

とある科学の肉体支配【完結済み】

てふてふちよーちよ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その女性は愛する妹に頼まれあるアニメを視聴することとなる。科学と魔術がひしめくそのアニメはサブカルチャーに疎い彼女にとっては新鮮で、興味を引く程度には面白く感じた。

だが、不幸にも彼女は事故に巻き込まれてしまう。

命を落とした彼女が再び目を覚ましたら、自身の幼い頃の姿になっていた。

少女の名前は天羽彗糸。

しかしまわりの人は学園都市に君臨する超能力者^{レベル5}のひとり、第6位藍花悦の名前で彼女を呼ぶのだった。

そして時は流れて学園都市へ渡った少女はとある少年と出会う。

少年の名は垣根帝督。

少年が少女に手を差し伸べた時、物語が動き出す――

毎週一回金曜日更新

時々月金の週二回更新

※作者はハーメルンは愚か小説を書くこと自体初めてです。間違いを見つけたらそつと教えてくれると嬉しい限りです。

※1話1話がめっちゃ長いです。平均で8000字です。

※オリ主ちゃんの設定上、原作とは違うように話が進んだり、都合

のいいように物語が進んだりします。それが大丈夫な方はお進み下さい。

※オリ主ちゃん最強じゃないけど神経は凶太い

※オリ主ちゃんはオタクじゃなくてパリピのギャルですし、原作についてよく知っています。イラつくことがあるやもしれませんが、そういう生命体だと割り切っていただけだと幸いです。

※アニメがベースとなっておりますので原作と差異があります。ご容赦ください。

2021.08.31追記：アンケートの結果微々たる量の恋愛要素が加わりました

2022.06.15追記：本編完結しました。番外編投稿中です

2022.11.19追記：番外編完結しました。今後の更新はありません。

今まで読んでくださり、誠にありがとうございました。

目次

2020

最終回

1

生き返り

プロローグ

15

1話：始まり

26

2話：顔合わせ

38

七月

3話：夏休み

53

4話：木山春生

61

5話：禁書目録

75

6話：正義

96

7話：風紀委員

115

8話：闇

129

9話：嫌い

144

10話：嫉妬

165

11話：自己嫌悪

186

12話：救えない

206

八月

13話：ポルターガイスト

222

14話：MAR

239

15話：夜の病院

259

16話：研究室

269

17話：カーチェイス

287

18話：生命線

300

19話：格上

320

20話：神に目をつけられた白衣の天使

336

21話：ホームクルス

343

22話：瓜二つ

359

23話：九九八二

373

24話：一人目

391

25話：変身

404

26話：放縦

422

27話：誇示

443

28話：生

460

29話：予感

483

30話：デジャヴ

499

31話：誘拐騒ぎ

520

32話：痛みを知る人と痛みを知らない人

539

33話：青

560

34話：漏洩

577

九月

35話：始業式

597

36話：刺客

615

37話：尊ぶべき犠牲

633

38話：赤

650

39話：九月上旬

664

40話：罨と敵

683

41話：舞台入場

697

前日譚：とある妹の告白と懺悔、そして姉の生涯

708

42話：腐敗臭漂う真相	714
43話：祈り	730
44話：知らない人	748
45話：血の滲む	767
46話：大覇星祭	778
47話：厄介	790
48話：疑問	804
49話：怖いこと	815
50話：癩に障る	828
51話：道しるべ	841
52話：五月蠅い人たち	852
53話：きっかけ	866
54話：可愛い子、可愛そうな子	879
55話：踏切の内側	892
56話：立ち入り禁止	906
57話：悍ましい人	916
58話：粗大ゴミへの微々たる愛情	928
59話：価値観の相違	939
60話：推理	952
外伝：とある偶像の四月愚者	967
61話：二日目朝	983
62話：舞台裏	999
63話：発覚	1009
64話：発展	1020
65話：的外れな自信	1029

66話：合流

67話：手掛かり

68話：肯定、否定

69話：苦味

70話：回想

71話：良くない知らせ

72話：仕方のない人達

73話：すれ違い

74話：やめてくれ

75話：目の前の貴方に

76話：E C C E A C I L L A D N I V B V T V V M

1158

77話：お年頃

78話：不本意なデート

79話：メタフィクション

80話：誰かのため

81話：会いたい

82話：現実と虚像の交差

83話：虚言と真実の交差

十月

84話：平和の影

85話：路地裏の葬儀

86話：緑の目の怪物

外伝：ハイエナ

87話：インディアンポーカー

13151300128812781267

1256124012311217120211901170

1148113511241112110210931083107210551042

88話：狩猟

89話：自己犠牲的愛

90話：交友

91話：執事とお嬢様

十月九日 独立記念日

92話：幕開け

93話：望まれない救い

94話：アフターケア

95話：想定外

96話：舞台の上

97話：バタフライ・コンフェス

98話：幕引き

99話：彗星夢死

100話：喪失

死後の世界

101話：嫌がらせの関係

102話：しようもないマウント

103話：男のろまん

104話：寄り道の罨

105話：襲来

106話：鬱陶しい女とプライド

107話：天の御使い、その仕事

108話：神隠し

109話：覚悟

あなたのために地獄へ

154815431534152315111502149014751464

145514471437142414121402139413801372

1358134713321324

110話：空の下で

111話：女王と三姉妹

112話：噛み合わない物語

113話：ロンドンでの大騒ぎ

114話：トラップ

115話：本音

116話：ああ、おぞましい

117話：準備段階

118話：学園都市にて

119話：お気に入り

ふたりで地獄へと

120話：白い景色、ロシアにて

121話：前線へ

122話：対峙

123話：蹂躪

124話：第三の主人公

125話：代替物の残骸

126話：天変地異

127話：新生

128話：名状し難きグロテスクな少女

129話：終息への道筋

130話：神の慈悲

131話：世界の真理、あるいはメタ的考察

132話：二人だけの幸福論

最終話、けれど世界は終わりを知らない

17971778176617571748173417271721171317031692167816651656

1648163916291618160615931585157815661557

あとがき

設定

番外編：一話完結

手綱はこの手の中に

愚かな妹は気難しい

恋愛長編：キミのあいどる！

act1：それはすれ違いから始まった

act2：あなたのためになりたいの

act3：胃袋掴めというけれど

act4：青年の主張、少女の感情

act5：面倒な女と面倒な男は交差しない

act6：黄金の輝きに価値がある

act7：心はそれを認めない

act8：支配者の恋

act9：きらめく始まり

act10：濁った別れ

act11：偽物と、冷たい鎧

act12：名状し難き恋

act13：普通の恋

act??：デートに誘おう！

act♡♡：デートに行こう！

現代中編：異世界跨いで画面外

初日：初めまして

一日目：おやすみなさい

二日目：おはようございます

208720742062

204820402027201319931978195819461930191919011888187318621849

18311821

1808

三日目：こんにちわ

四日目：お久しぶり

最終日：さようなら

2020

最終回

「慧糸お姉ちゃん！おかえり！」

日本を世界と繋げる空の玄関口。これから他国へ向かう人や帰国してきた人、愛する人を送りに行く人や迎えに来た人でごった返す空港のターミナル。

その中のソワソワしながら車椅子に座った高校生くらいの金髪の少女が愛する姉を呼んでいた。

「ただいまあ、元気してたかあ？」

到着ロビーから少女と同じ金髪を揺らす女性が眠そうに語尾を伸ばしながら車椅子に近づいていく。

彼女の名前は天羽慧糸。

女性にしては背が高く、日本人らしくも他民族の血筋が伺える不思議な顔立ちは美しく、周りの目を引いていた。

ビリビリのジーンズと体にピッタリ張り付いたTシャツはシンプルながら彼女にとっても似合っている。しかし良ければお姉さん系、悪ければギャル系と認識されるであろうスタイルのため、外見だけ見れば彼女に好感を抱く人は余りいないだろう。

「お迎えはアンタだけ？お父さんたちは？」

少女にハグをし、キャリーケースを渡すと車椅子の後ろに回る。ハンドルに手をかけ、そのままタクシー乗り場までゆっくりと進み始めた。

「あー、パパたちお姉ちゃんのおかえり。パーティの準備してるから来れないって。」

慧糸を見上げ、少女ははちきれんばかりの笑顔を向けたが、反対に姉は酷く困惑した顔で妹の目を覗き込む。

「……それって秘密にするやつじゃね？」

「あっ……わ、私なんも言っていないから！」

「はいはい、ったく、あたしの妹なのに変なところで抜けてんだから」

ガラガラとキャリーケースを滑らせ、出入口から外に出ると白く輝く太陽が彼女たちを迎え入れた。

9月だというのにまだまだ日本は暑い。湿気と暑さがジリジリと身体に襲いかかるこの感覚は帰国したばかりの彗糸には少しばかり辛いのか、懸命に汗を腕で拭っている。

「というか車椅子大丈夫なタクシーってあるん？呼ばなきやダメなんじゃね？」

きよろきよろとタクシーターミナルを見渡しながら話しかけるが、その様子を見て車椅子に座りながらくすくすと妹が笑いだした。

「あのワゴン車がそうだよ、お姉ちゃんも抜けてるねえ」

「お？院卒のこのお姉様に喧嘩売ってる？」

ぐつと腕をのぼし、後ろからハグをするように妹の柔らかい頬をその長い指でつねると、余程痛いのか妹は涙目になりながら姉の腕を叩き、一生懸命抵抗の意思を見せた。

「うっふえにやい、うっふえにやいあら！つにえんにやい！」

姉が指を離すと妹が涙を浮かべた顔で彼女を睨んだが、まるで効いていないのか彗糸はヘラヘラと笑いながら年頃の妹の頭を撫でる。

「にやはは、めんごめんご」

「もー、ほらタクシー乗るよー！」

「はい」

呼び止めた大きいタクシーにガタンと車椅子を乗せ、そのままタクシーに乗り込んだ。

「姉妹で仲がいいね」と優しく笑う老いた運転手に会釈をし、行先を簡単に伝えると妹の隣の席に座る。

「はあ、つつかれた〜！マジ秒で帰りたい……」

ほふつと大きく音を立てて椅子にもたれかかった彼女は溜息をつきながら長い脚を組み直した。

「そーだ、お姉ちゃんき、おすすめしたアニメ観た？」

随分と演技ががったセリフだなど一瞬違和感を覚えた彗糸だったが、何を妹が求めているのかを理解すると本日2回目の溜息をつき、妹を軽く小突いた。

「アンタ、もしかしてそれ聞きたいがために迎えに来たん？」

「ち、ちがうよ！それもあるけどお姉ちゃんに1番に会いたかったから！」

凶星か。

姉にしてみれば中々シヨックではある。

が、そこは姉。妹の性格を熟知していた彼女はそんなとこだろうと思っていた。

そしてその優秀な頭脳で姉が導き出した次の行動の最適解はひとつ。

全力でからかうこと。

「それもあるって……あーあ、お姉ちゃんマジハートブロークンだわあ、これは感想なんて言えないにやあ……」

悲しそうな表情を綺麗な顔に浮かべ隣を見ると、慌てているのか腕をブンブンと縦に振る妹の姿が写った。

「えっ！それはだめ！言って！」

「ええ〜？どーしよーかなあ〜？」

「彗糸さまあ!!」

まるで神に祈るかのように両手を合わせる妹の姿に彗糸は少し笑みを浮かべ、意地悪そうに囁いた。

「しかたないにやあ？」

「うう、ありがたや……」

くすつと妹の醜態に笑いながら話を彼女がしたい話題に変えてやる。

「で、なんだっけ？アンタおすすめの……えーと、」

「とある!!とある魔術の禁書目録！」

姉は別に忘れていたわけではなかった。

ただ、日本のサブカルに縁がなかった彗糸にとって馴染みがない長いラノベのタイトルを声に出して言うのは少し恥ずかしかっただけ。

しかし大好きな作品のタイトルを忘れられたと勘違いした妹はなかなか出てこないタイトルを大きな声で答えた。

「あーそれぞれ。一応そのアニメ1期から3期と……レールガン？」

だっけか、それと、あと一方通行のアニメと……あ、そうそう、漫画のスピノフ、垣根くんのやつは読んだ。」

まあほとんど二倍速で観たけど、と心の中で付け足した。

「……ばっちりハマってんじゃん！つーか垣根くんのスピノフ私まだ読んでない！」

「ハマってねーよ」

結構な量の作品だというのにアニメだけとはいえほとんど観た彗糸に妹は驚きを隠せなかった。

「まあ、面白かったと思うよ？でもなんでこれアタシに観せたかったわけ？」

「だってお姉ちゃん頭いいし」

単純な疑問に対して酷く単純な答え。

しかしその答えはあまりにも単純で情報量が少ない。どんなに妹の思考回路を分かっていても情報量が致命的にまで少ないとさすがの姉でも理解不可能であった。

「はっ。」

「お姉ちゃんめっちゃ頭いいアメリカの大学に入ったじゃん？その後は今日まで大学院で研究？してたわけで」

「……だからっ？」

姉は懸命に努力し、見事アメリカの有名な大学で学ぶ権利を得た。それだけでなく、卒業した後彼女はそのまま大学院へ。そして今年卒業した。現在24歳。

急に褒められ少し照れたが、その内容は彼女の中で答えと結びつくことはなく。

「だからだよ！頭良いお姉ちゃんがこのアニメ観れば私に科学側の説明とかしてくれるじゃん！」

「……アンタさー、あたしの専攻なんなのかわかって言ってる訳？」

あまりにも自己中心的で生意気な考えに呆れを通り越して愛おしさも感じるが、やはり少しズレていた。

目の前の少女は本当にこのアタシの妹なのだろうか。

馬鹿を見るような目を妹に向けるとビクツとその体を震わせた。

「……わかって言っていないけど」

きよとんと首を傾げる妹に苛立ちを覚え、つい大声で叫んでしま
う。

「あのさあ、あたしの専攻はざっくり言えば生物物理学！体の仕組み
を研究する学問！医学！コンピュータとかプログラムとかは範疇外
なんすわ！」

「へー……」

まるで興味が無い。

「アンタねえ！あたしがなんのためにその分野の研究してると思っ
てんの！」

「……なんで？」

あまりの間抜け具合に声を荒らげたら、すこしだけ運転手に睨まれ
た。

しかしそんなチンケな睨みだけで怯む姉ではなかった。

「ごんつのーお・ま・えの為だわ！アホか！アンタの足を動かせるよう
にしたいんだわ！このドアホ！」

「あーそういえばそうやんね」

ケラケラと他人事のように笑う妹を殴ってしまいたくなりながら
も、彗糸はその拳を納める。

6歳差の可愛くて生意気、自由人で沸点の低いおバカな妹。

そんな彼女は先天的に足が不自由だ。

永遠に治らない。

姉として出来ることを考えて考えて考えまくった結果、アメリカに
生物学を学びに行ったのだ。

彼女は救いたかった。目の前の少女を。

自分の頭脳が人を幸せにするのなら、彼女は喜んで自らを差し出し
た。

妹を、愛する人を、隣人を、すべてを幸せにするためならこの姉は
なんだってする。してしまう。

究極の善人。自分が誰かを助けるために生まれてきたと信じて疑
わない聖人。

正の異常者。

それが天羽彗糸という女であった。

「はあ……もういい……」

「あは、それで？感想、感想！ハリー！」

両腕を広げ感想を催促する妹は嬉々とした表情で姉を見つめる。

「はあ……そーだなあ、話は面白かったけど主人公がなああって感じ？」

「え!?なんでさ!!?」

主人公、それは物語の中心的人物。

大抵の主人公は読み手に1番近い場所におり、読者が嫌いになる要素はあまりないはずの人物。

それなのにこの女は好かないと答えたのだ。作品の大ファンで、主人公が推しである妹にとってはあまりにも衝撃的な言葉だった。

「だあって上条くんはパンチしてるとこしか記憶にないじゃん？御坂ちゃんも攻撃してるとこしか記憶にないし？初期の一方通行くんは……なんかあって思うし」

「はあ、お姉ちゃんは分かかってない！ほんと分かかってない！ほんとに見たわけ!?…てかなんかなあってなにさ」

まあ捻くれ者の姉だ、しょうがないと心の中で思うと同時にその感想に酷く興味を惹かれた。

あのヒーローたちを嫌うだなんて！

そんな子供のような感情が妹の中で蔓延った。

「ん?この子の能力って基本的にはベクトル操作っしょ?作中でもあつたけど、これってフツーに病気治せたりするんだわ」

「うんうん、それで?」

相槌を打ちながら姉の話に耳を傾ける。

「一方通行くんは最初反射で人を傷つけるのを嫌がって、無敵になれば誰も襲ってこない!!傷つかないって考えた訳で。それってさお姉ちゃん的には逃げだと思っくんよ」

「逃げ?」

そう。足を組み直し、腕を窓にかけながら彗糸は話し始める。

「大いなる力には大いなる責任が伴う。彼は責任から逃げて自分が1

番楽になる道を探ったのかなあって感じるわけ。彼は自己中心的で、自分が傷つかない道を選んだ。その力が薬にもなることを知らずに、いや知ろうとせずの方があつてゐるかな？ともかく、全てから逃げて1万人殺して、そこでやつと責任に気づく。なんというか、彼に対する哀れというか、学園都市に対する怒りというか、医学者としても人間としても酷い気持ちになったかなあ。歩んだ道が違えば、そんなことも起きなかつたと思うと、なんか寂しいよ」

「……結構真面目に見てたんだね」

「ほとんど2倍速だけどねー」

肩を竦めて困つた顔をする隼糸はやはり「姉」であり、「下の子」を第1に考えて行動してしまう。

2倍速にしてもきついスケジュールの中妹の薦めるアニメを見終わつたのだ。

「じゃあ他の超能力者はどう思う？」

ピンポンとタクシーが高速道路に乗つた音が聞こえた。

「垣根くんは能力も性格も結構好きかな。あとは、麦野ちゃんはいいキャラだよな。食蜂ちゃんはよく分からないけど見た目は可愛いと思う。で、6位の藍……あー、まだ分からないんだっけ……7位も、アニメには出てなかつた、よね？」

「じゃあ話は？面白かつた？」

「うん、それは面白かつた。ただ、登場人物みんな哀れで見てて辛かつたかな。個人的にはお腹いっぱい」

「なるほどなるほど……じゃあ好きなシーンは？」

「うーん……垣根くんのバトルかなあ、やつぱり」

イカれた捻くれ者の姉のオキニのシーンは読者である妹にとっては予想もつかない所だつた。

垣根帝督、まさかそのシーンとは思つてもいなかった。

フィアンマのシーンやら一方通行の実験シーンやら風斬氷華のシーンやら、作画も話も良いシーンは他にわんさかある。まさかピンポイントで主人公の上条当麻が出てこないシーンを上げられるとはヒーロー至上主義の妹には考えられなかつたのだ。

「え!?!は!?!そこ作画良くなってみんな悲しんでるところやぞ!?!」

「そーなん? 未知の法則って研究者ならどの分野でもワクワクすると思うけど。」

少し寂しそうに語る姉に妹はある感情を読み取った。それはアニメオタクを語る上で欠かせないもの。

妹でいう上条当麻のこと。

「……もしかして、垣根推しか!?!」

そう推し。

オタクと推しは互いを語る際に切っても切れない関係にある。

オタクとは対極の位置にいるパリピという人種である姉にまさかと否定はしたものの、姉本人からは肯定の言葉が投げかけられたのだ。

「かもね、見た目も結構好きだし。」

「まじか……あーでも、お姉ちゃんギャルだもんね! ホストに惹かれるのは運命だもんね!」

驚きに満ちた顔をした妹ではあったが、惹かれる理由が思いついた為かすぐに腑抜けた顔に戻る。

そんな様子を姉に睨まれたが、気にしないのが妹という生命体なのだ。

「……垣根くんのスピノフ読んで泣きそうになるくらいには好きかな。哀れな子だと思うよ。」

「え、お姉ちゃんが泣きそう……って私読んでないからネタバレしないでね!」

垣根帝督のスピノフ。

少し前に発売されたが妹的には別に推しても無ければ原作で死んでしまうキャラクターの話だ、お小遣いに余裕ができたら買おうと買わずにいたのだ。

「うーん、垣根くんはねえ、なんか、可哀想というか。ヒーローになりえたのに1位にぜーんぶ持ってかれちゃった子。報われない不幸な子ってこういう子のことを指すんだろうなあって思う。」

「ふーん、好感高いの?」

「何かを守るために、世界を変えるためにがむしやりに頑張る男の子はお姉ちゃん的に好感高いよ。助けてあげたくなくなっちゃう」

これまで人を助けることを目標に生きてきた女なのだ、慈しみの心は妹だけにとどまらず全ての人に向けられる。善人だろうが悪人だろうが。

「でも彼氏いたことないお姉ちゃんが誰かに好感を持つってすごいことだと思うよ？」

ただただ素直に純粹に、妹は嬉しかったのだ。

全ての者に慈愛を向ける姉であるが、誰か一人に対して好感を持つことはなかった。

究極の博愛主義者。それが妹の持つ姉の印象。

超常現象を操るアニメのキャラクターと言えど姉が誰かに興味を持つのはありえないと思っていたのだ。喜ぶのも当然だろう。

「そうかな？」

「そうだよ！せっかくモテるのに！」

「うっさいなあ……恋とかよりも研究してる方がドキドキワクワクするし、セックスなんてつまんない行為も興味無いし」

天羽彗糸は博愛主義者であると同時に、無性愛者でもあった。

他者に恋愛感情も性的な欲求も抱かないのだ。

天使が人間と恋には落ちないように、彼女もまた人間に特別な感情を抱かなかった。

彼女が抱く感情は二つ。慈愛と憐れみ。

彼女にとつては妹も、家族も、隣人も、悪人も、善人も全て救うべき人々。悲しませてはならない人々。

誰もを平等に愛する。

彼女はまさに地上に降り立った天使そのものだった。

「せっ、えっちと言いなさい！ふしだら！」

「……アンタが話振ってきたんだけど。なんて呼称しようが関係なくね？」

突然切り込まれたそういう話に妹は慌てふためき顔を赤らめるが、姉は微動だにしない。

生物学を専攻する慧糸にそういったジャンルの話は特別恥じらうようなものでもなく。

「あるーあるあるー！ちよーあるってばー！」

「あっそ」

ぶつきらぼうに話を切り上げるところをみてこれ以上この話を続けても無駄だなと妹は心の中で思案する。

「でも垣根帝督かぁ、意外っちゃ意外」

どうせ恋バナなんて興味無いんだ、話題を垣根帝督に戻そう。

一気に考えるのがめんどくさくなつたのか話題をすかさず変えた。

「そう？」

「うん、悪役とか嫌いじゃん、お姉ちゃん。」

「それでもなくない？信念を強く持つて行動する人ってかつこいいと思うけど」

「上条は違うの？」

その理屈なら上条当麻だつて当てはまるじゃないか！とイラつきを覚えたフアン、もとい妹だったが、しかしそんなこととは露知らず、姉は話を続ける。

「……あれは信念とかそういう次元じゃなくてさ、ただ説教して物理で攻撃してくるやつが苦手なだけ。もつといい解決法あるのになあつてもどかしくなんだよね」

「ふーん、でも垣根推しねえ……」

別に垣根帝督が嫌いというわけではない。ただ心配しているのだ。

原作を読んでいる妹にはその後の垣根帝督の扱いが分かつてしまふ。そう考えると姉の気持ちも可哀想なものにも見えてくる。

先輩オタクとして推しが死んで悲惨な目に遭うという恐怖体験に姉がついていけるのか、心配になってしまふのだ。

「まあそんなイケメンホストも工場長からカブトムシになるんですけどねえ……」

「は？」

もちろん原作を読んでおらず、なんなら卒業関連で忙しくアニメを見る時間が取れなくて垣根帝督以外のシーンをほとんど二倍速で観

たニワカでオタクですらないギャルの彗系にはなんの事かは分からなかった……ことは無かった。

そう、ネタバレwikiを読んだのだ。

論文を書き、研究に明け暮れる姉にはアニメを真面目に視聴する時間はほとんどなかった。垣根帝督のスピンオフ漫画程度を読む時間はあったがアニメは時間がかかる。論文の作業中にほとんど2倍速でバックグラウンドミュージックと化した状態で観ていたのだ。

しかしそんな状態でも基本情報は入っており、フィீリングで語ることができるのは頭の良さ故か。

しかし妹は必ず彼女に感想を聞いてくる。アニメをちゃんと見ると約束した手前、下手に感想を述べて違うとツッコまれるのは癪だった。

そのため姉はスマホでほとんどのキャラ、事件、用語のネタバレwikiを読み漁った。具体的に言うとい巻から最新刊までの全部。

まあwikiだけでなく、SNSやイラスト投稿サイトなんかに転がっている二次創作なんかも拝見しているので知識にかなり偏りがあるが。

そんなわけで今の姉は垣根帝督が真っ白のカブトムシになってしまいうことも、超能力者第6位の名前が藍花悦ということも、一方通行が総括理事長になることも、学園都市が「徹底的に科学の形に擬態させたテレマの僧院そのもの」であることも知識として知っている。

「いや、原作の話。お姉ちゃんには後で貸すから。」

「……おけまる。楽しみにしとくわ。」

そんなことiミクロンも思ってもない妹に原作の小説を押し付けられる未来に少し期待する。そのまま同じ話題で盛り上がれば良いな、と希望を胸に抱きながら姉は笑みをこぼす。

「ふふふ、お姉ちゃんもアニメオタクに……!」

「いや、ならんから」

そんなこんなで感想大会に終わりが見えてきたころ、事は起きた。

事と呼ぶには大きすぎる出来事。

不幸とは全ての者に平等に、そして唐突に訪れるもの。

それを今日、自ら経験することになった。

「あれ、なんかおかしくね？」

ふと妹から目を逸らした姉の目に入ったバックミラー。

「んー？何が？」

「……後ろの車、速くね？」

「え？」

バックミラーに映る大きなトラックは普通よりも早く大きくミラーに写っていく。

徐々に大きくなるトラック、その運転手の目は固く閉ざされ、光を写していなかった。

「おじさん！後ろからっ！」

「なっ、」

状況を理解した運転手がハンドルを切る。

隣のレーンに移り安堵したのもつかの間。

トラックはスピードを落とさず前に突き進んだ。

結果、

「お姉ちゃん！お姉ちゃん！」

トラックは横転、前を走っていた不運なタクシーは巻き込まれペしゃんこに。

しかし幸運なことに車に乗っていた内の二人は無事だった。

そう、二人。

慈愛の精神に満ち溢れた美しい女は愛する妹を助けた。

自らの命を差し出して。

「お姉ちゃんっ！なんでっ！」

横たわる女性からは赤く光る液体が溢れ出した。

シートベルトやエアクッション程度で全ての衝撃から身を守ることは不可能だと彗糸は分かっていた。

車椅子は車に固定され、身動きが取れない妹。大事な、大事な妹。

「なんでえ、なんで、おねえちゃん、がっ、」

当たり前じゃん。

アンタの姉なんだから、医学者なんだから、人を助けるのは当たり前っしょ。

そう答えたくとも口からは空気と血と、掠れた音しか出てこない。

「おねえぢゃ、おねえぢゃん、う、あ、」

泣かないで、愛しい妹。

アタシのシユガー。

あたし、ダメなお姉ちゃんだったなあ。

アンタの足を治す方法を研究するためにアメリカ行つたのに、肝心な妹であるアンタのことを構ってやれなかった。

「な……かあ……あ、い、て……」

泣かないで。

最後の力を振り絞って出した言葉。

アンタを泣かせたくなかったんだ。幸せにしたかったんだ。

冷えていく手先、体から溢れる生暖かい赤、朦朧とした意識。

最期に見た景色は涙で瞳を満たした愛しい妹。

笑ったアンタの顔をずっと見ていたかったのに。

ああ、神様、もし、もしも次があるのなら、あたしは誰も泣かせません。

全部、助けます。

だから、チャンスをください。

全てを変える、チャンス。

彼女はやはり最後まで天使であり続けた。

そんな天使の願いは神の手によって聞き届けられた。

暗闇に沈んだ意識が何かを掴む。

天の糸、あるいは救いの糸。

空へ落ちていく感覚。

浮遊感と風を感じとり、あるはずも無い瞼を開いた。
そう、開いたのだ。

「……………え？」

目の前に広がるのは明るい天井。

窓から差し込む太陽の光がベッドで横たわる彼女を眩しく照らした。

「いき、てる？」

生き返り プロローグ

目を覚ました直後のあたしの目に入ったのは自分の異様な体だった。

「な、えっ？ど、どういうこと？なんで体がっ、」
明るい部屋の中、ベッドの上、ひとりでしきりに体をぺたぺたと触る。

小さな手、小さな足、小さな胸、小さな頭。
とにかく、全てが小さかった。

「子供っ……っ？」

どこぞの名探偵みたく体が縮んでいたのだ。驚くのも無理はないっしょ？

とにかく、確認しなきゃ！

そう思った瞬間にはベッドから飛び降りていた。

目線が異常なほど低く、一瞬ぐらつく。元々170cm以上はあったのだ、平衡感覚が掴めないのは当たり前か。

しかしこんな所で転ぶ訳にも行かず、すぐさま体勢を建て直した。そして部屋の隅に置かれていた姿見を見つけて、全身を映し出す。

小さな体に黄金の髪、緑が見え隠れする瞳の色。

「小さい頃の、あたし……っ？」

アメリカオタクな日本人の母と、色んな血が混じっているらしい国籍アメリカの父がその場のノリでヤツて生まれたあたし。

髪の毛はブロンドで、目は緑がかった茶色。顔は日本人っぽいけどことなくアメリカンぽくもありヨーロッパぽくもあり、中東ぽくもある。簡単に言えば雑種。

名前も彗糸^{ケイト}。アメリカでよくある名前のケイトからつけられたふざけた名前。

好きでも嫌いでもない、興味なんてなかったあたしの体。

しかし今は自分の体であることに酷く安心し、そして同時に混乱していた。

「どういう、」

医学的にも常識的にも大人が子供になるなんて確率はほとんどない。ありえない。てかあたしはさつき死んだのだ。

その記憶も感覚も何もかもがあたしの中に残っている。

じゃあなんで今のあたしは3歳ほどの少女になっているんだ？

「悦？起きたのか？」

小さな頭で現状を分析していると、ガチャリとドアを開けて見知った男性が静かに入ってきた。

「……と、さん？」

そう、あたしの父だった。

「悦、起きたのなら言ってくればいいのに。」

部屋に入り、あたしの元に歩み寄る父と思しき男性。

しかし、言ってることは理解不能、意味不明で。

「ママがご飯作っていつてくれたから、後でふたりで食べようね。悦。」

お父さん、何言ってるの？

ねえあたしのことを悦って呼んでいるの？

お父さんそっくりの男。

でもあたしを呼ぶ名前も、纏う空気も、何もかもが違った。

「パパは今日仕事だけど、1人でお留守番出来る？」

優しい声色で目線を合わせて喋る男は自らをパパと呼んだ。

「え、あ、」

誰。

知らない、これはお父さんじゃない！

恐怖で頭が支配される。

声が出ない。

死んだあの時と同じ、掠れた声が口から零れる。

腕を引かれ、部屋の外へと連れていかれそうになるが、懸命にこの短い手足で抵抗を試みる。

「や、め、」

声を出そうとした瞬間、音が鳴った。

ピリリリという無機質な電子音が部屋に響く。

「あ、ごめん、パパ電話してくるから、先にリビング行って?」

そう言つて男は分厚く、折り畳めもしない携帯電話をズボンのポケットから取り出し外へ向かった。

「もしもし、藍花です。」

そんなことを言いながら。

「藍、花?」

情報が渋滞を起こしている頭の中で3つの事実がぐるぐると回る。

男が口にした藍花という言葉。

その男がパパを自称し、私を悦と呼んだ事。

電子音を鳴らす携帯が随分と古臭いものだったこと。

確証はない。

しかしこの状況証拠から導き出される答えはひとつだった。

「あたしが、藍花、悦……?」

その事実が重くのしかかる。

オタクじゃないあたしに薦めるほど妹が大好きだったライトノベル。

「とある魔術の禁書目録シリーズ」

その物語の舞台である学園都市に7人しかいない超能力者^{レベル5}の一人、序列6位。

名前しか出ていない登場人物。

その名前は藍花悦。

「どういうわけ……?」

天羽隼^{アモウケイト}系の体と意識を持ちながらもあたしは藍花悦^{アイハナエツ}と呼ばれた。

藍花なんて滅多にある苗字でもなければ、悦なんて言葉を子供につける親も少数。

何より男の持っていた携帯電話が時代の流れを表していた。

「とある魔術の禁書目録」は2010年頃に発売されたと記憶している。

となると、恐らくだが作中もだいたいその年代。

「学園都市は外と比べると2、30年くらいは科学が発展している」設定。

つまり学園都市外は発売頃とあまり変わらない……と思う。

何が言いたいのかと言うとあの小説の話が2010年頃をベースとして書かれているのなら、メインの登場人物が生まれた年はだいたい1990年代後半。

ガラケーもなかった時代に生まれたわけで。

つまり、仮説が正しければあたしは藍花悦の名前で、藍花悦が子供の頃の年代とほぼほぼ同じ頃に生まれていることになる。

アニメは2倍速、wikiを読んだって全部わかるはずもなく、無知に等しいあたしには舞台設定の知識がほとんどない。

全てを憶測で語ることしか今はできないが、考えることは大切だ。そして考えて考えた結果、

結論：登場人物のひとりとして「とある魔術の禁書目録」の世界にいる可能性がある。

小さな脳みそで導き出した答えはあまりにも非現実的で。

「は、はは、ジーザス、なぜあたしが、」
パタリ。

膝から崩れ落ち、ドアの目の前に寝転がる。

ああ、どうしてこんな目に。

こんなことなら、ちゃんと死んでおけば良かった。

パパと名乗った男が仕事に行った後、空っぽになった家であたしはすぐさま古臭いパソコンに向かった。

調べるワードは「学園都市」

あたしの記憶が確かなら学園都市はこの年で既に存在しているはず。

カタカタと小さな手を器用に動かしキーボードを打つとネットの海から情報が流れてくる。

クルクルとまわる読み込み中のサインにイラつきながらも何個か

のアーティクルに目を通すとそこには信じたくない文字の羅列をびつしりと詰まっていた。

学園都市は存在する。

「まじ……ってことは、まじでラノベの世界に？」

そう言えば、と昔妹が最近の日本のブームとかいう題でメールを送ってきたことを思い出す。

異世界転生？ 転移だとかがブームでファンタジー世界に現実世界の人間が召喚されてしまうとかいう内容が大ブレイクとか書かれていた記憶が薄らとあった。

「転生とか、マジなんそれって感じなんだけど……あながち間違いでもない……？」

とはいえここが本当にリアルの世界かどうかともわからない現状、これを「転生」とやらに当てはめていいのかと、少し悩む。

もしかしたら事故で死んでいなかったあたしが見ている夢かもしれない。

もしかしたらどっかの研究所であたしの脳みそを水槽に入れて夢を見せているのかもしれない。

もしかしたらVRの世界かもしれない。

そもそも話、他次元に位置されると考えられる異世界を行き来することなど科学的に可能なのか？

いや、否定からは何も生まれえない。考えるのはよそう。

どうせなにが正解かなんて分からないし、答えを見つけないすべもないのだから。

頭に熱が登るのを感じながら少しずつ現状を整理する。

自称パパの話と部屋中にあった写真やら手紙やらを引っ括めると、あ・た・し・は・あ・た・し・の・よ・う・だ・つ・た。

どうということ？と思うかもしれないが聞いて欲しい。

前述した通り、あたしは日本人の母と、アメリカ人の父を持つ少しユニークな家庭環境のもとで育てられた。生まれた場所はアメリカで、妹が生まれるまでニューヨークに滞在。その後、18才でアメリカに留学生として舞い戻ってきた。

つまるところ二重国籍とゆーわけだ。

そしてこの藍花悦も同じだった。全く同じ経歴、同じ過去。違うのは妹が居ないこと。

「……まじ、どーゆーことなん？ 藍花悦の情報は小説ではほとんどなかった、てか名前しか無かったじゃん。どうしてあたしと同じ過去を歩んでんだ？」

藍花悦の名前ってだけで過去も見た目も心も天羽隼糸。

あたしはあたしとして藍花悦になった？

分からない。

「ともかく、あたしが藍花悦って呼ばれてる時点であたしがあの物語の登場人物であることに変わりはない、か……」

つまり、あたしは学園都市に行かなくてはいけない。行かざるをえないのだ。

「バタフライエフェクトだったっけ？ ひとつの事で未来が大きく変わるってやつ……」

バタフライエフェクト、それは人の影響力を語る上で欠かせないものの。

誰かが何かをした時、それは波紋となり他のものにも影響を及ぼす。

あの学園都市だ。登場人物のひとりが登場しないだけで戦争が起こる可能性がないとは言いきれない。

wikiを読んだ程度の知識しかないが、本当の藍花悦も物語の外で何かしらしていたはず。それが何かは分からないが存在が居ないだけで何かしらのハプニングが起こる可能性がある。

そしてそのハプニングで誰かが傷つくかもしれない。

たとえフィクションの世界だろうと、誰かが傷つくのは見たくない。

ならば答えはひとつ。

「目指すは学園都市。きっとあたしにも出来ることがあるはず。」

と、意気込んだはいが、何から始めようかな。

「……学園都市に行くには、かあ」

椅子に腰かけながらブツブツと呟く。

「どっかの学校に入学するのは当たり前だけど、その前に後ろ盾とカモフラージュが必要、かな？勉強したいしね」

藍花悦として生きるのも結構だが、私には天羽彗糸という名前があるし。それを使わない手はないっしょ。

藍花悦は登場人物だが天羽彗糸は違う。小説に出てこないイレギュラーな存在。藍花悦が居ないことでおこるハプニングがあるのなら、天羽彗糸がいることで起こる奇跡だってあるはず。

元々いない存在がいるのだ。マイナスに進むかもしれないが、プラスに話が進まない訳でもないじゃん？

奇跡を起こせるかもしれない。

「……初めは大学に行こう、情報収集と後ろ盾には申し分ないだろうし、何よりも卒業してるし入学なんて簡単っしょ。」

なんなら院も卒業してるし。

そうと決まれば、話は早い。

まずは幼稚園の卒業からかな？

この世界に私がいる理由はわからない。

なんならこの世界が現実かどうかもわからない。

でも未来に傷つく人がいるのが分かっているのなら、医学者として救いの手を差し伸べるのがあたしのやるべきこと。

それは世界が変わっても変わらない、あたしをあたしとらしめる存在理由。

時の流れは早く、気づけばいつの間にか大学卒業を控えていた。

自分が自分じゃなくなったあの日から7年が経ち、3歳の少女は10歳へと成長した。

さて、この世界に来る前のあたしは生物物理学を学んでいたのだが、この世界でも同じものを学んだ。

理由は単純明快、あたしが好きだから。

いや、本当は物理学がとりたかったんですよ？

だって超能力者の操る能力は大抵物理が絡んでくるから。

一方通行がいい例だろう。方向を操る力は簡単に言えば物理法則をねじ曲げる能力。あたしがこの後どんな能力を得るかは分からないが、物理学を学んでおいて損は無い。

：しかし、あたしに物理学の才能はなかったようで、早々に壁にぶち当たった。

—ので、安全牌な生物物理学を再び学び直した。

そんな訳でまたもや生物物理学を専攻し、大学生活をエンジョイしたわけだが、その生活は一概に楽しいと呼べるものじゃなかった。

それはこの世界の医学に関すること。

自分が死んだ2020年とは違い、医学も薬学もそこまで進歩してなく、2020では救われているはずの人が救われていないということが起きていたのだ。

学生の身で新薬を発表したり治療法を伝授するのは歴史的にも狙われる的な意味でもやばい。

そう思つてヒント程度の知識は与えたが、現在より進んだ医学を知るものとして人を救えない事実は何より辛かった。

「うわ、メール多すぎっしょ……確認すんのだる……」

鬱々しい気持ちを切り替えるため、少しだけ進化したかに見えるデスクトップパソコンに目を向けたが余計に気分が落ち、ついつい口から愚痴がこぼれた。

パソコンの前で大きな椅子に座ると金髪を軽く揺らす。

可愛らしいピンク色のTシャツはパソコンの光を浴び、薄らと青い光を跳ね返していた。

「結構効果的だったんかなあ、あれ」

パソコンから目を逸らした先にあったブラウン管のテレビは、ついでこの間の出来事について延々とレポートしていた。

綺麗なブリティッシュイングリッシュで喋るリポーターが黒髪黒目の可愛らしい少女にマイクを向けた。

―ミス藍花、大学卒業したらどこに行こうと考えていますか？

―特に考えていません。ですが、日本には学園都市という科学技術が発展した街があると聞いております。将来的にはそちらで御教授願おうかと。

東洋系の長い黒髪の少女は青いワンピースを纏い、流暢な英語で礼儀正しく返答を返した。

弱冠10歳で大学を卒業するスーパーガールという見出しで放送されるこの映像はついこの間大学卒業が確定した日に撮られたもの。「一通くらい学園都市から「うちで勉強しませんか」メールがくればいいなあって思ってたただけだったのに……一通どころか滅茶苦茶着てんですけど……」

新聞の一面に乗るほど藍花悦は有名となった。

藍花悦という天才少女を求め、様々な大学院、研究所、病院、その他もろもろが必死こいてあたしにメールやら手紙やら送ってくる。

しかし、

「秘密守れるやつじゃないとあたしを委ねたくねーし？」

あたしの秘密、それは黒髪が似合う藍花悦という少女は実は金髪が眩しい天羽彗糸だという事実。

あたしは学園都市で2人分の戸籍を手に入れるつもりでいた。

藍花悦として物語に食い込むのはどうしても避けたい。なので天羽彗糸という少女を代わりに使うことにしたわけ。

世間的に藍花悦が黒髪ロングの青い少女と認識されている今、地毛の金髪を伸ばしても天羽彗糸が藍花悦であるとは誰も思うまい。

しかも苗字に藍が入ってるのだ。

ピンクやら緑やら黄色やら、わざと青以外を好んで着る天羽彗糸からは藍という言葉は連想しにくい。

もちろんこれらの情報は全て学園都市に入った後に全て規制をかけるつもりだ。

あくまでもこれは学園都市の研究者に対するカモフラージュ。天

羽彗系に興味を向かせないためのもの。

学生には原作と同じく、名前しかわかってない超能力者で通るつもりでいる。

「……ケド、まさかこの人がメール送ってくるとは思わんかったなあ」そんなあたしの重大な秘密、そんじよそこらの研究員に教えて助けを乞うわけにもいかず、どうするか迷っていたわけだが。

案外すんなりと解決しそうだった。

「……冥土帰し、ねえ」

天才外科医、だったか。

請け負った患者は誰一人として死なさずに助ける、神の手を持つ医師。

その功績から冥土帰しという異名が着いた男。

医学者として、人間として尊敬に値するし、その技術を学びたいと心の隅で思っていた。なので彼から招待されるのは素直に嬉しかった。

しかし、登場人物としてはどうだろうか？

ご都合主義満載の最強ヒーロー。

物語にぽつと現れて施術し、助言をくれる、都合のよすぎるキャラクターというのがあたしが彼に抱いた印象。

しかも本名も出ておらず、アレイスターと昔からの知り合いときた。怪しき満点。

なぜ外科医の彼が生物物理学者、つまり内科のあたしにメールを送ったのかもわからない。

けど彼以外に信頼できる人も浮かばず。

「鬼が出るか蛇が出るか、賭けてみるしかない、かなあ……」

彼に全てを教えるのは少し不安ではあったが、他のキャラクターと比べればまだマシかと考え直し、彼にメールを返す。

ピコンとメールが送信されたのを確認すると、安堵からため息をついた。

「やつと、やつと手に入れた。」

学園都市への片道切符。

「情報収集も、隠れ蓑も作った、大物が引つかかるとは思わなかったけど、ここまではだいたいプラン通り。」

姉として、医者として、人として、あたしのやるべき事。

「今度こそ、誰も泣かせない、誰も傷つけさせない、救ってみせる、この手で。」

たとえ フイクション 嘘の世界でも誰かが救いを求めるのなら、あたしが救ってみせる。

あたしはあたしの正義を貫く。
ハッピーエンドに向けて。

1話：始まり

新学期から2ヶ月が経った6月下旬、俺は適当に作った学友共と地下街のゲームセンターで気分転換をしていた。

「うっわ！垣根すげえなお前！すんげえとるじゃん！」

がこんと大きな音を立ててUFOキヤツチャーの取り出し口に箱が落ちる。

「この出来が違うんだよ、バアーカ」

「くっそおお！」

指でトントンとこめかみを指すと悔しそうに、しかし楽しそうに友人たちが文句を叫んだ。景品を手に取り、袋に入れようとするが、ぬいぐるみやらお菓子やらでパンパンに膨らんだ複数の袋に入るスペースは無く。

「あー、どーすっかなこれ。お前らいるか？」

「え、じゃあ貰うわ。ラッキー！」

友人のひとりに景品を手渡すと何故かその場で踊り出す。やめて欲しい。

こいつの友達やめようかな。

暗部に身を置く身分ではあるが、基本的にこれが俺の日常。これも一応学生だ。仕事がない時は学生として生きている。たとえいつか終わりが来るとしても。

そんなくだらない考えが頭をふよふよと回っていると突然他の友人が俺の肩を叩く。

「なな、あの子可愛くね？」

「は？」

俺らの後ろ、3つ隣のクレインゲームの前に立っていた少女を彼が指さした。

肩に掛かる長く巻かれた金髪は毛先からピンク色に染まっており、金とピンクの美しいグラデーションを作っていた。背は女にしては高く、170以上はありそうだ。手足は長く柔らかそうで、胸部も大きいと呼べる程度には膨らんでいる。気だるそうな目には緑と茶色

を混ぜたような不思議な色の瞳が輝いていた。

ガラスに映る綺麗な顔からは色んな国の血が混じったような印象を受ける。

「あれは……どこの制服だ？」

「Fラン高校のセーラー服だよ。頭悪そうだし、やらせてくれねーかな。」

童貞のくせに何高望みしてんだ。そんなツツコミを心の中で入れながら少女を見つめる。

緑色に塗られた爪でクレイゲームのボタンを叩いている彼女の耳にはびつしりとピアスが刺さっており、肩にかけている分厚い革製のスクールバックにはこれでもかとキーホルダーがくっついていた。そのどれもがピンクと緑で構成されているのは気のせいか。

「……でも金持ちそうだな」

「え？どうしてそう思った！なんでや、垣根え！」

「どっかの高校生探偵みたいなこと言ってるじゃねえよ……いや、ほら、ピアスとチョーカー、ネックレス、指輪、あと腕輪、あれ全部ブランドもんだぞ」

キラキラと耳元で揺れる星型のピアスはこの間出たばっかのハイブランドの新作。首元には高そうな素材のチョーカーに、ダガーを模した金のネックレス。他の装飾品にも有名なブランドのロゴがデザインされていた。

「チツチツチツ……あまいなあ、アメリカの青いケーキより甘いぜ垣根君よオ！」

「うっぜえ……」

「あんな見た目なんだぞ！どうせ援交で貰ったに決まっている！」

「……しょーもね」

本格的にこいつらとの縁を切った方がいいかもしれない。

興奮する野郎どもを無視して奥のアーケードに足を運ぼうと体を逸らす、それは叶わず。

「どこ行こうってんだ垣根え！」

「そうだそうだ！」

「んだよ……勝手にナンパしてこいよ、俺カンケーねえし」

友人二人に腕を捕まれ自由を奪われる。

「はあ？顔面偏差値最高点を記録してるエリート様に行かせた方が早いに決まってるだろ！」

「は？何言つて、つておいっ！やめっ、うわっ！」

腕を思いっきり引かれたかと思ったら放り出される。パチンコの要領で弾き飛ばされた先には先程の女子高生。

「……」

「……えーと、大丈夫？」

失態とはこのことを言うのだろう。勢いを殺しきれず、少女を巻き込み派手に転んだ。少女の上に馬乗りになってしまい、結果として少女を押し倒すことになってしまう。

「あ、いや、悪い」

すぐさま体をどかし、少女に手を差し伸べる。申し訳なさそうな顔で見つめると、俺の手を取り立ち上がった少女は反対に心配そうにこちらを見上げた。

「ダイジョーブ？派手に転んだけど、足とか、痛めてない？平気なん？」

「は？え、あ、大丈夫、です？」

馴染みのない心配する声に一瞬思考が停止し、つい敬語で答えてしまう。驚きを隠せなかった。

「そっか、よかった。気をつけてね？」

安堵したような表情で笑いかけられるが、そこに強烈な違和感を感じる。

この女は、なぜ俺を気にかける？自分ではなくぶつかってきた男を心配する？なぜぶつかったことに文句のひとつも言わない？

なんとなく、引つかかっつる。

「……？俺の顔になんかついてんのか？」

しかし、その思考は直ぐに中断された。顔に穴が空くほど見つめられていることに気がつくのと、少女は慌てて顔を逸らす。

「えっ？あ、えと、ちよーイケメンだなあつて、あはっ」

取り繕った言葉で有耶無耶にしようとするが、その態度が俺に不信感を抱かせた。

俺を知っている？

警戒したその時、ウザったい声が俺たちの間に割り込んできた。

「いやー！お姉さん！ウチのバカがすみません！」

少女の後ろを真犯人どもが陣取り、巻き込まれた哀れな少女は動きを止めてしまった。

「えっ？」

「おい、誰がバカだ」

お前らのせいだろ。と付け足すがスルーされてしまう。

「お詫びに飯でも奢らせてくんね？」

胡散臭い笑顔で提案するゲスい友人どもに少女は少し考える素振りをした。

「……あー、なるなる、そういう事ねえ」

「へ？」

眉を八の字に曲げ、なんだか困ったように笑う少女は悪びれもせず爆弾発言を落とす。

「ごめんねー、そーゆー事に興味無いんだわ。発散したいのなら別の人を頼ってねん」

「そーゆー事」、その単語の意味に気づいた性行為の経験のない友人どもが反応してしまう。

顔を青ざめ、赤くし、凶星をつかれた野郎2人は必死に弁明し始める。

「えっ!? いや、別にそういう訳で声をかけたわけじゃなくてですわええ！ただただお詫びをしようよーな!?」

「おっ、おうー！そうだな!？」

「……はあ、うちの童貞共が迷惑かけた」

ため息をつきながら野郎どもを遮り少女の前に立つ。すると後ろから喚き声が聞こえてきた。

「ど、童貞じゃねーし！」

がそんな声は無視。

「しかし、まあなんというか、俺が申し訳ないと思ってるのは事実だ。お詫びになんか奢らせてくんねーか？」

申し訳なさ半分、彼女への興味半分ってところか。自分の心配をしない、自己への興味が薄いと思われる少女は俺にとっては未知の存在。

自分が絶対であり、何よりも優先される俺にとって彼女は不思議な生命体にしか見えなかった。それに加え、俺のことを知っている様子。何かしら俺に関係がある場所にいるはず。

正体を暴くのもスクールのリーダーたる俺の務めだろう。邪魔なら潰す。それだけだ。

「うーん、心遣いは有難いけど、あたしもう少ししたらバイトあるんよねえ」

それに、こんな派手な見た目の少女がどんな「バイト」をしているのか。多少探りを入れてもバチは当たらないだろう。

「この近くに美味しいケーキだすカフェあんだけど、だめか？」

ぴつとゲームセンターの外を指で刺すと、少し悩む素振りをして少女は苦々しい顔で決断を下す。

「うーん……うし、わかった、奢ってもらおう」

乙女的には難しい問題だったのだろう、まだ少し悩ましい顔をしながらもケーキに嬉しそうにしている。

まあ来なかったら後日暗部伝いで調べることになっていただけだし、どっちでも良かったが。

「そりゃよかった。で、お嬢さんの名前は？」

「あたしは天羽^{あもうけいと}彗系。よろしくね」

名前を聞かれた少女、天羽彗系は手を差し出し握手を求めてきた。

それに応じ、手を握り返すと後ろから「なんでコイツばかり!!」

「このリア充!!」とノイズが沸く。

「天羽彗系、か。珍しい名字に名前だな。まあ人のこと言えんが」

天羽彗系、聞かない名だ。「こっち側」の人間ならすぐに広まりそうだが、聞き覚えがないということは杞憂だったか？

「そーなん？おにーさんのお名前は？」

「垣根帝督だ。珍しい名字と名前だろ？」
ピシツと天羽の顔が少し歪んだ。

まさかナンパ野郎が垣根帝督だとは思ってもみなかったよ!!!
絶賛疑いの目をかけられているあたし、天羽彗糸は心の中で涙を零しながら叫んだ。

「どれにするんだ？」

店員に羨ましげな顔を向けられながら注文をする垣根帝督はなんだか様になつており、この現実には少し立ちくらみがしてくる始末。

名前を聞くまで気づかなかった自分が悪いのは百も承知だが、そんな自分にイラついてしまう。この苛立ちはどこにぶつければいいんだっ！

「あつ、えー、んじゃあ、チーズケーキで、お願いしまあす」

ゲームセンターのすぐそば、地下街にあるアンティークな雰囲気のあるオシャレなカフェの中、隅つこの2人席に垣根帝督とあたしは座っていた。

3つ隣の席には垣根帝督の友達がこちらの様子をメニュー越しに伺っている。

「さつきは悪かったな」

「?別に気にしてないよー。垣根くんは悪くないでしょ?それにこうやって〃お詫び〃されちゃってるし、そんなに謝らなくて良くね？」

……垣根帝督ってこんな律儀な紳士キャラだったっけ?いや、アニメを観たのが10年以上前、あたしがほとんど忘れてるだけで元々こうだったのかな?

そう、あたしは忘れていたのだ。

インパクトはあっても10年も経てば重要なキャラクター以外の

視覚情報は薄れていくもの。ロン毛の茶髪、高身長、めっちゃイケメンという要素を覚えていてもアニメではなく現実であるこの世界ではあまり意味が無い。だから名前を聞くまで彼が何者か気づけなかった。とはいえものすんごいイケメンだったためガン見してしまい、その結果垣根帝督に疑われることになったが。

なんで疑うんよお！こちとらただのギャルだし!?見た目は暗部に片足突っ込んでそうな反抗的なカンジだけど！垣根くんがビビるほどイケメンでガン見しちゃったけどさあ！

綺麗な顔に笑みを浮かべるその黒い目には疑惑と敵意が薄らと読み取れた。

「なあ、その制服見かけねえけどどこの？」

「えー、名前聞いてもわかんないと思うけど……んー、これこれ、ここの」垣根くんの機嫌がいつ悪くなるか内心ビクビクしながらも平常心を装って笑顔で返答する。スマホの画面を操作して学校を公式ホームページを開き、彼に見せた。あたしが今在籍する高校は皆様ご存知「とある高校」

大学を卒業し、冥土帰しの元に転がり込んだあたしは適当な理由をつけて彼に頼み込み天羽彗系の戸籍を作ってもらったのだ。代わりにと言ってはなんだが、小中学生の内は学校に在籍せずと冥土帰しの病院でお手伝いをさせてもらっていた。が、高校だけは行っておくとパンフを渡されたのだ。まさかそこが「とある高校」とは夢にも思わなかったけど。あのオッサン、何が目的なんだか。

ちなみに黒髪黒目の藍花悦は書類上は藍鈴女子高に籍を置いている。まあ一度も行っていないが。なぜ藍鈴にいったのかというと単純に藍が学校名に入ってるから決めた。わぁテキトウ！

「垣根くんは長点上機なんだね。何年？」

そんなおバカ高校のセーラー服を着るあたしとは反対に、特徴的なブレザーに身を包むイケメンはどこからどう見てもエリート校こと長点上機学園の生徒様。しかし、小説でも漫画でもアニメでも学校生活の描写はなかったはずなのに彼が学校に行っていることに違和感を感じなかった。まるでそれが当たり前のように、常識のようにスト

ンと頭に記憶される。違和感がないという違和感。

「2年」

「一個上かあ、あれ、じゃあ先輩って呼んだ方が良さげな感じ?」

「いや、垣根でいい」

カチャカチャと音を立て店員が2人分の紅茶とあたしのチーズケーキ、垣根くんのモンブランを持ってくる。綺麗な色をしたそれらはどれも美味しそうで、甘党のあたしには天国のように感じた。

「にしても、なんであの時俺を心配したんだ?」

「んむ?どのとき?」

「さっきのこと。押し倒しちゃったとき。罵詈雑言は覚悟してたんだがな、なんも言わねえから拍子抜けしちまって」

んー、と喉で返事をし、チーズケーキを咀嚼する。甘酸っぱいこの味を妹が食べたなら「初恋の味!」とかふざけるんだろうか。

「目の前に転んだ可愛い男の子がいるんよ?心配しないわけないじゃん?それに垣根くんは悪いことしてないでしょ?怒る理由なんてないよ」

精一杯の笑顔で答えると目の前の美しい少年は端正な顔を歪めて低い声で唸った。

「俺は可愛い男の子じゃねえ、男だ。それを言うなら女である自分の心配をしろ」

少しイラつかせてしまったか、ピリピリとした緊張感が体を支配する。目の前に座る背の高い男の子は学園都市超能力者^{レベル5}第2位、垣根帝督。下手なこと言ったら痛い目を見ることになるのは明白だ。

「あたしは大丈夫だから、心配しないで?」

それでもあたしは笑顔を崩さないように努力をした。彼の目にとんな風に映っているかは分からないが、今できる精一杯の笑顔を彼に向ける。

「誰もテメエの事なんざ心配してねえよ」

ぶつきらぼうに言い放ち、そっぽを向く。よかった、機嫌が悪い訳では無いようだ。ただの可愛い照れ隠しじゃないか。ああ、まるで妹を見ているよう!

「ありがとう、心配してくれて。お姉ちゃんは丈夫だから、心配しなくてもダイジョーブ!」

「お姉ちゃんって、お前年下だろ……」

「垣根くん弟っぽいからさ」

「はっ。」

今こうやって話していて思う。彼は別に悪党ではないんじゃないか、と。

あくまであたしの悪党観に基づいての話ではあるが。彼はどちらかというと悪役だ。

枉林檎の件を見る限りではあるが、あたしの中で垣根帝督は自分の信念の元で誰かを救おうと一生懸命その手で必死に光を掴もうとした頑張り屋の少年として認識されている。ただ、やり方が悪党だっただけなんだ。

どんなに光を求めても悪の道にいる彼には掴めない。

不幸な少年。救うべき人。

傷ついたまま最期を迎える彼の物語をあたしは認めない。認めたくなんかない。

アレイスターによって生まれた悲劇をあたしは終わらせたい。

だってこんなにも光を求めてるんだよ?

こんなにも良い子なんだよ?

死んでしまっていていいわけが無い!

あたしは救わなくてはいけない。

あたしは赦さなくてはならない。

闇を見つめる瞳を涙で曇らせないように。

「でもほんとに大丈夫なんよ。あたしの能力のおかげでね」

「……能力?」

うん、と相槌を打つと垣根くんはこちらに顔を向ける。少しだけ期待の色が瞳の奥に見え隠れしていた。

「知りたい?」

「まあ、少しは」

笑みを口元に浮かべ、なんて説明しようかと考える。数秒ほど考

えが纏まり、口を開けた。

「あたしの能力はね、癒しなんよ」

「癒し？」

「大能力者の肉体支配^{リカバライザー}。それがあたしの能力。人の傷を感知してあたしの傷も他人の傷も癒せるって感じ。だから最初に垣根くんに怪我があるか聞いたんだよ」

このあたし、「天羽隼系」の能力、それは大能力者の肉体支配^{リカバライザー}。作中で土御門元春が使っていた能力の上位互換だ。ちなみに名前は彼と被らないようにとか言われて学校側がつけたもの。

しかし、これは天羽隼系として人を欺くための嘘の混ざった能力であり、藍花悦の、いやこの能力の真髄ではない。

「……なるほど。他人の治癒は初めて聞くな」

「えへへ、珍しいっしょ？」

この能力の真実、それは治癒だけでは無いということ。

超能力者第6位の藍花悦の能力に付けられた識別名は「不死者^{アンデッド}」

なんだかゾンビを彷彿とさせる能力名は研究員がつけたもの。

自分と、他人の肉体を構成する細胞、脳から送られる電気信号、神経、ホルモン、その全てを支配し、操る。それがこの能力の本質。分泌されるホルモンを減らしたり、筋肉の縮小増大、細胞の活性化と壊死、脳内信号の制御など、とりあえず体のことならなんでもござれの万能能力。

死んでも脳があれば生き返る。だから「不死者」

身体能力だけなら聖人や7位ほどの強さを持てる力。

そしてこの能力は私と親和性が非常に高かった。元々あたしは生物物理学、つまり体の仕組みを研究していたのだ。体の細胞からなにもかも勉強し、研究し続けていたあたしにはこれ以上ないほどピツタリな力。そんな素晴らしい能力。

しかし、超能力者に勝てるかと聞かれたら無理な話。

この力が出来るのは肉体のコントロールのみ。他の学問に应用が聞く他の超能力者と比べると見劣りする。

一人で軍隊を壊滅できるという超能力者、しかしその選出法は科学

的に価値があるか。軍隊を壊滅できる自信も科学的価値にも自信はある。が、これは他の超能力者も一緒。結局、あたしに出来ることは不死身に近いこの体を使つての肉弾戦。

デタラメな7位削板軍覇

精神を支配する第5位食蜂操祈

破壊光線を打ってくる第4位麦野沈利

電撃を放つ第3位御坂美琴

未知の法則を操る第2位垣根帝督

そもそも近づけもしない第1位一方通行……

負けはしないが勝てもしないだろう。

そもそもの話、この能力はどこから来たのだろうか？これは藍花悦の能力なのか天羽擘糸の能力なのかわからない。藍花悦の能力は原作でまだ明かされていないからだ。

じゃあ、今あたしが持っている能力は何？

「あー、ごめん、そろそろバイト行かないとマズイ」

変にこういったことを考えると深みにハマって出れなくなる。学者としての経験から意識を浮上させ、時計を見ると予定の時刻に針が差し迫っていた。

「ん？ああ、そういえばそんなこと言ってたな」

「ケーキ美味しかった、また遊ぼうよ。これメアドね」

重い鞆の中からメモ帳とペンを取り出し、メールアドレスをさらさらと書き記す。驚いたような顔をする垣根くんにそれを押し付け、席を立った。

「ふーん……ま、連絡には期待すんなよ？こう見えても忙しいからな」「ふふ、知ってる。じゃあね、奢ってくれてありがとう。また会えると嬉しいな！」

手を軽く振り、そのままバイト先まで小走りで向かう。遅刻ギリギリ、間に合うとは思うが下手をしたら間に合わない。

失言に気づかないままあたしは店を出た。

少女が走り去ったすぐ後のこと。

「知ってる……ねえ？」

「なんで垣根ばっかりっ！顔か！顔なのか！くそおお」

「なぜ！こんなにも！人間とは不公平なのだろうか!!!」

3人の少年たちはそれぞれの思いを叫びながら店を後にした。

2話：顔合わせ

授業中、とある少年により恐る恐ると開かれたスライド式のドアは賑やかな教室を一瞬で冷ややかなものにした。

「お、おはようございまーす……」

夏休みが近づき始め、みんな浮き足立ち始める7月の始め、眩しく光る太陽の下であたしはクーラーのよく効いた教室に座り、机の下でスマホを弄ることに専念していた。

「上条ちゃん！また遅刻ですか!？」

背の低い少女ーいや幼女と呼ぶべきかーは遅れて教室に入ってきたツンツン髪の少年に目をつけ、その可愛らしい顔を膨らませる。

スマホから目を離し、教室の後ろに視線を向けるとそこには我らが主人公、上条当麻が申し訳なきように突っ立っていた。

「カミヤん！今日はどんな不幸だったのかにやー?！」

「どうせ女の子相手にフラグ立ててきたんやろ!? そうなんやろ!？」

金髪グラサンのいかにも怪しいやつ、そして青い髪と耳で光るピアスが特徴的な男子生徒2人が途中参戦してきた少年にからかいの言葉を投げかける。

「はあ……不幸だ」

不幸と呟く少年の名前は上条当麻。

この世界の主人公で、もう会えない妹の「推しキャラ」とやら。

「上条くんおっつ。そんで今日は何があった感じなん?！」

彼と席が近いあたしは入学当初から積極的に上条当麻に絡みに行っていた。

おかげで今はクラスの女子の中で一番上条当麻と仲が良い。

あたしがわざわざ距離を詰めに行ったのはそれは彼が主人公であり、この世界を動かす超重要人物だから。

ヒーロー様のそばにいれば何かしらに巻き込まれるだろうという楽観的な考えの元、彼と仲良くしていたのだ。

……いや、良い子だよ?！」

良い子だし、話してて結構楽しいよ?！」

別に嫌々関わっているわけじゃないよ？

アニメで観た印象よりもずっとまともだし。

こんなことなら真面目に観ておけばよかったなって後悔する程度には良い子だと思うよ？

ただ友情かどうか聞かれたら少し言い淀んでしまう。

それはあたしがこのあとの物語を知っているから。

そしてあたしがこの世界ですべきことは彼の救いの手から零れ落ちた不幸な子供たちの救出だと思っているわけで。

どう足掻いても彼を利用している事実は覆らないのだ。

「いやあ、それがですね？財布と家の鍵を落としてしまいました……」

「マ？やばたにえんじやん！さすが不幸のプロって感じ？」

わざと馬鹿みたいな口調で上条に話しかけるもぐったりしている彼にツッコまれることはなく。

それもそうか。

席に座ろうと椅子を引いた上条は今にも死にそうな顔をしていた。

そりゃあ財布と鍵失くしたらそんな顔もしたくなるわな。

「上条さんには天羽さんが何を言ってるのかミミリも分からん分からない分かります3段活用っ！」

「3段活用関係なくね？上条くんまじウケるんすけど」

ああよかった。

ツッコミが出来なくなるほど衰弱していた訳ではなかったようだ

そんな感じで適当に彼と駄べっているとぺしっと何かに叩かれる。

「なんすか小萌せんせ〜！」

前を向くとそこには小さな先生が日誌をもって怒っていた。

「だめですよ！授業中に喋っちゃ！天羽ちゃんは一応優秀なので大抵の事は大目に見えますけど、上条ちゃんの邪魔だけはしちゃダメですっ！」

「はあ〜い」

担任の小萌先生の言葉に素直に従い、黒板のほうに姿勢を正し、スマホいじりに戻る。

後ろの方から上条くんをからかう声が聞こえるがあえて聞こえない

い振りをする。いちいち相手すんのもめんどいし？

メールアプリを起動し、この間知り合ったばかりの少年に連絡を入れると秒で返事が返ってきた。

忙しいんじゃないんかい！

「あ、そうそう上条ちゃん、放課後残ってくださいね？遅刻した分とこの間の宿題未提出のことでお話があります！」

逃げちゃダメですよ？と付け足した小萌先生の笑顔には誰一人逆らえないとこの教室の生徒たちは理解していた。生徒たち全員が一斉に上条くんのほうに目を向けると、そこにはプルプルと身体を震わせた不幸な少年が立っていた。

「…………ふ、ふ、不幸だあー!!」

「いやあ、あれは傑作だったにやー」

「自業自得やな、遅刻したカミヤんが悪い」

「仕方ないだろー？財布も鍵もなかったんだから…………」

今朝の一悶着から数時間が過ぎ去り、あつという間に下校時間となった。

呼び出しのせいでいつもより遅い時間の科学の発展したこの街の中を歩く。

「にしてもカミヤんはええなあ」

わざとらしく大きなため息をつく青髪ピアスは何故か恨めしげに俺の顔を見つめた。

「ん？何がだ？」

「やって、あの天羽彗様に懐かれとるやんか！」

天羽彗糸。

入学当初から仲良くしているクラスメイトの女の子。

金髪にピンクのグラデーションが下から入る、どこからどう見てもザ☆ギャルなその女の子はどうしてか俺によく話しかけてくる。

「あれ絶対カミヤんのこと好きやろ！あー、なんでカミヤんばかり！」
「そうかにやー？天羽はカミヤんに哀れみに近い感情を抱いてる気がするぞ？」

ガツクリと肩を落とす青髪をまあまあと宥める土御門だったがその内容は俺にはさっぱりで。

「え、上条さん知らない間に天羽に同情されてたわけでせう……？」

底辺校に舞い降りたギャル系天使、それが天羽慧系の周りからの評価だった。

土御門と似た能力を持つレベル4であり、他の生徒と比べると頭3つ分は抜けている天才。

こんな底辺校にいるのが間違いのような人物。慈愛の精神に満ち溢れた本物の白衣の天使。

しかもアメリカからの帰国子女ときた。

口調はアレだが、性格も服装からイメージするものとはかけ離れており、どこまでも善人。

そんな彼女が一目置かれるのも無理はない。

「そりゃあ不幸人間カミヤんだからせよ」

「俺の不幸のせいかつ……でも天羽は俺のこと好きじゃないと思うぞ」

不幸体質はこんな所でも不幸を呼んでしまうのか……！と少し悲しみに心を支配されかけるが、ふとこの間見た光景を思い出す。

カフェの中、楽しそうに談笑する姿を。

「ほほう？…どうしてそう言いきれるんだ？」

グラサンをまるで悪役のようにクイツと中指で顔に近付ける土御門はどこことなく真剣だ。

「アイツ、彼氏いるっぽい」

思い返すはこの間の放課後。

シャレオツなカフェに男と座っていたあの光景。

「……な、に？」

「なん、だと……？」

俺の出した答えは2人にとっては予想外のものだったようでは
かーんと口を大きく開けて固まってしまふ。

「ちよ、ちよ、カミヤン！それはどこ情報!?教えてくれや！頼むで！」
が、流石は青髪ピアス、すぐさま意識を取り戻し俺の肩を大きく揺
さぶる。

「いや、この間すげーイケメンとカフェでデートしてるとこ見かけて
さ」

揺さぶられながらも完璧に答えられた俺を誰かに褒めて欲しいか
ぎりです。

「くっ！やはり顔か！顔なのか！」

「しかも長点上機っぽい」

「が、学歴社会いー!!」

悲鳴をあげる青髪ピアスは放っておいて、話を続ける。

「けっこう背も高かったし、モデル体型ってやつだったな。でもどこ
となくチャラかったかも」

「あんな感じかにやー？」

そういつて土御門が視線を向けた先には俺の言った特徴とよく似
たやつがいて。

「そうそう、あんな感、じ……」

「あ?」

「あ」

「あれ、上条くんじゃん」

……本人じゃねえーか！

「えーと、こちらが垣根帝督くんぞ」

近場のファミレスへ移動したあたしたちは簡単にメニューから注

文したあと、自己紹介をすることにした。

「……」

あたしの隣には垣根帝督くん。

「で、こっちゃんが上条当麻くんと愉快的仲間たち」

テーブルを間に挟んだ前には上条当麻くんと土御門元春くん、青髪ピアスくん

「ど、どうも」

ビクビクと子犬のように震える上条くんが哀れに見えてくる。

それもそのはず。威圧感を放ち、機嫌の悪さを隠さない垣根くんが目の前にいるのだ。

でも上条くん、いちばん怖いのは隣に座るあたしだよ……

「俺たちの扱い雑なんにゃー……」

「いや、そんな扱いでもボクは興奮するで！」

テーブルの上にはそれぞれが頼んだケーキやらご飯やらが鎮座しており、思う存分好きだけご飯をぱくついていた。上条くんと垣根くん以外は。

ぴくりと垣根くんの目元が動く。

あ、これガチギレじゃね？

「あは、は、ごめんごめん、金髪くんが土御門元春くん、んでもう一人は青髪ピアス」

「青……？」

やっと声を発した垣根くんだが、その機嫌は悪いままで。

めんどくさい性格だなと感じながらも何となく頭を撫でたい衝動に駆られる。

妹もこうだったなあと思いつ出した。

あたしが別の人と喋っているとすーぐ機嫌を悪くして拗ねちゃう妹。でも頭を撫でて、思いつきりハグをすると機嫌が治るのだ。馬鹿で可愛い妹。

「ニツクネームや。青髪ピアスって呼んでくれてもええんやでー！」

「……」

「……」

懐かしい記憶に浸っていたが現実の重い空気を感じ取り、意識を向ける。

おつつつつつも!

え? 何この空気? 沈黙!

「あー、えーと、垣根さん? カップルの時間を邪魔しちや悪いし、このままおいとましますね……?」

「……? カップルじゃねえけど」

「……? ところでようやく彼らに目を向けた。」

「え!? 違うの!?!」

「やっぱカミヤんの勘違いか……っしや!」

「まーそんなところだろうと思っただぜよ」

「少しだけ空気が軽くなる。」

垣根くんの機嫌もほんの少し治ったように見えた。

「でもこの間ナンパしてきたわけだし? その気はあるんじゃないのー?」

「……ナンパじゃねえ」

あ、また機嫌悪くなった。

どこが沸点なのかいまいち掴めんなこの子は。

「はいはい、そーですね。それで? なんで呼び出したの?」

とりあえず話をそらそう。

彼の方を向き、今日呼ばれた訳を聞く。

授業中、メッセで渡したいものがあるから会いたいなどと言われた結果、今日あたしはここで垣根くんとお話しているのだ。

そんな垣根くんは自分のスクバに手を突っ込み、なにやら目当てのものを探し始めた。

渡したいもの、爆弾じゃなければいいけど。いや、ほんつとに。ガチで。

「ん」

ずいっと言葉も発さずに押し付けてきたのは可愛らしいピンクと蛍光グリーンスマホストラップ。

巨大なリボンがついたそれはこの間ネットで見かけたお高いブラ

ンドのロゴが付いていた。

「なんこれ？買ったの？」

「流石に押し倒しちまってるし、ケーキ程度で許されるとは思っ
ねえからな。これでチャラにしろ」

変質者とか言いふらされたら困る、なんて付け足しながらため息を
つかれる。

何だ、てつきり女の子取っ替え引っ替えしてそうだから押し倒した
くらい何とも思わないかと。

結構純粹？

「別に何とも思っていないんだけどな。垣根くんって案外ちゃんとして
るね。律儀〜！」

「そういうテメエは貞操観念ゆるふわかよ。見た目みたいに股も緩
いってか」

「んー、そういうこと興味ないなあ。したこともしろうと思っただ事も
ないし」

適当に垣根くんの失礼な発言を聞き流し、もらったスマホストラッ
プを見る。

金色の金具にショッキンクピンクと蛍光緑の目に悪そうなりボン
が二つ連なるそのストラップの下には白いクマのぬいぐるみがつい
ている。

ジャラジャラと他にもストラップがついたスマホを取り出し、それ
を取り付けた。

……あれ？そう言えばあたし今垣根くんに絶賛疑われ中なんだよ
ね？

もしかして、発信機とか……

いや、疑うのはよそう。うん。あたしはなにも気づいてませんよ？
ええ、気づいてませんとも。

それにしてもあたしはピンクと緑が好きと言った訳ではない。お
そらくだが、あたしの髪の色や緑色の爪や鞄に着けたピンクと緑の
キーホルダーをみて買ってくれたのだろうか。

そう考えると自然と笑みがこぼれてしまう。

彼はやはり他人を気遣える人間だ。

誰かを救おうともがき、けれど光に手が届かなかった。そんな不幸な少年。

「ふふふ、凄く嬉しい、ありがとう」

そんな彼を救いたい。

「そーかよ」

ぷいっと顔を背ける彼の横顔からは照れと喜びの感情が見える。

機嫌は完璧に治ったようだ。

「あれ？なんか上条さん達、場違い？」

「ボクたち、見せつけられてるんとちやいます？」

空気に馴染んでいた上条くんたちを思い出し、すぐに向き直る。

「にやはー、ごめんね？元々こつちが目的だったからさー」

「……んじゃ渡したし帰る」

「は!?!何言ってるの!?! stay stay! sit!」

席を立とうとする垣根くんの腕にすかさずしがみつき、行かせはしないと抵抗の意を示す。

「そーだよ、話そうぜ？あんたとも仲良くなりたいたいしきー」

「……はあ、わーったよ、勝手にしろ」

観念したのか腰を下ろす。

腕を解放してやり、ニコニコと彼を見るとイラツとしたのか頬を抓られる。

いひゃい

「なにすんのさあ」

「なんかイラツときた」

ひどいなあ。

抓られた頬を擦りながらじっと睨むと鼻で笑われた。

「垣根さんって制服から察するに長点上機の生徒だよな？頭いいのかわ？」

そんなあたしには目もくれず上条くんは垣根くんに詰め寄った。

こいつ、勉強教わる気だな。

「あー、垣根でいい。俺も苗字で呼ぶから。」

「んじや垣根で」

「でだ上条、俺の頭がいいかだったな？そうだな……学園都市の中なら2番目に頭がいいってことにはなってるな」

ふつと笑みを零しながら言い放つ垣根くんからは絶対的な自信が伺える。

まあスパコン並の演算能力持つてるんだから頭いいよね。

あれ？垣根くんってもしかしてイケメン高身長金持ち頭脳明晰喧嘩強いでクアトロ無双してる……？

ぱ、ぱねえな。

「……？2番目……？」

しかし上条くんは理解が追いついていないようだ。

「7人しかいない超能力者の2位ってことっしょ」

「そのとおりだ」

上条くんのために正解を答えたが、まだ現実を受け入れてないのか目がぐるぐると回っていた。

「に、にい、2位ですか、そーですか、ええ、はは、」

「凄いな、高位能力者だとは思ってたけど超能力者とは思ってもなかったなあ」

嘘ですけどね。

バリバリ知ってましたけどね。

「ち、ちなみに、どんな能力か、聞いてもよろしいでせうか……？」

恐る恐るといった表情で上条はまるで授業中のようにかろくその右手を挙げる。

「まあ、調べれば出てくることだしな、教えてもいいか。俺の能力は未知物質、未知の物質を操る力だ。」

少し悩む素振りをした垣根くんではあったが、特に心配した様子もなく簡単にその手の内をバラしてしまう。

そこから絶対的な自信が伺えた。

「ん？み、未知？」

「そ、この世界に存在しない物質の操作、それがこの俺の能力」

「わ、わけがわからないんやけど……」

「ま、上条くんが逆立ちしても勝てない人物って事はわかる」
「うっ……」

垣根くんは空が飛べる。それを考慮すれば近距離右手パンチしか出来ない上条くんやあたしは絶対に勝てない。

……うーん、骨の骨格を無理やり変えて翼を作ればいけるか？いや、無理だな。

「いやあ、彗糸ちゃん、すごいのと知り合いやないか……」

口をひくつかせる青髪くんと驚いた振りをする土御門くんだが、上条くんほど驚いた訳では無いようだった。

「ふっふー、この調子で超能力者の友人作りまくってコンプリートしよーかな」

「俺らもう既に3位とは知り合いだし、できるんじゃないか？」

上条くんに言われて思い出すのは一人の少女。

御坂美琴。

中学生の超能力者。

ツンデレと呼ばれる性格らしく、あまり馬は合わないが子供っぽいところを見ると応援したくなる、そんな可愛い子。

初対面の相手に電撃とかヤバくね？とか思っていたが実際に1人の人間として話してみるとそこまでサイコパスには感じなかった。

上条経由で知り合った数少ない友人。

「7位もね！知らないのは1位と4位、5位だけかな？」

そして第7位、削板軍覇くん。自分でもよく分からないがいつの間にか仲良くなっていた。意味がわからない。

彼を言葉にするのなら「嵐」がピッタリだろう。

「6位は？」

青髪ピアスに聞かれ、一瞬体が強ばった。

しかしすぐに何を聞かれたか理解し、返答を考える。

6位はあたしだ。

数に入れるわけがない。

「え？あ、忘れてた。6位も知らないなあ……」

なんとか口から捻り出した答えは意外とみんなに受け入れられた

ようで、疑問を持つものはいなかった。

「……藍花悦」

「え？」

突然呼ばれた名前。

情報は消したはず。

どうして、なぜ知っている。

なぜあたしを知っている。

誰が教えた。

いつ知った。

どこで漏れた。

誰に聞いた。

何を知っている。

どうやって、

あ、

恐怖で

体が

動かない。

「藍花悦？」

すかさず土御門くんが垣根くんに聞き返した。

「第6位の名前だ。つってもそれしか知らねえけどな」

「へえ〜どんな能力なんや？」

「だから知らねえつつてんだろ。能力は疎か、見た目、性別、年齢……」

その何もかもが見当たらねえんだ」

ため息をつきながら足を組み直す姿は堂々としていて、彼の強さを

ひしひしと感じる。

あたしに鎌をかけているの？それともあたしへの宣戦布告？警告

？

わからない、彼の思考が。

「見当たらない？」

「なーんか昔はテレビや新聞で引っ張りだこだったらしいがその映像も新聞のページも何も見つからないんだと。俺が調べたわけじやな

いからよくわかんねえけど」

「ふうん」

「あ、でも黒髪で青が似合うってことは分かってるらしい」

「何そのピンポイントな情報」

「すげーいらぬ情報だろ？」と垣根くんが笑うとつられて彼らも笑った。

「変だよなあ……って天羽？どうした？」

笑いも動きもしないあたしに少し不思議に思ったのか垣根くんが肩に触れる。

その温かさにハツと我に変えり、何とか声を出す。

「つえ、あ、なんでもない。バイトのこと考えてて」

「そうか？バイトキツイのか？」

大丈夫だよー、と心配性の上条くん返答するとなんとなく心が落ち着いた。

大丈夫、バレてない。まだ、大丈夫。

「……そういや聞いてなかったがなんの「バイト」をしてるんだ？」

しかし、平穏を取り戻しかけた心は垣根くんの質問で飛び跳ねた。

あー、そうだ。あたし疑われてるんだった。私のバイトを暗部関連のものと勘違いしてるんだよなあ。

最初に会った時ジロジロ見ちゃったし、ちよつと口が滑って余計なことまで言っちゃったしね。しかもこーんな見た目だ、そこら辺の低賃金バイトだと信じるとは思えない。

言葉を慎重に選ばないと勘違いされて敵になりかねないな。

「……ああ、垣根くんには教えてなかったね」

慎重に考えた結果、ストレートに教えるのが1番得策だと結論付ける。

「あたし、ナースなんよ」

「……は？」

変に「人に癒しを与えるリツパなお仕事だよ☆」なあんて言ったら絶対ヤラシイ仕事だと勘違いされるっしょ。

あまり悪い印象を与えたくない。

「夜間だけだけどね。夜はナースさんしてんの。冥土帰って聞いたことない？あの人の元で修行してんよ」

まあ、夜のナースって隠語っぽいから勘違いする可能性は無くはないけど……

さすがに冥土帰しの名前を聞けば暗部とは思わないっしょ。

まあ冥土帰し本人もかなり怪しいが。

「冥土帰し？……ああ、あの天才外科医とかいう」

怪訝そうな顔をしながらあたしを見つめる。

「そうそう、その人」

「じゃあ俺の勘違い……？」

ぼそつと聞こえないように呟いたみたいだが、隣にいたあたしにはバツチリと聞こえた。

が、ここで何か言ったか聞くとめんどくさくなりそうなのでガッツリスルー。

疑いも晴れたようで良かった良かった。

「というか彗糸ちゃんそろそろバイトの時間やないか？」

そう言われパツと時計を見るとそろそろバイトが始まる時間。

「あつーやばつー！また怒られるっ！」

「奢ってやるから、さっさと行けよ」

自分の分のお金を払おうと財布を取り出したら、やんわりと垣根くんに止められた。

「えっ？マ!?ちよーイケメンちゃん！ありー！」

「そりやどー、も!？」

女の子にいいところを見せたいのだろうか、背伸びした姿に思わずハグをする。

アメリカにいた頃は男女構わずによくやった。そういう文化だったしね。

妹と被る垣根くんには尚更したくなるのが姉心ってヤツ。

「じゃーのんっ！」

手を振り、その場を颯爽と去る。

「……なんだ、あれ」

「アメリカからの帰国子女、リアル白衣の天使こと天羽彗糸様やで」
「……なるほど」

七月

3話：夏休み

夏休みが始まった7月20日。

第7学区にある総合病院。

「派遣？」

「そうだね？」

すこし大きい襟がきつちりと閉められている短い袖のピンクがかつた白いシャツをパタパタと仰ぎながら風を送る。同じ色のズボンからは足首が見えており、その隙間から暑い空気が流れ込んできた。

いつもつけているピアスも、ネックレスも、チョーカーも、指輪も、ブレスレットもなにひとつなく、自慢の巻き毛はひとつに結ばれている。

綺麗な金髪の毛先からピンクのグラデーションが入った素行の悪そうなナース、それが今のあたしから感じ取る印象だろう。

そしてそんなあたしはクーラーが効かない暑い部屋の中であたしは何故か私服の垣根くんと2人で冥土帰しの前に座っていた。

そう、何故か垣根くんがいる。

「つかさあ、なんでアンタここにいんの」

隣に座る彼を睨みながら見上げると、その綺麗な顔に胡散臭そうな笑顔を作った。

「なんでって……お前の監視？」

彼はまだあたしを疑っているようで、そのガラス玉のような黒目には濁った感情が伺える。

「なんで」

「能力での他人の治療に興味があつてな、いつ見れるか待ってるわけ」

「……さては、暇人だな？」

「どうとでもいえ」

一応理由を聞くが適当なことしか言わず。精一杯からかうが流さ

れてしまった。

ていうか、何であたしのシフトしてんだ？冥土帰しのもとで働いてるとは言ったが、どこの病院で働いてるかは教えてないし。

こりやますますあのスマホのストラップが怪しくなってきたな。盗聴器か発信機でも入れているのか？まあ、害はないし、あたしを監視してあたしの疑いが晴れるならいいか。

「お話中悪いけどね？こっちの話も聞いてもらいたいね？」

「あつ、すみません。で、派遣つすよね？行ってもいいんですけど……なにかあつたんすか？」

「虚空爆破事件、って知ってるかい？」

「あー、あの連続爆破事件か」

「まあ、知ってますケド……」

虚空爆破事件。一昨日犯人が捕まったことにより収束した連続爆破事件のこと。コンビニやセブンスミス、様々な場所が規則性なく爆破されたこの事件はめでたく風紀委員と超電磁砲、不幸な少年の手によって幕を下ろした。

そしてこの話は超電磁砲に元からある事件のひとつ。

本当は介入したかったが何日に起こるのか完璧に忘れていたため出来なかった。

原作通り、誰も悲しまずに終わったので介入しなくて正解だったのかもしれないが。

下手に割って入った結果、ハプニングが起きて死人が出たら嫌だし。

「その犯人の学生が昏睡状態に陥った」

「ふーん？」

「……それであたしに向かって欲しいと？」

「そういう事だね？似たような症例が沢山来てあっちも参ってるみたいだ。ということ、これがあちらから送られてきたカルテと病院の場所。よろしく頼むね？」

「……はあーい」

「あちらで仕事が終わったらそのまま上がっていいからね？」

資料を受け取りそのまま部屋を出る。

昨日の停電はまだ復旧しておらず、病院内の非常用電源は患者さんに使われているためクーラーなどに割く電力なんて持っているはずもなく、廊下には熱気が籠っていた。

「垣根くんもくんの?」

「能力を使うとこが見たいって言ってんだろ。行くに決まってる」

「ですよー」

そのままエレベーターで下へおり、関係者入口へ。外に繋がる扉を開けるとそこには関係者専用の駐車場が広がっていた。

「なにで行くんだ?」

「んー?これ」

向かう先には1台のバイク。

「これ、おまえの?」

「そ、かわいいっしょ?250ccのネイキッドモデル!」

カ○サキグリーン……ではなくただの蛍光グリーンの小柄なバイクは女性が運転するのにちょうどいいサイズでかなり人気のあるものだった。

企業的な意味ではどちらかと言うとカワ○キよりヤ○ハに近いが。蛍光グリーンが本当に好きなんだな、なんて呆れながら零されるが、あたしがピンクや緑を好んで選ぶのはあたしに”藍色”、まあ平たく言えば”青”のイメージをつけさせないためだ。意図的に青色を遠ざけてる。

「オマエ、バイクの運転なんて出来んのかよ。無免許じゃねえだろうな?」

「もってるよ!一応4月生まれだからもう16歳なの!」

ふーんと興味無さそうに返事をする彼に少し苛立ちを覚えながらもヘルメットを被る。

とうか元々は24歳の院卒の大人だったんだ。車も乗れるし、バイクも乗れる。

さすがに重機は操縦出来ないけど……

「一応スペアのヘルメットあるけど、乗る?別に1人で歩かせてもあ

たしはいいんだけど?」

「いや、俺が運転するからいい」

「は?」

意味のわからないことを言ったと思えばあたしの手からバイクの鍵とヘルメット奪い去り、愛車に跨った。

突然の事で一瞬頭が真っ白になる。

「お前が後ろ乗れ。テメエの運転とか怖いっつーの」

「免許は!?!」

「ある。車はさすがにねえけど」

「な、ならオツケー、なのか?」

あれ?でもこの子アニメで車運転してなかったっけ?記憶違い?

頭にハテナを浮かべながらもヘルメットを被り後ろに座ると彼の背中に体を預けた。

背が10センチも変わらないあたし達、それなのに垣根くんの背中は少し広く感じる。男の子の体。

「変なところ触ったら殺すからな」

「え?弟にセクハラすんのはお姉ちゃんの務めじゃないの?」

「誰がお姉ちゃんだ、年下」

悪態を着きながらもバイクのエンジンをかけ、アクセルを踏み込む。

心地よい振動と音が体に伝わるのが感じられた。

バイクの後ろに乗るのは死ぬ前も含めて初めての経験だった。

垣根くんの運転テクは見事なもので、スイスイと合間を縫って目的地へ普通に走るより少し早く到着してしまったほど。

「初めまして、今日派遣されてきた大能力者^{レベル4}の肉体干渉能力者、天羽隼糸です」

「ああ、あなたが。話は伺ってるよ……そちらは?」

病院の入口であたしたちを待っていたと思われるお医者様に声をかけて名乗ると最初は喜びの表情を見せるが、垣根くんの姿を見ると怪訝そうな顔に変わった。

「彼は我々の病院に善意で協力をしてきている超能力者^{レベル5}のお一人で

す。力になるのではないかと考え今回お呼びしました。前もって御相談せずにお連れしたことはお詫び申し上げます。彼も病室へ連れて行ってもよろしいでしょうか？」

「あ、ああ、構わないが……」

「どーも」

適当なことを言って強引に納得させるとそのままあたしたちを中へ案内する。

コツコツと足音を響かせながら病室に向かう途中カルテを確認している垣根くんがこつそりと耳打ちをしてきた。

「お前、敬語使えるんだな」

「そりゃーTPOくらい弁えるっつーの……」

まるで珍獣を見ているかのような目線をあたしに向けてきやがるが、そこは似たような生意気な妹がいたあたし、特に怒りもせず平常心で受け答えることに成功。

「こちらです」

案内された先にあつた病室の扉を開け、中に入るとそこには髪が伸びている少年が横たわっていた。

疲れきった寝顔を晒す意識のない少年もまた、あたしが救うべき人。しかし、この昏睡状態はきつと神が与えた試練であり罰だ。

力に飲み込まれ怒りの矛先を間違え、人に傷を付けた彼へが正しくなるための。

彼が人に赦されるために必要な処置なのだ。

「どれどれ」

そう考えながらもやはり助けられないのはあたしじゃない。手をかざさずとも身体に干渉することは出来るが、一応あたしは大能力者^{レベル4}として身分を隠しているワケありの人間だ。

わざと手をかざして彼に演算を試みる。

ー演算開始

? 外傷、無し

? 脳内物質の異常、無し

? ホルモンの異常、無し

? 血液の異常、無し

? 脳細胞の壊死、または機能停止、無し

? 神経の異常、無し

? 脳内での電気活動の異常、発見

? 電気活動の改竄を確認、制御を開始

? 失敗

? 脳内電気信号を制御、自力での電気活動の鎮静化を開始

? 失敗

「……やっぱ無理、かあ」

分かってはいたが、その事実を突きつけられるのは少し心が痛む。

「なにか、手がかりは？」

「知つての通り、私の能力は体の異常の感知、そして治癒です。異常は感知出来ました。しかし残念ながら私には治すすべがありません」

不安そうな顔をする医者と看護師に首を軽く横に振りながら事実を述べる。廊下よりは幾分か涼しい病室内の空気はあたしに重くのしかかった。

そこになぜか垣根くんから疑うような目線が送られてくる。

能力を見せたのはやはり失敗だったか、と頭の隅でふと思った。

「そう、ですか……して、異常とは？」

「脳内電気活動の異常が観測出来ました。脳波の測定をするのをオススメします。たしかに私の能力なら精神的な損傷も治せないわけはありませんが、この場合だと「リカバライザー肉体支配」では手も足も出ません」

「そういうものなのか」

「そーゆーものなの、あたしの能力は万能じゃない」
淡々と答えるあたしではあるが、心の中では悔しさがぐるぐると渦を巻く。

力不足。

そう、あたしの能力は万能なんかじゃない。

あたしには彼は治せない。その事実だけがあたしの脳を支配した。

「……わかりました。ご協力感謝します」

そのまま暗い空気を漂わせながら病室を出ると、明るい髪色をした

少女二人が走ってくるのが視界に写り込む。

「風紀委員の白井です。様態は？」
ジャックメント

「最善は尽くしていますが、以前意識を取り戻す様子は……」

綺麗な髪を高い位置で2つ結んだ小柄な少女と、明るい茶髪の背の高いーといっても私ほどではないがー見覚えのある少女が二人、不安そうにあたしたちに話しかけた。

その少女こそ、この物語の主人公。御坂美琴である。

「あ、あの、私この前そいつの顔思いっきりぶん殴っちゃったんですけど」

「それなら大丈夫だよ、御坂ちゃん。頭部に損傷は無いから、アンタのせいじゃないよ」

お医者様の後ろからひよつこりと顔を出すと少女、御坂美琴は驚きの声をあげた。

「天羽先輩！」

「久しぶり、元気してた？」

挨拶のハグをするとビクリと身体を震わせ、困惑した表情を可愛らしい顔に浮かべる。

その隣ではツインテールの少女がわなわなと怒りと嫉妬で肩を震わせていた。

「何、テメエの知り合い？」

「上条くん経由でね、ちよーつとだけ」

くすりと笑うと御坂ちゃんはほほほと頬を紅くしてみせる。

恋する乙女だなあ。

「それで彼のことなんだけど、体に異常はこれっぽっちもないのに、意識だけが失われてるって感じ？」

「脳波に少し異常がある程度で、なーんもわからないんだっけか？」

「そうそう」

垣根くんに補足され領きはするが、少し違う。

そもそも脳波とは生き物の電気活動を電極によって読み取り記録したものを呼ぶ。脳波は略語で実際は脳波図と呼ぶのだ。

脳から出る電気活動そのものではなく、その記録が脳波図とされ

るもの。だからこの場合は電気活動に異常が見られる、の方が正しい。

とまあ、知識を披露した訳だが一応言っておく。これはあくまでもあたしが死ぬ前の事実、この世界の脳波については知らん。

脳医学は学んでねーし。

「ただおかしな事に、今週に入って同じ症状の患者が次々と運ばれてきていて……」

そう言っただけでカルテを見る医者表情は酷くつらそうだった。医者として、人を救う者としての苛立ち、葛藤。

その後ろでは中学生2人が何やら思い当たる節があるのか険しい顔をしている。

「情けない話ですが、当院の施設とスタッフの手に余る事態ですので天羽さんを派遣させてもらったり、外部から大脳生理学の専門家を招きました」

唯一の光、招かれた専門家は全てを引き起こした元凶。

カツカツとパンプスを院内響かせ、その女性はあたしたちの前に現れた。

「お待ちせ致しました。水穂機構病院院長から招聘を受けました、木山春生です」

長い髪を揺らしながら女は木山と名乗った。

4話：木山春生

「天羽先輩はどうしてここに？」

待合ロビーに場所を移したところで、御坂ちゃんが口を開く。

「この通り、お仕事。今日はもう上がりだけどね。別の病院に勤務してるんだけど、こっちに駆り出されて」

特に嘘をつく必要もないのでナース服に手を当てて普通に答えると、へえーと感嘆の声があがった。

まあ、看護婦をしていることは言っていなかったしね。

軽くお互いの話をして本題に入ろうとするとツインテールの少女、白井黒子ちゃんが恐る恐ると言った風にあたしと御坂ちゃんの間で割って入る。

「あのお、お姉様、こちらの方々は……？」

そうだ、まだ白井黒子ちゃんとはお知り合いじゃなかった。アニメ越しで知ってはいても、現実では他人。自己紹介は必須だ。

「ああ、初めまして、あたしは天羽慧糸。好きに呼んでよ」

「はじめて天羽さん。私は白井黒子。御坂美琴お姉様の後輩でジャッジメント風紀委員ですの。」

握手を求めると一瞬不思議そうな表情を浮かべたが、とくに遠慮せず握手を返してくれた。

日本人の子どもにしては珍しい対応だ。

よろしくねと笑顔を向けると彼女も笑顔を返してくれる。嬉しいねえ。

「んで、こっちは弟のていとくん」

いかにも怪しいイケメンの垣根くんは先程から奇異の目で見られており、そろそろ紹介しないと不味いことになりそうだった。

体のラインがハッキリと分かる薄手のTシャツに、細身のジーンズ。腕にはチャラチャラとブレスレットが付けられており、胸元にもドッグタグのようなネックレスがぶら下がっている。どこからどう見てもThe不良少年であり、どう考えても病院にいるような人物ではない。

「何ひとつあってねえじゃねえか」

弟の一言にイラついたのかぺしつと金色の頭を叩かれた。

何がそんなに嫌なんだ。お姉ちゃんに手を挙げた罪で訴えるぞ。

「弟さん、ですの？」

「違う。血縁関係も書類上の関係もない。こいつが勝手に言ってるだけだ。俺は垣根帝督、こいつの……」

「弟！」

何を言いかけたかはわからないがやはり弟は譲れない。素早く手を挙げ声を張り上げると、今度は両手で頬を抓られた。

「まず家族じゃねえし血も繋がってねえし俺の方が年上だろーがややくしくなるから黙ってる脳味噌&bitかテメエは」

「ぴえん」

脳の記憶容量をファミコンに例えられた気がするが、何も聞こえない。ええ聞こえてないとも。

そこに御坂ちゃんがあたしたちの会話に口を挟む。まるで恋する乙女のように質問してきたその顔には少しだけ期待と憧れが見え隠れしていた。

「てことは先輩の彼氏……!?!」

「彼氏じゃないよー!あ、だからと言ってセフレでもないよ!」

「セ、セフッ、?!」

かぁーつと顔赤くさせて目を見開いてる御坂ちゃんとゲテモノを見るような目でこちらを見てくる白井ちゃん。

三者三様の反応で面白いなあと思うと同時にこの世界の性教育に少し考えが飛ぶ。

この程度の単語だけで真っ赤に顔を熱くする御坂ちゃんをみると、少し不安になってしまふのは当たり前っちゃ当たり前?

性的知識は彼女くらいの年齢なら必ず必要だし、学ばなくてはいけない大事なこと。性知識に恥じらいをもつのは構わないが、性を嫌悪し、汚いものだと感じるのは生物学者としては少し残念に思ってしまう。

この先、そのような憎悪の感情が恥じらいの延長線として芽生えた

ら生物としては困ったことになるだろう。

というかだから上条くんにツンデレ？な態度を取っちゃうのかなあ。

もう少し気を抜ければ彼女にもなれるだろうけど…うーん、でもメインヒロインはインテックスちゃんだからなあ。

「セフレねえ、お望みならなってもいいが？あ、彼氏の方がいいか？」
そのイケメンフェイスに優しい笑みを貼り付けこちらを見る垣根くんだが、その声色はどう考えてもからかいが混じっていた。

でも、悪いけどお姉ちゃんにそーゆーおちよくりは効かないよ？

「ふふ、興味無いかなあ。恋とか愛とか性とか」

「はあ、つまんねーの、もう少しいいリアクションしろよ。その中学生の方が面白い顔してんじゃねーか」

その目線の先には顔を赤くした御坂ちゃん。

「残念。お姉ちゃんにそーゆーのは効かないよん」

イタズラが失敗したかのようにムスツとする垣根くんはやっぱりあたしの妹にそっくりで。顔に出ちゃうところとか、生意気にもおちよくってるところとか。全部、全部。

5位見たくいうならば「下の子力が高いわあ☆」かな？

「よく分かりませんが、仲が良い、ということでしょうか？」

「そうそう、よろしくね白井ちゃん」

話が色々と逸れた気がしたが、何はともあれ自己紹介は円満に終わった。

ほんとに良かった。

御坂ちゃんがアニメで強い！喧嘩しよ！と上条くんを追っかけ回していたところを見ると、第2位！強い！喧嘩しよ！とか言い出しかねないかと結構ヒヤヒヤしてたのだ。いや、マジで。垣根くんが超能力者^{レベル5}って自分から言わなくてよかった。

「君たち、まだ居たのかね」

ちようどそんな話が終わった頃、パンプスを鳴らしこちらに向かう人影があった。

木山春生。ふわふわとした茶色い髪に鋭い目、その下には激務を証明する隈が色濃く現れていた。

「ちよつとお尋ねしたいことが」

白井ちゃんが木山さんに駆け寄るが、そんなことには目もくれず、天井に設置された大型のエアコンに目を向けた。

「それにしても暑いな。ここは真夏日でも冷房を入れない主義なのか……」

虚ろな目で話す木山さんは本当に暑そうで、今にも倒れそうにみえる。

「あー、昨夜の停電で色んな病院の電気系統が死んじやって。うちんところもだけど、大体の病院が復旧してないんすよ」

「だからあの病院も暑かったのか」

昨夜起こった発電所の不具合から来た停電は病院系統に影響を及ぼした。

そう言えば、上条くんがインテックスと出会う日は前日の夜に御坂ちゃんが雷を落としたせいで停電してたんだっけか。何日かは覚えてないけど。

昨日の夜に雷が落ちたという情報はなく、発電所が不具合を起こしたという話を聞いたからその日は今日ではないと思うけど。

「御坂ちゃんなんか知らない？電気系統の能力者だし。雷でも落としたり？」

「え!?か、雷は落としてないわよー！」

ん？雷は？

じゃあ別の何かをしたのか？

「そうか、非常用電源は手術や重篤患者に使われているしな」

「へ？」

なにか掴みそうなところで思考が中断される。

それもそのはず。

「はあ……」

木山さんが服を脱ぎ始めたのだ。

プチプチとシャツのボタンを丁寧に外し、白衣を脱ぐ彼女にみんな

が慌て出す。

「また始まった……」

「はーい、垣根くんは見ては行けませんよお」

「痴女かよ……」

木山さんがシャツを脱ぎ切る前に垣根くんの後ろに回り込んで両手で目を塞ごうとするが、木山さんには目もくれずにため息をついてそのまま後ろを向いた。

「おや、結構紳士的……?」

まあ何はともあれ良かった。流石に16—17の少年にストリップショーを見せるわけにはいかなかったのでモーマンタイモーマンタイ。

しかし風紀委員の白井ちゃんがモーマンタイが無問題と思うはずもなく。

真つ赤な顔でその行為を咎める白井ちゃんであった。

「う、な、何をいきなりストリップしてますの!」

「いや、だって暑いだろ」

が、木山さんには効かず。当然のようにそう答えるのだった。

「女だけならまだしも俺がいるとこで脱ぐんじゃねーよ……」

「下着つけててもダメなのか」

「ダメです!」

白井ちゃんに強く念を押され、手伝わされながらも服をきちんと着込むとなんだか疲れたように木山さんがため息をつく。

「いやいやいや、ため息をつきたいのはこっちだけ?」

だが暑いのは事実、早く復旧してくれないかな。そう思いながら手で顔を仰いでいると何だか真剣な顔つきで御坂ちゃんは木山さんの前に立った。

「木山先生、専門家としてご意見を伺いたいです」

「それはいいが……ここは暑すぎる」

窓の外を見ながら彼女は言った。

病院で細々とした作業が終わった後、青い空をバックに緑のバイクを走らせ駐車場に停めると、そのままカフェへ向かう。

店のドアを開けると、カランコロンと涼しい音があたしたちを出迎える。キヨロキヨロと辺りを見渡し、お目当の人物らを探すと店の奥にひっそりと彼女たちがいた。

常盤台の中学生二人と疲れが隠しきれしていない女性の三人組はかなり店内で目立っている。

「さて、先程の話の続きだが、同程度の露出でもなぜ水着は良くて下着はダメなのか」

「いや、そつちではなく」

何やら答えが一生でなさそうな話題で盛り上がっている三人組に近づいて声をかけると、パアツと顔が明るくなる。

白井ちゃんに至っては「助けて」目で訴えていた。

木山さん、何をそんなに語ったんだ。

「やあやあ、何やら面白そうな話をしているね?」

「なんつー話題だよ……」

そのまま木山さんの隣に二人で座ると、ようやく本題に入った。

「幻想御手?」

それは^{レベルアップ}幻想御手に関して。

「それはどう言ったシステムなんだ? 形状は? どうやって使う?」

「まだ分かりませんの」

学者らしく興味津々といった感じに木山さんが白井ちゃんに聞くが、名前と存在しかまだ特定できてない^{ジャッジメント}風紀委員の彼女にはそれ以上の情報は提供しようも出来なくて。

「それ使うだけでレベル上がんなら、誰も苦労しねえな」

「絶対能力者^{レベル6}にでもなっちゃおう?」

「……気にはなるがドーピングに頼るのは御免だ」

現時点で絶対能力者^{レベル6}に到達できるのは一方通行のみ。

……本当に?

垣根くんはアレイスターのスペアプランだ。それが意味するのは一方通行が神になり損ねた時、垣根くんがその役割を負うということ。

つまり、垣根くんもそれ相応の舞台を用意すれば絶対能力者^{レベル6}に到達

する。と、思う。

彼をこの幻想御手事件に巻き込むべきなのか？なにか取り返しのつかないことになるのでは？

不安がぐるぐると頭を回る。

巻き込んでいいことがあるかもしれない、でもなぜか不安の感情が肥大化していく。

なにか、なにか私は見落としてないか？

垣根帝督はここにいたべき人間なのか？

「とにかく君たちはそれが昏睡した学生たちと関係しているのでは無いかと、そう考えているわけだ」

「はい」

いや、大丈夫。垣根くんならきつと大丈夫。

頭を切りかえ彼女達の話の話を傾ける。

「で、そんな話をなぜ私に？」

何故？そんなの明白だろうに。

元生物物理学者から見て大脳生理学と幻想御手なる存在は密接に繋がっているようにしか見えない。なのに自分にそんな話が振られたのかわからないように振る舞うのは何故？

どう考えても能力の向上は自分だけの現実に干渉している。そしてその自分だけの現実パーソナルリアリティは脳から発生されるものだ。

自分が犯人だと悟らせないためか。

「能力を向上させるということは脳に干渉するシステムである可能性が高いと思われれます。ですから、もし幻想御手レベルアップが見つかったら、専門家である先生に是非調べていただきたいんですの」

「ま、妥当だな。自分だけの現実に干渉してるんだ。脳に何かしら影響してると考えるのは普通だろう」

原作をある程度知っているあたしからすればこんなものただの茶番だ。

だって犯人はここにいるんだし。

まあここで捕まえる訳には行かないが。

「むしろこちらから協力をお願いしたいね。大脳生理学者として興味

がある」

ところで、とワンクッションを入れて木山さんが言葉を続ける。「さつきから気になっていたんだが、あの子たちは知り合いかね」窓の方を向くと、そこには黒髪の似合う2人の少女が窓越しにあたしたちを眺めていた。

「へー、脳学者さんですかあ」

その少女二人はカフェの中に招かれ、簡単に木山さんに自己紹介された。

その肩書きに花飾りの少女はすこし驚く。

脳学者なんて普通に生きてたら知り合うこともないだろう、当然の反応だ。

「はっ、白井さんの脳に何か問題が!？」

「……幻想御手の件で相談しましたの」

「ああ、それなら」

なんて白井さんと花飾りの少女二人がふざけ合っていたが、^{レベルアップバー}幻想御手の単語にもう一人の少女が反応した。

持ってますよ、と続けるつもりだったのだろう。嬉嬉としてそれを見せつけるために席を立ち上がろうとするが、遮られる。

「黒子が言うには^{レベルアップバー}幻想御手の所有者を保護するんだって」

「え?」

ピタリ。

少女の動きが止まった。

「どうしてですか?」

「まだ調査中ですので、ハッキリしたことは言えませんが使用者に副作用が出る可能性がありますの」

「っ、」

その言葉に少女の息が詰まる。

「変なもん使って自滅すんなら自業自得じゃねえか?」

ボソツとあたしにしか聞こえないくらいの小さな声で垣根くんが

眩く。垣根くんらしい思考回路に思わず笑みを零すとキツと彼の猫のような目に睨まれる。

ああ怖い怖い、睨まないでくれ？なんつって。

「まあね、それで心に平穏が訪れるのならあたしはなんも言わないよ」
「…へー？お前がそう言うとは思わなかった」

彼と同じように小さな声で眩くと、まるで予想してなかったかのよう
うにその黒い目玉を丸くした。

そして少し考えるそぶりをした後、ニヤニヤとしながら耳打ちして
くる。なんだか子供の頃に妹と内緒話をしたのを思い出す。

「自分が納得するならそれでいいと思うよ？でも力で欲のまま他人を
悲しませたりするのはご法度。罰を受けるべきかな」

「ふーん、正直言つてドーピングなんて言語道断！とか言うかと」

「使うのは構わないよ。ただそれに後悔して悲しむのが嫌なだけ」

そういつて互いに顔を見合わせるとどっちが先か、くすくすと声を
潜めて笑ってしまう。

互いに耳打ちし合うこの状況がなんだか可笑しくて笑ってしまった
のだ。

しかしそんなあたしたちを余所に話は進んでいく。

「それに、容易に犯罪に走る傾向が見受けられました」

その一言は少女を打ち砕く。

「ん？どうかしました？佐天さん」

「あ、いや、べつに」

必死に取り繕い、悟らせまいと佐天と呼ばれた少女は笑顔を作る。

「て、てゆるーかさあ！このイケメンと美人ナースはだれ!?私知らな
いっー」

「ナイス佐天さん！実は私もいつ聞くかちよつと迷ってたんです
よお」

話題を変える為かあたし達に話を振るも、その仕草に違和感が残っ
た。

しかしそんなことは微塵も感じていないのか、ぐつと親指を立てて
佐天と呼ばれた少女に花飾りの少女が笑いかける。

「私は佐天涙子、でこっちは初春飾利！お姉さんたちは？」

佐天ちゃんと初春ちゃんはきらきらと輝く瞳をこちらに向けあたしたちが話すのを待っていた。

「んあ？あー、あたしは天羽慧糸。高一。そして病院に勤務するナースさん。んで、この子は」

「垣根帝督。高二」

「しかも長点上機」

本日二回目の自己紹介にすこし面倒くささを感じながらも簡単に、そして簡潔に自らを紹介した。

もう面白おかしく自己紹介する気力も残ってない。

「えっ!?あのエリート校の!?」

目をさらに輝かせ食いつくのは驚いたことに佐天ちゃんと初春ちゃんだけではなく、なぜか御坂ちゃんと白井ちゃんもだった。

「まーな」

「え!?ってことはかなり高位の能力者なんです!?!」

バンツとテーブルを叩き、興奮する佐天ちゃんであったが、反対に垣根くんは冷静に、そして面倒くさそうに答える。

「長点上機ではないが、こいつは大能力者^{レベル4}らしい。どう見ても超能力者^{レベル5}級だがな」

「マ?!めっちゃ褒めんじゃん!今日はどしたん!テレ期か!」

一瞬勘づかれたかと思いはしたが、あえて否定しないことでこれ以上疑われないようにする。が、それとこれとは別に褒めることを滅多にしない垣根くんの言葉を聞いてついついにやけてしまう。

可愛いなあこの弟は!とか思いながら思いつきりハグをしてわしゃわしゃと髪の毛を撫でると低い声で唸り、あたしの腕を掴んだ。

「撫でるな殺すぞ。セツト乱れたじゃねえかムカついた殺す」

「あたし死なないし……」

ぴえん、と落ち込んだ振りをするとデコピンをお見舞される。

しかし痛覚を遮断していた私に死角はなく。ニコニコとしていたら舌打ちをされた。

「じゃあじゃあ、垣根さんは?」

「……秘密」

「えー、教えてくださいよ!」

「ふん、口が軽そうなやつに誰が教えるか」

その割には上条くん達に教えていたが……

ああ、そうか、あそこに土御門くんがいたからか。あえて教えることで余裕を見せつけた……そんなところかな?

推測でしかないけど。

「じゃあ!お二人のご関係は!?イケメンと美女なんて絶対何かありますよね!」

関係かあ、疑われてる人と疑ってる人って言う訳にもいかないしなあ。

だからと言って友人、もちよつと違うし。

あたしたちの関係を表すにはこの世界の言葉は少しヘツダが足りない。

「姉と弟、従姉と従弟……勝手に想像してくれていいよ。説明すんのマジダルいし」

「そこは弟じゃなくて、兄だろ年齢的に。てか家族じゃねえ」

はあ、とため息をついて気だるげに言うともたもや垣根くんにデコピンをされてしまう。

てかツツコミどころそこかよ。

「あたし全人類のお姉ちゃんだからそこは譲れないんですー」
「んだよそれ」

この光景を見てふむふむと大きく頷きなるほどおと間抜けな声出す佐天さんはさつきと比べると少しだけ元気になったように見えた。

そのまま神妙な顔で何か答えを導いたかのようにふつと笑みを零して彼女は口を開く。

「カレカノ、と……」

「ちげーよ、誰がこんなデカ女と」

間髪入れず否定する垣根くん。

イライラを隠さず声を低くして威嚇する彼だが、なぜかあたしにはその意味が理解不能で。

「……うっぱいはでかい方がいいんじゃないの?」「つぐ!」

何となくで聞いた質問だったが、他の人からは発言に驚かれた。とくに御坂ちゃんは口から飲み物を零していた。

もしかして、垣根くん貧乳好き?なんて心の片隅で思っていると耳をほんのりと紅くした垣根くんが声を張り上げる。

さては、想像したな?男の子だねえ。

「そっちじゃねえ!背丈の話だよ173cm女!」

「ああ、そっちか」

たしかに女にしては背の高い方だが、別になんとも思わない。

ヒールを履いてしまえば大体の人は見下ろせる身長は、あたしにはステータスでして。姉として妹を、弟を導ける。

上に居られる。

……あれ?あたし身長教えたっけ?

ま、いつか。

「これは……仲良しさんってやつですかね?」

初春ちゃんに言われ、しつくりと来た。

そう、仲良しさん。

「まあ、そんな感じかにやー」

「誰がテメエと仲良しだつて?あゝあ?」

垣根くんの照れ隠しを華麗にスルー。

「なあんだ恋人じゃないのかあ」

勢いよくソファに座り込んだ佐天ちゃんだったが、肘に飲み物の入ったグラスが当たる。

グラグラと揺れると重力に従ってテーブルから落ちてしまった。

「あっ」

「……はあ」

何が起きたか、最初から説明しましよー。

まず、あたしたちの席順は左から佐天ちゃん、木山さん、あたし、垣根くん。そしてそれぞれの前に白井ちゃん、初春ちゃん、御坂ちゃん。

そして佐天ちゃんの右肘が当たったグラスのコップ。

つまりこぼれ落ちたガラスは佐天さんの右手側、木山さんに向かって落ちる。

「すみませんっ!」

結果、ガラスの中を満たしていた液体は木山さんのもとに降り注ぐこととなってしまった。

「気にしなくていい、かかったのはストッキングだけだから」

あたしたちを跨ぎ、席から離れるとその場でスカートに手をかける。

黒いストッキングをするりと脱いでいくと、白い肌が浮き彫りになった。

「脱いでしまえば……」

「だからー!人前で脱いじやダメだと言ってますでしょうが!」

しかし、白井ちゃんの手によりみるみるうちに元の服装に正されていく。さすが風紀委員^{ジャッジメント}。

「しかし、起伏に乏しい私の体を見て劣情を催す男性がいるとは……」

「男性代表、どう思うん?」

「……人による」

大きくため息をついて目を瞑る垣根くんはそこまで狼狽えてなく、彼の紳士ぶりが窺えた。

でもこういう人に限ってすごい性癖ありそうだな……なーんて。

「趣味嗜好は人それぞれですの!それに殿方でなくても歪んだ情欲を抱く同性もいますのよ!?!ねえ!?!」

白井ちゃんの叫びがカフェに響きわたる。

その後も連絡先を交換したり(垣根くんは拒否っていたが)と色々話し込んだあたしたちだが、夕方頃には解散となった。

「お忙しい中色々教えて頂きありがとうございます」

白井ちゃんが丁寧にお辞儀をすると、柔らかな木山さんが微笑んだ。

「いや、こちらこそ、教鞭を奮っていた頃を思い出して楽しかったな」「教師をなさってらしたんですか?」

「むかし、ね」

その笑みはどこか寂しげで。

そのまま歩いて帰る彼女の背中は小さく、悲しげに見えた。

「なんというか、ちよつと変わった感じの方ですの」

「白井さんよりですか?」

そんなくだらない話を風紀委員達がしている最中、何も告げずに佐天ちゃんが先に帰ってしまう。

「……」

しかしそんなこととは露知らず、少女達は話を続けていた。

「一度、支部に戻らないと行けませんわね」

「乏しいけれど木山先生に渡すデータも揃えておかないと」

続いて御坂ちゃんも離脱。

「というわけで私たちは支部へ戻りますの……お姉様は?」

「ん?なんか佐天ちゃんと帰っちゃったけど」

「そ、そんな!お姉様!」

気づいた頃には二人ともその場におらず。

そろそろあたしたちも、と言いかけた時、カバンの中にあつたバイクの鍵を引ったくられてしまう。

手癖がひどい男だ。

「俺らも帰るぞ」

「あつ!あたしの鍵つ!返せつ!」

いつかあたしの知らないうちにバイク乗り回してそうで困るな。

ちゃんと手綱は握っておかないと。

そのまま駐車場へ歩いていってしまう垣根くんをなんとか追うと少し止まってこちらを待ってくれた。

なんだかんだ優しいなあ。

だからと言ってあたしのバイクは渡さないが!

軽く彼女らに手を振って垣根くんを追いつくと帰路につく。

そしてそのまま彼女達と別れた。

今日が何の日か思い出せずに。

5話：禁書日録

バイクが走る音が心臓に轟く。
風が体を包む。

心地よい音と風の流れになんとか少し眠くなってしまうのは人の性でしょ？

「おい、寝たら殺すからな」

「えっ、ま、まさかそんな」

しかし前方から殺気の籠った声が聞こえ、微睡みの中から覚醒された。

なぜ気づいた。

さてはエスパ―か？なんてのんびり考えてると、視界の端に見慣れたツンツン頭をみかける。

「あれ？垣根くん、あそこにいるの上条くんじゃない？」

クラスメイトの上条当麻。

主人公の姿を見つけたあたしは赤信号で停る垣根くんの背中を叩く。

「ん？ほんとだ」

察してくれたのか上条くんの方へバイクを向かわせる辺りに垣根くんの優しさと紳士さを感じちやう。

「上条くーん！」

「あれ？垣根と天羽じゃねえか、バイク通学とは、かっこいいっすね」
叫びながら手を降ると、声に気づいた上条くんがこちらを振り向いた。

上条くんの歩く道にバイクを寄せると、なんだか羨ましそうに見つめられていることに気づく。

「通学？今日から夏休みつしよ？」

そう、今日は7月20日、夏休み最初の日。学校なんてあるはずなく。

「上条さんは不幸にも補習だったんでせうよ……」

「あー、お前バカだもんなあ」

ああ、そういえばそうか。

クラスの半数が小萌先生の補習を受けていたはず。

上条くんも例外に漏れず、あの補習を受けていたのか。

「いや、垣根に勉強教えて貰って少しはできるようにはなったんすよ!?!」

……ん？垣根に？

この、垣根くんには？

「え、なにに、仲良くなったの？」

待つて、そんなに仲良くなつてたわけ？確かに初めて会った時に上条くんとは連絡先交換してたけど！ヒーローと悪役、だよね君たち!?なんで仲良くなんかなつて……

いや、そうか、垣根くんは一方通行と違って日常に普通に溶け込めるんだ。

普通の男子高校生みたいに普通に笑つて、普通にバカをやって、普通に過ごせる。

じゃなきやスピノフ漫画でも学友から冗談交じりの出席日数を心配するメールなんてそもそも届かないか。

彼は御坂美琴を除けば1番人間的な超能力者^{レベル5}だったはず。普通の少年。でも実際は暗部なんてものに在籍する悪役。

そして正義を求めた悪役でもあるのだ。

光を求める悪役と光そのものであるヒーロー、何かしら共鳴するものがあつたのかもしれない。

結局はあたしの憶測だけ……

「まーな！つっても、俺が垣根に勉強手伝ってもらつてただけなんだけどな」

「夜中に電話してきやがって……ちゃんと勉強しろよ1年」

「うう、おっしやる通りで」

まるで昔からの友人のように駄べる二人がすこし微笑ましく見えた。

「へー、てか上条くんの寮つてここらへんなん？」

「ん？そうだけど」

「暇だし上条くんち行くわ、場所おせーて」
「えっ」

「そうだどうせなら上条くんちでもっと親睦を深めようじゃないか！」

と、上条くんへお邪魔することを提案してみるとなぜか垣根くんもノツてくる。

「そうだな、エロ本でも探しに行くか」

「えっ」

突然の提案と何故かノリ気な垣根くん。

「住所、教えろ」

「……はい」

そんな驚きの連続に顔をポカーンとさせ言葉が出ない上条くんだったが、いい笑顔をした垣根くんが詰め寄ると途端に冷や汗をかき始める。

呆気なく住所と言う個人情報を漏洩する上条くんの姿はやっぱり不幸と呼ぶにふさわしい。

上条、敗北！

教えてもらった住所を元に上条くんの寮へ向かい、バイクを来客用の駐車場スペースへ停めると寮の入口で家主の到着を待つこととなった。

「あ、きたきた、上条くん！」

「バイクはやっぱ早いな、羨ましい……」

ヘトヘトになりながら歩いてくる姿はまさに不幸少年と呼べるだろう。

泣きそうな顔で必死に「バイクに乗せろよ」と垣根くんに訴える上条くんだが、よく考えて欲しい、それあたしのバイクなんだわ。

「これでもスピード落としたんだけどな」

「んじや、行きますか」

エントランスを抜け、エレベーターに乗り込む。ボタンを押すと鉄の扉がゆつくりと閉まる。

そういえばさあ、と上条くんが前置きをして口を開いた。

「今朝、ベランダにシスターさんがぶら下がっててさ」

「なんじゃそりゃ、夢でも見たんじゃねえの?」

今朝、ベランダにシスターが?

待てよ待てよ待てよ!

今朝?ということは昨夜の停電は御坂美琴が引き起こしたというのか?

雷はなかったはず、ではなぜ?

思い出せ、思い出せ!何が違う、何が原作と違う?何がアニメと違う?

ん?アニメ?

……そうだ、そうだよ。アニメだ!

禁書目録では雷を落とした御坂美琴によって停電が起こった。では超電磁砲では?

記憶が間違っただけならばレベルアップ編は禁書目録と同じ時間軸、そしてアニメ版ではスキルアウトに電撃を放って停電を起こしたんだ。

あれ?でも原作者ってちゃんとアニメの監修してて矛盾点を確認してたんじゃない?

じゃあ今この状況は?

……もしかして確認してただけで口出ししてないってオチ?

いや、そもそもあたしが本編の開始日を忘れていたのが悪いのだ。雷が落ちた次の日なんて曖昧なデータで決めつけていたあたしが悪い。

shit!

原作も電子書籍で適当に読んでおけば良かった!

「インデックスって言うらしくてな?部屋にフード忘れてったから取りに来ると思うけどな」

この世界はアニメ版と辻褃を合わせるために様々な要素を断捨離しているのか?

しかし、なぜアニメ版の超電磁砲をベースに?超電磁砲はあくまで

も外伝という立ち位置だ。

なぜ超電磁砲の方に辻褄を合わせようとしているんだ？

「インデックスう？目次ってどう考えても偽名じゃねーか」

それに、そもそも街がおかしい。

アニメ版では元となる場所が存在する。

立川や武蔵小山の駅前だったり、モノレール、多摩センターだったり、秋葉原のドンキだったり、某美大だったり。セブンスミストなんか吉祥寺にある百貨店だし。

でも原作では学園都市が東京と神奈川を跨いで作られた場所だと書かれてても、べつに現実通りの街並みとは一言も書いてない。はず。

なのにこの世界はアニメと同じように世界が構築されている。

あたしが通う「とある高校」もそうだが、この街の姿形がアニメ通りの景観なのだ。

この世界はアニメを基本としているのか？

じゃあ、アニメ化されていない創約や、垣根くんのスピンオフは、どうなる？

「ついたぞ」

チン、エレベーターの音があたしを思考の底から引き上げられた。

考えを頭に留めながらエレベーターを下り、通路を進む。

原作、いやアニメ通りなら背中を斬られ、出血しながら横たわるインデックスが清掃ロボに掃除されかけているはずだ。ここからは下手したら命を落とす。

あたしに他人を助け、癒し、肉体を聖人ほどに強化する力はある。流石に自分を3000度の灼熱の炎から守るすべはない。垣根くんを何とか戦闘させないようにはしたいけど……今回ばかりは流石に無理か。

「ん？」

短い通路の先、3台の清掃ロボが白いナニカを懸命に排除しようとして動き回っていた。

「清掃ロボット、だね」

あくまでも冷静に呟くが、頭の中は14才に見えない赤毛の魔術師でいっぱいだった。垣根くんや木山さんを救うと決めてる今、あたしはまだ死ぬ訳にはいかない。

「たく、人の部屋の前で何掃除してんだ？」

「お前の部屋かよ」

呑気に話す男子高校生2人組。

「ん……うふ、なんて言うか、不幸だ」

その白い物体が今日一日ずっと気にかけていた少女だと気づくと笑みを見せて少女に駆け寄った。

「おいインデックス、こんなところでなにやってんだよ」

「この子が？」

「こんなところで寝て……」

この状況に何も不信感を抱いてない上条くんだったが、隣にいる垣根くんがその匂いを感じ取る。

寝息ひとつ立てないシスターに訝しげな目を向けた垣根くんはやはり暗部にいる身、微量な鉄の匂いに鼻をひくつかせた。

「っ！天羽！怪我人だ！」

「え、わ、わかった！」

まさか垣根くんが先に気づくとは思わず少しだけ動きが鈍るが、直ぐにインデックスに駆け寄り、その長い髪の毛をどかす。

そこには痛々しく血を零す巨大な傷が白い修道服の下に隠れていた。

「なっ、イ、インデックス！おいっ！大丈夫か!？」

「こりゃ、後ろから斬られたな……ナイフか何かか？」

「……これ、刀の切り口っしょ、間違いない。でもこんなでかいと治すのに時間かかっちゃう」

あまりにも酷い傷だ。

この出血量だと1時間も持たないかも。

「安心して、あたしが必ず助けるからね、お嬢さん」

「一体どこのどいつにやられたんだ!？」

声を荒らげる上条の後ろから低い男の声が聞こえた。

「んー？僕達、魔術師だけど？」

ゆつくりと近づくと、その男にあたしは見覚えがあった。

赤毛に、目の下にバーコードの刺青、たくさんのピアス、黒い神父服、14才のくせに2mに近い身長。

ステイルⅡマグヌス。

炎の魔術師。

「これはまた随分と派手にやっちゃって」

煙草を啜えながら喋る彼に他のふたりが警戒態勢をとる。

低い声で上条は疑問を投げかけた。

「なんで」

その表情は見えない。

「ここまで戻って来た理由？さあね、忘れ物でもしたんじゃないのかな？」

わざとらしく喋るステイルに静かに耳を傾ける。

「昨日はフードがあったけれど、あれってどこで落としたんだろうね？」

フードに残った魔力をサーチしてここに来たんだっただけ？

まあそんなこと分かっちゃいけないので不思議そうな顔をしとく。

「ばっか野郎が……！」

強く握りしめられた上条くんの拳は白くなっていた。

「んで？神父様だか牧師様はこのシスターさんに斬りかかったわけか？」

すつと立ち上がり、垣根くんは問いかける。

圧倒的な自信。超能力者としての余裕。

「それを斬ったのは僕じゃないよ。神裂だって何も血塗れにするつもりはなかったんじゃないかなあ？」

後、僕は旧教だ。と付け足すがそんなことはどうでもいいと言わんばかりに垣根くんが嘲るように口を釣り上げた。

「現に血塗れにしておいて、するつもりはなかったって……どここの三下のセリフだよ」

「……その修道服、歩く教会は絶対防衛なんだけど、なんの因果で碎け

たのか」

イラつきを誤魔化すように話を逸らしたステイルだったが、その答えは垣根くんを理解されるはずもなく。

「何でだよ」

今まで無言を貫いていた上条くんがやっとその口を開いた。

「ん？」

「俺は魔術なんてメルヘン信じらんねえし、テメエら魔術師みてえな生き物は理解できねえよ。けど、お前たちにだって正義と悪ってもんがあるんだろ」

ギリギリと歯を食いしばる音が耳に入ってくる。

「こんな小さな女の子を寄つてたかつて追い回して、血まみれにして、これだけのリアルを前に、まだ自分の正義を語ることができんのかよ！」

しかし、上条当麻の叫びはステイルⅡマグヌスには届かない。

「言いたいことが済んだのならどいて欲しいな。それ、回収するから」
あたし達、というよりインデックスに指を刺すと垣根くんが割つて入る。

その背中からは余裕と期待の感情が簡単に感じ取れた。

「回収する女に傷をつけて殺しちゃあ、本末転倒じゃねえか？なあ、神父様よ」

「正確にはその持つてる10万3000冊の魔導書だからね、傷をつけたって別に構わないのさ。まあ、傷つけるつもりは微塵もなかったが」

10万3000冊の魔導書。しかしそんな膨大な量の本など今の時点では見当たらない。

不思議そうな顔をしながら二人は神父の話に注意を向ける。

「ああ、そこのお姉さん、注意したまえ。君達程度の人間だったら、1冊でも目を通せば廃人コースは確定だから」

「悪いけど、人のために死ぬるなら本望なんだわ。この子を救うためなら変な本だって読むよ」

そういつてインデックスに手を当てるあたしを軽く睨んできた。

けどそんな睨みで竦んでしまうあたしじゃない。

そのまま演算に集中する。

「ふ、ふざけんなよ、そんなもん一体どこにあるっていうんだ」

「あるさ、その頭の中に」

トントンとこめかみを叩く仕草はなんとなく垣根くんと似ている。

彼もまた、救うべき人。

「え？」

「1度見たものを一瞬で覚えて、1字1句を永遠に記憶し続ける能力を持つてるんだ。」

「完全記憶能力ってやつか、珍しいことで」

「その頭はね、世界各地に封印され持ち出すことの出来ない魔導書をその目で記憶し保管している魔導書図書館ってわけなのさ。」

ま、それ自身は魔力を練ることができないから無害なだけど。とスタイルが零す。

違うよ、違うんだ。なぜ考えない、スタイルⅡマグヌス。

なぜ自動書記ヨハネのペンなんてものがあるのか、なぜ魔術が使えないのか。

君は考えることを放棄したんだ。

「その10万3000冊は少々危険なんだ。だから、魔術を使える連中に連れ去られる前にこうして保護しにやってきたってわけさ」

「保、護？」

まるで初めて聞いた言葉かのように上条くんが掠れた声でスタイルの言葉を反復する。

その言葉は今の現状を表すものとはかけ離れていた。

「そうさ、保護だよ、保護。それにいくら良識と良心があつたって拷問と薬物には耐えられないだろうしね。そんな連中に女の子の体を預けるなんて考えたら心が痛むだろう？」

「テメエ、何様だ！」

声を震わせ右手の拳を神父の顔を目掛けて大きく振りかぶるが、いとも容易く避けられてしまう。

そのまま勢いを殺せず、スタイルの後ろに回ってしまった。

スタイルに隠れてその表情は見えないが優しい彼のことだ、きつと

悲痛の叫びを心の中で上げていているんだろう。

戦いの経験だけなら垣根くんとタメを張れるはずの14歳。一方、喧嘩程度の戦力しかない上条。力の差は圧倒的だ。

「ステイルⅡマグヌス、と名乗りたいところだけど、ここはfortiss931と言っておこうかな。」

灰色の煙を漂わせながら彼はその目をギラつかせた。

「ラテン語だな。強者、って意味だったか?」

一触即発の空気が漂う中、垣根くんが口を開く。

さすが第2位といった所か、ラテン語まで知っていると。

「よく知っているね。ま、語源はどうだっという」

ふうつと息を吐くと煙が月明かりに照らされた。

「魔法名だよ、聞き慣れないかな?」

「魔法……?」

「僕達魔術師って生き物は魔術を使う時に名前を名乗ってはいけないぞうだ。古い因習だから理解できないけど、重要なのは魔法名を名乗りあげたことだね。」

煙草を口から離し、そのまま空に放り投げる。

「僕達の間ではむしろ殺し名、かな?」

ヂリ

空気に熱がこもる。

「炎よ」^{Kenaz}

空に投げられた煙草から巨大な熱の塊が現れる。炎はそのまま男の手元を集い、まるで生きているかのように蠢く。

その熱量は尋常ではない程のものだと肌で感じとれた。

「これが、魔術?」

「発火能力者……?大能力者^{レベル4}はありそうだが」

両手に携えた炎は大きく揺らめくと勢いよく燃え盛り、上条を襲う。

「Purissanauppizgebo
巨人に苦痛の贈り物を」

轟音を察に響かせながら不幸な少年を包み込むと、その姿を掻き消した。

「上条くん！」

「っ！上条！」

助かると頭でわかってはいても心は理解してくれない。咄嗟に名前を叫ぶと演算が止まってしまう。

やり直した。

「やりすぎたかな。残念だったね。ま、そんな程度じゃ何回やっても勝てないってことだよ」

ため息をついてこちらに振り返るスタイルだったが、その後ろに影が落ちる。

その影は足を一步踏み出した。

「誰が」

二歩

「誰が何回やっても、勝てねえって？」

三歩

「な！ばかな！」

「上条！」

そこには傷一つ負ってない上条当麻がその拳をキツく握りしめ立っていた。

「ったく、そうだよ！何をビビってやがんだ？あの修道服をぶち壊したのだってこの右手だったじゃねえか！」

「くっ！この！」

その姿に驚きの表情を隠しきれなかった背の高い神父は再びその手に炎を集める。

またもや揺らめく熱を上条に向けて放つも、彼の右手がそれを迎え入れた。

その右手を炎に添えると、大きな音を立てて炎が崩れ落ちる。

膨大な力は残す影ひとつなく打ち消され、無に帰す。

「炎が、打ち消された？一体どんな原理で……」

初めて目にしたその現象に垣根くんもスタイルも目を丸くする。

もつとも、科学の街で生まれ育った第2位はその現象の解析に夢中のようにだ。

「……幻想殺し」

ぽつりと呟く。その力の名を。

人の作りし異能も、悪魔の誘いも、天使の慈悲も、神の救いをも拒むその力。

彼を語る上で必要不可欠なその能力は全てを打ち消す。灼熱の炎も、癒しの光も。

「そうか、やっとわかったよ。歩く教会が誰に破壊されたのか。」

苦虫を噛み潰したように低く唸ると、今度は別の呪文を呟き始めた。

炎の精を呼び覚ます呪文を。

「世界を構築する五大元素のひとつ、偉大なる始まりの炎よ」

空気が震える。

「それは生命の育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり」

熱が集まる。

「それは穏やかな幸福を満たすと同時に冷たき闇を滅する凍える不幸なり」

風が赤く色づく。

「その名は炎、その役は剣」

そしてそれは顕れた。

「顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ」

人の姿をもつ炎。

目の前に現れたそれは辺りに炎を撒き散らし、上条へと襲いかかる。

「魔女狩りの王、その意味は必ず殺す」

しかし、それに臆さず彼は右手を伸ばした。

「邪魔だ！」

打ち消された炎は彼を通り過ぎ、背後に熱を集める。

揺蕩う炎は再度姿を成し、その手に抱えた巨大な十字架を振り下ろした。

「くっ」

右手で打ち消そうと藻掻くも、炎の巨人が消えることは無い。

「……打ち消しても炎が再生してるのか？あの炎は一体？」

垣根くんが呟くと、あたしの前で横たわるインデックスがそれに反応したように口を開いた。

「ルーン、神秘、秘密を指し示す24の文字にしてゲルマン民族により2世紀頃から使われる魔術言語で、古代英語のルーツとされます」

「っ！喋っちゃダメ！傷口が……！」

「喋れんのか!？」

声を聞いてしやがんだ垣根くんとあたしの2人で少女の顔を覗きこむ。可愛らしい顔だと言うのに、得体の知れない恐怖を感じ取れた。

「魔女狩りの王を攻撃しても効果はありません」

少女、いや自動書記は話を続ける。

「壁、床、天井、辺りに刻まれたルーンの刻印を消さない限り何度でも蘇ります」

「お前、インデックス、だよな？」

まるでロボットのよう喋るその子は瞳に光がなく、淡々と言葉を紡ぐ。

「はい、私はイギリス清教内第0聖堂区必要悪の教会所属の魔導書図書館です。正式名称はindex—librorum—prohibitorumですが、呼び名は略称のインデックスで結構です。現在自動書記を起動——」

その言葉は最後まで並べられることが出来なかった。

黒いコートから伸びる長い足は哀れなシスターを踏み躪らんと振り下ろされ、その口を強引に塞ごうとされたから。

慌ててその小さい体に覆いかぶさり、守りの体勢に入る。

痛みを感じないように痛覚を遮断。

彼女の思いを踏み躪らせてたまるもんか。

「天羽！垣根！」

ぎゅつと目を瞑り、衝撃を待つが一向に蹴られる気配はしない。それもそのはず。

男の足は一人の美しい少年に遮られていたのだから。

「この女に手を出してみる、この俺が相手になる」

「か、垣根くん……」

違う、あなたを守るのはあたしなんだ。

違う！違う！あたしは護られるべき人じゃない！

しかしその叫びは垣根くんに理解されることはない。

「お前はそれがガキに集中しろ。この俺がいるんだ。火傷のひとつも負わせねえよ」

舌打ちをした赤毛の神父はとても苦しそうに、且つ面倒くさそうに垣根くんの目を見る。

「……まあいい。どうせ君たちには出来ないんだ。この建物に刻んだルーンを完全に消滅させるなんて、君には絶対に無理だ」

そして息を吸うと今度は別の呪文を紡ぎ始めた。

AshToAshDustToDust
「灰は灰に塵は塵に！」

再びその手に炎が現れる。空気を熱し、辺りを燃やす。

SquamousBloodRoad
「吸血殺しの紅十字！」

刹那、眩い光と爆音が破裂した。

「下の階に逃げたか」

煙が晴れ、視界が鮮明になる。

なんとかかして顔を上げると、見知った少年の顔はなく。

「上条くん！」

代わりに下の階から音が轟いてきた。よかった、彼は生きている。

「あいつは無事だろ」

上条くんがこの場にいないのを確認するとステイルⅡマグヌスはこちらに振り返り、あたしの腕の中にいるインデックスを見つめた。

ゆっくりとした足取りでこちらに向かってくる姿は、神父より殺し屋の雰囲気に近い。

「さて、君たちは彼のようになりたくないだろう？それを渡してもらおうか」

しかし、歩みを止めた。

その前には月明かりに照らされ、まるでスポットライトに当てられているような垣根くんの姿が強烈な威圧感と共に立ち塞がる。

「ハッ、誰がテメエの指図なんか従うかよ、三下」

軽い挑発には乗らず、ステイルはあくまでも冷静に、しかし挑戦的に言葉を放つ。

「……燃やされたくなければ今すぐに引き渡すことをおすすめるよ」

「どうして？彼女に傷をつけた情けない男になぜ渡さなきゃいけないの？正義を持たないアンタに、渡すとなぜ思う？」

「天羽、黙ってる」

あたしはアニメでもステイルと神裂が好きではなかった。

救う手段ならいくらでもあったのに。陰謀にも、嘘にも、何もかもに気付かず、最後の最後まで騙された者たち。

無知は罪だ。与えられたものをただただ鵜呑みにして結局自分の手で救えなかったんだ。

あたしは探した。勉強した。愛しい妹を救うため、どんな手段も使い、どんな本でも読み漁り、いろんな人に話を聞いた。

それでも救えなかった。治せなかった。結局死んでしまった。

だから彼らに感情を揺さぶられなかった。

たくさん選択肢を持っておきながら最後まで気付かなかった彼らを見ていて、あたしは醜い感情しか抱かなかった。

「……さて、魔術師殿？こちとら根っからの科学っ子でな、正直魔法がどうかよくわかんねえんだわ」

この場に居たのがもしたただの一般人だったら、ステイルの言葉に素直に従って、撤退していたのかもしれない。

だが彼は違った。

「でも今この目で見た魔術、能力の産物でもなければ科学に基づいた手品でもない」

彼は学園都市に7人しかいない超能力者の一人。

「認めるよ、魔術師。その力はこの街を変えるにふさわしいものだ」

序列二位、未元物質。

「ならば答えはひとつ、解析して手に入れるだけだ」

背中から噴出された未元物質はみるみるうちにその姿を表す。

その形は聖書に記された存在と酷似していた。

6枚の翼。

それが意味するものは熾天使、神の意志を伝える者。

「な!?て、天使……!?」

だがそんな思考に科学の国で生まれた熾天使はため息をつく。

当たり前だ、彼はあくまでも人間。天使程度のちつぽけな存在なんかじゃない。

「悪いな、テメエらが信仰する神の使いじゃねーんだわ。まあ、んなことあどうでもいい」

その翼は大きく広げられた。

星の光に照らされた美しい翼は少年の美貌も相まって、神秘的なものにしか見えなかった。

「神に祈れよ、インチキ神父。お前は今日、ザアルハラ地獄に招待されるんだからな」

前置きしておく、別にあたしは熱心なカトリックでもプロテスタントでもない。

アメリカという宗教が根強く浸透した国には居たが、たかが神や天使ごときを崇める思考は残念ながら持ち合わせてはいないのだ。

けれども、なぜか彼を隠す白い翼を見ると祈りを捧げたくなくなってしまふ。

それほどまでに今の彼は神々しかったのだ。

「つ炎よ」Kenaz

人をも溶かす凶悪な熱の塊が垣根くんを目掛けて飛び掛った。だが、スピードをあげて殺しにくる炎に彼は狼狽えもせず、ポケットに手をつ込んでだらんと立ち続けている。

美しい翼を軽く広げると、煙を立てながら熱が弱まっていくのが見えた。

「悪いがそんなものはとつくに解析済みだ」

大きく広げられた翼の下、圧倒的な力を見せつけた少年は目の前の大男を見下す。

「お前は一体……!」

その事実には魔術師は酷く取り乱した。

「そうだな、未知を支配する者incognitaってどこか？」

未知の支配者。

その力は無限。

それが垣根帝督。

「さて、次はこっちの番だな」

翼に力を込め、攻撃を仕掛けようとした瞬間、警報が鳴った。

スプリンクラーが起動し、人工的な雨が降り注ぐ。

「まさか、インケンティウス魔女狩りの王の炎を消すために？……そんなつまらない理由でずぶ濡れにされたのか」

通路の奥、エレベーターのある方角から足音が響く。

「インケンティウス魔女狩りの王はどうしたんだ」

その音の主は一人の少年。

上条当麻、この物語の主人公。

「つたく、参ったぜ、あんたすげーよ。正直ナイフかなんかでルーンを刻まれてたら勝ち目ゼロだったよ」

拳を握りしめ、ハッキリと男を見据えるその姿はまさにヒーローと呼ぶにふさわしい。

「まさか、インケンティウス魔女狩りの王は3000度の炎の塊！こんな程度で鎮火するものか！」

「ばーか、炎じゃねえよ」

スプリンクラーから降る水が熱した空気を冷やす。

「てめえはひとんちに何べタバタ貼っつけてやがった？」

言い終わった瞬間、上条くんの背後からけたたましい音とともに人の姿をした炎が現れた。

その光景をみた魔術師は笑い声を上げながら彼の行為を小馬鹿にする。

「すごいよ、だけど経験が足りないかなあ、コピー用紙ってのはトイレットペーパーじゃないんだよ？たかが水に濡れた程度で、完全に溶けてしまうほど弱くはないのさ」

現れた炎の巨人にひとつの言葉を投げかけた。

「殺せ」

命令を与えられた巨人は、上条くんを飲み込み、炎の渦が彼の姿を消した。

が、聞き慣れない音とともに炎が消滅していく。

「馬鹿な！僕のルーンは死んでないのに！」

炎は右手によって打ち消され、跡形もなく消え去ってしまった。

「バカはテメエだろうが。紙は破れはしないが、インクはどうだ？」

垣根くんの声に我に返ったのか、その精霊の名をしきりに叫ぶ。

「っ！インクケンティウス魔王、インクケンティウス魔王狩りの王！」

けれどその名を呼んでも返事は愚か、姿も現さない。

「さてと、」

ヒーローがゆつくりと、だが力強く歩み寄る。

「は、AshToAsh灰は灰に！」

呪文を口にするも、

「DustDust塵は塵に！」

炎は生まれず。

「SquamousBloodyRoad吸血殺しの、紅十字……！」

先程までの冷静さと残酷さを感じさせない、戸惑いを隠せていない少年の頬にヒーローの拳がめり込んだ。

遠くに聞こえる消防車の音を聞きながらあたし達は上条家から少し離れたベンチに居た。

ベンチにインデックスを寝かせて心配そうに彼女を見つめる男二人。その姿を必死の思いで走らせたバイクに跨りながら、あたしは眺めていた。

「これで発信機みてえな機能は消えちまったはずだけど……」

フードを片手に喋る上条くんとその姿を物珍しそうに眺める垣根くんにはなんだか少し楽しげな雰囲気か漂っている。

「お前の能力って意味不明だな。異能を打ち消すってなんだよ」

「いや、垣根こそ、なんだよあの羽！」

少し興奮気味に話す上条くんだったが、垣根くんにはそれがかなり

頭に来たようで。

「次にあの羽に閉してなんか言ったら殺す」

彼の頭を片手で鷲掴み、念を押す。

「き、気にしてるのな……」

「んで、バイクに腰かけて黄昏てる天羽彗糸サン？こいつの怪我は治ってるのか？」

ボーツと2人を眺めていると突然声をかけられた。

「ん？ああ、魔術的な要素なんかで少し妨害されたけど、何とか治したよ」

「だから時間かかったのか」

おそらくの話だが、ヨハネのペン自動書記が起動していたインデックスは

アンデッド「不死者」もと「リカブライザー肉体支配」を害あるものだど認識したのだ。

細胞を分裂させて血液の量を増やすことが出来なかったため、結局脳の電気信号を制御して人間の自然治癒能力を高めて傷を塞いだわけ。

そしてどんなに私の能力でドーピングしたとしても、やはり限界はある。

思ったより時間がかかってしまった。

「まあね。でもこの子ドーすんの？上条くんちは無理やん？垣根くんに美少女預ける訳にもいかないし……」

「お前家はダメなのかよ、同性だろ」

なんて上条くんに聞かれるが、あたしには人を家に呼べないわけがある。

「うーん、部屋が汚い、部屋が狭い、ここから遠い」

「汚部屋系女子かよ」

致命的な理由を3つ述べると、顔をひくつかせながら垣根くんに頭をチョップされた。

「うちの病院に連れてくわけにもなあ……ここのID持ってなさそうだし……あつという間に情報が漏れちゃう」

頭を擦りながら思考を廻らすと、ベンチから小さな声が漏れた。

「あ、れ、とうま、どうかした？あれ、しらない人も？」

声の主はインデックスだった。

「お、起きたか！ 具合は大丈夫か？ 傷は痛むか？ なんともないか？」

「大丈夫、だよ、でもなんで、傷が……」

「あーあたしの能力。傷を塞ぐことが出来んの」

「いえーいとピースして見せると少しだけ悲しそうにこつちを見上げた。

「どうして？ あたし、助けることが出来たんだよね？」

「なんで君はそんな悲しそうな顔をするの？」

「なー、魔導書図書館ちゃん、魔術って一体なんなんだ？ それはどんな力なんだ」

「考えさせる時間もくれず、垣根くんが興味津々にインデックスに聞く。

上条くんもインデックスを見やり、話を促した。

「……」

「教えてくれインデックス」

上条くんの一言で重い口を開く。

「……魔術って言うのは、君たちみたいに才能のある人間が使うためのものじゃないんだよ。才能のない人間が、それでも才能のある人間と同じことがしたいからって生み出されたのが魔術」

「才能……？」

「どうまたちが使う超能力だよ」

しかし例外もある。

「そう、土御門元春だ。」

私の下位互換の能力をもつ彼は問題はあつたが、魔術を行使していた。

「なら、能力開発のカリキュラムを受けてるこの街の学生には……」

「うん、魔術は使えない」

「彼を真似すればあたしにも魔術が使えるかもしれない。」

「……なるほど、大人は使えると」

「1人で納得する垣根くんは置いておいて、そのまま今後の予定を三人に聞いてみる。」

「んなことよりどーすんの？インデックスちゃん野宿させるつもり？」

そう聞くと、ドヤ顔で我らがヒーローが笑いながらとある人物の名前を出した。

「……天羽、いるじゃないか俺達には最強の先生が！」

6話：正義

「ていうか、なんだってビール好きで愛煙家の大人な小萌センサーの
パジャマが、お前にピツタリ合っちゃまうんだ?」

ヤニと酒臭い部屋の中、5人は居た。

背の高い少年は床にあぐらをかいて座り、窓の縁にはツンツン髪の
少年がガラのわるそうに座っている。

彼の目の前には布団の中で休むシスターと、似たような背格好の少
女。

あたしはというと垣根くんの隣でスマホいじり。昨日の上条家で
の火災がニュース記事に上がっていた。

「たく、年齢差いくつなんだか」

ピンク色のウサ耳のついたパジャマを着込むシスター、インデック
スとパジャマの持ち主である少女、小萌先生はそのデリカシーのない
発言に怒りを覚え、思い思いに主張をする。

「見くびらないで欲しい!」

「うんうん!」

「私もさすがにこのパジャマじゃ胸がちよつと苦しいかも」

「ん!?その発言はナメてるのです!」

そんな二人の漫才を眺めながら背の高い少年、垣根帝督が口を開
く。

「まさか、こんな神話生物紛いの先生がいるとはなあ」

「小萌先生はうちの学校の七不思議だからねえ」

どう見ても小学生くらいにしか見えない小萌先生は垣根くんには
不思議な生物のようで、しきりに観察していた。

……まさかそういう性癖?

「デメエ今失礼なこと考えただろ、あ?」

あつ抓らないで

わるかったから!

「ところで上条ちゃん!天羽ちゃん!結局この子達は上条ちゃん達の
何様なんです!」

ぴつと指を指した先にはインデックスちゃんと垣根くん。

まあ、そりゃあ気になるわな。海外の人なんてここじや珍しいし。ハーフもどきのあたしでさえ珍獣扱いだ。垣根くんはどう見てもチンピラだし。

昨日の夜、身を隠す場所を考えたあたし達が思いついた場所が小萌先生の家だった。

ぐったりしたシスターさんを抱えた上条くん、ナース姿のあたしに、チンピラにしか見えない垣根くん。

昨夜の小萌先生は何も聞かなかったけど、やっぱり教師としては聞かなくてはいけないだろう。

「うーん、妹?」

「うーん、弟?」

苦笑いで二人して答えるが、そんな無茶苦茶な設定は小萌先生に通じる訳もなく。

「天羽ちゃんはともかく!上条ちゃん!嘘にも程があるです!銀髪碧眼の外国美少女です!」

「なんで俺だけっ!」

「そりゃあ見た目っしょ?ねー帝督う?」

「ムカついた。テメエは後で覚悟しとけ」

垣根くんにはハグをするがべりつと体から剥がされる。片腕だけで持ち上げられると、そのままポイツと捨てられた。

びえん。

そんなあたし達には目もくれずぶんすこと可愛らしく上条くんを怒る小萌先生はどこからどう見ても小動物にしか見えない。

ヒヨコがびよびよと鳴いているような、そんな感じ。

「先生、一つだけ聞いてもいいですか?」

「はい?」

「事情を聞きたいのは、このことを学園都市の理事会なんかに伝えるためですか?」

一瞬、しんと部屋が静まりかえったのは垣根くんから漏れた殺気のせい。

「……上条ちゃんたちが一体どんな問題に巻き込まれているかわからないですけど、それが学園都市の中で起きた以上、解決するのは教師の役目。大人の義務です!」

「大人の義務、ねえ……」

この学園に反旗を翻す予定の垣根くんだ。なにも考えず、思考を停止しアレイスターの言いなりになるその姿勢になにか思うところがあつたのだろうか。

「上条ちゃんたちが危ない橋を渡っていると知って、黙っているほど先生は子供ではないのです」

座っている上条くんの前にしゃがみ、顔を見合わせる。

その姿は子供でも、見せる表情は心優しい教師のもの。

「先生が赤の他人だったら遠慮なく巻き込んでるけど、先生に借りがあるんで巻き込みたくないんです」

しかし上条くんにはそれを拒む程の信念と意志を持ち合わせていた。

「何気にかっこいいセリフを吐いて誤魔化そうたって、先生は許さないですよ?」

少し顔を赤らめながらもすくっと立ち上がり、小萌先生は扉を開ける。

「あれ?どこへ?」

「執行猶予です!先生スーパー行ってご飯のお買い物してきます。上条ちゃんはそれまでに何をどう話すべきかきっちりがっちり整理しておくですよ?」

優しく微笑む小萌先生はやっぱり教師だ。

「それと、先生、お買い物に夢中になると忘れるかも知れません。帰ってきたらするしないで、上条ちゃんから話してくれなくちゃ、ダメなんですからね」

ガチャリと鍵は閉めずに外へ出た小萌先生を見送ると、上条くんは畳の上で寝っ転がった。

「素敵な人だね」

「ん?小萌先生のことか?」

「うん」

小さくて強い、我らの小萌先生。

彼女に相談すると何でも解決してしまうような気がしてしまうのは当然のことだろう。

黄泉川先生といい、うちの学校にはいい先生が沢山だ。

「……これ以上先生は巻き込めないな」

そりゃあそうだ。魔術だ何だのって小萌先生には関係ない話。

今回は原作と違い、あたしが傷を治しちやっただから魔術こそ習得はしなかったものの、おそらくあたし達の会話でなんとなくは勘づいてる。

「つーかさあ、話変わるけどインデックスちゃんさあ」

しかし、それよりもだ。

「ん？」

「あたしに魔術って、教えてくれたりする？」

あたしに重要なのは魔術。

ふと右手を見る。

何の変哲もないただの右手。助ける力はあるとしても、守る力は十分とは言えない。

あたしは、護らなくてはいけない。この世界を。

それには圧倒的な力が必要。

「魔術は能力者じゃ使えないみたいだけど、使って内臓傷つけても治せばいいだけじゃん？」

あたしは手札が少ないから。

魔術なんてものに手を出すのは当たり前前の感情でしょ？

「ねえ、インデックスちゃん。あたしが魔導書について、魔術について知ったら、正義をなせるかな」

じつと彼女を見つめると、禁書目録はゆっくりと顔を上げる。

「……けいと、魔導書って言うのは危ないんだよ。そこに書かれている異なる常識や違える法則、そういう違う世界って善悪の前にこの世界にとっては有毒なの」

「有、毒？」

“有毒”、その言葉に上条くんが反応した。

「うん、魔術師ならともかく、この世界の人間が違う世界の知識を知るとそれだけで脳は破壊されてしまうから」

「破壊って……魔術ってそういうものなのか？」

「知りたい？」

まるで主に祈るかのように両手を重ね合わせるインデックス。

「私の抱えてるもの、ほんとに知りたい？」

そして真っ直ぐ上条くんをその綺麗な緑の目で撃ち抜いた。

その言葉に少し微笑み、彼はインデックスちゃんに近づく。

「なんていうか、それじゃこっちが神父さんみてえだな」

「え？……ほんと、懺悔を聞く神父さんみたい」

イチャコラしているお二人さんをよそにあたしはひとり呟きを零す。

「結局、あたしに魔術は無理ってことかあ」

諦めたわけではないが少しだけガツカリしていると、頭に何かが乗った。

「……お前は黙って守られてりゃあいいんだよ、正義気取りの善人様」
垣根くんの手の平はあたしとほとんど同じで女の子みたいに細い。
なのになぜかがつしりとした男の手だと今は認識していた。

「やだよ、だってあたしはみんなのお姉ちゃんだもん」

正義を成し、人を守り、赦しを与える。

それがきつとあたしがこの世界で成すべきこと。

あたしの存在理由。

「……ねえ、とうま、けいと、ていとく」

「ん？」

「十字教は何でもとはひとつなのにどうしてこんなに別れちゃったんだと思う？」

脈絡のない突然な神学の問題に少し狼狽えるが、一応宗教の盛んな国にいたんだ。ある程度は答えられる。

「宗教に政治を混ぜたから、かな？」

「そうだね。正解だよ。そのせいで分裂し、対立し、バラバラの道を歩

くことになった。同じ神様を信じてるのに。それぞれが独自の進化を遂げて個性を手に入れたんだよ」

「個性ねえ」

「まあカトリックとプロテスタントの時点でかなり違うよね。前にプロテスタントの人に神のあり方について説明された時は困ったなあ」
前世？の話だがあの時は本当に困った。別に信仰心なんてこれっぽっちもないのに突然神様議談が始まんだもん。

めんどくさかったなあ。

「けいとは十字教徒なの？」

こてんと首を傾げる姿も可愛いシスターさん。

この世界においてのキリスト教である十字教。カトリックやプロテスタントは同じようにいる。違うのはイギリス清教くらいか？神学なんか勉強してないし、よく知らない。

え？とある魔術の禁書目録のになんで神学を勉強しなかったか？

……そもそも、あたしは禁書目録の方に干渉するつもりはこれっぽっちもなかったのだ。

だってこっちには最強のヒーロー、上条当麻がいるから。その点、超電磁砲には上条当麻がおらず、全員が救われるわけではない。だから本当は超電磁砲で救いの手からこぼれ落ちた少年少女達や背景に描かれた程度の「モブキャラ」達を助けることにフォーカスをおいていたのだ。まあ、日付を忘れてたりで失敗したりしたが。

だから今世でも生物物理学を学んだのだ。

「あえて言えばね。アメリカに住んでてさ。あっちって無宗教って珍しいじゃん？だからカトリックって言ってただけ。信徒ではないよ。名前ももらってないし」

つーか、この世界の十字教キリスト教も父と子と精霊の信仰がベースなのだろうか。

「そっかあ、旧教かあ。あたしの所属するイギリス清教も旧教でね、イギリスは魔術の国だから魔女狩りや宗教裁判、そういう対魔術師用の文化が異常に発達したの。だからイギリス清教には特別な部署があ

るんだよ。」

あたしの中でイギリスにはカトリックのイメージはほとんどない。イギリスはオランダあたりと一緒にプロテスタントだった気がする。違っただけ？

世界史はあまり得意ではないが、やはりこの世界は歴史すらあたしが元いた世界と違うのかな？

イギリスといえば丸メガネの魔法使いや不味いご飯、美味しいエール。それらはあるのだろうか。

……酒呑みたくなってきた。

「魔術師を撃つために魔術を調べあげて対抗策を練る、必要悪の協会、ネセサリウス。」

「ネセサリウス？」

静かにインデックスが頷く。

「だけど、穢れた敵を理解すれば心が穢れ、穢れた敵に触れれば身体が穢れる。その穢れを一手に引き受ける部署。その最たるものが、」

布団に潜るインデックスの頭に水で濡らしたタオルを置くと、上条くんが苦々しい顔で呟く。

「10万3000冊の魔導書……」

「うん、魔術っていうのは式みたいなものだから、上手に逆算すれば相手の攻撃を中和させることもできるの。世界中の魔術を知れば世界中の魔術を中和出来るはずだから。私には10万3000冊の魔導書が」

「叩き込まれた」

「またもや頷くインデックス。」

「逆算して妨害するって能力と似てるんだね。不思議パワーでやってるのかと」

「術って言ってるあたり、学問として成立してるんじゃないの？」

きちんと理解してたわけじゃないが結局のところ二つとも似たような……

垣根くんと魔術の考察をするが、あたし達の話を一言も聞いてない上条くんが声を荒らげた。

「ふん、そんなやばいもんなら読まずに燃やしちまえばいいじゃねえか。」

「重要なのは本じゃなくて中身だから、原典を消してもそれを伝え聞かせちゃったら意味が無いの。それに原典の処分は人間には無理」

しかし直ぐにインデックスちゃんに否定されてしまう。

「正確には人の精神では無理なの。どうしようも無いからこそ、封印するしか道がなかったんだよ」

悲しそうな表情を見せる彼女はまさにヒロインと呼ぶにふさわしいだろう。

「つまり、連中はお前の頭の中にある爆弾を手に入れたって訳なんだな?」

「10万3000冊は全て使えば世界を例外なく捻じ曲げることが出来る」

魔神? 魔人? なんかに近い存在とか何とかwikiには書いてあつたっけ?

宗教関連はマジで意味わかんねーのでぶっちゃけ斜め読みしかしてない。

いや、だって、テレマってなによ、霊装ってなんすか、偶像の理論ってなに? ってなるわけで、学者として、科学崇拝者として。ね? あたしは悪くない。

「テメエ、そんな大事な話、なんで今まで黙ってやがった!」
「うおっ」

突然叫んだ上条くんの声にビビり少しだけ肩がビクリと震えた。

心臓に悪いからやめて!

同じようにびっくりしたのか少しだけ涙目で上条くんを見上げるインデックスちゃん。

まるで小動物のようだ。

「だって、信じてくれると思わなかったし、怖がらせたくなかったし、それに、あの、嫌われたくなかったから」

「ぎけんなよてめえ! 舐めたこと言いやがって! 必要悪の協会? ネセサリウス? 10万3000冊の魔導書? とんでもねえ話だったし、聞

いた今でも信じられねえ！だけどな、たったそれだけなんだろう？」

布団からインデックスちゃんの様子を伺う。

いやー、上条くんは熱血だね。

垣根くんがドン引きしてるよ。

「見てびびってんじゃないやねえ、たかが10万3000冊を覚えた程度で気持ち悪いとか言うと思ってるのか？」

確たる意思をもち、上条くんが宣言する。

「ちったあ俺を信用しやがれ。人を勝手に値踏みしてんじゃないやねえぞ」

泣きそうになるインデックスにデコピンをかます上条くんだが、彼は自分が言った言葉をきちんと理解してるのだろうか？

「ほら、俺ってば右手があるから魔術師なんざ敵じゃねえし！」

「けど、補習で学校に行かなきゃならないって言ったから」

朝方言ったであろうセリフ。その内容はいまの上条くんとは随分とかげ離れたもので。

「言ったつけ……？」

「絶対言った」

「……いいんだよ、学校なんて！」

少々不貞腐れながら答えるが、その態度は余計にインデックスのイライラを増幅させる。

「じゃあなんだって学校に行かなきゃとか言ってたの？予定があるからって」

「おい、完全記憶能力もちが証言してるぞ」

「私がいると居心地悪かったんだ？」

しかし上条くんは無言を貫き、ぷいっと顔を背ける。

「悪かったんだ？」

「うーわ上条最低だな」

「弁解の余地なしっしょ、これは」

三人で追い詰めるとシスターさんが大きく口を開けた。キラリと白く鋭い歯が光る。

……がぶっ！

「にしても、お前が魔術に興味を持つとはなあ」

「未知を知りたくなるのは学者の性ってやつだからねー」

バイクを走らせ、病院へ向かう。

「学者ねえ?」

車線を変え、右へ曲がるとそこには知らない道が広がっていた。

「あれ?道違くな?」

「寄り道」

「は!?!ちよつと!?!ふざけてんの!?!ねえ!?!」

突然そんなことを言われ驚きで声を上げる。あたし今からバイトなんですけど!?!先生に怒られる!しかし、スピードを出して誰もいない小道に入るとなんだか理性と反して不思議とワクワクしてしまうのはなぜだろうか。

バイトに遅刻するのは決定か、まあ垣根くんには全責任があるのであ
たしは関係ない。うん。

「こんな道、始めてきた……」

「地図は頭に叩き込んでるからな、こういうところなら沢山知ってる」

「はえー、さすが第2位」

そのままバイクを走らせていると、人の怒鳴り声が薄らと聞こえてきた。

「んみや?なんか聞こえる」

「どつちだ?」

「左」

「ん」

左へ曲がり、少し行った先。道路の下、廃ビルの近くでいかにもな連中が少年と少女をいたぶる姿が見える。

瞬間、体が動いた。

ヘルメットを垣根くんに投げつけると、道路から下の道へ飛び降りる。垣根くんの怒鳴り声が聞こえた気がするがそんなこと気にしてられない。

誰かが痛みの中で悲しんでいるのなら、それを助けて救うのが姉であり、ナースであるあたしの役目。

アスファルトに派手な音をたてながらも着地する。重力に逆らっているわけでも、風を操っている訳でもないあたしはふつーなら骨にヒビが入ったり、骨折したり、足が痛んだりするんだろが、こつちには「リカバライザー肉体支配」、いや「アンデッド不死者」があるのだ。

痛覚を遮断しているため、痛いなんて感情は湧かないし、骨密度を調整してるから骨なんて折れないし、たとえヒビが入ったとしても、その程度なら自動防御、もとい自動治癒が勝手に治してくれる。

「少年たち、おいたはダメだよ?」

「誰だテメエ」

「通りすがりの看護師ってどこかな?今すぐ止めたら気絶程度で納めてあげるよ?」

三人の加害者と二人の被害者。

加害者のチンピラくんたちはいいとして、被害者のうちの一人に見覚えのある人がいた。

「あれ?佐天ちゃん?」

「あ、天羽さん?」

その少女の名前は佐天涙子。昨日出会ったばかりの少女。

ああ、じゃあこれって幻想御手レベルアップの取引現場か何かか。

確かチンピラくんの一人がなんか面白い能力なんだっけ。

しかし何の能力だったかまでは覚えておらず、結局頭には何も思い浮かぶことはなかった。

チンピラくんたちはニヤニヤと口元を歪ませながら何やらム力つく視線でこちらを見てくる。

「……おい、的の変更だ。お前らの強度レベルがどれくらい上がったのか、こいつで試してみようじゃねえか」

「うん、いいよ。おいで、哀れな少年たち」

片手を突き出し、おいでと手招きをすると何本もの鉄パイプや瓦礫が私をめがけて宙を舞った。

念動力者、もしくは重力操作か。

―演算開始

↓アドレナリン分泌、成功

↓β―エンドルフィン分泌、成功

↓その他脳内麻薬の生成、成功

↓脳内電気信号にてリミッターの解除、成功

↓肉体硬度の変更と上昇、成功

↓視覚処理能力の上昇、成功

「危ないねえ」

その全てを避け、無傷で彼らの前に歩く。

「このっ！」

少々おつむが足りないのか、一人が一直線にこちらに走り、殴りかかってきた。

「遅いにゃー」

突進してきた男の足をひっかけ、転ばせる。転んだところに胃をめぐらして膝を打ち付けると、ピクピクと痙攣させながらその場に倒れんだ。

こっちは視覚処理能力を向上させてるんだ。人の動く姿が、取り巻く環境が、鮮明に、そして遅く感じる。

原理はめんどくさいんで省くが、簡単にこの現象を説明すると、これは命の危険を感じた時に全てがスローモーションに感じるような感覚のこと。

あれは危険を感じた時に視覚の処理能力が通常よりも高まるからおきる現象なのだ。

つまり、今のあたしは脳の信号を弄ってわざと「危険」だと誤認させているのだ。それだけでなく、目の神経やらも弄っている。

もちろんその作られた恐怖から気持ちが悪むことは可能性はある。それを中和させるためにアドレナリンやドーパミン、β―エンドルフィンなどの脳内麻薬も急速に分泌させてるってわけ。

「つとー」

足を踏み込み、大きく跳ぶ。

物体を操る少年はこちらに向けて先程のようにパイプやら石やら

を飛ばしてくるが、それを踏み台にして勢いよく男に突っ込んだ。肘が胸板に力強く当たると、少年は反動で後ろに大きく吹っ飛ぶ。そのまま地面に叩きつけられるとゲホゲホと咳き込み行動不能に。アバラ折っちゃったかな？ごめんね。

「あとはアンタだけかなー？どうする？降参？」

「……テメエはぶち犯してマワして、それから殺してやる」

「それは困るなあ、お手柔らかに」

そのまま特攻をかけ、男相手に蹴りを放つ。ガンツと大きく音を立って吹き飛ばしたのは廃ビルの周りを囲む仕切り。

あたしは一応男を目掛けて蹴ったはず。なのに想定とは違う場所に足が当たった。

なるほど、誤認ってやつ？

「なんか、面白い力持ってるね」

拳を振るうとまたもや標的と逸れる。

フェンスを凹ませた拳からは血が流れ落ちた。

↓演算を開始します

↓三角筋の損傷を確認

? 治療完了

↓中手骨の破損を確認

? 治療完了

↓同じく中手骨付近の血管、皮膚の傷を確認

? 治療完了

一瞬のうちに治る傷。

さて、この少年の能力は不思議なものだ。誤認をさせる能力といったところか。

目に異常を感知してない辺り光の屈折を弄っているのか？

つまり目が真実を写すとは限らない。目を信用してはいけない。であれば、目を使わなきゃいいだけのこと。

視界を切り、代わりに聴覚、触覚、嗅覚を上昇。

聞こえる音で、鼻に届く匂いで、体を触れる空気で、人の居場所を探る。

なるほど、そこか。

一点をめぐけて足を突き出す。

が、いつもより音を拾う耳に鼓膜を揺さぶる声が聞こえた。

「や、やめてください！天羽さん！」

震える足で間に割って入ろうとする佐天ちゃんの声だった。

まだ逃げてなかったの？

見えないというのにそっちを反射的に振り向いたのが悪かった。ガッツと鈍い音をたてて脇腹に衝撃が走る。

佐天ちゃんに気を向けたその瞬間に隙を突かれて蹴られてしまったのだろう。痛くはないが少しびっくりした。視覚に頼らないからこうなってしまう。

そして次に聞こえたのは誰かをフェンスに打ち付ける音。

「あ？ガキが生意気言うじゃねえか。なんも力もねえやつにごちやごちや指図する権利はねえんだよ」

得た力で欲のまま行動し、正義のカケラも見受けられない、己の信念なんて持ってもいない野郎に勇気を振り絞った少女を貶す道理は存在しない。

正義のためだ、致し方無い。首の骨を折ってすぐに治癒するか。脳さえ機能していれば生かすことが出来るので、首の骨の一本や二本、あたしには関係ないし。

と意気込むが、そこに一人の少女が現れるのを感じた。

「貰い物の力を自分の実力と勘違いをしているあなた方に、彼女をとやかく言う権利はありませんわ」

高く、可愛らしい声が怒りと殺気のこめて鋭く言葉を言い放つ。

「ジャッジメント風紀委員ですの」

「白井さん……！」

まじかあ、自分でなんとかするつもりが……

でもここで白井ちゃんがビルを壊してこのチンピラくんを恐怖を植えつけなきや幻想御手レベルアップのこと教えてくれないだろうしなあ。

あたしも拷問じみた真似はできるけど中学生にグロ現場見せたく無いし、垣根くんにますます疑われちゃう。

視力を回復し、その他の感覚も元に戻す。

男が佐天ちゃんを遠くへ投げ飛ばし、白井ちゃんを見下ろしているところが見えた。

「暴行傷害の現行犯で、拘束します」

仕方ない、ここは佐天ちゃんの保護を最優先にしよう。

と、思ったが

「あれ？」

いない。

投げ飛ばされた方に目を向けるが、そこに人の姿はなく。

「黒髪ならさつきどつか行つたぞ」

「ヒエ、か、垣根くん！」

ぐるりとビルの角に佐天ちゃんを探しに行くも、そこにはおらず。アニメならこちら辺にいた気がしたのだが、記憶違いか？

そう思って白井ちゃんの所に行こうと後ろを振り向くと、垣根くんが至近距離で立っていたのに気づく。

その近さと気づかなかつたことから驚きで少しだけ喉から悲鳴が上がった。

「なんでここに？降りてきたの？」

彼の表情は無に等しく、笑っているわけでも、悲しんでるわけでもなかった。

ただどことなく、かすかに怒りと不安が漂っているのを感じる。

「ど、どうかしたの？怪我したの？具合悪いの？だ、大丈夫？あたしが

———
治してあげる。

そう口に出そうとしたが、首を掴まれその言葉は引っ込んでしまった。

がしやんと大きな音をたてフェンスにぶつけられると怒りを含んだ声が頭上から聞こえた。

まるで未知の生物に恐怖するかのような顔をした垣根くんがあたしを見下ろすと静かにその口を開く。

「それはテメエの方だろ」

「え？怪我なんかしてないけど」

フェンスにぶつかっても痛覚は遮断されているので痛みはない。垣根くんに掴まれている喉元だつて普通に喋れるくらい。彼が手加減しているのは彼が一番わかっているはず。なぜそんなことを？

「瞳孔が開いてる、こんな明るい場所だ。それに脈が異常に早い。顔は青い、でも汗をかいてるし、体も熱い。ぼーつとするだろ？さっきまでのテメエなら首を狙った攻撃くらい難なくかわしただろ。でも今は反応できなかった」

つらつらと分析してくる垣根くんにギョツとする。この子、全部見破ったの？脈を測るために首を掴んでるの？さすがというか、何というか。

彼が行ったことは全部事実だ。

そしてこれは別に異常でも何でもない。ただの副作用だ。

瞳孔が開くのは視覚情報を通常より多く取り入れるため。無理やり恐怖を感じさせたことも改まって余計に大きくなっている。

脈が早いのは血液の供給量を上昇させるため。あと精神的緊張からもきてるかも。

顔が青いのは消化器官など戦闘時にいらぬ項目にエネルギーを使つてないからその影響。

熱は筋肉が生産しているもの。汗をかいているのは体の体温を一定以上あげないため。

ぼーつとするのは脳内薬物の分泌、特にβ-エンドルフィンの分泌によるもの。恐怖の伝達信号はすでに消しているのでβ-エンドルフィンによる多幸福感と安心感がそのまま体を支配しているのだ。

「オマエ、脳の電気信号で力のリミッターを解除できるんだよな？」

「え？何で知って」

あたし、教えたっけ？

確かに今の戦闘で考えつくかもしれないが、確認するように聞かれたのだ。彼は確信を持ってあたしに話している。

なぜ知っている？調べたのか？確かにその程度の情報なら書庫に載っている。だが調べたという事実には変わらない。

一体どこまで調べたんだ？

天羽彗系の情報を調べたくらいで藍花悦に辿り着くはずはないが、下手したら勘付かれてるかも。

「この症状はどう見ても電気信号でリミッターを外した程度で現れるものじゃ無い。テメエ、自分の体に何をした」

真っ直ぐとその漆黒の瞳に見つめられる。何だか、怖い。

あたしを人間として見てないみたい。

「言え」

「……所謂ひとつのドーピングってやつ、脳内麻薬の分泌促進」

小さな声で呟くと首を締める力が増す。少しだけ苦しい。

「はっ、大能力者^{レベル4}とは思えねえな、その応用力。テメエは一体何者だ」

「あたしはただの看護師だよ。ただの、看護師」

そう。結局あたしはただのナースなのだ。

人々を救い、癒し、助けになる白衣の天使。

だからあたしはこの力を悲しむ者のために使う。

それに、あたしはみんなのお姉ちゃんだから。

「看護師ならまず自分の体の心配しろ。それで倒れてもらっちゃ困る」

パツと首元から手が離れる。緊張が解けてストーンと地べたに座り果ててしまう。

「たく、白衣の天使様は躡がなってねーな。調教のしがいがあることで」

悪びれもせずそう言う垣根くんの表情は髪に隠れて見えない。

「あたしは平気なのに、なんでそんなに心配するの？」

だって、あたし元々別世界にいたんだよ？死んだんだよ？

痛みの中で、生ぬるい血溜まりの中で、あたしは、死んだんだよ？

あれ以上の痛みは知らない、あの痛みを誰かに知って欲しくない。

だからあたしはあたしを犠牲にする。

武器として盾として、あたしを使う。

それがあたしの仕事だ。

心配される筋合いはない。

「心配じゃねえよ、お前が死んだら俺に疑いがくるから困るんだよ」
不器用な暖かさに、自然と笑みがこぼれる。

「てつきり勝手に飛び出したことに怒るのかと」

「あ？テメエが看護師でみんなのお姉ちゃんを自称する正義気取りの善人様ってことはわかってんだ。飛び出すのは目に見えてる」

熱を帯びた首元に手を当てながらふらふらと立ち上がると彼が肩を貸してくれる。肩に腕を回し、寄りかかると何だか懐かしい匂いが周りに広がった。

垣根くんの不思議な匂い。香水とも違うそれはもしかしたらAI M拡散力場の未元物質データクマターの匂いだったりするのだろうか。

なんか、今日は優しいな？

どうしてだかわからないが。

「あ、ありがとう、垣根くん、心配してくれて。でも、あたしは大丈夫だから」

「……お前は本当に思考回路がおかしいな、何で他人は気にして自分は気にしないんだか」

「そーゆー生命体って割り切つてよ、ん？」

しみりとしたこの空気に突如として鳴り響いたのは大きな衝撃音。

「えええ!?は、廃ビルがつ!!」

廃ビルがガラガラと崩れていく様子が瞳に映る。

白井ちゃんがやったとは理解しているが近くで見ると理解とかすつ飛ばして普通に驚く。

撤去予定の廃ビルとはいえ、こんな感じにやられたら工事のおじさんたち困るだろうな。

「お前行かせないで正解だったな」

「皆様お揃いで」

音もなくその場に降り立ったのはツインテールの良く似合う白井ちゃん、と先程一戦交えた不良少年。

「あら？佐天さんは？」

「帰っちゃったみたい」

そうですか、と少し残念がる白井ちゃんを余所に垣根くんがその不良少年を見た。

「んで？なんでこのムカつく野郎を連れてきたんだ？」

その顔には憎悪が見て取れる。

なんでそんなに怒ってんの？

「ああ、そうでしたの。レベルアップバー幻想御手を頂くんですしたわ。」

「つうあー！」

白井ちゃんがタンクトップを引っ張り、男を睨むと彼は小さく呻き声を上げた。

先程の光景がフラッシュバックしたのか、身体を震わせながらあるものを両手で差し出す。

それを垣根くんが引つたくり、女子二人で覗き込む。

「あ？音楽プレーヤーじゃねーか」

その手には小さな音楽プレーヤーがポツンと置かれているだけだった。ジャッジメント

風紀委員の少女とチンピラまがいの少年に疑いの目を向けられた不良少年は恐怖に怯えながらその正体を口にする。

「レベルアップバーれ、幻想御手は、曲なんだよ」

「なんですって？」

7話：風紀委員

7月24日、電気系統が直り、クーラーが効く病院の中で二人、忙しく作業をしていた。

「もおお、なんでこんなに忙しいのぉ!？」

「つーかなんで俺まで……」

看護服を着込むのは本職であるあたしと癒す職業とは程遠いはずの垣根くん。

これから搬送される患者さんのために病室のベットメイキングをするあたし達は傍から見たら茶髪と金髪ピンクグラデのヤンキーだ。

しかし、身に纏う看護服がそのイメージを払拭する。

「この間の21日に佐天ちゃん助けたりアンタが寄り道したりでバイトに遅れたことへの罰って先生言ってたじゃん」

「だからって無給でこの第2位様を3日間こき使うとはいい度胸じゃねえか」

「二度とバイクは運転させない……」

はあ、と溜息をつきながらも作業を終わらせる。

ベットメイクも終わり内線でその旨を上へ伝えると、面倒くさそうに垣根くんが首を鳴らした。

「つたく、今日で病室の片付け7回目じゃねーか。なんでこんな入院患者が来るんだか」

「なんかこの間の虚空爆発事件の犯人みたく、学生がバタバタと倒れてるみたいだよ?しかも大抵が無能力者らしい。低レベルの人達が沢山搬送されてきてんだってさ」

「はあー、なんでだろーな」

まあ幻想御手のせいなんだけどね。

力を求めた哀れな子供たち。

少しブルーな気持ちになっていると耳に取り付けてあるインカムに通信が入る。

医師や看護師などの関係者用の無線機だ。

「はい、こちら天羽……え?はい、はい、わかりました」

「なんかあったか？」

ぴつと通話を終了すると垣根くんが暇そうに状況を聞いてきた。

「佐天ちゃんが救急車で運ばれてくるっぽい……この部屋に通すから搬送手伝いに行くよ」

「え？こないだの黒髪ロングか？なんでまた」

「さあね、わかんないけど初春ちゃん、花飾りの子も一緒みたい」

病室を出て1回へエレベーターで降り、救急車搬送口へ足を早める。

救急車用の駐車スペースはなぜか混雑していた。

何台もの救急車と沢山の人の中、ストレッチャーに乗せられた少女を見つけると救急隊員に指示を出す。

「ナースの天羽です。佐天涙子さんを乗せた車両で間違いありませんか？状況は？」

「はい、先程電話でお伝えした通り、心拍数の異常は無し、その他外傷も確認されてませんが意識不明の重体。友人に部屋で倒れてたところを見つけられたそうです」

ふつと救急隊員が目を向けた先には花飾りが特徴的な少女が涙を零しながら座っていた。

「わかりました。ここからは私達ナースにお任せ下さい。診断書は別のものに届けさせます」

テキパキと救急車のストレッチャーから病院の物に移動させると、そのままエレベーターへ。

「垣根くんは初春ちゃんを病室に案内してあげて！ゆつくりでいいから！」

エレベーターが閉まる前に垣根くんに叫ぶと、呆れたような顔を向けられた。

目的の階に到着し硬いエレベーターの扉が開くと、急いで病室へ向かう。

まず病衣に着替えさせて、ベッドに移して、心電図の電極を付けて、その後脳波計に繋いで測定結果を先生に送って、診断書の作成、んで

それを救急隊員に渡して、学校へ連絡……

やるが多すぎる！

病室へ入り、ストレッチャーから体を下ろす。本当は2，3人でやる作業なのだが、先日から昏睡状態の患者が何人も救急車で運ばれており、普通の診察も検査も通常通り行われているので看護師も先生方も手がいっぱいなのだ。

だから本当は垣根くんが居てくれて助かってたりする。

あとで彼になんか奢ってあげようと考えながら必死に病室内で作業をしているとノック音が病室の扉から聞こえた。

「垣根くんかな……？はい！入っていいですよ！」

ちようど病室で出来る作業も終わりが見えていたんだ、入れてもモーマンタイツしよ。

「ほら、入れよ」

「あれ？」

横開きの扉が開いた先には垣根くんとなぜか白井ちゃんと御坂ちゃんがいた。

「初春ちゃんは？」

きよろきよろと見渡すが、先程までいた花飾りが見当たらない。

「木山先生の所にデータ解析をしに……」

白井ちゃんは簡単に答えるが、その声からは不安が見て取れた。

「木山？なんでまた？」

「佐天さんは幻想御手を使用してこんなことになっちゃったらしくて

……」

幻想御手、^{レベルアップバー}原作通りそれが原因か。まあ当然か。

佐天涙子が幻想御手^{レベルアップバー}に手を出すのは必然だ。原作でそうだから、という意味ではない。

彼女はコンプレックスの塊だった。そしてそれを友達が見抜けていない以上、変わることはない。私がコンプレックスの話をして心には響かないだろうしね。

助けるとかそういう話ではないのだ。これは彼女と友人が気づかないといけない話。

いずれ別の形で訪れていたことだ、私が今悲しみから救っても意味がない。それはただの応急処置に過ぎないのだから。

「……そっか。とりあえず外で待つて？色々事後処理があるからさ」

「わかり、ました」

2人を病室の外に促して、再度佐天ちゃんを見やる。

力を望むのは当たり前のことだ。別にそれを咎めるつもりは一切ない。しかし彼女が自らの欲を満たすために友人を悲しませたことについては少し怒りを感じた。

「レベルアップ幻想御手ねえ、ま、当然っちゃ当然か。自分だけの現実に干渉するんだ、倒れるのも無理はないだろ」

「とりあえず診断書書いてもらわなきゃね、脳波計の結果も出たし、先生に渡しに行くか」

「そーだな、大先生の見解が聞きたいところだ」

その後細々とした事後処理が終わり、とある少女達を呼びに行く。

「あ、御坂ちゃん・白井ちゃん！」

廊下を歩いていた二人を見つけるとなるべく明るい顔で近づいた。

たしか屋上で喋ってたんだっけ、佐天ちゃんについて。

「天羽先輩、垣根さんまで……二人ともここで働いてたんですね」

「俺は違うけどな。こき使われてるだけだし」

そう言えばあたし達ふたりはナース服だった。垣根くんが勘違いされるのも当たり前か。

彼に睨まれながらちつと舌打ちされるが、あたしはめげない。だつて命令したのあたしじゃないし。

「それはそれとして、2人とも、先生が呼んでたから着いてきてくれる？」

場所は変わり暗い研究室内。

カエル顔の医者がパソコンをカタカタと鳴らしている後ろであたし達4人は立っていた。

「これは幻想御手被害者の全脳波パターンなんだ」

ぱつと見せられたモニターには沢山の脳波図が映っていた。

「脳波は個人個人で違うから同じ波形なんてありえないんだね？」

そう前置きして言葉を続ける。

「ところが幻想御手被害者には共通の脳波パターンがあることに気がついたんだよ」

「どういうことですか？」

その結果は医学には乏しい白井ちゃんや御坂ちゃんには理解が及ばなかったようだ。

聞き返すと先生は優しく教えてくれる。

「誰か他人の脳波パターンで無理やり脳が動かされているとしたら、人体に多大な影響がでるだろうね？」

「幻想御手に無理やり脳を弄られて植物状態になったってこと？」

「誰がなんのつもりで……？」

パソコンからこちらに体を向けると先生は簡単に言った。

「僕は医師だ。それを調べるのは君たちの仕事だろ？」

ナース服からセーラー服に着替え、病院を後にしたあたし達は
風紀委員の支部へ足を運んでいた。

「なんでお前夏休みなのにセーラー服なわけ？」

「服考えるのダルいから」

底辺高校のセーラー服に沢山のピアス、首にはチョーカー、両腕にはジャラジャラと音を鳴らす複数ブレスレット、指には太めのリング
「……女子高生としてどうなんだよ」

「いつも病院にいるからさ、移動だけで私服着るのも嫌なんよ」

ちなみにアクセサリーは全て幼い頃から面倒を見てきた患者さん
たちから頂いたもの。

何となく着けてなきや申し訳ない気がするので着けている。

「そういうもんか？」

そうやってあたしのファッションを心配する垣根くんはというと
明るい水色のスキニーなデニムに、白地にオレンジのラインが半袖部

分に入ったオーバーサイズのポロシャツをゆったりと着ていた。

イケメンなので大抵のものは着こなすこの男は全世界の非モテに羨望の眼差しを向けられることだろう。

「にしてもあのカエル顔のお医者さんはなんで二人を私達に同行させたのかしら？ねえ黒子」

そんなイケメンの前には学園都市超能力者第3位の超電磁砲。

「言っていたじゃありませんか、怪我人が出るようなら天羽さん連れていきなさいと。垣根さんは知りませんが」

そして大能力者の瞬間移動能力者の白井ちゃんと、同じく大能力者兼超能力者のあたし。

立派なハーレムですね！おめでとう！青髪くんは斬首されるといよいよ☆

「俺は幻想御手とやらが気になるだけだ。脳波パターンを変更する技術には少し興味がある」

「脳波ねえ」

そんなことを思われているとは思ってもいない垣根くんは淡々と白井ちゃんの質問に答える。

脳波、その言葉にふと、死ぬ前に勉強していた事を思い出した。

「そもそも脳波ってのは脳の電気活動を脳波計で記録した脳電図、脳波図の略称ってだけなんだけどねえ」

「え？」

ほつりと呟くと誰かが反応した。しかしそんなことを気にも止めずに口を動かす。

「脳の電気活動の個人差って結局のところまだ曖昧だし、たかが音楽を聴くだけで電気活動の変更は可能なわけ？てゆーのも？その個人差って α ?波 β 波帯域のスペクトルにあるビミョーな個人による違いを何回も測定してパワースペクトルを求めて、平均を求める作業で分かるわけです」

「天羽先輩？」

「 α ?波の20〜50 μ Vぐらいの微妙な違いと、 β 波、速波の違い。別の研究だと θ 波が1番個人差があるとか言われているけどあれ

は複数のチャンネル間で平均を取って初めて現れるEEGの違いだし」

「あ、天羽さん？」

「それに少しの雑音でも脳波図は変わってくるんだよ？同じ環境で、同じ事を同じ人間にやらせても全く違う結果が出たりするわけで。体調、精神状態や集中度でもすぐ乱れる脳波図なんて物は本当に個人を特定し、一定の活動に無理やり改竄するのを可能にするほどのもの？たしかに患者の電気活動は無理やり変えられてたけど、それって長時間続くの？」

「おい」

「指紋認証や顔認証の代わりに脳波図を用いたバイオメトリック認証なんて物を作ろうとするとどこもあるみたいだけど、それは多チャンネル脳波計で？ α ？波と β 波だけじゃなくて δ 波、 θ 波、 γ 波を使うもので、誤り率が低いとは言え運用できるほどのものじゃないし。パワースペクトル以外の個人特徴の特定方法が見つからない限り正答率も上がらないし。サブリミナル効果で外部からの刺激を与えて個人差が顕著に現れる波を掴んで98%の割合で個人を把握する技術もあるけどそれは視覚情報を元にしたものだったし。あれ？つまり幻想御手レベルアップは音からサブリミナル効果を生みだして脳内電気活動の変更を外部からの刺激から可能にする音響装置？たしかあの時測定した少年は睡眠時だと言うのには？徐波は見られなかった、なぜか α ？波と速波が動いていたよね？つまり寝ていながら起きている？なら意識はどこに？それって——」

言葉が続けようとした瞬間、歩いていた足に何かが引っかかり横転。そのせいで思考は中断されてしまう。

顔から勢いよく地面に頭をぶつけると、ジンジンと額に熱が集まっていくのを感じた。

なにが起きたのかいまいち把握してないまま足元に視線を合わせると、垣根くんの長い足が見える。

彼に足を引っ掛けられたようだ。顔を上げて確認すると垣根くんはなんだか怖い表情でこちらを見下ろしてきた。

「な、なに?」

「ジャッジメント風紀委員の支部、着きましたの」

そう言つて指で示した場所はアニメで見た177支部の入ったビル。

でも、ここつて確か……

「……お前、随分と詳しいんだな」

何かを思い出しそうになったものの、垣根くんの低い声で我に返つた。

「え? ああ、別に、あたしの叶えたかった夢に関係があつたから勉強しただけ。まああたしの本分は違ふところだから詳しく知つてゐる訳じゃないし」

足の不自由な妹。私はその足を治すために必死に勉強して、研究に明け暮れた。

あの日々は二度と戻つてこない。

本当はここでこんなことしてる場合じゃないんだけどな。なんでこんなことになつたんだか。

「夢?」

「そう、夢。御坂ちゃんにもあるっしょ? 叶えたい夢。あたしはもう叶えられなくなつちやつたけど」

階段を登り、支部へ案内されると早速白井ちゃん達はパソコンの前面を陣取る。

「特定の人物の脳波パターンがハッキリしてるなら……」

「初春に書庫バンクの検索をしてもらえば……!」

「初春ちゃんいないけど?」

「あ」

カタカタと白井ちゃんがパソコンをなにやら操作するが、この中で一番パソコンに強いであろう花飾りの似合う少女が居ないことに気づくとため息をついた。

少女たちが右往左往としていると、そこに奥から一人の女性が歩いてくる。

「まったく、何を騒いでるの?」

「固法先輩！」

固法美偉、だったか。メガネが似合う女子生徒。猫につける名前かよ、と名前を知った時は最初はかなりビツクリしたが、まあフィクションだし、特に今は気にしてない。

だって帝督って名前のほうが、ね？

彗糸もかなり珍しい部類の名前だから人のこと言えないし。

白井ちゃんが簡単にあたし達と今の状況を説明すると、ふむふむと顎に手を当て納得した。

そのまま自分のパソコンに向かうと、^{バンク}書庫へアクセスを始める。

「なるほど、そういうことなら^{バンク}書庫へのアクセスは認められるでしょうね」

「能力開発を受ける学生はもちろん、病院の受診や職業適性テストを受けた大人のデータも保管されてるから見つかからないことはないでしょう」

「それでもない情報もあるがな」

^{バンク}書庫、あまりあたしと関係なさそうなものに見えるが、実は大アリだったりする。

ナース、つまるところ医療従事者であるあたしは健康診断や受診記録を^{バンク}書庫に登録することがあったりする。

そのおかげである程度自分で自分の能力の説明欄を改竄できたりするのだ。今^{バンク}書庫に書かれているあたしの能力の備考欄などはすであたしが改竄したもの。

「でも、なんで幻想^{レベルアップ}御手を使うと同一人物の脳波が組み込まれるの？」

「しかも能力の強度^{レベル}が上がるなんて、さっぱり分かりませんわ」

御坂ちゃんと白井ちゃんの疑問を自分らしくすこし考えてみるが私の持つ脳医学的知識にはそれを答えることは出来ず。

「というかネットワークはA I M 拡散力場だ。」

なんとなくく分かるが、結局はそれっほい嘘^{サイエンス・フィクション}、あたしの常識はその理解は出来ない。

「コンピュータってあるソフトを使ったからって性能が格段に上がるわけじゃないわよね？ ネットワークに繋いだらいざ知らず」

「ネットワークに繋ぐと性能が上がるんですか？」

「お前なあ、ジャッジメント風紀委員なら知つとけよ。いいか、ネットワーク上でコンピュータを並列に繋げれば演算能力が上がるんだよ。たとえば個々の性能はそのままでも」

「垣根、さんでいいのかしら？彼の言う通りよ。」

クラウド機能みたいなものか？

マジ情報工学はあたしの専門じゃないし、ガチでわからん。

医学は人の体、つまり自然のものだけど、情報工学は人工的なもの。人工的なものあまり興味が湧かないので理解する気もない。

自然の不思議を人工的なもので解析するのは面白いが、人工的なものを作り上げるのは微塵も興味ない。

0を1にすることよりも1がどうして1なのか考える方が好きなのだ。

「呼び名なんてなんでもいいだろ」

「ていとくんでもか！」

「ムカついた、後で半殺し決定」

なんであたしにだけ!!!

垣根くんは結構あたしに対してあたりが強い。愛情の裏返しなのか、敵対心の現れなのかはわからないが、何かしら彼のなかであたしに対して感情があるってことだと思われる。それが良いものか悪いものかはきつと今後に関係してくる。

なるべく良い関係を築きたいんだけど、少し難しいかもしれないな。

「そうか、もしかして、レベルアップ幻想御手を使って脳のネットワークを構築したんじゃない？」

「可能性はあるわ」

「でもどうやって皆の脳を繋いでるんですか？」

固法さんが深く頷くと今度は御坂ちゃんが質問をした。

確かに脳を繋ぐだなんて2020年の時点ではまだできていない技術。脳とパソコンをリンクさせてパソコンの操作を試みるって技術ならなくはないが、脳同士のリンクなんてあの時代では到底不可

能。そもその話、薬物投与による超能力の開発もなかった。となると、あの世界にないものが関わってくることは明白。

そして脳に関係していてあの世界にはないものと言え、思い浮かぶのは一つ。

「A I M拡散力場じゃね？あれって無自覚に周囲に個々の力を放出してるものっしょ？その力場をなんらかの力、それこそW i F iやB l u e t o o t hのように電波で繋げてしまえば繋ぐことは不可能では、ない、のかな？」

一応自分の意見を言ってみるが、言ってるあたしは自分でも何を言ってるのか分からない。

というかA I M拡散力場ってなに。

力場という単語自体は空間の中で粒子に作用する非接触力を表すベクトル場のことを示す。

A I M、ここでは目的ではなく無意識って意味だったか。

A I M拡散力場は言葉通りにいえば「無意識下で能力を拡散し、粒子に作用するベクトル場、つまり空間の広がりの中で大きさと向きを持つ量の分布を表すもの」という意味になる。

脳内電気活動の書き換えにより能力の無意識下の出力を変更することによって、その空間の広がりの中のベクトルを改竄し、自身の知らないうちに他人のA I M拡散力場と同調した……つてというのがあたしの憶測だけど、果たしてあっているかどうか……

「でもあれは無意識下の事だし。あたし達の脳はコンピューターで言えば使ってるO Sがバラバラだから繋がっても意味ないんじゃない？」

「コンピューターネットワークもO Sはバラバラだし、使ってる言語だって違うわ。だけどネットワークが作れるのはプロトコルがあるからでしょ？」

「特定人物の脳波パターンがプロトコルの役割をしているって言うんですの？」

「固法ちゃんはおくまでも可能性だけど、と注射は入れるもののその目には確信めいたものがあつた。」

プロトコルってコンピューター同士の通信をする際の手順や規格のことだっけ。簡単に説明すればAとBの情報をそれぞれの言語へ変更してくれる万能翻訳機ってところか。

さっきのあたしの仮説でいえば脳波図の書き換えっていう行為がプロトコルと同じ役割をしているってことになる。

「でも、そうやって脳を並列で繋げば莫大な量の計算をすることが出来る」

「単独では低能力しか持ってない奴でもネットワークと一体化することで能力の処理能力と速度が向上するっつーわけだ。それに加えて同系統の能力者の思考パターンが共有されることでより効率的に能力を扱えるようになる。だから能力が上がるなんてことが起きた。案外簡単な事だったな」

つまんなそうに垣根くんは説明する。

「たぶん昏睡患者は脳の活動全てをネットワークに使われているんじゃないの？ さっきこのバカが言ってたが、こいつが測定した幻想御手使用者のひとりは脳波図では睡眠時に現れる徐波は見られず、なぜか人が起きている時に現れる α ？波と速波があつたそうだ。脳は活動してるのに昏睡している。別の何かの大きな演算を処理しているからその演算のために身体を省エネモードに切り替えたんだろ」

……さすがスパコン並みの頭脳持ちである。

もうこいつだけでいいんじゃない？

「ん、でたわよ」

「脳波パターン一致率99%……」

やっと問題の脳波パターンを持つ人物を絞りきったようで、あたし達に画面を見るように促してきた。

そこに映っていたのはあたしたちのよく知る人物。

「登録者名、木山春生……」

茶色く長い髪に目の下の隈。大脳生理学者の木山春生その人だった。

それを理解すると突然白井ちゃんと御坂ちゃんが叫ぶ。

「初春さんが！」

あー、そう言えば彼女の元に行ったんだっけ？

「さつき、その木山先生の所へ行くって言って！」

「なんでですって!?!」

声に驚く固法ちゃんに御坂ちゃんが答えると、またもや驚いた。

すぐさま小さな携帯を取り出し、初春ちゃんの番号に電話をかける
と白井ちゃんが電話に向かって声を荒らげた。

「初春!?!」

しかし電話口からは無機質な女の声しか聞こえず。

「繋がらないんですの!」

「アンチスキル警備員に連絡! 木山春生の身柄確保! ただし、人質がいる可能性あ

り!」

「はい!」

さつすが^{ジャッジメント}風紀委員、こういう時の対処は迅速且つ明確で流石としか
言いようがない。

そんなバタバタと騒がしくなった室内で御坂ちゃんが出入口へ向
かう。力強く固法ちゃんの方を見据えると、自信に溢れた声で出撃を
宣言する。

「私も出るわ!」

「一般人を巻き込見たくはないけど、^{レベル5}超能力者のあなたが手伝ってく
れたら……」

御坂ちゃんは大きく頷くとそのまま勢いよく外へ出て行ってしま
う。

連絡が終了した後、すぐその姿を追いかける白井ちゃんはなんだか
子犬のようで。

「さ、て、と、あたし達も追いますかあ」

「あ、天羽さん? 貴方達は一般人なのよ?」

ぐっーと背伸びをして扉に向かうと、固法ちゃんに呼び止められ
る。

「あたしがここに来たのは怪我人救助のためだから、行くに決まっ
てるっしょ」

怪我人の白井ちゃんはタイミング掴めなくて出来なかったけど。

「ま、俺も護衛ってことで着いてってやるよ」

ニヤニヤと馴れ馴れしくあたしの肩に腕を置く垣根くんはどこか愉しげだ。

「護衛なんていりまっせーん！垣根くんはここで待機でーす」

しかし、彼には傷ついて欲しくない。

おちやらかながらも “stay” と言うが、垣根くんはそれでもニヤニヤとあたしに顔を近づける

「空飛んで行った方が早いだろ？」

妙に色気のある低く、優しげな声を耳元で囁く。こんな声で様々な女性を落としてきたと思うとなんだかあたしが軽く見られているようにイラツとくるが、まあいい。

あたしにとって重要なのはその色気ある声よりも内容なのだから。

「……同行を許可しましょう。大空、飛ぼうぜ、カッキー」

「オマエ案外チヨロいな」

「あ、貴方達！怪我どころじゃすまないのよ!？」

しかしそんなあたし達をみて風紀委員ジャッジメントとして止めに入った。

「悪いが固法さん、俺らは怪我とは無縁でな」

自信満々に言い放つ垣根くんは固法先さんはあからさまに動揺する。

あたしもあたしで手を自分の腰にあて、彼女を見る。

アニメじゃ背が高く感じたが、160程度か。自然と見下ろしてしま

まう。

「私は天羽隼糸、不死身の^{レベル4}大能力者、^{リカバライザー}肉体支配」

「俺は垣根帝督、^{レベル5}超能力者の第二位、^{ダークマター}未元物質」

私たちには自信があった。

そして高らかに宣言する。

自分が死なない自信を。

「こいつは死なねえよ、この俺がいるんだからな」

「この子は死なないよ、あたしがいるんだからさ」

そして相手を死なせない自信を。

8話：闇

「おーおー派手にやってんなあ」

青空の下、綺麗な翼を背負った垣根くんに掴まりながら空を飛ぶ。垣根くんの首に腕を回し、彼に腕一本で支えられる。

木山さんを追った先にある高速道路を空高くから見下ろしていた。

「助けに行かないとー」

木山さんの手で警備員アンチスキルがあつという間に片付けられていくのが見えるといてもたってもいられず、垣根くんに降りてと言ってみるが効果はなく。

手加減してるみたいだが、それでも怪我人はいる。あたしが行かなくてどーするっての。

「まあ、待つてろ。お前の役目は怪我人の治療だろ？」

彼がいなければすぐにも飛び出して助けるというのに！

じたばたと暴れはするものの、垣根くんを傷つけるわけにはいかないのでドーピング無しの筋力で対抗するが、さすがに鍛えてるであろう現役暗部の垣根くんには勝てず。

というか今更だけどあたし身長173cmで57kgはあるぞ!?

なんで片手で持ち上げられてんの!?!おかしくね!?

いや、まてよ、この人漫画でもアニメでも人の骨を足で砕いてたな

……

人の骨を折るには4000ニュートン、換算して大体400kgくらいの圧力をかけなきゃいけないわけだけど……

……もしかしてこの人最強なのでわ?

「そ、そうだけどーだからって目の前で警備員アンチスキルが怪我するところを見るって訳にも！」

でもめげてはいけない!

懸命に抵抗を重ねるも、努力は虚しく全て垣根くんは無視されてしまふ。

「はいはい黙っとけチワワ、まずはアレを解析してからだ」

「チ、チワっ!?!」

い、犬に例えられるなんて侮辱の極み！

しかもチワワだなんて！

「で、バカ、お前はこれをどう考える」

「これって、どれすか。あとバカじゃねーっての！」

「木山春生の多重能力だ」

「え？ああ、その事か」

高速道路の上で高そうな青いスポーツカーから降りてアンチスキルと交戦する木山さんは能力者でないはずなのに能力を使い彼らと渡り合っていた。

時には水を操り、時には風を操り、時には人そのものを操るその姿はどう見ても普通の能力者には見えない。

「うーん、そうだなあ……1万人の能力者をシナプスで繋いだ幻想御手というシステムはいわば一つの巨大な脳でしょ？そんなに大きい脳なら普通の脳では出来ない現象が起かせると仮定して考えると……」

アニメをまともに見てないので大半は憶測になるが、少しだけ覚えている理論を組み込みながら自分なりの答えを思案する。

「AI M拡散力場を通してネットワークを構築する人の能力を他の脳で演算補助して起こしてる現象なんじゃない？だからネットワークの総体、脳を束ねる木山さんが能力を使ってるよう見えるんだと思う。そうだなあ、沢山の能力が仕舞われてる棚から演算方式を取り出して、沢山の人に演算をさせる。そんな感じ？だから結局棚に入った能力しか扱えない。一度に複数の能力も使えると思う。でもたぶん能力の複数行使には限界があると思う。1万の脳が処理落ちしない限りは使えるとは思うけどね」

とまあ、自分の見解を述べてみるが結構適当だったりする。あくまで仮説だしね。

「クラウド機能みたいな感じかなあ、例えるなら」

「ネットワーク上に落ちてるデータをパソコンで演算補助して使ってるようなもんか」

答え合わせをするように言った垣根くんの言葉に軽く頷く。

「そうそう、そんな感じ。だから結局のところ木山さん自体に能力が宿ってるわけじゃない。ネットワークと分離させてしまえば能力は使えなくなると思うよ」

まあ、パソコンについてはよく分からないからなんとも言えないけどね。

「なるほどな……多重能力なんてもん作り上げるとは大したもんだ。どんな研究をしてきたんだか」

「あー、多重能力とは仕組みが違うからアレをそう呼ぶのは少し違う気がする。多重能力がひとつのパソコンでふたつのデータの演算をすることなら、こっちはたくさんのパソコンでふたつのデータを演算するって感じだから」

一応訂正を入れるがどうでもいいと言わんばかりに軽くあしらわれてしまう。なんでなん！

「ふーん、お、終わったみたいだな、行くぞ」

丁度警備員が木山に敗れた姿を垣根くんが確認する。

と思つたら今度は視界が逆さになった。

急降下していく体は彼の翼に守られてはいるものの重力は感じ、内臓が口から全て出るんじゃないかという錯覚と恐怖が押し寄せる。

「え？まっ、ああああああ!?!」

「掴まってるよ」

ああ、ニュートンの万有引力は正しいんだな、と改めて理解した。逆さに落ちていく感覚、垣根くんが掴まっているとはいえ怖いものは怖い。

え？あたしなんかした？

紐なしバンジーとか聞いてない、聞いてないよ。

「うーわ、警備員が全滅かよ」

道路の上に急停止してゆっくりと降り立つ。怖かった。泣いた。他人に空を抱えられて飛ぶのは怖かった。

もし次に飛ぶ機会があったら自分で操縦したいな。もうやだ。

「にどとかきねくんとそらはとばない」

「子供みたいな喋り方になってんぞ」

フラフラしながら状況を確認する。

10人ほどの警備員アシスキルが怪我をして倒れており、他にも怪我をかばいながらも立ち上がっている。□がちらほらと見受けられた。

「っは、きゅ、救護班です！ん？班？え、えーと、メ、衛生兵メディックですーと、とりあえず治療します！」

平衡感覚を元に戻し、倒れてる人に駆け寄ると治療を始める。

翼を仕舞った垣根くんも垣根くんでスポーツカーに近づき、中を確認していた。

「おい、花飾りのお嬢さん、起きてるか？……こりやダメだ、ぐつすり寝てやがる。呑気なことだ」

ひとまず無事を確認し終えたところで、誰かが関係者用の階段から登ってきたのが聞こえる。

茶髪が可愛い御坂ちゃんだ。

「天羽さんに、垣根さん！？な、なんでここに！」

先に着いていたあたし達に驚いて叫ぶと慌てだし、携帯電話で何やら確認を取っていた。白井ちゃんにだろうか？どうして、とか、避難指示とか言ってるからそう思ったただけだけど。

あたし達は垣根くんのチートでビルの上を通って来たからね。御坂ちゃんより早く着くのは当たり前だったりする。

「衛生兵ですー！」

「あれの護衛」

通話を彼女に警備員アシスキルを治療しながら笑顔で手を振ると何故か苦笑いを返される。

御坂ちゃんは垣根くんのそば、つまりはスポーツカーに近づきながら彼にも理由を聞くが、垣根くんは相変わらずの仏頂面であたしを指さし答えた。

「護衛はいらんゆうーとるやろがつ！」

「うっせーぞチワワ」

「やめい！！」

それで、と御坂ちゃんはスポーツカーの中の初春ちゃんを見て垣根くんに問いかける。

友人は何よりも大切なんだろう。優しい子だ。

しかし無知なる光の子の優しさは闇を知る☒には有毒だ。頭の片隅で暗い場所を知っていても、それを知ろうとしなければただの怠惰。中学生だから、なんて言い訳はこの世界では通用しない。

彼女は日常を守るために闇を知ることから背を向けた。

それは決して悪いことではない。ただ、見る人によれば逃げだと思われるかもしれないが。

超能力者は大抵が自己中心的だとあたしは分析する。まあ自分だけの現実が強固なんだ。当たり前か。

自分を守るため、自分が良ければそれでいい。そんな彼らが語る正義は、果たしてあたしが認めるべき正義なのか？

与えられた情報を鵜呑みにし、模索せず、考えもしない。

闇を知り、光も知り、与えられたものに疑問が持てる。理不尽に争い、他人のために力を振るう者があたしの認めるべき正義なのでは？

「あの、初春さんは大丈夫なんですか？」

「ん？あーそれなら」

大丈夫、と垣根くんが口を開きかけたその時だった。

「安心しろ、戦闘の余波を受けて気絶してるだけだ。命に別状はない。」

煙の先、一人の女性が現れる。

「……木山春生」

悲劇を知る女性。

あたしが救い、赦すべき人。

「御坂美琴、垣根帝督、学園都市に7人しか居ない超能力者の2人も、さすがに私のような相手と戦ったことはあるまい。」

「なんだ、知ってたのか」

余裕を見せながら垣根くんが薄く笑いながら声をかけると、彼女もまた余裕を持って答えた。

「君はこちら側では結構な有名人だからね、未元物質」

しかし垣根帝督が超能力者という情報を知らなかった御坂ちゃんは一瞬垣根くんに意識を向ける。

「え？垣根さんが超能力者……？」

「その話は後だ。前に集中しろ」

「さて君達に、1万の脳を統べる私を止められるかな」

「止められるかな、ですって？当たり前でしょ？」

木山の元に向かおうと地面を蹴る御坂ちゃんだったが、蹴る地面が一瞬にして消えてしまう。

ぽつかりと穴が空いた高速道路に驚くが、その隙に爆発音が空に轟く。

「っ！」

「天羽！」

爆発で1番危険なのは爆風だ。色々なものが飛んでくるっていうこともあるが、風の威力だけで鼓膜が破裂し、眼底出血を引き起こしたりするからだ。酷い時は肺充血、皮下出血、裂傷、内臓破裂などなど。悔るべからずってやつだ。

まああたしは怪我してもすぐ治すからあんまり関係ないが。

「天羽、平気か？」

垣根くんとは少し距離があるので彼は今回はあたしの前に割つて来ず、自分の身を守っていた。

そうそう、それでいいんだよ。

本当はあたしが守ってあげたいけど、今回ばかりは警備員アンチスキルが優先されるべきだからそっちに行けないからさ、自分を守って？

「え？こんなの大丈夫だよ。てか護衛とか言いながら大したことないね、ていとくん」

「……ムカついた、バイク没収な」

「え」

所有権はあたしにあるはずの移動手段が垣根くんの手によって奪われたところで、御坂ちゃんが口を開いた。

「驚いたわ、ホントにいくつも能力が使えるのね。多重能力デュアルスキルだなんて、楽しませてくれるじゃない」

ビリビリと電気を頭の周りに発生させながら木山さんを威嚇するが、その発言に訂正を求める。

「私の能力は、理論上不可能とされるアレとは方式が違う。いわば、マルチスキル多才能力だ」

「……こりゃ、アイツの推測も馬鹿にできねーな」

風が動き出す。

勢いよく力を持って一直線に吹き荒れた風は御坂ちゃんを切り裂こうとするも、簡単にかわされてしまった。

「呼び方なんてどうでもいいわよ！こっちがやることに変わりはないんだから！」

高圧力の電撃が御坂ちゃんから放たれるが、それは不可視な壁に苛まれ弾かれた。

絶縁体で周りを囲ったのか？それとも空気振動で電気を捻じ曲げた？

こちとら物理は専門外。何となく知っている知識をもとに仮説を立てるが、果たしてこれが正解なのかはわからない。

「どうした？複数の能力を同時に使うことは出来ないかと踏んでいたのかね？」

木山さんが足でアスファルトを叩くと波紋が広がる。

直後、大きな揺れと共に地面が割れた。

衝撃エネルギーを送り込んで圧力波でアスファルトを砕いたのか？

「な!？」

「ぎゃっ!?!あたしまで!?!」

高速道路が大きな音を立てて崩れ落ちる。その範囲は広く、近くにいなかったあたしまで巻き込まれる羽目に。

本日2度目の人体落下とか聞いてないっすよ、神様。

落ちても平気なように演算を開始するが、誰かに腕を掴まれた。

「垣根くん、どしたの?」

「間一髪ってどこか?あとでなんか奢れよな」

「あたし、一応大気圏から落ちても死なない自信あるんだけどな……」
崩れた高速道路の上から垣根くんと共にぽっかり空いた穴から下を覗く。

そこには余裕綽々と地面に降り立つ木山さんと、高速道路を支えるコンクリートの柱にまるで蜘蛛のように張り付いている御坂ちゃん。どう見ても木山さんの方が優勢。

「拍子抜けだな、超能力者^{レベル5}というのはこの程度ものなのか」

その言葉が頭にきたのか御坂ちゃんは瓦礫の一つを能力で持ち上げると、木山さん目掛けて勢いよく投げ付けた。

「電撃を攻略したぐらいで、勝ったと思うなああ！」

しかし木山さんの手のひらから現れた細長い剣のような光の粒子に木っ端微塵に碎かれる。

その光る剣みたいなのは何かは原子崩しの劣化版か何かだろうか。皆目見当もつかない。

「こんなのが超能力者^{レベル5}の第3位かと思うと涙が出てくるな」

「だったら、アンタも戦いなさいよ!!」

言い争う御坂ちゃんに向けてぴっと指を指すとそこに円形の亀裂が走る。

電磁波で柱にくっ付いていた御坂ちゃんを囲むように亀裂が走ったかと思うとその亀裂を基準にコンクリートがところてんのように押し出された。

「っ！しまった！」

慌ててその場から離れる彼女だったが、なんとか傷をこさえながらも地面に着地することに成功した。

それでも傷は傷だ。

治してあげたい、痛みをなくしてあげたい。感情の赴くままに体を動かす。

だがそれは一人の少年によって阻止されてしまう。

「お前に何が出来んだよ。大人しく俺と待機しろ」

飛び降りようとするも垣根くんに首根っこを捕まえられてしまう。どうしてあたしに行かせてくれないの。

「もうやめにしないか。私はある事柄について調べたいだけなんだ。それが終われば全員解放する。誰も犠牲にはしない」

「ふざけんじやないわよー」

少しだけ悲しそうな表情を見せながら提案するも、御坂美琴はそれを拒む。

「誰も犠牲にしない？あれだけの人間を巻き込んでおいて？人の心を弄んでおいて!?そんなもの見過ごせるわけないでしょうが！」

闇を知らない光の子。みんなが幸せな世界にいると勘違いしているからこそ出る言葉の数々は闇を知る者にはただの詭弁で馬鹿げたものでしかなかった。

あたしだってこの世界の全部知ってるわけじゃない。少し知ってるだけで知ったかしてるバカだ。だから彼女たち登場キャラクターにとやかく言う資格はないし口出しする気はない。

自分で道を探させるのも一つの愛の形だしね。

結局あたし知ってるのは簡単な時系列とキャラクター、あと舞台背景くらい。妹に言わせればただの”にわか”。このフィクションは好きだけどファンかどうか聞かれたら困っちゃう。

でもね、たとえ死ぬ^前世^世のことを覚えてなくとも、闇を知ることではできたと思うんだ。

どうしてスキルアウトがこの学園都市にいる？なぜ能力開発が善意のものだと思う？そもそも科学はどうやって発展した？

その賢い頭脳で考えればすぐに分かるはずなんだ。

「やれやれ、超能力者^{レベル5}とはいえ所詮は世間知らずのお嬢様か」

「アンタにだけは言われたくないわ！」

世間知らずの光の子。それが今の御坂美琴に対するあたしの評価だった。

「君たちが日常的に受けている能力開発、アレが安全で人道的なものだとも思っているのか？」

そもそも、能力は未だ研究がされている分野だ。

つまり裏を返せばまだ研究が十分じゃないのだ。なぜ信頼する。

学園都市が善意で能力開発のノウハウを教えているとなぜ思う。

「学園都市の上層部は、能力に関する重大な何かを隠している。それを知らずにこの街の教師たちは学生の脳を日々開発しているんだ。それがどんなに危険な事か分かるだろう？」

「……」

何か思い当たる節があるのだろうか、垣根くんは静かに拳を握りしめた。その横顔から微かに悲哀の感情が読み取れる。

力んで白くなるその手を横から両手で包み込むと肩に頭を預け、優しく、妹に向けていたような声色で彼に問いかけた。

「垣根くん、何か怖いものでも思い出した？」

「……別に、ありきたりな悲劇を思い出しただけだ」

少しだけ、本当に少しだけ彼の声が震える。

泣かせたくない。垣根くんも、木山さんも。全部。

「なかなか面白そうな話じゃない、アンタを捕まえたあとでゆっくりと調べさせてもらおうわ！」

片手と片膝を地につけると黒い固まりが木山さんを目掛けて飛びかかる。

砂鉄だ。

しかし黒い砂鉄の塊は木山さんが動かした崩れたアスファルトを刺し、その動きを止められた。

「残念だがまだ捕まる訳には行かない！」

すると道路の近くに転がっていた空き缶用のゴミ箱が宙を舞った。

ゴミ箱から空き缶が空に散らばる。空き缶に何か思い当たる節があったのか驚いた表情で見上げると、その反応に木山さんが声を上げる。

「さあどうする？」

「全部ぶっ飛ばす！」

無数の電撃がその体から放たれると一つ残さず空中で爆発、跡形もなく消えてしまった。

「どう？ぎつとこんなもんよ！もうおしまいな——」

気が緩んだ瞬間、木山さんの手元にあった一つの空き缶が御坂ちゃんの後方にワープする。

「うしろっ！」

直後、爆発がおきた。

「もつと手こずるかとおもったが、こんなものか超能力者^{レベル5}」

派手に崩れたコンクリートの下に埋もれた御坂ちゃんの姿はここからじゃ確認できない。

生きている確信はあった。けどあたしの心はあたしを不安にさせるのが大好きなようで、頭にあの時の痛みと寒さがフラッシュバックする。

その痛みは死の痛み。血が流れ落ちるあの感覚。

「大丈夫だろ、あんなんでも超能力者だ」

悔しい。とても悔しかった。

あたしがいれば、あたしが盾になればよかったのに。

そうしていたら、今頃彼女は無傷だっただろうに。

「恨んでもらって構わんよ」

背を向けて歩き始める木山さんだったが、誰かに抱きとめられその動きを封じられた。

「つかまえ、た」

「なっ!?馬鹿な!磁力を操って即席の盾を組み上げたのか!」

一芝居打った御坂ちゃんの逆転勝利といったところか。

何はともあれ無事なようでホッと胸をなで下ろす。

「ゼロ距離からの電撃、あのバカには効かなかったけど、いくらなんでもあんなとんでも能力までは持つてないわよね?」

「くっ!」

コンクリートを操作し御坂ちゃんを攻撃しようとするも、彼女の電撃の方が素早かった。

「遅い!」

身体中に青白い電流が流れ込む。側から見ても痛そうだと理解できほどの威力。

悲鳴に近い叫び声を木山さんがあげて倒れこむと同時に御坂ちゃんは何かを見たのかブツブツと何かを喋り出した。

「あ?何やってんだ?」

「うーん、多分木山さんの記憶が御坂ちゃんに流れ込んでるんじゃないかね?ネットワークの総体に電気を浴びせたわけっしょ?それってハッキングに近い行為じゃん」

アニメではこのまま回想シーンになるんだけど、現実世界に限りなく近いここではそんなことは起きず。

というか電気を介した回線で記憶共有とか意味不明。

そんなんで記憶覗けたら精神科医が喜びまくって精神疾患なくなるわ。

ていうか能力そのものが意味不なんだけどね、SFなんて興味なかったから。

SFなんてある種のこじつけだし、ほんとには好きでもなんでもないので。

なんでこんな世界に生きることになってしまったのか。どうせならあの時死んでいた方がマシだった。

「見られた、のか？」

「なんで、なんであんなこと」

そんな会話が下で繰り返り広げられるがそんなの垣根くんには関係ないようで、何かを思い出したようにパツと顔をあげる。

あたしを掴んで崩れた瓦礫が散乱した地上に降りると、ゆつくりと口を開いた。

「木山春生、なーんか聞き覚えのある名前だったからさつきから思い出そうとしてたんだが、やつと思いついた。オマエ、木原幻生んこの研究員か」

「……それがどうした」

「数ある悲劇の一つだ、そこまで知っているわけじゃねーがなんだったか……置き去りのAIM拡散力場を使つて暴走能力者を解析するとか何とか」

含みのある言い方で彼は木山さんに顔を向けると、苦々しい顔で彼女はその実験を真実を語りだす。

闇の一端に触れてしまった哀れな子。

彼女の罪を咎めてもいい存在は今ここにはいない。だって彼女は自ら闇を知り、考え、行動した。

そこに罪はあるが、正義の為になしたのなら、あたしはその罪を背負い、赦しと慈悲を与える。

「暴走能力の法則解析用誘爆実験、もつとも、それに加担していたと気づいたのは後になってからだがね」

木山さんは足をふらつかせながら立ち上がる。

治してあげたい。けど、垣根くんは腕を掴まれている現状では彼女に近づくことはできず。

遠隔で治してもいいけど距離制限とか演算が複雑とか一度に一人しか治療できないとか色々制限がある。

それに垣根くんになんとなーく能力を勘付かれてる模様、下手なことして彼が敵に回ったら彼を救うことができなくなる。

「人体、実験」

ポツリと何も知らない女の子が声を漏らす。

この街はそのものが大きな実験施設だ。人間というモルモットを解剖するし、薬漬けにするし、殺しもする。

あたしだって元々は学者だったし、研究の過程でモルモットやネズミを殺していた。だからその思想に特に疑問は持たない。

モルモットが叫ぼうが死のうが、興味のかけらも湧かない。というか人間のためになるのなら喜んで殺そう。

でも人間の場合は違う。

あたしは人間が大好きだから彼らを泣かせたくない、助けたい、救いたい。

たとえその死で人が助かったとしても誰かが泣くのであったらあたしはそれを許しはしない。

他の生物なんてどうでもいい。他でもないあたしの愛する人間がその悲劇の対象だからあたしはこの街が嫌いだ。

「あの子たちは、1度も目覚めることも無く今尚眠り続けている！私たちはあの子たちを使い捨てのモルモットにしたんだ！」

「でも、そんなことがあったのなら警備員アンチスキルに通報して……」

「統括理事会が指示を出してるんだ。警備員アンチスキルが動くわけがねーだろ」

その事実が教師である彼女にはひどく冷たいナイフのように突き刺さったまま。

23回、小さな声で先生は呟いた。

「これがなんの数字かわかるか？あの子たちの回復手段を探るためとして事故の原因を究明するシミュレーションを行うためにツリーダイアグラム樹形図の設計者の使用を申請した回数だ。樹形図の設計者の演算能力をもつてすればあの子たちを助けられるはずだった！もう一度太陽の下を走らせることも出来ただろう！だが却下された！23回ともすべて！」

「だからって、こんなやり方」

「じゃあ他の方法を考えてごらん」

静かに彼女を見据えるとびくりとその肩が飛び跳ねる。

「ごめんね。怖がらせるつもりも、悲しませるつもりも、叱るつもりもないんだ。」

「解決策もデータもなしに否定するのは学者じゃない。別の手段の提示をしない限り、彼女の努力を否定してはいけないよ」

ただ、無知な少女にその現実を知って欲しいだけ。

少しだけ口調がキツくなってしまった。ダメだな、姉だというのに八つ当たりみたいに見えるじゃないか。

「あ、天羽先輩？」

「あの子たちを救うためなら私はなんだってする！この街の全てを敵に回しても、辞める訳にはいかないんだ！っあ、」

そう叫ぶも次の瞬間に何かに苦しみだす。

頭を抱え、地面に両膝をつくとその痛みに悶えるとプツリと糸が切れたようにそのまま倒れ伏した。

「木山さん！」

うつ伏せに倒れた木山さんを助けるために垣根くんの拘束を抜け駆け寄ろうとするも、それは目の前の光景によって拒まれる。

地面に付した彼女の背中から一本の光の糸が勢いよく空に伸びたのだ。

まるでパイプのように太いその糸はみるみるうちに一つの塊と なって宙に浮かぶ。

その塊は徐々に姿を変えて見覚えのある生命体へと変わった。

「なに、あれ？」

「胎児……？」

頭上に光る輪つかと背中に無数の糸を携えた半透明の大きい胎児はその眼をあげ、産声をあげた。

9話：嫌い

巨大な胎児。

その姿は現実離れしており、流石の俺でも少しは驚いた。

「メタモルフオーゼ肉体変化……う？こんな能力、聞いた事……」

常識が通用しない能力を持つてるとはいえ、さすがにコレは予想外。

さて、どうするか。

ポケットに手をつ突っ込みその気味の悪い胎児を眺めていると、木山春生に近づこうとする影が見えた。

「天羽、その女に近づくんじゃねえ」

「え？」

警告した瞬間、叫び声に似た耳を劈くような高音が鳴り響く。胎児から発生したその音は空気を振動させた。

まるでそれが合図だったかのように強烈な風が胎児から俺と第3位に向かって放たれるが、この程度の風で俺をどうこうすることも無く。

「つくー！」

第3位も瓦礫を積み上げ物理的な盾を作り上げて難を逃れていた。
超電磁砲レールガンが無事なのは分かってはいたが、いちばん弱いやつが見当たらない。

まさか死んだか？いや、あいつはほとんど不死身だ。

「おいチワワ、死んだか？」

「チワワじゃねーっつーのー！」

とりあえず大声で呼んでみると、瓦礫がかたりと動く。

大きな瓦礫の下から現れたそいつは血は流してはいるものの、元氣そうにその場に立ちあがる。

しかしそんなこと気にも止めずに第3位は火花を上げる高圧の電流をその怪物に向かって撃ち込んだ。

「全然反応しねえな」

彼女が怪物めがけて放った電撃は確かにその透明な肉体の一部

を破壊した。

しかしノータイムでその損傷を新しく生えてきたふたつの腕で構築しなおすと、ほんの僅かに胎児が風船のように膨らむ。

その姿はまさに怪物。

「……う？膨らんだ？」

「気味悪いな」

ぎよろぎよろした赤い目に、妊娠して2ヶ月目くらいの姿の無数の腕を持つ赤子はどっからどう見ても気持ち悪い。

魔術師の次はバケモノ退治ときたか。

次は魔王討伐にでも行くか？ほんと、アレと出会ってから面倒ごとに巻き込まれてるな。

「……子供、か」

しかし、この辺りの地理を考えるとなんだか面倒なことになりそうだ。

そう思いながらあのバカんとこに移動しようと足を踏み込むと胎児の顔と思しきパーツがこちらを向く。

それが目を見開くと空気が揺れる。

小さな結晶がパチパチと凝縮していき、それはみるみるうちに巨大な物になった。

鋭利な結晶は猛スピードでこちらに雹のように降ってくる。単調な動き。

「垣根くんー」

一瞬俺を呼ぶ悲鳴に近い声が聞こえたが、その声は降り注ぐ結晶によつて掻き消える。

こんなもん羽を展開させるまでもねえな。

「御坂さんー」

後ろの方から飴のような甘い女の声が耳に響く。

先程の攻撃で遠くに走り去っていた電撃娘の後ろにある柱の影から花を頭に生やした女生徒が何かを伝えたそうに第3位をみていた。

「う、初春さん!?!どうしてここに?」

「ああ、起きたのか」

そういえばあの車で寝てたな。

音で起きてこつちに降りてきたつてどこか。

だが俺には関係ない。降ってくる結晶を交わしながら先程木山春生が倒れていたところに目を向けるとセーラー服を着た少女が手厚く介抱しているのが見える。

無事だったか。

「初春さん、大丈夫？」

俺の背後にいる中学生共も無事なようで、女の甲高い声が聞こえるあたりわざわざ確認するまでもないだろう。

だがそんな耳障りな声に胎児は反応しない。水の中を漂うように怪物は俺たちとは反対の方向に向かって進みだした。

「あれ？追つてこない？闇雲に暴れてるだけなの？」

「さあな」

何本もの腕を仕切りに伸ばし何かを求めるバケモノ。

どことなく母の愛を求める子供にも見えるそれは鼓膜を震わせるように超音波じみた奇声をあげて何処かへ向かう。

「まるで何かに苦しんでるみたい」

花飾りがぼつりと眩く。

苦しんでいる、か。

あのギャルなら助けてあげようとかいうのだろうか？どこまでも善人でどこまでもお人好し。

大嫌いだ。

そのギャルの行方を探してみるが先程までいた場所にはもう既に居ない。

辺りを軽く見渡すと、柱の方にヒラヒラと揺れる白い布が目に入る。

後ろでうるさく騒ぐ女子中学生に声をかけて彼女がいるであろう場所に向かうとそこには柱に寄りかかる哀れな学者とそれを慈愛に満ちた瞳で見つめる女性がいた。

その姿はなんだか一種の宗教画の風景にも見える。

「もはやネットワークは私の手を離れ、あの子たちを取り戻すことも、

回復させることも叶わなくなつたか、おしまいだな」

「木山さん……」

「諦めないで下さいー！」

そんな二人の間に花飾りが割つて入る。

何やら目を見つめあっている二人だが、こつちはそんなこととしてる場合じゃない。

二人の間に強引に入り込むと、思ったより怒気が籠もった声が口から溢れる。

「で学者さんよ、あれはなんなんだ？」

「……おそらく集合体だろう、AIM拡散力場の結晶」

本題を促し、学者に考えを参考程度に聞いて見ると重々しい表情で話し始めた。

ネットワークそのもの、といったところか。

その情報だけで何となく全貌が見える。

金髪女に目をやると眉間に皺を寄せてなにやら難しそうな顔をしていた。

何を考えてるんだか。

「そうだな、仮に幻想猛獣AIMバーストとでも呼んでおこうか。幻想御手のネット

ワークによつて束ねられた1万人のAIM拡散力場、それらが触媒となつて生まれた潜在意識の怪物、言い換えればあれは1万人の子供たちの思念の塊だ」

胎児、もとい幻想猛獣AIMバーストの泣き叫ぶ声が体を揺さぶる。

「生霊みたいなものかあ」

「なんか可哀想……」

可哀想、か。

アレが1万の無能力者の塊だと仮定しても、俺はそうは思えなかつた。

自業自得、その言葉がピッタリだ。何も知らず、のうのうと生きていけるのになぜ力を求める。

どんなにデタラメな力であろうと、どんな善人であろうと、暗闇に落ちたら一瞬で黒に染まる。

人を殺す感覚も、人を騙す感覚も、人を貶める感覚も、知らずに済むというのに。

それに生霊なんてオカルトは存在しな……いや、魔術があるんだ、お化けもいるのかもしんねーな。

だがとりあえず今の問題はあの気持ち悪い物体を壊す方が先だ。魔術については今は構ってやれない。

「どうすればあれを止めることが出来るの?」

「それを私に聞くのかい?今の私が何を言っても君たちは信用しない」

まるでもう全てを諦めたかのように女が呟くと、花飾りが前に進みその腕を見せびらかす。

「私の手錠、木山先生が外したんですよね」

「ふん、ただの気まぐれさ。まさかそんなことで私を信用すると?」

少し驚いた表情をしたものの、木山春生は狼狽えずに返す。

「それに、子供たちを助けるのに木山先生が嘘をつくはずありません。信じます」

底抜けの優しさ。甘ったるい棒付きキャンデイのような優しさは闇を知る者にとっては劇薬だ。

甘えたくなり、頼りたくなり、困らせたくなる。中毒になり永遠に抜け出せない。甘美な迷宮。

守られることに慣れてしまう。弱くなってしまう。

そうなってしまいうくらいなら、俺は優しさを拒む。

一度食べてしまったら取り返しをつかないことになることを俺は知っているのだから。

「木山さん、人のためにたくさん悩んで、たくさん苦しんで、必死に求めた木山さんだから、アナタを信じるんですよ」

優しい、安心するような女にしては少しだけ低い声が哀れな学者の頭上から発せられる。

それは到底犯罪者なんかに向けられるようなものではなかった。まるで我が子に無償の愛を注ぐ母親。

慈愛に満ちた笑みでどんな人にも向けて、どんな人でもとろけるよ

うな優しさで包み込み、力もないのに全てを救おうとし、自分の信じる正義を成そうとするその女はまるで天使のようで気味が悪かった。そのくせ自分自身にはその優しさを欠けから見せない、自己犠牲の塊。

世界で一番嫌いな女。

「まったく」

顔を伏せる彼女の表情は見えない。

しかし天羽彗糸を一番近くで見えてきた俺は何となくわかってしまう。その心を。

「AIMバースト幻想猛獣はレベルアップ幻想御手のネットワークが生み出した怪物だ。ネット

ワークを破壊すれば止められるかもしれない」

「レベルアップ幻想御手の治療プログラム！」

「試してみる価値はあるはずだ」

浮遊するAIMバースト幻想猛獣はアンチスキル警備員に何とか食い止められているが、それもそろそろ時間の問題。早めにあれを殺さないと学園都市が滅びかねない。

それは困る。俺にはまだこの街でやるべき事が残っているのだ。

「あいつは俺と第3位で何とかしてやる、花飾りと天羽はアンチスキル警備員のとこ行ってる」

格下だが他の奴よりは使えるだろう。誰でも理解できるような簡単な指示を出す、それに第3位が異議を唱えた。

「何であんたに指図されなきゃいけないのよ！だいたい本当にレベル5超能力者なわけ!？」

「俺は第2位、テメエは格下、ついでに年下だ」

「に、2い!？」

驚きで思考を停止している中学生を置いてバケモノの場所に歩みを進める。

しかしそれを必死の形相で止めに入る馬鹿がいた。

「ちよ、ちよつと、垣根くんたちを危険な目には合わせられないっての!」

「危険？誰に言ってるんだよ。危険な目にあうのはどちらかと言うとお

前だろ」

俺の近くが一番の安全地帯。それはこの女だつてわかっているはずなのに、頑なに俺たちを戦場に向かわせない。

それは愚かにも俺たちを守りたいなどと宣うのだ。

本当に賤のなつてない救助犬だ、調教のしがいがある。

「あたしは強いよ？死にもしないし、だからっ」

「ドーピングの反動でインフルエンザみたいな症状になるのか？」

思い返すはあの時のこと。

チンピラに絡まれてるただ少し喋っただけの知り合いと見ず知らずの男を助けるため自らの体内で毒を分泌し倒れそうになったこと。

自分の不調に気づきもしないまま綺麗に笑うその姿が無性にムカついて八つ当たりをしてしまったあの日。俺は理解したのだ。

この女は頭がイカれているのだと。

『正』に位置する精神異常者。

それが俺の知る天羽彗糸という女だった。

「で、でも怪我して欲しくない！」

「はあ、お前の目的は沢山の人を治療することだろ？それを忘れて俺に浮気してんじゃねえよ」

「つぐ」

凶星を当てられると少し顔を顰める。

分かりやすい女だ。

「とつとと行け」

「……う、今回だけだかね、丸め込まれるの。垣根くんも御坂ちゃんも、怪我したら承知しない」

如何にも納得してない顔だが丸め込めることに成功。

心配され慣れてないからか、こいつに心配されると少しこそばゆく感じる。ああ、本当に鬱陶しい女だ。

「超能力者よ？大丈夫だから」

「怪我のひとつでもしてたら怒るかね、初春ちゃん行ける？」

「はいー」

二人が階段の方へ向かっていくのを見届けると第3位が走って行

く。

俺も行こうと歩みを進めると小さな、蚊のような声がかすかに耳に届いた。

「ほんとに、根拠もなく人を信用する人間が多くて困る」

背の高い長髪の警備員アンチスキルが肌色の触手によって高速道路に叩きつけられる。

部下と思しき丸メガネの女がそれを見て悲鳴をあげた。

「隊長！っひ」

恐怖で涙を浮かべる女にまるでミミズのように蠢く触手が近づいていく。

赤い目玉を先端に携え、赤子のような二本の短い腕が生えているそれはゆっくりと女に滲み寄った。

「い、いや！来ないで！」

ゆっくり、ゆっくりとまるで恐怖を煽るかのように近くそれを女は銃で何発も撃ち抜くが、それはすぐに肉体をまた新たに構築する。

膝が恐怖で震える女にそれは手を伸ばす。

「つきやあー！」

間一髪といったところで何らかの力によって女は道路の中央に引っ張られた。

その際落とした銃は触手によって作られた衝撃で道路とともに跡形もなく消し去られてしまう。

「なにぼやっとしてんのよ！死んでも知らないわよ！」

「はあ、めんどくせえ」

その女を助けたのは電撃使いの少女。

傍にいる俺は特に何もしていない。

「あ、あなたたち誰!?一般人がこんな所でなにしてるの!？」

「ったく、どいつもこいつも一般人、一般人って」

「あいつよりマシだろ。あいつに至っては助けるべき人になってるか

「らな、俺ら」

それもそうねと返されバケモノを見つめるが、メガネの女はそれを良しとせず俺たちに突つかかってくる。

「とにかく直ぐにここから逃げなさい！」

しかしそれが言い終わると同時に、またもや触手がこちらに向かってきた。

女の襟を掴み上司と思しき女の元へ投げ飛ばす。

誰か死なせるとあの女が泣き喚いて俺に説教かますだろう。そうなると思倒この上ないので一応は助けてやる。

先ほどまでいた場所はまるでクレーターのようにはぼっかりと穴が開けられていた。

それを引き起こした触手は第3位によって息の根が止められるも、再び肉体を作り出し本体の元へ帰っていく。

再生能力持ちはアイツといい本当に厄介だ。

「逃げるのはそっち！あいつはこっちが攻撃しなきゃ寄ってこないんだから！」

「それでも、撤退する訳にはいかないじゃん」

第3位のありがたいお言葉を否定で返す警備員アンチスキルはスツとある場所に指をさす。

苦虫を噛み潰したような顔で長髪の女が指をさした場所にはあのバケモノと大きな施設が見えた。

「ん？」

「あれがなんだかわかるか？」

真っ白い塀で囲まれた真っ白い建物群。

俺はそれを知っていた。

「原子力実験炉だろ？」

「まじ？」

「大マジ」

顔を見合わせ事の重大さを再確認すると、またもやメガネの女が声を上げる。

「何やってるのあの子！」

「あれは天羽!?それに木山の人質になっていた……!くっ、この混乱で逃げ遅れてるじゃん」

その視線の先には先程別れた中学生と高校生の凸凹コンビが階段を登っているのが見えた。

アイツの名前を知ってるあたりアイツの学校の教師か?あの学校で警備員アンチスキルやつてる女は……黄泉川愛穂だったか。

脳にある知識と照らし合わせ、素性を確認すると隣から力強い声が聞こえてくる。

「ちがう、天羽先輩と初春さんはもう人質でも逃げ遅れてる訳でもない。頼みがあるの」

第3位が警備員アンチスキルと目線を合わせた。

スピードを出しバケモノが大地を走る。

目的地に今まさに辿り着かんとするも、放たれた電撃がその腕を破壊し歩みを遮った。

腕を切断された胎児はその大きな体を動かし、切り落とした電撃使いと向かい合った。

「あんたの相手はこの私達よ!」

果たしてその言葉の羅列を理解したのかはわからない。しかし頭上に淡い光を発生させると、その圧縮されたエネルギー体を俺らに向かって放つ。

白い六枚の羽が背中に展開され、俺の意思と関わらずその攻撃を防ぐ。

「つち、うぜえな」

「羽……?」

第3位が驚いた顔でこちらを見てくるがまたもやバケモノがエネルギー体を作り出すとその表情も真剣なものに変わる。

攻撃に備え翼を広げるとエネルギー体が二発、あろうことか高速道路の非常用階段の方に向かった。

その一撃は階段を木っ端微塵にし、煙がたつ。目を凝らし煙の中を見ると二つの影が見えた。無事みたいだ。

二発目も彼女達の方に向かったが、おそらくは無事だろう。

再び頭上で光がボールのように集まっていく。けれどそれを生み出す腕が白い鋭利なもので切り裂かれる。

俺の翼で切り裂かれたそれは奇声をあげ肉体を再生した。

「この俺をシカトするとはいい度胸じゃねえか、ムカついた」

「アンタの相手はこの私だつて言ったでしょ？」

その怪物を見据え宣言する。

「アイツに手エ出すつてんなら容赦はしねえ」

「みつともなく泣き叫んでないで、真っ直ぐあたしに向かってきなさい！」

ばちっ

大きな火花をあげて電撃が飛び交う。

空を飛び腕を破壊し続けるが埒があかない。

肉体に干渉する未元物質ダークマターを引つ張つてくるのも考えたが、そもそもあれは肉体ではない。AIM拡散力場そのものといえる存在だ。干渉できないわけではないが下手をするとネットワークを構築する無能力者に何らかの影響を与えかねない。でもだからと言ってこの無限に再生する触手どもを相手にするのも面倒になってきているのも事実。

「ねえ、聞いてもいいい？」

そんなことを思いながら一旦降下してみると第3位が突然話しかけてきた。

面倒な生き物を二体も相手しなきゃなんねーのかよ。

「あ？こんな時になんだよ」

「共闘してるのに垣根さんのことあんま知らないなあって」

電撃を放ちながらそんなくだらねえことを聞いてくる少女は少しだけ楽しそうだ。

大方、今まで全力で能力を行使した経験が少なかつたのだろう、きつと面白いおもちゃやでも思ってたんじゃないか。

「はあ、随分と余裕だな」

「それはそつちもでしょ」

無数の腕が伸びてくるが、近づいてくるそれを空気と共に切り裂き破壊する。

「で？何が聞きたいんだ？スリーサイズなら教えねーぞ」

「聞きたくもないわ！いや、天羽先輩とはどんな仲なのかなって。随分と仲良さげなのに彼女じゃないって言うから」

アレとの関係、か。

自分でもわからないものを他人に説明するのは至難の技。

通りあえずそれっぽい言葉を模索する。

「アレは……なんというか、腐れ縁？」

数ある関係を表す言葉の一つで表すが、やはりしつくりこない。

友だちではない。恋人でも性的関係を持つてるわけでもない。大嫌いだが殺したいほど憎いわけではない。ましてやアレに父性を抱いてるわけでもない。

上辺だけの関係でも無ければ、踏み込んだ関係でもない。上司とか部下とかパトロンとか、仕事の関係でもない。でもだからと言ってただの知人ではない。

馴れ馴れしいやつだが、俺もそんな態度なのでやっぱり少し違う。息が合うわけでもない。一緒にいて落ち着く？信頼？まさか。

似た者同士、理解者、他人、味方、敵、どれも違う。

「へー、付き合い長いんだ」

「いや、初めてあったのは6月の下旬だ」

6月のあの日、ゲームセンターでアレと会ったあの日から始まった。

人を殺し、人を騙してきた俺が日に当たった日。

学生ではあるが俺は暗部にいる。たとえ学友でも必要以上の興味は抱かないようにし、一定の距離を保っていた。

でもアレは違う。純粋に興味があった。

生物学的にも弱くて、社会的立場も弱い、そんな人間。だというのに生物学的にも強くて、社会的立場も強い、そんな俺を心配したのだ。

得体の知れない未知の生物。

「えっ、最近じゃない」

「アイツが個人的に気になってな、何回か連絡取ってたらこんな感じになってた」

その日から俺はアレと連絡を取るようになった。お詫びを口実に会ったりもした。

そして上条と出会い、今までの日常が劇的に変化した。天羽隼糸と上条当麻が俺の世界に侵食しはじめたのだ。

天羽は毎日のようにちやんとご飯食べてるかだとか今日は楽しかったかだのメッセージを送ってくるし、上条は毎晩勉強を教えて欲しいと電話をかけてくる。

初めての経験だった。

人に心配されることも、人に教えることも。

「気になった?」

「変なやつだからな」

そう言つて空に再び舞う。高速道路の上で金とピンクの髪が揺れるのが見えた。

変なやつ、か。

先ほど第3位に言った言葉が頭の中で反響する。

そんなチンケな理由だけで俺はあの狂人と一緒にいるわけじゃない。

自分で言うのも変だが、超能力者は客観的に、精神医学的に全員頭がイカれてる。

自分だけの現実の強固さと精神は比例しているのだ、認めたくはないが理論としては理解している。

超能力者だけじゃない、高位能力者は大体そうだ。

そしてアイツも。

ただ、あれの頭のイカレ具合は俺たちとは正反対だ。

俺らはいっだって自分が1番だ。第3位だつてそう。特別な自分が好き。自分が一般人扱いされるのも、無視されるのも嫌がるのはおそらくそこからだろう。

他人なんて二次、それが高位能力者の共通点。

でも天羽彗糸は違う。全てを平等に愛する彼女の一番はいつだって自分以外。

あいつは自己犠牲の塊だ。

自分に興味が無い。自分が死のうが何されようがなんとも思わねえイかれた女。

人間誰しも死に恐怖する。それは超^レ能力者⁵も同じこと。

第1位は害なす全てを反射するし、第4位は生存本能から最大出力を出せない。

それなのにアイツは死なんて興味も無い。逆に自分より他人の死を嫌がる節がある。

インデックスという少女を必死に治療していた彼女の横顔が頭を横切る。

馬鹿な女。

お詫びの品に細工を施して渡したが、アイツはそれに勘付いてなおスマホから外していなかった。

もし理由を聞いたらきつとアイツは何食わぬ顔で「だってたとえ爆弾でも外したら垣根くんが嫌がるでしょ？」とかいうに決まっている。

気味が悪い。

自分を正義の使者だと信じて疑わない、全人類のお姉ちゃんを自称する生死観のぶっ壊れた善人。

手網は握っておいて損は無い。

それに、この第2位を心配するお人好し生命体なんて暗部に狙われやすいだろ。手元に置いておいて管理するのが飼い主の役目だ。

「ん？なんだこの曲」

大空の下、羽で攻防戦を繰り返していると聞いたことのない音楽が耳に入る。

不協和音にも聞こえるその音は不快なものでもなく、だからと言って安心するようなものでもなく、不思議な音色だった。

向かってきた三本もの腕を一気に羽で叩き斬る。どうせ再生する

んだ、気休めにもならない。

しかし、その腕は再生されなかった。

「再生されない？……ああ、これが治療プログラムか」

この曲が治療プログラムそのものか。

でもネットワークを構築する人間を元に戻した程度でこのバケモノが死滅するとは思えない。

なぜならこれは1万人の思念体。AIM拡散力場によって肉体を獲得した存在。

ネットワークが破壊されてもこの肉体を現世に縫い付ける何かがあるはず。

「わるいわね、これでゲームオーバーよ！」

青白い電気が少女の周りにバチバチと音を立てて現れる。その電流は分散し、怪物の表面に流れた。

大きな塊はその体を黒く変色させその場に崩れ落ちる。

「はあ、間髪一つもやっ？」

「気を抜くな！まだ終わっていない！」

木山春生、バケモノの生みの親がのろのろと歩み寄ってきた。

おそらくネットワークと乖離したことからくる自律神経の乱れや、体調の不調がまだ治っていないのだろう。

流石のアイツでもそこら辺は治せないのか？それともあえて治さなかった？それを治したらどう考えても超能力者と同レベルにしか見えないだろう。

俺は今でもアイツの素性を疑っていた。

誰かを治癒する能力を聞いたことがなかったこともあるが、誰かの傷を治癒するということはその肉体に、脳に干渉していることとなる。

それはつまりアイツは誰かを触れただけで殺すことができるのと同義だ。

生死を操る力。

超能力者だと言われても不思議ではないはずの力。

「ちよ、なんでこんな所に！」

木山に気を取られた第3位が叫ぶと、目の前の塊がその触手を振るった。

弱々しくも力強いその腕が抵抗の意思を見せる。

「ネットワークの破壊には成功してもあれはAIM拡散力場が産んだ1万人の思念の塊！」

「ま、ネットワークから離脱した力の残骸みたいなもんだからな。俺の未元物質ダークマターと同じだ、常識は通用しない」

「話が違うじゃない！だったらどうしろって」

もぞもぞとその塊は再び動き出した。

地面に付した体を起こし金切り声をあげると木山が叫ぶ。

「核が、力場を固定させている核のようなものが、どこかにあるはずだ、それを破壊すれば」

AIM拡散力場の粒子の結晶体みたいなものか。なるほど。ネットワークの作り上げた核。

この幻想御手騒動で得た知識はかなり有益なものだった。

脳でネットワークを構築する技術、かなり使える。後はそれをどう使うかだ。

「佐天さん？」

思考を巡らせていると誰か知らない他人の声が耳を支配する。

ドロドロとした醜い感情を漏らすその声は怪物から聞こえた。

「精神干渉か、ゲスいことしやる。」

力を求める誰か知らない人の声。

日常を変えたい、虐げられている日々から救われたい、日常に刺激が欲しいと宣うその声の数々は俺の感情を揺さ振ることはなかった。

その程度の悲劇で求めるだなんて反吐が出る。闇を知らないくせに、まるで自分が闇にいるかのような口ぶりだ。

ムカつく。

「下がって、巻き込まれるわよ」

「構うものか、私にはあれを生み出した責任が」

「自己犠牲はうちのナスだけで結構だ。大人しくしてろ」

学者の前に立ち、羽を広げると女は少し驚いた表情でこちらを見

た。

この女を見殺しにしたらあのバカに色々言われるのは目に見える。それは勘弁して欲しいのでこうやって盾として女と怪物の間に割って入っているのだ。

断じて優しさからくるものではなかった。

「アンタがよくても、あんたの教え子はどうすんの。回復した時、あの子たちが見たいのはアンタの顔じゃないの？こんなやり方しないなら、あたしも協力する。そう簡単に諦めないで」

諦めないで、か。

希望やら努力やら信じてるガキの言葉にぴくりと反応する。あいつも同じことを言うだろうか。

本当にムカつく。

「あとね、あいつに巻き込まれるんじゃない。あたしが巻き込んだりうって言うてんのよ！」

一直線に放たれた電撃。しかし誘電力場と思しきものに遮られてしまった。

しかし彼女は俺と同じ超能力者^{レベル5}。その程度じゃ終わらない。

電撃は直撃せず、強引にねじ込んだ電気抵抗の熱で体の表面が消し飛んでいく。

痛みにもがき苦しむ触手が一本の束になり、腕のように振るわれる。

「ごめんね」

しかし電撃使いの少女に操られた大量の砂鉄によって切り裂かれてしまう。

「気づいてあげられなくて」

透明な結晶体がいくつも少女に降り注ぐ。

「頑張りたかったんだよね」

それすらも黒い砂によって砕かれた。

「でもさ、だったらもう一度頑張ってみよう」

音を立てて一枚のコインが舞う。

「こんな所でクヨクヨしてないで、自分に自分で嘘つかないで、もう一

度」

超電磁砲が一直線に放たれた

核と思しきものを空高くに飛ばされると、まるで砂糖菓子のように粉々に撃ち抜かれた。

パラメーターリスト
素養格付のことを考慮すれば、こいつが言ってることは偽善で、ただの嫌味にしか聞こえないだろう。

でも知らない奴には救いになる。

無知が罪なのか、知ることが罪なのか、それはあのシスターにでも聞くか。

「これが、超能力者⁵」

バケモノの姿は塵と化し、その場には何も残らなかった。

アンチスキル
警備員のマークが描かれた護送車の前、今回の騒動の犯人が手錠をその腕にかけられて立っていた。

「あのっ！」

花飾りの少女と共にその女を見届けていた第3位はおずおずと護送車に乗ろうとした木山に話しかける。

二人は不安げな顔をして木山を見ており、その光景に俺は耐えられず目を逸らす。

なぜ犯罪者にそんな目を向ける。

丸く収まった？結果オーライ？人を殺してない？

偽善。偽善だ。どんなに足掻いても結局この女が犯罪を犯したことに変わりはないのに。

「その、どうするの？子供たちのこと」

「……もちろん諦めるつもりは無い」

野心家な大脳生理学者は当たり前のように呟く。

「もう一度やり直すさ、刑務所だろうと世界の果てだろうと」

私の頭脳はここにあるのだから、と宣言するその顔には確固たる意志が宿っているかを見えた。

「ただし、今後も手段を選ぶつもりはない。気に入らなければその時

はまた邪魔しにきたまえ」

「ふふ、木山さんはいい人だね」

そんな会話が飛び交う中、俺の隣で静かにしていた女がその学者に歩み寄る。

慈愛に満ちたその女の表情には優しい微笑みが浮かんでいた。

「木山さん、あたしはあなたの正義に、信念に基づいて考えた結果起こしたこの行動に怒りもなにも持ってないよ。あなたが他人のために理不尽に争ったことは素晴らしいことだと思う」

まっすぐ前を見つめて、悪人に近づく彼女は俺の頭脳を持ってしても理解できない文字の羅列のその口から紡いだ。

この女は、一体何を言ってるんだ。

「偉そうなこと言うけど、あたしはあなたの正義のもと、あなたの罪を赦したい。ううん、人を愛するあなたをあたしは赦すよ。だからね、もしあなたがその正義を貫きたいと思ったのならあたしの元において。待ってるから」

「は!?!先輩!?!」

「……面白い子だ、覚えておくよ天羽隼糸」

ふっと笑うとその悪人は車に乗り込む。

一万人を昏睡状態に陥れた悪人はあろうことか一人の女に赦しを得られた。

それが無性に俺をイラつかせる。

「やれやれ、懲りない先生だわ」

「お前はホント何言ってるんだよ」

「でも、伝えたかったからさ」

そんなしんみりとした空気の中、間抜けな電子音が鳴る。

どうやら音の出所は天羽なようでガチャガチャとたくさんのストラップをつけたスマホをスカートから取り出すと断りを入れて電話に出た。

そのスマホのストラップにはいまだに俺が渡したものがついてる。

あの日俺がアイツに渡したストラップは買ったものに少し細工を

施したもので、特殊なものだった。

俺が改造し、スマートフォン用のハッキング経路に使った発信機や盗聴もできる優れもの。他にも機能はあるが、まあいい。

スマホの電波をキャッチし、逆算する。そして逆算したデータはデータクマター未元物質を介して俺の携帯に届く。

逆算されたスマホは容易くハッキングできた。今俺の携帯にはアイツのスマホのデータどころかアイツにまつわる殆どの情報が入っている。

暗部かと思つての処置だったが、無駄に終わってしまったな。

だからと言つてデータは消さないが。

「レベルアップバー幻想御手使用者がみんな起きたつてさ」

通話を終わらせ笑顔で報告する少女の言葉でその事件は幕を下ろした。

暗闇が支配する時間、帰路に着く俺たちは賑やかな光が灯された繁華街を歩いていた。

なんだかんだと適当な話で盛り上がっていた時、ふと先ほどのことが思い浮かぶ。

「なんでお前は木山春生を赦そうだなんて言つたんだ？」

この女はあんな犯罪者を許した。

赦しを与えた。

それは俺には到底理解できない行為だった。

「……あたしはね、思うんだ。真なる罪は無知であることだと」

「で？」

「神の理不尽を知り、それに抗い、誰かを救おうと、誰かを笑顔にしようと全てを投げ捨てる。それがあたしの考える正義。あたしは例え殺人鬼であろうと、反逆者であろうと、その人がその正義に則って行なっているのなら、あたしはその罪を赦すよ。それがあたしの役目だから」

まるで母のように、姉のように、天使のように、神のようにソレは

笑顔で言った。

「だから垣根くん、あなたがあなたの正義を成すとき、あたしは味方だって覚えておいてね」

オマエなんて大嫌いだ。

10話：嫉妬

月明かりと人工的な光が照らす街中、あたしは垣根さんと二人でんびりと世間話をしながら帰り道を歩いていた。

先ほどまでについて二人して風紀委員の支部で話をしていたのでいつもより遅い時間に帰路についている。

今日は実に濃い1日だった。朝は佐天ちゃんが搬送されてきたり、ATMバースト昼は幻想猛獣を倒したり治療プログラムを放送したり風紀委員の固法ジャッジメントさんに怒られたりと、色々あった。

そんな今日の出来事を思い返していると、耳に可愛い女の子の声が入る。

「おっふろー！おっふろー！おっふつろー！」

目を向けた道の先には真白い少女、インデックスちゃんが風呂桶を持って上条さんと歩いているのが見えた。

「お二人さーん！」

「けいととていとくだ！」

「ご機嫌な少女たちの元に行ってみると二人がこちらに顔を向ける。可愛い声であった私たちの名前を呼んでくれるインデックスちゃんは何やらご機嫌だった。」

「天羽、垣根も一緒……って、天羽オマエ何で服ボロボロなんだ？」
そんな中、上条くんはあたしの服装を見てギョツとする。

セーラー服の裾は少し焦げ、スカートも襟元も少し毛羽立っており、擦れた箇所が何個もあるので驚くのも無理もない。

傷は一つもないが、流石に服を治す能力は持っていないのだ。ボロボロなのは当たり前。

「ちよーつと爆風に巻き込まれちゃって」

「ば、爆風!?大丈夫かよ!?!」

「大丈夫！平気よん」

ピースをして上条さんに笑顔を向けると納得してなさそうではあったがそれ以上の追求はしてこなかった。

追求されても説明できる自信がないので正直ありがたい。

一人安堵のため息を吐くとインデックスちゃんがあたしの袖をグイグイ引つ張って話しかけてくるのに気がつく。

何だか妹を思い出すその仕草に少しだけ心臓が鳴った。

「けいととていとくは夜遊び中？」

「ううん、帰宅中。ホントはバイクで帰ってたんだけど、どっかの誰かさんに鍵を没収されたから歩くしかなかったんよ」

夜遊びと勘違いされるのは少々不本意だが、こんな時間に出歩くこんな見た目のあたしは確かにそれっぽい。

自分で納得しながらも少し悲しくなってしまう。

あたしたちが歩いている理由、それはあの戦闘中に言われたことを垣根くんがホントに実行してしまったから。

バイク没収だなんて冗談かと思っていたが風紀委員の支部から病院にバイクを取りに行こうとしたところで彼に鍵をひったくられてしまい、あたしはバイクのエンジンを入れることすらできなくなってしまう。

「テメエがあの時ふざけたこと抜かしたからだろ。反省しやがれ」

「あたしはお姉ちゃんだから弟君に何言ったっていいんだよーん」

「んで？テメエらは呑気に銭湯かよ」

ならば精一杯彼の氣に触ることを言って反抗しようとしたが、腹立たしいことに彼は無視して上条くんを話を振る。

ジャッジメント
風紀委員に窃盗罪でしよっぴいてもらおうかな。

「俺の部屋は……な？」

「ああ……」

魔術師によつて爆発されたり、魔術師が狙われる可能性の高いあの部屋には帰っておらず、上条くんたちはどうやらあの事件の後から小萌先生の家で寝泊まりしているようだった。彼の瞳に光が宿っていないのも頷ける。

あたしの部屋を貸すのは色々あつて無理だし、垣根くんも立場上無理。可哀想だが、彼をそう言った面で助けることはできない。

でもあの部屋でインデックスちゃんの首輪？だか何だかを破壊しないと衛星か何かを破壊できず、物語が変な方向に向かうかもしれない。

いので彼にはそこにとどまってもらわなきゃ困る。

あれを壊すことで何だったか、レムナント？とか出てきて赤い髪のサラシの女の子がなんかなるんだよね？

それでえーと？何が起るんだっけ。一方通行くんと何やかんやあつて、土御門くんと海原？くんと暗部で活動して…？

やばい、全然覚えてない。

暗部編は三期だっけ？あそこらへんほとんど覚えてないんだよね。垣根くんが死んじゃったのが衝撃的でほとんど見てなかった記憶がある。

だってね？未知の物質ですよ？一瞬何をトチ狂ったのか徹夜明けの頭で論文書こうとしたほどインパクトあるんですよ？

そんな子が死んじゃったら他の話も見ずにスピノフを泣きながら電子書籍で読むに決まってるじゃん？

三期、三期か。なんか口、ロシア？そこらへん行ってたよね？

やばいな、これじゃ救う人すらわかんないじゃん。

と、とりあえず今の目標は垣根くん救出つてことで、うん。後のことは未来のあたしに任せよう。

「ねーねー…とうまーけいとーていとく！聞きたいことがあるんだよ！」

今更自分の記憶の抜け具合を改めて理解したところで再びインデックスちゃんが口を開く。

「あ？」

「こもえが言ってたコーヒー牛乳つて何？カップチーノみたいなもの？」

「んなエレガントなもん銭湯にはねえよ。銭湯何だと思ってるんだ」

ああ、銭湯に行くのか。風呂桶持ってるし、当たり前か。

あれ？なんかアニメでもこんな回なかったっけ？何の回だったか…

いや、あたしの記憶はかなりあやふやだし、あてにはならないか。

「けどインデックスにはでかい風呂は衝撃的かもな？イギリスつて迫っ苦しいユニットバスがメジャーなんだろう？」

「うーんその辺は良く分かんないかも」

「確かにアメリカはなかったなあ。シャワーで済ませる人が多かったし」

「そういえば帰国子女だったな、オマエ」

一応死ぬ前も死んだ後もアメリカに居た身、あつちのことは多分この中で一番詳しい。

死ぬ前は妹が生まれた6才までアメリカ、日本に戻っても高校卒業と同時に渡米して大学院を卒業するまで日本に長期で帰ってない。この世界では目が覚めた3才の時から学園都市にきた10才の時までずっとアメリカ。日本にいた時期よりアメリカに居た方が長い。

今のあたしは精神的には死んだ年齢の24歳+この世界で過ごした13年で合計37歳。アメリカには合計で22年いた。

たとえ精神が四十路手前でも思考が若々しいのは周りの環境と体の若さに引つ張られるためか。

「私、気がついたら日本にいたからね、向こうのことはちよつと分らないんだよ」

「ん？あぁ、道理で日本語ペラペラのはずだぜ」

しかし上条の発言にインデックスちゃんは首を横に振った。

「ううん、そういう意味じゃないんだよ。私、生まれはロンドンで、聖ジョージ大聖堂の中で育つたらしいんだよ。どうもこつちに来たのは1年くらい前かららしいんだね」

「らしい？」

「うん、記憶がなくなっちゃってるからね」

記憶がない。

そういえばそんな設定だった。神裂ちゃんとステイルくんに一年周期で記憶を消去されているんだよね。

記憶を消す理由、今思い出してもムカつくな。病院行けばスグ分かるじゃんとか思いながらアニメ見てたよ。

だから結構こちら辺は覚えてる。記憶は強い感情と結ばれているからね。

彼女たちの説明が嘘、というか完璧なフィクションだったから上条

くんが小萌先生に確認を取るまでアニメを勧めてきた妹の神経を疑ったりした。

結局騙されてたけれど、騙される方が悪い。

彼らなら救えたのに思考停止してる彼らを見ていても酷い感情を覚えたのを記憶している。

「は？オマエ完全記憶能力持つてんじゃねーの？あのデケエ神父の嘘だったのか？」

「ソレは本当だよ。でも最初に目を覚ました時は自分のことも分からなかった。昨日の晩御飯も思い出せないのに魔術師とか、インデックスとか、ネセサリウスとか、そんな知識ばかりぐるぐる回って、本当に怖かった」

「じゃあ、どうして記憶をなくしちゃまったかもわかんねえってことか？」

「うん」

やっぱりアニメと同じで記憶喪失か。

あたしは原作の知識がほんの少しあるからどうしてそんなことになってるか分かってるけど、何も知らない人だどう思うんだろ？

この世界の脳の学術的な定義とか研究は2020と変わらないはず。垣根くん頭いいし、そこらへん分かってそうだよな。

「垣根くんはどう思う？」

何やら黙って考え事をしている垣根くんの耳元に小さな声で話しかけてみると彼も同じように耳打ちを返してきた。

「そうだな、完全記憶能力、瞬間記憶能力、映像記憶能力、サヴァン症候群、カメラアイ、ハイパーサイメシア、いろんな呼び方があるがソレらはあまり研究が進んでねえ。自分に関する事柄以外は箇条書き程度にしか覚えてないこともあれば、全て覚えていることもある。結構曖昧でよく解ってないのが現状だ。だがそれらが記憶喪失になったことは聞いたことがねえ」

「よく知ってるね。さっすが垣根くん。研究はあんま進んでないし、どんな仕組みが超記憶を生み出すのかも解ってない。それでも一年だけの記憶がぼっかり空くという事実は今の研究では一応有り得な

い事になつてる。だけどそんな有り得ないことがインデックスちゃんの中で起こっている」

「漫才をしている上条くんに聞こえないようにこそそと耳元で喋り合う。」

「この間もこんなことしてたな。」

「お互いの知識とそこから導き出される結論はほぼ同じで、顔を見合わせて小さな声で答え合わせをする。」

「精神的、または物理的なショックか……あるいは」

「魔術、か。信じられねーが」

「お互い顔を見つめたまま頷く。」

「垣根くんが原作の知識なしでここまでたどり着けるのならあたしがたどり着いたつておかしくない。」

「超能力者^{レベル5}とバレるのも問題だが、それ以上に未来を知っているとバレル方が厄介。」

「ある程度垣根くんと知識のすり合わせをしておけば不安要素はなくなるので積極的にやっつていこう。」

「イツテエー！」

「とうまのばか！知らない！」

「認識の確認が終わったところで上条くんが大きな声を上げる。」

「パツと二人でそちらの方を見るとたくさんの噛み跡を付けた上条くんと彼の風呂桶を奪って走り去っていったインデックスちゃんが目に入った。」

「あ？シスター行っちゃったぞ」

「噛むだけ噛んだら先に行っちゃまいやがって……」

「俺らが目を離れた隙に何があったんだよ」

「そのまま三人で音と人に溢れた道を歩きを進める。」

「青に変わった信号。」

「交差点を渡ろうと足を踏み出したその瞬間、取り巻く全てがガラリと変わる。」

「そこにあるのは静寂。」

「足音も、話し声も、エンジンの音も、何も無い。」

人がいない。

「あ、れ、人が？」

「……………どう言うことだ？」

交差点の真ん中、三人は立っていた。

静かな街の中、コツコツと足音が響く。

「ルーン」

凜とした声が背後からかけられた。

「人払いのルーンを刻んでるだけですよ」

「てめえは…………」

長い髪を高く後ろで括ったその女性は不思議な格好をしていた。

真っ白い半袖のTシャツは胸のあたりで結ばれており、腹部を晒し

ている。

ダメージ加工が施されているジーンズは片足を覆い、もう片方を露出させていた。靴はなぜかウエスタンブーツ。

そして最も目を引いたのは彼女のもつ黒いもの。

その手には2mにも及ぶ巨大な刀が握られていた。

あたしは彼女の名前を知っている。

「神裂火織と申します」

モデル顔負けのスタイルと美貌。

その姿からは絶対的な自信がにじみ出していた。

「出来ればもうひとつの名は語りたくないのですが」

「魔法名か、こないだの神父、ステイルって奴が言ってたな。てことは

魔術師か」

そしてそれに受けて立つように垣根くんが前に出る。

彼もまた自信と余裕に溢れているのが分かる。

「率直に言います。魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが」

「嫌だと言ったら？」

そしてそこに上条くんも同じように立ちはだかった。

「仕方ありません、名乗ってから保護するまで」

彼女が刀に手を触れる。

刹那、風が吹いた。

勢いよく放たれたその風はあたし達を通り抜け、一つの風車からそのプロペラを切断する。

折れた翼は空を舞って、遠くに消えてしまった。

「もう一度問います、魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが」「な、何言ってるやがる」

威勢良く言い放つものの、その足は震えていた。

無理もない、下手したら首が文字通り飛ぶんだ。

幻想殺ししかない彼はきつと怖いはず。

「てめえを相手に降参する理由なんぞ」

「何度でも問います」

再び刀に触れると風が波となって押し寄せる。

まともに立っているのはあたしの前にいる垣根くんくらい。

さて、どうしようか。

「私の七天七刀が織り成す七閃の斬撃速度は一瞬と呼ばれる時間に7度殺すレベルです。必殺と言っても間違いではありませんが」

この間見たく体の戦闘モードへの移行はもう済んである。

彼女と戦ってデータを集めて調整すれば互角の勝負はできるはず。

多分、おそらく。

死にはしないけど、勝てるかは分からない。ていうか無理そう。

あたしができるのは不死身を使つての持久戦くらいだし、彼女が自分の意思で止まるまであたしは勝てない。

「ステイルからの報告は受けています。貴方の右手は何故か魔術を無効化する。ですがそれは貴方が右手で触れない限り不可能ではありませんか?」

まさか今日がこの日だとは思っても見なかった。

あたしは魔術サイドに干渉する気はないつつーのに。これは不運なのか幸運なのか、わかるのは神だけか。

「その背の高い少年はお強いそうですが、それでも音速で行動できなければ私の七閃は避けられません」

何か覚悟を決めたのか、一直線に上条くんが彼女に走り出す。

右手を伸ばし、魔術を打ち消そうとするが彼女の起こす風には無力

だった。

腕を血だらけにし、不思議な風に飛ばされてしまう。

「七閃」

劈くような音と共に何か放たれる。

「幾度でも問います」

なるほど、思い出した。

これは魔術じゃない。そうだった。

彼女の流派はフェイントなどが得意なんだったか。あまりそこらへんの記憶はないが確かそうだった気がする。

気がするだけで合っているかは分からないけど。

「じゃあ、あたしが相手になるよ」

垣根くんを軽く押しつけて二人の前に出る。

少し驚いたような顔をした神裂ちゃんは一瞬力を抜く。しかし流

石は武人、再び警戒して刀に手を置いた。

「貴方は……」

「天羽隼糸、よろしくね、神裂ちゃん」

笑顔を浮かべて一步を踏み出すと彼女が動く。

「七閃」

再び大きく風が吹いた。

視覚情報の向上、ピントを合わせて光を探す。

目を見開きゆっくり動く世界の中、細い糸を見つけると素早く手で絡め取った。

「これって、ワイヤー？魔術師じゃなかったの？」

「……言ったはずです。その少年のことはステイルから話を聞いていたと」

「カモフラージュってやつ？すごいね、すつごく切れ味が良い」

痛みを感じない血だらけの両手にあるのは赤く光るワイヤー。風を起こしていた正体ってやつ？

「天羽ー」

上条くんの声が聞こえた。が、無視。誰にも怪我させたくない。

彼の右手を傷だらけにしたことは絶対許さない。だってあたしに

その怪我は治せないのだから。

なんとかしてワイヤー攻撃をやめさせなくては。近接戦をかければ遠距離攻撃やめてくれるかな？

そんな考えの元、足に力を入れ、力強く地を蹴る。瞬時に縮まるあたしと彼女の距離。そのまま彼女に回し蹴りを試みるが、巨大な刀に遮られた。

ゴキツと嫌な音が足から聞こえる。痛みは感じないが、力が入らなくなつた足を軸に後ろに跳ぶ。

「硬いなあ」

足の一本持つていかれるつもりではいたが、まさか硬度で足が折れるとは。骨の硬度そのものをある程度向上させているというのに、恐ろしいことだ。

まあいいや、治せばいいだけだし。

「この七天七刀は飾りではありませんよ、貴方の体くらい吹き飛ばせます」

「天羽！戻ってこい！」

まるでどつかのボールにモンスターを入れて旅するゲームのようにあたしを呼びやがる垣根くんの方を振り返り、あくまでも冷静に落ち着いた声で彼にやんわりとお断りの意思を伝える。

振り返った先にいた垣根くんはなぜだかひどく苦しそうな顔をしていた。

どうして？泣かないで、お願いだから。

「垣根くんは今日いっぱい頑張ったでしょ？だから今回はあたしの番。それに、女同士の方がいいでしょ？」

「私は魔法名すら名乗っていません。名乗らせないでください。私はもう二度とあれを名乗りたくない」

「ワイヤー使わないなら穏便に話してもいいんだよ？」

笑顔で言つて見せるとまたもワイヤーが飛んでくる。

仕方がない。もう一回接近戦を試みる。跳躍し、頭上から蹴りを落とすが、先ほどと同じように刀で防がれてしまう。

ダメだな、リーチのあるもの使わなきゃ無理かも。

後方へ飛び、距離を取る。なるべく男二人に近づかないように。あんまり彼らに近づくと巻き込みかねないし、何より垣根くんはこの間みたいに心配されてしまう。

それだけは避けたい。

「なあ、神裂とやら」

しかしあたしの考えとは裏腹に垣根くんが近寄ってくる。

その声色は少しだけつまんなそうに聞こえた。

「え？か、垣根くん？」

あたしの隣に立って真っ直ぐ神裂ちゃんを見据える彼は何だかとっても頼もしい。

頼もしい？

あたしは何を考えて？違うでしょう？彼は守るべき人で、救うべき人で。

間違えても、彼は頼もしいと感じちゃいけないのに、違うのに。どうして？

どうしてその横顔に安心してしまうの？

「テメエ、天羽を殺す気ねえだろ」

はあ、と息を吐いて気だるげに零す彼に神裂ちゃんは少しだけ力を緩め、刀から手を離してあたし達を見据えた。

「言ったでしょう？私達の目的はあくまでも彼女の保護だと。貴方達を殺すことではありません」

「何言ってるんだ？あのシスターの背中斬ったのテメエだろ？保護対象を殺そうとする奴が何故邪魔をするこいつを殺そうとしない？」

彼の言葉は鋭いナイフのように彼女に届く。何かを我慢するような表情を一瞬見せると、顔を伏せてしまう。

「善人ぶってんじやねえぞ小悪党。何をそんなに戸惑ってやがんだよ」

垣根くんのセリフに彼女は大きく吠える。

まるで何かを訴えるように。

「私だって、好きでこんなことをしている訳ではありません！」
「はっ。」

ほかんとする垣根くんたちだが、あたしは違った。

だって知っているから。落ち着いて。あたし。

怒ってはダメ。怒鳴ってはいけない。だって彼女達も救うべき人間なのだから。

だから、落ち着いて。

演算を開始して脳内麻薬の調整をする。γ-アミノ酪酸を分泌。

β-エンドルフィンも、セロトニンも。全てを使って感情のコントロールをする。

「私の所属している組織の名前は必要悪ネセサリの教会」

「それって、インデックスと同じイギリス清教の」

「彼女は、私の同僚にして、大切な親友なんですよ」

酷く悲しそうな顔をして訴える彼女に上条くんは狼狽えた。垣根くんも態度には出さないが驚いてはいるようだ。

あたしはというと静かに感情のコントロールに勤しんでいた。

だめ、だめ、感情を誰かに当てるのはお姉ちゃんじゃない。

「私だって彼女の背中を斬るつもりはなかった！あれは、歩く教会が破壊されたと知らなくて……！」

「防御があるからって普通斬るかよ。で？その親友さんは何でんなことやっちゃまったわけ？」

嘲笑う垣根くんがあたしの言いたいことを言っていく。

なんだかんだ彼とは思いが似ているのだろうか？でも、彼に嫌な役目を押し付けてるみたいで。

嫌な気分になる。

「そうやって保護しないと、彼女は生きていけないんです」

ポツリポツリと言葉を紡ぐ。

「それは何故だ？」

「完全記憶能力」

上条くんもこちらに合流し、三人で彼女の言葉の続きをまつ。

「それが全ての元凶です」

「完全記憶能力って、10万3000冊のことか……？」

「全部シスターさんの頭の中に入ってるんだろ？」

10万3000冊の魔道書。

全ての元凶。

物語の中心。

「人間の脳の容量は意外に小さい。ですが、いらぬ記憶を忘れることで知らないうちに脳を整理している。だから人間は生きていける。ところが彼女にはそれが出来ない。街路樹の葉っぱの数からラツシユアワーに溢れる一人一人の顔、雨粒の一滴一滴の形まで。彼女の頭の中はそんなどうでもいい記憶であつという間に埋め尽くされてしまう」

「はっ？」

落ち着いたはずだった。頭で理解してはいるはずだった。

でも現実で、この耳でその理論を聞くと頭に血が登っていくのを感じる。

別にあたしは脳医学者じゃない。生物物理学者だ。脳に関しては基本しか知らない。

それでも、彼女の言ってることが間違っていることは分かった。そんな基礎の基礎に騙されてるといふ事実があたしをイラつかせる。

思わず声が出そうになった。怒鳴り散らしてしまいそうになった。けれど垣根くんが腕を掴んできた感触で、その思考が中断された。口パクで「おすわり」と言われ、少しだけ落ち着く。あたしは犬じゃないのにな。

「あんた達は同じ組織に所属していながら、なんでインデックスに悪い魔術師だなんて言われてんだよ。それとも何か？インデックスが俺を騙したって言いたいのか？」

「彼女は嘘を着いてはけませんよ。私たちが同じ必要悪ネセサリウスの教会の人間だということも、自分が追われている本当の理由も、何も覚えていないのです。だから自分で判断するしか無かった。自分を追う魔術師は10万3000冊を狙う魔術結社の人間だと思うのが妥当だと」

それでも続けられる言葉の数々に我慢はできそうになかった。

腕に触れる垣根くんの手のひらの体温だけがあたしの感情抑制剤

だった。

「……ツツコミどころは色々あるが、話を全部聞いてからにするぞ天羽。それで？なんであいつは1年前の記憶を失っちゃってるんだ？」

「失ったのではありません。正確には私たちが消しました」

「やっぱりな」

歩いていた時にあたしとしていた話ですでに魔術が関与していると理解していた垣根くんにはあまり驚くような話ではなく、落ち着いた表情をしている。

上条くんは酷く驚いた顔をしているが。

「あんたは！インデックスの仲間だったんだろ!?あんたにしたってインデックスは大切な仲間なんじゃないのか！だったらどうして！」

「そうしなければならなかったからです。そうしなければ彼女が死んでしまうからですよ」

「彼女の脳の85%は10万3000冊の記憶のために使われています。そのため彼女は常人の15%しか脳を使えません。その15%に記憶を続けければ彼女の脳は……」

ああ、嫌だ。

そんな分かりやすい嘘に騙されて、インデックスちゃんを悲しませて。何でそんな悲しい顔をするの？

生物物理学^あ者に、そんな嘘を当たり前のように言わないで。

「85%って……マジかよ……」

「そんな……記憶を消す以外に方法は？」

「ありません」

垣根くんも上条くんも驚いたように声を出す。もともと、その意味は真逆のものだが。

しかしその女はそれに気づかず話を進める。

「いつまでだ？」

「記憶の消去はきっかり1年周期で行われます。ちょうどその時でなければ記憶を消すことは出来ないのです。あと3日」

「3日？」

軽く頷くと彼女は話を続けた。

「私たちに彼女を傷つける意思はありません。むしろ私たちがなければ彼女を救うことは出来ない。引き渡してくれませんか？私が魔法名を名乗る前に。それに、記憶を消してしまえば彼女はあなたの事を覚えていませんし」

冷めた声。

氷のような声が場を支配する。

「そんな彼女を助けたところであなたにとって何の益にもなりませんよ」

だがヒーローはその程度の氷で燃え尽きることは無かった。

「ふざけんな！あいつが覚えてるか覚えてないかなんか関係あるか！俺はインデックスの仲間なんだ！あいつの味方であり続けるって決めたんだ！聖書に書かれてなくなつて、絶対にそうなんだよ！」

炎のように燃えるその言葉の数々は氷の女に火傷を負わせる。

「なんか変だと思つたぜ、単にあいつが忘れてるだけなら、全部説明して誤解をとけばいいだけの話だろ！なんで誤解したままにしてんだよ！なんで敵として追い回してんだよ！テメエら、何勝手に見限つてんだよ！あいつの気持ちをなんだと！」

「うっせえんだよド素人が！」

その熱にとうとう女が悲鳴をあげる。

怒気を含んだその叫び声はあたしの心を激しく揺さぶる。

「知つたような口を聞くな！私たちが今まで、どんな気持ちであの子の記憶を奪つて来たと思つてる！あなたはステイルを敵視しているようですが、あれが、一体どんな気持ちであの子とあなたを見ていたと思つてるんですか!?!どれほどの決意の元に敵を名乗って居るのか、大切な仲間のために、泥をかぶり続けるステイルの気持ち、貴方なにかに分かるんですか!?!」

もう、限界だった。

垣根くんの手を乱暴に振りほどき、口を脳と直結させる。

出てきた言葉の羅列はとても綺麗なものとは言えなかった。

「はあああ!?!ド素人はアンタでしようが！」

喉を痛める程大きく叫ぶ。

γ—アミノ酪酸も、β—エンドルフィンも、セロトニンも、どんな脳内麻薬も今のあたしには無意味だった。

「85%? 残りの15%は1年しか容量がない!? 1年周期で消す? 単純計算で6年分しか容量ねえじゃん! アンタにはインデックスちゃん! 6歳児に見えてるわけ!? 人間ナメてんの!? 1ペタバイトは記憶すんだぞ!? どれだけ膨大な量かわかるか!? ネットで調べてみるよ! 脳科学者に電話してみろよ! 有り得ねえって言われるよ! 気持ち!?! 少しも脳を働かせなかつたアンタたちの気持ちなんか知るかよ!」
そこまでいうと再び垣根くんは腕を掴まれる。彼に軽く睨まれ、いたたまれなくなり目を伏せる。

呼吸も忘れスラスラと言葉が出てきた。自分でもまさかここまで出てくるとは思ってもみなかった。姉だというのに、なんたる失態。

言葉以上に、それを口にした自分が何よりも怖い。

「天羽、俺も思ったが少し言い過ぎだ。ああ、でもオマエ的には無知が罪なんだったか、そりゃキレるわな」

「えっ? ど、どう言うことなんだ?」

また叫びそうになるあたしの口を片手で覆って垣根くんはあくまでも冷静に話し始めた。

ほんと、まるであたしの飼い主だ。

「人間の脳は1ペタバイト、これは大体2の50乗、約1125兆バイトの容量がある。もっと言えばデータ量とか細胞数とか使って色々計算すると最低でも140年分以上は覚えられるんだ」

「え……? じゃあ、脳が、パンクって」

「んなことある訳ねえだろ。ていうか85%とか15%ってどっから出てきた数字だよ」

大きいため息を一つついて話を続ける。

「それに記憶には種類がある。感覚、短期、長期記憶の三つ。んで長期記憶は陳述記憶と潜在記憶二つに分けられて、またそこからエピソード記憶、意味記憶、手続き記憶、プライミングと条件付けにカテゴライズされる。本をたくさん読んだって意味記憶に蓄積されるから他の部分には影響でねえんだよ」

「え？つてことはつまりこいつらは……？」

「誰にだかしらねえが、騙されてたつてわけだ。こんな病院行ったりちよつとネットで検索すればすぐわかることで騙されるとか、御愁傷様だな」

ホントだよ。神なんか傲慢な存在じゃなくて、人間という理性ある存在に頼れよ。

あんなロクデナシ、頼つて何になる。あんなもの、祈つて何になる。理不尽で、残虐で、いつだつて人間を困らせるのは神だというのに。

「で、でも！現に彼女は一年経つと苦しんで！」

「それこそ魔術じゃねえの？」

「ど、どういう」

ヒントなら沢山与えただろう。

「あのさあ、ちよつとは考えなよ！インデックスちゃんはたくさん危ない本を持つてる危ない組織に属する女の子なんですよ!? 10万冊も頭に危険な本を詰め込んだ女の子をなんの細工もしないで普通野に放つ!? アンタは個人情報沢山のスマホにパスワードかけないわけ!? それと一緒でしょ!？」

垣根くんの手を口から話し、腕も振り払う。二度目の拒絶。

彼の表情は見えないが、そんなことはどうでも良かった。

いや違う、わざと見なかった。

「それは、」

「救う救う言っておいて！脳死状態で与えられた情報だけ鵜呑みにしてっ！救えるのにいっ！なんでえ、なんで、なんで考えないのお、」

がくん

足の力が抜ける。

地べたに座りこみ、頭を抱えるとぼたぼたと塩辛い水が瞳から溢れ出た。

「天羽？」

違う世界に置いてきた愛しい妹の泣き顔が頭に浮かんで離れない。

愛しい妹。あたしのシユガー、あたしのハニー、あたしの全て。

「あんたたちのこと、なんもしらない、あたしがっ、分かるつてのに！」

なんで考えない！考えを止めたらそれは死と同じ！」

どんなに、どんなに、どんなに努力をしても、救えなかった。
治せなかった。

最期なんて、泣かせてしまった。

「なぜ……？」

アナタを救いたかったのに！歩かせたかったのに！神の理不尽には結局抗えなかった！

もつと生きていれば助ける道はあったかもしれないのに！死ななければ可能性はあったのに！

「すぐえるのに、どうして、どうして、なんでかंगाえないの、すぐえるんだから、すぐってよお、」

救える道があるくせに！あたしにはないものがあるくせに！

「なぜ貴方が泣くのです……？」

羨ましい！アンタが羨ましい！

「ちからがあるくせに、みちはあるくせにつ、みえてない、の、ばかじゃないの、うらやましい、なんで、なんで、」

彼らに向けるあたしの感情。

それは七つの大罪の一つ、嫉妬であるとようやく理解した。

「しんでからじゃっ、おそい、んだよ、」

思い出すのは妹の泣き顔。

動かない足をぶら下げて腕を懸命に動かし、あたしを呼ぶ彼女の涙。

「神裂」

「ステイル……」

「今回だけだ、一旦、彼女の話を聞かないか」

涙で前が霞む中、何処からか現れた男が女を引き止める。

「……私もそう考えていたところですよ」

悲しげに伝えると彼女たちはじつとあたしを見る。

見ないで。

醜いあたしを見ないで。

「悪いがこいつはテメエらのおかげで傷心中だ、話なら明日来い。ど

うせインデックスがどこで寝泊まりしてるか知ってんだろ？」

その目線を遮るように少年が立ち塞がる。

「そう言われずともそうさせてもらうよ。だからそんな怖い顔しないでくれ」

彼の顔を見るのが怖かった。

あの後、上条くんはインデックスちゃんを探しに一旦別行動、魔術師二人も立ち去った。

残されたのはみつともなく泣きじゃくるあたしと、それをおぶる垣根くん。

暖かい彼の背中。その暖かさにあたしは無性に口を滑らせたくない。

「垣根くん」

静かな道を歩む中、掠れた声で彼の名を呼ぶ。

「あ？泣き止んだかよお子様」

「昔話、聞いてくれる？」

許可を求めるが彼は口を開かなかった。

無言は肯定。そう受け取って小さく話を始めた。

「あたしね、妹がいたの、生意気で、抜けてて、オタクで、でも頭は良くて、すごく可愛くて、だいすきな、妹」

「妹？……ああ、そういうことか」

一瞬だけ訝しむが、次の瞬間には納得したかのような声を出す。

何を考えているのか最初は分からなかったが少し考えたらなんとなく彼の思考回路を理解した。

この世界では妹なんていない。あたしは一人っ子。書類には一言も書かれていない。

どうせあたしのこと暗部として調べたんだろう。彼はきっとそのことを知っている。

そして暗部だからこそ、彼はそれを悲劇の痕跡だと思い込む。勝手に誤解してくれるのなら有難い。

「生まれた時から足が動かない、あたしの、妹」

「足が？」

「うん、神経の問題でね、先天的に神経筋接合部分に欠損があるの、足だけ、動かない、不治の病」

「不治の病、か」

治したかった不治の病。

でも妹はもうそばに居ない。探す意味が、生きる意味がない。

「不治の病って言っても治療法が見つかってないだけ。治るかもしれない。だから小さい頃からマッサージとか、電気治療とか出来ることは全てやったんだ」

思い出すのは子供の頃の記憶。

学校から帰ってきたら真っ先にすることが彼女の足のマッサージ。

幼い頭で論文を読み解き、自分で改良を重ねたマッサージ法は彼女には好評で高校卒業まで欠かさずやった。

でもなんの成果も得られなかった。

「いっぱい勉強頑張って研究とかもしたんだよ？たくさん、たくさん、勉強した。実験もした、有識者に話も伺った。人生かけて、全部捨てて、あの子を、助けようとした」

だから今度は自分で研究することにした。

沢山の機材と沢山のモルモット。人体以外ならなんでも使った。

あたしの正義のために。

「でもね、無理だった。結局、死んじやった。二度と会えなくなった。もう二度と、あの子を歩かせることが出来なくなっちゃったつ、あたしの力じゃ、つ、ダメだったの、」

先ほど枯らしたはずだというのに止め処なく涙が頬を伝い流れ落ちる。

「神って、ホントにつ、理不尽、だよ」

垣根くんの首に回した腕に力が入ってしまう。自分の血に濡れた手で自分の手首を掴む。

苦しくさせてごめんね。

「だからね、あの人たちがつ、うらやま、しい。できる、のに、ちよつ

と、考えれば、調べれば、わかるのに、すぐえるのにつ、あたしに、できなかったことが、できる、くせにつ、あの人たちが、うらやましい、の」

「……」

「お姉ちゃんって、また、よんで、ほし、のに」

あの子の無邪気な声が聞きたい。

もう会えないというのに。何処までもあたしは欲深い。

あたしは強欲で、傲慢で、嫉妬深く、憤怒に振り回されている無能。自分でも分かってる。

もしあたしが天使だったのなら、すぐに墮天させられてしまうだろう。

「かきね、聞いて、ない、でしょ」

「聞いている」

ぶつきらぼうだがその言葉に嘘は感じられなかった。

「ふ、ふふ、ありがとう」

感謝を伝えるとボソリと何かを彼が呟く。

「……それがお姉ちゃんの原因か、そりゃあ気も狂っちゃまうな」

しかし疲れと眠気に襲われているあたしには聞き取れず。

「なんか、言った？」

「何も言ってるよ。寝てろ」

彼の声と匂いに酷く安心し、睡魔があたしの体を襲う。

朦朧とした意識の中言葉をつぶやくと、そのまま意識を手放した。

「おやすみ」

最後に聞こえたのはあたしの言葉なのか彼の言葉なのかは分からなかった。

11話：自己嫌悪

ぱちりと深い眠りから目が覚める。

なんだか疲れている体を起こすと窓から入る太陽の光に少し目が眩んだ。

「あれ、あたし」

「やっと起きたか」

タバコと酒の匂いのする部屋の中、布団にいるあたしを見下ろす一人の美しい少年。

「あれ？垣根くん？あたしの部屋に……あれ？うちじゃない？ここって」

「オマエの担任の家だよ」

見覚えのある家だと思ったらそうか、小萌先生の家か。

垣根くんにはべらべら喋って、おぶられながらどっか行っただのは覚えてる。

でもあたしの部屋に入らないでくれて助かった。部屋を見られるのは少し困る。

「顔洗ってこい。ひつでえかおしてるぞ」

「知ってる」

垣根くんに促され、狭い洗面台に入って顔を洗う。昨日はシフトだったから化粧薄めなんだよね。

よかった。普通の日なら朝起きた時もっと大変なことになった。

ポツケに入れてた化粧直しを取り出し、ある程度身支度を整える。

家に帰ってきて……

「上条くんは？」

化粧直しが済んだところで上条くと幼女二人がいないことに気づく。

生徒の友人とは言え男女を二人つきりにするのは家主として如何なものか。というか家に置いてつていいのか。

「あいつならおチビ先生とチビシスターと買い物だ」

「上条くん、ロリコンとして通報されてないといいけど……」

青髪くんを虜にする幼女型教師とメインヒロイン幼女、そして不幸な少年……

その三人から導き出された答えは至極真つ当で大変失礼なものだった。

「それは確かに心配かもしれないねえがそこじゃねえだろ」

何が？とシラを切るも彼は舌打ちをして睨んでくる。

全く、怖い顔をしていると幸せが逃げてしまうというのに。

「昨日の魔術師が今日来るんだよ」

「あー、そんなこと言ってたね」

布団を片付けながら彼に耳を傾ける。

そんな態度が気に入らないのか背後から尋常じゃないほどの殺気と怒気を感じた。

何そんなに怒ってるの。少しだけ冷や汗が出る。

「どう思ってたんだよ」

「なにが？」

それでもまだ分からないフリをするのは昨日のことを忘れて欲しいから。

「昨日取り乱して泣いてたやつがなにすつとぼけた顔してたんだ」

しかしそう簡単には彼が忘れてくれるはずもなく。

「……忘れてくれたってよくね？」

「絶対忘れねえな。約束してやるよ」

物凄く嬉しそう且つ物凄く勝ち誇ったような顔をしてこちらの動作を眺めていた。

なんでこんなにも悦に入ったような表情をしているのかは分からないが、彼があたしの失態を永遠に忘れてくれることはないことだけ理解する。

誰にも喋るつもりはなかったこの過去、感情。

なんで彼に話してしまったのだろうか。仮にも暗部なんてところにいるこの少年に何故言ってしまったのだろうか。

あの時はなんだか、彼なら受け止めてくれるって思ってしまった。思っただけいけないのに、頼ってはいけないのに、弱さを見せてはい

けないのに。

だってあたしは姉だから。

「まじありえん……ほんと、最悪」

「テメエは一体なんなんだ？」

一瞬で声色が変わる。

彼の問いは一瞬だけ脳を麻痺させた。

あたしの存在？あたしのなにを聞きたいの？藍花悦のこと？

どれも答えられない。答えを導き出せない。

あたしは一体誰なのか、なんの為にいるのか、自分でも分かっていないのだから。

あたしの持っているものは全て推測。この世界のことさえなにも分かつちやいない。

「テメエはなぜあの魔術師を嫌う？」

「嫌ってないよ。あたしは誰だって大好きだよ」

どんな問いを投げかけられても取り乱さないよう、心を落ち着かせていたはずだった。

しかし予想してない問いかけにびくりと体が反応する。

心臓が音を立てて血を巡らせる。身体中を駆け巡る血液は体温を上昇させ、皮膚に塩分が多く含まれた水滴を作り上げた。

冷静に、冷静に、あたしは言葉を紡ぐ。姉として弱いところを見せないように。

彼にあたしを弱いものと認識させないように。あたしは守られるものだと思わせないように。

「じゃあ言い方を変えよう。何故テメエは自分を嫌う」

「……別に、嫌ってなんかないよ」

チクチクと心に針が刺さる。罪悪感と焦燥があたしを蝕む。言わないで。

「いいや、嫌ってるさ。だからこそテメエは昨日、自分と同じ道を辿り、同じような存在の神裂火織とステイルⅡマグヌスに既視感を覚えて泣いたんだ」

「だから、嫌ってないって」

ほんの少し声が上ずってしまおう。
知られたくない。

醜い感情を、醜い心を。

いつだってあたしは姉でいたい。

強い象徴であり続けたい。それがどんなに難しく厳しいものであつたとしても。

「そもそも話がおかしいんだよ、普通テメエみたいなシスコンのイカれた女が妹を助けるためになりふり構わずオカルトに走らないのはおかしい。宗教にハマるのは大抵テメエみたいな悲劇の体験者だ」

「ここは科学の街だよ？オカルトなんて、神なんて信賴してない」

笑みを携え、その場を乗り切ろうと明るい声で言葉を返すが、垣根くんには通用しない。

さらに苛立ち、あたしを分析しようとする。

暴かないで。きっとそれはあたしの世界を覆す。

激しい恐怖と警戒心が脳に警報を鳴らし、焦せらせる。

「それはあちらさんも同じだ。科学なんて信用していない。レッテル貼りによる思い込み。常識の範囲でしか行動できないテメエらはよく似てる」

「あたしは」

「否定はさせねえ。似た者同士で、似たような思想、似たような境遇に、似たような結末。違うのは彼らは手遅れにならない点か」

否定しようとした。けれどそれに被せるように発言してくる垣根くんの前に言い訳も屁理屈も一切通ることはない。

「自己を否定するテメエは魔術師たちを否定しなければならなかった。木山と違うのは彼女が行動を起こし、自分の常識さえ通用しないモノを作り上げたからだろ」

彼の発言が、彼の言葉が、挙動が、目付きがあたしにナイフのように突き刺さる。

光を映さない彼の瞳が酷く澄んで美しいものに見えた。

「テメエは端から魔術なんて信用していない。常識の中でしか生きられない。思考停止。ステレオタイプの枠でしか超常的な現象を測れ

ず、分析できない。タブロイド思考とも言うな。テメエは超常的なものも、魔術なんてオカルトも理解しようとしていない。劇場のイドラ、先入観に苛まれている」

「ちやんと、考えてるし」

心の底では分かっている。あたしがなにも分かっていることを。

それでもあたしは救わなくてはいけない。全ての人を。

姉として、全ての妹と弟を。全ての人間を。

それがきつと呼ばれた理由なのだから。そうとしか考えられないから。

これは傲慢で理不尽な神が与えた気まぐれな救いの糸。

妹を救えなかったあたしが得た名誉挽回のラストチャンス。

だからたとえなにも知らなくてもあたしは救わなくていけない。

垣根くんも、神裂ちゃんたちも。

だからあたしは虚勢を張り続ける。誰がなんと言おうと、救わなくてはいけないから。

「考えてねえよバァーカ。常識に囚われてるテメエには何も救えねえし、これから先何も出来ねえよ」

「それ、は」

その意思は無残にも打ち消された。

「ま、テメエは永遠にそのままでもいいんじゃない？常識に凝り固まったテメエがいれば常識の通用しねえ俺が如何に凄い存在か際立つだろ」

付け加えるように、先ほどとは打って変わって軽い声で欠伸をしながらい放つ。

猫のような仕草は心なしか気持ちを楽しにした。

「……なにそれ、励ましのつもり？」

「愉快な思考回路だな。テメエがそう思うならそうなんじゃね？」

弟分に励まされるとは、姉としてはまだまだのようだ。

改めて決意する。

あたしはあたしを使つてでも彼を、全てを救わなくてはならない。妹を泣かし、助けることのできなかつたあたしがやるべき事だか

ら。

「んで、妹思いのケイトちゃんは今日も泣くおつもりで？」

ガラリと纏う空気を変え、ニタニタとまるでチェシャ猫のように口を釣り上げ笑う彼だったが、これにいつもの調子でツツコミを入れるともつとあたしに遠慮なく痛い言葉を投げかけるに決まってる。

何年間生意気な妹の姉をやっていたと思ってる！姉という生命体はそんなことでヘコタレはしないのだ。

そうこう考えているうちに玄関の方から物音が聞こえ、ラツキー！なんて思いながら急いで確認しに行く。

「はあ、つつかれた」

「おー、おかえり」

玄関の方に向かうと、そこには沢山の食材を抱えた上条くんがいた。

傍らにはお手伝いをするインデックスちゃん。微笑ましいな。

昔の妹と重なる。

車椅子に乗りながら買い物袋を膝に抱えるあの子はいつも楽しそうにあたしと出かけてくれた。

もういないあの子。

「あ？小さい先生はどうした？」

「病院に行ったぞ？なんだったか、昏睡状態の生徒が起きたとかで見舞いに」

「ああ、それか」

垣根くんと上条くんは玄関近くの台所で何やら作業を始める。

「ご飯でも作るのかな？」

上条くんが料理上手なのはアニメでわかっていたがまさか垣根くんも……？

確かになんかよく分からないオシャレ飯作って女の子口説きそうな見た目しているけど、まさかそんな。

頭がべらぼうに良くて？顔もイケメンで？スタイルも良くて？背が高く？金持ちで？骨を折る程度には強くて？社会的地位も高く？しかも料理上手？

この人、もしかして凄すぎるのでは？

現実世界なら無双出来るんじゃないかね？友達に紹介したら醜い女の争いに発展しそうだ。

「けいと、大丈夫？」

改めて垣根くんの異常なステータスに恐怖しているとインデックスちゃんが心配そうにこちらを伺っているのに気づく。

可愛らしい顔を不安で歪めてあたしを見上げ手を組む少女はまさにシスターだ。

「ん？なにが？」

「……あたし、なんにも知らなかった。とうまが急いで私を探しにきて、こもえの家に戻ったらていとくがボロボロのけいとをお布団で寝かせてた。いっぱい泣いたって、聞いた。」

震える声で涙を堪えながら懺悔をする少女。

あたしはいつから神父に転職したのか。

「私は、なんにも気づかないで、3人が他の魔術師と戦ってることなんて、これっぽっちも考えないで、私は、とうまたちを助けられなかった」

「そうだね、無知は罪だ。インデックスちゃんは考えなかった。思考を停止させた。それはいけないことだとあたしは思うよ」

目線を合わせるためにしゃがみこみ、その綺麗な緑の瞳を見つめる。

春に芽吹く草木を彷彿とさせるその瞳には心配そうなあたしが映った。

「天羽、言い過ぎじゃねーか？インデックスだって」

「あはは、ごめんね。でもちゃんと言わなきゃいけないことだから。それで、インデックスちゃんはどう思った？」

まるでお父さんのように駆け寄る上条くんに少しだけ謝ると、再び彼女のほうを向く。

「どうって、悲しくて後悔した」

「ならいいんだよ。取り返しのつかないことに後悔して、悲しくして、そこからまた考える。延々に考えて、後悔すること、それがあたしの

思う無知への罰だと思うんだ」

シスターでも神父でもなく、あたしはあたしとして言葉を続ける。「だから今いっぱい後悔して、次に生かそう？それがきつとインデックスちやんのできる事だから」

それが今あたしが与えられている罰でもあるから。

永遠に後悔し続ける罰。

妹を忘れずに、後悔し、痛むこと。それが何もできなかった無知な己への罰。

死んでも死なず、永遠に蝕む大罪への罰は傲慢な神が与えたもの。元はと言えば神の理不尽に翻弄された結果だというのに。

「けいと……」

しみりとした空気が嫌でなんとか話題を変えようと立ち上がると、ふと上条くんの包帯が目に入った。

アニメではあの時敗北して倒れたんだっけ。痛々しいその腕に胸が痛む。

それは罪悪感という痛み。

「にしても、なにその上条くんのぐるぐる巻きの包帯？」

「ああ、これはインデックスがやってくれたんだよ」

ぷらぷらと包帯が巻かれた腕を動かすとニカツと笑う上条くんは強がつているようにも見えて少しだけチクリと胸が痛んだ。

もつとあたしが頑張っていれば、もつとあたしが強ければ、傷なんて、痛みなんて負わせなかったのに。

あたしは強くならなくちゃいけない。誰かを守るため。誰かを救うため。誰かを笑顔にするため。誰かを幸せにするため。

妹を幸せにできなかったから。この世界では幸せを与えたい。

愛しい人間に。

「治すためにはそうしとかなないとね。魔術みたいにはいかないけど」
「そうだな、魔術なんか使わなくても大丈夫だろ」

腕を見つめ何かを悲しむように上条くんが呟く。

一人の少女を守ると決めたそのヒーローは誰よりも強く、誰よりも強かった。

そしてそれはあたしの心に影を生む。
強い主人公ヒーローになりたかった、と。不純物イレギュラーではなく、英雄ヒロインに。
そうしたら妹を救えただろうに。

「出来ることなら、お前が魔術語ってる時の顔ってあんま見たくないからな」

優しい顔で微笑む上条くん。その微笑みに宿る感情はきつとあたしが妹に向けるものと似ているようで似ていない。

そんな笑みにインデックスは悲しそうに目を伏せる。

「そっか、私また目覚めてたんだ」

「目覚めてた？」

「あー、あの時の機械じみた感じの？」

キョトンとするヒーローであったが、頭のいい悪役にはなんとなくピンときたようですぐにそれを言い当てた。

第二位の頭脳は伊達じゃない。もうすでに自動書記ヨハネのペンが一体何なのかきつとわかっている。

「うん。でもその時のことはあんまり突っ込んで欲しくないかも。意識がない時の声って寝言みたいで恥ずかしいからね。それに、なんだがどんどん冷たい機械みたいになっていくみたいで、怖いんだよ」

自分が自分じゃなくなる感覚。それにあたしは身に覚えがあった。

藍花悦と呼ばれた時。

あの名前で呼ばれると自分の定義が崩れていく感覚に陥った。

この体は何？この心は何？この知識は？この声は？この記憶は？
何かを忘れている気がする。

あたしは、何？

そんな考えが脳を圧迫する感覚。

「ごめん」

「いいんだよ」

申し訳なさそうな上条くんとインデックスちゃんの声で我に返る。
考えてはいけない。一種のブラックボックス。

中身を知ったらあたしはあたしで居られるか分からない。

「そうだ、オマエ飯食えるか？」

「え？病人じゃないから食べれるよ」

なるべく明るく取り繕って垣根くん問いに答えると少し睨まれる。彼は鋭い子だ。

きつと不安を見抜いている。でもごめんね。

これは誰にも話せないことだから。とても馬鹿げたノンフィクションだから。きつと彼には考えつかない。

垣根くんはあたしを助けることなんてできない。

「なら作りますか、垣根も手伝えよ？」

「あたしも手伝うって！」

「ああ、わかった。あと泣き虫は座ってろ」

楽しそうにキッチンに行く上条くんが付いていこうとするも垣根くんは額をまたもや小突かれる。

「横暴！」

二回も小突かれたおでこは真っ赤になり、ヒリヒリとしたその小さな痛みは心の痛みを塗りつぶした。

男子二人組のお料理はムカつくことに絶品で、女子として、人間として、何もかもとして敗北感を味わった。

毎日コンビニ弁当だったり栄養サプリで生きている多忙な看護師なのだ、知識はあれど実践経験は0に等しい。

「さて、お客様が来るんでしょ？」

「天羽、ほんとに大丈夫か？」

美味しかったご飯のお片付けをインデックスちゃんと二人で終わらせ、居間に戻る。

なんだかんだ心配するあたり、あたしは彼に懐かれていると考えていいのだろうか？

「うん、垣根くんがいるから、大丈夫」

「そーかよ」

ちやうどその時、タイミングよくピンポーンと跳ねるような電子音

が鳴った。

それを聞いた上条くんが立ち上がって玄関へと向かう。

玄関から現れた二人組は昨日少しばかり喧嘩をしたお二人さん。

ステイルくんと神裂さん。

「なんで、あなた達がここに……？」

酷く怯えた顔をしたインデックスちゃんだったが、一瞬のうちにキツと睨むような顔つきに変わる。

上条くんと彼らの間に入ろうとした彼女の肩に手を置き、垣根くんが止めに入る。首を横に振り全員を茶の間に促す。

「俺らの招待客だ。勝手に入れよ」

「ここ小萌先生の家なんですが？」

「こまけえこたあいんだよ」

垣根くんと上条くんのちよつとした漫才に空気が軽くなったのは分からないが、特に問題もなく全員ちゃぶ台の周りに座る。

何だかとってもシユール。

「さて、どこから話すか」

垣根くんは少し悩むそぶりをしてゆっくりと話し始める。その真相を。

「まず、インデックス、こいつらはお前と同じ組織のものだ」

「え？どういうことなの？」

パツチリとした目を大きく見開きその言葉をゆっくりと噛み砕く。彼の言葉は思ったより理解し難かったのか神裂ちゃんに視線を投げかけた。

それに気が付いた彼女は静かに口を開く。

「……私たちは必要悪の教会所属の魔術師です」

「僕達にはある目的があつて君を追いかけていた」

「目的？」

「なんかな、お前の頭はあと3日したら爆発するんだと」

怪訝そうな顔で彼らを覗き込むインデックスちゃんに垣根くんが代わりに答えを教えた。

やる気のなさそうに手で爆発を表しながらバーンと効果音までつ

けるその仕草はシリアスというよりシリアルと言える。

「ばっ!？」

「ま、嘘だけど」

安心させるためなのか只々馬鹿にしているだけなのかは分からないが、ベーツと舌を出してジト目でどこか違うところを見ている彼は どう見ても暗部のリーダーなんて物騒なものに見えなくて。ちよつと悪戯好きの少年にしか見えなかった。

「ていとくーなんで嘘つくの!」

「もつとも、彼らにとつては真実だがな」

ふざけた声が低く、警戒するような声にガラリと変わる。

一瞬のうちに纏う空気が変わった。少年の中に潜む攻撃性。それを表すかのような声色だった。

「我々はインデックス、貴方の脳が10万3000冊の魔導書に圧迫され1年で記憶を消さないと死んでしまうと聞かされていました。そして上に命令され何度もあなたと過し、何度もあなたの記憶を消しました」

「……すまない。謝って許されることではないのは重々承知だよ」

「ごめんなさい。なにも考えず上を信用した我々の責任です」

頭を深く下げて謝るが、それはあたしの醜い感情を助長させるだけだった。

あたしは部外者だ。視聴者だ。ファンですらないただの一般人。薄いモニターの外で彼らを見ていただけに過ぎない。

だからあたしがこんな感情を抱くのはお門違い。資格なんてない。それでも嫉妬の炎はグルグルとまだ胸の中で渦巻いていた。

「つたく、こんな小学生レベルで躓く辺り、魔術師ってのはどれだけ現代科学に疎いんだ? まあ、変な本読まされてたつてんだから科学的な考えが浮かばない理由にはなるが……」

だが何とか感情を抑えられたのは他ならぬ垣根くんのおかげだった。

もう痛みも赤くもない額が、彼の暖かさをまだ持っていた。その暖かさがあたしの心を落ち着かせる。

それにあたしにはそんな醜い感情よりも他に彼らに伝えるべき言葉がある。感情にのまれるな。

「で、でもなんで嘘ってわかったの？」

「それは……」

「インデックス、テメエはこの金髪頭がなんの職業か知ってるか？」

そういつて彼が指をさしたのはあたし。

突然振られる話にし少し驚き、声が漏れてしまう。

「え？」

「インデックス知らなかったっけか？でもあの服着てたの知ってるよな？」

「あの服？初めて会った時の服のこと？確かに今日とは全然雰囲気違ったけど」

初めて会った時は今つけているチャラチャラしてるものは全部取っていたし、髪も上げていた。

パンツスタイルのナース服はあまり病院に行かない人やナースに夢を見ている人にとつては少し珍しいかもしれない。

「こいつはな、ナースなんだよ」

「つまるところ、体の仕組みについては俺と同じくらい詳しいわけだ」

上条くんの説明の後に、まるで自分のことのようにドヤ顔で紹介する垣根くんは姉を紹介する弟のよう。ちよつぴり微笑ましい。

ただ「俺と同じくらい」発言は少し納得いかない。精神四十路手前なめないでいただきたいものだ。

いや、その精神も今ではかなり疑問だ。四十路だというのに精神は自分で言うのも腹立たしいが自分の精神が肉体と釣り合っているのだ。

若々しい考え、若々しい感性。まるで新しく生まれたように。

チグハグな精神と肉体。

何かが引つかかる。

「けいとつて、頭いいんだ……」

「インデックスちゃん、喧嘩売ってる？」

はあとため息をつくとごめんねと謝られる。謝って欲しいわけで

はないが、何だか複雑な気分。

ナースになるための試験をコネを使って受けてはいるが、一応実力で勝ち取っているのだ。精神は先ほど述べたように不安定だが、知識は問題ないはず。

「んで話の続きだが、お前の記憶の圧迫は嘘だと看破されたにも関わらずこいつらはここに居るのはなぜだと思う？」

首を傾げ何のことだか分からないという顔をするインデックスちゃんに今度はあたしが説明する。

もう心は落ち着いていた。

「なんか、決まって1年経つとお前にその症状が出るんだってさ」

「そう、今回はその件で話をしてるわけ」

「え？でも今のところは何も無いよ？」

確かに3日前だというのにインデックスちゃんの体調はすこぶる元気で以上は見られない。

しかしステイルくんたちによると本当に苦しむそう。

「でも本当に苦しむんです。苦しくて目も開けられないほど」

「脳に異常は見られない、そもそもの話が嘘……なのに本当に苦しむ、それは何故だ？」

「……魔術？」

顎に手を当てて少し考えたインデックスちゃんは恐る恐るそれを答える。

その答えは出題者の垣根くんを満足させるもので、まるで兄のように悪戯な笑みを浮かべていた。

「正解だインデックス、ご褒美に上条をこき使う権利をプレゼントだ」
「えっ」

「さっきちよつと話に出てたけどさ、インデックスちゃんと初めて会った時自動書記ヨハネのペンが起動されたって言ってたんよ」

突然生贄にされた上条くんをシカトし、垣根くんの話に続くようにあたしは少しづつ順番に説明をすることにした。

インデックスちゃんには申し訳ないが少し嫌な話を彼の代わりにするとしよう。汚れ役は姉の役目だ。

「あの時は死にかけてたからそれが起動されたと推測するとき、死にかけになって困るのってインデックスちゃん以外に誰がいる？」

「必要悪の教会……」

「そ、切り札であるインデックスちゃんを無くしたら一番困るのはインデックスちゃんの上司だよね」

紐解いていく。その謎を。ひとつづつ、丁寧に。

今のあたしたちはさながら探偵のようだった。

「教会がシスターさんの頭を弄って1年周期で記憶を消さなければ死んでしまうという細工をした」

シャーロックホームズ役の垣根くん。

「インデックスちゃんが裏切ることのないように、科学に疎い部下が彼らに従わなくてはいけないように」

ワトソン役のあたし。

「つまり、自動書記ヨハネのペンと記憶消去に伴う苦痛はインデックスちゃんを教会から手放さないための足枷、首輪だと予測が立てられるってわけ」
「初対面の俺たちがわかるのに長い付き合いのテーマエらが分からなくてどーすんだよ」

交互に喋るあたし達に他のみんなは黙り込む。

本当は上条くんが気づくはずだったのだ。あたし達の知識と記憶が簡単にここまで導く、導いてしまう。

果たしてこれが未来をハッピーエンドに導くかは分からない。バッドエンドになるかも分からない。

でも必ずしも悪い結果を引き起こすとも言えない。あたしは介入し、改変する。ハッピーエンドへの道を無理にでも作ってみせる。

たとえなにも知らなくても。

「それでどうするんだ？インデックスの首輪を絶つには何をすればいい」

「上条くん、ステイルくんはルーンを使って魔術を使ってたよね？それってさ、裏を返せば何かに刻めば魔術は使えるってことだよね？」

静かな部屋で声を出す。あたしの一言にみんなが唾を飲み込む。

「刻まれた魔術。紙に刻まれていたそれを生物に刻んだら、どうなる

？」

その一文でみんな理解に及んだらしい。

ハツとした表情で一斉にあたし達に目を向ける。

「服は上条が触って爆発させたんだろ？フードも俺らが消すところを見ている。となると……」

「私の、体……」

その声の持ち主にみんなが意識を傾ける。

死の苦しみを刻まれた小さな少女。

それを誰よりも早く理解した上条くんが勢いよくインデックスちゃんの頬や額に右手を当てた。

しかし何も起こらない。

「……あれ？なんともならないぞ」

「んな大事な刻印見えるところにつけてくかよ馬鹿かよテメエ」

人体における見えないところ、何個か候補は浮かび上がる。

口内が正解だが、一応自分の頭で考えてみる。

だって穴なんて正直言つて口以外にもある。

というか耳穴の方が脳に近いし誰にも触られないからそっちにすればいいのに。いや、でも小さすぎるのか？

膾は？聖なる母の象徴みたいなものでしょ？聖母マリアに似た存在が聖書に書かれている十字教なら正解かどうかは別として普通に有り得そうなんだよなあ。

あ、でも聖母マリアは処女だからダメなのか。

てか普通に解剖して内臓にかけばよくね？あ、解剖つて十字教ダメなんだっけ？

じゃあ口内が一番いいのか。納得

「……口の中かな。脳が一番近く、手の届くところと言ったらそこくらいしか思いつかないね」

「だろうな。というか十中八九そうだろう」

何だか少しピリピリした空気の中、ステイルと垣根くんが怒りを含んだ声で話し合う。

「じゃあさっそくー」

「まあまあ、待つて待つて」

ガタガタとちやぶ台に足をぶつけながら立ち上がる上条くんにあたしは慌ててストップをかける。

「何でだ？いまやった方が……」

「いや、あと三日はあるんでしょ？昨日の今日なんだよ？明日以降でもよくない？」

適当な理由をつけて一旦席に座らせると不思議そうな顔で上条くんがこちらを見上げてきた。

今じゃダメな理由、それは人工衛星を破壊しなくてはいけないから。どうしてかはあんまり覚えてないが。

インデックスちゃんの放つ破壊光線じみた攻撃があの衛星を壊さなきゃイベントはおきない、はず。どんなイベントだったかあんまり覚えてないが、アレは確か学園都市のほとんどの実験の演算を担うスーパーコンピュータ。アニメ通りに壊しておけばある程度の悲劇は減らせる筈。

わかんないけど！

あたしの記憶はインデックスちゃんみたいに万能ではない。欠落が見られるのだ。

主要人物と大まかな流れしか覚えてない今、あの演算装置が壊れることで起きることを記憶していなかった。

でも今できることはそれくらいだ。アレがない状態で物語が進んでいた以上、あの衛星の破壊は必要と判断する。

衛星が真上を通るのは3日後の0時くらい……だったはず。

人工衛星は基本的に1日で16、7周するので逆算して大まかな位置さえ分かれば破壊は可能だが、計算を失敗したら破壊できない。

学園都市のものだから静止衛星だとは思うが、今は昼間。警備員もいるし、真昼間からレーザービーム打たせたら捕まる。

それは嫌。

「確かに、そうだけど」

ついでに言うと、あたしと垣根くんは万全じゃない。だって昨日幻想猛獣と神裂ちゃんとの連戦だったんだ。個人的には家に帰りたい

い訳で。

そんな理由であたしは明日以降への延期を提案しているのだ。

「何があるかわからないし、万全の体調で挑みましょう！これはドクターストップです！」

「医者じゃねえだろ」

それに注射怖いことの前に少しでも落ち着いてもらうのが看護師の役目だしね。

注射怖いことが終わったら飴をあげて偉いねと褒める。小児科の看護師さんの役目。

小児科じゃないけど。

「はい、ということで解散！明日の夜にここ集合！夜なら小萌先生居ないから！あの人いっつも夜中銭湯で長風呂してるって友達言ってたし！」

彼らを急かすようパンッと手を叩き立ち上がると、納得してない顔をしながらもみんな渋々了承してくれた。

もう話は終わった。そんな表情をしながら魔術師二人は玄関へ足を運ぶ。

背を向け玄関から外へ向かったその二人に小走りで声をかける。

「あの」

昨日のことについてずっと言いたかったことがあったから。

醜い感情に芽生えた感情を聞いてもらうため。

「昨日はごめんなさい。とつても酷い言葉を使っちゃって。今更だけど」

頭を下げ、謝罪をする。

昨日の暴言。ずっと頭にこびりついてた。

理論的じゃ無い感情に、感情的な言論にずっとわだかまりを感じていた。

言葉は鋭い。鋭利な刃物にもなる。あたしが言葉で傷つけたのは紛れもない事実。

深々と頭を下げたせいで彼らの顔は見えなかった。

「……いえ、謝られるようなことは」

「それでも、ごめんなさい」

面を上げて真っ直ぐ彼らを見つめる。少しだけ戸惑うと、軽く会釈をし彼らは去って行く。

赦しを得た、のかな？分らない。でも言いたいことは言えた。

もうここに用は無い。

「さてと、あたしは帰るかなあ」

「天羽達、帰んのか？」

上条くんの言葉に頷き、玄関の扉に手を掛けるとそれに垣根くんもついてくる。

彼も帰るそうで、じゃーなどと上条くんに別れの挨拶をしてあたしの後ろでドアを開くの待っていた。

ドアを開き、玄関から一步外へ出たところどころでくるりと上条くんたちに振り向く。

「着替えたいしね。そーゆーことで、アデューー！」

なるべく笑顔を崩さずにそう言って扉を閉める。

扉が閉まってすぐ、私の肩から緊張が抜けるのがわかった。

安堵から小さく息を吐く。

緊張した。また酷い言葉を口にしないかビクビクとしていた。

泣きださないか、あの日を思い出さないか怖かった。

「そんじゃ、帰ろうか」

一旦思考を止め、垣根くんと帰宅しようとして後ろを向く。しかしそこに彼はいない。

不思議に思い視線をアパートの下に移すと、もう既に道端でムスツとしながら立っている彼が見えた。

「帰るぞ」

なんだかんだ待っていてくれていた彼の元へ急いで走り寄るとそのまま帰路につく。

嫌な思考はもう既にどこかへ飛んでいた。

このままなにも考えずに、神の意のままに進むこともできるだろう。

でもそれは嫌だった。

誰の手のひらで転がされているかはわからない。もしかしたら今この状況すら窓のないビルで一人揺蕩う男のプラン通りかもしれない。

それでも構わない。全てが救われるのなら、あたしは喜んでこの身を差し出す。

それがきつと正解に繋がるから。

12話：救えない

7月26日、深夜。

暖かい光を発する電球に6人の人間が照らされる。

赤毛の神父、不思議な格好の女性、茶髪の少年、ツンツン髪の少年、そしてあたしで一人の少女を見つめていた。

その少女は真っ白い修道服を着込んでおり、可愛らしい顔には不安げな表情が浮かんでいる。

「さて、時は来たわけだけど」

午前0時、小萌先生の部屋にて家主の知らぬところで大変なことが始まろうとしていた。

「インデックス、大丈夫か？ 具合は？」

「大丈夫なんだよ、ほんとに」

明後日には記憶を消さなくてはいけない魔術をかけられている少女、もといインデックスはツンツン髪の上条くん心配の眼差しを向けられている。

「上条くんの不思議パワーがあればなんとかなるっしょ！」

「異能の打ち消しなきゃ意味わかんねー代物なら異能力相手に負ける事ねーだろ。ムカつく野郎だ」

なんだか暗い空気を紛らわせようと明るい声でハキハキと喋ってみると、意外なことに垣根くんがそれにのっかって来た。

まさか彼が反応するとは思ってもおらず、少し驚いて見せるとため息をつかれる。

「なんで上条さんは垣根に敵対視されているのでせう？」

「喧嘩ならコテンパンにできるが俺の未元物質でコテンパンに出来ないのかムカつく」

「どつちにしる俺をコテンパンにしてーのかよ！」

「垣根くんは負けず嫌いだから、気にしなーい気にしなーい！」

負けず嫌いな悪役。それがあたしが垣根くんと過ごして得た情報だった。

わずかな時間しかアニメに出ておらず、本だって白くなった彼を除

けば1巻分しか出てないらしい。スピンオフも一冊分。

圧倒的に彼の情報が少ないというのにこの垣根帝督には人間と呼ぶに相応しい程度には感情が詰まっております、ただの途中退場キャラクターにはどうしても見えなかった。

まるでこの世界が足りない設定をそれらしく補っているかのようで、なんとも不思議だった。

「だけど本当に彼の力で助けられるのかい？」

「確かに、魔術を打ち消すとは言え……」

男子二人による漫才が行われている中、インデックスよりも不安そうな表情をした魔術師二人組、神裂ちゃんとステイルくんが言葉を零した。

不安になるのも当然か。ついこの間まで彼女が死ぬのを信じていたんだ、突然不思議な力で治せると言われても不安しかないだろう。そんな彼らに体を向けて限りなく明るい声で力強く答えてみる。彼らの不安を和らげるように。

「出来るよ。誰であろうとなんであろうと、行動すれば何かが起きる。でも行動しなければ何も起きない。行動できるものをあたしはヒーローって呼ぶんだと思う」

そしてそのヒーローの方に振り向く。

自分にできる精一杯の笑顔で彼に言葉を掛ける。

君にはヒーローになる資格があると認めさせるように。

「だからさ、お姫様助けてヒーローになろうよ、上条くん！」

「……おう！」

「ヒーローねえ……」

垣根くんの眩きは他の人には聞こえていなかったみたいで、特に誰も反応しなかった。

彼に少しだけ笑みを向けると顔を背けられてしまう。

「口ん中に指入れるが、大丈夫か？」

「うん、とうまのこと信じてるから」

あたしたちを余所に上条くんたちは窓を背にしたインデックスの口の中にその指を入れる。

まるで歯医者のように真剣な顔で口の中に指を突っ込むその姿が少しだけ面白く見え、クスリと小さく笑ってしまう。

しかしその笑みもすぐに消えてしまった。

パキンと何かが壊れる音と共に上条くんが壁に吹き飛ばされたからだ。

「うわっ」

「上条くんー」

「警告、第3章第2節、第1から第3までの結界の貫通を確認。再生を準備。失敗。自動再生は不可能」

吹き飛ばされた彼の前には美しい緑の目を血のように赤い魔法陣を刻んだインデックスが浮いていた。

その血の色がやけに恐怖心を煽る。まるで悪魔のようだ。

気づかれないようにすぐさま演算を試み、能力を展開し始める。今回はドーピングじゃなく、言ってみればハッキングだ。

藍花悦の能力、「不死者」は半径2kmくらいまでなら触らずとも肉体に干渉できる。

だから超能力者に認定された節があったりなかったりしたり。

「現状10万3000冊の書庫の保護の為、侵入者の迎撃を優先します」

そういうわけで、インデックスちゃんの精神のクラッキングを開始する。

精神干渉じゃないので脳の水分に干渉するわけじゃなく、体そのものに影響を及ぼす。

脳の電気信号を遠隔操作のように操り意識とは違う行動させたりなど、他にも色々と操作ができ、これが結構使える。範囲の狭さと演算が複雑なこと、そして複数人に干渉する場合は命令が一律になってしまうのがネックだが、精神のみならず細胞一つ一つにも干渉は可能で下手したら自分の周りの死体を手を触れずにゾンビに変えることもできたりするのだ。

「書庫内の10万3000冊により結界を貫通した魔術を逆算、失敗。身体ヘリアルタイムで書き換えを行う魔術を感知。逆算、失敗。該当

する魔術は発見できず。術式の構成を暴き、対侵入者用のローカルウエポンを組み上げます」

「あは、バレた」

脳と筋肉の電気信号に干渉して声を出さなくさせようと演算を始めるがやはり魔術的な何かで抵抗される。

しかも、さすが自動書記ヨハネのペンと言ったところか、すぐに看破されてしまった。

一旦干渉をやめ、身を引くと垣根くんに疑いの目を向けられてしまう。小さな声で言ったはずなのに隣の彼にはバツチり聞こえてたということか。

「テメエ一体何したんだ」

「んー、それよりもなんか来る感じくない？うわーやばたにえん」

「言わなきゃ殺す」

「……後でね。今はこっち優先!」

苦笑いで彼に返事をするとき立ちを隠さずに舌打ちされた。物理的接触なしでの肉体干渉はさすがに疑われるだろう。

それに彼は十中八九あたしの情報を書庫バンクで見ているはず。あそこにはあたしの能力を肉体に触れることで細胞と微弱な電気信号を感じ、干渉することができる程度のことしか書かれていない。そんな中、書かれてもないことをやってのけたのだ、絶対疑われる。

あとでなんて言い訳しようかな。

「侵入者1、天羽隼系に対して最も有効な魔術の組み合わせに成功しました。命名、神Justitia pugioneの正義を執行せよ、即時発動します」

ぐるぐると考えを巡らせていると機械のような冷たい声が頭上から発せられた。その内容はかろうじて覚えているアニメのセリフとは違ったもので、驚きを隠せなかった。

即時発動、彼女のセリフに体がいち早く反応する。

これはやばそう!

「あれ!?!あたし!?!上条くんじゃなくて!?!てか何それ!」

小さな魔法陣が彼女の周りに出現すると、それが白い短剣のような形となりあたしを目掛けて飛んでくる。かなりの数で避けるのが間

に合わないかも。慌てて体の処理能力を上げ、無理やり体を動かしてそれらを回避するとその剣は床に突き刺さっていく。あたしが身につけているペンダントの飾りみたいなダガーの形をしたそれらは、一度床に突き刺さると消滅してしまう。

Justitia pugnare
神の正義を執行せよ？あたしに対して組み合わせた魔術？これじゃあまるであたしが神に裁かれているようじゃないか！

冗談じゃない！神に正義なんてないだろうに！

少し焦っていると後ろから何かが投げ飛ばされてくる。

「つち、おらー！そーれいっけ、かつみじょう！」

「垣根ええ???!」

「え!?!ちよ!?!上条くん!?!」

垣根くんによって投げ飛ばされた上条くんがあたしとインデックスちゃんの間に割り込んできたのだ。

軽く投げた本人の方を見るとなんだか愉しそうな顔をしている。

全く、未知の魔術に気分が上がっているのか？

可愛いことで。その子供っぽさに少し呆れてしまう。

「侵入者2上条当麻の妨害を感知。侵入者に対して最も有効な魔術の組み合わせに成功しました。これより特定魔術、聖ジョージの聖域に切り替え、侵入者を破壊します」

空間が切り裂かれた。

二つもの魔法陣が展開され重なり合う。その重なった先、切り裂かれた空間の隙間、その奥におぞましい何かがこちらを見ている。

決して何かがそこにいるわけではない。ただ、その空間になんとも冒瀆的でおぞましく、酷く恐ろしい何かがいる。

そのなにかは白く眩い光の柱をその隙間から伸ばす。天をも貫く光の柱。

あたしたちへ一直線に伸びるその柱は間に立つ上条くんの右手によってその力を打ち消されるが、絶え間なく伸び続けその威力を完全に消滅させることはできなかった。

あの先には人は入ってはいけない。そう人間としての本能が囁きかける。

それでもなぜか心の奥底では恐怖を感じていなかった。神の領域を感じさせるその恐怖の塊は何故だかあたしを高揚させた。

未知の力、未知のもの！研究者魂からくる高揚感なのか、心の奥でくすぶっていたなにかから得られる感情の昂りなのかはわからない。

恐怖と快哉。矛盾した感覚が脳を激しく揺らす。

けれども事実としてここに宣言しよう。

この胸の高鳴りは恐怖からではなく昂奮からくるものだ。

「やっぱ昨日やらなくて正解だったな」

「なんで魔術を……」

感情の波の中、垣根くんたちの声がふと聞こえた。

戦いの中だということ初めて思い出し、目の前で膨大な量のエネルギーを打ち消す上条くんに慌てて助けに入る。

背中を押さえ、踏ん張る上条くんに力を貸す。能力は彼に使えない。だから彼が吹っ飛ばないように背中を支えることしかできなかった。

「あのなあ、魔術使えねーのは能力者と原石くらいなんだろ？魔力を錬れないとか言ってたが、超記憶持ちがそんな特殊体質持つてるとかどんな偶然だよ。」

「そうそう、だから昨日はやめておこうって言ったんだよ」

手を貸しながら垣根くんの話に補足をすると垣根くんは少しびつくりした表情であたしを見てくる。

馬鹿のくせにわかっていたのかと言わんばかりの顔をあたしに向ける彼にピースをしてみせると今度はイラついた表情に変わる。

沸点が低いのは相変わらぬようだ。

「自動防衛システム組み上げとくのは普通だろ」

「何故魔術が使えないのか？それは無意識のうちにその防衛システムに使われていたから、そう考えるのが自然じゃない？」

そこまで言い終わると突然体に加わる力が重くなるのを感じた。

光を打ち消し続けている上条くんの手から鮮血が飛び散る。

大嫌いな赤色の液体。

血管も皮膚も切れ、痛みにも耐えながらも必死に力を打ち消していく

上条くんはやはりヒーローだった。

「聖ジョージの聖域は侵入者に対して効果が見られません。他の術式へ切り替え、侵入者の破壊を継続します」

しかし無慈悲にも自動書記ヨハネのペンはそのヒーローを殺そうと力を振るう。だがここには上条くん以外にもヒーローがいた。その者たちも一人の少女を助けるために力を使う。

「……つfortis931!」

「salvare000!」

最強の名を持つ者と救いを差し伸べる者、その名を高らかに叫ぶと炎の渦とその赤い光を反射する糸が部屋に張り巡らされた。

熱に気を取られた自動書記はその糸に気付かず攻撃をし続ける。

その瞬間、糸が足元の畳を引っ繰り返す。それは自動書記の照準を狂わせ上条くんによって打ち消されていた光の柱を天へと向けた。

空を断ち切るその光は天まで届き、永遠に広がる空間へ伸び続ける。

その光はきつと空に浮かぶ忌々しい演算装置を破壊してくれることを祈りながらその光り輝く柱を見上げた。

見上げた先、天井にできた大きな穴から何やら落ちてくるのが見えた。

「なんだ、これ」

それは白く美しい羽根だった。

何枚もゆらゆらと落ちてくる月明かりに照らされたその羽根は暖かさも生も感じることがない、なんとも無機質で異質で気持ちの悪い羽根。

垣根くんのものとは違う、嫌な予感をもたらすその羽根になんとも言い難い感情を抱く。

「これは……竜王ドラゴンの殺息ブレス！伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同義です！それにたった一枚でも触れてしまえば大変なことに！」

「羽に触れたらいけない……この光に当たった部分が羽に変換されているみたいだが……同じ物質なら未元物質ダークマターであるビームを防ぐことも可能か？」

羽根には羽をと言わんばかりに白く輝く美しい6枚の翼を展開した垣根くんは器用に翼を手足のように動かし落ちてくる羽根に触れた。

バチンと音が鳴ると彼の翼の一部がまるで熱に溶けたようにドロドロと原型を留めずに崩れる。その光景に苛立つ垣根くんだが、瞳には興味と探究心が見えるのは気のせいではない。羽根が床に落ちても床が溶けないあたり、彼の翼は生物として認識されているのか？疑問は尽きないが、今集中すべき点はそこではない。

羽根の形を元に戻すと笑みを浮かべ静かに魔法陣の奥に潜む獣のような得体の知れないそれを睨みつけた。

なんだか少し怖い。垣根くんの感情にではない。

垣根くんのその勇ましい姿があたしに恐怖を植え付ける。

救いを拒み、勇敢に立ち向かう悪役の後ろ姿に一つの予測が頭を支配する。

彼は守らせてくれない。赦しを与えさせてくれない。

あたしは彼を救えない？

「垣根くんってなんでもありだよね……羨ましい！」

「そう褒めるなよ。確かに俺はテメエより強いがテメエも上条と同じくらいには強いんじゃない？」

「うっわムカつくねえ」

感情を誤魔化すように話しかけてみると彼は悪い顔してこちらを見下してくる。

でもその小悪党な振る舞いがなんとなくこの感情を押さえ付けてくれた。

あたしはなにがなんでも助けなきやいけない。この可愛い少年を。

そのためならあたしは神に牙を向けたって構わない。

あたしは救う。それが役目なのだから。

「ステイルから聞いてはいましたが本当に天使みたいな見た目とは……」

神裂ちゃんが一人呟くと、彼の美しい翼がみると大きさを換え

て巨大なものとなった。

その翼の一枚は上条くんを守るように彼を覆い、光の柱を遮断する。

「うおっ」

「逆算完了だ。気にせず行け」

顎で指すと上条くんは頷き、そのまま自動書記の元へ走り抜けた。

逆算された光の柱は未元物質ダークマターで作られた翼に傷一つつけることもできない。

「警告、第6章13節、新たな敵兵を確認、戦闘趣向を変更。戦場の探索を開始。完了。現状最も難易度の高い敵兵、上条当麻の破壊を最優先します」

「原子崩しと原理は似ているな。あれと違うのは出力の違いと性質の違いってところか。質がバラバラで逆算がちよい面倒だったが、その程度じゃ俺の未元物質ダークマターは壊せねえよ」

学園都市第二位は余裕の笑みを携えて自動書記ヨハネのペンを嘲笑う。

「警告、第22章第1節、未知の力による術式の逆算に失敗。天使の力テレズマを用いた魔術と推測します。対魔術の構築を開始。構築まで20秒。その間聖ジョージの聖域の出力を上げ迎撃を試みます」

挑戦的で挑発的なその笑みは人ではない今のインデックスちゃんには効かない。

「いけ上条！」

切り札が動く。

全てを打ち消す力をもつ右手を魔法陣の亀裂のその先へ伸ばした。

「この世界がつ！神様のシステム通りに動いてるってんなら！まずは！その幻想をぶち殺す！」

手が触れた。

空間の間に隠れていたおぞましい何かは呆気なくその力を失い消滅する。

そして目の前にいる魔術師にその手が当たるとそれは一人の少女に戻っていく。

「警、告、最終、章、第0、首輪、致命的な、破壊、再生、不可」

空気を纏い、ゆっくりと床に倒れ込む彼女を上条くんが受け止める。

異様な空間は消え失せて、静寂と舞い落ちる羽根だけが残された。

「終わった……？」

「上条くん！」

戦闘の疲労だろうか、インデックスちゃんに重なるように上条くんもその場に崩れ落ちてしまった。

その頭上には白い羽根。

体は自然と動く。不幸な少年を守るために。

舞い落ちる羽、誰かがあたしを呼ぶ声。

全てが混ざり合い、溶け合う。

「天羽！」

ぎゅつと目をつむり、二人を守るように覆いかぶさる。

最後に見えた景色は部屋一面の白だった。

結論から言えば、ハッピーエンドに導かれた。

「はあ」

「なーに不貞腐れてんだよ」

しかしその結末はあたしによって作られたものではなかった。

「そりゃあねえ」

第7学区にあるとある病院の使われていない診察室の中、ナース服に着替えたあたしは椅子に座りため息をつきながら垣根くんをじつと見つめる。

上条くんを救ったのはあたしではなく彼だった。

未元物質データクマターを最適化した彼の翼はいとも簡単に上条くんと覆いかぶさったあたしたちに降り注ぐ羽根から守ってしまった。そしてその事実は納得のいくようなものではない。

彼の翼が羽根に生物とカウントされていた時点で彼の翼もあたしにとつては傷つけてはいけない大事な彼の体の一部。光線から身を

守る盾にさせた挙句、全てが終わった後もあたしたちの盾となった。

あたしは彼を傷つけてしまったのだ。

そして自分の力で上条くんを救ったわけではないのだ。あたしの存在理由が大きく揺れる。なにも成せない。なにも起こせない。

あの羽根に記憶を消して欲しかった。こんな屈辱的で絶望的な真実をなかったことにして欲しかった。

この世界にいる意味がわからない。なにも成せないのなら、なぜあたしはここにいます。

今まで歩んできた物語たちは結局なにも変わっていない。あたしがいたから変わったことはなにもない。

幻想御手レヘルアップの件も物語の本筋とほとんど変わっていない。何もかも変わっていない。

あたしがいたから起きた事件もなければ、あたしがいたから変わった結末もない。

あたしは、なぜここにいます？

「なに悩んでるのか知んねーけど、お前が庇ってなけりやあいつは助かってなかったんだ誇っておけよ」

嫌な考えで脳が支配されていると突然額に痛みが広がる。デコピンされたのだと気づくと彼に少しだけ睨みを利かせるが、怖がりもせず、楽しそうに笑っている彼が見え、意味がないと考え直し顔を背けて窓を眺めた。

窓の外には白く無機質な何本ものビルが建っており、太陽の光を反射して発光しているかのようだ。

下を覗くと快晴の中で病院の敷地内でダベっている看護師らが見える。

「どういう意味？助けたのは垣根くんじゃん」

「はつきり言っとくが、俺はお前を疑っている」

疑問を投げかけると彼は直球に疑いを告白した。あまりの直球勝負に一瞬思考が真っ白になるがそんなことで話を中断させるわけにもいかず、とりあえず話を合わせようと声を出す。

動揺していた割には冷静な声色が口から溢れてしまい、それはそれ

で驚いてしまう。

「まあ、だろうね。自分で言うのもなんだけど結構怪しいっしょ、能力方面で」

「それもそうだが、まあここではそこまで話すつもりはない。とりあえず疑っている事実があることを覚えておけ」

「それで？あたしへの疑いと上条くんを助けたのはどんなカンケーがあるわけ？」

彼が何を言いたいのか、何を伝えたいのか分からない。

自分の脳みそに絶対的な自信を持つているわけではないが、理解できない言葉の羅列に少しだけ苛立ちを覚える。

「テメエが上条に覆いかぶさってなきや、俺は翼で守っていなかった」
「……なんで？理解が追いつかないんだけど」

言葉を整理する。彼の思考を、彼の思いを理解できるように。

しかしどんなに整理しても、どんなに考えてもそれを掴むことはできない。

あたしの頭ではスペックが足りない。

「いいか、テメエは俺に疑われている」

「うん」

そんなあたしをみて呆れたようにため息をつく、優しく、一から説明を始める。

噛み砕いて説明されてなんだか子供扱いだ。あたしはお姉ちゃんなのに。

なんとも惨めな光景だ。

「んでそんな奴が俺に後で教えるとはぎいた」

「げ、なんで覚えてんの」

流石の頭の良さなのか、夜中に言ったことをバツチリと覚えており、少しだけ肩が震える。

適当に有耶無耶にしておもうという作戦は効きそうにない。どうやって誤魔化すか考えていると、垣根くんは言葉が続ける。

「俺のハッキング技術を持ってしてもほとんど情報が見つからないテメエが、俺に、教えると言ったんだ。頭吹っ飛んで情報抱え落ちなん

てふざけた真似してみろ、ムカついてこころ一帯更地にする」

「そんなにあたしのこと気になんの？なんであたしに執着すんのかい
まいち分からん」

彼の言いたいことはなんとなく理解できた。しかし何がそこまでして彼にあたしへの執着心を産むのだろうか？

忘れてはいけない。この子はなんだかんだ仲良くしてくれているが暗部に所属する少し悪い子だ。そんな子が今のところ人畜無害なたしに一目置いてくる？

どうしてそこまであたしを気にかける？

「……テメエが嫌いだからだ。嫌な奴の情報を持ってて困ることはない」

「なるほど？分かるようで、わかんねーような？」

つまるところは嫌悪と負けず嫌いな性分ゆえの執着か。マイナスの感情があたしに向けられているのは少し残念だが、彼があたしに執着しているのなら彼を救いやすい。好都合か？

まあなんだっていい。彼を救うためなら感情だってなんだって使う。上条当麻を自分の手で救えなかった今、あたしの一番の目標は垣根帝督の救出。闇にいる少年を光の元へ連れ出すことなのだから。

「テメエがこつち側に落ちたら厄介なことになるしな」

「こつちってどつち？」

「それこそテメエに関係ねえ話だよ」

小さく呟かれた言葉を拾い、問いかけてみると嫌そうな顔で舌打ちをされてしまった。

こつち、まあ普通に考えて暗部のことだろう。現状、疑われてはいるがあたしは彼が暗部に所属していることを知らないことになってる。

関係ないと突っぱねられたが、少し気になる。あたしが堕ちたらどんな厄介事がくるのだろうか。殺した相手を治されたら困るとか？

まあいいか。そこまで気にするようなことでもないだろう。

「あつそー、垣根くんが教えてくれないのならあたしも教えんくていいよね？」

「はっ・殺す」

だがこれはいい誤魔化しの理由になる。

そう思つて椅子から立ち上がり、椅子に座る垣根くんを満面の笑みで見下ろすと悪態をつかれる。

しかしその程度で怯むあたしではない。そのまま診察室のドアへ足を進めると後ろから勢いよく椅子から立ち上がる音が聞こえた。

「どうぞ？情報抱え落ちになっちゃうね！聞きたかったら言わせたくなるようにしてご覧なさいー！」

「あつ、テメ、どこいくんだよー！」

「上条くんどこ！来る？」

診察室のドアを開いて彼が来るのを待っていると、嫌な顔をしながらもゆつたりと歩いてきてくれる。

素直じゃないヤツめ、そう思つてくすくすと笑うともう一回デコピンをお見舞いされた。痛い。

「あー、あいつまだ起きてねーんだったな」

「疲れてたんっしょ？しゃーなししゃーなし」

「もう昼間だつつうのに、呑気に11時間睡眠、しかも点滴つきなんて贅沢なことだ」

昨日の夜、疲労から倒れてしまった上条くんと眠るインデックスちゃんをおぶつてあたしがお世話になつてこの病院に連れてきてから11時間程度は経つていた。寝過ぎは体に良くないが、昨夜は大変だったんだ、寝かせて置いてもいいだろう。

インデックスちゃんと二人部屋で寝かせているが、パニックに陥つてないといいな。ラッキースケベ的なサムシングで。

「そーいやインデックスちゃんどうなったか知ってる？」

ちようど上条くんの話題が出たのだ、インデックスちゃんについて聞いても変ではないだろう。

そう思つて聞いてみると、つまんなそうに語り出す。

「あー赤毛の、ステイルから聞いたが、あの後教会の方に脳と魔力に関して騙してたことに説明を求めたら様子見、回収は先送りになつたらしっ」

「先送りねえ、普通首輪外れたら着け直す為に連れ帰りそうだけど」
「それこそ逆だろ。今あのシスターたちは全員教会に不信感を募らせてるんだぞ？そんな中回収命じたら魔導図書館が抵抗するだろ」
「なんだかんだでアニメと同じ道を辿っているのか。それが良いのか悪いのかはわからないが、一人のヒーローが誕生したことに代わりはない。」

もう魔術サイドに関わるのは止そうかな。垣根くんは魔術覚えられたら困るしね。

でも自分が魔術を覚えることはまだ諦めていない。

彼を守るのにも、彼を救うのにも力は必要不可欠。なんとかして会得したい。

そこらへんに魔導書の一つでも落ちてないものか。

「それよりもインテックスの破壊光線で学園都市の衛星が撃ち落とされた方が気になるがな」

「マ!?撃ち落とされたん!?!」

ぼーっとしていた脳内に衝撃的な言葉が耳に入る。

撃ち落とせたのか!わざわざ周期の予測立てて衛星破壊を目論んだが無事に破壊されたようで一安心だ。

諸悪の根源みたいな節があるし無くなってくれてよかったと思う。それがどう影響するかは分からないが、とりあえずはヘンテコな実験はなくなるだろう。

「なんでそんなに喜んでんだよ」

「秘密! あーよかったよかった」

「あの衛星の何を知ってるんだ」

素直に喜んでいると軽く睨まれる。

流石に喜び過ぎてしまったか。まあいい、どうせ路線変更は決めていたことだ、これからはミスティアスなお姉ちゃんとして垣根くんの隣に居ようじゃないか。いつか教えたくなくなったなら教えてあげよう。

そうすれば、彼もきつと納得するんじゃない?

「だーかーら、あたしに何か喋って欲しいなら喋らせるようにしてみなよ! あ、拷問は効かないからね? 痛覚遮断できるし」

「上等だ、覚悟しろよ？」

べーっと長い舌を出して挑発してみると、眉をヒクつかせてみるからにイラついていた。

苛立った表情で親指を顔の前で下げて態度で「死ね」と宣言して来るあたり、かなり気に障ったのだろう。単純で沸点が低いこと。

「うんうん、お姉ちゃんは弟の挑戦を受けて立ってあげよう！」

「弟じゃねえー！」

歩く彼の前に立って堂々と胸を張るとチョップでツッコまれてしまふ。

「大声出しちゃダメだよ？病院内ではお静かに！」

「ダメエと言える立場かー！」

賑やかな廊下の中、あたしたちは二人でヒーローを迎えにいく。

クーラーの涼しさが体を通り抜け、心地の良い空気があたしたちを囲む。

幸せを感じる昼下がり。

この幸せが永遠のものならどんなに素晴らしいか。

最後を知るあたしは祈る。神ではなくあたし自身に。

彼らに永遠の幸せが訪れますように。

八月

13話：ポルターガイスト

8月5日、あの件から一週間がたった夏の暑さと太陽の光が鬱陶しい昼下がりのこと。シスターの救出

特に面白いこともなく、俺は少しだけ平穏な日々を暗部の仕事の合間に噛みしめる数日が続いている今日この頃、賑やかな色使いのクレープ屋から少し離れたベンチで木陰の涼しさを味わっている俺の隣には派手な髪色の女が甘ったるそうなものを食べていた。

ヘソや二の腕が出るほど小さいサイズの眩しい黄色いTシャツ、同じ色のスニーカーヒールに白いジーンズ。首元にはチョーカーとダガーを模したネックレス。腕にも耳にもジャラジャラとつけられら金属類は太陽光を反射してキラキラと品もなく輝いていた。

アメリカのホームドラマにツツコミとしていそうな格好の金髪ピंकグラデーション女はクレープを頬張りながら鼻歌を歌っている。「そーいや、ポルターガイストって知ってるか？」

随分と能天気なその女に一言呟くと突然のことに驚いたのかゲホゲホとむせ始める

目が泳ぎ、髪の毛を笑顔で掻き上げるその仕草は動揺の印。例えばんなに声色が冷静でもこの女は分かり易かった。

この女、天羽彗糸は凶星を突かれると笑おうとする。一ヶ月過ぎしてわかったことは名前と、勤務先と、住所と、能力と、それくらい。それ以外は全く分からなかった。

どこで生まれて、どここの学校に行って、誰と過ごしたか。まるで生まれたての赤子のように、記録が残されていなかった。

だからこそ、妹の話を聞いたときに愉悦感が俺を支配した。誰も知らない秘密劇、それをこの女はこの俺に伝えたのだ。こいつは他でもない俺に教えた。

秘密の共有。

これはこいつの秘密を抜き取るゲームだ。なかなか難易度の高い

攻略ゲーム。

だから俺はこいつの隣にいた。

「つぐ、へ？なにそれ？」

「……なんか知ってんのな、テメエ」

ヘラヘラとムカつく笑顔を貼りつけながら誤魔化すようにクレールに食いつく。

世間話程度にあげた話題だったが、何やら知っている様子。

目を逸らす彼女をジツと威嚇するように見つめるが、対して効いてない。

「喋りません！」

「テメエが今食ってるそれを払ったの誰だと思ってるんだ」

しかし、手元にある食いかけのりんごのクレールについて言及すると簡単に諦めてこちらに向き直る。

奢られる罪悪感があるのだろうか？ だけどさつきまで鼻歌を歌いながら奢らせていたのはこいつだというのに。

最近少しづつだが俺に対する遠慮というものがなくなってきた気がする。それもこの間のインデックスの件から。

変な生命体に懐かれてしまった感が否めないが、特に気にすることでもないだろう。

「はあ、なら垣根くんがまず話してよ。もしかしたらあたしが知ってるのと同じかもしれないし」

「……ポルターガイストって言ってもここんどこ起きてる地震についてたネット上の噂話だ。最近起きてる地震がポルターガイスト、ま、つまりは霊的な干渉かもしれないって噂だ」

簡単にポルターガイストについて説明してやると、少し驚いた顔を向けてくる。

確かに霊的な干渉なんて非科学的な代物を例え噂話とはいえ俺の口から聞くのは珍しいことだろう。

だがこいつと行動するようになって魔術だの魔導書だの、そういったものに関わるようになってしまった。非科学的なそれらを俺はこの目で見ている。

それに俺の能力そのものが常識に囚われない、柔軟な思考を持っていなきや扱えないのだ。理論的じゃないものも暴こうとするのは当然。

「信じてんの？」

「魔術なんてもんがあるんだ、お化けが居たって何らおかしくねえだろ。だが今回は違うって証明されてる」

「ふーん」

だが今回は霊的な干渉からくるものでは無いとあらかじめ知っていた。

「RSPK症候群って分かるか？」

とある一つの単語をあげると、観念したかのように二度目のため息をつくどポツポツと話し始める。

垣根くんらしいよねなんて言いながら話す辺り、懐かれているようだ。

「実はね、病院に通達がきたの」

「通達？」

「ポルターガイスト現象はその症候群の同時多発だから、病院にその症状の患者がいるのなら引き渡せっってね」

その答えは少し違和感が残るものだった。

まだ何かを隠しているような感覚が脳にこびり付く。こいつは何をどこまで知っている？

「あんまり言いふらさない方がいいと思って黙ってたんだけど……」

「病院より俺を優先しろ」

「さすがにそれはウケるんですけど」

くすくすと女にしては少し低い、柔らかい声を潜めて笑うその姿が妙に鼻につく。

頬を抓ってみるがなんとも無い顔で笑い続ける。

この女には拷問なんて効かない。自分の体なんて興味がないのだ。

例え喉を切り裂こうとも、四肢をもぎ取ろうとも、女としての屈辱を与えようとも、きつとこの女は泣きもしないし、叫びもしない。

こいつが泣いたのを見たのは一回だけ。神裂とかいう女に見せた

涙は救えなかった妹を思い出したから、彼らの行いに自分の失態を重ねたから。

それは決して自分のことではない。妹を、インデックスを思ってしまった涙。

仮に拷問で泣いたとしてもそれはきつとお門違いな涙。自分の痛み、自分の境遇への涙ではなく、誰か別のものを思ってしまった涙。

ムカつくことこの上ない。

「分かったら洗いざらい吐け」

「垣根くん、尋問苦手でしょ」

そんな風にふざける天羽の元に三つの影が落ちる。

視線をそちらに向けると見覚えのある中学生二人と知らない少女が立っていた。

暑苦しいサマーニットがトレードマークの制服を着込む常盤台の超電磁砲、御坂美琴。

一人は涼しそうな夏服を身にまとった黒髪の少女、佐天涙子。

「あれ？天羽先輩と垣根さん？」

「ん？御坂ちゃんに、佐天ちゃんと、どなた？」

そしてもう一人の少女はオドオドとしたように俺たち二人を見比べながら何を喋ろうか考えてる様子。

天羽が声をかけるとビクツツと肩を震わせ、しどろもどろに言葉にならない声を発した。

自分で言うのもなんだが側から見たらヤンキー二人組だ。生温い世界に浸ってる少女だ、怯えるのは当たり前か。

「この子は初春の新しいルームメイトの春上ちゃん！」

すかさず佐天涙子が二人の間に割って入り、軽く紹介してみせる。それでもオドオドし続ける少女。

「えっと、よ、よろしくお願いしますなの」

「しくよろしく！あたしは天羽彗糸。こっちは垣根くん」

「……どーも」

天羽が馴れ馴れしく握手を求めると怖がりながらも春上と呼ばれた少女は手を差し出した。

中学生とつるむ気はない。ベンチから立ち上がって離れようとする
と天羽も慌てて立ち上がって追いかけてくるが、二人してその道を
阻まれる。

それもそのはず、黒髪の少女が大きな声で俺ら二人の前に立ちふさ
がったのだ。

苛立ちを隠さずに睨みつけるが、もろともせずに元気ハツラツと
いったように笑顔で声をあげた。

「お二人も一緒に行きましょうよ！」

その少女の提案は理解し難いものだった。

「さー春上さん！次は何をやりましょうか！あれなんてどうですか
？」

「初春つてば張り切っちゃって」

途中から合流した花飾りの少女とツイントールの少女も加えて、7
人でガヤガヤとうるさく音が飛び交うゲームセンターへ訪れていた。

キンキンと様々なところから聞こえる不愉快な電子音はイラつき
を助長させる。

「なんで俺らまで……」

「ゲーセンかあ、色々思い出すねえ？垣根くん」

なぜなら、ゲームセンターはこの腹立たしい女と出会った場所だか
らだ。あの日、あの時、学友に誘われていなければこいつと出会うこ
ともなかったというのに。会いたくなかった、知り合いたくなかつ
た。

この女は俺を赦してしまうから。俺の罪を知りながら赦してしま
いそうだから。

木山の事件で確信したのだ。この女は俺にとっては悪魔だと。

俺は赦しなんていらぬ。弱くなってしまうから。

この世界を変えるためには弱さなんていらぬのだ。

頭にあの子の幻影がちらつく。

俺の羽を綺麗だと笑い、悲劇にあつたあの子。

「そーだな。で？テメエはバイトじゃねえのかよ」

それを悟られるわけにはいかない。ポーカーフェイスで話を誘導すると、何気付かずにムカつく笑顔でこれまたムカつく声で語る。

何もかもがムカつく。大嫌いだ。

「オフだから垣根くんと遊んであげてるんじゃない」

「俺が遊んでやってるんだろ」

「えー、お姉ちゃんが愚弟と遊んであげてるんだよ」

「誰が愚弟だ殺すぞ」

ふざけたことを抜かしやがるこの女はいつか必ず殺す。いちいちムカつく女だ。

なぜ弟にこだわる。なぜ姉にこだわる。

彼女の狂気じみた行動は全てこれが起因だといっても過言ではない。

なにせ彼女は人生をかけて妹を救おうとしたらしいのだ、悲劇と成り果てた妹を見て気が狂うのも無理はない。

姉としての自分しか彼女は知らないのだ。彼女の話通りなら当たり前のことかもしれない。

見つからない彼女の人生の記録、彼女のものしかない戸籍、天涯孤独と証明した書類の数々。彼女の話が嘘である可能性は十分にあつた。

しかし、あの涙は嘘とは思えず。

結果行き着いた仮説は学園都市が絡む悲劇。

単純だが十分あり得る話。この街は悲劇のデパートなのだから。

「じゃあゲームで勝負しようじゃないか」

そんなこと考えてるとは微塵も思っていないのか、ニヤニヤと俺を見つめながら奥にあるシューティングゲームを指差す。

7cmはある高めの高めのヒールを履いてるせいで、今日はこいつとよく目があう。173cmもある女がヒールを履いているのだ、ほとんど目線は同じ。

少しだけ俺の方が高いが、よく目があうのがなんだかムカつく。緑がかった赤茶色の目。色素の薄いその目は眩しく俺の黒い目に焼きつく。

「ほう？俺に挑むとはいい度胸じゃねえか。ぶっ潰してやる」

「お姉ちゃんに勝てるもんならね！」

「ムカついた、コテンパンにしてやる」

俺に勝てるわけがないだろうに、負けたら何か奢ってもらおうか。いや、どうせなら洗いざらい話してもらおうか。

中学生どもの制止を聞かず、腕を掴んで小走りでゾンビもののシューティングゲームに向かう。ちらりと覗き見た天羽の顔はとても嬉しそうだった。まるで弟の我儘を聞く姉のような顔。

少しだけ苛立ちを覚えた。

弟なんて弱い存在じゃない。

数十分後、ゲームセンターに備え付けられた休憩室で二人して自販機の前でぐったりとしていた。

「はあ、垣根くん強すぎる……」

「引き分けとか聞いてねえぞ……」

結局何回も勝負はしたが何回やつても引き分け。

ドーピングしていた天羽は気分が悪そうに自販機から出てきた柘榴の絵が描かれている缶を空気が抜けるような軽い音を鳴らしながら開けた。

そのままちびちび飲んでる姿はなんとなく酒を嗜む大人に見えてしまう。こいつに限って未成年飲酒はなさそうだが。

天羽が使い終わった自販機の前に立ち、同じものを購入する。ピッとボタンを押すと音を立てて缶ジュースが落ちてくる。

「あれ、先輩ここにいたの？」

ガコンと落ちてきた柘榴ジュースを取り出していると先ほど別れた中学生共がわらわらと休憩室に入ってくる。

楽しげに入ってくる団体様は自販機に近づき、こちらに話しかけてくる。

お気楽なガキなことだ。

「あれ、御坂ちゃん達も休憩？」

「今プリクラ撮ってきたところ」

笑顔でプリクラを見せてくる少女たちは先ほどよりも距離が近くなっているようだ。部下の能力見たく心の距離は見えないが、明らかに変化はすぐに嗅ぎとれた。

ガキは楽しそうだ。そういえば上条は今頃インデックスに振り回されているのだろうか。哀れな奴。

いや、俺もこいつに振り回されてるっちゃ振り回されてるな。同類か。不名誉なことだ。

「んじゃ、うちらもセルフイー撮るか」

「は？写すな」

本当にこいつには振り回される。突然変な単語を口に出したらスマホを何やら操作しだす。ジャラジャラと付けられたストラップには俺お手製の発信機兼GPS兼ハッキング用装置兼その他諸々が施されたものもあつた。まだ外していないのかよ。気づいているはずだというのに。

渡した時の少しだけ苦々しい笑顔を思い出す。あれはわかっている顔だった。

考えの最中、スマホのインカメをこちらに向けられる。

向けられるというより、囲われるの方が正しい表現かもしれない。腕を軽く伸ばし、スマホに二人の顔を写す。背がほとんど同じせいで顔をさほど近づけもせず簡単に取られた写真はすぐさま携帯に送りつけられる。

盗撮の現行犯は悪びれもせず待ち受けにしようとかほざきやがった。

スマホを取り上げようとするが前見たく押し倒しかねない。力を込めずにスマホを奪おうとする。

「春上さん？危ないっ！」

お互いスマホを奪おうと、奪われまいと軽い取っ組み合いをしているが、何かがぶつかった音で中断された。

音の出所に視線を向けると、そこには春上とかいう少女がおでこを押えてうづくまつていた。

その目の前には透明なガラスしかなく、容易に何が起きたか想像がついた。

大方ガラスが見えてなくてぶつかっただろう。

「ドンくせえな」

「あーゆー子が男にモテるんだよねえ」

思わず心から言葉が漏れるが、天羽も同じように考えていたようでも領きながら乾いた笑みを顔に浮かべていた。

確かに庇護欲が湧きそうな少女だが、俺にはただただ面倒くさそうな少女にしか見えない。うちにいるスナイパーがこんな感じだが、彼女の場合は仕事はちゃんとやってくれるので面倒には思わないが。

「大丈夫ですか？」

「あれ……」

花飾りが鈍臭い少女に近寄り心配していると、その少女が何かを指差した。

指の先には今日の夜に川辺で行われる花火大会のポスター。

「あー、今日だったっけ」

「ねえ！みんなで行こっか！」

「いいですわね！」

そのポスターを見ると中学生どもは楽しそうにきやつきやと話を進めていく。

俺たちには関係ない話。そもそも花火が好きではない。

「中学生はいいねえ、楽しそうで」

「うるせえけどな」

ぼーっと眺めていると隣から優しそうな声が入ってきた。興味味のなさそうに呟く仕草がなんだか違和感がある。

他人に興味があるわけではないのか？行動がチグハグで思考が読めない。

こいつは一体なんで他人のために命を張るのに、他人に興味がない？

「垣根さんたちも！一緒に行きましょうよ！」

「悪いけど、遠慮しとくね。みんなで楽しんできな？」

「俺も」

誘われるとはなんとなく思ったが珍しいことに彼女が先に断った。

まさか天羽に断られるとは思ってもいなかったのだろう、目を丸くさせ焦りだす。

「なんでですか!?多い方が楽しいですよ?」

「うーん、興味が無いっていうか……」

「右に同じ」

ここまで花火について意見が被るとは思わなかった。大抵の女は目の前のガキ見たく花火がどーの、屋台がどーのとうるさく騒ぎだすものだど認識していたので少しばかり驚いてしまう。

クレープやらケーキやらが好きな彼女のことだ、屋台のスイーツに釣れられて行ってしまうかと思っていた。

「花火といえば絶好のデートスポットじゃないですか！浴衣姿の彼女を見て惚れ直すイベントがあるじゃないですか！」

だが諦めの悪い少女は花火の素晴らしさを力説しだす。身振り手振りで懸命に説得にかかる彼女だが、何故そこまでして俺達を連れ出そうとしているのかわからない。

確かにデートスポットして賑わう花火大会だが俺には一切関係ない。後々の関係が面倒くさくて女は作りたくねえし、天羽も無性愛者の節がある。

それに浴衣をこいつに着せても絶対似合わない自信がある。長身で、腰の位置が高く、寸胴とは真反対の体型。西洋系とすぐにわかる体つきに一部がピンク色とはいえつむじから伸びる金色の地毛はどう見ても浴衣が似合うようには見えない。

「こいつ浴衣似合わねえだろ」

「うん、骨格がもうダメだね。日本人離れしてる。華奢じゃないし」
「てかなんでこいつに惚れなきゃいけないんだよ」

呆れながら本日何度目かも忘れた溜め息を吐く。中学生に付き合いうほどお人良しでも善人でもない。

いい加減キレそうにはなるが、隣の女の一言で今夜の予定が変わってしまう。

「でも花火には行くよ」

「あ？行かねえんじゃねえの」

「一緒には行かないってこと。熱中症とかで倒れる人がいるかもしれないでしょ？だからパトロールで呼ばれてんの」

「テメエは行かねえんじゃねーのかよと心の中でも態度でも悪態をつくと、苦笑いで理由を話した。

確かに祭りなどには派遣された医療班などが動員されることはある。成る程など納得するが、こいつが行くなら俺もついて行くしかないだろう。俺とこいつはゲーム中なのだ。秘密を喋らせる簡単で難しいゲーム。

ついて行かない選択肢は俺の中にはなかった。

「ふーん、じゃあ行く。仕事ぶり見に行つてやるよ」

そう言つて目を合わせて笑つてみせると、ふっと愉快にも余裕の笑みを返される。

この俺に余裕ぶつた顔を見せるだなんていけ好かない女だ。とつとと秘密を吐かせてゲームを終わらせよう。

「この2人つて、結局なんなんですか？」

「腐れ縁……らしいけど、実際のとこわかんないわね」

「悪友つて感じが一番近い気がしますわね」

中学生たちの話し声は聞こえなかった。

そして時は進み、夕暮れから夜へ変わる黄昏時。蝉の音を聴きながら二人で賑やかな川沿いを歩く。

医療班として祭りに参加しているバカ女を連れて屋台を周りながらのパトロール。片手にワッフルなんぞ甘いものを持ちながら歩く

彼女の姿はどう見てもパトロール中のそれとは見えなかった。

「うーんおいしいー!」

「テメエ、人のこと財布とでも思ってたのか?」

ガツガツとワツフルを食べ終わると満足げな顔をして次の屋台へ腕を引いてくる。

興味はなかったんじゃないやなかったのか疑問に思うほど楽しそうに笑いながら屋台へ足を運ぶ。

「奢るっていったのはそっちでしょー?」

ニコニコと邪のない笑みはチクチクと俺の心臓に針を刺す。

こいつといると調子が狂う。

太陽みたいな女、近づくと焼き殺される。

「この野郎、いつか泣かす」

「無理なのにねえ……」

今のこいつは何を言っても笑って流してしまいそうには浮かれていた。

酒でも飲んだのか不安になる程浮き足立っており、鼻歌交じりにスキップをしながら俺の前をぴよんぴよんと飛び跳ねている。

跳ねるたんびに揺れるポニーテールと、ひらひらと風ではためくいつもと形が違うナース服は外にいるのに病院を連想させた。

「てか、なんだよその服、色気ねえな」

「そりゃあ医療班のユニフォームだしね」

いつものパンツスタイルではなく、ワンピースタイプの薄ピンクが清潔感を想起させるナース服にいつもはつけていないナースキャップ。

制服はミニスカート、私服はジーンズの彼女がひざ下のワンピースを着ているのは珍しく、いつもの姿よりナース感マシマシとなっているため歩く人々から奇異の目で見られていた。

だが、腕にある祭り関係者の腕章がその目を少しだけ軽減される。

「ユニフォーム姿で遊んでんじゃねえよ」

「あ、花火」

「無視すんなアホ」

仕事姿で祭りを満喫しているのはあまり褒められたことじゃないだろう。俺だって暗部での仕事服と私服は分けている。

というのにこの女は堂々と仕事着でサボり中だ。真面目な性格と思っていたが、それは見当違いだったのか？

おい、と声をかけてみるも今度は何も喋らなくなる。打ち上がる花火の音だけが唯一の音だった。

そのまま小走りで階段を登り始め、中腹までたどり着くまで一言も彼女は喋らなかった。

何か機嫌を損ねたのか？あまり見ない雰囲気の彼女に少し不気味さを感じる。

「真面目にやんなくても今は大丈夫なの」

階段を何段か登り、残り半分くらいまでになると気だるげな目で遠くに見える屋台の端を指差した。

やっと開いた口からはどこか嫌そうな、且つイラついた声色が響く。花火の音で掻き消えそうなほど小さい声だった。

指差した場所には大きな護送車に似た車が複数台停車しており、その車両の側面にはMulti Active Rescue、通称MARの文字が書かれている。

「ほら、あれ」

「MAR……？先進状況救助隊か？なんでまた」

威圧感を発するゴツイ車両は祭りの雰囲気には似合わず、強烈な違和感を放っている。

基本的に救助活動を主にした部隊だったはずだ。こんなちつぽけな祭りになぜここまでの部隊を？

そもそもここは祭り会場だ。天羽みたいな医療班用の緊急車両やドクターカー、子供などの軽傷者のための簡単な医療スペースならわかる。

しかしあれらは救助隊だ。災害時に救助活動を行う組織。

災害が発生していない今、一番場違いな連中だ。

となると、これから何かが起きるのか？

「あれがあるからあたしが遊んできてもいいんだよね。警備体制バツ

チリだから」

最近起きている災害となると思い浮かぶのは一つ。

「……ポルターガイストか」

「そゆこと。ポルターガイストが発生した場合のためにいる、というか十中八九ここで発生するんだよ」

「へー？なるほど」

十中八九ここで発生する、ということは事前に察知して来ている訳か。まあそうだろうな。あそこには木原の家系が一人いたはず。

技術力なら申し分ない。その程度のことならやってのけるだろう。

「M A Rが場所を特定してることとはポルターガイストはR S P K症候群の人為的な発症によるものってことか？ A I M拡散力場への干渉で発症することもあるからな」

「なーんだ、知ってたの？」

「前に脳をネットワークで繋ぐなんざ荒業やった木山つつー研究員が加担されていた実験が似たようなものだっただろ。A I M拡散力場へ干渉し暴走能力者を人工的に生み出して解析する、なるほどな。M A Rが駆り出されるわけだ」

脳内に蓄積された知識によればR S P K症候群は人為的にも起こせる。前に出会った木山春生が狂った原因である暴走能力誘発実験が似たようなものだったはず。

「さすが垣根く、んっ!」

直後、轟音があたりに響き渡る。地震のように地面が揺れ、上の段にいた天羽がバランスを崩し足を滑らせる。それをそのまま受け止め、翼を小さく展開し空を飛ぶ。

花火に夢中な川沿いの人にはバレないだろう。そのまま高く飛翔し、状況を確認する。

被害はほとんどなく、倒れている人もけが人も見当たらない。パニックに陥ってないのはさすが地震大国の国民だからか。

「タイミングバッチリだな……これがポルターガイストか？」

「また飛ぶことに……」

人生二度目の生身で飛行に文句を言うムカつく女を腰のあたりで

抱えながらザツと辺りを飛ぶと、崩れている箇所を見つける。

ちらほらと疎らな人数が見える辺り、人気スポットではないのだろう。

「あ？あそこ崩れてんな」

「急降下！怪我人なら助けるよ」

「俺はタクシーかよ」

半ば呆れながらもゆっくりと道路の真ん中に下ろすと、街灯の目の前にいたパワードスーツを着込んだ何者かと倒れていた少女の元へ走り出す。

「救護班です！怪我人は!？」

「天羽さんー!」

「祭りの救護班？随分と行動が早いよね」

その場にいたのはMARのパワードスーツを着た女と、今日の昼に少しばかり顔を合わせた花飾りの少女、黒髪ロングの少女に倒れている一人の少女。

倒れている少女はオドオドとしていた春上と呼ばれていた少女だった。

「MARの……テレステイーナさん、ですよね？」

「ええ、そうよ。ごめんなさい、報告しなきゃいけないから彼女のこと頼めるかしら？」

「分かりました」

テレステイーナと呼ばれたその女はその場を離れると、崩れた崖の方へ向かう。

「あの、春上さんは……」

しゃがみ込み、少女に手をかざし簡単に意識の確認をし始める。そういえばまだ能力は話していないんだっただか？

瞳孔や脈拍などを一通り確認すると、立ち上がり他の少女たちの方へ向き直った。

「気を失ってるだけだから大丈夫。とくに損傷はないよ」

「よかったあ」

「ごめん、他の人も確認しなきゃいけないから離れるね。2人だけで

大丈夫そう?」

安堵する中学生たちをよそに少し慌てながら天羽が離れようと軽く手を合わせてごめんといいながら許可を求める。いつもなら病人につきっきりの彼女が珍しい。

今日はなんだか予想の範囲外の行動が多い。俺の彼女への認識の違いか?あるいは何かを考えての行動か?

考えてもわからない。とりあえずは保留だ。

「大丈夫です!」

ごめんねと謝りながら俺の腕を掴み小走りで少し離れたところへ行く。

道路の真ん中、祭りの屋台が見下ろせるそこからは崩れた崖と何かの作業をするMARの姿が見えた。

「さてと、どうなってるかな?」

道の端に設置されている柵から身を乗り出し、MARの働きぶりを二人で確認する。

崩れた箇所に群がるMARと先程のテレステーナと呼ばれた女が崖の近くに停めてあるMARの車両の近くで通話している姿が確認でき、あまりの対応の早さに乾いた笑いが漏れる。

「負傷者はいなさそうだな。それよりも、MARが迅速過ぎて笑えるな」

崩れた斜面に何やら機械をかざしている隊員もおり、その用意周到さが窺える。

きな臭い組織だ。

直感的なものではあったが、勘というものは存外侮りがたいシロモノ。

MARには何かしら探りを入れておいたほうが良さそうだな。

「MARでは事前に力場の探知が出来るんでしょう?だからここにいたんだし」

「RSPKは何者かによるAIM拡散力場への人為的干渉が原因、そしてポルターガイストを引き起こす、か」

少しだけ違和感を感じる。何かが引つ掛かる。

「なんか引つ掛かる?」

じつとMARの方を向いてると、天羽の方から俺に話しかけてきた。貼り付けた笑顔。

何かを隠している。

ニコニコと微笑む彼女と向き合うと少し前の出来事が頭によぎる。

「AIM拡散力場への干渉……レベルアップ幻想御手が似たようなシステムだったよな。なあ?天羽サンよ」

それは木山春生の起こした幻想御手事件のこと。

「……黙秘権を行使しまーす」

「あの女に赦しを与えるとか言ってたのはどこのどいつだっけ?」

そしてあの女に赦しを与えるだのほざき、私の元においてなど支離滅裂な発言をしたのは他でもないこの天羽彗糸だ。

「さあ?どこのどいつでしょーね?」

「あくまでもしらを切るつもりか?」

飄々と笑顔を携えてその女は高く跳び、道路と崖を分断する柵の上に降り立つ。

「言ったでしょ、垣根くん」

花火を背に、俺を見下ろしながら白衣の天使は悪魔のような笑顔を見せるとそれは口を開いた。

「あたしのことを知りたいなら喋らせて見せて?」

14話：MAR

鼻腔を擦ぐる消毒液の匂い。今日も今日とて変わらず、怪しい挙動が多いナースの監視を続けていた。

その姿はいつもより慌ただしく、あっちに行ったりこっちに行ったりと忙しい。

溢れるように病院のロビーから通路にと患者がひしめく混沌とした空間は人の怒号や、ナースや医者 of 忙しない足音が病院を駆け巡る。

「今日は随分と賑やかだな」

「そう思うなら手伝ってくれる？」

「やだ」

「邪魔するなら帰ってね？」

監視対象の天羽隼糸はいつものナース服とポニーテールを揺らしながら早歩きでカルテを確認しながら通路を進んでいく。

通路の両端に固まっている患者たちの間を割って通る彼女はさながらモーゼのようだ。

「んで？なんでこんなに患者が多い上にテメエは違う病院にいるんだ？」

今日彼女が忙しく働いていた病院はいつもの第7学区のカエル顔の医者がある場所ではない。

だからといって別に転職したようにも見えないし、カエル顔の医者にクビにされたようでもない。

「第21学区の自然公園でポルターガイストがあつたの！そこでこっちの病院に沢山患者が運ばれてきて人手が足りないから駆り出されてんの！」

「あー、そんなこと言ってたな」

そういえばそんな話もしていたか。あまりにも大慌てで病院内を移動し回っていたから真面目に聞いてなかった。

地震のようなポルターガイスト現象が起きた第21学区の自然公園から大勢の怪我人が搬送されてきており、その量は病院の機能を一

時停止させるほどのものだった。

軽傷者に割く人員が減れば効率的に重傷者へ対応ができるそうで、なにやら豪勢な肩書きを持っている回復能力持ちのこの女が軽傷者の早期回復のため駆り出されたわけだ。

「聞いておいてよーごめん次の人の手当に……って初春さん？」

早足に次の患者の元へとカルテを確認しながら歩み寄ると、そこには昨日の夜にも会った花飾りがインパクトを残す一人の中学生がいた。

「天羽さん、垣根さんも……ここで働いてたんですか？」

「今回は派遣！怪我見せて」

「は、はい」

軽く膝を擦りむいているようで、しゃがみこみ足に手をおいて演算を始める。みるみるうちに治っていく傷口。

肉体の治癒能力を上げて直しているというより、細胞に信号を出して補修している方が正しいかもしれない。違いがあるようには見えないかもしれないが、言い換えればこいつは肉体に干渉してから相手の持つ治癒能力を向上させているわけではなく、細胞そのものに干渉して治癒という結果を得ているということ。

大能力者^{レベル4}で収まっていい能力なんかじゃない。こいつは俺の仮説があつていれば、肉体の治癒どころか人間を生き返らせることができるかもしれないのだ。

「肉体支配^{リカバライザー}」どころか「屍術師^{ネクロマンサー}」にもなれる能力の研究価値が低いとは思えなかった。

「初春さん！」

「皆さん！」

ちようど傷を塞ぎ終わった頃、ばたばたと大声で騒ぐ少女たち病院の出入り口から走ってくる。ロビーにいた俺たち、というより花飾りの少女を見つけると心配そうに不安げな表情で囲んだ。

「大丈夫？怪我は？」

「すみませんわざわざ、天羽さんに治してもらったので大丈夫です」

「え？天羽先輩、ここでも働いてるの？」

無事を確認するとようやく第3位が俺たちに気付く。不思議そうな顔をしてこちらを向くと天羽が愉快そうに笑顔で答えを返した。

「派遣です。んで、垣根くんはあたしの邪魔しにきてんの」

「なにいつてんだよ、俺がいるから変な男にセクハラされねーんだろ」

「あはは、そーかも?」

適当に俺の有能さをアピールすると控えめな声で笑い飛ばす。

もうすこし面白い反応をもらえるかと思ったが、軽く流されてしまった。

この女はそういった話題に全くといつていいほど反応しなかった。その態度がさらに苛立ちを加速させる。

侮辱しても、セクハラまがいのことを言っても流されるだけ。暴力を振るってもニコニコと笑みを浮かべ、反対に俺を心配してくる始末。

気味が悪かった。

この薄気味悪い女を逆算して、解析したい。それが俺が向ける彼女への唯一の感情。

「ほんと、仲がよろしいことで」

「そういえば、春上さんは?」

「春上さんなら一応ここに緊急搬送されてるはずだよ、リストに書いてあるし」

愉快的勘違いを未だにしている白井という風紀委員ジャッジメントの少女と第3位。

昨夜の花火大会で倒れたあの少女も搬送されているのか、きよろきよろと辺りを見渡していた。

にしても昨日の今日でまたポルターガイスト発生時に倒れたのか?

「気絶しただけだそうなので、大丈夫ですよ」

「初春、ポルターガイストの直前、昨夜の花火大会のように春上さんの様子に変わったところはありませんでした?」

偶然には出来過ぎている。そう思ったのは俺だけではないよジャッジメントうで、風紀委員の少女が疑うような目を花飾りの少女に向けた。

現場で不審な行動をした人を真つ先に疑い、調べる。サスペンスでもミステリーでも一番最初に行うことだろう。

風紀委員なら当然の反応だが、ただ倒れた程度でここまで気にするかどうか？

「なんかあつたの？」

「あの時、ポルターガイストが起きる前、突然眩き出して歩き出したんです。それが不思議で……」

「あー、なるなる」

「私が調べたところ、春上さんは異能力者^{レベル2}ながらちよつと変わった^{テレパス}精神感応ですの。もしあの時とおなじような不思議な挙動が見られたとしたら……」

精神感応。確かにAIM拡散力場に干渉しうる能力だが、異能力者^{レベル2}ならそこまでの芸当はできない。

“ちよつと変わった”がどのような意味かは把握しかねるが、一時的にでも能力の送信範囲が向上すれば可能ではある。

なるほどな。疑うには十分か。風紀委員の言動にも納得がいく。だがそれに納得いかないものもいた。

「なんで、なんでそんな事調べたんですか？」

その少女は初春飾利。

「なんでって……」

信じられないものを見るかのように驚きと敵意が混じった目が一人の少女に向けられる。

二人して同じ風紀委員であるのにすれ違ふとは、組織としてはお粗末だ。

「まさか白井さん、春上さんを疑ってるんですか？」

「そ、そういう訳では」

「酷いです白井さん」

はつきりとした拒絶だった。

泣きそうになりながらも花飾りが声を上げると二つ結びの少女が酷く狼狽える。

脳内御花畑な友達思いの少女に、合理的判断を下す風紀委員の少

女。正反対の性格だというのに、なぜ仲がいいんだ。わからない。

俺には友情なんてわからない。

「春上さんは転校してきたばかりで、不安で、私達を頼りにしてて、それなのに、それなのに！」

「あのね、初春さん、黒子は別に……」

徐々に口調が強く、声が大きくなる。病院ということも忘れヒートアップしていく花飾りの少女に一人のナースが前にでる。

お姉さんらしく、それでいてナースらしく優しくも力強い小さな声が耳の奥を揺さぶる。

「お静かに。ここは病院、喧嘩するなら外でやってちょうだい？」

少しだけ怒ったような顔をしながらも、花飾りの少女を軽く咎める。

初めて怒った顔を見た気がする。昨日の花火での不気味な苛立ちとは少し違う、誰かに対しての愛ある怒り。

誰かに怒られたことなんてない。生きてきて今まで俺には向けられたことない感情。

少しだけ複雑な感情が心を蝕む。

「精神感応^{テレパス}が、AIM拡散力場の干渉者になる可能性はなくは無いわ」その感情を必死に考えないようにしていると、背後から女性の声が聞こえてくる。

声が出た方を振り向くと、色素の薄い長い髪を一つに括り眼鏡をかけた女が立っていた。

Multi Active Rescueの頭文字が灰色で印字されているオレンジ色の救急用のベストを着込むその女には見覚えがあった。

「ただし、それには少なくとも大能力者^{レベル4}以上の実力が必要だし、余程希少な能力と言わざるを得ない。」

その女の名はテレスティーナ。

他の隊員に軽く報告を受けると再びこちらに振り向いて胡散臭い笑みを向けた。

「異能力者^{レベル}2にその可能性はほとんどないと思うけど、念の為、ちゃんと検査した方がいいのかもしれないわね。お友達の名前は？」

「春上衿衣さんですの」

「白井さん！」

その胡散臭い笑みに少女の名前を伝えると、花飾りが必死の形相で口を開いた少女を睨みつける。

「潔白を証明するためと思いなさい」

しかしその表情に戸惑いも見せずに笑みを貼り付けたままだ。

「大丈夫、専門のスタッフが揃っているから、安心して？」

「皆様、喧嘩するなら病院から出て行ってね？」

そのような会話を続ける二人の間に少しだけ苛ついたような口調の天羽が割って入る。

その苛立ちはどことなくテレステイナに向けられているような気がした。

「あら、昨日の医療班の……」

「ああ、初めまして。第7学区の病院から派遣されてきました。大能力者^{レベル}4の肉体干渉能力保持特別医療従事者の天羽隼糸です」

間に割って入った天羽を見て少しばかり声をあげたが、その声は特に天羽を前から知っているようなものではなかった。

ならばなぜ天羽はこの女に対して苛立ちを覚えている？彼女は一方的にこの女を知っているのか？

初対面だったのを忘れたかのように天羽は異様なくらいに完璧な笑顔で自身の長ったるい肩書を名乗る。その肩書きに聞き覚えはなかった。

「あなたが噂の……そちらの彼は？彼氏さん？」

一度に降ってきた大量の情報を簡単に整理しながら物思いに耽っているふざけた戯言がその女の口から零れた。

反論しようと口を開きかけるが、ふと一つの考えがよぎった。

MARという組織に木原が一人いるのを事前情報として知っているということ、そして天羽がこの女に苛立ちを覚えていること。

その事実が複数の考えを生む。

「いや、俺は……こいつの兄です」

その考えから導き出された答えは至極簡単なものだった。

俺の名前を出してはいけない。

「……ええ、ええ、そうなんです。高位能力者なので少しお兄ちゃんの手を借りていて」

「えっ？」

金髪頭に指を向け、適当に兄を名乗ると驚きはされたがさほど動揺せず笑顔を作って話を合わせてきた。

不機嫌な声で”お兄ちゃん”と呼んでくる姿に凄まじい違和感と嫌悪感が押し寄せ、鳥肌が立つ。

従兄妹とでもいった方がマシだったか。いや、どっちもどっちだ。

中学生たちも驚きはしたが天羽が少し微笑むと静かに頷いた。何をどう理解したかは不明だが、黙ってくれるのならありがたい。

「お兄さん？仲がいいのね」

それほどでも、と営業スマイルを貼り付けると金髪から少し笑い声が漏れた。

バイクの鍵を返す日は遠のいたな。

「良ければあなた達も来てくれる？あなたみたいな子が居てくれるのは心強いわ」

天羽にテレステイーナがウインクをひとつすると親指で後ろを指した。

病院から移動し、春上という少女を研究所に検査のため搬送した後のこと。

場所は変わり何やらパステル調の少女趣味な部屋に通される。

色とりどりのファンシーなインテリアに少女たちは皆釘付けになりあちこちを見回していた。

中学生たちはその趣味に驚いたり、同じ趣味なのか興味津々といった風にインテリアを見ていたが、一人だけ金とピンクの髪を揺らしな

がら何やら探すようにあたりを見渡ししている。

「なんか、全然研究所って感じしませんよね、すっごいセンスっていうか……」

「女がてらに災害救助なんてやってると、こういう純粹なものが好きって意外に思われるのよね」

「ここは研究所の一室、しかも胡散臭い女の部屋だった。」

「さて、改めまして、先進状況救助隊付属研究所所長のテレステイナーです」

あらかた部屋を堪能したあと、ソファに促される。しかし6人も座れるスペースは流石になく、結局俺と天羽、そしてツイントールのジャッジメント風紀委員は座らずにドアの付近で立ちながら話を聞くことになる。

中学生に席を譲るのは少々不満だったが、挙動不審な態度を続ける天羽のそばで監視を続けるには彼女の隣にいる他なかった。

「所長!?! ってことはMARRの隊長さんで、研究所の所長さんで……ええと、あとなんですか?」

「所長ねえ……」

頑なに名字を名乗らないテレステイナーの肩書きに黒髪が驚くが、それを聞いて益々不審に思う。

彼女の正体に目星は付くが、なぜ救助隊なんかをしている? 救助隊を隠れ蓑に何かをしているのか?

考えは尽きない。

「うふふ、それだけよ? そう言えば白井さんと天羽さん以外はまだ名前を聞いてなかったわね。お兄さんのお名前は?」

だが考えても仕方がない。いざとなれば殺せばいい。

それが俺のやるべきこと。

「……天羽帝斗だ」

適当にそれっぽい名前をあげると目線の少し下から吹き出すような笑い声が漏れた。小さく「ていとくん」と戯けたことを抜かしたのが聞こえると、軽くそいつのこめかみのあたりに両手の拳をグリグリと当てる。痛みを予期していなかったのか小さい悲鳴がその金髪から漏れるのを確認すると最後に頬を抓って解放する。キャンキャン

と耳元でチワワのように文句を言ってくるが痛くも痒くも無い。

「仲がいいのね。あなたは？」

一人づつ名前を聞いていくが特に怪しいそぶりはしていない。強いて言えば第3位に少しだけ驚いた程度か？

あの一族を全て知っているわけではないが、この街にあるあの男のプランはほとんど把握しているつもりだ。

これもその一つか？だがわからないな。救助隊という表立った組織がなにができる。

色々と考え始めるが、その思考は一人の少女の悲鳴に近い大声で中断されてしまった。

「あのー春上さんは干渉者じゃ、犯人じゃないですよね!？」

心配そうに、そして焦るようにテレステイナーに叫んだのは初春飾利。

未だに結果が出ておらず焦りと緊張が爆発したのか声を震わせながら聞くと、テレステイナーがその顔に胡散臭い穏やかな笑みを浮かべてポケットから何かを取り出す。

それはよくスーパードなどで売っている色とりどりのコーティングが施されたチョコレートの筒。

「試してみる？」

「え？」

「あなた、好きな色は？」

筒をカラカラと音を鳴らしながら軽く揺らし、中身を確認すると初春飾利に笑顔を向ける。

爆弾でも仕掛けてんのか？いや、第3位がいるこの状態で何かしかすことは無いだろう。

「なんでも好きですけど、強いていえば黄色とか……」

「黄色ね？手を出して」

「なんなんですか？一体……」

訳がわからないと言いたそうな表情をしながらも両手を差し出すと一粒のチョコレートの筒がコロンと少女の手元に転がった。

黄色のコーティングがされたチョコレートの筒。それを見た女は薄く

笑い、少女を見据えた。

「あら、幸先いいわね」

不気味な表情だった。

そろそろいきましようとしてテレステイナが立ち上がりドアの方へ向かうと中学生達もそれに続く。

長い廊下の先、MRI室と書かれた白いドアにたどり着くと躊躇いもなく部屋に入る。たくさんの機材で囲まれた部屋の右側の壁は透明なガラスとなっており、誰が何をしているのか簡単にわかるようにされていた。薄いガラスの先には一人の少女が検査にかけられている姿が見える。

てつきり血みどろな検査でもしているかと思っただが予想は外れたようだ。

「春上さん！」

たかがMRIの検査だというのにガラスにへばりつき、恐怖やら不安やらそういう類の感情を憶える表情をしながら少女の名前を呼ぶ。だが別室の彼女には聞こえておらず、気づかぬままMRIを終える。

「あー、干渉者じゃないみたい」

「ほんとね。たしかに、彼女は異能力者の精神感応、しかも受信専門で自ら思念を発することは出来ない」

しかしそれには目もくれず天羽はデータを取っていた研究員のところに歩みを進めた。検査結果を見せてもらったようで、一通り確認すると顔色一つ変えずに結果を告げる。当然と言わんばかりの表情で結果を凝視する彼女に強烈な違和感を感じた。

「でも書庫に登録されたデータでは特定波長下においては例外的に強度以上の能力を発揮すると」

「白井さん！まだそんなことをー！」

その結果にまだ疑念があるのか勇敢な風紀委員の少女が疑問を問いかけるが、それが癪に障った花飾りの少女が声を荒げる。

だが疑わしきは罰せず。疑うのは人間として普通の心理であり、それが表の世界だけとはいえ風紀を守る組織に身を預けるものなら当たり前の思考回路。

だからこそ、俺はこの花畑の少女にイラつきしか覚えなかった。

ちらりと隣に戻ってきた天羽を盗み見ると、それに気づいて優しい笑みを浮かべる。まるで俺の感情を読み取ったかのようなその表情が不愉快で堪らなかった。

「検査結果を見る限り、どうやら相手が限られるみたいね。その相手だけは距離や障害物の有無に関わらず確実に捉えることができる。いずれにしろ彼女にAIM拡散力場への干渉など不可能ね」

「ほらーほらー」

「私はただ……」

勝ち誇ったような笑みを浮かべる花飾りとは反対に納得がいつていないような白井。

「白井ちゃんも初春ちゃんも間違っではないのにねえ」

喧嘩と呼ぶには酷くお粗末な光景を眺めながらはあつとため息をつくと、二人をフォローするように天羽が口を開く。

二人を見る目は優しく、まるで妹の喧嘩の行く末を見守る姉といったように更に俺を苛つかせた。

全人類の姉だと豪語するこの女が気味が悪くて、嫌いで、嫌いで仕方がなかった。その優しく、甘えてしまうような目が何よりも嫌いだった。

間違っていないと本当に思うのか？もし仮に彼女が干渉者だったらどうしていたというんだ？

綺麗事だけじゃ誰も救えない。薄っぺらい希望の光だけじゃ何も救えない。

だから俺は汚い方法でこの街を変える。醜く歪んだ世界をこの汚い手で変える。

それは決して間違っていない。誰に言われようと俺は思っていたい。

大きく感情が揺れる。

ムカつく。全部全部、壊してやりたかった。機械も、人も、友情なんてものも、何もかも。

「その点あたしはお兄ちゃんに寛容よねえ？弟って言ってくれれば

もーっと喜ぶんだけどにやー?」

何かが頭に触れる。その暖かさに気づくと静かに波は引いていく。

その温もりの正体は誰かの手だった。優しい手つきで髪を梳かしていくその手は男にしては細く、女にしては大きい。

それは横の女の体から伸びており、頭を撫でられているのだと気づくのにそう時間はかからなかった。

優しく、全てを分かっているかのような表情で頭をポンポンと叩くと手を下ろす。

「……誰が弟だ、誰が」

ふざけた語尾で茶化してきた彼女だったが、何故か苛立ちは覚えなかった。悪態をついていつものように振る舞うとそいつは満足げに頷いた。

本当によく心得ている。下の子の扱いを、末っ子の扱いを、一人っ子の扱いを。

下手に説教されるよりも茶化すような不真面目な台詞の方が今の俺には気楽だった。

「でも……だとしたら……本物の干渉者は一体……」

未だ残る謎を疑問に思いながら第3位が呟くが、誰もその言葉に反応を示すことはなかった。

移動することとなり、ドアを開けて部屋を出る。再び長い廊下を進み、階段を降りたり登ったりしてようやく別の棟の個室へたどり着く。

「春上さん?」

スライド式のドアを開けて中に入ると、その音に反応したのか少女がゆっくりと目を開けた。

それに気づいた花飾りは一目散にベッドへ駆け寄る。

周囲を確認しながらベッドから上半身を起こすと、何があったか理解したのかため息をついて顔を伏せた。

「あたし、また……」

「大丈夫ですよ、何も心配しなくていいですから」

花飾りに気がつくくと安心したような笑みを浮かべるが、何か別のことに気がつくると狼狽え始める。

それを見て花飾りは心配そうに何かを渡す。

その手には窓から差し込む光を反射して輝くネックレスがあった。

「はい、大事なものなんですよね?」

「うん、友達との思い出なの」

「友達って探してるって言う」

大事そうにそれを受け取り首にかける。安堵した表情でペンダントヘッドを眺めると静かに呟いた。

「声がね、聞こえるの」

「それって精神感応の……」

「たまにだけど、でも、それを聞いてるとボーッとしちゃって」

「じゃああの時も……?」

ポルターガイスト現象発生時に声が聞こえる、か。ポルターガイストの発生によって誰かと波長がリンクした?

AIM拡散力場が関係しているとはいえそれは可能なのか?

受信する相手が限られるという話だ、ならポルターガイストに乗じて特定の誰かの思念が強まったという線もある。

ポルターガイストの正体、それはRSPK症候群を発症させた際に起こる現象であることはすでに把握している。

そしてその症状がおそらく誰かがAIM拡散力場に干渉して人為的に及ぼされたものだとも知っている。

となると、この少女が聞こえたのはRSPK症候群により一時的に能力が強まった誰かの思念?

誰かの手によりRSPK症候群になった人の思念ということなのか?

「中になにか入ってるんですか?」

そのペンダントヘッドはロケット仕様になっているようで、ぱかっ和中を開くとそれをベッドの周りを囲む少女たちが覗き見る。

彼女たちの反応を見る限りそれは写真、それも一人の女の子を写したもののようだった。

「枝先絆理ちゃんって言うの」

「その子っ」

「絆理ちゃんのこと知ってるの?」

その名前に一人だけ反応を示す。

第3位が声を漏らすとそれに驚いて話を聞こうとするが、口を開きかけて言い淀んでしまう。

何かを知っている顔。光しか知らなれないと思っていたが暗闇を知っているのか?

……いや、そうだ、ついこの間彼女は知ってしまったんじゃないか。木山という女に教えられて。

「あのね、あたしも置き去りなの。同じ施設で育ってね」

何も答えない第3位に特に責めることはせず、小さく話し出す。

「私、人見知りで友達もできなくて、でも絆理ちゃんとだけは仲良くされたの」

それはありふれた話。学園都市に無数に存在するごく普通でどこにでもあるような話。

情に訴えられるようなものでもないただの事実。似たような話ならそこら辺に転がっている。

「いつも能力でお話してくれてたの。けど別の施設に移されて、それきり……」

それでも話は続く。

可哀想な子、哀れな子だと、その少女に部屋にいる誰もが同情の目を向けた。

平和に、闇を知らずに生きているというのに何故可哀想だと思う? 彼女は どう見ても幸せな世界の住民だ。

「なのに、この頃また聞こえるの、絆理ちゃんの声が、助けてって、でも何処にいるのか、何をして欲しいのか、分からないの」

悲痛な表情で言葉を零した。

「助けてあげたいのに、私、何も出来ないの」

「大丈夫ですよ!お友達はきつと見つかります!いえ、私がみつけてみせます!なんてったって風紀委員ですから!」

そんな彼女の手を柔らかく自身の手で包むと花飾りの少女が優しく励ます。

その場面が先程の天羽と少し前、幻想御手の時に手を握ってきたことと重なる。

似ている二人だが何か違うところもある。

その些細な違いが大きな要因となる。この二人への印象の違いの。

「お涙頂戴なこと、なあ彗、糸……？」

鼻で笑いながら隣にいるはずの女に話しかけるも、そこに見慣れた姿はなく。

そもそも部屋にいない。どこに行ったのか首を傾げているとパタンと扉がしまったのが聞こえた。

静かに部屋から出ると、しっかりとした足取りで何処かに歩いていく金髪頭が視界に入る。

「おい」

肩を乱暴に掴み強引にこちらを振り向かせると少しキョトンとした風に俺を見上げる。なんで呼ばれたのか分からないとも言いたげな表情だ。

「テメエは何を知っている」

挙動不審な態度、何処か不機嫌な佇まい、何もかもが知っている彼女と違っていた。まるで何かを知っているかのように、攻略法を知っているゲームをしているかのような振る舞いにずっと違和感が付き纏う。

彼女の瞳には得体の知れない何かが蠢いているようで気味が悪かった。

「……べつに」

「答えろ」

グツと肩を抑える手に力を込めるが、痛みを感じてないか呻き声一つ上げずに俺の目を真っ直ぐと見つめる。

俺の感情を、思考を探るように数秒見つめた後、少しだけ悩むそぶりをして観念したかのように息を吐く。

「……今日の夜、暇なら病院おいでよ」

「あ？夜這でもしろってか？夜のナースの本領発揮ですかア？」

諦めたような顔で夜のお誘いをしてきたのがムカついて更に力を込める。勿論それが性的なものでないのはわかってはいたが、その声と表情が無性にイラつく。

俺を巻き込みたくないと言っ強くと訴えるその目がどうしようもなく嫌だった。

超能力者の第2位である俺を心配し、巻き込まないようにと考えるその脳をぐちゃぐちゃにして殺してやりたい。

俺に優しくしないでくれ。

「んなわけねーっしょ、来たくないなら来なくてもいいよ？垣根くんには関係のないことだし」

「は？テメエふざけるのもいい加減に」

今度は殴ってやろうかと拳を握りしめるが、結局彼女にぶつけることはできなかった。

無駄なことだと分かっている。どんなに殴られてもこいつはヘラヘラと笑うだろう。気味の悪い異常者。

「あのお、お二人とも？私たちは帰宅しますが……」

拳を納めたところで誰かに声を掛けられる。

用事が終わり、帰るところと見られる中学生達が呆然と、または何やらキラキラとこちらに視線を向けるのに気がつく。

一瞬何にそんな目を向けているのか分からなかったが、天羽の肩においた手に視線が注がれているのに察する。これだからガキは嫌いだ。

「行く行く〜！ほーら、行くよ」

肩から離れた手を今度は彼女から握ってくる。手首を捕まれ、そのまま引つ張られるように中学生の輪に連れていかれると研究所から離れ、帰路につく。

研究所側から車回してくれてもいいだろうに、気が利かない組織だ。

久々に乗ったモノレールにはほとんど人がいなく閑古鳥が鳴いていた。

中学生どもが横一列で席に座り、俺たち二人は対面の席に足を組んで座る。

「ちょ、ちょっと待ってください、枝先さんは木山の元生徒で、その枝先さんたちがポルターガイストを起こしてるって言うんですか？」

移動の最中、簡潔にテレステイナに話したという話を教えると黒髪が大慌てで話に割り込んだ。

第3位が語った内容はシンプルなものだった。

木山春生が起こした幻想御手事件で第3位が彼女の記憶を覗いた時に見たという少女が、春上衿衣の持っていたロケットペンダントに挟んであった少女だったという。

そしてその少女は実験のモルモットだった。実験の影響で未だに眠り続けている少年少女達は哀れにも暴走能力者としてポルターガイストを起こしているとのこと。

「無意識以下での暴走か、推測通りだな」

ほとんどは推察通りで面白みに欠けた。だが木山に関しては少しだけ気になった。

そいつは今はまだ塀の中。頭のイカれた実験を世間に公表しかねない存在は上層部にとっては邪魔だろう。

死んでいるか一生塀の中かの二択。容疑者として名前が上がるのがおかしいのだ。

「いやーさすが垣根くん、ってスマホ返して！」

「あ？うるせえ黙ってる」

ムカつく言い草の天羽からスマホを取り上げ、勝手にネットに潜る。パスワードを解除されたことに少し驚いていたが、すぐに何かを理解するための息をつく。

この女のスマホのことならきつと俺の方が知っている。初期から入ってるアプリしか入れておらず、ほとんど手付かずの状態。壁紙が昨日の自撮りなのがムカつくが消去するのは後にしよう。

今はハッキングが先だ。

この女のスマホには未元物質ダイクマターで細工されたストラップがあるため、こつちの方がハッキングがし易い。それに加え俺の携帯じゃ足が付

く。何かを知っているだろうこの女のスマホならきつとバレても特に問題はない。そのため少々スマホを拝借した。

「仮説ですけどね」

「その子たちを見つけないことには何も分からないわね」

ぽちぽちと文字を打ち、ネットワークに侵入を試みる。ストラップの未元物質^{データマター}を介してこの世のものではないウイルスを送りつけると早々に引つかかった。

セキュリティがガバガバ過ぎる。こんなもんなら同僚の輪つか野郎に頼まなくても入り込める。

「見つけるったってどうやるんですか？」

「それは……」

「パソコンでぱぱーつとやっちゃえばいいんだ！初春の出番じゃない！」

ハッキング中でも中学生共はうるさく喋っており、何やら騒がしい。

「もちろん探します、探しますけど……春上さんの次はその友達を疑うんですか？」

「あんたいい加減にしなよー」

怒りを含んだ声が入り、ついスマホから目を話す。

少女達の間には先程から不穏な空気が漂っていた。

「はあ、ほんとガキはめんどくせえな」

「まーまー、いいじゃないの」

呆れながら呟くとほんわかとした声が隣から漏れた。

柔らかな微笑みながら少女たちを見つめてるその女の台詞は俺の思っていたものと真逆だった。

「あ？テメエなら喧嘩はやめろとか言いそうだけど」

喧嘩を止めに入りそうな女だというのにそれをしなかった。

「あたし喧嘩はいい文化だと思ってるよ？だって持っているのは自分の正義と怒りの感情でしょ？そこに悲しみがなければあたしは別になんとも思わないよ」

「お前って変なところズレてるよな」

「そりやどーも」

だがそれに突っ込むこともなく話を終える。スマホの画面に映されたその文字がその気力を無くしたからだった。

「褒めてねーよ。あ？木山ってもう保釈されてんのか」

「えっ?!垣根さん今なんて?!」

「だから、木山が保釈されてるって」

そう、木山春生はもうすでに保釈されていた。

彼女はこの街で自由を謳歌しているそうだ。

「あんな重罪を犯しておいて?!」

「ていうかどうやって情報を?!」

「ハッキング」

淡々と中学生の問いに答えて思考を始める。

今持っている事実で謎を解く。

「RSPK症候群ってAIM拡散力場の共鳴で集団発生するんだったか、あのジジイの論文にあったな」

「え?!知らない情報がわんさか?!ど、え?どういうことですか?!」

「は?あのジジイ、木原幻生の論文だったか、干渉された暴走能力者ってのは共鳴するらしくてな、同系統の能力者が共鳴して暴走するっつー話だ。例えばそのエレクトロマスターなら磁場を操る能力者と、電場を操る能力者が影響を受ける。ねずみ算式よろしく共鳴していくわけだ」

頭の隅にあったあのクソジジイの論文を引っ張り出し、脳内で内容を読み直していると中学生たちがワラワラと寄ってきた。うざったいことこの上ないが、仕方がないので一から丁寧に説明してやると感嘆の溜息が周りから上がる。

天羽に至っては正解だと言わんばかりに満足げに頷いていた。

「でも、木山って子供たちを助けるためにあんなことしようとしたんですよね?それなのにその子供たちを利用するっておかしくないですか?」

「……さあ、でも繋がってるのは確かじゃねえか?なあ、我が妹よ」
「次妹って言ったら病院出禁にする」

兄を名乗ったことにまだ腹立てているのか、妹と呼ぶと顔を青くして訴えてきた。

弱点を知ったようで少しだけ優越感が押し寄せる。

「ていうかなんでお兄ちゃんって嘘ついたんです？」

「女子中学生とヘンテコナスに囲まれる男が、他校、しかも同級生ですらないってどう考えても職質されるだろ」

「ああ、確かに」

適当に質問に答えながらスマホの履歴を消して天羽に返す。

……写真消すの忘れた。まあ、後でいいか。

「A I M 拡散力場の共鳴……10名の子供があの実験の被害者なのですのよね？それって下手をすればほとんどの学生が……」

「ま、ざっと八割は影響されるな」

「垣根くんは特殊すぎて影響されないね」

「俺様は特別だからな。褒め称えていいぞ？」

軽口を叩きあっているとモノレールが駅に停まった。

どうやらその駅は天羽が降りる駅のようで、立ち上がるとモノレールから降りてからこちらを振り返る。

「はいはい、そうだ、垣根くん、あたしは今日は別の病院に行かなきゃいけないから来るなら深夜にでも」

来なくてもいいけど付け足して彼女は駅の出口へ向かう。

一度も振り返りはしなかった。

「密会のお約束でも？」

「ま、そんなところだ。ガキは首突っ込むなよ」

モノレールは動き出す。

深夜まで、どうやって暇を潰そうか。

15話：夜の病院

完全下校時刻もとつくに過ぎた深夜のこと、俺は病院に向かっていた。

携帯を開き、再度メールを確認する。

もし来るのなら緊急外来の入口から来てね。

そう書かれた携帯の画面に舌打ちをすると病院の裏手に移動する。わざわざ緊急外来の入口と指定してくる辺り、なにかあるのだろう。一体何を企んでいる？

まあいい。たとえ罫だろうがなんだろうが、行ってみればいいだけの話か。

外来入口を見つけ、中に入ろうとすると後ろから車がブレーキをかけた音がした。

ぱつと後ろを振り向くと、そこには青いスポーツカーから下りてきた2人の人影があるのに気づく。

「君は……第2位……？」

「あ？木山春生か……御坂美琴も……」

スーツを着た女、木山春生と中学生らしい服装の第3位がスポーツカーから下りるとこちらを見て少し驚いた。

こいつらと会わせるのが目的か？いや、違うだろうな。木山春生はともかく第3位はおそらく勝手に来たのだと推測する。首を突っ込みたくなる性格なのは幻想御手事件レベルアップで把握している、大方木山春生が在籍していた研究所にでも行って木山春生に見つかったんだろう。

だが俺の目的はこの2人ではなく、怪しい行動を繰り返すあのバカだ。

「……着いてきてくれ」

俺に少し驚いて一瞬体が強ばった木山だったが、力強く緊急外来の入口を開けると第3位と俺に目を配る。

暗い病院に入り、エレベーターで地下へ。気まずい沈黙の中、音を立ててエレベーターが目的の階へつくとゆつくりと扉が開く。

エレベーターを降りた先にはガラスで隔離された小部屋があった。

その中には10人ほどの少年少女が真っ白な明るい部屋の中音も立てずに眠りについていていた。

「私の、教え子たちだ」

ガラスに手を当てて苦虫を噛み潰したような表情で小さくつぶやく。

「やっぱり、ポルターガイストを起こしていたのはアンタなのね」

「そうだ」

予測通り、元凶は木山春生で合っていた。だが、少し疑問が残る。幻想御手レベルアップバーのときにこの女は生徒を助けるためと事件を起こしたと話していた。そんなやつが生徒を使うか？文字通り人生を賭けてまでやったというのに？

「けど、それには複雑な事情があつてね」

ガラスの部屋の隣にあつたドアが突然静かに開かれた。その部屋から出てきたのは天羽の上司にあたるカエル顔の医者、そして天羽本人だった。

「電撃の使用は控えてね？病院だからさ」

いつものムカつく笑みを浮かべながら口元で指を交差させると今にも攻撃しそうな第3位を少し咎める。どこことなく怒りの感情が混ざっていた。

「いったい、何がどうなつてるのよ！」

責めるような声で第3位が叫ぶ。

「木原幻生、彼が全ての始まりなんだね」

ゆつくりと医者の口から人の名前がでた。その男、木原幻生の名を俺はよく知っていた。マッドサイエンティスト。あの木原の名を持つ頭のイカれた科学者。

沈黙が訪れたとき、天羽がガラスに足を運びながら静かに語り始める。

「絶対能力者6、神ならぬ身にて天上の意思に辿りつくもの、通称SYS

TEM」

「絶対能力者6……？」

突拍子もなく告げたその言葉の羅列は第3位には理解が追いつい

てないようだった。その言葉を、その存在をよく知っている者としては理解できないことが酷く羨ましく思える。

何も知らない、何も分からない、無知であることがどんなに楽な事か。

「この街の存在理由、目的、目標。絶対能力者^{レベ}つてのはこの街の研究者の最終目標ってやつなんだよ」

「まあ、そうだな」

改めてこの街の意味を確認されたが、元々知っていた身、特に反応することは何もない。

「そしてそれは木原幻生とて同じ。人間程度が神に届くと本気で信じている哀れな男」

彼女の口振りはどこまでも傲慢で、どこまでも力強く、どこまでも気味の悪いものだった。

たまに彼女が人間以外の何かに見える。

その傲慢さ、神かのような目線と態度、異常な慈愛の心、かと思えば自分自身に興味がない。

その思考が、態度が、違和感を感じさせた。冒瀆的で、奇妙で、気味の悪い何か。その性格はこの女の本質としか思えなかった。例えばこの女が全てを知っていても、知らなくても、きつと元よりそういう性格だったのだ。

その考えに吐き気をもよおす。名状しがたい感覚と、慄然たる考え。

この女は本当に人間なのか？

まるで何か得体の知れない生命体のよう。

「そして彼は調べ、考え、見つけた。暴走能力者の脳内では通常とは異なるシグナル伝達回路が形成され、各神経伝達物質、様々なホルモンが異常分泌されることを」

悪魔のような笑み。それはいつも見る彼女からは到底考えられない笑みだった。

「それらの分泌物質を採取して凝縮生成したもの、能力体結晶を生み出した」

善性と魔性、2つを持ち合わせた微笑みが子供たちの部屋のガラスに映る。

やっとこの女の底を掴みそうだったというのに。やっと理解ができるところだったというのに。

今の彼女は俺の知っているものと真逆だ。

正解が遠のいていく。

「能力者にそれを投与すると絶対能力者が生み出せる。そう思っただけでモルモットに与えたの」

怒りも愉悦も何もかも混ざったような声色だった。

「それに意識障害などの副作用があることを知っていても。それでも彼は実験をした。何人も犠牲者を出して」

そう答えると少しだけ怒気を含んだ声が変わる。

「あの事件に関わり、事の経緯を天羽くんから聞き、そして確信した。木山くんが救おうとしていた置き去りが能力体結晶の実験台にされたんだってね」

「あの時君達に話した暴走能力の法則解析用誘爆実験すらも方弁だったんだ。あれは能力体結晶の投与実験だった」

唇を強く噛んで呻きのような低い声が静かな部屋に木霊した。

彼女らの話は学園都市のことを考えれば有り得る話だった。というより、有り得ることだと感じさせるほどにはこの街はネジが一本どころか何本も外れている。

醜い都市の醜い現実。それ以上でもそれ以下でもない。

「そんな、絶対能力者なんて取っ掛りも見つかってないようなもののために……?」

その現実には少女は理解が追いつかなかった。

「そんなイカれた実験のせいで、この子達はこんなにされたって言うの?」

蚊のような細い声。

しかし、その声は一人の女に殺される。それが常識だと言わんばかりにその女は淡々と現実を突きつけた。

「だって、この世界の全てはこの学園の研究者にとってはモルモット、

ただのネズミ。それでも彼らにも正義があつてそれをしてる。それに変わりはない」

正義。

それがこの女を構成する。

自身が正義の名の下で妹とやらを助けるために全てを賭けた彼女にはそれしか残らなかつた。正義を成す妹が居なくなつた今、彼女はそれを他人に押し付ける。

彼女にとつて正義を成すものなら、彼女は助力を惜しまない。たとえそれが悪党だとしても。

虫唾が走る。

「僕にできるのは医者としてこの子達を救うことだけだ。幸い、全員を集めるのに時間はかからなかつた。僕はこの街では多少顔が利くからね」

カエル顔の医者がコホンと咳払いをして話を遮つた。

「あとは目覚めさせるために専門家の話が聞きたくてね」

「あたしが呼んだつてわけ。ま、いづれ連れ出す手筈だつたから早くなつただけだけどね」

してやったりとピースをして見せてくる。不愉快な面に少しだけイラツとしたので乱暴に髪を掴んで持ち上げて顔を覗き込む。

それでも彼女はニコニコとムカつく笑みを浮かべていた。

「テメエに一体なんの権限があつてそんな芸当出来んだよ」

「それは秘密つてやつだよ、垣根くん」

つま先立ちになりながらも笑顔でしーつと指を口に当てて何も聞くなとその薄気味悪い目で訴える。少し舌打ちをして手を離すと乱れた髪を整え始めた。

「無理を言ったのは私の方だ。あなた方には感謝している。ここの設備を使えたおかげでこの子達を目覚めさせる目処が着いた」

「じゃあ助かるの？」

「いや、別の問題が発生したんだね」

顔を伏せ、苦しそうに医者がつぶやくと補完するように今度は木山が答える。

「覚醒が近づくとA I M拡散力場が異常値を示した」
「能力の暴走か」

小さく呟くとそれに反応して天羽が頷いた。

「そゆこと。そしてR S P K症候群の同時多発を引き起こした」
「彼の研究は進んでいた」

複雑な表情を浮かべる医者が口を開く。

「僕の知っていた能力体結晶ではポルターガイストなど起こるはずが
なかったんだよ」

「だが、改良を重ねた能力体結晶はこの子達を眠りながらにして暴走
能力者にしてしまった」

「じゃあこの子達が目を覚まそうとすると」

「ポルターガイストが起こる」

起こして学園都市を海に沈めるか、永遠に子供たちを起こさない
か。なんとも残酷で皮肉なことか。

学園都市の闇、ムカつくほど悲惨な実態は嫌な悲劇を思い出させ
る。

「なにか、方法はないの？」

「ダメなら何とかできるんじゃないの？」

「買い被りすぎだよ、垣根くん。少しだけ電気信号を操って細胞の活
性化が促せるだけのあたしじゃ手も足も出ないよ」

残念そうに、悔しがりながら声を絞り出す。

「それに例え肉体を構成する全てを操れたとしても、一度に異常分泌
する全てのホルモン、神経伝達物質、その他もろもろを正常な数値ま
でに落とすことは困難だよ」

あたしじゃ、ダメなんだよ。

小さく呟くその言葉の数々に俺は違う考えが過った。

こいつは今なんと言った？

例え肉体を構成する全てを操れたとしても？

例え話、フィクション、嘘。それでも彼女が嘘を言っているように
は見えなかった。

もし、もしもこの言葉が本当だとしたら、この女は絶対能力者にな

りうるのでは？

今回の件でこいつは暴走能力者のデータを得ている。こいつは自発的に、理性を放棄せずに、暴走能力者になれる可能性があるのだ。もしもこの女が本当に肉体を構成する全てを操れるのだとしたら、自分で自分の肉体を操って、絶対能力者になることが出来るかもしれない。

そんな女が、プランに組み込まれてないなんて思えなかった。

「彼女を責めないでくれ。彼女の協力もあつて暴走を鎮めるワクチンソフトの開発が予定より早く進んでいるのだから」

「じゃあー！」

様々な疑念が生まれ始める。だがそんな事お構い無しに話は続く。

「ただ、能力体結晶の根幹をなしているのはファーストサンプルと呼ばれる、最初期の人体実験の被験者から生成された成分。ワクチンソフトを完成させるにはどうしてもそのデータの解析が必要なんだ」

弱々しい声が木山春生の口から零れた。

「そのデータを探して昔居た研究所に行ってみたが結局何も残されておらず、君と鉢合わせしたってわけだ」

だがその目には決意と野心が見える。

「だが諦められるものか。あのデータは能力体結晶の研究に必要不可欠なんだ。それだけのものが廃棄されるはずがない。どこかに必ず。私はどんなことをしても必ず見つけ出してみせる」

「もし、見つからなかったら？」

「この子達は覚醒させる」

力強く宣言すると、第3位が声を荒らげた。

学園都市を敵に回すような木山春生の覚悟は彼女には伝わらない。

「ポルターガイストを承知の上で?!」

「これ以上この子達を眠らせては置けない!」

「だからって! そんな……!」

残念ながら、言い返せる言葉を彼女は持ち合わせていなかった。

それでも最良の結果を模索する。しかし、彼女には思いつかない。光しか知らないから。闇を知らないから。

「ご都合展開なんて訪れない。

「そう、そんなことはさせない」

そんな彼女の後ろからハキハキとした女の声が聞こえた。

薄い色素の長い髪の毛は高い位置でひとつに結ばれ、フレームのない眼鏡をかける女の後ろには何人かの部下と思しき人物らがいる。

「テレステイナーさんっ!?!」

先進状況救助隊の隊長と研究所の所長を務める女。

「ごめんね、後をつけさせて貰ったわ」

「一体……」

「先進状況救助隊です。子供たちを保護します。大人しく我々に従ってください」

MARがこの場に出てくるのに違和感を覚える。

ポルターガイストの元凶ではあるが、それを取り締まり、摘発するのはアンチスキルの役目だろう。なぜ、わざわざ救助隊が出てくる？

「MARが一体なんの用だよ。テメエらは災害救助が目的で作られた組織じゃねえの? こういったケースは別の組織が動くはずだ」

「学園都市に被害が出る事態を阻止するのがレスキュー隊の仕事ですから」

「レスキュー、ねえ?」

どう見ても怪しい。

「令状も用意しましたが、私としては自発的に引き渡して頂けることを望みます」

「本物のようだね」

「安心してください。我々は人命救助のスペシャリストです。能力者を保護し、治療するための設備は整っています」

本当に人命救助のためと言えるのか?

迅速すぎる行動、組織の目的とはかけ離れた言動。

どう考えてもおかしかった。

「あなたにアクセスできないデータも、我々であれば合法的にアクセス出来ます。今のお話にあったファーストサンプルのデータも入手できる可能性が高いのです」

しかしそれに従う木山春生でもなかった。テレステイナを睨み子供たちを庇うように身を構える。

だが、その視線を遮るよう彼女の前に御坂が立ち塞がった。大きく手を広げ立ちはだかるように立つ第3位。

挑むような目つきで木山を見据える。

「なんの真似だ」

「気に入らなければ邪魔をしろって言ったのはアンタでしょう？」

「どけ！あの子たちを救えるのは私だけなんだ！」

悲鳴に近い叫び声が鼓膜を揺さぶる。

「救えてないじゃない！」

突きつけられた現実^{レベルアップ}は心を裂き、木山は目を見開いた。

「幻想御手を使って、ポルターガイストを起こして！でも、1人も救えてない！」

「あと少し、あと一息なんだ」

消え入るような呟きだった。

諦めきれないと、絶望を受け入れまいと歯を軋ませながら顔を歪ませる木山はついこの間の天羽と重なる。

こいつも隣にいるこの女も、他人のために身を捨てる。人生を捨てる。

その思考が気持ち悪くて反吐が出る。

「枝先さんは、今助けを求めているの。春上さんが、あたしの友達が、彼女の声を聞いているのよ」

「救えないだなんて、研究者に対して面白いこと言ってくれるね？」

その間に天羽が割って入る。

悪魔のようで、天使のようでもある笑顔で穏やかに、しかし力強く。感情にブレが見えているが、爆発させないのはある程度の成長か。

「例え何があってもあたし達の手で救う。そのためにあたし達がいるんだから、今までの努力を否定しないで？お願い」

寂しそうな、現実を見たくないような目。

現実を直視せず、幻想を追い求める彼女は哀れで、醜くて、虫唾が走る。

俺を心配して、救うことに囚われている、弱い女。

姉だと言い張り、他人を救おうとし、自らを嫌い、自分が出来なかつた事を成したものに憧れ、赦しを与える。

とてもじゃないが人間なんかに見えなかった。

「さてと、令状がある限り、あたしに出来ることは少ない。まさかこんな早くに来るとは思ってもなかったしね。連れてつても構わないよ」
「ご協力感謝致します」

大きいため息をつき、道を開ける。

それでも何かを知っているような目つきは止めなかった。

「後でそちらに伺うと思うけど、その時はよろしくね」

2人の女の間奇妙な空気が流れる。

一瞬動揺したかに見えたが、すぐに笑顔を張りつけて後ろの部下たち目線を配った。

「……回収しろ」

はい、と短く部下たちが答えるとガラスの部屋に勢い良く突入し、子供たちをベッドごと移動していく。

数分が経った頃、部屋には呆然とした木山春生と複雑な表情をした御坂美琴、カエル顔の医者に俺、そして無表情の天羽しか残されていなかった。

16話：研究室

昨夜のゴタゴタからかなり時間が経ち、今はお昼前。

病院の地下にある青と紫が一切排除された禍々しい色の研究室の中で、真つ白い椅子に座りながらあたしは黒い液体を啜っていた。苦味が口に広がり脳を刺激する。

この世は甘味だけあれば事足りるというのになぜ人は苦味や辛味を求めるのだろう。苦痛でしかないというのに。

コーヒーを消費しないと新しく飲み物が買えないため、仕方なくそれを飲む。

苦い。

資料や本でごちゃごちゃした部屋の中、溜息をつきながら文字がびっしりと映っているパソコンの画面をボーツと眺める。英語で書かれているそれは昨夜連れ去られた子供たちの記録。能力を暴走させた時のホルモンや神経回路、血液循環についてなど、事細やかに体の変化が記されていた。

このデータがあれば、あたしはもっと強くなれる。1つづつ確認しながらスクロールしていく。

魔術も勿論諦めていない。しかし魔術を教えてくれる人がいない今、別方向で強化を試みなくてはならないのだ。

それは物理的な肉体強化。

暴走能力者のデータをそのまま自分に組み込んでしまえば絶対能力者はいかずとも、自身の能力強化に繋がる。そのためのデータは子供たちが提示してくれた。

治すために収集していたデータを勝手に使うのは少々ためらわれたが、あたしが皆を守るために必要なものだ。後悔と罪悪感を永遠に心に残してでもこのデータは使う。

しかしその子供たちはテレステイナーさんに連れて行かれてしまった。

治そうと手は尽くした。けれど無理だった。

治すのに必要なファーストサンプル、あれの力無しではあたしでき

え手が出せないのだ。

あたしの手では誰も救えない。

インデックスちゃんの時におこなったように「^{アンデッド}不死者」は遠隔からも肉体に干渉ができる。半径2kmまでは干渉可能だが、そこまで範囲を伸ばすと単純なことしか出来ない。

しかも一人一人違うように干渉することが出来る訳でもないのに加え、演算がムカつくほど複雑。

周りにある電化製品全てと繋がる事が出来るリモコンを想像して欲しい。たくさんボタンはついてるが、ボタンをひとつ押すと繋げた電化製品が全て同じ影響を受ける。

対象を選ぶことは可能、しかし対象となったものは全て同じように干渉される。それに範囲が遠いとそれだけ演算が複雑になってくる。

勿論近くにいた子達なら簡単に、そして複雑な干渉が出来る。

しかし、全て同じ結果になるのだ。

一人一人違うホルモン量、分泌量なのに同時に、同じ影響を与えると体に悪影響を及ぼす可能性の方が高い。

細やかな調整は可能だが、それが全員に同じようにされるのだ。性別、体格、脈拍、その他もろもろが皆違う。誰か一人を元にして全員に干渉するのは危険。

だからあたしは力不足だった。

「はあ、嫌になるなあ……」

自分自身に嫌気がさしながら思い返すのは昨日の夜こと。

昨夜テレステイナーさんに子供たちを預けたのは彼女には行動してもらったため。

アニメの知識があるとはいえ、それは断片的で完璧なものでは無い。子供たちがこれから移動される場所の外観は知っていても、場所を知っている訳では無いのだ。だからテレステイナーさんに子供たちを連れていってもらった。彼女に道案内をさせるために。

「おい、ちよつといい、か？」

思考の海の中、ドアノブを回す音が聞こえ、浮上する。

ノックもせずに勝手に研究室にズカズカ入り込んでくるのは昨夜

から木山と話し込んでいた垣根くん。

昨夜と服に変わりはなく、足首が見えるジーンズに、赤い半袖のワイシャツ。お高そうなスニーカー。

インスタに載つけたら5万いいねは確実なアウトロー系イケメン。美人と言った方が正しいのか？

口に出したら怒られそう。

「ノックは？」

「オマエ着替えたんだな」

「無視かあ……」

椅子に座るあたしをまるで不思議生命体を発見したかのように驚きに満ちた顔で見てくる。不思議に思うのも無理はない。

いつもはセーラー服のあたしだが、今日は私服を着ている。

理由は単純、今日起こることを危惧しての衣装替え。セーラー服はこの間の件でボロボロにしてしまい、新品を調達するのに手間取ったのでお休みしていただくことにしたのだ。ナース服も同様だ。あれ結構高いんだよ？

ドレッシーな光沢感のある真っピンクのへそ出しフリフリのカヤミソール。白いスキニーのズボン、茶色のベルトには銀色のチェーンがぶら下がっている。

靴は踵の高い足が見えるタイプのコルクの茶色いサンダル。

余談だがこの靴のおかげで今日は垣根くんとほとんど同じ身長だったりする。

そしていつものアクセサリー類。

そこまではいいのだ。

その全てを包み込むかのように着ているのは真っ白い白衣。

研究者のシンボルである白衣はいつもナース服かセーラー服の2択のあたしがきているのは少し珍しいだろう。

「研究者だったのか？」

「一応ここには研究者として在籍させてもらってるからね。ここは研究室兼自室」

「確かに、テメエらしい部屋なこと」

キヨロキヨロと部屋を物色するように見渡し、要所要所に置いてあるサボテンや観葉植物を手に取り始めた。

この部屋は緑とピンク、そして黄色で構成させている。そのため緑の植物や、ピンクや黄色の花々が置いてあり、プチ植物園状態。その他にもファンシーグッズが所狭しと置いてあったり、研究室には見えなかった。

「で、なーに？(´▽`)よーけんは？」

「昨夜について、少し話でもしようじゃねえか？」

「……なにについて？」

目を細め、睨むようにあたしを見てくる。普通の人なら怖がるかもしれない。けど、あたしは違う。

例えどんな目を向けられようと、あたしは姉で居続ける。揺るぎない信念。

あたしを構成するただ一つの役目。誰かを救い、赦すこと。

姉としての、役目。

「いや？ただ、何やら愉しそうだったからな、仲間にも入れてもらおうかと」

鋭い眼光に嘲笑うかのような声色。

「愉しそう、か。確かに愉しいかも知れないな」

コーヒーカップを机に置き、目を瞑る。スニーカーが床を擦る音が聞こえると目の前に人の気配がした。

「反吐が出るほどの善人が、患者を前にして愉しいだなんて、職務怠慢もいい所だな？」

「未知への探究心、それもあたしを構成するひとつだよ」

ゆっくりと瞼を開くと目の前に机にもたれかかった少年がいた。天使のような翼を持つ少年。

残念ながら今はその翼は隠されているが、微かに白い羽と同じような匂いが鼻をかすめる。

未元物質^{ダークマター}、神の住む天界の力。

その匂いは香水の匂いと合わさって不思議なものへと変わっていた。

「タブロイド思考に苛まれるテメエが探究心？面白え冗談だな」
「あたしの探究心は絶対能力者⁶についてだよ。子供たちへの実験ではない」

悪戯好きな少年はあたしのコーヒーを机から奪うとちびちびと飲み始める。

コーヒーは好きなようで、美味しいそうに口をつけていた。

「神ならぬ身にて天上の意思に辿りつくもの、か。テメエは神にでもなりてえのか？」

「まさか、傲慢で理不尽で人を愛さない神なんてクソほど嫌い。神様嫌悪症なの」

笑みを浮かべ少年を見る。

長身に比べ少し幼い顔は可愛らしく恐怖に彩られていた。動揺し、硝子のような黒目は少しだけ小さくなっていく。

その顔も可愛らしい。けれど一番見たいのは喜びに満ちたような笑顔なのだ。

「そんな神に人間如きが成ろうだなんて笑えるでしょ？」

昨夜のように愉色を見せ、怖がらせないようにするも逆効果。

さらに警戒心を強められてしまう。

「……興味あるのかデイスってんのかハッキリしろよ」

「あたしも神への反逆に加わりたいだけ」

疑うような視線に疲れ、溜息をつきながら言葉を続ける。

「あたしは神なんて大嫌い。でもね、そんな神を目指そうとする人間が愛おしくてたまらないの」

あたしは神の存在を本能的に理解していた。いや、知っていたのほ
うが正しいか。

もしここが本当に別世界と呼ばれるものならば、あたしがいるのは
神の仕業という事になる。

この世界でもまだ異世界への行き来は不可能なのだから。

再び目を瞑り、瞼を開く。

目の前の垣根くんは何やら面白い顔をしながらあたしを見下ろして
いた。

何かを言おうと彼が口を開きかけたその時、ドアをノックする音が部屋に響いた。

「どーぞー」

間延びした声でドアの向こう側へ声をかける。

真つ白いドアが開くと、そこには花飾りが似合う少女、初春飾利と目の下に隈をこさえた大人の女性、木山春生が立っていた。

「お取り込み中ですか？」

「んーん、ご要件はー？」

椅子から立ち上がり、彼女達の元へ向かう。垣根くんもあたしのマグカップ片手に着いてくるが、あたしへの疑いは晴れていないようじつと頭上で睨んできている。

「あの、今からM A Rに資料を届けにいきましょうと思うんですけど、こつちにも資料があるらしいので……」

「あー、取りに来たんね。はいはい」

要件を理解するとパソコンのデータをUSBに入れる。データを入れ終わると白衣を脱ぎ、ドア付近のピンク色のハンガーラックにかけて彼女にUSBを手渡す。

「一緒行くよ」

「わかりました！一緒行きましょう！」

「あ、そうだ、病院の入口で待っててくれない？あたし先生に外出のこと言ってくるから」

M A Rの方に行くのは分かっていたが、この後はどういうスケジュールだったか。

木山さんと楽しそうに近くのエレベーターに乗り込む初春ちゃんを眺めながら、もうほとんどない記憶を必死に思い返す。

超電磁砲1期の最後らへんだったか。初春ちゃんがジャツジメントの支部に戻って、御坂ちゃんがM A Rの本部へ行って、そこでこの病院に入院。そこから支部に戻って決戦だっけ？あれって時間経過どんな感じなんだろ。

いまいち覚えてないな。

というか最近、原作関連の記憶を忘れていつている感じがする。

ちゃんと見てないから当たり前か。

妹がここに入れば何がどうなるのか教えてくれるだろうに。

でもあたしの隣に彼女はもう居ない。

「垣根くんは？」

「……いや、いい」

マグカップを未だ持ったまま睨むような目付きであたしを見下ろしている。

瞳の奥、蠢く嫌悪があたしに向けられた。

「そう？じゃあ研究室閉めちゃうから外出てくれる？」

「は？何言って」

でも、あたしはそれに興味はない。彼の嫌悪も何もかも、知っていてもあたしのやるべき事は変わらない。

姉として、全てを助け、救い、赦すこと。姉というものはいつだってそんな役割で、下の者を包み込んで見守らなくてはいけないのだ。姉の役目を全う出来なかったから、今回は完璧に姉でなくてはいけない。

誰に嫌われようと、誰に貶されようと、あたしは姉であり続けなくてはいけない。

「垣根くんパソコン触るでしょー？それはダメですー」

垣根くんを優しく部屋から追い出し、ガチャんと扉を閉める。電子ロックを施し、自分のIDでしか開かないようにすると彼に向き直る。

「はいロック完了〜！ハッキングしたらすぐに分かるから入っちゃダメだよ〜！」

物凄く嫌そうな、残念そうな顔をしながらマグカップ片手に舌打ちをしてくるが、仕方の無いことなのだ。我慢してもらいたい。

スマホとは違い、あのパソコンには藍花悦のデータが入っているのだ。

あたしとの関係性についてデータは残してないので見られること自体は構わないのだが、彼の技術力で後でデータを辿られて真相に近づかれるのはかなり困る。

先生に頼んで彼を監視しておいてもらおうとしよう。

「んじや、いつてきー！」

スマホを取りに一旦ナースステーションの知り合いに話しかけて、病院の出口へ。

入口には初春ちゃんと木山さん。

ちなみにスマホをナースステーションの知り合いに預けていたのは垣根くんのストラップがあつたから。

あたしはこの病院の地下にスマホを持ち込んだことは無い。それは垣根くんがくれたストラップが盗聴器の可能性があるからだ。

あのスマホはダミーでほとんど使っていないので電話の盗聴は無意味に等しいが、この病院内は違う。

あたしの正体、あたしが藍花悦であることを知っているのは学園都市に片手で数える程度は存在する。

その内の一人がカエル顔の医者、冥土帰しだ。

彼との会話を盗聴されるのは非常に困る。そのため、何も知らないナースステーションの知り合いに預かってもらっているのだ。

たわいもない話をしながら3人でM A R へ向かう。歩きで向かっているのはここから結構近いから。

最初は木山さんの車で行けばいいのと思ったが、彼女が車で行動すると時間が少々おかしなことになってしまうので辞めてもらうことにした。

あたしの記憶が正しければ、M A R に行ったあと、泣きながら走ってきた初春ちゃんから話を聞いた御坂ちゃんがM A R に行くので、車で行くのと初春ちゃんが1人になるのはありえない状況になる。

本当は2人ともM A R に行かせたくはない。泣かせたくない。

けれど木山さんが居ないとテレステイナさんが囮作戦を使わないうし、初春ちゃんがいないとそもそも木山さんが来ないだろう。だって言い出しっぺは初春ちゃんなのだから。

M A R の研究所へ辿り着くと入り口から中に入り、テレステイナ

さんの元へ。

ロビーでどこにいるか聞き出すと、そこへズカズカと歩いていく。通路の先、薄い髪色の女性の後ろ姿を見つけると軽く声をかける。それに気づいた彼女は胡散臭い笑みであたしたちの方へ振り返った。軽く状況を説明して書類を手渡すと、綺麗な顔が一瞬だけめんどくさそうな表情を浮かべる。

「まあ、それでわざわざ今までの研究資料を？」

中身を見もせず書類を脇に挟むとこちらに笑顔を向けた。

それに笑顔を返すと少しだけイラつとしたのがわかる。

「それで、あの、枝先さんたちに会わせてもらいたいですけど……」

「残念だけど無理ね」

微妙な空気が流れるあたしたちの間に背の低い少女が割って入ってくる。

飴のような甘ったるい声がテレステイナーさんに掛けられると、空気が軽くなり再び笑顔を貼り付けた。

「子供たちは移送することになったの。ここよりも設備の整ったところに行くのよ」

「どこの施設ですか？」

「それを教える訳にはいかないわ。あの子たちのことはこちらに任せちゃうだい？ M A R が責任をもつて治してみせるわ。ああ、そうそう、春上さんも一緒だから」

何かを隠すような笑顔でさらりと言葉を返す。

本性を知っているあたしからすればこの人話を逸らすの上手なくらいにしか思わない。

「え？ どうして？」

「だって、ずっと探してた仲良しのお友達なんだもの」

初春ちゃんの疑問にこれまた素敵な笑顔で返事をし、言葉が続ける。

「一緒に居たいんじゃないかな？」

「でも」

抗議の声を上げようとした友達思いの少女を遮り、その女性はポ

ケットから何かを取り出した。

この間も見せた市販のマーブルチョコの筒。

ポンと軽い音を鳴らし、フタを開けると初春ちゃんに手を出すように促す。

「選んだ色が出たら春上さんでも子供たちでも合わせてあげる」

突然のことに初春ちゃんは言葉を詰まらせる。

何も答えず混乱している彼女に痺れを切らすと、短くため息をついて筒を振って音を鳴らす。

「仕方ないわねえ、じゃあ黄色にしとく？」

勝手に色を決め、少女の手に一粒のチョコレートを出した。その色は明るく華やかな黄色とは真逆の落ち着いた茶色だった。

「あらあ、残念！茶色！」

「からかわないでください！」

喉を鳴らして笑うテレスティーナに噛みつくように声を荒げるが、それでもテレスティーナはおちよくなるような喋り方をやめない。

「あら！私は真面目よ！」

小馬鹿にしたような表情で肩を竦めると、脇に挟んでいた書類を床にぶちまけた。

偶然にも意図的にも見えるその仕草はなんとも薄気味悪い。

「あらあ、ごめんなさいねえ」

そうはいうものの、落としたUSBをハイヒールで踏み潰す。

バキツと嫌な音を立てて粉々に破壊されたUSBはもはやデータを移行する機能を無くしていた。

「でも、どうせこんなデータ、役に立たないから」

嘲笑うように言い放つ。

「役に立たないかは見てからじゃないとわかんないよ、ね、木原さん？」

「あら、私のミドルネーム、ご存知なのね？」

木山さんと初春ちゃんを守るように立ち塞がり、目線を下に向けた。背が近い彼女と目が合う。

「木原……っ？」

「あなた達は知らなかったのね。私のフルネーム、テレステイナ＝木原＝ライフラインよ」

一族全員にマッドサイエンティストという末恐ろしい家系。その名字を聞くやいなや木山さんが彼女に掴みかかる。

「き、貴様あー！」

彼女もあたしが守るべき人の一人、痛みを感じさせる訳にはいかない。殴り掛かる木山さんに振り下ろされる拳を盾として彼女の代わりに受け止めると、衝撃が走る。

なんとか木山さんが受けるはずだった痛みを代わりに受け止める。痛みは感じないが、衝撃により肺から空気が漏れ出す。床に体が叩きつけられると、鈍い音があたりに響いた。

「天羽！」

「天羽さん！大丈夫ですか!？」

ケホケホと少し咳き込むと木山さんと初春ちゃんが駆け寄ってくる。まるで心配しているかのような表情は私の意図するものとは違っていた。

痛みを知らなくて済んだことに喜んでいて欲しいのに。傷つかなくて良かったことに安堵していて欲しいのに。

なんで泣きそうな顔をしているの？

「私たちが忙しいの。そろそろお引取りを」

初春ちゃんは泣きながら何処かへ走り去り、あたしも木山さんに手を引かれて走りながらわけも分からず病院へ戻ってきた。

病院に着くと、木山さんは一人で研究室へ向かい、閉じこもる。不思議な行動にキョトンとするが、すぐに興味は別のものに移る。

自分の研究室へ繋がる廊下にある休憩用のソファとテーブルに背の高い少年とカエル顔の医者が談笑しているのが見えたからだ。

「よお、おかえり」

なにやら御機嫌なのかニタニタと笑いながら頬杖を着いている垣根くん。

先生に監視を頼んだのは正解だったようで、スマホには電子ロックへのハッキングの形跡は通知されていなかった。

「先生、垣根くん変なことしてませんでした？」

「いいや？締め出された後からずっと話し込んでいたんだね？」

良い子にしていたようで一安心。

だが、彼には少し頼み事があるのだ。ちよいちよいと手招きしながらStand Up!と言うと渋々といったように立ち上がる。

「んじやま、垣根くん借りますねー？」

目線がほとんど一緒の彼を掴むと、そのままエレベーターまで歩き出す。

「は？おいつー！どこ掴んでやがる！」

「どこって、襟？」

「やめろ！伸びる！」

パシツと手を叩かれ、襟を離すと舌打ちをしながらエレベーターに乗り込みボタンを押し始める。慌ててエレベーターに乗るとウィーンと音を出しながら扉が閉まった。

「あのさ、ちよつと手伝って欲しいの」

嫌がり顔を驚きに塗り替えながら垣根くんがボソツと何かを呟く。

「手伝って、欲しい……？テメエが……？」

「え？なんでそんな驚いてんの？」

驚愕に染まったその顔はあたしとしては少々不本意であり、そんな顔をされる理由が思いつかない。

何がそうも驚かせたのか一切わからない。

「いや、人をお願いするような女じゃねーだろ」

「だって、あたしパソコン苦手だからさあ」

確かに誰かにお願いをすることはほとんどないが、こればかりは仕方がないのだ。

あたしは電子機器に疎い。

もちろんwordやexcelなどの基本的なものは出来るし、元の世界、もしくは現実世界の人間程度のこととは普通に出来る。が、ハッキングとなったら話は別。そこまでのことは範疇外だ。

そもそもの話、あたしは情報工学などがあまり好きじゃない。発見をしていく生物学とは違い、作っていく工学系は苦手だ。

「パソコン?」

「垣根くんならどーせ知ってると思うけど、テレステイナさんって木原の姓を持つてるんよ。それで大体理解できるっしょ?」

「ああ」

神妙な顔をして静かに頷く垣根くん。エレベーターの扉が開き、一階へ降り立つ。

「MARの研究所から子供たちが移動させられるの」

「それで?」

「移送先に先回りしたいんだけど、場所わかるかなーって」

そのまま話をしながら向かうのは関係者用の駐車場。

「……俺はエスパージャーやねえんだが」

「ハッキングして?」

「堂々と犯罪宣言してんじやねえよ。仕方ねえな、貸しひとつな」

顔をヒクつかせるが、ため息をついて手を差し出す。何を意味するのかわからず首を傾げていると、イラついた声が口から溢れた。

「おら、スマホ貸せ」

「あたしの?」

「いいから貸せ」

駐車場につながるドアを開きながら、ズボンのポケットに突っ込んでいたスマホを取り出す。彼に手渡すとすぐさまロックを解除してポチポチと何かをします。

前回貸した時もあったがなぜこの少年はスマホのパスワードを知っている?あたしが弄っているのを見て記憶した?

そのスマホに情報はほとんど入ってない。強いていうならネットの履歴と画像、クラスメイトの連絡先程度だ。

それかスマホ経由でプロバイダーと回線事業者の情報を抜き取るくらいしかできない。それをしたって分かるのはあたしの名前と住所くらい。

書庫にも能力の簡単な説明と名前、写真しかない。

藍花悦もそう。あるのは強度レベルと名前だけ。学校名は愚か、性別も、姿も、能力も、家族構成も何もかも載せていない。

女子校に在籍させてはいるが、あたしに関しての資料は紙媒体のみ。学校のパソコンからあたしを調べることは困難だ。

彼はあたしの情報にたどり着けないはず。

「どれどれ……警備員アンチスキルの回線から周り込めばいいか」

「出来たん？」

作業が終わったかのような雰囲気を感じ取ると、彼の後ろからスマホを覗き込む。

ハイヒールのおかげで殆ど背丈が変わらないため、楽々と覗き見ることができる。嫌がる顔をする彼だったが、なんだかんだ攻撃してこないあたり危険じゃないと認識されているのか？

「出来た。ふたつあるな……どっちが本命か……こっちだな。たしかこの先に閉鎖した研究所があったはずだ」

「ありがとう。じゃあ行ってくるわ。鍵ちよーだい」

スマホの画面に映ったM A R本部の映像には一般車に偽造された輸送車が映っている。

M A Rの車両は木山さんを誘き出すための罠だったはず。そこまです算に入れるとは恐ろしい少年だ。

「バイクの鍵！返して！」

それはそれとしていい加減彼に奪われたままの鍵を返して貰わねば。

手のひらを見せながら催促するが、何を言っているのかわからないと言った風に目を丸くする。

「俺が運転するし」

「垣根くんは連れていきませんー！」

彼を危険な目に合わせる訳にはいかないのだ。

たとえ彼があたしより強くても、それを認めてはいけない。なぜならあたしは姉だから。

姉という生き物は、いつだって強くなくてはいけないのだ。

それは全てに該当する。垣根くんも、インデックスちゃんも、上条

くんも、木山さんも、御坂ちゃんも、初春ちゃんも、佐天ちゃんも、白井ちゃんも、テレスティーナさんも。

全ての人があたしの妹であり、弟であり、護るべきものなのだ。全てを守る為ならば、あたしは全てを捨てても構わない。

「じゃあ鍵は渡さねえ」

「ねえ!?!ふざけてんの!?!」

しかし、その気持ちは彼には伝わらない。

何故なら彼は強者だから。

それでもあたしは全てを守りたい。悲しみなんか知って欲しくない。痛みを知って欲しくなかった。

たとえばあたしが弱くても、それだけは譲れない。

「連れてってくれるのなら、返すけど?」

「……じゃあ歩くからいい」

仕方ない。ここは最善の選択をしよう。

彼を巻き込まない方法。それは彼の願いを聞き入れないこと。

「え?は?マジで言ってるの?」

「大マジ」

「拗ねんなよクソガキ」

拗ねている訳では無いが、クソガキ呼ばわりは少しだけカチンとくる。

「んまー!クソガキだなんて、お姉ちゃんに対して酷くない!?!」

「誰が姉だ殺すぞ」

「あたしですー!」

胸を張り、堂々と姉であることをアピールするが垣根くんはジト目になりながら溜息をつく。

何言ってるんだこの女はといった哀れみの籠った目だが、ここで辺に言い返すと惨めな気持ちになるので口を閉ざして彼の発言を待つ。

「……はあ、飼い主は寛容じゃなきゃいけねえからな、返してやるよ」

「だーれが飼い主じゃー!」

「え?俺」

おとぼけ顔で当然のように言ってくる彼にイライラが募る。

彼があたしを犬に例えることが何よりも嫌いだった。犬、それは動物のこともあるが、配下という意味もある。

あたしが誰かの下であると言っているようで気分が悪かった。あたしは姉でなくてはいけないのに。

「お姉ちゃんはあたし！」

「年下がふざけたこと抜かしてんじゃねえ！」

「もー！我儘なんだから！」

「それはテメエだろうが！」

ひとしきり言い合った後、ゼエゼエと荒い息をあげながら改めて垣根くんと向き合った。

手を突き出し、鍵を求めるが相変わらずの仏頂面で頑なに拒否続ける。

「……はあ、とりあえず鍵、返して」

「ついて行っていいなら返してやるって言ってるんだろ」

さては意地になってるな。

こうなったらテコでも動かない。それはもういない妹から学んでいた。

生意気で姉の気持ちなどわからない彼女はいつだってあたしの側にしようとした。どんなに他人に偏見を持たれてもあの子はあたしの側から離れない。

あの子への思い出と愛情が迫り上がってくる。もう二度と会えないというのに。未練タラタラで女々しいことこの上ない。

でもこの後悔が、思い出が、悲しみが、記憶が、罪が、感情があの子を証明するただ一つの証拠。

決して忘れてはいけないあたしの罪。

彼女を救えなかったことへの罪はあたしが永遠に後悔し、他人を助けること。

あたしは姉なのだから。

「……じゃあ、あたしの後ろでナビして。あたしコンピューター苦手だし」

「ま、それでいいや」

本当は彼を連れて行きたくない。

でも、こうでもしなきゃ彼はきつと鍵を返さない。返してはくれない。

いつだって全てがうまく行った試しがない。幻想御手の時も、イン

デックスちゃんの時も、妹の時も、今も。

介入した全ては運命通りに進んでいる。

どんなに運が良くとも、結果がともわなければ意味がない。

あたしはそういう星の下で生まれてしまったのだ。

そしてその理不尽なる運命からあたしは逃れようと必死に歩む。

「後で返せよ」

「いや、あたしのなんすけど」

この子、さり気なくバイクの所有権を奪おうとしてない？

……それもいいか。どうせ姉のものは全て下の子に渡されてしまうのだ。

バイクくらい、渡したって困りはしない。

「てか、木山はいいのか？あの女もついて行くだろ」

「彼女には言わないよ。先に行っておいて不安要素を無くしておきたいの」

鍵を受け取り、エンジンを掛けると空気を大きく吐き出すようにモーターの音が駐車場に響き渡る。

ヘルメットは被らずにバイクに跨り、彼を後部座席に促す。

邪魔な髪の毛を簡単に下の方に二つに結んでいると、低い声が後ろから聞こえた。

「……テメエらしくねえな」

何を企んでいる、と唸る彼はさながらライオンだ。後ろから刺されないといいが。

手元が狂って垣根くんをバイクから振り落としかねない。彼を怪我させるのは何があっても避けたいのだ。

「残念だけど、近接戦闘と盾以外であたしができることは少ないからさ。カーチェイスは無理なんよ。だからせめて子供たちの安全確認と不安要素の排除くらいしないとね」

と、それほいことは言っているが、実際の目的は二つ。もしあるなら研究所にデータを回収すること、そしてテレスティーナさんに木山さんではなくこちらを狙わせること。

後者の方がメイン。だから視認性を高めるためにヘルメットはつけない。

本当は垣根くんにはつけていて欲しいのだが、姉がつかないものは妹もつかないという法則の下、彼がつかないのはわかっていたので強制はしていない。

今回の事件は少々めんどくさい。

記憶が確かなら、この事件は2チームに別れる。木山さんの車で研究所へ向かうチームと、MARの足止めをするチーム。

本当はどちらにも行きたい。しかしあたしは二人もいない。どっちにもいけない。

なのであたしはどちらにも行かないことにした。

つまるところ誘導作戦。

あたしが彼女らよりも早く行動することでMAR、そしてテレスティーナさんをあたしの方に向かわせる。

そうすれば木山さんや御坂ちゃんの方には追っ手がこないことになる。

成功するかは分からないが、成功すれば誰も傷つかない。

今度こそ守れる。

あたしは^{死なない}不死者。

だからこそ、あたしが全てを引き受ける。

「成長してきてるじゃねえか駄犬」

「次に犬扱いしたら出禁」

軽口を叩き合いながらアクセルを押し込む。

熱い空気を打ち消すように心地の良い風が体を通り抜ける。

誰も傷つかない夢を見て緑色のバイクは前に進んでいく。

17話：カーチエイズ

「絶対能力者⁶？」

冷たく硬いベッドの上、幼く可愛らしい少女が鈴のような声で自分を見下ろす老人に話しかける。

身に纏う病衣は純真無垢な彼女を表すように濁りのない科学的な白で染められていた。

「そうだ、絶対能力者⁶だ。お前は学園都市の夢になるのだよ」

「まあ！おじい様！私がこの街の夢に！」

頬を赤く染め、何も知らずに歓喜に酔う少女の眼前が何かによって暗闇となる。

取り付けられた機械は管を伸ばし、一つの瓶に集結される。何も分からぬまま、何かが起きようとしていた。

「そう、その礎にな」

真つ赤な血液は管を通り、フラスコに流れ着く。

ピチヨン、ピチヨンと一滴一滴が瓶の中にこぼれ落ち、それはいつしか結晶となった。

能力体結晶。

赤く光るその宝石は彼女にとって何よりも大切で、何よりも尊ぶべきものだった。

「yellow marbleよりmarbleリーダー、報告します。緑色のバイクに追跡されていることが確認されました」

その少女は今や立派な女性となった。

彼女、テレステイナーナ||木原||ライフラインは紫色のアーマーに身を包みながら部下の報告を確認する。

薄暗い機械の中で彼女は通信をとると、綺麗な顔を醜く歪ませた。

「緑……？誰が乗っている」

「金髪にピンク色が入った女と茶髪の男です」

送られてきたデータを確認すると、見覚えのある顔ぶれがそこに写っているのが分かる。

その人物に心当たりがあった。

自分を睨むように見ていたあのナースとその兄を名乗る少年だ。特にあの女の視線は気味が悪かったのでよく覚えていた。

木原ということを最初から知っていたであろう女が、自分に鋭い目つきを向けるのも無理はない。

しかし不思議だ。何故部外者であるその兄弟がいち早く自分たちの行動を把握したのか。

その答えは見つからぬまま、部下に報告を続けさせる。

「……あの兄妹か。了解した。それで、brown marble、そっちはどうだ？青い車は着いてきているか？」

「予定通りです」

「ならばbrown marble、誘導が終わり次第速やかにyellow marbleの援護へ迎え」

何もかもが思い通りに進んでいる。ムカつく兄妹がしやしり出てきてはいるが、それも彼女にとっては脅威ではない。

今一番彼女が目の敵にしているのは第3位のレールガンと子供達の保護者である木山春生。それ以外は眼中になかった。

だからこそ、彼女は調べようとしなかった。

天羽彗糸という女と、天羽帝斗と名乗った自称兄の少年の素性を調べることはなかった。それに後悔するも既に遅い。

念を入れて調べておけばよかったと思いつつながら舌打ちをして確認をしていく。ある程度現状の分析を完了すると力強い声で部下に指示を出す。

まるで女王様のように振る舞う彼女を咎める従者はいない。

「さて、茶番の時間は終わりだ」

罨にかかった哀れなモルモットたちを監視衛星から覗き見る。

子供たちを救おうと必死になるその姿が彼女にとっては愉快で堪らない。

「そろそろフィナーレと行こうじゃないか」

妖艶なその声は誰の耳にも届かなかった。

ところ変わって高速道路。23学区へ繋がる道を緑のバイクが猛スピードで突き抜ける。

ヘルメットも付けず、二人乗りで爆走するそのバイクは蛍光緑の車体にベタベタとシールが貼られていた。

そのバイクに乗るのは二人の男女。

運転している女はバイクに乗るには動きにくそうなピンヒールでペダルを踏んでいた。

彼女のくせ毛は太陽を反射して金色に光っており、ピンク色に染まった毛先は空の青さをさらに引き立てていた。

少女というには大人びている彼女、天羽慧糸は後ろに向かって大きく叫ぶ。

「次は?!」

風に掻き消されない強い声は後ろに乗っていた少年の耳に入る。

追っていた車はもう遠く見えなくなっており、いちいち少年に道順を聞かなくてはならなかった。

今回ばかりは20歳ではない自分を酷く呪った。自動車免許を取れていれば、スポーツカーでも買って追いかけたというのに。

だが例え彼女が車で追いかけていたとしてもきつと撒かれていただろう。

なぜなら追っていた車両はレスキュー隊のもので、学園都市の技術で作られたものなのだ。彼女が好む他国の有名なスポーツカーでは到底追いつかない。

「左」

ぶつきらぼうに答えた少年はバイクの後ろに足を組みながら悠悠自適にのんびりと欠伸を噛み殺す。

安全性などまるでない座り方の少年を慧糸は少し心配に感じたが、彼はこの学園都市に7人しかいない超能力者^{レベル5}第二位の垣根帝督なのだ、その心配は杞憂で終わる。

しかしたとえどんなに強い相手でも身を案じてしまうのが天羽慧糸という女であり、それは垣根に対してでも変わらなかった。

「はあ、にしても誰も追ってこないね」

「つーか、やけに静かだな」

それもそのはず、今この場には彼女たち以外に車も何もいなかったのだ。

そしてその静けさは次に何が起こるかも暗示していた。

奇妙な静寂の中、かすかな音の違いを感じ取る。

音が耳に入った瞬間にアクセル全開で道路を走り抜けると、バキツと嫌な音が地面から聞こえてくる。

ピシツと道路に亀裂が入ると、それは線となり一直線に彼女たちに向かってくる。

亀裂の下から大きな音を立てて黄色と黒の警戒色が目に悪い大きなロボットが現れた。

四角く、6mくらいはありそうなそのロボットの肩の部分には灰色でMARと刻印されていた。

「面白い、もっとも、そのくらいの方がぶっ殺しがいがねえもんなあ!？」

そのロボットからは狂気に満ちた一人の女の声が響いてきた。

それがテレスティーナのものであると理解すると、垣根が彗糸の背中を強く叩く。

「おい」

「わかってるー！空飛んで逃げてもいいんだよ?」

更にスピードを上げ、ロボットから遠ざかろうとするも、車と同等、またはそれ以上の馬力をもつロボットからは逃れられない。

少し離れたと思ったらまた距離が縮まる。

窮地に陥っている彼女らだが、彗糸自身は内心喜んでいた。

それはロボットがこちらに向かってきたからである。彼女は賭けに勝った。

元々、テレスティーナをこちらに誘き寄せるのが目的だった彼女なのだ、喜ぶのも無理はない。

しかしその喜びよりも先に後ろに座る少年に声をかけてしまうのは彼女の性格故か。

「誰にモノを言ってる、俺が逃げるわけねえだろカス」

「せめて怪我しないようにね！」

「わかってるっつーの」

軽く言い合いながらも高速道路を走る。

背後から近づいてくるロボットが無ければありきたりな兄妹喧嘩にししか見えないが、ここはこれから戦場と化するのだ。和気あいあいとした空気は場にあつてなかった。

「オラオラー・命懸けで逃げねえと！ペシヤンコになっちまうぞ！」

その光景に苛立ちを覚えるとテレスティーナはマイク越しに声を荒らげる。

声はバイクを運転する隼糸の鼓膜を揺さぶる。

「テレスティーナさん……」

「あ？テメエはあの女も赦すとも言うのか」

悲しそうな声色が垣根を苛立たせる。

唸るような低い声は天羽隼糸への嫌悪と警戒が入り混じっていた。

「彼女に正義はない、だからこそ、あたしは正しく導かなくてはいけないの、だつてあたしは——」

「姉だから、か？」

マイナスの感情を向けられながらも姉である彼女は物怖じせず、断言する。しかし言い切る前に垣根は勝手に言葉の先を当ててしまふ。

少しの間とはいえ、彼らはお互いを誰よりも理解していた。それは他に彼らを理解する人がいないからでもある。

秘密の多い少年と、秘密の多い女。

誰も知らないことを彼らは少しだけ知っていた。

他の誰も踏み込んだことのない領域を少しだけのぞいたことがある二人。

だからこそ他のものより少しだけ互いを理解していた。

他は0しか知らない世界で、彼らだけは互いの1を知っていた。

たったそれだけのことが彼らをトクベツにした。

「大正解！あとでなんか奢ってあげる」

「これ程までに正解したくなかった問題がかつてあつただろうか」

「反語やめい！」

猛スピードで緑色のバイクが駆け抜ける。モーターの音が空気を震わせ、体を駆け巡る。

「テメエの能力は肉体干渉！近接戦闘しか出来ねえ無能が！しやしやり出てんじゃねえ！」

テレスティーナの叫び声がスピーカーを通り、彼らの耳を劈く。

その叫び声に垣根が反応すると、スピードをあげたバイクのタンデムシートにゆっくりと足を乗つけた。

黒く分厚いシートの上に優雅に立ち上がると、キャラメルのような茶色い髪が凄まじい勢いの風に靡いて顔を隠す。黒檀のように黒く美しい瞳は真つ直ぐ機械の中に体を隠すテレスティーナを射抜いた。

「俺を忘れてもらっちゃ困る、なあ？テレスティーナⅡ木原Ⅱライフライン」

「ああん？大能力者^{レベル4}だったか？テメエに何ができるってんだ？」

鼻で笑われても気にもとめず、垣根帝督は優雅さを保ったまま威風堂々たる姿で黄色い玩具を見据える。

「改めて自己紹介させてもらおうか、俺はこいつの兄なんかじゃない」
嘲笑うかのように薄く笑った彼はか弱い少年と呼べるものではなかった。

強さからくる余裕の笑みは科学者に少しの警戒を与える。

「超能力者^{レベル5}序列2位、未元物質^{ダークマター}」

圧倒的強者と呼ぶに相応しい佇まいで自らの名を高らかに宣言した。

「垣根帝督だ、以後お見知りおきを」

「未元物質……！」

その事実は酷くテレスティーナを動揺させる。

油断大敵とはこのことだ、と少し自傷気味に心の中でテレスティーナは悪態をつく。

彼女は調べることを怠ったのだ。その怠惰が今、脅威となって立ち向かう。

それも最悪の形で。

「未知を操る俺に、ただの玩具がどう戦うってんだ？」

「はっ、だからなんだ？ 学園都市のモルモットであるテムエらが、研究者に適うとでも思ってたのか？」

それでもまだテレスティーナは勝ちを確信していた。

モルモットと研究者、それは相容れない存在で互いの強さを象徴する単語。

彼女が研究者である限り、モルモット風情に負けないというのが持論だった。

たとえそれが幻想であるとしても。

「うぜえことこの上ねえな。おい、こつち左だ」

「りよーかいー！」

スピードをもろともせず、綺麗な円を描いてバイクは左にターンしていく。

「おい、greenmarble、そっち行つたぞ、潰せ」

「こちらgreenmarble、現在警備員に——」

その先にいる自身の部下に通信を入れると、ノイズがかかった声が流れた。不審に思い、監視衛星を使い状況を確認し始める。

「あれ、初春ちゃんから電話だ、垣根くん取つて」

同時に慧糸のスマホにも着信を知らせる電子音が鳴った。

シルバーグリーンのスマホを取り出し未だ立ち続ける垣根に片手で渡すと、彼は手馴れた様子で通話ボタンを押した。

チャラチャラとりボンなどのアクセサリーが着いたそのスマホは、

彼が持つにはすしだけファンシー過ぎたようで、苛立ちながら彼は電話に出た。

「あ？ なんだよ。はい、こちらおバカなナースの電話ですがー？」

「か、垣根さん!? あの一！ なんですそこに天羽さんというんですか！」

スピーカーモードにされたスマホからは飴のように甘ったるい声が聞こえた。その声の主は風紀委員の1人、初春飾利。ジャッジメント

彼らの安否を気にして電話してきたようだったが、垣根の低い声に少し驚き一瞬言葉が詰まる。

「それは俺が聞きてえ。んで、何の用だ。こちとら取り込み中だぞ」

「あ、あの、あのですね！警備員が足止めをして下さっているのを教えようかと……！なのでそっちの道は今安全です！」

物怖じせずに要件をはつきりと伝えるが、それでもやはり少し怖いのか声が震えていた。

特別垣根が怖いというわけではない。しかし彼女の人間としての本能が電話越しの不機嫌な声に恐怖を感じるのも事実。

結果として彼女は木山春生の青いスポーツカーの助手席で涙目になりながら通話しているのだが、それは垣根にはわからない。

「ねえ！そっちはどうなってるの！」

バイクを運転しながら隼糸は後ろに向かって声を張り上げる。

見かねた垣根はバイクの上にしやがむと、スマホを彼女の口元に持っていく。その行動は優しさからではなく、声のポリウムに苛立ったからであるが、その感情が能天気な女に伝わることはない。

ありがとうと笑顔でいうその姿にさらに苛立ちを覚える。

「木山先生とそちらに向かっています！追っていたMARは白井さんが片付けちゃいました！」

「怪我人は！」

「え、い、いないと思います！」

「ならよし！」

彼女の報告に笑みを見せると、しゃがんでいるのがつらくなってきたのか垣根は立ち上がり通話を終わらせる。

あまりにも唐突な行動に彼女は少し狼狽えたが、手元を狂わせないのは前世からのバイク経験の賜物なのか異常なほどの器用さ故か。

「あーはいはい。切るぞ」

「えっ、ちよっ！」

気まぐれな猫を彷彿とさせる少年にもはや呆れとため息しか出ない。

「垣根くん、あんまり辛辣な態度取っていると嫌われちゃうよ？お姉ちゃん心配だなあ」

「あ？」

姉であることに酷く拘るその女は年上であるはずの垣根でさえ「守

るべき対象」として認識してしまう。

それが彼女の性質であり、本質。たとえ天変地異があろうとも、姉^{見守}でありナース^者である彼女はその考え方を改めない。

きつとそれは彼女が自らと向き合わない限り、変わらない。不変な感情。

それが変わる時、彼女は彼女でいられるのか。それは神でさえ知る由もない。

「つちー役立たずのゴミ共が！だったら自分でやってやる！」

「華麗なハンドル捌き期待してるぞ？」

「はいはいー」

強烈な存在感を放つ黄色いロボットから声が聞こえた瞬間、凶悪的な速さで何かが迫ってくる。

ロボットの腕だと思われるそれをいとも容易くハンドルを制御してかわしてみせ、そのままのスピードを維持して走り続けてしまう。

彼女の運転はレーサーと勘違いしてしまうほど見事なもので、なんならその心持ちも命がけのレースに参加する人と同一のものとなっている。

もはや彼女の脳はジェットコースターに乗っているのと同じくらいこのドーパミンを分泌しており、競うことに一種の興奮さえ覚えている。

元々彼女はそういうものだった。

最愛^妹の女性を救う事に人生をかけた狂人だと思われがちだが、彼女は他の面でも頭の螺子が二、三本抜けていた。

ついこの間、垣根とシューティングゲームをしたときだってそうだ。ただの少女が、人を殺す事に長けている少年に銃で引き分けるはずがないのだ。異常な器用さ、そして豪運。

武器と称するものならなんでも扱えて、それが勝負事なら尚更興奮するのも彼女の狂人的な面でもあった。

そもそもの話、妹を救うというゲームにのめり込んでいた彼女が今現在キャラクターを救うというゲームに命をかけているのが何よりの証拠だ。

自動書記の奥に隠れ見えた悍しい未知の領域に興奮していたのもその一環だろう。

彼女は神の手にも余る狂人だった。

「チヨロチヨロとーいい加減諦めろー！テメエらがどんなに足掻こうが！ガキ共を助けることなんざ出来っこねえんだからよー！」

そんな器用な彼女は武器バイクを華麗に乗りこなすと後ろから降ってきたロボットの腕を躲す。

しかし、彼女のハンドル捌きがプロと匹敵するほどのものだとしても、彼女を殺そうとしている人にとっては目障りであることこの上ない。テレスティーナは喉を痛めつけてしまいそうなほどの大声がロボットに取り付けてあるスピーカーから流れ出る。

「どんなに難しいことでも、どんなに出来ないと言われても！科学者で！姉であるあたしは！足掻き続けなきゃいけないだつーの！お姉ちゃんナメンなよー！」

針のような言葉にも彼女は屈しなかった。

足掻き続けた先に何が待っているか分からずとも、彼女は永遠に足掻き続ける。

それが報われないと知っていても。彼女はそういう生物だった。

「その理屈はおかしいだろ」

だがしかし、彼女を未だ人間としてしか見れていない垣根は発言に理解を示さない。

たまに彼女を宇宙人か何かだと思ふことはあったが、彼は彼女を人間と認めていた。

だからこそ執着を生む。

理解不能な人間ほど恐ろしくて興味深いことを彼は知っていた。

「うっさいな！あたしは助けなきゃいけない！救わなきゃいけない！導かなくてはいけない！だってあたしは！みんなのお姉ちゃんだからー！」

彼の言葉に少しイラついてしまい、つつい大声で反論してしまふ。

その心の内をぶちまけるとそれを聞いた垣根は口から空気を吐き

出すように笑い飛ばす。

よほど面白かったのか、涙目になりながら笑うと背筋を伸ばして目を瞑る。

「っは、頭がイカれた女だ。だからこそ面白い。底が見えないからこそ、理解したい、解析したい」

小さな声で呟くが、その声は彗糸は届かない。

ため息をついてゆっくりと目を開く。

その先には黄色い標的しか見えなかった。

「テメエを解析する前にくたばられたらいい迷惑なんだよ。だからテメエの道は俺が開いてやる」

「テメエらに何が出来る？この機体はあくまでもレスキューのために作られたものだ！電撃も炎も水も！災害時を想定されて設計された！」

「それは常識の範囲内での災害の為の玩具だろ？」

その少年は神々しいほど白く光る3対6枚の羽を背中から伸ばすと自分よりはるかに大きいその黄色いオモチャを見下ろす。バランスの悪いバイクの後ろに優雅に立つ彼は宗教画に描かれそうなほど気高く美しかった。

「俺の未元物質ダークマターに、常識は通用しねえんだよ！」

「垣根くん！殺さないように！」

バイクを運転する彼女の忠告なんて気にもとめずに彼は背中に意識を向ける。

白い翼が大きく広げられると、三日月のように天に伸び湾曲する。

「テメエの玩具は、未知の光線に耐えられるかな？」

「なっ!？」

彼が手を上げると円を描くその翼の真ん中には手のひらに収まるほど小さな太陽が生まれる。

そしてその手を玩具に向かって振り下ろすと、太陽は無機物のような白い光線を黄色い物体に向けて撃ち放った。

レーザービームと形容するには禍々しく、破壊力が強すぎるその光の柱はロボットをまるでおもちゃのようにいとも簡単に破壊する。

勢いが弱々しくなると、光が消えていき、徐々に柱が見えなくなった。「いっちょ上がりだな」

「ちよ、ちよっと待って!? 垣根くんいつの間になんか技を!」

あまりの威力に思わず驚き、声を上げる。

彼女が驚いたのはそれだけでない。見たことのない攻撃に恐ろしさを覚えたのだ。

彗系が知っている垣根帝督という人間はどこかのゲームに出てきそうな破壊光線を打つような人間ではなかった。何故なら彼女の知っているアニメの世界、そして漫画の世界でそのような描写はなかったからだ。

「あ? インデックスが出した聖ジョージの聖域ってあったろ? あれを^{データマター}未元物質で再現したんだよ。見りゃわかんだろ」

「わかんねーよ!」

天羽彗系がこの世界に加わり起こした変化が、彼の糧となったのだ。

喜ぶべきことなのか彼女には分からない。しかしそれを考えるより先に彼女は焦りを覚えていた。

彼女が垣根と行動することによって生まれた違いが彼を強くした。その事実には彼女は恐怖する。きっと彼女は彼を力で止めることは出来ない。それでも全人類の姉として全てを救うと誓いを立ててしまった彼女は諦めはしない。

どうしようと悩むふりをしながら今後の展開を軽くシミュレートしてみるが、スーパーコンピュータ並の知力も演算力もない彼女が思い描く未来は陳腐で都合的なものだった。

「初めてやってみたが、なかなか上手くいったな」

鼻歌気味に自分の作り上げた惨状に満足するが、バイクに乗っている彼女はそうはいかない。

減速しながらも彼に文句の一つくらい言いたくなるのも当然の心理と言える。

「しかも初めてとか! こんな大事な時に実験ですか!」

「モルモットの^俺人生はいつだって実験だろ」

一度誰もいない道路の上で停止し、依然としてバイクの上に立ち続ける彼に着席を促す。

随分とご機嫌なようでニカツと悪戯つ子のような笑みを浮かべると素直にバイクに跨った。

「そーでしたね！すみませんね！」

「ほら、道は空いたんだ。とつとと行くぞ」

「なーんか、納得いかないなあ」

アクセルを捻り、エンジンを再び起動させると風を感じながら目的地へとバイクを走らせる。

生温い風が彼らの頬を掠めた。

18話：生命線

パソコンの光が眩しい狭い管理室の中、背の高い少年、垣根帝督と同じく背の高い女、天羽隼糸がカタカタとキーボードを忙しなく叩いていた。

「うーむ、データはあんま残ってないなあ」

ギシツと椅子を軋ませながらその場で伸びをすると肩を鳴らす。

徹夜続きのOLのようなその仕草は見た目と相まって大人びて見える。

彼女が今まで見つめていたパソコンにはError | Not Foundの文字がびっしりと詰まっており、誰から見ても八方塞がりなのがあった。

「パソコン苦手なんじゃねえの？」

彼女に目もくれずそう質問した彼は必死に青く光りを放つ画面と睨めっこしながらせかせかと指を動かす。

キーボードを打つ規則的な音は心地よく部屋に響く。

「簡単なことは出来るよ？ただ、ハッキングとかは無理、ていうかやったことないってだけ。そっちはどう？」

「深くまで潜り込んではいいるがプロテクトが硬いな。めんどくせえ」

舌打ちしながらも珍しく従順に隼糸の言うことを聞き、研究所の全貌を暴こうとキーボードを叩く姿はいつもの彼とは思えない。

「無理なら休んでてもいいよ。酷使させちゃったし」

「あ？無理な訳ねえだろ第2位だぞ」

「無理しないでね？」

その珍しい姿に少々恐怖的な意味でドキドキしながら彼に話しかけるが、鋭い睨みですごまれるとそそくさと目を逸らす。大抵誰かがいつもと違うことをしていると、それは決まって何か良からぬことを考えていることだと彼女はよく知っていた。

変なことやらかしたらちゃんと呼らなきや、と心の中で決意をすると同時にあることを思い出す。

「あ、そうだ、キャパシティなんたら！」

「あ？」

それはほとんどない前世の記憶に埋もれていたキャパシティダウ
ンの存在。

「テレスティーナさんが開発したっていう演算妨害音響装置！多分こ
こに着いてるでしょ？アナウンスマみたいに流せるようにしてそうだ
からさ、解除して？」

ニコニコと垣根に頼み込むと舌打ちしながらも解除し始める。

悪態をつき、キーボードをカタカタと打つ。イライラしている彼の
タイプ音はどことなく大きく、力が籠っていた。

「注文が多い女だな。モテねえぞ」

「うーん、モテないか。そういうの興味無いからなあ」

乾いた笑いを漏らしながらぼーっと垣根のタイピングを見つめる。

その目には家族への愛情に近く、得体の知れない愛情があった。

「狂人の上に恋愛感情無しか、ますます人外じみてるな」

「恋とか性とかあたしはやっちゃいけない、知っちゃいけない。知っ
たらあたしはここに居れなくなる気がする。……何言ってるんだろ、あ
たし」

天羽慧系の人外じみた感覚は、その思考からくるものもあった。

慈愛と博愛の感情しか持てない彼女は、恋愛や性愛など微塵も興味
がなかった。興味を持つてはいけないと、無意識のうちに自分に暗示
をかけていた。

それは恐怖からくる暗示。愛に溺れて全てを救えなくなるという
恐怖。

人に恋をする龍もいれば、人と情事に及んでしまう天使もいる。

人外だとしても、恋というのは当たり前のこと。しかしその当たり
前が彼女にはできない。

確かに無性愛者や非性愛者というものもある。だが彼女はそれに
当て嵌まることはない。

元々彼女にはその感情があったはずなのだ。

しかし最愛の少女を救うと決めたその日から封をした
無意識のうちに封をした感情は彼女の精神を狂わせる。

いつしかそれが当たり前になったのだ。

「あ？恋をしちやいけませんってどこのアイドルだよ。卒業予定はねえーのかよ？」

「卒業予定は永遠にないかな」

くすくすと冗談に余裕の笑みを返すとさらに垣根の眉間にシワが寄る。

「女よりお姉ちゃんだから、そういうのはしちやいけないの」

「聖女気取りか？夜中に襲われても知らねーぞ」

彼の言葉にはいちいち棘があり、その心情は決して良いものではない。

垣根帝督という少年は天羽彗糸という女に3つの感情を抱いていた。

一つは人間とはかけ離れたその精神に対する激しい嫌悪感。

二つは自分が見つけることのできない秘密に対する執着心。

最後は珍獣を手元に置いておきたいという気味悪い保護欲。

得体の知れない彼女へ対する感情は綺麗なものではなかった。

「実の姉をそういう目で見る人はいないでしょ？」

「はあ……いつか痛い目見るぞ」

「大丈夫、痛みなんか感じないから」

狂気が宿った光のない赤茶色い緑の目は恐怖でしかなかった。

その気色悪い目から視線を外し、そっぽを向いて話を続ける。

「女として色々失ってんな」

「お姉ちゃんだから」

「そうじゃなくてよ……」

その異常な思考に彼は胸焼けのような感覚を覚える。

グロテスクな彼女の考え方は彼には反吐が出る代物だった。

「あ、でも安心して？ちゃんと垣根くんも皆大好きだから」

「ほんと頭イかれてんな。テメエはさながら宇宙人だな」

「宇宙人……間違っではないかも」

「はっ」

宇宙人という単語がストーンと腑に落ちる。

彼女は今でも疑っていた。この世界はまやかしなのかと。実は水槽に浮かんだ自分の脳が見ている夢なのではないか。実は高度なVRゲームの世界なのか。

実はこの世界が本物で、今まで生きてきた世界が夢だったのか。実は神が作った世界で、自分はただのキャラクターなのか。

実は地球そっくりな別の惑星に飛ばされたのか。

切りがないほどの「もしも」が彼女を苦しめる。

だからこそ宇宙人という言葉がしつくりときた。

宇宙人、いるかもわからない幻想で、フィクションの中ではよく地球を侵略する得体の知れない知的生命体。

今の彼女は確かに宇宙人と言えるのかも知れない。

実際は違うとしても。

「それよりも解除できた？」

「できた。木っ端微塵に破壊しておいたから、二度と使えねえ」

それはそうと話を戻すと、ニヤニヤと垣根がキーボードから指を離す。

そのままその指でこんこんと画面を叩く。その画面にはCapacit y Down Brokenの文字。

解除する程度で別に木っ端微塵に壊さなくてもいいじゃないかと思う隼糸ではあったが、やってしまったことは元に戻せない。

「いいこだね、よーしよしよし」

「ぶっ殺すぞ」

しかし良い働きをしてくれたのも事実。お姉ちゃんとして大型犬を撫でくりまわすように垣根の髪を乱雑に撫でると手を叩かれる。

悲鳴の代わりに、可愛げがないと愚痴を溢すと今度は頭を軽く叩かれた。さすがに2回も叩かれるとは思ってなかったようで、驚いて固まってしまう。

妹に拒絶されるのと同じくらいのダメージが彼女に与えられていたが、そんなことを垣根が気づくはずもなく。呑気に彼女に話しかけた。

「つたく、テメエも研究者ならこれくらいできるようにしろよ。遅れ

てんな」

「……研究者ってだけでなんでもできると思ってたっしやる？」
呆れたように彗糸の方に振り向くと、青筋を立てる彼女が立っているのが見えた。

未だ心にダメージを負いながらも垣根に返事を返すが、それでも彼は呆れ顔を浮かべ続ける。

「できねえの？」

「できるか！」

「それで、もうやることねーの？」

「スルーですか！」

微笑ましい喧嘩が今まさに始まるうとしていたその時、複数人の足音が管理室の外側から聞こえてくる。

バタバタと騒がしくなると、突然大きな音を立てて扉が開く。

「天羽先輩！垣根さん！」

勢いよく開いた扉の先には走ってきたのか肩で息をする御坂美琴と、その後ろには彼女の友人たちが不安げに立っていた。

「来たね、お転婆ガールズ。」

「なんで2人がここに！」

「まあまあ、落ち着いて？」

ズカズカと怒りながら御坂は管理室の中にいる天羽に近く。むくれ顔で睨んでみるが「お姉ちゃん」には効かない。

膠着状態なその間に白井黒子がずいっと割り込むと御坂とは違って呆れた目を向ける。

「外にいたMARが倒れていたのですが、あれはどなたが？」

「2人でちよろーっとね」

グツスリ寝てたでしょ？と微笑むこの女はやはり危険だ。可愛らしい風紀委員の脳内に警報がなる。

ちよつとなんてものじゃない、と彼女は先ほど見た光景を振り返った。

この研究所の警備として配置されていたと思われるMARたちはすべてが無力化されていたのだ。

完璧な無効化。誰一人として致命傷はなく、すやすやと眠っていたのだ。

大能力者^{レベル}とはいえ、MARは訓練をしている屈強な人間の集まりだ、それを全て自分も相手も無傷で無力化するなど、普通の人間にはできない。

その裏に少しのトリックとたくさんの嘘が隠れているのは彼女は知らないとはいえ、結果だけでも白井が警戒するのには十分だった。

「それで、子供たちの居場所は分かるか？」

続いて初春飾利と佐天涙子を連れた木山春生が管理室に入ってくる。

不安げな表情が彗糸の眼に映った。

「それなら垣根くんが……」

「あー、そうだな。今この施設内で、1箇所だけ消費電力が桁違いの場所があるからそこじゃねえの」

木山の問いに他のものよりも機械に疎い彼女が答えられることはできず、未だに機械をいじる垣根に話を振った。

つまんなそうに頭を掻きながら管理室の一番大きいパネルに指をさす。

この施設の消費電力がリアルタイムに映されたその画面にはびつしりとよくわからない数字が敷き詰められている。

「最下層ブロックか……」

「わ、私達も行きましょうー！」

木山がそれを確認すると大急ぎで部屋を出て目の前の階段を降りていく。

それを見て慌てて中学生たちが同じように階段を降りていくが、高校生二人組はじつとその光景を眺めてるだけで何もしない。

「階段降りるのダルい……」

それもそのはずだ。目の前にある階段は最下層ブロックまで続いているのだ。

そしてこの層と最下層までには何層も挟まっており、一種の高層ビルのような作りになっている。

現実的でなんだかんだ合理主義な二人にはその非合理的で現実味のない長い階段に冷ややかな笑いしか出てこない。

「だからって飛び降りんなよ」

「垣根くんはいつからテレパスになったんですかねえ……？」

どうせ大気圏から落ちても死なない丈夫な体を持っているのだ、と考え手すりを掴む。しかし大きな手に頭を鷲掴みされその行動は始める前に阻止されてしまった。

苦笑いしながら彼を見上げる隼系であったが、垣根の珍しい怒り顔に一瞬動揺を見せると手を柵から離してしまう。

それでも階段を使いたくないのか冷めた目でもう一度階段に視線を向ける。

「でもさあ、コレは嫌でしょ」

「エレベーター、あつたはずだ」

「天才じゃん」

垣根の一言で虚ろな目を輝かせると早く連れて行けと目で訴え始めた。お姉さんというより年相応の少女的な面が残っていたかと思えばかり安心するとエレベーターへ足を進める。

それに続き隼系もエレベーターに乗り込むと5分と経たずに最下層へと辿り着いてしまう。

エレベーターの扉が開き、最下層へ足を踏み入れる。

大広場のように広く、機材に囲まれたその部屋をぐるりと見渡すと丁度木山たちが階段から降りてきた。

「見つけた……！」

「春上さん！」

部屋の奥、階段を少し降りたところにある広いスペースに何個も設置されているカプセルのような機械は赤い管のようなものが中央のカプセルに繋がれている。オレンジ色の半透明なガラスに覆われたカプセルの中にはテレステイナによって移送された子供達が眠っていた。

その子供達の入ったカプセルを束ねるように上段に配置してある一つのカプセルに初春と佐天が近寄る。中には寝息をたて目を閉じ

ている春上衿衣が横たわっていた。彼女の無事を確認すると、辺りを確認すると言つて佐天が部屋から飛び出していく。

彼女が扉を通つたその時、嫌な音がどこからか聞こえてきた。

「なんだこの音……」

「キャパシテイダウン?!」

その瞬間、モスキート音のような不快な音がその場に響く。

頭をかき乱すような不愉快なノイズに御坂は心当たりがあった。

近頃スキルアウトが能力者狩りなどというイカれた遊びをしていたのを知っていた彼女は、同時に彼らが能力を無効化するのに使用している機械のこともよく知っていた。

開発者がスキルアウトに横流しし、情報を集めていたその装置の名前はキャパシテイダウン。

つい先ほど開発者本人に話を聞いていた彼女はこの音を流した犯人もよく理解していた。

「この、クソガキ共が……!」

研究所の奥からガツンガツンと重い装甲で床を一步づつ踏みしめながらその開発者がゆつくりと近づいてきた。

紫色の駆動鎧（バードスーツ）に身を包み、ノーフレームの眼鏡の奥に野心を持った青い目を光らせて、薄い色素の綺麗な髪を揺らしながらその人、テレスティーナ（木原）ライフラインが現れる。

低い声で心底憎むように少女らを睨み付けると、突然の事態に混乱していた彗系の元へ向かう。

「さっきの礼だ!」

「つうぐ、っは」

なぜ垣根がシステムごと破壊したキャパシテイダウンが動いているのか必死に考えていた彼女の腹にテレスティーナは重い蹴りを入れる。

演算が乱れるこの状況で彼女に成すすべはなく、壁に蹴り飛ばされてしまう。骨が軋む音と痛みに苦しむ彼女の呻き声が悲劇を知らない少女たちの耳にこびり付く。

「先輩!」

「だい、じょーぶ、だから、ね？」

隼糸本人に外傷は見られないが、内臓と肋骨の何本かは負傷したように痛覚を正常に戻していた彼女は腹部を抑えながら肩で息をしていた。

口から赤い液体がポタポタと流れ落ちる。それでも笑顔を作ってみせるのは彼女の狂気からなのか健気さなのか。

「撃強った本人者じゃなく天羽弱を狙う辺り、クソ雑魚だな。チンピラ風情が」

「っは、言ってるクソガキ」

うるさいノイズに顔を顰めながら垣根はテレスティーナを見下ろす。

しかしその言葉に怒りを頭にするほど彼女も幼稚ではない。鼻で笑い飛ばすと、そのまま歩みを進める。

「キャパシティダウンですね！御坂さんが言ってた！能力者だけを苦しめる音だっつて！」

「なんだ？それがわかった所でどうするってんだ」

春上が眠るカプセルに近づくと、それを守るように初春が前に出た。

少しばかり足が震える彼女だったが、それでも勇気を振り絞ってテレスティーナの道を塞ぐ。

「確か、改良型は大きくて固定したスピーカーを移動できないって！」

「ああ、だがこれは施設に着けてるものじゃない」

ため息をついてテレスティーナは話を続ける。

「どこの馬鹿だか知らねえが？この施設のキャパシティダウンのシステムをど丁寧に未知のウィルスで破壊しやがってな？これは劣化版だ。だから動けはするだろう？」

「なるほど……垣根くんはちゃんとやってくれたと……」

「テメエ信用してなかったのかよ」

血を吐きながらも、隼糸が口を開く。ふざけた口調ではあるが、彼女はいたって真面目に垣根が嘘をついていると思っていた。

忘れがちだが、垣根帝督という少年は暗部に所属している自他共に

認める悪党だ。彼女はそれを忘れてはいない。

テレステイーナが暗部と何らかの繋がりがあつたという描写がア
ニメ内にあつたと記憶している以上、ある程度は警戒していた。

もつとも、現時点では垣根は無意識のうちに暗部としてではなくた
だの少年として接しているのだが、彼も彼女も先入観からそれを理解
していない。

「つたく、ごちやごちやうるせーガキだ。せつかく良いもん見せてや
ろうつてのに。能力体結晶の完成っていうな」

前に立つ初春を押しつけ、カプセルに繋がれたパソコンを立ち上げ
る。しかし、青白い電流がその手を拒む。

「なんでよ」

演算がしにくい状況での電撃は不安定で、意図した場所に当たらな
い。

それでも彼女は今だに火花を散らしながら憎き研究者を睨みつけ
る。

「アンタだつて犠牲者じゃない！お祖父さんの実験台になって、能力
を暴走させられて、なのに！」

「犠牲なんかじゃねーよ。権利を得たのさ。私から生まれたこの種を
花開かせて——」

感情的な彼女の発言にテレステイーナは薄く笑うと、どこからか小
さな筒を取り出す。

いつも持っていたチョコレート菓子のではない、ガラスでできた透
明な小さい筒。

「絶対能力者⁶を生み出す権利をなあ！」

その中には真っ赤な宝石がキラキラと人工的な光に照らされて輝
いていた。

「それはまさか、ファーストサンプル……！」

「こいつはこれから、学園都市初の絶対能力者⁶になる！このガキ共の
力を使ってなあ！」

血のように赤い能力体結晶を愉しげに掲げると、ゴンゴンと春上の
入っているカプセルを叩く。

その光景に舌打ちしながら垣根は頭を掻きながら彼女を見下す。

「体晶、だったか？だが理解できないな。それを使った絶対能力進化実験は樹形図ツリーダイアグラムの設計者から絶望的な答えが出てると聞いたが？」

彼は知っていたのだ、彼女の研究について。

能力体結晶というその存在を風の噂で聞いていた。

能力をブーストさせる代物とは聞いていたが、まさかここで繋がるとは。そんなことを考えながら彼はその開発者に目を向ける。

「なあんだ、知ってんのか？なるほど？テメエはこっち側ってことか。教えてやるよクソガキ、いいか？研究者つてのはなあ、自分の目で確認しないと気が済まねえんだよ！」

「あー、やっと治った」

「あ？」

一触即発の雰囲気の中、低い女性の声が部屋に木霊する。

壁際でふらふらと目を閉じて頭を押さえながら立ち上がると声の主、天羽慧糸がテレステイナのもとへ行く。

「ごめんね、耳潰したから、何言ってるのか分からないけど、この子達を傷つけるなら、あたしが相手になる」

足音も、声も、何もかも今の彼女には聞こえない。

聴神経の遮断。蝸牛内の小さな有毛細胞の人為的な破壊。うるさい音が飛び交う中、彼女はそれをやってのけた。

何も聞こえなければ、演算を狂わせることはない。酷く単純で至極簡単な答えを導き出した彼女は丁寧に、そして静かに、演算の失敗なんて考えもせずに音を封じた。

彼女は死を恐れない。

ゆっくりと緑の瞳を開くと、まっすぐテレステイナを見る。

「は……う？」

「テメエまた何かやらかしたな？」

彼女の発言に誰もが驚きを隠せなかった。

耳を潰した、この女は確かにそう言ったのだ。

たとえノイズがひどくて音が止まないラジオがあっても、ノイズをなくすために破壊する人はなかない。

なぜなら物を壊すという罪悪感や後ろめたさが破壊衝動を抑制するからだ。

自身の身体を自ら傷つけるという行為はそれと同じ。痛みへの恐怖、罪の意識、それらが自傷行為にブレーキをかける。

しかし彼女にはブレーキが存在していなかった。

その異常な考えと行動に垣根は息を飲む。

目の前にいる少女は自分のことなんかどうだっていいのだ。誰かを救うためならその命も捧げる。

「演算妨害音響装置……だっけ？ならその音を聞かなければいいだけの事」

狂気を孕んだその女は悪魔のような薄い笑みを浮かべた。

「へー？肉体干涉能力がそこまで出来るとはな。書庫には書いてなかったが、テメエ何者だ？」

「だから、聞こえないってば」

ニコニコと笑みを絶やさずにテレステイナを見る。

二人して高いヒールを履いているが、少しだけ彗糸の方が背が高い。

「まあいい、テメエが何者だろうがどうでもいい。学園都市を壊滅させればいいだけの事だからな」

「ふざけんじゃないわよー！」

彼女たちの間に御坂が割って入る。

定まらない不安定な青白い電流をばちばちと放出しながら苦々しい顔でテレステイナに詰め寄った。

「学園都市にそんなことするのなら、総括理事会が黙ってないわよ!?なんでそんなことするのよー！」

「神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの、そのための学園都市だろうが！絶対能力者^{レベ}さえ誕生すりゃあ、こんな街用済みだろうがよお！」

何も知らない少女を嘲笑うとテレステイナは汚い真実を紡ぐ。

「そういや、テメエ面白いこと言ってたな？スキルアウトはモルモットじゃねえ？そうだ、スキルアウトだけがモルモットじゃねえ！お前

ら全員がモルモットだ！学園都市は実験動物の飼育場、テメエらガキは1人残らず、家畜なんだよ！」

「つアンタねえ！」

その真実に怒りで肩を震わせる御坂だったが、彼女を遮るように背の高い少年が前に出る。

スポットライトに自ら当たりに行くように前に出た垣根はピリピリとした空気を纏っていた。

「言ってくれるじゃねえか」

「な、羽……？」

純白の小さい6枚の翼を広げると、キツと研究員を睨みつける。

闇を知る少年は己の苛立ちと鬱憤の全てをその女にぶつけるつもりで口を開く。

「ならそのモルモットが牙を立てることを、身を持って知りやがれ」

「垣根くん！」

「いい加減、このうるせえ音を止めねえと、な！」

彼が腕を振りおろすと突風が突如発生する。

轟音とともに身体を通り抜けるその風はなんらかの機械に当たると派手に火花を散らしてショートした。

「しまっ、うぐっ！」

その機械が崩れ落ちたと同時に音が止む。

瞬間、銀色の細い棒がどこからか能力体結晶をもつテレスティーナの手に刺さる。それを見て瞬間移動能力者が安堵の表情を見せた。

突然の痛みに驚きと動揺が隠せないテレスティーナは演算機能が回復した御坂によつて、電磁波で部屋の奥へと飛ばされる。

テレスティーナの手から離れた赤い結晶は木山春生の元へ転がった。

「ふふふふ、あつはははは！もういい、わかったよ、テメエらこの施設ごと、丸ごと吹っ飛ばしてやんよ！」

部屋の奥の壁に激突したテレスティーナはゆらゆらと、青筋を立てながら彼女の背丈ほどある長い金属製の槍のような武器を取り出す。

タコの足のように放射状に伸びる複数のアームを先に携えた槍は

その先端から青白い球体を生み出す。

「こいつは第3位の能力を解析して作ったもんだ、テメエの超電磁砲より強力にな！」

「撃てるもんなら、撃ってみなよ！」

その光を少女たちに向けた矢先、バキツと強烈な音になる。

骨が折れる音にも似たその音は他でもないテレステイナーがもつ槍から聞こえてきた。

彗糸が槍をその怪力でへし折ったのだ。

「なっ！テメエ！ゼロ距離だぞ!？」

「あんの、馬鹿っ！」

彼女の蹴りが銀色の槍を真つ二つに折ると、そのままテレステイナーの懐へ潜る。

まだ光を発する槍をもう一度蹴り飛ばすと、今度こそ機能を停止させた。

「たかがあたしの命程度で全てが救えるってんなら、命くらい差し出してやる！」

その勢いでテレステイナーの腹部に膝蹴りが炸裂する。

脳のリミッター解除をされて怪力となった彼女の蹴りは骨をも折れるほどの衝撃を繰り出した。

「つぐはーうー！」

蹴りを入れた瞬間、彼女は同時にテレステイナーに能力を使用する。

メラトニンの分泌とベンゾジアゼピン受容体の刺激、即効性の睡眠薬を服用した状態と全く同じ症状を引き起こした。

結果として、手加減されていた彼女の蹴りがアーマーのみを砕き、その瞬間に強引に入眠させられた。他のものには蹴りの衝撃で気絶したように見えたが、実際は少しの衝撃と能力による強制的な眠りに落ちただけなのだ。

「ごめんなさい、痛いよね、苦しいよね、でもねこれはきつと因果応報って奴なのよ」

苦しそうに寝息を立てるテレステイナーの頭を優しく撫でる。

「テレスティーナ、アンタは自分の欲のために他人を悲しませ、痛めつけた。正義によるものではない以上、あたしはアンタを赦せない、赦すことができない、罪を背負ってあげられない。アンタは罪を自分で背負わなくてはいけないの。だってアンタは欲のままに行動したのだから」

優しく諭すような口ぶりは姉らしくも、天使らしくもあり、得体の知れない気味の悪さが滲み出ていた。

「おやすみ、テレスティーナ」

眠る彼女に笑顔を向けると、後ろにいる少女たちの方へ向き直る。

「よし、じゃあ子供達の治療にうつりますか。木山さん、皆、怪我はない？」

「あ、ああ」

「なら良かった」

彼女らの無事を確認するとホツとした表情を見せた。

先ほどとは違う姉らしい表情からはその狂気さは微塵も伺えない。

「テレスティーナさんはあたしが見てるからさ、治療プログラム作つてきな？」

「そ、そうさせてもらいましょうか」

そそくさと能力体結晶を持って木山たちが子供達の元へ向かうと、今度は垣根の方へ振り返る。安堵の表情から下の子を心配する顔つきになった。

「垣根くんも、怪我不い？」

「テメエなあ……」

「ん？」

ヒールのおかげでほとんど同じ身長になっている彼女には彼の表情がよく見えた。

頭を抱えていた彼は、突然ぱつと顔を上げ彗糸の肩を両手で大きく揺さぶる。

「自分のこともちったあ心配しろはドアホ！」

「え？なんで？」

ガクガクと上半身を揺さぶられながら困惑した表情をみせるとき

らにヒートアップし、今度は両頬を引つ張った。

「テメエはよお!!この口か!」

「らんれえ!」

「俺らじゃなくて自分の身を守れつつってんのワカンねえのか!?あ!?日本語わかりますかあー!」

必死に訴える垣根だったが、その訴えは彼女には理解不能だった。

「だ、だって、あたしだよ?心配なんてしなくていいよ?」

なぜなら彼女は「不死者」だから。

もう二度と死が訪れない彼女はその恐怖を克服していた。

だからこそ彼の考えがわからなかった。

一度死んだ命に、死なない身体。死の恐怖を消し去るには十分だった。

「テメエが死んだら困るって何度言わせりや気が済む?言ってみろやコラ」

「あたし死なないってば!あたしじゃなくて自分の心配して?垣根くんたちが怪我したら嫌だからさ」

笑顔で言ってみせるが、それが彼の神経を逆撫でする。

「テメエは弱者だろうが!黙って守られてろ!見てるこっちがヒヤヒヤする!」

「はあああ?お姉ちゃんは強いんですがあ?下の子はお姉ちゃんに守られてればいいの!」

それぞれがお互いの考えを伝えようと、理解してもらおうと必死になるが、二人して頑固なため進展はない。

「誰が下だ!この脳内花畑シスコン野郎!」

「まー!失礼ですこと!あたしはシスコンじゃなくて全人類のお姉ちゃんってだけですうー!」

「もつとダメじゃねーか!」

二人してムキになり大声で口論を始めると、それよりも大きい声が部屋に響く。

「二人ともうっさい!テレスティーナが起きたらどうすんの!」

「……中学生に怒られてんぞ、オマエ」

「……垣根くんだったって」

クーラーが効いた病院の一室。

個室となつてゐるその部屋のベッドには綺麗な女性が眠つていた。心地よいクーラーの風で女性が目覚める。

「う、こ、こは、」

「おはよう、起きた？」

ベットから上半身を起こすと、一番最初に目に入るのはベッドの隣の椅子に座る不良じみたナース服の女。様々な国の血筋が混じつたような不思議な顔立ちの女性は優しい笑みを浮かべていた。

そしてその後ろには警戒するようにベッドの中の女性を睨む背の高い美しい少年。

彼らに見覚えがあつた。

「テメエら、は」

「おはよう、テレスティーナ」

テレスティーナが先ほどまで敵対していた子供達の内二人、天羽隼糸と垣根帝督。

しかし彼女たちが誰なのかわかったが、肝心なことはテレスティーナには分からなかつた。

「なんでテメエらがここにゐる？ 私は警備員アンチスキルに……」

それは彼女がなぜここにゐるのか。

テレスティーナは理事会の手から離れ、大々的に違法行為をした。総括理事会の後ろ盾がない今、彼女は逮捕されているはずなのだ。それなのに拘束も手錠も彼女にはつけられていない。

「それは特別な権限つてやつでなあなあにしてもらったんよ」

「……なぜ？……ここはどこだ、目的はなんだ、テメエは何者だ」

「その前に、一応伝えておくね。アンタが拉致った子供たちは、無事木山さんの手により救われた。彼女は成し遂げたんだ」

笑顔の彗系がテレステイーナには天使よりも悪魔に見えて仕方がない。

得体の知れない恐怖がテレステイーナの脳を圧迫する。

「だからなんだ？」

「んで、最初の質問に戻るけど、ここはうちの病院のVIPルーム、つまり今のアンタは患者」

淡々と質問に答える彗系。

その口調はどことなく楽しげだ。

「あ、安心して？……ここには盗聴器とかないから。スマホも持ってきてないしね」

「んなことあどうでもいいんだよ、何が目的だ」

「この病院で働いて欲しいの」

突拍子も無い提案だった。

「テレステイーナ、アンタには才能も知識もある。それを正しく使ってほしくてさ」

「何言ってるんだテメエ？」

「さっきアンタに赦せないって言ったけどさ、なにも100%赦せないって訳じゃないの」

寂しそうに、けれどどこか懐かしむように彗系は言葉を続ける。

「アナタの気持ちも分かるからさ。不要と言われ、研究しか道がなかったああなたが、よく分かる。あたしも、研究しか道はなかったし、世界に不要と言われたから」

どこか遠くを見るように窓に視線を向ける彼女の高校1年生とは思えないほど大人びた表情はテレステイーナの心を揺さぶった。

天羽彗系はちゃんと研究を理解していた。何を使って成果を出し、何を犠牲にしたかも。

けれども、彼女にとっては些細なことだった。

何せ彼女も昔は科学者だったのだ。

何百、何千というモルモットを殺し、ラットを殺し、虫を殺し、猿を殺した。

彼女は人間しか愛していない。動物など殺したって心はゆらがない。

だからこそ、誰よりもモルモットを使い潰す木原の心情を理解していた。

探したい、見つけたい。

その一心で情のない他の生物を殺してきた。

その矛先が人間でも、彼女にそれを否定することは出来ない。

彼女も同じことをしてきたのだから。

彼女は決して善人ではないのだ。

「だから、あたしの所において。研究という快楽を貪ることのできず、他人を救うことしか許されない病院に。あなたの才能と知恵、正しく使おう？きつと、貴方は正義をなせるから」

姉に甘えたい、頼りたい、そのようなありえない感情が心の奥で芽生え始める。

「テメエ、頭イカれてんのか？」

「うん。そうみたい。よく言われるよ」

「自覚あるのがタチわりいな、クソ」

理解ができなかった。

気味が悪い女を理解なんかしたくなかった。

それでも無意識に姉を求めてしまう。

「そうだ、あたしが何者かって話だけど、改めて自己紹介させてもらおうね」

相変わらずの笑顔で彼女は言葉を紡ぐ。

「あたしは天羽彗糸、それ以上でも、それ以下でもない」

嘘だらけの自己紹介だったが、その嘘に気づくものはない。ここにはない。

悪魔のような天使の笑顔を携えて、彼女はテレステイナの青い瞳を見つめる。

彼女のオリーブ色の瞳に映ったテレステイナは驚きと呆れの表

情に満ちていた。
「これからよろしくね、テレステイナー」

19話：格上

8月8日、いちばん暑いお昼時。

お腹がすいてくるこの時間帯、あたしは病室の中で2枚のカードをテーブルに放り投げた。

山のように積まれたカードに投げたカードが落ちる。

そのカードにはスペードとクロバーの10の模様が描かれていた。

「あつがり〜！垣根くん弱いねえ」

「テメエ狡したろ〜！」

ここは難病を抱えた子供たちの病室。大部屋の中、ひとつのベッドの上で子供たちとあたし達はトランプをしていた。

言っておくが、これはサボリではない。

何も知らない垣根くんにはそう見えるかもしれないが、一応これも仕事なのだ。

具体的に言えばメンタルセラピーと遠隔からによる肉体の干渉。

メンタルセラピーは言わずもがなこのトランプ。外に出歩くことの無い青少年少女達に比較的歳が近く、少しだけ年上のあたし達が遊ぶことで良い刺激になるのだ。

そして本命の仕事は肉体干渉。

一人一人、遠隔から肉体に干渉することでゆっくりと病気を治そうというあたしにしか出来ない治療カリキュラム。

本当はすぐに治せるのだが、そうすると今度はあたしが怪しまれる。

そうなるのは勘弁なので冥土帰しと相談した結果、こんな感じになったのだ。

「してませ〜ん！純粋なあたしの運で勝ったんですう」

いい加減飽きてきたトランプだったが、メンバーが増えると楽しいものだ。

しかし勝ちすぎて垣根くんにかサマを疑われる。こう見えても運だけはあるので、イカサマをせずとも勝ってしまうのが彼の癪に障

るのだろう。

と言つても、その運神でどう見にか出来捨ない出来事れもあつたけど。

「第2位様は随分と疑り深いな？このバカにそこまで出来るスキルはねーよ」

カードを2枚手元に持ちながら、テレスティーナさんが鼻で笑う。子供たちも一緒に「お兄ちゃん負け惜しみ！」などブーイングを飛ばすと、ピクピクと垣根くんの眉が動く。

あー怒ってるなあと分かっているにしても精神的年下をからかうのはやめられない。

「垣根くんほんつと運ないねえ……上条くんと戦わせたらどうなるんだろ」

「運だけで25連勝してるのはどう考えてもおかしいだろ！つかなんでこのクソ女がここにいる！」

上条くとタメを張れるほどの不運な垣根くんをここぞとばかりにおちよくると、ガタンと椅子を倒す勢いで立ち上がる。

テレスティーナさんを指さすと、怒ったような声を張り上げた。

「なんでって、垣根くんだつて知ってるじゃん、テレスティーナさんはこの研究員になつたつて。ねー？」

「ねー」

「仲良くしてんじゃねえ気色悪い！」

この間の事件以降、テレスティーナさんはうちの病院の研究員として雇われている。

理由としては2つ。

一つ目は彼女にあたしの隠れ蓑になつてもらいたいからだ。

隠れ蓑、まあつまるところデコイだ。

天羽彗系は少し目立ちすぎている。幻想御手の件レベルアップバー、今回のポルターガイスト、前回のインデックスの件、色々と介入している。

どう考えてもビーカーで浮かんでる総括理事長に目はつけられているだろう。

だから囚人の彼女を招き入れた。

暗部を知り、木原である彼女が病院という施設にいるのだ。厄介極

まりないだろう。

そうすることであたしじやなくテレステイナーさんに目を向けさせようという魂胆なのだ。

が、ぶつちやけ成功しない。

だって監視カメラがミクロの世界の大きさで、何百万と散りばめられているんでしょ？ 気配を消すなんて無理だろう。

だからこの理由はどちらかというところ「できたらいいな」程度の話。

「もー、テレステイナーがいるなら俺も行く！ って言ったの垣根くんだよ？」

垣根くんをなだめながら再び考えを巡らせる。

テレステイナーさんと呼んだもう一つの理由は彼女の知識を借りるためだ。

木原を名字を持つ彼女は科学者としては非常に優秀だ。その知識はこの先必ず必要になる。

彼女の研究はAIM拡散力場への干渉。キャパシティーダウンと能力体結晶がいい例だ。

パワーアップはこの先必須、ならば彼女の知恵を借りるのも一つの手。

あたしに足りないのは学園都市独自の超心理学、優秀な研究員に教授願うのは当たり前だろう。

「そりゃあテメエが死なねーか見張ってなきやいけねーだろ！」

「あはは、 ないない」

「テメエ……！」

垣根くんがこんなな感情をあらわにするのは珍しいな、と思いつつら適当に話を流す。

回復持ちあたしが死なないことは知っているというのに、なぜここまで心配するのか分からない。

母の後ろを付いてくるヒヨコのようにびよびよとあたしに付いて回る姿になんとなくほっこりする。

でも10月に、命を散らすと思うと切ない。死ななくともいいはずなのに。

「じゃああたし勝ったし、買い出し行くね」

椅子から立ち上がり、いまだにトランプの勝敗が付いていない彼らの元から離れてドアへ向かう。看護師としての業務とは少し離れるが、先生、垣根くんやテレステイナーさんにお昼ご飯を買ってこなくてはならないのだ。

彼らに書かせた買い物リストの紙を手に取り、ドアを開く。

「隼糸、アイスココア忘れんなよ」

「……早く帰ってこいよ。腹減った」

「言つとくけど、先生に頼まれたもののついでだからね？」

彼らに軽く手を振って部屋を出る。

ナース服で買い出しをするわけにはいかなかったので着替えるために自分の研究室へ向かう。

外に出るのは少し億劫だが、業務とあれば仕方がない。

面倒な業務を片付けに足早に研究室へ向かった。

簡単にナース服から私服に着替えると、街へ出る。

随分とめんどくさい買い物押し付けた垣根くんたちのために、わざわざ歩いて遠くのコンビニまで足を運ぶ。

道なりに歩いていくと、何やら騒がしい声が耳に入ってきた。

「教科書ってなんでこんなに高いんだろうな」

「そのお金で何が買えたのかなー？」

少年の声と少女の声。生前から知っているその声の主は想像通りなら知り合いだろう。

その声がする場所に目を向けると、そこにはツンツン頭の少年と真白いシスターさんが立っていた。

「あつれ〜？上条くんたちじゃん、ちやおちやお〜！」

「けいとー！」

手を振りながら彼らに近寄ると、少女、インデックスちゃんがびっくりしたようにこちらを向く。

その隣にいる少年、上条くんも「久しぶり」と手を振ってくれた。仲良くデート中のようなようだ。相変わらず仲がよろしいこと。

「今日は垣根と一緒にじゃないのな」
「まーね」

普段と同じような態度で話しかけてくれる彼に少しだけホツとする。本来なら記憶が破壊されているはずだというのに、それがないことがとてもなくあたしに安心感をもたらした。

あの日、上条当麻の記憶はなくならなかった。

だからあたしのことも垣根くんのこととも覚えている。それが何よりも嬉しかった。未来を変えられたのだと。

たとえそれが垣根くんによって訪れた改変だとしても。

「にしても夏休みは毎日バイトしてて教室で叫んでたお前が、なんで今日は私服なんだ？バイトないのか？」

今の服装は先ほどのナース服とは違う私服だ。それに高い位置で髪を結んでいる。上条くんには珍しい姿だろう。

夕日のスナップが真ん中にプリントされた真白いTシャツは赤いワイドパンツに入れてあり、首や指、腕にはいつものジヤラジヤラしたアクセサリー、そして黒いスニーカー。

相変わらず青や紫が一切排除されたこのコーディネートは
2010年代 2020年
今時っぽくないが、イマドキらしいだろう。

これでも前世ではSNSをチェックしたりと、結構ジャパニーズティーネイジャーファッションは好きだったりするのだ。

あの子にもよくセンスがいいと褒められたり、褒められなかったり。

「あはは、お昼の買い出しお願いされちゃってね。ほら、ナース服で出歩くのはあんまり良くないから」

ナース服での外出は不衛生だし、なるべく避けるのが一般的だ。

だからと言ってナース服で出歩くことが禁止されてるわけではないが。

「でもこの間はナース服だったよな」

「あの時は別の病院に配属されてたから、その帰りだったの。だから

着てたわけ」

この間とはおそらくインデックスちゃんと初めて会った時のことだろう。

通院や、患者の手伝い、着替える場所がない場合は大目に見られる。あの日は患者に接触してないので先生にお許しをもらっていたし、色々特別だったのだ。

「なるほどな」

「んで？お二人はデート中？」

上条くんの隣に立っているインデックスちゃんに視線を向ける。きつと今のあたしはニヤケ顔だ。

自分のは全くと云っていいほど興味はないが、他人の恋愛模様は聞き出したい。

アニメと違い、記憶がある上条くんなのだ、そういう関係になってもおかしくはないはず。

同棲してるのだからそういったことが起きる可能性は大いにある。男女の友情は高確率で成立しない。

ちなみにあたしが垣根くんたちに向ける感情は家族愛、姉妹愛と呼ばれるそれなのでセーフ。

「そ、そんなんじゃない！」

「そーだぞ？3600円もする参考書を買って行ってきたんだ、デートじゃねーよ」

しかし上条くんは男女間の友情を信じているタイプの人間だった。

最初は少し照れていたインデックスちゃんだったが、その発言を聞くや否や眉間にしわを寄せる。

「……とうまのバカ」

「上条くんって、なんでそうなんだろうね……」

呆れて言葉も出ない。垣根くんだってここまで鈍感ではないだろう。

希少生物上条くんはあたしたちの呆れ顔なんて気づきもせず言葉を続ける。

「たしかに俺が勉強してれば3600円も使わなくて済んだからな

……馬鹿であることは認めよう」

「違うんですけど」

なぜこうも分からないものなのか。好きじゃなければ同棲なんてするはずないだろう。

ため息を一つついてインデックスちゃんに目を向けるが、彼女はそこには居ない。

「あれ？インデックスちゃん？」

「おい、何見てんだ？」

どうやら何かを見つけたようでじつと食いつくように建物を見つめ、あたしたちの声は届いてないようだ。

穴があくほど見つめられているそれはアイスクリームがでかかど印刷してある大きな看板。

それを羨ましげに眺めている彼女が今何を考えているかはすぐにはわかった。

「食べたいの？」

「インデックス……まさか一緒に散歩した見返りに3600円分のアイスとか要求するんじゃない

だろうな……？」

暑く、日差しが眩しい夏のお昼頃、アイスが食べなくなるのは自然の理だろう。

それも過食症気味のインデックスちゃんはなおさらその欲求が強いはず。

たくさん食べるのはいいことだが、流石に3600円分のアイスはどうかと思う。

どれだけ大きい胃袋を持っているんだか。

「どう嘛ー私は一言たりとも暑い、辛い、バテたなんて言っていないよ！まして、他人のお金を使いたいと考えたこともないし！結論として、アイスが食べたいだなんて微塵も思っていない！」

上条くんの一言に傷ついたように頬を膨らませて訴える。どう見ても怖いという感情より、インデックスちゃんかわいいなと思え

なかった。

アニメでも可愛いなと思いつながら見ていたがリアルを前にするとさらに可愛く見える。

しかし上条くんには効果が無いようで、彼はため息をついて口を開く。

「わかったよ、素直にエアコンの効いた店の中でアイス食べてえと言えば良からう」

「とうま！この服は主の御加護を視覚化したものであって、私は1度たりとも、不便だとか暑苦しいだとか、ああ鬱陶しいだとか！微塵も思ったことないよ！」

「思っただね」

声を荒げて否定するが、その内容はどう考えても否定されているよなものではない。

たしかに彼女の服は暑そうだ。白は光を反射するとはいえ、布地はかなり分厚く、夏場に着るものではない。

「それに！私は修行中の身だから、一切の嗜好品の摂取は禁じられるんだよ！」

「なんでダメなの？神だって物語の中で嗜好品食べてるじゃん？」

シスターの禁止事項や掟は知らないし、興味もないが、少し疑問が浮かんだ。

少しばかり残ってる前世の記憶から、数少ない神話の知識を引っ張り出す。

「そうなのか？」

「ノアの方舟、知ってるでしょ？アレって神の世界の嗜好品を人間が知っちゃって手に負えなくなったから神が全部水で洗い流したってお話でしょ？この世界にある嗜好品は神の世界で普通なら、人間だって嗜んでもいいんじゃない？」

なんとなく概要を覚えてた有名な神話を例としてあげてみる。

これくらいなら知っていても問題はないだろう。たぶん。

一応10歳までは学園都市の外にいたのだからノアの箱舟くらい知っていてもおかしくはないはず。

「でもーでもー！」

「んじや、やめとくか？悩むほどなら食べない方がいいんじやねーの？」

欲望と立場の矛盾に振り回されているインデックスちゃんだったが、上条くんの言葉に素早く反応すると彼の背中にしがみつく。

子供のように目をキラキラさせる彼女は小動物のようだ。

「確かに、禁じられてるけれども！誤って口にアイスが放り込まれる可能性も無きにしも非ずで！とうま！」

「圧がすごいね」

ムキになる彼女も可愛らしい。

道行く人の視線を集める彼女は美少女と呼ぶにふさわしく、笑顔が眩しい。

垣根^{公式で美人と明言されているらしい人々}くんやインデックスちゃん、神裂ちゃんを見てると、いかにこの世界の美人が人間離れしているかがよくわかる。

自分の顔の造形を低く見積もっているつもりはないが、この世界では美人ではなさそうなのが彼らを見てるとよくわかる。前世で培ったメイク技術でなるだけ可愛くは見せているが、他人からどう思われているのか。

薄化粧で垣根くんの隣にいと惨めな気分になるよ。だってめちゃくちゃイケメンだもん。

化粧はね、心を安定させるためにあると心から思うよ。

「あれー？カミちゃん？」

結局欲望に負けたシスターさんが目の前でわいわい騒いでいると、後ろから声をかけられる。

ぱつとその声が出た方を向くと、そこには原作ではびっくりするようなテノールを持つらしいピアスをつけた青い髪の少年と、金髪アロハグラサンのどう見てもヤンキーな少年がニヤニヤと立っていた。

「髯系ちゃんやないか！それに謎のシスターさん！」

「ん？」

青髪ピアスくと土御門元春くん。

二人ともクラスメイトで、上条くんのお友達。

「お久しぶりやなあ！ 慧糸ちゃん！」

「おひさ〜！」

まさかこんなところで会うとは思ってもなかった。

……あれ？ アニメでこんなシーンなかったっけ？

デジャブを感じる。見たことがある。

「んでき〜？ その子誰ぜよ？」

「もしかして、女装少年？ 女の子にしてはぺったんこ過ぎるし」

青髪くんの発言にアニメのシーンが頭に浮かぶ。

あ、思い出した。

これって、上条くんの腕がぶった切られる時の会話だ。

「お、お前らー！ 言っていることと悪いことが……！ 幾ら幼児体型だからって！」

このデリカシーのない会話に聞き覚えがあった。

確か吸血鬼の話。

そうだ、そうだ！ なんで気づかなかったんだ！？

どうしよう。個人的には魔術サイドには関わりたくない。

アレイスターにこれ以上目をつけられたくないのだ。

上条くん達とつるんでアレイスターの監視対象になったら困る。

もうなってる可能性は否定できないが、用心はしといたほうがいいだろう。

一応の目標は垣根くんを不幸にさせないこと。アレイスターに目をつけられたら達成できない可能性がある。

でも魔術も知りたい。

アウレなったら、名前なんだっけ、すつごい長かった気がする。アウレオス？ いや、何か足りない。

とりあえず錬金術師さんと呼ぼう。

錬金術師さん優しそうなイメージがなぜかあるので魔術教えてくれそうじゃん？

あれ、やさしくなかった？ 違う？

記憶があやふや。

やばいな。

「天羽も来るかにヤー?」

最終的にアイスクリーム屋さんに行くことになったようで、土御門くんが呼びかけてくる。

デリカシーのない発言をした上条くんはインデックスちゃんに平謝りしていた。

「……」

「めっちゃ悩んでるな」

土御門くんの問いにすぐには答えられない。

慎重に行動を決めなくては。頭をフル回転させ考える。

ついていきたい。

ついていきたいけど……!!

リスクとリターンを天秤にかける。

魔術を取るか垣根くんを取るか。

「垣根くん、に、買い物、頼まれてる、から」

結果、垣根くんをとった。

魔術を覚えられるところは他にもあるでしょ。

それに、最近の垣根くんはあたしに対してなんだか過保護気味だ。

買い物から帰ってこないと機嫌を悪くして錬金術師の住処に飛び込んできてしまいそうで正直怖い。

残念だが、合流するなら垣根くんにご飯を届けてからにしなくてはならない。

「……天羽、彼とまだつるんでるのか?」

泣く泣くお誘いを断るが、それに土御門くんが反応する。

確かまだ暗部には入ってないが、アレイスターとも繋がってる多重スパイだ。垣根くんのことを知っていても無理はない。

「学園都市第2位、いい噂は聞かないが、大丈夫か?」

「……心配ないよ、だって垣根くんが危険なことをしたらあたしがそれを止めるもの」

あたしが垣根くんのそばにいて暗部入りを疑われるのも困るが、それより困るのは垣根くんを調べられて学園都市への反抗心を持っていることがバレること。

彼が革命を起こそうとするのは10月のことだ。10月より前にその計画がバレたら原作が大きく変わりそうで正直怖いのだ。

垣根くんを今からマークされたら困る。まあもうマークされてそうだがな。

「上条くん、なにかあったら電話してね」

「お、おうっ。」

とりあえず早く買っていかななくてはならない。

上条くんを念を押してみるがわかってなさそうだ。まだ何も起こっていないしね。

早歩きでその場から離れると、コンビニへ向かう。

「はあ……まさかこの日は」

ヒヤヒヤしながら道なりに歩く。

とつとと用事を済ませて帰らなくては。

目的地だったコンビニを見つけると、すぐさま店内に駆け込む。

入店すると軽快な電子音がドアから流れた。

改めて買い物リストを確認するが、ため息しか出ない。

そのメモ帳に書かれたコンビニ限定のお菓子やお弁当を一つづつ手に取る。

「コーヒー、コーヒー……あった」

最後はコーヒー。テレスティーナさんに頼まれたココアはもうすでにカゴの中で、残りは垣根くんに頼まれたコーヒーだけ

なんでも珍しいコーヒーだそうで、特定のコンビニにしか置いてないらしいそのコーヒーは垣根くんの最近のお気に入りらしく、よく飲んで見かけた。見かけていた。

買ってこなかったら怒られそうだな。

リストの最後に書かれてあるコーヒーを見つけると手に取ろうと腕を伸ばす。

「っ、」

手を伸ばした先、コーヒーを手に取ろうとした時、同じようにコーヒーに手を伸ばした誰かに指先がぶつかった。

しかし触れた瞬間、力が反転されたかのように弾かれる。

「あ、ごめんね、取っていいよ」

不思議な子だった。

色素の抜けた白い頭髮と肌、リンゴのような赤い目。

身長はおそらく上条くんと同じくらい。ヒールを履いていなくとも、自分より背が低いのがわかるほど病的に小柄な体型。

「どオーも」

その子供の名前をあたしは知っていた。

アクセラレータ
一方通行。

学園都市に7人しかいない超能力者^{レベル5}の中の頂点に君臨する少年。

まさかこんな場所で遭遇するとは思いもしなかった。

色々と頭に彼の情報がよぎるが、一番先に目に入ったのは彼のもつ
買い物カゴに入ってる黒い物体の数々。

「君、どんだけ買うつもり？」

彼のカゴにびっしりと詰まったコーヒーの数は異常と言わざるを得ないほどの量だった。

「全部」

「ぜ、全部?! カフェイン中毒なっちゃうよ?」

手を休めず、コンビニの在庫を0にする勢いでカゴに入れる彼の姿を見て様々な病状が浮かぶ。

「カフェインの過剰摂取は胃痛、貧血、頭痛、自律神経失調症、冷え性、不眠、動悸、その他もろもろに繋がるんだよ!?! ダメだよそんなに飲んじゃー!」

「二日で飲むわけじゃねー、つかうつせエな、テメエには関係ねエよ」
「関係あるある! あたしは全人類のお姉ちゃんだし、ナースなんだから!」

どう見てもカフェイン中毒だ。

ナースとして、姉として、心配するのは当然。

「は? 頭イカれてんのか? ナースって……もつとまともな嘘つけよ」

「あー! 信じてないね! はい、これ」

そういつてズボンのポケットから金属製の長方形のケースを取り出し、その中から一枚の小さい紙を手渡す。

病院勤務、肉体干渉能力保持特別医療従事者、学生、など様々な漢字が並ぶその紙はついこの間、先生に言われて作ったもの。

天羽彗糸の名前とあたしの業務用の連絡先が載っている。

「……マジでナースかよ」

「だから、青少年の健康を心配するのは当たり前なの」

「ふーん、そうですかア……」

名刺とあたしを交互に見比べながらつまんなそうな顔で口を開く。

「で、君は？」

名刺をポツケに突っ込み

そのまま帰ろうとする彼を呼び止め笑顔で名前を聞く。一瞬ワケがわからないと言った表情をみせると、怪訝そうな顔であたしを見つめた。

「あ？ンだよ」

「名前、聞いてないからさ」

「聞きたいか？」

聞きたいもなにも名前以上のことを既に知っているが、確認は大事。

彼が一方通行アクセラレータということを確認せずとも分かってはいる。

白髪赤眼、ホルモンバランスが崩れており、中性的。不思議な喋り方に、整ってはいるが少し怖い人相はどう考えても一方通行アクセラレータで、彼以外にこんな姿の子は多分居ない。

名前を聞いているのは接点を持ったためだ。

知っているだけなら名前なんぞ聞かずにそのまま返してもいいのだが、これから先に一番の見せ場があるのだ。接点を持つておくのは悪くない。

「うん。だって名刺渡したし、名前くらい聞いてもいいでしょ？」

「……一方通行アクセラレータ、名前くらい聞いたことあるだろ」

「あらら、有名人と会えるとは」

前世から知っています、というわけにもいかないので取り敢えず在り来たりな反応を見せる。

実際、彼はかなりの有名人だ。嘘は言っていない。

「わかったならどっかいけ」

「まあ言われなくても買物終わったら帰るけど……でも一方通行アクセラレータくんは本当にその量のコーヒーを飲むつもり？」

「うっせエな、てかクン付けすンじゃねエ」

ぶつきらぼうに突き放つ姿はまさしく反抗期の少年といった感じ。

これ以上ちよっかい出すとキレられそうだ。潮時かな。

「えー、呼び捨てはちよっど……」

「うぜエンだよ」

うざいと罵られるが、なんだか垣根くんと似ていて笑ってしまう。

垣根くんに反抗期と子供っぽさを少し入れた感じというか、なんと
いうか。

「それよく言われる」

特に垣根くんに。

「友達いねエだろ」

「うん、よく分かったね」

「そりやアな……」

友達なんて欲しいと思っただこともないし、これからも作るつもりはない。

上条くんはクラスメイト兼目印だし、テレスティーナさんは後輩兼
隠れ蓑、冥土帰しは師匠。

垣根くんとの関係性に今のところ名前はないが、友人ではないことは
確か。

「とにかくー！コーヒー飲み過ぎないようにね？」

「あーはいはい、ンじゃ、さよーなら」

「体調壊したら病院行きなよ!？」アクセラレータ「一方通行くん!」

今はあたしの友人関係について考える時間ではない。

手を振りもせずスタスタとレジへ向かう彼の後ろから大きく声を
張り上げる。

「クン付けすんじゃねえクソ女!」

そんな会話を見ていた少年は、会話が映し出された携帯を閉じて一口角を釣り上げる。

「……これは、面白いことなってきたな」

音声を自動入力し、メールに送られてくシステムはうまくいつている。

まさかこんな情報が得られるとは。

そんなことを考えていた少年は手持ちのカードをみる。

ハートの2とクローバーのキングの二枚。

もう少しで勝てるだろう。

「あ？次はテメエの番だぞクソガキ」

「勝つ」

目の前のいけない女から直感でカードを引く。残り三枚のカード、どれか一つがジョーカーだ。

早く上がってしまいたい。その一心で引いたカードを裏返す。

カードには薄気味悪い笑顔のピエロが写っていた。

ああ、不幸だ。

20話：神に目をつけられた白衣の天使

オレンジ色の暖かい光が暗い部屋を照らす。

窓のない部屋の中、薄く光る大きなビーカーからコポコポと音がする。アクアリウムのように光るそのビーカーの中には不思議な色の液体で満たされており、男にも女にも子供にも老人にも聖人にも囚人にも見える人物が逆さまに浮かんでいた。

輝く銀色の髪は泡が浮かぶ水の中でゆらゆらと揺れて、薄く開かれた瞼の下にはエメラルドのような深い緑の瞳が鈍く光っている。

その人物はこの学園都市の創設者であり、稀代の魔術師、アレイスタールクロウリーその人であった。

「ふむ、アウレオルスの件はきちんとプラン通りにいつているようだ」
アンダーライン
滞空回線を通して眺める景色には三沢塾でのアウレオルスIIイザードと上条当麻の攻防が映っている。

腕が切断され、露出した上条当麻の肩から伸びる白い竜は今まさにアウレオルスIIイザードの頭を食べようとしていた。

空中を浮かぶ様々な画面にはそれに関するデータが文字として送られ、それをみて男は安堵する。

幻想殺しは着々と成長している。学園都市が作られた目的である彼の成長は順調に完遂されている。喜ばしいことだ。

「問題は……藍花悦か」

錬金術師の件は彼らに任せておこう。そう考えて、今度は別の景色をその瞳に写す。

夜中だというのに忙しなく病院内の個人の研究室でテキパキと働く少女が映る。

上条当麻から連絡が来ず、アレイスターとカエル顔の医者の方策により三沢塾に近づけない彼女は一人で研究室に籠っていた。

その少女のウェーブ掛かった金髪は毛先から桜色に染められており、美しいグラデーションを作っている。

高い位置でひとつに括られたその髪は、彼女が動く度に犬の尻尾のように揺れた。

アジア系にも、中東系にも、ゲルマン系にも、ラテン系にも、スラブ系にも見えるその異様な顔立ちは美しく、最も人間らしく、また最も人ならざるものに見える。

内面も実に人間離れしており、アレイスターからしてみれば興味深くも気持ち悪くもあつた。

その少女の名前は藍花悦。

天羽彗糸などという別の名義はあるが、それはこの世界での本当の名ではない。

彼女は天羽彗糸ではなく、藍花悦なのだ。

そして彼女が藍花悦である限り、アレイスターの監視からは逃れられない。

「彼女を一方通行と出会させたのも手筈通り……彼の精神に揺さぶりをかけてくれるだろう」

昼間、彼女が一方通行と出会ったのは紛れもない必然だった。

様々な調整を加え、彼女が一方通行と出会えるように舞台を整えたのだ。カエル顔の医者のおかげでスムーズにことが進んだ。

彼女にお使いを頼んだあの医者は帰宅した彼女の態度を見て、上手くいったと内心ホッとしていたのだが、それは彼女の知らない情報。

結局彼女はアレイスターの手のひらの上だった。

「精神異常者には精神異常者をぶつけるのが手っ取り早い」

正に位置する異常者と負に位置する異常者。その組み合わせの成
功例が藍花悦と垣根帝督であり、第1候補にも組み込めば更なる手順
の短縮が見込めるとアレイスターは考えていた。

「なにやらおかしな実験をしているようだが、それも組み込んでしま
えば問題ない」

研究室で冷めた目で資料を読むその少女に再び焦点を当てる。

散らかった実験室にはラットから流れた血が点々と垂れ、床を汚し
ていた。それに目もくれず少女は資料を読み漁る。

あーでもない、こーでもないと言を悩ませながら、自身の能力の向
上を目的とした実験を繰り返している。

彼女の傍らには自分だけの現実と脳科学に関する本がいくつも積

み上がっており、聡明なアレイスターにはそれが何を意味しているのかよく分かっていた。

無謀で無茶な実験内容だが、興味深く刺激的なものであるのは間違いない。

「藍花悦、異物であり、第3候補である少女……」

肉体の支配者である彼女は万が一の為の第3候補だった。

メインプラン アクセラレータ スベアプラン ダークマター
第1候補の一方通行、第2候補の未元物質、そして第3候補である
アンデッド
不死者。

「原 型 制 御が効かず、未来を知っているかのように行動する」

彼女には異能が通用しない。

彼女の認知を歪めようとしたものの、上手くいかず。だからこそ彼女は彼女のままだった。

前世の微々たる量の知識から得ていた魔術と能力がほぼ同じ理論だという事実を彼女は捻じ曲げられることなく持っている。

だからこそ彼女は能力も魔術も信じていなかった。

彼女はこの世界の全てを信じていないのだ。

「気味の悪い少女だ」

世界にたった一人だと思いつく孤独な少女。

それでも他人を助けようと足掻き、救いの糸を垂らす。自身の破滅などどうでも良いと考えるその少女は善人過ぎて気味が悪い。

異質で奇妙。それが彼女を表すのに最適な言葉。

誰も信用していないのに、彼女は誰をも救おうとする。

人間とは思えなかった。

天使か悪魔か、或いは堕ちた神か。

もしくはそれ以上か。

「第1候補、第2候補、第3候補……彼らがどう変わっていくか、見物だな」

ぱつと景色を変える。

「第2候補もなにやら企んでいるようで、益々プランの短縮が見られるな」

次に映るのは自室で未元物質の改良に励む第2位、垣根帝督の姿。

設計図や脳医学の資料が嫌という程積み上がっている彼の部屋は綺麗に整頓されている。

冥土返しに木山、そしてテレステイナから得た資料は案外彼の実験に重要だったらしく、ひとりほくそ笑んで理論を組み立てていた。「第2候補の短縮が上手くいっている。彼女を垣根帝督と出会わせたいのは正解か」

藍花悦と出会い、彼は少なからず彼女を守ろうと考えるようになってきた。それはこれから第1位が抱えるのと同じ感情。

たとえその関係が異質なものでも、使えるものならなんだって使う。

第2候補である彼は第3候補とは違い、メインプランと同じような舞台を必要とする。メインよりも先に感情を会得し始めているが、プランの短縮になるならそれもまた良し。それがアレイスターの導き出した答えだった。

『不死者』だったか。アレはその程度の代物では無いというのに」改めて藍花悦に映像を移す。

能力の向上を試みる彼女の姿はいつになく真剣で、赤にも緑にも見える不思議な瞳の奥に炎が揺らめくように見えた。

『不老不死』にも『死神』にもなれる力、『肉体の支配者』」藍花悦の能力は到底6位に収まる程度のものではなかった。

普通、能力とは一つのことしかできない。例えば応用力で名高い御坂美琴。

彼女は電気系統の能力使いで彼女は電気しか操ることができない。磁力や電子、電気信号も操れると言っても、根本は電気。彼女は電気に関するものなら全てを操れるが、それ以外には干渉できない。

例えば未知を操る垣根帝督は、未元物質という未知の物質しか操ることができない。

既存の物質に未元物質をぶつけ、変化を起こすことができても、既存の物質そのものには干渉できない。

例えば神と等しい力を持つ一方通行は、体に触れる全ての方向しか操ることができない。

投げた小石を弾丸のように弾き出すことはできるが、その小石の成分を弾丸のものに変えることはできない。

一人一つの能力。それが絶対的な条件だった。彼女が現れるまでは。

肉体とは様々なもので構成されている。

水分、脂質、タンパク質、ミネラル。

体内を巡るシナプスは電気を使い、体からは熱が発せられる。

そのどれもが違う物質で、どれもが違う演算を必要とする。

しかし肉体の支配者たる彼女はその違いを含めない。

脳内信号という電子を操り

髄液という水分を操り

遺伝子という因子を操り

ホルモンという物質を操り

体温という熱量を操り

血液の向きベクトルを操る。

体内に限ってだが、万物の全てを操れていた。

デュアルスキル
多重能力に限りなく近い存在。

「科学で解明できない原石。もともと、彼女はその事を知らないようだが」

彼女の力は科学によって生み出されたものではなかった。

嚴重に封が施されているその情報を知るのは極僅か。本人でさえ知らない。

知っているのはアレイスターとほんの少しの上層部くらいだ。

「薬物投与で生み出した能力ではなく、引き出した能力」

それは神が許可した唯一の武器。

この世界の理から外れた力。

その力があるからこそ彼女は神の存在を疑うことがなかった。

そしてその異次元の力は彼女を神如き強者に仕立て上げた。

抑えこまれるように内在していたその力は科学の力で再び彼女の手に渡った。

学園都市で初めて現れるように設計されていた神の時限爆弾。

この世界に墮とされたときに神に与えられた枷のようなものだったが、それは少女を含め誰にも分からない。

神に目をつけられた少女は彼女の知らないところで何重にも枷をつけられていた。

例えば能力。

例えば記憶。

例えば感情。

例えば運命。

世界を渡った代償だった。

「一時期、神童と言われ、医学を背負っていくと持て囃された少女。なるほど、恐ろしい才能だ」

黒髪に黒目。青が良く似合う昔の藍花悦は神童と評価され、今でも研究所の何ヶ所かは彼女に協力を要請している。すべてアレイスターに拒まれてるというのに、健気な研究員達だ。

原石であること、そして最も異質な能力であることは限られた人しか知らされていない。だからこそアレイスター自ら彼女にまつわる研究のほぼ全てを藍花悦の知らないところで断っていた。とはいえ、複数の研究所は事実を知らされずにデータを使う許可をもらっていたりするが。

「あの医者が欲しがるわけだ」

彼女を学園都市に招待したのは他ならぬあのカエル顔の医者。

彼が藍花悦を呼んだのは至って簡単な理由だった。

学園都市に行きたいと言った幼い彼女の元に何通も届いた研究所は学園都市では珍しくない非合法的な施設が大半だったのだ。それを知っていた医者は、研究員として彼女を呼んだ。必要なものを全て与え、暗部から隔離した。

そして今はその弟子を随分と可愛がっているようだ。

「幸運の女神にも、冥界の女神にもなれる存在か」

薄く開かれた緑の目が少女を見据える。

「まさしく、イレギュラーの名に相応しい」

神に最も愛され、最も嫌われているその少女は着実にその力の片鱗

を見せていく。

21話：ホームクルス

8月14日、アクセラレータ一方通行と出会ったその6日後。あたしは直射日光の当たる外から、冷房の効いた店内へ入る。

様々な店が並ぶこのショッピングモール、セブンスミストの中は多くの人で賑わっていた。

「どーしてあたしは、垣根さんとセブンスミストにいるんでしょう？」
私服に着替えさせられ嫌々連れてこられたあたしは非難するように隣にいる少年を見上げる。

今日は目線が近くない。

「散歩だ散歩。テメエが丸一日研究室にこもってるからこの俺が直々に気分転換に誘ってやってんだろ感謝しろ」

アクセラレータ一方通行と出会ったあの日から丸5日、あたしはずっと飲み食いせず研究室にこもっていた。

科学者や研究者としては何日も部屋に閉じこもるのは良くあること。前世では研究に没頭して1週間飲み食いせずに倒れて病院のお世話になったこともある。

「別に良くない？まるまる1ヶ月は起きてられるよ？」

だが昔のあたしとは違い、今のあたしには能力がある。

体内のエネルギーさえ調節出来るあたしは倒れることなんてない。「サプリとプロテインで生命を維持してる女が健康なわけないだろ」

「ご飯を食べてエネルギーを作るより効率がいいじゃないか。」

それで事足りるのだ。食えるという行動に今は必要性を感じない。趣味としてご飯を食べるなら時間はとるが、優先順位が研究が第一のいま、ご飯を食べる気にはならなかった。

「なんで垣根さんに心配されなきゃいけないの？」

「テメエ、こつちが下手に出てりゃ……」

そもそも彼があたしの体を心配すること自体、おかしな話。

なにか企んでいるのか？

彼の人物像とかけ離れている気がするのだ。

「垣根くんは傍若無人、悪逆非道、虎視眈々、正々堂々って感じじゃん」

あくまで、あのアニメの中の話だが彼の印象は概ねそんな感じ。決して誰かを心配するような少年ではない。ましてや疑いの目が向けられているあたしを心配なんてしないはず。

あのスピンオフ漫画の少女、杠ちゃんみたいに彼の好感を上げるような発言もした記憶はない。

姉として接してはいるが、それが好感を上げる要素とは思っていない。お節介が嫌いな人もいるし、それは分かっている。

それでも世話を焼いてしまうのがあたしなので辞めるつもりは無いが。

「お前の中の俺はどうなってんだ？」

「可愛い弟くんって感じ」

軽く微笑んで見せると、あからさまに不機嫌になる彼の姿に小さく笑ってしまう。

そういうところが子供だということを彼は理解しているのだろうか。

どこことなく少年らしさが見え隠れする彼は弟か子供くらいにしか見えないのだ。

生意気で、口が悪く、そんなもって反抗的。

弟という幻影が付きまとう。彼は弟でもなんでもないと言うのに、幻想が認識を歪める。

見守る者^{ナース}として、あたしは中立で居なくてはいけない。

けれど見守る者^姉としてあたしは彼に入れ込んでしまう。誰よりも妹らしいから。

歩んだ人生は彼の倍以上、それだけでなくても享年は24、妹と同じくらいの年齢である彼にそれ以上の感情を抱く事はなかった。

「……可愛いって、男だぞ？」

「可愛いって言い続けたら男の子でも可愛くなるらしいよ！」

嫌そうな顔をする垣根くんだが、女性に可愛いと言い続けて本当に可愛くなったという実験結果があるのだ。これはレツテル効果というもので、貴方はこうだと決めつけられることで実際にレツテル通りに行動するという心理学的に説明できるものだ。

垣根くんがいい人って言い続けられいい人になるかな？と、少し思うものの、言葉だけで変わるのなら人間苦労しない。

人間、そんな簡単に変わる事はないのだ。たとえ死んだとしても、「テメエは余程愉快なオブジェになりてえみてえだな？」

「垣根くん可愛いね！」

「よし、表出ろ」

「怒ってる顔も可愛、いっ！ひどい！」

よしよし、と頭を撫でて見せると、それがさらに彼を苛立たせ、怒らせてしまう。

そのまま頬を抓られ、肉を持ち上げるように引つ張られる。

だが、痛みは感じなかった。痛覚を遮断してるわけじゃない。

いつもみたいに強く抓られていなかったのだ。

なぜ？いつものように力を掛ければいいのに。どうせ痛みなんて、いつだってOFFにできるのだから。

彼だってそれを知っているはずだ。ならばなぜ？なぜ手加減をす

る。気味の悪い感情と考えがグルグルと渦を巻く。

「これが世に言う修羅場というものですか、とミサカは人前で恥ずかしいセリフを言ってる女性と、そのお連れの男性を交互に見つめます」

しかし、その思考を中断するように声をかけられる。

「っえ？」

そこに立っていたのは御坂美琴の外見を持つ少女。しかし御坂美琴より声が落ち着いていて、まるで別人だ。

そしてその存在を、あたしは知っていた。

「あ？第3位じゃねえか」
妹達。

超能力者第3位電撃使い御坂美琴の量産型軍用クローン。

その情報を知っているのは限られたものだけだ。

だから何も知らないように静かにしている。変に目をつけられたら困るので。

「第3位……お姉様のことを言っているのなら、ミサカはお姉様ではありません」

「……あー、なるほどな、あれか、妹か」

妹。そう断言する彼に違和感を覚えた。

「わかんないよ？従姉妹かもよ？」

ドツペルゲンガーと呼ぶにふさわしい目の前の少女は妹と断言するにはまだ情報が足りない。従姉妹かもしれないし、再従姉妹かもしれない。

彼はきつと妹達を知っている。彼の口ぶりとおあたしの直感がそう告げた。

よくないことを企んでなければいいが。

「いえ、妹であっています、とミサカはお姉様とお知り合いと見られる男性の意見を支持します」

「変な口調だな、長えよ」

「変ではありません、とミサカは今だ名乗らない男性に明確なツツコミを入れます」

自分から絡んでおいて、自己紹介を求めるとは。

なんだか凶々しい彼女にコホンと咳払いをすると、苦笑いをみせながら名前を伝える。

興味津々なのか何も考えていないのか、あたしを覗き込む瞳は無機質で何を考えてるか分からない。

「えっと、あたしは天羽慧糸ね、んで彼が……」

「……垣根帝督だ」

「ていとくん……ぷぷ」

簡単に名前を教えると、吹き出すように彼女は笑う。と言っても目は笑っていないが。

まさしく無表情と呼ぶにふさわしい彼女の瞳は御坂美琴と全く同じ色をしていた。

その中に穢れのない瞳に少しの感情の色が見られる。クローンとは思っていたより感情豊かなようだ。

まるで人間だ。

「テメエ初対面の相手に随分と無礼だな……」

「まーまー、ムキにならないの」

眉間にしわを寄せる垣根くんを軽く宥める。

人造物に何言ったって時間の無駄だ。だって人では無いのだから。価値観も何もかもが違う別の生命体。

しかし彼女は人に作られ、プログラムによって魂を構築した
レディメイド
既製品。

唯一無二の人間とは違う。

人間に作られたホムンクルスをあたしは人間とは認められなかった。

「で？妹ちゃんはなんでこちらに話しかけたわけ？」

「辞書にしか載っていない修羅場が体験できると思いまして、とミサカは先程のお2人を思い返します」

そんな考えを隠してあたしは彼女に問う。

なぜセブンスミスにいるのかも気になるが、1番気になるのはなぜあたし達に話しかけたのか。

藍花悦絡みか、垣根くん絡みか。

少しばかり警戒しながら彼女の返事を待つと、返ってきたのは突拍子もない答え。

「……修羅場？」

修羅場と言われてもあまりピンと来ない。

そもそも修羅場とはなんだ？

1万文字のレポート締め切り前日だというのに一文字も書いていないことか？それとも解剖の講義で誰かが嘔吐して騒ぎになることか？

あたしの知る修羅場とはこういったもので、特に何も起きていない現状を修羅場と呼ぶ彼女に疑問が浮かぶ。

「こんな修羅場とは呼ばねえよ」

「なるほど、あの程度は愛ある2人には日常だと……」

「これに愛情なんかこれっぽっちもねえよ！」

よく分からないが、彼女の一言に垣根くんが大声を上げて否定し、

あたしの首を掴む。グラグラと揺さぶられ、目が廻る。

くらくらしながら彼を見つめると、何だか複雑な表情をしていた。

「大丈夫！あたしにはあるよ！垣根くんへの愛情！」

「テメエはややこしくなるから黙ってるこのバカ！」

なんの話かは分からないが、彼へ愛情なら誰にも負けない自信はある。

首を掴まれながらもとりあえず大声で愛を叫んで彼に笑顔を向けると今度はデコを指で弾かれる。

「馬鹿じゃなくてお姉様とお呼び！」

お返しという意味ですこし頭をツンつと指で押すと、物凄く嫌そうな顔をされる。

さすがにそんなに嫌がられると悲しい。

「お姉様なんですか？」

「こいつが言ってるだけだ、真に受けるな」

「ひどいなあ！あたしはいつだって垣根くんの、全人類のお姉ちゃんのもりだよ」

「テメエいい加減にその口縫い付けるぞ」

胸を張って言うが、益々垣根くんの顔が歪んでしまう。不機嫌な彼に口を掴まれて何も喋れなくなると、あたしのその姿を観て少なからず彼の機嫌はよくなる。あたしを手元において支配したいといっているようだった。

しかし支配なんて出来やしない。

なぜならあたしは姉だから。これは彼からの支配ではなく、あたしが彼を甘やかしているだけだ。

これも一種の愛の形。

姉として、あたしはリードしたがりの少年を持ち上げる。

どんなに嫌悪されようと、どんなに蔑まれようと、どんなに理解されずとも、あたしは姉にいる。

それ以外の役柄はあたしには合わない。

あたしはいつだって子供か姉としか生きられない。そういう思考

回路しか持っていない。

だってあたしの世界にはあたしと、妹と、親しいない。

娘と姉。それ以外の役回りを知らないのだ。

だからそれ以外の存在になることなど、考えられない。

「仲良しなんですね、とミサカはじつとお2人を見つめます」

「……はあ、とりあえず行くぞ」

「あ、ちよつと」

死んだような目で見つめられるが、垣根くんにはそれが居心地の悪いものだったようで、あたしの腕を掴んで別の場所へ行こうと足を進めた。

しかし数歩進むと妹ちゃんも当然のように着いてくる。

まるでひよこのようだ。

「……何でテメエも着いてきてんだ」

しかし、その行為は垣根くんにとって不愉快なものらしい。

苛立ちながらも垣根くんが理由を聞くと、相変わらずの無表情で答えた。

「面白いお二人に同行しようかと思いましたが、とミサカはお姉様のお友達に奢ってもらおうかという魂胆を隠して簡潔に答えます」

「めっちゃ心の声漏れてんぞ」

この喋り方の一番の問題点は全部包み隠さず言ってしまうことかな。

苦笑いを向けながらあたしは垣根くんと顔を見合す。

「でも着いてくるって言ったって、ねえ?」

「散歩ってただけだから目的はねえぞ?」

彼女には申し訳ないが、あたしたちに当てはない。

今こうやって散歩しているのも垣根くんが出かけるぞとあたしを引っ張ってきたからであって、特に目的は無いのだ。

「なら、ミサカが目的を提唱します」

「どこか行きたいの?」

スつと手を挙げた妹ちゃんに目を向ける。

「それが買えるところがいいです、とミサカは首元を指さします」

挙げられた手を下ろして指を刺したのは あたしの首元。
キラキラと光るチョーカーとネックレスが揺れていた。

「あー、アクセ見たいの?」

ネックレスを持ち上げて、彼女に聞いてみると小さく頷く。

確かに女性とカラスはキラキラしたものが大好きだ。あたしも例に漏れず、ジャラジャラとつけている。

だが彼女は人ではない。

興味を示し、美しいものを美しいと感じ、物欲を感じられるのは人間だけだ。

七つの大罪というように、欲というのは人にしかない感情。

そんな彼女がアクセサリーに興味湧くとは夢にも思わなかった。

確かにアニメの中でも猫や缶バッジなどに興味を示していたが、自分から進言するほどではない。

明らかにおかしい。何故ここまで成長している?」

疑問と疑惑。

知っている彼女と今日の前に立っている彼女は明らかにイコールで結ばれない。

「その服も、気になります」

「ん?なんか気になる?」

しかしそんなあたしの疑問なんか露知らず、彼女はあたしの胸元に視線を落とす。

なにかついているのかと思い、そこに目を向けるが、あるのは自分の胸の谷間のみ。足元が見えないほど膨らんでいる胸部には特に問題は見当たらない。

「いやいや、どこの露出狂ですか」

「ろしゅっ!」

「まあ、そう思うよな」

突然の誹謗中傷に慌てると、自分の格好をもう一度よく見る。

オレンジ色の短めのキャミソールに、白いシースルーのロングカーデイガン。

白く光沢感のあるガウチョパンツは絵の具が飛び散ったようなデ

ザインが施されており、黄色、オレンジ、ピンクの華やかな色が散りばめられている。

靴は白いスニーカー。

確かにへそは出してるし、胸元の防御力も薄いけど、前世ではこういう格好してる所謂ファッショニスタも少なくなかった。

さてよ？こういう格好してたのは2019年頃……つまりこの世界の人たちには少し早すぎるのか。

こういう時未来人は辛いな。

「言い逃れは出来ませんね、とミサカは男を寄せつけるために露出する哀れな女に冷ややかな目線を送ります」

「ファッショニー！でーすー！」

腹立たしい。

可愛いじゃないか、この格好。あたしに罪があっても、服には無いのだ。

「あと、化粧も濃いですし」

「それ女に言っちゃいけない台詞ナンバーワン！」

ジトつと向けられた綺麗な瞳は大きく、クリクリと可愛らしい。

化粧が濃いだなんて、なんてひどい台詞か。

あたしが化粧をするには二つ理由がある。

その名の通り、化ける為。

藍花悦の身を隠すためのカモフラージュ。

天羽隼糸と藍花悦は同一人物だ。そのため二人の学校の証明写真を見比べてしまえば、勘のいい人でなくともすぐにわかってしまう。

徹底的に排除した青色や、黒髪黒目などその他諸々工夫はしてあるが、できることは全てやって起きたい。

化粧もその一部だ。

とは言え整形級のメイクではないのでぱつと見違うなーくらいにしか感じない。

もう一つは価値観によるもの。

すっぴんで街を歩くんなんてあたしにはできない。なぜならそういう価値観のもと育ったから。

現世では飛び級してアメリカにずっと居たが、前世のあたしはアメリカ生まれ日本育ち。

公立の小学校に公立の中学。

高校は留学生を多く排出するミッションスクール。昔アメリカでいざこざを避ける為カトリックを名乗っていたのはある程度知識があるからだ。

そして日本のパリピ女子高生としては化粧は命よりも大事だ。アメリカの大学に入ってもその価値観は変わらない。

あたしは普通の世界で育って、彼らの価値観のもとで育った。だがこの世界は違う。

この世界の高校生はあんまり化粧をしない。

それはここがアニメの価値観で構成されているからだ。

アニメーションの中の女の子は化粧はしないし、スカートが短くたって怒られない。

ツインテールは当たり前で、ニーハイは可愛いもの、痛々しい子だとは思われない。

その価値観の違いにあたしは追いつけなかった。

化粧とズボンが何よりの証拠。

あたしはこの世界の人間じゃないのだ。

「とりあえずギャルは置いといて、アクセサリーショップまで連れていくのは構わないぜ。どうせぶらついてるだけだしな」

「はあ……それで、アクセサリー屋さんってどこ？」

少し嫌な感情が心を蝕むも、垣根くんの気だるそうな声で我に帰る。

もうツツコミをいれるのも疲れた。

「この階に1件あるな、アクセサリーって言うより雑貨屋だが」

「あそこですね、とミサカは腕を引っ張り、目的地へ急かします」

「ふふ、急がなくなつて大丈夫だよ」

妹ちゃんに腕を引かれ、ショップへと小走りで向かう。

ああ、なんだか懐かしい。

あの子と過ごした日々を少しだけ思い出す。

あの子はあのブランドが好きだったっけ。あの子はあの色が好きだったっけ。

消えかかっている記憶が、蘇る。

「キラキラしてます」

「そう、だね」

感情のない黒い瞳が微かに揺らぐ。

「あ、あれ、貴方がつけているものに似てますね、とミサカはさりげなくアクセサリーショップの中に誘導します」

彼女が手に取ったのはナイフを模したネックレス。あたしが着けているダガーを模した金のネックレスとは値段が雲泥の差だが、少し似ている。

少しだけテンションの高い彼女は嬉しそうな表情を見せる。

いや、そう見えた。

無表情ではあったが、その身振り、その声色、その瞳が感情を訴える。

訂正しよう、彼女は紛れもなく人間だった。

「オマエ、いつもジャラジャラつけてるもんな」

「でもこれ貰いもんなんだよね」

「貰い物……？」

腕にはブレスレットが右に1つ、左に2つ。

右手の小指には金色の分厚い指輪。ピアスもびっしり。

首元には金の装飾が施された緑のチョーカー。

これらは患者からの贈り物。

「うん、患者さんがたまにくれるんだ。みんなあたしに感謝してるんだってさ」

「皆さん貢ぐクンなんですね、とミサカは古い用語を嬉嬉として使います」

お高いものが大半だが、どれも大事な患者さんからの贈り物。

レジンやら樹脂やら粘土やらで自分で作るのも好きだが、やっぱり誰かからの贈り物は心が籠っている感じがしてもっと好きだ。

しかし、垣根くんはそれが嫌みたいで、話を聞くと一気に顔を歪め

た。

「……外せ」

「え？」

「いいから全部外せ」

首のチョーカーに手をかけられる。

不機嫌な声に、顰めた顔。怒られるようなことをした覚えはない。

伸ばしてきた腕を掴み、睨むように彼の烏のような黒い瞳を見つめた。

怒ったような顔。いつもとは違う表情はあたしを不安にさせる。

「なんでさ」

「……盗聴器でも入ってたらどうするんだ」

少し躊躇ってから彼は言った。

何かと思つたら盗聴器疑惑か。

あまりにも飛躍した理論と的外れな心配に思わず笑いが吹き出る。

「まっさか、垣根くんじゃないんだから！」

脳で思いついた文章をそのまま口にしてしまう。

失言だということに気づかずに。

「俺じゃなかったら？」

「あ、ヤバ、失言」

結果向けられたのは疑いの目。

やってしまった。

やってしまった！

脳と口を直結させるのは良くないことだとあの件神裂さんのことで学んだというのに！

「やっぱ知ってたんだな」

「……まーね」

口から滑り落ちた言葉は元には戻らない。

諦めて彼と向き合う。

「だって、いきなり見ず知らずの人にお高いストラップ渡してくるんだよ？ 疑うでしょ」

「ならなぜ外さない。あの時受け取らなければ良かっただけだろ」

ピンクと緑のリボン。白いくまのチャーム。
あたらしい色の配色。

たとえばこれが爆弾だとしても外すつもりはない。

「だって、たとえば盗聴器入りでも垣根くんがあたしのことを考えて選んだものだよ？嬉しいじゃん」

「……そーかよ」

少しだけ表情が和らぐが、再び顔を顰める。

「だがそれとこれとは話が別だ。外せ」

「嫌だつての」

「ワガママいうな」

「その発言、アンタにそっくりそのまま返すよー」

今日の垣根くんはいつになく頑固だ。

そんなに盗聴が嫌なのだろうか？自分はあたしにやるくせに、サレル側にはなりたくない？

自分勝手の極みみたいな彼だが、そこも彼のいいところなのでなんとも言えない。

「新しいの買ってやるから、俺の言うことを聞け」

「嫌ですけど!？」

チョーカーを外しにかかる垣根くんの腕を必死に拒むと、子供を見るようにあたしを見下ろした。居心地の悪い空間。

子供扱いしないでと言いかけるが、いまの姿高校生じゃ何を言っても無駄だ。

視線に耐えきれず、彼から目を逸らす。逸らした先には蚊帳の外だったミサカちゃんが店の前で立っているのが見えた。

「これとか可愛らしいですね、とミサカはうるさいお2人をスルーしてアクセサリーを見ます」

「ミサカちゃん、もはやツッコミもボケすらしないね？」

彼女の眼中に既にあたしたちの姿はなく、キラキラと光るピン留めを眺めている。

オレンジ色のレジンが先端に着いたそのピン止めはとても乙女チックで、オリジナルが好きそうなものだった。

やっぱり好みも似るのだろうか。

「キラキラ……ふふ……」

「買ってあげようか？」

「っーいえ、ミサカは」

じつと穴を開けそうなほどピンを見つめる彼女を隣から覗き込む。ただの少女にしか見えないほど、目の前の少女は人間らしかった。

「お姉ちゃんには甘えた方がいいよ？」

「……そう、なんですか？」

「そう、お姉ちゃんって生命体はね、妹に、弟に甘えられるために生きてるんだよ」

魚のように口をパクパクさせて慌てふためく彼女からピンを優しく奪う。

困ったような、驚いたような、嬉しいような、そんな複雑な感情が彼女の瞳の奥で燻っている。

「姉は、妹のために……」

「っーことで、お姉ちゃんに甘えなさい？」

「アイツ結構頑固だからな、諦めろ」

何とか丸め込むと、レジに向かう。

垣根くんもあたしのことを分かってきたようで、特に邪魔はしなかった。

すんなりとレジに行き、ピン留めを購入する。

外で待機していたミサカちゃんに手渡すと、嬉しそうに薄く微笑んだ。

だ。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます、と、ミサカは」

「妹を甘やかすのは姉の特権だから、当たり前でしょー？」

ミサカちゃんの発言に被せるように口を開く。

また新しく妹ができた気分だった。

この子だけは守ろう。

アクセラレータ
一方通行に殺されないように。

「ミサカちゃん、ほかに行きたいところある？」

何かをしてあげたい。そんな感情が募る。

せつかく会えたのだ、せつかく人だと認識できたのだ、もつと彼女の感情を見てみたい。

「……いえ、そろそろ別の所へ研修へ行かなくてはいけないのでここでお別れです、とミサカはピンをつけながら別れの挨拶をします」

「研修？お仕事でもしてるの？」

「明日のお仕事のために少し研修をしているのです、とミサカは簡単に説明します」

十中八九、一方通行アクセラレータとの実験のことだろう。

明日か。

それまでに実験場を突き止めないと。この子と、一方通行アクセラレータを救わなくてはいけないのだ。

姉として、ナースとして。

「そっか、これ、名刺。電話ちようだいよ、何かあつたら力になるよ」
「医療、従事者……？」

「そ、あなたが痛くて辛くて、苦しい時、連絡ちようだい？」

この間一方通行アクセラレータに渡したものと同じ名刺を渡すと、彼女はまじまじとそれを見つめた。

優しく微笑みかけると彼女は目を伏せてしまう。

10センチはある身長差のせいで彼女の表情を見ることは出来なかった。

「……覚えていたら、連絡します、とミサカはきつと連絡しないだろう名刺をポケットにしまえます」

ツツコミをいれたくなる言葉が聞こえたが、まあいい。渡したのが重要なことから。

彼女が少しでも生きたいと願えば何かが変わるかもしれない。

願いととはどんなに不利な状況でも簡単に覆ってしまうほどの力を持つ。

神にチャンスを与えられたあたしはそれを誰よりもよく知っている。

理不尽で残虐、傲慢で気まぐれな神はどんな願いでも叶える。現に

あたしは叶えられてしまった。

「んじや、またね」

「はい、さようなら」

手を振って店を離れる彼女を見届ける。

孤独な後ろ姿。あの子の姿がチラつく。

力になってあげたい。姉としてのごく当たり前な感情。

しかしその感情さえ垣根くんには見透かされていたようで、少しだけ睨まれる。

けれど不思議とその目に敵意はなかった。

「……首突っ込むんじやねえぞ」

「お姉ちゃんだから、それは無理な相談だよ」

これから先、どうやって干渉しようか。

考えを纏めながら帰路に着く。

あたしは夢を見ているのだ。大団円のフィナーレを。

彼らの笑顔を。

22話：瓜二つ

ミサカちゃんと出会った次の日、昨日からあたしは休みを貰って街中をひたすら歩いてきた。

隣にいつもいる彼はおらず、今日は1人での散歩。新鮮だが少しつまらない。

垣根くんはテレステイナの監視をしているとかで居ないのだ。

たしかに盗聴されているが、それでも実物が隣にいないのはなんだから悲しい気持ちになる。

元々はこれが正解だと言うのに。

現世 前世
今も昔も変わらない。いつも1人。

友達はいなかった。

どんなに可愛くても、どんなに綺麗だと持て囃されても、あたしにとっては妹が一番で、他の誰も平等に見ていた。

誰もが平等に「愛すべき隣人」なのだ。もちろん手伝うこともあれば、助けることだってあった。

けれど取っ付きにくいあたしは深く誰かと付き合ったことがない。

クラスメイト曰く、高嶺の花。先生曰く、八方美人。他人曰く、ビツ

チ。両親曰く、博愛主義者。妹曰く、無性愛者。

酷い言われようだ。

けれどそれが正解なのだ。

誰とも関わらず、遠くで見守り、助けるべき時に助ける。

それが正しいはずなのに。

彼がない。

それだけの事が酷くあたしの心を不安にさせる。

初めて誰かがいないことに寂しさを覚えていた。

「まったく、ミサカちゃんはどこにいるのやら……」

炎天下の中、当ても無くひたすら歩く。通気性のいい真っ白いシャツを着ていてもまだ暑い。黒いズボンが熱を吸収するせいだ。

ネガティブな感情を取っ払って休憩でもしよう。

そうだ、駅前のカフェにでも行こう。丁度良くショッピングセン

ターの近くにいるのだ、涼しい店内で美味しいケーキでも食べようじゃないか。

歩道橋を渡り、階段を降りる。何やら賑やかなガシャポンコーナーを横切り、カフェへ向かう。

「ん？」

が、見知った顔を見かけた気がして一度通り過ぎた子供達が群がるガシャポンコーナーのもとへ引き返す。

子供たちに囲まれ、ガシャガシャから取ったと思われる缶バッチを握りしめながら喜びの声を上げる御坂美琴がそこにいた。

「み、御坂ちゃん？」

「あつ、せ、先輩……」

いつもの常盤台の制服に、ルーズソックス、茶色い髪が可愛らしい中学2年生の御坂美琴ちゃん。

子供達の視線を集めながら、御坂ちゃんに話しかけると真っ赤な顔で後ろ手で何かを隠すと、慌てふためき出す。

「でかい……！」

「でつつつか……」

ある一点を凝視されセクハラ紛いの言葉を浴びせられるが、子供相手にムキになったって仕方がない。

特に何の反応も示さず、彼女の周りを冷静に観察してみる。

どうやら彼女はこの少年少女を従えてガシャポンをしていたようだ。

カゴの中に所狭しと入っているたぐさんの缶バッチがそれを教えていた。

一体なんのガシャポンに夢中になってるんだ？

彼女の後ろからちらりとそのガシャポンを確認すると、緑色の生命体が描かれたガシャポンが眼に映る。

「ゲコ太？」

可愛いのかよくわからないカエルのキャラクターがガシャポンの機械に描かれていた。

名前はゲコタと言うそうだ。

丸っこいフォルムが何処と無く前世でお世話になったマヨネーズのキャラクターに似ている。

そう言えばこのゲコ太といい、キャラクターものが好きなんだったか。

メルヘンで乙女趣味。そういえばそんな少女だった。

「おねーちゃん、缶バッチが欲しかったんだって！」

「沢山回ったらやっと取れたんだよ！」

「へー、どれどれ」

沢山回ったのは足元にある複数のカゴを見ればよく分かる。一体どれ位1万円札を消費したのだろうか。

欲しいものために全てを投げ捨てる心意気はよく理解できるし、あたしだってそんな感じなので咎めることなし。

ただ、これ程までに目当てのものが出ないとなると、彼女の幸運値が気になるところ。一体排出率何%なんだ。

財布から100円を1枚取りだし、ちやりんとガシャポンに入れる。この頃はまだ300円とかぼったくり価格じゃないのか。

「ん？なんだろう」

取っ手を回し、ガコンと出てきた丸いカプセルを手取る。微妙に曇っているカプセル越しからはよく見えず、テープを外して中身を取り出す。

缶バッチに描かれていたのは天使の羽がついたカエルの絵。

あっさり出てきた主人公に少し拍子抜けしてしまう。

「ゲコ太！」

「運すご!？」

どうやらたった一回で目当てのものを取ってしまったようだ。

驚きに満ち溢れた子供たちが羨望の眼差しであたしを見る。

「おねーちゃんが1万円以上溶かしたものを100円で……!」

あたしは昔からツイていた。

だからあの子にはスマホゲーのガチャを引かされたり、クジを引かされたりなどしていた。

今もこの豪運は健在のようで、今回のガシャだけでなく、垣根くん

と出会ったこと、冥土帰しに拾われたこと、藍花悦に成ったこと、ほとんど全てがあたしにとつてはラッキーだ。

まあ、死んだことは不幸かもしれないが、垣根くんと出逢えたのは中々嬉しいことだ。いい子だし、あたしがいれば幸せになれるかもしれないから。

そう思えるほどには彼が好きだ。勿論、姉として。

あたしは彼を幸せへと導き、死の運命を覆さなければならぬ。

「そうなの？じゃあ、はい、どーぞ」

「い、いいの!？」

御坂ちゃんに手渡すと物凄い笑顔でそれを受け取った。

運試しで取ったものだ、あたしが持つていても仕方がない。

「あたしより好きな人が持つてた方がいいでしょ？」

「ありがとう！」

手渡した同時にどこからか電子音が鳴る。自分から音が出ているのかと思いポケットからキーホルダーがジャラジャラついたスマホを取り出す。着信は愚か、通知は1件も来ていない。

ちよつと寂しい。

「あ、もうこんな時間！帰らなきゃ！」

音の出処は御坂ちゃんに着いてきた子供のうちの一人だったように、携帯を見ると焦り始める。

もう時計は17時を回っていた。

子供は帰る時間だ。

子供たちを送ることになり、バスへ大人数で歩く。

夕日が眩しいオレンジ色の空に少しだけ目が眩んだ。どこかで見た事のある光景。

これもアニメのワンシーンだったか。

デジャブのように感じる光景は記憶の柵から何かを引き出そうとするが、あやふやな記憶からはなにも思い出せない。

「今日は他の子と一緒にじゃないんだね」

「黒子は風紀委員の仕事で、他の子も用事あるみたいで」

たわいもない話をしながら道を歩く。

きつと何か起きるはず。あたしの勘とデジヤブを信じて御坂ちゃん達に同行し、バス停に歩みを進める。

「でも、こんなに貰っていいの?」

そんなあたしの腕の中には袋いっぱい缶バッチがあった。

カプセルに入ったままの景品がガチャガチャと擦れるような音が袋から聞こえる。

「取りすぎて困ってたから……」

「ありがとうね、病院で配るよ」

テレステイナーさんがこういった類のものが好きだったはず。

今や共同のものとなったあたしの研究室は最近彼女によって研究室がさらにファンシーなものになっているのだ。すこし困りはするが、彼女が幸せなら目を瞑ろう。

「御坂ちゃん?」

「なんか、変な感じが……」

ぱっと視線を袋から視線を外すと御坂ちゃんがどこか遠くを見ているのに気づく。

眉を顰める彼女だったが、彼女のいう変な感じはあたしには伝わらない。

変な感じ?」

よく分からないが、なにか事件が起こっているのだろうか。

疑問を持ちながらも歩き、バス停にたどり着く。そこにちょうどバスが止まり、子供たちはそれに急いで乗り込む。

「じゃあね、お姉ちゃんたち!」

「バイバイ!」

「じゃーね」

袋を抱えた子供たちを見送り、帰路に着こうとするが御坂ちゃんは立ち止まったまま。

「どうかした?」

だんまりとする彼女の顔を覗き込む。

先ほどの「変な感じ」が未だ引つかかっているようで、何やら難しい顔をしていた。

「変な感じがしたって場所に、戻ってみる？」

「……ええ」

多分あそこに行かないと物語が進まない。多分、ここが『超電磁砲』アクセラレータでの一方通行編の導入だ。

直感的にそう思うと2人で走り始める。

大まかなあらずじしか覚えてない今、直感と薄っすらと残る視覚的描写しか頼りにならない。

自分の勘と御坂ちゃんのを感覚を頼って先ほどの場所に引き返す。

「確か、この辺りから……」

道路を渡り、並木通りをひたすら走る。

辺りを見渡しながらマンシヨン群の近くを彷徨くと、木陰の下に人影が見えた。

木を眺める少女はゆっくりとこちらを向く。

「あ、アンタ……」

その少女は御坂美琴と瓜二つの容姿を持っていた。

同じ顔、同じ体、同じ髪、同じ瞳。全てが同じ。

頭に着いたゴーグルとピン留めだけが彼女たちを区別する唯一の方法だった。

「……みゃー」

「は？」

瓜二つの少女は脈絡もなく猫の鳴き真似をする。

突然のことに反応が追いつかず啞然としてみると、彼女は再び上を見上げた。

「と鳴く四足歩行生物がピンチです」

「ミサカちゃん？」

急いで彼女の元へ駆け寄り、彼女の視線の先を辿るように目を追うと黒い物体が木の枝に乗っているのが見える。

真っ黒い子猫が木から降りれなくなっているようで、しきりに鳴いていた。

これを眺めていたのか。姉妹仲良く可愛いものが好きなのよ。だ。
「先程、この道を通り掛かった際に路上駐車された車に取り残された赤ん坊を発見しました」

説明を求めるように御坂ちゃんが彼女を見つめると、子猫を見つめ口を開く。

「熱中症の危険がありましたので、ミサカの電力でロックを解除し、窓を開けたのですが、それに驚いたその生物が驚いて木に駆け上がり、降りることが出来なくなつたのです、とミサカは懇切丁寧に説明します」

「あー……って、そんなことはどうだっていいのよ！私はあんたがなんなのかって聞いてんじやない！」

「妹じゃないの？」

「私にこんなそっくりな妹はいないわよ！」

分からないふりを続け、御坂ちゃんに問いかけるが怒った声で怒鳴られてしまう。

勿論実際は分かっているが、わかっていることを表に出してしまつたら今度は私が疑われる。

御坂妹、2万人もいる御坂美琴のクローンのひとり。番号までは覚えていないが、1万に近かつた気がする。

御坂ちゃんが叫ぶと、小さな悲鳴をあげて木の上の猫が飛び上がった。

そのまま木から落ちかけ、必死になって太い枝にしがみつく。

何とかしないと落ちそうさ。

「どうやら、さらに危機的状況になつたようです。助けなくてよろしいのでしょうか？」

じつと御坂ちゃんの方を見つめるが、誰も子猫を助けようとしな

い。
あたしは動物なんて興味が無いし、助けるつもりは無いので、彼女たちが何とかしなきゃいけないのだが。

「ちつさくてもネコなんだから、あのくらいの高さ大丈夫よ！それよ

り！」

「そうですか、お姉様はあの生物が地面に叩きつけられても一向に構わないというのですね」

「その結果、大きな怪我をして機能障害がでて、生命活動を停止しても、関係ない」と

猫を無視してミサカちゃんに詰め寄るが、暗い瞳でオリジナルを責め立てる。

「自分で助ければいいじゃない?」

だが、それが私には通じない。丸め込まれることはない。

というのも、木をよじ登るなり、救急に電話するなり、やりようはいくらでもあるはずなのだ。

ただ突っ立っているだけなのは如何せん良い行動とは言えない。行動を起こすことこそが、大事なのだ。

「あそこまで手は届きません」

「いや、登ればいいじゃん……ったく、あたしがやるから、よく見ときなさい」

どことなく悲しみながらミサカちゃんは言う。

その顔になんだか複雑な気分になり、子猫を助けるために木に足をかける。

人はいないのでまあ大丈夫だろう。

軽々と木によじ登り、子猫の首根っこを人差し指と親指で摘まみ上げる。

野良猫は可愛い顔して感染症が多いのだ。猫ひつかき病にマダニなど、野良猫を触るのはオススメしない。

中にはアルコール消毒でも殺菌できなかったりするのだ、一度かかると治すのが面倒。

なら最初っから最低限の接触で済ませるべき。

「つと、はい」

「そういった乱暴な掴み方は如何なものかと」

「あたし動物あんま好きじゃないの」

猫を摘み上げ、地面に降り立つとそのまま猫を地面に下ろす。

ムツとした表情を向けられるが、仕方がないじゃないか。

病気を抜きにしても、そこまで動物が好きじゃないのだ。

嫌いと言うのは少し違うが、あたしは人間以外の生物に愛情をミリ単位も感じられなかった。

興味が無い。それに尽きる。

「え、意外……アレルギーでもあるの?」

「そーじゃないけど、なーんか、嫌いなんだよねえ」

なぜかは分からない。

もはや本能のようなものだった。人以外の全てが嫌い。

猫も、犬も、牛も、馬も、鹿も、山羊も。

愛する人間以外の生物なんて、興味も愛もない。

強いていうなら神くらいだ、感情を持っているのは。

愛憎、嫌悪、様々なものが混じった汚い感情は今のとこ神とあたしにしか向いていない。

「でも貴方に懐いてるようですね」

「うっわ、よじ登るな」

下ろしたはずの真っ黒い子猫がズボンに爪をひっかけ、よじ登ってくる。

まだ子猫だからか爪による痛みはないが、懸命によじ登り、胸元へ駆け上がってくる。

「動物に嫌われる体質から見ると羨ましいけどね」

「あー、電磁波だっけ?」

胸元にしがみつくと猫に触れようと御坂ちゃんが手を出すが、嫌がってさらに上へ昇ってくる。

そういえば電気系統の能力者は動物に嫌われやすいんだっただか。

動物が嫌がる電磁波がでるとか出ないとか。

……いや、嫌がるって何。

低周波の電磁波はほとんど人体に影響がない。人間に害を及ぼしてないことと、携帯電話をちゃんと使ってるってことは低周波。どう考えても wireless router くらいの電磁波でしょう? そんな嫌がるほどなわけ?

わからんな。

猫が電磁波を嫌がるというのなら人間に寄り付かないだろうし。

そういえば猫が今のように進化したのは人間に餌を与えてもらうための論文があった。その説が正しいと仮定すると、電磁波を嫌がるのならそんな進化しなくないか？

……まあいい、どうせサイエンス・フィクションなのだ。考えたつて時間の無駄。

猫が死のうが嫌おうが興味はクソほどない。

「そうそう、電気使いの宿命ね」

「ミサカもダメなようですね」

2人の御坂による電磁波に子猫は怯え、胸元で丸くなってしまう。驚いた、本当に電磁波がダメなのか。本当にこの世界の常識は違うのだな。

垣根くんっぽく言えば「この世界にあたしの常識が通用しねえ！……ネガティブな意味で。」

前世でこれについて研究してたらなんかの賞でももらえただろうか。まあ前の世界の技術力じゃ解析できないだろうな。無理だわ。

「タピオカチャレンジみたいなことなってる……」

「たぴっ？」

「つて、そうじゃなくって！」

白いシャツの上に丸くなった子猫はどことなく震えてる。

そんなこと御構い無しに黒い子猫を持ち上げ、地面へ下ろすとトテとテとどこかへ走り去る。

毛だらけになったシャツを軽く手ではらうと目的を思い出した御坂ちゃんが大きく声を張り上げた。

「さつきからお姉様とかミサカとか！アンタ、私の、ク、クローンなわけ!?!」

「はい」

先ほどからずっと聞きたかった質問をぶつけるも、クローンだと肯定した少女は無表情で答える。

「あっさり……」

「クローンねえ……でもあんま似てないね」

一番違うのはその声だ。そっくりな顔はしているが声質が微妙に違う。

この違いはどうして出ているのだ？

気づかないように能力を展開し、二人の肉体の情報を見比べる。DNAマップ、つまりヒトゲノムを解析して全く同じDNA配列の生命体を生み出したわけだが、なぜか少しだけ違いが出ている。

声の違いと脳細胞が少しだけ違う。

まず前提として、この世界のキャラクターたちはアニメと全く同じ声を持っている。

垣根くんはイケメンボイスだし、上条くんも力強い声を持っている。一方通行もあの特徴的な声で確信したようなもの。

そして御坂美琴とそのクローンもだった。

彼女たちは声優、いわゆる中の人が違う。

なので声帯や口腔の構造に違いが見られるのだ。

そして脳細胞の発達具合も違う。

これに関しては自分だけの現実が関係しているのだと仮定できるが、声の違いはどうしても答えが見出せない。

知らないところで改変が行われている？

それも極力関係のないところで？

……調べる必要があるそうさ。

「れ、例の計画とやらは凍結されたはずでしょ？なんで、なんでアンタみたいなのが存在すんのよ！」

「ZXC—741—ASD—852—QWE—963」と、ミサカはパスの確認を取ります」

「パス？」

体内の情報を見ているうちに話が進んでいた。

危ない危ない。パスを記憶しておかなくては。

長いがまあ覚えられない訳ではない。記憶力に自信はある。

だが、前世の記憶があやふやな今、あんまり胸を張って言えないのだ。なので心の中に留めておくだけにしておこう。

「やはりお姉様は実験の関係者ではないのですね、先程の質問にはお

答えできません」

「どこのどいつが計画を主導してんの？」

少しだけ寂しそうに感じるミサカちゃんにズバズバと御坂ちゃんが質問していく。

「機密事項です」

「なんのために作られたわけ？」

「禁則事項です」

「痛い目に会いたいの？力尽くで聞き出したって……」

しかしどれもこれものらりくらりとかわされてしまい、苛立つと勢いよく胸倉を掴み御坂ちゃんは自身のクローンに詰め寄る。

迫力のある声で無理やり口を開かせようとするが、それにクローンの少女はそれに全く動じなかった。

その姿に何か思ったのか手を放し、押し退ける。

「いいわ、行きなさい、勝手にあとをつけさせてもらうから。どうせアンタはどっかの施設なり研究所まで帰るわけでしょ？そこでアンタの製造者をとっ捕まえて直接話を聞き出してやるわ」

それを聞くとミサカちゃんは何事もなかったようにその場を離れてどこかへふらふらと行ってしまった。

「よくわかんないけど、妹ちゃんはクローンで、実験に使われてるってことでいいのかな？」

「……先輩には関係ないわ」

とりあえず何も聞かなかった事にはできないので、一応御坂ちゃんに確認をとっておく。

この事件に首を突っ込む気にいるので、ここで接点を持つておけば変に勘繰ることはないだろう。

「そう？クローンなんて如何にも医学に通ずるあたしの分野じゃない？」

「危険だから、着いてこないで」

「まあまあ、お姉ちゃんを頼りなさいって」

御坂美琴はある程度あたしを知っている。

幻想御手の件といい、なんとなくでもあたしの行動原理を知ってい

る。だからこそ彼女はあたしを止められない。

笑顔で答えると、諦めたように彼女はため息をつく。

「妹達……」

彼女の隣に立ち、前を進むミサカちゃんを追跡する。

ぼーっと歩く彼女からは殺伐とした裏の世界を感じることはなかった。

「それが計画の名前？」

実際の計画は概要しか知らない「一方通行を絶対能力者にしよう計画」だが、知らないふりを続ける。

2万ものクローンを破壊することで絶対能力者に到達するという話だが、本当だったのだろうかと少し疑ってしまう。

二万程度の敵を殺したところでレベルアップができるものなのだろうか。ゲームは妹にレベル上げを頼まれた数種しか知らないが、そんな方法で現実世界でもレベル上げができれば苦労しないだろう。

確かアレイスターはクローンそのものが必要なんだったか。そう考えると一方通行くんの計画って嘘なんじゃ？

あんまり知らないので憶測でしか語れないが。

「……私の軍用クローンを作るとかで」

「軍用かあ、それはそれは、面白いことで」

もういつそのこと巨大アルマジロでも作ったほうが強そうな気がするけどね。防弾も攻撃力もあるし異能力者よりは結構いいのでは？

……いや、それをしてしまうと怪獣大戦になってしまうな。見てみたい気がするが、考えるのはやめておこう。

軍用そのものもフェイクみたいなものだし、深く考えちゃいけない気がする。

「ん？妹達？……ちよ、ちよつと！」

何かに気がついたのか御坂ちゃんは前を歩く少女の元へ駆け寄り、回り込んで彼女の肩を掴む。

「まさかとは思うけど、アンタみたいのが5人も10人もいるんじゃないでしょうね！」

ああ、そうか。まだ2万人もいることを知らないのか。自分が2万人もいたら世界中で人助けができるな。

あたしのクローンでも作ってくればよかったのに。こき使うんだけどなあ。

そんな考えが浮かぶ中、少女の大声が耳に入る。御坂ちゃんとミサカちゃんが二人でなにやら話している。

「ふふふ……こねこ……上から読んでもしたから読んでもこねこ……ふふふ」

「つて、くだんないこといってないで聞けよ！」

言い争う二人は本当の姉妹のようでとても懐かしい気持ちにさせる。

おぼろげな記憶を一つ思い出す。それは中学生の頃の話。

中学二年のあたしに、小学二年の妹。毎日の登下校、車椅子の重さ。

昇る朝日に、落ちる夕焼け。

思い出は断片的で、もう全てを思い出すことはできない。

あの子の顔もわからないほど記憶が欠落し始めていた。私が蝕まれていく。

それでも心臓に刻み込まれた想いがあの子の存在を忘れさせないでいた。

「まるで双子だねえ」

「血どころか遺伝子を分けてるんですけどね……」

疲れ気味の御坂ちゃんと未だにニヤケ顔のミサカちゃんの顔は寸分の狂いないほど似ている。

ミサカちゃんの方が少しだけジト目気味な気もするが、全く一緒の顔がこうも並ぶと少し面白い。

「とりあえず、カフェでもいく?」

落ちる夕焼けを背に提案すると、二人は顔を見合わせて頷いた。

賑やかな少女たちと、ちよっぴり感じる寂しさを胸に私は太陽が眩しいを道を歩く。

夜はまだまだ来なさそうだ。

23話：九九八二

「なかなか美味しいミルクティーでした」

20:30、夜の帳が下りる頃、たわいもない世間話を交えながらあたし達は街頭に照らされた歩道を歩く。

日は落ち、着々と夜に塗り替えられていく空はビルの光によってかき消され明るさを保っていた。

「好きなの？ミルクティー」

「ミサカはミルクティーにはうるさいのです」

未だ無表情を保ちながら波のない声で言うが、そこに少しだけ感情の動きを感じ取る。

「そっか、今度はもつと美味しいとこ探しとくよ」

「いちごショートケーキも美味しかったです、とミサカは率直に感想を述べます」

これは垣根くんに美味しいケーキ屋さんに聞かなくてはいけなくなりそうだ。

ゆっくりと三人で人工的な光が眩しい道を歩んでいると、突然後ろで静かにしていた御坂ちゃんが口を開く。

「ねえ……アンタ、いつになったら帰るのよ」

3時間くらいはカフェで駄弁っていたが、一向に妹ちゃんは帰る気配が無い。

まあそうだろう。これから彼女は死刑されに行くのだ、帰る場所はない。

「言い忘れていましたが、ミサカはこれから実験に向かうので施設へは戻りません」

「はあ?」

「お姉様があとをつけるのは自由ですが、ミサカの創造主には会えませんが」

今になって衝撃の事実を言い放つ。元々知っていたので特に驚くことは無いが、何も知らない御坂ちゃんは目を丸くしてしまう。

確かに彼女は帰るなんて一言も言っていない。

「なんで今頃……」

「聞かれませんでしたので」

「確かに」

結構おちやめなところもあるのか？

会えないという事実を言わないことによるメリットはそうそう多くない。強いていえば御坂ちゃんをからかえること、そして長く彼女と会話出来ることくらい。

クローンなんて合理的な判断を下すものと思っていたが、この光景を見ると人間にしか見えない。

少し肩を落とすと、御坂ちゃんがポケットから何かを取り出す。真っ白い電子辞書のような機械。たしか小さいパソコンだったか。

ポケットからそれを取り出すと同時にカランと音を立てて緑色の何かが落ちた。

「それはなんですか？」

それは先程のガシヤで手に入れた缶バッチのうちのひとつ。

天使の羽を背負ったカエルのキャラクターがプリントされたその缶バッチは個人的に可愛いと思えるものではなかった。

「いや、ガシヤガシヤでとった景品だけど……あ」

「なんででしょう？」

「いいからじっとしてなさい」

妹の前にしゃがみ、缶バッチをサマーセーターに付ける。

「うん、鏡で見るより客観的でわかりやすいわね、こうしてみると結構アリって気も……」

「いやいや、ねーだろ、とミサカはミサカの素体のお子様センスに愕然とします」

セーターの端についた缶バッチをまじまじと眺めると、ミサカちゃんのはため息をついた。

確かに余りみないファッションではある。

基本缶バッチはカバンや帽子につけている子が多いし、服じゃなくそういったものに付ければいいのに。

……まあ、セーラー服にピンをつけてカバンに缶バッチもシールも

キーチェーンも何もかもつけているあたしが言っただって説得力はないか。

というか缶バッチを服につけるファッションって2010年代に流行ってたな……

ジーンズやらシャツやらにごちゃごちゃにつけていた記憶がある。2012年頃か？あたしはその頃高二か。今よりひとつ上だったな。ということは時代の流れとしては御坂ちゃんの感性は正解ってことか。現代人のあたしは古臭い^{2020年没}としか思わないが。

「な、なにおう!?!じよ、冗談に決まってるでしょ?!ちよつと試しにつけてみただけよ!」

お子様センスと罵倒され、すこしビクツとした御坂ちゃんだったが、気を取り戻し缶バッチを外そうと妹ちゃんのサマーセーターに手を伸ばす。

しかし哀れにも伸ばした手は罵倒したミサカちゃん本人によって叩かれ、缶バッチに触れることは無かった。

「ん?」

それに一瞬不思議に思い、御坂ちゃんは妹にもう一度手を伸ばすが、また手を叩かれてしまう。

真つ赤に腫れた手は痛そうだ。

缶バッチをめぐる不毛な攻防戦はしばらく続き、決着がつかないまま御坂ちゃんは大声で叫ぶ。

「つて、なんなのよー!」

「ミサカにつけた時点で、このバッチの所有権はミサカに移ったと主張します。お姉様の行為は強奪であると思います」

「何よその屁理屈!」

「まあまあ、いいじゃん、もう一個あるでしょ?」

可愛らしい姉妹喧嘩を止めに入る。

あたしの言葉に渋々御坂ちゃんは食い下がると、ミサカちゃんは改めて缶バッチを手にとった。

「お姉様からの初めてのプレゼント……もう少しマシなものはないのでしょうか、という本音を胸にしまってミサカは嘆息します、

はあ……」

「やつぱ返せ！」

プレゼントというものに感情が揺さぶられたのだろう。悪態を吐きながらも大事そうに缶バッチを触って居た。

嬉しそうな顔に掛かる茶色い髪の毛にはオレンジ色のピンがキラキラと顔の横で光を反射していた。

「そういうえば、この間あげたやつ付けてくれてるんだね」

「誰かからの初めてのプレゼントですので」

なんとなく嬉しそうに語る彼女を見てひとまず安心する。

髪に付けられたキラキラと輝くそのピン留めは彼女の心に残るようなものになったようだ。

それだけで心が満たされる。誰かから貰ったものは、たとえどんなものでも嬉しいのだから。

心がなければそれは感じることはできない。

よかった、彼女は人間だ。

人間ならばあたしは愛せる。大丈夫、あたしは彼女を愛せる。

「え？アンタたち知り合いだったわけ？」

「ああ、昨日ナンパされたの」

「ちげーだろ、とミサカはすかさずツツコミを入れます」

特に考えもせずこの間のことを話題にあげると、御坂ちゃんが目を丸くした。

そういうえば知り合いだということは一切話していなかった。カフェで話していたことは大抵甘味の話だったし、そもそも話す必要がないと思っていたのだ。

「ナ、ナンパ？」

「まあ冗談だけど」

彼女との遭遇は偶然によるもので、どうやって知り合ったのかを説明するのはめんどくさいし、何よりかなり嘘くさい事実なので、言わない方がめんどくさい事にならないだろう。

適当に誤魔化すと、御坂ちゃんは意味不明とも言いたげな目をする。

「……もういいわ、今日のところは失礼させてもらおうわ」

ひとしきり質問すると彼女はあつさりと尾行を諦め、帰ろうと後ろを向いてしまう。

だがそんな彼女にミサカちゃんが「あ」と小さく声を漏らす。

「まだなんかあんの？」

「……いえ、さようなら、お姉様」

「ああ、うん、じゃあね」

その小さい声に振り向いた御坂ちゃんだったが、別れの挨拶をした妹に特になんの疑問も持たず、そのまま帰ってしまった。

「貴方は帰らないんですか？」

完全に彼女の姿が見えなくなると、ミサカちゃんが口を開く。未だ彼女のそばに立つあたしを見上げる。

どこことなく不思議そうな表情を浮かべる彼女の両腕を掴み、屈んで視線を合わせる。

女子中学生にしては背が高い彼女だが、あたしにとっては小さい。

「貴方がこれから何をするのか、あたしは少しかわかってるつもり。これでも学園都市の暗い部分を知ってるからね」

「……」

「だからあなたが傷ついて、死にたくないって思ったら電話して？」

じつと暗い瞳を見つめる。

名刺、渡したよね？と聞くと人形のようにコクリと頷いた。

「もつとも、電話がなくても行くけどね」

腕を離してふたたび背筋を伸ばして立ち上がる。

「また今度、紅茶飲みに行きましょう？」

自分に来る一番の優しい笑顔を彼女に向けると、ミサカちゃんは軽く視線を外して顔を伏せた。

「……ミサカは」

「お姉ちゃんに甘えていいからね」

優しい言葉をかけても、彼女の表情は変わらない。

「覚えて、おきます」

「またね」

「……さようなら」

消え入りそうな声で呟くと、ぺこりと会釈をして帰ってしまった。

「さて……調べようかな」

彼女の背中が見えなくなると直ぐにスマホを取り出す。

ロックを解除し、メッセージアプリを起動する。

「さあ、どちらに連絡しようか。」

一瞬迷ったが、彼に頼むのは得策ではないな。

出番のない彼女に頼るほかあるまい。

「見てくれるかなあ……」

メールに先ほどのパスを添付し、送りつける。今の時間ならまだパソコンを弄ってるはずだ。

一分と少し経ち、メールではなく、電話の着信音がスマホから流れてくる。

慌てて電話を取ると、気だるそうな声がスピーカーから流れてきた。

「あ、もしもし？テレステイナーさん？」

「おい、今のメールの意味はなんだ」

声の主はテレステイナーⅡ木原Ⅱライフライン。

今現在あたしの研究室でお手伝いをしてきている心優しい女性だ。

「あ、ちよつと待って。そこに垣根くんいる？」

「は？居ねえけど。木山んここに話聞きに行ったぞ」

本題に入る前に垣根くんの所在を聞くと、彼女は簡潔に答えた。彼がないなら都合がいい、このまま電話を続けよう。

電話してるところを彼に聞かれると厄介なことになるのは確かだ。

うちの病院でまだ入院中の木山さんのもとに行っただのは少々疑問だが、特別気にすることでもないだろう。

「で、なんだよこれ、セキュリティランクAの情報じゃねーの？」

「うん、それを抜き取ってあたしに送って欲しいの」

優秀な木原で、暗部を知っている彼女ならハッキングくらいよちよいのちよいだろうという考えで彼女にパスを送りつけたのだ。

それに、今回は垣根くんに頼ってはいけない。盗聴されているのは分かっているが、それでも彼に前回のようハッキングの手伝いをさせてはいけない。

前回はテレステイナーさんの件だったから手伝ってもらったが、今回は一方通行だ。アクセラレータ

垣根くんは暗部の少年。そして彼は10月に一方通行と直接対決するのだ。アクセラレータ

彼を巻き込んで物語の道筋を大きく変えるわけにはいかない。

ある程度物語の枠からはみ出ないようにしないと、後々取り返しのつかないことになるかもしれない。

それこそ彼の死が確定されてしまう可能性があるかもしれない。

だから今回こそ彼は連れて行ってはいけない。

「……あー、なるほどな、はいはい、ちよつと待ってろ」

「ありがとう！大好き！」

「羽のように軽い好きだな、まあいいが」

何となく話が分かったのか、特にツツコまれることなく、彼女は了承してくれた。

持つべきはマッドサイエンティストの同僚だ。

しばらく沈黙が続き、スマホ越しに彼女のキーボードの入力音だけが聞こえる。

「で、どう？出来そう？」

「木原だぞ？これくらい秒殺だ。おら、データ送るぞ」

5分も経たないうちに彼女はデータを調べあげたようで、ピロンと耳元のスマホからメールの着信音が鳴った。

電話を切ったら直ぐに確認しよう。

「ありが——」

「天羽、なんでこの研究をお前が知っている？」

「……紆余曲折あってね」

通話を終えようと口を開けかけたが、テレステイナーの問いでそれは塞がれる。

彼女の質問に答えてあげたかったが、時間もないうえ、話すと長く

なるので適当に誤魔化すと舌打ちが耳元から聞こえた。

「これは暗部の実験だ、テメエみてえな弱つちいのはすぐ殺されるぞ」
「大丈夫、流石に第一位に勝てると思ってるから、事が済み次第逃げるよ」

今のあたしでは一方通行くんには勝てない。ほぼ不死身とはいえ、彼に一撃を加えることは無理なのは明白。

絶対死にはしないが、勝てない。

それにあたしが彼を傷つけることを許さない。

たとえ彼が忌々しい神と等しい力を持つていたとしても、彼が人間である限りあたしは彼を愛するのだ。

「……まあいい、あのクソガキには言わないでおいてやる」

「何から何までありがとう、明日なんか奢るよ」

ニッコリと笑顔を作って笑いかけると、見えていないはずの彼女はそれを察したようにため息をつく。

垣根くんに配慮していただけるのはありがたいが、どうせバレてる。

とはいえパスをメールで送りつけたので盗聴されていないし、「なんか怪しいことやってるな」程度にしか思わないだろう。

彼に何から何まで把握されるわけにはいかないのだ。

「いや、いい。その代わり何があったのか鮮明に教えろよ、少し興味が
ある」

「分かった、ありがとうね」

感謝を軽く伝えると、何も言われずに通話を切られる。全く、照れ屋なんだから。

メールボックスを確認し、送られてきたデータを確認する。

やはりテレステイナを病院に連れてきたのは正解だったようだ。こういう時に暗部を知る人が垣根くん以外にいと何かと便利だ。

メールに添付されていたデータファイルを開き、ぎつと目を通す。

『シスターズ妹達』を運用した『絶対能力者絶対能力者』への進化法

――学園都市には七人の超能力者が存在するが、ツリーダイアグラム

への予測演算の結果、まだ見ぬ『絶対能力者』へとたどり着くものは1名のみだということが判明した。

—この被験者に通常のカリキュラムを施した場合、『絶対能力者』に到達するには250年もの歳月を要する。

—我々はこのプランを保留とし、実践による能力の成長促進を検討した。

—特定の戦場を用意し、シナリオ通りに戦闘を進めることで成長の方向性を操作する。予測演算の結果、128種類の戦場を用意し、『超電磁砲』を128回殺害することで『絶対能力者』にシフトすると判明した。

—しかし、『超電磁砲』を複数確保するのは不可能であるため、過去に凍結された『欠陥電気』計画の『妹達』を流用してこれに代えることとする。

—本来ならば『不死者』に協力を要請するはずだったが、同じ戦闘パターンしか生み出せない『不死者』には不可能であり、クローン製造技術の大元は『不死者』の応用により出来ているため、要請は難しいと却下された。

—武装した『妹達』を大量に投入することでスペックを埋めることとし、2万体の『妹達』との戦闘シナリオをもって『絶対能力者』への進化を達成する。

アニメで見ていた通り、2万体制にも及ぶ第3位のクローンの殺害により第一位はレベル6に至ると書いてあり、驚きはしなかった。

ただ、アニメにはなかったと思われる一言があたしを揺さぶる。

同じ戦闘パターンしか生み出せない『不死者』には不可能であり、クローン製造技術の大元は『不死者』の能力の応用により出来ている。

様々な大人の思惑が渦巻く憎たらしい実験計画のレポートの中でその一文が心に突き刺さった。

：『不死者』？なんでここにその言葉が？

その疑問が頭を支配する。

声の違い、筋肉量の僅かな差、想定よりも遥かに豊かな感情。原作と食い違うクローンの姿。

ああ、納得がいった。

その全ては恐らくあたしの能力を根幹としたクローン製造技術によつて生まれたものだ。

あたしの能力は演算が複雑で繊細、科学に应用するときつと誤差が生じる。

ではなぜあたしの能力が使われたのか。

仮説だが、この世界がアニメの世界をベースとして作られたものと仮定すると、声の違いというクローンにはありえない違いが出てしまう。そこで神がキャラクターの設定を守るために話が壊れない程度に無理やり根幹を変えた……というのが一番筋が通っている気がする。

もつとも、これがVRや水槽の脳が見る夢ならば話は変わってくるが。

しかし、まさか生きてるだけで改変が行われているとは。

それに、「同じ戦闘パターンしか生み出せない『アンデッド不死者』には不可能」
だなんて。

思わず乾いた笑みが浮かぶ。

あたしが、できないと？

あたしに不可能があると？

永遠の命を持つあたしが、使い捨てと比べられると？

消耗品に、あたしが劣ると？

憤怒が混じった傲慢な感情が湧き上がる。

学園都市直々の安っぽい挑発はあたしを苛立たせた。

「着信は、無いね」

レポートを眺めるのに夢中で少し時間が経ってしまった。イラつきながら、時間を確認すると、21時になったところだった。

相変わらずスマホに着信はなく、少しだけ落胆する。

「現世への未練を少なからず作れたと思ったのだけど、無理か。強引でもいいから感情を作らせとくべきだったかな」

感情を生み出すきっかけ作りようはいくらでもある。

アドレナリンを分泌して興奮状態にして擬似的な恋愛感情を作ることでもあるし、脳にストレスを与えて涙を流せることも、悲しませることも出来る。

扁桃体や前頭前野に刺激を与え、悲しみならノルアドレナリン系、幸せならドーパミン、脳内麻薬を使えば感情を取得することなんて簡単だ。

心に存在する感情を揺さぶることはあたしでもできる。その感情が本物かどうかは別として。

もう少し強引にでも改変を行うべきだったか。

きつかけ程度ならいくらでもやりようはあったのだ。

「はたしてクローンに想いはあるのか」

解明されていない感情という複雑なシステムはクローンに存在するのだろうか。

持論だが、心、意識、感情と呼ばれるものは心臓にあると考えている。

脳を操ったって、心臓を動かせられなきや意味がない。だから今まで彼女の肉体に干渉してこなかった。

「さてと、行くか」

そろそろ実験が始まる。

21時を示す腕時計を見つめ、息を吐く。

得た情報と、スマホの地図アプリを駆使し、実験現場から最も近いコンテナ置き場に向かう。

間に合うことを信じて。

街頭もない暗く広い空間で少女は息を切らしながら走る。

茶色い髪についているピン留めは反射する光がなく、鈍い色をしていた。真つ暗な砂利の上、少女こと御坂美琴の9982番目のクロールはコンテナが積まれたこの広い空間を懸命に走っていた。

「逃げる逃げる、その分だけ長生き出来るからよオ」

後ろから聞こえるのは悪魔のような人の声。

「なんせ、こいつは命懸けの追いかけてっこだからなア」

真つ白い髪、真つ赤な瞳。

「追いつかれたらゲームオーバーだぞ？」

どこか浮世離れたその人物は9982号を追いかける。

「おつせエ」

後ろにいる鬼、アクセラレータ一方通行が放った見えない風はその少女の体を吹き飛ばす。

骨が軋むほどの衝撃がその薄い体を走り抜けた。

「かつ、はあっ……」

「寝っ転がってる暇なんざねエぞ」

息を整え、フラフラとした足取りで立ち上がろうとするも足元がおぼつかない。

「オイオイ、もう壊れちまったのか？つまんねエな」

しかしそんなことはどうでもいいと言うようにアクセラレータ一方通行は彼女にゆっくりと近づく。

「こんなんでも本当に絶対能力者になれんのかねエ」

アクセラレータ一方通行がこのような実験に協力するのにはわけがあった。

それは誰しもが夢見る絶対能力者への到達。

最強ではなく無敵。

溜息をつきながら歩みを進めると、今の今まで死にかけていた少女はが立ち上がり、コンテナの向こう側へと走り去ってしまう。

「あ？いいねエ、渋いじゃねエか、そう来なくっちゃよオ」

余裕の笑みを携えて彼はコンテナへと向かう。

ゆっくりと歩く彼からは見た目とは違い、強者の風格が漂っている。

角を曲がり、クローンが走り去った場所へ目を向けるとそこには少女が己から逃げようと走っていた。

その背中に能力によつて操られた衝撃を飛ばすと、9982号は呆気なくその場に倒れ込んだ。

「どうしたどうした？そろそろへばつちまったかア？それとも、もう諦めちまったのかなア？」

「ミサカ、は、目標の能力を、正確に、把握出来ていません、が、これまでの実験結果から、周囲にバリアのような、ものを、張り巡らせていると、推測、します」

歩いてくる鬼に怖がりもせず、少女はその場に倒れ伏したまま口を開く。

「目標が、地に着けて歩行していることから、下方、少なくとも足裏には能力は展開されていないと、思われるため、そこからの奇襲が、最も有効であると、結論、付ます」

「なアにぶつぶつ言ってるんだア？逃げねエなら終わりにすんぞ」

「逃亡では、ありません」

力強い声だった。

腕の力を振り絞り、上半身を起こすといつものような無表情でアクセラレータ一方通行を見据えた。

「計画通り、目的地への誘導を達成した、とミサカは訂正を求めます」

瞬間、アクセラレータ一方通行の足元から火薬の匂いと共に大きな音と爆風が巻き起こる。

「目標、完全に沈黙」

爆風、熱量、その他もろもろを考慮してもきつと鬼は死んだだろう。

そう思つて安堵から警戒を解いてしまう。

「ギンねエン」

しかし、煙の奥から真っ白い髪の毛の鬼が現れる。急いで距離を取ろうとするも、足を掴まれ地面に貼り付けられてしまった。

「テメエの考えは、てんで的外れなんだよオ！」

「あつああー！」

あらゆるベクトルを操るその人は、非力な見た目に関わらず、そのモルモットの左足を股関節から引き抜いてしまう。

今まで感じたこともないような強烈な痛みが神経を伝い、脳に信号を送る。

大量の血液と肉片が散らばり、引き千切られた左足は宙を舞って遠くへ投げ捨てられてしまった。

「っ！」

痛みにより痺れた脳は案外言うことを聞くようで、痛みにもがき苦しむ暇もなく彼女は電撃を撃ち放つ。

しかし一方通行にはその程度の攻撃は通用しない。

その電撃のベクトルをも操り、逆に9982号の体にその電流が流れた。

セーターに付けられた缶バッチが電気によって外れ、コロコロと彼女の後ろに転がってしまう。

そのまま力なく倒れ、地面に顔を埋めた。

「プレゼント、ふたつめの、プレゼント」

そう呟きながら彼女は必死に腕を動かし、落ちてしまった缶バッチを拾いにいく。

芋虫のように体をくねらせ、缶バッチを手にとると少しだけ口角が上がった。

「お姉様と、天羽さんからの、プレゼント」

その次に手を当てたのは彼女の髪に付けられたピン。

それは初めて貰ったプレゼントだった。本物の姉からもらった缶バッチとは違い、大人びたそのピン留めは彼女にとっては大切なもののひとつだった。

缶バッチとピン留め。2つもある大切なもの。

彼女はどの個体よりも恵まれており、なおかつ感情を芽生え始めていた。

走馬灯のようにここ2日の記憶が蘇る。

天羽彗系に話しかけたのは何も偶然ではなかった。

無意識のうちに彼女は天羽彗糸がクローン技術の生みの親である藍花悦だと感じたのだ。

それはもはや理論を超えた何か。運命と言える代物だった。

彼女の言葉が録音テープのように一言一句間違えないで脳に響く。

―あなたが痛くて辛くて、苦しい時、連絡しようだい？

―あなたが傷ついて、死にたくないって思ったら電話して？

―お姉ちゃんに甘えていいからね

―お姉ちゃんって生命体はね、妹に、弟に甘えられるために生きるんだよ

どろどろと砂糖のように甘い言葉の数々。彼女の言葉は救いを求める者にとっては甘美な果実のようだった。

甘えてしまいたくなるのも当然か。

「ふ、ふふ、ミサカは、電話なんて、持ってませんよ」

しかし彼女にはそのすべはなかった。

全人類のお姉ちゃんと豪語する頼もしい存在に甘えたくても、することは無かった。

何かが持ち上がったような大きい音がすると、猛スピードでその物体が彼女を目掛けて飛んでくる。

影がかかる。ぎゅつと缶バッチを握りしめ、彼女は逃げようともせず、その場に座り込んでいた。

死を覚悟し、目を瞑る。

だがいつまで経っても痛みはこなかった。

アクセラレータ一方通行の照準が間違ったわけでも、彼女が逃げた訳でもない。

恐る恐る目を開けて頭上を見上げると、一人の女性が立っているのが見えた。

「ごめんね、気づかなくて」

何トンにも及ぶ巨大な車体から細い腕でその人は9982号を守っていた。

金色と桃色の髪、赤みがある翠の瞳、真っ白なノースリーブのシャツ、黒のズボン。

大人びた服装の女性は先程別れを伝えた人だった。

「電話持ってなかったんだ、そりゃー電話出来ないよね」

「あな、たは」

彼女は笑顔を向けたまま巨大な鉄の塊を2つの腕で下から持ち上げている。

腕からは骨の軋む音や血液が流れ落ちるが、不思議なことに痛みが脳に伝わる前に全て治っていく。

「神はまだあたしの味方のようなね」

「デメエ……この間の」

その光景に少しばかり一方通行は驚きと焦りの声を上げる。

この能天気な女には見られなくなかったと。

「つたく、おつもい！」

体を大きく動かし、持ち上げていたトラックを空中にぶん投げる。

轟音と突風を巻き起こしながらそれが地に落ちると、彼女は一方通行をそのオリーブ色の瞳で捉えた。

「……ナニモンだ」

「全人類のお姉ちゃん、みんな大好きなナース様よ」

天使に見間違えうほど慈愛に満ちた大人びた笑顔を彼女は殺人鬼へと向ける。

沢山の命を奪った白髪の子供はその笑みに少し気味の悪さを感じた。

「こういう場合どーすんだ？二人仲良くあの世へ導いてやればイイのかア？」

その笑顔を血に濡らしたいと心の奥底で破壊衝動が生まれる。何もかも包み込むような天使の笑みは、今の一方通行には毒だった。

神に等しい力を振るうその子供には天使による救いの糸はプライドを傷つける代物だ。

「一方通行くん、殺すならあたしだけ殺しなよ」

「あア？何言ってんだ？」

彼女は一度しか会ったことのない一方通行にその命を差し出す。

不死性への絶対的な自信、命を平等に見ない彼女だから言えることだった。

彼女は人以外の生物にその価値を見出せなかった。
だからこそ自分の命をいとも簡単に投げ捨てられた。

彼女は自分を人として認識していなかった。

「君が無敵になるまであたしを殺してご覧」

「は？」

「これでも不死身だからさ、好きだけ殺していいよ」

不死身の体と異常な思考回路がそうさせていた。

そして学園都市からのくだらない挑発がその思考をさらに過激にさせる。

彼女は今、貼られたレッテルを引き剥がすためだけに一方通行に手を差し伸べていた。

「それでアナタが幸せになるなら、あたしは構わない」

「……気持ち悪い」

その異常性を感じとれるのは同じ異常者だけ。

同じ穴の貉。同族。

彼女たちは互いに似ていて、互いに違っていた。

モルモットならば殺していいという道徳心の欠如、常に上でありたいという傲慢さ、そして失った最愛の人。

神の御使いである少女と神に等しい力を振るう一方通行。

「アナタの正義をとやかく言うつもりは無い、でもそれで彼女が悲しむなら話は別」

足を失った一人の人間を抱え、彼女は一方通行の瞳をまっすぐ見つめる。

緑と赤。二つの色がかち合う。

「だからあたしは彼女を助ける、それがあたしの正義」

狂気を孕んだ瞳だった。

人間とはとても思えないほどの狂気。別次元の、別の生命体のような得体の知れなさが彼女にはあった。

冒瀆的な存在。それが彼女を表すのに相応しい言葉だった。

「じゃあね一方通行くん、また今度」

その怪物は人間のようにお辞儀をして高く跳び去る。羽のない彼

女は病院を目指してウサギのように高く跳び上がった。

24話：一人目

朝日が昇り、窓を通り抜けながら光が差し込む。その光は優しく少女の瞼を照らし、閉ざされた茶色の瞳を呼び起こす。

ゆつくりと開かれた瞳に映るのは白い部屋と朝焼け。

「あ、れ、ここは」

「起きた？」

「天羽、さん……」

ベッドの上で窓の外を眺めるその少女にあたしは優しく喋りかける。

「おはよう、ミサカちゃん」

病衣を着た彼女と、ナース服を着たあたし。どういう関係かは明白だ。

昨夜より容態が良さそうな彼女に安堵しているとミサカちゃんは質問を投げかける。

「おはよう、ごいいます……あの、ここは」

「うちの病院の最上階の個室」

一種のVIPルームであるこの病室は完全な個室。そのため少々値が張るが、今回はあたしが支払いをしているので特に問題は無い。

「だからほら、足も治ってるでしょ？」

そう言っ指さすのは布団に隠れた彼女の左足。

布団に山を作っているそこは左足が出会ったばかりの頃と変わりにくくついていた。

「……ミサカの足は無くなったはずでは？」

引きちぎられたその足はあたしの能力により復元した。

DNA情報による複製、復元。それもあたしの能力がもたらすもの。

切断しようが引き千切ろうが、傷口からDNA情報を元に復元できるのだ。それを彼女に使ったのだが、少しばかり驚かれました。

「医学って凄いでしょ？」

しかしそれを教えたなら超能力者だと怪しまれる可能性があるのです。

秘密にしておく。

笑顔で話を流すが、ますます怪しまれるだけだった。

「医学うんぬんの話ではないと思うのですが」

「まあ、あんまり気にしないので?」

「いや、気にしますが……」

その話を根掘り葉掘り聞かれると少し困るので、別の話に話題を変
える。

頭の隅でゆつくりと、彼女の心を蝕む演算を行いながら。

「で、生き残った感想は?」

彼女の目を見つめる。

あたしの背にある窓から差し込む朝日が眩しそうだ。

「……不思議な気持ちです」

太陽に目を細める彼女は猫のよう。

借りて来た猫のように静かな彼女に少し意地悪をしようと問いか
ける。

意地悪な質問は彼女の本音を引き出すための薬。

「アナタが戻りたいなら研究所に五体満足で返すけど、どうする?こ
こにいたい?」

「……実験をするのがミサカの役割です」

目を伏せると茶色い髪がカーテンのように顔にかかる。

横に置かれたピカピカと光る缶バッチに目を移すと、あたしはゆつ
くりと口を開いた。

「それはクローンとしてのミサカちゃんの役割でしょ?」

足を組み、頬杖について優しく問いかける。

彼女の顔を覗きみようとすると、深く頭を下ろす彼女の顔は少しも
見れなかった。

「あなたを一人の人間とみなして質問してるの」

「ミサカはクローンです。人間とカテゴライズされません」

小さく溜息をつき、なんて答えようとしばし悩む。

もうとつくに彼女のことを人間として認識していたあたしには
少々めんどうきい。如何にして彼女を人間だと認識させるか。

頑固な頭に干渉し、じわじわと彼女の考えを柔軟にしていく。肉体の全てを操れることは、擬似的な感情を作ることと同義だ。

「……そうだなあ、ミサカちゃん、マリーの部屋って知ってる?」

「有名な思考実験のことなら知ってます、とミサカは賢さをアピールします」

少し考えて出てきたのが前世で雑学程度に習った有名な思考実験。生まれた時から白黒の部屋に閉じ込められた少女がいる。

その少女は色についての学問を極めており、色に関してならどんな問題も解ける。ただ、本物の色を見たことは無い。

林檎は何色か、朝顔は何色か、どうやって色が見えて、どういう仕組みで色を判別しているのか、彼女には知識しかない。

そんな少女が色のある世界と出会った時、何を感じるか。

人間にクオリアはあるのか、というのがこの思考実験。

「これってミサカちゃんと似てると思わない?」

キョトンとする彼女に笑顔を向ける。

「研究所の中で知識を直接インプットされたミサカちゃんは、外に出てなにか新しいことを感じた?」

「……それは」

足を組みなおし、椅子に手を置いて仰け反る。後ろを見るとそこには昇る太陽が朝を告げていた。

「クオリアって言ってね、言語化不能の私秘的な感覚を意味するんだけど、あたしはそれが人間を構成する大事な要素だと思ってるの」

クオリアとは体験を通じて獲得する感覚のこと。感覚質とも呼ばれるそれはとてもあやふやで、人間にしか感じ取れない。

朝焼けの空の感じ、頬を抓られた時の痛み、感覚。脳科学で未だ証明されていないこの問題は、この世界でも謎のまま。

どのようなメカニズムで、どのようなクオリアを生み出すのか、あまり研究が進んでいない。

第5位の能力を持ってしても、きっと分からない。それは魂そのものだから。

「視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚、痛覚、冷熱、感情、それら全てにク

オリアは存在するとされてる」

知ってるでしょ？と彼女に聞くと小さく頷く。流石に知っているか。

「そしてそれを持たないならあたしにとってはただの肉塊としか認識しない」

同じ思考実験の1つ、哲学的ゾンビというものがある。ゾンビといっても、あたしみたいな死に損ないや、動く死体のことではない。

この哲学的ゾンビは人間そっくりなのだ。まるで人間のように行動し、言葉を喋る。内蔵も、心臓も、細胞も、ただの人間と同じもの。それと人間の唯一の違いはクオリアがないこと。クオリアがない、つまり内面的な経験を持たない人間。架空の存在。

哲学的ゾンビは存在可能なのかなど、哲学者の間で議論されている代物だ。

何が言いたいのかと言うと、クオリアを持つものが人間であり、それ以外はただの動物なのだ。

言葉を喋る肉塊。

それをあたしは人間とは呼ばない。

人の肉体と人の意識、その二つがなければ人とは呼べない。

それ以外は物理的反応、化学的反応、電気的反応の集合体でしかないのだ。

「初めて音楽を聞いた時、どんな感覚がした？初めて誰かに触れた時、どんな感触だった？缶バッチを貰った時、どんな気持ちか沸いた？」

「……」

「そしてクオリアを持っているかは他人からは分からない。だからあたしはアナタの心に問いかけてるの」

津上に置かれた缶バッチを彼女の手のひらにのせる。

血を綺麗に拭き取ったそれはガシヤから取り出したばかりのようだった。

「貴方は、生き続けたい？」

手を握り、彼女の目を見つめる。

「……生まれた理由は一方通行のプランのためです。死ぬのが使命で

す」

「それは人間が与えた使命でしょう？人間如きが、他の人間の生きる使命を定めることはできない」

静かな部屋にあたしの声が響く。

「自分で考えたあなたの生きる意味、神に与えられた使命、心臓に刻まれた存在理由、あるでしょうか？」

「ミサカに、あるのでしょうか」

顔を上げてあたしの瞳を見つめる。

潤んだ瞳は彼女の意図しないとこであたしが与えたストレスによるもの。

彼女は勘違いをする。感情があると。その勘違いが彼女に本当の感情を生む。

一度知ってしまったえば、壊れたダムのように欲と感情は溢れる。

「これから知っていくのも一つの手だよ、あたしは元々知っていたけど」

彼女に感情が芽生えた。あたしの手によって。

「……ミサカは、お姉様と、もっと喋りたいです」

「うん」

蚊のように小さな声が彼女の口からこぼれ落ちる。

「ミサカは、猫を撫でてみたい、です」

「うん」

「ミサカは、オシャレなお洋服を着たいです」

「うん」

ぼろぼろと欲が溢れ出す。

脳に位置する側坐核におけるニューロンを刺激されてでてくる偽りの欲望。

彼女を人間として意識させるにはこれぐらいしかできなかった。

「ミサカは、アクセサリーを沢山つけたいです」

「あたしなら、全部叶えてあげられるよ」

その感情が与えられているものと気付かず言葉が続けた彼女の頭を優しく撫でる。

妹の姿がちらついた。

あの子の方が甘え上手だったな、と少し

「年上に甘えていいんだよ」

「ほんとに、いいんですか？」

「あたしはその為にここにいるのだから」

力強い声ではつきりと言葉を返した。

席から立ち上がり、ポケットに入れていたスマホを手に取る。

「そうだね、まずは一つ目から叶えてあげようかな」

「一つ目？」

通話アプリを開くと、あたしは少しウインクをしてみせる。

「まあ、見てなつて」

首を傾げるミサカちゃんを見下ろしてスマホを頬に近づけた。

スマホから漏れた鬱々とした音声は目の前の少女より少し低い。

20分は経った頃だろうか、病室の外からバタバタとうるさい足音が聞こえてきた。

「っ先輩！」

「surprise、まさか本当に病院に搬送されていたとは……」

バンツと大きな音を立てて扉が開くと、そこにはミサカちゃんそつくりの人物、というか遺伝子提供者本人である御坂美琴と、青い制服に身を包んだ黒髪の少女が息を切らして病室に入ってきた。

病院内はお静かに、と言いたいところだが、彼女達の心境がよく分かるので今回は咎めないでおく。

「よく来たね。ほら、ミサカちゃん、ご挨拶」

「……お姉様、おはようございます」

少しだけ嬉しそうにミサカは御坂美琴をみる。

光の宿っていない瞳だが、確かに想いが見えた。

「ああ、おはよう……じゃなくて！ てっ、てつきり、死んだのかとっ！」
「残念なことには、ミサカはまだ生きております」

この反応を見るに御坂ちゃんは昨夜、アニメと同じようにアクセラレータ一方通行
くんと対峙して負けたのだろう。

にしても、アクセラレータ一方通行くんも悪い子だ。生きていることを伝えてあげ
れば良かったのに。

……ま、望むだけ無駄か。彼にそんなことは期待していない。

「あ、足は!? 足が落ちてて、それで私っ！」

「何故かこのように完璧に治っております」

「えっ!? な、なんで!?」

布団を剥がし、取り乱す御坂ちゃんにミサカちゃんは問題なく動く
左足を見せつけた。

「医学ってスゲー、ということらしいです、とミサカは適当に話を逸ら
します」

無い胸を張ってすごいだろ、とでも言うようにフツと軽く笑う。

医学がすごいのもあながち間違いでは無い。今回は一から脚を作
り上げたが、私の上司に当たるこの病院のとある医者は上条くんの腕
をくつつけることもできるのだ。

神経を繋ぎ合わせ、血管をくつつける。これ自体は前世でもあった
事例で、腕のみならず脚や顔、男性器や頭をくつつけた症例もある。
それ自体は驚きはするが不可能なことではない。

だが上条くんに関しては接合からの回復スピードが凄まじかった。
通常、接合した後は数ヶ月にはリハビリが必要なのだ。

だというのに上条くんは術後すぐに指を動かせたそうだ。やはり
この世界の医学は進んでいる。

羨ましい。

この世界が本当の世界なら、どんなに良かったか。

「But、それより何故病院に搬送されたのが気になるわ」

少し感傷に浸っているとジト目をした少女が口を開く。

確かテレステイナーナさんが送ってくれたデータの一つに名前が

あつた気がする。

布束砥信だっけ。アニメにも出ていたな。

あれ、でもこの子つてアニメと原作の見た目が違うって話題になったとかなくてないとか、wikiだか何かで見た記憶がある。

この世界がアニメを元に行っていることはやはり確定か？声といい、建物といい、この布束砥信といい、私が見てきたアニメの世界にそっくりだ。

原作を知らないあたしへの配慮とでも言いたいのか？ムカつく神だこと。

「あ、ああ、あたしが運んできたんよ」

「先輩が……？」

一旦考えるのをやめて布束ちゃんたちに向き直る。

この世界のことを考えたって答えは出ないのだから。

「御坂ちゃんよりは裏の事情を知ってるつもりだからね、出会った時になんとなーく感じ取ってさ、ちよつと調べてたんよ」

敵意はないと笑顔を向けるが、逆に怪しまれてしまう。

「で、アナタは布束ちゃん」

「……随分と知っているのね」

「長点上機に知り合いがいてね」

そういつて自分の鎖骨のあたりを軽くトントンと指で叩く。

指し示した彼女の襟元には長点上機学園の校章をあしらったピンが服についていた。

青く、珍しいシルエットの制服はどう見ても可愛いとあたしの中で評判の長点上機学園のもの。

実は藍花悦の学校を決める時、藍鈴女子高校と長点上機学園の二つでかなり悩んだのだ。

長点上機学園は有名校、超能力者がいてもなんらおかしくはないし、制服も青で藍花悦の名前を置くにはなんの申し分もない。

だが有名すぎるのが痛手だ。有名だからこそ藍花悦について探られると真っ先に候補に浮かぶ。

それに長点上機は学校の中でもハイクラスのシステムを採用して

いる。つまり、紙媒体のデータはほとんどない。

そうになると、ハッキングされただけで全ての情報が流れてしまう。しかし、藍鈴や今通っている学校は外の学校と変わらず、紙でのデータが多くなっている。

藍花悦の情報はわざわざ紙媒体で藍鈴に置かれている。ハッキング防止対策はアナログが一番いいのだ。

色々考慮した結果、知名度も低く、比較的管理しやすい藍鈴女子高校に在籍させることにした。

それにしても、彼女は垣根くんのこととは知っているのだろうか。

確かこの子は3年生。垣根くんは2年らしいが、彼について知っていたりするのだろうか。

というか垣根くんがこの子より年下っていうのもなんか腑に落ちないな。高校3年生くらいかと思っていたのに。

こちら辺は語られていないっぽいから深く追求できないけど、これもなんらかの神の介入によるものなのか。

「それで、これからどうする？」

静まり返る病室に耐えきれず、あたしは軽い調子で御坂ちゃんに切り出した。

「どうするって、こんな実験止めさせるのよ」

「実験の関連施設は20を超えるわ。全てを破壊して回るつもり？」

御坂ちゃんは力強く答える。きつく握りしめた拳は白くなっていた。

呆れたように布束ちゃんは顔を顰める。出来やしないと、その顔が物語っていた。

「あたしも色々気になるところはあはるし、手伝うよ」

出来ないわけない。

明るい声でそういうと御坂ちゃんは驚いたようにあたしをみる。

「ねえ、先輩は関係ないのに、どうして？」

「関係大有り、ミサカちゃんの足を治したのはあたしだし」

ニコニコと笑顔を向けるが、腹の中では一切笑みを浮かべていなかった。

天羽慧糸としては繋がりはあるが、藍花悦はこのプロジェクトの根幹にいる。

あたしに出来ない子というレッテルを貼りやがった学園都市に、あたしは見せつけなきゃならないのだ。

あたしは出来る子だと、出来る姉だと、解らせなくてはいけない。「それに、患者さんの必要なものを提供する、それがうちの上司のモットーだから」

「……ありがとう、先輩」

「当然のことだから」

それに、いくら超能力者^{レベル5}といえど、所詮は世間知らずのお嬢様。中学生には荷が重く、心細いだろう。

彼女だけでも十分だとは思いますが、バックアップは必要だ。

「……やってみたいことがあるの」

「なにになに？」

「これ」

深く考え始めると、今度は布束ちゃんの方から話しかけられた。

ホテルのルームキーのようなUSBメモリを握りしめ、彼女はこちらをみる。

その目には正義と彼女の覚悟が簡単に読み取れた。

「感情にまつわるデータよ。これを彼女にインプットしたいの」

いつも持ち歩いているのかと一瞬驚くも、そのUSBの活用法を考え始める。

USBの中身をインプットとか現実的に考えればありえないのだが、まあここは現実ではない。フィクションだ。

とりあえず何かしらの機材が必要になるのだろう。だが、それっぽい機材はなかったはず。

「うーん、ここは病院だよ？ テレスティーナさんもいるし、人材は十分だけど……多分そういう機材はないよ？」

たしかにこういった類のエキスパートが^{テレスティーナさんと木山さん}二人もいるが、機材はない。

出来るとしたらアニメに出てきたあの研究所だろう。

うちの病院でできるかもしれないが、うちの先生、冥土帰しにまた変なことに首を突っ込んだと知られると怒られかねない。

あの人には恩もあるし、親代りみたいなものなのであんまり迷惑はかけたくない。

「ま、待って、テレステイナー!?!」

「え? うん、テレステイナーさん」

何も考えずに今病院にいるもう一人の科学者の名前をあげたことに気づかないまま、ぼーっと考えていると御坂ちゃんが声を荒げる。

そうだ、彼女と合わせるのは少しマズイのか。

しかし彼女を引き抜いたのはこういった場面に彼女の知識が使えたと考えたからだ。彼女を名をあげないでどうする。

あたしはSFの知識も、ファンタジーの知識もない。

あるにはあるが、この世界の知識ではない。SFの有名な本は知識として読んでいたし、ファンタジーなら神曲やら聖書という原点を何度か読んだことはある。しかしこれらの知識はこの世界の知識ではない。

この「とある魔術の禁書目録」の世界のSFもファンタジーもあたしはほとんど知らないのだ。

知識不足。

それを補うのが垣根くとテレステイナーさんだ。

垣根くんだけでも十分知識は補えるが、如何せん彼は暗部所属の少年だ。しかも現役の。

彼に話を聞くとなると疑われるし、何より彼はきつと協力しない。

そこで出てくるのがテレステイナーさん。一度捕まっております、こちらで行動を把握している彼女は扱いやすい。

しかも暗部について知っており、知識も技術もある。

本当は木山先生にこの位置にいて欲しかったが、彼女には生徒たちがいるのだ、安易に闇に突っ込む真似はおそろしくない。

テレステイナーが適任なのだ。

「なんであの女が!」

鬼のような形相であたしを睨みつける。

だがそんな表情をされてもあたしの心は揺らがない。

彼女の正義はあたしが否定していいものではない。

「あたしも、科学者だから、気持ちはよくわかるのよ」

「わかる!?先輩だつてあの場に居たじゃない!非人道的なあの子をよ
く知っているでしょ?!」

喉が痛むような張り裂けるような叫び声に近いその言葉の羅列は
少しだけ昔のあたしを思い出させた。

「……人を殺すのと、動物を殺すの、アナタはどっちが重い罪だと思
う?」

「殺すことはいけない事よ」

「そうね、ならあたしは彼女と同じだよ」

古い記憶。

あの子のために何匹も殺した事実。

正義のために何匹も何匹も何匹も動物を殺した。

だからあたしは人殺しを否定することができない。殺したという
事実は同じなのだから。

正義のため、幸せのためならば殺したって何したって、あたしは止
めることはできない。

血の暖かさも、肉の感触も、鳴き声も、あたしは誰よりも知ってい
る。

そして死の痛みもこの体が覚えている。

「モルモットも、ラットも、人以外なら殺した。死よりもおぞましい痛
みを与えたことは1回だけじゃない」

人のためならば人以外なんだって殺すし、なんだって使う。それが
あたしが今までしてきたことであり、それをやめると他の人に押し付
けることはできない。

それがあたしの正義。曲げることは許されない。

「あたしは目的のために殺した。だからあたしには学園都市の科学者
を糾弾する権利はないの」

重い沈黙が部屋を満たす。

この異様な空気の中から早く抜け出したかった。

渦巻くヘドロのような感情が入り混じった今の心情はきつと人間には理解なんてされない。

物語のキャラクター あたしの目指すもの、あたしが欲しいもの、そのどれもはこの世界の人間になんか分かるはずないのだから。

25話：変身

変身しましょう。

金を黒に、白を黒に、赤を青に。

世界が反転する。

緩やかな曲線を描く脚は黒いズボンで隠しましょう。

大きい乳房は布を使ってなだらかに。

オーバーサイズの服で身体を隠せば完璧。

白粉もアイシャドウもマスカラも、何もかもを落とすの。

そして最後の仕上げ。

桃色の後ろ毛をハサミで切り落とす。

じゃきん、じゃきんと軽い音を暗い部屋に響かせながら、桜色の毛

束が床に落ちた。

しかし、それだけじゃ終わらない。

遺伝子を変えましょう。

色素を変えましょう。

細胞を、形状を、何もかもを変えましょう。

踵まで伸びた黒い髪、黒い瞳。

藍色が誰よりも似合う人。

天羽彗糸はここにはいない。

「ラスト2つか」

8月19日の午後、日が沈み、ほとんどの人が家に帰った頃のこと。

あたしは足までまっすぐ伸びる黒髪をなびかせながらとある研究所の前に布束砥信と2人で立っていた。

「indeed、御坂美琴がほとんどの施設を潰したからね」

ミサカちゃんを保護したあの日から今日の夕方まであたしと御坂

ちゃんは研究所潰しに励んでいた。といってもやったのはほとんど御坂ちゃんで、あたしはサポートに徹していたが。

それはともかく、その結果今日までに20もあつた研究施設は残りふたつとなった。

「ぼくがやるのは君の護衛ですね」

そして今、あたしは布束ちゃんの護衛として残りの施設のうちのひとつ、Sプロセッサ社脳神経応用分析所に来ている。

彼女はアニメと同じくこの研究所スケープゴートと呼ばれていた。

それを助けるための護衛として今あたしはいるのだ。

いけ好かない研究所。

彼女を生贄にする訳にはいかない。

生贄にされるのは文字通り山羊だけで十分だ。

「……uhm、貴方のその格好と声は何？」

下唇を噛み締め、研究所を睨んでいると、隣の少女から少しだけ視線を向けられる。

「え？ああ、これ？変装だよ、あの格好で派手な行動すると先生に怒られちゃうからさ」

いつもの金色と桜色が眩しい癖っ毛はここにはない。鳥のように黒い真っ直ぐな長髪。

鼻にかかるほど長い前髪は左目を光から遮断していた。

妹らしく言うならば黒髪ロング片目隠れ、だったか？

表に出ている瞳と、髪の間から覗ける目玉は両方黒い。

声もいつもとは違って、性別の聞き分けがつかないソプラノ声が喉からでていた。

足の裏まで届く黒髪も、髪の色も、長さも、瞳の虹彩も、高い声も、全てが能力でできている。

潰した胸と、変えた声、背の高いあたしは今の姿だと少年と誤解される確率の方が高いだろう。

身体を隠す藍色のカンフー服は萌え袖を通り越して、手がすっぽり見えなくなる程度に袖が余っている。

下半身は真っ黒いズボンとスニーカーでコーデインテートされており、見た目はミステリアスな中華系と言った感じ。

精一杯アニメキャラのようにデザインして自分で作った衣装。

とりあえず、浮世離れた服装ができれば及第点といったところか。

「Why、何故中華服なのかしら？変装だけなら他のものでもいいんじゃないのかしら？ゴスロリとか」

「ゴスは流石にハードルが高いつて……」

ジロジロと見つめる彼女に困った顔を向ける。

そんなに怪しまないでくれ、これしか条件に当てはまるものがないのだ。

アニメキャラにありそうな格好で

手軽にミステリアスを演出できて

動きやすくも体のラインを隠し

記憶に残るようなインパクトのある

それでいて痛々しくないような服装

それがチャイナだ。

一応ゴスロリやら、着物やら、パンクファッションやらスーツ、他にも候補はあった。

しかしゴスロリは抵抗があるし、布束ちゃんの私服と被る。あと性別を隠せない。

着物も着付けが大変だし、似合わない。

パンクファッションは一方通行と被る。

スーツは垣根くんと被る。

で、思いついたのがチャイナ。

大昔からオリエンタル系はミステリアスの代名詞みたいなもんだし、2020年では中華モチーフの普段着が流行ってたからゴスロリほど着るのに抵抗もない。

あと可愛いし。

わざわざインパクトのある服装を考慮したのは「藍花悦」が元からいるキャラクターだからだ。

「藍花悦」はキャラクター、空想上の人物。ならばそれらしい衣装を与えなくてはいけない。

現時点での登場人物と被らず、キャラクターが確立できる手段がチャイナ服ぐらいしか思い浮かばないのだ。

それに変に袖が長くてもチャイナ服なら変に思われなし、動きやすい。

安易な考えだが、それ以外に考えが思い浮かばなかった。

「……So、これからの流れ、分かっているわよね？」

「うん、君を地下まで送り届けることでしょ？」

わざわざ変装をしてまでここに来たのはアニメと同じことをするためだ。

この研究所の地下室でデータを入力するのが目的。あと藍花悦のデータ削除のため。

天羽隼糸の姿でここに来ると、暗部に狙われやすくなってしまう。そのため駆り出されたのがこの姿。

黒髪に黒目、青が誰よりも似合うこの姿こそが藍花悦なのだ。

研究にあたしの能力が使われた以上、藍花悦として行動するのは理にかなっている。

不本意だが、今回ばかりは藍花悦として正義を執行せざるをえない。

手札も持ってきているし、これは簡単なお仕事になりそうだ。

「Exac tly. 研究所にお呼ばれされたのはいいけど、戦力がないと不安なもの」

「まあ、あたしぼくのごときはごき使ってくれて構わないよ」

まったく、本当にめんどくさい。

スケープゴートにされるのを知っているのだ、助けるのは当たり前。

殺しはしないが全員痛い目に合わせたってバチは当たらないだろう。

「本拠地の設備ならデータを入れられると思うのだけれど……」

「……まあ、やって見なきゃ分からないよ。行ってみよう」

冷静を保ちながらあたし達は施設内に足を踏み入れた。

研究所内は騒がしく、バタバタと慌ただしく研究員が働いていた。その中で二人静かに案内人を待つ。

五分は経つただろうか、待つのに飽きてきた頃、幸薄そうな研究員が一人歩いてきた。

ここの研究所のお偉いさんなのか、どことなく見下した目線であたしたちを見る男は布束ちゃんに話しかける。

「お待ちしておりました、ええと、貴方が」

「布束砥信です。学習装置テストメントの設計に関わっていました」

彼は布束ちゃんに確認を取ると今度はあたしに目を向けた。

冷たいその目に臆さず、あたしは前に一步踏み出す。

「……こちらは？」

「量産型能力者計画の協力者です。移送されると統括理事会から聞きまして、機材の確認をするために駆けつけました」

怪訝そうな顔でこちらを向く彼にあたしは精一杯の嘘と本当をごちゃ混ぜにしたセリフを冷淡な声で言ってみせる。

あらかじめ考えていたセリフは機械のように口から流れ、自分の知らないソプラノ声はいやになるほど無機質だった。

口角を釣り上げ、目を細める。彼の瞳に映るあたしの笑みは自分でも疎んでしまうほど恐ろしい。

「そのようなお話は聞いていませんが……」

ぴくりと男の眉が動く。

「それはおかしいですね。上に確認してみてください」

「……確認してまいりますので、部屋で少々お待ちください」

多少イラついたような表情を浮かべる研究員だったが、それ以上何も出来ないようですなりと部屋に案内した。

男が応接間に案内し、部屋に通されると、そのまま駆け足で別の部屋を後にした。

ドアの前で研究員が立ち去るのを確認すると、隣にいる布束ちゃん

の方を見る。

視線に気がつくくと彼女はコクリと頷く。

「行きましよう」

「うん」

扉を開き、人のいない道を通って地下へ向かう。

念の為、武器を調達してきたが杞憂だったか。誰とも会わずにすんなりと地下に降りることが出来た。

「今なら手薄なはず……」

「御坂ちゃんももう1件の方に行っているからね、あつちに戦力を割いているんでしょ」

懐中電灯で足元を照らしながら目的の部屋まで足を進める。

広い廊下には扉が幾つもあり、どれも似たようなものだった。

「ここだわ」

そのうちの一つを布束ちゃんは迷わず開ける。

真っ白で広い部屋の奥には何らかのモニターや機材が設置されており、壁にはめられたガラス越しに見える装置と繋がっていることが簡単にわかる。

その機械を迷わずに起動させ、布束ちゃんはデータの入力を開始した。

一応安全を確認しようとして一通り部屋を見渡すが、機械と大きな窓ガラスくらいしか見るところがない。

仕方がないので窓ガラスに顔を近づけると、その奥に人がいるのが見えた。

メカメカしいベッドの上に仰向けに横たわるその人はおそらく御坂美琴のクローンの一人。

「出来そう？」

「分からないわ、でもできる限りの事はするつもりよ」

USBを差し込んでデータの入力をする彼女には焦りと希望が見える。

入力しているデータは感情にまつわるもの。

研究員がクローン達に同情すれば計画も止まる、それが彼女の考え

だ。

あたしの考えとは真逆。

感情のデータをいれようが科学者が情を湧くことは無い。それはあたしが一番よくわかっている。

どんなに可愛い動物だろうと、研究に必要ななら殺すのだ。それが研究者という人種だ。

無駄な作業だとは分かっているが、藁にもすがりたいという感情はあたしも知っている。だからこそ、どんな無駄な行為だと知っていても応援したくなってしまう。

「……その前に、少し荒事が起こるかも」

そしてあたしのやるべき事はその思いを守ること。

彼女の正義を妨げるものは例外なく近寄せない。

「いるんでしょう？」

数は3人ほどか。

生命体を体で感知すると、ひとつしかないドアの向こうに声をかける。

その声に応えるようにドアがゆっくりと音を立てずに開いた。

部屋に入ってきたのは3名、細身の男性二人と一人の小柄な少女。

オレンジ色のノースリーブのパーカーを着た少女は深くフードを被り、口を開く。

「……関係者であることを考慮して上に確認を取りましたが、データ類の移送が完了するまでは、ここへの立ち入りは超禁止とのことでした。それにその青い服のお兄さんも客じゃないそうですしね」

12か13歳くらいの幼い少女がこちらに向かって歩いてくる。暗部組織、アイテムの構成員のひとりだったか。

念の為武器を持ってきたのは正解かな？

そう思いながら袖を重くする物体に手を伸ばす。

火薬臭い武器は好きではないが、必要ならば使うしかない。

「襲撃者は単独犯であると推測されているが、一方の襲撃が超陽動である可能性を捨てるべきではない。故に防衛組がもう一方の施設襲撃を受けても、対処は遊撃隊に任せて自陣を超堅守すること」

淡々と言葉を紡ぐその少女はそのフードを外した。

栗色のショートカット、チョコレート色の目。可愛らしい顔立ちの少女からは濃厚な暗闇の匂いがする。

「どうやら、麦野の読みは超当たったようですね」

苗字は絹旗だったか。下の名前は思い出せないが、今はその情報は要らない。

能力は……確か窒素を操るものだったか。

一方通行の演算パターンを埋め込まれたモルモットの一人。

「暗部ですか……そういえば雇われてると聞きましたね」

「ご存知なら、無駄な抵抗はしない方がいいと分かっていますね？」

「無駄な抵抗はやって見なきゃ分からないんですよ」

これは少々まずいことになった。

戦闘不能にすることは出来るのだが、なにせオーデイエンスがいる。布束ちゃんに能力の使用を見られたくない。

「あなたはやるべき事をやってください。彼女らの相手はぼくがします」

「……超調子乗ってますね。お望み通り、相手してもらいましょうか」

布束ちゃんにこちらを気にしないように促すと、それに少しイラついたのか絹旗ちゃんが小さく舌打ちをした。

その隙に左右の袖に腕を伸ばす。腕を組むように袖に入れた手は硬いものに触れた。

「そんな怖い顔しないでください、可愛い顔が台無しですよ」

袖から二本の黒く光る武器を取り出す。白い光に反射して艶めかしく存在を主張するそれは現代の刃、拳銃だ。

両手で握りしめるこの2丁の拳銃は学園都市製のスグレモノ。

ベレッタやトカレフといったあたしの知っているものより全然軽く、扱いやすい。

色々なコネを使って獲得したこの2丁を真っ直ぐ絹旗ちゃんに照準を合わせる。

「拳銃ごとときで、私に勝てるん？」

少しだけ拳銃を出したことに目を見開くが、それでも彼女は微動だ

にしない。

銃が彼女に通用しないのは前世から知っている。リアクションが薄いことくらいは最初から分かっていた。

「思ってませんかよ？」

パンつと乾いた音を立てて拳銃から弾丸が飛び出す。

1ミリの狂いもなく弾丸が天井のLEDライトを撃ち抜くと、ガラスがキラキラと輝きながら雨のように降り注ぐ。

連続で放たれた複数の弾丸は狙い定めたとおりに全ての光を潰した。

腕にかかる負荷と反動。おもちゃとは違うその重さと強さは随分と懐かしいものだった。

それに気を取られた絹旗ちゃんとその他のチンピラに直ぐさま能力を使用する。

小細工無しに能力を使用したいが、何も無いところで突然倒れるなど、布束ちゃんに絶対疑われる。

だが、潰された光源は勘違いをもたらす。真つ暗な部屋の中でなら勝手にあたしが全部仕留めたと勘違いしてくれるだろう。

「つな、なにが、つ、がは」

脳の電気信号を遠隔で弄られた少女とその他のチンピラは何もわからずに膝から崩れ落ちる。

人間、少し細胞を弄ったり、電気信号を変えたりするくらいで痙攣したりするのだ。

実に脆くて壊れやすい。人間はトラックに撥ねられた程度で死んでしまうのだ。

窒素を操るとしても、体の水分やら細胞やら電気信号を直接操作できるあたしには意味が無い。

とはいえ通用しない能力者もいるが。

「何が起こったか、それは君が理解できないことです、教えるつもりはありません」

暗い部屋の中で口元に指を立てて寝転ぶ少女を見下ろす。

唯一の光であるスクリーンの青い光が足元を照らしていたが、突如

赤く色が変わる。

見慣れたエラーの色に少しため息をつく、後ろで機械をいじっていた布束ちゃんが小さく声を絞り出した。

「……だめ、エラーが出てしまう」

「やはりダメですか……まあいいでしょう、ここにいる一体に直接インストールすることは出来たのですよね？」

わかつてはいたけど、失敗か。

何か行動を起こしたこと過程は大切だ。何かが変わることだってあるのだから。

「……実験を止めることはできないのね」

しかし、楽観的なあたしとは違い、布束ちゃんは暗闇でもよく分かるほど落ち込んでいる。

悲しいことだが、20001号を何とかしない限り何も出来ない。それを伝えるつもりはないが。

「それはまた考えればいいことです。とりあえず戻りましょう。先に行ってください」

「……sure、外で待ってるわ」

彼女を落ち着かせる必要があると考え、一人になれるように配慮する。

こういうのは時間を置けば気分が落ち着くはずだ。

扉から少女が出ていくのを見届けると、まだ少しだけ意識がある少女に声をかける。

瞼を閉じたり開けたりしながら、荒く息をする絹旗ちゃんはとつても眠そうだ。

「……さて、君はアイテムの1人ですよ？ 確か名前は……絹旗、でしたっけ」

「なん、だ、超、しってるん、です、ね」

「これでも職業柄、暗部のことはよく知ってるんです」

低い声でそう言うと睨まれる。

あの医者の方で働いているのだ。前世の記憶が無くても、結構そうだった暗い世界の話は流れてくるので知っている。

「あんたは、いったい、だれ、なんです」

「そうですねえ……」

わざとらしく笑顔を作り、彼女に向ける。

「ぼくは藍花悦、君の上司の2つ下の位の者、と言えは分かりますかね？」

「……第、6位」

苦虫を噛み潰したような表情をみせる彼女を他所に、あたしは少年のような声で話を続けた。

「正解です。けどまあ、この学園都市に藍花悦は何人もいますからね、本人ではない可能性も考慮してくださいね？」

「それで？そんな、超大物が、こんな、研究所に、なんの用、です？」
途切れ途切れに彼女は言葉を発する。

弱々しくも強さを忘れない声。

「探しものを見つげに来たんですけど……」

なんの用と聞かれても、彼女に伝える訳にはいかない。あたし個人の目的は藍花悦に関するデータの消去だ。

さすがにそこまでの情報を彼女に伝えるのは得策ではないだろう。

「まあ、ここに用はもうありませんね」

「……殺すんですか」

布束ちゃんの護衛もあるが、あたしの目的はこの施設のデータの改ざん、ぶっちゃけここに用はない。

軽く言った言葉だったが、暗部的には死刑宣告と同じように重く聞こえたらしい。

唸るような声は可愛い盛りの少女が発するものとは思えなかった。

「まさか、するわけないでしょう」

「じゃあ、なんで」

「無駄な殺生は嫌いなんですよ。これでも博愛主義者なんです」
単純な話だ。

そう答えると彼女は呆れたような顔をみせた。

「超、意味、わかん、ない、ですけど」

「わかんなくてもいいです。君はこれから眠ることになりますし、起

きた時にはそれを考える暇もないでしょう」

彼女の脳内活動に手を加える。

シナプスへの介入。

それは彼女を眠りへと誘う。

「おやすみなさい」

それから少し経ち、誰も居なくなった研究所の一角、真つ暗な部屋の中であたしは一人、青く光るスクリーンを眺めていた。

座り心地のよい椅子に座りながらカチカチとスクリーンに繋がれたキーボードを打つ。

出てくるデータは全てあたしに関してのもの。

「……藍花悦の能力データの流用、か」

他の部屋よりいくらか広く、この施設の全てのデータが集まるこの部屋の中には数人の白衣を着た男たちが倒れており、火薬臭い。

倒れている人からは血は流れておらず、息をしていることから彼らが眠っていることが容易にわかる。

とはいえ、眠らせた張本人はこのあたしなので死んでいないのは元々知っているのだが。

「全く、人のデータで勝手に遊ばれても困るっつーの」

クローンと藍花悦に関する情報の移送はまだ終わっていないかったらしく、探すのは簡単だった。

あとは消去するだけ。

消去しますか？とウィンドウが目の前のスクリーンに表示される。袖をまくり、藍色の服から覗く黒い裏地を見せて腕を出すと、手袋をはめた手でスクリーンを触った。

ウィンドウの右下に配置された「はい」のボタンをタップすると、みるみるうちに藍花悦の情報が消されていく。

黒髪ロングで黒目の少女は跡形もなくこの施設のデータ上から消

え失せていく。

「まさか人の能力データでクローンを作るとは、思ってもみなかったけど、やっぱり不完全な代物っぽいな」

藍花悦の能力がクローン技術に適応されているとは思ってもよらなかったが、そのおかげで良い方向へ未来が改変されていると考えると少し複雑だ。

「てことはぼく、ミサカちゃん達の母親みたいなものなのか？」

ぼそりとつぶやくが、誰も返事を返さない。

布東ちゃんをひとりで研究所から脱出させた後、データの消去の為残っていたあたしは移送していた研究員達はあらかた片付けた。

もちろん殺してないし、拳銃も数回しか使っていない。

麦野沈利も来ていたようだが、幸運なことに鉢合わせることはなかった。

「……第6位、か」

スクリーンに写った自分の顔はいつもと違う。

本当の顔に、黒髪。ヘーゼルの瞳は漆黒に。

スクリーンに反射したあたしの顔はいつもと少し違う。

いろんな人種が混ざった不思議な顔。化粧をしていないから普段よりその感覚が色濃く出ている。

「藍花悦、アナタは一体誰？」

別の存在、別の生き物。

「存在するぼくと存在しないあたし、どっちが本物なの？」

あたしは存在しない。

この世界に天羽彗系という少女は存在しない。しかし、藍花悦という名を持つ少女はこの世界で生まれて、生きて、息をしている。

本当の顔だって藍花悦のものだ。

どちらが本物か、もはや分からない。

それほどまでに天羽彗系は藍花悦という存在を脅かし、反対に藍花悦も天羽彗系の存在を否定する。

天羽彗系は藍花悦を認めなくなかった。

「……新しい名前、新しい世界。新しく人生を歩めって神の意向なの

かな」

いつだって神はお節介を焼いてくる。

余計なお世話だというのに。

ああ、嫌だ。

神という忌々しい存在に自分が縛られるのが何よりも嫌だった。

あたしは神に縛られるほど弱っちくない。神に仇なす強者でいたい。

救いの糸を垂らすのは神ではなくて、この天羽擘糸だ。

この世界が本物異世界だろうと偽物仮想世界だろうと知ったこっちゃない。

神に値する存在があたしの運命を決めている事実が気に食わないのだ。

傲慢で、理不尽で、残虐。

神と称する存在はいつだってあたしを不幸にする。

その理不尽にあたしは抗わなくてはいけない。それがあたしの使命で、生きる意味なのだ。

不幸の星に生まれた登場人物架空の人を幸せにする。

それがきつと、あたしの罪への贖罪になるだろう。

「あたしは絶対あたしでいてやる。藍花悦として生きるものか」
弱々しい声が部屋に響く。

それがどんなに無謀で不可能な事だと心の奥底で理解していても、抗うことは決してやめない。

苛立ちが脳を埋めつくしているといやな音がスクリーンから鳴った。

ビーっと鼓膜を突き破るような音は赤いスクリーンとともに失敗をあたしに伝える。

「エラー……う？くそ、手を回されたか。名前を伝えたのは間違いだったか？」

崩れるような音を立ててスクリーンを叩き割る。電子の光を反射して砕け散るガラスはあたしの手には傷の一つも付けやしない。

詰んだ、詰んでしまった！

結局何もせずここから立ち去らねばならないのか。

腹立たしい、実に腹ただしい。あたしは出来ない子という証明が消えることがないと、割れたスクリーンと無機質な音が伝える。

貼られたレットテルは永遠に剥がれない。

「……くそっ、こんなあたしなんて、死んじまえ」

自分の体を抱きしめ、ぶつぶつと言葉をこぼす。

出来ない子と言われるのが何よりも嫌だった。

何も出来ない現実を見たくなかった。誰も救えていないあたしを認めたくなかった。

何もかも疲れてしまった。自信を無くした心は徐々に精神を蝕む。

苛立ちと不安に押し潰された心臓は机に置かれた銃のグリップを握れと囁く。

掴んだグリップ、頭に向けた銃口。乾いた音を立てて弾丸が放たれると、こめかみに衝撃が走る。

カランと涼しい音を立てて床に落ちたのは、使われた薬莖とこめかみに打たれた銃弾。

打たれた銃弾はこめかみを貫通し、血をこぼさずに床に落ちる。床には血の一滴も落ちていなかった。

痛みも、寒さも、暑さも感じないこの体は正常に機能する。

あたしは生きていた。

生を願わなくても生きる体。トラックに撥ねられようが、銃弾で打ち抜かれようが、剣で貫かれようがあたしは死なない。

「……そうよ、そうよ、あたしは、あたしは出来る子なのよ。何万回殺されても生き返る、アレを無敵に導くのは造作もないのよ。わざわざ消耗品に頼らなくなったっていいのよ。あたしは、出来るお姉ちゃんなんだから」

その生があたしに希望と自信を与える。

永遠の生命があたしを強くさせる。誰よりも傲慢な自信は人を超越したこの体から溢れていた。

落ち着きを取り戻し、椅子に座ると揺れた髪から漏れた火薬の臭いが鼻をくすぐる。

クンクンと髪と体の匂いを嗅ぐが、強い火薬の匂いが鼻を狂わせ

る。それでも拳銃のグリップを握っていた手が酷い臭いということだけはわかった。

学園都市製の拳銃とはいえ、火薬を使っているので臭いのは当たり前か。

日本は安全な国、この国で握ることはないと思っていたのに。嫌な匂いが昔住んでいた国を思い出させる。

心臓は再び苛立ちを増した。

もう来ない妹との平穩。戻りたい世界。

「……くそつ、最悪」

早く帰って、シャワーを浴びよう。気持ちを入れ替えて席を立て、部屋を去る。

重い足取りは朝焼けの美しい外の世界に向かっていた。

死に損ないの出来損ない。

誰かを救わなければ自分の価値も見いだせない欠陥品。

嗚呼、ダメなお姉ちゃんなんて、あの時死んでいればよかった。

明るい部屋の中、部下の報告を黒い革製の椅子に座って男が聞いていた。

白衣を着るその男はいかにもな研究者ルックをしており、疲れた目

をしている。

先ほどまで上司と口論をしていたその男は、いつになく焦燥気味だ。

「藍花悦が来た？」

「ええ、研究所で護衛をしていた暗部組織が遭遇したとのことですよ」

部下からの報告は随分とめんどくさいものだった。

介入予定のない第6位が姿を現した。その事実は実に厄介だった。

「……面倒なことになったな」

「彼女へ実験協力は却下されていますし、彼女がこちらに牙を向けるとは思っても見ませんでしたね。天井さん、どうします？」

「彼女に対しての有効的な攻撃手段はないんだよ、どうしようもない」
あの女が動くのは想定外だ。そもそも実験が彼女の耳に入るはずなかったというのに、どこで間違えたのだろうか。

天井と呼ばれた男がため息をつくとき、部下は首を傾げた。

上司の言葉が理解できなかったのだ。

「彼女は不死身というだけでは？捕まえて実験に使えばいいのではないのですか？」

「アレは人間じゃない。それに上層部のお気に入りこそ簡単に潰せない」

藍花悦はその性質、その能力、その本質から上層部に匿われていた。だからこそ彼女に実験データを見せてはいけないとの御達しがあり、嚴重に隠していた。

それが突破された事実は責任者である彼の胃をキリキリと痛める。

「まあ超能力者は皆性格が破綻してる人でなしですし、怪物じみた能力も持ってますからね。不死なんか特に気に入られているでしょうし」

「そうじゃない。彼女は本当に人でなしなんだよ」

彼女が上層部、つまりとこアレイスターに匿われていたのはその肉体故のことだった。

彼女は人間ではない。

人と乖離した存在を知るアレイスターはそれを理解していた。

深く理解することはなくとも、彼女が人ではないと、彼の守護天使が囁く。彼女が神の頭脳を持ってしなければ知り得ないことをアレイスターは知っていた。

とはいえ、彼女が人外に近い得体の知れない化け物ということは万人が知っている情報ではない。

現に、この男も量産型能力者計画レディオノイズの責任者だったからこそそれを知っていた。

しかし、そんな立場にいても彼女の肉体がこの世のものではないという情報しか知らなかった。

どんな事実が隠されていようと、それしか彼は知らされていない。しかし、それを詮索することが命を脅かすことだけは知っていた。

「それってどういう……」

「それは君が知ることじゃない。とりあえず藍花悦に関する情報は厳重に管理しておけ、面倒なことになる前にな」

だから彼は詮索しないように部下に忠告する。

彼女に情報を漏らさないように、厳重に鍵をしなくては。

ただでさえ擦り切れた精神は彼をじわじわと狂気に陥れていく。

26話：放縦

8月20日、ムカつくほど澄み渡った青空から遮断された暗い部屋の中で電子音が鳴り響く。

一人暮らしにしては広いマンションの一室、コーヒー缶やら資料やらが綺麗に整頓されている部屋で寝ていた俺はそのうるさい音で目を覚ました。

「朝っぱらから誰だよ……」

イラついた声を漏らしながらもベッドから這い出し、音の出处である携帯を机から拾い上げる。

ろくに名前も確認せずに電話を取ると間抜けな声がスピーカー越しに聞こえた。

「もしもし……」

「よお垣根、今大丈夫か？」

声の主は上条当麻だった。

アレイスターが展開するプランの中枢にいる重要人物。

天羽彗糸と出会った利点の1つといえはこいつとコネクションを作れたことだろう。

イマジンプレイカー
幻想殺しなる理解不能な能力を右手に宿した少年。

限りなく善人に近い。だが、あの女ほどかと聞かれれば少し頭を捻る。

どっちも似た存在ではあるが、やはり性別の違いか、性格の中にある何かの違いか、天羽彗糸のほうがどこか螺子が外れている気がする。

善人とはエゴイズムの塊だ。あの女を見るとそんな哲学的な考えが増幅する。

そのエゴイズムの塊を解さない限り、俺はあの女に赦されてしま
う。

それだけは阻止しなければならない。

「何の用だよ、こんな朝から……」

「いや、天羽、そこに居ねえか？」

こんな朝から電話をかけるのだ、さぞ重要な要件かと思い、欠伸を噛み殺しながら問いかける。

しかし、彼の要件はどうやら俺が世界で一番嫌いな女のことだったようで少し舌打ちをしてしまう。

彼女の名前を呼んで欲しくないと考えてしまうのはきつと嫌悪感からのもの。

決して醜い感情からではない。

「あ？いねえよ」

「マジかー……垣根んとこに居ると思っただがな……ワリい、時間取らせたな」

「あのバカと連絡取れないのか？」

上条当麻がなぜあのギャルと話がしたいかは知らない。だが、アレの保護者兼飼い主としては自分の知らないことが起きるのも嫌だった。

「ん？ああ、16日に連絡したんだがずっと電源が入ってないみたいみたいでさ。病院にもいねえらしいし」

「あー……15日からずっと休み取ってたんだ、アイツ」

何かあったのかと聞いてみると彼も俺と同じような状況のようだった。

「ついでに言うとその日から会ってない」

15日、テレステイナーにアクセラレータ一方通行の実験を聞いたあの日からこの俺でさえ彼女と連絡が取れていない。自分が研究にうつつを抜かしている最中、彼女はスマホを家に置いたままどこかへ行ってしまった。

この俺でさえ連絡が取れていないのにこいつはもつとアクセスできないうらさう。

ああ、ムカつく奴だ。俺にひつついて付きまとってたくせに、ぱたりと姿を消す。

何を思っていて、何を思っていて、誰といるのか、知りたくて堪らない。俺をぞんざいに扱う今の彼女が恐ろしい。

だが彼女が何をしているかの大体の目星は着いていた。

最近あの実験に関与している施設が次々とテロにあっているらしく、どうせそれに関わっているのだ。

しかし、そんなことを知る由もない上条は気の抜けた声であろう事かあの女の心配をし始める。

「そりゃー心配だな、風邪でも引いたのかね？」

「アレが引くわけねえだろ」

あの女の能力を考える限り風邪を引くなどありえないだろう。

自身と他人の電気信号を操り肉体の再生能力を劇的に向上させ、体のリミッターを外す。常盤台にいるらしい大能力者^{レベ}の電気系統の能力者と近く、その上位互換の能力だと書庫^{バンク}には書かれている。

しかし、書庫^{バンク}の言っていることは信用出来ない。

それに、あの女の今までの言動を考えると書庫^{バンク}の情報を鵜呑みにしてはいけないとよく分かる。

他人の怪我を感知する力、脳内麻薬の分泌を促す力。

そして彼女の肉体を構成する全てを操れたらという例え話。

それらが本当かどうかは分からない。

全て彼女のでまかせかもしれない。

これは考察、予想、推測でしかない。

しかし彼女の言葉が本当なら、体温を上げてウイルスを殺すことも、自ら白血球やらマクロファージやらを作ることとも可能だろう。

なんなら精神への干渉もきつと出来る。

そんな女が風邪なんかひくものか。

しかし何かの事故やら事件に巻き込まれている可能性もなくはない。

現代人だと言うのここに最近スマホを持ち歩いてないおかげで彼女の行動が把握できてないのも事実だ。

「……仕方ねえ、家に行ってみる」

「あ、じゃあ俺も行くぜ」

バカ正直に家にいるとは思わないが、病院に居ないとなると、他に思い当たる場所もない。

そこでふとある疑問が思い浮かぶ。

何故こいつはこんな朝早くからあの女に連絡を取ろうと思ったんだ？

なにか良くない企みを？

飼主のいない所で？

「てかこんな朝からアイツに何の用だよ」

今でさえ俺の知らないところで何かをしているという状態が腹立たしく破壊衝動に駆られるというのに、それ以上のことでもしていると？

ムカつく。

俺の知らないアイツを知ってる上条が非常に目障りだ。

醜い感情が心を支配する。

「いやあ、そろそろ夏休みの宿題がやばくてな」

「……写させてもらいたかったのか」

しかしその心配を吹き飛ばすほどマヌケで思いもよらない答えに少し肩の力が抜けた。

「馬鹿だろ」

「はい、上条さんは紛うことなき馬鹿です……」

自分が危惧していたことは起こらなさそうだ。

安堵のため息を着く。

「とりあえず、アイツの住所送るから行ってくれ。俺も今から行く」

「了解！」

上条の元気ハツラツな声を聞くと通話を切り、携帯をベッドに投げ捨てた。

今日の予定を組み立ながらスウェットを脱いで私服に着替えていると朝食を食べていないのに気づく。

「……ま、朝飯は後でアイツらと食べに行けばいいか」

早く合流して飯を食べに行かなくては。

軽く笑みが零れるのを気付かぬまま、俺は玄関に向かった。

数十分後、第7学区にそびえ立つマンションの前に俺はつんつん頭と共に立っていた。

「……でけえな」

「医者の名前で契約されてるからな、豪華だろうよ」

マンションのロビーに入り、ズボンのポケットから1枚のカードを取り出す。

このマンションの鍵は合鍵を作るのが難しいカードキータイプで、それを入口の機械の窪みに差し込むとガラスでできた入口が開いた。「なんでんなこと知ってんだよ」

「調べた」

「は？」

そのまま奥へ進み、エレベーターに乗り込むと9階を押す。

流れるような動作に流石の上条も少し疑問を覚えたようで、怪訝そうな顔でこちらを見てきた。

「つか、さっきのオートロックもすんなり入ってたけど……」

「合鍵」

「なるほど……ってテメエら、そこまで進んでたのか!？」

ぴつと先程だしたカードキーを彼の目の前で見せつけると、納得したような顔を見せるが、直ぐにその意味を勘違いし声を荒らげた。

「アイツから貰ったわけじゃねえぞ」

そういうと今度は犯罪者を見るような目を向けてくる。

犯罪者であることは確かだが、この件に関しては犯罪は犯していない。

「あの医者にくれって言ったらくれた」

「い、医者アー!!」

エレベーターが目的の階に止まり、扉が開く。狭い空間から廊下へ出ると、生温い風が頬を掠めた。

この鍵はあの冥土ヘンキョウセンセラー帰しがくれたものだ。

しかも自分から寄越せと言ったものでは無い。

ポルターガイストが多発していた時にちよつとした質問と話つい

でに貰ったもの。

俺に鍵を渡すとは間抜けな医者だ。こんな俺を信用するとは。鍵を渡された時に言われたことを少し思い出す。

—あの子を助けてやってくれ

俺はヒーローじゃないというのに、何故か受け取ってしまったこの鍵。

「……随分と信用されちゃったみたいだな、ほんと」

「なんか言ったか？」

聞こえないような小さな声で心から言葉が漏れる。

しかし鈍感な上条の耳には届かなかった。

「いや、なんも。ほら、この部屋だぞ」

929号室。そこが彼女の部屋。

合鍵で突入するのも一瞬頭に過ぎだったが、さすがに女性の部屋にノックなしで入るほど常識がないわけではない。

なのでインターホンをしつこく連打する。

鬱憤も溜まっているのでこれくらいしたって許されるだろう。

「やめろやめろ、怒られるぞ」

「それも面白いからいいだろ」

「ええ……」

しかしどんなにベルを鳴らしても扉の奥からは物音一つしない。

「出てこねえな」

仕方がない。ここは強引に入らせてもらおう。

鍵を取りだし、ドアノブの近くに取り付けられたスキャナーにカードキーを差し込むとピピッと音がする。

「あつ、コラー！不法侵入！」

「何言ってるんだ、合鍵持ちだぞ」

簡単に開かれたドアの取っ手に手をかけ、ドアを引くが、勢い良く腕を横切った足によってそれは拒まれた。

ドンッと音を立ててドアを蹴り、侵入を許さないその足は黒いスニーカーを履いており、足首は細い。

「合鍵渡した覚えはないんだけどなあ」

そして足が伸びる方向から低く優しい女性の声が聞こえてきた。

「あ？なんだ、外にいたのか、よ……」

ここ5日会っていない少女の声だと理解すると、顔を拝もうと後ろをむく。

ムスツと顔を顰めて、ドアを抑えていた足を下ろす彼女の姿はいつもと違った。

「垣根くん、なんであたしの家の鍵もってんの？」

「髪の毛、どうしたんだよ」

胸部の曲線も、化粧のしていない顔も、白いシャツと黒いズボンのボーイッシュな服もいつもとそんなに変わりはない。腕に抱える黒い布の塊も気になったが、それよりも気になるものが視界を埋め尽くす。

唯一違っていたのはその髪だ。

俺と似たような色の金髪はいつもなら胸まで伸びており、毛先は牡丹色に染まつているはずだった。

しかし、今の彼女はどれでもなかった。

向日葵色の髪は足首まで伸び、その毛先は色づいていない。前髪もいつもより長く、赤いピンで留めている。

まるで別人だった。

「どうだっていいでしょ。垣根くんには関係ないよ」

重そうな髪を掻き上げて、ため息交じりに呟くその態度が気に食わなかった。

俺だけが彼女の秘密を知っていないわけではない。それが飼い主である俺の務め。

「は？俺に関係ない？テメーの飼い主は俺だぞ？吐けよ駄犬」

「……あたし今機嫌悪いの。お願いだから変なこと言わないで」

いつもと違う姿、いつもと違う感情のブレが腹立たしい。

俺以外にこのイカれた女の秘密を知っているのがひどく不安だった。

誰にも理解できないこいつを理解するのが俺の楽しみなのだ。

その楽しみが奪われるのが酷く不愉快だった。

「そいつはおもしれえな。暴言のひとつでも吐いてみるよ善人」
「はっ。」

安い挑発をかましてみると、目に見えて彼女は苛ついた。

低い目線で睨まれるが、ちっとも怖くない。威嚇する子犬は俺に優越感を与えるだけだった。

「言えねーのかよ意気地無し」

「……f u c」

「やめろやめろ！お前ら！仲良くしろよ！」

珍しく暴言が聞けると思ったが、優しい優しい上条当麻様がそれを阻止した。

つまらない。この女の本音を引き摺り出してぶち撒けさせたいと思うのは飼い主である俺だけか。

「……喧嘩売ってきたのは垣根くんでしょ」

「テメーがうだうだして答えねえからだろ」

「弟分に心配される筋合いはないよ。大したことじゃないから」

苛立ちを抑えるような声で彼女はため息をついた。

全人類の姉を豪語する彼女は相変わらず頭がおかしいようだった。

「誰が弟だ誰が」

「垣根くん」

「姉ぶってんじゃねえぞ年下」

姉というポジションに恐ろしいほど執着する彼女は気味が悪い。

その考え方も、声も、見た目も、何もかもが気味が悪くて大嫌いだ。

この女を好きになる男がこの世にいるとは思えない。

彼女の深淵は吐き気を催すほど気味が悪かった。

「でも髪の色似てるし、遠目から見たらホントに兄妹てえだな」

鈍感な上条は何も考えていない頭でぽろっと言葉を零す。

兄・妹

俺の方が上だと、上条は認めた。認めたのだ。

その一言は俺を舞い上がらせる。俺はこのイかれた女の下になんかならない。

優越感を込めてその女を見下ろすと、彼女は見るからに嫌そうな顔

で低く唸る。

「……誰が妹よ」

「テメエだよバアーカ」

「あ？」

暴言がそのまま口から溢れたが、何事もなかったかのように天羽はため息をつく。

揺れる髪は嫌になる程眩しい色をしていた。

「……とりあえず、退いてくんない？ 着替えたいんだけど」

丸まった布の塊を腕に抱え、後ろのドアに行こうとする彼女の髪から嫌な匂いがどろりと臭う。

濃い血の匂い。

それを感じ取ると、横を通り過ぎようとする彼女の髪を引っ張る。

「うわ、なにになに」

長い髪を掴み、匂いを嗅ぐと彼女からは到底匂わないはずの匂いがシャンプーの匂いに隠れて鼻を掠める。

それは硝煙の匂い、そして濃厚な血液の匂い。

火薬の嫌な匂いか鼻の奥を刺激した。

「テメエ、今までどこにいたんだ」

「……秘密」

睨むように瞳を覗き込むが、それにビクともせず彼女は薄く笑う。憂いを帯びた眼差しはどことなく疲れているようで、肩に力が入っていないかった。

「で、なんの用？ 悪いけど部屋汚いから話すなら外でね」

伏せた目からはほんのりと苛立ちの感情が見え、気だるそうな声からは疲れを感じさせた。

「じゃあ俺これから学校だし、公園でいいか？」

「……着替えてくるから、待ってて」

中が見えないように薄く開かれた扉に体を滑り込ませ、10分ちやうだいと言って慌ただしく逃げるように部屋の中へ入っていく。

その慌てように俺は上条と目を合わせた。

上条と3人で向かったのはとある公園。

赤い自販機が佇むその公園は朝だからか、人の気配がほとんどなかった。

お金を入れて、自販機からコーラとサイダーを取り出すとベンチに座る天羽の元に向かう。

硬く口を閉ざし、空を見上げる彼女の頬に冷たい缶を当てても反応はない。

疲れきった目でそれを受け取ると、ありがとうと呟いて飲み始めた。

手にしたコーラ、商品名ザクロコーラ、は美味しいとは思えないのだが、なぜか彼女は気に入っていた。

とは言え俺が手にしている黒豆サイダーよりはマシなのかもしれない。

「あー、美味しい」

男物のブカブカとしたチューリップの写真がプリントされた真っ白いTシャツと柳色のズボン。

髪はいつも通りの長さに切り揃えられ、いつの間にか毛先も桃色に染まっていた。あの短時間でよく色がついたなと少し思ったが、学園都市の技術なら造作もないか、少し納得してしまう。

気の抜けた服装だが、いつもと変わらずアクセサリーをジャラジャラとつけてるのはそれが大切なものだからか。

彼女のファッションは今どき見ない格好で、そのセンスが少し気になっってしまう。

こいつのファッションセンスは少しおかしい。流行を追いかけないというか、ダサイというか。

この間はTシャツをズボンに入れていたし、そのズボンはどこで買ったのか聞きたくなるような真っ赤なワイドパンツ。

独自のファッションセンスを持っているのは明らかだった。

「お前、朝飯食べたのか？」

「食べてないよ」

ぼーっと飲み干した缶の成分表をまじまじと見つめながらベンチに座る彼女だが、案外話は聞いていようようで俺の質問に即答する。

「じゃあ後で食いに行こうぜ、腹減った」

「垣根くんの奢りなら」

「たかる気満々だな……何食いたいんだよ」

コイツの食生活はかなり偏っている。

必要な栄養素は全部サプリで補い、ご飯を食べるのが面倒臭いと
言っでご飯がわりにプロテインやらカロリーメイトで腹を満たす。

そのわりに甘味は好きで、よく俺にケーキが食べたいから買ってこ
いなど宣いやがる。

矛盾だらけで理解不能だ。

「……山羊肉のトマト煮込み、とか？」

「マニアックすぎる」

ついでに言うと、味の好みも理解不能。

何故そこで山羊を出す。

そんな会話をしていると、先程使った自販機から狼狽える声が聞こ
える。

そこには上条しか居ないはずで、何かあったのかと目を向けた。

「あ、あれ？あれ？」

「なんだよ、うっせえぞ上条」

ガチャガチャとお釣りを出すためのレバーを必死になって下げる
彼は、俺の声に気がつくとき青ざめた顔で小さく呟く。

「……あのお、お釣り、出てこないんですが」

突然告げられた内容に一瞬ポカンとするが、すぐに理解すると遠く
を見つめる。

晴れた青空はまるで上条を皮肉っているようだ。

「不幸だな」

「不幸だねえ」

「不幸だ……」

不幸体質の上条ならこんなことなきつと日常茶飯事だろう。

遠い目をしながら缶コーヒーに口をつけると、放心状態の上条に近づくと影が見える。

短い茶髪を揺らして上条に近づく少女に見覚えがあった。

「ちよろつと、ボケつと突つ立ってんじやないわよ、買わないなら退く退く！」

「ん？ビリビリじゃねえか、何やってんだ？」

超能力者第3位、御坂美琴。

そういえば天羽が彼女と知り合ったのは上条経由と言っていたな。

インデックスといい、彼は年下に好かれるようだ。気さくに彼女に話しかけるが、ニツクネームに不満があるようで、御坂美琴は眉間に皺を寄せて声を張り上げる。

「……あたしには、御坂美琴つて名前があんのよ！いい加減覚えろこのバカ！」

張り上げた声と同時に青白い電流が空気を斬り裂く。

人がいないとはいえ、無闇矢鱈に能力を使う姿勢は感心しない。

第4位と同じく、短気なんだろう。電子制御系は皆同じなのか？

「あー、ビリビリ、その自販機な、どうもお金を飲むつぽいぞ」

「知ってるわよ」

上条を退け、自動販売機の前に立つ御坂美琴に彼は親切心から忠告する。

しかし彼女にはそんな問題は些細な用で、悪戯を思いついた子供のよう口角を上げて彼に微笑みを向けた。

「裏技があんのよ、お金入れなくてもジュースが出てくる裏技がね」

そう言い終わるや否や、大声を上げて体をくるりと回す。そこから放たれた回し蹴りは自動販売機の側面に当たると、ガコンと音を立てて1本の缶ジュースを取り出し口に落とす。

「この自販機ボロっちいから、ジュース固定してるバネ緩んでんのよねえ……何が出てくるか選べないのが難点だけど」

「器物破損に窃盗……お嬢様がやることとは思えねえな」

「こんなことしてるから、自販機壊れるんじゃない？」

自販機からジュースを取り出すと、すぐさま缶を開けて一気に飲み干す。

さりげなく行われる軽犯罪に少し乾いた笑いが出てしまう。

「いいじゃない、アンタ達には実害があるわけじゃないでしょ？」

「と、申してますよ、同志上条」

「……」

御坂美琴の言葉に天羽は現在進行形で実害を受けている不幸な少年に視線を移す。

その視線に気づくが、彼は目を逸らして哀愁漂う表情を浮かべただけで何も話さない。

「……のまれた？」

「……」

キラキラと不幸な少年を笑うように瞳を輝かせる御坂美琴。しかし彼の口は硬く閉じたままだった。

「一体いくら飲み込まれたわけ？」

「……2000円」

ここでやつと口を開く。

まさか2000円も飲み込まれていたとは思わず、彼の深刻な顔を見て少し同情してしまう。

自分も運がいいとは言えないので、彼の気持ちは何となく察する。

この気持ちは隣の女には分からない痛みだろうな。

「つぶぶ、2000円!?!ひよつとして2000円札!?!」

「そりゃ自販機もバグるだろ……」

「パないね」

ようやく御坂美琴の笑いが納まった頃、彼女はごめんごめんと軽く告げて、彼に笑顔を見せた。

「じゃー取り返してあげるわ」

「どうやって……?」

先程と同じイタズラっ子のような笑み。

嫌な予感。

ぼけっと座る天羽の腕を掴んでそそくさとその場を離れると、常盤

台のお嬢様はまるでキックボクシングを始めるかのように体を上下に動かした。

「こうやってー！」

背後からガラガラと何かが大量に落ちる音がしたと思ったと同時に、けたたましいアラーム音が聞こえてくる。

お嬢様はこんなにも野蠻なのか？逃げておいて正解だ。

もうすでに離れた位置にいた俺たちは他人事のように哀れな男子高校生に同情のこもった目線を送った。

「あつー垣根！天羽！卑怯だぞー！」

「悪いな、窃盗犯になるつもりはねーんだよ」

後ろを振り返ると上条が必死に走っているのが見える。

心の中で彼にご愁傷さまと呟くと同時に後ろで走る天羽の顔がちらりと目に入った。

先程の生気のない顔とは打って変わって、心底楽しそうな表情を浮かべている。

その表情に少しだけ安堵する自分がいた。

少し走った先にあったベンチの辺りで足を止めると、数秒遅れで上条が走ってくる。

「っは、はえーよ、お前ら……」

息を荒らげ身を投げ捨てるようにベンチに座ると、彼に向かって一本の缶ジュースが投げられる。

先ほどの窃盗で獲得されたそれは手に入れた経路がまともであればきつと彼も喜んでいただろう。

「愉快に現実逃避してないでジュース持ちなさいってば。元々アンタの取り分でしょ」

彼を追いかけてきた御坂美琴が投げたその缶ジュースは黒豆サイダーの文字が映っていた。

彼女が持つ薄い革製の鞆の上にはピラミッドのように缶ジュースが積まれており、その一つ一つを上条に投げ渡す。

「なんか、これを受け取った瞬間、傍観者から共犯者に成長進化しそうで怖いんですが……」

「良かったねえ上条くん、女子からのプレゼントだよ?」

「いやいや、元々は上条さんの2000円札がですねえ!」

もう疲れはないのか、ケラケラと明るく振る舞う天羽はいつもの脳天気な彼女に戻っていた。

「いいからジューズお飲み!美琴センサー直々のプレゼントだなんて、うちの後輩だったら卒倒してるのよ?」

「卒倒だ?少女漫画じゃあるまいし」

お嬢様学校は先輩をお姉様と呼ぶ風習があるんだったか。

ついこの間の幻想御手やポルターガイストの件で知り合った少女の1人が彼女をお姉様と呼んでいた記憶がある。

女子校とはかくも面倒くさそうな場所だ。

「ま、少女漫画ではないよねえ」

「は?」

「んー、なんでもない」

だが隣にいる天羽は女子校のことよりも少女漫画という単語に反応する。

小さな声で呟かれた言葉は、意図が分からない単語の羅列。

何を言っているのかと睨みを利かせるが、彼女は悲しそうに笑うだけだった。

「お姉様?」

無理やり口を開かせてやろう。そう思って武力行使頬を掴をしようとした瞬間、特徴的な少女の声が後ろから聞こえた。

「まあお姉様、まあまあお姉様!補習なんて似合わない真似をしていると思ったら、このための口実だったのですね!」

「念の為、聞くけど、このためって、どのため?」

名前は白井黒子だったか。

白なのか黒なのかはつきりして欲しい名前の少女は笑みを貼り付けており、その態度と言葉に御坂美琴は少し顔を引きつらせた。

「決まっています、その殿方と密会するためでしょう?今日はダブルデートですか?」

上条に笑顔で詰め寄る白井黒子だったが、どう見てもその目は笑っ

ていない。

「初めまして、私、お姉様の露払いをしている白井黒子と言いますの。もし、お姉様にちよつかいを出す気なら、まず私を通してからにしてくださいな」

「……アンタはっ、このヘンテコがあたしの彼氏に見えんのか!」

ビリビリと火花を頭に散らしていた御坂美琴は、我慢の限界に到達したのか大きな声とともに青白い閃光を放出する。

上条を盛大に罵倒しながら放った電撃は白井の足元に一寸の狂いもなく撃ち込まれた。

「ですわよねえ……垣根さんは天羽さんと一緒ですし、そのような類人猿など、私のお姉様に限って。それではくれぐれも過ちは犯さぬようにしてくださいませ、お姉様」

しかし、その場所に彼女の姿は既がない。

目の前の街灯の上に移動していた彼女はお嬢様らしくお辞儀をしてその場から去っていつてしまう。

うるさいのが増えたり減ったりと忙しいなと考えながら先程まで白井黒子が立っていた街灯を見上げていると、今度は別の声が御坂美琴を呼んだ。

「お姉様」

「またか!」

落ち着いたトーンの声が御坂美琴を呼ぶ。

その声は全く同じ見た目の少女から聞こえてきた。

ゴーグルをつけていること以外は御坂美琴と瓜二つの少女が階段の上で俺たちを見下ろす。

「え? 増えてる……!? 御坂2号!?!」

「妹です、とミサカは間髪入れずに答えました」

「この間の妹か」

御坂美琴の量産型軍用クローン。

一方通行の実験に起用された人の形をしたモルモット。

1体はあの病院に匿われているようだが、2万体制もいるそっくりな少女は見分けがつかない。この個体は病院から抜け出した個体なの

か、他の個体なのかを判断するすべは俺にはなかった。

「妹……うけどミサカなんかで一人称は御坂なの？そこは普通名前の方を使うもんじゃねえのか？家の中で混乱するだろ」

「ミサカの名前はミサカですが、とミサカは即答します」

だが、隣の女には見分けが着くようで、少女を無にも等しい暗い瞳で見つめる。

興味が無いといった様子で、黙ったまま御坂美琴とその妹を眺めていた。

「別の妹か」

ポツリと零した声は酷く冷めていた。

「アンター！一体どうしてこんな所でブラブラしてんのよー！」

「どうしてかと問われれば、研修中です、とミサカは簡潔に答えます」

御坂美琴の迫力ある声に動じず、クローンは淡々と答える。

「……おい、妹、ちよろつとこつち来てみようか、色々積もる話があるから、色々」

「いえ、御坂にもスケジュールがあります、とミサカは」

はぐらかす彼女に御坂美琴は感情を抑えるように顔を伏せて階段を登り始める。

階段の上にいる彼女のクローンに腕を回すと唸るような低い声を絞り出した。

「いいから、来なさい」

重い空気が場を支配する。はたから見たら家庭環境が複雑なご家庭出身としか思えないが、事実は小説より奇なり、複雑どころの騒ぎじゃない。

「じゃあ、私たちはこつちの道だから、アンタたちも寮の門限とか気にしなさいよ」

俺たちに一言別れの挨拶を伝えると、そのまま帰ろうと彼女たちは踵を返した。

それを見届けると、天羽も空になった缶をゴミ箱に投げ捨てて家の方向に視線を向ける。

「あー、んじゃあたしも戻るわ」

「えっ?」

「じゃあね、上条くん」

軽く手を振って彼女は来た道に戻る。ぽかんとする上条を置いて公園を離れるとゆっくりと二人で歩く。

歩幅に差がない俺たちは、お互いの歩調に合わせる必要はない。

しかし、歩調が同じとはいえ、彼女は俺よりも小さい。

サンダルを履く彼女の目線は今は俺よりも低く、つむじが見えるほど。その低さが彼女を弱い人と感じさせる。

たとえそれが勘違いだとしても、俺は彼女に守られるような存在じゃないと信じていたかった。

悶々とした考えが頭を重くしていると、彼女の方から声をかけられる。

萌葱色も錆色にも見える気味の悪いヘーゼルの目はどこか闇を纏っているかに見えた。

「お腹空いてるんだっけ、どっか食べに行く?今の時間だとファミレスかな?ファストフードとかコンビニでもいいけど、あ、でも部屋に垣根くんを入れるわけにいかないし、イートインがあるとこじやないとダメだよねえ」

何も聞くな、と圧をかけるような笑顔で俺に発言権を与えまいと早口で捲し立てる。

逆にそれが俺の感情に揺さぶりをかける。

俺の知らないところで何をしている?俺に黙って何を考えている?

目障りなノイズが頭を掻き乱す。

知らないことが酷く恐ろしく感じた。

「…お前は今何をやっている」

彼女が聞きたくないであろう言葉を投げかけると、びくりと肩が跳ね上がった。

わかりやすい女だこと。

解りやすいはずなのに、底が掴めない。

立ち止まり、彼女はゆっくりと振り向いた。

張り付いた笑みは隠し事のサイン。

「どうせ知ってるでしょ?。」

「いいや? 知らないな」

「へー、垣根くんが知らないなんて珍しいね」

再び前を向いて歩き始めると、明るく取り繕った声色で話を逸らす。

「はぐらかすな」

彼女の肩を掴み、強引に振り向かせるとガクンと力が抜けるようにフラついた。

その弱さと隙にさらに苛立ちが増す。

弱いくせに、なぜ強がる。

思考回路の矛盾と、彼女を突き動かす感情に得体の知れない不気味さが募るばかり。

「知りたい?。」

いつの間にか彼女から笑みが消えていた。

「どうしても?。」

「早く答えろ」

見定めるような瞳が髪の間から見え隠れする。

「テメエが第1位と接触してんのは知ってたんだ。今朝までスマホを家に放置してまで何をしていた」

「さあ? なんでしょーね」

のらりくらりと言葉を躲かされてしまう。

このまま彼女のペースに飲まれるの癪だった。

「髪と手に着いた火薬の匂い、どう弁明するつもりだ?」

肩から手を離し、髪を掬う。

硝煙と火薬の独特の香りはもうしない。

「答えろ、テメエは何をした」

「……水穂機構が業務撤回したね」

「は?。」

空を見つめ、やっと開いた口からは昨夜のニュースが出てきた。遠くの空で浮かぶ飛行船が映すニュースだとその視線で気がつく

と、ふっと鼻で笑われる。

「聡明な垣根くんならこれくらいヒントをあげれば分かるでしょ？」
髪を触る手を振りほどき、見下ろす様は先程の弱々しい姿とはかけ離れていた。

自分の手で髪を払うと、糸のような髪が靡く。伸びる金色が太陽に照らされ目に焼きついて離れない。

「ご学友に調べるの手伝ってもらったら？」

悪魔のように笑う彼女の口から出てきたのは突拍子も無い言葉だった。

なんでそれを知っている。なんでそんな笑顔でその言葉が言える。含みをもたせた単語はきつと他の人には理解できない。

闇を知る人
垣根帝督だからこそ理解できる言葉。

それを彼女が知っていたことが酷く怖かった。

「デメエ、どこまで知ってる」

「知っていることは少ないよ、ただ普通の人よりは知ってるっただけ」
指を口に当て佇む天羽が恐ろしく感じる。どこまで知っているのか、なにを知っているのか。

恐怖が心を埋め尽くす。

天羽^善彗系に垣根^悪帝督を知られるのが、赦されてしまうのが堪らなく怖かった。

「あたしが何かを知っていることが怖い？」

凶星を突かれ、動揺してしまう。

口を閉ざし、睨み付けると彼女は慈愛に満ちた表情をみせる。

その顔が何よりも嫌いだった。

悪党は天使の救済を望んではいけない。

現実と、壊れた精神がギシギシと鬨ぎ合う。

「大丈夫、あたしが何を知っているてもアナタの味方であることは変わらないよ。あたしは垣根くんのこと大好きだからさ」

「……信用出来るかっつーの」

吐き捨てた言葉は苦し紛れの虚勢。

真っ直ぐでいて嘘くさい彼女の好意はいつになっても慣れない。

「信用なんてしなくていいよ、理解なんかしなくていいよ、どうせあたしの考えはあたしにしか理解されないのだから。でもね、あたしはアナタを救い、赦すためだけにこの世界にいることは覚えていて」

白い布地を翻して彼女は笑う。

目を細め、愛しい何かを見るように笑う姿がチクチクと俺の心に針を刺す。

「明日、楽しみだね、垣根くん」

放縦で、異端な彼女の微笑みはいつだって俺を苛立たせる。

その苛立ちは悪との葛藤、善への憧憬の表れ。その感情に蓋をして俺は今日も彼女の隣に立つのだ。

27話：誇示

サイレンが五月蠅い大通り。暗い路地の隙間、光のない道に一人の少女が立っていた。

「間に合わなかったか」

着崩したセーラー服に身を包んだ彼女は言葉を零す。丸一日掛けて捜索したというのに、彼女は間に合わなかったのだ。

セーラー服に似合わない真つ黒なピンヒールは、高い音を路地裏に響かせた。

拭き取られた血痕と強い薬品の匂い。

ここで何が起こったかを強く想起させるそれらに彼女は一瞬顔を顰める。

「待っててね、アクセラレータ一方通行くん」

狂気に満ちた慈愛の眼差しは月夜に照らされ薄気味悪く光る。

未来を知るその女はひっそりと路地を飛びだす。軽やかな足取りで空を跳び、ただひたすらに舞台へと向かった。

少女、天羽彗糸が向かった先は操車場。月明かりの下、積み上げられたコンテナのひとつに彼女は可愛らしい最強との再会を待ち侘びながら静かに座っていた。どこに来るかはおおよそ見当がついている。

前世から受け継がれた視覚情報は、地学園都市アの技術とリ合わさり、彼女をここへ導く。幸運な少女。

数分経った頃だろうか、地面と擦れる靴の音が彼女の耳に入った。静かな空間で強調されたその音は彼女の方角に向かってくると、その人はコンテナの上に大きく飛び乗り、象牙のような白い髪を揺らす。

細い体、少女より低い背、炎のような赤い瞳。それは彼女が待ち焦がれていた人。

「あ……？ テメエは」

飛び乗ったところで、その人の目に反対側のコンテナで座る女の姿が映る。

バターのような金髪にストロベリーピンクの毛先。大きな瞳の上にはアイシヤドウがキラキラとしていた。

月を背にしてコンテナに座る彼女はどこか神秘的な雰囲気纏っている。一番会いたくない人。

「久しぶり、アクセラレータ一方通行くん」

にこやかに笑顔をみせると、白髪の青年、アクセラレータ一方通行は嫌そうに舌打ちをした。

アクセラレータ一方通行はこの女が苦手だった。

たった数回の会話しか交わしていない。だがそれだけで彼女と相容れないのがすぐに分かる。

それ程までに彼女への嫌悪感は分かりやすかった。

「そういや、研究所が軒並み破壊されたらしいんだが、もしかしなくともテメエのせいかな？」

「まーね、これでも力があるからさ」

ばたばたと上が騒いでいたのは知っていた。そしてそれが彼女のせいだとなんとなく気づいていた。アクセラレータ一方通行は2度目の舌打ちを打つ。

早く会話を切り上げたかった。

「また邪魔しに来たってわけか？」

「いいえ、アナタを救いにきたの」

「は？俺？あのクローンじゃなく？」

また邪魔するなら今度こそ殺せばいい。

そう思い、嘲笑うように女を見たが、憎たらしくもその女は救いの言葉を紡ぐ。

それは彼に理解できない言葉だった。

「あれはモルモットじゃん？人間じゃない」

「ナースが吐いているいい台詞じゃあねエな、なら前に助けたクローンはなんだってんだ？」

「9982号を助けたのはあの子が人に成ろうとしていたからよ。これからアナタが殺す子は死に疑問を持っていない。だから別にどう

だっつていいの」

苛立ちを覚えながら一方通行は目の前の狂人に疑問を投げ掛ける。
返ってきたのは想定外の答え。

彼女は善人ではなかった。

究極の人間至上主義。人を愛し、人を助け、人を救う。

その中に動物も植物も天使も悪魔も神も含まれない。

人の形で、人の心を持っていれば、彼女はそれを愛する。けれども、どちらかひとつでも欠落していれば彼女にとっては人間ではなかった。

そのため人の形を持っていても、借り物の心である他の妹達に心は動かなかった。

「一番大切なのは人間であるアナタなんだから」

「相変わらず気味が悪いな、彼氏できねーぞ、クソ女」

冗談交じりに鼻で笑うと、気味の悪い狂人は静かに微笑む。

祈りを捧げるように胸元で手を組み合わせ、彼女は一方通行を緑と赤の瞳で見据えた。

居心地の悪い空間だった。

「あたしは全ての人を平等に愛さなくてはいけないの。個に執着すると破滅するからね」

「まるで体験したかのような言い回しだな」

「こう見えて経験豊富な、生も死も」

大きい目は細められ、まるでどこか遠くを眺めているかのように見える。

優しそうな顔立ちは逆に気持ち悪さを増した。

「で？クソビッチはどうやって俺を助けると？」

「それは勿論、あたしの命で」

「はっ。」

突拍子のない提案だった。そして細められた目からそれが冗談ではないと暗に伝えていた。

「この前言ったじゃん、クローンじゃなくてあたしを殺せば、って」「自殺志願者か？悪いが、テメエみてえな野郎の願いを叶える程、俺は

できてねエンだよ」

「自殺？あたしは死なないもの、自殺ではない」

彼女の微笑みは傲慢であり、強欲。

救いを求めるものにはきつと謙虚で寛容な微笑みに見えるのだから。

しかし救いを求めない一方通行アクセラレータにしてみれば悪魔のような女だった。

禁断救の果実を与える存在。

エゴの塊である少女は天使のような心を持ちながらも、実態は悪魔に似ている。

「言ったでしょう？あたしは不死身だって」

悪魔のような少女は天使のような微笑みで殺せと言わんばかりに両腕を広げた。

「大能力者の肉体支配レベル4。売りは高い不死性なの、よろしくね」

狂気が蠢く瞳は一方通行アクセラレータを苛立たせる。

何も知らない癖に。なにも出来ない癖に。名前の無い感情が彼の中に確かに生まれ始めた。

彼女の考えはあまりにも途方もなく、怠惰な戦法だった。

永遠に、永久の時を使って一方通行アクセラレータを諦めさせる。無敵になろうが、諦めようが、彼女には関係ない。

その「怠惰な戦法」ができる彼女が出来損ないのはずがないと、あの研究資料を書いた野郎に見せつけたかった。

その病名はナルシズム。傲慢な少女は自分が正しいと思いつづける。

「……面白エ、どこまで切り刻んだらオマエは死ぬんだろうな？」

「試してみる？」

「言われなくても」

その苛立ちを原因へと向けた。

足を軽くコンテナにぶつけると、大きく風が吹く。

カッターのように鋭いその風は少女の首を刈り取る。高級感を醸し出す緑色のチョーカーは真つ二つに切り取られ、無残な姿となる。

風に吹かれ髪は舞い、首はごろんと彼女の手元に落ちるが、その表情は髪に隠れて見えない。

月に照らされたその光景は彼が見たかったものでは無かった。

一滴も零れない血を少し疑問に思いながらも一方通行はアクセラレータその光景をただ呆然と眺めていた。

「……あっけねエな」

動揺が彼の瞳に浮かぶ。

逃げると思っていた、叫ぶと思っていた。

今まで殺してきたモルモットだって死に際には痛みで叫んでいた。それは人間の生理現象。

動物ならある筈の生理現象が、彼女には現れない。

刃物を向けられたら体を逸らすなりするはずだと言うのに、彼女は動かなかった。痛みと死を受け入れた。

反射ができるわけでも、助けてくれると信じる人がいるわけでもない彼女がそれを受け入れることがどんなに気味の悪いことか。

冷静を装いながらも彼は酷く動揺していた。

「首を刎ねよだなんて、まるでハートの女王ね。さしずめあたしはアリスかしら?」

「……は?」

そしてその動揺をさらに助長する声が女の方から聞こえた。

首を刎ねたというのに、体から分離した頭は声を絞り出す。

「アリスなんて柄じゃないの。あたしは白の騎士ナイトなのよ、アナタを最後のマスまで導くルイス・キャロルなの」

彼女は生きていた。

頭の無い体を持ち上げ、カチリと元に戻す。血液の一滴も零さずに端正な顔が体に収まった。

もしかして彼女の首を刎ねたのは幻覚だったのだろうか? 本当は肉体ではなく精神干渉の能力者ではないのかと、考えが飛躍する。

しかし分断されたチョーカーが嘘ではないと醜く主張していた、

「……能力は体に宿るものではない。魂にある」

驚く一方通行に少しため息をついて彼女は話を始める。簡潔な事

実を彼に伝えていく。

死を知る彼女は死に恐怖を抱かなかった。

妖精のようにくすぐったい彼女の笑い声は一方通行の耳を這うように纏わり付く。

「体が分離されようが、頭がぶつ飛ばされようが、魂が両方に宿っていれば死ぬことはないの。それがこの世界のルールなの。あたしはそれを誰よりも知ってる」

「……気持ち悪い」

「そうね、他人に理解なんか求めてないよ」

一方通行の垂直な感想だった。蛇蝎の如く彼女を嫌う。

しかし嫌悪程度で彼女は傷つかない。彼女が傷つくのは神の理不尽に抗えなかった時だけだ。

愛する者を幸せにするためだけに彼女は生きていた。

「人間は理解できないものに恐怖する。自分とかけ離れた存在に恐怖く」

彼女は垣根帝督と同じ、無限と創造を司る。

そしてそれは一方通行には理解できない。有限と破壊を操る能力者、対になる存在に理解を示すことは無い。

だからこそ垣根帝督だけが彼女を理解できると言っても過言ではなかった。

「君は酸素がなければ死ぬ。反射を破ってしまえば痛みは感じるし、腕を切断すれば血は吹き出す」

淡々と彼女は言葉を続ける。

「君に出来ない事が出来るあたしを君は理解することが出来ない」

彼女が一方通行に持つ感情は一種の嫌忌だった。

神を嫌う彼女は神と等しい力を振るう彼と、神如き強者である自分を嫌う。

とはいえ、一方通行は人間だ。

人への愛と神への憎しみが混ざったヘドロのような感情が彼女を蝕む。

「神を目の前にした人間が言葉を失うように、君にはあたしが分から

ない」

だからこそ挑発的な言葉がスラスラと彼女の口から零れていた。

神への歪で絶対的な信頼が彼女を盲目にさせる。

絶対能力者⁶も何もかも彼女は信じていない。人の身で神の王座に座ろうなど、出来るはずがない。

けれどもその割に彼女は絶対能力者⁶を生み出すことに肯定的だった。

それは理不尽で傲慢な神に一矢報えろと考えたから。

いつだって彼女は神を見返すために行動する。誰かを幸せにするため、神に仇なすためならばその命さえ捨てる事が出来る。

「たとえ君が粒子加速器¹であっても、未知^{異世界}を知らない君は、あたしという怪物は解析できない」

少女という名の怪物は笑顔を忘れない。

美しくも醜い、嫣然たるさまは邪悪だった。

「殺しちやおうよ、こんな気持ち悪い人外」

囁くような声が一方通行¹に絡みつく。

まるで悪魔の囁きだ。蛇のように体に巻きついて離れない。

月を背にした彼女は祈るように手を組んだ。

「あたしを殺せば、クローンを殺さずに済むかもよ？」

少女は一変して大人の表情を魅せる。

怖気を震うような微笑がその姿を麗しい聖女にも恐ろしき竜にも感じさせた。

子供であり大人。彼女は無垢であり不浄で、矛盾を持ち合わせる。

矛盾を好む研究者^大のお気に入り。

艶かしい声と言葉に大人ならば酔ってしまおうだろう。夜をまとう

少女の危うさが人を惑わす。

「ねえ、一方通行¹」

「っ！」

しかし相手は子供だった。

矛盾と未知、誰も解析できない力を持つ彼女は一方通行¹にとっては得体の知れない怪異でしかない。

ゾワゾワとした気持ち悪さが背中を這う。

悪魔に唆された哀れな子供はその場から高く跳び上がり、女の座るコンテナに飛び移った。

腹立たしい笑みを浮かべるその女の肩を強く踏み付けると、子供を相手にするような柔らかい声が足元から漏れる。

「うわお、すごいねえ、ひとつ飛びだ」

「……喋るな」

足に力を込めると、バキツと音がした。

骨が折れたというのに、彼女は笑顔を崩さず、呻き声ひとつあげない。

「どうする？・殺しちゃおう？」

和かな笑みが一方通行の神経を逆撫でする。アクセラレータ

愉悦と苛立ちの籠った彼の声色は少女に恐怖を植え付けることはなかった。

「不死身の攻略法、知ってるか？」

「んー？氷漬けにするとか？」

ぽつりと呟いた言葉に腕が潰れた少女が反応する。

未だに笑みを携えていた。

「その通り、動けなくすればいいだけだ」

「っ！」

言葉と同時に大きな音を立ててコンテナが崩れ落ちた。

彼女が座っていた部分が抜け落ち、コンテナの中に落ちていく。

「粉の感触はいかがですかア？」

規則正しく置かれていた重い袋を突き破って底へと落ちる。

そこにあっただのは大量の小麦粉の袋だった。

粉が舞い、重い袋が彼女の体を圧迫し、動けなくした。ピンで止められた蝶の標本のように体から自由が奪われる。

「ひんやりしてて気持ちいいかもね、降りてくれば？」

「そこでもがいてろ、クソビッチ」

精一杯の皮肉を込めて笑顔を見せるも、一方通行はその笑顔に恐怖するだけ。アクセラレータ

捲りあがったコンテナの天井部がみるみるうちに元通りになっていく。

「……閉じ込められたか、くそ、動けない」

暗く息苦しいコンテナの中、一人悪態を着く。

四肢は動かず、瞳には暗闇しか写らない。

手足と視界が奪われるのは彼女にとっては死よりも恐怖することだった。為す術がない今の姿は滑稽で、実に腹立たしい。

動けないことが彼女にとっては何よりも恐ろしいこと。

それは救済を与えられない事と同義。

何も出来ないことが悔しくて腹立たしい。絶望と憤怒の感情が湧き上がる。

「はあ、どーしよっかな」

ため息混じりに呟いた言葉は誰かに届くことは無かった。

その数分後、一方通行アクセラレータの気持ちがいくらか落ち着きを取り戻した頃に今度は違う少女が現れる。

「時刻は8時25分つてどこかア？」

冒流的な少女を詰め込んだコンテナを抑え込むように座る

一方通行アクセラレータは、現れた少女、御坂美琴のクローンに声をかけた。

頭に着けたゴーグルでしかオリジナルと見分けがつかない彼女は一方通行アクセラレータへ目を向ける。生気の宿ってないくらい瞳だった。

「じゃ、お前が次の実験のダミー人形ターゲットってことで構わねエンだな？」

「はい、ミサカのシリアルナンバーは10032号です、とミサカは返答します」

コンテナの上で彼女を見下ろす一方通行アクセラレータに10032号は小さく頷く。

「その前に実験関係者かどうかパスを確かめるのが妥当では？とミサカは助言します」

これから死ぬというのに少女は怯えるどころか一方通行アクセラレータをすこし

叱る。

その異常さは封じ込めた女の姿をした化け物と同じ。違うのは見た目と感情と狂気くらい。

「まあ、オレが強くなるための実験に付き合わせてる身で言えた義理じゃねえンだけどさあ、あの女もお前も、よく平然としてられるよなア、この状況で。ちつたアなにか考えたりしねエのか」

舌打ちを打ち、一方通行はアクセラレータに疑問に思う。

死は万人に訪れる。それがどのような形であれ、普通は恐るはずなのだ。

それこそ、絶対的な存在を前にしたら尚更。

「何か、という曖昧な表現では分かりかねます、とミサカは返答します」

「自分の命を投げ打つなんざ俺には理解出来ねえなア。俺は自分の命が一番だしさあ、だからこそ力を欲することに際はねえし、そのためならお前たちが何百、何千何万と死のうが知ったこつちやねえって鼻で笑うことも出来んだぜ？」

有限の命だからこそその無敵への執着。

自分の夢を叶える為の手段。

そのためには彼は人も殺す。どんなに罪悪感があっても、モルモツトに置き換えてしまえばその感情に封をすることは容易かった。

「ミサカの方こそ、貴方の言動に理解出来ない部分があります、とミサカは答えます」

感情の無い人形はAIのように静かに口を開く。

原作とは違う製法で藍花悦のデータを元に作られたクローンといえど、彼女と過ごした訳では無い10032号に感情は見られない。

生みの親との思い出は共有されてあれど、藍花悦と出会い、感じたことは9982号だけのものだった。

「貴方は既に学園都市で最強の超能力者レベル5です。誰も追いつけない位置に立っているならば、それ以上の力を欲する必要はないのでは？と、ミサカは予測します」

「最強ねエ……そんじやどうして周りの連中はそれを知ってんだ？実

際に俺と戦ってみて負けたからだろ？逆に言えば、俺の強さは面白そうだから試しにあいつに喧嘩を売ってみよう、って程度にしか思われてねえってことだよな？」

少女の答えに嘲笑うと、彼は憎悪も激情も合わせた泥濘のような感情を吐き出す。

「ダメだよなア？そんなんじや、全然ダメだ、そんな最強じや全くつまんねえ！」

張り上げた声は喉を痛めそうほど感情が籠っていた。

「俺が目指してんのはその先なんだよ、挑戦しようと思うことが馬鹿馬鹿しくなるくらいの戦おうって思うことすら許されねえ程の、そんな無敵な存在なんだよ」

感情を昂らせ、穢れのない少女に全てを吐露するも、少女は無関心といったように別の話をし始める。

「実験開始まで1分30秒ですが、準備は整っていますか？とミサカは再度確認をします」

無視されるのはあの女を除けば誰だって嫌な気持ちになる。もう何度目かも分からない舌打ちをすると彼はすつとその場から立ち上がる。

「つたく、ちったア暇でも潰してみようと考えたんだが、こりやダメだな」

冷めた目で見下ろすも、クローンの少女は感情をみせない。

「気味が悪い。」

「やっぱオメエとは会話になんねーわ、まだあの女の方が会話になる」

コンテナから音もなく飛び降り、少女の前に立つ。

「そんじや、もういいか？そろそろ死んじまえよ、出来損ないの乱造品」

「午後八時二十九分45秒、これより第10032次実験を開始します。被験者^{アクセラレータ}一方通行、所定の位置に着いてください、とミサカは伝令します」

頭につけていたゴーグルで視界を塞ぐと、緑の淡い光がゴーグルから発せられた。

それを合図に一方通行はアクセラレータ一気に10032号に飛び込むと、コンテナを伝い、逃げる彼女を追いかける。

実験が始まり、世界はまた静寂に包まれた。

そして時間が進んだ頃、誰もいなくなったコンテナからバコンと何回か音が響くと強烈な力によって内側から穴が開けられる。

側面に穴が開けられたコンテナからは一人少女が現れ、月が怪しく彼女を照らす。

小麦粉だらけで咳き込む彼女は服についた汚れを払い落とすと先程まで一方通行がいたであろう地面を見下ろした。

「やーつとどつかいってくれたか」

そよそよと夜風が気持ちよく彼女の髪を撫でる。

閉じ込められていた彼女、天羽彗糸は自らの知恵と力を使って自由を得た。

淀んだコンテナの空気から解放されたものの、彼女を取り巻く空気は重々しい。

「はあ……さてと、これからどうしようかな」

コンテナの上に飛び移り、操車場を見渡す。

一方通行がどちらに行ったのか確認するためだ。

「……おや？おやおや？上条くん？」

無理やり視力を上げて目当ての人物を探してみると、少し離れた所で別の人物を見つける。

重力が通用してなさそうなツンツン髪の少年がフェンスをよじ登っていた。

それはアレイスターの『計画計画』の中心人物、物語の主人公、上条当麻。

誰よりもヒーローである彼は切羽詰まった表情で操車場に乗り込む。

その姿は天羽彗糸の嫉妬心を刺激する。

「いいねえ、ヒーロー英雄って！いいところを全部持ってって、誰もを救えて、泥水なんて啜らずに勝ちを奪える。あたしも欲しかったな、

主人公
ヒーローの座が」

我儘でエゴの塊の少女は感情を押し殺した声で言葉を呟く。
彼女は自分が異物ということを誰よりも深く理解していた。

違う世界、違う理、違う自分。だからこそヒーローという概念に恋焦がれる。

自分が掴めない存在に嫉妬の炎が揺らめく。

それが欲しいと、醜い嫉妬が彼女の奥底で燻る。

誰よりも醜く、汚い感情を背負って彼女は月を見上げた。

濃艶な少女は傲慢で強欲、そして非常に嫉妬深い。怠惰な戦法しかできない彼女は、憤怒の感情しか湧かない最強を姉として叱りに行くのだ。

コンテナが積み上がった操車場の中心で青白い電撃が弾ける。

ビリビリと空気を震わせ、白い悪魔へそれは一直線に放たれた。

「なんだよ、なんだ、なんですかア？どれだけ時間を稼いだところで、奇跡なンギ起きるわけねえだろ！」

少しの息苦しさを感じながら一方通行は吐き捨てる。アクセラレータ

形勢逆転か。コンテナの上でクローンは被験者を狩ろうとしていた。冷たい目で遠く輝く月を見上げると、小さく言葉を呟く。

「今夜は、風がないのですね」

「この匂い……なるほどねえ？電気で酸素を分解して、オゾンにしてるってわけか」

焼け付くような匂いに顔を顰め、口を手で覆うと一方通行は歪んだ笑みを向ける。アクセラレータ

「この俺を酸欠状態に持ち込もうってか？いいねいいねエ！最ツ高だね！」

獲物はクローン。狩人は一方通行。アクセラレータ

それが崩れることはない。

空気が薄いのを気にも留めずに彼は愉快に口を歪ませる。
久々に感じる臨場感、愉しさ。興奮しない方が可笑しいとすら彼は
思う。

「きつちり俺の敵やってンじゃん！退屈しねえなあ、さすがに1万回
殺されりやあ悪知恵のひとつでも働くってか？」

使わなくなった電車のレールに沿って走る獲物が知恵を使ったの
が堪らなく面白かった。

「だけど弱点がひとつ、お前が追いつかれちゃったら、この作戦は失敗
だよなあ!?!」

地面を蹴り、加速する。

箒で空を飛ぶ魔女のようにスレスレの地面と並行に飛び、必死に逃
げ惑う少女へと追いついた。

魔法のような現実には10032号は驚きを隠せない。

「っー」

「驚くことはねえだろ？足の裏にかかる運動量のベクトルを変えただ
けだ」

ニヤニヤと馬鹿にするように笑うと、細い腕を彼女の鳩尾にぶつけ
る。

その細腕からは想像もつかない程の衝撃が少女に放たれると、人形
のように吹っ飛んでしまった。あまりの衝撃に息が止まる。

咳き込みながら腹に与えられた痛みと戦っていると、一方通行に見
下ろされた。

「なあ、自分の手を痛めずに相手を殴る方法って知ってつか？」

軽い力で少女を蹴ると、凄まじい衝撃が少女にぶつかる。胃液がこ
み上げ、内臓がめちやくちやになるのが嫌でもわかった。

声にならない悲鳴をあげる少女に一方通行は笑いかける。
アクセラレータ

「相手の体が触れた瞬間、運動量のベクトルを相手に向けりやあいい
んだよ。ま、その分？相手のダメージは倍になるけどなあ」

愉悅に浸りながら何度も何度もクローンの薄い体を蹴り飛ばす。

しかし何回か蹴った時、自分のとは違う靴音が聞こえた。力強く地
面を踏みしめる靴音は聞き覚えのないものだった。

あの女のものではない。

そう思い、後ろを振り向くとそこには見慣れない姿があった。

「……オイ、この場合実験つてのはどうなっちまうんだ？」

ツンツン髪の少年がそこに立っていた。

低い声を絞り出すと、その少年は一方通行を睨みつける。

「離れるよ、テメエ……今すぐ御坂妹から離れろよ」

「オイオイ、頼むぜ、一般人なンギ実験場に連れ込んでンじゃねえよ」

ヒーローのように立ちふさがる少年に思わず呆れた口調でその少年をまつすぐと見据えた。

黒い瞳と赤い瞳がぶつかり合う。

「クソ、後味悪いな、秘密を知った一般人の口は封じるとかってお決まりの展開か？」

「うるせえよ」

面倒なのが增えたため息をつく。今日はなんだか妨害が多い気がする。

そんなどうでもいい考えが頭を巡るも、それは妨害者の言葉で掻き消えた。

「あ？」

「ぐちやぐちや言つてないで、離れろつてつてんだろ三下！」

三下という言葉に苛立ちが湧く。

プライドだけは立派な白髪の子供はその単語に怒りを覚えた。

「お前、何様？7人しかいねえ超能力者の超能力者の中でも頂点って呼ばれてるこの俺に向かつて三下？」

腹ただしい感情を隠すように足元の小石を蹴ると、それは弾丸のようにスピードを上げて後ろの鉄塔にぶつかる。

鉄塔は轟音をあげて爆発し、跡形もなく消え失せてしまう。そんな衝撃に目の前の少年は驚きも、叫びも、恐怖もしなかった。

覚悟を決めた人間の瞳は一方通行を昂ぶらせる。

「へー？お前おもしれえな、さっきのクソビッチとは違う異常さだ」

ゆつくりと黒髪の少年は憎つき悪魔へ足を進める。

その姿に一番動揺を隠せなかったのは悲劇のヒロイン本人だった。

「何を、何をやっているんですか？と、ミサカは、問いかけます」

ありえない光景に思考が停止する。彼女が予想していた未来とは違っていた。

予想とかけ離れた現実に心が悲鳴をあげる。

「ミサカは自分の心理状態に疑問を抱きます。いくらでも換えを作れる模造品の為に、貴方は何をしようとしているんですか？と、ミサカは再三にわたって問いかけ―」

「うるせえよ、ちっせえ事情なんて知ったことじゃねえ、俺はお前を助けるためにここに立ってんだよ、お前は世界でたった一人しかいねーだろうが！」

少女の言葉をかき消すように少年は声を張り上げた。

ヒーローである少年は力強く悪魔を見据える。英雄は今まさに囚われの姫君をその魔の手から救おうとしていた。

どんなに無謀なことでも、どんなに恐ろしいことでもヒーローは止まらない。

「勝手に死ぬんじゃないぞ、お前にはまだ文句が山ほど残ってたんだ、今からお前を助けてやる、お前は黙ってそこで見てろ」

優しい笑顔がミサカに向けられる。

その会話が苛立ち、一方通行が声アクセラレタを荒げると、ヒーローは再び彼を睨みつけた。

「なんだア？さっきからヒーローじみた台詞ペラペラと……まさかこの俺の存在、忘れちゃったんじゃないやねエよなア？」

一方通行アクセラレタの声にヒーローは拳を握る。

足を踏み込み、大きく腕を振りかぶった。しかし拳は宙を切り、反転させた方向によって足元がぐらついて吹き飛ばされる。

哀れなことに、ヒーローの拳は悪魔に届くことはなかった。

未来予知なんかなくなっちゃって予期できる痛みの波紋に固く目を閉じ、身を守るように体を丸める。

だが痛みはいつまで経っても少年の体に伝わらない。代わりに柔らかなクッションのようなものが吹き飛ばされた体にぶつかり、衝撃を和らげた。

「じゃあ聞くけどさあ」

少年の体を支える一人の少女。

甘ったるい色の瘵毛が風になびいて、少年の頬にかかる。

「あたしのこと忘れてない？」アクセラレータ「方通行くん」

「悪魔に挑む英雄を導くのは天使の役目。」

そう言わんばかりに彼女は不思議な色の瞳を悪魔に向ける。

若葉のような緑と夕焼けのような赤が混ざった瞳は悪魔を捉えて離さない。

28話：生

月が明るく照らす藍色の空の下、積み上げられたコンテナの傍に4人の人影が伸びる。

白い髪の子供、黒い髪の少年と金の髪を持つ少女。

上条当麻の肩を支えながら天羽捰糸は力強くその場に立つ。その顔は慈愛に満ちていた。

「さっきぶり、一方通行くん」

優しい声が一方通行の耳に響く。禍々しい色の瞳が一方通行を捉えると、彼女は嫣然たる笑みを見せる。

気持ち悪い優しさは一方通行には苦痛を伴う代物。

その微笑みは一方通行の顔を顰めるには十分だった。

「天羽！なんでお前ここに！」

同じく肩を掴まれた上条当麻も彼女に一種の不信感を抱く。

彼女はこの事件に関わりが無いはずだというのに、何故ここにいるのか分からなかった。

考えを巡らせるが、しつくりくる答えは見つからない。彼女は彼にとっては何者で、裏の事情を知らない彼には見当が付かなかった。

「……脳内お花畑のクソビッチ、コンテナで一生眠ってればよかったのになア？もっペン死にに来たのか？」

「ええ、アナタの気が済むまでね」

月の下、優美で下品な笑顔をみせる彼女は嫌になるほど美しい。

宗教画のモデルにでもなれるんじゃないかと、普通の人間ならば思うかもしれないが、ここは学園都市。

その姿は異形で汚い科学でできた化け物としか認識されない。

彼女は『出来る子』であると思わせ付けなくてはならない。ただそれだけのためにここに立っていた。

彼女はエゴイズムの塊。一方通行の心などどうとでもよかった。傲慢な少女は己のレットテル剥がしに奔走される。それが意味のないことだとわかっていても。

「上条くん、受け身取れる？」

「へ？」

自分より背が低い上条に彼女は困ったように話しかけた。履いたピンヒールがなおのこと彼らの背丈に溝を作る。

遠くでバキッと嫌な音がすると、答えも待たずに彼女は脳から体に信号を送った。体の強化、肉体の支配、彼女は彼女にしかできないことをする。

蛇のように蠢くレールが上条の目に映った瞬間、天羽は小さく言葉を漏らした。

「ごめんね」

彼らを目掛けて廃線となったレールの残骸が飛び込むと、天羽は勢いよく上条を投げ飛ばす。

「っ!?!うわ?!」

訳の分からぬまま投げ飛ばされた上条だったが、彼の身体能力は彼が思うより優れており、不恰好ではあったが、外傷もなく地面に着地した。

しかし、投げ飛ばした天羽の方はというと、上条の方へ逃げて来たものの、足や腕には痛々しい傷がついては消えていく。

感知する間も無く塞がってしまう傷は気味の悪いものだった。

両者無事を確認し顔を見合わせるが、間髪入れずに再びレールが雨のように降り注ぐ。変えられた方向と強さ、それが頭を打ったらどんなことが起きるかなんて馬鹿でもわかる。

上条は自分目掛けて飛んでくるレールの残骸から逃げるように背中を見せるが、永遠の命を持つ化け物は違う。

骨が軋み、肉は裂け、傷口は血液一滴溢す前に塞がれる。

少女という化け物はそこに佇んだまま力を受け入れる。自分の力を誇示するため、自分の存在を認めさせるため。

永遠の命が彼女に万能感を与える。

運命を支配できると、その運命の価値を平等に下に見る。そうすれば彼女は妹への罪悪感を払拭できると思っていた。

それが贖罪になると、本気で思っていた。

躁的防衛と呼ばれるそれは、彼女を子供に、天使にさせる。

「……どうやら、マジでお前はイかれてるみてエだな」

腕は折れ、血は流がれ、肌は裂けた。痛みを消して、彼女は振り続けるルールをその体で受け止める。

それは彼女を見せつけるため、上条当麻を守るため。

どんな異能を打ち消せても、物理現実は殺せない。それを知ってるからこそ、彼女はその場から動かなかった。

「上条くん、飛んでくる火の粉はあたしが何とかするからさ」

攻撃が止むと、彼女は後ろで目を見開く上条に微笑んだ。

みるみるうちに塞がっていく傷と、月明かりは上条の脳裏に焼き付く。英雄を導く天使は己の体など微塵も興味がなかった。

アクセラレータ「一方通行くんのこと、お願いね」

「……ああー」

天使の願いは英雄によって叶い届けられる。それはフィクションでも現実でも同じだった。

「ンだよ、仲良く共闘ってか？無能力者と大能力者が一緒になったって、なアーンも出来やしねエよ！」

「それは、やってみなきゃ、わかんないんじゃないやね？」

アクセラレータ一方通行が彼らの前に立ち塞がる。

どんな強者であっても天羽擘糸は屈しない。自分が弱者であろうと、それが不幸を嘆くなら彼女は救いの糸を垂らす。

それが彼女の使命であり、本質。

哀れな異常者は、天界から落ちてきた己を天使だとわかっていた。

無意識レベルの理解は彼女の言動に影響を及ぼす。

天死後の世界から落ちてきた魂。それが意味するのは天使。

彼女は本当に天使だった。

「さすがに不死身は相手すんのめんどいなア？」

顔を顰め目の前の愚者にアクセラレータ一方通行は歩みを進めた。

実に腹立たしい。何もかもを破壊し、何もかもを殺してしまいたい激情がふつつつと彼の中で煮え滾る。

世界で一番嫌いな女。理解なんてしたくなかった。その顔を見たくなかった。

「そうだ、分断させちまえばいいかア」

「っ！上条くん！」

コンテナと鉄骨、レールの残骸が空を舞い、地面に突き刺さり少女と少年の間に高い壁を作る。

嫌なものは視界に入れたくない、その一心で一方通行は力を奮った。地面に突き刺さったレールに降り立つと上条を冷たい目で見下ろす。

天から人を見下す神のようだった。

「っ、は、はあ」

「狩人を楽しませるなら狐になれ。食われるための豚で止まってんじゃないやねえぞ三下ア！」

レールから飛び降り、上条をその力で吹き飛ばすと、抵抗することも出来ずに上条は聳え立つレールに身体を打ち付ける。

耐え難い痛みに思わずえずくと、喉を痛めるような咳が彼を苦しませた。

「反対側の女がめんどくせエからな、そろそろ、終わりにするとすつか」

ジリジリと弱者に近寄ると、彼は左手を差し出す。この男の全てを跳ね返そうと、憎悪を込めて差し出したその左手は一度触れば死が訪れる悪魔の手。

血は逆流し、電気信号は狂わされ、死に至るのだ。それを知ってか知らずか、上条は恐怖からその手を叩き落とす。

触れた右手はどんな異能も打ち消す力を持つ。それは一方通行の攻撃も例外ではない。

逆流しようとした血液も、狂わせようとした電気信号も、一方通行な力を拒む。

「はっ……っ、あ、ああああ！」

そして拒絶された左手は一方通行にとって未知であった。知らない痛み、知らない感情、知らない力。

それは一方通行の感情を暴発させることくらい容易かった。昂った感情は力となって上条を襲う。

風が舞い、空気は切り裂かれ、上条は押し寄せる力によってコンテナへと吹き飛ばされた。

「がつー！」

「上条くんー！」

上条がぶつかつたコンテナに^{アクセラレータ}一方通行の足蹴りが命中すると、ベゴツと不気味な音を立ててそれは丸く凹む。圧倒的な力の差だった。そして蹴られたコンテナは物理法則に従って積み上げられた他のコンテナと共に上条の方へ倒れ落ちる。

ホコリを巻き上げ、大きな音を立てて倒れたコンテナは惜しくも上条の体を押しつぶすことはなかった。

「上条くん、大丈夫？」

「お前も無事か、良かった」

コンテナから溢れた小麦が漂う中、先程分断された天羽が横から飛び出てくる。

なんだかんだ元気そうな彼女に安堵すると、何やら険しい顔で彼女は上条の腕を掴んだ。

「とりあえず、ここから距離をとるよ」

何が起こるか彼女は知ってる。どんなに物理に乏しくたって、彼女にだってある程度学はある。

粉が充満するこの空間がどれくらい危険なものかを知っていた。

「女の方は知ってるようだなア？」

上条の手を掴み、頼りないピンヒールで地面を蹴るが、目の前の化け物に思わず足を止めてしまう。

目の前の煙の中、白い髪が現れた。凶悪な笑みを携えて^{アクセラレータ}一方通行は彼らの行く手を塞ぐ。

「空気中に粉末が漂つてて、そいつに火がつくとさア、酸素の燃焼速度がバカみてエに早くなるんだと」

鼻で笑い、^{アクセラレータ}一方通行は上条たちを馬鹿にしたかのような顔を見せる^{アクセラレータ}一方通行こそが今この場の支配者だった。

袋の鼠、蛇に睨まれた蛙。それが今の彼らの状況。逆転する力はない。

「なあ、お前、粉塵爆発って言葉くれえ聞いたことあるよな？」

歪んだ笑みに身体が強ばる。

「掴まって！」

「え、ちよつ、うおー！」

予感と微かな匂いで彼女は思いつきり上條の腕を引っ張り、折れてしまいそうなヒールで地面を翔る。僅差で鳴動と共に空を明るくする爆発が起こる。藍色の空は一気に橙色に染め上げられた。

爆音の中、一方通行アクセラレータの笑い声が不気味に響く。

「つは、ギリセー？」

「あつぶねー……」

静けさが戻った頃、爆煙が晴れた夜空の下で天羽は起き上がる。隣にうつ伏せで横たわる上條の安否を確認すると、彼は苦笑いを返した。

「まったく、さつき身を持って経験したばっかじゃねエか、酸素奪われるところこっちもつらいんだつつの、あー死ぬかと思った」

互いの無事を確認していると、コツコツと晴れた爆煙から一方通行アクセラレータがゆっくりと身を表す。愉悦を見せる彼の笑みは決して端正なものではなかった。

「ふふ、嘘つき、君がそんなんで死ぬわけないでしょ」

「別にいいんだぜ？世界で初めて俺を死ぬ所まで追い詰めたつて言っても」

地べたにへたり込む彼らに一方通行アクセラレータは気怠げに話しかける。

この場の強者は他ならぬ一方通行アクセラレータだった。

「死ぬ物狂いで努力しても一歩も近づけねエ、かと言って仮に近づいたところでお前らに何が出来るつてんだ」

誰も届かぬ最強の座に君臨する一方通行アクセラレータは嘲笑気味に彼らを見下ろす。

その視線が嫌で嫌で堪らない。ゆっくりと上條が相対するように立ち上がると、一方通行アクセラレータは視線が同じの彼を睨みつけた。

「俺は触れたもののすべてのベクトルを操ることが出来る、俺がお前に触れたら最後、全身の血管と内臓を根こそぎ爆破つて事な」

ど、そこんとこ正しく理解してたのか？」

目の前の最強は死さえも操る。

捻じ曲がった方向は人も、音も、生も、何もかもを拒む。上条と似て非なる力。

最強の称号を持つ子供は自ら殻に籠る。誰も傷つけないから、誰にも傷つけて欲しくないから。

望んだありきたりの幸せのため、彼は人を拒む。

「ま、つつても、この一方通行アクセラレータを前に今こうして呼吸してることもそのものが奇跡なだけだな、それ以上を望むつてのは、贅沢なンじゃねエの？」

息を吸い込み、目を見開く。

全てを拒むため、全てを取り返すため、手を伸ばす。

「だからいい加減、楽になれ！」

上条目掛けて一直線アクセラレータに一方通行が加速した体で飛び込む。

一方的な力が上条を捉えようと腕を伸ばした。彼を否定しようと、食ってしまったおうと伸ばされたその腕は勢いよく上条に向かってくる。

「くそおお！」

何も出来ない無力さからか、圧倒的な力の前に理性が失われたのかは分からない。

上条は右腕を大きく振りかぶり、拳を勢いよく一方通行アクセラレータの顔にぶつけた。そしてその力は拒まれることはなかった。

何か割れるような音と共に一方通行アクセラレータが吹き飛ばされると、彼は驚いた様子で右手を見つめ、再び拳を再び握り締める。

この右手なら、最強を否定できる。目の前の事実が彼をヒーローにした。

「っ……天羽、お前下がってろ」

「……そうだね、彼を殴れるのは君くらいだもんね」

唸るような上条の声に天羽は残念そうに頷く。素直に彼の言葉に従うと、兎のようにコンテナの上に飛び乗った。

彼女は分かっている、自分が主人公じゃないことを。醜い嫉妬の化け物にはそれに届けやしないと、知っていた。

結局のところ、彼女はただの傍観者、見張る者だった。

どんなに頑張っても奪うことのできないヒーローの座。彼女は彼らを見下ろしながら緑の目を光らせる。

天使は人間の英雄に恋い焦がれる。

彼女は英雄を導く星であり、その星が英雄になることはありえない。

「っ、たく、面白エ、ちくしよう、いいぜ、最っ高にいいね、愉快で素敵に決まっちゃまったぞ……お前はア！」

何回も何回も、全てを拒む右手が一方通行アクセラレータの顔にめり込む。痛みを知らない白髪の子供は初めての感覚に戸惑い、恐れる。

知らない痛みは彼の積み上げてきた全てを壊すのに十分だった。

肉が、骨が、心が悲鳴をあげる。

その痛みは神から示された運命。

痛みとは神からの戒めであり教え、彼はそれを受け入れなければならぬ。でないとなれば進むことはできない。

「……痛そう」

彼女はそれを分かっていた。

進むことは尊いこと。正義であり、幸福。進めないことは何よりの不幸だから。

あえて彼女は手を出さない。

彼女の嫌いな痛みは『神による理不尽な痛み』であって、『進むための痛み』ではなかった。

けれど、たとえ一方通行アクセラレータがその痛みを受けなくてはいけないとも、やはりその光景は彼女にとっては針のむしろであり、毒だった。

痛みからの解放と幸せへの道標を示してあげたい。ショートカットを教えてあげたい。

けれどもそれはただの甘えであり、真の救済は自ら考えさせ、行動させなくてはいけない。

感傷と無力さでチクチクと胸を痛める。

しかし、黙って殴られたままの一方通行アクセラレータではなかった。ただひたすらに殴られていた一方通行アクセラレータだったが、大きく飛び跳ねると、天羽の頭

上を横切ってコンテナの後ろへ逃げ込んでしまう。

「ちつくしょう……どういふことだ、一体……」

ぶつぶつとありえない現実に向け惜しみに似た言葉を零す。

今の姿は到底最強と呼べるものではなかった。

「はっ、負けたことがない、ね」

地面を擦る靴の音が一方通行の背後から聞こえる。力強い足音は

一方通行を不安の渦に突き落とした。

ヒーローは決して逃げない。

強く握られた拳は一方通行に恐怖を覚えさせる。最強の座から引

き摺り下ろされるのでは無いかという恐怖。

その感情は初めてのものだった。

「あらゆる敵を一撃で倒し、どんな攻撃も反射する……そんなやつ、喧

嘩のやり方なんて知ってる筈ねえよな」

「吠えてんじゃねエぞ、三下がア！」

足元のレールからネジが吹き飛び、波のように上条を空高く打ち上げる。

2 m以上は跳んだらうか。一瞬驚くものの、持ち前の適応力とアドリブ力で下降する力を使って右の拳で一方通行の頬を殴打した。

「ガッあー」

レールの先の通行止の看板に体を大きくぶつけると、一方通行は呻き声をあげる。

強烈な痛みが彼の演算を狂わせた。

「あいつらだつてな、精一杯生きてきたんだぞ、全力を振り絞って、必死に生きて、精一杯努力してきた人間が、なんだつて、テメエみたいな人間の食い物にされなくちやなんねーんだよ！」

ゆらゆらと定まらない足元で立ち上がる一方通行に上条は訴える。

出会った10032号と御坂の意思を胸に抱いて彼は今ここに立っていた。

死ぬために生まれ、それに疑問を持たないクローンの少女。

自分の知らぬところで力を悪用され、死を覚悟してまでそれを止めようとするオリジナル。

それらを上条は知っている。

知っているからこそヒーローである彼はここに立っている。

「精一杯……生きてきた？全力を振り絞って生きてきた？なんだよそりゃあ、クク、ククカク」

だが上条の訴えは一方通行アクセラレータにとっては薄っぺらく、意味をなさない。上から目線の偽善は体を突き刺し、心に膿が溜まる。

一方通行アクセラレータにも意思があつて正義があつた。お互いの正義は相反するものだ。正義とはひとつでは無い。

不気味な笑い声をあげると、彼は月へ真つ直ぐ両腕を伸ばした。

手のひらに集まるように風が吹き荒ぶ。かき集めた風は頭上に青白い球体が生み出し、空気をビリビリと痺れさせる。

その光は一方通行アクセラレータにとつての希望、上条にとつての絶望だった。

「やばっ！」

「殺せ」

身の危険を感じると、天羽は素早く上条と一方通行アクセラレータの間に割り込む。上条を庇うように2人で地面に伏せると、青白い球体から無数の光線が彼らを目掛けて放たれた。

身を焦がすような熱が頭上を通り抜ける。

「上条くん！大丈夫!？」

「お前こそ！」

滑稽な彼らの姿を一方通行アクセラレータは笑い飛ばす。

自分は勝てると、慢心と優越感が彼の身を包んでいた。

「なんだ、なんだよ、なんですかア？女に守られてやんの！でかい口叩くだけで大したことねエなア!？」

「……アンタにだけは言われたくないわね」

「あ？」

一方通行アクセラレータの大声は天羽の心に穴を開ける。思い出すのは死んだあの日の会話。

スつとその場に立ち上がると、彼女は顔を伏せて言葉を続けた。

「すべてのベクトルを操る、それがどんなに素晴らしいことかアンタは分かかってない」

その力があればなんだったって出来るのに、なんだったって助けられるのに。あたしなんかよりうまくできるのに！

嫉妬が少女の体を蝕む。誰よりも嫉妬深い彼女は彼の力を誰よりも羨んでいた。

神に力を与えられた者である彼女は神と等しい力に強く憧れる。

「破壊しか知らないアンタは、あたしに勝てない」

「天羽ーなにしてんだー！」

一步一步、土を踏み締めて彼女は進む。

放たれた光線は彼女の柔らかい体に傷をつけていく。けれど気にもとめずに力強く彼女は歩いた。

不死である彼女は痛みなんて感じない、死の恐怖なんて感じない。

感情の赴くまま、彼女は真つ直ぐ、体に穴を開けながら一方通行のもとに歩く。その姿は一方通行にも、上条にも恐怖を植えつけた。

誰もが啞然とする中、少女だけが動く。時が止まったような感覚だった。

化け物の少女は神と等しい力を持つ一方通行に憎悪を抱く。

神への反逆を誓う彼女は、その力の使い方に疑問と憤怒の感情を覚えるのだ。神と同じ。理不尽と暴虐を与える一方通行に、神に、彼女は嫌悪する。

蛇蝎の如く嫌う神とよく似た思考とよく似た力を持つ一方通行は、彼女にとって毒だった。

「人体の創造を司るあたしに、破壊しか能がない今のアンタじゃ勝てない」

彼女は一方通行には勝てない。しかし負けることも無い。

途方も無い怠惰の戦法ができる肉体は彼女を特別にする。永遠に生きる体は彼女を無敵にする。

例えばそれがどんなに愚かなことだと分かっているとしても、それをやめることはない。

何故なら、特別じゃない人間は物語に食い殺される『モブキャラ』にしてしまうから。彼女は強固な自我を持って物語に割り込む。

だからこそ彼女は超能力者の一人になれたのだ

「自分を悪と決め付けて、それ以上を考えない、最悪の未来しか見出させないアンタが、たまらなく愛おしくて、たまらなくムカつくの」
「あ……？」

彼らはやはり似たもの同士だった。

タブロイド思考に劇場のイドラ。思考が止まり、最善を見いだせない。

異常者は互いに嫌う。同族嫌悪。

それでも彼女はまるつきり嫌うことはできなかった。

「大好きよ、アクセラレータ一方通行、その愚かさもまとめて、愛してる」

彼女は己を嫌う。だからこそ彼女は神裂火織とステイルマグヌスを拒絶した。

科学を拒絶し、ただひたすらに少女を苦しめた彼らに己を重ね、嫌悪した。

しかし、アクセラレータ一方通行は違った。

紛いなりにも、彼が実験に参加したのは現実を壊したかったから。彼は行動を起こしたのだ。変わるための努力が確かにそこに存在した。

たとえその方向が間違っているとしても、たとえそれが馬鹿げた方法でも、自分を幸せにするために手を伸ばした彼を否定することは彼女にはできなかった。

彼女は彼の正義を咎めない。だからこそ彼女は彼を拒絶しなかった。

自分が出来なかったことを成し遂げた彼に憧れと嫉妬を渦巻いた感情を抱く。

「愛するアナタに傷ついてほしくないの、だから終わりにしましょうよ」

慈愛の天使は誰もを墮落させる微笑みを見せる。

天使の救済ではなく悪魔の囁きに似ているそれは、まるで泥の中でもがくような苦しさと気味の悪さを持つ。そのおぞまじさがアクセラレータ一方通行の脳裏に残る。

こびり付いた言葉は彼の憎悪を助長させるだけだった。

「幸せになりたいなら手伝ってあげる、幸せにしたいのなら手を貸してあげる、だから」

一方通行アクセラレータの前に立つと、彼女は狂気が蠢く瞳で見下ろす。

背の高い彼女は一方通行アクセラレータを酷く威圧する。強大な感情が一方通行アクセラレータにぶつかった。

「お姉ちゃんの言うことを聞きなさい？」

濁った感情は姉たる彼女を完成させる。

地獄の全てを飲み込んだように澱んだ彼女の目は見守る者である彼女だからこそ魅せる色だった。

凶悪で冒瀆的な少女の名状しがたい笑みに一方通行アクセラレータは戸惑いを隠せない。

彼女の言葉の全てが理解できなかった。理解しようとしても思考は止まる。それ以上理解してはいけないと警報が鳴り響く。

そこが垣根帝督との決定的な差だった。

人間が神を目の前にしたら言葉を失うように、人は未知に恐怖する。そしてその未知を常識の範囲で理解する。

現れた神がただの幻覚だと思おうように、目にした怪奇が実はただの見間違いだと納得するように。

一方通行アクセラレータは未知を知らない。

彼の本質は『自身が観測した現象から逆算して、限りなく本物に近い推論を導き出す』ことであり、未知を解析・再定義して『理解出来る法則』に落とし込むこと。

それはつまり、未知を『未知』として見ていないということ。未知を既存の法則、ステレオタイプに当てはめる彼の演算は、領域外の未知の化け物には通用しない。

だからこそ、彼女を未知の化け物だと定義した上で、『理解出来ない法則』を探す垣根帝督だけがこの天上から降りた化け物を解析できる。

それが揺るぎない事実だった。

「一方通行！」

未知に恐怖する一方通行アクセラレータの後ろ、可愛らしくも力強い少女の声が響

く。名を呼ぶその声に振り向くと、風に吹かれた胡桃色の短い髪がその視界にちらつく。

一方通行アクセラレータの背後を虎視眈々と狙う超電磁砲、御坂美琴がコンテナの隙間に立っていた。

「動かないで」

コインを撃ち込まずと構える。

死を覚悟して彼女はそこに立っていた。自分の不始末を自分で片付ける為に彼女は銃口コインを最強へと向ける。

全てを失くす覚悟を持って。

「御坂！やめろ！」

「そんな無駄なことしないで、御坂ちゃん」

しかし、その行動が虚しいだけだと知っている天羽は、一方通行アクセラレータの陰に隠れていた顔を見せた。

御坂美琴が命をかけずともこの問題は収まると知っている彼女は優しく啓蒙する。彼女の知る正解に導き、物語の短縮を図るのだ。

「先輩、なんでここに……」

「そんなことどうでもいいでしょ？」

しーっと人差し指を口に当て、彼女は御坂にわざとらしくヒントを与える。早く動けばそれだけ早く彼らはこの痛みから解放されると彼女は信じていた。

「……プラズマだっけ？気体が電離したもの、だよな？物理はあんまり詳しくないんよ」

「プラズマ……？風のベクトルを操ってプラズマを……？」

「あたしが知ってるプラズマは血漿blood plasmaと原形質protoplasmくらいだから、そこら辺の原理はノータッチで。これでも生物学専攻なの」

軽く冗談交じりに口を開くと、策があるのか、御坂はどこかへと走り去る。それを見届けると、どこか安心したように天羽は再度一方通行アクセラレータに目を向けた。

青白い光が少女を照らす。浮世離れたその光も相まって、彼女の微笑みは悍ましく見える。

人ではない理解できない禍々しい何かの蠢くその瞳は一方通行アクセラレータを

見下ろす。

恐怖だった。その目が何よりも恐ろしかった。

「プラズマは荷電粒子群と電磁場が相互作用するもの……電磁場を操れる御坂ちゃんって結構邪魔じゃないかやー？」

「第3位くらいのが能力者が、俺の力を上回れるわけねーだろ？」

「そーねー、風でも操ればいいんだけど、超能力者^{レベル5}には風使いは居ないしねえ」

^{アクセラレータ}一方通行は彼女の危惧を鼻で笑うが、それでも彼女は笑みを崩さない。

「でもさあ、他に策はあるよねえ？」

なぜなら彼女は知っているから。

物語のあるべき姿を。

「っ！何が起こってんだ……？計算は完璧なはず……」

「そうそう、風力発電のモーターって特殊な電磁波を浴びせると回転するらしいよ？」

「っ……この野郎！」

熱量を持つ青白い球体はロウソクの灯火のように揺らめくと、一気にその勢いを失っていく。

風に掻き消えた青白い光は誰のことも照らしていない。空虚に消えた光を必死にかき集めようと腕を伸ばす。

しかしどれだけ腕を伸ばしても、どれだけ風をかき集めても、もう二度とその光は彼の手に届くことはなかった。

それは御坂とその妹達によって人為的に歪められた風の流れによる妨害。いたぶってきたモルモットは叛逆の牙を向ける。

天羽の言葉から彼女たちを瞬時に結びつけた^{アクセラレータ}一方通行は怒りを露わにした。

唸るような声を喉から捻り出すと、彼は後ろを睨みつける。

「殺すー！」

コンテナの間、^{アクセラレータ}一方通行の背後、血だらけのミサカ10032号がゆらりとふたつの足で大地を踏み締めていた。

鬼の形相で彼女を睨むが、視線の間に2人の少女が立ち塞がる。

金と桃色、茶色が視界を支配した。少女たちはそれぞれ感情を一方通行を真つ直ぐ見つめていた。

「させると思う？」

「凶に乗ってんじゃねエぞ格下」

低い声で威嚇するも、聖なる少女は屈しない。聖域に立ち入らせまいと右腕を広げる。

「大丈夫、アンタを倒すのはあたし達じゃないから」

確信めいた微笑みは一方通行の後ろを見つめていた。

「……手を出すな」

怒りに肩を震わせ、英雄は立ち上がる。

一方通行の背後で彼は右手を強く握りしめていた。

「ヒーローはあたしじゃない、主人公は上条当麻なのだから」

悲しそうな声色が一方通行の脳を揺さぶる。

「そいつらに、手を出すな」

「……おもしれエよ、お前、最高に、おもしれエぞオ！」

誰かを守ろうとする少年に一方通行は歯を噛み締めた。

その苛立ちを埋めるため一方通行は走る。走って、走って、殺そうと、目の前の存在を消そうと体を動かした。

両腕を前に突き出し、上条当麻の首を刈り取らんと彼に飛び込んだ。

「歯を食いしばれよ最強」

しかし、一方通行の拳届くことはなかった。

上条は右手の拳を握り、しゃがみこむと一方通行の懐に潜り込む。

「俺の最弱は、ちつとばつか響くぞ！」

全身全霊、ありつたけの力を込めて最弱は最強に拳を叩き込む。痛みを知らない体が吹き飛ばされると、一方通行はその場で意識を失った。

そして同時に終わったことへの安心感と疲労で上条当麻もその場に倒れ伏す。

「……これで一件落着、かな？」

喧嘩疲れで地面に倒れた子供たちを優しく見守りながら、彼女は安

堵の吐息を漏らした。

優しい風が頬を撫でる。

ゆりかごのような感覚、花の香りと柔らかい感触。耳を掠める誰かの吐息。

「ア……？」

感じたことの無い感触に違和感と安らぎに一方通行は目を覚ました。

「あれま、起きちゃった？」

目の前の谷間、首筋、髪、浮遊感。

簡潔に言えば、一方通行は女に抱っこされていた。

「っ！何しやがる！降ろせ！」

「うわっ！」

操車場が見える道の上、彼は先程散々に貶し、恐怖を覚えた女に抱き抱えられていることに気づくと、彼は一瞬の間を置いて声にならない悲鳴をあげる。

最強が女に抱き抱えられていることと、初めての匂いに、初めての感触、初めての感覚にパニックを起こすと、力を反転し、彼女の腕の中から脱した。その勢いで少女が尻餅をついてしまうが、そんなことはどうでもよかった。

「強引に降りないでよ、降りたいなら降ろしてあげるんだから」

「ダメエ、何が目的だ？」

あまりの出来事に彼女の思考の裏側を読もうとするが、彼女はキョトンとするばかり。

地面にへたり込む彼女は先程までの狂気を感じさせない程か弱く見える。

「何って病院に連れていこうと……」

「……病院？」

彼女の話によると、どうやら一方通行が敗れた後、最弱を名乗った

ヒーローは御坂美琴の手により病院へ連れていかれ、1人残された哀れな一方通行は世話焼きな彼女によつてあの場から逃げだしたそう。
「だって一方通行くんの家知らないし、あたしの家にあげるわけにいかないし……病院しかないじゃん？顔も結構腫れてるし」

「余計なお世話だ」

その場に置いていけばいいものを。そう一方通行が呟くと風邪引くでしょう？と困ったように笑った。

「大丈夫だよ、あたしはアンタを悪いようにはしないから。だって大好きなもの」

「……テメエ、さつきもんなこと言つてたな」

気軽に使われる愛の言葉に一方通行は身を強ばらせる。

イカれた女の心情を彼が理解することは無い。

「あたし、人間が大好きなの。一方通行くんも人間だから、大好き」

「なんだ？博愛主義かなんかか？」

「まあ、そんな感じ。それにほら、馬鹿な子ほど可愛いって言うじゃん？」

くすくすと妖精のようにあどけなく笑うと、彼女はスカートについた汚れを払いながら立ち上がる。

キラキラと下に光るナイフのペンダントが一方通行の目を奪う。

その荘厳なペンダントは彼女を聖職者のようにも感じさせた。

「一方通行、誰もがあなたを赦さなくてもあたしは赦すよ」

そのペンダントを握り、彼女は言葉を紡ぐ。この世の全ての砂糖を溶かしたような声だった。

悪魔のような囁き声が一方通行の脳をかき乱す。

「あなたにはあなたの正義があるわけじゃない？」

「ハッ、正義だア？俺にンなもんねーよ」

「アナタの信念、アナタの願い、アナタを幸せにするアナタだけが導き出せる正義」

目の前の少女が紡ぐ言葉の数々は歪んでいて狂気を孕んでいる。

瞼を閉じ、ペンダントを祈るように握って彼女は一方通行の前に立ち塞がった。

歪んだ唇と傲慢さが溶けだす瞳は人のものとは思えない。

「それが実験に参加した理由でしょ？」

「……何を知ってる」

「なんでも知ってる、だってお姉ちゃんだもん」

全てを知っているかのような口ぶりに一方通行は得体のしれない不気味さを感じ取る。

細められた目は寛大にも強欲にも感じられた。

「一方通行くんはいままでずっと悩んできたんでしょ？それでこんなことになっちゃった。アンタの賢い頭ならもつといい結末をシミュレートできるはず。それを手伝わせて？君なら出来るよ」

人間を愛する彼女はどんな大罪人であろうと、救いの言葉と糸を下ろす。

「それがきつとアナタの贖ハッピーエンド罪になるから」

神に力を与えられた彼女は神の子であり、御使い。たとえ神を嫌おうと、知らずのうちに行動してしまう。

たとえ聖痕がなかりうと、彼女は聖女であり、伝道師。神の高潔で公正なる正義を伝え歩く。気付かぬうちに植え付けられた歪んだ使命は他ならぬ神が与えたものだった。

彼女は罪を送り、運ぶ者。その罪を天へと送る役目を追う。

「ダイジョーブ！あたしはみんなの味方だよ。だからお姉ちゃんを頼って？」

邪悪で聖なる笑顔。矛盾を抱えた彼女の笑みはこの世の何よりも美しくも冒濫的だった。

「覚えておいて、例え世界が敵に回っても、あなたに正義があるのならお姉ちゃんもアナタの味方だから」

「……気持ち悪い」

心の底から吐き出した言葉だった。

しかしそれに傷つくことも無く、彼女は当たり前のようにその言葉を受け取った。

「理解されなくなっちゃっていい、あたしが誰かの正義幸せの礎になれるならそれだけで幸せなの」

神の歪んだ精神を受け継ぐ少女は聖女のような笑みを見せる。それは誰にも理解されない、蠱惑的で典麗な笑みだった。

鉄塔の上、双眼鏡を掲げて一人の少年がその場を遠くからその光景を眺める。

茶色にも金にも見える不思議な髪、鳥のように黒い瞳、端正な顔立ち。部下を引き連れたその少年、垣根帝督は双眼鏡から目を離すと少しため息をついた。

彼は全てを見ていた。

1から100、その全てを。

「首がくつつくとか、どんだけだよ……ぜってえ嘘ついてるなアイツ」不審な動きをする駄犬の観察にきたら思わぬ収穫があった。

首を刎ねられた少女の光景が頭から離れない。吹き出しもしない血液、閉じた傷口、喜ぶ彼女。

気味が悪かった。

その気味の悪さに隠れる心配も彼を苛立たせる。

愚かな妹分。

限りなく似ていて限りなく似ていない彼らは互いを上だと主張する。

少女は姉だと、少年は兄だと、自分が強いと競い合う。

元来、兄妹・姉弟とは互いを理解することはない。理解できない。

当たり前だ。血を分けたとて彼らは他人なのだ。

しかし誰よりも互いを理解する。矛盾を持つ存在。

その矛盾をこの二人も抱えていた。

理解できない少女、しかし不思議と理解できる根本。

理解できない少年、しかし不思議と共鳴する感情。

彼らは擬似的、精神的な兄妹・姉弟であり、その関係が覆ることはない。

「……ムカつく」

零した言葉は一人の少女に送る言葉。

不機嫌な声色は後ろで機械をいじる部下と思しき少年の肩をビクリと震わせる。

「しかしまあ、あのメサイアコンプレックス、一方通行に突っ込んでいくとは思わなかったな」

「でもおかげで結構情報取れましたね」

「まーな。アイツにつけてたストラップがこんなところで役に立つとは」

何本ものケーブルが伸びる輪っかのようなゴーグルを頭に被せた少年は上司である垣根の顔色を伺うように言葉を発した。

超能力者である垣根に話しかける時はいつだって心臓が破裂しそうなくらい緊張する。

「演算解析装置でしたっけ？なんでそんなのつけてたんですか？」

「珍しい能力だったからな。まあ、あいつの能力が複雑すぎて解析するのめんどくさくなつたから使つてなかつたが」

「第2位に複雑つて言わせるつてことは……」

少し息を飲む。彼はスーパーコンピュータ並の知性を持ち合わせているのだ。

あの少女の能力にひとつの仮説が浮かび上がる。

「たぶん原石かもな、本人に養殖か天然か聞いたわけじゃねえし」

「7位が最大の原石でしたっけ？」

「アイツはマジでわかんねーが、天羽はあそこまで分からねーわけじゃない。でも原石の可能性は大いにある」

原石。それはある種の天才のことだ。

薬物によつて生まれた能力とは違う、生まれついでの特異能力。異形の存在。

人でありながらも人では無い力を扱うものたち。

「珍しい能力ですしね」

「だからストラップを渡したんだよ」

「でもこの解析用のストラップ、その他にも機能がありますし、随分と慎重ですね」

「アイツには色々世話になつてるからな、いなくなると困るんだよ」

面倒くさそうにため息を着くと、彼は再び少女が居るであろう方角に目を向けた。

「そんな困ります？ちよつと特殊なナースですよ？」

「テレステイナーや木山春生、冥土帰しとのコネはアイツが居たからこそできてんだ。おかげで未元物質ダークマターの開発が上手くいってるからな、感謝する程度にはいい働きぶりだ」

「垣根さんが感謝つて、やべー……」

垣根帝督の人物像とはかけ離れた感謝の言葉に驚きが隠せない。あの垣根帝督が感謝するとは、いったいどれほど幸運で前世で徳を積んだ人なのかとすこし思うが、不機嫌な上司の声で思考を消し去る。

「誉望ー？無駄口叩いてないで一方通行のデータ収集しろよ？」

「わ、わかってますよ、垣根さん。でもさすがにあの小さいストラップじゃ分かる情報が少ないですよ」

誉望万化の言葉にあのストラップのバージョンアップを考える。

最近になって研究している未元物質ダークマターの新しい使い方と製造が実用段階に近づいているのだ、そろそろ新しいものを持たせて行動を把握するのもいい案かもしれない。

そんなことを考えながら、哀れにも彼の手中で飼われる子山羊を遠くから見つめる。

彼女は騙された子山羊だった。

しかし彼女はそれを知っている。体よく使われていることに気づいていながらも、それに甘んじていた。

それは一種の愛の形。

彼女の盲目的な愛を信じる彼は鎖で縛り、得体のしれない女を飼
殺す。

歪んだ関係性を表す言葉はこの世界には無い。

これからもこの先も、彼らはぐらついた関係を築き上げる。

29話：予感

エレベーターを降り、地下へ。

薄くピンクがかかった白いナース服に身を包み、自分の研究室へ歩みを進める。

もはやテレスティーナの自室と化した研究室のドアを軽くノックをして、ドアノブを回すと、甘いココアの匂いが鼻腔をくすぐった。

「テレスティーナさん、今大丈夫？」

室内にいらっしゃる女性の名を呼ぶと、暗い研究室の中で長髪の女性が顔を上げる。

パソコンの光を反射して怪しく光るメガネの奥には深い青の瞳があたしを面倒くさそうに見ていた。

「んだよ、今忙しいんだが？」

ココアを飲みながら、我が物顔で研究室の高価なコンピューター用の椅子に腰掛ける彼女だったが、それよりも強烈に視界に入ってきたのは最近会っていないかった少年の存在。

机にもたれ掛かり、紙の束を眺める少年はあたしに気がつくどふつと笑みを零した。

「あれ？垣根くんきてたの？」

あたしが一番大切にしているであろう少年、垣根帝督に近づくと、彼は不気味なくらい端正な笑みをあたしに向ける。

何が企んでいる、その笑みから簡単に読み取れた。

「よーっす」

「最近来てなかったのに……珍しいね？」

「まーな、用事があったてな」

ぐしゃぐしゃとあたしの髪を犬を撫でますようにこねくり回す。気味が悪いほど上機嫌な彼に不信感が募る。まるで子供をあやすよくな行動は、あたしを苛立たせるだけ。

鋭く睨みつけるも、手を止めることはない。

彼が幸せそうならいいと思うが、矛先があたしなら話は変わってくる。こちらには色々事情があるのだ。あからさまに機嫌がいい彼

に考えを巡らせる。

頭を撫でるといふ行為には複数の意味が隠れている。

愛情表現にスキンシップ、あたしが頭を撫でる時に伴う感情はそこらへんだが、彼は絶対違う。彼があたしにすこしでもポジティブな感情を抱くわけがない。

そうなる、考えられるのは励まし、ご機嫌取り。または褒めてくれるのか。

使われた？

何にかはわからない。けれども不気味なほどに機嫌がいい彼と、褒めているような動作がそう感じさせる。

知らないうちに手綱を握られていると、彼の言動が告げていた。

彼は一方通行の一件に首を突っ込んで来ていない。境遇からして何かしらやつてくると踏んでいたのだが、それらしい動きはみていない。

あたしの知らないうちにあたしに何かをしていた？

だからあたしを褒めている？ 知らずの内にあたしは彼の手伝いをしてしまった？

「……ご機嫌だね、なにかいい事でも？」

「自分の心に聞くんだな、鈍感女」

鈍感。含みを持つ言葉に予感が確信に変わる。

絶対なにかした。だが何を？

盗聴程度でご機嫌になるほどの情報を与えた覚えはない。原作と大きく差異がある訳では無い。

……藍花悦として動いたのが致命傷となった？ でもあのスマホは持つていつてない。

となると一方通行関連。

なにか情報を落としたか？

「そーいや、首、大丈夫か？」

ぐるぐると考えが脳を満たしていると、彼の影が頭にかかる。

一瞬何を言っているのかとぼかんとしてしまうが、いきなり首を掴まれ彼が何を言わんとしているのかはつきりと分かった。わかっ

てしまった。
すべて見ていたんだ！

どくと心臓が脈打つ。

冷たい汗が体を伝う。手先が震え、声が出ない。脳の信号が渋滞を起こしパニックへ繋がる。

首が空を舞ったあの瞬間を、あたしの言葉を、きつと聞いていた。

「……垣根くんには関係ないでしょ」

やつとの思いで絞り出した声は蚊のように弱く、小さかった。

親指で跡ひとつない首を撫で、ガリツと爪が食い込む。痛みを感じない鈍い体はその痛みに反応することはない。

目を狐のように細めた彼の口から短い笑い声が漏れた。彼の黒檀のように黒い瞳に写る自分の姿はあまりにも滑稽で、つい目を逸らしてしまう。

あたしは出来る子なのに、できるお姉ちゃんなのに、まるであたしを子供のようにみるその目が嫌いだ。あたしは大人で、その目を向けられるべきはアンタなのに。

「いいか、テメエの飼い主は俺なんだよ。」

天使の翼を持つ少年は悪魔のような笑みであたしを見下ろした。

視線に耐えかね、腕から身を振る。

手を離し、何も無かったかのようにテレスティーナさんに向き直ると嫌な空気が場を重くした。それでもめげずに微妙な空気の中朗らかに笑顔を向けて、声をだす。

小さく聞こえた舌打ちは痛みを感じないはずの首にジクジクと熱さを残した。

「それで、テレスティーナさん、実はお手伝いさんが急遽入ることになりました……」

「お手伝いだあ？」

「ちよーっと、雇用増加と言いますか、タダ働きと言いますか……」

笑顔を浮かべて本来の目的を軽く説明すると、テレスティーナさんは怪訝そうな顔を見せる。無理もない、あまりにも突然すぎて、脈絡のない話だもの。

先程とは打って変わって明るい空気を纏うものの、誤魔化しきれなさそう。それでもテレステイナーさんは何も言うことはなかった。

ため息をついてまるで兄妹、姉弟喧嘩でも見ているかのように生暖かい目をあたしたちに向ける。

詮索する気はなさそうだった。

「ほら、クローン拾ったって言ったじゃん？一部がここで働くんだって」

「ああ、あのクローンか」

貼り付けた笑顔で話すのはついこの間のこと。

原作通り、アクセラレータの一方通行の実験は凍結された。

1万人もの同じ顔を持つ少女達は晴れて自由の身……とは行かないのが学園都市。

アクセラレータの一方通行の実験が凍結されてしまった今、1万人もいる妹達シスターズの処遇は全世界に拡散されることとなり、様々な研究施設や軍事施設に派遣されていった。5人のミサカちゃんがうちに留まる運びとなったのだ。

10032号、10039号、13577号、19090号、9982号の合計5人。

それを伝えるとテレステイナーさんはにんまりと口角をあげた。

まるで新しい玩具を見つけたような笑みは前と変わっていない。人は変わらないものなのか。運命は覆せないものなのか。

実に不愉快だ。変えようと足掻くあたしを嘲笑う神が憎くい。

「そう、そのクローン。垣根くんもどうせ知ってるでしょ？」

「そりゃーな」

「なんだ、知ってたのか、わざわざ隠してた意味がねえな」

苛立ちを隠し、垣根くんに明るく話しかける。ちらりと覗き込んだ瞳は真っ黒い。

机に腰掛けているからか、少しだけ彼との背が近かった。屈んでいるといふのに彼を見下ろせない自分の身長に腹がたつ。

上にいたい、姉でいたい。醜い嫉妬の渦があたしを飲み込む。

「まー、垣根くんはなんでも知ってるからね。さすが才色兼備」

「褒めてもなんも出ねえぞ」

そんなことを思っただけでも、彼は気づいていないようだった。ぶっきらぼうに言い放つ垣根くんは少し安堵する。

彼の機嫌はすっかりいつもの調子に戻っていた。少年らしい、子供っぽくて、生意気。

この少年らしい彼が好きなのだ。間違っても年上のお兄ちゃんらしさが垣間見える彼ではない。

このあたしを下に見る彼は嫌い。好きでいるためにその不幸な結末に嘆く少年でいてほしいと願ってしまう。

「いいんだよ？お姉ちゃんに奢ってくれたって」

「……明日でいいなら」

「マ？愛じゃん。どした？変なもの食べた？」

「本題に入りやがれ」

ふざけ合いながら話しているとテレステイナから低い声が聞こえてくる。

流石にふざけすぎたか、そう思っただけで咳払いをして本題に入った。

「こほん、とりあえず、軽作業は彼女達に任せることにしたから」

「ふーん……でもいいのか？あの実験に使われてたクローンに研究の手伝いさせて」

「本人たちが手伝いたいって言うんだもん。それにナースの方もお手伝いしてくれるらしい？いいんじゃない？」

肩を竦めで見せると、テレステイナさんはため息をつく。

クローンの少女達が手伝いを買ってでたのはあたしの責任もあるのだ。あまり責めないで欲しい。

というのも、クローンの延命治療で色々手伝ったのだ。

1万人全員の調整は骨が折れ、時間も掛かったが、自身の能力を最大限発揮して彼女達の生命維持に一役買った。そのためあたしの近くで仕事させていけばいいんじゃない？という安易な考えの元、5人のクローンは手伝いを申し出たのだ。

研究員としてここに在籍している以上、そこら辺の手伝いをさせなくてはいけない。心配ではあるが、仕事の負担が減るのは有難いこと

だ。明日は久しぶりに休みを取りたい。

「研究ねえ……そいつはこれの事か？」

ここ最近では沢山働いたな、なんで思っていると垣根くんが一束の分厚い資料を右手でチラつかせてくる。

重要機密と書かれたその紙束は、あたしが作ったものだった。

「……なんで垣根くんがその紙持つてるの？」

それはあたしがこの病院の研究室で作り上げたもの。

そしてそれを彼に渡した記憶は無かった。

「借りた。んで、今日はこれを返しにきた」

「どういうこと?! テレスティーナさん!？」

これらを管理しているのはテレスティーナさんだ。どう考えても彼女の仕業。

キツとテレスティーナさんを睨むも、悪びれもせず彼女は笑うだけだった。

「仕方ねえだろ、金くれるって言うんだから」

「ま、まあいいけどさあ……」

悪意ある彼女に腹立たしさを覚えながらも、怒鳴ってしまいたい衝動をぐっと抑え込む。怒ったって無駄だ。

そんな気持ちを探したのか否か、垣根くんは言葉を続ける。

「能力者の脳の構造、脳の信号パターン、それらを全て分析して特定のレベル、特定の能力を生み出す研究、ねえ……? 随分と面白いことしてんだな」

「……惰性でやってるだけだよ。研究員として呼ばれてる以上、やってる素振りを見せないで怒られんの」

あたしがやっている研究、それは能力を生み出す研究だ。

どうしてこんな研究をしているのかという話は実に簡単で、それはあたしが「学園個人」という単語を知っているから。

暗部組織のひとつ、アイテムに在籍する少女がどうやらこの先その名前で呼ばれるそう。理由としては、学園都市そのものとタメを張れるほどの能力になるから、らしい。いまいち分かっていないが、彼女が成長し、他人に好きな能力を与えることができるようになるからだ

そう。

そこであたしは考えた。

ぱくってしまおうと。

学園都市に匹敵する能力があるのなら、学園都市から誰かを守れるかもしれない。

おあつらえ向きに、あたしには人体を支配する力がある。その力を使えば脳の細胞だろうがなんだろうが物理的に変更が出来る。理論的には可能なはずなのだ。

誰かを守るため、あたしは生前と同じくメスを握り研究を始めたのだ。

とはいえこれには問題がある。

「でも結果はあんま出てねえみたいだな」

それは結果が出せていないこと。

あたしが怒っていても怒鳴らない理由がこれだ。

今も昔も何も成し遂げられないのが腹立たしい。あたしはそういう星の下生まれてきてしまった。

どんなに足掻いて、行動を起こし、必死になっても何一つ上手くいかない。上手くいったことを数える方が難しい。

そしてもう一つが欠落品ということ。

ただ、アイテムの少女と違うのは、どんな能力でも与えられるわけではないのだ。

望む能力を与え、使えるようにすることは出来る。しかし、情報がある既存のものだけ。

A I M 拡散力場に手を加えて能力を花開かせるのではない。能力による肉体変化によって変更した脳によって植え付けられる力。

元となる能力者の脳の構造やらDNAなどのデータが必要になるので、自由自在に与えることができないのだ。

「それを知って何がしたいの？百歩譲って、あたしがあなたの飼い犬だとしましょう。それで？飼い犬が何で遊んでたって飼い主には関係ないでしょ？」

だが、失敗云々は今は関係ない。一番の問題は何故垣根くんが知っ

ているかだ。

腕を組み、見上げるように垣根くんに咎めるような眼差しを向ける。知られることで困ることはないが、それでも姉として他人の研究室を物色する『悪い子』を叱らねばならない。

「俺は愛犬家でな、ペットがゴソゴソ何やつてるかまで知らなきや気がすまねーんだよ」

「随分とストーカー染みてるね？彼女出来ないよ？」

嘲笑気味に鼻で笑うと、見下すような笑みから嫌そうな目付きへと変わる。

こちらを探られるのは困るのだ。

「余計なお世話だ、雌犬」

「女と密会して、情報仕入れるヤリチン野郎にだけは言われたくないね。今度は何を企んでるのかしら、ご主人様？」

「企んでなんかねえよ、俺はいつだって世界平和しか考えてねーよ？」
再び顔に宿る少年らしい余裕な笑みはイタズラを考えついた子供のようにだった。

憎たらしくも愛らしいその笑みに自然と笑いが零れる。全く、実に17歳らしい顔だ。

妹とは一つ下の少年はあの子より子供らしかった。

「よく言うよ、テレスティーナさんと木山さんばかりと喋ってるらしいじゃん？お姉ちゃんのこと放ったらかし？」

「ごごぞとばかりに姉貴面すんじゃねえ」

怒った方に頬を抓られるが、痛みはない。痛覚がないとはいえ、加減しているとすぐに分かる。

柔らかい手つきと、暖かい体温。まるであたしが妹にするような手つき。腹がたつ、腹がたつ！

手加減なんかしなくていいのに、感情を全てぶつけたっていいというのに。

愛する人間の為ならば喜んでサンドバックになるというのに、彼は随分と優しいようだった。

「実際、お前資料の催促やら質問やらしてきて何がしてえの？」

「……そうだな、このバカのために工作に励んでるとしか言えねーな」
テレスティーナさんの言葉に垣根くんはじつとあたしをみて答える。

優しく、気味が悪い感情が漆黒の瞳の奥に隠れていた。気持ちが悪
い感情、思い。

あたしを子供みたいに見つめるその目が大っ嫌い。

反吐が出る！

ぞわりと背中を蛇が伝うように寒気があたしを襲う。

頬を抓る手を振り払い、むすつとしたような表情をみせると、痛
かったか？なんて的はずれなセリフをあたしに投げかけた。

お前のその目はあたしに向けていいものじゃない。その感情はあ
たしが妹に向けるものと同じだ。

保護欲、姉妹愛。

あたしに優しくなんてしないで。守ろうとなんか考えないで。

固唾を呑んで、心の平静を取り戻すと、取り繕うように明るくふざ
けたように言葉を零す。

「えー？あたしの為の工作？隠蔽工作？あたし何か垣根くんに隠蔽さ
せるようなことしてたっけ？」

「そっちじゃねえ、凶工だよバカ。開発、アート、創造、製作のほうだ
よ」

その場しのぎに口にした言葉は彼を欺くにはちやうど良かったよ
うで、彼は気づかずにあたしのデコを人差し指で弾いた。

「え、垣根くん、芸術に目覚めちゃったの……？それはそれでなんかウ
ケるんですけど。わら」

「デメエいつか泣かすぞ」

頭が悪そうにふざけ倒すと、流石にムカついたのか低い声で威嚇し
た。

短気で生意気、我儘で自分本位。それが『下の子』であり、あたし
が求めるもの。

主導権なんか握らせるものか。

「で？あたしのための工作って何。爆弾でも作ってんの？」

腰に手を当て、呆れ気味に彼に問う。

すると、彼は悪戯好きの悪ガキのようにニヤついた。その顔からは明確な悪意そのものを感じることはない。

なんだ？何を企んでるんだ？

「ま、お前にとつてはいいものじゃねえよ」

「なぞなぞかよ」

テレステイナーさんの言う通り、まるでなぞなぞ。

少し頭を傾げて色々と考えて見るが、思いつくことは何一つない。爆弾でも作ってあたしを木っ端微塵にしようとしても考えているのだろうか。

嫌な光景が目には浮かぶが、頭を振って有耶無耶にする。

恐ろしい考えに頭を悩ませていると、またもや頭をまるで犬を撫でるようにぐしやぐしやにされた。

「お前に直接の害はねえ、と思う」

今日の垣根くんは「お兄ちゃん」みがある。

それがなんとも腹立たしく、あたしにとつて吐き気を催すものなのか彼は分からない。

あたしは姉なのだ。

誰かに下に見られてはいけない。それが守るべき者なら尚更だ。

「思うって……やばいなあ、遺言書書いといいた方がいい？」

「そうだな、全財産俺に託すって書いとけ」

撫でる手を掴み、手を下ろすと彼に視線を向ける。ふぎけながらも彼の行為を咎めるように強い口調で言葉をこぼすが、イタズラ好きな少年は悪びれもせず目を細めた。

ムカつく。あたしの行動をただの子供として見るその目が嫌い。

あたしは姉で、年上で、大人なのだ。

アンタは弟で、年下で、子供なのだ。

あたしを子供として、妹として、この世界の人間守る者として扱わないで。

あたしは大人で姉で、別の世界の人間見張る者なのだから。

嫌な汗が首を伝う。

確立していた人格が不安定な揺れを観測する。不安と焦燥が心を

埋め尽くす。

強い信念に強い力、垣根くんはとつても強い。それでも神の理不尽に抗えなかった弱い彼を救いたいのだ。

しかし、強い人といると自分が酷く弱く見えてしまう。彼といると自分が弱くなる。

早く抜け出してしまいたい。

姉だと言うのに、否定されている事実をひた隠しにしながらあたしは彼から目を逸らした。

なにか反論しなくては。そう思つて口を開いた刹那、びりりりり、けたたましい電子音が鼓膜を揺らし、静寂を破る。

あまりの音に思考が宇宙の彼方まで吹っ飛んでいき、慌てて音の出処を探した。

「あ、ごめん、電話」

机の引き出しから引っ張り出したのはいつものスマートフォンとは違う小さなガラケー。真っ黒いそのケータイはゴツゴツしており、どちらかと言うと男性に人気があるモデル。

あたしらしくないその電子機器は垣根くんに疑いを持たせるには十分だったようで、彼は怒ったような顔を見せた。

「……その携帯始めて見るな」

「ああ、これ？仕事用なの」

「仕事用、ねえ？一体どんなお仕事で？」

睨むような目付きに心臓が飛び跳ねる。しかし精一杯の虚勢と笑顔を貼り付けて、口に指を当ててドアノブに手をかけた。

「……詮索禁止だよ。犬にだってプライベートはあるのさ」

閉まる扉の隙間から見えたのは垣根くんの酷く怒った表情。

お前に教えるわけにはいかない。

アンタを救うその日まで秘め事は続く。

エレベーターを使って、最上階へ。誰もいないフロアの女子トイレへ駆け込むと、能力で少し声を変えて通話ボタンを押した。

電話の相手は分かっている。

「やあ駒場くん、どうしたんです？」

相手は駒場利徳。第7学区に居座るスキルアウトのリーダーその人だ。

「……頼まれ物を送った」

「ああ、ありがとうございます。お代はいつもの所に振り込んでおきますね」

まるで旧友のように軽い調子で話しかけるも、彼は相変わらず単調な声だった。

それに高い不思議な声で答えるも、口からこぼれるソプラノの声は自分に違和感を与える。

さて、ここでどうして駒場利徳が出てきたのか少し話をしよう。

まず最初に、あたしは藍花悦がスキルアウトと関係を持っていることを知っている。そしてそのスキルアウトが横須賀という名字だということも。

物語が始まる前にそしてその男が藍花悦に接触してくるのも知っていた。

だからあたしはその日が来るまで待っていた。物語が正しく進むのを。

しかし、待てども待てども来なかった。わざわざ今年の2月ごろに暑苦しい奴と接触して探りを入れたというのにな。

そしてあっさり理由がわかった。

あたしはぼくを隠しすぎたのだ。

原作で藍花悦は名前、在籍校、そして6位という事実しか知られていない、らしい。

その点ぼくはどうだ？

……そう、在籍校がバレていないのだ。

それに藍花悦として行動をほとんど起こしてきていない。年齢も性別も何もかも知らない相手を横須賀くんは多分探し出せなかった。

そりやそーだよ、情報ほとんど出て来ないんだもんね。

なのでぼくは急遽代役を立てた。

いろいろ吟味した結果、白羽の矢が立ったのは駒場利徳だった。

浜面仕上やらビックスパイダー？かなんかの人も考えたのだが、浜面は後々面倒なことになりそうだし、後者もそこまで権力やらコネはなさそう。

アニメに出ており、顔が分かるのが最優先事項。

その中で銃の仕入れができ、善人。詮索して来ず、ある程度守りたの弱み人がある不幸な人物。

それが駒場利徳だったのだ。

「……弾丸のみとは、使う機会があったのか」

「そこら辺はノーコメントで」

しーっ蛇のように音を出して詮索するなど伝えると、彼は口を閉ざした。

「……超能力者レベル5なら銃がなくなつて戦えるだろう、それもお前の能力なら」

「もしものためですよ、能力は万能じゃないので。何かの拍子で使えなくなることであってありますしね。それに、ぼくはか弱い非力な一般人ですし？他の超能力者レベル5に襲われたら一溜りもないじゃないですか」
少し間が開き、再び駒場利徳は口を開く。実に馬鹿げているその質問に慣れない敬語で言葉を返すと、彼はため息をついて話題を変えた。

「……はあ、あと、名義の件だが」

「不都合でも？」

「……いや……問題は無い」

それはあたしが知っている藍花悦の唯一の行動について。名義貸しだ。

何人か見繕った学園都市を嫌う悲劇を知った少年少女達に駒場く

んを通して藍花悦のIDを貸しているのだ。

原作と大幅に行動を変えるのは避けたい。そのため原作同様、同じように行動を起こしている。

もちろん、原作と差異のない状況を作り出すのが目的だが、アレイスターへのささやかな反逆でもある。垣根愛しい弟君くんを悲しませる奴は無条件で敵だ。

とはいえ、流石に誰に名前を渡すかまでは知らないので適当に選んでいるが、持ち前の運と当てにならない神の加護があればなんとかなるだろう。

それが結果あたしの首を絞めたって、あたしだけに降りかかる災いなら構わない。愛する人間に不幸が訪れなければ他のことはどうでもいい。

「ではなにか？」

「……なぜ名義貸しなんてしてるんだ？それこそお前の力なら彼らを助けることくらい出来るだろうに」

「あのですね、ぼくは聖徳太子でも分身の術が使える訳でもないんですよ？名前を貸すことによって救われる人がいるのなら、そうするだけですよ」

駒場くんの口から滑り落ちたのは不満の声。

一番の目的は少年少女達の救済、どんなに不満を言われてもあたしに名義貸し以上でできることはない。

非力で力のないものに立ち向かうナイフを持たせ、自身の力で幸せへ導かせる。

藍花悦として直接手を貸したっていいのだが、こういう個人的な憎しみは自分で解決しなくちゃ意味がない。

何かを変えたいのなら行動あるのみだ。

あたしは見守る者、見張る者。彼らの幸せのちよつとした手助けしできないのだ。

「……理解できないな」

「理解なんて求めてませんよ。するだけ無駄ってやつですよ、駒場くん」

この感情が理解されなくなつて構わない。理解できるはずもないのだから。

この世界の人間と別の世界で生まれたあたしには互換性がないのだ。

「理解など到底無理だろう。」

そろそろ戻らなきや垣根くんにとやされそうだ。

通話を切ろうと思ひボタンに指をかけるが、大切なことを思い出す。

「あ、そうそう、駒場くん、ぼくのことを詮索する人が居たら話して欲しくはありません。ですが、優先するのは君の命です。もし殺されそうになったら遠慮なく言うといいですよ」

あたしだつて鬼ではない。一応あまり話すなどは言つてあるが、駒場くんだつてあたしの大切な人の一人だ。

愛する人間は何人たりとも不幸になつて欲しくない。

「君が死んでしまうと悲しむものがいますので」

「……」

「あの少女によろしく伝えておいてくださいね」

そう言つて、一方的に通話を切る。ツーツーと規則正しい電子音が鳴り響く個室は自分のなかの孤独感と孤立感を浮き立たせた。

トイレの壁にもたれかかり、ため息をつくと頭を壁につけて天井を見上げる。点滅する白いLEDの蛍光灯が目を刺激した。

ああ、嫌だ。

「つたく、ふたつの顔があるつてのも、めんどくさいな」

名前が二つ、姿が二つ、人生が二つ。

背筋を伸ばして携帯をしまつと、頬を掴んで無理やり筋肉をほぐして笑顔を作つた。

管理が面倒くさいことこの上ないが、物語を守るため、愛する人を不幸から救い上げるため、この面倒くささも受け入れなければならぬ。

ニーチェ曰く、孤独な人はあまりに深く苦しんだために笑いを発明しなくてはならなかつた。

あたしは苦しんだって、孤独でも構わない。あたしはあたしを犠牲
にしてでも勝ち取らなくてはいけないのだから。
笑^{ハッピーエンド}顔のその先を。

30話：デジヤヴ

太陽よりも眩しい白。宙よりも深い世界。懐かしい匂い。

瞼にチラつく光を感じると、私は目を覚ます。煌めく光が淡く体を照らしていた。

揺蕩う身体と、風もないのに靡く髪。

空虚の地上は私には見覚えのないもの、そこが現実ではないと理解するのにはそう時間がかからない。

見覚えのない世界、けれど体はどこか懐かしむような感覚を覚える。

これは俗に言う天国というやつか。

不思議な現象を前に、不思議と脳は理性を保っていた。知らない光景になぜかデジヤヴと既視感を感じると、私はひとつため息をつく。

しかし徐々にその理性は目の前に浮かび上がる存在によってそのため息は掻き消され、穢される。

男か女か、人か動物か、宝石か汚物か、無機か有機かどうかも分からない存在が私の眼前に現れたのだ。

本能に刻まれた憎悪が少しずつ私の心を蝕んでいく。心臓は尋常じゃないほど脈打ち、握りしめた拳に爪がめり込んだ。

それがこの世界の創設者であり、管理人であり、全てであり、所謂神という存在であると、私は知っている。

なぜかはわからない。けれどあの日の記憶がこれを神だと肯定する。

死んだあの日の追憶。空に堕ちる感覚、掴んだ救いの糸。

心臓に記憶された何かの神の存在を覚えていた。

その物体が私に向けて声を発する。

口があるわけでも、脳に響くようなものでもない。

身体が、心が、その言葉を不思議と理解した。

— 嬉しいか？

短い言葉だった。

たったそれだけの言葉を言うために、わざわざ下界に降りたというのか？

馬鹿馬鹿しい。

愉しくなんかないに決まってる。

貴方が私から全てを奪ったのだろう。

最愛の妹を奪われ、愛する世界を奪われ、今度は見知らぬ土地に産み堕とされた。

神が憎かった。

幸せも愉しさも愛しさも、全て奪われ蹂躪される。神という傲慢で力ある存在に私はいつも被虐を受けるのだ。

それが堪らなく嫌だった。

神の理不尽に背くのが私の願い。

私は神を仇なす為に幸せを与え、神の正義を成す。

まるで神の使いだ。

神の心臓をダガーで突き刺すために、私は天使のように人を導く。

人を愛し、幸せに導けば、理不尽な神に一矢報いることが出来ると信じていた。

矛盾する心理。

矛盾を孕む私は酷く不安定で酷く脆い。

ぐつと唇を噛み締めると、この世の理不尽を詰め込んだ存在は私を見下ろす。

— 幸せか？

傲慢な存在は再び私に問う。

愚問だ。

私が幸せではないのは明らかだろうか？

貴方の理不尽を彗くときに私は幸せを感じる事が出来るのだ。何も出来ていない私は現状に満足も幸福も抱いていない。

水槽の夢、バーチャルリアリティ、並行世界、異なる世界。

そのどれだろうが興味はない。

貴方がどのような形の神であろうと関係ない。

どんな世界だろうがやるべき事は変わらないのだから。

私は見張る者。

人に幸福と赦しを与え、理不尽で暴虐なる神に反逆する。

幸せが保たれるように。

神が私のたどり着いた答えにため息を着くと、世界が崩れていった。

闇は光に照らされ、輝きを増す。

夢が壊れていくのが肌で感じとれた。

飴細工のようにどろどろと溶けていく神に対し、私は初めてこの虚無の世界で口を開く。

「あたしに何をさせたいの？」

何がしたいのか分からなかった。

どうしてこの世界に閉じ込めたのか。

どうして力を与えたのか。

どうして理不尽を与えるのか。

どうしてチャンスを与えたのか。

理解が出来なかった。

この世界に「神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの」は現れない。

神を知り、神に力を与えられた者であり、神如き強者である私が其れを理解できないのだ。

神を知らない人間が、その御身に届くとは到底思えなかった。

神の身に手を届かせたい。

この世に生まれ落ちた理由を知りたい。

私の使命を今一度問いたい。

それを理解するには神の器が必要だ。

手練り寄せるように手を伸ばす。

天使になれば、その心は理解出来るだろうか？

神は問いに答えることは無かった。

ゆっくりと眼瞼を開く。カーテンの隙間から零れる朝日が優しく部屋を照らす。

部屋に散らばる研究資料に、乱れた机。他人に見られたくない少し自堕落な部屋。

いつもの光景。

「……最悪」

理論上は睡眠など必要なのに、机で病院関係の仕事をしていたら寝落ちしていたようだ。

頭を抱え、髪をぐしゃぐしゃと掻き回す。ふわりと舞う匂いはどことなく垣根くんを思い出させた。

少し疑問に思ったが、そういえば昨日ずっと監視されて、家帰ってもシャワー浴びなかつたんだ。彼の匂い、もとい未元物質ダークマターの匂いが髪に着いてしまったようだ。

そこでふと先程まで見ていた夢と思しき光景が脳に蘇る。

世界で一番嫌いな存在が出てくるだなんて凶夢じゃないか。嫌な汗がシャツと肌の隙間を伝う。汗ばんだ肌に張り付いたシャツはとても気持ちが悪い。

「あれ、もう昼？寝すぎじゃん、笑える」

スマホに手を伸ばそうと机の隣の充電スペースに目を向けると、壁掛け時計が目に入る。

時計は12時過ぎを示していた。

「うっわ垣根くんから鬼メール……そうか、今日遊ぶ約束してたっけ、殺されるな、確実に」

昨日、彼に奢ってもらうとか話をしていた。機嫌が何故かい彼はほんとに奢ってくれるみたいで、今日待ち合わせをしていたのだ。……12時に。

そして今は12時半。

あー、怒られるな、これは。

とりあえず「死」って単語とスタンプだけ送信して、スマホから手を離す。

今日は何を着よう。青を徹底的に排除したファッションにも最近底が着いてきたのだ。

「なんだ……うめっっちゃ調子いいやん今日。久しぶりに寝たから？」
椅子に座ったまま伸びをしてから立ち上がると、体調が異様にいいのに気づく。なんだか今日は体が軽い。

肩こりには生前から今日まで悩まされていたが、なんだか今日はスッキリしてる。

寝てる時に自分で回復したのか？いつもなら痛みを感じたらすぐに演算してたんだが。

「神にあったからか？サービス精神旺盛だな。クソ」

少し嫌な気分になるが、とりあえず顔を洗おうと自室の扉を開いて、廊下へでる。

2LDKのバカ高くてバカ広いファミリー用のマンションの一部屋は、うちの先生冥土帰しが与えてくれたもの。

独り身には広すぎるが、安心安全の物凄いセキュリティが着いてるらしく、進めてきたのは先生だ。部屋番号は自分で選んだが、選んでる時はめっちゃくちや申し訳なかった。

だが、どんなに高セキュリティでも2LDKはないだろう。

廊下の目の前、自室と対になる別の部屋は空き部屋になっており、一度も入ったことがない。

そのまま廊下を玄関とは真逆の方向へ進み、トイレを通り過ぎてキッチンへ。

とはいえ目的の地はキッチンの廊下を挟んだ隣、洗面所だ。

研究資料やら栄養剤の瓶やら読んでない本やら切った髪の毛やらが汚く散らばるリビングからそっと目を逸らして洗面所へ入る。片付けるのは来週にしよう。

目を瞑って欠伸をしながら鏡面に立ち、そのまま顔を洗う。

顔を伏せたままタオルをとって、水を拭うと顔を上げて今日初めて鏡を見る。

いつもと変わらない姿。金と桃色の髪、茶色と緑の瞳、不思議な顔立ちが鏡に現れる。

はずだった。

「え?」

人とは思えない白さを持つ無機質な肌、瞳も口もなく、窪んだ穴が目と口の役割を果たす。

自分のものよりも小さく膨らんだ胸部。

それは紛れもなく、前世の記憶アニメにでてきたにある天使の姿だった。

「あああああ?!!」

衝撃だった。あまりのことに驚いてしまい、早足に後退ると、足を滑らせて背中から派手な音を立てて転んでしまう。

あたしじゃない誰かが映ったことに酷く動揺した。

「どういう、え?なに、どうして?」

そのまま床にぺたんこ座り込む。

尋常じゃないほどの汗と上がる心拍数。正常な数値から外れた体の動きはあたしがパニック状態に陥ったと語る。パニックに陥ったと脳で理解しても収まらない。

息が上がる。細かい息を吐いて、吐いて。

一種の呼吸困難だ。

落ち着けと脳は叫ぶが、体が言うことを聞かない。

ぐちゃぐちゃに乱れた神経がヒートを起こす。

パニック状態に陥ると、能力が自動に抑えようと無意識の内に演算をしてしまう。

しかし、パニックに陥った人間は演算なんか出来やしない。それも複雑で繊細なあたしの能力なら尚更。

間違った演算にパニックに陥った体。

その結果は更なる精神への混乱になる。

一度パニックになると衝撃がない限り、一日はこのまま。

能力の代償とも言えるこれはあたしには抑えられない。

「つおえ、つげほ」

込み上げた吐き気に思わず嘔吐くも、口からは唾液と胃液しか出てこない。何も食べてない胃から何かが出るわけがなかった。

自分が他人になってしまったという恐怖、自分が自分でなくなる恐怖。

あ・た・し・は・そ・れ・を・一・度・体・験・し・て・い・る。

あの時の焦燥感、恐怖。フラッシュバックのように感情がとめどなく流れてくる。

「どう、いう」

手を見ても、足を見ても、いつものあたし。緑のネイルに、白くてブカブカのシャツ。

しかし鏡には床に座り、表情のない顔であたしを眺める天使。体を包む匂いが違う。

そうだ、これは垣根くんの未元物質ダークマターが髪に付着したんじゃない。これはこの体の匂いなのだ。

天界の力、天界の体。匂いが似ていてもおかしくは無い。

「つは、はあ、はあ」

懐かしい匂いと懐かしい感覚。包み込む鏡越しの肉体はあたしとシンクロして離れない。

不思議と違和感はない。それどころか、いつもの体よりしっくりくる。

「どう、して？ どう、え？」

あたしはこれを知っている。

深い深い記憶の底に落ちているのを知っている。魂がこの体を覚えている。

心臓に貯蔵された記憶が似ても似つかないこの体を似ていると感じさせる。

何と？

分からない。

あたしって、なに？

「あたし、あたしっ、う、おえ」

嫌な考えに体が拒絶する。

それを知ってはいけないと、脳が警鐘を鳴らす。

息が上がり、呼吸ができない。生理的な涙と涎と汗がとまらない。

心臓は破裂しそうなほど早く血液を循環させる。

誰か、助けて欲しい。

「テメエ、俺を待たせるとはいい度胸してんじゃねーか」

女性らしくも、少年らしくもある優しい声が不思議なことに洗面所の扉、あたしの頭上から聞こえてくる。

泥棒でも入られたか？とパニックがとまらない脳の片隅で考えるが、それよりも早く瞳はその女性の方を向いた。

金と桃色の髪、赤と緑の瞳、不思議な顔立ち。

「あ、たし？」

「はっ？」

それはあたしだった。

男物のシャツにズボン。普段からそんな服装だから特別違和感を感じなかった。

困惑したような表情であたしを見下ろすあたし。

それを理解した瞬間、体が動いていた。

「かえして！」

「つちよっ！テメエ何して！」

それはあたしの体だ！

あの子妹と繋がる唯一の証拠！

襟を掴み、廊下へ押し出す。ゴンツと鈍い音を立ててキッチンにぶつかるとドッペルゲンガーはあたしを押しつけてリビングの方に背を向けてあたしを見ていた。

「返してよ！それはあたしの！」

「テメエ寝惚けてんのか?!」

腕を伸ばし、その体を掴み取ろうとするが、かわされてしまう。勢い良く飛び出したせいでバランスの取れない体は、重力に従って地面に一直線。

やばい。

能力が暴走気味な今、痛みを与えられたらショックで気絶しかねない。

ぎゅつと目を瞑る。

しかし痛みは体に到達しなかった。

ドツペルゲンガーが小脇にあたしを抱え、地面との接触を防いでいたのだ。

まさかあたしに助けられるとは思ってもいなかった。

そして、同時にこれがドツペルゲンガーなのかと疑問に思う。

ドツペルゲンガーは入れ替わりをする。オリジナル^{あたし}を助けるような存在じゃない。流星にそれぐらいは知っている。

ならばこれは誰？

軽々とあたしを持ち上げる腕。まるで兄のようにあたしを優しく見下す目。

その人物に心当たりがあるじゃないか。

あたしを抱えて空をも飛べる少年。

あたしなんかを心配しちゃう少年。

「……か、きね、くん？」

「それ以外誰がいるんだよ」

あたしの顔で呆れたように笑う姿が垣根くんだと告げていた。

ゆつくりとあたしを床に立たせ面白そうに笑うあたしの顔だったが、不穩で上から目線のその笑いはどう考えても垣根くんのももの。

垣根くんだ。

垣根くん。

あたしは今彼に何をした？

彼の服を掴んだ。壁にぶつけた。

痛みを、教えてしまった。

「……あ、ああああ?」

「うおっ、うるせ」

やってしまった!

「よりもよって垣根くんに!

あどけない少年に痛みを! 苦痛を! 与えてしまった!

「ご、ごご、ごめん! 大丈夫!? 土下座!? 土下座しとく!」

「しなくていい!」

再び脳が機能を停止し、混乱状態になる。

タブーを侵したその事実にも動揺と罪悪感が肥大化した。

「け、けが、怪れない!」

「大丈夫だから、落ち着け、情緒不安定女」

「ごご、ごめん、ほんとに、ごめん」

少し涙ぐみながら彼に怪我がないか確認すると、苦笑いが返ってくる。

謝っても到底許されないことだ。

あたしは、守るべき人を傷つけた。罰は重くあるべきだ。

「何があったんだよ、部屋ぐちゃぐちゃだし」

どんな罰でも受けると覚悟をして体を強張らせたあたしだったが、意と反して垣根くんは少しため息を着いてぽんぽんとあたしの背中を叩いた。

あまりにおかしな行動に目が点になるも、なぜかその年上じみた彼の行動に安堵する自分があるのに気づく。実に腹立たしいことだったが、あたしの口はその事実流されやすく、簡潔に彼に現状を伝えようとしていた。

「な、なんかね、垣根くんが、あたしの姿に、見えるって、ゆうか、なんてゆうか」

落ち着きのない声であたしは事実を伝える。

包み隠さず言ったとしても、この光景を信じてもらえとは思っていない。

ただ、不思議と今の彼なら言ってもいいと思ってしまった。甘えて

しまおうと、彼ならきつと解決できるんじゃないかと。

肩を掴まれ、リビングにぽつんと置かれているソファに移動させられる。

彼の顔を見ながら真実を包み隠さず言ってみたが、想像通り、彼は信じてないようだった。

「とりあえず落ち着け、話はそれからだ」

「あ、えっと、と、とりあえず、お詫びに首吊った方がいい？」

「落ち着け！」

ぴしゃつと雷が落ちたような大きな声。

あんまり聞かない彼の大声にビククリすると、勢いよくソファに座らせられる。

こんな汚い部屋に上げたくなかったな、とどこか冷静な頭が思っていた。

「ご、ごめん……」

「なんなんだよ……」

謝りながらも、あることが頭をよぎる。

なんで彼はここにいるのだ？

合鍵を何故か持っているのは知っている。でもだからといって彼がここにいる理由にはならない。

「……なんでここにいの？」

「テメエが遅刻するわ、変なメッセ送ってくるわで心配したんだよバカ」

「心配……ああ、垣根くんって見た目にそぐわず律儀にも待ち合わせ時間の30分前に来るタイプだからね……」

そうだ。この子はなんだかんだ言っただけでもない子なのだ。

あんまり原作での情報がないからだろうか。彼は結構律儀で、少年らしい。

それもそうか、杠林檎の件や、そもそも学園都市に反逆したのは彼の優しさからのようなものだ。

元から可愛くて良い子、しかも自ら行動を起こす。とっても素敵な少年。

「見た目は大きなお世話だ。お前もいつつも時間通り来るじゃねえか、その見た目で」

「遅れたら悲しいでしょ?」

「なら二度と遅刻すんな」

ぽふつと頭に優しめなチョップを決められてしまう。本当に兄みたいだ。

あたしより、上手。

おかげで徐々にいつものペースに戻ってきた。もう精神は落ち着いているようだ。

精神的にあたしは幼い。体に引っ張られるように若々しい考えと精神を保っている。

前世で大人だったからと言って、今のあたしは高校1年生。ほんのちよつとだけ年上の先輩にはやっぱり敵わないようだ。

だが、それとこれとは話が別。彼があたしの兄ぶろうとするのは非常に気に食わない。普通にムカつく。

話を戻して軌道修正といこう。

「じゃなくて!なんで垣根くんがあたしの姿してんの!」

「って言われてもな。俺は俺に見えてるし、お前はお前に見えてんぞ?」

「え?」

そう言ってソファの上、あたしの隣に座るあたしの姿をした垣根くんに詰め寄る。

しかし、返ってきたのは予想だにしない答えだった。

彼には普通に見えている?ならこの状況はなんだ?

鏡の中のあたしと現実のあたしは違う?

確かに自分の手のひらはいつもの通り、人の手だ。

「俺がお前の姿に見えてるか……幻覚、精神干渉か?でもここら辺でお前以外の能力を感知してねえんだけどな……」

「感知?」

「気にすんな、こつちの話だ」

うーんと、結構真面目に考えてくれる彼だが、何を言っているのか

はよく分からなかった。

よく分からないと彼を見上げるも、なんでもないと言われてしま
う。気になるが、まああんまり重要なことではないだろう。

今重要なのはこの状況だ。

「能力でもないとなると……魔術か」

「あ」

頭を捻りながら考えてると、あたし、もとい垣根くんがぼそつと呟
く。

魔術の影響。

そういえば、第1期になにやら面白い現象が起きていたじゃない
か。

「はああ……そうだよ、上条くんだよ！」

大きなため息とともにクラスメイトの名を呟くと垣根くんは顔を
しかめた。

あたしはこの事象を知っている。

それは御使エンゼルフォール墮し。

天使を人間の領域に引き摺り降ろすとかいうあの大規模な魔術。

今日だったのか！

いや、それよりもだ、それは感知されないのではなかったのか？

なぜあたしは見えている？

ぐるぐると回る思考はある一つの仮説を提示した。

それは別の世界の人間だからこそ此のようなことになっているの
ではないかというもの。

天使と入れ替わったのも、別の世界共通点の人間があるだから？

仮に、あたしが元いた世界がパラレルワールド、又は異世界なるも
のだとしよう。

魔術は別世界の法則を利用した力。

垣根くんみたいに天界の力とかを現実世界に引っ張ってきている
のが魔術、とwikiにあつた気がする。

その別世界って異世界のことだよな？

ってことは、あたしがいた世界が異世界としてカウントされる可能

性があるのでは？前世の世界≡異世界？

異世界の法則がこの世界の毒になるなら、異世界から来た魂と体を持つあたしはこの世界にとって毒ではないのか？

それに、前世の世界でなくても、そもそもあたしは屍人、死人。それはあたしが輪廻の輪に乗り、天国へ行き、地獄に落とされた事実があるはずだ。

魂は必ずあの世に行く。

天国、煉獄、辺獄、地獄。どこに割り振られるかは知らないが、一度死んでいるあたしはそこにもおかしくないんじゃないか？

先ほどの明晰夢もどきで見た場所が死んだ後の魂が行った場所だとしたら、それに懐かしさを覚えるのも納得だ。

だが、それにしたつて妙だ。どこから落ちてこようが、あたしが別の世界、異次元的な場所から来たことに代わりはない。

魔術を行うにはMP対価や、生贄儀價、儀式が必要だ。異世界からきたんだからそれ相応の対価を支払っているはずなのだ。

なのに、あたしは平然と生きてるし、世界観に大きな影響もない。それが無いってことは何を意味するの？

そもそも世界そのものがおかしいじゃないか。

ここは原作ではなくアニメを基準とした世界。建物、キャラクター、時系列。視覚情報がアニメの描写だと教えてくれている。

それはなぜ？どうしてアニメが基準なの？

アニメをベースとした利点は？メリットは？

この世界の住人がアニメと原作の違いなんて知らない。知るはずもない。

だから必然的にそれらの違いを知っているあたしに関わる利点となる。

アニメベースのこの世界はアニメしか見てないあたしにとってはわかりやすいし、ありがたいが、何故？

……ありがたい？

もしかして、あたしが理解しやすくするため？

それはどういうことだ？

この世界はあたしの為に作られたと言わんばかりじゃないか。
あたしのために神が作りあげた世界^{プログラム}？

あたしの低俗な願いを叶えるためだけに？

ひとつの単語が頭に浮び上がる。

世界五分前仮説。

なんでも世界は5分前に作られたとかいう思考実験。

この世界は、あたしの為に作られた？

正^{正義}使命を果たす為に？

何故？

しかしそこで思考は止まる。

「なーに難しい顔してんだよ。見えるだけで害はねえんだろ？なら良

いじゃねえか」

「……まあ、ね」

眉間に親指を当てられ、否応無く顔を垣根くんに向けられる。

考えても仕方が無い。これ以上考えるのは止めよう。

そういえば、この御使^{エンゼル}墮^{フォール}しは上条くんの父親が上条くんを思うあま

りに偶然発動してしまっただったか。

不幸な息子のために幸運のお守りやら厄除けとかを置いていたら

作動してしまった魔術。

同じような境遇であるあたしも彼の気持ちはよく分かる。

だが生前、あたしはそういう類のものには手を出さなかった。

前世には魔術なんてものはなかったし、信じられるのは科学だけ。

そういう現代で生きてきたあたしにはそれらを信じることはできな

い。

「てか聖職者が魔術って、よくよく考えれば冒濫的で地獄に行くよう

なものだよね……なんで使うんだろ」

ぼつりと、何となく思ったことを呟く。

必要悪の教会とか理屈ではわかる。魔術に対抗するために宗教が

作り上げた武装隊のようなものだ。

それは分かっているんだが、あえて自分から地獄に落ちるようなこと

をするのが分からない。

だって彼らは敬虔なカトリックなんだよ？

あたしみたいに信仰心の欠片もない人じゃない。

魔術とは、あたしの知る聖書の中ではクソツタレで傲慢な神に対抗するための手段だ。

神に仇なす行為をわざわざ引き受けるなんて、聖職者としては少しチグハグだ。

あたしは神が嫌い。信じていても、信頼も愛情もない。あるのは憎悪のみ。

だからこそ魔術を習得して愛する者を救いたいと願う。でも彼らは違う。神を信じ、神を愛し、神に祈る。

好きな人のために、好きな人に仇なす行為をする彼らが、少しだけ可哀想で哀れに見えてくる。

そういう思いを抱くのは、あたしだけで十分なのに。

「そうなのか？」

「えーっと、たしか……第八圏、悪意者の地獄に行くんでしょ？」

「なんだそれ」

あたしの一言に何故か垣根くんは首を傾げた。

知らないのだろうか。

床に研究資料や切った髪の毛と一緒に散らばる書物から神学関連の本を引つ張り出す。この部屋にある本はこの世界に生まれた時に入手したもので、その大半はまだ読めていない。

宗教色の強い「とあるシリーズ^{世界}」を理解しようとして買った書物だが、たとえばアメリカに住んでいても、前世でミッシヨン系の学校に通っていても宗教に興味がないので今まで埋もれていた。

ラインナップ神曲に失樂園、旧約と新約聖書、あとはタロット占いの本だったり、エンジェルナンバーについてなど。まあ、ほとんど読んではいないが！

途中まで読んだが、大半はwikiの知識。ぶっちゃけ意味わかんないし、完璧に放置していた。

「これこれ、ダンテの神曲」

「知らねーな」

引つ張り出した本を彼に手渡すと、彼は首を傾げる。名前すら聞いたことないのだろうか？

ダンテ・アリギエーリの代表作、神曲。当時の地獄観を表す、神学的にも文学的にも評価高い何世紀も前のファンタジー作品だ。

まああたしもそんなに詳しくないので断言できないが。

「天国、煉獄、辺獄、地獄に関するフィクションでね、外の世界では割りかし有名だよ」

「天国と地獄ねえ」

ミッシヨン系の高校に通つてはいたが、授業はほとんど寝てたし、アメリカでも日曜にルームメイトに連れられてミサに行かされたぐらいで宗教については普通の人よりかは知ってる程度。

旧約聖書が何から始まり、何で終わるか。

新約聖書が何から始まり、何で終わるか。

神曲とは何か、グノーシス主義とはなにか、天使の階級、聖人の名前、四大天使の名前。

その程度の知識だ。

学園都市の人より多くは知っているが、互換性は多少あれど、頭にある知識は前世キリスト教のものでこの世界十字教の知識ではないし、マジモンの宗教家、聖職者には劣る。

カトリックと職業柄一部の神話を少し知っているが、他を知らない。なので魔術の考察をするのには便利ではないし、ここでは無駄知識だ。「で？それには物語があんのか？」

「うん。話としてはダンテって人が森に迷い込むところから始まるの」
垣根くんの問いに軽く頷く。

「暗い森からウエルギリウスという詩人の案内の下、地獄の門を潜り地獄の底へ、そして煉獄へ登る。最後頂上につくと永遠の淑女、ベアトリーチエの導きにより天国へ行くの」

空中に一本の線を描くように、下から上へ人差し指を動かして物語を口にした。

地獄へ落ち、そこから上へ上へ。煉獄を通過して天国へ。

この本でダンテは下に落ち、そこから地球の裏側へ上に登るのだ。

地獄の門をくぐり、第一圏：辺獄へ。そこから第二圏、第三圏、第四圏、第五圏。彼は歩き続ける。

永劫の炎が燃え盛る墮天使たちの城塞、デイーテの市に入り、第六圏、第七圏、そして第八圏を過ぎると、彼は最下層、第九圏にたどり着く。そこは嘆きの川^{コキユートス}。

^{ルシッファー}裏切者が永遠に氷漬けにされている極寒の地。

地獄を抜けた先には煉獄、七つの大罪を洗い流すための山がそびえ立つ。

第一の台地から破門者として、または第二の台地から遅悔者としてその山を登り、大罪を「浄罪」するのだ。

第一冠、第二冠、第三冠、第四冠、第五冠、第六冠、第七冠と登り、ダンテはついに山頂へ到達する。

そこから先は天国だった。

月を伝って一から九の天を登る。そして最後、第十天：至高天、エンピレオへ着くと、ダンテは「天上の薔薇」の前で見神の域に達するのだ。

「で、第八圏、悪意者の地獄ってのは魔術師とか、悪い人が墮とされる地獄のこと。首を反対向きに捻じ曲げられて殺されるらしいよ」

「聞いたことねえな」

「まあ学園都市だしねえ……まともに読んだのここに来る前だからあってるかわかんないけど、そんな感じの物語ってこと」

垣根くんに渡した本の目次をなぞるように物語を語り終えると、とある疑問が脳裏に浮かぶ。

学園都市はどこまで宗教や魔術というものを排除しているのだろうか。

クラシックの音楽には聖書やそこそ神曲をモチーフにした楽曲はたくさんある。

バレエなどの演舞も、彫刻などの美術もそう。なんなら神話の一節が入った病名だってある。

占いだって一種の魔術だし、魔術を謳うマジシャンだっている。

あたしの世界とはまるで違う。常識が、価値観が、全て丸ごと違う。

あたしだけひとり浮いている。

あの世界はあの子に不幸をもたらしたけど、この世界と比べれば何千倍も幸せな世界だった。

「ここに来る前って……お前何歳だったんだ」

「それは秘密」

しーっと口に指を当てる。

むすつとあたしの姿で顔を顰める彼に少しばかりの優越感を感じると、私は静かに声を漏らした。

「あたしはこの地獄に落ちるのかな……やっぱり煉獄？遅悔者として煉獄を登るのかな」

ダンテの神曲で描かれる地獄と天国はあくまでもフィクション。聖書には載っていない嘘っぱち。

それでもなんとなく煉獄へ行くのかと考えを巡らせてしまう。というより死んだあたしの魂はどこにいたのだろうか、の方が正しいかもしれないが。

前世への未練、後悔。どんなに考えても無駄だということにはわかっている。

けれど、それを全て忘れてしまったら、あたしはきつともう二度とあの子を思い出せない。

この世界に染まりたくない、前世の記憶が叫ぶのだ。

「お前が煉獄なら、俺は地獄か？」

「垣根くんは天国行きだよ。だって、あたしがいるんだもの」

「善人なお前に着いていければ天国に行けると？」

「ううん、違うよ」

垣根くんの見当はずれな言葉に、少し笑いが込み上がる。

『神曲』の地獄においての重罪は「裏切り」、こんな善良で己の正義を全うしようとする少年が地獄に墮ちるわけがない。

それにあたしがいるのだ。なんとしてでも、神に定められた彼の運命を覆さなければならぬ。

「あなたを幸せにして、天国行きの切符を貰えるように手助けするのが、あたしの使命だからさ。神曲だと……私はウエルギリウスかな、

ベアトリーチエ天国の元へ送り届ける役目」

あたしはベアトリーチエではない。

けれどウエルギリウスではある。

彼に幸せへの道順を示し、見守る。それがあたしのやるべきこと。

彼が死の運命から覆されれば、あたしの役目は終わりだ。

「天国までの道のりはあたしが、そこから先は君のベアトリーチエを見つけてね」

ぽんと彼の肩を叩く。

自分の姿をする彼を励ますのは少し嫌な気分だ。

足の踏み場もないほど散らかったりリビングがこの空間を浮世離れにさせた。

二人のあたし、少年と天使、存在しない二つは散らかった部屋の中で息をする。

「ちやんと幸せになってね、垣根くん」

「……なんでテメエに決められなきゃいけないーんだよ」

苛立つ彼はまるで思い通りにならない子供のよう。

極めてプライドが高く、傲慢。

あたしと同じ。けどあたしとは違う。

彼は幸せになるべき人。

「うーん、天使様だから？」

「は?」

「今だけね」

冗談抜きで天使様なんだけどね、今は。笑いながら含みを持たせて言ってみるも、彼は首を傾げるだけだった。

彼に私の今の姿は見えていないのでただの冗談か頭がおかしい女としか見られていないだろう。

「意味わかんねー……」

そう愚痴を零す彼に苦笑いを向ける。

しかしすぐに嫌な考えが頭に浮かび、ため息をついた。

この魔術が明日か明後日に戻るのはわかっている。それでも違う体にいるという恐怖は消えない。

自分が自分で無くなる恐怖は誰よりも知っていた。
朝起きたら、また別人になっていないだろうか。この世界にまだ留
まれるだろうか。

彼を死の運命から救うことができるのだろうか。
不安が心を満たす。

嗚呼、今夜も眠れなさそうだ。

31話：誘拐騒ぎ

8月31日、午後五時。

夏休み最後の日、あたし達は近所のファミレスで不幸な少年の真っ白な紙を埋めるお手伝いをしていた。

「何か嫌な予感がする」

暑さの厳しい夏から隔離されたファミレスの中、必死にレポートを書く自称不幸少年、上条当麻が顔を上げた。

涼しいはずの店内で汗を一滴零す彼からは何やら確信めいた強い言葉が放たれる。

「上条くんちに強盗でも入ったんじゃない?」

「やめてくれ……今日は御坂に振り回されるはアステカの魔術師に追われるわで大変だったんだ……もうこれ以上不幸を呼びたくない」

彼の斜め前、窓ガラスを背にしてスマホをいじるあたしは予言を呟く。

実際に起こっているとは露知らず、上条くんは頭を抱えながらぶつぶつと否定した。

積み上がった宿題と焦りを見せる顔。今日の疲れが色濃く出る彼に少し申し訳なさを感じながらもスマホを弄り続ける。

彼には悪いが、こっちにも事情があるのだ。

「今日は忙しいねえ」

「ねえけいとー!何でも頼んでいいの?」

上条くんの隣、あたしの目の前に座る真っ白いシスターはメニューと睨めっこしていた顔を上げ、目を輝かせる。

疲れ気味の家主をほっぽり、食べ物に夢中になる彼女がまさか魔導書図書館だなんて誰も思うまい。

「いいよー、払えない分は垣根くんが払うから」

「ダメエ俺を財布かなにかと勘違いしてないか?」

これから来る請求書の束を想像しながら乾いた笑いを浮かべ、隣のイケメンこと垣根くんに話のベクトルを捻じ曲げる。すると呆れたように睨まれ、少し怒られてしまった。

学園都市の第二位様なんだからこれぐらい払ってくれたっていいじゃないか。

そんな眼差しを向けると問答無用で頭を叩かれる。随分とバイオレンスなことだ。

シンプルながら洗練されている白いワイシャツと黒のズボンに身を包んだ彼は元々着ているあの衣装と何となく似ており、どこか浮世離れしていた。

シンプルイズベストを地で行くその服は垣根くんの顔面の美しさとモデルも真つ青の体型を最大限に引き出しており、ほぼ全ての女性客の視線を独り占めしている。

誇らしい限りだ。

対してあたしはギリギリ膝を隠す白装束のようなカシユクルのワンピースなんか着ていて、インデックスちゃんと3人で真つ白トリオになっていた。暑さを感じないと言っても、見た目くらいは涼しくしたい。

「レポート書き終わったあ……!」

涙ぐみながら埋め終わった原稿用紙を天井に掲げる上条くんに微笑みがこぼれる。

アニメでは終わらなかつたことが終わってよかつたね。

「おめ!とりま見してみ?」

「あ、注文いいすか?」

念の為誤字脱字を確認するために上条くんから原稿用紙を受け取り、一つづつ確認していく。

これでも元院生、教授に頼まれて学生のレポートチェックをしたりしたので確認作業は得意だ。

一字一句、間違えないように文字を目でなぞっていく。内容もちやんとあり、目立った間違いは見当たらない。

頑張ったなと思うが、同時に彼に必死に教えていた垣根くんの苦労を考えると何故か涙が出てくる。

今日のMVPは垣根くんがいいんじゃないか?

そんなMVPは我関せず ウェイトレスを呼んでインデックスと

注文をし始めており、この状況をスルーしていた。

明るい声で優しく注文する彼はいつもの姿とはかけ離れており、めちゃくちゃ面白い。

イケメンに少し頬を染める可愛いウエイトレスが注文を聞き終わると垣根くんはガラリと声を変えて上条くんとあたしを睨みつける。

「一教科終わらせたぐらいで喜んでんじゃねえぞ」

「……はい」

「ま、まあ、いいじゃん、ね？モチベも大切だよ？」

蛇に睨まれた蛙のように肩身を狭くする上条くんがあまりにも哀れで、すかさず助け舟をだす。

本来は終わるはずのない宿題が終わったのだ、未来が変わった事實は褒めるべきでしょ？

「甘やかすな。俺の貴重な時間を使ってることを忘れんじゃねえぞ」

しかし自分にも他人にも厳しい垣根くんはそれを許さないそうので、冷たい目の上条くんとあたしを見下ろした。

「垣根様、本当にありがとうございます……」

「分かっただけ早く終わらせろ」

大きいため息をついて頬杖を着く垣根くんはどこか楽しげだ。

上条くんと垣根くんの青春劇を目撃しているこの現実なんだから、とつてもポカポカする。

そして同時になんで原作でこうならなかったという悲しさが込み上がる。

漫画スピンオフを読んで死にたくなかったのは生まれてから死ぬまで君しかないないよ、垣根くん。

あたしと全世界の垣根くんファンのために幸せになってくれ。

いや、あたしが幸せにする。必ず。

「ごめんね、あたしが提出してなかったら貸せたんだけど……」

とりまそんな考えをしながら2人の会話に割り込んだ。

男子二人の和やかな会話に割り込むのは気が引けるが、改めて謝らなければならぬと感じたのだ、割り込みくらい許して欲しい。

そもそもファミレスで集まって上条くんの宿題を手伝う会が結成

したには理由がある。

その1、同じ学校のあたしが宿題を夏休み中に小萌先生に提出していたため見せることが出来ない。

その2、助っ人で来てくれた垣根くんが狭い部屋に文句を言った。

その3、ガチで汚いあたしの部屋と、立場上部屋を貸せない垣根くん。宿題をやる場所がない。

その4、インデックスがお腹を空かせた。

以上4つの理由によりファミレスで上条くんのために勉強会をしていた。

あとはまあメタ的な意味もあるが。

8月31日、あたしは何が起こるのかを知っている。

インデックス誘拐事件と打ち止め誘拐事件^{ラストオーダー}。

その他にもアステカの魔術師やらあったのは知っているが総スルー。恋愛ごとに首を突っ込むのは避けるべきだ。下手に干渉して恋のキューピットにでもなってしまうえば今後の展開に絶対影響が出る。

御坂ちゃんには申し訳ないが、上条くんにはインデックスちゃんの隣にいてもらわないと話が進まない。

とりあえず今日のメインは前述した2つ。

どちらを取るかは明白だった。

ファミレスにいる通り、あたしが取ったのはインデックス誘拐事件。

理由は色々あるが、ひとつを挙げるとすれば垣根くんと一方通行くんを合わせたくないことが挙げられるだろう。

この間の妹達しかり、この先敵として出会う2人を極力合わせたくないのだ。

「いや、今日までやってなかった俺のせいだから……天羽が謝ることじゃねえよ」

「つかなんで今の今までやってなかったんだよ。こんなの一日もあれば終わるだろう」

「いやあ、最近まで両親の元に強制送還されて……あと一日では

これは終わらないかな」

特に御使エンゼルフォール堕しトリスのことは言及せず、上条くんは帰省したことを話してくれた。

海へ行ったこと、両親と会ったことなど、当たり障りのない話にすこし昔を思い出す。

前世の実家は杉並区、可もなく不可もなくで、両親との関係は良好。妹を預けられるあたしがいたから夫婦仲に問題はなさそうだった。

私立の高校に、留学、色々お金を出してくれたことももちろん感謝してる。

一番感謝しているのは妹を産んでくれたことだが。

しかしこれはあくまでも前世の話。

今世の両親に特別な感情はない。

帰省したいという思いもない。

大学だってなんだって自力で来たし、学園都市に来れたのも大学の教授や先生のお陰だ。今の両親ではない。

妹を産んでいない偽物。

藍花の姓をもつその偽物にあたしは感情を抱かない。

「帰省かあ……いいな、あたしも帰りたい」

しかし、妹がいる前世の実家には帰りたい。そんな感情がほろつと口から出てしまう。

ホームシックな訳では断じて無いが、妹のいる世界に帰りたい一心で言葉を口にしてしまった。

「天羽の場合はアメリカに帰んのか？」

「あー……そうなるね。親もいるし」

「そっか、けいにとってアメリカにいたんだよね」

とはいえそんな事情を知るはずもない彼らは興味津々にあたしの家庭環境を聞いてくる。

学園都市しか知らないから興味が湧くのも当然か。

「いたっていうかミックスだかね？まあ血が混じり過ぎてて純粋なアメリカと日本のミックスとは言えないけど」

「多国籍って凄そうだよな、家庭環境。なあ、どんな親なんだ？」

「普通の人、興味ないからなんとも言えないけど」

妹を産み、あたしを姉にしてくれた前世の両親。

そしてあたしをこの世界に産むためだけに生み出されたであろう
今世の両親。

「興味ないって……」

育ててもらってもない偽物。興味も湧かない。

妹を産んでもらった恩はあれど、妹のいないこの世界ではあたしを
産み堕としただけの役立たずだ。

「ま、今のあたしにとっては冥土帰しが親代わりだし、多少はね？」

10歳からお世話になっている冥土帰しがこの世界での基本的な
保護者。

彼の協力無くして天羽彗糸は存在しない。

そういう意味では親にも当たるだろう。

「ねえ、けいとはなんで学園都市に来たの？アメリカにも似たような
機関はあるんでしょ？」

「んー？そうだなー、こつちでやりたいことがあったから、かな」

ぼーつと上条くんの前稿用紙を眺めながら受け答えをしていると、
なにやらあたしの根幹に関わる質問が飛んでくる。

物語の世界で物語の舞台に行かないわけが無い、と言いたいところ
だが彼らに伝えるわけにもいかず、適当に言葉を濁す。

「やりたいこと？」

「それは秘密」

口元でぼつてん印を人差し指で作ると、インデックスちゃんはすこ
しほっぺを膨らました。

可愛い顔をしてもらった口の固いのだ。

「でもけいとって十字架教徒なんでしょ？教会も少ないのによく来よ
うって思ったね」

「十字架教徒……ああ、前言ってたな。なんだよ、柄にもなく神を信じて
んのか？」

まだまだ質問は続くらしく、インデックスちゃんと垣根くん2人が
かりで畳み掛けるように聞いてくる。

宗教の話題は世間的にはタブーだと知らないのか？

いや、知らないか。学園都市の一生徒と、記憶のないシスター、彼らに世間の常識が備わっているとは思えない。

「まあ、渋々カトリックを名乗ってはいたけど……うん、信じてはい
る、かな」

信じてるって言うより知っているの方が近いけど。夢とはいえそ
れに遭遇してるし。

垣根くんを上条くんのレポートを手渡して彼に確認をさせると、大
きくため息をつけてあの日のことを思い出す。

ハッキリと自分が掴んだ天の糸の感覚を覚えている。

空に堕ちていくあの日の体験を忘れるわけが無い。

懐かしくも苛立たしい感情がじわじわと脳を登る。その感情に目
を細めながら渋々答えると、垣根くんは鼻で笑った。

「シスターの前で悪いが、神なんていねーだろ」

「魔術はすんなり信じたのに神は信じないの？」

「この不幸な世界こそが神のいない証明だ。神がいたら世界は平和に
なるし、理不尽も、不幸も起きないだろ？魔術は結果として目に見え
ているから信じるだけだ」

天の力を奮う少年は神の存在を信じることは無かった。

「……違うよ、神がいるから理不尽が起こるんだよ」

その浅はかな思考にため息を着くと、椅子に頭をもたれて真理を口
にする。

誰もが誤解する慈悲深い神の偶像を粉々に打ち砕きたかった。

「上条くん、この間喋ったよね、ノアの方舟について」

「あ？ああ、言ってたな。なんだっけ、文化を知った人間が世界を大変
なことにしたから神が洪水を起こしたってやつだろ？」

ノアの方舟。

誰もが知っている有名なこの話は旧約聖書に書かれている。新約
聖書はキリストのことばっかなので、キリストの出てこない話は旧約
聖書に書かれている。

それはともかく、ノアの方舟は墮落した人間を一掃する際に、一人

の人間とその家族だけを助けて他の人間を全て母なる海に還した。

神は、墮落した程度で人を流してしまう。

「そう、神は傲慢にもたつたそれだけの理由で人間を殺すんだよ？」
傲慢で気まぐれ、残虐で強欲、怠惰。

七つの大罪もびつくりの罪深い神が誰からも愛される事実が気持ちが悪。

「それを踏まえてさ、垣根くん、あなたは本当に神が人間を愛している、人間の味方であると思う？」

「……人間を愛するのが神様じゃねーのかよ」

「何言ってるの、聖書において神が殺した人間は三千万人だよ？神はね、傲慢で強欲、気まぐれで残酷。だからこそ、あたしは信じはするが信頼はしない、愛しはしない」

足を伸ばし、気怠げに椅子にもたれ掛かるあたしを見下ろす垣根くんに自分のペンダントを見せつけた。

ダガーを模したペンダント。

これだけは自分で買ったものだった。

「あたしが握るのは十字架じゃなくて神を貫くダガーなの」

「……歪んでんな」

姿勢を正し、きちんと椅子に座る。こほんと咳払いして空気を和ませるように明るい声で話題を変えるが、垣根くんの冷めた目は変わらなかった。

「ちなみに、ちょっと違うけど神を忌み嫌うことをグノーシス主義って呼んだりするよ。人間の世界が地獄で、神様が魔王って考え方」

「お前って無駄に知識豊富だよな」

「これでもお勉強は得意なの」

無駄と言われようと立派な知識、脂肪の詰まった胸を張って言ってみせると、「すごいすごい」と適当にあしらわれる。

全く、酷い人だ！

グノーシス主義、それは魂の解放や、神を否定する考えのひとつ。たしかアレイスターがグノーシス主義者だったはず。

純粋な物理だけの世界を目指しているとか何とか。エイワスと名

乗る天使が伝えたその物理で動く世界はグノーシス主義的な考えの世界と似ている。んな世界、哲学的にはないが。

にしても、前世で実在していたアレイスター・クロウリーは詳しくないのでなんとも言えないが、このエイワスってなんなんだ？

考察、と言ったふうになつてしまいが、そもそも天使というのは聖書に名前が無い者が何万もいる。一人一人に守護天使がいて、その名前は聖書に書かれない。

つまり、エイワスはただの守護天使って意味になるんだが……どう考えても違うし。

なんかエジプトの神様みたいな姿になるようだし、神と同等の力を持っているのだろうか？

「けいとして、学園都市の人にしては物知りだよね、とうまもこれくらい詳しくれば言つてること分かつてくれるだろうに」

「え？あー、まあ職業柄、神話はよく知つてんのよ」

考えを色々巡らせているとインデックスちゃんが上条くんを猫のように睨む。

確かに学園都市の人間にしては物知りだがこれはあくまでもキリスト教の知識、十字教のことはさっぱりだ。

それに知つてる神話だつて偏りがあるし、万全ではない。

大学で神学専攻しておけば良かったと少し思うが、神なんて嫌いなものを讚える授業を受けるのは精神衛生上良くないのでわざと避けたのだ。それに物語としての聖書や神曲、失樂園は理解できるが、神が何を伝えたいかなんて知りたくもないし。

「職業柄？お前聖職者かなんかだったわけ？シスター服借りれば？」

「まあナースも教師も見方によれば聖職者だけ……そうじゃなくてさ、医学用語って神話が元になってたりするんだよ。だから自然と知つてるって感じ。単語の背景知つていた方が覚えるの簡単だからさ」

「神話から？例えば？」

からかい混じりに笑う垣根くんは少し苛立つが、平常心で受け答える。

上条くんもその話には興味があるようで、テーブルに身を乗り出して聞いてきた。

「例えば海馬^{hippocampus}。これは伝説上の生物ヒポカンプスからきてるの」「へー」

仕方ないと例を上げると平坦な声がある。

聞いてきた癖にリアクションが薄いことに腹が立つ。もう少し具体的な例を出した方がいいかもしれない。

「虹彩はギリシャ神話の虹の女神イリスから、アキレス腱は英雄アキレウスから」

「お、おう」

「病名ならナルシズムが有名だね。あとダイアナコンプレックス、エディプスコンプレックス、あ、あと心理学^{psychology}って単語そのものがPsyche^ケ、聖書で魂を意味する言葉から来てるよ」

知識を脳から引つ張り出し、口から吐き出す。簡単なサイクルはどうやらあたしの箍を外したようで、溢れ出る知識がラジオのように延々と流れ出た。

「薬関係だと睡眠薬^{Hypnotic}が眠りの神ヒュプノスから。モルヒネはモルペウス、夢の神から取られた名前」

「あの一、天羽さん？もう十分なんですけど……」

「こいつは医療オタクだからな、一度この状態になると止まらねーんだよ、諦めろ」

不名誉な称号が垣根くんの手によって付けられたのが頭に来ると、あたしは口を閉じて深刻そうな顔をする。

突然止まった口にハテナを顔に浮べる男性陣に一発かましたい一心で再び口を開いた。

「……ちなみに、思春期の男性諸君にお役立ち情報。エロは愛の神エロスから、そして英語で媚薬を意味するaphrodisiac^{アフロジシアカ}の元ネタはアフロディーテ、ヴィーナスの丘は……言われなくてもわかるよね？」

「んなお役立ち情報要らねーよ。死ね」

渾身の一撃のつもりだったが、照れもせずにはバツサリと一刀両断さ

れてしまう。

さすがにこの位では動じないか。思春期男子の耐久性をなめていたな。

「ていうか！そんな情報よりも！宿題がですねえ！」

「あー、はいはい、んじややりますか。つぎはどれ？」

思春期男子の耐久性、というよりただただ宿題と己の未来を危惧していただけのようで、必死の形相で残りの教科書を見せつけてくる。

哀れな学生はペラペラと教科書を巡り、頭を抱えた。

「数学なんだが……」

「それなら垣根くん担当だね。あたしの得意分野は生物学、化学、英語、保健体育、社会のみ！一応ドイツ語、あと勉強中だけどロシアとイタリアもいける！」

「俺はオールマイティーだからお前と違ってなんでも教えられるだけだ」

勝ち誇った顔を見せる垣根くん非常に醜い苛立ちを感じながらも、笑顔を見せるあたりあたしも成長したのではないか？

お前は出来損ないだと言わんばかりの顔はあたしの脳を笑顔の下で掻き乱す。

「第二位様様だな……」

「お前さ、この俺第二位に教わるなんて、宝くじに当たるほどの幸運ってわかってんのかコラ」

「俺、お前と友達になれて良かった……」

「きつしよ、口じゃなくて手を動かせ」

あたしの心の棘に気づかずには実は高校生らしい掛け合いを始めた。

青春臭く、馬鹿みたいな会話は在り来りの日常を描き出し、心の棘を一つづつ抜いていく。

幸せそうに変哲もない日常は垣根くんのイメージとは掛け離れている。けれどその掛け離れたギャップが埋まる時、彼はきつと幸せなんだ。

刺激ない日常、色褪せた毎日。

刺激的な日常、色鮮やかな毎日で死ぬくらいなら、そちらの方にて欲しい。

死ぬことは進めないこと。とても不幸な事だから。

「ふたりとも仲良しだね」

「ほんとだね、見てて楽しいよ」

だから彼らが和やかな世界を観ているのがとても楽しかった。

心のモヤを吹き飛ばすほど、涙が出るほど、不幸な彼らの何気ない幸福があたしにとっては最高の幸せだった。

妹なら「尊い！」とでも叫んでいただろうか。

「お待たせ致しました」

「あっ！来たよとうまー」

そんな幸せを噛み締めていると、一人のウエイトレスがハンバーグやらご飯やらパフエやらを持ってきた。

ほとんどがインデックスちゃんのものだろう。重そうなお盆を両腕に抱えながらウエイトレスは足元に気をつけながら歩く。

「きやつー」

「あ」

転びそうだな、と思っていた矢先、つるりとウエイトレスは床の摩擦に転ばされた。

倒れるウエイトレス、投げ出されたお盆、宙を舞うお皿。

空飛ぶスパゲッティ・モンスター教なんてものもあつたな、なんてくだらない考えを巡らせながら物理法則に基づき落下していく食べ物を目で追った。

落下した食べ物はどういう訳か全て上条くんの頭に降り注ぐ。

「あーらら、さすが上条くん」

「スゲーな、お前」

ぐちゃぐちゃになった食事を頭に乗つけた上条くんは悲しそうな顔でワナワナと身体を震わせる。

彼の左隣にいたインデックスちゃんには全く被害が及んでないのが彼ら二人の幸運値の差ギャップを浮き彫りにさせた。

「でもレポートが無事でよかったね」

「垣根様様だな……」

インデックスちゃん頼んだ豆腐ハンバーグやライスがぶち撒けられた悲惨な机だったが、幸運なことにレポートだけは無事だった。垣根くんが手に持っていたレポートはハンバーグの汁が一滴もかかることはなかった。

垣根くんが今の今までチエックしていたレポートが無事だと分かったと、上条くんは安堵の溜息を零して力なく椅子にもたれかかる。

「俺の数少ない運か、垣根の運か……どっちが働いたんだ？」

「それを決める前にさ、あの人どうにかしたら？」

「あ？」

垣根くんが机にレポートを置いた瞬間、後ろのガラス越しにくぐもった声が微かに耳に届く。

カチンと何かぶつかった音が聞こえた瞬間、あたしは垣根くんの腕を持ち上げ、隣のテーブルに飛び乗った。

幸い使用者がいなかったテーブルに足が着いたその時、大きな音とともにガラスが割れる。

吹き荒ぶ風がガラスから力強く流れ出す。

テーブルの上に垣根くんを下ろしてその風の行く末を眺めていると、パキンと弾ける音とともに風が止んだ。

打ち消された風は周囲をめちやくちやし、全てを無に還す。風が止んだその場には粉々にされたテーブルと何もかもを打ち消す少年しか立っていないかった。

「てんめえ……なにしゃが、あ？」

ガラスの向こうにいるはずの男に上条くんは叫ぶ。

顔をあげ、敵意を向けるが、窓の外には誰もいなかった。

「こちらだ」

上条くんの背後に知らぬ間に移動したその男は惨状を目にして少し驚く。

黒いスーツに身を包んだその男は二メートル近い長身で、筋骨隆々の体格をしていた。

テキサスに居そうな体格をもつその男の両目は固く閉じられてお

り、どうやって前を見ているのかはなはな疑問だ。

しかし、片腕につけられたボーガンのような装置がそんな些細な問題を吹き飛ばす。危険だと、脳が警告を出していた。

「この結果は予想外だが、無益な殺生が減るのなら喜ぼう。このまま投降すれば君には手を出さない。目的のものさえ手に入れば君たちに危害は加えない」

「無益な殺生ねえ……ド派手なご登場しといて何言ってるんだか」

テーブルから降り立ち、鼻で笑うように男に声を掛けると、垣根くんはあたしに目を向ける。顎を使って指示を出し、彼はゆつくりと上条くんの隣に立った。

別に彼に言われたからではないが、床に倒れているインデックスちゃんの元に駆け寄る。

この事件は彼女を狙つてのもの、彼女のそばにいた方がいいのは明白だ。

「インデックスちゃん、大丈夫？」

「けいとも、怪我は？」

「あたしは大丈夫だから」

体を起こし、守るようにインデックスちゃんの体を抱き寄せる。今、彼女から離れるわけにはいかないのだ。

身を守る体制に入り、大男の挙動に注目していると視界の端にひらりと舞う紙切れが写る。その真っ白い紙切れに書かれていたのは薄い色の線と、鉛筆の黒。

それは上条くんの魂込めて書かれたレポートの切れ端だった。

「俺の、俺の宿題が紙吹雪に……」

「上条、お前は頼むから黙っててくれ……」

その事実を知ってしまった彼は体を震わせる。

パソコンなり携帯のメモなり、電子機器で書いておけばよかったのにね、と的外れなことを考えてしまうのを許してほしい。これでも現代っ子なのだ。

粉々にされたレポートの切れ端を持つ手をぐつと握りしめた彼は、大男に屈さず声を荒げた。

「おい！そのお前！お前がやったんだからお前が責任取れ！俺の宿題お前がやれよ！」

「知ったことか」

「オーケイ……今日の上条さんはちょっとばかりバイオレンスですよ……つてあれ？」

正当な権利だと言わんばかりに大声で主張する上条くんだが、もちろんそれは一刀両断される。

逆になぜそれが通用すると思ったのか。

上条くんが鋭い目つきをその男に向けるが、一度あることは二度あるのがお約束、彼の姿はもうそこにはない。

首筋に当てられたゴツゴツとした何か、背後からの威圧。

その男はインデックスちゃんを抱きしめるあたしの首に矢のない弓を当てた。

「手短に済みます。子供の遊びに付き合う気は無い」

「天羽！」

「インデックス！」

ぎゅつとインデックスちゃんを抱きしめる。手放すことがないとわかると、男は静かに口を開いた。

「女、死にたくなければそれから手を離せ」

「無理な相談ね、インデックスちゃんを連れていきたいならあたしを殺してからにして」

挑発するように男を見上げると、閉じられた目と目が合う。

睨まれている。

そう感じ取るとインデックスちゃんを守る腕に力が入る。離れまいと必死になるのは当たり前だ。

「何考えてんだテメエ、そいつらをどうするつもりだ！」

「分かるだろう？これが10万3000冊を記憶している禁書目録だと知りうる者だ」

「お前、魔術師か」

「如何にも」

上条の問いに頷くと、大男は平坦な声で呪文を口にした。

「断魔の弦」

弓の音と共に放たれた風は首筋を切断する。

引き裂かれる肉、切られた神経と首の骨。けれどもその傷は風の刃が通り抜ける前に再び接合された。

傷を認知する前にそれは消え失せる。アクセラレータ一方通行の時のように見世物として気軽に頭を弾き飛ばすわけにもいかないのだ。

「なーんでみんな首を狙うのかなあ？そんなに女王様になりたいの？」

オーデイエ客ンスに配慮しての治療は随分と大男を驚かせたらしく、彼は眉間にしわを寄せてあたしを見下ろす。

まるで化け物だと、人じゃないと、その顔が訴える。

知っているよ、そんなこと。不老不死にすらなれる自分が人じゃないことくらい。

永遠の命と永遠の若さ。細胞を保ち続ければそんなことは簡単だ。

永遠に生きるなんて、化け物と呼ばれるには十分すぎる。

「あたしの能力は卓越した回復力。バラバラに刻まれたって生き返るけど……どうする？」

「ふむ、面白い能力だ。しかし、非力な娘よ、傷を治せたところで本体が強くないと意味は無い」

浮かべた笑みはどうやら相手の癪に障ったようで、男は遠慮なく軽々とあたしたち二人を抱え上げた。まるで子供が人形を抱くように男の腕に抱えられてしまい、なんとなく気恥ずかしい。

「透魔の弦」

そのまま弓のついた腕を垣根くんたちに向けると、ガチャンという音と共に弓が引かれた。

風が頬に当たり、あまりの風量に目を閉じてしまう。何が起こったのかよく分からぬまま大人しくしていると、どうやらあたしたちが見えていないのか目の前の少年たちはあたりを見渡し始めた。

透明化。見えてるのに見えていない。

「待てこの野郎！」

「ひゃっ！」

どこかに行ってしまったのかと思ったのか、上条くんが左手を突き出すと可愛らしい声の下から聞こえた。

インデックスちゃんのお可愛らしい声に驚くと、上条くんはまじまじと自分の手を見つめる。

「なにか小さくて柔らかいものが……!?」

「小さくて柔らかい……?ならインデックスか」

「そこにいるのかインデックス!」

どう考えてもセクハラ案件で裁判沙汰にできるが、寛容な姉は全てを聞かなかったことにした。

ええ、聞こえてない、聞こえてない。

現実逃避をしていると、弓のついた男の腕が上条くん目掛けて振り下ろされる。

その隙に再び風でガラスを割ると、あたしたちを抱えたまま男が店の外へ逃げていく。

ガラスを踏み荒らし、足音を響かせながら彼の目的を達成しに連れ去られてしまった。

さあー、大変だ。

すこしこの状況を楽しみながらあたしは男の鼓動を聞いていた。

散らばるガラス片、壊されたテーブル。透明人間が残していった惨状を何やら面白そうに眺める垣根帝督と、その透明人間が壊していった窓から身を乗り出して誰もいない道を睨むように見ている上条当麻が異様な店内で立っていた。

「くそっ!やられた!」

「あいつらなら平気だから、とつとと追うぞ」

悪態をつきながら愚痴をこぼすと、垣根はいつもの調子で彼の隣で携帯をいじり始める。

その態度に若干苛立ちながら上条は友人である彼に詰め寄った。

超能力者である彼ならどうにかできたはずなのに、そんな腹立たしさが脳を過ぎる。

「なんであの羽出してくんなかったんだよ！」

「ここ店内、子供が多い、よって却下だ。あと面白そうだったし」

「性格悪いなおい！」

悪魔のように面白がる彼に上条は大声でツツコミを入れた。そんな腹立たしい奴だが、真面目に怒らないのは彼がやるときはやる奴だと知っているから。

上条にとつて彼は「いい奴」で、大切な友人の一人だ。だからこそ彼らはこんな状況下でも軽口を叩いていた。

そんな二人は割れた窓ガラスから身を乗り出し、いなくなった同棲相手と世界で一番嫌いな少女を迎えに店を出る。

「あの、お客様？」

「は、い……う？」

しかし、外に出ることは叶わない。店のウェイトレス、シェフ達が総出で彼らを呼び止める。

青筋を立てた彼らの目には怒りしか見えない。

その気迫に上条が押されていると、垣根がぼんとその肩を叩く。

「頑張れ上条」

笑いを必死に堪えながら、彼はまるで他人事のように上条に全てを丸投げした。

哀れな不幸少年を笑う彼も十分不幸な少年ではあるが、そんなことを知らない彼はめちやくちやに汚れた店内で片方を馬鹿にする。

高校生らしい掛け合いだが、場所が悪い。

冷たく、迫力ある目線を送るファミレスの従業員、イケメンフェイスでせせら笑う金持ちの友人。

上条の何かが弾けた。

「ふ、ふ、不幸だア——！！！！」

悲痛な叫びが彼の中から湧き上がる。

店内に木霊した叫び声が問題を解決するわけではないのに、彼は感情の全てを声に乗せた。

人は切羽詰まると叫ぶらしい。
もはや彼の決め台詞となったその言葉は、小さな店内で虚しく響いた。

32話：痛みを知る人と痛みを知らない人

ファミレスでの一悶着が主に俺のおかげで収まった後、上条と2人でファミレスの近くで突っ立っていた。

そんな上条は闇雲に走るなど俺に怒られ、仕方がないからひたすらインデックスに電話をかけては苛立ちを露わにする。

「くそー電話出ねえ！」

「なにやってんのお前？」

「どこに行ったか聞ければって、お前も天羽に連絡しろよ！」

近くの電柱にもたれ掛かりながら携帯を弄っていたが、あまりの五月蠅さに少しため息を漏らしてしまう。

無駄な体力使ってんじやねえと呆れたように話しかけると、彼は必死の形相でこちらを見る。

「いや、あいつの場所なら分かってるし」

「え？」

「あのクソ女にGPS付けてるからな」

カチカチと操作していた携帯を上条に見せつける。マップと位置情報が表示された画面に一瞬理解してなさそうな顔を見せるが、簡潔に意味を教えると今度はその顔を青ざめさせた。

「それって犯罪……」

「双方合意の上だ。それに他の監視網も使ってるからな」

「それもどうかと思うんだが?!」

慌てる上条を無視してゆっくりと地図が指し示す方角へ足を向ける。

俺らの気味悪い関係性を彼に知られる訳にはいかない。どうせ理解されないのだから。

携帯をしまおうと、折り畳む。だが、畳んだ丁度その時、メールが入った。

舌打ちをして再び携帯を開き、メールボックスを確認するとそこには4つの漢字が表示されている。

「あ?……馬鹿からメールだ」

「馬鹿って天羽のことかよ。あいつ結構余裕だな。それでなんだって？」

差出人は世界一嫌いな女のもの。

誘拐されているというのに、脳天気なやつだ。ぽちぽちとメールを確認するとそこには「気にしなくていいから、垣根くんは帰って大丈夫だよ」なんてくだらない内容が書かれていた。

ふざけた内容のメールは俺の苛立ちを増幅させる。

「……気にすんな、だとさ」

俺をなんだと思ってる？

弱いと本気で思っているのか？

泣き叫んで助けを乞えよ。

弱いことを認めろよ。

気持ちが悪い。気味が悪い。

俺を弱いものだと思つてあんな女が憎くて憎くてたまらない。

大好きだとか、赦すだとか、幸せにしたいだとか言っておいて、肝心な俺の第二位としての誇りを無残にも踏み荒らすあの女の矛盾する行動が気味が悪くて仕方がない。

感情を抑えて呟いた自分の声はやけに冷たく聞こえた。

「ま、天羽ならそう言うだろうな」

だが、俺の禍々しい感情とは違い、上条はまるでそれが当たり前のように肯定した。

「あ？」

「アイツ、結構辛辣だろ？」

アレを解っているかのように眉を八の字にさせて笑う。

まるで親しい人のように、まるで全てをわかっているかのようにやめろ。

あれを理解するのは俺だけだ。あの気持ち悪い女の深淵を理解出来るのはお前じゃなくて俺だ。

「……そうか？好き好き言ってるイメージしかないが」

お前は言われたことがないだろう、大好きだと、幸せにすると、天国に連れていくと、赦してあげると。

アレが求めるのはいつだって俺で、犬のように「垣根くん」ときゃんきゃん鳴きながら付けられたリードで首を絞めながら俺を振り回すのだ。

それを知らないお前に、彼女という化け物を理解出来るはずがない。

「うーん、アイツ自身は俺らを好きだとは思っただけど、俺らがあいつを好きになるとは思っただけじゃないんだよな。平等に見てるってか……だから自分のことあんま話さないし。俺らあいつのことあんま知らないんだよな」

「それはねえな。あいつ病院の患者から感謝されて色々貰ってるし、喜んでるぞ？他人が自分を好きになるって事実はわかっただろ」

上条から出されたアイツの思考パターンは随分と的外れなものだった。

アレが好意を理解してない？

患者からはプレゼントを貰って、上条からは心配されて。それを受け取ってるじゃないか。

誰よりも人を愛する彼女が他人の好意に気が付かないわけが無い。

それを受け入れるかどうかは別として。

「あー、あのアクセだろ？それなんだけどさあ……垣根、お前さ、世話になったナースに感謝の気持ちだけで高級な指輪だったりピアスだったり送るか？」

「は？送るわけねえだろ、本命じゃあるまいし」

「だよな？でも天羽はアレをただの感謝の印としか思っただけなんだぜ？」

突然振られた質問に少し戸惑いながらも冷静に答える。当たり前なことを聞く彼の意図がイマイチ分からない。

理解できない質問に首を傾げていると、上条は乾いた笑いを見せた。

「本命にあげるようなプレゼントをただの感謝の印だと思っただけで、誰かが自分にそういう気持ちを抱くって思っただけで証明になるんじゃないか？」

彼の言葉がすつと、腑に落ちる。

そうか、彼女の気持ち悪さのひとつはそれか。

少しづつ理解する。あの女の気持ち悪さを。

俺を好きだと言っておきながら、俺が彼女をぞんざいに扱うことに不満は言わない。あいつを嫌いと言っても傷一つ着かない。

だってそれが彼女の当たり前だから。

誰も自分を愛さないという凶悪で強烈な思い込み。パラノイア思考、愛着障害。

彼女はいつだって傲慢で強欲、誰もを愛し、自分を過信するナルシズムに侵された精神をもつ。しかし誰もを受け付けない心の聖域と自分が愛されるわけがないと卑下する精神が同じように存在する。

アンビバレント、二律背反。相反する精神が彼女を作り上げる。

「……お前がそれを言うのも、アホらしいけどな」

そんな単純なことを気づかせた上条に精一杯の皮肉をぶつけると、彼はきよとんと目を丸くした。

「めんどくさい事になったにやあ」

どこかのビルの屋上、心地よい風が頬を撫でる。

縄に縛られアンテナのような建造物の下でインテックスちゃんとして二人で正座させられている現在、あたしは大きなため息と共にやるせない言葉を漏らした。

「ごめんねけいと、私のせいで」

「んー？インテックスちゃんのせいじゃないよ。あたしが好きで着いてきたんだから」

そのため息に罪悪感を覚えたのか、インデックスちゃんは悲しそうに目を伏せる。

だが、その感情はお門違いだ。ここに来たのはあたしの意思、間違っても彼女のせいではない。

しかし、流石シスターというべきか、あたしが励ましても顔は晴れぬまま。なにかふざけたことを言うべきか、それともシリアスに励ました方がいいのか。

「ほ、ほら、縄で縛られるなんてあんま無い経験だし、攫われた方がよりお得っていうか、ね？だから落ち込まないの！」

前者を選択し、とりあえず笑わせようと適当なことを抜かしてみるのが、逆効果。

憎悪、嫌悪、憧れなどを全部混ぜたような視線をある一点に向けた。縄に縛られたことにより嫌という程存在感が増したそこを凝視する彼女はあまりにもこの状況に似つかわしくない。

「……大丈夫、インデックスちゃんも育つから」「べ、別に胸なんて見てないんですけどっ」

呆れながらも彼女に優しく言葉をかけると、逆に怒られてしまう。インデックスちゃんとは恐らく1、2歳差。それなのに身長でも体格でもあたしの方が色々大きい。彼女もイギリスの血が入っているはずだから、あたしと似たような感じのはずなのにね。まあ人それぞれ成長は違うのでなんとも言えないが。

そもそも、彼女は守られるヒロインとして描かれている。胸が小さいのも、背が低いのもきつと保護欲をそそるため。誰だつて173cmのお姫様は嫌だろう？

アメリカの16歳男子の平均身長ドンピシャな女を守ろうと考える読者は多分居ない。ていうか居て欲しくない。

「20歳くらいまでは成長し続けるから、大丈夫だよ」「だから違うっ！」

人間、20歳くらいまでは胸も背も成長するものだ。そしてそれをあたしは前世でよく知っている。

今のあたしは高校1年生、成長期の真っ只中。前世と同じように成

長するのなら高校卒業までに身長は30cm伸びるし、胸だつてこれ以上デカくなる。

自分の経験によって裏付けされた事実をインデックスちゃんに伝えると、彼女は狼狽えながら否定した。そしてそれ以上墓穴を掘らないようにか、別の話題を口にする。

「そ、それよりどうするの？ 頑張れば逃げれるかもよ？」

結び目を解けると自信満々の彼女はあたしに逃亡を立案した。とても素敵な提案だが、あたしはそれに首を横に振る。

逃亡なんてメリツトのないことをする気にはなれなかった。それに、この話は誰も傷つかない、誰も不幸にならない(宿題が粉々になった上条くんは別枠)

そんなことを思いながらあたしは物語の正しい結果をインデックスちゃんに伝えた。

「平気平気、上条くん来るし、このままで平気でしょ」

正しい結末、それは上条当麻が助けに入ること。

垣根くんは厄介事に首を突っ込むタイプじゃない。だからあたしは彼が来ないかのような言い回しをした。

後ろ手で持ったスマホで送られたメールはきつと彼に届いているはず。

「ていとくは？ その言い方だと来ないって感じるけど……」

「来ないでしょ、あの子あたしのこと嫌いだから」

「嫌い？ そうは見えないけど」

メールを考慮しても、彼が来ないことはわかっている。

たとえば彼が「優しい子」だとしても、彼はなんだかんだ現実主義者で面倒事に関わるタイプではない。今まで彼がイベントごとアクセラレータに関与していたのはあたしが振り回していたからで、一方通行の時のように、あたしが呼び掛けないと現れやしない。

それに、彼を除いてもこの世界の誰かがあたしを助けに来ることはない^とあたしは知っている。

上条当麻は可愛いらしい同居人の為に尽力するのであって、決してあたしの為ではないのだから。

「嫌いだよ。てか、あたしの事を好ましく思う人はこの世に居ないから」

「そんなことないよ？けいとはとうまと違ってご飯くれるし、私は好きだよ？」

「インデックスちゃん、それはただの感謝、好きとは無縁の感情だよ。あたしは誰にも好かれない、それがこの世界のルールなの」

この世界の全てがあたしに大きな感情を抱くことは無い。だってあたしは物語の登場人物ではないのだから。

あたしはこの世界の人間じゃない。あたしの体は元いた世界で作られて、あたしの魂は元いた世界で育てられた。

「体に巣くう腫瘍を愛する人は居ないでしょ？」

あたしは唯一のプレイヤーキャラクター。NPCとは違うシステムで構築されている。

この世界が本物でも偽物でも、それがルールであり、真理。

システムが、コードが、プログラムが違う。この世界の外から来た人外。

たとえばあたしが人間であっても、あたしはこの世界の人間じゃない。

それはNPCだけで構築された箱庭では異端であり、腫瘍。

システムが違う汚物。

「それってどういう……」

「あ、ほらほら、なんか、完成したみたいだよ？」

それ以上聞いて欲しくない。その一心で話題を自分から空へと変える。

頭上を見上げると、何本もの縄が自分たちのいる中央の電波塔らしき建造物から放射状に垂れ下がっていた。それには御札のようなものがついており、それがなんだかスピリチュアルな印象を与える。

「これは……神楽舞台？」

「神楽……って神社で巫女さんが踊ってるやつか」

「そんな大それた代物ではない。さしずめ盆踊りの会場といったところだな」

縄が張り巡らせた空を眺めていると、大男が話に入る。

名前も覚えていない一話限りのキャラクター。けれど彼が自分の正義に基づいて愛する人を助けようとしているのは知っている。

だからあたしは彼の行為に口出ししていない。

「そんなものを用意して、私に何かを憑かせる気?」

「なに、結界を張ったのはこいつの威力を少々増強しようという魂胆だ」

シリアスな空気の中、がちやんと音を立てて男が腕にはめたボーガンのような武器を見せる。現代チックで機械じみた風貌、けれどどこかの和風なその弓には矢が無かった。

「梓弓? 日本神道で使う霊装だね」

「なにそれ?」

「日本神道の神事で鳴らす弓のこと。口寄せをするときとか、魔除のために鳴らすんだよ」

魔除のために鳴らす、その言葉がなにか得体の知れない興奮をあたしに与えた。それが本当なら、あたしはこの場で役に立つのではないか?」

冷たい汗が頬を伝う。

あたしが出来る子だと、証明出来るのでは?

一方通行のとき、この間の御使エンゼルフォール墮しアクセラレータのとき、あたしは失態ばかり見せている。最近のあたしは何も出来ていない。

今日、あたしは再び神とやらにあたしが出来る子だと見せつけられるのでは?」

興奮と歓喜。

見返せるかもしれないという事実があたしの心臓を飲み込んだ。

「素晴らしい、こちらの文化圏もカバーしているのか、その魔導書図書館は」

そんな興奮をよそに、男は話を続ける。

「俺の元々の威力はせいぜい心に衝撃を加え、歪みを正す程度の力しかない。しかし、条件さえ揃えば、相手の心を詳細に読むことが出来る」

弓を見つめ、男はその巨体でインデックスを見下ろす。

閉じられた目には覚悟を決めた意思が嫌という程感じられた。

「そう、胸の内に必死に隠している10万3000冊を暴くことなども」

「だめ！私以外の人間が魔導書に触ればどうなるか、あなただって分かってるでしょ!？」

「無論、百も承知」

覚悟を決めた男に何を言っても無駄だ。例えインデックスちゃんが事実を提示しても、その先の不幸を教えても、その意思が覆ることは無い。

腕を伸ばし、弓が今まさに引かれる。

刹那の時間、瞬きの一瞬、あたしは身を乗り出して「待つて」と言葉かけた。

「死なない方法、一つだけあるよ」

弓を引くその一瞬、何かが起こる前にあたしは力強い声を彼の耳に届く。

「……何を言っている?」

「言ってたじゃん、梓弓は本来魔除に鳴らすものだって」

間一髪のところまで動きを止めた男に笑みを見せてあたしは彼に語り掛けた。とても馬鹿げた空論、本当に出来るかわからない空想。けれど、話さずにはいられなかった。

「あたしに全部押し付けていいよ。アンタの痛み、邪気を」

今のあたしにできること、あたしがこの場にいる理由。それはきつと誰かの痛みを受け入れるため。

誰かのための正義を貫く人に祝福を捧げるため。

目を閉じる大男は静かにあたしの言葉に息を呑んだ。

「きつと、そのためにあたしがいるんだから」

男が弓を引く。弦が震え、まるで調律されていない弦楽器のような嫌な音が鼓膜を揺さぶった。

音と共に縄が紫に光ると、何かが体から湧き上がる。

鉄の匂いが内側から這い上がり、口腔へ上り詰めた。思わず吐き出

した鮮烈な赤。

「っ、かは」

「けいとー！」

それは血液だった。

酷い痛みと血腥さが頭を埋め尽くす。口から零れた血液の塊はボタボタと真つ白いワンピースを汚す。

醜い痛みが体を支配した。焼けるような、凍えるような感覚。久しぶりの感覚に脳はブレる。逆流する胃液に、血液。鼻からも血が流れ、瞳がチカチカと瞬く。

弾けるような痛みと、紙に垂らしたインクのようにじわじわと広がる痛みが交互に体を侵食する。

「痛く、無い？本当に……？」

男はほとんど血を流していなかった。少量の血液が彼の口から零れるが、彼の口ぶりからして痛みは無いようだった。

それに安堵し、少しだけ口角を上げる。ふらふらと立ち上がり、縄を解く。

血に濡れてドロドロに崩れた縄を解くのは至極簡単なことだった。再度痛みを体から無くし、ゆっくりと足りなくなった血液を量産しだす。

少しずつ体調を整えながら千鳥足で立ち上がり、男に近寄ると不思議なことが起こった。

徐々に思考が男とリンクしていくのだ。どうやら邪気と一緒に彼の脳内の邪気を孕む情報も押し付けられているらしい。

彼の精神が流れ込む。魔導書図書館で一人浮かぶ男の精神が。

思わぬ副産物、思わぬ贈り物。彼を手助けするだけでなく、喉から手が出るそれを手に入れることも出来るのか！

彼の開いた魔導書が頭に濁流のように押し寄せる。

「抱、朴子……なんだ、不老不死って、あたしがしてることと変わらな
いじゃん」

男、闇咲逢魔の毒々しい感情と共に一冊の書物があたしの中に流れ込んだ。

彼が手にしたのは抱朴子という魔導書。

中国文化における不老不死、仙人になるための魔導書、あらゆる病を解く薬を作る鍊丹術が載っているそれは、あたしに必要な本だった。

あたしが欲しいのは誰かを守る手段であって、自分を守るそれじゃない。

だからといって自分が自由に魔導書を手にすることも出来ず。ただただ苦痛だけが押し寄せる。

神経回路を切っても体をのさばる痛み。心の痛み。

どんなに内臓の腐食を戻しても、どれだけ傷口を治しても、どんなにホルモンを調整しても、心臓につけられた精神の痛みは消えることはない。

痛みを消すことも出来ないあたしを神は嘲笑う。

ぬか喜び。馬鹿みたいな自分に嫌気がさす。

神が、あたしの糧になるものを与えるわけがないだろう。単純な話だった。

神に見放されている。その事実が重くのしかかる。

名誉挽回のラストチャンスは、愛からくるものではない。きっと、あたしを苦しめて、痛めつけて、神を自称する忌々しい野郎が悦に浸るためのお人形遊び。

愛されているのならば、元々あたしは死んでいない。妹は不幸じゃなかった。

自己嫌悪が痛みとともに体を蝕む。

「術者の痛みをけいとに押し付けているの？そしてリンクした痛みに乗って魔導書の情報も……」

すつと、闇咲さんの前に立った。魔導書共に流れてくる彼の感情は二つ、愛する人を助けるための正義と、あたしへの罪悪感。

その罪悪感を払拭するため、あたしは笑顔で立ち続ける。心の痛みなんてどうだっていい。

愛すべき隣人が傷ついているのならば、あたしはそれに応えなくてはならない。

「ありがと、あたしも見てみたかったの魔導書を。欲しかったやつじゃなかったけど」

「どうして!?!けいと!言ったよね!毒だつて!」

彼の罪悪感を消し去るため笑顔で感謝を伝えると、インデックスちゃんが声を張り上げた。

耳を切り裂くその声にあたしは身体を震わせる。

彼女に向き直り、男に背を向けると再び笑みを貼り付けた。随分と昔に言ったことをよく覚えていると、感心してしまう。

「諦めきれないよ。誰かを救うすべがあるのなら、あたしは意地でも手を伸ばす」

その笑顔のまま、闇咲さんに振り返る。振り返りざま髪と共に揺れる真っ白いワンピースは、醜い赤に侵食され見る影もない。

目を細め、同情するように、感情移入するように彼に笑いかける。

「あんたも同じでしょ?」

お姉ちゃんはなんでも出来なきやいけない。

いつだつて上に居なくてはいけない。挫折なんてしてはいけない。

だからこの痛みは挫折なんかじゃない。

生まれてから足が動かない愛しい妹。

覆せない運命を受け入れて可愛らしく笑うあの子。

彼女を救えなかった罪はあたしはこの世界の理不尽と戦うことで償われる。

あたしはあたしを傷つける。

妹垣根の代替品帝督を助けなくてはいけないから。

それがあたしの使命だから。贖罪だから。

あたしが傷つくのはあの子のせいじゃない。

「違うよ!」

その思考を遮るように白い少女が叫ぶ。

アンティークなティーカップのような白と金を纏うシスター。赤と対極にあるその色が強烈に目に焼き付いた。

白の女王と赤の女王。目の前の少女と自分の赤く変色したワンピースに、鏡の国のアリスに登場するキャラクターが頭に浮かぶ。

痛みを知る白の女王と、自分本位な赤の女王。

今の状況を語るにふさわしい。

「あたしは分かる、その梓弓、威力が増幅されすぎて二人の心があたしの中に逆流している。だから分かるもの」

「あたしの、心？」

白の女王があたしの首を刈り取らんと駒を進める。

「ふたりとも、大切な人を愛していたんだよね。だからこそ、命をかけてでも助けたかった。助けるためには他人を傷つけて、罪を侵さなければならなかった。だからその責任をふたりとも愛する人に押し付けたくなかった」

その言葉はあたしを追い詰めた。

鉄の味と噛み締めた苦味が口の中で混じり合い、吐き気を催す。

「だったら、ふたりとも破滅しちゃだめなんだよ！こんな薄汚れた魔導書に頼るなんて方法じゃダメ！」

インデックスちゃんが涙ながらに叫んだその刹那、ビルの内部に唯一繋がる扉が勢いよく開かれた。

その扉から二人の少年が飛び出す。そのうちの一人、黒髪の少年が伸ばした右手は張り巡らせた縄を全て打ち消した。

「とうまー！」

「インデックス！」

神を討ち滅ぼす右手を持った少年がヒロインを助けに参上する。

そのヒーローの隣には、あたしが今一番会いたくない少年が眩しいほど整った顔で佇んでいた。苛立ちと不安が心を吹き荒ぶ。

「垣根くん……なんで、ここに」

「ナジだよナジ、俺がいなかったらこんな早くに着いてねえぞ？この馬鹿」

奥歯を噛み締め、腹から押し出すように言葉を呟いた。怒気を含んだ彼の声が益々不安を呼ぶ。

痛みは不安に押し潰され、感じることは無くなっていった。

「自ら危険に飛び込んで欲しくないってのに、なんでそういうことするかなあ」

「お前が言ったんじやねえか、妹を心配するのが兄だつてな？」

「はは、かつこいいけど、アンタがあたしの上になれる訳ないでしょ？」

笑顔を見せながらも、彼の目は笑っていない。なんとも言えない威圧感と、彼の怒りが体にまとわりつく。

「……悪いのか」

「あ？」

膠着した状態のあたし達の間にも、闇咲さんの巨体が割ってはいる。何かを掴むように伸ばした腕には黒い弓が厳つく鎮座していた。

「例えこの命と引き換えにしても誰かを守りたいと思うのは悪いことなのか！」

金属のぶつかる音がした。弓が引かれ、風が吹く。

しかし真っ白い天使のはねがそれを跳ね返す。ぶつかった風は跳ね返り、あたし達目掛けて飛んできた。

あまりに強い風は体を吹き飛ばし、あたしと大男を地面に叩きつける。夏の夜が作り出す床の熱さが体を電気のように走り抜け、喉から血を吐き出す。小さく呻き声が溢れても、心配する人なんか居ない。

痛みなんか感じないのだから。

「悪いさ、悪いに決まってる」

「天使……？」

地面に倒れるあたし達をまるで可哀想な人を見るように、彼はその黒い瞳で捉えた。

あたしの人生を否定しないで。

あたしを哀れだなんて思わないで！

久しぶりに感じる熱さに耐えながら、ゆっくりと体を起こす。

彼に言つてやらなきやいけない、彼に教えなきやいけない、あたしが間違つてないことを。

「……悪くなんてない、悪くなんてない！それが悪いはずがない！愛しい人の死が肩代わりできるのは尊いことだ！あたしは間違つてなんかない！」

声を張り上げて立ち上がると、真っ直ぐ彼の瞳を見る。硝子玉のよ

うな目はあたしの奥を見据えていた。

じわじわと蝕んでいた嫌悪が高波のように心を喰い尽くす。

侵食された心から漏れる禍々しい感情は身体を伝い放出された。演算として放出された感情は空気を揺らし、他人を飲み干していく。誰にも聞かれたくなかった。誰にも見られたくなかった。

「なっ、前がっ」

「な、なに、これ、聞こえないっ」

人を揺さぶるほどの演算が放たれる。

聴覚の遮断、視神経の寸断。それらを引き起こす演算はこの場の全てを痛めつけた。

悲鳴と恐怖がこの空間を支配している。ゾンビのように手を突き出して滑稽に歩き回る人、その場でうずくまる子。それぞれの反応の違いは見るに耐えない。

言葉を発することも、考えることも、聞くことも、見ることもあたしが許さなかった。

ただ一人、強者を除いて。

「テメエらみてえなやつはいつつもそうだ。いつだって自分を数に入れない、自分のことなんて興味が無い。自己犠牲型の自分本位で博愛主義なエゴイスト共が」

立っていたのは二人。

弱者であり、強者。

運命を決められた弱者で、最強^{レベル}の称号⁵の第二位に君臨する強者。

そして誰にも勝てない不死の弱者で、運命を掻き乱す強者。

「お前の大切な人はお前が大切じゃねえのかよ、テメエは誰かに死なれることの痛みが分かんじやねえのかよ」

そしてその一人が牙を剥く。

彼はあたしじゃない誰かに訴えているようだった。まるで自分の後悔を、まるで自分の体験を思い出しているかのよう。

あたしの知らない誰かと重なるような瞳は酷く恐ろしい。

アンタは何を思ってるの？何を考えてるの？

「目の前で誰かが苦しんで、傷ついて、でも自分には何も出来なくて、

どうしようもない苦しみを知ってんだろ？残された人が大切に思ってるお前を無くして悲しまないと、なぜ思う。テメエは自分に自信があんのか卑下してんのかハッキリしろ！」

「うるさい！うるさい！あの子が泣くことよりも死ぬ事の方が嫌なことに決まってる！救われぬまま死んでしまうことの方が何よりも悲しいに決まってる！あたしが死んだって彼女は幸せであり続ける！」
くらくら、ぐわんぐわん。目眩がする。

認めたくない現実に、諦めきれない幻想に挟まれて抜け出せない。
乱れた演算はパニックを引き起こす。口が止まらない。本音がロボ口と血液と涎の混じった口内から吐き出されていく。

誰かに死なれることの痛みなんか知らない、死んだのはあたしだから。

死の運命を肩代わりしたのはあたしだから、悲しませたのはあたしだから。

だからそんな痛み、知りたくもない！

「焦って、辛くて、苦しくて、痛くて、怖くて、震えて、叫んで、涙が出て！」

憎むような、咎めるような、悲しむような感情をぶつけられる。

吐き気を催すような御託を並べてあたしを否定する彼にあたしはじくじくと醜い思いに駆られた。

静かに語られるそれは主人公の言葉。

お前の台詞じゃない！

「テメエはそれを与えてるって自覚はあんのかよ。そんな重い衝撃を、大切な人に押し付けてるって分かってんのかよ！」

お前にだけは言われたくない、心が煮え滾る。

「神の理不尽に足搔いても救えない！何をしたって空回り！そんな出来損ないが愛しい人のために命を使って何が悪いの!?!救いもできず、涙も拭けず、何も出来ない死に損ないを神も、誰も愛するわけがないでしょう?!だからあたしはここに立ってるのよ！」

息が上がり、目眩がしながらも、あたしは彼の言葉を斬るように一心不乱に叫ぶ。

もはやただの口論だった。

自分の主張を曲げない二人で行う不毛な議論。無駄と分かっている、伝えたい。

あたしが間違っていないことを。

そう、あたしは間違っていない。

この世界がそれを立証する。

妹の死を肩代わりした現実がこの世界へ導いた。この世界に生まれたことを、力が与えられたことを、垣根くんと出会ったことを、他でもない彼に否定されなくなかった。

「俺もテメエのことなんざ大嫌いだ！愛してなんかない！好きなんかじゃない！だからどうした！俺以外にお前を好きだと言うやつがいるのをちゃんと理解しろ！」

垣根くんの言葉は何一つ理解できない。それはあたしにとっての間違いで、知りたくないことだから。

喉を痛めて叫ぶと、目眩が酷くなり、吐き気が込み上がる。酷くなった目眩は、ただでさえ流れ出た血液で貧血の体を崩壊へと導く。

「いるわけねえだろ！神だつて見放すあたしを！この世界は認めない、が、はっ、おえ」

言葉を言い終わる前に、ぷつり、糸が切れたように体が崩れ落ちた。鼓動は激しく体に響き、鼓膜の奥にある蝸牛が耳鳴りを引き起す。逆流する胃液は吐き気を催し、体温は上昇していく一方。朦朧とした意識と脱力した体は酸素を欲しがり、呼吸を乱す。

「あ、れ、見えるようになってる？耳も……」

他人を蝕む演算は掻き消され、少年達は何があつたのかわからぬまま顔を上げた。

高鳴る胸の鼓動、脱力感、乱れた呼吸。自身が観測した病状から逆算して、限りなく本物に近い推論を導き出し、病名を探し当てる。

この症状をあたしは知っていた。

それは酸素欠乏症。

「チアノーゼって言うんだっただか、顔が真っ青だな？パラノイア思考のお姫様」

力なく横たわるあたしを、垣根くんは勝ち誇ったような笑みで見下ろした。

わざわざ羽を見せたのはこの為か。

策に嵌るとはこういうことを言うのだろう。

魔術の風を未元物質ダークマターで跳ね返したものだと思っていた。けれど、実態は違う。

彼は風を受け流しただけだった。

跳ね返されたと思っていた風は彼が巻き起こしたものだ。風に乗せて酸素を分解する未元物質ダークマターでも散布したのだろう。

とんだ少年だ。

「……姫じゃ、ないし」

「嫌いになったか?」

「まさか、なんないよ、この程度で」

朦朧とした意識で受け答える。口元もまともに動かない。

酸素欠乏症、通称酸欠の症状のひとつに思考能力の低下がある。体に関する能力は体の不調が色濃く影響される。とくに精神的なパニックと酸欠や薬による思考能力の低下はどう足掻いても治せない。酸素が無くたってあたしは死なない。自分で血液を増やし、細胞を活性化出来るから。

けれど頭に血が上ってまともじゃない演算は生き地獄を与え、殺さずにあたしを生かす。

ギリギリの生。綱渡りのようなもの。

「上条・そちの男はお前が何とかしろ。俺らは帰る」

「え?お、おう」

上条くんに事後処理を任せると、垣根くんはあたしの腕を掴む。

彼の手からじわじわと伝わる暖かさは、嫌気が差すほどに熱い。

「オラ、帰るぞ」

「おいてって」

その熱に苛立ち、腕をずるりと彼の手から滑り落とす。

しかしそれがわざとだとわかつている彼は、小さく舌打ちすると今度は跡ができそうなほど強く腕を掴んだ。痛みを感じないとはいえ

少し不快感を感じて彼を睨むと、真つ黒い瞳で見下ろされる。まるで拒否したら殺すと言っているようだった。

「つたく、面倒な女だなテメエは」

「いや、垣根くんのせいじゃん……」

おぶろうとしているのか、しゃがんで腕を持ち上げたあたしに背を向けた。そのままあたしの腕を肩に掛けてもう片方の腕を取るが、それを振り払う。

しかし、我が儘言うなど文句をつけられ、睨まれてしまった。それでも意思は揺るがない。

あたしが弱いと認めたくないのだ。おぶられるのは2回目、こんな失態を認めたくないかった。

それに、真つ赤に染まったワンピースを彼に押し付けたくない。彼を汚したくない。

「血、うつるから」

「誰に物言ってるんだよ、テメエは」

察してほしい、なんて他力本願な本心を言葉に包み、吐き捨てる。だが彼は頑固で、プライドが高い。あたしの発言を鼻で笑うと、床に撒き散らされた血だまりを指差す。

首を傾げ、動かない頭でぼーつと見ていると、じわじわとその血だまりが消え失せていった。

見えない何か血を侵食していくように、赤の下から徐々に隠れていた床が露わになる。

そして同時にあたしのワンピースも赤から白へ、オセロのように色が変わっていく。

「…すごい」

「褒め称えて崇めてくれたっていいんだぞ？」

こんな芸当ができるのはどう考えても垣根くんだけ。やはり人体を砂に変えてしまうようなことができる彼にできないことはあまり無い模様。

能力だけなら多分一方通行より応用ができるし、性質そのものが常軌を逸してる。能力だけは。

なんだかんだアホの子の気がある彼だからこそ二位にいるのだと、なんとなく感じる。可愛げがあるのでそのまま置いてほしい。

「いいこ、いいこ、かつこいいよ、とっても」

「やっぱやめろ」

そうやって子供みたいに振る舞う彼はやっぱり「年下」だ。そんな精神的年下、しかも弟のような彼におぶられる自分は酷く滑稽に感じる。

軽々と背中につけられ、そのまま出口へ向かった。戻ってきた酸素と徐々にクリアになつていく思考、唯一心配なのは彼の上で吐かないかだけ。

「けいと」

彼の背中の上でぐったりしているとインデックスちゃんに呼び止められる。

闇咲さんと上条くんは彼女のことを待っているのがインデックスちゃんの肩越しに見えた。彼らをほっぽいてまであたしに話しかけるとは、なんの御用だろう。

どうしたのと、掠れた声で優しく話しかけると、彼女は少しためらってからゆっくりと口を開いた。

「さつき、けいととの感情と一緒に少しだけ記憶が見えたんだ」

「……垣根くん、降ろして」

それは爆弾のような一言だった。

あたしの記憶、あたしの思い、それは決して誰かに言うてはいけないこと。

一度垣根くんに降ろしてもらい、彼女に近づくとあたしは低い声で小さく呟く。聞かなくてはならない、何を見たのかを。

「……なにをみた」

「車椅子に乗った女の子と、けいととの二人」

覗き見られた記憶は最悪なことに、誰にも見せたくないものだった。

垣根くんにはしか教えていないあたしの秘密。

「でもね、けいと、大人だった。今より背も、胸も少し大きくて。顔つ

きも髪色も全然違った。しゃべる言葉も、理解できなかつた。日本語なのに、理解できない言葉」

凍るように冷たい沈黙の中、インデックスは語る。

化け物を見るような、怪物をみるような目を彼女はあたしに向けた。

畏怖を孕ませた瞳があたしを捉える。

「けいと、貴方はどこから来たの？」

「ふ、はは、どこから？ 決まってるじゃん、天国だよ、天国。はるばる、空から落ちてきたのさ」

彼女の言葉に天を指して答えると、訳が分からないといった表情を浮かべた。

一度死んだ魂は、体と共に空に堕ちたのだ。

彼女に分かるわけもない。

33話：青

夜の帳が落ちる頃、白髪のを靡かせ、細い体の子供が黄色いスポーツカーを覗き込む。

誰もいない道路に誰もいない建物。立ち入り禁止の札が立てられた出入口から難なく侵入したその人はスポーツカーの外で気絶する男に目も向けず、シートに横たわる幼い少女に駆け寄った。

「芳川か、ああ、ガキなら保護したぜ」

黒いガラパゴスケータイで知り合いの研究者と連絡を取ると、つい最近最弱に負けた最強、一方通行は幼い少女の様態を素人目で確認する。どうやら彼女に外的損傷は見られず、暴行を加えられたことは無さそう。

しかし、体に異常は見られないと言っても、幼い少女の額に取り付けられたものは今の状況では少し不可解だった。

「あ？おい、クソガキの顔に電極みてえのが着いてるぞ」

「恐らく、妹達の身体検査用キットだわ」

少女の熱っぽい顔についた電極を電話相手である研究者、芳川桔梗に尋ねると、彼女は簡潔に答えた。

高級そうなスポーツカーのシートに横たわる少女は一方通行が殺してきた二万のモルモットを束ねる司令塔、その個体名は最終信号。その事実を知らながら、彼は今まさに彼女を救おうとしていた。

他の個体とは違う彼女は幼さと絶対的な支配権を持つ。彼女は二万のホムンクルスを統べる女王。その性質は悪人を呼び寄せ、今の誘拐まがいな状況を作り出す。

彼女を蝕むのは醜い病。全てを失った馬鹿な男が植え付けたそのプログラムは、世界に散らばる妹達に他者を傷つける命令を伝達させる。媒介となつてしまったその幼い子供は頬を赤くさせ、乱れた呼吸で必死に生きていた。

スポーツカーの外で気絶するその誘拐を行った腹立たしい悪人に舌打ちをすると、一方通行は最終信号に付けられた電極から伸びるコードの根元、パソコンのような機械にざっと目を通す。何かの波形

や数字が所狭しと並べられているデスクトップは彼の知らない単語で埋め尽くされていた。

「BC稼働率ってのは？」

「それは脳細胞の稼働率ね。Brain cellでBC」

「脳細胞の稼働率？……なあ、この機械を使ってウィルスを駆除できねえのか？こっからじゃ連れて帰るのに時間かかるしょ」

「無理ね、書き込みをするには専用の培養器と学習装置が必要なのに」

パソコンに映る文字を必死に目で追いながら彼は芳川に提案するが、呆気なく彼女に否定されてしまう。どうすればいいかと頭を悩ませてしていると、電話越し、なにか騒がしい音が一方通行の耳に入る。それは車のモーターのような低い音。

「……あ？おい、お前今」

「そう、私は今そちらに向かつて運転中。君が研究室に引き返すよりは時間を短縮できると思ってね」

彼女は一方通行の元に向かつていた。必要なものを全て持って悪夢にうなされる幼い女王を助けに車を走らせる。

「ウィルスコードの解析は終わってんのか？」

「八割方って言ったところかしら。午前零時までには間に合うわ」

「ったく、何処まで手間掛けさせやがるつもりだ、このクソガキ」

安堵のため息が一方通行の口から零れる。

しかし安心もつかの間、いきなり最終信号の口から解読出来ない無秩序な音が流れ出た。まるで壊れたスピーカーのように混沌とした文字の羅列を叫ぶ少女に一方通行は狼狽える。人が口にすることも出来ないような高速で無機質な声は彼女が作り物だと改めて一方通行を痛感させた。

「おい、芳川、これはどうなってる！」

「ちよつと黙って！」

その悍ましい音に恐怖を煽られながら一方通行は芳川に苛立ちと不安をぶつける。遮る一方通行の大声を咎めると、芳川は最終信号の小さい声を必死に鼓膜で捉えた。

数字のような言葉の数々、そしてその間に混じるアルファベット、

妹達をよく知る芳川は至極簡単に答えにたどり着いてしまう。地獄のような真実にたどり着いてしまった。

「やっぱり、そうなのね」

「なんだよ、何が起こってる」

「ウイルスコードよ、もう起動準備に入ってるんだわ！タイムリミットまでまだ4時間もあるのに……まさか、ダミー情報だったの？」

ブツブツと電話越しに呟く芳川は切羽詰まった様子だった。そして声色は一変し、研究者として彼女は決断を下す。

「聞きなさい、一方通行。嘆くのはまだ早いわ。君は手を打たなければならぬ」

「手？まだ手があんのかー」

「ウイルスは御坂ネットワーク上に配信される前に各妹達シスターズが逆らえない上位命令文に変換させられる。それには約10分かかる」

低い声が携帯電話のスピーカーから流れる。彼女の言わんとしていることが分からないほど彼は愚かではない。

携帯を持つ手に力が入る。汗が頬を伝う。

「もう分かってるわね？君にできることはただ1つ」

分かりたくない、知りたくない。初めて感じる感情を塞ぎ止めて一方通行は彼女の言葉を待つ。

「打ち止めの処分、その子を殺すことで世界を守るのよ」

彼女の言葉は冷酷で、恐ろしかった。

「……諦めろってか」

「そうなるわね」

諦め、それは最強である彼がしているはずがない。プライドを傷つけることなどあってはならない。

あの日の頬の痛みだけで十分なのだ。

「切るぞ」

「一方通行！」

ふと、一方通行の頭に嫌いな女が浮かぶ。

明るく、けれど冷めたような金の髪、毛先は甘ったるい牡丹色で、その瞳は緑と赤が混じっていた。嫌い、というより恐怖に近い感情を初

めて一方通行アクセラレータに感じさせた特異な怪物。

——全てのベクトルを操る、それがどんなに素晴らしいことかアンタは分かかってない

——人体の創造を司るあたしに、破壊しか脳がない今のアンタじゃ勝てない

——大好きよ、一方通行アクセラレータ、その愚かさもまとめて愛してる

——愛するアナタに傷ついて欲しくないの、だから終わりにしましようよ

——幸せになりたいなら手伝ってあげる、幸せにしたいのなら手を貸してあげる、だから

——お姉ちゃんの言うことを聞きなさい？

——気味の悪い言葉の羅列、おぞましい瞳の色。

——竜のような恐ろしさと天使のような純粹さ、悪魔のような囁き、神のような傲慢さ。どれをとっても一方通行アクセラレータが思い浮かぶ彼女の姿は異様で、異端。

——けれど、彼女の偽りない言葉に囚われる。

——「くそつ、あれにだけは頼りたくなかった！」

——例え世界が敵に回っても、あなたに正義があるのならお姉ちゃんはおアナタの味方だから

——何かを知っているかのような、全てを知っているかのようなあの女アクセラレータは一方通行に救いの糸を垂らす。

——それが彼女の役割で、使命だから。

——そしてその糸を掴んだのは他でもない一方通行アクセラレータだった。

8月31日、20時少し手前、重い荷物を背負って街灯が照らす歩道をゆつくりと歩く。背中当たる柔らかい何かと、血の匂い、吐息。俺にとっては2度目の体験だった。

俺の部屋で一旦休ませるか、彼女の汚い部屋に捨てて帰るか、病院にぶち込んでおくか、やっぱりあのホテルに置いてくるべきだったか頭を悩ませていると、規則正しい電子音が背中越しに聞こえてきた。

「……電話」

沈黙を破ったその音に背中中の荷物、天羽彗糸が反応する。血反吐の吐きすぎで枯れかけていた声はいつの間にもやら治っており、通常と遜色ない声色に戻っていた。

「鳴ってるな」

「あたしのなんですけど」

「そうだな」

何を言っているのか分からないという風に返答すると、彼女はグラグラと俺の肩を揺らす。癩癩を起こした子供みたいに我儘を言う彼女は姉というよりは妹のようだ。

子供のくせに大人ぶる彼女は実に幼稚で、幼い。

「降ーろーしーてー!」

「は?血だらけ女が立てるのか?」

「もう治ったから!歩けるから!」

おぶられている時は静かだというのに、一度口を開けばこのザマだ。五月蠅い妹分を乱暴にその場に下ろすと、彼女はよろめきながら着地する。

顔色も、呼吸も先程とは比べ物にならないほど落ち着いており、健康そうだ。

俺は今回合わせて3回、取り乱した彼女を見ている。

一回目は神裂火織と初めて会った時。

二回目は彼女の汚い部屋に初めて入った時。

三回目は今日、というか先程。

一回目はともかく、問題は二回目と三回目だ。

前回と今回、それに共通するのは彼女のバイタルの不安定さ。顔色も呼吸も、目の焦点も汗も体温も、あの日と今日は酷く苦しそうだっ

た。彼女は原石で、肉体を構成するほぼ全てを操れる可能性がある。限

りなく正解に近いもしもの話ではあるが、それが正しいのならば精神的な損傷も、肉体的な欠落も治せるはずなのだ。

だというのに、前回と今回では一向に落ち着く気配も、治る気配もなかった。

二回目するとき、彼女は明らかに精神に異常をきたしていた。いつものとは違う、死んでしまいそうな危うさを持つ焦燥的な異常。彼女曰く、それは魔術的な何かで俺が自分に見えたから。

そして今日、彼女は魔術によって肉体の内部を破壊され、俺によって精神的に追い詰められ、どう見ても身も心もズタボロだった。

自分の傷も治せず、そしておそらくだが、インデックスの時のように、外部から肉体に干渉してしまう。そんな芸当が出来るなんて超能力者レベル5でもおかしくは無さそうだが、今はその話では無いので割愛しよう。

とにかく、そのふたつの出来事に共通するのは魔術と精神的な窮地。

けれど魔術は他で見ているし、因果関係そのものはありそうにない。

「そこである仮説を立てる。

もしかしてこいつは、精神的に追い詰められると、パニックになって自滅するのでは、と。

この仮説が正解なら、こいつは自分の体調次第で死んでしまう、世界で最も弱い生き物なんじゃないかと。誰かが守ってあげないとすぐに息を止めてしまうんじゃないかと。

そして、その三つのパニックを治したのは他ならぬ俺。俺はこいつの生殺与奪の権を持っているのではないか？彼女を掌中に収めることが出来ているのではないか？

俺だけが、彼女の手綱を握れる。それがどんなに支配欲と優越感を満たすことか！

俺にはこいつの兄になる才能があるのではないかと、少しばかり真面目に考えてしまう。

「まったく、やっぱホテルに置いてくれば良かった」

「はいはい、ありがと。あー、もしもし?」

五月蠅い少女に少しの苛立つが、兄は妹分の反抗期くらい寛容にならなければいけない。小さくため息をつく、スマホを耳にかざす彼女を見守ることにした。

「一方通行くん……」

「……第一位がお前に何の用だ」

番号も確認せず出た電話は、あの一方通行のものだった。

寛容に受け止めたはずの苛立ちがじわじわとせり上がってくる。彼女の首を刎ねたお前が、どの面下げて彼女に電話なんかする。何を思っただけで差し伸べた手を振り払ったお前が彼女を望むというのだ。

苛立ち、腹立たしさ。そういった無駄な感情が湧き上がる。

「……あー、なるほど、君は今壁にぶち当たってるわけだ」

俺の気持ちも考えずに、彼女は一方通行に明るい声を掛けた。

姉のように、母のように、迷える子羊を導く天使のように、まるで全てを分かっているかのように彼女は淡々と電話越しに天啓を言い渡す。

「一方通行、あなたに出来ること、あるでしょう?」

その乙女は全てを見通す神のように傲慢で愚かしい。虫唾が走るような彼女の確信めいた言葉は、正しく神が示した道のようなものだった。

「全てのベクトルを操る、それは全てのベクトルを制御できるってこと。本当に破壊しか道がないの?」

彼女は忌々しくも、電話相手を信じているようで、聞こえない声に笑顔を向ける。細めた目で遠くを見つめ、相手が最も望む救いの言葉を口にする少女の瞳は何よりも力強い色を輝かせる。

「大丈夫、君の力で誰かを救うことが出来るってあたしが誰よりも知ってる」

確信を持って、彼女は子羊を導く。囁くような低く、優しい声は俺に向けられていない。

「頑張りなさい。お姉ちゃんもそっち行くから。君は最強なんですよ? 諦めるなんて、らしくない」

彼女は一方通行を信じていた。けれど俺を信じていない。その感

情の違いは、その思いの差は、どうすれば埋められる。

何故そいつを信じるのに、俺の強さは信じてくれない。チグハグさと、憎むべき鍾愛は針のむしろのようだった。

「さて、ご覧の通り、用事が出来たので、ここでお別れよ」

劇の終焉を告げるように彼女は仰々しくお辞儀をする。乙女のお姫様のお辞儀とは違う、紳士のようなお辞儀。右足を引き、右手を体に添えて、優雅に。

「じゃーねん」

「待て」

ニコニコと目を細めて笑い、そのまま暗闇に消えそうになる彼女を肩を掴んで引き止める。

不思議そうにしながら立ち止まり、彼女は首を傾げた。まるで何が起こっているのか分かってないようだった。

「なぜそうも首を突っ込みたがる」

「なぜって……あたしは全ての愛する人間を救わなくてはいけないから？」

当然のように、それが当たり前のように彼女は声色を変えずに答えてみせる。間違いないかののように振る舞う彼女が恐ろしかった。

「一方通行を助けるというのか？」

「それがあたしの役目だから」

疑うことなく彼女は言っただけのける。不変の価値観と正義は醜く歪んでおり、彼女を怪物として写し出す。

なんでだよ、と小さく呟いても依然彼女の顔には笑顔が張り付いたままだった。

理解できない。

俺は未だに彼女を理解出来ていなかった。

「アイツは躊躇なくお前の首を刎ねたんだぞ？」

「それが？」

つまらなさそうに彼女は言う。早く切り上げてしまいたいと、その言動から滲み出ていた。

「俺がやってきたこと、一方通行がやってきたこと、知ってるんだろ」

「？」

「やってきたこと？……ああ、御学友達とお人形遊び？もちろん知ってるよ、こう見えても色んなことを知ってるんだから」

「じゃあなんで助けるなんて言えるんだ」

知っているはずなのに、分かっているはずなのに、彼女は俺を、アレを赦すと言う。その異常な思考回路に苛立ちが募る。

どんなに言葉を脳で理解していても、その本質を正しい意味で理解することは無かった。

「あたしが姉だからだよ」

様々な民族の血が見える端正で不思議な顔立ちには彼女をまるで人間じゃないかのように見せる。

その顔は恐ろしく、禍々しい。

「俺も、アイツも、人殺しだ。なぜそうも助けようとする？俺らは悪党だぞ。救われるような綺麗な人間じゃない」

赦しを与えるその女は俺にとっては砂糖のような存在だ。自分を正義の使者だと信じて疑わない、全人類のお姉ちゃんを自称する生死観のぶっ壊れたナニか。

そんな化け物に感情を吐露すると、それは困ったように笑う。

「……垣根くん、どうして人を殺してはいけないの？」

「は？なにわかりきったこと聞いてんだ？」

「まあまあ、これは議論だから、考えを述べてご覧？」

その醜い女はすこし考える素振りを見せると、道徳の授業だか哲学の講義でしか聞くことがない質問を口にする。

何を考えているか分からない緑の瞳は赤く濁っていた。

「……動物としての本能、か？」

「共食いをする種族は沢山いるのに？」

その質問に簡単に答えると、彼女はすぐさま否定する。

「じゃあ社会が成り立たないから」

「なら人を殺して社会が成り立つ世界なら人を殺してもいいの？」

仕方ないのでそれらしい別の答えを用意すると、再び彼女は即座に言葉を斬った。

「法で定められているから」

「殺人は法で禁止されてない。ただ殺人を犯したら罰せられるってだけ」

「……じゃあ、相手が悲しむから」

3度目の答えも気に入らないらしい。少し苛立ちながら偽善的で在り来りな回答を口にする。

自分が口にする言葉ではないと分かっているとしても、どこまでも善人で、どこまでも慈悲深い彼女にとっての正解なら口にしない訳には行かない。

偽善的な言葉に苛立ちと不快感を感じながらそれを彼女に言うのと、彼女は予想と反した否定の言葉を呟いた。

「じゃあアナタが人を殺さないで悲しむのなら？」

「は？」

「垣根くんが誰かを殺すことで幸せになるのなら、どうする？」

俺はどうやら勘違いをしていたようだった。彼女の答えは到底予期していたものではない。

天羽彗糸は善人なんかじゃないのだ。エゴの塊、自分本位の怪物。

俺の前にいるのは誰かを幸せにする為ならば自分も、動物も、神も蹴落とす冒険的な少女だった。

「戦争があれば人殺しは英雄に、防衛なら殺してしまってもお咎めはなく、大罪を成した人なら合法的に殺される」

氷のように冷めた瞳が俺を写す。

「善とか悪ってさ立場と環境で変わってしまう程度のとてまあやふやなものなんだよ。みんなが人を殺すのはダメと答えるのは道徳によつて皆の認識が統一されているから。そこから深く考えると、結局は個人の解釈って分かっちゃう」

彼女の慄然たる考えが名状しがたい感覚を生み出し、俺を恐怖の渦に突き落とした。

「だからね、垣根くん、あたしは例え殺人鬼であろうと、反逆者であろうと、その人が自分の正義に則つてそれを行っているのなら、あたしは味方だよ」

何回も言ってるでしょ？なんて朗らかな笑みを携えて俺に伝える彼女は聖女であり、悪女。

彼女は矛盾を抱える。その矛盾が酷くおぞましい。

無垢であり不浄なその笑顔に、軽蔑と唾棄を込めて俺は酷く汚い感情を彼女に吐き捨てた。

「……お前は本当に気持ち悪いな。人を愛すと言っておいて誰もを平等に上から見る。弱者のくせに傲慢。お前のチグハグさが気味が悪い」

「別に垣根くんを気持ちよくするために生きてないし、どう思おうが興味無いよ。あたしは君を救うためにここにいるんだから」

彼女の笑顔はいつだって俺の神経を逆撫でする。

俺より弱くて、俺より小さくて、俺より柔らかい。弱者^妹である癖に強者^姉のように振る舞う彼女が嫌いだ。

「上から目線の自惚れ屋。それでいて他人の感情を受け付けけない。テメエはいつか破滅するぞ」

「その何がいけないの？」

吐き出した感情は冷めた口調で否定される。興味なんてないかのような凍てつく氷のような声が二人しかいない道路に響いた。

己を天使だと、神の御使いだと疑わないメシアコンプレックス。

彼女の場合、自分は本当にそれだと信じている。見返りなんていない、自己犠牲で作られた汚物の塊。エゴイズムとナルシズムが作り上げる究極の他者愛性知的生物。

「テメエを管理する俺に被害が出るって言ってるんだよ」

「管理？あなたが？あたしを？」

「そうだよ駄犬。お前の手綱を握ってるのは俺だ、ご主人様に厄を持ってきてんじゃねーよ」

掴んだ彼女の肩を強く握って所有権を誇示すると、彼女は何もかもが可笑しいと、彼女はせせら笑う。

「……神^物の理^語不尽に抗えず、運命に逆らえないコツペリア^{お人形さん}が、あたしに首輪をつけれると本気で思ってたの？」

傲慢さが滲み出る艶やかでおどろおどろしい瞳は俺をまるで別世

界の住人のように射抜く。

彼女は己を同じ人間だと思っていない。

神にでもなった気か。ナルシズムの塊のようなセリフは俺を苛立たせる。

「コツペリアア？随分と愉快で素敵な勘違いをなさってるようだな」

コツペリア、それはバレエの喜劇。

自動人形であるコツペリアと、それに恋をした青年が真実を知り、恋に敗れる話。博士であるコツペリウスに作られたその人形はエナメルで造られた眼球を剥ぎ取られ、無惨な姿となり、幕を下ろすのだ。まるでこの俺がその哀れなお人形だと言い做すなんて烏澁の沙汰だ。

愚かな彼女が酷く哀れで、気に食わなかった。

俺は無惨な運命を辿る哀れな自動人形なんかじゃない。

「俺は人形じゃない。テメエの飼い主だ、履き違えてんじやねえ」

「はっ、飼い犬はテメエだろ垣根帝督、神にもアレイスターにも飼い殺される哀れな負け犬だ」

「っ！テメエ！」

身の程知らずな言葉の羅列に、思わず彼女の喉を両の手で押さえつける。今此処でこの獣を殺してしまおうと、その首をへし折らんと力を入れる。

死んで、死んで、死んで、また生き返れ。

けれどどんなに力を込めても彼女は笑みを崩さない。

先程の弱々しい赤い少女とは違う、真っ白で力強い乙女がそこに息を乱さず立っていた。

その気持ち悪さと醜さが酷く不愉快で、酷く目を引く。

「凶星つかれて冷静さ欠いて、人に当たるの？」

「……ぶっ殺す」

「殺してみろよ、アンタの幸せを世界で一番望んでるこの死に損ないを殺してみろよ。それでアンタが幸せになれるのならばあたしはそれを受け入れてあげる」

波のように彼女の体温、鼓動、柔らかさが腕を伝う。

正常な体は、彼女が抵抗しないと伝えていた。いつかの日、初めて彼女の首を絞めたときとは違う、正しいリズムが刻まれている。

「いい？垣根帝督、あたしはね、あなたを幸せにするためならなんだつてするよ、なんだつてできるよ」

眼前で揺れる前髪を払うように、彼女は俺の髪を撫でる。我が子をあやす様な、妹を、弟を励ますような手つきはぞっとするほどおぞましい。

彼女の喉を絞める手に力が入る。痛いはずなのに、苦しいはずなのに、痛苦を覚えるどころか、彼女は俺に憫笑を見せた。

「あたしは君を幸せにして神に認めさせなきゃならない、それが今のやるべき事なの」

「何言つてやがる」

「あたしはね、見せつけなきゃいけないの。人間の可能性を、人間の力を。そして神に認めさせなきゃいけない。どんな理不尽でも人は覆すことを」

俺から視線を外し、彼女は月を見上げる。

誰かを憎むような、蔑むような、そんな醜い視線が空を射抜いた。

誰に向けられたのかも分からないその眼差しは見たことも無い激んだものだった。

「あたしは理不尽に抗える。規定通りの動きしかできない**botじや**ないのよ。それを踏まえて、あなたはあたしを殺せる？」

「テメエがいなくなつて理不尽に抗えるさ、自分だけが出来ると思うなよ」

「アンタには出来ないわよ。だって現に変わったでしょう？あたしがいた事でああなたの価値観、やるべき事、正義。今日、上条くんやってきたのだから君の性格なら有り得ないこと」

まるでそこに正しい現実があつたかのように彼女は語る。正しいものが改変されたかのように、何かが変わってしまったかのように語るその声色はどこまでも傲慢だった。

テノールより高く、ソプラノより低いアルトの声は優しく、けれど凛々しい。

「一方通行もそう。本来なら彼があたしに連絡するはずないの。全て変わったのはあたしの存在。あたしがいることによつて今ここに君がいる」

首を絞める手に彼女の手が触れる。優しい手つきにびくついて一瞬力を弱めると、手を握られた。汚れも、怪我もない冷たいその手。苦勞をしたことの無いような手が彼女を弱者だと、守られる人だと教える。

母のように、姉のように慈しみながら握る手にはライムグリーンに塗られた爪が切りそろえられていた。生命と永遠を象徴する緑色の爪は二人の手の白さと夜の青さを際立たせる。蜂蜜のような自分の肌と、卵のような乙女の肌。

色も、柔らかさも、曲線も、全く違うのに、同じ人間、同じ生物。だというのにその違いがさらに彼女を別の何かに見せた。

理解できない別の生き物。その生物を理解したいと、思ってしまった。未知を知る故の弊害。

「あたしは垣根くんより弱いかもしれないけど、あたしがいることによつて変わってくる現実がある」

藍色の空と、金と桃の髪、白い服。青の欠けらも無い彼女は色彩学的に藍が似合う。

彼女の孤独な思想と、澄んでいて澱んでいる感情を表す最適な色。

真っ白いワンピースは藍色に染まり、その荒涼たる姿と相まって彼女を特異な存在に変貌させた。

「だから、リードじゃなくて、守るべき人として手を掴んで?」

ぎゅっと握る手に力を入れて、藍色の乙女は救いの糸を垂らす。

「あなたを幸せに導くために」

それがどれほど俺のプライドを傷つけるものかも知らずに。

瀟洒で聖なる少女は笑みを絶やすことはない。慈愛と慈悲の籠った眼差しは薄気味が悪いほど夜空の下で煌めいていた。

「……幸せって、なんだよ」

「大団円のその先、誰もが夢見るハッピーエンドだよ、垣根くん」
「陋劣で悪辣、けれど何よりも清純で流麗な少女は夢を見る。」

誰よりも子供っぽくて、夢見がち。彼女が渴望するのは学園都市では有り得ない喜劇。

彼女だって知っているはずなのだ。

悲劇しかこの学園都市では有り得ないと。陰惨なこの街で、彼女の望む未来は成立しない。

馬鹿げた願いは叶うことは無い。

彼女程度では成し遂げられない。それは強者である俺だから成し遂げられるもの。

お前に出来やしない。

「はっ、脳内お花畑、んなもん出来るわけねえだろ」

「出来るよ、だってあたしがいるんだもの」

「自信過剰、ナルシスト、メシアコンプレックス。そのくせパラノイア思考でタブロイド思考、劇場のイドラに苛まれる自己嫌悪の塊。矛盾だらけで気持ち悪い」

己を誰よりも嫌って、誰よりも信じる。

二つの矛盾した心理は彼女を化け物に仕立てあげる。

矛盾を持つ彼女は酷く歪んでいて、酷く興味深い。それは未知を知り、未知を操るこの俺だからこそ見いだせる感情だった。

「理解できねえよ、お前、気味が悪くて、反吐が出る」

俺は彼女が嫌いだ。

好きだと言う癖に、愛していると言う癖に、彼女は俺に興味なんてない。俺の力に興味なんて湧かない、俺を認めない、俺の強さを認めない彼女が大嫌い。

言葉とズレた行動は不思議と俺を苛立たせる。

「うん、知ってる。誰もあたしを理解できない、誰もあたしを愛さない。あたしはアンタとは違う生き物なんだから」

「その考え方からしてお前は間違ってる」

間違いを認めず、多方向に愛を注ぎ、欠陥だらけの道を歩む彼女は酷く醜い。

だが、その道の果てを見てみたいと思ってしまう自分がいる。愚かな少女の哀れで惨めな結末を高めから覗いていたい。

お前は間違っているのだと、俺が正しいのだと、兄のように彼女を責め立てたかった。

「姉が間違うわけないでしょ?」

「ああ、反吐が出るほど間違ってるよ、お前は」

弱者のくせに、彼女は強者であろうとする。その間違いが気持ち悪い。

「……俺は、気持ち悪いお前の深淵を見たい。誰も見た事のないそれを」

ぽつりぽつりと言葉を吐く。おぞましい少女の手を握り、心からの軽蔑と嫌忌を込めて。

彼女の手は氷と間違うくらい冷たかった。

「だから、俺も連れてけ」

深淵を這いずる狂気の少女は不浄で、妖艶な、聖なる笑みを魅せる。

白いワンピースが暗闇の中で彼女を浮き立たせ、目に焼き付いた。

夜から切り取られたその少女は誰よりも正しくて、誰よりも間違っていた。

それを肯定して、否定して、解析したい。それが俺の願いだった。

奇怪で凄艶、暗澹あんたんで鮮麗、正義であり悪。

可憐で幼気な少女はお砂糖とスパイス、そして素敵なもので出来ている。

大人になった乙女はリボンとレース、そして甘く可憐な顔かんばせで出来ている。

マザーグースは嘘つきだ。

この世の甘苦を煮詰めて作り上げられた目の前の生物は砂糖でも、スパイスでも、リボンでも、レースでも、素敵なものでも、甘く可憐な顔でも出来ていない。

彼女は矛盾でできた『人間』だった。

どこまでも澄んでいて、どこまでも濁んでいる少女は、いつも笑顔で俺を見下す。

「……いいね、主人公っぽいよ、垣根くん。とっても、かっこいいよ」
その笑顔はどこか悲しげだった。

俺は世界で一番、お前が嫌い。

そして俺は誰よりも深く、お前を知っている。
憎んで、蔑んで。それでもお前の隣に立ってしまおう自分が腹立たし
い。

34話：漏洩

落ちた太陽、全てを青に染める真夜中。乾いた銃声が静寂な青の中響き渡る。

男から放たれた弾丸は真っ直ぐ、一切の迷いなく対角線上に立つ白髪の子供を撃ち抜いた。鮮烈な赤が青に混じる。吹き出た血液は青を汚し、びちやりとグロテスクな音を立てて床に散らばる。

最強と呼ばれたその子供にはその銃弾を防ぐ方法はなかった。いや、正確にはあったのだ、けれど自らの意思で使わなかった。

それは彼の通り名、アクセラレータ一方通行そのもの。全てを拒むその能力から作られた反射膜、それさえあれば彼が傷つくことは無かった。けれど初めて誰かを救うという事実が、そのすべを封じる。垂らされた救いの糸を手放し、その代わりに幼い少女に握らせた。

強烈な衝撃は一方通行を撃ち抜き、今まで覗き込んでいたスポーツカーのシートから強引に引き剥がす。守りたい幼い少女、ラストオーダー打ち止めから手が離れてしまう。

吹き出た赤と夜空の青、そして見下ろす白い月がじくじくと瞳を焼き焦がす。焼けるような痛みに悶え、床に崩れ落ちる。

しかし、汚い地面とぶつかることは無かった。

「お疲れ様、アクセラレータ一方通行くん」

「テ、メエ、おせー、よ」

アクセラレータ崩れ落ちた一方通行を受け止めたのは他でもないあたしだった。

白い髪と赤い血が真っ白い服に花のように咲く。散らばった髪の毛の間から覗く赤い瞳にゆっくり手をかざすと、彼に優しく話しかけた。

「ゆっくりおやすみ。大丈夫、全ては滞りなく終わるから」

あたしは彼を治せない。

声は優しくとも、心の中ではチクチクと針が突き刺さる。

彼は自身の電気信号も、血流も、ベクトル能力でその体を制御できる。あたしと同じ力。とはいえ、アクセラレータ一方通行くんより応用力はないが。

ともかく、自分で操作できるということは、あたしの操作を自力で

打ち消すことが出来るということ。つまり、あたしは彼を治すことが出来ない。

悔しきと無力感が体を襲う。

「高そうな車だな、性格の悪さが滲み出てるぜ？おっさん」

胸の中でうなされる一方通行の軽い体をお姫様のように抱き抱えると、後ろからゆつたりと、優雅に少年が歩いてくる。黄金色の髪を揺らして彼、垣根帝督は嘲笑うかのように辺りを見渡した。

ゴンゴンとめちやくちやになったクルマのバンパーを叩くと、その場に腰を抜かす哀れな男を見下す。その悪態に少し呆れながらあたしは、一方通行を車の運転席に座らせ、彼の横に立った。

その光景に男は更に顔を青くする。銃を構える手は酷く震えていた。

「な、なんだお前ら、だ、誰だ！」

「そうだなあ、この間襲撃した一人っていえば分かるかな？」

「っ！お前が、あい——」

その男、天井亜雄は最初こそ威嚇していたが、あたしの一言に顔を強ばらせる。そしてあろう事かあたしの本名を口にしようとした。

瞬間、全てがバレてしまう前に開けた口に足を、正確にはピンヒールを蹴り入れる。今回ばかりは手より足の方が距離も短く、口をふさぐには合理的だ。

鼻にめり込んだつま先部分と、口腔に突きつけられたピンヒールはさすがに痛かったようで、あまりの出来事に彼は拳銃を落とす。それを拾い上げて垣根くんは男を汚物のように蔑んだ。

「うっわ……流石のドMも喜ばねえぞ」

「外野、うるさいよー？」

無神経な言葉にむすつとした顔を見せると、彼はふつと鼻で笑う。なにやらおかしなことを考えているようで、笑いを堪えるように手を口元で隠していた。

仕方の無い少年だ。子供のようにならぬ口を叩く彼に少しばかりの苛立ちが込み上げるが、非常事態の前で口論をする訳にもいかない。小さくため息をついて彼に呆れた顔を見せ、あたしはスポーツカー内で

横たわる少女を指さす。

「垣根くん、その女の子を病院に運んどいて。あとはあたしがやつとくから」

「そいつはいいのか？」

「あたしが連れてく」

少女、ラストオーダー打ち止めを軽々と片腕で持ち上げ、お人形さんのように抱えると、彼は少しため息をつく。

あたしと少女を交互に見ながら残念そうにだらんと下を向いた。文句ありげな顔がこちらを向くと、彼はジロジロとあたしを見つめる。

「つたく、テメエもこれくらいちっさければ持ち運びが楽なんだがな……重いんだよ、お前」

「すみませんねデカくて」

「ホントだよ、縮めデカ女」

悪態を着いてから帰路につこうとする彼にべえーつと舌を出す。女子に重いだなんて言ってはならぬと、習わなかったのか？ムスツとして彼に拗ねてみると鼻で笑われる。

正直かなりムカつく。まるで年上のように茶化し、拗ねる自分を笑い飛ばすその一連の行動に苛立ちと腹立たしさを覚えるも、別の要件を思い出すとポケットに手を突っ込む。取り出したものを軽く投げつけると慌てた様子もなくそれを受け止めた。

「あ、これ持ってた」

「は？……お前」

小馬鹿にした表情を向ける彼だったが、あたしが投げたものを空いた手でキャッチすると、顔を一気に顰める。

彼に投げたのはあたしのスマホ。彼お手製の盗聴器がついた特別なもの。それが意味するのは分断、秘め事、真実。

「ここから先は、あたしだけの世界だからさ、立ち入り禁止なの」

軽く微笑むと、垣根くんは眉間にしわを寄せる。苦々しい表情をみせる彼は、悲しいような、苦しいような声を上げた。

その感情の意味があたしには分からない。

「教えてはくれないんだな」

「自分で調べなきや、楽しくないんじゃないの？」

「……先行ってるからな」

「……先行ってるからな」
つまらなさそうに彼は打ち止めを抱えて病院へ足を進めると、そのまま見えなくなってしまう。

その姿を見届けると、あたしは男の口から足を抜いて話しかけた。

「さてと、天井亜雄、アンタ確か量産型能力者計画の責任者よね？」

あたしは彼を知っている。

それもそのはず、ついこの間の一方通行くんアクセラレーターの件で自分に関する実験を盗み見ていたから。藍花悦のデータを使ったことを知ったのは偶然とはいえ、知ってしまったものは聞かなくてはならない。

クローンたちの製造に使われたあたしの能力。そして彼はその製造の第一人者、問い詰めるには持つてこいだ。

彼の体の支配権を有するあたしは、彼の神経を麻痺させ、逆らえないように肉体を調教する。体もまともに動かず、生殺与奪の権を握られた可哀想な男は土の味がする口で咳き込みながら答えるしか選択肢がなかった。

「つげほ、つがは、はあつ、は……まさか、こんな所で出会えるとはな、ゾンビ女」

「あたしのデータを実験に組み込んだんでしょ？これは必然よ」

反抗することは愚か、立ち上がることも出来ない天井亜雄は言葉であたしを挑発する。

けれどそんな事言われても、あたしの心はゆらがない。さつきまでもっと酷い言葉の数々を垣根くんの口から浴びせられたのだ、この程度の罵倒はもはやなんとも思えなかった。

「だが使えなかった。お前のデータは使い物にはならなかった。遺伝子情報の変更程度にしか役に立ってない」

「他人に流用したら失敗するに決まってるじゃん。あたしにしか使えないんだから」

「ああ、そうだな、化け物。お前以外にそんな力を持つ奴は二人としていない」

彼の憎しみの籠った目があたしを映す。化け物のように、怪物のよう
うにあたしを見るその目が気に食わない。

あたしは人間だ。この世界とは違う世界から来た人間、それがあた
し。

「……化け物だなんて、失礼極まりないね」

「化け物だろう？人でなし、人間の皮を被ってヒーローごっこか？」

「こんな女子高生つかまえて化け物だなんて、酷いこと！あたしは人
間だよ？」

たとえ違う世界の人であろうと、あたしは人間。それ以上でもそれ
以下でもない、ただの人。

けれど、違う世界の人であるからこそ、あたしはまだ見張る者でい
ることが出来るのだ。

「はっ、『肉体ドミニオンの支配者』、第三候補サブプランのモルモット、そんなお前が人間だ
と？笑わせる」

「あ？なにそれ？ドミニオン？」

「知らないのか？ふ、はは、何も知らない哀れな人外、真実を知らない
まま醜く死んじまえ」

意味の分からない言葉を口にする、彼は唸る。厭悪渦巻く低い言
葉は獣のようだ。

「そこまで嫌われてるとはね、あたしのデータを使って甘い蜜を吸つ
たくせに」

「そのせいでこうなったんだ、恨むのは道理だろ？」

「大いなる力には等しい代償が必要。それだけの事でしょ？」

優しく微笑み、彼の目の前にしやがみこむ。悍ましい怪物を見てい
るかのよう小刻みに震え、冷や汗をたらすその男は実に滑稽だっ
た。

「っ、殺すのか？」

「まさか。これでも博愛主義者なの」

震える男の顎を右手で掴み、強引に目を合わせた。恐怖に染る瞳の
色は夜の青を溶かす。

哀れで罪深い男に慈悲を与えまいとゆつくりと、土に染み込む命の

水のように静かに、広がるように演算をし始めた。

「だから全てをリセットしてあげる。記憶も心も感情も0に戻す。子供の頃は誰だって純粹だもんね？」

死とは最大の不幸である。

未来は分からない。絶望かもしれない。けれど生きている限り、何が変わるかもしれない。

神は気まぐれ、幸福も不幸もいつ降りかかるか分からない。生きることは賭け事みたいなもの。

それでも0・1の確率で幸せになるチャンスがあるのならあたしは醜く泥を啜ってでも掴み取る。

人は死を救済だなんて言うけれど、あたしはそうは思わない。死を望むことはとても不幸なこと。

死を望んでしまうその人生が、その選択をさせたことこそが不幸だとあたしは思う。

だから私は彼を生かす。次のチャンスに巡り会えるように。

100を0に、有を無に、全てを初めに戻す。スタートに戻る。すぐろくの駒を壊すのではない。初めのマスに戻すだけ。

純粹なあの頃に戻してあげる。闇を知らなかった頃へ。

「救いの糸を垂らすのは神ではなくあたしなのよ」

電気信号を操って、脳髓を操って、細胞を操って。痛いかもしれないけど、苦しいかもしれないけど、それがきつと贖罪になるのだから。

優しく微笑むと、彼も子供のように無邪気な笑顔をみせた。

？

青が包む夜の中、停めた車を降りたその女は目の前の異様な光景に目を丸くする。

「……………これは」

そこには一方通行も、アクセラレータ打ち止めも居なかった。いたのはただ一人、ラストオーダー

この誘拐騒ぎの犯人で、研究者である天井亜雄。

しかし、彼はまともな姿をしていなかった。

口から零れる涎、純粋な瞳、わんわんと溢れる涙、地面でへたりこんで泣き喚くその男はまともではなかった。まるで母を探す赤子、まるで何も知らない純情な子供が癩癩を起こすような姿は異常だった。

銃を握る彼女の手はそのおぞましい光景に震える。

それは心理学的に退行と呼ばれるものだ気づくのになんか時間はかからなかった。

「アクセラレータ二方通行が？いや、彼ならもつと……」

惨い光景に頭が酷く痛む。何が起こっているのかと、理解できない現実がめまいを起こした。

赤子のように泣き喚く背の高い男を眺めながら彼女は下唇を噛む。彼女は甘い人間だった、だからこそこの光景に吐き気とおぞましさを感ずる。

こんな姿にするのなら、殺してしまう方が優しいのではないかと。どこまでも甘い彼女はこの日初めて優しさを見せる。彼に向けられた銃口は他ならぬ優しさから来るものだった。

誰か知らない他人が起こした酷い現実はそれほどまでに強烈な光景だったのだ。

「二体、誰がこんなことを」

呟いた言葉は突然鳴り響く電話の音で掻き消える。あまりに唐突な音に少し肩が跳ねるが、着信が知り合いだと分かると途端に安堵した。

電話の主は昔馴染みの医者。こんな時になんの用かと、彼女は携帯を耳にかざす。同時に引かれた引き金は、花火のような音ともに裏切り者を地獄の底へ突き落とした。

？

一方通行くんアクセラレータの手術に立ち会い、彼を病室へ運んだ後、夜勤の仕事をしようと暗い廊下を歩く。自分の配属先のナースステーションに足を運ぶと、そこには青白い蛍光灯の光でキラキラ輝く黄金色があった。

「よう、おかえり」

「あれ、帰ってないの?」

「悪いかよ」

何かをいじりながら満面の笑みであたしを迎え入れる垣根くんは不気味なほどご機嫌だ。それに少しばかりの恐ろしさを感じるが、そんなことよりも彼の手元に目がいく。

彼しかないナースステーション。そこに踏み入れて彼の隣に立つと、彼の手元のそれがあたしのスマホだと気づいた。写っているのは電話帳のアプリ。

何してんだ。

「アンタ、あたしのスマホで何してんの?」

「情報の抜き取り」

「は?なに?怒りたいの?」

「で?一方通行は?」

全く、何を考えているのか分からない少年だ。呆れながらため息を着くと、適当な椅子に座っている彼は先程のことを聞いてくる。

その質問に笑みが少し溢れると、あたしは彼の頭を軽く撫でて一方通行アクセラレータのカルテを確認する。

重要人物のカルテはアナログな紙でしか書かれないのだ。

「大丈夫、生きてはいるよ。けど脳の損傷で彼の演算能力と言語能力は無くなっちゃったけど」

彼が気にしていたのは永遠の一番手。まあ、これから喧嘩売りに行くのだから気にする理由もわかる。なので簡単にあらましを説明す

ると、彼は意味深に笑った。

一方通行がこれから先付き合っていないかなくてはならないものは失語症。前頭葉のブローカ野、または側頭葉のウィルニツケ野の損傷から引き起こされるこれは基本的に治ることは無い。

そして演算能力、そして身体能力も異常をきたしている彼はこれから先大変だろう。とはいえ演算補助道具をこれから作られるし、能力さえあれば歩ける、そもそも彼は死なない。

欲しかった家族も手に入れて、愛する人も手に入れて、トントン拍子で上手くいって、主人公にもなれて。

彼は決して不幸じゃない。今までの経路が不幸だとしても、これから歩む人生は幸せだ。

未来で牢屋にぶち込まれながら統括理事長になると言っても、それは彼が選んだことで、彼はそれを不幸とは思っていない。

死にもせず、愛する人も救える彼は不幸なんかじゃない。

彼が自分を不幸だなんて言ったら殴る自信がある。そういう意味では上条くんも殴りたいかも。

不幸とは進めないこと。守れないこと。何も出来ないこと。不自由なこと。当たり前前の幸せを受諾できないこと。

だからあたしは歩けないあの子を幸せにしようとした。死んでしまいかもしれないあの子を守った。

あたしは不幸であり幸福。彼女を命を懸けて守れた誇りと、在り来りな幸せな生活を掴めない妹を助けられなかった罪悪感に苛まれる。

「……なあ、お前は、何故一方通行を信用した？」

「んー？何が言いたいのか？」

「お前は俺の強さを信じない、なのにあいつは信じた。俺たちの差は何が産んだ」

沈黙の中、垣根くんが口を開く。机に座るあたしは一方通行のカルテを閉じると、頭上で光る蛍光灯を眺めた。

青白い光は眩しくて目を痛める。

「……そうだなあ、神を、運命を信じているから、かな」

垣根くんの質問の答えは至極簡単だ。

一方通行は幸福、死なない、そして垣根帝督は不幸。死ぬ

たったそれだけの事。決められた運命が彼らの強さを表す。

垣根くんは主人公じゃない。どんなに主人公じみたセリフを言っても、それは変わらない。彼の運命は決められていて、彼の強さは語られない。

彼は、死んでしまう。

それが彼をか弱く見せた。

カルテを仕舞おうと机から降りて、垣根くんの後ろを通る。彼を同情する顔を見せなくなかった。

きつと、もつと嫌われてしまうから。

「ロマンチストが。神を嫌うと豪語しておいて結局はそこに行き着くのか」

「まあ、少し違うけどね」

彼の納得する答えが出せない自分かもどかしい。なにか言えることはないか、なにか伝えられることはないか。ぐるぐると思考が廻る。

意味がわからないと、椅子でむくれる彼はまるで猫のようだ。

くすくすとその姿を笑いながらカルテを棚に収めようとする、不機嫌な彼に目を奪われていたせいでカルテも、棚の他のものも落とすてしまう。

「あー」

「ばーか、俺に見とれてるからだよ」

「自分で言う人初めて見た……すげえ」

大きく音を立てて落下したそれらを戻す作業を考えると億劫になる。疲れているのだろうか。理論上は眠りも要らない体のはずなのに。

眉間にしわを寄せながら片付けるためしやがみこむと、珍しいことに垣根くんも手伝いに来てくれる。「馬鹿だな」なんて隙あらばあたしを罵倒しながら手伝ってくれる彼はチグハグで笑いが込み上がる。

「……垣根くんも一方通行くんも、みんないい子なんだよね」

「は？なんだよ唐突に……俺らは悪党だぞ？いい子じゃない」

ぼつり、考えが口から零れた。

そうだよ、彼はとつてもいい子じゃないか。ラストオーダー打ち止めもちゃんと病院まで運び、嫌いなはずのあたしをホテルに捨ててこずおぶって帰ってくれる。

当たり前のことを忘れていた。彼は悪党であつていい子なのだ。

「あたしね、この世界の人間は全員いい人だつて信じてるの。それが誰であろうとね」

「性善説でも信じてんのかよ」

「うーん、なんだろうね、よくわかんないや」

物語の世界、生み出されたキャラクター達は読者に愛されるように生まれている。

どんな極悪人でも、そのバックグラウンドには悲しい出来事と悲劇が必ずある。

いじめっ子が実は母親に虐待を受けているだとか、ラスボスが実は人間から不当な扱いを受けていたとか。感情移入がしやすいように、誰もキャラクターを嫌わないように、言い訳という善性が用意されている。

垣根くんも、アクセラレータ一方通行くんも、テレスティーナさんも、アレイスターさんも悪い子なのだ。

けれど同時に良い子でもある。

アクセラレータ一方通行は友達と遊ぶ未来を掴むため1万のクローンを殺した。

テレスティーナさんは人の、化学の発展のため、アレイスターさんは娘の不幸の復讐として。

そして垣根くんは誰もが悲劇を体験する世界を否定するため。

誰もが不幸で、誰もが善人なこの世界があたしは大嫌いだ。けれど誰もが善人である世界はとても分かりやすく、とても恐ろしい。

「じゃあなんで助けてやんねーの？お前は正義ある人を助けんじやねえの？」

「……あたしの能力は彼に通じないの、無理なんだよ」

拾ったカルテを全て元の位置に戻すと、彼は当たり前のようにそれを聞く。

一方通行くんアクセラレータにあたしの力は通用しない。その事実が再び心を抉った。力不足。出来ない子。ナイフのような言葉が浮かんで消えていく。

「それにき、垣根くんは彼を助けて欲しい？」

「……それは」

「きつき言ったよね、あなたが幸せならなんだってしてみせるって、なんだって赦せるって」

痛みを隠しながら、あたしは垣根くんアクセラレータに笑いかけた。

「あたしの最優先事項は垣根くんアクセラレータなの。垣根くんが不利になるようならあたしは助けられないよ。それが貴方の罪になるのならあたしが背負う。貴方に赦しを与える」

たとえ一方通行くんアクセラレータを治せなくても、あたしには垣根くんアクセラレータの為という大義名分がある。あたしは決して間違っていない、あたしは決して出来損ないじゃない。

「それに、欠陥がないと彼は彼のベアトリーチエを認めないからね」

垣根くんラストオーダーの為だけじゃない、物語の大きな改変は避けられるべきだ。もし彼が打ち止めに助けられなかったら、きつと彼は今のままだ。

打ち止めラストオーダーがいるからこそ、彼はロシアまで行くし、学園都市の理事長になる。その未来を捻じ曲げたくなかった。

それに、改変されてしまったらきつと彼は暗部なんてものに堕ちないし、垣根くんラストオーダーの目的に遠のいてしまうかもしれない。垣根くんラストオーダーのためにならないのであれば、

「……全員を救うんじゃないかねえのかよ」

驚いたように、彼は目を丸くする。まるでその答えは予想していなかったかのように、あたしの深淵を覗こうとするように彼は問う。

それに対しての答えはきつと同じように彼の理解できないものだった。

「あたしにだって特別はあるよ」

「お前に？無性愛者で、博愛主義者でパラノイア思考のお前に特別だって？面白い冗談だな」

「あたしは人間なら誰でも好き、どんな人だって愛してるよ。良き隣人としてね」

そう呟くと、ゆっくりと目を瞑る。あの子を思い出すように、あの世界を思い返すように、ゆっくりと、けれど力強く。

その思い出は未練。現世に残した唯一のもの。

「でもね、その隣人の中に1人だけ特別がいるの。あたしにとっての特別。それはね、あたしの妹」

能力の無い世界、幸福で不幸せな世界、平凡で色褪せた世界。それでもいつだって平和な世界。

そして彼女がいる世界。

あたしが生まれたその世界はあたしの全てだった。愛しい妹を悲劇に落とすその世界を見返す為に足掻いて、泥を啜って、命を懸けて幸せを模索した。

けれど、開けた瞼の先にあるのは彼女のいない世界。

何よりも嫌って、何よりも愛さなくてはいけない新しい自分。

「誰よりも、何よりも、彼女を愛してる」

これは誰もが美しいという姉妹の愛。なによりも綺麗で、何よりも煌々キラキラしていて、何よりも美しい愛の形。色情も恋情も霞んでしまう、ただひたすらに透き通った愛。

あたしが世界のなによりも愛する人。世界の誰よりも幸せにしたかった人。

たった一人の愛しい妹。

あたしより可愛い顔も、明るい金髪も、意地悪な態度も、甘え上手な所も、オタクな趣味も、心配性な性格も、その何もかもを愛している。

あたしは彼女を幸せにしなければいけないかった。けれど、神の理不尽はそれを拒む。

あの子が幸せになるのを拒む。

だからあたしは、神に幸福を拒まれた垣根くんを救いたかった。

「だからね、垣根くん。世界一愛している妹とよく似た貴方をあたしは助けたいの。叶えられなかった願いをあなたで叶えたい」

垣根くんは不幸だ。

望^死んだ世界に進め^まず、愛する人を守れず、何も出来なかった。

人じゃない体と、否定したかった善性に犯される未来。

彼は当たり前前の幸せを掴めなかった。

妹と限りなく似ていて、誰よりも不幸な少年。あたしはあの子を救えなかった贖罪として彼を救いたい。

それを人は感情転移と呼ぶ。相手を変えて過去の自分に打ち勝たんとするその行為は心理学書にも書かれた心理療法のプロセスの一つ。

あたしはあたしで自身の心を治療する。垣根くんを使って、あたしの後悔を正す。

ただのエゴイズム。自分のためだけに、あたしは汚い感情の下、彼を救うのだ。

「この世界で一番好き^{キャラクター}なあなたを幸せにしたいんだよ」

「……俺はテメエの妹のスペアじゃねえ」

低い声で声を荒らげる彼の気持ちも分かる。

スペアにされるだなんていい気分じゃない。けれど、分かっているも辞めることは出来ない。彼を妹の代わり以外には見れなかった。そうとしか思えなかった。彼と出会えたのは偶然なんかじゃない、きつと必然なんだと。

彼こそが、あたしが叶えられなかった願いを叶えてくれる最後の希望としか思えなかった。

「うん、わかっている、わかっているよ。それでもね、君にあの子の影を見ってしまうの。だから君が幸せになるまで、垣根くんのお姉ちゃんですさせてね」

出来損ないの死に損ない。あの世界で叶わなかったたった一つの願いを、今度こそ叶えたいと願うのはいけない事？

あたしの願いを叶えるため、理不尽に抗うため、神に力を誇示するため、神への完璧で完全なる復讐のため、あたしは彼を幸せへ導く。

世界一嫌いな少女は憎むべき敵のバイタルを確認しにどこかへ行き、俺はひとりきりでナースステーションで籠っていた。

天羽慧系のスマホの情報を彼女公認で盗みながら、夜の病院で暇を潰す。どうせなら仮眠室にでも行こうかと席から立ち上がると、ちょうど別の人がナースステーションに入ってきた。

このこのナースたちとは顔見知りではあるが、さすがに夜中ここに入り浸っているととなると絶対怒られる。面倒だと心の中で悪態を着くが、それが白衣を着たカエル顔の男、通称冥土帰しだと分かると途端に安堵した。

「天羽くんは？」

「仕事だ。まったく、この病院ブラックかよ？あいつ多分寝てねえぞ」
「医療従事ってというのは基本ブラックだよ？でも良かった、君が一人で居てくれて」

天羽に会いに来たのなら席を外すべきか、そう思ったが、どうやら目的は俺のようだった。仕方ないので浮いた腰を再び椅子に下ろして話しかけると、彼はため息混じりに呟く。

「俺に用とは、どんなぐ要件で？」

「君に言ったじゃないか、彼女を助けてくれと」

彼の要件とは鍵と一緒に約束させた彼女についてのことだった。

流石に一方通行アクセラレータやら別種のクローンを担ぎ込んできた馬鹿な女はどう見ても絶賛問題行動起こし中としか見られない。それは分かっているても責めるような口調に少し苛立つ。

「助けたぜ？トランス状態のバカを治してやった」

「……彼女をね、あまり表舞台に出したくないんだよ」

「箱入り娘じゃねえんだぞ？そんなに過保護になる理由がわかんねえな」

あまりにも過保護な冥土返しに呆れた顔を見せると、彼は少し悩んだ顔をしたら今度は何かに頷いた。

「単純な理由だよ。彼女を表舞台に出せば確実にアレイスターに狙われる」

「アレが？ただのバカ女だろ」

「ただのバカ女なんだ。親代わりだとは聞いていたがここまでとは。頬杖を着いて呆れ返っていると、彼はまだ話を続ける。

「彼女はね、人ではない、いや、人に近い何かなんだね？」

「は？クローンかなにかか？それとも人造人間か？アンドロイドか？」

彼の発言は現実味のないものだった。

「この世界と互換性がない、といえはいいのかな。彼女は全てが不思議なんだよ。体の構造は人間と非常に似ているが、何かが違う」

嘘のような話を淡々と呟く。出鱈目のような話を彼は確信を持って話していた。

「日本、ロシア、ドイツ、スウェーデン、イングランド、アメリカ、台湾、フランス、レバノン……血が混ざりすぎてて生まれを特定できない、もはや彼女という新しい人種と考えた方がいいね？」

ため息を着くと、先程片付けたカルテが沢山詰め込まれた棚に近づいてひとつのファイルを引っ張り出す。

そのファイルには#06と書かれていた。

「ひとつのOSに合わせたアプリが違うコードなのに別のOSで動いているように、同じ人のはずなのにまるで違う世界の物質コードを使っているかのようなんだよ」

バカみみたいな話、フィクションみたいな話、それでも苦々しい顔でそれを語る冥土返しに嘘をついてるとは思えなかった。

「宇宙人みてえってことか？」

「まさにそう。宇宙人だ。能力も解析できず、身体も彼女だけのもの。彼女は理解してないようだがね」

彼は一枚一枚カルテを確認するように捲っていく。その表情は重々しいものだった。

「そして精神も異様だ。僕はね、4歳の頃から彼女を知っているが、彼女は何も変わっていない。今の彼女と昔の彼女は全く同じだ。その頃から既に成熟した大人だった」

そういつて彼はカルテから写真を取り出し、俺に手渡す。この病院で働くナース姿の一人の幼い少女が写ったその写真は初めて見るものだった。

「幼女のナース姿って……需要どこだよ」

130cmくらいで、幼さの割に背が高いその女の子はどこからどう見ても天羽隼糸本人。短い金髪はもう既に毛先が薄い桃色に色付いており、ふたつに括られている。ズボンスタイルのナース服は今とセンスが変わっていない。

幼い頃から患者から好かれているようで、貼り付けた笑みを浮べる彼女に病衣を着る患者達がニコニコと微笑んでいた。

どうやらこの病院にはロリコンが多いらしい。

写真に着いた年月日から察するに彼女が10歳のころのもの。彼女の家庭的な背景は全く分からないが、働かなければ学校にも行けなかったのだろうか？

この頃から社畜とは狂気の沙汰だ。

「昔から勤勉で、よく働いてたよ。学校にも行かず、ただひたすら」

「学校に行っていない……学費でも払えなかったのか？」

「いや、彼女が言い出したんだね？ 大学も出ていたし、一人前の大人だって聞かなくてね、今の高校だって僕が強引に行かせたようなものだよ」

へー、と聞き流したが、その発言をもう一度よく頭で反復する。大学も出ていた？

知らない情報が流れ星のように勢いよく過ぎ去っていくのをつかまえると、医者に大声で聞き返してしまう。

「は？ え、大学？ あいつ大卒なの？」

「ん？ 聞いてないのかい？ 彼女はここに来る前アメリカの大学で神経の再構成について研究しててね、それが気になって見に行ったんだよ。6歳で入学して、10歳で卒業。卒業してすぐ来たからその写真

は10歳の頃だね?」

「神経の、再構成?」

ふと、初めて彼女をおぶさったときの話を思い出す。

愛しい妹、彼女の大切な人。

彼女は確か神経の異常で足が動かないと言っていた。彼女のために人生をかけたと。

話とこの写真から察するに彼女がここに来たのは4歳から10歳の間。その間に神経の研究をしていたのなら、妹はその頃に他界しているはず。

心理学的に、幼少期の出来事は人格の形成に大きく関わっていると言われている。つまり、妹の死こそが彼女を構成する全てであり、そこが深淵の入口なのだ。

「神童なんて昔は呼ばれていたよ。それがきっかけで僕の元に来たしね?」

「神童ねえ、そりゃ10歳の時に大学にいればそう呼ばれるだろう」

「それだけじゃない。彼女は先を見ていたんだよ」

近づく深淵に少し口角が上がる。それを隠すように口を手で覆うと、冥土返しは気づかずに言葉を続けた。

恐ろしいものを思い出すように絞るようにでた声は彼の頬に冷や汗を流す。

「どの治療法が成功し、どの治療法が失敗するか、彼女は元々知っているようだった。未来予知に近いんだ」

気重になる空気に居心地の悪さを感じる。冥土返しはカルテを閉じると棚に戻して息を着いた。

「全く、15歳だと言うのに恐ろしい」

他のどの発言よりもその発言が少し引つかかった。

彼女は4月生まれ、16歳だと、バイクを乗り回していた時に言っていた。彼が間違えているのではないかと思いい口に出すと、冥土返しは何を言っているのか分からないと言った顔をした。

「15?16って聞いているが?」

「ん?彼女は9月生まれだからまだ15のはずだよ?」

年齢詐称。しかも誕生日まで違ふとききた。4月と9月ではだいぶ違ふ。

俺の知っている天羽隼糸は結構面倒くさがりな性格をしている。

そのため部屋はこの世の終わりかと思うほど汚いし、花火みたいな娯楽なんて興味がない。だから少しの仮説が思い浮かんだ。

「……もしかして、9月29日か？」

「なんだ、知ってるんじゃないか」

「いや、あいつの部屋番号から察しただけだ……結構安直だな、面倒くさがったか？」

「部屋を選んだのは彼女だよ。あの子は結構面倒くさがりだからね？」

そしてその仮説は当たりだった。

アクティブでよく考えるはずなのに、安直で面倒くさがり。抱えた矛盾は彼女らしかった。

「彼女はね、今まで誰とも交流がなかった」

「あいつ、友達いないもん」

「だから君がいてホッとしてるんだ。彼女にも頼れる友人がいることが」

「……友人ねえ」

友人という言葉に少し反応する。俺は彼女の友人なんかじゃないと、反論したかった。

しかし、だからといって俺たちの間を表す明確な言葉もない。反論しようと開けた口からは空気しか出なかった。

「あの子も僕の患者だ。精神が不安定な彼女を正するのが僕の医者としての義務だ。そしてその治療には君も必要でね？あの子を正すのを手伝ってやってくれ」

俺と彼女の関係は複雑だ。

兄と妹、飼い主と犬、嫌いと好き、興味と無関心、憎しみと愛情、そして認めたくないが姉と弟と、複数の関係が混じり合う。

そして今日、ここにセラピストとクライエントの関係性も追加されてしまった。

「暗部の人間だって知ってるだろ。なぜ俺に頼む」

「簡単さ。彼女を信じてるからだね？」

カエル顔の医者は優しそうな瞳で俺を見つめる。

ああ、嫌だ。優しさが取り巻く空間は苦手だ。底抜けに優しく甘
い女の隣にいても、それだけはまだ苦手だった。

「君はいい子だと、彼女はまるで君の姉のように笑って言っているよ」
「……姉とは、実に厄介で気色悪い生き物だな。悪党をいい子と呼ぶ
なんてあのイカれた女くらいだ」

姉である彼女に勝てそうにない。けれども彼女を下に引きずり降
ろして見下ろしたいと、兄である俺は願うのだ。

九月

35話：始業式

9月1日、二期期初日の今日、昨晚起きたいざこぎのせいで病院で一夜を過ごしてしまった事実にうんざりしながら仮眠室から出ると、五人の少女に囲まれた。

自分より20cmは低く、全員が茶髪で同じ制服を着たその少女たちは五人姉妹というわけではない。

彼女たちは第三位、御坂美琴の軍用クローン。二万のクローンのうちの五体は様々な理由でここに配属されていた。

「垣根さん、打ち止めを連れてきていただきありがとうございます」とミサカ10032号は嫌々ながらも感謝します」

「嫌々って……まあ、頼まれたことだしな、感謝する程じゃねーよ」
困んでいたミサカの内の一人が無表情で感謝の言葉を伝えてくるが、その顔も相まって感謝されているとは到底思えなかった。

別に感謝されたいなど思ってもいないし、打ち止めを病院に連れてきたのは俺に頼んだ女に口煩く言われたくないからで、決して良心からではない。

昨夜起こったことは実際のところ多くは知らないが、一方通行を助けたような気がしてならないし、結構複雑な心情を抱えていた。

「あ、あの、垣根さん」

「あ？」

悶々とする感情に蓋をしながらため息をつくとき、恐る恐ると言った表情で別のミサカが俺の服の袖を引っ張った。

おそらくこの中で一番おしとやかな子だったはず。確か番号は19090号。

「えっと、あの、打ち止めはミサカ達が見ているので、天羽さんに朝ごはんを食べるよう説得してきてくれませんか？と、ミサカ19090号は少し照れながらお願いします」

「アレを？飯に？勝手に食うだろ。昨夜も結局食べてねえし、腹減る

んじゃねえの？」

19090号は少し目を伏せて女の子らしく小さな声でつぶやいた。しかし内容は女の子らしいキラキラとしたものではなく、もはや内容的には介護に近い。

サプリと栄養補助食品とスイーツだけで生命を維持しているミサカたちの上司は彼女たちの悩みの種だったようで、少女たちは全員揃ってため息をついた。

「あの人はいつもご飯食べないので。さすがに今日は二学期の始まりなので食べてもらいたいのですが、とミサカ9932号は苦悶の表情を浮かべます」

「ならお前らが誘えば？」

「ミサカ達はそうホイホイ外に行けませんので、とミサカ10039号は答えます」

「それと、ミサカ達は彼女の部下なので強く言えません、とミサカ13577号は付け加えます」

リレーのように言葉を繋いでいくクローンの少女たちになんとも言えない不気味さと面白さを感じるが、彼女たちの依頼は全くもって面白くない内容だ。

めんどくさいことを押し付けられている感が否めない。

「はあー……めんどくせえな、冥土返しに頼めよ」

「冥土返しは天羽さんに弱いので無理だとミサカ9932号は断定します」

「た、たぶん天羽さんは垣根さんの言うことなら聞くとと思うので……と、ミサカ19090号は小さく言い添えます」

十もの継るような無表情の瞳がじつと俺を見る。流石に目を向けられたら少し困る。

それでさえ話の内容は世界一嫌いな妹分について、嫌だと思いがらもしぶしぶ承諾してしまう。

「……お兄ちゃんポジションは大変だな」

小さな呟きにはこれ以上ない感情がこもっていた。

そんなこんなで、再びナースステーションへ足を運ぶ。

「飯食いに行こうぜ」

俺の一言に彼女、天羽彗糸は目を丸くした。

朝ご飯も食わずに始業の時間までナースの業務を終わらせると意気込んでいた彼女にはその言葉は望んだものではなかったらしい。

嫌そうな顔をして遠慮しやがる彼女に腹が立つと、その襟を掴んで彼女の私室と成り果てた研究室まで引き摺る。頼まれた身なので、どんな武力行使も厭わない。頼まれごとじゃなくとも武力行使に出る確率が高いが。

駄々を捏ねたつてお兄ちゃんという生物は妹に優しくなんかしないのだ。

「……で、なんで地下街？」

無理矢理私服に着替えさせて引っ張ってきたのは懐かしの地下街。

このこのゲーセンで彼女と出会ったのだが、まあそんなことはどうでもいい。

「外歩くの暑いだろ？紳士的で優しい俺に感謝しろ」

「いや、よりによって……ま、いつか」

不貞腐れながら俺を睨む彼女だが、怖くはなかった。なぜなら、その瞳の奥には好奇心と、喜びがきらきらと溢れていたから。

それに喜びを感じると、俺はムカつく妹の無理やり引っ張って目的の場所へ向かう。

俺は誰よりも、お前が甘いものに目がないのを知ってる。

「あつ！ケーキ新作出てる！」

だからご飯を食べたあとも、甘味を見つけると彼女は時間を忘れて俺を引っ張る。彼女は誰よりも自分本位で、我儘。それはどう考えても『妹属性』だ。

「ブドウシェイク美味しそうだよ垣根くん！」

笑顔で、まるでただの少女のように彼女は跳ね回る。やはり女は甘いものに弱い。それはこの馬鹿な少女も例外ではなかった。

いつもの気味の悪さとは無縁の姿だった。

「次はアイスね!」

やはり、マザーグースは正しいようで、彼女は砂糖で体を構成している。砂糖の塊片手に喜ぶ彼女は外見から懸け離れた幼い子どものように見えた。

……しかし、ものには限度がある。

「テメエは掃除機か!」

堪らず声を上げると、天羽は隣で不思議そうな顔をした。

七回は甘ったるいものを買ったというのに、なぜ今だに衰えず甘いものを口にくわえているのだろうか。

「垣根くん、これはゲームって言うんだよ?」

この間まで中学生だったとは思えないほど豊満な胸にフラペチーノの入った容器を乗せて、太いストローで飲む彼女の手元は一寸の狂いもなく的確に目の前のゲームのボタンを押す。

俺たちがいたのは出会いの場、ゲームセンター。出入口に置かれたアーケードで対戦している俺たちだったが、あまりの俺の負け具合に腹が立ち、つい先程の放縦な彼女を思い出して叫んでしまう。

「ちげーよ。どれだけ食うつもりだ胃袋ブラックホール」

しかし、俺の腹立たしきをもとめせず、彼女は甘ったるい飲み物をフリーハンドで飲みながらゲームを続ける。

だというのにハイスコアを叩き出している彼女は例のドーピングをしてなさそうだった。

「甘いものは別腹って言うでしょ?」

「生物学専攻してた大卒が別腹なんてふわふわした言葉使うんじやねえよ。太るぞ」

「ちよっつとつとまってるんで大卒知ってるの!?!教えた記憶ない!」

余裕を崩したい一心でつい昨夜知った彼女の秘密を零すと、彼女は目に見えて慌て出す。

その余裕がなくなつた哀れな姿が見たかった。優越感が再び俺の

心を支配する。

「昨夜冥土返しから聞いたんだよバァーカ」

「しゅ、守秘義務がない……?」

愕然とした表情を浮かべ、なにやら悩み出す彼女だったが、秘密を掴まれたことよりも考えるべきことがあるのではないかと少し呆れてしまう。

ポケットに入れていた携帯を取り出し、時刻を確認するとため息をついた。

「つうかお前が点々と店変えるからもう昼じゃねえか、お前学校はいいのかよ」

「いいじゃん、どうせ今日は始業式だけでしょ?」

「サボりはよくねーぜ?」

「人のこと言えんでしょ、アンタ」

見た目から想像もつかない優等生な彼女に今この状況を携帯の画面を見せつける。携帯が指し示す時刻はとつくに昼を過ぎ、始業式だけの今日ならもう生徒は下校する時間だ。

俺はなんとも思っていないが、優等生な彼女にはきつと毒。そう思つての言葉だったが、予想と反して彼女はなんともなさそうに笑う。どうやら彼女は思つたより優等生ではなかったようだ。

「いいじゃん、楽しいよ?弟分と遊ぶの」

「え、なに、俺のこと好きなの? テメエは無理だわ、回れ右して帰りやがれ」

「は?あたしの崇高で、純粋な愛情を恋情とか下賤で上辺だけの愚劣な感情にしないでくんない?」

ふざけたことを言い放つ彼女に苛立ち、からかい混じりに彼女の嫌がる言葉を投げかけるとその女はあからさまに笑顔を崩して威嚇する。

ワントーン下がった彼女の低い声と笑顔のない無に等しい顔はかなり怒ってる証拠。さすがにここまで怒っている所を見たことは無かった。彼女の沸点はいつだっておかしくて、意味不明。

「うつわ、ガチトーン……冗談なんだからそんな怒るなよ、沸点がわか

んねーんだよお前」

「あたしの愛はね、姉弟愛、隣人愛……人はこれをアガペーと呼ぶんだよ。お分かり？」

「ぜってえ呼ばねえ。それはな、自己犠牲型他者愛性愛着障害って言うんだよ」

アガペーだなんて、笑わせる。

お前の愛は汚くて、穢れてて、多方向に向けたもの。そんな醜い愛の形を綺麗だなんて呼んで欲しくなかった。

作り上げた言葉を吐き捨てるにあからさまに顔を顰めた。

「それ、垣根くんの造語でしょ。そんなもの心理学で習ったことないけど」

「お前に関しては俺がルールだって言うてんだろ」

「なにそれ、俺様系？ウケる」

言葉とは裏腹に彼女の声色と表情は笑顔には程遠い。

苛立った表情だが、見た目は怒ってなさそうだった。真っ白いシャツにプラスチックの容器を乗せて冷めた顔をする天羽に笑いが込み上げるが、それと同時にある疑問が浮かぶ。

「つーかよ、姉妹愛だったって、妹と過ごしたのは多くて九年くらいだろ？なんでそんなに執着してんの？」

「……あたしの生きる意味だったってだけ」

その疑問は彼女の根幹に関わるもの。昨夜色々と天羽本人の話は聞いたが、彼女を突き動かす感情に関わるものは何も聞いていない。

冥土返しの話が本当なら、彼女が妹と一緒にいたのは学園都市に入る前、つまり彼女が10歳の時まで。たかが九年程度、それも記憶がおぼろげな幼少期のころにいた妹への執着は並ならぬものだ。

「生きる意味ねえ……妹のために幼少期に大学入ったってくだりか？」

「文字通りの意味だよ。あの子が出来ないことはしない、あの子のためになる選択をする。人生全て、捧げたかった」

「ストイックすぎるだろ。その精神を今でも続けてるとか正気の沙汰じゃねえな」

「あたしにはそれしかなかったからね」

こんな性格じゃ、親も苦勞するだろう。話を聞いてもその程度しか思い浮かばなかった。

自分の意思は全て他人のため。他人のために自我を通すその生き方は彼女を産んだ両親や、重い愛を受け取る妹にしては鬱陶しいものでしかない。

「妹とは仲良かったのか?」

「あたしは愛してたけど……彼女は知らない」

「冷たい奴だったのか?」

「そういうわけじゃないよ。悪戯好きで、生意気で、可愛くて、明るくて。好きな漫画とか本とか、アニメとか、いっつも楽しそうに話して……とつても可愛い子」

こちらと目も合わせずに、彼女は目の前のゲーム機にコインを入れる。スタートのボタンを押して冷えた声で答えるこの女の横顔にはどこことなく後悔の色が見えた。

人の目が見れないほど、彼女にとって妹の存在は大きいのだろう。

「じゃあなんで知らないなんて思うんだよ。話聞く限りじゃ仲良さそうじゃねえか」

「……さっき大学の話が出てたけどさ、あの子はあたしが大学で何をしてたのか興味無さそうだった。あたしに興味が無いんだよ」

彼女の口振りは酷く冷たいものだった。そしてある推測が同時に浮かぶ。

前提として、この女の妹は姉である彼女に自分の好きな物を共有したい程度には愛情がある。趣味や興味を共有したいと思うのはどう見てもプラスの感情。どういう意味の好きでも、それは変わらない。どうして彼女がそれに気づかないのか、それは彼女がきつと愛なんてものを知らないから。

ではなぜ、妹は自分のために大学へ行く姉に興味を持たなかったのか。

これは推測でしかない、彼女の家族構成も、妹の人格も知らない。だからこれは俺の妄想だ。

自分の好きな人が自分のせいで人生を捨てたらどう思うのか、人生を妹のために捧げたことを妹はどう思ってたのか、彼女が人生捧げてまで掴もうとした幸せが本当に妹の幸せだったのか。哀れな考えが頭に浮かぶ。

「テメエは不幸な奴だな」

きつと彼女の国語の成績は最低だろう。

思わず乾いた笑いが溢れる。

頭がおかしくて、不幸で、それでも自分は幸福でまともだと思っている哀れな女。間違った努力をし続ける馬鹿な人。

その生い立ちをいつか知るのだろうか。

「は？喧嘩売ってる？」

「なんだ、喧嘩したいのか？」

「したいのはそっちでしょ？」

五月蠅い妹分はゲームそっちのけで低い声で威嚇する。自分の哀れさに気づかない、気づこうとしない彼女を思わず鼻で笑うと、さらに天羽は顔を歪ませる。

どんなに馬鹿にされようといつもヘラヘラとしているのに、自分が不幸と言われるのは嫌なようだ。

ばちばちと交わる視線の間に火花を散らし、威嚇し合う。一触即発とはこのことだ。

「あのお、お二人さん？兄妹喧嘩は他所でやった方が……」

「誰が兄妹よ！」

「お前らだよ！」

しかし、突然話しかけてきた男によってそれは中断される。顔を近づけ睨み合っていると、ぽんと肩に手が置かれた。置かれた右手は男の手。

兄妹という単語に素早く反応したのは天羽だった。威嚇する猫のように声を張り上げると、その人物は見るからに狼狽えた。

「あ？上条？なんでここに」

「いや、それは上条さんのセリフ……」

その人物は上条当麻だった。昨夜会ったばかりの彼との再会は何

故か懐かしく感じる。

始業式を終えたと思われる上条はいつもの学生服に薄っぺらい学生靴を持って呆れた顔をしていた。

「ていとくー！けいとー！昨日ぶり！」

「インデックスも一緒か、仲良いな……あ？そっちは？」

学園都市では珍しい真っ白いシスターをいつものように引き連れた上条だったが、後ろに別の人物を引き下げているのに気づく。

ノーフレームのメガネを掛け、長い髪を一部サイドで結んでいる少女。有名な女子校の制服を着込んだ少女は俺の隣に居座る女とほぼ同じくらいに胸部が膨らんでおり、上条の隣にいつも居るタイプとは全く違っていた。

おっとりした見た目に、長い髪、服の上からもわかるプロポーシヨンの良さ、清楚感。ああ、男が好きな女子の要素を全部注ぎ込んだような女子生徒だなと、生暖かい目で上条とその少女を眺める。

とうとうインデックスから乗り換えたか……と失礼極まりない思考が一瞬浮かぶ。しかし、その生暖かい目に居心地が悪くなったのか少女が口を開けた。

「あの、えっと、そのお……」

「彼女は私の友達！ねー、ひょうか！」

「えっ、あつ、はい、か、風斬氷華つていいいます」

風斬氷華。

その名前に聞き覚えがあった。

霧ヶ丘女学院にいる「虚数学区の鍵」、プランの重要な役割を担う謎の少女。

その程度の情報しか知らないが、それでも彼女が危険であり、マークしておかなければならない存在だと分かる。

それを隠して押し黙っていると、俺を代弁するかのように少し苛立ったように天羽は言葉を零す。

「……友達、ね」

何かを知っているようだった。恐らく、それは風斬氷華のこと。随分と物知りだ。その知識は一体どこから来るのか甚だ疑問だっ

た。

パソコンもろくに使えず、俺にハッキングを頼んでくるほど。何より彼女は表の世界の住人。

なぜこんなにも気持ち悪いほど闇に詳しいのかが気掛かりだった。

「それはともかく、天羽、小萌先生怒ってたぞ？初日からサボりとは補習が必要ですね！って」

「うわあ、最悪！垣根くんのせいだかんね!？」

「テメエのせいだろ、責任転嫁すんじゃないやねえコラ」

しかし瞬きをした一瞬で彼女の苛立ったような表情は吹き飛んでいた。ムスツと俺に責任を問う彼女は怒ってはいるが、ふざけているだけ。本心での怒りと上辺だけの怒りくらい見分けが着く。

だからこそ彼女が今何かを隠していることもよく理解していた。ムカつくことこの上ない少女。

「ねえ、ていとく」

「あ？なんだよ」

苛立ちを隠しながら賑やかなゲームセンターの奥を眺めていると、インテックスに話しかけられる。

興味津々といった風貌で俺と天羽二人が先程までやっていたゲーム台を指して首を傾げた。

「これなに？なんのテレビ?」

「あの……それはテレビじゃなくて……」

「これはゲームだ、ゲーム。やった事ねえのか?」

まじまじとゲームを眺めるインテックスだったが、突然鳴り響く電話の着信音に肩が跳ねる。一瞬自分の携帯かと感じるがそれは杞憂だったようで、うるさい電子音の出所は上条だった。

「電話?悪い、中に入っててくれ」

「うん!行こう行こうひょうか!」

呑気に携帯を取り出すと、彼は優しくインテックスにゲームセンターに入るように促す。

その姿を見届けると、彼は俺たちに困った様子にお守りを頼んだ。

「垣根、アイツらのこと見ててくんねーか?」

「しゃーねーな、あとでなんか奢れよ?」

同居人が心配なのだろう、愛に溢れるその頼みに頷くと彼は嬉しそうに笑う。

通話ボタンを押して電話口を口元に当てた後ろ姿に羨ましさを感じながら、俺は隣の女の襟を掴んだ。

「おら、行くぞバカ」

「喧嘩売ってる?」

天羽の襟を掴み、引つ張るようにゲームセンター内に足を踏み入れると、目の前のゲームに群がっているのが見える。

ぴよんぴよんと跳ねながらゲームの辺りをうろつく少女達は片方がシスター服じゃなかったら放課後の女子生徒にしか見えない。

「可愛い可愛い可愛い! ねえねえ、可愛いよひょうか!」

「う、うん……」

先にゲームセンターに入っていた少女2人はクレーンゲームに興味を示していた。

白い頭巾を被った茶色いクマが積み上げられたクレーンゲームを嬉嬉として眺めている。所狭しと敷き詰められたぬいぐるみは子供受けするようだ。

「なんだ、それが欲しいのか?」

「ていとく! 取れるの!?!」

「この垣根帝督に不可能はねえ」

子供がおもちやを欲しがるのは当たり前前の感情だ。不幸で貧乏な主人の代わりに取ってやろうとポケットに入れていた財布から取り出すと、緑のネイルがそれを阻止する。

呆れたような、蔑むような目つきがこの行動を無駄だと言っていた。

「さつきあたしにボロ負けしたくせに?」

「あ?」

「は?」

「あのう、おふたりとも、仲良く……」

俺と初めて会った時、俺がたくさんクレーンゲームで賞品を取って

いたのを覚えていないのだろうか？

そう思つて睨むが、彼女は優越感たっぷりに笑うだけだった。一度きりの勝利で悦に浸つてんじやねえと、今度こそ勝つてやるという意味を込めて中指を立てると、別の少女、風斬氷華に宥められる。

「怒られてやんの」

「あ？殴る」

その一連の流れを笑う天羽に思わず手を上げるのは当たり前のことだろう。

「ん？ねえ！なにあれ！」

「ああ、コスプレ……」

ムカつく女のこめかみを拳でグリグリと抉っていると、インデックスが道行く女を眺めて黄色い声を上げた。

大胆にもバニーガールのコスプレをした2人組の女子に興味が移ると、インデックスは興奮気味に目を輝かせる。バニーガールの入つていった場所はゲームセンターにはよくあるプリントシールの撮影ゾーン。

キラキラとエフェクトのかかったシャッター音が聞こえると、インデックスはあからさまに興奮し撮影スペースがあるカーテンの奥を凝視した。

「ほら、あっち、写真シールの撮影用に服の貸し出しサービスをやってるんだと思う」

「上条くんはあたし達が待つてるから、やってくれば？」

風斬氷華が指差した場所にはカーテンのついた簡易更衣室がずらりと並んでおり、毒々しいデザインのポップと無料コストの単語がこれでもかと強調されている。

コスプレして何が楽しいのかさっぱりわからないが、女子なら心踊ることなのだろう。そう思つておそらく一番身近な女性に目を向けたが、全く興味なさそうに一人蚊帳の外感を醸し出していた。

その表情から伺える感情は『無関心』、または『無関係』だろう。花火にもコスプレにも興味がないこいつはどこか大人びた笑顔でインデックスを眺めていた。

「ありがとうー！行こう、ひょうか！」

「いつてらー」

困惑する風斬氷華の腕を引つ張ってコスプレコーナーへ走り去るインデックスを見送る。

年相応に楽しそうに遊ぶ彼女たちの笑い声を聞きながら上条を待っている、しばらくして何も知らない彼が不思議そうな顔をして歩み寄ってきた。

「あ、いたいた、垣根！あれ？インデックス達は？」

「ああ、アイツらならプリクラの為にコスプレ中だ」

「と、とうまっ!？」

閉められたカーテンを親指で指差し簡単に事情を説明すると、上条ではなくカーテン越しに女性陣二名の声が上がった。慌てた様子の声色から着替え終わってないことがよくわかるが、カーテンに隔てられている現状、焦る意味がよくわからなかった。

「あの、い、今開けてもらおうと困ります……!？」

「ふふん、上条さんは保健室の轍は踏みませんのことよ!？」

なぜ上条が見るからの地雷を開けると思うのだろう。つつかつかる言い回しに首を傾げるも、上条の言葉で余計ややこしくなる。

「保健室で何があつたんだよ……」

「上条くんはラッキースケベの達人だからねえ」

「いやいや、上条さんは不幸ですからね?」

自称不幸の少年は隣でめんどくさそうにスマホをいじる天羽の適当な言葉に反論する。胸を張って言えることではないはずなのに、虚しく胸を張っている彼は見るに耐えない。

「あの、ちょっと、押さないで……!きやつ!」

そんなバカみたいな会話を途切れさせたのは女性の短い悲鳴。風斬氷華のものと思われるその悲鳴は先ほどの天羽の言葉をまさしく体現したものだつたと、ことが終わった後に思うだろう。

不幸とは一体なんなのか、哲学的な問題を持ってきそうな奇跡的な確率で男と女を隔てていた布切れ一枚がビリビリとカーテンレールから外れ落ちる。

カーテンの向こう側、よく知らない青と白が特徴的な魔法少女モノのコスプレをしたインデックス。

バラバラな服を着る少女たちはその反応も様々だった。一人は不慮の事故とはいえ着替えを覗かれたことに怒りを露わにし、一人はそれに怒りではなく羞恥を覚えて頬を染めた。

三者三様の姿に覗いてしまったという罪悪感や、やましいものを見てしまったという性的な興奮よりも、呆れしか出てこない。

「ま、こうなるわけですよ」

「……なるほどな」

片手で項垂れる頭を押しえながらため息をつくとき、更衣室から飛び出てきたインデックスが怒りに任せて上条を噛みまくる。その光景に再びため息をつくとき、天羽も乾いた笑みを漏らした。

目の前のカオスな空間に呆れしか感じないが、同時に少女たちが楽しむ空間に隣にいる天羽が混じらないのも彼女の性格を考えるとため息しか出てこない。

「テメエはやんなくていいのか?」

「見てるだけで十分だよ」

「ま、お前の場合、毎日がコスプレだもんな」

改めて見る彼女の意味不明なファッションセンスに思わず頭を抱えてしまう。

真っ白いブカブカのシャツに明るいライムグリーンのワイドパンツ。裾をいれたシャツと、ゴテゴテした指輪にチョーカー、ネックレス、ブレスレット。

コスプレまがいのファッションはコスプレではなく、私服なのが末恐ろしい。

「そんなに変? 普通じゃない?」

「もつとガキらしい格好しろよ、老けて見えんぞ」

「あたしはガキじゃないんですけど? 大人と言ってくんね?」

馬鹿にするような言葉を口にする時、彼女は低い声を絞り出す。

彼女は妹と呼ばれるのが酷く嫌いだった。だから俺はそこにわざと蹴りを入れる。コイツを怒らせて、苛立たせて、感情を見たい。そ

の深淵に近づきたい。

優越感が心を渦巻く。この瞬間が堪らなく好きだった。

「ガキだろ」

「垣根くんのほうがガキじゃん」

「年齢は俺の方が上だ高校1年生」

「精神の話してんの」

まさか一歳差とは言え年下にガキ呼ばわりされると思ってもみなかった。

いい加減堪忍袋の緒が切れそうだった。シャツを掴んで顔を近づけさせると、低い声で威嚇する。ほんの少しだけ背の低い彼女は背伸びをしなかつたって容易くそれに順応した。

「あ？喧嘩するかクソガキ？」

「え？なに？去勢されたいって？」

両者互いに睨み合い、一步も譲らない。

けれど、野次馬から聞こえる俺らに向けられたヒソヒソ声が耳に入ると、途端にその勢いを無くす。

認めなくてはならないが、こんな見てくれの男女が喧嘩しているのはかなり目立つはずだ。

「で？テメエは写真撮ってこねえの」

「撮らないよ、メンドクさい」

こほんと咳払いをして話題を逸らす。着替えを事故とはいえ覗き見た上条に齧り付くインデックスを横目に、無難な会話を広げようとしたが呆気なく彼女の否定の言葉で崩れ去った。

会話を広げようとする気はこいつには無いのだろうか。こいつとは沈黙しても気まずくなることはないが、自分の努力が否定されるとなんだか悔しい。

「えー！けいとも写真撮ろうよー！」

「うちらもう帰んなきゃ行けないからさ、ごめんね？」

上条を齧りながらインデックスが落胆の声をあげる。残念そうにしていた彼女だったが、天羽はなんとも思っていないようで心のこもっていない声でインデックスに謝った。

帰るだなんて言う天羽だが、早く切り上げて帰りたい理由は分からない。

「あ？用事でもあるのか？」

探るように聞いてみるも、困ったように笑うだけだった。

結局、写真も撮らずに俺らは二人で帰路をついていた。

「ほんとに良かったのかよ、帰ってきて」

「いいのいいの」

地下街から地上に上がるための階段を登りながら彼女に聞くと、天羽は気にしていないかのように話す。友達がいらない博愛主義者は、友達なんて作れないと当たり前のように受け取っていた。だからこそ彼女は写真も撮らないし、青春の一ページを作ろうともしなかった。

あまりにも孤独な思想にため息と呆れた笑みなが溢れていると、後ろから走ってきた野郎に肩をぶつけられる。

どかっと、ぶつけられた肩に痛みはないが、ただただ腹立たしい。舌打ちをしてその男を見上げると、心配そうに天羽が見上げてきた。

「あ？……なんだよ、階段で走ってんじゃねえよクソ」

「大丈夫？怪我は？」

「いや、大丈夫だが……」

謝りもしないのかよ、と怒りを顔にして拳を握る。何をそんなに急いでいるのかとおもいながら後ろを振り向くと、後ろにはどう考えても通勤ラッシュの電車の人数がわらわらと階段を登っていた。この時間帯でこれほどの混雑は有り得ない。

少しの疑問と不安が脳にチラつく。

「あー、ゴミ捨てなきゃ」

何かあったのか合法的に調べるため携帯を取り出すが、天羽の間抜けな声で中断される。

わざとらしいその声に一瞬眉を顰めるが、手に持った空の容器を見せつけられると思わず黙ってしまう。本当のことを言っているのはわかるのに、下手な演技が胡散臭く感じさせた。

「戻って捨ててくるから先行つて。少ししたら戻るから」
にこりと貼り付けた笑み。それはいつも見る秘密のサイン。俺が剥がしたいと願うそれ。

何を考えているのかわからない笑みは酷く恐ろしかった。

「おい、さて、お前何考えて」

大きく足を踏み込んで、金色と桃色の髪が跳ねる。階段を踏まずに下まで一直線に降りた瞬間、大きな揺れが足元を疎かにした。

「じゃーねん、垣根くん！」

そしてシャツターが目の前に落とされると、彼女との間に壁を作る。地震に反応して落ちたと思われるそれは薄っぺらくて、けれど全てを拒む。

また一人で勝手にフラフラとどこかへ去る彼女が堪らなく不安だった。

俺の知らないところで何かしでかして、何かを助けて、何かを救って、何かを甘やかして。

人口調味料のような醜い甘さでできた少女が俺の知らぬところで、知らない人に、その秘密を教えたいと思うと嫌になる。

それは俺だけの楽しみだと言うのに。

「お前のリードは俺が握ってること、忘れるんじゃねえぞ」
息を吸う。そして大きく息を吐くと、俺は一人呟いた。

飼い主は俺であり、お前を見る目はどこにだってあると証明しなければならぬ。

「……少し早いお披露目になっちまったな」

誕生日は9月29日。少し早めのバースデープレゼントに驚く彼女の顔はどんなものだろうか。

たかがキーホルダー如きで、俺が終わると思ったのか。

ああ、この両目で見れないのが酷く不愉快だ。

36話：刺客

「お前の細腕で喧嘩なんか出来るかよ！」

「とうま、今までのラッキーが自分の実力だと思っ
てない？ 所詮とうまは魔術の素人なんだから！」

電気の消えた地下街。廃墟的な雰
囲気を纏う不気味な通路からは二人の男女の騒がしい声が響き渡る。

「何をおっしゃいますやら！ この不幸の塊である上条さんにラッキーなんかあるはずねえだろ！……自分で言っ
て嫌になる」

「あ、あの……」

ツンツン髪の少年、上条当麻と真つ
白いシスター服の少女、インデックス。

騒がしいその二人を宥めるように黒髪
の少女が割って入ろうとするが、それを遮るよう
にあたしは騒々しい二人組の肩を叩いた。

「お二人さん、仲良く喧嘩？」

「天羽!? お前帰ったんじゃ……!」

「けいと！ なんで来たの!？」

突然現れたあたしに目を丸くさせながら、
彼らはあたしに食ってかかる。

上条くんには白いシャツを掴みながらグ
ワングワンと上半身を揺らされ、インデッ
クスちゃんには周りをうろちよるとさせられた。
主人公らしく他人を気遣う心構えには感心するが、
その心配はあたしには無縁のもの。

「風紀委員ちゃん達が慌ててたからねえ、
手伝いが出来ればと思っ
て来ちゃった♡」

「来ちゃった♡じゃねえーよ！ 危険なんだぞ?!」

明るい声とふざけた調子で言ってみるも、
逆に怒られる。けれどそうやって怒るもの
の、上条くんはなんだかんだ諦めてく
れて、やれやれとため息をついた。

まったく、心配性なのは垣根くんと似
ていることで。それでもこの後現れるはず
の風紀委員に瞬間移動されないように平気
だと念を押

す。もともとの日に何が起こるか知っている身としては、偶然とはいえこの場にいるのだ、手伝いたいと思うのは当たり前だろう。

「不死身の隼糸ちゃんに不可能はなくなつてよ？」

「で、でも魔術師なんだよ!?この間みたいに血だらけに……」

「大丈夫、大丈夫!あたしがしたいのは警備員アンチスキルと風紀委員ジャッジメントの手伝いだから」

だがインデックスちゃんはどうも納得していないようで、しきりにあたしの緑のズボンを掴んで訴えてくる。優しく頭を撫でて大丈夫だと伝えても彼女の顔は晴れぬまま。

何故か彼女の胸元にいる猫も不安げな顔をしていた。猫は感情なんてないから、たぶん錯覚だろうけど。

ここまで心配されているのは恐らく、昨日のことが関与している。

昨夜、彼女に記憶の一部を覗かれているのだ。視覚情報だけしか彼女に伝わっていないとはいえ、疑惑の目を向けられているのは確か。

「あ、あの、えっと、もう一人の方は……?おひとりみたいですけど……」

「んー、安全なここに置いてきたから安心して?」

記憶操作が出来ればいいのに、などと物騒なことを思っていると黒髪の少女、風斬氷華から話しかけられる。

自己紹介をしていないためあたしと垣根くんの名前を知らない彼女は言葉を濁しながら質問をするが、何を言いたいのかはよく分かった。

それに笑顔で答えるもその答えは彼女を困惑させるだけだったよ
うで、しどろもどろに目を泳がせる。

悪いが、あたしの最優先事項は垣根くんただ一人。どんなに強かろうが、彼を危険な場所には連れてけない。

彼は上条くんたちとは違って主役でもなければ主人公でも無い。
ただの悪役で、死人。とても不幸な子。

そもそも今日、この日に地下街を選択してしまう時点で彼が不運なのは確定だ。

あたしがいることで事件に巻き込まれることは無かったが、選んだ

時点で既に不幸。

そんな彼は今頃不満でも漏らしてるだろうか。それとも呆れて帰ってしまったのだろうか。

スマホに着信が無いことから、きっと後者だろう。あたしに興味が無い方が彼にとつては安全だ。

「アイツがいるほうが安心するんだが？」

「あ、それより誰か来るよ？」

呆れ顔の上条くんの呟きを大胆に無視して、あたしは通路に目を向ける。

ちいさな二人分の足音。

年齢はたぶん少し下。能力のサーチ機能から算出したDNA配列は女だと伝えてくれた。

状況と結果から察するに恐らく風紀委員ジャッジメントの彼女と、第三位の少女だ。

「隠れるインデックス！」

「どうま逃げて！」

しかしそれを知る余地もない上条くとインデックスちゃんは、足音に警戒して互いを庇うように前に出る。

しかし残念なことに、お互いの大切な人の前に出ることは出来ない。ぶつかった二人の体はそのまま体勢を崩して重なって倒れてしまった。

その重みでインデックスちゃんの服の中に隠れていた猫が鳴く。

通路に響いた猫の悲鳴は甲高かった

「……ねえ、こんなところで何やってるわけ？」

「あらあら、こんな時間から大胆ですこと」

その猫の鳴き声に反応したのか、少女たちは突き当たりの通路からこちらに飛び出してくる。

倒れ伏した上条くんを見下ろしながら頭に青白い火花を散らす御坂美琴ちゃんと、それを呆れる白井黒子ちゃんが眼前に現れた。

「やつほー、御坂ちゃん、白井ちゃん。お仕事中心？」

「あら、こんには、天羽さん。お久しぶりですわ」

「久しぶり、お仕事大変そうだねえ」

修羅場になりそうな御坂ちゃんではなく、壁にもたれかかる白井ちゃんに話しかける。ツインテールが可愛い彼女はあたしを見ると丁寧に挨拶を返した。

「なにとうま!この品のない女たちは一体誰!?知り合い?!」

「アンタね、初対面の相手にいきなり品がないってどういうこと?」

「貴方、やっぱりとうまの知り合いなの?とうまとは一体どんな関係?」

お上品な白井ちゃんに声をかけた矢先、シスターともお嬢様とも思えない様な言葉が飛び交い始める。

上条くんを挟んで始まる修羅場に少しため息をつくが、青春真っ只中の少女達に可愛らしさも覚え、なんだか不思議な感覚が湧き上がった。

「かか、関係って!いや、アンタこそ、コイツのなんなのよ!」

「え?えっと、命の恩人だったりする」

「はあ?アンタも頼んでないのに駆けつけてくれた口?」

可愛い喧嘩に微笑んでしまうが、同時に遣る瀬無い気持ちになる。

垣根くんも青春をしていたのだろうか。

十月に死んでしまう彼は楽しいことはあつただろうか、好きな人はいただろうか、親友はいただろうか。

生産性のない幻想に縋ってはいけない、これから私がその景色へ導くのだと考えていないと弱いメンタルはすぐ落ち込みそうだ。

「とうま!」

「アンタ!」

「は、はいっ!」

「どうということだか説明してもらおうわよ!」

「どうということだか説明して欲しいかも!」

少女二人による不毛な言い合いは、二人のため息で矛先が変わった。

御坂ちゃんの言葉に頷いたインデックスと、その意味が理解出来た

御坂ちゃんは今度は大きな声でそれぞれの意中の相手を呼ぶ。あまりの大声と気迫に体が強ばった上条くんにはズカズカと迫り、顔を見上げると彼女たちは怒りの表情を見せた。

「まあまあ、二人とも落ち着いてー!」

「なるほど、大体怪しいと思っていたのですけど、お姉様は私を差し置いて上条さんに身も心も全てをさらけ出したということですね、ふふ、ふふふ」

「さらけ出してなんかないわよ!」

宥めるように間に入ってるが、白井ちゃんの言葉に御坂ちゃんが反応してしまい、意味をなさない。

なんでこうも落ち着きがないのか。けれど状況は先程の修羅場とは一転したようで、御坂ちゃんは上条くんには呆れながら声をかけた。

「で?アンタ、今度はどんなトラブルに巻き込まれてるわけ?」

「知るかよ!」

「それで白井ちゃん、今何が起こってるの?」

「この地下街でテロリストが活動中のようです。大規模な戦闘が起る可能性がありますので、私達は閉じ込められた方たちの避難を済ませませんと」

漫才みたいな二人に少々呆れ、話を進めるために白井ちゃんに簡単に状況を聞くと彼女は簡潔に答えた。

これでも瞬間移動テレポートの使い手ですし、と冷静に付け足すと、胸を張って腕章を見せつけた。白井ちゃんの風紀委員ジャッジメントとしての責任感がひしひしと伝わってくるようで、なんだか微笑ましい。

「ならお前はコイツらを外に出してやってくれ、その間、俺が時間を稼ぐ」

「アンタが先に逃げるのよ!」

「とうまが先に逃げるんだよ!」

「つつてもなあ……俺の右手はあらゆる能力を無効化させちゃう、だからここに残るしかねえんだよ」

「私の力にも限りがあります、一度に運べるのは二人が限度でしょう」
自分の右手を眺めながら上条くんは笑う。困ったような笑顔に少

し躊躇うも、白井ちゃんたちは特に何も感じないようだ。

「あ、あたしは警備員のお手伝いするから遠慮しとく」

「そうか？ならまずはインデックスと風斬を頼む」

一瞬上条くんを目を向けられるが、慌てて拒否すると理解したのか軽く頷く。それ以上あたしに構うことはなく、別の人を逃がすように彼は白井ちゃんに頼み込んだが、それがいけなかったのかインデックスに怒ったような顔を向けられた。

それでも上条くんは乙女の気持ちがよく分かっているように首を傾げる。

「とうま、それはつまりこの短髪と残りたいんだね？」

「え？じゃあ御坂と風斬でいいよ」

「ほう……？アンタはこのちっこいのと残りたいと……？」

上条くんのいい加減な言葉に二人の乙女は眉間にシワを寄せた。どちらの優劣もないというのに、彼の隣にいたい一心で御坂ちゃんとインデックスちゃんはいがみ合う。

「不幸だ……」

その光景に思わず上条くんはいつもの決めゼリフを蚊のような弱さで呟いた。

そんな上条くんの言葉に答えるように白井ちゃんが二人の少女の肩に手を乗せる。よく分からないと言った表情をする少女達だったが、決定が覆ることは無い。

「ではお二人共」

「え？」

結局、選ばれたのはいがみ合っていた二人の少女だった。しゅんつと、音もせず三人は消えてしまう。

瞬間移動、実に便利な能力だ。瞬時に消えてしまった三名の少女を見届けると、上条くんは風斬氷華の方を向いて罰の悪そうに言葉を零した。

随分と優しい人だ。人じゃないものに優しくするなんて。

「悪いな、お前を残しちゃって」

「ううん、私は別に……それより貴方の方こそ……」

そう風斬氷華が呟いた瞬間、大きく地が揺れた。

「始まったか!」

グラグラと揺れる地面はなにか大きな力が奮われた証拠。通路の奥、その震源地に目を向ける。

「悪い、風斬!お前はここで白井が来るの待っててくれ」

「え? 貴方は?」

「魔術師を止めてくる」

力強い眼差しだった。驚異を消そうとするその視線は正しくヒーローのもの。

そんな彼は申し訳なきようにあたしに声をかける。ヒーローにしか出来ない真剣な顔はチクチクとあたしの心に棘を指す。

「天羽、来てくれるか?」

「もちろん!あたしはそのためにいるんだから!」

けれどその痛みに気付かないふりをしてあたしは笑う。

ヒーローへの嫉妬はただただ醜いだけだ。それぐらい、あたしだつて知っている。

土埃が上がる閉鎖空間、上条くと音の大きい方へ靴を汚しながら走る。

連鎖する銃弾の音と、重い何かが地面を踏む音が鼓膜を揺さぶつた。

「大丈夫ですか!?!」

火花を散らす通路に差し掛かると、そこでは警備員アンチスキルとなにか巨大なものが交戦しているのが見える。

土袋で簡易に作られた壁に身を潜めながら銃を持つ警備員達アンチスキルに上条くんが飛び出ると、一人の隊員が声を張り上げた。

「少年!こんなところで何してんじやん!」

「黄泉川せんせいじゃん！お仕事？」

「天羽！しかもそつちの子は月詠先生のとこの悪ガキじゃん！」

それはうちの学校の先生の一人、黄泉川愛穂先生。別クラスの担任ではあるが、あたしの立場的によく知っているのだ。

上条くんの後ろからヒョイツと顔を出すと、彼女は見るからに焦り始める。警備員アンチスキルとしては子供がここにいるのは有り得ないはずなのだから。

しかし警備員先生の心配をもともせず、上条くんは土埃の先の巨大な何かに足を進める。

その先にいるのは、記憶が正しければ土でできたゴーレム。その拳を地面に打ち付けている巨体が土埃の奥に佇んでいるはずだ。それを知らない上条くんは恐れもせずに危険地帯に足を踏み入れた。

「どこ行こうとしてんの！少年！ぐ、っ」

「先生！大丈夫？待って今治すから」

それを止めようと黄泉川先生は腕を伸ばす。しかし、体の傷がそれを拒んだ。

痛みに顔を顰め体を庇う先生のもとへ駆け寄るが、それも嫌なようで彼女は大声であたしを叱る。

「天羽、お前はなんでここにいるじゃんか！」

「先生も病院であたしの治療を受けてるなら分かるでしょ？あたしが理不尽な痛みが嫌いってこと」

怒るような目、心配するような目。ただの教師と生徒なのにそこまでの目をできる彼女や担任はとても素敵だと思うのはあたしが現代人だからだろうか。

けれどそんな目を向けられても困るだけ。

あたしは姉で、見守る人。立場が同じなのだ。

ただの生徒子供としか見られていないこの状況はかなり歯がゆい。

「まったく、月詠先生のとこの生徒は、悪い子が多い」

「仕方ないよ、だってあたしってそういう人間なんだもの」

そういつて笑いかけると、彼女はため息をついてあたしの肩を優しく叩く。

「天羽、少年とこ行ってやれ」

「え？」

「彼が痛みを感じてるんだ、大人より、子供を優先しろ。それがナースだろ？」

母のような寛大さを持つ黄泉川先生は優しくあたしを押しつけた。その優しさはあたしに向けていいものじゃないというのに。

あたしはその優しさを与えるべきなのに。

「大丈夫、もう治したから」

「な……はは、迅速じゃんか」

「戻ってくるまでには治ってるよ」

もう既に遠隔で自然治癒能力の向上を促している、あたしが戻るまでには完治しているだろう。驚いた表情をする先生だったが、今度は呆れた表情をして乾いた笑いを零した。

衛生兵として、お仕事はちゃんとしなくてはいけないのだ。それでも戻ってくるという言葉の意味を込めて軽くハグをするとあたしは上条くんの元へ向かう。

「上条くん！」

「天羽！アンチスキル警備員はいいのか？」

暗い通路に立つ上条くんの横に名前を呼びながら立つと、彼はあからさまに驚いた。先生を心配しているのか、少し焦りながら喋る上条くんの言葉に頷くと今度は別の女性の声が通路の奥から響く。

「おや？また哀れな子羊が迷い込んだのか？」

土埃が舞う通路の奥、どデカイ土の人形の隣に立っていたのは手入れのされていないミディアムの金髪と足をすっぱり隠す真っ黒いゴスロリの女性。

カトリックの見た目とはかけ離れたその服装の女はあたしの顔を見るとあからさまに嫌な顔をした。

それは恐らく、あたしを知っているからこそ表面化する感情。

「初めまして、魔術師さん。あたしのご存知みたいね？」

「ああ、知ってるよ。三番目の天使だろ？主天使だなんて呼ばれてる哀れな科学のモルモット」

直感からそう問いかけると、彼女はあっさりとそれを認めた。馬鹿にするように冷めた声で彼女が言う言葉の数々はあたしの知らないもの。

「あはは、天使！主天使ねえ!?しかも三番目！いやはや、アレイスターに天使って呼ばれてるだなんて光栄だわ」

よりにもよって天使だなんて笑わせる。

確かに、天から落ちた魂として天使と呼ぶのは間違っではないが、神の手先として崇められる存在に他人から揶揄されるのは酷く不愉快だ。

しかも主天使で三番目ときた。

主天使とは位の高い天使の階級のこと。英語ではドミニオン。

そして三はキリスト教ではとても重要な位置にある特別な数字。

思い出すのはこの間の天井亜雄が言った『^{サブ}肉体の^ド支配者^ニ』、そして『^{サブ}第3候補』という言葉。

何かが引つかかる。

アレイスターは何かを知っている？

あたしの知らない何かを。

「ふ、人間のくせに炎の子だと呼ばれてるだなんて、いけ好かない」「なに？アンタは立派な泥人形を持つてるじゃない。塵の子は塵の子らしく生きればいいじゃないん？それが旧約聖書に書かれたことでしょ?」

けれど今はそんなことどうでもいい。のちに調べればいい事だ。

今あたしがするべきはとつとこの場を制圧して、先生達の治療に向かうこと。衛生兵とは兎にも角にも忙しいものなのだ。

鼻で笑い、薄っぺらい挑発の言葉を並べる彼女にマウントを取るように歪んだ笑顔で扇動すると、彼女は目を吊り上げた。

「炎の子を騙る醜い泥から生まれた人形はお前だろ？それと、彼女はゴーレムIIエリス、ただの泥人形と侮らない方がいい」

白いチョークを握って彼女は獣のように唸り、あたし達を睨みつける。まるで一心同体のボディとでも言いたいように、彼女はエリスと名付けられた泥でできた巨体を誇らしく見上げた。

「大地は私の力、エリスを前にしたら誰も大地に経つことなど出来やしない」

「お前！」

「お前ではない、シエリー・クロムウエルよ。ま、ここで死ぬんだし、イギリス清教名乗つてもねえ」

鼻で笑うように名乗る彼女の言葉に上条くんはすこし怪訝な顔をする。

イギリス清教、この世界にしかない宗教は彼の守るべき人と同じものだ。その事実困惑しながら声を出すと、シエリーと名乗った女は強く彼を睨みつけた。

目は口ほどに物を言う。その目には憎悪が渦巻く。

「イギリス清教？ インテックスと同じ組織の人間がなんで……」

「戦争を起こすんだよ、その火種が欲しいの。だから多くの人間にイギリス清教の手駒だと知ってもらわないとね！」

上条くんの質問に力強く答えると、シエリーさんはチョークを振るってゴーレムに命令を下す。するとその泥人形はあたし達ふたり目掛けて大きい拳を振り下ろした。

間一髪といったところでそれを躲すも、拳は地面にめり込み、波紋のような衝撃と共に床を凹ませた。

「破壊力だけはパないね、見た目ブサイクだけど」

「くそ、少しでもあいつに触れることが出来れば！」

流石の腕力に驚くが、この程度ならもし食らっても複雑骨折と内臓破裂程度で済みそうだ。コンティニュー出来る身体はやはり素晴らしい。

上条くんと二人でそのゴーレムを見上げていたが、後ろから聞こえた声に目が奪われる。

「あの」

そこに空気も読まず現れたのは風斬氷華だった。上条くんの気遣いを気にも止めず彼女はオロオロと不安げにあたし達の背後に立つ。

その行動も含めてあたしは彼女が好きではなかった。本当は上条くんも危険な目に合わせたくないのだ、彼の心配をよそに勝手な行動

をとる彼女はやはりあたしと同じで人じゃない。

だから辛辣な態度をとってしまっても、罪悪感が湧くことはなかった。

「風斬!?馬鹿野郎!なんで白井を待ってなかった!」

「あの、えっと、その」

「いいから早く伏せろ!」

しかしヒーローである上条くんは彼女を心配し、叱る。ゴーレムによって作られた迫り来る新たな衝撃と、飛び交う瓦礫から彼女を守ろうと必死に腕を伸ばし、地面を蹴った。

けれど、その努力も虚しく、風斬氷華の額の左側に大きな瓦礫がぶつかってしまふ。ガツンと痛々しい音ともにぶつかつた瓦礫はメガネを弾き飛ばし、彼女を重力と共に床に叩きつけた。

「風斬!」

地面に叩きつけられた彼女に二人で駆け寄るも、その現実離れた光景に思わず息を飲む。

倒れ伏した少女の横で膝を地につけて上条くんは目の前の光景に目を見開いた。

「あーらら、大変」

風斬氷華は人ではなかった。

瓦礫が当たつた左のおでこから頬にかけて、文字どおりぽつかりと穴が空いていたのだ。まるで割れた卵の殻のように、空いたパズルのように、忽然と彼女の肌が失われていた。

そして壊れた頭の空洞には光り輝く三角の物体が禍々しく棲む。脳があるべき場所に潜んでいたそれは幻想御手レベルアップバーのときの化け物の核とよく似ている。

「な、なんだ、これ」

驚愕の表情を顔に浮かべて戸惑う上条くんだったが、対してあたしは至って冷静だった。

それもそのはず、元々彼女が人間でないことは知っているし、知らなくてもそもそも能力を使えば他人の肉体構成を把握出来るあたしに隠すことはできない。

あたしは風斬氷華を愛することは出来ない。だって彼女は人間じゃないから。

人じゃない肉体、それは人でない事を意味する。あたしと同じ。あたしは彼女の末路を知っているのだ。天使としての自分を受け入れて翼を生やす。

死を恐怖し、人になりたいと願い、生きたいと思った9932号とは違う。

彼女が人間になりたいと思わない限り、それが覆ることは無い。

あたしが好きなのは、人の姿をして、人のように意識する人間であり、それを凌駕し、不幸に怯えない自分や風斬氷華、クローンを愛することは出来ないのだ。

「う、あれ？メガネ……」

おぞましい自分の姿なんて露知らず、風斬氷華はゆっくりと体を起こす。いつもなら目の前にあるメガネがないことに気づくと、彼女は自分の顔に手を添えてしまった。

そこで初めて気づくのだ、自分が人ではないと。

「え？なに、これ？」

崩れた頭部に彼女は戸惑いを隠せなかった。欠けた部分をなぞるように指を動かすも、あまりにもおかしい現実には彼女はフリーズする。何が起こっているのか確認しようと右隣のガラスに目を向けるが、その行為はただただ彼女の恐怖を増幅するだけだ。

知らないお店のショーウィンドウが彼女の真実を映し出す。へたりとその場に座り込んでいた彼女はガラスに映る自分を見て動揺と焦り、恐怖を感じた。

「そ、そんな、え？こんなものって、いや」

全てを理解して狂ったのだろうか、風斬氷華は甲高く痛々しい悲鳴をあげると、立ち上がって走り去ってしまう。

「いやああああ！」

「風斬！おい！そっちは！」

「エリス」

彼女が向かった先には巨大なゴーレムが鎮座していた。上条くん

の声は届かず、彼女はゴーレムによって投げ飛ばされてしまう。大きな衝撃は彼女を高く舞い上げ、鈍い音とともに天井にその体を打ちつけた。

「風斬ー!」

「う、うう」

それでも彼女はめげずにゆつくりと立ち上がる。

破損されたはずの体はみるみるうちに再構築されていき、それが益々彼女の恐怖と不安を煽った。

「あああああ!!」

再び叫び声を上げて走り去る風斬氷華だったが、それを見て魔術師はほくそ笑む。

「行くぞエリス。無様で滑稽な狐を狩りだしましょう」

そう呟いた瞬間、土で出来た人形は天井に穴を開け、主人と共に逃げる。巨大な穴を開けられた天井は当たり前のように崩れ落ち、大小様々な瓦礫はまるであたし達の行く先を拒むように降り注いだ。

「くそ、何がどうなってるんだ」

降ってきた瓦礫に埋もれた通路を眺めながら彼は言葉を零す。その顔には焦りが見えた。

無力感と困惑でいっぱいはいっぱいの彼に少しでも助けになるのが多分今のあたしがやるべき事。そう感じるや否や、口が勝手に動き出した。

「簡単だよ、彼女はあたしと一緒に化け物って訳」

「お前と、一緒……?」

「あたしはね、能力の特性上他人の肉体を把握することが出来るわけなんだけどさ」

本当に自分の口から言っているのか少し不安になり一度口を噤むが、意を決して口を開く。

出てきた言葉は上条くんには理解し難いものようだった。

「彼女ね、体がないの」

「体が?」

ゆつくりと、そして優しく事実を話す。薄暗い地下街の空間で静か

に。

「肉体がない、それは永遠のもの。メビウスの輪。あたしとおんなじ」
まるで狐がキスをするように自分の両手で無限の印を作ると、それをメガネの要領で親指と人差し指と中指でできた輪っかから彼を覗く。

酷く不安げな表情をする彼だけが切り取られたようにあたしの視界に写った。

「まあ本物の肉体があるあたしの方が恵まれてるけどね」

その不安げな表情は突然鳴り響いた電話の着信音とともに更に酷く歪んでいく。彼の感情を理解することは出来なかった。

ちらりとあたしの様子を伺いながらぎこちなくズボンのポケットから携帯を取り出す彼に少し乾いた笑いが出てしまう。

「であれば？きつと答えを教えてくださいよ」

「……あいつのどこ、行ってきてくれ」

「見つかるかわかんなくてもいいならね」

あたしは笑って電話を取るように促すと、彼は苦々しい表情で小さく呟いた。

主人公はやっぱり優しいみたいだ。死ぬ事の無い人を心配するだなんて。

その甘い優しさは酷く心を痛めつける。優しくないあたしを余計醜く見せるだけだった。

彼の言葉に頷いたら風斬氷華が走っていった方向に足を向ける。上条くんの顔も見ずに迷いなく前を歩き、ある程度の距離を取ったらその場で立ち止まった。

「とは言ったものの……生命反応が無い無機物をあたしは見つけられるのかな？」

少しため息をついて能力による肉体探索を行うが、やはり生命体じゃなければ見つからない。

手掛かりもないし、どこかから音がする訳でもない。ゴーレムⅡエリスとシェリーさんが逃げていった大穴から進んでいれば良かったか？

とはいえ時すでに遅し。考えるだけ無駄ってやつだ。

「まあ、いつか、最悪見つからなければ一般人の避難誘導の手伝いすればいいだけだし」

人間とは切羽詰まると安全な場所に逃げようとする。この閉鎖空間においての安全な場所は出口。

もし仮に出口へ向かったのだとしたら、最初に上条くんたちが入ってきた出入口に向かうはず。なぜならこの地下街は今の彼女にとって初めてくる場所だと思われるから。

どこの出口に向かうか地下街のマップから調べようとするが、最悪なことに今立っているところには地図らしきものはなかった。

何回目かも分からないため息を吐き、あたしはその場で頭を掻いてスマホを取り出す。

ネットの公式サイトから地図に飛んだ方が早い。そう思つての行動だったが、飛び込んだきたのはエラーの文字。

慌てて右上にある扇形のアイコンに目を向けると、そこにはバッテリ印が嫌というほど鮮明に光っていた。

つまるところ圏外、ネットワークエラー。

「まっつて？・低脳すぎるでしょ？学園都市5G導入しろよバカ！」

あまりに馬鹿げた出来事にスマホを振るといふ古典的な解決法に手を染めるが治ることは無い。どんなにスマホを上下に振っても、揺さぶっても圏外は圏外。アンテナが立つことはなかった。

学園都市の技術力が聞いて呆れる。5Gどころか7Gくらい出来るだろ。

「こんな時垣根くんなら道教えてくれるのかな……」

ため息をついて、その場にしゃがみこんだ。

なぜ今日はこんなにもツイていないのか。

落ち込みながら足元を見つめる。おろしたての緑色のスニーカーは土埃を被って汚れており、ドブのような色をしていた。

家に帰ったら靴を洗わなきゃだとか、学園都市へ5G導入を願う声明を送るかなど訳の分からないことが頭を廻る。

「私が教えて差し上げますよっ。」

そんな意味のわからない落ち込み方をするあたしの背後から声が聞こえてきた。優しく、低い、柔らかい男の声。どこかで聞いたことのあるような、なんだか好きになってしまうようなそんな甘い声。

一般人がここまで迷い込んでしまったのだろうか？

ありがたい申し出だ。風斬氷華などほっぼいてその男を出口まで護衛するのも悪くない。

肉体のない化学の天使に思い入れもないのだから。

「え？何処のどなたか存じ上げないけどありがとうございま、す……」
そう思つて後ろを振り返るも、誰もいない。

まさか本当に幽霊でも出たのだろうか？実体のない幽霊が怖いと思つたことは生まれてきてから一度もないが、今回ばかりは背筋が凍るほど恐ろしかった。

この耳に、鼓膜に、その優しい声が届いたはずなのに。その姿は無い。

キョロキョロと辺りを見回し、その声の出処を探す。

上から下へ、なぞるように目を動かすと、足元に真っ白い何かがいるのに気がついた。それは無機物のような白さを持つ厳つい虫だった。

カブトムシ、兜虫、beetle。

機械のような風貌のその昆虫は、美しい白い甲冑とエメラルドよりも深く美しい翡翠色の目を持っていた。

「初めまして保護対象、私はカブトムシーナンバリング05」

優しく、低い男の声。けれどどこか無機質で感情が籠っていない、不思議な声。

あたしを保護対象と呼び、自分からカブトムシと名乗るその小さな醜い生き物をあたしは知らない。

「貴女のお供をさせていただきます」

嫌になるほど神々しい白さを持つその物体はどこで喋っているかわからない声で言い放った。

「……はえ？」

思考が止まってしまうのは、あたしの小さい脳のせいじゃないは

ず。

37話：尊ぶべき犠牲

目の前の白いカブトムシはよじよじと、へたり込むあたしのズボンによじ登る。

蛍光緑のワイドパンツはカブトムシの白い体を際立たせた。同じ色の緑の目がじつと深くあたしを見つめる。

脳が目の前の光景を理解してくれない。

「え？まっつて、まっつて？話が読めない」

「何がでしよう？」

「頭が混乱状態なんだけどさ、あの、まず君何？なんでカブトムシが喋ってるの？幻覚？」

顔を手で覆い隠しながら、震える声をこぼす。喋るカブトムシなんてファンシーな現実には脳がパニックを起こした。

意味がわからない、なに、なんなんだ。

「人の姿の方がよろしいでしようか？これでいかがでしよう？」

ただひたすら現実に疑問をぶつけると、カブトムシはぐにやりと、まるでレンズの歪みのように体を捻じ曲げた。みるみるうちに風船のように膨らむと、それは人の形を成す。

へたり込むあたしに覆い被さり、上から見下ろす真白い少年。

この世界で誰よりも好きなたった一人の不幸な少年。鋭い目つきが印象的で凄艶な顔立ちをしたたった一人の男の子。

「垣根、くん……」

その生命体は垣根帝督に姿を変えた。

しかし、元の彼とは全く違う。それはあたしの太ももを挟むように膝をつき、彼は顔を覆うあたしの手を取った。

理解できない光景は確実に現実のものだった。

違う、違う！

これはあたしの知る垣根帝督じゃない！

暖かい手、蜂蜜色の肌、ブラックベリーの瞳、パンプキン色の髪色、ラズベリー色のスーツと、ワインレッドのセーター。

それがあたしの知っている『垣根帝督』

対して目の前の生き物はどうか。

冷たい手、クリームのような白い肌、ライムの瞳、バニラのような髪色、そしてライラックのスーツと、ローズミストのセーター。

彼じゃない彼に恐怖する。お前は誰だと、何者だと訴えたかった。

「私はマスターである垣根帝督から作られた人工生命体のひとつです。貴女の保護を任せられました」

「じんこーせーめーたい……カブトムシ、05……」

しかし、訴える前にその生き物は簡潔に自分を明かす。その言葉に聞き覚えは嫌という程あった。

カブトムシ05、これから先の未来、死んでしまう垣根帝督が未元物質^{ダークマター}で生み出した無数に存在する偵察機の一体。

『学園個人』と呼ばれる少女に影響され、垣根帝督そのものに成り代わる歪で唾棄すべき存在。

その事実気がつくと、あたしは握られた手を振りほどいてその襟を掴んだ。

「待って、なんで貴方が今ここに存在してるの？」

「とぅーとぅー」

「垣根くんは？彼は無事なんでしょうね?!」

コレが現れるのは垣根帝督が死んでからだ。木原病理とかいう車椅子に乗った科学者から着想を得た垣根帝督が、能力を吐き出すだけの存在になった自分を生き返らせるために取った手段。

自分の体を未元物質^{ダークマター}で代替し、命を吹き返す。

垣根帝督という少年の結末、末路。

それを知っているからこそ、あたしは彼の安否を必死になって問いたです。あたしの知らないところで、あの美しい少年が死んでいるかもしれない現実が酷く心を苦しめた。

「私の存在と因果関係は分かりませんが、マスターなら存命です。先程貴女と別れた場所で待ちながら私経由で貴女を見張っています」

「見張り？」

存命という言葉に胸を撫で下ろすも、続けられた言葉にすこし怪訝な顔をしてしまう。

彼があたしに一定以上の監視を続けると思えなかったのだ。

あたしが彼を見張り、見守る立場にいるはずなのだ。逆転するはずはない。姉であるあたしが、誰かの下に立つことはないはずなのだ。

「はい、私達は貴女を見張るために作られました。貴女のそのストラップでは行動を把握出来ないため、意識があり、行動が興せる私達作られたのです」

ぎりりと05の言葉に歯を食いしばる。自分の行動が仇となった事実^{事実}にただただ腹が立った。

携帯を持ち歩かなければ盗聴はされない、何もバレない。そんな単純な行動^{単純な行動}があたしの首を今締めている。

彼の言っていたプレゼントとやらの正体は恐らくこれのこと。

あたしにとつてはいいものじゃなく、直接の害はない。あたしを監視するけれど、あたしに害はなさない真っ白い作り物。

「……私達？なに？気持ち悪い虫が何体もまだいる訳？」

「はい、私達です。二百体いますよ。本来は2万体制る予定でしたが、時間が足らず、このようなお披露目になってしまいました」

しかも何匹もいるらしい。未だあたしを見下ろすエメラルドの瞳は無機質な笑みを見せた。張り付いた笑みはまるで機械のように冷たい。

けれどその裏に憎悪や嫌悪は見えなかった。

これがこの生命体の自然な笑みであり、顔なのだ。それを理解すると、あたしは低く唸るような声で威嚇する。

得体の知れない生物に精一杯の虚勢を込めて。

「二百……そんなに？何がしたい訳？」

「私たちは貴女のために作られた未^{データ}元物質製の人工生命体です。貴女を監視し、見張り、助ける事が私達の生まれた理由です」

ピリピリと張り詰めた空気が薄暗い地下街に漂う。

目の前の生き物の言葉に小さく舌打ちをすると、それを両手で押し退けてあたしはゆっくりと立ち上がった。

見下ろされるのは垣根くんだけで十分だ。嫌悪感を顔にしながら未だ膝を着くその前に立つ。どんなに嫌な顔をしていても、目の前

の生き物が傷つくことは無かった。

「未元物質ダークマターで構成された人外、ね。あたしの為の天使の軍団なんて、垣根くんは一体何を考えてるのかな？」

「天使だなんて、メルヘンチックですね。マスターも天使と呼称されるところは思っていないと思います」

あたしが立ち上がったのを見て、彼も立ち上がる。

デフォルトなのか、ずっと穏やかな笑みを浮かべるその生き物は気持ちが悪いくらい吐き気がした。まるで、自分の鏡を見ているみたいで気味が悪い。

「風斬氷華といい、今日はハロウィンだったっけ？ ったく、イライラする。てか早く上条くんところ行かないといけないのに」

元からこの世界にいる風斬氷華という人外。そしてストーリーに登場しないあたしと、この時間軸では存在しないカブトムシ05。

どれが一番気持ち悪くなんて明白だ。

あたしと目の前の生命体は同じ土俵にいる。あたしと同じ立ち位置にいる。

概念が、思いが、覆されてしまうほどその生命体はあたしの存在を脅かす。なぜなら同じものだから。

唯一違うのは自我があるかないか。

「保護対象」

「着いてこないで」

それに背を向けて歩き出す。

ドロドロと心臓を満たす懊悩が嫌になる。これを視界に入れてはいけないと脳が叫ぶのだ。苦痛から逃れるため、適当な脇道に入ろうと足を動かす。

自分の上位互換のような存在に、心の平穏が脅かされる。この空間にこれ以上留まってはいけない。

「上条当麻はそちらの道には居ませんよ」

けれど05は空気も読まずにあたしに声をかける。

何を考えているのか分からない無機質なエメラルドの瞳は酷く恐ろしいものを感じた。ただひたすらに恐怖することしか許されない。

自分と似た存在がただひたすらに怖かった。

「上条当麻と警備員アンチスキルならもう目的の人物へたどり着いているようですが、どうしますか？」

「……いけず、あたしの気持ちも無視するのね」

あたしの焦燥感なんか無視して背後に佇む生き物は淡々と話す。人離れた存在は風斬氷華なんかよりもよっぽど恐ろしい。

哲学的ゾンビ、人間と全く同じはずなのに何かが違う。

そんな気味悪さと、煽るような言葉に思わず足を止めた。振り向いて嫌味つたらしく笑顔を向けるも、白い生き物が笑みを絶やすことはなかった。

「意地悪なんかじゃありませんよ、事実を述べているだけです」

「……人外、他人の気持ちも分からないのかって言ってるのよ」

下唇を噛んで小さく声を出すと、それはまるで人のように困った笑みをみせる。

「けれど貴女も、化け物なのでしょう？」

「……そうね、そう。でも化け物同士は馴れ合わないでしょ？」

あたしの何を知っているのかは知らないが、05はあどけない少年のように微笑みながらあたしを見つめた。

まるで母をみる少年のような瞳は今まで向けられたことのないものだった。背筋を這う蛇のような悍まじさが脳に登り詰める。

「ですが天使と天使なら、兄弟にだってなれますよ？」

「口説き文句としてはイマイチね、出直してきな」

「これはこれは、手厳しいことで」

なにを考えているのか分からない。そもそも、これは人ではない、理解するだけ無駄。

あたしと同じ。

この感情は嫉妬。

自分の概念を喰い千切るような存在に穢れた嫉妬と、存在を奪われる恐怖を感じるしかなかった。

西口出口。

看板が外れかかった通路の奥、響く沢山の銃声と、巻き上がる埃の匂い。

大きな泥の塊を囲む警備員は一斉にそれに向けて銃弾を放つ。撃ち出る火薬と、警備員アンチスキルが設置した複数の白い照明に照らされながらもゴーレムは微動だにしない。

その巨体に隠れるように立つゴスロリ女と、それを睨む上条くんと風斬氷華、そして黄泉川先生。

「あーらら、大変なことになってるねえ」

透明な盾の前で身を守りながら今か今かと反撃の機会を伺う風斬氷華を除く二名。泥の人形に視線を注ぐ彼らに後ろから気の抜けた声で話しかけると、ぎよつとした表情をしてあたしたちにその視線を向けた。

「天羽！」

「おまつ、どこ行ってたんだよ！」

「ちろーつとね、『知り合い』を見つけたから」

慌てる彼らの前に、後ろに隠れていた真白い人型の生命体を見せると、その顔はさらに驚きに満ち溢れた。

当たり前前の反応は少しつまらない。

「……って、垣根?!あれ、でもいつもより色素が薄い?」

「君、あの化け物の時の……!」

各々が三者三葉の反応を見せると、一気に誰だという視線を投げかけられる。

見覚えのある人のそっくりさんはやはり珍しいようで、目を見開いて問い詰めてきた。

めんどくさい問い詰めにすこしため息を着く。なんと言おうかと辻褄合わせに戸惑うも、よくある言い訳を思いつくと勝手に口が開い

た。

「あー……こいつは垣根くんの双子の弟。ぼったり出くわしたからこっちまで連れてきたの」

「弟？」

物腰が柔らかく、生意気さが些か足りないがこれが垣根くんと見た目と声だけは似ているのは事実。弟だと法螺を吹いてもすんなりと受け入れられた。

しかし当の本生物は異議があるようで、納得のいかない様子で空気の読めない真面目な返答を返し始める。

「私が保護対象を案内しました。あと私は弟ではなくー」

「ややこしくなるから黙ってて」

ウザったいことこの上ないその口を手で覆うと、それは渋々口を閉じた。

どうやら垣根くんの作り上げた下僕は私に対しても従順のようだ。

「それで？どんな作戦立ててんの？やっぱり上条特攻？」

「ま、それしかねえかな」

話を変え、今の状況を簡潔に問うと、上条くんは困りながら笑う。

アニメ通り、自ら特攻して敵の懐に潜るといふ彼へのダメージが大きすぎる作戦を立案していたようで、そのダメージを最小限で済ませたいあたしにとっては少し困るものだった。

「ふーん……ねえ05」

「はい、なんででしょうか保護対象」

「アンタさ、垣根くんみたいに未元物質ダメージマター錬成できんの？」

「少し劣化はしますが、可能です」

口を塞ぐあたしの手を退かし簡単な質問をすると、05は特に表情を変えずに答えた。

肉体しか干渉できないあたしにはあのゴーレムを止めるのは不可能。シエリーさんを遠隔操作で昏倒させても魔術、もといゴーレムが動きを止めるか分からない。あたしでは役不足なのだ。

そのため如何に上条くんを無傷で彼女の元まで送るか、それがあたしが考えなくてはいけないこと。

「アンタ、あたしのために作られたとか言ってたよね？」

「はい」

「あたしの手足になれる？」

「それが生まれた理由です」

それには05の力は必要不可欠。垣根くんじゃない人外に頼み事をするのは罪悪感もわからないし、とても便利だ。

簡単に何をさせたいか教えてみると、05は悩む素振りもせずに即答する。垣根くんの頼もしさを持った、ぞんざいに扱える人外はあたしにとってはご都合主義の塊だ。

「やるだけやってみましょう、貴女を助けるよう命令されていますので」

「というわけで、上条くんはステイ」

「あつ、おい！」

「天羽！……つたく、銃撃やめるじゃん！」

制止する声に耳も貸さず、そのままゴーレムのもとへ足音を響かせた。

真つ直ぐ土の塊を目で射抜くと、側に立つ魔術師、シエリー||クロムウエルは八の字を寄せて黙り込む。

少しの間、静寂が空間を満たしていた。けれど、魔術師の張り上げた声でそれは終わりを告げた。

「エリス！」

魔術師が名前を叫ぶと、泥の人形は腕を振り上げる。

勢い良くあたしに迫るその腕は力強く空気と共にあたしを押し潰そうとした。避けるのもめんどくさい。

大きな手で潰しにかかるゴーレムをその場で受け止めようと立ち止まる。複雑骨折程度で済むのなら攻撃を受けたって問題ない。

迫る手、空気の振動。手を合わせるように受け止めるため右手を振り上げた。

しかし、大きな手が触れる瞬間、誰かに引っ張られる。

「保護対象、避けるという行動はこういう場面で行うものです」

左腕掴まれ、間一髪で05によって巨大な手の攻撃は部分的に避け

られた。そう、部分的に。

「あー、つたく、爪塗り直しじゃん！シャツも気に入ってたんだけど、最悪」

「お、おま、う、腕っ」

かざしていた右手は腕から肩にかけて服と共に無惨に引きちぎられ、遠くへ吹き飛ぶ。

血を塞ぎ止めたから血液が吹き出すことはなかったが、さすがに吹き飛ばされた腕はグロテスクな光景だったようで上条くんは青ざめた顔をしていた。

「へーきよ、へーき、んなことで死ぬわけないでしょ」

まるで花が咲くように、蔦が伸びるように、肩から筋肉と皮膚、血管、神経、血液、骨が再生されていく。その光景に誰もが息を呑んだ。この瞬間はとても美しい。

けれど人とはかけ離れた光景に誰もが恐怖を抱く。それは人外も同じ。

「貴女の腕は使い捨てでは無いのですが」

「そっちは適当に処分しておいて。学園都市って気軽に体捨てる^{ハイッ}いから困るんだよねえ」

見るも無残な姿になった緑のネイルが輝く腕を掴みあげて05は感情の分からない顔で呟いた。そんな05にちぎれてしまった腕の処分を命じると、彼は口を閉じる。

その反応に思わずため息をつくとも05にボロボロになってしまった真白いシャツを投げつけた。上半身下着姿に一瞬ギャラリーがどよめくが、そんなことにいちいち構ってやれるほどの余裕もない。

投げつけたシャツを05が受け取ったのを確認し、グロテスクな腕をそれで包めと目線で訴える。しかしあまり察しが良くないようで、05は首を傾げて指示を待っていた。

「はっ、化け物、しかも男連れときた。人間騙って楽しいか？三番目」「うん、とっても楽しいよ。だってあたしがここにいれば誰も傷つかない」

めんどくさい05なんて気にも止めずにそのまま歩みを進める。

目の前のゴスロリ女に嘲笑気味に罵倒されても、歩みが止まることはない。

「そういう考え方がマスターの沸点だと気づいた方がよろしいですよ」

「いいのよ、だってあたし死なないもの。その泥人形と一緒に、やってることは変わらない。人体錬成、永遠の肉体。それはとっても冒瀆的なこと、素敵なこと」

余計な一言を言ってくる05を鼻で笑い、笑みを携えながら言葉の矛先を魔術師へ向ける。

煽り合い、皮肉を言い合いながら睨み合う。相手がどう出るか精一杯に考えながらの虚勢の張り合いは虚しいものだ。

「とはいえ？あたしはカトリックを名乗ってるとはいえ実際はいわゆるグノーシス主義。どんなに冒瀆的なことをしていても、神を愛するアンタとは立場が違う。神と同じように泥から人形を作るのは楽しい？」

「へー？あんた、学園都市の人間なのによく知ってるね。野蛮なアメリカに住んでただけある」

あたしの挑発を鼻で笑うと魔術師は不愉快な言葉を並べ立てる。不快な言葉とあたしについて知っているかのような口振りは非常に面白くない。

けれど挑発に乗るわけにもいかず、感情を押し殺して彼女の言葉を笑い飛ばす。

優位にいるかのようになり立ち振るわなければいけなかった。

「神は土から人を創った、カトリックじゃなくなっちゃってこんなん知ってるわ。それで？魔術師がその御身に、本当に届くと思ってるの？」

「はっ、神に届くわけがないのは知ってるのよ。まずは原初に土、神は土より形作り、命を吹き込みこれに人と名をつけた。ノアの方舟以前、グリゴリの長により伝えられた秘宝、その御業は人になせるものならず。だから私の手によって生み出されたのは腐った泥の人形ではない」

「グリゴリねえ……聖職者が墮天使賛美してどーすんの。彼らの知識

で泥人形作って、壊して、面白い？」

高圧的に目を細めると、魔術師は舌打ちをした。馬鹿にしたような言葉は彼女の目をつり上げる。如何に冷静を装っても、青筋を立てて怒気を含んだ低い声はあからさまに彼女の苛立ちを表していた。

「化け物に理解できるわけがないだろ？」

「そうね、理解できないかも。あたしならこんなことじゃなくて救うために力を振るうもの」

「一番目にも二番目になれない出来損ない、お前に何が出来る？」

出来損ない。その言葉に一瞬苦悶の表情を浮かべてしまおうが、悶々とした気持ちを払拭し余裕な態度を保つ。

その程度の嘲弄では心臓は脈を乱さない。

「出来損ない、か。あんたに言われる筋合いはないわ。だって、あたしは天使に命令を下すことが出来るんだから」

虚を衝くように05の名を叫ぶ。

同時に、泥人形がぐちゃぐちゃと泥濘へと姿を変えた。腐った林檎が溶け落ちるように見るも無惨な姿になったゴーレムは力なく崩れ、大きな泥の池を作り上げた。

「なっ、なにが」

泥の中、色素の薄い人型が姿を現す。エメラルドの瞳を煌めかせて泥濘に佇むそれは静かに口を開いた。

体のほとんどが学園都市の泥や瓦礫から作られたゴーレムには05の攻撃は有効のようだ。

「コンクリートに付着すると化学反応を起こし、分解する未元物質ダークマターを生成しました。魔術の知識はマスターから引き継いでいるので対処可能です」

引き出せる未元物質ダークマターに限りがあるのが難点ですが。

そう言い添えると05は薄っぺらい笑みを見せる。胡散臭い笑顔は垣根くんによく似ていた。

「さてさて、魔術師、アンタの出来損ないの人形はこれでおじやんなっちゃったね」

05の創り出した泥を見つめてあたしはせせら笑う。憎しみの

籠った魔術師の真つ直ぐな目が写すあたしは随分と悪役じみている。

「あ、でも安心して？アンタを止めるのはあたしじゃないからさ」

本当ならあたしの能力で気絶させる方がいいのだろう。けれど
ゴーレムが気絶程度で動かなくなるのかは分からない。

だからこそあたしはヒーローに託すのだ。

それに、この先の出来事を潰すのは少々気が引ける。可愛らしいインデックスちゃんのためにも、風斬氷華との和解をないことには出来ない。

例えば人でない物であっても、風斬氷華はあのお優しいシスターの『お友達』だ。

嫌悪を催しても、彼女の友情物語に水を差すような真似は控えない。

「ありがとな、天羽、垣根弟」

「なっ、いつの間に」

細かい瓦礫を踏む音が後ろから聞こえる。思惑通り、崩れ落ちた泥沼をビシヤビシヤと音を立てて通り、上条当麻は真つ直ぐ歩む。

呆気にとられる魔術師を他所に、上条くんは大きく右腕を振りかぶった。

「テメエは黙って眠ってる！」

全身全霊の力で振り下ろされた拳は勢い良くシエリー||クロムウエルの頬を容赦なく殴り飛ばす。頬を走る衝撃は凄まじく、彼女を宙に浮かせ床に叩きつけた。

げほげほと咳き込みながら痛みに耐える彼女だったが、皮膚が切れた唇からは禍々しい声が零れる。

彼女は負けていると思っていなかった。

「ふ、はは、お前らがやったのは形を崩しただけの事、魔術そのものは掻き消えていない」

優美な手つきで床に何かの模様を描くと、彼女は勝ち誇ったように笑う。人の手で描かれたとは思えない完璧な円形と、真つ直ぐ伸びる線はアニメで見た魔法陣そのものだった。

「二体目でも作る気？」

「一度には二体も持たせらんねーのさ。けどな、そいつを上手く利用すればこういうことも出来るんだよ!」

チヨークで描かれた魔法陣が眩く光ると、うつ伏せに倒れる彼女の周りを囲むように円のような亀裂が床に走った。

バキツと嫌な音がなつた刹那、ぽつかりとその亀裂に沿って穴が開く。魔術師を地下へ下ろし、その場には空洞だけが残された。

「あちゃー、逃げられた」

「クソ、風斬のことを狙ってるわけじゃねえのか?」

「さあ?どーだろーね?」

くり抜かれた床部分を眺めながら上条くんは悩む素振りを見せると、すぐさまぱつと天井に顔を向ける。

何かを思い出したかのような顔をするあたり、目論見に気づいたのだろう。

「……インデックスか!誰を殺しても構わないって!」

「イギリス清教出身だし、まあそんなだろうね」

「早くアイツンとこに行かなきゃなんねえ!」

簡単に答えを見つけ出すと、上条くんは黄泉川先生の所へ走り去ってしまう。あまりの慌てっぷりに笑いそうになるも、不謹慎すぎるので自重する。

「地下街の封鎖はまだ解かれなくてさ……」

チーターも真つ青な素早さで先生のもとへ行ってしまった上条くんだったが、しばらくするとこちらに重々しい空気を纏って戻ってきてしまう。走り去る前とは全く違う表情は哀愁漂うものだった。

「でしょうね。こういうのって建物の管理と警察組織で管轄が違うことが多いから」

「クソっ」

「どうする?あたしと05……垣根弟なら運べるよ?それともシャツターぶっ壊す?」

刻々とインデックスちゃんに迫る危険に怯えながら悪態を着く上条くんは協力を申し出るも、彼の表情が晴れることはない。

腕を組んで05と顔を見合わせてため息を着く。

穴の縁でたむろするあたし達だったが、その背中に小さく声がかけられた。

「あの、さつきは、ありがとうございました」

「ああ、それよりお前、体は大丈夫なのか？」

オドオドとしながら風斬氷華が上条くんに感謝を伝えると、彼はそれに苦笑いを返す。警備員がここら一带に設置した照明を背にした風斬氷華はえらく眩しい。

「は、はい、たぶん、平気だと思います。もうあの石像は襲って来ないんですよね？」

「あの煤けたゴスロリ女は逃げたんじゃない……次のターゲットを追い始めただけだ」

もごもごとした口調で辺りを見渡す風斬氷華だったが、残念なことに脅威はまだ完全に消え去ったわけではなかった。

シエリーさんの目的は私や風斬を殺すことではない。特定の条件さえ揃えば誰でも良いのだ。

鍵となるもの、風斬氷華、上条当麻、インデックス。

一方通行や妹達も物語の鍵ではあるがスペアがいる彼と数多くいる妹達は優先順位は低そうだ。

同じような理由で私と垣根くんも狙われないだろう。垣根くんは結局のところ第二候補だし、あたしは不死身、重要性はそこまで高くない。

となると、消去法的に次の標的は上条くんの大切な人となる。

「そのうちの一人が、インデックス」

それはインデックスちゃん。

本当は今いる警備員アンチスキルに手伝ってもらうのが最善手なのだろうが、彼女は学園都市の住人じゃない。迂闊に警備員アンチスキルに保護を頼めるような身分にないのだ。

それをわかっているから上条くんは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。何が今できる最善策なのか、彼は懸命に考えていた。

沈黙が空間を支配する。しばらくの間、誰も言葉を交わさずに上条くんを見守っていると、穴の前でしゃがみこむ彼は意を決したように

眩く。

真後ろで動きを待っていた私たちに背を向けて立ち上がると、彼はまっすぐ巨大な穴を見つめた。

「行くならここしかねえか……天羽、垣根弟、手伝ってもらっても——」
「ま、まって！ほ、本当に行くんですか？」

「インデックスが危ないんだ」

穴の底を眺める上条くん君に風斬氷華は後ろから叫ぶ。どれだけ危険だと訴えても上条くんがその視線を外すことは無かった。

ただひたすら愛するシスターを助ける未来を信じて彼は力強く答える。揺るがない覚悟に一瞬たじろぐも、風斬氷華は静かに、震えながら彼に言葉を伝える。

彼女にとつてのハッピーエンドを。

「大丈夫、です。貴方が行かなくても、助ける方法があります」

「どういうことだ」

「化け物の相手は化け物がすればいいんです」

風斬氷華の言葉に驚いたのか、上条くんは思わず地面に空いた穴から目を逸らしてしまう。

彼の目に入るのは風斬氷華の笑顔だけ。あたしと05を追い越して風斬氷華に近く彼の表情は見えない。

風斬氷華の笑顔と05の無表情、そして背中で語る上条くんの虚しさ。それしかあたしの目には写らなかった。

三人の人外と、一人の人間。とはいえ、その人間も随分と人間離れしているが。

「私は、あの石像の化け物に勝てるとは思えないけど、少なくとも囮くらいにはなれます。あたしが殴られてるスキに、あの子には逃げてもらいます。あたしは化け物だから、それぐらいしか出来ないけど」

「お前、まだそんなこと言ってるのかっ」

怒ったように眉を釣り上げて立ち上がると、彼は力強く土を踏みしめて風斬氷華の前に立つ。声を荒らげ、風斬氷華の決意を蔑ろにするように彼は言葉を叫んだ。

「お前は化け物なんかじゃねえ！大体、俺がそんなことされて嬉しい

とでも思ってたのか！」

「感情なんて関係ないよ」

「天羽……！」

だが大切な友人を叱るように声を張り上げた上条くんの言葉はあたしによつて斬り捨てられる。彼らの間を遮るように立つと、上条くんは見るからにう狼狽えた。

まさか否定されるとは思っていなかったのだろう、彼は動きを止めた。

「行きなさい、風斬氷華。それがあなたにとって正しいことだから」

「っ、は、はい」

「風斬！」

その隙に風斬氷華を穴に促すと、それは躊躇わずに穴に落ちていった。

まるで兎の穴に落ちていくアリスのようにスカートを翻して暗い底へ風斬氷華は身を投げる。それを引き留めようと上条くんは右手を伸ばすが、その右手は何かを掴むことはなかった。

引き止められなかった彼はその顔に動揺の色を浮かべる。小さくなった背中ではあたしに謎の優越感と悦びを与えた。

ヒーローの落ち込む姿はとても愉快なものだった。

「ツ天羽！この前も！今日も！自分の体を顧みず、なんで突っ込むんだ！なんであいつを行かせた！」

そんな彼は勢いよくあたしの方に振り返ると、悲痛な声を絞り出す。千切れても再びくつつく腕を掴み、彼はあたしを見上げた。

背の低い彼はどう足掻いてもあたしを見下ろすことは出来ない。その事に再び優越感をおぼえるも、きつく睨む彼の目はあたしには眩しかった。

「それがあたし達に出来る唯一のことだからだよ」

見下すように、その眩しい瞳を見つめる。垣根くんとはまた違った黒い瞳はキラキラとした輝きを放つ。掴まれた腕にじんわりと彼の手の熱が伝わってくるのが酷く腹立たしい。

その輝きを、熱を否定したくて、氷のように冷たい言葉が口から降

り注ぐ。

「あたしと風斬氷華はほとんど一緒、永遠に死ななければ、歳をとることも無い。肉体があるかないか、物理現象の塊か本物の人間か、それだけの違い」

風斬氷華のことは愛してない。

けれど風斬氷華の感情はよく分かる。だって同じものだから。

誰かを助けるための自己犠牲。それはとても尊いことで、素晴らしいこと。

あたしだけが傷つけば、全てを終わらせられる。

自己犠牲とは力、誰かを生かすことが出来るすべ。だからあたしはここにいます。

妹をこの体で助けた事実があたしをこの世界への侵入を許可したのだ。

自己犠牲の尊さはあたしの体に刻みついている。九月上旬、この肉体を妹に捧げたあの日が全てを物語っていた。

「あたしにとってこの能力は完璧で幸福で、完全無欠な愛すべきもの。あたしが死ぬことで誰かを無敵に導けるし、あたしが傷つくことで救われる誰かがいる。あたしはそれに幸福を覚えるの、幸せなの」

その過去を否定なんかされたくない、この世界にいる理由を否定されたくない、妹を救った事実を否定されたくない。

右手を過信し、自ら災難に飛び込む上条当麻に否定なんかされたくない。なかつた。

この男は私を否定できる立場にいないのだから。

「そんなあたし達の幸せを否定しないで」

お前も同じ穴の貉だと言うのに。

38話：赤

瓦礫と埃が床を覆い、床や天井が崩れた地下街は警備員アンチスキルの置いた照明で眩しく照らされる。ぽつかりと地面に空いた穴にはロープが虚しく垂れ下がっていた。

英雄がつたっていったロープ。10分以上前に彼が使ったロープは未だそこに鎮座しており、シャツターもまだ開かない。

あたしはただひたすらに時が過ぎるのを待っていた。

上条当麻が風斬氷華を人として肯定する瞬間を見たくなかった。

「行ってしまったね」

対角線上にあるロープをぼんやりと見ながら縁の近くでしゃがみこんでいると、ふと後から声をかけられる。

聞き覚えのある声、しかし聞き覚えのない口調。真白い生命体が砂利を踏み締めながら地面に座るあたしの隣に立ち止まった。

真つ白い革靴らしきものが視界に入る。

自分の緑のスボンと、灰色の瓦礫のせいでその白さが嫌という程目に入った。

「いいんじゃない？上条くんの友情物語に水を指すのも嫌だし」

「だというのに、貴女は何故今にもその穴に身を投げそうなのですか？」

しゃがみこんで頬杖をつき、暗い穴の先を見ていたあたしにそれは優しくも無機質な声をかけ続ける。

嫌になるような声に苛立ち、ゆらりと立ち上がるとそれは不思議な顔をした。無機質なライム色の瞳の奥、微かな感情の揺れ。

真つ白いシャツに包んだ肉塊を大事そうに抱えて、05はそこに静かに立っていた。

「帰るんだよ、シャツターはまだ上がらないみたいだし」

何を伝えたいのか分からない05に眉をひそめながら眩くと、それはまたもや意味不明な顔をする。不安と無機が入り交じったような表情はなんとも言えない不気味さを持っていた。

抱える白い塊はじわじわと赤を広げる。それに少し顔を顰めると、

何を勘違いしたのか05はあたしから目を逸らして口を開いた。

「そこから飛び降りるのは危険です。ロープをお使いになられたら如何でしょうか」

「服汚れるし、その案は却下よ。いいの、あたしは死なないんだから。さつきも見たでしょ」

「見たから言っているのです」

貴女の腕は使い捨てではないと言ったばかりですが？なんて均一なトーンの声で05は言い添える。

宝石のような緑の目は言語に絶する気持ち悪さと、美しさを持つていた。禍々しいそれと一線画すように立ち上がって睨みつけるも、それは微動だにしない。

垣根くんと同じ身長、同じ顔、同じ声のそれはさらにあたしを苛立たせた。

「いいんだよ、だって痛みなんかないし」

「痛みがなくても、貴女を愛する他人が悲しむとマスターに説教されたばかりではありませんか？」

「……垣根くんは何言ったって変わらないよ。あたしが使い潰されるおかげで愛する人が笑顔になるのなら幸せだし、それは永遠に続く幸福なんだから」

それは誰にも否定されたくないこと。不変の感情。

あたしの望む幸福はとてつもなく難しいことであり、誰にも理解されないもの。やはり05には少し難しいようで、眉を八の字にして相変わらずの無機質な瞳であたしを見る。

「あなたの幸福は理解し難い」

「簡単な事だよ、あたしはあたしにとって正しいことをしたいだけ。たったそれだけの事」

「貴女の言う正しさとは、なんですか？」

「快感だよ。快樂、悅樂、エクスタシー」

からかうように声を潜めてみると、05は少しだけ目を逸らす。子供のように小さく縮こまり、気まぎれになったのか逸らした瞳はうろろと彷徨っていた。

「……なんか言い方がいやらしいです」

「そこは垣根くんっぽいね。未元物質ダイクマターの生命体って生殖能力あんの？」

「話を逸らさないでください」

まさか恥ずかしいと思うとは。

人じゃないはずなのに感情があるというのか。けれど意識があるように振舞っているだけかもしれない。

緑の目を伏せてみくれたような顔をした05だったが、その顔を見るだけで苛立ちが湧く。白い睫毛の隙間から覗く緑は相変わらず読めない。

「……ベンサムの唱えた功利主義だよ。幸福とは悦楽、そして悦楽を生む全てのものはそれと比例して善である」

「それは全体的な幸福論を唱える時に使うものでは？」

「全体だろうがなんだろうが、正義って言うのはエゴなんだよ。エゴに基づいて他人を幸せにしたいのならそれは即ち正義であり、幸福なことなんだよ」

少し間を置いて05に意味を伝えると、先程までの狼狽えを感じさせないほど冷静な声と瞳で05は言葉を返す。

少年のようなあどけなさも、純情もそこには見えない。無機質で冷たいなにか。

「貴女は本当に理解しがたい」

「あら、人外にも理解されないなんて、残念ね」

「貴女の思考はとても人間らしくありませんが、同時にとても人間らしい。だからこそ私には分かりません」

真っ直ぐとあたしを見つめる目は酷く冷酷だった。

「誰も理解しない愛情、誰も知りたくない幸せ、気持ち悪いあたしの感情。人に理解されない信念を持つことは許されないことだと思う？」

「その答えを私は持ち合わせておりません」

「自分で答えを作ること出来ないのね。せつかく肉体があるのに魂がなくて意味が無い。つまらない木偶の坊」

ガヤガヤとうるさい背後とは打って変わって果てしない沈黙が間

を流れる。

探るように05を見つめるも、それが何を考えて、何を感じているかは分からない。デフォルトの笑顔も浮かべず、それは無表情でその場にたち続けていた。

「怒りもしない、それが一番の証拠でしょ？」

言い捨てるように言葉を吐くと、あたしは汚れたスニーカーで地面を蹴る。静寂だけが残る地下へと身を投げた。

下へ、下へ、下へ、穴の中に落ちていく。落ちるのは何回目だったか、苛立つ思考の中で思い返すがあの日の感覚しか思い出せない。

初めて空へ落ちたあの日の風、初めて目を開いたあの日の光、初めて死んだあの日の鮮やかな赤、初めて泣かせてしまった妹の塩辛い涙。

穴の中、暗闇の中、初めての目を思い出しながらあたしは地へと降り立った。

空を橙色へ染める太陽に目を細め、真白いカブトムシが肩を這う感覚に気持ち悪さを覚えながら静かに道路に佇む。腕に抱えた真っ白い布と真っ赤な肉の塊の重さにうんざりとするが、忙しなく働く警備員アンチスキルに比べたら些細なことだ。

たくさんの瓦礫とそれを処理していく警備員アンチスキルに風紀委員ジャツジメントを後目に、工事中のビルの上を眺める。ツンツン髪の少年とシスター服の少女、人型のなにか。

ゴーレムを打ち消した残骸を地上に残しながら彼らは天に近い空の下で甘酸っぱい青春を繰り広げていく。あたしにとっては毒のよくな空間。

彼らのやさしいせかいの中で風斬氷華は人となり、人の輪に入っていく。

反吐が出る。

「結局、上条くんはアレを人だと認識するのね」

化け物を否定して自分と同じレベルまで引き下げる。彼の思考は随分と腹立たしい。

いいじゃないか、人と違っても。

永遠の命、永遠の肉体、永遠の精神。否定なんてされたくない。

あたしの幸せを否定する彼らをどうしても、心から好きにはなれない。愛すべき隣人ではあるが、好きなキャラクターにはなれない。

「いいねえ、青春だ。ま、片方はただの科学反応の集合体だけど」

そんな彼らに皮肉を込めて小さく呟くと、喧騒の中で低い声が背後からはつきりと聞こえた。

「アレはテメエにとっては人じゃねえんだ？」

「マスター」

その声に05は肩から飛び立ち、声の主へ音を立てて飛んでいく。後ろに立つ端正な顔の持ち主は飛んできた05を手のひらに乗せてゆつくりとこちらに歩むと、ニコニコと胡散臭い笑みを貼り付けた。

きつね色の髪が茜色の空と相まって一際精彩を放つ。

「よう、駄犬。新しい首輪のつけ心地はどうだ？」

「最悪ね」

「そりゃあよかった」

赤を纏った少年はクスリと忍び笑いを洩らした。子供のような純粹な邪気を感じる笑みに少し臆するが、その恐ろしさを飲み込んで静かに声を出す。

「いい性格してるね、大好きよ、本当に」

皮肉を込めて鼻で笑うが、彼の表情は変わらぬまま。逆に胡散臭い笑顔をさらに張り付かせて恐怖を煽るような苛立ちと怒気を含んだ声であたしを責めたて始める。

随分と怒ってるようで、黒い瞳の奥は濁ったように赤い空を映していた。

「それで、その首輪が教えてくれたんだが、今度は腕を吹っ飛ばされたんだって？」

「それが何か？関係ないでしょ」

あたしの顔から右腕へ、視線を逸らすと彼は鼻で笑う。真っ白い布の塊を有無を言わず奪い取ると、その表情は呆れ顔へ変わった。

「関係大ありだ、何勝手に行動してんだ」

「垣根くんには被害は出てない。あたしの作戦は成功した。別にいいでしょ？」

「まったく、やっぱお供をつけたのは正しかったな。感謝しろよ狂人」
未元物質データマターでも展開しているのか、彼の手にあるあたしの右腕と血液が分解され、崩れていく。どろりと腐った肉のように液体に変わり、最終的には肉塊なんてなかったかのように赤く染っていたシャツは白へ変わる。

「人体錬成なんかした人間に狂人とは言われたくないね。そんなの作って何がしたいの？」

「手綱を握っただけだ。これから、少し忙しくなるからな」

「忙しいならあたしも連れていきなさいよ、垣根くんのためならなんだってできるんだから」

忙しいと言葉を濁す彼に苛立ちを覚えると、口は勝手に声を出す。

九月一日、運命の日まであと一ヶ月と少し。彼の忙しさの意味は誰よりも知っているつもりだ。だからこそ、喉から捻りだした声は悲しさを我慢するような小さく震えていた。

愛するキャラクターの為ならばなんだって出来るのに、自分が出来る子だって証明する為ならばなんだって出来るのに、神の理不尽に背く為ならばなんだって出来るのに。

心からの願いと愛を込めて真っ直ぐ見つめてみるも、彼は向けられた視線を真っ白いシャツで遮る。顔に被せられたシャツは血の匂いを微塵も感じさせなかった。

「駄犬はステイだ。お前がこっちに來たら手に負えないからな。しつちやかめっちゃかにするだろ、お前なら」

「なに？お姉ちゃんだけハブられてんの？」

「だからこうやって愛するお兄ちゃんのお人形さんを持ってきてやってんだろ？」

まるでどこかのアニメーション映画に出てくるお姫様のようにカブトムシを長い指に乗せて、彼は艶やかな笑みを浮かべる。

右手の甲に乗せたカブトムシを顔の近くに寄せて眺める彼の横顔は、夕日に染められまるでオレンジのマリーゴールドのようだった。

世界一赤が似合う少年。

太陽を浴びたアプリコットのような髪色に、夜を閉じ込めた瞳。

陰と陽を両立させる少年は果てしなく闇深く、果てしなく輝いていた。その矛盾が人間臭くて、子どもっぽくて、可愛らしい。

「誰がお兄ちゃんよ、誰が」

「俺の事だよ、ばアか。とうとう日本語も理解できなくなったか？」

「は？喧嘩売ってんの？」

兄だと背伸びをする子供に苛立ちをみせながらも、内心は至って冷静だった。

それがどういう事なのかは分からない。けれどあたしの口から出る罵倒めいた言葉はいつもより柔らかく、棘はなかった。

彼が上に立ちたがるのをなんだかんだ理解しているのだ。姉として、寛容な態度を見せるのは当たり前。

だが、理解と納得は違う。

なんだかんだムカつくことはムカつく。少し喧嘩腰に腕を組んで睨むと、彼は策にはめたと言わんばかりにニヤついた。

「事実を述べただけだ、そう怒るなよ」

「……ははぁーん、200体もこんなチンケなものを家で一人寂しく作ってた我が弟君はお姉ちゃんに構って欲しいんだ？だから反抗的なんだ？」

そのニヤついた顔を歪ませてやろうとチクチクと刺のついた台詞を吐き捨てる。すると目論見通りに彼は柳眉を逆立てて声をさらに低くした。

「あ？喧嘩売ってんのか？」

「事実を述べただけじゃん、そう怒らないでよ」

「事実じゃねえ」

勝ち誇った笑みがみるみるうちに怒りに満ちた憎たらしい顔にな

るのがなんとも子供らしくて愛らしくて可愛らしい。

膨れっ面で否定する彼に思わず笑いを堪えてしまう。なんとも言い難いこの空気が楽しくて仕方ない。

「はい。200体ではなく、正確には205体です」

「そこじゃねえだろ」

けれど05にはその楽しさは分からないようで、愚かにも場の空気を乱すようにどこで出ているのか分からない声を出す。

垣根くんと彼と全く同じ声の会話はなんだか現実離れしていた。

「そうなの？」

「私は初めての成功例、4体の失敗作の後に作られたものなので、個体としては1stですが、制作としては5thです」

05は羽音を鳴らしながら再度あたしの肩にとまる。

肩に感じる虫の気持ち悪さと蠢きに不快感を感じるが、05の話はそれを忘れさせるほどのものだった。

「……つかさ、人体錬成なんて知識、垣根くんにははないはずだよね？生物学に通じてるわけでもないし」

カブトムシ05、及び未^{データ}元物質製の生命体は本来この時間軸にはいない。

それはアニメにも登場していなければ、そもそもこれらは垣根くんが死に近い状態に置かれた時、自らを復活させるための知恵だったのだ。

キリスト様もビックリな復活はあまりにも悲惨な末路故の産物。それがこんなにも早く、不鮮明な理由で造られるのは有り得ない筈だというのに、あろうことか現実に起きている。

その不気味な現実にて得体の知れない気味の悪さを感じてしまうのは、極々当たり前のことだろう。

「こいつらはな、お前の研究である能力錬成と、冥土返し、テレスティーナ、木山春生から得た知識から創られた。だからお前には感謝してるぜ？おかげで神の御業を作り上げることが出来たからな」

先程の魔術師との会話を聞かれていたらしく、彼はしてやったりと言うような子供らしい表情をしていた。

その顔に少し腹立たしさを感じると、あたしは唇を噛み締めた。木原病理の役割はいとも簡単に代替されてしまった。他ならぬあたしの手で。

けれど、本当に？

どう考えても、その程度で神の御業を成せるとは思えなかった。ヒントを与えても、道標を示しても、ショートカットを教えても、それは容易くできるものではない。

神の御業は神にしかできないのだ。

「私達のネットワークのモデルはレベルアップ、木山春生が作り出したネットワークです。貴女がマスターと居たおかげで今の私が生まれました」

「ま、あながち間違いじゃないな。お前の研究のおかげで脳を作る事ができたし、能力の噴出点を分け与える事ができた。お前が母みたいなものだ」

「……あたしのせいか、あたしが生きていたせいか、あたしがここにいるせいか」

ぐつと真つ白いシャツを胸元で握りしめる。

あたしのせいだ。あたしのせいで彼に死の象徴を作り出させてしまった。

あたしが、神なんかを呼び寄せてしまったばかりに、こんなものが作られた。

神の御業は神にしかできない。

簡単な事だ。介入、干渉、救いの糸。

神はあたしの首を絞めるため動く。性根が腐っているのが神というもの。

その事実は何よりもあたしの対抗心と苛立ちを増幅させる。全てが神なんぞの掌の上だと思いたくない、信じたくない。

お前の理不尽に抗うため、あたしは生きているのだ。

愛おしい妹の死を肩代わりして、垣根くんの死を遠ざけて。それがあたしのやるべき事で、それは何があるうと変わらない。

握りしめたシャツはしわくちやになっていく。シャツの白と肌色

と爪の緑。醜い生命体と同じ色。

それに顔を顰めるが、その生命体がそこに移動すると益々顔が歪んでいく。

髪の間隙を縫うようにあたしを見つめながら緑の爪にそれはとまる。

まるであたしの手から生まれたように、白と緑の生物は手の甲に佇んでいた。

「はい、貴女のおかげで私は生まれたのです。貴女は私の母であり、私の生まれた意味全てなのです」

「はっ、処女なのに子持ちだなんて、あたしは聖母かよ」

自傷気味に声を洩らすも、実際あたしの頭の中では酷く複雑な感情が入り乱れていた。

両手を胸元で強く握りしめて、ゆっくりと思考を巡らせる。

事実、この体は処女であり、純潔。そしてそんな女を母と呼ぶ限りなく自分に近い生命体。

その事実から聖母マリアを連想するのは容易い。

マリアと言えば処女懐胎。天使によってキリストをその体に宿したという新約聖書の物語。

自分の能力なら天使による受胎告知なんかなくたって処女でありながら妊娠することは可能だし、酷く不愉快だが、聖処女にだってなれる。

人体の創造、それ即ち懐胎。

そして偶然か必然か、宗教画における処女マリアを象徴する色は青だ。

藍花悦の能力と名前。

まるで神の母マリアを連想させるかのような設定じゃないか。

「悪いけど、あたしが好きなのは人間なの。カブトムシはお呼びじゃない」

沸々と嫌な考えが脳を廻る。しかしこれ以上進展しない考えに苛立ち、05に当たるように言葉を吐き捨てた。

「んだよ、カブトムシかつこいーだろ？それに、未元物質ダークマターで作られてる

とはいえ肉体は人間と遜色ない。ま、人間の姿じゃなくてもいいんだがな」

「……姿が人間だろうと意味ないよ。未知の物質天界で作られて、作られた自我しか持たないものを愛することは無い」

「私はマスターの命令に従うだけです。貴女が嫌がろうと、関係はありません」

あたしは処女マリアじゃない。

だから天使に祈ることはないし、神の子を認めることはない。

垣根くんの言うことを聞いて、自分で考えないただの玩具。あたしは05を愛することは出来ない。

「そういうところが嫌なのよ。自分で考えなさい」

「仕方ねえだろ？お前を監視するには俺がカメラの権限を持ってなきゃいけない。こいつらの自我は全て俺をベースにしている。サンブルが俺以外無いつてもあるが、お前的には俺の姿と声と、性格のほうと言うこと聞くだろ？」

「は、こんなメルヘンチックな王子様みたいな子が垣根くんをベースにしてるって？どう考えても生意気さが足りてないじゃん？」

「思考パターンが同じって意味だ。上下関係ハッキリさせるために従順な性格にしてんだよ」

合理的だろ？なんて憫笑を携えてあたしに笑う彼は少年らしいあどけなさや青年の艶やさを持っていた。

興味のために神をもその玉座から引き摺り降ろすその強さは酷く恐ろしく、美しい。冒瀆的な少年は誰もを凌駕する美しさを秘めていた。

「風斬氷華とは違うのね。まあ、それでも人間ではないのだけど」

「あんなのと一緒にするなよ、あれは結局電気信号の集合体。でもこいつらはめんどくさいことに肉体と感情がある。御坂のクローンとほぼ同じだ」

だから制御が面倒だと愚痴を零すが、自分にとってはそんなこと些細な事。

肉体があろうとそこに自分の意思がなければ人ではない。

肉体がそもそも人間と違い、天使と同じそれ。あたしは天使なんてもんを敬うことはないし、愛すことはない。

それは愛すべき人ではない。

「だから何？あたしはそれを愛することは無いよ」

「私を嫌うのですか？」

手に乗る白いカブトムシは酷く無機質で感情の籠っていない声で呟く。ただの事実確認、そう言いたげな無感情さはあたしを苛立たせるだけだった。

「嫌いにはならないよ。ニーチェ曰く、愛せなければ通過せよ。興味が無いのなら素通りすればいいだけだもの」

「お前が素通りしようと、関係ない。こいつはずっとお前の隣にいて、俺に報告してくれる。お前の弟みたいなもんだ。よかつたな、本物の弟ができて」

05へ抱く感情は愛憎入り交じる無関心。

垣根帝督の一部として愛しているかもしれない、けれど天使のような存在に憎悪しか湧かない。

たどり着いた結論は無関心。

これがどうなろうが関係ない。

「喜ぶと思ってるの？」

「せっかくの誕生日プレゼントだ、喜べよ」

「あたしの誕生日4月だけど？」

怒りを抑え、突き放すように答えるも、彼は動じない。狼狽えもせず、さらに愉悦を顔に浮かべると垣根くんはニタニタとチエシヤ猫のように口角を上げた。

「9月の29日だろ？聞いたぜ」

「……何を聞いたの」

「それだけだ。後はお前の体が変な構造ってぐらいだな」

本当の誕生日、本当の自分。それは藍花悦に繋がるもの。

彼がそれを知っていることに恐れを抱くも、それよりもあたしの知らない言葉が彼の口から飛び出すことに動揺してしまう。

その動揺をいとも容易く見抜くと、垣根くんはゆつくりと足を踏み

出す。

黒い瞳は空の赤と相まって今の彼は言葉を失うほど美しかった。

「構造……？何の話？」

「お前の知らない話だ。お前の深淵の根元、お前さえ知らないお前の秘密」

一歩、また一歩、少しづつ彼が近づいてくる。コツコツと靴音を鳴らして、目の前まで来ると足を止めた。

ギリギリ胸に当たらない距離。10センチも違う背が憎くて堪らないのは見下す彼の瞳が酷く綺麗だから。

「俺はな、お前の家族なんて知らない、お前の人生も、これからも。知ってるのは名前と、誕生日、能力の一部と、身長、体重、国籍、学籍、スマホのパスワードと、交友関係、それくらいだ」

「それで十分じゃない？もうすでにあたしの全てを知っているじゃん」

「何言ってるんだ、それはテメエも一緒だろ？お前も何故か俺の全てを知っている。暗部のことも、昔の悲劇も。思わせ振りの態度で、まるで全てを知っているかのように振る舞う」

歯をギリギリと噛む。強く、強く、強く。

目の前の少年の言葉を否定するように、ただひたすらに。

「でもテメエも俺も、互いの深淵を知らない。だから俺はテメエと一緒にいる。それはテメエも同じだ」

切れ長の目を細め、まるで兄が妹を見るように、主人が犬を見るように彼は夜よりも深い黒の瞳であたしを見下ろす。

勝ち誇ったような美しい顔は夕日に照らされてさらに流麗で神秘的なものだった。

純情な少年は蛙と蝸牛、そして仔犬のシツポで出来ている。

大人の青年はため息と流し目、そして嘘の涙で出来ている。

マザーグースは正しかった。

目の前の少年は好奇心と探求心、そして恐ろしく耽美な何かで出来ていた。

キャラメルのように甘みと苦味が混じる少年は紛れもなく人間で、

それが何よりも素晴らしいものだ。あたしは知っている。

彼は愛しい妹と同じだった。

素敵なもので作り上げられた少年はいつものにやけ顔であたしを見下ろす。

「俺はな、テメエさえ知らない深淵を覗くためだけに、他でもないテメエのために神の御業を成したんだよ」

その笑顔はどこか誇らしげだった。

あたしはこの世界で一番、あなたが好き。

それでもあたしはあなたの全てを、あなたの深淵知ることには無い。

嫌われて、けれど構われて。そしてあなたの隣に立って、自分の存在を再確認するの。

39話：九月上旬

九月上旬、暑さが残る澄んだ空の下で一人歩く。蟬が五月蠅い病院の周りを確認するようにグルグルと目的もなく廻るのはめんどくさいし、しんどい。

薄ピンクの看護服は少し窮屈で、嫌になる。熱を感じない体とはいえ籠るような気持ち悪い熱気は正直不愉快だ。

何も起きない平和な日常にため息を吐く。せつかく高位の能力を手に入れたのだから全てを助けようと意気込んでいたのに、それが仇となるなんて聞いてない。

九月上旬といえば上条くんがローマの十字教徒とのいざこざをはじめた出来事がある。しかし自分は超能力者^{レベル5}、なので外出許可は降らないし、上条くんたちに茶々を入れることは叶わない。

なので次のイベントが来るまで学生らしく学校で日常を過ごそうと考えていた。けれど現実はそうもいかなかった。

「はあ、めんどくせえ……」

普通なら学校で授業を受けているはずの時間帯、あたしは病院の外をただひたすらと歩く。

平日だというのに学校には行かず、病院を彷徨くだなんて普通じゃありえない。

そう、普通じゃないのだ。

この行為はパトロール。この病院に在籍する妹達も同じことをしているが、自分も戦力として駆り出されたのだ。

眩しい太陽に目を細めながらこの状況に苛立つ。

というのも、昨日の昼に変な武器持った人がテロってきたり、どっかの最強さんが自分の病室の壁に穴をあけたり、深夜に変な集団が駐車場にでかい穴を開けたりとやらで、警戒態勢なのだ。

高位の能力者、しかも色々な事件に自ら巻き込まれて行ったあたしは防衛に適任だと言われこの様にパトロールするだけの日々を送る。

公欠になるのが唯一の救いか。

「仕方ありませんよ、妹達だけでは広範囲を索敵出来ません」

病院の裏、ぼーっとなしながら足を止めると優しくも無機質な声が頭上から降り注ぐ。

誰をも虜にしてしまうような優しい男の声。けれどその声の主をよく知っている自分からすると反吐が出るような声。

無視を決め込むのもバツが悪い。眉間に皺を寄せながらゆっくりと振り返るとそこには確かにこの世界で1位2位を争う程度には嫌いな生命体が佇んでいた。

しかし、その姿は初めて会ってから今日まで見たことの無い姿をしており、さらに眉間に皺が刻まれる。

「アンタ、何それ？」

「ナニ、とは？」

振り向いた先に立っていたカブトムシ05、通称05は通常なら色違いの暗部姿の垣根くん、つまり色落ちしたようなスーツとセーターを着ているはずなのだ。

真っ白い肌に、色の抜けた淡い色の髪、そして美しいライム色の瞳。それに変わりはない。

「服だよ、服」

違うのはその服装。

薄い水色の看護服はどう見ても彼が自分の能力で作ったものとは思えないし、違和感を覚えさせるその見た目は酷く不愉快だった。

「先程、この服の方が違和感がないと冥土返しに言われ、貰いました。貴女の隣に居やすくなるのなら構わないと思いましたが、悪手でしたか？」

「それ着てたら病院にしか居れないでしょ。どっか行きなさいよ」

「貴女から片時も離れるなど上位命令を受けているので、それは不可能です」

苛立ちながらシツシツと手で追い払うも、05はそこに突っ立ったまま。

その言葉に頭を抱えて溜息をつくが、そんな態度をとっているにも関わらず05は動じず笑みを貼り付けた。

「ああ、どんどん自由が無くなっていく……ここは地獄か」

「ここは学園都市ですが」

「んなマジメに答えないでよ」

あたしは愚痴を零すことも許されないのか。

真顔であたしの言葉をぶった斬る05に不快感を感じながら舌打ちをしても、それは顔色を変えることは無かった。

無を体現したようなそれに苛立ちが募る。こういう時は酒や煙草に溺れてしまいたいが、今は未成年、気軽にストレスをぶつけられない。

五月蠅い蝉と、腹が立つ男の幻影に、ゆっくりと肌を伝う汗。何もかもが嫌だ。

「セミうるせえなあ……早く秋になんねーかな」

「保護対象、セミの種類によつては12月まで鳴きます。聞こえなくなるのは随分先かと」

「……マジメに答えるなって言つたばかりなんですけど？ただのお気持ち表明だから」

悪態をつきながら早足で歩き始めると、05もふよふよと浮遊しながら着いてくる。

霊に取り憑かれた人はこんな感情なのだろうか。恐怖や怯えよりも嫌悪感と腹立たしさしか湧かない。

この生命体の口調、声色、見た目、匂い。その全てに言い難い気味の悪さと嫌忌が湧き上がる。

「つかさ、保護対象呼びやめてって何度言つたらわかるの？」

「保護対象は保護対象です」

「名前を呼ばれないことほど、嫌なことは無いんですけど？」

名は体を表す。

名前がどんなに重要で、大切なものなのかを分からないこの知性なき醜い生物が大嫌い。

名前を呼ばず、『保護対象』だなんて呼ぶこの生き物が何よりも嫌い。

自分を弱くするその生き物が大嫌い。

名前がなければ、あたしはあたしで居られないのに！

ボロボロと崩れていく感情が優しくコーティングされて口の端から溢れ出す。抑制した声は早歩きをしているからか、乱れたラジオの音声のようだった。

「私の世界はマスターと保護対象・天羽彗系だけで構成されています。それ以外はありません。よって、名前を呼ぶ必要はないと思います」
病院の裏手から表に差し掛かったところで05は小さく声を出す。
蚊のような小さな声だが、そこに寂しさの感情はない。均一な声は優しくも無機質。

苦味を感じさせるその声に顔を顰めながら一瞬足を止め、振り向く。建物の影に重なるそれはどこことなく陰鬱だった。

「……別に、名前くらい神だって呼べるっつーの。視野を広く持ちな？」

現世とは少し違う、何かが違う雰囲気纏うそれはやはり人とは言えない。

けれど、最低限認めてはいた。

「05、あたしはね風斬氷華と違ってアンタを一応は評価してるの」「評価、ですか？」

「あたしと似たようなもんなんだから、何かを変える力があるはず。今アンタは垣根くんの命令で動いてるから気に食わないのよ」

カブトムシ05、並びに未元物質製の生命体は異界の素材で作られた生命、そしてこの時間軸にいるはずのないもの。

居るはずのないキャラクター、別世界の常識に基づいて作られたそれは創作者によって息をして、生を受ける。

神の気まぐれによってここに呼ばれたあたし、生きる世界が違っていたあたし。

垣根くんのエゴによって作られたそれら、ちがう世界の物質で作られたそれら。

基本は同じ。

ジャンルは同じ。

種類は同じ。

「貴女と似てる……」

ぽつりと言葉を発するその腕を引つ張って建物の影から抜け出す。

暑さを感じないとはいえ、やはり肌に纏わり付く熱気は気持ち悪い。それでも05を陽の下へ連れ出すと、そのまま歩き始める。

それらとあたしは色々な点で似てる。だからあたしは否定しない。否定したら今あたしがここにいる現実を否定することになるから。

あたしであろうと、誰であろうと、この現実を否定してはいけなから。

それはあたしが妹を死から助けたことを否定することに繋がるから。

それだけはしてはいけない。

「とはいえ、自分にしかない意識がなければ人とは認められないけどね」

「意識、ですか……どうすればヒトになれるのでしょうか」

「人になりたいの?」

されるがままにされている腕に力を入れることもせず、05は相変わらずの冷たい声で言葉を呟いた。

「いいえ」

「じゃあなんなの?」

「……貴女とマスターの考えていることを知りたいと思うのです」

小さい声、けれどハッキリとしている声が後ろから風に乗って耳に届く。

人の心など分らないくせに、分かろうとするその姿勢はどうみても嘘くさくて。

人のいない病院の裏手はまたすぐに影を差す。ずんずんと足だけが進んだ。

05の顔なんか見れない。

「垣根くんの気持ちは共有されてないの?」

「理論としては分かっています。けれど、映画を見ているような気分なのです。とはいえこの目で映画を見た事はないので表現として正しいかわかりませんが」

「垣根くんそのものではないのね、まあ従順な性格に作り替えたって言うってし、当たり前か」

「私達は垣根帝督をベースに生まれました。その中で一番自我と意識が確立されているのがこの私です。どちらかと言えばマスターの成分が入った別の人格といった方が正しいかと」

前を向いたまま話しかけると、それは平坦な声で答えた。

05の言葉が正しければ、きつとカブトムシ05はスワンプマンみたいなもの。

垣根帝督の自我を切り取って新しく構築された別の生命体。それを垣根帝督と呼ぶか別の存在と呼ぶか。

カブトムシ05という存在は一体なんなのか、それはきつととても難解で、解明不可能な哲学的問題だ。

あたしと同じ。

自分という概念が酷く不安定な存在。

「ま、どうでもいいか、アンタが何を思おうが内面的経験を持たないアンタは人じゃないし、あたしは愛さない」

それを深く考えてしまったら、きつと自分は自分でいられない。

24歳の天羽彗系であり、16歳の天羽彗系であり、15歳の藍花悦である。自分を切り取って作られたのか、ただのコピーなのか、本物なのか、それは自分にだって分からないんだから。

分かってはいけないこと。一種のブラックボックス。

「貴女は人間が好きなのですね」

05の言葉にピタリと足が止まる。

当たり前前のことを聞いてくるそれに今までのとは違う自然な笑顔が溢れ出す。

「そう、あたしは人間が好き。そしてその中で一番好きなのはあたしの妹。その妹に似てる垣根くんが二番目に好きなの」

「そして人でない私は好きではないと」

「ええ、そうね」

あたしは05を愛すことは無い。自分と同じものを愛せやしない。けれど否定してしまえば自分の現実の否定へと繋がる。

矛盾を抱えた心理は05への無関心へと繋がる。

05がどんなにあたしに感情を抱いても、どんなことを思っても、05の性質が変わらない限りそれは覆ることは無い。

このあたしを母と呼ぶそれに、愛情が湧くはずがない。あたしは姉であり、母ではないのだから。

「それは、困りましたね。貴女は人を拒まない天使のような人だとして学友や職場の方から聞いていたのですが」

「アンタは天使かもしれないけど、あたしは違うよ」

「私は自分を天使などとは思っておりません。確かにこの間比喩として出しましたが、私は未元物質ダイクマターで作られた人工生命体であり、天使ではありません」

まるで落ち込んでいるかのような声で呟く05を鼻で笑うと、無機物でも苛立つのかむっとした表情で言い訳に近い言葉を少し早口で並べ立てる。

張り合うように頬を膨れさせて抗議する05の手をぎゅつと握り、ため息をつけてその白さを改めて認識した。

「どうだか。天使は生まれつき天使なんだよ。人間のあたしとは違う、生まれつき未元物質ダイクマターで作られたあんたは天使と同義でしょ」

「といますと?」

「天使は炎の子、人は塵の子。概念が違うんだよ。人間は死んだ後キリ……十字教なら天国か地獄、もしくは煉獄へ。人間が天使になることはない」

ミルクのように白いその手は人間のものとは違う。体を構成するものが違う05、ひいては未元物質ダイクマターの蟲の群れは天使の定義とよく似ている。

アレイスターだかどこかの上層部に主天使ドミニオンと名付けられたとはいえ、自分の体を構成するのは人の血肉。

喜ばしいことに、あたしは天使ではないのだ。

「……宗教は分かりませんが、とにかく、天使は人間とは違う生き物と言いたいのですね?」

「そう、人は死んだら最後の審判を天国、煉獄、地獄のどれかで待ち続

ける。それが絶対であり、カトリックにおける真理……あれ？」

人が天使になれない。人は死ねば天上へ登る。ダンテの神曲じやなくても、この真理は絶対だ。

聖母マリアも聖人も、天使にはなれずに天国で最後の審判を待つ。そして天使は天上と下界を行き来し、最後の審判まで神の遣いとして人を導く。

そこまで考えると、ふと別の疑問が浮かぶ。

人が死んだら否応なしに天国か地獄に行くのなら、あたしはなぜここにいる？

あたしはなんなんだ？

そもそもあたしは魔術とか、超能力なんかない現代で生まれて死んだ。それは嘘じゃない。というかあの痛みを嘘と言われたらキレる。

しかし、あたしが次に目覚めた時は五体満足で別世界に放り出され、しかも三歳児、同じ見た目で名前が違うという状況に晒された。

これは普通、キリスト教の考えではあり得ない。

だがキリスト教、または十字教の教えがあたしの輪廻転生に適應されるかは怪しい。考え過ぎなだけかもしれない。

けれどその疑問も残念なことに簡単なことで解決してしまう。

それはあたしの能力だ。

あたしが超能力を扱えるのも、能力というこの世界にもともとある概念にあたしが適應しているから。

言い換えれば、この世界に生きる限り、あたしはこの世界のルールに縛られるし、世界も自分の設定に縛られる。

この世界には宗教の世界、つまり天国や地獄もあるし、魔術は大雑把に言えばその世界から力を引っ張ってきている力だ。

ならば死んだあたしもその宗教観に縛られるはずなのだ。特に前世でもカトリックを名乗っていたあたしは、カトリックに縛られるはずなのだ。

けれど天国に行くこともなく、地獄に落ちることもなく、煉獄を登ることなくあたしはここにいる。

「あたしは、何？」

ポツリと消え入りそうな声で呟く。握ったままの白い手を強く握ると、視線を上へ、手の主へ向けた。

そういえば、これはこの間なんと言っていた？

— 貴女は私の母であり、私の生まれた意味全てなのです。

純潔である自分と、子だと主張する人ならざる生き物。

聖母マリア、純潔、青。

それを再び思い出すとその場に立ち止まって思考を巡らせる。何か、何かが引つ掛かる。

「どうかされましたか？」

「神の子を産んだ純潔なる母……」

05の声も届かない深い思考の海でひたすらに考えた。

ストーリー、または登場人物そのものにモチーフを与えるという物語はいくつもある。

童話、神話、食べ物、動物、はたまた実在の人物をモチーフにしていたり。

妹が遊んでいたゲームや観ていたアニメにはそういったものがよく見受けられた。だからたまに宗教関連や歴史関連の質問をしてきたことがあったのだ。

そういった点からこの『とある魔術の禁書目録』という世界、または登場人物が宗教的モチーフを持つていると想像するのは容易い。

なんなら昔、wikiや掲示板スレッドなどで超^レ能力者⁵は七天使をモチーフにしているとか、上条当麻はヌイトやらハデイトとかいう神をモチーフにしているなどという考察をよく見かけていた。

そこである仮説が立てられる。

登場人物である『藍花悦』も何らかのモチーフを持っているのでは無いか？

名前と能力。

どう考えても聖母マリアに似ている。その似ているという事実は、物語を外側から眺めていたあたしにしか分からない。

モチーフとはキャラクターの行動、心理、姿に色濃く反映される。それはきつと、天羽^{藍花}彗^悦系にも。

「……あたしの勘は、当たってるのか」

消えていく記憶、増幅していく傲慢、キャラクターを人と認識する感情、限りなくこの世界の住人に近い感覚と、相容れない認知、この世にある天国との矛盾。

もう一度、あの薄汚い神に話を聞かなくてはいけない。

そして同時に悟る。きつと、その機会は近いうちに訪れると。

晴れ渡る空の下、空気の熱と太陽の熱が嫌になる天気^{テンキ}に苛立ちながら目の前のテーブルに置かれたガレットにナイフを入れた。

一口分に切り取るとフォークで口へと運び、咀嚼する。

食事なんてただの生命維持、生きるため必要なもの。それでも美味しいものが食べたいと思うのは人間だからだろうか。

テラス席に青い空、雰囲気の良いカフェ、美味しい食べ物、そして目の前の席に座る幼い少女。

子供には大きすぎるカーキ色のブルゾン、どうみても下着にしか見えない紫のキャミソールワンピースを着て、大きいブーツを履いた黒髪のポプカットが特徴的な少女を観察しながら再びガレットを口に運ぶ。

フォークとナイフと俺を交互に見ながら、ガレットに怯えるような顔をするその少女は昨夜確保した『暗闇の五月計画』の実験台の一人。これから先の未来で挑むたった一人の最強に打ち勝つための切り札のひとつ。

「俺がわざわざ買ってやったもん^{もん}に文句があるのか？さっさと食っちゃえよ」

少女、^{ゆずりはりこ}杓林檎に目の前のものを食べるように促すと、不器用な手でナイフとフォークを使ってガレットを口に入れた。

みるみるうちに表情が困り顔から子供らしい笑顔になると、杓は声

を絞り出してあたふたと両手に握ったカトラリーをブンブンと振り回す。

「おっ、おいしい、これっ！こんな、美味しい食べ物っ！」

「ガレットなんて別に珍しくもないだろう、それともどこぞの女みたく偏食だったのか？」

「食べ物いつも、四角くてボロボロと、緑のプルプル、ピンクのネチネチ、あと点滴」

いつも甘いものしか食べないどこぞ馬鹿女を少し思い出すが、そんなのに構わず少女はガツガツとガレットを食べ進める。

口の中に食い物を入れながら喋る杠はまるで小動物のようだった。

「レーシヨン以下かよ……今どき最前線の兵士だつてもつとまともな……いや、でもアイツはサプリだけで生きてたな」

「これすごい、とつてもおいしいっ！すごい！」
「おう……」

ふと汚い部屋と散らばる薬品が頭をよぎる。気が向いた時に甘いものだけ食べて、気が向かなければ生命を維持できる程度の量のサプリメントを飲む。自堕落な生活。

あれは一種の精神修行だったのだろうか。

カプトムシ05をつけているから最近はそのういったものはないが、目の前の少女の生活環境といい、あの金髪ギャルといい、研究者という生き物は物を食べない、食べさせないがモットーなのだろうか。

最近顔を見ていないムカつく女に溜息をつくど、顔を上げた矢先に白い容器に困惑しながら首を傾げる杠林檎が視界に入る。

「それはそのポテトにつけて食うんだ」

ケチャップの入った小さい容器を持ち上げて匂いを嗅ぐ少女に呆れ、なるべく優しく教えてあげるも杠はそのまま容器に指を突っ込んで行儀悪くケチャップを舐めとつた。その行動力はまるで野生児だ。

「おいしい、濃い」

「単体で食うもんじゃねえよ」

優しく教えても、女という生き物はどいつもこいつも話を聞かない。

ケチャップを指で掬いながら猫のように指を舐める杠林檎は正しくそれを体現していた。

「腹も膨れたろ、そろそろ本題に入ろうぜ」

彼女の行動に少々頭を悩ませるが、プレートの上が空になるのに気づくと椅子に深く座ってずっとはぐらかされていたメインテーマを話題として引っ提げる。

少し威圧的な低い声で話しかけてみても、少女の無表情は相変わらず崩れなかった。

『暗闇の五月計画』……なんで一方通行の演算パターン掴みたいの？一方通行と戦いたい？」

「あいつと戦うのが目的じゃない。それは単なる手段だ」

捕獲した少女はこれから先に起こす革命の為の駒。一方通行の演算パターンを埋め込まれた少女は自分の目的のために必要なのだ。

この世界を変えるために、クソツタレな統括理事長を引き摺り降ろすために必要なパーツ。

「垣根の目的は？」

少女の問いに答えることは無かった。

沈黙が続けると、杠は無表情を顔に貼り付けて再び質問を投げつける。

「言えない？言いたくない？」

「お前には関係の無いことだ」

「なにかなくした？」

確信をつくような嫌な言葉が彼女の口から落とされた。

嫌な記憶、嫌な感情。混じる気持ち悪さが脳を掻き混ぜる。頬杖を ついていた自分の掌を強く握りしめた。

「お前には関係ねえって今言ったよな」

「お前じゃない、杠林檎」

「悪い悪い、名前と呼ばれねえのムカつくもんな、ゆじゆりは——」

苛立ちを隠すように軽い調子で話を変えるが、長い舌に邪魔されて自分でも認めたくないが少し噛んでしまう。

言いつらい名前にクレームを言ってしまうのだが、少女の可哀想な

目に気がつくとも目を逸らす。

「ゆじゆりは……」

「っせえ、噛んでねえ」

「噛んだ」

「噛んでねえつつつてんだろ」

どんと机を叩いて威嚇する。

しかしそれでも杠林檎は怯まずにじーっと生暖かい目で見つめてきた。

「絶対噛んだ」

「あー喉渴くな追加の飲みもん買ってくるわ」

生暖かい目をする子供を一人置き、その足でカフェ店内へ。

賑わう店内に反してレジ前は閑古鳥が鳴いており、すんなりと注文することが出来た。何故か頬を染めてテンパる店員にホットコーヒーを頼むと、店員は笑顔でコップを取ってコーヒーマシンにポニーテールを振り回して注ぎに行く。

慌てずともいいのと思うが、脳の大半の意識は別のところに引張られてしまい、店員の姿もろくに見ずのため息を吐いた。

「ったく、可愛くねえガキだな」

先程の生意気な子供が脳裏にちらついて苛立ちを孕む声が小さく口から漏れ出す。

かっこ悪いところを見せ、威厳を失ってしまった。いつだって上に居なければならぬ人種としてはやってしまった感が否めない。

隙を見せてしまうとどこぞの全人類の姉を豪語する馬鹿に弟扱いされるのが目に見える。例え彼女がこの場にいらなくても、常日頃から年上らしくしていなければならぬのがこの俺だ。

とはいえこの場にはいない女について考えるのは無駄であり、05に全で一任しているので今考えることでもないだろう。05からの感覚共有で特に不自然な点もないし、今は俺の後を追ってどこぞに突っ込むこともなさそうだ。

自立型追尾カメラは随分と優秀なようだ。

「なんだ？」

店員がはにかみながら持ってきたホットコーヒーを手に取って気分よく店内から颯爽と出ていくと、ちょうど小さな爆発音が空に響く。

空気を揺らす音ともに人が波のように押し寄せてくると、悲鳴がいたるところから上がった。それに眉を顰めて問題の場所に足を向けると、そこには警備員アンチスキルの格好をした集団が杠林檎を取り囲んでいるのが確認できる。

少女の足元の地面はまるで大きな力が使われたように凹み、ひび割れていた。

「人が流れてくると思ったら何してんだよ」

「おいキミ、我々は家出少女の保護活動中だ。彼女の能力が暴発する可能性もある。下がっていなさい」

ひび割れをなぞるように足を踏み出す。

ホットコーヒーをすすりながら彼らに近づくと、男の一人が機械的に俺にふざけた警告をした。

光の無い目、定型文のような台詞、小さく幼い少女に向けられた銃口。どう考えても、この光景はありえないものだった。

「警備員センセイ、じゃねえなお前ら」
「警備員アンチスキルならばの話だが。」

こびり付いた死の匂いは服を変えた程度で落ちるものじゃない。嫌な気配と、ムカムカする空気。

「こっち側のクソみてえな悪党の匂いがプンプンするぞ」

「我々が悪だど？」

俺の言葉にあからさまに嫌悪と憎悪を見せると、男は唸るような声を出す。その声は獣のような暴力性を秘めていた。

「自覚ねえの？じゃあ悪党以下だな」

「我々の活動は正義だ。我々こそが正義なのだ」

傲慢な口ぶりに世界で一番嫌いな少女が思い浮かぶ。

正義を振り翳す愚かで夢見がちな乙女。変なところで冷めているのに、妙にメルヘン思考な気味の悪い女。

どんな思考でも、それが彼女の言う正義ならば暖かく赦しを与え

る、そんなメシアアコンプレックスに苛まれた慈愛の天使。

「正義ねえ……俺が世界一嫌いな女も正義を掲げてそれを正しいと言っていたが、アイツとは全然違うな」

あの狂人は正義が複数あると考えている。その人が幸せになる方法こそが正義だと本当に思っている。

実にムカつく理論だが、彼らと違うのは多様性を認めていること。酷く歪んだ考えは何よりも忌むべきで唾棄すべきもの。

その気持ち悪い考えを肯定して、否定して、暴くのが俺の役目。「なんというか、正しさを掲げてひとつしか信じず、疑わないつてのが一番の悪だと思っただよな」

だからこそあの女の考えを肯定しても、目の前の男たちは否定する。

お前らなんかが正義を語るなんて片腹痛い。

他人を否定して受け入れなくせに、砂糖の欠けらも無いくせに。

「お前らのことだよカス」

飲み干したコーヒーのごみを口を開きかけた男に投げつけると、ヘルメットで眼光を隠し、まるで軍隊のように統率の取れた流れで手に持った暴徒鎮圧用の大きな銃を構えた。

向けられた銃口に思わず乾いた笑いが漏れ出す。

「なにそれ？^{アンチスキル}警備員が丸腰の学生に銃を向けるのか？」

「問題ない。不良学生鎮圧用のとても安全な模擬弾だ」

「あ？」

嘲笑うように言葉をかけると、銃口を向けた一人がきつく構えた銃を握って気味の悪い声を洩らす。

「ちゃんと生きたまま罪を全身で理解させることができる安全な武器だ！」

見開いた目はまるで神を崇める狂信者のよう。吠えるように、自分が正しいと虚しく叫ぶ獣。

醜い顔のそれは曰く人畜無害の武器を構えて汚い正義を掲げた。

「正義を理解できない悪め、お前も我々が正しく導いてやろう！」
引かれたトリガーから連鎖し、銃口から放たれた弾丸は目にも止ま

らぬ早さでこちらに一直線に向かってくる。引き金を弾くだけで人を殺すその鉛玉は歪んだ正義のために人を射抜かんと空を舞う。

けれど小さな弾丸は無慈悲にも力強い風によってねじ伏せられた。「安全だとか、危険だとか関係ねえな。超電磁砲レールガンくらいまでなら俺の羽は耐えられるぞ?」

風が晴れた先、埃や塵がゆっくりと地に落ちたその瞬間、杠林檎の隣に佇む自分の背中から伸びる翼が白い輝きを放って偽物共を威圧する。

三?六枚の白い翼は彼らには何よりもおぞましく感じるだろう。

「き、貴様、その翼、まさかつ、第二位ツ!」

「誰にケンカ売ったのか把握したようだな」

冷や汗を流し、目を見開き、震える悪人共は実に滑稽で、愉快だ。

そんな悪人共にかける慈悲も、慈愛も、赦しもない。

「そうだ、俺が『未元物質』ダークマター、垣根帝督だ」

俺も同じ悪人なのだから。

夏の風物詩であるアイスクャンディーを口に含みながら空を見上げてみると、遠くの空で煙が上がっているのが見えた。

灰色の煙は青い空によく映える。どうみてもそこで何かがあったのは一目瞭然で、目を凝らしながら首を捻った。今日は特別何かある日でもないというのに。

「あれ?どうしたんだろ」

「あれはマスターが起こしたものです」

どこかの誰かさんが激しい喧嘩でもしていたのだろうか。アニメ

でこんなシーン見た記憶はないし、多分学園都市の日常の一コマなのだろう。

そう思っって特別興味は持たなかったが、同じようにその煙を眺めていた05はその原因を知っているようだった。

「へ？垣根くんが？なにやってんのあの子」

アンチスキル
「警備員の格好をした集団と交戦していたそうです」

垣根くんはやんちゃだな、と甘いアイスクャンデー片手に空を眺めていたが、脳はゆっくりとその意味を噛み砕いていく。蟬がやけに五月蠅い中、まともに思考してしてくれた脳にあるものが思い浮かんだ。

9月上旬、日付が明言されていないひとつのお話。警備員アンチスキルのパチモンと、不思議な少女、研究者が描かれるあのお話。

白と黒の絵、紫の表紙、人生で初めて買った漫画、この世界で一番の少年。

「あ」

垣根帝督のスピノフ作品。

『とある科学の未元物質』

それと結びついた瞬間、05の肩に掴みかかった。

伝えなくてはいけない。メールや電話じゃなくて、誰にも妨害されないシステムで。

愛する少年の大切な少女が傷つく事実を。

「05！どうやって垣根くんと連絡とってんの？リンクしてるんでしょ？映像をリアルタイムで送信するの？傍受されないの？」

「いえ、強いて言うならメールの送受信みたいなものでしょうか。必要な情報だけ送信できます。それに未元物質で行われているので誰かに傍受されることはありません」

それを聞いて安心すると、更に05の肩を強く掴む。痛そうにすることはなかった。

この先のことを知っているからこそ、彼に助言をしたかった。痛みを知ることのないように、少女が不幸にならないように、ショートカットを教えてあげたかった。

「突然どうされました？」

「その、垣根くん——」

「天羽さん」

伝えて欲しいことがある。

そう口にしようとしたが、それはとある少女によって遮られてしま
う。

「うおっ!?びつくりした……どうしたの?9932号ちゃん」

突如背後に現れた茶髪の少女。背はあたしより10センチは低く、
目は死んだ魚のよう。

ウチの病院に勤務するクローンの一人、9932号ちゃんがそこに
立っていた。

他の妹達とは違うピン留めがあたしが助けた子だと判別できる方
法の一つ。前よりは表情筋が豊かになった気はするが、死んだような
目は相変わらずだった。

「天羽さんにお客様がアポを取ってきたのですが……お伝えしても?
とミサカは他のミサカから送られてきた伝言を間違いなく伝えます」
「客?あたしに?誰?」

ミサカちゃんの要件は特別驚くものではなかった。ただし、今が夏
休みじゃないことを抜いたら。

二学期も始まり、普通なら学生として学業に専念しているこの季
節。そんな時期にわざわざ学校ではなく病院に突撃するなどのよう
な要件だろうか。

研究絡みだろうかと怪訝な顔をする、少しの間を開けてミサカ
ちゃんが躊躇いながら声を発した。

どうも嫌な予感がする。

そしてあろう事かその予感は見事命中した。

乏しい表情筋を苦々しいものにして、彼女は接点があるはずのない
人物の名前を口にする。

「……木原相似、と名乗っています、とミサカは嫌な顔をしながら名前
を呟きます」

五月蠅い蝉の音は何故かとても非現実的で、静かなものに聞こえ

る。

一気に脈打つ心臓と夏の暑さがあたしの脳を破裂させた。

40話：罨と敵

夜、蟬の鳴き声も、明るい空もない狭い研究室の中、白い蛍光灯の下で三人の人間が等間隔に立ち、互いを睨んでいた。

一人は白衣姿の髪の長い大人の女。薄く色付いた髪をひとつに括り、椅子にふんぞり返るその人はテレスティーナ・木原・ライフライン。

一人は同じく白衣姿の男。短いグレーの髪、あたしと同じようにびっしりと耳に付けられたピアス、チエシヤ猫のような笑み、黒い手袋。その人の名前は木原相似。

そして二人の木原に挟まれているのは金髪、ピンクグラデ、ピアスにチョーカーにネックレスをゴテゴテに着けたあたし、天羽彗糸。

一人だけ白衣を着ずに、ミモザ色のオーバーサイズのシャツに白い短パンと、金のサスペンダー、シャツと同じ眩しい黄色のハイヒール。どう考えても自分だけ浮いていた。

「それで？あたしになんの用？」

低い声で呟いて机の上に腰を下ろし見定めるように男を見下ろす。

カブトムシ05をチャームとしてくっつけたスマホを持って机の上に足を乗せ頬杖をつくとき、木原相似は蛇に似た細い目をさらに細めて癪に触るような腹立たしい顔で笑った。

スピンオフにしか出てこないこの人が動いているということは今はその時系列ということであっているだろう。

そして物語を知っているこそ、この男があたしに用事があるのが考えられなかった。

「随分と切羽詰まってるんだな？代替品でお遊びしてる野郎がこいつに何の用だよ」

「おや、これはこれは、実験が頓挫して捕まったところを拾われた可哀想な人じゃないですか。なぜこんな所に？」

「知ってるくせに、嫌味つたらしいなクソ」

刺々しい言葉の押収は木原同土故なのだろうか。

しかし、今は二人の喧嘩よりも思惑の方が百倍は大事。ため息をつ

いて本題に入るよう促すと、木原相似は貼り付けた胡散臭い笑みで話し始めた。

「……それで、本題は？」

「貴方を実験に使いたくて、お迎えに上がった次第です。珍しく許可が取れたんですよ」

「あたしを？ 実験に使いたいなんて、初めてかも」

彼の話とは何かの実験についてだった。

学園都市で能力開発をすると価値があるものは研究対象となり、幼少期から研究機関でデータを取られたりするのだ。

それは自分も例外ではない。超能力者^{レベル5}である時点で研究対象としては上の方。データだって子供の頃取られていたし、それが今勝手に色々ところで使われている。

けれど、あたしは珍しくどこの研究機関に属してなかった。

データは全てこの病院で簡単に取られたものと、能力に開花した直前に取られたものの2つしかない。冥土帰しによって守られているため、ほとんど実験協力なんかしたことがないのだ。

だからこそ彼の思考が読めなかった。

今までだってあたし無しで世界はまわっていたのだ、わざわざ黒幕からお出ましになるとは思わない。

「そりゃあ貴方は嚴重に管理されてますからね。生物学の分野で貴方の能力は重宝されてますよ？ ねえ、ゾンビさん」

「……妹達のこと？ 確かに何故かあたしの能力が使われてたけど、それ以外には何も……」

「あれ、ご存じないんですかあ？ 貴方のデータを使おうとしたどつかの馬鹿がアイテムに潰されたこと」

演技じみた声色でニタニタと笑う木原相似に眉を顰める。

人を苛立たせるには十分の態度に思わず舌打ちをしてしまうと、さらに口角が上がった。腹立たしいことに、彼の言っていることに思い当たる節はなかった。

「なにそれ、どういうこと？」

「なんでしたっけ、ケミカロイドを作るとか何とか……まあ、なんでも

いいです、重要なのはそこではありませんし」

ケミカロイド、その単語に脳の奥の記憶が反応する。

記憶が確かなら、その単語は超電磁砲二期の最後の下りに出てきていた。

夏休み中に起こる話で、てっきり自分が遭遇していないだけだと思っていたが、彼の話を信じるならそもそも起こらなかったと考える方が正しいようだ。

中心人物そのものが作られなかったというのだから。

この話が起ころなかつた原因は何となく推測できる。

考えられる理由は二つ。

布束砥信の暗部入りを阻止したこと。そして木原相似の話が本当ならもう一つの理由はあたし自身だ。

「あたしって、そこまで有名人だったわけ？」

「生物学の分野ではそうみたいですよ？だってなんでもできるんですから！まあ、代替品を扱う自分には大きく関係ある分野ではありませんが」

『藍花悦のデータは嚴重に管理されている』

『生物学の分野で藍花悦の能力は重宝されている』

前者はともかく、問題は後者。

前提として、あたしの能力はそもそも原作にはない。藍花悦の実際の能力かどうか分からない。

そうなると、研究での価値観や用途が変わってくる。

一方通行アクセラレータがいなくなったら窓のないビルの外壁は凄まじい防衛機能を持つていなかっただもしれない。

垣根くんがいなくなったらお米みたいな形のお面も作られなかったかもしれない。

上条くんがいなくなったら学園都市は存在してないかもしれない。

人がいることで変わる未来、現実、過去。

原作とは違う能力を持つ藍花悦がいることで生物学分野の根本が変わってしまった。

本当はない能力があるせいで、生物学に関する研究が全く違うもの

になったのだ。

ここで前者、『藍花悦のデータは嚴重に管理されている』の話が出てくる。

先程の通り、『生物学の研究Ⅱ藍花悦の能力データを使う』という図式が出来てしまったこの学園都市。暗部の研究員もおそらくこの図式を知っていたのだ。

そして何かしらの方法を使ってあたしのデータを使おうとした。

アニメに出ていたケミカロイドは特別性の飴を舐めなきやいけなどかなり欠陥もあつたし、学会に発表するとかが目的だったのであたしのデータを使ってさらに改良しようとするのに納得出来る。

彼の話が鵜呑みにするなら、自分の能力はかなり厳しく管理されているらしい。理由は不明だが。

だが事実、今の今まで学園都市の能力者だと言うのに研究の協力要請も来たことがないし、実験の手伝いもしたことも無いのだ。彼の話に信憑性はある。

そんなものに安易に手を伸ばしたら、闇討ちされるのは学園都市なら当然なのかもしれない。

何となく自分がある故の変化を感じ取る。けれどそれが何を意味したいのかはよく分からない。

嚴重に管理されているからなんだという話だ。この人は曲がりなりに木原で、嚴重とかそういったことは関係無さそうだというのに。

「結局、何が言いたいのか？」

「今回の試みは上層部に評価されているらしいって事ですよ。それで、来ていただけますか？」

自分の存在によって物語そのものが変わってきている可能性がある。

バタフライ効果、小さく物語が歪んでいく。

それでも、やはり彼があたしを呼ぶ理由がわからない。

そもそも彼の行っている実験は一方通行のアクセラレータパチモンを作ることだ。

しかもDAとかいう独立した組織を手駒にしていることから察す

るに、彼は上層部から見放されているのだ、あたしを使う許可が降りたとは考えにくい。

畏臭い。

というか十中八九畏。

「保護対象、危険です。これ以上彼の話を聞くことは――」

「で？どちらまで行けばいいの？」

畏なら嵌ればいい、敵なら赦せばいい。

どうせ死ぬことは無いのだから。

あたしにしか聞こえないほど小さいカブトムシ05の囁きを無視し、堂々と机から降りて床に立つ。

小声であたしの名前を呼ぶが、そんなことどうでもよかった。

あたしが必要とされている、それだけで十分だった。

「いいんです？抵抗しないで」

「うん。あたしの体使っていていいよ。どうせ死なないし、有意義に使った方がいいと思うの」

ボタンがひとつ空いた大きいシャツの胸元に手を当てて心からの笑みを向ける。

畏に嵌めようとしたって、出来る姉であるあたしはその程度じゃ折れることは無いと、強い想いを胸に秘めながら。

「……天羽、ふざけてんじゃねえぞ。木原の実験がどういいうものか分かかってんだろ？」

「わかった上で言ってるの。あたしがやることで他の子が痛い目を合わないで済むのなら、それでいいんじゃない？」

「やはり聞いた通り変ですね、貴方」

相変わらぬニタニタした笑顔を貼り付けた男にテレステイナが舌打ちをした。同じ木原でも相性は最悪のようだ。

だがどんなに止められようと、あたしの意見は変わらない。

「でもさ、なんであたしを使うのかは教えてもらおうよ」

「……まあ、そのくらいなら。あなたが『第三候補』であり、

『肉体の支配者』だから、という至って簡素な理由になりますし」

とはいえ信用しきったわけではない。探るような質問を投げかけ

ると、彼は少し間を開けて頷くとこの間も聞いた単語を口にした。

『ドミニオン肉体の支配者』と『サブプラン第三候補』

この単語を耳にするのは二回目だ。天井亜雄が呟いたものと同じ言葉。

あたしの知らないことが上層部に有りそうだ。

「そう……ま、とりあえずエスコートして下さる？」

後で調べるのは確定として、今はスピノフの現状をどうにかするのが先だ。

扉を開けると笑顔を見せると、木原相似は苛立ちを隠しながら笑う。蛇のように細い目は笑っていないかった。

扉を開けた彼と共に研究室を出ると、直ぐに十人ほどの警備員アンチスキルのパチモンに取り囲まれ、そのまま暗い廊下を進む。

まるで重要人物かのような扱いに思わず笑いかけるが、必死に咬み殺す。笑いを堪えて肩を震わせるあたしに反応する人はいなかった。

「貴女は……」

「しー……垣根くんには教えちゃダメだからね？」

そのまま笑いを堪えながら厳つい男たちに囲まれて廊下を歩いていると、スマホのストラップに擬態していた05があたしにしか聞こえないような小声で囁いた。

こうやって質問してきているあたり、まだ垣根くんには報告していないのだろう。

「いえ、教えない訳には」

「……そっか、君は人じゃないもんね。秘密なんかできるわけが無い」
05と同じように声を潜めて囁くと05は固い頭でいいえを突きつける。拒否権なんてないというのに。

だが確かに、05に期待するのはお門違いだ。造られた生命体は秘密なんて人間めいたことを出来るはずがないのだから。

暗い廊下を突き進むあたしは、手元にぶら下がる生命体に視線を向けることは無かった。

「秘め事ってのはね、利己的で我儘な人間にしか出来ないの」

人間じゃない05に期待なんかしていない。どうせ人間じゃない

のだ、秘密なんてことが出来るとは思えない。

実験のことも、本当のことも、言ってしまう方がいい。少しムキになって拗ねた自分に嫌になりながら、心の中で言葉を唱える。

「だからさ、アンタに期待なんかしてないよ、カブトムシ」

どうせいつかバレてしまうことなんだから。

『第三候補』ねえ……いいこと聞いちまったな」

二人の人間がいなくなった部屋の中、残された女性は青白い蛍光灯の下で顔に影を作りながら笑う。

悪戯っ子のような、悪役のような凶悪な笑みは誰にも気づかれることは無かった。

星が煌めく夜空の下、河川敷を三人で歩く。一人は少女、一人は部下、そして俺。

川から来る心地良い風に乗って草木と水の匂いが鼻をくすぐる。

「さつき食べた肉塊すごい美味しい！とても！」

「肉塊……死体みたいに言うなよ」

後ろから着いてくる少女、杠林檎の言葉に呆れながら道を進む。階段をおりて、川辺に近づくと立ち止まる。振り向いてそこに散らばる石ころを指さした。

「さて、食ったぶんは働いてもらわないとな。林檎、試しに能力使ってみろ」

一瞬首を傾げた林檎だったが、言葉の意味を理解すると指さした小石に近づいて強く目を瞑った。

手を握りしめて力を放出しようとするが、小石はガタガタと揺れるだけで変化はなかった。

資料じゃ低能力者程度の念動使用サイコキネシストとあったが、昼間の出来事と言いい、数値にブレがある。その法則に心当たりはあるが、推測で物事を判断することは得策ではない。

少しづつ解明していけばいい、アクセラレーター一方通行のデータを。

しかし、そこから何十分か時間が経っても何も起こらなかった。的を設けたりと色々として試行錯誤してみたが、結局彼女の能力が向上することは無い。

時間だけが虚しく過ぎていく。

近場の岩に腰を下ろしてその光景を眺めていたが、欠伸が出てしまうほど何も起きない。これ以上やっても無駄だろう。

そう思っ顔を上げたが、林檎の前の小石が空に打ち上がっていくのに目が奪われる。

林檎の能力ではなく、人為的な移動。打ち上がった石ころのほう視線を向けると、そこには石をぶら下げた黒いドローンが月明かりを背にして耳障りな音と共に飛んでいた。

「邪魔しちゃってごめんねー、でもそんな特訓じゃ何年かかっても力は発動しないって」

加工された声がそのドローンから響く。性別もよく分からないその機械じみた声に苛立ちが芽ばえる。

ムカつく言い方の機械にガンを飛ばすが、機械は物怖じせず話を

続けた。

「知ったような口をききやがるな、誰だテメエ」

【おお恐い。私も彼女と同じ関係者ってやつでね？林檎ちゃんとの付き合いはお兄さんよりは長いよん】

「ふーん？それで、何の用だ？」

【この先にその計画に関わってた研究施設がある。破棄されて、もう誰も使ってないけど】

淡々とした機械音が響く。それが話す内容は興味深いが、同時にきな臭い。

探るように空を五月蠅く舞うドローンを睨みつける。

【お兄さん短気？そんなに睨まないでよ、私も林檎ちゃんが能力使うところ見たいだけ、オトモダチなもの】

進展がない状況でこいつはタイミングよく現れやがった。怪しいと思うのは当然だ。

林檎の情報経路を弄ってるやつなのか、加担してるだけか。

全て推測の域を出ることは無いが、真実に近づけるのならやるべき事はひとつ。

「わかった、乗ってやるよ。オトモダチのお誘いだもんなあ？」

罠なら突破すればいい、敵なら潰せばいい。

誰よりも強いんだから。

月の明かりも、街灯の明かりもない真つ暗な視界。ドローンに連れてこられたのはもう使われていない製菓工場だった。

暗い廊下を突き進む。人のいない静かな工場は薄気味悪い。

子供に夢を売る工場の地下へと靴音を響かせながら足を進める。

皮肉の効いた施設に乾いた笑いが浮かぶが、地下におりた林檎の不安げな表情を前にしてはその笑みも消えてしまう。見覚えがあるのだろう、不安げな表情はここで何が起こったのかを物語る。

真つ白で何も無い部屋、機械しかない広く無機質な部屋は嫌な気配が漂っていた。

「見覚えがあるってことはここは——」

【だからー、さっきから】

部屋の端に取り付けられた無数のモニターと機材に足を運び、触ってみる。電源をつけてみるが、触ると同時に浮かぶドローンから響くハウリングのような音に気が向いてしまう。人間の声が合成されたような声が気持ち悪い。

だが気味が悪い声は突如生身の声へと変わる。

「そう言ってるじゃん」

ハウリングの晴れた声は扉の向こうから出てきた少女のものだった。

長い黒髪だが、顔に掛る横の髪は黄色に脱色されており、子供の外見には似合わないパンクなファッションと相まってひねくれた不良少女のよう。

俺はこいつを知っている。

名前は確か黒夜海鳥。

杠林檎と同じ『暗闇の五月計画』の被験者、実験台、モルモット。

それを理解した瞬間、大きな音が広い部屋に鳴り響いた。

黒夜海鳥が手元に持っていたボタンを押すと、二人の少女から切り離すように透明なガラス板が天井から落ちてくる。それと同時に床も動き、隔離された少女たちをガラス越しに見下ろす構図になっていた。

「舐めてやがんな、こんなガラスで俺を切り離したつもりか」

「やめときなよお兄さん。ここは能力者の実験施設だから壁も床も特別製。チンケな攻撃は通じない」

壁に取り付けられたスピーカーから黒夜海鳥の冷たい声が流れる。

ガラスに触る俺に忠告じみた言葉を垂れ流すと、勝ち誇ったような笑みで俺を下から見上げた。

腹立たしい顔に思わず手に力が入ってしまう。

「さすがに超能力者の前じゃ3秒と持たないだろうけどさ、お兄さんがこつち来る頃にはガラス片で林檎ちゃんはボロ雑巾みたいになつてるよ?」

スピーカーから流れる音声は癩に触ることしか言わない。苛立ちを露わにして睨みつけても、ヘラヘラとした表情は一向に変わる気配がない。

「それに、林檎ちゃんと私、被験者同士の戦闘データが得られるまたとないチャンスってね」

「なに?」

ガラス越し、黑夜海鳥と杠林檎、二人の少女が対面する。言葉を二三交わしたあと、黑夜海鳥がまたもや手元のリモコンのボタンを押した。

しかし何かが起きることはなかった。目に見えた変化は特にない。

唯一、林檎を除いて。

何かから身を守るように頭を抱え、うずくまると、乱れた呼吸がスピーカーを伝って自分のいる部屋に響いた。

「林檎ちゃんに指向性のスピーカーで不快な音をぶつけてんの。お兄さんさあ、もう薄々は気づいてるでしょ?林檎ちゃん的能力発動には強い負荷が鍵になってるって」

自分には聞こえない音が小さな少女を苦しめる。けれど自分には何もできない。

部屋のモニターとともに流れる映像の一つで、林檎の能力が分析され、カタカタと音を立てた。

俺の目的は一方通行の演算パターン。このまま傍観していればデータが蓄積され、この間得たデータよりも多くを得ることができることだってできる。

ここにただ立っていれば、全てが終わる。何もなくていい、究極の怠惰。

……本当に？それでいいのか？

怠惰なあの少女と同じことをしていて、いいのだろうか。

流れに身を任せ、自分が、他人が傷ついてもなんとも思わない、怠惰。

苦悩が脳を支配する。しかし、俺の苦悶なんか気にもせず少女たちは戦い始めた。

空素の槍を何度も何度も黒夜海鳥は林檎に打ち込む。床に、壁に凄まじい音を立てて勢いよく飛び出た空素がぶつかると、林檎は小さな体を縮こませて逃げ回った。

何回も逃げ回り、必死に細い足を動かす。

「あああく、最初はイイ感じだったのに。まあ、失敗作は所詮こんなもンかア」

しかし、出口のない部屋での攻防はすぐに終わりへ向かう。

追い詰められた林檎は怯えた顔で身を守るが、それでも黒夜海鳥は足を止めずに林檎へと近寄っていった。

「もオイイヤ、ちよーつと期待はずれだったねエ。バイバイ、林檎ちゃん」

手から放出される空素の槍を構え、ゆったりとした足取りで近づく。

鬼ごっこの終わりを迎えようと、空素が流れ出る左手を振りかぶった。

「失敗作……うはは、それはオマエもだろオがアツ！」

だが、林檎によって跳ね返された不快な音がその手を拒む。

ばちばちと空気が震え、スピーカーからもその凄まじい音が伝わってきた。

空気の振動を操作して相手に音をぶつけたのだろう。

音の波形は変えずに方向だけを变える力、さつきまでと能力の出力が桁違いとはいえどう見てもあの夏の夜、空の下で気味の悪い少女越しに見た力と同じだった。

あの日見た光景。吹き飛ぶ頭と、月夜に光るネックレス。

とても嫌な記憶。

腹立たしい記憶を胸に押さえ込みながらゆっくりと顔を上げると、いつの間にやら少女たちは別の部屋へ長い廊下を渡っていた。

少女たちが飛び込んだのは血と瓦礫で埋め尽くされた部屋。

画面越しでもわかる異様な空気に顔を顰めると同時に、林檎の甲高い痛々しい叫びがスピーカーから漏れ出す。

痛々しい悲鳴。悲惨な部屋に響くそれは酷く心を揺さぶった。

「昔ね、ここで林檎ちゃんのオトモダチが死んじゃったのさ」

喉痛めるほどの林檎の叫び声に気にも止めず、黑夜海鳥は冷たく鼻で笑う。

血だらけの床と崩れた瓦礫を見下ろすと、馬鹿にするような声を吐き捨てた。

「なんて言っただけ、あの子。いちいち名前なんて覚えてないけどさ」

「おい」

「まあ待ちなつて、もっと傷口を抉ってやれば『暗闇の五月計画』の成果が見られるかもよ？」

「もういい、データは十分に集まった。林檎をこっちに渡せ」

思わず、小さい少女を守るような言葉が出てしまう。

普段ならこんなこと言わないはずなのに、こんな人間じゃないはずなのに。

ただ、誰かが泣いているのなら、幸せにするべきだと、頭の片隅で嫌いな女が囁くのだ。誰かを幸せへ導くための方法、それこそ正義だと、あの少女は言った。

目の前の悲劇を、学園都市に蔓延る穢れを追い払うための方法。俺にしかできないこと。

どんなに汚くても、この信念を曲げるつもりは毛頭ない。交渉権を手に入れて、この世界を終わらせたい。

けれど、目の前の小さな子供一人幸せにできないのなら、それだつて不可能だ。

「あつれー？なに、お兄さんもしかしてそんな面で優男なわけ？暗部に身を置いてる第二位が、そんなこというんだ？」

思い出すのは二人。

自分を巻き込まないために血まみれになったシスターを自分のエゴで救った少年。

誰かを幸せにする為なら死も痛みも苦も厭わないエゴの塊と呼ぶに相応しい少女。

ヒーローとはきつとエゴなのだ。

誰かを救いたいという願いから生まれたエネルギーが彼らを突き動かす。

「子供が消費されて潰されるなんて、学園都市では普通だろ？ありふれた悲劇のひとつに、何ヶチつけてんだよ？」

「この学園都市での常識……か」

その言葉を言い終わるや否や、白い翼が視界を覆った。儂く綺麗な音を立ててキラキラと人工的な光を反射しながら目の前のガラスは砕け散る。

崩れた瓦礫と粉々になったガラスが散らばる実験場に六枚の羽を背負って降り立つと、少女たちのいる部屋へ繋がる廊下を見据えた。

「オイオイオイ！なに急にブチ切れてんだよッ！」

廊下の奥でそんな声が聞こえると、間を遮断するように何枚もの分厚いシャッターが道を封じる。

浅ましい考えに思わず鼻で笑ってしまう。そんな小細工でこの俺から逃げられると思っっているのか。

「テメエがこの学園都市の枠組みをどう捉えようが、その中でどう生きようが知ったことじゃない」

力を振るうと凄まじい音と風を起こして空を舞う。美しい月を背にして落ちた瓦礫の上に立つと、小さい少女たちは驚きに満ちた表情で見上げてくる。

俺によつて吹き飛ばされた天井は無残な姿となり、地下であるこの場所に月の光をもたらした。

「ただな、超能力者を甘く見るんじゃない」

瓦礫から降り、恐怖の色を見せる子供に近づいてその頭に手を乗せる。さらに青ざめていく顔は実に滑稽だった。

「俺に常識は通用しねえんだよ」

41話：舞台入場

「様子はどうか？」

ホテルの一室、大きなベッドに横たわる幼い少女を横目で確認しながら壁にもたれ掛かる。部屋には部下の心理定規メジャーハートと誉望万化、そして少女と俺。

工場でのいざこぎの後、眠ってしまった杠林檎は未だに小さな寝息を立てながら上質なベッドの上で眠っていた。

「頭の怪我は大したことないわ。傷口も小さいし。ハッキリと覚醒してくれないと距離が測れないから心の傷は分からないけど」

「回復を待つか。もう夜も深いしな」

部下である心理定規メジャーハートに容態を聞いて一安心するとため息をつく。金髪を高い位置で結び、ピンクのドレスを身に纏う彼女は本来は精神系能力者だが、どうやら怪我也見れるらしい。

その見た目と手際の良さにどこぞのナースを思い出すと、頭を振って窓に視線を逸らす。子供はもう寝る時間、窓の外の景色はいつぞやと同じ藍色に変わっていた。

ため息について藍色の空から再びベッドにと視線を写すと眠っていたはずの少女は体を起こし、俺を黒い目に写す。

「かきね……」

「目が覚めたか。疲れてるだろ、寝てろって。また明日な」

「……ううん、今聞いて欲しい。まだ私がハッキリしてるうちに」

寝起きと感じさせないしつかりとした口調で林檎は口を開く。俺を見つめる黒い瞳は力強かった。

「……わかった」

ベッドの近くの椅子に座り、静かに彼女が口を開くの待った。

林檎が語った悲劇は学園都市ではありふれているそれ。

代わり映えのない真っ白い建物、生きるためだけの食事、冷たい研究員の目、体から伸びる無数のコード、愛する友人の死。

在り来りで、陳腐な悲劇。どこにでもありそうで、あってはいけな
いもの。

最愛の友人を自分のせいで失った過去。

「その後どうなったのか分からない。でも計画は続いたし、私の記憶はもっと途切れるようになった」

悲劇を語り終わると林檎はぐつと自分の腕を握る。顔を伏せて唇を噛む彼女の顔は酷く歪んでた。

小さな手に力を込めて握った細い腕は徐々に赤くなっていく。

「だが計画は突如ストップした」

「さっきの子……黑夜が急に暴れて……」

「回収してきたデータの中には黑夜とかいうやつ^の記録はないっすけど、枉の事故の記録はありました。内容はやや不完全ですが」

「事故じゃない！私が、私がつ、殺し、だから」

実験場の奥、瓦礫の下に見え隠れした暗い赤色はきつとその時のもの。あの赤を思い出したのか林檎は目に見えて動揺し出す。

グラグラと感情とともに揺れる瞳は腕から流れ出る鮮血を写した。

「……お前の悲劇はわかった。だが過去に酷い目に遭ったからって今後も同じ道を歩まなきゃならねえ道理はねえ」

小さな体を震わせ、血が出るほど指を腕にくい込ませる林檎に出来る限り優しい言葉をかける。

ハンカチを取り出して血がぼたぼたと流れ落ちる腕に巻き付けると、涙を浮かべながら林檎は顔を上げた。顔を苦痛で歪めて涙を零す彼女に何故か心臓が痛みを感じた。

「そもそも俺たちは一方通行の演算パターンアクセラレータのデータが取れば十分なんだ。以前取った演算パターンに情報量を増やしたいだけ。さっきの戦闘で十分にデータは取れている。だから……」

「もう一度あの研究所跡に行きたい」

「何？」

複雑な心境を隠し、優しい言葉をかけても林檎は懲りずに先ほどの研究所へ行きたいと言葉を零す。

意味がわからなかった。酷い目にあっても、危険だとわかっているも、自分が弱いとわかっているも、自らを忌み嫌うべき場所に連れて行けというその考え。

何よりも嫌いな考えだった。

「私の記憶は途切れるだけじゃなくて少しずつ抜け落ちていつて。いつか能力の制御も出来なくなるかもしれない」

巻きつけたハンカチに手を置いて林檎は小さく呟く。蚊のように弱々しい声が部屋に響くと懇願するように彼女は黒い眼で俺を見上げた。

「そうなる前に、垣根に全部渡したい」

「……お前もアガペーを崇めるタイプか？飯と宿の恩返しには大袈裟すぎるだろ」

「垣根がいいの、垣根に、助けてほしいの」

「助けて、な」

彼女の零した言葉は俺に向けられていいような言葉じゃなかった。

こんな悪党ではなく、例えばツンツン髪のヒーローやどこぞの正義の使者に向けられるはずの言葉。救いの糸を垂らすのは俺じゃない。

「俺は正義の天使様じゃねーつつうの」

口から滑り落ちた言葉は嫌に自虐的だった。頬杖をついて椅子に深く座ると、思わずため息をつく。それほどまでに馬鹿げた言葉だった。

馬鹿馬鹿しい言葉に呆れ、笑みが浮かんだと同時に部屋に備え付けられている電話から音が鳴った。想定外の電子音に警戒しながら心理定規が電話を取ると、無機質な音声スピーカーから流れ出る。スピーカーモードにされた固定電話から流れ出た音声は聞き覚えのないものだった。

「あー、『スクール』って言いましたっけ？皆さんお揃いですか？」

おどけた様子の声の主はおそらく男、初めて聞く声に警戒心が募る。眉を顰めてその声に耳を傾けると、ヘラヘラとした剽軽な態度で電話越しにその男は話を進めた。

「誰だテメエは」

「ああ、すいません、ご挨拶が遅れましたあ。自分、その素材……：：：：林檎でしたっけ？のデータを集めてる研究者で、木原相似って言います」

その男は木原と名乗った。

その単語に体は素早く反応すると、音を立てて椅子から立ち上がる。

学園都市の暗闇を知るものなら必ずは聞いたことのあるだろう苗字。忌々しい科学の申し子たちが冠するその名前は決していいものではない。

唐突な名前に驚くと、大きな音が部屋に響いた。

「これからソレを回収しに向かわせるんで何卒よろしくお願いしまっす」

椅子から勢いよく立ち上がった瞬間、大きな音ともに部屋の窓ガラスが一斉に割れる。まるで映画のワンシーンのような手際の良さで割れた窓ガラスからロープを伝って部屋に押し入ってきたのは白衣を着る科学者ではなく、紺色で統一された分厚い服を着た警備員アンチスキルのパチモンども。

「またこいつらか。うるせえし懲りねえし、鬱陶しい連中だな！」

DAアラウズと名乗るそれは一斉に銃を構えるが、それに生やした翼で応戦する。ぶつぶつと正義を呟くパチモンどもは一度は倒れるが、何度もゾンビのように起き上がった。

自分の怪我を厭わない姿はとても気味が悪い。

その姿に嫌いな女が一瞬思い浮かぶが、彼女は珍しくこの件には首を突っ込んでいないことを同時に思い出す。

胸騒ぎがする。

「まったく！そいつらの心、不自然なまでに均一だわ」

何度も起き上がる気味の悪い奴らに追撃しようと再び翼を展開するが、心理定規に止められる。この中で一番精神に詳しく、近い彼女の言葉は攻撃を止めさせるには十分な説得力を持っていた。

「はい！自分がやりました。彼らが持っていた正義？とかいう使命心を代替してあげたんです」

「代替の心だと？」

「代替ですよ、代替！なんにでも代わりはあるんです、代わりの無いものなんてこの世にはありません。手も足も、主義信条だって代替品で

まかなえます。だから彼らは今、僕の命令を自分の信条だと思って行動してくれてるんですよ」

空気より軽い声で木原相似と名乗った男は答える。薄気味悪い持論を展開する男の声を響かせる電話に舌打ちするが、木原は態度を変えずにつまらない言葉を続けた。

【唯一無二のものなんてありません、そう思いますよね？帝督さん】
「馴れ馴れしい野郎だな。俺が賛同するわけねえだろ」

苛立つ口調の野郎の言葉を低い声で力強く否定した。

俺は知っている。何にも変えられないものをもつ少女を。

他の人には感じない感情を受け止めてくれるたった一人の少女を。

俺は誰よりも気持ちが悪くて、誰よりも傲慢で、誰よりも替えのきかない唯一無二の少女。

あの気持ち悪さを知らない電話の声の主に、賛同するわけがなかった。

【あれー、帝督さんは分かってくれると思ったんですけどねえ、だって貴方——】

ノイズ混じりの声が一直線に俺の鼓膜を揺さぶる。何を言おうとしているのか、分かっているけど酷く不愉快だった。

【スぺアプラン、^{アクセラレータ}一方通行の代わりじゃないですか】

突きつけられた烙印に思わず体から怒気と殺気が溢れ出す。忌々しいたった一つの言葉、これ以上ない醜い言葉。

どいつもこいつもスぺア、スぺア！あの女も、この男も、俺をスぺアと言う。

耐え難い怒りがじわじわと喉へせり上がってくる。ヘドロの様な感情が波のように俺を飲み込んだ。

「テメエ……」

怒りが脳を支配する。爆発する怒りに任せ口を開くと、それを遮るように甲高い音が鳴り響いた。腹を抉るような不快な音は音量を上げ、鼓膜を破るような痛々しい音へと変わっていく。

自分にはただの雑音としか聞こえないが、部下にとっては耳を塞いで音から身を守るようにしているほど不快なものようだった。

「攪乱のつもりか？」

あまりに突拍子のない音に思わず顔を歪めると、突如としてベッドから幼い少女の悲鳴が響いた。慌てて林檎の方へ向くと実験場で見ただ苦痛の顔を浮かべて声にならない悲鳴を上げている林檎が視界に入る。

耳をつんざくような痛々しい叫び声を上げながら林檎は背中を大きく仰け反らしてベッドに沈んでいくと痛みを我慢するように体を縮こまらせた。

彼女から弾けるように床がひび割れていき、床に亀裂を作る。地震のように揺れる足元は不安定な能力のせいだった。

「あつ効いてますねえ、色んな音を組み合わせて杠林檎さんの脳に強い負荷を与える音を代替してみました。結局は脳が外部刺激を受け取って反応してるだけですからね、刺激であればなんでもいいんですよ」

ふざけた調子で声を弾ませる声の主に思わず自分でも驚くほどの怒りが洩れ出す。

苛立ちを隠せずに舌打ちをすると、この光景が愉快と言わんばかりに弾んだ声で再び木原相似は電話越しに口を開いた。

「そうそう、貴方のお気に入りの彼女ですが」

彼が口にした言葉は更に苛立ちを増幅させる。

お気に入りという単語に当て嵌る女は後にも先にも一人しかいない。初めて出来た嫌いで嫌いで仕方のない女、それでいて手を引く張ってやりたくなる愚かな少女。天羽隼糸という醜い乙女。

「アイツにも手え出すってんなら、殺す」

【残念、もう手は出しちゃったんですよお】
ぎりぎり歯を噛み締める。

自分の犬に手を出された、そう思うと気が気でなかった。

あれの首を絞めていいのは自分だけ、あの女を罵倒していいのは自分だけ、追い詰めていいのは自分だけ。

秘密を知っているのは俺だけ。

独占欲が溢れ出す。あの気味の悪い女の手綱を握れるのは俺だけ

だというのに。

「……地獄に連れていかれてえみたいだな」

「そんなに怒らなくても！この女がどう扱われようが、スクールには関係ないでしょう？」

「ああ、スクールには関係ねえな」

狼が威嚇するかのような低い声を部屋に静かに轟かせる。お気に入り
の玩具を盗まれたことは自分でも驚くほど自分を腹立たせた。

また首を刎ねられたのではないか、また腕を千切られたんじゃないか、また痛みを笑ってるんじゃないか。俺の知らないところで苦しんで、我慢して、秘密を隠すあの女を眺める愉しさを他人に知られたい
なかつた。

「テメエは俺個人に喧嘩を売ったんだよ、理解してんだろくなクス」

「そうですね、では失礼しまつす」

木原がそう呟いた瞬間、取り囲むD Aアラウズの一人から小さな光
が点滅し、轟音と眩しい光が激しい爆風とともに体を襲った。

激しい音と、風。目を震ませるほどの風と光に頭に血がのぼる。

この程度の野郎どもに憤りさえ感じた。

「チマチマチマチマ、小細工ばかり。本気でうざってえぞ、テメエら」
煙が晴れる前に未元物質データクマターでできた翼で攻撃を仕掛けてあらかた戦
力を削ぎ落とすが、視界が広がった後の光景に思わず汚い言葉が口か
ら洩れる。

「クソっ」

ベッドの上に座っていたはずの林檎が忽然と姿を消していた。

しくじったと心の中で悪態を着くと追い討ちをかけるように軽快
な声がスピーカーから聞こえてくる。腹立たしい口調の男は愉快と
言わんばかりに声を弾ませた。

「はい、林檎さん回収させて頂きましたあ。D Aアラウズの皆さん、
足止めよろしくですー！」

木原相似の一声でホテルの中へ突入するD Aアラウズが誉望のも
つパソコン経由で確認出来る、途端にホテルが騒がしくなる。

警備員と同じ格好のそれらは通常より多くのパニツクを呼び起こし、

部屋の外でもその混乱がよく理解できた。

「二階にもD/Aアラウズが！」

「ゴキブリみてえに湧きやがって」

切られた通話に一瞬ムカついて顔を歪めるが、生産性のない怒りに我を忘れる前に別の問題へ意識をソフトさせる。

林檎と天羽がよりにもよって木原に連れてかれた。それが一番の問題だ。

認めたくはないが、林檎が連れていかれたのは俺の不手際、そこに問題はあれど疑問はない。

一番の疑問は天羽のこと。

連れ去られたのなら05でもなんでも連絡が入るはずなのだ。脳波もリンクしており、通信はできるはず。

彼らに与えた命令は天羽彗糸を危険から遠ざけ、管理し、保護すること。

答えはひとつしか浮かばなかった。

「……あの馬鹿女、自分から行ったな」

「ああ、天羽彗糸のことですか？」

「その天羽さん？が自分から協力したっていいいたいの？まさかそんな、危険だつて分かるでしょ」

あの夏の日の一部始終を見ていた誉望はともかく、心理定規は俺の言葉に目を丸くして否定する。

彼女を知らない人はそういう風に決まってる。あの馬鹿は俺にだつて理解できないのだから。

「アイツは常識から外れてんだよ、俺にだつて理解不能だ」

上に立つものとして、彼女を叱らなくてはいけなくなった。面倒事が増えた事実は何度目かも分からないため息をつくとき、そのままベッドの上に座り込む。

今日は厄日だろうか。

暗い研究室の中、おびただしい量のコードや電極をつけた少女が壁際に取り付けられた椅子に座っていた。まるで処刑をするための電気椅子のような見た目のそれに座る彼女は小さな寝息を立てる。

人の姿でその少女を眺めるのはカブトムシ05、垣根帝督が造り上げた作り物の生命体。妹達のネットワークを真似たプログラムを持つ二百もの生命体、さしずめ弟達とでも呼ぶべきか。

彼らはマスターの命令通りに目の前の気味悪い少女を監視する。

冷めた目が少女、天羽彗糸を見ていた。無機質なエメラルドの瞳は何を考えているのか読めない。

「保護対象、私はどうしてしまったのでしょうか」

その生き物は、目の前の少女に対し、不思議な感情を抱いていた。人間とは違う思考パターン。危険な思想だとオリジナルは定義づけており、それは彼らも理解している。彼女を守れと、監視しろと命令されたのが彼ら。

けれど、護衛なのに05は自らの意思で研究室へ行く天羽を無理やり止めなかった。

どうしてなのか、検討もつかない。何故あの場で黙ってしまったのか分からなかった。

「全てが分からないのです、貴女の行動も何もかも」
「わからなくても結構よ」

小さく言葉を零すと、寝ていたはずの天羽がはつきりとした口調で遮った。眠そうな瞳はどこか悲しげに見える。

突然のことに少し驚くが、05は相変わらずの平坦な声で目覚めた

彼女に話しかけた。

「起きていたのですか」

「あたしを呼ぶ声がうるさくてね」

「……私は何も言っていないませんが」

「アンタじゃなくて、薄汚れた神の声」

「か、神、ですか？」

蚊のような小さな声で呟いた言葉は05には理解不能なものだった。この部屋は二人しかおらず、彼らの声以外だと服の擦れる音と、機械が動く音しかない。

けれど天羽の耳にははつきりと嫌な声が聞こえていた。

電極やコードを伝って送られてくる情報の数々は天羽に変化をもたらす。耳障りな声に悩まされる少女だったが、それを05が知るところとは無い。

「ああ、嫌ね、他人の思考を植え付けられるのは」

「……あの、何の話でしょう？」

じわじわとコードを伝い、電気に乗って取り込まれていく情報は他でもない一方通行アクセラレータの演算パターンだった。じわじわと視界が白に染め上げられていく。

三番目の代替品である彼女は一方通行アクセラレータのスペアになる素質があった。それ故に、今彼女には嫌になるほどの情報が与え続けられていた。

「でも、これでまたあの世界に行けるのね。あたしの勘って結構当たるかも」

「話が噛み合っていないのですが」

「貴方に会える日を楽しみにしてたんだよ、とても、とても」

「……誰に話しているのですか？」

彼らの噛み合わない会話はさらに加速していく。

微睡みながら小さな声で話す天羽に05は眉を顰める。目の前の少女はまるで夢の中にいるようだった。05とは違う、どこにもいない誰かと話しているよう。

彼女の瞳は05を見つめてはいなかった。

彼女に見えていたのはいつかみた夢の続き。真っ白い世界に、深淵のような深い色をもつ何か。

それと答え合わせをするように彼女は言葉を零す。

「天使になれば貴方の言葉がわかると思ったけど、やっぱりあたしは正しかった」

今この瞬間、彼女は再び「天上の薔薇」へと近づいていた。

天から堕ちた魂と、一度入れ替わった肉体、植え付けられた神と等しい人の破片。

今の彼女は神に一番近く、世界で一番異質な存在だった。

「結局、コツペリアはあたしだったのね」

大切に造られ、理不尽に壊される。神に愛され、醜く壊れていく彼女は正しくコツペリアだった。

コツペリウスに作られ、壊される可哀想なコツペリア。

再び目を閉じてゆっくりと体を真っ白い世界に預けた。

瞼を閉じるとあの日の痛みが再び脳裏に蘇る。流れ出る鮮烈な赤、視界に広がる眩しい青、涙を零す金の少女と、熱を伝える灰色のアスファルト。

嫌な思い出だった。

彼女は認めたくなかった。

自分が間違っていたことを。愛する妹を不幸にしたことを。

背中 of 熱を抑えるように、彼女は自分を抱きしめる。

この世界に来たきっかけ、自分が歪んでしまった境目、初めて感じた死の穏やかさ。その全ての不幸を思い出しながら。

天羽彗糸は、九月上旬に死んだ。それは紛れもない事実。

そしてそれはとてもとても、不幸な事だった。

前日譚：とある妹の告白と懺悔、そして姉の生涯

誰もいないお花まみれの白い部屋の中、私は一人座っていた。むせ返るような花の匂いは酷く吐き気を催すものだった。

青い椅子に座って、手鏡で最後まで抜かりなく髪を整える。今日は一週間ぶりにお姉ちゃんに会える日。

まるで初デートに行く乙女のように何度も鏡を見て何回も自分の見た目を確認する。

しかし鏡の中の自分の目元に赤が見えると小さくため息をつく。せつかく会えるのにこれじゃ台無しだ。

お姉ちゃんとお揃いの金髪、お揃いの瞳、違うのは顔と体の造形、身長、あと性格。

お揃いというだけで十分嬉しいが、それでもさらに可愛くありたい。好きな人の前ではいつだって可愛くありたい乙女心。

静かな広い部屋の真ん中、手鏡を制服のポケットにしまつてゆつくりと車輪を回した。お姉ちゃんに会えるこの日を何度夢見たことか。前を向いて、車椅子を走らせるとじわじわと熱さが込み上がっている。九月中旬だというのに未だ夏のように暑かった。

私には六歳年上のお姉ちゃんが居る。

名前は天羽彗糸。

私の名前とは違ってイマドキで、可愛い名前。歳は二十四で、美人さん。

そんなお姉ちゃんは私が大好きだ。

いつも車椅子を押してくれて、いつも話を聞いてくれて、好きじゃないくせに私がおすすめたものはきちんと見てくれて、私のために勉強して、私のために留学して、私のために研究する。

そして私の幸せを両親よりも、誰よりも考えてくれる、そんな天使みたいな人。

私のために人生を使っていた馬鹿な人。

中学では私の送り迎え。

高校は留学しやすく、英語も勉強できるミッションスクール。大学はアメリカにある生物学の権威ある大学に留学。そして大学院では研究者を訪ね回って。それらは全て私への愛故の行動だった。彼女は私へ愛を注ぐ為に人生を棒に振った。

というのも、私は生まれつき足が動かないのだ。

私の下半身の神経は繋がっていない。

一生治らない不治の病。

生まれつきの欠陥品。

それでもなお両親もお姉ちゃんも私を愛してくれた。

そしてお姉ちゃんはそれを治すために私が生まれてからずっと努力を重ねた。

彼女が中学、高校生のころは送り迎えをした後、家に着いたらリハビリを兼ねたマッサージ。

大学と大学院では私の神経を治すための研究。

誰よりも努力を重ねて、誰よりも私を愛して、誰よりも愛を求めていなかった。

究極の自己犠牲愛。

私の為に生きて、私の為に働いて、私の為に自分を殺す。

お姉ちゃんは頭がかなりおかしかった。

こんな私に尽くして、人生を無駄にする。

お姉ちゃんは私以外興味がない。

私以外の他人を平等に見て、全ての人に等しく愛を与える。特別な感情も何も抱かなかった。

よく言えば八方美人、悪く言えば冷酷。

私にしか特別な感情を抱かなかった。私を助けようともがいて、足搔いて、必死に歩み続ける。

私はそんなお姉ちゃんが大好きだ。

私を好きだと言っておいて、一人で勝手にアメリカに行ってしまう。

私を愛していると言っておいて、私の幸せを考えない。

私の幸せしか見てないお姉ちゃんなんて大っ嫌いだ。

お姉ちゃんが居れば幸せだと言っても、お姉ちゃんは足を治すのに必死で、私の方なんか見向きもしない。

私のことを第一に考えるくせに私のことは気にしない。

お姉ちゃんが私を愛しているように、私はお姉ちゃんを誰よりも愛していた。

だからこそ、私の幸せを彼女は理解できなかった、彼女の幸せを私は理解できなかった。

お姉ちゃんに幸せになって欲しかった。

大好きなお姉ちゃんに、誰よりも幸せになって欲しかっただけなのに。

私に振り回されるお姉ちゃんが嫌いで嫌いで仕方なかった。

趣味を持つて、お友達を沢山作つて、彼氏を作つて、結婚して、子供を作つて。

世間一般で言われる「幸せ」を築いて欲しかった。

私のせいで潰れてしまうくらいなら、私なんて構つて欲しくなかった。私のせいで消費されていく人生、それも世界一愛してる人の人生だなんて私には耐えられなかった。

子供には重い責任。一人の人生を背負うのは18の自分には潰れてしまうほど重かった。

だからお姉ちゃんの興味を別のものに移そうと考えたのだ。

きつと私より面白くて、興味深いものがあれば、「普通の人」になつてくれると。

私は所謂オタクというもので、アニメ、漫画、ゲームをこよなく愛していた。だからこそ自分は彼女よりも創作物に理解を示して、それがどれほど人の人生に影響を与えるかを知っている。

けれど先程述べたようにお姉ちゃんはとっても忙しい人、中高では受験、大学では研究にレポート。教えたアニメを見てくれるとは思え

なかった。

そんな中、転機が訪れた。

大変不謹慎なことだが、ちよつとしたパニックが世界を蝕んだ。

お姉ちゃんはアメリカから帰って来れず、私はお家から出れず。そんなことが起きたのだ。

なので私は好きな作品を選んでお姉ちゃんに送り付けることにした。

その作品は「とある魔術の禁書目録」。

インデックス

第1期から3期の円盤をお姉ちゃんに送った。あとスピノフの『とある科学の超電磁砲』の一期と二期を。

アメリカの卒業式は6月で、卒業式が延期された今なら見てくれると思ったのだ。とはいえ、延期したせいで増えた課題がわんさかと有ったため、送った時は怒られたが。

でも私が一番好きな作品をお姉ちゃんは観てくれた。

レビューはそこそこで、面白いと言ってくれた。どうやって見たのかは知らないが、他のスピノフ作品まで観てくれて。

しかも、キャラクターの一人を好きとまで言ったのだ。

私はとつても嬉しかった。

今度こそ、「普通の人」になって「普通の幸せ」を見つけてくれると、本当に思っていた。

しかし、神とは残酷で理不尽なもの。

それを強く感じる出来事がつい一週間前に起きた。

花の匂いが充満する部屋の中、白い棺に車椅子を五月蠅く鳴らして近づく。流行り病のせいでさきやかな葬儀になってしまったと派手好きな両親は嘆いていたが、姉と二人きりのこの世界は心地のいいものだった。

棺の中を覗き込む。そこには金色の髪の女性が美しく両の瞼を閉

ざしていた。

2020年、9月上旬。お姉ちゃんはこの世から消え去った。

日本に帰ってきて家に向かっている途中、乗り込んだタクシーにトラックが突っ込んだのだ。

お姉ちゃんは私を庇って死んだ。

車に引き摺られ、ざらざらしたコンクリートに擦られた背中からは太陽の光で輝く鮮血が溢れ出る。腕の肉が裂けて骨が見えていた。あばら骨は肺に突き刺さり、ガラスの破片は喉を切り裂く。

流れ出した生暖かい血液は、私の靴を、体を、顔を汚していく。

痛いはずなのに、お姉ちゃんはいつものように慈愛に満ちた瞳で私を見ていた。

あの日の光景が鮮明に脳裏に浮かぶ。

忘れることなんて出来ない。

とても怖かった。

冷たい体、赤い液体。

死んでいくという事実と、光景にそぐわない優しい瞳がなによりも恐ろしかった。

お姉ちゃんの体の感触が今でも体に染み付いている。

「私が死ねばよかった」

棺の前で、私は言葉を零す。

愛しい姉は私が選んだ白いドレスを着て十字架のしたで眠る。使ったこともないロザリオを握って目を瞑る彼女の肌は修復され、生前と変わらぬ姿で横たわっていた。

死人だというのに、今でもお姉ちゃんは世界で一番美しかった。それが酷く気味が悪い。

唇は震え、熱を持つ目頭からは止めどなく塩辛い水が零れ落ちた。

強く両手を握り、私は祈る。

ああ、神様、もし、もしも次があるのなら、お姉ちゃんを幸せにしてください。

輪廻転生というものがあるのなら、次のお姉ちゃんの人生を素晴ら

しいものにしてください。

私に縛られない幸せな人生を送らせて下さい。

世界で一番大嫌大嫌いいなお姉ちゃんを幸せにしてください。

これはきつと、穢れた恋。何よりも汚くて、何よりも恐ろしく、一方的で独りよがりな醜い愛の形。

汚い私は何よりも愛しい女性のために祈る。

世界の誰よりも幸せになって欲しいから、恵まれて欲しいから、報われて欲しいから。

そんな人間の祈りは神様の手によって聞き届けられた。

健気な少女を愛していた神様は少女を幸せに導くため救済の糸を垂らす。それが例え地獄の入口になろうとも、少女が幸せになるのならどうでもよかった。

神はただ、一人の少女を幸せにしたかった。

42話：腐敗臭漂う真相

白いLEDが眩く照らす廊下の先、薄っぺらいドアを派手な音を立てて蹴破るとニタニタとした笑みが特徴的な薄気味悪い男と目が合った。

「よお」

木原相似と思われる白衣姿のその男に声をかけると、男は変わらず三日月のように笑った。

薄汚い灰色に染めている短い髪に、耳を貫通する複数の黒いピアス。大学生くらいに見える彼は待つてましたと言わんばかりの満面の笑みで俺を迎える。

起動されたパソコンをいじりながら腹立たしい笑みを携える木原相似の隣には二人の少女。

可愛らしい幼い少女は硬いベッドに寝かせられており、もう片方の早熟した乙女は機械的な車椅子に座って眠りにについていた。

字面だけ見れば特に問題は無いだろう。しかし幼い林檎を拘束するネットと、天羽の手足を椅子に固定する鉄の塊、そして彼女らの頭を覆う特殊な装置はどう見たって普通じゃない。

そのヘルメットに刺された多様なコードと体に付けられた電極は、互いのデータを送り合うように繋がっていた。

「どもども、想定よりお早いお越しで。衛星マップの位置やら記録、全部代替したはずなんですけどねえ？」

「量が少ないが、俺には独自の監視システムがあつてな？探すのに苦労はしなかった。部下たちも外で待機させてるぜ？」

二百の兵を使えばこの程度造作もない。

俺を嵌めるために代替を作り、煙に巻こうとする愚かな科学者を鼻で笑うとあからさまに嫌な顔をした。

怒りを抑えるような笑顔で笑う科学者はそれでもめげずに扇動しようとして口元を歪ませる。意味が無いとわかっているはずだと言うの

に。

「そうでしたか、しかし遅かったですね、もう全て終わってしまいました。残念ですねえ、第二位ともあろうお方が、か弱い少女すら満足に守れないとは」

「やつすい挑発だな、誘拐犯の言葉に耳を貸すと思うか？それに俺のペットに手え出すなんて、よっぽどの変態か、死にたがりか。どっちだよ、テメエは？」

「すみませんね、貴方のペットを勝手に改造してしまつて！杠林檎と同期し、一方通行の^{アクセラレータ}一部を手にした今の彼女なら代替品をも超えるのでは無いですかね？まあ起動しないのが欠点ですけど」

使い古されたような挑発を鼻で笑うと木原は更に声を荒らげる。ありもしない所有権を宣言する木原は実に哀れだった。

今だ微動打にしない天羽を呆れたように見つめて残念がると、彼はわざとらしくため息をつく。

まるで天羽に期待しているかのような仕草に少し違和感が残った。「しかしわかかんねえな、なぜコイツなんだ？こんな爆弾抱えたような女は要らねえだろ」

彼女の能力は確かに不思議で、かなり怪しい。それでも利用価値があるとは思えなかった。

事実に近い推論として、彼女は原石である可能性がある。それを踏まえれば、7位のように利用価値が低くなるはずだ。

彼女は7位ほど複雑ではない。

どんな演算で、どんな現象を起こしているのかは把握出来る。

けれどどうやって引き起こしているかは分からない。完全なブラックボックス。

そんな爆弾みたいなものを利用するとは思えなかった。

「そりゃあ彼女が^{サブプラン}第三候補だからですよ。^{サブプラン}第三候補である彼女を代替品として使うのは当たり前前のことでしょうか？」

「^{サブプラン}第三候補……？」

そんな疑問に木原は簡潔に答えた。簡潔すぎて意味不明な言葉に思わず眉を顰めると、木原は嘲笑いながら丁寧に説明していく。

「無理をすればSYSTEMへ到達が可能な一人つてことですよ。不思議に思いませんでしたか？彼女は体内において、万物を操るんですよ？電気信号も、水分も、細胞も全て……それって、正しく神に近い存在ですよね？」

「……そんな理由で林檎と同期したっつーのか？」

何も知らない事を馬鹿にして木原相似はせせら笑う。腹立たしい笑みに思わず舌打ちをするが、その男から笑みが消えることは無かった。

自分の知らない言葉の羅列は酷く不愉快だった。

彼女が規格外なのは知っている。一番近くで見ているのは他ならぬ俺だ。

大事な犬のことならなんだって知っていたのに、まだまだあの愚かな犬には秘密があるようなのが堪らなく不愉快だ。

「ええ、そうです。アクセラレータ一方通行の代替品を作るんですよ」

「……つぶは、馬鹿だろお前、あいつが何かにとって変わることはねえよ。あいつこそが teme が嫌う唯一無二なんだからな」

至って真面目な話をしているはずなのに木原相似という科学者の話は馬鹿げていて笑ってしまうほど滑稽だった。

あろう事か、あの馬鹿を代替品ごときに使うという発想に思わず腹から笑う。この俺も、馬鹿な女も、誰かの代替品なんかになり得ない。「唯一無二」ですか。まあ出来損ないの失敗作は唯一無二と言えるのでしよう。彼女は今は夢の中。何も聞こえないし、何も見えない。自分の能力で自分の殻に閉じこもる。哀れなことですね！

「なら起こすだけだ」

天羽を一目見ると、木原は嘲笑う。

未だ眠り続ける彼女は木原からすれば失敗作。科学者が失敗を笑うことに違和感を感じるが、変わらない態度で彼を見下す。

あれを罵っていいのは俺だけだ。

「あれえ？おかしいなあ、確かそちらさんアクセラレータも一方通行のデータが欲しかったんじゃないんです？利益は一致してるはずですが？」

「悪いが、今探してるのはデータじゃなくて人間でな」

利益が一致しようとして、この男となら断固拒否だ。

それでなくても、俺の目的は彼とは違う。哀れな少女と愚かな乙女を兄として迎えに来たのだ。

木原の言葉を鼻で笑ってやると、彼は更に口角を上げた。

「杠林檎と天羽彗糸ってやつを迎えに来たんだ」

「うへえ、そんなナリして騎士ナイト様気取りですか、キザですね。それじゃあ」

ゆらり、少女が立ち上がる。

木原相似が仰々しく、まるで紳士のようにニタニタとした笑みで後ろに下がると、バチバチと引き千切られるような音がした。

何本もの伸びたコードと子供には大きいヘルメットを被った彼女は言葉を発することなく自身の能力で拘束を解いて体を起こす。

「ご所望の方はこちらです」

科学者の言葉が霞むほどの轟音が響いた。

猛スピードで突進してきた林檎を展開した翼で力を受け止めると、天井を壊し、外へと舞台を変える。

緑が広がるサッカーフィールドに降り立つと、衝撃で壊れたヘルメットは無惨な姿で芝生に落ち、黒い髪が風に吹かれた。

大小様々な瓦礫を周りに浮かべた林檎の焦点の合わない目と合う。夜のように黒い瞳は光を失っていた。

光のみが存在する真つ白な空間の中、ふたつの存在が対峙する。

少年が幼い少女を助けようと懸命に頭を使う中、未だ眠り続ける大人びた乙女は再びあの日の夢の続きを見ていた。

白い世界、誰もが手を伸ばす極楽浄土へ彼女は夢を媒介として侵入する。

夢の中の天界へと再び到達した金色の乙女はその背中と頭上に死んだ証を携え何も無い空間に座る。天上の薔薇へ辿り着いてしまった彼女は目の前に鎮座する存在に貼り付けた笑みを見せた。

彼女の目の前にいるのはいつか夢で会ったもの。

男か女か、人か動物か、宝石か汚物か、無機か有機か。彼女の前に佇む全てを凌駕した存在は神であり、この物語の語り手。

黒く光る三角の冠を頭上に掲げた神を前に、乙女は花のような微笑みを貼り付けた。

「貴方の作ったコツペリアは、最後どうなるの？」

微笑を浮かべた彼女の瞳には憎悪と嫌忌が蠢く。神を恐れない淑女は私にとつては恐ろしく美しいものだった。

—天使よ、それは汝次第だ

私が言葉を伝えると、彼女は目に見えて落ち込んだ。愛らしいと思ってしまうが、私は彼女を幸せにしたいだけであり、その表情は望んだものでは無い。

「天使、ね。確かに擬似的な天使ではあるかも」

目を伏せてはだけたシャツの袖を力強く握り締める彼女の背中には、人にはあるはずのないものが生えていた。

それは死んだ者、または神の御使いしか得られない一對の白き翼。その翼はA I M拡散力場の歪みでも、天界の物質でも、未知の物質でもない。紛れもない本物。因子を、骨格を、筋肉を変えて作り上げられたそれは彼女を守るように広がった。

そして頭上には死者であり御使いである証の丸い輪っか。丸い天使の輪が淡く彼女の金の髪を照らす。

その姿に彼女は菌を食いしぼり、シャツを掴む手にさらに力を込めた。

「翼に輪っかだなんて、笑っちゃう。05に言ったことがまさか正解だったとは」

彼女は正真正銘の天使だった。

あの日、あの場所で、あの世界で彼女は死んだ。死んだ彼女は天使となる。

「あたしの知識もバカにならないって、垣根くんに自慢できるよ。人は死んだら転生なんてしない、生き返ったりしない、カトリックを名乗るあたしなら尚更ね」

けれどそれは有り得ないことだった。

人は死ぬと天使になるのではない、神の遣いが天使なのだ。

神は彼女の為に救いの糸を垂らした時、新たな世界へ彼女のまま生きてもらうために天使へ変えた。

普通に考えておかしいじゃないか。

普通の人間は異世界なんかに行けない。

人間の魂は彼岸で最後の審判を延々と待ち続けなければいけないのだ。

記憶を保持したまま、姿が同じのまま、何よりも大切な名前が同じまま生き返ることもあつてはならない。

それが人間ならば。

神は考えたのだ、どうすれば最愛の乙女を幸せな世界に新たに生かせるか。

だから神は昔と同じ手法をとった。

グリゴリを天から降ろし、人間を見守る役を与えた時と同じ方法を。

神はたった一人の乙女を幸せにする為に彼女を天使へと仕立てた。「でも、そのおかげで副産物として不死を得られたと思えば安いものなのかもね」

天使は人ではない。彼女もまた人でない。常世の法則に当てはまらない体と能力は紛れもない天使の特権だ。

ここは天界、彼女の本来の姿が映し出される。彼女はもう死人であり天使なのだ、天国に戻れば姿が変わる。

彼女は正しく天を羽ばたく天使。名は体を表すとはこういう事だ。とはいえ、今の彼女は常世の生き物。以前夢であった時と違い、姿が戻ってしまったのはきつかけがあったから。

そのきつかけは三つ。その三つのピースが揃ってしまったのだ。天に召した魂と天使の体、そして神と等しい人の脳。天使に戻る条件が揃ってしまったのだ。

「ねえ、この劇は貴方にとって素晴らしいものだった？」

誰も分からない世界の言葉で話す。

私を見る彼女の目は酷く冷酷で悍ましい。

その気味の悪い目は神のお気に入り。赤と緑、悪魔の色と天使の色が混じるその目が好きだった。

—この劇は汝の為に動く。まだ物語は終わらず進む

「……そうだね、この世界はあたしのための舞台、貴方が作ったただの暇つぶし。貴方が飽きるまで舞台は終わらない」

誰よりも退屈な神は一人の乙女に目をつけた。

正しく狂う異常者を見つけてしまった。

現代において、人は神を愛すか神を信じないかの二択しかない。嫌う人はその存在を信じないからこそ嫌う。愛する人は信じているからこそ愛す。

神という概念を嫌い、愛すのだ。

けれど天羽彗糸という少女は違った。

彼女は神を信じながら嫌った。その存在を認めた上で嫌っていた。妹の回復を神に祈るのではなく、その体にした神を呪った。

久しく感じていなかった人間からの厭悪に神は昂る。神は健気に科学に縋る乙女を見初めてしまった。

正義を唱え、全てを嫌い、生を捨てた強き科学崇拝者を。

そして彼女が神に縋りやり直しを求めたあの日、それに応えてあげ

ようと、神は救済の糸を垂らした。

「答えてあげようか、この舞台がなんなのか」

ぽつり。乙女の口から言葉が落ちる。

全てを諦めたような素振り^{パレルワールド}で彼女は語り始めた。

「ここは貴方が作った並行世界。あたしが生きやすいように調整されて、辻褃合わせに設定を付け加えた模造品」

世界の仕組みは至極在り来りで陳腐なものだった。

この世界は平行世界、交わることの無いはずのふたつが結ばれた。天界によつて強引に結ばれた世界は辻褃合わせに奔走される。

話す言葉も、常識も、認識も世界の辻褃合わせによつて変えられた。

世界が違うのに、言葉が通じるのが可笑しいのだ。

世界は互いに互換性がないはずなのに、たとえ同じ日本語でも全く違うデータのはずなのにプロトコルが設定されている。

しかしそれを不思議に思うことはなかった。

それもそのはず、不思議に思えないよう世界が辻褃を合わせていたのだ。

そしてその辻褃合わせは世界の外見とキャラクターに大きく影響を及ぼす。

「だから街に外観はアニメそっくりだし、声も同じで、微々たる量の物語の改変が行われている。垣根くんが長点上機に通つてるのもその一貫でしょ？」

世界には世界の秩序とルールと理がある。能力のない世界にいた彼女がいとも簡単に順応し、適応し、フィクションを本物だと受け入れさせたのは他でもない世界による辻褃合わせ。

この世界はフィクションから作られた本物。

違う理に違う歴史。平面の世界は立体となり、嘘が本当になる。

足りない設定を補い、もつとも有り得る仮説を事実にする。その辻褃合わせに彼女の精神も飲み込まれた。

でなければ物語は円滑に進まない。

設定が描かれていないキャラクターが設定を補っているのも、能力を使えることに疑問を持たないのも、フィクションでしか無かった

キャラクターを本物と受け入れるのも、全ては円滑に進めるため。

「あたしが掴んだのは救いの糸なんかじゃない。貴方の箱庭で演じるハズレくじを当ててしまっただけ」

「ここは神の愛する乙女が生きれるように最適化された世界だった。どんなに足掻いても、あたしは貴方に打ち勝つことは出来ないのね」
けれどその事実を彼女は知らない。

世界の真理の奥にある深淵を覗く前に彼女は自己完結してしまう。

「ここは地獄。^{デイト}炎の市、それとも極寒^{コキユートス}の地かしら。暑さも寒さも分からないから判別つかないわ」

勘違いを続けたまま彼女は語る。地獄に落とされたことへの憎しみを込めた乾いた笑顔から生気を感じることは無かった。

「でも、やっと貴方のしたいことがわかった気がする」

ため息をついて目を伏せる。諦めたとしても言うような目付きだった。

「あたしに罰を与えたいのね」

疲れ果てたかのように弱々しい声が静かに口から零れた。

他人に振り回された人生は知らずのうちに彼女へストレスを与えていた。抑圧された己の願望は虚無へと還る。

全てを投げ出したいたい気持ちを押し殺して彼女は息を吐く。

「主人^神に歯向かうあたしを、この世界^{地獄}に墮としたのね」

事実、彼女にとってこの世は地獄だった。

妹から切り離され、足掻き続けることしか許されない世界は地獄にしか感じられないだろう。

そして神にとっても、客観的に見れば地獄であることには違いがない。

彼女が自分の願いを叶え続ける限り、妹の願いは成就されない。たとえ彼女が幸せでも、妹の願いは叶えられない。

それは世界一愛する妹への裏切りであり、重罪。

しかし、彼女が妹の願いを叶えてしまうと、今度は彼女が不幸になる。

相反する願い。彼女は永遠に幸せになんかなれない。

ダンテの神曲で最も重い罪は「裏切り」。永遠に妹も自分も裏切り続ける彼女には重罪を犯した罪人だ。

永遠に真実の幸福に辿り着くことはないこの世界は確かに地獄と呼べる代物だった。

—違う

けれど、それは私の真意とは違う。

これは神の寵愛。欠陥だらけの人生を歩み、哀れにも死ぬべき人の運命を肩代わりした孤独な一人のベアトリーチェへの愛。

これは紛れもない神の愛だった。

「何が違うの？ 貴方はあたしを苦しめて、罰を与えたいんでしょ？」

—罰ではない、愛だ

「意味がわからない、愛なんてものを神が人間に与えるはずないじゃない」

妹を殺そうとしたのも、彼女をこの世界に落とすことも、彼女を天使にしたのも、神の愛故のものだった。

しかし神の愛を信じない乙女は確固たる意思で否定する。

「人を幸福にするのは科学よ」

歯を食いしばりながら彼女は唸るように呟いた。真つ直ぐ私を見つめると、声を響かせ自身の姿勢を正す。

神への憎悪だけが今の彼女を突き動かしていた。

「生きれない人には手術を、見えない人には眼鏡を、聞こえない人には補聴器を、喋れない人には人工咽頭を、歩けない人には車椅子を」

彼女が思い浮かべるのは見慣れた青い車椅子。私が殺そうとした妹を天羽彗糸という乙女は変わらず愛していた。

悔しげな表情をする彼女は私の見たいものとは程遠い。

「全ては人の情動から生まれた科学のおかげ。誰かが犠牲になるかも

しれないけど、それ以上の人間が救われる」
解せない。

「自分だけの人生を妹に捧げることを止めさせたかった。だから神に抗う不幸な乙女を幸せにする為に妹を亡き者にしようとした。神はただ哀れな乙女を妹という束縛から解放してあげたかっただけなのだ。

神を呪う姿を愛していたのに、いつしか彼女の幸せを願ってしまっ

た。
在り来りな幸せを掴む彼女が見たかった。

しかし神の願いは聞き届けられない。

力強く私を睨む乙女からは幸せを受け入れる姿勢は感じられなかった。

「科学とは神の理不尽に抗う人間しか持たないすべ。人間を幸せに出来るのは人間だけ、間違っても貴方じゃないのよ」

—けれど、この感情は確かに愛である

「愛がなんだつてのよ、アンタは好きだからこんなにもあたしを苦しめているの?」

悲痛な叫びが魂から吐き出された。

怒りに悲しみ、後悔に未練、罪悪感と喪失感、無力感と絶望が彼女の体を強ばらせ、震えさせる。

「あたし、まだ生きていたかった。確かに願ったよ、チャンスが欲しいと。けどね、そもそもアンタが理不尽を与えなければあの子も幸せだった、あたしも死ななかつた」

幼い子供のように彼女は自らの体を抱くと声を振るえさせ、呟いた。

懺悔のような言葉は私の心を酷く掻き乱した。

「まだまだやりたいこと、あったのに」

徐々に俯いていく彼女の頬に一粒の水が伝う。

私のしたことは、結局彼女を幸せにすることは無かつたのだ。前世

への未練、痛み、後悔が彼女を襲う。15歳の彼女には酷く重い感情だった。

「ちゃんと死んどけばよかった、願わなければよかった、祈らなければよかった」

—愛しい乙女、後悔しているか

「そりゃあそうだよ、あの子のいる世界に帰りたいよ、死にたくなかったよ」

後悔に苛まれ、身動きが取れない彼女の言葉は口にするにつれ段々と弱くなり、砂のようにさらさらと消えていく。

それでも乙女は上を向いて、涙を袖で拭った。

「でも、今のあたしにはやるべきことがある」

挑発的な笑みを浮かべた彼女はまさに私が見初めた強さを持っている。運命にも神にも噛み付くその傲慢さと強さは私を更に昂奮させる。

頭上に輝く丸い天使エンジェルの輪ハローに照らされた愚かな乙女は強かな鴉にも、凜猛な鷲にも、美しい白鳥にも見えた。

「貴方の理不尽を替カいて、救いの糸を垂らす。天を羽ヒばたく天使であろうと、それがあたしのやるべきこと。それが天羽アマノハ彗スイ糸イトの生きる道だ」

竜のような鋭い瞳が私を写すと彼女は神を蹴落とすかの如く低い声を何も無い世界に力強く木霊させる。

神を恐れないその慄然とした様が好きだった。

「この名に相応しい生き様を貴方の目に焼き付けてみせる」

運命を覆そうと死ぬ前も生きた後も足掻き続ける彼女の最果てには何が残るのだろうか。

その愚かな最後を極彩色の幸せで彩りたかった。

彼女の妹を殺そうとしたこと、それを最愛の乙女が庇ってしまったこと、悲しみにくれる神に乙女が縋ってしまったこと、愛に応えようと世界を用意してしまったこと、今となつては何が過ちだったのかは

分からない。

けれど、一つだけ言えるのは全て起こるべくして起こったのだ。

「神よ、貴方に多くの不幸が訪れんことを」

両手を強く握り、唾棄を込めて彼女は祈る。世界一嫌いな神への呪いのろいを込めて。

—乙女よ、汝に多くの幸福が訪れんことを

それに答えるように私は言葉を下す。真似るように呟いた呪いまじないは彼女に届くことは無かった。

白が黒に塗りつぶされていく。

祈りながら天から落ちる少女を最後に世界は幕を下ろした。

月が見下ろす夜の下、凄まじい音と風が体を通り抜ける。

雨のように降り注ぐ瓦礫を翼で弾いて身を守るが、想定を超えたスピードと強さは羽では威力を殺しきれずに体はじわじわと押す。

びりびりと肌を焼くような威力に眉間に皺を寄せると、一気に後ろに飛び去った。様子を見ながら戦略を立てなければならぬと感じさせる程の威力だった。

「いやあく理論通りでもやっぱり生で見ると迫力が違う！」

薄い紫のキャミソールワンピースを大きくはためかせながら呆然と立つ林檎の後ろから拍手が空に響く。

ブツブツと小さな声で気味悪く言葉を繰り返すDAアラウズに守られながら木原相似はフィールドへ立つと声を弾ませる。腹立たしい声と取り囲む男どもは異様な雰囲気に含まれており、気味が悪い。「数多さんもこんな気持ちだったんですかねえ」

そうやって笑う彼の隣には自動制御の車椅子に乘せられた天羽慧糸が顔色を悪くしながら座っていた。

ヘルメットを取られ、林檎と繋がるコードも無くなったはずなのに彼女はまるで苦痛の中にいるかのように力強く目を閉じる。

「あつ！でもでも、実際の超能力者相手に実証実験出来る自分の方が気分は上かも？」

彼の笑みが堪らなく不愉快で、堪らずに背中の六枚の翼のひとつでその腹を切り裂いてやろうと力を奮う。

人にしか作用しない物質で出来た翼を笑う男に刺そうと広げるが、それが木原相似に届くことは無かった。

「うわー、人体にだけ刺さる物質での攻撃ですか、エゲツねえ」
相変わらずのにやけ顔で彼は笑う。翼によって傷つけられたのは

彼を守るように直線上にいた一人の人間。

「まあ、人の肉を代替^原にすれば防げちゃうんですけど、ねえ、慧糸さん」
木原相似と俺の間を割って座る天羽の腹から鮮やかな色の赤い液体が溢れ出る。

翼で刺した黄色いシャツを滲ませ、ショートパンツの白いデニム生地を汚すと、血液は足を伝って足の先の緑の爪から床にぽたりと落ちた。

金と桃色の髪、銀と黒の車椅子、黄色のシャツに、白いショートパンツ、靴を履いてない足の爪先に塗られた緑、紫の空、そして流れ出る鮮血。

彼女は青以外の全ての色を持っていた。

「野郎……」

「敵の頭を潰す、セオリー通り過ぎて陳腐ですけど試さずには居られないですよねえ」

口元で三日月を描く木原は車椅子に腕を乗せて蔑むような視線を向けた。

未だ夢を見て眠り続ける天羽の髪を掴むと、その男はほくそ笑む。更に顔を苦痛で歪める天羽を気にもせず、彼は話し続けた。

「まあ、その攻撃は届かずに貴方が唯一気にかける女性に当たってしまっただけですが！」

腹の底から馬鹿にするような剽軽な態度はまるで蛇のよう。

腹立たしい言葉は延々と続く。悦に入ったように、調子に乗った男は口を止めることなく彼女を罵倒した。

髪から手を離し、ぐったりとする天羽のシャツをボタンがちぎれる程の力で引っ張ると木原は蛇のような薄気味悪い目で俺を蔑むように見た。

「本当に哀れな女性ですね！性格上断れず、かと言って中途半端に頭がいいから罠とわかってしまう。力もないのに自ら進んで罠に嵌るなんて、本当にどうしようもない人！」

モルモットの手入れの仕方を知らない男は更に乱暴な手つきで天羽の襟を握る。

車椅子の背もたれに寄りかかり馬鹿にするような態度を続けるが、間髪入れずに咳かれた低い声によって妨げられた。

「どうしようもねえのはテメエだろ」

それは低く、けれど高い、まるで気高い竜を彷彿とさせる女の声。分類されるならアルトにあたる声は他ならぬ天羽のものだった。

自暴自棄になったかのように言葉を吐き捨てる、彼女は閉じていた目を薄く開いて眉を顰める。

なりふり構わず声を荒らげた彼女は確かに自暴自棄に見えたが、同時に憑き物が落ちたように生き生きとしているようにも見えた。

素早く椅子の肘置きに固定されていた腕を鉄の塊から己の腕力で解放させるとバキツと嫌な音が響き渡り、その勢いで木原の顔に自分の頭を鈍い音がするほどの力でぶつけた。

衝撃に耐えきれずフラフラと後ろによるめく木原だったが、天羽はそれに見向きもせず足に甲を固定していた拘束具を強引に壊す。

軽やかな足取りで彼女は椅子の上に立ち上がった彼女の腹部からは一滴も血液が零れていない。

あまりにも突然な出来事にこの場にいる全てが固まる。洗脳されているDAアラウズにとってもそれは言葉を失わせ、戦意を喪失させる程のものだった。

それは彼女が起きた事でも、拘束から抜け出した事でも、木原を傷つけたことにでも無い。

天羽彗糸の異様な姿に全てが息を呑んだ。

「あーら、何口開けてんの？感動の涙くらい流してよ」

ボタンを失った為に彼女の肩を剥き出しにし、手を覆う光沢のある黄色いシャツは傷口の塞がった腹部の鮮血と共にあるものを顕にした。

「せっかく天使様が降臨してるんだから」

それは真つ白な一對の翼。

俺とは違う、肩から直接生えた白い羽に、まるで天使の輪のように彼女の頭上に浮かび光り輝く真四角の凶形。

彼女は聖なる淑女だった。

43話：祈り

月が煌めく夜、痛みによって夢から醒めたあたしは静かに椅子の上に立つ。

重い背中と周りを囲む人達の視線にうんざりしながらため息を着くと、同じように背中に翼を背負った少年と目が合った。

「は……う？天使？」

目を丸くしてあたしを見ると、彼は小さく言葉を零す。

天使だなんて笑わせる。この世界で生きるための媒体という役割しか持っていないそれに驚かれたって困るだけだ。

あたしは天使ではなく死人なのだ。例え天使になってしまっても、あたしが死んだことには変わりはない。

「全く、嫌になる。こんな椅子に座らせて、こんな世界に呼びやがって」

再び相まみえたあの薄汚い神はあたしを愛していると言った。

神は愛故にあたしをこんな姿にして、愛故にこの世界に降ろした。全てはあの野郎のせいだった。

あの白い世界で知った真実に唇を強く噛み締める。

クソ野郎。一番の願いは叶えられず、初めて願った自分だけの願い^{エゴ}を叶えやがった事実^{エゴ}は酷く腹立たしい。

激しく心を掻き乱す真実に顔が歪む。嫌になるような真実はあたしの思いを踏み潰すようなものだった。

「いやはや、まさか起きてしまうとは！しかもこんな見た目とは。失敗作だと思っていたのですが……見当違いでしたかね？」

「あら？貴方科学者じゃないの？失敗作は新しい可能性の種なんだから、蔑ろにするのは頂けないね」

嫌な記憶にむしゃくしゃしていると、眼中にもなかった白衣の男に話しかけられる。

誰だったかと一瞬戸惑うが、この研究の責任者だと気づくと口角を上げた。苦々しい顔をする科学者は、返事の代わりに銃口を向ける。

彼と、彼の周りを守る警備員の服装をする正気を失った男たちが虚

ろな目で銃を構えた。向けられた銃口に更に笑みが漏れる。

「ああ……そういえば居たね、正義を名乗る意思無き集団」

光のない目であたしを一齐に見つめる男たちは何を言われても言葉を返さない。

自分の意思でなく他人の言葉で動くのは些か癪に障る。正義とは誰かを幸せにする自分だけの方程式、誰かの言いなりになっているだけでは成りえないのだ。

「あなたの正義を貫くのは素晴らしいよ、けど、自分にとっての正義じゃないと意味が無い」

虚ろな彼らに笑いかけると、たちまち彼らは膝を落とし、地面と接触する。汚い地面に音を立てて倒れ伏す彼らに言葉をかけても、返事を返す人はいない。

規則正しい寝息を立てる大柄な男に、小さな歯ぎしりをする女、多種多様な寝方で夢を見る彼らを車椅子の背もたれの上に座って見下ろした。

「おやすみ、自分の正義を見つけられるといいね」

あたしを殺そうと牙を見せたくせに、殺すはずの相手の演算で寝てしまった哀れな子羊ども。

夜の風と彼らの寝息が耳を掠める。ここに立っていたのは三人、死の運命にある科学者と、悲劇の英雄とそのヒロインの幼い少女。そしてあたしはそれをひとり上から眺めていた。

それぞれが互いに鋭い眼差しを向ける。とくに、既視感を覚える姿をしたあたしに。

「……やっぱり、お前変だよな」

「余所見してていいの?」

言葉を濁して呟く垣根くんだが、頭上に影ができると彼は一気に空に飛び上がる。降り注いできた土や瓦礫が地面にクレーターを空けると砂埃を舞いあげた。

未知の物質で出来た翼でその土埃を薙ぎ払うように大きく羽ばたかせて空を飛ぶ。広いサッカースタジアムの光を浴びて彼の翼は神々しく白く光っていた。

美しい姿を地上から目を細めて見つめるとその視線が鬱陶しいのか彼は嫌そうに顔を顰める。

「テメエも飛べや鳥人間」

「解剖学的に人はどんな翼を持ったって飛べやしないよ、垣根くんじゃない限りね」

天使であろうと、翼がであろうと、人であるあたしは飛べない。

体の重さ、筋肉のつき方、どれをとっても翼を生やしたただけでは人間は姿を保ったまま飛べないのだ。

常識的に、科学的にそれが当たり前であり、常識外れな能力をもつ垣根くんでもない限り出来ないだろう。自分は結局、自分の枠組みでしか考えられない。

空が飛べない事実を知っているから、それが当たり前だと思っっているから、あたしは彼のように空は飛べない。

「じゃあその輪っかはなんなんだよ、能力とも科学ともかけ離れてるじゃないか」

「AIM拡散力場の異常だよ。ここでは十分有り得る科学じゃない」

空を飛び、杠林檎が彼めがけて飛ばす瓦礫を華麗に避けながら彼は苛立った声で投げやりに声を放つ。

翼は本物だが、天使の輪は恐らくAIM拡散力場の影響だろう。

虚数学区があたしの体にいちばん身近にある天界だ。天国から落ちてきたと仮定すれば、虚数学区天界を通じてAIM拡散力場に影響を与えるのも納得がいく。

もつとも、自分の能力にAIM拡散力場があればの話だが。

原作でも天使になった一方通行アクセラレータの話は出ていないようだし、そもそも彼のwikiを読み込んでないのでなんとも言えない。

「それで？天使様、一方通行アクセラレータの代替品にさせられた哀れな少女を救うのを手伝って頂けますか？」

少し意識をメタ的な要素の考察に逸らしていると、垣根くんはため息をついてあたしと視線を合わせた。

大きな翼で空気を掻き混ぜながら空を飛ぶ彼の髪が揺れる。杠林檎がぶつけ続ける鉄や土の塊を風ではね返して、壊して。

他人行儀かのように嫌味つたらしく含み笑いを見せる彼に目を伏せながら口角を上げると、同じように彼も目を細めて笑った。

「もちろん……っつていいいたいとこだけど、もう決着つけちゃったよね？」

「よくわかったな？ま、お前に食らわせた奴だし、わかってても無理ねえか」

「あたしのおかげだね？じゃなかったら苦戦してたでしょ」

「感謝はしねえからな。俺の実力だバァーカ」

経験と実践は何よりも大切だと、元学者であるあたしは知っている。これまでの積み重ねが物語を変えることも。

彼が生み出した物語の変化や、あたしがいるからこそその経験の変化、それによって様々なことが変わってきている。それは素晴らしいことであり、素敵なこと。

これからの身の振り方を改めた方がいいかもしれない、と一人思う。

あたしなんかよりも、よく出来た素敵な少年に色々と教えてあげれば、彼自身の力で不幸を跳ね除けられるかもしれないのだから。

「何を言ってるんです？」

くすくすと互いにしか分からない話で盛り上がっていると、今まで黙り込んでいた木原相似が口を開いた。

あたしを彼から遮断するように、隠すように木原が前にでると、彼は蛇のように鋭い目付きで睨む。

「んー……あの子には問題点が多いよねって話、かな？」

「……言っているでしょう？代替品だと。オリジナルに問題点があれば代替品にも引き継がれます」

すこし非難を含んだような言い方をすると、木原相似はさらに目付きを鋭くさせた。

しかし、そんな顔をされたって現実が変わらない。あたしの首を刎

ねたあの一方通行アクセラレータの再現には程遠いばかりか、一方通行アクセラレータの代替品にしては問題点が多すぎる。

「同じ問題点、なら同じようにすればいいだけだろ？」

「はい？」

だからこそ、今の垣根くんなら簡単にいなせてしまう。

ぱたり。

今まで荒い呼吸を続けていた杠林檎が柔らかい地面に倒れる音がした。

「人間は案外脆いのよ。血管に空気入れたら死んじゃうし、頭ぶついたら死んじゃうし、トラックに撥ねられた程度で死んじゃうし、酸素がなければ死んじゃうし」

「ど、どういう」

「まさか嫌いな女の口を閉じるために使った手がこんな時に役立つとはな」

ゆつくりと地に降り立つと、彼は息苦しそうに地面に寝る小さな少女に駆け寄った。

芝生とはいえ、穴ぼこだらけの地面を裸足で走るのは得策ではない。それが小さな女の子なら特に。

呼吸が正常に戻ってきた少女に安堵の溜息を零すと、垣根くんが小さく寝息を立てる少女を抱えた。勝ち誇ったような笑みを浮かべる垣根くんが腹が立ったのか、目の前の科学者は少年を見上げて苦々しい顔で睨む。

「あたしは酸素がなくても脳がまともに動けば理論上は生きてはいられる。まあ、ちよつと前に失敗しちゃったけど」

可愛らしく睨む様に笑いが溢れると、丁寧テイネに説明をし始めた。

夏休み最終日。あの日垣根くんがあたしに何をしたかを思い出しながら、ゆつくりと、丁寧テイネに。

「未元物質ダークマターは未知の物質。元素と交われば新しい何かになる。有害なものなんかにね」

彼があの日したこと、それは未元物質ダークマターによる酸素の低下。

酸素という原子に未元物質ダークマターという新たな原子と組み合わせれば、全

く新しい物質になる。それに準じて空気中の酸素濃度が低下していき

く。あの日と同じように羽で巻き上げた風に混じらせ、酸素を新たなもののへと変えたのだ。

「アクセラレータ二方通行は人間だ。こいつとは違って酸素のない環境下で生きられない。欠点と同じなら、同じようにすればいい。本人も言ってたぜ？」

「今の本人なら対策するだろうからこんな失態見せないだろうけど……この子は一方通行最強じゃないし、そもそも植え付けられたデータは昔のだからね、倒れるでしょ？」

八月の半ばで経験した爆発と熱を思い出す。あの日の焦げ臭さと、息苦しさは最強でない杠林檎には堪えるだろう。

「果汁で作られたリンゴジュースと化学薬品で作られたリンゴジュースは同じリンゴジュースかもしれないけど、中身は全く違うし、味も違う。それが作られた過程、それが及ぼす影響は変わってくる。果汁100%のリンゴジュースは化学薬品で作られたリンゴジュースと同じ結果はもたらさないし、その反対もわかり」

真つ直ぐ、一直線に瞳で科学者を射抜く。

人とは違う生き物を前に、科学者は唇を強く噛むことしかできなかった。

「果汁で作られたジュースは化学薬品で作られたジュースにとって変わることは無い。お互いが本物で、お互いが偽物。代替出来るのはその概念だけ」

本物なんてない。偽物なんてない。

全てが唯一無二で、全てが代替品。

忌々しいあの神を自称する気味悪い汚物が連れてきた平行世界。世界そのものが唯一無二で、あたしの世界の代替品。

だからこそ断言出来る。

世界の全てが唯一無二で、全てが代替品に成りうるのだ。

「アクセラレータ二方通行の代替品、妹の代替品、世界の代替品、共通点を見つけて、同じ穴にピースを埋め込んでも、似ているようで違う。穴は埋まって

も出来上がる絵は違ってくる」

「何が言いたいんですかあ……?」

「お前、本当に超能力者の価値が見えてんのか?」

あたしの言葉に繋げるように垣根くんは口を開く。

単純な話だった。

杵林檎は一方通行じゃ^{アクセラレータ}ない。似たような何か。表面は同じでも根本的な部分が違うのだ。

「お前は超能力者を自分が理解出来る部分だけ解釈して、自分が知ってる技術で代替しただけじゃないのかって話だ」

垣根くんの言葉に、木原は柳眉を逆立て歯を食いしばる。両手の拳を握って、手袋に深く爪をくい込ませた。

「まあ、気づいたところでもう遅い。はじめからやり直しだよ」

ぱん、と首を傾げて頬の辺りで手を叩く。

脳細胞の破壊、意識の離脱、痛みのないやり直し。

救いの糸を暗闇とともに垂らす。夏の夜に救った哀れな科学者と同じ道を辿らせる。

それがあたしにとっての正義だから。

前に進めるように、救いの糸を垂らすだけ。

それが天羽彗糸のやるべき事。

クレーターだらけになったフィールドで黙々と寝息を立てる人達を一箇所に集め終わると、重労働にため息を着く。色々と情報がいつぺんに入ってきたからか、今日はなんだか疲れてしまった。

背中に生えた重い白い塊と、淡く頭上を照らす不気味な四角い冠。嫌な生物との逢瀬を思い出すと吐き気がこみ上げる。思い出したくもない。

吐き気を催す記憶に苛立ち、椅子に深くもたれかかったまま垣根くんへ視線を逸らす。

サッカー場の芝生の上で子供を抱えて長い足で立つ彼は少々犯罪臭がする。ホストのような少年が可愛らしい幼い少女、しかも薄っぺらいキヤミソールだけの子供を抱き抱えるのは傍から見たら通報案件だろう。

「それでその子はどうするの?」

「この場で起して病院に連れてく、後遺症とか心配だしな。お前の病院で検査して入院させろ。拒否権はねーから」

「はいはい、お姉ちゃんは拒みませんよ」

随分と勝手な彼にため息がでるが、彼なりの甘え方だと思うとにやけてしまう。誰かに頼られるため、誰かの役に立つため生きているのだから、嬉しく思うのは当然だ。

大切な少女 榎林檎をあたしに任せるといふのだ、これ以上光栄なことは無い。

アクセラレータ 一方通行が病院にいるし、少々気がかりはあるが、彼の為なら自腹で入院させてあげよう。

姉とは寛大な心も持っているのだ。自分の看護師としてのスケジュールと、少女の容態から分かるアバウトな入院日数を簡単に割り出したり、病室の空きを思い返して少女を守る最適な計画を計算してみる。

うん、多分大丈夫。

シスターズ 妹達に頼んで何とかして見せよう。垣根くんの為なら年下に頭を下げたって構わない。

色々と考えながら上体を起こしてみるのが、不安は消えぬまま。果たしてこの後ちゃんと物語を変えることができるのだろうか。

救った後の未来を考えても、まだ救えていない現状では取らぬ狸の皮算用だ。

考えを巡らせながら横目で垣根くん達を確認する。この先どうなるかは彼次第だ。

と思ったが、眠った杠林檎ちゃんを抱きとめる彼に思わず口が吃る。目に飛び込んできた光景に大人として一瞬恐ろしい考えが浮かんでしまった。

「な、なにやってんの？さすがに野外ではマズイんじゃない……」

「光と音で心——いや、脳の電気信号に影響を与えて起こすんだよ。ゴミみてえなこと考えたら翼もぎ取って四肢へし折って焼却炉に棄てる」

「……はい」

背の高い少年が眠る幼い少女の肩を抱いて顔に手を添えている光景は色んな意味でドキドキする。どう見ても如何わしいことをする五秒前だろう。

たしかこういうのをカップリングと呼ぶのだったか。よく知らないが、目の前の光景に当てはまる言葉はこれくらいしか持っていない。

しかしそんな感情を見透かされてか、ゴミを見るかのような目で舌打ちをされてしまった。

邪な目で見ていたことに罪悪感が刺激されるが、二人の間に蔓延る奇妙な沈黙を破った子供の声ではっと我に返る。

「垣根……っ？」

垣根くんの腕にもたれかかっていたお姫様が声を絞り出す。

少しづつ現状を小さな頭で理解していくと、少女は見るからに慌て出した。

「体は平気か？」

「垣根！あのっ……ごめっ……あーっ」

声にならない言葉を吐き出すと、彼女はキラキラとした瞳で垣根くんを見上げる。

「お腹すいた！」

とても可愛らしい笑顔だった。

「つぶ、はは、お前、寄りにもよって飯かよ！はは、後で飯食うか？」
「お肉もいいけど、ガレットがいい！」

きらきらと幸せそうな空間が何よりも大切な子供たちを取り囲む。
永遠に醒めてほしくない幸せ。その輪に入ったら壊れてしまいうなほど眩しくて美しい幸せだった。

誰にだって壊させやしない。

「……問題はここからか」

だが未来を知っている身からしたらそう上手くいくはずないとわかかってしまう。

自壊プログラムとかいう意味不明な技術でその命が腹立たしい神の下へ召されてしまうのは何よりもムカつく。

何処のどいつが仕掛けたか知らないが、本当にいけ好かない。

確信を持つて言える、あたしは恐らく彼女を治せない。

アクセラレータ
一方通行の能力を持つているのが理由ではなく、もつと根本的な問題。

あたしは自壊プログラムなんていう技術を知らないのだ。

あたしの能力でできることはあたしが理解していることだけ。

不老不死になれるのは現代技術では無理でも、理論上なれるという事実を知っているから。

肉体を再生できるのは細胞がどうやって分裂して、どうやって再生するか
の理論を知っているから。

翼を生やしても飛べないのは、人が翼をつけても重量や筋肉の量で飛ぶことが不可能だと理論的に知っているから。

故に、時限式の自壊プログラムとかいうものの理論を知らない以上、手が出せない。

似たような症例として心肺停止が考えられるが、それを特定の条件下で引き起こす症例を知らないのだ。

それにプログラムと言うくらいだから機械か何かかもしれないし、生命維持、ひいては延命処置は出来ても完全に助けられるかと言われ

れば首を捻る。

「垣根さん！」

「あ？ 誉望、何慌ててんだ」

最善手を出来の悪い頭で模索していると、サッカー場の奥から聞き覚えのない少年の声が響き渡った。

誉望と呼ばれた少年は土星の環のような円形のヘッドギアを被り、小さなパソコンを持ってこちらへ急いで走ってくる。

名前と姿はアニメ経由で知っていたが、こんな声だったのかと思わず感心してしまう。

「貴方達が戦闘中に研究所内のデータを分析してたんだけど……」

「少々面倒なことになったかも知れませんが」

遅れてやってきた赤いドレスの少女——本名は確か極彩海美だったか——心理定規メジャーハートが息を上げて呟くと、後ろから真っ白いカブトムシがあたし目掛けて飛んできた。

あたしの頭に乗ってくる05を見るように上を向くと、顔を伝って手元へ降りてくる。

大変な姿になった人をほったらかしてどこ行ってたんだ。彼がいればあたしが起きる前に垣根さんと杠林檎ちゃんをなんとかできたのかと思うと、ムツと口角が下がる。

「05、あんたどこ行ってたの」

「マスターに命令されてデータ解析の手伝いを」

「とにかく、その子を今すぐ機材のある場所に連れてった方がいいわ」「これ、これみてください」

白々しい05にお灸でも据えてやろうかと頬を膨らめますが、慌てた様子の部下二人が上司である垣根さんに詰め寄る所を見るとふざけている場合でも無さそうだった。

小さなパソコンの画面を押し付けるように誉望くんが見せると、垣根くんは眉を顰めた。

「……自壊プログラム？」

垣根くんの唇から言葉が零れた瞬間、今まで上の空だった杠林檎の体が糸が切れたようにふらりと揺れる。

力が抜けるようにバランスを崩した彼女は地面に倒れかけるが、地面と接触する刹那に気づいた垣根くんが体を受け止めた。そのため寸での所で汚い地面に体を叩きつけることは無かった。

「おいっ！どうした、林檎！」

受け止めた彼女は弱々しく息を吐き、みるみるうちに顔が青ざめていく。

数秒前とは違う少女に誰もが目を見開いた。

かくいうあたしも例外ではない。05を手に乗せたまま立ち上がり、彼らの元へ足を進めた。

「特定の条件下での臓器への機能停止命令がプログラムされてるんです！」

「クソがつ！おい！しっかりしろ、林檎！」

汚い地面なんか気にせず、垣根くんは綺麗なスーツで膝を着いて杠林檎を横に抱く。

垣根くんの膝に頭を乗せた少女はとても苦しそうで、悲しそうだった。

「天羽っ！お前なら何とか出来るだろ！早く！」

「垣根、お願いがあるの」

「なに死にそうなこと言ってるんだよ……！」

杠林檎の小さな手を握っていつもとは違う必死の形相で叫ぶ。あたしに縋るように声を張り上げ、大切な人を失いたくないと垣根くんは必死になって少女の手を力強く握った。

「垣根、お願い、わたしを覚えて欲しい」

「それが、お前の救いだっつてのかよっ！」

「なわけないでしょ」

ぺしっと優しく彼の頭を後ろから叩く。

痛みのない衝撃に目をぱちくりさせた垣根くんの前に杠林檎を挟むようにしやがみこむと、翼を広げて優しく微笑んだ。

翼で囲った三人だけの白い世界。淡い光と互いの目線が交差する。

「死とは進まないこと、不幸なこと。それが救済であるはずがない」
自分の頭ではきつと杠林檎は助けられない。

現実には縛りつけられたあたしの脳では役立たずなのだ。けれど、常識を覆す力を持つ少年ならきつとできる。

それを分からせる為、手助けする為、きつとあたしはここにいます。自分の見たい未来のため、あたしは彼を信じることにした。

「垣根くん。あなたに出来ること、あるでしょう?」

「何言って——」

「未知の物質を操る、その可能性を貴方は提示してきたじゃん」

一度落ち着いたはずの口が再び開くが、あたしが人差し指でもう一度閉ざす。

彼の唇を閉ざす人差し指、その手の甲に留まる白いカブトムシと垣根くんの目が合った。

彼は知らなくてはならない。誰かを救えることを。

そのためにあたしがいる。

彼がこの世界を生き抜くため、進めるため、幸せになるため、死なないため、あたしが目の前の少年を主人公にしてみせる。

「君の力で誰かを救うことが出来るってそばにいたあたしが誰よりも知ってるよ。誰にだって否定なんかさせない」

垣根くんの口から手を退かして彼の手を取ると、そこにカブトムシ05を優しく置いた。

カブトムシをじつと見つめると垣根くんは顔を上げる。もう焦りは見えなかった。

「大丈夫、お姉ちゃんも手伝ってあげるから」

怖くないよ、と言い添えると垣根くんはふつと鼻で笑う。

バカと小さく呟いて呆れたように笑う彼にこれ以上、言葉をかける必要はなさそうだった。

「未元物質で命令を解除させる、少し我慢できるか?」

「う、うん……」

ぽんつと05をあたしの頭に乗つけると、彼は力強い声で杠林檎に声を掛ける。

憎たらしい、いたずらっ子のような自信溢れる笑みはとても主人公らしかった。

「でもどうやって?!今から機材を持ってきた方が……」

「^{データマター}未元物質を介して脳の電気信号を制御する。プログラムそのものを
なかったことにする」

「んなこと、できるとは」

自信満々に垣根くんは焦りを見せる部下たちに笑う。

「俺の^{データマター}未元物質に、常識は通用しねえんだよ」

在り来りで使い古された言い回ししか浮かばない。どんな言葉も、
今のあたしの心情を表すことはできなかった。

あの小さな液晶越しに惹かれた少年が目の前にいる喜びを表すに
はこの世界は狭すぎる。

決め台詞を力強く答える彼はとてもかっこよかった。

「つか、きね」

「大丈夫、安心しろ。天羽、バイタルとって報告しろ、あと生命維持を
優先して能力使え」

こんなにもかっこいい少年に頼まれてしまったては大人としては領
かないわけにもいかないだろう。

ポケットから髪留めを取り出して髪を高い位置でひとつに結ぶと
頷いて息を吐く。

脈拍、呼吸、血圧、体温。

怖くないと少女の手を握ると少しずつ上体を確認していき、正常で
ない箇所を逆算する。

今回の場合だと脈拍と血圧が少しおかしい。脈拍は遅く、血圧が低
い。呼吸は荒いが、その割に音に異常は感じられない。

一項目ずつ確認していく。
自分の常識の枠組みで逆算して、既存の症例に当て嵌める。それがあ
たしにできる全て。

「インスリン、ホルモンの過剰分泌を確認。肝臓と腎臓の機能障害を
確認。ブドウ糖供給低下。徐脈性不整脈を確認。心臓、及び脳の電気
系統の乱れによるものと断定。薬剤性低血糖と房室ブロックと仮定
します」

「……大体何が起こってるのかは理解した。俺が脳の電気系統いじつ

てプログラムそのものを無くす。お前は心臓部の生命維持に専念して、バイタルの変化を逐一報告しろ」

「了解しました。ペーシングと薬剤除去を試みます」

自壊プログラムなんてものの原理は分からないが、似たようなものならば知っている。

それは薬だ。

溶ける速度や形状などを変化させることで薬は必要な地点で効果を発揮する。飲み薬に関わらず、シール型、塗り薬、どんな方法でもそれに変わりはない。

杠林檎の症状を仮定するのなら薬剤による血糖値の低下が恐らく発端だ。

脳にブドウ糖が行かなかつた。まずそれを解消するために脳は肝臓からブドウ糖を血液へ流そうと命令を下す。

しかし同じく薬剤の影響で不整脈に陥った為、血液が上手く循環せず、脳にさらに影響を及ぼした。

だから肝臓、腎臓、心臓といった内臓が機能停止させられるのだ。

「かき、ね、っ」

「心配するな」

病気を仮定することは大切だ。そこから新たな発見を見つけて病名を変えていく。

薬剤が投与されているのならそれが及ぼす影響を元に正せばいい。

心臓の電気系統が問題なら正常値まで戻すのを手伝えればいい。

「おい、そっちの制御は上手くいつてるか」

「自分の心配しなさい。こういうのの扱いはあたしが一番慣れてんのよ」

「はっ、俺が上手くいつてるのは分かるだろ」

杠林檎のおでこに手を添えて、垣根くんはニンマリと口で弧を描く。

部下の誉望万化から借りたパソコンで少女の脳の情報と照らし合わせながら彼は杠林檎の脳を制御していった。

未元物質^{データマター}での制御、漫画でも音と光で深層心理に入り込んでいたし、

あたしと木山さんから学んだ脳医学の知識があればきつと可能だ。人体を作り上げた今の彼ならば彼女を助けられる。

不思議と冷静な頭の隅で心は断言した。

「そうね、垣根くんに出来ないことはないのかも」

そしてそれは現実となる。

握った少女の手はゆつくりと熱を帯びてきた。

とくとくと、と規則正しいリズムが手首に刻まれる。

体を巡る血液は糖を脳へ送り、心臓は正常に動き始めた。

「血糖値の上昇を確認。エピネフリン、コルチゾール、グルカゴン、それぞれ正常値まで低下。脈拍安定……うん、峠は越えたみたい」

「間に合ったか……」

呼吸音、心拍、全ては規則正しくリズムを刻み、手首からは地面を流れる真つ赤な溶岩のような血液の鼓動が響く。

少女が生きている証だった。

「でもまだ油断は禁物だよ。ほらお友達連れて病院行きな。あたしが連絡しとくから」

杠林檎を抱き抱える垣根くんのポケットからひよいつと携帯を摘み出し、冥土帰しの番号を入力する。

少し嫌そうな顔をしたが、直ぐに困ったように笑うと彼は立ち上がって部下に車を出せと命令すると急ぎ足で出口へ向かった。

「ありがとな」

飛び出す前に一言つけ加えて。

「……子供は純粹で、可愛いねえ」

誰も居なくなつた広い空の下で呟く。高校二年生の男子生徒にこれ程まで可愛さを感じたことはない気がした。

母性と呼ぶべきか姉心と言うべきか、一心不乱に頑張る彼らはとてもいじらしくて可愛らしい。

「保護対象、マスターと一緒に向かわなくて良いのですか？」

「お姉ちゃんはでしゃばらないのよ、ここの時は」

翼の因子を崩すように、肉体を収束するように演算してみると、思つた通り翼はまるで花が蕾になるかのように消えていく。

バランスも取れるようになり、軽く感じる。頭上で浮いて瞼を照らしていた光る四角い冠も消え失せ、ただの人に成り下がった。

その姿に驚きながら頭に乗っていた05が人の形をとって地面に足を着けると、こてんと首を傾げて無機質な緑の目で見つめてくる。その言葉に先程の情景が目には浮かぶ。

「それにさ」

ありがとうなんて、恥ずかしがりながら呟いた上品でいじらしく、愛らしい少年の笑顔。

不幸が決められた少年の笑み。

「自分で助けた方が彼のためになるでしょ？」

その笑顔を見るためにあたしは生きている。

それがあたしのやるべき事なのだ。

自分で救うことが彼の幸せになるのなら、彼が人を救う手助けをする。

自ら積み上げたもので自らの想い人を救うことが彼の希望になるのならその道へと導く。

そうして迎えたのがあたしの夢見たハッピーエンド。お姫様は王子様によって救われた。

05を作り上げた今、彼には可能性がある。物語を自ら壊す可能性。

その可能性はあたしがいるから見えるもの、ならば彼が正しく成長するようにコントロールするのも姉の役目だ。

誰かが幸せを掴む為に、あたしは救いの糸を垂らすのだ。

「貴方は、本当にマスターのことを考えているんですね」

「そりゃあ、この世界で一番幸せになって欲しい子だから」

05の言葉に微笑むと、それは「理解し難い」とだけ言って黙り込む。

生まれたばかりのお前に分かるわけがないだろう、前世から続くこの未練を。

誰かの為に生きていたい。

誰かの為に祈りたい。

誰かの幸せの礎になりたい。

他人の為に命を使いたいのがあたしの願い。好きな人に自分のエゴを押し付けることでしか生きられない。

それは叶えられなかった未練、あの子を救えなかった後悔。

あの子を裏切ってしまった、あの子を泣かせてしまった。その事実
にひたすら悔しいと心臓が叫ぶのだ。

とつても悔しかった、とつても虚しかった。

だから今度こそ、ちゃんと自分の力で歩けるよう、生きれるどんなに嫌われ
ても、貶されても、突き放されても彼を救うのだ。

あたしは姉だから、大人だから。

神にさえ叶えられない独り善がりな祈り。

それがたった一つのあたしの願い。

「まあ、他にも救うべき子羊はいるみたいだけどね」

後ろに横たわる哀れな子羊たちにため息をついて、あたしは青く眩
しい空の下で踵を返した。

44話：知らない人

月と星の光だけが部屋を照らす丑三つ時、することも無く手持ち無沙汰な現状に退屈さを感じて一人病室に座っていた。

冥土返しの診察も終わり、あとはベッドの上の少女が目覚めるだけ。何も無い病室で窓の外を眺めながら思考に浸る。

それにしても退屈だ。

面会時間もとつくに終了しているというのに俺がこの場にいられるのはあの嫌いなナースと結んだ縁のおかげというのは分かっている。認めたくはないが有難いし、それ以上を望むのは我侭だろう。

けれど本も、テレビもない、携帯で連絡できる友人もこんな時間だと限られてくる現状、何かしらの暇つぶしを提供してくれてもいいんじゃないかと、文句の一つぐらい出してしまう。

部下を帰したのは間違いだっかと思いが、アイツらがいても退屈は変わらなさそうだ。

林檎が起きるのを待つしかないかため息が出る。最近一人になる機会が少なかった為、誰かの声がないのは少し物足りない。

普通なら保護下にある少女が倒れて病院で入院していると聞いたら顔は青ざめ、退屈なんて感じないほどハラハラするだろう。

けれど俺は違う。

俺はわかっていた。彼女がしばらくすれば起きることを。

だって彼女を蝕むいけ好かないプログラムを取払ったのは俺で、その後はあの冥土返しが引き継いで、不本意ながらあの天使様の手伝いもあつたのだ。

杠林檎は生きる、そう確信していた。

「か、きね……う？」

「起きたか、寝坊助」

だからこそ、ベッドから小さく漏れた声にも驚かなかつた。

もともと白いベッドから緑の病衣を着た黒髪の幼い少女が体を起こす。表情筋をあまり使わない少女だと言うのに、今日ばかりは驚きで目を見開いて口を薄く開いていた。

「私、生きてる……」

「俺に救いを求めたのが運の尽きだな、死ねなくて残念か？」

夜風を入れようと窓を開けるとそよそよと二人の髪が揺れる。

驚きと喜びで毛布を握りしめる林檎に、あの嫌いな女と同じように目を細めて問いかける。

「……ううん、とつても、嬉しい」

小さな声で呟いた声は夜の風に溶けていく。破顔を見せると、林檎は小さな水滴を一粒目尻から零した。

その返答に柔らかく口角を上げてしまうほど、自分はこの少女を気にかけていたみたいだった。

「そうか。ま、取り敢えず第二の命の恩人を呼ぶとするかな」

ベッドに腰かけて林檎の短い黒髪をわしゃわしゃと撫でると、傍に繋がれたコードを手に取った。

しばらくするとスライド式のドアが静かに開き、病室の照明が入ってきた白衣の男によって付けられる。

カエルのような顔が白衣と肩書きの威厳を弱める凄腕の医者が入ってくると、林檎はびくりと肩を震わせた。

「起きたんだね？」

「見ればわかるだろう？……つてかあのバカはどこにいるんだよ」

カエル顔の医者、冥土帰しの質問に質問で返すが、同時に別の疑問が湧く。後から向かうと別れたあのいけ好かない女が上司である医者者の隣にいないのが妙に気になった。

しかし、そんなことよりも林檎にとつては医者の顔の方が気になる様で、首を傾げて医者を指差し俺に困惑した表情を見せてくる。

そんな無礼な態度にも関わず、医者が優しく微笑むと林檎はさらに困惑した表情を浮かべた。境遇を考えると医者にかかったことも病院に入院したこともないのだろう、初めての環境に戸惑っているの

も無理はない。

「……カエル？」

「このカエル顔の医者は冥土返しって呼ばれてる医者だ。お前を助けた後に駆け込んだんだよ」

「君達の主治医だ、よろしく頼むよ。で、君の質問だが、本人が答えてくれるんじゃないかな？」

林檎に優しく答えると、医者は俺の質問に意味不明な答えを返しパツと窓に視線を移す。意図がわからず同じ方向に目を向けると、夜風を招き入れる開いた窓に金と牡丹色がちらついていた。

「げ、先生ネタバラシしないでくださいよ」

「何してんだよ馬鹿」

「垣根くん驚かそうかと……」

「馬鹿だろお前」

人の姿を保つ05の首に緑の爪でしがみ付いている少女、天羽隼糸が窓の縁から病室に降り立つ。任務が終わったと言わんばかりにカブトムシの姿に戻った05を手に乗せてしよげた表情を見せる彼女に少しの苛立ちが芽生える。

何をしてるんだとか、今まで何をしていただとか、なんで気配に気づけなかっただとか、色々と言いたいことはあったが、ぐつと堪えて頭を抱えながら大きく溜息をつく。

今日はなんだかんだと疲れたのだ、この女と話すことすら面倒だった。

「研究所の……天使」

「うーん、否定したいけど、まあ、初対面のお嬢さんには少々インパクトのありすぎる姿だったよね」

だが俺の思いとは反して林檎は天羽に興味があるようだった。俺と同じように羽が生えた人間に興味が移るのは当たり前なのかもしれない。

彼女の声に天羽は林檎の傍で目線を合わせるようにベットに腰掛けると彼女は朗らかな笑顔を見せる。

愛嬌のある笑顔。コミュニケーションのためだけに作られたよう

な笑顔はどうしても気持ち悪く感じた。よく知る相手の外向けの面なんて気持ち悪いか面白いかのどちらかだ。

「初めまして、天羽隼糸って言います。よろしくね、杠林檎ちゃん。垣根くんから話は伺ってるよ」

「……ぶりっ子」

「外野は黙ってな」

その感情を林檎を挟むように座る天羽にぼそつと呟くと、彼女はすぐさま反応して低い声で応戦した。緑にも赤にも見える不思議な瞳と目を合わせ、お互い睨み合う。

最早じゃれ合いに近い行為に互いバチバチと火花を散らした。

「……天羽、垣根と仲良いの?」

「普通の人より互いを知ってるだけだよ、気にしなくていいからね」

きよとんとする林檎に天羽は困ったようにヘラヘラと笑う。軽く林檎にハグをして頭を撫でると、彼女はきつぱりと林檎の質問に答えた。

しかし子供にはよく理解できない関係性に林檎は更に首を傾げる。その表情に天羽は一瞬狼狽えると、今度は強引に手に乗ったカブトムシ05に話題を変えた。

狼狽えた理由はいくら考えても分からなかった。

「で、こっちはカブトムシ05……喋るペット的な何か?」

「まあ、あなたの盲導犬的立ち位置ではあるので、間違っってはいませんね」

「カブトムシだ……!」

結果として天羽の思惑通り意識を別の方向に移すことに成功したようで、林檎は少しだけ口角を上げて手のひらに乗ったカブトムシ05をじつと観察し始める。

初めて見るのか、05を見て林檎は目を輝かせて、食い入るように魅入った。

「さて、診察の結果だが……プログラムの解除、内蔵機能の回復、共に完了。君たちの処置が迅速で正確だったからこそだね?天羽くんが入れ知恵でもしたのかい?」

子供の意識が別のものに逸れたところで、こほんと冥土帰しが咳払いをした。話を聞けと言わんばかりの眼力に天羽とお互いに黙り込むと、彼はやれやれと呆れながら話し始める。

子供ウケしそうなカエル顔をほころばせて冥土帰しは淡々と報告するが、そのどれもが自分の思った通りで特に大きく反応はしなかった。

やはり思った通りと言うべきか、心配するようなことは何一つない。

「垣根くんが頑張ったからですよ、私は何も」

「今更清楚ぶって謙虚になるなよ、気持ち悪い」

まるで成長を見守る母か姉のように優雅に憫笑を携える女に思わず舌打ちを打つ。自分だつて精神すり減らしていると云うのに、何故笑えるのか、意味がわからなかった。

林檎と同期して、脳みそいじくられているはずなのに、よく分かんねえ翼が生えて、頭には四角い天使の輪が浮いて、どう見ても人じゃなかったのに、なぜ笑える。なぜ他人事のように振る舞える。

「で、今後のことなんだが……」

「何か問題でもできたか？」

「いや、9月14日に退院だね？」

「早っ!?!逆に問題じゃねえの!?!」

苛立ちを更に増幅させるように神妙な顔をした冥土帰しだったが、拍子抜けするような朗報に思わず苛立ちが吹き飛んだ。

一週間どころの騒ぎじゃな早さの退院に驚き言葉を失う。どう見ても栄養失調で、脳を弄ったとか関係なく入院が必要そうな子供だ。なぜそんなにも早く済むのかひどく困惑したが、どうやら元凶はわかっていたようで髪を弄りながら苦笑いを見せた。

「あー、やっぱり?良かれと思って自律神経とかホルモンバランスとか治して、タンパク質作ったりしたけど、やめといた方がよかったかな」

「いや、治してもらおう分には困らねえけど、流石に早すぎるだろ。もう少し様子見た方がいいんじゃないかねえのかよ!」

「色々あるんだ。天羽くんならわかるだろう?」

「あー、まあ、わかりますよ、流石に」

確かに治してもらうのは有り難いし、ラッキーだがどう考えても可笑しい。医者とその部下の含みある会話に舌打ちをし、その意味を教えろと未だベッドに座る彼女と視線を合わせて、ベッドに腰掛ける。

その意図に気づくと、彼女は直ぐに眉を八の字にして耳を貸せと手招きをした。

仕方なく彼女にしたがって身を乗り出すと小さな声で話し始める。確かにその内容は林檎に聞かせたくないものだった。

「別の問題児がいるからさ、なるべく長い期間ここに置いてたくないんだよ。わかるでしょ」

「問題児、か……」

問題児、その言葉についてこの間の8月31日のことが頭を過ぎる。

白くて小さくて、この学園都市最強の座に座る赤い目の悪魔が撃たれたあの日のことを。

今でも入院していることは知っていたが、確かに彼に関連する研究の被害者である林檎がいるのが知られれば病院に迷惑がかかるかもしれない。天羽はともかく、冥土帰しにはこんな時間に急患、しかも厄介なプログラムで死にかけた林檎を診てもらったという恩がある以上、迷惑はかけたくない。

「そうかもしれないけどよ、退院してもこいつひとりで住ませる訳にも行かねえだろ。病院の方が安全だし、入院が長引いた方が正直助かるんだが」

「なら垣根くんの家と一緒に住めばいいじゃん。女の子と同棲だよ?二人つきりだよ?ラブコメしようよ、ラブコメ」

それでも納得いかないものは納得出来ない。ヒソヒソと林檎の頭上で内緒話を続けるが、呆れるような言葉が返ってくるだけだった。

ニヤニヤと口元に弧を描いて笑う天羽が無性に腹立たしい。

「……テメエ俺がこのガキに手を出すとでも思ってたのか?」

「えっ、しないの?!」

「しねーよ殺すぞ」

コソコソと小声でしようもない下世話な話を繰り広げる女に苛立ちが募る。眉間に皺を寄せて低い声で怒りを顕にするが、彼女は分かっているみたいでさらに話を続けた。

キラキラと恋バナに興じる乙女のように下世話なことを嬉々として声にする女の言葉に猛烈な吐き気を感じてしまう。

確かに、躊躇なく恋愛話をぶっ込んでくるのは姉らしいといえれば姉らしくもある。が、そんなものをこの女に求めてはいないのでただただ腹ただしさしか浮かばない。

「えー、林檎ちゃんじゃないなら、本命はあのドレスの女の子？名前は？」

「心理定規な。あといい加減黙らないと窓から突き落とすぞ」

止まらない口に嫌気が差し、物理的に黙らせてやろうかと拳を握るも、直ぐに力が抜けた。

一度痛い目みさせないとこいつは分かりっこないと思って拳を握ったが、そもそもこいつは痛みを感じない。殴っても分かりはしない。

やり場のない怒りに柳眉を逆立てて肩を震わす。どうすればこいつの頭を治せるんだ。

「なんの話してるの？」

「え？垣根くんの未来のお嫁さ」

「お前の退院後の住居についてだ」

嫌いな女の今後に頭を悩ませていると、聞いて欲しくない会話に林檎が首を傾げて入ってくる。

誤解を与えそうな台詞を答えようとした天羽の口を右手で瞬時に抑え話題を適当に変えると、俺の返答に納得したのか林檎は寝起きのようにはつきりしない表情で頷く。

イマイチ話の内容を掴んでいないようで正直ほつとする自分がいる。なんせ実際の内容がバレていたら自分の立場が危ういのだ。

軽蔑の眼差しを向けながら問題となったセクハラをしてきた女の口から手を離すと、彼女は目に見えてガツカリする。女の恋話の餌食になるのは懲り懲りだ。

そんな俺たちを見て再び咳払いをすると、冥土帰しはため息を着いた。またかと呟くあたり、彼も天羽に振り回されている犠牲者の一人なのだろう。

「……君の立場的に預かりにくいのもわかってる。かといって一人にする訳にもいかない。回復したと言つてもこれから先の食生活や生活習慣がダメならプログラム関係無く病気になる」

「まあガリガリだもんな、栄養失調にでもなつて倒れてられても本末転倒だ」

林檎は恐らく、というか十中八九チャイルドエラー、そして今まで研究所で管理されていた。IDはあるかもしれないが、住む家は恐らく無い。

俺が引き取りたいのは山々だが、暗部に属している以上、第二位の保護下にあるとなると襲われる可能性が跳ね上がる。

だからといって上層部の誰が自壊プログラムを仕込んだか分からない以上、野放しにするわけにもいかない。

今必要なのは暗部に在籍しておらず、けれど自衛できる程の力があり、世話好きで、初対面の人とも難なく話せて、人並みレベルの健康的な衣食住を提供出来る人。

そして、冥土帰しと俺はそんな人物に心当たりがあった。ぱつと同時にその人に視線を向ける。

「そういうわけだから、天羽くん、君が引き取りなさい」
「……っえ？」

二人で目を向けた先にいたのは困惑した表情で佇む一人の看護師兼高校生。

ぱちぱちと目を瞬かせて彼女は硬直するが、医者と俺の話は彼女をおいて進んでいった。

「この子、大学で栄養学の授業取つたし、病院の栄養士と交流してるからそういう知識はあるんだね？それに君の監視もあるし、一番安全で、人から詮索されにくい環境下にある」

「愛想だけはいいし、親戚の子を引き取ってるって言えば違和感はあるって納得するしな、女だし」

「えっ？えっ？なんであたしが……初対面ですよ？」

「看護師がいる方がなにかと安心だろう？それに、こういう時のために君に広い家に住まわせているんだから、有効活用してもらわないとね」

おどおどと突然決まった事実には狼狽えて天羽は拒否するが、恩がありすぎる冥土帰しに強く出ることには出来ないようで、徐々に元気を無くしていく。

しゅんと言葉に出せないことに落ち込みながらオロオロと目と体を右往左往していた。

「……天羽と住むの？」

「女同士だし、それがベストだろ。それに俺の家は安全とは言い難いし」

「ゆ、杠ちゃんは垣根くんの方がいいよね？ね？」

「天羽でいいよ、垣根がそういうから」

「主体性無じやん……」

対して林檎は特にリアクションもせず、流れに身を預けるスタンスを貫く。

不安そうではあるが同時に少し嬉しそうな表情をみせるあたり、研究所以外で寝泊まりすることに子供らしくワクワクしているのかもしれない。

けれど天羽はまだ諦めてないらしく、大人気なく林檎に縋るように問いかける。しかし視線を合わせて林檎に詰め寄っても、欲しい回答は得られなかった。

「取り敢えず退院の手続きするから、垣根くんは私と一緒にナースステーション、天羽くんは杠くんのバイタル確認しときなさい」

「え、まってあたし了承してない」

「じゃ、また後で」

子供に縋る哀れな看護師に見送られながら病室の扉を開ける。

くるりと背中を向けて勝ち誇るように後ろに向けて手を振ると、地団駄を踏む大人びた子供の罵詈雑言が閉じるドアに向かって叫ばれる。

久々に勝てたような感覚に心は踊り、晴れ渡った。
俺に勝てると思うなよ。

そして9月14日、退院の日。

引越しや入居の手続き、ご飯を食べたり、生活雑貨を買ったりと慌ただしくして昼を過ぎて居たらいつの間にか空は暗くなり、子供は寝る時間となっていた。

「ねえ、マジであたしの部屋？今からでも遅くないから垣根くんの部屋にしよ？ね？」

「いい加減うるせえぞ、何がそんなに嫌なんだよ」

藍と紫が混じった空を建物から発する痛々しい光が照らす夜、明るいマンションに入り、ロビーの機械にカードキーを認識させて自動ドアを潜る。

未だグチグチと文句を垂れる女を無視して林檎の手を引きエレベーターに乗り込むと、慌てながら彼女も乗り込んだ。

今日買った林檎の服やら日用雑貨の入った袋に、分厚い学校鞆を手に持ってエレベーターに滑り込むとセーラー服姿の天羽が金髪の髪をかき揚げて苦虫を噛み潰したような顔で俺を見上げる。

「いや、ほら、女には色々あるじゃん？」

「なんもねえよ。男も連れ込んでねえし、呼ぶ友達もない。乱痴気騒ぎをするようなタイプでもない。な？問題ナシだ」

「それに貴女が学校に行っている間は私達が面倒見れますので、貴女に負担はありません」

「ほ、ほら、部屋汚いし……」

「私と一緒に掃除したではありませんか」
「う、」

嫌だ嫌だと天羽は拒絶するが、エレベーターは否応なしに上昇する。9階まで数分もかからずに到着すると、駄々をこねる彼女をほっぽいて真っ直ぐ929号室へ足を進めた。

彼女の思考回路が分からない自分に苛立ちながら早歩きで天羽を置いていく。

苛立ちが募る。弱気で、拒絶する彼女はいつもの思考回路とは異なっていて、何故そんなに嫌がるのかわからなかった。

「俺はたまにお前が分かんなくなる。世話好きなお前が拒否する理由はなんだよ?」

「だって、あたしがしゃしゃり出る問題じゃないじゃん? 杠ちゃんは垣根くんの方がいいわけで、あたしはその輪に入っちゃいけないって言うか……」

俺たちに追いつくように小走りをしていた天羽だが、徐々に声が弱くなると足を止めてその場に立ち尽くした。

なにかに恐怖するように、彼女は片手で頭を支えると弱々しく息を吐く。

それに気づいた林檎は俺の手を離して彼女の下に駆け寄ると顔を覗き込んで相変わらぬ無表情で話しかけた。

「天羽は私がいると邪魔?」

「……そうじゃなくてさ、あたしの方が邪魔じゃない? 可愛らしいお姫様と王子様の仲を引き裂くのは嫌というか、杠ちゃんと垣根くんが仲良くしているのを遠くから眺めてたいって言うか……」

「クソみてえな考えしてねえで腹くくれ」

「あ、ちよつと!」

うじうじ、うだうだ、ウザったい女を無視してそのまま929号室に到着すると、持っていたカードキーで部屋を開ける。

学生向けじゃない物件なだけはあるって、開いたドアの先はワンルームでは無く、無駄に広かった。

「ここ、住むの？」

「……独身貴族だったのに」

「デメエ結婚適齢期じゃねえだろ15歳」

2LDKの室内に靴を脱いで上がると、林檎は目に見えてテンションを上げる。キョロキョロと辺りを見渡し、玄関から続く廊下の壁にあるドアノブに手をかけた。

ガチャリと音を立てて扉が開くと、そこには目に痛いほどの桃色と黄色、緑色が目に飛び込んでくる。

肺を満たすほどの甘い匂いが鼻腔をくすぐる。

「お花がいっぱい」

「そこはあたしの部屋。今日はとりあえずここで寝てね、ベッドなんてここしかないし」

真っ白な家具を覆うのは色とりどりの花。ピンク色のチューリップ、黄色い向日葵、赤い彼岸花、白いマーガレット。季節感の統一されていない花々は憎たらしく咲き誇っていた。

初めて入る部屋の中にはいたるところに本が積み上げられており、たくさんの植物も相まって植物園や図書館に見える。ジャンルがバラバラな本に、研究資料と思しき紙束。角部屋だからか、窓もあり、月の明かりだけでも色を視認できるほど明るかった。

部屋の雰囲気を感じ取る、ここに隠すべき大切なものは置いていないと。

そして同時に気味の悪さを感じる。しかし気味の悪さに気づく前に、部屋に飛び出した林檎に気を取られてしまいその薄気味悪さに答えを出すことはなかった。

「あんまりキョロキョロしないの、これから当たり前になるんだからそんなに驚かないで？」

うるさく動く林檎の腰を捕まえて、そのまま体を抱き抱えると天羽はスタスタと部屋のベッドに彼女を下ろして笑顔を見せる。

皺一つないベッドに座った林檎を置いて荷物を下ろすと、学校指定のものではない大きなスクールバックを手を取って彼女はまっすぐ俺が立つ部屋の扉に向かった。

「垣根くん、ちゃんと杠ちゃんのこと見ててね？あたしこれから仕事だから」

「仕事？」

「そう、大事な仕事。1時間くらい空けるから、静かにしててよね。このマンション、大人ばかり住んでてすーぐ苦情くるんだから」

スマートフォンを手に玄関へ歩いていく彼女は再び革靴を履き始める。05もそれに続いてカブトムシ姿のまま彼女のバックに留まると、天羽はそれを見て薄く笑う。

「垣根くんも早く帰りなよー？寮生でしょ？」

「うっせえな、とつとと失せろバーカ」

「なるほど、反抗期の息子を持つ母ってこんな気持ちなのか」

「誰が息子だクソ女」

からかうように剽軽な態度でくすくすと笑う女にムキになって叫ぶが、もうそこに彼女はいない。

パタンと音を立てて閉じた玄関を睨みながら舌打ちをするが、このやり場のない怒りが彼女に届くことは無かった。

「くそ、言い逃げかよ」

「……行っちゃった。仕事って看護師のかな？」

「ちげえよ、あいつのシフトはもうない。大方、どこぞのスペースデブリの片付けに行っただらろ」

「なにそれ？」

ああ、イライラする。

ベッドに座る林檎の隣にどかっとな腰を下ろしてポケットから携帯を取り出すと、ベッドに身を沈ませた。

違和感を感じながらも、この部屋を物色することはない。女の部屋を許可なく引つ掻き回すのは趣味じゃないし、できた空き時間にやるべきことがあるのだ。

それに、大切なものは分厚いスクールバッグにでも入っているのだろう。持ち出した辺り、その説が濃厚だ。

部屋の違和感を解消するためにも、まずは彼女について情報収集するのが先決だ。

手に持った携帯でひとまずニュースサイトにアクセスすると、出てくるのは他国の宇宙開発について。何カ国もスペースシャトルを宇宙に飛ばしたと報告する記事が並ぶニュースサイトにため息を置いて、天井を仰ぐ。

「残骸なんて俺には関係ねーな」

暴走したどこかのシスターによって打ち砕かれた世界一の演算機は宇宙に未だ漂っており、それを狙ってどこの国も宇宙船を飛ばす。

きつとあのお人好しは助けたクローンにでも頼まれて壊しに行つたのだろう。

「問題は、こっちだな」

自分の携帯を開いて、いつかの8月に盗んだデータを呼び起こす。

俺の手から離れて一人で最強に突っ込んで行つたあの日。俺ではなくテレステイナにハッキングを頼んだあの日。

自分のスマホにデータ送らせたのが運の尽きだ。哀れな女は隠し通そうとする秘密を暴かれる。

「垣根、なにしてるの?」

「調べ物」

『シスターズ』を運用した『絶対能力者』への進化法」と題されたデータを開く。

絶対能力者へとたどり着くものは1名だけだとか、『超電磁砲』を128回殺害するだとか、『不死者』とかいう知らない能力者に協力を要請するはずだったとか、クローンを2万殺すだとか、そんな物騒な内容の項目は無視し、ただひたすらスクロールをして目的の項目へ読み進める。

忙しくて真相を追求できていなかったが、今ならちようどいい。

ボタンを押す手を止め、画面に映る文字の羅列を一つづつ確認していく。一方通行の実験に携わっていた研究所を照らし合わせ、あの暑い朝に言われた名前を見つけると口笛を吹いて喜んでしまう。

「みっけ」

上条に連れられ、初めてこの家に来た時のこと。

いつもとは違う、踝に届く長い金髪と火薬の匂いを纏っていた少女

が帰り際に伝えた名前。

あの日の言葉が鮮明に蘇る。

—水穂機構が業務撤回したね

随分と日は空いたが、今日、あの日の続きをしようじゃないか。

—聡明な垣根くんならこれくらいヒントをあげれば分かるでしょ？

挑発しておいて、勝ち逃げだなんて許しはしない。

「たしか、あの日に業務撤回したのは二つだったな」

「何の話？」

「なんでもねーよ」

あの日業務撤回したのは水穂機構とSプロセッサ社脳神経応用分析所のふたつ。

そしてその両方とも一方通行の研究に関与していた。

未だ解体されていない研究所に未元物質データマターの偵察隊を向かわせる。

200体のうちの何匹にその二つの施設の廃墟に偵察をするよう命令を下した。

至る所に潜む白い虫達はマスターからの命令が下されると各々空を舞って目的地へと向かう。

30分、いや、40分は掛かっただろうか、いち早く水穂機構に着いたグループから未元物質データマターによる連絡が入る。

それらと視覚を共有し、家にいながら研究所の中を見渡すとおかしな点が目に入った。

「あ？」

「どうしたの？」

「なんでもねーよ、心配してねーで遊んでろ」

無意識に零した声に隣に座る林檎が反応する。

なんでもないと行って彼女の頭を撫でてみると、彼女は少し落ち込んだような目をしてトテトテと本が積み上がる部屋の隅へ行ってしまった。

哀愁漂う背中に罪悪感を感じるが、かといって彼女に付きつきりに

なる訳にもいかない。

再び視覚を下位個体と共有すると、その有様に少し驚く。鉄の床が外れ、所々に焼け焦げた跡がある研究所はどう見ても異様な雰囲気に含まれていた。

「あいつにこんな芸当は……」

床に広がる小さな爆発で焼け焦げた跡に、一直線に焼き切れたような跡。拳銃なんかでは作れない跡に思わず顔を顰める。

アイツらは拳銃を使わない。他の暗部に心当たりがあるからこそ、断言出来る。

あの短気な4位を拳銃だけでいなせるとは思えないし、彼女の能力では勝てない。

結論、彼女はここにはいなかった。

「わざと違う方を言ったのか？なんのために？」

誤魔化すということは何らかの秘密があるはず。そう思って直ぐに別の部隊と感覚を共有しようとするが、部屋にいるもう一人の声で思わず中断してしまう。

「変な本ばかり」

「あいつ趣味がおかしいからな」

神学関連の本、語学の教科書や、医学書しかない部屋はさすがに林檎にはつまらないようで、綺麗に積み上げられた本を崩しては積み直す作業を延々と続けていた。

床に散らばる本にはよく知らないSF小説や、大人向けのライトノベル、教育学の専門書なんかも落ちており、ジャンルの幅広さからどれが持ち主の好みのジャンルなのかいまいちピンと来ない。ただ彼女の勤勉さが伺えるだけ。

「……つまんない」

「ちよつと待ってる。これ終わったら遊んでやる」

部屋の隅で丸くなる林檎に声をかけたあと、直ぐに別の研究所へ向かわせた部隊と視覚を共有する。

Sプロセッサ社脳神経応用分析所と書かれたその建物に簡単に侵入すると建物の管理室に移動させる。壁の中も移動できる未元物質データマトリ

なら、管理室を見つけるのに1分とかからなかった。

「……電気系統は死んでねえな、これならいけるか？」

管理室のほとんどの壁を独占するスクリーンに未元物質データマターを接続させ、電気を通すと、一気に光が着く。ランクの低いデータも消えておらず、撤退して行つた研究員たちのずきんさがよく分かる。

そのデータの中から残る監視カメラの映像を自分の携帯に送信させ、偵察隊の任務を終わらせると、彼らは各々の巡回ルートへ戻っていった。

「うっし、きたきた……つと」

送信したデータを見るため視界の共有を切断して、携帯のメールを確認する。

あの女があの日なにかしているのが分かればあの女の上に立てる。そう思ってファイルを確認するが、写っていたのは知らない人だった。

「……誰だこいつ」

踝まで届く鳥のように黒い長髪は顔の左半分を隠し、その隙間から黒い目が覗く。着ている服は何故か藍色のカンフー服で、黒いズボンに覆われた足が服の裾から伸びていた。

身長は恐らく俺より10センチから5センチ低く、男にしては華奢だ。

男なのか女なのかパツと見では少しわかりにくい中性的な人物が、白衣を着た若い研究員と並んで歩いている姿が画面に映っていた。

「なにが？」

「見るか？」

「うん」

意図せず呟いた言葉に林檎が首を傾げると、ベッドの隣に手招いて携帯を二人で一緒に並んで確認する。

構われて嬉しいのか、林檎は少しだけ笑っていた。

「こっちは……見たことあるな、先輩か。話したこともねえけど」

「髪の毛長い」

白衣の研究員が長点上機でのひとつ上の先輩だと気づくが、林檎は

それよりも髪の毛の長い方に目がいった。

髪の毛の長い金髪なら知っている。あの日の天羽は毛先のピンクも取り払って、セミロングより少し長い髪の毛を踝まで伸ばしていた。

「ほんとだな、あの日のあいつもこんぐらいだった……あ」

そしてそこでようやく気付く。

これがあの日の彼女だということに。

「……これ、天羽か」

「天羽？すごい、私全然分からなかった」

長い黒髪と黒目なんて体を操る彼女ならなんとかできるだろうし、デカイ胸だつて潰してオーバーサイズの服を着れば案外隠せる。

顔が半分も隠れているからパツと見わからなかったが、たしかにどこの国の人かいまいち分からぬミスティアスな顔立ちをしている。

彼女の真実、それが目の前の小さな画面に映っていた。

そして同時に気づく、この部屋の違和感に。

画面に映る藍色。それこそが違和感の正体だった。

藍色、空色、水色。青、蒼、碧。

この部屋も、そして天羽自身も、藍を身につけないのだ。色とりどりの花はあれど、青だけがなかった。

その事実が気がつく、思わず笑いが溢れてしまう。

彼女はこれを隠すために青を着ないのだ。

「なるほどな、これが隠していたい真実か」

色と見た目だけでこれほどまで変わるとは。

いつもとは違う清楚でミスティアスな印象が漂う画面越しの人物に思わず感心してしまう。

その変貌っぷりを褒めてやりたいほど。

今度、青い花でもプレゼントしてやろうか。

どんな顔をするだろう。バレたと思って顔を強張らせるか？それとも意図に気づかず笑うだけか？

早く伝えたい、お前の一番知られたくないことを知ったことを。

「つまり？」

「変装して悪いことしてんだよ」

「天羽、悪い子なの？」

「ああ、とつても悪い子だな」

長点上機の先輩、布束砥信と行動を共にするのは分からない。けれど推測のようなものは出来た。

きっと、私怨なのだろう。

Sプロセッサ社脳神経応用分析所は筋ジストロフィーを主に研究していた場所。

そして彼女の話によく出てくる妹の動かない足。

筋肉が衰えていき、若くても動けなくなつて死んでしまう不治の病。そして若くして死んだ、足の動かない妹。

その二つはきつと繋がっていたのだろう。

アイツが御坂美琴のために動いていたことも知っているし、分かっている。救うことを生きがいに行っている女が御坂美琴を助けることはわかっていた。

けれど、姿を隠してまで御坂美琴と別れて行動したのはきつとそういうことなんだろう。

一方通行の一件を知って、手伝いついでに復讐をしに行った。それが俺の見解だった。

「黒目の方が似合ってるって言ったらどんな反応するか、楽しみだな」

「でも今の目の色の方がキラキラしてるよ？」

「眩しいだけだろ、あんな気味悪い色素異常の目なんて」

それが分かったら途端に肩の力が抜ける。やっとなつ、彼女の秘密を知り得たのだから。

深く息を吐くと、林檎の頭に手を置いた。きっと今の俺は晴れやかな表情をしているのだろう。

「で？遊んで欲しいのはどこのどいつだつて？」

でなければ、こんな言葉が口から出るはずもないのだから。

45話：血の滲む

藍色の空を照らすビルの隙間、血が流れ出す脇腹を抑えてゆっくりと歩く。

ガラガラと銀色のスーツケースを引っ張りながら、フラフラとする足を無理やり動かすと電気が走るような痛みが体に広がった。

「つくそ、痛いわね」

赤髪をふたつに括り、サラシとスカートだけで守る体に名門校のブレザーを掛けただけの自分の体をビルの壁に預けると、脇腹に開けられた赤い穴から手を退かす。

7月に破壊されたスーパーコンピュータのデブリである残骸^{レムナント}。能力の出処、それを知るためその科学の脳を奪った。

またクローンによる実験が行われるのではないかと危惧した第三位、それを助けたい心優しい後輩など、面倒な輩を呼び込んだ代物だが、それを抜きにしてもこのスーツケースの中身には価値があった。「はあつ、はあ、どんだけ、血が流れてんのかしら」

格上の能力者と、自分の下位互換のと戦い、ボロボロになりながらも辛勝した。後は銀のスーツケースに守られた残骸^{レムナント}を届けるだけ。

だと言うのに体は言うことを聞かなかった。軽傷だったはずなのに、血は止まることなく溪流から流れる水のように溢れ出す。

「つは、あ、れ、から、だが……？」

体調がすこぶる悪い。壁にもたれながら一歩づつ前に進むが、一向に進まないのだ。刺された箇所が悪かったかのだろうか、どくどくと心臓は脈打ち、肺は酸素を求め。

ぐらぐらと揺れる視界に吐き気を催すと、地面に落ちた血液によって足を滑らせ転倒してしまう。

なんとか立ち上がろうと努力をするが、手先は震え、体は冷えていき、動く気力はなかった。

「つやば、しぬなんて、きいてない」
くるしい。

ただその一言が頭に浮かぶ。

あのツインテールの風紀委員ジャッジメントが使う短い鉄の棒に空けられた穴がここまで自分の体を蝕むとは思えない。

何かがおかしい。

それを分かってはいても、結論は出なかった。

どうにかしてこの苦しみから逃れなくてはいけない。そう思って身じろぐが、何も成果は得られなかった。

私の吐息が裏路地に木霊する。恐ろしいほどの寒気と心臓の鼓動が体をきつく縛り付ける。

誰か助けて。

「わっ、大丈夫ですか!?!」

裏路地の入り口、人工的な光を背にした誰かが声を上げた。

霞む視界から見えるのは赤いジャージ、確か藍鈴女子高校のものを着た背の高い女子生徒が駆け寄ってくる姿。

ふわっと風で巻き上がる高い位置で一つに結ばれたセミロングの金髪は緩くウェーブがかかっており、毛先は牡丹色に染まっていた。

緑と赤茶色のヘーゼルの瞳で私を捉えると、その学生はスマートフォンを取り出して泣き出しそうになりながら床に倒れる私に駆け寄った。

取り出した薄緑のスマホには何故か白いカブトムシのストラップだけが寂しく着いていた。

胸も大きく、女性的雰囲気纏う学生だが、随分と少年的な趣味でも持っているのだろうか。

「な、に……」

「大丈夫?!?!すごい怪我!」

取り出したスマホでどこかに電話をかけると、彼女は慌てたように電話相手に場所を伝え始める。

怪我人、病院、などの単語を呟いている当たり、救急車でも呼んでいるのだろう。

彼女の迅速な行動に安堵するが、同時に疑問も浮かぶ。

「あんだ、なに、もの……？」

こんな夜中に、こんな路地に、なぜ人がいる？

何故タイミングよく現れた？

どう考えてもおかしかった。

残骸を狙う別の刺客か？それとも任務を遂行できない私を口封じでもしに？

恐ろしい考えが頭を駆け巡る。この学生が敵である可能性は充分有り得るのだ。

動かない体に流れ出す血。寒気が襲い、まともに演算ができない今、この学生に襲われたら死は確実だ。

「そんなことより、手当を！」

「だれだつ、て、聞いてんのよッ！なんで、ここに、いる、の！」

チャックを下ろして赤いジャージを脱ぐと、彼女は横たわる私の患部にそれを当てようと手を伸ばす。真っ白いスポーツブラと肌を露出しているにも関わらず、彼女は恥ずかしがりもしなかった。

赤いジャージをさらに赤くしようと患部に押し当ててるが、その手を全身全霊で叩き落とす。

だっておかしいじゃないか。こんなタイミングよく助けにはいるだなんて。

「え、えっと、あたしは天羽慧糸。ランニングしてたらアンタを見つけ
て……」

「は、ラン、ニング？」

真っ青な顔で体を震わせてへたり込む学生は天羽慧糸と名乗った。ランニングをしていたと証言する彼女の足や腹部、胸の谷間は薄らと汗が流れており、街灯の光を反射していた。

顔を伝う冷や汗とは違う汗、そして太ももに巻き付けられたスポーツ用のペットボトル、高い位置のポニーテール、汚れた白と黄色のハイカットスニーカー、たしかにランニング中の女子といった風貌だ。

「ごめん、なさい、怒鳴って、しま、って」

「い、いえーあたし怪しいし、謝らないで？」

ジャージを脱いだことで服の下になにか武器を隠しているとも考えづらい。太ももを隠しきらない短いズボンが武器が入るとも思えないし、そもそもこんなに顔を青くさせて震える女子生徒に人が殺せそうとは思えない。

「ごめ、ん、な……さ、い……」

だから気づかなかった。

脅威じゃないことを理解したからこそその安心感か、傷口の痛みを耐えられなかったのかは分からない。徐々に微睡み、瞼が閉じようとした時、必死に介抱する女がなんて呟いたか知る事はなかった。

「大丈夫、すぐ終わるから」

重い瞼が閉じる。

最後に見たのは彼女が地面に置いたスマートフォン。

そのスマホにカブトムシのストラップが無くなっていたのに気付かず私に私の眼球を瞼が覆った。

「はあ、全く、震えも顔色の悪さも、操作できるってのに」

藍花悦でなく、天羽隼糸と名乗った自分は赤髪の学生が倒れる路地裏で壁に体を預けビルの隙間に流れる雲を見上げた。

あたしの能力によって本来致命傷になり得ない傷によって気絶してしまった少女、結標淡希に罪悪感を感じながらため息を吐くと顔を下ろし手で自分の髪を梳く。

「演技上手ですね、女優にでもなるおつもりで？」

「まさか」

すつとどこからともなく現れた垣根くんの顔をした05に褒められるとゾワゾワとした感覚が背中を襲う。

皮膚の血管を収縮し、血流を悪くすれば顔は青ざめるし、発汗を促せば汗は出て、自律神経による生理反応を弄れば体は恐怖を感じて勝手に震えてくれる。

全ては能力に依存した演技だったが、どうやら傍から見たら演技上手と認識されるようだ。

「てかあんたどこにいたの？あんた勝手にスマホから外れてどっか行ったでしょ」

「いえ、特に」

「……ま、いいけど」

突然現れた05はあたしの質問に少し狼狽えたように目を泳がせるが、それこそ演技だろう。

この生物達に感情はない、だからきつと垣根くん絡みの問題を隠しているだけか何かだ。深く追求することは無い。

「つたく、こーんなスペースデブリなんか持ち帰って、あたしの妹分を怖がらせんなっての」

特に05と話すことも無く、そのまま倒れる結標淡希の傍にしゃがむと服のポケットをまさぐった。

無造作に突っ込んであった無線機を壊すと、同時に彼女の患部を一応確認して再び立ち上がる。

もう彼女に用はない。

「しかし、言われるがまま赤髪のお下げの女を探しましたが、まさか本当にこの方が残骸レムナントを持っているとは」

「前情報ってやつだよ」

「9982号ですか？」

「そうそう、そゆこと。アンタ壊しといてよ、あたしの腕力じゃ壊せるか疑問だし」

05の言葉に適当に相槌を打つと、くるりと踵を返す。

前情報は前世の記憶ありきのものだから適当に誤魔化すしかないのだ。従順にしたがってスーツケースを破壊する05を背にし、結標淡希を抱きかかえて路地裏の奥の光へ足を向ける。不思議そうな05を置いて歩き出すと、それはヒヨコのようにあたしの後ろをついて

きた。

「さーて、とつととズラかろうかな。会うとめんどいやつもいる事だし」

「めんどくさい、とは？」

「知らなくてもいいことよ」

困惑するような声を出す05を置いて人工的な光が差す大通りに躍り出ると、くるりと振り返ってそれを見つめる。

にっこりと笑顔で答えるが、05は相変わらず意味がわからないと愚痴を零した。

重傷人を病院へ運び、スクールバッグを肩にかけて行きと同じセーラー服に着替えた後、コンビニ袋片手にあたしは帰路に着く。

垣根くんそつくりの姿をした05と二人体が触れるほど近くに固まって歩いていると、すぐ目の前にマンションが見えてきた。

「コンビニって、ご飯の材料も売ってるから便利だよねえ」

たわいもない話をしながら家路を辿る。

誰もいない道はとて静かで、あたしたちの足音と声だけがこの場にある唯一の音だった。

「そもそも料理出来るのです？」

「まあ、人並みには作れるよ。美味しいかは分かんないけど」

不本意とはいえ子供を預かることになってしまったのだから多少

は自炊をしなきゃいけない。そう思ってコンビニで材料を買ってきたのだが、05はあたしの料理の腕を心配しているようだった。

怪訝な顔をしてコンビニ袋に手を伸ばし、荷物を代わりに持つてくれた05だったが、それに反応すること無く淡々と質問に答える。

昔は能力なんか持っていなかったもので、前世では生きるために料理していたし、料理歴は結構長い。

こちらら前世では中学から高校まで妹の弁当を放任主義の親の代わりに作り、大学と大学院では口に合わないアメリカの食文化で何とか生き抜くため自炊して生きていたのだ。

とはいえそんなことを赤裸々に伝えることは出来ないので適当に誤魔化すと05はさらに眉間に皺を寄せる。

どうにも信頼されてないみたいだった。

「その割には料理を作るとは愚か、食べてるところを見たことないのですが」

「今は必要ないかなあって。サプリとかでコントロールすれば生きてられるし」

栄養学的観点からすれば、野菜とサプリだけで人間生きるために必要な栄養素は全て取ることが可能で、健康的に生きることが可能なのだ。

科学で証明されたことならばあたしにだってそれは実現できる。それでも05は納得いっていないようで、眉を顰めていた。

「それにしても甘いものを好んでいるようですが、必要ないのでは？」

「あたしにとってご飯を食べることは息抜きみたいなものだからさ、甘いものとか美味しいものは趣味みたいなものだよ」

「……よく分かりません」

ギョツとコンビニ袋を握りしめて05は小さく呟く。

分からないことを分かうとするそれに対してため息を零すと、05は俯いた。伏せた目は何を伝えたいのか分からない。

「分からないなら、分からないままでもいいさ。どうせアンタは人間じゃないのだから」

「そうかもしれませんが、私は貴女達を理解したいと思うのです」

「……表面上はなんとも言えるよ、哲学的ゾンビ」

理解することがないのなら、無駄な努力なんてしなくていい。優しく教えたつもりだったが、05はぐつと下唇を噛む。

いつもの無機質な声はどこか苦々しかった。

「哲学的ゾンビ、ですか。私に意識がないと言いたいのですか？」

「ええ、だって自ら行動を起こしたことないでしょ？」

内面的経験がない、意識がない。そんな紛い物にあたしのことが分かるわけが無い。

あたしにとってカブトムシ05は唾棄すべき異質なもの。そんなものにあたしを理解して欲しくなかった。

「……質問を変えようか」

道の真ん中で足を止める05にため息を着くとゾンビ二袋を持つその手を掴んで、髪を揺らし目と鼻の先に見えるマンションへ足を動かす。

静かな道はあたしの声を余計に響かせた。

「垣根くんが、マスターが死んでしまったら、死に瀕したら、分身である君はどうするの？」

「もちろん助けます、それが私の生まれた理由です」

「ほら、考えてない」

05の腕を掴む手に込める力を強めると、05は弱々しく言葉を零す。それはよろめきながらあたしに引っ張られてフラフラと着いてきた。

「貴女だって同じじゃないですか」

「そうね、あたしは誰かを救うために生きている。それがあたしの存在理由。確かに似てるかも」

「なら、」

「でもね、あたしが人を救いたいと願い、それが正しいと信じていて、そのために生まれてきたと思うのはあたしのエゴ」

「エゴ、ですか」

「そう、エゴイズム！誰かを幸せにするという結果が欲しくて人を救う。あたしの正義はエゴの塊だ」

ピタリと足を止める。

マンシヨンの目の前で眩しいライトを浴びながら05に笑いかけると、それは建物から零れる痛々しい光に目を細めた。

「でもあんたは違う。命令されたからでしょ？そうやって命令されて、そうやって言われて、だから命を捨てる、誰かを助ける。自我がない」

「……それは」

「エゴに基づいて他人を幸せにすることが正義であり、幸福。ならエゴを持たず、他人を幸せにしないものは正義でもない。そしてエゴを持たないものは人間じゃないでしょ？」

静かな空気が漂う。口を開かない05の頭を優しく叩くと、そのまま目の前のマンシヨンに入っていた。

エントランスホールのガラスの自動ドアをカードキーで開くと俯いたままの05の手を引っ張って早歩きでエレベーターへと駆け込んだ。

エレベーターの中、口を閉ざした二人の間には会話はなかった。

ピカピカと現在のフロアを示す光がひとつ上がっていく。9階まであと少し。

「……何故、貴女はそこまで他人の幸福に執着するのですか」

チン。

軽い音と共にエレベーターの扉が開く。

沈黙を破った05の言葉は質問するまでもない、くだらなくて簡単なものだった。

「それがあたしの幸せだからだよ」

しかしその答えは05にとって面白いものだったらしく、自我もないくせに小さく声を洩らして笑う。

エレベーターから飛び出て軽いステップを踏むあたしをそれは苦痛に耐えるような酷く醜い目であたしを見下す。

「ふ、はは、幸せ、幸せですか。貴女は存外頭が悪いのですね」

「なに、今更気づいたの？」

とても嫌な目だった。

あたしを馬鹿にするような、哀れむような、そんな冷たい目。

その目を鼻で笑うが、05はその目を止めることは無い。

「他人を幸せにしても、自分は幸せになりません。他人の為に自分を消費するのはお世辞にも頭がいいとは言いがたい」

「あたしは元々見た目通り頭悪いんだよ。別に神童でもないし、天才でもない。生まれてこの方努力一筋なんだよ」

みんな、みんな、あたしを過大評価しすぎだ。

あの醜い神も、お前も、彼も、あたしに期待をかけすぎだ。

あたしに出来るのは努力だけ。

才能はないし、特別なものは何も持ってない。

妹が生まれた時、初めて努力し始めて、何年も何年もかけて目標に向かった。結局叶うことはなかったけれど、それでも報われると信じて努力を重ねてきた。

能力だって、あのふざけた神があたしをこの世界に降ろす為に体を作りかえた時の副産物。

勉強は前世の知識。前世だって大学には入れたのは小学生の頃から努力したおかげ。

「お粗末な頭で必死に考えて、必死に足掻いて、それでハッピーエンドを目指す。それが天羽彗糸のやるべき事」

「それは義務なのですか？」

「そう、義務。あたしが生きるための理由、幸福」

辿り着いた我が家のドアに薄っぺらい鍵を反応させると、ドアノブに手をかけて静かな室内の中へと滑り込んだ。

いつもは無い男物の靴と、格段に小さい子供の靴が綺麗に並べられた玄関になんとも言えない嬉しさを感じながら明かりが漏れる自室のドアを開く。

「貴女の言うハッピーエンドは迎えられるそうですか？」

「それは……一目瞭然じゃない？」

荷物を置いて、明るい部屋に入ると目の前の光景に足が止まった。カモフラージュのために買った甘い花の匂い、崩された本。

この間教えた神曲や、詩集、教科書に、哲学書。きつと目の前の少

年と少女が暇潰しに読んだのだろう。優しく微笑んで静かに落ちて
いる本を拾うと、05もそれに続く。

ベッドの上、目を瞑って静かに眠る少年と寝息を立てる小さな子
供、まるで親の子のように二人は眠りに着く。その姿に05と二人顔
を見合わせてくすくすと互いに笑い会う。

幸せそうな彼らの姿は本当は起こらなかつたもしもの姿。運命を
捻じ曲げた結果は誰から見ても望まれた幸せだった。

「努力って、来世でも報われるんだね」

幸せそうに眠る子供たちは何よりも愛らしく、何よりも愛してい
た。

46話：大覇星祭

ゆらゆらと漂う嗅ぎなれた匂いと白い世界。何処か知らない世界の中、呆然と立っていることに気づく。

何も無い白い世界。これはきつと夢だろう。とてもわかりやすい明晰夢だ。

何処までも白い視界に警戒しながら辺りを見渡すと、視界の端に何かが見える。

それは禍々しいものだった。

宇宙を凝縮したかのような醜く美しい何か。定まらない形をしたその頭上には三角の光がまるで優しい風に当たる風車のように回っていた。

一体何者なんだと、口にしようとして唇を動かしたその刹那、力強い風が体を吹き飛ばす。

何も教えないとでも言うかのように、強い風が吹き荒ぶ。霞む視界の中、歪んでいく白と黒は混ざり合い、最後は濁った黒となった。

誰かに体を揺さぶられる。優しい振動に目がゆっくりと開く。

そこには白い世界も、穢れた何かもいなかった。

白いベッドの上、軽いブランケット越しに体を揺する黒髪の少女と目が合うと彼女は優しく微笑んだ。

「垣根、起きて」

微睡みの中、はつきりしない意識で体を起こす。淡いピンクの薄手のブランケットに、白い枕、柔らかいベッド、いい匂いのする部屋に、ローテーブル、部屋の隅に積み上げられた本や書類。

そこまで見てやつと今の状況を把握する。

「……そうか、寝ちまつてたか」

ブランケットに手を置く林檎をぼんやりと見ながら少しづつ目を醒ましていく。

昨夜、林檎に本を読んだり、絵を描いたりと世話を焼いていたらそのまま寝てしまったようだ。

まあ、嫌いな女の家なので迷惑を掛けても困ることは無い。そのまま布団の上でブーツとしていると、何やら訴えるように林檎がこちらにキラキラとした眼差しを向けてくる。

「垣根、ご飯」

「あ？」

何やら急いでいるような林檎に引っ張られてベッドの目の前のローテーブルに移動すると、目の前に料理とメモ用紙が置いてあることに気がつく。

いい匂いにつられると料理の前に座り、そのメモ用紙を手にとって読んでみる。そこにはやけに大人びた字で05と学校に行くこと、料理は自分で作ったこと、そして部屋を物色しても構わないことが書かれていた。

バッチリ化粧してセーラー服を着込む彼女が思い浮かぶと、ため息をついてテーブルに並べられた朝御飯に目を向ける。

卵、ベーコン、キノコとほうれん草のガレットに、プルトマト付きのサラダ、レトルトのコーンスープ。

この間林檎を連れていったカフェのようなラインナップにだ。それがよほど嬉しかったのだろう、林檎は乏しい表情筋を精一杯使って笑顔を浮かべる。

「ガレット……？」

「食べたいって垣根に言ってたの聞いてたみたい、早く一緒に食べよう？」

「なるほどな……」

どうやら家主は子供を喜ばせることが得意らしい。起きてすぐ食べれるようにと部屋に置いておくあたりも彼女の性格が表れている気がした。

皿の傍に置かれたナイフとフォークを手にしてガレットを小さく

切り分けるとそれを口に入れる。毒は入ってなさそうだ。

料理を口に運びながら改めて部屋の内装をみるが、やはり青はない。家具は全て白、飾られている花は全て青以外の色で、開けっ放しのクローゼットからは青のないシャツやズボンが見えていた。パツと遠くからみる限り、スカートはこの間のワンピースしかないように、物凄い違和感を発していた。

部屋の主のファツションセンスにとにかくいうのも忍びない。

この部屋唯一の暗い色であるテレビをつけて、そのまま食事を進める。天気予報だとか、起こった事故だとか、ニュースキャスターから次々と出てくる情報に耳を傾けながらゆっくり手を動かす。

何も考えずに情報を右から左へ受け流してとろける卵とベーコンを口へ運ぶと、美味しいご飯に喜んでいた林檎が途端にフォークを動かす手を止めた。

「ねえ、これなに？」

「あ？」

行儀悪くナイフでベッドから反対側の壁にかけてあるテレビを指すと彼女は首を傾げる。

体操服姿で走る学生たちを写した映像は彼女の興味を引くに十分だったようで、フォークに刺さったきのこを忘れて食い入るようにテレビに視線を注いでいた。

「大覇星祭のことか？これは去年の映像だな」

「気になるのか？」

「うん、なんか楽しそう」

大覇星祭、それは9月下旬の学園都市全域で行われる大規模な体育祭のこと。

全ての学校の生徒が見世物として夢や希望を追う反吐が出るような行事。クリーンなイメージを持たせるだけの広告に特に興味を抱くことは無かった。

目を輝かせて答える林檎には申し訳ないが、彼女の言葉に同意することは無い。

「行きたい」

「……まじか」

しかし自分の中で結論を出したところで、彼女は完結に要望を伝えた。

大人しくても所詮は子供、興味が出るのは分かっていた。しかし想定内の答えとはいえ、実際に言われたら困る。

「つたく、しょうがねえな」

それでもなぜか俺の口からは腑抜けな声がもれていた。

一度言ってしまった言葉は戻せない。やってしまったと思い頭を抱えながらも、なぜか心の奥底は笑っていた。

初めて守れた子供の些細な願い叶えられなくては第二位の名が廃る。それにあの馬鹿女が騒ぎを起こさないか心配だ。

そんな言い訳を胸に、暖かく甘いコーンスープで胃を満たした。

少し寒さを感じる9月19日、灰色にピンクと白のラインが入ったブカブカのウインドブレーカーのチャックを一番上まで閉じて、風を遮断する。それでもジャケットから伸びる防寒具がついてない足は風を敏感に感じとっていた。

寒さを感じない体でも風に当たると体は冷えるし、いちいち演算をするのも馬鹿らしく思ってしまう。

賑やかな喧騒の中、壁に取り付けられた大きな街頭ディスプレイの目の前で黒い携帯を握りしめて一人佇む。

脱色された金色の髪を揺らしてマイクに向かって優しく喋る常盤

台の女王と、その柔らかな声をかき消す程の大声で叫ぶ熱血少年が映るディスプレイを眺めながら電話の主の言葉に耳を傾けた。

「ぼくを探してた?」

調整したソプラノ声を潜めて電話の相手に問う。

いつもとは違う少年らしい声で呟くと、電話相手、駒場利徳はため息を着いた。呆れたように短く息を吐くと彼はコピー機のような淡々とした口調で話を続ける。

「……大覇星祭の選手宣誓の件でな。まあ映像を見れば見つかったないのは分かったが」

「でもありがとう。心配してくれるのはありがたいよ」

「……そうか」

どうやら藍花悦に大覇星祭の選手宣誓をさせようと運営が搜索していたらしい。

今年の選手宣誓を^{レベル5}超能力者に任せるといふ頭のネジが外れたようなトチ狂った企画を考えていたことに戦慄すると同時に、見つからなくて良かったと安堵した。

自分ならまだ前世での職業や経験があるため大勢の前で人当たりのいい笑顔でスピーチができると思うが、他の人間には無理だろう。垣根くんは頼まれた時点でキレそうだ。

「ありや、切られた……ま、いつか」

ありがとうとだけ伝えると、駒場くんは直ぐに通話を終わらせる。

ツーツーと短い電子音が鳴る携帯を項垂れながらしまうと、再びディスプレイに目を向けた。削板軍覇と食蜂操祈の選手宣誓が終わり、大覇星祭の情報を映す画面はとて賑やかに見える。

「天羽、なにしてるの?」

あたしの知らないところで知らない面倒事が起こらないといいが。肩を落としながら大きい画面から目を逸らすと、そこへ聞き覚えのある声の黒髪の少女が声を掛けてきた。

黒髪のボブカットに、黒目。カーキ色の七分丈のズボンと、同じ色をしたブカブカのブルゾン、淡い紫色の花の写真がプリントされた白いシャツを着込み、白いスニーカーを履いた少女、杠林檎は首を傾げ

てあたしの顔を覗き込む。

「ん？お仕事の電話……って、あれ、なんでいるの？」

「垣根ならあっち。天羽の競技見に来た」

「いや、あたし競技でないし……」

どうして彼女がいるのか理解できないまま、30センチ以上は差がある杠ちゃんと目線が合うようにしやがんで聞くと、彼女は屋台が並ぶ道路を指さした。その指の先を視線で辿ると、茶色と白い髪の少年姿が視界に入る。

何名かの女子生徒に囲まれ笑顔を浮かべるジャージ姿の美少年達。自分の知り合いだと気づくのにそこまで時間はかからなかった。

子供を放って置いて女性に優しくするのは少し腹立たしいが、眉目秀麗な人間の宿命だと考えれば仕方ないのかもしれない。

「女の人が怖くて逃げてきた」

「……イケメンの双子もどきは大変だね。あたし移動しなきゃいけないし、面倒見れないんだけどな」

「移動？どこか行くの？」

「うちの学校の野郎どもの棒倒し……あの人達おいて二人で行っちゃう？」

杠ちゃんの手を握り、ポケットに入れたパンフレットを二人で確認する。

もうそろそろいつかのアニメで見た棒倒しが始まる時間だ。行きたくないが、巡回ルートと被っているのだから仕方がない。

仕事道具を入れた重い服にうんざりしながら立ち上がり、未だ生徒徒に絡まれる彼らを遠目から眺める。助けに入るつもりは毛頭ないし、なんなら置いていってもいいくらいだ。

どうしているかはわからないが、杠ちゃんに引っ張られて嫌々来たのだろう。なら彼らが楽しい方を優先するべきだ。

杠ちゃんの手を握って次の場所に行こうと彼らから視線を逸らして足を動かす。

しかし次の瞬間に誰かにグツと髪を引っ張られ、足はその場に留まることになる。誰かは見なくても分かっていた。

「お前どこ行くこうとしてんの？」

「げ、バレた」

ピンクの毛先を掴んでイラついた口調でその人はあたしを睨む。

金に近い茶色の髪、どこの学校でもない市販の黒いジャージをヤンキーのように着崩す少年は学園都市超能力者^{レベル5}第二位の垣根帝督。

そして隣には彼そっくりな見た目の白ジャージを着込むカブトムシ05。

「すみません保護対象、勝手について来てしまつて」

「いいよ別に、怒つてないから」

「テメエがいねえから女に絡まれたじゃねえか責任とつて昼飯奢れ」

眉を八の字にして落ち込むように肩を竦める05とは違い、垣根くんは悪びれもせず未だあたしの髪を掴む。

離すように手を軽く叩くと、不服そうな顔に眉間に深く皺を刻んだ。

「えー……？あたしに責任擦り付けるの？自分のせいなのに？楽しそうだったし遊んでくれれば良かったじゃん」

「うるせえ女に囲まれて何が楽しいんだよ、うるさいのはお前と林檎だけで腹いっぱいだ」

「別に強がらなくていいんだよ？勝手に連れて来たことはちよつと怒つてるけど、杠ちゃんならあたしと05で面倒見てるから行って来れば？」

「黙れ殺すぞ」

「理不尽の極みじゃん……」

今度は意味不明な怒りとともに頭を叩かれる。俺様気質で自分勝手な子供っぽい彼に乾いた笑みが浮かんでしまう。

子供は何を考えているかよく分からない。そこが愛らしいと言えるが。

しかしなぜこの場に彼がいるのか分からない。少し疑うような視線を彼らに向けると、それを察したのか05は朗らかな笑みを浮かべた。

「保護対象、マスターは心配しているのです」

「何を？」

「か弱い貴女を一人にすることをです」

「待って、あたし喧嘩売られてる？」

垣根くんと05の二人であたしと杠ちゃんを囲むように見下ろす。

いつもの無機質な声で人の神経を逆撫でするようなことを貼り付けた笑みで言い放つ05に若干腹立たしきを感じるが、それに気遣いもせず05は話を進めた。

「貴女はいつもいつもいつも、何かやらかしてます。木原相似みたく怪しい実験に身を売ったり、マスターと初めて会った時のようにマトモでない貴女の唯一自慢できる体型に売春目的の野郎がやって来たり、変な事件に巻き込まれたりなどが考えられます。なんなら大覇星祭が終わった後に貴女が五体満足で生きてるか想像が出来ません。なので貴女を見張るのは必然です」

「あたしデイスられてる？ねえ、なんで？」

「口答えしてねえで黙って目の届くところにいろ。やらかす未来しか見えねえんだよ」

まるでやんちゃな小動物を見るかのようにあたしの頭をぐつと片手で抑えると、垣根くんは怒り気味にため息を吐いた。

ため息をつきたいのはこっちだ。

背を縮めるかのように頭を抑える垣根くんの手を払おうと腕を握って退けようと力を入れるが一向に退かない。筋肉量を増やしてゐるのに。

馬鹿力をこんなところで使うなど目線を送るが、彼はいつもと変わらない悪戯つ子のような笑みを浮かべていた。

「やらかすって……」

「初めて聞く係の腕章つけてるのが大きな証拠だろ。なんだよ緊急係って、聞いたことねえよ」

頭から手を退かし、今度は右腕に付けられた赤い腕章に手を掛ける。緊急係と赤い布地に黄色で書かれた腕章は他で見られるようなものではない。

あたしとつい最近出来た複数の部下が付いているもので、馴染みの

ないそれに垣根くんは険しい顔をする。疑うような視線がチクチクと降り注ぐ。

「……まあ、これは統括理事会の知り合いに作って貰った係だしヤバそうなのはわかるけど、一応ちゃんとしてんだからね?」

「ん? 作つ、た?」

「あれ、言つてないっけ」

針のような視線から逃れるため杠ちゃんの手を握つてゆつくりと歩き出す。

渋々後ろを着いてくる少年の鋭い目付きに背中を強ばらせながらため息をこぼして道を進む。賑やかな通りの隅を歩いているからか、自分の声がやけに大きく聞こえた。

「普通に大覇星祭とかダルいしき、休む言い訳が欲しかったんだよ」

「ダルいだけでサボるんじゃないやねえ不良女。それがその腕章となんの関係があるってんだよ。それなら放送とかに行けばいいだけじゃねえか」

灰色のウィンドブレーカーとカーキのブルズンを挟むように黒いジャージと白いジャージがあたしと杠ちゃんの両隣に立つ。片腕と片手が塞がれた状態に不満を覚えるが、特に怒ることは無い。

早歩きであたしたちに追いつくと、垣根くんは右腕の赤い腕章を掴んで不機嫌そうに呟いた。

「極力地味な仕事に回りたい、かと言って大覇星祭に深く関わるのは嫌だ。やるなら風紀委員ジャッジメントみたいな仕事がいい。でも風紀委員ジャッジメントに入つてない」

「つまり警護と称して散歩したかったわけだな?」

「なので上に掛け合いました」

「は?」

杠ちゃんを抱き上げて、狭い道を通る。

四人で並ぶには狭い道は、横一列に並ぶ数が三人に減ると途端と窮屈さを感じなくなった。

「今までの大覇星祭で出た負傷者、重傷者をリストアップし、保健委員だけでは不十分なこと、熱中症、脱水症状、夏血栓、低ナトリウム血

症の危険性をとにかく強く訴えた。巡回型の保健員が必要じゃないかと」

「低ナトリウム……？」

「訴える前に努力の方向性がおかしいことに気づいてくれ」

「とにかく、そう言ったら上層部があたしの能力を買ってくれてすんなり特別措置をしてくれたの」

淡々と事情を説明すると、あからさまに嫌そうな顔をされてしまう。馬鹿にするような腹立たしい表情をして隣を歩く彼にまたもや頭を叩かれると彼は頭を抱えて肺から大きく息を吐いた。

「ああー、お前ほんとさあ……どこからどう見ても罨だろ……」

「でも緊急係ってなに？」

「ジャッジメント風紀委員みたいな感じ。パトロールして、近くに重傷者が居たら救急車の代わりに駆けつけるの。救急車より迅速に治せるからね」

「なるほど……？」

腕に抱えた少女の質問に笑顔で答えると、彼女は首を傾げながらも頷いた。

新しく買った新品の服と、ずっと着ていたブルゾンをぎゅつと握り大人しく抱っこされている杠ちゃんはとても小さくて軽い。

あたしが高校一年生の頃、妹は9か10歳。同じような小ささと軽さだった。

そう思うと自然と手に力が入る。離しては行けないと、ぐつと手を強く握る。

「ですが貴女は特殊とはいえ大能力者^{レベル4}ですし、そんなすんなり要望が通ると思えないのですが」

「相手も同じことを考えてたっただけだよ」

「……つまり？」

杠ちゃんと同じように不思議そうな目でこちらを伺う05に笑いかけると、彼は緑の瞳を逸らす。

白に近い淡い茶髪に白い肌、緑のラインが入った白いジャージを着た彼はいつもより人間らしかった。

「大覇星祭、本来なら厳しい学園都市の警備が緩む日。外からイケナ

イものが来る可能性はある」

足を早めて声を潜めて答えると、彼らは同じ顔で同じように眉を顰める。

この日に起きる出来事()を知っているあたしからすればこの処置は当然だった。自分から志願したのも同じこと。

魔術への対抗策がなく、行動が制限されていては今日起こることに介入することも難しくなる。

だから部下を作ったし、上層部に打診した。コネは有効に使うべきだと、経験上知っているからこそ特別処置を貰えたのだ。

「不死身で、しかも05を経由すれば200の監視カメラが使えて、第二位である垣根帝督を主人公ヒーローに仕立て上げた異常分子。それがこの学園都市でのあたしの評価だからね、こういう処置を取るのは当然でしょ」

「……何の話だよ」

「つまり、アレイスターはあたしを管理しやすく、そして問題に巻き込まれやすくしたいわけ」

ほとんど望み薄だったリクエストが実現しているのもきつと彼の都合がいいから。

それを理解してるからあたしはこんな臭い腕章をつけているのだ。薄く笑みを見せると、垣根くんは目を鋭くさせて顔に影を落とす。

嫌そうな顔。そんな顔をして欲しくて言っている訳では無いのに。

「彼が想定してない不慮の事故が起きてても、あたしが近くに居ればリカバリーが出来る。アドリブが得意な人ではあるけど、修正できるならをしておいた方が良いつて思ったんでしょ？」

「……テメエは一体何を知ってるんだ」

「ほとんど何も知らないよ。特にここから先の未来は」

物語を一部知っているとはいえ、見ていない最新作に関しては大まかな話しか知らない。

どうやって動くか、どうやって救うか、取り返しのつかないことになる前に動くためにあたしはここにいる。

「それより早く移動しようよ、棒倒し終わっちゃう」
そのためにはまず物語の初めに向かう他あるまい。

47話：厄介

歓声で賑わうスタジアム。観客が入り乱れる通路の手すりにもたれ掛かりフィールドを見渡すと、隣に立つ小さい少女が声を漏らす。「凄かったね、天羽の学校」

「まあ、上条くんがいるからねえ……勝つ未来は見えていたというか」初めての観戦が終わり、先程まで棒を倒すためにフィールドを走り回っていたクラスメイト達をキラキラとした目で見つめる杠ちゃんの視線に複雑な感情を抱くと一人ため息を吐く。

誰かと何かをするなんて無理、協調性のないあたしには擦れた意見を言うことしか出来ない。子供に対してそんな物言いをするのもどうかと思うが、そんな言葉しか出なかった。

既に選手は退場し、次の種目の準備を始めるフィールドを背にして手すりに体重をかけると今度はあたしの擦れた発言に背の高い少年が反応する。

瓜二つの顔の少年二人が別々の表情を浮かべる姿はなんとも愉快で可愛いと言うべきか。

「まあ上条盾にすれば何とかかなりそうだもんな」

「代わりに上条くん過労死するだけだからね」

「どうまがどうしたって？」

瓜二つの少年の片割れ、垣根くんと一緒に不幸な少年の疲労を心配している、突然目の前にどこからともなく白く小さい生き物がとび出てくる。

ヒラヒラとした白い布を被ったその人に思わず驚くと、彼女は笑顔を見せた。

「うお、びつくりした！」

「おや、貴女は……」

「やつほーけいとーていとくー！」

金で縁取られた白い修道服に、銀髪碧眼。この物語のヒロインであるインデックスちゃんが笑顔で前に立つ。

周りを見渡してみると、どうやら彼女一人きりのようで見慣れたつ

んつん髪の少年はいなかった。

「あ？インデックスじゃねーか」

「ねー、とうまどこにいるか知らない？」

そしてそのいない保護者はどうやら彼女の探している人物だったようで、首を可愛くこてんと傾げて見上げてくる。

SNSに蔓延る小動物の動画なんか目でもない可愛い顔に心が動かされると、垣根くんの隣に立つカブトムシ05に助けるよう目線を投げた。

「あー……05、見てあげて」

「彼なら学校の方かと思います。先程ナンバー138が目撃していました」

「だつてさ」

間髪入れずに答えた05に感心しながらそのままインデックスちゃんに目を向けると、彼女は喜びながらも驚くような複雑な表情を浮かべる。

「ありがと……つて、ていとくが二人いるんだよ!？」

「こんにちは、禁書目録。会うのは初めてですね」

「あー弟だ、弟。めんどくせえからそれ以上は聞くな」

混乱しているのか垣根くんと05を見比べると、目を丸くしてぽかんと口を開けた。

確かに全く同じ顔の人間が並んで、しかも片方は色素が異常に薄いなんて普通の人ならば驚くだろう。

それに対して説明するのを面倒くさがった垣根くんは何も聞くなと釘を刺す。少し戸惑った様子のインデックスちゃんだったが、あたしと垣根くんの間にいる杠ちゃんの小さい声に反応するといったの間にか話題は変わってしまった。

「垣根、誰……？」

「友人の同棲相手だ、仲良くしろよ？」

あたしと垣根くんの間立つ杠ちゃんは垣根くんのジャージの袖を掴んで困ったように眉を顰める。

それに答えるように杠ちゃんより少しだけ背の高いインデックス

ちゃんは困惑する少女に笑顔を見せると、彼女の手を取って笑いかけた。

「私はインデックス！あなたは？」

「……林檎、杠林檎」

「よろしくね、りんごー！」

「よろしく……？」

原作じゃ見ることの無かったシーンに少し目眩が起きそうになるが、ぐつと感情を堪える。

各作品ヒロインが仲良くしている。

例えそこまで愛着がなかったアニメの作品といえど、片方は死にゆく運命だったのだ。喜ばないはずがないだろう。

「ところでインデックス、こんな所で暇潰ししてねえで愛しの上条のとこ行ってこいよ。多分アイツも探してるぞ」

「いえ、もう既にこちらに向かっているんで、それは悪手かと」

ニコニコと四人の可愛らしい会話に耳を傾けていたが、05の言葉と同時に誰かのスニーカーを踏みしめる音が微かに耳に届くとすぐさま笑顔を封じてそちらへ顔を向ける。

キユツと靴を地面にこすり合わせるその音の先には、クラスメイトの一人がポツンと携帯を握り締めて立っていた。つんつんと尖った黒髪に、同じような黒の瞳。

それがクラスメイトで、この世界の中心人物、上条当麻であることに気がつくのにそう時間はかからなかった。

「インデックス！ここに居たのか！」

「どうま！って、なんで涙目なの？」

インデックスちゃんの顔を認識するや否や、ぽかんと立っていた上条くんは何故か打たれたように赤く腫れた顔に涙を薄っすらと浮かべ迫ってくる。

その表情に疑問が尽きないインデックスちゃんは彼の心配そうな大声を無視してこてんと首を傾げた。

「よお、上条、インデックス放ったらかしてどーこ行ってたんだよ」

「お久しぶりです上条当麻」

言葉にならない怒りやら心配で頭を掻く上条くん、垣根くんたちが話しかけると、空気は一気に明るくなる。

やはり女子より同性同士の方が話しやすいのだろうか。明るい主人公と暗い——この場合は闇を知っているという意味だが——準主人公、波長は合わないはずなのに何故か仲良く見えた。

というより境遇や野望を考えると、垣根くんが仲良くしてやっているに近そうだが。

「垣根！それに垣根弟！久しぶりだな、2週間ぶりか？」

「その説はお世話になりました、保護対象が」

「05？喧嘩売ってるでしょ？」

挨拶もせず、彼らの会話をくだらない思考の外側で聞いていると突然話を振られ、思考が一気に引き戻される。突然とはいえ振られた話題に冗談交じりに返事をする、それに05ではなく上条くんが眉を八の字にし、顔を顰めた。

「てか天羽、お前休みって聞いてたんだけど？」

「公欠」

「ああ……なるほど」

彼の疑問に簡潔に答えると、彼はあたしの腕についた腕章を見て苦笑いを浮かべた。

そして腕章に向かっていた彼の視線は次にあたしと垣根くん、間に立つ少女に移る。

初めて会う幼い少女と目が合うと彼は何を妄想したのか胸を押さえてあたしに怪訝な顔を向けてきた。

「……天羽、隠し子がいたんだな？似てねえけど」

「誰の隠し子だつて？もっかい言ってもいいんだよ？」

「冗談です、すみませんでした……」

面白くもない冗談に握った拳と笑顔を見せると、上条くんは90度に腰を曲げて勢い良く頭を下げる。中身が年増とはいえ15、6の同級生になんてことを言うのだ。

ともあれ流石にクラスメイトの頭をずっと見ているのも忍びない。「怒ってない」と簡単に伝えると、彼は笑って頭をあげる。そして人

懐っこい笑みで少女たちを見比べて自己紹介を求めると、静かな杠に困って最終的にあたしを見上げてきた。

「えっと、この子は杠林檎。ちよっと訳ありでね、一緒住んでるの」「新しく出来た友達なんだよ！ねー、りんごー！」

「うん……新しい……おとも、だち」

屈託のない上条くんの笑顔に怖気付いたのか、警戒心が強まった杠ちゃんの代わりに簡単な紹介を述べると、インデックスちゃんが意気揚々とその間に割って入る。

出会って数秒、数分にしか満たない人間を共と呼ぶその神経の太さに一瞬驚くも、杠ちゃんが嬉しそうな顔をしているのに気付くと静かに口を閉じる。

人との関係を他人がとやかく言うのはやめた方がいいだろう。

「そっか、俺は上条当麻だ。よろしく、杠」

「うん、よろしく、上条」

ほんわかとした時が流れる。どうせならシリアスな話からこの暖かい空気を保ったまま話を進めて何も起きない大覇星祭でも楽しみたいと、ぼんやり頭に過ぎる。

そんなことができるはずもないと分かってはいるが、翼が生えたりだとか嫌いな生命体に出会っただとか、前世含め20年ぶりの子供との生活だったり、精神は疲弊しているためまともな思考ができない。

「ねえとうま、お腹空いたんだよー！」

「垣根、私も」

ふわふわと外れた思考は誰かの腹の音で否応無く現実に戻される。朝ごはんも食べさせたのどこにお腹が空く隙間があるのだろうか。

食べ物を摂取しなくて済む自分にとっては不思議でしようがないが、成長期の子供たちの食欲と成長の止まった自分とを比較するのは時間の無駄だ。

「子供は食欲旺盛だな」

「じゃあみんなで食べに行こうか」

「屋台エリアまで行けば山ほどあるしな」

「では向かいましょう」

腹を空かせた子供たちに、保護者四人(?)は互いに顔を見合わせる。

子供たちの期待の籠った熱い眼差しはあたしたちを香り立ち込める屋台へと足を向けさせるほどの力を秘めていた。

しかし、その足は無慈悲にも一つの看板によって道を塞がれる。

「ごめんね、ここ、もうすぐパレードが始まるじゃんよ」

黒い長髪を低い位置で結び、警備員アンチスキルの藍と黒の制服に身を包んだ女性が行止めと書かれた看板を先頭を歩いていた上条くんの前に立てかけた。

何度か色々な事件で会っているその警備員アンチスキル、そしてあたしが通っている学校の先生である彼女、黄泉川愛穂先生は申し訳なさそうにあたしたちに謝ると、上条くんは肩を落とす。

「やはり不幸なのが上条当麻……アイデンティティに愛されてるね」

「すげえなお前、ちようど行く時に看板立てられるってなかなかない経験だぞ」

「くそお……」

まさか本当にアニメ通りのことが起こるとは。こうなると分かっ
てはいたものの、実際起こるとなんだか不思議だ。

屋台へ向かうための近道、大通りを渡って目的地に行くはずだったが、まばらに集まる人々と、立て掛けられた看板がそれを阻害する。どうやら何かしらのパレードがあるようだ。

前世から知っているパレードなんて千葉に位置する大きな遊園地や御神輿くらいなので少し興味深いのが、人混みにいるのは苦手なので

個人的には人が集まる前にご退散したいものだ。

「うう、手を伸ばせばそこにあるのに……」

「ご飯……ガレット……」

「そんなに落ち込まなくても、ご飯は逃げませんよ」

しかし少女たちはそうもいかないようで、看板にしがみついて反対側の道路をなんともいえない悲しい顔で見つめる。その表情にありもしない心でも打たれたのか05が彼女たちを励ますが、それでも少女たちの顔は晴れない。

食に勝る喜びはないと言うことか。

「黄泉川センセエ、5秒くらいだし、ぱぱつと渡らせてよお」

「ダメじゃんよ。天羽に至っては巡回ルートがあるんだろ？ちゃんと歩け少年少女！」

ダメもとで黄泉川先生にお願いしてみるも、呆気なく却下されてしまう。痛いところまで突かれ、反論の余地はない。

残念ながら遠回りをするしかないようだ。どうするか隣に立つ垣根くんはパツと目線を向けると、彼は呆れたように別の道を長い指でさし示す。

「こっからだとあっちの地下街から横断するしかないな。めっちゃくちゃ遠いが」

「西に3キロのそこだな。よく知ってるじゃん、双子の少年」

「まあ、多少は……」

第二位の良すぎる頭にはきつとマップすら仕込んであるのだろう。学園都市はよく道が変わるとか言うが、随時更新しているのだろうか。疑問は尽きない。

そんな完璧超人の片鱗を見せる垣根くんは黄泉川先生は笑顔を見せると、彼は目を逸らして口籠る。

「夏休みの時も目の前の建物を直ぐに原子力実験炉だって答えていたし、優秀なんだな、少年」

「……そんな昔のこと、よく覚えてますね」

「そりゃあ覚えてるじゃんよ、そっちの弟くんのごとも」

「そりゃ、どうも」

なんだなんだ、一般人を前に猫被る垣根くんは何やら成長だとか可愛いだとかいう感情が湧き上がる。そんな顔もできるんだと、アニメでも漫画でも見ることの叶わなかったこそばゆい彼の表情に昔妹に感じたような気持ち、例えるなら赤子の頃の妹が初めて立った時と似たような、達成感やら喜びやら愛情といった何かが心臓を満たす。

確かキュートアグレッションと呼ぶんだったか。

「垣根くん可愛いねえ！褒められて照れてるんだ？」

「うっせえカス足踏むぞ」

「もう踏んでる！靴が！下ろしたての靴が！」

年上に褒められたことを照れて可愛い反応をする彼を茶化すように顔を覗き込むと、癩に触ったのか彼は悪態をつきながらあたしのスニーカーをぎゅつと踏んだ。彼の黒いスニーカーに踏まれた白いハイカットのスニーカーは哀れな姿になり、くつきりと垣根くんの足跡が付いてしまう。

同じくらいの足のサイズなのが腹立たしい。大雑把にその汚れを拭き取るが、なかなか落ちない汚れに苦戦していると今度は上条くんがため息をつく。

食欲に振り回される少女たちに生暖かい目を向けると、彼は彼女たちの心をおるような言葉をつぶやいた。

「仕方ねえ、次の大玉転がしまで我慢な」

「さすがに3キロとなると歩きたくありませんもんね」

O5と上条くんの二人で悪食な少女たちはその場に崩れ落ちる。片方はしくしくと膝を抱え、片方は体を震わせて人体で一番鋭い牙を上条くんに見せつけた。

キラリと覗く白い歯は上条くんの体を強張らせるほどには恐怖を煽る。

「と、う、まあー！」

「え、なんで……？ちよ、ちよとおおおおお?!」

インデックスちゃんは勢いよく上条くんに飛びかかり、彼のツンツン頭に噛み付こうと彼女は大きく口を開けた。

彼女の足が地面から離れる。まるでスローモーションのように彼

に飛び込むが、目的の人物はもうすでにその場から消えていた。

別に彼がインデックスちゃんを避けたわけでもなければ、インデックスちゃんが照準を誤ったわけでもない。彼はその場に声だけ残していなくなった。

「つしやあああああ！捕まえたわよ！私の勝利条件！」

理由は実に乙女的なもの。どうやら内容的に借り人競争の真つ最中なのだろう。

雷のような一瞬で上条くんの襟首を掴んだ常盤台の超電磁砲レールガン、御坂美琴が凄まじい速さで群衆の中に消えていく。

捕まったことに不幸を叫び、遠く彼方に消えていく上条くんたちを暖かい目で見守りながら、あたしたちは立ち尽くす。

「あーあ、誘拐されちゃった」

「……追うか」

不幸というより、男なら羨ましいだけではないだろうか。そんな瞬間に立ち会った垣根くんとあたしは互いに顔を見合わせてため息をついた。

本当は追うつもりは更々無かったが、少し悩んで彼の言葉に頷く。どうせなら派手に物語に巻き込まれようじゃないか。

「05、インデックスちゃんと杠ちゃんをご飯食べれるとこまで連れてってあげて」

「えっ！いいの?!」

「それが一番だな。少し不安はあるが」

大人だけで自称不幸少年を追いかけよう。

かと言って腹をすかせた子達を放っておくほど落ちぶれてもいない訳で。丁度いい小間使いがいるのなら、それを有効活用しない手はない。

「不安なら月詠先生に連絡しておくから、安心して行ってくるといい。友人を迎えに行つてやれ」

「えっ！黄泉川先生最高じゃん！あり！」

05に彼女たちの護衛を頼むと、少しだけ眉をひそめる垣根くんに思わぬところから声がかかる。

笑顔をあたしたちに見せると、黄泉川先生は願っても無い提案をして親指を立てた。嬉しい申し出に思わず感情が高ぶり先生に抱き着くと、彼女は頭をぼんぼんと優しく叩く。

黄泉川先生に連絡されれば小萌先生だって無下にはできないだろう。先生にこんなくだらないことで連絡するのは少々しにくいので実にありがたい。

「オラ、くつついてねえでとつとといくぞ。追い付かなきゃいけないの分かってんのか」

「垣根くんもお姉ちゃんにハグされたいのかい？いいよ、このデカイおっぱいは皆のものだからね！」

「ハイハイ、もう馬鹿が馬鹿なこと言ってるのにはなれたんだわ、ごちやごちや言ってるでなくぞ妹分」

感謝の気持ちをはグというとても安易で安上がりな態度で示していると、後ろから強引に首根っこを引っ張られる。

かなり真面目に怒っている垣根くんにからかい混じりに鼻で笑って腕を広げると、今度は呆れたようにズルズルとあたしのウインドブレーカーの襟を引っ張って上条くんたちの走って言った道へと進み出した。

強引に引っ張られながら進むあたしたちの後ろから聞こえた「行ってらっしゃい」に手を振って、主人公二人が走り去って行った道を二人で早歩きで歩いていく。

借り人競争は佳境に入っているようで、何回もアナウンスが耳に届くと、その音に導かれるようにあたしたちは主人公の元へ足を進めた。

そしてパレードが始まり人混みがさらにひどくなった頃、あたしたちは三人横一列に並び混雑した道を歩く。

「散々だったな、お前」

「ほんと、それな……はあ、不幸だ」

「いいじゃん、青春してて」

「こんな青春望んでませんことよ……」

難なく上条くんを捕まえられたあたしたちは先ほど別れた場所へ道を辿りなんてことない会話を続けた。御坂ちゃんに連れて行かれた先で何があつたのかは知らないが、ヘトヘトになった彼を挟んで垣根くと笑う。

もうすでにいなくなった少女たちの跡を辿るように道なりに進み、パレードが始まる賑わいを通り過ぎた。

「インデックス達は垣根弟と屋台エリア行つたんだっけ？」

「うん、ちよつと遠いけど、お腹空いてたからさ。放っておくのも可哀想でしょ？」

「悪いな、インデックスの我儘に振り回しちゃって」

「林檎も行きてえつつてたし、起こるべくして起こつたようなもんだ。気にすんな」

「垣根様……ありがてえ」

「ハイハイ、あ？」

垣根くんにペコペコと頭を下げ、男子高校生らしい会話をする彼らだが、ある一点に気がつく途端に足を止める。

道の先、人混みの中で浮くような赤毛と金髪の長身の男二人に視線を向けると、彼らもこちらに気がついた。赤毛の男と金髪の男。よく知るその顔触れに思わず声をあげると、彼らも同じように気づいて視線が交じり合う。

「土御門に……ステイル……？」

「おや、厄介な人物が三人も来た」

2mはある長身に、首を掠める赤毛、真っ黒い神父の格好をした西洋から来た魔術師、ステイルⅡマグヌス。そしてツンツンした金髪に学校指定の体操服を着た柄の悪いサングラスの少年土御門元春。

騒がしい道の端でコントラストのはつきりした二人の少年に目が止まると、自然と体は彼らの元へ呼び寄せられる。厄介ごとの香りにどう足掻いても主人公気質の二人は抗えないようだ。

「いつかの神父様と……お前は確か……」

「……こつち側では出会いたくなかったんだけどな、第二位も魔術を知っているし、しょうがないか」

「へー？お前も魔術師ってやつなのか、世間は狭いな」

面白い組み合わせの二人組に垣根くんが疑問を示すと、土御門くんは一つため息をついて鋭い眼光をサングラスから覗かせる。闇を感じさせる強い瞳にも動じず垣根くんは鼻で軽く笑って挑発的な笑みを浮かべた。

ほとんど同じ身長 of 二人が散らす火花に特に気にせず、あたしは誰も違和感を持たないようにただ何も知らないように振る舞うだけだ。元から知っているとはいえ、実際は知ってはいけないことなのだ、極力顔に出さないように振る舞うのがベストだろう。

「土御門くんも魔術師なんだ、結構身近にいるんだね」

「……妙に芝居がかった台詞はやめろ天羽。どうせ知ってたんだろ？」

しかし、どうやらあたしの演技はいつも演技をしている土御門くんにはどうやら無意味だったようで彼は険しい顔で今度はあたしを見下ろす。

ああ、最悪。背の高い男に見下ろされるのはひどく虫唾が走る。ヒールのない靴は彼らとの差をさらに広げ、あたしにひどい不快感をもたらした。

上に立つのはあたしだ。いつだって、あたしは姉でなくてはいけない、上でなくてはいけない。

人を見下ろす側にいなくてはいけない。それはきつと、身長も同じ。

「お姉ちゃんは弟たちのことはなんでも知っているのだよ、土御門くん」

「その情報の出所が聞きたいんだよ。お前は何かと胡散臭い。本当は

上条と一緒に行動しているのも嫌なんだ」

「胡散臭いだなんて失礼ね。アンタの方が胡散臭いだろ、鏡見てきなよ」

だからこそ、思ってもない挑発の言葉がすらすらと口から流れ出る。たった7cmの身長差にここまで苛立ちを覚えるのはなぜだろう。

垣根くんと同じだから？サングラスに映った自分が嫌いだから？

結局答えは出なかった。

自分の性格の悪さと沸点の低さに自ら呆れ、強く腕を組む。思わず口から出てきてしまった挑発の言葉につなげる言葉を足りない頭で必死に考えながら。

「そうだなあ。じゃあとびつきりのヒントをあげよう。名前はとても大切なもの、どんな人間か、名前を見ればすぐ分かる。名は体を表すって言うでしょ？」

「何が言いたい」

「隠りたいのなら、名前ぐらい改名すればって言ってるの。先輩からのアドバイスってやつ？そんな分かりやすい名前しておいて隠れるだなんて笑止千万だよ。」

結局出てきたのは苦し紛れのメタ的な考察。

まだあたしがアニメを見ていなかった頃、妹が何も知らないあたしを反応が返ってくるぬいぐるみかのように扱って永遠と小説の考察やらを聞いていたのがラツキーだった。

まともに聞いてはいなかったが。

記憶が間違いないやなければ、土御門という苗字のルーツは安倍晴明。そのことを事前に聞いていたから、彼が陰陽師と名乗って合点があった記憶があるので多分間違いはないはず。

まあここで苗字の珍しさとか意味が無いにも程があるけど。

あたしの天羽に、垣根、上条。前世で見たことのない名字のラインナップに「浮いてるから分かりやすい」なんてギャグにもほどがある。

「……こちらの歴史にも詳しいんだな」

「こう見えて勤勉なの。魔術の仕組みは分からないけど、宗教に関し

ては大まかな歴史くらいは知ってるよ？カトリックなんかは特に」

「どういうわけかあたしが陰陽師関連の歴史に詳しいと誤認されてしまったが、確かに学園都市の子よりはちよびっとだけは知っているだろう。」

「正しいといえば正しい。」

「それはいい、説明しても理解して貰える可能性が高まるからね」

「説明？」

勘違いをされたままでも構わないと判断しそのまま適当に答えたが、今度はその勘違いに赤毛の魔術師が返事をした。

その返事に上条くんが何を意図しているのか分からないといった風に首を傾げると、ステイルくんは大きく息をついて言葉を続けた。

「君たち、厄介事に巻き込まれるつもりは無いかい？」

48話：疑問

騒がしい会場の真ん中、柔らかい人工芝で大きな玉を転がすだけの競技が行われる。ツンツン髪の少年が正気のない顔でその玉を転がしたり、転がさなかつたりするつまらない光景にあくびを噛み殺す。「で？改名女はこれから何をするつもりで？」

「さあ？上条くんが付いて行くのかなって。彼の隣いれば厄介ごとは確実でしょ」

ステイルやらなんやらと別れた後、競技に出なくてはならない上条くんを追ってスタジアムの観客席に座り、上の空で景色を眺めていたところに垣根くんが口を開く。

「いちいち棘のある言葉。知らなかったことが余程プライドを傷つけたようで、ずつとこの調子だ。」

子供らしく拗ねる彼に可愛さとめんどくささを感じるが、可愛さが勝ってしまうので特にダメージは無かった。

「本名も教えていないくせにアレを信頼してるとでもいうのか？お前が好きで仕方がない俺にすら教えてない癖に？」

「拗ねないでよ、そんなに知りたいたいなら調べれば良いじゃん。どうせ秘密ってあとでバレるようになってんだし」

「ふん、余裕ぶつてろ。後悔しても知らねえからな」
どうせ名前など遅かれ早かれいつかバレてしまう。切り札として

大切にしておきたいが、それでも覚悟はしている。
頭だつて、器量だつて悪いんだから。落ちこぼれなんだから。

気が滅入ってしまう自己嫌悪に憂鬱になりながらフィールドで呆然と立ちすくむ選手、上条当麻に視線を移す。

これ以上考えたら病んでしまいそうだ。

「それにしても、上条くん、やる気失ってるね」

「ま、あんなこと言われたらな」

二人の魔術師との会話を再び思い返すと、垣根くんと二人顔を見合わせてもう一回、今度は深く長いため息を吐き出した。

「魔術師が侵入している?」

それは数十分前のこと。

背の高い赤毛の魔術師と金髪の柄の悪い魔術に挟まれて話が進み、物騒な言葉が場に飛び交う。

彼らの言葉に驚いたふりをしながら呟くと、ステイルくんが深く頷いた。

「そう、今の学園都市は一般来場客を招く為に警備を甘くしている」

「その隙を着いてこの中に魔術師たちが侵入しているって訳だぜ?」

彼の言葉が続けるように口を開くと土御門くんはニヒルな笑みを浮かべる。サンングラスの奥に見え隠れする猫目は細く弧を描いていた。

「この間のゴスロリみてえに爆弾抱えてるってわけか。なんでこんなに魔術師は学園都市にホイホイ侵入できるんだろうな」

「あれ、垣根あの時いたっけ?」

「あー、弟経由だ」

なんだかんだ魔術に順応してきているのか、特になんとも思っていないさそうに垣根くんがぼやく。めんどくさいと言いたげな彼だが、厄介ことは否応無しに舞い降りる。

「現在確認しているのは二人。ローマ正教のリドヴィア||ロレンツェツティ、そいつが雇った運び屋のオリアナ||トムソン」

「運び屋、か。取引をするためにこの街に来たんだな?」

諦めたように近くの壁にもたれかかる彼はステイルの言葉にいち早く反応する。暗部出身なだけあって、薄暗い話には敏感で、尚且つ危機感を持てるような人間だ。

垣根くんの低い声に場の空気がより一層重苦しくなる。

「その通り。奴らはこの街で教会に伝わる霊装の取引を行おうとしている」

「……霊装？なんだそれ？」

「魔術的要素を含んだ武器とでも考えるといいぜ。ゲームにおける勇者の剣みたいなもんだにゃー」

「でもなんでこんな所で……学園都市って一番オカルトから一番縁のない所だろ？」

霊装、辞書的な意味ではフォーマルな服やらを意味するが、魔術では違う。ゲームなんて妹とやっていた対戦向けのものしか知らないので土御門くんの例がうまく伝わらないが、とても影響力のある武器ということとは辛うじて分かる。多分前世の原作知識が少しでもなかったら理解できていなかったかもしれない。

ともあれ、霊装とは確か偶像の理論、だったか。いまいち覚えていないが、伝説や聖書の内容を解釈して、それに近い現実のもので代用することで数パーセントにも満たない力を得ることができるとか、できなるとか。

宗教的なモチーフの芸術作品が魔力を持っていて、そのモチーフと同じことが少しだけできる。そんな解釈でいいのだろうか。

聖人とかも偶像の理論なのか？近年の現代芸術には人を使つたものもあるし、聖人も偶像の理論でも通じそう。よく分からないが。

「だからこそじゃねーの？学園都市側、魔術側、お互いに手を出しにくい場所なんだろ？大切な取引をするにはもってこいだ」

「今その人たちを取り締まれるのは魔術を知る学園都市内部の人間だけだし、数は限られてくるよね」

「動けるのは君たちくらいってわけだ」

色々とメタ的な考えを巡らせながら話を進める。魔術師の侵入を3回も許すなんて、学園都市の警備はザルすぎる。

わざとなんだよね？アレイスターくんの考えはあまり理解できてないが、流石にガードが緩すぎて笑いが込み上げて来てしまう。まじいい加減にしてほしい。

可愛い可愛い垣根くんに平穏を与えてくれよ。暗部なんか作つてねえでまず学園都市の警備のザルさをどうにかしていただきたい。そうすれば大抵の問題は片付くでしょ。

「じゃあ神裂は？あいつ確か聖人とかって……」

「ああ、あのでっけえ刀の……聖人って、善人ってことか？」

「神の子の身体的特徴、あるいは魔術的記号を持つ人のことだ。世界に20人ほどしかいない貴重な人達でね、君が戦ったときの人間離れの身体能力は彼女が聖人だから出せるものなんだよ」

「あれは魔術的なバフを掛けてるわけじゃなかったのか」

あつたこともない人間への厄介な憎悪に心を悩ませているが、それに気づかずには他の少年たちは話を続ける。嫌になる自分の汚い心情を消しとばして彼らの話について行こうと耳を傾けて次に続ける言葉を待った。

「そんな聖人は確かに戦力になる。けどね、今回は使えないんだ。何しろ取引されている霊装が霊装でね」

「どういう意味だ」

神妙な顔つきでステイルくんはゆっくりと口を開く。

眉間に皺を寄せて、重々しい表情をする赤毛の神父は嫌そうにその名前を呟いた。

「その霊装の名前はスタブソード刺突杭剣。あらゆる聖人を一撃で即死させるものらしい」

そんな会話を交わした後、あたしたちは無気力な上条くんの競技を観戦する今に至ったのだ。

観戦席にボーツと座り、彼らとの会話を思い出しながら二人考えにふける。

「スタブソード刺突杭剣かあ……刺す剣つてもうちよつと名前ひねられなかったのかな」

「刺突する剣つて頭痛が痛いみたいなネーミングだが……分かりやす

くていいじゃねえか。まあ、秘匿するものをわかりやすくしちやあんな意味ねえけど」

アニメを見て、wikiを多少見た程度の身としてはなんだか腑に落ちない。

ローマ・カトリックは一番歴史やらが価値観がめんどくさい宗派、カトリックが神の子を殺す武器を持つてるなんて少しおかしい話だ。自分たちの神を裏切ると同義じゃないか。

キリスト教、ひいては十字教は色々分岐してる。

十字教、ユダヤ教、イスラム教、それぞれルーツは同じ。でも重要視する聖書や、神が違うから違うものに分断されたわけで。

三位一体、父と子と精霊。父なる神と、神の子と、精霊を唯一信仰するのがキリスト教、または十字教。唯一神の子イエスを信じているカトリックが、それと酷似する聖人を殺す武器を持っているのはなんともおかしい話だ。

自分の宗教の価値を貶めるようなことをローマ正教の狂信者がするののか。

まあ聖人は崇拜しちやダメだし、もしかしたら小説の方で補完されているのかもしれない。しかしそれを知らないので憶測でしか話せない。本当に面倒だ。

「もう宗教壊滅させた方がこの世界幸せになる気がする」

「なら新しく宗教でも作るか？垣根教でどうよ？」

ただひたすら思考の海でこの物語を如何に幸せなものかにするかを考えていると、突飛な声が真横から掛けられる。

自分を神格化すると受け取れるような言葉に小さく吹き出すと、そのまま息を抑えるように口から笑いが漏れ出した。からかい混じりにニンマリと弧を描く挑戦的な笑みは、なんだかとても子供っぽい。

「ふ、ふは、まあ、確かに？神道的には人間皆神様だしね？あながち可笑しくもないけどさ、垣根くんが神、教祖とか、ぶふっ、無理でしょ。

めんどくさくて三日坊主になるのが目に見える、ふふ」

「何言ってるんだ、この俺にできねえことはねえんだろ？」

「ふふ、確かにそうかも、じゃあ垣根くんが神様になったらあたしが信徒になってあげるね」

ビジュアル的には熾天使止まりな彼だが、天使は別の多神教じゃ神になれると言うし、彼がああ汚物に取って代わることもできるのかもしれない。

そうなってくれたら、あたしは喜んで彼の供物になって、手足になつてあげるのに。

「へー？言つたな？俺の為に貢物でも捧げろよ？」

「うん、いいよ。あたしから得られるもの全部あげるから。垣根くんのためだったらあたしなんでも捨てれるもん」

「相変わらず愛が重いな、そんなに要らねえ」

「それは残念。今ならお買い得なのに」

「本名も教えられねえ嘘つきの愛なんか貰つたつてしようがないだろ」

「まだ拗ねてんの？」

妹へ捧げてた行き場のない綺麗な愛情を、全部、全部あげてしまいたい。しかし彼はそれを望んでいないようだった。

どんなに拒絶しても、あたしが愛を押し付けるだけでも分からないのか。嫌われたつてなんだって、あたしが出来る子だと証明するため、あたしは彼に全部あげるんだ。

「で、今回その刺突杭スタブソード剣を持ち込んだのはローマ正教だっけか。どんな宗派なんだ？」

「ローマ正教はカトリックの総本山だね。一番信心深いイメージがあるかな。ローマに行った事ないからあんま知らないけど」

話は戻り、今度は今起きている厄介事へと話題が変わる。めんどくさいと思つたのだろう、ふつと顔を背けて垣根くんは言葉を続けた。

「そーいやお前もカトリックだったよな」

「アメリカは無神論者だと異端扱いされるからねえ。それに、カトリックってプロテスタントと比べて割合多いから納得されやすいんだよ」

たった一つの嘘で面倒事を避け、他人に好印象を与えられるならそ

れをするのが一番合理的だ。

信心がないので地獄に落ちるかもしれないが、それだけで妹を助けるために行く様々な研究所の人間に愛嬌を振り撒けられるならやらないわけにはいかない。そう思っただけで前世では神学校へ入学したりとしたが、そのせいでの状況があるのだからなんだか複雑だ。

仏教徒なら転生なんてしなかっただろうか。

でも垣根くんに会えないのはちよつと寂しいな。それにごちゃごちや言ったって妹との時間が帰ってくるわけでもない。

「めんどくせえな……同じ十字教なんだろう？どこが違うってんだ」

「呼び方とか？神父と呼ぶのがカトリックで、プロテスタントは牧師で……まあ一番は大切にしているものが違うんじゃない？」

「だから牧師って言った時あの赤髪は訂正を入れたのか。なるほど」

複雑な心情を封じて垣根くんの問いに適当に答えると、同時に少し疑問が湧く。

この世界の宗教と前世の宗教はどれほど違うのだろうか。名前と宗派は決定打だが、そのほかには？

カトリックはミサがあり、政治と絡んでいた為教会が豪華。反対にプロテスタントは結構質素、そしてカトリックとは違い離婚でき、尚且つ聖母の扱いが違う。

というのが前世での基本だが、そもそもこの世界でプロテスタントの魔術師にお目に掛かったことが無いのでこっちのプロテスタントに関してほとんど情報がないのが現状だ。

だからってネットで調べたら怪しまれそうだし、気軽に聞くこともできない。

聞きたいことは他にもある。

スラブ刺突杭剣と偽られたペテロの十字架は元々逆十字架なのにアニメでは正位置だったり、

イギリスの国教はプロテスタントだったり、

現実の（この場合前世）知識とはかなり食い違いがある。

小説の方は知らないが、アニメと原作は大きく違うと言われているらしいし、この世界も大きく違うのだろう。

つまり、あたしの知識はこの世界にあまり通用しないのではないかということだ。

そこで問題にぶつかる。

あたしは果たして彼に前世の知識を教えていいのだろうか。

いや、考えても仕方がないのはわかっている。けど、垣根くんはいとしてアレイスターに前世がバレるのは極力避けたいのが心情だ。それでも、垣根くんに聞かれたらホイホイと答えてしまえばいい。あるし、なんなら疑われてもいいかとさえ思う。

垣根くんが幸せならあたしなんてどうでもいい。

「……なあ、お前8歳の頃までしかアメリカいなかったんだろ？なんでそんなに知ってるんだよ」

「一般常識だし……それに嫌だったけどミサとか行ってたからね、学園都市育ちの子よりは知ってるのはあたりまえでしょ」

「あたりまえ、ね。神を嫌ってるって言った奴がカトリックを名乗ることもか？」

大玉転がしが終わったと報告するアナウンスに混じって垣根くんからピリピリとした嫌な空気が張り詰める。

疑われている？何かしでかしたか？

少し不安になったが彼の質問はなんてことないものだった。ただの事実確認、意味のない疑問。

「……だって知ってるんだもん」

あたしはそれを知っている。この世界に呼んだ神の施しを、傲慢な救いの糸を。

愛しはしない、けれど認めはする。あの汚物を。

でなければあたしはあたしの現世を否定することになってしまいうから。

「はっ…それってどういう……」

「あ、上条くん来たよ。合流しようよ」

「……そうだな」

小さく呟いた言葉を聞き返そうとする彼の声に被せるように席を立つ。

戦意を削がれ、聞き返すことなく怪訝な顔をするだけして座る彼を見下ろすのはなかなか愉快なものだった。

競技が終わった上条くと土御門くと合流し、いまはバスの中。自動運転で動く無人バスはあたしたち四人の声しかしなかった。

「十字架に架けられた神の子は一体どうやって殺されたか知ってるか？」

「あー、磔にされてってやつだよな？」

「磔刑のことね。十字架に両手首と両足首を釘でうちつけて、体の支えを無くす刑罰だけど、実際それで死んだかは怪しいらしいよ」

土御門くんの質問に上条くんが首をかしげると、それにあたしは自信満々に答える。

死に方は聖書よりも医療分野に近い。それに実在する刑罰だ、これくらいなら答えたって支障はあるまい。

「体を支えられなくなることで呼吸困難に陥って死に至るわけなんだけど、即死しないから最終的には槍で刺すんだよ」

「お、天羽が正解だ。刺殺されたって説が有力だな」

確か槍を刺したのがロンギヌスで、これをロンギヌスの槍って呼ぶとかなんとか。そんな話が頭の奥の方にあるのを見つけて引っぱり出す。

色んなアニメやゲームで名前が上がるのを聞いたことが多少あるので、きつと知っていてもそう可笑しくないはずだ。

「この刺突杭^{スタブソード}刺つてのは処刑と刺殺の宗教的意味を抽出し、極限まで増幅、凝縮、収束させた霊装ですたい」

「つまり、刺殺された神の子とニアリーイコールの聖人には効くってことか」

「そういうことだ。普通の人間にはなんの効果もないが相手が聖人なら一撃で葬る力を持つって代物だ」

実際は違おうとしても、もしそんなものがあつたとしたら確かに脅威だろう。核爆弾を全て壊すスイッチがあるようなものだ、様々な国が阻止しに翻弄されるのも事実。

本当はその思考さえ変えてしまう恐ろしい洗脳兵器だとしても。

「そんなもん取引して、魔術師たちは何をするつもりなんだ？」

「戦争じゃねえの？聖人って俺LEVEL5らみたいなものなんだろ？」

「けど、聖人以外の魔術師いっぱいいるんだろ？神裂が居なくても戦えそうな気がするけど……」

「うーん、核を無力化できる技術があるなら勝てる勝てないに関わらず戦争は起こるんじゃない？」

「そうだな、実際に勝てるかどうかではなくて、勝てるかもしれないと錯覚させただけで戦争つてのは起こっちゃうのさ」

上条くんの質問にみんなで答えるがそれでも上条くんの疑問は尽きぬまま。揺れるバスのアナウンスに急かされて降車するも、上条くんは眉を寄せて立ち止まる。

「でもそんなやばいものならインデックスに協力を仰いだ方が良くないか？」

「ダメだ。今回の件じゃあの禁書目録を使えない。事件の現場に近づけさせることも、事件に関する情報を伝えることもやつちやいけないぜ？」

「なんで……」

今はいない魔術のプロを思い出し、降りたバス停の前で彼は土御門くんに聞くが望んだ答えは得られない。

それもそのはず、インデックスちゃんは何かと監視の目が向けられている重要人。そして取引なんてヤバそうなものにそんな人を巻き込むのは面倒ごとを増やすだけだ。

「何かが起こるならあの子が中心、って外の魔術師達のサーチが集中

してるからにやー。もしあの子が動けば魔術師たちが一斉に押し寄せて来るって寸法さ」

「つまり、あのインデックスに魔術のことを気づかせないようにしながら何とかしなきゃいけないってことかよ」

あたしの考え通り、ひいてはアニメ通りのセリフをいうと、上条くんは苦々しい表情で頭を抱える。頼もしい相棒がいなくなったら誰だっけそうするか。

とはいえ彼は主人公で、んなものがなくなっただって物事は解決できるし、人を幸せにできる。

ムカつくことこの上ない。

「やっぱお前といると厄介事が舞い降りてくるな。しかも知らない情報がわんさか見つかるし？着いてきて正解だ」

ニコニコと機嫌が良さそうに私の肩を肘置きにして不安を煽るような悪戯っ子の笑みを浮かべるを浮かべる垣根くんを見てふと正気に戻る。

あたしは主人公じゃないから、この世界の人間じゃないから、醜い泥濘を汚く這いずり回ってでしか幸せを掴めない。最悪、掴むことすらできないのに。

「……そうかもね」

恨めしい、羨ましい。あたしが得ることのできなかつたそれを持っている上条くんがひどく羨ましい。

醜い嫉妬に悩まされながら、あたしは垣根くんに微笑んだ。

この汚い心臓を拙く隠すように。

49話；怖いこと

バス停を離れ、一旦インデックスちゃんと合流するため垣根くんの案内のもと道を歩く。

騒がしい中心地から少し離れた簡素な道を辿って歩いた先、ピタリと止まった垣根くんと同じように足を止めると背の高い鉄の柵に囲われた小さな緑豊かな場所が視界に広がった。

「ここか」

只山大学植物学部と柵にあるプレートに書かれているそこは小さな林のように緑が眩しい樹々が並び、一般公開されているのか門は開かれたままだった。

静かな空間、澄んだ空気、学園都市にしては緑の分量が多い気がするそこに躊躇なく入っていく垣根くんの後ろをついていく。

「なんでこんなところに？」

「お前んとこのミニ教師が引率してくれることになったんだよ」

「黄泉川先生に頼んでおいてよかったね」

垣根くんによるとどうやら別れた少女らはアニメと同じように我らが担任、小萌先生のお世話になっているようでこの緑の先にいるそうだ。

黄泉川先生に頼んだ通りに先生と行動している彼らに少しばかり安堵する。

小萌先生が魔術に触れていない今、姫神秋沙がオリアナⅡトムソンに攻撃されてしまった場合回復手段がない。あたしがその場にいればかわからない以上、05を小萌先生の近くに置いておくのが一番安心だ。

適当に相槌を打って雑木林を進む。淡い木漏れ日と心地よい風、目に優しい緑の間を潜り抜ける。ジャリジャリと土を踏む音が耳に届く。

それと同時に小さい鳴き声が木々の隙間から聞こえてきた。小さな猫の声。

誰かを呼ぶような小さな声に上条くんが反応すると、垣根くんもそ

れに従って道を変える。小さな声の主は案外近くにいたようで、数歩足を進めるとすぐに目と鼻の先に見えた。

三毛猫が岩の上にちよこんと座っているのに気がつくのと、上条くんはやけに上機嫌に駆け寄った。

「お、スフィンクス発見。お前だけか」

「いつも猫着いてきてんのかよ」

「家に置いておきなよ……あ、近寄らせないでね」

動物は嫌いだ。

搾取される側。殺される側。

可愛くないし、臭いし、賢くないし、口も聞かないし、利口でもない。

外に出せばノミがついてくるし、病気も持ってくる。

寿命も短いし、簡単に殺せてしまう。

興味の欠片もない。

というか彼はちゃんと動物病院でワクチンはさせたのだろうか。避妊は？

まあどうせフィクションの世界なのでこの猫が病気になることも孕むこともないだろうし、現実的に考えてはダメか。

何分世界が変にリアル志向なためイマイチ現実的に水を差す癖が抜けない。アニメを見ている分ならなんとも思わないが、実際に目の前で息をしていると変に現実を意識してしまう。

元の世界に戻りたいと思ってしまうのは必然だろう。

「天羽、猫苦手なのか？可愛いのに」

「そんなものより垣根くんの方が可愛い」

「その可愛くて大好きな俺を盾にしているのお前分かってるか？」

上条くんが抱きかかえる子猫から身を隠すようにサツと垣根くんの後ろに回って、その場から身を隠す。にやーにやーとあたしの方を見て甘えるような子猫の鳴き声はとても鬱陶しい。

それに呆れるように零した冗談混じりの声に何か反論をしようとして口を開いた時だった。

「マスター、保護対象！」

後ろから唐突に声が掛けられる。優しそうな女の声。どこか聞き覚えのある低音が焦ったように足跡をつけるように力強く走ってくるのが聞こえた。

保護対象と呼ぶ存在を私は一人しか知らない。

声に違和感はあるが、きつとカブトムシ05だろうと何の躊躇もなく振り返る。

しかし、そこには恐ろしい造形物しか立っていないなかった。

白い肌、真っ白い髪は肩を撫で、大きく膨らんだ胸部まで届き、ふわふわとウェーブがかかっている。身長は173cm、私と同じ服を着て、同じピアスをつけて、それは立っていた。

「……あたし?」

自分が二人いる。

そのおぞましい光景に掠れた声が喉から漏れ出す。

思わず垣根くんのジャージを強く握る。頭が破裂しように熱を帯び、心臓は高く跳ね上がった。御使墮し^{エンゼルフォール}を思い出すような恐怖。

消えるんじゃないか、彼のそばにいられなくなるんじゃないか。不安が脳を飛び交い、呼吸がうまく機能しない。

「05、あんまこいつを驚かすな」

「あ、すみません……貴女の姿の方が好都合でして見た目をお借りしております」

「な、何だ、05、か。びっくりした、本当に」

荒い呼吸を正すように肩に手を置かれる。ゆっくりと呼吸が戻ってくる、はつきりとそれを認識できた。

エメラルドのような澄んだ緑の目。あたしとは違う目の色と髪の色、喋り方と振る舞い方。ようやくそれが05だと理解する。

大丈夫、大丈夫、姿を取られたわけじゃない。自分が違うものになるわけじゃない。

「なっ! お前垣根弟か!」

「はい、そうですか?」

「お前の能力って肉体変化^{メタモルフォーゼ}なのか!? てっきり垣根と同系統かと」

垣根くんのジャージから手を離して平常心でその場に立つと、驚い

た様子の上条くんが少し声を大きくして目を見開いた。

そういえば彼はまだ05が人ではないことを知らないのだった。それを知ったら風斬氷華と同じように迎え入れるのだろうか。人外を人外として見ず、自分と同じ下まで引き摺り下ろすのだろうか。

腹立たしいことこの上ない。あたしたちを人として見るなんて。

「話すと長いんだが、まあ、俺を経由して制限はあるが俺の能力も使えるって話だ。そういう特製のデバイスを持つてるとでも思ってくれ。だからテメエの右手で迂闊に触るなよ？」

「さっきの霊装みたいなものか？まあ、メタモルフオーゼ肉体変化なんて珍しいし、隠したがる気持ちは分からんでもないが」

「あの、私のことはともかく、保護対象、こんなことを貴女に言うのもおかしいですが、助けていただけませんか？」

嫌悪感を潜め彼らの会話を静かに聞いていると、突然自分の姿をした05があたしの手を握った。本題を思い出したかのように焦ったかのように慌てるそぶりを見せるその姿に違和感を感じる。

まるで人のように慌てる姿は気色悪い。

「え？なんでさ」

「禁書目録があちらで……」

「まさか魔術師が……!?インデックス！」

「着替えを……って、今行ったら……!」

05の言葉が終わる前に上条くんが飛び出していく。静止の声も聞かず走り出した彼は白いシスターの名前を叫び、そのまま奥へと猫を抱えて走っていった。

「えっ……っ？」

「あ……」

しかし、その先にいるのは魔術師ではなく着替え中の少女たち。草むらをかき分けたどり着いた彼の目に飛び込んできた光景に上条くんはあんぐりと口を開けるとまるで時が止まったようにその場が凍る。

元から05経由で何を知っていただろう垣根くんと、そもそも話の流れを知っているあたしはその光景を見ることはないが、彼らの悲鳴

だけははつきりと聞こえた。

「……とうま、これで何度目か数えてみると良いかも!!」

「す、すみませんんんっ!!!」

ガブリ。

叫び声に呆れて彼らを覗きに行くが、チアリーダー姿のインデックスちゃんが足に下着を引つ掛けて真つ赤な顔で倒れていたり、同じ服装の小萌先生がチアリーダー用に見せパンを持ってわなわなとへたり込んでいたり、杠ちゃんがボーっとしていたり、思っていたよりカオスな光景が広がっておりため息をついてしまう。

「お前ん所のクラスメイトと担任だろ、なんとかしろよ」

「転校、したいなあ……」

「長点上機くるか?こき使ってやるよ」

「遠慮しとく」

なぜこんなところで着替えているのかだとか、なぜ下着を脱いでいるのかだとか、何箇所かツツコミたいが、そういった感情が込み上げるかのように頭を抱えた。

せせら笑う垣根くんの冗談を笑えるほどの気力は残っていない。

「申し訳ありません、この場をどうおさめるのが正しいのか分からなくて保護対象を呼んだのですが……」

「……まあ、確かにこの場の空気は男性がベースのアンタにはキツイでしょーね」

申し訳なきさそうにつぶやく05と惨状を眺めると大きなため息が出る。

たとえばマスター个体である垣根くんが女慣れしていたとしても、実際の経験もなければそれについて理解していない今の05には少し精神的に負担だろう。

それでなくても、男性がこの場にいるのが見られたら通報もの。どう考えても犯罪一歩手前の状況にしかみえない。

小さな子供をこんな野外で着替えさせるだなんて先生も先生だが、2020年なら炎上ものだろう。

落ち込むように肩を落として顔を伏せる05だが、自分の顔をして

るのでなんだかいつもより気色悪い。上から下、観察するように全身像を見るがやはり色は違いどあたしとほとんど一緒、というか全く同じ。

「それにしても似てるね……なんか変な気分。よくそんなに真似できたね」

「ああ、それは貴女のDNAマップのデータが入っているからです」
気持ち悪いほど似ていることに嫌悪感をあらわにすると、05はなんともないような顔をして初めて聞くような話をさらりと告げた。

あたしのDNAマップ？一体なんの話だ。突然降ってきた爆弾のような事実_がに体が固まる。

いつ、どこで、どうやってあたしのDNAマップを？下手したら藍花悦について探られている？

本日二度目の危険信号が頭を駆け巡り、
様々な考えが脳裏に浮かぶ。

「お前の流した血からデータをとった。未元物質_ははこういうことにも使えるんだよ」

「血液……未元物質_のの可能性に涙が出るね、二つの意味で」

しかし藍花悦に関しては杞憂だったようで、垣根くんの答えに少しホッとした。

あたしが流した血というのはきつと夏休み最終日の事件か、もしくはその次の日のことか。

未元物質_で血を別の物質に変化させたと思ってたが、どうやらその前に_はDNAマップに既存のDNAを吸収させて一部を手元に残しておいたのだろう。

素晴らしい能力であると同時に脅威だ。

「垣根、みて、小萌が着せてくれたの」

「……露出多すぎね？」

恐ろしさを感じながらその場で肩を落とすと、先ほどまでブーツと突っ立っているだけだった杓ちゃんが垣根くんのもとにトテトテと何事もなさそうな顔で服を見せびらかしにやってくる。

白と萌黄色のチアリーダー姿。

アメリカじゃチアリーダーディング部も珍しくなかったが、日本でその服を見るのは久しぶりだ。とはいえ子供にさせる格好かどうか聞かれたら首を捻る。

どうやら垣根くんも同じ考えのようで眉を顰めて口をへの字にさせた。

「そう？かわいい」

「可愛いのは構わないが、その格好で一人になるなよ？変態に捕まっても俺は知らねーかな」

「そうそう、可愛すぎて連れ去られちゃうかもね。05から離れちゃうダメだよ？」

05に小さい杠ちゃんの手を握らせると、彼女は少しだけ口を尖らせてぎゅつと05の手を握り返した。

和やかな空気、この空気が無くならなきゃいいのに。

しかし現実とは非常で、男の高い悲鳴でその空気はすぐに消え失せてしまう。

「この裏切り者があー!!」

「うがあああー!」

怒りを含んだ女の声と良く知っている男の悲鳴。全員の視線がその声のした方角に移る。

「なんだ？上条の断末魔が聞こえたが」

「あー……05、その姿のままでもいいから引率してあげてね？あたし達はまた離脱するから」

「かしこまりました」

仕方がないので少女たちを置いて声のした方へ進む。進むにつれ大きくなっていく声は林の出口からしたようで、学校指定のジャージと体操服を着た女が座り込む上条くんの襟首を引っ張っている姿が出入り口の前にあった。

「まったく！少しは大会を成功させようという努力は出来ないの貴様は!」

「今つてうちの学校はなんの競技やってるのかな……」

「それくらいなんで覚えられない!?そうか、脳の栄養が足りてないよ

うだから糖分を摂取しなさい！」

「そんなことをしても上条さんのお馬鹿は治りませんのことよ！」

尻餅をついた上条くんの上にプロレス技の様な何かをかけるのは同じ学校の体操服を着た女子高生だった。

デコ出しの胸まで伸びた黒髪はあたしと同じくらいの長さで、大きな胸もおそらく同じくらい。去年まで中学生とは思えない体つきの女子に見覚えがあった。

「今は二年女子の綱引きと、三年男子選抜のトライアスロンだよ、上条くん」

その学生がクラスメイトの吹寄制理だと気がつく、彼らの青春真っ只中な会話に割り込む。

突然降ってきた声に吹寄ちゃんが目を丸くさせ、今度は珍しいのか怪訝そうな顔で垣根くんとあたしを見比べた。

「ん？天羽さん？……それと、どなた？」

「……こいつの親戚だ」

「天羽さんの親戚？確かに雰囲気は似てるかも」

あたしが誰かと一緒にいるのは珍しいのだろう。しかも見た目が少々やんちゃそうな少年と一緒になんて、正義感が強くて仕切りたがりの女の子なら余計に気にするはず。

しかし一般的な警戒心を持つているにも関わらず、猫かぶった表情でついた垣根くんの適当な嘘を疑うことはなかった。

どう見ても顔は似てないし、髪色も二人して明るいとは言えあたしの方は金髪だ。しかも目の色は真っ黒とヘーゼル色で掠りすらしな

い。どうしてその嘘を見抜けなかったのか非常に気になるところ。

「てかお前は早く立てよ」

「う、最もなご意見どうも……」

「……もう、ほら」

未だ下半身を地面と接触させながら吹寄ちゃんに引つ張られる上条くんに垣根くんの一言で吹寄ちゃんが手を差し伸べる。そのまま手を引いて木々の外へ抜けた彼らを追ってあたしたちも足を進めた。

静かな林から賑やかな大通りへ。上条くんの手首をしっかりと握って前を歩く吹寄ちゃんたちを眺めるように数歩後ろを歩く。

青春を駆ける高校生たちの背中は何んだか見ていてとても心がくすぐつたい。

「青春だねえ、誰かの青春は見てて楽しいよ」

「俺らには縁がないものだからな」

彼らの甘酸っぱい青春劇を暖かく見守る。あたしの人生に甘酸っぱいことはレモンの果汁一滴分もなかったのでなんだか新鮮だ。

彼らの姿を酒の肴にして青少年たちをからかいたい程度にはとても興味があった。未成年なのが悔やまれるばかり。

「ねえ、上条。大覇星祭ってつまらない？」

「ん？」

「どうも貴様は浮ついているというか、別のことが気になっているよ
うな気がする」

「それは……」

「上条が今日つままないのなら、運営委員として準備を進めてきた私
がなにか不足していたという訳だからさ。企画を立てて今日まで頑
張ってきた身としてはみんなに楽しい思い出を共有して貰いたいと
思ってしまうのよ、我儘かもしれないけどさ」

捉えようによってはまるで嫉妬する初々しい乙女のように聞こえ
る言葉を吐いて吹寄ちゃんはずんずんと顔を上げて前に進む。

離れているとは言え数歩しか距離がないので彼らの声ははっきり
と聞こえた。

「そりゃあ厄介事が舞い込む体質だからな」

「垣根くん水差さないの」

「お前のクラスメイトはお前と違って嫌になる程生真面目だな。イベントなんか適当にやればいいだけだろ」

「大覇星祭に一喜一憂するほどの感受性はうちらには無いから理解しづらいだけだよ。まあ垣根くんはそこが可愛いからわかんなくてもいいと思うよ」

前に行く彼らに聞こえない程度の音量で小さく呟いた垣根くんの脇腹を肘で少し小突いて咎めると、ちろりと赤い舌を出してさらに話を続けた。

あたしたちとは違う性格で、趣味で、考え方の人間を理解できないのは当たり前だろう。生暖かい視線を上条くんたちに送る垣根くんは少し意地悪な答えを返すと、彼は不機嫌そうな顔であたしを見下ろす。

「さつきから可愛い可愛いいうっせえな、テメエはオウムか」

「女子高生ですから、一応。可愛いしか言えないんだよ」

「いい加減にしねえと口縫い合わす」

「垣根くんの気がすむならいいんじゃない？垣根くんになら何されても可愛いからヨシって感じだし。ねー？」

「ねー？じゃねえよ、日本語喋ろボケ。意味不明すぎるんだよ」

かなり苛立ったのかあたしの頬をこれでもかと抓ってくるが、痛覚を遮断しているのでくすぐったい程度だ。ベーっと舌を出してくだらない攻防を始めようとお互い目を鋭くさせるが、前方から聞こえた悲鳴に近い大声に思わず二人して意識がそれてしまう。

「やはり他のことが気になって仕方ないみたいね！」

「え、いや違うってー！」

なんの話をしていたかはさっぱりだが、突然吹寄ちゃんが大声を張り上げた。まるでキスをするかのように近い彼らの顔。顔を赤らめて長い髪を弾ませると、彼女は大きく背を仰げ反らせる。

「は、離れなさい上条当麻！」

「いってえ!?!」

「いっつん。」

照れ隠しか拒否反応か、物凄く痛そうな音とともに彼女らのおでこが勢いよくぶつかる。その反動でデコをぶつけられた上条くんはフラフラヨタヨタと後ろ、つまりあたしの方へ倒れこむ。

「あぁっんー」

柔らかく大きな胸に飛び込んでしまった上条くんだったが、彼を受け止め艶やかな声を出したのはあたしではない。

腰に当てられた手に、誰かの鼓動と息遣い。ドツと汗が流れる。

「平気か？」

「あ、ありがとう、ごめんね」

上条くんがあたしに激突しないようにと珍しく気を利かせたのだろうか、腰を掴み引き寄せて助けてくれた垣根くんはめんどくさそうな顔をしていた。

受け止める覚悟があつた自分としては別にありがたくもないが、とりあえず感謝を伝えると彼の手を無理矢理剥がした。

焦燥感と恐怖心。ウインドブレーカーの上からもわかる体の線を知られたくない。

「……お前さ、その服の下」

「あー、か、上条くん、大丈夫？」

怒ったような、探るような彼の目つきから逃れるように垣根くんの言葉をかき消すように少しだけ大きな声をかける。

知らない女の人の胸にダイブした上条くんのもとに駆け寄って何事も無かったように明るい顔をして彼らに視線を移すと、上条くんがぶつかった女の全体像がよく見えた。

「ごめんねえ、こんな人混みはあんまり慣れてなくて」

「あ、いや、こちらこそ」

「大丈夫？ 痛いところない？ おでこが赤くなってる」

あたしと同じような眩しい金髪に、同じように大きい胸、暗い青の瞳、大胆に着崩したベージュの作業着。そして手元には身長と同じくらい大きい白い布で包まれた長方形の何か。

オリアナⅡトムソン。

その女が今追っている魔術師であると理解するのは容易かった。

「……なあ、ひとついいか？」

「なーに？」

「金髪の西洋人、それもどでかい物をもっている神裂火織もびっくりな露出度の高い女。お前は思う？」

「垣根くん、それは答えを言ってるようなものだよ」

そしてどうやらそれに気づいたのはあたしだけでは無いようで。耳元でさりげなく呟くと垣根くんはあたしの肩に肘を乗せてめんどくさそうにため息をついた。

「ま、だからなんだと言う話だがな。俺らには関係ない」

「……そう思わされてるだけかもね」

ヒソヒソと小さく答えると、彼は眉を潜めて体重をかけてくる。答えろと圧を物理的にかかれるが、何も答えずに黙って見てると上条くんの方へ視線を促した。

「ぶつかってしまったお詫びに、ね？」

右手を差し出して握手を求めると、女性は目を細めて妖艶に笑う。「キスの方がいい？」なんて子供をからかうように囁くと、欲望に忠実なのか冗談なのか上条くんが大声で「はい」と叫んだ。

「はい！その方がっうぐっ!？」

高校生の欲望がこれでもかと詰め込まれた力強い上条くんの答えは吹寄ちゃんの気に障ったようで軽く殴られ、結局右手を差し出して握手に応じた。

右手が女の手に触れる。

しかし握手をしようと互いの手が触れたその瞬間、女の方が手を思いつき引つ込めた。優しそうな色っぽい目つきは途端に驚き、恐れ、疑うような暗い色を纏う。

「ッ、そろそろ、お仕事に戻らなくっちゃ、じゃあね」

急ぎ足で女はこの場から離れると人混みに隠れるように溶け込んでいく。

派手な格好の女一人を見失うことはそうそう無いが、今から追わないと確実に見失うだろう。どうするか、どう出るか、上条くんの言葉を待つように沈黙が場を満たす。

「……垣根、天羽、行けるか？」

「いいよ、お姉ちゃんが着いてっつてあげる」

女が逃げた方角から目を逸らさず、上条くんは差し出していた強く右手を握る。

強い主人公の眼差しを向けたまま真っ直ぐ前を見つめる彼に笑顔を向けると力強く頷いた。

50話：癩に障る

賑やかな道、天井の陰と人混みに隠れるように陽が差し込む赤茶色のタイルが敷かれた渡り通路を進む。話し声、足音、様々な音で賑わう道を三人で横並びになって歩くとあたしはあくびを噛み殺し何も知らないかのようににこにここと笑う。

「で、どうしたの上条くん？」

何も知らないように振る舞うと、彼は優しく、そして眉を顰めて人混みの先の金髪をじっと見つめた。

金髪碧眼、お姫様のような巻き毛に、ベージュの作業服から目も向けられないほど露出した肌。視界に入るオリアナトムソンをチラチラと横目で見ながら右手で拳を作る。

「いやさ、あの人の手を握った時、何かを壊した感じがしたんだ……たぶん、魔術師だと思う」

多分と言いながら確信を含んだ強い口調で言い切ると、彼はぐつと握った右手から力を抜いて手の平を静かに眺めて目を伏せた。

彼の気持ちを探るように一度伏せた目を見ようとしてみるが、彼より高い背がそれを許すことはない。黙ったまま携帯を取り出して何処かへかけると、彼は状況を語り出した。

土御門くんに話しているのだろう、オリアナから目を離さずに小さな声で話す彼の邪魔をしないように一歩下がる。

「まさかお目にかかれるとはな。上条は不幸なのか幸運なのか」

「上条くんが不幸なわけないでしょ。いつだって事件の中心にいろ、誰かを守る。まあ、彼が生きてなかったら厄介ごとも起きなかつただけだね」

一歩下がった途端に上条くんを挟むように隣にいた垣根くんも下がってくる。居場所やらGPSなんて単語をだす上条くんの電話に向けた真剣な声を利かせたのか小さく呟く彼は、じっと前を向いて自然な形で歩いていた。

「どうやら暗部出身は伊達じゃないようだ。」

チラチラとオリアナを横目で確認する上条くんとは違って自然に

振舞えているような気がする。

年不相応な尾行テクニクに苦笑いでしか応えられず、どうしたものかと次に出す言葉を考え始めるが、どうやらそれは無駄になりそうだった。

視界の端で跳ねる金髪。オリアナトムソンが走り始めた頭が瞬時に理解する。

「あ、バレた」

しかし、足よりも口が動く。

それがいけなかったのか、上条くんよりも遅れて足が動いてしま
う。

渡り通路から枝分かれしたガラス張りの橋へ。

走り去るオリアナを追いかけていった上条くんの横に小走りで追いつくが、そこにはすでに誰もいなかった。

「いない……う？」

ガラス張りの通路は誰一人立っていない。立ち尽くすあたしと走る気がないのか歩いてくる垣根くんを置いていくように、もうすでにいない影を追って上条くんがパツキリ別れた通路の境界を跨いで走り出した。

「あらら、走ってっちゃった。あたしらも走る？」

「あー……そうだな」

彼に追いつくのは容易いが、隣にいる垣根くんが走らないのならあたしも走るわけにはいかない。顔色を伺うように上を見上げるが、めんどくさそうな声のため息が返ってくるだけだった。

息を荒くして走る上条くんの後ろをジョギング程度の軽い走り
で追いつくと、大きな建物の下で険しい顔をして奥の倉庫らしき建物を
凝視する二人組に鉢合う。赤髪の神父と、金髪にグラサンの学生。

それが知り合いだと気づくと、減速して彼らの隣に立って改めてその建物を見た。たくさんのバスが並んだ大きな駐車場と、大きな車庫、そこがどんな施設なのか、初めてきた自分でもそこがどんな施設か理解するのは容易い。

「つはあ、はあつ、バスターミナル……?」

「自立バスの整備場だね、来るのは初めてかも」

学園都市のバスは基本的に自立しており、自動運転で運行されている。2020年でも似たようなものはあったのであまり驚きはしないが、それでもこんなにも多くのバスが並んでいると圧巻だ。

「ここで返り討ちにしてやろうって魂胆なんだろう。人もいないし、暗くて狭い空間だ。トラップ仕掛け放題ってわけだ」

「トラップ……」

薄暗く広い車庫を駐車場から眺めているが、オリアナらしき影は見当たらない。垣根くんの言う通り、トラップを仕掛けて虎視眈々とあたしたちを狙っているのだろう。

そんな目の前の地雷に上条くんは少し躊躇し、眉間に皺を寄せた。

「入ってみればわかるんじゃないやねえの?俺は遠慮しとくが」

「じゃああたしが行くよ。確認し終わったらくれれば?」

誰も中に入らないような雰囲気の中、あたしは笑顔で手をあげる。ただならぬ雰囲気が一瞬にして凍りついた。

笑顔で答えたつもりだったが、みんなしたため息をついて頭を抱える。

『何言ってるんだこいつ』とか、『頭おかしい』みたいな、大変喜ばしくない視線に一瞬苛立ちが芽生えるが、そんな感情は揺れる視界に気を取られどこかへ消えてしまう。

「あー、自殺志願者はこっちだ」

「えっ?!ちよつと!」

唯一あたしの発言を予測していたと思われる垣根くんは、なんとなくと言う顔であたしのジャケットと中身のセーラー服の襟を強く掴む。

ズルズルとまるで羽田空港から旅行に行く人々が持つキャリアー

バッグのようにあたしを引き摺ると、彼は黙々と歩き出して羽も出さずに動かないバスの上に飛び乗った。

「中入るより上から待ち伏せする方が相手にとっては不測の事態だろ。トラップ仕掛けてる合間に先手とるぞ」

「拒否権は？拒否権を求めます！」

「お前セーラー着てんのかよ。掴みやすいな」

「この人話すげえ聞いてない！」

襟を掴まれているせいでまともに歩けないというのに、垣根くんは構わずにバスからバスへ飛び移る。上条くんたちが小さくなっているのを確認すると、そのまま車庫の反対側の出入り口まで30秒もかからずについでしまう。

おそらくまだオリアナは車庫の中。

アニメでは上条くんが車庫から抜けた時まだオリアナは目の前にいた。それと全く同じルートを辿っているのなら、まだ上条くんたちが車庫の中にいる現時点、オリアナも同じように車庫にいるはず。

「オラ、連れてきてやったんだから、後はお前がなんとかしろ」

「はあー？アンタが勝手に連れてきたんじゃん、本人がなんとかしなよ。暴力はあたしの辞書にないし？」

「へえ、暴力を知らない？そんなもの持つといてよくそんな口叩けるな？」

車庫の屋根に投げ捨てられその場にぺたんと座って彼を見上げていたが、めんどくさそうな顔に免じてゆっくりと立ち上がる。

その時言い返したのがいけなかった。彼は再びあたしの襟を掴んで軽く体を持ち上げて、ジッパーに手を掛けた。

嫌な笑み。

中身の重さで引つ張られてウインドブレーカーは形を崩す。

服越しでも分かる服の中身に彼は嫌そうに息を吐いて手に力を込めた。

「……やっぱ気づいてたか」

「分かりやすいんだよ、お前」

「うっさいなあ、分かりやすくないし」

「バレたから拗ねてんの?」

「拗ねてないから」

つま先立ちで支える体から乱暴に手を離すと、がっしやんと音を立てて銀色や黒色の重い何かが落ちる。

拳銃、ハンマー、爆弾。

疑いと呆れと怒りとその他諸々の感情を含んだような声色で彼は落ちたものを拾い上げた。

「どうせなら撃ってみろよ。早く終わらせちまえば後々楽だ」

「……アンタがそう言うなら」

ウインドブレーカーのジッパーを下げると、セーラー服が現れる。

ハーネスのような銃のホルスター、弾薬に、小さいサイコロのような爆弾。

全て貫い物。

弾を込めて、放つ。慣れてはいないが、引き金に手を添え力を込めるだけならあたしでも出来た。

「麻酔銃じゃねえな、実弾?」

「正解。本音を言えば持ちたくないんだけど、イベントって色々と問題が発生したりするからさ。譲ってもらったの」

スキルアウトやらその他のコネクションを使って色々と手に入れた武器。ずつしりとした重さが手に馴染む。グリップを握りセーフティレバーを外すと、垣根くんはさらに顔を顰めた。

麻酔銃なんてものは別の資格が必要なくらい取り扱いが実弾より危険だ。一寸でも狂ったらあたしでも修復不可能の状態に陥る。

そう思っただけで実弾を駒場くんなどから買い付けているが、どうやら麻酔銃ではなく実弾を持っているのが意外なようで垣根くんは首を傾げたまま黙っていた。

「で?撃てるのか?」

「もちろん」

「ふーん……即答とはお前らしくねえな。まあ、アメリカ育ちだし? あつちじゃ狩猟はスポーツみてえなもんだからな、一理あるか」

力強く答えると、先程までのまるで不出来な妹を怒るような怖い顔

から、納得のいく答えを出せたのか悪戯を考えついた子供のような悪い笑顔を見せる。

途端に態度を変えニタニタと口で弧を描く彼に少し不安を覚えつつも真つ直ぐ前を見て重い拳銃を構えた。

「なら、狐狩りと洒落込みますか。お姫様」

「言われなくても！」

望遠鏡にも、虫眼鏡にもなれる目はどこまでも鮮明に景色を映す。

彼の言葉と同時に女の姿を捉えると、銃を構えて引き金に手を掛けた。

乾いた音が空気を振動し、鼓膜に伝わる。

狙うは手元。当たらなくていい。驚いて刺突杭剣^{スタフソード}、もとい看板から手を離せば計画通り。足を止めれば及第点。

一直線に進む弾丸は走る金髪の女の荷物を持つ手の爪を掠めた。足を止めると、弾丸の軌道を辿って車庫の屋根に立つあたしたちに視線を向ける。

彼女が看板から手を離すことはなかった。

「初めまして指名手配犯。降伏してとつと面倒を終わらせてくんない?。」

不敵な笑み。余裕のある大人の笑み。そんな笑顔を浮かべるオリアはあたしを見てふつと鼻で笑う。

前世のあたしがしていたような、年長者の余裕。気に食わない笑みに苛立ちながらも笑みを返すと地面に降り立って同じ目線で目だけ睨み合う。

「ふふ、ごめんなさいね。それはちよつと聞けない相談だわ」

「抵抗するってんなら、俺らも容赦しねえけど?どうせ選ぶのはテメエだ。抵抗か降伏か、どっちがいい」

嫌味を込めて笑いかけると、金髪の女性、オリアは妖艶な笑みを浮かべる。自信に溢れる顔に冷たい感情しか湧き上がらない。何か答えようと口を開くが、屋根から降りてきた垣根くんの声が変わりに答える。

いつものように意地悪な笑顔をみせる彼に姉として怪我をする前

に隠れてと言つてやりたかったが、楽しげな顔を横目で見てしまうとどうしても言えなかった。

「ふふ、なら激しめなプレイでお願いしようかしら。でも選ばせてくれるだなんて随分と紳士的なね、そういうのお姉さん好きよ、濡れちやうくらい」

「未成年相手に興奮してんの？ 青少年を誑かすのはやめてくんない？」

前言撤回。

卑猥な言い回しに、吐息の多い言い方。青少年の教育によくないことを確信すると、慌てて垣根くんの前に守るように出て低い声で睨む。

それでも女の笑顔は崩れない。

「まあ！ 可愛い嫉妬なこと、見かけによらず初々しいのね。そんな見た目で案外経験少ないのかしら？ もしかして初恋？ 処女かしら？ アドバイスでもしてあげましょうか？」

「は？ まさかブロンドの巨乳が誰しも淫乱だと思つてんの？ この世の愛が性愛だけとマジで思つてんなら多様性について学んでこいよ、見聞が広がるからさ」

この愛を性が絡む汚いものだと思つて彼女に一々苛立ちを感じてしまう。

思わず喉が痛むほどの感情を低い声にのせて吐き捨てるが、それでも認識を改めることはなかった。

「あら、凶星なのね。ふふ、子供を相手するのは楽しいわ。でも、お喋りはこれくらいにしましょう？」

まるで初々しい子供を見るような眼差しで看板を持つ手とは反対の手にリングでまとめられた一冊の単語帳のような代物を手に取る。何の変哲も無い単語帳。

文字の書かれた一枚をそこから破くと、彼女の不敵な笑みはさらに口角を上げた。

「そろそろ運動のお時間よ」

オリアナの弧を描いた口で破いた紙が淡く光る。それと呼応する

ように空気から生み出されたのは肌を傷つけるほどの鋭い風。

痛くなんかない、痛みなんて感じない、死んだあの日以上の痛みを感じることはない。だから受け止めようとまっすぐ前を見た。しかし見えたのは真っ白い壁。

甘い匂いが鼻腔をくすぐる。

「俺の前に立つってことは俺に守ってほしいってことか？」

「違うから」

あたしの肩を掴んで背後に立つのは真っ白い翼を持つ少年。向かってきた風はその翼に遮られ、こちらに届くことはなかった。

殻のように守る翼の隙間から見えるのはオリアナの驚きに満ちた顔だけ。

「紙に書いてある魔術を発動させる感じが。炎なら対処法は解っているんだが、それ以外は詳しくなくてな。打撃が一番手っ取り早いから」

「翼……!?!」

ブツブツと独り言を呟きながら目の前に広がる翼を広げると、驚愕の色を浮かべるオリアナと眼ががち合った。魔術師のことだ、天使とでも誤解して、恐れを感じているのだろう。

そんなものではないというのに。

「見惚れてないで、自分の心配でもしたらどう？」

ぐつと強く地面を蹴る。驚きで体が硬直し、反応が遅れたオリアナの懐に入ると、そのまま拳銃を持った手を振り上げた。

しかし拳銃の底が彼女の頭に当たる寸前のところで躲される。驚きから笑みへ表情が変わると、何事もなかったかのように距離をとって看板を後ろ手に隠した。

「貴方も激しい方が好きなのかしら？女同士、仲良くしましょう？」

「申し訳ないけど、お友達はいらない主義なの。それよりも、足元にご注意を！」

再び接近すると、そのまま拳銃を持つ手とは別の手でウィンドブレーカーからサイコロのような小さい黒い爆弾を一つ地面に向けて転がす。

一瞬のことだった。

目の前が鮮烈な赤に変わり、その次にまたもや白に変わる。

その白が先ほどと同じ白だと気づくのにそう時間はかからない。ぐいっと誰かに襟を掴まれて宙を浮く感覚はさつき感じたものと同じ。爆風の傷も、爆熱の火傷もない体と、掴まれた襟。

地面が遠くに見え、空が近い。

トンつと軽い音を立て地面に降り立つと襟を掴んでいた張本人は今度は両手であたしの肩を掴み、目線を合わせてまるで子供に言い聞かせるかのように怒りを含んだ瞳であたしを見た。

「爆弾はな、遠くに投げるものだ。決して自分の近くで爆発させるものじゃないんだ」

「知ってるよ?」

「なら何故自分諸共吹き飛ぶような場所に投げる?俺が助けなきや木っ端微塵だったぞ」

「別に良くない?ちよつとグロいかもしんないけどアンタは見慣れるでしょ?」

何かと思えばまたこれか。彼の言葉に呆れてしまう。

何度言ってもわかってくれない。死なないと、傷つかないと何度伝えても、あたしが彼を信じていないように彼は信じてくれない。

兄貴面しやがって、と心の奥の方で悟られないように悪態を吐くと、彼も同時に大きな溜息をついた。肺の空気を全て抜くかのような溜息と共に項垂れると、流し目であたしをちらりと見る。

「引っ叩いていいか?」

「それで垣根くんは満足する?」

「……しねえな」

了承が得られるとでも思ったのだろうか。意味の分からない発言に続き、誰も得しない行動の許可を求められるが、諭すように拒むと彼はすんなりと聞き入れた。

あたしが打たれて垣根くんが幸せになるのなら喜んで頬でもなんでも差し出すが、別に得しないならする必要もないだろう。

「随分と仲がいいのね、お姉さん妬けちやうわ」

「あ?」

不毛な会話が誰かに遮られる。爆発を起こしたその先、炎と煙が巻き上がる地面に燃ゆる赤を反射した金髪が風に揺れる。

未だ不敵な笑みを携えたままオリアナ・トムソンはそこに立っていた。

「こんな玩具じやお姉さんを熱くすることはできないわよ。最も、少々焦って濡らしちゃったけど。見てみる？下着までびちゃびちゃだよ」

「水の魔術か、詠唱もしないでそこまでの芸当ができるもんなんだな」
ぼたぼたと髪から、服から大きな水滴がこぼれ落ちる。口に加えていた単語帳の紙切れを地面にふっと吐き捨てると、彼女はズボンに手をかけてからかうように甘い声で囁いた。

誘惑するような甘ったるい声。大人の声。

自分が失ってしまったあの頃を彷彿とさせるその声はひどく憎い。
「未成年にそんなもの見せようとしなくてくんない？そんなにヤリたのなら適当な男でもひっかけてホテルでも行ってこいよ」

「つぶぶ、おまつ、ー！」

声にも、卑猥な表現を青少年に向けて言っている現状にも苛立ち、つい口が滑ってしまう。子供相手に、しかも真昼間からそんな発言をするだなんて、妹が居た身としてはとても気に触る。

けれど、どこか妙なわだかまりが残る。大人として、姉として、怒っているはずなのに。

なぜか悔しい気持ちが入り上がる。

「あら？なに卑猥なこと考えてるの？やっぱり見た目通りな子だったのかしら？」

「……ブロンドの巨乳っただけで決めつけてんならアンタにステレオタイプって言葉を教えてあげる。無性愛って言葉も存じあげないよ。うだったけど、ご存知？ステレオタイプ。いい言葉だから知ってて損は無いと思うけど？」

「そういえば処女だったわね貴女。だからその天使くんと仲がいいのかしら？ならそのまま大人にならずに彼らに彼らにキャンディでも貰ってなさいお子様。十字教じゃ処女はウケがいいんだから」

「処女膜なんて金と能力さえあれば何回も復元できるものを崇高だと崇める男共に可愛がられるのはお断りよ。愛なんて与えるだけで十分なんだから」

どうしてかは分からない、けれどなんだかとても腹が立つ。

理解不能の腹ただしさを口から溢れでる言葉の暴力で隠し、言葉の裏で必死に脳を動かしてその感情の出所を探していた。

この感情はどこからくる？

怒り？

嫌悪？

憎悪？

それとも、嫉妬？

いいや、嫉妬なんて違う。垣根くんに恋愛感情を抱くことはこの先あり得ないし、この女に劣等感を感じているわけでもない。

ならなぜ？

「我儘ね。そんなんじや男に相手にされないわよ」

憎たらしい笑みがあたしの何かを傷つける。

とつくの昔に捨てたと思っていた感情に亀裂が走ると、いつの間にか大声が喉を切り裂きながら溢れ出た。

「……他人と交わることをステータスみてえに言いやがって、アンタは性愛しか知らないの?!」

あれも違う、これも違う。自問自答を必死に繰り返し、たどり着いたのは一つ。

プライド。

あたしは、この女にこの愛を貶されたのだ。

あたしの顔、性格、声、髪、体型。それらならばこれほどまでに腸が煮えくり返ることはなかったのだろう。

何よりも大切なあたしの正義を、愛を貶したのだ。

この愛を汚いものだとして認識するだけならまだ許してやるというのに、あたしの生き様を貶されるのは何よりもムカついた。

あたしがここのいる理由も、死んだ意味も、生きる糧も、そんな汚い愛じゃないのに。ましてや誤解した上で貶すだなんて。

否定ではない侮辱。

それは酷くあたしの心をかき乱した。

理解しろなんて言わないから、あたしの愛を汚いものにしなさい！
心からの叫びは声じゃなく、能力によって女の元へ届く。

痺れるような甘い演算。

波のような感情は脳に直接命令を下した。何も喋って欲しくない、何も答えて欲しくない。眠ってしまったと、強く心から願ってしまった。

バチンと派手な音を立ててオリアナはその場に膝をつく。魔術の効果か、完璧に昏倒させるには至らず、辛そうな顔をして頭を両手で抱えた。看板を手放して頭痛と耳鳴りに耐える彼女はそれでも笑みを崩さなかった。

「ツ……！厄介な能力者もいるのね、お姉さん興奮しちゃう……！」

「垣根くん」

「ハイハイ、お姫様」

手放した看板は呆気なく垣根くんの翼によって回収される。それを見て一瞬顔を歪めたが、オリアナの強気な姿勢は一向に崩れそうにない。

だが車庫の奥から聞こえる足音が耳に届くと、彼女はほんのりと焦りを見せた。

「おいっ！今すげー音したけど大丈夫か!？」

「馬鹿が馬鹿したただけだ。気にすんな」

「……人が増えると面倒ね。それは預けておくわ、可愛い能力者さん達」

上条くんと土御門くん、二人分の足音に気がつくともオリアナは再び単語帳の一ページを切り取って魔術を発動させる。

風の魔術の応用か、体を包む大きな風の塊に乗って彼女は別の建物の屋根に飛び移り挑発的な笑みを見せて逃げて行ってしまった。

「逃げられたか、追うぞー！」

「大丈夫だよ、どうせ会うことになるし。それより早く^{スタブソード}刺突杭剣確認したらいいんじゃない?」

「えつ、ああ、そ、そうだな、とりあえずこつち確認しておこうぜ。刺突杭剣スタブソード持ってねえんだし、あつちも大人しくなるんじやねーか？」
逃げて行ったオリアナを追おうと土御門くんが声を張り上げるがそれを意図せず嫌な言い方で止めると、垣根くんの持つて居た布に包まれたオリアナの忘れ物を受け取って上条くんに押し付けた。

受け取った上条くんがいそいそとそれを床に置いて布を外し始めると、土御門くんは仕方がないとでも言いたそうな顔つきで動きを止める。

「なんだよ、また拗ねてんのか？」

「別に。なんでもないよ。心配しないで？」

目の前の二人が荷解きを始めたのを見て黙り込むが、隣の少年はどうやら気に食わないようだった。先程から機嫌が悪いことを感じ取られているようで、ムツとした表情であたしを見下ろす。

ニコニコとそれに笑顔で返事をするが、垣根くんはその答えに納得していないのか少しだけ不服そうな顔をしてそっぽを向いてしまう。見えない顔からは感情を読み取ることはできない。

理解されなくなつて構わない。けど、この愛を性愛なんかに区別されて、侮辱されるのは頭に来る。

誰だつてそうだろう。自分が最も大切にしているものを貶され、見下されるなんて嫌に決まっている。

笑顔の下は随分と濁った感情で埋め尽くされていた。

「つと、重いな…あ？」

垣根くんがそっぽを向いたちようどその時、上条くんが声を上げる。どうやら荷解きが終わったようで、白い布から色が現れた。

「これが、刺突スタブ、杭剣ソード？」

そこにあつたのはアイスクリームの看板。

何の変哲も無い看板。

それらしい嘘は見事に役目を終えた。嘘に翻弄されて走り回った事実のため息をつくふと空をみる。

眩しい太陽の下、そこには沈黙しかなかった。

51話：道しるべ

オリアナと一戦交えてから数十分、いや数時間以上は経っただろうか。

祭りごとの雰囲気鬱陶しい道端の隣、太陽が眩しいテラス席に座りながらにも少々飽きてきた。

底が尽きそうな持ち帰り用のプラスチックに入った冷たいミルクティーを胸の上に置いて、目の前の大男が電話を終わらせるのを手に持ったスマホを弄りながら待つ。

目の前に座るのはゴシック調の神父服に赤毛の2m超えの外国人、その隣はまるでライオンのたてがみのようにワックスで固められた金髪とサングラスの体操服姿の背の高い男子生徒。

そしてあたしを挟んだ隣に真っ黒いジャージを着た茶髪のホスト風のイケメン。

しかも唯一いる女は金髪と真っピンクのグラデーシヨンのかかった毛先、胸も服の上からも分かるほど大きく、生足をさらけ出して態度悪そうに椅子に座るあたし。

そんな治安の悪そうな四人組と一緒に座るのは黒髪黒目の平均的な背丈の男子生徒。ほかと比べればまだそこまでハツチャケてはないが、同じような系統のやんちゃやそうな見た目は同類に映るだろう。

チラチラと通行人から怪訝な視線を向けられるのはきつと可愛い女の子が甘くいフラペチーノを飲むような爽やかな店外の丸テーブルをこんな見てくれの不良が囲っているからに違いない。

「なあ、オリアナ追わなくてよかったのか？」

「持つてるもんわかんないんじゃないじゃ追ったって対策できないでしょ。やらかして死んだらどうするの」

まだ比較的大人しそうな彼、上条くんはそんな視線を物ともせず、二つ隣のあたしに声をかける。

隣に座るのが未だ電話を握る男と、不機嫌そうなホスト顔のイケメンということが思っていたよりも気まずかったようで、椅子を後ろに引いて助けを求めるような顔で口を尖らせ、目で訴えていた。

しかしそんな顔をされてもスマホで他人と連絡する手は止まらない。

ぼんやりと画面を見ながら言葉を返す態度は『話す気がない』ことへの意思表示になったようで、上条くんはおとなしく引き下がり寂しそうにため息をついて顔を伏せる。

「上に確認が取れた。まあ、順番を追って話そう」

再び沈黙が訪れたと思った矢先、今度はその隣が嫌そうに言葉をこぼす。

何処と無くピリピリした空気を発しながら目の前の大男、ステイルⅡマグヌスが携帯電話から顔を外し、右手でこめかみを抑えて大きくため息をついた後、彼はあたしたちの顔を見てゆっくりと説明し始めた。

「まず、^{スタブソード} 刺突杭剣は嘘……というより誤解だ」
「誤解？」

「人々の勝手な憶測や伝承が独り歩きしてしまったわけだ。彼女らが持っている物品は正しくは使徒^{クローチエティピエトロ}十字。まったく、とんだ話だ」

重々しい表情で口を開くと、彼はさらに頭を抱える。想定と違う物品の取引というだけだが、新しい事実がさらに現状を最悪のものにした。

「ピエトロ、あー、ペテロか……神の子の使徒、教会の始まりだっけ？」

魔術師たちが散々追いかけて回っていたその正体は使徒^{クローチエティピエトロ}十字。

ローマ・カトリックの祖とされる人であり、カトリック総本山のバチカンに骨を埋めた人物。神の子と同じは恐れ多いからと言い、逆十字架を墓石にしたとかしないとか。

「中々博識だね。詳しく言えば、ローマ正教の総本山であるバチカンは昔、広大な土地にペテロの遺体を埋め、そこに十字架を立てたところから始まったんだよ」

「んで？逸話は理解したがその十字架を模した霊装は具体的にはなんなんだ？」

そんな曖昧な記憶を適当にぼろつと零すと、ステイルくんは頷いて説明を続ける。しかしその説明だけでは納得いかないようで隣に座

る垣根くんはムスツと足を組んで湯気が立つコーヒーカップに口をつけた。

「つまり、その十字架を立てたところがローマ正教となったのなら、これを立てた空間はもれなくローマ正教の支配下に置かれるって話だ。それが学園都市であつてもね」

「支配って……」

「何もかもがローマ正教の都合のいいように展開していくし、誰もがその変化に違和感を覚えず、納得してしまう」

重々しい表情でステイルくんは下唇を噛む。言葉にできないような暗い声で呟くとほかの四人は口を固く閉じてその言葉の重さを噛み締めた。

「どんなに理不尽な要求でも、どんなに不条理な重荷を背負わされても、誰もが幸せしか感じられない世界が出来上がる」

幸せの平等化、とでも表現すればいいのだろうか。

ローマ正教の思う幸せを受諾し、誰もが幸福になれるワンダーランド。

誰も彼も、ただ一つの幸せのために生きて、己のエゴを失って、正義を知らずに死ぬ。

一度は夢見た理想郷。

冗談じゃない。

人の数だけ幸せがあつて、エゴがあつて、正義がある。それが素敵なのに、それが好きなのに。

奪われるなんて、溜まったもんじゃない。

「……ムカつく思想だな。結局は夢物語、魔術だろうがなんだろうが人を幸せにするのは己だ」

「でもまあ、彼女達の言い分も分からないでもないかな。誰もが幸せになる世界は悲願だもん、素敵だとは思うよ」

「お前マジで言ってる？」

それでも気持ちそのものは否定することはできない。

胸の上に置いていたテイクアウト用の使い捨てカップを手に取り、

手に持っていたスマホに視線を落とす。誰とも目線を合わせないように俯く、小さな声で話し出す。

みんなを幸せにしたい、それも立派な彼女らのエゴであり幸せ。誰かを、不幸せな人を幸せにしたいと願うあたしと根っこは同じだ。

だが、あたしがそれを正しいと思うかは別の話。

「でもね、ひとつの宗教によって束ねられた秩序が必ずしも幸せでないってというのは歴史が既に証明しているの、本気で素晴らしいとは思えない」

歴史。

小説。

デイストピアな世界は朽ち果て、いずれ終わる。他人の幸せを否定して、侮辱して、嘲笑って、あまつさえ改変して。

そんな世界あつてたまるもんか。

「学園都市が都合よくローマ正教の傘下に収まれば、科学サイドと魔術サイド、半々のバランスで保たれている今の世界はローマ正教の一極集中となってしまう」

「じゃあ取引っていうのは……」

「ああ、学園都市と世界支配権そのものだろうさ」

オリアナ達の目的は実に分かりやすい。大昔にやったRPGのラスボス如き考えに呆れて言葉もない。

苦々しく呟いたステイルくんだったが、席を立とうとした矢先に垣根くんの言葉で浮かした腰を再び椅子に戻す。

「その前に質問いいか？」

「ん？天使様がそんなこと言うとは思ってなかったね。どうぞ？」

「俺は魔術のことは全く分かんねーから言うけどよ、そのクローチエティビエトロ使徒 十字ってなんでまだ発動してねーんだ？オリアナが持つてなかったってことは彼女は運び屋つーよりも共犯だ。んで、その霊装を持ち出したのはおそらくローマ正教側のリドヴィア。彼女達の考えが共通だとしたらとつとと発動しちまった方がいいんじゃないかねえ？」

なんとも言えない表情でドカンと爆弾を落とす。ステイルくんは

眉間を押さえ、土御門くんはため息を着く。上条くんはそんな反応に首を傾げ、垣根くんはいたって真面目な顔をしている。

実際、あたし達二人に不足しているのは魔術関連の知識。アニメを見ていた頃も「早く魔術発動すればよくね？」とか無粋なことを考えていた。

静かな空気にピロンとスマホの通知音が響くと、時間が動き出したようにステイルくんがゆつくりと説明を始める。

「そこからか。いいかい？大規模な魔術は発動条件がシビアだったりするんだ。ゲームの中みたいそんなホイホイと使える代物じゃないんだよ」

「でも、ブラフがバレてしまっているのに隠れもせず人の前を堂々と突っ切り、派手な格好をしているのはなんでだろうね」

「あ？なんの話？」

届いたばかりのメールを開封し、添付されていた写真を開くとパッと彼らに見せる。

飛行場に侵入できたりとカメラに反応しない可能性も考慮したが、やはりマッドサイエンティストとは素晴らしい。

上条くんに触られたこと、同じ魔術を行使しない性質と、術をかけたりドヴィアと接触できないと踏んでの一か八かの行動だったが、どうやら正解だったみたいだ。

スマホに写るのは金髪の女の写真。エスニック風の服は肌色の割合が多く、十分に人の目を引くデザインだ。

目撃情報なども多数連絡が来ており、にやけ顔でそれらを見せつけると男どもは訝しげにつぶやく。

「どうやって……」

「病院勤務ナメんなよ？アンタたちなんかより表の知り合いは多いんだから」

知り合いの先生、警備員^{アンチスキル}、クラスメイト、他部隊の構成員、研究者、患者。

そしてなんと言ったって、病院であたしを待つ木原の二人。使えるものはなんでも使う。

ひっきりなしにくる通知が賑わう道と反して静かなあたしたちの間でひたすらに鳴り続けた。

「だから魔術の探索をやめろといったのか」

「そゆこと」

バスでのいざごぎの後、何もなくすんなりとこんなカフェでくつろいでいられるのは本当はありえないはずなのだ。

それもこれもあたしが無理やり引っ張ってきたから。

なぜなら探索するのは土御門くんなのだ、それもハンデつき。

魔術を使つて体調を崩す人を扱き使えるわけがない。

看護師としてもだが、体に反動で怪我を負ったり、逆探知されて戦力を削がれるのは普通に痛手だ。

「なんでそんな用意周到なんだよ、というかこれ監視カメラの画像だろ、どこで……」

「さあ、なんででしょうね」

「テメエ、またあの女に頼ったのか」

「話を戻そう？今大事なのはあたしじゃなくて、テロリストでしょう？」

ニコニコと無防備にスマホを見せていたのが悪かった。少し怒気を含んだ声で垣根くんはパツとスマホを私の両手からひったくり、あたしの手元には何も握られていない。

眉を逆立て必死にスマホとにらめっこするなんとも自分勝手な彼の姿に思わず指でテーブルを弾くと、垣根くんは少しだけ目を見開いて言葉を喉に引っ込めた。

「で、オリアナの不可解な行動理由は三つ。一つ目は攪乱のため。まあ要するに困だね」

目を細め笑う。そしてこん、こん、テーブルを叩き、指でリズムを刻むとみんな黙ってあたしの言葉を待った。

十分に周りが静かになると笑顔で音を止め、そのまま頬杖つきながら話を進めて二つ目を提示する。

「二つ目は挑発。真の目的がバレたって問題ないと誇示したい」

笑いながら両手で頬杖をつく、魔術師達の顔が少しだけ険しくな

る。

あまりにも静かなテーブルはプラスチックの容器に入った氷の溶ける音がやけに大きく響かせた。

「そして三つ目。魔術のため」

「魔術のため？」

「ステイルくんが今言ったでしょ。発動条件があるって」

「そうか、魔術の発動にはその場所や時間、周りの要素が合わないと発動しないものもある。つまり……」

「魔術を発動させるに最適な場所を探している？」

各々があたしの言葉に脳を悩ませる。推理にみせかけたネタバレだが、案外上手く騙せているよう。

最後の理由を提示すると少し考えるそぶりをしてステイルくん達は黙り込むと、それに納得した様に土御門くんが顔をあげサングラス越しにまっすぐあたしを見据えた。

「もし天羽の考えが全て正しいのなら、俺たちを向かい撃つつもりで、魔術を行う場所を探し、囷として行動しているってことか」

「そうなるね。まあ推論の域はでないけど」

情報がないまま正解までたどり着かせるのは甘やかしすぎかもしれない。

しかし、オリアナという女はあたしに喧嘩を売った。愛を決めつけ、嘲笑い、挙げ句の果てにこのあたしの幸せを捻じ曲げようとしている。

許せない。

あたしは外見も中身も中身もなく歪で、汚い。

あまり怒らない質ではあるが、そんなあたしの最も触れられたくないところをあんな女はいともたやすく踏み抜いたのだ。

腹ワタが煮え繰り返るほどの怒りに蓋をして静かに笑う。

あたしは認めさせなくてはならない。

この感情が正しいことを。

必ず。

「でもその魔術の発動条件って、なんだろうね。学園都市を朝っぱら

から回っても見つからないほど条件が過酷なのかな？そもそもペテロの十字架はどれほどの効力があるのかな」

だからこうやって他人を甘やかす。とつとあの女の元に向かわせて、エゴと言う名の正義の鉄拳を食らわせねばなるまい。

早く物語を終わらせると、早く嫌なものを片付けるとシヨートカツトを教えていく。

「そういえば前に海で会った天使は空を夜にして星の位置変えてパワーアップしてたな」

「星か。確かに魔術では重要だが……」

「ていうか、そもそも学園都市にあるのかな」

そもそもの話、この霊装は学園都市になかったと言うのが話のオチだ。

学園都市で起こることは全て前座。あの女なら前戯とでも言うだろうか。

悪いが無駄なことをするつもりは毛頭ない。必ずあの頭に私の正しさを叩き込まなくてはいけないのだ。

無視できる過程は全て無視して、最短であの女を警備員アンチスキルだかイギリス清教に突き出す。

悔い改めさせて、この愛を認めさせる。

それには彼らが不可欠だ。だから正解に限りなく近い答えを教える。

感情を隠すため、全てを知っている自分をまるで有能な人間の様に見せるため。

そして、人を殴ってしまうほどの激情を止めてもらうため。

あたしは善人セーフテイ共に縋り付く。

「は？だからこいつらがここに派遣されたんだろ」

「警戒を学園都市に集中させるための嘘だったら？」

「だがそしたら学園都市に対する魔術は使えなくなるんじゃないか？」

「発動条件がどうあれ、もしもその魔術が学園都市よりも広い範囲をカバーする物だったら？学園都市の外にいたってその魔術が使える

なら、学園都市に警戒を集めて外にいた方が安全じゃない？ゲームで例えるとなんだろう、広範囲攻撃、的なの？」

どこから思いついたのかわからないだろう突然すぎるあたしの推測に他のものは呆れた顔をしてグジグジと反論を述べていく。

けれど全貌を知っているあたしがそれに頷くこともなく。

例えるなら海上を進む船のレーダーみたいなものだろうか。レーダーの範囲に捕捉された対象なら近くにおらずとも発動条件が整えば魔術を行使できる。

ざつくりとした認識だが、アニメと同じように進むのが前提のこの世界ならこの程度で問題ないだろう。

「ま、結局憶測でしかないけどね。オリアナに関してはこっちで見張らせとくから、アンタ達は霊装について調べておいた方がいいと思うよ」

今ある情報で提示できるのはこの程度か。これ以上ヒントを提示すれば怪しまれるし、かといって何も教えないのは早期解決に繋がらない。

「あたしはあたしでやるからさ、そっちは勝手にやってなよ」

言いたいことを全て言い切ると、スマホをしまって席を立つ。

あとは各々勝手にやればいい。他にもやることは残っているのだ、これにばかり時間をかけてはいられない。

それに色々なイベントをスキップしている今、少しくらい離れていたらって問題ないだろうし、イギリスから情報が来るまで何も教えることが何一つないのだ。

これ以上ここにはいても何も進まない。

カフェから離れ、少しだけ静かな道歩く。

もうお昼時だからだろうか、レストランにでも言っているのか先程より人が少ない。それでもちらほらと人はおり、親子で仲良くしている姿が散見される。

藍花の姓を持つ親とは絶縁状態、前世の親とは関係は良好だったものの二度と会えない。

少し羨ましいというか、懐かしいというか、なんとも言えない感情が湧き上がるのを感じながら進む。

「さて、これからどうしようかな」

軽い足取りで道を歩くが、一歩踏み出した瞬間に後ろから物凄い圧を感じて思わず足を止めてしまった。

狼のような鋭い視線と重圧。

もう誰だかわかっている。

足を止め、笑顔で振り向くと思つた通り、眉間にこれでもかと皺を寄せた垣根くんがそこに立っていた。

「テメエはいつも……今回は何を隠してる」

「なーに？知ってるんじゃないの？」

「テメエがさつき受け取った画像の送信元が警備員の回線ってことは知ってるぜ。そして警備員がこんな簡単に情報を漏らさないことかな」

「あれ、本当に知らないの？」

首を傾げ、上から見下ろして来る彼にすこしの違和感を感じる。

確かに、運営に掛け合つて自分の役職をもらったことは色々と手回して情報がいかないようにしていた。藍花悦関連なのだから尚更。それでも、病院にいることや部下のことはあまり隠していない。なぜなら彼も知っていると置いていたから。

杠ちゃんを随時気にかけている彼なら05を使ってあの男の所在を調べていそうなのに。

あたしの推測は違っていた？

「知らないなら、知らないまま置いてよ。関係ないことだろうし」
「関係あるに決まってるだろうが」

「……覚えてないじゃん、もうアンタには関係ない代物だよ」

ぼんやりと考えながら垣根くんの端正な顔を見つめる。

05との連絡不足、調査不足、丸くなった垣根くんの性格。気掛かりな事は沢山あるが、どんなに考えても答えは見つからない。

やはり杠ちゃんを救ったのが原因か。

それとも彼の情報がアニメや原作で描写不足だから起こる行動パターンとの矛盾か。

「改名に続いてまだ隠し事か。何？お前は俺に殺されたいわけ？」

「うん、それもいいかもね。殺されるのも良いかもしれない。それが垣根くんの為になる死なら喜んで受け入れるよ」

「……メンヘラビッチ、いつか化けの皮剥いで顔面踏み躪ってやるからな」

怒れる狼のような低音で唸る。そのまま噛みつかれて死んだって本望だということを彼はきつと理解していない。

救うことが願い。

他人の幸せを想う。

死ぬことを恐れない。

他人のために生きているあたしを理解してくれるのはいつになるのだろうか。

悶々としながらあたし達は暗い空気の中、陽の下を歩き出す。

52話：五月蠅い人たち

目が眩むほどの光を頭上から照らす太陽に様々な思いを抱く午後、熱したフライパンのような歩道はお昼時ということもあり、周りばかりきつとご飯にでも行っているのだろう、全くと言っていいほど人通りが少ない。

朝方より静かな道を二人で進む。あてもなく歩く行為にそろそろ飽きてきたようで、隣でため息をついて垣根くんは空を仰いだ。

長袖長ズボンの黒いジャージを着ていると言うのに一滴の汗も流さない彼に少しばかり感心しながら同じ歩幅で歩いていくと、突然彼は足を止めてあたしの手首を握る。心配と、少しの嫌悪が混じった表情はあまり好きじゃない。

「なあ、腹減った」

「アンタがあたしのパトロールについてくって言ったんでしょ」

「飯食わねえとは思わねえだろ」

もうすでに機嫌を治し、改名の件も、監視カメラの件も特に言わなくなってきた矢先、今度は腹が減ったと機嫌を悪くするこの可愛い男が超能力者の第二位とはには信じられない。

やはり超能力者第二位と言っても、所詮可愛い高校二年生。空腹には耐えられないそうだ。

やはり180cm以上の高身長、高IQの持ち主は食べる量も多かったりするのだろうか。

そう言えばご飯を食べるところはあまり見た記憶がない、それに好きな食べ物も嫌いなものも知らないな。

色々な『知りたい』が一瞬溢れ出るが、まずは目の前のことをこなしたい自分にとっては彼の申し出は不要なものだった。

「上条くんと昼ご飯食べてきなよ、あたしといってもご飯食べれないよ？」

「お前にも食わせないと保護者失格じゃねえか」

代案として別の友人と食へに行くことを進めるも、玉砕。

そんなにあたしが好きかとかからかってみたくなるが、余計な一言に

姉としての尊厳にヒビが入るとそんな言葉は喉の奥に引っ込んでしまおう。

ふざけているとしか思えなかった。

「ご飯なんて食わなくなつて一ヶ月生きてけるし、いまはこっち優先だからそのふざけた考えを捨てなさい」

「あのなあ、俺がお前を心配してんのは林檎のこともあるって分かってんだろうな？ぶっ倒れて林檎泣かせたら死ぬどころの話じゃねえんだぞ」

「あたしが死んだぐらいであの子は泣かないよ。それよりもオリアナとトムソンについて心配しとけば？」

「あ？飼い主がペットの心配すんのは当たり前だろ、話逸らすな」

まるであたしを管理しているかのような言い方が癩に触る。

感情に任せて前に進もうと一步を手を振り払うが、それでも垣根くんは人の神経を逆なでするような言葉をとめない。

振り払った手首をもう一度、今度は折れてしまいそうなほど強く握って、彼はあたしを繋ぎ止める。

無駄だと知っているくせに。

「本当に？あなたの野望だつて気味の悪い偽物に変えられちゃうかも知れないんだよ？誰もが幸せしか感じられない世界になつてもいいの？」

「それは……そんなつまらねえ世界を望むだなんて、宗教家はよく分かenneえな」

「分からなくてもいいんじゃない？相手は神に祈る異端者なんだから」

話を自分から逸らし、いま一番考えなくてはいけないことへ軌道修正を試みる。自分の信条と願望を否定される未来を提示したらそれはあつけなく達成された。

垣根帝督という人間を否定する魔術は態度に出さなだけで彼の中では大きなわだかまりになつていたので、現実を突きつけただけで手首を握る力がゆるゆると無くなつていく。

「いい？全てがひとつの幸福によつて秩序が守られる世界はありえな

いの。そんな幻想に縋る教養もない人間を理解したって意味が無い」
「でも願いとしては真つ当じゃねえの？お前と似てるわけじゃねえか」

「垣根くん、幸せはエゴなんだよ。自分が幸せになるすべは自分にか分らない。それをとやかく外野から言われるのは腹が立つだけ」
体を反転させ、彼と向き合う。あんなものと似ていると言われたことにとつともなく腹が立った。

まるでこの感情を害だと言われているよう。

汚くないのに、穢れてないのに、害なんかじゃないのに。

強くなる口調をどうしても止めることができない。緩められた彼の手は、あたしの口を閉じるには刺激が弱いようだった。

「お前はどうかなんだよ。足の動かねえガキを幸せにしようと人生掛けたんだろ？」

「それこそあたしのエゴでしょ？あたしにとつての幸せを受諾して欲しかっただけ。あたしはあたしの幸せのために彼女を幸せにしたかったの、誰にも否定できないあたしの幸せなんだから」

「他人に人生を預ける生き方はいつか破滅するぞ」

「いいんだよ。この血潮を他人のために使うことこそがあたしの喜びであり幸せなんだから。破滅しようが一時の快樂に身を任せたいの」
ぐつと手を握り、拳に爪を食い込ませる。痛みは感じなかった。

早くなつていく口の動きは止められない、まっすぐ見つめた目は垣根くんから照準を離さず黒い瞳の奥を見つめたまま声をだす。

ここで目を逸らしたらきつと負けてしまう。

正論ばかり言う彼に。

「可哀想な奴だな、お前は」

「垣根くん、あたしのこと怒らせたいの？」

可哀想だなんて思わないで。

だって違うんだから。

お前なんかよりよっほど幸せなんだから、お前よりずっとずっと幸せなんだから。

あたしが可哀想なはずないじゃないか。

できる限りの低い声と鋭い視線を投げつける。

それでも乾いた笑いをやめずに彼はぐつとあたしの頭を片手で押さえ込んで、毛先だけ桃色のくるくるとウエーブがかった髪を掬い、何か面白いものを見るかのように口角を上げた。

彼が何を考えているかは分からない。

それでもバカにされている事だけはハッキリと分かってしまった。「お前みたいのが怒ったって怖かねえよ。お前メジロみたいだし、ぴーぴーうるさくて」

「誰がメジロだ。ていうかそのチョイスなに」

「緑とピンクばっかだろ？桜にとまるメジロみてえじゃん、花の匂いするし。これ香水か？」

ケタケタと馬鹿にするかのように声をあげて笑い、目を細めて今度は耳を塞ぐように両手を添え、金と桃色の髪を梳く。吹き上がるように花の匂いが空気に舞った。

犬と戯れているような手つきはひどく不快で、それを止めようと腕を掴むがびくともしない。

それでもその不快さを受け入れた。それがあたしなりの優しさだから。

「……部屋にある花の匂いがついたんじゃないの？でもまあ、桜はあつてるかも。髪の色ピンクだし。ちよつと濃いけど」
「色だけな」

メジロなんて小さくてうるさい鳥に例えられたのは心の底から腹立たしいが、その理由にはある程度納得がいくし、安心した。

髪の色も、来ている服も、さくらんぼに近い色だ。持つてる服も白か、黄緑、もしくは赤系統。

青だけが無いあたしの姿を見て緑の生き物と桜を連想するのも当然、そしてあたしに藍の印象が無いということは藍花悦を連想しづらいことを意味する。

だからこそ安心する。

自分の目論見が珍しくうまくいっていると分かるから。

それを感じさせる彼の言葉は、先ほどの不愉快な行為を忘れさせて

しまうくらいあたしを舞い上がらせた。

「色だけって、それ以外になんかある？花卉？雌しべ？」

「花言葉だ、馬鹿。桜は『優美な女性』、お前には程遠いだろ」

「へー、花言葉知ってるとは思わなかった。趣味なの？」

そして饒舌にもさせる。

怒っていたこともすつかり忘れ、未だに髪を掻き乱す手を軽く引き剥がして、雑学に近い知識を披露する垣根くんのギャップに目をほんの少し見開く。

「あー、ほら、女はそういうの好きだろ？お前は違うみてえだが」

「そういうのって贈り物考える時使うんでしょ？プレゼントなんてあんま渡さないし、興味なかったな。垣根くんはすごいね、物知りだ」

「子供あやす時みたいに褒めんなよ、ムカつく」

「えー、本心なんだけどなあ」

花言葉だなんてロマンチックな言葉がまさか彼の口から聞けるとは思いも寄らなかった。

そういったものは他人によく物をあげる人や、いわゆるオタクが気にするものかと勝手に思っていたから。

というのも、妹はそういうものが好きだったのだ。

宝石やお酒、星座に花、色。そういったものの意味や言葉を調べては好きなキャラクターに当てはめて考察だか解釈を広げていた。

何度も、何度も、よくわからない用語を用いていかに好きなキャラクターが素晴らしいか力説していたが、自分には無関係なものだと思っていたのであまり興味を持つことはなかった。

それに彼女が欲しがるものは大抵課金とグッズ代に使われる現金か、アニメのDVDボックス、漫画、もしくはゲームソフト。

誰かにプレゼントをあげるときはそもそも本人に聞くし、花に例えたことも、例えられたこともなかった。

それを使うような場面は私の人生に一度も現れなかった。

「でも花言葉ねえ……『優美な女性』は確かに違うかも。でもだからと言って他の花はあんまし思い浮かばないなあ」

垣根くんは花に例えるならなんだろうか。

口では自分のことを気にしながらも、脳はもう違うことを考えていた。

そりゃあ誰だってこんなおばさん（精神年齢39か40くらい）に似てる花なんかどうでもいいだろう。それなら隣に立つ顔の良い男について考えていたい。

じつと顔を見つめ合う。

綺麗な人。美しい人。彼を表現する言葉は何個も浮かび上がるが、花は全く思い浮かばない。

そもそも人間を花で例えるのなんて無理な話。

だって人は花なんてものよりよっぽど美しくて可憐で無力で儂いものだと知っているから。ただの植物に複雑な人間を表せることなどできない。

ならばどうするか？趣向を変えよう。

似合う花を考えれば良い。

どんな花なら彼を更に美しく見せれる？

鮮血を彷彿とさせる彼岸花？

儂く散ってしまふ桜？

風に揺れる藤の花？

冷たい雪の上に花を落とす椿だろうか？

それとも太陽を求め続ける向日葵？

そういえば、死体を埋めると色が変わる花を聞いたことがある。

確かそれは美しい青と薄紅色の花。雨の匂いに混じって花の香りを漂わせる神秘的な花。

名前は――

「紫陽花」

土壌の酸性度によって色が変わるその花の名前を呟いたのはあかしではなかった。

「突然どうしたの？」

「お前は紫陽花みたいな女だなんて。ハイドランジア、アメリカにもあつただろ？」

ぞわぞわ、ぞくぞく。

一気に寒気と虫の這いずるような感覚が背中を駆け上がる。じつと彼を見つめる瞳は狼狽え、瞳孔が狭まるのを感じ、彼の言葉に熱が奪われていく。

どういう意図があるかわからない。

それは紫陽花の歴史から？

それが違うのなら花言葉？

それとも、その色から？

青にも赤にもなれる花だというのに、紫陽花という単語はリトマス紙のように彼の思惑をはつきりと教えてくれなかった。

「それは、髪の色と同じだから？」

恐る恐る、嫌な予感が脳に警鐘を鳴らしながら言葉を選んでぐっと自分の腕を掴む。

怖い。彼の考えが読めないのが堪らなく怖かった。

もし、もしも彼が青い紫陽花を思い浮かべていたらどうしよう。

心臓が高鳴る。真っ赤な血液を押し出して体を巡らせているにもかかわらず、手先は冷え、顔は暖かさを失っていた。

「どつちだと思う？」

鼓動を伝える心臓を扶るように、八重桜のように色付いた髪を撫で垣根くんは笑う。全てを見透かしたように細められた目が呼吸を奪い、目を離すこと許さない。

バレている。

どこまでかは分からない。藍花の名字までたどり着いたのか、それとも青い服を着た自分を知っているのか。

そのどちらかなのは分からないけれど、何かを知っていることだけは理解できた。

逃げなくてはいけない。

「あ、あたしちよっと、用事あるっ」

そう思うや否や、体は動いていた。律儀に別れの言葉を投げ、くると彼から体を逸らす。

弾む髪から溢れる花の匂いがやけに鼻についた。

「どこ行こうってんだ、嘘つき」

「っんあ!？」

だが無情にも大きな手に髪を掴まれる。散々弄られていた髪をまるで手綱のように力強く引き寄せると、力に耐えきれず体が後ろへ仰け反り垣根くんの胸板と背中が衝突し声が漏れた。

カーテンのように垂れ下がる茶色い髪が自分の視界に広がる。暗い瞳は逆光で見えづらい。

足を放り投げ、猫の胴をぶら下げて持つように脇の下で支えられている事を考慮しなければ、とても美しい光景だと純粹に感じられたのに。

「う、嘘なんか、ついてないし」

「ならどこ行こうってんだ」

「……ちよつと、そこまで」

「馬鹿だろ、お前」

「そんなの知ってるし、いちいち言わなくていいし」

口を尖らせぶつくさ文句を言うのと、「あつそ」とだけ言って支えていた腕を離し地面に体を叩きつけた。人形のように体を支えられているよりはよっぽどマシだが、予告なく手を離すのもやめて頂きたい。

意地悪な人だ。でも同時に優しさも見え隠れする。

派手な音を立て地面とぶつかったと言うのに、さほど衝撃を感じなかったのは彼なりの優しさだとお姉ちゃんは知っているのだ。

「そんなにまでして止めなくたっていいじゃん」

「これくらいしなないとお前は分からないだろ?」

「だからって叩きつけなくても良くない?」

しかし人の気配が全くないとはいえ、よくもまあ女を地面に叩き付けられるものだ。いつもの高慢な態度に呆れ返るとため息をついて体に力を入れた。

そのまま立ち上がろうとしたところで二の腕を掴まれぐつと勢いよく今度は上に持ち上げられ、早く立てと急かされる。

地面に叩き付けたと思ったら立ち上がるのを急かしたりと、随分と俺様気質な男だ。

再び呆れてしまう。

とはいえ、一番呆れてしまうのはそんな彼が好きで、どんな態度でもなあなあにして許してしまう自分の愛だろうか。

「あのね、垣根くん、ついてる嘘を暴きたいのなら、暴力じゃなくて知性で挑まなきゃダメだよ」

「何、挑発してんの？」

立ち上がって上着についた皺を伸ばしながら子供らしい彼の態度を鼻で笑うと、再び髪を掴まれ無理やり彼の黒い瞳と目が合わさった。

10cmも違わないのに、背の高い彼と視線を合わせるためには必死に背伸びをしなくてはいけない。

少しでもバランスを崩したらきつと倒れてしまうだろう。

彼が前から支えてなければ。

優しい子だ。

傷ついてもいいって何度も言ってるのに。痛みなんて感じないって言ってるのに。

中途半端に優しくして、あたしを傷つけない彼にもどかしさを感じてしまう。

何だっしてあげられるのに、気まぐれな優しさで拒む方が傷つく。無力な人間だと言われているようだった。

なにか言い返さなくては。

そう思って口を開いた時、垣根くん越しに誰かの大声が響いた。

「そこまでだ、兄ちゃん！」

先ほどまで誰一人歩いて居なかった道の先にだれかが立って居た。ずっと前に聞いたことのある男らしい声に気を取られ髪をつかむ手が緩まると、自分のものより大きく骨ばった手から髪がスルリと落ちる。

「……あ？誰、お前」

「げ、」

昭和に取り残された喧嘩番長のような出で立ちに、マイクを使わずとも大きく聞こえる声、物理とは何なのか今一度問いたくなる絶対に

ずり落ちない肩にかけただけのジャージ。

真っ白い鉢巻をツンツンとした黒髪に巻いた赤いジャージ姿の少年と目が合うと、同じようなタイミングで顔を顰める。

あたしはその男を知っていた。

「……待てよ、その鉢巻にふざけた格好……第7位か」

「俺のこと知ってるのか？ そう、俺は学園都市の超能力者の一人、ナンバーセブンの削板軍覇だ」

ぼくの一下。

序列7位の原石。おそらく、超能力者の中で一番厄介な相手。

体力という概念のない脳筋は、死なない体を使つての持久戦しかできないあたしにとっては厄介極まりない。

その上、彼は藍花悦を知っている。

ずっと前のこと、藍花悦に接触してくるはずだったスキルアウトを探しにわざわざ扮装して会いに行った相手がこの第7位。

髪の色も長さも、胸の大きさも、声の低さも、服も違う。気づかない確率の方が高い。

それでも念のためある程度隠れながら様子伺おうと一歩後ろに下がった途端、大きな声を張り上げた彼と目が合った。

「ま、それはともかく今その嬢ちゃん投げ飛ばしたろ？ 髪まで引つ張つて。可愛い嬢ちゃん、それも恋人にするとは根性があるとは思えねえな」

「か、可愛い嬢ちゃん……？ どこに……？」

「ここに女はお前しかいないだろ、ちよつとはその小さい頭で考えろボケ」

言われ慣れない単語に思わず辺りを見渡すと、ずっと前に出た垣根くんのため息交じりに睨まれる。

あまりにも自分を形容する単語とは離れすぎていたのだ、ちよつと理解できなくなつてそれくらい勘弁して欲しい。

少し狼狽えながら真っ直ぐあたしの目を見る削板に居心地の悪さを感じる。

気味の悪いお世辞に嫌悪しているのか、気迫に押されているのか、

それとも絡むはずのなかった第二位と第七位が衝突する原因を作り出してしまったことに罪悪感めいた感情を感じているのかは分からないが、濁りのない澄んだ目から視線を外したい。

「チツ……まさかこんな予想外の野郎がしゃしゃり出てくるとはな。こちとら取り込み中だつてのによ」

視線をうろちよると動かししていると、前に立つ垣根くんが腰に手を当て鬱陶しそうに大きく舌打ちを鳴らした。

誰に向けたものだったかは分からないが、機嫌がすこぶる悪いことだけは分かる。嫌な予感しかしない。

「で、助けに入る理由が分かんねえんだけど。こいつをどう扱おうが俺の勝手だろ？それとも何か？こいつと知り合いか何かなの？」

「いや、全く知らんやつだ……多分」

「は？って事はお前アレか？変な正義感で人助けしてヒーロー気取つてる勘違い野郎って訳か？」

「うん？俺はただ根性無しの兄ちゃんを見過ごせないだけだぞ？」

一触即発のピリピリとした空気が重い。

あたしを藍花悦として認識してないみたいだが、それでも妙に勘の良いこの少年の前にはいたくない。早く垣根くんとの場を逃げ出したい気持ちが出始める程度にはめんどくささを感じていた。

「そういうタイプの馬鹿か。お前とどつちがマシだろうな。なあ、彗糸ちゃん？」

「話振らないでよ……」

「ならとつとと誤解を解け。馬鹿と話たくねえんだよ」

なるべく空気になつていようと静かにしていた矢先、気持ち悪い呼び名で突然二人の視線が一気にあたしに集まった。

スポットライトを浴びせられているような緊張感に顔が強張る。それでも上擦った声で彼の頼み通り誤解を解こうと一歩前へ足を踏み出した。

「あ、あのね、削板くん、申し訳ないんだけど、あたしは大丈夫だから。これは彼なりの愛だし。ね？垣根くん」

「は？俺はお前に愛情を感じたことは一ミリもないが」

「なんで助け舟を沈没させるの！もつとめんどくさくなるじゃん!!」
「嘘でも嫌だ」

適当な嘘と本音を混ぜて笑いながら垣根くんを庇うように前に出るが、その努力は虚しく頼んで来た本人によって意味のないものへと変わってしまう。

確かに事実とはだいぶ離れているし、彼が嫌がる気持ちもわかる。しかし上手に嘘をつかなきゃ生きていけないし、面倒事は増えるだけ。

我慢して欲しいと目で訴えるが、そっぽを向いて黙り込む彼にそれ以上怒ることはできなかつた。

「嬢ちゃん、悪い事は言わねえ、愛を言葉でも態度でも表さない根性無しは嬢ちゃん自ら根性叩き直してやった方がいい。嬢ちゃんに無理なら俺がやってやる」

「えっ!?! た、たたきなおす!?!」

この場をどう切り抜けようか足りない頭で必死に考えるが、最善策が見つからぬまま削板くんに大きな声で説教を食らう。

根性を叩き直すなんて物騒なことを言う彼は申し訳ないが善人には見えない。

「あ、あのお!! 言わせてもらいますけど! あたしが垣根くん好きなのだけど垣根くんは別に関係ないっていうか、あたしが勝手に尽くしたいだけだし、救いたいだけだし、垣根くんのためならなんでも出来るっただけで、その愛を返せとは微塵も思わないし、何なら垣根くんは別に根性なしじゃないし、かつこいいし、可愛いし、好きだし、優しいし、かつこいいし、とにかく何でもしてあげたいほど好きなの! 叩き直さないから!」

「ああ、秋でもメジロがうるせえな。頭ん中が春真っ最中だからか?」
恋仲だと勘違いされているのは慣れてるし、価値観のアップデートされてない時代遅れに説明するのも億劫だから今は良しとしよう。

しかし、垣根くんをDV彼氏か何かと思われることは無視できないし、彼は根性無しなんかじゃない。

部外者にそんなことを言われるのは腹がたつ。

その誤解だけでも解こうと全身全霊になつて言葉を捲したてる。必死に庇つた相手は呆れ返り、伝えたい相手はぼかんと口を開けているのはあまりにもめちやくちやな反論だったからだろうか。

後半に至つては自分でも何が伝えたいのか分からなかったから、当たり前か。

「……なるほど。だったら尚更許せねえな、恋心を利用して依存させるなんて根性のねえ奴がやる事だ！」

「こ、恋!? 違いますけど!!? 話飛躍しすぎ! ねえ垣根くん!?!」

「まあ、確かに他人から見たらそう見えるだろうな」

「否定を!! しないさい!!」

息が上がリ、呼吸が乱れながらも言いたいことを全て言つたはずなのに、それでも誤解は続き、余計にややこしいことになっているようだった。

愛を理解してくれない人種は本当に嫌だ。オリアナといい目の前の少年といい、なぜ分らない。

理解しろとは言つてないのに、ただ分かってくればいいのに、何故か彼らは勝手に全部知っているかのようにあたしを無様だと見下ろしてくる。

「で? どうすんの? 俺がこいつの扱いが雑なのは認めるけどよ、第7位に何が出来るってんだ?」

「垣根くん! 挑発しないの! 削板くんもやめなさい!」

「簡単な事、根性入れ直してやるだけだ!」

ぐつと前にいたあたしの肩を掴んで引き寄せると、馬鹿にするように削板くんを鼻で笑う。

冷ややかな嘲笑を合図に削板くんは拳を作り、足を踏み込んだ。やめろと叫んでもやめずに、自ら怪我をしにいくようなことを続ける二人にもう優しい顔は出来なかった。

「止めろっつってんだろ! 日本語分かんねエのか!!」

「うおっ!?!」

削板軍覇と言う男にあたしの能力が通用するのは知っていた。

やめろと叫んだ瞬間に、その動きを止めさせる。なりふり構っていない。

垣根くんには可哀想だと言われ、青い自分があるのを知られた。

削板くんには余計な世話を焼かれ、オリアナ・トムソンはあたしを侮辱した。

磨り減った精神は自分が思っているより酷い有様だったようで、終わらない馬鹿騒ぎで更に消耗していく。

もういい加減にして欲しい。

みんなしてあたしを見下して、侮辱する。これが罰とでも言いたいの？

「アンタはこっちで職務質問よ、文句言わずについてこい」

一瞬だけでも体の制御を奪えばいい。

何が起こったのか分からないと言いたげな少年二人に構わず、ひらりと風にはためく鉢巻を強く握り、出来うる限りの低音を耳の近くで囁いた。

「え？いや、俺は根性を……」

「垣根くんはどこかでご飯食べてね、ついて来なくていいから」

「あ、おいー」

そのまま誰とも目を合わせずに無理やり鉢巻を引っ張って歩く。

近くのファミレスでもなんでもいい。どこでもいいから息をした

い。

早く、早く。

不安定なこの心に、とびきり甘い砂糖が欲しい。

53話：きっかけ

「それで、根性にうるさい削板くんはどうしてお昼も食べずにあたしたちに突つかかって来たわけ？」

垣根くんを置いて逃げた後、ひと気のないベンチに甘いリンゴジュース片手に座ると、隣で何が起こっているのかわからないような顔をする少年に話しかけた。

ツンツンと尖った黒髪に、白い鉢巻と肩に掛けた赤いジャージと、昭和に取り残されたような典型的な熱血少年は、この学園都市に七人しかない超能力者の一人、序列七位の原石、削板軍覇。

知らないとはいえ第二位に喧嘩を売った彼をそのまま放って置くこともできず、とりあえず買ってきた炭酸水を手渡して、自分の手元のペットボトルの蓋を開けた。

「そりゃ嬢ちゃんが酷い目に遭ってるのを見過ごせるわけねえだろ」「そこはいいんだよ。問題はあそこの区画がご飯食べるところがなく、今の時間はほとんど人がいないはずなのに、アンタみたいなレアものが歩いてたかってこと」

もうすでにお昼ご飯の時間、彼なら一ヶ月くらい食べ物を食べなくても根性とやらで普通に生きてそうではあるが、それでも食べ盛りの少年がスポーツの祭典だということにお昼に行っていないのが気にかかっていた。

それに彼は超能力者の一人、それが偶然にも第二位と第六位に鉢合わせるなんて、何か厄介ごとでもあるのかと勘ぐってしまうのは当たり前前だ。

「あー、実は探してる奴がいてな、一人が好きそうな奴だからひと気のないところにいるんじゃないかと思って、色々回ってたんだよ」

「探し人ねえ……探すの協力してあげてもいいよ、満足してくれるなら」

「いや、大丈夫だ。連絡つかねえから探してただけだからな」

犬の様なひと懐っこい笑みを浮かべて彼はありがとうと言って手元のペットボトルを開けた。

カシユツと弾ける様な音を立てて蓋を外し、炭酸水を一気にあおる。息をついて空を見上げる彼の言い分からは特に嘘や誤魔化しは感じられない。

「どうやら疑心暗鬼になり過ぎていたようで、少し罪悪感を感じると両手で握っていたりんごジュースに口を付けた。」

「連絡つかないなら心配じゃないの？監視カメラから追ってあげてもいいけど？」

「心配はしてねえよ、そいつも根性ある嬢ちゃんだしな。なんつったって、俺と同じ超能力者なんだからな」

言葉と同時に口に含んだりんごジュースは彼の発言によって食道とは別の場所に流れ込む。

彼の言葉はそれほどまでに衝撃的な言葉だった。

「つげホ、ごほ、レ、超能力者う？」

「俺が知ってる超能力者はそいつだけでな、あいつも大覇星祭の選手宣誓に呼ばれたのか気になってたんだよ。宣誓しに来てみたらあつたことねえ奴だったからさ」

最後の一文に狼狽え、ゲホゲホと咳を繰り返すあたしが落ち着くのを待って話を続ける。

一人しか知らない超能力者、その人物をあたしはよく知っていた。

「……根性ある嬢ちゃん、ね」

それはぼく自身。

学園都市に七人しかいない超能力者の一人、序列六位。
『不死者』
アンデッド

本名、藍花悦。

ぼくが彼と出会ったのは二月のことだった。

服を通り抜ける冷たい風を感じながら綺麗に舗装された道を歩く。雨が降りそうな桃色の朝焼けと馴染まない藍色の中華服は厚い素材で作ったとはいえ、二月の寒さには少し心許ない。

自分の思うチャイナ服を現代的なジャージのようにして前世の家庭科以来に触るミシンで必死に使った手作りの服だが、上に被るだけの楽チン設計にした代償は大きい。

採寸を間違えた少しだけ大きい上着はまだまだ改良の余地がありそうだ。

緑色のスマートフォンを片手で操作する手はほんのりと赤く色づいて、溢れる吐息は白い。

「今日は風が強いな」

乱雑に切られた踝まで届く黒髪は冷たい風に吹かれ、左目を隠す長い前髪とともに大きく揺れる。

目的地はすぐそこだというのに、髪が鬱陶しく中々前に進む気が起きない。

それでも大きいため息をついて歩き出すと、マンションに囲まれたなんも変哲も無い公園へたどり着く。

風が強い日だからなのか、朝早い時間なのかは分からないが、普通なら歩いているはずの住人は一切見当たらず、代わりに腕立て伏せをする少年を見つけるとすぐさま声をかけた。

「初めまして第七位さん」

「あ?」

「ぼく、藍花悦って言います」

硬い地面に手を当て、腕立て伏せをしていた昭和の番長の様な出で立ちの少年は突然話しかけられたことに驚き手を止めた。

笑ってしまうほど長い黒髪に、左目を隠す前髪、この世界ではあまり見ない中華服を着た中性的な人間に話しかけられたら誰だって一瞬脳みそが固まるだろう。

わざわざ変装してまで会いにきた人物、七番目の超能力者、削板軍覇は反復する様にぼくの名前を呟く。

「藍……？」

「君の一つ上、第六位……っていえば分かりますかね？君に話が——」
「勝負か！」

笑みを浮かべ自分の身分を告げると、彼は途端に目を輝かせて声をあげる。思っても見なかった単語に話を遮られると、困惑するあたしをおいて彼はベラベラと嬉しげに頷いた。

「……へ？」

「いやあ、流石に同じ超能力者相手は初めてだ！強い奴と手合わせしたいとは思っていたが、六位と会えるとはな！」

「え？あ、あの、話があるってだけで……」

「ここじゃなんだな……よし、あっちの河原まで走るぞ！」

「えっ、ちよっつ、ちよっつと！」

嬉しそうな顔にたじろいで返す言葉を引つ込めてしまったのが悪かった。何を言っているのか理解が追いつかないうちに、話は思わぬ方向へと進む。

太く、力強い手に腕を掴まされると、肌を痛めつけそうな冷たい空気を目にも留まらぬ速さで走り出す。そこから逃れるほどの力を今のあたしは持っていないかった。

川から流れる風が水の匂いを乗せて体を通り抜ける。冬の真っ只中、夏頃は豊かな緑が目を奪う河川敷は霜が降りて、雲行きが怪しい

空も合わさりどんよりとした空気に包まれていた。

「はあ、はあつ、なんでつ、ぼくがつ、っは」

「息切れか？根性ねえな」

「根性じゃなくて、っ体力の、もんだいっ！」

息を切らしてしやがみこむと呆れた様に削板くんはあたしを見下ろす。自分の体の使い方を未だ理解しきれていないあたしは、もともとの身体能力の高さを強化する程度しか出来ていない。

あまりに速いスピードについてこれただけ、まだマシだ。

「仕方ない、勝負の前にその根性鍛えてやる！」

「いや、あの、あた、ぼくはそんなこと望んでない……」

第六位としてきたのが悪手だった。初めて見るお仲間テンションがおかしくなっているのは明白だ。

本来の目的、藍花悦に接触すると思われる某スキルアウトの情報を聞く前に面倒なことになってしまったのは一目瞭然、運が悪いと言えない。

やっと息が整ってきたというのに、彼はあたしのことなんか気にも留めずにぐつと地面をスニーカーで踏み込む。

パチパチと霜柱が足元で割れる音が冷えた空気にこだました。

「根性入れろよ！行くぜ！」

「へっ!?だから、話聞いてっ?！」

大きく息を吸うと、彼は拳を握りしめ腕を引いた。人の話を聞く姿勢ではないことを悟ると、急いで演算を開始する。

アスリートも試合に使う度々逮捕されるドーピング剤を体の中で再現すれば、多少は彼の技についていけるはずだ。

「すごい……ペア——ンチ!!」

まさか決闘が禁止された現代で喧嘩を、しかも河川敷ですることになるとは思いもしなかった。

地面を力任せに蹴り大きく体を反らして彼の攻撃を避けると、その動作に喜んで彼は再び構えに入る。おそらく楽しそうにしているのはあたしが第六位で、彼は一度も他の超能力者と会ったことがないからだ。

「おつ、気合い入ったか？」

「つこれでも、六番目ですから、これくらいは出来ないと……！」

「なら、もう1発！すっごいパンチ!!」

間一髪で一撃目を避けたばかりだというのに、彼は構わず追撃を放つ。強い衝撃波は容赦なくあたしを襲い、長い髪を乱して体を吹き飛ばす。

決して軽くないはずなのに、体は宙に浮き、受け身が取れないまま鈍い音とともに近くの岩に額をぶつけた。

「ぴっあーあぐっ、」

「しまった、やりすぎたかつ！悪い！」

ずつと昔に感じたことのある衝撃が、懐かしい痛みとともに迫り上がる。まるで釘を打ち込んだかのような酷い痛みに下唇を噛む。

手で額を触ると真っ赤な血が白い肌を汚した。流れる血は、空から降ってきた一滴の水と合わさって土に染み込んでいく。

痛みは嫌いだ。だってあの日の無様な己を思い出すから。

「はあ、っは、こういう時、痛覚は消しておくべき、ですかね」

痛みなんて感じたくない。

衝撃波で巻き上がった煙の中、額の血を藍色の袖で拭って血の染み込んだ地面に立つ。額の傷はもうなくなっていた。

「っ！それがお前の能力か！すげえなお前！根性あるじゃねえか！さすが超能力者！」

「根性、ね。そもそもぼくの能力は戦闘に向いていないんです。だからほら、身を守ろうとしても肉は裂けてしまう。永遠の肉体を使って持久戦に持ち込むしかない、不出来な体。貴方には到底叶いませんよ」

「……それはただの言い訳に過ぎねえな、第六位。」

ぽつり、ぽつりと小さな透明の水滴が地面に弾ける。徐々に強まる雨が濡れ鳥の髪をさらに鮮やかな黒に染め上げ、重さを増した。

朝焼けの桃色の空は雨雲に覆われ、天から水を零す。張り付いた長い前髪が気持ち悪い。

「はい？何を知っているのか知りませんが、ぼくは事実を話していま

す。貴方に説教をされる筋合いはありません」

「しかも短気ときたか、根性ねえな！超能力者が情けねえ！」

「あのですね、短気ではありませんし、今も怒ってるわけじゃありませんよ？情けないのは勝手に解釈して御高説垂れる貴方ではありませんか」

あたしが短気だなんて笑わせる。

こっちには何十年も六歳下の妹の我儘やイタズラを怒りもせず育て上げた実績があるし、ずっと彼女を叱ってきた身なのだ。バカにされた程度であたしが怒るわけない。

そもそもあたしが削板軍覇に近づいたのは全然現れない藍花悦の協力者を探すためであり、こんなふざけた格好の男にとやかく説教されるためではない。

強く歯を食いしばると、彼はその考えを見透かしたように口を尖らせる。

「ほら、怒ってるじゃねえか」

「怒っていません。もし怒っていると思うのなら、貴方が怒らせることを言っている自覚があるということになりますね」

「屁理屈だな、それが苛立つてる証拠だ」

冷たい雨粒が頬を伝い、唇を濡らす。服は体に張り付き、靴も水を吸い込んで気持ち悪い。雨を全て弾ければどれほどいいか。

雨は嫌いだ。

天の水、神様の恵み。妹は恵まれなかったのに、みんなして神を持ち上げる。

冷たい水がまるであたしを嘲笑うように頭上に降り注ぎ、髪を、肌を、服を惨めな姿へ変貌させた。

「いいか第六位、お前にはお前にしか出来ないことがある。超能力者レベル5に選ばれたお前がそれを知らないわけがない。お前の持つ能力は六番目に選ばれたんだぞ。七では無く六番目にだ。それとも俺に遅れをとる程度の能力なのか？」

「……五月蠅い人ですね、言いたいことはそれだけですか？」

「お前がそんな認識じゃ、お前はこっから先なんも成し遂げられねえ

ぞ」

まるで全てを理解したかのように第七位は鋭い眼光であたしの瞳を射抜く。正しいと言わんばかりに堂々とした言葉にあたしの擦り切れていた理性が失われた。

いつも次点にすらならないあたしを、出来ない子とでも言いたいのか？

「ッ黙れ！」

いい加減、黙らせたかった。

「っ!?体、がつっ！」

「……………?止まった……………?」

本能のまま叫んだ演算は触れてもいないのに第七位の体を縛り付ける。生まれて初めて心から叫んだ自分の大声と、初めて知った自分の可能性にふにやふにやとその場に座り込んだ。

もしかして、触れなくても操作できるのか？

一種の興奮状態に陥ると、そればかりが頭を埋め尽くす。

あたし、もしかして、出来る子なんじゃないか、可哀想な子じゃないんじゃないか。

興奮が心臓をかき乱した。

「よくわからんが、うおお!!根性おおお!!」

瞬間、パキンと何かが割れる音がした。

その興奮を大きな声とガラスが割れるような音が鎮める。目を見開いて驚く彼に体が強張り、また襲ってくるであろう衝撃波にぎゅつと目を瞑るがそれは一向にこなかった。

「この体が動かなくなる感覚……………今のはお前がやったのか？」

「た、たぶん？」

何も起こらないことに不思議がり、恐る恐る目を開けるとそこには衝撃波の代わりに、心の底から笑う少年の笑顔があった。

自分が惨めに見えるほど眩しい笑顔は酷く腹立たしい。見下ろされる感覚と、邪気のない笑みに複雑な思いが混ざる。

あたしより背の低い男の、子供を相手にするような笑みは神経を逆なでするだけだった。

「な、俺の言った通りだったろ、嬢ちゃん！」

「別にアンタに言われたからじゃ……って嬢ちゃん？」

「あつ、悪い、名前聴き逃しちまって……」

しかしそんな感情よりも彼の一言に動揺してしまう。へたりこむあたしに差し出した彼の顔をまじまじと見て、震える声で濡れた藍色の服越しに自分の肩を掴んだ。

彼はあたしを『嬢ちゃん』と呼んだ。あたしを女性だと認識したのだ。

あたしが女だと見破られたことが更に恐怖を煽る。

弱い生き物だと思われたくない、ちっぽけなプライドが主張していた。

「いや、あの、ぼくのこと女って、どうして？」

「ん？ああ、手が女って感じだし、他にも走り方とか、避け方、防御とかでなんとなくな。最初は女なのか、女みたいな男なのかイマイチ分からなかったが」

少し悩むそぶりをして答えた彼の言葉にぎゅっと胃が縮小する。

確かに、体の線を隠しても手を隠さなきや意味がない。それに女と男の骨格や筋肉の違いは運動能力にも、その仕草にも現れるのだ、見た目だけでは誤魔化しきれない。

思わぬ形で勉強になってしまった。服も改良して、これからは拳銃など男女差の表れない武器を使った方がいいだろう。

こんな簡単なこともわからなかった自分が憎たらしい。

「能力に関わらず、やっぱり男女差はデメリットか……やっぱり男には勝てないのかな。力及ばずで誰も助けられないのは嫌なのに」

下を向いて細い両手を握りしめる。力一杯握った手は垂れた黒い髪の毛のせいか、いつもより白くみえた。

確かに、彼のいう通り、女らしい細く白い手だ。

服を捲れば女だとすぐにわかる凹凸のくつきりした体つき。大きな服で隠しただけの体の線はじっくりとみれば女だとわかるだろう。

もつと服は硬い生地にしよう。袖はもつと、いや、実用性がないほど長くしよう。

じゃないと弱いつて思われてしまう。

可哀想な子だと思われてしまう。

ただの群衆の一人になつてしまう。

それが堪らなく怖かった。

嫌な考えが頭から離れない。こんなあたしじゃ物語に食い込めないんじゃないか、何も出来ずに終わつてしまふんじゃないか。

「聞き捨てならねえな。男か女かじゃねえ、大切なのは根性だ。誰かの為に体を張るその根性は男女なんか関係ねえよ、だからあんまし思い詰めんな」

とん。

頭に何かが触れた。それはほんのり暖かく、骨張つていて、筋肉質な彼の手。

爪が食い込むほど握っていた手が開く。

「……そうだよね、うん、そうだよ」

あたしが傷ついて、盾になつて、命を賭ければそれでいい。

大嫌いな痛みも消せばいい、傷は塞いでしまえばいい。死でさえ、あたしには意味をなさない。

死なんて、あたしには関係ないのだから。

「ありがとう、削板くん。なにか答えが見えた気がしたよ」

「ん？俺は何もしてないぞ？」

子供のように撫でる手を無理やり振り払うと顔を上げて笑う。この世界をもつと理解できたような気がした。

なんの知識のないあたしでも生き残れる、この世界での生き方を教えた彼に感謝を込めて黒い瞳で優しく彼に微笑んだ。

「まあ、君はそんなこと言いそうだよね」

結局目的も果たせず、横須賀という男につながる収穫はなかったけれど、それでも何かを学べた。

それはきつとこれから先、あたしの糧になる。

雨はもう止んでいた。

彼との出会いがもともと外れかかっていた安全装置を完全に壊したと、今なら思える。

垣根くんと出会う前に彼に出会えていて良かった。でなければ垣根くんへの愛はいまよりも薄く、きつと何も出来ずじまいだったろうから。

それでも今も人を殴ることが怖くて戸惑い、臆している。

「根性なんて、あるのかな」

「ん？なんか言ったか？」

「別に。それよりさ、アンタ根性無しに喝を入れるみたいなこと言っただけど、それって具体的になんなの？」

「そりゃあ拳と拳の語り合いだろ。それをしなきゃ分からねえ奴もいるからな」

ぽつりと呟いた言葉は彼の耳には届かなかった。適当に誤魔化しながら笑うと、彼は気にすることもなくペットボトルに口を付ける。

渡した炭酸水はもうすでに空に近い。

対してあたしが手にしたりんごジュースは未だ半分以上残っており、ぬるい温度の水滴が手を伝う。

彼なら、あたしの欲しい言葉をくれるかもしれない。

形が変わらない程度にペットボトルを強く握り、彼の目を見る。期

待と罪悪感を膨らませて、彼に問いかけた。

「なら、好きな人の幸せを邪魔する人がいたらあたしはその人を殴ればいいの?」

教えて欲しい。

あたしは、オリアナⅡトムソンにどうやってこの想いを知らしめてやればいい?

「はあー?なんだその根性のない意地悪な野郎は。いじめられてんのか?」

「違うよ。ほら、早く答えて?」

未知の能力を使い、垣根くんとは違った信念を貫く削板軍覇。あたしの感情を第七位ならなんて答える?

あたしを知らない彼がどう答えるのか、あたしの欲しい言葉を言ってくれるのだろうか。ドキドキと胸が高まる。

初めて会った時の様に、あたしにこの世界の生き方を教えて欲しい。それは闇にいる垣根くんはきつと教えてくれないから。

「そうだな……よく分かんねえが、根性無しなら叩き直すに決まってる!一発喝入れてやるしかねえな!」

「じゃあさ、あたしの幸せを馬鹿にして、あたしの願いを罵って、あたしの愛を蔑む女にあたしはどう応えればいいと思う?」

「なんか難しいこと考えてるな、嬢ちゃん」

眉を擡めて腕を組むと、彼は少し唸りながら首を捻る。しかしすぐに分かった様な顔をしてあたしの頭に手を乗せると、優しく微笑みかけた。

大きく、ゴツゴツとした男の手。

「うーん、そうだな……お前を馬鹿にするような根性無しなんか、根性入れ直してやれ。それでキツパリ怒るのをやめる。それでいいんじゃないねえか?」

「……そうだよね、うん、そうだよ。アンタはそんなこと言いそうだよね」

彼の手を振り払い、ありがとうと簡潔に伝えると彼は少し驚いてとびきりの笑顔を見せた。

それに同じような笑顔を返すと、ゆっくり頭の中で彼の言葉を噛み砕いていく。

幸せを塗り替えて、あのクソ野郎神を信仰する世界にさせるなら、それは脅威だ。

彼の脅威になるのなら、どんな手段を用いても、どんな結果になろうと辞めさせる。そして、拳を交えてあたしの感情を沈めさせる。

実に個人的で、実に正義感ある理由であの女を殴る。

「ありがとう、削板くん。なにか答えが見えた気がしたよ」

やっぱり彼は安全装置を壊してくれた。

もう迷わない。あの善人どもには頼らない。

あたしは、あたしの力でこの美しい愛を認めさせなきゃいけないのだ。それはあたしにしか出来ないこと。

そのためには手段なんか選んでいられない。

「なら良かった。じゃあ、俺はもう行くぜ。また勝負してくれよな」

「あーはいはい、いつかね」

スマホから電話をかけようと目を離すと、削板くんはベンチから立ち上がりその場を去った。

赤いジャージを翻しどこかへ走って行く彼はすぐに小さくなり、見えなくなる。きつとお腹が空いているのだろう。

その姿を見送ると、再びスマートフォンに視線を移し、りんごジュースを口に含んだ。

「……また？」

人工的な甘さが喉を通る。

彼の言葉の真意に気がついたのはもう少し後になってからだだった。

54話：可愛い子、可愛そうな子

学園都市にしては緑が豊かな道に一人、携帯を片手に当てもなく歩く。通常なら学生しか歩かない静かな歩道は、普段より多い警備員アンチスキルや保護者の声と足音で賑やかだ。

それでもどこか静かに感じるのは八重桜のような鮮やかな色を持つ金髪の五月蠅いメジロが隣にいないからだろうか。

「はあ、あの馬鹿、勝手にどっか行きやがって」

昼飯を食わせてやろうと一緒にいた天羽隼糸は俺ではなく、初めて出会ったやかましい馬鹿を優先し何処かへ行ってしまった。

いなくなった彼女に多少腹立たしさは感じるが、それでも心は随分と落ち着いていた。

たとえ初めて会った何も知らない第七位如きに可愛いと言われ、珍しく照れて視線を泳がせていたとしても、俺の心は平穩な静けさを保っている。

俺が一番彼女の深淵を知っている。

だから別にムカついてない。

確かにあの根性馬鹿に何か感化されないか気にはなるが、携帯を持つ手についた花の匂いがそんな些細なことを吹き飛ばした。

彼女の髪についた甘すぎる花の匂いが未だに香る。メジロと例えた自分は案外間違っていないかった。

秋だというのに春の匂いがした彼女はきつとメジロのように、甘いものを買ってやると囁けばすぐに第七位なんぞ置いてきぼりにして俺の元へ戻ってくる。

そして俺を見つけるとメジロのつがいのように俺に抱きついてくるのだ。

アレはずつと、これから先も俺しか見えていないのは明白。だから別になんとも思わなかった。

それに今日は青い彼女も見れた。紫陽花なんて色が変わる花の名前をあげただけで、一瞬で卵色の肌を青くさせる彼女を思い出すと少しだけ口角があがってしまう。

藍色と紅色の花はそのどちらも持つ彼女が嫌厭するべき花。

それはどちらにも取れるから。

俺が彼女に『ブルーが似合う』と言っているようにも、『マゼンダが似合う』と言っているようにも聞こえるのが紫陽花という花なのだ。

だから先ほどの彼女は見るからに俺を悩み、恐れ、逃げようとした。

なんとも愉快なことか。小鳥を追い詰める瞬間は最高に面白い。

俺が青い彼女を知っているとバラしてしまったのは痛手だが、面白おかしく表情をぐるぐる変える馬鹿な女を見ただけで元は取れた。

機嫌がいい今のうちにあの女に連絡して餌付けをしようと、携帯の電話帳を開く。林檎と、あの女と飯を食べば監視になる。

場所はわかっていているのだ、あとはあの鳥の好物を聞き出して俺に感謝させてやるだけ。足を止めて電話帳の一番上を押そうと決定ボタンに指を掛ける。

「刀夜さん、後ろ！」

「おっと！すみません！」

しかし、後ろからぶつかってきた男のせいで決定ボタンは押されるどころか、手を離れて汚い地面に滑り落ちた。

ぶつかった男に文句でも言おうかと後ろを振り向くと、だれかに何処と無く似ている男が申し訳なさそうに頭を下げるのが目に飛び込み、あまりの勢いに一瞬身を引いてしまう。

「あ、いや、こちらこそ立ち止まっててすみません」

「主人が申し訳ありません。携帯、壊れていませんか？」

「すみません奥さん、ありがとうございます。壊れてないみたいなんです、大丈夫です」

刀夜と呼ばれた男の隣で、若々しい見た目の女性が落とした携帯を両手で渡して困ったように眉を寄せた。夫婦揃っていい人そうで、なんとも居心地が悪い。

渡された携帯に一切ヒビは入っておらず、それを聞いて胸をなでおろすと今度は申し訳なさそうに眉を寄せる。

「……あの、もしかして当麻さんのお友達ですか？」

「母さん？」

「電話帳に上条当麻、私たちの息子の名前が見えたので……すみません、盗み見てしまつて」

携帯を開いてデータが壊れていないか確認していた俺に、彼女は自分の息子の名前を告げる。開いた携帯は電話帳の天羽のア行からカ行に変わつており、落とした時に間違えてボタンを押してしまつたのだらう、上条当麻の名前が一番上に入力されていた。

「あいつの親御さんか……ええ、知り合いです。謝らなくても大丈夫ですよ、奥さん」

「当麻のお友達、か。会えて嬉しいよ」

「しかもこんなかつこいい子だなんて、嬉しいわ、刀夜さん」

物腰が柔らかく、綺麗な顔をした女性の息子はどうやら俺の知り合いだつたようだ、ぶつかった夫婦は優しそうに互いに顔を見合わせて笑う。

どこことなく優しい雰囲気は言われてみれば上条と似ている。

きつと彼らは自分の息子がこの都市に蔓延る『計画』^{プラン}に関与しているとも知らないのだらう。息子共々哀れなことだ。

今日は随分と運がいい。嫌いな女の面白い挙動も見ることができ、アレイスターに繋がる野郎の家族にも会えた。

猫を被つて探る程度、造作もない。

「上条くんをお探しですか？必要あれば連絡しますよ」

「気にしなくても大丈夫ですよ、何やら急いで居たようですし」

「いや、急いでなんか居ませんよ。お友達の御両親ですから、ぜひお手伝いさせてください」

必要あらば愛想良く振る舞い、あくまでも友好的に接すれば、表の人間はあつけなく信用する。そうしていれば邪魔もされないし、一般人をこちら側に巻き込むことはない。

ニコニコと笑みを貼り付けて優しく提案すると、夫婦は悩むようなそぶりを見せて困つたように笑う。

もうひと押し、何か引き止める方法が必要だ。

「あーっ！」

何か案はないか考えていた脳に甲高い女の声が響く。

考えそつちのけで上条夫妻とその声の主に視線を向けると、そこには誰かになんとなく似ている女性が微笑みながら走ってくるのが見えた。

これまた何処かで見たことあるような栗色の髪に、高い背と豊満な胸も持った女性が嬉しそうに駆け寄ると、知り合いとみられる上条夫妻は少々驚いた顔をして彼女に会釈をする。

「こんにちは、また会いましたね！」

「ああ、朝の」

「はいっ！今朝はどうもありがとうございました。おかげでこの通り」

大学生もしくは院生くらいの若々しい顔立ちをしたその女性は同じような顔をした少女を連れており、女性の親族と思われるその少女は上条夫妻の後ろに立つ俺に気がついてなさそうだ。

常盤台中学の体操服を着ているその少女は、話についていけないように、顔色を伺いながら隣の女性を見上げた。

「……誰？知ってる人？」

「第三位様が大好きな上条当麻の親御さんだ」

大人同士の会話に馴染めず、自分を連れてきた女性に少女、御坂美琴がぎこちなく声をかけると、その質問に上条夫妻の後ろから顔を出して答える。

中学生にしては高い背と、栗色のショートヘアの少女は俺と同じこの学園に七人しかいない超能力者の第三位、常盤台に在籍する電撃使い、通称『超電磁砲』こと御坂美琴だった。

「へ、へえっ!?ち、違っ！べ、別につそんなんじやつ、つて垣根さん!」
「よお第三位、綺麗なお姉さん連れて昼飯か？」

少し前の騒動で顔見知りになった第三位は俺の言葉に真っ赤な顔であたふたと訂正を入れ、必死に弁解し始めた。

そして真っ赤な顔と冷静じゃない頭で俺だと認識すると、なぜいるのかと言いたげな表情で驚いて耳の近くで大きな声を張り上げる。

いつもいる女とは違う酷く高い声に鼓膜が揺さぶられると、思わず舌打ちをして耳を片方塞いでしまう。うるさいのには慣れているが、

それでもやはり五月蠅いものは五月蠅い。

「おや、君も彼女と知り合いなのか。世間は狭いな」

「あらあら、美琴ちゃん！誰、このかっこいい子は！」

「初めまして、垣根つていいいます。そこのお嬢さんとは少し顔見知りです」

「こちらこそ初めまして、御坂美鈴と申します。よろしくね」

御坂美鈴と名乗った第三位の親戚と握手を交わすと、淡い香水の匂いが鼻の奥を刺激した。

しかし自分の体にこびり付いた主張の激しい花の香りがそれを打ち消す。女性にしては高い身長にモデル顔負けのプロポーション、そして甘い匂い。

先ほど別れたばかりの馬鹿な少女を思い出すのは当然だろう。

天羽はよく自分を上だと、大人だと主張するが、こういう人や上条の母親を大人の女性というのであって、天羽は絶対違う。

全人類の姉を名乗る馬鹿なあの子は絶対に姉なんかじゃない。

だってあいつは子供で、俺より年下で、小さくて、弱くて、幼くて、可哀想で、可愛い馬鹿だから。

「色目使ったら天羽先輩にチクるわよ」

「何であいつの名前が出てくんだよ。関係ないだろ」

御坂美鈴と名乗った女性と握手を交わしながらそんなことを考えていると、早く離れろと第三位がじっと嫌そうな目を投げかけ顔を膨れさせる。

家族を取られて寂しいのか嫌味を言ってくる第三位は、不機嫌そうに腰に手を当てジロジロと俺の顔と服装を交互に眺めて、むすつと眉を顰めた。

「ていうか垣根さん長点上機だったわよね？体操服は？」

「俺が参加すると思ってるのか？」

「まあ、いない方が私達には有利だから別にいいけど」

しかし市販の真っ黒いジャージをじっと見つめ、俺の答えを聞くと目の前の生意気なガキは呆れたように笑う。

俺が通っている長点上機学園の体操服を着ていないことに、毎年勝

てもしないライバル校こと常盤台に在籍する第三位は薄っぺらい胸を張って勝ち誇ると、その発言に今度は俺を上条当麻の友達としか認識していない上条夫妻が首を捻った。

「長点上機？てつきり当麻のクラスメイトだと思ってたんだが……」
「競技で独走してる学校よね？常盤台ってそこと交流あつたの？」

誰も上条当麻のクラスメイトとは言っていないはずなのに、勝手にそう認識していた夫婦は不思議そうに説明を求め、御坂美鈴はきよとんとして発言者である第三位に顔を向けた。

素性を明かすつもりはなかったのに、第三位の余計な言葉で奇妙な目線がチクチクと肌を刺す。

「あー、えっと、上条、さんのクラスメイトに垣根さんの彼女がいて、その先輩経緯で垣根さんと知り合った感じ。垣根さんも天羽先輩経由でしょ？」

「そうだが、その一文にデマを混ぜるな。誰が誰の彼女だ」

「それ以外形容できないじゃないのアンタたち……」

めんどくさい追求には答えず、黙り込んで言った本人が説明するのを待っていると、その視線に気づいた第三位が色々と言葉を選びながら話し始める。

昏睡事件をきっかけに知り合ったことは伏せたい事実だったように、当たり障りのない説明をするが、その中に紛れる嘘について過敏に反応してしまった。

勘違いされたらあの女が物凄く怒り、叫び散らすのが目に見える俺にはそう言った冗談はとてもじゃないが笑えない。

訂正を入れろと訴えるが、確かに第三位のいう通り俺たちの関係性に当てはまる単語はまだ見つかっておらず、言葉に詰まる。

「垣根くん恋人がいるのかい？ならその人とお昼食べたほうがいいんじゃないか？」

「こんなにかっこいい彼氏なんて彼女さんは気が気じゃないでしょうに！ダメよく、浮気なんかしっちゃー！」

「こんなカッコいいと女の子が放つて置かないでしょうし、ねえ、刀夜さん？」

「母さん？なんでそんなに怖い顔を……？」

言葉に詰まる。事実として認めたと解釈した保護者たちは一斉に思い思いの言葉を述べる。

俺を恋する少年とでも言いたげな御坂美鈴はキラキラとした目で説教くさい言葉を口にし、上条と同じ女運をしてそうな旦那に上条の母親が釘を刺して冷たい笑みを浮かべて、めんどくさい雰囲気が一気に作られた。

「第三位、後で俺とあいつに謝罪な」

「悪かったわよ、こんなに聞かれるとは思ってなくて……でもあの人垣根さんにベツタリなのに今日はいないのね」

「べつたりなのは認めるが、いつも一緒じゃねえよ」

「ねえねえ、彼女さんどんな子なの？よかったら彼女さん呼んで皆で一緒にお昼食べない？」

話題が自分のせいで面倒な方向に逸れてきたことを認める第三位とは反して、彼女の家族はとても楽しそうにこちらにあの女の話話を振ってくる。

とびきりの営業スマイルで訂正を入れるも、携帯を握る手は力を増していくだけだ。苛立ちを隠しながら笑顔を作っても、この苛立ちは止まることを知らない。

「お気遣いありがとうございます。ですが、家族団欒を邪魔するわけにもいかないのです。そもそも彼女なんかいませんし」

「彼女じゃない？はっ、もしかして両片思いつてやつかしら？青春ねえ！」

訂正しても何度も誤解を繰り返される。この関係性にそんな軽い名前をつけられ、勘違いされるのは酷く不愉快だ。

今なら先ほどのオリアナとの戦闘で拗ねてしまった気難しい女の気持ち嫌という程わかる。

ムカつく。

「俺はあの女に恋愛感情及び性的感情を抱いたことは一ミリもありませんよ」

「嘘お!?だってあの人、ほら、あの、で、でかいじゃん！」

「あのな、俺をなんだと思ってるんだ？性格がクソで天秤に測るまでもねえだろ、あんな女」

何も知らない外野がああ気持ち悪い女と俺の曖昧な関係に名前をつけるんじゃないやねえ。

そう叫びたいのを必死に我慢していたはずなのに、顔を真っ赤に染め両手で天羽の胸の大きさを訴える第三位を見ると、その我慢も限界に達しそうだ。

いい顔をしていなきや物事は上手く進まない。

しかも『計画』^{プラン}の中核にいる上条の関係者なら特に。

だから猫を被っているというのに、あまりに鬱陶しい発言に被った猫はどこかに逃げ出しそうだった。

仕方ないじゃ無いか。

話聞かない、言うこと聞かない、爆弾に突撃する、人を下に見る、自分に過信する、自分のことを考えない、俺の事を弟呼ばわりするクズ女、この世界の誰が好きになるか。

気持ち悪い。

酷い目に合わせても懲りないあの五月蠅いガキを思い出すだけであの白く細い首を絞めたくなる。

気味の悪い少女の何もかもを知らないくせに、胸がでかいだの、可愛い顔だの、股が緩そうな外見だの俺との関係性を疑う人間は全員ムカつくだけだ。

その感情のまま、低い声で御坂美琴の鬱陶しい質問に答えたが、すぐに御坂美鈴の発言に彼女を卑下した言い方をしてしまったことを少し悔やむ。

携帯を握りしめて顔を伏せた俺を見る保護者たちの目には嫌厭の色が混じっていた。

「よく分からないけど、美琴ちゃんが変な子と一緒にいるのはちよつと心配かも……」

「悪い奴じゃねえ……っす。その、普通に優しいし。人のことを考えすぎて、怪我するようなやつなんですよ」

「いい人よ、先輩。ただ無茶し過ぎなだけ。垣根さんは大変でしょう

ね」

彼女が危惧することは理解できるが、誤解されるのも少々まずい。必死に持ち上げようと適当に言葉を濁しながら伝えてみるが、最終的に年下にフオローされる羽目になってしまった。

御坂が付け足した言葉に納得してくれた保護者共は顔を見合わせでふっと笑う。勘違いをしているのがすぐわかる。

「ふふ、危なっかしくてほっとけない子なんですわね」

「さては好きな子に意地悪したくなるタイプだな？優しくしてあげるんだぞ？」

誤解を解くメンドくささに体が疲れてしまったこともあるが、理解できない奴らにこれ以上言ったって無駄だ。

あの女の気持ち悪いところを知っているのは俺だけでいい。

自分のこと考えず、誘拐されても助けは呼ばねえし、知らない奴に付いてくし、俺の言う事を聞かずに怪我ばかりして、人を頼らない。

天羽彗糸という少女は、俺がいなくては死んじゃうような弱くてダメな女だった。

怪我しても笑って済まして、俺に隠し事ばかり。分かりやすい虚勢を張って、分かりやすい嘘をついて、子供のくせに自分を大きく見せようとする意地っ張り。それに加えて甘え下手。

頭が悪くて器用貧乏、要領も悪いし、詰めが甘くて、肝心な部分がすぐ露呈してしまう。

必死に頑張って空回りしてる姿は籠の中で必死に飛び立とうとしてる小鳥のようで、とても愚かで可愛そう。

「ねえねえ、ちよつと興味湧いちゃった。写真とかある？」

「そういえば夏休みにゲーセン行った時二人で撮ってたよね。見せてあげれば？」

勘違いに拍車はかかり、あろうことか彼女の顔写真まで要求される。微笑ましい光景を見る目は不愉快だ。

勝手に話を進める彼らに呆れたため息をついてしまいが、どうせもう二度と会う機会はないのだ、今回だけは見逃そう。

握っていた携帯のアルバムを開いて、目当ての画像を見つけたすと

目の前にいるミーハーな大人共に画面を見せる。

眩しい金髪の毛先を鮮やかなピンクに染めた大人びた少女が映った画面は夏休みに撮ったもの。笑顔を浮かべる彼女と、メンドくさそうに隣に立つ俺が映っている自撮りは正直あまり見せたくない代物だ。

上半身しか隠せないぴったりとした黄色い半袖のTシャツに、緑のチョーカーと金色のネックレス、そして右手のピンキーリングに、左手のサムリング。

誰に見せても恥ずかしい、頭の弱そうで股の緩そうな見た目をした彼女のアーモンドのような大きい目はピンク色の濃い化粧で囲われており、つけまつげとマスカラ、ピンクの明るい口紅は彼女の幼く不思議な顔立ちに似合っていない。

「あらあ、可愛い子！」

「綺麗な子ですね、お化粧してるのが勿体無いくらい」

「やんちゃしてそうだが、可愛らしい見た目だな」

そんな見た目だというのに女性陣からは高い声上がり、お世辞が飛び交う。

消しておけばよかったと後悔してももう遅い。携帯に映った金髪の少女を見て各々が感想を述べキヤーキヤーと騒がしく笑い、勘違いがさらに大きくなっていくのが嫌でもわかった。

「しかし、この子どこかで見た記憶があるな。どこだったか……」

「あら、やっぱり？私も見た記憶あったんですよ！」

しかし、勘違いの激しい彼らの会話に小さな情報がこぼれ落ちる。初めて見せたはずなのに、もしかしてどこかで会ったことがあったのか？まさかももう既に知り合いに？

様々な憶測が一瞬で頭を埋め尽くすが、すぐに御坂美鈴が答えを出した。

「天羽のこと、知ってるんですか？」

「知ってる、というより見たことがある、の方が正しいかも。この子、芸能人が何かじゃないかしら？テレビで見たことあるわ」

「かもしれませぬ、私もテレビか雑誌で見たことあります。職業ま

ではわからないけど、昔こんな顔をした可愛い女の子が一時期ずっとテレビで特集組まれていたんです。確か、当麻さんが十歳だった時ね」

それはテレビ。

一番縁がなく、情報源としては最低限なメディアが一番に挙げられたことに頭が追いつかない。

記憶に刻むように上条の母が言った言葉を頭でゆっくりと何回も唱える。それほどまでに彼らの言っていることは自分の中の彼女と結びつかなかった。

「あ、勘違いかもしれませんよ？名字は天羽ではありませんでしたし、黒髪だったので」

「もしかしたら彼女の親戚とかかもしれないね。顔はそっくりなので」

「へー、天羽先輩の意外な過去。芸能関係者なら派手好きなのは納得かも」

「青がとっても似合う子だったのよ。いつも青い服ばかり着てて。でもこんな感じに成長したのねえ」

そんな自分の心境を察したのか上条の母が訂正を入れるが、それでも天羽と似た顔であることには否定せず、他の証言も天羽を彷彿とさせるもの。

黒髪で、青がよく似合う可愛くて幼い女の子。

俺はその少女を知っていた。

「それってこんな子、っすか？」

「そうそうーこの子！よく子供の頃の写真なんか持ってるわね」

急いで携帯のボタンを押してアルバムの画像欄を下に進め、見つけた画像を見せつける。幼さの割に背の高い女の子が写ったそれは、冥土帰しに見せてもらった天羽が十歳頃の写真のコピー。

130cm程度の背丈に合わせて作られたズボンスタイルのナース服を着てニコニコと微笑む彼女は、不本意だがテレビに映っただけもおおかしくない程度には愛らしい見た目はしていた。

「にしても、なんで見た目が違うのにわかったの？天羽先輩、黒髪じゃ

ないし」

「その子、物凄く大人びてて子供に見えなかったの。悪い言い方で申し訳ないけど、すごく怖かった印象があつて。それに綺麗な子だしね、顔だけは良く覚えてる」

夏休み最終日、天羽が小さい頃から気味の悪いくらい大人びていたと冥土帰しが言っていたことをふと思い出す。

彼女はその環境のせいで昔から、大人として生きてきたのかもしれない。なら、実際より年上に見せようと大人じみた服装をしたり、姉という立場に執着するのも腑に落ちる。

彼女は可愛そうな子なんだ。

何かが心を満たすと同時に、ピロンと小さく音が鳴る。自分の携帯から鳴ったその音はメールを受信した際に鳴る電子音。

携帯の画面には『メール：天羽隼糸』とだけ簡素なフォントで通知されていた。

「俺はこれで失礼しますね。色々話せてよかったです、本当に」

『ちゃんとご飯食べた？』と書かれたメールになんとも言えない高揚感を感じると、すぐに彼らに小さくお辞儀をしてあの女の元へ行こうと体をくるりと翻す。

もう彼らに用はない。

早くあの女に伝えに行かなくては、お前の秘密を。

「またね、垣根さん。今度は天羽先輩と一緒にね」

最後、第三位の言葉に足を止めたが、結局振り返ることはなかった。

何も知らない表の人々から遠のき、アンチスギル警備員がやたら多い公園を抜ける。その足取りは軽い。

早く青ざめる女の姿が見たいがために急ぎ足で向かう中、携帯でそれとは別の人物に電話をかけるとワンコールの後に同じ年くらいの

少年が短く返事をした。

その野郎の名前を機嫌よく呼ぶと電話越しでもわかるほど分かりやすく慌てふためく。面倒をかけられるとわかっているその少年は少しして諦めたようにため息をつく、静かに俺の言葉を待った。

「誉望、調べて欲しい人がいる」

『また随分と急に……誰を調べればいいんすか？』

違う名前。

隠蔽された能力。

神の領域に踏み込める三番目。

アレイスターが管理したがる能力者。

青、蒼、碧。必死に隠そうとする藍色。

その全てから導かれる名前は一つ。

学園都市に七人しかいない超能力者^{レベル5}の一人。第六位を冠するその人。

「藍花悦つていうんだけど」

55話：踏切の内側

象牙のような真っ白い髪を揺らして、黒髪の少女と明るい髪の小さな先生について行くお昼過ぎ。

緑の目で前を歩く彼女たちを追うと小さな体で先生を名乗る女性に笑いかけられた。

「でも驚きですっ！天羽ちゃんにすっかりした妹さんがいたなんて！」

「は、はは……ええ、まあ……」

「妹……？」

今の自分より30、いや40cmは離れていそうなその小さな女性に言葉を濁し苦笑いを浮かべると、ブロックが規則正しく並ぶ道を歩く。

月詠小萌と名乗ったその女性は、自分が保護し、愛すべき少女が通う学校の担任を任されている人物で、その少女と化粧を含め瓜二つの姿をしている私を妹と認識しているようだった。

ほんのりとウェーブがかかった鎖骨ほど長い髪に、可愛い顔を隠す分厚い化粧、そして173cmの高い背と、足元が見えないほど大きい胸。

着崩したセーラー服とたくさんついたアクセサリーが幼い少女をどうも大人びてみせるこの姿は、保護対象：天羽慧系本人に見間違われるほどそっくりだろう。

その全てが白くなければの話だが。

太陽を彷彿とさせる金色と、春を告げる桃色の花に似た色が毛先に入る髪の毛はその色を失い真新しい印鑑のような象牙色をしており、普通なら温かみのある肌は陶磁器のように無機質で青白い。

くすんだ緑の襟が特徴的なセーラー服も境目がわからないほど白く、同じように茶色いローファーも、金色のピアスやネックレス、緑色のチョーカーもアイボリーに近い白。

そしてアレキサンドライトのような赤と緑の瞳の代わりに、エメラルドも霞むほど眩しい緑が埋め込まれている顔は、たとえば彼女とそっ

くりでも別人ということがよくわかる。

この白い体が彼女と認識されるには無理がある。

より人間らしくなるために色をつけることもできるが、本人が怖がるのでしたくない。

「あの、保護……姉は学校ではどうですか？」

「いつも通り、頑張り屋さんのいい子ですよ！」

この体を妹と認識する担任の先生に話を聞くのはマスターである垣根帝督にとつても好機だと判断し簡単な質問を投げかけるが、返ってきた答えはマスターも私も知っているような事実だけ。

頑張り屋なことは私達が一番知っている。それよりも深い内側だつて。

それに彼女の姿を借りているからこそわかることもある。

視界、歩幅、体の動かし方、神経が集中している場所に、人からの視線。

道路に面した道を歩くのは何も私たちだけじゃない。

いつも化粧で隠しているどこか幼くも年相応な綺麗な顔立ちに、日本人とは思えない体型は人の目を惹き、先ほどから男性の汚い目線と、女性の嫉妬深い視線が鬱陶しい。

思い返せば彼女がマスターとゲームセンターで初めて出会った時もこういった気味の悪い目線に晒されていた。

手首を強く握ると、目を伏せて柔らかい唇を噛む。初めて感じるこの忌々しい人々の目に、彼女は何も思わないのだろうか。

天羽彗糸と私の関係性は一言で言えば母と子だ。

母に害する者がいるのなら、それを排除するのが彼女のために作られた生き物の務め。

私はこの体の持ち主のために生きている。それが私のやるべきことで、生まれた意味だから。

「05、どうかした？」

「いえ、なんでもありませんよ」

心配そうな杠林檎の言葉に我に帰ると、いつものように笑顔を作つて優しく振る舞う。そういう風にプログラムされている思考回路は

それ以外の振る舞い方を知らない。

作られたこの精神と体は例え垣根帝督と同じものを元にしていたのだとしても、改変されている性格は少しずつ変わってきていた。

「それでお聞きしたいのですが、彼女がやってる緊急係とは一体なんなのでしょいか」

「ああ！あれですか！あれはですねえ、天羽ちゃんが自分で言い出したことで、私と、親船先生と、黄泉川先生で上に掛け合っただんですよお」

「自分で？」

「夏休みに先生のお家に来ましてね、色々計画を立ててたんです！すごい行動力ですよ、天羽ちゃん」

道を歩きながら必要な情報を尋ねると、小さな先生は自慢するかのよう笑顔で様々な話をしてくれる。

保護対象の新たな情報を集めて、送る簡単な作業を繰り返すが、その処理の裏側で私なりに情報を処理していった。

よく存じ上げない係の名に、必死になる研究、その思惑を理解しようと懸命に作られた脳を動かす。

それでも理解は深まるどころか遠くなるばかり。

この間、木原相似に連れて行かれた時もそうだった。神だの、世界だの、意味のわからない言葉を発する彼女を簡易なプログラムは理解できなかった。

自分を傷つけると宣言していた男について行き、人間にしかできない『秘密』という言葉で私の行動を制限して、弱きを助けようとする。

そんな人間である彼女を、作り物の私は永遠に理解できない。

「いつも、私達に黙って彼女は何かをしてるんでしょう」

「ん？どういことですか？」

「あの人は何かを知っているようにいつも振舞って、そして知らない内に怪我をして、知らない内に何かを解決しようとする。私は彼女の思考が全く分かりません」

足を止めると、眩しい青い空が見下ろす。単純な疑問が口という器官から出ると、その言葉に月詠小萌がその空を見上げた。

盾である自分は疑問など持つてはいけない。それでも、マスターとリンクし、彼女と多くを話す私は、今まで考えたこともないような疑問が感知できないほど体に蓄積されていた。

「ふーむ、難しい質問ですねえ」

「私も、わかんない」

「杠ちゃん？」

「……天羽とね、あまり話したことないの。だから天羽のことなんも知らない」

私の袖を掴むと杠林檎は少し眉を下げて小さく呟く。掴んだ袖が何を意味するのかは分からなかった。

「そうですか？ コミュニケーションはあると思うのですが」

「んーん、そうじゃない。一緒に住んでるのに、どこの研究所にいたか、どんな服が好きか、どんなお菓子が好きか、そういうのわかんないの。天羽はいつも私の事ばかり聞くからちよつと、怖い」

「確かに、天羽ちゃんはあまり自分の話をしませんね。いつも忙しそうですし、自分のことは二の次なんだと思いますよ？」

保護対象は、誰の目から見ても頭がおかしい。

一番大切なはずの自分自身を狂気と呼べるほどに蔑ろにし、ほかの人間に奉仕する。少し喋った程度の人間でもその狂気を爪の先程度は理解できるだろう。

しかし、毎日一緒に過ごす私たちにはその狂気を他の人間とは比べ物にならないほど垣間見てきた。

自分のことは何も言わずに、他人を一番最初に考える彼女は小さな日常の中にも黒いインクのような狂気を滲み出していく。

その姿は恐ろしく、危うくて、手を差し伸べてくなるほど可愛そう。「でも怖いですかあ……悪い子ではないんですけどね。自分に無頓着で、自信がないんですよ。それに、杠ちゃんをとつても大事に思ってるってことですから、杠ちゃんから聞いてみればいいかもしれません！ 答えてくれると思いますよ」

「……そんな簡単に人を知れるのでしょうか？」

上位個体ですら知り得ない彼女の深淵。それを易々と理解できる

と言う小さな教師は随分と大人に見えた。

「知れますよー！だって同じ生き物ですから！」

同じ生き物。

その言葉に九月上旬の彼女の姿を思い出す。白い羽を生やし、四角い光を頭上に浮かべたあの姿。

神の使徒と呼ぶにふさわしい姿をした彼女は、どこかで嗅いだことのある甘く濃い匂いをしていた。

私は人間ではないけれど、あの姿の彼女なら分かるかもしれない。

私と同じ、羽を生やした生き物である彼女なら。

あの日の興奮が蘇る。

木原相似の元へ行く彼女を止めなかった己が理解できなかった。なぜそんな行動を起こしてしまったのか、組み込まれたプログラムは答えを出さなかった。

きつと理解していたのだ。

彼女を突き落とすことで、同じ土俵に立てると。それが頭の悪い不幸な天使に近づける唯一の活路になることを。

「05！杠ちゃん！」

遠くから声がする。

金色と桃色の少女がマスターの隣に立って私たちを呼ぶ姿を見つけると、背の低い教師に一礼をして杠林檎の手を引きながら彼女の元へ走り出した。

守りたい少女の声が私を導いていく。それはまるで神の示した道のような道だった。

まだ太陽が青い空に高く昇っている昼ごろ、美しい金髪に、露出度の高いエスニックな衣装を着た背の高い女性がヒールを鳴らしてぐ

るりとあたりを見渡す。

想定より多い警備の数に眉を顰め、鋭い目で睨むと小さく愚痴をこぼした。

「嫌ね、警備が多くなってきてる。もしかして、お姉さんがいる場所筒抜けだったりする？」

数の多い警備員はオリアナアンチスキルトムソン、ひいては彼女らの野望には目障りなのは確実で、いかなくはない場所に現れる彼らにめんどくささを感じていた。

変更された警備状況を鑑みるに、次に確認できそうな場所は残り少ない。どうするかと短く息を吐くと、青い空を睨みつけた。

「……予定を早めたほうがいいかしら。どっちみち殺すことには変わらないんだし」

誘い込まれているような感覚が脳裏を掠めるが、あの哀れで無垢な桃色の乙女を泥に沈められるのなら誘いに乗るのも悪くない。

クラゲの足のように腰布から伸びる白い布地がひらひらと風に舞うと、願いを叶えるため、ヒールの音を響かせて女は前に踏み出した。

緑の芝生に多くの観光客や保護者、学生たちがレジャーシートを広げてご飯を食べたり、食べ終わって談笑したりと賑やかな公園の隅、木陰の下でそれぞれの上着を敷いた上に座る。

暗いからか、俺たちのカタギに見えない雰囲気気圧されたのか、木の近くだと虫がいる事実が嫌なのか、賑やかなはずなのに周りに人がいないこの木陰の下はそよそよと心地よい風が頬を撫でた。

「ね、好きなご飯は？」

「んー、中華かな」

「好きな服は？」

「Tシャツとズボンさえ有れば生きれるよ」

「好きなお菓子は？」

「強いて言えばキャラメル」

食べ終わった弁当と、外されたピンク色のガンホルダーなどを置いた地面はたくさんの枯葉が重なり合い、その一枚を手にとると春のような女が隣で目尻を下げて笑う。

周りに人がいないとは言え、あけっぴろげに自分の情報を喋るのは少し面白くない。しかし俺の冷たい視線にも気がつかずに、膝に乗った林檎と体を向き合いながら彼女は能天気にも面白みのない会話を続ける。

カブトムシの姿に戻った05も彼女の胸の上に居座っており、なんとも居心地の悪い疎外感を感じていた。

「パトロールとやらはいいのかよ？」

「連絡くるまでは休憩。ねえー、杠ちゃん」

何もせずに桃色と金色の髪を風に揺らす嫌いな女に責めたように嫌味を投げかけると、彼女は林檎を胸に沈めるように抱きしめて長い舌を出す。

「むぐ、これ、何が詰まってるの？」

「脂肪と筋肉と男のロマンだよ。杠ちゃんもいつか育つから、安心して？」

無駄に大きい胸を抱きしめて顔を埋める林檎は初めて感じる人間の柔らかさに首を捻る。貧相な身体をしてる自分の体と比べて不思議そうな顔をしていた。

そして暖かさと女体特有の柔らかさに屈し、顔を埋めて眠そうに欠伸をするとゆっくりと瞼を閉じていく。

すぐに寝息を立てた林檎に優しく微笑んで頭を撫でる姿は年の離れた姉妹に見えた。

「ガキ相手に変なこと言ってんじゃねえ。教育に悪いだろ」

「何、嫉妬？ 触る？」

「いらねえサービスを押し付けるな」

こういう時、女という生き物は本当に厄介だ。ただ男より脂肪分が

多いというだけで自分に価値があると勘違いする。

胸当てをつけていないセーラー服の襟を掴んで下着の紐を見せてくる姿に呆れと軽蔑しか出てこない。

確かセーラー服の襟は正面から破りやすいようにできているんだっただか。清楚の代名詞であるはずの制服が途端にそういう店での衣装にしか見えなくなってくる。

経験がありそうな見た目と発言なのに、実際は大人ぶってるだけの未経験なのがさらに腹立たしい。15歳の少女として有るまじき発言をする少女のぼんやりとした無垢な瞳に大人びた化粧は似合っておらず、チグハグな彼女に苛立ちが湧く。

「保護対象、そうやってからかうのはマスターだけにしておいてくださいね?」

「いいじゃん、全人類のお姉ちゃんはおっぱいもみんなのものなんだし。こんな肉と脂肪の塊触るだけでみんな幸せになるならエゴでしょ?」

「エゴの使い方が間違ってる上、クソみたいな考え方だな。むやみやたらにそういうことしてんじゃねえぞ。変な奴に声かけられたらどうすんだよ」

自己犠牲を尊ぶこの女のふざけた考えはいつまで経っても理解し難い。

自分の胸を寄せ上げて勝ち誇ったような顔をする彼女の思想は理解できないほど馬鹿馬鹿しく、愚かだ。呆れてものが言えない。

「そうですよ、ただでさえ前例があるんです。自衛しなくてはダメですよ」

「別にあたしがナニしたって関係ないでしょ。どう扱われようが、どうでもいいだろ?」

ブローチのように胸元に居座る05の正論にぶすつと顔を歪めると、もう既に寝てしまった林檎を抱き寄せる。強くなっていく口調での外れな反論をする彼女はあからさまに不機嫌だ。

自分が褒められるのに慣れておらず、人を頼らないことを信条としている人間不信な彼女には、優しさに似たような忠告は酷く居心地が

悪いものだった。

だからわざと感情を揺さぶるように気持ち悪い世辞を言い続ける。
「……馬鹿でなんもわかってない可愛い可愛いお前が俺以外の暗部の手に渡ったら迷惑なんだよ。頭ん中お花畑なお前が暗部のクソ共に手出されてみる、そつから先はお前の正義とやらを尽くせなくなるほどの暗闇だぞ」

「あたしはみんなのものだからなあ、暗部に所属するつもりはないよ？でもベタ褒めとは珍しい。とりあえず脳外科、精神科、心療内科か眼科の紹介状書いてもらおうね、垣根くん」

「正常だボケ。ほーら、これなんてロリコンにウケるぞ？馬鹿みたいで可愛いよな」

悔し紛れに笑顔で使いこなせてない皮肉を呟く彼女の肩を抱いて引き寄せると、キラキラと光を反射するピアスが揺れた。柔らかい肌からじんわりとした温かさが伝う。

掴んだ肩は女にしては少し広いが、それでも俺よりは圧倒的に小さい。

鬱陶しそうにこちらを見上げて感情に任せて喚く姿は本当に鳥のよう。俺だけが手懐けられる馬鹿なメジロ。

威勢よく鳴いても、囁くような低い声で携帯電話の写真フォルダにあつた一枚の画像を見せた途端に覇気をなくしていく。

俺の思惑だと知らず、ぐるぐると顔色を変えていく姿は思わずにやけてしまうほど可哀想だ。

「これ、なんで垣根くんが……」

「テレビ出てたんだって？」

「っ、どうして知って」

携帯に写っていたのは先ほど保護者たちに見せた小さい頃の天羽の写真。西洋の人形を彷彿とさせる幼女は、化粧をしていたとしても今の彼女と雰囲気や面影がよく似ていた。

「ふーん、本当に出てたんだ」

「えっ、っ!?!」

自分の過去を認めてしまったことに気がつくとすぐに口を手で塞

いだ。唇を結んで、視線がうろちよろと彷徨う彼女の顔は笑ってしま
うほど青ざめていた。

幼さが残る顔に塗られたピンク色のアイシャドウが冷や汗に混
じって溶けていく。

「黒髪にして、化粧落としたら、人形に見えるよなあ。青い服を着たら
可愛いと思うけど、買ってやろうか？」

「……遠慮しておくよ」

「遠慮するなよ。藍色の服を着て、髪をストレートにすれば、ほら、人
形みたいで可愛いだろ？」

別の写真を見せると、掴んでいた肩がびくりと跳ねる。

凹凸のはっきりした女性らしい体を隠すブカブカの藍色のカン
フー服と、同じようにブカブカナ真つ黒いズボンを着た性別不明の人
物が写った画面はジワジワと彼女の精神を蝕んでいく。

カラスのように黒く、くるぶしまで届く長い髪を持ったその人物の
隠れた顔は、随分と前に見た天羽の素顔と同じだった。

「あたし、じゃないし」

「嘘つき。化粧で隠そうたって無駄だぞ。それに俺は化粧してないお
前を見てるんだ、言い逃れはできないぜ？」

藍色の服、黒い髪と瞳、人形のような気怠げで生気のない端正な顔
に、胸を潰して作った分厚い胸板、隠した喉元と細い手、声変わりを
していない少年のソプラノ声。

男のような格好をしても、化粧で誤魔化そうとも、近くで見れば直
ぐにわかる。俺に隠し事なんてできるはず無いのだから。

似合わない化粧が汗で少しずつ剥がれていく。

気だるそうな目を縁取る跳ね上げ気味のアイラインに、トリツク
アートの要領で描かれた無に等しい涙袋。ぼんやりと境界がぼかさ
れた桃色の口紅を付けた唇は程よく厚みがあり、重みのあるまつ毛が
マスカラやビューラー、つけまつげによって必死に上を向いているの
がアンバランスだ。

気が強そうな大人の女性というより、元々がアーモンドのような垂
れ目だからかただのマセガキにしか見えない。

年相応の、大人びた顔。

まるで子供が背伸びをして大人のように振る舞うような幼さが残る少女というのが正しいだろう。

武装のように固められた粉は、写真に写った別の姿を隠すためのカモフラージュ。

その姿の名前を、藍花悦と仮称しておこう。

俺がその名前にたどり着いたのはなんてことない言葉だった。写真を見たあの保護者が言った『青が似合う、黒髪の子』というどうつてことのない単語の羅列。

なんの変哲のない言葉だが、少し前、具体的にいうと上条たちと初めて出会ったとき、俺はその言葉を言っていた。

そのとき話題に上がっていたのがこの名前だった。何にもわかっていない第六位の超能力者^{レベル5}。藍花悦という華やかな名前と、黒髪に青が似合うということしか分からなかった詳細不明の人物。

そこから彼女に繋げるのは簡単だった。

違う名前があるということ、隠蔽された能力があること、神の領域に踏み込める三番目であり、アレイスターが管理したがる能力者だということ。

そして必死に藍色を隠そうとするその姿に藍花悦の名前がちらついた。

「あーあ、可愛そうに。必死で隠してたのにな？こんな簡単にバレちゃまって、怖いか？」

「別に、」

「そーいやお前の本名、結構可愛かったな」

それらしい挑発とハツタリをぶつけて彼女の肩を横から抱きしめる。強大な力を持つものからの抱擁は弱い人にとっては優しさよりも恐ろしさを感じるものだ。

青ざめる彼女を馬鹿するようにクスクスと耳元で笑うと、緑色の爪が深く食い込むほど彼女は太ももを握った。

彼女は頭が悪い。

要領も悪く、空回りしてしまう彼女は、脳の許容量を感情で埋め尽

くされると思わぬところでポロを出し、失言する。

そんなやつに未だ遅れをとっている事実には苛立ちも感じるが、反対に言えば振る舞い以外は完璧に隠蔽しているということだ。

これは彼女の口から感情と真実を吐露させるための狡い作戦。なにせ今の俺には彼女が藍花悦と繋がる物的証拠、あるいは確信的な証拠がない。

ただの憶測をつなぎ合わせただけのハリボテに過ぎないこの辻褄だけがあつた推論。

証拠集めは部下に頼んでいるが、もし上層部が絡んでるなら間違いなく証拠を集めるのは困難だろう。

だから俺は彼女の口からこの推論を肯定させなくてはならなかった。

俺の知らないこの女の脅威を一つずつ、確実に紐解いていく。

俺しか知ってはいけない、俺しか彼女を理解できない、俺しか彼女を救えない。その領域に踏み込んで良いのは俺だけだ。

「……そう、そうですね。それはどうも」

しかし、思惑とは裏腹に彼女は失言も、怯えもせずに言葉を漏らした。

彼女の顔から考えが読み取れない。一体何を考えているのか分からないのが恐ろしい。

楽しいときは無邪気で無垢な笑顔、困ったときは口と眉をへの字に曲げて、恐れたときは顔を青ざめさせ、悲しみに暮れるときはポロポロと静かに涙をこぼし、酷く怒ったときは獣のように唸る。

彼女の顔は容易く感情を教えてくれるはずだというのに、時折、何を考えているのか分からない、人形のような不気味な顔を見せる。

初めて会った時もそうだった。何を考えているのか分からない、気怠げな目で冷たくゲームを眺めていた。そして今も。

心臓が一瞬、動きを止めた。想定外の反応に脳がフリーズを起す。

どの言葉が間違いだったのだろう。俺の目を見ない彼女に恐ろしさを感じていた。心臓がこれ以上ないほど悲鳴をあげる。

瞬間、どくどくと脈打つ心臓を脅かすように、その高鳴りと同じような高い音が彼女のポケットから鳴り響いた。

「あ、迎えが来た」

「迎え……？」

思わず掴んだ手を緩めると、彼女は寝息を立てる林檎を俺の膝に乗せ、05をその額に置いて立ち上がる。

そしてシルバーグリーンのスマホを取り出し内容を確認すると、徐々にいつもの笑顔に戻っていった。

「オリアナ、見つかったの。だから行ってくるね」

外していた胸を強調する太いハーネスをつけ、ウィンドブレーカーを拾い上げて袖を通す。

「それは俺と一緒にダメなことなのかよ」

「この件は緊急係が責任を持って解決に当たらなきゃいけないことなんだよ。あたしは哀れな子羊を導きに行く義務があるからさ」

恐ろしい色をした瞳が俺を見下ろした。龍のような得体のしれない悍ましさが彼女に纏わり付く。

突き放すように冷たい言葉で距離を置く彼女は、俺が知っている彼女とはかけ離れていた。

「それに、もうあたしはいらないでしょ？」

言いたいことだけ伝えると、ウィンドブレーカーを翻して彼女は立ち去る。

もう花の残り香は消え失せていた。

「……今は泳がせておくか」

引き止めればよかったと後悔するが、既に手遅れだ。

もうすでに見えなくなった女の背に向かって小さく呟くと、強く拳を握りしめる。

あの女が考えていることが分からないことが自尊心を傷つけていく。俺しか理解してはできない領域が遠ざかっていくことが不安で仕方がない。

「マスター、我々はいかが致しましょう」

「林檎を巻き込まれないようにしろ。あの女は俺の手で躡る」

どうせ拗ねているだけ、怖がって虚勢を張っているだけ。俺がいな
いことに寂しがつて、悔やめば良い。

あんな女、ちよつとくらい痛い目にでも合えば良いんだ。そして俺
の元にまた戻って来れば良い。

そして俺こそがお前の飼い主にふさわしいと理解しろ。

いつだってあの女の上に立っていたい。無力で無謀だと分からせ
たい。

夢も希望もないのだと、その先にある茨の道に行くなど伝えなくて
はいけない。それが彼女を任された身としてやらなくてはいけない
ことだと知っている。

傲慢な女の醜い最期を見たくないから、俺は彼女の側にいた。

56話：立ち入り禁止

未だ青空が広がる午後、昼の休憩はとつくに終わって活気が戻ってきた時間帯に俺、上条当麻は赤毛の魔術師ステイルⅡマグヌスと、友人の土御門元春の三人でベンチに座り今後の行動を議論するなど、イベントに参加する学生たちの会話とは程遠い会話を繰り返していた。

お昼ご飯も食べ終わり、インテックスと別れた後に合流した彼ら二人は、険しい顔で言葉を交わす。

議題はオリアナⅡトムソンの行方について。

というのも、俺たちは彼女の行方を知る手段を持っていないのだ。

追跡を行う魔術も、それを行うのに必要なオリアナの魔術の痕跡やらが入手できていないので行えず、現場であるバスの車庫も友人二人が派手に交戦したせいで警備員アンチスキルの手が入り、結局入れずじまい。

そして唯一動向を探っていたクラスメイトの天羽擘糸と、兄のように彼女を気にかける垣根帝督、双方と連絡が途絶え、電話をしても一向に繋がらない。

つまるところ、俺たちは詰んでいた。

「どーすっかなあ」

時間が限られているこの切羽詰まった状況を打破する素敵なサムシングは頭に浮かばず、ただただ貴重な時間だけが過ぎて行く。

何か策はないか、必死こいて脳を引っくり返してみても何も変わらない。

「おい、上条とそのお仲間共」

しかしそこに救世主と崇めてもいいほどベストなタイミングに知能指数が一番高そうな男が現れた。

市販の真っ黒いジャージをヤンキーのように着崩してめんどくさそうな顔で俺の名を呼ぶ彼はいわゆるイケメンと呼ばれる人間で、長い茶髪の隙間から覗く切れ長の黒い目はガラス玉のようだ。

カタギの印象を与えない不良っぽい見た目だが、それが女心とやらを掴むんだらう、決して人通りの少くない公園近くのベンチに女性の視線がチラチラと不規則に彼に向けられている。

現にクラスメイトを一人手籠め、ではなく仲良くなっていることを知っているのです。そこまで驚くことはないが、それでも純粋にイケメンって凄いなと頭の悪い感想を思い浮かべてしまう。

そしてそれに対して羨まず、恨まず、こうして仲良くできるのは彼の鼻にかけない態度と、天羽隼糸に付きっ切りで世話を焼く一途な彼を知っているからだろうか。

「垣根え！テメエ連絡返せよな！俺の親に天羽のこと惚気たの知ってるんだぞ！」

「誰がそんなことした。それより捜査はどんな感じだ？」

それはさておき、詳しくは知らないが先ほど自分の両親と会って色々話をしたと聞いている以上、連絡をしてこなかった垣根にツッコミを入れざるおえない。

何件メールを入れても返事をしないことに腹を立てていることを茶化しながら訴えると垣根は鬱陶しいと言わんばかりに眉を顰め、ため息をついて呆れたように土御門たちに言葉をかけた。

「俺らはオリアナ探しで走り回ってるどころだ。誰かさんのせいで探索方法が限られていてな」

「何も進展ねえの？まあ天羽がもう見つけちゃったからどうでもいいか」

首に手を当て、面倒ごとを嫌がる垣根の発言にその場の誰も固まる。彼の言葉は脳が理解を止めるほど、俺たちが渴望していた事実だった。

静かな空間に、公園の賑わいが反響する。

「な、何故それを早く言わない！」

「だからこうして言いに来てやってんだろ。俺は天羽迎えに行くだけで、オリアナとは関わるつもりねえしな。あんま派手なことできねえ身だし」

脳の働きを一時的に止めてしまうほどの衝撃的な発言に、かろうじてステイルが声を上げる。ぶっきらぼうに爆弾発言を投下した垣根は狼狽える俺たちを一切気にかげず淡々と答えるだけで、あまりの淡泊さに若干驚く。

まさか俺たちでも彼でもなく、優しいクラスメイトの女子が先手に行くとは誰も思っていなかった。誰しもがそう思っているだろう。

彼女、天羽彗糸は垣根の大切な人（と言ったら怒られるだろうか）で、俺と土御門のクラスメイトでもある。

オタクに対して偏見もなければ気持ち悪がらない彼女は女子の中でも話す機会が多いので、垣根ほどではないがその性格をよく知っていた。

天真爛漫、と思えば淡白で、物理的距離が近く心理的距離が遠い人。それは男グセの悪そうな大胆な格好と派手な化粧をしていて、成績上位に加え高位能力者という客観的事実が関与しているのだろう。

先生達とプライベートでも仲良くなれる程コミュニケーション能力が非常に高いのにどこかどつきにくく、他の人とするむ姿はあまり見たことない。

積極的に関われば嫌厭するのに、自分が積極的になるのは構わない気まぐれな猫のような、どこか恐ろしい狂気を隠し持った少し不思議な女性。

派手な外見と、微かに一般人とはズレた常識が彼女に近づいてはいけないような空気を作る。

それが俺たちクラスメイトの評価であり、彼女の奥に踏み込もうとする猛者はいなかった。

しかし、高位能力者は同じレベルの人間に惹かれるのだろうか。

目の前のイケメンがどこからともなく現れ、誰も知ろうとしない彼女を彼だけが受け止めた。

垣根は全てを知っている。

だからこそ彼の反応は淡白なのだ。

彼女がすること全てお見通しの彼に、俺たちの彼女への理解について話したら、きつと鼻で笑われ「何も知らないんだな」と言われることは間違いない。

「看護師ゆえの人脈があるにしたって、あまりにも周到すぎるんじゃない……」

「でもおかげで探索が楽になっただろうが。天羽が向かってんのは恐

らく場所は第23学区の実験空港、そこにオリアナがいるかもしれねえからまずそこを当たつとけ」

「第23学区？あまりにも畏くさくないか？」

なんでも知っている彼の言葉に土御門は未だ半信半疑であることを隠さず、警戒心をむき出しにして睨む。

180cm以上はある二人と、2mは確実にある背の高い魔術師に囲まれた168cmしかない上条さんは取り残されているような感覚が膨らんでいくが、それよりも顔色を変えず事実だけを述べていく垣根に対しての恐ろしさの方が勝る。

「平気だろ。畏なんざ突破しちまえばいい」

「それができたら苦労しねーんですたい」

垣根はこの学園都市に七人しかいない超能力者の第二位、強さなら誰にだって負けないだろう。

彼の淡々とした言葉は、彼の自信の表れでもあるのだ。それがカッコいいと思うから、守ってくれると思うから天羽は彼と一緒にいるのだろうか。

強者ゆえの自信が滲み出る彼の言動には素直に関心してしまう。

「……どうやら、こちらにも進展があったようだ」

「メールか？」

「解析中の同僚からだね。転送する」

聞き覚えのある電子音が鳴り響く。

その音がステイルの携帯から鳴っているとわかると、それを確認してステイルは少し眉をあげ、そのデータを俺の携帯に送った。

有益な情報を求め、いざデータを開いてみると、そこにあるのは知らないアルファベットの羅列のみ。

「ラテン語……」

「あの霊装とやらの管理方法についてだな。保管するときには光を当てないで掃除は昼にする。んで、作業員はサボってホロスコープを使う星占いをしてた、とのことだ」

「超能力者^{レベル5}ってラテン語できるのか、すげえな」

「少しだけだったの」

知らない単語に混乱していると、隣にいた垣根が携帯を覗いて面白そうに内容を読み上げた。

天羽と良く似た甘い花の匂いが微かに鼻腔をくすぐる。スラスラと文字を目で追う彼は匂いまでおしゃれなのか。

「……昼に掃除をして、夜にホロスコープで星占いをする。魔術の発動条件のヒントだとしたら、用心してたのはおそろく、」

「夜だね。星の位置で力が増す魔術もある。ピエトロが夜空の光を集めるアンテナだとしたら、オリアナが探しているのはアンテナを立てるために最適な場所かもしれない」

画面に映った短い文章で魔術師達は推測を広げていく。

星を使った魔術に少し意識が向くが、土御門はそれよりも別のことが気掛かりのようで、今だに悩むそぶりをしながら必死に使徒クローチエディピエトロ十字を読み解こうと携帯と睨み合っていた。

「だが問題なのはペテロが死んだのは六月二十九日ってことだにやー。それに日本とバチカンじゃ経度も緯度も違う……空に浮かぶ星が違えば、また違う理屈が必要となってくるし、場所の問題も……」

「そんなの簡単にクリアできるんじゃないか？星は何億、何兆とあるんだ。屁理屈ごねて、似たような星と地形で条件を代替してしまえば発動できるかもしれないぞ」

魔術に疎い男二人を置いてきぼりにして眉を寄せながら土御門がこぼすが、すぐに垣根が活路が見出した。

俺の携帯を見ながら長い指をポケットに入れてめんどくさそうに説明をする彼に視線が移る。様になっていると、頭の奥で思いながら彼の言い分に耳を傾けた。

「少なくとも、超能力の理論なら可能だ。そもそも能力つーのは自分だけの現実を強化して生まれるもの、極端だが、Aの星が α 星だと思えば、そいつにとってAの星は α になっちゃう。魔術つてのはそういう使い方もできんじゃないやねえの？まあそこまで出来るなら学園都市内でやんなくても良さそうだけどな」

そこまで聞いて、彼らと別れる前に天羽が言っていた推測を思い出

す。

——オリアナの不可解な行動理由は三つ。一つ目は攪乱のため

——二つ目は挑発

——そして三つ目。魔術のため

——ていうか、そもそも学園都市にあるのかな

恐ろしい推測が脳裏に浮かぶ。

クラスメイトを疑うようなことはしたくないが、それでも疑惑だけが膨れていき、罪悪感が心にわだかまりを生んでいく。

「でだ、星が必要つつうことはビルもなく、空が広く見える場所。考えられるのは飛行場、ビルの屋上、実験施設かね。ついでに人の幸せを紛いなりにも祈る連中だ、きつと人を巻き込まない場所でやるんだろ。そうなる場所が結構絞られてこないか？」

それこそ、第23学区の実験空港とか。

垣根の言葉が深く脳に刻まれる。そして恐ろしい考えが真実味を帯び、喉に引っかかって離れない。

「で、でも、さっきの話じゃ夜にしか発動できないんだろ？今昼飯食べたばかりのこの時間にオリアナが23学区にいるのはおかしくねえか？もしかしたら、当てずっぽうで……」

「上条、さっきから警備員アンチスキルが多いと思わないか」

「……言われてみれば」

それを払拭するように反論を口にする、垣根は少し周囲を見渡し、それから公園に配置されている警備員アンチスキルを嫌そうな顔で見つめて低い声で告げる。

確かに彼の言う通りなぜか警備員アンチスキルの姿をよく見かけるが、それがどうかしたのか。黒い瞳で遠くを見つめる彼の意図は読めない。

「あの女の緊急係にはおそろく警備員アンチスキルが多く配属されている。彼女が命令を下せば警備状況も変えられるとしたら？もしオリアナが23学区に用があると知っていたら、警備の配置を変えてそこに追い詰められることも可能だろうな」

「なんでそんな、あいつは何も知らないんだろ？どうしてそんな未来予知に近いことができるんだよ、おかしいだろっ」

恐ろしいことに、天羽の言葉はほとんど正解だった。

ただのクラスメイトで、予知能力もないのに、なぜか彼女は全てを知っているかのように話し、行動する。いつもの元気な少女とは思えないほど、彼女は賢く振る舞っていた。

怖い。

合理的すぎるその行動に対し、ようやく絞り出した思いはたった三文字だった。

この前の夏の日もそうだった。

最強と対峙したあの夏の夜。

たくさんの傷を何度も、何度も治して俺の前に守るように立ち、活路を教えて、一方通行に和解の道を示し、愛を伝えた。

夏休み最終日、レポートの手伝いを頼んだあの日、彼女はわざわざインデックスを守るために敵に臆することもなく、切られた首に痛がることもなく、ホテルの屋上で笑顔を見せながら血を流した。

そして二学期初日、始業式をサボった彼女と地下街で会った九月一日。過信した自分の体で無謀なことばかりしたと思ったら、恐ろしい瞳で風斬氷華を肯定した。

恐ろしかった。

まるで人間から乖離した生き物のような悍ましさにそれ以上言い返すこともできず、恐怖だけを覚えていた。

それなのに、薄い恐怖を押し込めて何もなかったように振る舞うのは、彼女が善人で、友人だから。

狂気であることに変わりはない。それでも誰かのために力を使い、愛を伝え、傷つく彼女を決して嫌いにはなれなかった。

「あの女を信じるのか？もしかしたらオリアナの科学サイドの協力者かもしれないねえだろ」

「ねえな。あいつは自分の従ってオリアナを檻の中にぶち込もうとしてるだけだ」

「でも確証はないじゃないか、なぜ信じられる？何を考えているのか理解できないあの女をどうして信頼できる、垣根」

だがそんな彼女を好ましく思わない土御門はサングラス越しに鋭

い眼光を覗かせる。

友人である彼の気持ちも理解できた。何も知らなければ、彼女の行動を裏切りと解釈するのも無理はない。

至極真つ当な疑惑だ。

「じゃあ野郎三人で俺らの帰りを待つてるか？」

それでも彼女をよく知っている垣根はそれを一蹴し、見下すように鼻で笑う。そんなことはあり得ないと暗に伝え、長い前髪を掻き揚げる彼はとても頼もしく見えた。

彼にしてみれば当たり前のことを聞かれているだけかもしれないが、圧倒的な信頼に嬉しさが込み上がる。

誰も理解しようとしなかったクラスメイトに、ようやく理解者が現れたのだから。

「それとも、あの女を世界で一番知っている悪党の言葉を信じるか？」

光のない黒鉛のような目で告げる退路のない質問。

答えはもう既に決まっていた。

しかし、信じてついていった先には大人たちだけだった。

「はああ??侵入禁止だア??？」

電車に揺られて数十分、第23学区近くの駅に降り立った俺たちを迎えたのは屈強な警備員たち^{アンチスキル}。

進路を阻害し、壁を作る彼らの中にはちらほらとMARと書かれたオレンジ色の制服を着た人たちや、緊急車両も置かれており嚴重すぎる警備に違和感しかない。

「今現在テロリストの制圧中につき一般人の入場を制限している。第23学区には近づかないように」

いかついフルフェイスヘルメットを被った警備員アンチスキルに道を阻まれ進めない現状にヤキモキする。目と鼻の先にオリアナがいるというのに、大人たちは俺たちを拒み、通すことはない。

「テロリストってまさか……」

「オリアナのこと、だろうね」

「警備状況を変えてもらったはずなんだが、なんで警備員アンチスキルとMARが……」

やるべきことが彼らによって崩れていく。

携帯を握りしめて唇を強く噛むと、土御門は頭を抱えてその場にしゃがみ込む。行き止まりに誰もが絶望を感じるような完璧な詰み。

これ以上、駒は動かせない。

「あー、そうか、なるほど、なるほどねえー？ テメエら、見た記憶あるなあ？」

「垣根？」

「あの女、まさかDAアラウズの残党を拾っていたとはな。MARも、テレスティーナがいなくなった今、支配権を持つのは天羽ってわけか」

突然、垣根が笑い出す。何もできないことへの現実逃避かと一瞬顔が引きつるが、彼の低い怒り狂う獣のような声にそんな誤解は消え失せた。

「早く天羽彗系に合わせろ。あの女を死なせたくなければな」

獲物を狙い定め、牙を見せる狼のように彼は静かに呟く。黒い鉛色の瞳は恐ろしいほど暗く、光を灯していない。

しかし、恐ろしい目に睨まれても、目の前の大人たちは顔色一つ変えず黙り続けた。

埒が明かない。

もうこれ以上粘っても大人たちはきつと23学区に繋がる道を塞ぎ続けるだろう。

強硬手段でも取らない限り、ここを突破することは難しそうだ。

「垣根、お前の能力でどうにか出来ねえのかよ。俺らのこと抱えて飛

「べねえのか？」

「悪いが俺が抱えて飛べるのは女一人分だけだ、たとえ軽くても男を抱えるつもりはない」

「君のポリシーはともかく、こんな細い男に三人も男を運べるとは思えないし、現実的ではないだろう。どうにかして安全に、目立たずにいけないものかね。実験空港は目と鼻の先だと言うのに」

「ここいつらは天羽の引き連れてる部隊だし、全員殺すつてもできるが、こここの奴らをどうにかしても援軍が来る。警備が厳重になつちまった以上、実弾を使ってくる輩からお前を守りつつ、監視を避けての飛行は目立つから無理だな」

「どうにかできないかと垣根に尋ねてみるも、眉間に手を当てて不機嫌そうに呟く彼からは有益な情報は何も得られない。」

「こういう時、幻想殺しは拳銃には役立たずだな、とため息が溢れる。武器を持った集団には異能を殺すこの力は何の力にもならない。」

「どうするか……」

「この現状を打破できる何かが欲しい。そう思つて降りた駅の周りをぐるりと目で追う。」

「ここにあるのは警備員アンチスキルと、MAR、そして彼らの乗せる車両に、大量の武器と進入禁止のテープ。」

「その中で、空の色に馴染まないオレンジ色が目にとまった。」

「なあ」

「んだよ」

「危険な作戦が浮かぶ。まるで映画のような大胆且つ馬鹿げた作戦だが、それでも言う他あるまい。」

「この中で、車の運転できるやつはいるか？」

「視線の先にあるのはMARの緊急車両。それが示す意味を理解すると、彼らは悪戯好きの少年のような笑みで頷く。」

「自分含め、男とはいつになつても子供のようだ。」

57話：悍ましい人

冷たい秋の空に浮かぶ太陽がゆっくりと沈んでいく。その空に浮かぶ何便もの飛行機の轟音に鬱陶しさを感じながらオリアナは真っ直ぐ何も無いまつさらな灰色の地面を進み、そして足を止めた。

「こんにちは、また会えたね」

何も無い場所に春を思い出させる甘ったるい色の女が立っている。光景は苛立ちを増幅させ、思わず舌打ちをしたくなる。

「どうやってここを突き止めた、どうやって先回りした。様々な疑問が浮かんで穏やかに見せかけていた感情を波立たせる。」

「どうしてここにいいのか聞きたい？」

「……そうね、教えてくれるなら教えてもらいたいけど」

「まあ、人の目と、監視カメラ、あとはドローンとか色々ね」

くすくすと、妖精のような邪悪な笑い声が何も無い平坦な地に響き渡る。

クッキーの生地みたいな甘い金髪に、さくらんぼのようなグラデーションと、大きな胸を支えるハーネス。抹茶色のチョーカーと爪。

灰色のウインドブレーカーを翻し、真っ白いスニーカーで地面に立つ目の前の少女の不思議な色の瞳と目があった。

緑と赤の色素異常を起こした瞳がオリアナを捉え、目を細める。笑うと犬みたく目を閉じてしまう彼女の癖は可愛さのかけらもない。

その蠱惑的な笑みは男性なら頬を染め、ベッドにでも誘うのだろうが対峙するオリアナは女性、ただ気持ち悪いだけだった。

「ま、それはいいとして、天使くんは来てないのね。あなた一人？随分度胸があるのね」

「それはアンタも一緒じゃない？分かってて来たんでしょ？」

「……そうね、そんな予感はしていたわ」

明らかに増えた警備の数、人を監視するような纏わりつく視線。決して兆候がなかったわけではない。わざと誘いに乗るようにここに立ち入ったのも事実。

糸のように閉じた瞼の隙間からギラギラと光る瞳が見透かしたか

のようにオリアナを見つめる。悍ましい蛇を彷彿とさせる感情をその気味悪い色の瞳の奥に飼っていた。

「さて、全ての正義のため、あたしの個人的な理由のためアンタを殴るけど、覚悟は出来てる？」

空を飛ぶ鉄の塊が巻き起こす風に、二人の金髪がまるで生き物ように舞う。花の匂いをさせる目の前の少女は、母親の香水を勝手に使う好奇心旺盛な子供みたく屈託のない笑みを浮かべた。

何も知らずに背伸びをするこの乙女に、闇を抱えた女は酷く苛立つ。

「はっ、もしかして、バカにされたのがそんなに悔しかったの？それとも彼氏くんを誘ったから？もしくは幸せを変えたいから？どちらにせよ、何も知らない夢見る処女には刺激が強すぎたのね」

「挑発のつもり？肌を重ねなくたって愛は伝えられるし、そんなつまらない行為に頼らなくても人は言うことを聞いてくれるのよ。人は全て同じじゃないの。あたしとアンタじゃ、愛が違う。それすら分かんないのかよ？」

そもそも不感症だしね、と聞いてもない情報を付け足すと、名も知らない少女は息を吐くように小さく笑う。コロコロと表情が変わるその顔はまさしく子供だ。

我儘な子供をバカにするような言葉がオリアナの口元から零れ落ちると、少女はキャラメルのような甘い声と顔を歪めて苦味を増す。

その姿を見るだけで、目の前の愚かな子供がオリアナとは相反する思考と、悍ましさを持つているのはほんの少し言葉を交わしただけで感じ取れた。

気持ちが悪い。

真つ直ぐな子供の純粹さと、大人のような汚さを感じさせるチグハグな態度が気持ち悪くて、さらに苛立たせる。喋るだけで、精神がすり減るようだった。

「あら、『ツマラナイ』？誘われたことがないだけじゃない？あ、恥ずかしくて強がってるだけかしら？ああ、もしかして、彼のためにハジメテを守っているの？まあ、一途なこと！」

「性愛とか恋愛なんてものがなくなつてあたしは生きていけるし、あたしの愛はそんなもので満足できる程度の代物じゃないっての。まあ、どうせ分かりはしないから、説明するだけ無駄だろうけど」

嘲笑うオリアナに目もくれず、少女は鮮やかな桃色に塗った唇を歪めて唾棄を込めた視線でため息をつく。

愛なんていらないだなんて、オリアナにしてみればそんな主張は戯れ言でしかない。愛とは人間が必ず持つ欲求の一つ、それが無いとは思えなかった。

どうせ意地っ張りから出た見栄だろう。ただ大人になるのが怖いだけのガキで、それでいて大人ぶりたい年頃のめんどくさい思春期の子供。

それがオリアナが考えられる精一杯の解釈だった。

「たとえアンタの幸せが何よりも素晴らしいものだとしても、理解もせず、歩み寄ろうともしないアンタ如きに、この思いを偽物の汚い量産品にすり替えられるのは困るんだよ。だからここでアンタを止める。どんな犠牲がでようとも」

「イキがっちゃって、無様で可愛いわね、貴方。みんなが幸せになれる基準点さえあれば、貴方の愛するあの少年も幸せになれるのに、理解も出来ないのね」

「……この愛を分らない女が他人の幸せだのほざくなよ。この美しい愛の形も理解できないくせに彼に刃向かって、彼とあたしの幸せを変えようとして、あたしの愛を見下すアンタをあたしは一生許さない。だから地面とキスして謝れよ、淫乱女」

オリアナトムソンは知らない。

目の前の子供が本当に大人で、本当に他人のためにしか生きることができない可哀想な乙女だということ。

その乙女は沢山の嘘を重ねてきたが、自分に嘘はつかない。その口から出る言葉は本当の想いだった。

望むものが違う、愛するものが違う、信じるものが違う、幸せの基準が違うからこそ、人間という生き物は何よりも愛おしい。

上条当麻の幸せ、一方通行の幸せ、垣根帝督の幸せ、もう居ない妹

の幸せ、自分の幸せ。全てバラバラで、全ては完全に噛み合う事はない。

そして彼女の幸せとは、彼らを幸せにするために生きること。

人それぞれの幸せに自分を消費して欲しいと本気で想っていた。

彼女の幸せを、誰かの幸せを否定する人は、彼女にとっての悪。

だからこそ少女はオリアナを酷く嫌悪していた。

オリアナの目的は魔術を使った幸せの標準化。

均一化した幸せを求むオリアナたちは彼女の幸せを、愛する人の幸せを否定する。どんなに崇高で、正しくても、余計なお世話としか思えない。

ただ彼女は認めていて欲しかっただけなのに、理解も示さず、認めせず、あまつさえこの幸福を蔑むようなオリアナたちの幸せは否定しなければいけなかった。

彼女は傲慢な己の意思に従って、自分の価値を揺るぎないものにするためにこの場に立っていた。

それは愛する少年のため、愛する妹のため、自分を選んだあの神にこの価値を分からせるため。

彼女は天国の下、自らの正義を誓う。

「ま、土下座したって絶っ対、許さないけどね！」

とびきりの笑顔を見せて、彼女は胴体を包むウインドブレーカーから取り出したサイコロを振る。正確にはサイコロに似せた小さな爆発物。

削板軍覇に彼女の思いを肯定された今、彼女を止める安全措置は壊れてしまった。いつもいるはずのセーフティーがない今、過激な思想を過激な方法で伝えることしか思いつかない。

「っ！同じ手は通用しないわよー！」

「テメエの魔術は分かってんだよー！」

「なっ、ー！」

馬鹿の一つ覚えと言わんばかりに、なんども、なんども、彼女は危険物をばら撒く。

自分の体を危険にさらしてまで、派手な音と荒ぶる風を味方にして

彼女はオリアナをじりじりと後退させ、魔術を使わせる。

弾が枯れるまで、少女は自分の体に傷をつけては治し、危険な行為を続けていく。距離を縮めるまで、止めやしない。

「アンタの魔術は銃と同じ。同じ弾は二度と使えない。使い捨ての魔導書を沢山持つてるっただけ」

誰にも教えていない、ましてやズブの素人に手の内を明かされる。何もかもを知っている口ぶりで浅葱の空を背に笑う少女の見下すような目が気に食わなかった。

けれどそれは相手も同じ。たとえ可愛らしく笑っていても、水を、風を使って爆発をいなす魔術師に腹の中では煮えたぎるような怒りが体を燃やしていた。

「それに動作に時間がかかる。目的のページを破るのに1秒はかかるんだ、それよりも早く攻撃出来たらこっちのもの。悪いけど、肉弾戦には自信あるの」

「肉弾戦、ね？実戦で出来てなきや意味無いわよ？」
「確かにそうだよ、でもパワーならこちらの方が強いでしょ？」

爆炎の中、少女は強く地面を蹴る。アスリート並みの瞬発力で一瞬のうちにオリアナの懐に潜り込み、長い脚を顎めがけて勢いよく振り上げた。

すんでの所でそれを躲すが、女性特有の柔らかくしなやかな体はすぐさま次の攻撃へ入る。こめかみを狙う上段蹴りが素早くオリアナを目掛けて放たれると、頭を守るように構えていた細い前腕にヒビが入るほどの衝撃がぶつかった。

一撃が重い。

こんな蹴りがこめかみに当たったらきつと即死だ。こんなお花畑のような少女が化け物のような力を持つとは、学園都市の作った能力とは恐ろしい。

けれど、運動能力を底上げするだけのくだらない能力なら勝てる見込みはある、そう思って腕に当たった細い足首を強く掴み、遠くへ振り払った。

「なんだ、結構力あるんだ。てつきりテクだけで体力は無いものかと

！」

その勢いでバランスを崩し、投げ飛ばされた少女だが、驚くほど柔軟な体は新体操のように音も立てずに美しく回転しながら後ろに飛び去ると、精一杯の皮肉を込めて笑う。

少女には勝てる自信があった。

オリアナは知る由もないが、彼女はこの学園都市が誇るたった七人しかないの超能力者^{レベル5}一人なのだ。

その実力は一国の軍隊さえ手玉に取れるほど。溢れ出る自信はその肩書き故のものだった。

まともに相手をすれば、素手で骨を砕き、歯は肌を噛みちぎり、足で体に穴を開け、鞭のようにしなる身体で美しく懐まで潜り込まれる。

目の前の可憐な少女は、第七位を除けば、この学園都市の中で一番身体能力が高く、体がしなやかで、強い力を持つ女子高校生だった。

それに加え、今回はしないと制限しているが、他人の体の支配権を奪い取れる力さえ秘めている。ハンデを課していれど、彼女はこの学園都市で一番を誇る女体の持ち主、ただの肉弾戦で勝てるのは聖人か、第七位のみ。

「ふ、ふふ」

「あ？何笑ってるの」

しかしそれを知らないオリアナは少女の言葉はただの見栄にしか見えなかった。面白くもない意地っ張りな子供の拙い見栄に彼女は笑う。

一緒にいた少年に誘うような言葉をかけたことに怒っているとしか少女の愛を解釈できないオリアナは、あまりの必死さに思わず彼女を馬鹿にしたように口を開いて笑い飛ばす。

「あなた、そんなにあの天使くんが好きなの？」

「そんなの好きに決まってんじゃん、今更なんなの？」

「じゃあ、天使くんに見せたくなかったでしょうね」

「はっ」

頬を染めることも、照れ隠しに真反対のことをいうありきたりな反

応も見せず、少女は首を傾げた。

少女が垣根と呼んでいたあの翼を持った少年を好きになるのは至極あたりまえなこと、その後続いたオリアナの言葉の意図も何もかもわからない。

「貴方が死ぬところに決まってるじゃない」

「何を……ッ、」

一枚、手に持った単語帳のページをオリアナの唇が捕らえた。

そのページが紙の束から引き千切られると、まるで汚い土の下で凍る霜柱を踏み潰したような音が少女の耳に届く。

鼓膜に響くその音は他ならぬ彼女の体から響く音だった。

「貴方が弱いのならすぐ殺すんだけど……認めたくないけど確かにパワーは私以上ね。テクニクはないけど持久戦になったら私の不利になる。だから、とっておき。どうやらこれで正解だったようね」

「っあゝ、ツがは、っうええ」

「しつこい女に、天使みたいな子ねえ……学園都市って、面白いわね。あなたみたいな子供がいるなんて」

封をゆつくりと剥がすように、つけた覚えのない怪我が開いていき、じわじわと何箇所にも傷口が広がる。

最初は背中、そして肩。

ぱつくりと目のように割れた皮膚から滲み出る血液が真っ白なセーラー服を汚して、足を伝い地面に血溜まりを作っていた。

傷ついた内臓のせいで口腔に生臭くて酸っぱい胃酸と血液の混ぜ物が込み上がると、呻き声が小さく上がる。

まるで大きな事故にあったような傷が静かに広がるその姿は目論見とは違っていたが、結果よければ全て良しとも言うように、オリアナは大して気にはしていなかった。

何回も爆発に突っ込んできた彼女なら、制服の下に沢山の傷があるだろうと推測して魔術を発動させたが、思っていたものよりはるかに多い出血量に、乾いた笑いが漏れる。

硬い骨の割れる音、柔らかい肌が裂ける音、鉄の匂いが空気を侵食していく。そして同じように、少女の感情も吹き出した血液とともに

心から溢れ出す。

「っは、天使、天使って、うるせえ、んだよ」

「はい?」

「そんなに羽の生えた生き物に会いてえなら、あたしで我慢しとけつつつてんだよ!!」

吹き出した感情は、質量を持ってこの世界に現れた。

赤に染まった上着を脱ぎ捨て、露出したのはセーラー服を突き抜ける一対の大きな翼。

そして頭上に浮かぶ眩しい四角い輪がヘブンリーブルーの空と檸檬色の髪を照らし、体を追うほど大きな翼はオリアナがよく知っている伝説の生き物によく似ていた。

名前の通り、少女、天羽彗糸は真正正銘、天と繋がる生き物だった。

「っは、あなたも!? 本当に、学園都市は面白い!」

「いいぜ、相手してやるよ異教徒! 愛しの天使様がッ! テメエを地獄の囊ふくろに叩き落としてやる!」

彼女は酷く恐ろしい顔で心を埋め尽くす汚い想いを叫ぶ。

スカートの下から抜き出した柄の長い警棒を握りしめて、痛々しい声を張り上げた。なりふり構ってられない。

気管を開いて酸素を必死に掻き入れて、瞳が開き、交感神経に刺激が広がる。アドレナリンで動いている体は死に瀕してもなお、この悍ましい感情を伝えるために心臓を動かしていた。

「ッ、嫌ね、醜い女の嫉妬は! 傷をつけてもそんなにプライドを守りたい?」

「このッ、この傷を! 馬鹿にすんじやねエ!!」

痛みのない重い体で腕を持ち上げ、オリアナの脳天に警棒を振り下ろす。しかし、徐々に傷が増え、骨が折れていく天羽の体では、攻撃はかすりもしない。

神の加護能力があるとはいえ、その能力を授かる前に作った死に繋がる大きな傷はゆつくりと、そして確実に開いていき、重い枷のように体の自由を奪う。

それは酷く懐かしい感覚だった。

軋み、身体中の節々に響く自分の声に聞き覚えがある。それは十年も前の話。あの九月上旬のこと。

猛スピードで迫り来る鉄の塊に体が大きく崩れたあの日の光景が蘇る。

この傷は誰よりも大切なあの子を救った証だと、必死に保つ意識の中、はつきりと理解していた。

「……ふーん、そんな惨めな姿になってまで自分の恋を守りたいのね。本当、貴方って——」

——可哀想。

「この傷は全部あたしの勲章、誰かを救えたって証。だから、だからッ」

オリアナの一言は鋭いナイフのように心に突き刺さった。薄っすらと、透明な雫を目に浮かべ哀れな少女は叫ぶ。

全身全霊、全ての感情を詰め込んだ痛々しい声は空気を突き抜け、空を飛び交う飛行機を撃ち落としてしまいそうな程、力強かった。

「あたしを可哀想だなんて思うなよ！」

警棒を振り上げて、できうる限りの力で重い一撃を放つ。やかましい口を塞いでやろうと下ろした鈍器は灰色の地面にめり込んだだけだった。

その光景に天羽の苛立ちが膨れ上がる。

認めてはいけない、自分が可哀想ということを。

愛する家族を救い、理不尽の権化である傲慢な神に選ばれ、そしてその存在に愛を囁かれたこの自分が、可哀想で、だれかに劣っているはずがない。劣るわけがない。

劣ってはいけない。

それはこの体で救った命、これから救う命、そしてこの舞台を整えたあの忌々しい神への冒瀆。

それだけは許せなかった。

「可哀想ね、そんな血だらけで、犬みたいに唸って。可愛い顔が台無しよ？」

「どうやら、殴られるだけじゃ、つ足りねえみてえだな?」

「それはこちらのセリフよ。とつとと終わらせましょう? 虫の息なんだから、楽にして欲しいでしょ?」

大きく距離をとったオリアナは、面倒とでも言いたいのかため息を
ついて再び手のひらの単語帳からページを破る。

それと呼応するように、彼女の周りからコンクリートで固められた
地面に紋様が浮かび上がった。あみだくじのように不規則な線が張
り巡らせられ、天羽の行く手を阻む。

淡い光を発するその線は、危険な匂いを漂わせていた。

「あ?線?」

「そこから一歩でも動いたら、あなた死ぬわよ」

「死ぬ……?この、このあたしに、死?」

「ハジメテのあなたにはキツイかもしれないかしら? イツちやうくら
いの衝撃よ、そこで花でも散らしなさい」

死ぬと言われ、目の前の天使は瞳孔を狭めてあからさまに動揺し始
めた。メリーゴーランドのように頭上の四角いネオンの光輪が回り、
セーラー服を刺し通した大きく翼を広げると、顔を伏せて風に髪をな
びかせる。

「くっ、ふふ、ふふふふ」

「……何か面白かったかしら?」

二人を隔てる線を見つめ、嘲るように天羽は笑う。不気味に笑う声
を不快に感じるのはいじやない。

腹を抱え笑う彼女の悍まじさが、その神々しい姿も相まってオリア
ナの目に恐ろしく映った。

「イカせる?! 悪りいが、こっちはもうとつくの昔にいつちまってんだ
わ!」

「はあつ!」

「もう死なんぞ怖かねえ! それ如きで、あたしは止めらんねえんだよ
!!」

「あなた、頭おかしいっ! 死ぬって言うてんのよ!」

誰かのために生きて死ぬことがおかしいわけがないじゃないか。

それを目の前の愚かで教養もない馬鹿な女に叩き込まなくてはいけない。

手にした鈍器を大きく振りかぶり、地面に刻まれた死線を跨ごうと力強く一步を踏み出す。

「誰かのためにあたしは死ぬる！証明だつてしてらんだから！」

しかし、その手は届かなかった。

硬いキャンデーを噛んだ時にちかい、軽くも痛々しい音が足から体へ伝う。プレス機に潰された金属のように、軽々とへし折れた足の骨はもう動かない。

跨ぐことが出来なかった地面の線は、彼女の心情を理解することもなく消え失せた。

あとほんの数歩で、振り上げた警棒が届くという距離で、体は地へ落ち、冷たい地面をどろどろと真っ赤な血が覆う。

「うがつ、ああ！！！」

もうすでに声が出なくなり、あの日と同じように指先から体温が奪われていく。掠れた呻き声と、動かない手足では彼女を作るこの激情を伝えることも、見せることもできない。

痛みを感じない体でも、視界に入るワイン色の液体は彼女のとつくなくなったはずの心にあつた古傷を抉った。

「はあ、騒がしい子ね。ようやくスタミナ切れ？」

倒れ伏した自分の姿が見下ろすオリアナの冷たい目に映る。見るに堪えない惨たらしいその姿は、あの日を思い出してしまふほど赤かった。

ああ、やつぱり、死んだ時こんなブスだったんだ。

酸素の足りない脳は、こんな時だからこそ、昔の感情を蘇らせる。裂けた皮膚はきちんと化粧で隠れたのだろうか、あの子は怖がらなかったのだろうか、トラウマになっていないだろうか。

美しくない自分の姿を早く化粧で隠したい。きつと自分が化粧を手放さないのは、あの時の妹の恐怖に染まる顔と、自分の体が死んで

いることに起因しているのだろうと、動かない頭でぼんやりと考える。

そういえば、あの日も空は青かった。

どくどくと流れる血液に、治しても治らない傷と、折れたまま動かない体である傲慢な神がた住む空を眺め、溢れ出る想いを心の中で呟く。

よかった、あの子がこうならなくて、と。

青春を謳歌する妹が、こんな惨めな姿にならなくてよかった。死んだのが自分だということがたまたまなく嬉しい。

体から溢れる血の暖かさを感じながら、冷たくなる自分の体の心を嬉しきで加熱する。

あの子をこんな目に合わせなかった自分を偉いと褒めてあげたい、褒めてもらいたい。この体を見下ろすこの女は一生自分に勝てないと、誰にも理解できない優越感が血液のなくなっていく体を満たしていった。

ねえ、アンタは処女を馬鹿にしてたけど、あたし、そんなことよりもすごいことしたことあるんだよ。

誰かの為に命を捨てたことがあるの。ねえ、処女なんて目じやないでしょ？

性も生も全部、誰かの為なら捨てれるんだから。

だから、あたしは可哀想なんかじゃない。

58話：粗大ゴミへの微々たる愛情

澄んだ青い空は地に落ちていく太陽の光を浴びて、その淡い碧を地平線から光る茜色と混じり、桃色と青磁色に染まる。

その空に浮かぶ多数の飛行機に見下ろされるのは二人の女。正確には、一人の女と、一人の天使。

「あらら、死んじゃった？残念、もう少し遊びたかったのだけど」

地面に真つ赤な花を咲かせ、浅い呼吸を繰り返す哀れな少女を眺めながら彼女は言葉を零す。柔らかな肉塊は、血溜まりの中、静かに眠りについていった。

足元に転がるそれは到底同じ人間とは思えない姿で眠る。その姿が神の使いだと知っているオリアナは、冒瀆的な見た目に少し眉を顰めた。

墜落した天使から溢れ出る血がオリアナの美しい足を汚していく。

体を覆うほど巨大な白い翼と、脈と共に回転する四角い輪。それをもつ少女は天使と形容する他あるまい。

体から出現したそれは前世で起きた悲劇の証拠。

冷たい灰色に生温い赤い液体を広げていくその少女、天羽彗糸は昔、死んだことがあった。

神に護られた揺るぎない精神はあれど、天国と生身で繋がる身体はとも無防備で、それこそ古傷を開く魔術にいつも容易く呼応し、この惨状を作り出してしまうほどだった。

「さて、邪魔者もいなくなつたし、早くやるべき事をやらなきやね」

惨たらしい光景から目を逸らし、面倒な少女に絡まれて散々だったと呆れながらくるりと踵を返す。血溜まりをよけ、落ちる太陽に向かうが、すぐに足を止めた。

とてつもなく大きな音が耳に届く。

金色の髪を美しくはためかせながら振り返った先、そこにあったのは青と桃色の空によく似合うMARと書かれた大きなオレンジ色の車両と、黒髪の少年の拳だった。

「オリアナアアアアア!!!」

「っ、なっ！ガはア、っ！」

立ち入り禁止のフェンスを飛び越えた車から勢いをつけて跳ぶと、オリアナの頬を目掛けて右手の拳を振り下ろした。

物凄いスピードでぶつかつた男の拳はオリアナの頬にめり込み、鋭い痛みをぶつける。恐ろしいほど躊躇なく拳をぶつけたその男は、この世界の主人公、上条当麻だった。

「ツは、ふ、ふふ、やっときたのね」

だがあまりにも遅かった。

それは彼女の野望を止めることではない。派手は音を立てて落ちた車から少年三人が降りると、よろめきながら赤く腫れた頬を撫で彼らを嘲笑う。

かわいそうな紅一点を救うには、少しだけ遅い。

「でも残念、手遅れよ。君の彼女、殺しちゃったもの」

運転席から降りた背の高い茶髪の少年に艶やかな笑みを浮かべた。無愛想な顔をした少年はその視線を追い、そして見つけてしまう。

視線の先には息を飲むほど悍ましく、恐ろしく、美しく、可憐で、浅はかな生き物が横たわっていた。

その異形な姿に目を見開き、口が渇く。

「天羽？」

小さく掠れた声が垣根帝督の口から漏れる。

人形のように動かず、川のように絶え間なく紅に染まった液体を身体中から流すその鳥が茶髪の少年、垣根帝督のものだと気がつくのに一秒もかからなかった。

沈む太陽よりも鮮やかな紅色がその哀れで可愛そうな少女の髪を、足を、手を、頬を伝う。春を告げる暖かい太陽のような金と濃い桜色の髪も、花に止まるメジロに似た緑に塗られた爪も、その全てが目潰してしまいそうな眩しい赤に塗り替えられる。

曖昧な空の色は少女の鮮烈な赤をより美しく魅せ、淡い桃色に見える翼と四角い光輪に照らされた髪は花のように地面に広がり、その姿は墜落した鳥を彷彿とさせた。

「アエエエツッ!!」

「あら、いいの？お姉さんに構ってて。その子死んでるかもよ？」
「ツクぞ!!」

怒りに任せてオリアナを殴りかかるが、彼女の言葉に拳を納めてなりふり構わずに惨めな肉塊へ走り出す。

急いで彼女に駆け寄って真っ赤な血を気にもせず抱き上げると、少しだけ聞こえる心臓の鼓動と柔らかい肉の暖かさに心から安堵した。

「垣根、天羽は——」

「大丈夫だ、まだ」

怖い。

様々な感情が喉の奥を焼くように心臓から逆流していく。

血が喉を詰まらせ、呼吸が奪われていく目の前の少女から体温が失われていく感覚が鼓動に合わせて指先から伝わった。

服が汚れることを気にも止めず、延々と流れ続ける血液ごと彼女の体を強く引き寄せて、真っ赤に染まってしまった汚い金髪を梳かす。

柔らかい身体と、花の匂いが混じった血の匂い、腕に感じる誰かの重さ。

この重さを、知っている。

その重さを失ったのはずっと昔のことだ。

幼い頃、初めて自身を褒めてくれた髪の毛の長いあの子を失った。とても惨い過去の話。

この翼をかつこいと初めて微笑んでくれたあの子は、惨めな最後を彼の腕の中で迎えてしまった。

その枷を未だに外せていないからこそ、大切な人の死を恐れ、その死の元凶を激しく憎んだ。

それでも、二回目は上手くいった。

この姿をかつこいと言ってくれた小さな黒髪の少女を救うことが出来た。それも、目の前に横たわる女のおかげで。

だから慢心していた。

この柔らかい生き物は死ぬことは無いと。

垣根帝督という少年から離れないと。

鳥のように五月蠅く春を告げ、犬のように自分を愛してくれるこの女が、どんな無茶をしたって死ぬことは無いと思っていた。

それは彼女の能力を見て、そして自分の実力を知ったのこと。

ちよつと痛い目を見て、俺のありがたさを知ればいい。だからこそ、彼女の企んでいることを無理やり止めなかった。

自分の無力さを痛感すればいいと、少し苦味の強い意地悪のつもりだった。ヘマをして何もできない彼女に笑いながら「可愛そうだな」と言つて、彼女がそれに怒つて、助けてあげて。

それに死んだって構わないのだ、彼に隠すことを知ればそれでこの関係は終わるのだから。

ただ彼女が自分に隠す秘密を知りさえすればそれでいいと、それさえ知ればもう終わりだと、考えていた。

けれどどうだ。

肉塊を前にした途端、恐ろしさのあまり目は見開いて口からは荒い息が絶えず零れるこの体は何を感じた。

腰から伸びる血に濡れた白い翼と、淡く光る四角い天使の輪が浮かぶその頭にこの前の九月上旬のことを思い出す。無力なくせに全て一人で終わらせようとして、馬鹿なくせに全て一人で考え込んで、子供のくせに大人の振りをして、体を傷つけていく。

現に今、皮膚がめくれ、骨が砕けた顔はどう見ても穏やかだった。ふざけやがって、満足そうな顔してんじゃねえよ。

俺のために生きると言つておいて、一人で見当はずれな勘違いを続けてこんなざまになりやがって。この俺を差し置いて、ムカつく女に殺されてんじやねえ。

怒りがふつふつと湧く。それは彼女に対して、そして自分自身に対しての怒り。

天羽彗糸という乙女は、自分がいないと死んでしまうような弱者だと、自分が一番知っていたのに。

過信と慢心が己の心をぐちゃぐちゃと掻き混ぜ、目の前の可哀想な

女がその汚い心臓を鷲掴む。

ペットへの愛情は、人への愛情よりもずっと重い。

大切な人間を失った垣根にとっては尚のこと重かった。

「……翼に光輪ニンプス、噂は本当だったか」

「どういうことだ……彼女は一体……」

血の匂いがこの場にいる全員の鼻腔の奥を刺激する。白い翼と、ネオンのように光る四角い光輪を持った生き物を、何も知らない魔術師たちは天使と見間違えた。

美しい少年に抱きかかえられた醜い異形の存在に土御門とステイルは唾然とし、言葉が出ない。

違う異質な生き物を抱いている少年に掛ける言葉も、その生き物たちに近づくことも出来ず、ただそこに立ち尽くすことしかできなかった。

「二定以上の怪我を負った人間を昏倒させる術式なんだけど、あと10分は解けないから死んじやうと思うわ。今はかろうじて生きてるでしょうけど。でもどうする？解いてあげましょうか？それとも死なせておくのかしら？」

「野郎ツツ」

体を強く抱きしめ、嘲笑う魔術師を睨みつける。大事な犬の処置はもちろんするが、それよりも目の前の女を殴り飛ばして殺してしまいたい。

露出した腹を突き刺そうと翼を、未元物質を展開し、剣のように鋭く伸ばす。しかし、彼の肩に置かれた右手がそれを止めた。

「垣根、天羽連れてけ。土御門も」

「あ、ああ……」

異能を打ち消す右手が垣根の動きを止め、翼が碎け散った。冷静さを少しづつ取り戻すと、重苦しい空気が弾けるように視線が交差する。

今やるべきことはペットの治療であり、ムカつく女を殴るのは全てを拒む右手を持った主人公の役目、悪役の役目じゃない。

「あら、お姉さんの相手は二人？二対一なんて卑怯じゃない？」

「そんなこと思ってもいないくせによく言うね」

重く暖かい体を大事そうに抱えて走り去る垣根と、それに付き添う土御門を背にし、上条当麻とステイルⅡマグヌスは金髪的女性と睨み合う。

「オリアナ、悪いがテメエらの企みは止めさせてもらう。命懸けで止めた友人のためにも、絶対に止めてみせる」

力強く答えた主人公は、英雄のような眼差しで目の前の女を討つと硬く右手を握りしめた。

「様態は？」

上条たちが交戦を広げる中、真っ赤に染まった少女を乗ってきた緊急車両に乗せながら、垣根と土御門は互いに言葉を交わす。

鼻を掠める血の匂いに吐き気を感じながら、緊急車両に備えられた簡易ストレッチャーに少女を乗せると、強い鉄の匂いが車両内部に広がった。

「見りゃわかんذار。出血量が尋常じゃねえし、骨は触った感じ全部折れてるし、呼吸音はおかしいどころの話じゃねえし、傷は一向に塞がねえし、どういうことなんだよこれは」

「オリアナが言ってただろ、10分はこのままだと。こっちで処理しないとすぐ死んじゃまうだろうな。かろうじて生きてんのは俺と似た、上位互換の能力のおかげだ」

肌色が見当たらない醜い傷を触診しながら垣根はほんの少し焦りを見せる。

オリアナの言った言葉が正しければ、彼女の受けた魔術は『一定以上の怪我を負った人間を昏倒させる術式』。

腑に落ちない。

彼女が負っていた怪我を感知して無理やり昏睡状態に陥らせるだ

けの魔術のはずだ。そもそも彼女の能力ならば傷なんて負つてもすぐ治せるだろうし、一定以上の怪我を負うことはあり得ない。

彼女につけられた傷は大きなものに衝突され、押し潰され、引き摺られてできる悲惨すぎるもの。

まるで車に轢かれたような、それも猛スピードでトラックに突っ込まれでもしない限りつけられないようなものだった。

検死をしたわけではないが、暗部に身を置き、人の生き死にを見てきた垣根にはわかる。

この傷はオリアナにつけられたものではないことを。

「とにかく、このままだと止血すらままならない。ここが病院なら人工皮膚でも使うんだろうが……」

「人工皮膚……それなら何とか出来そうだ。骨も何もかも未元物質で繋ぎ合わせる。血が足りなけりや俺が輸血する。ただ問題は……」

しかしいくら考えても、それに答えを見出すことはできない。

なら考えても埒のあかない疑問より、目の前にある問題と向き合ったほうがいい。そう思ってセーラー服にストレッチャーのベルトを巻きつけるが、入り切らない背中の白い物体に舌打ちをした。

真っ白い翼、四角い光輪、人間にはない部位はベルトで固定するにはかなり邪魔で、腹立たしい。顔を顰め、血塗れの翼を掴んで必死にベルトを回す。

「これじゃマジモンの天使みてえじゃねえか……」

「そいつは天使じゃないぜよ」

苛立ちながらベルトの金具を強引に繋げる垣根に、土御門ははつきりと答えた。

不敵な態度と、圧倒的な実力に、闇浸かった彼の人生。垣根帝督という人間については悪い噂でしか知らないし、土御門にとっては苦手な部類の人間だ。

次に会うとしたら共闘ではないことだけはわかる。

そんな垣根帝督に、危険人物である天羽彗系の情報を伝えてもいいのか心がせめぎ合う。

「あ？」

「輪つかだよ、輪つか」

少し唇を結んでから息をはいて土御門は口を開いた。ストレッチャーにのせる作業を続ける手を止め、その手を強く握る。

淡い期待だった。

必死に彼女をストレッチャーにのせる彼ならば、この女の手綱を掴めるかもしれない。蛇のように蠢き、誰の手にもその本性を表さない胡散臭い悪魔を、上条当麻から引き剥がせるかもしれないと、友人想いの彼は期待していた。

「天使の輪には色々の種類がある。丸は天使が、三角は神が持つ。そして四角は神に認められた人間が持つんだにやー。って言っても、これらは宗教美術的な観点での話で聖書にはなんら関係ないがな」

「三角と、四角……」

「天羽については俺もよく知らない。戸籍だって偽物で、存在自体がない。彼女の経歴も何もかもが不明だ。俺のコネを使って知り得たのは彼女が3番目と呼ばれていることくらい。俺に言えるのはその程度だ」

土御門の言葉に垣根はあの日見た夢をふと思い出す。何もない白い世界にいたあの禍々しい何か。

白い空間の中、定まらない形で汚く蠢き、宇宙を凝縮したかのような輝きを放つ美しいあの塊はその頭上に何を持っていた？

ただの夢だというのに、垣根の端麗な顔に冷や汗が伝う。

魔術を、そして未知を操る今の垣根に、それを否定する材料は今の所揃っていないかった。

「……手伝い、サンキューな」

「おう、これでチャラってことで」

眠る少女のスカーフを外し、暗に出てけと命じると土御門はあっさり従った。

自分のものの全てを見られるわけにはいかない、だからその紳士的な気配りに安堵すると赤で濡れた深緑の襟を両手でぐっと掴む。

セーラー服は確かに破りやすかった。

「死んだら許さないからな」

彼女だけが、どんなに最低な自分であろうと隣にいてくれる。手放すわけにはいかない。

こんな都合のいい駒、後にも先にも現れることはないを知っている。

この恐ろしい蛇を、清らかな鳥を、人を愛する犬を手懐けられるのは、ほかでもない彼だけだ。

虚無が続く、白い世界に閉じ込められる。九月上旬以来の訪問に、乙女は眉を逆立てた。

「あーあ、また死んじやった」

——乙女、汝は天と繋がる魂を持つ。死を目にして再び相見えることとなった

四度目の天国に翼を広げ、丸い光輪をくるくると風ぐるまのように揺らす彼女は明らかに不機嫌だった。

彼女の前に君臨する異形の存在、人が神と崇めるそれは彼女の姿を見て表情の声色で呆れたように告げる。

彼女は一度死んでいる。

それは決して変わることはない現実だ。

この世界とは異なる場所、位相から力を引き出す魔術はこの世界の住人でない天羽の体には毒でもあり、同時に人畜無害な代物でもあった。

神による加護プロテクトをかけられた精神は持つが、しかし器はその異世界からきた魂が能力やその世界のルールに適応できるように再利用された体はその加護がない。

だからこそ、魔術という異世界からの法則は、神の人形と呼応した。交わるはずのなかった前世での肉体と、彼女の精神を世界に留める現世の肉体が共鳴し、あるはずのない傷を精神から呼び起こした。

「どうせ死ぬのなら、彼の為に死んであげたかったのに。こんな出来損ない、生きていたってしょうがないじゃない」

小さく、低い声が白い世界に響き渡る。色のない世界に響いた色のない声は、天から降り注ぐ水のように冷ややかだ。

白い世界に溶ける宇宙のように、何よりも美しく、全ての穢れを掻き集めた姿で神は彼女を見つめる。

悍ましい思考を持つその乙女は、神にも呆れられ、そして愛されていた。けれど、神の寵愛を受けているはずの彼女は願った通りの道を進めない。

神に決められた台本をなぞることしかできなかった。

——汝を望むものの限り汝は生き、汝は歩む

神の一言が、意図せず乙女の心の奥深くに突き刺さる。

「……そっか、お父さんもお母さんも、妹も、あたしが生きることが望まなかったんだ。もう、誰にも望まれないのなら、死んでしまいたいのに」

目の前の汚物が放った言葉は、可哀想な乙女が誰にも愛されていないことを示し、己の絶対的な価値を見出すために生きる彼女に大きな傷を作った。

わずかに残っていた枯渇した愛情への飢えが自尊心を酷く痛める。誰にも必要とされないことが恐ろしかった。

誰かのために生きているのに、誰にも求められない現実が酷く虚しい。

誰かに求められる価値あるものになりたくて、誰かを幸せにできる勇者になりたくて、誰かを救える主人公になりたかった乙女には、神の告げた真実は心を壊すに値するほど残酷だった。

——神が望む、汝の生きた想いを。ならば生かす、そののみ

「ああ、そうだった……まだ生きてられるのはお前のせいだったな、クソ野郎」

お前のせいこんな目に遭っているというのに、辛く苦しいというのに。思わず叫んでしまいそうな感情を短い言葉に乗せて、彼女は犬のように唸る。

こんな人間、早く死んでおけばよかったと、疲れ果てた意識の中ぼんやりと肩を落として項垂れた。

——愛しき少年の元へ帰るがいい、乙女。務めを果たし、正しき道を歩め

神の一言に彼女は顔をあげる。疲れた笑みを浮かべ、彼女は呟いた。

「言われなくたって」

その言葉が何に対しての返答なのかは、乙女にしかわからなかった。

59話：価値観の相違

白い世界が溶け出し、柔らかい風が頬を掠める。体を包む暖かい毛布の中、瞼をゆっくりと開けた。

視界に広がる見覚えのない天井に一瞬戸惑うが、すぐにここが自分の勤務する病院の一室だとぼんやりした頭が理解する。ほんの少し開けられた窓から聞こえる風の通る音と賑わう街の歓声がやけに五月蠅かった。

一つため息をついてベッドに深く体を預けるとスプリングが軋む。頭を抱えて肺から全てを吐き出すと、昨日の出来事を思い出す。

オリアナによって開かれたあの日の傷、そして忌々しい神との逢瀬。

その時伝えられたことが脳裏から離れない。

誰もあたしを望まなかったと、確かに神は言った。

大嫌いな神から言い渡された真実にじんわりと目頭に熱が集まる。

「やだなあ……」

体を包み込む暖かさが溶け出し、寒さが精神を駆け上る。どうやら神の言葉は自分が思っていた以上に深く心に傷をつけたらしい。

自分に似つかわしくない気色悪い寂しさに寒気を感じると、体を震わせ布団を深く被る。

そこでふと、体に違和感を感じる。なんだろうと体を起こすが、その理由はすぐにわかった。

髪が短く切られ、セーラー服が病衣に変わっている。しかも肌着を着ていない。

唇を強く噛むと髪を元通り胸元まで伸ばし、鳶のように伸びて波を打つ金髪を引き寄せて畳んだ膝に顔を埋める。

普通ならば驚いて慌てふためく状況だが、この光景に心当たりは嫌という程あった。

全部、聞こえていた。

肩を抱く垣根くんの大声も、土御門くんの常識的な宗教芸術学も、その一部始終を。

急に不安に駆られ顔を両手で覆う。

崩れた頬と、飛び出た肉。大昔につけた傷が開いた恐怖が蘇る。

この恐ろしい傷を子供に見せてしまった。

そして、そんな子供なんかにも助けられた。罪悪感と羞恥心が大人のあたしに襲いかかる。

強く自分を抱きしめて小刻みに息を吐く。体を駆け巡る他人の血液と馴染まない物質を抑えようと、脳みそが必死に働いていた。

自分とは違う遺伝子がこの体に入っている。

割れた骨を、裂けた肉を、破れた内臓を知らない物質が繋ぎ止め、体を巡る血管には知らない血液が少量流れる感覚が気持ち悪いほど能力越しに伝わった。

この血の持ち主と、この未知の物質に対しての劣等感が激しく膨らむ。胃酸が込み上がるような気持ち悪さにぎゅつと強く肩を握り、誰もいない病室で一人頂垂れてもそも気持ち悪さは消えなかった。

「起きたか、馬鹿女」

突然、体に響くような大きな音をさせながら勢いよくスライド式のドアが開く。あまりに大きい音に傷心気味の精神は酷く驚くが、何処か冷静な脳は振り返りもせずその人が誰か理解した。

あたしを馬鹿と呼び、めんどくさそうに欠伸をする少年に心当たりは一人しかいない。

「垣根くん……」

「浮かない顔してんな。オリアナなら上条がなんとかしたぞバァーカ」

彼の苛立った顔をみるのはこれで何回めだろうか、見下す彼の不機嫌な表情に思わず顔を伏せる。

「てか髪伸ばしたのか？ 便利な能力だな」

「……なんで切ったの？」

「治療の邪魔だったんだよ。深い意味はねえ」

いつもの調子で喋る彼に少しの違和感を感じながらそのままの座り込んでいると、自分の視界が突然黒に覆われる。

鼻の奥をくすぐる男物の香水の匂いと、懐かしい匂いがするその黒

は、彼の着ていたジャージだった。

「…ジャージ？」

「流石にそれだけじゃ寒いだろ」

着ろと言わんばかりにジャージを手放した彼の顔を伺いながらそれに腕を通すと、今度は可愛らしい買い物袋を押し付ける。二人分の距離を開けて座った彼を不審に感じるも、今の自分にはそれを茶化すほどの気力はない。

それよりも気になるのは、疲れ気味な彼の顔。小さなため息をついて髪を掻き上げる彼からはいつもの余裕は感じられなかった。

「で、こっちは？」

「そっちは着替え。感謝しろよ？ わざわざ手配したんだからよ」

彼の態度に引つ掛かりつつも、手渡された紙袋を開いて中身を確認する。嫌な予感が纏わり付いて離れない。

開けたくない気持ちを抑えながら、ゆっくりと袋を閉じるテープの色が剥がれかけた爪で切り落とす。手を少し止め、うつすらと目を開けながら袋を大きく広げると、その色に息が止まった。

鮮やかな青い下着に目を奪われる。

レースにリボン、これでもかと可愛さを閉じ込めたそれは深い藍色をしていた。

上下揃ったそれを袋越しに強く握る。丁寧にラッピングされた袋に皺がつくも、心に残ったのは虚しさだけだった。

まるで今までの自分を馬鹿にされているよう。自分の尻尾を追いかけ回す知能の足りない馬鹿な雌犬ビッチとでも言いたいのか。

遠回しの嘲笑が腹立たしい。

こんな皮肉めいた物をもたらって喜ぶとも思っただろうか。プレゼントのセンスも趣味も悪い。

「……前のは？」

「捨てた。ボロボロでもう着れないだろうし」

「そう」

「なんだよ、機嫌悪いのか？」

機嫌が悪いかだなんて、ふざけてるにも程がある。腹立たしい彼の

言葉に奥歯を噛み締め、袋を中身ごと床に置くと垣根くんは胡散臭い笑みを貼り付けた。

「もしかして腹減ってんのか？なんか買ってきてやるよ、たこ焼きとか、焼きそばとか。それとも甘いもんがいいか？」

「いらない」

「あー、病み上がりだと固形物は無理か。そうだ、あれ買ってこようか？お前好きだったろ、あそこの自販機のじゃくろジュース……」

人を魅了する顔の造形だというのに、カッコつけて言った言葉を噛むと途端にその笑みは崩れ、沈黙が場を満たす。固まったまま視線を外す彼との間に流れる気まずい空気に思わず口角があがった。

かっこいい顔に似つかわしく無い可愛い失敗なんて、ずるいじゃないか。そんな子供みたいなことを言われたら、大人は笑顔にならずにいられない。

「つはは、ザ行も言えないとか、ガキじゃん」

「噛んでない、あとガキはお前だ」

「舌の筋肉が未発達だから噛むんだよお子ちゃま。外舌筋でも鍛えれば？」

「ガキじゃねえ！」

しかし損ねた機嫌はそんなものでは治らない。

「キス下手のクソガキ。どうせガキらしくあたしの裸見て勃起したんだろ？後ろめたさで近づけもしないのかよ」

「精一杯の侮辱を込めて、二人分の距離を開けたまま座る彼を鼻で笑う。これくらい言わなきゃ、割りに合わないだろう。」

遠回しとはいえ見下され、馬鹿にされた。

いつもなら特に苛立たないことでも、今の自分には何よりも腹立たしいことだった。

彼に全て知られて、神には愚かだと憐れみを向けられ、そんな状況で彼の言葉を聞き流すほどの余裕はなかった。

「ああ、もしかして、大嫌いなあたしを助けたのは見返りが欲しかったから？こんなブスに発情するなんて、オスは大変だね！ま、どうでもいいけど」

彼への牽制にはこれくらいで十分だろうと、ベッドから立ち上がる。あたしの上に立とうと気持ち悪い優しさを振りまく彼に、今は嫌悪感しか抱けなかった。

だって嫌じゃないか、彼にまであたしの努力を貶されるのは。

言いたいことだけ言って扉の方へ体を向けて立ち去ろうとした途端、今まで黙っていた垣根くんに強く腕を掴まれ再びベッドへと投げ飛ばされた。

急に変わった視界に小さな悲鳴が出ると、髪を強く掴まれる。色のついていない金髪を掴み取り、瞬きもできないほどのスピードで彼の掌が頬を打った。

「っーな、何!?!」

頬が腫れるほどの衝撃に生理的な涙が浮かぶと、物凄い剣幕で垣根くんはガシツと両頬を掴んだ。足に跨り、体の自由を奪われた状態ではそれを振りほどくことは不可能。

初めて見るような恐ろしい顔に見下ろされ、小さく呻き声をあげると彼は手に力を込める。

「んなことするかよカス！テメエが血だらけになって倒れた後、誰がブツサイクになったテメエを一生懸命になって助けてやったと思ってんだ!!そんな俺が、お前になにか求めると思うのか!」

「っ、助けてなくても、治せやし！見返りでもなきや助けないでしょ!」

「俺が女に困ってると思うか!?!それにな！俺らが駆けつけた時、テメエは車に轢かれたみてえにボロボロで術が解ける頃には死ぬってテメエのクラスメイトに言われたんだよ！その状態からどう治すというんだ！言ってみろ!」

怒られたことは今までの人生で多くない。

妹が生まれる前は物静かな子だったし、放任主義の両親はあたしにほとんど干渉することもなかった。この世界でも両親とは早々に縁を切っているから育てられたことすらない。

だから誰かからの怒りを初めて受け止めることに恐ろしさを感じる。鼓膜を破りそうな声量の怒号に肩が震えるのも無理はなかった。

「テメエは弱いこと知れ！虚勢張って、自分を大きく見せようなんて思つてんじゃないやねえ！俺と肩を並べられると本気で思つてんならおめでたい頭だな！お前はいつまでも、俺に守られる弱っちい女だつてこと忘れんじゃないやねえ！」

真つ直ぐあたしを見つめる黒い目が恐ろしい。

並べられた正論が鋭いナイフのように突き刺さる。よく動く彼の口を塞いで、何も喋れなくしたいのに。それなのにあたしにできることは何もなかった。

「お前なんて、大っ嫌いだ！」

痛々しい声が病室を木霊する。吐き捨てられた言葉に苛立ちしか覚えられず、頬を包む手を掴み、叫ぶ。

「なら殺しとけばよかったのに！君のためなら何度だつて死ぬるつて、嫌いなら殺してくれて構わないつて、何度言えばわかるの！なんでそうしなかったの！」

だつて藍色を知られ、藍花の性を知られたあたしにもう用事はないじゃないか。

こんなあたしに損得勘定を抜きにして、打算も、計算もなく、優しくするとは思えなかった。

「いい加減にしろッ！死ぬことがどういふことかお前が一番わかつてんだろ！必死こいて治療して、輸血してやつて、それで今お前は生きてんだ！それを殺しとけなんてふざげんじゃないやねえぞ！」

掴んだ手を強く握りしめて叫んでも彼はわかつてくれず、さらに声を荒げる。頬を包む彼の手は、あたしのもと同じはずなのに、いつもより大きく感じた。

なにを考えているのかわからない彼の心情を探ろうと黒い瞳を見つめても、答えは返つてこない。

いやだ。

あたしより上に立つなんて、あたしに説教を吐き捨てるなんて。顔を全て包み込むその手が憎かった。

「こつちはもう死んだんだよ！あたしの死は、あんたが思うほど軽くはない！」

悲鳴に近い叫びが喉を痛める。思わず叫んだ失言に少し危機感を覚えるが、もうそんなことどうでもよかった。

あたしの『死』は誰よりも重いもの。あの感覚を感じたことがある。あたし以上に『死』を感じた人間なんていない。

この思いが、軽々しいものなわけじゃないか。

あの重みを、あの苦しみを、お前のためなら感じても良いって言うてるのに。

なんでわかってくれないの。

「は……う？もう死んだって、どういう事だよ」

「……別に、いつもの戯言だよ」

「それは、お前に羽が生えて、輪っかが浮かんで、車に轢かれたような怪我ができたことと関係しているか？」

賢い彼はあたしの分かりにくい失言にすぐさま反応し、顔を掴む手を離す。苦し紛れに話を逸らそうと彼から顔を外したが、どうやら逃げ場はないようだった。

膨れ上がった感情が口を潤滑にし、本音をぼろぼろと零してしまう癖が本当に嫌いだ。心臓が鼓膜まで響き、喉の熱さがじわじわと脳に上り詰める。

まるで察して欲しい構ってちゃんのようで、恥ずかしい。

「そうだよ。あたし死んだの。神様にも会った、輪っかも羽も、その証明」

「神、さま……？」

馬乗りになる彼の肩を軽く押し、力なく体を起こすとゆっくりと話していく。四方八方逃げ道は塞がれ、退路は見当たらなかった。

たとえそれが如何なる未来につながったとしても、この場を誤魔化しきる方法は、悲しいことにあたしの小さな脳味噌では思いつかない。

どうでもいい。アレイスターに自分の素性がバレても構わなかった。

過去を話したところで何になる。消えてしまった昔を懐かしむことくらいしかできない。

ならば彼に受け止めてもらいたい。二人分の精神を抱え込む一人の体にはもうこの思い出たちは重すぎた。

「トラックにね、轢かれたんだー。ずっと、ずっと昔のことだけど。でも生きちゃった。この世界のおかげで」

あたしゾンビだ。それともキョンシーと呼ぶべきか。とつくの昔に死んでいたこの体は、きつと腐敗臭の漂う汚い物。

項垂れながら小さく呟くと、シーツを握りしめてあの日を思い出す。

鮮烈な赤と、澄み渡る青、灰色のアスファルトと妹の金髪。

「垣根くんは知らないかもしれないけどさ、死ってすごい痛くてね、すごく汚れるの」

肺は潰れ、骨は砕け、背中は摩擦で擦り切れて、頭は割れて、顔の肉は剥がれ落ち、足も口も腕も動かなければ、声は掠れ、血は止め処なく溢れ続けたあの日、あたしは死を知った。

誰にも否定できないあの日の痛みはあたしの生きる土台となった。

そう、土台。

今生きる体も、トラウマに蝕まれたものだった。

恐ろしい色に、恐ろしい痛み、その何もかもを感じたくないとあたしは経験から封をする。

怪我した時、血を流さないのも、痛みも感じないのも、その経験からくるものだった。

「でもね、あたしその痛みでね、妹を救えたの。今まで何もさせてあげられなかったのに、それだけはできたの。足も、普遍的な日常も、今まで何も与えられなかったのに、初めてあの子を幸せにできたの、死なせなかったの」

そして死は新しい習慣と共にあたしに新たな価値を与えてくれた。

何も成せなかったあたしに、あたしにしか出来ないことを教えてくれた『死』はこの心臓を動かす揺るぎない正義だ。

あたしの死はあたしに優越感を与えてくれる。出来ないあたしを価値あるものにしてくれる。

それが堪らなく嬉しかった。

「だからね垣根くん、あたしはあたしにしかできないことで垣根くんを助きたい。アナタがこれから受ける痛みを肩代わりしたい。好きだから、垣根くんに辛い思いをして欲しくないの」

大好きな貴方を痛みのある未来から救いたい。祈るように手を重ね、握る。

死を知ることのないように、幸せな道を歩めるようにこの体を骨の髄まで使い果たしたい。

どうせ元に戻るのだから。

「……お前はナルシズムの塊だな、自分を特別だと信じてやまない。自分だけ棚を上げて、自分だけ不幸になろうとするエゴイスト。お前は他人に幸福を押し付けることで悦びを見出す^{サディスト}変態だ」

可哀想な女を見るかのような視線が体に突き刺さる。あたしを見下ろすその目が気に食わない。

垣根くんを突き放して後ろに倒れると空気が舞い、カーテンの間隙から溢れる暖かい光が目を焼いた。体を受け止めた柔らかいベッドから仄かに洗剤の香りが鼻の奥をくすぐる。

甘い匂いに、彼の苦い視線。溶かしたザラメのような視線は酷く不愉快だ。

「今更気づいたの？お前の前にいる女は碌でもない女なんだよ」

顔を隠して鼻で笑うと彼の切れ長の目がさらに釣り上がった。

高慢ちきで、欲張りで、おまけに怠け者。食い意地は張ってるし、嫉妬深いし、怒りっぽい。そんなこと、生まれ変わる前からずっと知ってる。

だからあたしを気持ち悪いって思っても、馬鹿って思うのも構わない。

それでも、この想いだけは美しいと知っていて。

この想いが異常だと、可哀想なものだと、気持ち悪くて、汚いものだと思わないで。

これは誰も査定できないほど美しくて儂い、あたしにしかできない愛の形なんだから。

頼むから、馬鹿で碌でもない女に可哀想な目を向けないで。

何もできないあたしを、これ以上追い詰めないで。

「あたしはね、馬鹿で、愚図で、なーんにも出来ないの。知ってるでしょ、第二位様」

だつてもうすでに崖っぷちなんだ。

前世、幼い頃に貼られたレッテルに振り回されて生きているあたしには、二度目の人生は窒息しそうなほど苦しい。

『出来ない子』

今も、昔も、貼られたレッテルは同じ。

それはあたしが自分のために生きることができなかったから。幼い頃から、他人のためにしか生きられなかった。

妹が生まれる前は親のために生きようと、正しい人生を歩もうとしていたが、残念なことに彼らは放任主義の自由論者で、あたしに全て考えさせ、『自由』を与えた。

それは正しい道がないということ。

どれが正解なのかかわからず、ただひたすら彼らの幸せである『あたしの幸せ』を考えて、考えて。

結局答えは見つからなかった。

出来損ないの自分なんかのために生きたってしようがないじゃないか。

「でもね、そんなあたしでも人のために死ねたんだ。それだけが誇りなの、誉れなの」

そしたら生まれたのだ、あたしの生きる意味が。

あたしより柔らかくて、あたしより可愛くて、そして可哀想な妹。あたしがいなくては生きてられない子供。

彼女を抱いた時に、やっと生きる目標が決まったのだ。

彼女のために生きたい、彼女を幸せにすると。

そして幸せにした。最期に死を肩代わりすることによってあたしはあの子を幸せにできた。

「だから、あたしは誰かの為にこの肉体を使いたい。あたしは誰かの為になるために生きている。それがあたしの生き続ける意味。それはあたしにしか出来ない崇高な愛なんだよ」

あたしの死は愛だ。永遠の肉体が与えた無制限の愛。
誰かのために死ぬるつてとても尊くて幸せで、幸福なこと。あたしの死は幸福。

それはあたしを唯一無二の存在に、生きる道を示してくれる。あの子を初めて幸せにした方法だからあたしはそれに執着する。

それがあたしを幸せにするための必須条件。

何度だって死んであげる。

だからあたしは可哀想なんかじゃない。

「わかんねえよ、お前の言ってること全て。なんで死ぬことに幸福を覚えるんだよ、気持ち悪いんだよ、お前」

「あたしの無い全てを持つてる垣根くんは、あたしの気持ちは分からないよ」

ぐつと彼の肩に手を伸ばし、引き寄せたと同時に体を起こして今度は彼を見下ろした。

茶髪が散らばる白いシーツの感触がくすぐったい。

形勢逆転といったところか、顔のいい男を見下ろすのは気分がよかった。綺麗な顔をした少年があたしの下でふてくされて、歯を食いしばる姿はなんとも面白い。

美しい顔。彼の顔が見えるように髪を梳いてふと思う。

真っ黒で美しい瞳は、芸術のような切れ長の目に収まり、長いまつげで囲われている。見惚れてしまうほどかっこいい。

あたしとは違う。

茶色と緑が混じった汚いこの瞳とは違う圧倒的な美。あたしが頑張って化粧をしても掴みとれないような強い目元に、下品に見えない明るい髪色。

羨ましい。

優れた容姿に、優れた頭、お金持ちで、地位もあつて、背も高く、性格だって悪くない。可愛くて、かっこよくて。

不幸なことや少し危険な仕事をしていることを除けば彼は女の子にとって理想の王子様だろう。杠ちゃんと二人で並んでる姿なんて、まるで少女漫画の中のワンシーンのようだ。

その姿を守りたい。かつこいい彼を守りたい。

お姫様と王子様の世界を何を使ってでも守り抜きたいと願ってしまふ。

「じゃあなんで全部持つてる俺を救おうと願う、なんで死ぬことを惜しまない。矛盾してんだよ、お前」

「それがあたしのやるべきことだから」

ベッドの淵に座ると、垣根くんは横たわったまま言葉を零す。閉じたカーテンの先を眺め、目を閉じるとチクチクと刺す胸の痛みが広がった。

妹を救ったことへの神からの贈り物、そして妹を泣かせたことへの天罰として、彼をスペアに叶えられなかった願いを叶える。

この世界であたしがやるべきこと。

最低な理由だと、改めて思う。

それでもあたしはそう生きなくては这个世界を生きていけない。

だってそれがあたしの正義だから。

誰かを救い、人を守り、許しを与える。这个世界で生きるあたしが成さなくてはいけない贖罪。

神の理不尽を知り、それに抗い、誰かを救おうと、誰かを笑顔にしようとしてを投げ捨てる。

いつだって、あたしの正義は揺るがない。

「俺を愛して、幸せにして、赦すことじゃねーのかよ、前、言ってたじゃねーか。自分で言ったことも忘れてんのか」

「死は愛だよ、垣根くん。それに、死んだって構わないでしょ？ どうせお前は全部知ったんだろ？ あたしが誰なのか」

この男は知っているはずだ。このあたしが誰なのか。

あたしの役割、藍花悦という人畜無害な脇役の名を知られている。その秘密に脅威がないことを知れば彼はあたしの前からいなくなる。藍花悦が脅威でないことをわかつている今、彼はもうあたしに興味を抱いていない。

だからこそ、彼の怒りがわからなかった。こんなあたしを生かし、保護をするなんて、わけがわからない。

なにをしたいのか読めずに、ただただ苛立つ。

別に居なくなつたつて構わない。彼があたしに会いたくないのなら、彼の意思を尊重するだけ。

嫌がることはしたくない。彼のためにならないことはしたくない。たとえそれが二度と会うことのない未来に繋がつても構わない。

前世はそういうやり方で妹を守ってきた。友人と出かける妹の後ろ姿を見て必死に勉強に励み、彼女の居ない海外の大学まで行って。それ以外にも沢山、使えるもの全て使つて彼女を守ってきた。今更、会えないだの、会いたいだの、薄っぺらい恋愛ソングの歌詞みたいな気持ちは抱かない。

ただ今後やりにくくなるだけ。それ以上の感情は思い浮かばない。何だつていい。

モブに紛れてでも、あたしは彼を救う。今までと何も変わらない。

本当に？

「まだ何も知らねえよ、バーカ」

静かな病室に響いた垣根くんの声に意識が戻る。あたしの頭を押し込んでからベッドから降りると彼はそれ以上なにも言わずに彼はそのまま病室を出て行った。

冷たい声だけが耳に残る。なんとも都合のいい言葉だろうか。耳障りのいい言葉を残した彼に、強く唇を噛む。

なにをしたいのか分からない。それでも、その言葉の真偽は分かっていた。

あたしを喜ばせるのが上手な彼に思い馳せながら、柔らかい毛布に体を埋める。

微かに香る彼の匂いは、少し甘かった。

60話：推理

嫌いな女の病室を飛び出した後、向かったのはとあるマンションだった。渡された合鍵を使って何事もなく部屋に入れることに僅かな優越感を感じるも、複雑な感情は未だこんがらがって治らない。

部下を呼び出して数分、先に呼んでいた女の部下を引き連れて入った部屋は彼女の匂いが色濃く残っていた。

部下一人と、少女一人。汚い部屋で三人、静かにもう一人の部下を待つ。リビングではなく、彼女の部屋を指定したのは、ただの気まぐれと、ほんの少しの下心。

病院で動けない彼女のいないうちに、何か見つけたい。それに替える服も渡すべきだろう。

ため息について改めて部屋を見渡すと、汚い部屋を覆う多様な花の匂いが鬱陶しく鼻の奥を刺激する。鮮やかで毒々しいほど成長した花々に若干ムカつき、その辺にあつたハサミを手にとって、花瓶から垂れた花の枝を掴んだ。

「ちっす、ここでもいいんすよね？」

切り落とそうと枝を掴んだ矢先、呼んでいたもう一人の部下が軽い音を立てて扉を開き、部屋に足を踏み入れた瞬間に充満した強烈な花の匂いに顔を顰める。

「つて、うわ、なんすかこの匂い……」

「花の匂いよ。ここまでするとちよつと気持ち悪いけど」

扉を後ろ手に閉めて、ボサボサの髪と洒落つ気のない長袖のスウェットを着た部下、誉望万化が部屋の中を見渡すと、もう一人の部下である年下の少女、心理定規が派手な桃色のドレスを揺らしたため息をつく。

心理定規がベッドの上に座りながら塗るマニキュアの匂いと、花の強烈な匂いが混じり合い、気持ちが悪い匂いが部屋を充満している。

「あの女、花の繁殖を促進してみたいでな、季節じゃねえ花が部屋中に伸びきってんだよ」

「天羽ってお花、好きなのかな」

足の踏み場もないほど散らかった本を手に取り、ブーツとしていたあの女の同居人、杠林檎が呟く。手に持った本はラヴクラフトのホラー小説で、無表情で気味の悪い表紙を眺める少女になんと声をかければいいのか分からない。

気持ち悪い本は天羽の趣味なのだろうかと一瞬不快感を催すが、よく見ると足元には論文のしたためられた紙束に、聖書、神学関連の本、科学雑誌と、SF小説など一貫性がなく、いつもの収集癖かと別の意味で呆れてしまう。

乱雑に積まれた本を避け、床にぶつかるほど伸びた枝を手に取り、丁寧に枝を切り落としていく。

ピンク色のチューリップ、黄色い向日葵、赤い彼岸花、白いマーガレット。

ジャンルの定まらない本に、文字の書かれたレポート用紙と脱いだ服が散らばった部屋には毒々しい色の花々が蔦のように絡まり、咲き誇っている。

季節感に統一が無い花々が、気持ちが悪いくらい増殖し、部屋にこびりつくような甘い匂いを発していた。

膨張して無残な姿に成長した花々をハサミで断ち切っていく。

何か意味があるのではないかと思つて、花言葉や誕生花など色々調べて見たが、結局、ハツタリと揺さぶりにしか使えなかった無意味な花たち。

甘い女の匂いに似た香りは酷く胸焼けがするほど嫌な匂いだつた。

この部屋の主、天羽彗糸がいない中で、甘い花の匂いが肺を満たす空気を吸う。

尖ったハサミが涼しい音を立てて花の首を刈っていく、マーガレットが床に落ちると、今度はチューリップに手を伸ばす。

あの女にこびりついた匂いを鋭い刃で削ぎ落とすように、一つずつ、切っていく。

天羽は俺らがこの汚い部屋に入ったこと知ったら何を思うだろうか。

今頃病院で悪態でもついている彼女を想像すると思わず笑いが溢

れてしまい、つい口を手で覆って隠す。

今朝の彼女の話はとても面白かった。誰にも教えなかった自分の過去を彼女はこの俺に教えた、その事実だけでむずむずとしたこそばゆい感情が心臓を満たす。

俺が直した体を見てどう思っただろうか。

俺の血が駆け巡る体をどう感じるのだろうか。

可哀想で馬鹿なやつ。顔が曇れば曇るほど愛着が湧く哀れな女。

俺の前で弱音を零した彼女に、俺が離れることを恐れたあの女に、優越感と高揚感が込み上がって、脈が早まるのがよくわかる。

紙袋を覗いて、小さな意地悪に気づいた後の彼女の泣きそうな顔はとても愉快だった。

「……にしても、女の子の部屋って感じじゃないですね。夢が覚めた気分です」

「窓開けてもいいかしら?」

他人の部屋、それも一応暗部ではなく日の当たる一般人に近い存在のものだというのに、部下たちは自由気ままに辺りを見渡して文句を言ったり、一つしかない窓を開けて換気を始めたりと、勝手に動き回る。

女と縁がなさそうな誉望はまだしも、他人との距離を見間違うことのない心理定規メジャーハートがそういった行動を起こすのは些か不自然に感じた。

「天羽の部屋が……綺麗に……」

「汚くするアレが悪いから気にすんな」

「貴方、こんな部屋の汚い女が好みなの?」

一人で花の処分をしていると、心理定規メジャーハートの棘のある言葉に一瞬ハサミが俺の手を噛む。

鋭い刃先だったが、俺の手からは血の一滴すら流れない。何事もなかったかのように再び花の茎に刃先を向けると、静かな部屋に俺の言葉がよく響いた。

「何を勘違いしてるのか知らねえが、あいつが勝手に俺を好きって言ってるだけだからな」

「六月くらいからずっと気にかけてきたくせに?天羽隼糸、だったか

しら。その子が勝手に言い寄ってくるだけなら早く振ればいいじゃないの」

「……なんだよ、機嫌悪いのか?」

珍しく口調の厳しい心理定規^{メジャーハート}に眉を顰め、ハサミを握る手を緩める。真つ白なベッドの上で彼女は腕と足を組み、一つにまとめた金髪を揺らして猫のような目をきつく細めた。

苛立ちを隠さずに言葉が続ける彼女は、塗ったばかりのマニキュアがついた爪で強くスカート^{メジャーハート}の裾を掴むと顔を伏せる。

「そんな女の下着を代理といえど買わされて、あまつさえ呼ばれた家^{メジャーハート}がその女のもので、しかも半同棲状態なのをわざわざ見せつけておいて、よくそんなことが言えるわね」

「……確かに金は俺が払ったとしても、お前に巨乳の下着を買わせたのは酷だったか。悪かったな」

「違うわよー!どうして貴方はそう人の神経逆撫でするようなことを言うのかしら?!」

何に怒っているのかと考えてみるが、視線の先にあつた薄っぺらな胸元に合点がいく。

キャバ嬢のような桃色のキャミソールドレスとゴテゴテしたネツクスレスが年不相応な艶やかさを演出する彼女だが、体つきは年相応で、天羽と比べたら子供だろう。

まあ、あの女が成長しすぎただけだから別に心理定規^{メジャーハート}が貧相とは思わないが、医療目的に裸にひん剥いてしまった天羽の服を買わせに行かせたのは配慮が足りてなかったのかもしれない。

とりあえず形だけは謝っておこうと、適当に詫びるが、どうやら俺の考えは違っていたようで、高い声が否定した。

「つってもな、何に怒ってんのかわかんねーし」

「この状況よ、状況。半同棲なんてして、どう考えても貴方、あの子に近すぎるわ」

心理定規^{メジャーハート}の言う通り、確かに俺たちは距離が近い。と言うのも彼女が俺を好きだからで、俺も彼女を知ろうと深く心に踏み込もうとするから。

当たり前だ。

林檎が住み始めてからはその保護観察としてカブトムシ05がいながらも何度か訪ねたし、掃除もした。だからこの部屋以外は綺麗だし、俺の私物も何点もある。

あらぬ誤解を受けるのも当然だろう。

しかし、それがなぜ怒りに繋がるのかはいくら考えても答えが出なかった。

人畜無害で可愛そうな狂人を飼い慣らして何がいけない。必死になつて俺を愛する都合のいい犬を可愛がつて何がおかしい。

ハサミを握る手に力がこもる。自分の声が徐々に低くなっていくのが静かな部屋のせいによくわかった。

「その何が悪い?」

「同じ女として忠告してあげる。あの子と仲良くするのはやめておいたほうがいいわよ」

「……俺のプライベートに口出しするのは、お前も偉くなったもんだな?」

パチンと音を立ててチューリップが花を落とす。次いで真っ赤な彼岸花の茎を掴むと、吐き気を催した部下のバタバタとうるさい足音が遠のいて、静かさに拍車がかかる。

隣で林檎も不安そうな顔で見上げており、少しだけ居心地が悪い。

「九月上旬、あの子と少しの時間とはいえ初めて遭遇した時、私は貴方と一緒にいる女がどんなものなのか見てみようと彼女の心を覗こうとしたわ」

「ダメエ、俺の許可なくあの女に踏み込んだのか」

俺が所属する組織、『スクール』に唯一配属されている精神干渉系能力者である彼女は人と人との心理的距離、つまりは想いを測り、その距離を自由自在に操る。

初めて会った赤の他人を世界で一番愛する人にも、大好きな家族をただの知り合いまでに落とせる能力は組織として使うにはいいが、その矛先が自分に向けられると途端に厄介なものになった。

「そしたら何が見えたと思う？何も見えなかったのよ。彼女に能力が効かないって、感覚で分かったわ。何を考えているのかわからない人を、一番近くに置いておくつもり？」

俺すら知らない彼女の心理を覗こうだなんて、笑わせる。

「打算と下心を込めて『好き』と伝える女はいるわ。彼女は貴方の前で演じているだけかもしれないのよ？どうしてそこまで——」

「なあ、あと何分テメエのくっだらねえ話に時間を割けばいいんだ？」
心を読むこともできなかった目の前のガキが、あの忌々しい天使様の何がわかる。

あの恐れの見えない傲慢な目に見下されたことも、あの優しい慈愛に満ちた目に見つめられたことも、真つ赤な液体で着飾って倒れ伏す柔らかい肉の感触も知らない赤の他人が、あの女の何を知っていると
言うのだ。

打算と下心を込めて『好き』と伝える女がいることぐらい知っている。そういう女が何人も押しかけてきたこともあった。

だが彼女はそんなチャチで優しいものではない。

砂糖の塊のように甘く、かと思えば度数の高いアルコールのような苦さを見せる弱い人。

蛇のような艶やかさと、小鳥のような愛らしさと、犬のような無邪気さと、龍のような悍ましさを持つ気色悪い少女だと、俺だけが知っている。

「何もわかつちやいねえ上に、俺のプライベートにズケズケ文句だなんて、テメエは一体何様のつもりだ」

俺しか知らない領域に軽々しく踏み込むな。

「おい誉望！早く頼んだもん報告しろ！」

掻き乱された感情の波を落ち着かせるために、走り去った部下を大声で呼びつける。

トイレに駆け込んだ部下は案外早く駆けつけると、焦りながら再び甘い匂いが充満した部屋の扉を開く。

苦々しい表情をしていたが、本題に入るとわかると途端に頼もしい顔をみせた。

「えっ、はっ、はい、藍花悦についてでしたよね?」

「なんか分かったのか?」

そもそも俺がここに彼らを呼んだのは天羽の素性と藍花悦の関連性を調べるためだ。早く終わらせて、彼女のいる病室に戻りたい。

あの女が何をしでかすか心配だ。

「藍花悦……? 接点もない第六位について調べるなんて、何がしたいの?」

「上手く行けばそいつを引き込めるかもしれないってただ、手数は多い方がいいだろ」

「でもどうして? 会ったこともないじゃない」

「……色々あつてな。誉望、データは?」

適当に会話を逸らしながら誉望から手渡されたタブレットに指を置く。天羽が藍花悦と関連性があることを黙って、タブレットに表示された文字の羅列に目を向けた。

「潜れるところまで潜ってみたんすけど……どうやら藍花悦を名乗る人物が複数いるみたいで、どれが本物か分からないっすね」

「複数?」

起動されたPDFファイルの枚数はたったの三ページ。その中には藍花悦のIDを使った形跡のある人間の顔写真が鮮明、不鮮明に関わらず貼られていた。

それ以外の情報は何一つ書かれておらず、詳細不明としか記されていない。

「性別、年齢問わず、何人もの人が藍花悦のIDを使ってるんですよ。おかげでどれが本人か、そもそも本人がその中にいるのかすら分かりません。ダメー情報も多くて、精査するのに時間かかりましたよ……」

「何もわからなかったのか? 見た目も、能力も、性別も?」

「全くヒットしませんでしたね。そもそもそのデータが最高ランクのセキュリティで、下手すると上層部にバレると思ったので手はつけてないっす。そんなに重要なんすかね、第六位って」

画面に指を滑らせてスクロールしていても、あの人形のような顔

は見当たらない。俺の考えは不正解だったのだろうか。

夏休みに見た、武装のない可愛そうな女の素顔を探して指を滑らす。

日本人であるのはわかるが、同時に複数の国のイメージが湧く、様々な国が入り混じる彼女だけの顔。

甘ったるいベビーフェイスに、気だるそうな垂れ目、ぽってりした唇に、伏せ気味の長いまつげ、色素の薄い瞳、卵型の顔。

あの藍色の少女が持つ空気を侵食していく冷えた恐ろしさは、化粧をしているときの豪華絢爛故の悍ましさとよく似ていた。

画面越しに見たあの顔は、確かに天羽彗糸だったはずなのに。必死にあの顔を探して何度も同じページを捲る。

か弱い人形のような顔が脳裏に浮かんで消えない。焼印のように刻みこまれた彼女の名状しがたい表情に強くタブレットを握る。

昨日の無邪気な笑顔と、恐ろしいほど感情の色が見えない顔が頭からずっと離れてくれなかった。

笑うと目が三日月になる可愛い癖と、ドールに似た不気味な無表情の顔。

化粧の剥がれたその顔はどこにもなかった。

「超能力者のIDなんて、そう簡単に作れるものじゃないと思うけど。あら、この子いい化粧品持ってるわね」

「相当腕の立つ人でも雇って偽造したか、もしくは上層部絡みつつかね。考えられるのは」

俺の早とちりだったのだろうか。心臓が大きく脈を打つ。

まさか俺に限ってそんなことあるはずがないと、肥大化したプライドと想いが思考の邪魔をして少し息がつかまる。

先ほどの苛立ちを感じさせない態度で部屋を見て回る心理定規メジャーハートに對し、困ったような顔を見せる誉望にタブレットを返して溜息をつくと腰に手をあてて再び考え始めた。

どうにかして辿り着けないか。

どうにかしてあの女に繋がる糸口が欲しかった。

「……本人が与えてるのかもな。自分を隠す隠れ蓑として」

「ならIDの流出先を時間がある時に調べときます。携帯のデータ辿れば分かるかもしれないんで」

天羽の本名が藍花悦であることは限りなく正解に近い答えなはずだ。それなら、隠れるためにわざとIDをばら撒いている可能性だつてある。

思い出すのは夏休みに見た不恰好な黒い折りたたみ式の携帯電話。真つ黒なあの携帯が、隠れ蓑である濡れ羽色の長い髪を彷彿とさせた。

あの時、研究室で談笑していた時にかかってきた電話にヒントがあるかもしれない。

だからと言つてもあそこはテレステイナがいたり、看護師や医者の目があったりと何かと嚴重で近づきづらい。誉望に全部任せるのは少し酷だが、怪しい行動を天羽の前で取りたくないなので仕方がないので頼んでおこう。

「あ、頼まれた『天才少女』の話題なんすけど、研究者のメールを見つけてました」

「天才少女？何それ？」

「この部屋の持ち主のことだ」

先ほどから黙って床に散らばった本を難しい顔をして読む林檎の素朴な疑問に答えると、構ってほしそうに顔を膨れさせた彼女の頭を優しく撫でながら誉望に話の続きを促す。

「えっと、それですね、垣根さんの言っていた時期に多くの研究者が全く同じアドレスに一斉にメールを送ってたんですよ。そのアドレスはもう消されてるんですけど、そこに送られている内容は殆ど誘致に関するで、名前が全て削除済み。怪しき満開っすね」

「そのアドレスから名前は辿れないのか？」

「学園都市の運営するものじゃないのでそこまで足を伸ばすのは少々危険かと」

彼女が天才少女であることを肯定していたからそれが事実だとはわかっていたが、それが藍花悦名義だったかは分からないようだ。

まあ五年も前の情報をそう簡単に手に入るとは思つてはいなかつ

だが、やはり不発だったか。

仕方がない、こちらの方向で新しい情報が見つかるのは期待しないでおこう

「ふーん……なるほどな。誉望は引き続き情報を集めてろ」

「分かりました」

「この子、ズボンばかり履いてるのね。スカートがないんだけど」

「テメエはさつきから何やってんだ」

誉望との会話を一旦切り上げると、いまだに部屋を見渡しながら散らばった服を取る少女が視界に入る。

スカートが一着もないことに少し引つかかったがそれよりも苛立ちが勝ってしまい、腕を組んで背の低い少女を睨んだ。

うろちよろと部屋の中を見て回る彼女のやっていることはあまり好ましくない。踏み込んでもらいたくないと、少し眉間にシワが寄る。

「物色よ、物色。この子の服装みれば貴方の女の好みがわかるじゃない」

「愉快的勘違いしてる上に、泥棒とは感心しねえな。物色するのは構わないがテメエには寸法が合わねえから持っていつても仕方ねえだろ」

「持つてかないわよ、失礼ね」

「まあ気になるのも無理ないんじゃないですか？こんなに散らばってれば」

足の踏み場のない室内で四人の男女のうち二人が物珍しそうに部屋を見渡す。何が面白いのかは全く分からないが、なんだか不愉快だ。

そんな感情に苛まれている俺なんか気にもせず、なぜか林檎と二人でベッドの下や引き出しの中を躊躇なく漁り始める。

そして何かをクローゼットから見つけると、あつと声をあげた。

「みて、これ服の型紙だわ。しかもミシンまで」

「天羽って裁縫上手だよ。料理もできるし、大体なんでも出来る。掃除以外は」

両手で大きな荷物を取り出しケースを開くと、随分と大きいミシンが顔を見せる。一緒に入っていた紙を手にとって書かれた字に沿って視線を動かしてみると、それが彼女の採寸や服を作る時の計算を書き殴ったものだというのがすぐに分かった。

書かれた数字と文字はあの袖の長すぎる重い服について。あの藍色の服は自分で作っていたのだろう、こんな分かりやすい場所にヒントを置いておくんなんて、本当に詰めが甘い。

「意外と女子力あるのね……男を落すにはギャップが必要なのかしら？それとも胃袋を掴むほうが……？」

「本人はそういう器用貧乏なところが嫌なんだろうけどな。つか落とすって何」

器用貧乏でなんでもそつなくこなす。料理も、裁縫も、運動も、演技も、嘘も、人とのコミュニケーションも、一定以上こなせてしまう彼女は一番になれない。

広く浅くを地で行く彼女は何もこなせなかった。

だから特別になろうと突っ走る。

彼女は言った、妹のために死んでみせたと。

きつとそれは比喻で、大胆な言い回し。死にかけるほどの大怪我を妹の代わりに背負ったと、滲んだ瞳で告げる彼女は飼い主をなくした犬のようだった。

何もできなかった彼女は、初めて感じた達成感快感を求めて人を救い、赦し、愛する。

エゴイストであり快樂主義者、他者愛をベースにした愛着障害に、タブロイド思考、メシアコンプレックスのヤンデレ。

もともとおかしかった彼女の思想は、きつと衝撃的なほどの痛みでまとまるはずのない感情が一つになった。

なんて可愛そうな人だ。

俺より劣っているくせに、俺の先を行こうと健気に無茶をする彼女に、飼い犬程度の愛着が湧くのも無理はない。

紙を強く握り、床に落ちた服を踏みつけると不思議と心が躍る。誰に取っても都合のいい愚かな女が、俺の隣にいる事実が喜ばしい。

あの血だまりに落ちた哀れな異形のことを管理できるのは俺だけで、二度とあんな失態は見せる訳にいかない。

しかしそれを改めて理解して優越感に浸る俺とは逆に、女二人がクローゼットの奥に手を伸ばして呆れたように目を細める。

「でも、そんな乙女的な子なのに服は甘くないのね。もっと可愛いもの着てれば男ウケしそうだけど。それで別の人と付き合えばいいのに……」

「着てる服、なんか研究所の人みたいで嫌い。可愛くない」

「そうね。無地が多いし、シンプルなものが多い。高校一年生にしては気味が悪いくらいに大人すぎるわ」

心理定規メジャーハートと林檎が手に取った真っ白いTシャツは少し伸びており、安っぽい。金にかけてないシンプルな家具と服は持ち主の豪華絢爛な風貌とはミスマッチだ。

安そうな発色の鮮やかな色をした合成繊維の服が散らばる床には青がなく、どこもかしこも白ばかり。

「この女がセンスと倫理観を母親の腹の中に忘れてきたのは知ってるだよ。それがなんか気になるのか？」

「なんだか背伸びした子供というより、もはや諦めてる感じね。可愛いもの好きそうなのに。ま、あんな見た目じゃ似合わないでしょうけど」

「は？可愛い？この女が？」

「だってほら、化粧品もボトルとかパッケージが可愛いのみばかり。花も見た目が可愛いものだし、散らばってる文房具も、ノートも可愛い色が多いじゃない」

藍色を隠すための明るい色を指差してから化粧品が散乱したドレッサーの椅子に座ると、心理定規メジャーハートはため息交じりに目を伏せた。

意味のわからない言葉を先ほどから呟く心理定規メジャーハートの言葉が何か引つかかる。

この話、というよりその言葉そのものに。

「なんか、貴方の話の天羽彗糸がこの服の持ち主ってなんだかチグハグなのよね。中身と外見が違うっていうか……あなたみたいな人を

好きって言うような人が、こんな地味なのかしら？安物だし」

「そんなの人それぞれじゃないですか？」

「そうかもしれないけど……話を聞いた限り、私は悪に憧れる世間知らずなお嬢様みたいな子を想像してたのよ。もしくはうちのリーダーを誑かす別組織の色仕掛け担当か、ただの金目当てのピッチゴールドデイガーか」

「なんか、今日の心理定規さん容赦ないっすね……」

中身と外見が違う。

子供のくせに大人のように振る舞うあの少女の人形のように冷たい顔が何故か脳裏に浮かんだ。

「天使、様……？」

「どうかしましたか？」

今朝、病室で天羽が言った言葉を鮮明に思い出す。そして、昨日のくすんだ青と橙色の空の下で真つ赤に染まった彼女の異様な姿。

血腥い体を包むあの大きな翼と光輪。あれを見て、魔術師土御門はなんと言っていた？

パズルのピースのように今までの記憶が蘇ると、ゆつくりとそのピースは穴を塞いでいく。

脳を冷やすような慄然とした恐怖が、静かに広がった。

あの夏の日、一方通行に首を刈り取られたとき、なぜ『能力は体に宿るものではない。魂にある』と断言した？

あいつは、誰を信じていると言った？

あいつは、誰を殺すために剣を握ると言った？

あいつは、誰に己を認めさせたいと言っていた？

彼女は言った。

死んだことがあると。

大人であると。

神に出会ったことがあると。

もし、彼女の話が全て本当なら？

「ちよつと、どうしたの？」

「確か……」

夏休み、初めて天羽の素顔を見た日、彼女は自分の役割をウエルギリウスと位置付けた。

辺獄を彷徨うウエルギリウスは神の子が産まれる前に死んだ詩人。わざわざ己をそんな御伽話で例えた彼女に違和感を今更になんて感じる。

もし、それすらもヒントだったら？

散らかった床からとある詩集を見つけると、急いでページを捲る。あの青い少女が言った言葉を反復しながら目的の一文を探し出し、噛みしめるように脳の中で呟いた。

手に取った本は、ウエルギリウスの詩集の一つ、「アエネーイス」。第十巻の中盤、ラテン語で書かれた一文に指を添えると小さく息を飲む。

『神は勇敢なものををを救済する』

悍ましく、冒流的な推論が体の自由と、息を奪う。初めてこの部屋で眠ったあの日の夢が鳴り響く鐘のように激しく脳を揺さぶった。

冷や汗が頬を伝う。

魔術とは違う世界の異なる常識や違える法則を引き出す術だと、七月二十一日、天羽の担任の汚い部屋でインデックスが零していた。

それは恐らく十字教が言う所の神が住まう国なのだろう。

つまり、神の子と精霊と父なる神が存在する世界は異なる次元にあると魔術が証明しているのだ。

そして十字教徒の魔術師曰く、三角は神様が、円形は天使が、そして四角は、選ばれた人間が持つと言う。

暑い夏の日、夢に現れた高潔な物体はその頭上に何を浮かべていた？

昨日の黄昏時、地に伏せたあの女は何を持っていた？

天羽彗糸は神に見初められた人間だと、俺の記憶の中で佇む彼女を照らすあの美しい光の輪が静かに語っていた。

恐ろしくて馬鹿馬鹿しい考えに頭を横に揺さぶり頭をあげると、切り忘れた真つ赤な彼岸花と鮮やかな黄色の向日葵が俺を見た。

そして脳裏に浮かんだ一つの花言葉が俺の脳内で激しく主張し、赤く染まった金髪と結びつく。

有り得ない、そう思っても今まで聞いて、見たものがその言葉を『有り得ない答え』から、『可能性のある答え』へ変貌させていった。

この世界と互換性がない体

解析できない能力

傲慢な性格

幼い頃から成熟した精神

まるで本当のことだったかのように告げる死んだ過去

そして、何よりも憎む神の理不尽

とてつもなく悍ましい考えが脳を駆け抜ける。あの女の深淵に着実に近づいている感覚が堪らなく気味が悪くて、且つ気持ちが良い。

誰も知らない少女の秘密を知るのが何よりも楽しかった。

しかし、優越感で満たされた脳の裏側でふと気がつく。

カブトムシ05との接続が切れたことに。

外伝：とある偶像の四月愚者

目を開けると、そこは夢の中だった。

「……なんだこれ？」

テレビや漫画によく出てくる楽屋のような部屋に一人、ポツンと立ち尽くす。煌びやかな衣装のかかったハンガーラック、会議室によくおいてある長机には菓子折りや、ミニボトルのお茶、真ん中にあるソファ、そして壁にある横長の鏡と椅子はどこからどう見てもアイドルや芸人が使う楽屋だ。

部屋を見渡すと同時に、大きい鏡に映る自分の姿に眉を顰める。なぜ着ているのかわからない料理人のコスプレ衣装に身を包んだ高校生姿は見ていて愉快とは言い難い。

「夢、だよな？ うん、夢だ」

普通なら芸能人がいるような楽屋に似た部屋に、本物ではない料理人のコスプレ衣装。記憶にない目の前の光景に賢い頭は冷静に判断を下した。

これは夢、それも明晰夢だろう。

夢を夢だと理解したまま進む夢を明晰夢と呼ぶ。今まで一度も明晰夢と呼べるような夢を見たことなかったが、なるほど、これが明晰夢か。

夢だと脳がなぜか理解している状況は確かに明晰夢と呼ぶほかあるまい。

「かつきねくうーん!! 元気いー?」

初めて感じる不思議な感覚に少し感動していると、派手な音を立てて薄っぺらいドアが勢いよく開かれた。

聞き取りやすい低い女の声がいともより元気よく部屋に広がる。確認せずとも誰だかわかる特徴的な声にため息をつくとも面倒だが彼女の方に体を向ける。

「天羽、お前は普通の格好なんだな……」

夢の中だというのに全く安らげない彼女の元気に呆れるが、同時

に彼女のいたって普通の格好に拍子抜けしてしまう。申し訳程度にフリルのついたアイボリーのへそ出しサマーニットに、赤紫のズボン。現実世界の彼女よりフェミニンさを醸し出す目の前の彼女は、いつもの調子で笑う。

彼女もコスプレしていれば、この微妙な恥ずかしさは感じなかっただろうに。

しかしそう願っても着ている服は夢だと言うのに変わらない。明晰夢とは思いつりに内容を変えられるものではないのかと疑問が湧くが、今更考えていても仕方がなかった。

「なにが？それより早く！出番もうすぐだよ！」

「は？なんの？」

「なについて今日は料理対決番組の収録日でしょ？」

強く腕を引かれ、楽屋を飛び出すとガヤガヤとうるさい廊下を歩く。金と桃色の髪と大きな胸を揺らしながら進む彼女はどこか楽しそうだ。

しかし楽しそうなのはいいが、何を楽しんでいるのかがわからない。料理だの番組だの言っているが、コスプレをしている理由なのだろうか。

この夢を理解できてない現時点では、彼女の楽しげな横顔を見つめることしかできない。

「おい、押すなって！」

「公開収録ってやつなんだから、早く行かないと！」

「そうじゃなくて……！」

舞台袖と思しき場所に連れてかれると、背中を金色のネイルのついた手で強く押される。何をすればわからないまま舞台へ足を踏み入れると、ニコニコと冷たい笑みを浮かべた彼女の弧を描いた目と視線が交わる。

「楽しんでおいで」

どうせ夢だ、意味不明なのは当たり前のこと。夢の中でも薄気味悪い彼女の笑顔を背に、仕方がなく舞台へと向かった。

「さあ今晚も始まりました！本日のゲストは学園都市でトップアイドルの地位を争う三人……」

舞台上上がると、すぐに収録が始まる。自分の他に観客の目を奪うのは二人、見覚えのある顔に夢だと忘れて苛立つと、陽気なナレーションがさらに苛立たせた。

「一方通行さん！」

カメラが隣の小さな白髪を捉える。

「垣根帝督さん！」

そして今度は俺へ移り、最後に唯一の女性に照準を合わせた。

「そして御坂美琴さんです！」

同じような料理人風の衣装を着た第一位と、女兒向けアニメにありそうなフリルたっぷりのコック衣装を着た第三位。

どうやら三人揃って職業・アイドルのようで、あまりにもぶっ飛んだ夢に一人、心の中で嘲笑しているとナレーターはさらに言葉を続ける。

「さて、今回はスペシャルな審査員にも来ていただいています！」

「え？」

高いヒールが硬い地面を踏み鳴らす。

長く、真つ直ぐな黒髪を揺らして舞台袖から現れたその人物に心臓が大きな鼓動を響かせた。

「今話題の女性アーティスト！超能力者、第六位！藍花悦さんです！」

「っな!?!?!」

赤い化粧も、露出度の高すぎる藍色のチャイナちつくなエロい衣装も、天羽とタメを張れる大きな胸も、何もかもあの監視カメラ越しにみたものとは違う。

ただ、サイドの毛を団子状に纏めた長い黒髪と、ドールのような気怠げで儂い顔は確かに、画面に写っていた天羽の別の姿だった。

「さあ今日は一体どんな料理バトルが繰り広げられるのでしょうか——!?司会の私もテンションが上がってきました！」

驚きのあまり声が出ない。涼しい顔で審査員席に座る藍花悦（仮）

の端正な顔を見ると、冷静を装いながらも頭の中で必死に考える。俺の焦りも関係なしに続けるナレーションはただただうるさいだけだった。

だがすぐにどうしてその姿をしているのか理解すると、冷静さを欠いた頭はいつもの平常な精神状態に戻る。

なんであいつが藍花悦として出てきたのか、それは『ここが夢だから』の一言で片付いてしまう。

夢というのは現実で起こった出来事や感情を整理する過程で眠りの浅いときに見ると言われている。だから表面上に出ない深層心理が反映されたり、その日見た出来事に似たシチュエーションを夢としてみたりする。

つまるところ、天羽彗糸の裏の顔である『藍色のチャイナ服を着た人物』が藍花悦であるという証拠のない推理が夢に影響を与えているのだ。

だから天羽と同じような服装に、プロポーションをした藍花悦(仮)がこの夢にいる。

簡単な答えにたどり着くと、呆れながら目の前のキッチンに視線を移す。二つの姿で夢にまで侵食する彼女にふと笑い、フライパンを手にした。

夢の中でも俺を困らせたがるのが彼女らしい。

「……作るか」

料理対決番組ということだったので、やはり料理をしなければいけないようだ。置かれた食材にざっと目を通すと、頭を抱えたい衝動に駆られる。

料理は決して得意ではない。

確かに、自分が生きるためのそれなりに美味しい料理の作り方は一人暮らしということもあって知ってはいる。

しかし、知り合いのどこぞのヒーローみたいにならばうに上手でもなければ、見た目と反して学と器用さだけはあるギャルとは違って他人に出せるほどの小綺麗で栄養の整ったものを出せるわけではない。

一度天羽たちに食わせたときだって、上条と二人で作ったから見た

目も綺麗だったし、他人に出せた。

女に出す料理を知らないのだ、この料理対決とやらが自分に不利なのは嫌でもわかる。暗部にいる超能力者がそんなものを知っているわけがない。

まともには天羽以外の女と出かけたことすらないのに。

キッチン近くの置いてある乾燥パスタを手に取り、思索する。テレビ的には地味な料理になるだろうが撮り高とか知らねえし興味もねえ、そもそもただの夢だからいつも自分で適当に作るパスタでいいんじゃないか。

藍花悦とはいえ、この夢の中では天羽が役割を担っている。アイツなら何食わせても文句言わずに食うだろう。

「最初に作り終えたのは垣根帝督さん！いつもの派手さを抑え、堅実にパスタを作り上げました！普通の男子高校生の作るご飯といった感じがします！」

遠回しに嫌味でも言っているのかとキレたくなるムカつくナレーターに舌打ちをすると、藍花悦の前に適当に作ったパスタの皿を置く。

そりゃあワインとか使って風味付けとかすれば派手になるかもしれないけど、いちいち自分で作る飯にそんなことしなくていいだろ。それに相手は見知った相手(?)だ。変に格好つければからかわれること間違いなし。いつものようにご飯を出せば彼女は満足する。

なら普通に、いつものように美味しい普通のご飯を食わせるだけだ。

「さて、審査員の藍花さん！如何ですか？」

「……」

黙ったまま口を動かすと、藍花悦は目を伏せて一枚のパネルを持ち上げた。

7点。おいしい。

舞台袖から早歩きで先ほどの楽屋へ向かうと、強く扉を開く。目をまん丸に見開く天羽の顔にチクチクとした苛立ちを覚えるのはなんだろうか。

「で、説明してもらおうか」

「何を？」

「この夢についてだ」

ソファの上に寝転びながら差し入れと思しきクッキーを口にしている彼女を見下ろす。大きなタブレットを弄っていた手を止め、怪訝そうに眉を八の字にするとクッキーを飲み込んでから困ったように笑った。

「絶対能力者⁶に到達するためアイドルをやるんだって。で、垣根くんはアイドル、あたしがマネージャー。わかる？」

「……夢とはいえぶっ飛んだ設定だな」

「ファンサービス目的の別次元スピノフだから当たり前でしょ。でも君の男前な顔とCVを使えば一位なんてすぐなれると思うよ？このあたしがマネージャーなんですし！」

ソファに深く座り、隣に座れと促されると、天羽はニコニコと馬鹿にするかのように俺を見上げる。何を言っているのか話の内容は半分も理解できないが、それでもどこか楽しそうということはわかる。

手に取ったタブレットにアイドル姿の俺を映してくすくすと目を細めて笑う彼女からは、夢の中だということのとてもいい香りがした。

しかも押し当てる胸の柔らかい感触まで感じる。ここまで自我をはつきりさせ、感覚がある夢は初めてだ。

「でもマネージャーか。お前は俺のファン1号とかやってそうだったのに、夢の中とはいえ意外だな」

解像度の高い夢に感動すら覚えるが、同時に俺の夢だからこそなんともいえない疑問が浮かぶ。

こいつに俺のマネージメント業務なんぞ、夢の中でもやって欲しくない。俺の隣で黄色い声援を馬鹿みたいに発声しながら笑っているのが一番望ましいはずだ。

夢の中という特異な空間だ、もしかしたら何か意味があるのだろうか。

夢つてのはフロイトやユングの夢分析だったり、一応ちゃんとした心理学に分類されている。深層心理が深く関与されていると言われる夢は、精神医学ではなんだかんだ重要だったりするのだ。

ていうことは俺は深層心理の中では天羽にマネージメントを、自分を管理されたいと思ってるのか？

そんなドMみたいな思考、自分が持っていると思いたくない。

「え？ああ……大丈夫、ちゃんと君のファンクラブ会員番号no. 1だから。ほら、推しを意識した服装だし？オタクに優しいギャルじゃなくてオタクになったギャルだぞ♡」

「だよな、そうだよな？やっぱり夢の中でも俺のことが好きなんだな、お前は」

背筋が凍るような気色悪い仮説だったが、それを払拭するように天羽の明るい声が狭い部屋に響く。両手で可愛くハートを作って笑う彼女は、現実世界の彼女とそっくりで、自分の夢の完成度に感心してしまう。

「だってその方が似ているだろう？」

明るい声が一気に低く、冷たい声が変わる。

聞いたことのない恐ろしい声と意図の分からない言葉に夢ということ忘れて恐怖が迫り上がる。

「……は？」

「それより、他のアイドルのことは聞かなくていいの？説明してあげるけど」

「あ、ああ……頼む」

冷たい声をなかつたかのように振る舞い、明るく笑うと彼女はタブレットの画面を見せる。漫画に出てくるような王子様風の衣装を着た一方通行アクセラレータを映すと、鼻歌交じりに甘い匂いを漂わせて一緒に画面を覗き込んだ。

金縛りのように固まった体は、夢だというのにそれ以上聞くなと言われているようだった。

「まず第一位、^{アクセラレータ}一方通行。歌って踊れる大人気アイドル。よくよく考
えるとなんで三白眼ギョロ目低身長口と目付き悪^{んちゆ}人が人気なんだろ
うね？人間の価値観よく分かんないや。そんなに性格と歌が良いの
かね？ま、どうでもいいけど」

「^{アクセラレータ}まで、辛辣すぎないか？一方通行嫌いなわけ？」

「立場的に、かなー？それに嫌いになって欲しいんでしょ？」

いつもの彼女からは考えられないような早口がテープのように一
気に流れ出す。可愛い顔して笑うくせに、その口から零すのは淡々と
した可愛げのない嫌味だった。

でも、これはきつと正しいのだ。

夏休みのあの日、^{アクセラレータ}一方通行と対峙したあの日に見た光景は今思えば
腹立たしい事実だ。^{アクセラレータ}一方通行を嫌っていて欲しいって言う自分自身
の深層心理が働いているのだろう。

「……そうだな、お前が好きなのは俺だけでいい」

「^{エンバイア}さつすが垣根帝国帝王。俺様度はキャラクターの中で群を抜くね。
やっぱり王子様系アイドルは君みたいにちよつと抜けててアホで高
身長のパカ顔がいい人間にピッタリだと思うよ」

「それは褒めてるんだよな?？」

夢だからこそ従順な彼女に機嫌が良くなるが、同時にいつもとはど
こか違う彼女になんともいえない疎外感を感じていた。

同じ外見なのに、中身が少しだけ違う目の前の少女は聞いたことも
ないような単語を並べながら俺を褒めるが、虚しいだけだった。

「^{んで、}後は第三位御坂美琴。着ぐるみ着たり、フリフリの衣装着た
り、みんなの想像する地下ドルって感じだねえ。最近のアイドルは
かっこよさに極振りしてたりするし、結構珍しいかも」

何を言っているのか分からないアイドル用語に圧倒されていると、
タブレットに指を滑らせて話を続ける。

「^{第四位……んー、}麦野沈利は暗部の子達と一緒にガールズバンド
やってるからアイドルとはちよつと違うかなー？」

フリルとリボンがたくさんついた御坂美琴の画像を映したタブ
レットは、今度は真っ赤なライブ衣装に身を包んだ大人びた女がマイ

クを握る画像に変わる。

顔を知ってる人の衣装姿は夢の中だからこそ気まずくてぎこちない。

「第五位、食蜂操祈。御坂美琴と同じ感じだけど、プロポーションの良さ、センスの良さ、コミュニケーション能力の高さから海外セレブ系タレントもびつくりする良質なコスメ・ファッションブランドを展開してるよ。SNSの運営もピカイチだね」

早く別のシーンに写って欲しいと願うと、あつた事のない、いや、この間の選手宣誓でしか見た事ない第五位の姿が映る。

見た目も相まって華やかな第五位は確かに、現実世界でもアイドルをやっているもおおらかなさそうだった。

「第七位、削板軍覇。沢山資格もってて、ラーメンを小麦から作り出すとかどこに向かっているか分からない原石の少年。最早説明不要なTOKI……歌って踊れて米作りまで出来る農業系アイドル枠だね」

「おい、一人抜かしてるぞ」

パツと画面が暑苦しい男に変わる。飛ばされた番号はよりにもよって一番聞きたい場所だった。

「あら、バレちゃった？そんなに知りたいの？♡」

「早くしろ殺すぞ」

見覚えのありすぎるムカつく男にイラつき、足を組んであからさまに不機嫌になると、天羽は両手で頬杖をつけてタブレットにあの髪の毛長い女を映した。

「第六位、藍花悦！黒髪スーパーロングのチャイボーグ系アーティスト。キャッチーな流行りの歌を歌うぞ！さっすが現実っ子、学生ばかりの学園都市故の戦略だね！グッズもブランドなしや、モチーフ系の大人向け、配信もたくさんやってるよ。オタクの喜ばせ方ちよー知ってるじゃん♡この運営に着いてけば解釈違いのない最高のオタクライフをエンジョイ出来るぞ♡」

「何一つ理解できねえ……」

テンションを高くして早口でまくしたてる彼女に若干引きながらタブレットの画面を見つめる。俺の夢は天羽と藍花悦が同一である

と信じてやまないようだった。

顔も体も全く同じ。チャイナ風の衣装と控えめな化粧、長すぎる黒髪が醸し出す雰囲気を変えているが、どこから見ても隣座る胸がでかくて頭が弱い女にしか見えない。

夢から醒めた時、彼女と話すのが気まずいだろうな。

しかし何故目の前の天羽はこんなにも詳しく、鮮明に、俺の理解できないアイドル関連の用語と思しき単語を喋るのだろうか。

ここは俺の夢だ。俺の知識と記憶を整理するための副産物。だといふのに目の前の女はどう考えても俺の知らない知識に詳しくすぎる。

「なあ、なんでお前、そんなアイドル詳しいの？」

俺の夢とはいえ不可解な点が多すぎる。不安げに隣に目を向けたが、知らない表情の女に固唾を？む。

「……さあ、なんでだろうな？」

薄く笑う彼女の言葉を最後に、視界は黒く変わった。

瞬きのうちに、目の前の景色が変わる。

「え、それではルールを説明しますね。地図で指定された範囲以外には立ち入らないようにしてください。道具は指定のもの以外使用禁止ですが、能力は自由に使ってください。大丈夫です」

目に入るのは空調の効いた心地いい楽屋ではなく、果てしなく青い空と海、潮の匂いがするそよ風とサンダルに入り込む砂、そして陸地に広がる緑だった。

「料理の次はサバイバル番組ってやつか？忙しいことで」

先ほどと打って変わった視界に何故か思考は順応し、ナレーターの声から今の事態を推測する。

料理人の格好から、白い半袖シャツと裾を捲ったズボンの上にアロ

ハシャツを羽織ったおかしな格好へと変わっており、花で作られた首飾り、ハワイではレイと呼ばれるものが首からぶら下がっていた。

見た目に文句が言いたいところだが、完成度の高い自然にその感想は引つ込む。煌めく海面に、雲ひとつない青空は海がない学園都市で同時にお目にかかる事は一生ない。

暗部所属で超能力者である自分には縁のない場所、夢の中とはいえアホみてえな格好しているところを除けば結構いいバカンスに成りうるだろう。

しかし、夏の海にいらなくてはいけない存在が欠けていた。

「水着の女はいねえのな……」

せつかくの明晰夢だというのに、この場にいるのはむさ苦しいホルモンバランスの崩れた男女、幼女、下手をしたら母親と同年代の年上の女が二人。

夢の中でくらい願わせてくれ。

嫌いなジャンルの人間が集まったこの場所に、せめてもの華やかさが欲しい。

「金髪のちゃんねーとか、あいつ適任だろ……」

思い出すのは見た目しか取り柄のない少女。

ギスギスした空気が重い。何故夢の中でまでこんな思いをしなきゃならんのか。

なんだかんだ言っつて、女で、明るくて、適度にうるさく、適度に空気を読まない天羽はこう言っつたギスギスしている空気を軽くしていたのだろうか。

それにあいつがないと、女ばかりの第一位に負けたような気がしてならない。

全部吹き飛ばしてしまおうか。

そんな物騒な考えが頭を巡ると、タイミングよく誰かにアロハシャツの裾を引かれた。軽く引かれたシャツに添えられた手を後ろ手で握る。苛立ちながら掴んだ柔らかい手に、覚えがあった。

「服を掴むなよ。伸びるだろう？」

振り返った先にいた長い黒髪の少女、この夢では藍花悦を名乗る彼

女は黙ったままじつとこちらを見つめ続ける。

俺と同じ黒い目玉は気味が悪いほど暗く、澄んでいた。

「アロハシャツ欲しいのか？それともこの花か？」

「……」

黒い瞳と髪を照らすような華やかな黄色の水着を着た彼女は不気味な無表情で何かを訴える。

何を考えているのか分からない彼女にとりあえず着ていたアロハシャツを着せたり、レイを首にかけたりしてみるが、何をしても無反応を貫く。

「何が欲しいんだお前は……」

「ただ君を知りたいだけだよ」

いい加減めんどくさくなっていたところに、小さい声が耳に届く。初めて聞いた子供のような弱々しい声はストーンと、心に入るように大きく耳の中で反響する。

悪戯っ子のような笑みを浮かべた彼女を最後に、再び視界は歪んでいった。

そよ風に薙ぎ払われ、暗転した視界は鮮やかな青を奪い、灰色の天井を写す。鏡に映った自分は、いつの間にかアロハシャツから暗部の仕事の際に着ている赤紫色のスーツに変わっていた。

「ヤッホー、元気？」

また楽屋に戻って来たと確認すると同時に、明るすぎる女の声に眉が動く。俺のスーツと同じ色をしたビジネススーツを着る彼女に小さくため息をついてしまう。

「……元氣に見えるなら、一回眼科にいったほうがよさそうだな」

「じゃあ慰めてあげようか？」

苛立ちながらソファに深く腰掛けると、開いた足の隙間に薄手のストッキングで守られた太ももが滑り込む。

馬鹿にするかのように目を細め笑う彼女に、ようやくこの夢がなんなのか分かってしまった。

「……はあ、下手なモノマネ見せられるのにもいい加減飽き飽きする」「というところ？」

「アレはそんなこと言わねーんだよ、大根役者」

ソファに座ったまま、強く目の前のクソアマの顔面を蹴り飛ばす。派手な音を立てて後頭部から倒れるクソ野郎の太ももを片足で碎くと、声も上げずにそれは逃げようと床を這いずる。

「そもそも、あいつが俺の夢の中だからと言つて一方通行の悪口言つたり、自分の分身を褒めたりするはずがねえんだよ。だって他人を愛して自分を卑下する矛盾だらけのナルシストの彼女だからこそ、俺は今まで嫌わずに側にいてやってるんだ。誰にもない長所で、短所だから、その思考回路が知りたくてわざわざ一緒にいてやってんだ、それをなくしたらただの馬鹿女じゃねえか」

アイドルに興味がない俺が、アイドルになる夢を見るなんぞイカれてる。

夢とは睡眠時に記憶や感情の整理をするための人間に備わったシステム。自分が願ってもいないことを、自分の記憶にないことも、自分が思ってもないことが起きるわけがないのだ。

最初から感じてはいた。俺の夢だからと言って、いや、俺の夢だからこそ、彼女は俺の都合がいいように変わることはありえない。

俺よりも、全ての人に愛を振りまき、ずっと笑って、影で出来もしないことを努力する彼女の方がよっぽどアイドル気質で、俺はそれをよく知っている。

都合のいい夢だといっても、揺るぎない感情は夢に侵されることはない。俺のあの女への感情と知識が夢ごときに敗れるような綺麗なものと思われるのは、ひどく不愉快だ。

「……嫌いだから一緒にいる、か。それが彼女にとって一番いいのかもしれない、やはりこれで良かったのかもしれないな」

「どこの能力者が魔術師だか知らねえが、夢に干渉してまで出来の悪いモノマネしやがって、要件によっては殺す」

ストッキングに穴が開くほど強く足を踏みつけ、低い声で聞こえるように呟いた。

あの気持ち悪い唯一無二をこんな量産型の馬鹿女みたいに扱った目の前のブスに、怒りが煮えたぎる。

何が目的かは知らないが、夢に干渉してまで俺を侮辱するこの野郎を許してやることはできそうになかった。

「要件、か。ああ、忘れていたよ」

女は笑いながら呟くと、潰した足を元に戻し、ゆらりと立ち上がる。

「汝は、あの乙女に死んでほしいか？」

金色と桃色が揺れる。太陽のように眩しい髪と気味の悪い色の瞳と相まって、厳かに佇む少女を何かおぞましく神聖な何かに見せていた。

「それとも、死んでほしくない？」

いつものセーラー服に、男物かと思間違うほど採寸があつてないウインドブレーカーに身を包んだ彼女の煌びやかな装飾品がキラキラと、暗闇に閉じていく背景の中で光る。

「は…？」

「要件はそれだけ。誰かが望まなきやあたしは干渉できないからさ、聞きにきたの。ついでに君をからかいにも来たかな」

いつの間にか宇宙のような暗闇に変わっていた場所で、ようやく思い出した。

今日は大覇星祭初日の夜で、あの女が、天羽彗糸が真っ赤に変わった日だということ。

「死んで欲しいわけ、ねえだろ」

あの暖かい血の、あの柔らかい肉の感触が蘇る。

二度と触りたくない冷たい体が、恐ろしいほど鮮明に記憶の奥底から呼び起こされていく。

空と地面の区別がつかない暗闇に膝を着くと、茶色い髪が垂れて視界を奪う。髪の間から覗く足がゆっくりと、こちらに向かって歩みを進めた。

「じゃあ、あたしが生きることが神に祈れる？」

「神？」

「そう、神様。人間のプライドをへし折って、神様に祈れる？」

ピタリと目の前で足を止めると、彼女は思ってもいなかった言葉を投げかけた。あまりに突拍子もなく、馬鹿馬鹿しい話に乾いた喉元から小さな笑い声がかすかに漏れ出す。

まるで神にしか救えないとでも言っているようで、腹が立つ。

「は、っはは、馬鹿馬鹿しいな。お前を救うのはこの俺だ。神なんかに祈るものか。俺は人を救えると、お前が教えたんじゃねえか」

俺が彼女を治した。他でもないこの俺が。

第一位にもできないことを、今まで出来なかったことを、俺は成し遂げた。

それをあの女の顔をした他人に馬鹿にされるのは、ひたすらに腹立たしかった。

「……そっか。君は君の力で望みを叶えるんだね。似た者同士で、いいじゃないか」

俺の答えに優しく笑うと、天羽に似た誰かは何処かへ去ろうと髪をなびかせて踵を返す。もうここに用はないと言うように目の前の女はは晴れやかな顔をしていた。

「おい、どこいくんだよ！テメエにはまだ話が」

「大丈夫だよ。心配せずとも垣根くんが望む限り、あたしは生きるよ」

「なんでテメエにそんなことがわかる、結局お前は何を——」

その腕を掴もうと手を伸ばす。勢い良く立ち上がったせいによるめいた体は、振り返った彼女の顔を最後に勢いをなくし、言いかけた言葉を終わらせることも出来ずに急激に襲ってきた眠気によって瞼が閉じていった。

「だってあたし、神様だから」

最後に見たのは天羽とよく似た人懐っこい笑顔。

そして、風車のようにゆらゆらと頭上で回る三角の光だった。

ゆつくりと、柔らかい光に瞼を開く。

何か、不思議な夢を見ていた気がする。ぼんやりとした頭で思い出そうとするが、何も思い出せない。

嫌な夢だった気がするが、思い出せないくらいどうでもいい夢だったのだろう。

それよりも節々の痛みがつかくと、ため息をつきながら肩を回す。

硬い病室の椅子で姿勢悪く寝ていたからか、身体中が痛い。大変な作業に珍しく疲れてしまったとはいえ、流石に椅子で寝るのはよくなかった。

もう二度と、こんな作業は御免だ。

とても面倒臭い作業だった。

血を抜いて、入れて、皮膚を作って、貼って、骨をくっ付けて、神経を繋いで。神経がすり減って、疲れてしまうほど、とても精密な作業だった。

しかし、この痛みを尊んでしまうほど、成し遂げた『作業』は達成感を与えてくれた。

「俺が、救ったのか」

カーテンから漏れる星々の明かりに照らされたベッドに目をやる。規則正しい寝息を続け、病院に運んだ当初より随分とよくなった顔色に安堵して椅子にもたれかかり、深く息を吐く。

「感謝しろよ、バーカ」

誰にも聞こえない声は静かな部屋の中で小さく響いた。

61話：二日目朝

エレベーターが下降する。小さなLEDライトが伏せた顔から垂れる髪と肌を照らし、あられもない姿で立っていることになんだか恥ずかしさを通り越して溜息しか出ない。

渡された下着に、借りている黒いジャージしか着ていないこの姿のまま外に出たら通報ものだろう。それでいて隣に立つ少年が全く反応を示さないのも少し悲しい。

先程別れたばかりのイケメンと寸分変わらず同じ顔をした生き物は、全くの無表情だった。

制服を破ったと言った垣根くんの冷めた顔を思い出すと、取り寄せる制服にかかる金額が頭を過る。

貧乏性のあたしにとっては少し痛い出費だ。誰か代わりに買ってくれないだろうか。

「替えの服くらい持ってきてくれればいいのに……」

「出歩いて欲しくないから服を渡していなかったんですよ。その小さな頭では理解できませんでしたか？」

背が高く、綺麗な顔をした真っ白い少年、カブトムシ05があたしの手を強く握る。あらかさまに機嫌が悪いこの生き物は刺々しい言葉を投げかけ、開いたエレベーターの扉をくぐった。

白い蛍光灯の光が眩しく光る。

爪が食い込むほど強く握られた手に苛立ちを感じながらも、痛みを感じない体は悲鳴ひとつあげずに真っ直ぐ研究所に進んでいく。

「……あたしは裸で放り出されても恥ずかしがらずに出歩ける女よ」

「絶対にやめてくださいいね」

「だからこうやって服を取りに来たんじゃん、わかんない？」

少しだけ歩くのが早い05を伏せたまま髪の間から軽く睨みつける。

しかし全く動じずに研究室の扉を開いてムツとした表情であたしを見るだけだった。

全く面倒な野郎だ。

あたしの監視をマスターから仰せつかっているこの生き物もどきは先ほどからあたしから目も、手も離さない。

見るからにあたしの行動を制限しようとしているこの物体に苛立ちしか感じなかった。

「ていうか、アンタにとやかく言われる筋合いないから」

「ありますよ。だって私は貴女の護衛なんですから。貴女を危険な目に合わせるような行為は止めなければいけません」

思わず強い口調になると、05は眉を下げて拗ねたように反論を口にする。

悲しそうに振る舞っているそれにほんのりとした罪悪感を感じても、どうせ振る舞いだけの空っぽの入れ物のそれに感情を割くだけ無駄だと分かった。

「あー、さいですか……」

「ちよつと、聞いてますか？」

顔を見られないようにそのまま面倒な奴の手を引きながら研究室に足を踏み入れる。

明るい花に、鮮やかな緑、随分前に垣根くんからもらったクレインゲームの景品などが至るところに置いてあるこの研究室はいつきても華やかだ。

「着替え、見てもいいけど撮影はしないよーに」

「しませんよ。安心して着替えてください」

垣根くんから借りたジャージを脱ぎ、パソコンの隣に置かれたロッカーを開く。

姿見を無理やり取り付けた不恰好なロッカーから一着のワンピースを取り出すと服に袖を通した。

椅子に置いた黒いジャージとは全く違う色のそれは、秋口に着るには少し薄手だ。

肌触りのいい白い布が肌を隠す。

垣根くんにアクセサリ類を没収されたのは痛手だった。Vネットの飾りっ気のない首元に寂しさを感じながら、膝丈まであるスカートのを伸ばして鏡の中にいる自分を見つめる。

死装束のように胸元の布地が重ね合わされた白いワンピースは、上品なはずなのに、ハイウエストのシルエツトが強調する胸のせいどころか下品だ。

気が滅入る。

化粧をしていないことも、華やかなアクセサリーがないことも、死人であることも、すべて。

可愛くない自分も、飾っていない自分も見たくない。ひどく醜い自分なんか見たって楽しくない。

一度ぐちやぐちやに潰されたこの顔は、この世界で生きている登場人物と比べたらどれほど醜いことか。

褒められるのはこの体くらい。着飾らないと、不安だ。

「珍しいですね、ワンピースなんて貴女らしくない……いや、そういえば夏休み最終日にそれを着ていらしてましたね」

「……あれはあの日だったからねえ。真っ白いワンピースなんてか弱いの代名詞みたいなものだし、上手くいくと思って」

真っ白なカシユクルのAラインワンピースを着るあたしは、いつもの姿からは全く想像できない清楚なもので、どこからどう見ても似合っていない。

デコルテが露出した瀟洒なワンピースは夏休み最終日にインデックスちゃん誘拐騒ぎに便乗しようと思って買ったもの。

か弱く見せれば油断してくれるだろうかと短絡的に考えた自分が馬鹿としか思えないが、それしか良い案は思い浮かばなかった。

どうせ不幸の塊がいるのだ、他の事件と比べたら遭遇する確率は非常に高い。

そして事件があると理解した上での作戦は結果的にうまく行った。

弱い女だからこそインデックスちゃんの隣で彼女を守るかもしれないなら、あたしは自分のポリシーを捻じ曲げたって構わない。この件に関しては自分が女でよかったと何度思ったことか。

「何が上手くいくと?」

「人助けかな」

白いハイヒールを履くとその足で隣のパソコンの前に座り、引き出

しの中から化粧箱を取り出して暗転しているパソコンの画面を鏡代わりに顔の塗装を始める。

自分の顔はあまり好きじゃない。

どこの国の人間なのかわからない気持ち悪い顔。

子供みたいな大きな垂れ目を囲むまつげは伏せ気味で、ぼんやりとした瞳は気味の悪い色をしている。

少し腫れぼったい唇も、笑うと目が細くなって釣り上がる癖も、無いに等しい涙袋も、子供みたいで大嫌い。

大人でいたいのに。

下地とファンデーションを塗って、サクランボのようなピンク色のアイシャドウで飾る。

同じ色の口紅は白粉で色を抑えてから、全体にじゃなくてぼんやりと塗って、伏せたまつげをビューラーとマスカラ、つけまつげで伸ばしてパツチリと。涙袋を描いた後、茶色のアイラインをつり目に見せるように引いたら出来上がり。

自分の短所を隠した加工品。

垂れ目気味だけど、少し端を跳ね上げれば、女ウケがいいと前世で死んだあたりに流行っていた『強い女』らしく見える。

そこまですらないと、美しくなれない。

もう思い出せない妹の顔とも似ていない造形は、鏡を見るたびにため息を零したくなる程嫌いだった。

「……御自身のことを大切になさってくださいね」

「は？突然なに」

デスクの近くに置いてあった自分の学校鞆からヘアアイロンを取り出すと、コンセントを挿して電源を入れる。

180℃に温まるまでの間は髪を梳かそうと感傷的な気分のままヘアスプレーに手を伸ばすが、05の手が代わりにそれを掴み、ブラシをもう片手に握った。

髪を優しく掴み、椅子の後ろに立つ05の顔はギリギリのところどころでパソコンの画面に映らない。垣根くんと同じ優しそうな声だけがそれの感情を教えてくれる。

「貴女が傷つく姿は見たくありません」

「なんで？別にあたしが怪我しようがどうでもいいでしょ？」

「そんなことありませんよ、貴女の痛々しい姿はマスターも私も二度と見たくありません。どうしてもよくないです」

冷たいミストが髪を濡らす。意味のわからない言葉を絶え間無く零し、優しく髪を梳かす05の表情は何えない。

地面を踏みつけるヒールが軋む。

なんだかとても気持ちの悪い感覚だ。ゆっくり動く太めのブラシが髪を撫で、ぞわぞわと蛇が這うような不快感が背中を襲う。

「すぐ治るし、見たくなきゃ見なきゃいいでしょ」

「ですが、今回のように不測の事態が起きるかもしれません。念には念をといてはどうでしょう？貴女に死んで欲しくないのです」

温めたヘアアイロンに髪を巻きつけ、熱する。慣れた手つきで髪を触る05の優しさにまみれた嘘はあたしの機嫌を損ねるだけだ。

誰も悲しまないあたしの死がまるで残酷なことだと嘯く彼らの言葉は、あたしの心に空いた穴を広げていく。

「あたしが死のうが、お前らはどうだっていいだろ」

あの世界でさえ悲しむことのなかったあたしの死を、この世界の人間が悲しむわけがない。

嫌な考えから気を紛らわそうと、蛍光緑の液体を取り出して爪を塗り始める。

粘り気のある液体の匂いが薬品の匂いを上書きするように広がっていくこの不快感は、何歳になっても慣れない。

「どうしてもよくなんかありません」

初めて聞いた05の力強い声に肩が跳ねる。何も聞きたくない一生懸命動かす手がうつすらと熱を帯びていく。

「あたしに生きて欲しいと思う人間なんか、家族ですらないのにな？」
「やっぱ塗り直せばよかったかもしれないと思ったところでもう遅い。」

剥がれ欠けの緑色から見える爪をパテで埋めるように塗ったマニキュアは酷く不格好だった。

使い終わったマニキュアをキツく締める。少し強く締め過ぎたよ
うで、瓶に小さなヒビが入るが気にせず引き出しに投げ捨てた。

神曰く、『汝を望むものいる限り汝は生き、汝は歩む』

今朝見た忌々しい神の夢が脳の奥を燻り、自然と奥歯を強く噛む。
あの気持ち悪くも美しい存在が放った言葉は考えたくなかった前世
を思い出させた。

あたしが死んだのは、妹も、両親も、誰一人として生を望まなかつ
たから。神はそう告げた。

心臓が脈打つ。ほんのりと目頭が熱くなり、息が苦しい。

見返りも、愛も要らない。

それでも、あたしに生きていて欲しくなかったと告げられたのは、
とても寂しかった。その言葉は飢えた愛情を刺激し、感じたことの無
い寂しさをこの体に教えてくれた。

「それってどういう、」

「テメエらここでイチャついてんじやねえぞ」

ぼんやりと色を塗った指先を見つめていると、後方のドアが開く音
と共に低い女性の声が部屋に響く。

後ろを見ずともその人が長い髪を揺らしながらこちらに歩いてく
るのに気がつくのと、小さくため息をついた。

「してませーん」

「ていうかテメエ入院したんじやねーの？」

「脱走」

髪に付いた大人の匂いが懐かしい。強い煙草の匂いを待とう女性、
テレスティーナⅡ木原Ⅱライフラインはなんともなさそうに言葉を
聞き流すと半笑いであたしを見下ろした。

「あのガキが心配するぞ？まあ興味ねーけど」

「てかテレスティーナⅡさん煙草吸ってんの？匂いするんだけど」

鼻の奥を刺激する煙草の匂いに思わず顔を見上げ、目を合わす。髪
をかきあげ、嫌そうな表情で眉を寄せると一気に煙草の匂いが広がっ
た。

懐かしい匂いが忘れていた味をセピア色の映像のようにぼんやりと舌に浮かぶ。

「煙草吸ってた職員と話したから匂い移ったんだろ。結構喫煙所人いたしな。なんだ、煙草の匂い嫌いなのか」

「ううん、懐かしいなって。昔吸ってたからさ」

昔、20を超えてたあたしはその特権をフル活用し、酒を呑み、煙を吸うなどいたって普通の大学生がすることをしていた。ギャンブルも、なんでも、必ず一回はした。

どれも好きではないし、美味しいとも思わないので今に至るまで呑んでも吸ってもいないが、あの独特な匂いを嗅ぐとあの味を思い出してしまう。

「……ちよつと待ってください、貴方未成年ですよね??」

「だからこつち来てからは買ってないよ?別にそんな好きだったわけじゃないし」

大人の世界はコミュニケーションが必須となる。それを円滑に進めるには知識が必要だ。

それも性的関係を設けずに研究者や教授を取り入れるとなると、『大人の嗜好品』の話は必ず知らなければならぬ。

タバコを吸っていればスモーキングルームで会話を始めることができ、酒が飲めればいい気になってバーに誘われ、ギャンブルが分かればカジノで交流を図れる。

誰かに取り入るためのものではないが、長年やっていないと案外寂しく感じてしまう。同時に、それらを使えない子供の自分に苛立つ。

未だ昔の身長に数センチ届かない体、幼い顔、酒もタバコもできない年齢はどれも鬱陶しい。

「ふーん、見た目らしく遊んでたのかよ。どんなの吸ってたんだ?」「女性向けのタール少ないやつだよ。月に一箱消化するかしないか、って感じ」

可愛らしいデザインのピンク色のボックスと、細身の煙草を口に含むと広がるメンソール。気まぐれにシトラスやバナラを選ぶと飽き

がこない。

懐かしい味が広がる記憶に哀愁を感じ、ふとため息をつく。

大人の時の知識なんてこの世界じゃ一ミリにも役に立たないが、経験はどんな場所だろうと役に立つ。細かな経験は、冥土帰しや学校の先生と喋るのに役立ち、必ず糧となる。

前世の記憶と経験を引き継いだあたしは、もしかしたらコミニケーション能力は世界最強かもしれない。

そんなことを思ってみたりもするが、実際引き継ぎデータがあるのは、やはり未来を知っているだけにかかわらず、大きなアドバンテージだろう。

戦うことより、権力者に媚を売るの方が得意だ。

演技をするだけで、ちよつと優しくするだけで、研究者や権力者は妹を救うために必要な情報を落としてくれる。誰かのために他人に優しくするのはとても気分がいい。

「え？あなたアメリカにいたころ8歳とかそこらですよね？」

「ま、アメリカはなんでもありみたいなどこあるしな、酒は飲んでたか？」

「うん、飲んでた」

話は煙草から写り、酒の話へ。

もう体感出来ない『酔う』という状態に思い馳せるが、この年齢だと商品を買うことすらできないのであの味を楽しむことすらままない。

虚しい。昔できていたことが今になって禁止される感覚は非常に虚しい。

もうこれ以上大人に戻りたくなる話をして欲しくないと思わせるほど虚しかった。

「保護対象、あなたの幼少期は些かおかしいのでは？」

「でもガキなのに酒飲めるって案外すごくねえか？子供の舌には苦いだろ」

「んー、まあ。でも甘いのが結構あるし。果実酒とか定番じゃない？」

口に唾液が分泌されていく。真面目に聞いてないふりをしながら

必死に酒への欲を隠してみるが、その考えと比例するかのようには膨らんでいく。

長年酒を浴びていない舌はあの苦味を求めているような気がした。

「ふーむ、煙草、酒と続けばあとは薬か。やった？」

「1回だけ。でも副作用酷くて二度としないって誓った」

「……副作用か」

アメリカというものは日本とは様々な点で大きく違う、とだけ述べておこう。

ボコボコのネイルを見ながら今すぐ居酒屋に向かいたい衝動を抑え、あまり記憶に残ってない前世の大学生活を脳内で振り返る。

妹のために教授や学長に媚は売っていたが、友達と呼べるのは寮のルームメイトくらい。の打算しかない学校生活を送っていたためか全くと言っていいほど記憶にない。

あたしはアメリカの大学院まで卒業して学んだのが接待の仕方のみというのがなんとも情けなかった。

「え？8歳児が？保護対象、なんて人生送ってるんですか、親はなんとも言わないのです？」

「言わないよ、あたしのこと興味無いだろうし」

「ヤクで副作用でるのか……じゃあこれは厳しいか？」

デスクに腰を下ろして、長い足を組んだその人は身動きが取れないあたしの手に何かを乗せる。手渡された薄いケースを訝しげに05と凝視して中身を取り出すと、タブレット菓子のような赤い結晶が手に落ちた。

眼鏡の奥の綺麗な青い瞳であたしたちを見下ろすと彼女は薄く笑う。

「体晶？出来たんだ？」

「お前のDNAサンプルとファーストサンプルを使ったものだ。暗部に出回ってるものとは質が違う、本物。薬で副作用が出る体質だとちよつとキツイかもしれないな」

「能力が開花する前の話だし、今の体は関係ないよ。大丈夫、問題なく使いこなせると思う」

軽い結晶に笑みが浮かぶ。これでまた新たな武器が一つできた。これさえあればいつもの自己ドーピングより遥かに良い効果が見込めるだろう。

誰かを守る力が注ぎ込まれた一粒の宝石に大きな期待を馳せ、胸元でじつくりと見つめる。

待ち望んだ力を試したいと浮き足立つ感情を止めるのはできそうになかった。

「どうして自ら茨の道を進もうとするのですか」

手のひらに途端に重みを増す。後ろから結晶ごと白い手であたしの手を掴み、指を絡めると05がヘアアイロンをデスクに置いた。

後ろから回された手に顎を掴まれ上を向かされ、エメラルドのように眩しい目と視線が交わる。

「決して無茶はしないでください。貴女が倒れたら私は、」

「アーハイハイ、うるさい」

強引に手を離して勢いよく立ち上がると、05は椅子にぶつかり不機嫌そうな顔を見せた。体晶をケースにしまい、ヘアアイロンのコンセントを抜いて再び自分の学校鞆に手を伸ばす。

少しの武器と、化粧道具、そして藍花悦の衣装などが入っているこの鞆は、垣根くんに見つかる前にコインロッカーにでも置いておかなくては。

昨日の騒動で藍花悦の黒い携帯をポケットに入れたままだったし、あの口ぶりから察するに彼は全てを知っているのだろう。

それでも物的証拠をそのままにするのは隠れていた身としてはやりたくない。

認めたくないという気持ちが大半を占めるが、それに気づかないふりをしてアイロンを片付け、同時に体晶の入った灰色のケースとともにワンピースの小さいポケットに突っ込んだ。

「これで絶対能力者になれるかは分かんねえけどな。これはあくまでも自分で自分を制御しちまうお前がスムーズに暴走できるためのものだ。そこから先は自分でなんとかしろ」

「ありがとねん？あたしこっちの技術はノータッチだし、テレス

「ティーナさん大好き！」

「羽より軽い好きの安売りをするなっつていつつも言っただろ、学習しろ」

「保護対象、人にすぐ抱きつくのではありません」

感謝のついでにテレスティーナさんに抱きつくときとすぐさま05に腕を掴まれズルズルと引き摺られて引き剥がされる。

嫉妬深いのか、危険察知能力が強いのか、過保護なだけなのかは分からないが、強い力で腕を掴まれるのははつきり言っただけの不愉快だ。

「そのようなものを使わなくても私やマスターが守って差し上げますのに、なぜ自ら危険な行為をなさるのですか」

「実験よ、実験。学園都市ならあたり前でしょ」

どうせこの体は神のオモチャ、壊れるほど乱雑に扱ったって支障はない。

05に手を握られながらポケットに突っ込んだケースを布越しに触る。自分を暴走状態にするのは難しいと判断し、夏頃から作ってもらっていた代物だが、果たしてうまく行くのだろうか。

思惑というものはいつも成功するものではないが、こればかりは成功して欲しかった。

「そういえばもう一人は？」

「またグググチ文句言ってるぜ。ま、すぐ黙らせるからいいけどよ」

「もー、またテレスティーナさんに迷惑かけてるの？ダメでしょー？」

作業員が一人足りないあたりを一度見渡すと、研究室内にある出入り口とは違うドアを開いて最近拾った研究者に声をかける。

白衣の下で見え隠れする真っ黒い義手でパソコンを打つその男は九月上旬、あたしの大好きな人を殺しかけた最低な人。

灰色の短い髪に、たくさんついたピアスと黒い革手袋をつけた彼、木原相似は顔を顰めて大きな舌打ちを小さい部屋こだまさせた。

「相似くん、黙ってるの？何が気に入らない？設備？ご飯？」

「……………ここにいること、そのものでしょうかね」

大きな椅子に座り、様々な機械で埋め尽くされた部屋で小さく呟く。憎悪の籠った目を向ける彼はまるで捕獲された蛇のように滑稽

だった。

「そうか？最高だろ。研究は続けられて、永遠に死なないモルモットはいる。研究費と過激さとモルモットの数が足りねえが、こっちは学園都市に追われる側だしな、文句ねえよ」

「木原だというのに、呆れてモノも言えませんね。そんな女にほだされて、牙が抜けたんです？」

「あ？ここには面白いからいるだけだ。どうせ計画もおじやんになつたしな」

テレスティーナさんの言葉に彼は首を振る事はない。口角を下げ、睨むその姿になんとも言えない面倒臭さを感じる。

呆れてしまうのはこっちだろうに。

「……相似くん、これは救いの糸なんだよ。哀れなお前に与えた最初で最後のチャンス、わかるでしょ？」

「この扱いが、ですか」

タイヤが擦れる音が鳴った。真っ黒い車椅子に乗った彼は一寸も動かない足を見せつけるようにと、彼は薄く笑う。

「やり直してやつだよ。もう一度挑戦するチャンスを与えたの、分かる？本当はあの場で放置したかったけどお……木原の謎技術で復活されてまた杠ちゃん達に迷惑かけたら嫌だし？仕方ないから戻してあげたんじやん」

「……戻す？この体が戻した結果だと？」

それはやり直しの代償だった。

腕と足の機能の損傷、脳へのダメージ。一度やり直しを強要させて、人並みに戻した際に起こる弊害。

やり直しのやり直し、それが今の彼が置かれた状況だった。

だって杠ちゃんを傷つけたことには変わりはないし、このくらいの枷は必要だ。

まだこの男を許してはいないのだから。

「なら戻して欲しくなかった？」

「そうですね、あのまま殺しておいてくれた方がまだマシでしたよ」「殺すのはいつかね。まだ使えるから」

デスクに腰掛けると、彼が座る椅子にヒールをぶつけて見下ろす。「アナタ達の才能を悪用して、この学園都市をぶっ壊すために使いたって思ってるの。それはきつと、アナタたちにしか頼めないこと。わかるでしょ？」

あたしを滅茶苦茶にして、この世界の理を破壊して、神の領域systemに到達したい。

神をあの手から引き摺り降ろすため、あたしの正義を行うため、彼らに科学を悪用してもらわなくてはいけなかった。

垣根くんを運命の日から救い上げるには、なりふり構ってられないのだ。

それは人間の情動で生まれた科学の力で神を殺したいという破壊衝動に限りなく近かった。

「正義だのうるさいくせに、自分は悪人に縋るのですね」

「なんか勘違いしてない？正義と悪って人の価値観と立場によって変わるんだよ。あたしは絶対的な基準点つーまやかしなんかを持ち合わせてないの」

苦虫を潰したような顔であたしを見上げる彼を鼻で笑うと、ますます表情が暗くなっていく。

分からず屋どもが。

人のいう悪とはただの手段の一つ。

誰かのために人を殺す、反道徳的な事だって、誰かを救うための手段だ。

それが誰かを幸せにするのなら、あたしは咎めない。その罪をかわりに背負ってやる。

「どんな形であれ、正義のためならあたしは何度だって死ぬし、誰だって使うわ。動物を何匹殺したって構わない。この美しい愛のためならば、惨たらしい手段を使ったって、あたしは赦すんだから」

「……頭がイカれてますね。アナタは倫理観というものがありませんか？人権とか、存じ上げませんか？」

「お前がそれ言うの？自分が今まで何してきたか分かってんだろ？」

静かな部屋に、低い声が広がる。

「まあ、これでも相似君のこと結構好きだし、処置は甘くしてるけどね」

「……気に入ってる？まさか、帝督さんから乗り換えたんですか？まあ、あの女癡悪そうですしね、浮気でもされたんですか？それにそんな見た目と性格じゃワンナイトラブしか出来なさそうですしね」

「そうじゃなくて。あたし、相似くんの研究テーマ、気に入ってるんだよ？」

代替の足、代替の命、代替の役割。本物ではないけれど本物であるそれはあたしの望みを代替してくれる。

あの子の足の代わりに、あの子の命の代わりに、あの子の役割の代わりに。

あの子を失ったあたしはこの代替にまみれた世界で生きている。

それを研究するこの男を否定するのはあまりにも虫が良すぎるのではないか。

「そういうところに就職しようとしたし、あたしが研究してた分野でもあるからさ」

そう言えば、本当は春から新卒だった。死んだ後の未来なんか考えたってしょうがないが、それでも『もしも』が頭に浮かぶ。

せっかく就職活動をわざわざ日本ですべてまで家族と暮らそうと考えていたのに。あたしが死んだ後の荷物や手続きはどうなったんだろうか。

死んだあたしを見て、親は何を考えたのだろうか。

生みの親に付けられた名前を、彼らの手で死亡届に書かせてしまった親不孝者に何を思ったのかあまり知りたくなかった。

「あたしにとって垣根くんは未練を果たす為の代替品だしね。相似くんがやりたいことはとてもよく分かる。それが害にならなければの話だけ」

「後悔や未練で動くだなんて見た目通り女々しい人ですね。元彼のことでも引き摺ってるんです？」

「恋愛なんかじゃなくてさ、大切な家族への未練だよ。分かんない？思い浮かばなかったわけ？」

だからこそ、前世に犯してしまった罪をこの世界で拭う。地獄の中、天国へ行くために人を救い、あの神にこの価値をわからせる。

誰にも求められなかったあたしでも、人を救えると、お前の箱庭で生きる哀れなお人形じゃ無いと証明しなければならぬ。

「はあ、そうですか。それで？どんな未練かは存じ上げませんが、それを達成したら貴方は帝督さんを捨てるんです？」

「え？」

「未練とは目標のことでしょう？達成したら何かあるのかと思いましたが」

相似くんの言葉は少し衝撃的だった。未練を果たしたその先の不確定な未来なんて考えたこともない。

当たり前だろう。この体は他人のためにある。未来もこの体を他人のために使うに決まってる。

それでも、明確に救う人がいない人生は考えられなかった。

あの子のために学校に行って、勉強して、就職して、生きて、死んだ。

人生すべてあの子に捧げた。

そして今、成せなかったことを垣根くんであらうとしてる。

この未練を果たした時、あたしには何が残るんだろう。

もしあの子が歩いていたら？もしあの子が幸せなら？もしあの子が死んでいたら？

もしあたしだけが生きていたのなら？

あたしはどうしていたのだろう。

彼のために死にたい。

けれども、残念なことにあたしは死なない。

たとえ死んでも生き返る。あの痛みも暗闇も血も感じず、生きてしまおう。

ならば彼のために生きていたい。

けれど、垣根くんを死の運命から遠ざけた後、彼を幸せにできるのはヒロインはヒロインちゃんだけ。

不幸に陥るキャラクターを多く知っているわけでは無いし、次に幸

せにするべき人は思い浮かばない。

彼を救ったあと、あたしは何をすればいいんだろう。

「おい、電話なってるぞ」

「え？ああ、誰だろ？」

デフォルトのまま設定された電子音にふと我に帰る。規則正しく鳴る音に慌てて飛び出し、デスクの引き出しを開けると黒い携帯を手にとった。

「はい、どちら様？」

そこでようやく気がつく。この携帯は、本来この場所にあるべきでないことに。

「初めまして、藍花悦さん？」

甘ったるい声に聞き覚えがあった。

鮮やかな黄色い髪と、誰もを魅了する外見と知られざる過去。

今日がなんの日かを鮮明に思い出させるほど衝撃を、この声の持ち主は持っていた。

62話：舞台裏

大覇星祭、初日。騒がしい道の上、時間を気にしながら空を駆ける。汚れてしまった体操服を着替えに行っただけだったが、思っていたより手間取ってしまった。

学園都市中が人に溢れ、賑わい、活気付くこの期間、磁力を使いながらの空中散歩は意外と気がつかれないようで、次の競技―確かバールンハンターだったか―に間に合うようビルとビルの間をすり抜けていく。

時間にはギリギリ間に合いそうで、競技場の近くまでスピードを上げると同じ体操服を着たクラスメイトたちの頭髮が見え、近くの硬い土に勢いを緩めて降り立った。

工事現場の奥、人気のない場所に複数人である彼女らに一瞬疑問が湧くが、待たせている事実の前にはそんな些細なことはどうでもよかった。

「ごめん、遅くなって……」

整列されて積み上がった角材の後ろに降り立つと、悪びれながら頭を下げてクラスメイトの元へ走ろうと一歩を踏み出す。

しかし、足を一步出したはいいものの、クラスメイトや後輩たちの視線の先にいた見慣れた茶髪と顔に思わず体は隠れる場所を求めて角材の裏に足を戻した。

「御坂様、サイズ、キツくないですか？」

「運動には支障ありません、むしろ胸部に余裕があります」

「ねこ、お預かりしておきますね」

自分に向けられていない視線の先、毎日のように鏡でみる自分と瓜二つの少女がぼんやりとした目で白と赤の体操服に袖を通す。

その光景に脳が動きを止め、理解の先よりも先に慌てて体を引っ込めると、息を殺して見つからないように口を両手で塞いで黙り込んだ。

「あらっ？」

「どうかなさいまして?」

「いえ、今誰かいたような……」

僅かだがその中の一人、胸元まで伸びる黒髪を三つ編みにした後輩、泡浮万彬と目が合う。

しかしどうやらあまり気には止められておらず、隣に立つ栗色の髪をふわふわとしたボブカットの友人、湾内絹保と不思議そうに顔を見合わせて首を捻るだけ。

そんなことよりも、私の関心は私と瓜二つの少女、妹の姿に向いていた。

私と同じ顔、同じ背、同じ体格の少女。超能力者のひとり^{レベ}で第三位に位置するこの私、御坂美琴を模した軍用クローンのうち一人が私の代わりに友人たちと喋る。

何やってんのよ、あの子！

はらはらと心臓の脈が早まるのを感じながら、彼女らの成り行きを見守る。

どうやら私と勘違いされているようで、真つ黒い黒猫を取り上げられた彼女はいつものぼんやりとした無表情で立ち尽くしていた。

一体全体なんでこんなことになったのか。

だいたい想像つくけど、誰も私と見分けがつかないとは、助かったような、寂しいような。

そろそろ競技の始まる時間。流石に今から彼女と変わるわけにもいかず、起きちゃったものは仕方がないし、その場を後にしてあとは妹に任せることにしよう。

私の代理で出るんだから、思いっきり暴れなさいよね。

それが昨日の出来事だった。そして同時に事の発端でもあったのだろう。

大覇星祭中は家族とホテルに泊まらなくてはいけないというルールの下、泊まったホテルのいつもとは違う枕の硬さに悩みながらロビーまで続く長い階段を降りる。

朝早いからか、あまり活気はない。

それでもちらほらと同じ体操服に、黄色い学校指定の上着を着た学生たちが何人かおり、小さな声で談笑していた。

同じ学校に在籍する超能力者^{レベル5}、食蜂操祈の配下ともすれ違い、なんとも居心地が悪い。

「御坂様！」

「あ、湾内さん、おはよう」

『女王』が朝からいないなどと不穏なことをいう彼女らにも朝の挨拶をしてそのままロビーへ向かうと、今度は昨日見かけた後輩と目が合った。

小さく手を振って笑うと、目の前の友人、湾内絹保はゆるいウエーブがかかった髪に手を掛け気まずそうに顔を困らせる。

「おはようございます、あの、差し出がましいかもしれませんが、私の体操服はいつ頃……」

「体操服……?」

覚えのない質問に体が固まるが、それが昨日、私の妹が借りた服のことだと気がつくと自分でも驚くほどの大声がホテルのロビーに響き渡った。

「つえ? まだ返しに来てないの!?!」

「はい?」

「あつ、じゃなくて……ごめん、その、コーヒー! コーヒー零しちゃつて、クリーニング出しても染み残っちゃうから、買い取らせて? 新しいの届くように手配しとくから」

「いえいえ、そこまでして頂かなくても」

慌てて訂正の言葉を並べて頭を下げると、湾内さんは優しい顔を浮かべてお辞儀をしてから立ち去って行く。

体操服を借りたままなんて、私に迷惑をかけないよう徹底していた

妹達シスターズならありえないことだ。私に成り済まして大覇星祭を遊び倒そうという魂胆なのかは分からないが、湾内さんには申し訳ないことをした。

まだ今日の競技までには時間がある。彼女達、通称『妹達』シスターズは其の生まれのせいでメンテナンスが必要不可欠な体を持っており、姉としては勝手に出歩いているのは多少なりとも心配だ。

まあ、監視カメラを確認して回れば、すぐ見つかるだろう。

楽観的に考えながらホテルのフロントへ向かうさなか、心の奥底で燻る不安がゆつくりと溶け出していく。

なんだか、胸騒ぎがする。

不安をかき消すように、私は足早にホテルを後にした。

空を飛び回り、複数の監視カメラのデータを覗き見たところ、その胸騒ぎが的中したのか思いもよらない光景が小さなカメラに収まっていた。

小型のデバイスの画面に映った映像に冷や汗が頬を伝う。細い路地の奥から担架に担がれて救急車に乗る姿に息が止まった。

瓜二つの顔が赤く染まり、荒い呼吸を繰り返して大量の汗をかく姿は、どう考えても異常だ。

急いで磁力を手繰り寄せながらこのエリアの管轄と思われる消防署へ向かう。不安と恐怖が心臓と足を早くする。

妹達シスターズの姉とも言える私に、彼女が行方不明になったとの連絡が一切入らないのはおかしい。それに、彼女達を預けている第七学区の病院は、信頼できるカエル顔の医者に、少し厳しいが優しい看護師だっている。

看護師として妹達シスターズのメンテナンスの手伝いをしている先輩からメールの一通も来ないのは不自然だ。

「あの、すみません」

第七学区の消防署にたどり着くと、近くで談笑していた中年の男性二

人に声をかける。灰色の帽子に髪を隠し、つばを目元まで引き寄せながら映像で見たものと同じナンバーの救急車に指を差すと、彼らは軽く眉を顰めた。

「昨日、これを動かしてた方は……？」

「昨日？俺とこいつだけど」

人当たりの良さそうなおじさんで良かった。質問に驚いたような顔をしたが、特に疑うこともせず彼らは頷く。

詮索することもなく軽い口で輸送した病人の詳細を喋る彼らに市民として不安は覚えるとはいえ、手荒な真似もせず教えてくれるのは正直ありがたい。

「昼前くらいに茶色がかった髪を肩まで伸ばした女の子を搬送しませんでしたか？」

「あー、あの子か。俺たちで運んだよ」

「その子、あたしの知り合いで、搬送先の病院がどこか、教えていただけないでしょうか」

「それならほら、あそこだよ、見えるだろう？」

彼らは目の前の大きな建物を指差す。そこが妹達シスターズがお世話になっている第七学区の病院だったことに驚くが、確かにあそこの病院に運ばれたのならあの医者達が連絡をしない可能性もあり得る。

だって彼らはプロだ。私に連絡する前にすぐさま治して何もなかったようにしてしまうかもしれない。

深く安堵すると、教えてくれた彼らにお辞儀をして馴染みの病院へと走り出した。

しかし、

「え？運び込まれてない？」

「その時間に急患があった記録はありませんね」

救急隊員の言葉が嘘だったと、受付越しに座る若いナースが告げた。

「でも、救急隊員の人が運んだって……」

「どこかの病院と勘違いされているのでは？」

消毒液の匂いがする病院のロビー、予約や会計を請け負う総合受付に座るナースに改めて確認するが、パソコンの情報を照らし合わせても救急隊員の証言を裏付ける証拠は何一つ見つからない。

確かに彼らはこここの病院に妹を運んだと言った。嘘をつく意味はないはずなのに、ナースはそんな事実はないと再度告げる。

おかしい。証言が食い違うなんて、あり得るのだろうか。

ふと、あの先輩の顔が浮かぶ。明るい金髪と桃色の毛先に、緑と茶色の瞳を持った一人の女性。

彼女の名前は天羽慧糸。

幻想御手レヘルアップの時は一緒になって木山晴生を止めて、ポルターガイストの時も木山先生の生徒を助けるために尽力してくれ、テレステイナを許して釈放したことには怒ったけど、妹達シスターズの実験施設を破壊して回った時も、一方通行を止める時も助けてくれた優しい先輩。

彼女の優しいけれどどこか怖い笑顔を思い出す。

チャラついた見た目は近寄りたいたいが、何度か一緒に厄介ごとに巻き込まれている自分は彼女がどういう人だかよく知っている。

あのバカと同じ、究極のお人好しで善人。自分には厳しく、他人にはとことん甘く接する底抜けに、いや、恐ろしいほど人間に優しい人。

最初に出会ったのは上条当麻を追いかけ回していた時、彼氏彼女と勘違いされて恥ずかしさを紛らわすために電撃を放った際だった。

その頃から印象は変わっていない。

テレステイナを許して、夏休みのあの日に一方通行を諭すように立ち塞がって、気絶した彼をわざわざ病院に運んだお人好しの先輩。

自分の悪いところをよく知っているからこそ、他人に甘くする彼女は自分には理解できない人間だった。

わかるのは彼女が底抜けに優しいことと、責任感を強く感じる性格だということ。

「じゃあ、あの、ここにいる看護師の、天羽慧糸に繋げてもらえますか？友達なんです」

あの人の性格なら、自分で抱え込んで秘密裏に対応している可能性

がある。

もしかしたら彼女なら何か知っているのかもしれない。

「友達？……申し訳ないんですが、あの子なら昨日から係の仕事でお休みしています。係の関係で大覇星祭中のシフトはありません」

「休み？」

「はい、先程まで病室で休んでましたけど、ご友人に呼び出されて出掛けていますし、本人に連絡した方が早いかと」

「そう、ですか……ありがとうございます」

だが肝心な時に自分の勘は役に立たなかった。

昨日の昼、借り物競走の時、垣根さんと大人数で警備員アンチスキルと話していたことを思い出すと、残念ではあるがナースの言葉に納得がいった。

先輩はおそらく関与しておらず、この件も知らない可能性が高い。彼女に伝え、協力を煽るのも一つの手だ。

ロビーを抜け、再び消防署へ走り出す。膨れ上がっていく不安をぐっと抑えながら急いで足を動かした。

十分もかからずに先ほどの消防署にたどり着くと、もう一度同じ質問を聞く。先ほどのナースの証言も添えて。

「いや、間違いないって。なあ？」

「確かに、あの病院に運んだよ？」

「でも、そんな記録は……！」

証言の食い違いが続く。嘘だと看破されても悪びれない職員に苛立つと同時に、あることに気がつくのと、目を見開いて白と赤の救急車を見つめた。

いや、変だ。

行方不明の妹は湾内さんから借りた常盤台の体操服を着ていた。通常、身元不明の学生が病院に搬送されたら制服から学校を特定し、どこの病院だろうとまず学校に連絡をするものだ。

だというのに、御坂美琴が搬送されたら連絡は一切もらっていない。

「一晩たつても学校側からなんの動きもないのはおかしい。」

「あの、本当なんですか？」

そうになると、疑うべきは救急車を運転してた人だ。

「じゃあ、引き継いだ病院関係者の名前は？その時の情報を説明出来る？」

「当たり前だろう。いつもの子だよ、金髪の背の高い女の子」

「隼系ちゃんがいる日は大体あの子に引き継いで貰ってるからね」

疑いの眼差しを向けられても、彼らは当たり前のように質問に答えた。

「天羽先輩は昨日からお休み中よ」

「え？あれ？じゃああの子は、」

彼女は昨日からいない。明らかかな嘘だった。

素早く救急車の運転席へ乗り込むと、制止も聞かずに能力を使って走行履歴を確認する。青白い電流を流し、ナビを起動させると周辺の地図が表示され、現在地を赤いマークが示していた。

「な、降りなさい！」

パネルに表示された走行履歴は、彼らの証言を否定する。病院を通りすぎ、地下駐車場に向かったと矢印が静かに主張していた。

「君！いい加減に」

「これはどういうこと！」

病院なんて、向かってないじゃないか！

地下駐車場に行つて、そこから引き返していると表示されたディスプレイに苛立ち、奥歯を噛む。

あの子は救急車に運ばれて、地下駐車場で別の車に移された。そう考えるのが一番妥当だろう。

私の知らないところで、妹に聞きが迫っていることに自分の不甲斐なさを痛感する。何も知らずに、遊び呆けていた自分が恨めしい！

「この走行履歴を見る限り、あんた達は病院になんて行ってない！説明できるものなら説明してちょうだい！」

「そんなはずは……」

「動かぬ証拠がある以上、言い逃れはできないわよ！」

画面から目を離し、問い詰めようと勢いよく体をひねると、振り向きざま深く被っていた灰色の帽子が落ちた。

露わになった髪と、クリアになった視界のせいでおじさん達の驚いた表情が良く見える。

「君は、昨日の……?」

やってしまった。搬送した少女と瓜二つの外見を持つ人物がこの場にいるなんて、事情を知らない人から見たら驚きどころの話ではない。

慌てて救急車から降りて説明をしようと口を開くが、出てくるのは空気がかり。

「一体どういうことだ、なんだって搬送された本人が自分がどこにもいないなんて狂言を……」

「違うの!これは、」

「まて、どこかで見覚えがあると思ったが、超能力者^{レベ}の子だね?電気を操るとか、なんとかの。走行履歴も、君が能力で改竄したんじゃないのかい?」

「そんなことするわけないでしょ!」

いわれのない疑いに思わず体が動き、腕が中年の隊員の襟元へと伸びる。強く作業服の襟を掴んで声を荒げてみても、彼らは口を割らない。

「ここまでしているのに、一向に本当のことを話さない彼らにいい加減腹が立ってきた。」

「身元を隠してたのは謝るわ!でも、嘘つかないでホントの事を言つて!」

「う、嘘なんかついて、ない」

「嘘じやなきや、あんた達の記憶はどうなってんのよ!いい加減なことばっかり——」

襟を掴む手に力が入る。嘘をついていないと信じたくても、この場にある証拠が全て否定する。

どうしてこうも彼らは頑なに嘘をつき続けるのか分からない。天羽先輩の名前を出してまで嘘を着く彼らに怒りさえ感じるが、ふと別

の考えが思い浮かぶ。

証明されない証言と、事実と噛み合わない彼らの記憶。

彼らが本当のことを言っているとしたら、食い違った記憶は他の能力者に改竄されたとも考えられるのではないだろうか。

いるじゃないか、一人。

脱色されたハニーブロンドの髪を腰まで伸ばした同級生の能力者。

七人の超能力者の第五位。

誰にも勝る精神干渉能力者、『心理掌握』

名前は、

「君！その手を離しなさい！」

食蜂操祈

彼女の煌めきが眩しい瞳が脳に焼きつく。

警備員などに包囲されているこの状況を煩わしく感じさせるほど、星形の模様が入ったあの女の目が頭から離れなかった。

63話：発覚

静かな廊下に響くほど強くドアを蹴破る。チャチな電子ロックは見事に外れ、跡形もなく木っ端微塵になると明るい光が部屋から溢れた。

靴音をうるさく鳴らし、中にいたムカつく顔の研究員の机を強く叩く。

鬱陶しそうに顔を上げた彼女、テレスティーナは面倒そうに溜息をつくと一度振り向いたというのに顔を背けてパソコンを立ち上げた。

「あの馬鹿はどこだ、どこにやった」

「あ？扉は静かに閉めろよ」

「いいから答えろクソ女。あの女は一体どこだ？」

暴れてしまいたいほどの情動をコントロールしながら問い詰める。接続が切れたことに気がついて慌てて向かったこの研究室にあの金髪がおらず、テレスティーナしかない明るい室内には甘い香りだけが残っていた。

「あいつなら四十分前くらいに連絡きた奴とデートとか言って05と仲良く遊びに行ったぜ？」

「は？デートお??あいつに俺以外の男がいるわけないだろ」

「男ではありませんよ、とミサカは訂正します」

呆れた表情で淡々と話すテレスティーナの声に不安が募る。どうしようもない感情に苛立って強く拳を握って目の前の女を睨むと、突然少女の声があった。

感情が汲み取れない冷たい声に振り向くと、茶髪の少女と黒髪の子供が目に入る。

「相似に誘拐されて搬送されてたガキじゃねえか。9982号、そのガキどうしたんだ？」

「垣根さんに先ほど面倒見ろと言われたのですが、何やら彗糸お姉様がピンチと聞きました、とミサカはここにいる理由を簡潔に話します」

「林檎、お前話したのか」

「うん、知りたいって言われたから」

御坂美琴の軍用クローン、缶バッチとヘアピンをつけている個体、9982号が杠林檎の手を引いて壊れたドアを跨ぎ、二人揃って無表情でこちらを見つめる。

不気味に感じながらも、無表情なりに彼女達の感情は感じ取れていた。

クローンの遺伝子元と同じように、彼女もまた他人を助けたがる主人公タイプなんだと、何と無く分かってしまう。林檎のいい預け先だと思ったが、どうやら自分の考えは的外れだったようだ。

「ったく、コレじゃお前を9982号に預けた意味ないだろ。それで、あの女は誰とどこに？」

「食蜂操祈のもとへ行くとおっしゃってました、とミサカは彗糸お姉様の発言を思い出して見ます」

「……は？食蜂操祈？」

聞き覚えのある名前に軋むほど強く机を掴む。天羽と接点のないはずの格下の名前が出るとは予想もしていなかった。

「つて、誰？」

「超能力者^{レベル5}、第五位の精神干渉能力者だ……昨日選手宣誓に出てた女だな。第一位、第二位、第三位ときて第五位まで知り合いか。いや、そういう第七位とも知り合いつつてたな」

天羽は第五位と知り合いなんかじゃない。林檎の質問になんだかんだ丁寧⁵に答えるテレスティーナを横目に見ながらギリギリと手に入力を入れる。

テレスティーナの言う通り、彼女は第一位と第三位、そして俺。

そこから先はずっと一緒にいたのだ、彼女が誰と出会っていたのか知らないはずがない。

初めて上条と会った日だったか、そんな話をしていたのを思い出す。あの日渡したストラップが役に立っていないのは少々不愉快だが、あの日上条と合わせてくれたのは好都合だったなど、懐かしさに浸ると、ふとある事に気がつく。

そういえば、彼女はあるとき第七位と知り合いとも言っていた。

なのに何故、昨日、第七位は知らない他人かのように振舞っていたのだろうか。

「ですが第五位の方が彗糸お姉さまになんの御用なんでしょうか、とミサカは疑問に思います。他に頼る方は居そうですが、とさらに付け加えます」

「さーな、用事でもあつたんじゃねえの？」

第七位のこととは後で問い詰めるとして、9982号の言葉に再び第五位に関して考察を巡らす。

天羽自体が第五位と接触するのは性格的にありえる。鳥頭の彼女なら危ない目に合うと分かっている、涙を流しながら助けを請えばすぐに騙され流だろう。

しかし、第五位の目的は不明だ。

と言うのも、天羽をわざわざ呼ぶ理由が見当たらないからだ。

第三候補、三番目の天使等、知らないところで異名が増え続ける彼女だが、第五位が暗部や上層部と関係がありそうなこのワードと関係あるとは思えない。

かと言って能力目当てとも思えなかった。

天羽にできることは限られている。

治すこと、戦うことしかできない。しかも無能力者相手であろうやく勝てる程度の強さしか持たないチワワみたいな強さしか持てない馬鹿ときた。

人畜無害、それどころか喋ると精神が疲れて、目を離すとすぐに面倒ごとを持つて来て俺を困らせる。

ほつといてはいけないタイプの人間。

何もできない愚かな人。それでいて何かを成し遂げようと足掻く。

それが彼女だ。

知らないとはいえ、そんな女になんの用事があるというんだ。

しかも精神に関する事ならなんでもできる能力を持つ第五位が。

治してほしい急患でもいたのか？それも、この病院に連れて来られないワケありの患者が。

「まったく、今日は10032号もどつか行っちゃったし、相似の野郎もついて行つたし、人がいねえーんだよ。手伝わねえならドア直して帰れや」

「待て、どの野郎だつて？そいつあのクソ野郎じゃ、」

「あ、内線だ。ちよつと待つてろ」

頭を掻きながら聞き覚えのある名前を出すテレステイナは、突然鳴り響いたデスクの内線電話を手に取り適当に有耶無耶にする。

尋問したい衝動に駆られるが、電話が終わるのを待ちながら必死に堪えた。

「……なあ、天羽の友達を名乗る女子中学生が現れたようなんだが」

「そういえば先ほど、お姉様の微弱な電磁波を感じ取ったような……」

電話を置いて何度目かのため息をつくとき、彼女は落ち着いた様子で電話内容を伝える。思ってもいなかった客人に互いに顔を見合わせる。

「関連性があるかは分からないが、どうする？調べてみるか？」

「テメエも手伝うんだろうな？」

「大事なモルモットのためだ、手伝ってやるよ」

何かを企んでいる食蜂操祈と、このタイミングで天羽を探しに来た御坂美琴。

天羽がまた何かに巻き込まれていることだけは、この場にいる全員、分かっていた。

「本当に、申し訳ありませんでした」

連絡を受けて駆けつけた教師とともに消防隊員達に深く頭を下げ、苦々しい顔で謝罪を述べる。何も情報を得られず、妹のために何もできなかつた自分の不甲斐なさが胃を熱く煮えたぎらせた。

不安と無力感が体を襲う。そして思い浮かんだあのふざけた女の笑顔に奥歯を強く噛む。

「ほら、行きますよ」

教師に促されるまま黒い高級車の後部座席に座り、重苦しい雰囲気のまま車が走り出す。両手をきつく握りしめて光沢のある座席に座っていても、思考は先生のお説教よりも妹達に向いていた。

「全く、何を考えているのです。公共機関に対して脅迫紛いの狂言なんて、大事にならないよう相手方が便宜を図ってくださいだから良かったものの……一体、何が原因なのですか？」

綿辺先生が来るまでの間、消防隊のおじさんたちに引っかけを混じえた質問をしたけど、嘘をついているようには見えなかった。

だとしたら、やっぱり彼女しかいない。

学園都市一の精神干渉能力者。食蜂操祈。

彼女なら他人の記憶を操作し、人の認識をすり替えることだって可能だ。

「食蜂操祈に、能力を悪用して犯罪を隠蔽した疑いがあります」

「それが本当なら、由々しき事態ですが……そう判断せざる負えない根拠があるのですか？」

「それは……」

しかし学校側にどう報告しても、妹達に触れることになる。それは避けなくてはいけない。

その結果なんとも歯切れの悪い返答しか返せないことにむず痒さを覚えてしまう。

「具体的には、なにがどうとは言えないのですが……」

「それでは如何ともし難いですね……御坂さん、今は大覇星祭の期間中、学園都市が世界中から注目を集めています。超能力者の貴方は我が校のみならず、学園都市の代表として振る舞わなければなりません。それが重圧になってることは理解していますが、軽率な行動は普段以上に慎んでください。理解出来ますね？」

「は……」

小さな声で呟くと、先生はため息をついてこめかみを抑えた。

先生が私を心配してくれているのはわかっているが、それでも妹達と食蜂操祈を放っておけるわけがない。

車の外から見えるビル群を尻目に、お叱りを聞き流しながら考える。しかし考えても、考えても一向に分からない。

食蜂操祈が救急隊員を操って運び屋をさせたとして、目的は一体なに？

いや、それに関して今はいい。

とにかく、競技が始まったら抜け出して、可愛い妹を探しに向かわなくてはいけない。

今の所、救急車がいった地下駐車場が唯一の手掛かり。まずはそこに向かうしかあるまい。

今後の行動を組み立てながら一人静かに座っていると、車が歩道に乗り上げ停車する。先生の後を追うように車から降りたのはいいものの、何か違和感を感じてしまう。

「あら、丁度良かった」

「な、」

どうやらその違和感は正しかった。

車から降りた先、先生は近くで話し込んでいた同じ学校の生徒達に話しかける。十人はいるそのグループの顔触れに見覚えがあった。

「あなた達、ちよつとお願い出来るかしら。御坂さんは今少し精神的に不安定になっているので、見ていてあげて欲しいのです」

「はあ、構いませんが……」

長いプラチナブロンドをお姫様のように巻いた少女が困ったかのように笑う。見張りを頼むなんて、これでは考えていた行動プランが台無しだ。

しかも、

「まあ、御坂さん。私、貴方とは一度ゆつくりお話して見たかったので。よろしくお願いいたしますね」

「あ、はあ……」

よりによって、食蜂操祈の派閥メンバーなんて。

「あんまり先生方を困らせてはいけませんよ？」

「御坂さんはわんぱくさんですからね」

なんだか居心地の悪い会話にやりづらさを感じながら自分を取り囲む少女達に警戒しながら乾いた笑みを浮かべる。

もうすでに車に乗って走り去って行った先生はなぜ彼女達を選んだのだろうか。

食蜂操析は学校内で大きなグループを作って配下に入れた人達に『女王』と呼ばれている。そして目の前にいる彼女達はその取り巻きの一部。

特にプラチナブロンドの彼女、帆風潤子さんはよく覚えている。背格好や体格が似ている彼女は食蜂に一番忠誠を誓っているメンバー、先生が彼女達を呼び止めたのは果たして偶然だろうか。

畏にはめられたような感覚が消えない。

——御坂さん。

考えがまとまらないまま彼女達の輪に歩み寄ると突然、頭に声が響く。高い声は耳ではなく、頭に直接響き、それが能力を介してということだけがわかる。

辺りを見渡して声の主を見つけようと視線を動かすと、派閥の一人の目と会う。明るいボブカットが似合う彼女は可愛らしくウインクをして人差し指を口元に置いた。

——見張り役ということなので、御坂さんと回線を繋ぎました。この回線が繋がっている間、私は御坂さんのおおよその位置を把握できません。お逃げになると、私達が全力で御相手することになりますのでテレパス念話か。

含みのある言葉に苦笑いしか返せず、近くにあったベンチに座り込むと静かに足元を見つめる。

振り切ろうと思えば、振り切れる。けど追われながら情報集めるのは流石に厳しい。

それに表向き、派閥メンバーから敵意は感じない。食蜂操析からなにか聞いている訳では無さそうで、無理に引き剥がせば厄介ごと巻き込んでしまうかもしれない。

とにかく、これ以上動くのは得策ではない。誰かの手を借りること

ができればいいのだが。

顎に手を当てこの状況を打破する策を考えるが、一向にいい案は思
い浮かばない。

一度思考を切り替えようとパツと顔を上げ、道路に面した道に目を
向ける。

赤いリボンで結ばれた明るい色のツイントールが視界の端に捉え
られると、小さく声をあげた。

「ちよつと知り合いと話してきていいかしら？逃げたりしないから」

「え、ええ……」

黒子、初春さんに佐天さんの姿を両目が捉えると、派閥メンバーに
一言断りを入れてから小走りで駆け寄る。

もう四の五の言つてらんない。彼女達に手伝ってもらわなくては、
妹を助けることはできないのならば、迷惑のかからない範囲で手を借
りるのも大切だ。

「黒子・ちよつと、頼みたいことが……」

色々あつて怪我をした黒子は車椅子に乗りながら佐天さんと初春
さん二人と仲良く談笑しながら道を進む。

偶然にも彼女達がこの道を通つてくれたのは正直ありがたい、笑顔
で駆け寄つて名前を呼ぶと彼女達は足を止めて振り返る。

ただ、その表情はまるで予想していかないものだった。

「なんですの？人の名前を気安く呼ばないで頂けます？馴れ馴れしい
ですわね」

「白井さんのお知り合いですか？」

「いえ、うちの学校の御坂美琴という先輩ですわ」

「え、有名人じゃん！確か超電磁砲^{レールガン}って呼ばれてるんですよね！」

他人行儀な拒絶。見知らぬ他人と接するかのような冷たい声に自
分の顔から笑顔が消えていくのがわかった。

信じられない言葉に体は固まって、脳はまともに動かない。何を
言っているのか、理解することを脳が許さなかった。

「く、黒子……？みんなで、私をからかつてる訳じゃないわよね……
？」

「何を言ってますの？」

「初春さんも、佐天さんも……」

「なんで、私達の名前を？」

苦笑いを浮かべながら、黒子の座る車椅子を押している初春さん達に話しかけても、皆困惑したような表情で顔を見合わせる。

私のことを、忘れたようだった。

知らない他人と接するようなきこちない彼女達に喪失感がぼつかりと心に穴を開ける。今まで遊んで来たこと、巻き込まれた事件、些細な会話、初めて出会った日のこと、その全てを忘れてしまった彼女達に、なんて声を掛ければいいのか、分からなかった。

「白井さんが話したんですか？」

「いいえ、私も面識はありませんの。私達のことをどこで耳にしたのか知りませんが、お困りでしたら話を聞きますわよ。ジャッジメント風紀委員として……」

「いえ……、」

そのまま立ち去る彼女達を背にして、強く拳を握る。こんなにも悲しくて、酷く虚しいのに不思議と涙は出ない。

それよりもあの女への怒りや憎悪が膨れ上がる。

態度のデカい同級生の顔が脳裏にこびりついて、無性に苛立たせた。

しかし、だからと言って何かができるわけではない。あのいけ好かない女の部下に取り囲まれている現状、次に行く競技の準備をしなくてはいけないし、勝手気ままな行動が制限されている。

私にできることは無に等しい。

仕方がないので競技の準備に取り掛かる。次の種目は風船サンド、ペアになった選手が互いの体に風船を挟んで手を使わずに早くゴールに運ぶ競技で、スタートライン付近に立ち止まると、はあっと息を

吐いた。

何もできないのは気に入くないが、チャンスは必ずある、今は待つことに徹しよう。

「御坂さん、風船、私が膨らませてもいいかしら？」

「ああ……うん」

隣で風船に息を吹き込む婚后さんの横顔を見ながら顔を伏せる。広い道路を使ったこの競技はペア種目、本当は黒子と出るはずだった。

九月中旬に起きたちよつとしたいざこざで怪我をしてしまったため車椅子のお世話になる彼女は棄権する事を本当に残念がっていたけど、きつと今の黒子はなんの競技に出るかすら覚えていない。気が滅入る。

誰よりも私を慕ってくれて、仲の良かった親友が私のことを覚えていない。そんな認めたくないほどの喪失感と絶望が大きく心に穴を開けていく。

当たり前の愛がもう私に向けられない。

彼女たちの繋がりは何よりもかけがえのないものだった事くらい分かっていて、それを失ったら酷く心が傷つくことも。

だからこそ、それを失った今、何よりも強い怒りがあの女に向かって強さを増していた。

「そう言えば御坂さんが双子だったとは知りませんでしたわ」

「え？」

「昨日のバルーンハンター、出てらしたのは妹さんでしょうか？」

競技に嫌気をさして俯いていた矢先、思っても見なかった発言に目を見開く。誰にも見抜かれなかった昨日の出来事を突然看破された事実はあまりにも私に衝撃を与えた。

「婚后さん……いやあたしじゃないって気づいてたの!？」

「あーら、私、人を見る目は確かなつもりですわよ。醸し出す雰囲気の違いと申しましょうか」

全く同じ顔、ほとんど同じ声。性格は少し違うが、誰にも見抜けないほどそっくりな妹達が、まさか転校してきたばかりの彼女に見抜か

れるとは思っても見なかった。

得意げに胸を張り、風船に息を吹き込む婚后さんの手を掴むと彼女の瞳を覗き込む。

「あの、婚后さん！お願いがあるんだけど！」

これしか道はない。

取る行動は一つしかなかった。

64話：発展

練習よりも簡単だった風船サントは無事一着で終わり、運営委員のスタッフに軽く会釈をして一位の旗を受け取ると、ペアを組んでいた黒髪の少女が息を途切れさせながら体を震わせ口を開いた。

「じゃ、邪智暴虐にも程がありますわよ！食蜂操祈！」

「婚后さん！声、声！」

よく通る声を張り上げる婚后さんを小さな声で落ち着かせると、彼女は拳を握りしめて怒りに肩を震わせた。

「妹さんを拐かし、あまつさえ白井さん達の記憶を操作するなど、常盤台生の風上にもおけませんわ」

そして小さく頷くと、姿勢を正し私と目を合わせる。

「話は承りました。妹さんのことは私が調べてきますから、御坂さんは食蜂派閥の目を引き付けてくださいな」

「ごめん、こんな私事に巻き込んで……でも、くれぐれも深入りはしないで。あの女は何を考えているのか分からない怖さがある、手掛かりさえあればあとは自分で何とかするから」

旗を握りしめて肩を落とすと、顔を上げて青い空を睨みつけた。

第五位、食蜂操祈。精神に関する能力では右に出る者がいない彼女が、一体何を企んでいるのか分からない。

そんな彼女と婚后さんを対立させるのは本当に申し訳ないし、巻き込む事に抵抗がある。現状、何もできない身としては、せめて忠告することしかできなかつた。

「……いえ、御坂さんは私からの情報を信用すべきではありません」

「え、なんで……？」

「私も既に食蜂操祈に洗脳されているかもしれないからですわ」

淡々と述べる、私に背を向けて婚后さんは眩く。もつともな発言だというのに、何故か私は酷く動揺してしまう。

これ以上、友人を無くしたなんて考えたくなかつた。

「私からもたらされる情報は全て嘘。御坂さんはその可能性を考慮すべきですわ」

「そんな……」

「ええ、そんなことを言っていたら誰も信用できませんわよね。ですから私は妹さん本人を連れて戻ります。信用するなど言っておいてなんですが、私を信じてお待ちください」

そう言つて婚後さんは真つ直ぐ走り去る。その背中を追いかけようと腕を伸ばすが、届かずに虚しく空気を掴むだけだった。

「二位お見事でした、流石ですわね」

「……どうも」

遅れてやつてきた監視役に足を止められ、そのまま動きを止める。有無を言わさず取り囲む集団に苦笑いしか浮かばない。

「大丈夫かな……」

もう見えなくなつてしまった婚後さんの姿を目で追つて、白い体操服の裾を握りしめる。

巻き込んでしまった手前強くはいえないが、危ない目に合わないでほしい。たとえあの子が助かつて、婚後さんが危ない目に逢うのも嫌だ。

小さくため息をついて監視役たちと歩く。早く抜け出したいのにそれをできない自分に怒りが募る。

もう一度、今度は大きなため息をついて周りを囲む彼女たちの表情を伺うと、視界の端に小さな白い虫が写った。

足を止めて目を凝らしてみると、あまりの美しさに息を零す。

それは白いカブトムシ。

珍しいその色は何かを訴えるように、美しい緑の瞳で私を見ていた。

眩しい太陽の光を反射するアスファルトを蹴り、少しだけ下で結ん

だ黒髪をなびかせて走り出す。先ほど御坂さんに聞いた話に怒りを募らせながら。

行方不明の妹に、記憶を消された友人の白井さん達、そして原因の食蜂操祈。与えられた情報を噛み砕くように一から頭の中で整理する。

妹さんが行方不明になったのはバルーンハンターの後、そして今向かっている工事現場に近い路地裏で見かけたのが最後だったらしい。何故、食蜂操祈は妹さんを誘拐したのか、その根本的な理由は分からないが、御坂さんに宣言した以上早く見つけなくてはならない。目的はおそらく妹さん。

つまり、食蜂操祈の派閥の方々が御坂さんを監視しているのはただの時間稼ぎ。それも、一時しのぎが出来ればいいと言う程度のもの。そして白井さん達の記憶を奪うだけで、彼女達を御坂さんと敵対させなかったのは恐らく、そこまでする必要性を感じていないということ。

急いだ方が良さそうだと、走るスピードを上げる。

「となれば……食蜂操祈が接触したのも、恐らく……」

路地を抜け、ひとけのない道に踏み入れると、辺りを見渡す。

御坂さんの話ですと、妹さんと最後に別れたのは目の前に広がる工事現場。鉄骨や袋に詰められた砂利などが積み上がった工事現場には誰もおらず、見た限りでは特に異常はない。

この工事現場で妹さんは連れ去られた、しかしどうも腑に落ちない。

妹さんは御坂さんのように心理掌握メンタルアウトを防げるようなレベルではないということ。なら能力で人目につかない場所に行くように命令することも出来たはずなのに、なぜ捕獲して移送などという手段をとったのか。

考えられる線は一つ。

妹さんが倒れたのは能力によるものではなく、食蜂操祈にとっても不測の事態だった。

そんな推測が脳裏に浮かぶ。

もしそうなら、この場になにか手がかりが？

土が剥き出しになった地面に目を向けて、手掛かりになりそうなものを探してみると、角を曲がった先に緑色の何かが落ちていたのが見えた。

小走りで駆け寄ってそれを手に取るが、カエルをモチーフにした薄っぺらいお面だと気がつくとき少し首をひねる。

御坂さんが好きなケロゾウ、だったか。何故こんな場所に落ちているのか不思議に思うが、頭上に影が差すと顔を上げて注意を移した。

「あれは……こ、こらー！」

何かと思つて近くにおいてあつたドラム缶の方へ顔を向けると、一匹の小さな黒猫がその三倍の体格はしていそうな大きなカラスに襲われており、慌てて手で振り払う。

大きな体をした鳥は子猫を狙うのは諦めたのかどこかへ飛び去り、子猫だけがその場に残される。

カラスが飛び去った後も不安げに縮こまる子猫を撫でて様子をみるが、仕切りに私を見ながら鳴いていた。

御坂さんのお手伝いもあるためこの可愛らしい動物を預かることはできないが、自分の中の良心がいつの間にか子猫を手取る。

こんなことをしている暇はないというのに、可愛らしい子猫を放つてはおけなかった。

「よしよし、可哀想に、って、あら？」

しかし、奥の方から誰かの砂利を踏む音が響くと、黒猫は手から離れ、その音の方向へと駆け出す。

軽く砂利を踏む音がゆっくりと大きくなっていく。誰の気配もしなかったのに、いまははつきりと誰かがいるのが聞こえた。

「……どなた？」

「あれま、先客？」

突き当たりから現れたのは、逃げていった黒猫を抱いて佇む背の高い女性。

15cmはある踵の高いパンプスを履いているとはいえ、おそらく身長は平均以上。175cmはあるメリハリのある体と、化粧の濃い

ハーフ顔も相まって学生には見えない。

しかし胸元に入場証をぶら下げていないので迷い込んだ外部からの一般客の線も薄い。

かと言つて、この場にふさわしくない体の線を隠す真っ白いワンピースと男物の黒いジャージを着ている辺り、おそらくこの工事現場の関係者でもなさそうで、どう見ても怪しかった。

「常盤台生？この猫はアナタのかな？」

「い、いえ……」

子猫の首をつまんで私を見下ろす女性に少しばかりの嫌悪感を感じ、じつと観察を続ける。猫を乱暴に扱う態度もそうだが、180cmもある背から見下ろす彼女の奇妙な目の色にはなんともいえない怖さと威圧感があつた。

「ふーん？じゃあこの猫は警備員アンチスキルに持つて行つたほうが良さそうかな、お邪魔してごめんねー」

「えっ、ちよ、ちよつとお待ちなさい！」

「はい？」

「あ、貴方は何故ここに？」

普通の人とは違う、闇も光も入り混じつたような目。赤と緑の不思議な色を細めて笑う女性はこの場を去ろうと背を向ける。

その背を引き止めようと伸ばした手が彼女の腕を掴み、ピタリと動きが止まった。

御坂さんの妹について何か知っているかもしれない。一度そう考えたら呼び止めずにはいられなかつた。

振り向きざま金色と桃色の髪が消毒液の匂いを撒き散らす。消毒液の奥に香る甘い何かの匂い、柔らかいその匂いは優しく、嗅いだこともないような香りだつた。

「んー、強いていえば探し人を見つけにかな？お嬢さんには関係のないことだよ」

「……宜しければ、お手伝いしますわ」

「何か用事があるんじゃないの？気にしなくていいよ」

優しい香りと、優しい笑み。そのまま立ち去ろうと、含みのある言

葉を残して背中を見せる彼女を引き止める。

腕を掴まれきよとんと目を丸くする女性の不思議な色の瞳を見つめて、できうる限りの笑顔を見せた。

「常盤台生として、困っている人を見過ぐせませんもの！」

御坂さんとは別の立ち位置から妹さんと繋がっている可能性は高い。きっと彼女は何か知っていると、直感する。

そしてその自分の純粋な直感を、信じることにした。

「えつーと、それで、お姉さんはどなたをお探しで？」

「そう言えばお嬢さんも、なにか探してるみたいだけど、そっちはいいのかな？」

手始めに簡単に探りを入れてみようと名前も聞かずに質問を投げると、女性は薄く笑ってはぐらかす。女性にしては低い声に体が強張ると、彼女は少し屈んで覗き込むように言葉を続けた。

「お友達でも探してるの？」

「っ、そ、それは……」

低い声が背筋を這う。赤と緑の瞳から目を逸らすと、女性は朗らかな笑みを浮かべて足早に歩き出した。狭い路地から抜け、大通りに出てもそのスピードは落ちずに、淡々と人を避けながら進んでいく。

「あら？ 婚后さん？ と、どちら様でしょうか？」

「湾内さん！」

前を歩くその人に注意を向けながら深く考え込んでいると、よく見知った学友とすれ違う。栗色のふわふわしたショートヘアが特徴的な友人、湾内絹保さん。

学友の中で最も親しい彼女に話しかけられたことに喜ぶが、如何せんこの状況下では素直に喜べなかった。

というのも、失礼とはわかってはいるが、隣に清楚とはかけ離れた長身痩躯の女性が立っているのだ、心配されてしまうかもしれないし、下手をすれば不審がってこの女性から情報を探れなくなるかもしれない。

「ええと、こちらは……」

「こんにちはは、この方とは先程出会いました、見つけた猫を助けていた

「だいたんですよ。いいお友達をお持ちですね」

「まあ、そんなことが？」

一瞬言い淀んだ自分とは反対に、隣の女性はその風貌からは連想できないほど丁寧な言葉で湾内さんに人懐っこい笑顔を浮かべ、なんてことなさそうに腕に抱いた黒猫を見せびらかす。

きつと嘘を言い慣れているのだろう、その上品な物腰は派手な見た目が霞むほどの演技で、浮かべた笑顔は自然に見えた。

「え？ええ、そうなんですよ……それで湾内さん、この子をしばらく預かってもらっても——」

「あら？この猫さん、御坂様の猫さんですか？」

簡単に話を合わせながら猫の頭を撫でるが、湾内さんの言葉にすぐにその手は止まった。

「え？これ飼い猫なの？」

「飼い猫かはわかりかねますが、バルーンハンターの競技中に預かった猫さんにそっくりです。でも、確信がある訳じやありませんので……」

「バルーンハンター……では御坂さんの妹さんの……」

まるで持っていたオモチャが突然価値あるものだと判明したような高揚感が手先を痺れさせる。

もしかしたら足跡やら何やら、色々使えば子猫から何か分かるかもしれない。

女性が抱くこの小さな猫が、この瞬間可愛い動物から情報を持つ金の卵へと昇格したような気分だった。

「ふーん、その妹さんがアナタの探し人なのね」

思わず呟いた言葉を聞かれ、肩が跳ねる。軽率な発言は慎むべきだった、軽い口に嫌気がさしながら眉を寄せた。

「でも、御坂様に妹様がいらしたなんて」

「その、詳しく説明している時間はないのですが……御坂さんから行方不明になった妹さんを探して欲しいと頼まれていまして……」

「行方が？」

湾内さんの言葉に軽く頷く。

「この子は、妹さんがトラブルにあったと思われる現場にいたのです
が……」

「そうですね、水泳部に動物を介する読心能力者サイコメトラーの知人がいます。そ
の方ならこの猫さんとコンタクトが取れるかも。事情はわかりませ
んが、私たちにもお手伝いさせてください」

「じゃあ、その御坂さんの妹さんへの手掛かりになるかもしれないん
だ、この猫」

「私、連絡してまいりますので、ここで少々お待ちください！」

どうやってこの猫さんから情報を得るのか少し不安だったけれど、
友人の提案によって活路が見えた。

優しくて頼もしい彼女に感謝しつつも、仕方ないとはいえ怪しい女
性に誰を探しているのかを教えてしまったことが悔やまれる。

「良かったね、お嬢さん。探し人が見つかりそうで」

「え、ええ……ありがとうございます」

知り合いを呼びに走り去っていった湾内さんを見送り、女性が抱え
る子猫を撫でる。

サイコメトラーの方ならまだ食蜂操祈の手は伸びていないだろう
し、妹さんを連れて帰ってこれるかもしれないと喜ぶ反面、隣の女性
の存在にその喜びの波は引いていく。

「それで、あの、貴方は誰を探していたの？」

「ああ、それはもういいの。見つけたから」

意味ありげな笑顔にわずかな違和感を覚えると、不審に思いながら
背の高い女性を横目で見上げた。

程よく厚い唇が弧を描く。何か別のものに関心が移ったかのよう
に、視線を外して目を細める彼女からは不思議と敵意が感じられな
かった。

「え？それはどういう——」

「失礼」

違和感がないという違和感。それを探ろうと口を開いた瞬間、後ろ
に立っていた見ず知らずの男性が自分よりも早く声をかけた。

「ちよつとお話があるんですが」

妙に演技がかつた男の声に振り返ると、少し横幅がある短髪の男性と目があう。高校生くらいの男性は胡散臭い笑みを振りまいて口元を歪ませた。

「御坂美琴の妹について、なんですがね」

濁った暗い緑の目に姿が映る。怪しい男の姿に体は動きを止めても、脳は思ったより冷静に働いていた。

鬼が出るか蛇が出るか。

一抹の不安を抱えつつも、それが手掛かりになるのならば、友人のために向かうしかあるまい。

ぐつと息を飲んで、足を踏み出した。

65話：的外れな自信

白井さんや初春と別れた後、賑やかな通りを抜けていつもと違う学園都市を、私、佐天涙子は浮き足立って散策していると、土産屋の入り口に置かれたストラップチャームがふと目に止まる。

見覚えのあるつぶらな瞳は確かあの人が好きなキャラクターで、名前はゲコ太だったか。

体操服を着たカエルを模したマスコットが風に揺れ、買えと言わんばかりに主張していた。

「へー、大覇星祭限定バージョンか。どうせもうチェック済みなんだろうけど、一応聞いてみますか」

体操服を着たそれを写真に収めようと携帯を手に取り、カメラを起動する。そしてシャッターを押そうとしたその時、何とも言えない違和感に気付く。

「って、誰……？」

携帯に写ったカエルは、誰の好きなキャラクターだったか。まるで脳が霞んだかのようにその人だけが思い浮かばない。

誰だったか、気の抜ける見た目のマスコットを好きな人なんてそうそういないだろうに。

しかしこのマスコットの写真を誰も必要としていないのなら、もうこの土産屋にいる意味もなくなってしまった。

誰に送るか分からない写真に頭を悩ませながら踵を返し、帰路にっこうと長い黒髪を翻す。

「あれ？天羽さん？」

振り返って帰ろうとしたのはいいものの、今度は見覚えのある金髪に目が惹かれ、またもや立ち止まった。

白いワンピースの上に黒いジャージを羽織った金髪の女性が機嫌良さそうに通り過ぎる。毛先の桃色がなく、前にあった時よりも背が高いが、あの何とも言えない雰囲気と、ハーフ顔は確かに知り合いの女性だった。

こちらに気づかず路地へ知らない人と入っていく彼女の背を見送りながら、立ち止まり首を傾げる。

「垣根さんと一緒じゃないって珍し。浮気とか？」

高校生で年上の先輩。どうやって知り合ったのかはあまりよく覚えてないが、見た目よりもだいぶ優しくて人当たりのいい人だ。

いつも恋人―恥ずかしさからなのか互いに否定するが―と二人で仲良くしている印象がある彼女だが、少し様子が違う。

というのを見た目からは考えられない清純なワンピースを着た珍しい姿で、これまた珍しく小太りの男と歩いているからだ。下種の勘繰りをしてしまうのも仕方がないのではなからうか。

しかし、

「まー、あの人たちに限ってないか！」

垣根さんならともかく、あの天羽さんに限って裏切ることはないだろう。

彼女らに背を向けて歩き出すと、心地よい風が髪を撫でる。何も感じぬまま、何も思わぬまま、私は屋台へ向かった。

上からの命令はめんどくさいものだった。

御坂美琴の無力化、そして今度は彼女のクローン、妹達の確保。面倒な任務だが、やれと言われたら仕方がない。

だからロボットを使って情報を集め、ようやく一人の女を捕まえた。

「妹さん、という呼び方は妹達の通称から来てるんですか？」

後ろを歩く頭の悪そうな女に声を掛けると、誰もいない開けた場所へ進む。小さな貯水池と大きなパラボラアンテナが建つここは雑木林と繋がっており、人目もないので追い込むにはもってこいだ。

「それとも、本物の妹として紹介されたのかな？まあ、どっちでもいいか」

池にかかった木製の橋を渡りきると足を止めて貼り付けた笑みで振り向く。

「僕もね、その妹さんとやらを保護するように依頼されてまして、よろしければ、お互いの情報を提供し合いませんか？」

自分の言葉に後ろを歩いていった金髪の女が優しく目を細め笑う。背が高いせいか若干威圧感を放つその女は警戒心も見せずにニコニコとそこに佇んでいた。

「ふーん？悪いけど、名前も目的も名乗らないような人間に話せることはないんじゃないかにやー？」

「ま、そうなりますよね。でも、そこをあえて目を瞑って、手掛かりとやらを話してくれないかなあ」

彼女は物怖じせず眩しいスパンコールを乗せた顔で犬のように人懐っこく笑う。場にそぐわない柔和な笑みの彼女に苛立つてしまふのは何故だろうか。

その煌びやかな顔が腹立たしかった。

「でないと、お薬を使って無理やりってことになるよ？」

鬱蒼と生い茂る木々の隙間から犬や猫を彷彿とさせる四足歩行のロボットが静かに顔を出す。

チタン合金と合成樹脂から作られたロボットは静かにくぐもったモーター音を唸らせて女を囲むと、犬のマズルに似た顔面から伸びるホースが鞭のようにしなり、地面に小さな穴を開けた。

「お薬で無理やり？何それ、エロ本の読みすぎじゃね？」

「あまりふざけたこと言っていると、死ぬよ、君」

T：G Dは捜索用のロボットたちであれど力はある。可愛い犬だと侮るこの小娘如き、何とでもなる。

まずはふざけた口調で嘲笑う目の前の女をめちやくちやにしたい。妹達の行方を上から探せと言われていたが、この馬鹿な女で遊んでからでもいいだろう。

「キミには無理だよ」

触手のように伸びたホースを軽々と避けて朗らかに笑うと、女は橋の手すりに飛び乗る。

ただでさえ背が高いというのに、更に高く見下ろす彼女の視線は不愉快だった。

高位能力者ゆえの圧倒的自信、それが癩に触る。優しい笑みなのにどこか悍ましさが残る彼女の顔は悪魔にも見えた。

「そうかな？君程度の能力者なら僕でも何とかできちゃうと思うよ？大能力者^{レベル4}」

「あれ、あたしのこと知ってるの？」

「第七学区の病院で働いてるんだっけ？随分とお優しいんですねえ！優しすぎて反吐が出ちゃいますよ」

女の顔が少し歪む。やはり見た目通りの馬鹿で浅はかな女だ。

知らないとも思っていたのだろうか、自分の評判を。

彼女の名前は天羽隼糸。第七学区の名物看護師で、大能力者^{レベル4}。

太陽すら霞む眩しい金髪に、緑と赤のぼんやりとした瞳、煌びやかな化粧で隠した素顔と長身で女らしい体は男なら一度見たら忘れられないだろう。

彼女の能力は『^{リカバライザー}肉体支配』。

自他の電気信号を操って傷を塞ぐ究極の回復役。おまけに自分の体に掛けられたリミッターを外し、化け物並に肉体を強化できちゃう厄介な能力。

いつか敵に回ったら厄介なことになるのは目に見えていた。

どんなに重傷でも、どんなに死にかけてでも、彼女にかかればあつという間に治され、再び『元氣』になってしまう。

人を殺し、殺されるのが日常茶飯事である暗部にとってそれは非常に迷惑な能力なのは明白だ。昨日殺したと思った相手が次の日に生き返って復讐でもされたらそれこそ永遠に物事が解決しない。

しかし彼女は暗部に属しておらず、表の人間。脳内お花畑の馬鹿で役立たずなメスガキ。

そのため上層部に警戒されることも、危険視されることもなかった。

馬鹿な奴らだと、笑ってしまふ。暗部にいないからなんだというのだ。

なんの役にも立たない能力を振りかざして聖女ぶる偽善者の危険性を理解していたのは、他ならぬ自分だけだった。

だから個人的に能力のデータは確認していた。外見のデータもインプットされていた。

そんなことも知らずに不思議そうに見下ろす女が哀れに思えてくる。何も知らぬままこの場に立っている彼女は可愛そうにしか見えない。

「善人気取りのクソビッチが、観念して喋っちゃえば痛い目を見なくて済むよ。じゃないとツ！」

T：GDに命令を下し、彼女に飛びかからせる。長いホースと重い体を思い切りぶつけ、橋から落とそうと機械が一斉に動く。

これは勝つたと、一人ほくそ笑む。やはり彼女の情報を知っているのは大きなメリットだ。

彼女の弱点、それは生き物以外に能力が効かないこと、物に触れなきや干渉出来ないこと、そして肉体を強化するにしても限度があるということ。

リミッターを解除すると攻撃とともに体に大きな負荷と痛みがかかる。彼女が痛覚を消さない限りたかだか大能力者^{レベル4}程度では長期戦は厳しい。

また、彼女ではないが^{ランペイジドレス}下位互換の似た能力の場合だと心身に負担がかかり、特に脳には激痛が発生するらしい。

それに加え、骨や関節など肉体の強度はそのままのため、彼女の細腕では強化してもせいぜい重い物を投げ飛ばせるくらいだろうか。

そんな欠落品の能力者がT：GDに勝てるとは思えない。

「喋らせたいなら、こんなロボットに頼るなよ」

「なっ」

しかし想像とは違い、砕けるような音と共にT：GDが地面に落ちる。片手で頭を握り潰すと、柱から降りてゆつくりと歩み始めた。

データと一致しない事実を目を見開く。ここまで強化されるとは、どのデータにも書かれていなかった。

「もしかして、あたしのことが弱くて優しい白衣の天使とでも思ってたのかな？なんかごめんねー？」

何かがおかしい。データが改ざんでもされたのだろうか。

場に似つかわしくない落ち着いた優しい声が鼓膜を揺さぶる。ゆつくりと歩みを進める彼女からは、得体のしれない恐ろしさがひしひしと感じられた。

どうしようか。

ロボットを全滅させられたら手に負えない。どうにかして彼女の歩みを止めなくてはいけなかった。

必死に頭で考えながら、ポケットに手を入れる。何か勝つための道具がないかとポケットを弄る手だったが、指に硬い何か当たると自然と口角が上がった。

そうだ、ナノデバイスがあった。

血液に軍用のナノデバイスを注入する、バルーンハンター中の御坂美琴に注入したものと同じ、体の制御を奪うナノデバイス。

インフルエンザのような症状を生み出し、戦闘不能に持ち込むこれこそが、戦況を変える唯一の手段だった。

しかし問題はどうかやって打つか。

ナノデバイスを打つのは蚊に似た極小のロボット。その名も
タイプ：モスキート
T：MQ。

血も流すことも、痛みを感じることもなく打つことが可能だが、対象が動いていると注射針をさせない。

「なら、君じゃなくてさっきの子を連れてくるとするかな」

「……は？」

一瞬でも彼女の動きを止めれば僕の勝ち。

早速ロボットを起動させて、ゆつくりと進む彼女を背にして雑木林

に逃げ込む。頭も弱い馬鹿な女、おつむの足りてない奴の思考を止めるのは案外簡単だ。

相手の予想と反した行動をとればいい

大胆な行動に反応できないマニュアル人間な、単純な脳みそしかない女ならそれで十分だ。

その一瞬だけで、ナノデバイスは注入できる。

「ちよ、ちよつと、待てつてのっ！っあ、あれ？」

思惑通り、一瞬脳の動きを止めた彼女は足から力が抜けて音もせず汚い地面に倒れ伏す。

「まさか、こんな簡単な陽動に引つかかるとは、見た目通り馬鹿なんだね！」

「つく、う、立て、ない」

「無駄無駄、今打ち込んだのは体の制御を奪うナノデバイスだからねえ。貴重なんだからなるべく使いたくなかったんだけど、体を強化する能力者ならこれが一番有効的だしね」

金髪と大きな胸を揺らしながら必死に立ち上がろうとしても、立ち上がることはできない。太ももの、恐らくナノデバイスを注入した場所から血を垂らし、地面に寝転ぶ彼女はとても滑稽だ。

「……ひよつとして、御坂美琴の頼みでこんなことやってんの？見返りも無しに？他人のために？そんなんでこんな目に遭ってるんだから、お笑いだよねえ」

息を荒げ、力なく倒れた女を覚めた目で見下ろすと、彼女は何か言いたげに睨む。

馬鹿な女の意味のない威嚇。怖いはずもない。

「しっかし、あれも酷い女だねえ。無関係の人間を言葉巧みに巻き込むなんて。やっぱり超能力者なんてのは、みんな」

クズばかり。そう続けようとしたところで倒れた馬鹿の口から言葉が漏れた。

「お笑いはお前の方だろ」

「あ？」

「見返りを求めるなんて、テメエの粗末なもんと一緒に小さい器だな。」

あたしの愛はそんなもののためにあるわけじゃねえんだよ」

挑発的な目線に思わず笑いが出る。戯言を呟く女があまりにも滑稽すぎた。

火照った顔で絶え間なく荒い呼吸を吐き、視点の定まらない開いた瞳孔で笑う姿は、強がりには見ええず、馬鹿馬鹿しいだけだった。

「はっ、他人に精神委ねてちや二流、その上与えられた役割も果たせないんじゃ三流以下だよ。なのに何が愛だよ、馬鹿かな？」

「自己紹介かよ。イキって上から目線でペチャクチャ御高説語るくせに、自分には他の奴が開発した玩具おもちゃでオナつてんじゃねーか、ダツセえな、っ、うがつ！」

あまりの口の汚さに思わず足がでる。白いワンピースを汚すように強く腹を蹴ると、透明な唾液を撒き散らしながら小さな呻き声が足元から漏れ出した。

芋虫のように丸まった背中を抱いて、裾の余った真っ黒い男物のジャージを強く握りしめる彼女の顔は綺麗なままだった。

「ウルセエな！上からも言つてんじゃねえぞ！結局、何も出来や、しなかったじゃねえか！役立たずなんだよ！テメエは！御坂美琴も！ゴミしか使えないなんて！飛んだ災難、」

腹立たしい。

何回も、何回も、腹を強く蹴る。靴が彼女の腹にめり込む度に髪が、胸が、ワンピースが揺れる。

痛みに耐えながら必死に唇を噛む女は、最後はうめき声の一つも言わなくなった。

それでも怒りは収まらず、蹴りを入れると思いを消すほどの高い音が丁度蹴っていた女の腹部から鳴り響く。

「ん？電話？あー、良かった、危ない危ない。情報聞く前に死なれちゃ面倒だ。あーヤダヤダ、下等な奴ほど人をイラつかせるのが上手くてさ」

突如鳴り響いた電話の着信音に我に返り、足を退かすと後ろに座る機械で出来た犬の群れに振り返る。

ワン切りだったようでもうそれ以上音は鳴らなかった。

女の電話からの音のせいとはいえ、止められて良かった。殺してしまつては意味がないのだから。

「T：GD、この女を運んどい、T：G、？」

何事もなかったように犬どもに命令を下し、頼まれた用事を済ませようと歩き出す。しかし、命令を下してもロボットは一步も動かない。

接触不良でも起きているのかとT：GDに手を伸ばすが、それは叶わなかった。

「あ？っか、あ」

T：GDは愚か、自分の体すらピクリとも動かない。

命令を再び下そうと口を開くが出てくるのは掠れた空気だけ。まるで金縛りにあったように体が動かず、声が出ない。

何が起こっているのか分からない体の異変に瞳孔が見開く。冷たい汗がいたるところから流れ出し、初めて感じる言語を絶する恐怖が背中を伝う。

「僕を蹴つて、満足した？」

地面を踏む音がやけに大きく聞こえた。

聞いたことのないソプラノの少年の声に汗が吹き出る。動かない体は小刻みに震え、あまりの悍ましい声に体が冷えていくのが伝わった。

「さて、改めて自己紹介させてもらいましょうか」

後ろから耳元で囁くように、吐息の多い声が静かに呟く。息が掛かるほど近い距離、背中に感じる暖かさと柔らかさは恐ろしさを増幅させていく。

得体のしれない恐怖、まるで蛇に睨まれたような背筋の凍る恐ろしさが脳を支配した。

「初めまして、藍花悦と申します。超能力者の第六位レベル5って呼ばれてる、ちよつとスゴイ人です」

トンっと、肩を押される。自由の聞かない体はいとも容易く横転し、仰向けに倒れると鈍い痛みが体に広がった。

逆光で見えない女の顔がこの世界で何よりも悍ましく感じてしまふのはなぜだろうか。

「っあが、あ」

「嗚呼、ごめんなさい。キミの喉、潰してしまつたから何言つてるのか分からないんですよ」

動かない口を金魚のように必死に動かしても、女はトントンと自分の首を指差し、目を細めて薄気味悪く笑うだけだった。

不気味な笑顔に背筋が凍る。しゃがみこんで顔を除く悪趣味な女の顔を殴りたくても、動かない体はそれを叶えることはない。

「ふふ、なんでしたっけ。見た目通りの馬鹿？ 酷い女？ 善人気取りのクソビッチ？ 自分のこと言えるんですかね」

「っう、が！」

なんとかして応援を頼もうと動かない手で携帯に手を伸ばす。しかし、手首を捕まれ、その目論見も白紙に戻った。

どンドン輪郭がぼやけてくる彼女の怒気を含んだ声に脂汗が溢れていく。血の気の引いた冷たい体には、彼女の手は熱すぎた。

「だーめ。他人に精神委ねていては二流なのでしよう？ それにこれでは与えられた役割もできないので三流以下ですね」

手首から撫でるように指を絡ませると、薄い笑い声を耳元で囁く。

「女と手を繋ぐのは初めて？」

繋いだままの手はキャンディーを噛み砕くような軽い音を響かせ、耐え難い痛みを全身に広げていく。

リングを手で握りつぶしたこのようにぐにやりと曲がつた手に恐ろしいほどの痛みが走ると、嗚咽を漏らし、喉を痛めるように叫ぶ。

「これから先垣根くんの邪魔になつたら困るんです。だからぼくはキミを痛めつけて、ぼくに恐怖を抱かせようと思うんですけど、どう思いますか？」

「がつ、がぎ、ねッ?!」

「そうですよー、垣根帝督くん。第二位さんですねー、知ってます？ 彼、ぼくの好きな人なんです、彼を愛してるんです」

「あがッ！」

「彼に迷惑かけるなら、ぼく、キミのこと絶対に許しません。キミを観測し続け、地の果てまで追いかけますからね？ 忘れぬように」

叫び声に動じもせず、女は恍惚とした表情で頬を染めて呟くと、恐怖を煽るような笑顔で冷たく見下ろす。

名状し難い彼女の悍ましい笑顔に震えが止まらない。もう全て終わったかのように立ち上がって金縛りを解いた女が堪らなく恐ろしかった。

「う、うわああああああああつ!!」

ようやく動けるようになった体を必死に動かして雑木林を突っ走る。無我夢中で足を動かし、コンテナ置き場へと逃げ帰った。

恐ろしい怪物から逃げ出すほど、もうプライドは壊れて見る影もない。砕かれたプライドはただの復讐心へ変わり、脳にあるのはあの忌々しい女のことだけだった。

「クソガアああ！小娘があああ！僕を見下しやがってええ!!」

ボロボロになりながらコンテナ置き場へたどり着くと、止めてあった大きな大型トレーラーを見上げる。なんの変哲も無い地味で大きなトレーラー荷台についたシャッターをボタン一つで開くと、艶のある黒いボディが隙間から覗いた。

「やはり情報だ！最初から能力を把握していれば！僕が負けるなんてありえない!!」

現れたのは巨大なカマキリの姿をした大きなメカ。一人を灰にできるほどの火力を持つロボットがあんな女に負けるはずがないと、一人笑う。

「T：M T！目立つから使用を控えていたが、捜索用のT：GDとはタイプ：マンティスパワーが桁違いだ！能力のスペックを理解した今！僕が負けるはずない！」

この屈辱、ただ殺すだけでは到底治らない。ズタボロにして捉えて、女に生まれたことを後悔させてやる。凌虐の様子をネットの世界に配信して、心も体も壊した上で、社会的にも抹殺してやる。

そのくらいしなくては、煮え繰り返る怒りは静まらない。

どんなことをしてやろうか、どんな辱めを受けてもらおうか、どんな方法であの体を犯してやろうか。頭の中に出てきた復讐後の無様な哀れな姿に興奮で血潮がたぎる。

あの女を地獄の底に落としてやらなきや、気が済まなかった。

好きな人がいると言っていたあの女が、女としての尊厳を破壊され、どうせ純潔では無いとはいえ上から散タイキって罵倒していた男に好きにされ、好きな人に見限られたらどれほど無様だろうか！

「本当に？」

滑稽な女の未来予想図に笑っていると、頭上から声がした。

「つな、なぜ！」

「足トロいねー、馬場くん」

勢いよくその声に顔を見上げると、足を組んで見下す女が太陽を背にして笑っていた。

くすくすと、少年のような高い声が耳障りで、鬱陶しい。

九月後半の茹だる暑さにやられたのか、動かなくなっていく思考と定まらない視線に違和感を感じながらも女を睨むと、その人間は両手で顔を支えて哀れな子供を見るように呟く。

「言いましたよね、迷惑かけるなら許さないよ」

「ふ、ふふ、なんとでもいうがいいさ。誰であろうが、T・マンティスの前では——！」

「お取り込み中申し訳ないんですが、これならもう動きませんか？」

「——へ？」

蜃気楼のように霞んでいく視界に車椅子に座る白衣の男が映る。その人間の顔は、解像度が下がったかのように朧げで、上で見下ろす人の顔も見えなくなっていた。

「まあ、何？鬼ごっこはキミの負けってことで、いいよね？」

目の前で話す人間の顔が認識できない。笑っているように見えるこれは、一体誰だったか、もう思い出せなかった。

髪の色は、目の色は。何色だったか。

どんな顔だったかすら、認識できなかった。

ぐらりと、空がひっくり返る。痛みもなく再び地面に倒れた体はもう動かない。苛立ちも、腹立たしさも感じなかった。

どうしてこうなったかも思い出せない。

「食峰ちゃん？一人処理したよ」

意識が遠のく中、ゆらゆらと揺れる白い炎のような人間が聞いたことのない少年声で呟く。黒い携帯電話をに話しかけるそれが誰で、女なのか、男なのか、人間なのかも分からなかった。

覚えているのは藍花悦と、垣根帝督いう名前だけ。

今まで話していたこれは、誰だった？

何もかも忘れてしまった脳はその場でぷつりと、糸が切れたように動きを止めた。

66話：合流

ビルの間を通り抜け、先程別れた友人の辿った道を通りながら声をあげる。

思っていたより上擦った声は、人通りが疎らな道を小さく通り抜けた。

「天羽先輩が誘拐された!？」

先程も別の場所で名前が出た友人が誘拐をされたと聞けば、誰だつて大声を出してしまう。

それも、今まで何度も危険に巻き込んでしまった大切な友人の一人、心配にならないわけが無い。

『まあ、大まかに言えばそんな感じだ』

「つて、何でそんなに冷静なのよ……」

頭上に登った真つ白いカブトムシの言葉を反復させながら両足を動かすと、それは平坦な声で淡々と事実を述べる。

誘拐なんて物騒なことに巻き込まれているのがこのカブトムシの製作者の大事な人だというのに随分と声は冷めていた。

『冷静に怒ってるだけだ。お前に八つ当たりするわけにもいかねえし』

『嘘つき、天羽の部屋壊したのに』

『壊してねーよ。綺麗にしてやっただけ』

『お洋服までボロボロにしたのに？ベッド半分折れてたのに？』

『……俺は悪くねー』

垣根帝督の音がするその虫は、何食わぬ声で呟くが、すぐさま知らない少女の音が聞こえた。聞き覚えのない幼い少女の声は、記憶にある垣根帝督のイメージからかけ離れていた。

「子どもの声？変な犯罪犯してんじゃないでしょーね？」

『天羽が拾ってきたガキだ。あんま気にすんな』

あっち行つてると、マイクが拾うギリギリの音量で付け足す聞き覚えのある大人の声は、夏休みに会って、なんなら戦った科学者の女、テレスティーナのものだった。

『とにかくだ、テメエのご学友にうちの研究室長が連れ去られて、おまけに妹達シスターズの一人もない。そこにテメエが病院にやってきた。気になつて動向を追つたら、お前と同級生の会話が聞こえてきたもんで、助け舟を出したつてわけだ』

「なるほどね……確かに先輩、あの子達の体調管理してるつて言つてたから、接点はあるかも。でもどうしてこんなちっさいカブトムシで連絡して来たのよ」

随分と丸くなつた彼女は今までの経緯を簡単に説明すると、テレスティーナはカブトムシ越しても分かるほど大きなため息を着く。

疲れた声色をした彼女に大変そうだと少し同情してしまうが、彼女との因縁を考えるとそれも思えない。

それに顔を見合わせられない事情が分からない以上、簡単に信用するのともうかと思われた。

確かに、彼女の話は筋が通っている。

彼女は天羽先輩と一緒に病院で勤務しているので、妹達シスターズのことを知っているのも理解出来る。垣根さんにも会つているので、彼が知っているのも分かる。

そして私が今日、天羽先輩の居場所を病院の看護師に聞いたので、そこ経由で彼らに伝わるのも想像に容易い。

しかし分からないことが一つだけあつた。

それは彼らが顔を出さない理由。

食蜂操祈の派閥メンバーを自分でも分からないまま眠らせたこの虫を使えば遠隔でも能力を使用出来るようだし、言葉を交わして私の存在を認識しているということは視界も音声も拾えるのだろうか。

だからこそ分からなかつた。

こんな高性能な人工生命体を作つてまで顔を合わせたくない理由が。

『まあなんだ、俺らは今表立って行動できなくてな、こうやって秘密裏に行動してるつてことだ』

「なんで？ テレスティーナは、まあ、分かるけど。垣根さんはどうしてよ」

『大人の都合だ。それよりも、早くあの馬鹿を探さなきゃいけないだよ、手掛かりとかねーのか』

一匹のカブトムシから知り合い二人の声が流れることに慣れないというのに、彼らは答えをはぐらかして話題を変える。

なにか隠していると分かっても、それが何なのかは分からない。モヤモヤとした疑惑がわだかまりを作って、素直に彼らの話を鵜呑みにさせてくれなかった。

「アンタこそどうなのよ、天羽先輩のスマホの位置情報とかで探せば分かるんじゃないの？……てか、このカブトムシ使いなさいよ。飛んで回れば余裕じゃない？」

『残念なことアイツのスマホは俺の手の中で、カブトムシ達は別にリソースを割いてる。数に限りがあるし、サーチしても、05……別のカブトムシが俺と接続を切られてアイツと一緒にいるんだ。あの個体は必ず天羽のいうことを聞く、監視の目のないところに向かわせることなんざ造作もない』

声だけと言うのに目に浮かぶ垣根さんの苛立った姿に乾いた笑いが漏れると、同時に大きいため息をつく。食蜂との？がりを持つてる先輩を追えば自ずと答えは見えると思っていたが、どうやらそんな簡単な話でもないようだった。

「詰んでるのね……じゃあ監視カメラとかは？」

『……それに関してだが』

テレステイーナが引き継ぐように言葉を零す。重たい空気を吐き出すように恐る恐るとカブトムシを通して呟く彼女に、なんとも言えない不安を覚えてしまうのも当然だった。

『アイツ、相似も連れて行きやがったんだよ』

「……誰？」

少し言い淀むが、小さな声で知らない名前を口にすると一瞬互いに沈黙する。

その名前に心当たりがないが、心のどこかで少し嫌な予感がした。それはその名前と同じ名字の人物を2人知っていたから。

『木原相似、同じマッドサイエンティストってやつだな』

そしてその予感は見事当たり、思考が止まる。

「……はああああ?!先輩、また?!お人好しにもほどがあるでしょ!?!」

衝撃的な事実足に足を止めるとその場で大声を張り上げる。

道端で叫んでしまったもので、少し通行人の目が痛い。恥ずかしくなつてその場を離れるが、それでも叫びたい感情は無くならない。

テレスティーナといい、天羽隼糸という友人は一体どんな思考回路を持っているのだ。

甚だ疑問だった。

『お人好しじゃなくてただの馬鹿だあんなの。クソが、あの女、知らねえうちにまた拾いやがって。しかも、男だぞ男、それも自分を誘拐した奴。ふざけてやがる。俺じゃダメだったのかよ、俺よりのクソナードのほうがいいってか。クソムカつく。俺こと好きなんじゃねーのかよクソ』

「誘拐?!ねえ先輩って大丈夫なの?!ちよつと世間知らずにも程があるでしょ!いや、本当に!先輩三歳児なの?!」

イカれているとしか思えない。

垣根さんの話を、テレスティーナの話を全て真実としたら、天羽隼糸という先輩はとんでもないアホなんじゃないか。そんな仮説が脳裏に過ぎる。

2つ上の大人びた先輩。

クラブに行つて、チャラチャラした男にナンパされてそのまま夜の街に吸い込まれ朝帰りをしていそうな見た目のギャル。

お世辞にも頭が良さそうには見えないが、大人な雰囲気や大能力者^{レベル4}ということもあり、ちよつと抜けてるところはあつたが『大人な先輩』として接してきた。

しかしどうだろう。

彼らの話から聞く彼女は、大人な先輩たる人物なのだろうか。

もしかしたら彼女は、私が思うよりも幼くて、お人好しどころかおバカで、大変面倒な人なのかもしれない。

そう思うと最早天然記念物レベルの思考回路に呆れて涙が出そうだった。

『おうおう、うるっせえなガキども。それは本人に言え。とにかく、同じ木原がいる以上、監視カメラやそれに準ずる機械は使えないと思え。アイツは機械に強いしな』

「仕方ない、婚後さんの所に行ってみましょう。なにか掴んでるかも」
『そうだな、面倒な輩も動いてるって聞くし、早く見つけた方がいいぞ』

小さくため息を吐いて面倒な先輩に頭を悩ませながらテレスティーナの言葉に足を急がせると、ふと口を開く。

「……アンタ、随分丸くなったのね」

『耳、腐ってんじゃねーか？』

今まで聞いたこともない投げやりな彼女の言葉は、今までの印象とは比べ物にならないほど優しかった。

どうやら、異常なほどの優しさとは人に伝染するらしい。

変わってしまった昔の悪人に笑みがこぼれると再び前を向いて友人を探し始める。

黒い髪を探して真っ直ぐ道を進むと、姫カットの手入れの行き届いた髪が視界の隅でひらひらと舞う。先程別れたばかりの綺麗な黒髪に、また口角が上がっていた。

「あ、婚後さん！アンタ達、ちよっと黙っててよね」

頼もしい友人の背を見つけると、ポケットにカブトムシを突っ込み駆け寄る。歩道に立ち尽くす彼女に疑問を抱くも、満面の笑みの婚後さんを見ると疑問よりも安心が脳の割合を占めた。

「まあ、御坂さん！えっと、派閥の方々は……？」

「ちよっと、知り合いが助けてくれてね。あれ、その猫は？」

笑顔でこちらに振り返った友人の手には、一匹の黒い子猫が抱えられていた。ふわふわで可愛い子猫にどこか見覚えがあったが、それよりもまずは子猫を抱えてこの場を動かない婚後さんに困惑していた。

頼みごとをほっぽって別のことをするような人でもないし、かと言って猫をに預けぬままぼんやりと立っているような子でもない。

何か彼女たちと関係があるのかもしれないと淡い期待を抱いてし

まう。

「ああ、この子は妹さんとはぐれた場所におりまして、いま湾内さんが読心能力者の方を……ではなく！御坂さん、どうしましょう！」

「どうかしたの？」

「実は、何か知って居そうな女性が、怪しい男性に連れて行かれまして！私は湾内さんを待たなくてはいけないと、それで、彼女だけが……！」

「えっと、落ち着いて？ゆっくりでいいから」

期待を裏切らず、妹達シスターズに繋がる手掛かりを見つけたらしい彼女に安堵すると、今度は別の問題が浮上する。道に指を指しながら早口で捲し立て、焦ったように子猫を強く抱きしめた。

「少々、長くなるのですが……よろしいでしょうか？」

そういつて簡単に今まで起きたことを話すと、婚合さんはようやく落ち着きを取り戻す。

あの子と別れた場所に何かを知っているような口ぶりの女性が現れ、行動を共にしたが、そのあと現れた妹について話があると声をかけてきた小太りの青年に婚合さんの代わりについていった。

要約すると、そんな感じ。

派閥メンバーに監視され、垣根さん達と話していた時に起きたらしい出来事は、確かに焦りを感じさせた。

大まかな話の流れは理解したが、その女性にも、男性にも心当たりはなく、謎は深まるばかり。

もしかしたら垣根さん達が知っているかもと考えもしたが、婚合さんの前で出すわけにいかないし、これだけのヒントからその人物へ辿り着くのは難しいだろう。

「どんな人だった？」

「背が高い金髪の女性です。お化粧をされてて、あまり学生らしくは見えませんでしたね」

「うーん、心当たりはないわね……」

妹達^{シスターズ}について何か知っていそうな学生に見えない金髪の女。もしかしたら潰した研究所の関係者かもしれないし、もしかしたら外部から来た人かもしれない。

確実にその人物に辿り着く手掛かりはなさそうで、この件も手詰まりになってしまった。

頭に手を当て悶々としてしていると、何かを思い出したように婚合さんが声をあげ、子猫の腹を見せながら私の目を見つめた。

何か重要なことでも思い出したのかと首を傾げると、彼女はとても嬉しそうに猫を抱きしめた。

「そういえば、おそらく虹彩異色症でしょうか、一つの瞳の中に赤と緑が綺麗に混じっていましたわ。あんな瞳の方はそういないでしょうから、そこから調べれば……！」

「……やっぱり、心当たりむちゃくちゃあるわ」

赤と緑を一つの虹彩に持っている人間はそんなに多くおらず、そして一人だけ、そんな色の瞳を持っている友人がいた。

忘れられない色の瞳を持つ彼女は、間違いなく婚合さんが出会った人物で、この事に大きく関わっている。

予想が確信に変わる。何をしているか分からない先輩に不信感が募っていくのも無理はなかった。

今すぐにも彼女を問いただして、理由を教えて欲しい。何をしていて、どんな目的があるのか。

底抜けに優しい人が、どうして垣根さんに何も言わず食蜂を手伝っているのか一生懸命考えても分からない。

「あれ？えつと、御坂さん、でいいですかね？よく会いますね」

「佐天、さん……」

答えの出ない問題にため息をつくとき、今度は別の人に話しかけられる。

婚合さんと同じ黒髪に、私たちとは違う学校の体操服を着た彼女は、大切な友人の一人、会えたことへの嬉しさが込み上がるが、自分のことを忘れている現実に浮ついた声は徐々に覇気を無くしていく。

だがそこである事に気がつく。彼女が歩いてきた方角が、先ほど婚

合さんが指差した方だと。

黒い携帯電話を耳に押し当てると眩しい晴天を仰ぐ。

コンテナが積まれた操車場から見える空にはたくさんのビルが立ち並んでいた。

「食蜂ちゃん？一人処理したよ」

地べたに寝転ぶ横幅の広い青年を見下ろして雇用主に連絡をしてみると、相手は機嫌良さそうに電話越しに笑う。

『どおーも、ありがとねえ？藍花サン？』

「その名前はやめてほしいんだけど」

『えー？だってこっちが本名じゃない？大切なオトモダチですものお、ちゃんと名前呼び合いましょお？』

明るい声で呼ばれた名前は非常に不愉快で、低い声で慎重に呟くが電話相手は恐ろしくもないようで相変わらずフワフワとした態度であたしを苛立たせる。

「オトモダチ、ねえ……バレたくなきゃ手伝えって脅迫まがいのモーニングコールして来たのは誰でしたっけ？」

『あらあ？その携帯、垣根さんに見つかる前に回収してあげたの、だーれだ☆』

「……それとこれとは話が別じゃんか」

男が好きそうな甘ったるい声は可愛らしくあれど、どこか奥で冷たさを感じる。

名前を知る少女の小間使いを強いられているのはさして悪いもの

では無いが、それでも腹立たしい口調には苛立っていた。

『とにかく、ちゃんと働きなさいよお？垣根さんに教えて欲しくないならねえ』

「ちよつとー……切られちゃった」

面倒そうな声で一方的に通話を切られる。

我儘な女王様に少々呆れながらも、久々に感じる年下女子に振り回される感覚は少しだけこそばゆい。

だから強い言い返せないのだろうか。姉としての性というか、母性というか、人の願いを叶えてあげたいと動いてしまう。

なんとも都合のいい体だとは思っているが、そうやって生きているのだからしかたない。

「お相手はなんと？」

「次も頑張つてだつてさー。これ、馬場くんの携帯ね。主犯の無線とかの情報あると思うから探してよ」

後ろから車輪を回す音が聞こえると、染めた灰色の髪が視界の下に映る。

随分目線の低いその男に先程押収した携帯電話を投げつけて、地面に倒れた青年をしゃがんで覗き込むと、木原相似は大きく息を吐く。

「はあ、貴方の言うことはクソほど聞きたくありませんが、仕方ないです」

「よろしく。あとは……この子どうしようか」

足元に転がる青年、馬場くんの頬を指でつつきながら彼の巨体を隠す場所をボツと考える。

何もかも忘れて眠りこける彼を眺めていると、車輪が軋む音が響き、影が差した。

「殺してないんです？ダメですよ、殺さないで。慈悲とは生かすことだけではありませんので」

「でも、幸せとは生きることじゃない？それに人を殺すのは嫌だしね」「貴方が愛してやまない垣根帝督も人を殺していると言っのに？」

冷たい目で見下すと馬鹿にするかのように鼻で笑い飛ばす。

滑稽とでも言いたいのか、神経を逆撫でするような歪んだ口元が腹

立たしかった。

「貴方も同じ土俵に立てなければ、彼に愛想を尽かされるだけですよ」
「構わないよ。だってそもそも愛なんて彼は持ってないもの」

「可哀想に、好きな人に愛されたこともないんですか。でもそうですね、貴方みたいな人、嫌われて当然ですよ。これからも、貴方は誰にも愛されずに死ぬんでしょうね」

「そうだよ。それがどうかした？」

「愛も知らない女が愛と正義をほごくのですか？見当違いな救いをばら撒く貴方はママゴトをしているようで、非常に滑稽ですよ」

「滑稽に見えるのは、アンタの脳が足りないからじゃない？」

ゆつくりと立ち上がり、今度はこちらが見下ろすと相似くんは細い目をさらに細め、歯を食いしばりながら眉間に皺を刻む。なんてことの無い言葉だったが、彼にとっては吐き気を催すほど気色悪い言葉だったようで、吐き捨てるように罵詈雑言を口にした。

「……貴方のこと、本当に嫌いです。死んでくださいよ、はやく。そしてたらきつと、世界は平和になる」

「あたしが死ぬくらいで訪れる平和なんてこの世にないよ。それよりこの子移動させとくから、データ解析早めにやっというてよねー」

面倒臭いスイッチを入れてしまったため息をつき、馬場くんを大きなぬいぐるみのように抱えてトレーラーの背面に下ろす。

体積のせいで引き摺る形になったのは申し訳ないと思うが、それしか方法がなかったので許して欲しいと心の片隅で祈る。

影のあるギリギリのスペースは、傍目からは人がいるとは思えないだろう。

「ごめんねえ、酷い事言っつて」

酷いことをしてしまつたと、一人悩む。

暴言や脅しなど、ある程度の脅しとはいえ少々言い過ぎた気がしてならない。手の骨も、治したとはいえ折つたのは事実だ。

誰にも優しく、誰にも平等に幸せを与えなくてはいけないというのに、自分の意義を失つたような気がしてならなかった。

「そんな人間にも謝るんですか」

「そりゃあ、結構言い過ぎちゃったし。まじあたし、ゆーて好戦的じゃないんよ？ 穏健派というか、あんま暴言吐かないし」

「貴方の言葉は、彼ほど下衆なものではないと思うんですけどね。謝る必要はないかと」

しかし木原相似という男は容赦のない奴のようで、ゴミを見るときの目付きで吐き捨てる。

酷い言いように呆れ返っても、その男は捕まえた青年を馬鹿にするように笑うだけだった。

「こういうタイプの馬鹿はきつと貴女を打ち負かした後、手酷く犯してどこぞのポルノサイトに映像売りつける事くらいやるでしょう。もしそれでも、謝れるんですか？」

「あたしが酷い事言った事実は覆せないし、あたしはなんとも思わないよ。男子らしい復讐の考え方で可愛いじゃん」

クソほどどうでもいい。

興味もないことをペラペラと、わざと怒らせようとしてるのが必死に捲し立てるのは笑ってしまうくらい無駄な努力だ。

馬鹿になってまであたしに失態を犯させようと、奮闘する彼が可愛く見える。

足が動かないのも相まって、垣根くんよりも更に『あの子』を重ねてみてしまっていた。

だからあたしは笑って木原相似を見ることしか出来ない。

妹と同じ、車椅子に乗って誰かの助けを必要とする彼に、一種の興奮を覚えてしまっていた。

「……ああ、貴女なんて大嫌いです。善人すぎて反吐がでる。せいぜい汚いおっさんに公衆トイレとかで犯されればいいじゃないですか？」

「あまり保護対象にセクハラをしないでくださいますか？」

随分と酷いことを言われている。それでも何も言わずに悪態をつく彼を優しく眺めていると不意に誰かから横から抱きしめられる。

天国と同じ匂いのする真っ白い少年の腕が胸の下を強く締め付け、渡すまいと至近距離で低い声で呟いた。

「ちよつと、05、邪魔。そつち終わったんでしょーね？」

「はい、車はもう動きませんよ。それでこの男共はいかがいたしましたしょう？」

笑顔でトレイラーの運転席から降りてきたそいつは、爽やかな笑顔で倒れた青年と車椅子に乗った青年を交互に見やる。

データの消去や車の意図的な故障、大きなロボットとの接続解除、その他諸々を嬉々としてやったこの生き物は、まだ働きたいと言わんばかりにあたしの肩を強く掴んだ。

「何気に私を数に入れなくてくださいよ人造物」

「あ？無断で殺さないだけマシだろボケ」

うるさく口論をする二人を横目に閉まりきったトレイラーを確認すると、05を引き剥がして車椅子の取っ手を握る。

ゴム製の滑り止めと、懐かしい重みに思わず口角が上がってしまう。

「05、口悪い。垣根くんじゃないんだから」

「不可抗力です」

優しく05を諭して重い椅子に力を入れると、ゆっくりと車輪が回り出した。

早く撤収してしまおう。

婚合ちゃんに見つかつたら面倒だろうし、佐天さんや、ほかの顔見知りと出会ってしまったら言い訳を考えるのが大変だ。

「にしても、そんなに酷いことをしたのですか？あの取り乱し方はかなり異常でしたけど」

操車場から離れようと歩いていると、カブトムシの姿に戻った05が頭の上でふと疑問を投げかける。

「さあ……？もしかしたら、あたしが怖い人に見えたんだろうね」

何も知らずに疑問に思うそれに笑顔が溢れると、視線の下の灰色の髪が揺れる。彼の肩が跳ねるのを見逃さなかった。

「ね、相似くん♡」

車椅子越しに首を強く抱き寄せる。忘れられない夜を思い出し、手を震わせる可愛い子供の耳元で微かに笑うと、青ざめた顔で唇を噛ん

だ。

やり直しのやり直しというものは、酷く恐ろしい記憶を作り出した。

本能故の恐怖。

死を知った彼は、あたしの抱擁を恐ろしい怪物と見間違う。

67話：手掛かり

微かに香る花と化粧品の匂いが薬品の匂いを塗り替える研究室の中、マニキュアや文房具が散らばる汚い机に肘を着く。

大きな画面とコード繋がる白いカブトムシをつんつんと指でつくとパソコンのスピーカーから少女の高い声が流れ出した。

『天羽先輩、本当にここに来たのかしら？』

砂利を踏む音と共に御坂美琴が告げると、画面上に広々とした場所が映る。巨大なパラボラアンテナと、ちよつとした橋のかかった池があるその場所は、人目につかない静かなところだった。

「足跡があるからいたんだろ」

『ほんとだ』

ピンヒールの跡が残る、所々抉られた地面は誰かが争った後だと暗に伝えていた。

そしてそのピンヒールが奥に続く林に続いているのも分かってしまった。

『ちよつと！勝手に行かないでよ！』

御坂美琴の頭の上に待機させておいたカブトムシを研究室の中から操作して、その場にいないまま探索を始める。勝手に飛んだことを訴える第三位を無視して小さな機体を脳波リンクで動かし、生い茂る狭い木々の隙間を飛んで行く。

カブトムシの五感から伝わるあの女の甘い匂い。

どこかで嗅いだことのあるような優しい匂いを辿ると、木々の奥を抜け、ずっと先にある操車場へとたどり着いた。

「早速手がかりでもあったか？」

「特には」

「おっせーな、何やってんだか」

操車場につくが、何も目につくものは見つからず、ココアを入れたきたテレステイーナに鼻で笑われる。

いちいち癩に触る女だと苛立ちを露わにしても、彼女は何事もなかったかのように近くの椅子に座って静かに画面を見つめていた。

早く手掛かりを見つけないと、カブトムシを動かす。目となり、手となり、足となるこれは、自分が思っていたより便利だった。御坂が来る前に何か見つけようと飛び回り、観察する。

そうして時間をかけて見たら、あつけなくその手掛かりを見つけてしまった。

『何かあったー？』

「これみてみる」

『トレーラー？』

コンテナが積まれた操車場に少し遅れてやってきた御坂美琴に、不自然なほど大きく、広告すら貼っていない大型のトレーラーの後ろに來いと先導する。

真つ暗な影のできたそこに倒れていた人影は、この場に似つかわしくない野郎だった。

『これが婚合さんの言ってた人？』

小太りに、お世辞にも造形が良いとも言えない顔。その男が暗部の構成員だと分かったのは、滲み出るクソ野郎の雰囲気のおかげだった。

「やっぱり表沙汰に出なくて正解だな、第二位」

「ああ……クソ」

隣でココアを啜るテレスティーナの言葉に頷くと、奥歯を噛みしめる。

ムカつく。腹の虫が治まらない。

ムカつく顔のクソ野郎が天羽に近づいたことに昂り、近くにあった薄い板を握り潰すと乾いた音が研究室に響いた。

一番起きて欲しくないことが起きてしまった事実にただ腹が立つ。力任せに片手で割ったアイシャドウパレットからキラキラと彼女の髪色と同じピンク色が零れ落ちる。

今すぐ、あの女もこの男も殺してしまいたいほどムカついていた。あの女をほかの暗部と鉢合わせたくなかった。しかも、こんな男に。

どんな傷も治せる究極のお人好しを、ほかのクソ野郎に取られたく

ない。

俺以外の誰かに愛を囁くあの女を見たくない、心の底から願っていた。

『天羽先輩がこれやったのかしら。ちよつと心配ね、無事かしら』

「……なんでお前が心配すんだよ。ただの知り合いだろ」

馬鹿な考えをよそに、第三位はクソ野郎を見下ろして小さく言葉を零す。

まるで友達とでも言いたげなその言葉に、なぜか苛立ちを覚えてしまった。

『はあ？友達だから当たり前じゃない』

「……なるほどな」

友達。

呆れたように笑う御坂の言葉に心が踊る。

アイツに友達なんて居ないのに。

人に頼れず、人を好きになれず、他人を見下ろすことしか出来なくて、誰に対しても一定の距離を置く馬鹿で面倒な女が友達なんか作るわけない。

確信する。

天羽彗系は、きつと御坂美琴に興味が無いと。

優先順位の第一位はいつだって俺だと。

その結論に不服はなかった。

『逆に聞くけど、垣根さんは天羽先輩のなんなのよ』

「飼い主、そして探求者。多分な」

『何それ』

「ほつとけねー奴ってことだよ」

不思議そうな顔をする御坂に伝えたのは本心だった。

彼女を知りたい、制御したい、隠していたい。

それがあの女に対する基本的な感情だった。

交友関係だろうがなんだろうが、あの女のことを知りたい。家族関係、友人関係、恋愛関係、人生、価値観、なんでもいい。

彼女の秘密を暴くためにも、知らなければ、彼女の部屋で思い浮か

んだ推測をただの妄想と否定できないのだ。

もしかしたら、彼女は天羽彗糸では無いという仮説。

何故か思い浮かんだその仮説は心に影を差し、絡みついて離れない。

死んだということ、神に会ったということ、大人なこと。

人の脳を入れ替え、知識を入れ、他人を特定の人物として認識させる実験は学園都市ならば存在していてもおかしくない。

チグハグな精神と、いない妹、そして死を知っていることはそんな考えに辿り着かせてくれた。

可哀想な悲劇のヒロインかも知れないと、何故かそう思ってしまった。

借りたウインドブレーカーのポケットの中で手を握りしめると何かが手に当たる。

金属が擦れる音を鳴らすポケットから金色のアクセサリーたちを取り出すと、輝く項垂れながら眺め、小さく口角を上げた。

ピアス、ブレスレット、指輪、チョーカー、ネックレス。

返しそびれてしまったそれらを強く握りしめ、優越感で心を満たす。

他の人から貰ったものなど、返すつもりはなかった。

『確かに分かる気がする。あの人はちよつとあのバカに似てるから、嫌いになれないって言うか』

「上条に？」

『おかしいほどに優しいとことか、すぐ人を許したりとか、ズタボロになって帰ってくるとことか、すぐ体張るとことか……あと、何故か憎めなくて、助けたくなくなるとことか。今みたいだね』

手の中でぱきぱきと音を立てて指輪を握り折ると、御坂の言葉に顔を上げる。

画面に映る優しい笑顔の御坂が癩に障った。唇を噛んで、再び強く指輪を握り潰すと嫌いな女の笑顔が思い浮かぶ。

「……俺にとっては誰よりもムカつく女なんだけどな」

血だらけの彼女の甘い匂いと、柔らかい肉、そして冷えていく体温

が忘れられない。

ヒーローでもないくせに、必死になって傲慢にも俺を愛す彼女は、何よりも嫌いだった。

コンテナが多く積み上げられた操車場から一旦戻り、先ほどの雑木林の入り口で学友たちに一匹の猫を見せる。

湾内さん、泡浮さん、婚合さん、佐天さん、知らない猫耳帽子の少女と私。

大きなパラボナアンテナの下で猫を囲む女子中学生とはおかしな図ではあるが、人がいないこの場所はこれからすることを考えると、でも都合のいい場所だった。

「この猫ちゃんですか？」

「ええ、すみません、サイコメトリー読心能力手間をかけさせてしまって」

「いえいえ、御坂様の頼みですから」

猫耳のついたオレンジ色の帽子をかぶった顔なじみのない少女に湾内さんが軽くお辞儀をすると地面で可愛く座る黒猫の前にしゃがむ。

猫が電磁波で逃げられると困るので少し距離を置いてその様子を見ていたが、しゃがんだまま私に向けて笑う猫耳中学生と目があうと慌ててお辞儀を返して笑う。

「それで、えっと、猫とお話してきませんか？」

「いいえ、私の能力は。テレパスの類とはあくまで別物なので、会話ができるわけではありません。動物の感覚経験クオリアを断片的に読み取るだ

けですけど、この子自身が理解できない状況でも汲み取ることができるといふ利点もあるのですよ」

困惑したように佐天さんは首をかしげると、しゃがみこんだ猫耳少女は人懐っこい笑みを浮かべて返す。

どうやら彼女が湾内さんが呼んでくれた動物専門の読心能力者サイコメトラのようで、優しいことに多くのことを話していかないのにも関わらず快く黒猫の記憶を見るのを承諾してくれたようだ。

「昨日のお昼頃でいいんですよね？」

「はい。そうでしたわよね、御坂さん？」

「うん、私の妹といえるはずなんだけど……」
「では」

申し訳ないと感じながらも、頼つてしまう自分に情けなさを感じつつ猫耳少女が黒猫の頭に手を置く姿を眺める。

念じるように静かに目を瞑る少女から感じる緊張感に、なぜか自分の体も強張り、聞こえないような小さな音で息を飲んだ。

「場所は工事現場か資材置き場……背の高い男の人が一人。あ、あと女の人っぽい影が」

目を瞑り、子猫に右手を添えたまま少女は呟く。

「会話を始めました。『どういう形であれ、あちらの先手を取れる。今は構っている余裕は』『Auribus oculi fideliores suntはどうなっている？』
『ラテン語？』」

『『見ることは聞くことより信じるに値する』、何かの符牒でしょうか？』

難しい顔をして少女が言葉にした聞きなれないラテン語に各々首を傾げ、眉をひそめる。

もしこの猫が見た女が食蜂だとしたら、彼女は何を思つてラテン語なんて口にしたのだろう。謎だけが深まっていく。

「えっと、『あの少女の手を借りるのは』『白衣の天使様』『究極のお人好しなら、もしかすると』」

「白衣の天使、ですか。御坂さん、お心当たりは……」

「……一人ね」

しかし有益な情報もあつた。

知り合いに一人しかいない、それも今探している女性と同じ珍しい特徴に頭を抱えて悩む。

読心能力者の言葉から断片的にだが、天羽先輩が食蜂に手を貸していることは何と無く理解できた。

垣根さんのいう通り、食蜂が天羽先輩に手を出したのは間違いなさそうさ。

「これ以上は難しそうですね、この子も気が動転していたみたいで」

「いえ、ありがとうございます。助かりましたわ」

「では私はこれで」

一礼をして読心能力者の猫耳さんがこの場を立ち去ると、湾内さんたちはその背中を見送った。

猫耳少女の背が完全に見えなくなったところで一息ついてこちらに一切近づこうとしない子猫に視線を移す。

「それで、どうでしたか、御坂さん？」

「とりあえず、天羽先輩は巻き込まれたって感じなのはわかったわ……それ以外はなんとも」

有益な情報を得られたか聞かれるが、それに答えるのは少々難しい。

泡浮さんに困ったような笑顔を見せるのが精一杯だった。

「でもみんなありがとう、私のために。危険な目に遭わせるわけにもいかないし、あとは私がなんとかするから」

「しかし、私達もお力添えを……」

これ以上悩んでいても仕方ないと、一礼してから笑う。

後で垣根さん達に相談してみようとポケットに手を添えて唇を噛むが、婚后さんに両手を掴まれ、ハツと唇を離す。

私はとても素晴らしい友人に恵まれた。

とても危険だと言っているのに、私を信じて、私の為に力を貸してくれる、私にはもつたない大切な友人達。

だからこそ、私は彼女たちに危険な目にあつて欲しくない。

「じゃあさ、その猫、第七学区の病院に届けてくれないかな？垣根さんって天羽先輩の知り合いがいるから、見ててくれると思うの」「ですが……」

大事な人に怪我をして欲しくないと思うのは至極普通なこと。

掴まれた手を握って笑顔で返す。

傷つくのは私だけでいい。どこぞのお人好みな先輩みたいにやられっぱなしになるつもりは毛頭ないが、それでも、自分だけで解決できるのなら、友人たちを巻き込みたくなかった。

けどほんの少しのいたずら心がその感情を上回る。ポケットの中で猛抗議をして動き回るカブトムシを静電気で沈めながら、猫の世話を預ける。

妹達と、名前も聞いてない訳ありの少女なら喜んでくれるだろう。シスターズ

それに垣根さんは天羽先輩から目を離れた罰として、これくらいのこととはしてもらわなくては。

「……分かりましたわ！責任もってお届けします」

「ありがと、婚合さん」

「いいえ、御坂さんの帰りを待つのも友達としての務めですもの、当たり前ですわ！」

少し躊躇い、婚后さんは笑顔で頷く。

手を離してから子猫を抱き抱えると、湾内さんと、泡浮さんを連れて教えた病院に踵を返した。

残ったのは私と佐天さんのみ。記憶のない彼女と二人きりにいるのは少々気まずい。

「仲、良いんですね」

「うん、大事な友達なの」

少し沈黙が走る。

記憶のない彼女と何を話せばわからず、口を閉ざしたまま視線をうろちよるとさせていると佐天さんの黒い瞳と目が合う。

「あの御坂さん、さっきの話なんですけど」

「ん？何か知ってるの？」

「実は、さっきのオウブリスなんたら、ってやつ、あれ私がよく見る都

市伝説サイトの名前なんです……」

「都市伝説サイト？」

Auribus oculi fideliores sunt

『見ることは聞くことより信じるに値する』と先程湾内さん達が翻訳していたが、その名前は、意外にも全く関連性がなさそうな佐天さんから素性を明かされることとなった。

都市伝説サイト、なんて胡散臭い単語を脳内で反復させながら思考を巡らす。

もし、黒猫の記憶にでてきた女が食蜂操祈で、男の方が彼女の協力者だとしたら、なぜそんなものに彼女達は興味を示したのだろうか。

「食蜂はどうしてそんなサイトを……？」

「食蜂、って誰ですか？」

頭の中だけで言ったつもりだったが、気付かず口に出していたようで、佐天さんはキョトンと目を丸くする。

「ああ、うちの学校にいる第五位の超能力者。この件の第一容疑者、的なやつよ」

「もしかして記憶を操れるとかって言う……」

軽く頷くと、佐天さんは悩む素振りをしてまたもや気まずい沈黙が流れる。

食蜂操祈になにか思うところでもあったのか聞きたいけれど、今は彼女が教えてくれた謎のサイトの方が気掛かりだ。

「えっと、それでそのサイトの話なんだけど……」

「あつ、はい、そこは噂話を集めて実際に検証するって感じのサイトで、初春に、さつき会った時の花飾りの子に頼んでサイトを探して貰ってたんですけど、見当たらないって言われて……」

「見当たらない？」

『確かに見当たらない』

「あ、ちよつと！」

サイトが見当たらないという言葉に訝しむと、硬い感触がポケットから腕を伝う。

凄まじい勢いで腕をかけ登り、頭のとっぺんに羽を休めると、男の

声が女子二人だけの空間に静かに響いた。

「カブトムシ？垣根さんの声が……」

『通信デバイスだ。深く考えるな』

「すごい……！」

真つ白の体に緑色のつぶらな瞳が特徴的なカブトムシに佐天さんは動じず、そしてその声の主を言い当て楽しそうに私の頭上をキラキラと目を輝かせて覗き込む。

こうなったら仕方がないと、半ば呆れながら垣根さんの声がするカブトムシを右手で掴みながら見つめる。

「もう……で、見つからないってどういうことよ」

表情の分からないカブトムシの姿では、声色でしか感情が判断できないのが難しい。

『単純に検索しても出てこねーってことだ。ダミーサイトでも作って隠蔽してるのか、その都市伝説サイトは出てこねーな』

「……嘘ついてないでしょうね」

『なんで嘘つかなきゃいけねーんだよ』

「いや、猫そつちに預けるの怒ってるかなーって……」

『それに関してはガキどもが猫に喜んでるからどうでもいい。どうせ俺は世話しねーし』

腹いせに嘘をついてないか訝しげに見つめると、僅かに聞こえたよく知っている少女、おそらく別の妹達シスターズの嬉しそうな声に被って面倒くさそうに垣根さんはぼやく。

他の子とは違う嬉しそうな声はおそらく9982号で、他に聞こえる声はおそらく天羽先輩が拾ったという少女だろう。

なんだかんだ言っつて、この男は面倒見がいいのか。

『とにかく、嘘はついてねーぞ。天羽に関わるしな、嘘なんかつかねーよ』

「じゃあ、食蜂が隠蔽したのなら、食蜂にとって都合の悪い情報がそこにあっつたってことよね？」

『初春って機械に強いお嬢さんだったか。もしかしたらもう既に突き止めて、都合が悪くなつて処理された可能性があるな』

彼の言葉が本当だという以上、その事実はそのことにおいて辻褃を合わせてくれた。

初春さんなら不審なサイトを見つけたらすぐ情報を調べてしまうだろうし、もしそれを食蜂が探知したのなら、データ消去させ、オマケに記憶を覗いて私の友人だと知るのも容易いだろう。

目の前の友人の記憶がないのも、サイトが見つからないのも、食蜂によって繋がった。

「……支部に行ってみますか？」

「そうね、垣根さんもそれで良い？」

『あの馬鹿に繋がるなら、どこでも良いぜ』

やっと見つけた小さな手掛かりに、拳を強く握る。

食蜂操祈と天羽先輩、どちらも何を企んでいるのか全く分からないが、でもようやくその影を掴めそうだ。

「そうだ、一応連絡を……あれ？」

「どうかしたの？」

「いえ、なんでもありません！早く行きましょう！」

後ろで携帯を睨み、足を止める佐天さんに声をかけて、喜ばしい進展を噛み締めながら風紀委員支部へと向かおうと足を踏み出す。

早く全てを終わらせたい一心で、私は歩き出した。

人々で賑わう大通り、その中でスマートフォン片手に機嫌よく笑う一人の女性が一人で歩いていた。

「美琴ちゃんも頑張ってるみたいね、結構結構」

首まで伸ばした明るい茶髪と、ハリウッド女優も真つ青な砂時計型

のメリハリのある体が何人かの男の視線を奪うものの、女性は一切気が付かずにスマートフォンを眺める。

その内容は恐らく大覇星祭ニューストップに躍り出た、自分の娘、第三位御坂美琴の風船割りレースの記事だろう。

自分の娘の活躍に、誇りを持たない親は多くない。母である女性、御坂美鈴もまた、多くの親と同じように娘の活躍に喜んでいた。

そんな喜ばしい記事だが、歩きながら見るのはあまり褒められたことではない。

モラルある母親は見出しだけ確認すると、直ぐに携帯をポケットにしまつてブラブラと散策を続けた。

しかし、

「ほら、もう大丈夫ですよ。心配しなくても、私がついていますから」
聞き覚えのある甘い声にその足を止める。

「あら？あの花飾りは……初春ちゃん！」

「美鈴さん！」

春爛漫とした咲きこぼれんばかりの花飾りを付け、少しはねた黒髪ジャツジメントのショートヘアが良く似合うセーラー服姿の風紀委員に御坂美鈴は手を振りながら駆け寄る。

知り合いだったようで、初春と呼ばれた中学生は笑顔を見せて御坂美鈴に頭を下げた。

「あれ？その子は？」

「迷子さんです」

駆け寄ったはいいものの、背の低い中学生よりもさらに背の低い少年が初春の後ろで泣きそうな顔をしているのに気がつく、少し躊躇う。

「ええ、大変じゃないこんな人混みじゃ、手伝おうか？」

「いえ、親御さんにはもうこちらに向かつてもらってるんです」

「そうなの？」

「はい！美鈴さんもお持ちの入場証にGPS機能がついていて、来場者の位置情報は本部で検索できるんですよ」

世間話に花を咲かせる余裕があるのか、風紀委員ジャツジメントの腕章を付けた彼

女に伺うように聞いてみると、もう既に解決済みだそうなので、御坂美鈴は胸を撫で下ろす。

母親だからか、どうやら涙を浮べる子供を人一倍気にしてしまうようだった。

「パパだー！ パパーー！」

子供が元気よく父親を呼ぶと、彼らは感謝を伝えて去っていく。

「気をつけてくださいいねー！」

笑顔で手を振る風紀委員ジャッジメントを微笑ましく思いながら、御坂美鈴は首からかけた入場証を見つめる。

自分の顔と、割り振られたIDが記されたカードにどこか納得した表情で頷き、裏に書かれたバーコードを指でなぞった。

「なるほどねー、これだけ多くの観光客をどう管理するのかわかるとは思ったけど、しつかり対策してるってわけだね」

規模の大きい学園都市は、外部の人間をあまり歓迎しない。

そのため観光客を入場証のデータによって位置情報を管理し、不測の事態に対応していた。

そんな学園都市の観光客対策だが、それには欠点がある。

「でも、そのシステムをハッキングすれば、誰だろうと特定の来場者を見つけ出すことも可能になっちゃうんですよ」

その欠点を、突然現れた金髪の女性が御坂美鈴の隣で呟いた。

高い背に、華やかな金髪のその人は顔は見えないが、落ち着く声でくすくすと笑う。

後ろ姿だけでわかる大人びた体つきと、清純そうな服装に見覚えはない。

風紀委員ジャッジメントの少女と共に、御坂美鈴の知り合いだろうか。

実に都合がいい。

御坂美鈴と渡り合うには母親だけじゃ足りないと思っていたところだ。

深くフードをかぶり、木陰から彼女らの様子を見つめる。

どくどくと、血が熱く興奮していた。

「天羽さんー！」

「初春さんパソコン強いんだから、ちゃんと見ておかないとダメだよ？じゃないと」

眩しい金髪を翻し、白いスカートが揺れると、化粧で華やかに彩られた笑顔と目が合う。

どきどきどきどき。

異常な速度で血液を押し出す心臓に痛みが走る。

立てないほどの圧迫感が体の中から放たれ、息が苦しい。

「わるーい人が使っちゃうかもしれないから」

人と思えないほど悍ましい赤と緑の瞳に姿が映る。

恐ろしいと訳もなく感じる脳に、体は声も出さずに背を向けていた。

恐怖とは、脳の働きにより制御されている。

走り去っていった小柄な人影を見つめながら目を細めると、眉間に皺を寄せる。

本当は病院送りにしようと思っていたが、気付かれぬようゆっくりと支配していったためか逃げられてしまった。

観測範囲にいれば継続できるが、後で対処しても良いだろう。

「どうかされましたか？」

「ううん、なんでもないよ。初春ちゃんはお仕事中？美人なお姉さんまで連れて」

顔を覗き込んで来る初春ちゃんに考え事を中断されると、隣に連れられた女性に視線を動かす。知り合いによく似た顔の女性は何故か嬉しそうにしながらこちらを見ており、何処と無くその視線は不愉快だった。

「私はパトロール中です！それで、この人は」

「初めまして！御坂美鈴と言います、よろしくね」

「天羽慧糸です。もしかして御坂美琴ちゃんのお母様ですかね？お会い出来て嬉しいです」

三十代前半くらいの若い母親。第三位、御坂美琴が順調に成長したらこうなるのかと考えてしまうほど、大きい胸と高い身長を除けば彼女は娘によく似ている。

生物学的に娘は父親に似て、息子は母に似るというが、御坂ちゃんは違うようだ。

「え！よく分かりましたね、私なんて最初お姉さんかと思っちゃいましたよ」

「うちもお母さん若いから、なんとなくね」

若い母親なんて珍しくもなんともない。十五歳であたしを産んだ母は、あたしが中学二年の頃なら三十歳くらいだった。

そもそも、アニメの世界の母親役は幼少期の成長を疑うほど若作りのキャラクターが多い印象があるため、メタ的な推理をすれば簡単にわかる。

「それにしてもなんでこんな所に？垣根さんもいないですし」

「あの子はちよつと用事があるみたいだね。それよりもパトロールはいいの？こんなところで駄弁ってたら、白井ちゃんに怒られちゃうよ？」

「ハッ！そういうえばそうでした。じゃあ私はこれで！」

あたしの一言に体が強張ると、早口で別れの挨拶を告げて初春ちゃんは雑踏の中に溶け込んでいった。

人混みに紛れて見えなくなるまでその背中を眺めてから、小さく息を吐くと隣に立っていた綺麗な母親に笑顔を見せる。

「じゃ、あたしもここら辺で失礼しますね。良い一日を」

「あ、ちよつとちよつと、待って！」

「はい？」

当たり障りのない言葉でこの場を去ろうと軽く会釈をするが、引つ張られたジャージの裾に足を止める。

頼まれごともあるので早く先ほどの子供の対処に向かいたいのだが、興味津々にこちらを覗き込んでくる彼女をみると、それも叶いそ

うになかった。

「貴方、例のカノジョよね？やだー、会えるなんて嬉しいわ！」

「えーっと？あの、一応アナタとは初対面のはずですが……？」

「美琴ちゃん、そのお友達経由でね、貴方のこと聞いたのよ」

「はあ、そうですか」

キラキラと好奇心で支配された輝かしい瞳に苦々しい表情をした自分が映る。何について言っているのかもわからず、困惑しながら首を傾げてその場に固まってしまう。

「ね、ね、貴方と垣根くんってどんな関係なの？」

「垣根くん？えっと、帝督くんですか？」

「そうよおー！もう、あんなカッコいい子のお相手がこんなに綺麗な子なんて。しかも、昔テレビに出てた芸能人の子なんですもの、気になっちゃうじゃない！」

「……え？」

突然出てきた大好きな人の名前に思考が止まる。しかし止まった思考は続けて言われた『テレビ』と言う単語に反応し、かろうじて喉から乾いた声をひねり出した。

彼女の言葉に、ゆっくりと脳が昨日の出来事を思い出す。ガラの悪い満面の笑みで写真と共に告げた知らないはずの事実。

その事実の出所がどこなのか、脳の奥では気になっていた。完璧に隠蔽したはずの過去を、どうして情報が規制された学園都市にいる垣根くんが知っていたのか見当もつかなかった。

しかし、今やっと理解した。物語に深く関与しない外の世界の人、それも魔術に関与していない一般人で、当時大人だった人は覚えている人もいるだろう。

最悪だ。

「良かったらお茶でもどう？青春真つ只中の若人のお話、聞きたいわ！あと美琴ちゃんのこともね」

「……ええ、構いませんよ」

この調子なら、本名もすでにバレている。

優しく笑顔を作って頷くと、御坂美鈴は嬉しそうに笑う。これも必

要なことだ。

彼女の中の『ぼく』を知ることくらいは短い時間でもできる。どれほどの情報を彼に与えたのか、知るべきだ。

幸い、時間は確保できていた。

68話：肯定、否定

明るい髪をふたつに結び、ジャッジメント風紀委員の腕章をつけた少女が叫ぶ。
三人と一匹しかいない部屋ではその声は大きすぎたようで、隣に立つ佐天さんの肩が飛び跳ねる。

否定的な言葉には、なんと返せば分からなかった。

「絶対ダメですわー！一般人に支部のパソコンを見せるだなんて！」

可愛い顔で怒りながら黒子はソファに座りながら目の前の机を強く叩く。

初春さんのパソコンを調べに177支部へ来た私たちはどうやら歓迎されていないようで、眉間に皺を寄せて怒られてしまっていた。「確かに行方不明の妹さんは心配ですわ。ですので、私たちがお調べいたします。その為の、ジャッジメント風紀委員ですもの」
「それはそうかもしれないけど……」

客観的に見れば確かに黒子の言う通り、妹が誘拐されて行方不明なジャッジメント風紀委員や、アンチスキル警備員にお願いするような事件で、自分たちは一般人かもしれない。

しかし、私たちが探しているのはただの妹ではなく、私を模したクローン。

真実を知ってしまったえば、どうなるか分からない。

だからあの子は私が見つけなければいけなかった。姉として、加害者として、シスターズ妹達の平和は必ず守らなければならないから。

「あの、白井さん、お願いします。御坂さんにパソコンを調べさせてください」

「佐天……？」

どうしようかと固まっていると、仰々しく黒子に頭を下げて佐天さんが静かに口を開く。

それに続いて自分も深く頭を下げる。汚れた靴についた泥を真っ直ぐ見つめるように、深く。

「お願いします。私達、もしかしたら御坂さんにとっても酷い事をするかもしれないんです。助けになりたいんです」

「酷いことですか？」

「大切な友人、だったかもしれないんです。今回の事件は精神系の超能力者が関与しているそうですし、だから……！」

「……だから、彼女を信用しろと？」

冷たい声が放たれる。縮まらない心の距離がもどかしかった。

それでも必死に頭を下げて頼みこむ。

初春さんのパソコンを見なければ、妹の手掛かりも、天羽先輩の場所も全て分からない。これ以上の情報を得られないのだ。

「お願い、これ以上迷惑をかけるつもりはないの。一度だけ、そのサイトを確認できたら……！」

「……関係者以外に機材を触らせるわけにはいきませんの。私が見ているうちは、絶対誰にも触らせませんわ」

黒子はため息をつくと席を外し、給湯器へ向かう。少しためらってから未だ頭を下げ続ける佐天さんに向かって、もう一度ため息を零すと、背を向けたまま立ち止まり、少しだけ間を開けて呟いた。

「わたくし、お茶を入れてきますの。万が一、パソコンをどなたかに触られても、お茶を入れている間は分かりませんわね。あー、大変ですわ」

困ったように佐天さんを横目で見てから、明後日の方を向いて呟いた。

「ツ黒子！ありがとう！」

「はっ離してくださいまし！私にはそのような趣味はありませんのっ！それに私はお茶を入れるだけですの!!感謝を言われる覚えはありませんわ！」

「あ、ごめんね」

感極まり抱きつくくと、黒子は悲鳴をあげてそそくさと給湯器のあるスペースへ逃げ込む。

それに少しの寂しさを覚えたが、寂しいを紛らわしてパソコンに向き直ると、使い込まれたキーボードに手を置いて息を吐いた。

ばちばちと青白い火花が舞う。キーボードと手のひらを繋げるように落ちた小さな稲妻がパソコンの電源を入れて、次々とウィンドウ

を開く。

消されたデータの復元。この稲妻がネットワークを駆け巡り、削除されたデータを元の姿に戻していく。

「あ、でたー!」

たくさんのウィンドウの中に、一際目立つ写真の置かれたサイトが飛び出す。

見知らぬビルと風景の中佇む人工的な鮮やかな金髪と、目を隠す黒いモザイクが特徴的なその写真は良く見知った女を写していた。

MISSION:5

【要塞線の奥に眠る秘匿技術!?超能力を生み出す最新鋭DNAコンピュータを追え!】

なんて、つまらない見出しと共に貼り付けられたその姿は、ずっと追っていた人と同じだった。

「食蜂……!!」

拳を握る。画面に映る忌々しい女にこれ以上ない怒りが湧いていた。

賑わう道端に隣接されたカフェのテラスにあるテーブルに着くと、フローラルな香りの中に嗅いだことの無い甘くて優しい、砂糖のような香りがゆったりと広がる。

目の前の女の子の柔らかい香りだと気づくのに、そう時間はかからなかった。

「それで、垣根くんとはどういう関係なの?」

「……まあ姉弟のようなものですよ。彼を支えたいあたしと、傍若無人に振る舞う可愛い弟が一番しっくりきます」

クツキー生地のような金髪的先、桃のようなグラデーションが風に揺れるのも気にせず、目の前の少女は答える。

天羽彗糸という可愛い名前と派手な見た目からは想像もつかない大人びた受け答えと、普通の女の子より少しだけ落ち着いた柔らかく低い声。育ちがいいのか、それとも本人の経験の多さなのかは分からないが、幼い顔立ちと高校一年生という年齢の割には非常に大人らしかった。

「天羽ちゃんの方が年上なの？」

「あたしが一つ下です。でも年齢なんて関係ありませんよ」

店員がテーブルの隣に着くと、暖かい紅茶とコーヒーが静かに置かれる。学生向けのチープなコーヒーの香ばしい匂いと、その匂いに負けない彼女の甘い匂いに痺れてしまいそうだった。

「年下のお姉ちゃん……お世話好きってことかしら、弟としてしか見られないのは垣根くんにとって辛いんじゃないの？」

「本人は嫌でしょうね。でも、そんなこと関係ありませんし」

「そう？ 貴方を好きな垣根くんには関係あると思うけど」

淡々と答える天羽ちゃんに、昨日のお昼に出会った背が高くくてカッコいい男の子の顔を思い浮かべる。

長身でスタイルが良く、女性の視線を奪う端正な顔立ちと長い茶髪に真っ黒い瞳。

目の前の彼女とは真逆の明度をした彼、垣根帝督くんの見た目にそぐわない柔和な笑みと、目の前の少女について語る時の恥ずかしそうな顔、そして感情を隠すためのトゲのある言葉がどうしたって頭から離れられなかった。

「ありませんね。彼の好きは高く見積もっても今までのことへの感謝でしょうし、彼はあたしのこと好きじゃないですよ。それに、あたしも彼も、互いを性的に見ておりません。この感情は貴方が思っているようなものではありませんよ」

「性的って……言い切るわね」

「事実ですから」

きらきらと太陽の光を反射する紅茶に似合わない、彼女の冷たく、重い言葉を柔らかい笑みで言い放つと、彼女は暖かい紅茶にガラスのシユガーポットから取り出した角砂糖をふた粒入れて、かき混ぜる。ティースプーンとティーカップが当たる音が賑わう道の喧騒の中はつきりと耳に届いた。

彼と似たような言い分に、少し影が曇る。彼女の言葉が照れ隠しなのか、本音なのかは、彼女の愛らしい笑顔からは分からない。

ただ、15、6の少年少女二人が、互いの感情を否定するのに『性』を口に出すのがなんだか気持ちが悪かった。

「……天羽ちゃんは垣根くんのこと嫌いなのか？」

「好きです。断言できます。この世界で一番、誰よりも愛しています。顔も、能力も、生意気な態度も、甘っちょろい性格も、不幸なことも、可愛いところも、全部大好きです」

自分の考えは違っていたのだろうか、少し核心を突くようなことを聞くが、考えに反して彼女は心の底から笑う。

笑うと目が細まり、猫のようになる癖は子供のようだった。

そういえば、垣根くんも必死になって彼女のいいところを言っていたなど、ふと思う。

彼女たちは、きつとお互いをよく知っていて、知らないことは一つ以外何もないのだろう。幼馴染のようなものの。

唯一知らないことは『性』だけ。その一線を越えたくない。

だから知らないことを盾にして、否定する。

彼女と彼は似た者同士で、パズルのピースのように凹と凸がかつちり噛み合うような関係性で、進展などないと思っている。

もどかしい子供達だ。

よくあるラブコメ、よくある葛藤。若さゆえの燻った感情にくすぐったさを覚えるのも無理はない。

自然と笑みが溢れてしまう。

「思春期って大変ね」

「そんなもの、来た事すらありませんよ」

しかし、私の笑顔と反して少女は口を固く結ぶ。三つ目、四つ目と、白い角砂糖を紅茶に落としていくと、だんだんと顔にかかった影が濃くなつていった。

心臓が大きく鳴る。

失言だったと、口にしてからわかった。彼女は普通の少女じゃないことを失念していた自分が悪い。

彼女が自分の娘が学園都市にくる前からずっと大人しかいない世界にいたと思ひ出したのは自分だというのに、頭が回らなかったなんて情けない。

垣根くんに見せてもらった一枚の画像。ナース服を着た130cmくらいの少女は、確かに昔テレビで見た恐ろしいほど大人びた子供だった。

あの頃と変わらぬ受け答えができる彼女は、子供と呼ばれたことはきつとなかったのだろう。

「あ、そうね……貴方は環境がちよつと特殊なものね。小さい頃から大人ばかりの世界にいたら、思春期なんて忘れちゃうかもしれないわ」

「環境はあまり関係ありませんよ。ただ、下の子がいると上は勝手に大人になつてしまうだけです」

「あら、兄弟いるの？」

「妹が一人いました」

「……なんか、ごめんなさい」

「いえ、本当のことですから、お気になさらず」

失言に続いて、また失言をしてしまう。何個目かも分からない角砂糖を入れ、苦々しい笑みを浮かべる彼女に胸が締め付けられた。

親は上の子に『お姉ちゃん』を求めてしまう。特に彼女みたいな出来た子だと、尚更。

それが彼女の年齢よりもだいぶ大人びた態度に繋がりに、幼い頃の恐ろしいほどはつきりとした受け答えの元にもなっていた。

過去形になつてしまった妹だけが取り残されて、姉である彼女はその頑張りを捨てられなかったのだろう。

「妹、かあ。そりゃあ大人になっちゃうわ。うちの美琴も、高校生になつたら天羽ちゃんくらい大人びるのかしらねー……」

「……御坂さんは、随分娘さんと仲がよろしいんですね」

「え？そうかしら、普通だと思っただけ」

生意気さが増してきた可愛い娘の顔を浮かべると、天羽ちゃんは再びシユガーポットを手に取る。

意図のわからない質問に嫌味はなく、ただ純粹疑問のようだった。

「体育祭……大覇星祭にわざわざ足を運ぶなんて、珍しいと思いましたが」

「そう？天羽ちゃんのご両親は来てらっしゃらないの？」

「来ませんよ。あの人たちとは縁を切ってますので」

三つ、角砂糖をティーカップに落として溶かす。白と茶色の角砂糖はぬるくなつてしまった紅茶に沈み、ゆっくり回るティー Spoon に潰されていく。

平坦な声が、ティースpoonの無機質な音と交わり、恐ろしく冷えて聞こえた。

「え？縁を……？ど、どういうこと？」

「言葉のままです。最後に両親と連絡したのは入学、いや、卒業ん時だっけ……忘れちゃったや」

指を折り、一、二と数えると、途中で少し笑って数えるのをやめてしまう。その姿から何年も連絡を取っていないのは理解できた。

「そんな、どうして？」

「求められた子ではないですし、それに、あなたなんか本当の子供じゃないと、気味が悪いと、言われましたので。一緒にいると気分が悪くなるそうです」

「は、娘に対して？そんなのって、」

「本当のことですから、仕方ありません」

冷たい言葉に、熱い怒りが込み上がる。湯気の立つコーヒークップを強く握りしめると、想像とは違う、掠れた声をひねり出す。

怒りが言葉にできないほど、少女の恐ろしい冷たさに喉がかじかんでいた。

「そんなことないわよ、普通の女の子じゃない！」

「怒らなくて大丈夫ですよ。あたしもあの人たちになんの感情も抱いてないですし、結構どうでもいいんです」

「どうでもいいって……」

また四つ、角砂糖を落とす。

「あ、誤解なさらなくてくださいね。あたし、家族のことは大好きですから。お金も、計画性も貞操観念もない不節操な人たちでしたが、あたしを、妹を産んでくれて、あたしに役割をくれました。家族には感謝してもし足りないくらいです」

心の底から溢れる可愛い笑顔の彼女に、これ以上ない寂しさと、悲しみと、愛おしさを感じてしまう。

娘と、彼女の想い人の言う通り、天羽隼糸と言う少女は『底抜けに優しく、無茶をし過ぎ、人のことを考えすぎて、怪我するようなやつ』なんだろう。

でなければ、誰がどう見ても破綻している親子関係を、嬉しそうに笑顔で言葉にはできない。

「ねえ、どうしてそんなに他人を好きでいられるの？」

「それが『お姉ちゃん』だからです。あたしは、たくさんの好きな人が幸せでいられるように生きていたいんです。好きな人を幸せにしなきゃ生きる意味がないんですよ」

「でも、それだと天羽ちゃんは幸せにならないじゃない。自分の幸せはどうでもいいの？」

「あたしが幸せになるために、みんなを幸せにしたいんです。大好きな人たちが幸せであることがあたしの幸せって、とても贅沢ではありません？」

先ほど入れた砂糖が溶けきらぬまま、シユガーポッドに手を伸ばす。けれど、ガラスの器にはもう角砂糖が残ってなかった。

彼女の甘い優しさは誰かの温もりでしか溶けることはない。一つ一つの挙動から感じる『姉』としての頑張り、言葉から感じ取る彼女の冷たい過去に同情に近い、吐き出したいほど熱い感情が湧き出る。

あのかっこいい少年に全て伝えて縋りたいほど、短時間しか言葉を交わしていない彼女の幸せを願っていた。

「……天羽ちゃんには、垣根くんと幸せになつて欲しいと思うんだけどね」

「垣根くんがあたしに恋をすることはありませんよ。何より、好きな人の幸せが必ずしも本人の思いと同じとは限りません」

沈殿した砂糖を隠すようにミルクを垂らす。琥珀色に透き通る紅茶はゆつくりとミルクと混ざり、白濁としていく。

宝石を汚すかのように色褪せていくティーカップの中身を見つめながら、彼女は小さく呟いた。

「それに、親にすら望まれなかつた人間を愛するような人間はこの世界にはいないのですので」

「そんなことないわよ、子供を愛さない親なんて」

「愛されていたとは思いますが。けれど、愛とは必ずしも生きていて欲しいと願うものではありません」

初めて、彼女の瞳と目が合った。

鮮やかな赤の中に、穏やかな緑が煌めく不思議な目の色。現実離れたその色は酷く恐ろしい。

「愛に常識なんてないんですよ」

湯気の立っていないカップに口をつけ、鮮やかな瞳を瞼で閉じる。

「あたしの愛を、汚い恋だと勘違いしないでくださいね」

紅茶を飲み干し、紅茶一杯分よりも明らかに多い金額をテーブルに置くと、立ち上がって背を向け、振り返ることもなく背の高い少女は小さな肩を縮めて足早に去っていった。

肩に重みが増していく。

薄暗い路地に入り、大きいため息をつくと足を止めて、口に残った甘い味を感じるように唇を触る。

第三位の母親と交わした言葉は、あくびを我慢するほど退屈でつまらなかつた。

「母親役だからって、期待しすぎちゃったな」

この世界の人が、あたしを理解することは永遠にないというのに。分かつてはいたのに、淡い期待を抱いたのが悪い。

タイムロスとも呼べない短い時間だったが、時間を無駄にしてしまった。

本名も知らず、最小限な情報しか垣根くんを提供していない。その程度の確信を得るためだけのお茶会は随分と長引いてしまい、結果的にそれ以上のことは何も得られなかつた。

無駄な時間だったと一人項垂れる。

垣根くんの本名まではバレていないことは分かつたから良かったのかも知れない。けれどその先を期待してしまったのは自分のせい。

塵のように積もっていく苛立ちに奥歯を噛むと、擦り切れるような呼吸音が狭い路地に響く。

「泣いてるんですか?」

「なわけねーでしょ」

大きいため息をつく、白い影が影が視界の中ぼんやりと映る。

ビルの陰から現れた白い影は車椅子を押しながら少年の優しい声で呟く。その影と目が合うと、それは車椅子を手放してすぐにあたしの元へ駆け寄った。

「泣かないでください、悲しまなくても私がいまですよ」

「そんなこと、思ってもないくせに」

頬を包む真っ白い手に温度は感じられない。はめ込まれたエメラルドの瞳から目を逸らすと、体を押しつけ車椅子の取っ手を握って真っ直ぐ陰に歩き出す。

彼と同じ姿をして、あたしを可哀相な女と見下ろすその目が気に入らない。

口の中の体温で溶けていく砂糖は甘いだけで、美味しくなかった。

69話：苦味

体調がすぐれない。

吐き気を催しながら重い体を引き摺るように隠れ家に向かうと大きな柱にもたれかかって息を吐く。

大きな地下で轟々と水が流れる音と、少しだけ鼻に付く匂いとうんざりしながらローブを脱ぎ捨てると、ピンク色の衣装が現れる。前任者からもらった衣装は、暗部にしてはあまりにも派手だった。

「はあ、最悪……あの女、精神系の能力者か？」

顔にかかった暗い色の長いツインテールを手袋越しに軽くはらうと、先ほどの恐ろしい瞳を思い出す。

鮮やかな赤と、厳かな緑が入り混じった薄気味悪い色。

どこの誰かは知らないが、自分を射抜くあの見透かした瞳から察するに同業者、それも目論見に勘付き忠告をしに来たのだろう。

「あーもう、御坂美琴から色々聞き出す算段がめっちゃくちゃじゃん……」

推察するにあの女は高位の精神干渉系の能力者。接触せずに体内を狂わせるとなると、大能力者かも知れない。

あの瞳に射抜かれた時の恐ろしさを思い出す。

御坂美琴の母親と、友人と思われる頭お花畑の誘拐して、御坂美琴本人から情報を引き出す算段があの子のせいで狂ってしまった。

考えていたプランは潰れ、体調は未だ回復せず、現状は最悪と言わざるをえなかった。

「ん？着信？」

鈍痛で蝕まれる頭を叩くような木琴のコール音が、肩にぶら下げたタブレットから響く。大きな空洞とも言えるこの隠れ場所に反響する冷たい音はともうるさかった。

『取り込み中だったか？』

「んーん、別に。それでどしたん？何か重要なことかなー？」

『先ほど馬場から通信があつてな、少し気になることがある』

タブレットを起動し、通信を始める。マイク機能のついた乗馬鞭を

片手に体調の変化を感じ取られまいと明るく話すと、相手の女、こき使っている暗部組織『メンバー』の構成員の一人は重々しく口を開いた。

『……私が所属する暗部組織、メンバーは学園都市統括理事会の特命を受けて動く組織だ。だから貴様の命令も当然、上からの任務だと思っていた』

「はい？それが？」

『今回の任務、統括理事会は一切関わっていないらしいな』

突拍子も無い発言に眉を顰める。低い女の声は、どんな感情なのか推し量ることを許さなかった。

その後放った言葉に、顰めた眉にさらに深く皺を刻む。

『裏取りは博士がしているが、確かに上層部らしからぬ命令だったと思う。貴様は外部の依頼者と共謀し、仲介者の立場を利用して、私や馬場らを使役していた。そう考えるのも無理はない』

一向に連絡がこない使い捨ての駒がまさか真相に辿り着いているとは思わなかった。クローンの情報を一向に報告してこなかった小太りの青年の顔に苛立つ。

してやられた。行き場の無い怒りが心の中を彷徨っていた。

『私にとっては誰の指図かなどどうでもいいことだが、裏切り者には制裁を下さねばなるまい』

無機質な音声がかかります。

どこから間違えてしまったのだろうか。手駒もいなくなり、苦しくなる体だけを残して、計画は崩れ去ろうとしていた。

「あの男……！」

余計なことをしてくれた自信家の男のバカみたいなイキリ顔が思い浮かぶ。あの男への憎悪が、吐き気とともに、静かに増幅していった。

歌を歌う準備でもするかのように、ドレミの音階を一音ずつ喉で鳴らしていく。喉を元の調子に戻すよう、音階を上げていくと意地の悪そうな男の声から、いつも通りなんの変哲も無い若い女の声に戻った。

「あー、いー、うー、んっん、声戻ったかな？」

初めての試みにしては上手くいったと、自分自身感心してしまう。声帯の変化など、筋肉と喉の構造少しだけ弄れば似たような声にはできると思っていたが、まさか本当にできてしまうとは。

馬場くんの身体に干渉したデータのおかげで、わざわざ暗部の少女に会いに行かなくて済んだのだ、彼に感謝してもし足りない。

「戻っていますよ。でも驚きました、まさか自分の声帯を変えることができるだなんて」

「んー、まー声紋取られたり、対面で話すとなるとすぐバレちゃうけどね。電話越しだったのが救いかな？」

自分の秘めたポテンシャルに少々気分が良くなっていると、先ほどから姿の見えなかった05が、ベンチの後ろから冷たい紙パックを手渡してくる。

まだまだ暑い九月中旬、喉を潤すために買ってきてもらった500mlの紙パックはすでにぬるくなっていた。

「どうでもいいですけど、警策看取をなんとかしたって主犯をなんとかしなくては意味ないですからね？」

「ま、それはおいおい。警策ちゃんは今度観測範囲にいればすぐ気絶させちゃうから問題ないし、主犯は後でどうにかするよ。誰かは知らないけど」

05の後ろから現れた車椅子の青年に馬場くんから奪った携帯電話をその男に投げつけると、面倒な顔つきでこれまた面倒な説教くさい問いを口にする。

適当に言葉を濁すと、長いストローを開いた紙パックの開け口に突き刺して、甘酸っぱいレモンティーを口いっぱい含む。

ほのかなタバコの匂いと合わさって、甘い香りが鼻の奥を刺激した。

「貴方の能力で殺せばいいのに、甘っちょろい人ですね」

「口を開けば甘い甘いばかり、ケーキでも食べたいの？お子ちゃま」

人ひとりいない第二学区の公園。木陰の心地いい涼しさが頬を撫でるベンチを惜しくも離れると、文句ばかりの分ならず屋に向かって視線を落とす。

ヒールを履いた目線からは、車椅子に乗った平均身長の子供のように小さかった。

「なら」

彼が加えるタバコを右手で奪う。細身のタバコは赤い光が呼吸に合わせて瞬く熱が手の中に収まった。

「これはダメね」

奪われた一本のタバコは、瞬く光を失うように舌に絡み、喉の奥を通る。元通りに治った喉に飲み込まれたタバコからは濃いメンソールの味がした。

「なっ!?!」

「……健康被害、尋常じゃなさそうですね」

懐かしい味を凝縮した塊が胃に落ちる。カプセル式とは違う濃いタバコの香りが胃酸に溶けると、目を丸くする彼らに笑う。

「うん、苦いね」

「ペツ、ペっしててくださいー！ほら、早くー！」

「うるさいなー、大丈夫だよ」

保護者の真似事をする05の鬱陶しい視線を振り払い、ストローに口をつける。両手で持った紙パックには、まだたくさん液体が残っていた。

「でもなんでこんな女物吸ってるわけ？そもそもタバコ吸ってたっけ？」

口に残った苦味をレモンティーで洗い流す。青い空の遠くを眺めながら素朴に思った疑問を甘さでいっぱいになった口からこぼした。

「ただの嫌がらせですよ」

未だ舌に残ったタバコのざらつきに息を吐く。吐いた息をかき消すように鳴り響く着信音に、ただ黙って車椅子を押した。

アスファルトを強く踏みしめて、遠くに建つ大きなビルの見える学区へとたどり着く。

来る機会が少ない学区で、一際目立つその建物は見覚えのあるものだった。

「第二学区……確かにあの写真にあった建物ね」

『あれは第二学区の風紀委員の支部だ。写真から場所を特定するなんてバカでもできるだろ』

「いちいち棘があるわね、素直に感謝できないじゃない」

肩に乗った小さな白いカブトムシが鼻で笑う。

ムカつく言い方に苛立ち、片手で鷲掴んで揺さぶるが、カブトムシ越しの音声は乱れることは無かった。

『感謝なんて、俺みたいなのやつにするもんじゃねえよ』

『照れてるだけだから気にすんな』

『ウルセエぞババア』

「ちよつと、大声で喧嘩しないでよね！」

騒がしいカブトムシに呆れながら小さな声で怒ると、カブトムシ、もとい垣根さんとテレスティーナは押し黙る。

しかし、やつと静かになったカブトムシをポケットに突っ込んで、監視カメラをチェックしながら道を走っていくと、人のいない道の真ん中でまたもや面倒そうなため息が大きく響いた。

『はあ……これで天羽が関わってなかったら俺は働き損だな』

「そんな事言わないでよ、それでも役に立ってんだから」

『これでもってなんだよ、すげー役に立ってるだろ』

不服そうにポケットから這い出して、頭の上でくつろぐとカブトムシはくぐもった音声を放つ。

超能力者らしく、自分本位な人なようで、こちらを気にせず悩んでいた。

天羽彗糸。

第2位ともあろう人物の頭を悩ませる先輩の名前に自分大きなため息をついてしまった。

どうしてか食蜂操祈の元へ行った大切な先輩に、ただただ疑問しか湧かなかった。

「でも因果関係が分からないわね。どうして先輩はついて行ったの？怪我人でもいるのかしら？」

『拾った妹達の面倒見ろって言われたんじゃないか？クローン健康管理してるのあいつだし』

「でも、それ知ってる人少ないわよ？」

『クローンのことを知っても知らなくても、天羽彗糸の名前を知っていて、尚且つ能力を知ってれば協力を仰ぐのは必然じゃねーか？』

『それにクローンのことを能力でだれかから聞いたか、関係者が第五位と繋がってるかすれば自ずと分かる。色々考えは尽きないな』

ふと呟いた疑問に、テレスティーナと垣根さんがそれぞれの考えを間髪入れずに答えると、「あー」と、気の抜けた声で納得してしまう。

そして同時に、先輩への心配と焦りが膨らむ。

「天羽先輩はなんでこう、変な人についてっちゃうのかしら？しかも木原の一人連れてるんでしょ？どんなやつなのよ」

『相似に関しては、なんとも言えねえな。天羽のことを嫌ってるのか』

「どうして連れていくんだか……」

不思議な先輩だとは常々思ってはいたが、彼女の行動はどう考えても危険極まりなく、彼女を取り巻く環境をイマイチ分かっていない自分でさえその危険さは理解出来るほどだった。

腐っても大能力者だというのに、天然を超えた頭の緩さにほとほと

呆れていた。

『あとは、そうだな……足が動かせないからなのか、天羽はやたらべつたりだな。たぶん好きなんだろ』

「え、浮気？」

テレスティーナの思いもよらない言葉に、機敏に動いていた足が動きを止める。

それほど衝撃的だった。

確かに、天羽先輩は博愛主義と砂糖を煮詰めた性格をしている。

頼んだことは愚痴ひとつ言わず領き、勝手に人を助けるお人好し。誰に対しても、それこそ敵対していたテレスティーナにできえ、優しい人。

突き抜けた優しさを持つ先輩、しかしそれにはただ一人の例外があった。

それが今話している第二位、垣根帝督だ。

何が母性、または姉性をくすぐるのかは皆目見当もつかないが、天羽先輩は誰よりも垣根さんを特別に思っている節があった。

見るだけで分かる。

垣根帝督という男への愛は、私やほかの友人への気配りとは明らかに違う愛だった。

『あのな、天変地異が起きようとあいつは俺の事一番好きに決まってるんだよ。ふざけた推論かましてんじゃねーよ』

『キレんなよ。冗談だ』

そしてその愛の重さを彼本人も理解しているようで、馬鹿なことでも言いたげに鼻で笑うと、テレスティーナは呆れたように訂正を述べる。

だが、彼女の言い分はそこで終わるものでもなかったようで、咳払いをしてから、再び持論を展開した。

『ただ、事実として、多分今のあいつお前のこと眼中にねえっただけ。あの女は相似の野郎が秘密を漏らさないか監視してるんだよ』

「秘密？」

『色々な』

含みのある言い方に違和感を感じるが、聞いてみてもはぐらかされる。何か先輩がとんでもない爆弾を抱えてるのかと一瞬危惧するが、テレステイナーの呆れた声色からして、物騒なものではないと何と無く感じ取れた。

あの人の性格からして、誰かに迷惑をかける秘密ではないと、わかっていた。

「よく分かんないけど、その木原相似って人は天羽先輩にとっても危険で、それを管理するために一緒にいるってこと？」

『かも知れないっただけだ。今日に関しては、天羽が食蜂と会った後についていってたらしいから、関係ねーかも』

間の抜けた欠伸をして音声を切るテレステイナーに思うところはあれど、何も言わずに再び走り出す。

しかし垣根さんは怒りを抑えたような、低く強い声をカブトムシから放った。

『関係ねえっただって、相手はあのクソ野郎だぞ、なにかするに決まってる』

「クソ野郎って……知り合いなのよね？」

『知り合いどころじゃねえ。アイツは前、天羽と、うちにいる保護したガキを誘拐して、改造とかしたクソ野郎だ。だから焦ってんだよ』

殺しとけば良かったなどと物騒なことを口にして、垣根さんは音声だけでもわかるほど苛立ちを顕にする。

その内容に走り出した足がスピードを無くしていく。

保護したガキ、これに関して背景を知らないので考えないこととするが、それ以外の言葉には脳は素早く反応した。

天羽先輩は、件の木原相似という研究者に誘拐され、改造されそうになっている。

その事実を、ある推測を呼び起こした。

「天羽先輩ってもしかしてとんでもなく馬鹿なんじゃ……」

それは、天羽先輩の3歳児かと思われるほど弱い危機管理能力の欠損。

『ようやく気づいたか。あいつのアホのレベルは俺が出会った人の中

でダントツだ。たまに人の言葉を喋ってんのかすら分からなくなる」
「子供でも変な人についてかないわよ……ちゃんと保護しておきなさいよね。パパ……」

『誰がパパだ殺すぞ』

非常に、大変、とても、物凄く世話の焼ける先輩のちやらんぽらんな笑顔が思い浮かぶ。

仕方のない人だと、許してしまいそうになるのはきつと、彼女の砂糖のように甘い底抜けの優しさと、彼女の淡い匂いのせいだろう。

『そう言えば思い出したんだけどよ』

あだ名に文句を言い続ける垣根さんに柔らかく笑いながら走り、監視カメラを回っていくと、テレスティーナがおもむろに呟く。

『なんだ？あの馬鹿にまつわることなら一字一句間違えず言え』

「何よ、時間ないし早く言ってよね」

『あのジジイ、木原幻生のフォーラムが今日の昼頃にあるってカエル顔の医者に言われたんだよな』

「木原幻生？何度か名前は聞いたけど……」

その内容はいまいちピンと来ず、走りながら聞き返すと慎重そうにテレスティーナは言葉を紡いでいく。

『さつき言つたる？天羽に電話が来た時、天羽が出て行ってから、しばらくして相似が出て行ったって』

『そうか！クソ、してやられた！』

「は？どういうこと？」

彼らだけで進んでいく話についていけず、その場で足を止める。

『……天羽が木原相似を連れて行ったんじゃないやなくて、木原相似が行ったってことだよ』

「それが何か……あ」

そしてそれに気づいた時、冷や汗が一筋頬から流れ落ちた。

『後から合流したということは、あの男は第五位の洗脳にもかかっておらず、なおかつ頭の中を覗き込まれていない』

「そして、木原幻生のフォーラム……」

繋がっていないと考える方が不自然だろう。

何をしたいのかは考察の余地はないが、なにか大きな事態を起こすつもりだとは判断できる。

食蜂操祈、天羽先輩、そして名前しか知らない木原相似。その三人が別々の思惑をもつて動いている。

面倒事が増えていく厄介極まりない現実には、ただただ苛立ちしか芽生えなかった。

「どいつもこいつも、好き勝手しちゃって。先にどれから対処すればいいのか」

『それに関しては答えからやって来てくれたみたいだぜ?』

拳を強く握り、灰色の地面をきつく睨むと、歪んだ視界に誰かの足が入り込む。

影を踏んだその足に顔を見上げると、強烈な金色が目を焼き、長い髪が風に吹かれて太陽を反射した。

「あらあ、こんなところで奇遇ね。御坂さん?」

人を小馬鹿にするような間延びした声が鼓膜に届く。

「……食蜂、操祈」

星が輝く瞳で私を見下ろす女は、ずっと探していたものだった。

70話：回想

事の発端は昨日のお昼だった。

「これはどういうことかしら？」

うだる暑さの中、ノースリーブの体操服姿で地面に寝そべる少女の隣に跪く男に聞くと、彼はため息をつく。

茶色い髪を汚い地面に広げて呼吸するその少女は、嫌いな同級生、御坂美琴にそっくりだった。

あろうことか、人のいない工事現場の隅で、大嫌いな第三位のクローンを見つけてしまった。

しかも、息苦しく倒れ伏した姿で。

本当に、厄介なことになったと今なら思う。

「軍用のナノデバイスにやられたように見えますネ。電気系の能力が干渉している恐れがあるので、ワクチンソフトだけで完治するかどうか」

少女の容態を確認すると、男は膝をついたままわたしを見上げる。雇った男は優秀で、インフルエンザによく似た症状を一眼見たただけで症状に当たりをつけた。

さすが、警備強化専門の知的傭兵アドバイザーを自称するだけあって、彼、カイツノックレーベンはこういった軍用デバイスから引き起こされる症状をよく知っているようだった。

「しかし、それでも彼女を回収すべきかと。この自体は我々にとってチャンスと言えます。どういう形であれ、あちらの先手を取れるわけですかラ」

「命に関わる時は、御坂さんに白旗あげるわよ？」

クローンの姉、同じ学校に通うイケ好かない貧乳のことを思い出すと、げんなりと肩を落とす。

御坂美琴、学園都市一の電気系統能力者。自分の持つ精神干渉能力が効かない彼女を相手にするのは些か分が悪かった。

「ふむ、ならばあの少女の手を借りるのは如何でしょう？ ナノデバイスを制御するのは無理かもしれませんが、彼女なら一定の生命活動を

保てるかもしれません」

「誰よそれ、そんな人いるの?」

「白衣の天使様と呼ばれてるお人好し、と表向きはなってますネ」

「たまたまとはいえ知ってしまったクローンの実態。簡単に死んでしまふ彼女らの命を気にしてため息をつくつと、カイツは考えがあるよ
うで、ある少女を話題にあげた。」

「あー、第七学区の名物看護師のこと?名前確か、天羽彗糸、だった
かしら」

その少女に対して心当たりはあった。特に動向を追っていたわけ
ではないが、部下の一人、帆風と似たような能力だったため興味本位
で調べていたことがあった。

確かに彼女なら外傷なら治してくれるかもしれない。けれど彼女
が自分の中で真つ先に出てこなかったのは、能力について知っていた
からだ。

データ上では、中身までは治らないと記載されていた。皮膚や骨の
外傷や内臓の物理的な損傷は治せても、病までは治せない。それが彼
女の能力だった。

それを踏まえると、熱を出して苦しそうに気絶するクローンに彼女
は役不足でしかない。

「それは表の名前でス」

「表?」

「彼女の本名は藍花悦、ご存知ありませんか?」

完璧に名前を当てたはずだというのに、カイツは全く違う名前をあ
げる。その名前は、想像からかけ離れていたものだった。

「藍……それって第六位じゃない!?!」

「そうですヨ、知ってる人はごく僅かですけど」
超能力者^{レベル5}、序列六位。

藍花悦。

青がよく似合うと噂されるにも関わらず、性別、年齢、容姿、在籍
校、能力、その他プライバシーが一切明らかになっていない謎に満ち
たその人の名前に動揺する。

都市伝説に近しい人物の名に、驚きが隠せなかった。

「な、なあって貴方が知ってるのよお」

「前の職場で彼女について報告がなされましてネ。独自で調べてたのでス」

「ふーん……でも、名前しか公表されてないワケありの人間なんて、頼りたくはないのだけど？」

動揺しながらも、名前しか知らなかった人物について考えを巡らせる。

情報がほとんどない幻のような存在をわざわざ呼びつけ手駒にするのは少なからずリスクがあった。

「彼女は言葉通り不死身ですし、乱雑に扱っても多少のことでは壊れません。それに情に弱く、貴方の思惑を正直に話せば快く快諾してくれますヨ」

「そんな人頼らなくても大丈夫よ」

不死身という言葉にほんの少しだけ興味が湧いたものの、わたしが導き出した結論はシンプルだった。

触らぬ神に祟りなしとも言うように、謎に包まれた人をわざわざこの件に巻き込むのは悪手だと結論付けた。

「私が彼女を知ったのは前の職場と言いましたが、どうしてもか分かりません力？」

「はい？前職って絶対能力進化計画の警備主任よね？なんでそんな人が……まさか」

「彼女はクローンの生みの親、だから前の職場で話に上がったのですヨ」

しかし、カイツの言った新しい情報に心が揺らぐ。

クローンの生みの親と言われてしまえば仕方がない。

妹達シスターズにいかなる感情を抱いているかは分からないが、もし件が耳に入ればわたしの知らないところで厄介ごとを招く可能性がある。その可能性を消すためには、相互利益のある形で手駒に迎えた方が管理の手間が省けるはずだろう。

「……ちよつと警備員アンチスキルに動向を追わせるわあ。どうにか会わずに接触

できるようにしてみる。怖そうだし？」

しかし、管理をするにしても、第六位なんぞに直接会いたくなかった。能力が分かかっていない人間に丸腰で接することもそうだが、黒幕に第六位と接触したことを知られるわけにもいかないというのが理由だ。

それに正直に言えば、名前と雇った男越しでしか存在を確認できない人と顔を会わせるのが億劫だった。

「とりあえず救急車呼んでちょうだい？ 適当に精神操作して途中まで運んでもらうから」

ため息をついて救急車に電話する男の声を聞きながら空を眺める。工事現場の鉄骨で狭まった青い空には、忌々しいほど輝く太陽しか見当たらなかった。

「ん？ 彼女の猫でしようか？」

通話を切った頃、カイツは近寄ってきた黒猫を見て呟いた。成熟し切っていない、まだ子供の黒猫は、手招きした彼に小さく威嚇をした後すぐに走り去る。

身を潜めて威嚇し続ける猫の鳴き声が絶え間無く聞こえていた。

「ありやりや」

「首輪してないし、野良じゃないのー？ どつちにしろ今は構ってる暇ないしい？ ほっときなさい」

「そうですね」

「それで？ 『Auribus oculi fideliores sunt』はどうなってるのかしら」

「あの都市伝説サイトですか？」

話は子猫からとある都市伝説サイトへ移る。

仰々しい名前をしたプライバシーの侵害と名誉毀損で訴えてもいレベルの傍迷惑な都市伝説サイトは、ついこの間自分の隠れ家をスクープとして取り上げた最低なサイト。

人の迷惑というものは考えられないのだろうか。

「全くもう、尾行も探知も出来ないようセキュリティ力を全開にしてるっていうのに、遠く離れた水滴をレンズにできる念視能力者サイコメトラーに取ら

れるなんて。なんで趣味の都市伝説サイトの管理人がそんな趣味持ってたんのよ、ほんと能力者って悪質よね」

「あなたがそれをいいますカ」

「なんか言った？」

何か気に触る言葉が聞こえたが、カイツはさつと目をそらしてクローンを見下ろしながら自信ありげに笑う。

「ま、その件はご心配なく。ダミーサイトを自動生成するプログラムを走らせています。あのサイトが日の目を見ることはないでしょう」

自信に満ちたその言葉を信用する他なかった。

しかし、その信頼は脆く崩れることとなった。

「おやおや、これハ。ダミー生成の仕組みを解析して、元のサイトを突き止めようとしているものがあるようデス」

それは今日の朝のこと。綺麗な窓から朝日が登るのを眺めていた時のことだった。

「アンタねえーご心配なくって言わなかったかしら!？」

「まあ待ってください。万が一に備えて、侵入者を逆探知するように仕組んであります」

パソコンの前で薄く笑う男の頬を手持ちのリモコンでグリグリと挟ると、慌ててパソコンの画面を見せつける。

策があるという男を怪訝に思いながらパソコンを横目でみると、確かに彼のいう通り策はあるようだった。

「風紀委員第177支部？」

パソコンに表示された文字を呟く。

今思えば、ここから見通しが狂ってしまったのだろう。支部で見つけた風紀委員の子が御坂美琴の友人で、その記憶とデータを全て消したのがきつとターニングポイントだった。

しかし、あの時はあれ以外やりようがなかったとしかいえない。
巻き込まないためにも、知られないためにも、安全に妹達シスターズを保護する
ためにも、仕方のないことだった。

「そういえば、藍花悦を勧誘することにしたんですか？」

大きく息をついて置いて置いてあるソファに座ると、パソコンを操作する
手を止めて話しかけられる。昨日から続く会話の答えを知らない彼
に黒い携帯を見せると、柔らかい目尻を僅かに釣り上げた。

「昨日なぜか警備員アンチスキルと一緒に居てね、ちよろーつと操作して気づかな
いように、ほら、携帯奪ってきたの」

「電話番号見るだけじゃダメだったんです？」

「なんか取り込み中だったから、しれっと持ってきてもらっちゃった。
まああ、人越しだったけどいい人っぽかったし？強かったし？使って
あげないこともないかなーって」

この携帯は後で看護師でも経由させて彼女の手元に送り届けよう
と今後のスケジュールを組み立てながら、携帯をカバンにしまう。

男向けの無骨な携帯電話を取り上げたのは昨日の夕方。なにやら
23学区でいざこざがあったらしく、警備員アンチスキルやMARに囲まれた彼女
を見つけてその場で奪ってみたのだ。

警備員アンチスキルとは言っても、『擬き』のほうだったりと色々な臭くはあった
が、彼らの記憶を覗き見た限り彼女は強いようで、使える駒だと判断
した。

しかし不安要素はあった。それは昨日の昼、公園で食事をする彼女
を通行人越しに確認した時見た光景のことだった。

「……問題なのは第二位さんなのよねえ」

「だ、第二位、ですか……？」

「そうなの。第二位、垣根帝督と昨日から一緒にいてねえ。面倒にな
りそうじゃない？」

「暗部組織に属する彼がなんであんな表の人間ト……」

垣根帝督。名前と能力だけは知っている超能力者レベル5の一人である彼
の名前が出たのが相当驚きだったのか、カイツは目を見開いて椅子か
ら勢いよく立ち上がった。

暗部にいと小耳に挟んだことはあるが、目を見開いたまま椅子に深く腰をおろした目の前の金髪の男の反応を見る限り、それは正確な情報だったようで、もう一度深く息を吐く。

「どうやら彼氏みたいなのよ、藍花悦のね」

仲良くお昼ご飯食べていたみたいだし、と付け足すと彼はまたもや驚いた顔をして、しかし今度は興味深そうに声を弾ませた。

「か、片方は身分を隠しているとはいえ、超能力者^{レベル5}同士のカップルとハ……」

「そうよー。彼らが保護してる少女の脳内を確認したわあ。半同棲してるみたい」

「いやはや、超能力者^{レベル5}の色恋沙汰はあまり聞きませんが、そうですね、彼らが……まともに恋愛をしている彼らはまさに、序列も霞むほどの『勝ち組』……」

「わたしが第六位に負けてるって言いたいわけ？」

「イエ……」

生き生きとした声で興味津々に独り言をぶつくさと呟く男に怒気を含みながら笑いかけると、その表情は一気に弱々しくなる。

レディの目の前で恋人の有無を問うような話はタブーだと社会経験で学ばなかったのだろうか。

「ったく、どうなるかしらあ……藍花悦との仲良し力がどれくらいなのかによって、面倒ごとが増えるかもしれないわねえ」

「本当に付き合ってるのなら大丈夫ですよ。藍花悦という少女は好きな人を争いごとに巻き込もうとしませんかラ」

ソファに体を埋めさせて、ライトの光に目を細めると優しい声が背を向けたカイツから聞こえた。

自信とは違う、確信めいた言い方に戸惑いながらも、わたしはそれを信じることにした。

そしてわたしは出会った。眩しい金髪と、悍ましい瞳を持った第六位の怪物に。

彼女の記憶も見て、第二位の目も回線を外し、バレないように水面下で動かした。簡単な脅し文句も添えたら、彼女は遺憾無く能力を發揮し依頼を完璧に遂行した。

普通なら洗脳もせずにそんなことはさせない。考えの読めない人間なんて信用に値しないからだ。

しかし今彼女を協力させているのは、様々な問題と、盲目的で絶対的な愛と、なぜか直感で感じる狂気に近い優しさに絆された結果である。

その選択が仇をなしたと分かったのは今さっき。

走り回る顔見知りの前に立った今この瞬間だった。

「あらあ、こんなところで奇遇ね。御坂さん？」

「食蜂、操祈……」

短い茶髪が風に吹かれ、目を見開いた彼女から小さくわたしの名前が呼ばれる。

『随分あっさり出て来たな、第五位』

「目に付く監視カメラ全部にアピール力全開で映って、白い虫で監視しておいて、白々しいわねー？ねえ、垣根さん？」

天羽彗糸が持っていた垣根帝督の『目』と同じ姿をしたカブトムシが男の声を放つ。緑色の瞳はどこか怒っているようだった。

「あの子達はどー」

「天羽さんは後から来るけど、貴方の妹はサイトの建物の中よお？わたしの隠れ家じゃ、あそこが一番信頼力あるもの」

「お仕事？アンタ、あの人に何させて」

「しょうがないわねー、でもこっちも時間が押してるから、話したいんならついて来なさいー」

質問しからない面倒な人に背を向けて歩き出す。
本当に厄介なことになったと、一人面倒を感じながら。

71話：良くない知らせ

詰められたトラックの荷台は思っていた方向とは逆に進んでいるようで、モニターに映る第三位は鋭く目の前の金髪頭を睨みつける。『写真の場所から離れていつてるみたいだけど?』

『時間が押してるっていったでしょ?話をしたかったら、しのごの言わないで。それにあの場所は誰も近づけたくないのよねえ』

クーラーの効いた研究室で見るパソコンから流れ出た軽い女の音声。選手宣誓で聞いた時と同じ声で、第五位は言葉を繋いでいく。

『心配しなくても、すべて終わったらあの子は返すわよ。ナノデバイスを打ち込まれてるみたいだから力には少し心配だけど、命に別状はないしい?』

『ナノデバイス?』

『あら、知らないの?』

『逆にあんたは妹達の何を知ってるってのよ。こそこそしてあの子を拉致して、変な連中頼って!』

研究室は実に静かだった。モニターの向こうで一触即発しそうなほど力強く呟く第三位とは比べ物にならないほど。

何を考えているのか、先程から隣の椅子に座ったまま一言も喋らない茶髪の青年を見つめてみるが、第三位に目もくれず、彼は金色のピアスを眺めていた。

『何も知らないのね。……一番最初はずちの研究所で妹達について研究員が話してるのを聞いてちゃったことかなー。第一位のプランが凍結して、うわさが裏で広まっちゃったのよ』

「そしたら暗部の一組織に御坂美琴の無力化とクローンの捕獲の依頼が来たことを知ったわけだ」

『え?』

第五位の声によく顔を上げて、補足するように呟くと、茶色い髪の間から暗い色の瞳でモニターを覗く。

真意が見えない第二位の黒い瞳が、拗ねた子供のように面倒な色をしていたのだけは確かだった。

「トレーラーのそばに落ちてたデブがいただろ。あれがその一人だ」

『あの人が……ってなんで知ってんのよ』

「そりゃあ俺が、」

「こいつに教えてやったんだよ。高位能力者がホイホイ暗部に関わるもんじゃねーからな、こういう形態をとってお前らに協力してんだよ。顔合わせたくねーし」

嘘を僅かに交えた本当のことを伝えたと、垣根が驚いたようにこちらを向く。

彼が暗部と伝えること自体に不満も、何もなかった。けれど、上司の顔がチラつくのと、どうしても彼の言葉を奪うことしかできなかつた。

「お前……」

「文句はテメェんとこのお姫様に言え」

はつきり言おう、自分は優しくはない。人は殺すし、ろくな実験しかしていない。

科学のために、木原の名字を持つ自分は、何もかもを壊して科学を悪用してきた。

しかし、同時に自分は拾われた身だ。

忠義を尽くすとまでは言わない、けれど大事なモルモットが身体や精神に異常が発生し、実験を継続できなくなる可能性があるのなら、なるべくそれを排除するのが研究者の務め。

たとえ科学を悪用しようと、結局は科学。

実験をする時の数値は同じにしなければならぬし、条件は一つしか変えてはいけない。

この青年が暗部とバレて、目の前の少女から非難され、天羽から引き剥がされた場合、きつと彼女は非難された彼に酷く悲しむ。

自分じゃない誰かのために泣く。

健全とは言い難い歪んだ考え方だが、それが彼女だ。

そのせいで実験が無に帰すことになっては非常に困るの。

『ていうか、お姉さん誰よ』

「テレステイナ。今は医療センターで働くただの研究員だ」

『ああ、あなたが……』

怪訝そうな顔でモニター越しに鋭く睨まれる。

しかし直ぐに話を戻すと、その視線は外された。

『あなたの言う通り、研究員から存在を知ったすぐ後に暗部の輩にそんな依頼が届いたことを知ったのよ。御坂美琴の排除と妹達の搜索を指示されていたみたいよお？』

「なるほどな。一方通行のプランを潰した奴なんぞ邪魔だったんだろ。それで本人の無力化の代わりに、間違えてクローンの方を刺しちまったと。馬鹿すぎんだろ、任務の一つもこなせないのか」

隣でため息をつく第二位の横顔が曇る。イライラとしながら片手で金色の指輪を潰していく様は狂気じみていた。

『その理屈だと天羽先輩が除外されてるのが分からないのだけど？あの人も一緒にいたんだから』

「……あいつは少々特殊だな。上層部に守られていることに加え、能力の関係上無力化できねー。かといってもあの女にバレようが第三位ほど大した力はない。除外するのわからんでもないな」

第三位の質問に軽く軽く答えるが、思考は別のところにあつた。

「というのも、第三位の疑問も決して的外れではないからだ。」

永遠に死なない肉体、そして生命を育む彼女の能力は、暗部にとっても都合が悪い能力だ。

御坂美琴を無力化するにしても、彼女がその場にいれば失敗してしまう。

どう考えても、今彼女が出歩いて、食蜂操祈に協力している状況は不自然だった。

誘われている。

なにか別の思惑に乗せられていると勘ぐってしまう。それほどまでに違和感があつた。

「でも御坂をナノデバイスで昏睡させただけなのか分からねーな。暗部なら殺しにかかるだろ」

『そこは分かんないけど、妹達が狙われる理由は分かるでしょ？』

『ミサカネットワーク……』

違和感の正体に気づかぬまま話は進む。第五位の目的はどうやら、妹達の脳波リンクで結成されたネットワークの悪用を防ぐためだったようで、暗い顔をする御坂に薄く微笑みかける。

『そ、あの処理能力の高さを悪用されるとやばーいことになっちゃうしい？だから個々の妹達から電氣的ウイルスを感染させないようにする経路を取ったの。私の天才力でね？』

「もし他の妹達が奴らの手に落ちたとしても、ミサカネットワークには干渉できないのか。それはよかったが……」

食蜂操祈の言葉に安堵すると、別の部屋で遊ばせている9982号の顔が思い浮かぶ。

こんな悪人の手伝いをやらされている彼女たちに被害が及ばないことが分かったのは、ある意味朗報だった。

『だから天羽先輩を連れてったの？彼女が妹達の健康管理任されてるから……』

『あー、そうみたいだけど、最初の理由は全然違うわよー？頼んだのは暗部の妨害だし』

面倒だと言わんばかりに足を組み直して座る第五位に、御坂が訝しげに眉をひそめる。この三人の認識と、彼女の言葉は乖離していた。

私は知っていた。

彼女が私を殴らなかつたことを。殴るように見せかけて、痛みなく眠らせたことを。

夏の暑い日、あの日の出来事を私は忘れることなどできなかった。彼女に赦された人間だからこそ、第五位の発言に納得がいかかつた。

「妨害？あいつがどんな形であれ人を傷つけるわけないだろ、あいつがそんな要望聞くはずが、」

「脅したんだろ。そうだな、「アンタの大好きな垣根さまに秘密を知られたくなければ協力しろ」みたいな感じでな」

『アンタ自己肯定力すげえすぎない？』

少し高ぶってしまった感情は簡単に覆される。

第二位の自信ありすぎる返答に一瞬場の空気がぎこちなくなるが、

首を傾げた第五位の複雑な顔に空気はさらに重くなった。

『半分正解で半分不正解ってところかしら。そもそもあの人、今回の件全部知ってたのよ。知ってなかったらそうやって脅すつもりでいたわあ。死ぬのを恐れずに、絶対に裏切らない永久不滅の駒なんて誰にとつても魅力的でしょ?』

「……知ってた?」

第五位の言葉に、モニター内にいる御坂も含めてこの場にいる全員が驚きを隠せなかった。

能天気で、何考えているのか分からない、なんなら昨日入院騒ぎになる程暴れた女が、なぜ暗部に精通する第二位や自分よりも先にこの事件を嗅ぎつけていたのか、分からなかった。

『そうよ、こういう事なのは全く分からないけど、彼女は全容を知ってたわ。だから彼女は協力する気で私の元に来たの』

『確かにあの人なら状況を知ってたら飛び出して行きそうね、中身三歳児説あるし……』

『だから快くお仕事してくれてるわよ? どうやらその暗部組織の一人を復帰不能状態にまで持ち込んだらしいしね』

憎たらしい笑みを見せると、第二位は机に散乱した可愛らしいボールペンを握り潰す。

怒りを隠さないその姿にもし今の感情のまま天羽と再開したら世界が崩壊するかしらないかの喧嘩になりそうだな、と想像してしまうのは当たり前で、なんで彼女はこんな男を好きになったのか、疑問が絶えなかった。

「あークソ、目を付けられたらどうな。俺が必死に隠してたものを明るみにしてくれてどうもありがとうクソガキ」

『どういたしましたしてえ? 第二位に感謝されるなんて光栄だわあ』

「ム力ついた、後で半殺しにしてやる」

『物騒なこと言わないでよ』

モニターに映る第五位と少しばかり口論をする騒がしいガキに、何故惚れたんだと年下上司のよく分からない性癖と好みに若干呆れていると、ふと先程の話を思い出す。

「おい、ちょっと待て」

「なんだよ」

「天羽が妹達の体調管理をしていることは上層部が知っているはずだ。妹達を世界中に派遣したからな、知らないはずない。だから暗部が妹達を狙うなら真っ先にこの病院に来るはずなんだ」

動いていた暗部は上層部の命令によってのみ動かされる。

妹達の処遇を知っている奴らが、わざわざ情報を渡さずに暗部を動かすとは考えられなかった。

『じゃあ今回の件は上層部絡みじゃないってこと?』

『そうよお、今回の黒幕は上層部じゃないわ。暗部を動かしていたのも、上層部を騙った別の奴ら』

そしてその考えは的中した。

『木原幻生、その人よ』

形のいい唇から一人の名前が呼ばれる。

スピーカーから流れた音声は、到底聞きたくない男の名前を広い研究室に響かせる。

同時に大きな音を立てて倒れた椅子は、もう既に座る人がいなくなっていた。

大きなビルが影を作る。日照権について問いただいたくなるビルの横で携帯に表示された画質の悪い地図に頭を悩ませた。

「で、ここはどこなんです?」

「食蜂ちゃんに指定された場所はここであってるはずだけど、いないねえ」

「どれ……おや、方向音痴でも地図さえあればたどり着けるのですね」
送られてきたメールに添付されていた地図を横にしたり、斜めにしたり、ぐるぐると回しながら見ていると、人の姿になった05に取り上げられ、再度確認される。

一言余計なその生き物に頬を膨らませて抗議してみても、垣根くんと同じようにはからかうのを止めなかった。

「ふん、嫌味が言える程度には成長したんだ。凄いでちゅねー、すげーむかつきましたあ」

「拗ねないでくださいよ、事実でしょう?」

「事実じゃないし」

車椅子の取っ手を掴み、ビルの影を足早にすぎる。

小学生男子と同程度の嫌味に少し機嫌を損ねると、握った取っ手が軋むほど強く手を握っていた。

「それでどうするんですか?拗ねているのは構いませんが、このビルに入る手立てを考えねばなりませんよ」

「……そーねー、どうしよつかなあ」

黙ったまま歩こうとした所、05に振られた話題に足を止める。

あたしにはこの先の未来が分からない。つまり、このビルに入る方法がわからなかった。

あたしが見たアニメは『とある魔術の禁書目録Ⅰ』『Ⅱ』『Ⅲ』、そして『とある科学の超電磁砲1期、2期』

一方通行と垣根くんのスピノフも見たが、もう全て時系列的には終わった出来事なので割愛する。

そう、御坂美琴が中心となる大覇星祭2日目を、あたしは半分までしか見れていないのだ。

時代も時代だったし、アメリカというアニメのみならず日本の映像作品が海賊版と違法アップロードくらいしか見当たらない国では、リアルタイムで配信されているアニメを見る手は少なかった。

なぜ見なかったのか今では悔やまれるが、そもそもあたしはオタクでもなければ、アニメや漫画が好きないでもない。

ただ妹が休みができたのなら見ると送り付けてきたDVDボックス

スを眺めただけ。

こんな世界に生まれることがわかっていれば、もつと真面目に見てただろうに。

「ほんと、どーしよ……」

関わらなくても良かったけれど、助けを求める人がいるなら助けなくてはいけない。

その役目を負うのだから、当然の事だった。

「行かないのなら一人で行かせてもらいますね」

「え？ちよつと、なんでよ」

一人悩んでいると、唐突に車椅子が独りで動く。

真つ直ぐ、ビルの影を抜けて陽のあたる場所に離れた彼は、蛇のような目付きで胡散臭い笑顔を作った。

「貴方を裏切ろうかと思いましたが」

車も通らない静かな道だからか、やけに彼の言葉が大きく聞こえた。

「……ふーん。あたしの愛を無視して救われた事実を反故にするんだ？」

「愛？愛されたことも無い貴女に、愛の何が分かるのです？」

「……」

「貴女のおままごと付き合うつもりはそもそもありませんでしたよ。勝手に正義でも名乗って楽しくやってください」

車椅子がゆっくりと遠のいていく。

その姿になにか、哀愁を感じるのはきつと、好きだった妹を思い出すから。

「相似くん。救いに二度はないんだよ」

「はい？」

「それだけ知っていて」

伸ばそうとした手を下げて、祈るように両手を握る。

あたしのやるべき事はすべてやった。

その結果が今の状態なら、失敗を受け入れなければならぬ。

一度救った命を、どう扱うかは自由であるべきだ。

「……引き留めないんですね」

「アナタのやりたいことなら、それを応援するよ。でも、正義のないエゴで誰かが不幸死ぬになるのなら、あたしは赦さない」

妹も、垣根くんも、目の前の彼も、救われたその先の未来にはあたしは干渉してはいけない。

それが彼の問いへの答えだった。

誰かに幸せになってもらうために生きているのなら、幸せになった人の隣にいてはあたしが幸せになれない。

愛する誰かが幸せになるために生きる時、あたしは最高に幸せを感じるのだ。

「あたしね、あたしの事を幸せにしてくれる人が好きなの。だからもう幸せになった君は、好きなどころに行っていいよ」

その言葉が彼に聞こえたのかは分からない。

自動で進む車椅子が見えなくなるまでぼんやりと、笑って道を見ていた。

「いいんですか？あの人を敵に送り出して……」

「それが彼の幸せなら仕方がない。これから先の未来が不確定な以上、あたしがどうこうするのは無理でしょ」

「だからって……」

「二度目はないの。あたしも彼も、全てにおいてもチャンスは一度しかない。だからもうあたしは何も言わないよ」

05の不安そうな表情に鬱陶しさを感じながらビルに背を向ける。

それらしい理由と優しい言葉で見送ったが、きちんと考えてのことだった。

杠ちゃんは垣根くんのところ。暗部が関わっているとところに深く今の彼なら世にはなっても支障はないだろう。

ついでに彼のデータはある以上、居場所をサーチすればこのビルにいるらしい今回の黒幕に会えるかもしれず、リスクはあれど簡単にこの事件を解決できるかもしれない。

彼を使えばこの事件も早く解決するのならば使う道はない。

それに、誰かを不幸にするのなら、必ずまた会うことになるのだ。

なにか起こしたら能力で特定して、今度こそ、全てをリセットさせればいい。

合理性と打算。

それが無ければ、あのような人間を手放すわけなかった。

「冷たい人ですね」

「なんとも言いなよ。それにほら、」

後ろから聞こえたエンジン音に振り向くと、人工的な金髪と、明るい茶髪に白いカブトムシを持った少女と目が合った。

「救うべき隣人は別にいるしね」

やっと来た主役に、あたしは小さく笑い返した。

72話：仕方のない人達

ビルの影に一人佇む金髪の少女は、ずっと探していた人だった。

「天羽先輩！」

「やつほー、遅かったねえ。あたしが早かっただけかな？」

朝からずつと探していた姿に駆け寄ると、彼女、天羽隼糸は真っ白いスカートを翻して明るい笑顔で手を振る。

朗らかな笑顔はこの場に似合わなかった。

「やつほー、じゃなくて！アンタ、垣根さんにめちやくちや心配されてたわよ!？」

「え？なんで？」

「多分ですが、私の通信が切れたからかと」

「あー、そういうシステムだっけ。ま、あの子はこっち来ないだろうし、どうでもいいけど」

何も分からない子供のように首を傾げて、困ったようにはにかむ。手の甲に止まるカブトムシと談笑しながら頷く危機感のない緩んだ顔は、確かに垣根さんが心配するのも無理はなかった。

しかし、その明るい顔にまた別の疑問が湧く。

彼女一人とカブトムシ一匹しかない光景は、聞いた話とは違っていた。

「どうでもいい……って、そう言えば、もう1人ついてるって話だったけど、天羽さんとカブトムシだけ？」

「……あの子は用事があるみたいだから、気にしないで？」

大きな目を閉じて笑うと、目尻が跳ねる。煌びやかな化粧で縁取られた目で作った胡散臭い笑み。

それに僅かに怯み、言葉が詰まったところで白い虫が頭から飛び立った。

『その用事は、ジジイのことか？』

『お、テレステイナーさんもいるの？賑やかだねえ』

『お前は相変わらず能天気だな。だからあのガキ怒らせるんだよ、分かってんのか？』

二匹の虫を手にして先輩はテレステイナーの言葉に首を傾げる。
あざとい動作だったが、表情を見るに本当に言葉の意味が分かっていないだけのようだった。

「なんか怒ることあるの?」

『また入院騒ぎでも起こされたら堪んねえだろ。結構大変だったみたいだし』

「んー、それはそうかも?でも今日は大丈夫だから!」

『お前の大丈夫は大丈夫じゃねえんだよ』

彼女を一番心配しているはずの垣根さんに対しての興味のない反応に呆れ返る。

これ程まで脱力させる返答があっただろうか。

身を隠しながらとはいえ、昼の時間を潰して彼女を探し回り、口を開けば彼女のことしか喋らない垣根さんに、なにか強いシンパシーを感じる。

鈍感な人間は、いつだって異性を振り回すものだ。

そしてそれを嬉しく思ってしまうのが人間というヤツなのである。

「お喋りしないで、目の前のことに集中してくれるう?」

やるせない気持ちにため息を着くと、頬を膨れさせて腕を組む食蜂に睨まれる。

申し訳なさそうに笑う天羽先輩にきつい視線を向けると、呆れた顔をして話を進めた。

「あ、ごめんね。それで、ここってなんなの?」

「この先が今回の黒幕、木原幻生のフォーラムが行われる会議場。道中の警備は無力化済よ」

「ふーん、木原幻生さんかあ。会ってみたいねえ、テレステイナーのお爺様」

『こっちは会いたくなかったがな』

聞かされていなかったと言うのに、先輩は驚いた素振りもせず、意外だという顔だけだ反応を返す。

呑気にテレステイナーに笑いかける姿は危機管理能力の欠如を体現しているようで、ますます垣根さんの苦勞が伝わってくる。

こんな人のどこが良いのかはわからないが、か弱いくせに強くなるうと背伸びして死地に飛び込む姿は確かに放っておけない。

無意識だとは思いますが、彼女の危機感のない狂気的な一面は過保護欲がそそられるものなんだろう。よくわからないが。

「それで御坂さん？妨害力さえ発揮しなければ、ここで見ててもいいのよ？」

「冗談。誰かの犠牲なしには何も出来ない奴らに、引導を渡してやるわ」

だんだんと小悪魔に見えてきた先輩から目を逸らし、少女漫画から飛び出してきたような瞳に視線を移す。

愚問とも言える答えのわかりきった質問を鼻で笑うと、私は答えも待たず飛び出した。

風を切り、ビルの隙間を抜けて、影を走る。

生ぬるい風が頬を掠めると、少し眉を寄せて顔を横に振った。

しかし、木原幻生は一体なんのためにこんなことをしているのだろうか。

忙しなく足を動かして暗い路地を走る間、ふとした疑問が浮かぶ。

この街の目的は絶対能力を作り出すこと。

だが絶対能力、既存の能力では到底たどり着けない領域を人の力で作り出すのは可能なんだろうか。

あの一方通行でさえ、2万人のクローンの犠牲を必要としたもの。

木原幻生が何を企んでいるにせよ、あの時以上の対価が必要になるはず。

それほどのものが承認させれるのなら、神の頭脳、それを目的とするこの街の本質はやっぱり――

そこまで考えて思考を目の前の道に戻す。

敵地に乗り込もうって時に考え事に没頭するなんて、天羽先輩を馬鹿にできないほど危機管理がなっていない。

後ろで走っている先輩に、この罪悪感がバレてないといいが。

「……あれ？」

後ろにいる先輩に罪悪感を込めて視線を移すと、そこには誰もいな

かった。

足を止めて再度確認してみても、やはり居ないものは居ない。

それも二人、食蜂操祈と天羽隼系がいなかった。

そこでようやく気づく。

嵌められた、と。

ここまでは一本道、はぐれるはずがない。調子のいいこと言っ誘い込んだつもりだろうか。

やるってんなら、例え同じ学校の女でも私は決して容赦はしない。

「ちよつとお、待ちなさいって、言ってる、じゃない!」

「食蜂ちゃん、大丈夫?」

しかし、そんな考えとは裏腹にゆっくりとした足取りで二人仲良くこちらにたどり着く。

人工的な金髪頭は長い髪を揺らし、大きく肩で息を吸いながら両手を膝につく。

片や天然物のくるくるとした金髪頭は大きな胸を抱え、食蜂の歩幅に合わせてるように走っていた。

「注意力とか、ないわけえ……?一人で、勝手に盛り上がってんじや、ないわよお。あたしが連れてきたんだから、足並み揃えるのが当然、でしょお……?」

「はあ、やつぱ一回家帰るべきだったかな……」

「……あんた達、運動音痴なの?」

外見がなんとなく似ているなとふと思うと、何気ない本心がぼろつと口から漏れてしまった。

「は、はあああつ!??誰が!運動痴だって、」

「そーいや、あんたが体育の授業受けてるとこ、見た記憶がないわね」
「確かに保護対象も体育は受けてませんね……運動能力が低い故ですか?」

逆上する食蜂に今までの学校生活を振り返る。

同じく先輩の頭の上にいるカブトムシの一匹―垣根さん曰く、自立型監視システムらしい―も心当たりがあったらしく、息を整えた先輩に優しく問いかけた。

しかし食蜂とは違い、困ったように胸の下を抑える彼女からは若干の余裕を感じさせられた。

「いや、体育やらないのは体操服がダサイからで、運動は結構できるよ？」

「じゃあなんでそんなポーズでゆっくり走ってるのよ」

「食蜂ちゃん置いてくわけにもいかないし、それに垣根くんに貰ったやつワイヤータイプで走りづらいんだよ……」

「……わいやー？」

「やつぱり能力で痛みはなくても重力には勝てないからね、なんだかなだ不愉快なの。ちよつとくらいなら大丈夫だけど、走らなくて良いならあんまり走りたくないじゃん？」

突然現れた単語に脳がフリーズを起こす。

ワイヤー、それは何かを巻き付けたり、固定する強い糸状のもの。

その単語と、走りづらいという言葉が結びつかなかった。

「わかるわあ！ズレて擦れちゃうし、保護力ないから走ると縦に揺れて痛いよねえ」

「だから基本スポーツ用なんだけどさ、それでも結構揺れるし、息しづらいし、足元見えないしで、やなんだよねえ……」

『男が理解あるわけねえんだから貰いもんだろうが着るなよ。デザインばかりで機能性見なさそうじゃん、あのイケメン』

しかし食蜂とテレステイナは分かったようで、話を進めていく。

一瞬分かるのかと驚くが、一旦会話が進んでしまえば何を言っているのか分かってしまった。

食蜂操祈と天羽彗糸。

彼女達の共通点は結構多い。

高い背に比べて幼く、華やかな顔立ち、色素の薄い金髪、不思議な瞳。それに身体に関係する能力と、何考えているか分からない風貌はよく似ている。

だから二人が意気投合するのならわかる。

では何故テレステイナが？

先輩と食蜂だけじゃない、テレステイナを加えた三人の共通項。

それは、高い背と大きな胸。

「今日替えがなかったからさ、やっぱり動きやすい服に一旦着替えてきた方が良かったよね。長距離走るのは無理かも」

「でも第二位さんから下着貰うなんて、結構進んだ関係なのねえ。あなたのサイズは店頭に無さそうだし、わざわざ買ってくれるなんていい人じゃない」

「うーん、いい人なのは確かなんだけどツンデレというか、回りくどいというか、面倒臭いというか。そんなところが好きなんだけどね、可愛いし」

もはや私は眼中に無く、二人は仲良さそうに、それこそ同じ趣味を持つ親友かのように心底楽しそうに話を続ける。

「えー、惚気？まさかこの話題で惚気られるとは思ってもなかったんだけどお」

「惚気じゃないよー。そういう食蜂ちゃんは、ちゃんとテーラー行つてそうだから、こういう悩みはなさそうだよね」

「……ちよつと」

「そうでもないわよお。布を多めに使うから他の人より料金高めになるし、気軽に服を買えないのよお」

自分を無視して進む談笑を止めようと小さく声をかけるが、それは叶わず食蜂の言葉で掻き消される。

初めて会った二人なのに、仲の良い光景を続けるのは舞台のようう嫌だった。

『あー、分かる。Tシャツとか伸びるし、プリント物は歪むし、ワンピースはズリ上がるしな。ネットショツピングとか邪悪の塊でしかねえ』

「そうそう。可愛いって思ってた買ってみたら全然入らなかったり、逆にガバガバだったりで、後々自分で手直しするんだよねえ。おかげで裁縫上手くなったけど」

「自分で出来るのはいいじゃない。私なんか手直しでお金かけなきゃいけないんだから。ま、大した値段じゃないけど、直ぐに着れないってのがねえ」

「ちよつと!!」

覇気のある、大きな声で目の前の姦しい声を塞ぐ。

そこまでしてようやくこちらを認識すると、食蜂は柔らかな笑みを途端にからかい混じりのいけ好かない笑顔に変えた。

「……あらあ？御坂さん居たのお？全然話に入ってこなかったから気が付かなかったわあ！」

「あんた、喧嘩売ってる？」

「べつにいい？お子様には早い話ただだけよお。仕方ない、仕方ない☆」

「この女ツ……」

「わー！喧嘩しない喧嘩しない。ごめんね、話し込んでやって。脱線しちゃったね、ごめん。話戻そうか」

頭から電気を散らし、ニタニタと笑う食蜂を睨むと、先輩が慌てて仲裁に入る。

珍しく困りながら謝る先輩の姿に戦意を削がれ、大人しく口を閉ざしたが、食蜂は不満そうに口を尖らせた。

「……そもそも、私一人で済ますつもりだったわけだし？仲良く突入する必要はないわよねえ」

「ええ。私もあんたと行動を共にする方が不安だわ」

眉間に皺を寄せて文句を言う食蜂だったが、彼女の言葉は珍しく同意せざるを得ないほど、完璧な正論だった。

「別々に動きましょう」

合図もなく、同時に同じ文章を言い放つ。

「……あたしは？」

どちらに着くか迷う先輩を一人置いて、二人別々に歩き出した。

「お守りかあ……」

観光客と保護者で賑わう大通り、規制された車道を手に持った紙切れを眺めながら歩くと、ため息を零す。

手に持った1枚の紙。正方形の紙切れには折られた皺と、『お守り』という文字が付けられていた。

「すみませーん、借り物競争なんですけど、誰かお守り持つてる人いますんかー?」

学園都市にお守り持つてるやつなんていないに等しい。

なにせ科学を信じ、科学を愛し、科学で繁栄してきた街なのだ。お守りなどという非科学的な物体を持つ人間は、少なくとも学園都市にはいない。

つまりこれは負け確定のお題。

勝ちは見えなかった。

「誰かー、っん?」

不幸だと叫びたくなる衝動を抑え、僅かな可能性にかけて道を歩く。

人の多い道ならば、誰かしらは持っているかもしれない。そう思っ
てひたすらに歩いていると、人混みの奥を走る茶髪の知り合いを発見
した。

周りの目を引く高い背に、綺麗な顔。容姿端麗な見た目は、確かに
知り合いの超能力者^{レベル5}だった。

「垣根? 垣根ー!! なにやってんだー!」

小走りで人を避けながら進む彼に大きな声で話しかける。

超能力者が走るほどなにか大変なことが起きたのか気になるとい
うこともあったが、彼がお守りを持つてる知り合いが居ないか聞きた
かっただけでもあり、どうしても喋りたかった。

「おーい、垣根! かーきーねー! 垣根さーん!」

「うるせえしぼくぞ」

一向に気が付かないが、根気強く叫ぶと、痺れを切らしたのか足を止めてじろつと湿った目で睨んでくる。

目は口ほどに物を言うと言うが、事実、彼の鉛のような真っ黒い目からは鬱陶しいという感情が色濃く伝わった。

「おおよかった、てつきり耳が聞こえてねーのかと」

「お前の場合は目が見えてないようだな、俺は今急いでるんだよ。分かるか上条」

「俺も急いでるんだよ！頼む垣根様！話聞いて!!!」

「あ？呑気に歩いてるだけだろ」

「ちげーよ！借り物競争中なんですってば！ほらー！」

鬱陶しいと顔に書いてある垣根を何とか呼び止め、『お守り』とだけ書かれた薄っぺらい紙を見せつける。

俺の置かれた状況を察すると、今度は哀れなものを見るかのような生温い目で見下ろす。

「お守り？学園都市で見つканのかよそんなの……」

「そうなんだよ……なんか持ってねえか？」

「お守りねえ……そんなもの……あ」

「なんだよ」

早く終わらせたそうにしていた彼だったが、なにかに気がついたのか難しそうな顔をして顎に手を当て考え始めた。

「お守りってただの概念的だよな？」

「は？何言ってるんだ？」

「厄除け、魔除け……護符的なものは世界に沢山ある。全部知ってるわけじゃねーが、パワーストーンや四つ葉のクローバー、そして口ザリオもそれに含まれる」

「えーと、つまり？」

サイズの大きい灰色とピンクのウィンドブレーカーから金色のネックレスを手渡す。

見覚えのあるナイフの形をした手のひら大のペンダントトップは、昨日の夕方に見たきりの少女のものだった。

「これやるよ。四つ葉のクローバー探すよりはマシだろ？」

「これ、天羽のじゃねえーか。あ……もしかして、昨日……その、形見……？」

「バーカ、生きてるよ。なんなら現在進行形で俺に迷惑かけてるよ」

渡されたペンダントに嫌な予想が浮かぶ。最後に見た彼女の血に塗れた姿から連想した結末に、恐る恐ると尋ねる。

けれど予想していた言葉と反して面倒くさそうに、且つ嬉しそうに呆れたため息を着いた。

「それならいいが……そもそもお守りじゃねーだろ、これ」

「あいつの扱い方がいい、恐らくコレはロザリオの括りになってる。もし読心能力者が触ったりしても、あいつ自身がこれを特別視してる節があるから問題ないだろ。敬虔で複雑な反カトリックとでも言っ
とけ」

「ありがてーけど、本人がお前にあげたのかよ？盗んだんじゃねーだろうな？痴話喧嘩に巻き込まれたくねーから、そこはハッキリしろよ？」

言い訳じみた解説を聞きながらペンダントを見つめると、太陽の光が磨かれた金属に反射して目に入る。

持ち主の金髪と同じように輝くこれを借りたいのは山々だが、どうしても彼らの関係性を考えると中々決断がつかなかった。

「あいつは俺のもんだから身につけてるものも俺のもんだろ」

「お、なんだ。とうとう告白でもされたか？」

「告白……そうだな、『告白』はされたな」

「まじか！やったのか!?!あの推定Gカップを揉みツグア!?!」

気の合う友人に対して使う以上の自己中心的で俺様ぶりな言葉にある推測を立てた瞬間、みぞおちに長い足を折りたたんだ膝が物凄いスピードでぶつかる。

確かにエロ方面に話を持っていったのは悪かった。俺だって、もしインデックスについてそんな冗談を言われたら殴るだろう。

でも気になるから、仕方ない。

告白という単語と、天羽が着ていたはずのウィンドブレーカーを着

込む目の前の友人の姿に下種の勘繰りをしてしまうのは当たり前のことだ。

だから俺は悪くない、思春期男子に誤解させるような態度を取るのが悪い。

そんな不真面目な冗談を頭の中で唱えても、テレパスでもない彼には伝わらず、苦虫を噛み潰したような顔で腹を抱え踞る俺を見下ろしていた。

「死にてえのか？」

「ず、ずびばせんでじた……」

「告白という単語に恋愛ごと以外の意味があることを叩き込んだけ。次そんな話題出したらテメエの粗チン磨り潰すからな」

「こわ……」

風貌からは想像つきにくい柔和な笑みで全男が泣くような物騒すぎる台詞を吐き捨てると、彼は立ち上がるのも待たずに背を向ける。

「それはやるから、とつとと行け」

「あ、ああ……てか何そんなに急いでんだよ。お前、競技あんのか？」
「言っただろ？ 現在進行形で迷惑かけてるってな」

痛みが落ち着いて立ち上がり、ペンダントを握って彼に声をかけると前に進んでいた垣根の足が止まる。

一度口を開け、何かを言いかけてから少し考えると、意を決したかのようにもう一度俺の前に立った。

「そうだ、あー……お前に必要な情報かは分からないが一応伝えておく」

「なにをだよ」

「御坂美琴とそのクローンが絶対能力進化計画の研究者に狙われてるらしいぜ」

「はっ。」

突然の発言に息が詰まる。

大事な友人の名前と、忌々しい計画の名前に、体温が一瞬にして冷えていく。

見開いた目は、潤いをなくしていった。

「あとはテメエ次第だ、じゃーな」

場をかき乱す様な事実だけ伝え、垣根は再び人混みに紛れて走り去る。

残されたのはキラキラと光るペンダントと不安。

ざわざわと五月蠅い人混みの中、俺は一人ただ呆然と立ち竦んでいた。

73話：すれ違い

暗いビルの中、僅かな陽の光が照らすロビーで一人エレベーターを待つ。誰もいない静かなロビーに自分の声が反響しても、誰かが降りてくることはなかった。

「降りてこないねえ」

『誰か使ってたんだろ』

「やっぱり別に警備を集中させてるのかなー、どう思う?」

『第三位とか、静かに侵入できなさそうだし、そうなんじゃねえの?』

エレベーターが止まる階を示すライトが点滅していく。上から下へ降りてくるエレベーターを待ちながら両手に乗ったカブトムシと共に辺りを見渡すが、やはり人は誰一人としていない。

遠くから聞こえるくぐもった騒がしい音から察するに警備は別のところに集中させられていると考えつくが、実際どうなのかは分からない。

軽い質感のカブトムシに問いかけてみるも、特に有意義な答えは帰ってこなかった。

「じゃー楽勝だね、面倒ごとは避けたいし、ラッキー」

「あの、お言葉ですが保護対象、もう少し危機感というものを……」

「ハイハイ、わかったから」

困ったように呟く05が羽音を鳴らして頭に留まる。説教くさいセリフを適当にあしらいたため息をつくと、ちようどのタイミングで弾んだベルの音が静かなロビーに大きく響いた。

暖かい光が目の中の扉からゆっくりと零れ、エレベーターの内部から黒い影が伸びる。

光に照らされて出てきた屈強な男数人と目が合うと、すぐさま銃口が向けられた。

「なっ、なんだ貴様!」

「ま、薄いつて言っても警備はいるよねー」

『そりやそーだろ』

カブトムシに引き連れられた変な女に戸惑いながらも、銃を手にした男

は強く睨む。

五人ほどの男たちから向けられた銃口が明かりに照らされ光ると緊張感漂う空気に大声が木霊する。

「動くなーどうやって入ってきたんだ！」

「えー、どうって、こうやってだよ」

笑顔で足を一步進めると、大きな体がひとりふたりと、順番づつ大きな音を立てて地面に倒れていく。

何も動作はなかった。自然なように男たちが眠りについて、膝から崩れていっただけ。

ただそれだけだというのに男たちは化け物を見るかのように歯を食いしばり、同じように倒れていった。

「……書庫のデータと一致しませんね、あなたの出来ることは傷を治すことだけでは？」

『便利な能力だよな。そりゃあお前に執着するのも納得するわ』

「うるさいですよー、お黙り」

簡単にカブトムシたちの言葉をはぐらかすと、エレベーター内の一番上のボタンを押して回答から逃げる。最上階を目指して扉が閉まると、がくと大きく中が揺れた。

余計な詮索をされるのは少し面白くない。

第六位の力、複雑な経路を辿って転生した故の副産物は存外便利な能力だったが、同時に身に余る。他人の体の支配権を奪い取る能力は誰にも誰にも譲ってはいけない、自分にしか扱えない大きな爆弾だった。

だから超能力者^{レベル5}としては誰の手伝いもしない、してはいけない。そして能力を知られてもいけない。

何せ2km先の人を全員殺すことも、昏睡状態にすることも出来る能力者など、御都合主義の塊で、勝利の女神に必ずなってしまうのだから

「はあ……それで、どちらに向かっているんですか？」

「上。大抵大物は上の階にいのよ」

『VIPフロアのことか』

「うん、多分そこにいるんじゃないかなーって」

二匹のカブトムシの緑眼に見つめられながら、上昇していくエレベーターの表示パネルを見つめる。エレベーターのいる階と地面からの高さを表示するモニターには子供の頃のような心踊る感覚があった。

「たぶんって……」

「だって知らないし。知らないなりに適当に動くだけだよ」

「どういう意味です？」

「ひみつ」

誤魔化した秘密に納得いかず、不機嫌そうに頭の上で動く05を余所に、ふとあの忌々しい存在を思い出す。

前世の知識が無ければ満足に動くことも出来ない。でも、あたしがいることで変わる何かがあるなら、行動は必須。

知識がなければ何も出来ない無能だと、神なんぞに思われたくなかった。

嫌な野郎の顔に少し腹が立つも、感情を隠そうとドレミの音階を適当に当て嵌めた鼻歌を鳴らしながら再び表示パネルに向き直る。

目的のフロアはかなり近かった。

『でも、本当にあのジジイはここにいいのか？』

もう少しで目的地に着くところで、テレステイナーの音声が狭いエレベーターに響く。

唐突な質問に驚き、視線を落とすと緑色のつぶらな瞳と目が合った。

「どうして？」

『木原がそういう性質だからだ。こんなところであっさり捕まるほど耄碌してねーよ、あのジジイは』

『でもフォーラムには出ているのでしょっ？』

『他人を自分そっくりにする技術はある。影武者が適当に出席してる可能性も十分にありうる』

テレステイナーに言われ、初めて別の可能性に気がつく。

こんな序盤に黒幕が捕まることは創作の上ではセオリーで、二転三

転と物語を続けるためには簡単に終わらせることは無い。

それが『とある』という多くの小説や漫画が発表されている大きなジャンルならば尚更だ。

それに木原幻生の重要さを考えれば、もし本当に本人がいるのなら、暗部でも使つて警備させるはず。

「……念の為戻ろう。杞憂ならそれでいいのだし」

エレベーターのボタンを押す。向かうとしたら、きつと大事な鍵が一人眠っている女王様の根城。

上昇していくエレベーターは、緩やかに停止すると、下降しだした。

エレベーターが下降する。自分と、死体しかない狭い空間に苛立ちながらもその扉が開くのを待つ。

あつという間に金持ちや重鎮がいる特別なフロアに到着すると、思い扉から淡い光が溢れ、姦しい二人の少女と視線があった。

「あらあ？遅かったじゃないの、天羽さ、ん……？」

「ちよつと、何処ほつつき歩いて……え？」

人工的な金髪頭と、自分より赤みがかった茶髪頭が目線の下で目を見開く。嬉しそうな顔から驚きに満ち溢れた顔が面白く、鼻で笑うと一気に場の空気が変わった。

来ることを教えて居なかったのだから驚くのも無理はないが、あま

りのオーバリアクションを笑わずにいられなかった。

「よう、ガキども。何アホズラ晒してんだ？」

「か、垣根さん！なんでここに……！」

「馬鹿を迎えに来たんだよ。暗部が関わってねーなら問題ねーだろ？それに、関係者を始末しにな」

「はあ？なんで垣根さんがそんなこと……」

「天羽の名前が広まると厄介だからな。情報を消すんだよ」

「ああ、なるほど。相変わらず過保護ね……」

適当な理由を並べて若干豪華なフロアを見渡す。少女二人と屈強な警備員しかおらず、見慣れた背の高い天然の金髪が見当たらないのが気に入らなかつた。

彼女の匂いも残っておらず、カブトムシの反応もない。

ここに居ないことは明白だった。

わざわざ迎えに来たというのに、俺の犬はまた行方をくらませていた。

「でも、ちよーどいいところに来たわね。木原幻生を捕まえたところよお、鑑賞してくでしよう？」

「天羽はどうしたんだ？」

「そんな急かさなくても、じきに来るわよー。それより木原幻生のところ、早く行きましようっ！」

天羽の金髪よりトーンの明るい髪が揺れる。きらきらと輝く瞳は少々気味が悪いが、それよりも彼女の言葉に興味が惹かれた。

あの馬鹿のことも気にはしているが、有名なクソ野郎のご尊顔が観れるとなると、話が変わって来る。

「……で、どこにいるんだ？」

「この中よー、連れてきてもらったの」

食蜂の開けた扉に御坂と三人で踏み入ると、警備服姿の男複数人が一人の男を囲っていた。

目と口を封じられ、拘束された姿で静かにパイプ椅子に座る老人を監視する屈強な男共というシニールな光景に面白さを感じるも、実際のところ場所が薄暗い倉庫なのも相まって怪しげな雰囲気醸し出

していた。

「どこにいたの？」

「セーフルームに隠れていた所を発見しました」

弱そうなジジイだな、とそれだけ思いながらことが進むのを見守る。しかし同時に学園都市における科学の第一人者、そんな男が目の前のヨボヨボで弱そうな老人だということに疑問が浮かんでいた。

テレステイナーの祖父ということで、年を食ったジジイなのは分かってはいた。しかし直感、といえばいいだろうか。

生気や覇気という、木原特有の気味の悪い情熱がこの男から一切感じられないのがおかしいと、直感的に思う。

そもそも捕まるのがあまりにも呆気なさすぎる。超能力者^{レベル5}とはいえ、ただの箱入りお嬢様、こんなにも簡単に、暗部の奴らもあつたことがないマッドサイエンティストを捕まえられるのだろうか。

何より天羽がいないことが気掛かりだった。

彼女は今まで必ずなんらかの事件に遭遇して来た。

インデックス、木山春生、神裂火織、一方通行、誘拐事件と打ち止め、ゴスロリの魔術師、木原相似、そしてオリアナの一件。

よくよく考えてみれば、打ち止めと一方通行以外の事件に関しては彼女は自ら首を突っ込み、まるで未来が見えているかのように正確なアドバイスを残してボロボロになって帰って来るのだ。

偶然か必然かは分からない。

もしかしたら上層部と繋がっていて、計画を円滑^{プラン}に進めるために行役をしているのかもしれないし、はたまた彼女は予知能力に近いことができるだけかもしれない。

どうであれ、ここに彼女がいないのはとてもおかしいかった。

「テープを剥がしますか？」

「あー、会話力は要らないわよ。直接脳に聞くから」

天羽彗糸は、もうすでにこのビルから離れたのではないか？

そんな疑問はすぐさま的中した。リモコンの操作音が狭い部屋で大きく鳴ると食蜂は足を止め、そして再び歩き出すとおもむろに木原

幻生の顔を破り捨てて。

文字通り破り捨てたのだ。

まるで包装紙を勢い良く破るかのように無残な姿で薄い皮膚が剥がされると、全く別の皮膚が露わになる。

死んだ魚と見間違えるほど見開いた黒い目と大きく開いた口は、どう考えても年寄りのものではない。

「変装……？」

それに気が付くと、御坂の静かな声を掻き消すように靴音を鳴らし、て食蜂はドアへ向かう。

先ほどの剽軽とした態度からは考えられない深刻な顔でドアノブに手をかけ、一人何処かへ向かおうとする彼女だったが次第に足が止まった。

邪魔をするように立ち塞がる俺に投げかけた不愉快そうな目線。塞がれた道に気がつくときさらに目を釣り上げた。

「なに、天羽さんが来ないことに苛立つてるわけ？」

「アイツが来ないのは想定済みだ。それより情報を共有せずにどこか行こうなんて、冷たいんじゃないか？お嬢さん」

「……本物の幻生が向かってるのは例のサイトにあったビルよお。急いでるの、これでいい？」

眼球が少し狼狽えるも、彼女は真っ直ぐ前を見据えてドアを開いて一歩を踏み出す。自分のアジトに木原が向かっていると分かっても一切取り乱さない姿勢は実に超能力者らしい自信溢れる姿だった。

「ふーん、じゃあ先に行ってるな」

「はっちよつとー」

小さく走る彼女を追い越し前に進む。場所さえ聞いてしまえば、あとはそこに向かうだけだった。

しかし細い手がウィンドブレーカーの裾を掴む。

掴んだ衝撃で、服からあの女の匂いが舞う。花と薬品と微かな血の匂い、そしてその奥にある絆されてしまうような女の香り。

中学生たちを置いて煌びやかな廊下を進むのを拒むように掴まれたジャケットは目論見通り俺の足を止めた。

微かな匂いに思わず足を止めると、どこか申し訳なさそうな食蜂が袖を掴んでうろちよろと視線をさまよわせていた。

「……なんだよ」

「行くって、どこに」

「はあ？そのビルにだよ」

「どうやって？」

「飛んでくんだよ」

「車より速いわけ？」

「そりゃあそうだろう」

天羽は恐らく05に命令を下して空を飛び、ビルまで向かっていく。ならばこちらも空を飛ぶしかない。

そもそも、このビルには飛んで屋上から入ってきた。

昨日と違い、アンチスキルの目も、抱えるべき他の野郎もなければ、ありがたいことに観光客は地面で行われてる競技に夢中。

飛んでもそこまで人目につかない。

そんな当たり前なことを聞く食蜂に軽く首を傾げると、彼女は不服そうに上目遣い気味に俺を見上げた。

「……第二位さあん、お願いがあるんだけど」

「あ？」

金髪と、甘い蜂蜜の香りが混じるあの女の香り、変わらない背丈と体型、そして気味の悪い目。

大嫌いな女を彷彿とさせるその姿を前に、強く拒絶することは不可能に近かった。

我ながら甘くなったものだ。

どこぞの馬鹿と関わってから、どうも俺は俺らしくない。

だから今、空を飛び、向かいに行く。唯一無二の馬鹿な女を、一直線に。

しかし、その甘さが面倒事を呼び込む。

腕にずつしりと沈む人間の重さと、隣から発生する微弱な電磁波。そのどれも決して、望んだものとはかけ離れていた。

「これが俗に言う快適な空の旅、ってやつかしらあ」

「精神系はこういうとき不便ね。移動手段が限られてるんだもの」

本来ならば一人で静かに空を飛んでいたはずだった。

なのに余計な人間が二人も呑気にお喋りを続けていた。

「人の腕の中でくつろいでんじゃねえ落とすぞ」

「やだあ☆こつわあ〜い！天羽さんに浮気してるって嘘ついちやお♡」

「本当に落とされてエのか」

お姫様のように抱き上げられているのも関わらず、堂々と腕を組んで踏ん反り返る食蜂に呆れて少しばかりの意地悪を見せると、わずかに体が強張った。

「いいじゃない、軽口ぐらい叩かせて。本当は貴方達みたいは何考えてるのか分からない人を相手にするのは嫌なのよお？非常事態だからこうしてるの。そこんとこ弁えてちょうだいねえ？」

「……好きだけ疑えばいいさ、今までのお前の常識が効かない相手に疑心暗鬼になるのは当然のことだ。別に怒りはしねえよ」

精神系の能力者は面倒な女が多いとは思っていたが、彼女の言葉を鑑みるにそれは当然なのかもしれない。

聞こえてた本心が聞こえないというのは、彼女にとって自分の世界が崩れることと同じなのだろう。

心に作用する能力は、他の物理的な能力とは失ったときの大変さが違うのかもしれないと、なんとなく感じ取れた。

またもやため息が溢れる。

腕に抱えた人間の重みにうんざりしながら、早く下ろしたいと心の中で唱えると、今度は静電気が肌をぴりぴりと掠った。

「それで食蜂、木原幻生は都市伝説サイトにあったあんたのアジトを狙ってるのよね？」

「そうなんだけど、どうやってあの場所が……」

ビルとビルの間を落下しながら電気を繋いで跳ぶ御坂の姿を食蜂が小さく覗む。

疑いの目を向けられた御坂の慌てた姿に、彼女が問題に関与しているとは思わせない。

「私じゃないわよ!?!」

「分かってるわよ、時系列的に辻褄が合わないもの」

苦しそうに手袋を噛む食蜂の顔が歪む。無意味な議論だと分かっているようで、苛立ちながらもそれ以上言及することはなかった。

「その情報が罫で、誘導されてる可能性は？本当は場所をつきとめてなくて、私たちを尾行してるのか？」

「それなら平気だろ。何せ第二位様がいるんだからな、場所に着いたあとならどうとでもなる」

しかしそれ以外にも考えは止まらず、御坂は眉間に皺を寄せる。

彼女の考えは最もだが、それらは大して驚異ではない。

第二位という地位が圧倒的なのは分かっている。他の超能力者も同じこと。

三人も超能力者がいる現状、怖いものはない。

どんな敵でも殺せる。俺だけでも全員殺して事を済ますことくらい簡単だ。

けれど、危惧しているのは真逆のこと。

「私たちがいない間にあそこを占拠されること。最悪の事態になるわ」

その瞬間に間に合わないことだけだ。

窓のない黒いビルが圧倒的な威圧感を放つ学園都市を見下ろすように、白い体に支えられながら屋上へと降り立つ。

空が近いこの場所は風が少しだけ強かった。

「じゃあとつとと片付けて、帰りましようか」

雲が厚くなってきた空を見上げ、カブトムシ二匹に笑顔を見せる。僅かな悪寒を感じながらあたしは物語の中心に降り立った。

74話：やめてくれ

空を仰ぐと涼しい風が頬を掠める。

ビルの下で雇用関係にある男に電話をかけようとスマホに電源を入れてみるも、立つべきアンテナは一本も立っておらず肩を竦めて息を吐いた。

「圏外……」

「無駄よ、この辺一带に強烈な妨害電波が放射されてるわ。そして、」

この場では役に立たない電子機器をしまうと、地面に降り立った御坂さんは眉間にしわを刻んで巨大なビルの入口を僅かに細めた目で睨む。

すでに荒らされた敷地に、嫌な気配を感じるのはわたしだけではな
いようだった。

「ブラフじゃなかったみたいね」

まるで缶詰の蓋を開けたかのようにぽっかりと、そして丁寧に切り取られた頑丈な入口に息を飲んだ。

吸い込まれるように、切り取られたドアから入るとひんやりと冷たく、物音一つしない静かな廊下を渡る。長い廊下だと言うのに、照らす灯りも、人の影すら見当たらない。

もうすでに手遅れの可能性が脳裏に過ぎる。確たる証拠はなけれど、最悪なケースを想定してしまうのも無理のない話だった。

「随分と静かだな。撤退した後か」

「無人兵器の反応も感じないわ、天羽先輩が何とかしたのかしら……」

堂々と廊下の真ん中を進み、暗い空間に焦りを感じながら当たりを見渡す。塵一つ落ちて居ない廊下で、目につくものは何もなかった。

廊下を満たすのは三人の超能力者^{レベ}の息遣いと、床と擦れる靴底の音。

それしか存在しない廊下で、この場が最悪かどうかを断定するのは難しかった。

「ねえ、ここで働いてた職員たちは？」

「さあ？^{エクステリア}外装代脳の整備に必要なだから、殺されてはいないんじゃない？」

「外装代脳？」^{エクステリア}

奇妙なほど静かな研究所を歩くと、またもや破壊されたドアを潜る。この建物の中で一、二を争う大きな部屋に明かりはついておらず、さっぱり見えない前を感覚で進む。

それでも確かに分かる嫌な予感に、胸騒ぎが耐えなかった。

「この研究所の目的よ。^{エクステリア}外装代脳は私の能力を増幅、拡張するブースター、とでも言ったところかしら？表向きはね」

三人分の足音が何も無い広い部屋に響く。

かすかに聞こえる泡の音と、どこかのモーターの音が混じる暗い部屋をまっすぐ進むと、一度足を止めて結んだ口を僅かに開いた。

「エクステリア計画の本来の目的は私の能力を誰でも使えるようにすることだったんだゾ？」

「はあっ!？」

「登録された人間は能力者だろうと、一般人だろうと、^{メンタルアウト}心理掌握の行使力を得る。そういうオモチャなのよお、アレ」

人を感じして広間のライトが全て点灯する。白い光に照らされて現れた中央に位置する筒状の大きなガラス張りに手を置き、冷めた目でその奥にある大きな水槽を眺めた。

その奥に浮かぶ、鮮やかな橙色が少し眩しかった。

「コン、^{クローンドリ}才人工房は元々天才や偉人級の人間を生み出すことを目指した研究機関だったんだけど、私の天才力に目がくらんで、偉人を作るより偉人を洗脳する方が早いつて、短絡した研究者たちが開発したが、^{エクステリア}外装代脳」

オレンジ色の液体で満たされた、まるで水族館のアシカやアザシが泳ぐような円筒の水槽に視線を移す。

「ま、潰した上に乗っ取っちゃったけどお」

下から上へ登る気泡を見つめ髪を片手ではらいのけて呆れ返るように呟くと、ふと、昔を思い出す。

ここでの生活、失った友人、得たもの。

洗脳した研究員達は激しく興味がなかったが、この場にある唯一の楽しい記憶だけは大切だった。

「心理掌握は人格高潔な私だからこそ制御できる力、俗物が手にしたら無闇に振り回して危険なものねえ」

「能力を増幅させるだけでも眉唾なのに、他人に譲渡なんて……それが都市伝説サイトにあった、能力を生み出すDNAコンピュータ？」

「ああいう噂って、どこから出てくるのかしらねえ……そもそも、正確にはコンピュータじゃないしい？」

ゆつくりと周りを見渡しながら水槽に近づくと二人をガラス越しに確認すると、深く息を吐いて再び下で眠る外装代脳を眺める。

誰にも知られたくないのに、まさか同じ超能力者に見られるなんて、想定外だった。

けれど、逆に良かったのかもしれない。なんて思われても、何を感じても、同じ境遇の彼らには分かるはず。

同情なんてもの、して欲しくもない。

「私の大脳皮質の一部を切り取って培養、肥大化させた巨大脳。それが、外装代脳よ」

ごぼごぼと空気が泡となり登っていく橙色の半透明な液体の中、羊水に満たされた子宮に漂う胎児を彷彿とさせる大きな脳がそこにあった。

気色の悪いアクアリウムだと、何度思ったことか。

しかしこれに動じもせず、他の二人は目を見開く事もなく淡々と受け止める。

彼らはこれがこの街の当たり前だと知っていた。

そしてその当たり前前にひどく安堵するわたしがいる。同情も、恐ろしさも感じず、この都市の仕組みを理解する彼らに。

「木原幻生はこれで何かしようかと企んでるってわけ？」

「多分。でも持ち出せるとは思ってなかったし、そもそもこれを使うには数日かけて登録する必要があるのよね」

「制圧しても長期的じゃなきゃ意味が無いわけか。そうになると、目的は妹達になるのか？」

「でも彼女には何重にもプロテクトがかかっているわ。解除するには私か、^{エクステリア}外装代脳が必要になるのよ」

同情せず、深く聞くことも無く話が続いていく。

その中で何か気になることがあったのか、第二位、垣根さんが顎に手を当て高い背で見下ろした。

「……なあ、話変わるんだけどよ、お前さ天羽の頭ん中の覗けたのか？」

「何よこんな時に。そうねー、あの子と今朝方会った時、アナタのカブトムシとの回線を切ったんだけど、その時だけね、彼女の脳内を見たのは」

「っ、見れたのか！」

「一部だけね……話してあげてもいいけど、言ったこと天羽さんに秘密にしてよねえ」

だが彼が口にしたのは全く違う話題で、彼女のことしか考えていないのかと若干そのマイペースぶりに呆れてしまう。

まあ、彼はその目的が完遂されればこの件は関係ないわけで、当たり前の行動ではあるけれど、やはり気に食わない。

「で、彼女なら記憶は見れたわ。3歳から今日までのんだけど」

「アンタなら普通じゃない、何が変なの？」

「でもね、感情が、考えが読めないのよ」

「はー？」

今日の午後を思い出す。あの意味不明な女と出会ったことを。

協力者の頭の中は必ず覗き、場合によっては洗脳し、手駒にする。それが私の生き方であり、自らを守る方法でもある。

だから当然、彼女の頭の中も覗いた。

何も考えてなさそうな無鉄砲な女の中身だろうと、確認しなくては後々面倒だから。

けれど、その中身はまるでマトリョーシカのように、私の力では一番外の蓋しか開けられなかったのだ。

「誰かとの会話は聞こえるの、何を書いたかも、何を言ったのかも。でもその会話の中で何を思っていたかが分からない。感情も、考えも、

感覚も、何一つ共有できない」

「はあ？分らないってどういうことだよ」

「プロテクトがかかったかのように、彼女の想いが読めなかった。記憶もそう、感情が読めないから切り捨てようとしたのだけど、書き換えることができない。だから使ってやってるのよ」

「プロテクト……」

「そうでもなきや、何考えてるか分からない人間を私が使うと思う？」
驚いたような垣根さんの顔を見るに、彼女の能力については何も知らないようだった。

第六位であることを隠しているし、能力の内容も伏せているのだろう。

知りたいと思うことも、隠すことも、わたしにはできない愛の形。互いに愛されてるな、と思う。

エゴを貫いた愛。

それがきつと彼らの愛の形。そうとしか考えられなかった。だって、おかしいじゃないか。

彼女の特異な能力は上層部に目をつけられており、藍花悦として垣根帝督に接近すれば確実に両者は引き離される。

だというのに彼らは一緒にいる。

誰かの命を救い、活用し、ゾンビを統率できるポテンシャルは、マッドサイエンティスト達が見過ごすはずもないというのだ。

それだけじゃない、彼女が上層部に服従すれば、暗部なんて必要が無いのだ。

永遠の肉体、永遠の力。

例え欠落があったとしても、一国の軍隊を殲滅できる超能力者^{レベル5}の一人をモルモットとして、大軍の指揮官として、人を惑わすスパイとして、お偉いさんの欲を埋める玩具として、壊すことなく使えるのだから、お掃除屋さんの必要性が無くなる。

彼女ひとりが背負えばいいのだから。

そういう意味で、彼女は自分の体を代わりに暗闇にいる男一人を助ける程度の価値は持っている。

しかし、価値があるというのは同時に危機でもある。それこそ、第二位の男とつるんでいることがバレてしまったら必ず何かしらの手段を使って関係性を消されてしまう。

それが色恋なら尚更。

だから正体を明かさないのかもしれない。

彼と一緒に居られる綺麗な体のままでいたいから。彼に心配させたくないから。築いた愛を失くしたくないから。

そんな甘い理由で彼女は隠れているのかもしれない。

彼女は自らのエゴを守るため、いまの彼を救わないのかもしれない。

心の中を読めばすぐに分かることなのに、読めない感情のせいで結局は憶測に落ち着く。

もしかして、そうかもしれないというただの考え。

でもその『もしかして』に、美しい我儘を垣間見た気がしてならなかった。

「つまり、あいつは自分の脳に不完全なプロテクトをかけて、お前による肉体の操作をある程度とはいえ跳ね返したわけだ」

「まあ、そうなるわねえ」

「ってことはよ、他人の肉体に干渉できるアイツなら、お前と全く同じことを他人にできるってことにならねえか？」

イヤーな女の顔を思い出していると、彼の言葉にはたと気がつく。天羽隼系の能力は万能だ。肉体を好きなように干渉できる彼女の

能力の中で最も恐るべき点は、他人の体を好きに支配できること。

それはきつと脳内の水分量すら数に入る。

つまり、彼女の能力を使えば、わたしの力なしで妹達のプロテクトを解除できる可能性があった。

「っ！貴方の妹はこの奥よ、はやくっ、」

その可能性に気がつくとき焦って妹を保護した部屋に向かおうと振り返る。想定外の事態に急ぎ、先導するため前に出たが大きな音で足を止めた。

ポケットから鳴る着信音に急いでスマートフォンを取り出すと、人

目も気にせず強く言葉を発した。

「っ、もしもし!?!」

『やっとな繋がりましたカ』

圏外だったはずのスマホから見知った男の音声が流れる。いつもと変わらない声に安堵し、強くスマホを握りしめると前屈みになりながらもカイツの安否を確認しようと少しだけ感情のこもった言葉を送った。

「今っ、外装代脳エクステリアの正面力よ、そっちは?」

『屋上でス。彼女も一緒です。天羽さんもいますヨ』

「でかしたわ!屋上ね、直ぐに」

「イエ、襲撃者は手練の特殊部隊を思わせる集団でしタ。人1人抱えた私を取り逃がすとは思いません。ここに誘導されたと見るべきでしょう。注意してください」

彼の返答にひと安心し、ほっと息をつく。全員がひとかたまりで居るのなら、こちら合流しやすいもの。

しかし位置情報を聞いてすぐに動こうと返答するも間を置かずには却下される。

確かに彼の言うことも一理あるが、こちらの戦力を考えれば彼が危惧するほどのことはない。

「大丈夫よお、その辺は胸囲力が戦闘力に吸い取られたアマゾンと大好きな彼女を追いかけてここまで来たイケメンがいるから心配しなくていいゾ☆」

「誰のことかな……?」

「デマを流す行為が常盤台生の間では流行ってんのか?訂正しろ」

『そうですか、超能力者レベル5が二人もいるなら』

後ろの方からの文句を聞き流しながら明るくカイツに伝えると、安心したような声色がスマホから聞こえる。

しかし瞬間、脳に気持ちの悪い違和感が走る。

彼の声になにかを感じとった訳では無い。ただ、こじ開けられるような脳の違和感が体を駆け上り、冷たい床に両膝を着く。

「ちよつと!大丈夫!?!」

『予定とは違うけど、手間が省けたね』

「っ、！」

大丈夫かと駆け寄る御坂さん達の声に被さるように、年老いた男がスマホ越しに口を開いた。

『いやあ、登録を煩雑にすることで乗っ取りを防ぐ、甘いねえ。登録などしなくても、巨大脳を僕と同じ脳波に調律してしまえば、能力は僕のものなんだよ』

その声を聞くや否や、上手く動かない顔を動かして御坂さんにアイコンタクトを送る。意図を察して走り去る彼女の背中を見つめ、垣根さんと二人で電話に耳を傾けた。

嫌な予感しかもはや感じ取れない。

『食蜂くんも噂くらいは聞いた事があるんじゃないかな？』

「レベルアップ幻想御手……」

『木山くんに脳波調律のインストラクションを授けたのは、僕だからね？』

腹立たしい老人の嘲笑う声にスマホを握る手に力が籠もる。

何もかもに遅れをとった自分の不甲斐なさと、至らなさに言葉にならない憤りだけを募らせて、わたしは立ち上がった。

元気そうな老人が電話を切ると、レーザーポインターを手にしてこちらを振り返る。後ろで硬直する第五位の協力者に目もくれず、一直線に座り込む少女に向かうと、彼は奪ったスマホをポケットに入れた。

暖かい風が頬を撫でる屋上で胡散臭い笑顔を見せる老人の名前は木原幻生、白衣に身を包んだイカれた研究者のひとりだった。

「妹達に仕掛けた多重プロテクトも、今の僕なら解除することは容易い」

「それはどうかな」

10032号の前に立つ彼に低い声で警告を発する。守るように彼女から視線を遮ると、老人はわざとらしく考えるふりをして笑う。

この場をどう乗り切るかを必死に足りない脳で考えるため、時間を稼がねばいけないあたしの葛藤を見透かしているようだった。

「あたしの能力知ってるんでしょ？他人の脳内だって、調節可能よ。アンタのおもちやと、あたしの能力、どちらが先に支配権を奪うか、試したっていいんだぜ？」

「ふむ、力比べか。でも、君にとっても悪い話じゃないと思うんだけどねえ？」

「は？っ、なんのつもり？」

何を考えているか分からない義眼でわずかに見下ろされ、レーザーポインターの赤い光が額に向けられる。

ポインターを向けたままボタンを押すと、電子音とともに肩に止まっていたカブトムシが二匹とも滑り落ち、ピクリとも動かなくなつた。

しまったと思ってもすでに遅く、動かないのを確認すると彼は芝居がかかったように咳払いをして話を続ける。

「これを使えば、あの『窓のないビル』を突破できる。そう言っても？」

「……それは」

「一瞬の揺らぎが命取りだよ、藍花くん」

彼の提案に、瞬きよりも短い一瞬、思考が停止した。

このスピノフの最後を知らないあたしには、その言葉が現実になる二次創作イレギュラーなのか、史実原作通りなのか、一瞬のうちに判断がつかなかった。

本当のことを言っているかもしれないと、わずかに期待してしまつた自分に苛立つ。

二度目のスイッチの音に体が動かなかつたのは、全ては自分の欲のせいだ。

「君は如何せん要領が悪い。一度思考を止めてしまえば、他人への干渉が疎かになる。君の探知機能が御坂くんのような受動的なものじゃないのが一番わかりやすいかな?」

「どうしてそれを……」

『教えたからですよ、それ以外ありません?』

屋上に置かれた給水タンクや、空調機器の隙間から見覚えのあるロボットが現れる。猫のようなしなやかなフォルムとマズルについたホースに、犬のような身のこなし。

馬場くんの操っていたロボからは、なぜか先ほど別れた男の声がした。

「相似くん……」

『木原に科学技術の対処を任せてはダメだと、なぜ分からないのですかね』

「取り乱してるねえ、藍花くん。でもそんな君を突破すれば、妹達に特製のウイルスを打ち込めるって訳だよ」

「っ、あああああ!」

想定外の見た目のご登場に取り乱していると、地面に転がる10032号の額に向けて呆気なくレーザーの光が当たる。

軽い音ともに押したスイッチは簡単に彼女を捉え、考える余裕も与えずにか弱い少女は咆哮をあげた。

苦痛に耐える呻き声から恐ろしいほど黒い稲妻が走る。放出された大きな稲妻は束となり、空を覆い尽くすと、赤い閃光を飛ばしながら宙を蠢いていた。

「素晴らしいねえ、そうは思わないかい?」

『でも、用途がなければ無意味では?』

「なら、一番面白い使い道をしようじゃないか」

空に留まる稲妻を見上げながら老人と機械は愉快に喋る。その空間だけ異変がないかのようになり、孫と祖父のような朗らかな会話が進む光景は理解不能で思考が追いつかない。

だが動かない脳は勢いよく打ち破られたドアのけたたましい音で起き上がる。

スライド式のドアを電撃で外した少女は、あたしの目の前に転がる瓜二つの少女の顔を見て声を張り上げた。

「その子に、なにをしたああああ!!」

第三位、御坂美琴の甲高い声が空を突き上げるように響いた。

青白い電撃を身に纏って叫ぶ彼女の必死な形相に木原幻生の口角が歪むように上がる。

「第一候補の陰に隠れたアレイスターくんのお気に入り。その眠れる力を覚醒させる起爆剤に使うのはどうだろう？」

瞬間、行き場を失っていた黒い稲妻が空から彼女を目掛けて降り注いだ。

「御坂くんは、天上の意思にたどり着けるかな？」

体が飛ばされそうなほどの風と、体を突き抜ける微弱な痺れに態勢を崩し、膝をつくと白い生き物が視界に映る。

御坂美琴と同じ姿をした真っ白な生命体は周りに火花を散らし、焦点の定まらない黒い眼球で真っ直ぐ前を見つめていた。

「……嘘」

白い生き物はとてつもないスピードでこの場を離れると、遠くに雷を轟かせ地面に振動を響かせた。

その姿を満足げに見つめると、木原幻生は壊された扉から何処かへ消えてしまう。しかし、そんなことはどうでもよかった。

御坂美琴が怪物に成り果てたことも、10032号が気絶したことも、食蜂操祈の協力者のことも、カブトムシも、垣根帝督のことも、全てどうでもよかった。

あたしの心を掴んだのは、そんなものではなかった。

匂い、あの懐かしい匂いが鼻腔をくすぐる。

垣根くんの匂い、05の匂い、天国の匂い、そして、神の匂い。

御坂美琴が掴んだのは、神だった。

その事実が、酷くあたしの心をかき乱す。

あたしを殺して、あたしに世界を作り、あたしに体と命を与え、あたしを愛していると言ってくれた忌まわしい神は、今や御坂美琴の手にあった。

『愛だの恋だのほごきながら、結局欲に走った結果がこれですか。ざまあ無いですね』

鬱陶しい声がロボット越しに愉快に喋る。

その声に返答するほどの余力は残っていなかった。何もしたくなかった。

どんなに嫌おうと、神は絶対的な指標である。

あたしを愛故にこの世界に落とし、使命を与え、地獄で未練を果たすチャンスくれた。そしてあたしはその愛に応え、あの理不尽の権化を見返して、未練を果たすために誰かを救い、赦す。

あたしを愛するあの汚物を、あたしは刺し違えてでも殺したかった。

それがこの世界。神があたしに与えた舞台^{ドールハウス}。

ドールハウスに入れた人形が親によって勝手に手入れをされていたら？

知らない踊り子が、主役を差し置いて舞台監督に気に入られたのなら？

神が偽物^{フィクション}に肩入れしたのなら、本物^{あたし}はどうなる？

『あーあ、可哀想に。口が聞けないほどショックでしたか？哀れですねえ、本当に』

「……うるさい」

『そう睨まないで下さいよ。藍花さん』

『その名前で呼ばないで』

『なぜ？これが貴方の本性じゃないですか』

あたしだけの味方がいない、それはこの世界の台本がないに等しいこと。

愛という確かな繋がりがなくて、神はいとも簡単に介入し、傍観者の立場を手放してしまう。

それは裏切りと呼ぶに相応しかった。

裏切りは最も重い罪だというのに、神はあたしという愛さなければ

ならない相手をいともたやすく裏切った。

その事実^に絶望に落とされたまま、機械から発せられる青年の声が耳を通過する。

『七人しかいない超能力者^{レベル5}の一人、序列六位【不死者^{アンデッド}】。それが貴方です、藍花悦』

言葉を言い切ったその時、誰かの息遣いが屋上に唯一繋がる非常口から足音が聞こえた。

壊されたドアが落ち、開けつびろげになった出口の先で茶髪が曇り空の下で揺れる。前髪の下から黒い瞳が覗く、背の高い、美しい少年と目があった。

少しだけ開いた彼の可愛い大きめの口からは乾いた声にならない音だけが溢れる。

互いに言葉を交わさずとも、悟る。

今日はとても最悪な日だと。

75話：目の前の貴方に

じんわりとした熱気が頬を撫でる屋上で、聞き慣れない名前に足を止める。

眼前に立つ少女の泣きそうな顔に駆け寄りたくなる衝動を抑えて、その名前を呟いた。

「藍花悦……？」

秋に咲く小ぶりの花を苗字に添えた六文字の名前は彼女本人から聞きたい名前だった。

ぽっと出の男に挑発されているかのような声色で告げられるべきものではない。

虚しさで憤りを感じる。暴きたかった秘密は、部外者の手によって容易くベールを剥がされた。

「……違う」

『いいえ、貴方は藍花悦、ただの第三候補^{サブプラン}の置物。アイを冠する癖に誰にも愛されない欠陥品です』

「違う、違うんだ……」

『天羽彗糸なんて、この世界のどこにもいないんですよ』

責め立てるように続く言葉に天羽は頭を抱えて唇を強く噛む。

唇が裂けても血は出ずに、ただ祈るように両の手を強く握って彼女はうわ言のように否定していた。

「うるっせえな、吠えてんじゃねえよカス」

その姿があまりにも悲惨で、哀れで、可哀想で。彼女を掴みたいと思うと、囁くように罵倒する鉄の玩具を粉々に吹き飛ばす。

軽く力を奮うだけで簡単に壁に打ち付けられたロボットはもう二度と動くことも、喋ることもなかった。

「何、なんのつもり？」

「はあ、怪我してねえか？昨日みてえに治療すんのは二度とごめんだぞ」

「……はい？」

急ぎたい気持ちに蓋をしてゆったりとした足取りといつもの声色

で震える少女の頭の手をおく。

柔らかい金髪は、暗い曇り空の下だというのに、目に優しくないと眩しかった。

「っは、なあんだ、垣根さんは最初から知ってたのねえっ？第六位、つてこと」

「……確証はなかった。せいぜい、沢山いる藍花悦の一人かと、そう思ってた。けど、違うんだよな？」

息を上げながらようやく屋上に辿り着いた食蜂操祈の言葉に一度躊躇つてから小さく答える。

掬うように金髪を撫で、確認するように髪から顎に手を添えると小さな笑い声が口元から溢れる。切羽詰まった笑い声が嫌に耳に響いた。

「は、はは……ずっと知ってたんだ。馬鹿な女が必死になってるところ見て、愉しかったんだ？」

「違っ、」

掴んだ顎を持ち上げて彼女の嘲笑を否定しようと口を開く。しかし開けた口から否定の言葉を出すことは叶わなかった。

ただひたすら悲しそうに目を伏せる彼女に喪失感を覚える。その顔に、言葉を奪われた。

「お前も、あの野郎も、全部全部見透かして、馬鹿にして、いい気にさせて、大嫌いなくせに、思わせぶりの態度で繋いでっ、あたしの愛を貶すんだっ?!」

「おいっ、落ち着けって!」

泣きそうな声で、歪んだ瞳で、震える肩で叫ぶ。感情が爆発したように手を振り払い、後ずさる彼女の悲痛な声をますます塞ぎたかった。

そんな声を聞きたくないと、胸の奥がひどく痛む。

「ねえ!?! 貶して、笑って、馬鹿にして、楽しかったんでしょ?! あたしの人生、どうしてくれるんだよ!!」

「テメエいい加減に、っ!」

甲高い声を撒き散らして泣きじゃくる口元を奪おうと再び手を伸

ばした。しかし掴んだ腕を引っ込めようと、ヒールを鳴らして彼女は後ろに下がる。

俺に触られたくないと言われているようで、腹立たしい。どうやってでも、捕まえたかった。

負けじと腕に力を込めると、強く身を引かれ、バランスが崩れる。彼女を巻き込みながら地面に倒れこむと、汚い地面と背中がぶつかり鈍痛が体に響いた。ジツパーの擦れる音、何か軽いものが落ちる音と、彼女の小さな悲鳴に反射的に目を瞑る。

けれど、掴んだ柔らかい肉に否応無しに瞼は大きく見開いた。

金色が灰色の空に広がる。顔にかかる息と、くっ付いた額、目を覆う金髪と、掴んでしまった柔らかい部位に一気に体温が下がる。

守ろうと自分から下敷きになったのがいけなかった。

背中を預ける冷たい地面と同化したくなるほど、上からのしかかる暖かい体温にどうにかなりそうだった。

「っ、悪い。痛くないか？」

急いで上に乗る彼女を退かそうと優しく肩を掴もうと手を動かす。しかし触れるか触れないかの瀬戸際、手が途端に強張る。

馬乗りになった女にこんな時だというのに良からぬ想像をしてしまうのは男のサガとでも言えればいいか。

まるで間違いを犯した、いや、間違いを犯されているかのような格好に緊張と羞恥心が入り混じり、それ以上手を伸ばすのは危険だと自分のプライドが警告していた。

「……そうか、繋がればいいんだ」

「はっ」

上の空で耳元で囁く声がくすぐったい。ゆっくりと顔をあげた彼女の眩しい金髪がカーテンのように視界を塞ぐと、赤と緑の瞳が大きく見開いた。

「他の女にうつつを抜かしてるならば、首を捻ってでも振り向かせればいい」

不穏な発言を呟いて体を起こすと、彼女は手元に落ちていたミントタブレットの包装によく似た細長いケースを手取る。

中身がまだ入っているようで、動かすたびにカラカラと音を鳴らしていた。

「神の子の血は神の奇跡を作り出す。それは愛が枯渇してない証明になる。あたしはまだ、生きていられる、愛される」

酷く嬉しそうな顔でそのケースを掲げると、祈るように優しく呟く。何を意味しているか分からない言葉の羅列に思考は追いつかず、垂れた髪を掴もうと手を伸ばしてみるも、あっけなく消えた体温と重みに手は届かない。

「なあ、一体何言つて、」

「ちよつと！ラブコメ中悪いんだけど、非常事態なのよ。木原幻生の場所教えてくれるかしら？」

「あ？……ああ、木原幻生は建物の中だよ、ここにはもう居ない」「面倒な爺さんねえ……大変なこととしてくれたし……」

俺たちの事情に興味が無いとでも言うかのように、食蜂は妹達のそばにいた男の洗脳を解く。その合間に立ち上がると、天羽は俺に目もくれず雷が落ち続ける場所をじつと見ていた。

その熱い視線が俺の目と向かい合うことはなかった。

「とりあえず、妹さんを安全な場所に移動させてちょうだい？そんな場所ないかもしれないけど」

「アナタは？」

「幻生を追うわあ。私じゃないと洗脳されて終わりでしょう？それで、藍花さんはどうするの？」

「……藍花、悦か」

倒れた10032号の隣に立つ背の高い外国人に答えると、食蜂はすぐさま天羽の方を向く。その言葉に天羽は小さな声で自分の名前を呟いて、目尻を下げた。

憂いを帯びた目だった。赤らんだ目元で囲われた鮮やかな赤と緑の虹彩を閉じて大きく息を吸う。

そして、次に目を開くと、その鮮やかな色は消え失せ、俺と同じ、真っ黒な瞳が空を眺めていた。

「食蜂さんたちは避難を優先してください。木原幻生と相似はぼくが

何とかしますので」

「お、おいつ、どこ行こうと、っ」

どこかへ行ってしまうような細かい声で雷の落ちる遠くから視線を外し、出口の方へ通り過ぎる。一言も交わさずに、視線も向けずに、表情のない顔で離れていく。

いつもと違う雰囲気堪らなく怖かった。

だからまた手を伸ばす。

しかし掴んだのは腕より細い黒。やっと会えたというのに拗ねる彼女を引き寄せようと伸ばした手が掴んだのは長く黒い髪だった。

糸のように細く、長い髪の束が手の中に収まる。

掴もうと伸ばした腕を振り払うように一瞬のうちに地面と触れ合うほど髪が伸びるとまるで日蝕のように、輝く金色が夜の色に変わった。

一瞬の出来事に息を飲む。

太陽が沈んだ髪色に言葉は出なかった。掴んだ髪を握る手は自然と力を失い、すると柔らかい髪は重力に従って落ちていく。

流れる水のような髪に、酷く心は痛む。それでも何ヶ月も隣にくっついていた女を諦めきれなかった。

「……なにか御用ですか？」

「っ、なにつて、お前は俺と帰るんだよ。その為に俺は」

「何故？ぼくが藍花悦だと知ったのに、これ以上何を求めるのです？」

天羽のものとは違う、子供のような少年の中性的な声が黒髪の少女から伝う。

重い髪を引き摺って視線をこちらに向けた彼女は人形のような顔をしていた。

貸してあげた黒いジャージを着る彼女は、長い髪と合わさって、白い肌が亡霊のように浮き出ているようだった。

「……は？何言ってるの？」

「第二位というのに記憶力は乏しいのですね。ぼくがキミと一緒にいたのは、キミがぼくのことを知りたいからでしたよね？」

「それは、そうだけど、お前には俺が必要だろ？」

「どうしてそう思う？」

「どうしてって、だっていつもお前は俺と一緒にいたいんだろ？だからずっと隣に、」

「思い出して。一度でも、ぼくがキミを誘ったことがありますか？」

初めて聞いた恐ろしく低い声に、喉が震える。

嘘つきな女は、鋭い事実を突きつけて再び歩きだした。

その後ろ姿は、か弱い日本人形のよう。

「っ待てよ、おいっ！」

「電話、鳴ってますよ？」

もう一度、この手で捕まえようと一步踏み出すが、タイミング悪く鳴った携帯電話に気を取られ、天羽は、藍花悦は出口へと消えていく。

「……っ、クソが！」

追うこともままならず、仕方なく鳴り止まない着信音を止めるために携帯を開くと腹立たしい人物の名前が表示される。

上条当麻。

その男の名前にこれ以上ない苛立ちを感じてしまった。

老いを感じさせない軽い体で研究所を進む。何もない廊下を歩くのは少し退屈だったが、それでも会うべき人のため仕方がなかった。

金髪と、輝く瞳を持った第五位を探して、自分以外の音がない静かな廊下をただひたすらに歩く。

しかしどこへ行ってしまったのか、彼女の姿は見当たらない。どうしたものかと足を止めること数分、見たことのない黒が義眼に写った。

その黒に引き寄せられるように明るい廊下を渡る。

角を曲がり左へ。一転して暗くなつた照明で淡く照らされた廊下の先、カラスのような少女と目が合った。

濡羽色の艶やかで恐ろしく長い髪、片目を隠す前髪から覗く光を反射しない黒檀のような瞳と、人形と見間違ふ顔の造形はまるで日本のお伽噺に出てくるお姫様のよう。

「最初に会うのは食蜂君かと思つたけど、違つたね」

その少女の名前は藍花悦。

照明にしては不十分な照射量のライトの下で淡く照らされた黒髪の間から獲物を狙うように細められた目がこちらを見る。

「嫌でしたか？」

「まさか。なにせ、君の能力は食蜂くんと同じく生き物にしか効かないからね。殺すのは簡単。妨害とも思つてないよ」

来ると思つていた人物とは違つていたが、足止めにくるのが彼女だろうが、食蜂君だろうが対して変わりはない。

メンタルアウト
心理掌握で防御された脳味噌、そして機械仕掛けの体には同じメンタルアウト
心理掌握も、彼女の能力も効かない。

厄介なのは第二位の彼だけだが、彼の立場と性格を鑑みればここに來ることは考えられなかつた。

つまるところ、不安分子は万が一にもないのだ。

「死なないぼくを殺す？研究者なら、ぼくのこと大切になさつた方が宜しいのでは？」

「何を言う！君を殺すのは簡単だよ。だって君は死ねないわけじゃない、死なないだけ。自分でも分かつてるだろう？」

彼女の言葉は決して不正解ではなかつた。

彼女の特異さは一部の研究者では有名で、上層部に目を掛けられている。そう言つた意味でも殺せなければ、能力的にも殺すのは不可能に近い。

しかし御坂美琴が絶対能力者⁶になつてしまえば藍花悦の価値は暴落し、守られることもなくなる。

そして彼女の能力を深く知り、自らの知恵と力を使えば、難攻不落

の不老不死を殺めることだって可能だった。

「……そうですね。この力は望まれた生を与えてくれる。誰も望まなければ、あたしは死んでしまう。ですが、それがどうしたのです？ 神でもない人間が、ぼくを殺せると？」

「随分な自信だねえ、君の能力くらい突破するのは容易いんだよ」

頭のイカれた少女は傲慢な台詞を吐き捨てると、わずかにこちらを見下ろす。

実に可哀想な少女だ。

自分の短所も知らない子供が何を言ってるんだと呆れ果て、止めていた足をゆつくりと進める。

彼女、藍花悦の演算は酷く複雑。

視神経の切断、聴覚の破壊、傷の再生、色素の変化、髪の毛の長さ、ホルモンバランスの分泌。一度能力を使えばずっと継続する変化をもたらすスイッチとしての機能。

そして血液を循環させ、心臓を動かし、働かない頭を回転させ、演算し、その状態をポンプのように保つ機能。

どれも同じ理論で成し得ないものだが、多重能力デュアルスキルに最も近く、何もかもを操る彼女は代わりに膨大な演算をしなければならなかった。

「恐ろしい能力だよねえ、肉体の全てを支配できるなんて。しかし残念なことに君は頭が悪い。要領が悪く、多くのことを考えられない。そして良くも悪くも素直で、愚か」

もし彼女が一方通行アクセラレータほどの演算能力があれば、誰よりも早く、安定して絶対能力者レベル6にいったかもしれない。

けれど、彼女の脳は小さく、演算能力は超能力者レベル5にも満たない代物だ。

普通の少女と言って差し支えない程度の塵のような演算しかない欠落品。その普通は、最大の欠点であり弱点だった。

侮辱を吐き捨てれば激怒し、恐ろしいことがあれば酷く恐怖し、誰かが死ねば泣く。波が激しく、極端。

そして一度その感情の波に乗ってしまえば彼女はずっとその感情に囚われる。

その性質を利用すれば殺すことなんて容易い。

「藍花悦の攻略は簡単だ。その小さい頭を醜い激情で埋め尽くし、演算なんか出来ないまま殺せばいい」

足を止め口角を上げると、疾風が飛び出す。木山くんの作り上げた幻想御手を応用した技術は、数は少ないといえど、複数の力を行使させてくれた。

そのうちの一つが牙となって彼女に傷をつける。

吹き飛ばされた右腕は血飛沫一つ上げずに彼女を照らす頭上の照明にぶつかる、小さな火花を散らしてぼたりと落ちた。

「激情？そんなものどつくに埋め尽くされて心は崩壊寸前ですよ」

綺麗に切り取られた右肩の断面から咲き誇る花のように筋肉組織や骨が生まれていく。

呻き声一つ上げない少女は、代わりに潜めるようにくすぐったい笑い声を暗くなった廊下に響かせる。

フルートのような単調で、か細く小さい笑い声はどこかおぞましく、眼球の焦点が定まらない。

「なあ、木原幻生。アナタはぼくの異名を知っているかい？」

「ええと、なんだったかね。『肉体の支配者』、と上層部は時々呼んでいたかなあ？」

突然脈絡のない話題を振ると、袖の無くなってしまったジャージのチャックを下ろす。

髪で隠れた表情からは、それがストリップショーなのか、隠し球を持つているのかの判断はつかない。

「ならばその意味を知っていますか？」
はらり。

黒いジャージも、白いドレスも脱ぎ捨てると藍色の下着が現れる。黒の中で華やかに主張する体はどうしてか、エロティシズムより恐怖を伝えていた。

「主天使、それは神の秩序を知らしめる天使の階級。そしてその長は神の正義、天使ザドキエル」

色気よりも芸術品のように厳かな空気を纏う少女は、片手に持った

小さな赤い宝石を飲み込むと、嬉しそうにスポットライトのない暗闇でヒールを鳴らした。

一步、また一步と、荘厳な太鼓の音のようなくぐもった音を響かせヒールが床を蹴る。

「喜べ」老人。お前が捨てた生命線ライフラインは大いに貢献した」

暗闇の中、ひとつの光が闇に溶け込む黒い髪を照らす。淡く、美しい光だった。

その光景に言葉を失うと、目の前の生き物は頭上で輪を成す自分だけのスポットライトの下で、大きな白い物体を掲げる。

それが大きな双翼だと気がつくのに、一秒もいらなかった。

中世絵画から生まれたような恐ろしい生き物が、美しく長い黒髪を広げて静かに目を開く。

髪の間から見えた黒い虹彩には一等星に似た光がきらきらと輝いていた。

「ああ良かった。神はまだあたしを望まれている」

独り言のように少女は呟く。

安堵したかのような顔は、もはやこの世界を見つめていなかった。

そしてその顔を最後に、放たれた衝撃が脳の動きを封じ、呆気なく全てを奪われた。

76話：ECCCE ACILLA DNI VBV
TVVM

鳴り響く電話を取り上げ、表示された相手と通話を繋げる。

まさか第二位が彼と知り合いなんて、とよく知った男の名前に少しだけ場違いな喜びが心の中で飛び跳ねていた。

『つ垣根！どうなってんだよ、この状況はよ！』

「ごめんなさいねえ、垣根さんじゃないのお」

電話を繋げた瞬間に弾けるように叫ぶ彼に残念そうな声色で返答すると、当たり前のことではあるが、彼は驚いたように声を荒らげた。

『へっ？だ、誰だよ！』

「こんにちは上条当麻さん、輸送準備中の垣根さんが変わって今の状況を伝えるわあ。質問は受け付けないんだゾ☆」

『お、おう……？輸送……？』

屋上で妹達を抱えるカイツの隣で地面に落ちた白いカブトムシに命を吹き込む青年の姿をちらりと横目で見ると、ゆっくりと歩む。

「状況を説明すると、私の精神干渉能力とミサカネットワークが悪用されて御坂さんが大変なのよお」

『やっぱアレ御坂なのか……』

フェンスに体を預けて絶えず上がる雷の方へ視線を向けると、地面につんつん頭の少年が携帯電話を握りしめ、白いナニカと対峙しているのが少しばかり遠くで見えた。

まるで雷神のような風貌のソレは青白い雷を放電しながら地面に浮かぶ。

人間とは思えない彼女に何を思ったかは分かりたく無いが、お人好しの彼ならばどんな感情であろうと彼女を救おうとするのだと、分かっていた。

「でもお、あなたが周囲にいて妨害力を発揮し続ければ、ネットワークの変化を遅らせる事が出来る！かもしれないわあ……多分」

『あやふやだなっ、おい！』

「まー、直接触れば元に戻るかもしれないしい、レッツ☆チャレンジ！」

『つーかあんた誰だよ！』

叫ぶ彼の声を無慈悲に携帯とともに閉じると、思い馳せるように雷を眺める。

何もかも無効化する右手を持つ少年に淡い希望を持ちながら後ろを向くと、希望とは真逆の顔をした少年に言葉をかける。

「垣根さーん、そっちどう？」

「……準備できたぞ」

傍らにいたのは彼に瓜二つの白い少年。そこそこ長い茶髪が揺れる屋上で、衣服をはためかせながら緑色の瞳をした生き物が頭を下げる。

「マスター、申し訳ありません。私が不甲斐ないばかりに」

「俺の顔で謝ってんじゃねーよ。お前がいたおかげであいつのデータも取れたしな。あとは早くこいつらを避難させろ」

「了解しました……保護対象をよろしくお願いします」

垣根さんの言葉に、白い生き物は大きなカブトムシに姿形を変えた。ひと2人は乗せれる大きな姿に驚くものの、テキパキとカイツと妹を乗せる彼の背を見送ると、一転してカブトムシの持ち主に向き直った。

「あからさまに落ち込んでんじやないわよお。そんなんで第二位さん大丈夫なわけえ？」

「平気だ」

話しかけるのも躊躇うような陰鬱とした雰囲気怖気ずくこともなくただ呆れる。

平気などと言う男からは喪失と虚無を感じ取れた。

「あのねえ、そんな暗い顔してる人が平気なわけないでしょ？ 藍花さんならわたしが取り持つてあげるから、元気だしなさいよお？」

「いらねえ世話だ。アイツも言っただろ、あの女の秘密を知れたのならもうそこで関係は終わるんだよ」

「あれ、付き合ってたわけじゃないの？」

「そんな低俗な関係じゃねえよ」

その哀愁を漂わせる背から鋭利な刃物に似た否定の声があがる。

事前の情報と違う彼の言い分に疑問が浮かぶものの、からかって良い雰囲気でもなく、ただ恐ろしかった。

「じゃあ何？ 貴方たちはビジネス的な関係なのに、あんなに仲良しだったわけ？」

「仲良しじゃねえ」

間髪入れずに遮られる声は焦っているようで、強い言葉からなにか歪さを感じ取る。

まるで認めたくないから拒絶しているようで、わたしにとってはチグハグにしか見えない。

一緒に住んだり、一緒に遊びに行ったり。それって、ビジネスと呼ぶには少し、おかしいのではないかと、明るい茶髪が風に吹かれるのを見て一考する。

わたしは見たのだ。感情も考えもない天羽慧系の記憶を。

彼女のピンチに駆けつける姿も、飛び降りた彼女を助ける姿も、怪我をした彼女を抱き上げる姿も、全て見た。

だからこそ、彼の言葉は信じるに値しない。

「てことは、彼女は、あなたにとってビジネス如きの他人なの？」

「知るかよ」

「どうみたってそれ以上の、」

「知らねえつつてんだろ!!」

張り上げた声に肩が跳ねる。怒気を含んだ大きな声は虚しく風の音で掻き消えた。

「っ、なら、なんでここにいるのよ。あの人がどうなろうがどうでもいいんでしょ？」

「……」

反論することもせず、静かなまま出口へ向かうと、静寂を崩すように轟音が鳴り響く。

爆発に似た音がビルを揺らし、壊れて床に落ちたドアがかたかたと震えるほどの音はビル内部から響いたようだった。

「っ！クソっ」

「ちよつと！置いてかないでよお！」

音が発生した場所をめざして出口へ走る。何が起こっているか分からないというのに、焦ったように走り去る彼は外見とはかけ離れて優しく見えてしまった。

確かに、ずつと独りだった少女がこんな人を好きになるのも極々当たり前かもしれないと、場違いな考えを巡らせながらわたしは必死に追いつこうと歩みを早めた。

大きな音が響くと、地面が揺れる。周りの小物がガタガタと柵から落ち、机の上の工具が散乱する光景に嫌気がさしながらも目の前のパネルをいじり続けた。

やつこの思いでこの階のスピーカーカーと監視カメラの制御権をもぎ取ると、急いで回線を繋げて映像を映し出した。

爆発音の発生源を突き止めるため何十ものモニターを起動し、何かをみつけようと目を凝らす。

そして青い画面に映る何箇所もの景色のひとつ、真ん中のモニターに人影が映った。

「好きな男にフラれて傷心中かと思いましたが、随分と元気そうですね。失恋の気分はどうですか？」

黒檀のようにどこまでも深い色の長い髪と、藍色の下着、そしてその背中から生える完璧な白色をした一對の翼と、淡く光る丸い輪を頭

上に浮かべた少女がモニターに顔を向ける。

備え付けの最新式マイクで画面越しの彼女に言葉を伝えようと、余裕な表情を見せた。

『別に、何も思っちゃいないよ。愛は向けられるものじゃなくて向けられるものだからね』

「嘘吐きですね、傷心を隠そうと虚勢を張らなくなつていいんですよ？ここには自分たち二人しかいないんですから」

まるで爆発が起きた後のような大惨事の中、彼女はいた。

崩れた壁や天井の瓦礫をバレエを踊るかのように可憐な動きで飛び越えて、彼女はゆっくりと前へ進む。

体を操るだけの能力者が何故爆発後のような惨状を作り上げたの
は分からない。けれど先程までいたはずのジジイは傍におらず、嫌な予感が脳裏に過ぎる。

なにか恐ろしい怪物を呼び起こしてしまったのではないかと、考えは尽きなかった。

『本当だよ。あたしは誰もを愛してるけど、彼らの愛は求めていない。全てを知られようと、嫌われようと、それは全て起こりうること』

「起こりうること、ですか。ならば幻生さんを殺したのも必然と？あなたの思想から反した行動ですが、どう弁解なさるおつもりで？」

『殺した？殺してなんかないよ、ちゃんと生きてる』

虚勢を張った女はそれを隠すかのように髪に隠れていた右手から何かを放り投げると、足元に散乱した機械のパーツを踏み潰す。

脳漿が飛び散る桃色の臓器と、キャンディのような眼球が捨てられた地面には破れた白衣に包まれた義手が一つ落ちていた。

「……一体全体、あなたの能力で何をすればそうなるのです？」

『外装代脳エクステリアを取り上げたくらいかな、君も何となくわかってるだろ？あとは、そうだね、支配権を奪ったかな』

顔色一つ変えず素手で脳を掴んでいた手から薄っすらと桃色の液体が流れ落ちる。

彼女の言葉は正しくて、実際に外装代脳エクステリアの反応はない。もし彼女が代わりに外装代脳と接続しているのなら、彼女は今第五位の能力を所

有していることになる。

それだけじゃない、彼女は自分の能力で他人の水分量を好きに調節できる。理論がほとんど同じ心理掌握メンタルアウットの情報を獲得していれば、今の時点で画面越しにいる女は肉体のみならず、精神さえも支配できるのではないか。

嫌な予測に冷や汗が湧く。

脳漿で濡れた手で口元を抑え笑いを堪える姿に何か得体の知れない恐ろしいものを感じるのは、人間としての本能からだった。

『技術って恐ろしいね、相似くん。こんなに小さくなっても機械さえあれば姿を取り戻せるんだから』

「あなたはてつきり甘いだけの人間だと思ってたのですが、なんだ、やれば出来るじゃないですか」

まるでどこに行くのか決めているかのような足取りで彼女は進む。

ギラギラと星のように瞬く虹彩がまっすぐ見つめる先には、明るい廊下しかないというのに。

「それで？今度は自分を殺しにくるのです？」

『殺さない。けどあたしの愛を伝えるに行く。正義を全うするだけ』

「相変わらずイカれてますね。貴方のこと、本当に嫌いです。気持ち悪い」

わざとらしく怖がるふりをすると、画面の向こうの彼女は足を止めて柔らかく微笑む。廊下の奥で怪しく光沢を見せるそれは、大きな腕を動かし床に大きな穴を開けた。

彼女の身長三つ分はある巨大なボディが道を塞ぐ。

馬鹿でナルシストな調子に乗った男から取り上げた、カマキリの形をした機械は鎌の形をした両腕を振り上げた。

「でも、そう簡単に通すほど自分は甘くありませんよ？」

『そうみたいね。面白いオモチャも奪ってるし』

左目を隠す長い前髪を掻き上げると、一度だけ高いピンヒールのつま先で床を叩く。立ったそれだけ、小さな一撃で床がめくり上がり大きな衝撃がビルを伝い、カメラが大きく揺れた。

振動と共にカマキリの腕が切り離される。その威力に、ものの数秒

足らずであるの木原幻生を脳だけの姿に作り上げた経緯も容易に想像できてしまった。

彼女の能力とはかけ離れた有様に絶句し、言葉を失う。

ただのちっぽけな虫を踏み潰すような軽い足取りで、彼女は防御を突破してしまった。

「あ、貴方の能力は体のことだけでは無いのです?! どうして念動力サイコキネシスのような真似が……!」

『あたしは物体を動かしてなんかないよ』

「は?じゃあ何を……」

『ただすこし、足からの衝撃の方向を弄っただけ』

耳に纏わりつく笑い声が気持ち悪い。轟く爆発音と爆風に負けな
いほどの衝撃的な告白は、揺れる画面を見てるだけの自分には少し刺
激が強すぎた。

「ベクトル操作……?しかし貴方の能力は——」

『馬鹿なあたしの演算だけでは上手く扱えないの。電子、水分、因子、
物質、熱量、向き、ベクトル、たくさんの演算は複雑に絡み合っ
て身体の中だけで精一杯だった』

「一体どういう……」

『能力体結晶だよ。神と鮮血の糸で繋がるあたしは、神の演算を手に
したの』

意味不明な言葉を続ける彼女は真っ直ぐカマキリの元へ向かう。
足を踏み出す事に凄まじい疾風が巻き起こり、くるぶしまで届く長い
黒髪がまるで触手のように風で広がった。

「はあ……?何言ってるんです?」

『この体は神によって作られた、ならば神と繋がるのも道理じゃない
か。神と等しい力も、神如き下僕ならば使えるもの、それだけの話だ
よ』

「支離滅裂ですね。体晶のせいで、言語機能が低下したのでしょうか
?」

理解のできない話に乾いた笑いを見せると、彼女は喉を鳴らして口
に含むように笑う。かつんと小さな瓦礫を蹴り飛ばし大きな爆発を

巻き起こし、彼女の姿は爆煙に掻き消され画面の中から消え失せる。

『この姿を見てもそう言えるか?』

背後から凄まじい音が轟いた。その音の方に顔を向けると、明るい光に少し目を細める。

モニターの光しかないはずの薄暗い部屋に眩い光が差すのはあり得なかった。

その光は、天井から降り注いでいた。大きな穴の空いた天井が無機質ながら温かみのある白い光をスポットライトのように通すと、柔らかない香りが部屋を侵食していった。

「退けよ、天使様のお通りだぞ」

天から翼を持った少女が降りてくる。人間とは思えない造形に一瞬、息を飲んだ。

頭上に浮かぶ光輪と、上階から照らされた黒髪がドレスの裾のように落ちた瓦礫を擦る。藍色の少女は瞳の中の一番星を薄く歪めて朗らかに笑った。

「つ、サーチ機能か……!」

「ずっといる場所くらい分かっています。でも、きちんとお話しなくてはいけないと、そう思ってたんです」

「は、話……?」

「あたしを愛してくれる人はいないと言ってたね」

床に散らばった工具や機材を眺めると、瓦礫の山から降りてぽつりぽつりと話を始める。

「正解だよ。誰にも望まれず、誰にも愛されたことはなかった。これからも、この先も、誰かがあたしを好きになることは無いよ。だってそういう描写がないから、恋愛感情を抱く相手が決まってるから」

静かな部屋に彼女の言葉と瓦礫の崩れる乾いた音が響く。ヒールを鳴らしながら前を見つめる彼女は、その姿も相まってどこか厳かでおぞましかった。

「でも、一人だけいるんだ。あたしを愛してくれる誰かが」

床に落ちた取っ手の長い金槌を見つけると、拾い上げて胸の前で握りしめた。神に祈る信者のように優しく微笑む彼女だが、金槌を握る

と途端に恐ろしい形相に変わる。

憎いと暗に伝えるその黒い目は、どういう原理か薄暗いこの部屋の中で淡く光っていた。

「それはあたしのためにあたしを殺し、あたしのために救いを差し伸べ、あたしのために世界を作ったクソ野郎。お前らが御坂美琴に植え付けた一部。この世界を具現化した愚かな神様のことだよ」

「か、神……？」

「そう、神様。あたしだけを愛してくれる神様、けどテメエらのせいで浮気されちゃった」

止まっていた足が再びゆっくりと移動する。長い前髪に隠れて見えなくなった両の目は先ほどとは打って変わって感情が読み取れなくなつた。

「だから神の望みに従い、愛を取り戻す。あたしが彼をまだ愛せるように、最期まで幸せにできるように」

「何を、言っているのですか…、分かりませんよ！その能力も、全て…」
「私は主の端た女です。御言葉通りこの身に成りますように」

金槌を王笏のように唇に当てると、青白いモニターに照らされながらこちらにゆっくりと歩み寄る。

体はもはや動かさず、自分にできることは思いの丈を叫ぶことだけだつた。

「どうしてそうなるのですか、どうして能力が切り替わつたのですか、どうして！もっと見せてください、貴方の底を、掴んで見せます、理解してみせます！だからっ！」

「歡喜しろ、テメエは今日神の意志を知り、神の御言葉を聞き、神の秩序を知る。願い通り、神の正義をその足りない脳髓に刻み込んであげましょう」

顎を金槌で持ち上げられると、可憐な少女はその見た目からおよそ出るとは思えない高い少年の声でひどく汚い言葉を紡ぐ。

厳かで、美しく、清純で、悍ましい天使のような少女が花の優しい匂いを振り撒いて神々しく頭上の輪によって淡く照らされる。

その恐ろしさたるや。彼女を人とはもう脳が認識してくれなかつ

た。

鋭い痛みがこめかみから突き刺さる。支配権を奪われたこの体は生きるも死ぬも彼女次第。

彼女が願えば触らずして肉体を腐らせることも、脳を作り変えることも、心を奪うこともできてしまう。他の能力者とは違う、抗えない死がそこにあつた。

常識を凌駕する能力に痛みを越す興奮と興味が湧く。何も考えられない頭で手を伸ばすと、動きに伴い買ったばかりの煙草の箱が音を立てて落ちた。

知りたい、その異常な能力を。だから最高の舞台に連れ出した、誘導した。

テレステイナ
親 戚の優しい検診じゃ、この女は暴けない。

伸ばした手は、彼女に届くことはなかった。

「だから、まだあたしを愛してください。神様」

朦朧とする意識の中、最後に聞いた言葉が自分に告げられたものではないと気づくと、悔しさを抱えて目の前の少女の眩しさを拒むように瞼を閉じた。

落ちた煙草のボックスを拾い上げると、微かに痙攣を繰り返しながら椅子の上で気絶する木原相似くんを乱暴に床で眠らせる。

埃が舞う薄暗い部屋の中で柔らかい感触の椅子に深く座ると細い煙草を一本取り出して口に咥えた。

物が散乱した机からライターを掴むと、青いモニターの光と空いた天井から差し込む少量の照明しかない暗い室内で真っ赤な光を燃やす。

肺を満たす煙を薄く吐き出すと、青白い光に彩られて空気に散らば

る。天に登る煙が消えていく光景にただ懐かしさしか感じなかった。「神様、あたしはまだ、この世界で生きていてもいいんですか」

椅子に体を預け、彼に恋い焦がれる。

あたしをこの世界に落とした産みの親は、自分が思っているよりも繋がりがあつた。

神が裏切れば、あたしはこの世界では生きていけない。

嫌いだと、死んでしまえばいいとも思うのに、あたしは神の加護なしには生きられない体。あれに見捨てられたら、あたしはこの未練を果たせない。

大好きな彼と同じ空気を吸うこともできなくなる。

だから、あたしは世界一嫌いな神に仕えてでも、あたしは世界一好きな彼を救いたい。

初めて好きになった他人だから。

「あたしの人生、なんでこんなことになっちゃったんだろうなあ……」
モニターの電源を一つ消すと、そこに酷く疲れ果てた天使の姿がぼんやりと浮かぶ。

荒れた部屋と、血色のない顔がどこか他人事のように笑ってしまふ。

けれど引き攣る神経のせい、上手に笑えなかった

「あたし、普通の女だったのに」

妹の為に、自分を最大限生かすため、ずっと研究してた一般人。

妹のことだけ考えてきただけの、社会経験もない普通の学生。

要領も、頭も悪くて、一度に多くのことをやるのがちよつと苦手な、

妹思いの姉。

こんな世界に生きるための体でも、脳でも、魂でもないのに。

前世との歪な違いに精神は疲労していく。

前世は簡単だった。

研究も、妹だけでなく誰かの為になることだから、ずっとそれをしていたらいつかは報われると思ってたからそれだけをずっと見据えて生きてきた。

それだけであたしの人生いっぱいになった。

目標はいつでも一つだから、こんな女でも容易く生き抜けたのだ。けれど、この世界はそんな簡単じゃない。

名前隠して、本性隠して、上手く立ち回れるように手を回して、嘘を沢山ついて。

目の回る忙しさに体は追いつかない。

まるで15歳の自分が24歳を演じてるかのよう感じてしまうのだ。

初めてこんなに頭を使うからボロも出るし、馬鹿に見える。堪らなく疲れる。

あたしの若さが、あたしの老いについていけない。

今までならひとつのことに没頭してれば良かったのに。それすらままならない。感情の波は今までより激しいのに、大人のあたしに振り回されて、疲れだけ残って。

前はなんでも出来たのに。タバコも、お酒も、ギャンブルも、車も。今よりもなんでも出来たのに。

今も昔も、同じくらい窮屈だった。

「天羽？」

静寂が低い男の声で破られる。背の高い少年の暗い茶髪が微かに揺れたのを横目で見ると、深く息を吸い込んだ。

香りが口腔に広がる。

啜えたタバコの爽やかなメンソールとシトラスの味はどうしてか、とても切なく苦かった。

77話：お年頃

小さく呟いた名前に、暗く狭い部屋の中で椅子に座り縮こまる少女の肩が跳ねる。

どこまでも続いているような長い黒髪と、淡い光に照らされる白い羽はまるで繭のようで、開けた扉から見える彼女がとても小さく見えていた。

「……誰かお探しですか？」

煙草を啜え、煙を吐く。気だるげな目元は長い前髪に隠れて全貌は見えず、何を見て、何を考えているのかすら想像がつかない。

覇気のない言葉が静かな部屋にこだまする。聞いたことのない、子供のような声だった。

「天羽隼糸、って女をな」

「ここにいるのは『肉体の支配者』、それか『不死者』。そんな女、いませんよ」

聞いたことのない単語を口にする、掠れて消えかけた口紅をたばこの煙が覆い隠した。

両目を隠す前髪の隙間から黒い目玉が覗く。向日葵のような星が瞬く異常な虹彩に思わず顔を背くと、床に転がる嫌いな男の体が視界に入った。

動かない人体と、床に落ちた剥き出しの脳みそ、そして壊れた天井と様々に機械に訝しむ。

顔の見えない少女が、何か得体のしれないものに見えて仕方がなかった。

「これ、全部お前がやったのか？」

「それが何か問題でも？」

ピクリとも動かない男の体を跨いで彼女の元に歩み寄る。寂しそうな声色で煙を纏う彼女に手を伸ばすと、膝を抱えて閉じこもった。

顔を隠す彼女の心情を表すかのように、頭上の輪は先ほどより微かだが早く回っていた。

「……なにか、御用でもあるのですか」

「違う」

「じゃあなぜ近づくのですか。もう、あたしは必要ないでしょう？」

一歩ずつ近づいていく。彼女の言う通り、彼女に近づくことも、触ろうと手を伸ばすことも、連れて帰ろうと説得することも必要はなかった。

もう一緒にいる意味がないと、わかっていた。

天羽彗糸という少女は秘密が多い。その秘密を、好きな人への隠し事を知りたかった。そのおかしい思考回路を知りたかった。

けれどももう知ってしまった。

05に接続した時に聞いた御坂美鈴の話と、嫌いな男の言葉から全て知らされた。

おかしな思考回路は悲惨な家庭環境故の結果だと、彼女が藍花悦であることを。

知りたいことは知った。隣にいる意味はなくなってしまった。

それでも足は彼女に近づこうと動き、手は彼女の頭を撫でようと伸びる。

なぜ近づいているのか。

なぜ彼女と帰ろうとしているのか。

なぜ彼女の髪に手を伸ばしているのか。

なぜ、小煩い女がいなくてこれからが想像できないのか、何もかもが分からない。

大きな翼を生やした天使に興味があるから？

下着姿の綺麗な女の子を触りたいと思うのは思春期男子として当たり前だから？

どれもパツとしない。

ただなぜか、こんな姿をした少女を置いてはおけないと心がずつと揺れ動いていた。

「どうしてだろうな、俺にもわかんねえよ」

「分からないなら、放っておいてよ」

「それは、」

「嫌いな女に、情けなんかかけないですよ」

優しく髪を撫でた手が弾かれる。それは今までになかった本気の拒絶だった。

「……あたしのこと、忘れさせたほうがいいのかな？キミは甘っちょろいから、そうでもしないとかわせぶりな態度、やめてくれないかな」
「あ？第五位の真似事か？」

その手で机の上に置きつ放しにされていたエアコンのリモコンを拾い上げると、まるで銃口のように彼女は俺へとポインターを向ける。

黒い髪から覗く彼女の黒い目はリモコンとは違い、下を見て顔を隠していた。

なんとも不器用なのか。

自分の望みを押し殺してまで俺を『幸せ』にしたいなんて、目の前の不器用で馬鹿な少女にできるはずもないと、手を再び伸ばす。

負けたくないと、どこか頭の隅で対抗心が燃えていた。

「ぼくの能力はね、『不死者』って言うんです。上層部には『肉体の支配者』と呼ばれているそうですが」

「……それが、お前がずっと隠していたかったことなのか」

「知ってました？実はね便利なんですよ、この能力。体に関することならなんでもできる。肉も、水も、電気も、遺伝子も、なんだって。まあ、なんでもできすぎて脳の処理が追いつかないのが難点ですけど。だからと言っても、体は精神ほど簡単に区切れるものじゃないのでね、リモコンでなんとかするのは本当は無理なんですけど」

乾いた笑い声が彼女の口元から溢れる。反論を許さないとでも言いたげに言葉を並べて、強気にリモコンを向ける下着姿の彼女はあまりにも滑稽だった。

「でも心理掌握は違う。マイクロレベルの水分調整が及ぼす最大限の精神操作は区切ることと真価を發揮する。外装代脳と繋がった今、能力のデータが逐一送られてくるんだ。どうすれば精神を支配し、どうすれば精神を壊せるのか。これがどう言う意味かわかるでしょ？」

「精神にまで干渉する気か」

「うん、そのほうがキミは幸せになれるだろうから」

弱々しい声が暗い部屋に響く。向けられた手に自分の手を重ね、優しくリモコンを奪い取ると小さく息を飲んでから遠くへ投げ捨てた。反抗もしない、まるでそうしてほしいと言わんばかりの、態度だけの対抗。

床に落ちた衝撃でリモコンの中身が零れ落ちる。乾電池がなくなつて、もう動かないリモコンは亡骸のように崩れた瓦礫の上にぶつかってヒビが走った。

「っ、なにをするの。記憶なんて無くした方が幸せでしょう?」

「……俺のこと、嫌いになつたのか?」

「はい?そんなわけないでしょ」

「なら、なんでそんな感じなんだよ」

苛立ちながら椅子から立ち上がると、彼女は慣れた手つきで煙草を吸う。糸のような煙が口元から零れ落ちて鋭いメンソールの匂いが彼女の香りを掻き消していく。

彼女が大人に塗りつぶされて、犯されていくようで、その行為が言葉に言い表せないほど嫌だった。

「だって、ぼくはヒロインじゃないんだもん」

すれ違いざま、小さい声が耳に入る。靴を脱いで裸足のまま地面に落ちた細かい瓦礫の破片を蹴り飛ばす姿は拗ねる子供のよう。

「はあ?ヒロイン?なんだよそれ」

「言葉通りだよ。ぼくはキミに望まれない、どんなにぼくがキミを好いていても、キミはぼくを好きにはならない。もう一緒にいる理由なくなつちやつたから、キミに不快な思いをさせたくないの」

「お前は、俺に好きになつて欲しいのか?」

「そうじゃないの、違う、違う!ただ、キミに幸せになつて欲しいだけ。キミにとつてはぼくがない世界の方がいいでしょ?」

御伽噺でしか聞かないような単語に、思わず呆れた声が出る。しかしその言葉の意味を説明しようともせず彼女は話を続ける。

まるで言い訳をまくしたてるかのように強く言い切ると、項垂れながらいまにも泣きそうな声で喉を震わせた。

「そんな泣きそうなやつ言うこと信じられるかよ」

「なんで？もうゼーんぶ教えてあげたよ。もうあたしはいらないんだよ。」

「……最終日のフォークダンスも、もうすぐ来るお前の本当の誕生日も、お前がいなきや意味ねえーだろ？」

出口に手をかけて振り返りもしない彼女を引き止めるため、何かを言おうと口を開く。

しかし出てきたのは嘘。

すぐに嘘だとわかるようなできの悪い言い訳に内心呆れてしまう。だが思ってもいない嘘でもつかなきや目の前のカラスは飛び立ち、跡を濁して消え失せる。

それが嫌だと感じるほど、どうやら彼女に情が湧いていた。血だまりの中、初めて救った愚かな女を嘘について手放したくないのは本心。

その本心に嫌気がさす。こんな女、本当は会いたくなかったと。

「ふ、ははは、馬鹿だなあ垣根くんは」

「あ？」

「言ったでしょ？ぼくはキミのヒロインじゃないんだよ」

無理してはにかむ彼女になんて返せばいいのか分からず、背を向ける彼女に中途半端に腕を伸ばして立ち止まる。

意味のわからないセリフと、助けて欲しいと言わんばかりの弱々しい声に彼女への『嫌い』が思考を止めさせた。どうするのが正解だったのか、わからない。

少しの苦味としょっぱさを残して、滞りなく二日目が終わった。

そして何も起きること無く、会うことも無く、大覇星祭最終日が訪れた。

賑やかな屋台の隅にあるテーブルで、財布を持ってどこかへ行った黒髪ボブの少女を待ちながらぼーっと遠くで揺らめくキャンプファイヤーを見つめる。

藍色の空に溶けていく赤になにか苛立ちを感じて、手元にある携帯電話を開き通知を確かめても苛立ちは炎のように大きくなるばかり。たくさんの通知が来ていたが、望んでいる人からのものはなかった。

残り少ないバッテリーに焦りを感じながら通知が来ないか待つ。何度見てもメールも、メッセージも、電話も、何一つ来なかった。

あの日から彼女と会っていない。

家にも戻らず、彼女はあのタバコの煙のようにどこかへふっと消えてしまった。

別に心配じゃない。興味なんてない。好きじゃない。

あんな女、大嫌い。

だが心はあの甘く優しい匂いを、柔らかい血肉を、おぞましい瞳を、人形のように、且つ誰にでも愛されるあの顔を、捕まえた細い首を、忘れさせてくれない。

初めての『スキ』も『アイ』も、忘れることは出来なかった。

移ってしまった微かな情は、確かにこの心に巣食っていた。

「垣根えい!! テメエ、なんで二日目から連絡途絶えたんだよ! 結構心配したんだぞ!!」

「あ?」

物思いに耽っていると、上条当麻がどこからともなく叫び声に近い大声を上げて現れた。

どうやら絶賛フォークダンスをおこなっているキャンプファイヤーから逃げてきたようで、頬に誰かの靴跡を残していた。

至って無難な風貌だというのに、罪作りな男だと言うのがチグハグだ。

御坂美琴にインテックス、前の騒動にいた神裂火織もそんな気がするし、どうやら食蜂操祈も知り合いのよう。

まさかうちの馬鹿にまで毒牙にかけてないかと嫌な予感が脳裏をよぎるが、俺の事を置いて去ったムカつく女の顔を思い出してしまい、忘れるようにこめかみを抑える。

「無理難題だけふっかけておいて、それで俺が大変な目に遭ったら助けにもこねーしよお！それに連絡しても返事こねーしよお！友人を心配させんじやねえ！」

「……お前なら出来ると思って託しただけだ。それに、お前らのことなんかどうでもいいしな」

「どうでもいいって、なんだよ、今日は随分と冷めてんな」
「別に」

五月蠅い男を冷たくあしらうと、機嫌を伺うようにそいつは前にある椅子に凶々しく座る。辺りを見渡して誰かを探す彼に面倒臭さを感じて空に目線を移すが、すぐに声をかけられ薄暗い空を視線から外した。

「ていうか天羽はどこなんだ？」

「あ？あの女に何の用だ」

「いやほら、借りてたやつ返そうかと。おかげで無事にゴールが認められたし」

そう言っつて金色のペンダントをテーブルに置くと、眩しいペンダントトップが街灯の光を強く反射する。キラキラしたペンダントは、もうここにはいない女のもの。

嫌という程頭に浮かぶ彼女の笑顔が腹立たしい。

「まだ入院中なのか？それとも機嫌悪いから一緒居たくないだけか？」

「そう思うならどっかいけ」

「友人が落ち込んでるところを放っておけるわけねーだろ？何があったんだ？」

「天羽と喧嘩したの」

話を聞く気満々のそいつを遮るように向こう側の屋台を眺めていると、テーブルの近くで少女の高い声が代わりに答えた。

「はっ!?まじで!?!」

「……おい、林檎。何余計なこと言ってるんだ？」

煩い屋台の方から現れたのは黒髪ボブが印象的な少女、杠林檎だった。屋台に行きたいと連日騒いだ少女は今やりんご飴片手に落ち着いた様子で聞かれたくないことを簡単に言い放った。

「だって本当のことだよ？」

「けい」と喧嘩なんて、珍しいね」

林檎の後ろからひよつこりと出てきた銀髪の美少女が抱えた食べ物の匂いが食欲を減退させる。

他人の問題に首を突っ込みたがるシスター服の少女は心配そうに焼きトウモロコシにかぶりついた。

「インデックスさん?どこに行ってた……って両腕に抱えた食べ物は一体……」

「買ってもらったんだよ!」

「誰に……?」

「垣根にもらったお金使った」

焼きそばに、たこ焼きに、わたあめに、りんご飴。小さな腕に収まりきれないほどの食べ物に上条の顔が引き攣る。彼の財布から出ているとは思えない量の食事は、どうやら林檎に持たせたお小遣いから使われたようだった。

「……申し訳ありません、垣根様」

「なら何も聞かずに帰れ」

一万円程度、渡した分だけなら子供が自由に使ったって困らないが、上条は顔面蒼白でテーブルに頭を擦り付けて謝り倒す。

それに漬け込み帰ることを促すも、彼らはけろっとした顔でテーブルを囲む。

「それはダメだよ。悲しい顔をしてる人をほっとけないんだよ！」

「お前らには関係ねえよ」

「関係ないって、ともだちだから心配なんだよ」

「そーだそーだ！」

しかし散財を許したのがいけなかったのか、調子づいて各々席に着くなり主張を再度繰り返す。

余計なお世話とでも言わんばかりの主張は、呆れ返ってしまうほどうるさかった。

「うるせえな。あんな女なくなつて、」

「寂しくないの？」

「……一人は慣れてんだよ」

黙らせようと開いた口は、隣に座った林檎によって閉じられる。

寂しいだの、そんな感情はあるはずない。けれど、家に帰ってこないお節介な女のいない日々は、確かに静かで、今までと同じずなのに、どこか心の隅ではあの騒音を望んでいた。

「そんな寂しいこと言うなよ。それで、いつから喧嘩してんの？」

「えつとね、大覇星祭2日目からずっと帰ってきてない。垣根に凄く怒ってるんだって。テレスティーナが言ってた」

「5日も帰ってきてねえの!？」

「それってもはや迎えに来て欲しいんじゃないのかな……けいとも子供っぽいんだね」

人の言うことも聞かず林檎は赤裸々に事情を話す。大袈裟どころか全く違う話の内容にもはや訂正する気も起きなかった。

「どんな酷い喧嘩したんだよお前……」

「部屋を壊して、服と、家具と、おけしよーを捨てて、勝手に掃除したからっ。」

正解を聞くように林檎がきよとんと首を傾げ、こちらに目で訴えかける。

もうそろそろ訂正しないと誤解されたままになりそうで、ため息を深く吐いた。

「そもそも喧嘩なんてしてねえよ。大体、あいつがそんなちつさい事

で怒るわけねえだろ」

「じゃあなんで一緒にいないの？」

「一緒にいる理由がなくなっただけだ」

そう、喧嘩なんかじゃない。

これは利害の一致した中身の無い関係だ。共にいる理由がなければ、もう合わなくなっただけいい。

アイツは俺と一緒にいたくて、俺はアイツの本名を、本当の姿を知りたくて、そんな相互利益があったから互いに一緒にいたのだ。

「理由？好きだからじゃねえのか？」

「愛情なんてものはねえよ。あんな女、大っ嫌いだ」

「ならなんでオリアナの魔術で倒れたあいつを必死になって治したんだよ。嫌いならあんな必死な顔しねえだろ」

「……まだその時はあいつに生きてもらわなきゃ困るからだよ」

しかしその返答は彼らにとっては不十分だったようで、話し足りないと言わんばかりに質問を重ねる。

「困るってことは、けいどが生きていることでいとくにメリットがあつたってことだよな？」

「メリットだあ？金持ちで、イケメンで、なんでもできる超能力者のお前に、天羽はどんなメリット与えてやれたんだよ？」

「別に、俺に隠し事してたから知りたかっただけさ」

「それだけ……？それだけのメリットのために守ったり救ったり一緒に遊んだりしてたわけ？」

「テメエにだけは言われたかねえ」

どんなに彼らに彼女のことを言われても、心は動じない。

「いいんだよ、フォークダンス踊ろうとか、誕生日に駄々こねられねえの楽だし。うるさくなくて俺は快適なんだ。だからこれ以上蒸し返すな」

「……天羽の誕生日、近くなの？」

「あ？確か四日後だ」

「今日は25だから、29日？あれ、でも4月って聞いてたような……」

ぼろつと口から出た本音に、林檎は過剰に反応する。席から勢い良く立ち上がり、何か求めるような目をして睨むと頬を膨らました。

「なんで教えてくれなかったの」

「聞かれなかったから」

矛盾に気がつきそうな上条をシカトして林檎はふてくされる。誕生日なんぞ、教える必要性は感じられない情報になぜ価値を感じているかは分からない。

俺だけが知っていればいいわけで、林檎が知る必要はなく、チクチク刺さる視線が鬱陶しい。

迷惑だ、全くもって腹がたつ。子供の世話も、誰かと言葉を交わすのも、人を宥めるのも、女である彼女の方が有利だというのに、肝心な時にいない。

何日間も音信不通で、隣にいないにも関わらず、起きることすべてに彼女の面影を感じてしまう。

「なら誕生日プレゼントでもやって機嫌治してもらえよ。理由とか言ってチャンス逃すと一生帰って来ねーぞ?」

「あ? 贈るかよ、もう今月の初めに渡しちまったしな」

「むっ! ひとつしかプレゼントしちやいけないって法律はないんだよ! なんてことない日でも、贈り物を貰ったら嬉しいものなんだから」

「ただの守銭奴だろ、それ」

「ていとくは夢がないね。それくらいしなきや女の子の機嫌は取れないって言ってるの!」

面倒なことに林檎だけでなく、お節介なやつらも誕生日のくだりに興味を抱く。まるで俺が悪いかのように進んでいく話に苛立ちテールをコツコツと人差し指で弾くが、誰も俺の感情に興味など示さなかった。

「じゃあ誕生日プレゼントは決定として、何贈るよ。女の子の欲しいもんって分かんねーし」

「……ハンカチ、とか?」

「いいセンスだな。けど特別感はあるまいねえかも」

俺を抜いて話がどんどん進んでいく。人の話を聞かない彼らに我

慢は限界を達していた。

「おい、なんで俺がプレゼント渡すことになつてんだよ。頭下げるならあっちからだろ。あいつから『垣根様ごめんなさい、好きだから許して』って請われねえ限り、俺はっ」

「そうだ！あいつの好みとかあんまり知らねえし、ここは誕生日から連想するものでどうだ？季節もの的な」

「話聞けウニ頭」

俺は至つて悪くない。

強いていえば、素直にならず、頑なに虚勢を張り続ける彼女が悪い。だからもし、もしも、俺と一緒にいたいというなら、彼女から言わなくてはおかしいのだ。

だって俺と一緒にいたいのは彼女であつて、断じて俺が彼女と一緒にいたい訳では無いのだから。

もし天羽彗糸本人が『一緒に居たい』と言つたら、仕方なく許可する立場にいる。

それが正しい認識だ。

だからこの俺が頭を下げるなんておかしな話だった。

「うーん、9月29日かあ……天使ミカエル、ガブリエル、ラファエルの日、ユダヤ教では天使ザドキエルの記念日で、贖罪の日、新年イヴでもあるね。けいとつて聖書的には結構凄い日に生まれてるかも」

「へー、よく知つてんな。なんの日なのかは一切わからねえけど」

誰も主張を汲むことなく話が続く。しかしその中であつた聞きなれない単語になぜか惹かれてしまった。

「……なあ、最初の3つは絵画とかでよく耳にするけど、ザドキエルつてだれだ？」

ミカエル、ガブリエル、ラファエル、それらならば古典美術で何度か見聞きしているから分からないこともないが、最後の名前だけは聞き覚えがない。ただ純粋な興味が自然と、まるで意図されていたかのように湧き出た。

「アブラハムの個人教授とも呼ばれていてね。神の正義を執行する天使様なんだよ。でも、7人の大天使の1人とか、下つ端天使の1人と

か、墮天使アザゼルと同一視されることもあったりで結構キャラブレの大きい天使かな」

「正義ねえ……」

「後は木星を司る慈愛と慈悲と記憶の天使で、グノーシス主義だと傲慢を表す悪意の天使でもあるかな」

インデックスの言葉に何か恐ろしい考えが脳裏を過ぎる。まるで彼女を象徴すると言わんばかりの天使に、何か作意を感じるのは当然のことだった。

慈愛に満ちた笑顔と慈悲を込めた輝かしい瞳、そして傲慢な振る舞いが記憶に焼き付いて消え失せない。

彼女が進む正義も、神への歪な愛憎も、全てがインデックスの口から伝えられる天使と良く似ていた。

「……あのさ、お前さ、天羽の誕生花とか、石とか、なんかそういうの知ってる?」

「たしか誕生花は林檎とツンベルギアとポーチュラカとチトニアだね」

「林檎……私?」

「食べ物のような」

「それで誕生石は慈愛を意味するブルーサファイアで、誕生色は強靱な精神を表すオペラ。誕生星は南十字座ε星で慈悲深い正義感を意味するよ」

嫌な考えが止まらない。確認の意味も込めて質問を重ねると、考えをさらに現実味のあるものにされた。

林檎は花なら「好み」「優先」「選択」、実なら「後悔」「誘惑」、木なら「名誉」

チトニアは「果報者」、ポーチュラカは「無邪気」で、ツンベルギアは「黒い瞳」「美しい瞳」

そしてインデックスの言う通り、ブルーサファイアは「慈愛」、オペラ色は「強靱な精神」、南十字座ε星は「慈悲深い正義感」

どこを切り取っても、あの少女の誰にでも愛される顔を思い出す。それは他人を「好み」、自分より「優先」して人を救う「選択」し、

妹を救えなかった「後悔」と、まるで人を「誘惑」するかのような言動と見た目で、誰かを救った「名誉」を欲しがり、

トランプを運だけで勝ち上がる運に恵まれた「果報者」で、「無邪気」に笑い、荘厳な緑と赤の「美しい瞳」と秘密にしていた「黒い瞳」を持ち、

「慈愛」に満ちた笑顔を誰彼構わず振りまき、「強靱な精神」で批判も同情も嫌悪も跳ね返し、誰にも侵されない「慈悲深い正義感」を持つ。花の香りを纏って、青を拒む体は知らないところでサファイアのような藍を身につける。

そして彼女は星のように輝く金髪を桜に似た鮮やかなオペラ色でわずかに塗りつぶしていた。

気味が悪いほど、9月29日は天羽彗糸に似合っている。

9月29日の擬人化のような少女は、どう考えても偶然が折り重なって生まれてきた人間ではない。

まるで誰かが意図して作り上げたかのような、そんな感じたこともない得体の知れない感覚。

「……なあ、話戻すけどよ、そのザドキエルって、ドミニオン、とかって呼ばれてねえか？」

「呼ばれてはないよ。ドミニオンって天使階級のひとつだし」「階級？」

初めての感覚に戸惑うも、この考えを否定してほしいと絞り出すように趣向を変え核心を突こうと質問を変え、静かな声で問う。

最後に見た彼女が呟いた知らない単語。まるで本物の天使と見間違う異形な姿にあった四角ではない丸い輪っかに、静かな興奮と、音もなく這い寄るおぞましさがあった。

「ザドキエルは主天使、ドミニオンの長なんだよ」

そして考えは命中する。

二つある名前、死んだ過去、妹のチグハグな記憶、妙に古臭いセンスト、神に会ったと豪語するあの表情、魔術への執着と、まるで未来

を知っているかのような発言。

彼女は一体、どこからきたのか。

彼女は一体、何者なのか。

嫌な憶測が脳裏に浮かぶ。机に置かれたロザリオに似たナイフのペンダントに固唾を？み、緊張が脳の思考を疎かにする。

彼女は、本当に文字通りの天使なのかもしれない。そんな馬鹿げた考えがいまになって鮮明に脳裏に浮かび上がった。

お姫様が泊まるような一室、ライトアップされた学園都市の全貌を見下ろせる豪華な部屋の中で綺麗なシーツに身を預け、黒い服を手にとった。

この部屋にあるのはわざわざ持ってきた学生カバン、その中にあった藍花悦としての最低限の荷物と、手の中にあるボロボロになってまともに着られない黒いジャージだけ。

長い黒髪が白いシーツに散らばる。もう何日も会えていない彼が何度も頭にチラついてまともに考えをさせてくれなかった。

別にいなくなっただってどうでもいいのに。寂しくなんかはないのに。なぜか体はもう匂いのしない黒い布切れを捨てられず手元に残る。

今頃何をしているだろうか、ちゃんとご飯は食べているだろうか、杓ちゃんと喧嘩してないだろうか、怪我はしていないだろうか、些細

なことでも笑えているだろうか、ちゃんと生きているだろうか、不幸じゃないだろうか。

考えが彼で半数を占める。

仕方がないじゃないか。

ずっと、ずっと誰かのために一人で生きてきた自分には、彼は初めての人だった。

最初はただのキャラクターだったけど、話して、触れて、関わって、人間並みの愛情が出来上がって、未練を成し遂げるための好きな人じゃなくなつて。

いつからか、あの可愛い少年が、この身を滅ぼしてでも幸せにした人になつていた。

重い体を起こし、これまた豪華な洗面台へと向かう。人生初とも言える屋上に近いスイートルームは防犯のため借りたと言えど、無駄な出費としか思えない。

こんな小汚い烏に似た女より、彼氏のいる可愛い少女が泊まるべきだろう。相手もいない自分には大きすぎるベッドも、二人掛けのソファアームも、無駄な防音設備もいららないというのに。

宝の持ち腐れとはこのことか。

重い足取りでたどり着いたバスルームの透明なガラスに肩がぶつかる。そういった行為に及ぶために作られたとしか思えない機能性の全くないバスルームに苛立ちを感じながらも、なんとか辿り着いた洗面台に手をおいてゆっくりと上を向く。

醜い我儘を洗い流そうと蛇口に手をかけると、デザイン性のある丸い鏡写った顔にふとため息をついた。

目元に覆いかぶさる長い黒髪。その隙間から見える黒檀のような虹彩には光り輝く一番星がギラギラと瞬いていた。

人間とは思えない瞳に乾いた笑いがこぼれる。あの赤い結晶を飲み込んだ対価としてか、輝く星はその輝きは失せることなかった。

「神様、あたしまだ、見捨てられてないんですね」

星とは、基本天使を表す。

神の子イエス・キリストが生まれた馬小屋へ三人の学者を誘ったベ

ツレヘムの星、あれこそが天使の姿の一つだと言われているからだ。死んだこの体が天使というのは少々おかしい話だが、この世界準拠で考えればさほど頭のイカれた話ではなかった。

『考察』というものがある。

それは張り巡らされた伏線やアトリビュートを通してフィクションの物語のモチーフや土台を詮索し、そのキャラクター、その世界が一体何を思っ、何を目指して、何を考えて、何を象徴して、何を望むのかを考え、議論することだ。

『とある魔術の禁書目録』だって例外じゃない。

何人ものファンが物語を読み解き、キャラクターが何を表し、何をモチーフとし、何を役割を背負うのかを考えてきた。

そのうちの一つに天使にまつわるものがある。

それは『超能力者はそれぞれ七大天使になぞられているのではないか』というもの。

天使と見間違う翼を持てるキャラクターがいる以上、けして的を得ていない訳ではない。誰がどれかは見当つかないが、可能性としてはある。

しかしそこには問題があった。

四大天使は決まっていれど、ほか三天使は書によって異なるのだ。だからあたしは読者の深読みとしか考えていなかった。

しかし、ここはその深読みが具現化した本物には程遠い模造品パラレルワールド

その考察がこの世界のシステムに組み込まれている可能性は十分にあったのだ。

そしてその可能性は現実となった。

「アレキスターくんは知っていたんだね。人間でないことも、その役割も、全て」

能力名をつけられた時点で考えておくべきだったと、肩をすくめ項垂れる。

未練を治すために生まれ、死に損なった人。

そして最後、ドミニオン。

それは神の秩序と権威を知らしめる天使の役職。そしてその指揮

官は七大天使の一人、神の正義を伝える天使ザドキエルだと、勉強熱心なあたしは知ってしまった。

どれもあたしの本質。

この肉体を支配するのは天使だと、黒幕は全て知っていた。

「でも、少し違う。ぼくは神の使いじゃない、あたしは神の人形なんだよ。台本をなぞり、未練を果たして、神を見返して、そして最後は醜く死んでしまう」

けれどその読みは外れだ。たとえ天使でも、この体は役職のないただの駒。

結局のところ、あたしはコツペリアなのだ。

あたしはあの神のお人形さんで、台本をなぞることしか出来ない見た目だけの大根役者。どうせ愛を伝えられずに死ぬだけだ。

ただの舞台装置、ただのお人形さん。だからコツペリアは幸せにはなれない。ただの装置に幸せなんていらぬから。

可哀想なコツペリア。ヒロインでも、人間でもないただの舞台装置。

主人公も、ヒロインも、悪役も、モブも、全員が幸せな大団円を作るのがコツペリアの役割り。

あたしがコツペリアというのなら、あたしのやるべき事はひとつ。

死をもって大団円を築くのだ。ヒロインでも主人公でもなく、彼らを幸せに導く眩い星として。



青年フランツは恋をした。

相手は窓辺に座る美しい少女、コツペリア。

心を奪われるのは当然だった。その少女は人形で、気が狂った人形師、コツペリウスの作った芸術品なのだから。

それを知らない青年は恋人スワルニダに黙って家へ忍び込む。嫉妬した恋人が同じように忍び込んだことに気が付かずに。

けれど青年はコツペリウスに見つかりその魂を奪われてしまう。コツペリウスは自分で作り上げた人形に命を与えたかったのだ。

ただのお人形を人間に、それが唯一の望みだった。

だが青年の恋人にコツペリアの真似をされ、散々とかわかれ、悪戯され、結局夢は敗れ、コツペリアを人にすることは叶わない。

そして酷く乱暴に扱われたコツペリアはエナメル製の瞳を落とし、壊れてしまう。

腕も、足も、人の形を保てなくなり、もはや人形とすら呼べなくなつた。

命を奪うほど大切な人形が壊れた消失感に膝を崩し、そのまま最後の幕が上がる。

ラストはなんてことないハッピーエンドだった。

恋人二人は仲直りを果たし、村の皆に祝福されながら歌と踊りで笑い、喜びを分かち合い、永遠の愛を誓った。

そして残されたコツペリウスも、最後は二人の謝罪に心を痛め、コツペリアなんて忘れて人々の輪に入っていく。

コツペリアは壊れたまま、装置として終わりを迎える。生きること

もなく、壊れることが運命付けられたただの都合のいい人形。

しかし、神はそれを望まれていなかった。

バレエというものは作り手によって同じ物語でもその結末が大きく変わることが多い。

それはコツペリアも同じ。

壊れたコツペリアに見向きもせず、壊した主人公恋人達の婚姻を祝福する最後。

コツペリアが本物となり、コツペリウスと結ばれる最後。

そしてもうひとつ。

賑やかな村の隅で、ただ一人、無残に壊された最愛の女性の冷たい残骸を虚しく、切なく抱きしめるコツペリウスの姿で幕が閉じるのだ。

78話：不本意なデート

彼女がいけない日が過ぎる。

何日も、何日も。

だからと言って、どうということはない。今までもうるさい鳥がない生活を送っていた。

何不自由のない生活。昔に戻っただけのなんてことない生活。

殺し、殺され、畏怖され、嫌われる。

仮面を被って日常を送り、夜に仮面を脱ぎ捨てる生活を繰り返して、繰り返して。

頬に跳ねた血を拭って、匂いを消すためにシャワーを浴び、緊張の中眠りにつく。それだけの日常が戻ってきただけだ。

それに今は自分が初めて救えた小さな少女も傍にいる。暗闇を知っている暗い髪の少女は、過ぎた時間と比例して微かな感情が芽生えていた。

守らなくてはいけない。この小さい子供を、俺をかつこいいという愚かな子供を、初めて救った命を。

なら、彼女は？あの藍色の天使は、誰が守る？

金色と濡羽色の少女が鮮烈な赤に書き換わる光景を想像して酷い眩暈が襲う。

俺は彼女に何がしたい？何をさせたい？何を思いたい？

俺は彼女を、どう思っている？

纏まらない思考が脳を掻き乱したまま、暗い路地へと身を投じた。止まらない情動に焼き切れそうになりながら。

鮮やかな夕焼けが溢れる窓際で柔らかな桃色に爪を塗る。鼻につくネイルの匂いと、仄かに香る知らない誰かの血の匂いが部屋に漂う。

九月三十日、月が変わるこの日は午後には雨が降ると予報されており、窓から見える雲の隙間から降り注ぐ赤い光は雨を予感させた。

硬さのあるソファに座り、真つ赤な夕焼けを眺めているとガチャリとドアが開く。赤い空から目を離すと、慌ただしい様子の少年が勢いよく部屋に滑り込んだ。

「おかえり、任務はどうだったのかしら？」

「どうもこうも、大変でしたよ……あの人ここ最近ずつと機嫌悪いし、めんどくさいっつーか、なんっつーか……」

くたびれた長袖を着込んだ少年は大きなため息を吐いてドアに背を預ける。酷く困憊しているようで、土星の輪を思い出すフォルムのゴーグルを外し、少年、誉望万化は場所も弁えずに愚痴を零し始めた。
「心理定規さん、あの人何とかありませんか？」

「何で？」

「いや、『何で』じゃなくて……下手したら俺らが殺されそうなんすけど。結構怖いんっすよ」

ボサボサとした黒髪を掻きながら服から汚れを軽く払うと、眉間にしわを寄せる。最近機嫌の悪い上司に振り回される彼は随分と困り果て、疲れ果てた様子だった。

この場にはいない上司の困った八つ当たりから察するに、彼はどうも限界のよう。

「……仕方ないわね」

気が重い。

女関係のいざこざにあまり茶々を入れたくなかったけれど、仕事に支障が出ているのならば自分がなんとかするしかあるまい。

どうしようもない人をデートにでも誘おうかと、重い足取りでソ

ファーから体を持ち上げた。

人で賑わう放課後の百貨店。ちらちらと向けられる熱のこもった女性の視線が鬱陶しい空間の中、人工的な甘い匂いが鼻の奥を突き刺した。

「これはいい香りね、一つ買っておこうかしら」

「……おい」

様々なテスターから溢れる多様な香水の匂いが混じる。年不相応なピンク色のドレスを着た背の低い少女が瓶詰めメジャーハートの香水を手にとると、その匂いが一気に纏わりついた。

人の呼びかけもまともに聞かず心理定規メジャーハートは豪華に巻かれたポニーテールを揺らす。

キャバクラの嬢にしか見えない寒そうな服装をする齡14程度の外見は、ちぐはぐで可愛げはない。

「この口紅は……ちよつと濃すぎるかしら。私には似合いそうもないわね」

「……おいつて」

キラキラと光を反射する香水瓶をおくと、次は口紅のテスターに移る。ドレスと同じ赤い口紅は彼女の好みではなかったようですぐに視線は別のところへ向かった。

いつも見る金髪よりだいぶ低い身長を目で追うが、慌ただしく目を移りする同僚に呆れて物も言えない。

「あと必要なものはって何かあったかしら。靴はこの前買ったし……」

ああ、季節物の服も見ておかないと。次は服のコーナーに行くわよ」
「……おいっ！ちよつと待て！」

理解する間も無く言葉をまくし立て次の場所に向かおうと背を向ける。慌ただしく服屋が並んだ階に向かうその背に抗議の声をあげるとようやく彼女はこちらを振り向いた。

「あら、どうかした？もしかして何か欲しいものでもあつた？」

「ねえよ、欲しいものなんて。それよりなんだこの状況は」

簡単にクソみたいな任務が終わって、帰ろうとしていたはずだった。

あの女が帰ってこないのに腹を立てながら林檎に勉強でも教えてやろうと、天羽の家まで向かっていったのだ。

しかし現在いるのはセブンスミストのコスメ売り場。心理定規メジャーに頼みがあると連れてこられた若い女がこぞつて集まるスペースは、180cmもある男がいる場所ではなかった。

「なについて、貴方に気分転換してもらおうと思って」

「はあ？そんなもん要らねえよ、俺は帰るぞ」

「最近イライラしっぱなしで、部下たちが怖がってるのよ？ガス抜きは必要じゃないかしら？」

今すぐ帰ろうと踵を返したところで、核心に触れるような言葉に足が止まる。呑気に会計を済ませて店を出る彼女の顔から表情は何えなかった。

「気遣いは結構だが、お前の買い物に付き合うのが気分転換になるのかよ」

「あら、私の買い物に付き合うのも悪くないはずよ？喧嘩してる相手が女なら特にね」

「喧嘩なんかしてねえよ。アイツが一方的に怒ってるだけだ」

「なら尚更ここにいきべきよ。私が買うもの見てれば、自ずと彼女にお詫びに何をあげればいいのか分かるじゃない？」

「……俺が謝る必要性が感じられねえな。それに、テメエみてえな年上相手に小銭稼ぎする女の好みがあいつとが同じなわけねえだろ」

一刻も早く帰りたい気持ちを削ぐようにあの女の存在を匂わせる。

メジャーハート
心理定規の言い分に少し興味が湧いたものの、すぐさま彼女の顔を思い出すと興味は薄れていった。

金のために男相手の個人的メンタル相談窓口なんて純粹とは程遠い仕事をする目の前の女と、他人のために生きるため看護師なんぞ聖職につく女、全く違う両者が同じ好みで、同じ方法で宥められるとは思えない。

「まるで彼女の好みを知ってるみたいない分ね。仲良しで妬けちゃうけど、女が機嫌を損ねたときは男から折れた方がいいわよ？」

「ほぎげ。それよりいつまで買い物してんだ。早く帰ってえんだよこっちは」

「まだまだ、こんなの序の口よ。女には色々必要なの。天羽さんと買い物した時だって、こんな感じだったんでしよう？」

「俺はアイツと二人きりで買い物なんてしたことねえけど」

服の売り場がある階に二人並んで向かう。いつもより目線も一部分の体積も違う隣に違和感しかないが、なるべく考えないようにしてエスカレーターに乗り込んだ。

「デートもまだってこと？随分と奥手なのね」

「なにか誤解してねえか？アイツはただの協力者だ。上条当麻や、その他の接点を繋げてくれるな。あとは林檎の保護者もしてもらってる、ただそれだけだよ」

「ふーん。そういうことにしておくけど、本当に彼女と買い物行ったことないの？」

「あ？……林檎に必要なもの買いに行っただくらいか？でもあれは3人だったし、忙しかったしな。ねーんじゃねえの？」

「呆れた、同棲まがいのこととしておいて、デートすらしてなかったなんて」

「テメエが勝手に関係を勘違いしてただけで、俺らにはなんもねえよ」
言い訳を並べ立て関係性を否定しても、呆れた顔をするだけで真剣には聞いていない。訪れたフロアで最初に目についた店頭に向かうと、もうすでに違う話が変わっていた。

色とりどりの服が並ぶ店先、女物の衣服に囲まれる状況と腹立たし

い事しかいわない同僚にそろそろ飽き飽きする。

「なら安心したわ。ところでこの赤と青の服なんだけど、どっちの方が私に似合うと思う?」

「……知るかよ、自分で考えろ」

おもむろに手にした眩しい赤と、深い青のワンピースが視界に入った。キャバ嬢が着ているような露出の多いドレスの眩しすぎる色は、白い肌と白い翼についた鮮血と、最後に見た青い下着姿の可愛そうな女を思い出させる。

きつと、背が高く、色の薄いあの女ならばどんな色でも着こなして見せるのかと思うと心拍数が増す。あの日の紅も、この間の藍も、彼女の持つ確かな色。

赤も、青も、緑も、黄色も、白も、黒も、どんな色でも彼女の色がちらついて集中が削がれる。

思わず目を逸らして平常心を装うと、勝手に勘違いをした彼女は赤いドレスを持って鏡の前に立った。

「赤い方を見てたわね。青も少し見てたけど、こっちの方が好みなの? そうね、私もこっちの方がいいと思うわ」

「人のことを勝手に判別機にするんじゃないやねえ。つーか、こういうのはお前の客について行ってもらえよ。男も多いだろうし、そいつらの方がよっぽど協力的に買い物に付き合うだろうぜ」

柄になく狼狽えてしまった言動を勘違いしてくれるのはありがたいが、その扱いが判別機と同列なのは少しムカつく。勝手に判断されるのも、機嫌が悪いと言われ俺が悪いかのように認識されるのも、何もかもムカつく。

なんでこんなところになくてはならないのか、益々分からない。気分転換と適当に言いくるめて、これをさせたいだけなら、別のやつに頼めばいいとしか思えなかった。

「それは駄目。客の人達だけは絶対連れていけないわ」

「あん? どういうことだ?」

「彼らとは今までお話するだけっていう関係だったけど、買い物になんて誘ったらその関係が崩れちゃう。一度崩れれば『もつといけるん

じゃないか』って邪な発想が生まれるものよ。距離を弄って修正することもできなくはないけど、一々面倒じゃない?」

「はあん、そんなもんか」

女、しかも若い女と喋る事実だけで男という生き物は邪な発想を生むのではないかと、男を甘く見ている少女を見て思う。極端ではあるが、全人類は豊かな胸が好きだと思って、ある程度男の性を理解しているあの女の方がまともな異性観を持っている気がしてならない。

巨乳で、気さくで、優しく、暖かい女だからそういう考えを持っているのか。

しかし、胸にだけ集中する男の視線を鈍感で阿呆な彼女が理解しているとは思えないので、きつと職業故の考え方なんだろう。

だからなんだという話だが。別にあの女が誰に股開いてたつてどうでもいい。

どうでもいい。何も思っていない。

けれどなぜか想像が広がり、脳に霧がかかる。言葉にできない感情を見て見ぬ振りして小さな同僚に背を向けた。

「……それにこんな大事な買い物は信頼できる相手と一緒にやらないとできないわ。私の言ってることわかる? 垣根帝督……」

しかしすぐに足を止める。脈絡もなくスーツの上から纏わりついた細い腕に止められた体に苛立ちが増していく。

子供のマセたからかいとは分かっている。けれど、不愉快な体温にそろそろ我慢の限界を迎えそうだった。

「信頼できる相手だ?」

纏わりつく腕を振り解くと、舌打ちを響かせ冷たく彼女を見下ろした。面倒な言動にいちいち振り回されるのもいい加減嫌気が差す。

「俺みたいな悪党が信頼できる相手に見えるのか? いやいや買物のしすぎで頭でもバグったのかよ」

「……でも天羽さんはこんなこと言わないのかしら?」

「アイツはそんなこと言わねえよ」

黙っていて欲しいと静かに願う。あの女を理解していない人間に、彼女についてとやかく言われるのは非常に不愉快だった。

深淵を覗いたこともない人間が彼女の何がわかる。

ただの狂人でも、聖人でもない、おぞましい少女の何を知っているというんだ。

「ふーん、こういうことを言う相手には気をつけてって言おうとしたんだけど、あなたには必要なかつたわね。いつそ清々するくらい戸惑ってくれないみたいだし」

「当たり前だ、この程度で動じる俺じゃ、ねえ……?」

向けた背に、優しい香りがすれ違う。ずっと焦がれていた甘い香りに、体は愚か、脳も機能を停止した。

微かに舞った淡い匂いに勢いよく振り返る。蕩けるような甘くて優しい不思議な香りがぶわつと膨らむ先に伸ばした手は、指先で微かに恐ろしく長い黒髪に触れた。

「っ、垣根くん……」

「……天羽？」

目元の隠れた少年と目が合う。可愛らしい少年声と、幼い顔と年齢に似合わない長身。平らな体を隠す藍色のカンフー服に息を飲む。

顔の見えない姿と、違う声に体つき。判別できるのは長い髪と彼女の優しく甘い匂いだけだった。

時は少し戻り、夕方。

誰もいないホテルの一室、大きなベッドに体を預け白いシーツのシワを伸ばす。手にした黒い携帯電話に表示された9月30日の文字にため息をついてゆつくりと起き上がると、ガラス張りの壁から突き

刺す眩しい赤に目を細めた。

「何から手をつけようかな……」

持ってきた学生カバンから藍色のカンフー服と白いシャツ、黒いズボンと靴、そして胸を潰すための小道具を取り出す。藍花悦に成るための儀式のようなものだった。

現れた藍色の綺麗な下着も脱ぎ、上から大きな矯正バンドで潰すと更にガムテープで補強する。

その上からシャツを着ようとベッドに投げた服に手を伸ばすが、ふと黒いジャージが視界に入ると迷わずそれを掴む。

「……会いたいなんて、我儘が過ぎるよね」

優しい匂いはもう消え失せ、懐かしい香りは何処かへ旅立ってしまった。もう二度と彼の優しい香りを感じられないのはほんの少しだけ寂しかった。

昔から独りで生きていたのに今更かもしれない。寂しさを覚えたことなんて一度もなかったのに、死んだ今になって永遠に会えないことを嘆いてしまう。

クソみたいな女。こんな人間生きていなければいいのに。

シャツの代わりに布面積の少なくなったジャージを着て、上から大きな藍色で隠す。胸を平らにしたせいか、昨日ではあまりゆとりのがかった上半身は今となつては隙間だらけだった。

着替えが完了し、うねった髪を遺伝子操作でまっすぐ伸ばす。長い黒髪と両目を隠す前髪を満足げに触ると、ルームキーを持って日が落ちそうな曇り空を背にして外へと向かった。

ドアノブに手を掛ける。不意に鳴ったチャイムよりも早くドアを開けると、薄い色素が優しく光を反射した。

「誰……？」

チャイムと同時に開けたドアの先、そこにいた女性の長いポニーテールが揺れ、メガネの奥で薄く睨む青い瞳と目が合う。

「警戒心無さすぎだな、クソガキ。チェーンくらいは付けろ」

「テレステイナさん……？」

久しぶりに会った彼女に目を見開く。面倒くさそうに腕を組んでドアの目の前に立つ彼女に驚きを隠せず薄く口を開いて立ち尽くすと、大きなため息をつかれ、嫌そうな目で睨まれた。

「なんつー顔してんだ、クソガキ」

「な、なんでここに？あたし、教えてない……」

「出かけるぞ」

「……へ？」

思考がついていかないまま長い袖を捕まれドアの外に体を引き出される。

バタンと大きな音を立てて閉まるドアを背に、返答もないまま前へ前へと進んでいった。

長い袖が更に伸びるのではと心配になりながら連れていかれた場所は何とことない百貨店。

建物に繋がるガラスの自動ドアを潜ると暖かい空気体が通り抜ける。暖房が程よく効いた建物内の明るい光は暗くなる外と比較するからか余計に眩しかった。

「……それで、なんであたしをここに連れてきたの？」

腕を引かれ、コスメのフロアを抜けるとエスカレーターを上る。

先程から黙ったままのテレステイナだったが、エスカレーターを降りるとようやく口を開いた。

「体晶、使ったか？」

「え？使ったけど……」

「テメエを連れ出したのはその使用報告と、メンタルケアの為に美味しい飯でも食いに行こうかと」

今度はゆっくりとした足取りで袖に隠れた手を繋いで歩く。能力

体結晶の使用について聞くにしては優しい口調になにか意図を感じるのは、おそらく気のせいではなかった。

「……前者は分かるけど、メンタルケアって何」

「実験をする際、被験者は基本的に心身ともに健康でなくてはならない。それは分かっているだろう？モルモットの管理はしなくちゃな」

「そうじゃなくて、メンタルケアが必要なほどあかし病んでないって言うてるの」

「クソガキと喧嘩したんだろ？家にも帰ってねえみたいだし。杠から聞いたぞ」

掴まれた手を強く握り返して歩みを進める。いつの間に杠ちゃんとお知り合いになったのか気になるが、それよりも大きな勘違いの方に意識は向く。

心配、というよりただの事実確認に近い口調に僅かな苛立ちが生まれた。

垣根さんと喧嘩なんかしてないのだ。ただ、垣根さんの隣にあたしが必要ないだけ。

垣根くんがあたしを嫌うのだから、あたしは隣にいれないのだ。

今まで通り、彼があたしを隣に置く理由がない限りあたしは彼に近づけない。

嫌われていることを知っているから、そんな行動しか取れなかった。

「……体晶の使用報告なら後でレポートまとめて送る。今日は色々忙しい日だからもう帰る」

「おい帰るなよ、忙しいってなにがあるんだ」

「色々よ、いろいろ、ろ……」

少し強引に手を振り払うとすれ違った少年から懐かしい香りが舞う。

黒い髪の間隙から辛うじて見えた彼は、ずっと好きだと誓った綺麗な少年と同じ姿をしていた。

「垣根くん……」

「……天羽？」

同じ声と呼び方に彼が本物だと理解する。掠れた声で呟いた名前はいつもと違う少年の声だというのに、彼もまたあたしだと理解した。

堪らなく嬉しい。けれど、同時にチクチクと胸を刺す痛みに悶え藍色の服を掴む。

隣に立つ金髪の子供と二人でデートをする姿に、なにか、心の奥で憎悪が渦巻いた。

嫌いな女に、思わせぶりな態度を取らないでよ。

79話：メタフィクション

幼い中学生にしては背の高い少年がそばで立ち止まる。自分と同じ年か、一つ上くらいの少年は、リーダーと目を合わせたまま動かない。

奇妙な沈黙が場を満たす。

何だか気まずい雰囲気、言葉を出すのを躊躇った。

「な、なんでお前が、ここに……」

沈黙を最初に破ったのはリーダー、垣根帝督だった。カーテンのように落ちる黒い髪を指先に絡めて、まるで生き別れの兄弟を発見したような驚きに満ちた黒い瞳でソプラノ声の少年と見つめ合った。

初めて見る顔に僅かな不安を感じる。

暗部とはかけ離れた男子高校生の表情に、彼の悲劇も闇も、一切感じられなかった。

「えっと、知り合い？」

「……違います、行きますよテレステイナー」

「いいのかよ？」

時が止まったかのように目を見開いたまま固まる彼らに咳払いをすると、黒髪の少年は目を逸らして付き添いの女と背を向ける。

焦ったように目元の隠れた少年の踝まで届く気味の悪い黒髪が翻った。微かに花の香りがする少年の長い髪は、蝶のようにひらひらと舞う。

着込んだ藍色のカンフー服も相まって、中性的な少年は同じ人間とは思えなかった。

「よくないだろ」

不思議な少年の長い髪を掴み、リーダーは離れていく。少年の元へ向かった彼は、私のことは眼中にもないようだった。

魔法にでもかかったかのように気味の悪い少年に目を奪われたとすら思うほど、彼の態度は私へのものとは違う。

何だか腹立たしい。ずっとともに仕事をしてきた女の同僚ではなく、知らない美少年に関心が向くなんて。

「ちよつと、どうしたのよ」

「誉望でも呼んであとは一人でやれ、野暮用が出来た」

「はあ?」

奇行に走る上司を止めようとくすんだ色のジャケットの裾を掴むが、すぐに振り払われて彼らは人混みに消えていく。

強引に掴んだ藍色の袖を引いて走り去る彼の背が消えていった先を見つめながらぼかんと立ち尽くす。

「どういふことなの……?」

風のように消えていったリーダーの不可解な行動に、脳の理解が追いついていなかった。

袖に包まれた腕を強く掴み、振り返らず真つ直ぐ歩く。

沢山の服屋が並んだフロアで顔を伏せながら腕を強く握ると、後ろを必死に着いてくる少女から悲痛な声が小さく聞こえた。

「離して、おねがい垣根くん」

「なんで」

「あた、ぼくのこと、嫌いなんでしょ?」

小さなお願いに構わず前に進む。彼女の聞き慣れない少年声に腸が煮えくり返りそうだった。

この女はずるい。すぐくずるい。

二週間音沙汰もなかったくせに、お前の言うことを聞くとなぜ思う。

もう嫌いになったのだろうか、もう二度と会えなのかと、そんな憶測を真実にしようかと思っていたこの時に、タイミング悪くやつてくるお前を手放すと思う。

一番不安な時に、信じられなくなる時に現れて、落ち込んだ機嫌をすぐに舞い戻らせる。

そんな女、ずるいに決まってる。

「……誕生日、なんで帰ってこなかったんだよ」

「つえ？あ、ああ、そんなものもありましたね」

強く細い腕を掴んだまま、少しだけスピードを落とす。探るように呟いた質問は彼女にとっては予想外だったようで、声色からして困惑しているのが伝わる。

少年のソプラノ声。聞き慣れない声とよそよそしい態度が腹立たしい。

「なんで帰ってこねえんだよ」

「言ったでしょ、キミに不快な思いをさせたくないって」

「俺の事、怒ってるのか？だからそんな冷たいわけ？」

足を止め、ようやく彼女に振り返る。髪の色や質が変わって胸が平らになったせいか、いつものような威圧感はあまり感じられない。それどころか小さくなっているように感じる。

目の錯覚と言えばそれまで。

けれど、むすつと頬を膨らます仕草に目元が見えずとも小動物的な小ささを感じるのはきつと勘違いじゃない。

「ぼくが怒ってるように見えます？」

「見える」

「別に怒ってません」

「じゃあなんで『ぼく』って言うんだよ、敬語やめねえんだよ」

「ぼくが藍花悦だから、それだけです」

拗ねた子供のように口をへの字に曲げて顔を背ける彼女に、危惧していた感情が呼び起こされる。

襲うのは脱力感。手から滑り落ちた彼女の袖をもう一度握る勇氣は無かった。

「なあ、俺のこと、もう嫌いになったのか？」

「馬鹿ですね、嫌いになるわけないでしょ？」

面倒くさそうに、呆れたような力の抜けた笑顔を見せると彼女の手

が袖越しに手を触れる。

繋ぐわけでも、握るわけでも、掴むわけでもない、ただ触れただけの手に近い感情がこもっているのは自分にしかきつとわからない。

「……服でも見るか？」

「いいです、別に。早く帰るので」

「あ？・テメエは俺の誘いを断るのか？」

触れた手の暖かさに安堵すると近くにあつた服屋に目を向ける。ブランドものでもない学生向けの安価な服屋だが服の種類は多く、似合うものや好きなジャンルを話題にする目的なら申し分ない。

けれど俺の気が利いた誘いをぶつきらばうに断ると彼女は逃げるために背を向けた。

「先ほどの中学生とデートの続きでもしていたらどうですか？嫌いな人ではなく、好きな人といった方が精神衛生的によろしいかと」

「あれは荷物持ちとして呼ばれたようなものだ。変に勘違いして拗ねてんじやねえよ」

「違いますう、拗ねてません！垣根くんこそ素直に言えばいいじゃないですか、中学生のませた子供に邪な感情を抱く性癖があるってね！」

どこか怒った様子の彼女を訝しげに見つめながら首根っこを押さえて引き止めると、子供らしく可愛げのある少年の声を荒げて罵倒とも言えない雑言を放つ。

精一杯の意地悪に少し笑いが込み上げるのを我慢しつつ、不名誉なレッテル貼りに多少の苛立ちを感じて首を掴む手に少しだけ力を込めた。

「誰がガキを相手にするって？いい加減、考えを改めねえと強めにグーで殴るぞ」

「ふん、殴ればいいです。コンシエルジュとかついてそんな金持ちの超能力者が、わざわざこんな学生向けの施設で中学生女子と二人きりなんて、そう思われてもおかしくありませんもん！」

目線の下で喚く少女の拗ねた言動に少しの違和感を覚える。それは些細な事、しかし見逃せない。

先ほどから心理定規との関係性を疑って、からかうような事しか言っていないのだ。

女が女の悪口を言うときは大抵一つの感情しかない。

鈍感でもない男には分かる。兄への思いか、弟への思いか、恋する乙女の純情か。

子供らしい嫉妬心に苛まれているとしか思えなかった。

「……お前、嫉妬してんの？ならもう少し可愛くアピールしろよな」

「うるさい、ぼく帰ります！」

「おうおう、帰るな帰るな」

否定もせず捨て台詞を吐いて逃げようとする彼女の腕を絡み取り、相変わらずお子様な彼女をエスコートしようとする前に出る。

やっぱり好きじゃないか。拗ねて嫉妬しているだけじゃないか。

ただの家出少女ならば、俺がこんなに悩む必要はない。

俺が謝る必要はない。

「ほら、せっかく会えたんだ、綺麗な服でも買ってやるから機嫌治せ」
「……別に機嫌が悪いわけじゃないです」

少しだけ縮まった距離にくすぐったさを感じると、手を握って目に入った服屋に足を踏み入れる。

甘い色で埋め尽くされた柔らかい服ばかりが並び、女が好きそうな曲が流れる店内に入るには少し恥ずかしさはあつたけれど、少女の機嫌を取るためならばそんなもの些細なことだった。

「で？どういう服がいいんだ？その変な服と比べたら何だってマシではあるが、一応聞いてやろう」

「いらぬです、別に。ていうかこれは変じゃないですけど」
入り口付近に飾っていた赤いワンピースを手にとってからかい混じりに彼女に当てると、先ほどから拗ねた顔をさらに顰める。

藍色の上に乗る紅色は眩しく、藍花悦らしくはないと、そう伝えたいのだろうか。やんわりと押し返す彼女にため息をついて今度は別の布を手にとった。

「あー、今は青縛りだったか。ならほら、こつちは？」

「いやです。なんでぼくがそんなの着なきやならないんですか」

「なんでって、女は好きだろ、ここのうの」

今度はお望み通り柔らかな青をしたチュニツクを体に当てる。なかなか様になつてると思っていたが、お姫様は随分と我儘で、俺が選んだものを軽々と拒否した。

「そうじゃなくて、なんでデートみたいな雰囲気出してらんですか。嫌いなんですよ？ぼくのこと」

「うるせえ、黙って着てこいよ、その格好似合ってねえんだよ」

口煩い女に見繕ったもの全て押し付けるも、駄々をこねながら丁寧に服を元の場所に戻す。袖の長い服で器用に畳む姿に関心するが、それよりもこの俺を二度も拒否したことに少なからず腹が立った。

「だからって、やだ、こんな服着たくない」

「お前の服って一昔前のセンスでダサいんだよ、いい機会だしどうにかしろ」

口を尖らせて意思表示をする彼女の顔に腹が立ち、袖の中にわざわざ手を入れて彼女の腕を掴む。逃げないようにと手首を掴むと、さらに不機嫌そうに口が曲がった。

彼女の私服の法則はかなり可愛くない。

色のついたキャミソールと白系のハイウエストのズボン、または大きなサイズのシャツをブカブカのズボンに入れたスタイル。

たまにショートパンツを履くこともあるが、この法則はあまり変わらない。

はつきりこの場で言おう、ダサいと。

誰がこの時代でシャツインするのか聞きたいし、なぜそんなにもシンプルすぎる服を着るかも問いたい。

写真のプリントされたシャツも、どこかアナログちつくで古めかしい。古着屋で買ったかのような、というか古着屋で買っていると確信できる服装はどう見ても時代遅れだった。

「……流行は巡るんです。それに好きな物と似合うものは違うんですよ、イケメンには分からないでしょうけど」

「なるほど、好きと似合うは違うのか。じゃあ次はロリータでも見に行くか？似合うんじゃないの？貧乳」

「話聞いてましたかロリコン。ああいうのは小柄でちっちゃくておっぱいのない子が似合うんですよ？ぼくが巨乳で高身長なのは客観的事実かと思うのですが」

「でも今は貧乳じゃん」

「そりゃあ潰してるから当たり前です」

言い訳を重ねる子供にムカついて、少し意地悪な笑みを浮かべて袖の中に手を入れる。暖かい手を捕まえて、逃げられない彼女の滑稽な反論を笑い飛ばすとほんの僅かに強く指を握り返された。

「っーかあのデカさがこんなものになるなんて質量保存の法則どうなってるんだ？」

「……企業秘密」

手を繋いだままそっぽ向いて頬を膨らます子供に口角が上がって息を吹き出す。視線を下げると見える子供の珍しい顔に笑い声を我慢しながら優しく手を繋いだ。

「まーた拗ねてんのか？どうすれば機嫌治るんだよ、お子様」

「お子様じゃないです」

「じゃあ天使様ってか？どっちにしたって純粹無垢な存在ってのは変わりねーだろ」

子供じゃないと高い少年の声で反論する少女に笑い声を吹き出して鼻で笑い飛ばす。ずっと、ずっと彼女を見続けていた自分にとっては彼女の反論なんて意味をなさない。

「純粹無垢？処女だという意味なら、ぼくは自分で処女だと明言したことありません。ロリコンのキミには残念かもしれませんが、ぼくは純潔の乙女ではないのですよ」

「嘘つけ、お前はそう思い込ませるのが得意なただの耳年増なガキだろ」

「違いますけど？全然違いますけど？」

胸を張って見栄を張る。そんな馬鹿な子供のことなんて、考えずとも理解できる。嘘をつくときは胡散臭い笑みを浮かべる彼女は、とても分かりやすい。

俺が何も知らないでも思っているのだろうか。

「テメエのことは全部分かるんだよ。俺をあんま舐めるな」

「全部、ですか。じゃあぼくがどこから来て、どうやって生きて、どうやって死んだかもわかりましたか？」

優しく笑うと、期待とは逆に冷えた声が耳を貫く。冷たく、恐ろしい声で彼女は鼻で笑う。

馬鹿にするように嘲笑い、挑発的に口元を歪ませくすくすと囁く姿は恐ろしい妖精のようだ。

「……なんとなく、だがな。確実な証拠はない」

「どんな推測か、聞かせてくれるんですよね？」

期待するような目線に口が僅かに開く。この場で言ってしまったのもいいものか、少し気がかりだった。

秘密で繋がる関係は推測を伝える事で崩れてしまうのではないかと。

それでも伝えたい。彼女のことを一番知っているのはこの垣根帝督だと言うことを。

「……魔術は別世界の常識を引き摺り出す能力。だから聖書の引用がされる。聖書に書かれた天国が目に見えないだけで本当にあるからだ。ならば、天国から魂と呼ぶにふさわしい何かを手繰り寄せることはできないのか」

これはただの推測であり憶測。

しかし、それでも辻褄のあった推理だ。

魔術が別の世界の常識を引き出す術であること、彼女が天使と呼ばれること、未来が見えるかのように動くこと、名前が二つあること、記憶がちぐはぐであること。その全てを解決してくれる良く出来た推測。

確証も何もないただの妄想に近いけれど、それでも話さずにいられなかつた。

「死んだ人間も、天使の輪が描かれることがあるらしい。轆かれて死んで、神に会って、生きているお前自身を神が生まれる前に死に、死後の世界を案内するウエルギリウスに例えるあたり、お前は俺に伝えようとしていたんだろ？自分がこの世界とは別の法則から呼ばれた

ことを」

「……シャーマニズムからの着想ですか？随分すんなりそんなぶっ飛んだ推測を立てましたね」

「お前の能力はブラックボックスに近い。つまるところ原石でも開発した能力とも言いづらいんだよ。聖人とかいう魔術サイドの原石みたいなものがある以上、ありえない仮説じゃねえ」

前髪に隠れた瞳を見ようと体を互いに向ける。

推論が当たっていてほしい、当たって欲しくない。二つの感情にぐるぐると頭が悩まされていた。

「お前は藍花悦でもあり、ずっと未来に死んだ天羽彗糸と言う少女で、魔術か科学かは知らないがお前は天国から呼び起こされてしまった。タイムリープ、タイムトラベル。きつとそういうことなんだろう？」

「……聡明だね、惚れてしまいそうです」

手を握ったまま伝えた言葉に目尻を緩めて小さく笑う。心底愉しそうに微笑む彼女の姿に胸を撫で下ろすも、安心するには早計だった。

「でも正解を答える必要はありませんよね？」

「は？」

「だってぼく、キミとは無関係な赤の他人ですもの」

だんだんと握り返す力が弱くなる。

流れる雨のような髪はカラスのようで、手から伝わる心音と合わせ、さって何か不吉を感じさせる。

「……それは俺と一緒に居たくないってことか？」

「そうですね。だってキミはぼくのこと嫌いなんですもん。キミが嫌いなら、ぼくはキミのために離れるだけです」

「嫌いじゃねえよ」

「嘘つき。無理してぼくと居なくなたっていいんだよ」

「だから無理とかそういう話じゃ」

弱っていく彼女の声と、崩れていく口調にむしゃくしゃした複雑で処理しきれない巨大な感情が湧き上がる。

全てを否定して欲しいと縋るように強く手を握っても、握り返すこ

とはなかった。

「じゃあどんな話なわけ？」

「それは……」

これ以上言葉は出ない。

俺のことを好きだというくせに、俺と一緒に居たくないなんて言うてのける彼女に、なんて答えればわからない。

俺はお前のことなんか好きじゃない。でもお前は俺のことが好き。だからお前は俺と一緒に居たいと願わなくてはいけない。俺が願うことではないから、お前が望まないと、お前は俺の隣にいれないというのに、なんで一緒に居たくないと言う。

「安心して。嫌いな人と一緒にいなくなたって、誰もキミを責めないよ」
寂しそうに笑う彼女の瞳がひらりと舞った髪の間から僅かに覗く。

輝き続ける星を瞳に閉じ込めた黒い虹彩は向日葵のように真っ直ぐ俺を見つめていた。

天羽彗糸の考えはいつだって読めない。

彼女の真相も、彼女の思いも、何もわからぬまま絡まった指はいつしか離れて黒髪をなびかせながら彼女はどこかへ去る。

残されたのは不完全燃焼の想いだけ。

どうすればいいかわからないまま、ひどく掻き乱された感情を胸に
呆然と帰路へとつくしか今は出来なかった。

厚い雲に覆われた暗い空を眺めながら、誰も居ない公園のベンチに

座る。隣に無造作に置いた開けっ放しの携帯電話から漏れる光は少し眩しい。

太陽の沈んだ空は星がなくても明るい街のおかげで暗闇と呼ぶには程遠かった。

「優しい人だよ、垣根くんって」

ベンチに深く腰を下ろしてぽつりぽつりと呟く。

誰もいない公園に一人、幽霊みたいな姿の女が喋るところなんて誰かに見られたら怖がられるかもしれない。

けれど通行人が来ないことを知っていれば、恥ずかしさなどなかった。

「嫌いな人でも、利益を産まなくなった赤の他人でも、少なからず情は湧いちやうんだろーね」

袖の中から顔を出した自分の手を見つめてくすぐったい笑みを浮かべる。

感じた骨ばった大きな男の手に気持ち悪い笑顔が止まらなかった。自分の手よりほんの少し、本当、ほんの少しだけ長くて、ちよつとだけ太くて、大きい手。

可愛らしいじゃないか。

こんな女に小さな情が湧いて、申し訳なさそうに眉を下げて氣遣って、嫌いな人の機嫌に振り回されながら頑張って振る舞う姿が何とも愛らしい。

ただ気分が悪いからと、意味もないのに好きでもない女の機嫌を取ろうとする彼が可愛くて、愛おしくて、いじらしくて、好きで好きで堪らなかった。

「こうなったのも杠ちゃんのおかげかしら」

メインヒロインを救った結果はとも上々で、最高のものだった。

本当はこんな性格じゃないはずなのに、杠林檎を救った結果は性格として顕著に現れた。

最高じゃないか。こんなにも自分の行いが未来に直結しているなんて、何にも代え難い興奮を感じさせてくれる。

彼が恋をするのは一方通行と打ち止めから察すれば幼女で、守りた

い人であるメインヒロイン枉林檎。

もしくは何故かネット上で多かつた部下の心理定規と恋愛関係を築くか。

あたしには何も出来ない。命を糧に救うことしか脳がないあたしには家族ごっこしかできない。

お人形だから。偽キャラクター物じゃないから。

ごっこ遊びしかできない。どんなに彼らを家族と思っているとしても、所詮ストーリー本物を作ることは叶わない生き物だった。

「どうして、あたしは本物じゃないんだろ」

ここはフィクション。

現実には虚像が混じった良く似ている別世界。物語を前提に進む世界はじわじわと精神を蝕み、いつしか負担になっていった。

常識が、知識が、何もかもが前世と違い、前提が覆る。

あたしの思いもこの世界では通じず、察しようとする感情も互換性がなく、全てが意味不明。

楽になりたいとすら思ってしまう。

「……ねえ、アレイスターくん。虚数学区なら、死人も受け入れてくれるかな?」

9月30日。この日の出来事を思い出す。

あの日彼が作りあげた天国は、あたしが行った天国と同じなのから分らない。

けれど、その天国に行ってみたいと疲れた体は休息を求める。

疲弊した精神はもうこの世界を望んでいない。

『……いやはや、キミはなんでも知っているな。その情報を得た経路はないというのに』

突然、誰もいない公園で声が響く。

開けっ放しの携帯電話から男とも女とも判別付きにくい声がノイズ混じり響くと、その人は呆れたように吐息を零す。

段々と冷えてきた空気に乗ったその声は決して明るくはなかった。

「ふふ、だってあたしの為の世界だよ?知らないはずないでしょ?」

『キミの為?』

「ここは神が与えた小さな舞台。物語にひとつ新しい命を入れて成り行きを見守る悪趣味な世界なの」

回線に割り込んできた彼に動じることなく、小さく笑う。

本当のことを言っているまで、それを信じるか信じないかは彼次第。

けれどあたしは本当のことを言っている。

ここは小さな箱庭。小説に、アニメにある所しか世界が広がらない
フィクションの世界。

その中に一つだけ、全てを狂わせる神の視点をいれて成り行きを見守る地獄なのだ。

そのひとつが知識を持って都合のいい装置になるか、都合のいい役者になるかは分からない。

けれど、あたしの与えられた役割は自分の意思に従い、知識を持つて誰かを救い、赦すこと。

そのどちらかになるしか道はない。

『……お前は世界を演劇に例えるのが好きなようだね。この世界はそんな小さなものではないと言うのに』

「好きなもの、古典芸術。それに事実だろ？決められた言葉、決められた出来事、決められた感情。劇と何が違う？」

『天使らしい言葉だな、主天使。劇を見守る観客気取りか、お気楽なものだ』

嘲笑が響く。天使と言う単語をわざとらしく使う彼に同じように笑い返すと、肌が焼けるような緊張感が空気を張り詰めた。

「やっぱりキミは最初から神の御使いだと知っていたんだね、アレイスターくん」

『お前にはAI M拡散力場がない。あるのはとても似ていて違うもの。だから推測できた。とはいえお前の能力が別次元の神が与えた方程式の違う天使の力だと知ったのはついこの間だがな』

「だから主天使？残念ね、意味を理解出来ても本質を理解できないなんて」

ため息をついて、前髪の隙間から見える雲に覆われた空を薄く睨

む。

神の秩序を知らせる天使だとあたしを名付けたこの男をとてもしゃないが、好きになれなかった。

「あたしの役割は神を憎み、神を信じること。それを主が望んでいるから、あたしはここに生きているの」

『全く分からんな。神の意思を伝えるお前はただの駒ではないか』

「違うわよ、彼はあたしに最期まで期待しているの。未練を果たすことを、彼を殺すことを、彼を憎むことを。あたしは、神の意思で神を裏切るの。神は大罪を望まれているんだ」

彼の名付け通りに生きるつもりは毛頭ない。

だって神が望んでいるものが違うと、やっと理解したのだから。

垣根くんの約束を裏切って杠林檎の面倒を見ていなくても、全てを幸せにしたいと願っても、死にたいと祈っても、死ななかつた。

それどころか体晶を通じて神の力を繋げてくれた。

神はあたしに望んでいるのだ。この舞台を如何に変えるか、この舞台で如何に未練を果たすか。

その為ならば、神は何をしたって赦す。大好きなあたしが幸せになるためなんだから。

『……お前の会った神とやらはどうやら神ではなく邪神のようだ。人の一生で遊ぶイカれた子供じゃないか』

「頭のイカれた神様だから、あたしを愛してくれるんだよ」

『ならば神に愛された異端者よ、神の世界を卸すため、その体を貸してもらおうか』

誰もいない公園に誰かの息遣いと、足音が静かに響く。

ベンチを囲むように立つ何人もの武装した輩にため息を吐くと、一斉に銃口が黒い髪に向けられた。

「打ち止めはいいんだ？」

『念の為さ。あちらが失敗した時の為の最終手段。虚数学区とも、この世界とも違う別次元の天界を呼び起こす。違うものでも、理屈が同じなら同等の効果は得られると思わないかい？』

「そうね。あたしをどう使うかは君たち次第だし、結構結構、上々だ」

足を組み、犬のような鋭い目で冷たく凝視する彼らを鼻で笑う。
分厚い雲を見上げると生温い風が髪を揺らした。

「けれどね、キミのお手伝いはしたくないの。だって、全てを傷つけたのはお前らだろ？」

銃口の矛先に、髪に、一滴の雨粒が落ちる。

「悪いけど、この命は彼のためにあるの。彼の命を奪う輩に、渡すわけないっしょ？」

天使と呼ばれるならば、それ相応の行動を起こさねばなるまい。

唇に当たった雨を舐めとると、ゆっくりと腰をあげる。響く銃声と、葉莢の香りを受け止めて、あたしはその場に立っていた。

優しい人を指して人は天使と呼ぶ。けれどその使い方は正しくはない。

天使とは、本来優しさなど持ち合わせていない。

何万、億もの人を殺した神の下で働く天使が、優しさなど持ち合わせているはずもない。

彼らは神の試練を伝え、殺さず死なさず、試練を完遂させるためいるのだ。

80話：誰かのため

重い扉にカードを押し付け、音が鳴るまで待つ。最悪な気分で開いたドアの奥は光に溢れ、少し目に痛かった。

「……今戻った」

玄関で靴を脱ぎ、靴箱を開く。中に入れようと靴を持つが、そこには自分の靴が入る隙間はない。

仕方なく、整頓された女物のスニーカーとヒールの隙間に革靴をねじ込む。彼女が落としていった黄色いピンヒールは、汚れたまま革靴の隣で倒れて狭い靴箱から零れ落ちた。

しまった、と思っても既に遅く、黄色い靴が一足地面に落ちる。安いピンヒールは少し塗装が剥げ、地面に落ちた衝撃で更に色が擦れてしまっていた。

怒られるだろうか。

そう思っても怒る人は今はいない。気にすることは何一つないというのに、僅かな不安と後悔がわだかまりを残す。

明るいリビングへと向かう足取りはいつもより重かった。

「おかえり、天羽は？」

「最近そればつかな……」

リビングに足を踏み入れると、明るい照明の下で猫を撫でながらソファに座る林檎と目が合う。

いつの間にか第三位に押し付けられた黒猫の首から聞こえる鈴の音が少し気に触る。カブトムシ姿の05とじやれつについて鳴き声がうるさい子猫は決して好きではない。

何よりこの家の主が猫嫌いだ。上条が飼っていた猫に遠巻きから文句をいうくらいには。

というより、動物全般が苦手なのだ。

自分が犬や鳥みたいだからだろうか。同族嫌悪に近い感情なのかは分からないが、彼女にとって生き物というのは人間か、それ以外かの大雑把な括りでしか認識していないようだった。

だからなのか、彼女は05にも一線引いた態度をとる。カブトムシ

に限らず虫も動物としてみなし、作られた体を冷めた目で人を好きで居続けるのだ。

本当に嫌だ。

居ないくせに嫌という程思い出す彼女の腹立たしい笑顔も、呑気に猫と戯れる05を見てそんな考えしか浮かばない自分も。

あの女がいない部屋だと言うのに、何かとつけて彼女の金髪と黒髪を交互に思い出す脳にいい加減嫌気がさしていた。

「会ったんでしょ？」

「……05」

「聞かれたので……申し訳ありません」

キツチンに立ち、袖を捲り蛇口を捻ったところでカウンター越しにじつと大きな目で見つめてくる。表現力の乏しい彼女の不安と期待が入り混じった瞳がチクチクと痛む。

どうやっても、あの女の顔が思い浮かぶのが本当に嫌だった。

「少しだけな。でも帰ってこねえよ」

「天羽、そんなに怒ってるの？」

「さあな、どうでも良い」

隠すことでもないかと淡々と質問に答える。蛇口から捻った水は人肌程度に温かく、ゆっくりと溢れ出すと手に弾かれシンクへと落ちる。

袖の中で握った彼女の柔らかさを忘れさせないような温度に胸を刺す痛みが広がった。

「どうでも良いの？ならなんで今も天羽の家に住んでるの？」

「それは、引越しながら面倒だし、お前も馴染んだ場所にいる方がいいだろ？」

「帰ってくるの待ってるんじゃないの？」

「待ってねえよ、あんな奴」

彼女の体温を忘れるように濡れた手を拭いて気を紛らわすために冷蔵庫を開ける。

冷気が頬を撫でる冷蔵庫に喉を潤す何かを求めて手を伸ばすもそこには食べ物ひとつ置いてなかった。

仕方あるまい、自炊するような人間は今ももうどこにもいない。ほとんど何も入っていない冷蔵庫の中身に舌打ちをすると、強く扉を閉めて拳を握った。

「じゃあ嫌いななの？」

「大っ嫌いだ、あんな女」

あんな面倒で、馬鹿で、最低で、愚図で、俺が居ないと何も出来ない碌でもない女、どこで死のうが、どこで生きようがどうでもいい。

冷蔵庫が空っぽになる程度、どうってことない。

「垣根、電話なってる」

「あ？こんな時に誰から……病院？」

冷蔵庫の前で立ち止まっていると、突然ポケットに入れていた携帯電話から着信がなる。規則的なベルの音を延々と繰り返す携帯の画面に表示されているのは先ほど会って秒速で別れたあの女の勤務先。

まさか仕事に来ず無断欠勤を続けていることを的外れにも俺に当たられるのだろうか。

面倒見ろと言われておいて約束を守る気がない自分にあの力エルによく似た医者が出教でもかますのだろうか。

何を話されるかは分からなかったが、どう考えても面倒なことにはかならない。けれどあの病院からの着信をむげにすることも出来ず、面倒に思いながらも通話ボタンを押して耳に当てる。

しかし聞こえた音声は男のものではなかった。

『よお、ヨリは戻したのか？』

「……なんでテメエに報告しなきゃなんねーんだよ」

『あの馬鹿の部下だからだ、一応な。それに他のクローン共も気になっただよ』

強い女の声には聞き覚えがあった。元悪党のいけすかない科学者に舌打ちを鳴らす。

赦しを受け、何事もなかったかのように表で働く彼女があまり好きではなかった。

「戻すヨリなんかねえよ。それだけか？切るぞ」

『実はあの馬鹿に伝えそびれたことがあってな。藍花の方に関してな

んだが、まあ聞きたくないなら切ってもいい』

「……手短に話せ」

大嫌いな女の名前に心臓の音が大きく鼓動していく。忘れようと思っても、偶然か必然か、ひっきりなしに彼女を思い出させるかのような話が続く現状が腹立たしい。

忘れてしまいたいのに、どうしても忘れさせてくれなかった。

貰った『好き』を忘れればもう諦めがつくというのに、何ヶ月もとにも過ごした馬鹿な犬に今更ながら小さな執着心が生まれていたのは確かだった。

『どうやら上層部から藍花悦を生け捕りにする依頼が出てるみたいだな。木原数多の野郎が統率する獬犬部隊ハウンドドッグが街で暴れる算段になってるそうだ』

「は？生け捕り……？」

『生きていればどんな形でもいいらしい。どっかの研究みたいに脳みそ三等分にでもされるんじゃないかねーの？』

テレスティーナの言葉に目を見開く。思いあたる節がないわけではないが、それでも驚かざるを得ない。

そんな言葉を想像して居たわけではないのだから。

しかし、どうして彼女が狙われているかは分からないが、確かにありえない話ではなかった。電話相手の言葉に強く拳を握ると、感情を整理するため大きく息を吸って吐く。

最後に見た異形な姿、彼女が起こしたとは思えない悲惨な現場、随分昔に聞いた第三候補サブプランという木原相似の言葉。それらを纏めて考えれば、彼女がアレイスターの計画プランに何かしら関与しているのは明白だ。

例え実際の情報が一切なくても、それだけは確かに言える。

神と見間違う彼女の力は金の成る木のようなもの。

植物に、動物に、人間。その全ての肉と精神に干渉できる彼女は現代社会の問題を全て解決できるほどのポテンシャルを秘めている。

食糧難に少子化、そして死さえ。

文字通り全てを克服する都合のいい女が天羽彗糸という少女であ

り、今まで目立った被害がないほうがおかしいとしか思えなかった。
『早く連れ戻してこい。アイツがあのおっさんの手に渡るのは同じ木
原として腹立つんだよ』

「なんで俺が……」

『テメエらがうじうじして素直になれねえーのを年上がお膳立てして
やってんだ、つべこべ言わず行け』

「もう俺はあいつと一緒にいる理由がねえんだよ。あの馬鹿がどこで
何されようがどうでもいい」

知らなかった事実が徐々に解像度をあげて脳に鮮やかな悩みを与
える。けれどその想いに生身でぶつかるのはプライドが傷つく行為
だった。

だから控えめに否定の言葉を呟く。理由という武装を持っていな
い今の自分にはその答えにたどり着くことができなかった。

『理由なんかなくなつて別にいいだろ、お前らめんどくせえな』

「大体、なんで俺がアイツを迎えにいかなくちゃいけない。アイツが
会いたくないっていうんだから、アイツから頭下げてくるのが筋だ
ろ」

『テメエは待ってって言われたらどこぞの犬みてえに待ち続けるような
従順な男なのかよ。あんな女に手綱握られてしおらしくしてんじや
ねーよ第二位』

「あ？誰がなんだって？」

『本当のことだろ。どうせあの馬鹿のことだからお前に迷惑かけたか
ないとか意味わかんねーこと言ってるんだろうけどよ、迷惑つーのは
かけられる方が決めることだ。テメエはあんな世間知らずの女の迷
惑を受け取れねえほどヤワなのか？』

呆れたようにため息をつくテレスティーナの言葉に心の中で燻っ
ていた思いが一つずつ溶けていく。

歯止めの効いていた感情はもう持ち堪えられそうにない。

「んなわけねえだろカス。俺を誰だと思ってるんだ、あんな女の我儘
の百個や二百個、どうとでも——」

『おう、その調子だ。早く連れてこいよ』

投げやりな言葉を最後に電話が切れると、キッチンのシンクに手をおいて大きく息を吐く。気が抜けたといえればいいか、もう悩みなんでどこかへ飛んでいってしまった。

「クソッ！」

嫌になる。

理由を見つけてしまった。また嫌いな女と一緒に居なくてはいけない、重大な理由が。

大嫌いだと、呟く口は心なしか歪んで、口角がわずかに上がっていた。

「05、林檎を寝かせてろ。帰りは遅くなる」

「分かりました」

いまだに黒猫と戯れる林檎と05をおいて玄関に向かう。心なしか軽い足取りに不満を覚えながら、玄関の扉に手を掛けた。

林檎といい、あの女といい、いつから俺の近くに人がいることが当たり前になったのだろうか。

しかし今ではその当たり前が崩れるのは酷く不愉快だった。

沢山の初めては、いつしか当たり前となり、なくてはならない日常になる。がらでもない、けれど聡明な頭は容易く感情を理解するものだ。

大切な物は失って初めて気がつく、なんて言う奴はただの大馬鹿野郎でしかない。

ものを食べなきや死ぬことも、水飲まなきや死ぬことも、息をしなきや死ぬことも知ってるくせして、大事な宝物を失ったら後悔するとは知らないなんて、ただの頭が足りてない馬鹿だ。

自分の感情くらい理解している。

「ほんと、仕方のない奴だな」

開けた扉の先、土と水が混じり合った匂いが雲に覆われた学園都市に広がる。排水溝を流れる水の音、跳ねた雨粒の音。

肌を掠める涼しい空気の中、梅雨でもないのにしっとり滴る雨にふつと息を吐く。

藍色の少女を迎えに行くにはちようどいい天気だった。

大振りの雨の中、水がぶつかる音に耳を澄ませながら橋をくぐる。照明のない暗い橋の下、やけに五月蠅い雨音にかつんと体を支える杖が音を鳴らす。

自分を待つ小さい少女のために買った絆創膏を手に提げたレジ袋にいで、ゆつくりと歩いていった。

静かな道、静かな街。太陽はもうすでに沈んでおり、活気はない。その中でかすかに聞こえた異音に気づくとチョーカーの電極に手を掛ける。

「まア来ると思ってたんだ、こういうバカが」

ボタンを押して、瞼を閉じた。瞬間、大きな黒い車が体を目掛けて飛び込む。

派手な音を立てながらフロントのバンパーが凹んだ車はガソリンの匂いを撒き散らして停車した。

「俺に恨みがあるのか？俺を利用しようとしてんのか？どっちはしんねエけど、ぶち殺す」

奥にいる武装した男の怯えた顔に笑いかけると、車内にいた男は酷く青ざめてドアを蹴飛ばし逃げ惑う。

その様子に思わず口角が釣り上がる。杖をしまつてフロントを強く握ると、簡単に中身が露出した。

見え隠れする車の配線を引き抜いて、掠れた声で笑い叫ぶ。

「ああ、楽しい!!!やべエよオ!!!最高にとんじまったよオ！クソ野郎オオオ!!!」

衝突してくる何台もの車を笑い飛ばすと、大きな音を立ててこの場にある車が全て崩れ落ちる。まるでドミノ倒しだ。

爆発が起きてもおかしくないこの場に笑いながらと立ち尽くしている。一台の車から恐怖に怯える男が扉を蹴破り走り去る。

ぼんやりとその背を見送ると、目を伏せた。

「つまねエの」

眩いた言葉をかき消す様に眩しい赤が荒ぶる風とともに大きな音を立てて爆発する。

熱をねじ曲げ、炎をねじ曲げ、燃え盛る赤を掻き分け前へ進む。

一瞬にして爆煙が覆う空間を背に、更に大きく声を張り上げた。

「演出ご苦労オ！華々しく散らせてやるから感謝しろオ……？」

目の前に止まる何台もの軍用車両を鼻で笑う。押し寄せる車は炎の前に停車し、武装した集団が銃口を向けて、派手に燃え盛る炎に強く銃を握りしめた。

「だから言ってるじゃねえかよ、あのガキぶつ潰すにはぬるい方法じゃダメなんだよ」

しかし一台新たな車両が目の前に停車すると、一斉に銃を下ろす。

一際大きい車の中から、気怠そうなおっさんが開いたドアから降りると握ったグローブを深く手にはめた。

黒い布地に金属の部品がついたグローブを眺めてため息をつくおっさんに見覚えがあった。

「やっぱこの俺じゃねえとな」

それなりに年を食った金髪頭の男だった。白衣の下に着たジャージと、顔に大きく入れた幾何学模様の刺青が特徴的な男は少なからず因縁のあるクソ野郎で、望まない再会に喉が怒りで震える。

「木原クウウンよオ！なんだア？その思わせぶりな登場はア？人の面見るのにビビって目エ背けてたインテリちゃんとは思えねえよなア……」

「俺としてもテメエと会うのはお断りだったんだけどな……上の命令だから仕方ねえんだよ。なんでも緊急だとかで、手段を選んでる余裕はねえんだと」

頭を搔きながらバツが悪そうに吐き捨てると、今度は鋭く睨む。前面から感じる無気力さは、昔研究所にいた頃を思い出させ眉間に皺が寄るのも無理はなかった。

「だからな、悪いけど、ここで潰されてくんねえか？大体、誰がテメエの力を発現してやったと思ってる？」

「あ？何、何ですか？その義理と人情に溢れた台詞、もしかして恩返しとか期待しちやってるわけ？」

乾いた笑いを漏らしながら真っ赤な炎に照らされる彼に舌打ちを打つと、その目はさらに鋭く歪んだ。

「つかよ、イカれるなら一人でやれよ、俺の体弄った研究者の数なンて、両手の指じゃ足りねエンだよ。いちいちオマエの思い出なンぞ留めておくと思ってるのか？」

「本気でムカつくガキだなテメエは……いやあ、殺したいわ、めっちゃくちゃ殺したいわ……やっぱあんときちんと殺しておくべきだったんだよなあ……失敗失敗……何やってんだかなあ、俺……」

いかついグローブの上から指を鳴らすと、静かな自虐とともに吐き出すような薄い笑い声を飛ばす。

薄気味悪い声が響く雨の中、唯一聞こえた声はひどく不愉快だった。

「そんなわけで殺すわ、クソガキイ!!」

咆哮とともに、木原数多は勢いよく地面を蹴って一直線にこちら目掛けて走り抜ける。拳を大きく振りかぶって、ただひたすら、愚直に走る男の姿に鼻で笑う。

この俺に、ただの拳が通るわけがないと知っているはずだというのに。哀れみさえ感じてしまう。

どんなものでも跳ね返す圧倒的な力の前に気でも狂ったのか、それともただのブラフか。

何を考えているかはさっぱりだったが、その行動が致命的なことだけにはつきりと分かっていた。

「ツガア!？」

しかしあろうことか彼の拳はあっけなく自分の頬を強く殴打する。

頬から全身に走る強い痛みにつばを吐き出すと、フラフラとした足取りで体を支えるが、それでも足元はおぼつかず不安定。

思考が追いつかない。

能力が効いてないかと思いついて、チョーカーを確認してみても、先ほどと同じように問題なく電源は入っている。

「おいクソガキ、もういつペン言うけどよ、そのつまんねえ力はどこの誰が与えてやったと思ってるんだ、思い出したかよオ!!」

「うガツアア!!」

体を守る絶対的な反射膜が突破された事実は、なかなか受け入れ難かった。

チョーカーに気を取られて意識を別に移していると再び拳が頬にめり込む。口の中に広がる鉄の味に不快感を覚えると同時に脳に伝わった衝撃に吐き気を催した。

地面に叩きつけられ、手放した買い物袋を踏みつける男に視線を移す。

眼球の痛みがつかないふりをしながら見上げた先、大きな男の足が色のついた箱を踏み潰した。子供が好きそうな、いかにも女児向けなデザインの小さな箱。

袋から飛び出た少女向けの絆創膏を踏みつける大きな足にただただ大きな憤りを感じる。

自分を待つ少女のために買ったキラキラした包装が踏み潰され、汚される光景に言葉は出なかった。

「似合わないねえ……ま、あれはこっちで回収してやるからよ。テメエは安心して潰れて壁のシミにでもなっかってくれ。そっちの方がテメエらしいだろうしな」

「ナメてンじゃねえぞ、三下がアア!!」

強い怒りに大きな風を巻き上げる。竜巻に似た凶暴な風を演算し、あたりを吹き飛ばさんとした。

この男を殺してやろうと、強い感情を抱いて。

「ダメなんだよなあ……」

しかし、風は響いた不愉快な笛の音であっけなく掻き消えた。

笑いながら首から下げたホイッスルに似たものを掴むと、小さな隙間から吹く風のような音が響く。

不快な音に掻き消えた旋風は体を無防備に曝け出し、簡単に攻撃を受け入れた。

鉄パイプかなにかで殴られると、体は宙に浮き大きな音を立てて歩道に面したガードレールにぶつかる。

背中から広がる痛みに呻く。あり得ない現実を直視するには頭の回転は間に合わず、男からの攻撃をまともに考えることができない。

能力のような不可思議な現象に、ただ呆然とするほかなかった。

「オマエ、まさか、自分の体に超能力の開発を……?」

「あ?は、はははっ! 違う違う、そうじゃねえよ、そういうのは実験動物の仕事だろうがよ。あんなバカげた力使わなくなつて、テメエ一人潰すことに苦労なんかしねえんだよ。今日はこいつの調子もいいしな」

考えを馬鹿にするよう嘲笑う木原数多は手にはめたグローブを鳴らし、大事そうに目を細める。

明らかに大事だと教えるそぶりに思考しない頭でも理解し、なりふり構わず手を伸ばした。

それさえ壊せばいいと思えば簡単なことだった。

「っ、アアアア! とりあえず、死体決定だクソ野郎!!!」

「そっかそっか、力の秘密はこのグローブだと思つたのか。けどそうじゃねえんだ……」

反撃されないようすぐさま体勢を立て直し、グローブを粉々に打ち砕く。そのまま殴ろうと拳を握り懐に入ると、不意に呆れるような笑みを零して木原数多は呟いた。

「いつまで最強きどつてんだ! このスクラップ野郎が!」

瞬間、再び激しい痛みが頬を打つ。予想と反し、グローブを失った拳は無慈悲に鼻をへし折る。

「テメエの反射は絶対の壁じゃねえだろうが。ただ向かってくる力のベクトルを反対に変えてるだけだ。なら話は簡単でよお、直撃の寸前に拳を引き戻せばいい。言つちまえば寸止めの要領だな」

激しい痛みで悶え地面に倒れ臥すと、内臓を揺さぶるように背中を何度も蹴り続けた。持続する痛みと吐き気に嗚咽を漏らしながら痛みから這い出そうと再び演算を試みる。

だが笛に似た音を鳴らすと同じようにパタリと演算が停止し、能力は発現しない。

「つまりテメエはわざわざ殴られに来てるって訳だ、分かってくれたか？マゾヒストくん？……ガキの頭にはちと難しすぎたか？」

蹴りを入れるのをやめ、腰を踏みつけながら男はダラダラとお喋りを続ける。

痛みを耐えながら酸素を掻き入れ、今か今かと反撃の好機を見計らうも木原数多はただ見透かしたように見下ろしているだけだった。

「さっきの風も同じことだ。テメエの能力はベクトルの計算式によって成立してる。ならソイツを掻き乱しちまえばいい」

腰から伝わる痛みで嗚咽を漏らす。強く踏みつけられた背に感じる強い侮辱に反吐が出そうだ。

「特定の音波や電波で全てジャミング出来んだよ！こっちはテメエの特徴、計算式、自分だけの現実、全て把握済みだ！伊達にその力開発してねえぞ！」

この状況を打破しようと演算を試みるも、耳を撃く笛の音に気を取られ演算は強引に消される。この場を打開する策は何一つとしない。

真つ暗な感情だけ押し付けられ、もうどうすることも出来なかった。

「なあ一方通行、テメエはあれの意味を理解してねえんだよ」

おもむろにしゃがむと、木原は馬鹿にするように乾いた笑いを漏らす。地面に転がった虫でも見るかのような腹立たしい目で見下ろす彼がひたすらに憎い。

しかし今は殺したくても殺せない現状に歯痒く耐えるほかなかった。

「大体よお、レディオノイズ量産型能力者計画に第三位のレールガン超電磁砲が採用されるって、なんで第一位のテメエじゃなかったんだ？なにかがある、テメエが

ちつとも理解してねえ何かがな」

「クソツタレが……」

隣にしゃがんでせせら笑う男に怒りが湧いた。屈辱や憤怒といったおどろおどろしい感情が殺意を増幅させ、唸り声のごとく低く罵声をひねり出す。

けれど彼は変わらずにムカつく顔で笑う。

「感動的だねえ、ほれ、本人だって大喜びだ」

痛みの中、木原数多の言葉を飲み込みながら顔を上げた。彼の視線の先にいる誰かを確認したくて開けた目に飛び込んできた光景に喉が渇く。

自分を待っているはずの少女が、茶色い髪を雨に濡らしてそこに居た。背の高い男二人に拘束され、意識のない体が運ばれる彼女の姿が視界に入ると木原は面倒そうにため息をつく。

もう用はないと暗に伝える彼の顔が憎かった。

「回収完了ってところだな。こりや藍花悦の方は要らねえか」

「藍……？」

「あ、本命は生け捕りって話だったけど、あれはほんとに生きてんのか？まー、そんなときや第六位に生き返らせてもらうからいいか」

振り向きもせずに木原は早々に立ち去ろうと腰をあげる。仕事が増えると文句をたらたら流しながら足を進める彼の背を掴もうと、痛みがじくじくと残る腕を伸ばす。

どうしてもあのガキを救いたい。

けれど一瞬のうちに助け出し、能力を無効化する音を使わせないとができるのかが微かな不安として残る。

計算も、能力も使える。しかし今は圧倒的に隙がなかった。

その一瞬の隙のためならばオカルトにだって祈る。

どうか、誰でもいい、あのガキを助けてくれ、と。

「遅いと思ったら、こんなところにいらっしやったのですか」

叶わないと思った願いに、転機が訪れた。

知らないソプラノ声が優しく響く。雨の雑音を掻き消すはつきりとした少年の声がこの場にいる誰もの視線を奪ってしまう。

高い少年声が耳に纏わりつくようなくすぐったい笑い声をこぼす。どこかで聞いたことのある笑い方に体を起こすと、雨に鎮火されていく赤い炎の上、見下ろすように橋の上で男を待らせた少年の右目と目が合った。

「……藍花悦？」

乾いた喉でその少年と思しき人物の名を呟く。そこに立つ少年はその名に相応しい藍色の少年だった。

前髪で隠された左目と、幼い顔に似合わない背丈、体を覆うサイズの合っていない服のせいで分かりにくいのが14歳前後だろうか、170cm程度の声変わりが来ていない幼い少年が木原の部下とよく似た男たちを従わせてそこに立っていた。

「雨は嫌いなんですよー、ぼく」

「あ？」

雨に濡れた酷く長い黒髪と、藍色のカンフー服を身に纏った少年は女のようなドールフェイスで笑う。

雨がとても似合うと、余裕なんてないはずなのに緩やかに回復していく思考の中で思ってしまうほど、少年に目が奪われていた。

柔らかい声で笑う少年はどこか浮世離れしていて、目が離せない。

「だからあんまり待たせないでくださいよ」

甘い花の香りが少年の動きとともに優しく舞う。静かに燃え上がる炎に照らされた藍色の少年は冷淡にこの場の全てを見下ろした。

81話：会いたい

炎が舞い、煙が上がるアスファルトのそばで白い髪の少年が小さな赤い瞳を見開いた。橋の欄干の上、タバコの箱を手にながら見下ろす男たちの姿はなかなか滑稽で思わず乾いた笑いが溢れる。

「お前が、藍花悦……？」

「ぼくに気を取られていいんです？」

一本のタバコに優しく火をつけ、地面を這う最強に笑いながら空に煙を吐くと未だ掴まれたまま意識を失う打ち止めラストオーダーに目を向けた。

無防備なまま捕まった小さい体はかろうじて生きてはいるが、このまま連れて行かれたらきつと二度とアクセラレータ一方通行と言葉を交わすことはできなくなる。

「ッ、打ち止め！」
ラストオーダー

それを理解してか、アクセラレータ一方通行は地面を叩いて大きな風を巻き上げた。一瞬の隙を狙った風は木原の持つ笛で無効化されることもなく、ラストオーダー打ち止めの小さな体を吹き飛ばしてこの場にいる全ての視線を奪った。

吹き飛ばした本人は大きな口から塊のような血を吐いてその場で嗚咽を漏らす。

最強と呼ぶには頼りないその姿にわざとらしく声援を送ると、未だ体を硬直させる木原数多が口を開いた。

「さすが第一位くん。チャンスを無駄にしませんねえ」

「……あーあ、ゴルフボールじゃねえんだからよお。ヤード単位で人飛ばすんじゃないよ。まったく、テメエのせいだぞ、第六位」

「何でもかんでも他人のせいにしてると、人生上手くいきませんよ？」
袖の中からボタンを押す音が鳴ると、後ろに待機している男共含め全員が木原目掛けて銃を構える。言葉も交わさずに静かに彼らは上司の頭を吹き飛ばそうと照準を合わせた。

ヘルメットのプロテクター越しに見える彼らの瞳には美しい星が花開く。

支配権を握られた彼らには、もう成すすべなど何一つ残されていない

かった。

「……精神にまで干渉するとは、相変わらず化けもんだな、テメエは」
「化け物？人間をモルモットだと認識する人に言われる筋合いはありませんね」

「実験動物だろ。現にテメエは3番目、俺らの科学の礎になる運命だ」
動けない体の代わりに懸命に口で罵詈雑言を並べる男に哀れみを感じると、未だ小さく燃える地面に降り立った。

そして近くにいた車に向かって長い袖を向け、ボタンの音で運転手の意識を奪う。

「ま、何言ったって通じないか。アクセラレータ一方通行くんはそのまま逃げてどうぞ？彼は僕がどうかして差し上げますので」

意識を乗っ取られた戦闘員がしつかりとした足取りで黒いワゴン車のドアを開けると、覇気のない第一位に視線を向ける。

「……感謝はしねえぞ」

「自由に。それより途中でシスターを拾うのをお忘れなく、きつとお役に立ちますよ」

開かれた車のドアに僅かに驚くも、彼はすぐに理解して杖を使って起き上がる。とても嫌そうな顔で車に乗り込む彼を背に、再び木原に向き直った。

「それで、キミはどうでしょうか？殺すのはポリシーに反しますし、どうされたいです？」

「……まあ、テメエは出来ればって話だったしな。アクセラレータ一方通行と最終信号さえどうにかなればいい」

半ば諦めの境地で木原数多は面倒臭いと言わんばかりにため息を大きく吐いた。動かない体に抵抗することもせず、ただ面倒としか言わない。

その言い草に、なにか怒りが沸くのは気の所為だろうか。

「モルモット一方通行は殺すつもり？」

「そりゃあそうに決まってるだろ。それが学園都市なんだからな」

「……そうですねえ、キミたちはそうですね」

怒りは気の所為ではなかった。研究者として及第点にも届かない

返答に、昔足搔いた事実をふと思い出す。

「でも、科学者ってそうじゃないと思うんです。他人のために最前線に立って、みんなの為に研究する。人に役立つために、愛する誰かを救うために。決して一人の少年を追いかけて回すような職業じゃないはず」

彼らはフィクション。それは分かっている。

けれど、どうしても独善的で非現実的な思想に虫唾が走る。認めがたい思想は、疲弊した体では無視することも出来ずにまともに脳に怒りを覚えさせた。

「ふざけてるとしか思えねえな。研究をするために科学者になるんじゃないやねえんだぞ、その先の、救いたい誰かのために研究をして、科学者になるんだからな？」

為す術なく立ち尽くす男の前でせせら笑う。研究者という職業を履き違えているフィクションは、いつだって本職の怒りを買うものだ。

「それなのにこの科学者は人間をやれモルモットだ、家畜だ、実験材料なのって……お前らなんのために生きてんの？」

「おめーの言ってることはただの偽善的な理想論だろ。病院で使う薬だって、どれだけ犠牲が出たと思ってる？」

「は？お前治験と自分の実験を同列に語ってるの？ふざけてんの？適当にガキ攫ってきて効果が見られなかった子は健康も確認しない手抜き野郎共と、審査が厳しい治験を同列に語るなよ」

頭の出来が違う男は目を丸くして眉を下げる。まるであたしが間違っているかのように見つめるこの男の両目を潰してしまいたかった。

「ここは学園都市だぞ、何をそんなにマジになってんだよ？気持ち悪いな」

「……ああ、ごめんなさい。だってムカつくんですよ、たとえ嘘で作られた世界と分かっているでも」

あたしが悪いのはわかっている。フィクションを現実として見てしまつて、本物として受け止めてしまうこの脳が悪い。

けれど、この思いは間違いじゃない。

これは職業病に近いのだ。

教師が『ついでだから教職免許を取ったキャラクター』とか『脚色されたクソ教師』に苛立つのと一緒に。

看護師が『そんな簡単な業務じゃない』と。

アイドルが『そんな優しい世界じゃない』と。

女子高生が『そんな互いに仲良くない』と。

政治家が『そんなに陰謀は渦巻いてない』と。

警察官が『銃の扱いはそんなに簡単じゃない』と言うのと同じ。

現実はそのなにごとに甘くない、そこまで現実は酷くない。

事実を知っている人間は、虚構を酷く嫌ってしまふ。まるで自分が酷いものだと言われているようで、まるで簡単なものだとされているようで、必死に得た地位が悪だと言われているようだから。

野暮なのは分かっている。

たかがフィクション、ただの芸術品。そこに現実を求めてはいけない。

だから前は気にせず鑑賞できていた。たとえ酷く鬱陶しい設定でも、それはただのフィクションで、現実じゃないことを理解できていたから。

でもここはちがう。

例えばフィクションだろうと、あたしが感じて、触れられるのであればそれは三次元として認識される。

そこに現実リアルを求めるのは罪だろうか。

「……頭イカれてんな。一体何を話しているんだよテメエは。理解できねえよ」

「理解出来ねえに決まってるだろ。天上の世界のことは、その世界にいた人しかわかんねえからさ」

「つい」、うがつ！ガガガツつう!!!?」

袖の中からリモコンを取り出すと、彼の脳めがけてボタンを押す。脳を締め付ける痛みにはしたなく涎を撒き散らし、断末魔をあげながら地面に倒れた男から笛のついたペンダントを奪い、背を向けた。

情報も大事な道具も奪った今、目的は果たされたのだ。

「もーいいよ、キミは。どうせ情報取れたらやり直しのつもりだったし」

崩れ落ちた男に目もくれず、そのまま意識を奪った戦闘集団に笑いかける。何も考えず、何も答えられない兵士たちをリモコン一つで整列させ、倒れた男が本来言うべきセリフを口にした。

「2班に分かれて、一方通行の妨害と打ち止めの捕獲。殺さず、死なずに、完璧に遂行しなさい」

虚ろな目をした兵士たちに言い放つ。

「やり方はわかってんでしょ?」

司令塔がすり替わったことすら理解できていない彼らは違和感すら覚えずにあたしの言葉に敬礼を向け、車に乗り込み走らせる。

排気ガスの匂いがしない車は静かにタイヤを回し、街灯の光に照らされて遠くへ消え去った。

「いい街ね、もっと早く侵食が進むと思ってたけど」

一台だけ残して走り去る車の軍勢、その間に飛び込んできた黄色い服の女性に気がつくのと、タバコを啜えて大きく息を吸った。

「……客人?」

「いいや、殺しの商売敵ってところさ」

吸った息を煙として吐き出すと、白目を剥いて倒れる木原くんからその女に視線を移す。

頭からつま先までからし色の十九世紀フランス風の衣装に身を包んだ修道女が、布で包まれた大きな棍棒を手に睨み、舌についたピアスを覗かせた。

耳だけじゃなく、眉に、頬に、目元に、舌につけられた多くのピアスは少し真似してみたいと思わせる。顔の造形を変える濃ゆい化粧も、実際の時代よりファッションが遅れた学園都市の人間には怖いかもしれないが、2020年まで生きたあたしには特別変にも感じられない。

前方のヴェント。

それが彼女の名で、今のあたしには面倒な人でしかなかった。無駄

口叩かずに早く撤収しておけばよかったと、後悔しても遅い。

「ぼく、人殺しじゃないんだけど……いつか、説明も面倒だし。早く帰ろ」

アックセラレータ

一方通行に『覚醒』させないことが今回の目的。10月9日に勝つための仕込みはもうすでに木原数多の無力化で終わってしまった。

そこから先はこの物語のヒーローの役目で、自分には関係がない。だから『虚数学区』を呼び起こすお手伝いだけで終わらせ、主人公が勝てるように目の前の客人を疑似的な天国によって弱体化させれば今日の計画は終わるのだ。

だからこの女性と関わる必要性はない。

「……驚いた。あんた、敵意がないのね」

「ぼくはキミに興味無いだけです。あー、でもピアス開けてるのはかつこいいと思いますよ」

「随分となめられたものね。興味無いなんて、自殺志願者かしら?」「いえいえ、ただ、ぼくはそういう人間なんで、キミに敵意を向けることがないだけですよ」

口からタバコを離し、残された車のドアノブに手をかける。彼女の登場は自分の感情を高ぶらせるほどのものではなかった。

だって好きでもなんでもないんだもの。

事故で弟さんが亡くなった可哀想な人、そして見当外れな復讐に燃える面倒な人。

理解できても共感できないキャラクターに思い入れはない。

生きなかつただけで医学を、科学を憎む人間を、現実のあたしは好きになれなかつた。

服の工業生産は機械を多く使う。布も大抵化学繊維で、コールターの合成染料も多い。ピアスだって手作りじゃない。

街灯という電気によって夜道は照らされて安全性が確保され、風邪を引いた人間は科学が作り上げた抗生物質で完治し、顔を隠す化粧品は多くの動物実験とパッチテストでようやく商品化され、地面を踏みしめるアスファルトは科学的に作られた。

そもそも、科学や医学という物は錬金術やら天文術なり言われてき

た異端の学問。魔術と何が違う。

経済も、農業も、心理も、政治も、社会も、法も、教育も全て科学。人間が何に生かされてるか分かってて言ってるのか、甚だ疑問だ。

「まあ、そんなこと思っただけでも無駄なんですよ……」

「あ？」

たとえどんなに腹立たしくても、彼女の言う科学とは自然科学、特に工学と医学だろうからこんな八つ当たりは的外れで、論点が違う。

それに、あたしの役目は人を憎むことじゃないのだ。全てを救い、幸せを教えること、それが神に唯一与えられ、神の喉元を搔つ切る武器。

それを手放すわけにはいかない。

「……嫌ですよ、ほんと、医者とか科学者って。デマだとか、嘘だとか、インチキとか、陰謀説とか、科学を信じない人間にまで救いを施さなくてはならない。とても嫌な職業です。蔑ろにする人間も含めて全て救うのがお仕事なんて」

タバコの灰が自然に落ちると、運転席のドアを開いて答え合わせをするように優しく口を開く。

彼女の口から伸びる細長いチェーンとその先についた十字架を生温い風が揺らした。

「だからね、ぼくはキミを嫌っても敵意は持たないんですよ。全ての者に救済を与える尊ぶべき職業に殉ずるぼくはキミを愛さねばなるまい。役を全うし、全てに平等のもと救済を与えるのがそもそもぼくが生まれた理由ですよ」

「……気味の悪い野郎だね」

「宗教家だって本当はそうあるべきですけどね。そんな色を着たシスターには一生かけても理解できませんよ」

運転席に乗り込み、エンジンをかける。久々に運転する鉄の塊に内心緊張がありながら、アクセルに足をおいた。

「誰にだって分からないんだから」

今日はとても疲れてしまった。

こんな日は、アルコールと糖分に溺れて朝を迎えたい。大人のあた

しにしかできないことで、朝を迎えたい。
もう失くすものも、隠すものもないのだから。

雨の音を掻き分けて明かりが照らす道の上を飛ぶ。冷たい雨を打ち消すほのかに暖かい秋の風を体に受けながら、大嫌いな女のために月明かりの眩しい空を飛んでいた。

誰にも代わりが務まらない自分だけの美しい天使様。力強く、か弱く、可憐で、可愛そうで、哀れな少女のため、空を回る。自分が他人を救えると教えてくれた眩しい彼女の姿を追ってひたすらに飛ぶ。

傘を持っていない彼女を汚い雨から守るには自分が必要なのは、嫌という程身に染みていた。

「あ?」

狭い路地に降り立って、隙間の中に隠れていないかくまなく探すと一台の車が目の前を横切った。

真っ黒なワゴン車から微かに臭う煙と火薬。静かな道路に一台だけ走るその車は、ひと気のない子の道では少し浮いていた。

あからさまに怪しい車に、息を飲む。中に座っていた白いシスターと、小柄な白い野郎の姿を捉えた両目は、その車を追い続ける。

「一方通行……?」
アクセラレータ

呆然としたままその車を見送ると、嫌な予感が脳を駆け巡る。賢い脳は、あつという間にあの女と過ぎ去った悪党に繋がりを見出して、無視し難い推測を作り出した。

「……クソ女、やっぱり大っ嫌いだ」

散々悩ませ、ずるい素ぶりで忘れさせないあの女の小悪魔に似た含みのある笑みが頭から離れない。

誰も彼もに手をつける浮気性な少女に怒りが沸くのは当たり前のこと。この俺の記憶に住み着いておいて、憎き男と談笑していたと思うと腸が煮えくり返る。

車が来た道を辿り、彼女の元へ向かう。無責任な彼女に、なんと少しでもこの思いを吐き捨てたかった。

82話：現実と虚像の交差

信号の赤にアクセルを離す。少しだけブレーキを踏んで調整すると、車は白線を踏まずに停車した。

自分しかいない車内、タバコの煙とスピーカーから流れるなんてことない通信に鼻歌を鳴らしながら深く背を預ける。

車に跳ねる雨の音が心地いい。煙を吸って、吐いて。

『第五学区内、事件現場での証言を元に書庫^{バンク}より照合。この者を殺人未遂事件の重要参考人として手配する』

泥のように眠ってしまったし、もうそんな空間で、微睡みながら赤い光が緑に変わるのを待つ。アンチスキルの通信を傍受する賢い車から排出された一枚の写真に薄く笑みを浮かべながらタバコを吸った。

ホテルへ戻るため、帰路に着く。

「上手くいってるみたいで上々だね」

なかなか変わらない信号に呆れてシフトレバーを引き、パーキングに変更すると換気のために窓を開く。

遠くのビルが中央の高い塔にぶつかる轟音をBGMに背もたれに寄りかかって大きく煙を吐き出した。大きな灰の塊を落とす短くなったタバコを灰皿に投げ捨て、煙が充満する車内の中小さく言葉を漏らす。

疲れ切った体はもう動きたくない、根を張るように背もたれに張り付いて動けない。

「……でも、ほんとに上手くいってるのかな」

「何が上手くいってるって?」

変わらない信号をぼんやりと眺めながら不安な言葉を呟くと、聞き覚えのある低い声が開いた窓から響く。

生温い風が吹く開いた窓から恐ろしく笑う茶髪の少年が目飛び込んで思考が停止してしまう。あまりに突如な声に驚いて言葉が音にならず、息だけが口から漏れる。

フロントドアに手を置いて、酷く冷たい顔で見下ろす少年の綺麗な顔が強烈に目に焼き付いて離れない。

「っ垣根くん!? なっ、なんでっ、っぴえ!」

「何間拔けな声出してんだよ、うるせえな」

酷く機嫌が悪そうな低い声で舌打ちを鳴らすと、困惑するあたしを置いてドアを開き無理やり運転席に薄い体を滑り込ませた。

椅子の背もたれを強引に下げ、ただでさえ狭いスペースを独占するかのように抵抗できない体を押さえつけて体に跨るとあたしの体を倒された背もたれに強く押し付ける。

一瞬の出来事に小動物のような叫び声をあげることしか出来ず、思考がまとまらない。

「ど、どうしてここに……?」

彼の片足が太ももの間を陣取り、首を両手で押さえつけ自由を奪う。下半身の動きを封じられ、彼の体温がじわじわと広がっていった。

暖かい。

雨の中、傘も持っていない目の前の美しい人は水滴の一つすら落とさず、冷たい瞳で見下す。アンバーガラスと良く似た茶色い髪が頬を撫で、少しくすぐったい。

そういえば、最初に出会ったときも彼が上にいた。

「それは自分の胸に聞いてみることだな、尻軽女」

懐かしさと優しい温度がゆつくりと混乱を収め、ようやく状況を把握する。彼は何かを求めていること、そしてその何かが分からないことだけははつきりと頭が理解していた。

考えられるのは二つ。

この命か、体か。

前者は因果関係が結び付かず、殺す理由が思いつかない。

二者択一、結果たどり着いた答えは在り来りで陳腐な後者。一夜限りならば男は嫌いな女でも抱ける事実を知っている20を超えた自分には、その推測はパズルの凸凹がはまるようにしっくりとくる。

しかしここはフィクション。^{キャラクター}彼らはあたしに感情の一つも抱かない。彼の言動に意味なんてない。

ムカついたから殴る、ムカついたからこうやって感情をぶつける。

たったそれだけのこと。

性的関心が行動に直結しない生易しいキャラクターたち、恋愛感情もままならない奥手なガキがただ自分の性を振りかざして脅しているだけ。

なんともつまらない。なんともガキくさい。

「……あー、やっぱりやりたいんですか？この巨乳揉みたかったんです？それしか今のぼくにはないですものね！ロリコンのくせに実に思春期らしい願望で——ツふあ!!!?」

あたしがすべきなのはありもしない現実で馬鹿にして、否定の言葉をもらうこと。うまく感情を引き出して、彼が言って欲しいセリフを模索する。

そうすれば目的が見えてくるはず。

はずだった。

戦略は虚しくも、引き千切られて弾け飛んだ藍色の服によって有耶無耶に消えてしまう。重苦しい服は男の手にかかれただのラツピングペーパーのようなもの、抵抗をする間も無く服は形を崩したただの布切れへと成り果てた。

その光景に、言葉は出ない。

「はっ、俺のジャージ着てるとか、本当に俺のこと大好きだな」

思考は現状を理解できず、呆気なく開いた服に唾然とする。あらわになった肌と、平たくした胸をかううじて隠すボロボロのジャージを鼻で笑い、布を引き裂いた。

「へ、あ？な、なに、どうしたの？」

「今ここで、テメエが死ぬまでぶち犯してそこら辺の犬にでも喰わせちゃうかっつってんだよ。そこまでしないとテメエは学習しねえのか？」

黒い瞳はまっすぐあたしを見る。おぞましく低い声が雨の音が響く車内に広がった。

視界を埋める男の体に混乱の波が引いていく。

「……ふざけてるの？」

「ふざけてるように見えるか？」

何を言っているのか理解できない。脅しと取れる発言に苛立ちが増す。

説教をかましたいのか、本当に碌でもない女を抱こうとしているのかはわからないが、その感情に付き合っていないらなかつた。

ただの舞台装置には何もかも意味がないのだ。だからピントのずれた説教にも、面白くもない行為にも興味は湧かない。

脅しの意味を履き違えた子供にこれ以上付き合ってられなかつた。

「ふざけてんだろ。セックスが脅しだと思ってる時点でただのガキのお巫山戯にしか感じねえーよ、小学生か」

「言うようになったな、ド処女。テメエの人間性全否定してゴミみてえに扱ったっていいんだぞ」

「このあたしが本当に処女だと勘違いしてるのなら、相当愉快的な頭してんな第二位様。そんなナリして頭フリパツパかよ」

説教臭い台詞を吐き続ける恋愛経験の乏しい子供に、あたしは教えなければなるまい。脅しとは相手の大切なものを傷つけなくては意味がないと。

お前が相手にしている女は大人で、お前が思っているほど簡単ではない。

動きを奪われた足を懸命に動かしてクラクションを鳴らす。突然響いた音に微かに驚いた彼の隙について赤い結晶を口に含むと、神の力を用いて車からの脱出を図る。

コツンと、ドアを叩く。作られた小さな衝撃は神の演算によって膨大に膨れ上がり、風が生まれた。

作り上げた大きな風が車を駆け抜け、ドアも、ガラスも全て吹き飛ばし、埃を巻き上げ突き抜ける風に体を預けて外に抜け出す。

「っけほ、抜かれた……！」

バラバラになり、所々凹んだ黒塗りのワゴン車から体を捻り出すと、舞い上がったホコリに咳き込みながら地べたに座り込む。

展開された翼のせいで穴が空いたカンフー服と、壊したドアの鋭利な残骸に引き裂かれたズボン。垣根くんの安否を少々心配しながら車から遠ざかると、鋭い声に喉が冷えた。

「痛てえな、そしてムカついた」

重い翼に垣根くんの影が差す。恐ろしく冷えた黒い瞳に、吐き出す息が冷えていく。

本能が恐怖を告げる。

「あ、ご、ごめんなさっ、いつ!?!」

「今のはどう見ても能力によるものだよね? どういうことか説明しろ」

気づくよりも早く首を掴み取り、地べたに座り込んだ体を持ち上げられると声が漏れた。痛みよりも恐怖で演算がおろそかになる。

大きな手に締め付けられた喉からは小さな嗚咽と、吐息混じりの弁解しか吐き出せず、背中の重い翼も相待って非常に不快だった。

一体何に対して怒って、なにを伝えたいのか分からないあたしには、彼は恐ろしく見えて仕方がない。

「ツあ、ふっ、たい、体晶、飲んだだけです。っ神様の力を、繋ぎ止めるためにね」

「体晶……? 俺に黙って使ってたのかよ、クソが」

息を吸い、小さな声を吐き出し事実だけを述べたつもりだったが、真実は彼の機嫌を損ねる。

捨てるように首を離し、怒気を含んだ低い声が上から降り注ぐように響く。水溜りに落ちた体は雨の中、白い吐息とともにゆっくりと冷えていった。

恐ろしい形相をまともに直視することができない。

「申し訳、ありませんが、キミには関係ないことでしたので。だって、ぼくがどうなるうが、キミにはどうでもいいことでしょう?」

「……どうでもいい? テメエは自分の責任つてものを分かってねえな」

「責任、ですか。よく分かりませんが、ぼくのこと嫌いなんですから、もう関わらないでくださいよ。キミに迷惑かけたくないのです」

「今のテメエの方が迷惑なんだよー!」

「っ、う!? ツ!!!?」

水に濡れた体にも目にも留まらぬ速さで彼の右足がめり込んで、あま

りの強さに道路を挟んだビルめがけて体が投げ飛ばされた。体にかかった重力がスピードを落とし、ビルの側面に強く体を叩きつける。

息が止まり、骨が折れると痛みが迅速に脳を駆け巡る。翼が緩衝材になったとはいえ、不意の痛みは泣きたくなるほど不快だった。

「っ、はあ、どうしたんですか、キミが何言ってるのか！ミクロンも分かりませんよ……」

傷は立ち上がると同時に治り、痛覚はシャットアウトされる。慣れない背中 of 重さと、頭上にある丸い光の輪に苛立ちと眩しさを感じながら遠くに見える彼を視線で追う。

抑えきれない情動を吐き捨てる彼の言葉は、自分の理解が及ばなかった。

「黙れ馬鹿女！テメエは俺の隣で喚いてるのがお似合いなんだよ!!」

「はあ!?!意味わかんない！ほっときなよ！嫌いなんですしょ!？」

「好きか嫌いの二択しかねえーのかテメエは!」

カメラの多い地上にいるのは危ないと、狭い裏路地に逃げ込んでビルの屋上を目指す。エアコンの室外機、壁のくぼみ、用途のわからないパイプを伝って空に近づくと、空を飛ぶ美少年が理由も分からず追ってきた。

迷惑だ、迷惑で仕方がない。勘違いしそうな言葉と、まるであたしを心配するかのような説教が、迷惑で仕方がなかった。

「嫌いの一択だよ！だって！だってあたしは誰にも好かれたいから!」

「悲劇のヒロイン気取ってんじゃねえぞブス!」

「ヒロインですらないあたしへの答えが、この世界なんだよ!」

ヒロインでも、キャラクターでもない自分への感情は、好意であるはずないというのに。思わせ振りの態度が腹立たしい。

こんな女がヒロインなわけないじゃないか。フィクションの世界で、リアルが主人公になれるわけないじゃないか。

彼の言葉は所詮本当のことを知らないガキの戯言、耳を傾ける必要性もないはずなのになぜかまともに返事をしてしまうのはなぜだろう。

「それは、お前が天使だからだと言いたいのか？」

「うん、あたし、宇宙人なの、天使様なの、この世界の人間じゃないの！」

たどり着いた屋上、手すりの上で高らかに笑う。追ってきた王子様は大きな翼を背に雨模様の空を飛び、笑い声に響めつ面を見せる。

濡れた髪が顔にへばり付き、張り付いた服が不愉快でも、叫んだ思いのおかげで心はどこか晴れやかだ。

いや、晴れやかというよりは、雨であることを受け入れたような感覚。

諦め。

呆れ。

この感情が理解されないことへの妥協に近かった。

「だから愛されないの？ ばっかじゃねえのお前！ ウブで鈍感なんてどこぞの少女漫画のヒロインそっくりじゃねえか！ だからテメエが嫌いなんだ！」

「ふぎッ！」

白い翼の破片が体に突き刺さり、風が体を吹き飛ばした。床に体が落ち、空いた体の傷を塞ぐために脳が動く。

胸を潰すために巻いた分厚いサラシが外れても、必死に体を治し、修復し、立ち上がる。重い翼を支える足は少々頼りなく、足元は覚束ない。

「反撃しねえと、このまま死ぬぜ？ どうする、天使様！」

「どうすると思う?!」

ガムテープが外れ、重力に従って外れたサラシにつまづきながらも走る。

大きく身を乗り出し飛び出すと、高いビルの上から街灯の上へと着地した。片方の靴が脱げ落ちるのも構わず、降り立った衝撃を神の力で受け流すと緩やかに裸足を汚いライトの上に乗せる。

熱を帯びた電灯は、自分には暖かさも感じられない。

「さっきの風といい、テメエの能力は体に干渉する能力じゃねえのかよ。どうやったら人為的な風を肉体干渉能力が使えるんだ？」

「この体は神の血を飲むことで神の脳と繋がり、拡張する。拡張して脳は神の片鱗さえ与えてくれるってわけ。僕の精神は天国と繋がるのですよ」

「ああ、なるほど、神様の世界とリンクして、外装代脳エクステリアのように拡張したってことか？んで俺の推測はあながち間違ってるないんだな」

ようやく違和感に気がついた彼に薄く笑う。聡明で、未知を信じる勇気がある彼は答えを聞くだけで近しい真実に辿り着く。

勘の鋭い少年にもはや笑うことしかできなかった。

「そうですね！ぼくはね、死んで、この世界に天国を通じて藍花悦として産まれ落ちた！シャーマニズムと言っても過言ではないんです！だからキミはぼくが好きじゃない！天羽お化け彗系けのことなんて、キミは好きにはならないだろう!？」

「お化けて、死んだから生き返っただけだろ？なんでそんなに卑屈なんだ！」

もう隠すものがないとわかると、頭は途端に馬鹿になる。風を起し、近づけまいと躍起になる脳に、これ以上思考を求めても無駄だった。

「だから！ぼくは死んでるんです！キミとは違う時代を生きたんです！違う世界で生まれたんです、だからぼくはっ！キミと離れなきゃいけないんです！」

「死んだからなんだよ、欲張りなくせに変なところで謙虚になるんじゃないねえ！」

髪が風の中で舞う。白い翼と、輝く光輪に邪魔されながら叫んだ言葉は、呆気なく否定された。

彼の顔がまともに見れず、き荒れる風の中で好きな人の怒号に感情が弾ける。様々な感情と思いが巡り、破裂した思考が止まった。

膨大な問題と、障害と、悩みと、感情に、もう体も精神も疲れていた。

「うるせえええええっ!!」

吐き出した感情に神は呼応する。白い閃光が頭上の輪から瞬いて、一筋の光を大きな威力で発射した。

眩い光が目を奪う。神の世界と同じ匂いがする焼け跡に、なぜか心は踊っていた。

「未元物質ダイクマター……!？」

酷く勘の鋭い男は白い匂いに驚きつつ、繭のように体を覆う翼を開いた。自分にしかできないと思っていた特別な力が、二番煎じに薄められて彼はどう思うだろうか。

神の世界を引き摺り出した女へ向ける憎悪はきつとあたしを拒んでくれると、信じたい。

「っは、天国の一部分を引き摺り出す、それくらいの奇跡ならば神の御使いだって出来るに決まってる、分からない？」

「そうになると、俺の能力は……」

「お前のものとは比べ物にならないほど精度も、力も弱いけれど！けれど！三番目になるくらいのはあるんだか——ツウグア!？」

想いを叫んで、叫んで、叫んだ末、白い泥が口から溢れた。内臓が抉れ、粘りつ気のある白濁が腹の底から湧き上がる。

血の匂いに混じった微かな花の香りに、思い出したかのように見上げた空に見える光の羽に全てを悟り、白濁を口から零す。

藍色の空の中、白い光が巨大な繭のように伸びていた。世界に降ろされた擬似的な天国、虚数学区の姿に体が事切れる。

こじ開けられた擬似的な天への扉はたとえ欺瞞の結果であれ、あたしを愛した神への毒になった。

神の鼓動が伝わる。神様に作られた炎の魂にはこの鼓動が酷く痛む。

体に詰め込まれた天国の一部が拒否反応を起こし、炎症を作りながら体を燃やす。

吐き出した白濁の液体は、紛れもなく大覇星祭の時に目の前の少年によつて植え付けられた天界の一部だった。

「はっ……テメエ、まさか本当に俺がいない間に……!？」

「おえあ、ごへ、っ、これは」

「この俺を散々悩ませて、散々不快にさせて、散々迷惑かけておいて、お前はその間知らねー男とやることやってたってわけか？」

「っは、ちが、おえ、これは垣根くんの……っ」

しかし彼はそんな事実知る由もなく、くだらない推論を並べ立てる。半透明の白い液体に、いやらしい勘違いを思い巡らすのはごく当たり前の反応か。

顔を顰める彼に弁論したくとも、舌に張り付く苦味のある液体が邪魔をして言葉を口にさせてくれない。

「ぶっ殺す」

白い羽根が街灯目掛けて飛び交う。凄まじい殺気と、素早い攻撃に不安定な足元がおろそかになる。

なんとか避けようと動いても、狭い足場では不十分だった。

「っ、おアツ……！」

羽根の一枚が強烈な速さで足が貫き、バランスを失った体は宙に落ちていく。吐き出した白と、回る視界に気持ち悪さが胸の底から込み上がる。

反転した世界に白を吐き出すと、体は重力に従いあつという間に地面に近づいた。

「飛べねえ天使とは面白い。その翼はただの飾りか」

花の生えてない低木の上に音もなく落ちた体が、なんだかとても馬鹿らしく感じる。鼻の奥から溢れた赤を藍で拭う自分に嫌気がさす。

空から見下ろす垣根くんの嘲笑と、不快な雨、格上にどうしたって勝てない弱い自分と、リアルとはかけ離れた今に、虚無としか言いようがない感情が芽生え初めていた。

「っはあ、なんで、なんでこんなことに、っ」

本当は弱つちい涙腺が、こんな時になつて力んでいく。疲れ果てた心は、濡れた肌の不快感に壊れてしまった。

滲む視界に息が上がり、鉄の匂いがする赤い液体が鼻からぼたぼたと落ちる姿は、きつととても滑稽なんだろう。

「っなんだよ、泣いてんのか？元はといえはテメエが……」

「なんで、っ、あたし、怒られなきゃいけないの？なんもしてないのに、」

柔らかい葉の上に座り込み、ボタンの壊れたジャケットを内側から

閉めようと袖から腕を出す。

裸同然の姿と、片方の靴がない足元に乾いた笑いと無力感が襲う。馬鹿げた姿に、もう限界が近かった。

「どうして、そんなに言われなきやいけないの？」

できること全部やってるだけ。ちゃんと世界を理解して、迷惑かけないようして。

自分の全部を教えてあげた。

未練を果たす仕込みは終わらせた。この世界で一番愛している少年を救う手立てはできた。

なのに、なぜこんな目に遭うのだろうか。なぜ神は試練を与え続ける。

どうして、彼はあたしに怒っているのか。

何もかもがわからない。

もう逃げてしまいたい。

「垣根くんの、ツバカー！」

考えることをやめたかった。

叫び声と共に体を預ける低木の枝を伸ばして、広げて、成長させて大きな繭のように体を覆う。隙間から見えた彼の見開いた瞳と目を合わせないように。

花を咲かせる勢いで伸ばした枝の中、息を荒げて必死に涙腺を冷やして嗚咽を漏らした。

「ああああ……っ」

優しい花の香りに本音が零れる。

もう思い出せない妹と、両親の顔、昔住んでいた東京の風景に、大人だった頃のあたし。

その全てが、もう叶わない。

この地獄に連れてこられた精神は慣れない現実の大きな差に耐えられず、口の隙間からどろどろと煮詰まった砂糖に似た重い感情が溢れ出た。

「帰りたいな……」

死は決して救済ではない。死んだあたしは、死後もこうやって苦し

められている。

神の願いによって愛された魂は地獄という舞台に連れてこられたあたしこそが、死が終わりでない証明。

けれどこの世界からの唯一の逃げ場は死であり、最後にたどり着いた答えもまた死であった。

もう体は動かない。

何もかもに疲れ果てた。許容を超えて流れ込む神の苦痛は生きる気力すら奪う。

花と雨の香りで満たされた暗い繭の中、怠惰な感情が心を蝕み、体は精神と共に機能を停止した。

「紫陽花の下には死体が埋まってるとはいうが、まさか天使が泣いてるとは誰も思わねえだろうな」

冷えた風が動かない体を撫でる。繭を開き、大きくなった雨音に薄く目を開くと腕を取られ、草を通り抜け明るい夜に連れ出された。

花開いた紫陽花の繭が割れる。

鮮やかな紫陽花の藍が目に焼きつき、雨粒が睫毛に弾かれて世界がきらきらと輝く。夜の淡い光を反射する柔らかな雨は、腕を掴んだ彼の体温のおかげか不快ではなくなっていた。

「言いたいことがあるなら直接言え、俺にだってお前の泣き言を聞いてやる余裕くらいあるんだぞ?」

秋の寒さを吹き飛ばす暖かい手が腕を引く。こんな女に見せてはいけない柔らかな笑みを浮かべる少年に、心の奥が疼いた。

「……頼むから、嫌いな女に優しさなんて見せないでよ」

「嫌いな女、ね。お前は一から十まで全部言葉で言わなきや分からないのか」

「言わなくてもわかるよ。キミたちはぼくが嫌い。だってぼく、ヒロインでも、ヒーローでも、なんでもないのですから」

フィクションのキャラクターは現実の人間を認識しない。二次元と三次元、読み手と創作物、生き物と無機物。

だが、干渉するはずないものは神によって立体となり現実と成った。

認知され、認知し、関わる。本物と同然の並行世界。

けれどここは本当の世界と違う。歴史は煩雑で、未来は決定付けられ、人によつては過去は曖昧で、誕生日も、血液型も、身長も定かではない。それは感情も同じ。

全て決定付けられた世界にいるあたしはただの装置で、小さな変化を捻じ込み変わりゆく世界を傍観するしか脳がない。

決められた感情が、傍観者に移ることは決してないのだ。違う生き物に感じる愛情なんてない彼らは、たとえ天変地異が起きても装置に愛情を感じることはない。

孤独な世界。

でもそれでいい。もともと貰えないものを、代替品に望んだって意味がない。

たとえどんなに飢えていようが、自分が愛を与えれば潤う心にとつてはこの世界は都合がよかった。

「そのヒロインとやらじゃねえから自分の我儘は通らないと？俺に幸福を与えようと自分の幸せは貪つておいて、我儘は言えないってか？」

「嫌いな女の我儘なんて、気持ち悪い以外何でもないでしょ？」

「もう少し柔軟になれ、お子様。少しは心情を読む努力をしろ」

彼の言葉がやけにうるさい。掴まれた腕を引き剥がして数歩後ろに下がっても、かさぶたを剥がすように痒みを増していく心に頭がどうにかなりそうだった。

ここは都合がいい世界なんだ。

愛情なんか貰わなくて生きていける。

誰も望まない人間が創造物に愛されるはずもない。

誰にも望まれなくても、我儘^愛を貰ける舞台。

大嫌いな神に刃を突き付けるための世界。未練を叶える世界。

彼と一緒にいたいのはあたしの我儘。情が湧いた少年を最期まで見届けたいという欲。

欲望、我儘。本当は一緒にいなくなつていい。彼はあたしが嫌いで、それを尊重するのが姉だ。

だからこの我儘は叶えられることはない。
ないはずなんだ。

「垣根くんは、そんなことあたしに言わない。絶対、絶対、君はそんなこと言わない、君は、あたしを……」

「テメエは何を怖がってたんだ。目の前にいるのがこの垣根帝督様だということ忘れてんじゃねーぞ？ちよつとは素直になれよ、お姉ちゃんなんだろ？」

こんな優しくて柔らかな暖かい感情が向けられることなんてないはずなのに。

理解から遠のいた現実には吐き気を催す。ウブでも、鈍感でもないあたしには彼の挙動に心臓が高鳴るのを分かっていた。

まるで好きだと言われているようで気味が悪い。あり得ないはずの優しさに磨り減った精神が痛みを増して行く。

あまりの熱に溶けてしまいそう。

「……いいの？こんな醜い我儘を美しいキミにぶつけても」

初めての熱に体は崩壊寸前だった。

熱が唇を溶かしていく。貰ったこのない言葉の数々に手は震え、足先は冷える。縮こまる翼と光を失意かけた頭上の輪が感情を物語っていた。

「テメエの願望を叶えることくらいなんてことねーんだよ。常識を超えて、その願望を実現してやるさ」

「……どんなものでも、叶えてくれるの？」

「俺がどんな願いも抱きとめてやる、だからこっちこいよ」

神様が美しく微笑んだ。

その美しさに、次元の壁が崩壊する。彼の姿に目が眩んだ。

面倒と言いたげな困った笑みと、遠慮がちに広げた腕に心が瞬く。

限界だった精神は、初めて貰った微かな愛情に悲鳴をあげて神に縋り付いて離れようとしなない。

叫びたい、この愛を。

好きだと、何よりも好きだと、どんな世界でも君を一番に愛していると、叫びたい。

けれど、代わりに出たのは可愛らしくもない嗚咽。満身創痍の体を引き摺って、優しい少年の胸の中に飛び込むことしか、今のあたしにはできなかつた。

「俺がお前の汚い我儘を受け止められないくらい甲斐性のない男だと思つたか？ テメエごときが抱える悲劇なんざ、今度は俺の力でハツピーエンドに変えてやれるんだよ、バーカ」

そう言つて盛んに伸びた紫陽花を一本だけ手折り、ぐしゃぐしゃになつた自分に美しい花を差し出した。

藍色の美しい花。藍花悦にふさわしいその色を手取る自分の顔はきつと緩み切つていただろう。

「色々聞きたいことはあるが、いまは帰るぞ。この身一つで空の旅をプレゼントできる男なんかこの俺ぐらいなんだからな？」

腰を掴まれ、白い翼が視界を覆う。乱れた髪の間から見えるのは彼だけだつた。

高揚感と浮遊感が心を襲い、脈が早まるのがよくわかる。

浮ついた熱は空を飛ぶ体を風にも冷めないほど熱い。初めての感情に戸惑いながらも、熱を持った心臓は心地よい風に感情を噛み砕き、一つの願いを生み出した。

破滅願望。

あたしの脳はコツペリアを受け入れた。
願う。

あたしの全てを捧げたいと。

名前も、戸籍も、財産も、誇りも、記憶も、体も、感情も、何もかもを。

最悪な終わりを迎える不幸な少年に、幸せな世界を生きて貰うために何もかもを失いたいとすら思う。

彼のためならば、何度だつて地獄に落ちる。

世界で一番好きな人のために死ねるなんて、あたしはなんて幸せ者なのだろうか。

これは崇高な愛の形。あたしにしか出来ない鮮明で美しい愛。こんな女を家族だと思つてくれた少年に渡せる唯一の贈り物。

あなたのためなら、なんだって出来る。
あなたのためなら、なんだって赦せる。
主人公の為ならば、コツペリアはその身を滅ぼしても惜しくない。

神の為じゃなくて、あなただけのために死にたいの。

他にもない貴方だけのために、あたし、死んでしまいたい。

この我儘をどうか叶えてください、垣根くん神様

あなたのためならば、悪魔にだってなってみせるから。

83話：虚言と真実の交差

静かに動くエレベーターを降り、廊下を渡る。マンションの九階から見える夜空はようやく雨と光が無くなり、晴れやかな藍色で染まっていた。

「泣き止んだか？」

「うん、大丈夫」

月から目を逸らし、今度は空と似た藍色の汚れたジャケットで体を包む少女に視線を落とす。

黒い髪はいつの間にか金色へと塗り変わり、瞳の色も星を輝かせながら夜闇の色から鮮やかな赤と緑に変わっていた。

ずっと手を握ったまま俯く少女の眩しい金髪は西洋のお姫様のように。月夜に照らされ輝く長い金髪を揺らしてふんわり笑う彼女はどこか現実離れた姿をしていた。

天使の翼が生え、光る輪っかが頭上で回る姿も、かぐや姫のような黒髪も、彼女という存在が全て現実じゃないように感じてしまう。

小さい声で答える彼女はまたどこかへ行ってしまおうのではないか、どこか遠くへと去るのではと、嫌な予感が駆け巡る。

「ほんとかよ」

「垣根くんがいるから、平気だよ」

「……そうか」

強く手を握り返すと、彼女は優しく体を近づける。

普通の女より背の高い彼女だからか、色濃く香りが広がった。その香りが血の匂いじゃないのに心底安堵する。

もう二度と彼女の赤を見たくないというのに、一時の感情に身を任せたことがなんもと情けない。

「林檎寝てるから静かにな」

「分かった」

たどり着いた玄関にカードを差し込むと、電子音と共にロックが外れる。開いた扉から音を立てずに中に入って靴を脱いだら、なんだか肩の力が抜けた。

たかが女ひとり迎えに行くのに九日もの時間がかかってしまった。こそばゆい感情に頭を振ると掴んだ手を少し強引に引つ張つて窓からこぼれる淡い光を頼りに風呂場へと連れていく。

雨の匂いが香る彼女から汚いものを全て落としてしまいたい。

「とりあえず泥落として、体あつためろ。風呂沸かしてやるから」
「じゃあ、あたし花瓶探してくるね」

脱衣所の電気をつけ、風呂のスイッチを押し、ジャケットを脱ぎとうと彼女の手を離れた。

その間手持ち無沙汰の彼女は手に持った一輪の紫陽花を生ける花瓶を探しに背を向ける。ソファとテーブルしかないリビングに花瓶があつたか覚えてないが、家主は記憶力がいいのか迷わず棚から透明な花瓶を手にとってキッチンへ水を入れに行った。

少し浮き足立ったような笑顔、そんなに花が嬉しかったかとなんとも言えない感覚が脳裏に沸く。

その感覚を忘れようとももの数分で沸くお湯に軽く手をつけ、温かさを確認するとふと甘い匂いが鼻を掠めた。

たくさん置かれたシャンプーやコンディショナーなどのバスグッズ。

優しい香りはここからかと、キッチンの方へ向かっていった彼女を思い出す。ゆつくりと満たされていくバスタブの水面を眺めながら、ぼんやりと温かさと柔らかい香りに目を瞑った。

「垣根くん、垣根くん？」

「え、あ、ああ、なんだよ」

「お湯、沸いた？」

彼女の呼び掛けに気がつくつと、香りを振り払って風呂場から離れる。もう花瓶は片付けたのか、洗濯機をいじりながら待つしおらしい少女のそばからは風呂場と良く似たい匂いがした。

「沸いた。あとは入るだけだな」

「じゃあ一緒入ろ？」

着替える彼女のために脱衣所を出ようと引き戸に手をかけるも、優しく掴まれたセーターの裾を前に手は一瞬にして強張る。

彼女の言葉の真意に惑わされ、脳は呆気なく思考を止めた。

『一緒に入ろう』、確かに彼女はそう呟いた。『入ってくる』でもなければ、『先入れば?』でもなく、『一緒に入ろう』と、確かに言った。

甘い誘いの意味を解読できないほど俺は鈍感でも、うぶでもない。女が男にそんな言葉を投げかける時は決まってヤラシイ意味である。

彼女の思考回路に一瞬脳がショートする。何を持って彼女がそんなことを俺に言うのか理解が及ばなかった。

「……は? 何言ってるんだお前」

「だめなの?」

しかしその無駄な考えはすぐに消え失せる。

そうだ、この女は男を知らない。風呂をともしにするくらい、彼女にとっては大らかな家族との交流程度なのだ。初めて会った時、押し倒してしまったと言うのに悲鳴一つあげなかったことも、今考えれば彼女らしい。

色気があるのかなのか。本人は先ほど経験はあると言い張っていたが、無自覚なあざとさからは男の影を感じることはない。

ガキだな、とだけ思う。

甘えたい本心から来るあざとさは、どう見たって子供だった。

「いや、強請られても入らねえよ……」

「なんで?」

「なんでって、見れば分かるだろ」

だからと言って、男女が同じバスタブに浸かるのは大問題で、避けなければならぬ。ただでさえスキンシップが多く、柔っこい肌の彼女と一緒に入るのは羞恥心が勝つ。

けれど彼女は意味がわからないと言った表情を続ける。

それとなく理由を説明しても、性別の違いとは彼女にとっては些細な問題のようだった。

「……貧相な体だから?」

「お前が貧相なら第三位とかどうなんだよ、気にしてるみてえだから可哀想だろ」

「あたしは豊満だけど、垣根くんは……えつと……」

「あゝ？俺がなんだって？」

「胸板薄いし、腕細いし……」

服の上から胸を持ち上げて首をかしげる彼女の含みのある言葉に思わず反論を口にしてしまう。

気遣うような可愛い笑顔を見せる彼女にどうしてもプライドが傷ついてしまって仕方ない。

「俺が貧相っていいいわけ？」

「……見えてる筋肉は多分ただ脂肪がなくて浮き出てるだけだから、その、なんかごめんね？」

「オーケイ、喧嘩売ってるんだな？俺様の体見て風呂場で倒れても知らねーからな」

「一緒入る前提なんだ？」

「あゝ、しまった」

申し訳なきように眉を下げる顔に苛立ちを感じると、ついムキになって彼女の肩を強めに掴む。馬鹿な女に鼻で笑われるのは不愉快で、考えとは逆に見栄を張ってしまった。

これでは彼女と同じではないか、虚勢を張っていじらしく自分を大きく見せようと健気に頑張る目の前の女と全く同じで反吐が出る。

そしてそれが仇となり、からかい混じりの笑顔が咲いた。ムキになることを予見していたのか、してやったりと彼女は優しく笑う。

負けを認めざる負えない。今日の彼女はいつも調子が狂う。

「……っーか一人で入れるだろ。なんで俺が、」

「二人じゃ寂しいから、かな？」

いつもなら絶対に言わない言葉を小さく呟く彼女に頭はなぜか冷静に思案する。

これは勝てない。

どうすれば彼女を傷つけないか、どうすれば間違いを犯さないか。だがそんな配慮は全くのナンセンスで、意味をなさなかった。

張り詰めた思いを最小限のお願いで有耶無耶にしようと思えば健気に背伸びをするお子様に、勝てるすべは思い浮かばない。

本当にずるい女。

「……………しょうがねえな」

随分甘くなってしまうた。寂しそうに肩を落とす姿を見てノーとは言えない自分が腹立たしい。

暖かい空気が体を包む。適温に熱されたお湯の中、静かに膝を抱えてシャワーの音が止むのを待った。

「誰かとお風呂に入るのは久しぶり」

「そうかよ」

「昔はよく妹と入ってたからさ」

シャワーを止めると、彼女は遠慮もせず湯船に足を入れる。上機嫌な声に目を逸らしても、触れた爪先が嫌という程彼女の形を思い浮かべた。

裸くらいどうってことない、見たことくらいある、けれどどうしても見てはいけないと強く警戒してしまう。

それはこの状況だからこそ思うのだろうか、それとも心情の変化だろうか、いまの自分には上手に解決できそうにない。

「…………バスボム入れるね?」

「勝手にしろ」

気持ちを察してか、彼女はどこからか取り出した金色の入浴剤を湯船に落とす。甘いジャスミンの香りを漂わせて音を立てながら湯の中で溶けていく金色の塊は、透明な水の色づけていく。

広がる黄金が少し眩しかった。

「さっきはごめんね」

「なんだよ、突然」

静かな浴室で穏やかな女の声が反響する。溶けていく入浴剤を見つめながら梳かす金髪は染まっていくお湯の色と徐々に同化していった。

「酷いことを、沢山したから」

「お相子だろ」

繊細な少女の苦しそうな声にため息を漏らす。心配性で怖がり過ぎて、過ぎる彼女に呆れて頭を抱え再び目を瞑った。

寂しそうに困る彼女を直視するのは疲れてしまう。

一体何を落ち込んでいるんだか。彼女の思考回路にはいつも驚かされる。

ただの子供の慣れない悪口に俺が落ち込むとでも思っているのか甚だ疑問だ。まだ可愛げのある精一杯の罵倒に、逆に笑いしか込み上げてこないというのに。

「でもね、思いは言える時に言わなきゃ死ぬ時後悔するからさ」

「……それは体験談か？」

「そうだよ、もう既に一度人生を歩んだ先輩からのアドバイス」

溶けきった入浴剤の中から現れたドライフラワーが彼女の周りに散らばる。金色の湯船に浮かぶ深い紫と花びらと白い花がゆつくりと揺れた。

「やっぱり、お前は何らかの別世界から来た生命体なのか？」

「正解に近い、けれど不正解」

なんてことないように常識からかけ離れたセリフを吐く彼女に慎重に言葉をかける。全てを諦めたかのように笑う姿に息を飲んだ。

「あたしが生まれた世界はね、少し未来のパラレルワールド並行世界。あたし、未来人で

異世界人なの。凄いでしょ？」

パラレルワールド「並行世界……？」

「この世界はあたしも、妹もいない世界だった。なのに無理やりあたしを物語に当てはめて、藍花悦として舞台を続けている。ここはそういう世界」

パラレルワールド並行世界とは、バタフライエフェクトの結果である。

ひとつの事柄が違っただけ、ひとつのものが変わっただけ。たったそれだけの要因で未来が捻れ、結果が枝分かれし、もしもの世界がねずみ算式のように増えていく理論の一つ。

そして彼女曰く、ここは彼女が生まれなかった場合の世界らしくかった。分岐し、ありえなかつたもしもの世界、パラレルワールド並行世界と呼ばれる異次

元からきたと、そう彼女は言った。

馬鹿げている。と、普通ならば思うだろう。なんて電波で天然なバカ女なんだろうと鼻で笑って終わらせる嘘くさいお話にしか聞こえない。

けれど彼女を知っていればそんな風にバカにすることは思い浮かばなかった。

「……だから自分には誰にも愛されないとと思うんだな」

「そうだよ。だって天羽彗糸は元々この世界にいなかったんだから」

彼女の言葉で全てが繋がる。

科学的にか、魔術的にか、どういう理論なのかは検討もつかないが、この世界でいないはずの彼女は精神だけが別人の体に移された。

学園都市でも、魔術側でも決してありえない話ではない。魔術に執着して、カトリックを名乗っていた彼女なら尚更。

これはきつとタイムリープを含んだシャーマニズム。だから死者であり生者でもある彼女は丸と四角の輪を持つのだ。

藍花悦のなかに植え付けられた自分の現実が歪み、彼女はいつしかこんなにもおぞましい生き物になってしまった。

「その頃は……前世と呼ぼうかな、前世のあたしは能力なんでもってない、ただの女だった。だから死んだの。何も無かったから、何も出来なかったから、結末を可哀想に思われて、不憫に思われて、この世界で未練を果たすチャンスを貰った」

寂しそうに、そして嬉しそうに彼女は淡々と語る。いつもの笑顔からは想像もつかないほど儂げで、可愛そうな姿だった。

「けど、この世界はあたしには少し、ハードモードすぎたみたい」

向日葵のような一番星が咲く瞳で優しく手の中から溢れ落ちる金色眺める姿に息を飲む。

キラキラときらめく金色の水面を両手で掬う彼女に目が奪われて他には何も見えない。紫の花びらも、輝く湯も、視界に入るとはなかった。

死んだ後も大人に利用されて、未熟な精神のまま同じことを繰り返すとても哀れな子供が目の前で健気に笑い、手元に浮かぶ白い花を見

つめ続ける。その姿は可愛そうとしか思えない。

想像できるだろうか。

一度望まぬ死で体を引き裂かれたというのに、誰か知らない人の手によつてもう一度やり直す。間違いを正して、全てをもとに戻すやり直し。

それが同じ世界ならいいのかもしれない。野心があつた人ならば、もう一度全てを一から始められると歓喜するだろう。

けれど彼女の場合は違つた。自分の生まれなかつた世界で、好きな人もいない世界で、天羽彗糸は生きていかなければならなかつた。

異常な精神を持った女には生きていくのも苦しいはずだ。

自暴自棄になつて、自分で自分を殺めていたつておかしくない。強い野心や、願いがなければ尚更。

だから彼女は正義を役割だと決めつけ生きる。自分が死なないため、生きれるため、頑張れるために。彼女は自ら異常になつたのだ。

それを悲劇と呼ばずなんと呼ぶ。

彼女は悲劇のヒロインと呼ぶにふさわしい少女だつた。

「この世界は嫌いか？」

「そうだなあ、垣根くんと出会えてなかつたら嫌いだつたかも」

「あ？並行世界パラレルワールドの俺に会わなかつたのか？」

「……ずつと、遠くから眺めていただけ。会いたいと思つても、会えるような人ではなかつたから」

溶けるように体を深く湯に浸けて息を吐くと、張り付いた金色の髪を撫でて薄っすらと笑う。懐かしさを思い出しているかのような困つた笑みに少し苛立ちを感じるのはなぜだろうか。

小さい違和感を感じながらも、その笑顔に全てがどうでも良くなつてしまつていた。

「それで、前世のお前はどんな人間だつたんだ？」

「別に、普通の人だよ。旅行好きでよく家を空ける両親と、足が動かないオタクで勉強嫌いな六歳差の妹がいる、ちよつと八方美人で、男に好かれて女に嫌われるタイプのなんてことない長女」

知りたい、二度も人生を生きた女を。ゆつくりと時間が進む浴槽の

中、白い湯気を纏う金色の少女しか見えなかった。

「頭はそこまで良くなくて、愛想と可愛げだけで生きてきたなんてことのない凡人で、何をしても一番になれなくて、誰かのためにしか生きる価値を見いだせない何も無い人なの、あたし」

覇気のない声を響かせる彼女の手を緩く握る。緑色のマニキュアで彩られた爪を親指の腹で撫でると、暖かさで下がった目尻がさらに眠そうに蕩けて深く目を閉じた。

「昔からお前は自己肯定感が低いんだな。幼稚園卒業時に大学入れる頭はあつたんだろ？一応勉強はできるじゃねえか」

「現役で大学院まで行つたんだから、年相応だよ」

「は？お前本当は何歳なの？」

「……24で死んだ。夭折、ようせつって言つていいのかな」

彼女の口ぶりに違和感を感じると、少し青ざめた顔でため息をつく。微かに揺れ動いた瞳の星は感情と呼応して少し輝くをなくす。

嫌なことを思い出しているのか、暖かい湯の中だというのに彼女は肩を抱えて縮こまつて掠れた声で昔の記憶を絞り出した。

若くして死ぬなんて暗部の中では日常で、なんてことない当たり前。いつものことだ。

決して彼女が特別なわけではない。

それでも、ただの事故で妹を庇つて死んでいった正義の少女が惨たらしく死ぬ姿は想像したくなかった。

「垣根くん、あたしはね、キミにそんな人生送って欲しくないんだ。後悔して、嫉妬して、これからの青春も知らないで死ぬ運命なんか、美しくて可愛いキミには似合わないんだから」

「子供のくせに、なにいつちよまえに大人ぶつてんだよ、バーカ」
「子供は垣根くんの方だよ、何も知らない子供だ」

大人のはずなのに、十五歳らしい無垢な笑顔を見せる。

とても嬉しそうでいて、とても晴れやかな笑顔。その腹立たしい笑顔に掴んだ手を緩めると勢いに乗って柔らかい女の両腕が視界に広がった。

「子供じゃッ——!?!」

「あたしから見たら立派な子供だよ。強がりだけど優しい子供、そんなキミが好きなんだよ」

湯船から漂う甘い薔薇の香りを巻き上げて視界が回る。強引に引き寄せられた柔らかい肉の塊が景色を覆い、肌色だけが目に映る。

まるで母のような抱擁に言葉にならない悲鳴が押し潰され、女子高校生のくせに大きい胸に息が奪われた。

「つガキは、テメエだろ……泣き虫のくせに強がって、我儘も満足に言えない家庭環境に難アリの面倒臭いガキ」

「そうだね、あたしも子供だ。キミみたいな子に我儘を聞いてもらえて喜ぶでしょうもない人だけど、それでも君より少し年上で、少し長い人生を歩んできた」

一瞬だけ呆けた脳を必死に回転させ素早く体から離れると、まるで思春期の子供を見る母親のような暖かい目線を向けられる。

居心地が悪い空間だった。自分よりも子供な女にそんな目を向けられるのは屈辱以外の何でもない。

「大好きだよ、垣根くん。キミの為ならば、どんな間違いも、どんな罪だって犯してあげる。垣根くんが幸せになるためならあたし、死んだっていい」

離れたはずなのに、再び肌色が視界を埋め尽くす。壁に両手を当て、逃げ場を奪うと彼女の金髪が牢獄のようにするりと垂れる。

彼女の恐ろしく優しい笑顔から視線が動かせない。

視界が全て彼女で埋まって、彼女の香りが浴槽から漂う薔薇の匂いを掻き消した。心音が跳ね、息が上がる。

どうにかなくなってしまいたい、彼女の赤と緑の荘厳な瞳に惑わされて、思考はまとまることがなかった。

「……なんで俺なんだよ」

「君が一番好きだから。ただそれだけの理由だよ」

湯船に張った金色の湯に彼女の金髪が溶けて、この水すら彼女のよう錯覚する。金色の牢獄に捕まった思考回路は、どうしようもないほど落ちぶれていた。

蕩けるような甘い言葉の数々を無際限に降らしてくれる目の前の

少女が眩しくて、黒い虹彩が少しずつ焼き切れていくよう。

「少しでいいから覚えていてね、アナタの幸せを望む人がいることを」
女神様が微笑んだ。その衝撃に、全てを理解した。

彼女は人形でも、天使でも、悪魔でもない。彼女は神様なのだ。

欲しい言葉を、欲しい時にくれる俺だけの都合デア・エクス・マキナの良い神様。

神の言葉を説き、全てを赦し、物語を大団円へと導く、舞オルケストラ台の上
の主演。

金色の水面に浸かる神様は、女の姿をして優しく笑う。

高鳴る心臓はその姿を記憶する。脳を取り換えても、きつと心臓に
残った彼女の姿は決して忘れることは無い。

十月

84話：平和の影

カーテンから射し込む暖かい光が瞼を焼く。遠くから聞こえるリズムカルな音と、胃をくすぐる甘い香りが重い体をゆつくりと起こす。

蕩けてしまうほど柔らかいベッドには昨晚一緒に寝たはずの少女がいない。シーツに皺を残していなくなった彼女に大きなため息をついて、壊れかけの狭いベッドから腰を上げた。

秋の朝、少し冷たい空気が廊下を満たす。足裏から伝わるひんやりした床を渡り、音がする方へ向かうにつれ甘い匂いは濃くなっている。

ケーキのような甘い匂い、食欲をそそる香りに自然とキッチンへと向かっていった。

「……起きてんなら言えよ」

「あ、おはよ。ご飯すぐ食べる？」

透明なボウルとおたまを片手に昨夜の形相を一切感じさせない柔らかな笑みをした天羽彗糸は、母のように優しく目を細める。

甘い匂いと簡素なエプロンも相まって本当に幼い母のようだった。

「何作ってるの？」

「パンケーキ。牛乳と卵と粉だけで作れるから、さっきコンビニで買ってきた」

バニラの香りが広がるキッチンで、一つにまとめた長い金髪が揺れる。熱したフライパンで手際よくホットケーキが何枚も焼かれていく香りに、昨晚の驚きに満ちた告白は脳の隅へと追いやられていた。

未来であり、バタフライエフエクトの先から来た孤独な少女。全貌を話すことはしてくれなかったが、概要だけでも言ってくれたのが救いか。

自分しか知らない秘密。男という生き物は単純で、秘密を知ってしまったら特別感に舞い上がって途端にプライドが砕けて優しくなる。

そのせいなのか自分の機嫌がすこぶるいいことにある程度恥ずかしさを覚えながらキッチンに踏み入れた。

「じゃあ、後でスーパー行くか」

「どうせホテルに荷物取りに行かなきゃいけないから、ついでに買いに行くよ」

「あー、そういえばそうだな。飯食ったら全員で行くぞ」

涼しい風を送る冷蔵庫を開けて唯一ある牛乳を手取る。

コップを取りだし、零れる手前までなみなみ注ぐと一気に飲み干した。

「一人で行くつもりだったんだけど」

「金の面倒みるの俺なんだから、一緒行くに決まってるだろ」

「えー、優しい。好き」

「知ってた」

一枚、二枚と、ホットケーキをひっくり返し、大皿に積み上げていく。

形のいいホットケーキが綺麗な焼き色を重ね、貝殻のような白い皿を覆い尽くす。目を覚ます暖かい微笑みに、この日常が当たり前だと錯覚してしまう。

こんな日々が続くのだろうか。このたおやかな女がずっと隣にいる生活が続くのだろうか。

時折不安を感じる。

自分のような人間が、光射す人間の隣にいていいのか。

血で汚した自分の手は、表の人間とこんなにも近しくしていいのだろうか。

「垣根、朝ごはん……っ!?!」

小さな少女の眠そうな声に不穏な考えは消え失せる。

タオルケットを片手に目を擦る杢林檎の子どものらしい姿に気を取られ、考えはよそへ移っていった。今はとにかく、目の前のガキ二人の面倒を見ることが大切だった。

「おはよう杢ちゃん。ご飯出来てるよ」

火を止め、林檎の低い目線と視線が合うようにコンロの傍で膝を着

く。

躊躇いながらも短い腕を広げて天羽の胸の中に飛び込むと、くすぐったそうに長い金髪に頬をくつつけながら林檎は乏しい表情を薄く笑顔にしてみせた。

「天羽、いつ帰ってきたの、何があったの?」

「昨日帰ってきたんだ。ごめんね、留守にしちゃって。ちよつと色々あってさ」

強く抱き締め過ぎて胸に溺れた林檎を離すと、長い金色が滝のように小さい体を囲う。朝日の眩しさと整頓された小綺麗なキツチンの中では、彼女の恐ろしく長い金髪は一際輝いていた。

「髪長くて、お姫様みたい」

「そーお?ありがとね」

軽く頭を撫でて立ち上がると再びコンロに向き直る。話は終わったと言わんばかりに話を切り上げたのは、褒められたことが恥ずかしくなかったのか。

残り少ない液体を掬ってフライパンに流し込む姿はなんとなく年相応に見える。

「天羽、猫飼いはじめたんだよ」

「え、猫?」

「げっ」

「すごい懐いてね、犬みたいって垣根言ってた」

感情がほのかに見える上擦った声で唐突に林檎は呟く。

フライパンを見つめる天羽に横から抱きついて、柔らかい胸に顔を押し付けると幼子のように拙く言葉を吐き出していった。

「あとね、テレスティーナとね、病院のミサカと友達になったの」

「うん、それで?」

「05とね、みんなと、猫と、沢山遊んだよ」

「楽しかった?」

「天羽がいればもっと楽しかった」

「ごめんね、今度はあたしも一緒に遊んでいいかな?」

「うん、次は天羽とも遊ぶ」

フライパンから手を離し、火を止めながら林檎を抱きかかえると内容にちやちやを入れることも無く優しく背中を撫でた。

困ったように、胸に収まる大きな子供を抱き締めて笑う光景は少し眩しい。

羨ましいとすら、感じていた。

それは母の愛を受けた記憶が無い故か、誰かに甘えて欲しいという男の願望なのか、どちらかは分からなかった。

「ホットケーキ、私がやりましょうか？」

「あー、ただいま05。お願いしてもいい？」

「よろこんで」

いつの間にか後ろに朗らかな笑顔で佇んでいた05と場所を交代すると、林檎を抱きかかえたまま天羽は耳元で僅かに怒気を含んだ声で囁く。

「猫のことは後で聞きます。だから05ばつかに頼らないで、林檎ちゃんのこともたまには見てあげなよ？」

「……へいへい」

いつもと同じ、高校生らしい女の低い声に安堵してちやんと話を聞いていないのを悟られまいと適当に返事をして彼女達の頭を撫でる。

このまましおらしく家に行くのだろうと、一抹の不安を覚えながらも朝面倒事に巻き込まれに行くのだろうと、一抹の不安を覚えながらも朝食の準備に取り掛かった。

しかし、不安は杞憂だったと言わんばかりに何も起こることなく十月三日に日付は変わる。

特別怪しい様子はなく、今日もソファに座り、膝の上に小さな黒猫と林檎の頭を乗せながら黙々と料理本を眺めているだけで、いつものようにハチャメチャな行動をしようとはしていなかった。

「今晚何しよつかなあ……うーん、明日の朝ごはんも考えないと……」

「これ何？」

「海老フライだね。これでもいいけど、海老だけじゃ味気ないし……白身、いや、サーモンフライとか？」

「そうなるよ、海鮮類が冷蔵庫にありませんね。家にあるもので作った方が良いのでは？」

「アンタたちに美味しいもの食べてもらうのが最優先だから、そういうことは考えないの。残り物くらいなんでもなるしね」

本に留まるカブトムシ05と談笑しながら真面目に今晚の献立を考える姿に、高校は行かなくていいのかだとか、病院の仕事は大丈夫なのか、と色々言いたくはなるがぐつと堪えて平然とした態度で彼女の前に立ち塞がった。

「おい、これから用事あるからテメエ大人しくしてろよ？」

「ん。スーツとシャツ、アイロンかけておいたから」

ガンを飛ばすように睨みながら釘を刺すも、いつもと同じ普通の態度で料理本を眺め続ける。

話を聞いているのか聞いていないのか判断つかない適当な相槌に呆れてものも言えない。

「ありがたいけど話逸らすな。いいから大人しくしてろよ？外出るな」

「でも買い物しないと……」

「そんなもん、俺が買ってくる」

「いいよ、今一番忙しい時だろうし。それに、知り合いに会わないといけないから」

相変わらず本を読み続ける彼女の言葉に一度思考が止まる。

いつもの含みのある言葉はともかく、その後、知り合いに会うという単語に耳を疑った。

彼女はなんだかんだと人の懐に入るのが上手く、知り合いは多い方だ。それは彼女の職業柄とコミュニケーション能力の高さ、人柄の故。それは分かっている。

けれどこんな時に俺の命令を受け入れず、名前を明かさない知り合いに男として変な勘繰りをしてしまうのは当たり前前の事だった。

「あ？テメエまた変な奴に唆されてんじやねえだろうな？それとも浮気か？殺すぞ」

「いや、垣根くんと会う前からの知り合いだよ、仕事上のね。あと彼氏面しないで」

「仕事？その口ぶりは病院のじやねえよな？」

勤務先の知り合いならば、上司とか、後輩とか、先輩とか、先生とか、そういった呼び名を使う。知り合いという単語は彼らを表すには不適切。

きな臭い『仕事』という単語に暗部で働いているのではないかと勘違いしていた昔を思い出す。それほどまでに彼女の言葉には違和感しかなかった。

「藍花悦を調べたことは？」

「あるけど」

「沢山見つかったでしょ、藍花悦つて人達」

「……それと関係してると？」

「あたし……いや、ぼくはね、色んな人に名前を貸してるんですよ。その人の正義を成すため、欲を満たすため、ぼくの名前を使わせてるんです」

本をテーブルに置いてため息を着くと、一つ一つ順序だてて説明していく。空気を読んだのか黙りこくった林檎の頭を撫でながらふつと息を吐いて似合わない敬語で喋り続けた。

「そして今日会う人は藍花悦の名義貸し事業の共犯なんです。その件でお話がありましたね、会いに行かなくてはなりません」

「その用事は電話で出来ねえのか？」

「書類の回収をしようかと。大覇星祭中に連絡はしているので、あとに取りに行くだけなんですよ。流石に郵送する訳にはいかないのよ」

彼女の言葉に嘘偽りは特になさそうで、胡散臭い笑顔を見せずに話すあたり本当のことだと推測できる。

書類の回収だけならばすぐに終わるし、第六位という肩書きがある以上、拗れることはないだろう。もし何かあっても05が居ればそれで済む話だ。

それでもいやなものは嫌だ。俺の目の届かないところで面倒事に巻き込まれたら困る上、ただでさえ忙しい『仕事』がさらに忙しくなってしまう。

「でもなんか合った時にはもう遅いんだぞ？そう易々と許可できるわけ……」

「行かせてくれたらぼくの戸籍、あげますよ」

「あ？」

「藍花悦のだけですけどね。それじゃダメですか？」

どうしようかと頭を悩ませていると、小さな囁き声が耳に纏わりつく。

妙案とでも言いたげた誇らしい笑顔で挑発的にこちらを見つめる赤と緑の瞳に言葉が詰まった。

「……いや、戸籍貰って俺はどうすればいいんだよ」

「えー……じゃあ、何でも言う事聞いてあげます」

「めんどくさくなってるんじゃないよ」

ようやく絞り出した返答に頬を膨らますと気だるそうにそっぽを向く。

子供のように拗ねる彼女にため息をついても、心臓を握られているといえばいいか、彼女に勝てるはずもなく。

今回だけと言いつつながら屈してしまうことは明白だった。

「……はあ、今回だけだからな。スマホ必ず持ってけ」

「わーい、らびゅー♡じゃあ制服借りるね」

「出かけるの？」

「杠ちゃんも来る？」

「うん！」

薄っぺらく見える重い愛の言葉を押し付けて元気に笑うと、黙っていた林檎の頭と猫を退かして立ち上がる。

話が終わったと起き上がった林檎もお出かけに機嫌が良くなった天羽の姿を見て僅かに口角を上げた。

「なら私も行った方がいいですね」

「絶対傷つけるな。そのためにお前を作ったんだからな」

「分かっております、マスター」

置き去りにされた料理本の上で羽音を鳴らす05に命令を下すと微かな後悔に頭を抱える。

許可してよかったのか、本当に大丈夫なのか。

自分が守らなくては行けない少女たちを仕事だからとはいえほっぽって良いのだろうか。

不安だけが心に残って酷く不愉快だった。

銃を放ち、的を打つ。初めて持った武器に苛立ちを感じていた練習場で、その男は暗闇に似合わない爽やかな笑みで言い放った。

「統括理事会から、我々グループに仕事のオーダーが入りました」

酷く不愉快な言葉の羅列だった。

今では0930事件と呼ばれている先月終わりの出来事。そのせいで落とされた暗闇はグループと呼ばれていた。

損害や打ち止めの件など様々な要因から木原数多の穴埋めを余儀なくされ、現在は暗部所属。肥溜めに叩き落とされた気分だった。

打ち止めに危険が及ばないならそれでも構わない。

けれど必ずしもこの都市が安全とも言いきれないのが不快だった。

現在学園都市は先の事件のこともありローマ正教などというお花畑の宗教団体と揉めている。

戦争まで秒読みと言って過言ではないほど揉めていた。その攻防のため内側への防御が手薄になりつつあり、学園都市も安全とは言えない。

暗部に身を置くことでしか動くことが出来ない自分が何とも腹立たしかった。

「標的となる対象はスキルアウト、あなたの方が詳しいかももしれませんね」

「ああ、無能力者達が集まっている武装集団だな」

何も無い白い廊下を渡るさなか、隣の男がたんと話を進める。

海原光貴と名乗った本名も本当の顔も不詳な変装男は暗部には似合わない爽やかな笑顔を見せた。

「ええ、現在連中はおもちゃを作っているようです」

「オモチャ？」

「木材をくり抜いて中に爆薬を詰めたロケット砲です。江戸時代に試作された棒火矢と言ったところでしょうか」

二人の靴音が広い廊下に反響する。単調な声で話し続ける海原は少しだけ前を歩いて業務報告を続けていく。

「彼らはこの数日間の間にあちこちで工作を行っております。災害時の誘導経路の傍に放置自転車を移動させたり、vip施設周辺の排水溝にゴミを詰めて塞いだりと、保安上の問題として取り上げるような問題ではありませんが」

「グループってのは、ガキのイタズラの後始末まで請け負っているのかよ？」

どんな内容かと聞いていれば、馬鹿馬鹿しくなるほど学園都市では些細な問題ばかり。

呆れて帰りたくなるほどどうでもいい問題にため息を着くが、それでも海原は話を進める。

「ですが、既に二万件以上、オレンジやレッドの警報時にはエラーとして検出されてしまうんです」

「そのための棒火矢だつて言うのか」

「大量のエラー報告によってサーバーがダウンしてしまえば、スキルアウトたちが暴れても警備員はやってこない」

「じゃあ、警報を解除すればいいんだろ」

「今が戦争中じゃなければね」

スキルアウトの目的は警備員アンチスキルの混乱。裏で行っている本命がバレないようにするための策と言ったところだった。

馬鹿馬鹿しいとしか言葉が出ない。警備が薄い今を狙って行動に移すあたり、相当彼らの中では執拗に狙った獲物なのだろう。

「内も外も敵だらけってか。学園都市つてのは余程多くの人間から恨まれてるみてえだな」

「そういう人々をなんとかするのが我々の仕事です」

足を止めてこちらを向くと、海原は簡素な携帯電話のディスプレイを見せる。

大男の写真だけ見せて、彼は長い前髪の間隙から見える穏やかな目をきつく細めた。

「ターゲットの名前は駒場利得。現在のスキルアウトを束ねるリーダーでもあり頭脳でもあります。彼を速やかに処分することでスキルアウト側の計画を未然に防ぎます」

初仕事の相手としては少し不満があれど、拒否することができはるはずもなく。

ただ領いて仕事に着くだけしかやることは無かった。

そして現在、揺れる車の中で汚い街並みを横目に仕事へ向かう。

携帯を片手に眺める景色はスラム街と言つていい程度には汚れ、落書きなどで壁が埋めつくされていた。

「なんでゴミ収集車なんだよ」

『何かと便利なんですよ。死体の処分などもありますから』

二人乗りのごみ収集車に乗り、目的地まで向かう。自分こそ違っても、運転を任された知らない下っ端の野郎は清掃員らしき服装をしており、車自体も鼻をもぐような腐臭がする。

はつきり言つて最低な車だ。

「クソ野郎の死体を漁るゴミ収集車か。笑えねえ話だな」

目的地に到着するとすぐに車から降りて目の前の小汚い路地に目を見やる。

どちらもゴミみたいなものだ。匂いも、見た目も。

『指示通り、20分後に回収に来ます。お気をつけて』

「勝っても負けてもアレに乗るわけか。生身か死体かはさて置いてな」

切られた通話に舌打ちをすると携帯をしまつて裏路地へ向かう。

杖が床に着く音と靴音がよく通る狭い路地に面倒ながらも身を投じた。

85話：路地裏の葬儀

薄暗く埃臭い空気の中をひたすら杖をつきながら歩いていく。

警備ロボット対策の金網がそこら中の出入り口を塞ぎ、ビルとビルとの間の空は人工衛星の監視を逃れるための色とりどりの布で覆われている路地裏は少し異様に見えた。

「懐かしい空気だ」

地面の監視と空の監視を塞ぐスキルアウトの在り来りなガキ臭い小細工を鼻で笑うと、突然支給された黒い携帯電話が鳴り響く。

名前が書かれていない登録番号だが、振り分けられたナンバーから自ずと誰なのか分かる仕組みになっていた。

「土御門か」

『そろそろ初陣だと思っつてな。お前に忠告しておくことがある』

「で？内容はなんだよ、先輩？」

『俺たちのことは信じるな』

突然の電話で唐突な宣言を言い放つ男に啞然として口をぽかんと開く。

グループの構成員の一人、土御門元春の言葉に驚いて足を止めた。尖った金髪にサングラス、前開きのアロハシャツを半裸の上に着て『にやー』とか語尾につける胡散臭い野郎は、想像よりもだいぶ変な野郎のようだった。

『俺たち全員、その存在が表に出ただけで問題になるような連中ばかりだ。そういう人間ばかりを選んで作られたグループにゴールはない』

「この俺がご褒美を期待してるとでも言いてエのか？」

『統括理事会が決めたルールに従ってるだけじゃ、出し抜けないって話だ。その上で勝つにはどうしたらいいか、それを認識しておけ。俺もお前も、守るべきものを、持ってんだからな』

静かに真面目な口調を続ける彼にため息を着くと、早く話を切り上げようと携帯を強く握る。

仕事の前に面倒な話はしたくなかった。

「要件はそれだけかよ」

『早いところ終わらせて帰ってこい。結標の方も、そっちでそろそろ仕事を始めるだろうしな』

「結標？」

同僚の名前に訝しむも、携帯越しの声が掠れるほどの風が一瞬のうちに吹き荒れ、血の匂いを巻き上げる。

小さく聞こえる断末魔と瓦礫の崩れる音、そして湿った火薬の匂いから路地裏の奥で何が起こっているかくらい安易に察することはできなかった。

「競走とは聞いてねエンだけどな」

『あいつが狙ってんのは人じゃない、金だ』

長い赤髪を下でふたつに結び、学生服のミニスカートを履いてジャケットを肩にかけたシャツも着ていないサラシ姿の女、結標淡希の顔を思い出すと舌打ち混じりに低く唸る。

九月前半に緊急搬送されて能力が傷ついたと聞いた空間移動能力者^{テレポーター}がまともに動けるかは知らないが、勝手に進む話に腹が立つ。

「つーか、あの女はまともに使えるのか？」

『お前と同じだよ。補強してる』

「……そオかい、そりや結構」

投げやりに通話を切ると苛立ちをぶつけるように目の前に広がる荒れた路地に目を向ける。

陰鬱とした空気が孕む狭い道、人の気配が漂うこの場所は反吐が出るほど汚らしい。

「そんじゃまア、始めるとしますか」

チョーカーの電源を入れ、収納式の杖をしまう。

「お片付けだ。十分で終わらせてやる」

「こみ溜めによく似た路地の前、冷めた声だけが響いた。

倒れ伏せた人間の山を築き、綺麗になった路地を進む。もう音も風も聞こえず、どうやら結標淡希の方は難なく終わったように見えた。

「やだねエ、一人で残業つてのは」

「……それなら休ませてやろうか」

「ア？」

独り言として呟いた言葉はいつの間にか居た男によって返事を返される。三階分はありそうな工事用の簡易な足場に立ったゴリラに似た大男は、海原に見せられた標的の姿と一致していた。

「……一方通行か」
アクセラレータ

「駒場利得だな？一応理由を尋ねてやるオか？」

立ち止まって大男を見上げると、体格に似合わない暗い顔で彼は凄む。大きな体格をやつとのこととで収める黒いジャンパーの安い光沢が鈍く薄暗い路地で輝いていた。

「……スキルアウトが能力者を叩く理由なんて、聞いても面白いものではない」

「ハン！街を混乱させた上で無差別攻撃つてどこか」

「無差別ではない。標的くらいはこちらで選ぶ」

「なかなか余裕があるみてエだが、今の状況掴めてンのか？」

抑揚のない喋りではぐらかす駒場は手に持った黒い棒を上から投げ捨てると、三白眼を細める。

傍に落ちた黒いそれは、壊れてしまった懐中電灯のようだった。

「俺が殺した」

血に濡れた懐中電灯は確か座標移動、ムーブポイント結標淡希の私物。

その意味を理解すると脳が処理を止めた。

言葉を出そうにも、喉がそれを拒む。なんて答え、なんて言えばいいか分からなかった。

「……話に聞いていたのと違う。日陰者たちは普通ならここで躊躇わない」

「そオかい。知ってるか？俺の前に立ったクソ野郎は普通ならミンチ

になるンだぜ？」

上から目線でものを言う駒場に、一度切っていた電極に手をかける。

腹立たしい物言いの彼に苛立ちが増す一方だった。

「……その電極、何らかの電子情報を送受信しているな」

何度目かも分からない舌打ちを鳴らすと電極のスイッチを付け、能力を使用できるように回路を変えた。

一万にも及ぶ妹達の代理演算によって戻る今までの能力。

それを知られては非常に困る。だからこそ目の前の男をすぐにも殺さなくてはいけなかった。

地面を蹴って上に飛ぶ。一気に飛び立ち駒場と視線が交わると高く笑いながら殺さんと手を伸ばした。

しかし駒場がおもむろに取り出した縦長の缶に視線が向かう。

緑色の缶が視線の先で回る。駒場の大きな足で蹴り飛ばされた缶は煙幕とも違う銀色の粉を吐き出し、空中に漂った。

「……電波攪乱装置の一種だよ」

「ッ!」

その言葉を理解する前に足場に倒れ伏す。送られてこない演算に混乱しながらも、上から入れられた蹴りを避けて腰に着けた銃を手にした。

音と煙を吐いて銃が弾を飛ばす。一発、二発と撃ってこの状況を突破しようとして撃ち込んだ弾丸は大男目掛けて宙を舞う。

しかし巨体に似合わず素早い動きで避けると、大きな足で銃を蹴落とし脳天めがけてかかとを振り下ろした。

強靱な足が硬い足場に振り下ろされる。身体強化の効果がある**ハードテレピンケ**発条包帯を体に仕込んでいるのか、無能力者を超えている身体能力は足場に大きな傷を与えた。

「……真っ赤に弾ける」

太いマガジンが二本刺さった不思議な形態の演算鈍器スマートウェポンから弾丸が放たれ、足場を崩し体が地面に落ちる。

叩きつけられたコンクリートの冷たい感触と硬さが脳を駆け巡り

焼けるような痛みを刻みつけた。

焼けるように背中がひどく痛む。死と誤認するような強烈な痛み
に吐き気を催しながら咳き込むと、彼もまた地面に重い体を着地させ
再び銃口を向けた。

悶えている暇もなく男が握った銃口が脳を見据え銃弾を放つ。焦
りつつ弾丸を確実に交わし、体と一緒に落ちていた拳銃を拾って照準
を上へと合わせた。

引き金を引く。男ではなく上へ向けた弾丸は空を隠す布を留める
金具目掛けて弾き出され、軽い発砲音が狭い路地に鳴り響く。

「すみませんが、これは外さないでもらいます?」

しかし放った弾丸は別の弾丸とぶつかり合い激しい火花を散らし
て消え失せる。極めて正確な射撃に驚きのあまり息を飲んだ。

背後から放たれた弾丸の持ち主の声は、以前何処かで聞いたこと
のある特徴的な少年の声。

見ずともわかるその男の姿に舌打ちを鳴らして駒場から目を離さ
ずに体の動きを止める。第三者の乱入に次の動きをかき乱され、どう
相手が動くのか何う他なかった。

「……なぜここに、にッ!」

少年の声に駒場の動きが止まる。驚きに満ち、酷く恐れた表情の駒
場は声を漏らし、思いつめたかのように少年を見た。

因縁やらなんやらでもあるのかとふと思う。もしかしたらこの少
年の前で彼を殺すのはとても残酷なものなこともかもしれない。恐れ
られる行為かもしれない。

だが手にした銃に躊躇いは無かった。

「オイオイ、敵から目エ逸らすなよクソ野郎」

「ッ!ぐっ……ふ……」

薬莢が落ち、拳銃は煙を上げる。小さな弾丸に貫かれた巨体は膝を
つき嗚咽を上げて地面に伏せた。

呆気なく奪われた命と、動かない体。悪に堕ちた自分に彼を生かす
方法は分からなかった。

「キミの仕事の方が早かったですね」

「……テメエ、なんでここにいる」

沈黙が続くこの場で最初に口を開いたのは後ろに佇む少年。長点上機学園の制服を着て、高校生にしてはだいぶ幼い女顔を少し歪ませそこに立っている薄幸そうな謎めいた美少年はついこの間の九月三十日、藍花悦と名乗っていた。

「彼は友人でしてね、狙われると聞いたもので」

「ハッ、俺に復讐でもする気か？」

「いえ、ただ最後くらいは弔ってあげよう」と

この間出会ったばかりの不思議な少年は長い黒髪を翻して憂いた瞳で倒れた男を見下ろす。

彼のそばでしゃがみ十字を刻むと、藍花悦と呼ばれていた少年は目を瞑って黙り込んだ。神に祈る信者のそぶりに何か皮肉めいた意図しか感じられない。

「彼は、最近頻発している無能力者狩りに酷く心を痛めていたようですよ、こういう結果になってしまったのは非常に残念です」

数十秒経ち、ゆつくりと目を開けると床に着いた長い髪から埃をはらって立ち上がった。

ぽつぽつと布に覆われた空に向かって呟く声は掠れており、唯一隠れていない右目は微かに潤んでいた。

「無能力者狩り？」

「第一位は世間を知らないようですね。格上の馬鹿が、格下をどう扱うかなんて見ればわかるじゃないですか」

駒場を見下ろしたまま彼は震えた声で吐き捨てる。男のくせに女々しいやつと思っても、どこか神々しくもあるその姿から目を目が離せない。

黒いネクタイと白シャツをきつちり上まで留めた品行方正な着こなしだというのに、彼の体よりだいぶ大きい藍色のスラックスと同じ色のジャケットと童顔な女顔のせいで年相応には見えない。

祈る手は白い手袋で隠され、唯一露出する右目に視線が自然と向く。輝く一番星が煌めく黒い瞳に景色が奪われ、それ以外何も見るこ

とが叶わなかった。

「キミは彼らが馬鹿をやっているから差別されると思われているようですが、内情は少し違います」

瓦礫の多い場所から平たく開けた場所に移動させようと必死に細い体で駒場の大きな体を掴む。機動力はあっても体力や筋力はないのか、ひとり大変そうに汗をかいていた。

闇を知らながらも甲斐甲斐しく死んだ大男に世話を焼く優男を手伝う気にはなれないが、何かするわけでもなくその姿を追う。本当に第六位、藍花悦なのは知らないが、得体の知れない優しさは超能力者^{レベル}らしくはない。

「最初に差別があったから肩身が狭くなり、暴徒と化すのですよ。奴隷であった人々は元の国では平和そのものだったように、奴隷として扱われて、初めて差別を受け、そこから革命が行われた。歴史で習いませんでしたか？」

平らな場所に死体を移すと、彼は再び手を合わせる。

憂いを帯びた気怠い目を囲む伏せ気味の睫毛は少し湿っていた。

「これがその結果です。キミみたいな一定数の格上に馬鹿にされ、それが嫌で自分を強く見せようと群れを成し、暴力を振るう。自分でも分かっているでしょう？言葉の節々から下に見ていることがよく分かるのですから」

「なんですかア？突然来て説教ですかア？随分と偉そうだな？」

「説教をしているつもりはありませんが、もしこれを説教と受け取ったのなら、キミに思うところがあつたということですよ」

駒場の安いジャンパーから取り出した携帯電話を少し弄ると、畳まずにこちらに投げ渡す。

軌道がズレることなく手の中に収まった携帯にはたくさんの名前が無能力者狩りの犯人としてリストに並んでいた。

「能力者による無能力者の虐げは、凄まじいそうですよ」

携帯を渡すと、近くのドラム缶に座って駒場をボーツと眺めて息を吐く。

「キミがどうするかは勝手です。ただ、彼はまだ、ここに置いていつてくたさいませんか」

スキルアウトのたまり場に学園都市屈指のエリート校の生徒が佇む。ただひたすらに駒場の死体を眺める彼にかける言葉は見つからなかった。

「旧友の最期くらい、感傷に浸りたいんです」

右目に輝く星は水分で光を乱反射し輝きを増す。

その瞳を拒むことを本能が許すことがなかった。まるで格上の存在に常識が縛り付けられたように、脳が彼を許す以外の選択肢を与えなかった。

「……まだ残業があるからな、勝手にしろオ」

「そうだ、彼女なら無事です。もう既に家に帰っておられました」

「そオかよ」

事実、0930事件の際木原をしりぞけてもらった借りがある。もう死んだ人間を弔う程度の時間、くれてやってもどうでもいい。

蛇足を伝えて涙を堪えるなよらしい男を背に、杖について仕事へと向かった。

「サービス残業なんて、めんどくせエな」

手にした携帯に肩を落とすと、路地裏から抜け出す。

眩しい太陽に目を細め、新たな仕事に大きく息を吐き出した。

熱が昇る。大きくなる心音に連なつてゆつくりと意識が浮上していく。

血液が体を巡り、正常な機能が再開していくのが自分でもよく理解できた。

「行った？」

「行きましたよ」

徐々に聞こえてくる耳に少年二人の声が届く。

ソプラノが綺麗な知り合いの声と、聞いたことの無い低い男の声。

「その人どうしたの？」

「ちよつと派手に転んだみたい。杠ちゃんは心配しなくていいよ」

そして次に聞こえたのは幼い少女の声。感情の起伏に乏しい声は自分のよく知る大切な少女のものではなく、初めて聞く声だった。

「……………は？」

「残念ですがここは天国じゃなくて学園都市です。キミが死にかけたスキルアウトの溜まり場ですよ」

ようやく開いた目に飛び込んだのはいつものたまり場。

目の前には色とりどりの布で隠れた青空と、藍色の制服を着た黒髪の少年、そして彼に少し似た黒髪の少女。何故か白いカブトムシを頭に乗せた少女のキョトンとした顔にやつと現実を理解してきた。

「……………なぜ、生きているんだ？」

体が動き、脳が思考する。

鉛玉が腹部を貫いた記憶を最後に息絶えたはずだというのに、体は熱を持っていた。

「それはぼくが何とかしてあげたから。ねー、05」

「貴女の演技には毎度驚かされてしまいますね。泣いたり震えたりと……………」

「涙腺弄れば泣くし、体温を下げれば震えるんですよ？簡単な原理ではありませんか」

第六位、藍花悦は喋る白いカブトムシと談笑しながら相変わらず幼い笑顔を見せる。

正義を成すための手段を与えるこの少年とは少しばかり長い付き合いだった。

無能力者の自分にも対等に接する底抜けに優しい少年。

労働と物品にきちんと対価を払い、胡散臭い笑みではあるがいつも尊敬を絶やさず平等に人を見る。もはや異常に近い平等さに気味の悪さも感じるが、超能力者^{レベル5}であることを考慮すれば彼は高位能力者の中で随一の人格者に見えて仕方がなかった。

「……………人を死んだことにするのも、朝飯前ということか」

「はい。心臓を止めて、体温を下げ、血中の酸素濃度を低下させれば死

んだように見えてしまいます。その間ぼくの能力で心臓を使わずに血液を循環させ、脳の動きを止めさえしなければ平気なんですよ」

起き上がって地べたに座ると、長い髪が汚れるのも気にせず藍花は目線を合わせるためにしやがみこむ。

相変わらず人の心を掴むのが上手いやつだ。隠れていない右目に輝く星に、思わずため息が零れる。

「……さすが、お人好しだな」

「いいえ、キミが人を慈しむ良い奴でなければ、ぼくはこんなこととしておりませんよ。よつて、この結果はキミ自身の人徳が掴み取った救済です」

「……相変わらず賞賛を受け取らないな」

「キミが生きていることこそが、ぼくへの賞賛そのものですから」

こんなことを言う少年を巻き込みたくなかった。

遅い後悔に苛まれながら、疲労が消えた健康体を地面から起こす。

「……さて、要件を聞こうじゃないか」

話があると連絡が来ていたことをすっかりと忘れていた。

招かれた客人をどうもてなそうかと考えながら、小さな友人に不器用な笑顔を向けた。

86話： 緑の目の怪物

薄暗くなってきた夕方。仕事を終わらせ豪華な一室に足を踏み入れる。高層ビルの一フロア、天井が少し広い隠れ家に置かれたテーブルを爪先で軽く叩くとそばにいた部下が口を開く。

「もうそろそろでピンセットの情報が集まりそうね」

「……そうだな」

テーブルから離れたソファにマニキュアを塗りながら座る部下、メジャーハート心理定規の言葉に頷くと、大きなガラス越しに学園都市を見下ろす。

綺麗に取り繕っても分かる内部の汚さがにじみ出るこの街が嫌いだった。

常識という言葉で悲劇を正当化させる汚物の塊。そんな世界を好きでいられるはずがない。

しかし不安はあった。

守りたいものができた今、彼女たちを巻き込みリスクを無視してまで反逆はなされるべきなのだろうか。

彼女たちを失わずに生きれるのだろうか。

この街よりも大事なものができてしまった今、自分の計画するこの反逆に恐怖を抱き始める。

なん十万人が住む街が減ぶことより、たった一人の神様を失うことの方が恐ろしかった。

「あら、機嫌悪いの？」

「そう思うなら話しかけるな」

「冷たいわね、一応貴方の部下なのよ？ 悩み事なら聞いてあげてもいいわよ。有料だけど」

マニキュアを塗る手を止めずにからかうように笑う女に舌打ちを鳴らすと別の一人用ソファに座る。

ほとんどの作業を部下にやらせていたとはいえ、これから起こる反逆は自分がずっと望んでいたものはず。けれどあの馬鹿二人の顔が浮かぶとなんだか途端に全てどうでもよくなる。

自分は彼女たちを救えた。たったそれだけの事実が反逆への望み

を薄めていく。

人を好きになった代償は酷く重い。望みが別のものに変えられ、どうしようもなくなる。

巻き込みたくない、傷つけたくない、幸せでいてほしい。

そんな複雑な心情が混ざった一つの『好き』はどうしようもなく頭を悩ませて答えを教えてくれなかった。

「ちよつと、本当に大丈夫?」

「……どうでもいい」

「え?」

「もう、どうでも——」

『取り込み中失礼するよ』

思わず呟いた無気力な言葉に被さるように男の声が響く。机に置かれたままのノートパソコンが点灯すると sound only の表記とともに通話アプリが開いた。

所属する暗部組織、スクールの連絡役。ここしばらく報告のなかった連絡役からきた突然の連絡に微かに驚いて口を閉じる。

まるで言葉をかき消すためだけにきたような連絡がいいものとは思えない。

「……相変わらず唐突に連絡してくるんだなクソ野郎。何か用か」

『ついさっき上から連絡をもらってね。お前が知ってる天羽、いや、藍花悦についてだ』

予感は大いに命中し、今現在買い物に行っている普通の少女の名前を目の前のパソコンが口にした。

クソ野郎が口にしていい名前ではない。

彼女に危害を加えるような上層部が言葉にしていい名前では絶対になかった。

「アイツに何かしたら容赦しねえ」

『何かするのはお前の方なんだがな』

「あ?何が言いたい?」

『簡単さ。藍花悦をここに連れてきて欲しい』

「んだと?」

身構えていた体が男の声にさらに強ばる。何を意図しているのか分からぬまま彼女についてのくだらない話が続く。

『ハウンドドッグ 猟犬部隊を潰したのは彼女だ。落とし前をつけてもらわなくてはね』

「ほとんどは一方通行が殺したんだろ？だからアイツは暗部に墮ちたと聞いたが？」

『いや。彼が暗部にきたのは街の損傷のため。ハウンドドッグ 猟犬部隊はあまり関係がない』

知らなかつた事実に苛立ち、足を組み直す。

腹立たしくても感情に乘せられては負け。クソ野郎の前で失態は見せられない。

『藍花悦はハウンドドッグ 猟犬部隊の半分をこちら側の命令を聞かないように洗脳してしまった。生きているとは言え、もう使い物にならない彼らを処分するのだから金がかかる』

「だからアイツを使って金を稼ごうと？いい性格してんじやねえかクソが」

『そんなに褒められてもね。それに君も嬉しいだろう？好きな女と同じ職場なんて』

しかし男の言葉に感情は簡単に崩れそうだった。

「黙れ、テメエに何が分かる」

『不安かい？彼女に人殺しをさせるのは。でも、九月三十日、君がセブンスミストで彼女を引き止められていれば、こんなことにはならなかったかもしれない。奥手な自分を呪うんだな』

「クソ野郎、内臓全部引き摺り出して欲しいみてえだな」

少しずつ強まっていく口調に呆れてしまう。どうしてもあの女に關しては感情が強くてしてしまうようで、わずかな時間で我慢の限界に達してしまいそうだった。

『それに、これは統括理事会直属の命令なんだよ』

「はあ？」

『今並べた理由はただの言い訳、本質じゃないってことさ』
「何が言いたい？」

『君達が何を企んでいるかは知らないが、上層部はそれに彼女を参加させたらしい。たとえ君が嫌がってもね』

電話相手の単調な声に息が止まる。全てを見透かされたような言葉に怒りと苛立ちが一気に沸き起こるにも関わらず、馬鹿みたいな女の顔を思い出して辛うじて言葉を飲み込んだ。

「……あいつを暗部に入れることで俺らを見逃すって言いたいのか？」

『そこまでは言わないが、上層部は何か彼女に期待しているのは確かだよ』

無機質な音声が窓に響く。考えたくもない言葉の数々に唇を噛んで耐えるしかない自分が情けない。

『君とは少しばかり長い付き合いだ。だから忠告しておこう、あの少女に情が湧くと破滅するのはお前だ』

苛立ちで部屋を半壊にする前に通話が切れる。やり場のない怒りに立ち上がり地面を強く踏み鳴らすとガタンと音を立ててノートパソコンが揺れたテーブルから落ちた。

「クソが……！」

歯を強く噛み締めて拳を握る。苛立ちしか見当たらない感情をどうにかしてしまいたい。

純粹無垢な少女をこちら側になど連れてきたくないというのに、現実には非情である。

「藍花悦って女性なの？彼女って言ってたけど……」

「彼女のことを口にするな」

「っ」

苛立ちを募らせながらドアノブに手をかける。あの女について興味を示す心理定規メジャーハートの言葉は今の自分にはムカつく以外の何物でもなかった。

「藍花悦について余計な詮索したら殺す。引き続き仕事に専念しろ」

それだけ吐き捨てて帰路に着く。はやく会いたいと足早に部屋を後にした。

花のような少女の安否だけが頭にぐるぐると廻り続けながら。

買い物も済まし、大荷物を両手に持ちながら暗い学園都市を歩く。街灯に照らされて明るいとはいえ、女性が歩くのには少し心配な時間、人の姿に戻って車のない車道側を彼女のために歩いていた。

「なあーんか、嫌な感じ……」

「どうかされました？」

「なんか、悪寒がするの。第六感が嘔いてるってどうか」

杠林檎を抱き上げ、長い黒髪を夜風に揺らす少年のような少女は眠そうに気怠い目を細めて頬を膨らませた。

藍花悦と言えればいいのか、天羽彗糸と呼べばいいのか、胸を押し潰しマスターの青い制服を借りている彼女はいつもの元気ハツラツとした少女の姿ではなく、少し気まずい。

人工生命体に気まずいという感情があるのがおかしい気がしないでもないが、それでも気まずいと形容するしかない。

「どこか痛い……？」

「違うよー。気にしないで寝てな、色々回ったから疲れたでしょ？」

「子供は眠くなるのも早いですしね」

保護対象の平たい胸の中で微睡みながら杠林檎が呟くと手袋をつけた手で頭を撫でる。

まだまだ成長期、少しずつ回復しているとはいえ子供の健康体からは遠いところにいる杠林檎には夜とはいいきれない時間でも眠くなくなってしまいううだ。

「寝なくても平気」

「眠そうな顔で何言ってるの。明日お料理するんでしょ？」

「うん、お菓子つくる……」

「だから早く家帰えって寝ちゃお」

一緒に遊ぶと約束した通り、女性二人で楽しそうに明日の予定を立てながら薄暗い夜道を歩く。

眠りが近い子供のとろけた声と優しい女の声が夜に響いた。

「ん……ふふ、お揃い」

「なに？髪の手？」

「ちよつと、嬉しい……」

夜空に溶け込む長い黒髪を握って杠林檎は目を瞑る。

寝息をたてて首元の髪に埋もれる彼女の背中を優しく撫でるときらに穏やかな顔になっていく。

「寝ちやったか」

「微笑ましいですね」

「ほんと、子供って可愛いわ。アンタたちも含めてね」

まだまだ家につかない長い道のり、眠ってしまった少女を抱えて保護対象は笑う。

困ったように眉を下げてはにかむ彼女の言葉になにかプライドと似たような何かがかかる。

子供と呼ばれるのは、非常に不本意だった。

「子供じゃありませんが」

「何を言う。未成年は立派な子供。大人が守るべき大切な存在よ」

「あなただって未成年ではありませんか」

「どうせ垣根くんと同期して話全部聞いてんでしょ？言いたいことわかるよね」

「……二十四歳だって、子供ですよ」

「アンタたちより大人だよ。なんならこの世界での年齢も足す？アラフォーだよ、アラフォー。垣根くんのお母さんでもおかしくない年齢なんだよ」

勝ち誇った笑みを見せてこの間の話を掘り返す。

決して大人には見えない笑顔は彼女の言う『実年齢』とやらにはそぐわない。

「アラフォーは高校生の母にしては少し若すぎるのでは？」

「あたしのお母さんは十五であたし産んだけど」

「マイナーな具体例出すのは卑怯です」

「でも本当のことだし。ほら、ママっぽく見える？」

一等星の輝く瞳で笑う。杠林檎を抱きしめて佇む姿はなんだか面白くない。

自分の保護下にいて欲しいのに、誰かを守る母になんてなってる欲しくなかった。

「……どちらかと言うと年の離れた姉妹みたいですよ」

「まあそうね、あたしは母ではない。姉ではあってもね」

言葉を濁して再び歩き出す。杠林檎の寝息がはつきりと聞こえる静寂に足音が響いた。

居心地の悪い空間が酷く恐ろしい。

「ん？」

少しばかり歩いた先、夜の暗さに負けない赤いポストが見えてくると、どちらが先か顔を見合わせる。

沈黙を破って二人見つめる先には茶髪の間人が落ちていた。

「……なんか、人が落ちてますね」

「もしかして……急アル？ちよつと、杠ちゃん見てて。あとタクシーも」

「分かりました」

眠る杠林檎を静かに移し、携帯を渡して飲んだくれと思われる女性に血相を変えて駆け寄ると優しく女性の背中をさする。

素早い対応は職業柄か。

「お姉さん大丈夫ですか？」

「あれえー？おにーさん、会ったことあるうー？」

「げ、御坂美鈴……」

買い物袋を下ろし、渡されたスマホに入った専用のアプリでタクシーを呼ぶ。住所を入力するだけでタクシーが来るのはありがたい。

しかしその僅かな時間に保護対象は茶髪の女性の素性を理解する。

第三位によく似ているその人は大覇星祭で出会った御坂美琴の母、御

坂美鈴だった。

「げ、ってなによぉ〜！おこらせると、ちゅーしちやうぞぉ〜！んちゅ〜！」

「やめてください、警備員呼びますよ」アンチスキル

「保護対象、大丈夫ですか？」

ポストから抱きつく対象を変えると、勢いよく青い制服を捕まえようと両腕を伸ばす。もう少して唇が触れる距離、荷物がなければ助けられるというのに杠林檎を抱えた自分には文字通り手も足も出なかった。

しかし心配は杞憂で終わる。

珍しく舌打ちを鳴らして軽やかにかわすと、保護対象は怒ったかのような顔をして眉を顰める。

「帰るよ。杠ちゃんのためにも早く帰らなきゃ」

「え？帰るのですか？」

「タクシー呼んだんでしょ？急アルの心配は特にないから置いて行って平気よ」

「ええー、いっちゃうのお？」

足早に立ち去ろうと踵を返すが、再び彼女の細い腰が御坂美鈴に抱きつかれたため歩みを止めざるを得なかった。

どうやら腹が立っているようで、彼女と関わり合いたくないと全身から苛立ちが感じられる。

少し雰囲気の違い保護対象の顔は顔を覆う前髪のせいで見えなかった。

「……自分の許容を理解してか知らずか自制心を働かせないでこんなことになるまで呑む大人は嫌いなんです。夜勤の看護師や医師はさらに嫌ってるんじゃないですかね？」

大きなため息を着くとハッキリとした女の声で苛立ちながら呟いた。

ぴりぴりとした空気が張りつめ、彼女の言葉が終わるのを待つしか出来ない。御坂美鈴もそれを感じ取ったのか恐る恐る腰から手を離す。

強い怒りに圧倒され、その場から離れることが出来なかった。

「そもそもここは学生の街ですよ？ 昼間だろうが夜だろうが、迷惑をかけるのは高い確率で子供だと分かっているはずなのになんでここまで呑む？ アンタ、母親なのにそれでいいわけ？」

「……えつと、ふえ？」

「あたしはね、子供はもちろんたとえ大人でも信念のある、誰かのための仕方の無い迷惑なら赦すよ。それが役目でもあるし義務でもあるからね。けど、こんな自暴自棄で誰のためにもならない迷惑はどんなものであるかと容赦しないから」

怒気を含んだ声が誰もいない道にこだまする。

初めて見る彼女の怒りは随分と説教臭くて物凄く恐ろしい。平坦な声で淡々と事実と正論を容赦なく大人の女性に叩き込む姿はいつもの彼女とはかけ離れていた。

「酒ってのは適量飲めばいい効果は得られるけどさ、薬と同じく沢山飲めば毒になるの。計算能力も空間把握能力も、あまつさえ理性もなくて、さつきのアンタみたいに未遂とはいえ未成年相手に性的接触を求める馬鹿がでてくるわけ。子供にトラウマ植え付けて楽しい？」

「そういうつもりじゃ……」

「大体ね、子供がいる母親が他人の子供に迷惑をかけるようなことをするなんて、自分の娘がそんな目にあつたらどう思うとか考えないわけ？ ここにいる全員が人様の子供ってこと忘れてんじゃ——」

「保護対象！ 泣きそうなんでそろそろ……」

畳み掛ける正論を酔いから覚めたのか正座をしながら聞いている御坂美鈴の傷ついた顔に慌てて保護対象の口を塞ぐ。

ヒートアップしていった説教は正論すぎて現状では悪手だった。

「……はあ、そんなに泥酔して娘に恥ずかしいと思わないの？ 言っとくけど悪いのは酒じゃなくて一人の親のくせに自分の許容が分かってないアンタだからね」

「迷惑かけて、すみません……」

地べたに正座で項垂れる御坂美鈴はどう考えても傷ついており、今回ばかりは保護対象が言い過ぎだ。

正論は人を傷つける。いつもの優しい対応とは違うきつい対応に少し唾然としていた。

「あたしもお酒好きだから呑むなどは言わない。けどね、自分の適量が分かってないと痛い目見るのは自分自身なんだから。何かあっても大学生とはいえ子供抱えた親は『仕方ない』じゃ済まされませんよ」「はい……すみませんでした……以後気をつけます……」

「絡んだのがぼくで良かったですね。うちのお姫様達に手を出していたらどんな手段をつかってでも豚箱にぶち込んでいましたよ」

落ち込む御坂美鈴に罪悪感に似た感情を覚えながら保護対象の横顔に目を移す。

「なんでそんなに今日は怒っているのです？お酒に悪い記憶でも？」

「酒、というより酒のせいで性衝動を抑えられなくなる馬鹿がね。幼い妹がいると過敏になるもんなの」

「あー……女性は特に気をつけた方がいいですね」

やはり気が立っているようで、落ち着いた今でも節々に怒りを感じられる。

未だに眠る杠林檎の体を返せと両腕を広げる彼女に優しく体を預けると、先程の穏やかな顔に戻った。

ここに杠林檎がいたからこんなにも激怒したのかと、少し的外れな彼女の怒りに寂しくなる。

キスをされそうになったのが嫌だったと言えはいいのに、杠林檎やほかの子供に危害が及んだら嫌という理由で彼女はここまで感情を顕にした。

自分も嫌なはずなのに、最優先に他人を思う思考にどこか嫉妬してしまう。

自分の心配をして欲しい、他人なんか許さなくていい。

まだファーストキスを奪われたことに嫌悪された方がよっぽど人間らしくった。

人間的に出来すぎた人はとても気味が悪い。

「ごめんなさい、知らない人にこんなことしてしまって……」

「いえ、あたしも言い過ぎちゃったし、ごめんなさい。お詫びにアナタ

から不安と火の粉を取り払ってあげる」

まだ酒が抜けてないのか、ふらふらとおぼつかない足で立つと焦点の合わない目で深々と頭を下げる。

杠林檎を抱いてやつと本心から落ち着いたのか、ズボンのポケットから小さなリモコンを取り出していつもの朗らかな笑顔で笑った。

「何にもしないで、ゆっくりお休み。起きた頃には全て終わってるから」

「え？なんの話を——」

音を鳴らしてボタンを押すと、保護対象と同じ輝く星を瞳に咲かせて御坂美鈴は地面へと倒れ伏す。そのまま来たタクシーに投げ込み、御坂美鈴が運ばれていく様子に言葉が出ない。

意味は分かるが意図が分からない言葉の羅列。目の前の光景に予測が建てられず思考が止まり、何をいつているのか理解が及ばなかった。

「上書きしたからもう問題はないよ。なんたら運動つてのも、超能力者の親無しじゃ無力だろうしね」

「あの……なんの話ですか？」

「別に、火種を消しただけ。面倒事は起こる前に潰すに限るじゃん？」
「火種、ですか？」

何が起きているのか分からない。しかしたしかに分かるのはまた知らない未来を防ぐために何かをしていることだけ。

おぞましく深い黒に瞬く眩い星が極彩を放つ。

その瞳の色を直視するのは心臓が焼けるように痛かった。

「そう、主人公を産まないためにね」

彼女の考えることはまるで分からない。

人形のような不気味なすまし顔を、不自然なまでに機嫌を良くして笑顔を作る姿に息を呑む。

子供を抱える優しい姉の顔をした綺麗な人が暗い夜の中、白い街灯の下で藍色の少女が静かに微笑んだ。

「05、帰ろっかー」

恐ろしい女だった。

誰にも言わない秘密を抱え、心を掴んだまま飢え殺す。

そんな女のために生まれた事実が心臓を抉り心拍数を上げていく。確信した男心を振り回し、子供時代の飢えを潤して心の隙間に入り込む。

上目遣いと上から目線。悪魔のような女で、天使のような母である。

邪智暴虐で自分本位の完璧な神様が目の前にいた。

心臓が酷く痛む。不愉快な感情に苛まれ、ただひたすらに苦しかった。

私の全てはおぞましい神様のもの。

なら彼女は――

外伝：ハイエナ

十月三日も滞りなく終わり、翌日の朝。何事もなく朝を迎え、同居人垣根くんから奪い取ったシャツとズボン上から簡素なエプロンをつけ朝の仕事をこなす。

ご飯の支度、洗濯、掃除、前世も合わせれば三十年近くこなしてきた家事を一通りこなし終わり、忙しなさも落ち着いた頃、一枚の封筒を手に最後の仕事へ向かった。

「はい、これ」

「あ？」

「藍花悦のID。好きに使って」

厄介で暗い仕事に行く前、玄関先で子供がみていないタイミングを図り茶色い封筒を垣根くんへと手渡した。

中身は自分についての全ての権限、全ての情報が詰まっているとても大切なもの。死んでも手放してはいけないような大事な書類。

でも死んでしまったらそれはただのゴミクズだ。存在しない人間に権限や人権なんてない。

ならば死んだ後、誰かのために使って欲しい。誰かの幸せのため、あたしは骨の髄まで使われないから。

目の前に好きな人に自分の全てを渡すことに胸が高鳴り、喜びがさらに増していた。

「……ああ、どーも」

しかし自分の高揚感とは逆に彼は機嫌悪く封筒を手を取った。

自分だけが浮き足立っている現実を目眩がする。新しく出来た手駒に喜んでくれると思ったのに、予想外の反応に困惑する他ない。

想像とは真逆の態度に舌は乾いて、言葉は消えた。

その言葉から数時間経ったあと、未だに彼の素振りに混乱しながら小鍋に火をつける。

「垣根くん忙しいのかな」

「……なんでそう思うの？」

「だっていつもよりそっけなかったからさ」

水と糸状の寒天を煮詰めてため息を着く。

太陽が頂上に近づく頃合い、小綺麗なキッチンの前で二人と一匹はお菓子を作っていた。

必要な材料の計りと容器の準備を任せていた杠ちゃんはあたしの小さなぼやきにクッキングシートを手に首を傾げる。

可愛くエプロンをつけた彼女の頭を優しく撫でると嬉しそうに目を細めた。

「マスターにも色々あるのですよ」

「何、知ってるなら教えてよ」

「嫌です」

ヘラで混ぜると溶けていく鍋の中身に注意を向けながら手元で休む白いカブトムシをつつく。

硬い羽を優しく爪で弾くと05は緑の瞳を閉じて小さくため息をついた。

「教えて」

「教えません」

「ケチ」

「可愛く言ってもダメです」

「吝嗇家！りんしやく」

「言い直しても無駄です」

何を言っても05は硬い防御を崩すことなく口を閉ざす。絶対に口を割らない姿勢を崩さず耐える05にこれ以上何を言ったって無駄だと悟り、傍らにある砂糖を手にとった。

計りできちんと測った砂糖の山を鍋に注いで掻き混ぜる。透明な液体は砂糖によって濁り、鍋の底が見えなくなっていく。

「クッキングシートひいた？」

「うん。できたよ」

全て溶けきってクリアになった鍋の中身を用意していた二つの小

さいバットに流し込むと、空気を抜くため軽く底をで叩く。

綺麗に平になった二つの砂糖と寒天の水を前に、それぞれ爪楊枝に着色料付けて作業に乗り出した。

「杠ちゃんは何色にするの?」

「たくさん使う」

「虹色?綺麗になるね」

「天羽は?」

「赤。綺麗かなって」

食紅をすこしとって透明な液体にランダムな模様を作っていく。紫も少し入れて美しい赤を彩る。

何も無い所に生まれた赤にぼんやりと秋色のスーツを着た好きな人が思い浮かび、関係もないのにまたも今朝のことを思い出して素っ気のない悩みが膨れ上がった。

「でもどうしたのかなあ……ほんと。なにかあったのかな……」

「垣根のこと?」

「うん」

大人であり姉である存在として悩みがあるならば聞いてあげたい。

けれども無理やり聞くのはなんだか違う。

もどかしい。

何も出来ない自分が不甲斐なくて歯がゆかった。

「貴女とは住む世界が違います。分かるでしょう?」

「まあ暗部はねえ……色々面倒くさそうだよね」

住む世界が違う。それは次元ではなく道のこと。

そもそも住む世界が違っていた自分には鼻で笑ってしまうような言葉だが、暗部という世界はヤクザやマフィアに近い性質を持つ学園都市直属の自治警察、勝手が違いすぎる道は人から見れば別世界の話にしか聞こえない。

色々なことを知っていても結局自分がいる場所は暖かい光の中、暗いところにいる人の心情を誠に理解出来るかは不明だ。

「でも、前会った子達はそこまで……いや、分かんないか」

「は……?会ったとは?マスターや一方通行以外で?」

しかしそこまで思った所で随分前に出会ったことのある少女達を思い出す。

華やかな女の子が多いひとつの組織。腐敗臭がしそうな名前をした四人組の顔をふと思いつくと、05は慌てて頭に飛びついた。

硬い身体が頬にめり込む。

虫の細い足が頬を歩く感覚はモゾモゾしてくすぐったかった。

「あー、ちよつと前に……聞く?」

「聞く!」

「あれは一方通行アクセラレータを狙って病院が襲撃された時の話なんだけど……」

赤に色づき熱が無くなった液体を冷蔵庫に入れてゆっくりと話し始める。

少し前の九月中旬の話を。

それはまだ蒸し暑い九月のこと。

能力のおかげである程度の暑さは紛れるものの、じめじめとした日本特有の暑さにはニューヨーク生まれの体は悲鳴をあげていた。

「ええ? 暗部組織をあたしが見つけると?」

クーラーが効いた涼しい部屋、湿気も暑さもなく快適なこの部屋で、カエルに似た顔の医者が頷く。

「同じ時期に超能力者レベル5の一位と二位が関わる事件が同時に起きるなんておかしいにも程があるだろう? もしかしたら君の大切な子がまた狙われるかもしれないんだ、やってくれるね?」

「そうですねえ、一方通行アクセラレータを狙うのも困りますし……でもこちらのD Aは吸収しちゃいましたし、上層部なら先生の方が詳しいんじゃないやありません?」

「素性を調べて危険性があるか遠くから見極めるだけでいい。君の能力なら戦う前に戦闘不能に追い込むことができるし、それくらいなら問題なからう? 本当は話を聞き出してもらいたいが……そこまでは

言わないさ」

朝早いこの時間、冥土ヘンキャンセラ帰しから話があると云われて来てみれば面倒な仕事を押し付けられただけだった。

関与していないスピンオフの皺寄せ、自分がいる故の新しい業務は面倒にしか聞こえなかった。

「一方通行の事件に関与した暗部で生き残ってるのはおそらく一つだけ。その子たちを見てきて欲しい」

「はい、やりますよ。しがないバイトですし、拒否権はないですもん」

「バイトはバイトでも、君は特別なバイトくんだね？とにかく、いい報告を期待しているよ」

書類を手渡され大きくため息を着く。面倒なことを押し付けられたとただただ肩を落とした。

そして向かったビルの上、渡された情報に軽く目を通しながら目的地を遠くからこつそりと眺めていた。

名前は屍喰部隊スカベンジャー。英語で言えば scavenger。

発音はスカベよりスキヤヴェに近いのに日本語つて変だよねとか、自分達をミミズやらゴムムシやらに例えられて嫌じゃないのかどうか、色々言いたいことはあれど、資料にある顔写真と一致するか確認しながら欠伸をする。

まず目についたのがリーダーの飯棲リタ。

小萌せんせーにデザインが似ている少女で、幼い顔を両手がデザインされたマスクで覆っている。

背が一番低く、幼い子だが他のものをまとめあげて作戦を指揮しているようだった。

その次に嫌という程目に入るのは作楽木ナルハ。

美大に居そうな紫髪の少女の左頬にはドク口のタトゥーが入っており、凶暴そうな兎の着ぐるみを半裸に近い危なっかしい格好で手足

だけ動かしていた。

将来はプロダクトデザイン系か、彫刻系か、能力で作り上げたそのうさぎはぬいぐるみにいてもおかしくはなさそうな完成度だった。

その少女の後ろ、爆発物が何かを投げける子に目を向ける。

薬丸医月。名前から攻撃方法が推測できる暗部的にはどうなのか問いたくなるのを堪え、大きな帽子で髪を隠した少女を眺めてため息を着く。

薬品を扱うキャラクター、病院で勤務して薬品の取り扱いが大変ということを知っている自分にとっては少し心配になる子だった。

最後に清ヶ太郎丸。黒髪ロングが綺麗なセーラー服姿の女装男子。

藍花悦とキヤラ被ってる感じがしなくもないが、それ以外は特筆すべきところはない。

強いていえば舌に着いたドクロのタトゥーぐらいか。なぜ内臓にそんなことをしたのか聞きたくなるが、痛そうなので経験談はあまり聞きたくない。

「……変なところないし、帰ろ」

スキルアウトを処理する仕事を頼まれたのか、廃墟のなかで不良たちと仕事を続ける彼女たちに飽きて座っていた屋上の柵から立ち上がる。

報告を済ませて杠ちゃんの病室へ向かわなければとビルから身を乗り出した。

その時視線に気づく。遠くに見える少女たちの目と目が合った。

「あれま、どうなるかな」

飛び降りたビルの下、衝撃からくる損傷を一瞬にして治して歩き出す。彼女らがどう出るか少し楽しみに思いながら路地裏を進む。

一歩一歩、誘うようにゆっくりと。

「誰？アンタ」

「お姉さん？お姉さんはただの通りすがりの女子高生だよ」

そして少年なのか少女なのか分かりづらい声が路地裏に響いた。

先ほど眺めていた少女たちが狭い道の左右を塞ぐ。明らかな敵対心がそこにあった。

「さっきの目標の仲間かなあ。どうする？リーダー」

「目撃者は潰さなきゃ。ただでさえ次にヘマをしたら首が切られちゃうからね」

「了解！」

紙が舞う。紙吹雪が薄ピンクの大きなウサギに変化すると、巨大な手が自分目掛けて襲ってきた。

紙にしか効かないサイコキネシス。戦うには少し面倒な相手だった。

「戦うつもりはないんだけどな」

「そう言ってるのも今のうちっ、キッツ!」

威勢良く向かってきた着ぐるみの手は、この体に触れる前に勢いを失い力を失い倒れ臥す。

触らずとも簡単に他人を弄れる能力の恐ろしいところはどんな人間でも戦う前に殺せることである。かといって殺すことはしない、せいぜい眠る程度だ。

垣根くんはテレスティーナさんが杠ちゃんに近づかないかの監視、05は杠ちゃんのそば。そして今後会うこともないスピノフのキャラクター達。

ある程度本領を発揮したってそこまで支障はあるまい。

「ツ、ナル！薬丸、行って！」

「このっ！」

今度は液体の入った薬瓶が頭目掛けて飛んでくる。化学室で見かけるような細長い試験管が宙を飛ぶ。

分離した中身が混ざり合う前、ギリギリの状態の薬品はどう考えても危険な物品だ。

「邪魔」

ならば、投げた彼女が理解する前に掴んで投げ返せばいい。一秒のうち120mもの速さで電気信号は送受信される。

ならば一秒も満たないうちにそれより早く動けばいい。

自分の脳の送受信をさらに早めて投げられた試験管を掴み腕が千切れるほどのスピードで少女たちの隙間に投げ返す。

腕を犠牲にする一瞬の必殺技。大きな帽子をかぶった薬丸ちゃんの頬を試験管が掠めて後ろで爆発した。

大きな音と熱が轟く。

「……………へ？」

「あたし、人に頼まれてアナタたちに会うよう頼まれただけなの。見逃してくれないかな？」

「デメエ!!」

驚きのあまり地べたに座り込む薬丸ちゃんに、隣に立っていた清ヶちゃんちやんがスケートをするように走りだす。

摩擦を感じさないう走りです。能力によってできる移動に関心を覚えるも、すぐに目の前の状況に思考を切り替えた。

「摩擦係数の変動か。でも、それは体の中にもあるんだよ」

「っ、あ？」

「関節が動くのは摩擦のおかげ。それを無くしたら、転ぶのは目に見えてるよね？」

腕を広げて迫り来る少年に笑う。

少し体を弄れば、転ばせて動きを奪うことくらい造作もない。

「あッ！」

「つつかまえた」

伸ばした腕で倒れかけた彼の頭を受け止めて衝撃を和らげる。

そこそこ長い黒髪を優しく撫でて硬い生地せうちのセーラー服に顔を埋めさせて抱きしめた。確かに骨ばった骨格は少年な感じがする。

「よしよし、痛くなかった？」

「……………へ？」

「で、最後はアナタだけだ。どうする？」

「な、なに、何が目的だっ！こんな能力、聞いたこともっ！」

抱きしめたまま最後の一人に視線を移すと、小さな子供が震えながらマスク越しに叫ぶ。

悲痛な叫びは予想とは反していて、すこしだけ心の中では焦っていた。

「あ……………前、アクセラレータ一方通行くんにちよっかい出したでしょ？またちよっ

かい出ささないか最近の様子を見てくれってお願いされてね。邪魔するつもりはなかったの、ごめんね」

「あ、アクセラレータ一方通行……？お、お前、第一位の手先かッ……」

ありのまま正直に話すのが、安易に出したアクセラレータ一方通行の名前に意識のある全員が震え上がる。

PTSDにトラウマを抉る言葉はNGだと分かっていたのに、軽率な言葉がこの場の空気を酷いものへと変貌させた。

「そんな、そんなこと！絶対にしないっ……！」

「だよねえ……」

やってしまったと、軽々しい言葉に後悔する。

どうにかして彼女たちの気分を元に戻さなければならぬ。

どうすれば？暗部の子供は何を求める？普通の子供ではない彼女らは何をして欲しいと思うのか。

「そうだ、お詫びに今日だけ君たちのお手伝いしてあげよう」

「……え？」

考えついたのはなんとも簡単な答え。今日だけの体験入学を決めてしまった。

「あの、ほんとに来るんです？」

しばらくした後、彼女らを起こして向かったのは次の仕事先。

病院から少し遠い名前も知らなかった研究所に不法侵入して白い廊下を進む。お詫びとしてここに来てしまったが、果たして本当にこれが良い判断だったのかは分からなかった。

「ま、まああそこまで戦闘能力があるなら使い物にはなるだろうし……」

「怪しいだろ、どう考えても」

後ろを歩く屍喰部隊スカベンジャーの子供達はコソコソと互いに話し合う。特に女装男子の清ケちゃんはずっとあたしを睨んでいた。

「今回だけだから気にしないで。数分後には他人に戻るんだから」

「お姉さん嫌いだから、あんま一緒に居たくないんだけど」

「それは残念。でも、はつきりモノを言えることはいいことだよ」

「なんか、そういうところが嫌。強くて怖いのに可愛いくて優しいから嫌いになりきれなくて嫌い」

「嫌いなのに褒めてくれるの？ありがとうね、ウサギさん」

唯一警戒心も少ないナルハちゃんが顔を覗き込んで顔を顰める。

紫色の髪が綺麗な彼女が頬を膨らますとドクロのタトゥーも同じように膨らんだ。

子供らしい表情は可愛くて微笑みが浮かぶ。

「それで何をするの？」

「あー……横領と情報の横流しをした研究員の殺害。その場では殺せって」

一度仕事内容をきちんと確認しようとするナルハちゃんとの談笑をやめて後ろにいるリーダーちゃんに向き直る。

嫌々と言いながらも携帯を手にして遠慮気味に体を寄せる彼女の姿に微笑みながら携帯を覗く。そこには対象の個人情報から健康上のバイタルや基礎情報まで記載されていた。

男性、A型RH＋、低身長、近視、喫煙家。こと細やかに書かれた情報に少し呆れてしまう。

こんなぼつと出の女に簡単に教えるだなんて、この標的は誰に殺されてもいいような人間だったのだろうか。

気の毒だが誰のためにもならない悪いことをしたのなら、それ相応の責任を取らなくてはいけない。

ただ、その責任はこんな子供に委ねるようなものではない。

ここは最悪な世界。

この都市は嫌いだ。大人がやるべきことを我儘で押し通して子供に押し付ける。

同じ大人として、彼らを軽蔑するのも無理はない。

「うーん、人を殺すのは立場的に無理だから、そこまで送り届けてあげる。それでいい？」

「でも、どこにいるかなんて……」

「ここにいるのは確かだし、こうしよう」

「えっ？」

死に関与するのはとても嫌だったが、彼女たちのトラウマを刺激したり倒したりと酷いことをしてしまったのは自分。

落とし前はきっちり付けるべきだろう。

最悪な世界の身の振り方は分かっている。

「――！」

声にならない叫びを放つ。人間には聞こえない特殊な音を喉の中身を変形して絞り出すと、跳ね返った音を受け取ってある程度の構造を把握する。

3D立体ならば把握するのは簡単だ。

方向音痴でも出来る。いや、あたしは方向音痴じゃないが。違うが。

「なにをしたの？」

「エコーロケーション。あたしの能力じゃ生き物の居場所は分かって
も建物の構造は分からないからね」

「た、建物の構造が分かったって意味はないじゃないか。本人が分からなきや……」

「これだけの情報があればホルモンバランスと体の異常である程度絞れるもんなの」

受け取った波紋に構造を把握すると、現在感知している男の現在地と照らし合わせる。

ニキ口先までなら高感度で探せる万能な能力に感謝しなくては。

「見つかったよ」

それだけ言って場所へと移動する。長い廊下を進んで道を曲がり小さな倉庫へ。

倉庫、というよりも情報データベースと言うべきか。

大切な情報を紙だけで残している随分とセキュリティ意識の高い古臭い研究所に見えた。

「う、うそ……ホントにいた……」

ドアを開いた先にいたのは白衣を着た男。見せてもらった情報に一致した普通の研究員だった。

「な、なんだお前は！おい、セキュリティはどうなって——」

「あー、ごめん。早く帰りたいからお喋りは御遠慮するね」

「ーッ!?ガッ、こえ、がつつッ、!?!」

噛み付くように吠える男の喉を諫めてその場にお座りさせる。

無様によだれを垂らしながら膝を着いた男に背を向けて屍喰部隊スカベンジャーちゃん達に向き直ると笑いながら倉庫から一歩外に出た。

「はい終わり。あとはあなた達でどうにかしてね」

目標までは連れていく約束は呆気なく達成された。

優しく笑ってそのまま帰路へと向かう。少し不思議な体験に機嫌よくなりながら足を進めた。

研究所を出て、病院までの道のりを行く。完全下校時刻を過ぎ、日が傾いた時間の空は赤と黒が混ざって綺麗だった。

「あ、あのッ!!!」

帰る足を誰かの声が止める。先ほど聞いた子供の声、別れて間もない声に止めた足を軸に振り返った。

振り向いた後ろ、そこにはショートカットとマスクの小さい子供が道の先に一人立っていた。先ほど別れた組織のリーダーは肩で息をしながら暗い道の中、街灯の明かりに照らされて真っ直ぐ目を見つめる。

「あれ?まだ手伝った方が良かった?」

「お姉さん、強いし一緒にいてくれると心強いんだけど……ぼくたちと先生退治をしてくれると嬉しいんだけど!」

手伝いが必要かと思っただが内容はただの勧誘。大人嫌いの子供による可愛い反抗だった。

「……そうだねえ、確かに先生は好きじゃないかな」

考えてみれば、この世界にまともな大人はいない。

ひとけのない場所とはいえ屋外で堂々と年頃の少女を着替えさせる倫理観のない先生。

大人としてじゃんって口癖はやばいんじゃないかと心配になる先

生。

暑いと脱ぐ先生。

他人の娘と息子を蔑ろにして娘を助ける踏み台にする自己中が過ぎるダブルスタンダードで愚かな男。

現実なら本当に大学やら教職課程を受けたのか疑問に思うほどのやばい人達。

「じゃあっ！」

「でも、誰かを救おうとしているのは確かだ。蔑ろにした先生が嫌いなのはよく分かる。でも、あたしは人間を心から嫌うことは出来ないかな」

それに、結局のところ全部フィクション、本当に存在してもいない人間に大学経験を求めても無駄なのだ。

フィクションでも人間は愛している。でもフィクションだから多くは求めない、何も望まない、何も願わない、何も期待しない。

現実を生きたこともない薄っぺらいピクセル二次元のキャラクタの塊に何ができる。

「お嬢さんたちの気持ちも、大人の気持ちも知った上で、あたしは両方が納得する答えを自分を犠牲にしても考えたいの。だからごめんね」

言葉も脳内も全て本心である。

彼女たちとはきつと馬が合わない。だから背を向けて歩き出す。

この場にこれ以上いてもあまり意味がなかった。

「じゃあ、最後！名前！名前聞いてないッ！」

「……名前？」

最後と言われ、もう一度足を止める。もう二度と合わない子供に名乗る名前などなかったが、次に会うことはない彼女を少し驚かせようと邪気が湧く。

誰も聞いていない静かな道、ヘブンキャンセラー冥土帰しに渡した盗聴器スマートフォン、たった一人しかいない観客の前ならば平気だろうと口を開いた。

「藍花悦、悦でいいよ」

振り向きざま髪が勢いよく黒に染まり、くるぶしまで伸びる。先に残った桃色が霞むほどの深い黒が赤い空に散らばった。

「あい、は……ッ第、六位……！」

「みんなには内緒だよ？」

驚く顔に困ったように笑い、口元に人差し指でバツを作る。

静かになった道を辿り、そのまま二度と彼女らと会うことはなかった。

「つてことがあってね。可愛かったんだよお、なんかすごい初心な感じで！」

冷えきったバットを二つ冷蔵庫から取り出すと、まな板の上にひっくり返して包丁を手を取った。

綺麗な虹色と、透明な赤の二つの板。先に虹色を手にとつて小さく切り分けていく。小さな虹色の宝石がまな板の上に転がっていった。

「天羽って色んな人と知り合いだよね。ね、猫さん」

小さく切り分けた塊を一つ、黒猫を抱えた杠ちゃんのように放り込むと彼女は嬉しそうに目を細める。琥珀糖と呼ばれる綺麗な砂糖の塊、甘さしかないこのお菓子を彼女はお気に召したようだった。

「たまに思考回路イカれることありますよね、貴女」

「え？そっかなあ。普通じゃない？」

次は自分の作った赤い砂糖の板を切り分ける。

結晶のように小さく、美しく、ルビーのように包丁で割っていく。傍にいる05の呆れたような声に少し笑うと、刃を深く砂糖に切り込み、綺麗な断面を見せる。

ひんやりとした琥珀糖は少し紫を入れたせいか血のような美しい赤をしていた。

「……そのまま暗部として仕事をする事になっていたらどうするのです？」

「そんなときはそんなときかなあ……でも垣根くんのためだと言うのなら、それぐらい苦でもない」

「軽々しい言い方ですね」

切り取った美しい赤い宝石を一粒手に取ると、ペランダから射し込む昼の太陽に照らす。ステンドグラスのように美しく光を通すお砂糖の塊は自分の血で生み出した体晶のようだった。

「男のために死ねる女の言葉が、軽いはずないでしょ？」

口に入れた甘い宝石は柔らかい氷のように軽やかに歯で割れてしまふ。中から溢れた蜜のような甘い舌触りがあつという間に溶けると口は更に甘さを求めて渴き、疼く。

ただひたすらに甘い琥珀糖は、少し物足りなかった。

87話：インディアンポーカー

「インディアンポーカー？」

円のように囲むたくさんの機材。頭の輪と繋がれた数本の長いプラグで接続した機材の中、同僚にあたる人からの電話から聞こえた単語を聞き返す。

機材がオーバーヒートしないよう冷房の効いた部屋は少し肌寒かった。

「ええ、自身の経験や技術を他者に継承することが出来るカードよ」

「それがどうかしたんすか」

「学園都市の科学者の間では最近このカードを使って保険のために自分自身のエッセンスを残しておこうとする動きが見られるわ」

心理定規メジャーハートの言うインディアンポーカーは夢を匂いとしてカードに閉じ込め、カード使用者にその内容や技を記憶を移すことが出来るもの。

ただのおもちやを複数改造すれば誰でも使える代物で、表の世界では小さなブームとなっていた。

「もちろん望み通りのデータが記録されるかは賭けだけど。それでも試みるものは相当数いるという話よ。科学者の頭の中は文章化できない領域が大きいものね」

「ということとは例の……」

「そう。私たちの探しているピンセット、そのノウハウのカード化による流出が観測されたわ」

固唾を呑んで僅かに強く携帯を握る。計画に必要な技術のひとつ、超微粒子干渉吸着式マニピュレーター、通称ピンセットの名前に眉を顰めて電話越しの彼女を訝しむ。

学園都市に反旗を翻すために使う小道具、素粒子を掴み取り情報を受け取るこの機械は未だに確認されておらず、彼女の言う情報もダミーである可能性が高かった。

「それは確かな筋の情報なんすか？」

「さあ？でも少しでも芽があるなら調べるしかないでしょ？やり方は

任せるから当たってちょうだい」

「ダメーであろうと調べると、同僚の冷たい声が電話から聞こえたとすぐさま通話が切れる。」

冷たい人だとたまに思うが、それでもからかいが過ぎる部下の少女よりはマシか。

「はあ……セキュリティランクaからdの全情報よりインディアンポーカーおよびピンセットとの関連が疑われる会話を抽出」

「仕事がまたひとつ増えたため息をつくときサイコキネシスで繋がったコンピュータで情報を引き出していく。」

流れ込む情報は目の前のモニターに全ての映し出され、処理された情報を一つ一つ確認していった。

「ただの雑談にしか見えないものもあるが……方が一、億が一の可能性もさらっていかないことにはたどり着けないからな……」

「ヒットした十三件の情報を精査しながら両手を握る。『どんなものでも箸で掴む名人』のカードに関してトークを広げる女子中学生の關係なさそうなデータも混じる画面に再度大きく息を吐いた。」

自分よりいくらか小さく細い手を引いて明るい道を歩く。

ほんの僅かに緊張しながら前を歩くと、手を引かれて平たいスニーカーで着いてくる天羽隼糸が控えめに声を上げた。

「垣根くん、垣根くんっ」

「なんだ」

「なんでこんなところに？あだし、用事なんて」

「服、必要だろ」

現在いるのはセブンスミスとは違う高級志向のデパート。

足を止めて未だに俺のシャツとズボンを借りる彼女の姿を見下ろすと手を握り返さずに彼女は目で不満を訴える。

長い黒髪の藍花悦の姿に少しの苛立ちを感じたが、口を噤んでただ

彼女の問いにだけ答えた。

「じゃあ杠ちゃんたちは？なんで二人つきりなの？」

「……別にいいだろ、ガキがいない方が楽だし」

つい二日前下された命令に心の中では悪態を着く。

今日二人きりでこんなところに来た理由は暗部に来るかどうか、決定事項みたいなものだがそれを伝えなくてはならない。

そして身分を隠す衣装を与える。そのためにカフェもありまともな服屋もあるこのデパートにやってきた。

林檎もカブトムシもないのは子供の前で暗い話をするわけにいかないから。ただでさえ悲劇を知る子供の前で暗部関連の話はしたくない。

けれどまだ本題を言えずにいた。

酷く不安で恐ろしい。どんなにおぞましい人でも表で生きて、底抜けに優しく、どこまでも俺を好きでいてくれる人間に、共に地獄に堕ちてくれなんて言葉、言えるはずもない。

彼女には、暖かい光の中で生きていて欲しいと、暗がりの中の人間は願う。

「最近俺の服しか着てねえから洗濯間に合ってねえじゃん。いい加減このままもまずいだろ」

「あたしはこのままでいいんだけど……ていうか元はと言えば汚いからって全部捨てた垣根くんのせいじゃ……」

本題を隠して手を引く。頬を膨らませて文句をたらたらと零しながらも手を握り返してくる彼女に、薄く口元が緩んで仕方がなかった。

「まったく、金は俺が出すんだ。何が嫌なわけ？」

「だって垣根くんがあたしとサシで話したいことって絶対変じゃん」

「俺をなんだと思ってるんだよ」

「好きでもない人を許しちゃう変な人」

「……その論争は前回終わらせたと思ったんだが」

膨らませた頬は徐々にしぼんで覇気をなくし、手の力は抜けていく。

困ったように寂しく笑う姿がなんとも胸を締め付けられた。

「だって、そうじゃん。好きでも嫌いでもないんでしょ？」

「……お前はしようもないやつだな。言語能力大丈夫か？」

「言葉なら通じてるよ？」

何かを諦めたかのように薄く笑うと再び手を握り返す。しようもない女の手を優しく、かつ強く握りしめた。

頭が固くて変なところで自己肯定感がなく、そして恐ろしいほどの鈍感。

彼女の生まれを考慮すればそれも当たり前かもしれないが、それでも気持ちが悪くなるほど現実離れした思考に目眩すら起こる。

本当に仕方がないやつ。

人の悪意や劣情に鈍感な彼女は俺なしで生きていけるのか、甚だ疑問だった。

「とりあえず見て回ろうか。可愛い服でも着れば自己肯定感もつくだろ、馬鹿」

「ごちとら自己肯定感マックスだが？低いのは垣根くんですよ」

「はいはい、かわいいかわいい」

「話聞いている？ねえ！」

鳥のようにうるさく喚く彼女を手を握ってデパートの中を進む。

騒がしくも、どこか嬉しそうな彼女の顔に不安を抱きながら、いつ本題に入ればいいか迷っていた。

「で、どういうところ行きたいんだよ」

近くにあつた案内パネルの前で立ち止まると、彼女は長い黒髪を鬱陶しそうに指に巻きつけながらじつとパネルを眺める。

何か考えているのか、それとも考えてもいないのか分からない気怠い目を見つめながら彼女の言葉を待った。

「んー、あ、女児服見たい。あとおもちゃ屋さん」

「あー……大人の玩具はさすがに置いてねえぞ。あと赤ちゃんプレイは流石に……」

「違うわっ！杠ちゃんになんか買ってあげたいの！なんでそういう話になるのかなあ!？」

真意が分かりづらい優しい目に一瞬はてなが頭上に浮かぶ。一体
女兒服とおもちや屋にどんな因果関係があるのかと下衆な憶測が脳
裏をよぎるが、恥ずかしそうな赤い顔に不安は過ぎ去る。

いつもの下ネタへの反応とは違うどこか乙女らしい反応に少し疑
問を抱きながらも、黒い頭を叩いてため息をつく。読解能力のない相
手はやはり少し面倒だった。

「……お前のものを買いに来たって今散々話したよな？」

「あたしのは安いとこでいいよ。それより杠ちゃん、どういうおも
ちや好きかな。妹は普通にゲームとブルーレイBOX買ってあげれ
ば良かったからさ、どうなのがいいんだろ」

「はあ、なんでそうなんだろうな」

「ん？」

自分のものを買えと言っているのに、なぜ林檎の物を買おうと思う
のだろう。彼女の世界には彼女が含まれていないのだろうか。

「そうだな、おもちやは最近だとインディアンポーカーを作るための
装置が人気なんじゃねえの？」

「えっ、ギャンブル？」

仕方なく最近流行りと言われているおもちゃを教えると、彼女は
首を傾げて人形のような伏せ気味のまつげの隙間から俺を見る。

いつもと違う黒い瞳に輝く星、その目にかすかに胸が高鳴ると軽く
視線を外して何も無い空間を見た。

「違う。未来人なのにそこは知らないのか」

「垣根くんだって、もし過去に行って未来ではどんなタバコが流行っ
てたか聞かれても吸ったことないからよく分かんないでしょ？それ
と一緒に」

未来人だというのにインディアンポーカーについて知らないこと
に疑問を持つと、彼女はもつともらしい理屈を自信満々に述べる。得
意げな顔は小さい童顔のせいで本人が想像しているであろう『かつこ
いいお姉ちゃん』とはかなりかけ離れていた。

「インディアンポーカーってのは組み合わせたおもちゃを使って自分
の見た夢をカードに香りとして封じ込めるものだ」

「アロマみたいなもの？それで何すんの？」

「そのカードを使うと夢の提供者が見たものと全く同じ夢を見ることが出来て、なおかつその経験や技術も引き継げる。例えば水泳選手の見た夢を見れば自分もプロ並みに泳げるようになったりな」

インディアンポーカー、それは既存のおもちゃを組み合わせてチエキのようなカードに夢を匂いとして封じ込めた代物。

夢の質や内容によって値段など取引の相場が変わる大規模になったおもちゃで、自分で作ることもできるが多くの取引によって夢を買っていると聞いた。

あまり興味はない。けれど社会を知っておかなくてはいつアレイスターに打ち勝つ情報が入るかもわからないため、何事も知らなければならなかった。

「相変わらずぶっ飛んだ技術だけど、凄いな。使い道によっては医療に使えるかも」

「医療？」

「だって、認知症で箸の持ち方も忘れた年配の方とかにもう一度記憶させたりできるじゃん？結構便利かも、それ」

基本情報を伝えると、彼女は顎に手をおき楽しそうに口角を上げる。いつまでも他人のことしか考えない思考回路に呆れて乾いた笑みしか浮かばない。

どうしてこんな少女になってしまったのか彼女の記憶を問いただきたいくらい、彼女に呆れてしまっていた。

「ちよつと作ってみたいな」

「いらねえ」

「でもさ、夢の中でしか伝えられないこと、ない？」

可愛そうな女に肩を竦めて息を吐くと、握ったままの彼女の手が指を絡ませ訴えるように強く力を込める。思わず彼女の方へ顔を向けると黒い右目の星と目が合って、囚われて、体が言うことを聞かない。意味深な言葉と恥ずかしそうな顔に脳は簡単にパズルを組み立てて、間違いとしか思えない恥ずかしい推測が思い浮かぶ。

夢でしか語れない秘め事なんて言われたら、許してしまうに決まっ

ている。

「……服買ってからでいいなら、あとで寄ってやるよ」

「わーい！好きっ！」

意外と策略家な彼女に何度目かのため息をつくど、手を握って店へ向かう。要らないおもちゃを買う代わりに、彼女の服を俺が勝手に選んだって文句は言えないだろう。

明るい太陽の下、ショーウィンドウを眺めながら鼻歌を鳴らす。

「うーん、こっち？いや、こっちの方が……」

たくさんの時計が並ぶウィンドウに目が奪われ釘付けになってガラスの中を覗む。人に贈るためのショッピングはつい夢中になってしまう。

こんなところを上司麦野に見られたら『フレンドア？何サボってんの？』とか言われるのだろうか。

あの腕力ゴリラお化けの怒り顔を思い出すと少し寒気がする。

しかしどうやらその寒気は思い出だけのものではなかった。

ショーウィンドウを眺める自分の金髪と小柄でキュートな姿と共に、道の右側からききな臭い男ふたり組が通り過ぎる。

『Fチーム、現場に着きました』、そんな言葉を電話で報告しながら過ぎ去る男達に同じ雰囲気を感じていた。

暗い日陰の匂い。血と硝煙が当たり前の日常を生きる人間の匂い。

素人じゃない。

敵対組織か、それとも同業か。暗部組織アイテムとして、上司に相談すべきか。

様々な考えが巡りながら自然と彼らの後を追っていた。

「今晚見るの楽しみだなあ……」

長袖のセーラー服を着た黒髪の中学生が歩道を歩く。手に持ったインディアンポーカーを見つめながら前もみずに歩いていた。

車道に近く細い道は人通りもまばらで誘拐にはうってつけの場所で、無防備な彼女は独り言を呟きながら危機など察知できずに進む。

「そうだ、見てみたらフレンジさんに教えてあげよつと！」

彼女、佐天涙子とは少しばかりの知り合いだった。

鯖缶が巡り合わせた奇妙な縁、今朝も新しいインディアンポーカー―確か『どんなものでも箸で掴む名人』とか何か―が手に入ったと嬉々としてメッセージアプリで連絡し合う程は仲がいい短い間柄。

「あーあ、何やってんだか」

そんな彼女は先程の男たちに軽く噴射型の睡眠剤で眠らされると、行人の視界を遮るように止まった白いハイエースに押し込められる。

手馴れた動作で誰にも気が付かれないうちに彼女を連れ去った男共と、学園都市だと言うのに警戒もしない平和ボケした中学生にため息を着く。

「タダ働きはしない主義だけど……ねえ、誰か車寄こして。麦野には内緒でね」

適当な名前も知らない下っ端に繋いで足を確保する。

一宿一飯の恩義といえいいか、一度くらい助けたってバチは当たらないと言いつつながら携帯片手に腰に手を着いた。

火薬の匂いと、香る土埃。普通に生きていれば嗅ぐときは友人との花火くらいの珍しい匂いの中、微睡む脳を揺さぶる高い女の子の声にゆつくりと瞼を開いた。

「おーい起きろお」

そこに立っていたのは金髪碧眼の小柄な少女。ベレー帽とクラシックな紺のジャケット、赤いチェックのミニスカートから伸びた黒タイツと白いパンプスがフランス人形のような可愛い知り合いだった。

フレンダと名乗った彼女とは鯖缶が結んだ奇妙な縁で繋がっており、つい先程も彼女にメッセを送るか悩んでいたところ。

そんな彼女が煙の中何事も無かったかのように車の外で立っていた。

手には手錠と、耳にかかった取れかけのアイマスク、そして伸びたヤンキーたちに思考が爆発する。

一体何が起きて、何があったのか分からぬままパニックになっていた。

「……えっ!? ここ、どこ!? なんであたし縛られてっ!？」

「手錠焼切るからうつ伏せになって? 動く手首無くなるから、じっとしててね?」

しかし彼女の悪戯っ子のような微笑みに口元が引き攣り言葉は出ない。

何が起こったのか聞かない方が身のためだと、好奇心旺盛な自分の勘が珍しく告げていた。

88話：狩猟

枝垂桜学園。青々とした木々の間に紅葉した木が混じる並木道を歩き校門へと向かう。

賑やかな少女たちの話し声が響く中、一人静かに歩く自分には心地よい風の音しか聞こえない。

「弓箭様、弓箭様？」

いつもの日常に妥協していると自分の苗字を呼ぶ声が耳に入る。

本当に自分が呼ばれているのか半信半疑になりながらも、本当に自分の苗字だと遅く理解すると慌てて返事をして足を止めた。

ゆるいお下げが似合う茶髪の学生と、黒髪のお淑やかな学生がこちらに優しく微笑みかける。

「えっ、はは、はははははっ!?!」

「私達、これから学び舎の園の外を冒険してみたいと思うのですが、一緒に如何ですか？」

クラスメイトの穏やかな笑顔に思わず声の上擦って啞然と立ち尽くす。

いつぶりかのお誘いに興奮と高揚が抑えきれなかった。

「あの？」

「わわわわわたくしとでございますか!?!」

「ええ」

「よよよろこんで……あ」

熱が上がった顔をほころばせて頭を縦に振ると、電話の着信音に熱は冷めていく。

「ご学友との大切な時間を邪魔するうるさい音に苛立ちながらも携帯を手に取り軽やかにお辞儀をした。

「すすすすみません、ちよっと失礼します……」

急いで離れると携帯を耳に当てて言葉を待つ。

電話口から聞こえる聞き覚えありまくりの男の声に落胆すると彼は言葉を続けた。

『猟虎、今平気か?』

「ああ誉望さん……」

『仕事だ。Fチームの逃がした標的を捕獲して欲しい』

「え、今からですか？その、これからご学友と、」

『無理そうか？』

仕事内容を伝える教育係、誉望万化の陰鬱な声に焦り気味に言葉を返すと圧の強い返答が想定通りに返って来る。

仕事だから仕方ないとはいえ、彼女たちと一緒にオトモダチらしいことが出来ないのがひたすらに悔しかった。

「……いえ、はい」

『そうか、仕事の情報はすぐ送る。早く持ち場につけよ』

「はい、ですよね……」

力なく頷くと携帯を閉じてご学友に頭を下げる。

電話がなければ今頃楽しく談笑しながらこの並木道を通って学習舎の園から外の街へとお出かけしていたというのに。

誉望さんに恨みしか感じず、腹が立ってしよすがなかった。

「あの、申し訳ございません。用事が入って……」

「まあ、それは残念ですわ」

「では、またの機会に」

別れたご学友の背中を見送って項垂れる。この足で戦場へと向かうのは酷く気が重かった。

土埃と火薬の香る戦場に立つ。黒いボレロの制服を脱いで全身を覆う黒いタイツを隠す白シャツと黒いミニスカート、茶色いハーネスに着替えると、思考回路は一気に仕事に変わる。

白い砂利が覆う工事現場。戦場の痕跡から獲物は二匹、一匹は奪われたターゲットなので襲撃者は一匹。

砂利に着いたローファーとハイヒールの跡を察するに、二匹ともメス、歩幅から逆算するに体長はハイヒールが155cm、ローファーが160cm程。

「はあ……一年半ぶりにクラスメイトに声をかけられたのに……！」
残された残骸を目にしたため息を着く。

ぬいぐるみに偽装した爆弾の布や綿が散らばる現場は阿鼻叫喚としており、倒れた男たちと無残にも引きちぎられた人形のクズで汚くなっていた。

「ぼっちからの脱却、そのままクラスの人気者！学園のアイドルになるはずだったのに……！」

落ちているぬいぐるみの頭を茶色いウエスタンブーツで踏み潰し奥歯を噛み締める。

破れた人形からはみ出る白い綿が砂利と混じって汚い灰色に変わっていった。

「輝かしい未来を潰したからには、せめて、楽しめる狩りであってくださいよ」

静かな店内、洗練された商品とシンプルかつ煌びやかなデザインの少し高めの店はよく行く店舗で、メンズもウイメンズもある今の彼女にはピッタリの店。

隣にいるバカのためにアテンドスタッフに服を選ばせてる最中、自分でも色々見渡していると隣の女は何食わぬ顔でスマホを片手に俺の袖を掴んだ。

「ね、高速道路沿いの建物が爆発したって。怪我人とかいなかったかな」

「テメエ、男と買い物してて呑気にSNSか。スマホ叩き割るぞ」

ニュース通知を開いて速報を見る天羽隼系のスマホを取り上げてワインレッドのスーツのポケットに突っ込むと困ったように手を出して返せと訴える。

先程までは今は見る必要のない男物のほうにざっと目を通していったあたり、彼女の服を見ているというのに何も思うところがなさそうだ。

「やめてよねー？ バックアップ取ってないから面倒じゃん」

「ならやるな。気が散るだろ」

取り上げたスマホを返すと、今度はズボンのポケットから自分の携帯が着信音を鳴らす。

仕事をしているはずの部下からの電話に少し苛立つと、ため息を吐いてから天羽の黒く長い髪を撫でた。

「誰から？」

「仕事の連絡みてえだ。スタッフと服の相談してろ、すぐ戻る」

「女と買い物してる時は携帯いじるんですか。ふーん」

「うるせえばーか、俺はいいんだよ」

丁度よく現れたスタッフに彼女を預けると、一度店の外に出て電話を取る。

今まで話していた女の華やかさが無い、普通の男子高校生の業務連絡だと分かっているからか電話に出るのが物凄く億劫だった。

「要件は？」

『ピンセットの情報を持っている可能性がある学生を追っていたのですが、下にやらせたら失敗しました。それで獵虎を向かわせたことで報告をと』

部下である誉望万化の報告に天羽が言っていた高速道路付近の爆発についてのニュースを思い出す。

関係しているのかは分からないが、もしそれが関連しているのなら確かに失敗しているのだろう。スムーズに事が進めば基本爆発なんて稀にしか起きない。

「あー……分かった、あとはテメエらに任せる。こっちはまだ、スカウトの途中なんぞでな」

『藍花悦でしたっけ。上じゃなくて垣根さんに頼むってなのに上層部から蔑ろにでもされてるんですかね？ 情報はあんなにガチガチだったのに』

「……そろそろ戻る、切るぞ」

少し都合の悪い質問に無理やり電話を切ると、再び天羽の待つ店内に戻る。

どうぞと、スタッフにドアを開けてもらい、大きな鏡のある試着室に足を踏み入れた。中にいる長い黒髪は、選んでもらった服をクルクルと周りながら確認して、嬉しそうに声を弾ませる。

「誉望くんなんだってー?」

「なんで知って……いや、未来人だったな。服はそれでいいのか?」

「うん。でも、これ桁が予想より0多かつただけど、あたしのカード持ってきた?」

「俺が払うって何度言えばわかる」

中の下着が丸見えなのが分かっていていいのか分かっていないのか、無防備にヘブンリーブルーのワンピースの裾を翻す。

靴も新調し、頭には白いカチューシャも着けてどこぞのお嬢様のように。

スタッフの見立てが良く、喜んでいるのは良かったが相変わらず俺を頼らない口ぶりが腹立たしい。

そんなに俺は頼りないかと変な嫉妬心しか浮かばなかった。

「もう帰っちゃおうの?」

「……まだテメエの、藍花悦の一張羅を探すんだよ。ほら、こないだ破っちゃっただろ?」

ワンピースと靴の代金を全額一括で払い終わり店外に出ると当たり前でも言うように手を繋いできて期待した顔で見上げてくる。

どちらかと言うと遊び足りないとも言いたげな顔に手を強く握り返して、複雑な心境を悟らせないよう口角を上げた。

「あー……確かに、藍花悦のチャイナ服はボロボロになっちゃったし、バレたといえど藍花悦と区別する服は必要だよね」

「そうだろ? だからもう少し、な?」

調教されてきた犬を離さないよう手を解いて腰を強く掴む。

二度と赤い色に染めたくないと思っただけでも、暗がりには引き摺り下ろさなければならぬ自分の立場と、手に入れた光を失いたくない心

情。袖に絡まった黒く長い髪のように酷い不安が心に絡みついて離れなかった。

佐天涙子を颯爽と助け、逃げた先は街の真ん中。

車が走り、そこそこ多い人の喧騒の中、目の前で頭を下げる彼女の感謝を冗談めかして笑い飛ばした。

「ありがとうございます、フレンドさん」

「無事でよかったですわー。私がいなきやどうなってたか」

「ですね。でも携帯もないし、さっき買ったカードもなくなっちゃったし。スキルアウトって怖いですね……」

困ったように笑いながらつむじを見せるが、すぐに笑顔が消えるとポケットをまさぐってため息を着く。

持っていたカバンも無くなり酷い有様だと言うのに、学園都市によくある馬鹿のやんちゃとししか見れていない彼女に自分も同じように大きく息を吐いた。

「アレ、イタズラ目的の不良集団じゃなかったわよ？ 狙われる心当たりとかないわけ？」

「ないですよそんなの！ ていうか警備員アンチスキルに通報を……！」

「あー、それはアタシがしといたから」

「え？ そうなんですか？」

表舞台の人間である彼女に暗部が関わっているとは直接言えず、適当にはぐらかしながら腕を引っ張って話を変える。

そのまま道なりを進み、二人並んで雑談に花を咲かせた。

「そうそう。ほら、感謝してるならスーパーでサバ缶大量購入して、またカレー作りなさいよ！」

「ええ、今からですか!？」

「他に何作つてもらおうかな!カレー以外なら他に鯖が美味しい料理といえば、例えばそうね——ッ!」

掴んだ腕を恐ろし人の多い道を進む中、音もなく痛みが貫いた。

左肩から吹き出た真つ赤な血が綺麗な歩道に散らばり、汚い模様を作る。

「えっ……っ？え、血……っ？何が……っ？」

唐突な出来事でも案外頭は動き、慌てて佐天の腕を引っ張って死角へ走る。

何も理解出来ていない彼女に痛みを悟られないよう必死に腕をかばいながらデパート近くの壁にへばりついた。

「ちよっ、どうしたんですか……!」

慌てる佐天を横目に肩の傷と周りを確認して壁に背をつける。

一体どこから狙撃された?何故?

色々な考えが脳を巡るが、弾丸が貫通したものの左肩の感覚はある。事実是不幸中の幸いだった。

麦野達に連絡をしなくてはと、ポケットからスマホを取り出し電話帳を開いて通話ボタンを押そうとした時、弾けるようにガラスが飛び散る。

綺麗に銃弾を撃ち込まれたスマホが地面に落ちると急いで佐天の手を取り近くのデパートに逃げ込んだ。

「ねえ、大丈夫?」

「中入るわよ!」

周囲の建物からは見えない角度のはずなのに、銃弾は見事に小さいスマホに命中した。

これは遠距離からの狙撃ではなく、近距離、しかも通行人に悟られないほどの手馴れ。

同業者か敵対組織か、佐天を狙う誰かさんに心の中で舌打ちを鳴らしてデパートへと身を投じた。

少し前に走り去った二人組のクソ女の跡を辿りながら薄く笑う。黒毛と金髪の学生二人が今回の標的、獲物を見つけた興奮を抑えながらゆつくりと、そして正確に彼女たちをつける。

あの金髪クソリア充女に残る、捕獲班の皆さんの血の匂い。それこそが獲物へと導く道標。

ご学友の誘いを断ってまできたお仕事で、仲良さそうにイチヤイチャするリア充共を見せつけられてとても腹立たしくてならない。

黒毛は生け捕りとの命令ですが、もう片割れは、狩ってもいいオモチャ。

この鬱憤を晴らすのにちょうどいい。

落ちた血液を地面から救いにとって舐めると鉄の味が舌にじんわりと広がる。

彼女たちの行動は、この鼻が手に取るように教えてくれた。

逃げた先のデパートに足を踏み入れ観察し、匂いを観測する。

デパート内に逃れ逡巡の後、エレベーターで上階に移動したのだから、匂いがエレベーターの中で途切れてしまった。

「楽しませてくださいますよっ。」

楽しみを奪った人達、ならば相応の娯楽を提供してもらわねば釣り合いは取れない。

89話：自己犠牲的愛

賑やかな人混みから遠ざかり、彼女が行きたいと言ったところに連れ回されるお昼頃。彼女が欲しいと言った夢をプリントするためのおもちゃが入った紙袋を手に提げて少女について行く。無駄だと思いつつも、彼女の珍しいお願いを拒むことはできなかった。

そして現在、色鮮やかな店内で両手に紙袋を持ち、機嫌のいい黒髪頭を見つめる。柔らかい花の香りを振りまいて、天羽彗糸はハンガーを手に取ると顔を上げた。

「ねー、どっちがいいかな?」

犬のように無垢な瞳で首を傾げる彼女は黒と赤の二つの下着を手にとって簡素な質問を告げる。

フロントにジッパーのついた脱がすことを前提にしたような黒いベビードール一式と、純情とは一体何なのか再度問いたくなる赤く布面積の低いレースの上下。

目眩がする光景に頭を抱えるも、天羽の期待する瞳は輝きを失うことがなかった。

「……下着がないから買いに行くのは分かる。一緒に店内入るのもまあ、分かる。金出すのは俺だしな。けど、何故あろう事が俺に選ばせる?」

「男的な可愛さを聞こうと思って。あとからかおうかと♡」

長い黒髪に、水色のワンピースと白いヒールのないパンプス、そして白いカチューシャ。

両家のお嬢様ルックな現代版かぐや姫は、そのお上品な服装からは想像もつかないアダルトな下着を手にとってあざとい笑顔を作る。

前髪に隠れた片目をちらちらと隙間から見せながら笑う彼女にため息しかでない。

「可愛いねえ……これは可愛いじゃなくてエロいだろ、ジャンルのには。お前は地球上の男を全ての悩殺するもりか?」

「でも……この人達って貧乳ロリ好きだから悩殺もクソもなくなっけ?」

「なんなんだそのぶっ飛んだ偏見は、んなわけねえだろ」

貞操観念と羞恥心がない女を多少心配しながら赤い下着を元のラックに戻し、代わりに色気も可愛さも装飾もないシンプルな白いセツトを持たせる。

不満を言いたそうに頬を膨らませながらも渡した商品の値札を見ているのがなんとも面白い。

「えー？だって仲良い男の子みんな貧乳ロリ好きだよ？土御門くんはロリ貧乳の義妹ちゃんとやる事やってるし、青髪くんは小萌せんせい大好きだし、上条くんは仲良くなる女の子みんな貧乳だし、一方通行くんも打ち止めにゾツコンだし……」

「あのグラサン野郎、きな臭いとは思ってはいたが……救えねえな」

一、二、三と色を塗っていない指を折り、知り合いのロリコンたちを数え始める。

羅列される知人の名前に呆れ返るが、同時に彼女の周りにはのがロリコンで心底良かったとも思う。

幼女体型とはかけ離れたグラビアモデル体型はロリコンには好まれないだろう。

まだ誰も彼女をそういう目線で見ない方がよっぽどいい。

「とにかく、この学園都市に巨乳は求められてないの。垣根くんだけって貧乳好きだし」

「はあ？脂肪の大きさを人を好きになるわけねーだろ。そういうのは好きな奴のものが自然と好きになるもんなんだよ、お子様」

「やっぱり低身長貧乳ロリ好きじゃん」

「話聞いてたか？お前は自分を低身長貧乳ロリだと思ってるのかよ？」

「え？あたしは高身長巨乳お姉さんでしょ、何言ってるの」

しかしだからなのか彼女の偏見は歪みまくっており、俺にさえその火の粉が降りかかる。

頑なに自分への愛情を認めない彼女に飽き飽きしながら腰に手を着く。上条達がまともな性癖を持っていないせいで一人の乙女が常識を歪ませてしまったでは無いか。

もう矯正しようがない変な方向にねじ曲がった自己否定に頭を悩

ませられる。

キスをしようが、結婚しようが、ベッドの上で抱こうが、この先一生一緒にいようが、彼女の頭が愛を理解することは無いのだろうか。

本当に厄介な女だ。

「……お前は立派な低身長貧乳ロリだよ」

「え、やばい、眼科行く……？それとも脳外科……？」

「俺よりチビで中身3歳児なら低身長ロリだし、オリアナに比べたら断然凹んでるしな。お姉さんって呼ばれてえならもう少し中身を成長させろ」

恋愛感情も覚えたことがないお子様のおでこに軽くデコピンをお見舞うと、痛がる素振りもなく眉間に皺を寄せて鳥のようにうるさく喚く。

懸命に虚勢を張る可愛そうな彼女に呆れながらも、いつもと変わらない調子に日常が帰ってきたと安堵していた。

「へ、凹んでないんですけど!?!このFカップが見えませんか?!」

「あれ、Gじゃなかったか？」

「あつ、間違えた、アメリカ基準ではFで、日本だとGなんです!ぐろーばるなんです!」

精一杯胸を張ると、ワンピースの前ボタンが弾けそうにシャツが伸びて真ん中に隙間ができる。紺色のキャミソールで肌そのものは見えないとは言えど、その小窓に目が行くのは男のサガか。

フンスフンスと効果音がつきそうな少女の精一杯の反抗に頭が痛くなるも、馬鹿な彼女の言動に一周回って可愛げを感じて頭を抱えた。

「はいはい、デカさを誇るのは俺を越してからにしろ。あ、でも下半身は俺よりデカいかもな」

「これでもモデル並には体型操作してるんだから170cmにしては細身だよ!それに女は脂肪がつきやすいの、デカイのは余計です!」

「お子様は見栄の張り合いで大変だな。なんでもいいけど、こういう会話他の奴とするなよな?」

軽く頭を撫でてやると、彼女はさらに顔を顰める。自分の肉体を大

人としての判断材料にだす彼女の馬鹿さ加減に呆れるも、内容が内容なので少しドギマギしてしまう。

小さい顔と大きな胸のせいで大きく見える肩幅と大きめの骨盤で隠れがちだったが、胸を潰し、肩パッドのついたジャケットを着れば男と勘違いされる程度には細いのだ。

なんだか途端に小っ恥ずかしくなる。こんな馬鹿女へ向ける不純な感情が馬鹿馬鹿しい。

四ヶ月もの月日で積み上げられていった初めての感情がこんなアホな女へ向けられていることに内心呆れてしまう。

しかしうるさい彼女の声で一瞬のうちに永遠に解決しない悩みはどこかへと消え去った。

「垣根くんとか話さないし、って誰がお子様よ！24歳なんですけど?!合計すればアラフォーですけど?!」

「あのな、前世が何歳だろうと、今現在どう扱われているかで精神年齢ってものは変わるもんだ。第一、今みたいに喚く時点でガキだろう」
「タバコも吸えて、お酒も飲めて、バイクも車も運転できるし、ギャンブルだって何回もやったことがあるし、確定申告の書き方も知ってて、扶養から外れるほど稼げて、お金の管理もできるし、アンタなんかより沢山の人と喋って、議論して、勉強して、色んなこと経験してきた大人なの！子供なのはそつちでしょ！」

「そうやって屁理屈並べるところがガキなんだよ。黙って年相応の服着てろ」

馬鹿みたいに胸を張る彼女の頬を軽く抓ると、ギュツとハンガーを握りしめてじつとりとした視線で睨まれる。

早口で捲し立てながら怒りを露わにする彼女だったが、本気で怒っている時とは随分と違って、どちらかと言えば拗ねていた。

「……30万のワンピースは年相応じゃないと思うけど」
「古着よりよっぽどマシだ」

「ふん、80sの良さが分からない子供に何言われたってなんとも思いませんもんねえー！」

「あ、おいっ！ったく、外出てるぞー！」

手に取るように分かる彼女の感情に振り回される自分に若干嫌気が差しながらもそれを辞めることはない。

黒い方のハンガーを持ってレジへ向かった彼女の背に少し微笑みながら店外へと出向く。

「……さて、どうするか」

付近にある柱に背を預けてレジで会計をする彼女の後ろ姿を遠くから眺める。

鬱陶しいほど長い黒髪と女性にしては高い身長のおかげで人混みにおいても分かりやすい。

彼女にどうやって本題を伝えようか。なんて話せばいいか、なんて切り出せばいいか、分からなかった。

彼女と離れるとすぐにこの間の命令が頭に浮かんで離れない。

整合性が取れていないおかしな命令だったが、背いたら必ずと言っていいほど高確率で俺たちの反逆は阻止される。

スクールの面々を独断で動かし、上の依頼と関係ない施設に潜り込んだりしているのを、滞空回線があるアレイスターや上は知っているはずなのだ。

にもかかわらず他の組織が掃除に乗り出さない。

さらに彼女を俺たちの計画に巻き込みたいと言い出す始末。

考えられる理由は複数ある

俺たちの行動がどう計画プランに恩恵をもたらすかを見定めているのか。

反逆を通して第二候補スペアプランと第三候補サブプランに何かしらの期待をしているか。

そもそも反逆そのものが計画の内か。

今の俺を止めさせるのは簡単なはずだというのに、そのアプローチがないのが気味悪い。

俺を黙らせたいのなら天羽と林檎を捕まえて目の前で人体解体ショーでもするなり、他の男に犯されるなり、見せしめにすればいいのだ。

想像するだけでも嫌だし、そんなことが万が一にでも起きれば全員皆殺しするのは確定しているが、俺がいるのは暗部、それくらいはそれだけ決しておかしくない。

だと言うのに与えられた重りは天羽との行動のみ。

嫌ではある、けれど考えつくような他の惨い仕打ちに比べれば圧倒的に優しい。もつと言え、第六位という戦力を上が直々に与えているようなもの。

なにか意図を感じて仕方がない。

「そーいや、インディアンポーカーでエロい夢を売ってくれる奴がいるって都市伝説、知ってるか？」

今日のうちに本題に入れるだろうかと頭を悩ませていると、同じ柱の裏側で馬鹿みたいな大声で下品な話を繰り広げる男子学生二人組が耳に入る。

そこそこいい学校の制服を着た彼らだったが、内容は馬鹿馬鹿しいほど下品。

スクールとして追っているインディアンポーカーの話に興味はあったが、内容の馬鹿らしさに呆れてしまう。

他人の見た卑猥な夢が詰まったカードを売買など、聞いていて気分の上がる話ではない。品のいいデパートで話すべき内容でもないが、そんなことも構わずに学生は話を続ける。

「あー、BLAUって天賦夢路か？アレ、この間見つかって制裁が下されたらしいぜ？精神系に操作されたのか作り方すら忘れたとかかなんとか」

「マジかよ、くっそー、残念すぎるだろ……！」

「本当だよな。有名な女性アイドルやニュースキヤスター、あの超能力者の御坂美琴と食蜂操祈のもあったらしいし、見てみたかったわ」

唐突に出てきた知り合いの名前に心の中でせせら笑う。超能力者という絶対的な立場に置かれているというのに、顔の整った女というだけで知らないところでオカズになっているのが威厳もなくて哀れにさえ思う。

御坂美琴は置いておいて、第五位は胸がデカく、顔だけは愛嬌と可愛げがある女王様気質の中学生。

天羽の偏見とは真逆の、男が好きそうな外見と性格はこういう馬鹿

の餌食になりやすい。

とはいえ中学生の子供相手との性行為を夢に見る男に反吐が出て堪らない。

基本的に性産業は儲かる。だからそんな馬鹿なことするやつも出てくるのは自ずと分かるが、中学生、しかも超能力者^{レベル5}に臆することなくそんな犯罪めいたものをばら撒くことは理解に苦しむ。

しかし話を聞く限り、その代償として作った本人は餌食にした恐ろしい中学生に返り討ちにあったのだろう。

因果応報、自業自得。

もう終わった話だと安堵して綺麗に磨かれた地面のタイルに目を向けた。

「あ、俺、あの第7学区の病院のバイトちゃんの見えてえわ。裏で流通してねえかな」

その視線はすぐに前を向く。不穏な言葉に腕を組んで必死に耳を立てると、静かに息を飲んだ。

第七学区に病院なんてわんさかとある上、バイトを雇ってるところは何も自分の知っている所だけではない。

なのに何故か胸騒ぎがしてやまない。

「ギャルのナースだっけ？ スキルアウトの間じゃ有名だよな。この間の幻想御手の時に看病された奴らがこぞって推してる奴」^{レベルアップ}

「巨乳で高身長、金髪でオタクに優しいギャルのポニテナースだぜ？ 属性多すぎだろ」

男共の言葉に脳が停止する。いつも隣で健気に努力をする彼女の行いが、低俗な想いの糧になるなんて、想像もしたくなかった。

反吐が出る。気持ち悪い。殺してしまいたい。

初めて彼女と出会った時、クラスメイト達が鼻の下を伸ばして語っていた偏見が今になって心に突き刺さる。

「ま、つつてもあーゆるーメスはやるだけでいいよな。付き合うとかになったら面倒くさそ」

「それは言えるな。高給取りの高能力者^{レベル4}だし、プライド高そうで嫌だわ」

たった一人の神様に汚れた目を向けるのは誰であろうと許せなかった。

彼女のおぞましい優しさを、恐ろしい愛を、そんな汚いもので穢されるなんて酷く腹立たしい。

殺さなくてはいけない。

無垢な乙女を知らない下劣な人間など生きていたってしようがないじゃないか。

汚される前に、自分が全て片付ける。

「垣根くん」

殺意を持って手を伸ばすも、優しい花の香りが体の動きと共に舞う。

前からの柔らかい抱擁と、視界を覆う黒い髪、くっついた頬から伝わる体温に感情は静かに収まっていく。

「遅くなってごめんね、殺気立ってどうしたの？」

「……はえーよ」

「何か嫌なことでもあった？」

心配そうに顔をのぞき込む彼女の手を取って柱に押し付けると、男共と鉢合わせないように自身の体で盾になる。

何も分からないかのように困った顔をして様子伺う彼女を好奇心の目に晒したくない。

「どうせ聞いてたんだろ、なんでそう言える」

「ああ、さっきの？ 垣根くんには関係ないんだから、気にしないの。あたしも気にしてないし」

「なんで、そんなこと言うんだよ」

綺麗なシヨツピングバッグを彼女の手から取ると、声を潜めて頭をその手で撫でられる。

優しく前髪を撫でる手が暖かい。その暖かさに自分とは無関係だと言われるのも、全てが赦されるのも腹立たしかった。

「生理現象なんだから。垣根くんだって好きな子相手に妄想くらいするでしょ？」

「しない、絶対に」

神様を汚すことは許されない。

だからこんなにも悩んでいるというのに、彼女はそんなこと知る由もなく不愉快な質問を投げかける。

なぜそんなことをすると思うのか分からない。

「もー、何拗ねてんの？ほら、早く行こうよ。ね？」

「……馬鹿女。お前みたいなのやつが酷い目に遭うんだよ」

「そう？さっきの子の方が危なそうだけど」

「あ？」

離れようと手を引く彼女の控えめな力に逆らわずに歩き出す。シヨツピングバックは全部持って、少女の手を握る。

きつく指を繋いでゆつくりと賑やかな人混みを通り過ぎて彼女は何か悟ったように口を開いた。

「さっきの子、都市伝説って言ってたよね」

「それがなんだよ」

「学園都市の人間は陰謀論とか不祥事とか、そういう噂話ゴシップが好きな間抜けが多いんだから、そういう人の方が危ない目に合いそうじゃん？」

「間抜けって……お前が言うのかよマヌ彗糸」

「なんだバ垣根。あたしが言ってる事わかんないの？」

「あ？喧嘩売ってる？」

少し厳しい口調の彼女に手を強く握ると、不服そうに握り返す。

いつもより強い語彙に苛立ちながらお互い睨み合うが、天羽は張合いもなくすぐに諦めてため息を着く。押しに弱い彼女らしかった。

「でも事実でしょ？佐天さんとかいい例じゃない、ゴシップに連れ回されて危険にあってる人」

「幻想御手の時の生意気なやつか」

随分前に会ってそれっきりの中学生が話題に上がると、興味も無い顔を思い出す。

そう言えばそんな人たちもいた気がする、今まで思い出すことも無かった顔ぶれが徐々に脳裏に浮かぶ。とはいえ今後一生顔を合わせることはないので思い浮かんだところで意味は無いが。

「陰謀論や馬鹿なゴシップって儲かるの、金の成る木なわけ。スキルアウトみたいな何も無い人達が秘密を垣間見て特別になれたと勘違いして金を落とす。せいぜい搾取されて愚かな行動に悔やむしかないよ」

「辛辣だな。お前にしては珍しい」

「実際に佐天ちゃんたちが被害にあってるからね、こればかりは。もしさっきの学生の話題があたしじゃなくて知り合いだったら、記憶消してたかも」

「なんで自分ならそうしないんだよ」

「あたしは大人だから、子供のやることはある程度大目に見てんの。子供同士とか大人なら怒るけど」

「いつにも増してしつかりとした持論に危うく納得しそうになるも、結局のところいつもと変わらず彼女は全てを下に見て大人ぶってるだけだった。」

24歳の姉だったことがそんなにも特別なのだろうか。

子供みたいに泣いたくせに、今更名誉挽回をはかろうと懸命に背伸びをする彼女が滑稽に見えて仕方がない。

「でも、珍しいね。あたしのことと怒るなんて」

「テメエが甘いからいつつも代わりに怒ってやってるんだろ？感謝しろよ」

「別にいいのに。なんでまた」

「……四ヶ月の愛情だよ。バーカ」

笑って、泣いて、傷ついて、それでもずっと俺が好きだといい、秘密を抱えて誘惑して、俺を困らせる。

滑稽な女だというのに、なかなか離れられない厄介な感情。

単純接触効果と返報性の法則の相乗効果か、四ヶ月という長い時間は確実に彼女への態度も、視線も、思いも変えていた。

それを愛情とはつきり言ってしまうほど、四ヶ月の日々は自分の意識を変えてしまった。

「たった四ヶ月で愛情が芽生えるなんてちよろいね、垣根くんは」

「そういうテメエは初めて会った時から俺のこと好きだっただろう」

が

「違うよ。生まれる前から垣根くんが好きだったんだよ」

彼女の蠱惑的な言葉に息を飲む。心臓の跳ねる音しか聞こえず、まるで世界から音が消えたよう。

繋いだ手が汗ばむ。

俺の言葉は信用しないくせに、自分の愛の言葉は簡単に信じさせる、とてもずるい人。

きつとこの先誰にも言われることがない情熱的で重い愛情が苦しい。劇薬のような甘くて苦しい言葉に喉が渇く。

いとも容易く愛を言ってしまう軽率な女を、大切な人と思うのは当たり前なことくらい24歳ならば知っているくせに。

思わせぶりの態度が腹立たしい。

子どもみたいな女に振り回されている自分がどうしようもなく嫌だった。

「でも、ありがと。嘘でも愛情なんて言ってくれて」

「ツだから、テメエはいい加減に——ツ!？」

再びくだらない論争を始めそうな彼女の言葉に強張った体は解れてしまう。

相変わらず愛情を信じない馬鹿に説教をかまそうと一度足を止めると、耳を擘く叫び声が突如デパートの屋内に響き渡る。

痛々しい声だった。デパートに木霊する女の悲鳴にその場にいた誰もが反応し、何人ものひとが酷く慌てた様子でこちらになだれ込むと一気に密度が高くなつて酷い混乱に陥った。

「っ！何?！」

「馬鹿っ、手を離すな!」

どうすればいいか分からない一般人がパニック状態で爆発音が続く方向から逃げようと足を踏んだり、人を蹴飛ばしたりと恐ろしい光景が続く中、絡めていた指が水のように滑り落ちる。

そのまま波に逆らって騒ぎの方向へ向かう彼女の背が遠のくのが少し怖かった。

「おいっ!!馬鹿ッ……!」

「行ってみよ、垣根くん！」

必死に手を伸ばして再び彼女と繋がると、焦燥気味に彼女は手を握る。

繋いだ手にひどく安堵する。離してはいけない手を掴めるのは自分だけ。

他でもないこの俺が彼女を傍で守れることが何よりも喜ばしかった。

人の多いデパートへ逃げ込むと、エレベーターから離れた中央の柱へと体を預けて懐からチューブに入った薬を取り出した。

傷を塞ぐ学園都市製の塗り薬を風穴が空いた腕に塗りたいくりながらひとまず様子を伺うと、佐天涙子が慌てふためきながら怪我を塞ぐ私を見つめる。

現実がよく分かっていなかった彼女だったが、ここまで来ると理解も追いつくようだった。

「私を追いかけてきたんですか!？」

「多分ね！」

手練のスナイパーに近接から狙われているこの状況、十中八九先程佐天を連れ去った奴らの仲間だろう。

何が目的かは知らないが、きつとデパート内では手は出せまい。

「ここで一旦時間を稼ぐ訳よ。結局、これだけ出入りが多い場所、変装して人混みに紛ればまくのは簡単、ッ!？」

しかし考えとは裏腹に右腕に銃弾が貫通する。

誰に気づかれることも無く唐突に痛みが響き、真っ赤な血液が腕から吹き出した。

「走って！」

再び佐天と走り出す。人ごみを掻き分けて紛れるようにデパートを進むも、未だに多少は混乱していた。

この人混みの中を躊躇なく撃ってくるようなスナイパーが相手だと、この状況は少しまずい。

この人垣を利用してるのは相手、私たちはまんまと相手の有利な場所に誘導されていた。

「周りの人に助けを！」

「何の役にも立たないわよ！パニックになって逆に身動きが取れない事態になりかねない！敵が人混みに潜んでる状況で、それは致命的！」

「じゃあ、携帯借りて……！」

「借りようとした相手の頭が弾け飛ぶだけよ！」

「っつ!!」

必死に意味の無い救いを求めて思考を回転させる佐天をあしらいながら人を通り抜け、柱を通り抜け、人混みから脱する。

人のいない場所に駆り立てられる現状は決して愉快ではない。

ハンターには二種類いる

一切存在を気取らせない完璧な仕事に喜びを見出すタイプ。

実力を誇示し、獲物が悶え苦しむ様に喜びを見出すタイプ。

追ってきている奴は後者だろう。なぜなら自分と同じ気配を感じるから。

ならば必ず勝機はある。

そう思ったのもつかの間、逃げ回り続けて数十分はたっただろうか、相手に一撃を食らわせることすら出来ずに未だに走り回っていた。

逃げながら仕込んだ爆弾のトラップも、さり気ないフェイクも、床にばらまいた接着剤も、なにもかも不発。

まるでこちらの行動を全て読まれているかのように相手は数々の妨害をもろともせず銃弾を撃ち込む。

発信機でもあるのかとふと思うが、それではトラップの回避のカラ

クリが分からない。

行動の全てを把握するのは滝壺の能力追跡でも遠見能力でも不可能。AIMストーカー セカンドサイト

特に距離も遮蔽物も変動する入り組んだ建物内ではもうとつくと見失つてははずだった。

対抗手段が分からない。結局どこから来るのか分からないのでは対策のしようがなかった。

痛い。開いた傷と吹き出る血液がどくどくと波打つ。

相手の手の内が分からず、増えていく痛み^に体が限界に近い。

「あのー！」

狙われてるのは佐天一人。

守つてやるほどの義理はなく、今なら別々の方向で逃げれば敵は相手を追うだろう。

自分は暗部の人間。薄暗い人間が一般人を裏切るなんてごく普通のこと。

他人を囮にするのも、いつものこと。

「あのー！二手に別れましょう！」

「っは!?!」

「別々の方向に逃げれば私の方を追って来るはずですから！」

現実的な考えを肯定する佐天の言葉に足を止める。

ふざけた考えをあたかも当たり前のように言う女に思わず手が伸びた。

「そんなこと言われなくたって分かっているわよ！」

彼女の服を掴んで近くの柱に押し付ける。この感情を目の前の女にぶつけなくては自分の気が済まない。

薄っぺらい友情のほずなのに何故か彼女の提案に腹が立つ。どうしてだかは分からない。

「アンタあたしから離れて身を守るの!?!無能力^{レベル}なんでしょ!?!捕まっても命までは取られないとでも!?!」

おなじ無能力^{レベル}、けれど違う境遇は戦闘力に差をつけた。

生暖かい平穏を生きてきた女が言う軽々しい提案に腹が立って仕

方がない。

「何聞き出そうとしてるか分からないけど、吐いたあと処分されるだけよー!」

「でも、このままじゃ……二人ともやられちゃうじゃないですか……あたし、足でまといでしかないし……だ、大丈夫ですよ、かけっこは自信ありますから……」

「結局、お人好しかと思ってたけどここまで来るとただの馬鹿ってわけね」

それを伝えてもなお囧になるとふざけたことを言う彼女に呆れたため息を吐く。

けれどこれはチャンスでもある。囧を買って出る勇気を履き違えた無謀な駒がいるならば、戦況は戦略さえ外さなければこちら側へ傾けられるもの。

「でもまあ、そんなに言うならお望み通り、囧になってもらおうじゃない!」

一か八かの賭けに出る。

死んだって構わないと楽観的な中学生に全てを賭けてみることにした。

90話：交友

黒いツーサイドアップを揺らしてクソリア充共を追いながらデパート内を見て回る。

完璧に客として擬態し、服の下に装着した狙撃銃を悟らせないように振る舞えば、彼女らに見つかることも無い。

腕の曲げ伸ばしで自由に組み立て、分解が可能なこの銃は炭酸ガスを用いておりほぼ無音。

彼女たちが銃痕で気づくことも、素振りでも気がつくことも無い。ステルス特化のスナイピング。

どこにいるのかも分からない敵に怯え、気付かれずに銃弾を撃ち込まれ、絶望に浸る最中、彼女たちはどんな声で最期鳴くのでしょうか。

楽しみで仕方がない。じわじわといたぶって、丁寧に噛み殺して差上げたい。

しかしだからといって時間もかけてられない。

口煩い教育係善望さんに上から目線でまた色々と怒られてしまうのが目に見えていた。

急がなければ。そして楽しく殺さなくては。

楽しみに浮かれている中、黒い髪の中学生在が人混みの中、ゆつくりと一人こちらに歩いてくる。

顔を伏せて周囲を伺うようにゆつくりと。

私わたくしのトラッキングは後追い。

狩猟民族が獲物を追跡するのに使う技術で、残された痕跡から獲物の情報を読み取るのが主な使い道。しかし、これは痕跡を追う技術、戻ってこられたら途中の行動が把握出来ず、獲物にありつけない。

だから来た道に戻る今の彼女は自分の技術を封じる手段にもなる。

一瞬バレたのかと思うも、周囲を警戒する彼女の様子にそれは杞憂だと思ひ直す。

恐らく偶然。わざと敵陣に出て襲撃者を特定しようとしているのが丸分かりな仕草だった。

黒毛を囷に使ってリア充金髪が人混みを観察、黒毛に反応した人物を襲撃しようという魂胆でしょう。

無駄だというのに。

ぼっち……ではなく、暗殺術を極めた私は人混みに完全に溶け込み違和感を与えません。

視線、表情、身のこなし。全てが完璧に自然体。

まあ黒毛を見捨てて一人だけ逃げた可能性もありますが、それはそれで楽しみが増えるだけのこと。

友情なんて上辺だけなのに。

ふとデパート内のマップとサービス情報が表示された店内のパネルから目を離して黒毛へ視線を移す。

人混みから抜けて彼女の全貌が見えると、自分の考えがあまりにも甘いと悟ることとなった。

見捨てるどころじゃない。人形を沢山抱えた黒毛に目を見開く。

金髪の目的は使い捨て、人形の姿をした爆弾を持たせて目撃者も襲撃者も全て始末する算段だと黒毛の抱えた人形を見て確信した。

あのクソリア充にとってこれは、自分はこのうのと逃げおうせて目撃者全員の口封じをし、わたくし私の始末ができる一石三鳥の妙手。

しかしそんな無差別殺人を犯せば組織ごと潰されるのは必死。それで窮鼠が猫を噛んだつもりなのか。

黒毛の腕から人形がひとつ落ちる。

床に落ちた人形が抱えた時計の大きな秒針が動き、かちつと音が鳴る。

爆発する。

落ちた爆弾に恐れて柱の陰に逃げ込む。最悪の事態を想定し、覚悟を決めた。

しかし火薬の匂いも、吹きすさぶ風も、溶ける熱も弾けなかった。爆発しないと分かると一気に体の芯が冷えていく。

しまった、やらかしてしまったと、後悔だけが押し寄せた。

「みーっつけ、たア!!!」

「ガ、フッ!!」

悔いる時間も与えずに右頬に白いハイヒールがめり込む。

飛び蹴りをしてきた低身長の子は勝ち誇った笑みで腹を蹴飛ばし、距離を取った。

「結局、ぬいぐるみを爆弾と認識するのはあんただけってわけよ。ココソネチネチいたぶってくれたけど、百倍にしてぶっ飛ばしてやるわ！」

「……返り討ちです」

膝を着いて見上げた先の女が見せる腹立たしい笑みに右腕で照準を合わせて撃つ。

柱に穴を開け、コップや携帯、床にも銃痕を残しながら避ける女を追って床を蹴る。

叫び声をうるさく喚き散らしながらパニックに陥った群衆に目もくれず、逃げていく女に銃弾を撃ち込みながら設置された館内マップの横へ回り込む。

反対側に移った女の脳天目掛けて右腕から弾を噴射するも、飛ばされた紺色のジャケットによるフェイントで遅れをとり、無防備な横腹に強い蹴りが直撃する。

一度体制を立て直そうと素早く後退すると、ふたつの小さな三面ダイスによく似た灰色の何かが宙を舞う。

それが何か理解すると、すぐに横へ飛び風を受け流す。

破裂する風と熱量、焼ける空気の匂い。それは小さな爆弾だった。破片効果のない衝撃波のものとはいえ、近接戦闘に爆弾なんて酔狂な女なのか。

しかし腕のダメージでまともに投げられず、投げかけた爆弾を容易く銃で弾いて追撃を阻止する。

驚異にはなり得ない。こんなもので狩れるなんて、底が知れる。

「あらあらあー!! 大口を叩いた割にたわいなあい!! 百倍にするとかなんとか……もう、立つこともできませんか……?」

後ろに後退した彼女の腹につま先を蹴り入れると、痛みが酷いのか床に這いつくばって嗚咽を漏らしながら肩で息をする。

強気な女の倒れ伏す姿はなんと興奮しがたい愉悦を感じさせた。

「……ハッ、結局立ち上がらないのが、伏せてる方が安全だからって訳よ」

「ッ、しまっ——」

それが仇となる。床に伏せて満身創痍の体で金髪はスイッチを押そうと不敵に笑う。

勝ちを確信した腹立たしい顔に、なすすべはなく押し寄せるだろう風に身構えた。

「何が安全ですって？」

強い風の代わりに、優しい女の声が響く。何も起こらない事実衝動的に瞑った目を開くと、一人の女が目飛び込んできた。

そしてその後ろで人形を抱えて飛ぶ何十匹もの白い蟲。

酷く長い黒髪と、空色の上品なワンピース、白いパンプスとカチューシャをつけた長身瘦躯で人形のようなハーフ顔の綺麗な女性だった。

長い前髪に隠れた左目と、露出した右目には眩い星が瞬いて、黒い目に輝きを彩る。

神秘的な魅力を持った不思議な人だった。

「垣根くん、キミはこのことをご存知で？」

「予想外だよ。全く、誉望の野郎……なんで報告しねーんだ」

「ッか、垣根さんッ!!」

初めて見る女性に手を引かれる長身の眉目秀麗な男性はどう見ても上司で超能力者の垣根帝督その人。

思わず上擦った声でその場に立ち尽くすと、彼は物凄く嫌そうな顔でため息を吐いた。

「まずは、目的から貰おうかな。弓箭猫虎ちゃん」

「……？」

ちいさなりモコンを向けられると、四人しかいない広い空間にかちつとボタンを押す音だけが響く。

何をしたいのか分からず首を傾げるも、全てを見通したかのような呆れた顔で今度はクソリア充に視線を移した。

「……なるほど、佐天ちゃんね。で、キミはただのお人好しと言うわけ

「？」

「ッ……ッ！ッッ！」

「喋らなくて結構です。どうせ全て改竄しますから」

声も出ず、体も動かない金髪に冷やかな視線を送ると大きく息を吐いて深呼吸し、もう一度リモコンを押す。

「……………二km先までの十分間を消しました。荒い処置ですが、健康に被害は出ないでしょう」

「は……………？体晶も使わずに……………」

「そして佐天涙子もどうやら何も知らないようです。無駄骨でしたね、お可哀想に」

嫌そうな顔で単調な敬語を話す彼女に少し驚いたような表情をする上司から察するに、彼自身も彼女の能力を知らない様子。

ネームドの組織に所属する彼ならばどんな情報でも得られるはず。だということにこのリアクションはどういうことだろうか。

よく知られておらず、かつ垣根さんともあろう方がなすがままにされるほどの実力者で、わざわざ共に行動する相手。

そんな目の前の女に少し心当たりがあった。

「……………藍花、悦？」

「おや、どうしてぼくを……存知で？」

「新しい部下って……………」

学園都市に七人しかいない超能力者^{レベル5}、その六番目を冠する正体不明の謎多き人物。

その名前が新しく来る構成員との話を教育係から軽く聞いていた。けれど彼女はそれを知らないのか、恐ろしく低い声で後ろに立つ垣根さんに声をかける。

「……………垣根さん、……説明を」

後ろを向いた彼女の顔を見ることも無く、その言葉を最後に自分の体は力なく地面へと倒れ伏した。

倒れた二人の少女をよそに、罰の悪そうな顔をする垣根くんを軽く見上げて腕を組む。

怒っているのはあたしだと言うのに、彼の方が背が高いのが腹立たしい。

「説明」

「……どうせ中身みたんだろ」

「垣根さんのお口から聞きたいんです。言わないなら彼女たち起こしますよ」

リモコンを倒れた少女たちに向けると、そんなに嫌なのか彼はため息を一つ吐いて頭を掻きながら面倒くさそうに呟く。

なんだか腹立たしい仕草に寂しさを覚えるのは気のせいだろうか。

「上から藍花悦を勧誘しろって言われたんだよ」

「ぼくを？・なんでまた」

「知るかよ」

ぶすツとあさつての方向を見ながら不機嫌そうに告げる彼の横顔に嘘はない。けれどもその内容に疑念を抱くのは当たり前だった。

アレイスターは知っている、あたしがなんだってできることを。ならば行動が制限される組織、ましてや反逆を企んでいる垣根くんの元へ送らないはずだ。

一体何がしたいのか。十月九日が目前に迫っている今、何かしらの思惑があることに違いない。

「……ぼくを使いたいのか？あの人」

十月九日、全てが決まる日にアレイスターはあたしに何かをさせたのだろうか。

死か救済か。どちらかは分からないが彼は何とかしてでも藍花悦を物語に組み込んで、さらなる発展を望んでる。

一方通行が未だ覚醒していない現状、木原数多の持っていた笛を所

有しているあたしに役を全うすることを望んでいるのだろう。

こんなまどろっこしいことをしなくたって、未来はすでに決まっているというのに。

「何の話だよ」

「ふん、ぼくのこと信頼してない人に教えることはありません。教える義務とかありませんしー?」

「あ? テメエが信頼に値しないのは自分の行動のせいだろ」

怪訝そうな顔をする垣根くんの横を通り抜けて、虫にぶら下がった爆弾人形しかない豪華なデパートを歩く。いつもより少し早めに、低いヒールでコツコツとタイルを踏みしめて遠ざかる。

しかし彼も負けじと長い足で追いついて後ろにピツタリとくっついて離れない。一人にしてくれない彼に、胃の奥から粘りのある怒りがドロドロと溶け出してく。

「……ぼく、君と同じ超能力者^{レベル5}です。第一位とキミと、第五位さんとはとんど同じことができます。キミのためだけに力を振るう覚悟もあります」

「でも俺より弱いだろーが。見栄張ってんじやねえぞガキ」

「弱さなんて関係ありません。ぼくはキミが大好きで、キミの幸せのために死ぬ。体を売ることだって、金品を差し出すことだって、人を殺すことだって。それだけで十分じゃないですか」

腹立たしいセリフに思わず立ち止まると、勢いよく後ろを振り向いた。振り向きざまに舞った男物のウツデイな香りが鼻を掠める。

ひどく甘い空間に吐き気がしてたまらない。

「弱い奴が、俺と一緒に地獄に落ちてくれるのかよ?」

「垣根くんためなら、弱くたってキミを幸せに見せます」

もう後戻りができないほど心酔しているというのに、この男はこれ以上何を望むのか。思い詰めたような瞳で見下ろす彼が何を考えているのか分からない。

キミのために汚れたい。

キミのために全てを失いたい。

キミのために死んでしまいたい。

理解してくれないことが堪らなく嫌だった。

「……そうだな、お前はそういう奴だったな。心配しただけ杞憂か」
彼はただ呆れたように大きな手で頭を撫でてから再び手を握る。
何を言っても譲らないとわかったのか、手をとって歩き出した。

面倒だと言いたげな横顔で前を進む彼にもどかしい感情しか覚えられない。何を考えているか分からない少年に、いつまでこんなにかき乱されなければいけないのだろうか、

「じゃあ面白い物、続けるか？ 藍花サン？」

「……悦んで呼んでよ、先輩」

腕に体を押し付けて軽くため息をつく。急に態度を変えた彼にわずかな苛立ちを感じながらも、結局文句も言えずについて行くしかない。

美しい服を汚さないため、彼のそばで綺麗であるため、手を繋いだまま面白い物を続けた。

「クソ仕事ご苦労。お前たちのおかげでピンセットの情報が集まった」

ガラスブロックから差し込む夕焼けが眩しい午後、仕事から戻ってきた弓箭獵虎とその教育係、誉望万化の前でリーダーが手持ちのインディアンポーカーを眺めていた。

近くのソファでその光景を見つめながら、唯一おかしな点に言及せずただ彼の言葉を待つ。

「現在の所在こそ不明なものの、近日中に霧が丘学園近くにある施設で実際に使用されるのは確定。今回のソースはまともらしい。この凶面で行く。必要な計算を……」

「あの……垣根さん、その前に……」

「なんだ」

「彼女は……その、どなたで……?」

しかし待てが出来ない誉望万化は恐る恐る手を挙げてちらりとリーダーの隣で静かに立つ女性に目を向ける。

背の高い女だった。170はある高い背と同じ長い黒髪と、前髪で隠した左目と唯一見える右目に咲いた輝く星。

人形のような冷たく儂い顔、FかGはある大きな胸、お淑やかなお嬢様風の風貌。男が好きそうな女、そんな印象だった。

「初めまして、藍花悦と申します。ぼくのことはお気になさらず」

「ぼくっ娘……」

微笑みかける女に誉望万化がほんのりと目を見開いて耳を赤く染める。

青空色のパステルカラーで染った上品な高級ワンピースの上から白いエプロンを着て、同じように白い靴とカチューシャを付けた彼女は昔の看護師のようで、暗部の人間としてはかなり異質だった。

「こいつは俺と行動する。ちよつかいかけたら殺す、とくに誉望」

「っは、はい……」

侍らせた彼女を大事そうに横に置いて威嚇するリーダーに九月三十日の出来事を思い出す。

藍花悦と名乗った彼女をその日に見たことがあった。会話を一言二言交わした程度だったが、その時は平らな胸と広い肩幅で、中学生くらいの少年にしか見えなかったというのに、今の彼女はどこからどう見ても良家のお嬢様。

「大丈夫ですか、誉望さん。彼のことは気にしないでいいですよ」

「え?あの……」

「悦」

「はいはい、相変わらず彼氏面が酷いですね」

「うっせ」

輝夜姫のような風貌に似合わない凶器的な大きさの胸部から視線を外さない部下を遮って、低い声で下の名前を呼ぶと藍花悦は小さくため息を着く。

仕方ないと言いながらリーダーの隣に戻る彼女の顔は朗らかだった。

「えつとというわけで、本日付で配属？されました。第六位、藍花悦と申します。よろしくお願いしますね」

柔らかく笑うと、彼女は小さくお辞儀をして再度名乗る。

優しそうな笑みに甘い香りが舞う。同性だというのに、言葉に言い表せないような甘い香りのせいで無条件で好きになってしまいそうだった。

「よ、よよよろしくお願い致しますわ!!わたくしたち、お友達ですものね!!手取り足取り全部教えてあげます!」

「こんにちは弓箭さん。お昼ぶりですね」

毒牙にもう既にかかっている弓箭獵虎はリーダーを恐れもせず藍花悦に抱きついた。

大きな胸を衝突させながら生き別れの恋人かと勘違いするほどの大袈裟な挙動で抱き合う弓箭さんに一種の恐ろしさを感じるも、そんなことにせずに藍花悦は笑みを絶やさなかった。

「ららら獵虎って呼んでください!わたくしたちお友達、いえ、もう親友ですから!わたくしもええええ悦さんと読んでもよろしいでしょうか!?!?」

「いいですよ、獵虎さん」

「ツツツ!!おおお友達ですから後で遊びに行きましょうね!!お洋服もお揃いにして!!あとメアド交換して!!それから、それから!」

押し当て合う互いの豊満な胸のせいでそこまで密着できていない体をぎゅうぎゅうに押し込む弓箭の頬を触る。

黒く長い髪をカーテンのように垂れ流して弓箭獵虎を見つめる姿は恐ろしくも惹かれてしまう。

「獵虎さん、そんなに大急ぎでやったら楽しいことがすぐ終わってし

まいますよ。お揃いもメアド交換も逃げませんから、少しづつ楽しみましよう?」

「ふあ、ふあい……」

至近距離で優しく笑う藍花悦の落ち着いた言葉に弓箭さんも大人しく従って体を離して機嫌良さそうに近くの椅子に座った。

末恐ろしい女、自分でさえ扱えなかった弓箭獵虎という部下をいとも容易く手懐け静かにさせる。

カラクリがあるとしか思えない精神操作に不安しか感じない。

「キミも」

「……ええ、よろしく」

次にソファに座る私に手を差し出して握手を求めると、彼女は眩しい星が瞬く瞳を微かに歪めて小さく声を潜めた。

くすくすと妖精のような笑い声。外見も相まって酷く恐ろしかった。

「よろしくね、極彩海美さん?」

誰も知らないはずの名前を吐息混じりに恐ろしいほど優しく眩くと、彼女は甘い香りを残してリーダーの元へ帰ってしまう。

小さく眩いた声は自分にしか聞こえず、ただただおぞましい。

「なんて言っただんだ?」

「んふふ、なんでもありません」

これは宣戦布告で、忠告。彼を傷つけたら許さないという一方的な警告だった。

リーダーの腕を取り、悪魔のような笑みをする彼女に息を飲む。

なんでも知っているかのような態度が恐ろしくて、言葉を発することもままならない。

こんな女に心酔するリーダーに、信頼など置けるのか甚だ疑問である。

そんなことを思う片隅で、カチツと小さくボタンを押した音が聞こえたような気がした。

91話：執事とお嬢様

秋の風が頬を撫でる昼過ぎ、外に設置されたテーブルに着いて目の前の女が仕入れた情報に耳を傾けた。

「——妙な動き、だと？」

「ええ。こつちで手に入れた情報によると、第一位を含む『グループ』が、とある店舗で活動しているみたい」

目的の一つである一方通行アクセラレータの不確かな情報を淡々と報告するキャバ嬢のような中学生の言葉を鼻で笑うと、涼しい風に木々が揺れる。

休日出勤に苛立ちを感じるも、桃色のドレスを着た部下の面白いの表情を見つめながら話の続きを待つ。

アレイスターに繋がる第一位の情報は例え休日が無駄にしても必要だった。

「はっ……天下の学園都市第一位様が、今じゃパシリかよ。で、その店舗ってのはどこだ？」

「最近新しくできた、執事喫茶よ」

ただその内容は到底理解できるものではなく、思考が止まりその単語だけが脳に残る。

「……執事なあ？」

執事、バトラー、使用人。

現代日本で一生聞くことがなかったであろう単語を復唱する。

その単語の意味をきちんと理解出来ているかは自分でもよく分からなかった。

クーラーの風が心地いい午前中、冷蔵庫から取り出した冷えた甘い琥珀糖をケースに移しながらスマホのスピーカーから流れる可愛い少女の言葉を復唱する。

「執事喫茶、ですか？」

『はいっ！最近新しくできたんですよ！良ければ今から行きませんか？そそそれで、お揃いのお洋服を着て、一緒にお友達らしいお話をして、お料理食べて、手を繋いで、それから、それから！』

「それは構いませんが、スクールのそんな遊んでる暇あるんです？忙しい感じしてたんですけど」

赤い琥珀糖を少し摘み食いしながら可愛い夢を語る弓箭獵虎の提案を聞いていると、おっとりした外見からは想像もつかない早口で捲し立てられ手が止まる。

楽しそうで可愛いと思うが、あまりにも友達という単語に単純な彼女が少し心配でもあった。こんなにも扱いやすい子供、これから先大丈夫なのだろうか。

それにこちらにもまだ準備がある。キッチンカウンターに置かれた印刷されていない真っ新しいインディアンポーカーのチエキを横目で見ると、少し眉を寄せた。

垣根くんの邪魔がないようなら今晚のうちに印刷するつもりだったが、距離の詰め方が大袈裟な少女と遊んでしまったら家に帰れるか不安になる。

要求がエスカレートしてどこぞのラブホで女子会がしたいだの、家でお泊まり会がしたいだの言い出したら困るのはあたし。

断るべきか、悩んでしまう。

『垣根さん曰く、あとは一方通行の戦闘パターンアクセラレータの収集で、目立つ動きは極力しないらしいですから、大丈夫です！』

「そうですか。で、決戦前に少し遊びたいというわけですね？」

『そうなんですっ！せせせつかく、親友になれたのですから……』

期待する声で電話越しに大きく話す彼女に思わず微笑んでしまう。

誰かの可愛い要求、それも背が低い女の子からの要求は断れないのが姉の性。

あの子にも頼まれて色々回ってあげたな、とふと思ひ出す。

キャラ弁がいいとせがまれば作ってあげ、頼まれれば秋葉原のメイド喫茶まで連れて行ってあげ、大規模な同人即売会とやらにお友達と行きたいと言われれば車を出し、コンビ二でくじが引きたいと言わ

れば他県まで車を走らせ、アイドルのコンサートに行きたいと言われればチケットを買ってやって運営に事前に連絡までする。

「どんなに自分が興味ないものでも、誰かに頼まればやってのけてしまうもの。」

それに、新しく出来たオトモダチと小さな居候さんに新しい思い出を作らせるのも楽しいかもしれない。

「いいですよ、行きましょう。杠ちゃんも連れて行きましょうか」
『どなたです?』

「えっと、一緒に住んでる子です。お友達になってくれるといいですね」

『ままままああ!!ふふ、ふ二日で二人もお友達が!わわわわかりましたわ、今からお揃いのお洋服を三着買って行きます!なのでサイズと住所を教えてください!!』

「ハイハイ、落ち着いてくださいね。ぼくたちは逃げませんから」
友達が增えるのはいい事だ。長く友達でいられないあたしの代わりに仲良くしてくれればいいのだが。

賑やかな狛虎ちゃんの興奮気味の声を聞きながらケースに詰め終えた琥珀糖を冷蔵庫にしまい、ソファで猫と戯れる杠林檎を誘いにキッチンから離れた。

「ふん……サイズは合ってるか。意外と悪くねえな」

人の多い喫茶店で身を包んだ執事服のスワローテイルの長い裾が揺れる。十月に入ったとはいえまだクーラーが作動する店内では黒く重なったフォーマルな燕尾服と白い手袋はすこし暑い。

「しかし一方通行は何を狙ってるんだ？」

「何か目的があるんだろうけど、実際見るとなかなか異様ね」

貸し出しの黒い執事服を着込んで店の中に紛れながら一方通行の姿を探すと、随分前に上から覗き見た白髪頭が人混みの中立っている姿が薄らと確認できた。

背が低く、人相も悪く、筋肉もなければ脂肪もない薄っぺらい体。病気を疑うような細さの男の執事姿は似合っているかと聞かれたら口を噤んでしまう程度のもの。

似合わない姿で周りを見渡す男に第一位の貫禄は感じられなかった。

「一時は絶対能力者になろうなんて話だった第一位様が、随分とまあ堕ちたもんだな」

「でもこんなところで給仕なんてしてることとは何か目的があるのよね」

「さあな、それよりも知り合いに見つかからないかが心配だが」

一方通行から一度目を離して人の多い店内を軽く見渡す。オープンしたばかりのカフェは見物客が多く、普通の喫茶店とは比べ物にならない程に混んでおり入口が辛うじて見える程度だった。

「あら、藍花さんに見せたくないの？そんな面白い姿、見せなきゃ損だと思っけど？」

「あいつは可愛い可愛いってうるさくなるからダメだ」

こんな姿をあのカバに見られたくない。執事服が似合っていないとは思わないが、あのうるさい女に見せたくないかった。

見られたら最後、ずっと可愛いだとか好きだか鬱陶しく鳴き続けろちよると俺の周りを犬のように纏わり付く。

いつその事ベッドに沈めて黙らせてやろうかとも思うが、純潔の神様にそんなこと出来るはずもなく、ただの妄想で終わってしまう。

出来るのは奇跡に祈ることのみ。ミーハーだけどどこか冷めてる彼女がこの店の存在を知らないでいることを願っている事しか出来なかった。

「でも彼女、今日はあの子と一緒にオフなんでしょ？こっちに来るか

もしれないわよ?」

「弓箭はこういうの好きそうだな。仕方ねえ、05にこつちこさせるなって連絡を——」

「お帰りなさいませ、お嬢様方。初めてのご帰宅で宜しいでしょうか?」

「はい。三人でお願いします」

05と通信をしようと羽も出現しないほど軽く未元物質を展開させていると、店内の出入口から呑気な女の声が入る。

ちようど話していた女の声とよく似た通る声だった。思わずその方角に振り向いて声の出処を目で追い、見つけた黒髪に固唾を飲む。

「わー! 本当に執事がたくさんおりますね、悦さん!」

「執事?」

「そういうタイプのコンセプトカフェ……えつと、お芝居しながら雰囲気を楽しむカフェ? うーん、伝え方が難しいですね」

「執事って、何?」

「そこからか……」

最悪だった。

林檎に弓箭、そして天羽のガキ三人組が同じ黒髪を揺らしてそれぞれ似た服装で姉妹のように席に案内される姿に背筋が凍る。

「なっつっ——!?!」

「噂をすれば。お揃いなんて、ナカヨシさんね」

三人して同じ髪型で、見たことも買った記憶もない服を着込む彼らは髪色も相まって仲良し三姉妹に見えなくもない。

黒いタイツとチェック柄のベージュのミニスカート。秋らしいくすんだ淡い色のジャケットは金持ちお嬢様学校のクラシカルな制服に採用されていそうな上品さがあった。

「執事さんかっこいいですね。こんなに男性のいるところは学び舎の園にないのでちよつと恥ずかしいですが」

「メイドカフェは行ったことありますけど、執事喫茶って似た感じなんですかね? せっかくきたんですし、イケメンとチェキ撮って売り上げに貢献しますか……え、チェキないの? コンカフェである意味無で

わ?」

「メイド? そつちも行ってみたい」

各々好き勝手に喋りながらメニューを見たり店内を見たりと、こちらに気付かぬまま彼女たちは執事姿のウェイターに促されたテーブルにつく。

楽しそうに談笑を続ける彼女たちから隠れるように心理定規メジャーの近くの柱に背を預けた。

「なんでここに……!」

「大方、弓箭さんの方が無理を言ったんじゃないの? あの子、距離の詰め方が尋常じゃないし」

「……これが寝取られ? 女に女を奪われるのか??」

「落ち着きなさいよ」

「落ち着いてるだろ。これ以上にならないほど落ち着いてるぞ」

俺には見せない少しオシャレで高い服を着て、楽しそうに手を繋いで、恋人のようにイチヤイチャとハグをしたり顔を近づけたりする光景はどう考えても浮気である。

そんなことを本人に言えば『彼氏面するな』とかなり本気な声色で怒られるのが目に見えているが、それでもそう思う他あるまい。

女相手だろうが、パーソナルスペースを侵害しまくった光景は腹が立つ。

「はあ、あの子のどこがいいの? 天羽隼糸といい、貴方趣味悪いんじゃない?」

「小一時間ホテルでおっさんの相手してるガキに言われたくねえな。他人の趣味にとやかく言える立場にいいのかよ、お前」

「何もやましいことはしてないわよ。それよりも彼女たちの方がやましいこととしてそうだけど? 胸の大きい気さくな女なんて、如何にもじゃない」

奥歯を噛み締めながら腹立たしい光景を眺めっていると、心理定規メジャーが要らない小言を吐き出す。

どこか怒っているような、責めるような言葉は目の前の浮気現場も相まって純粹にムカついた。

「何も知らねえガキは黙ってる、狭い視野で語ったら殺す」

「やだ怖い、何がそんなにいいんだか」

「お前には一生をかけても分かんねえよ」

趣味が悪いことくらい自覚している。おぞましい神様を家族だと思つて、あまつさえ情を抱いているなんて常識の範疇外だ。

けれど、彼女を好きでいられるのは自分しかない。

そう思うと、優越感で脳みそがオーバーフローし、まともにも考えることもできなかつた。

「ふーん……じゃあ本人に聞いてみようかしら」

「は？おいっ!!」

怒鳴りたい衝動を抑え天羽達のいるテーブルを眺めているとおもむろに心理定規メジャーハートが立ち上がって軽い足取りで眺めていたテーブルに向かつた。

「ねえ、一緒に座つても大丈夫かしら？」

「一人分は空いてますけど、つて心理定規メジャーハートさん!？」

「こんにちは、なんだか楽しそうね」

こつんと白いテーブルを叩き、目の前に座る弓箭に軽く笑う。

少し前に弓箭と軽く話した際に近過ぎて心理的距離を離れたと言つていただけあり、弓箭の反応はなんてことない顔見知りに話しかけられた程度にしか思つていないようだった。

「あ、垣根と一緒にいた……」

「心理定規メジャーハートって呼ばれているわ。よろしくね杠林檎さん」

林檎の対面にあるデザインの凝った席に自然な動作で座るも、斜め前の天羽は疑う素振りひとつせず楽しそうに笑っているだけだった。

危機感のない笑顔に嫌な予感しか覚えなられない。

「キミのような子もこういうところに来るのですね。少し意外です」

「面白そうだったから、ついね。それより貴女たちはさつきまでデートでもしてたの？」

「デデデデートだなんて、いえ、でも私たち親友ですからデートと呼んでも支障は、でも交際相手との外出の際に使う単語ですし、いえ、でもデートということは私達は親友以上の恋人になれるということだ

しょうか？ですが私たちは女性同士……！ああ、いけません、そんな……!!」

「えー……つと、心理定規メジャーさんはどなたとここに？お一人だとは思えませんし」

「ええ、私達もデートなの。ほら、こっち来なさいよ」

恥ずかしそうに顔を赤らめよく分からない言葉を羅列する弓箭を置いて困ったように笑う天羽を鼻で笑うと、心理定規メジャーは挑発するようにこちらに目を向ける。

目が合った。星の輝く黒い瞳と目が合ってしまった。

仕事とはいえ中学生と二人きり、コスプレもしていること非常識な現実を彼女に見せたくなかったというのに、現実には軽々と嫌な方向に物事を進めてくる。

「垣根くん……」

「ごめんなさいね、彼のこと奪っちゃって。でも付き合っていないのだし、いいでしょう？」

「……ええ、別に彼がどこで誰と何してようがどうでも良いですよ。たとえ相手が垣根くんのストライクゾーンど真ん中のロリ中学生でも気にしません」

低めの声で見えていたメニューを閉じると、頑なに目を合わせないように天羽は真っ直ぐ心理定規メジャーを見続ける。

明らかに不機嫌になった可愛い嫉妬に心がくすぐられながらも、浮気だと勘違いされている現状はどうかして打破したかった。

「嫉妬しているの？居場所を奪われて、面白くないのかしら？」

「面白い冗談ですね。まるでぼくが彼に恋しているみたいなお口振りですけど、精神系能力者のわりにぼくの心は読めないですね」

「読めなくても分かるわよ。ルービンの恋愛尺度のテストでも試してみたらどうかしら、それとも恋愛相談でもしてあげましょうか？サービスするわよ」

ばちばちと火花が見える気がする彼女たちの交わる視線に弁解の言葉は喉から飛び出ることを躊躇する。

様子を伺いながら天羽の隣に立つも、女同士の罵り合いに気圧され

口は恐れをなして閉じてしまった。

「自分の感情くらい理解してますよ。これは愛よ。何よりも綺麗な愛、恋なんかじゃないの」

「愛？血縁でもない、会って間もない人間を愛しているというの？」

「これは神が願う隣人愛ですよ、異教徒。分からないなんて可哀想に」
「神に祈る情弱だったの、あなた。だからそんなに頑なで我儘なのね」
「愛は『尽くしたい』と思う美しい願望。恋がその逆だと言うのなら、恋とは『その人に尽くされたい』という一方的で我儘な怠惰なる想い。ぼくの感情はそんな穢らしいものではないんですよ」

いつもの超理論を展開し、低い声で自分の想いに封をする彼女に寂しさを覚えるも、強がりでも我儘の言えない可哀想な姿に同時に心臓が潰れそうになるほどの何かを感じる。

「なに、貴女マゾヒストか何かなの？じゃなきゃこんな男と付き合わないでしょ」

「テメエ当人の前でよく悪口言えるな」

「次に垣根くんのこと侮辱したら女の特権取り上げますよ。それとも不治の病にでもかけてあげましょうか？後、ぼくは彼とお付き合いなんかしてなければ恋もしていません」

ため息をつく心理定規メジャーの軽い悪口に自分よりも怒る天羽のはつきりとした強い口調に空気が張り詰め、息苦しい。マゾヒストと俺以外に罵られているのに、それ以外に意識が行くのはいつも通りだったが、それでも本人すら分かっていない嫉妬心のせいかもしれない。明らかに怒っていた。

「マゾヒストなのは否定しないのね」

「……研究者はマゾとサド、両方兼ね備えていなければなりませんので、反論する余地はないかと」

「マゾ？何それ」

「り、林檎さん、メニュー見ましょう?!喧嘩してる人は置いておいて、ね？」

林檎がいる前で女同士の喧嘩が勢いを増していく。弓箭がいたおかげで林檎の気はそれだが、それでも小うるさく彼女たちは論争を続

けた。

「小動物を生かし殺すことへの罪悪感がないサディズムと、自分を実験体に使えるマゾ心がないと研究者つてのは務まりません。歴史のお勉強はしてないようですね」

「自分を実験体につて……お前ほんと頭のネジ取れてんな」

「それは科学を作り上げてきた偉大な医学者科学者への冒瀆ですよ垣根くん。ピロリ菌を自ら飲んだ医学者、コレラ菌を摂取し無害を立証しようとした近代衛生学の父、ミゾサナダムシの幼虫を自分から飲んだ動物学者、自分の性器を傷つけてまで淋病の仕組みを解明しようとした解剖学者、自分の心臓にカテーテルをぶっ込んだ医者に、それから――！」

論争は激しくなり、天羽の欠点が色濃く口から吐き出された。

学術的なこと、医学的なこと、そういった事柄が彼女は好きだった。それこそ早口になって興奮するほどに。

いわゆる科学オタク。

妹のためとは言え一生を科学に投じてきた彼女は尋常じゃないほど科学に執着していた。

そこがなかったら完璧な女なのにと少し思うが、子供のように知識をひけらかし興奮する姿は隙だらけで一周回って完璧なのではないかと錯覚する。

この馬鹿さ加減がなんとも言えない。

「心理定規メジャーハートが追いつけてないから、もうそろそろ話を戻そうな？ できるか？」

「……馬鹿にしてるでしょ」

「してないから、な？ いい子だから」

しかしこのアホさ加減を知らない心理定規メジャーハートには情報過多だったようで、ぽかんと目を見開いて天羽を見ていた。

俺の言葉に口を噤み、従順に椅子に座る彼女の姿がよつぽど可笑しかったのか、心理定規メジャーハートは恐ろしいものを見るかのように掠れた声で吐き捨てる。

「本当に彼が好きなのね、あなた……どうしてそこまで彼が好きなの

？理解不明なんだけど」

「全てですよ。美しい顔も、綺麗な目も、少し大きな口も、ちよつと飛び出た犬歯も、丸っこい頭も、高い背も、骨っぽい手も、結構大きい足も、細い腰も、脂肪分のない体も、発達途中の筋肉も、口煩い所も、甘いところも、なんだかんだ優しい所も、自信家な所も、少しロマンチストなところも、白い羽も、誰かを救いたい心も、野心を持つてるところも、なにもかも。全て知った上で好きなんですよ」

「……それを恋と呼ばずになんて呼ぶのよ」

「これを愛と呼ぶんですよ、勉強不足ですね」

天羽は俺のオタクでもあった。

続けざまにはつきりと言い切る愛の告白に小つ恥ずかしさを多少感じ、緩む口元を抑える。

もう片方の手で落ち着くように優しくハーフツインに括られた長い黒髪を撫でて、機嫌を損ねたお嬢様に精一杯の思い遣りを口にした。

「悦。お前が思ってることはないから、安心しろよ。お前を置いて行きはしねえから」

「……別に、なんも疑ってませんが？」

「ぜってえ誤解してるだろ……ッ?!」

少しだけ頬を膨らませながら顔を伏せる彼女の頭を撫でながら必死に弁解するも、雰囲気をぶち壊す店内の奥から喧嘩をするような激しい音に全て遮られた。

一方通行が接客していた方からの騒音にことが始まったと理解し、気が引き締まる。

テーブルが崩れる音、誰かが倒れる音。軽く頭を叩いて帰るように天羽の目を見ると、ため息混じりに彼女は立ち上がった。

「はあ、面倒ごことに巻き込まれる前に行きますよ」

騒ぎが大きくなってきた店を見渡して、下着が見えそうなほど短いスカート揺らし勢いよく立ち上がる。

林檎の手を引いて出入口へ向かう彼女を引き留める理由はなかった。

「いいの？垣根置いてって」

「そ、そうですよ、垣根さんだつてもしかしたら何かわけがあったのかもしれませんし」

「良いんです、帰りますよ」

黙ったまま店内を後にする姿にはらはらと焦りを感じるも、先程の頬の赤を見るにまだ拗ねているだけ。

可愛い妹分が変に弁解を捻じ曲げて理解していないかだけが心配だった。

「随分あの子に甘いのね」

「あんな告白毎日聞いてたら気も削がれるさ。間抜けで可愛いだろ？」

唯一残った心理定規の言葉に口元が緩む。弁解も聞かず勝手に帰ったとはいえ、心の底から俺のことが大好きな可愛そうな少女の熱い愛の言葉に絆され、拗ねた彼女に苛立つことも無く帰ってしまう。弓箭もいるため無事に帰れるのは分かっているため尚更無理に引き留めることは無かった。

「だから馬鹿やつてる連中はアイツが見る前に潰すに限る。そうは思わないか？」

それに悲惨な現場を見せる訳にもいかない。隣で懐の銃に手を伸ばす分かりやすいクソ野郎に振り返ると、青ざめていく野郎の顔をせせら笑う。

暗部に堕ちたからと言って、それが神様が汚れていい理由にはならない。

「お粗末な雑魚が。一方通行が狙つてたのがコレだなんて笑えるな」
だから見えないように、見せないように、感じないように、聞こえないように、触れないように管理しなければならぬ。

家族であり、ハジメテの少女を守るのは他ならぬ自分だけだから。

アンチスキル
警備員の通報で都合が悪くなり、早々に着替えだけ持ち去って近くの路地裏に身を隠す。

後で服を処分しなければと思いつつも、もったいないとも感じながら薄暗い道を一人で歩いていった。

メジャーハート
心理定規は客の避難のどさくさに紛れ撤退、残された自分は一人虚しく帰るだけ。

「垣根くん!」

「天羽、なんでここに……!」

つまらない帰路にため息を着くと、突然目の前から柔らかい女の声が反響する。

狭い路地ではつきりと聞こえたあの女の声にパッと前を向くと、想像通り、背の高い巨乳の人形のような女が心配そうに駆け寄ってくるのが見える。

下着が見えるのも気にせず短いスカートで走る彼女に悶々とした感情を味わいながら、走ってきた少女を体で受け止めると彼女は困った顔で早口を捲し立てた。

「怪我は? さっき警備員アンチスキルが向かってたけど大丈夫だった?」

なんとも健気な少女なのか。心配そうな瞳で顔を近づける背の高い彼女からは先程の不機嫌そうな雰囲気は感じられず、ただ純粹にいつも通り他人を心配しに来ただけだった。

「なんだよ、機嫌悪いんじゃないのか?」

「……あつ、わ、忘れてた!」

「つふはは、そうか、悪いか。ぶふ、機嫌って忘れるものなのかよ」
単純な脳細胞に笑いが止まらず口を抑えて控えめに笑い飛ばすと、天羽は恥ずかしそうに口を尖らせながら必死に誤魔化する。

その滑稽な態度が余計笑わせてくるのも分らないのか、羞恥に煽られ彼女の赤みのある頬が更に顔が赤くなる。なんとも馬鹿で脳が

素直なのだろうか。

「ちよつと、笑わないでよ！怒るよ！」

「はあー、おもしれえ。それで？どうやったら機嫌直してくれますか、お嬢様」

犬にも満たない記憶容量に笑い疲れると、綺麗に淡い茶色でコーティングされた爪を手に取る。

機嫌が治っているのは目に見えているが、からかわずにはいられなかった。

「……イケメンってすごすぎるいよね」

「お褒めいただき光栄です、お嬢様。さらに惚れたか？」

「寝言は寝て言って。あたし、誰かに奉仕されるの嫌だもん。する側でいたいんだから」

頬をふくらませて不貞腐れているにも関わらず優しく手を握り返す本心に柄にもなく優しく微笑むと、気まずそうに手を離そうとそっぽを向く。

仕方なく手袋を外して素直になれない家族の手と指を絡ませ逃げないようにしてみると、満更でもなさそうに握り返して路地裏を歩き出した。

「ならメイド服でも買って帰るか？そんで美味しいミルクティーでも入れてくれよ」

「いらないよ、そんなもの。雇われじゃなくても、垣根くんのためならなんだって出来るんだから」

重い愛の言葉を恥じらいもせず軽やかに言い放つ彼女にため息をひとつ吐くと、手を繋いだまま帰路を歩く。

この服はいつかのために記念に取っておこうと、機嫌の治った彼女を眺めながら思うものの、心の奥ではそれどころでは無い不安がふつふつと湧いていた。

きたる革命の^{十月九日}日、純粹無垢な乙女が傷つくことだけが恐ろしかった。

十月九日 独立記念日 92話：幕開け

十月九日、バタバタと忙しく仕事をこなし、やっと一息つこうと病院内の自動販売機にお金を入れる。

二段目のボタンを押し、無糖のコーヒーがガコンと音を立てて取り出し口に落ちると今度は別の音がこめかみの近くで聞こえた。

「また随分なぐっ挨拶だね？」

こめかみに当てられた重い銃口から微かに臭う煙に顔を顰めながらコーヒーを取り出すと、缶の蓋を開けて苦いコーヒーの香りで書き換える。

白い髪と赤い目、杖を着いて体を支える大切な患者の物騒な挨拶に動じることも無く、喉を潤すコーヒーの旨味に浸りながら白衣のポケットに手を入れた。

「情報が欲しい。電極の設計図だ」

「チョーカーの調子が悪いなら僕が治してあげようか？」

苛立った声で睨む彼の首についた黒いチョーカー型の電極、それは八月最終日脳に風穴を開けた彼のために作ってあげた生命維持装置だった。

脳を損傷し、演算も会話も歩行も困難になった彼を補助する一万の^{システムズ}妹達と繋がる回線。イヤホンのように脳と繋がる線とチョーカーがないと、彼は喋ることも、歩くことも、自分でいることもままならない。

「命綱のオンオフを他人に握らせるつもりはねえ。上層部の連中にもオマエにもだ」

「……そうか」

ドスの効いた低い声で脅す^{アクセラレータ}一方通行にポケットの中身を差し出すと、彼は銃片手に用意周到な事実^に怪訝そうな顔をする。

渡されたUSBは真正銘の本物で、彼の望むものが入っていると、いうのに彼は疑い深いのか訝しんだままだった。

「用意がいいな」

「患者に必要なものを用意するのが僕の仕事だ」

コーヒーの苦味が胃に落ちる。

医者として患者の望みは叶えたい。どんな人間でも救いの手を差し伸べるのが医者であり、その価値観に従って仕事をするだけ。

USBも、家も、人生も、何もかも患者の為ならば用意する、それが医者としてのプライドだった。

「所で打ち止めが会いたがっていたよ。もう少し早く出てきてくれれば良かったのに」

そう言えばと、先程の退院してしまった小さな少女を思い出すと、一方通行にむきなおる。

しかし、そこにはもう白髪の少年は影もなくなりどこかへまた行ってしまった。

「はあ、まったく……家出が最近の流行りなのかね？」

大切な家族に会いたがらない彼の姿に金髪の少女の顔が脳裏に浮かぶ。

十歳から学園都市で面倒を見ている大切な愛弟子とここ数週間連絡が取れておらず、大変優秀な学生が隣にいるのは知っていても少し心配だ。

六年もの間面倒を見てきた子供に愛情が湧くのも当然、どこか抜けている可愛い子供が今どこで何しているか気になっていた。

「どこで油売ってるんだか」

人種を特定できない混ざった遺伝子、能力の常識から外れた力と異常なほどの優しさは学園都市にも、アレイスターにとってもこれ程にない研究材料。

気にするのも当然か。

ボーイフレンドが何とかしてくれることを祈りつつ、騒がしい病院の廊下で缶コーヒーを飲み干した。

演説の中継を写すタブレットを両手で持ちながら隣に座る垣根帝督の肩に寄りかかる。

暗い部屋の中、柔らかいソファで二人だけ。近い距離に恥ずかしさを僅かに感じながら暖かい体に体を預けた。

「猟虎ちゃんのほうは順調そうだね」

タブレットに映されたのは野外会場で行われている親船最中による演説の中継で、現在はトラブルにより画像が差し替えられている。

トラブルとは機材でも野外特有の天気の問題でもない。物語とは違い、成功した暗殺計画に薄く唇が歪む。

弓箭猟虎が生存したおかげで親船最中は捕食者の餌食にされ、血を流した。

ただやはり弓箭猟虎の性格故、親船最中は数箇所撃たれ、手負いになる程度の怪我で済んだ。

殺すことが目的ではないので作戦そのものに支障が出なければいい。

その点においては弓箭猟虎は適任と言えるだろう。

「さつき引き上げを命じた。アイツの性格的にはもうちよい遊びたかって言うと思ったが、お前の名前だしたらすぐ帰ってくるよさ」

「扱いやすくていいね、あの子。可愛いし、お嬢様だし、もう少し落ち着けば垣根くんと相性良さげじゃない？」

黒髪のハーフツインに、同じぐらいか少し小さい程度の平均以上の胸、可愛い系の整った顔をしているお嬢様。

垣根くんと並ぶとお上品さが際立ち、チグハグながらお似合いに感じる。事実、一途な子のほうが家族あかしにさえ独占欲を覚える垣根くん

はお似合いだろう。

「今度はあのうるさいのと付き合えとか言うつもりじゃねえだろうな。いい加減聞き飽きたぞ」

「別に？垣根くんが幸せなら誰でもいいし。でもロリはダメだから、せめて13になるまで待つてあげてよ？」

「はあ……面倒くさくなってきた。つか、お前いいのかよ」

しかし狛虎ちゃんが嫌なのか、不機嫌そうな顔であたしの肩を抱き寄せてため息を着く。

手持ち無沙汰に黒髪を指に巻き付けながら遊ぶ彼に特別怒ることせず面倒臭いと言わんばかりの彼の顔を見上げた。

「なにが？」

「親船最中を殺さないでって言わねえの？弓箭の性格が即死に繋がるものじゃねえから今回死ななかつたものの、別のスナイパーとかだと死んでたんだぞ？」

「んー、色々とバックアップしてくれた人だから恩は返したいけど、あんま好きじゃないんだよねえ……」

学園都市統括理事会の一人、親船最中。『スクール』が狙うその女性は自分の通う学校に在籍する先生の親御さん、直接は会った事ないが、大覇星祭での係などを先生経由に伝達してもらっていたこともある。

なので恩はある。優しい人だということも知ってる。

けれど決して善人ではない。

人を傷つけることはしたくなかったが、どうやっても死なないのが分かっていたことと、垣根くんの機嫌を損ねる可能性を危惧したら大きく意見を言うのとはばかれた。

「なんでだよ？学生に選挙権を与えるってお前好きそうじゃん」

「学生は子供なんだよ、垣根くん。それがどういうことか分かる？」

親船最中の演説内容は至極簡単。大人に支配された学園都市で子供が選択肢を得ることである。

子供に選挙権を与え、大人への発言権を得る。それが親船最中の政策で、希望だった。

しかしあたしはそんなものただの馬鹿の戯言にしか聞こえない。「たとえばどんなに頭が良くて、演算能力が高くて、彼らは子供で、責任を負うべき立場じゃない。だから普通は選挙権は20とか18なの」

学園都市の子供たちは自分の知る子供と比べてかなり未熟だ。

幼い頃からの親と離れた一人暮らし、遮断された外のニュース、2020から進んでいるんだか遅れているんだかよく分からない技術の差。外の世界とではファッションなどの流行が一時代遅れていた、占いよりも都市伝説や陰謀論を好むなど、学園都市と外の世界は全く違う。

未熟なのだ。

随分前にも垣根くんに話したが、都市伝説や陰謀論を信じて好む人は特別になりたがる人が多い。

それこそ特別が確立されている学園都市では特別になる日を夢見て叶わぬ努力をする人は外の世界よりもずっと多い。

そんな子供たちに選挙権を与えたらどうなるか、考えなくとも想像つく。

「どんな形であれ、大人が無能の証を責任という形で子供に押し付けるのは、立場ある大人がするべきことでは無いんだよ」

それだけじゃない。無知で経験の浅く、責任能力のない子供に選挙権^{責任}を与えるのは大人としては落第点だ。

子供が選んだ指導者の責任を取るのと同じ子供である。学園都市に入った責任を子供が不幸という形で負う現在だって腹立たしいというのに、それ以上子供に責任を押し付けて何がしたい。

統括理事会の唯一の良心と呼ばれるその老女は、自分にとっては使い古された空論を振りまくただの老害だ。

大人が子供を守るべきなのに、この世界の人間共はそんな単純なことですら出来ない。アレイスターも、木原たちも、警備員も、暗部も、魔術師も。

私利私欲にまみれたクソ野郎ども。

こんな単純な理論を理解する頭もないクズ共のせいで皺寄せが可

愛い垣根くんのもとへ来てしまおう。ならば正義の鉄槌くらい下したって問題は無いだろう。

「それに、親という存在はどれほど大切か分かってるくせして他人の子供が親と離れ離れになるこの状況を是非としている時点でアレイスターと同類だしね」

「はあ、理想が高いな、相変わらず」

ため息を吐いて頭を撫でながらソファから立ち上がると、彼は部屋から出ようと扉の前に立つ。

一変して雰囲気が変わる彼の背を追って自分も柔らかいソファから腰をあげた。

「もう行く?」

「弓箭もすぐ帰ってくる。手薄なうちに行くのがベストだろ?」

「うん、わかった」

「……大丈夫か?」

手招きする彼の手を取って隣に立つも、心配そうな彼の顔に足が止まる。

人が傷つくことにも動じず従順すぎるあたしに恐ろしさを感じたのか、彼は静かに釘を刺す。

杞憂だというのに、心配事が尽きないリーダーに微笑みが浮かんだ。

「もちろん、垣根くんのためならなんだって出来るんだから」

この美しい愛のためなら、どんなに汚い血の海の中でも息をしてみせる。

理解されなくても、寂しくなんかなかった。

少し混んできたお昼時のファミリーレストラン、奥のボックス席に鯖カレー缶や映画のパンフレットなどが乱雑に置かれ、自分を含めた女子四人がテーブルを囲む。

持ち込んだシャケ弁当を丁寧に食べながら各々好き勝手にお昼を楽しむ彼女たちに目を向けた。

「昼前に統括理事の親船最中が狙撃された事件があったけど、あの件そろそろこつちも動きたいんだよね」

携帯を取り出すと、真つ先にウェブサイトが開く。

親船最中の演説が襲撃により中断されたと大きく掲載されたネットニュースを尻目に部下たちは報告に騒ぎ始めた。

「ああ、公演ででしょ？」

「たしか死に至るほどではないらしいですけど、それが？」

「はあ……そいつらが企んでいることは、私たちアイテムの討伐対象だからよ。何考えてんだか知らないけど、私たちの仕事が増えたってわけ」

金髪にベレー帽をのせた小柄な少女、フレンダと、同じように小柄な茶髪頭をしたニットワンピース姿の絹旗最愛が報告に茶々を入れてうるさく騒ぐにもかかわらず、ただ一人無言で空を眺める滝壺理后にため息を吐くと再び言葉を続けた。

「まあ反乱分子を叩くのがうちらなのはわかるけど、なんでそいつらは親船なんか狙ったんだろーね」

「確かに。言っってはなんですけど、影響力もない、殺す価値があるかも分からない人ですよ？」

「逆に考えるのよ、暗殺するだけの価値がないからこそ選ばれたって」
「超意味がわかりませんが」

無能力者ながら機動力のあるフレンダ
高能力者4 オフエンスアーミー
高能力者4 AIMストーカー
高能力者の能力追跡の滝壺

そして私、超能力者第四位、麦野沈利。

反乱分子を排除することに趣を置いた暗部組織アイテム、それが私

たちがいる吐き溜め。

「どの誰だか知らないが、統括理事会の一人を未遂とはいえ暗殺計画を実行したならば私たちの討伐対象になる。」

「VIPが暗殺されかけたらどうなる？」

「え？一部の警備は混乱するでしょうね。VIPの周辺や犯人捜しに人員を割かなくちゃいけないし、医療スタッフや機材なんかも超動員されることになるでしょうし」

「その混乱に乗じて何かしでかすつもりなのよ。つまり騒ぎを起こすための標的としてギリギリセーフなラインである、死んでも影響が少なくて警備が薄い親船が選ばれたってわけ」

「親船カワイソ！」

「つまり、襲撃のせいで警備が手薄になっている施設をチェックすれば敵が現れるのよ」

間抜けな奇襲者の手口くらい分かる。革命家気取りの馬鹿がはしゃいでいるのは虫唾が走り、腹立たしい。

「下部組織に連絡して車を出させて。馬鹿騒ぎするクソ野郎どもを皆殺しにしくちやね」

食べ終えたシヤケ弁から手を離し、硬いソファから腰をあげる。

仕事を増やした馬鹿共を皆殺しにしくはなくては気がすまなかった。

93話：望まれない救い

アクセルを倒し、学園都市の街を走るタクシーの中、跳ねた茶髪を揺らして窓の外をみる少女は不機嫌そうに口を尖らせる。

水玉模様のキャミソールワンピースの上から大きめのシャツを羽織った少女の視線の先には灰色の空が広がっていた。

「んー、なんか方向が違うって、ミサカはミサカは訴えてみたり」

「いいえ、あつてますよ」

「第六学区の遊園地に行ってみたって、ミサカはミサカは願望を繰り返して表明してみたり！」

「と、繰り返しておっしゃるのを気にせず、ご自宅までお送りするようお医者様から申し使っておりますので」

赤信号で停車し、信号を待つと少女は瞳を輝かせて甘えた声で可愛らしくミラーに映った運転手をじっと見つめる。

ミサカと名乗った不思議な喋り方の少女は住み慣れた家よりも遊園地のほうが大事なようだった。

しかしどんなに可愛らしくせがまれてもプロである運転手は無言を言わず自宅への帰路へ着く。

未だに変わらない信号と後ろの席に座る小さなお客さんを交互に確認しながらアクセルから足を離れた。

「ならここ以降ろして？ミサカの足で行って見せるから、ってミサカはミサカはちよっぴりお姉さんみたいにお出かけがしたいと言ってみたり！」

「目的地までの料金をすでに貰ってますから、途中下車は……」

信号が青に変わる瞬間、気を逸らしてしまったのがいけなかった。

ばちつと静電気が発生したかのような小さな音が聞こえると同時に後部座席にいた少女は電子ロックされたドアを開けて道路へ飛び出す。

「この隙にミサカは逃亡を図ってみる、う!？」

「わっ、大丈夫？」

「お客さん！」

幸いなことに一番端のレーンで信号待ちしていたため他の車と接触することは無かったが、勢いよく飛び出した少女は見知らぬ女性の体とぶつかって金色の髪がひらひらと地面に散らばる。

慌ててタクシーを走らせ適当なところで路上駐車をすると、転んでしまった小さなお客さんと巻き込まれた女性に駆け寄った。

「あれ？天羽だ！」

「ラストオーダー、こんなところでどうしたの？」

地べたに尻餅をついた女性は少女を抱き留め優しく声をかける。

十月というのに未だ夏服を来ている女子高生は一緒に転んだ自分に気にせず知り合いの少女に傷がないか確認しながら立ち上がった。

「おや、貴方は確か……病院の」

「こんにちは。この子はうちの病院の患者さんだったはずですが、どうしてタクシーに？」

金髪に桃色のグラデーション、きつちりと化粧が施された大人びた体の童顔な女子高生に見覚えがある。

第七学区の病院に通院する人や呼び出されるタクシー運転手、救急隊、そういった人達の間では名の知れた看護師見習いの女子生徒だった。

170はありそうな高い背、ハーフ顔、モデル並みの細い手足、なのに脂肪の着いた胸と尻、高い腰の位置と適度についての筋肉のおかげで貧相に見えないしっかりしたプロポーション。

病院にそぐわない今時な格好はそうそうおらず、記憶に残りやすかった。

「退院されたのでお医者様からご自宅まで送るように申しついていたのですが……」

「やだー」

簡単に概要を伝えると、少女は女子高生のミニスカートに隠れるように抱きついて子猫みたいに威嚇する。

その姿に困ったように顔を見合せ、しばらく戸惑っていると観念したように背の高い高校生は声を上げた。

「じゃあラストオーダーちゃん、あたしのお友達と三人で一緒に帰ろ

うか。楽しいと思うよ?」

「お友達?」

「杠ちゃん、ご挨拶を」

朗らかな笑顔で妥協案を伝えると、彼女は近くの街灯のそばで様子を見ていた黒髪の少女を呼び寄せる。

「……だれ?」

黒いショートカットの眠そうな少女はスカート握りお客の少女と目を合わせた。

匂いのしない灰色の施設にヒールの音が響く。

素粒子工学研究所、この場所が親船最中の暗殺未遂でゴタゴタが起きた唯一の施設だった。

「素粒子工学ねえ」

「こんなところの何を狙ってるんでしょうね」

誰かが侵入した形跡のあるドアをくぐり、着いてくる三人の部下たちの声が静かな道に反響する。

絹旗の疑問に対する答えは誰もいないこの場所では見つからない。

「麦野いるしヨユーでしょ、人もいないし」

「……」

「とうか、戦闘員すらいない……チツ、予想が外れたか?」

廊下をぬけ、広い空間に出ても周りに人は誰一人いなかった。

フレンドアの余裕そうな表情とは反対に、ピンク色のジャージの裾を心配そう握りながら黙り込む滝壺を背にぐるりと周りを見渡す。本当に人一人いない施設に不穏を感じるのも無理はない。

「あらあら、うるさいと思つたら。四匹も子羊が迷い込んだようですね」

予想が外れたかと腰に手を当て眉間に皺を寄せていると、ソプラノの少年声が広い施設にこだました。

聖歌隊にいるような優しい声に上へ振り向くと、声に似合わない背の高い女が鬱陶しい前髪を伸ばして吹き抜けの上の階から見下ろしていた。

「あ、アンタは…」

「どつかで見たことあるような……」

「お久しぶりです、絹旗最愛さん。お元気そうで」

「第六位、藍花悦……!!」

絹旗が目を見開いてその女の名前を呟く。もはや都市伝説に近い実態不明の名前に再び女の方に顔をあげると、星の輝く右目と目があった。

物語に出てくる日本のお姫様のようなくぶしまで届く長いストレートの黒髪、ヘブンリーブルーの膝丈ワンピースと白いエプロンを揺らして品のいい少女は優しく笑う。

背は平均よりずば抜けて高く、胸も自分より一つほどサイズが大きくて、人形のような幼く気怠いハーフ顔が生意気そう。

自分とは相容れないような、そんな感じの女だった。

「初めまして、アイテムの皆さん。『肉体の支配者』の藍花悦と申します」

男がこぞって欲しくなるようなプロポーションの高嶺の花は優しい少年の声で笑顔を見せる。

ナイチンゲールのような昔の看護服に似たエプロンとワンピースを翻し、階段の手すりから身を乗り出してせせら笑う女に苛立ちしか感じなかった。

「テメエが？何人か藍花悦を名乗る無能力者に会ったことはあつたが、本人に会えるとは」

「……超デカイ女だったんですね。てつきり男かと」

「ぼく、女にも男にもなれるんです。そういう能力なので」

「メタモルフオーゼ肉体変化？随分と珍しい能力だな」

笑みを絶やさぬまま藍花悦と呼ばれた少女は長い髪をなびかせる。

長い前髪で隠れた左目にも眩しい星が輝いていた。

「麦野、この女はそんなものじゃ、ツあぎイ!?」

「ちよ、絹旗ツ、ウ、ふづツツい!?」

「ツ!?おい!」

星の輝きが増すと後ろで事を見守っていたフレンダと絹旗が途端に悶え始め、こと切れる。荒い息を繰り返し、汚い地べたに体を伏せてそのまま呻き声一つこぼさない。

「クソ女、テメエ一体何をした?」

「メタモルフオーゼぼくの能力は肉体変化なんかではありません。安全に、危険なく、戦闘前に戦闘不能にできる不殺の武器です」

喉元を押さえたまま失神した彼女たちの姿に目の前のふざけた女が何かをしたと勘付くと、強く女を睨む。

空気を操ったか、それとも精神のほうか、どんな手を使ったかは分からないが、目の前の女が何かしたのは明白。妖精のように悪意のない笑顔を続けるクソ女の優しい声がひどく耳障りだった。

「目的は滝壺理后さんだけですし、降参するなら何もしませんよ」

「私……?」

「寝言言ってんじゃねえぞ、クソアマ!!!」

少し狼狽えた滝壺を庇い、蒼白い閃光を作り出して固定された砲台のように巨大な力を放出させる。

原子を曖昧なまま固定し、強力な蒼白い光線を放つ自分の『メルトダウン原子崩し』はどんなものでも溶かし尽くす。第六位の格下がそれを避けられるわけもなく、微動だにせず爆発の中に飲み込まれていった。

鉄が焼ける匂いと灰色の視界。煙を巻き上げ破壊された階段の踊り場を見て無意識のうちに口角があがる。

人の影が見えない煙の奥に勝利を確信した。

「オイ、なに人の女焼こうとしてんだよ」

しかし唐突に響いた男の声に勝利は消え失せる。

煙の向こう、藍花悦が居たその場所で淡く発光する白い繭に目が奪われた。

それは大きな翼だった。少女の体を守る強靱な白い翼はゆつくりと開き、煙幕を吹き飛ばして全貌を露わにする。

「つてメエは、未^{ダイクマター}元物質……!!」

「名前で呼んでほしいもんだな、俺には垣根帝督って名前があんだからよ」

鼻筋の通った小綺麗な顔に似合わない黒い鉛のような瞳が白い翼から垣間見えた。肩につく茶髪を揺らしながら藍花悦の肩を抱く男にひどい嫌悪感を催す。

さらに格上の恐ろしい男の登場にはらわたが煮え繰り返って仕方がなかった。

「……別に垣根くんの手伝いがなくたって大丈夫だったのに」

「嘘つけ、避けようとしなかったくせに」

第二位と第六位、二人指を絡めて甘い言葉を囁き合う。気持ち悪い光景が進む。

まるで子供のような擬似的恋愛の自慰に鳥肌が立って、吐き気が止まらない。

鉛色の瞳が二つ、見つめ合う姿がひどくおぞましかった。

「第二位と第六位が恋人ごっこかよ、気持ち悪い。イかれた同士、乳繰り合って楽しいか？」

「テメエは黙ってる」

「ッ！」

思わず飛び出た罵倒に巨大な翼が地面にめり込み足場を崩す。受け身をとって距離をとることにすんでのところで成功するが、アイテムの要である滝壺はそのまま吹き飛ばされ壁に衝突して小さな呻き声をあげた。

「もー垣根くんは怒りっぱいんだから」

「お前だって我慢ならねえだろ？」

「ええ、まあ。そうですけど……ほら、早く終わらせちゃいましょう？」

かつんかつん、低い白のヒールが音を鳴らし、藍花悦は階段を優雅に降りる。

「滝壺！ テメエ、ぶっ殺してやる」

「大丈夫、夫……私が、なんとかする……」

「体晶飲んだって意味ありませんよ、だってぼく、AIM拡散力場なんでもってませんもの」

ゆっくりと滝壺に向かって歩くおぞましい女に気圧されながらも滝壺は痛みを我慢して立ち上がる。

小さなケースで持ち歩く能力体結晶を何を思ったのかおもむろに口にし、大きく目を見開く滝壺に藍花悦は少し笑い、恐れることもなく突き進む。恐れを知らない黒い瞳を攻撃したくても、なぜか動かない重い体がそれを拒んだ。

「ぼくは博愛主義なので人殺しなどはしません。けれど、その役からは降りてもらいましょうか」

「ツツうガツ、おえあああ……！」

「何を、して……」

「パースナルリアリティ自分だけの現実を破壊しているんです。大丈夫、ぼくの方にバツクアップはとっているんで能力そのものがこの世からなくなるわけではありませんから、安心してくださいね」

「は……う」

体晶飲み込んだのにも関わらず、何も起こらず、何も喋らない滝壺はそのまま膝から崩れ落ちる。

その姿を高い背で見下ろす女のおぞましい笑顔に痙攣しながら叫ぶ滝壺を呆然と眺めることしか出来ない。

それしか体が許されていなかった。

まるで魔法にかけられたよう。

体が石と勘違いするほど重く、神経が繋がっていないと錯覚してしまう。種も仕掛けも分からない金縛りに、歯を食いしばることしか出来なかった。

「恐ろしいですか、第四位。キミが誇る唯一の兵器が、こんなぽつと出の女に奪われて」

「ツツア、アーンこの、クソツタレエエ!!」

重い体を必死に動かし、憎たらしい笑みに指を向ける。弱々しく点滅する光が女に向かつて放たれるも、鉛筆程度の細さしかない閃光は大きな的に当たることもなく消え失せ、何も得られない。

ただ恐怖が募る。

目線を合わせるようにしやがむ女の黒髪が牢獄のようで恐ろしい。「今は何も考えずお眠りなさい。目を開けたらただの一般^{モブ}人に成り果ててしまうだけですから」

脳が掻き混ぜられていく。脳髓が破壊され、水分が移動し、視界が鈍く光る。

抗えぬ冒瀆的な恐怖に歯を鳴らし、嗚咽を漏らすしかできず、声を出すこともままならない。

失っていく記憶、使い方を忘れていく能力、全てを失っていく。

麦野沈利という人間が破壊され、また新たに作り直されていく感覚だけを残し、意識は闇の中へと眠っていった。

「第四位の無力化!?!」

「ああ。超能力者^{レベル5}の順位がどうなるかわカンねえな」

ガラスブロックが照らす広い室内、ソファの上で手に入れたケースをばらす垣根くんの背を見つめていると、研究所での出来事について報告された部下三人は異様な形相でこちらを見つめる。

「使い方を忘れさせただけです。無能力者^{レベル0}と変わりはありませんが、超能力者^{レベル5}の立場がなくなっただけではないと思いますよ?」

「似たようなもんだろ」

「それに滝壺さんの方は能力を破壊しましたが、垣根くんの方にデータは送りましたし、この世から能力追跡がなくなったわけじゃないんですよ?」

「俺とお前がいれば学園都市中の能力コピーできんじゃないか?ほんと、俺から離れるなよ?」

誉望万化くんの驚いた声に淡々と説明しながら研究所から拝借した黒い箱を分解していく。

垣根くんの言う通り、第四位麦野沈利とその場にいた面倒な人達全てに記憶、見ている現実、認知、それらを歪め、改竄した。

A I M 拡散力場に直接手を下すのは赤い体晶を飲まなくては出来なさそうだが、体そのもの、脳そのものへの干渉はドーピングをしなくとも出来る。

第四位も未来の八人目も、将来垣根帝督というキャラクターの幸せを邪魔をする。05がいる以上、その可能性がないとも言いきれないのなら、今の時点で無力化するのがきつと正しい選択だ。

浜面^{ロー}仕上も、滝壺^{ヒロイン}理后もないこの世界線なら、きつと垣根帝督と榎林檎がその場所を取って代われる。

そうすれば未来が保証される。^{主人公補正}

あたしが見たい未来が約束される為ならば、あたしは鬼でも悪魔にでもなるつもりだった。

「離れるななんて、甘ったれですね。お姉さんがハグして差し上げましょう」

「物理的にくつつくな。危ねえから」

「あつ!垣根さんずるい!悦さん、私も!はははハグをお!!」

「俺の周りで遊ぶんじゃねえクソガキども」

感極まって機械をいじる垣根くんに抱きつくと、後ろから弓箭獵虎ちゃんも抱きつく。

垣根くんに怯えもしないその肝に内心驚きながらソファ越しに後ろに立つ獵虎ちゃんを軽く抱きしめると、もう一度垣根くんの手元を見る。

色々なパーツが散らばるローテーブルの前で凜々しい顔で手を忙

しなく動かす垣根くんの姿に狛虎ちゃんから手を離して大人しく彼の隣に座り直した。

「分解してるんですつけ。えーと、なんでしたつけ、なんたらマニユピレーター」

「超微粒物体干渉吸着式マニピュレーター、な。通称ピンセット」

「で、そのピンセットを組み直すんですよね。めんどくさいですねえ、箱のまま使えないんですか?」

「こういうのは盗難防止に外側を大きくして重くしてるので、組み立て直すほうが無駄がなくて便利なんですよ」

「それは分かってはいるんですけど……」

側に立つ誉望くんの説明はもう既に知っていたこと。

しかしアイテムも無力化し、メンバーもアイテムが壊滅したことによつて現場が混乱し、データで追跡していた彼らは未知の藍花悦の登場により追跡もままならない状態のはず。

ならば別に小型化しなくたって支障は無さそうだというのに。

「でも設計図なしでそういうことしちゃうって、やつぱり垣根くんってカツコよくて頭いいですよねえ。うっかり惚れちやいそうです」

「もうすでに惚れてる女が何言ってるんだ」

「寝言は寝て言ってください」

だが真剣な目で機械をいじるイケメンの姿は悪くない。

隣に座つて横顔を眺めて微笑ましい姿に笑うと、面倒くさそうな表情に変えて一度手を止めた。

「……貴方、天羽つて彼女がいるんじゃないの?」

「あ? あー、あれは違う、妹みたいなものだ」

「都合いい女つてこと? あの子可哀想ね」

手を止めていると、心理定規メジャーちゃんハートが近くの一人用ソファに座つて呆れたようにため息を着く。

天羽彗糸が藍花悦と別人と認識を弄っているせいとはいえ、垣根くんが二股をしていると思われるのは少し腹立たしい。

というか彼女だと思われることすら腹立たしい。

天使は恋なんてしてはいけないのだ。別次元の生き物は他次元の

生物と愛を成してはいけないのだ。

無性愛を貫かなければいけない、恋を知ってはならない。

それ以上踏み込んではいけない。

人を救えなくなってしまう。

「垣根さんって結構クズ……」

「誉望？」

「ッ、なんでもないツス!!」

「誉望くんは怒らなくなたっていいじゃないですか。可哀想ですよ」

「藍花さん……」

重い枷に固唾を飲むと、立ったまま背中を縮こませる誉望くんに目を向ける。

嫌な考えを取り払うように少年の手を取り頬を膨らませた。現実を取り払うため、少年に優しくする自分が何とも滑稽にしか見えな
い。

「二度目はねえからな？」

「俺、見回り行つてきます!!」

手を取った瞬間に広い部屋に響く怒気を含んだ低い声に誉望くんは勢いよく部屋を飛び出した。

「さて、組み直したぞ」

あまりの速さに驚いて声も出せず啞然としてみると、苛立ったように彼は足を組んでソファに体を預ける。

手に着けた二本の爪が伸びる機械仕掛けの手袋を見せびらかすように掲げ、不機嫌なまま部下の二人に目をやった。

「解析してる間はお前ら休んでいいぞ、少し時間がかかるからな」

「分かりました!じゃ、じゃあ悦さんはわたくしと……」

「テメエは教育係と行動しろ」

「えーッ!」

嬉々としてあたしの首に腕を回す獵虎ちゃんを鋭く睨むと、垣根くんはもう部屋に居ない誉望くんが飛び出て行った扉を指さして冷たく命令を下す。

酷く恐ろしい形相に流石にいいえを言える肝は獵虎ちゃんと言え

ど持っていないようだった。

「また後でね、獵虎ちゃん」

「うう、行つてきます……」

「なら、私はちよつとお小遣い稼ぎにでも行つてこようかしら」

垣根くんの一言で悲しみにくれる獵虎ちゃんの哀愁漂う背中を見送ると、今度は心理定規ちゃんメジャーハートが立ち上がる。

桃色のワンピースを翻し、流し目で見下ろす少女に垣根くんはため息を吐いて足を組み直した。

「ああ、恒例のエロい副業な」

「ただお話を聞くだけ、カウンセリングよ」

「おっさんとホテルで二人つきりなんだろう？ 勘違いされる要因はそっちにある」

「ホテルの一室で雑誌捲りながらお話すだけよ」

呆れながら手に着けたピンセットを弄ると、心理定規ちゃんメジャーハートは少し眉間に皺を寄せる。

内容を察するに彼女はパパ活、あるいはそれに似ている事でお金を稼いでいるそう。

パパ活とは、女性による非合法的なデートのサービスである。

基本的には食事やお買い物などのサービスを行い、高額なプレゼントや金額を見返りとして貰う女性によるお小遣い稼ぎ。

しかし大抵は肉体関係もそのサービスの一部になることが多く、立派な売春行為である。

また、得た利益から税金を払わなかったら脱税になる。贈り物にも贈与税があるため、金銭を受け取ってなくても脱税になる場合もあつたりする。

「金持ちがお店に通つて女にお金を渡す理由って知ってる？ 別に性欲を満たしたいんじゃないやなくてね、仕事以外の人間関係を自力で構築したいのよ」

「へー、みんな優しいんですね。大切にされてて何よりです」

「……はい？」

パパ活をしている設定とは知っていたが、どうやら体までは売って

いないようで、少し驚く。

前世での男という生き物は、大抵『お持ち帰り』しようとしてくる。それは前世での理想の女性像が巨乳だからとは分かっているが、この世界ではスタンダードらしい体の彼女がそういった行為をしていないとは驚きだった。

恋愛だけでなく、性交渉もこの世界のキャラクターは未経験なのだろう。オリアナと、子供を産んだ母親たち以外は。

恋愛経験も性交渉もない、いびつな思春期の子供達。

それが作者の好みなのかは一切分からないが、その世界観が目の前の少女の認識を歪めてここまで危機管理能力を低下させたのかと思うと痛ましい。

「いや、手を出さない男性って凄いなって。性欲を隠してキミと接してくれる方はいい人だと思いますよ？ぼくはそんな大人、ここに来る前は会ったことないので」

「……それは貴女が男との距離を間違えてるからじゃないかしら？」

「んー、でも男の人って結構穴さえあれば誰でもいいって方多いですから。稀でしたが睡眠薬とか幻覚剤の類が使われたこともありまして、気をつけた方がいいですよ」

「……ご忠告どうも」

嫌そうな顔で扉を閉めて出ていく彼女の小さな背中を見送ると、ソファに深く体を沈ませる。

長い間ぼくっ娘の敬語キャラである藍花悦を演じることに少し疲れってしまった

「で、睡眠薬とか、お前平気だったわけ？」

「ん？んー、まあ。性交渉には妊娠と性病ってリスクがあるからね、妹を治すまでは健康でいたかったし、金銭トラブル避けたかったから何度も国家権力のお世話になったよ」

疲れから息を大きく吐くと、ピンセットを弄ったまま垣根くんが胸の辺りに頭を乗つけて寄りかかる。

可愛いつむじを見せながら、ピンセットから飛び出る長い爪をカチャカチャと鳴らして小さく呟いた。

「やっぱ処女じゃねえか」

「……………大人なんですけど、24歳だったんですけど、経験済みなんですけど」

「そうだな、大人大人、可愛い可愛い」

どこか安堵した声色で顎を胸に乗せて馬鹿にしたように笑う彼の顔に頬を膨らますと、頬を撫でられ更に笑われる。

少し腹立たしい彼に少しでも反撃しようと彼の頭を抱きしめ胸に埋めて、遠回しに嫌味をぶつけてみることにした。

「……………それより、あたしよりも垣根くんが睡眠薬とか飲んだら危なそうじゃないですか？ぼくとは違って体内は操れないですよね？」

「そうだな、一定時間は寝るかもしれないねえが、多分他の人間より効きが遅くて効果が切れるのが早いと思うぞ」

しかし嫌味も学園都市第二位には効かず簡単に拘束を解き、今度は胸ではなく肩に横から寄りかかる。

嫌味を避けられた上に抱擁まで逃げられた事実に関を落とすと、わざとらしくため息をついた。

「まったく、ムカつくくらい便利ですねえ、ダークマター未元物質」

「お前も充分便利だよ」

「そう思うなら、ボロボロになるまで使い潰してよね？」

嫌味にしか聞こえない彼の言葉に小さく呟く。

あなたの為の人形だというのに、甘く優しいご主人様は使用方法を極端に間違えていた。

94話：アフターケア

「杠は何処に住んでるの？寮で一人？と、ミサカはミサカは聞いてみる！」

「大きなマンションに、天羽と、垣根と、カブトムシと」

静かに進むタクシーの中、小さな二人組が楽しそうに会話を続ける。

アホ毛が飛び出た茶髪の少女、ラストオーダー打ち止め。そしてもう一人、黒髪のボブが綺麗な杠林檎が拙い感情を精一杯に出しながら答えた。

真ん中の席で二人仲良く互いに話す光景は少し微笑ましい。

「垣根？」

「かつこいい、お兄ちゃん？みたいな」

「その人知ってるかも。会ったことは無いけど、ミサカを病院に連れて行ってくれた人だよ」

「そうなの？」

「うん、多分」

そろそろ家が近い帰路の途中、マスターの名が会話にあがる。

下手なことを言わないで欲しいと心配になりながら、窓から見える外の景色を目で追った。

「ありがとうございます」

「お気をつけて、お嬢さんたち」

過ぎ去る景色も止まり、タクシーの運転手に笑顔を向けて見覚えのないマンションへと向かう。

もう仲良くなったのか、二人手を繋いでタイルで舗装された道を歩いた。微笑ましい光景に少し唇を噛んでしまうのは宿命のせいか。

「では、おうちに戻りましょうか」

「えー、まだ遊んでたいって、ミサカはミサカは名残惜しそうに手を繋いでみたり」

「……じゃああたしの家に来る？ここから近いし」

予想どおり駄々をこねる子供に用意していたセリフを伝えると、彼女の頬はみるみるうちに赤くなってピンとはねたアホ毛が電磁波の

影響か真っ直ぐ伸びる。

人目見てわかる感情に罪悪感と呼べるものを感じながら彼女達の手を取った。

「えーいいの!? やったね、杠！ ってミサカはミサカは歓喜のあまり飛び跳ねてみる!!」

「……うん、嬉しいな」

二人の少女を両手に目の前の目的地から遠ざかる。

慣れ親しんだ自宅へ向かう足取りは、いつもと違う体のせいか、酷く重かった。

いつものスキルアウトのたまり場所、監視ロボットから身を隠すための鉄条網と、空からの監視を逃れるためビルの間にかげられた色とりどりの布が目につく路地裏、前を歩くゴリラのような大きな背中を追った。

友人から連絡があったと突然立ち上がったかと思えば、彼、駒場利得は俺の首根っこを掴んで路地裏に出たのだ。

不可解な行動に目を点にしながらいりリーダーについて行く。彼について行くことしか部下である自分には今のところ出来なかった。

「やあ、駒場さん！ お久しぶりですね」

「……久しいな、藍花悦」

路地裏から同じように寂れた表通りに繋がる狭い通路の先、そこに立っていた人物を認識すると駒場はコピー機のような声を少しだけ和らげその人を歓迎する。

高級な黒塗りの車を背に佇むその人の姿に足を止めると、恐る恐る口を開いた。

「えつと、こ、この人が？」

「初めまして浜面仕上さん、お会いするのは初めてですね？」

地面を擦る長い黒髪と、前髪に隠れた左目、そして眩しい星が輝く黒い右目に萎縮し、ただの確認の言葉がどもる。

そこにいたのは自分よりも少しだけ背の低いモデルのような女性。

水色が上品な膝丈のワンピースを白いエプロンで隠し、白のカチューシャと低いヒールのパンプスで足も頭も飾る。まるで一昔前の看護婦のよう。

手に持ったジェラルミンケースが少し場違いだが、清楚なことに変わりはない。

童顔で、ハーフ顔。

お人形のような少女だというのに、顔に似合わない巨乳がどこか威圧感を放ち、実際よりも大きく見せていた。

その人の名は藍花悦。

学園都市超能力者第六位の怪物。

「……その格好は？」

「あ？あー、これは知り合いの趣味です。ほら、ぼく、女にも男にもなれるでしょう？だからよくからかわれてしまうんですよ」

服装に疑問を抱いた駒場だったが、問題はそんなものではない。

彼女の目的、それこそが一番大切だった。

「それで？第六位のエリート様が俺らのリーダーになんの用だよ」

「ああ、駒場さんにはお話しましたが、この子達についてです」

本題に入ると、彼女は車の中を軽く指さす。高級車の中でぼんやりと空を見つめる四人の女性に眉を顰めると、駒場は知ったようにため息を着く。

「……この子達が例の能力者か」

「はあ!?能力者!?!」

くるくると巻かれた長い茶髪の気の強そうな美人、まだ中学生ほどの背の低い金髪と茶髪、そしてどこかぼーっとしてそうなジャージ姿の黒髪ボブの少女。

どの人もどこか浮世離れしていて、どこか金持ちのエリートっぽ

く、この溜まり場には少々場違いだ。

「お話しした通り、今日から無能力者の一般人四人です。まあ完全に壊せた訳では無いので三人は一か二、硬度が落ちた程度ですが……とにかく、ちよつとやらかしてしまつてね、キミのところで面倒を見てやつてくれませんか？」

「……そんな義理はないが」

「そうだ、なんでリーダーがそんなこと……！しかも能力者なんだから!?」

統一性のない女性四人組に狼狽えても、藍花悦はその表情が見たかったと言わんばかりに胡散臭い笑みを浮かべる。

「うち一人はキミの大切な幼女のお姉さんです」

「……しかし、四人は面倒見切れんぞ」

「リーダー!?!」

彼女の支離滅裂なお願いに少し言葉が添えられると、駒場は考える素振りをしてため息を着く。

同意と見なす言葉に驚きながら彼を見上げるが、どうやら本気でこの四人の女達を助けようと思つていたようだった。

「分かってます。だから浜面さんと呼ばせたんですよ」

「……え？」

しかし流石に四人もの人間の面倒を見れるほど駒場利得という男は暇でもない。それを見抜いたのか、藍花悦は企むような無垢な笑顔で俺を見る。

「浜面さん、キミが面倒見なさい」

猫のように目尻が上がる気怠い目が鋭く俺を見る。

考えたくもない言葉の羅列に喉が干上がり乾いた声がひねり出た。

「な、な、なんで!?はあ!?俺が超能力者の言うこと聞くと思ふかよ!?!」

「だってキミ暇そうですし、さつきから胸の辺りへの視線が気持ち悪いし……それくらいしてもらつても良くないですか?」

「いッ、いや、み、見てねえし……てか見てても関係ねえし!?!?」

慌てて拒否するも、凶星を突かれ後退る。腕を内側にいれて胸を強調するようにわざとらしく恥じらう女に小さな悲鳴が上がると、彼女

は嬉しそうに女にしては高い背で見上げる。

「カジノで働く兎でも思い浮かんでました？それとも、レース上で写真を取られるレースクイーンでしょうか？」

「な、何故それを!!？」

「ぼく、エスパーなんで」

男の最低な性を心の中で叫びながら塞ぐように両手で顔を覆う。眩しい笑顔に自分の汚い欲が恥ずかしくてたまらない。

目の前に巨乳に妄想が捗らない男がいるのだろうか。

サイズは定かでないが、Fはある威圧的で圧倒的なバストを見れば誰だってバニーもコンパニオンもレースクイーンも着せたいと思うに決まっている。ミステリアスな人形女の肌に興奮するのは男の宿命と言わざるおえない。

「……諦めた方がいい。どうやっても勝てないからな」

「な、なんすかそれ……!!？」

そんな邪な妄想はダダ漏れなようで、くすくすと藍花悦は困ったように笑う。呆れる駒場の姿も相まってまるで羞恥プレイのよう。

「ではお願いしますね、浜面さん。お金はここにあるんで、当面は大丈夫でしょう」

スキルアウトである俺の手を掴み、持っていたジェラルミンケースを手渡す。

ずしつと重みで崩れるバランスに思わず声を上げると彼女はまた胡散臭い笑みで軽く頭を下げた。

「な、なっ!?こんな、えっ!?」

「浜面仕上さん、キミに一人の人間として依頼します。どうか、この少女たちを守ってやってくれませんか？」

超能力者が、無能力者に頭を下げる。

その光景に息を飲む。

どうやら彼女は酷くお人好しで頭のイカれたエリート様だった。忖度のない態度に、いいえを突きつけるのは酷な話。

俺に退路はなかった。

「……どうなっても知らねえからな」

「大丈夫、主人公にはならずとも普通の人間は幸せになれますよ。浜面くんも、みんなも。アレイスターなんかには追い回されるのはぼくだけで十分ですから」

受け取ったケースを握りしめて真っ直ぐ彼女を見ると、朗らかな笑顔で喜ぶ。

男がほつとかなない笑顔だなど、抵抗できない自分に呆れてしまう。高位能力者には珍しい思考の女に抗うことも出来ず、彼女に笑い返すしか出来なかった。

「……相変わらず善人だな」

「いいえ、今回は切ってしまった縁を繋げ直したただけなので、正義などは関係ありませんよ。ぼく、アフターケアもバッチリなんです」

全てが終わったと言わんばかりに彼女は背を向いて車の方へ向かう。柄の悪い平凡な運転手にドアを開けてもらい、空っぽの少女たちを車から降ろしてもう一度振り返り、彼女は胡散臭い笑みを貼り付け再び頭を下げた。

「それではぼくはここで。まだ仕事があるのでね。御機嫌よう駒場さん、浜面さん」

「あ、おう……まあ、面倒くらい見てやるよ」

車に乗りこむ彼女の違和感のある穏やかな目が優しくこの場にいる全員を射抜く。

誰も拒むことの出来ない優しくも恐ろしい笑顔に体が冷えていった。

「皆様に多くの幸があらんことを。お幸せに、元気でね」

もう二度と会わないと誓う彼女に一抹の不安が過ぎる。

しかし素性を知りもしない高位能力者にかける言葉も見つからず、そのまま走り去る車を眺めながら立ち尽くした。

恐ろしいほど全てを平等に見る異常者の力の籠った言葉を脳内で繰り返しながら、残された女たちに向き直る。

面倒事を押し付けられたと思いつつも、どこか浮き足立っている自分がいることに気がつくのはそう難しい事じゃなかった。

地面を照らす陽の光が眩しい暗い路地裏。コントラストの激しい地面に苛立ちを感じると手にした風船が一つ空を飛ぶ。

連絡のつかない部下たち、混乱している上層部、どれもこれも目障りでひどく鬱陶しい。

「こんにちは、お姉さん。こんな所をおひとりで歩くのは危険ですよ」残り一つの風船が反射する光が路地裏の前で佇む少女に重なる。ヘブンリーブルーのワンピースを真新しい白のエプロンで覆ったアリスのようなおぞましくも美しい少女。

現実離れた人形のおぞましき美しさに歩みを止め、きつく風船の紐を握る。

その少女の名前は藍花悦。天使として呼び起こされた恐ろしい悪魔だった。

「でないと、悪い人が天国に連れ去ってしまいますから」

口元で人差し指を重ねてバツを作る。彼女のあざとい仕草と同時に生きてきて感じたこともない恐ろしい吐き気と寒気が込み上がる。堪え難い苦痛に膝をついた。

「っおええ、ツがうええええ」

「大丈夫、痛むかもしれませんが、これは救いなんですよ。分かってくれますよね。アイテムの上司さん」

燃えるような熱さが内臓を焼き、凍える寒さが体を極限まで冷たくする。死を覚悟する体は汚い液体を撒き散らし、息をあげて体を追い込んでいく。

チカチカと星が見える視界に、限界を感じていた。

吐き出した胃酸が彼女の靴に飛び散る。美しい白が醜く汚れて、穢されていく姿に痛みの中口角をあげた。

ざまあみろ。

そう思っただけでも、彼女の声色は変わらなかった。

「やだ、せつかく垣根くんを買ってもらったのに……替えの靴、買いに行かなくちや」

薄れゆく意識の中、最後に見えたのは冷徹な女の姿。

小さな声で悲しそうに呟く女の本心を掴めぬまま、重い体は熱された地面に抱きついた。

95話：想定外

アジトとして使うホテルの豪華な一室、大きなソファに座りながらピンセットを弄っていると静かな部屋にドアが開く音が聞こえた。

豪華な部屋に入ってくる女にため息を着くと、彼女は困ったようにドアを閉めて笑う。

「どこいったんだ？」

「麦野ちゃんたちの根回し。あと彼女達の上司とかのゴタゴタをまとめて解決してきた」

「んで、その靴は？」

「汚れちゃったから。ごめんね」

相変わらず優しく笑う彼女、天羽隼糸は黒い髪を揺らして部屋に入る。

買ってあげたものとは違う15センチはある折れそうな黒いピンヒールを履いた彼女に舌打ちを鳴らすと、更に眉を下げて彼女は隣に座った。

「あとね、飲み物買ってきたの。ほら」

「それ……」

「そういえば垣根くん飲んでたなって思って買ってきちゃった」

彼女が手に持っていたのは黒豆サイダー二本。

結露のついた黒いアルミ缶は、少し前の八月、上条当麻と彼女の三人で飲んだものだった。

「……飲めるのか？」

「大丈夫でしょ、テストされてんだろうし」

舌で思い出す水っぽく味気のない黒豆の刺激にはらはらと缶を開ける彼女を見守る。

あの日に飲んでいたものを覚えていることに喜びも感じるが、なんだかんだグルメな彼女に黒豆の甘ったるい炭酸水が口に合うとは思えず、その成り行きを見つめていた。

「……………どうやら、この会社の製品開発部と試飲テスターの人達とあたしの味覚は相容れないみたいだね」

「はあ……仕方ねえ女だな」

予想どおり一口飲んだ彼女は隣で悲しそうな顔をする。

絶望に浸る子犬のような寂しい顔で項垂れる彼女から空いた缶を奪って、ため息をついた。

「……いいの？」

「間接キスできて嬉しいだろ？」

「いや、べつに……」

心配するような目線を向けられながら一気に炭酸を煽ると、天羽の不機嫌そうな頬を撫でる。

複雑な表情の彼女にの彼女に薄く笑うと、さらに眉間に皺が寄った。

「それで解析は終わったの？」

「ああ。だがこれだけじゃアレイスターと交渉するにはやはりまだ足りないな」

「……まあいい情報はあんまりなさそうだよね。なんだかんだちゃんと対策してそうだし」

ピンセットについた手の甲に光る小さなモニターを見ようと、体を寄せて覗き込む。

一生懸命覗き込む彼女の近い顔から目を背けて、体に張り付く柔らかい脂肪を感じないように視線をカーテンで閉じられた窓の方へ向けた。

明かりもつけておらずカーテンも閉じられた暗い応接間、広いソファの上で体を押し付ける暖かい体に絆されないよう、意識は手を覆うピンセットに集中するほかない。

「もうひと押し、必要になるな」

「一方通行を殺すの？」

静かな部屋に響く彼女の恐ろしく優しい声に体が強ばる。

彼女が言っているような優しい言葉ではない、酷く残酷な言葉に一瞬唇を噛んだ。

超微粒子干渉吸着式マニピュレーター、通称ピンセット。

磁力、光波、電子などを利用して素粒子を掴むこの機械はアレイス

ターの持つ監視システム、学園都市にばら撒かれた五千万機もの目に見えない監視カメラである滞空回線アンダーラインから機密情報を奪い取り、アレイスターへ突きつけるための器具。

この器具から奪い取った情報の多くに機密情報はある、けれど交渉の席に着くには材料が少なく、これだけで交渉へ向かうつもりは毛頭ない。

残る手段は一方通行アクセラレータの殺害。順位を繰り上げ頂上に立つことでアレイスターとの交渉の場に向かう。

それくらいは理解している。

ただその事実を天羽隼糸という少女が言うことに酷く腹が立つ。

汚れてはいけない完璧な少女がその単語を出すことに唇を噛むと、湧き出る苛立ちを抑えて空き缶をテーブルに投げ捨てた。

「……それしか方法はねえ。メインプランを潰せば俺を無視できないだろう?」

「もう一つ、方法はあると思うよ」

「あ? ツ、な、何してんだよ」

彼女から視線を外し、ピンセットについた携帯電話のようなモニターを触りながらソファに体を深く預けると反対に彼女は立ち上がる。

白いエプロンが地面に落ち、水色のワンピースの金色のボタンが一つずつ外れていく音が焦燥感を湧き立てた。

紫のカーテンから漏れる淡い日光が部屋を色付ける。水色のワンピースが体を通つてすると落ちていくと、艶やかな女が真っ黒なワンピースを着てそこにいた。

「アレイスターへの突破口、それはきつと未来にあるんじゃないかな」
「はあ?」

柔らかいシルクの不透明なベビードール。艶やかな布地から伸びる足にはポーチ付きのレッグホルダーをぶら下げており、動く度に黒い下着の紐が見え隠れする。

劣情を煽るような格好からは想像もつかないほどおぞましい無表情で、彼女は高い背から見下ろした。

「だからね、他でもない君の為に天羽彗糸の全てを託したい」

「……これは？」

「門であり鍵、そして全てだよ」

足の間で膝を滑り込ませると胸の谷間から取り出した一枚のカードを見せる。自分が渡した高性能なピンクと緑のストラップがポーチから飛び出て揺れる光景に目が動かない。

エロティシズムの塊のような少女の動作に心音が跳ね上がる。

指で掴んだ眩しいホログラムで彩られた黒のインディアンポーカーに首を傾げると、おぞましい無彩色の瞳が星を輝かせ人形のような冷たい顔で呟いた。

「は……？」

「あたしの全てがこの小さなカードに詰まっているの。前世で見た事、知ったこと、その全てが」

「なら解析に、ッ」

視界に広がる彼女の顔と、牢獄のように垂れ下がる髪から逃げ出そうと体を傾ける。

しかし強くソファに押し付けられた肩に、体は思うように動かなかった。

「夢を見て、それが神へと繋がる唯一の方法だから」

「……なんでだよ。データにした方が楽だろ」

「データはアレイスターが盗み見ちゃうからダメ。この世界にたった一つしかない神への道を、アナタにあげたいの」

張り詰めた空気にか弱い女のか細い声が震える。その声に動くことは叶わない。

足を拘束するように上に座る彼女の肉の着いた下半身が太ももを圧迫し、逃げ道を塞ぐ。

纏わり付く花の香りと瞳の中で輝く星に逃げる気力さえ奪われ、反抗することすら出来なかった。

「……俺が寝てる隙になにかする魂胆じゃねえだろうな？」

「そう思う？」

「体晶を渡せ、そしたら信じてやるよ」

「……わかった」

仕方なく武器^{体晶}を奪って言う通りにカードを受け取る。

彼女の同じ花の香りが微かに感じる不気味なカードと、からからと音がする体晶の入ったケースを手に入れたため息をついた。

「はあ、ソファで寝ると体痛くなるんだよな」

こんな時に昼寝をする羽目になるとは思わず呆れてしまう。寝るといふ単語に反応したのか、気が緩んではいけないという日なのに欠伸が出て眠くなってきた。

「シャツは？シワシワになっちゃうよ？」

「……面倒臭せえな、ほんと」

ポケットの中身と没収したケースはそのままズボンのポケットに移し、ジャケットに手をかける。

ジャケットを脱ごうとするも、天羽の不思議そうな顔にシャツごとジャケットを脱いで寒そうな格好の彼女の肩にかけてソファに横になった。

「垣根くん、寒くない？」

「俺はいいんだよ。お前の方が寒そうだよ、そんな下着一枚で」

「……ありがとう」

ただの服に控えめに喜ぶ彼女の顔をデコピンで弾いて「バカ」と呟いた。

シャツとジャケットは彼女には少し大きいようで、ただでさえ胸のせいで大きく見えがちな肩が更に広く見えた。

機嫌のいい少女を内心喜びながらからかうように笑って手の中に収まったインディアンポーカーの薄いフィルムを剥がす。

「おやすみのキスはねえの？」

「そんなことしなくて、眠れるはずだよ」

「どういう、い、み……？」

額に置いたカードを避けるように女らしい薄い手が頭を撫でる。唐突に襲う眠気と、脱力感に思考がハッキリとしない。

ローテーブルに置かれた二人で飲んだ開けたばかりの炭酸ジュースが軽い音を立てて落ちる。

不可解な眠りに違和感を覚えても、もう遅かった。

「あたしね、体液の成分を変えられるの。A t o B、体内の違う物質に」

「おまえ、……！」

「どんなに仲良くても同じコップでものを飲んじやダメだよ、お馬鹿さん」

前髪を掻きあげ、長い髪が黄金へ変わる。隠していた左目も、露出していた右目も、バラバラになった前髪の間隙から垣間見え、鮮やかなステンドグラスのような瞳の色に戻る。

「バイバイ、垣根くん。これからも愛してるよ」

微睡む視界の中、抗えない眠気の底で部屋を出ていく彼女に手を伸ばすも、その手は輝く髪を掴むことが出来なかった。

路地裏から明るい表通りに出ると、杖を着いたままため息をつく。

仕事を終わらせ汚れた服で来るはずの送迎車を待った。

「アア、つつかれた」

「今日は一段と仕事が多かったな。こんな日が続かなければいいが」

「そうね、でも今は取り敢えず病院行かなくちゃ」

「海原の野郎はもう行っちゃまったがな」

「仕方ないわよ」

染めた金髪が痛々しい土御門元春と、足元から流れ出る血液をかばいながら歩く結標淡希。

今はいない海原光貴の腹立たしいすまし顔を思い出しながら静か

な道を出た。

「しかし、なんだか妙に賑やかだな」

「別の場所で親船最中が午前中に狙撃されただろ？多分そのせいで道路に規制がかかって、迂回のためにこっちに人が来てんじゃないか？」

「アア、そっちの進展はなんも聞いてねエな、別の組織やらがとっ捕まえたのか？」

路地裏から表通りに向かうと、賑やかな大通りに出る。

午前中に起こったテロ行為のせいだとはいえ、いつもより賑やかな道だった。

「こっちに仕事が回ってこないってことはそういうことじゃないの？」

早く病院行かなきゃいけないし、私はパスだけど」

「あれ？でも結構治ってねえか？結構浅かったのな」

「え？そんなに浅い感じじゃなかった気がするけど……」

しかし人の多い道に気にも止めず、結標は自分の怪我を指さし肩を竦める。

仕事でやらかした怪我は彼女が思っているほど深くなく、大量の血液で汚れていたはずの包帯は既に乾き、傷は塞がっていた。

その傷に少し前に出会った気味の悪い女を思い出す。美しい黄金と甘い桃色が目に付く気色悪い天使様ナースのことを。

「第七学区の病院になンでも治す看護師がいる、そいつに頼めばすぐ治るンじゃねエか？」

「お前、あいつのこと知ってたのか！」

「あ？なんだ、テメエも救いとやらを押し付けられた口か？」

「いや、ただの知り合いだ。表のな……」

その女のことを口にする、土御門は慌ててサングラスに隠れた目を見開く。

恐ろしいナースの広い交友関係にこちらが驚きたいくらいだったが、彼の慌てようを見る限り、その交友関係はいいものでは無さそう
だ。

「なんて子なの？怪我を治すなんて、結構すごい能力じゃない」

「天羽彗糸、金髪頭の看護師モドキの^{レベル4}高能力者だ」

天羽彗糸と呼ばれたあの女のおぞましい頭部が、思い出の中で宙を舞い、吐き気を感じた。

永遠の肉体を豪語する愚かな女の純粹無垢な笑顔と柔らかそうな細い四肢、そして蛇のような緑と赤の瞳に寒気が背筋を這う。

「天羽？待って、天羽ってもしかしてギャルっぽい背の高い子？」

「テメエも知ってンのかよ」

「その子、私がボロボロになって入院した日に助けてくれた子よ……」

「なっ、本当か!？」

彼女の名前に結標が傷口から目を離して顔を上げる。

驚いたことに、天羽彗糸の交友関係は恐ろしく広く、土御門に至っては先程とは比べ物にならないほど声を荒らげた。

「ふーん、アイツ、どこでも慈善活動してンのか」

「いや、恐らく違う……」

「ア？」

「あの恐ろしい女が、慈善活動程度で収まるわけが無い」

壁に背をつけ、土御門は随分とシリアスな声で呟く。

「なんでそう言いきれる？」

「逆にそう思うのは彼女を知らないからだ。あんな謎の多い女、なぜ信頼出来る？」

「謎？自分の名前も所属先も職場も全部ぶちまける人間が謎ってか？」

「知らないのか？あの女は——」

微かに目を見開く土御門の声が止まる。

それだけじゃない、通行人から車の音、全てが動きを止めて立ち竦む。

途端に静かになった周りに鋭く警戒すると、かつんと、フルートのように高い靴音が静かな街に響いた。

「あら、こんなところにいたのね」

頭上から聞こえた優しい女の声に顔を上げて視線を向けた。

太陽を背にして街頭の上に立つその女は優しくも胡散臭い笑顔で

佇む。

踵まで届く恐ろしいほど長い金髪と、両目を微かに隠す長くも隙間のある前髪が風で巻き上がり、甘い香りをここまで飛ばす。

ヒールで傘増しした190近い背のインパクトに負けない大きな胸。その上に着た黒い薄手のキャミソールワンピースからは曲線的な下半身が伸びる。

圧倒的な存在感に声が出ない。

『肉体の支配者』……！』

『主天使？違う違う、そんなものじゃないよ』

掠れた声でわけの分からない言葉を呟く土御門に少女は柔和な笑みを浮かべる。

太ももに着いた合皮のレッグホルダーと細い踵の黒いピンヒールが騒がしく音を響かせ、肩にかけてワインレッドのジャケットが風に吹かれて羽ばたく。

右手に付けた長い二本の金属製の爪が特徴的な手袋で頬を撫で、人形のような長いまつ毛を伏せた。

『あたし達は異邦者、神を欺く天使の軍団さ』

天羽彗糸、それとも藍花悦と呼ぶべきだろうか。

化粧と黒が無くなった女は、この間出会った女々しい男に瓜二つだった。

『アナタを殺しに来たの、一方通行』

かちりと手に持った小さなリモコンを押すと、鋭い痛みが肩を貫く。

可愛らしい童顔の笑みに気を取られていた体を貫いたのはなんてことない短い鉄の棒。

瞬間移動のように突然生えた鉄に驚き、咄嗟に近くの瞬間移動能力者に目を向ける。一瞬のうちに正気を失い、呆然とした表情の同僚たちは意識を保っているようには見えなかった。

『ッ!?気でも狂ったのか……!』

『もう彼女たちに言葉は通じないよ。天使の御言葉しか脳に伝わらないからね』

じんじんと痛みが広がる肩を庇って後退ると、この場にいる全ての人が一斉に視線を向ける。

無数の目が体を刺す感覚がおどましくて、恐ろしくて、声が出ない。

「さあ、第一位様！学園都市全てを敵にした時、お前は逃げ切れるかな？」

神のように嘲笑う女の声が静かな世界に響く。

煌びやかな女の姿が嫌というほど目に焼き付いて、脳から離れることがなかった。

96話：舞台の上

そこに立っていた女は初めて出会ったあの日の夜に瞬いていた星を瞳に輝かせて、たった一人の主人公ヒーローの前に悪役として立ち塞がった。

色のない灰色の空の下、艶やかな女の目線アクセラレータに一方通行が舌打ちを鳴らすと、道行く通行人が彼に一齐に殴り掛かる。

その光景にため息を着くとすぐさま電極を付けて上に飛び、女と同じ目線に立つため街頭へ降り立つ。目の前の女が押したボタンと連動して、必死に上に登ろうと柱に掴む軍勢の喧騒が酷くうるさかった。

「テメエ、救いを差し伸べるとか御大層な願望持つてたくせに、このザマか。救えねエな、藍花悦さんよオ」

「天羽彗糸で結構よ。それに救いを差し伸べているのに変わりないから」

にこにこ冷たい笑顔で見下す女、天羽彗糸は、前の面影を残したまま盲目的な救いを信じて目を細めて笑う。

大人の体で大人の服を着た子供の顔をした我儘な子供。彼女の支離滅裂な言葉アクセラレータに一方通行が薄く笑うと、傲慢な女はヒールで上げた高身長から馬鹿にするように見下した。

「これが救いか？目ん玉機能してンのかよ」

「他でもない愛する人のためさ。彼のためならあたしは死ねる、どんな罪でも背負ってみせる」

「愛だア？そんな軽いもののためにテメエはこの第一位に喧嘩吹っ掛けたのかよ？頭のネジ何本かねエンじゃねエか？」

ほのかに赤く染めた頬で、彼女は一瞬だけ随分と前に見たおぞましくも優しい笑顔に戻る。

その姿は恋する乙女にも、神を信じる異端者にも見える。心の底から嬉しそうに自殺願望を呟く彼女は、未知を知ろうとしない一方通行アクセラレータにとつては理解の出来ない毒物でしかない。

背筋が凍り、虫が這うような感覚が押し寄せ、侮蔑の言葉を吐き出

すしかできなかつた。

「侮辱するなよ、ノータリン。これは最強のお前には分からない崇高な愛だ。弱者あたしにしか出来ない孤高で幸福で鮮やかな愛の形。この正しく清らかで、何よりも美しい愛をその体に刻み込め。お前に出来ない愛の形に永遠に劣等感を感じてろ！」

「劣等感だア?! テメエみてエな何も出来ねエガキの自慰的な快樂なんて、知りたくもねエよ、クソアマアア!!」

歪んだ考えが拙い子供の幸福を捻じ曲げる。煩い理論に奥歯をかみ締め、一方通行は可哀想な女の叫びに街灯を強く蹴り、彼女の元へ勢いよく飛びこむ。

だが握りしめた拳を振りかぶり強烈な一撃を繰り出すも、突如消えた女に拳は届かず、寂しくも固いランプしか壊せなかつた。

「快樂を求めて何が悪い? 幸福とは所詮ドーパミンとオキシトシンの作り出す絶頂だ。人間がそれを望んで何がおかしいの?」

「テムエのオナニーのために一般人巻き込むなんて随分と思想を変えたんだな、白衣の天使様」

「だってそうでもしなきゃアナタに勝てないもの」

忽然と消えた女の声が下の道路から聞こえた。飛び降りる素振りもなく、唐突に。

声のする方へ苛立ちながら体勢を立て直してみると、そこで微動だにしない結標淡希に抱きつきながら彼女はせせら笑う。人混みを縫うようにひらひらと逃げ進む女の眩しい金髪が目には焼き付く。

長い前髪から覗く赤と緑の恐ろしい両の瞳にチカチカと瞬く星が嫌に鮮やかだった。

「さあ、テムエに齒向かう無実な一般人に傷一つ付けずにあたしを殺せる? それとも死ぬのは一方通行アクセラレータくんかな?」

「ハッ、自分で手を下さねエ臆病者に何言われたって響かねエよ」

「随分とチンケな挑発だけど、いいの? あたしを怒らせたら酷い目見るのはそっちだよ?」

沢山の一般人に囲まれて彼女は愚かにも身を守ったつもりでいた。

そして勝ち誇ったような腹立たしい顔で下にいながら見下す。殺

してしまいそんな顔を無意識ながら嫌っている自分がいることに気が付かないほど一方通行は鈍感ではない。

「ハッ、テメエが怒ったって何も怖かねエ——」

「打ち止め、今どこにいるだろうね？」

「ツツ!!テメエ……!!」

「言っただろ?あたし達は異邦者だと。何故もう一人いる可能性をなぜ考えない?」

含みのある言葉が目眩がするほど大きく鼓膜に反響する。

生気のない一般人に紛れて聞こえる不快な声にどうしようもない吐き気がこみ上がり、唸るように鋭い眼光で女を睨んだ。

「ブツ殺す」

「殺されるのはテメエだクソもやし」

「なアアに言ってんだクソ女!あのガキに手を出した時点で、テメエが負けるのは確定事項なんだよ!!」

怒りが湧く。あの子供に手を出さんとする最低な女に最高の地獄を見せなくてはいけない。

街灯から飛び降り、女の頭上目掛けて踵を振り下ろす。

民間人がいる以上、流れ弾に当たることを危惧して飛び道具などは使えない。

だから完璧な照準で、ブレーキが効く体で女を迎え撃つ。

瞬間移動を使う女に効くかどうかは分からない。

しかし瞬間移動の演算によるタイムラグを利用して、演算を繰り返せば、この拳は必ず届く。操ってるだけの格下の人形師に勝てる自信は大いにあった。

けれど、その自信はたった小さな笛の音で消え失せる。

「この空間の支配者はこのあたしだ。テメエの能力くらいなんともなる」

「うがアアツ!!!」

彼女が足に着けたポーチから取り出したのは小さな笛。スポイトのような膨らみを押し空気を送る不思議な形の笛は少し前に出会った木原数多が持っていたもの。

音によって乱された演算は体を地面に打ち付け、痛みを広げる。
天羽彗系の足元で無様にも痛みにも悶える姿にプライドが欠けて、羞恥心と苛立ちが湧いた。

「木原の……ッ」

「能力に頼って生きてきたツケだな、第一位。お前が守ろうとした一般人に暴力を振るわれて、自分より背の高い女に嬲られて。なあ、今何を考えている？何を思っている？知りたいよ、お前のこと」

能力で補強された脚力が放つ蹴りが一方通行の胃を^{アクセラレータ}圧迫させ、鋭い痛みに胃液が食道を通る。

口に広がる不愉快な酸味に嘔吐く暇もなく、天羽は更にピンヒールの先でみぞおちを抉る。

黒いビジュウが散りばめられた高いブランドの靴に自身の汚い液体がかかり、輝きをなくして澱んでいった。

「クソ女、ツ！ガ、うアア！」

「なんとでも言え。その程度、傷一つつかないさ」

「ッあ”ガアアア!!」

細い爪先が胃を捻じり、一方通行の薄い体を足の力だけで宙に浮かせて強烈な回し蹴りをぶつける。

凄まじい勢いで蹴飛ばされた軽い体は笛の音で演算もままならず、勢いを落とさずに傍の建物にぶつかつた。

小さい瓦礫が頭の上を汚し、口は胃酸を吐きながら細かい呼吸を繰り返す。

あまりの衝撃で内臓が破裂し、骨が砕けているのが薄い体によく伝わり、冷や汗が止まらない。一方通行の細い身体では受け止めきれないほど大きな衝撃だった。

「アア、呆気ない。第一位もこの程度か。こんな人間に彼が遅れを取っていたのかと思うと残念でならないよ」

「ッはア、さつきから、彼、彼、彼、うっせエな。テメエは自分の意思もねエのかよ」

地面を踏み締めるヒールの音に顔を上げる。

隙間のある太ももを揃えて両膝を着くと、地面に蠢く虫を見るかの

ように冷たい目線で左手に掴んだ笛を見せびらかした。

リモコンを大きな胸の谷間にしまい、わざわざ無防備な状況に体を晒す。

まるで狙い撃てと言わんばかりの余裕の笑みに、一方通行アクセラレータが怒りを覚えるのも無理はない。

「……彼のためがあたしの意味なの、それがこの愛なの、分からない？」

「ハッ、どこの誰に恋してんだかしらねエが、テメエみてエな女の彼氏なんて、ロクな奴じゃねエなアア?!?!」

挑発的な笑みが近づくと、腰に入れた軽い拳銃を手に取り照準を合わせた。

一方通行アクセラレータは知っている、拳銃如きではこの女を殺すことが出来ないことを。そして同時に、彼女が避けないこともよく知っていた。

不死身の余裕と驕りを見抜けぬほど馬鹿ではない。

だから狙ったのは彼女の長い指。小さな笛を挟む指を弾き飛ばし、目論見通り笛も指も裂けて少量の血液と笛の部品が飛び散る。

放たれた弾丸の僅かな風で揺れる金髪の間隙から、十字のピアスが下品に光を反射するのがよく見えた。

「……これは性愛なんか霞むほどの大きな愛。誰かに全てを捧げた。人生を、命を、この感情を。そんな、尊ぶべき愛の形だ」

悲鳴すらあげず、代わりにドスの効いた声がつくらしとした唇から滑り落ちる。口をなぞる左手はもうすでに修復され、怪我の跡もない。

人形のような顔で冷たく見下ろし、大きな女の影が伸びた。

「この愛を見誤るなよ。汚らしい感情だと決めつけて、この思いを貶すんじゃない。この愛の為ならば、あたしは命だって惜しくない。命に等しい愛を汚らしく思うな」

ゆっくりと立ち上がる彼女の顔は長い前髪のせいで分かりづらい。

逆光の中、高い背で佇む彼女の厳かな強い口調になにか恐ろしさを感じてしまうのは人間の防衛本能故だった。

「この愛すら理解できないお前に、あたしの全てが掌握できると思う

なよ」

苦々しい言葉を吐き捨てる彼女はおもむろに緑とピンクのスト
ラップが飛び出た太もものポーチから、ミントタバレットのような無
地のケースを取り出す。

その中から出てきたのは血のように赤い結晶。

「浅い底だ、掴むまでもねエよ」

一粒、それを飲み込む隙に演算を取り戻す。しまった洗脳リモコンの要と、
壊れた笛に勝機を見出し、一方通行は拳アクセラレータを突き出す。

触れてさえしまえば、後は好きなようにかき混ぜられる。

そう信じて、拳を握った。

けれど浅はかだった。

「底が浅いのはテメエだろ、愚鈍が」

「ガハツツ!!なツ!!」

理解した時には既に頭は地面にめり込み、折れたあばら骨が肺を傷
つける。

思考が止まる。みぞおちと脳に響く痛みだけが現実で、コンクリー
トにめり込んだアスファルトの冷たくごわごわした感触がどこか現
実離れしていた。

「テメエは脳ミソがデカいだけのなんてことない人間だ。なら話は簡
単、脳の電気信号が伝わるより早く、テメエをぶん殴ればいい」

「ツうガアア!!」

横腹を蹴られたことだけ理解した頃にはもう既に別の壁に体が埋
まり、大きなヒビを広げていた。

あまりの衝撃に血反吐を吐くも、徐々に鮮明になる視界に演算を始
める。不愉快な笛の音が無くなったおかげで、一方通行の体の中の切
れた血管や内臓が辛うじて生きれる程度に保たれた。

そして鮮明になった視界を白い何かが埋め尽くす。

雪のような場違いな白色にゆっくりと視線を向けると、思わず息を
飲む。

「それ、は……………!!?」

「言っただろう? 異邦者だと」

ワインレッドのジャケットとシャツを地面に落とし、下着が見え隠れする黒い不透明なベビードールが風に揺れた。

暗い空の中、コントラストを強める白が少女を守る。

血液の通る完璧な鳥の骨格と、細やかな解像度の羽。

乙女が背負っていたのは七対十四の翼だった。

「その筆頭は七対の翼を持った天使、アザゼル。神の御使がお前を殺すと言っているんだ」

「神、だア？ テメエ、いつから厨二病になったンだよ」

「この身を偶像とすれば、あたしはそれに成る。変幻自在の神の魂はそれくらいには耐えられるの。知らない人にはただの戯言だろうけど」

服を貫き、影を落として背の高い彼女の等身を際立たせる。

意味不明な言葉の羅列を並べる天羽に、一方通行はただただ混乱する他なかった。

「オカルト信じる口だったのかよブス」

「テメエがものを知らねえだけだよ、陰キャコミュ障。まともに学校も行かねえから他人と知識にギャップが開くんだよ」

「……テメエに何が分かる」

「分かるさ、同じ超能力者だから」

混乱しながらも体を起こし、残り僅かな電極の充電を気にしながら一方通行は立ち上がる。天使の言葉は彼にはただの戯言でしかない。

彼とは違う過酷な現実を生きた大人の少女の正論は、この世界ではただの気味の悪いものでしかなかった。

「別に学校に行くことが全てじゃない。けどな協調性、社交性つてのは会話で生まれる。それが皆平等に提供される場所が学校ってだけ。親とも、研究員とも、通行人とも話せないテメエにはわからねえかも知んないけど、学校とは勉強しに行く場所ではないんだ。社交性を身につけ、他人と関われるよう子どもを手助けする施設。大学は社会貢献のためだけど、まあそれはどうでもいい」

長い金髪はその奥、毒々しいほど眩しい赤と緑の瞳が朗らかに笑う。軽蔑を含んだその笑顔に、息が吸えず、溺れそう。

「友達と遊びたかったからクローンを一万も殺した馬鹿野郎には分からねえかもしれないねえが、友達つてのは最強だから出来るんじゃないやねえ、愛嬌と笑顔で出来るのさ」

彼女の笑みは一方通行の記憶に一生残るほど、今まで見せた笑顔の中でとびきり可愛い笑顔だった。

その笑顔で彼女は物語と同じように、彼の激情を言葉で揺さぶる。「今のテメエは立派にオンオフが出来ないほど能力が扱えない低能なのか？違う、その可愛い頭に詰め込まれたでかい脳ミソは制御を知っている。ならばお前は少し背伸びして『手は繋げないけれど、君を守って君と遊びたい』って素直に言えば良かったんだ。テメエに友達が出来ねえのは環境でも能力でもない、お前のくそ高いプライドとメリットを合理的に考えられない足りない脳ミソのせいだよ」

コツンと、ヒールが瓦礫を弾く。優しい笑顔はいつの間にか酷く恐ろしい嘲笑に変わっていた。

それは神が惚れた反逆者の決意にみなぎる強者の顔。

物語に現実を組み込む能無しの言葉を、見守ることを義務付けられた天使は叫ぶ。その思いが本心なのか虚像なのかは知らない最強は、彼女の想いを受け取ることができない。

「このぼくも、第三位も第四位も第五位も第七位も、お前と同等の第二位でさえ出来ている！他人と関係を繋げば得られるメリットを考えられず蔑ろにしたテメエのせいだ！」

「うるせエ……うっせエンだよオオオ!!!」

全てを蔑ろにした究極の理想論は何も知らない子どもにはただただ痛いだけ。目論見通り、彼女の言葉は感情を揺さぶった。

身の丈に合わない正論が一方通行の心^{アクセラレータ}を抉り、痛みが増していく。力を放出して、目の前の乙女を殺さんと意を決する。

一流の悪党として、彼女を殺すと。

「神を知らない無知なる強者め、凶星突かれて逆上か。いいよ、返り討ちだ」

白く眩しい七対の翼が大きく広がる。

見守る者が愛する誰かのために全てを投げ打つ先には破滅しかない。

その結末を分かっているながらも彼女は役目を成さんと恐怖に勝ち、そこに立っていた。

「デメエにコンティニューはねえ！何も知らぬまま、何も出来ぬまま、後悔の果てで朽ちていけ！」

右手につけた爪の長いグローブで髪をなびかせてはつきりと彼女は叫ぶ。

最高に美しい愛^{エゴ}を成就させるため、彼女は幸せ^恋を捨てて、命を捨てて、プライドを捨てて、優しさも捨てて、何もかもをたった一人の不幸な少年のために捨てる。

全てを捨てる覚悟の女には、最強など怖くない。

白い手が氷が入った二つのコップにオレンジ色の液体を注ぐ。

からんと溶けて満たされたコップを小さな客人と小さな居候の前において、一人の人間、一人のクローンと、借り物の姿の人工物が安いローテーブルの周りを囲んだ。

「天羽、どうしたの？」

「な、何がですか？」

「なんか、元気ないの？口調も変だし……ってミサカはミサカは尋ねてみたり……」

勘のいい茶髪の少女、^{ラストオーダー}打ち止めは不安そうに顔を覗く。

変化した金と桃色の髪が揺れる視界に言葉を躊躇い、カブトムシ05は口を噤んだ。

「……天羽って呼ばないで」

「え？」

「ここに天羽はいないよ」

「……どういうこと？天羽はここにいるよ？つてミサカはミサカは優しく質問してみる」

静かな部屋に杠林檎の小さな声が響く。顔を下げたまま呟く彼女の表情に、もう騙し続けることが不可能だとカブトムシ05は分かっ
てしまった。

「……私は、マスターである垣根帝督が作った人工物です。ミサカ
ネットワークを真似たデータ未元物質マターで繋がる喋る物。あなたと違って、人
間の肉すら持たない、肉に似たような物質の塊です」

「っ、体が、変わった!?!つてミサカはミサカは……」

「私達は人間ではないのです。それを活かして、保護対象に貴女を攫
うよう命じられました」

形を変え、材質を変え、少女が少年へと変わる。

どこもかしこも白い薄幸の美少年、乙女が夢に見る王子様のような
完璧な少年は、製作者とは違う柔らかい表情をすこし堅くして冷たい
床に正座した。

「なんでそんなことを？理由が分からないよ、つてミサカはミサカは
小さな声で訊ねてみる」

「マスターたちは一方通行アクセラレータを狙っています。そういえば、あなたが置
かれた状況が何と無く分かるかと」

赤裸々に全てを伝えた理由は05にはよく分からない。まだ人間
になりきれしていない生命体は、命令との矛盾だと分かりながらも何故
か自分が守るべき主人が不利になる行動を取ってしまった。

「……05はいいの？天羽つて多分ミサカたちにとつての一方通行アクセラレータ
ことなんだよね？05たちは、ここにいていいの？つてミサカはミサ
カははつきりと聞いてみたり」

「私は、マスターと保護対象のために生まれました。それを背くこと
はできません……それに、私は結局、貴女のように魂と意識を持った
生き物ではないので」

「でも、背きたいって思ってるんでしょ？つてミサカはミサカは理解
したよ」

打ち止めの悪意のない眩しい言葉に緑の瞳が歪む。ラストオーダー

棘のある言葉にもかかわらず、打ち止めはその瞳を見続ける。知らない感情に苛まれた緑の瞳は寂しそうに見えていた。ラストオーダー

「私は、保護対象が幸せになれるなら、なんだっていいんです。それが生まれた理由で、私は……」

「……幸せになるためなら、天羽に手を汚させてもいいの？」

「分かりません……人工物には、分からないんです。『幸せ』なんて」プログラム

「大切な誰かを『自分』で幸せにしたいくないの？ってミサカはミサカは最後に聞いてみる」

少女達の言葉に、感情が分からない少年は顔をあげる。よく分からないとだけ呟いて黙り込んだ彼に困ったように笑うと、打ち止めは水玉模様のキャミソールと大きなシャツを翻して立ち上がる。ラストオーダー

「05はお留守番！宿題ね！みんなと帰ってくるまでに考えとくこと！ってミサカはミサカはお姉さんぶってみたり！」

「どこに行くの？」

「あの人たちのところ！ってミサカはミサカは手を差し伸べてみる！」

突然立ち上がった打ち止めに首をかしげると、差し出された手に困惑する。裏切っているという事実を何と無く理解していた林檎には打ち止めの手をとる資格がないと思っていたのに、それでも手を差し伸べて彼女は笑う。ラストオーダー

「……私も、行っていいの？」

「もちろん、お友達だもん！ってミサカはミサカは手を握りかえすの！」

希望は希望を蔑ろにしない。

手を取り合った二人の少女は、精一杯の笑顔で走り出した。

残された一匹の生き物は残されたコップを眺めながら項垂れる。オレンジの液体を呆然と眺めて、白いジャケットにしわを作った。ラストオーダー打ち止めの言葉に思い出すのはいつかの夜のこと。

眠るマスターと杠林檎、そしてそれを眺める彼女の横顔。他人が幸せになることが幸せといったあの少女とほぼ同一の思考を持つ人造の天使はその問題に答えがなくても認めることができない。

「私は……」

経路を辿り、ネットワークを泳ぎ、その考えを押し込める。

ただひたすら、マスターと共有する不純な思いをどこかに押し付けるしか方法ができなかった。

97話：バタフライ・コンフエス

金髪の小さな子供が何枚かの用紙を少し背の低い女性に渡す。

ピンク色のリュックサックを背負った少女に、乏しい表情筋を精一杯働かせて茶髪の女性は口角をあげる。

——入賞なんて頑張った方じゃない？

——ごめんね。一番になれなくて

アメリカらしい広いリビングのソファ、娘が手渡した絵画コンクールの結果をじっくりと見ながら椅子に座っていると寂しい声が狭い部屋で大きく響いた。

特別賞と書かれた紙に悔しがるわけでも、悲しむわけでもなく、大事な娘は申し訳なさそうに顔を伏せた。

腹立たしい。

一番になれとも、特別になれとも言ったことがないのに、ひたすらに親にとつての幸せで自慢になる道を模索する娘にいつも苛ついていた。

——そういうところが嫌いって何回いえば分かるの？どうしてそうなるわけ？

——自慢の娘じゃなくてごめんなさい

——学習能力ないの？そういうこと言うからパパもママもムカつくんだよ

——ごめんなさい

異常な子供の卑屈な言葉を若い母親は冷たく跳ね返す。それは不器用な母親の愛だった。

自分のために好きなことをやってほしい、自分のために何か興味を持ってほしい。

いつも打算で動く恐ろしく大人びた娘の幸せを願つての言葉だった。

けれど高校に入つてすぐ生んでしまった若い母親には子供に優しく問いかけることも出来ず、ひどい台詞で気持ち吐露してしまう。

きつく言ってしまうのも無理はなかった。

アメリカの歴史や音楽が好きで一人で高校の留学手続きをした自分本位の塊のような母親には、娘の気持ちは理解できない。

旦那もそうだった。日本のサブカルチャー好きの背の高い良い男、彼も自分の興味と好きが原動力の奔放な人。

両親は娘の異常さを見抜いていながら、その性質を理解できていなかった。

彼女達が娘を憂いで叱るたび、その異常性が増大していることを。

——…あたしがいない方がお母さん達は幸せ？

——子供のくせに顔色伺わないで。そんなことも分からないの？

困ったように笑う娘に母は冷たく叱る。

子供だと言うのに、子供らしい笑顔ひとつしない娘が怖かった。その考えが正しいかのように、寂しい顔もせず彼女は悟ったような笑顔を貼り付ける姿が恐ろしい。

娘が一番大切だと言うのに、本人はそれを理解しようとしなない。

だから理解させようと強い口調で言葉を放つ。

子供は大人の顔色を伺わず、好きなように生きろと。娘がいない人生が幸せなはずないと。

しかし口下手で人生経験の乏しい二十歳になったばかりの母親の気持ちは、正しく伝わることはなかった。

——アンタのこと、生まなきやよかった

思わず飛び出た言葉も、真意とは違かった。

資産も少なく、若く、祖国と離れた地で子供を育てる自分が役不足なのを彼女は理解していた。

だから思う。

この子を産んだのが自分ではなくて、金持ちで教養もある、優しく子供に接することができる他人だったら良かったと。

そうだったらこの子は幸せだったかもしれないと。

可愛い愛娘を幸せにするには両親を変えなくてはダメだと、自己嫌悪の渦に飲まれていた。

しかし今更養子にだせるほど冷徹でもなければ、愛着がないわけではない。

大切な娘のため、できることは全てやってあげたかった。

——ねえ、妹か弟いたら、アンタ嬉しい？

——え？

彼女がここまで親の顔色を伺うのは寂しさからきているのかもしれないと、母はふと思う。

高校を中退し勝手を知らない異国の地で朝から夕方まで働く母親と、同じく正社員として働く十歳も歳の離れた父。確かに構ってやれていない。

世界一と言えるほど可愛くてよく出来た娘、たくさん愛したいに決まっている。

けれど時間がなければそんなことはしたくても出来ない。

ならばもう一人、遊び相手がいれば異常さも紛れるかもしれないと、安直な考えが真つ先に母の頭に浮かんだ。

——もしたら、アンタも落ち着くでしょ

一人の時間が多いのかもしれない。

自由すぎる国がいけないのかもしれない。

一度考えがまとまれば、母は止まることを知らなかった。

頬に生温い風が当たる。閉じた瞼を撫でる柔らかな日差しにゆつくりと視界を開く。

緑が揺れ、水の匂いが鼻を掠めた。

「……は……？」

日本庭園のような清らかな水面が続く池に満開の桜が姿を映す。華やかな桜と、暖かい陽気の中、ここがどこかの公園だということだけは理解出来た。近くにある看板から察するに蚕糸試験場か何かの跡地だった自然あふれる公園らしい。

そこまで分かっていれど、自分の頭の中のデータにはその公園は存在していなかった。

学園都市の地理も風景も頭に叩き込んだ自分の脳は、ここがどこか答えを出すことが出来ない。

学園都市の外。知らない世界の、知らない公園。傍を通り抜けた青い蝶に導かれ、眩しい水面と柔らかな桜に近づく。

熱を持った鉄製のフェンスに手を置き、香る桜を見つめると、目の前を通った蝶に自然と目線が移る。

蝶がひらひらと池の近くの東屋へ翅を下ろす。

日本らしい涼し気な木製の東屋の下、ベビーカーと幼い少女が池を見つめて、静かに座っていた。

「子供？」

沢山の荷物が付いた黒いベビーカーに乗せられた生後一、二ヶ月ほどの赤子と、小学一年生くらいの金髪の少女。

春らしい桃色の小さなワンピースを着て、粗い網目の麦わら帽子を被ったその少女は、柔らかな金髪と、茶色と緑のヘーゼル色の瞳を持っていた。

その子を知っている。

いつもよりくすんだ瞳の色と幼い見た目でも、彼女だと分かっていた。

「お嬢さん、こんな所で赤ん坊と一人なんて、少し危ないんじゃないか？」

どんな姿だろうと、彼女のこととはすぐに分かる。

話しかけなくてはいけないと、少女しかいない東屋に足を踏み入れる。

明るい地面にかかる影のコントラストが眩しい。

「いいの、あたしもうお姉ちゃんだから」

「お姉ちゃんねえ……ブレねーな、夢の中でも」

強気な顔で帽子のつばをあげる彼女は小さい天羽隼系そのもの。

特別なカードで見た夢の中は、どうやら彼女の古い記憶がベースとなっているようだった。

「ならお兄さんが危ない人が来ねえか見ててやるよ」

「お兄さんの方が危ない人じゃないの？赤いスーツなんてホストみたいだもん」

インディアンポーカーは自分自身が干渉できるものだったか少し疑問を持ちながら、少女の隣に腰を下ろす。

地面に届かない小さい足をぶら下げて大人しく座る彼女はいつもより人形らしさが増していた。

「ガキのくせになんつー単語知ってるんだ」

「ガキなんて、酷いねお兄さん。あたしお姉ちゃんだもん、なんでも知ってるよ」

「……そういえば、両親は？」

「ホテル。色々やってるんだよ」

小学生が知っているのがおかしい単語に眉を顰めると、幼い赤子と二人きりの彼女は何食わぬ顔で酷い事実を告げる。おおよそ子供が言っている言葉ではない単語を呟いて、何を考えているかわからない無表情で顔を見上げた。

「それ……どんな意味か分かってない、よな？」

「……さあ？何してるか、教えてくれるの？」

幼い笑顔に、彼女の言葉が嘘だと気づく。よく知る女子高生の彼女の面影がある子供に冷や汗が垂れる。

哀れな子供の身の丈に合わない言葉になんて返せばいいかわからなかった。

「あたしのせいで青春なかったから、遊びたいんだよ。でもね、それでいいと思うよ？あたし、もう手のかからない良い子になれたから」

「あ？」

「もう一人でなんでも出来るの。小学校に入ったから一人で散歩にい

けるし、ご飯も作れるし、お留守番もできるの。そしたらお父さんとお母さん、二人でもつと楽しいことが出来るから、幸せになれるんだ」
俺の心境など御構い無しに彼女は心底嬉しそうに呟く。

「それにね、この子とずっと二人きりでいれるから、嬉しいの」
椅子から降りてベビーカーの隣に立つと、彼女は小さい手でさらに小さい赤子の手を触った。足の動かない赤子を優しく眺める彼女の隣にしゃがんで視線を合わせると、幼い顔で嬉しそうにはにかむ。

ベビーカーより少し高い身長で、この公園まで一人できたのだろうか。彼女の笑顔にただ不安と哀れみが膨れる。

可愛そうな子供の言葉に共感など覚えられなかった。

「彼女ね、足が動かないの。だからね、お母さんとお父さんがいない間にたつくさん頑張るの。お勉強して、足を治して、それでね、いつかバージンロードで手を引きたいんだ」

可愛そうな少女の未来を見据えすぎた言葉に思わず彼女の肩を掴む。ずっと、ずっと、ずっと昔から考えを改めない彼女がひたすらに可愛そうに見えて、どうしようもない。

嬉しそうに他人の幸せを語る彼女の姿に感情が耐えきれなかった。

「それ以外に夢はないのかよ」

「ゆめ？」

「お花屋さんになりたいとか、なんかねえのか。なんだっていいんだ、職業じゃなくなつて、猫になりたいでも、宝石になりたいでも、お姫様に、なりたいても……」

小さな少女の肩を掴んだまま項垂れる。希望も夢もない世界で、それを信じる無垢な子供の見当違いな言葉。夢ともいえない拙い願いに吐き気しか感じない。

小学生になりたての可憐な少女のおぞましいほど大人びた感情が、想いが、ただただ虚しかった。

「ならあたしの夢は科学者になること！そしたらあたし、幸せになれるんだ」

「……幸せ？」

「だって大好きな人のために生きるって、とつても幸せなことなん

だって！だからあたし、妹のために生きたいんだ！」

「ッ、違う、幸せはそんなものじゃ——」

無意識のうちに小さな体を抱きしめた。柔らかく小さな体が自分の体に収まり、鼓動が伝わる。

いつもとは違う彼女を抱きしめて、腕の中で感じる体温を強く記憶した。

胸のない平たく幼い体は、いつもと違って体によく密着する。

そして、暗転。

唐突に眼前がただの黒い空間に染まり、眩しい赤に吐き気がこみ上げた。

「あ……ッツッ！」

真つ赤な液体が手を汚す。抱きしめた少女は、いつの間にか大きく成長し、自分が知る姿よりも少し大きく、顔は大人らしく変わっていた。

血液が彼女から流れ落ち、ワインレッドのスーツを汚す。

広がっていく赤を掬って、抱きしめて、嗚咽を漏らした。見たくない光景に、夢の中でも感情が滅茶苦茶に引き裂かれて酷く痛い。

その痛みに呼応するように、強く抱きしめた体は崩れていく。

柔らかい肉が公園で視線を奪った青い蝶に生まれ変わり、羽ばたいてどこかへ舞っていった。

昔、蝶は神として信じられていたとふと思い出す。

宝石のような青い蝶が視線を奪う。

その姿に心奪われ、未練がましく後を辿った。

血肉の匂いが消え、黒い世界に光が灯る。突然白に変わった世界に目を閉じると、響いた聞きなれた声が鼓膜を揺らした。

「逃げ出すと思っただが、好奇心の強い男だ」

眩しさを感じなくなっただ瞼を開くと、そこはゲームセンターに変わっていた。初めて出会った時とよく似ているゲームセンターに驚くも、その奥に佇む女の姿に更に驚きが増した。

夢とは逢瀬の場。そこにそれがいるのも不思議ではなかった。

足元を隠す白い肩出しドレスを着たいつも通りの幼い顔の背が高

い少女。その周りには青く美しい蝶が何羽も舞い、頭上には三角の輪が廻っていた。

その姿に息を飲む。

初めて出会った諸悪の権化に、少しばかり目が乾いた。

「……お前があの女を並行世界とやらに連れてきた犯人神様なのか？」

「正解だが不正解」

銀河が煌めくような眩い瞳で少しだけ俺を見ると、それは目の前のクレーンゲームに視線を戻す。

慣れた手つきでクレーンゲームのボタンを叩く神様の髪は天羽とは違って腰まで伸びていた。

「ここは並行世界パラレルワールドなんかではなく、虚像の世界。嘘が本当になった言葉と絵だけの何も無い世界だ」

「嘘？」

「蝶神の機嫌一つで何もかもが変わる不安定な場所。たった一人の乙女のために具現化した未完成な世界であり、これからも終わらぬ永遠の楽園とも呼ぶ」

「どういうことだよ、何を話している？」

ひとりでに喋り出すそれに少し狼狽え、意味のわからない言葉に身構える。

冷たい目線でクレーンゲームを続ける神様の声が、誰もいないゲームセンターに響いた。

「この世界はフィクションなんだよ、少年」

神様の言葉に眩暈が起こる。クレーンゲームのアームを動かす音と、ボタンを叩く軽快な音だけが騒音も音楽もない寂しいゲームセンターに響いた。

「彼女がいた世界はここよりすこし時間が進んだ世界。亡くなったのは2020年のこと」

何を言っているのか分からなかった。

「しかし未来といえど科学力は学園都市と比べたらチープであり、能力開発などなければ、暗部なんてものもなく、そもそも学園都市もない。他国では戦争も起こっているが、少なくとも日本では起きてな

い。科学力はないけれど少しだけ平和で、未来の世界だった」

「学園都市が、ない……？」

「魔術も超能力もフィクションで、学園都市はSF、この世界と比べたら退屈で酷く生温い優しい世界。彼女はそんな世界から来た」

真つ白になった思考を現実に戻すように、がこんと何かが取り出し口に落ちる。そしてそれを取り出すと、神は真つ直ぐ目を見ながら表紙を見せた。

『』とある魔術の禁書目録^{インデックス}、この小さな本に詰め込まれた言葉こそ、汝らの原型だ」

それは一冊の本だった。

黒い表紙の小さな文庫本。白髪で病的に細いキャラクターが描かれた重い雰囲気^{アクセラレータ}の表紙に息が上がり、言葉が出ない。

それは紛れもなく一方通行だった。

喉が冷え、言葉が凍る。生きている人間が、登場人物として描かれている小さな本に恐怖が湧き出た。

信じられない、信じたくない。

けれど、信じるほかなかった。

「小説の中にしか居ないキャラクター、都市、能力、理論。全てがフィクション、全てが嘘。虚構の世界に空想の人物、全てが虚像で組み立てた存在しない、世界と呼べるのかさえあやふやな存在」

「ツ、な、なにを言って……」

「向日葵と彼岸花、心の底で汝は気がついていたはずだ。」

「ツ……」

全てが腑に落ちる。どこか冷めたあの女の目も、濁した言葉も、先回りするような行動も、全てを見透かしたような態度も、誰も愛さないうような確固たる真実を盲信することも、全てを知っていると豪語する姿も、断片的な知識も、自分とは違う常識も、どれもフィクションとして知っていたと仮定すればとても自然だった。

彼女の部屋で毒々しく咲いていた向日葵と彼岸花が脳裏に焼き付いて離れない。

どこか心の底で感じていた推測が、さらにひどい事実として脳を揺

さぶった。

そして同時に沸き上がるのは虚しさと怒り。

あの可愛そうな子供を、何故こんな酷く汚い世界に墮とした。

誰よりも他人を思う異常者に、何故安寧が訪れない。

あの小さく不幸な少女を、何故世界一好きな人妹もいない世界に閉じ込めた。

「なんでアイツにそんなことを、おかしいだろ、そんなことしたって――」

「Omnia vincit Amor et si vobiscum」
愛は万物を支配すれば我も愛に従う

クレインゲームから離れ、蝶を纏いながら神様は呟く。優しいとは言いがたい笑みに言葉が詰まった。

「これは崇高な愛である。私はようやく見つけたのだ、愛に溢れ、慈悲に満ち、誰よりも激しい情動を隠す憐れな乙女を。成し遂げることの出来ない幻想にしがみつき、もがき、足掻き、努力しか出来ない子供が愛おしくて仕方がなかった」

メダルゲームの台に設置された椅子に座ると、コインを入れる。動き出した機械を見つめて、ため息を吐くと長い金髪が揺れた。

「だから全てを与えた。美貌も、幸運も、なにもかも。ただ幸せにしかかった、何よりも他人の為に努力をする乙女を世界一幸せにしたかった。けれど思惑と違い、殺そうと思った邪魔者妹を庇って彼女の魂はこの手の中に収まってしまった」

ジャラジャラと大きな音を立てて何十枚、何百枚ものメダルが溢れ落ちる。溢れ出た金色のメダルの一枚にキスを落として目を細めた。

いつもの天羽よりそぶりが色気付いた大人に見える目の前の神様に苛立ちを覚える。

「そして世界を作った。最後に見た夢フィクションを麗しい娘に与えたのだ。愛しい乙女のために、平面を立体へと変えた」

「……それが神様の愛かよ。要らねえ世話でしかねえ」

「かもしれない。けれど、この世界は私の愛だ。美しきベアトリーチエを幸せにするための世界。それを彼女は理解しない。自分の都合のいい世界を拒み、自分を嫌い、全てを投げ打って、自分を殺し続

けた彼女には理解できない代物だ」

「神様ってのにたった一人の女の幸せも考えられねえんだな。喜劇つてのはテメエらみてえな独り善がりなものじゃねえんだよ。悲劇を作りすぎて喜劇を忘れちまったのか？」

まるで彼女が自分のものであると言わんばかりの挑発的で余裕な態度が鼻に着く。服装といい、髪といい、カスタマイズされた姿が気に入くわない。

細身の真つ白なマーメイドドレスが所有権を表しているよう。その姿に苛立つ。

嘲笑っているようだった。天使が人の手に届かないと言われているとしか思えなかった。

「そこまでいうなら、貴様がやればいい」

ドレスの裾が地面に擦れ、それは椅子を降りる。

ワントーン下がったおぞましく低い声が体の芯に響き渡った。

「……は？」

「本来、彼女は汝に記憶だけを送るつもりだった。どう賽が転ぶか教え、無敵の未来予知を与えることだけを目的としてこのカードを作った。けれど、そこまで言うなら仕方が無い」

「一体何の話を……」

「夢を経由して新たな端末キヤラクターに全てを与え、かの乙女を大団円へと導く。汝の説く最適解に力を与えると云っているのだ」

ゆったりとした長袖を揺らし近づくと、神は自身の唇を指でなぞる。

蝶が舞い、三角の輪が風車のようにゆったりと廻った。

「垣根帝督、汝に物語の全てを託す。異世界の言葉は痛むだろう、けれどこれが汝が望むもの。旧から創、一から二十、表から裏、常識から前提、平面の壁の向こう側を、汝に与えん」

突然、脳に荘厳な音が響く。脳を掻き塗り、掻き混ぜるおぞましい記憶の音に言葉にもならない吐き気がせり上がってくる。

知りたくもなかった現実フィクションが、無限とも言えるほど多く脳の裂け目に焼き付いた。

「唯一無二の主人公ヒーローに仕立て上げ、都合のいい神デウス・エクス・マキナとして汝らハッピーエンドを幸福のその先へと連れていく。神の役目を全うし、汝に救いの糸を垂らしてみせよう」

「なにを、ツが、ツツツは!!」

「いかなる運命も私のもの神の決定に逆らうことは赦されない」

痛みの中、寂しそうなしたり顔が視界に映る。

嵌められたと気がついた時にはもう遅い。

「美しき少年よ、神の言葉をあの可憐な乙女に伝え、幸福へと導きたまえ」

数え切れない蝶が体を覆う。息もままならない蝶の大群に押しつぶされながら、脳が軋む痛みに悶え、苦しんだ。

痛みと引き換えに神は新しい駒を手に入れ、俺は全てを手に入れた。

未来も過去も思いもなにもかも、全てを。

「さすれば天上の薔薇が汝に祝福を与えん」

瞳を閉じ、祈りを捧げる姿に流れ込んだ記憶が理解する。

閉じる眼に映る純白のドレスは、棺桶の中の乙女が着たものだ。

息を奪った蝶の大群から視界が開ける。痛みと奪われた酸素に大きく息を吸いながら柔らかいソファから勢いよく体を起こした。

「ッ、ハアッ、はッ……今のは、」

頭に響く知らない世界の事実に頭を抱えながら息を整える。

色の消えたカードが額から落ちると、ようやく目が覚めた。

そして覚めた視界に神様の姿がない。

金も、黒も、彼女を象徴する色が何一つなく、暗い部屋は静まり返っていた。

「バカ女……いいつもいつも困らせやがって……！」

早く迎えに行かなくてはいいけはいい使命感に駆られすぐに立ち上がるも、居場所が分からないとその場で止まる。

早まる気持ちを抑え、彼女が渡したストラップをつけていたことを思い出すと、自分以外の誰もいない静かな部屋で携帯を取り出そうとズボンのポケットに手を入れる。

携帯を取り出すと同時にポケットから何かが落ちた。

きらきらした音を立てて落ちたそれは金色のペンダント。剣を模したロザリオのようなそれは、大覇星祭のときに真っ赤に染った天羽から取り上げ、壊さなかつた唯一のもの。

「……Omnia 愛は万物を支配せん vincit Amor えん et ん されば我も愛に従う」

神の呟いたウエルギリウスの一節を唱え、ペンダントを拾う。輝きを失うことの無い美しい金色を彼女の代わりに胸元に付けると、もう片方のポケットからケースを取り出した。

甘い香りがするケースから一粒、美しい赤の結晶が転げ落ちる。

「甘過ぎだ、馬鹿」

甘い結晶を舌で転がし、噛み砕く。

軽やかに割れ、とろみのある柔らかい砂糖菓子は口腔の体温に溶かされて消えてしまう。

マザーグース曰く、女の子はお砂糖とスパイス、そして素敵なもので出来ている。

けれどあの少女はスパイスも素敵なものもない。

静かに、汚く、醜く、ただ愛する人を死の結末から救うため生きている彼女は甘い砂糖だけで出来ていた。

98話：幕引き

グリゴリとは天使の軍である。神に定められ、悍まじきリリスに唆された忌々しい塵の子を見守ることを義務付けられた見張りの天使たち。

その長はアザゼルという天使だった。七対十四の翼を持ち、天にも届く高い背を持っていた。

誇り高き天使、そんな彼らは人間たちの美しさに恋をしてしまう。神に背き人を口説き女を抱いた。子を成し、その子らは巨人となった。

彼らは人に全てを教えた。

戦、商売、道具、学問、魔術。

天上の秘密を教えてしまった。

人を守る武器の作り方。

愛する人に振り向いてもらう化粧の仕方。

アザゼルはそれらの知恵を恋した人間に与えた。

だが神はそれを許さない。

戦と淫売で穢れた地上を神の水で一掃し、ひとつの箱舟だけを残し

世界を終わらせた。

グリゴリは全て地獄^{デイトの市}へ連れていかれ、永遠の業火に耐えなければならなくなった。

そしてアザゼルはその中でただ一人、地獄にも行けず、天国にも戻れず、地上の洞穴の中、たった独り、岩に押しつぶされ永遠の痛みの中悶え苦しむことを罰とされた。

自らをアザゼルと呼んだ女の最後は、想像に容易い。

理解する前に痛みが一方通行^{アクセラレータ}の体を襲う。反射を許さない重い打

撃が腹を強く打ち、いとも簡単に一方通行の体は浮き上がり、壁へ衝突した。

重い衝撃が一方通行の細い胴に走ると、胃液が食道を逆流して口から零れ落ちる。苦い口内にえずいて吐き出すと、天羽彗糸はとても嬉しそうに笑った。

「あらあゝ?!?!もう終わりかなあゝ?!?!第一位もあんまり大したことはないねえゝ!?!」

「ッ、ゴリラ女……」

十四の翼を広げ、金髪の少女は嘲笑う。ゆつたりと頭上で回る丸い天使の輪に照らされた彼女は、一方通行には悪魔にしか見えなかった。

「女に力勝負で負けるとは情けねえなあ、もやし男」

「それはテメエもじゃねエか?」

「あ……?ッ」

能力で後ろに距離を取る一方通行を、洗脳された何十人も的一般人に囲まれて見つめる天羽彗糸の鼻から赤い液体がぼたりと流れ落ちる。

ピンセットをつけた右腕で拭い、鬨めつ面を見せる彼女を笑い飛ばす。強がりな女の戯言など、一方通行の怒りにすら触れない。

「ハッ、脳処理を超えるスピードで殴るつてことはテメエの脳も負荷を負う。第六位如きのちっせエ脳味噌じゃ、その演算すらままならなかったようだな、馬鹿女」

「いいんだよ、これで。これはファンサービスだ。テメエが何をしたってあたしに勝てないと伝えるためのプレゼンテーション、お前が解ればそこで終いだ」

もう一度、胸元にしまったケースを取り出して赤い結晶を飲み込んで彼女は吐き捨てる。

飲み込んだ結晶のせいかな、光が強まった頭上の輪と瞳が妖しく一方通行を睨んだ。

「全ての手段を用いてテメエを地獄の環に連れていく!ウエルギリウスわの役目を果たす!そのための衣装、そのための舞台!この正義のた

めにテメエを殺す！」

「ガはアツツ!! ツツウア！」

「これで終わりだなんて思うなよ！」

苛立ちが増すと、感情をかき消すように三つ目の結晶を噛み砕いて叫ぶ。血潮の通った翼を大きく開き、白い物質でコーティングされた羽を広範囲に渡り貫き落とす。

鋭いナイフのような破壊力を持った重い羽が雨のように彼女から飛び出し、人を襲った。

「……白衣の天使様が一般人巻き込んて成す悪は気持ち良いかよ淫乱売女」

「あたしの能力知ってて言ってるの？」

「能力の話じゃねエよ。美学が足りねエつつつてんだ」

軌道を反転された白い羽は地面に突き刺さる。そのまま天使にぶつけるのはリスクが高い。

けれど、彼の体を貫くことのなかった無差別の広範囲攻撃は、彼女の操る一般人も貫いて血溜まりを広げる。

結局一方通行が反転しようがしまいが一般人が血を流すのは決定づけられていた。

まさに地獄絵図。

その光景に怒りが募るのは一方通行には当たり前だった。

「つぶは！美学？美学つつた??なあ、美学って美しさを哲学として探求するれつきとした学問なんだけど、分かってて使ってるの？美大志望かよ」

「あ？ナニ？例えも真面目に受け取るクソ真面目な優等生キャラだったかよ、テメエ」

「だあかあらあ!!テメエは、悪なんでもものに美しさを見出してそれを探究してるのかって言ってるんだよ愚か者」

血溜まりは異常なほど早く干からび、怪我をした人たちは彼女の笑い声を聞いて立ち上がる。みるみるうちに全ての傷が塞がっていく人々は何事もなかったかのように、ただ一人の天使のために彼らは意識もなく群れを成す。

不死身の軍隊と呼ぶにふさわしかった。

「いいか？思想に美しさなんてない。泥濘でいねいの中でひたすら模索し、もがき苦しむ、それは悪も正義も同じ。お前はただの主張に美しさを感じるのか、レイシスト」

「……ツチ、頭が固い奴はこれだから嫌いなんだよ」

「そもそも、お前の言う美学は都合のいい言い訳だ。そこに美しさなどあるまい。他人を巻き込まなければ、部外者を傷つけなければ、そこまでしなければ自分はまだ綺麗だと、あの子に許されると、そんな言い訳をするための都合のいい線引き。お前の箱庭が美しければ、外の汚物などどうでもいいんだろ？」

凜として立つ天使は手に溢れるほど多くの結晶を取り出し、カラになったケースを投げ捨て小さな背の主人公を見下す。ヒールであげた22cmの身長差が恐怖を煽る。

残った全ての結晶を強引に飲み込んで舌舐めずりした彼女は何か恐ろしい怪物としか映らなかった。

「嫌いだよ、お前が。神を彷彿とさせるその考え方が大っ嫌いだ」

「ッ！」

「アナタを殺す。たとえそれが間違이었다としても」

瓦礫を踏み潰し、一方通行を見る赤と緑の荘厳な瞳を歪める。飛べない天使は大きく距離をとって手をあげた。

軍隊を指揮する右手に人々は黙って整列をなし、主人公と悪役は直線上で対峙する。

「滝壺理后を無力化して、後はテメエだけなんだ。テメエさえ死ねば障害はもうないんだ！だからほら、死んでくれよ！愛しい彼に幸ハッピーエンドせを見せてあげたいんだ！だからお願いっ！あたしの愛の礎になってくれよ最強！」

「テメエに酔ってンじゃねエぞ、イカレ女！」

「それはテメエだろ！」

叫び声に白い光が空を切り裂く。

曖昧に固定された原子が柱となって強大な破壊力とともに放出された。

しかし一方通行アクセラレータへ一直線に伸びた光線は方向ベクトルを操られ、建物にぶつかり瓦礫を増やす。

熱量を反射しても不死の女を殺すことはできない。

もしかしたらこの中の一般人を盾にされるかもしれない。

様々な考えが巡り、いまだに決定打を打ち込むことができなかった。

「安寧を貪れると思うなよ第一位！あたしがいればテメエなんぞ簡単に量産できるんだ！それがぼくの価値なんだ！テメエの代替品スベアくらい造作もない！助けなんて来ないんだ！」

鼻からも、口からも血を吐き出し、無我夢中で乙女は叫ぶ。熱と光を撒き散らし、支離滅裂な言葉を吐き出して彼女は崩れた足場に強く立っていた。

彼女の目にはたった一つの愛しか見えていない。

結晶の力で沸き上がる血潮に、まともな判断は出来なかった。

「それがあたしの能力！支配者は人権も、人格も、人生も、何もかも無視して体の全てを支配する！テメエが死んだってあたしがいればほかのモブを主人公に仕立て直せる！だから、その役目を寄越せ！テメエがいなくても代替品で世界物語は回るんだよ！」

「なアにワケ分かんねエこと言ってるんだドブス。キマリすぎでとうとう頭イカれたか？」

「イカれてんのはお前だろ？ありもしない美学に取り憑かれ、たった一週間と二日しか見てない暗部の人間をさも分かりきったかのように上から目線で御大層な言葉を並べるなんて、ヒーローのくせに悲劇のヒロイン気取りかよ！」

息を荒らげ、フィクションと現実も入り混じって光線を放つ。

圧倒的な熱量が場を熱する。想いの熱が全てを溶かし尽くし、アスファルトはめくり上がり地面が抉れた。

「いい加減、死にてエよオだな！」

「ただの悪役だったくせに、ちよっと人気が出たからって正義のヒーローにシフトチェンジしたお気に入りが！ありもしなかった心を捏造されて、過去も未来も設定もない薄っぺらいキャラクターが！この

人間様に勝てると思うなよ！」

「吠えてンじゃねエよ、クソ豚!!!」

咆哮がぶつかり、衝撃が辺りを包む。空高く反射された白い光に惑わされ、天使の目線は地面から天へと向かう。

その一瞬の隙だった。

僅かな揺れに、地面が波のように押し寄せる。コンクリートが裂け、変形していく地面に高いヒールがもつれ、体が無防備に晒される。

あつという間に、地面に飲み込まれた。

飲み込んだ大量の化学物質のせいでまともに演算ができなくなつていく彼女には、一方通行の感情の波を受け止めきれない。

「近距離の格闘戦やら兵士を集めることに關してはテメエの方が上手だ、そこは認めてやる。けどそれはテメエが弱点から気をそらせるためのただの悪知恵だ。侮辱で思考を乗っ取つて、実際の有効手段を忘れさせる姑息な手」

無様にも美しい金髪を汚し、天羽彗系はビルとアスファルトの波の間に挟まれる。

ベクトルが捻じ曲げられ圧力のかかったアスファルトがトーストに挟まれたバターのように灰色の壁に柔らかい体を押し潰し、力を削ぐ。

「不死身には放置プレイがお似合いってなア！お説教がなければテメエの言うくんだりないプライドのためにこのまま拳で殴りあつただろうよ。自分で自分の首絞めて、なア、今どんな気分よ？」

「ああ”ギツ”

「まア、テメエみてえなクソ女の考えなんて知りたくもねえがな」

「…………ふ、ははは…あっひゃ、ははは!!!」

プレス機のように押し潰すアスファルトのざりざりとした凹凸が体の肉を強く抉り、嫌な音を立てて腕の骨が割れる。

そして目の前で右腕が引き千切れた。

笑い声と共に強まっていく圧に右腕が引き千切られ、ぼたぼたと垂れる赤黒い液体が地面に模様をつけていく。

おぞましい光景だった。

「ア?とうとうネジが外れたか?」

「なあ、なんで最初にテメエの脳天に釘をぶち込まなかったと思う? 能天気と同僚と話し込むお前的大脑に釘を移動させたってよかったんだ。本質を見抜けなかった時点でテメエの負けなんだよ」

片腕のなくなった彼女は、自分の羽毛に顔をうずめながらくつくつと笑う。馬鹿にするかのように、再生しない腕の断面を見せびらかして大きな瞳を歪めた。

「テメエ……」

「お願い、こんな舞台、早く降りたいんだ」

焦点の定まっていない目に彼女の生命が終わりかけていることに気がつく。

いわゆるオーバードーズだった。

過剰摂取した結晶は演算能力を奪い、神への道を妨げる。致死量まで飲み込んだ科学技術の結晶は人の体を蝕み、そして神経を引っ掻き回す。

息を荒く吐き出して泣き叫ぶことしかできない。

内臓が圧迫されていく苦痛に、奪われた演算能力は痛み止めを作り出す事はなかった。

「殺してくれよ一方通行。アクセラレータ愛しい彼と同じ末路をあたしに与えてくれ。それが人形の幸せなのだから」

「……言われなくても殺してやるよ」

最後に見せた顔はあの夏の日に見た優しい決意に満ちた恐ろしい笑顔だった。

引き金に手をかけ、訴えるような悲惨な緑と赤の瞳に銃口を合わせる。昔見せた優しい面影の記憶に躊躇することはなかった。

「待っじゃんよ一方通行!」

しかしこの場にいる誰とも違う女の声に手が強張る。優しい女の声、その人を一方通行は知っていた。

黄泉川愛穂。

彼の保護者の一人だった。

「天羽、お前もなんでこんなことを……!」

「……あーあ、興醒め。最ッ低」

そして哀れな天使様も女を知っていた。ただの教師サブキャラクター、眼中にすらない。

「一方通行、天羽を離せ。そいつを殺させはしない」
アクセラレータ

「……俺は悪党だ」

「なら私が止める」

「無理だよ、せんせ」

警備員のトラックから現れた黄泉川に軽く舌打ちをして圧力のなくなつた隙間から這い出ると、力なく壁に体を預ける。

「アホみてえな語尾で本質を見ようとしないうる教職課程も通つてなさそうな薄っぺらい偽物キャラクターに何が出来る？」

「ッ、動いたら傷が——！」

「これは革命だ。闇を見る子供たちを救うための革命。二度と常識なんかで人が死なないため、悲劇を繰り返さないための美しき反逆だ。何時いかなる時も革命とは忌み嫌われる、けれどそれは未来で大きな価値となるとなぜ分からない？」

ボロボロの体と思考がままらない体を引き摺って、黄泉川のもとへ汚い言葉を漏らしながら向かう。

堕ちた天使の姿に息を飲む。

しかしその息は止まり、空気を飲むことはできなくなってしまう。

緑のジャージ姿の教師に最後の力を振り絞り、リモコンをふたたび手にとってボタンを押す。

息を奪うことなら、かろうじて可能だった。

そのまま崩れた女の腹をピンヒールでえぐり、半狂乱に天羽は叫ぶ。全てを投げ打つ思いが、言葉が、彼女の情動を増幅させ、後戻りはできなかつた。

「のうのうと生きる犬が。目の前の一人を救えた程度で後ろにいる何万もの学生を見殺しにするのか！」

「ツツが、ギアツツ」

「やめッ」

「テメエも同じだよ、打ち止めラストオーダーを救いたいならその土台を固めればい

いのに、目先の幸福しか見据えていない。ガキだからそこまでしか考えらんねえんだよ。箱庭の外にゴミを押し付けて、最後は箱ごと崩壊してゴミがなだれ込むのも分からずにお片付けしたフリをしてるただのガキだよ」

「――↓」
天羽の歪んだ言葉に、一方通行の脳の中で得体の知れない何かが発ける。

右脳と左脳を引き裂くような痛みの中から吹き出た力が膨れ上がり、大きな痛みを鼓動に乗って突き刺していく。

吹き出た力は黒い竜巻に似た翼となり、天まで伸びる。吹き荒れる風の中心で自我を失った一方通行に、もう言葉は届かない。

胃液を吐き出す黄泉川を守るように立ち塞がった彼の目は痛々しいほど充血し、喉から出るのは耳障りの悪い人ならざる言葉の羅列。

黒い翼の一つが黄泉川から離れさせるように天羽の腹にぶつかり、そばのビルに大きな体を投げ飛ばす。

口の中の鉄の味に気持ち悪さを覚えながらも、彼女は悲鳴一つもあげない。

歩道橋が崩れ、車を持ち上げる強い力が今まさに天羽彗糸を殺そうと牙を剥く。

「――y j r p 悪 q w」

「……やればできるじゃん、主人公様」

影が差す。体を覆う大きな何か、太陽を隠して頭上に浮かぶ。

それは警備員アンチスキルの大型トラックだった。

しかしおぞましい光景と裏腹に、彼女は目尻を下げた。降りかかる大きな鉄の塊に、役者は微笑む。

彼女は最後まで人形であり続けた。厄役を受け取った流し雛コッペリアとして、16歳の体で全てを受け止めることが彼女の覚悟であり願い。

アザゼルと同じ。全ての罪を背負い、ただ一人暗い穴の底で永久の眠りにつく。

それが彼女の幸せだった。

「ッあ。」

呆気なくあの日と同じように体はトラックの下敷きとなり、白い爆発が巻き起こる。

トラックが落ちたゆえの爆発か自爆か分からないほど強烈で、突然な爆発だった。

繭のように巻き上がる風が視界を奪い、この場にいる誰もが何が起こっていたのか分からない。

ただ一つ言えるのは、天羽彗糸という少女は神に愛された不運な少女であることだった。

「おい」

風が止む。そして少年の声が響く。

「何ムカついてんだ、チンピラ」

美しい少年が煙の奥、血に濡れた天使を抱きかかえていた。爆発のせいか、両脚も右腕もなくした小さな天使の胴体を優しく抱えて彼は鋭く一方通行の赤い瞳を睨む。

彼の首元で金色のペンダントが淡い光で輝いていた。

英雄が現れる。たった一人の愚かな少女を救うため、彼は主人公となった。

99話：彗星夢死

腕で支える柔らかい肉の甘い香りと血の匂いが混じる。

翼がもげ、左腕以外の四肢を失った天羽彗糸はいつもよりずっと軽かった。

「馬鹿女。いっつも面倒ばっかかけやがって、いい加減迷惑なんだよ」
長い金髪を掬い、口を閉ざす彼女の体を持ち上げる。

血とアスファルトの破片で汚れ、破れた服から見える肌を隠すように両腕で小さな胴体を抱き締めた。

「しかも俺が寝てる間に浮気とは、感心しねえな」

「nks女krs」

吹き荒ぶ風の中心地、鼓膜を突き刺すような言葉によく似た雑音が響く。

充血した両目で獣のように唸るそれは、背中なら噴出する竜巻に似た黒い翼で風を起こし、翼の先を勢いよく振り上げた。

「おいおい、あげるわけねえだろカス。胸もデカくて天使みてえない女なのは認めるが、テメエみてえなチンピラにやるかよバーカ」

「tszt殺cryn悪wm」

天羽目掛けて放たれた攻撃を容易くかわし、強く抱き締めたまま空を飛ぶ。

白髪の薄い体の人間から聞こえる声は人には理解できないものだった。

人の言葉が理解できない暴走状態の第一位に舌打ちを響かせ、信号機の上に降り立つ。

一刻を争うというのに風が吹き荒れている。アクセラレーター一方通行を睨みつけながら血が流れ出る赤い四肢の断面を未元物質で塞ぐが、それでも彼女の命に余裕はない。

病院に行かなくては。柔らかい体が冷えていくのがわかる。

「……どうしたもんか」

「krs死wmtsgn」

台風の中だって自由に飛べ、超電磁砲だって耐えるこの翼なら片腕

と両脚のない小さな体を守りながら病院へ行くことくらいなんてことない。

けれど、追いかけてくる可能性がある暴走状態の一方通行アクセラレータが飛行の邪魔をする。

この野郎を暴走状態にさせたまま放置しておけば、後を追って病院まで混乱を連れてくる可能性がある。

腕の中の彼女と、どんな怪我人でも治す外科医が巻き込まれる可能性があるので、その可能性を叩き潰す必要性があった。

「たとえばそれが無理難題だとしても、やる他なかった。」

「まあいい、なら俺が台本をなぞればいいだけだ」

羽を伸ばし、飛ぶ。

小説の中の自分と同じように三対六枚の翼を大きく広げ、太陽を背に空を舞った。

「ここは俺の世界だ。テメエはお呼びじゃねえんだよ」

回折を応用すれば、太陽光すら害ある光線へと変貌できる。暖かい光が痛みに変わり、一方通行アクセラレータに突き刺さると咆哮に似た悲鳴を喚き散らす。

攻撃が効いた。

教えてもらった未来フイクシヨとは少し違う現状に訝しむが、今回はまだまだ未元物質ダイクマターを解析してないことを思い出すと腑に落ちる。

好都合でしかない。煙をあげる服を爪が食い込むほど強く掴んで言葉にならない叫びをあげる一方通行アクセラレータの姿に再び翼を広げた。

「のたうち回ってる虚弱体質」

新しく未元物質ダイクマターを作り出し、羽のような形で一方通行アクセラレータが立つ地面へ突き刺す。

「酸素がなきや死ぬのなら酸素を別のものに入れ替えればいい。お前が風で掻き混ぜれば混ぜるほど、酸素は未元物質と反応を起こし、有毒になる」

「j k s m b 息 j a g e ……!」

「俺には酸素ボンベがいるからいいけど。そのまま惨たらしく死んでろ、一流の悪党サンよ」

大事に抱き締めた四肢のない体、当てつけのようにその唇から酸素を吸い上げて暴走する一方通行アクセラレータを見下し距離をとる。

天羽の最後の力か通行人は誰一人おらず、この場には死にかけの女ひとりど、いがみ合う男二人だけ。窒息死に追い込むには絶好のチャンスだった。

「反応がねえのもつまんねえな。なあ、天羽、こいつをどうして欲しい？」

静かに息が薄くなる。このまま死ぬのか、一方通行アクセラレータは嗚咽の一つすら漏らさずその場で喉を抑えてうづくまる。

0を1に変えられない一方通行アクセラレータから酸素というものを奪うのは、夏の日アキに本人が言った証言通り正解だったようだ。

「この世界も、全部なくなっちまえばいいのにな。そしたら、お前は幸せになれるか？」

徐々に息苦しくなる胸に破滅願望を覚えてしまう。

この世界は偽物フィクション。

運命は決まっている。それが天羽彗糸という異分子によって壊れた。

上条当麻、テレスティーナ、ミサカ9982号、杠林檎、木原相似、駒場利得、アイテム、浜面仕上、弓箭獵虎、藍花悦。

全ての前提が、結末が、何もかもが変わった。

それは彼女の願いから、想いから、正義から、愛から、エゴからくる些細で大きな違い。

生きることこそ幸せだと、前に進めることこそ幸福だと。

誰かのための行いこそ正義だと、幸せにするための行いこそ正義だと。

歪んだ女の価値観から生まれた救済。

「勝手に幸せになって、不幸な俺を置いてくのか？」

けれど彼女の幸せは違かった。自分を柵に上げ、特別だと信じて疑わない狂信メシアコンプレックス者の幸せとは、自分を殺すことだった。

誰かのために生きて、誰かのために死んで、誰かに人生を喰ってほしいと彼女は切に願う。

それは誰にも褒められず、誰にも相手にされず、望まれて生まれず、役割を欲した可愛そうな長女の成れの果て。

勘違いした役割を貫徹せず、死をもって達成した優越感が残る彼女が見出した唯一でできる救済。

唯一見てくれた神様に恩を返すため、仇を返すため、彼女は俺のために死のうとした。

それが彼女にとっての幸せだから。他人とは違う幸せを自分だけが味わえると思っていたから。

劣っている自分を特別に感じる異常な精神ゆえの拙く、不幸な幸せだった。

「自己中女、テメエなんか幸せ死なせてにしてやんねえから、ずっと俺の隣で生きる不幸を嘆いてろ、バーカ」

そんな自分本位で誰も幸せにならない想いなど、到底許せない。柄でもない感情を強く作らせるほど一直線でブレイキの効かない

愛は恐ろしく高い中毒性があった。

人を散々惑わせて、心の中に住み着いて、幸福を説いて、愛をくれて、救いを教えて、温かい肌で頭を撫でておいて、たった四ヶ月で離れるなんてふざけている。

自分がこの能力武器で人が救えると口説いた無責任な女に、最後まで責任を取ってもらわなくては割に合わない。

そんな最期で別れるくらいなら、永遠に不幸でいてほしい。

「だからテメエは俺のせいで死んでくれ。この女の思い通りにならなかったらならな」

すでに有毒に置き換わり役目を果たした未元物質ダークマターは綺麗に溶解消え、息苦しい空気の中には一方通行アクセラレータしか残っていない。

苦しみながら喉元を抑えるそれを見下して地面へと降り立つ。覇気を無くしたその周りに浄化作用を施した未元物質ダークマターをばら撒いて、自分の手で殺しに行く。

ゆっくりと息を戻していく一方通行アクセラレータの憎悪に満ちた顔が腹立たしい。

物語と違うと示したかった。

惨たらしく死ぬ『垣根帝督』じゃないと証明したかった。

「待って」

しかし物語は俺を置いて進む。

「最後の希望……あ？」

「止めに来た」

「林檎……」

違う役者を連れて。

「一方通行にしていること、やめてあげて」

「……いいだろ、べつに。こいつとお前さえ生きていれば、他の奴らなんてどうでもいい」

「天羽は、そう思ってる？」

少しずつ荒れていく風に黒髪のショートボブがなびく。

再び覚醒していく一方通行の前、無防備に立つ杠林檎と打ち止めの
「天羽のこと、どうするのってミサカはミサカはしっかり話しかけて
みる」

「……生かすんだよ、他でもない俺の手で」

「なら、いるべき所はここ？」

少女たちのはつきりとした言葉に抱きかかえた体を強く抱き締め
る。

言われなくたって分かっている。

自分では一方通行を殺すことが出来ないことを。

こんなことをしていたら、腕の中のいけ好かない女が死んでしまう
ことを。

悪役か大切な人か。

ここでどちらを選択するかで、物語通りの自分になるか、天羽の望
んだ自分になるかが変わる。

憎悪ゆえの諦めか、愛情ゆえの救いか。

仇を打つか、恩を返すか。

物語の垣根帝督ならば前者を選ぶかもしれない。

もう生きられないと、可愛そうな女が願いを叶えて死ぬことをただ

呆然と受け入れて、この街に撃鉄を起こすだろう。

けれどここにいる垣根帝督は、目の前の馬鹿のせいで物語の可能性を無くした人間だ。

口煩く正義を唱えた彼女の言葉が脳を廻る。

誰かを救えることを知っている。

そしてそれが、とても大切な事だということも。

「言われなくなつて、分かつてる」

拗ねた子供のような台詞を吐いて飛び立つ。

アクセラレータ一方通行も、直接交渉権も、学園都市も、どうだっていい。

決められた未来の行く末を知ってしまったら、もう興味をなくしてしまつた。

ビルの合間を縫うように通り抜け、軽い体を運ぶ。

見慣れた病院の裏口、急患受付に降り立つと待ち侘びたように一人の男が現れた。

「待っていたよ」

優しい目をしたカエル顔の医者が呆れたようにため息を吐く。

幸運な少女は、死ぬ事が許されなかった。

死とは永遠の安息と言われる。

カトリックにおいて死とは別れでなく安らぎ。神の元へ行き、復活を待つ通過点でしかないからだ。

それは正しいのかもしれない。

全てを成し遂げ、全てを終わらせた後、神は七日目におやすみになられた。

ならば人も、全てを得た後休むのが道理だろう。

誰も望まない生を、ようやく誰かのために捨てることができた。人形として、全てを請け負った。

汚い恋にならぬまま、清らかで美しい愛で全てを終わらせた。

だから役目を終わらせたこの体も、安息を与えられた。

あたしは不幸じゃない。

全てを終わらせ、成し遂げた故の死は幸福であるに決まっている。

眼前に広がる暗闇も、願い通り。

体を蝕む痛みも、目論んだ通り。

天へ召されることすら狙い通り。

ただ、この寂しさは想定外だった。

それでも望んだ暗闇に瞼を閉じる。

最後、彼の顔を思い出しながら死に全てを預けた。

冷たい世界を揺蕩う体に優しい誰かの囁きが響いた。

暗闇に沈んだはずの意識が何かを認識する。

それは誰かの手。骨ばった男の手。長さは一センチ程度しか変わらないのに、全く違う横幅のせいで大きく見えるだけの少年の手。

握れと言わんばかりにあたしに差し出された誰かの掌はどこか見覚えのあるものだった。

握ってはいけない。体が強く警告するが、何故かそれに反して自分の右手は恐る恐るその手を握ろうと前に進んだ。

ダメだと強く思っても、もう遅い。冷たい世界で熱を帯びたその手に抗えない。

触れるか触れないか、宙をさま迷っていた手はその手に強引に掴まれ、凄まじい力で前へと引っ張られた。

空へ降る感覚。

浮遊感と風を感じとり、あるはずも無い瞼を開いた。

そう、開いたのだ。

優しいクーラーの暖房が頬を撫でる。暖かい毛布の柔らかい手触りに、現実が押し寄せた。

「……………え？」

100話：喪失

浮遊した意識を焼く強烈な眩しい光に目を見開く。

ぼんやりとした瞳にうつった蛍光灯の白い光が目染みた。

「……………」

目の前に広がるのは暗い天井。よく効いた暖房の風が頬を撫でる。見慣れない広い景色に掠れた声は響かず、静かだった。

一瞬、意味が分からなかった。

体を襲った圧倒的な痛みの中、確かにこの体は朽ちたはず。だというのに目は開き、口は息を吐き、耳には静かな暖房の音が微かに聞こえ、体を覆う暖かいブランケットの感触が分かり、心音が体を駆ける。どう考えてもおかしい。

死んでいるはずなのに、まるで体は生きているかのようなだった。

「……は……ッ、体！」

寝惚けていた脳が掠れた声に驚き飛び起きる。

元々の女らしい高くも低くもない普通の声ではない、か弱い少女の声。

嫌な予感で脳が満たされる。

彼のために死んだのに、彼のために悪役になったのに。

想定外の光景に目を見開く。

また全てを変えるやり直しが始まるのだろうか、また未練を償う人生が始まるのだろうか、不安が胸を襲う。

不安を抱き、体を感じる違和感を勘違いだと願いながらベッドから体を起こした。

「あれ？」

明るい部屋の中、ベッドの上、体を見た。フリース素材の薄いブランケットが自然と起こした上半身から落ち、鏡を見なくても自分の体はつきりと見える。

服を着ていない小さな体だった。小さな手、小さな足、控えめな胸、小さな頭。

そして、異常なほど白く色の抜けた体と長い髪。

自分の体と呼ぶには程遠い貧相な体に喉が干上がり、言葉が詰まる。

「あたし、な……？」

ここはどこで、なぜあたしは生きているのか。なぜ小さくなっているのか。

空気が上手に吸えず、息が上がる。

ただただ恐ろしく、訳が分からず泣いてしまいそうだった。

ちゃんと死んだのに。彼の代わりに悪^役を成し遂げたのに。

神はまだ劇を要求するのか。

そう思った瞬間にはベッドから飛び降りていた。

しかし思うように動かない体はバランスを崩し、派手な音を立ててその場に転倒。全身を駆け巡る痛みに耐えながら力の入らない腕で上半身を起こした。

「ッ、あれ……？体、が……」

右腕と両足が動かない。唯一正常に動く左腕も、利き手ではないため少し動きがいびつだ。

鉛のように体が重い。

体が繋がっていない、そうとしか思えないようなぶら下がった四肢。麻薬などの副作用で手足の感覚が消え失せるなどはありません、けれど高揚感や倦怠感はなく、その線は考えづらい。

どう考えてもおかしい体に脳の処理は追いつかなかった。

「研究所……？なんで、あたし、」

動かなくても神経は通っており、ぶつけた痛みも、床の冷たさも感じられる。

これは夢ではない。認めたくない現実に目眩がする。

病院の地下、自分のためと貰った研究室の中で静かに辺りを見渡す。

まるでアリスになったようだった。全てが大きくなり、知っている場所が全く違う場所に感じるこの感覚。

孤独な夢の中だったらどれほどよかったか。

夢の様な現実で、部屋のドアが開く。

こつこつと靴音を鳴らし、部屋に入った誰かの吐息が耳に入る。

服も着ないまま地面に倒れたこの状況に冷や汗が止まらない。ど
の世界線にいるかも分からない今、その靴音は鳴り響く警告音に近
かった。

「だ、だれ？」

「……起きたのか、よかった」

力のない左腕で必死に起こした体の前に、背の高い少年が立つ。
キヤラメル色の茶髪に、切れ長の目、そして見たことも無い安堵した
優しい顔。

好きな人の眩しい姿に視界に星が散る。

着る順番が常識外れなホスト服を来た垣根帝督がそこに立ってい
た。

「つて、随分とまた煽情的な格好してんな、誘ってんの？」

「……自分で脱いだわけじゃない」

「分かってるよ、冗談だ」

心底安堵したような顔で笑うと、大きな手で胸と太ももを覆い、お
人形のように軽々と裸の体を持ち上げて先程まで横たわっていた簡
易ベッドに下ろす。

いつもと違う持ち方に、いつもと違う視界。羞恥心や嫌悪感、全て
がぐるぐると混ざって感情が脳を登り詰めた。

「触らないで、なにをするのッ」

「何って地べたに寝たままだと汚いだろ？足動かねえんだから、大人
しくしとけ」

この間のようにジャケットを羽織らせ、彼は優しく頭を撫でる。彼
の体温がまだ残る服と、頭を撫でる手に絆されそうになりながらも混
乱は続く。

彼の首で光る無くしていたはずのダガーのペンダントが揺れ、目を
奪った。

「自分で歩け、りゅっ？」

「何言ってるんだ、できるわけねーだろ？」

そのまばゆい金色に能力のことを思い出す。

腕が動かないなら信号を通せばいい、足が腐っているのなら作り直せばいい。

なぜ忘れていたのか、演算を始めた。

しかし想いは届かない。

何度試みても何かに障害され動かなかった。

演算に間違いはないはず、けれどどうやっても腕も足も動かない。

唯一無二に仕立ててくれた神の力が消え失せた。

あたしがあたしたるための武器。この世界で唯一許された神の力。

この体に『幸せ』を許した尊ぶべき恐ろしい力。

それが跡形もなく失われていた。

いや、少し違う。

奪われていた。目の前の男に。

もうすでに、この体は演算によって生かされていたとようやく気がつく。

微かに感じる人為的な心音、それは確かに神の力によって作られている。ただ、その管理はあたしの手から離れ、別の何かに乗っ取られていた。

「なっ、これ、こっ、これは、なんっ、なんで?の、能力がっ、」

「予想通り混乱してんな、落ち着けよ」

「ツツ???ア、やめ、ツ!」

「どうじ!たんだよ、随分ツンツンしてんな?」

混乱する最中、男物のフルーティーな香水の甘い香りが弾ける。暖かく、硬い筋肉が体を抱きしめ、強く肩を捕まえた。

突然のことに言葉にならない悲鳴が溢れると、ふた回り以上は大きい彼の体に抱き潰されそうになるほど強く締め付けられる。

「やめて、わかんない、わかんないよ、何が起こって、死んだはずじゃ——」

「俺が救ったんだよ」

大切な宝物を扱うかの様に強く、そして優しく抱きしめられる。

その意図が分からなくて恐ろしい。

「ストラップ、つけてただろ?盗聴やらハッキングできる優れものだ

が、あれの本質は他人のA I M拡散力場を解析して能力を解明することにある」

「それが……？」

「大切な情報が詰まったものだ、他人の手に渡るくらいなら木っ端微塵に相手ごと吹き飛ばす必要がある。そっからは分かるな？」

「自爆装置……？」

「そのおかげでお前は今生きてるんだよ。ま、足はなくなっちゃったが」

優しく簡易ベッドの上から抱き上げて、いつも作業をする事務用の回転椅子に座らせる。彼の膝の上に無理やり座らせられているのに、動かない両脚と右腕、そして筋力が低下した左腕では抵抗も意味をなさない。

子供をあやす様な優しい声も相まって、とても居心地の悪い空間だった。

「生き、生きてる？なら、この体は……？」

「ああ、びっくりしたよな？助けたのはいいが、足も腕もないし、内臓もぐちゃぐちゃ。お前の体は特殊で治療に長い時間がかかるから代替の体を用意したんだ」

「代替、の？」

「^{データクマター}未元物質で作った新しい体だ、だからほら、お人形さんみたいに真っ白で可愛いだろ？」

彼の言葉一つ一つが胸に突き刺さる。恋人を愛でる様な、人形で遊ぶ様な柔らかな手つきで顔を支え、くるくると椅子を回して開いていたロッカーの扉に正面を向いた。

ロッカーの扉についた縦長の鏡。

そこを見ると言わんばかりに大きな男の両手が頬を掴む。

そこにいたのは眩しい緑眼の少女だった。

齡十の小さな子供。十歳の平均身長よりだいぶ小さく柔らかい見覚えのある少女。

昔の自分の姿に言葉が消し飛び、吐き気が一気に沸き起こる。

それは子供になったからでも、体を触られているからでもない、た

だ鏡の前の異様な姿に感じたこともないおぞましさを覚える。

可愛くもない顔も、幼いくせに肉のついた体も、太ももまで伸びた長い髪も、何もかもが蚕の様に白かった。

その姿が彼の言葉を事実^にさせる。

この体は、彼の言葉通り代替品に入れ替えられてしまっていた。

それを踏まえれば、能力が使えないのも、体が自由に動かせないのも、どこか腑に落ちる。

アイデンティティの喪失。

失ってしまった大人の体と、入れ替わった子供の体に絶望しか感じられない。

「ツツ!!あ、あ、あああ!っおえ、おうああ……っ」

「よかったな、低身長貧乳ロリ念願のヒロインになれて」

「違、うッ、おっえ……っうぐ……」

あまりの驚きと恐怖に胃の奥から粘ついた液を吐き出す。零れた涙は透明でも、吐き出したものは女の体液とは思えないほど白かった。

「吐き出すほど嬉しかったのか?」

「違う、違う……ヒロインじゃない、それは別の誰かの役目で、」

「認めるよ、俺たちは運命の糸で繋がってんだ」

「意味、分かんないっ、変だよ、そんなこと、ありえるはずが——」

「俺がフィクションのキャラクターだからか?」

吐いたことを気にも止めず、汚れた体を後ろから抱きしめる。優しい抱擁とは違う冷たい声に体が強張った。

核心をつく言葉に言葉が詰まる。

「っ……」

「主人公でも、キャラクターでもないから、愛されない?」

恐ろしい。

彼の美しい顔を見ようとは思えなかった。

「聞いた、神様から、全部。ずっと、ずっと俺に嘘ついてきたんだな」

「……これが、その罰だと言うの?世界の真理を教えなかったことへの腹いせ?」

「いいや、違う。これは救済だ。可愛そうなお前のためにこの俺が用意した新しい人生なんだよ」

冷たい声が温かみのあるものへ変わる。急激な機嫌の上昇に必要以上に身を構えてしまうのは、人間としての防衛本能からだった。

「救済？この姿が？」

「お前が言っただら？生きることこそ救済だと」

「……何が目的？あたしに何して欲しいの？」

「見返りなんていらねえよ。俺はただ好きな女に生きていて欲しいだけだ」

彼の性格からは考えられない言葉に困惑も忘れて目を吊り上げる。

そんな優しい言葉を彼が言うわけがない。そんな設定じゃない。なんとも言えない違和感に羽織ったジャケットを強く握った。

「嘘つき。垣根くんがそんな事言うはず——」

「帝督」

「……んへ？」

ジャケットを握った手に大きな手が重なる。突然の自己紹介に驚き、開いた口からは言葉も出なかった。

「呼び方。二人とも垣根だと、他のやつが混乱するだろ？」

「な、なに……どういう……？」

「天羽彗糸はもうこの世に居ない。ここに居るのは垣根彗糸だけ。俺の大切な、たった一人の義理の妹だ」

世界から音がなくなった様な感覚が突如として訪れた。

彼の言葉が理解できない。何を意味しているのか理解できないほど、彼の言葉はナンセンスで意図の分からないただの音の羅列にしか感じられなかった。

妹。

天羽彗糸を表す言葉に相応しくない言葉。

そして彼と同じ名字に乾いた声が喉から絞りでた。

「……ひうえ？」

「裏のヤツらに知られたからな。藍花のほうはいいとして、天羽彗糸は知られたらまずいし、偽名にする代わりに俺の親と特別養子縁組に

させて、俺の義妹にした」

「あ……うぎ、まい……？」

「だから、呼び名は帝督かお兄ちゃんが適当だ。彗糸」

呼んだこともない下の名前をまるで世界で一番大事なように呟いて、意地悪な笑みをし彼はジャケツトの下の素肌を撫でる。

優しく労わるように動かない足を撫でる彼の手つきが気色悪い。

あるはずもない愛情を感じて、こんな女に愛情を持っているかのようで、怖い。

「な、なんで……」

「なんでって、あ、まさか婚姻届の方が良かったのか？」

「は？」

「確かにいつつも俺に熱烈な告白してたもんプロポーズな。でもな、俺はまだ18じゃねえんだよ、悪いな」

「ふざけて……！」

「ふざけてねえよ。これはただの復讐だ、飼い主から離れて勝手に死ぬのうとした馬鹿な犬へのな」

耳に顔を寄せて、彼は機嫌よく呟く。耳に纏わりつく囁き声がおぞましく、体がびくんと跳ね上がる。

「だって、姉を豪語する女が妹になるなんて、屈辱的で、恥辱で、悔しくて、死にたくなるほど苦痛だろ？」

涙は我慢できなかった。初めてぶつけられた純粋な悪意に喉が干上がる。

黒い瞳を歪めて見下し嘲笑う柔和な笑みに言葉を失った。

好きと恐怖が掻き混ぜられ、煮詰まっていく感情が気持ち悪い。

綺麗な愛だったはずなのに、何か恐ろしく汚れた感情で上書きされていくようで恐ろしかった。

「俺を置いて死のうとしたこと、永遠に悔いてくれ」
「っ、」

強引な言葉に飲み込まれる。大きな手に無理やり顔を上に向けられ、美しいブラウンの髪に囚われ、動けない。

侵食していく彼の体温と、液晶のような真っ暗な瞳が脳に焼きつ

き、もう助かることはないと理解する。

名前も、立場も、体も、願いも、思いも、プライドも、花も、命も、
全て奪われて。

今日、天羽彗糸という人間は二度目の死を迎えた。

死後の世界

101話：嫌がらせの関係

キーボードを打つ音が響く研究室の扉が開く。青と紫が排除され、青々しく伸びた草や、様々な花が生い茂るボタニカルな研究室の中で明るい茶髪と淡い色素のポニーテールを見つけると、ドアを開けた少女はお盆片手に足を踏み入れた。

静かな部屋が入ってきた茶髪の彼女に気がつく、室内で黙っていた垣根帝督とテレスティーナⅡ木原Ⅱライフラインは顔を上げて動かしていた手を一旦止める。

「彗糸さんは、如何なされました？と、ミサカはお聞きします」

コーヒーとココアをいれてやってきたミサカ9982号はそれぞれの前にカップを置くと、複雑な表情で研究室奥にある閉められた扉を見た。

何の変哲も無い普通の扉。

音沙汰のないその扉の奥は、今は子供になってしまった天羽彗糸、もとい垣根彗糸がここ数日泊まっている仮眠室だった。

「あー……黙ったままだ。ずっと喋んねえし、なんか知らんが機嫌悪いんだよ」

「子供にされたら誰だつて不機嫌になるかと思いますが、とミサカは当たり前前の返答をします」

「しょうがねえだろ、元の体が色々デカくてかさばるんだよ」

画面に文字を打ち込むのをやめてコーヒーを手に取り、垣根はため息を着く。

いつも騒がしい女はあの日以来冷たく、口数が少なくなった。プライドも何もかも全て奪われた現実と向き合うことが出来ず、塞ぎ込むことしか出来ない。

踏みにじって、蹂躪して。初めての侮辱に耐えられず、からに籠っていた。

「デカいって言ったって、女なんだから言うほどデカくないだろ」

「車椅子の問題だ。俺の部屋は残念ながらバリアフリーじゃなくてな、170cm女の大人用車椅子より、十歳130cm幼女の子供用車椅子の方が置き場にまだゆとりがあるんだよ」

テレステイナーの野次に眉をひそめ、舌打ちを鳴らす。

垣根にも色々と考えがあつての侮辱だった。表面上では嫌がらせの救済と言っているが、実際には現在の状況を考えている。

「なら足治せ」

「そしたらまた逃げるじゃねーか」

「なら身長だけ低くすればいいのでは？」とミサカは意見を述べます」

「DNA配列組み直すのクツソむずいんだよ。アイツは楽々とやってたけどな。んな面倒なことするなら成長途中で止めた方が早いだろう、時間ねえし」

飛び交う代替案にため息を吐く。カブトムシ05で使っていた彼女のDNAを使って体は作れたものの、生死の峠が近づいていた数日前の彼女は時間が圧倒的に足りず、体格を変えようとしても迫るタイムリミットに間に合うとは思えない。

だからDNAをいじることはせず、ラストオーダーと同じ、成長途中で造型を止めた。

出来ることの中で見つけた妥協点が今の現実、天羽彗系の幼女化だった。

しかしそれを知らないミサカはいたずらっ子の笑みを浮かべて近くの椅子に座る。面倒な子供にため息をついて再びパソコンと向き合いキーボードに手をおいた。

「つまりていとくんは彗系さんの足元にも及ばないと……と、ミサカは初めて知った垣根さんの出来ないことを嬉々としてからかいます」

「喧嘩なら買うぞ?」

「……ところで、お二人は何をなさってるんです?と、ミサカは露骨に話題を変えてみます」

データを送って、文字を打つてを繰り返す作業を続ける垣根と、小さな部品をハンダゴテでくつつけるテレステイナー。

その姿は別に特別でも珍しいものでもなかったが、ふざけた口調で

釘をさす垣根にこれ以上突つかかるのを怖がりあえてそれを口にしました。

「はあ……見てわかんדר」

「見て分からないから聞いているのですが？とミサカは頬を膨らませます」

「補助機作り」

「というと？」

見慣れぬ白い輪を作るテレステイナーと、プログラムを組む垣根に首を傾げる。

現状をふんわりとしか理解していないミサカには彼らの言葉が何を意図しているのかよく分からない。

「あー……彗糸の本体の状況は分かっているよな？」

「はい。両脚と右腕の欠損、ブレインフォグなど軽度の演算能力の損傷だと聞いています」

制作が終わったのか、Enterキーを押して垣根はUSBをパソコンから取り外す。

研究室の壁際にある業務用冷蔵庫程の生命維持装置を指さして、彗糸本体に視線を向けた。

「んで、あの馬鹿の能力は体を弄くり回す能力だ。でも言った通り演算能力が足りない。そのせいで無くなった手足を戻すことが出来ず、欠損した体を必死に生かすことしか出来ないわけだ」

「だから代替の体を与えた。と、ミサカは事実確認をします」

「あれはお前らもよく知ってる脳波リンクで別の体を動かしてる訳だが、演算能力のない脳を体に繋げても意識が戻ることも動くことも出来ないのは分かるな？」

一つずつ丁寧に現状を整理していく。

科学的な前提をよく知っている妹達には、垣根の言うややこしい状態について何事も無く完璧に理解出来ていた。

「はい。でも普通に動いてますよね？と、ミサカは昨日研究室で彗糸さんと話をしていた垣根さんの姿を思い出します」

「それはとりあえずカブトムシ05の演算を一部拝借して意識を保

ち、欠損のない部分はぎりぎり動けるようにしてるだけだ。一時的な措置で、ずっと続けるつもりは無い」

「だから一方通行と同じような代理演算補助装置を作るんだよ。つつても使うのはこのバカガキの虫けらどもだけだよ」

ハンダゴテで作業を続けながらテレスティーナはメガネを人差し指で少しあげる。

面倒だと言わんばかりに低く息を吐く彼女の顔には疲れが見えていた。

「虫と言つても多分お前ら1万人と同等くらいの演算能力だし、アイツのデータラメ能力を補助するくらいなんてことねえ。それに、」
「それに?」

「なんでもねえ。とにかく、その装置があれば今まで通り能力が使えるようになるわけだ」

言いかけた言葉を戻し、垣根は口を噤む。神様の力は神に通じるものには使えない、ならば天界から引き摺り降ろされた未元物質なら接続できる。

そうして基盤が整えば、演算が阻害されている本体も治るスピードが早くなる。

だが目の前の彼女らはそんなこと知らなければ、神のこともこの世界の事実も知らない。

言う必要も、教える必要もないと、垣根は目を伏せた。

「なら先程の車椅子問題は解決するのでは?と、ミサカは質問します」
「バッテリーの問題でずっと使えるわけじゃない。基本は足以外なら動く省エネモードにさせる。じゃなきゃ充電が丸一日もたねえ」
「だから車椅子は必須なんだよ」

「難儀な体してますね、あの人。と、ミサカは少々心配になります」
「ほんと、死なないようにするだけでクソほど準備あるし、面倒なことこの上ない」

パソコンの電源を落として深く椅子に座る。USBをテレスティーナに投げて、受け止めたのを確認すると足を組んで頭を抱えた。

か弱い虫によく似たあの白い少女の顔を思い出すだけで複雑な感情が沸き上がり脱力してしまう。

「そう言いながら服も用意して、車椅子も用意してって、ツンデレですね。と、ミサカは微笑ましく思います」

「そりゃあペットを大切にするのは飼い主の義務だろ」

からかうように笑うミサカに垣根は呆れながら足を組み直す。

さつきと打って変わった朗らかな空気は、明らかにミサカの配慮のおかげだった。

「ペットですか。なら飽きた頃には捨ててしまおうんですね……ってミサカは垣根さんを挑発してみます」

「そんなことするわけねえだろ。人をDV彼氏みてえに言うんじやねえ」

「え……DV……？」

二人してくだらない罵倒の応酬をしていると、突然閉めたはずの廊下に繋がる扉が勢いよく開く。

長い黒髪と耳の垂れた犬のような二つ結びが印象的な枝垂学園の女生徒が驚いたような、強張った顔で垣根を見つめる。

その少女を知らない女性二人は突然のことに少し驚き、からかいの言葉や考えは勢いよく引つ込んだ。

「あ？弓箭？なんでお前が……？」

「悦さんが、ここについて、お電話で……」

「電話？」

「そういえば、先ほどの携帯に『親友』を自称する着信があったのでお伝えしましたが……と、ミサカは新事実を伝えます」

「垣根さん、最低ですね……二股の挙句DVですか……私の親友に……!!」

お高いケーキ屋の箱と片手に花束を持って弓箭獵虎は混乱したような表情を浮かべる。

かろうじて聞こえた単語を真に受けひどい勘違いをしている彼女には諫めようとする上司たちの声は届かない。

「これは冗談であって、あなたが思うようなことは、とミサカはなだめ

てみます」

「最低な勘違いすんな、んなわけねえだろ！」

「ああそうだな、それは事実じゃない。正しくは三股だ。藍花、天羽、義妹」

「全員同一人物だろおが！つか話をややこしくすんな！」

非常に面倒なことになったと、垣根とミサカが考える中テレスティーナだけは違った。こんな面白いことは滅多にないと、誤解される発言を呟いて混乱を招こうと画策する。

居心地のいい研究室といえど年下に命令され、道徳を無視した研究が出来ないことに鬱憤を感じていた彼女はここぞとばかりに垣根の評判を下げるような言葉を続けた。

「ロリコンでギャル好き……性癖ねじ曲がりすぎだろ、救えねえな第二位」

「ロリコン!?垣根さん、まさか性犯罪に……?」

「アアア!こうやって誤解が拡がっていくつつつてんだろ!やめろやめろ!」

音を立てて回転式の事務用椅子から立ち上がると垣根の悲痛な声が響く。

誤解を解こうと声を上げるも、彼の弁解は虚しく掻き消え意味が無い。

「ちよつと、うるさいんだけど」

混沌とした研究室内を沈静化させるかのように、突如としてゆっくり開いた仮眠室のドアから幼い子供が白い電動車椅子に乗って現れる。

陶器で作られた人型の飾りのような少女の落ち着いた声で、一瞬にして騒ぎが止まった。静まり返った部屋の中で彼女だけが注目を集めていた。

「……さて、今お前が出てくるとさらにややこしくなる!」

「垣根さん?美人とはいえこんな幼い子を……?」

「違う!」

腰まで伸びる柔らかな髪を邪魔そうに手で払いながら現れた彼女

にこの状況を打破する希望を見出すも、彼女の格好にその考えを改める。

無機質な白い肌と髪、輝く緑眼と小柄な体、起きたばかりだというのに整った神に与えられた美貌を持った子供はあろうことか下着と履きかけの靴下しか身につけていない。

彼女が出てきたところで誤解が加速するのは目に見えていた。

「どうされたんです？と、ミサカは駆け寄ります」

「服、一人だと着にくいから……」

そんな彼らの騒動を気にもせず、用件を確認しに来たミサカに車椅子の背もたれに掛かった服を指差し困ったように眉を下げた。

淡い緑のセーラー襟と、ゆったりとしたシルエットをした紫陽花柄の布地が特徴的な中華風のワンピースを手に取り、「ごめんね」とだけ言って利き手ではない左手でミサカに手渡す。

右腕がだらんと力なく垂れる彼女には、たとえ一枚で完結するワンピースでも着替えにくいのは目に見えている。

「服を一人で着れないほどの子供とひとつ屋根の下……？軽蔑します垣根さん」

「これにはワケがっ、」

ボタンが付けられない子供のような会話をする彗糸たちに弓箭は勘違いを加速させる。仮眠室と書かれたプレートが垂れ下がる扉から出てきた艶やかな幼女と上司である垣根の関係を勘違いする彼女には、もはや会話全てが彼らの関係を暗喩しているようにしか聞こえなかった。

「にしても、ロリのくせに胸大きいですね」

「そう？Cって小さい方じゃない？」

しかし彗糸たちは呑気にも会話を続け、着替えも並行して行う。手伝ってもらいながらワンピースから頭を出すと、ミサカの悔しそうな無表情に困りながら袖に腕を通す。

女同士の細やかな会話はよく部屋に響いた。

「……これが強者の余裕ですかと、ミサカは絶望します……」

「何落ち込んでんの？泣かない泣かない」

大人の姿と比べて驚くほど平たい幼女の胸だと言うのに哀愁漂う無表情を続けるミサカに訳も分からずなだめながら頭を撫でる。

殺伐とした勘違い合戦を繰り広げる人達と違い、そこだけ暖かな空気が流れていた。

「しかもロリ巨乳ママ属性好きか、業が深いな」

「垣根さん、サイテーですね……こんな可愛らしい子供を……」

「だから！ちげーつつつてんだろ！」

穏やかな雰囲気壊すうるさい三人の声が部屋中に反響する。

決着のつかない彼らの動向を見守りながら履きかけの白いニーソックスを上にあげると、騒がしい部屋の中で一人、呆れ返ってため息を一つ吐いた。

結局、ことが収まるのに数十分もかかった。

「つまり、藍花さんが天羽さんで、この間の計画で体が壊れて、手術をしたら小さくなったと」

「そういうことだ……」

ココアを手に椅子に座り、複雑な気持ちになりながら弓箭は彼らの言い分を復唱する。

ようやく理解した彼女は申し訳なさそうに可愛いマグカップに口をつけた。

「時間かかったな。おかげでもう取り付けまで進んだぞ」

「なにこれ？」

呆れながら彗糸の首に白いチョーカーを付けてテレステイナはため息を吐いた。

「演算補助器。腕動くか？」

「あ、動く……」

「説明は後でしてやるから、今は慣れとけ」

細身のチョーカーに困惑するも、腕が動くことを確認すると硬かった表情が少し和らぐ。ずっと使っていなかった表情筋は、衰えることなく花のような笑顔を咲かせる。

利き腕が動くことが嬉しいのか、ぐーぱーと手を握ったり開いたりと繰り返して笑っていた。

「腕だけでも動けて良かったですね、とミサカは安堵のため息をついて呟きます」

「ミサカ……？　そう言えば貴女、第三位の……」

「弓箭、それはお前には関係ないことだろ？」

「あ、そうでしたね。すみません」

ふと弓箭は車椅子のそばにいる茶髪の少女に目を向ける。知っている名前、知っている顔、思い出そうと考えますが、上司の言葉と遠くの方で聞こえたボタンを押す音に気を取られ、モヤがかかり消え失せてしまった。

気にもならないつまらないことだったと勝手に改竄されていく。それは自然的にありえないことだった。

「……？　何したんですか？　と、ミサカは耳打ちします」

「なんでもねえよ、気にすんな」

小さく薄いリモコンをポケットの中で弄りながら垣根は視線を逸らす。勝手に脳を弄った罪悪感を微かに感じるも、面倒ごとを起こさないためだと理由つけて能力の本来の持ち主に目を向けた。

「でもちっちゃくなつて、ますます可愛くなりましたね！　えっと、悦さん？　で、いいんですかね？」

「……天羽でいいよ、獵虎ちゃん」

「お前はもう天羽じゃねえだろ」

「え？　どういうことですか？」

「こいつがおれの義理の妹だ。だからもう天羽じゃない」

弓箭との心理的距離を離したいのか、わざわざ天羽の姓を語る彼女に苛立ちを感じ、垣根は車椅子に座る彼女を持ち上げ膝に置く。

現実を拒む可哀想な義妹にちよつとだけ意地悪がしたかった。

「だから義妹ってさつき言ってたんですね……」

「そういうこつた。俺が性犯罪なんかするわけねえだろ」

「でもしてそうな顔してますよね。後で裏で揉み消してさうです！」

「テメエの存在を揉み消してやろうか？あ？」

「そそそそんなことより、可愛いお洋服ですし、髪の毛も結ってあげます！可愛くしましょう！ね！！」

つい口を滑らせた弓箭は焦りながら大人しく座る彗糸の髪を触り、乙女の必需品と言わんばかりに髪ゴムと櫛を取り出していじり始める。

人形の髪とよく似た柔らかい髪は簡単に櫛を通した。

「可愛いってより少女趣味でしょ。どんな性癖してんの」

「デザインは主にテレステイナだ」

「あつそう。てつきりアンタの変態趣向かと」

「ガキに発情するかよ、バーカ」

髪を弄られる中、小さな足に黄色いフラットシューズを履かせる垣根を鼻で笑うが生暖かい目で流されるだけ。大人ぶった余裕の笑みが腹立たしい。

子供扱いが加速しているのが嫌というほど伝わる。腹立たしい、姉の性分が強い彼女には侮辱でしかなかった。

「はい、出来ましたよ。どうですか？ちよつとだけお揃いなんですよ！」

「……ありがとう」

机の上で控えめに主張する花瓶から緑の紫陽花を手に取り、中華磁器のような淡い色の少女の髪に黄色いリボンと共に花を添えると弓箭は嬉しそうに手を離す。

綺麗に咲いた花と、お団子にアレンジされたツーサイドアップが揺れ、甘い香りがふんわりと舞った。

「可愛くなったな、おチビ」

「……思ってもないくせに」

整えられた髪を優しく撫でると、つまらなさそうな起伏のない声で彗糸は目を伏せる。

感情を悟られないように長いまつげで瞳を覆う彼女にちくりと胸が痛みながらも、彼は正確にその心情を理解できていた。

歪で複雑な愛情がゆっくりと紐解かれていることをよく知っていた。

知っている。天羽隼糸という人間は自分を一生嫌うことがないことを。

ずっと自分の犬でいてくれることを。手綱を掴み取れるのは自分だけだと。

それが彼らにとって揺るぎのない事実で、逃れられない運命だった。

102話：しようもないマウント

十月十三日、秋風が吹き、クーラーから暖房へ変わる季節に神妙な顔をした高校生が机の並ぶ教室で一人の女子生徒を困んでいた。

「アカン！ 購買のパンは全て全滅や！」

「食堂も満席ぜよ！」

「完全に出遅れたわね……」

「すまん、俺が教師にくだらないう質問をしたせいで……」

青い髪の青年、通称青髪ピアスは叫びをあげ地面に膝をつき、勢いよく開いた教室のスライド式ドアからサングラスの男子生徒、土御門元春が大声で報告する。

その言葉を聞くと唯一座っていた女子生徒、吹寄制理は大きなため息をついた。

悲観に暮れた彼らに申し訳なさそうに項垂れるツンツン髪の生徒、上条当麻の弁解が虚しく教室にこだまする。

お昼休み、腹の虫が鳴き止まない高校生達はあろうことか食事のチャンスを逃していた。

進学校とは呼びづらい至って普通の高等学校、食堂の席にも購買の在庫も限りがある。

成長期の生徒が集う高校なら尚のこと。

給食のお代わりや雑談で食堂の回転率は低く、購買のパンは複数買い占められ在庫がなくなるのも早い。

「このままだと、空腹を抱えたまま午後の授業に突入……」

「無理や！ ぼくらはまだまだ食べ盛り！ 放課後まで持つわけあらへん！」

一時間もないお昼休み、彼らは食の権利を行使できない緊迫した状況に差し迫っていた。

悲痛な叫びが生徒達から湧き上がる。

手段を選んでいられないほど、彼らは限界に近づいていた。

「……やるか」

「やるしかないな……」

静かになった教室で上条達はぼそりと呟く。冷や汗を垂らし、唯一残された道を口にした。

「よし、脱走だ！脱走してコンビニに行くんだ！」
最後の手段を上条は声を張り上げ叫ぶ。

民衆を導く英雄のように、導かれる群衆のように、彼らは強い眼差しで腕を高く突き上げた。

順調に校舎を抜け出し、学校外へ近づく。先生に会うこともなく、土御門、青髪ピアス、上条当麻の^{デルタフォース}三馬鹿と吹寄は校舎から脱出しようと機会を伺っていた。

空腹な彼らは走り出したい衝動を抑え、その一瞬の機会を待つ。
いける、そう確信していた彼らだったが、突然鳴り響いた電話にその希望は打ち砕かれる。

「Aチーム、逃亡失敗……」

「Bチーム、全滅……！あとは、頼む……」

クラスメイトの凄惨な雄叫びを最後に電話が切れた。その場になくても、電話越しの彼らの悲鳴だけでその惨状が想像できるほど彼らの叫びは切実だった。

残された歩兵は彼らのみ。三馬鹿と吹寄は必ず弁当を買ってくる
と胸に誓う。

「クソっ！残りは俺たちだけか」

そう吐き捨て土御門が外へと繋がる設置された緑色のフェンスを登ろうとした時だった。

車のクラクションが高らかに鳴る。

「げっ、災誤！自分だけ優雅に外食かよ！」

紺色の普通車が門を通り、止まった。窓から顔を出し仏頂面をする教師、災誤と彼ら四人は目が合う。

小学校勤務ならまだしも、高校勤務の教師が昼時に外出するのは労働基準法で定められた立派な権利であり、ブラックと名高い教職員にその程度の楽しみくらい許されると世間一般の常識なら思うかもし

れない。

普通のことだと。

だが残念なことに彼らは高校生だった。

教職課程の大変さも、残業代が出ない職場環境も、彼らがコンビニまで脱走している間に交通事故にでもあつたら誰が責任を取るかも知らない無知な高校生。

しかし世間知らずな彼らといえど、最悪な状況になったことは分かっていた。生徒指導の教師に見つけられた以上、罰則は確実。

ゴリラのような体格と顔をした教師の登場に彼らの希望は途絶えたと思われた。

けれど青春真っ盛りの残念な子供達は前に進むことをやめない。

「相手にするなカミヤーン！ここで捕まったらみんなのお昼が……！」

「お昼が？」

一番先にフェンスにしがみついた土御門が半分まで足をかけた瞬間、上条達は聴き覚えのある声に動きを止めてしまった。

高校生と呼ぶには多少大人びていて、少し陰険な雰囲気を持った声だった。最近めつきりあつていなかった友人の声に上条の頭からはお昼ご飯の項目が書き換えられてしまう。

「垣根!?!」

「イケメン君やないか!」

「確か天羽さんの……」

フェンスの向こう、青髪ピアスや土御門と同じくらい長身で襟足の伸びた茶髪が特徴的な眉目秀麗な少年が立っていた。

モデルか男性アイドルかと勘違いしてしまうほどスタイルの整った美男子。レベル5第二位、垣根帝督その人だった。

「お前、どうしたんだよ！天羽といい、お前といい、最近連絡ないと思ったら……！」

「悪いな。アイツも俺も、最近忙しかったんだよ」

そんな少年が連絡もなく彼らの学校の前にいることに上条と土御門は怪訝な顔をする。

英姿颯爽、前途多望、文武両道。高校生とは思えない財力もある、文

字通り完全無欠な彼が、上条達の底辺高校に来ている理由が分からない。

垣根と一番仲が良く、縁を繋いでくれたクラスメイト、天羽隼糸が十月前半から不登校なのを知っている上条たちには尚更考えつかなかった。

「……で、何しに来たんだにやー?」

「あの馬鹿の書類手続きとか、色々。テメエが思ってることはなあーんもねえよ、残念ながらな」

土御門の真意を隠した剽軽でふぎけた口調を鼻で笑うと、挑発的に垣根は目を細め笑う。

この場にいる理由ははぐらかしたが、少なくとも彼の言い方からは被害の及ぶようなおぞましいものは感じられなかった。

「悪いけど、お昼のこと忘れてない?」

「あつ、そうだ、災誤!あれ?」

垣根に気が逸れていた上条達は吹寄の声でハッと現状を思い出す。あまりに衝撃的な出会いにすっかり忘れていたが、三馬鹿らはお昼ご飯を求めに外までやって来たのだ。

そして生徒指導の災誤に見つかり、必死にフェンスをよじ登ろうとしていた。

しかし視線を垣根から外したのはいいものの、問題の先生も車もそこになかった。

「飯食ってないのか?なら、これとかどうよ?」

「え?……ピザじゃねえか!なんでんなんもってんだ!」

「通りで美味しそうな匂いが……」

疑問に思いながらも、能力を使ったのか軽々とフェンスを飛び越えてきた垣根に気を取られ考えは有耶無耶になってしまふ。

少し高いフェンスの土台のせいで隠れていたが、彼が持っていたのはピザのボックスを四つ入れた大きな袋だった。

その厳つい見た目に腹の中身が空っぽの高校生たちは目を光らす。

飛んだ衝撃で撒き散らした彼の甘い男物のコロンの香りを打ち消し、周りをジャンキーな匂いで食欲をそらせ腹を空かせるその物体

が救世主に見えて仕方がなかった。

「上からペパロニ、テリヤキ、エビマヨ、あとチーズ。いるか？」

「で、でも元々それを食べるつもりだったんだろ？いいよ、悪いし」

神の言葉と聴き間違うほど自分たちに都合がいい彼の言葉に動揺し、吃りながら返事を返す。

折角の申し出、ありがたいことに間違いはなかったが、大切な友人のものに手を出すほど落ちぶれたくなかった。

「また買えばいいだけだろ？欲しいならやるよ」

「な、なんて慈悲深いんや……」

「垣根様……養ってくれえ!!」

「キツツツシヨ、近寄るな」

「つうご!?!ふつ、ふふふはは、今日の上条さんは何されたって不幸じゃありませんことよ!」

しかし金持ちの余裕か、全く気にする素振りを見せない垣根に感極まって青髪はその優しさに膝から地面に伏せる。

そしてそれと同時に上条が冗談半分、本気半分に垣根に抱きつこうと地面から飛んだ。

あまりに酷い絵面上条の顔面を足裏で受け止めた垣根だったが、それでも上条は訪れた幸運に浸りながら笑っていた。

「でもありがとうございます、こんなにいただいて。えっと、お名前は……」

「垣根帝督。彗系の義理の兄だ」

だがその笑顔も幸福も、長くは続かない。

吹寄に聞かれ何気なく行なった自己紹介を三馬鹿は聞き逃さなかった。

義理の兄、英語にすればbrother in law、直訳すれば法律上の兄または弟。

三人はエスパーでもないのに同時に思索し、同時に互いの考えを見抜く。

天羽彗系の義理の兄であると彼は言った。ならば、天羽彗系は何になるか。

ここぞとばかりに思考力がフル活用され、一秒にも満たない短い間に彼らは気がついてしまった。

天羽彗系が垣根帝督の義理の妹になったことを。

「あら？でも苗字は……」

「手続きの問題だ。あんま気にしないでくれ」

義理の妹、それは彼ら―特に土御門と青髪ピアス―にとっては甘美な響きに違いなかった。

血の繋がらない全くの赤の他人が書類の記述だけで合法的に同じ屋根の下に住める事実は、同棲というものを夢見る少年たちには興奮材料の一つである。

それだけでなく、義妹は大抵が保護欲や支配欲など満たす年下であり、上手く交渉すれば自らを「お兄ちゃん」と呼んでくれる稀有な存在、好きにならないわけが無い。

そして性的な理由でも義妹というものは良い文化だと彼らは考える。

近親でないため官能的な展開になっても罪悪感は薄らぎ、かと言って思いを燃やす程度の背徳感はある絶妙な立ち位置にいるのが義妹というもの。

そう思っていた彼らにとって垣根は圧倒的な勝ち組だった。

天羽彗系、彼の義妹となった人物は少々背が高く、根暗で暗鬱とした陰の人々には明るすぎる性格を持った高校一年生。

濃い化粧、金髪にピンクのグラデーション、着崩したセーラー服、短いスカートと靴下、そしてジャラジャラと着けたネックレスや指輪などの装飾品。

完璧なギャル、それが彼女だった。

だがオタクという生物はギャルを苦手とする、なのでギャルが義妹になるのはあまり歓迎しない。

趣味を馬鹿にされ、スクールカーストの最上位から下民を見下す悪女こそがギャルという認識であり、恐るべき存在だ。

けれど天羽彗系の場合は少し違う。

どこか抜けており、オタクだろうと先生だろうと分け隔てなく接

し、異常とも呼べるほど底抜けに明るく優しい性格で、バイトとはいえないナスであり、垣根帝督好きな人に一途になれる—ヤンデレともいう—処女の可能性を秘めた乙女。

そして何より巨乳である。

凹凸のはつきりした体、それに屈服しないのは今のところロリを好む土御門のみ。

だがその土御門も、今回ばかりは目の前の美男子に嫉妬によく似た感情を抱いていた。

三人の思いは同じ。

「んだよ」

「ごんのツ、勝ち組がアアアアアアアアアアア!!!」

羨ましさや、悔しさ、妬み。名状し難い感情に思春期真っ盛りの子高校生三人組はゆらりと立ち上がり、その思いを叫ぶ。

義妹ロリメイド好き一名、女と称する全てを愛する男一名、そして極一般的な性癖を持つ健全な少年一名の悲痛な叫びがその日空に響いたのだった。

空が赤く色付き始めた午後、高層オフィスの開放感ある商業施設ゾーンのテラス席で垣根帝督は持ち帰りのホットコーヒーを飲んでた。

「ついわけで、転校届け渡して来たから。あと荷物も回収した。長点上機に入るのは元の体が治ってからだな」

特注と思われる真っ白い子供用の車椅子に座る髪の毛の長い義妹、彗糸に今日学校に行って来たことを話すと、彼女は甘いストロベリーフラ

ペチーノのストローを噛みながら喉を潤す。

甘いストロベリーの風味が喉を抜け、それを邪魔するコーヒートの苦い香りに彼女は少し顔を顰めた。

「そういやさ、上条たちに義兄だつて伝えたらすげーびっくりしてたぜ？お前の姿見せたら、ショック死でもすんじゃねえか？アレ」

顰めつ面を続ける彼女に気分が良くなり、垣根はお昼頃に会った知り合い達の慌てようを思い出す。

物語を知り、あの男子高生三人衆の性癖を知ってしまった今、主に二人の悲しみに打ちひしがれた顔の意味が良く分かる。ちよつとした悪戯のつもりだったが、垣根の予想以上に彼らは落ち込んでいた。「上条はともかく、青髪の野郎とクソ魔術師には会わせてやんねーけど。誰が大事な義妹を差し出すかつーの」

口ではそう言いつつも、会わせていたらどうなっていたかを考えてしまう。コーヒー片手に垣根は目を細める。

巨乳で高身長、大人であることを誇りに思う彼女が、威厳もない小さな幼女になると知られてしまったら、天羽彗糸だった幼女はどんな反応をするのか。

なけなしのプライドが砕け散って、惨めに泣き出す姿が脳内で簡単に想像できた。

「なあ、聞いてる？」

「聞いている」

「なら返事しろよ」

「やだ」

あまりにも返事がないのを不審に思い、隣でストローを噛みながら仏頂面を続ける小さな妹に視線を移す。人の話を聞いていないのか、カップの底に残ったクリーム残りを吸い取ろうと一生懸命にストローから吸う彼女は不機嫌そうに頬を膨らましていた。

可愛い見た目なのに人を苛立たせる天才なようで、適当な返事で垣根と頑なに視線を合わせないようにカップを凝視する。

垣根のことは眼中にない、というより垣根を見たくないといった雰囲気です。垣根の機嫌を逆なでした。

「なんで？俺と話せるんだぞ？」

「頭抜けてんの？こんな姿にした人と喜んで喋ると思ってるならめ
たい頭してんね」

「いい加減素直になれよ。嬉しいくせに」

昔の姿とは違って笑顔のない彼女に不満を持ち手に持ったプラス
チックカップを奪い取ると、苛立ちを隠さず彗糸は奥歯をかみ締め輝
く緑眼で睨む。

全てを奪ったこの男が許せないのも当たり前だった。

財や命が奪われるなんてそんな安いものじゃない。天羽彗糸の全
てが奪われ、蹂躪された。

精神も肉体も、財も地位も存在さえ、全て垣根帝督のものだった。

彼女といえど、いや、彼女だからこそ仕打ちに酷く激昂する。この
世界で唯一自分を確立する全てをなくしたことは、違う世界から来た
彼女にとっては死にたくなるほど恐ろしい。

「嬉しいと思う？」

「思うな、だつてお前俺のこと好きじゃん」

「……どうしてそう思うわけ」

それでも垣根のことが好きだと、わかりやすい彼女の心情は見透か
されていた。恥ずかしさのあまり唇を噛む仕草がいじらしく、馬鹿に
するように垣根は笑い出して小さな体を見下ろした。

「言っただろ？俺らは運命の糸で結ばれてるって」

「……頭のネジでも外れたの？運命なんて、現実あたしと虚像アンタの間にはない
んだよ」

「でも、俺は真実を知っている。お前がひた隠しにしてた世界の真
理つてもものを知っちゃった時点で、俺らは運命共同体なんだよ」

からになったカップを二つテーブルに置くと、彼は得意げに笑う。

屁理屈を並べる意地っ張りな少女に現実を理解させたい。彼女に
責任を取らせるべく、彼は意地悪な笑顔を浮かべて甘ったるい言葉を
囁いた。

「それにほら、『ていとく』と『けいと』、俺ら二字違いだろ？」

「だから？」

「同じなのは『いと』だけ。俺らは運命の『いと』で繋がってるんだよ」
強引に小さな手を取り、小指同士が触れ合った。

指切りをする彼らの手は、二人の小さな手と大きな手のせいかな少し不恰好で、益々垣根の中の支配欲が増幅していく。

前とは違う小さな手。それをいとも容易く包み隠せてしまう自分の骨ばった手を泣きそうな顔で見つめる彼女の顔が最高に子供らしい。

プライドを砕く彼女の姿に一種の安心感さえ覚える。奇行もなく、きちんと管理できる躰の行き届いたペットの姿に安堵するのは振り回されて来た飼い主として当然と言える反応だった。

「馬鹿でしょ、アンタ。突然なぞなぞみたいなもの言わないですよ」

「口説いてんだよ、女ってロマンチスト多いじゃねえか」

「口説く……ああ、そういうこと」

馬鹿にするかのような彼の言葉に何故か彗糸の熱は一気に解れていく。苦悶の表情は途端に晴れやかになり、無邪気な子供の愛らしい笑顔が咲いた。

その笑顔に悪寒が走る。

天使のような笑みが、悪魔にしか見えなかった。

「代替品になれてことだ？」

きらめく緑の目の中、怪物のように蠢く淀んだ恐ろしい感情が確かにあった。

たとえ死んでも治らない病を患う彼女には、垣根の言葉は勘違いも甚だしい捏造にねじ曲がる。

「子どもの姿も、髪が長いのも、色が白いのもも、そういう事なんでしょっ。」

白いまつ毛の隙間から緑の瞳で見上げる彼女の思考が読めない。

垣根の中で嫌悪感とおぞまじさが膨らみ、心が冷える。それほどまでに目の前の少女の言葉が恐ろしかった。

「初恋の相手に重ねてるんだ？見かけによらず初心だね」

「違う……そんなこと、思っていない」

彼女の言葉に否が応でも昔言葉を交わした少女のことを思い出す。

幼い垣根帝督のそばにいたあの少女。色素の薄い長く真っ直ぐな髪と、細い手足、そして白い病衣。

一度意識してしまっただけならもう頭から離れることはない。彗糸の姿と似ても似つかないはずなのに、彼女の言葉に少し感情が揺らぐ。

無意識のうちに、なくしてしまっただけのあの子の姿が彗糸の体に反映された。

それが彼女の見解だった。

「別にいいよ、あたしだってキミを妹の代わりとして見てた。だってら、今度はあたしが代替品になる番だ」

「俺はそんな気持ちでお前をつくったわけじ——」

しかしそんなことを望んだつもりはなかった。貼り付けた胡散臭い笑みを続ける彗糸の背伸びした感情に、垣根はひどく掻き乱される。

大嫌いだっただけで彼女と同じ道を歩んでいると言われていたようで。

自分の感情も何もかも、嘘だと罵られているかのようで。

酷く腹が立つ。

「垣根は、かっこいいね」

「ツテメエ、ー！」

彼女の無邪気な演技と、あの子に言われた短い言葉に怒りは最骨頂に達した。

勢いよく腰をあげ、そのか細い首を折ってしまいたいと手を伸ばす。それが意味のない行為だとわかっていても、彼女を垣根自身の手で自分の過激な思いを知らしめたかった。

「あつー！いたいた!!おーいー！」

けれど呑気な男の声が邪魔をする。愛ゆえの加虐は成されることではなく、伸ばした片手は中で動きを止めるほかなくなった。

苛立ちがさらに増す。けれどその思いを押し殺し、腕を下ろして立ち上がる。

「……上条、と、また女変えたのか。インデックスはどうした」

「えっ、あ、あの、私達はそんな関係じゃ、」

「実はさつき会ってな。魔術師の五和さんだ」

興醒めだと言わんばかりに舌打ちをして上条に視線を移すと、挿絵で見た記憶のある人物、一人の魔術師を連れ立って主人公が立っていた。

メインヒロインの銀髪シスターではなく、それなりにプロポーシヨンの整ったショートカットの女性を連れて上条は簡素に紹介する。

足に色のついた包帯が乱雑に巻かれているのかと勘違いしてしまうほどボロボロの臙脂色のジーンズと、紫に近い薄ピンクのセーターと短いニットを着た彼女はあっけなく魔術師と告げた上条に目を丸くして驚いた。

「い、言っつていいんですか!？」

「俺の将来の被扶養者、じゃなくて俺の大親友こと垣根帝督だ。神裂たちとも面識あつて魔術のことはある程度知ってる」

「勝手に俺の籍に入ろうとするな、胡麻すつてんじゃねえ」

上条のいたずらっ子のような笑みに脛を軽く蹴ると、垣根は赤い舌を出してバカにする。男子高校生らしいおふぎけにいつもの調子を取り戻し、垣根に至つては先ほどの憎悪や苛立ちは微塵も感じられなかった。

「つーかもうこいつら扶養してて精一杯なんだわ、他を当たれ馬鹿野郎」

「こいつ?……つて人形じゃねえか。お前、まさかフラれて精神が……」

自慢げに彗糸の頭を撫でていると、上条はきよとんと首を傾げる。彼に彗糸が本人だと、ましてや生き物だと理解することができぬわけもなく困惑したように垣根と少女を交互に見比べた。

微動だにせず、表情一つ変えない少女の肌も髪も青ざめるほど白く、淡い緑色と金色が印象的な服を着たそれは瑛瑯エナメルでできているかのよう。

まるで青磁できた茶器のように可憐で儂い少女が元氣溢れる澆刺な天羽彗糸だと、人間だとは思えなかった。

「馬鹿、生きてるわ。こいつは俺の義妹、れつきとした生き物だ」

「義妹?天羽がなつたんじゃねえの?」

「だから、こいつが彗糸だっていつてんだろ？」

イタズラが成功したような笑顔で垣根は少女を見下ろし、彼女を前に出す。あんぐりと口を開けた上条の狐につままれたような顔が面白くてたまらない。

中国陶磁器のような白く美しい少女。その少女が上条のよく知る天羽彗糸と同じだとは、普通ならば思わないし、逆に垣根を好きな女の幼少期を人形に見出す頭のイカれた男にしか感じないだろう。

けれど彼は主人公だった。懐の広さと、訳のわからない状況下での理解度は垣根と匹敵する主人公という圧倒的な存在、それが彼、上条当麻である。

「……マジ？」

「コンパクトで可愛いだろ？」

「上条くんが困ってるんだから、変なこと言わないの」

だからあつさりとお条は信じてしまう。人形のような少女の声にさらに信憑性が増し、疑う余地のない事実だと主人公ゆえの理解力を駆使して上条は彼らの言葉を信用した。

信用せざるを得なかった。

「なんでそんなことに……」

「色々あってな。来月くらいには元に戻るさ」

だが信じたからといってその状態になった理由が分かるわけではない。だから彼らの言葉を信じてそれとなく話を聞こうとするも、簡単にはぐらかされる。

教えるはずもない。

上条に真実を伝えるのは悪手だと、垣根も彗糸も分かっていた。というより、この世で最も恵まれた主人公に自分たちの不幸を話したくなかった。

「こつちの話より、お嬢さんの話聞いてやれ。戸惑ってんぞ」

「あつ……わ、わりい、五和」

「い、いえ、大丈夫です」

面倒になった垣根は蚊帳の外だった五和に都合よく矛先を変え、適当にやり過ぎす。

もう既に先の展開を知っているためか、垣根と隼糸はどこかつまらなさそうだった。

「あの、後方のアックアという名前を覚えているでしょうか？」

「神の右席の一人、だよな？ヴェントって奴とやりあった時に会ったよ」

ようやく本題に入れると、五和は安堵しながらも真面目に上条の目を見つめて話し出す。

ふざけた空気から一変し、事件の始まりを感じさせるシリアスな雰囲気気が漂っていた。

「相変わらず面倒に巻き込まれてんな」

「そのアックアからイギリス清教と学園都市双方に果たし状が届いたんです。数日以内に上条当麻を粉砕、いえ、襲撃すると」

「なんで俺を？」

「なんでじゃありませんよ！それは貴方がローマ正教最暗部の企みを次々と阻止してきたからですよ！」

彼らの言うローマ正教最暗部の企みというのは、垣根たちがクーデターを起こす前日にフランス、アビニオンで起きたテロのことである。

原作十四巻、アニメ第三期二話から三話にかけて起こった出来事で、科学サイドである垣根たちには学園都市側の警戒網が薄くなったこと以外あまり関係の無い話。

十月九日に全身全霊を賭けていた垣根にとって彼らの話は少し唐突で、本来ならば理解出来ていなかった。

けれど運命を乗り越えさせられ、全知全能の怪物から得た知識のおかげで全貌を知る彼は少し俯瞰気味に彼らの言葉を聞いていた。

「そりゃ買い被りすぎだよ。俺はただの高校生だって」

「お前が普通の高校生とかなんの冗談だ？」

「お前と比べたら平均ど真ん中の普通の人だろ！イケメン金持ち天才野郎！養えー！」

「卑屈になりすぎだつての、現実をよく見ろよ」

冗談に本音を少しだけ混ぜてトゲのある言葉を投げかけると、悪意

に気づきもせず上条はふざけ半分に垣根に迫真の叫びをぶつける。

卑屈になっているのはどっちだと内心思いながらも、プライドも高く、大事な妹の前で粗相できないのも相まって続けた言葉は少し皮肉めいていた。

「しっかし前方左方今度は後方って、次から次へ忙しいな。つか、俺なんかを狙ってるなんてむしろ暇なのか？」

「情報によると、アックアには聖人としての力もあるようなんです」

「聖人？」

「でも心配しないでください！アックアが襲ってきたとしても、私達が必要守ってみせます！」

垣根と彗系の知るとおり話が進む。

襲撃者の情報をこんな開けっぴろげな吹き抜けて話すとは暗部を知る彼らには少し考えられないが、それを知らない上条は何も思わず話を促す。

きらきらと自信満々に守ると宣言した五和に若干引くも、上条は一番気になることを引き出そうと首を傾げた。

「で、五和はなにしにきたの？」

「決まっています！護衛に来たんですよ！泊まり込みで！」

大きなダツフルバッグを抱えた五和は満面の笑みで答える。

完全に引き際を無くしていた垣根と彗糸はその姿を見ながら確実に巻き込まれる未来を予測し、二人してため息をついて夕焼けの眩しい空を見上げた。

103話：男のろまん

薄い玄関の扉を開くと、白い修道女が嬉しそうに顔を出す。

しかし、玄関先の光景にももの数秒でその笑顔は覇気をなくしていった。

「どうまあ？なんでこんなに人が多いのかな？しかも、なあーんで天草式のいつわがここに？」

彼女の予想と反し、そこに居たのは家主一人ではなく家主合わせた四人の男女。

つんつん髪の家主と、その後ろに立った顔の造形がすこぶる良い長身の男子高校生。

上条当麻の友人、垣根帝督。

久しぶりに見たと少しだけ驚いた表情をするも、それについては大して気にしているようでは無かった。

隣に天羽擘糸がないことも、この間会わせた杠林檎がないことも、真つ白い車椅子の少女が代わりにいることも特に気にせず、ただ一点を見つめる。

問題はただ一人、五和である。

薄紫でまとめたニットとベスト、そしてショートパンツとしてしか機能していない切り裂かれた紫のジーンズ。外ハネショートヘアに、清純派と言わんばかりの優しい顔。

魔術師、それも九月上旬頃騒動に巻き込んできた面倒な輩である。

彼女の来訪に巻き込まれ体質の上条を心配するインデックスは当然の如く不満そうな感情を表に出した。

「インデックス、引きこもりがちのお前の為にとあって、上条がわざわざばったり会った知人を家にあげたんだぞ？知り合いがいると楽しいかもしれないってな」

「……そうなの？」

しかし機転が利く、というより他人を騙し日常をスムーズにする必要性をよく知っている垣根は適当な言い訳を並べると、インデックスの追求をはぐらかす。

その手腕に疑うこともせず、純粹無垢なシスターは上条に上目遣いで真実か否かを問いただした。

「そ、そうだぞ！インデックス、寂しいと思って、な!?!」

「え!?!あ、は、はいー！そうですー!」

「ふーん……それで、この子は？ゆずりは、いないの？」

まだ疑惑は残るものの、一応納得した様子のインデックスは今度は垣根が押す車椅子に目を向ける。

この間紹介された杠林檎でもない、全く見知らぬ少女がその車椅子に大人しく座っていた。

白と緑を基調とし、金のアクセントを散りばめたシノワズリの少女。

伏せ目がちな人形の顔と、彫刻のような白い肌、絹のような白い髪、人間とは思えないその少女はまるで中国陶器のよう。

「こいつは俺の義妹、彗糸だ」

「けいと？天羽彗糸のこと？」

「正解だ」

幼い義妹の体を抱き上げ、車椅子を玄関前でコンパクトに変形させると彼は得意げに笑う。

普通ならば信じられない言葉にもかかわらず、幼い姿にかろうじて残った天羽彗糸の雰囲気インデックスは信じざるを得なかった。

「……ええ!?!」

「驚くよなあ、俺も驚いたし」

「私よりちっちゃくなってるんだよ！お人形さんみたい!」

「可愛いだろ？」

人形のように片手で抱き上げた彗糸の頬をつつきながら強く体を引き寄せると、人形のような顔が微妙に歪む。

ぐちゃぐちゃと気持ちの悪い感情で歪む表情は、垣根以外誰一人としてその本心を理解することは無かった。

「皆さんお知り合いなんですわね」

「大事な友達なんだよ、けいともていとくも!」

「……それは光栄ね」

「え？俺の妹になれて光栄だつて？」

「それは言つてない」

五和とインデックスの言葉に少しだけ表情を和らげた彗糸だったが、髪をつつく唇の感触のせいか表情はすぐに歪んでしまう。

しかし、鮮やかな緑の目が歪み、小さな歯を食いしばる姿に凄みは全くない。

そんな姿に垣根が懲りるわけもなく。

——全然怖くねーよバーカ！

と、内心見下しながら垣根は動かない足を強く抱きしめた。

「それで、なんでまたこんな姿に？」

「デメエらには関係ねえよ」

「答えてくれ。お前ら危なつかしいし、心配なんだよ……」

玄関先から移動し、キッチン近くで一人楽しく嫌がる彗糸で遊んでいると、話の流れをぶった切つて上条が少し真面目な顔を見せる。

本来の天羽彗糸の姿とは随分違う今の彼女について教えろと、そう彼は言った。

確かに、デカイ女が小さくなって、白くなっていることは知り合いならば誰だつて気になる。それは理解できる。

しかし、それは答える必要がない。

結局のところ他人で、関わる必要も、知る必要もない存在なのだ。

けれど上条当麻は主人公である。

上条には一切関係のないことでも、たとえば垣根だけが知っていればいいことでも、ズカズカと入り込んでくる。

それが主人公というもので、だからこそ主人公たる所以

上条当麻の名を冠する以上、記憶があるうとなかろうと、彼はそうやって行動してしまう。

「……この間の休みにテロがあつたら？」

「らしいな、俺はあんまり知らなかったが」

「そんなときに巻き込まれて治せないほどの傷が出来ちまつてな、回復してる間は脳波を使ってこっちの体を動かしてんだ。ラジコンみてえなもん」

主人公というだけで全てを持っていく彼に、自分だけのヒロインを渡したくはない。

一瞬という時間、葛藤が心でせめぎ合っていた。

けれど、友人としてなら教えてもいいかと、少しだけ丸くなった悪党は思い直す。

黙っていても勝手に勘違いされ、的外れな行動をされてしまうかもしれない。

それが主人公相手ならば尚更。

自分を正当化するために言い訳を考えながら垣根はだいぶマイルドに真実を言い換え、手持ち無沙汰に抱き上げた髻系の髪をいじり出す。

前の金髪とは違う白に近い髪色は、部屋の明かりのせいとかやけに眩しく見えた。

「ラジコンって、その体はどっから来たんだよ」

「作った。こいつのDNAとか色々使って。元の姿にもできたが、色々あつてな」

「……てことは幼女化は垣根の趣味ってことか!!お前って奴は……！」

眩しい髪を弄んでいると、上条の震えた声が静かに響く。

思わず前を向いて上条の目と視線が合うと、熱い感情が燃え盛る強い瞳に体が固まった。

好きな女を好きなように弄り、好みへと変える。

肉体そのものを変えて望んだ姿へ変えるなど、18禁の漫画でしかありえないような現実であり、興味が尽きることは無い。

しかし目の前にその実例がある。ならば知りたいことは一つ。

彼女の新しい体が造り手の性癖を色濃く反映しているか。

それを知らなければ死んでしまう、そんな物騒で呆れた熱意を秘めた目だった。

「話聞け。時間が無いし、デカいままも困るから昔の姿にするしかなかったんだよ」

「……じゃあそういうことになっておっう」

「あ？」

誰も彼もどうして性的な話にしたがるのか。思春期らしい上条の反応に垣根は呆れたように、そしてどこか面倒そうに顔を顰める。

彼自身は子供の姿に欲情する性癖など持っていないというのに、他の人らは直ぐにそういった話に持ち込む。

腹立たしい。

そんな話したくないというのに、好奇心旺盛な思春期達はどこも構わず話を続け、神経を逆撫でする。

「……ねえ、昔の姿ってことは、これは何歳の頃の姿なの？」

「十歳くらいか？小学生にはなってると思うが」

苛立ちを募らせながら垣根は顔を伏せると、今度はインデックスが恐る恐ると言った風に垣根に近寄る。

ろくな話じゃないと直感的に気がつくも、それでもシスターの話を遮る気にはなれなかった。

「……それでも、私より大人じゃない？」

「はい？」

モゴモゴと言い淀むインデックスの視線は明らかに彗系の胸部へ向かっており、視線に気がつく彗系は目を見開く。

胸の下に切り替えがあるワンピースのため確かに少し強調されているが、今までの彼女と比べれば至つて普通の膨らみである。

しかし小学校を卒業していない年齢にしては明らかに大きな膨らみでもあった。

それを暗に指摘するインデックスの考えはとても分かりやすく、この場にいる全員がその意図を汲み取る。

呆れてものも言えないとはこういうことかと、皆思っていた。

「みんなして、そんなに気になる……？」

「べべつに気にしてる訳じゃ」

「そうそう、気にすんなよ。遺伝てものがあるんだから」

視線に耐えかねたため息を着く彗系に、恥ずかしそうにインデックスは視線を床へと移す。

だがその恥ずかしげな顔も、上条のデリカシーのない発言で一気に

冷たい顔へと変わった。

明らかに間違えた発言だった。

デリカシーがない垣根でさえその発言に面倒が起これると分かるほどあからさま。どうしてそんなフオローになるのかと、頭を悩ませる他ない。

「……いいもん」

ローテーブルの傍に正座すると、糸が切れたかのように倒れてインデックスは平坦な声色でつぶやく。

どこからどう見ても拗ねていた。

「あ、あれ？あの、インデックスさん……？」

「デリカシーねえこと言うから」

「アンタもないじゃん」

困惑する上条に呆れた視線を投げかけると、危険物からインデックス離れるようにベッドへ彗糸とともに腰を下ろす。

柔らかいベッドに二人並んで成り行きを見守るも、どこか頭の隅でこの後の展開が予想できていた。

「あの、なんだかよく分かりませんが、完璧に爆発する前にいつそ、噛み付いてくれませんか？少しずつ怒りパワーを分散していけば、頭蓋骨も噛み砕かれずに済むと思うのです」

しれっと移動して高みの見物を決め込む垣根たちを観客に上条は深々と床に頭を擦り付け、いわゆる土下座をし始める。

自分の失態というのに保身しか考えていない言葉に呆れてしまう。

奇妙な時間だった。

小さな子猫がバカにするように目の前で寝転び、沈黙が訪れる。最悪な空気の中気持ち良さそうに身体を伸ばす子猫が場違いだった。

「そうだ、ねこちゃんにはいいものがありますよ！最高級なまり節！」とても滑稽な様子に耐えきれなかったのか、五和は慌てて大きな力バンから生の鰹節を取り出すと明るい声で猫を撫でる。

黄色味がかかった三毛猫は土下座する上条の体をまたいでなまり節へ向かって走り出した。

「相変わらず賑やかだな」

「人用のなまり節……ミネラル過剰から尿路結石ならなきやいいけど……」

飛び乗った上条の小さな呻き声と、静かなインデックス、そして健気に猫を可愛がる五和。その姿を呑気にベッドで幼い義妹を膝に乗せて垣根はつまらなさそうに見学していた。

「面白い物してたのか、いつのまに」

「はい、いくら護衛のためとはいえただ居候するのは気が引けますし。なんでもお手伝いしますよ」

「……っ！」

つまらなさそうに彗系の髪を弄りながら成り行きを見ていると、地獄のようだった土下座の会は別のやましさを感じる雰囲気変わる。

上条の視線はインデックスではなく、キッチンへ向かう五和の華奢な体へ注がれていた。

「なに、とうま。なんで空気の流れが一変しているの?」

「自分の胸に聞いてご覧なさい? 炊事洗濯家事……上条さんに全部任せつきりで、今までお手伝いすらしてこなかったのは誰ですか?」

一変した空気にインデックスが起き上がり、視線は上条へ向かう。

形勢逆転か、今はインデックスの立場が危うくなっていた。

それは彼女の日頃の行いのせいだったが、それでも上条が失言をしたことに変わりはない。

「それは、ごめんだけど……あつ、そうは言っても状況は全然……!」

「お鍋とかフライパンはこっちで、調味料はこっち」

「はい!」

だが上条は己の失言などとうに忘れ、五和をキッチンへ入れる。

緩んだ頬でキッチンの説明をする上条にそれほどまでに嬉しいのかと垣根は呆れ果てて眺めていたが、キッチンからでた瞬間にその顔は悲惨なものに変わった。

「垣根には天羽がいて、隣のグラスンにはメイドがいて、青髪は下宿先のパン屋で飯を食って。その間俺は……はあ」

「お前もインデックスがいるだろーが」

ベッドの方へ酷く項垂れて戻ってきた上条の顔に生氣はなく、大げ

さに肩を下げる。

冗談交じりとはいえ、その目には疲れからくる哀愁が漂っていた。

「あ、でもお前今日ピザ持ってたけど、いつもは外食なのか？」

「あー、まあ、そんな感じ。車椅子のガキにやらせるなんて酷な話だろ？」

「なら同類か……ヨシツ！」

あまりにも可哀想な表情をしていたにも関わらず、次の瞬間にはけろっといつも通りの表情で昼頃の話を蒸し返してくる。

お昼頃にピザを買っているなど、確かに自炊をしていない人間にしか見えず、彼が望んでいる女の子の手料理を垣根が食べているようには思えない。

ようやく上条がマウントを取れると、幼女を抱えた美男子を前に彼はガッツポーズをとる。

ひとつでも同じ境遇だと知るや否や、途端に彼は晴れやかな気持ちでいられた。

「何がヨシだ、俺はこいつのためを思って言ってるのであってだな、」

「……車椅子だからって出来ないって思ってたわけ？」

「いや、車椅子じゃ大変だろ」

「料理くらい、この体でも出来る」

だが、彼らの言葉は少女にとつて最上級の侮蔑でもあった。

車椅子というハンデを理由に彗糸を子供扱いし、繊細な人形を相手していると言わんばかりの侮辱。

負けず嫌いな彼女が、その言葉に被せるように子供ながらの唸り声で苛立つのも当然である。

「え、けいと料理出来るの?」

「あんまり得意じゃないけど、でも車椅子だからって出来ないわけじゃないし」

「な、なら私と同じ……」

垣根の膝の上で苛立つ彗糸だが、インデックスの問いには朗らかに答えてまるで別人のように対応する。

だがその優しい対応と謙遜が過ぎた返答でインデックスが誤解す

るのも無理はなく、碧眼を輝かせて彗糸を見上げた。

「インデックス、こいつの得意じゃないは『素人質問で恐縮ですが』と同類だ。信用するな」

「確かに、調理実習普通にできてた記憶あるな」

「そんなことないよ。キャラ弁とか可愛く作れないし、ホワイトソースとかたまにダメになって失敗しちゃうし」

高校生の頃は妹と自分の弁当を作ったり、アメリカで一人暮らしをしてる時は自炊したり、妹とお菓子作りまで作ってきた女、『あんまり得意ではない』という言葉は適していない。

しかしあまりにも自分にストイックすぎる彼女は他人と比較することもできずに軽い調子で自虐する。

それは到底褒められるような行為ではなく、言葉を聞いた周りに至ってはあまりのストイックさに驚き呆れていた。

「別にプロじゃねえんだから、そんな気にすんなよ」

「……美味しいほうがいいでしょ？」

驕りを捨てた緩みのない考えにため息をついて垣根は彼女の頬をつねる。子供の姿にしたのは彼女の母性、正しくは姉性、を捨て去るためでもあるというのに未だにおかしい思考回路は彼にとっては不安でしかない。

それでもそのストイックさが自分のためだと面と向かって言われるとどうにも強く怒れなかった。伏せた顔は髪で隠れて表情は見えないが、彼女が誰を想ってそんなことを言っているかなど、想像に容易い。

「さては俺の事大好きだな？」

「……どーだろね」

ほんの少しの糖分を含んだ彼女の言葉に優しく髪を撫でる。それに答えるように腰を支える大きな手を軽く抓って彗糸は頬を膨らます。

どんな辱めを受けても、どんな侮辱を受けても、一度好きになった彼を嫌いになることは出来ない。自分の性格に縛られ、立場を固められた彼女には神の手が加わらない限り垣根帝督を嫌いになれなかつ

た。

美しい愛、汚い愛、なんと形容されようと、宝石の輝きが失われることのないように感情も変わることはない。

ただひたすらにもどかしい感情がそこにはあった。

「オメーら人の部屋でやらしい雰囲気を出すなア！」

悶々としながら触れ合う二人の空気を粉々に壊す大声が狭いワンルームに響き渡る。

距離の近い男女が言葉を交わすのはあろうことかベッドの上。彼らにそんな気は微塵もないと言っても、家主の気は休まらない。

「ああ、悪い。同棲相手の手料理が食べられない上に童貞の上条には理解できない空気だったな……」

「お？煽りか？煽ってんのか？煽りやがってますね？」

「……しよーもない煽りするくらいならやつぱ作らない方がいいかな」

「えっ」

怒りが爆発する上条に調子づいて垣根は彗糸を抱きしめたまま笑うと、みぞおち付近を軽く小突かれ呆れられる。

その言葉のせいで男子高校生二人に面倒なスイッチが入ってしまったことも知らずに、彗糸は小さくため息を吐いた。

「俺を煽るから垣根に不幸が！いいなこの流れ！」

「よくねえ！」

「独占禁止法違反だバカヤロー！女子の美味しい手料理はみんなのものなんだよ！」

「いや、彼女作ればいいだけだろ……」

劣等感からくる苛立ちをぶつける上条だったが、垣根は彼の心情など理解しようとせずとても冷たく現実的な言葉を放つ。

その言葉は常人ならば口にするのも恐れられるような言葉。

『彼女』

自分を好きだと言い、自分を愛し、料理を作り、手を繋ぎ、肌を重ねる存在。

常人の憧れも、我儘も、全て叶う、そんな素晴らしくも遠い存在。

「それは言っただけじゃないワードだ。万死に値するぞ、垣根エ！」
「は？童貞ビビりの女たらしのほうが万死だろ、何人の女泣かせてきたんだ。罪でも数えてろ」

けれどその言葉は決して口にしてはいけない呪いの言葉だった。そのおぞましい言葉に上条は肩を震わせ垣根を強く睨む。

男のプライドをかけた戦い——あるいはしようもない口喧嘩と呼ぶ——が火蓋を切られんとしていた。

「いやいやいや！俺らの巨乳棒をロリにしたホスト崩れのほうが罪が重いだろ！つかタラシはお前だ！このイケメン！高身長！金持ち！頭脳明晰！」

「誰がホスト崩れだ!!このハーレムラノベ主人公！」

「はああ!?俺がハーレムラノベ主人公ならテメエはエロゲ主人公だよ!!寝取られて自滅しろバーカ!!」

「テメエまじぶつ殺すぞ！死ぬバーカ！」

幼稚な罵詈雑言が狭い室内に反響し、二人は構っていた少女たちをほっぽり出して取っ組み合う。

子供同士の些細な喧嘩に女性たちは少し冷ややかな視線を投げる。ことしかできなかつた。

「あの、大丈夫なんですか……?」

「いいよ、そのままにさせておいて。上条くんなら死なないし」

全てを砕く右手さえあれば垣根の能力が害を与える可能性もなく、ちようどいい喧嘩相手だと思いつつながら彗糸はキッチンから出てきた五和に顔を向ける。

困惑する五和だったが、随分と落ち着いている彗糸の姿に感化されたのか止めに入るのをやめて彼らを見守ることに徹することにした。

「でも、さすがに止めた方がいいんじゃないかな……?」

「あーね。でもすぐ終わるしよ」

「あ、そうだ、気分転換に大きなお風呂でも行きませんか？お二人とも暖まれば落ち着くと思うんです」

「それいいかも！ね、彗糸！」

それでもやはり喧嘩が長引くのはよろしくないと、シスターらしく

止めることに賛成するインデックスに女性たちは顔を合わせる。

しかし喧嘩慣れし、魔術の効かない男子高校生一名、超能力者第二位の腕っ節もある男子高校生一名、両方を抑えるほどの力量を持った人はこの場におらず。

ならばもうリラクゼーションに頼る他ないと、五和はある程度収まってきた男性二人の言い合いから視線をそらして困ったように笑った。

104話：寄り道の罫

日が落ち街灯に光が付き始めた頃、一台のバイクと大きな車が静かな街で縦一列に走る。

サイドカーのついた大きなバイクと高級そうなスタイリッシュなスポーツカーが明るい街灯に照らされて路面を走り、上条当麻の頬に心地よい風が当たった。

目的地はとあるスパリゾート。

垣根との軽い口喧嘩がある程度収まったとき、『大きな風呂でも入って落ち着け』と女性陣の提案で行くことになったのだ。

少し気を使わしてしまったと少し申し訳なさも感じるが、それでも気遣いは嬉しかった。

「悪いな、バイクのレンタル代出してもらっちゃって」

「いえいえ、資金は沢山頂いているので」

五和の後ろに跨り、街頭で輝くヘルメットを被った上条の声は静かな街によく響く。

完全下校時刻を過ぎた学園都市はあまりにも静かで、後ろで窓を開けて走る垣根たちにもはつきりと聞こえた。

「とうま、私はこの構図に何らかの意図を感じるよ?」

和気あいあいとした雰囲気の中、サイドカーにちよこんと乗ったインデックスが不満そうに口を尖らせる。

運転手である五和に体を密着させ、安全のためと腹のあたりに手を回す上条に注がれた視線はどこか邪気が交じっていた。

「そ、そんなことはないぞ! 上条さんはレディファースト的にそっちの席を譲ってるだけであってだなあ!」

『女の後ろに乗るのは確信犯だぞインデックス。もつと責めとけ、調子に乗るから』

「やめろオ! インデックスの怒りゲージをあげようとすんな!」

『なんの話だか』

弱々しい反論を口にする上条を鼻で笑いながら垣根はインデックスが持った携帯電話越しヤジを飛ばす。

先程の言い争いをまだ根に持っているのか、明らかに上条の不幸を
楽しんでる声だった。

携帯越しからでもはつきりと感じる垣根の馬鹿にするような笑み
を思い出すと、鋭い視線を後ろで走る高級車に向ける。幼い少女と二
人きりの友人に言葉にできない羨望を抱きながらフロントガラスの
向こう側を覗き見ようと躍起になっていた。

「くっ！二人だけ優雅に車なんか乗りやがって！しかもお前絶対無免
許だろー！」

『大切なのは免許カードじゃねえんだよ』

「天羽もなんか言えよ！」

『あたしも人のこと言えないし』

「このヤンキー共……！」

車の中で毛を弄る彗糸と目が合うと、腹立ちながらもため息をつ
く。

彼らは上条と少し違う常識を持っている。どこか危険そうな雰囲気
を醸し出す垣根はもちろん、歪な違和感を微かに覚えさせる元クラ
スメイトもどこか浮世離れしていて垣根とは違う恐ろしさを時々感
じさせる。

その違和感を言葉で形容することはできないが、何かをやらかして
いてもおかしくはない雰囲気であることは確か。

無免許運転も何も、怒ったところで改善されることもないと上条は
一人呆れてしまった。

「ねえーあれなに？でつかいジャングルジムがあるよ！」

「え？ああ、あれは発電所です。第22学区は地下に展開されている
ので、発電施設が地上に集中しているんですよ」

視線は後ろのフロントガラスから移り、高速道路から見える緑が
かったライトが眩しい大きな建物に向けた。

インデックスの言う通り巨大なジャングルジムが並んでいるかの
ような発電設備が立ち並び、大きなモーターが動くのが肉眼で確認で
きる。

そこは目的地である第22学区の真上。第22学区の電気を賄う

発電所だった。

「そういや、そのスパリゾートってどの階層にあるんだ？」

「えっと、第三階層です！」

地上からトンネルに入ると、光源が白い月から明るいライトに変わる。

螺旋階段を降りるような長く湾曲したトンネルを下り、オレンジ色の眩い光が車体を照らした。

「海藻？ワカメ？」

「そつちじゃねーよ。第22学区は全部で10の階層に分かれてんの」

「この先が第三階層です！」

変わらない景色がぐるぐると回り、永遠に続いていきそうなトンネルがようやく終わる。

眩しい出口に目を瞑り、開いた時にはオレンジの光はどこにも見当たらなかった。

「第三階層の天井は一面スクリーンになっていて、リアルタイムで星空を映し出しています」

「こんなの、本当に地下にあるもんなの？川もあるし森もあるみたいなんだよ」

「やっぱりなー、学園都市は」

鮮やかな青いスクリーンが空と見間違えるほど高い天井を埋め尽くす。

高速道路の下で建ち並ぶビルと流れる川、そして青々とした木々が更にこの場所が地下にあるということを忘れさせる。

それほどまでにこの第22学区という場所は学園都市の中でも異質で、『科学らしさ』に特化した場所だった。

「ていうか、あたしスパなんて行く気ないからね」

「あ？」

「車椅子は事前に連絡しなきゃダメでしょ。こういうのは前日までとかに連絡入れとくんだよ」

あまり見る機会がない景色に感嘆のため息を吐いていると、上条が

乗るバイクの横に垣根たちのスタイリッシュなスポーツカーが並走する。

開けたままの窓から聞こえる会話を上の空で『車椅子って大変だな』と他人事のように高速道路の街頭を眺めてながら聞いていた。

「それに、分かっているとと思うけど、今日は危ない——」

「俺は一言もスパに行くとは言ってねえけど」

「ん?!じゃあどこ行くんだよ、お前らは」

ぼんやりと聞いていた上条だったが、垣根の冷たい声にようやく彼らに視線を向ける。

この場にいる全員満場一致でスパリゾートへ向かっていると思っていたため、垣根の言葉は思いもよらない一言だった。

「ホテル」

「……………んなアツ!!!??」

続けて呟く垣根に、その場にいる誰もが喉を震わせ口を開ける。運転中だと言うのに、五和でさえ狼狽えながらキョロキョロと視線を動かす。

距離が近い男女がホテルに行くなど、彼らにとっては未知の領域、憧れ程度の夢物語である。

そんな言葉をなに食わぬ顔で言う垣根と少しだけ目を輝かせる天羽に、嫉妬や羨望など、言葉に表せない高校生の拙い思いが増していくのは当たり前のことだった。

白と金のシャンデリアが輝き広いスイートルームを照らす。部屋に入ってきた垣根帝督と彗系の姿を反射する開放感あるガラス張りの外には上条当麻達が向かったスパリゾートが見え、道路で見た時よりも空スクリーンがとても近かった。

「まさかアンタがそんな人間とは思わなかったよ」

「あ？なんの話だよ」

車椅子はドアの付近に収納され、乗っていた彗糸は横抱きにされながら広いベッドの上に靴のまま下ろされる。

つまらなさそうに体を下ろして窓際の椅子に座る垣根の横顔を眺めるしか、下半身が動かない彼女にはやることがなかった。

「何ってこの部屋の中、このベッドの中で行おうとしてる行為についてだよ」

「十二期待してんだよガキ。貧相な身体しといて何言ってるんだ」

柔らかい毛布にうつ伏せになると、一向に鋭い視線を窓から外さないう垣根に頬を膨らませて眉を顰める。

彼の感情が読み取れない。

ぎゅっとシーツを握りしめて、彼の端正な横顔を見つめ続けても彼が今何を考え、思っているのか彼女には全く理解できなかった。

それでも少しだけ嬉しかった。自分の体を使えば今日の一戦に巻き込まれずに済む。

上条当麻はもういい。垣根さえ幸せになれば他はいいのだ。

だから嬉々として性を匂わせる。一時間、それか二時間、それ以上の時間さえ稼ぐことができれば彼女の勝ちである。

「期待じゃなくて覚悟だよ。アンタが望んだから、あたしはこの体で生きている。神ではなく、アンタが望んだ。ならアンタの願いを叶えるのが道理じゃない？」

処女消失の行為などただの望みを叶える手段。そこにあるのは多少の覚悟と少量の恩義だけである。

天羽彗糸は二度死んでいる。そして二度目の死は垣根の手によって救われた。

それは紛れもない事実で、認めている。だからこそ、彼女は不機嫌になりながらもベッドに無防備に体を預けていた。

神曰く、望まれた故の生だと。望まれなければ死ぬと。

しかし、神が望まれた結末は彼女の死によってもう既に叶えられている。全てを救い、この物語に新たな結末を与えた。

もう天羽彗糸がこの世界で生きる必要はない。
ではここにいる天羽彗糸は誰に望まれ生きているのか。
その答えは、人形のように彼女の体を慈しむ目の前の男が持っている。

ならばその男の為に全てを渡すのが、彼女なりのけじめのつけ方だった。

「お前にんなもん望まねえよチビ。俺の好みはお前じゃない」

「好みでなくても、重ねてしまう。違う？」

「違うな。お前の言う昔のガキはお前とは似ても似つかない」

「どうだか。似ていなくても年齢や背格好で重ねる精神疾患は実際にあるし」

だが垣根にその理論が通じるはずもなく、こめかみを抑えて面倒と言わんばかりにため息を吐く。

愛想を尽かすほどつまらない話だと彗糸は分かっている。

初恋相手を引き合いに出されて、本来ならば殴りたくなるほどはらわたが煮えくりかえっているはずだというのに。

それでも彼は頑なに彗糸から視線を外して、つまらなさそうに窓の外を眺めていた。

「そんなに俺に好きって言われたいのか？お前」

「……はあっ!？」

ようやく彗糸のほうに視線を向けると、馬鹿にしたように見下ろし鼻で笑った。

まるで彗糸が特別な感情を持っていると言うような発言に目を見開いて唇を震わせる。

体温が上昇し、心臓に痺れが走り、舌先が硬く固まり動かなくなる。それがどんな表情なのかは垣根にしか分からなかった。

「な、何、突然気色悪いこと言わないでくんない？」

「いい加減素直になれよ、お前が感情に折り合いつけないとなんも進展しねえぞ」

「これは美しくて変え難い、姉としての愛だよ、垣根くん。女としての汚い恋ではないんだよ」

「誰も恋とは言ってるねえが」

動揺しつつも声を張り上げ奥歯を噛み締めると、僅かに嬉しそうな顔をして垣根はベッドに座る。

哀れな犬を追い込んで、追い詰めて、清々しいほど悪役らしい嘲笑で見下ろし、じわじわとベッドの隅に追いやっていく。

「それで？愛がなんだって？」

精神も、身体も、いつの間にか壁に追いやられ、言葉が詰まる。

「……アンタは妹の代替品で、あたしは初恋の代替品。それ以上でもそれ以下でもない」

「お前は俺の妹で、俺はお前の兄なんだよ。お互いがお互いの『本物』、お前を代替品としてみることは一生ねえから安心しとけ」

ようやく口から捻り出した答えに間髪入れずに否定され、言葉を無くす。

それでも、家族以外の愛情——その家族愛ですら特殊で怪しいが——を知らない彼女に彼の言葉が響くことは無かった。

「口ではなんとでも言える」

「書類上のまぎれもない事実だ」

「ただの嫌がらせの関係でしょ？」

威嚇する犬にそっくりな声が広い一室に響き渡る。

火花散る二人の視線が交わり、奇妙な沈黙が広がった。

「……それでも、俺とお前は紙の上では家族なんだよ。なら家族らしく振る舞うのが道理だろ？」

「そんなこと、思ってもないくせに」

居心地の悪い一瞬。先に口を開いたのは垣根だった。

永遠に結論を出すつもりがない彗糸に呆れ返って腰をあげると、疲れたように眉を八の字にしながら首に手を当てた。

分かっていないのは彗糸のほうである。

だが人間とは思えないほど清廉で完璧で異常だと、彼女自身は気づくことも無い。

理解不能なプライドと自己否定が織りなす頑固で卑屈な性格と、異常なほど膨らんだ正義感とそつなくこなすポテンシャルからくる揺

るぎない傲慢さ。

極めつけに生い立ちから来る外側の思考が理解から遠ざける。

病気の域に近いと垣根は思うが、超能力者^{レベ}である彼女だからこそその思考回路だと思ふと中々矯正することもままならない。

下手に矯正し、『自分^{パーソナルリアリティ}だけの現実』に影響があつたら困るのは彼だ。

結局彼女が自分で感情に気がつくまで煮え切らない関係が続く。

ただ一言、一緒に居たいと言えば済む話。

それが彼女には難しかった。

「とにかく、俺が帰ってくるまでに頭ん中整理しとけ。俺の気持ちでも考えてろ」

「は？どこいくの？」

「ちよつと、そこまで？」

「……アンタまさか、上条くんとこ——」

ため息をつくと垣根はそのまま外の廊下へ繋がるドアへと向かう。その姿を這うように追いかけてながらベッドのへりに寝そべる彗糸を一瞥してからドアノブへと手をかけた。

「その窓から眺めてろよ。結構いい眺めだぜ？」

「ッ、この馬鹿、なんでそんなこと！」

足の動かない子供に自分のクレジットカードだけ投げ渡し、反論も聞かぬまま垣根は静かに扉を閉めて部屋から消える。

彼は分かっているはずだ。この日に何が起こるのか。

閉まる扉を悔しそうに見つめながら唇を噛みしめる彗糸の顔を見ることもなく、彼はどこかへ行ってしまった。

子供一人が使うには勿体無い広すぎる部屋に取り残され、動き回ることもままならない。

そしてようやく気づく。彼の目的が軟禁だったことを。

「さいあくッー！」

ベッドから移動しようとサイドテーブルを掴むとぱきりと音が鳴る。哀れな子供一人置き去りにされて、ひびの入ったテーブルが大きな音を立てて崩れていった。

割れた大理石のテーブルがカーペットに散らばり、思いがけない力

に喉が干上がった。

ただの非力な子供、自分にテーブルが壊せるはずもなく。誰かが、何か、第三者の介入を一番先に考えるのは道理であろう。

けれど、ガラスに反射した自分の姿に考えが変わる。

白い体、白い髪、緑の目。

神の世界から引き摺り降ろした物質で構成された体と、天国にいた精神、神の御使いという役目。

偶然が重なった結果だった。

「……偶像の理論、だったか」

ここは偶像の世界。偶然と考察が力を持つ偶像フィクションの世界。命を絶ち、生まれ変わった故の世界。

こじつけがいつしか本物になってしまう世界。

肉、魂、心、全てに神が関与した彼女は、それに値するのではないか。

ガラスに映った天使は、とても嬉しそうに笑顔を浮かべていた。

105話：襲来

プルタブを引き、開いた缶からコーヒーの香りが広がる。手先から伝わる温かさに上条当麻は少し顔を顰めた。

「暑ちい……アイスのが良かったかな……」

地下にいる火照る体に夜風が当たることは無い。暖かい風呂上がり、スパリゾートの建物の前で缶コーヒーを啜ると白い息を吐いた。

「夜風にもあたりに来たんですか？」

「え？ああ、地下にいるのすっかり忘れてたよ」

ぼーっと突っ立っていると、不意に後ろから話しかけられる。

風呂上がりだからか少し頬の赤みが増した五和が愛嬌のある笑顔で彼の隣に立ち止まった。

「でしたら少し歩きませんか？」

「あ、でもインデックスは？」

「屋台の食べ放題コーナーを駆け回っていましたけど……」

「そっか、じゃあ迷子になることもないだろ」

風のない地下空間で困ったようにふたりは笑い合う。

缶コーヒーを飲み干して、たわいもない世間話を続けながら二人きりでスクリーンの下を歩く。眩しい街灯に少年と少女の影が伸びていった。

「これはチャンスだな」

その姿を眺める複数人の影が人混みにいた。

染めた黒髪をワックスで固めた男が思春期の男女を遠巻きに見つめる。嬉しそうに彼らを眺める彼は、何故か胸元に小型扇風機を四つもつけていた。

白地に赤の十字が染められたオーバーサイズのシャツと同じように緩い青のジーンズ。

ヒツピーファッションを彷彿とさせる服装の男は鼻歌交じりに腰に手を当て若い男女のあれこれを見続けていた。

「どう思います？ 教皇代理」

「ん？ 『夜のデート大作戦』？ なかなか良い雰囲気じゃねえーのよ？」

「……後方のアツクアです」

教皇代理と呼ばれた男、建宮斎字は近くの男に呼び止められる。

男の、仲間の一人の呆れ顔に気がつき上条たちから目を離すと気の抜けた顔はすぐに鋭い目つきへ変わった。

一般人に紛れる他の仲間たちの緊張感が空気を伝い、重苦しい。

「『侵入の形跡はない』、と学園都市からは報告を受けちゃいるが……」

「やはり信じられませんか」

後方のアツクア。

彼らの護衛対象、上条当麻を狙う刺客の名前で、建宮ら『天草式十字凄教』の教皇、神裂火織と同じ聖人と言われている男。

そんな男が学園都市を欺き護衛対象上条当麻の元へたどり着くのは容易であらう。

それに加え学園都市側のセキュリティは信用に値せず、キナ臭い。さらにいえば、学園都市は一国家とも言える存在、裏の考えから報告を渋っている可能性も大いにある。

「そもそも上条当麻一人のために、三方が策略を巡らせるってのは妙なよ。まだ俺たちが知らない情報が隠れている気がするのよな」

「つまり、本気で上条当麻を護衛するなら……」

「ああ、そつちも含めて探ってみる必要があるのかも」

天草式にとって上条当麻とは教皇神裂火織の件もあり、好感がある。すなわち価値がある。

けれど他の組織にとっては同じではない。学園都市にとって、イギリス清教にとって、ローマ正教である神の右席にとって、上条当麻の存在がどれほどまでに大きいのか。

巨大な組織をいくつも動かすほどの何かが彼にあるのは明白。

しかしそれが何かかわからず、頭を悩ませるだけだった。

「教皇代理、人の流れが……」

仲間の声にはたと気づく。確かにいたはずの人々が視界から消え失せ、話し声も何も聞こえない。

「俺としたことが、やられたのよな……」

魔術師ならば嫌にでも気がついてしまう。もう袋の鼠だと。

人払いの術式が組まれた中、威圧感を放つ大男の足音が誰もいない地下施設に響いた。

静かな地下街を二人きりで歩く。空調で整えられた暖かい気候のせいか五和の頬は熱を持っていた。

「そういうや、他の天草式の連中は？」

「えつとですね、今も少し離れたところから見張ってくれていると思います。やはり女教皇様がプリエステスいてくだされば百人力だったんですけど」
しかしムードのかけらもない上条の言葉に熱は解けて上擦った声が口から飛び出す。

周りにいるであろう仲間たちのことを思い出しながら笑うも、二人きりのこの状況に何も思っていないのかと少し眉を下げた。

「やっぱり神裂ってそんなにすごいのか？」

「そうですね！世界に二十人といえない聖人なんですから！どんなトラブルだって女教皇様がプリエステスいれば一発です！」

「へー……となるとアイツも同じくらいなのか。こえー」

「え？アイツ？」

それでも嬉々として自分たちの女教皇トツプの素晴らしさを興奮気味に伝え出す。だが上条にはピンときているのかいないのか、別の人物を思い浮かべているようだった。

「車椅子、乗ってただろ？」

「慧糸さん、でしたよね？あのちっちゃい……」

彼の言葉に先ほど別れた車椅子に乗った真っ白い子供を思い出す。南国の海のような煌めく鮮やかな緑の瞳と、おぞましいほど白い髪と肌。金継ぎした青磁を彷彿とさせるセーラーワンピースが似合うあの少女。

あの背の高い男前な少年の義妹だということしか知らない赤の他人で、興味のかけらすらなかったが上条の言葉に思わず足を止める。「そうそう。アイツ元々はクラスメイトでさ、俺よりデカかったんだよ。コギヤルってやつ？なんか、プールサイドでナンパ待ちしてそんな感じ」

「ク、クラスメイトですか……？そそそれは、えっと、仲が良かったのですか？」

「まー、仲良いと思うが。女子の中では話しやすいけど、たまに怖いんだよなー。常識がちよっと噛み合わないっての？高位能力者はみんなそんな感じなんだろうけど」

「な、仲、良いんですか……」

どこか嫌悪感を感じるも、何か放って置けない可憐な彼女が『大人』で、そして上条当麻のクラスメイトだったことに五和は酷く驚いていた。

それはいわゆる恋敵^{ライバル}、という意味で。

クラスメイトならば五和よりも上条に接する時間は増え、愛情は湧きやすい。

出し抜かれている。魔術師の五和には掴めないポジションにいる彼女を恋敵^{ライバル}と呼んで何がおかしい。

「アイツ前に神裂とやりあってピンピンしてたんだよなあ。おっそろしい」

「えっ、ど、どういうことですか!？」

けれどもそんな考えは無駄である。上条も彗糸もフラグは立っておらず、上条に至っては彼女に全く興味を持っていなかった。

恐怖も、愛も、ただの不思議なクラスメイト程度。気にはなるが、放っておけないほどでもない、そんな一般的な男女の友情程度にしか思っておらず、五和が危惧するようなことは何もない。

「五和？どうかしたか？」

「い、いえ！なんでもありません、なんでも！あんまりひと気がないんだなって。せつかく綺麗な夜景なのに」

「まあ、そうだな。夜の学園都市ってこんなもんだよ」

他の女の思い出に耽る上条をさみしげに見つめていると、静かな夜に冷えた空気が押し寄せる。

奇妙な静寂だった。

彼女ら二人以外、そこには誰もおらず循環するぬるい空気が頬を撫でる。

「それにしてはさつきから車も人も……」

緊張の中、音が一つ鼓膜を揺さぶった。

車のエンジン音も、人の吐息も聞こえない道に足音が響く。重い足音が立ち塞がった。

「宣告は与えた」

差し掛かった橋の先、低い男の声が空気を通り、五和たちの視線を奪う。

筋骨隆々とした背の高い男が静かに彼らを見ていた。しゃんとした背筋と凜とした立ち姿が放つ恐ろしく強大な存在感に誰もが口を閉ざす。

この男が『神の右席』の一人、後方のアックアだと、言葉も介さずに理解してしまうのだった。

「貴様の前にはいくつかの選択肢があったはずである。実行し、自分の命を預けるに足ると判断した選択肢がこれだというのか」

アックアは四つの小さな扇風機がついた首飾りを五和の足元へ投げると、残念そうに吐き捨てる。

乾いた金属音が静かな橋の上でこだまする。

仲間のトレードマークが汚され、地面に転がる光景に五和から言葉は出なかった。

「率直に言おう。もう少しまともな選択肢はなかったのかね」

「っう!?!」

次の瞬間、アックアは姿を消し、突如五和に大きな人型の影がかか

る。そして瞬きもできない僅かな時間、脳に轟くような衝撃が後頭部に放たれた。

眼前に星がチカチカと散らばり、揺れた視界いっぱい地面に体が崩れ落ちる。一瞬の出来事に息もできない。

「五和！」

「この世界で起きている騒乱の元凶を排除しにきた。人の心配をしている場合であるか？」

吹き飛ばされた五和に気を取られ、視線が逸れた上条に淡々とアツクアは呟く。その手には、どこから取り出したのか5mは優に超す巨大な棍棒が収まっていた。

「一組織の全体が束になっても勝てなかった相手に、一人で挑んで勝てると思っているのか？」

「私にも、意地があります！」

巨大なメイスに臆さず五和は態勢を立て直し、組み立てた二又の槍を手にアツクアへ走る。

しかし彼と目が合った刹那、脳が理解するよりも早く体に強い打撃をこうむった。為すすべなく五和の華奢な体は柱にぶつかり、苦い液が内臓から逆流し、息が上がる。

完敗だった。手も足もでないと、痛みで朦朧とした意識の中で思う。

護衛対象好きな人に迷惑と心配をかけて、何もできない自分の不甲斐なさや情けなさ。何よりも、自分の名前を呼ぶ彼の切羽詰まった声に喉を焼く胃液のせいでうまく言葉を返せないのが腹立たしかった。

「右腕だ。差し出せば命の方は見逃すのである」

攻撃が止まり、スクリーンに映った月夜を背にアツクアは上条の前に立ち塞がった。

上から目線の強者の言葉は酷く不愉快で、今にも殺してしまいたい。痛みの中、辛い感情が五和の中に生まれていた。

「ふっざけんな！」

「そうか、それならばもう少し現実を知ってもらおうのである！」

大きなメイスが上条の頭頂部目掛けて振り下ろされる。助けたい、

そう思い手を伸ばしても五和の細い手は白い風に苛まれ、届くことはなかった。

「おいおい、夜中なんだからあんまはしゃぐなよ」

吹き荒ぶ風が晴れる。メイスと上条の間に立つ少年の茶色い髪が揺れ、鋭い眼光がアツクアを見据えた。

しばし沈黙が場に満ちる。

眉目秀麗な背の高い少年、垣根帝督が強烈な好奇心と傲慢さを瞳に宿しながら立っていた。

「か、垣根エ!?なんでお前ここに」

「俺に男なんぞ守る趣味はねえが、ただ少し、世界の強さってやつを見てみたくな。付いてきた」

「……好奇心は猫をも殺す。今なら見逃すのである、一般人」

「そう言われてもな、俺にだって立場とか、色々あんだよ」

視界を完璧な白が埋める。

強い言葉を吐き捨て、白い繭が彼の体に広がり、そして花開いた。

それは三対六枚の翼。

補正を掛けたスクリーンの月夜にも引けを取らない美しい白い翼が彼を守り、頭上で回る丸い光輪が癖のある茶髪を照らした。

「熾天、使?」

「神の御使い様がテメエに引導を渡してやる。道を開けて死にやがれボンクラ」

轟音が風を斬る。羽ばたきで起きた旋風は鋭く尖った羽根をアツクア目掛けて吹き飛ばし、風の音で鼓膜を揺さぶった。

その姿はまさに絵画の中の天使様。一介の魔術師信徒に、その姿はあまりにも眩しく、開いた口が塞がらない。

ただただ、何が起きているのか理解するので精一杯だった。

「その翼、確かに天使テレスマの力とよく似ている。貴様は何者であるか?」
「なに、ただの通りすがりの悪役だ」

鋭い羽根を巨体であるにも関わらず素早く躲しながらアツクアは僅かに口角をあげる。ゴルフウェアによく似た白と青のポロシャツに羽根が擦れ穴ができたことに気がつく、男二人の視線が交差し

た。

音が轟く。空へ羽ばたき飛び立つと、広げた翼は姿を変え、白い光線となって幾重にも橋を揺さぶり大きな衝撃波が橋を脈打った。

何回も衝撃が波打つ。

足跡もなかった設置された橋は今となっては無数の穴を開けられ、強い衝撃の痕跡を残していた。

「素粒子を変化させて……？物理法則がねじ曲がっているというのか？」

「おいおい、余所見してる暇はねえぞ」

衝撃によって崩れた何箇所もの穴はそれぞれ違う変化を起こし、まるで違う物質がそれぞれぶつかっただかのようにだった。

何が起こっているのか見当もつかない五和たちとは反対に、アックアは脅威に顔を顰める。

ありえない現象が続く。垣根帝督というたった一人の少年が起こす全てが彼らには理解できなかった。

「ツなるほど、これは手強い相手であるな」

「そりやどーもッ！」

空で瞬く翼が乱反射する細やかな光を地上へと舞い落とす。

ダイアモンドダストと呼ぶに相応しい光だった。

スパンコールのように輝く光の粒は、地面に降りると鋭利な結晶へと姿を変貌させる。

地底を貫くような美しい水晶が剣のようにコンクリートから生え、足の踏み場を無くす。

「だが私とて聖人の端くれ、貴様に負けるつもりは無い」

間一髪でその結晶の先端を躲し、アーチの頂上へ飛び乗るとアックアは強く垣根を睨む。

そして大きなメイスを一振すると、橋の下を流れる川から巨大な水の塊が浮き上がり、空を飛ぶ垣根に勢いよく発射された。

「俺がいるの、忘れてんじゃねえーよー！」

何かが割れるような軽やかな音に水飛沫が飛ぶ。

塊は形を保てず結晶が残る地面に溢れ出し、無様にも浸水していっ

た。

「少し休んで回復した。お前も無理すんなよ」

「無理って、この俺に言ってるわけ？」

「お前が怪我したら、天羽がまた泣くだろ」

少年二人は緊張感を感じさせない軽口を叩き合く。

男同士がよく分からない絆、そんな不確かな何かだけで彼らは隣に立っていた。膝を突いて、息を整えることしか今は出来ない五和には、到底超えられない光景である。

「……でも、脇役だったまには良いところ奪いたいんだよ」

「は？」

「最後の言葉は交わし終わったか？」

二人の声はアックアの恐ろしい低音に掻き消され、誰にも聞こえなかった。

代わりに響くのは高い金属音。

振り下ろされた大きなメイスは上条を背中から殴り飛ばし、鈍い音が聞こえる。柵に引つかかった上条からは、唸るような悲鳴が小さく漏れていた。

「あああうッ！」

「上条さん!!」

「そして、貴様の翼も強度は無限ではないようであるな」

「ッ、うがあッ！」

上条のもとへ向かおうと五和がよろりと立ち上がると、すぐ横を白い物体が横切る。

甘い香りが鼻をかすめ、コンクリートに大きな衝撃を与えて投げ飛ばされたそれは、先程まで上条と言葉を交わしていた垣根だった

「且つ身軽でない。天使といえど、所詮能力で象られた装飾品か」

「……っけほ、掛かるGすら無視かよ、聖人ってやつは」

悪態を吐きながらゆっくりと立ち上がる垣根は舌打ちを鳴らす。

自分も怪我をして痛みがあるはずだと言うのに、彼は常に堂々と、余裕の笑みを浮かべていた。

「す、すぐ手当します！」

「俺はいい、自分の面倒見ろ」

「ツ……！な、なら上条さんにつ！」

「おいツ、うろちよろするんじゃ——」

こめかみから血を流す垣根に駆け寄るも、触られるのも嫌だと言わんばかりの気難しい顔に踵を返し、上条の所へ向かう。

血を流し、荒い呼吸を繰り返す彼から視線を逸らさず、長い槍で地面を叩いて目を瞑った。

淡い光が倒れる上条を包む。

傷が癒えるまで力を、想いを込めて五和は魔術を使い続けた。

けれど

「ツッー」

バキン、と高音が広がり、淡い光は力を無くし消え失せる。

右手に触れた癒しの魔術はその効果を発揮することなく壊れてしまった。

「あ、あ……」

「できねえのわかってんだろ！助けたいなら病院連れていけボケ、それくらいしか今のテメエには出来ねえよ」

なぜ、簡単なことにも気がつかなかったのか。垣根の怒号も放心状態の五和にはただの雑音にしか聞こえない。

全てを打ち消す特別な右手。どんな困難も打ち砕き、どんなしからみもないギフテッド。

そんな神の寵愛を受けた彼はヒーローのようだった。

けれど現実が違う。全て打ち消すということは、何もかも拒むこと。

悪魔の誘惑も、天使の慈悲も、神の運命も拒むその力は、癒しの手を自らの手で砕く。

そんな彼に、五和の癒しが届くことはなかった。

「垣根、そう、怒んなよ……」

だがヒーローは痛みの中立ち上がる。治らない怪我をかばいながら引き攣った笑顔で彼は一歩ずつコンクリートを踏みしめた。

「病院行かなくなつて、大丈夫だ。ありがとな、お前ら」

「待つ——」

叫び。

少年の吐き出すような絶叫と、振り上げた右手の拳が空気を斬る。大きな男に強く握った拳だけを武器に、上条は走り出した。

「ああおおおがああああ!!!」

だが拳は届くことなく、大きなメイスが上条の腹を抉る。

悲痛な声が偽物の空に響き渡り、吐き気を催す鉄の匂いと赤い飛沫が澄んだ空気に飛び散った。

恐ろしい光景だった。目眩が起きる血飛沫と鼻の奥を刺激する臓物の匂い。

上条の体がアーチの柱に押し潰され、ずるずると地面に倒れ最後にはピクリとも動かなくなった。

「……一日待つ」

「あ?」

「麻酔もなくここで引き抜かれるのも酷だろう。義手の準備でもしておくがいい」

そう吐き捨てて、アツクアの姿は消えた。脱力感が五和を襲う。

膝をついてただ遠くに聞こえるサイレンの音をぼんやりと聴きながら、上条に近づく垣根の背中を見つめるしか彼女にはできなかった。

「それで、馬鹿みたいに負けたんだ?」

大きくなってくるサイレンの音に被さるように幼い子供の声が聞こえた。怒りを含んだ冷静な声に、上条のそばで立っていた垣根はぶつきらぼうに振り返った。

「だから行くなって行っただのにね」

「黙ってるクソ女」

白い少女のセーラー襟を勢いよく掴んで苛立った素ぶりで乱暴に車椅子から掴み上げると、途端に声は静まる。

たどり着いた救急車のサイレンが余りにも場違いだった。

最後に見たのは到着した救急隊に指示を出す中華風の気高い乙女と、それを抱える少年に見送られて救急車に乗せられるヒーローの

姿。

悲惨な視界を遮るように、五和は小さく嗚咽を漏らした。

106話：鬱陶しい女とプライド

静かな病院にて、誰も口を開かぬまま時計の秒針が進む。消灯時間を過ぎた病院は薄暗く、天草式以外に人はいない。

そわそわとする仲間達の中、建宮齋字は取り返した首元の小型扇風機を手持ち無沙汰に触りながら医者から話を聞きに行つた仲間を待っていた。

「とりあえず危険な状態は脱したようだ」

沈黙を破るように現れた男が医者からの知らせを伝える。急ぎ足で建宮のもとへ報告にきた彼の言葉に、小さな歓声がチラホラとあがった。

「全身打撲と脳震盪、軽度ですが内臓へのダメージもあるとか」

「しばらくは絶対安静ね」

「対応が遅く、ちゃんとした指示がなければさらに酷かった可能性があるそうです。医者があの子に感謝しろと言っていました」

「あの子？」

胸を撫で下ろし、一先ずの無事を確認できたと言声を含めて喜びを分かちあっていると、男は報告を続ける。

困惑した顔をして医者という言葉のまま伝えたが、名前も知らない『あの子』という単語を建宮齋字率いる天草式は誰一人そのを真に理解できなかった。

「さあ？一緒についてきたあの茶髪の少年のことかと」

「実際の戦闘は見てないけど彼もそこそこの能力者のようだし、なんとかしてくれてたのかもね」

「それは後で本人に聞くとするのよ」

病院に搬送されたのは五和と上条当麻、そしてその友人である少年。

重症だった上条をベッドに乗せて、あとの二人は軽い手当と共に病院まで一緒に乗り込んだと話聞いていた。

五和であれば仲間なのだから『あの子』などという表現は用いない。ならば消去法的に少年のことだと適当に状況を判断し、言葉を濁し

た。

「でっお前さんはそこで何をやってるのよ」

言葉の意図や意味を探るよりよっぽど大切なことがひとつあった。

上条当麻がいる病室の扉を塞ぐ女に鋭い視線を投げると、建宮は苛立つたように言葉を吐き捨てる。

ぐずぐずとすすり泣く女。ピンク色のセーターを涙で濡らし、地べたで膝を抱えて五和は嗚咽を漏らす。

責任感と自己嫌悪、言葉に表せない気持ちにただ泣いていた。

「わ……たし、守るって……そう言って……槍だって、魔術だって、なんの役にも立たなかった……の、に。お友達も……怪我してるのに、守って……私だけ、何もできなくて……」

ぽつりぽつりと五和は強く膝を抱えて俯く。

金属が地面に衝撃を放つ音、脳を揺さぶった強烈な痛み、その全てが忘れられない。

凄惨で悲惨な血飛沫が記憶の中にこびりつき、震えが止まらず感情を吐露する彼女の背中はとても小さく、哀れであった。

「私、あの人の話を聞いた時なんてすごい力を持っているんだろうって思いました。でも違ったんです。あの人はどんな防御術式にも頼ることができない、どれだけ回復術式でもかすり傷一つ治せない。本当に体一つで戦っていただけなのに……」

「五和……」

「私、そんな人を見殺しにしたんですよ」

少しだけ顔を上げた彼女の目元は赤く、緊張で喉が干上がったのか、絞り出した声は掠れている。

人目も気にせず地べたに座る彼女の本音が冷やかな空気の中、長い廊下に響き渡った。

「そんな人間が、なんでこのうのと生きていますか!?なんで天罰が降り注がないんですか!?こんなのおかしい!あのベッドで眠っているのは私の方だったはずなのに——!!」

心の奥を吐き出す叫び。悲痛な声に、誰一人として答えなかった。答えられなかった。

「お静かに」

しかし、誰でもない声がいとも容易くその叫びに答えた。

叫びが轟く廊下の先、全ての視線を奪う。そこにいたのは電動の車椅子に乗った背の低い幼い少女だった。

「ッ……」

「ここは病人が寝る場所、アンタが懺悔を喚き散らす場所じゃないんだよ。アナタたちも、待つなら緊急外来のロビーに行きなさい」

「ごめんなさい、私……」

亡霊と見間違うほど白く、淡い色をした幼い少女が廊下を進む。進むたびに花の香りが舞う彼女に、ここにいる誰もが視線を奪われた。

「それは何に對しての謝罪？」

「……それは」

「ここで喚いたこと？ 悲劇に酔いしれてこんな所で自分語りしたこと？ 守れなかったこと？ 何もできなかったこと？ どれに對しての謝罪かはつきり言ってくんない？ じゃないと、返しようがない」

青磁色のシノワズリの少女は恐ろしく煌びやかな緑の目を歪めて五和を見下ろす。手先の体温が冷える感覚が建宮を襲い、緊張のせい、ただ少女の長い髪を見つめ押し黙ることしかできなかった。

「私はっ……酔いしれてなんか、ありません」

「すごいと思っていました。でも違いました。小学生みたいな言葉垂れ流しておいて、何を言っているの？」

突然現れた彼女が上条当麻の友人が連れていた子だとうやく思いう出すも、少女を制止するタイミングを失い辛辣な言葉が飛び交う。

優しく儂げな雰囲気少女だったが、吐き出す言葉が鋭く尖っていた。

「んなことが仕事を完遂できなかった言い訳になるとでも思うわけ？ 護衛なんだよね？ 上条くんの。それなのになぜアンタが五体満足で、彼が死にかけなの？」

五和の反論に動じもせず、少女は強い言葉を吐き捨てる。蔑む緑の瞳が当事者ではないというのに建宮たちには恐ろしく見えていた。

「アンタたちにも言ってるだよ。『夜のデート大作戦』？ 自分たちの立

場弁えてないのがトップなんて情けないね」

「ッ、なぜそれを……？」

「あたしとは立場が違うよね？上条当麻を無事に守ることが今の仕事でやるべきことだよな？ふざけた言葉で士気を高めるのは構わないけどさあ、TPOくらいわっかんないかな？」

そしてその恐ろしい瞳は五和から建宮たち全員へ向かう。絶対に知り得ない情報を口にする彼女に恐ろしさとは違う、得体の知れないおぞまじさが建宮の脳を駆け上る。

目の前のおぞましい少女が人間に見えない、それほどまでにその一言が亀裂を生んだ。

「恋する感情が邪魔になることくらい分かるだろ、それで失敗したら失うのは立場と仲間だけじゃねえんだぞ。事の重大さ本当に分かってんの？」

まるで仕事で過失を作った部下を論理的に問い詰めるように、声を荒げず淡々と少女は言葉を続ける。

誰も彼女に反論などできなかった。

現実メタを生きた合理主義の正論に対抗する手段など、彼らキャラクターが持っているはずもない。

「分かってねえよな？分かってたら教皇代理、アンタが彼の護衛をすべきだった。それが叶わぬのなら二人体制でも敷くべきだった。大切なキング守るのはいつだってたぐさんの駒だろうが。それすらできなかつたから、今、あたしのクラスメイトは死にかけて、あたしの家族は怪我したんだぞ」

「……申し訳なかつた」

「アンタたち表では普通に働いてんだよな？依頼もまともにできず、依頼側に損害与えて、自分たちは少ない被害で収まるって普通の会社なら解雇もの、なんなら賠償責任が発生してんの。責任なんて取れもしないくせに何が申し訳ないわけ？何に謝ってんのか理解できてる？」

ようやく絞り出した建宮の謝罪の言葉も軽くあしらわれ、話したこともない日常を言い当てられ誰もが口を閉ざして視線をそらす。

いたたまれなかった。

ただの子供に反論の余地なく圧されている。

信じたくない光景に絶句するしかできなかった。

「貴方だって……何もできてない、じゃないですか」

誰もが黙る中、地面から立ち上がった五和が小さく呟く。高いとは言えない背でわざとらしく足と車椅子に視線を移し、少女を見下ろす彼女に緊張感が漂う。

一触即発。女同士のプライドやら愛情やら恋やら、汚いものをかき混ぜた何かが張り詰めて、破裂してしまいそうだった。

「足の動かない、喧嘩もできない子供だから？ 最低な価値基準だな、社会人なら改めたほうがいい」

「……っ」

「確かにあたしは他人なしじゃ立てないし、歩けない。チャーカーを外したら意識だつてままならないし。半身不随、右腕の神経欠如、脳の破損、能力の権限も奪われて。いろんな制約があるのは自分でも分かってる。で、アンタは？ 五体満足で？ 魔術もできて？ なのに何もできてないよね？ ハンデもないくせに、何いつちよまえに吠えてんの？」

だが上手なのは少女の方だ。棚にあげた五和自身の問題を引き摺り下ろして淡々と逃げ道を奪う。

自分に向けられた侮蔑に怒らず、ただ五和たちの過失をよく回る口で責める様は子供に出来る芸当とは思えなかった。

「……なら、貴方は何が出来たんですか？」

「役目は果たしたよ。アンタたちと違ってね」

「何をしたんですか？ どんな素晴らしいことを？ そこまで言える自信がどこに——」

「好きな人に生きて欲しくて代わりに死んだ。これで満足？」

吐き出した五和の反撃に、少女は手のひら程度の大きさのカードを取り出して見せびらかす。

彼女の肩越しに見たそれは、どこかの学校のカード型の学生証。印刷された本人写真には可愛らしく胸の大きい学生が写り、一瞬誰なの

か分からなかった。

しかし、輝く緑と赤の荘嚴な目にはっと気づく。

目の色も、髪の色も、肌の色も、体の大きさも、何もかもが違うというのに、建宮たちは気がついた。

その写真の少女が、目の前で蔑む少女であることを。

「死にそうだったから、あたしが代わりに死にました。そしたら気まぐれか申し訳なさか、こんな不便な体とはいえ生き返らせてくれましたよ。体全てがあたしの希望の証明、彼が生きていることがあたしの『好き』の証明なわけ、わかる!?!」

「何を言って……?」

「確かに、今のあたしはできることは少ないよ。彼に、あたしの好きな人に、上条くんほどではないけど傷を負わせてしまった。治すことも、守ることもできない自分があんた達なんかよりよっぽど憎い」

見せた学生証をスカートのポケットに戻して唾を飲みこみ息を吐き出す。激昂した感情を抑えながら、少女は静かに息を整え扉に手をかけた。

「でもだからと言って立ち止まることはできないの。どんな形でも、あたしにはやるべきことがあるから」

冷たい声で呟いて、少女は上条当麻が眠る病室の扉を開く。

そこは誰も入れるなど言われていた病室。止めようと体が動く前に、目の前の五和が先に手を出した。

「そっちはダメですっ!」

「ッ!?!」

侵入しようとする少女を車椅子ごと押し倒し、くるくる回る車輪が壁にぶつかる音が静寂な夜に響く。地べたに倒れた少女の苦々しい顔にどよめきが広がった。

「ご、ごめんない、でもここは……」

「ここは医療関係者以外立ち入り禁止なのよ。嬢ちゃん、手荒で悪かったが……」

「はあ、むやみやたらと入るわけないでしょ」

誰の手も借りず一人で車椅子に乗ると、今度は別のポケットから名

刺入れを取り出す。面倒そうにその中の一枚を手渡す。

そこには簡素な字で『肉体干渉能力保持特別医療従事者』と書かれていた。

「医療、従事者？」

「そうだよ。このドアをまたげる資格があるの。大学に行つて、博士号取つて、勉強して、大切な人を助けようと頑張つた結果がこれなの。意味わかる？」

大事そうに名刺入れをしまい、彼女は病室へ入る。

自分たちが入れないその部屋にためらうこともなく車椅子で踏み入れた。小さな子供が、とても大きく成熟した大人に見えるほど、彼女の見せた笑顔は冷徹で、恐ろしい。

「入つた学校も、取つた資格も、専攻した学部も、付き合つてきた人たちも、全部たつた一人の愛すべき家族のため。あたし、好きな人を救うために人生も体も潰したの」

扉が閉まる。

最後、隙間から見えた冷たい緑の瞳がまっすぐ彼らを見た。

「それで、お嬢さんは何をなされたんですたっけ？」

再び沈黙が訪れる。小さな少女の恐ろしい姿が脳に焼きつき、恐怖が喉を閉ざす。

もう誰も口を開くことはなかった。

温かいベッドの中で手元の小さなリモコンを弄る寂しい夜、静かな病室の中でガラガラと扉を開く音が聞こえた。

そして次に聞こえたのは回る車輪の軋む音。

「おー、遅かったな」

誰が来たのか音だけで見当がつくと、垣根帝督は少し嬉しそうに口角を上げて少女に視線を向ける。

彼の想像通り、そこには車椅子に乗った自分の義妹、髻糸が少しむくれて病室に入ってきた。

「頼まれごととは終わったのか？ 大変だな、能力もないのに」

「アンタが外見の認識弄ったからでしょ」

「そのおかげでスムーズに上条の容態とか医者に言えたんだし、文句言うなよ」

「……そういうことじゃない」

「は？」

コンビニのビニール袋片手に彼のベッドの車椅子を近づけて、苛立ちを隠さず彼女はため息をつく。

口を固く結んで彼の言葉に返事もせず淡々と袋の中身をサイドテーブルに置く彼女は明らかに怒っていた。けれど垣根には原因が分からず、いつもの調子で接する他ない。

「あー、で、何買って来たんだ？」

「りんご、果物のほうね」

「ナイフは？」

「果物ナイフくらいはコンビニで売ってる」

見舞いの品にしてはありきたりでオーソドックスな赤いリンゴと紙皿を机に並べると、新品の果物ナイフをプラスチックの包装から取り出しリンゴを切り始める。

機嫌が悪いのにも関わらず健気にリンゴを切り分け、せつせと皿に並べる姿は小柄な体型も相まって小動物に見えた。

「それで……傷の方は大丈夫なの？」

「平気。ったく、医者もうるせーよな。頭だから一応検査入院しろとか。こういう時超能力者は面倒だ」

紙皿からひとつ、綺麗に切られたリンゴを手に取り口に含むと、甘酸っぱい舌触りが口腔に広がる。昼から何も食べていない胃袋に小さく甘いリンゴがゆっくりと落ちた。

一口で飲み込むリンゴが空腹を男子高校生を満足させるわけはない。

けれど、垣根のこめかみに貼られたガーゼを見て泣きそうになる少

女に食欲とは違う感情が満たされ、空腹など忘れてしまった。

「それで、強^{レベル}さなんて知って、何がしたかったの？」

「この世界で俺はまだまだなんだろ？蛙だって大海を知りたいのさ」

俯き加減に彗糸はリングを剥く手を止めて、上擦った声で呟く。

大事な人にたとえかすり傷でもつけたくなかったと、彼女の緑の目は強く訴えていた。けれどその思いは垣根にとってはただ邪魔な優しさ。

必要のないもの。

だから自分らしくない言葉を使っても、その言葉を切り捨てたかった。

「……随分と、設^{性格}定にそぐわないこというようになったね」

「お前のおかげでな」

「こんな人間に家族なんて言って、自分の弱さを理解して、しおらしく病衣なんて着てさ」

「そりや神様との邂逅なんて経験すれば悪役だって丸くなるさ」

「そんなこと思っていないでしょ。全部知ったアンタが、なんでこんなとこ居んのよ！」

だが議論は熱を上げ、息を荒げて彼女は手にしたリングを握り潰す。ぼたぼたと小さく柔らかな手から溢れる透明な液体が彼女の服を濡らし、彼が贈った服に染みを広げた。

彼の能力で使った作り上げた特殊な服、汚れることも破れることもない。それでも滴る液体に彼は顔を顰める。

綺麗なものが穢されてくようでも堪らなく腹立たしかった。

「交渉権のために動いてて、それだけが目的だったんでしょ？それが設定^{アンタ}じゃん！家族とか、ヒロインとか、そんなもの一番垣根帝督から遠いものじゃん！」

「今となってはどうでもいいことだ」

ため息交じりに壁に掛けていたスーツからハンカチを取り出し彼女の服と手を拭くと、手が重なる。

濡れた小さな手と、赤いハンカチ。

交わった緑の瞳の奥にあるのは戸惑いと恐れ、彼女の言い様が否定

された結果の動揺だった。

「そうじゃないよね、そんなこと言うキャラじゃないよね。だって、あんなに一生懸命に、」

「もうどうでもいいって言ってんだろツ!!」

引き攣った笑みで並べた彼女の言葉は体が固まるほど低く通る垣根の声で掻き消えた。

思わぬ反論に彗系の手が微かに震え、甘いりんごと花の香りが舞う。

強く言いすぎたと後悔しても遅く、涙を零しそうな彼女の瞳から視線を逸らして口を結んだ。

「……だって、悪役は主人公に勝てないんだろ？」

ようやく出た言葉は自分を正当化するためのもの。強く小さい手を握りしめ、逸らした視線は定まらずただ何も無い床を彷徨った。

彼は結末を知ってしまったのだ。

主人公補正
メタ的設定
神の寵愛を。
世界の理を。

主人公になれなかった現実を。

一生覆らない真実を。

誰も彼もが救われるエンディングを知った。

第一位が欲しかった地位をとってしまふことを、彼は知ってしまったのだ。

それが戦意を削ぐ。彼が成し遂げたかったことは嫌いな格上に掻つ攫われ、勝てない役者だとバラされた。

ならば今ある『唯一無二』を大切にすべきだと、そう感じるのはおかしなことだろうか。

「……じゃあ、勝たせてあげる」

「あ……う」

まるで責めるような言葉に彼女の思考回路をよく知る彼は酷く後悔するも、予想と反して彼女の口からこぼれたのは謝罪でも怒りでも僻みでも蔑みでもなかった。

それは恨みを持った、狂気に満ちた、覚悟を決めた、決意にみなぎっ

た、強い女の言葉だった。

「おい、どこ行くんだよ」

「必要なもの、取ってくる」

くるりと車椅子を動かして、リンゴの残骸を残し彼女は病室を後にした。甘酸っぱい果物と尊く甘い花の香りが充満した部屋でひとり、垣根はベッドに体を預け布団にくるまる。

能力を使えない、足の動かない少女に何ができる。

拗ねて、こじれて、見栄っ張りな少女が飛び出した先にできることなどないというのに。

しかし毛布の中で不貞腐れていても大事な妹であることに変わらない。

金も多く持たせておらず、一人の子供。夜の学園都市で何が起きるかなど深く考えなくてもすぐに最悪の予測はつく。

仕方ないと、もぞもぞ毛布から顔を出して適当な個体を一匹、監視役として飛ばす。

心配よりも拗ねた彼女への苛立ちとプライドが勝った。

どうせすぐに音を上げるだろう。何もできない子供、すぐにホテルか彼のいる病院に向かうしか選択肢はない

心配することは何もないと、リンゴの置かれたサイドテーブルを横目に彼は目を瞑った。

107話：天の御使い、その仕事

天井を埋めるスクリーンに映った鮮やかな夜空が木々が生い茂る公園を照らす。

そこに居たのは一人の男だった

よく鍛えられた筋肉と、高い背がとても目を引く男が耳元で音声を垂れ流す電話にため息を着く。

『殺すのをやめて右腕を奪うに留まるとはな、神の右席は己の方針を変えないものと聞いていたが』

「あの少年の特異性は右腕に集中している。それを奪えば脅威は排除されるであろう」

『件の少年はまだ神を知らぬと聞いた。それをただ殺してしまうというのは正直反発がある……ヴェントには笑われたがな』

上司にあたるローマ正教の教皇の言葉に彼、アックアは答えると電話越しから柔らかい声が聞こえた。

神を信じる真摯な信徒だからか、電話相手は彼の返答に少し安堵したようだ。

「私に何を期待しているかは知らぬが、私は貴方ほど善人でも博愛主義者でもない。殺すべき時が来たら殺す。それだけの話である」

「随分と甘く見てるのね」

電撃が走るような気配にアックアは通信を切る。

突如として現れた知らない少女の声。そして凄まじい気配。

聖人に引けを取らない強烈な存在だった。

「……日本にいる聖人は、背の高い女だと聞いていたが」

「アナタにはあたしが聖人に見えるんだ？」

白で作られたシノワズリの少女。紫陽花柄のワンピースと長い髪、そして鮮やかな碧眼が印象的なその子供は、体と同じように白い車椅子に乗っていた。

聖人のような何か巨大な力を抱えた少女だと、アックアは直感する。

彼女自身か、それとも繋がる別の何かか。厳かな少女から感じる気

配はまるで深淵に潜む神のようだった。

「否、似たような何かと形容すべきか。何者である」

「天使様だよ、見て分からないかな？」

「けらけらと、冗談を言ったかのように明るく、そして嫌味つたらしく歯を見せ笑う。」

その言葉に先程ぶつかりあった少年の姿を思い出すのは必然。六つの翼を持つ熾天使の特徴をもった少年の力強い攻撃が頭を過ぎる。

学園都市が作った天使、それも形を模しただけの粗悪品バナモン。本物と近いアツクアにしてみれば、あの少年も、目の前の天使を語る能力者と思しき少女も、ただの戯言を繰り返す愚かな科学の子にしか見えな
い。

「何匹の科学レブリカの天使が来ようと、私が臆することはない。少女、今すぐ帰路につけば見逃すのである」

「見逃す？それはアナタが言うべき言葉じゃない？」

十歳ほどの幼い子供。それも車椅子に乗った小さい少女は、本来ならば大人が守らなくてはいけない存在。

敵である前に、大人。形ばかりにでも恩情を与えなくてはなら
ない。

しかしその恩情を馬鹿にするかのように、少女は甘い香りを漂わせ
て小さな刃物を袖の中から取り出した。

林檎の香りがする小さな果物ナイフ。可憐な少女が持つには相応
しくない無骨で鋭いナイフが大きな満月の光を反射する。

目に見える殺意がそこにあった。

「猶予は与えた。愚かな少女、その選択に後悔しても遅い」

「後悔するのはそっちだよ」

少女の高いソプラノ声が月夜に響く。姿を晦まし、アツクアの目の
前にはカラになった車椅子が静かに車輪を回った。

冷たい空気が肌を刺す。音のない林の中、自然と目は上を向いた。
「言っただろ、本物だって」

月を背にし、翼を生やした恐ろしい生き物が緑眼を光らせ空を飛
ぶ。その頭上で回る丸い輪が淡く光り、少女を照らした。

背中から生えた五対の翼。

そして腰を支える小さな双翼と、スカートから伸びる動かない足の人形のように操る一対の翼。

合計七対十四の翼。

異様な姿だった。その数に該当する天使は彼の中で一つしか思い当たる節はなく、口の中で舌打ちを鳴らす。

「……アザゼルか」

天使であり悪魔である存在がいる。

ノアの箱舟のその前。塵人の子を見張るため、神に遣わされた天使の軍団がいた。

その名は『見張る者』

十字教の一派には天使として認められていない異質な存在。なおかつ彼らは他の天使と違い巨大で睡眠を必要とせず、肉体があり、そして罪を犯していた。

彼らが犯したのは死より重い罪、神への裏切りである。

彼らは恋をしたのだった。リリスに唆された始祖の子供達、監視すべき塵の子らを孕ませ、娶った。

そして恋に盲目となった見張りたちは全てを教え、巨大な子供達が生まれ、世界が腐臭漂う混沌となる。

そのグリゴリたちを指揮する天使こそアザゼルであった。

神に力を与えられた者

神が創った者

神如き強者

様々な異名がある彼は、七つの蛇の頭、十四の顔、文献によって異なるが六対十二、または七対十四の翼を持つと言われる巨大で恐ろしい天使。

彼は男に愛するものを守る武器と防具を、女に愛するものを振り向かせる化粧と宝飾を。

そして魔術を教えた。

それが神の逆鱗に触れてしまう。

溢れ出た洪水が世界を飲み干し、選ばれた者ノアの孫と生き物だけを残して

全てを始まりに戻した。

人の祖、魔術の祖。

多くの謎がある天使の一人と同じ記号を持つ少女に悪寒が走るのも無理はなかった。

「神を嫌い人を愛する天使なんて、とてもいい響きじゃない？」

「魔術師でもないのに魔術の始祖を名乗るとは、極めて不愉快である」とんつと軽やかに少女は木の枝に留まる。体重も重力も感じさせない姿は人間とは思えなかった。

本当に、聖書の中から飛び出した異形の存在のようだった。

「天国の肉体と、天を落ちた魂と、神と繋がった大脳。そこらの聖人だとか魔神だとかと同じものだと思わない方がいいよ、ミスター」

「それはこちらの台詞だ！」

月の光で伸びたアツクアの影から巨大なメイスが出現する。

掴んだ柄を大きく振りかぶり、少女目掛けて凄まじいスピードで棍棒が迫った。小さな体など吹き飛ぶ力が少女を殺さんとスピードを上げる。

しかし生身の人ならば死ぬことが確実な攻撃は、アツクアの思惑と反しピタリと宙で止まった。

火花を散らし、メイスが勢いを無くす。

力を受け止めた少女の手には、何の変哲もないただの果物ナイフが刃こぼれもせずに握られていた。

「ツなに……!!!」

「素晴らしい材料で作った武器が力を持つわけじゃない。行動を起こした人が英雄ヒーローと語り継がれるように、武器を手にした人の価値が力を持つ。本物の神が手にしたのなら、それは木の棒であっても力もつ武器になる」

魔術的な要素も感じない一般的な果物ナイフ。それも買ったばかりで、使い込んだ様子もない安物。

予想だにしない光景に後退し、アツクアは手に力を入める。

聖人の雰囲気醸し出すとはいえ、所詮ただの子供。同じ聖人でも大人であるアツクアの力を受け止めるほどの力を、子供の細い腕が受

け止められるとは思えない。

何かトリックがあるとしたか考えられなかった。

「たかが小娘と侮るなよ、お前の眼前に立つのは本物の神の子であることを忘れるな!!」

「天使の次は神の子か。随分な虚勢であるな。その生意気な言葉、いつまで続くか」

アックアの地面を揺らす音が地の底からくぐもったように響く。

地下のパイプを伝い、地面を裂いて現れたのはクジラのように巨大な水の塊。木の上で羽を休める小さな天使を飲み干すために、吹き出した上水が勢いよく降り注ぐ。

「やだ、あたし濡れるの嫌いなもの」

だが少女の言葉に水は重みを増し、軌道がズレて地面に落ちた。

雨と土の匂いが強く香る。水と混じって湿った砂利の上、地面に降りた少女は豪華な翼を広げてじっと彼を見つめていた。

「土……ういや、砂であるか?」

「正解。アザゼルのルーツ、ご存知でしょ?」

地面から数センチ浮かぶ天使は飄々とした笑顔を見せる。

水に濡れることも無く、砂利で靴が汚れることも無く彼女はそこに佇んでいた。余裕の笑みが腹立たしい。

確かに彼女の言葉は正しかった。

アザゼルは天使であるにも関わらず他宗教から組み込まれた多神教の神。

シリアからきた砂漠の神。すなわち神格である。

「……相性は最悪か」

「理解が早くて助かるよ」

水は砂の重みで愚鈍になる。そして土に伝わり分散する。

分が悪い。

「……聖母の慈悲は嚴罰を和らげる時に、神の理へ直訴するこの力。慈悲に包まれ天へと昇れ」

——これは本気を出さねばなるまい。

呪文を唱えて空に跳ぶ。

神の子の力と天使の力、そして慈悲深き聖母の力。全てを束ねる呪文。

体を集まる力をメイスに委ねて、渾身の一撃を少女に向かって放つ。

彼女に逃げ場はない。

命乞いをして、もう止められない速さの攻撃が空気を切り裂く。頬を掠める冷たい風の先、少女が目を細めたのが少し気がかりだった。

「私は主の端た女です。御言葉通りこの身に成りますように」

彼女が口にしたのは命乞いでもない、呪文のような何かだった。

それは絵画の台詞。物語の台詞。

フラ・アンジェリコ作『受胎告知』

ルカの福音書01章38節に記されたラテン語の頭文字。

ガブリエルによって告げられた受胎を聖母が受け入れる場面での聖母の言葉。

魔力の籠つていない、魔法の呪文。

その言葉に、アックアから力が抜ける。彼の唱えた慈悲の呪文がなかったことにされた、そのような感覚だった。

「っ!?力が……!?!」

「あたしはね、言われたの。愛してるって!お前をずっとみているって!お前らが請い願う神に!」

天使が顕現する間はその術式が使えない。

ならば、本物の聖母が顕現しているのならば、聖母を使った呪文はどうなるだろうか。

恐ろしい予測がアックアの脳内を巡る。

目の前の小さな少女が持つ可能性が恐ろしかった。

「マタイによる福音書、03章17節「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」、その言葉はあたしを神の子として定義する。ならば、神の子とへその緒で繋がれ、紛うことなき遺伝子で結ばれた母と同じだっておかしくは無い。神も認めた乙女なら尚更」

少女の愉快そうな笑い声が響く。してやったと馬鹿にする悪役顔

に苛立ち、躲されたメイヌを握る手に力が籠った。

少女は本物であった。

外側から現れた異次元の存在。それを定義するのは難しく、何万通りに『設定』を書き換えられる。

偶像ではない、無限に再定義可能な唯一無二。

誰にもその輝きを穢すことはできない。

「造られた天の器と、天へ昇った魂、そして神と繋がるこの想い。純潔で、女で、おまけに藍色を冠するこの名前。さて、どちらがより本物らしい？」

「そんなこじつけの理論で神に至れると、本気で思ってるのか」

「それがこの世界だろうが!!偶然配置した土産が術式になって!偶然生まれた子が神の子と同じ何かを持って!偶然つけた傷や日用品が儀式になる!紀元前の創作物を本物として扱って、それを解釈してこじつけて、思い込んで!それが巨大な力になる!それがこの世界のルールだろうが!」

果物ナイフが鋭く光る。喉が軋むほどの叫びを響かせ、小さな体がアックアの懐へと潜り込んだ。

「変幻自在のこの魂に恐れ懼けクソガキ!この神如き強者がテメエを極寒の地へと叩き落としてやるッ!!」

次に感じたのは衝撃。

メイヌで受け止めた重みは、可憐な少女が出せるようなものではなかった。踏んだ地面から浮き、アックアの巨体は引き摺られ、メイヌからは火花が上がる。

辛うじて押しとどまるも、地面に引き摺られた跡が残っていた。

「ッ!!出鱈目ではないようであるッ!!」

「アザゼルには多くの逸話がある。不浄の悪魔になったと、人を唆すリリスそのものだと、おぞましい概念そのものだと、更正しザドキエルと名を変え天使に舞い戻ったと。謎深き異邦者の一人。巨大であり、人と子を成せる超次元の神格」

空に浮かんだ少女は目を細め距離をとったアックアを鼻で笑う。挑発的な言葉と全てを見透かしたような冷たい瞳が恐ろしい。

「……貴様こそが、天使の中に紛れた『神』と言いたいのか」

「あたしも同じと言いたいのさ。神の言葉と天の血肉を持つこの体だからこそ、あたしは何にでもなれる!!この身を偶像と再定義すれば、あたしは人類の母にも!堕ちた御使いにも!清らかな天使にもなれる!人に紛れた無貌の神にもな!!」

「ふざけたことをツ!!」

「おふざけ?ふざけてるのはそっちだろ、ウイリアム||オルウエル!」
再び両者の武器が交わる。土埃を巻き上げ、風が起こる。

「ツツ名前を……!?!」

「医療の整っていない地域に薬草を伝える?飢えに苦しむ村にゴボウの調理法を広める?」

「知るはずもない名前を高らかに叫び、小さなナイフで少女は受ける攻撃を受け流していった。

「違うだろ!!金使って病院建てろ!薬草とか漢方って、お前医大出てるのかよ!出てんならなんで人を殺す真逆の職業ついてんだテメエ!」

鮮やかな橙色の火花が散る。強い花の甘い香りが舞い、何も無い静かな空気が華やかに色づくような錯覚が続く。

神の香り、天の匂い。ペースを乱し、この場を支配するのはただ一人、可憐な乙女であった。

「高校生のガキ一人に馬鹿げた力使ってさあああ!!!何が聖人だ!何が賢者だ!何が聖母だ!辞書でも引き直してこい!!」

「ぐツうつつ!!」

「言い返せるもんなら言い返してみろウイリアム||オルウエル!
このあたし神の御業を信じないというのなら出来るだろう!!」

細身の果物ナイフが5mを優に超える巨大なメイスをはたき落とす。そして気を取られた瞬間、アックアの足が地面から浮き、数メートル先の木へと体が叩きつけられた。

苦い味が口腔に広がる。込み上がる吐き気と悪寒がアックアに初めて揺らぎを与えた。

少女のおぞましい瞳から目が離せない。厳かに輝く緑の目が恐ろ

しかった。

「ツ……貴様は何者である？」

「あら？ 発言権は勝者^{あたし}にあるのだが？ 誰が質問で返せと言った？」

「……」

「あー、とにかく本題に入りましょうか、ミスターオルウエル」

開いた口は少女の強い言葉で閉ざされる。

それでも疑問は消えない。まるで本物の天使、神と繋がる怪物が現世にいることが信じられなかった。

魔法名を名乗らない科学側の人間。だというのに異様に聖書に詳しく、神の右席に詳しいような素振りを見せる不思議な少女。

おかしいと思うには十分すぎる違和感が確かに彼女にあった。

けれどそれを問おうとしても、口は思うように開かず声は出ない。

魔法にかかったようだった。彼女に逆らうことは許されない、そう思わせる魔法に。

「天使には神託を伝える務めがある。それはご存知？」

舞い降りた天使は優しい微笑みを携えて膝をついたアツクアを見下ろす。

唐突に告げる言葉に脳がフリーズし、動かない。突飛な言葉、けれどそれに茶々を入れる気も起きず、彼女の言葉を待った。

「この先、国を揺るがすクーデターと、世界を揺るがす戦争が起きる。お前の愛する世界と、愛する国と、愛する王女が無くなるかもしれない大きな事件だ」

「なにを言っ……？」

彼女の言葉は支離滅裂で、突拍子もなく、意味の理解できないものだった。

「全てを知る神の言葉を聴き、御使の願いを叶える気はあるか？」

男の眼前に降りたのは救済の糸。

おぞましき少女の差し出した小さな手。それを掴むか否か、眩しい光輪と広がる翼の前では考える余地などなかった。

108話：神隠し

窓の外で賑わう雀の鳴き声に薄く目を開く。

家とは違うベッドの硬さに苛立ちながら身体を起こすと、自然と溜息が零れた。

「クソ眠い……」

毛布を剥ぐと一気に体が冷える。鬱陶しい茶色の前髪をかき上げて寝惚け眼で空白のシーツを見つめると、垣根帝督は眉をひそめた。人型の湯たんぽがない。いつもなら文句を言いながらも渋々一緒にいる面倒見のいい義妹の姿がなかった。

——あの女、まだ拗ねてんのか。

昨夜の口喧嘩を解決しないまま飛び出していた彼女、『元』天羽捰糸の現在の姿を思い出す。

自分の手で捕まえておけばよかったと後悔しても後の祭りというもの。自分しかいない病室に寂しさを感じてしまう。

「そうだ、病院……検査入院とかだる、バックレちまうか……」

良い睡眠導入薬が不在だったせいはまだ眠い。重い瞼を擦りながらベッドから降り、ふと外をみる。

心地よい秋空が広がる窓の外。澄んだ空に浮かぶ雲がゆつくりと流れ、静かに時間が進む。

「つたく……あー、ナンバー50、捰糸の様子を——」

意地になっても仕方がない。

意を決して昨晚妹の足取りを追わせたダークマターで作られた一匹の兵隊に接続する。

「……繋がらない？」

しかし一向に意識は接続されない。

少女の足跡も見当たらず、忽然と彼のテリトリーからその気配が消え失せた。

冷や汗がじんわりと頬を濡らす。最悪な予測が垣根の脳内で巡る。感じたこともない恐怖が彼の体を突き動かした。

上条のネームプレートが書かれた病室の前、慌ただしく扉に手をかける。

珍しく焦りを見せる垣根の額には冷や汗が浮かんでいた。

「おい!!上条いるか!？」

「うおっ、なんだなんだ、どうした」

閉じた病室を勢いよく開くと、中にいた人物が驚いたような顔で目を見開いた。

音を出すなどとかやく言う目障りな女がいないからか、慌てる垣根には他人の迷惑など脳の隅から消え失せていた。

「あ?取り込み中か?」

「いや、ちょうど今から取り込むところだったからセーフだ」

「垣根帝督……貴方も巻き込まれていたんですか」

ズカズカと病室に入り込む垣根だったが、中にいた上条以外の人物と目が合うと少したじろいだ。

上条の周りを囲む自分と同じぐらい背の高い女性と、小柄な女性。

見覚えのある女性二人の視線は上条から垣根に移る。

なんとも言えない微妙な空気が少し気まずかった。

「神裂がいるってことは、アックアの方はどうにかなったのか」

「それが……」

「なんだよ」

五和と神裂火織が顔を見合わせ口籠る。病衣の上に纏ったいつもの赤紫のジャケットに手を入れ彼女らの言葉を待つが、バツの悪そうな彼女たちの表情に何処と無く先の展開が読めてしまっていた。

「……アックアの気配がないんです」

「気配が?」

「はい。私たちも何が起こっているか全くわからないのですが、とにかく昨晚から彼の気配が忽然となくなったのです」

物語と同じ結末。しかし彼女の重々しい口調から同じように解決されていないと察する。

逃したか。

物語の結末を知っている垣根にとって、彼女らの報告は神経を逆撫でするような代物だった。

「……つまり、アックアは学園都市から自国へ戻ったってわけか」

「え、ええおそらく」

「つーことはもう俺を追いかけてねえのか？たまには上条さんにも運が向くってわけですね！」

自国へ戻ったと思われるアックアに一つ悪い想像が垣根の頭を過ぎる。

痕跡を消して何処かへ逃げた自分の義妹。この世の全てを知り、神に愛される奇跡そのもの。

正義感が強く、好きな人を置いていってでも野望を成し遂げようと努力する生まれながらの異常者。

その彼女を見張るはずだった接続も感知もできない自分の能力で作られた生物型の端末。

そして次の舞台で役割を持つアックアの失踪。

接点があると、直感が伝える。

「そういうえば貴方はなぜここに？急いでいるように見えましたか」

「……もう、解決した。戻る」

肉体と魂、その双方が彼の監視から離れ行方知れず。大切なものが二つ、知らぬ間に彼の手から離れていた。

感じるのは怒り。自分のものが勝手に行動した独占欲と執着心が生み出した怒り。

そして何も言わずに去って行った事実喪失感が沸き起こる。

初めて感じるものだった。苛立ちと腹立たしき、喪失感と虚無感。遣る瀬無い感情に、戸惑いつつも口を強く結ぶことしか今はできない。

妹は次の舞台へ向かった。それも一匹の監視個体と魔術側の男に何か細工を施して。

もうここに用はなかった。女を侍らせる幸せ者の主人公も、そのヒロイン達も興味ない。

ただ一人、自分の義妹（ヒロイン）のことしか頭になかった。

話に追いつけていない女性陣を置いて垣根は静かに部屋を後にする。

混乱する感情を押し殺して、ただ冷静に、小さな人形への制裁に考えを巡らせていた。

雲の厚い空の下、一人の少女がいた。観光客で賑わう時計台の歩道橋の上、下を流れるテムズ川をガラス張りの足元から眺める可憐な少女は小さくため息を吐く。

「本当に暗い国だね、相変わらず」

人形のような少女。

白い肌、白い髪、鮮やかな碧眼。そして車椅子。

通行人の視線を奪う華やかな少女は、動かない両足に手を置いて遠くを見つめる。

ぼんやりと眺める雲はゆっくりと動き、微かに雨の気配がした。

雨の多いこの国で厚い雲を見ない日は多くない。ぽつりぽつりと窓にぶつかる柔らかな雨が、賑わう観光地をどこか蔽かで静かな場所に感じさせた。

「テメエの鬱陶しい顔と同じだな、メンヘラ」

「……うるさいよ、ナンバーファイフティ No. 50」

涼しい雨の音に被さるよう、若い男が少女に話しかける。

近寄り難い少女の頭を撫でる眉目秀麗な少年はとても愉しげに笑っていた。

「つれないなあ、親しみを込めてホワイトくんって呼んでくれたってかまわねえんだぜ？」

「それは違う人キャラでしょ」

アジア人にしては背の高い茶髪の少年が車椅子の後ろに回り、少女の耳元でくすくすと笑う。

白と茶の髪、緑と黒の目、そしてイギリス人の目線では10歳にも満たない少女とハイスクールに入ったばかりのような若い少年。その傍らには人ひとり入る大きな黒いスーツケースがあった。

「早く行くよ、時間もないんだから」

「あー、待ってっの、置いてくなよ」

外見と年齢差が無ければ仲睦まじいカップルに見えるほどの距離感で、彼らは橋を渡る。

どこか違和感のある二人組は橋を降りて目的がないようにフラフラとタワーブリッジを後にした。

誰にも見えないエレベーターの中、少年はため息をひとつ吐く。

「それで、小さなマスター。今後のご予定は？」

赤い瞳、黒い塗料を流し込んだような口の中と眼球。そして少女と同じように真っ白な服と肌と髪。

垣根帝督と瓜二つの姿をした彼は手持ち無沙汰と言わんばかりに小さなリモコンを意味もなく弄り、少女と手を繋いで目を細める。

「世界征服。あとサヴィルロウでショッピングでも」

酷く愉しそうににんまりと。彼らは繋いだ手を強く握って、雨が香るロンドンの地に降りた。

109話：覚悟

開いた窓から吹く風がカーテンを揺らす。茶色い髪を撫でる優しい風は、少し騒がしい病室に新鮮な空気を入れた。

「垣根さん、元気ないっすね」

「せっかくケーキ買ってきましたのに」

「ずっとこんな感じなの」

病衣を着込み、見舞客に目もくれずベッドの中で本を読む垣根の姿に彼らは困ったように顔を見合わせる。

いつもの輪っかをつけていない誉望万化に、落ち込んだ表情を向ける弓箭獵虎と杠林檎、そして彼女の上に乗った白いカブトムシ。何も見えない、何も聞こえない、そう言わんばかりに垣根は露骨に体を逸らす。

虫の居所が悪いというのに、呑気に心配——誉望の場合は怒りが爆発することに怯えているだけだが——されて押しかけられて、うるさく読書の邪魔をされるのが腹立たしい。

「そっとしておいてあげなさい、天羽さんが行方不明で傷心中なのよ」

「えっ、ついに逃げられたんスか？確かに、垣根さんってDVモラハラ気質ありそうですね」

「あつ、誉望さん、それ禁句……」

「え」

心理定規が肩をすくめると、誉望は自分の発言がいかにも悪手だったか顔を青くして理解してしまう。

殺される、誰もがそう思った。

しかし予想と反して荒んだ声で凄まれることも、大きな打撃を受けることもなかった。

「怒らない……？あの垣根さんが……？」

「本当に元気ないわね。変な病気なんじゃないの？」

「垣根さんが落ち込んでるところ、なんか新鮮ですわね」

あの少女の部屋で散乱していた本の束から無断で拝借してきてもらった複数の本の紙の匂いが垣根の鼻をくすぐる。

彼女の話によくでてきた『神曲』とウエルギリウスの詩集、教育学、医学の専門書、アイザック・アシモフやらラヴクラフトを筆頭とした英語やドイツ語の小説、政治哲学で有名な『リヴァイアサン』。

手に持った旧約聖書もその一つ。

異様に多い知識はここからかと、偏ったジャンルにため息が出る。

年季の入った本の手触り。その感触に持ち主の面影が脳裏に浮ぶのも無理はなかった。

「……天羽、早く帰ってこないかな」

「私たちが探してあげられないんですか？」

「あの機密情報多いし、俺らの権限じゃ無理かと……」

どう考えても、空っぽになった垣根の状況は、いなくなってしまうたあの眩しい少女が関わっている。そう思っても、部下と保護下の少女には出来ることはなく。

黙ったままの垣根を見つめ、突破口を必死に考えることしか出来なかった。

「貴方、この監視カメラカブトムシ沢山いるって話してたじゃない。自分で探せないの？」

「……無理だ」

ようやく、呆れたような心理定規の言葉に垣根は固く結んでいた口を開く。

読んでいた本を閉じ、ため息混じりにこめかみに手を当てる彼はどこか寂しげだった。

「その……お恥ずかしながらマスターに内緒でデータのバックアップをしていたサブの個体を彼女に奪われまして……」

「アカウントのバックアップから喋ることも人の姿になることも出来る個体だ。しかも、自分に忠順な05のデータ、監視の目もどうにかできる」

垣根曰く、探し人である天羽彗糸は味方を作り出して彼の監視網を内部から崩してとのこと。

つまるところ、彼に天羽彗糸を捕まえるのは不可能であった。

それに、『外』にいる彼女を見つけるのは困難である。

二度と会えない。そんな馬鹿げた妄想が垣根の脳裏に蔓延る。

あの金髪の眩しさを、血肉の柔らかさを、もう感じることは出来ないと、そんなありえない想像。考えたって仕方がないというのに。

「他にも色々理由はありますが……『本人』がいないので強硬手段に出れないと申しますか……」

「『本人』？」

「いえ、何も」

彼女は消えてしまった。全て、消えてしまった。

残るのは生活の痕跡だけ。

彼女の肉体も、能力の権限も、すべて奪われ消えた。

肉体さえ残っていれば接続を切れればいい。

能力の権限さえ残っていれば全員洗脳して無理矢理にでもイギリスに向かえばいい。

けれど、学園都市には何も無い。何も残されていない。

だから垣根は静かに病院に隔離されていた。

第二位という格タイトルが邪魔をし、スクールという立場が妨害する。

無力だった。

改めて気づかされる事実には垣根の口からはため息しか出ない。

「それで、皆様はどのようなご用件で？ただのお見舞いに来るような方々とは思えないのですが」

「ああ、そうだった。お仕事の話をするついでだったのよ」

「仕事？」

落ち込む中、ノートパソコンがひとつベッドサイドの机に置かれた。

何の変哲もないノーブランドの黒いノートパソコン。それが何を意味しているのか、垣根帝督はよく分かっていた。

「こんな状況で仕事って……つかスクールはこの間のことで謹慎くらっただろ」

「まあ、あの件は何故か伝達不足の認識齟齬による不運な事故って処理されていますしね」

十月九日以来、彼らは暗部組織として活動を停止させられていた。

それも責任を問われずに。

それは喜ばしいことではあるが、喜ばしいからこそ不穏であった。怒らせたはずなのに静かに笑っている人のように、得体の知れない怖さを感じる。当たり前前の叱責を受けないこと、それが異常にも恐ろしかった。

「でも休みも働くって垣根さん可哀想ですな……よっぽどの用件なんでしょうか」

「さあね。ものは届けたし、私たちは帰りましょ？」

パソコンを受け取ったことを確認すると、生意気な部下達は見舞いの品をおいてさっさと病室から出ていく。

面倒事に巻き込まれたくないのは誰しもが考えることだが、こうもあからさまにされると少し腹が立つのが人間というもの。

一気に静かになった病室。

あの子が居れば静かにならないというのに、なんて、見当違いのむしろやくしやする腹立たしさをどこかへ消えた妹にぶつける他なかった。

「林檎も、家戻ってろ」

「また後でね」

「ご心配なく、マスター」

上目遣いで心配そうに見つめる林檎を05と共に退出してもらおうと、大きいため息を吐いて、意を決してパソコンを開いた。

フルスクリーンにされた通話画面。sound ONLYの文字列に強烈な嫌悪感が垣根の中で湧き出ていた。

「携帯没収されたし、連絡手段がないとはいえ、部下にこの姿を見せるのはどうかと思うんだよな、クソ野郎」

『そう悪態吐くなよ、お前にとつて悪い話じゃないだろうしな』

手に持ったパソコンがプレッシャーを生む。善人に絆されすぎた今の垣根にはその重みは耐えきれない。

「つか仕事は俺じゃなくていいだろ。第一位にでもやってもらえ」

『ほう、君が言うならそうするが。でもいいのかい？君の妹を第一位に預けて』

話したくもない相手、口も利きたくないというのに、軽い口調の通話相手は垣根の感情を気にすることも無く話を始めた。

それでも、彼の関心を釣り上げるかのようにわざとらしく彼女の存在を匂わせて。

「んだと?」

『彼女が今イギリスにいるのは知ってるね?』

「ああ、それが?」

嗅がざるを得ない発言に、机の上に置かれたパソコンに目を向ける。

思わせぶりの口調。駆け引きがしたいのか、回りくどく本題に移らない報告者に、苛立ちが増す。

かと言って喜ぶように話に食いついてもいけない。

『そのことで上が少しピリピリしていてね。君に白羽の矢が立ったわけさ』

「俺にその駄犬を躡直して引き戻して来いつてか?」

『いいや、違うよ第二位。女を知って丸くなってしまったかい?自分の仕事すら忘れたとは』

「あ?」

読んでいた本がカーテンから流れる風に揺られ閉じる。

緊張感がひりひりと垣根の体を焼く。

『死を持って償わせろ、義妹の罪を』

舌が冷える。喉が干上がる。

パソコン越しの無機質な人の声が静かな病室に響く。

「ツな……」

『彼女は学園都市の敵だ。それを叩くのがスクールの役目、分かっているな?』

淡々と、言葉が突き刺さる。

逃げ場のない命令に口が動かない。

『早く迎えに行つてやれ』

通話が途切れる間に聞こえた小さな呟きを聞き逃さなかった。

ブラックアウトした画面に写った彼の端正な顔に薄っすらと笑みが浮かぶ。

見つかった抜け道に、乾いた笑いを浮かべながら強く聖書を抱きしめる。音のない病室で彼は瞼を閉ざした。

豪華絢爛な屋敷マンションの前に少年は立つ。垣根帝督そっくりな少年はある程度の見回りを終え、主人の待つこの大きな屋敷に帰ってきたころ。

しかしこの屋敷は主人のものではなかった。

大きな玄関を通り、長い廊下を進む。落ち着いたインテリアで統一されたクラシックな空間。

奥の大広間から香る紅茶のような甘い匂い。フルーツと木々が香る煙が纏わりつく。

「……まーた人が増えてねえか?」

香りの強い一室の扉を勢いよく開くと、何十人もの人間が一人の少女に群がる光景が真っ先に彼の視界に入る。

「根回しは必要でしょ?」

「そうかも知れねーけど、だからと言って多すぎ」

星が輝く瞳を持つ女や男に囲まれ、煙を吐き出す美しい少女。彼の赤い瞳と黒い眼球と目が合うと彼女は眩しい緑の目を細めて笑う。

個体ナンバー50の飼い主。白いパイプに口づけを落として甘い吐息を吐く姿は十歳前後の子供とは思えないほど狂氣的だった。

「仕方ないよ。議会の人間つてのは一人洗脳した程度じゃダメだし。

民間の企業も、マスコミも、それぞれ最低一ダースの手駒は必要なんだにやー。時代はチームワークだぞ?」

「国の乗っ取りなんて洗脳解かれたら終わりじゃねーの?」

「魔法が解ける前に法的に全て奪えばいいだけだよ。どんな手を使ってもね」

煙たい部屋で肩をすくめると、主人の近くの床に散らばった紙を拾い集める。手に取ったそれらには名義変更やら相続権、株、その他諸々一般の女子高生が扱うとは思えない内容が並んでいた。

署名された『天羽彗糸』の名前にため息しか出さず。

真剣な瞳で大真面目に世界征服を企む小さな子供が面白くて、とても面白くて、酷く呆れてしまう。

「どんな手でも、ねえ?そのロリ体型でこの場の男たちに尻でも振ったのか?」

「冗談言っていないで、書類まとめといってくんない?こっちは足動かないんですけど」

「何怒ってんの?生理?だから売春してない証拠ってか?」

「この年齢じゃまだ来てないっての、たぶん……だからしねーって言うってんだろ」

「じゃああっち使ったのわけ?自分の体とはいえずげーな」

二人の視線は窓のそばに置かれた大きなスーツケースに移る。

マスター、彗糸の本体。

一切腐臭のしないカバンの中身は、その外見からは想像も出来ない犯罪臭漂うものだった。

「いい加減にして。あれは直すためにもってきただけなんだから、傷つけるわけないでしょ」

「治すって、オリジナルの許可がなきゃ治療能力使えねえんじやねーの?」

「それをなんとかするためにイギリスに来てんだよ!!」

感情を抑えるような引き攣った声で叫ぶ。その声に反応するのは自我のある50番のみ。瞳に星を輝かせる手駒たちは、何を考えているか分からない顔で盲目的に主を見つめ、静かに命令を待っていた。

「…………ごめん、うるさかったね」

はっと失態に気がつくど手の中に収まったりモコンで人を操作し退出させ、疲れた顔で再び彼女はパイプから煙を吸って吐き出す。

一体いつから片付けていないのか、灰皿に溜まったタバコの葉と、ロミオとジュリエットの名を冠した葉巻が乱雑に机の上を汚していた。

「はあ……最近怒りっぽいけど、そんなにオリジナルに会えなくてさみしいのかよ。俺じゃダメなわけ？」

「そういうわけじゃない。そういうわけじゃないって、わっかんないかなあ…………？」

ぐしゃぐしゃになった白い髪が垂れ下がり、苦々しい顔で産み^マの親^タは頭を抱えて俯く。

弱々しい言葉が反響する広い部屋はとても寂しかった。

「ぜんぶ、ぜんぶ彼のためなのに、彼に頼るなんて馬鹿な話じゃんか…………」

彼女の不可解で、性格らしからぬ行動はたった一つの言葉から肥大したおぞましい愛から来るもの。

人を、神を、愛を、何もかもを蹴落としても彼の願いを叶える。『アレイスターと交渉する』そしてその先にあるはずの願いを、必ず。

もうあんな酷く哀れな表情など見たくない。悲しみなど感じて欲しくない。

だから彼から離れた。彼に傷をつけないために。

だから一人で成し遂げる。責任を自分だけが負うために。

自分が背負えば全て上手くいく。彼女はそう信じていた。

「自分のためとは言わないんだな」

しかし、ナンバー50にその言葉は響かない。

彼らは主と指定された保護対象のために作られ、守ること、願いを叶えることが生きる理由である。

主が不幸になるのは許されない。05のデータを持つ彼は尚更、その思想が強い。

「黙っててよ…………」

小さく呟いて、音を掻き消すためにサイドテーブルに載ったラジオを付ける。

ちょうど午後のニュースが始まる時間。

お天気の前に今日の出来事を力強い口調で伝えるニュースキャスターの声^{ファイブティーン}が静かだった部屋を少しだけ賑やかに変えた。

「……50、お客さんにお茶を」

「客？」

「時間が来たの」

ユーロトンネル爆破事故について喋る女性の声をつまらなさそうに聞きながら、誰もいないドアを見つめて50番に視線を投げかける。

どんよりとした緑色の目は輝きを失い、ふと暗い顔で目を閉じて煙を吐き出し、車椅子に深く背中を預けた。

「忠告は無視したのね、ミスター」

ドアが開く。彼女の問いに答えるように、筋骨隆々とした背の高い男が豪華な部屋に足を踏み入れた。

「あたし、なんでも分かるんだから」

生気を失った目に星が輝く。

その眩しい光に逆らうことができるものはこの世に居ない。

あなたのために地獄へ

110話：空の下で

少年は嘆いた。

「……不幸だ」

長い足を圧迫する狭いエコノミーシートで彼は眉間に皺を寄せ、ため息を吐く。窮屈な席と耳障りな声が頭を痛ませる。

こんなことなら無理をしても超音速旅客機に乗ればよかった。上が手配したチケットを馬鹿正直に使わなければよかったと後悔しても遅い。

「なあトランプとか持ってきてねえの？それかしりとりするか」

「それよりご飯なんだよ!!ビーフ・オア・フィッシュユ！」

一際目立つ綺麗な顔をした美少年の右隣、銀髪の少女と黒髪の少年がソワソワと座っていた。

賑やかな隣に垣根帝督は再びため息を吐く。この不運に感情が追いついていなかった。

「いつにも増して疲れた顔してんな。天羽が居ないのがそんなにつらいかよ色男」

「うるせえ落とすぞ」

「飛行機から落ちたらさすがの上条さんでも死にますわよ!!」

上条当麻とインデックス。

彼らが垣根と同じくイギリスへ向かっているのは知っていた。というよりも、これから迎えに行く彗糸がそれを知った上でイギリスにいる為、どこかで鉢合わせるとは思っていた。

しかしだからと言ってその偶然が、こんな最初に、同じ機内で、同じ席とは思いつかなかった。

何便もあるイギリス行きの中、彼と同じ便に乗ることになったのは、どこをどう考えても不幸としか思えない。

「ていうかまだイギリスつかないの？お腹すいたんだよ」

「今はフランスで貨物入れてんだ、ワガママ言うな」

「そうだぞ、あの光速音速爆音飛行機には乗りたくないだろう？」

まだフランスにて離陸しない飛行機、スカイバス365。うるさい隣人を乗せて飛ぶのを待つ垣根の心中は決して穏やかではなかった。それもそのはず。

この飛行機は落ちる。その未来を知る彼が穏やかになれるはずもなく。

フランスとイギリスがどうか、政府がどうか。

知らねえ奴等がクソみてえな信条掲げてくだらねえ理由で民間人諸共死のうと画策する。

それが未来に対する垣根の素直な感想だった。

気持ちが分からないわけではなかった。

垣根も括りとしては同じ『テロリスト』、もしくは『革命家』、彼らの考えや気持ちを真つ向から否定することはない。

けれど彼らは悪人としてはクソの部類に入る。

垣根のポリシーに反する小悪党どもに感情移入することもない。

さらに言えばこの飛行機は愚かにも逃げてしまった飼犬を連れ戻すために乗っているもの。

早く取っ捕まえたい気持ちと狭いエコノミーの圧迫感が苛立ちを増長させている現状、自分の旅路を邪魔する輩などただの汚物である。

殺そう。不審な動きをしたテロリストは全員殺す。あのアホの迎えを邪魔する奴は全員殺す。

狭っ苦しいエコノミーシートの中で固く誓った。

鉄の塊が飛び立ってから一時間経ったところか、時差で眠くなる頃合にふと不審な男が立ち上がる。

金髪で、何やら焦っている様子でトイレへ向かうその男の姿に見覚えがあった。物語に出てくるテロリストの一人。

このままのさばらせて到着時間に支障が出るのは非常に困る。ならば面倒を起こす前に、最善を尽くすしかない。

「垣根、どこ行くんだよ」

「飛行機で立つ理由はひとつしかねえだろ」

「あー、早く戻ってこいよ」

「へいへい」

未来をよく知る垣根はこめかみに手を当て、意を決したように席を立つ。

あまりにも突然で窓際に座る上条が驚いたような顔をしていたが、垣根に何かしらの疑いを持つているようではなかった。

「……はあ、未来が分かるってのは結構大変だな」

座席のあるスペースと添乗員などのスタッフの休憩スペースを隔てるカーテンを通り、薄暗い廊下を進む。

誰かの呻き声が微かに聞こえる手洗い場の前で、彼の足は止まった。

「少しよろしいですか?」

美人な添乗員をトイレの個室に押し込もうとする男を前にして、垣根は姿に見合わない温和な笑みを見せる。

事が起きるその一瞬、ニュースキャスターのように流暢で正確な英語で話しかける美少年の笑みにナイフを添乗員の首筋に当てるその男の動きが止まった。

「誰だ」

「そのクソみてえなことやめねえと、痛い目見るのはテメエになるぜ?」

柔和な笑みと裏腹に、彼は怒りを煮詰めた酷く恐ろしい声で男を黒い瞳で見つめる。

何か得体の知れない恐怖が、その少年から感じられた。

ただの子供、けれど彼は学園都市が誇る人の姿をした怪物。

垣根帝督という人間を知らぬ男は、ただその恐怖に震え、言葉が凍えた。

「……悪いが、今の俺はすこぶる機嫌が悪いんだ。言いたいこと分か

るよな？」

垣根の冷たい言葉に男は添乗員を離し、青ざめた顔でナイフを落とした。

殺される。

本能が悲鳴をあげていた。そして本能のまま、男は戦意を失った。

寒い貨物室の中、一人の男が静かに座っていた。冷たい床と冷たい空気、そして緊張が男を強張らせる。

今宵、何かが変わる。

彼らの行動で、飛行機がひとつ落ち、トンネルで繋がる二つの国に亀裂が生まれるかもしれない。

ただそれだけのために男は仲間と共謀し、大罪を起こそうとしていた。

そのためにはまず機内に潜伏していた仲間と合流しなくてはならない。

いつになったら迎えが来るのかと、寒い貨物室で白い息を零した。

しかし一向に彼は来ない。

まさか失敗したのか、そんな胸騒ぎがする中、ようやく唯一のドアが静かに開いた。

「おいクソ野郎、一人で楽しそうだな？」

扉から現れたのは茶髪の美男子だった。

流暢な英語で喋る知らないアジア人に少し驚き男は僅かに目を見開く。男を見下ろす冷たい黒い目と視線が交わると、わずかに甘い香りが漂った。

「俺の手を煩わせんじゃねえよ、クソが」

はつきりとした日本語が聞こえたその瞬間、白い塊が男の鳩尾にめり込んだ。

音のしない、攻撃だったのかすら認識できない痛みのない腹部への攻撃に男は首をかしげる。

何かされたように感じる、けれど何も起こって居ない。

見掛け倒しの強さかと、どこか安堵する。こんな線の細いモデルのような美男子に、覚悟を決めた恰幅の良い男が負けるわけがないと。

「精々ゴミはゴミらしくしてろ」

「……ッ?!」

しかし、異変はすぐに訪れた。

冷えた指先の感覚が消えていく。着込んだ布も、持つて居たグレネードも、短く切られた髪も、その重さを失い地面に砂が広がった。体が砂へと変わる。呪いをかけられたように少しずつ、体が砂となり崩れていく。

ありえない現実に悲鳴すら出ない。

その光景が受け入れられなかった。自分の体が砂に変わる摩訶不思議な光景がどこか他人事のようにすら見える。

「そのゴミ集めて捨てろ。まだ生きてたいならな」

最後に見えたのは灰となっていく肉体を恐ろしげに見つめ、震える仲間の姿。冷えた空気の中、自然と閉じていく視界はただその悪魔を映していた。

カーテンをくぐり、手洗いへと向かう。帰ってこない友人を迎えに行く足取りは軽い。

「あ、いたいた、遅すぎるぞ。どんだけ踏ん張ってたんだよ」

「ちげーよ、先客がいんだよ」

見慣れた美男子が壁に背を預けてぼんやりと宙を眺めているのを見つけると、上条は呆れたように話しかける。

大事な友人、垣根帝督。いつもセットの少女が行方不明だからかいつもより儂げな姿に心配が募り、思わず様子を見に来てしまった。

男相手にそんなことする必要はないと思うが、自分がその立場になった時を考えればそうも言ってられない。

それに上条にとつて彼は大切で、大事な友。困り事があれば助けてやりたいし、辛いことがあるなら話を聞いてやりたい。

男同士の友情と呼ぶには少し過ぎたヒーローの考え。

けれどそれを彼は友情と信じていた。

「なんだ、てつきり天羽に隠れてナンパかと」

「ぶっ殺すぞ」

垣根が言葉を言い切った後、それは聞こえた。

がたん。

ふざけた二人の態度を遮るように音が響く。

茶化しながら垣根を元気づけようとするも、大きく揺れた手洗い場のドアに会話が途切れた。

大きなものが倒れたような音、一体何なのかと二人の視線は自然とそのドアへと注がれた。

「あ、殺ぎ、殺さな——」

「あ？どうしたんだ、おっさん」

勢いよく扉が開くと、見知らぬ男が酷く青ざめた顔で現れた。

具合が悪いのか、歯切れの悪い言葉で震える男はすこし普通じゃない。

「だ、大丈夫か？すげえ具合悪そうだぞ」

「ッあ、あ、ああ!!」

尋常じゃない震えと顔の青さに上条は急いで駆け寄るも、男は怯えた顔をして走り去ってしまう。

いけない薬でもやっているのだろうか、そう疑問に思っても真相は分からない。逃げ出した男を追うほどの正義感を持っていない上条は、男の消えていったカーテンの向こうを見つめ、首を傾げることにできなかった。

「添乗員さん呼んどいた方がいいかね」

「大丈夫だろ、行くぞ」

「あれ？トイレ……あ、まてよ！置いてくなよ！」

何事も無かつたかのように、垣根は上条を置いて席へと戻る。結局用を終えずに戻る垣根に少し困惑しながらも、元気そうな友人の背中を見ながらそのあとを追った。

広い道路に一台の車が走る。四人乗りの至って普通の車、特に目立つことも無いそれに若い少女達が乗っていた。

「あ、飛行雲」

窓を開けて冷たい空気を顔に浴びると、後部座席に座った少女のひとりが零す。

澄んだイギリスの暗い空に一本、飛行機雲が走っていた。

これから起きることを予兆しているような一本線。ぼんやりと眺めるその線は、次第に薄れ消えていく。

「レッサー、気を引き締めろ。これからイギリスつてもものをぶっ潰すんだから」

「分かってますよ。この『新たなる光』がイギリスを変える、そうでしょう？」

運転席に座る別の少女にレッサーと呼ばれた彼女は、消えていったその雲を眺めながら冷たい空に息を吐いた。

彼女達は『新たなる光』、このイギリスを変えるべくやってきた輝きに溢れる若き魔術集団。

四人の少女たちで構成されるその光は、逞しい野望で満ち溢れていた。

この車が進む道こそ、彼女らの野望を叶える道。

この車が運ぶのは、ただのか弱い少女ではない。

「ちよつと待って……人がいる」

突然、運転席から見える景色に車が止まった。

道路の真ん中、それもこの車が進む車線に小さな人影が強烈な違和感を発しながらそこにあつた。

「子供……しかも車椅子。横断しようとしてタイヤでも突つかかっただんじやないの？」

「誰か何とかしてよ」

遠目でもわかる嵩張る白い車椅子と、白い少女の姿。

無力な子供が一人、道を塞ぐ。

このままでは進まない車。狼狽える車内で誰かが面倒と言わんばかりに大きく息を吐いた。

「ちよつとあんた大丈夫？」

「ええ、大丈夫」

仕方なくレッサーが車を降りて少女の元に駆け寄る。アメリカ、それもニューヨーク訛りの英語で答えると、少女は屈託のない笑顔で目尻を下げた。

白い車椅子と、白い少女。美人な子供だった。イギリス人にも見えだが、アジアや大陸の血も感じる不思議な少女。すんなりと人種間の隔たりやら取っ付きにくさをなくす、そんな不思議な魅力を持つ少女だった。

柔らかい笑みに安心が芽生える。

車椅子の子供一人、問題があつたら病院に連絡するなど面倒事が増えてしまう。助けてあげないと。

そう自然と思わせる何かを彼女は持っていた。

「目的は捕まえたからさ。ねえ、レッサーちゃん」
「え？」

けれどそんな魔性の笑みは長く続かない。

かちりと、どこからか聞こえたボタンを押す音が聞こえた。

その音を最後に、喉も、体も、指先も、何もかもが動きを止める。金縛りにあつたかのように、何一つ動けなかった。

蛇に睨まれた蛙。恐ろしく輝く少女の緑の瞳にレッサーの体は支配される。

たった一人の子供に肉体の支配権は奪われ、何もかもが無くなるような、そんな形容できないおぞまじさが喉元まで迫り上がって、吐いてしまいそう。

「さて、どうして差しあげましょうか」

「……本当に彼女たちが？」

「さあ？カーテナⅡオリジナルを確認すれば理解出来るんじゃないかと？」

妖精の笑みを彷彿とさせる笑い声の後ろから巨体の男が現れる。

体格のいい背の高い男は、無愛想な顔を顰めて動かない体で黙るレッサーを見下ろした。

冷や汗が伝う。恐ろしい結末が頭に浮かんでは不安を煽る。

ただひたすらに恐怖が押し寄せ、体が動きを止めてしまう。

「なっん、でッッ……！」

「神様はなんだって御見通し、だってさお嬢さん」

ようやく出たか細い声に答えたのは少女の袖から現れた小さなカブトムシだった。

眩しい赤の目を持った白いカブトムシが少女の体を這い、男の声で呟く。

脳が止まる。

これは現実か。夢か。

信じ難い景色にレッサーの唇は震え、手先の熱は消えていく。

「だから、この結果に不満なんか覚えなくてね？」

もう一度、少女はボタンを押す。長い少女の髪がゆれ、甘い匂いが強く香る。

荘厳な鐘が鳴るような鈍い衝撃が幾度となくレッサー達に波のように押し寄せ、そして最後、意識は飲み込まれていった。

111話：女王と三姉妹

学園都市とは違う空気、匂い、音。

雑踏の中で聞こえる英語と聞き慣れない音声案内に垣根帝督は辺りを見渡した。

長い空の旅をようやく終えてついたのは西洋の島国、イギリス。

今まで過ごしてきた学園都市とはどこもかしこも違う景色に少し目眩すら覚える。なにせこの大きな土地からたった一人の幼女を探し出すのが今の目的

約六千万という人口の中からたった一人の子供を探すのはあまりにも億劫だ。

「なあ、乗り換えの確認一緒にしてくれねえか？」

「さつきも確認しただろうが。そんなに不安かよ」

今後の行動に少なからず不安を覚えていると、後ろから困ったように上条当麻が垣根の肩を叩く。

見慣れた学生服で何枚かのチケットを持った彼の呑気な顔が腹立たしい。

これから彼が向かうのは物語の中心地、バッキンガム宮殿。

それがたまらなくムカつく。

別に彼が美術オタクだとか、歴史オタクだとか、そう言った理由ではなく、その立場が腹立たしいのである。

彼の義妹ヒロインは今や行方不明。けれど、未来の全貌を知る彼女なら必ず未来の先にいる。

そうなる物語の中心地、バッキンガム宮殿に彼女が向かうのは想像に難くない。

一緒に向かって、物語の登場人物から話を聞きたいのが本心。

だがたとえ学園都市が誇る超能力者の一人である垣根といえど、国の大事な施設に入れるわけがない。

しかし上条当麻は入れる。

インデックスの保護者だから。

なんでも打ち消す力があるから。

主人公だから。

「つかお前一応国賓みてえなもんなんだから、迎いの車あつてもよくね?」

「そんなものただの学生にはありませんことよ!」

「とうま……ていとく……」

男子高校生二人、いつも通りの軽口を叩き合っていると後ろからゾンビのような掠れた声で呼び止められる。

欲に満ちた恐ろしい少女の声。知り合いの悲痛な声。そして地鳴りのように響く腹の音。

背中から感じる圧力に振り返る他なかった。

「なっ、なんでしようかインデックスさん……?」

「とつても疲れてお腹がすいたんだよ!!機内食だけじゃ全然足りない!!ご飯は!!」

「うわああ!!」

腹の虫を鳴かせて小さいシスターが尖った歯を見せる。珍しくシスター服ではなく、一般的な白いワンピースを着ているせいかいたつて普通に町並みに馴染んでいた。

言いたいことだけ言って上条に飛びつくインデックスの叫びを尻目に垣根は息を吐く。

なんとも騒がしいやつらだろうか。主人公とヒロイン、二人楽しくハネムーン気分かと思うと更にムカつく。

「あの……お迎えにきたのですが……?」

「か、神裂サン……うっ」

上条がインデックスによって戦闘不能に持ち込まれたところ、不意に誰かから声をかけられる。

床に寝そべり頭を齧られる上条の前に現れたその人と自然と目が合った。

垣根と同じくらいの長身と長い黒髪、まだ未成年ということに驚くほど大人びた彼女、神裂火織の姿がそこにあった。

「よう、神裂。相変わらず派手だな」

倒れた上条たち二人をまたいで神裂の元へ行くと、垣根は不思議な

格好を見つめる。右腕と左足の袖が引きちぎられたなんとも愉快な上下セツトは人目を引く。

学園都市では見ない不思議な着こなしは最初から知っていたものの、実際目にするると非日常な服装は大変興味深い。羞恥心的な意味で。

「こ、これは魔術的なもので……って、何故あなたまで一緒にいるんです?」

「仕事だ。お前らとは別件」

少し恥ずかしそうにジャケツトの裾をもつも、垣根の顔を見て彼女の感情は恥ずかしさよりも驚きが勝る。

それもそうだ。

垣根帝督は本来学園都市にいるべき存在。イギリスに来る用事などないはずで、彼女と会うこともなかった。

だからこそその驚き。その驚きに満ちた顔がなんとも面白い。

「別件?じゃあ俺のために付いてきてくれたんじゃねえの?」

「なんでテメエのためにはるばるイギリス来るんだよ、寝言は寝て言え」

「俺の隣の席で一緒にイギリスに行くって、そう思う他ねえだろ!俺のことは遊びだったの!?!」

「殺すぞ」

「ひどい……」

行けるものならついてく、と言いたいのを抑え適当に誤魔化す。

伝えたら最後、真実を知られ、協力するなど主人公らしくされるだろう。そんな風に誰かに、それも上条当麻に首を突っ込まれるのは気分が悪い。

「じゃあていとくこないの?一緒に行けないの?」

「一緒にいて欲しいのかよ。そんなに俺のこと好きなわけ?」

「うん、だってていとくいい人だもん!」

しかし垣根帝督は上条当麻とインデックスの大切な友人である。

主人公が憧れる先輩、少女が好きな年上の男——この場合では恋愛ではなく隣人として、友人としての清らかな「好き」であるが——で、

放っておけるはずもないのは明白。

そこにあるのは純粹で透き通った感情。

寂しいだとか、心配だとか、そういったものが合わさった素直な思い。

勝てるはずもない。

暗い社会で生きてきた垣根にはそれに抵抗するすべは無く、インデックスの緑の目に押し負ける。

どうしようもないほど弱っている自分に腹が立つ。

「……どうなんだ？」

「え？そうですね……まあ、学園都市側が出発間際に事情を知る強い護衛をつけたってことにしておけば、たぶん……」

あの少女といい、インデックスといい、邪気のない愛くるしい素直な気持ちには強気になれない。

仕方がないと自分に言い訳をして頭を搔く。物語に巻き込まれるのは困るが、そこにしか探している義妹の情報がないのも確か。

答えは決まっているようなもの。ため息交じりに口を開いた。

豪華絢爛な廊下、金の装飾が大きな窓からは入る太陽の光を浴びて輝く。

場所はイギリス、バッキンガム宮殿。

民間の血税を使い込んだ装飾品と建物は実に価値が高く、何百年も前のものとは思えないほど美しさを保っている。

学園都市では見ない伝統と歴史を感じる宮殿。それに興味が湧くのは当然といえば当然で、客人は控えめながらも周りを見渡す。

上条も垣根も、その輝きに興味が尽きない。

片方はその輝きの価値に、もう片方は連れて来れなかった少女を思いながら、眩しい廊下を歩く。

「うはー……つか、なんでそもそも俺たちはここに呼ばれたの？」

「案内役である土御門は何も言っていないかったですか？」

「いきなり変なガスを食らって空港に置き去りにされた……」

「哀れだな、相変わらず」

垣根、上条、神裂、そしてインデックスが四人仲良く赤いカーペットの上を進む。

そして大きな階段に差し掛かった時、知らない誰かの姿が立ち塞がった。

「来たか」

金髪で、長身の男だった。皺ひとつ無い手入れの行き届いた茶色のスーツを着た紳士風の男。

確か騎士団長^{ナイトリーダー}だったか、背の高い男の不機嫌そうな顔に言葉が詰まる。その強い視線は垣根を見つめていた。

部外者である垣根に対する真つ当な反応。外部の者に厳しい国の要であるバツキングダム宮殿、疑惑の目を向けられるのは当たり前である。しかし、その疑惑を取り繕うともしない非外交的な態度は如何なるのか。

「二人増えているようだが、一体どういうことかね？」

「騎士団長^{ナイトリーダー}、彼は護衛の——」

「垣根帝督と申します、以後お見知りおきを」

神裂の言葉を遮ると、騎士団長^{ナイトリーダー}の視線が更に鋭く吊り上がる。しかしここで引く訳にはいかない。

義妹を追ってはるばる来たこの異国の地で、彼女に繋がる可能性のあるこのバツキングダム宮殿から追い出されるのは非常に困る。

自分の部下^{部下}が連れて来れなかった以上、ここしかチャンスはなかった。

「学園都市側の護衛と言った所でしょうか、我々としても、一個人とはいえ学生の安全が大切ですので」

「そんな話は聞いてないが」

「必要悪の教会からの依頼でもあります。能力のない学生と重要人物である禁書目録、学園都市からの輸送に危険がないと言えないでしょう？」

適当な嘘を並べて柔和な笑みを浮かべる。このチャンスを生かすため、精一杯口角をあげて目を細めて拙い言い訳で誤魔化した。

仕事であることは間違いない。

学生の安全が大切であるのも真実だ。

真実の中に嘘を混ぜる。

とはいえ今回ばかりは少しやりづらい。上手く丸め込むというには、今持つ真実も嘘の言い訳も、あまり使い勝手が良くなかった。

「……理解した。では、付いてこい」

「どーも」

だが案外すんなりと上手くいった。

すんなりすぎて笑顔の裏で少し焦るが、甘いマスクが崩れることはなかった。

だが考えてしまう。

これも神の手が入っているのか、否か。

ただ悩むだけ無駄である。無駄な努力に思わず思考の中で呆れてしまう。

神という超次元の存在の考えなど読めるはずもない。

「垣根が敬語だ……！」

「かつこいいー！」

「そんな言葉遣い出来るのですね……」

そんな垣根の考えを他所に、現場を目撃していた上条たちの意識は違和感へと集中する。

垣根帝督というプライドの高い男がへり下って敬語を使うとはこの場の誰も思っていなかった。

キャラじゃないと、誰もが思う。

容姿端麗の美人とはいえ目つきは悪く、溢れ出る面倒臭そうな、明らかにお人好しではなさそうなチンピラ野郎。敬語を使うような見

た目ではない。

不思議で仕方ない、そう言いたそうな顔が三つ、垣根を見つめる。それほどまでにおかしな光景だった。

「……一応、お前らより社会経験は多いぞ。それに彗糸が前——」
「前？」

「なんでもねえ、教える義理ねえし」

だが垣根にとっては至って普通のことである。猫を被る方が物事は上手く進むと、上条夫妻との会話やら、義妹の勤める病院などの経験からよく知っている。

それに飼い主故のプライドと言えば良いか、義妹に出来ることが出来ないという事実は堪らなく腹立たしかった。

TPOくらい弁えられるとサラリと言った年下で、ギャルギャルしい女。それも様々な感情を向けている相手、遅れをとるわけにはいかない。

ただの複雑な恋とも言えない幼い感情から来る態度。

しかしそれを馬鹿正直に言うことも出来ず、適当にあしらうことしか出来なかった。

沈黙が続く。

観光名所を巡るかのように宮殿内に興味を惹き付けられ、厳かな廊下で誰も本題に入ろうとしなかった。

「今からこのバツキングダム宮殿で行うのは作戦会議のようなものだ。建前では謁見という形になっている。なので出来れば正装して貰いたかったんだが……」

しばらく長い廊下を歩いた後、沈黙を破るように突然騎士団長ナイトリーダーが口を開く。

不機嫌そうにそれぞれの服装を横目で確認すると鋭い眼光で睨む。確かにこの場にいる中で正装と言っても差し支えないのは私服からシスター服に着替えたインデックスくらいだろう。

学ランを閉めず、中にポロシャツを着て、スニーカーを履いた上条。カラーズーツでボタンを閉めていない垣根。

そして袖をなくした神裂。

問題なのはこの三人に絞られる。

「正装……」

「いや、この場合は学ランも閉じずにポロシャツ見せてるお前の事じゃね?」

確かに一番に目がいくのは神裂の支離滅裂な袖無しルックだが、彼女の服装は魔術的な要素を含んだ戦闘服。

つまり彼女にとってはそれが正装である。

ではその隣を歩く垣根は?

品のある赤紫のスーツと白いシャツからみえる赤いセーター。

カジュアルながら上品なプレーントウの革靴。

ボタンを閉めていないのは確かにルーズであり、高貴な場所では良くないだろう。

しかしお値段は高貴である。

超能力者第二位、そして暗部組織スクールのリーダーという地位はやはり強く、人生一回遊んで生きたって何億ものお釣りが来る程度の財力を持ち合わせているのは明白。そんな男の着るものがただの布切れとは言い難い。

そうなると消去法で上条が選ばれる。

一般的な学ランは正装足りうるが、ボタンを閉めておらず、履き慣れたスニーカーで歩くのは正装とは呼べない。

せめてローファーで、ボタンを閉めていたら正装とも呼べるだろう。

けれど上条自身はそうは思っていないようだった。

「え!?俺!?それ言うならお前だって、この間みたいに変な順番でスーツ着てるじゃねえか!」

「はあ?変な順番ってなんだよ」

「変だろ!なんでシャツの下にセーター着るんだよ!」

「これは重ね着用の薄手のニットソーだボケ!」

「……話をしても?」

男子二人、不毛なファッション議論が始まりそうになるが、

騎士団長の不機嫌な声色に口を閉ざす。

永遠に解決することがなさそうな話題。口を挟んでくれてありがたいと、女性二人は安堵で胸を撫で下ろすも、反対に男性陣は少し不服そうだった。

「でも作戦会議ってなんの作戦について話し合うの？」

「ユーロトンネルの爆破に魔術が絡んでいる可能性ができたのだ。その先は陛下に聞くがいい」

「爆破？」

「そういやテレビで見たな」

長い廊下の突き当たり、大きな扉の前に一同の足が止まる。

そういえば、ふと垣根は上条に視線を移す。

なぜ上条たちは遠い異国の地に呼ばれているのか、考えてもいなかった。

結末を知る彗糸がイギリスにいる時点でユーロトンネルの爆発も何もかも、阻止できていたはず。

人が傷つくことを酷く嫌い、恐怖する彼女が爆発なんてものを見過ごすはずがない。

では何故彼らはここに？もつと言えば、何故事故は防げていない？いつだって他人の為、被害を無くすため、物語の先読みを活用して

日々偽善的なヒーロー活動に勤しんでいたというのに。

爆発は起こり、上条ははるばるロンドンへ、それもテロの可能性がある飛行機に乗ってやってきた。

彼女の考えが読めない。

いつもの彼女、天羽彗糸ならばありえない行動の数々。

喉に小骨が刺さるような違和感と気持ち悪さが胸を込み上げ吐き気を催す。

まるで意図的に、計画的に、打算的に彼女が動いているよう。強かな欲望があるかのようで。

酷く不安だった。

あの小さな子供が、艶やかな少女が、何を考えているか何一つ分からないことが恐ろしかった。

「入るといい」

ぼんやりと眺めていた扉が静かに開く。

重い扉の先、煌びやかな会議室の明るさと金属の反射光に少し目が眩んだ。

「よく来たな、さあこちらへ」

扉をくぐり、最初に視界に入ったのは一人の女性。

緩やかな段差に置かれた幾つものテーブルに囲まれた円の中心、歳を食った老けた女性がルネサンスを彷彿とさせる仰々しい白いドレスを身に纏い、凛々しく立っていた。

「彼女こそが女王陛下、エリザード様だ」

年寄りならではの凛々しさと威圧感。

靴まで隠す豪華なドレスを着たその人の手に握られていたのは、八十センチあまりの長い剣だった。

艶のある銀色は美しく、手入れが行き届いている。輝くその剣に切っ先は無く、両刃は研がれていない。

人を殺す武器ではなく、人を支配する権力をかたどった装飾品に近かった。

「あれって何か凄い剣なのか？」

「あれはカーテナと呼ばれる王族専用の剣です」

「この剣の所有者は擬似的にだが天使長ミカエルと同質の力を得られる礼装。優れものの一品さ」

何もかもが浮世離れしている部屋の中、困惑したように上条が神裂に耳打ちすると代わりにどこか満足げな女王陛下が答える。

カーテナ、そのオリジナルはこれから起こる諍いで使用される武器の一つである。

少し眉を顰め、その輝きから目を離さず扉の前で腕を組む。例えばいえど、凶器を前にして顔を少しも歪めない人はいない。

それでなくても権力を象徴する物体を見せびらかす女王の前に、プライドの高い垣根の神経が刺激されるのは目に見えていた。

「天使長ミカエル？」

「あらゆる天使の中で一番偉くて強い存在のことなんだよ」

「四大天使のひとりだ。三対六枚の翼を持つ、熾天使ってやつだったか」

「へえー……垣根物知りだな」

「まーな」

高価な霊装を前にして右手を隠す上条の姿を尻目に、ズボンのポケットの中で強く拳を握る。

物知りに決まっている。どれだけの本を彼女不在で読み漁ったか。遅れを取らないため、知識に追いつくため、経験に勝つため、何よりあの女を打ち負かすため、小さな努力は不可欠である。

聖書も小説も、教育論も論文も。本の知識と神の知識を武器にヒロインを捕まえに行く。

本物の主人公とは違う。努力を重ねなくてはならない脇役の運命。

口にはできない劣等感と苛立ちが積み重なる。

「仮に何かの因果で破壊されたとしても、誰も責めはせんよ。そもそも、こいつはカーテナⅡセカンドだからな」

「いや、名前だけ言われてもさっぱりなんですけど……」

「要は二本目ってことだ。最初に登場したカーテナⅡオリジナルはどこかへいってしまっただけで、仮にこいつが折れても新たなカーテナが生まれるだけだ」

「まったく、そんなわけが無いわ!」

暗い思考を吹き飛ばす強い声が響く。黒髪にモノクルをつけた物腰の落ち着いた女性が一人、側近も置かず会議室へと立ち入る。

第一王女、リメイア。

頭脳に特化した三姉妹の一人。

「カーテナⅡセカンドは確かに後世に作られた二本目ですが、現在ではその二本目を作る製法すら失われている」

「リメイア様、言ってくだされれば部下のものを。いえ、私が出迎えにあがりましたが……」

「ああーいけませんいけませんー! みすみす背中を刺される危険を増やしてどうするの?」

くるぶしまで長い上品な青いアフタヌーンドレスを翻し、階段を降

りる彼女は騎士団長ナイトリーダーをモノクル越しに睨みつけて品定めするかのよう
に後ろの垣根たちを見つめる。

何ともめんどくさそうな女。

王女ゆえの性格の曲がり方といえればよいか、何とも付き合いづら
うな人である。

「また姉上はじめじめしているの？世界の全部が信じらんないなら、
とっとと死んでしまえば丸く収まるのに！」

苛立ちがピークに達する前に、別の扉が開いて第一王女の言葉を
遮った。

騎士二人をつれた一つ結びの金髪がそこそこある胸を張って尊大
に中心へと闊歩し、高いヒールの踵を鳴らす。

真つ赤なプリンセスドレスはイギリスだからか少しロツクなテイ
ストがはいっており、存在感も相待って少年少女憧れの『お姫様』感
はあまりなかった。

第二王女、キャーリサ。

軍事力に特化した次女である。そしてこれから先のキーパーソン
である。

「ヴィリアン、お前も来てたの？」

キャーリサがふと視線を一つの机に移す。吐き捨てるように呟い
た言葉は、そこに座っていた物静かな女性に向けられたものだった。

そこにいたのはお姫様のような若草色のドレスに身を包んだ上品
な女性。

第三王女のヴィリアン。

人徳に恵まれた三女は口も開かずドレスの裾を掴んで綺麗なお辞
儀をする。綺麗な顔はどこことなく不安げだった。

「さて、他の連中も集まる頃合いだ。それじゃあ適当にトンズラする
か」

そして役者は揃う。

ニンマリと、したり顔の女王陛下は嬉しそうに客人に背を向けた。

112話：噛み合わない物語

「時には少人数、短時間で話を決めた方が効果的な場合もあるからな」
紅茶とビスケットの香りが鼻をくすぐる広い部屋で、最初に口を開いたのは女王だった。

「議題はフランスについてだ」

「フランスとは？」

「問題の発端はユーロトンネル爆破事故だ。私はこれをフランス政府による破壊工作であると判断した」

広い部屋の中、バラバラに置かれたソファにそれぞれ離れて座る。だだっ広い部屋、どう考えてもスペースの無駄。一人一つのソファで座る王室の四人もそう。

狭いソファで二人座る上条とインデックスと、仕事相手だと言うのに椅子に座れない神裂と垣根。側近である騎士団長はいいとして、どうやらイギリス王室は椅子不足なようだった。

「証拠は？」

「そのために禁書目録を招集した。ことに、フランス系ローマ政教の術式が使用されていれば正しく解析してくれるだろう」

「この問題の構図はイギリスとフランスの諍いではなく、イギリス、学園都市とローマ、ロシア正教の対立と考えるべきよ」

女性達の言い争いに近いディベートが始まる。

しかし熱が上がる討論の最中、垣根の中で何か違和感が生じる。

なにか、忘れていている気がする。

何を忘れている？何を見落としている？

膨大な記憶を巡り、ようやく思い出す。つい先程起きたことを。

——— そういえば、テロリスト殺っちまった。

ゆっくりと顔を上げる。後先考えずやってしまったと、今更後悔しても遅い。

テロリストのせいで高度が下がった飛行機を、共犯達が着陸して欲しくないがために魔術を使用した。

その痕跡から誰を追うべきかがハッキリとした経緯がある。

つまり、あの一連の事件は犯人を辿る有力な証拠の一つ。ムカついていたからと言って一人で解決するのは悪手だったか。

未来を先読みして行動する。

確定した未来を逆算して行動を起こすのは少々面倒かもしれない。そこだけに目が行って、やりたいことに集中できなくなる。

大変な作業だ。特に、関係のない人間には一切興味を示さない垣根には。

「……内部の諍いじゃねーの？最近物騒だったしな」

ならばせめてものの罪滅ぼしだ。自分の口に任せるしかない。

どんなデタラメでもいい、真犯人と首謀者にたどり着けるよう話を変える。ついでに情報を引き出す。

それが『垣根帝督』としてできる最善だろう。

「ほう？確か学園都市側の護衛だったか。にしては少々おしやべりじゃないかい？」

「学園都市でも起きたからな、内部犯の大きな事件が」

「十月にあつた事件か。あれって結局犯人捕まってないんだっけ？」

事実を伏せた真実に近い言葉。犯人が分かっている状態は酷くもどかしく、この程度でしかヒントを与えられない。

内戦を起こす人物がこの場にいることも、その先に内戦を起こした人がいることも、全て知っているというのに。

けれど教えることは出来ない。

立場と興味の問題。全て知っていると知られたらイギリスだけでなく学園都市にまで狙われ追われる。それでなくても大切なもの以外興味のない垣根には事実を教える義理などない。

「フランスかイタリアかロシアかって考えるのもいいが、候補の中に自分たちのことも入れといたほうがいいぞ。裏切り者がいない確証なんてないだろ」

「……確かにそれはあり得る仮説だが」

「つーか『犯人はアイツです、証拠はこれから探します』ってのがおかしいだろ。判断は証拠が集まってからでいいだろ。議会をするにしても、交渉するにしても、犯人が違ったら飛んだ笑いもんじゃねーか」

考える知識を動かし、口からそれらしい言い訳を作り出す。

なんとしてでも方向を修正しなければならぬ。でなければ面倒が更に面倒になる。

それもこれも彼女のため。いかに彼女を怒らせず、失望させず、なんのしがらみも、不安もなく垣根の元に帰ってこさせるため、円滑にこの物語の一部を終わらせるか。

それだけが望み。

出なければ今頃目の前の首謀者^{キャーリサ}を殺している。

「っ！失礼」

誰もが口を閉ざした広い室内、けたたましく響いた着信音に神裂が頭を下げる。そのまま後ろを向いて電話をとると、控えめな声で話し始める。

電話が来ることは知っていた。けれど来るとは思わず思案する。

本来ならばその電話は武器を輸送する四人組を発見したことを伝えるもの。

しかし、垣根がテロリストを音沙汰なく撃破したことで、主犯供は飛行機に干渉することはなかった。

干渉しないということは必要悪^{ネセサリウス}の教会に気づかれないということ。

電話の主も内容も、全く見当がつかなかった。

「どうやらスコットランド地方のあたりで魔術師同士の争いがあったようです」

「それは今回の件に関わるのか？」

「アックアの襲撃の可能性、そしてその魔術師たち、魔術結社予備軍『新たなる光』が発掘作業をしたのちにイギリスに向かったとの報告がありました」

「その発掘した何かをロンドンへ持ち込み破壊活動を行うといったところかしら」

顔には出さぬが、神裂の報告に唾然とする。

魔術師同士の争い？アックアの襲撃？聞いたことのない話ばかり。

犯人はすぐ分かった。自分がずっと追っていた少女のせいだと。

——何かしでかしてやがる。それもとても大きなことを

彼女への想いとややこしい感情が膨らむ。一刻も早く見つけなければならないと、焦りが募る。

思いがけない情報に胃が煮えたぎって仕方がない。

「……なるほど、ではこうしよう。ユーロトンネルの件を騎士派に、内敵である魔術結社予備軍の調査と撃破を清教派に。ただし禁書目録はこちらの調査のために別行動とする。それでいいかね？」

あっけなく修正は行われ、元通り原作にことが進む。思いがけず同じ方向に修正され、自分の頑張りが無駄になったのは少し腹立たしかったが、それでも確実に良い方向へ進んでいる。

彗系の動向が分かっただけでも幸いだ。

「で……ぶっちゃけ俺は何をしたらいい？」

「とうま、事件が起こると行かなきゃいけないっていうのはとうまの悪い癖だよ」

全て解決、方針が決まった、と思ったところで今まで黙っていた上条がおおずとお手を挙げる。

二人がけのソファでインデックスと並んで座る彼の顔はどこか真剣だった。

「いや、いいんじゃないの？ 必要悪ネセサリウスの教会だって、人員不足なんだから？」

「い、いえ……民間人を危険に晒すのは得策とは思えません」

「そうか……そうだなあ……民間人なら無理に協力してもらおう必要はない……」

「お、ラッキー！ じゃあここでのおんびりしてよっかなあ！」

運良く面倒事を避けられる、神裂達の会話からそう感じたのか上条は目の前のローテーブルからクッキーを一枚手に取る。

「ただし！ 国益を伴わぬ人員の滞在費用については、後日別途で請求させてもらうことになるが、構わない？」

「えっ」

「何、悪趣味な高級ホテルのスイートルーム二、三部屋分と思ってもらえば、安いもんだろ？」

だが上条当麻は不幸である。手にしたクッキーは彼の口に入るこ

とはなかった。

「案外安いな、払えば？」

「払っていたただけるんですか垣根様!」

「なんでお前の分払わなきゃいけないんだよ。俺は普通に帰るからな」

縫るような可愛くもない男の上目遣いに呆れてため息を吐く。

大した情報はなさそうで、深入りするつもりもない——というより、立場上でできない——事件、このまま退出しようと思いを向け扉へ向かう。

「そういえば君は護衛だったね？」

「まあ、そういうことになってるな」

「なら彼に着いてくのが護衛の仕事だとは思わないか？」

これはあくまでもイギリス国内の問題。

上条が呼ばれたのはインデックスを連れてくるためであり、大きな戦力としては見られていない。たとえどんな異能を打ち消せるとはいえ、彼はただの学生である。

銃で撃たれば死ぬ、頭を殴られれば死ぬ。人を殺すことも、テロを起こすこともできない『一般人』だ。

しかし、垣根はどうだろうか。未元物質という貴重な能力を持ち、国ひとつ滅ぼすことくらいなんてことない狂人。

学園都市ならまだしも国外での能力使用、それも任務以外での使用は大きなトラブルになる。

そこに殺人、物損、テロ、その他諸々が起きれば学園都市、そして妹からも痛ましい目で見られるのは確実。

このまま上条について行けばアックアにはたどり着き、物語に関わるはずの彗系にも近づける。

けれど、それを可能にする権限が今の垣根には無かった。しかし、一つだけ道があった。

「……ド派手に暴れていいなら、構わねえぜ」

女王からの許可。

それ以上に強い免罪符はない。

胡散臭い、柔和な美しい彼の笑顔がその思惑を示していた。

淡い光が零れる街灯の下、暗くなったロンドンのパブにて、黒髪の少女が温かいフライドポテトを口に入れた。

『いよいよ試合開始って感じ？キーパーはランシスに任せたわ』

聞こえる仲間の通信に耳を傾けながら油臭いパブのカウンターで頬杖をつくとき、またひとつフライドポテトに手をつける。

トリコロールのスポーティな衣装と、傍らに置かれた大きな鞆、そして顔の横の髪だけが黄色い彼女は、人の多いパブだと言うのを目立っていた。

『えへ、準備オツケー！ふふ、魔力、くすぐりたい、ひひ』

『とにかく、私らハーフが速攻で決めて、さっさと終わらせよう』

通信を聴きながら皿に載ったフィッシュフライに胡椒をかけると、通信相手は一向に喋らない彼女に不満げな声色を向ける。

『ちよつとレッサー？あなただってハーフの一人だっていうの、忘れてない？ハマしたら承知しないから』

『しませんよ。でもどうせなら、フォワードがいいですよね』

『大船の鞆の準備は終わってるの？せっかくあれを発掘したんだから、入れ物にも気を配ってもらわないと！』

『分かっていますって。今日イギリスを変える、そうでしょ？』

まるでゲームを楽しんでいるように、四人の少女たちはクスクスと笑う。

足元に置かれたよくある量産型の大きなカバンを横目になんまりと口角を上げた。

『私たち、新たな光が』

彼女達の瞳に星が瞬く。

輝く一番星に導かれ、少女達は今日、革命を成す。

113話：ロンドンでの大騒ぎ

揚げた魚の濃い油が口の中に広がる。しっとりとした衣と胡椒が生臭さを消し、抵抗なく胃袋へ落ちた。

あとは鞆を所定の位置まで運ぶだけ。例のものを移動させ、目的を果たせば任務終了。

残したドリンクの最後の一滴を飲み干し、レッサーは見えてきた仕事終わりに思わず笑顔になる。

「おつとつと、と？」

結んだ黒髪を揺らして彼女はカウンター席から立ち上がるものの、腰の位置より高い椅子にふらついて横に置いていた鞆にぶつかつた。模様のある白とオレンジのトランクケース。ドミノ倒しのように他人の鞆を巻き込んで倒れたそれに拾いあげようと手を伸ばす。

しかし、その手は思わぬ所で止まった。

「あれ？」

そこにあつたのは全く同じ鞆。ふたつ重なった同じ鞆にどつと冷や汗が吹き出る。

——どっちがどっちだっけ？

伸ばした手に戸惑う。自分のそばにある方が、自分のモノ。それは現場を見れば誰しもが思うだろう。

だがもし目を離していた隙にパブの酔っぱらいが場所を入れ替えていたら？ 飲んだくれた野郎は沢山いる。飲んで頭がイカれる野郎もいる。

「っ！こつ、こつちが私のです！おじさんのカバンはそつち……」

「おう、そつかそつか」

そして事実、レッサー側の鞆に手を伸ばす酔っぱらいがいた。重なったふくよかな手に焦り、思わず手を叩き落とすと手元の鞆を抱きしめその場に座り込む。

間一髪で他意のないすり替えを止められたことに酷く安堵した。

「せ、セーフ……うっ?!」

だがそこで気付く。

一人じゃない、二人三人、同じ形、同じ柄、同じサイズの鞆を持つ人がいることを。

「ど、どれが本物？」

誰かに盗まれた？

もうほかの魔術結社にバレてしまったか？

様々な想像がレッサーの頭の中で廻る。廻って、廻って、たどり着いた最適なルートを開くと、がたんと大きな音を立てて、彼女はカウンターの上へと土足で登る。

「ぜ、全員動くなあ!!!」

依頼人である最愛なる主のため、有り得る可能性は全て潰すほか選択肢はなかった。

「しっかし、まさかアンタが出てくるとはな」

乾いた空気に光る暖かい街灯の下を二人乗りの赤いスポーツカーが止まる。

助手席に座る上条当麻の呑気な声と吐いた白い息に運転する金髪の女性は僅かに口角を上げた。

「まあ、お姉さんにも色々あってね。ちよつと取引をして今ではイギリスのために腕を奮ってるって、わーけ」

「ツうぎゃ!？」

ふつと上条の耳元に息を吹きかけ、彼女は妖艶に笑う。

右目に被さる長い前髪と綺麗に整えられた金色の巻き毛が印象的な彼女、オリアナ・トムソンは相変わらず露出度の高い服を着てハン

ドルを握っていた。

赤信号で止まった車は青で進む。

ガソリンの匂いと排気ガスの匂いが鬱陶しいオープンカーのエンジン音が響く。

余程技術に自信があるのか、運転中にも関わらず彼女は横目で上条の隣を走るバイクに目を向けた。

「どっちかというところ、お姉さん的には天使くんが一緒にいるほうが不思議なんでしょう？」

「ただの仕事だ」

フルヘルメットで厳ついバイクを飛ばす垣根帝督は少し苛立ったようにオリアナの言葉に答える。

彼女はあまり好きではない。

様々な理由はあるが、今はその姿が一番癪に障る。

体つき、髪色、胸の大きさ。腹立たしいあの女にどことなく似ているオリアナの姿は正直今の彼には毒だった。

「あら、てつきりあの初々しい子にフラれちゃったのかと。それで旅に出た、みたいな？」

「フラれるもなにも、そういう関係性じゃねえよ」

「なに、まだシてないの？あんな元気で一途な子、滅多にいないから早く手をつけておいた方がいいのに」

この手の話題を振ってくるデリカシーと恥のなさも嫌いだ。

「ブツ、なっ、オリアナさん？学生にしていい話題ではありませんよ？」

「そう？ああいう子って、一度男を知るとそつちに流されちゃうと思うけど。誠実な子ほどそういうのに弱いから」

「……アイツが俺を嫌うわけねえだろ」

思いがけない質問にヘルメットで隠れた表情が曇る。

想像もしたくないかもしれないもの話など聞きたくない。けれど一度問題を定義されるとそれに答えを出したがるのが頭脳派（天才）というもの。

考えたくないのに考えてしまう。裸とか、凹凸とか。男とか、女と

か。

生々しい想像に小さく嘔吐く。

ようやく吐き出した言葉ですら気持ち悪かった。

「人の感情は変わりやすいんだから。他の素敵な人が彼女にアタックしたらすぐに鞍替えされるかもね？この人だけは私を認めてくれるって」

「アイツがそんな不誠実なことするわけ……」

「でも付き合っていないでしょ？不誠実も何も無いんじゃない？」

ハンドルグリップを握る力が強まる。オリアナの言葉に心がどこかブレーキを踏みたがっていた。

腹立たしいとしか思えない。何か反論しよう、声を出そう、だが何を言えばいいか分からず言葉に詰まる。

「あら、焦ってる？」

「ちが——」

『——リージェント・ストリートにて所属不明の魔術師が逃走中！繰り返す、リージェント・ストリートにて——』

反論を口にしようと口を開いたと同時に、誰かの声が大きく響く。魔術が無線か区別がつかないその切羽詰まった声にアクセルを深く踏む。

苛立ちをスピードに乗せて、赤い車と並走しながらターンを決めた。

「お馬鹿さんが尻尾を出したようね」

「うわあ!!」

U字に曲がり、あげたスピードで体が揺れる。たくさんのトランクを持って遠くの横断歩道を渡る少女の姿に、自然と視線が向いた。

「なんだ、ありゃ？」

「あからさまに怪しさ爆発！」

何個も同じ外見のトランクを持ち、一つづつ焦った表情をしながら捨てていく。不思議な行動を繰り返す指名手配の少女に、車を止めてオリアナは小さな紙を投げつけて眉を釣りあげ笑った。

「まずは人払い、そしてもうひとつ」

突如無くなった人混みと生活音。静かになった華やかなイギリスの道で轟く爆発音が膨らみ破裂する。

車を通り過ぎ、街に敷き詰められた石畳を走る黒髪の少女の前で火花が散った。

「ちよつとやりすぎじゃねえのか？」

「いいえ、むしろマズそうよ！」

爆発の衝撃で少し揺れた車体からオリアナは勢いよく飛び出す。

熱風が吹き荒れた道の真ん中で運転手に捨てられたスポーツカー。その隣にバイクを止めてヘルメットに手を伸ばす。息苦しい被り物なんて本当は必要なかった。

「文句は、ないですよね!!」

知らない少女の声が轟く。

知らないは少し違いかもしれない。知識として知っている声だった。

そしてその声が彼らを襲うことも、何を目的としているかも知っていた。

「痛てえな、そしてムカついた」

「ツツ!!」

金属でできた槍——知識によれば霊装『鋼の手袋』——を垣根の頭上で振りかぶる。大きく跳んだ彼女の重力で勢いを増すその槍は、真っ直ぐ垣根を狙う。

だが傷がついたのは相手だった。

短く編まれた長い黒髪先端が二つ揺れる。赤いカチューシャとラクロスのユニフォームのような服が目を引き少女は衝撃に軽い体を吹き飛ばされ、数メートル先に慌てて着地する。

今回の事件テロに大きく関与する魔術結社予備軍、『新たなる光』の幼いエース、レッサー。

「降参か死か。選ベクツガキ」

ヘルメットを投げ捨て、広げた十四の翼を背に赤いスポーツカーの上に降り立つ。

頭上に光る四角い光輪と、オレンジの街灯が神々しく彼を照らし

た。

絵画に描かれる美しき天使。実態を持った神の御使いがそこに存在した。

「なっ、て、天使いいいい!??!」

「あら？翼増えたのね」

「相変わらずかっけーな。ラスボス感はんばねえ」

驚きと感嘆の声上がる。透き通る白い翼から零れる光が下で見上げる少女達の顔を鮮明に照らした。

「無理無理無理!!!洒落にならないって!!」

「逃げんのかよ、つまんねえな」

「ツツは!!」

手を振りあげ、投げ飛ばした槍を持って逃げる少女に舌打ちを打つ。

目を見開いてうろちよろと逃げ出す鼠の姿が気に食わない。未元物質ダークマターで作りに出された重力で押し潰し、背の低い彼女の自由を奪って黙らせる。

容赦などなかった。

積もり積もった苛立ちが静かに溢れ出す。手を緩めることなどしない。邪魔者は全て殺す。邪魔をしなければ手はかけない。

それが自分の美学。彼女に嫌がられるくならない美学。

チンピラだと侮辱されるくならない優しさ。

「ガツハツツ!?なに、をっ?!」

「テメエに種明かすわけねえだろ」

「うがツ!!」

地面に降り、地面に伏す少女の腹を艶のある革靴で蹴り飛ばす。槍から手を離して咳き込む子供に罪悪感など感じなかった。

「お、おい……やりすぎじゃねえの?」

「テメエが優しすぎるだけだろ」

腹を抱えて横たわる少女の顔面を持ち上げるようにつま先で強く蹴ると、仰け反った少女の左腕に体重をかけて踏み潰す。

少し慌てたように上条が駆け寄るも、足にかける体重は同じまま。

「ツツあぐ……」

「頼むぜお嬢さん、テメエを殺して国際問題に発展させたくねえんだ。何をしてたか、教えてくれるよな？」

「あ、あなた、たちに、教えるはず、ない、でしよ」

呻き声が聞こえる薄ら寒い夜、胃液を吐く足元の少女が呟いた生意気な声が誰もいない道に反響する。

強い意志を宿した星の輝く目だった。

あの天使を嘯く悪魔と同じ、星が瞬く眩しい瞳。その言葉に息を吐いて、つま先に力を入れた。

全貌が分かってしまった。求める女がどこにいるのかも、すべて。

「……ああ、そう。それは残念だ」

「つふぎい、あツツ!!」

「垣根！それ以上は死んじまう！」

悲痛な叫びと骨の折れる音。醜い音は現実味がなく、淡々と目の前のものを処理しようとしていた。

興味もない。どれほどの痛みだろうと、心の中で渦巻く苛立ちを止めるほどのものではなかった。

「だから？」

「だ、だから、って……限度があるだろ！」

上条の言葉に顔を上げる。足の力を緩めることなく、ただ冷めた目でヒーローの姿を見ていた。

黒い目玉に映る主役の腹立たしい顔が癪に障る。

もう感情に蓋をすることはできなかつた。

「人のこと上から目線で殴ってるテメエが何言ってるんだ？」

「あ、え……う？」

「人を殴ることも、殺すことも大して変わらねえよ。同じ傷害。殺人罪になるか殺人未遂になるかの軽い違い。正義を説いて人を殴るお前も、悪を語る俺も、結局は人を傷つけている。そんなお前に何で説教されなきゃなんねーの？」

止まらない憎悪に歯止めが効かない。

「なあ、何言ってるんだよ！それじゃまるでお前が人を——」

「悲劇を体験した人間の末路がどんなものなのか分からないほど、テメエはどうしようもないウブな男なのか？」

ブレーキ役がないこの場で、ヘドロのような感情が溢れ出してしようがなかった。

「テメエの仲間って言ってる奴ら、必要悪の教会に、天草式、イタリアのシスター共。そいつらと一緒だ。悪いやつがいて、悪いやつに殺せと命令される。そういう世界で生きてきた、だからこのクソガキも殺す寸前まで追い詰めて情報を吐かせる。テメエだって他人の築いた死体の上を歩いてるくせに、見たことない被害者には目を瞑って、目の前の被害者には手を差し伸べんのか」

ズボンのポケットに入れた手を固く握る。酷く寂しそうな、辛そうな友人の顔が長い髪の間から微かに見えた。

羨ましい。善人としてカテゴライズされて、お姫様がいて、誰かを救えて、幸せで、酷い世界も、人の死体も見たことがない彼が。

——俺だって主人公そっち側にいたかった。

「そんなに正義を語りてエなら紛争地帯にでも行けよ偽善者。いつもいつもお花畑みてえな説教掲げて、鬱陶しい」

「偽善……」

「ストップ、今は喧嘩してる場合じゃ——」

「はっ、勝手にやってろ。俺は興味もクソもねえよ」

翼を大きく広げて空に舞う。腕を解放されすぐに逃げるレッサーとあたふたする上条たちを見下ろして、そのまま月に近づき藍色の空気に白い息を吐いた

「どいつもこいつも、イラつかせやがって」

小さく舌打ちを打ってイギリスの空を飛ぶ。やっと分かったあの子のところへ、全てを投げ打って向かう。

憎悪や不満や怒りが収まらぬ心中、嫌な予感に苛まれながら冷たい秋の風に体を預けた。

114話：トラップ

二つに分けた黒髪が軽やかに弾む。

ビルからビルへ、うさぎのように飛び回るレッサーを追いながら、上条当麻は耳元の携帯電話に耳を傾けた。

『スキーズ・ラズニル
「大船の鞆？」』

『ええ、解析班から詳細が来たの。今彼女たちが使っている鞆のことよ』

電話から聞こえるオリアナの言葉を口にしながら、冷たい空気の中を走る。

逃げる少女を見失わないように上を向いて、小刻みに息を吐きながら強く地面を蹴り飛ばす。

『礼装の効果としては鞆Aの中身を鞆B、鞆C、鞆Dに、同系の礼装に移動できるってもの。科学的に言えば……瞬間移動？^{テレポルト}だったかしら。それに似てるわね』

「重要なものをラクロスみたいにパス回ししてるってことでいいか？」

『その認識で構わないわ』

「わかっ、うおツツ!!」

『ちよつと、大丈夫？』

目の前に降りたレッサーの投げ飛ばしたゴミ箱に押し潰され、携帯に気を取られていた上条の足がもつれて硬い地面に背中を打ち付ける。

痛みに呻くと、してやったりと笑うレッサーの後ろ姿がよく見えた。

そのまま軽い足取りで彼女は走り去る。

明らかに上条をナメている彼女とじんわりと広がる痛み、口論してしまった大事な友人を思い出してついつい苛立ってしまう。

『彼女たちの名は新たな光。四人構成の魔術結社予備軍よ。二人撃破してるらしいから、残りの二人に本命が入ってるはず。急いで』

地面に落ちた携帯を拾い上げ、目の前の人影を追う。

アパートメントの側面に取り付けられた階段へたどり着くと、上へ飛ぶ彼女の影が視界を暗くする。眩しい街明かりに目が眩む。

「ぬおおお!! おおお!!」

レッサーを追いかけて二段飛ばしで階段を駆け登る。

しかし、あと少し、手を伸ばせば届く距離でなにか不穏な音がした。ばきん、と大きな音が響く。

金具が外れ、崩れる。アパートに支えられていた重い階段が、音を立てて崩れていく。あと数段、一階、手の届く距離で文字通り梯子を下された。

階段の踊り場に立つ上条も例外なく、共に落ちていく。

「うっそだろおお!!」

しかし彼は主人公。身体能力は恐ろしく高い。重力をもろともせず、落ちてくる階段を跳んで、蹴って、何とか開いた入口へと飛び移った。

あまりの身体能力の高さにレッサーは目を見開く。崩れていく階段に飛び移り、非常口にギリギリ間に合うなんて信じられない。

硬直したレッサーに手が伸びる。捕まえようとする男の手。

その右手が槍に触れ、ガラスが割れるような激しい音が耳を貫く。

あまりにも突然すぎる光景にレッサーは槍を投げ捨てて近くの部屋に駆け込むと、ふつと息を吐いて足を止めた。

行き止まり。逃げ場は無くなった。

「テメエの狙いは分かってる。他の連中ももう掴まってるぞ」

「でも、最後の一人だけはどこにいるか分からない。でしょ?」

アパートの一室に追い詰められた彼女を追って、上条は暗いオフィスへと足を踏み入れる。

ちやうどオリアナも合流し、ようやく追い詰めた不審人物に上条は問いかけた。

諦めろと、そう言った。

しかし、少女の瞳に光る眩い星はその言葉をものもしない。

「私たち三人は中継役。誰を経由しても作戦は成功ということになるのですから」

「中継役？」

「なんで量産されてるのに気がついた時点で気づかないんですかねえ?! 五個目の大船スキースプラズニルの鞆の可能性を!」

高らかに叫び、大きな鞆を掲げると青白い光が大きな窓から差し込む。眩しい光線は鞆を照らし、屈折するかのように鞆を通りまたどこかへ光を飛ばす。

パソコンのコードのように何かと鞆を結ぶ光の線。

どこかへ飛んだ魔術的な光に、ようやく分かる。彼女の目的地がここであり、もう後の祭りだと。

「お前、一体誰に中身を飛ばしたんだ! 一体誰が五個目の鞆を持っているんだ!」

「目的は達成したけど、試合に負けたのは事実。受け入れましょう? 口封じするなら今がベストです」

鞆を捨てて息を吐く。窓の外に見えた別の光に目を細め、彼女は諦めたように眉を下げて笑う。

「ツふー!」

一瞬、光が窓の外で瞬く。悪寒のするその光を前に、上条の体は自然と動いた。

軽い少女の体を折り重なるように突き飛ばし、頭を掠めた風に目を瞑る。

「狙撃!?!」

輝いた光は瞬きの一瞬で窓を貫き、目の前の子供の体を狙おうと一直線に宙を裂く。

それはひとつの矢だった。

「これは……ロビンフッド?」

「なんだって?」

「騎士派が使ってる遠距離狙撃用の霊装よ……軍事方面で有名なキヤーリサが直属部隊で開発されたもの……まさか」

壁に突き刺さった矢を取り上げてオリアナは呟く。

彼女の言葉が真実ならば、新たなる光の口封じに関わっているのはイギリスの第二王女。

「私たちが輸送していたのはカーテナⅡオリジナル。かつて歴史の中で失われた、戴冠用の儀礼剣にして、カーテナⅡセカンドなど遥かに凌ぐ、英国最大の、正真正銘、イギリスを変えるに相応しい剣です」
垣根が宮殿で匂わせていた『内部犯』のことが頭を廻る。
何か、恐ろしいことが始まるのではないか。嫌な憶測が絶えなかった。

遠い島国から派遣された白いシスターと、愚かな妹を背にして乗っていた豪華な馬車を降りる。

赤いドレスを照らす月明かりが酷く眩しく感じるのは、きっと彼女の、キャーリサの感情が高揚しているからか。
そうだ。

この日のために生きている。
フランスを蹴散らし、学園都市を薙ぎ倒し、完全なるイギリスを迎えるため。全てを覚悟してこの場にいた。

ローマ正教と学園都市、二つの勢力に板挟みとなる魔術国家であり科学と同盟を結ぶ英国。

その二つの大きな力にいつか巻き込まれる未来は明白である。
平和を手にするには武力がいる。

そのために計画し、今この場にいた。
問題があるとしたらあの少年。

上条当麻が連れてきたあの背の高い美少年。

全てを見通しているかのように見つめる黒い目玉と、威圧感。

ただの疑い深い少年と、傍から見れば思うかもしれない。けれどその奥にある憎悪のような炎は確かにキヤリーサに向いていた。

しかし彼は上条当麻と別の班で行動中。学園都市の能力者と聞いていたが、離れている今なら脅威ではない。

「キヤリーサ様」

「上手くいったよーね」

「確認を」

煌めく街並みを丘の上から見つめっていると、騎士団長の凛とした声が彼女を呼ぶ。

大きな鞆を持った彼がキヤリーサの前で足を止めると、膝を突いてその鞆を掲げる

クレーダー、そのための武力。

騎士派を使い、魔術師を使い、やっと見つけたそれはイギリスを震撼させる最高峰の聖剣。

カーテナIIオリジナル。

消え失せていた幻の剣。王家にしか使えないその霊装は、天使に匹敵する力を持つ。

二つ目と同じ銀色の剣が、君主の手に再び戻る。

はずだった。

「あら、開けちやうの?」

鞆の中から小さな声が聞こえた。柔らかく、きらきらとした少女の声。

それは想定外の現象だった。

「ッ!」

「なにっ!」

妖精のような囁き声に思わず彼は鞆を落とす。二人して、予想外の出来事に息を呑むことしか出来ない。

何が出てくるのかわからなかった。神か天使か化け物か。

「あー、狭かった!全く、羽も伸ばせないんだから」

かたかたとひとりでに動き、鞆はゆつくりと開く。

現れたのは小さな少女だった。狭い四角の中に閉じ込められていた少女の体は真っ白で、瞳と服に散りばめられた緑が青磁のよう。瞳の中で輝く一番星が煌めいて、美しかった。

その姿が瞳に焼き付いて消えない。

人とは思えないほど美しくおぞましい白の少女は薄く笑う。

まさしく天使だった。

何枚もの翼を広げ、頭上に丸い光輪を浮かべる少女の姿に、天使以外の何を思い浮かべようか。

「天、使……？貴様、一体」

「そう、お前らが愛してやまない天使様。ふざけた野望を止めに、神の使いが来てやったぞ」

カーテナⅡオリジナルを握り締め、少女は月を背にして空に立つた。

その姿は偶像に描かれる天使そのもの。神の御使いと同じ姿が月夜に浮かぶ。

輝く空に思わず目を細めてしまうほど、直視するにはあまりにも眩しかった。

「ふつ、天使自ら鉄槌を下してきたと？随分と妄想癖の酷い娘だし」

「あららら、ら？テロリスト風情にそんなこと言われるなんて思わなかったんですけど。お姫様って立場分かってんの？国の象徴としての機能はなされてないようで」

「うるさい盗人が。誰かは知らないけど、人のものを盗んでお説教か？」

「国の代表という立場を忘れて国民を巻き込んでクーデターなんか起こそうとしている人が何言ってるのかな？」

しかし彼女は天使を模したただの人だろう。魔術の理論とは違う天使に鼻で笑う。

空から見下ろすその紛い物に苛立ちさえ湧いた。馬鹿にされているようで、愚弄され、笑われているようで、酷く腹立たしい。

「少女、それを返せば見逃す。彼女への侮辱も、すべて」

「お姫様ならあたしへの侮辱は許されると？とんだダブスタね！殺して奪えよ。出来ねえのか？」

「……最期の言葉がそれか」

盗まれた剣を手にする少女の前に、騎士団長ナイトリーダーが立ち塞がる。少女が持つ銀色の剣を奪い返さなければ、イギリスは変えられず、計画は頓挫。

それだけは防がなければならぬ。

「あー、殺気立ってるとこ悪いんだけどお前の相手はあたしじゃないの。すっこんでてよ」

「なに？」

けれど少女は興奮めだと言わんばかりに冷えた目で溜息を吐いて、つまらなさそうに呟く。

その視線の先はキャーリサたちの向こう側、その奥を見つめていた。

「久しいな、騎士団長ナイトリーダー」

彼女の視線の先にいたのは大柄な男だった。無愛想な顔と低い声で湿った草を踏み締めて、彼は少女を守るように間に入る。

「ウィリアム!?なぜ貴様がここに」

「利害の一致した、ただの雇われである」

見覚えのある男に騎士団長ナイトリーダーは吠える。

彼の名はウィリアム・オルウエル。名誉ある騎士にならなかった傭兵崩れの魔術師。

少しばかり騎士団長ナイトリーダーと因縁のある男は少女に目配せして巨大な剣を構えた。

「じゃ、後はよろしく」

「承知した」

炎のような形をした巨大な剣を手に、ウィリアム・オルウエルは地面を強く蹴る。

目にも止まらぬスピードで騎士団長ナイトリーダーの腹に拳を入れると、転げ落とすように丘の下へ吹き飛ばす。

「ツガはっ!!!」

「騎士団長!!っ!」

なにかすべきだと横切る巨体に振り向くが、足がもつれて地面に落ちる。ぬかるんだ地面に足が取られ、赤い服は緑と茶色で汚れていく。

先程まで乾いていた地面は何故か水を含んでいた。

「さて、第二王女。カーテナIIオリジナルを使用してのクーデター、及びテロ行為、全ての証拠は揃っている。天国までご同行願おうか」

「はっ、遠慮させてもらう!子供の遊びに付き合ってる時間は無いんだし!」

鮮やかな緑の瞳で見下ろす自称天使に背を向け、ぬかるんだ地面から足を抜いて走り出す。

どうにかしてあの剣を取り戻さねばならない。けれど、天使の記号を持つ得体の知れない化け物に策なしで立ち向かうのは危険。

これが最善だと思つて疑わなかった。

「ああ、そう。じゃあ地獄へ道連れね」

しかし違つた。何をしても間違いだつたかもしれない。

少女の眩きは風を切り裂く音で掻き消える。

次の瞬間、大きな衝撃が襲う。

「ツツ!!がはあツ!!」

「わーお、斬れ味抜群。ちよつと予想外、ごめんねー?」

空気を斬る衝撃が走るキャーリサの足首を斬り、ドレスのように真っ赤な液体が吹き出した。

鋭い痛みに悲鳴が上がる。見えない攻撃に混乱し、叫びが空に反響する。

「なんなんだしっ!!それは王室専用のっ……!!」

「霊装、だつて?べつに機能はいらないの。魔法の杖だつて、普通に殴れば人を殺せるでしょ?」

「は……ただ剣を振るつた、それだけだと……?」

「天使が握ればどんなものだつて力が宿るのよ」

優しい微笑みで少女はキャーリサの前に立つ。立つといつても数センチほど地面から浮いていた。

得体の知れない化け物。理論を無視した怪物。

額から吹き出た気持ちの悪い汗がじわじわと頬を伝う。恐ろしい生き物の前に、恐怖が膨らむ。

「そんなデタラメがっ」

「通用するの。だって、あたしもデタラメなんだもん」

痛む足を引き摺って逃げようと歩き出す。意味の分からないことを繰り返す少女が怖い。

じくじくとした痛みも相まって嫌な想像ばかりが広がる。アキレス腱を切られたか、自然に動かない足に苛立ちを感じてならなかった。

「ぐっ……！くそっ！」

「万事休す？大人しくしてよ、寝るだけで済むというのに」

どくどくと血が流れる。少女の冷ややかな声に体が強張った。

良い状態とは言い難い。形勢逆転の糸口は見えず、少女に圧倒される。

逆らってはならない。魔法にかけられたかのように、思考が彼女に逆らおうとしない。

未知の力でねじ伏せられているようで、名状しがたい恐怖が押し寄せる。

「ツその言葉を信じる人がいると思う？分からないやつだな！」

「……随分と騷のなっていないお姫様ね。なら仕方ない。手段を変えましょう」

「うぎっあーひっ」

地面に倒れた体を剣先で投げ飛ばされる。腹に当たった金属の衝撃に口から胃液を吐き出し、丘を転がり落ちて木々の生い茂る林へと迷い込む。

「ツな……」

「どうやら武力じゃ分かってくれない様だし……？こちらは法と権力を武器にアナタを殺す。降参するのが身のためだと思わない？」

木よりも高く浮かんだ少女は大きく翼を広げ、軍隊のように片手を上げる。何かのサインだろうか。

迷い込んだ木々の隙間、静かな空気に聞き耳をたてる。誰かの息遣いと、湿った草を踏む足音。

「……警察?」

「そう、王室派の皆様よ。言ったでしょ? 『ご同行願います』 って」
硬い制服と、警棒、拳銃。イギリスでよく見かける駐在巡査と、スーツを着た刑事たち。

少女と同じ星を輝かせた瞳で、虚ろな視線をキヤारीリサに向ける。何かは分からない、けれど心臓を圧迫する言葉にならない違和感が確かにあった。異界に迷い込んだようなおぞましき、焦燥感。

「脅しか何か? 人質とって、天使の名が聞いて呆れるんだし」

「二面性を持つ天使はご存知ない? 十四の翼を持ち、人を愛するあまり悪魔となった天使の名を」

痛みをグツとこらえて、フラフラしながら立ち上がる。

木の幹に体を預けてしっかりと少女を睨むも、全く怖くないと言わんばかりにカーテナ||オリジナルに口づけを落とす。

子供のくせに、妙に色っぽい。ちぐはぐな存在。

悪魔の囁き声がクリスマススのチャイムのように鳴り響く。

十四の翼を持った小さな女に名が鮮明に浮かび上がり、思わずその忌々しい名を呟いた。

「……アザゼル」

「たった一人の人間のために世界を破滅に導いた神如き強者の名だ。その名に相応しく、この国を破滅へと導いてやろうか?」

「そんなハツタリで足止めして何の意味がある? 騎士派の連中を、ただの鉛玉で倒そうって?」

「つぷ、ははは、そんなことないよ! まさか、まさか……魔術や武力なんて野暮なことをする人間に、拳銃ひとつで対抗するわけないじゃない!」

細く目を閉じて上品に口に手を添え悪魔は笑う。大柄な男たちに囲まれるように青い草の上に降り立つ彼女は、恐ろしく強大な何かに見えて仕方がなかった。

「さつき言ったでしょ、『法と権力』を武器にするって」

「魔術師が法を遵守するだけでも？なかなかイカれた思考を持つてるよーだな」

「……誰に喧嘩売るか、見極めた方がいい」

低い声が冷たい秋の風に乗って響く。カチリと何か、ボタンを押すような音と、異様に静かな空気に目を見開く。

世界が暗くなった。

林の奥から見えていた街の煌めきが、輝きが、瞬きが、何もかもがふっとロウソクの火のように消え失せる。

道を照らす人工の灯りが一つ残らず、全て消えた。

計画停電でもあったのか、ストライキでもあったのか、発電所で事件でもあったのか、恐ろしい憶測が脳を飛び交う。喉が干上がり、声が出ない。

「ツツツ???!なッ、なにが……!!?」

『法と権力!』、それはつまり国そのもの。あたしはね、この国の全てを武器にアナタを追い詰める。この意味、分かるかな?」

子供の無邪気な微笑みが歪んで見える。

愛しいと思うべき子供だというのに、その可憐な少女はおぞましく大人びた香りを纏っていた。

「発電所も、水道局も、ガス会社も、宅配会社も、メディアも、議会も、軍も、警察も！何もかも！1から100！A t o Z！全て全て！ぜえーんぶ！……アナタが騎士派を手籠めにしたようにね、洗脳してみたの」

「……随分と誇大妄想が酷いようだが、そんなものでは私は止められない。嘘を吐く練習でもした方がいい」

興奮気味に語るかと思いきや、途端に冷静になって酷く愉しそうに笑う。反論しても、その笑顔は崩れない。

「信じないんだ？人の命がどうなろうと、どうでもいいって?」

「死……?」

「アナタがあたしに喧嘩を売ったから、管に繋がる大勢の難病患者や赤ん坊が死ぬの」

嘘のような言葉を並べて、少女はキャーリサの目の前で笑う。小さ

い体を宙に浮かせて、翼で囲んで、キャーリサの視界は恐ろしい化け物だけで埋め尽くされる。

甘い薔薇とほのかな煙草の香りが鼻腔をくすぐる。
言葉も声も出なかった。

「それだけじゃない。電気が止まれば交通が終わる。救急車は動かずに、車の事故が増え、人は多く死ぬ。」

「つは、あ、いや、何を言つて……わたしは……」

「水道局に連絡して蛇口を停めれば全国民が水不足で死ぬ。水がないから不衛生な川の水を飲んで疫病が流行り、交通のせいで仕事にも買物にも行けず、餓死しちゃう。イギリスに終止符が打たれるの。国がひとつ消えちゃうの」

くすくす、妖精の笑い声が聞こえる。人を侮辱する笑い声が翼でできた繭の中で聞こえる。

「あーあ、何千万も死んじゃうねえ、アナタひとりのせいだ！」

愛するイギリスのため、愛する国民のため、全てを投げ打って計画したというのに。

武器も、守りたい世界も奪われ、理不尽にも蹂躪される。

まるで神そのもの。宝石のように輝く少女の瞳が人のものとは思えなかった。

「ねえ、教えてよ。どっちをとる？六千万の国民か、アナタの夢か」

子供を相手にするような柔らかく甘い声で少女は痛々しい毒を吐く。

「武力で殺すだなんて、あたしには出来ないから、とても優しい方法でアナタを殺す。お姫様がクーデターの首謀者だつてマスコミが知つたら、国民はどう思うかしら？法廷はどう裁くかしら？やり直しの効く方法で、アナタをぐちゃぐちゃにしてあげる」

「ふざけッ——」

「怒らないでよ。国民巻き込んで、手下を丸め込んで、親殺しをしまいでイギリスを強い国にしようとしてきたんでしょ？因果応報、自分のしでかしたことが戻ってきただけ」

少女の柔らかく冷たい、小さな手がキャーリサの頬に触れる。人と

は思えないほど白く、無機質な肌は氷のように冷たかった。

「拳だけじゃ解決しないこともあることを、身を持って教えてあげる。だってあたし、天使だもの」

ふっと耳元で息を吐いて、キヤーリサの首筋にチクリと針を刺す。冷たい液体がドクドクと心音に合わせて血液に混じる。

掻き混ぜられる視界の中、脳の中で火花を散らす。

最後に見たのは聖母の微笑み。神の姿をした少女の慈悲深い笑顔だった。

1115話：本音

「我らの主、^{アザ}全て終わりました」

「はい、^ゴ苦労様」

静かになつた林の中、暖かい煙を吸つて、吐き出す。パイプに通る甘い煙が空に向かい、一本の線になる。林の奥で明かりがついた街に煙が向かう。

紅茶のような甘い香り。上品な煙の香りが風に乗つて50の鼻腔をくすぐる。

クラクラ、倒れて当てられる様な甘い香りだった。

「アザつて、痣？」

「『力』つて意味。だつて支配者はあたしでしょ？」

「相変わらずの教祖様スタイルだな。こんなロリの何がいいんだか」

「信者は彼らだけじゃないでしょ？ねえ、愛しの下僕⁵⁰」

敬礼する警察官たちを満足げに見つめる少女に頬を膨らませて50は見下ろす様に隣に立つ。妖精の様に声を潜め、小さく口に含んで笑うさまは植えつけられた感情を刺激する。

作られた生き物は母親に逆らえない。

尤も、彼らの関係は母子よりもおどろおどろしいが。

「……それで、あいつどうなんの？」

「ん？ああ、保護してもらうの。そっからは知らない」

吐き出した煙に嫌そうな顔ひとつせず、銀色の大きな鞆を提げた白い少年が呟く。

そらした視線の先にあるのは先ほど敬礼をして去つていった屈強な警察官達の背中。彼らが運ぶ担架には赤いドレスを着た美人なお姫様が眠る。

先ほどマスターが撃破した第二王女キヤーリサ、その人。

昏倒した第二王女を連れていく静かな男たちの異様な雰囲気は気味悪い。何事も無かつたかのように、王女だとも気が付かない彼らは黙つて連れていく。

なんとも異様な雰囲気だった。

「それで、見回りはどうだった？」

「あー、宮殿は誰も居なかったぞ」

「じゃあ女王様方はもう連れてかれたのね」

盛り上がった木の根に座る少女の吐く煙が天に昇る。50の足元で満足気な顔をする彼女が異質な存在に見えて少し怖い。

人工生命体なんかよりとても怖い生き物。それが彼女。

「そんで何がしたかったんだ？いらないうつ突っ込んで、イギリスの内政奪って、国そのものを洗脳して教祖になって、何がしたい？」

「言ってるじゃん。彼の願い、叶えてあげたいの」

靴を握る手に力が籠もる。純粹無垢な輝く瞳に恐ろしさが増す。

簡単に愛を言い切る彼女が生き物として恐ろしい。それが本心であることも、ただ人間としておかしかった。

彼女にはそれしかない。垣根帝督を救うことしか未来が見えない。

彼の呟いた言葉を受け止めたつもりで動いている。彼女にはもうそれ以外の想いは心になかった。

足も取られ、能力も奪われ、体も奪われた齡十六の子供。一番になりたかった幼い少女が全て失い、精神が崩れるのも至極当然なのかもしれない。

哀れな子供に乾いた笑いが零れる。頭のおかしい人間を前に笑いが堪えられない。

生き物らしくない思考が面白くて、だからマスターとして認めてしまふ。このイカれた脳を見てみたくて、言うことを聞いてしまふ。

植えつけられた思考がまるで自分の意思だと言わんばかりに。

「……マスターは健気だねえ」

「でも、本人は望んでねえんじゃねえの？」

ため息交じりに笑う乾いた声を遮るように50と同じ男の声が静かな林に響く。湿った草を踏む革靴の耳障りな音と低い声。

振り向かずとも白い二人にはその声が誰のものか分かってしまふ。

「……待つことも出来ないわけ？」

「それはお前だろ駄犬。方向音痴すぎて家に戻れないのか？」

「あたしの家はこの世界にないよ」

「俺の隣がお前の居場所だろ」

同じように高い背、同じように整った顔、同じ声と同じよう仕草、同じ体。

違うのは色。茶色い髪と黒い瞳。白い体、白い髪、赤い瞳と黒い眼球を持つ50とはまるで違う。

オリジナル、垣根帝督。感情の動きが見えない冷たい表情で見下ろす彼にマスターはパイプの煙を吹き掛ける。

小さな口からゆっくりと吐き出した甘い煙に眉を顰める垣根帝督の顔を見て、マスターはどこか悲しそうだった。

「……面白いこと言うね。でも、この願いを邪魔させる訳にはいかないの」

白いパイプを口にしてマスターは50の目を見てまた逸らす。先に行け、そう語る瞳に頷いて宙に浮く。

他のナンバリングなら、保護対象^{マスター}を置いて逃げるなんてしない。けれども彼は違う。

彼女の命令を聞いて、彼女の願いを叶えて、彼女のために働く。

それが50の生きる理由。逃げようがなんだろうが、彼女の命令は絶対。

そうやって思考が動く。

「なら逢瀬の時間としますか。お姫様？」

「言ってる、色男」

大事な鞆を手にして、剣を受け取り彼は空を飛ぶ。灰皿代わりのお菓子の缶に入れた煙草の葉はもう香りがしない。

綺麗な翼を広げるマスターの背中を最後に、50は冷たい林を飛び去った。

誰もいない木々の隙間を縫うように翼を広げて少女が飛ぶ。その

後を追って垣根もスピードを上げる。

二人の天使の鬼ごっこ。捕まりそうで捕まらないスリルに二人して楽しそうに挑発し合う。

昂った感情を吐き出して、溜まった想いをぶつけ合う。

「俺が居なくて寂しかったろ？今なら間に合うぜ？」

「寂しきなんて、覚えたことすらないけど！」

少し上昇し、垣根は逃げる少女向けて硬い羽根を弾丸のように弾き出す。

雨のように白い羽根が降り注ぎ、逃げる彼女の後を追尾する羽根のミサイルが少女の背中に大きな衝撃を与えた。

「ふぁッ!!うぐう!!」

「はは、変な声。喘いでんの？」

「ふざけてんじゃ、ッ!?!」

「ふざけてんのはテメエだろクソガキ」

抵抗虚しく地面に落ちた白い体が呻き声をあげて白い涎を吐き出す。体の色と同じ色の液体が緑色のセーラー襟を汚し、白いワンピースに泥がはねる。

天使が穢されていく。その光景に薄く笑い、垣根は見下ろすように木の枝に降り立った。

「ッ、あッッッ!」

「なあ彗糸、俺のこと嫌いになったか？だからこんな国まで逃げたのか？」

今日初めて彼女の名前を呼ぶ。言い慣れない下の名前がむず痒くて、恥ずかしい。

ただの名前だというのに唇がくすぐったくて不愉快だ。

「はっ、嫌い？そう、そうだね、嫌いかもしれない」

「……へー、言うようになったな。命の恩人に対してお前の口からそんな言葉が出るとは」

それは彼女も同じなのか、少し苛立ったような表情で目を伏せて翼を広げ立ち上がる。

動かない足を翼で器用に動かし、地面から数センチ浮いてフラフラ

と口元を拭くと、鋭い視線を向けた。

「体のことは感謝してるよ。こんな可愛い服も、綺麗な靴も、こんなのも初めて着た。そこは、ありがとう。でもあたしはそんなものじゃ幸福になれない。分かってるでしょ？」

「……分からねえな、テメエのイカれた脳内なんて分かるわけねえだろ」

「あたしは、あたしを幸せにしてくれる人が好き。だからみんな好き。あたしを使って、あたしを頼って、あたしを踏み台にして、幸せになってくれる人達が好き。あたしを幸福にさせてくれる、この未練を叶えてくれるから」

生意気な緑の瞳が暗い夜に光る。土埃を払った髪が風に揺れ、月明かりをスポットライト代わりに彼女を照らしていた。

「でも、アンタは違う。代わりに死んだのに、全然喜んでくれなかった。抱いて、キスして、死んで欲しくないって、こんな不自由な体と不名誉な家族構成肩書きを押し付けて。馬鹿みたいに丁寧きに扱ってさ」

「それがなんなんだよ、大切にされてなんの不都合がある？」

「あたしはお姫様じゃないの！ましてアンタの彼女でも、アンタのお嫁さんでも、妹でもないっ！いい加減にしてよ！」

大きな叫びとともに、彗糸は翼を広げ月を背に木々の上へ飛ぶ。少し折れた翼と、輝きが薄らぐ光輪が見えていて痛々しい。

切羽詰まった声が響いて、ぴりぴりと垣根の指先が痺れてその光景を見ることしか出来ない。

「気持ち悪いんだよ！アンタのおかしな言動も！ぐちゃぐちゃに掻き乱される感情もっ！ぜんぶ、ぜんぶ、意味分かんなくて、気色悪くて気味が悪い！」

精一杯の叫びが、身の丈に合わない愛の告白が、異国の空で響いた。突然の告白に面食らう。彗糸を見上げたまま、目を見開いて彼女の言葉を理解しようと唾を飲む。

なんて理解力の乏しい、愚かな少女なのか。感情に振り回されて、馬鹿のように騒いで。

愛おしさなんて振り切って最早呆れしか出てこない。その想いを

正してあげたい、その感情を治してやりたい。

そんなどうしようもない情がもどかしい。

「……お前、本当に馬鹿だな。自分の感情も理解できないのか」

「理解しようとしてもしないアンタにあたしの何がわかるんだよ！」

翼を広げ、羽根が光る。垣根に対して当てつけのように同じ羽根を弾丸の如く弾き出し、鋭い羽根を降らす。二番煎じの覇気のない攻撃。未元物質の演算ができない彼女には垣根と同じ真似しか出来ない。

そんな彼女の言葉のように鋭くて、けれど純白な弾丸。

無我夢中に喚き散らす彼女にはもう手段は選べない。

だって知っているから。

どう足掻いても、第二位に傷一つ作れないことを。

「理解しようとしなのはそつちだろ！一体、何にそんな必死になってるんだ！その幸せは、誰がいつ決めたんだ！」

「あなたが教えてくれたんじゃん！死を回避したくらいで幸せにならないって、夢を叶えることが幸せだって、そうすれば垣根帝督になれるって……!!」

「——は？」

叫ぶ彼女の言葉に思い出す。彼女に小さな八つ当たりをした冷たい病室のことを。

なんと言った？なんと答えた？

学園都市などどうでもいいと、お前だけ見ていたいと、そして、夢など叶わないと、そう言った。

垣根の頬に冷や汗が伝う。その言葉は彼女を追いつめる言葉だったと、ようやく気がついた。

実の妹の為ならば何年会わずとも遠い国で勉学に励める努力の人。願いを叶える為ならば好きでもない人に愛想を振りまける人。

勘違いした親の願いの為に幼い頃から無茶ができる人。

好きな男の為に死ぬ人。

そんな彼女に吐いた弱音は、姉としての本能を刺激するのは明白。もつと考えて発言するべきだった。

後悔しても、既に遅い。

「だからここに居るの！あなたが嫌がらない方法で、誰も死なない方法で、やり直しがきく方法で、あなたの願いを叶えるために！垣根帝督をもう一度胸を張って愛せるように！」

「ツうるっせええな!!いつもいつも独りよがりな考えで！いい加減こつちを見るバーカ!!」

苛立ちと小さな後悔が押し寄せる。

降り注ぐ羽根を風で押し上げ、跳ね返す。大きな翼から吹き荒れる風は彼女に全ての弾丸を跳ね返し、小さな体に突き刺さる。

「ツツああ!!」

折れた翼では支えきれず、ちぎれた翼では空は飛べず、彼女の体は墜落する。

高い呻き声と、土に落ちた軽い音が林の中でこだまして、ざわつく木々の音がやけにうるさい。

「テメエの飼い主が誰だか本当に分かってんのか？」

「ツぐ……勝手に言ってる、どアホ」

泥だらけになった肌を擦って、低空飛行で何とか逃げようときこちなく翼を振るう。ふらふらとどこかへ飛ぶ彼女にただ呆れてため息を着く。

「阿呆はテメエの方だよ」

木々の合間を地面すれすれに飛び、地面に突き刺さる羽根で出来た道を疑うことなく進む彼女の姿を追い、ゆつくりと湿った地面を歩く。

「ついやああ?」

「……やっぱど阿呆だな」

獣道のようなうっすらとした道。突き刺さる羽根で作られた道筋をなんの戸惑いもなく進む彼女に笑いが零れる。

湿った草木の擦れる音、その次に聞こえたのは可愛らしい子供の悲鳴だった。

「なにつ、なにつ、これ!」

「お前は未来が見える。どんな世界が広がって、どんな魔術が使われ

て、どんな能力が使用される。全部知っている。けど、知らないことのほうが多い」

「はあ?」

声の聞こえた方に進む。薄暗い森の中で小さく聞こえる彼女の切羽詰まった甲高い声が虫の鳴き声のよう。

月明かりの下、そこに居たのは糸に絡まった哀れな天使様。

蜘蛛の巣に捕らえられた可哀想な蝶。

粘つく糸で身動きの取れない翼と腕。動かない足は無力で、逃げることはできない。

「俺の身長は知ってるか?血液型は?体重は?誕生日は?好物は?好きな女のタイプは?お前は本に書かれた内容以外は何も知らない、知ろうとしない。書かれてないものは大切じゃないからだ」

「……それが?」

「つまりだ、なにかもを知っている傲慢なお前は筋書きにないことを予測できない。だからこうやって簡単に知らない罠に嵌る。俺が罠を張るような男と思っていないから。蜘蛛の巣をトラップに使うような男だと思っていないから」

落ち着いた垣根の声色と、見下す瞳に彗糸の興奮も落ち着いていく。

「糸だらけの蚕みたいで、可愛いんじゃないの?なあ、ちび」

「……緊縛好きのロリコン野郎。子供が好きならここにいないで杠林檎と仲良くしてれば?」

「俺的にはお前と仲良くしたいんだけど、ダメなわけ?」

いつもの彼女なら見せない酷く荒い口調と蔑むような目付きに苛立つ。

小さな頭に手を置いて、白く光る髪を滑るように撫でる。優しさこそが、彼女にとって一番の痛みだから。

『動きを止めたきや殺せば良い。気に食わない物があるなら壊せば良い』それがアンタの考えなんですよ?気に食わないあたしと仲良くして、なにがしたい?」

「何かしたいわけじゃねえよ」

「じゃあなんなの？何をしにイギリスまで来たの？」

「そりやお前、お姫様を捕まえに来たに決まってるだろーが」

彼女も苛立つているのか、言葉の節々が強くなる。からかうようにそれを流して、髪を手取る。

甘い香りがまわりついた髪の毛は蚕の糸のよう。

「お姫様？それはこのあたしのこと？」

「お前以外に誰かいるか？」

「んふ、ふふふ、垣根くんって存外馬鹿だよね」

突然、鋭い瞳が優しく、柔らかく、髪を梳く手を見つめる。

傲慢で、万物を見下す腹立たしいその眼。強がる彼女に思わず小さく笑う。

可愛そうで仕方がない。なのに笑みが止まらない。

「……ああ、本体のことなら、お前のチョーカーから接続先調べて迎えるに行けばいいだけだ。残念だったな」

「想像力が足りてないよ、そんなに馬鹿だったの？」

「あ？お前の体はもう動きもしない、喋りもしない。このチョーカーがなくなったらこの体も壊れてしまう、植物状態の玩具だろ。そこに何を想像するんだ」

髪から喉を囲む白いチョーカーに手を伸ばす。

反抗しようと口を開いて喋る彼女の声を響かせる喉の動きがよく分かる。

「本当に？着せ替え人形を子供のおままごとで動かせるように、パペットを手付けて、代わりにしゃべらせるように、人形は誰かが手にして初めて動くんだよ」

「50番のことか？それならすぐ後を追うし、お前をここで殺せば接続は切れる。能力だって、もう使えない」

「気づかない？虫にも人にもなれる変幻自在の奴隷と、脳の動かない空っぽの人形」

立場が崩れる音がする。彼女の言葉に顔が強ばり、嫌な想像が巡って、心音が響く。

大丈夫だと、心配するなど暗示しても、彼女の見下す笑顔に不安が

押し寄せた。

「……まさか」

「彼の使命は至極簡単。本体に寄生して、あの体を戦地まで移動させること。接続なんて関係ない。残念、目的はもう済んだんだ」

「ツ、テメエ、ベラベラ喋ってたのは時間稼ぎかよ……!」

「アンタと同等の演算能力を持つ彼なら、あたしの脳を直接動かして能力を使うことだってできる。食峰操析の心理掌握メンタルアウトも、結標淡希の座標移動ムーブポイントも。データさえあればなんだってできる。それがアンタの作ったちっぽけな虫の別の活用方法だ」

心音が止まるほど、彼女の言葉が恐ろしい。

想像出来なかった。自分の体すら無下に扱う、駒として見ている彼女の思考を把握出来なかった。

彼女は上条当麻とよく似ている。

自分の体を使い潰すところ、自分自身を駒として見ていること、自分以外の全てを救うこと。

気づいていたはずなのに。

優しくて甘い彼女にどこか手を抜いていた。話せば戻ると思っていた。好きなら隣に来てくれると思っていた。

でも彼女はすぐくて、他人の感情なんてどうとも思わない。

共感性の乏しい愚かな女。

——本当に大っ嫌いだ

『筋書きにないものは予測できない』だっけ？ さっきの言葉、そのまま返してやるよ」

ぱきんと、音がした。首を触る手に力が籠もる。

最後の言葉を残して、その人形から音はもう出なくなった。

疲弊と愛憎。

白いチョーカーの残骸と、溶けていく少女だった白い塊だけが彼に残る。

ただひたすらに虚しかった。

追いかける気力も湧かず、ただただ黙って座り込む。もう愛されない気がして怖かった。

明るく活気のある街で、煌めく町の装飾にも劣らない美しい少女が賑やかな店が並ぶ道を歩く。

花の香りを纏う彼女は街を歩く全ての人の視線を奪う。その美しい外見に、誰もが視線を逸らせなかった。

「あの人、リアルラプンツェルって感じじゃない？」
「背高いし、モデルかな？」

地面に着いてしまいそうなほど長い金髪と、目元を隠すような前髪。一際目立つ170を超える高身長。

前髪の隙間から見える顔はアジアンのような、ヨーロッパのような不思議な顔立ちで、天香国色と呼ぶにふさわしい。

「でもなんで男物？」
「確かに」

しかし着ている服は男物のスーツ。真っ白なスーツ、シャツ、セーター、靴。

どこか無機質な素材で出来たスーツは少女の年不相応に膨らんだ胸と、細くも女性らしい下半身、凹凸のハッキリした女性の体には全く似合わず。

変な想像や妄想が膨らむのも当然の話だった。

「あれじゃない？ホテルで取り違えちゃったとか」

「あは、それありえるかも」

馬鹿にするような英語と、やらしい視線が少女の体にいくつも突き刺さる。異国の言葉でも罵られるのは不愉快だ。

名誉のためにも服は変えた方がいいかもしれない。

足を止めて少し曇ったショーウィンドウを見つめると、血のように赤い瞳が前髪の間から見えた。

「脳みそに服のデータあればいいけど」

そう呟いて50はガラスに映った赤黒い瞳と見つめ合う。ポケットの中で握りしめたりモコンのひんやりと冷たい感触が熱を崩す。

面倒な視線から眠るマスターを守りながら、彼は険しい表情を浮かべてその場を立ち去った。

116話：ああ、おぞましい

暗い森の中、誰かの吐息が聞こえる。

誰かが息をする音。キャーリサに付いていったインデックスか、第三王女か。

探している面影を求めて、湿った林で吐息の聞こえた方へと上条当麻は走る。

ただ走って、走って、息が上がる。それでも走って、あの優しいシスターを迎えに行く。

白く曇る息が暖かい。冷える鼻先がじんじんと痛み、けれど体は温かく、止まらないエンジンが心臓の奥で動いているかのよう。

インデックスを、ヒロインを救いに主人公は悪へ向かう。自分を変えた友人の悲痛な表情に少し悲しみを覚えながら、彼は走っていた。聞こえる吐息が彼女のものでありますようにと、強く願いながら。

「……垣根？」

その音がする方へ足を踏み入れる。哀愁漂う上品な赤紫のスーツを汚して白い何かを抱き締める男の姿に足を止めた。

高い背、その身長に見合った高校生らしい細身な男が体を締め、静かに息をしている。飛び込んだできた光景に不安と気まずさを感じながら、上条は静かに彼の名前を呼ぶ。

垣根帝督、その名を。

「なんだ、ヒーロー様が何の用だ」

「お前、何して、何だよそれ……？」

ゆっくりと彼の元へ進む。覇気のない声と、丸まった背中になにか違和感を覚えていた。

その違和感は言葉にできない。近づくとつれ早まる心音と安らぐ柔らかな甘い香りに息を飲む。

近くにつれはつきりと輪郭が浮かび上がる白いそれに、恐怖が湧き上がる。

それは子供。美しい子供。

白く長い髪と、白い肌。真っ白いワンピースの緑の襟と金色の装

飾、光のなくなった暗い緑眼。

だいぶ前に天羽彗糸として紹介された彼の義妹。大人びた同級生の幼い姿。

「可愛いだろ？静かで。このままずっと黙ってればいいのにな」

「本気で言ってるのか？」

「どうだろうな。こんな柔らかかすぎる液体は好みじゃねえのは確かだ」

赤紫のスーツにべったりとついた緑がかった白い液体と、生気のない碧眼。

どろどろとけていく小さな体を抱きしめて、小さく呟く。白い液体と、溶けていく皮膚。人間というより、菌類のような最期。

もう喋らないその子供を膝に乗せて、彼は液体になつていく白い髪を撫でる。全てを諦めたような無表情がどこか恐ろしくて、寂しかった。

「それで？真犯人が分かってインデックスを探しに来た感じか？アツクアたちとはまだ会ってねえみたいだな」

乾いた笑い声を漏らしながら全てを知っているかのように淡々とした口調で上条の行動を言い当てると、どろどろの体を持ち上げてその場に立つ。

高そうなズボンが土で汚れ、白い肉塊で漂白される。

鋭い目がどこか荒んでいて、上条のよく知る気さくで、少し高飛車で、けれど根は優しい、そんな『垣根帝督』とは違っていた。

「……勘がいいな、そんな感じだよ。そしたら最悪の現場に居合わせちまった」

「最悪の現場ねえ。いい機会の間違いじゃないか？ヒーローさんよ」

「さっきから、なんだよ。そのヒーローって」

「テメエの役割だよ。成功が決められた最高の身分のこと」

少しづつ、ゆっくりと白い塊は蠟のように溶けていく。ぼたぼたと重い液体を地面に落としながら溶けていく体を抱きしめて、彼は酷く低い声で言葉を続ける。

「いいよなあ、人を殺したことがなくて、ずっと傍にいてくれる

優しい女の子がいて、酷い現実ヒロインに押し潰されそうになっても支えてくれる。死ぬこともなくて、手を汚すことも無くて、ハッピーエンドが確約されてるような人間なんて。心底羨ましい限りだ」

「俺にとつては、お前の方が羨ましいけど」

「誰もを救えるヒーローが悪人に羨むことが何かあんのかよ」

投げやりな彼の言葉に胸の奥がちくりと痛む。憎悪渦巻く黒い瞳に拳を握る。

嫌だった。垣根帝督という男にそんな顔をされるのは。

「俺はヒーローなんかじゃねえよ」

「あ?」

「女の子一人守れなかった、情けない野郎で、少し口の上手い偽善使いフォックスワードだって、ずっと思ってる。今だって守れてるか分かんねえ。不安だよ、何もかもな」

握った拳の中が汗ばむ。

思い出すのはあの日のこと。蒸し暑い七月のこと。

運命が変わったあの日のこと。

「あるときだって。狭い部屋で、虚ろなインデックスの前で、こんな俺に彼女が救えるのかって、嬉しかったけど、同じくらいすんげー不安だった!」

宙に浮かぶ魔法陣と狭い畳の部屋。ヤニ臭い室内とアルコールの匂い。

鳥肌立つ恐ろしい攻撃。魔術の光を反射する神裂火織が扱う細かいワイヤー。

そして虚ろな目のインデックス。

「でもなー俺なんかのために身を呈した天羽も俺も、全部、丸ごと守って見せたテメエのせいで、俺も守って見せたと思って思った! 誰よりも強いお前が、誰よりも自信のあるお前が! 焦って、崩れて、手を伸ばして、守るお前を見て、今のままじゃダメだって!」

喉が痛むほど強く感情を吐く。

初めて救えた人を大切にしたいって思った。

お前みたいになりたいって思った。

俺も守って見せようって思えた。
上条当麻は死んでいない。

今までの記憶がある。紛れもない本物の上条当麻である。

コンプレックスに苛まれ、不幸を諦めた、少しオタクな普通の高校生。死地へ向かう勇氣も、愛を曲げない強さも、本来あるはずない。けれど、彼は『主人公』をできている。

物語と同じ。億さず歩む勇氣を、愛を守る強さも、何かを失う恐怖を、正義を説く心を、彼は持っている。

物語と違う、けれど同じ『変化』を彼は起こしていた。

物語と似て非なる衝撃が彼を撃ち抜いた。

それに物語に居ない『異物』が関わるのは明白だ。

「歯ア食いしばれよヒーロー！お前のふざけた考えなんて、吹き飛ばしてやる！」

「……いいぜ。テメエの前にいる男が脅威そのものだと、身をもって思い知れ！」

白い体を抱えて垣根は空へ一直線に飛ぶ。木よりも高い空で彼は美しい翼を広げて不敵に笑った。

眩しい月光が白い翼を通り過ぎ、木々の隙間から一筋の淡い光が差し込む。

人の世で見れるどんな光よりも美しいその光は、とても不穏な暖かさを孕んでいた。

「月明かりで死ぬ気分はどうだ？」

「あつちい、だけだよ！」

ちりちりと焦げる木の幹にぎよつと目玉が飛び出るほど驚いて、転がるように木陰に隠れるように移動する。

月光を変換した眩しい殺人光線は隠れる場所の多い林の中ではあまり意味が無い。

「ここじゃ意味は無いか。ならっ！」

一筋の風が吹き荒れる。月明かりを反射する小さな粉が風に乗って地面に、木に付着した。

何をしたか、どんな攻撃か、いまいち知らない垣根の能力に緊張し

ながら粉の降り注いだ地面に注意を向ける。

聞こえたのは卵の殻が敗れるような軽い音。

ぱきぱきと、不快な音を立てて勢いよく飛び出したのは、剣先のように鋭い何本もの結晶。

殺意のこもった美しい結晶だった。

凄まじい勢いで上条の足元から尖った透明な結晶が命を取ろうと迫り来る。きらきらした美しい姿から想像もできないほど尖った先端が怖い。

「未元物質を周りに展開してもその右手で簡単に抹消される。なら話は単純、物理を持ってテメエを制す!」

「うああっ!?!ず、ズルすぎるだろ!」

「はっ、ズル?ズルはその右手だろ主人公!」

地面から生えてくる結晶を避けながらただ林を走る。

空から追ってくる垣根の冷たい声が腹立たしい。切羽詰まった心音が足音と同じように加速する。

打開策がない自分がなんとも不甲斐なかった。

「何もかも拒絶する能力は、裏を返せば全てを蹂躪し、何もかもを支配する力!誰にも負けない唯一無二!それを不幸なんてぬかすお前が大っ嫌いだっ!」

「んなこといったら!何でもそつなくこなして!恵まれてるくせしてそうやってコンプレックスでねじ曲がって面倒くさいお前は嫌いだよ!」

「何も知らねえくせに!上から目線で!高説垂れてどうもありがとな!!お前の何から何まで気に食わねえんだよクソが!」

結晶と木々に塞がれ立ち往生。進む道が無くなり、行き止まりに冷や汗がどつと溢れる。

ふと見上げた空で垣根の黒い瞳と目が合った。

やられる。

月を覆い隠す巨大な陰に本能で感じる。潰される、と。

喉を引っ掻く彼の罵倒に唇を噛みしめる。

大事な友人の言葉に、心は確かに傷ついていた。けれど不思議と嫌

な気分はしない。

初めて対等になれた気がした。

「上から視線はテメエだろ！そうやって安全地帯で見下ろして！あーだこーだ言って！大切な女ひとりに感情拗らせて！」

だから同じように高らかに主張を叫ぶ。高鳴る心音と、昂ぶる感情。

初めて彼と本心を叩き合う。友人として、憧れとして、境界を引いていた男と対等に。

何だか楽しくて、何だか嬉しくて。

能力で出来た風に薙ぎ倒され、倒れてくる木々に口角が上がる。

地面から生えた青白い結晶、倒れる木。空を飛ぶ垣根の曇った表情にほんの少しの揺らぎが見える。

行き場も逃げ場もないのに思考は勝利を確信していた。

「なっ!？」

「お前のできることを思いだせ！八つ当たりばっかしてねえで、腕に抱えた好きな女に何をしてやれるかを！」

跳躍し、陰を踏む。倒れてくる木を階段のように一步一步、駆け上る。落ちる階段だって登れてドアまで飛べる脚力、人を数メートル吹き飛ばせる腕力、御都合展開を引き寄せる主人公補正^幸_運。

出来ないことなどない。倒れる木々を階段のように飛び越えて彼の元へ腕を伸ばす。

しっかりと握りしめた拳に全てを乗せて、迎え撃つ。

「テメエの想いがしがらみになるのなら！その想いに足を掬われるのなら！俺が！そのふざけた幻想をぶち殺す！」

全てを征服する右手が垣根の頬へとめり込む。作られた翼は消滅し、大きな衝撃が垣根を襲う。

怒り、焦り、そして喪失感。濁った黒い目は虚ろに閉じる。

初めて受けた頬への純粋な拳に、垣根の磨り減った精神は動きを止めた。

——そういえば、あの病室の日からまともに寝ていないうつつすらと見える不健康な青いくまを消すために、彼の脳は回転を

止める。重力に従い、男二人は暗い林へと落ちた。

「うわああああ!!? 起きろ垣根ええええええ!! 気絶しとる場合かああ!!」

消えた翼、気絶した垣根。力無い普通の男子高校生二人が地面に落ちるのは自然の摂理。

達成感はや焦りにかき消えて、月の綺麗な空に叫ぶ。同じように綺麗な顔で気絶する垣根に少し苛立ちながら、腹に感じる粘ついた少女の体に気持ち悪さを感じながら、上条は己の不幸を叫ぶ。

「ふ、不幸だああああ!!」

だが幸運にも衝撃は彼らを襲わなかった。

二人の隙間から溶け出た白い人間モドキの残骸が彼らよりも早く地面に落ちる。溢れた白い液体はちょうど少年二人分の大きさに飛び散って、クツシヨンのように彼らを受け止める。

「あれ、無事……?」

彼女の意識が残っていたかは定かではない。そもそも、ただの器が意識を持つのも疑わしい。

ただ、その器の最期は彼女によく似た終わりだった。

上条たちが立ち会う前、隼糸がカバンから飛び出す少し前。煌びやかな宮殿の一室で二人の女性がティーカップ片手に口を嚙む。

暗くなってきた窓の外と、湯気の上がる紅茶の甘い香り。女王陛下

と髪の長い女性が二人、突然入ってきた男たちの言葉に目を見開いた。

「キヤーリサが指名手配された、だと?」

白いドレスを纏ったご婦人、女王エリザードは彼らの言葉を繰り返す。ドアを守る警察たちの言葉が脳内を駆け巡る。

アフタヌーンティーで穏やかになっていた心境が乱れた。

「参考人として同行願います、女王」

十人もいる警察官たちの鋭い視線。何も思っていないような冷峻な瞳が恐ろしい。

「こんな大変な時になぜ、いや、それよりも貴様ら警察、国家権力は王室派だろう!?この非常事態も通達していたはず」

「我々はイギリスの誰にも従わない。我々が慕う最愛なる主は貴様のような老いぼれではないのでな」

「あらら、老いぼれだって」

冷酷な警察官たちの視線を馬鹿にする様に女王の隣で紅茶を啜る女性がニンマリと笑う。体長の二倍はある長い金髪を後頭部で筒のようにバレッタで留めて、ベージュの修道服を着た彼女の鬱陶しい笑顔が腹立たしい。

彼女はローラースチュアート。イギリス清教の最大主教であり、必要悪の教会のトップ。

輝く碧眼を歪ませてからかう彼女はとても愉しそうだ。

「茶化する最大主教―それでキヤーリサは一体、」

『2000年テロリズム法第五、六条：軍隊、警察又は情報機関の構成員に関するテロリストにとつて有用な情報の収集、伝達、公表』及び『2006年テロリズム法第一条：テロリズムの奨励』に従って先ほど手配された。反抗するならば共謀罪と判断する」

「テロ……?」

「つまり、この有様はお前のところの娘が引き起かしたり?」

ティーカップに口をつけるとローラはため息交じりに警察に視線を向ける。煌びやかな室内に似合わない屈強な武装集団はその言葉に頷いた。

信じられない。女王の頭はそればかり。ローラの愉しそうな笑顔に苛立ちながらも、受け止めた言葉に混乱する。

ありえない。指名手配などあり得るはずがない。

自分の娘が指名手配される様なヘマをするわけがない！

「さすが我が娘！……と言いたいところだが、彼女ならテロを起こすまで完璧に隠蔽するはずだ。何か隠しているな？」

「全て我らの最愛なる主のお導きである」

母ゆえの確信に顔を顰めるも、男たちは眉一つ動かさない。

それどころか意味不明な言葉を並べて彼らは虚ろな目を光らせる。眩しい星が光る彼らの目はもはや女王達を見つめていなかった。

「主……？・宗教か？」

「これは教えなどではない、恋である。そして同様に我々は信徒ではなく、下僕。彼女の言葉は全であり、彼女の存在は世界である」

淡々と彼らは伝える。平坦な物言いから感じる異質さが気味悪い。

国家権力の一員とは思えない盲目的な言葉が信じられるほど女王たちは素直ではなく。呪文を唱えるように呟いた恋心を信じることは出来ない。

「こ、恋い？・どういうことだ？」

「そういえば、学園都市より人心掌握に長けし超能力者がイギリスに逃亡したから確保に能力者を派遣したって言われたける気が……」

洗脳されたかのような警察官たちの虚ろに輝く瞳に疑問を持つと、隣で他人事のようにローラが首を傾げる。

何気ない一言だった。けれど衝撃的な一言だった。

「なぜ言わん！・ってことはあの色男が派遣された超能力者なのか!？」

「言ったなりわよ！……忙しけれかったから、王室派に伝言するよう言ったなりけるけど……」

「そりゃあ報告こないわ！」

「し、仕方なからずじゃない！知らざりなりけたのだから！」

問い詰める女王に焦りながらローラは膝にティーカップを置いて頬を膨らませる。バツが悪そうに視線をそらす彼女が全面的に悪いわけではないのは女王も分かっていた。

けれども納得いかない。傍若無人とも言える面倒な性格をした女、善悪を気分で変える彼女に疑いの目を向けるのも無理はない。

「……はあ、話を戻そう。最愛なる主とは誰を指す？」

それ以上とやかく言うのも駄目だと感じ、女王はため息を零す。姿勢を伸ばし、男に引けを取らない鋭い眼光を虚ろな警察官たちに向け、力強く眉をひそめる。

威厳ある姿はまさに女王らしかった。

「天を羽ばたき、救済の糸を垂らす美しき彗星」

女王の言葉に一人の警察官が口を開く。

「最も崇高で、最も偉大で、最も恐ろしく、最も愚かな人」

一人、もう一人、交互に口を開いて瞳の中の星を瞬かせる。

神を愛する信者のような声色、恋する乙女のような恍惚とたるんだ口角。

「神たる支配者、我らは彼女を『アザ』と呼ぶ」

紡がれた恐ろしい予測が二人を襲う。

恐ろしい違和感、不穏な口ぶりに彼女らの直感は告げる。

最悪な事態が招かれると。

「『アザ』？ 墮天使アザゼル？ それとも何かの象徴か？」

『アザ』とは『力』、力そのものを意味する短い言葉。

続く単語は多くあり、それが何を意味するのか女王には分からない。そもそも彼女の解釈があっているかすらも怪しい。

けれどたった一人、理解に届く生き物がいた。

言葉の真意に気がついたのは規格外の悪魔だけ。似た様な生命の匂いは言葉越しにも伝わるのか、彼女は薄く微笑んだ。

「……異世界の神、か」

ローラの眩きは誰かに聞かれることもなく空気に溶ける。

力ある凶兆。

神たる支配者。

信徒のない怪物。

世界を夢見る愚者。

それは物語でしか生きることのできない二次元の神。

全ての元凶、全ての光、舞台の上の都合デウス・エクス・マキナのいい神様。
彼女が思い出したのは一つのフィクション。一つの創作。一つの
嘘。

『アザ』の名がついた白痴の魔皇。
彼女と同じ、聖書にない恐ろしき神格の名。

117話：準備段階

「インデックス！どこにいるんだ！」

林の中、暗鬱とした暗がりをも男一人背中に抱えて上条当麻は歩く。ただひたすらに会いたい少女の名前を叫びながら、歩く。

しかし自分よりも背が高く、かと思えば細身な友人を持ち歩くのもそろそろ体力の限界だった。

「クッソ、垣根が起きてくれれば上空から探すんだけど……起きろー
!!!」

「……やかましい」

とうとう我慢の限界に達し、背中ですやすよ寝息を立てていた友人を地面に落ろして肩を揺さぶる。

眠そうにうつすら目を開いて、片手で頭を支えると彼はため息交じりに呟いた。暗がりでも分かる彼、垣根帝督の整った外見が同じ男としてなんだか腹立たしい。

「気絶しとる場合じゃねー!!インデックスと天羽探すぞー!」

「あもう……うっ、ストレスで胃が……」

「大丈夫そうだな、ほら行くぞ」

ゆつたりと立ち上がる垣根に頷いて先に行こうと再び進む。

しかし、進もうと足を出した僅かな瞬間、殺気と呼ぶべき気配が体をちくりと刺す。冷たい空気に乗った誰かの視線が痛かった。

「おや、探し物かい？」

気配がする方へ顔を向けると、誰かが鼻で笑うような軽薄な声色を吐き出す。

そこに居たのは知らない男だった。垣根に引けを取らない色男で、背も高く、細身。肩につきそうな赤毛と夕日のような黄金の瞳が夜の暗闇でも目を引くその人は、どことなく垣根と似ていた。

「……誰だ、テメエ」

「右方のファイアンマ、といえはわかってくれるかな？」

「右方？」

「神の右席ってやつだろ、ほら、アックアとか」

切れ長の綺麗な目が？細身な肉体が？全体的に暖色だから？
いや、違う。

もっと根本的なところ。精神の方。

関わってはいけない、そう感じさせるなにか。

恐ろしさを感じさせる何か。血の匂いを感じる何か。

きっと彼らは同類だ。

「なんでそんな奴がこのこと俺の前で喋ってる？目的はなんだ」

「無意識か計算か、俺様の手助けをした奴がいてな。どんな奴か見に来たんだが……どうやらもう離れたらしい」

警戒心を強めて、鋭く睨む。フィアンマと名乗った男はその眼光を気にも止めずに辺りを見渡す仕草をして肩を竦めた。

探るような目付きに体が強ばる。何か言いたげな表情から、目的を察することは難しく、緊張が走る。

けれど、相手はそうは思わないようだった。

少し眉を動かして、黒い瞳を細める。なにか気づいたようだった。

呟いた声は酷く低い。

「あの馬鹿……宮殿の方も何か細工したのか」

「誰を思い浮かべてるかは知らんが、そいつのおかげですんなりと霊装が手に入った。ありがとうとでも伝えて置いてくれよ」

得意げな顔で笑うフィアンマに思考が引つかかる。大切なのは誰が手伝ったかではなく、何を手伝ったのか。

突然でてきた霊装という言葉に、自然と興味が惹かれる。インデックスが関わっているかもしれないと、嫌な予感が上条の脳内に鳴り響いた。

「霊装だと？」

「すごいぞ、見るか？」

訝しげに聞き返すと、彼はニンマリとあくどい笑みを浮かべて手のひらを上に向けた。その上に浮かぶのは小さな筒状の貴金属。筒を囲むように取り付けられたアルファベットが書かれたダイヤルロツクそっくりな装飾がひとりで動く。

鍵を開けるような動きをするその霊装は厳かにかちかちとアル

フアベツトを並べ、薄暗い夜が動くような大きな音が鳴った。

その音は土から響いていた。地響きを起こし、何かが勢いよく地面から現れる。

大きな音を轟かせ、硬い土を割って現れたのは白い亡霊。

探し続けていた生きた亡霊だった。

「インデックス!？」

ガラス細工のような美しい緑眼は光を失い、虚ろな表情をした小さな白いシスターが現れる。ずっと一緒の時間を過ごして来た、インデックスその人。

求めていた探しびとにようやく会えた高揚感と、いつもの明るく可愛い姿とは全く違う姿に不安で心臓が脈打つ。

土で汚れた彼女の異様な姿は嫌というほど見覚えがある。

魔道書図書館、その姿。

「はい、私はイギリス清教、第零聖堂区必要悪の教会、所属の魔道書図書館でs——」

「おや、整備不良かな?」

壊れたスピーカーのようにノイズを滲ませインデックスは汚い地面に倒れ落ちる。

気絶したのか、もう彼女の小さな口から言葉が発せられることは無い。

「インデックス! テメエ、インデックスに何をした!」

「知らんよ。知りたければその娘の製造責任者共に聞け」

慌ててインデックスに駆け寄り、体を抱き寄せる。土に汚れた銀髪が、月に照らされ輝いていた。

その様子を冷めた目でみつめるフィアンマという男に酷く憎悪が湧く。

「さて、俺様はちよつとロシアに行つて素材を回収しに行かねばならん。それまでは禁書目録とその右手の管理はお前に任せておく」

その視線を嘲笑うかのように鼻を鳴らして、彼は夜闇に消える。

ふつと、煙のように消えた男の憎たらしい笑みがずっと脳内を蠢いていた。

日が昇り、イギリスにいつもと同じ朝が来る。

バタバタと騒がしかったロンドン今日はやけに静かで、酷く静かな空気で満たされていた。

小さな窓と大きなベッドしかない狭い部屋、そこにいるのは男二人と、老女ひとり、そして眠る少女だけ。

「奪われた霊装は安全装置だ。意識がないのはおそらく、安全装置起動に必要な『首輪』がないため負荷がかかったのだろう」

「安全装置？」

一人柔らかなシーツの上で眠るインデックスを見つめながら、上条は女王の言葉を繰り返す。

少し疲れた顔をした女王エリザードは、上条の言葉に小さく頷くと再び口を開いた。

「十万三千冊の魔道書を記憶したこの子に日常生活を送らせるための安全装置。基本的人権を保障するためのものだ」

「えーと、基本的人権って、どういうこと？」

「銃みたいなものだ。『これは安全装置が着いている、だから一般人が扱っても大丈夫』っていうガバガバ理論。インデックスみてえな魔術サイドの核兵器みたいなもの、安全性が確保出来なきゃ逃走防止に幽閉、四肢切断、殺害したっておかしくないだろ？」

エリザードの言葉に繋げるように上条の隣で壁にもたれて垣根はため息を吐く。

僅かに感じる苛立ったような彼の刺々しい雰囲気は少し怖い。

「その通り。極論的な『非人道的な防衛手段』を回避するために策定された霊装だ」

「まあインデックスを魔導書図書館なんてものにした時点で基本的人権なんてないようなもんだがな。変なところで気を使うのは自分たちが反論なしに武器を持つためだ、優しいとか思わない方がいい」

不機嫌そうに腕を組んで垣根は俯瞰するように呟く。濁った黒い瞳は何かを蔑んでいるようで、強く握ったスーツは皺ができていた。「辛辣だな」

「子供が犠牲になるのは学園都市じゃ当たり前だ。そしてそいつらを信頼しないことも当たり前なんだよ」

「……とりあえず禁書目録はこちらで預かる。ファイアンマを倒さない限り、この子の安全は永遠に保証されないだろうが」

眉間の皺が消えない友人に困ったように聞き返すも、苛立ちが増すだけのようで低い声色は一向に明るくならない。

「それとは別件だが、ケイトという名に聞き覚えはあるか？」

「あ？なんでだ？」

「……いやね、イギリスに拠点を置く大手企業や国営組織がこの何日かで勝手に買収されていたり、権利を受け継いでCEOやら名誉顧問になっているやら、その名前で悪事を働いている子がいるようなんだよ」

重い空気に困ったように咳払いをしてエリザードが険悪な空気を収めるように話を変えようと垣根の方を向く。

含みを持たせたエリザードの言葉に眉をぴくりと動かして、垣根はさらに深く眉間に皺を寄せる。

買収、権利、などなど、大人な会話だとぼんやり聞きながら上条は一切分からない事情に困惑しながら二人を見つめるしかできない。

それが正解なのかも分からないが、理解できない会話に茶茶を入れるのも躊躇われた。

「確かにその女を取っ捕まえんのが俺の仕事だ。だからと言ってその女がしでかしたことでまで責任は取れないぞ」

「しかしお前の妹なんだろ？説明の義務くらいはあると思うが」

「いいや？俺の妹はもう殺した。それは別人だ」

「……ではその女はどこへ？」

「ロシア。おそらくフィアンマを追ってんだろうな」

「俺と目的地は一緒ってことか？」

「目的そのものは違うけどな」

険悪な雰囲気か漂って来た会話に聞き馴染みのある国名がある。フィアンマが去り際に残した国の名前に、パツと顔を上げて垣根と目が合った。

どうやら考えている事は同じ模様。

瞬間と呼べる短い時間、互いに行うべきことを理解した。

「なあ、しばらくの間イギリスの魔術師たちにインデックスを任せていいか？」

「いいが、少年はどうするんだ？」

「俺はフィアンマの野郎を、この手で殴りに行ってくる」

グツと拳を握り、一人静かに寝息を立てて眠るインデックスの綺麗な寝顔を見つめる。

救いたい。この少女を。好きな人を。大事な子を。

何も悪くないのに大人たちに利用され、制御を奪われ眠ってしまった彼女を、他でもない自分が救いたい。

「行こうぜ、垣根。ロシアまで！」

「言われなくても、そのつもりだ」

二人のヒーローが互いに視線を交差させる。

すべき事は決まった。あとは少女を起こしヒロインに行くだけだった。

窓の外から見えるエッフェル塔と華やかな街並みに少女はため息をこぼす。滑るように前髪を切り落とすハサミの音が心地の良い。

戦争が始まるかもしれない世界で、こんなにも平和なのは少しありがたい。やることが多いのは変わらないが、少しでも負担が少ないほうがいいに決まっている。

とはいえ、後ろでSPのように待機する信者たちの視線はあまり喜ばしくない。

平和なはずなのに、どこか居心地が悪かった。

「終わりましたよ、我らの主^{アサ}」

「どーも。やっと視界が見やすくなる」

貸切状態の美容室で虚ろな目をした若い男は出来栄えに満足したのか、ハサミを下ろして少女の服を守るスモックを外す。

地面までつく金髪と、マグマのように赤い瞳。大きな胸と女らしい体を隠す少し色褪せた長袖の青いワンピースと白いエプロン。

最後に白いリボンを二つ使ってカチューシャのように首元で蝶々を結ぶ。ピアスががない分寂しい耳元が、白いリボンで華やかに飾られ、ちようどいい。

鏡に映る完璧な少女に思わず笑みが浮かぶ。

鏡に映った天羽彗系の姿に、中身である50は嬉しそうに目を細める。鏡を見れば可愛くて色気ある女、すぐ下をみれば男のロマンがぶら下がっている。

男としてはきつと夢のような光景だ。

「後ろはいかが致しましょうか」

「あー、別にいい」

嬉しそうに喋る美容師の話を適当にかわしながら50はじつと鏡に映るマスターの姿を見つめる。自分が動けばマスターも動く、自分が笑えばマスターも笑う、自分が着替えれば、マスターも着替える。鏡で見ると人形劇のようで面白い。

うら若き乙女にふさわしい清楚な服と綺麗な金髪が見ていて飽き

ない。体の持ち主の記憶から引つ張り出し、自分の体の一部未元物質で構成した世界に一着しかない服。

——マスターの脳内にこんな可愛い服の記憶があつたとは思つてもみなかった。

そんな失礼なことを考えながら長い髪をいじる。記憶の中にあるのは露出が高かったり、今の時代にそぐわないセンスのものばかり。背が高いため似合う洋服が輸入品や掘り出し物のある中古だけだからといって、なんともセンスが悪い。そのため記憶の中で見つけた大半の服のデータは使い物にならなかった。

少女らしく可愛い服の一着も着れないのかと疑問に思っていた中、唯一あつたのがこのワンピース。

これだけは、普通に、それなりに似合っていた。

「しかし、こどもも長いと不便では？」

「あ？後で結べばいいだろ」

鏡を眺めていると、不意に美容師が後ろ髪に触れる。突然のことで少し驚くが、教祖らしくあまり感情を出さずにバツサリと言葉を捨てる。

確かにくるぶしまで長い髪は、手入れも面倒で、歩くとき邪魔だろう。けど長いほうが良い。

そもそも本人の意思なく勝手に切るのは如何なものか。

「ですが」

「……テメエ、あたしを怒らせたいの？」

しかしその考えをわかつていないのか、美容師は否定されてもめげずに鏡ごしに赤い目をみる。美容師の瞳に輝く下僕一番の印星がとても眩しくて、なんだか腹立たしい。

マスターの印を持っているのが、好意を植え付けられた50の癩に障る。

思わず飛び出た低い声は、彼女の明るい声とは思えないほど怒気を含んでいた。

「あ、ああ！お許しを！怒りをお収めくださいっ！愛してます、恋しております！あなた様が一番でございますっ！」

「……ほんとかな？」

「真実です！嫌わないでください！お願いします、お願いしますっ！」
「ふーん、じゃあ許してあげる」

地面に頭をこすりつけて謝る男を未元物質で作りに出した白い足で踏みつける。

白いフラットシューズが男の汚い茶髪を汚す。見ていて気持ちがいい。

「あ、切った髪は燃やしておけよ。他人に渡したら次こそお前らのと嫌いになるから」

「仰せのままに！最愛なる主よ！」^{アザ}

「そういや進捗はどうなんだ？戦争が起きるまで時間ねえんだぞ」

ため息をつけて足を離すと男は顔を上げ、涙を流しながら笑う。気持ち悪い信者の顔に舌打ちを鳴らすと、鏡越しから後ろで待機する老若男女に声をかける。

フランスで新しく洗脳恋に落とされたした国の重役、大手企業の社長、地主、その他。待つてました、と言わんばかりに主人の言葉に過剰によるこぶ彼らは異常だった。

「Aチームからの伝達ですと、フランス国内のダムと水源のある山は買収したそうです」

「他国も少しずつですが買収しており、マスメディア、水道局、発電所も抑え、CEOの名義は全て我らが主に変更しています。好きに扱ってください」

「この国の軍も政治も、全てあなたのものです」

嬉々として彼らは自国の征服についての報告を告げる。なんとも滑稽な人たちか、恋に落ち、思考能力を奪われ、盲目になった信者たちは自ら国を捧げる。

自殺を宣言しているようなものだ。たった一人の美人のせいで、国ひとつ奪われる。

彼らに施された洗脳は恋。一方的で報われない恋心。

自らの手で全てを捧げてしまうような盲目的な恋。

恋とは洗脳。だからたとえ洗脳が解けたとしても、それを洗脳だと

認識しない。

たとえ正気に戻って全てを失ったことに気がついて、顔の良い胸の大きな理想の女に振り回された自分が愚かだったと気がつくだけ。法律上も、自分の意思で、自分の好意で全てを捧げたと判断されるため、彼らが不利になるだけ。

恐ろしい感情だ。セックスも出来ないアクセサリー以下の女に皆群がって、自分の全てを貢いでくる。

恋と呼ぶにはおぞましい光景。

「はー……洗脳とはいえ、愛する相手に自分の会社を贈るってやつば頭いかれてるな」

「我らの主が喜ぶならば、我々は命すら惜しくありません」

しかし、その感情に犯されているのは彼らだけではない。

「……それは俺もだよ」

リモコン片手に立ち上がる。

フランスは手に入れた。あとは勝手に盲目な信者たちが自ら身を捧げてくれるのを待てばいい。

まるで生き物を殺す寄生虫のよう。自分なんかよりよっぽど虫らしい。

魔性の女と呼ぶべきか。それとも邪神か。

全てを釣り上げる完璧な肉体と美貌で知らぬうちに洗脳し、恋をさせ、すべて自ら捧げるように支配する。

魔法にかけられたら最後、破滅まで一直線。最後は自死か永遠の発狂、その二択しかない。

118話：学園都市にて

雲の厚い空が大きな窓からかすかに光を入れる。

学園都市に何軒も並ぶ高いビルのひとつ、オフィスビルの一室で男は口を開いた。

「お望みの品は何かな？逃走用の車？隠れ家？それとも両替かな？」

電気の点いていない暗い部屋で男は薄く笑う。店にやってきた客を鼻で笑うと、男は品定めするように視線を動かす。

広い机においたパソコンの淡い光が唯一の光源。暗い室内では客の人相はすこし分かりづらい。

分かるのは杖を突いていること、真っ白い髪をもっていること、病的に体が細いことくらい。

そして同じ闇に潜む人ということだけ。

「まあ何があったかは聞かねえよ。必要な物を言ってくればいい」
「……雑貨稼業さんよオ、アレも商品なのか？」

だんまりだった客は、広い部屋の一角に興味を示しようやく言葉を発する。

その視線の先にあるのは重い鎖で繋がれた裸体の女。部屋の隅に置いておいたそれをじつと黙って見つめる。

「ふーん、そっちに興味があるのかな？ただ悪いんだがあれはオプシオンじゃない、サンドバッグ——」

闇を知る人間ばかりがくる店にのこのことやってきた客だ、女を虐げるのに興味があるのかもしれない。

だが薄汚れて反応も悪くなってきたとはいえ、そのおもちゃは自分専用のサンドバッグ。断ろうとため息を吐いたところ、客は唐突に重い封筒を机に叩きつける。

金一封、女を一人買うための金がぽろつと開いた封筒から僅かに飛び出した。

「っ……おいおい」

「前払いだ。こつちもつまんない仕事回されてイライラしてンだよ」

「言っておくが殺すだけで七百万だからな。でもそんなガキのどこに

興味が湧いたわけ？」

分厚い札束に僅かに驚くも、ここまで執拗に購入の意志を見せるということは暴行以上のことでもしたいのだろう。

例えば、殺人とか。

「……う？アア、そつかそつか、何か勘違いさせちまったみてエだな」

しかし、想像は結局想像でしか無かった。客の低い声に喉から出た乾いた音が返事をする。

「俺が買ったのは、お前の方だ」

そこから先の記憶はない。痛みと熱い呼吸に遮られ、思考することは出来なかった。

血溜まりの中、客だった一方アクセラレータ通行はため息交じりに携帯電話に全てを報告する。

電話越しの満足気な声が入らなかった。

「一応終わらせた。クソみてエな仕事で退屈すぎたがよ」

鉄の生臭さが鼻を刺激する。しっかりとした作りの黒い革製のオフィスチエアが赤で汚れ、汚い血溜まりをフローリングに作る。

先程までペラペラと薄っぺらいことを軽薄に喋っていた男の面影はない。慣れてしまった死体の匂いが空気を汚していた。

「ア？必要なもの？息吸って吐くだけの肉塊の回収班と……あとは女物の着替え一式つてところか。サイズ？知らねエよ」

ちらりと鎖が外れた女子生徒を横目で見て強く携帯を握る。

小さく背中を丸めて自分を守るように体を抱きしめる非力な少女は痛々しい。

「回収班も、女の人員を回してこい。男が一人でも交じってたら、そいつの金たまを蹴り潰す」

机の上に置きっぱなしだったピン札の束を少女の足元に投げ捨てて踵を返す。

血なまぐさいこの部屋からすぐにでも出たかった。

「後は勝手に生きろ。残りの人生、成功するのも失敗するのもオマエ次第だ」

「貴方は……？」

カツカツと杖が床を叩く音が響く。少女の問いかけに足を止めることなく、ただ出口へと向かった。

「……悪党だ、クソツタレの悪党だ」

呟いた言葉が少女に届いたのかは定かではない。静かになった部屋を後にして暗い廊下を進む。

次の仕事に来るまでの無意味な時間がとても憂鬱だった。

暗くなってきた午後、早めの夕飯と思い、ソースと絡めたパスタを子供用の小さなプレートに盛る。

少し焦げてしまったパスタと、綺麗に盛り付けされたサラダ、残っていた保護対象が置いていった作り置きの子チューの残り。

ソレらを自分の白い肌と同じくらい白い皿に盛り付ければ完成。

完成度はそれなり。満足するかと聞かれたら、多分する。

「ご飯できましたよ」

「……はい」

配膳用のトレイに全て載せて、黒いガラスで出来たテーブルに並べ始める。

ワンテンポ遅れて返事をして、参考書やプリントから離れて杠林檎がテーブルに着いた。なにかに落ち込んでいるのか、いつも無表情の顔は僅かに曇っている。

「なんでそんな不機嫌そうなんですか」

「別に……」

「言いたいことは早めに言う方がいいですよ？ 私は保護対象のようにフルパワーで怒りませんから」

マスターにはきつとできない芸当だろうなどと、どこか冷静な脳が考えながら杠の伏せた顔を覗き込むように優しく諭す。どちらかというど、カブトムシ05は姉の方に似たのかもしれない。

「……垣根と05のご飯って美味しくない」

意を決したように杠は顔を上げて、頬を膨らます。僅かに感情が生まれてきた彼女の顔は明らかに不満の表情をしていた。

「そ、それは……多分製作者^{マスター}のせいです、ええ、そうに違いありません」
「切るのとか、盛り付けとか、作る手順とかは完璧なのに……なんで全部強火でやるの？」

マスターから受け継げられた料理能力。不満そうに黒焦げになったパスタのようなものを見つめる杠の顔からそつと視線を逸らす。

パスタに入っていた貝は無残にも黒く焦げ、油っぽい。

「……火力こそ力なんですよ」

「せっかく綺麗にできてるし、天羽がレシピまとめてくれたのに……なんで火をつけるとあいきゅー下がっちゃうの？ 虫だから火が好きなの？」

モゴモゴと口籠っていると、杠の冷たい視線が突き刺さる。彼女らしくない罵倒も相まって複雑だった。

マスターと様々な情報、技術、記憶を共有している05はもちろん料理の仕方もマスターからダウンロード、知識の一部として構築している。だから調理の際の癖や好みがマスターと同じになる。

包丁の入れ方、料理のさしすせそ、だしの作り方。知識は全て入っている。しかしマスターも05も、経験が追いついていない。

火を扱うと途端に血が沸き上がり、なぜかフランベをしたくなる衝動が掻き立てられる。これはもうそういう性格^{設定}としか言えない。

「日に日に口が達者になりますね……成長だと喜ぶべきなのでしょう
か」

「テレステイナーが勉強教えてくれるからかな」

「そうですね、悪いところも学んでるようで……」

ため息をついて、恐る恐るパスタに手をつける杓を見つめる。人工生物だというのに、日を跨ぐに連れ成長していく幼い子供に親心のよくな何かを感じてしまうのはなぜだろうか。

嫌そうにパスタを口に運ぶ彼女は05にとって、保護する対象だった。

「……天羽たち、いつ帰ってくるんだろう」

「今は……イギリスですね。十一月には帰ってきますよ。必ず」

「遅い……」

フォークとお皿がぶつかり合う音が広い部屋に響く。さみしい子供の声が大きく鼓膜にこびりついた。

誰であろうと、子供の悲痛な声は良心が痛む。早く、帰ってこないだろうか。

「それまでに色々、トラブルは解決しておきましょうか」

「どうしたの？」

「いえ、マスターに少し頼まれごとをされていて。もうそろそろ出なくてはなりません」

杓を置いて椅子から立ち上がる。一人でご飯を食べる彼女に申し訳なさを感じながらも、今後の行動を出来の良い脳を稼働させて考えよう。

たとえ大事な少女でも、もっと大切な命令がある。

「なにをするの？」

「おいたをする輩に、少しお灸を据えに」

記憶を分け与えられた今の05はするべきことがある。

物語を円滑に進めるための下処理。他でもない自分にしかできない大事なこと。

巨大な機械が広い地下に設置され、大きな音を反響させる。

都市外周の壁をなぞるように地下二百メートルもの奥深くに作られた巨大な輪っか。学園都市の科学技術が誇る世界最大の粒子加速装置が稼働する。

フラフープと呼ばれるそれは、学園都市内でも重要な施設の一つ。侵されてはならない場所の一つ。

逆に言えば、侵してしまえば『上』と交渉ができるとも言える。

「ココが爆破可能な状況であることで、統括理事会の思い切った行動を封じることができ、か」

「流石にこんな地下深くまで誰も手出しできないだろうしな」

そんな巨大な施設の中で、武装した男たちが呟く。この施設は切り札、クソツタレな上層部に一泡吹かせるための前準備。

施設を占拠し、子供の人質を奪った。あとは交渉のみ。

迎電部隊スパークシグナルと名付けられた彼らは、愚かにも学園都市を敵に己の思想を貫こうとしていた。

「時間か」

そう誰かが呟いて、彼らは行動に移る。静かに地べたでひっ付き合う子供の群れに視線を向けて、足音を響かせる。

交渉のための人材。2ダースはいるか弱き少年少女たちが膝を抱えて彼らを見つめる。

殺害現場を動画に収め、交渉の手札にする。それが彼らの作戦。

罪悪感などとうになかった。

「せめてもの慈悲だ。目隠しをしてやれ」

「ツ！こんな計画がうまくいくもんか。お前たちの悪事が許されるなんてことは絶対はないんだっ！」

子供の群れから生意気な目つきをした少年を一人引きずり出して銃を突きつけ座らせる。黒い布で目を覆われ、数分後には喋ることすらできなくなる少年は、最後の叫びを喉の底から吐き散らす。

涙を溜めた目は布に塞がれ、何も見えない。

「俺は信じてる。絶対にお前たちを捕まえてくれるヒーローがいるんだって。みんな助かるんだ、助けてくれる人が絶対いるんだ」

「そうか、そんなヒーローがいたとしても、地下二百メートルでは間に合わないようだ」

少年の純真な言葉に男たちは下品に口を開けて笑う。夢見がちの子供の届かない祈り。哀れなガキの馬鹿馬鹿しい祝詞を笑う彼らはトリガーに指をかける。

安全装置なんてない。手段を選ばず要求を通す。それが暗部のやり方。

それがこの学園都市のやり方。

ヒーローなんて、所詮夢物語だ。

「まあ、間に合うんですよねえ」

だが少年の言葉は力となった。一瞬のうちに拳銃は分解され、男は硬い床に頭を打ち付ける。

あまりにも唐突だった。

どこからか現れたそれは、硬い防弾チョッキを貫いて背骨まで響く衝撃を打ち付ける。

圧倒的な武力。たった一人の能力者に彼らは慌てふためく。

「なっ、お前どこから、ツツガアツツウ!?!」

「我々、^{ムーブポイント}座標移動のデータは取得済みです」

男たちの野太い叫びを砕く衝撃が襲う。足で蹴って、足で踏み潰すだけ。だというのにそれが与える衝撃は人間の域を凌駕していた。

頑丈なヘルメットで守られていた顎は砕かれ、頭蓋骨は陥没、眼球は人知れずに破裂し、喉仏は潰された。

肺も、胃も、腸も、骨も、腕も、足も、辜丸も、何もかも、硬い防護服のなかで無残にも潰され、破裂し、かき混ぜられる。純粋な暴力で、彼らはあっけなく生き絶える。

頑丈なヘルメットと衣服が血が漏れ出すことも、死に際を子供達に見せることもなく、場を汚さずに息を止めた。

「さて、もう大丈夫ですよ。お嬢さん方も、お怪我は？」

少年の目隠しと拘束を外し、それは優しく微笑む。

それはどこまでも白く、美しくも儂い少年の姿をしていた。高い背、細くもしっかりした体格、初恋を奪い去る甘いマスク、優しい声色。

白の中で輝くエメラルドの眼が輝く海のように眩しい。

ヒーローと呼ぶに値する、そんな生き物が優しく彼らに微笑んでいた。

「……王子様？」

「ふふ、そんなに素敵な生き物ではありませんよ」

白く端正な顔に怯える少年に微笑むと、白い体の輪郭が揺らぎ、子供と同じくらいの大きさのカブトムシへと変わる。

彼なりの気遣い、白い人間より白くて大きいカブトムシの方が喜ぶのではないかといういらぬ気遣い。

だが驚くべきことにその配慮は正解だったようで、少年は興奮したように彼の体ほどのツノに抱きついた。どうやら、緊張はほどけたよう。

「カ、カブトムシだ！」

「はい、真っ白なカブトムシです」

「すごい！カブトムシのヒーローだ！すごい——っ？」

子供の明るい声に彼は優しく言葉を返す。しかし、奥の廊下へ視線を向けるとまとう空気が変わった。

カツンカツンと響く音。誰かの息遣いに誰もが気がつく。

倒された仲間の増援か、突入したか。

「ア……なんだ、ソレ？」

「やっとききましたか、少し到着が遅れたようで」

緊張が走る中、現れた人物は唸るような低い声で背の高いそれを睨む。白い髪と赤い瞳。人相の悪い顔と細い体をしたその人は、杖をついていた。

第三勢力とでも考えるべきか。怪訝そうな顔でその人は死体に囲まれ子供達に懐かれたよく分からない物体を見つめていた。

「……喋る、カブトムシイ？」

足を止めたその人とその目の目が合った。あまりにも大きく違和感のある虫に、現れたその人は首につけたチョーカーに手を添える。

危険は不思議と感じない。けれど不安はあった。

「初めまして、第一位」

その生き物の澄んだ緑の目は、怪物のように禍々しかった。

1119話：お気に入り

「で、テメエはなんなんだよ」

「私は……とある方の伝言役です。伝書鳩とでも思ってくださいれば」「とある方？」

暗く冷たい施設の廊下。巨大な虫の前に、眉ひとつ動かさず一方通行は吐き捨てる。

素性の知れない、得体のしれない異形の昆虫に疑いを持つのは当たり前だった。

「……これなら分かってくれるでしょうか」

「ツ！」

ため息を吐くと、その昆虫はみるみるうちに人の姿に溶け出していく。

白い髪。白い肌。緑の目。大きな胸と、男よりも高い背。似合わないセーラー服。

あの夏、甘い言葉を囁いた悪魔。

あの十月、憎悪を撒き散らした自殺志願者。

憎らしい女の笑みがそこにあった。

「きつと、あなたは覚えてないでしょうけどね」

その真つ赤な瞳に映る白い人はずつと笑顔を絶やさない。

その笑みの下にあるのは冷たい感情。彼、カブトムシ05は決して目の前の最強が好きではない。立場上笑みを浮かべるが、後ろで重ねた白い手を強く握りしめ感情を受け流す。

マスターの憎悪の対象、保護対象の殺害対象、杠林檎の能力開発の元凶。

一步通行。

その人への感情は決して良いものではなかった。

その感情を隠して一匹のカブトムシは身分を明かす。

ニコニコニコニコ。

胡散臭い朗らかな笑みが一方通行を見下ろす。約五センチの身長差が心地がいい。

「……ンで？仕事をおつかって、なにがしてエンだ？」

「少しお手伝いができたらと、こうやって面倒を片付けているのです。気遣いですよ」

「嘘つけ。その目はお手伝いにきた優しい女がして良い目じゃねえぞ」

だが悪意や憎悪といった負の感情に敏感な一方通行にはその真意がわかる。ただの優しく美人な女ではないと。真つ白な外見とは裏腹に、その中身がどす黒いことも。

でなければ的確に、残虐に、武装した男どもの息の根を止め、なおかつ子供に見せないという計算で埋め尽くされた残酷ながら冷静な殺害方法なんてできるはずもない。

計算高くて外面がいい、顔だけの女。

それが一方通行の考え。

「……そうですね。私たちは私たちのお姫様を殺しかけた貴方のことは反吐が出るほど嫌いです」

「姫？あいつが姫とか末恐ろしいな」

笑顔の仮面を外し、冷たい緑眼でその生き物は一方通行を見つめる。端正な顔を歪めて嘲笑う。

一方通行のことなどどうでもよかった。彼の家族が死のうと、生きようと、悲しもうと。

関心などない。

別にマスターにも保護対象にも関わりなどない。興味はない。

「ンで？復讐でもしにきたのか？」

「それも面白いかもしれませんが、彼女が迷惑をかけたのも事実。私も、少し彼女に肩入れしてしまいましたしね。お手伝いをするのは保護者として当然です」

「ア？」

けれど彼女のためだと言うのなら、嫌悪も憎悪も気にしない。

汚い罵倒も、苛立つ視線も、気にしない。

「……簡単なクイズでもしましょう。貴方が殺してきた何体ものクローン、なぜ第一位ではなく第三位を？なぜそんな隠蔽したいものを

全世界の研究施設に？なぜ幻想殺しを持つ特異な少年に喧嘩で負けた程度で実験は中止に？考えたことありますか？」

「なんでテメエがそんなことを……いや、あの女の仲間なら知ってて当たり前か」

「何か裏があると、もつともつと深い理由があると思いませんか？例えば、ミサカネットワークの悪用とか、打ち止めの権限を使用し——」
「テメエ、あのガキに何かしたら殺す」

再び笑みを貼り付け哀れな子供に道しるべを与えていく。しかしたったひとつの名前に過剰反応すると、カチリとチョーカーの電源を押し。能力使用モードに切り替わり、一陣の風が吹く。

獣のように必死になってたかが名前に過剰に反応するどうしようもない人。言葉を遮り、話を聞かない姿勢に優しさを保つのに飽きが来ていた。

「……人の話は最後まで聞くものだろうが、早漏」

「ア？今なんて」

「いいえ、何も！ですが人の話は最後まで聞いたほうがよろしいですよ。短気は損気と言いますでしょう？」

小さく呟いた男の低い声は幸いにも一方通行には聞こえなかったようで、取り繕うように笑顔を作る。

埃をはたき落とし、皺ひとつない白いセーラー服を整え薄つすらと目を細めて腹立たしい赤い目を見下ろす。

「さて、お話は戻しますが、もし何か起きても、クローンゆえに治療が困難だったり、プログラムの問題に干渉できる人は多くありません。でも一定数、そういった子供を治療できる能力者はいます。そう、例えば体の全てを操る能力者とか」

「どんな怪我でも……」

「あのクローン達を健康を管理し、少しでも人間に近づくために保護観察をしているのは他にもない彼女です。貴方が殺そうとした彼女ですよ」

咳払い一つしてから簡単に、簡潔に、真実を話す。ただひたすらに残酷な真実を。

一方通行の顔から温かみが消え失せる。あの金髪を、甘い桃色を、赤と緑の瞳を、きつと思いついて出しているのだろう。

一生忘れられない女の恐ろしく明るい笑顔。

「彼女ならばきつと、記憶障害も身体の副作用もなく一千万ものクロールを本物の個性ある別の人間にできるかもしれないですね。貴方は正当防衛とはそんな人間を殺そうとしたのです。よかったですね、まだ彼女が生きていて」

「ツツ……」

畳み掛けるように05は笑顔で告げる。少しだけ顔が青ざめ、あの日のことを思い出す姿がひどく滑稽だ。

苦虫を噛み潰したような顔で背の低い一方通行はぐつと強く杖を握る。どんな未来を潰しかけたか、どんな未来がありえるのか。大きな脳で計算して、唾を飲む。

「……それで、俺にその話をしてどうする。なんの意味が、オマエになんの得がある？ 罪悪感でも植え付けて、無理難題でもふっかけよう？ 何がしたい？ 罵倒したいのか？ 後悔して欲しいのか？ 復讐したいのか？」

「私たちの願いはただ一つ、彼女が喜ぶ世界になること。あの忌々しい男の鼻を明かしてみたいではないですか」

マスター経由でもらった保護対象の真実。それは台本の行方、この世界の行方。

三次元から二次元へ。現実から虚像へ。

救われない人間と、結局救われる主人公。同じ過去、似たような闇、そんなものを持っていたって結局主人公でなければ救われない、幸せにならない。

救われないのならば、この学園都市を作った元凶に反撃をしたい。皆が幸せになる世界を夢見る彼女のために、何かをしてあげたい。それが今回の邂逅。

垣根マスターの代わりに保護対象と対峙し、肉片全てを垣根たちに回収されたピンセットを奪えなかった一方通行。

砂皿緻密を雇わなかったがために殺されない上層部。

何も知らない。何も起きない。

それを防ぐための邂逅。あの場で死ぬつもりだった彼女の尻拭い。「……それとこれはオフレコでお願いしますが、私は打ち止めに少々借りがあります。ですから、これから伝える言葉は決して貴方の為ではなく、とても勇敢なある少女のためです」

そして理由はもうひとつあった。

あの十月九日、小さな子供に怒られた。小さな子供に諭された。杠林檎を連れ、怪物を止めに行った少女。彼女のおかげでマスターが死ぬことも、保護対象が死ぬこともなかったのかもしれない。

別に連れて行かなくてもマスターが勝手に生かしていたのかもしれないし、別に必要な要素ではなかった可能性はある。

けれど、あの小さな子供が間接的にでも彼女の生き死に関わると言うことなら、恩は返すべき。

「妹達はアレイスターの大きなプランに関わっています。戦争が始まるかもしれない今の学園都市でそのプランが発動される確率は高い。そのプランが起動したとき、司令塔はきつと大きすぎる負荷を追う」だからポツリポツリと告げる。一方通行ではなく、その先にいる小さなヒロインに向けて。

「もし、打ち止めに何かあればロシアに行くといい。そこに彼女がいます。どんな怪我也、どんな病気も治すでしょう」

「オイー・待ちやがれ！」

必要なことだけ伝え、背を向ける。白い革靴が映える暗い廊下で振り返ることもせず出口へと向かった。

「では、私はこれで。残党狩りに行かなくてはならないので」
仕事はまだ終わらない。

もう少しの労働にため息をついて、ふっとその場から消え去った。

血の匂いが充満する部屋でカブトムシ05はため息をつく。何人もの武装した男が彼に向かって銃を撃ち、敵意を向ける。マスターの姿に戻ったカブトムシ05の美麗な顔に向けて、弾丸が放たれた。

その敵意に呼応し、彼は間合いを詰める。人外のスピードに追いつくものはおらず、呻き声一つあげることでもできずに、一人、また一人と倒れていった。

「ステファニーがいない今、何をしているのかと思ったただ別の階で妨害工作とか……彼女がいないとサロンを占拠する脳がないんですねえ」

打たれる弾丸は05を貫通することもなく、通り過ぎ、跳ね返り、潰される。銃を持つ人々は素早く革靴の底で骨を割られ、肺を破られ、心臓を抉られた。

どうしようもない暴君、人と呼ぶには異形な少年になすすべもなく命を絶たれていく。

「はあ、なんとも弱つちい、虫より弱いなんてなんて非力な生き物なんでしょう。と言うか、ドラゴンなんてものを聞いて、何がしたかったのでしょうか？」

血だまりの中でふっと息を吐く。その血の鮮やかに輝く赤色にあの少女の赤と緑の瞳を思い出す。

自分と同じ緑の目、血肉と同じ赤い目。生と死が入り混じる輝く瞳。

異国へ旅立った彼女の面影を、血生臭いこの部屋で確かに感じていた。

「……今頃、何をしているのでしょうか」

——幸せになるためなら、天羽に手を汚させてもいいの？

——大切な誰かを『自分』で幸せにしたくないの？ つてミサカはミサカは最後に聞いてみる。

思い出す、あの日の言葉を。何がしたいのか自ら思考できなかったあの日は違う。

これは彼女に頼まれたわけでもない。マスターに頼まれたのは事

実、けれど、彼の心は彼女のために行なっていた。

「きつと、貴方のためならば私たちはなんだってできるのでしょね」
仕事はまだ終わらない。

しかし不思議と気分は晴れやかだった。

一匹の龍が窓のないビルの中で起動する何体ものホログラムでできたモニターを見つめる。

その龍の隣で円柱の巨大な水槽に逆さまに浮かぶ長髪の人間、アレイスターはクロウリーは呆れたように目を開けた。

アレイスターとよく似たシルエットのその龍は、どこまでも白く、軽い体を浮かばせモニターに映った垣根帝督の分身を観察する。

『なんだか楽しそうだ、昼ドラ並みのドロドロなロマンスが期待できそうだな』

『そんなに第二位が気に入ったか、エイワス』

眼球のない仮面のようなのっぺりとした顔でモニターを見つめる化け物を、アレイスターはエイワスと呼んだ。

螺旋のような輝きよりも一層輝く双翼と、頭上に浮かべた丸い光輪が薄暗い部屋を照らす。

彼はドラゴン。彼は天使。

二つの記号に対応する未知の生き物。アレイスターの良き理解者であり、指導者。

知識を授けた異次元の化け物は、モニターに映った第二位の白い分身に夢中なようだった。

『正確にはその分身だがな。面白いぞ?』

「はあ……なぜそんなにも興味がそそるかも理解しかねるね」

表情には出さずとも楽しそうなエイワスに、アレイスターは眉に皺を寄せる。アレイスターは垣根帝督に興味がない。

確かにプランとは違って成長が見られ、影響が大きくなってきた。少女一人を補佐^{サブポート}として入れただけで、能力は飛躍的に伸びた。

だが彼は二番目。成長すればするほど、第一位の代わりを務める可能性が増えるだけ。

長期的に見ればプラン通り。

このまま伸びれば第一候補にもなりうるが、今はエイワスほど彼に興味はなかった。

『何を言う。その適応力、野心、能力、何を見ても興味深い。理不尽に全てを奪われても努力を惜しまず足掻き続ける者、そういうものに心奪われる。ヒーローと呼ばれる者にな』

「分からんな。それならばなぜあの少女を嫌うのか。お前のいうヒーロー像によく似ているじゃないか」

『ああ、あの忌々しい愚か者か。あれは違う。ただの破滅願望持ちのメシアコンプレックス、弱者を縛り付け救うお遊びをする邪神。ドールハウスで自分好みのおままごとを繰り返す子供。まあ、彼女がそれに気がついているか』

アレイスターとしては天羽隼糸の方が興味深い。愚直に願いを叶える努力をし、誰にも愛想を振りまき、全てを救う。エイワスの言うヒーローに当てはまる者。

しかしエイワスは気に入らないと言わんばかりに低い声色でモニターを見続ける。嫌そうな声色が不気味だった。

『忠告はしておく。あの女は私と同質だ。ちよっかいをかけるなら、相応の対策が必要だぞ』

「ご忠告痛み入る。そんなこと、私が一番よく知っているがな」

簡素な忠告にアレイスターは視線を逸らす。軽い反応にエイワスはただただ呆れてモニターの中で佇む少年たちを眺める。

数奇な運命を辿る少年少女。その姿に好奇心が疼く。

『……あの少女をにできる彼が、一番恐ろしいのかもしれないがな』

息を吐くように呟いたエイワスの言葉は誰にも聞こえることなく、暗い部屋に溶けていった。

ふたりで地獄へと

120話：白い景色、ロシアにて

スマートフォンをイヤホンで繋ぎ、流れる音声に耳を傾ける。暖かい息がひんやりと冷たい雪の中で白くなつた。手の中に収まったなんてことない地図と周りを見比べながら、意識をイヤホンに注ぐ。

ロシア国内、銀色の景色。東京に位置する学園都市では全く見ない光景に、少しだけ心踊りながら積もった雪を踏み締める。

精神は、思っていたよりずっと軽かった。

『これは、世界とそこに住む全人類を守るための戦いである』

——ダウト、身内のためだろ

イヤホンから絶え間なく流れてくるロシア語。ロシア国内のラジオだから、ロシア語が流れるのは当然のこと。

そんな当然を、さも当たり前のように彼は興味津々に聞いていた。理解できるのも当然、第二位の頭脳は伊達ではない。

『今日、各地で起こっている環境破壊、石油やその他の化石燃料などの不足問題は全て、学園都市の特異な科学技術が元凶となっている』

——学園都市はそんなちやちな枯渇性資源なんてほとんど使ってねえよ

『彼らの無秩序な科学技術の反乱を食い止めなければ、この惑星に住むあらゆる生命体は絶滅するだろう。学園都市は速やかに各地で行われているプロジェクトを完全に凍結する必要がある。そして、最先端の科学技術を我々に開示しなければならぬ』

——情報よこさなければ戦争って恐喝かよ

淡々とロシア語を聞きながら冷静に頭の中でケチをつける。強い言葉で断言する頭が眩しい大統領の声がどうも苛立つ。

どこの誰かに操られているとは知つていても、あまりにも支離滅裂な言い分に誰が一体騙されるのか、そう考えると面白くない。

『平和を求める我々の提案を拒んだ場合、学園都市は世界との融和の意思は無く、ただ己の利権のためだけにこの地球に住むあらゆる生命

体を危機に晒す、邪悪な存在だと判断する』

——どの口が平和って言ってんだ

『学園都市からの返答はモスクワ標準時間10月19日午前零時まで受け付けるものとする。それまでに成されるべき返答がなかった場合、戦意ありとして大陸間弾道ミサイルの使用も考慮した侵攻作戦を開始する』

——平和どこいった

コロコロ変わる言い訳にため息をつく、白い息が鼻先を温める。延々と話題に上がるロシアの大胆な宣戦布告。なんともお粗末な世界情勢に、ただただ呆れと吐き気を感じる。世間はそれでいいだった。

一体この世界はいつまで物語の通りに進むのかと。一体何を変えれば誰も幸せにならない悲劇を閉じれるのかと。

そう思うのは垣根帝督とここにはいない彼女だけ。

「お前、熱心に何聞いてんの？」

「ラジオ。聞くか？馬鹿が理屈コネようとして失敗してるラジオ。もう飽きたけど」

「こんな状況なのに余裕だな……って電波届くのかよ！」

イヤホンを外し、地図から視線を上げると上条当麻と目が合った。寒い空気に鼻を赤くさせ、寒そうにマフラーで顔を隠す。

いつもの学生服ルックだと言うのに、見た所死にそうなほど寒さを感じているわけではない。ただの学生服といえど、糸から縫い付け、全て学園都市製。防寒に関してはコートより優れているようだ。

「俺に不可能はねえ。電波どころかWi-Fi、無線まで傍受できるぞ」

「一家に一台垣根の時代くるな、これは」

「来てたまるか。それより、もうついたぞ」

進む足を止め、目の前の大きな施設を隠れるように少し遠く的位置から眺める。普通の、一般的な地図に書かれた軍事基地。

簡単に占拠出来そうな難易度の警備がなく、どう見ても軍事基地としては及第点にも届かない。なんとも胡散臭い場所だ。

「おー、これが例の軍事基地……」

「地図の通りならな。なんでこんなもん普通の地図に載っけるんだか」

「あえてセキュリティを低くして、重要に見えなくさせてるんだろな」

大切な駐屯基地だと言うのに、隠すこともなく地図に書かれている。大規模とはいかないまでも、それでも立派な軍事施設、なぜここまでおおっぴらにされているのか。

違和感。

「とりあえず、乗り込むとするか」

白い息を吐いて、硬い雪を踏む。水を弾く革靴と擦れる音が不快だった。

艶のある黒い車が真っ白なロシアの大地を走る。茶色いサンングラスをかけ、広い田舎の土地を有効活用したやけにワイドな道でハンドルの片手で握る彼女は、いや、彼はどこか不機嫌そうだ。

それはきつと助手席の大きなスーツケースのせい。

大きなスーツケース一杯に入っているのは大量のファイル。権利やら買収やら、政治やら。彼女に貢がれた全てについての書類を丁寧にファイリングしたもの。

そんなもの、見てるだけで気分が悪い。騙された人の顔が思い浮かんで、とても嫌だ。

『『マスターによる今後の行動プラン』ねえ』

そして手の中にある一枚のメモ用紙。

びっしりと今後の予定が書かれたそれは、体の持ち主がわざわざ書

いて残しておいたもの。イギリスからどういったルートでロシアへ入るか。その道中何をすべきか。全てが書いてある。

それはもう、本当に、恐ろしいほど細かく。

大人の女らしい字で丁寧に順序立てて、たまに色マーカーを使って整理されてメモに書かれていた。

現在はそのメモの半分程度まで進んでおり、同封された地図を見ながら片手で運転を続ける。

「で？次は？」

誰もいない直線を走りながら手元に視線を落とす。天羽彗糸直筆のナビによると次の指令は『スーパーみたいな雑貨屋に入る』のとのこと。

茶色い視界に見える短い文章は、どうも説明不足でなんて反応していいのか分からない。

入るだけか。

入って何かを買うのか。

というか雑貨屋ってなんだよ。

スーパーって、どういうことだよ。

他の項目よりも圧倒的説明不足なその一点にため息が出る。地図にわざわざそこへのルートも書かれており、必ず行けと言わんばかりだった。

「……入るだけでいいのか？」

地図の表記に従って、『スーパーみたいな雑貨屋』へと向かう。駐車場とも呼べないだっ広い店先にとりあえず車を止めて、地図にある個人商店へと向かう。

田舎の片隅にポツンと一軒だけ建っている個人商店。他にも車が一台止まっていることから察するに、どうやらドライバーにとっては憩いの地らしい。

防寒になるとは言い難い薄っぺらな扉を開いて店内へと足を踏み入れる。小型の赤外線ヒーターの暖かさ^{天羽}と外気の寒さは人間の体には少し刺激なようだ。

「マスターは一体何考えてんだか、あ？」

「ひっ！」

入った店の中、見えた景色は恐怖というより呆れか。店員と思しき女性が男性数人に囲まれているところ。

黒いマスクに拳銃を持った団体客は、女の胸ぐらを掴み今にも性犯罪でも犯そうとしている風貌だ。

「っな!？」

「オイオイ……まじかよ」

突然の来店に犯罪者たちは血走らせた目で敵意を向ける。その血の気溢れる視線が戦闘用生命体の本能に突き刺さる。

大きな胸を興奮させる闘争心。

「あの女、一体何歩先まで見えてんだか」

胸の高鳴りがカブトムシの攻撃性に火をつける。まつさらなエプロンがこんなにも早く汚れてしまうとは、夢にも思っていなかった。

ガタンゴトンと貨物列車が揺れる。

「やっぱ正解だったな」

「警備もザルで、罨くさいけどな」

木箱や段ボールなど、様々な荷物で埋め尽くされた軍事用の貨物列車はトンネルをくぐり、目的地へと向かう。

すんなりとできてしまった無賃乗車に違和感どころかきな臭さを感じながらも、垣根と上条は駅まで走る電車の中で小さく言葉をかわす。

「仕方ねえだろ。お前が俺を抱えて飛ぶわけにはいかねえし」

「何が悲しくて哀れな童貞オスをこの俺様が運ばなきゃならねーんだ」

「だろー？つて誰が童貞だ!!」

「ハイハイ様式美様式美」

男同士、軽口を叩き合う。男子高校生特有の雰囲気は、戦争が始まる寸前の国で起きるようなものではなかった。

「……そっぴいやさ、なんで付いて来てくれるんだ？天羽が俺の行く先にいるかはわかんないんだろ？」

「あー？アイツの目的は体晶の後遺症を治し、体を再構築すること。戦争が間近の国なら魔術師が多いし、復活すればすぐ応戦に行けるだろ？」

ふと上条は隣で暇そうに携帯をいじる垣根のめんどくさそうな横顔に問う。携帯の弱い電波を睨む端正な横顔は、一度横目で上条をみると、見せつけるように大きなため息を吐いてまた携帯に視線を落とす。

トンネルの中、ニュースサイトに一向に繋がらない携帯をどうにかしようと一人で能力を駆使しているものの、なかなかたどり着かない。作業に手間取りながら一番まとまな答えを簡単に教えて上条を軽くあしらう。

上条に伝えた答えは確かに彼女は思っているだろう。だが彼女のことだ。もつと恐ろしいことを考えているはず。

天羽の目的、それは物語に関与すること。戦争で何かを遂げること。

だが今の彼女は自主的に動けない。50番で失った四肢を補い、動かない体に乗っ取らせ、操縦させている現在、彼女は植物状態に近かった。

チョーカーの接続もないので脳が働かず、能力も意識も戻らない。

50と物理的に脳が繋がっている状態なら、本物の超能力である心理掌握は使える。けれど神の力はスペック不足で使えない。

ならばどうするか。

他人に直してもらえばいい。

そもそも彼女が能力を失ったのは爆発や圧力などの物理的な理由ではない。

物語のヒロインと同じ。

体晶を使用したの後遺症。オーバードーズを引き起こしてしまった結果。彼女自身の破滅願望のせい。

だから物語通り、ロシアへ、独立同盟へと赴いたのだろう。

「本当かよ。ならなんでイギリスの魔術師に頼まなかったんだ？一応あそこって魔術の本場じゃねーか」

「外交の問題だ。イギリス清教に借りを作るのが嫌なんだろうな、最大主教があんなんだと。その点ロシアには中立で、聖女と名高い善人がいる。防衛やけが人の回復を担う代わりに、回復魔術をしてもらえればノーリスクだろ？」

「そこまでアイツが考えてんのか？」

「ずるくて変に頭が回るやつだ。何かしらは考えてるだろ」

「よく知ってたんだな、あいつのこと」

垣根の話に怪訝そうな顔をする上条に自信満々に断言する。

彼女の思考は一番分かっている。誰よりも、神よりも、親よりも、絶対分かってる。

そんな感情が丸見えだったのか、上条はニコニコと嬉しそうに口角を上げる。

スレていた男友達。

友達が少なく、不思議な魅力が高嶺の花のように見える孤独な女友達。

二人の友人の変わり様が、純粹に嬉しかった。

「……それより、終点が近いみたいだぞ」

「おう！乗り込むか！」

「意気込みはいいが、静かにしろよっ」

なんだか小っ恥ずかしいと、緩やかにスピードが下がる電車の中で垣根はそっぽを向く。場違いなほど楽しそうな友人の顔に、なんだかやる気が削がれていった。

「こんなに貰っても、俺もこいつも消化できないんだがな」

閉じた銀色の鞆の上に乗つけた茶色い袋に目を向ける。ハンドルを握りながら、先ほど起きた（相手にとつての）阿鼻叫喚を思い出す。

コンマ2秒で制圧したのではないかと思うほど早くクソどもを倒してしまったせいで、ヒーローか何かと勘違いされる勢いでお礼を貰ってしまった。

垣根由来の考え方を持つ50番には少しモヤモヤする出来事だった。

「けふつ、ゲホッ……オリジナルのネットワークねえと、流石に演算が重いな」

ぼんやりしていると、突然鉄の味が喉をせりあがって塊を吐き出す。先ほどの戦闘で少しばかり内蔵に負荷を負った様だ。

そもそも側からみれば健康体に見えるが、中の人は欠損、薬漬け、脳障害を追った重病人である。

なんなら病院で管に繋がれていたところを本人が得体の知れないカブトムシに押し付けて国外逃亡している状況である。そんな体が、血の一つや二つ、吐かないわけがない。

そろそろどこかに定着したい。

だがこんなクソ田舎に休める場所があるのか。店があるから人はいるんだろうが、あの店はおそらく長距離トラック用のサービスエリアの様なもの。あの店があるから人がいるというわけではない。

「はあ、あつっ……」

それにしたって田舎すぎる。限界集落すらなさそうな銀世界で、車を止める。

青い長袖で口元の血を拭き取ると、ゆつくりと赤いシミは消えていく。その様子をぼんやりと眺めながら、サングラスを取って背もたれに体を預けた。

目を瞑って、息を吐く。真新しい車の内装の匂いが気持ち悪い。

「もし、お嬢さん。顔色が悪そうだが、大丈夫かい？」

胸元のボタンを外して楽な体勢に整えていると、不意に車の窓をコンコンと叩かれる。

ロシア語でノックする男に気がつく窓を少しだけ下げて、話を聞く意思表示をしながら外したボタンを再び止め直す。

窓から入る冷たい風が今はとても気持ちよかった。

「あ？脅しか？強盗は間に合ってるぞ」

「いや、ギブアンドテイクってやつだ。うちの集落は発電用の燃料を切らしちまってな。アンタが分けてくれるなら、うちの医者まで案内してやつてもいいぞ」

三十代後半か、淡々とした口調で喋る男はこの辺に住んでいる様だった。妙案とでも言いたいのか、自信満々に車体に肘で体を預ける男に思わずため息が溢れる。

このまま急発進してやろうか、と苛立ちを感じながらもマスターに手渡されたメモを見る。

腹立つ男だが、休めるのはありがたい。渡されたスケジュールに余裕があれば、申し出を受けてもいいだろう。

「……いや、それを法律では脅しって言うんだよ」

メモ用紙に書かれた『人を助けなさい』の文字に、何度目かのため息をつく。

彼女は全て知っているようだった。誰と何を話して、何が起こるか

を。
そのおどましさに、何も知らない50は少し恐怖と興奮を感じてしまった。

121話：前線へ

白く美しい怪物が言った。

ロシアへ行けと。

世界で最も広い国。日本列島の少し上にあるその大国は、寒く、閉塞的。

どこか寂しげなあの白い女の背中を思い出しながら、一方通行はギユツと腕の中で眠る柔らかい子供を抱きしめる。

熱と荒い呼吸。一目見て異常と分かる真っ赤な顔の少女は、薄らと目を開けて体を温めるコートを握った。

「ココ、どこ？って、ミサカはミサカはあたりを見渡してみたり……」
「列車の中だ」

ふにやふにやと寝ぼけ眼で打ち止めは一方通行の腕を枕に辺りを見渡す。

ガタンゴトンと心音のように規則正しく走る列車の中、息を潜んで二人は隠れる。連れ出した打ち止めは荒い呼吸が狭い列車の中で響いていた。

どうしてこんなことになったのだろう。

あの白い化物の言葉に彼女の様子を見にきたらこうだった。高熱、咳、意識障害。

言われるがままロシアへときた。何が起こっているのか、どうしてこうなっているのか、何もかも分からない。

ただ一つの希望に縋ってここにいた。

全てを癒す、偽善的な悪魔を追い求めて

「つふふ。やっと、久しぶりにアナタの顔が見れた」

酷く辛そうな顔を浮かべて打ち止めは小さな手を伸ばす。熱で赤くなった頬と息継ぎの多い声色、どうみても苦しいだろうに、打ち止めは真っ先に一方通行に手を伸ばした。

その想いが、その熱が、一方通行の奥底に眠る感情に火をつける。

どうしてコイツがこんな目に。

どうしてコイツなんだ。

どうして。

どうして。

どうして。

どうして。

綺麗とは言い難い感情。

忌々しい科学に対する憎悪。

ぶつける先のない憐れみ。

愛しいものが壊れる恐怖。

この世界全てが憎悪の対象だった。

小さく揺らいでいた憎しみの炎、頬を触る少女の姿に薪をくべて増幅する。

強く抱きしめた少女の体温に炎が広がった。

その炎に勘づいたように、唐突な金属音が列車の天井から不意に聞こえる。

誰かの足音、それも複数。

乱暴な足音の目的は、すぐに分かる。

「追って来たか」

列車の上に何かが飛び乗った音だった。列車を揺らし、天井を凹ませたそれらは、どう考えても偶然なんかではなく必然。

学園都市から脱出した第一位を連れ戻しに現れたと考えるのが自然だ。

「またあんな風に喧嘩したり、しないでね、ってミサカはミサカは聞いてみる」

「……ああ、約束する」

優しく打ち止めを膝から下ろすと、忌々しい音の場所へと視線を向ける。

彼女をまっすぐ見れなかった。

心配そうな目付きが腹立たしい。

心配される立場はそっちであって、一方通行じゃない。

己を一番に考えず、好意に値しない悪党の心配を真っ先にする彼女

が、本当に腹立たしかった。

「ゴミクスどもが、俺の癩に障ってんじゃねエーよ」

その純粋な瞳から逃げるように車両から飛び出て屋根へと上る。

現れた白い戦闘服に身を包んだ追っ手の前で、唸るように吐き捨てた。

誰かの声が石を敷きつめた古い大きな建物に響く。通話でもしているのか、男は開いた本の前で誰かに話しかけるように呟いた。

『ここは空間だ。座標と容積、その両方が重要ってわけだ。俺様にとって、ここはモスクワより重要なんだ。プロジェクトベツレームという観点から考えればな』

豪華なテーブルと椅子で、赤毛の男は不敵に笑いながら背もたれに深く体を預ける。切れ長の金色の目が見晴らしの良い景色を見下ろすと、鼻で笑って開いた本に視線を向けた。

誰かに聞かせるかのように語りかける内容はあまり要領を得ない。自信に溢れた言葉がいちいちに癩に触る。

『さっさと調査結果を出せ。お前だって司教のまままで終わるつもりはないんだろ?』

口ぶりからして、話し相手はロシア司教、教会の中でも上の立場の相手のよう。

しかし彼の酷く不遜で上からの態度は目上と喋っているように感じさせない。

『そう、そうだ、良い子だ。エリザリーナ独立国同盟か。確かに、それではロシア国内を探し回ってもサーシャ・クロイツェフを見つけれなかったわけだ』

不敵に笑うと、満足げに本を閉じて彼は席を離れる。冷気を送る外へ静かに飛び立つと、静かな建物で足音が響いた。

「いまなら行けたのに……！」

「落ち着けて」

男、フィアンマが消えた吹き抜けの二階を、下の柱から見つめていた上条と垣根がちらつと顔をだす。

今にも突撃しそうな上条の首根っこを掴んで制止させて、垣根たちはフィアンマが消えていった空を見つめていた。今行けば何かできたかもしれない、そう信じる上条を引き止めるのは少々骨が折れる。

列車から降りて、ついた先。

たどり着いた広い軍事施設を適当に順路に沿って歩いていたら、偶然ラスボスの謎の会話を目撃してしまった。

そう偶然、あくまでも偶然。

「アイツが何か隠し球でも持ってたらどうする？とりあえず今はその独立国とやらに行つて、話をする方がいいんじゃないか？」

「……なんか、落ち着いてんな、お前」

「だてに修羅場くぐつて来てねえよ。罨であれなんであれ、相手の基ホームグラウンド地で喧嘩をふっかけるのは得策とは言い難い。味方をつけてから殴りに行け」

物語の道筋を知る垣根にとっては必然だったが、それでも偶然といういで話を進める。今はいないレッサーの代わりを務めるために。とはいえ垣根本人も別に嫌々物語に沿っているわけではない。腹立たしい現実を知ってしまった彼は慎重にならざるを得なかった。

準備もなしにフィアンマに勝てるとは思えず、現状使える策もない。というか、そもそも垣根の目的は別であるためあまり茶々は入れたくなかった。

ここで喧嘩を吹っかけて、万が一負けたらどうする。死んでしまつたらどうする。

誰があの子を迎えに行く。あの世界一孤独な子供を、彼以外の誰が迎えに行くというのだ。

「お前がいると、なんか心強いわ」

「うわ、きつしよ。だから彼女できねえんだよ」

「ひでえー！褒めてんのに！あとそれは関係ねえ!!」

軽口を叩きながら、彼らはしつかりとした足取りで向かう

エリザリーナ独立国同盟。フィアンマが呟いたその場所へ。

「こんなところで油売ってるわけにはいかないんだけどな」

寒々しい雪景色が広がる土地。眩しい雪景色に目が眩む。足元においた鞆も、靴も濡れ、少し不快だった。

小さな集落に車を預け、しばらくぶりに体に外気が触れる。涼しさよりも、今は内臓の痛みの方が酷い。

それでも動くために50は少しばかりの休息を過ごしていた。「本当に医者に行かなくていいのか？薬草くらいなら出せると思うが」

「持病の原因くらいわかってる。治すすべはここにはねえよ」

適当な柵に背を預けて白い空を眺めていると、ここまで連れてきた胡散臭いロシア人が困ったように隣へと歩いてくる。

ガソリンの匂いをつけて歩いてきたその男は50の熱っぽい顔に診療所を案内したくも、頑なに拒絶されほとほと困っていた。

「しかし、それだと私たちがもらいすぎだ。何かお返しを」

「これが俺の神様の教えなんだよ」

「神……う？」

車の燃料なんてものを貰い、彼は50に恩がある。だからこそ平気か否か何度も尋ねる。

しかし意味はなかった。

恵みを与え、見返りはもらわない。それが彼の主人の考えであり、それに従っているだけのこと。

不思議そうな男を尻目に、雲行きの怪しい空を見上げる。

ここで道草を食っている暇はない。エリザリーナ独立国同盟とやらまで行つて、彼女を治癒してもらうのがこの旅の目的。

ここについてはダメだというのに、律儀に主人のを守ってしまう。そういう思考回路しかない。

犬として合格なのだろうか。いや、彼はカブトムシだが。

もやもやとした感情が満ちては引いて、波のように押し寄せる。なんだか痛まないはずの心臓が痛かった。

「ママ！アリス！アリスがいるよ！」

「……あ？」

雪を踏む足音と、誰かの声に思考が中断する。柔らかな少女の声が真つ白な雪に響いた。

あまりにも突拍子もない声に驚き、ふと視線を移す。

そこにいたのはなんの変哲もないただの子供。キラキラした瞳で美しい乙女を見る、ただの夢見がちな少女だった。

「コ、コラ!!静かに！」

「でも、ママ！」

「やめなさいっ！」

輝く瞳で青いワンピースと白いエプロンを着た有名なキャラクターの名を呼ぶ。母親と思しき女性に手を引つ張られ、制され、それでも名残惜しそうにこの体を見ていた。

一体何だったんだと一瞬疑問が浮かぶも、現在の見た目を思い出すとすぐに理解する。

踝に届く長い金髪、儂い顔と、赤い目。

見た目はお姫様そのもの。

しかも着ているのは上品な水色のワンピース、白いエプロン。物語に出てくる少女アリスを彷彿とさせる格好に、少女はえらく興奮していた。

「アリスねえ……そんな可愛い存在か？」

「仲間が失礼をした。すまない、気にしないでくれ」

血相を変えた母親に連れていかれた少女の後ろ姿を見つめ、ぼんやりとしていると申し訳なさそうに男が謝る。

謝るようなことをされた記憶はないが、少女の母親の行動は少し不審だ。

はたから見たらただの金髪の外人、しかも会話にロシア語を使っているからロシア人と思われるもおかしくない見た目だというのに、なぜ未知の生き物を見たような仕草をするのか。

赤い目が気に入らないのか、それとも身長か、いまいち分からなかった。

「ずいぶんピリピリしてんな。同胞と思しき女をあんな目で見ると只事じゃねえな」

「……第三次世界大戦が始まる前からここはきな臭い場所だな。余所モンは目えつけられやすいんだ」

「ふーん……日本でも田舎は開発に潰されることが多いしな、理屈は分からんでもない」

子供がつけた足跡と、静かな集落の異様な空気。この異質な集落にいるのは少し肩身がせまい。

カブトムシでも分かる嫌な雰囲気は田舎特有のものかと思っただが、どうやらワケありのよう。

共産主義で、喧嘩っ早い国、学園都市との戦争が間近で、内政はずつとギクシヤクしている。

「すぐ近くに独立同盟の国境があるだろう。ロシア軍はここを潰して前線基地を作りたいのさ。独立同盟からの侵略行為を阻止するためなんて名目で、輸送機から大量の地雷をばら撒かれたりもしているらいだ」

「地雷？そんなとこに住んでて平気なのかよ」

「なあに、ポイントシールみたいなものだ。回収してNGOに渡すと、食料や物資と交換してくれる——ッ!？」

たくましくも辛そうに笑った男の笑みを消すように、大きな音が地鳴りのように雪景色に響く。遠くから感じる火薬の匂いと、木々が焼ける匂い。

爆発。

発火。

襲撃。

色々な単語が50の頭を巡る。この体の安全が保たれない場所であるなら、ここから一刻も早く立ち去らなくてはならない。

柵から離れた彼女の瞳越しに50は見る。黒い煙が空に登る遠い景色を。

「どうやらまずいことになった。プライベーターだ」

「プライ……?」

「公認の山賊みたいなもんさ、ロシア軍に存在する空白の部隊だが、正式要員は0、軍人崩れのゴロツキを雇い入れた、汚れ仕事専門の部隊だよ」

大きな爆発だったと言うのに、男は余裕そうにその景色を眺める。ため息交じりに呟いて、対岸の火事とでもいうような姿がなんだか違和感を覚えさせる。

「ここを消しに来たのか」

「ああ、この戦争を機にここを更地にするつもりなんだよ」

「それにしても随分余裕だな。逃げる当てがあんのか？」

「いいや、ない。車を動かす燃料がないからな、どうにもできない」

余裕と感じたのは諦めだった。これからの死を回避することを諦めた男の哀れな声。

気が立った母親も、脅迫まがいとはいえないんだかんだこの体を心配する男も、アリスと喜んだ少女も、一緒に暮らした集落も、全て失うことを受け入れている。

そんな声。

死を受け入れるにはステップがある。

死の受容、キユーブブローロスが提唱した死を受容するに至る五つのステップ。

否認、怒り、取引、抑うつ、受容の五つ。

彼らはここに住むだけでそのステップのさらに先、諦めまでたどり着いていた。

それが心理的におかしい状態なのは、さすがにカブトムシといえどわかっていた。

服の姿をした未元物質の中からメモを取り出す。頭の中でその短い言葉を反芻して、考えて、顔をあげる。

『人を助けなさい』

神の言葉を綴ったメモ。

その重みは聖書と同じ。

「おい、どこ行くんだ嬢ちゃんー！」

「俺のマスターを『可愛い』なんて褒められちゃったら、犬としては応えなきゃダメだよな？」

車のキーを男に投げつけ、煙舞う空へ足を一步、一步と出す。

この体一つ守れないなんて、きっと彼女につまらない男と罵られる。そんなこと耐えられない。

完璧で、誰よりも強い騎士だと知っていてほしい。

全て守りきって、目的地までたどり着けば、あの女を見返せる。さらに必要としてくれる。

オリジナルよりもいい男だと見せつける。

それが彼の思考回路。弄られた思い。

結局、彼もただの虫だった。

寄生蜂に脳を乗っ取られ食い破られ、養分を吸われ生き絶える。

彼も同じ。

恐ろしい女に思考を犯され、都合のいい駒になってしまう。

「これも天啓か。この天使様が、哀れな他人のために天罰を下してやるよ」

どろり。

青いスカートに手を入れて、真っ白な足から銀色を取り出す。広げた六枚の白い翼が、雪の光を反射して輝く。

権力の象徴を手にして、50は女の声を吐き出した。

終点。停まった列車から暖かい子供を抱きかかえて降りると、寒さが鼻をツーンと痛める。

強く少女を抱いて温めながら、崩壊した基地の燃える建物と、煙の臭さを横目に雪の上を歩く。

「二足先に襲われてやがる……目的はこれか？」

降り立ったロシア軍の基地は壊滅状態。

人がいない廃墟と化した軍事基地をここまで徹底的に潰せるのは学園都市しかおらず、簡単に目星がつく。

理由は何か。

ロシアとの戦争だけじゃない、きっと一方通行の服の中に入れた紙も関係あるのだろう。

「この俺の回収任務と同レベルの作戦……なんかあると思って終着点まで来た方がいいが、このザマか」

ショート丈の白いコートから取り出したのは一枚の羊皮紙。

見たこともない不思議な文字の羅列と図形が描かれたその紙は、先ほど打ちのめした追っ手から取り上げたもの。

何か禍々しきを感じる一枚の紙を見つめ、再びコートの内ポケットへとしまい込む。何か役に立つかと思っただけだったが、そこまででもなさそうだ。

「生まれ！学園都市か!？」

ざっと誰かが雪を踏む。突然呼び止めた黒いローブを羽織った怪しい集団が一方通行の前に立ち塞がる。

面妖な杖を握って顔を隠す、まるで御伽噺に出てくる占い師のような格好の集団が敵意をむき出しに声を荒らげて杖を向ける。

攻撃される。

そうと分かれば話は簡単だった。

「ああん？そういうお前の方こそ、この基地を襲った連中じゃねえのか？」

首に繋がれた演算装置の電源を入れるのを合図に敵が杖を振り、彼らの身振りに合わせ生きた虫のように雪が宙へ浮かんだ。

雪を操る能力者、または技術か。一方通行へと放たれた雪に深く息を吐いた。

ただの雪、雪合戦でも行うのかと拍子抜けし、子供のような攻撃をいつものように反射する。白い雪は砕け散り、水となる。

はずだった。

雪は解けることなく光となった。スターダストと呼ぶにふさわしいただの光に変わり、水分も何も無い。

おかしい。

既存の物理法則が当てはまらない。

考える必要がある。片足で地面を蹴り飛ばし、人を飲み込む雪崩を生み出す。

生き埋めにでもしてから考えよう。敵を粉碎してから考えても遅くはない。

現時点で一番大事なのは腕の中の打ち止めのみ。

目の前の邪魔な壁は真つさらな雪で覆い隠すに限る。

「めんどくせえ……あ？」

再び静かになった雪景色の中、風を切り、何か大きな気配を感じる。

轟く戦闘機の音、頭上を通る鉄の塊。

学園都市製と思しき戦闘機から誰かが落ちる。それはハンググライダーの翼を広げ、風に乗って降下する。

白いボディスーツを着たそれは、縁を描くように回遊して滑空するも、一方通行を狙っているのが丸わかりだった。

雪を蹴って翼を壊す。穴の空いた翼では空は飛べず、生身の体が地面へと落下した。

嫌な光景が来ると、ほんの少しだけ目を薄める。赤くなる雪に身構え、手を握る。

通常ならば、地面へとぶつかり白を赤へ染めるのかもしれない。しかしそいつは違かった。

視力を奪うほど眩しい雷が目の前に落ちる。落ちる体に掛かる力を雷で相殺し、それは難なく地上に降り立った。

「……誰だ？」

雷。その雷に喉の奥がぞわぞわと縮み、一つの考えが脳裏に張り付く。

知っている。本当は聞かなくなってたってわかっている。

電気を操るその人の名を。

「第三次製造計画サードシーズって言えばミサカの事はわかるかな？」

その予感は的中する。

ミサカ。

御坂美琴。

超能力者第三位。最強の電撃使い。

妹達のモデル。

殺した一万ものクローン。まだ辛うじて生きる一万のクローン。

「ミサカは戦争の行方なんか興味ない、そういう風なオーダーはインプットされていない」

白い仮面をつけた少女が吐き捨てるように笑う。

「ミサカの目的は第一位の抹殺のみ。ミサカはそのために、そのためにだけに培養液から取り出されて来たんだからね」

大切な少女の生き写しが立ちはだかる。

最強の怪物を殺しに。

122話：対峙

雪景色が続くロシアで二人は足を止める。

男子二人、たわいもない話を延々と繋げるのは簡単だった。

「そういえば、お前御坂とはどんな感じだ？」

「はあ？どんなって、ただの知り合い？ビリビリの考えてることなんかワカンねえーし」

「アー……かわいいそうに。こりやインデックス一筋な感じか」

「なんの話だよ？」

空を見ながらロシアとは全く関係ない名前をあげる垣根に、上条は首を傾げる。

最近会っていない知り合いの名前に驚きつつも、何か含みのある言い方が引つかかった。

「今回、あいつは参加できなさそうだからな、お前があいつ好きなら可哀想かと思つて。可哀想なのはあっちだけど」

「参加？何言つてんの？お前」

「学園都市が発表してるロシアの映像がほぼ全て通行人にモザイクかけてんだよ。これじゃ俺らがどっかで写っても、学園都市側の奴らは気がつかない。あの馬鹿がなんかやったのかね」

「映像？モザイク？」

「ここが原作基準だったら来れたんだらうけど。かわいいそーに、学園都市がガチガチにハッキング対策してるから、第三位でも無理だな」

携帯を取り出して垣根はわざとらしく残念そうにため息を吐く。

御坂がなにか関係があるのかよく分からなかったが、垣根の薄く笑った表情を見るにそれはいい知らせのようだ。と言うより、彼にとって面白い知らせというべきか。

いたずらが成功した子供のように、面白いと言わんばかりに目を細めて笑う。

そこまで分かったものの、今度は別の疑問が浮かぶ。

彼はどうしてそこまで余裕の笑みを見せるのか。

「……よく分かんねえけどよ、それって今話す内容か？」

武装した集団に立ち塞がれる目の前の光景に、なぜ彼はそんなにも自由でいられるのか、なんとも不思議だった。

「こっからどうすんだよ、お前緊張感無さすぎ」

「あー、そういえばお前ロシア語喋れないんだったか。仕方ねえな」

ロシアと小国の国境で、彼らは立ち往生していた。

向けられた銃口と、むき出しの敵意。何にも動じない垣根の余裕ながら面倒と言いたげな顔に上条は心臓がばくばくと波打つ。

「テメエらの上司に用がある。フィアンマっつー面倒な野郎のことでな」

流暢なロシア語の意味がわからない上条には、死の宣告のようにしか聞こえない。

——頼むから、戦闘は避けてくれよ！

そう心の中で念じて、ひたすらに祈ることしかできなかった。

エリザリーナ独立国同盟。

ロシア国内にある複数の国家が独立し、結びついた小さな国。

その小さな国に、銃を突きつけられながら二人は入国した。

フィアンマがわざとらしく呟いた『架空の国』、物語の中心地によく来れた。

彼女をようやく見つけられるかもしれない安堵感、そして事件に巻き込まれる不安感。色々な感情が混ざりながらも、垣根は武装した男たちに促され、一際目立つ扉の中へ入った。

「ようこそ、お二人さん」

そこに居たのはデスクでゆったりと書類を見つめる金髪の女性。

エリザリーナ。窪んだ目元、栄養失調にしか見えない痩せぎすな体を長袖のダウンコートで温めるその人はこの国の立役者。

ロシア内の複数の国家を独立させ、結びつけるために活躍した、いわゆる聖女様。

「……身分証も通行手形もない、どっからどう見ても怪しいやつを招き入れるとは、結構危ない橋を渡るんだな、聖女様」

「弱小国家としての戦略よ。それに、目利きはいいつもりなの」
電球があまり多くない薄暗い部屋で、彼女は凜とした笑みを見せる。

体の細さを感じさせない国家元首たる堂々とした振る舞い。怯えを見せない彼女の表情に、トップとしての威厳をひしひしと感じていた。

「で、右方のフィアンマがここに来る、だったかしら」

「ああ、サーシャークロイツェフっつー魔術師を攫いに……って右方のフィアンマが何を指しているのかわかるのか？」

「拙い腕ではあるけれど、私も魔術師の一人よ」

堂々とした笑みに上条は少し狼狽えながら、目を見開く。

しかし彼女はそれを横目に話を進める。もう時間が無いことくらい彼女はよく分かっていた。戦争まで、時間が足りない。

だから急いだように本題に入る。

築き上げた大事な国を滅ぼしたくないから。大事な人々をなくしたくないから。

誰かを不幸にしたいくないから。

壁に貼った大きな地図を背に、彼女は立ち上がった。

「右方のフィアンマはこの戦争、いえ、我が国への侵攻に関する重要人物。この機に撃破しておきたい。ただし、交戦によって、独立国同盟市民の命が失われるようなことはあつてはならないわ」

「それに関しては譲歩できないな」

「なに？」

だが垣根の一言で、熱意に溢れていた周りは温度を無くす。

冷たい一言だった。

「そもそも、俺たちがここに集まることが罨なんだから」

胡散臭い、嘲笑うかのような笑み。ポケットに手を入れ、全てを見下ろす彼の顔に場が凍る。

疑いの目、驚きの目、信じたくないという目。色んな目が彼を見つ

めて、チクリと刺す。

全てを知る彼にとつて、もはやその光景は茶番でしかない。

『おや、どうやら聡明なやつがいるようだ』

「——ッ!!?」

垣根の言葉に続くように、誰かの声が響く。その場にいる誰かではない。スピーカーのように、部屋全体に聞き覚えのある声が広がった。

そして衝撃。

屋根が潰れ、瓦礫が崩れ、かろうじて見えた白い光線が人を殺すために振り下ろされる。

室内なのに見える快晴が、その人の姿を照らし、舞い上がった埃を可視化する。

「ほーら、のこのことラスボスが来たぞ。避難の準備しとけ！」

「何でお前はそう——！」

「お前はこっちだ、とつとと右手で壊してこい！」

もう一度、巨大な白い光線が剣を振るように空から迫る。一度で甚大な被害が出たというのに、もう一度されたら被害はさらに拡大するだろう。

聖女たちを逃がし、二人でなんとかするしかなかった。

「なるほど、気軽に破るには少々硬い壁だったらしい」

上条の学ランを掴み、物を扱うように乱暴なそぶりで投げつけて右手を使わせると、それはあっけなく粉々に砕けた。その先に現れたのは巨大な右腕を背中から生やす長身の男。

余裕の笑みを浮かべて瓦礫で覆われた無残な基地に降り立つと、その男は愉しげに上条たちを見下ろした。

黄金の目が、品定めするかのように鋭く彼らを見ていた。

「ファイアンマッ！」

「お前はメインディッシュだ。食べる前に下ごしらえをしなきゃな」

肩から生える大きな右腕を振りかぶり、息つく暇もなく振り下ろす。垣根の脳天めがけて一直線に腕が迫る。

もう面倒な国家元首はいない。狙われるのは垣根しかいなかった。

しかし彼は一步たりとも引かず、切れ長の目で見つめるだけ。自信があつた。この勝負に勝つ揺るぎない自信が。

「本物の天使様を見たのは初めてか？ヒーロー気取りのクソ野郎」
六の翼を広げ、薄く笑う。天使と見間違ふ神々しい姿がそこにあつた。

その姿にフィアンマは攻撃の手を止める。眼前に立つ天使にためらいが生まれるのは仕方がなかつた。

本物かどうかわからなくとも、それが求めていた存在であることに代わりはなかつた。

「……面白い、最初のスープはお前にしてやる」

けれど結局垣根は別解釈の天使。彼が求める天使とは違うプログラムで作られた異形の天使。緩めた手を戻し、もう一度右腕を振り直す。

それだけで風が動く。風を斬る魔術が凄まじいスピードで垣根の首を落とそうと切り掛かる。

だがそれだけだつた。翼を広げ、魔力の籠つた攻撃を別の法則に組み入れる。別の法則には別の法則をぶつけなければならない。

彼にはそれができる。

魔術の原理は『理解』している。ネタバレはもう読んだ。

解析に組み込むのは簡単だつた。

「それくらい魔術の解析は経験済だ、分解するくらい容易いんだよ」

「攻撃を別の何かに変換したのか。ふむ、対応は少し面倒そうだ」

「ただの面倒で済めばいいがな」

垣根が狙うのは諸悪の根源とも言えるおぞましい巨大な右腕。巨人のミイラと言われてもおかしくない気持ち悪さの赤黒い腕に、広げた翼を羽ばたかせて未元物質ダークマターをぶつける。

腕という物質を別の何かに変える。例えば土にでも変換されたら、もう右腕の奇跡は使えない。

「この腕すら別の何かに変換しようとしたのか？無駄なことを」

「ッ！」

しかし考えが甘かつた。

右腕は崩れることなく現存し、彼らの前で猛威を振るう。彼の能力では、右腕の奇跡というパラメータ異常は分解できない。

上条当麻の右手と同じ。抗えない奇跡が、能力の影響を及ぼす前に消してしまおう。

反撃をかわし、右腕が迫る。

力不足だと認めろと言われているようで、纏まらない考えをあざ笑うかのようで。

翼を広げ、受け止めることも考えられなかった。

「ツ！突っ立てねえでかわせよ！」

「あ、ああ……」

受けた衝撃が垣根と壁まで吹き飛ばす。垣根の腕に張り付いた上条の切羽詰まった顔を見るに、その衝撃は仲間思いの上条のものだった。

必死になる姿に思考は冷静になっていく。

どうすればこのラスボスを突破できるか。ゲームをクリアできるか。

人体ではないから、灰にはできない。未元物質ダークマターと同じ、違う法則で作られた右腕そのものを何かに変換はおそらくできない。

できたとしても、また生えてきたらどうする？

だからと言って本体に物理攻撃をすれば、『右手の奇跡』で打ち消される。

ならば本人を狙って空気を置き換えたりするべきか？しかしそれをしたら上条に害が及ぶだろう。もしくは空気が右手に触れて失敗に終わる。

それに広範囲な攻撃はしたくない。

無関係な一般人を傷つけたくないのもそうだが、もし、もしもこの狭い場所に彗糸がいたら、今の彼女はきつと避けられない。治せない。本当に死んでしまおう。

それだけは避けたかった。

右腕を打破する策がない。

冷たい水滴がこめかみを伝う。どうするか、考えが思いつかなかっ

た。

「……未^{ダークマター}元物質を使っても、作った法則が右手の奇跡とかいうバグにぶっ壊される。防御も攻撃も意味が無い。ここから導き出される答えは？」

「無理ゲーってことだな」

「不正解、クソゲーってことだ」

「同じじゃねえか!!」

つまるところ、『詰み』である。

インフレしすぎている、そんな意味のない言い訳がましい負け惜しみばかりが頭を回る。

出し抜けるか、このまま物語通り進むか、不安が押し寄せる。

「知っているか？19世紀に確立された現代の魔術師ってのは集団行動を嫌う」

「は……？」

「目の前で殺されそうになっているやつらがいる。これから、さらに罪のない民間人が何百人、何千人と侵攻作戦で殺されそうになっている。そんな状況で、力を持つ魔術師が黙って隠れてられると思うのか」

勝ち誇った顔でファイアンマは壁のように分厚く舞う埃の向こうを見つめる。

彼は目的を達成するのを待っていた。人が悲鳴をあげる騒ぎも、建物が崩れる攻撃も、全てそのためのもの。

サーシャ・クロイツェフ。それが探している魔術師の名。

彼の視線の先、煙の奥から現れた人の名前。目の前で笑う男の目的。

その魔術師は、あの夏の日、天羽彗糸が酷い顔色で冷たい鏡の前に座り込んでいたあの日、身体が入れ替わったと主張したあの日、天使をその体に降ろした人だった。

天使を降ろした貴重な体、魔術の世界ではきつと喉から手が出るほど欲しい一品。

その人を、ファイアンマは狙っていた。魔術の贄として。

そして灰色の煙が晴れぬ間に、長い金髪の少女が飛び出した。

「っ！」

「サーシャークロイツェフ！」

ウエーブのかかった長い金髪、黒いベルトが巻きついた拘束服、そしてリード付きの首輪。

少女が着るには過激すぎる衣装。

どう考えても普通ではない姿の少女は、大きく宙を飛んで、何か工具を手にして振りかぶる。

だがいとも容易くフィアンマの攻撃を許し、地面に降り立ったときには打撲で力尽きる。

小さな少女が地面に落ちた衝撃は、羽のように軽い。軽い音を立てて垣根のすぐそばに落ちた彼女は、気絶したのか、痛みで声が出ないのか、異様に静かだった。

「今日はラツキーデーだな。まさかこんな簡単に目的のものが二つとも手に入るとは」

静かになったサーシャークロイツェフを持ち去ろうと、フィアンマは巨大な右腕を開いて動かす。

だがその手は第三者の攻撃で拒まれる。顔の横を通り過ぎ、風穴の空いた攻撃に辺りは静まり返る。

知らない誰かの足音と、金属が擦れる音。背後から現れたその人に、フィアンマは同時にせずには笑みを浮かべるだけだった。

「懐かしい顔だ」

「別にそいつらに肩入れする義理はないんだけどさあ！いい加減、あんたがローマ正教引っ掻き回すの、見てらんないんだよねえ！」

からし色の中世ヨーロッパ風の衣装を着た女が靴音を響かせ前に出る。舌から伸びるロザリオに似た銀色のチェーンを揺らし、その女——確か前方のヴェントだったか——は吐き捨てる。

眉を寄せる化粧の濃い顔は、みるからに悪意に満ちていた。

「得意の天罰は使えんと、報告は受けているが？」

「その程度で終わると思ってるわけ？」

彼女はサーシャ・クロイツェフの付き添い、護衛としてここにいる。だからフィアンマの敵として立ちはだかるのも当たり前前の話。

彼女の背ほどある十字架の霊装を手にし、舌ピアスに繋がった鎖を揺らして彼女は立つ。

自信溢れる青い瞳に、フィアンマは薄く笑うだけだった。

「復元されたとはいえ、天罰の復元までは成功していかないだろう。仮にそうだとしても、その方法論ではこの俺様を倒すことはできません」
「その右腕、使用制限があるはずよ。そこらの雑魚と遊んでくれたおかげで、もう空中分解してるじゃない！」

「……どうだかな」

二人の魔術師の会話を中断するように、垣根はゆっくりと立ち上がる。スーツについた埃をはたいて襟を正しながら面倒くさそうにため息をついた。

そもそも、フィアンマはこの時点では本気でもなければ、殺しにきているわけでもない。

ただ魚を獲るため餌を撒きにきているだけ。魚が自ら網に掛かるように仕向けにきているだけ。

「あ？なんだ」

「そいつが奪ったのは魔術の知識を全て詰め込んだ少女の脳みそだ。そんな全てを解決する万能な説明書みたいなもん、使用制限を解決するために盗み出したに決まってるんだろ」

ならやるべきことは被害を出させる前にさっさとどっかへ行つてもらおうこと。

そして計画を頓挫させること。

「聡明なやつは面倒だ……全て知ってるように振る舞われて迷惑極まらない」

「なら聡明だからついでに言つとくぜ、ここは引くのが正解だ。だって、欲しいものを奪いに来ただけだからな」

貰った知識を全て使い、勝負に勝つ。

彼女から貰った知識を盾に、この場を切り抜ける。

「う……だ、第一の質問、ですが、どなた——」

「まだ寝てな、お嬢さん」

側で気絶していたサーシャの腕を引き、スーツの中に隠すように体を寄せる。

つい最近抱きしめた少女と同じような体格、扱い方は心得ていた。自分でも驚く優しい素振りに、少し気持ち悪さを感じてしまうほど。「それは困るな。頭が回るやつは、敵になるとなかなか厄介だ。だが、理解したところで何になる?」

「妨害くらいならできるさ」

小柄な少女を抱え、翼を大きく広げる。部屋を覆い隠すほど巨大な白い翼は、フィアンマを押し潰そうと空を覆う。

この少女は切り札だ。

この魔術師さえフィアンマの手に渡らなければ、彼の作戦は成立しない。

微かな希望に未^{ダークマター}元物質を展開する。勝つために手段は選べない。

「無駄なことを」

「あ? ツぐー」

「きやつー」

だが意味の分からない奇跡に跳ね返され、二人して建物の外まで身体が吹き飛ばされる。

ガラガラと大きな音を立てて、冷たい雪の上に打ち付けられた。

痛みより冷たさが勝る。

身体を駆け抜ける柔らかい雪の衝撃が全身を襲う。切れた唇から溢れた赤い血が白い雪に落ちる。

痛みが体を縛って、動きが愚鈍になっていく。

「もう茶番に付き合ってる暇はないんだよ」

「垣根!! テメエ!!!」

痛みに雪の中で倒れる垣根の姿に、上条の中の怒りが一気に沸き上がる。右手を握りしめ、拳を振り上げながら叫び、フィアンマの顔を目掛けて拳を振り下ろす。

だが圧倒的な戦力差の前に、上条も同じように身体が吹き飛ばされた。

埋められない差。

力の差。

届かない。力及ばない。酷く屈辱的で、腹立たしい。

「ツツうガツ!!」

「……本当にお前は愉快なやつだな、お前は。一番愉快なのは多くの他者に触発されて自ら基地へと赴いておきながら、結局全ての成果や報酬はお前自身の中へと蓄積されていつているところだな」

「何が言いたい……!」

「お前は自分の行動が本当に正しいことだと確信を持っているのか？俺様は自身の問題を解決するために右腕を振るい、お前は自身の周囲で起こる事件を解決するために右腕を振るう。他人が必死に積み上げてきた努力を一撃で粉々に砕くやり方だな。手段に差はないぞ？」
痛みをこらえながら上条は立ち上がる。

「そして俺様には確信がある。自らの行動が絶対的な善の到来を意味するものであるとな」

「……随分な自信だな、お前の言う善ってなんだよ」

虫を見つめるような冷たい目と、馬鹿を嘲笑う口元。

腹立たしい。

立ち上がる上条の姿に感化され、痛みを掻き消すように体内で能力を動かし、白い雪を革靴でしっかりと踏みつけて垣根は再び立ち上がる。

「なんだ、まだ喋れるのか？」

「善ってなんだよ、言ってみろよクソ野郎。世界中の人を救うこと？世界中の紛争をなくすこと？世界中の問題を解決すること？違うよな？そんなこと思ってる奴が、不況の中生きてる弱小国家をこんな姿に変えるとは思えねえ」

唇からじんわり滲み出る血を親指で拭き取って、倒れるサーシャを隠すように立ちふさがる。同じくらい背丈で睨む赤毛の男を鼻で笑って、無造作に両手をポケットに突っ込んだ。

「お前は理想の世界を作りたいだけ。戦争もない、問題もない、不況もない、完璧な理想郷へと新しく作り直したい。自分の考えた、サイ

キョーでサイコーなご都合展開満載の世界に作り直して、自分基準の幸福論で人を導くメシアになりたいわけだ」

時間を稼げ。

「世界なんて見てやしない。お前が考えてるのはこの世界で生きる人の幸福じゃなくて、自分が考えた完璧で正しい、くつだらねえ世界の幸福だ」

屁理屈並べて、正論並べて、捻じ伏せろ。

目の前のムカつく男のプライドをへし折ってしまえ。

「薄っぺらいなお前、ツマンネー男。そんなに世界が救いたいなら、まずは好きな女を救えるところから始めろよ初心者」

そこまで言い切った。言いたいこと全て、必要な時間全て確保し、言い切った。

そして次に感じるのは先ほどより重い衝撃。

「がはアアアッ！」

「はっ、うるさい虫だな。小さなガキ一人守れずに、何が初心者だ。笑わせる」

大きな右腕が垣根の腹を殴る。胃の奥から吐き出した液体が雪に散らばって、近くの木の幹に背中からぶつかった。

痛みに腹を抱えて背中を丸める垣根をよそに、ファイアンマは少し苛立ったように右腕を振るい、落ちていたサーシャの体を捕まえる。幼い修道女の姿が、右腕の中にスッポリと収まった。

言葉を発さない小さな体は到頭いけ好かない敵に捕まって、もう後がない。

「さて、一つはいただいた。お前はその右腕で輸送を阻害するのでな、あとでまた迎えにこよう」

「待てっ！ファイアンマ！」

望んだものを手に入れ、ファイアンマは意気揚々とその場を去る。光り輝き、瞬間移動のようにその場から忽然といなくなった。

追うにも追えず、上条が伸ばした右手は空気を掴む。少し悔しげに、伸ばした右手を見たものの、上条はすぐに顔をあげて木の下でのびる垣根のもとに駆け寄った。

「垣根、大丈夫か！」

「あ？平気に決まってるだろ」

血相を変えて駆け寄ったものの、白い翼が繭のように包む垣根はけろつとしており、怪我らしい怪我は見当たらない。

切った唇も、すでに完治していた。

「よ、よかった」

「それより、こつちを心配してやってくれ」

「…………え？」

安堵に胸を撫で下ろすと、垣根は翼を少し広げて抱えていた何かを見せる。180を超える身長と、高校生らしい体格にすっぽりと隠れてしまうその何かは、顔を真っ赤にさせて、子犬のように震えていた。「だ、だ、第二の質問ですがっ！……………初対面のくせに、随分と馴れ馴れしいですが、なんなんですか…………？」

「悪いなお嬢さん、無理させちゃったか」

両目を隠す長い前髪からでも分かるテンパリ具合に少しだけ呆れたように垣根は彼女から手を離す。

白い雪の中で少女は恥ずかしそうに自分の体を抱きしめて、真っ赤な顔で小刻みに震えていた。

鈍感な上条は分からないが垣根には分かっていた、それが寒さからの震えではないと。

少し申し訳なきを感じるが、でも仕方ない。

「サーシャークロイツェフ!?なんで、じゃあさつき攫われたのは!？」

先ほど攫われたはずの少女の元気な姿に目を丸くすると、上条は交互に垣根とサーシャの顔を見比べる。

まるでマジックのような現象に口をあんぐりと開く。何がどうなっているのか彼にはわからなかった。

「あつちはデコイ、俺の能力で作ったよく似たお人形さんだ。ちつこい彗糸と体格が似てたから、割と早く作れたな」

「か、垣根え!!お前、お前ってやつは……………」

「おうおう、もつと褒め称えろ崇め祀れ」

試合には負けたが、勝負には勝った。彼の想像通りに。

男子高校生らしい、からんとした会話をしながら彼らはしてやつたと笑う。しばらく笑い、からかいの応酬をした後でふつと息を吐いて雪の冷たさを思い出す。

「でも安心するには早いぞ。バレるのも時間の問題だ」

「ああ、早く進もう」

行く場所は見当がつく。少年二人は強く頷いて、崩壊した建物の横で立ち上がった。

この物語の終わりを迎えるために。

123話：蹂躪

戦場に天使が舞う。

水色のワンピースと白いエプロン、風にたなびく金色の長い髪。そして美しい十二の翼。

天使は剣を片手に、そしてもう片手に大きな鞆を持って、その天使は高らかに笑いながら青い空を飛ぶ。

「アハッハッハッハ!! ヴアルハラに行きたくなければ降伏でもしやがれカスども!!」

真っ赤な瞳で見下ろすのは大砲を打ち鳴らす戦車たち。小さな集落に押し寄せる軍隊崩れの山賊もどきたちの首を跳ねるため、彼女は空を飛んでいた。

「オラ!! 天使様のお通りだぞ!! 死ね!!」

水を得た魚のように、手にした剣を振り下ろし、一陣の風で全てを斬り落とす。目に見える斬撃は、多くの戦車を真つ二つにぶった切り、幾度も大きな爆発音を轟かせた。

熱と荒々しい風が吹き荒れる。

何回も、何回も、空に轟く爆発音が彼女の体を揺さぶった。

興奮で体が疼く。本体はどうか知らない、けれど中身は50その音に本能が反応する。

彼は戦闘と索敵を目的として作られた生命体。

本能にこのアドレナリンが刻まれている。血と硝煙の匂いが脳に刻み込まれている。

「あ? ……誰に喧嘩売ってんのかその身で思い知れ!!」

飛び込んできたヘリコプターの騒音に負けない声で叫び、一気にスピードをあげて国宝の剣を突き刺す。

先端が平らな非殺傷の儀礼用の剣だというのに、切れ味は恐ろしいほど良かった。

ヘリコプターが墜落し、少女の背で爆風が巻き起こる。熱風がスカートと髪を大きくたなびかせ、頬を撫でる。

最高の気分だった。

「随分と派手にやっているな」

興奮気味に溶けた雪に降りると、誰かに声をかけられる。どこから聞こえたのか辺りを見渡すと、見覚えのある顔と目が合った。

筋骨隆々の大男。ゴルフウェアのような白地に青のラインが入ったポロシャツを着たその人は、少し前まで雇っていた傭兵、アックアと名乗る男だった。

いつの間にロシアへ来たのか、それより何のようなのか。色々な考えや憶測が巡る。

敵ならば昨日の味方だろうと切り落とす。

ぐつと剣を握りしめ、片手で掴む鞆を隠すように構えた。

「あ？テメエは何でここに？」

「前の依頼主に予言された。ここで泣く人々がいると」

しかしその疑いは見当違いのようで、彼は炎のような形をした大剣を構えて眉を寄せる。

泣き叫ぶ民衆、隠れる人々、轟く爆発。

この場において誰に付くべきかは、一目瞭然だった。

あの夏の影から逃げる。小さな体を抱き締めて、白い息を吐き出して、懸命に走る。

ゆつたりとした足取りの悪夢から覚めるために。

一方通行を追うのはあの実験の残骸。

彼の進化のために作られた二万もの少女形をした模造品。

人と変わらない血の色と、体温。殺してきた一万の少女の影。

名付けるなら、番外個体。

ミサカネットワーク全体から集中的に悪感情だけを取り出すように作られた兵器。

一方通行の心を折るためだけに作られた生物。

一方通行を殺すためだけに作られた生物。

「うがあううう!!!」

電気を帯びた釘が銃弾のように一方通行の腕を貫く。あまりの痛みに叫び声をあげ、柔らかい雪の中に腕の中の温もりを手放してしまった。

雪の上に落とされた打ち止めは、小さなうめき声をあげて、包まれた毛布の中で荒く息をする。その姿に安堵しながらも、同じよう一方通行は地面に伏せる。

どくどくと流れる血を能力でせき止めながら、歩くその人を見つめて、ただ唇を噛んだ。

反射は使えない。もう二度と彼女たちを傷つけたくない。

仮面をかぶるその少女の姿に、恐れと痛みが波のように押し寄せ
る。

後悔、懺悔。言葉にできないその想いが、一方通行の痛みをさらに
ひどく感じさせる。

「もしかして、ミサカのことを守ってあげているとか考えてるつもり
？誰も頼んでないっつーの」

ゆっくりと歩く茶髪の少女が冷たく吐き捨てる。

一方通行の思考を読み取ったかのような、彼女は怒気を含んだ声
だった。

遅い足取りと、遠退く痛み^に一方通行の思考も澄んでいく。

白いボディスーツとハンググライダーを固定していた太いハーネ
ス。知っているクローンとは明らかに成長が進んだその少女。

よく考えれば少しおかしい。

ミサカネットワークに接続されている個体は打ち止めに管理され
ている。これは絶対である。

打ち止めと一緒に一方通行にそんな意味のないものを殺し屋とし
て派遣する理由もなければ意味もない。

この少女は一体誰なのか、今更な疑問が浮かぶ。仮面で顔を隠すそ
の少女に疑惑が生まれる。

フエイク。デタラメな嘘か。

全て嘘っぱちの口からでまかせ。そんな一つの可能性が一方通行の脳内を過ぎる。

確認しなくては。

倒れた地面から顔を上げて、手を冷やす雪を投げつける。

能力で補正された雪玉は、正確なスピードと方向に飛んで硬い仮面にぶつかった。金具が壊れ、のつぺらとした白い仮面が雪の上に落ちる。

しかし思惑は外れた。

仮面のない少女の顔に息が止まる。

同じだった。

仮面の下の素顔は、あの第三位と瓜二つだった。

少し荒れた表情が別人のような雰囲気に見せていたが、一万も同じ顔を殺して来た一方通行には分かる。

彼女は、紛れもなくあの実験から生まれた生き物だと。

「ミサカの体内には、ラストオーダー打ち止め側からの停止命令を拒絶する機構が取り付けられている。そいつにすぎたところで、このミサカを止められることはない。やるんだったら、確実にミサカを殺す気でこないかね」

声にならない悲鳴に喉が痛む。

直視したくない現実に脳が理解を拒んだ。

いやだ。嫌だ、見たくない。

「まあ、できないよね！それやっちゃたら今までの努力が全部水の泡になっちゃうんだもん！じゃあ、黙ってボコボコにされちゃう!?」
下卑た笑い声が曇り空に響き渡る。耳にこびりつく笑い声が吐き気を誘う。

冷えていく体温が指先の熱を奪う。

「怖いよ、助けて……」

「ッ！」

「人格が粉々になるまで遊んであげてから！存分に楽しんでよ！」
呟いた少女らしい声に目を見開くも、続けざまに叫んだ喉を痛める

声が幻想を打ち砕く。

あとはもう遊ばれるだけだった。

「もつと逃げ回ってよ！貴方はミサカたちを一万人以上、一万回以上殺してきたんでしょ!!最低でも一万倍は人権を踏みにじらないと帳尻が合わない！利子を含めれば、3倍返しじゃ済まないからね！」

手にした小さな釘が、オリジナルの超電磁砲のように青白い電流を纏って、立ち上がった一方通行に向けて放たれる。

何回も、何回も。

よろよろと立ち上がって、余裕なくそれを避ける姿に自然と彼女は歯を見せ大きく笑う。

「ほらーもう一発ー！」

そう叫ぶと、一瞬のうちに彼女は空に跳んだ。

莫大な高圧電流を使い空気を爆発させ、その勢いで空へと跳んだ。頭上からの攻撃が一方通行を狙う。

クラクラする。避けることができない。

放たれた釘は足に被弾し、呻き声をあげて一方通行は再び地面へと倒れ込んだ。

その隙に再び跳躍すると、彼女の足裏が凄まじい勢いで一方通行の後頭部を蹴り倒す。

「どうして今まで打ち止めラストオーダーを含めた他の妹達ミサカ達は貴方を糾弾しなかったと思う？答えは簡単」

顔を雪に押し付けられ、後頭部を何度もその足で踏み躪られる。がんつ、がんつ、と白い髪が汚い靴底に踏まれ、汚され、貶されていく。

「自らの意思で恨まなかったんじゃない！ただ、それを理解し、表現するだけの人間らしい感情の処理方法が不可能だったから表に出なかつただけ！」

仕方のないことだった。

当たり前のことだった。

彼女たちを殺した罪は消えない。どんなに善行を積んでも、どんなに守って見せても、どんなに愛しても、殺した事実が変わりはない。

永遠に償えない罪だと分かっているのに。

その行為で罪の意識が薄れていくのは一方通行だけ。

起こった事実は癒えず、当事者は永遠に記憶と恐怖を背負って生きていく。

「ミサカ達は少しずつ人間らしくなっている！じきに多くのミサカ達が憎悪に気づく！正当な復讐の権利について考えることになる！」

だからその痛みを受け入れた。泣くことも、喚くことも、反撃することも、抵抗することもなく、ただ受け入れた。

「……ああ、まずはあつちの不良品から片付けるか。その方が効果的っぽいしね」

だがその光景は彼女にとって面白くない。反応のない一方通行に足を止め、つまらなそうに彼女は視線を移す。

毛布に包まれ熱を帯びた幼い支配者。倒れた一方通行へ懸命に小さな手を伸ばす子供。

一方通行のかけがえのない人。

「サードシーズン第三次製造計画のもとでミサカ達は刷新され、ネットワークの拡大と再配備に伴って、さらなる性能の強化と躍進を遂げる！もはやラストオーダー打ち止めという旧世代の司令塔は必要ない！」

ニンマリと口角を上げて腕を構える。小さな指令塔を撃ち抜かんと、電力を込めて。

しかし弾丸は撃たれなかった。

大きな衝撃が彼女の腹を強く押し上げ、宙に浮かんで吹き飛ばされる。電気を込めた釘は力を失い、雪に落ちた。

少女の口から吐き出した赤い血が、白い景色の中で目を惹いた。

「つまりそういうことか。誰も死なせずに場を収める方法なんて、ねエンだな」

小さく一方通行は呟いた。赤い目に渦巻くのは絶望、怒り、諦め、憎悪、嫌悪、後悔。

名前のつけられない負の感情。

もう止まることはできなかった。

どちらも、互いの主張を止めることができなかった。

痛みを抑え、少女は怪物を殺すために立ち上がる。胃を掴むような腹の痛みと、衝撃で未だぐらつく視界で体が悲鳴をあげていても、彼女はもう一度釘を手にした。

電気を込めて、ありったけの力で磁力を放つ。

しかし、彼女の前にいるのは怪物の頂点。全ての力を束ねる生き物。

無理やり捻じ曲がった力が向きを変える。釘が貫いたのは少女の柔肌。

少女が飛ばした釘は白い怪物を傷付けることなく跳ね返り、彼女の胸を貫いた。

真つ赤な液体がじんわりと広がって、痛みが脳へ駆け上る。だが溢れ出る血に怖じけず、彼女はまた腕を伸ばす。

一種のプライドなのか、吹き出す憎悪のせいなのか、死の間際でも彼女は無謀にも仇を討つため照準を合わせた。

「つうあああがああああ!!」

しかし伸ばした腕は、一瞬で間合いを詰めた一方通行の手によって腕をへし折られる。

嫌な音。

あまりの痛み少女は倒れ伏す。ひんやりと体を冷やす雪に茶色い髪が散らばって、その髪がちらちらと一方通行の視界に映った。

酷い光景に一方通行の心は渴く。

胸を撃たれたのは目の前の少女。だというのに一方通行の心臓は痛みを訴えていた。

もうだめだ。何もかもが。傷つけてしまった。

傷をまた重ねてしまった。

拳が痛い。

でもこれで終わりじゃない。

また新しい妹^{シスターズ}達が、家族が、大切な誰かが、関係ない町や村が、人が、一方通行を殺すため、科学の発展のため使われる。

耐えられない。

この地獄から救われたかった。

金色が脳裏にこびりついて離れない。

あの夏の夜、救うといった悪魔のような女の笑みが脳に浮かんで
は嘲笑う。

血の匂いが酷い。

死ぬはずのクローンを救ったあの金髪の少女のように。

殺すはずのクローンを守ったあの黒髪の少年のように。

殺したかった女を助け出したあの茶髪の少年のように。

誰かを救いたい。

誰かに救われたい。

救済の糸が欲しかった。

「た、す……け……て」

「——ッ!!!」

小さな呻き声にはっと気がつく。

少女に馬乗りになった自分の姿と、血と腫れの赤で染まった両手の
拳に。無意識が自己を守るために行動を起こしていた。

少女の顔は晴れ上がり、赤い液体がかき氷のシロップのように雪を
汚す。

「助け、て、誰、か」

「うあああッ!!!」

思わず仰け反り、おぼつかない足で後退る。胃の奥から吐き気が迫
り上がった。

震える瞳孔が現実を直視する。

暴行された少女の姿に記憶が溢れ出るように蘇って、すぐそこまで
酸っぱい液体が上り詰める。

「貴方、の、せいだ」

ピピッと音が鳴って、頭から血が溢れ出る。何かが破裂したような
音だった。

流れる血に、とうとう口が開いて胃液を吐き出す。

その音は彼女に取り付けられた自殺装置の起動音。彼女は最後の
復讐に、自分の命を使った。

事実が、光景が、現実が一方通行の脳を蝕む。

悲鳴に嗚咽が交じり、そしてやがて笑いになる。痛ましい笑い声が、ロシアの曇り空を貫く。

喉が痛い。

心も。

どうしようもない思いを吐き出すと、自然と乾いた笑い声が出てしまう。このふざけた状況がくだらなくて、馬鹿馬鹿しくて、反吐が出る。

「ふざけンじゃねエぞ!!!俺のためだけにこいつは作られ、殺されたっていうのか!?これが全部学園都市のクソどもの計画だったんだろ!どうあがいても、このガキはくたばって、俺の精神がズタズタになって!暖かい部屋で酒でも飲みながら、どこかのだれかが笑ってる!そういうの全部ひっくるめたのが!連中の手の内ってことなんだから!!」

もうキャパシティを超えていた。

両手で顔を覆い隠しても隙間から見える現実には心臓が押し潰されそうで、体は崩れてしまっそう。

「ッは、だったら、俺がその全部をめちゃくちゃにしてやる!このガキが死ななきゃ計画が成功しねエっていうなら!俺の手でこいつを救うことで失敗させてやる!クソツたれども、今に見てる……!オマエ達の余裕の表情、今からここで粉々にしてやる!」

おぼつかない足が汚く溶けた雪に沈む。叫び、呻き、吐き出した憎悪が気持ち悪かった。

あの科学の街が憎い。

この世界が憎い。

何もかもが憎い。

おぞましい憎悪が溢れ出て、止まらない。

「クソツタレのクソツタレのクソツタレども!俺に殺す力しかないと思っ、見下しやがる性根の腐ったクソ野郎ども!今からオマエ達に見せてやる!俺にだって、何かを守る力があるってことをよオ!!!」

怪物の雄叫びが白い景色にこだまする。背の高い少女を抱えて、演算を始めて、少女を救うにしている物騒な言葉を並べて憎い概念へ叫

ぶ。

行き場のない醜い憎しみだけが彼の赤い目に映っていた。

鉄の塊と炎が散乱する雪景色は、もうすでに騒音はなく静けさが戻る。

「二人掛かりだと早いな」

「ああ、思ったよりも時間はかからなかった。避難も終わったであろう」

基地すら制圧し、大男とモデルのような少女の不思議な二人組は剣を持ちながら辺りを見渡す。もう既に敵は殲滅した、民間人の姿もない。

仕事は終わった。

しかし、地獄耳を遥かに超えた聴覚を持った彗糸の耳に歪な音が入る。

神経を乗っ取っている彼女の五感は全て50に伝わる、音も、匂いも、視界も。そのせいで瞳が50と同じ赤になってしまったが、しかたあるまい。

「別のが来てる。学園都市っぽいが」

雪を踏みつける重い足音、パワードスーツ駆動鎧を着込んだ軍勢が、この基地に向かってくるのが彼女の瞳越しに見える。

学園都市の軍のようで、ロシアとの装備の差ですぐに分かった。

「この場を占拠しに来たようであるな。どうするっ？」

「ここを守ってくれんならそれでいいんじゃないやねえか？一応弁えるように躡けるし、あれがいればロシア兵も突撃にはこねえだろ」

アックアにもそれが見えているようで、遠くの軍勢に顔を顰める。だがこれは好都合だった。力のない集落が、ロシアと戦えるはずがない。ならば敵に寝返ればいい。

学園都市に場所を提供し守らせる。脳みそに細工を施せば、それはもうロシアの侵攻など蹴散らす強力な盾になる。

「あ、そうだ。マスターから言付けがあつたんだ」

「……マスター？」

そういえばとふと思い出し、マスターからもらったメモを確認してから50は冷たい雪に膝をつける。

持っていた鞆を地べたに置いて金具を外し、乱雑に入れられた紙の中から一枚のA4用紙を取り出して男の前に差し出した。

マスターは用意周到と呼ぶには完璧すぎるほど、50に多くを残した。

この鞆に入っているのは多くの書類。

国を制圧した結果が書かれた大事な書類。そして彼女が書いたメモ。予言が書かれた紙の切れ端は、彼にとって何よりも大事だった。

「これは？」

「この近くできな臭い動きがあるそうだ。行ってみれば？」

渡した紙に書かれた細菌兵器だとか物騒な文字列に顔を顰めるアックアをよそに、鞆を持って立ち上がる。

やるべきことは終わった。あとは本来の目的をこなすだけ。

「……お前は どうするのだ？」

「エリザリーナ独立国同盟に。少し用があつてな」

剣を足の中にしまい直し、大きな鞆を握りしめて背を向ける。

国境は目と鼻の先。

アックアの言葉に振り返ることはせず、冷たく返して足を進める。

取り繕うのが難しくなつて来た体が、早く行けと急かす。口から吐き出しそうな血の塊を飲み込んで、平静を取り繕うので精一杯だった。

124話：第三の主人公

軍用用の大きな輸送車が揺れる。四人乗りの後部座席に少年が二人、眉間に皺を寄せてそれぞれの窓から白い外を見つめていた。

「はあ……」

うるさい走行音に掻き消されてしまうほど小さいため息を吐いて、上条は雪景色を眺める。

元気になつたり、落ち込んだり、とても忙しい。

「何落ち込んでんの？気持ち悪」

「なんだよ、落ち込んだじゃダメなのかよ」

「ダメだ」

「理不尽……」

分かりやすく項垂れる上条の姿に呆れてぶつきらぼうに声をかける。足を組み、偉そうに鼻で笑う垣根に、上条は少し心が軽くなったのか乾いた笑みを見せた。

「インデックスにそんな顔向けていいのかよ？また心配かけんぞ」

「……でもさ、フィアンマの言う幸福な世界って、どんなもんなんだろって思わないか？」

俺様気質ながら、人を気遣える程度の器量はある珍しいタイプの超能力者。それでいて少しお兄さんな垣根はそつのない簡単な励ましを続ける。

考えれば考えるほど沼に嵌っていく上条の姿に、なんだか昔の自分の姿を重ねながら。

「あのなあ……いいか、世界の幸福なんて一つじゃないんだよ。ベンサム功利主義を思い出せ。幸福とは悦楽、そして悦楽を生む全てのものはそれと比例して善であるといっただろ？」

「なんだそれ？」

「つまるところ、フィアンマが言う幸福な世界なんぞあいつのエゴで、正義という快樂を貪るためのただの口実だ。だから、お前もお前のエゴを押し通せ。好きな女のためにな」

随分前、カブトムシ越しで聞いた彼女の言葉を繰り返す。善とは幸福、幸福とはエゴ。好きなことをして幸福になっているだけ。

拒まれたって構わずに、嫌という程幸福エゴにしてしまえ突き進めばいい。

それがあの女の思考、考え、核。

自分にその幸福エゴが向けられるとは思ってもいない愚かな女の独りよがりな考え。

主人公ヒーローの思考回路。

腹立たしいその思考回路はある意味正しく、ある意味不正解。

他人もそのエゴを貫くと知らないのならば、こちらがまます通せばいい。自我を見せればいい。

自分だけの幸福エゴをこちらの幸福エゴでねじ伏せてしまえ。

「好きって、いや、俺はインデックスのこと大事だけど、そんなんじゃ」

「うるせエ。窓から落とすぞ」

「脅迫かよー」

しかし変な所に反論し、真っ赤になって上条はモゴモゴと垣根の言葉を否定する。

そこじゃない、と少し苛立ちながら上条の頭を叩いて鋭く睨む。言葉が一切響いていないのが腹立たしい。

「どんなに懐が広くても、好きじゃねえ女と同居なんてしねーんだよバカ。ロシアまできて、意味ワカンねえ強敵を殴ろうとして、世界救ってまで助けたいんだろ？そりや恋をすつ飛ばして愛だ、恋を経て強固になった愛なんだよ」

「う、やめろ……あいつを不純な思いで汚したくねえんだよ」

「恋じゃなくて愛なら綺麗らしいけど？あの馬鹿曰く」

頑固さは彗糸と同レベル。

救世主とはどいつもこいつも潔癖症なのか。自分以外の全てに清らかさを求める思考はなんとかならないものか、呆れて言葉も出ない。

彼はインデックスが好きで、その思いが汚いものだと感じていて、そして自分自身が汚いものだと感じている。

彼女も同じ。垣根が好きで、その思いが汚いものだと感じていて、

そして自分自身が汚いものだと感じている。

健気とはかけ離れた、自己肯定感の低さからくる自己嫌悪。

相手はその感情を求めているのに、隠してしまいこむ。相手の前では綺麗でいたいから、潔癖に汚いと思ひ込んだ感情を隠す。

なんとも哀れな人たちだろうか。

垣根とは全く違う思考回路で動く人たち。

何度も失いかけて、何度も手の中から零れ落ちそうだった。だから困いたくなる、手綱を握っていたくなる。

守りたい、何かをしてあげたい。幸せになるためなら学園都市だって、世界だって敵に回す。

もう失いたくないから。

もう離れたくないから。

もうなくしたくないから。

きっとその考えは幼い頃、大事な人を守れなかった反動。

そして多分、初めて誰かを自分だけの手で救えた故。

垣根の考えとは真反対、真逆をいく人たちの思考は全くといっていほど理解できない。

どうしてこうも、救世主とは脳の構造が普通とは違うのだろうか。どんな考え方なのか理解したくもない彼らに、深い、深いため息を吐く。

「そうやって俺に都合のいいことを……」

「ま、お前がどうなろうが知ったこっちゃやねえが、感情や存在一つのせいで未来つつーもんは簡単に変わる。いつか取り返しのつかないことになっても知らねーぞ」

取り返しのつかないことになったのが物語の、原作の垣根帝督である。

研究所で笑顔をくれた少女をなくし、かつこいと褒めた少女を救えず、彼女が現れなかった本来の世界。

闇に飲まれ、世界を変えるために第一位の座を求めた。

そして取り返しがつかないほど落ちぶれた。

05が自分に成り代わり、自分は墓とも呼べない場所で死ねずに、

神が思い出すまで永遠を眠る。

なんとも滑稽な最期だろうか。

理想ヒューマンになれず、結局自分は最も憎む男の二番煎じ。

望んで悪に堕ちたわけでもないのに。望んで殺したわけでもないのに。

望んで悪に堕ちた男に。望んで殺し続けた男に。完膚無きまで打ちのめされ、負ける。

負けたのだ、第一位に。

顔も、性格も、体型も、声も、彼女はきつと、垣根帝督の方が好みだと、一番だと、世間一般で好まれ、愛されるというだろう。

けれどそんなものはどうだっていい。

なんでも持っているのに、単純な脳の構造で、自分が一番誇りに思っていたもので負けた。

屈辱以外のなんでもない。

そして垣根すら知らないその屈辱を、彼女は知っていた。

彼女にそれを知られていて、守られてしまった。

そして結果的に、未来は変わった。

取り返しのつかないことになったのは彼女の方。

彼はよく知っている。

感情一つが、存在一つが、未来を変えてしまうことを。

「なんか最初に会った時と、変わったな、お前」

「……どこぞの馬鹿の受け売りだ」

あまりにも普段の垣根とかけ離れた言い分に目を微かに見開くと、少し嬉しそうに笑う。

のほほんと、何か勘違いされているようで少し癪に障る。

からかうような目線が腹立たしい。彼の思っていることなど見当違いの勘違いでしかないのに。

「あいつのこと大好きだな」

「今までの会話でどう解釈したらそうなるんだ？つか、俺の彗系に対する感情は、飼犬に対して思うのと近いから。愛ではあるがお前のものとは少し違う」

ああ、やつぱり勘違いをしている。腹立たしい声色に、溜まった鬱憤を吐き出すが、彼の笑顔は相変わらずそこにある。

確かに、一億歩譲ってこの感情が愛だと認めよう。しかし彼が思うものとはかなり違う。

飼い犬に湧く愛情のようなものだ。

愚かでグズで馬鹿で俺のこと大好きで一途。そんな女に対する愛情は犬と同じ。ペットと同等。

そうだと決まっている。それでも思わないと接していけない。

恋も愛も知らない子供相手に、重い感情はまだ早すぎる。

「……話聞いてたか？」

「べっつに〜？——んぎゃっ!？」

それらしい言い訳を並べたにも関わらず、上条は笑う。面白いものを見たと言わんばかりに歯を見せながら笑う彼だったが、急に止まった車の反動でシートベルトが腹に食い込んだ。

あまりにも突然の停止に二人して少し驚く。

だが話をうやむやにされたのは、垣根にとってありがたい話でもあった。

「な、なんだあ!？」

「あ、あれをー!」

ブレーキを踏んだ運転手が甲高い声で叫びながら曇った空を指差す。車を揺らす強い風と、天まで届く二本の黒い竜巻。

天災のような恐ろしい光景に唾を飲む。

「一方通行……」

中心地にいる人の名を呟いて、垣根は深く座席に体を預ける。

近づくクライマックスに、何か遣る瀬無い気持ちになるのはなぜだろうか。

叫ぶ。

「もう抑えらんねエよ！あのガキの笑顔だけじゃ収まんねエんだよオオオ！」

あの日見た少女の笑顔。

血の匂いと崩れたコンクリート、散らばった金髪と、睨む男の目。吐き気を催す空気を破った大事な人。

打ち止めの太陽のような笑み、優しき、愛情。

「全部、ぶっ壊して！片っ端からなぎ払いてエ!!」

もうすでに、甘いお菓子で止まる時期は過ぎた。柔らかな少女の暖かさでは、彼の感情を溶かすには熱量が足りない。

抱きしめて、愛情を注いでくれるヒロインじゃない。

殴り飛ばし、痛みを教えてくれるヒーローを待っていた。

「こんなもん作って喜んでるような連中も！その恩恵を受けて幸せっつウもん手に入れてる連中も！一人残らず！一人残らず!!」

「一方通行!!」

そしてその無意識の願いは叶えられた。

叫ぶ一方通行のしゃがれた叫びに重なった誰かの声、聞き覚えのある声に初めて、白い雪を真っ直ぐ見た。

「ツ!!テメエ、テメエら、なんで、ここに……」

黒髪の少年と、茶髪の少年。

自分を惨めに見せる、ヒーローの姿。

「なんで、なんで！なんでエエ!!」

足元に落ちた、何かの機材。もう何か分からない、分かりたくもない重い鉄の塊。

それを拾い上げて投げつける。細い腕とないに等しい筋肉が投げたそれは、猛スピードで風を切る。

重い一撃が、凄まじい早さで二人の少年を襲った。

「挨拶にしては物騒だな」

しかし攻撃は白い翼の前にスピードを失い、跳ね返され、そして碎け散った。

天使のように綺麗な男。

翼も、光る輪も、端正な顔も、余裕のある蔑みも、何もかもが腹立たしい。

一方通行の持つ黒い竜巻でできた翼のような紛い物とは違う。

白く輝く天使様の翼。

「妹達を全員救ったオマエも、女を颯爽と助けるオマエも、何もかもを救えるヒーローなんだろうオが！」

二人のヒーローのご尊顔が憎い。その揺るぎない立場が憎い。

夢物語に出てくるようなご都合展開の誰もが羨むヒーローがひどく憎たらしい。

「なんであのガキだけが、何も悪いことなんかしてねエのに！なんでこんなに苦しめられなきゃならねエンだよオ!!」

彼らは打ち止めの物語に現れなかった。彼女のヒーローじゃなかった。

御坂美琴の、10032号のヒーローなのに。あのクソ女のヒーローなのに。

ヒロインのピンチに駆けつけて、熱い台詞で悪を制し、世界を守るのが彼等だというのに。

打ち止めの前には現れなかった。

「上条、お前先行け」

「はあ!?お前、それは、」

「いいから、早く行け」

「……分かった」

隠すように片方の前に白い翼を広げると、茶髪の少年はまっすぐ前をみる。小走りでトラックへ戻っていく黒髪の無能力者の背中が鬱陶しい。

きつと誰かを助けに行くのだろう。

打ち止めじゃない、他の誰かを。

「つーことで、テメエの相手は俺だ。悪いな、第一位」

「ツ!!うがアアッ!!」

薄く笑うと、茶髪の彼が翼を広げ白い波を作り出す。雪崩のようなそれは一方通行の反射をすり抜け、細い体に大きな衝撃を与えた。

胃液が食道を逆流し、雪の硬さが背骨を伝わる。あの右手でもない、ただの翼に殴られた。

単純な物理攻撃。一方通行の賢い脳みそも何が起きているのか分からなかった。

「あ?なんだその顔、何が起こってるかわかってねえって顔だな」

「なにツが、アア!!」

「テメエの反射は有害無害のフィルタを持つてる。じゃなきや目は見えねえし音は聞こえない。そのフィルタを上手く利用すれば、こういうこともできるってだけだ」

もう一度胃の奥を抉るような痛みが襲う。雪の上を回転するように吹き飛ばされ、埋もれるように雪の中に叩きつけられる。

痛みが背中からじわじわと広がって、もう何も考えられない。

目の前の天使に全てをぶっつけないと、精神が保たれない。

「ツ、あのクソ女を救ったヒーローがア!!誰にも理解できずに救えなかった女が救えるなら!そいつをちよつとはあのガキに向けてみるってんだ!!クソがアアアツツツ!!」

「支離滅裂だな、第一位の頭脳が演算してたどり着いた答えがそれかよ」

「俺みてエなクソツタレの悪党が!今まで立ち上がった方がおかしかつたんだよ!ヒーローなかなれる訳がねエだろ!何をどオしたって、俺は血みどろの解決方法しか選べねエンだよオオ!なんで俺がこんな事しなくちやならなかったんだ!!オマエみてエなヒーローが駆けつけてくれたら、最初っからこんな間違いなんか起こらなかつた!」

痛みが増す体に鞭を打ち、両足を広げて立ち上がる。

叫んで、想いを叫び倒して、背中で渦を巻く竜巻が目の前の男を殺すために蛇のように横から吹き飛ばした。

「イイなア！あの女は！どんな災害を起こしても！どんな罪を起こしても！オマエみてエなヒーローが駆けつけて！好きを囁いて全部救い出してくれる！彼女自身もヒーローで、きっとテメエも、9932号みてエに！救われたンだろオなア!!」

風で巻き上げられた雪が煙のように辺りを隠す。

見えない視界の中、ありつたけの想いを叫ぶ。今の一方通行にはそれしかできなかった。

虚しいじゃないか、悲しいじゃないか。

彼等がいない。彼がいない。彼女がいない。助けてくれる光がないから、大事な少女が守られない。

あの子だけが守られない。

「オマエらみたいなのヒーローが駆けつけてくれたら！端っからこんな間違いなんて起こらなかつたンだ！あのガキだつて！あんなに苦しむことはなかつたンだよオ！」

「いまだにその程度の理論に止まってんのかよクソガキ。どうやらあいつの言葉は届かなかつたみてえだな」

想いを乗せたいくつもの攻撃が躲される。背の高い男に冷たい言葉で見下ろされ、一方通行のプライドはもう砕けていた。

「言つてたろ？『思想に美しさなんてない。泥濘の中でひたすら模索し、もがき苦しむ、それは悪も正義も同じ』『テメエは悪なんでものに美しさを見出してそれを探究してるのか？』あの馬鹿に言われた言葉をきちんとしてねえ」

あの日、あの十月に聞いた言葉が一言一句、全くテンポで、口調で、再び一方通行に向けられた。

金色の悪魔の言葉を、まるで聖書の一節のように、大切に、強く呟く。気持ち悪い。

「好きな人のために人生を消費したい、好きな人の隣にずっといたい。好きな人のために世界を壊したい、好きな人のために世界を守りたい。二つ違う考えがあれば片方は悪になって、片方は正義になる。手段なんてどうでもいい、好きなやつをヒーローになりてえなら！己のエゴを貫け第一位!!」

悪魔に毒された天使が一步一步と白い雪の上を歩く。

まっすぐ、黒い目が、見る。

簡単な論理で、確実に、しっかりと、一方通行の言葉を切り捨てて、その隙間に新しい価値観を、正論をねじ込んで行く。

いけ好かないあの女と同じ手法。

圧倒的なカリスマで、圧倒的な美しさで、圧倒的な言論で、真っ直ぐ、一方通行を殴りにくる。

「テメエが散々偉そうに語った美学とやらをかなぐり捨てろ！そのガキを救うためだけに汚くもがけ！悪だとか正義だとか、そんなつまねえもので世界を区切るな！特別なポジションも、御大層な言い訳なんかいらねえ！幸せにしたい奴がいるだけでいいんだって理解しろ!!!」

悪を知り、悪のまま救って、悪から救われた、過去の悪役の叫びとともに一方通行の顔面に拳をぶつけた。

未知の法則を纏った、彼にしか作り出せない拳。もやのかかった拳が、今まで感じたことのないくらいの痛みを伴って一方通行の頬にめり込んだ。

一方通行の知らない法則で、反射の殻を砕かれ、頬に大きな痛みが響く。脳に達する痛みにも、まぶたが重くなる。

叫んで、戦って、吐いて、もう疲れてしまった。

柔らかい雪の上に倒れると、少年の茶色い革靴が倒れた一方通行に目もくれず、倒れた少女たちの方へ迷わず進んで白い雪に足跡をつける。

その背中を最後に、一方通行の視界は閉じられた。

125話：代替物の残骸

厳かな教会で、少女が横たわる台に強く両手を叩きつける。焦った様子で儀式場で声を荒げると、彼は僅かに眉を顰めて息を吐き出す。

青年は赤毛を揺らし、肩を大きく怒らせた。

「やられた……！」

目の前の少女が溶けていく。金髪は白に、赤い布だけが残り、蟻が融けるようにドロドロと溶けて、祭壇にこびりつく。

人ではない人形が、静かに消え失せた。

「デコイ……あの時か！」

人間ではない白い塊に怒りがとめどなく溢れ出す。

あの時わざと攻撃を受けていたのはこのためか。いけ好かない男の嘲笑うかのような真つ黒な瞳が脳に浮かんだまま離れない。

色素の薄い髪、高い背、不敵な笑みと、様になったスーツ、そして整った顔。

自分と似た様な男、それは見た目ではなく中身の話。闇を見て、闇を知り、そして闇に打ち勝つすべを知る。

何より自分に底知れぬ自信を持っている。

科学側の自分と言ってもおかしくないくらい似ていた。

わざと負けるような策も、デコイによる妨害も、考えられていて腹立たしい。

「クソツタレ！もう一度捕まえに、いや、もうすでにあそこは警戒状態、代わりを……」

もうサーシャ・クロイツェフは使えない。一度手の内を明かしてしまつたら、聖女様や先程の男が策を練って反撃を許してしまう。

そもそも、もう別のところに逃げたかもしれない。

しかし何を代わりにすればいいかと聞かれれば答えかねる。

彼、フィアンマのやりたい事はとても壮大で、恐ろしく、絵空事のような奇跡。それを成すための術式は、天の御使いと関わりのある、もつと言えば天使をその身に宿した人を使う。

あの夏起きた大規模な魔術、エンゼルフォール御使墮しで天使を降ろした体を素体。

それがサーシャクロイツェフだった。

見た目と中身が入れ替わる、それも誰に認識されることも無く知らぬ間に入れ替わっていた。

彼女はその中でも天使と体を入れ替えた。椅子取りゲームのように肉体を、魂を入れ替え、この世界に天使が人の体を受肉し降り立つ。

エンゼルフオール
「御使墮し……そうだ」

サーシャクロイツェフは天使ガブリエルをその身に宿した。

なら、その天使の肉体はどうなった？

「天使に成り代わった方を使えばいい」

天使の体に入り込んだ魂。天と繋がる魂ならば、代替品が務まるのではないか。

「確か学園都市の……」

幸い、用心深く用意周到なフィアンマは、一通りサーシャクロイツェフと一緒に調べていた。使わないと思っていたため細部は知らないが、その名を知っている。

天使に成った人の名を。

「藍花悦、だったか」

学園都市、超能力者^{レベ}が一人。

第六位の怪物。

重い雪を踏みしめ、足跡をつけていく。長い金髪に雪が絡まり、重

さで歩きにくい。

「はっ、はぁ、クソっ……」

口の中で弾ける血の塊を吐き出して、汚した服と体を制限された能力を使って綺麗にしていく。

演算と重い体が足取りを重くする。

50の不具合ではないのに、本体の不具合が足を引つ張っていた。元気な思考なのに、体はそれに追いつかない。

車を渡してしまったのは失敗だった。

「もう少しだったのに、暴れすぎたっ……あー、もうっ！」

50の演算に追いつかず、体が足から崩れ落ちる。鞆を投げ出し、冷たい雪の上へ体を預けた。

力尽きた。マスターの体は歩くコマンドを拒否している。もう、この体を動かすのは難しい。

「くそったれ……こりゃ、適当な人間誘導した方がはえーな」

四肢と服だけ残り、50は赤く濁った口の中から這い出る。

小さなカブトムシは赤い血を綺麗に消し、雪の中で眠る女の姿を見つめると、少し翅を広げて辺りを見渡す。落とした鞆の上に乗って見える景色は白く、カブトムシの姿を隠してしまっそうだった。

「せめてデカくなればいいが、権限はオリジナルにあるからな。仕方ねえか」

本来彼らは15m程度までは巨大化できる柔軟な生命体。原作と違って隠密行動が主な用途だからこそ使ったことはないが、本領を發揮すれば足のない70だか80cmしかない軽い体くらい持ち上げられるはずなのだ。

けれど、05以外の偵察隊は製作者の許可がなければ巨大になれない。暗闇に紛れて情報收拾するのが役目、だから人目がつく行動は必ず許可がある。

それに05とは少し仕組みが違う。

彼は無理やり自我を作られ、駒にされ、パーツを補い人間の姿をしていた。

天羽彗系の四肢のない体と、中で流れる垣根帝督の血液から取った

DNAマップを使ってかろうじて保っていた姿は、今はもう演算する力がない。

せめてオリジナルと連絡を取ればいいが、マスターはそれを望んでいない。そして何より、オリジナルがロシアにいるのを接続が切れた彼は知らない。

八方塞がり。

自分の力しか頼るものがない。

「ちよつと待ってるマスター、移動手段でも探してくる」

国境はもう目と鼻の先。あと6mくらい歩けば着く。このままゆっくりと痛みに耐えながら歩くより、屈強な男でも見つけてこちらに来てもらった方が早そうだ。

50が飛び去り、金色が白い雪の中で置いてかれてしばらくした頃。誰かが雪を踏み、軽い足音が音のない雪景色に響いた。

「こんなところで天使様がお昼寝とは、あまりにも無防備だな」

中性的な青年が散らばる金髪を手にとって乾いた笑みを浮かべる。30kg程しかない軽い身体を持ち上げて、白い息をふつと吐き出した。

やはり科学側の人間、魔術でのサーチに簡単に引っかけり、簡単に見つけられた。

だが簡単すぎる入手に眉を顰める。

不安やら、恐れ。この女でいいのか、サーシャ・クロイツェフでなくて失敗しないのか。少し思うところはあった。

「……少し心許ないが、十分か」

しかし今はこれしか無い。

拾った体を抱き上げ大きな右腕を振るうと、青年はその場から姿を消す。

雪の上に残っているのは大きな鞆だけ。もうそこに天使はいなかった。

白い雪が続く道を歩く。それなりに処置をした打ち止めと番外個体をそれぞれ抱えながら、エリザリーナ独立同盟国へ向かっていた。

白い髪と茶色い髪。一方通行と垣根帝督が穏やかに罵倒しながら歩く光景は奇妙だった。

「はあ……なあーんでこの俺が仇を安全地帯まで持ってかなきゃならねえんだか」

「おいてくればよかっただろオが。わざわざ俺を起こしてまで移動すんだ、文句言いてエのはこっちだ」

「テメエは大事なガキを殴ってきた男に預けられんのか？」

「……クソが」

呼吸が柔らかくなつていく番外個体の息遣いに安堵し、重い体を背負って見えない道を進む。

発育のいい女が背中に乗っているにも関わらず、垣根の脳には別の女が居座っていた。

その女のことを考えると、たとえくそほど興味もなければ憎悪しか感じない奴相手でも、優しくしてやってもいいという感情が米粒ほど芽生える。

でなければ、この三人まとめてあの雪に置いてきた。

「俺だって、あのバカが泣かぬーならテメエらなんぞ雪の中で殺して
る。あいつに感謝しろよ」

「あのクソ女か……だから年下の女は嫌いなんだ。ほだされて、自分
らしさとかいうくだらないもんが崩れていって、クソみてエ」

「年下の女に振り回されんのは男なら誰でも通る道だ。それにどう対
応するかで良い男かどうか決まるんだよ」

ひんやりとした空気に吐いた息は白く色付く。

重い荷物だというのに足取りは軽い。

「良い男、な。ナルシストかよ」

「少なくとも、あいつは俺のことが世界で一番好きで、世界で一番良い
男だと思ってる。だからそう言ったまでだ」

「うっぜエ。女の手のひらで踊ってて惨めだな、オマエ」

「童貞の僻み……いや、テメエはどっちか分かんねえーんだったか？
じゃあ童貞喪女の僻みか」

鼻で笑い飛ばし、小さな最強を見下ろす。勝ち誇った笑みで見下す
垣根の自尊心は有頂天に達していた。

パレルワールドから続く因縁に打ち勝ったのだ、高揚感は底知れ
ない。

「死にてエならそう言えよクソツタレ」

「殺せるなら殺せよ——あ？」

殺意に満ちた軽口を叩きあっていると、顔のすぐ横を何かが通る。
青いなにかがひらひら、きらきら、白い景色の中飛んでいた。

それは青い蝶だった。

あの夢の中で息を奪った虫。鮮やかで、艶やかな蝶がふらふらと飛
んでいく。

「なんだよ」

「……ちよつとまつてろ」

目が奪われた。おぶっていた番外個体を降ろし、蝶の飛ぶ方角へと
足が向く。

「あつオイーどこ行きやがる！」

胸騒ぎが彼の肉体を支配する。

白い世界の中、その藍が強烈に目に焼き付く。第一位の制止も聞かず、青い道筋を辿った。

「――オリジナル?」

そこに居たのは赤い目をした小さな白い虫。

そして、彼女が持っていた大きな鞆だけ。

胸の鼓動が早まる。

蝶の姿はもうどこにもなかった。

暗いビルの中、人工的な淡い光が走る部屋でそれは眩いた。

『あの邪神が本来の姿を思い出したか』

面白いものを見つけたように、ごみ溜めに群がる虫を蔑むように、その白い怪物は薄く笑う。

「天羽さんのこと、気にしてないんですね」

『私のはあの女が嫌いだからな。興味はない』

エイワスの嘲笑を目にして、天使のような光輪とうねる光の翼を生やした生き物が眉を顰める。

冬物のブレザーを着込んだ生き物、風斬氷華は昔出会った邪神の姿を思い出し、苦々しい顔をエイワスに向けた。

体格と雰囲気がよく似ているその女性の眩しい金髪と甘い顔をよ

く覚えている。

同じ不老不死の怪物の目線で話す恐ろしい人間。

あの禍々しい赤と緑の瞳が、どうしても忘れられなかった。

「……これから、どうなってしまうのでしょうか」

『彼女は邪神だ。好きな人を愛せない世界なら滅ぼすだろうな』

「っ！」

未来を案じ、うつむき加減に風斬は弱々しく呟く。

その言葉を鼻で笑うと、エイワスは楽しげに声を弾ませた。風斬の苦々しい顔を馬鹿にするような声色が広い部屋に響く。

酷く楽しそうだった。

『案ずるな。顔の良い主人公が何とかしてみせるさ』

邪神を手懐ける少年に全てがかかっている。

好奇心溢れる化け物は、その事実が何よりもおもしろかった。

126話：天変地異

掘っ建て小屋のような一室で、小学生と高校生ほどのよく似た姉妹が二人ベッドの上で静かに眠る。

大きい体の番外個体ミサカワリストの呼吸は穏やかだが、小さい打ち止めラストオーダーは荒い呼吸で息をしていた。見てわかる打ち止めの辛さに心が締め付けられ、一方通行は気づかれないように小さく唇を噛む。

「戻ってきたと思えば、重体の女の子二人も抱えてくるなんて」

「悪いな聖女さん。応急処置はしたんだが、そっちの子は俺らにも治療が無理そうだな」

「全く、治療なら私の精神を何とかしたいのだけれど」

淡い金髪と、暖かそうなダウンコートを着た女性が打ち止めたたちに視線を落とし、ため息を吐く。

窪んだ目元が特徴的なその人は、同行してきた茶髪の少年の顔を見て小さく悪態を吐いた。

疲れ切った女性の顔は優しいながらも少しピリピリと緊張感を漂わせている。

「……で、どうなんだ、治るのか？」

「結論から言うと、こっちの大きい子は大丈夫。だけどこっちの子は難しそうね」

一方通行の言葉に視線を移すと、女性は再びため息を吐いた。

その表情に影がかかる。未来の確証ができない事実が、優しい女には苦だったよう。

「彼女には毒素が溜まっている。溜まっているだけなら治療は簡単なだけけれど、彼女の場合は恒常的にその毒素が注入されているような状態、一度抜いても意味がないわ」

「そうか……」

曇った女の顔に不安や焦燥が募る。しかしそれ以上の解決策はなく、肩を落として薄い壁にもたれかかった。

どうすればいい。

どうすれば大切な少女を救える。

答えの出ない問題がぐるぐると頭の中を回り続け、黙り込む。手詰まりだった。

「……取り敢えず、ここにいれば一応は安全だ。外出るぞ」「あ?」

沈黙が続く部屋で、背の高い少年が扉を開ける。軽い目配せをして外へ向かう彼の背中を追いかけ部屋を退出すると、廊下の真ん中で彼は足を止めた。

「羊皮紙持つてるだろ?」

「……それが?」

「そいつは鍵だ。打ち止めを助けるためのな」

冷たい声だった。

背を向けながら放つ男の声は酷く冷たく、憎悪に富んでいた。

「知りたいか?」

くるりと一方通行に体を向け、高い背で見下ろす。彼の言葉に一方通行の思考は乗っ取られる。

彼はなんといった。

先ほどの金髪が無理といった治療が、彼にはできるのか。

彼なら治療法を知っているのか。

目の前にある一抹の希望に心が掻き乱される。

声が思うようになかった。

「俺は打ち止めのこと好きでも嫌いでもねえし、助ける義理もなけりや、見捨てる理由もない。けどお前はどうか?」

そんな一方通行の感情を読み取ったのか、顔の整った少年は鼻で笑って吐き捨てる。冷徹な黒い瞳で見下す彼は思いの外一方通行に恐怖を感じさせる。

長く闇に投じていた分、多くを見てきた。

近くで光を感じていた分、多く絶望してきた。

憎悪も、野心も、後悔も、何もかも。悪感情なんて一方通行のものより遥かに大きい。

「俺の女を殺しかけて、命削ってまで主張したあいつの言葉を理解せずに厨二炸裂させて悲劇のヒロイン気取って、助けてやったのに感謝

の言葉もないお前のために、俺がこれ以上何をする必要がある？」
憎悪の籠った瞳が一方通行を見る。

全てを知る脇役は主人公が何よりも嫌いだった。海底のように深い闇に投じていても変わらぬ希望ある未来、愛を教えてくれるヒロインも死なず、完璧で、幸福な人生を歩む。

腹立たしい限りだ。

垣根帝督がどんなに努力しても得られなかったものを得て、それを守る力もあつて。彼が望んだ学園都市の改革も、目の前の格上がやつのける。

自分がやりたかったのに、全て奪われる。

闇に堕ちた英雄なんて命題で、ヒーローにはなれなくて。

彼には出来ないと見せつけられるようで、酷く腹立つ。

「……あ」

しかし一方通行がそんな事情知っているはずもなく。細く繊細な見た目と反した低い声を絞り出して、少年に縋り付く。

悪を、プライドを貫いたって打ち止めは助からない。

その事実をヒーローから教わった。他ならない垣根帝督から教わった。

一方通行にとって垣根帝督はヒーローだ。

嫌いな女の死に際に現れて、助けてしまう。嫌いな自分もまとめて殴り飛ばし、ここまで連れてきた。

そして今、言わなくても良いというのに、選択肢さえあれど救いのヒントを与えようとしている。

ヒーローと言わずになんと呼ぶ。

「……ありがとう……色々」

ぶつきらぼうに一方通行は呟く。

真逆。

彼らの感情は真逆だった。けれど、羨望、嫉妬は一緒。

どうやら彼らは、奥底の方では似た者同士だった。

「頼む。あいつのために、教えてくれ」

頭を下げて、最強らしからぬ低姿勢で、一方通行は言葉を吐き出し

た。

今までの一方通行なら絶対に言わない言葉に少年は小さくため息をついて頭を掻く。どうしたものかと、ポケットに手を入れ意味もなく床の木目を視線でなぞった。

「……打ち止めは前に同じような状況になつてははずだ。記憶を覗け。んで、その治療法の改変に羊皮紙を使え」

苛立った顔でため息をつく、少年はスーツの襟を正しながら簡潔に話す。これ以上手伝う理由は彼にない。

「歌は得意な方か？」

「歌……？」

適当にヒントを吐き捨てて背を向け歩き出す。

その歩みは止まらず、一方通行を無視して言いたいことだけ言つてどこかへ向かつてしまった。

廊下を突き進み、一つの部屋にノックもせずに入ると、垣根は低い声で目の前の生き物を覗む。

「さて、洗いざらい話してもらおうか」

赤い瞳の白いカブトムシ。旅行鞆に入った紙を読む生き物に鋭い視線を向ける。

愚かな下位個体に早く接続しなければ。

彼が匿っていた鮮やかな乙女の居場所を掴むために。

砲撃と銃撃。重い弾丸が地面を抉る音、素早い弾丸が装甲を貫く音。

学園都市の砲撃とロシア軍の攻撃の阿鼻叫喚の中、黒髪の彼は白い雪の中で身を隠す。

上条当麻は一人、先ほどの軍事基地へと来ていた。

フィアンマが来るならおそろくここ。そう目星をつけてやって来たものの、目の前の違和感に困惑する。

「魔術師が、いない？」

見えるのは砲弾と銃弾ばかり。ここにいるべき兵士がいない。

敵を翻弄する魔術師の方が、科学のトップである学園都市の勢力とまだ渡り合える筈だ。しかしここにあるのは下位互換、最底辺の科学装備のみ。

SF小説から飛び出た超常的な科学技術を持つ学園都市に、外の世界の鉛玉は通用しない。そんなことは分かっている筈なのに、なぜかこの場には唯一の対抗手段がなかった。

「どうして、みすみす学園都市を招くようなやり方を……？」

——決まっているだろう。重要な右腕を持ったお前を招くためだよ

疑問に答えを出そうとそこまで良くない頭で考えていると、突然何も無い空に声が響く。男の嘲笑が腹の底に溜まる嫌悪を呼び起こし、追っていた赤毛の男の声が纏わりついて離れない。

「フィアンマっ!？」

——砲撃に巻き込まれて右腕が失われるのも困るしな。手っ取り早く回収するためにわざと穴を開けておいたと言うところか

声がどこから来るのか、なぜここにいるのかわかるのか、きつと何かしら細工をされている。焦って右手で服の上から体を触ると、思った通り、ザラザラとした何かを右手が掴んだ。

服の隙間から抜き取ったのは小麦粉でできた白い人型の小さな人形。きつと魔術で作られたGPSのようなものだろう。ここま

で来ることを予測されていた、ここに来るように仕組まれていた、その事実が上条に重くのしかかる。

右手の能力により崩れて行く人形の姿に唇を噛んで、強く手を握りしめて、ただ後悔していた。

「あの時やけにあつさり引き下がると思ったら、見逃されたつてことかよっ……!」

——その答えは、今にわかるさ

最後に聞こえた小さな声を掻き消す音が響く。

地鳴りが体を揺さぶって、吐き気が腹の底から駆け上る。地震とは違う、浮き上がるような地響きだった。

はっと顔を上げ、動く地面に伏せて空を見る。曇り空がとても近い。

体が浮く感覚はない。けれど強い風を感じていた。

「なっ!?!」

地面が空を飛んでいた。土の塊が、上条を乗せて空を飛ぶ。彼が立つ地面だけではない。様々な地面が、崩れ、持ち上げられ、天空へと飛んで行く。

土は空の上で一つの塊となり、形を作る。

空に浮かぶ星のような形をした天空の地。厳かな教会や聖堂が集まる不思議な空間に、息を飲んだ。

そしてその頂点。様々な宗教的な建築物が集う星を、おぞましい生き物が見下ろす。

体も顔も髪も、全てが白い想像上の生き物。氷のような翼を広げ、本来目のあるべき窪みで世界を見下ろす生き物が、上条の視界に現れた。

「天、使……?」

遠くに見えるそれは神の使い。

神と繋がるある少女から無理やりひきずり降ろされた天の使い。

名はガブリエル。

水を司る天使。女の姿をした使徒。

127話：新生

揺らぐ水面の輝きに瞼が開く。肌に纏わり付く服の気持ち悪さと、水のぬるさに眠気が飛んだ。

体を抱く揺り籠のような居心地だというのに、横たわる体は凄まじい拒絶反応を示し、どこか薄気味悪い。

「……あたしは、いつの間にか家に帰っていたのかしら？」

視界に広がるのは自宅の浴槽。足を三角に折りたたんで横たわる体に温い水が押し寄せ、体に服が張り付いた。

散らばった長い金髪が透明な湯を金色に染めて、少し眩しい。

いつぞやに着た水色のワンピースと白いエプロンを着込んだまま、ぬるい水に浸かる自分の姿が対面の鏡に映る。不思議の国のアリスのようなワンピースは、この大きな体に似合っていない。

ぼんやりとした思考が、曇っていく鏡とは対照的にゆっくりと鮮明になっていった。

先ほどまでイギリスにいた。そして50がロシアまで連れてきたはず。

だというのに座る浴槽は日本の、自宅のバスルームで、記憶と考えていたルートが違う。

本来は弱小国の聖女様に体を直してもらい、意識を戻すはずだった。けれど彼女がいるのは自宅。

しかし不思議と現実感のない景色に違和感を覚えることはなく、自然と立ち上がって脱衣所へと赴く。

ここがどこか分かっていて。誰がいるのか分かっていて。

「まさか、風呂場で逢瀬とは思わなかったんだけど、なんか言い訳とかあんの？神様」

濡れた体から滴る不愉快な水に苛立ちを覚えながらシンプルな洗面所の前に立つ。膝丈のワンピースが足に纏わり付いて、徐々に体温を奪っていく。

胸元まで写す鏡の前、立ち尽くす。そこに居たのは自分によく似た他人だった。

その中で映る見知った顔に酷く苛立つて、ただでさえ増幅していく不快感がさらに湧き上がる。鏡越しの再会なんて望んでいなかった。「ここは汝の記憶に一番残ってる場所。それらしい理由も他にあるがな」

鏡で微笑むのは大人だった彼女。腰までの金髪と、大きな胸、大人しい化粧。捨ててしまった自分自身。

どこもかしこも昔見ていた自分。けれど、優しく微笑む彼女が身に纏うデコルテの空いた細身の白いドレスは全く見覚えがない。

それがあつたかもしれない未来の姿なのか、過去西洋らしい死装束に着せられた姿なのかは、あまり考えたくなかった。

「……それで？今回は何の御用？黄泉に連れてくにはまだ早いと思うんだけど」

「神の御使いを求める男に強引に接続されたようだ。私の意思ではない」

顔に張り付いた金髪を掻きあげて睨みつけると、それは自分より大人びた顔で寂しそうに笑う。同じ顔の、違う表情。

顔も、仕草も、声も同じなのに、吐き出す言葉も、見せる表情は全く違う。

唯一違う瞳の色は真っ黒で、内に銀河のような光を持っていた。

「は？接続？」

「男が願った。天使を呼ぶことを。そして汝の身体がその贄に使われた。それだけの事だ」

「ああ……フィアンマだっけ、なんでそうなったのか知らないけど、50へのオーダーは達成されなかったのね」

どうやら再びこの世界に呼ばれた理由は、彼女が意図しないところへ起きたイベントによるものらしい。

どんな因果関係があるのかはさっぱりだったが、神が愛する彼女に、こんなくだらないことで嘘をつくとも思えず、信じる他ない。

興醒めだ。最悪だ。

結局何も成し遂げられない。

望んだ未来は手に入らず、空回り。願いなど叶うわけなく、ただ冷

たい水の中で死んでいく。

いったい何回死ねば許されるのだろうか。

自分のための地獄で、すり減った精神は許しを乞っていた。

「結局、神様に愛されてようがなんだろうが、あたしはなんも出来やしない。意味のないモブ、どうしたって覆らない」

「……少し、誤解をしているようだな、美しきベアトリーチェ」

ぽつり、小さく呟くと神は目を伏せる。その仕草がどうにも上から目線で、見下すようで、馬鹿にしているかのようで、たまらなく腹立たしい。

神だというのに、恋する女のように我儘で、面倒で、ムカつく言動を続けるそれが大嫌いだった。

「誤解？このおぞましい寵愛も、ふざけたお遊びも、全部きちんと分かっている。くだんないアダ名で呼んで、馬鹿にして。分かっているのはそっちだろうが!!」

耳障りな声に洗面台を思わず両手で叩く。強くへりを握りしめると簡単にひびが入って、今にも砕けそう。

腹立たしい感情の行き場はどこにもない。

物に当たることではか、この言葉にできない苛立ちを幼い精神は処理できなかつた。

「くだらないアダ名とは心外な。だから理解していないと言われるのだよ」

「じゃああたしがヒロインとでも言いてえのか分ならず屋！何もできない人間をとっ捕まえて、こんな地獄に押し込めて！箱庭の中で一人咽び泣くあたしをつ、幸福な女だと思ふのか!!」

叫び、腕を大きく上げる。振り下ろした拳は腹立たしい神が映る鏡に勢い良くぶつかり、蜘蛛の巣のような亀裂を入れた。

拳についた鏡の破片が気持ち悪い。衝動が抑えられない。凄まじい怒りや吐き気が体を支配し、感情で体が動く。

大嫌いな自分の姿に、現状も相まって精神がひどく乱れていた。

「思うさ。この世でただ一人、神が愛する人間なのだから」

上がった息で白く曇る鏡が、じわじわと透き通っていく。

「少し前、汝は自らを白の騎士と、ウエルギリウスと例えたな」

曇りが晴れる鏡の奥で神は何匹もの青い蝶を侍らせ寂しそうに口角を下げる。

神の機嫌はあまり良くない。部屋の空気が急激に下がり、鼓膜の中で嫌な耳鳴りが響いて心臓の動きが早まった。

神の恐怖。恐るべき存在だと、ふと思い出す。

「それは違うのだよ、乙女。私の愛する女はそんなものではない」

「あ……？」

「汝は幼きアリス、愛しきベアトリーチエ。コッペリウス神が作りし、愛する女の化身なのだよ」

ため息交じりに神は呟く。意味の分からない言葉の羅列に一瞬思考が飛ぶ。

一体何を言っているんだろうか。

大昔の覚えてもいない何気無い台詞を引っ張り出して、神は何が言いたいのか。アリスとベアトリーチエなんて年代も作風も違う作品に当てはめて、何を伝えたい、何を考えている。

全く分からない神の言葉に、意外にも冷静に耳を傾けた。

「汝がコッペリアならば神とはコッペリウス。理論を凌駕し、次元を超えた恋の話。不思議の国のアリスも、神曲も、概念は同じだろう？」

「……何が言いたいのか？」

「察しの悪い乙女だ、こんなにも熱い愛の告白だと言うのに」

「一体どういう——」

「これは神が与えた夢の世界。どんな都合も、どんな辻褃も噛み合う、愛する少女に与えた永遠に続く劇。分からないか？汝が神に全てを与えられたことに」

理解のできない言葉の数々に脳の処理が滞る。神の言葉を止めたくて声を荒げるが、発言権は奪われた。

少女の言葉を遮って、鏡から細い腕が伸び、濡れた頬を掴まれた。鏡を通る、神の手。頬を触る自分と同じ細い手。

神の世界と自分だけの現実が重なる。侵食し、反転する世界で、神の瞳と目が合った。

「汝はルイスⅡキャロルの愛したアリスⅡリデル、ダンテⅡアリギエーリの愛したベアトリーチェⅡポルティナーリ。虚像と現実を繋ぐ人。夢の支配者と称すべき、次元の境目にいる者だ」

宇宙の輝きを内包する真つ黒な瞳と目が合った。

自分の瞳とは違う異質さ、おぞましさ。

星よりも大きな宇宙の煌めきが、体を強ばらせる。感覚で分かっってしまう偉大なる神の存在感に気圧されて、怖かった。

「ここは汝のために作られた世界。物語に落とし込まれた本物。神が与えた愛に溢れる贈り物」

同時に悟る。

自分は、これと同じだと。

内に秘める恐怖は、従属としての感情。下位個体としての怯え。

「不思議の国のドードーも、鏡の国の白の騎士も、天国に導かれるダンテも、すべて違う。この世界の理由そのもの、物語に閉じ込められた神の愛する永遠の乙女である」

ここにいるのは二人の神様。

創造神と、その愛を一身に受けた神の片割れ。

神の独り善がりな片想いで、人間は神様になってしまった。

全てを司る神様が作った、異界のひとつを貰い受けた幼い神様。

この異世界ではそう定義される。

世界を夢見る魔皇、外側を超越する永遠、世界を掻き乱す幼きアリス、本物と虚像を繋ぐベアトリーチェ。

決して、ただの愛称じゃない。

神が紡ぐ言葉は真。

ベアトリーチェとは概念、アリスとは象徴。

生きた人間が、虚像の世界を贈られたフィクションの代表格。

彼女と同じ。同じ存在。

「愚かな神の恋を叶えてくれ、私のアリスⅡリデル、私のベアトリーチェ。与えた世界で幸せになれ、それが世界の願いだ」

涙と冷や汗と脂が混じる。唇は氷のように冷たく、動かない。

齡十六のか弱い乙女にのしかかる。神としての責任、支配者の義

務、願いの末路。

「汝に、幸福が訪れんことを」

影が重なった。

触れた唇、心音と温かき。そのおぞましさを忘れることは無い。

彼女たちは、間違いなく同じ存在の、同じ神様だった。

「行け。その扉の先で、彼は汝を救うのを待っている。天使が降りたあの日と同じように、その腕を引き上げるのを」

恋する数学者は、恋した少女に夢ある物語を与えた。

恋する哲学者は、愛する女性に天の称号を与えた。

そして恋する神は、麗しき乙女に世界を与えた。

なんてことない愛だった。

瞼を柔らかく照らす光に意識が覚醒する。厳かな祭壇で、少女が目を開いた。

どろどろと溶けていく真っ白な右腕と両足。片足の中から見える剣と、光を反射する長い金髪の輝きが、夢で見た水面の煌めきを呼び起こす。

神の言葉は酷く不愉快だった。

殺され、愛され、神にされ。

一方的な愛情に押し潰されて、精神は疲弊して、疲れてしまった。

「……こんな夢、早く醒めてしまいたい」

四肢の代わりとなっていたパーツがどろどろと溶けていく。

本物の体を生み出して、服も、髪も、全て彼女の思い通り。

無から有を生み出し、一を十にして、彼女は完璧となる。

そこに居たのは少女でも、乙女でもない、一人の神様だった。

かつんと、金属が石のタイルを蹴る。剣を手に、少女が立ち上がった。

白い服と四肢はバレリーナのような衣装に。

長い金髪は高くふたつに結ばれて、大きな窓から流れる風に揺れる。

アリスならば、ポーンはクイーンに成り、盤上の最後で夢から醒める。

早く、この夢から醒めたかった。

鮮やかな白の瞳で、巨大な神様は空を見つめる。

最後、もう一度だけでも彼に会いたかったと、寂しい願いを込めて。

128話：名状し難きグロテスクな少女

記憶が流れ込む。

未元物質ダイクマターを通し、接続されたシナプスから垣根帝督の脳へと50が観測した光景が余すところなく広がっていく。

見えるのは赤毛の男の不敵な笑み。木の隙間から見えた光の粒子と、滝のように真つ直ぐ地面に落ちる長い金髪。

「赤毛の男に連れていかれた、か」

フィアンマの腹立たしい笑みに小さく舌打ちすると、ぎゅつと膝あたりのズボンを握る。

倉庫の中の適当な木箱の上、座り心地の悪さと不愉快な状況に苛立ちが増していた。

そんな垣根を見上げるように、姿が瓜二つの白い生き物がふてくされながら地面に座る。

黒い目玉と赤い虹彩。中が見えない真つ黒な口腔から溜息を吐き出して、50は嫌そうに口を開いた。

「接続完了つと……マスター！垣根帝督に設定……はあ、なんで俺が男の下につかなきゃなんねーんだ」

「同感だな。なんで俺が自分そつくりの部下を連れ歩かなきゃならねーのか理解不能だ」

ようやく道を外れた下位個体を回収できたと安堵するも、垣根そつくりの口の悪さと思考に呆れてしまう。

狭い倉庫を照らす小さな電球と窓の外の光に目を細めて、二人は同時に大きく溜息を吐いた。なんだか居心地が悪い。

「あーあ、保護対象早く戻ってこねえかな。つまんねー」

「仕方ねえだろ。今頃あいつは天空の城で囚われの姫君やってんだ、文句は攫つてつたクソ野郎に言え」

床に座りながらぼんやりと窓から空を見つめる下位個体の姿に、垣根も窓の外を見つめる。

眩しい空の光が窓から溢れ、柔らかく垣根たちの体を照らす。

しかしそこにあるのは異様な風景だった。

空に浮かぶ十字の星。様々な教会や聖堂が連なり、重なり、生まれ
た天空の聖域。ラスボスのいる空の孤島を少し強く睨んで、奥歯を強
く噛みしめる。

彼女はきつとあそこにいる。

あの金髪のお姫様は、何かの理由で赤毛のムカつく男に攫われた。
そしてそれは原作にはない行為。理由は分からない。

けれどフィアンマが彼女を必要とした事実だけがこの場にある。
サーシャ・クロイツェフの代わりか、彼らも知らない魔術的儀式の
必要素材か。解釈は色々あるが、彼らにとって大切なのは、彼女に害
を与えたという真実だけ。

その理由があれば、フィアンマへの対応が明確に決まる。

「行くのか？」

「いや、先にこっちに目を通す」

ムカつく敵に殺意を必死に抑えながら、話を変えるよう50の手に
ある鞆に視線を移す。黒いスーツケースは地面に置かれ、ホテルに
入った直後のように開けっ放しにされていた。

なんの変哲も無い鞆の中には大量の書類。

英語やフランス語、あまり見ない書類の数々を垣根は怪訝そうに見
つめて、その中の一枚を手を取った。

「何なんだ、この紙の束は」

「保護対象からのプレゼントだよ。喜ベマスター」

「あの女、ロシアまで事務作業しに来たんじゃねーぞコラ」

乱雑ながらある程度法則性を持って鞆の中に突っ込まれた紙束に
素早く目を通し、イライラしたように垣根は呟く。

有名飲料メーカー、ダム、水源、軍事施設、発電所。経営委任やら
アドバイザー就任やら、法則のない適当な企業の名前と、その最高権
利者の権利譲渡についてが書かれた紙を不思議そうに見つめて、簡単
に片付けをし始める。

この中にもしかしたら彼女につながるヒントがあるかもしれない、
とそんなことを考えながら。

「話は聞いていたがあいつはなんなんだ？ 国を跨ぐスーパー女社長に

でもなりたいのか?」

「マスターつてば分からねえの?」

「あ?」

「食を抑えれば飢餓になる。水を抑えれば食糧不足に紛争勃発、清潔も失われて、民は困難に陥る。民が困難に陥れば、上は頭を下げざるをえない」

彼女の思惑が詰まった書類に少し言葉が詰まる。

命と立場に関わる大切なものを奪えば、逆らうものは誰一人としていない。流石のアレイスターだって、ここまで権力を広げた脅威に対して、交渉を持ちかけられたら断らないだろう。

無謀にも、彼女は馬鹿げた夢見がちな作戦でアレイスターに立ち向かってる。

それを鼻で笑ってしまうのは、呆れか、恐れか、彼自身にも分からなかった。

「……目的は、上との交渉か」

「上も何人か洗脳してるけどな。でも命綱を握ってるのは確かだ」

彼女は確実に垣根帝督の願いを叶えようと駒を進めている。

水を奪い、交通を奪い、電力を奪い、情報を奪う。全て奪えば、交渉の席につけると疑わずに。

「これも、俺のためだと言いたいのか。こんな、意味のないことを」

「そうだよ、これが彼女が導き出したマスターの幸せに対する最適解つてわけ」

しかしそれが正しいことなのか、不思議でならなかった。

本当に垣根のためになるのだろうか。本当に彼女は垣根の幸せを願っているのだろうか。

読解力も共感力もない、理解力に乏しい少女の短絡的な作戦に眉を下げる。

彼女は考えた。原作の垣根帝督が追い求めたアレイスターとの直接交渉権があれば、好きな人が幸せになれるのでは無いかと。

彼は考えた。幸せになれなかった女と、幸せを求めた男が寄り添えば、欠けた何かが満ちて、二人で幸せになれるのでは無いかと。

哀れだ。彼女も、自分も。

双方の幸せを考えた結果、片方は潰れて、片方は失う。互いに信じる幸福が違うことは何よりも苦しい。

抱えている感情は同じはずだというのに、思いは通じ合わない。

哀れと言わずに、なんといいのか。

「幸せって、こんなんじゃないだろうに」

「それは本人に言わなきゃダメじゃねーの？言わねえと、本当に願いを叶えるぞ」

「願いなんで、ただ隣にいればいいだけだったのに、ここまでややこしく幸福を拡大解釈しやがって。捕まえたらリードつけなきゃダメだな、これは」

紙を眺めて、肩を落とす。彼女の考えが知りたい。

今までの彼女の行動が予測できる紙束をじっくりと、かつスピーディーに目を通して、淡々と思考を整理する。

垣根のための権力。上に掛け合うための手札。

しかし妙な違和感がある。

彼女が制圧したのはヨーロッパの主要国。物語が起きたフランスとイギリス、そしてイタリアなどの水道局やダム、電力会社、運送会社、携帯会社、大手メーカー。

50の言葉と記憶通りなら、それぞれの政治、上議員あたりも制圧していると考えられる。

素直に恐ろしい。正直言って、怖いくらい彼女は盤上でキングを追い詰める準備をしていた。

けれど同時に思う。

権力など、しかも他国の権力なんて、アレイスターとの交渉に果たして必要だろうか。

世界征服と言わんばかりに権力を広め、多くの国の首を絞める。それは確かにすごい事だ。

しかし、それがアレイスターとの交渉で切り札になるかどうかは分からない。

学園都市の技術力ならば、海外から輸入しなくても、海外の手を借

りなくても、学園都市内の人々を生かすことなど容易い。

水なら作り出せばいい。海外メーカーの商品も、もつと出来がいい似たような商品がすぐに開発される。

彼女のやっていることは学園都市には意味がない。

無駄だ。

他国を制圧しようと、学園都市には全く関係のないこと。

彼女のしていることは直接交渉権を手に入れたとしても、交渉を有利に進めることはない。

その事実がとてつもない違和感として垣根の心に残る。

今になって思えば、完璧でないにしても、彼女は無駄を省こうと努力してきた。

『超電磁砲』では木山春生の事件について色々知っているそぶりをみせ、テレスティーナの前に先回りして現れた。

『禁書目録』では最初からインデックスの枷について知っているようで、残骸も知らぬ間に決着をつけておいて、オリアナの件も今思えばとてもわかりやすいヒントを与えていた。

他人の代わりに物語を進め、イベントを進め、必要なヒントを疑問にもたれない程度に教えて、早く事件を終わらせる。

それが彼女のポジションであり、疑惑を持たれぬギリギリの役回り。制約や不安の中で、彼女はできることをして早く物語を終わらせようと画策する。

だというのに、この紙はなんだ。無駄ばかりの意味のない代物、アレイスターと交渉するにはいささかピン트가ずれている。

他国との外交を有利にするような権利や地位は、アレイスターには通用しない。

「こう言っちゃなんだが、直接交渉権を手に入れるのにこれって必要か？意味がないっか、これじゃまるでその後の事を考えて——」

まるで学園都市を手にした後の外交を考えているようだ。

無意識に導き出した答えに違和感がストンと腑に落ちる。

そうだ、この得体の知れない違和感は、彼女の言葉のその先を見据えてできたもの。

『『必要なもの』って、まさか、直接交渉権じゃなくて……』
恐ろしい考えに、病室で呟いた彼女の言葉を思い出す。

『必要なもの、取ってくる』

なんの変哲も無い、日常的な文章にひどく大きな思惑と、おぞましい考えが潜んでいると、ようやく理解した。

「学園都市そのもの。彼女はお前に世界を与えるため、ここまで来た」
現実的で完璧主義の少女は全て手に入れるつもりで種をばら撒いた。

最高の未来を作るため、垣根帝督を主人公のポジションに移すため、彼女は誰よりも早く創約へ足を踏み入れる。

彼女の望みは一つ。

全てを蹴落とし垣根帝督を主人公に仕立てる安全地帯に留めること。

その為ならば、彼女は罪を犯す覚悟があつた。

空に留まる巨大な土の塊の上、上条当麻は少し焦った表情で近い空を見上げる。いくつもの教会や聖堂をかき集めて作られた天空の孤島に一人浮かぶその白い何かをじっと見つめていた。

白い体と百合のような頭部、そして氷の翼。

天使と呼ぶに相応しい異形の姿に体が冷えていく。おぞましい生き物を目にした恐怖に脳が冴える。

「天使、だよな？」

神々しい姿で空を飛ぶ生き物に声が震える。人知を超えた生き物は空を縦横無尽に飛び回り、空気を揺らす。

その異形を追尾する学園都市の戦闘機が風を切り裂く音が轟いて、早まる心音とともに熱風が体に響く。

その姿に暫し立ち止まる。

何をすればいいのか、あまりにも巨大な力の前に思考が動かなかった。

——天使の媒体、十万三千冊の魔道書の遠隔制御霊装、儀式場のベツレヘムの星、大天使ガブリエル、そして俺様の力を振るうのにふさわしいお前の右腕。

男の声が風に乗って上条の耳へ届く。嘲笑と蔑みの交じった軽快な声は酷く不愉快で、拳を握る力が強まる。

目の前の脅威に目が奪われて、時が止まったかのように世界が見えた。

天使は手を伸ばす。そして無機質な表情で雲の厚い空を手のひらで掴み取ろうと、手を開いて静かに見つめる。

それは指の隙間、空の奥、星の輝きを見ていた。

——必要なものは全て揃った、あとは羊皮紙の回収だな

男の憎い声に、天使が動く。

空の色が変わる。灰色の空は濃紺の天空へと姿を変え、星々が動き、線が繋がった。

線で結ばれた星々で作られたのは巨大な魔法陣。天藍の空が輝きを増して、地上を異質な光で満たす。

あまりにも恐ろしく、神々しい空だった。

「っなあ!?!」

変わり果てた空の色に体が硬直し、黙って天使を見つめていると突然空中で爆発が起こる。

天使を標的に放たれた戦闘機の攻撃が空で破裂し、天使の背中から生える氷の翼にぶつかった。

尖った翼はその攻撃を、その機体を、一振りですべて突き刺し三機の戦闘機を真ん中から貫く。飛び散った火薬の匂いと外れた機体のパーツが流星のように豪華な建造物に降り注ぎ、辺りを粉々に壊していく。

ここにいては危ない。

本能を頼らなくても明らかな危険に足が下がる。学生服を翻して、何をすべきか分からぬまま走り出した。

「あの天使をどうにかするには……ッ！」

彼にできるのは右手での純粋な破壊のみ。深く考えずに、己の拳を握りしめて彼は石畳を蹴る。

自分にできることを成す。憎たらしい男の企みを打破できると信じて。

空が不穏に光る。星々が線で繋がれ、曇り空が深い夜空に変わり、フィクションでよく見るような魔法陣へと星が位置を変える。

異常な空と、その空に浮かぶ孤島。学園都市でも見ない不思議な光景に珍しく一方通行はアクセラレータ焦りを見せて静かな廊下を早歩きで渡っていた。

「オー・ドオなってんだこれはー！」

廊下の突き当たりで先ほど別れたばかりの少年を見つけると、一方通行は速度をあげて半ばぶつかるようにその少年の元へ急ぐ。

男にしては長い茶髪と平均身長を優に超える長身、ロシア系が多い中だろうと一際目立つ顔立ちの少年は、一方通行の声に端正な顔を歪めてため息を吐いた。

「うるっせーな、俺に当たるなよ」

眺める空はどう見ても非常事態だというのに、彼は特に焦るそぶりを見せずそのまま背を向け裏口へと向かう。

一方通行の顔など見たくないと一切視線を向けずにそのまま足を進める彼は、纏う雰囲気が先ほどとは少し違かった。

「なんだよ。変な空模様だったのに、やけに冷静だな」

「空に模様が浮かべるくらい俺だってできる」

「オマエは一体何と張り合ってるんだ？」

くだらない会話を交わし、裏口から雪の中に進むと空の上から微かに振動が伝わる。

とても小さい、けれどハッキリとした振動。

ふと二人して上を見上げると、誰かが暴れて爆発でもしたのだろう、天空の島が僅かに欠けて砕けたビスケットのように細かく崩れていく光景が視界に広がる。

全体的落ちてきているのか、ただ一部が落ちていただけかは不明だが、天空に浮かぶ十字の島が形を崩しているのは確か。

「あーあ、世界遺産もビックリな歴史的建造物が爆発してんな。損害賠償が国家予算並みになりそうだな」

「上で何が起こってるんだか」

「さあな」

その光景を少年は少し睨むように見つめて顔を顰めると、何か気がかりでもあるのか、彼は再び背を向けどこかへと歩き出す。

苛立っていると、ほぼ初対面の一方通行ですら分かる雰囲気。今にでも雪景色を焼け野原にしそうなほど、目の前の少年は苛立っていた。

「オイ、どこ行くんだ。まさかあの変な空飛ぶ教会に……」

「お姫様はラスボスのお城で待ってるのがセオリーだろ？」

「はア？お姫……アイツのことか？」

苛立ちながら立ち止まった彼の言葉に金髪と桃色を思い出す。彼の苛立ちの原因は、隣にいない女のせいのようにだった。

苛立つほど彼はあの女を求めているのかと、凄まじい勢いで脱力感

が一方通行を襲う。

「オマエ、女の趣味グロテスクだな……」

「喧嘩売ってんのかクソガキ。その妙に哀れんだ目を向けんなクソが」

天羽彗糸。

バターブロンドの髪と派手な顔、そして長身瘦躯で胸だけやたらとデカい体。

彼が言っているのは、一方通行にとてつもないトラウマと記憶を植え付けた悪魔のような女のことだった。

その事実を目眩がする。

あの女か。あの目の前で首を切られて笑った女か。

彼らが打ち止めと一方通行のように何かしらの絆があるのは知っていた。死にかけて彼女を助け出したのは他ならぬこの少年。それは間違いない。

けれどまさか、その関係性が姫と呼ばせるほどのものとは思いつかなかった。

あまりにもグロテスク。信じられない。

「あの女を姫と認識する人類がいるとは思わなかったが、いるところにはいるんだな、頭のイカれた地雷処理班が……」

「地雷処理って、幼女の方が地雷……っーか犯罪だろ」

「ア？さっきの続きしてもいいんだぞ巨乳好きの豚野郎」

「はあ、実質0歳のロリと巨乳なら後者の方が健全だろ。というか、胸だけでアレを選ぶと思うか？」

戦争中とは思えないほどくだらない好みの女議論は、少年の面倒くさそうなため息で終わる。

確かに彼の言う通り、見た目だけでカバー出来るほどあの女の異常性や狂気は優しいものじゃない。

そう考えればプラトニックや純愛なのだろうか。経験人数五桁はありそうな見た目の男女だというのに、案外潔癖なのだろうか。

「……思わねエな」

「だろ？色々あんだよ、テメエも知らない数ヶ月の情つてのがな」

ヒーローが見た目に絆されていないのは確かだろう。

それはそれで何かおかしい気もするが、とりあえずは納得出来た。しかし、どうも腑に落ちないと思いが巡る。一体どうしたら、憧れではなく恋慕を抱くのか一方通行にはさっぱりだった。

「ツオイ、まだ話は終わってねエぞ」

「俺は終わったと思うがな」

「待ちやがれ」

うんうん唸りながら悩んでいる一方通行を置いて少年は勝手に歩き出す。

ずんずん進んでいく少年の高い背にムカついて、思わず雪を足先で軽く蹴った。少し手加減はしたものの、勢いよく雪玉は飛び、茶色の頭に優しくぶつかる。

ぽすつと柔らかい音がして、茶髪を少し濡らす雪が赤茶色のスーツにシミを広げた。

イタリア製か、学生服に見えなくもない少し薄手でファツシヨナブルなスーツは雪に映える。

夜空の光と雪の反射光も相まって、振り向きざまに顔を顰めた美少年は何だか少し神々しかった。

「いってえな。そしてムカついた。本当に今ここで無駄な喧嘩したいのかヒヨロガキ」

「オマエが止まんねエからだろオが」

「時間が勿体ねえんだよ。テメエみたいなクソに構ってる余裕はねえ」

「だからア、俺も行ってやるって言ってるんだよ、理解力足りてねエンじゃねエの?」

高い背の少年を下から睨む。心底嫌そうな顔してる彼の感情など、一方通行にとっては些細なこと。

気にすることではない。

「……あのなあ、テメエはテメエのお姫様守れよ。せつかくヒント与えてやってんだから」

「借りは返す」

酷く苛立った彼の言葉に負けず、一方通行は続ける。

打ち止めの近くにいたいのも事実。しかし、一方通行の暴走を止め、避難所まで案内し、番外個体をここまで運び、少女達に応急処置をして、打ち止めの回復法を教えたのは他ならぬ目の前の少年。

借りは作りたくない。

「嫌いな女と嫌いな男のイチャイチャ見て粗末なもん勃たせる異常性癖持ちの猿じゃねえなら引っ込んでろザコ。返すつもりなら学園都市帰る時にくれ」

「テメエの名前も知らねエのにどうやって返すんだ」

「……いちいち面倒なやつだな」

苛立ちを隠しきれなくなった少年は乱雑に言葉を吐き捨てて、高い背で一方通行を鋭い目つきで睨んだ。

相当苛立っているようで、話を勝手に切り上げて、真っ白い翼を出す。

「垣根帝督。テメエの人生に一ミリも関係ない、ただの学生だ」

そう吐き捨てて、彼は空を飛ぶ。白い翼で夜空へ向かって飛び立った彼を止める言葉は喉に引っかかって出てこない。

「垣根帝督。その名前に覚えがあった。」

自分より弱くて、強い男だった。

流れる景色と、明るい照明。移動する大きな音が心地良いリズムで

オレンジの座席に座る上条の体を揺さぶる。

「まさかこんなところにモノレールが走っているとは……一体誰が電気を……」

猛スピードで動くモノレールの中で、上条は少し困惑しながら飛んでいく窓の景色を見つめる。

これが修学旅行のような楽しい出来事なら良かったのにと、あまり馴染まない二人席に体を預けてため息を吐いた。

一人、モノレールに揺られて基地へと向かう。なんとも寂しいものか。

けれど止めるべき野望のため、救いたい少女のため、彼は誰もいないモノレールの中で右手を握りしめる。

心音がうるさい。

緊張で体が窮屈だった。

窓を流れる景色も豪華で美しいが、ただ緊張が増すばかり。

「……あ、っー」

ふと視線を誰もいない車内から窓の外に移すと、白い生き物の窪んだ目のような部位と目が合った。

猛スピードでモノレールへと滑空し、無機質な表情で天使は上条当麻の方へと向かう。少しずつ、確実に、天使は流れ星のような驚異的な速さでモノレールへと突進した。

「ぶつかッッ……あれ?」

しかし真っ白な女体は視界の端から突如現れた銀色の何かに頭を貫かれ、地面へと突き刺さる。

長い剣のような銀色は前触れもなく天使の頭部を破壊し、白い体を地面に貼り付けた。突然の光景に食い入るように窓へへばりつく。

何が起こった、誰が何をした。

音速を超える攻撃に、疲れた思考は思うように動かない。

「……っ?」

違和感と脅威。藍色の空に現れた白い虚像の姿が上条の瞳に写った。

天使をいとも容易く薙ぎ払う上位の生き物。

背の高い少女の姿をした神様がそこにいた。

体と同じ長さの金髪を二つ結びにした、綺麗な神様。

雪よりも白いバレリーナのようなレオタードと、両足、右腕。円を描くコンパスのように鋭く尖った長い異形な足先。

二メートルを超す長身の神様は、底辺のない三角の光を頭上に乗せて、様々な光を集めているかのように神々しく光る。

太陽のような輝きを持った神様は、光り輝く不定形の瞳を持っていた。

目が合ったその瞬間、トンネルが窓の外と上条を隔てて姿を隠す。しかしその一瞬の邂逅で上条は悟る。

その神様はよく見知った少女と同じ顔をしていたことを。

129話：終息への道筋

少し硬いベッドの上に散らばった茶髪を無造作にかきあげて少女は小さくため息を吐く。

疲れ果てた体は動きが鈍く、動きづらい。だから彼女は待っていた。

横たわりながら見つめるUSBを取りに来る憎い野郎を。

「頼んでおいたデータは手に入ったか」

待ちぼうけだった彼女の苛立ちをかき消すように、ぎぎ、と古ぼけた金具が軋むドアが開く。

待ちわびていたいけない野郎の素っ気ない声色が腹立たしい。

「病み上がりの女にやらせる仕事にしては納期が早すぎるんじゃない？このミサカだってお休み欲しいんだけどなあ？」

「手に入ったかどうか聞いてんだ。答えはイエスカノーの二択しかねえんだよ」

「早漏かよ、もう手に入ってる。九月三十日に打ち止めが聞いたっていう謎の歌、その楽譜、疑似音声データ、サ라운드振幅グラフ、お好みはどれかな？」

つかつかとベッドの方へ歩み寄り、その野郎、一方通行は少し目を細めて彼女をその小さく白目の多い赤い瞳で見つめた。

なんで素直に従っているのかこいつはわかってない。

どうして彼女が、一方通行への悪意をぶち込まれた番外個体という女が、ヘコヘコと仰せの通りにデータを抽出してるか。なんにも分かかってない。

「全部出せよ、出し惜しみは三下のすることだ」

「なら、言うことあるでしょうよ」

「あ？」

「ごめんささい、お願いします」だろ？」

ただ無様にプライドを捨てる姿を見たいだけ。それだけのために飴を用意している。

それを一方通行は分かかっていない。

「ミサカア、第一位がみつともなくイケメンくんに殴られてえ、大事な子助けられてえ、謝ってたの聞いてたんですけどお？あのイケメンくんには言えるんだ？」

「……そオだな」

「ミサカには言えないのに、ぽつとでのイケメンくんには言えるなんて、あれ？もしかして第一位、そういう趣味？なあーんだ！実験中やけに下ネタ言うと思ったら！そういうことだったんだ？」

唇で弧を描いて番外個体は笑う。楽しいに決まっていた。

大嫌いな野郎を上から目線で侮辱するなど、どこの誰がしたって楽しいに決まっている。

「悪かった」

「……は？」

「オマエ達のごとは騙された俺が全面的に悪い。悪かった」

だがその感情は長くは続かなかった。頭を下げた一方通行の姿に続けようと思った罵詈雑言が止まる。

白いつむじを前にして、プライドを捨てた人に対して、なんと反応すれば良いか、少し戸惑った。

「……ふーん、あつそ」

「っ！」

その姿につまらなそうにベッドの上で胡座をかくと、顔を上げた一方通行目掛けて指にひっかけていたUSBを投げつける。

軽く宙を舞って慌てた一方通行の手のひらに落ちたそれから視線を外して、冷たい雪の積もる窓へ顔を向けた。

「ミサカそんなのいらないし。勝手に使えば？」

「……あんがと」

これまた一方通行らしくない台詞に笑いが込み上げ、鼻で笑う。

その言葉を、もつと早く言っ欲しかった。

「でもどうすんのお？その音声、ミサカのスペックじゃ表現できないし、別のパラメーターが必要なんでしょ？音楽が治せるとも思えないし」

「手筈は整ってる。あとは助けるだけだ」

視線を窓の外に向けたまま、一方通行はぶつきらぼうに吐き捨てる。さもそんな後暗い言葉なんて興味もないと言っているような一方通行の自信に富んだ言葉は、何故か本当に奇跡を起こせるように思えた。

きつと第一位なら、どんなにもがこうと、どんなに辛かろうと、ラストオーダー打ち止めを救ってみせるのだと。

なんだかそれが気持ち悪かった。

誰かの声がする。その声は旋律となり、歌として認識される。

荒々しく、どこか寂しい少年の歌声が微かに50の鼓膜を揺さぶった。

「ヘツタクソな歌だな」

エリザリーナ独立国同盟の少し端にある小さな倉庫で苛立った様子の50は小さく舌打ちを打って目を細める。

マスターに命令された雑用も、からかい相手保護対象がない状況も、酷く腹立たしい。

「なあ、テメエもそう思うだろ？」

苛立ちがピークに達し、思わず足元の肉体を一つ壁まで蹴り飛ばす。

マスターに命令されたスパイのお掃除は少々面倒で、何より血で汚れるのが腹立たしい。彼女の血と混ざった肉体に、別の男が入り込むような感覚が気持ち悪い。

「はあー、帰ってえー……」

息が遠のいていく数人のスパイを尻目に小屋を出る。

はやく、こんな色のない国から出たい。少女と歩いたロンドンの明かりがとても恋しかった。

空を見つめながら上条は走る。モノレールを降りた先のただっ広い空間を右手で触れながら、先程見た異形の影を思い出していた。

「アイツ、だったよな？」

バレリーナのような神々しい異形の姿が脳裏に浮かぶ。

顔はよく知るクラスメイトだというのに、身に纏う雰囲気、姿形、何もかもが違っていた。

なにか別の世界から来たような、例えるなら鳩の群れに一羽だけ孔雀がいるような目に見える違和感。

強烈な存在感が忘れられない。あの恐ろしい人の姿に、どうしても嫌な予感が拭えなかった。

「……やっぱ、天羽のこと垣根に言った方がいいよな？」

「馬鹿がどうしたって？」

「垣根？」

ふと先程まで共に行動していた彼女の保護者の顔を思い出すと、背後から声をかけられた。

高校生にしては少し大人びた声。

振り向いた先にいた顔見知りのイケメンに少し面食らって大声を出して後退る。至近距離で直視してしまった美男の顔に驚きつつ、案外早かった友人の登場に張り詰めた緊張が緩んだ。

「天使が居ないのはあの馬鹿のせいか？」

「あ、ああ、そうだけど……なんだ、飲み込みが早いな」

「下からいろいろ見えてたからな」

足を止めて垣根と向き合うと、さすが第二位と褒めたたえたくなくなるほど彼は早く状況を理解する。そのせいかりアクションは薄めで、特に気にしているようには感じない。

「んで？アイツの事見たんだろ？どうなってた？」

しかしさすがの垣根と言えど全貌は知らない様子で、上条に話を促す。

何も知らない垣根に思い入れのある人の変貌を伝えるのは少し心苦しく、つい言うのを躊躇った。

「あ、えっと」

「今更何言われたって驚かねえよ」

「……なんか、エロ——じゃなくて、遠目だったからよく分かんねえけど、天使と似た感じで、えーと、足と髪がすげー伸びてた。あと空飛んでた」

それでも言わなくてはいけない空気に負けて、先程見たクラスメイトの姿を思い出しながら、しどろもどろになりながら簡単に伝える。随分と簡潔に、そして簡素に伝える。

布面積の少ない白いレオタードと金色のツインテール。どこか成人向けの漫画に出てきそうな彼女の姿を赤裸々に伝えたら、過保護な彼は一体どんな反応をするのか。それくらいは何と無く想像がつく。なるべく刺激しないように、なるべく何も見てないとアピールしつつ、眉間に皺を寄せる垣根を見上げる。

今の所、怒ってはいなさそうだった。

「天使と似てる……か。なるほどな、またクソ野郎と繋がったのか」

「……驚いてねえの？」

「まあ、解釈を重ねれば彼女がここまで力を付けるのは予想がつく。

厄介なことになってるのは確かだが……お前よりは対抗策があるから問題は無い」

表情を変えず、垣根は考える素振りをして視線を地面に落とす。何を考えているか分からない黒い瞳が不穏で、どこか彼女と似ていた。

高位能力者はやはり例外なくどこか浮世離れしているのか。まったくブレない垣根の声色が何故か不思議で仕方なかった。

「けどよ、アイツ、天使と似た姿してたし俺の幻想殺しで……」

「無理。お前が消せるのは異能、幻想だけ。幻想で成り立ったこの世界の物理法則でしか成り立たない」

「はあ？ どういう意味だ？」

対抗策があると豪語し、垣根は不敵に笑う。王者らしい余裕の笑みが頼もしいのは確かだが、彼の言葉に少し引つかかる。

上条よりも対抗策があるとはどういうことだろうか。

確かに天羽の能力が効いたことは多々あって、それは体に直接、つまり右手が届かない臓器に干渉していたからだと思っていた。

しかし彼曰くそれは違うらしい。

どんな異能でも、どんな祝福でも、全て壊して消してしまう右手を持つ上条よりも対抗策があるとは一体どういうことなのか、上条の頭脳では広げることが出来ない。

「幻想ではなく現実、イメージの世界じゃなくて本当の世界。フィクションが現実には干渉できないように、お前の右手は彼女の現実を殺すことはできない」

「哲学の授業かよ」

「……多分、あの女が操ってるのは異能じゃねえんだよ。次元の違う本物、オールの雲からきた彗星、現実的で純粋な物理法則、誰かの創造を糧にする傍観者。なんて言えばいいんだろうな、このメタ的な解釈を」

「お、おー？」

思わず疑問を口にする、垣根はうわ言のようにポツリポツリと理解不能で哲学的な言葉を並べ始める。

次元？オールド？現実的？傍観者？

何を言っているのかはさっぱりで、頭がこんがらがる。別に緊急時だから脳の動きが追いつかないという訳ではなく、これが普通の景色の中で言われていてもきつと頭の良さが怪物並みの彼に追いつくことは無いだろう。

だが意味が分からなくても分かることはあった。

それは垣根が彼女を良く知っていること。

そして彼が知っていれば、きつといつものように仲直りしてしまうこと。

それさえ分かっていたら彼女の件はどうとでもなると、何となく理解していた。

「ま、お前が知ってても意味ねえし、忘れとけ」

「あ、置いてくくなよー！」

ぐるぐると悩んでいると、垣根は呆れたのか背を向けて先に進む。非情にも置いていく垣根の背に手を伸ばして、慌てて後を追った。

「は？お前は戻れよ。さつき脱出コンテナ見たぞ」

「そういう訳には——ッ!!！」

しかし轟いた爆発音に体が揺れ、予測していなかった動きに地面へ体が衝突した。

地面の奥底まで届きそうな大きな衝撃。絶えない衝撃から察するに、誰かがどこかで暴れているらしい。

「どうやら喋ってる暇は無さそうだな」

変わっていく空の色。

藍が金色へと塗り代わり、世界が自ら舞台を整える。

存外早く目的への道標を見つけた。広がる衝撃を頼りに、二人の少年が走り出す。

天使がその身を天へと帰した。

その感覚を受け取った青年は酷く驚き、恐ろしいと言わんばかりに汗を垂らして頭を抱える。

「何が起こっている!? 何故元の位相へ……!?」

プランにない、想定にない、よく理解できない。

漠然とした感情に振り回され、赤い髪をかき上げながらフィアンマは吐き出すように呟いた。

「――ッー」

酷い悪寒が背中を蛇のように素早く駆け登る。

なにか恐ろしい化け物に見つめられるような気味の悪い視線と気配。何か分からない、けれどその得体の知れない気配はとても甘い匂いを漂わせていた。

「貴様……」

振り向いたその先にいたのは贅として使った、存在すら忘れていた少女。

彗星のような眩い少女だった。

否。

少女の姿をした異形の生物だった。

眩しい金色のツインテールを地面に引きずりながらそれは微笑む。

ゆつくりと歩く酷く長い足は人の足ではなく、コンパスのように先が細い。

フィアンマより頭二つ分は背が高い少女は男の理想のような女体を持つていて、その顔は甘ったるくて、どこか不穩。

彼を見つめる白く異端な瞳は、円から四角へ、四角から三角へ、三角から五角形へ、ころころと形が変わり、不定形。

怪物。神になりたかった歪な存在。

少女はおぞましきキメラだった。

「……面倒なことをしてくれたな、神のふりした愚か者」

「歪みは治り、世界は思い出した。誰が支配者なのかを」

フィアンマの言葉など意に介さず、彼女は嬉しそうに言葉を紡ぐ。そして彼女が言葉を言い終わるや否や、少女の体を捻り潰さんと巨大な右手が少し動いた。

大きな衝撃と、爆発。

煙と土埃が爆風に巻き上げられ、少女の姿は消えた。

風が少女の柔肌を切り刻み、熱が少女の体を溶かすだろう。

鬱陶しい上から目線な女は好みではないと、煙を見つめて彼は鼻で笑う。灰になった少女は、叫び声一つあげなかった。

「おいで、悩み多き青年。キミの叫び、この神様が受け止めてやる」
しかし煙が晴れたその先で少女の柔らかい唇が弧を描く。

二の腕まで無機質な白で覆われた右手を差し出して、少女は薄く笑っていた。

世界が黄金へ変わる。

それは、神の到来を意味していた。

130話：神の慈悲

黄金の空の下で二人の男女の視線が交わる。少女の白い瞳と場違いな甘い香りが心臓を圧縮し、心拍数が跳ね上がる。恐ろしいほど背の高い少女の姿に恐怖が、恐ろしさが増す。

青年、フィアンマの頬に汗がつたい、わけがわからないほど体温が上がっていった。

「悩みか。お前が目の前にいることが悩みと言えるな」

「恋い焦がれた神様を前にして、言うセリフがそれ？」

煙の奥で笑う少女を鬱陶しく見つめると、彼女は愉しげに薄く笑った。丸い瞳が四角に変わって、淡く光る。

テレビ画面みたく光る白い瞳は満月のようで、少しノイズが走っていた。

「プロジェクトⅡベツレヘムはまだ完成していない。お前のようなハリボテに構っている暇などないのだよ」

「だがそのハリボテをここで殺さなければ、アナタは神上には届かない」

口に手を当て上品に笑う彼女は、まるで全てを知っているかのような口ぶりをして目を細める。

本当に自らを神と思っているのだろうか。確かに少女の言う通り、その衣装に随所に神のモチーフが取り込まれている。だが様々な象徴が入り混じっているその姿は本物とは程遠い。偶像の理論すら適合しない偽物。

ただの偽物。贋作。本物とは程遠い存在。

だと言うのに、少女の姿に心臓の鼓動が増し、体で感じる神如き威圧感に背筋が冷える。

彼女の紡ぐ言葉の一つ一つが氷のように冷ややかで、全てを見透かすような禍々しく光る白い瞳には得体の知れないおぞましさがあった。

「……藍花悦、だったか。素体にされただけの部外者に何ができる？」

「なんでもできる。この小説に書かれたことならば、すべて」

「小説……?」

真つ直ぐ前を見つめる少女の視線が纏わりつく。少女が口にする意味の分からない言葉の羅列と、自信溢れる姿が意味もなく怖い。

少女の姿を直視するだけで嫌な感情が湧き上がり、憎悪が増す。まるで本能が彼女を嫌っているようで、感情が彼女を恐れているようで、何もかもが意味不明で、名状し難い。

「アナタには到底わからない異次元の話。理解なんてできない代物よ」

「……そうか。別に興味もないが」

不快感から早く抜け出したい。再び巨大な右手を掲げ、光の束を重ねて巨大な熱量を一本の線のように発射する。

格下の相手には勿体無いほど強火な光線は、凄まじい熱を撒き散らし、一直線に少女に向かって放たれた。

確実に死ぬ。

誰にでも分かる事実に近い予想。

しかし安易な予想はいとも容易く覆される。

「無粋な力を使つてまで、世界をやり直したい?」

彼女は右手で掻き消した。熱は霧のように分散し、光が屈折する。

ただ右手を突き出すだけで、右手が空気に触れるだけで、少女が柔らかに微笑むだけで、人を溶かす光線が跡形もなく砕け散って、消え失せた。

彼が求めているものと全く同じ力だった。

世界を否定する力、神を拒絶する力。

「……幻想殺し?」
イマジンブレイカー

その力の名を小さく呟く。

目が見開いて、唇が乾いて痛い。信じられない、信じたくない光景に少し目眩がした。

「なんだと思う?」

「その腕、奪つてから考えよう」

フィアンマの持つ奇跡の右腕は試練や困難のレベルに合わせて出力を最適化する。ゲームで例えるなら、どんなにレベル差があっても

必ずオーバーキルできる最強の呪文、倒すというコマンドそのもののようなもの。

そんな最強の名を我が物にする右腕ですら、彼女に対してどのように出力すべきか迷っていた。

正確には、適切な出力はされている。しかし、それを上回る予想外の力が攻撃のたびに加わり、右腕が行う計算に誤差を生じさせるのだ。

だから彼には彼女の恐ろしさがよく分かっていた。

勝てるか否か、ギリギリのライン。感じたこともない感情がじわじわと脳を侵食し、手に汗を握る。

「神より幻想殺しがご所望とは。その歪んだ呪物崇拜、フェティシズムどうかならない？」

「ほざいてろ、神を名乗る不浄の女が」

光線で後ろの地面へ一瞬で移動し、近かった彼女との距離を伸ばす。崩れた地面を挟んで、安全地帯からもう一度大きな右腕を掲げた。

左手に持つ遠隔霊装がかちかちと音を立て、遠い異国で眠る図書館から知識を引き出し彼へ伝える。魔神に近い銀髪の少女から流れる知識が、彼に力をもたらした。

「警告、第二二章第一節、命名、神よ、エリ・エリ・レマ・サバク・タニ何故私を見捨てたのですか」

空間が赤黒く裂け、彼の前に浮かぶ二つの魔法陣の間から七秒もしないうちに青白い光の柱を放つ。

魔術の叡智を詰め込んだ一線の光が、自称神様の不埒な少女へぶつかった。

神を殺す光の力が少女を照らす。

偽物の神様と、偽物の幻想殺し。イマジンプレイカー何かしらのデメリット、制限はあるはずで。その制限を、キャパシティを超える力をぶつけてしまえばその力は壊れてしまう。

不安はあった。しかし、道は切り開かれると信じていた。

神を名乗るくだらない虚像など、取るに足らないと思っていた。

「あたしは見捨ててないわ」

「——ッ!?消、ッッ!?!」

魔法陣とファイアンマの体のごく僅かな隙間、体が少しだけ触れ合った。瞬きもできない一瞬の世界で彼女は間合いを詰める。

キスをされてしまいそうなほど、近かった。

「あたしならキミを見捨てない」

「ッ！警告、第二十九章第三十三節。『ペクスチャルヴァの深紅石』——発動開始」

荘厳な瞳に飲み込まれる前に我に返り、再度後ろに跳んで距離を取る。甘い香りが鼻に纏わり付いて、酷く不快で、クラクラしてしまう。

叫ぶように呪文を唱えて、巨大な右手を振るった。七秒ほどで完成した魔術が少女の足を覆い、魔法陣が光る。

足を封じる魔術。地面が割れるように赤い線が少女の足元を走り、足を膝まで縛り付けた。

見えない力が這い上がるように体内へ沈み、骨の関節を無理やり引き裂くような激痛が襲う、とても単純明快な攻撃。痛みに悶え死ぬ少女の姿は安易に想像できた。

尋常じゃない痛み、燃え尽きるような熱さ。足を縛る痛みが少女を攻めるといふのに。

なぜか少女は涼しい顔をしていた。

「警告、第三十五章第十八節。『硫黄の雨は大地を焼く』——発動開始」

場違いなほど涼しく優しい笑顔に酷い恐怖が押し寄せる。背中を這う蛇のようなおぞましき恐怖に喉が痛み、新たに呪文を口にした。

別の魔術を呟いて、立ったまま動かない少女に向けて新たな攻撃を仕掛ける。完全発動まで五秒。

動かない的に当てるのは簡単だった。空に何十本ものほどの熱量を持った灼熱の矢が、少女の頭上に降り注ぐ。

地面に無数の傷をつけて、少女の頭上に降ると爆煙があたりを隠した。

「これがキミの全力?」

しかし涼しい風が少女の周りから生まれ、煙を散らし、視界が晴れ

る。

傲慢に笑う少女が恐ろしい。まるで本当に神様だと言っているようで、その証拠を提示しているようで、本能が少女を恐れていた。

「……本当に自分を神だと思ってるのか、愚か者。仮に本当に神だというのなら、この歪で歪んだ世界をなぜ正さない?」

「正す? アナタはこの世界が歪んでいると思うの?」

「ああ思うさ。資源の残量、民族の対立、宗教の差異、食料の不足、国家の闘争、環境の破壊。神様とやらが全て正しく回るように歯車を配したはずなのに、どうしてここまで歪んでしまう? 答えは簡単だ、歯車のいくつかがすでに限界に達しているからだ」

その根拠ない傲慢に乗ってみたくなくなった。

苦虫を噛み潰したような顔と馬鹿にした嘲笑を向けて、神を名乗る子供に問いかける。哲学的で、馬鹿馬鹿しくて、質問ばかりする幼い子供のような、答えのないずるい問いを。

「だからそれを元に戻す。必要に応じて機構を変え、歯車を交換し、汚れを払い、その後改めて十字教という潤滑油を差して元の軽快な動きを取り戻す。絶望的な実力差を思い知れば分かる。従いさえすれば、俺様が世界中の人間を救う瞬間を見れるということに」

「……キミはメシアになりたいのね。世界中の皆を救って、アナタ好みの理想郷ディストピアを作りたいと、そう言いたいなのね?」

フィアンマの吐き出した傲慢を、夢見がちで批判の多い答えを、掬うように、花を愛でるように少女は優しく寄り添う。

神の慈愛を見せる彼女の表情は、場違いにも思えるほど優しげで夢げだった。

「その感情は理解できる。どうにもならない死を目の前に、誰か一人の世界を守り抜きたいと誓ったあたしと、とても良く似ている——けれど少し勘違いをしているみたい」

時計の針のような足が地面を叩く。人間のものではない異質な脚がどこか艶かしくて気持ち悪い。

人を見下す優しい瞳は狂気に満ちていた。

「支配者はあたしだ。救済を与えるのは汝ではない。烏滸がましい考

えは捨てた方がいい」

「……傲慢だな。やはり偽物か」

吐き気を覚える声色で現実に戻される。矛盾する感情に反吐が出
そうで、気味が悪くてしようがない。

「神などただの戯言だ。目の前にいるのは悪魔か、怪物。」

憎悪を形にした名状し難き混沌。

神は少女の形をしていない。神は狂気を知らない。

彼女は神様じゃない。

巨大な右手で押し潰して、焼き殺して、細切れにしなくては気が済
まなかった。

出力を上げてても上げててもキリがないのは分かっている。きっと、こ
の悪魔には勝てないとも分かっている。

それでも神を騙る子供を殺すため、彼は奇跡を起こす右手を振る
う。

「な、んだ……？」

だが右手は制御を失った。

指先が、手首が、可動の仕方を忘れ、誰かに手を握られているかの
ように、動きを止めた。奪われた、目の前の少女に。

自分を特別にする神の右手は、神によく似たただの少女に支配権を
奪われ、ただのガラクタに成り下がる。

まるで現実で干渉できない何かに支配されているかのように、腕は
力を失い、思考が止まった。

信じたくない現実に、言葉が出なかった。

「なんなんだ、お前は……」

「神様。アナタを救う、舞台上の神様」

理論的でない。説明ができない。認識ができない。この世界の概
念を覆す理解不能な力。

神とは違う、文字通り次元の違う力の構造に息を飲む。

もしも、もしもこの世界からも観測できない位相があったら、それ
は彼女と似ているのかもしれない。

誰も理解せず、誰も観測せず、膨大な力だけ持って神と誤解し、人

を蹂躪する。

客星。未知からの来訪者。

分からないことが分かる、無知の知。それほど複雑で異様な女だった。

「はっ……っ！」

「みんな幸せにしたいんだ？ファイアンマくんは優しいね、いい子だね、大好きだよ」

母が子供を諭すように、彼女は柔らかい手つきでファイアンマの頬を撫でる。その場違いな優しさが異質な雰囲気の中際立つて吐き気が止まらない。

全てを包む異常な優しさと、彼を見る虚ろな目がころころと形を変えていくのが堪らなく怖かった。

「でもね、世界をニユースサイトのまとめ程度でしか認識できていないキミにはこの世界は救えない。愛情を知らないアナタが、愛を振りまくことはできない。世界の広さを知らないアナタには、世界を救うことなんてできない」

彼女には全て分かっているようだった。太陽のような輝きを宿した瞳で見つめて優しく微笑む彼女の姿に嫌な汗が吹き出る。

ベツレヘムの星がなぜ巨大なのか。なぜ世界大戦なんか引き起こしたのか。

本当に最強なら世界中の教会、聖堂のパーツは必要なく、世界中の敵として戦争を引き起こす必要はない。

これらは保険だった。

敵の力によって自分のパラメータが変わる。つまり、敵が強ければ強いほど強引に力が引き出される。

最強になるための保険。

心の奥底。本人すら認知できない深層心理で彼は怯えていた。本当に自分の体の中に世界を救う力があるかわからないから。

「終わってもいない世界を救う前に、まずはアナタから救ってあげましょう」

少し屈んで、彼女は右頬に唇を当てた。甘い香りがぶわっと一気に

脳まで駆け巡り、思考に甘い痺れを残す。

聖なる口づけ。神の祝福。

寂しそうに笑って目を細める彼女の姿にあてられて、力が抜けていく。

「お前は、一体」

「……さあ、なんだろうね」

遠隔霊装と接続が切れて、体も何もかも地面へ倒れて落ちてしまふ。

魔法のように抗えない睡魔で混濁していく意識の中、少女の香りが脳裏にこびりつく。

とても甘酸っぱい、ラズベリーによく似た香りだった。

「そろそろか」

白い雪景色の中、筋骨隆々な男が手元の紙を眺めながら呟いた。細菌兵器やらなんやら、物騒な話題が書かれたその紙の切れ端、丁寧な英文で書かれた少女の字に彼はため息を吐く。

『元凶を向かわせる、上司の子守を頼む』

短い文章で書かれた天使から最後の依頼。後方のアックアに頼むには随分荷が重い。けれど彼女の知る適任は彼だけ。

知識のない理想論を語る青年の到着を待ちながら、アックアは黄金の空で浮かぶ星を眺めていた。

そしてその光景を見て、重い腰をあげるものがいた。

「流石に、見過ごすわけにはいかなかったな」

琥珀色の液体の中で男は眩く。異次元の神を前にして、彼はゆつくりと目を開いた。

131話：世界の真理、あるいはメタ的考察

揺れが酷くなる星の上、瓦礫が散乱した広場で二人の少年はその惨状を苦々しく眺めていた。

「もう終わったところか、クソ」

「ああ、どうやらそうみたいだな」

赤毛の青年が気絶して横たわる地面には無数の穴。そして大きなエネルギーがぶつかっただのか、美しかったはずの建物は瓦礫に成れ果て、見る影もない。

散乱した瓦礫の中から上条が壊れた筒を右手で拾う。力のなくなった小さな霊装を見つめて、言葉なくそれを握りしめる。

やるべきことを奪われた主人公。ここにきた理由は理不尽な存在に解決され、やり場のない感情をぶつけるあてがなくなった。

それでも彼は立ち上がる。倒れたラスボスの手を掴んで、崩れていく星から逃がすために肩を支えた。

ヒーローとは何も殴るだけじゃない。目に付く誰かを全て救い上げるからこそ、ヒーローと呼ばれる。

彼女と同じように。何も出来なくても、出来ることをする。

「とりあえずコイツを避難させて、天羽を……」

「あのバカは俺だけでなんとかする。お前はそいつと避難しろ」

そしてそれは垣根も同じ。ラスボスは倒され、星が落ちるこの場で、彼はまだ少女を諦めていない。

「はあ？お前、天羽どこにいるか分かんねえんだし、手分けして探したほうが……」

「いや、まだ近くにいる」

なぜか自信ありげな顔で、垣根は辺りを見渡す。

彼だけが、未知を知る彼だけが感じる何か。第六感的なそれを信じる彼の瞳は自信に満ちていた。

その姿に上条は軽々しくノーとは言えなかった。

「それに、顔見知りの男女の馴れ合いなんて見たくねーだろ？」

「……モドリマス」

そこまで言われたら仕方がない。

下で待つてる、と最後に言つて、上条はファイアンマを運びながら早歩きで進む。聞き分けのいい主人公は引き際をきちんと分かつていた。

あの少女のことなら彼に任せたほうがいい。

それだけはよく分かつている。

「会うのは初めてだったな」

教会が立ち並ぶ異様な光景で、背が異様に高い少女の背に誰かが声をかけた。

少し年老いた、男か女か分かりづらい声。喉から出ているのかいまいち分からない不思議な声色で、その人は少女の背後で顔を顰めた。「こんな辺境の地へ何の用？」

「キミを消しに来たのさ、第三候補」

裸足が汚い地面を踏み、瓦礫が少し崩れる。広い星の中で動く彼女をようやく見つけて、彼はここまでできた。

この長いエラーに終止符を打つために。

長い銀髪を翻し、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見えるその偉大な魔術師は神を名乗る愚かな少女を見つめた。アレイスター・クロウリーもまた、その他大勢のように彼女にいい感情を抱いていない。

彼とは対照的な白と黄金で彩られた少女。黄金の空の下で祝福さ

れる偽りの神。

反吐が出る姿に腹が煮えくり、少し言葉に怒気が含まれていた。

「三番目、三とは素晴らしい数字よね。生活の中、多様に紛れた三は時を測るのに、量子コンピュータは三つでできて、お前は三を女帝とし、神は三で構成されている。多様性の象徴だ」

振り向いた少女は人とは言い難い瞳を持っていた。二つにくくつて長い金髪を引きずって、露出の多い真っ白なレオタードを着た少女がコンパスのように尖った異形の足でゆったりと彼の方へ向かう。

底辺のない三角の光輪を頭上で揺らし、少女は不定形の瞳でアレイスターを見下し、ただ笑っていた。

「全てに通じるあたしも、三番目。幻想殺しにも、イマジンプレイカー加速器にも、アクセラレーターネットワーク構築の材料にもなれる、都合のいい全てへ通じる三番。スベア神と同じ三番、ネーミングセンスは良いみたいよ？」

「神とは過大評価だな。確かに、貴様の力は能力や魔術とフォーマットが違う。魔術とも、超能力とも、原石とも違う。神の祝福と言っても、差し障りはないだろう」

穏やかに笑う少女の余裕そうな口ぶりに少しばかり苛立ち、声を抑えながら息を吐く。腕を伸ばして、どこからともなく空間の中から青白い光を纏う杖を取り出して、少女に向かって少し乱暴に吐き捨てる。

「だが残念ながら、君を神と解釈する理論はこの場がない。所詮模造品、神のお気に入りに。多様な神を模し、神という漠然とした恐怖の記号を取り入れた偶像の理論も当てはまらない偽物。天使と呼ぶので精一杯な贗作物だ」

「そんな偽物を、わざわざ殺しにきたんだ？随分と暇なのね、統括理事長つてももの」

「殺しに来たのではない。消しに来たのだ。その力の源ごと」

手元に呼び出したねじくれた銀の杖で地面を叩き、歪な偶像へ死を宣告した。想像を超えて力にした愚か者は、彼の計画のイレギュラー中で大きくエラーを出す。未来も過去も、彼女に全て踏みにじられてしまう。

それだけは避けなければならない。彼の野望のため、彼の願いのた

め、彼は神如き強者を殺しにきた。

「んふ、そおねえ、あたしはキミにとって異分子^{イレギュラー}。上条当麻の中身も知っているし、アンタの計画の全貌を知っている。外側からの観測者がいると、キミはちよおつと困るもんね？」

「よく理解しているではないかアバズレ」

「やだ、アバズレはお前だろ外道」

「垣根帝督の犬であるお前がアバズレ以外のなんだというのか、淫乱女」

余裕綽々な態度を続ける少女は、アレイスターの言葉に少し眉を動かすも、再び余裕な態度でただ笑っていた。

その笑顔の下には、きつと多くの憎悪があるのだろう。たった一人の男の名前で微かにうろたえた女に勝ちを確信する。

弱点の多い娘。

あまりにも哀れな姿に少し笑いがこぼれた。

「……犬、ねえ。神様に歯向かうとは恐れ知らずの愚か者だこと」

「お前が神とは笑える。神に憧れ、恐怖に取り憑かれ、畏怖する生命体を様々な宗教のモチーフから合成した創作上の神、もといキメラ。神は神でも嘘つぱち、アザトースと呼ばれる創作物だ」

少女の正体に前々からあたりはつけていた。

能力によく似た別の力。原石とも言えない不思議な異能。この世界とは違う位相と繋がる、聖人とよく似た何かだとは学園都市に受け入れたときから分かっていた。

特別な子。神の子。選ばれた子。

上条当麻とはまた違う存在。誰にも求められていない、物語を掻き回す異分子^{イレギュラー}。

天使とよく似ている。

都合よく人々の前に現れて、神の力を振るい、主人公の運命を変えてしまう神の使徒。

決して神ではない。

天使。神の力をもらって粹がる子供。

くだらない女。幼い少女。

吐き気を催す邪悪。

侮辱の言葉はいくらでも思いついた。

「命なきフィクション。聖書をベースに練られた、現代の恐怖。今の君にお似合いだ」

「確かにアナタたちにとってぼくはアザトースでしょうね。深淵で眠り、世界を夢見る万物の王。キミは神を求める登場人物で、あたしはその最果て」

だが彼女は笑顔を崩さない。

「でも、そう理解してしまった時点で、お前はもうあたしには勝てない」

「——ッは」

衝撃が地面を走る。星の瞬きのような光で視界が一瞬乗っ取られ、体が教会の一つまで吹き飛ばされる。

声が出ない。胃の奥が痛い。どんな攻撃がされたのか理解が及ばない。

「お前は物語に翻弄されるただの駒。嘘で出来た記号の集合体。それらしい設定と、それらしい想いをもった嘘フィクションつぱち」

ガラガラと荘厳な扉が崩れ、講壇の前まで一気に体が投げ飛ばされると、肺から全ての空気が漏れ出す。

嫌な音とともに背中に大きな衝撃が加わり、地面に波紋を広げて巨大なエネルギーが広い聖堂に分散した。

「アナタはキャラクターで、あたしはアザトース。あたしの上に本物の神様ラブクラフトがいる。あなたは脳の奥でそう理解してしまった。アナタ達はそうとしか理解できなかった。だって、物語の中の世界しか知らないんですもの。だから同じように物語で解釈する。物語で例える。ここが、同じフィクションだと、本能の奥底で、キャラクターとして分かっているから」

バージンロードを少女が進む。

蠱惑的な声で、魅惑的な吐息で、少女は地面に座り込むアレイスターを高い背から見下ろして、妖精のようにせせら笑う。

「解釈するならば、アリス＝リデル、もしくはベアトリーチェ。創作二次元

に干渉し、神と通じた三次元^{人間}。現実から生まれた紙の中の神様。ご都合を全て吹き飛ばす、創造主と通ずる都合のいい神様^{デウス・エクスマキナ}。それがこのあたし」

丸だった瞳が三角に変わり、鮮やかに光る。

回る光輪がピタリと動きを止め、長い脚が倒れたアレイスターの眼前で音を立てた。

ステンドグラスの色とりどりの光が針のような白い足に反射し、目を細める。思いの外眩しかった。

「だからあたしには勝てない、逆らえない。お前はあたしによく似ているけれど、このページを読み込んだことがないフィクション。その時点で負けは確定している」

「つつ、なに、がツツツ！」

光が霞むほどの衝撃が倒れ伏したアレイスターにぶつかる。上から押し潰されるような長い衝撃は、魔術でも、科学でも説明がつかない。

理論上は可能、でもこの世の人間にはどう足掻いてもできない。そんな神にしか成し得ない原理や理論を超えた所業。

彼女が司るのは言わばバグ、グリッチ、乱数調整で重ねた奇跡。この世界でできることを全て詰め込んだ夢見る支配者。

神様だから。アリスだから。ベアトリーチェだから。

神が与えた文字だけの世界で、彼女は主人として放縦に行動する。

それがどれほどまでおぞましく、恐ろしく、力ある存在か。彼は未だに理解できていない。

「キミは知らないだろうけど、この世界において『異世界転生』という経緯は恐ろしいほど魔術的な意味を持つ」

「がはっ、はあっ、転生？お前は一体何を、言ってる」

「本物が、偽物の中に紛れ込む。死を体験し、神の干渉という儀式を持って再び命を与えられる。別の位相から新しい命として、人の中に紛れ込む超次元の存在。この物語の、この小説の、このページを貰った外^{メタ}から来た本物。舞台を舞台だと分かっている役者」

彼は知らない。ここがフィクションであることを。

キャラクターには次元の壁など認知できない。だから彼には少女の言葉はただのノイズでしかなく、意味のない音の集合体にしか聞こえなかった。

「ある科学者は説いた。次元は一方に干渉できないと。点は線に、線は立体に干渉することは出来ない。認知すら、感知すら出来ないと——けれど、反対はできる。立体は線に、線は点に、干渉、認知、なんだって叶う」

おぞましい言葉の羅列を続け、彼女は微笑む。

天使のような屈託のない純粹な美しい笑みに、悪魔のような人を見下し愚かさを嘲笑う声色に、彼は見出す。

神の面影を。

厄災の恐怖を。

誰も逆らえぬ、運命という支配者のおぞましさを。

「つまりね、お馬鹿さん、神様はお前を殺せるけど、お前は神を殺せないんだ」^{三次元}???

「つつつ!!!!ツうぐあツツ、なにっ、が……」

「神の視点!!」読者は作り手と世界を共有し、アリスは夢を自在に操り、ベアトリーチェは物語の中で天の力を得た。あたしが貰ったこの世界で、ぼくはなんだってできる。この小説の、この世界の一言一句、点から線まで、全てできる。三の地位を与えた時点でお前の負けだ」

彼女が目を細めると、全てが歪む。磁場が、空間が、視界が、体が、痛みが歪む。認知できない世界からの干渉。理不尽の権化。

ツールを使った、人では到底できない神の力。
胃液を掻き混ぜ、脳髓が吹き出してしまっような、全身を焼くような痛み。脊髄を掴まれ、引っ掻き回すような熱さが体中を駆け巡った。

「っ神に股を開いた、チート野郎が。幸福を勘違いする能無しめ、今すぐ死んで欲しい限りだな!」

「口悪いね、アレイスターくん」

「っは、反吐が出る顔の女を前に、汚い言葉くらい出るだろう?」

「……やっぱり、キミは好きになれそうにないな」

痛みが減り、じわじわと精神を蝕む。吐き出した憎悪を前にしても、神如き支配者は眉ひとつ動かすことなく、淡々と言葉を零す。

侮蔑の表情を浮かべて横たわるアレクスターを冷たく見下ろす彼女は、まるでアリの行列を眺める幼い子供のよう。

「あたしはね、信念のある、誰かのための仕方の無い迷惑なら赦すよ。まっすぐ前を見て、必要な人だけに攻撃して、意味のない人は見逃す、白黒わかっている人を。傷つけることに怯えながら、矛盾を抱えて、悪夢に苛まれる人々を、あたしは赦したい。救ってあげたい、助けになりたい」

ポツリポツリと、優しい雨のように冷たい言葉が降り注ぐ。酸性の、痛みある言葉。

画面越しで見っていた、強く、正しく、美しい女の面影はそこにはなかった。

「でもキミは違うね。火花という理不尽な運命を消すためにここまで上り詰めたのに、キミはその理不尽を与える側になっている。大事で、大切な、愛おしい子供を理不尽に奪われたのに、キミは他の誰かの大事で、大切な、愛おしい子供を理不尽にも奪う。倒したかった理不尽そのものに自分がなって、どう落とし前付けるの?」

ただひたすらに冷たい表情で、彼女は全て知っているような口ぶりで呟く。答えが決まっている疑問を投げかける彼女の傲慢な口調に苛立つが、それでもアレクスターは負けるとは思っていないかった。

神がなんだ。異次元がなんだ。

ここにいる彼を相手にしている時点で、彼女はただただ無駄な時間を浪費しているだけ。

ここにいる彼は結局無数の自分のうちの一人。

魂の輝きの結果。様々なifを束ねて顕現している今の自分を殺しても、根本は死ぬことがない。

結局のところ、彼女はチョウチンアンコウの光で惑わされる魚に過ぎなかった。

「お前には私は殺せないさ」

「どうして?まさか、自分が10億人もいるから、ここで殺しても意味

がないとか言わねえよな？」

しかし少女はそんなこと、とうの昔から知っていた。

10億8309万2867通りの自分。もしもの世界の自分を束ねて、今ここに顕現していることを彼女は知っている。

インターネットに接続して数秒でヒットする情報なんて、彼女にとって価値などない。ネタバレを読めばすぐに分かる情報なんて、取るに足りない。

「っ!？」

「その件はね、結構簡単な解釈で壊れるの」

「どこまで知って」

「この世界は文字と言葉で出来ている。結局は存在しない世界。設定はいつだって書き加えられ、最新刊が出れば昔の台詞が伏線だと認識されるとても不安定な世界。物語通りに進み、物語通りに終わる。一人の視点で、神の視点で書き連ねられた結末ありきの一本線」

文字。即ち言葉。世界を象るもの。

『ヨハネによる福音書』にこう書かれてある。

初めに、言葉があつた。言葉は神と共にあつた。言葉は神であつた。

つまりとところ、彼女は確かに神だつた。

「フィクションとして生まれたお前に、10億もの可能性なんてない。だって結末は決まってるって、10億ものifなんて六十六冊の聖書にだって書かれてないのだから」

神を出し抜くにはそれ以上が必要である。ページに刻まれている新しい設定か、

原作世界に出力されていない力でないと、彼女には勝てない。

逆に言えばここがフィクションで、彼女が人間で、彼がキャラクターでなければ、彼女は勝てなかつた。

彼女の運が良かった。

そして、彼の運が悪かつた。

ただそれだけ。

神に愛されたか否か。それだけの些細な違いだつた。

「そんなでたらめで、嘘くさい論法で、この魂の輝きは——」

「次元を超越した神として、このページを一から十まで、全部なかったことにできる。このフィクションにメタを持ち込むことが許されているのがこのあたし。あたしが顕現した時点で、勝敗は決したのよ」
——反転した世界なら、神に勝てるでも思ったか？

そう囁いて、少女は立ち上がり足をあげる。尖った足先がアレイスターの眼球に迫り、醜い痛みが貫いた。

「天網恢恢疎にして漏らさずというでしょう？お前は今日、全ての結果を受け入れなくてはならない。まさかこの日がこないとも思ってたか？」

「——うづがアア!?!」

『とある魔術の禁書目録』のセオリーはそういうもの。悪は結局、主人公以外の手で始末され、惨めに全てを奪われる。あたし、間違っていないよ」

目玉が潰され、海馬を掻き乱され、骨が碎かれる。感じたことのない痛みが、考えたこともない恐怖が一気に心を埋め尽くす。

嫌な水音が、ボウルに入った白い生クリームを掻き混ぜるような重い音が、脳みそを守る頭蓋骨の中から響いて、鼓膜の奥でミミズが這うような気持ち悪さがアレイスターの神経を駆け巡る。

「そうね、手始めに統括理事長の座を書き換えましょうか。そもそもその目的はそれだし」

「ぶっはッ、あガア、おっ」

喉に引つかかった吐瀉物を空気とともに吐き出すと、彼女は明らかに顔を歪めて舌打ちを鳴らした。

一度足を引き抜いて、今度は喉へ鋭い足先を突き刺す。声を出そうとするたびに、突き刺さった足と開いた穴から空気が漏れ出て、うまうま音にならない。

ノイズ交じりの耳鳴りが酷く鼓膜にこびりついて、思考もままならなかった。

「おい。誰が吐いていいって言った？返事は、か・し・こ・ま・り・ま・し・た、でしよう？」

「……?カつつつ、ジイ、K O、まつ、イリ、まあま、S H I、イだつつつ……!!?!」

思考が飛ぶ痛み言葉にならない悲鳴がアレイスターの穴の空いた喉から吹き出る。まるで台本のように頭に浮かんだ言葉をなぞって叫ぶように答えると、なぜか彼女は嬉しそうに歪んだ表情を花が咲くような明るい笑顔へと変えた。

「ああ、その台詞、アナタから聞けてよかった!」

酷く安堵した表情で、恋する乙女が花のように笑う。今まで見た中で、一番の笑顔。

血に濡れた頬が更に赤みを増して、優しく目尻が下がって、とても、とても彼女らしい笑顔だった。

「あがつつつつ!!」

「お前は殺してきた子供達を思い出しながら、この巨大な墓で静かに、誰からも思い出されることなく死んでいけ。そしてやり直すといい。お前の求めた完全なる物理法則に縛られた世界で自らの幸福を論じ直せ、インチキオカルティスト」

喉から足を引き抜いて、もう一度しゃがんで顔を近づける。頬に息がかかり、優しい何かが触れた。

その感触に体が燃えるように熱くなる。この世界から乖離していく痛み。死へと繋がる恐怖。彼の願いの代償が一気に体の奥底からマグマのように湧き上がった。

「ありえない魔術も行き過ぎた科学もない、アンタが望んだオールトの雲へ、やり直すための切符を差し上げましょう」

「お、がつつつつ、お前はあつつ、いったいつつつつつ……!!?」

体が溶けていく。自分と世界の境界線が分からなくなって、気持ちよく溶けて、けれど痛みを伴う快樂に絶叫する。

白くなる視界で見えた人形のような少女の顔が、何よりも恐ろしい。

名状し難い感情に支配され、肉体は動きを止めた。

「ただの犬だよ、Dog」

恋する乙女の顔をして、おぞましき神は吐き捨てる。

消えていく体を見つめる心臓の形をした瞳で少女は幸せそうに、けれどとても苦しげに微笑んでいた。

132話：二人だけの幸福論

赤、青、黄色、緑、紫、白、黒。荘厳で煌びやかなステンドグラスから色とりどりの光が射す。

鮮やかな色に照らされキラキラと地面まで届く長い金髪と、黄金の装飾が輝く。頭上で回る三角の光輪が風車のように廻って、白く眩しい瞳が形を変え揺らぐ。

コンパスのように尖った両脚は磨りガラスのようで、薄く光を反射していた。

美しく輝く教会の中、神様が一人、講壇の前で深く息を吐く。

真つ直ぐステンドグラスを見つめる瞳は、少し水を含んでいた。

初めはなんてことない想いから。

妹を笑顔にしたいと、そう思つて人生を捧げた。そのせいで理不尽な神に目を付けられ、死に至る痛みと引き換えにフィクションの世界へと連れていかれた。

そして何もかもが嘘つぱちの世界で新しい依存先を見つけた。

綺麗な人、かつこいいい人、優しい人、でも少し怖い人。生意気で、かと思えば優しく、ずる賢く、何かを隠し、後悔するようなそぶりに、愛する妹を見出した。

代替品を使ったお人形遊び。

自身も神の人形と分からぬまま、遊びに興じる。

それでもよかった。ずっとそれが続いても、なんら問題はなかった。

旧約の初めから最後まで。科学の最初と中盤まで。そして彼が主人公の一冊をなぞつて、救世主^{メシア}になりきる遊びを続けていけば、きつと妹の代わりに色んな人を救える。

大人になつても出来なかったことを、能力と権力のあるこの世界でなら成せると信じて、一直線にみんなを救おうと足りない脳で奔走した。

そして最後、きつとこの世界で一番不幸で、一番好きな人の代わり

に再び命を落として、幕を閉じる。

死なないで。幸せになって。そんな簡単な感情で全てを捨てる覚悟ができた。

愛の為ならなんだってできる。

そして純情を投げ捨てて、物語の幕を閉じるため身を投げた。

その予定だったのに。

彼女は他人の感情を計算できなかった。肉体ばかりに目がいつて、生死ばかりに気をとられて、物語の結末ばかり気にして、感情を持つ彼を蔑ろにした。

死はなかったことにされ、お姫様のように扱われて、弱者に突き落とされる。

尊厳が踏みにじられ、むず痒い感情で思考が纏まらず、価値観を全て否定された。命より大切な男に、これ以上ない屈辱を与えられた。彼のために死にたかった。彼の正当性をこの世界に刻みたかった。

自分が叶えられなかったことを、彼で叶えたかった。自分が叶えたことを、彼に見せつけたかった。

なのに。

なのに、彼はそれをさせなかった。

その理由は神様には分からない。同じ生き物じゃないから、なんでそんな思考になるのか考えもつかなかった。

だから解釈を変えた。

彼の望みはそこじゃなかった。そう彼女は解釈した。

死ではなくて、死に至った原因を覆す。

彼の幸福ではなく、望みを叶えれば、きっと幸せに、ヒーローとしてこの世界で生きていられる。

結果、極寒の地で結末を創約まで早めた。彼を無理やりヒーローの立場へと押し込んで、幸せを呼び込んで、それで終わり。

血に濡れたコツペリアは舞台の端で壊れて、主人公たちは幸福な祭りを楽しむ。悪役も改心して、誰も不幸になることなく物語が終わる。

今日、物語は大団円をもって終わった。

幕は閉じた。

世界は続かない。

この物語は最終回を迎え、もう誰もページを読み込まない。
終わり。

終幕。

だのに、主人公はそれを望んでいなかった。

「探した、探した、探したよん」

場違いなほど明るく、機嫌の良い少年の声が教会に響く。

主人公はまだ舞台を降りる気は無い。一人寂しく泣いている神様を救うまで、この幕は下りない。

「出口はここじゃないよ」

「脱出方法じゃなくて、ここには女を探しに来たんだよ」

壊れた豪華な扉を乗り越えて、長いバージンロードを少年が歩く。きらきらした茶髪をかきあげて、面倒と言わんばかりにぶつきらばうな口調で少女の元へ進む彼は実に主人公らしい姿だった。

「……どんな女か知らないけど、とつとと帰ってよ。このままだと、そうね、冷たい海に落ちるはずだから、今の内に」

「お前がいなきや帰れねえっての」

「手伝いはいらないでしょ？第二位なんだから」

「ちげえよ。お前を迎えにきたんだ、お前と帰らなきや本末転倒だろうが」

クレーターのように穴が開き、生乾きの血が飛び散る道を進む。

冷たい口調で拒む少女の言葉など気にも止めずに、ただ汚い床を歩いて、真っ白なお姫様の元へと行く。深海のような黒い瞳には揺るぎない感情が居座っていた。

「あたしは行かないよ。もう、この世界で生きていくつもりはないから」

「あ……？」

「彗星は燃え尽きた。藍色の空に金色の糸を引いて、光り輝いた後、全てを失ったように、残り少ない命を燃やして消えてしまう。だから、客星はここで消えなくてはならない」

「何ふざけたことを……テメエは俺と帰るんだよ、それ以外の選択肢はねえ」

バージンロードの中腹で、少女のか細い声が広い教会に響く。高い天井に声が反響し、鏡のような地面の大理石が鈍く光る。

煌びやかで、豪華で、海外の歴史的建造物らしく広い教会の中、自分で肩を抱く少女は、とても小さく、か弱い乙女に見えた。

少なくとも垣根帝督の目には。

「どうして？キミはあたしのこと嫌いなのに？」

「またそれか、テメエは」

「学園都市は奪えた。キミの願いは叶えられ、キミの嫌いな男は完璧に殺した。けど、キミは幸せじゃない。そうでしょ？」

七色の光を反射する黄金を揺らし、天羽彗糸と呼ばれた神様が振り向いた。

普段と違う、けれど同じ姿に心臓が跳ねる。蠟燭のようにぐにやぐにやと形を変える虹彩は、太陽のような白で彩られていた。

「キミはまだ幸せじゃない、本当に復讐すべき人はまだ死んでいないんですから」

白い肌を血で濡らし、寂しそうに神様は笑う。他人の血で汚れた神様が見せる笑みは、酷く引き攣っていて、見ていて痛々しい。

そんな顔、彼女には似合わない。

「……アレイスターはお前がやったんだろ？」

「キミが復讐すべきはアレイスターアクセラレータクロウリーでも、一方通行でもない。このあたしだよ」

彼女の言葉に垣根の足が止まる。何が言いたいのかわからず、少し困惑気味に言葉を返すが、神様は気にすることなく話を続けた。

「だってキミの好きな子も、キミが覚えている犠牲となった子供達も、この戦争で死んだ人たちも、あたしの半端な願いのせいで、本物の痛みを知ることになった。この世界において、誰かが痛みを負うのはあたしのせいなんだよ、垣根くん」

「なんでそんな結論に至った。テメエの脳みそは相変わらず意味不明だな」

「あたしはこの世界の人じゃないって、知ってるでしょ？」

講壇の前で、神様は呪文のように真実を唱える。彼を想うから、ずっとずっと、幸せを願っているから、呪いのように、突き放すための言葉を吐露していた。

「アリス||リデル、またはベアトリーチェ。言わば三次元から投影されたデウス・エクス・マキナ。第四の壁を壊す、おぞましき生き物」

真つ直ぐ、見つめ合いながら彼女は伝える。アレイスターに見せた猛獣のような醜さはどこかへ消え失せ、神々しい光を背に神様らしく、慎ましい声を吐き出した。

「アリス||リデルがいたから『不思議の国のアリス』が書かれた。ベアトリーチェがいたから『新生』や『神曲』が書かれた。あたしがいたからキミたちは苦痛を負った」

真実とは、蓋を開けてみると随分と当たり前の事だった。

フィクションに人間が入り込む話なんて昔の文学ではありふれている。

アリス||リデルは永遠の少女アリスとなり、夢の物語で様々な人の目に触れ、心に入り込み、老若男女が知る文学作品になった。

ベアトリーチェ||ポルティナーリは一方的に好かれていた男を天へ誘う天使へと偶像化され、有識者にありもしない哲学で解釈され、永遠の淑女として未来の創作物にまで名を馳せる。

作者神様の筆ひとつでフィクションに囚われて、世界を貫う。

そのプロセスと現状は酷似している。

神事に背く罪深き少女は神を惑わせた。貰った創作物の世界で永遠に醒めない夢を見て、現実と創作の間で漂う。

彼女は言わばひとつの偶像だった。

「デウス・エクス・マキナが現れる舞台が例外なく観客に嫌われたように、ご都合主義の塊であるあたしもまた、キミたちに嫌われるんだ」
三角の光輪がゆつくりと頭上で回り、地面に映る光が揺れる。逆光の中で輝く神様は、海の中で漂うクラゲのように柔らかな線をしていった。

「だからさ、ここで見殺しにして。そうすればキミの願いも、幸せも、全て叶うから」

神様は言う。忘れろと。

今までのことを、梅雨での出会いを、夏の出来事を、秋のすれ違いを、雪が積もる冬のロシアを、共に歩みたい春の未来を、全て忘れろと。

そして彼女の渡した幸福を手に、願いを叶えろと。

彼女はそう言った。

自分自身の幸福など考えもしない愚か者の戯言。

愛ゆえに己を殺す、究極の自己犠牲。そして最悪な形の逃亡。

自分だけ幸福になったつもりで逃げるのか。

いらぬ幸福を押し付けて、綺麗だと思っただまま死ぬのか。

本当の幸福なんて考えることもせず、自分だけ楽をするのか。

いい加減にして欲しい。

「……くっくだらねえ」

「あ？」

「アリス＝リデルとか、ベアトリーチェだとか。んなことクツツソどうでもいいんだよ！」

そんな御託、主人公には関係がない。

理不尽も、重圧も、運命も、苦しみも全て跳ね除けて、ヒロインを救う。それが出来るから、主人公はヒーローと呼ばれるのだ。

彼女がどんな思いだろうと、どんな困難があろうと、彼なら救ってみせる。

悪に落ちたと評されようと、主人公になれなかったとレッテルを貼られても、このページにおいて、垣根帝督は完璧で、完全に、誰もが憧れるヒーローだった。

「いい加減にしろよクソ女。苦痛とか嫌いとか殺せとか！いつもいつも自分本位で、俺のことを好きだと抜かすくせに俺のことを考えねー自己中女が！」

目一杯の罵倒を叫ぶ。ずっと秘めていた感情を滝のようにぶち撒けて、少女の逃げ道を塞いでいく。

神様だろうが、垣根より頭二つ分も背が高かろうが、足がヘンテコだろうが、彼女は彼女だった。

どこまでも優しく、どこまでも他人第一で、どこまでも垣根のことを想っている。

それだけ分かれば他の要素なんて、どうでも良い。

彼女が彼女たりえれば、それだけで救う理由になった。

「幸せとは前に進むこと、生きること、未来があること。それをお前が教えたんだ、他でもないお前が！ならなんでお前はそうやって生きない？悲劇のヒロイン気取って、俺を惑わせて、そのくせ勝手にどっかに行きやがって！もうテメエの我儘にはうんざりなんだよ！」

「なら早く殺——」

「だから今度は俺がエゴを貫く。お前が今まで俺にしてきたことを、そっくりそのまま返してやる」

彼の背で神々しく光る六枚の翼が広がる。少し憂いだ少女の後ろ、豪華な装飾が施された講壇を狙って翼で叩き割って、静かな教会に土埃を舞い上げた。

長ったるいバージンロードを飛び越えて、攻撃を受けないことに驚く少女の狭い肩を掴む。高い位置と濡れた血で手が偶然滑ると、そのまま勢いと能力を存分に使って講壇の残骸の上に叩き落とした。

「テメエがどんなに拒もうと、どんなに嫌がろうと、俺は勝手にお前を幸せにする。お前がどんなに不幸せだと感じてても、俺にとっての幸せをお前に押し付ける」

金色の装飾の破片が、硬い木屑が、少女の体に突き刺さる。散々振り回したペナルティにしては軽すぎる。けれど、今はそれしかできない。

ヒーローの愛ある説教から逃がさないように、拘束するにはこれし

かない。罪悪感に痛みを与えて、飢えた愛情に言葉で火をつけて、痕をつけるように押し付けて、神の子を突き刺したどこかの槍のように深く、情の分だけ地面に押し倒して、動かないように上から体重をかける。

彼女を人間にしたいから、少し乱暴に手荒く扱った。

「うがあっツツツ!!?!!いだっ?!!」

「テメエが俺を救ったんだ、テメエが俺をヒーローにしたんだ!だったら責任とって、ヒロインらしく俺に救われてるバーカ!」

「何を、ぼくはヒロインじゃ、そもそもあたしはこの次元の住人じゃないから——」

「前の世界のお前がアリスⅡリデルだというのなら、今のお前はフィクションの中の少女アリス。藍花悦でもあるテメエは立派なフィクションの住人だ!いい加減、目を醒せ!」

「なんでそんなにつ、なんであたしに勘違いさせるようなことを続けて、なんの得がっ」

乱暴さが功を奏したのか、彼女はいつものような顔を見せる。いつものアホ面を見せて、途切れ途切れの反論を切羽詰まって並べ始める。

人間らしい表情が戻ってきた。チカチカと輝く瞳が青を無くし、緑と赤を取り戻す。

拒み続ける彼女の表情が、声色が、なんだかとても懐かしく感じる。そして初めて見る乙女の顔にずっと昔の後悔と、乗り越えた今の価値がずっしりと胸にのしかかる。

「勘違いじゃねえ!得とか、利益とか、そんな問題じゃねえんだよ!」
初めはなんてことない後悔から。

大事な少女をなくした醜い後悔が感情をめちゃくちゃに壊して、ずっと治らなかつた。

最後に見た血溜まりが、幼い子供の在り来りな悲劇が怖くて。

そんな悲劇が常識な世界が恐ろしくて、憎くて、増幅した苦しみをどうにかしたくて。

そんなことをずっと考えていたら、いつの間にかその常識に両足が

浸っていた。

大嫌いな世界のため、裏切り者を殺す悪人に成り下がり、少女が綺麗と褒めてくれた翼は光を失った。

ただ復讐と革命を願い続け、闇の中壊れてしまった。

表でも猫を被り、何も考えられなくて、この世の全てを疑って、精神は磨り減り、心の痛みを耐えていた。

色がない暗い世界。

誰にも踏み込まれない領域に一人、憎しみを抱えて世界を俯瞰していた。

ずっとそうやって生きていた。

生きて。

生きて。

生きて。

そして紫陽花が咲く梅雨の六月、出会ってしまった。

星のように瞬く少女を。

綺麗な人、可愛い人、優しい人、でも少し怖い人。生意気な年下の少女は、誰彼構わず優しさを振り撒いて、表情豊かに毎日笑顔を見せて、彼に愛を囁いた。

初めてではなかったけれど、汚い自分を好きだという彼女に興味が湧いてしまった。

最初は疑いからだった。

少女の隠し事を暴くという言い訳を作り上げて、二人色んな事をした。彼女の冒険についていった。

怒った顔を見て、泣いた顔を見て、笑顔を見て、苦しげな表情を見て。

たった数ヶ月のこと。数ヶ月もの時間。

疑っていたことに罪悪感が湧くほど、彼女は一直線に好きだと言って、いつしかほだされていた。

彼女といればなんでも願いが叶う。神様のような少女。

一緒に遊んでくれた。

手料理を作ってくれた。

一緒に眠った。

愛情をくれた。

守りたいと思った少女を助けてくれた。

情が湧くには十分な時間、彼らは過ぎました。

それが代替品を使ったお人形遊びだったとしても、彼女は自分をずっと好きでいてくれて、隣にいてくれればそれでいい。

自身も彼女を昔の少女と重ねて、遊びに興じる。

それでよかった。ずっとそれが続いても、なんら問題はなかった。だが問題が起きた。

多くを望み、知らずのうちに物語をなぞってしまった。少女が幸せな世界を夢見て、願いを叶えようと動き出した。

常識を覆すため反逆を企て、革命を望み、死へと近づく。

だから彼女は『好き』を力に変えて、幸福の道を肉体と引き換えに示すことにした。

間違った幸福に取り憑かれ、ボタンのかけ違いのように思いがすれ違ふ。

死なないで。幸せになって。

そう言つて彼女は未来を変えた。

旧約の初めから最後まで。科学の最初と中盤まで。そして彼が主人公の一冊をなぞつて、彼女は救世主^{メシア}になりきった。

結果、彼は救われた。少女の形をしたヒーローに、暗い物語を書き換えられ、誰も描かなかった明るい未来を示された。

少女の幸福が満たされ、誰もが思う大団円で幕が閉じる。はずだった。

そんな結果、受け入れられるはずがない。

身勝手な想いで少女の願いを拒んだ。死を幸福と謳う少女が怖くて、可哀想で、苦しかった。

この世界で一番不幸でくだらない悪党の代わりになんて、死んで欲しくなかったから。

昔の後悔が押し寄せて、その日初めて自分だけの力で少女を救った。

肉体を修復して、生死の境から引つ張り上げて、物語の結末なんかもうどうでも良くなって、感情の赴くままに少女を救った。

生きて欲しいから、死はなかったことに。

可愛そうな彼女をなくしたくなくて、お姫様のように扱った。

ずっと隣にいて欲しかったから、か弱い子供に体を変えた。

価値観を変えるためと世話を焼き、むず痒い感情を抑えながら、少女となんてことない日常を過ごすことにした。

だがそんな優しさは意味がなかった。

貴方のために死にたかった。貴方のために命を消費したかった。彼女はそう叫んで遠くへ去った。

その理由は彼には分からない。同じ生き物じゃないから、なんでそんな思考になるのか考えもつかなかった。

分かるのは彼女が自分を好きなこと。そして、自分の一言をすぐ間に受ける短絡思考の馬鹿だということだけ。

彼女は当初の復讐を成すことにした。世界を飛び回り土台を作って、死に至った原因を覆す。

望みを叶えれば、きつと幸せに、ヒーローとしてこの世界で生きていられると、そう信じて。

結果、極寒の地で結末を創約まで早めた。ヒーローの立場を無理やり奪い去り、再び命を捨てようとしている。

そんな結末認めたくない。

幕を閉じるには早すぎる。

二人で世界を続けたい。

最終回なんて迎えないで、ページが無くても、誰に見られなくても、続けたい。

「俺は」

僅かに躊躇い、口を閉じる。今まで言ったことの無いセリフを、歯が浮く言葉を、だれかに伝えたことの無い感情を、声として出力するのが怖かった。

恥ずかしさやいたたまれなさ、色々な感情が喉の中で掻き混ぜ、そして、ようやく口にする。

垣根帝督らしくて、垣根帝督らしく無い、可哀想な彼女のためだけに送る、考えのない感情の言葉を。

「大きな衝撃と共に星が落ちた。」

唇の温かさど、衝撃が脳の中でぱちぱちと弾けて煌めく。体をかき乱す衝撃に少し体が浮いて、感情を上書きした。

巨大な彗星が広大な海に沈む。

星が輝く海の中は、随分と心地良かった。

空飛ぶ大地はどこかへ行ってしまう、黄金になっていたらしい空は至って普通の青空へと変わった。

きつとヒーローが全て解決して、この件を終わらせたのだろう。様々な人の歓声や、祝福の音が聞こえるエリザリーナ独立国同盟の隅っこ、ヒーローを見送った一方通行はしばらく空を眺めて、寒い雪の中でため息を吐いた。

「何そわそわしてんの?」

「ツ!?オマエ」

ため息を吐いて上を見上げる仕草を繰り返していると、突然頭上から声がかかる。

見送った少年と同じ声色、同じ顔。色が違うだけのドツペルゲン

ガーが、チエシヤ猫のように建物の屋根から寝そべりながらニタニタと笑っていた。

「あ、言つとくが本人じゃねえぞ。マスターはまだ例の場所に行つたつきりだ」

「……つてことは、あのカブトムシと同型か？」

「察しがいいな。その通りだ」

真っ白い体と赤い瞳。垣根帝督と同じ姿をした白目と口腔が真っ黒な生き物を前に、ふと先日 of 学園都市で出会った白い少女の姿を思い出す。

カブトムシの姿から変化した悪魔の顔は、あの女と瓜二つながら体も服も真っ白で、瞳は緑色だった。

「あのカブトムシも、第二位と繋がってたわけか。手のひらで転がされた気分だ」

「でもおかげで全部解決しただろ？」

「……どオだかな」

赤黒い瞳から視線を外し、空に再び視線を向ける。もう何も無くなった快晴を見つめて、何度目かのため息を吐く。

少女を迎えに行った彼は、あの飛行する星から逃げられたのだろうか。もう危険は去ったのだろうか。危機が見えない状況が少し不安だった。

「気になんのか？」

「別に第二位の事なんて興味ねエよ」

「誰もマスターとは言つてねえんだが？」

白い生き物のなんて事ない質問に、思わず動揺を見せて瞳が揺らぐ。

厄介なファンの面倒な感情を見透かしたように、クスクスとあの女と似た笑みでドツペルゲンガーは無言を貫く一方通行を見下ろした。「連絡先くらいなら教えてやってもいいけど、どうするっ？」

悪戯っ子の悪魔な微笑みと、悪巧みをする軽い声色。上から目線の怪物は、一方通行の憧れをくすぐるのがどうも上手なようだった。

冷たい海水が太陽の光でキラキラと輝く。黄金の空は水色へ変わり、点々と浮かぶ氷の塊を照らしていた。

とても寒い北極海で、少女は一人、オフィーリアのように水の中で横たわる。優しい海流に乗って、風に身を任し、目を閉じた。

「大丈夫か？」

閉じた矢先、頬に柔らかい何か当たる。花びらのように柔らかく頬に触れた大きな手のひらが、海水の温度をさらに冷たく感じさせて、頬に熱が籠っていく。

頬を触る手に自分の右手を重ねてゆっくりと瞳を開くと、海の底のような黒い瞳と目があった。

垣根帝督。少女がずっと好きな人。

そのまま手を引つ張って、分厚い氷の上へ引き上げられるとひんやりとした氷の感触が足の裏に広がる。

髪は解かれ、足は人に戻り、体は衣装をなくした。もう神の面影はなかった。

氷の上で有るまじき裸体を意味もなく彼に晒して、生きてしまった現実を直視するのは酷く屈辱的だった。

「ったく、お前は露出狂かなんかかよ。ほら、霜焼けしても知らねぞ」

俯いてひたすら黙る少女の腕を取り、勝手に自分のシャツとジャケットを着せて、甲斐甲斐しくボタンを留める。

なるべく姿を見ないように視線を配慮するのが忌まわしい。そんな意味のない事をされても腹立たしいだけだった。

「歩けるか？」

胸元のボタンを無理やり閉めると顔を覗き込んで少し眉を顰める。

「寒くないか？」

一向に喋らない少女の少し前を歩くが、動かない少女の姿に足を止めた。見せたことも無い顔がなんだか酷く胸に突き刺さる。

彼女は、この男を知らない。

こんな男、知らない。

恐怖で足が竦む。

こんなの、垣根帝督じゃない。

「歩けねえのか？」

眉を八の字に下げて、彼はもう一度顔を覗き込む。金色の髪の間から見える黒い瞳と目が合つて、少し視線を逸らす。

黒い瞳の奥に、知りたくもない欲が、彼に似合わない慈悲が、気味の悪い清い想いがあるようで恐ろしい。

その行動の意味が一向に分からない。さっきの言葉の意味が分からない。

ただ意味のない音を喉が鳴らす。

未だ彼の言葉を処理できていなかった。

幼く、経験の乏しい、愛に飢えた彼女の脳ではスペックが足りず、言葉が出ない。

なんで優しいのか、なんでそんな見たこともない顔をするのか、酷く困惑して、酷く怖くて、何も言葉が出なかった。

「なんだよ、そんなに俺が嫌か？」

「……意味が分からない。何がそこまで、あたしを生かそうとするの？」

「あ？んなもん——電話？」

突然単調な機械音が鳴り響く。防水加工が施された学園都市製の

折りたたみ式の携帯電話を取り出して、怪訝そうに耳元に当てた。

「誰……あ？なんでお前、あー生きてる……悪いが用なら後にしてくれ」

「……何？」

「一方通行からだ。どいつもこいつも面倒だな」

少し距離を空けて、酷く苛立った表情で返事をしていく彼の口から飛び出たのは自分でもよく知る第一位の能力名。

彼とは絶対接点のない、あつたとしてもこんな呑気に電話ができるほどの相手じゃない。

混乱。困惑。

なんでそんなにも堂々と嫌いな人と喋れるのか。

なんでそんなにも簡単に名前を吐き捨てられるのか。

垣根帝督とは思えない。よく知る彼の行動とは乖離した姿に心が乱れる。彼女が知る姿はどこにもなくて、ただの、普通の少年がそこに居て。

自分の常識が崩れていくのがままならない思考の中はつきりと感じ取れた。

「なんで、一方通行と……」

「50が連絡先渡しやがった。あ、待て、上条からもメール来てんな。

ロシア戻るのが懸命か？」

「どういう、何が、何がそこまで、キミを変えたの？」

「あ？」

「そんなの、らしくないじゃんか……！」

量の多い金髪を握って、緊張と困惑を抑えながらようやくやくまともな言葉を冷えた喉からかき出す。霜焼けのように冷えた喉は言葉を出すたびに痛みで軋み、吐き気を催す。

「……お前が変えたんだろ。他でもないお前が、俺の人生全部変えたんだ。お前の願いのせいで、俺はこうなったんだ」

恐怖。自分のアイデンティティが崩される恐怖が迫り上がって、警報のような耳鳴りが止まない。

両手を取られ、逃げ場を失う。まっすぐ、前を見て、一直線に、聞

きたくもない告白を受け止めなくてはいけない。

「お前の我儘で、お前の望んだハッピーエンドになった。だから黙って責任取って、今度は俺の我儘聞けよ。俺のやりたいようにやらせろよ」

願いを叶えた。けれど幸福になっていないと、自分がいないほうが幸福だと信じていたのに。だというのに、目の前の少年は、自分と一緒にいるほうが幸せだと言い切る。

全部 フィクション 嘘にしたかった。

星の中で感じた体温も、触れた肉も、鼓膜を揺さぶる言葉も。自分に都合のいい言葉なんて全部嘘にしたかったのに。

彼はそれを許さなかった。

「それとも、お前はまた俺にらしくないことさせる気か？」

そっぽを向いて、恥ずかしげに言う彼に感情が糸のように絡まり、言語にできない名状し難き高揚感が全身を熱くする。

絡まった感情はもう解くことが出来ない。運命の糸は、心臓と結びついていた。

今まで過ごして来た百を超える日常の結果。押し付けた幸福が跳ね返り、自らの元へ戻って来た。思えばただそれだけのこと。

彼女は彼の幸福を願い、生き抜いた。だから今度は彼の番。

主人公は交代する。

救われた少年は主人公となり、英雄らしく、救ってくれた女の子に幸せを返すだけ。

星が降る直前、身の丈に合わない真っ白な言葉を聞いた。言葉にするととても恥ずかしくて、とてもむず痒くて、暖かいそれは、誰にも教えない、二人だけの言葉。

二人だけの秘密。

その言葉の意味をようやく飲み込んで、咀嚼して、命の糧にできた。じんわりと胸の奥から熱が広がって、その熱は指先から頬まで、体の全てを飲み込んで、感情を水源のように留めなく溢れさせる。

潮風が唇に当たって、少ししよっぱくて、なんだか心が満たされていく。

幸せそうな顔だった。

嬉しそうな顔だった。

見たこと無い顔だった。

ずっと、望んでいた顔だった。

他でもない、自分のせいで彼は物語の道筋から外れた。

死はもう彼を襲わない。

不幸はもう彼を悲しませない。

彼は幸福だった。

そこに偽りは無い。

鈍感で、気持ちの読めない愚か者にその感情がようやく伝わった

——そっか、そうか。あたし、ちゃんと幸せにできたんだ。あたし、
幸せになれたんだ。

彼女は初めて幸福を感じた。心の中をじんわり温める快樂がむず
痒い。

夢も叶って、望みも叶えて、未練も叶い、理想よりもはるかな現実
で起きた幸福な結末ハッピーエンドを前にして、我儘で欲深い女の子は幸せになっ
た。

真つ白い世界の中で、彼女の赤はよく映える。静かに顔を伏せ、長
い金髪が地面に跡をつけて、金と白だけの世界で華やかな赤が広がっ
ていく。

「……なんかその言い方、えっちだね。帝督くん」

「そういう意図はねえが、って、おい、今なんて呼んだ？」

「えー？なんのこと？」

願いは叶い、これから先も叶い続ける。

彼女がいれば少年は幸福で、少年が幸福なら彼女は幸福だから。メ
ビウスの輪のように、幸福は幕を降ろさない。

「帰ろっか、学園都市に」

「……まずはロシアで馬鹿共を迎えに行かねえとな」

少年が差し出した手を握って、少女は歩幅を合わせて進む。

彼は彼女といることを望んだ。彼の望みなら、天羽擘糸という女は
何処へだっつついていく。

地獄の果てまでも、天上の薔薇までも、その乙女は彼のそばを離れない。

彼らはこの世界で一番幸せだった。

最終話、けれど世界は終わりを知らない

緑豊かな研究室で茶髪の少女達が歓声をあげる。

輪になった瓜二つの五人の少女達の真ん中、黒髪の少女が服を見せびらかすようにひらりと回り、その様子を背の高い女性が事務の椅子に座りながら見つめていた。

「ぴったりだな」

「……似合ってる?」

紺色と赤いスカートのセーラー服。膝を隠す長いスカートのプリーツはしっかりとアイロンでシワを取られ、綺麗に重なる。

円になって揺れたスカートが少女たちの目を引いた。

「とつても似合ってますよ。とミサカ19090号は自分のように嬉しく思いながら褒め称えます」

「ちよつとブカブカなのがいい感じですよ、とミサカ9982号は可愛らしい姿に微笑みます」

冬物のセーラー服を翻し、杠林檎はほんのりと頬を赤く染める。周りで褒めるミサカ達が見せるいつもの無表情は少し口角が上がっていた。

「ありがとう。早く学校行ってみたいな」

「三学期からだ、あと三ヶ月もねーぞ。それまでである程度勉強できるようにならなきゃな」

「うん、頑張る……!」

温かいココアを啜るテレステイナーの言葉に目を輝かせて胸元から伸びる赤いスカーフを握る。初めて着る制服は心をくすぐって、暖かい。

「しかし、垣根さんたちとは違う学校なのが残念ですね、とミサカ10032号はこの場にはいない人の名前を挙げます」

「仕方ありません、あそこは中等部がないのですからと、ミサカ10039号は肩を落とします」

「能力的にも、入るのは少々難しいでしょうね、とミサカ13577号はなかなか悲しい現実を伝えて溜息をつきます」

賑やかなミサカ達の話を上の方で聞いていたものの、杠は大好きな少年の名前に猫のように目を見開いて反応する。

自分を助けたあの人は今何をしているのか、良く考えれば何も聞いていない。海外から戻ってきたのは知っているが、今日何しているのかよく知らなかった。

「垣根たち、今日はどこいるの？」

「どこって、今日が初出勤なんだよ。仕事だ仕事」

ココアの香りがふんわり舞うテレステイーナの方にきよとんとした顔で視線を向ける。

面倒そうに、可愛らしいマグカップを片手にため息を零し、足を組み直す。

「もつと忙しくなるのかな……遊べなくなる？」

「上なら育休くらい充実してんだろ、心配するようなことは無いさ」

「育？」

知らない単語を呟いて、テレステイーナはマグカップに口をつける。

これから面白いことが起きると言わんばかりに鼻歌を歌いながら、彼女は困惑する少女達を眺めて甘いココアを飲み干した。

授業が終わる鐘がなり、小さな先生は宿題を押し付けて呑気に教室を出る。その小さな背中をぐったりとした様子で見ながら後方窓際のお騒がせ三人組はとてもしつこくため息を吐いた。

「あー、つらいわ。また怒られたし」

「宿題が多すぎるんですけどい」

「あああ……あああああ……」

ツンツン頭の黒い頭髪を掻き毟り、上条当麻は崖っぷちの出席日数と良いとは決して言えない成績に悩む。

悲痛な声を上げる上条の前の席では土御門元春が出された宿題の山に頭を抱え、隣では青髪ピアスが意味不明な叫びをあげていた。

「なんだよ、そんなに宿題嫌なのか？」

「あれだろ？天羽が転校したのが相当堪えたんじゃないかにやー？」

「ああ、金髪巨乳枠が……！軽度ヤンデレ純情系オタクに優しい金髪巨乳ギャルナーズお姉様がツツ!!まさか物理的にも精神的にもNTRを体験すると思わなかったんやでツツツ……!!」

困惑気味に青髪ピアスを見つめていると、唐突に座席から立ち上がり、遠吠えのように一つの空席へ叫ぶ。

金色のあの子が座っていた席にはもう座る人がいない。

見てくれも性格も良く近寄りがたい高嶺の花がいなくなったのは、男子生徒、特に青髪ピアスには大打撃だったようで、ここ最近言動がおかしかった。

「NTRって、付き合ってたすらねえのに何言ってるんだこいつは」

「長点上機に奪われ、イケメンギャル男くんに奪われ……！はああん、変な扉開きそうや……」

「多分もう開いてるぞ、その扉」

机にへばりつき、泣き真似をしながら青髪ピアスは唸り声をあげる。無気力に顔を伏せる彼はいささか大袈裟だが、確かにクラスメイトが別れの挨拶もなく何処かへ行ってしまふのは悲しい。

ロシアでも、帰り際に垣根には会ったが、彼女には会わせてくれなかった。理由はよく知らないが、垣根が若干機嫌が良かったのであまり気にはしていなかったが、何かあったのか今更になって気になってくる。

「しかしほんと仲良いな、あいつら。一緒の学校でこれから毎日一緒に登下校して一緒の部屋に……考えてきたらイライラしてきたんだぜい」

「でも長点上機に引き抜かれるのは薄々わかってただろ。そもそもこんな低ランクの学校に大能力者レベル4がいるのがおかしかったんだし」

「なんか、泣きながらバームクーヘン食うとる自分の姿が見えるで……」

「なぜバームクーヘン？」

たわいも無い会話を弾ませ次の授業を待つ。どんなに考えても高位能力者の思考なんて分からないのなら、考える必要はない。

それはきつと彼女のヒーローの役目で、彼らは遠くから祝福してあげればいい。

窓の外、空に浮かぶ飛行船が映す今日のトップニュースをぼんやりと眺めながら、上条当麻は静かに願う。

あの孤独なクラスメイトが今頃笑っていることを。

大家族用のマンションの一室、リビングのソファアールにて長くなった白い髪を弄りながら一方通行は黒い携帯電話を握り名前の増えた電話帳も見つめていた。

初めて入れた家族でも無い男のアドレスを見つめて静かに黙る。

電話帳の才行。

垣根帝督、自分より順位が低い、けれど自分よりもできた男。複雑な感情を向けるヒーローの一人。

ロシアでもらった連絡先は一度だけ発信履歴があった。

「なーにやってんのお？電話帳なんか見て」

「ツ！なんでもねエよ」

保護者の名前しかなかった連絡先に新しく入れた蔵つい名前をぼんやりと見つめてソファアールに沈んでいると、背後から誰かが肩を叩いて耳に息を吹きかける。

ニマニマと上から見下ろす少女の姿に苛立ちながらも動じずにそ

のまま座って、面倒な存在に溜息をついた。

ロシアから連れてきた番外個体ミサカワーストは嬉々とした表情で一方通行をなじる。日常に溶け込んできた罵詈雑言に返事を返すのは少し癪だった。

「よかつたねえ第一位、ぼっち脱却ってかー？ ぎゃは、初めての友達とか、何年生きてんですかー?!」

「うるっせエぞ。その口はくだらねエことしか言えねエのか?」

「もう、くつつきすぎ! ってミサカはミサカは二人の距離を離してみたり!」

いつの間にかソファアールが上がって番外個体と一方通行の近い距離を懸命に腕を伸ばし、打ち止めラストオーダーが眉間に皺を寄せ間に入る。

騒がしい日常に呆れと笑みが浮かんで、心の奥がくすぐつたい。

携帯を仕舞い、うるさい少女たちの喧嘩とも言えない言い争いを横目にテレビをつける。ちょうど始まったニュースは何やら延々と緊急速報について報じていた。

全く興味がないとはいえ、今見られる番組はこれしかない。

統括理事会についてのあれこれ話し、記者会見の現場と中継を繋げてレポーターが忙しなく口を動かしていた。

「あ?」

生放送の記者会見。統括理事長交代のテロップと共に現れたスーツ姿のその人に一方通行は目を見開く。

少女にも見える童顔と中学生にしては高い背。地面まで届く黒髪を揺らし、前髪が片目を隠す。

その少年とも少女とも言い難い難しい子供は、男物のスーツを着て、画面の向こう側から優しく微笑んだ。

細い路地裏。治安の悪い廃ビルの裏、スキルアウトの溜まり場で大きな叫び声と悲鳴が上がった。

「浜面アアアアア!! 弁当これじゃねえだろおおが!」

「ビイイイイ!! すんませんんん!!」

高校生か大学生ほどの女性が長い茶髪を振り回して弁当を持ってきた青年に怒鳴る。ビリビリと体を伝う声量におのきながら涙ぐんで、くるりと背中を向けて青年が財布片手に溜まり場を走り去っていくと騒がしかった空気が一気に静まり返った。

「あちやー、今日も今日とて元気なわけよ」

「全く、超うるさいですね」

「そんな浜面を応援してる……」

喧嘩の絶えない二人を見つめ、三人の少女たちが溜息交じりに置かれたテーブルを囲む。フランス人形のような金髪の少女と、見たこともない映画のパンフレットを眺める茶髪の少女が眉を顰めてくだらない言い争いから目を逸らす。

唯一心配そうな言葉を呟いた黒髪ショート少女は、青年が走っていった方向を見つめてピンク色のジャージでソファに体を預けて、そのままぼんやりと空を眺めていた。

「……うるさい奴らだ。軽率に面倒をみると言ったのは間違いだったか」

無気力な少女たちは、これが日常だと言わんばかりに、うるさい声をBGM代わりにして変わらない日々を過ごしていた。

騒がしくなった日常を背に、大きな凶体でテレビを見つめて男は少し嬉しそうに軽く笑った。

「駒場のお兄ちゃん、大体、何してるの? にやあ」

「……少し、感傷に浸っている」

足元から覗き込む小さな金髪頭の少女の問いかけを適当に誤魔化すと、男は型落ちのテレビに映る知り合いの顔に視線を向ける。

これからの未来に少し不安を抱きつつも、他ならぬ友人の背伸びした姿はそれ以上の喜びに溢れていた。

「これはどういうことだっ!!」

長い会議机を苦々しい顔色で大人たちが囲む。総括理事会を全員集めて行われている緊急臨時会議の議題はつい先ほどまで流れていた緊急速報について。

藍花悦が統括理事長に成り代わったという夢と錯覚してしまうような到底理解不能なニュースは、瞬く間に拡散し、直ぐに会議が執り行われた。

「誰がこんな速報を! 管理者はどう責任を取るんだ!!」

「あのクソガキツ! 殺したという報告は嘘だったのか!」

黒いオフィスチエアに何人かの年寄りが座り、怒号が鳴り響いて息苦しい。長い黒髪の亡霊を恐れて、いい歳した権力者が責任を追求し、他人を糾弾する絵面は気持ちが悪かった。

「……まさか、あの子が」

一人、上層部の良心と呼ばれる老女は騒がしい会議室の中でポツリと声を漏らす。

第六位の少女とは、娘を通して知っていた。名前を変えて、戸籍を変えて、上手く立ち回りつつも目を付けられていた子供。

人格が破綻した超能力者たちの中でも比較的まともに話を通じる彼女のことは少しばかり鼻屑していたが、今回ばかりは庇えきれなかった。

「早急にあの女を殺——つつぐっ!!?」

論争が激しくなる中、突然勢いよく両開きの重い扉が開くと、満堂水を打ったように静まり返る。微かに聞こえたボタンを押す軽い音

にこの場にいる全ての動きが止まった。

奇妙で恐ろしい沈黙の中、少女の柔らかく優しい声が広い部屋へ響く。

「くだらない世界だと思わない?」

短いヒールが艶のある床を叩く。まるで鐘の音のように荘厳で威圧感あるその音にこの場のくだらない大人どもは冷や汗をかいて、喉が冷えるように錯覚してしまう。

脳を刺激する恐怖。思考を握るおぞましさ。名状し難き恐れがこの場を有無を言わず支配した。

「つまらない世界だと思わない?」

黒いカチューシャで抑えた美しい金髪が揺れる。地面に届いてしまいうような金髪が微かにはためく度に優しくも甘い香りが舞い上がり、自然と少女に視線が向いた。

生気の抜けた人形のような——この場合はラブドールと表現するのが正解か——整った顔はどこか幼く、危うさと女の色気を感じさせる少女がヒールを鳴らし、甘い香りを纏わせ歩く。

「面白みのない世界だと思わない?」

白いドレッシーなシャツと、ややパーティー向けの短く上品な黒いミニドレス。

特徴的なベスト型のミニドレスは、どこことなく気品さを感じさせながらも上半身のボディラインをくっきりと残し、胸元の白いリボンが目を引く。

伸びる長い足はニーハイソックスで隠されながらも肉感的で、艶めかしい。

「子供が消費され、大人が利益を貪る。未来ある子供を食い潰し、大人が愚かにも恩恵を受ける現実離れた阿呆な世界」

「ツツ藍、は、なっ、えっつっ! なっでっつっつっ!」

煌びやかで上品、そして高圧的な少女。体も何もかも能力で支配されながら、支配から抜け出そうと誰かが叫びに近い声をあげる。

その姿を見ても、少女は笑顔を崩さなかった。

「せつかく素晴らしい技術があつて、素晴らしい教育があるのに、それ

を囲む豚が卑しくて、気持ち悪い」

「く、そがツツ、この売女——ごはアツツツツツ?!?!」

「あら」

椅子の近くを通った少女の髪に、喚く男の手が触れた。瞬間、白い脚が二つ、少女の背後から飛び出し、男は壁際まで吹き飛ばされて大きな衝撃がビルを揺さぶる。

壁に亀裂が走り、男はいとも容易く気を失った。

呆気ない。その光景に全員が息を飲み、脂汗が滲み出る。圧倒的なカリスマと、圧倒的な美貌と、圧倒的な暴力の前に、意見を述べる無謀な愚者はここにはいない。

「うるっせえおっさんだな、俺らの保護対象に触んじやねえよカス」

「言動にはお気をつけて」

男の腹を蹴り飛ばした白く長い脚を戻し、真っ白い少年がふたり、顔を出す。少女の後ろで騎士のように並ぶ二人はどこか浮かれ、機嫌が良いよう。

どこまでも白く、境界線が判りづらい瓜二つの少年は片方が緑眼、もう片方が赤い瞳と黒い白目、そして黒い口腔を持っていた。

「そうやって子供相手に掴みかかろうとするからダメなんだよ、おじさま方。子供を下に見て、家畜として、利益ある物資として見ている傍若無人な子供のまま大人になった年老いたアナタたちに、政治ごっこは早すぎた」

荒い呼吸で気を失う男にため息を吐いて、少女は淡々とした口調で言葉を吐き出し歩き出す。

向かうのは会議机の短辺、一際大きく黒いオフィスチェアがひとつ、背面を見せておいてある場所。真っ直ぐ、しっかりとした足取りで彼女は甲高いヒールの音を響かせる。

「あたしたち子供のほうがまだまともに運営できる。そうは思わない?」

「ああ、そうだな。全くもってその通りだ」

少女が足を止めてクスクスと妖精のように笑うと、それに呼応して椅子がぐるりと回る。

知らぬ間に、そこに人が座っていた。

襟足が伸びた明るい茶髪、鋭く濁った黒い瞳をはめ込んだ切れ長の目、高い背と細く引き締まったスタイル。少女とお揃いのデザインが印象的な細身のベストを着て、少年は薄く笑い、足を組む。

不敵な笑みで見下ろす少年の姿がひどく恐ろしかった。

「第、二位……っ」

「名前があるんだ、そっちで呼んでくれよおっさん」

自信に満ちた少年の声が会議室いっぱい響いて、静かな部屋を威圧感で満たす。

この世界を変える力があると信じて、少年と少女はここにいた。馬鹿馬鹿しくてくだらない。そんなことができるはずがない。

けれどその自信に満ちた姿は不条理を覆してしまいそうな確たる強さを持っていた。

「ツツふ、はっはは、お前たちっ、程度で、学園、都市の常識、を、払拭できると、思ってたっつ……!」

二人の怪物で支配された部屋は狂気と恐怖で満たされる。その確たる強さと狂気にあてられて、口を噤んでいた男の一人が制御を奪われた体で必死に嘲笑う。

夢物語を否定して、挑発的な笑みを崩したくて、無様な権力者もがいて蔑んで、机に涎を吐き散らかす。

「常識？常識だって、帝督くん」

「聞こえた聞こえた、誰に向かって言ってるんだろうな？ 彗糸」

その理性なき姿に少女は鼻を鳴らして、椅子の肘掛に腰掛けた。深く椅子にもたれかかる少年に体を預け、手を繋いで、二人は全てを見下して薄っすらと笑みを浮かべる。

どこか神々しいその姿に、誰一人として反論を口にする事はなかった。

「俺たちに常識は通用しねえ」

「偶像も、常識も、幻想も、あたしたちの前では意味をなさない」

夢見るおぞましき白痴の魔王がそこにいた。傲慢なる理不尽の権化は少年と少女の姿をして、人々を導く。

二人の神格はおどましくも、崇高で、もう誰も彼らに逆らえない。支配者が誰なのか、もう理解してしまった。

「つーわけで、学園都市統括副理事長の垣根帝督と、」

「学園都市統括理事長藍花悦、及び補佐官の天羽彗糸です」

少女たちが名乗る。怪物の名を。おどましき主人公の名を。

「みんなよろしくね♡」

そして宣言する。

能力者をモルモットと呼んで、決して晴れない暗闇に多くの罪を隠している者にとっては、死刑宣告に等しい挨拶を。

あとがき

設定

設定

天羽彗糸

様式美(トラック事故)を体験し異世界転生してきた本作主人公、のちにヒロインと化す少女。

本編開始時15歳、誕生日が来て16歳となる『とある高校』の一年生で、垣根より一歳年下(実年齢はさておき)。

去年まで中学生だったとは思えない高身長と体型をしており、男子たちからはいかがわしい目で見られていたり、いなかったり。しかし本人はその目を気づいていながら好きにさせています。大人なので。

能力は傷を治す「リカバライザー」で大能力者⁴。

バンク書庫には自他者の脳の電気信号を操作し、回復速度を上げる、との記載があったとか。オートリパース ランベージドレス 肉体再生と天衣装着と同じ括りになっています。

その能力から特別処置として冥土帰しのいる病院で看護師としてバイトしており、見た目のインパクトもあつてか広く知られているそうなの。
◆

が、その本性は精神異常者トップ7に入る第六位、藍花悦その人。

実際の能力は「アンデッド」で、名の通り不死身。超能力者⁵の一人として一応君臨しています。

体にまつわることならばどんなことでも可能にする能力で、理論上は全て説明できる優れもの。しかし、どうやって能力を動かしているのか分からないブラックボックスのため、研究者らは匙を投げたらしい。

理論上でしか実現できない能力、つまるところ彼女はTASに近いので、この世界の人間には絶対に理解できない。簡単に言えば、どういうプロセスがその結果を生み出すかは分かっている、けれどそのプロセスを行うシステムや動力が分からない、そんな感じ。

だが理論上は理解できるため、便宜上彼女の能力は原石として分類されず、一般的な能力者として分類されています（知っているのはアレイスターと冥土帰などごく一部）。

削板より厄介かもしれない。

そんな彼女の性格は天真爛漫、柔和温順。明るく優しく八方美人。全人類を平等に愛し（逆に言えば誰のことも平等に好きじゃない）、平等に助けることを人生の目的としている、まさに女神様のような人。

しかし決して善人ではない、絶対に。

他人を自分の理論だけで救うエゴイズムと、結果至上主義な考え方、そして共感性の乏しさ。嘘も平気でつくし、他人の考えが読めず、他人を救った後の責任なんて考えず、自分が正しいと信じて疑わず、自己中心的で、救うことに対して良心はなく、エゴイズムだけで動く獣。しかし口達者で、頭がいいので他人から見たらすごく魅力的に映る。

サイコパスの典型だけど、やってることは側から見たらただの善人なのでそうは思われにくい。が、勘が鋭い人たち、上条や、暗部の人間にはなんとなく勘付かれている。詰めが甘いね。

端的に言えば壮大なメシアコンプレックスを抱えたマイルド・サイコパス（もしくは予備軍？）。

そんなメシアになりきる天羽さんだが、ひどく執着している人物が二人いる。

それは妹と垣根帝督。

二人は性別も違うし、オタクと暗部の人間、見た目も全く違う。客観的に見て全く似ていない（天羽さん曰く「少し似ている」だが……）。けれど彼女らの幸福に執着するのは共通点がある。

それは「覆らない不幸」。

「足が動かず不幸を生きる妹」と「どんなに強くても必ず死んでしまう

不幸な垣根」、彼らは基本的に不遇で、不幸。そして絶対に報われな
い。

「自分にしか出来ないことで誰かを幸せ（天羽さん基準）にする」こと
で自尊心が満たされる天羽さんには、二人は美味しいスイーツのよう
な好物にしか見えない。

◆
なので、10月9日に大きな決心をしました。

そうですね、垣根の命日（死んではない）ですね。

この日彼女は垣根から役を奪い、死のエンディングを肩代わりする
ことができました。

神の人形はこの日流し雛のように、呪物として死にました。

作中でグリゴリと名乗っていますが、これは「全てを教え、一人の男
のために全部を壊して、死を肩代わりする天羽さん」と「人間に全て
を教え、愛した女のために全部を失い、禁忌を犯した全責任を負った
アザゼル」を同一化し、無意識のうちに魔術的なバフをかけていまし
た。

無意識、というより体晶で半分神様なので神のお膳立てとも取れま
す。

◆
そして人形つつーかエロすぎるラブドールのような彼女は、死ぬこ
とが天命だと言わんばかりに神に一矢報いてこの世から消えました。

◆
ええ、生き返りましたね。あっけなく。

しかも幼女になって。

幼女化は作者の趣味ではなく、『とある』における（ヒロイン性の
獲得、弱体化を意味します。

インデックスのように優しく真っ白。

打ち止めのように小さく幼い。

滝壺理后のように病弱で一途。

そして守られる弱者。

その要素を混ぜ混ぜした結果がこれ。垣根くんの性癖が心配。

二度目の死と尊厳破壊でプツンしてしまった精神は簡単に歪み、この時は自分の正義を最後まで貫かなきゃ死んでしまうバーサーカー状態でした。

アザゼルと同じ。愛のためなら禁忌を犯し、ひどい目にあってもその狂気的な愛を貫く悪魔。

その偶像と天界（天羽さんの神様がいる方の天界）の物質で作られた体が呼応し、偶像の理論を用いて彼女は墮天使となりました。ガバガバ理論。

◆
そして色々なことがあり、ロシアへ、その愛を貫きに行きました。

50さんに体に乗っ取られます。というか乗っ取ってもらった。

アリスのような見た目はその性質からきているものもありますが、本人が眠っている＝夢を見ているからでもあります。

◆
さて、そんなつよつよサイコガール天羽さんだが、異世界転生する前、前世ではそこまでサイコパス感はありませんでした。

至って平穏な国、至って安全な国。治安の悪いアメリカに住んでいただけ、学園都市ほどのブラックさはない国で普通に暮らしてきた彼女は、せいぜい「変な子」と言われる程度の少女で、特に怖い要素はありません。

確かに幼い頃から積極的に習い事をして、小学校に入った時点で一人だけで乳幼児の世話ができるスーパー幼女は気味が悪く、変で可哀想な子ではありますが、幼い子がさらに幼い子の世話をするって結構よくある話ですよ。習い事も同じく。

結構常識の範囲のおかしさ。サイコ感はあまり感じないです。

変な方向に行ってしまったのは、死を体験した後から。

自分の死で妹を助けたという客観的な事実が、そのまま自信になり、揺るぎない信念となり、いつしか「死を使ってでも抗えない不幸から誰かを救いたい」に思考が変わってしまった。

そして人がよく死ぬ世界観の物語に入り込んでしまったため、余計にその考えが強化された。これが日常ほのぼの漫画の世界とかだったらセーフだったのにな。

最終学歴は某アメリカの治安悪い某州の某大学院。大学も同じところらしい。

一話の時点で帰国していたのは就職のため。妹と一緒にいるためにメーカーの研究所に勤める予定だった。

が、24で死去。話に関係はないが、ベアトリーチェも同じ年齢で亡くなっている。はえーぐうぜん。

母は15で彼女を生んだ若い日本人ママで、父は母と3歳差。※10歳差でした、犯罪ですね。何と間違えたんだ？（2022/6/14追記）

文通で知り合ったとかで、アメリカに憧れる文学少女と、日本が好きなギークボーイの恋愛婚でした。

そのため天羽さんは6歳までアメリカで生活。親が若いので身の回りのことを全て自分で行い、異常なほど大人びていました。妹が生まれる前は結構暗かったらしい。

父の親戚が全世界にいるため、天羽さんはマルチリンガル。本人も人種が特定できない顔立ちをしている。日本とヨーロッパと中東を混ぜ込んだ、いいとこ取りの可愛い顔。

ぼーっとしてると人形みたいな気怠げな顔に見えるとか。

※天羽さんの名字ですが、父親が外国籍なのになぜ日本の苗字なのかと言うと、父が婿入りしてるためです。日本の法律だと外国籍からの婿入りは夫婦別姓になるので、実はお父さんだけ名字が違います。けどややこしいので電話口とかだと奥さんの名字を名乗ってます。

（2022/6/14追記）

余談ですが、この人種混ぜこぜの設定は「人は神様を模してる」
「全人類をルーツに持つ人ってすげー神に近くね？」という短絡的な
思考の下生み出されました。

全人類のお姉ちゃん発言も同じです。神として自分を認識してい
るメシアコンプレックスなんですよ、この人。

平等に人を愛して、平等に関心を持つてない、上辺だけの愛情。善
人ヅラした邪神様です。

ちなみにお住いは杉並区。97話で出てきた公園は「蚕糸の森公
園」で、実在する場所です。なお作者の地元でもなければ行ったこと
もない公園です。

「なんで蚕？」って思ったかもしれませんが、蚕は神様として崇められ
ている人工の生き物だからです。神に作り出された神様。そういう
ことを意識していました。

◆
そして幼い蚕は成虫になりました。神に作り出された神様、つまり
フィクションの神様へと。

グリッチ、バグ、tool assist、この世界の理論を全て
使える文字通りチートな存在。幻想殺しも、おそらく理想送りもでき
る。アレイスターは天羽さんがいた世界に行ってしまったが。

解釈するならば、少女アリスが白の騎士の導きにより白の女王に
なった姿、もしくは深淵で夢見る白痴の魔皇、アザトースとして呼ば
れるおぞましき生き物。

作者の考える美しさと畏怖を詰め込み、神のモチーフを多く取り入
れてデザインしました。

コンパス（丸を書く方）は宗教画では神を表現する持物（じぶつ）。
アトリビュートとして有名です。なので足先と三角の光輪がコンパ
スモチーフとなっています。三角の光輪も神様の象徴ですね。

あとはデウス・エクス・マキナとしてのバレリーナ要素とか、そこ
らへん。

◆ そんなおぞましき神様ですが、ヒーローの手によって可憐なヒロインへと戻ってしまいました。

学園都市の最高権力者となった天羽さん。逆らえる人は垣根くんくらいです。

なぜ天羽さんが（正しくは藍花さんですが）統括理事長なのかと言いますと、責任を負うようなことが起きたとき、垣根くんが責められるのを見たくないからです。いじらしいですね。

今後は原作の知識も駆使して外交問題も全部片付けてくれるでしょう。

ちなみに天羽さんが本編でいろんな人を洗脳したおかげでコロソンことローラさん率いるイギリスやロシアも手が出せません。

だって天羽さんが電話一本かければ水道局も発電所も止まるんですから。

おっかない女です。

（そういう話を最終話に付け加えようと思ったたら長くなったのでやめた。番外編で一話くらい付け足すつもりですが……）

◆ おっかない女こと天羽さんですが、唯一好きな男がいます。垣根帝督ですね。

天羽さんに手を出して後戻りできない垣根くんですが、最終話で衣装チェンジしてます。

衣装を変えるか悩みましたが（原作の垣根くんがパーフェクトなので）、一話だけの特別出演なのでお遊び程度にデザインしました。

本編では散々天羽さんに振り回され、ロシアまで行くこととなった垣根くん。

原作と比べてだいぶマイルドになりました。スピンオフを読む限

り友達もいますし、一日しか一緒にいない林檎ちゃんに優しくするなど、他の超能力者^{レベル5}と比べて対人関係は良好な様子なので天羽さんにもなんだかんだ優しくめで、面倒見の良い子です。

というより天羽さんの距離感がおかしいというべきか。

人懐っこくて、愛情をストレートに言える恥知らずな天羽さんだからこそ、本当に少しずつですが心を開けるようになり、最終的にあんなエンドを迎えることになりました。

偶像スピノフの方に近い、とても可愛くてちよつと抜けてる良い子です。なんで原作ではあんなことに。

この作品では長点上機学園に通う高校二年生。三月生まれで、非童貞。超能力者で暗部であること以外は案外普通の思春期高校生を想定しています。

なので際どい発言や露出に少しイラつとする。

でも本人も際どい発言をするのでどっこいどっこい。

天羽さんとはだいぶ距離感が近く、ナチュラルに同棲し、ナチュラルと一緒に風呂に入って一緒に寝る奇妙な関係。

自分を好きだと言ってくれる天羽さんにだいぶ関心があり、いつの間にかこんな関係に（最終話参照）。天羽さんに、いつの間にか入り浸ってるよこの人……と思われています。だからといって止める訳でも怒るわけでもありませんが。

なお幼少期のトラウマのせいで最終話後は天羽さんにかなりべつたりで離れなさそうです。



さて133話ちよいも続いた本編ですが、元凶、天羽さんをこの世界に召喚した神様はいわゆる第四の壁の住人。

クトゥルフ神話でいうところのH・P・ラヴクラフト、不思議の国のアリスでいうところのルイス・キャロル、神曲でいうところの作者ダンテ・アリギエーリでした。

作者の分身として書いてはいませんが、似たような概念・ポジショ

ンにいる超常的存在。女の趣味もセンスもすこぶる悪い神様です。そして恐ろしく一途でもあります。合計して三十年ほど天羽さんの人生にテコ入れしているので筋金入りですね。

性格は理不尽で傲慢。思いつきで人を殺すし、思いつきで異世界を作り出す創作者。

とても生意気かわいい人間がいることを知り、ずっと神様好みの幸福が訪れるように手を出していたヤンデレ。

が、なかなか強情な天羽さんにしびれを切らし、トラックで轢いた。本来は妹の方を殺そうとしていたが、天羽さんの想定外の動きで天羽さんが死ぬことに。

死ぬときくらい自分を守ると思っていたので、予想していなかった神様は急遽別の世界を作って、分身として世に降ろしました。

というのも、とある世界の理論では聖書や神話に書かれていない、データのない別世界の人間を呼ぶことは不可能なので、神の分身として天羽さんを産み落としました。

◆
では神様の話もしたので、次に超能力者の強さについて書こうと思います。

とあるでは論争になる強さですが、今回は天羽さんだけにフォーカスを当てていきます。

ルールとか仁義とか誇りとか個々の性格とか、純粋な能力だけで超能力者^{レベル5}vs天羽さんを考えた場合。

まず食蜂さんの精神攻撃は天羽さんに効かないので、物理であっけなく倒されます。

麦野さん、御坂さん、削板くん、一方通行ですが、電流やベクトル操作以外の操作、例えばタンパク質や遺伝子の操作、細胞の変質、0を1にする事なら可能でしょう。

なので、意図的に遺伝子の病気を作り上げたり、筋肉や骨の構造を変えたり、体の仕組みを変えたり、脳みそをいじって能力そのものを奪ったり、色々できます。

なお一方通行の手当てができなかったのは、ベクトル操作を行えな

いたため、あと今だからこそ言えますが同じ神の力なので反発するためです。

で、垣根くんですが、善戦するんじゃないかと。

0を1にする事は垣根くんも同じなので、対抗策を取られたら通用しなさそうです。食蜂さんのメンタルアウトを使用しても垣根くんに通じるとは思えませんし、物理だといくら強化したって生身の天羽さんは垣根くんには敵いません。

血流操作や電流操作をすればなんとか倒せるかなってレベルです。けれど性格なども加味して超能力者^{レベル5}vs天羽さんを考えた場合。

天羽さんは全員に負けるんじゃないかなと。決して弱いわけではありませんが、誰かが傷つくなら自分が傷つく人なので、攻撃すらしらないと思います。

しかし永遠の回復能力があるので勝敗はどうなるか。

なお、神様モード（ロシアの姿です）での勝率は100%です。神さまなので。

神様と繋がった天羽さんがかなり好戦的（体晶を使った時、ロシアのとき）なのは、半分神様が乗っ取っているためです。



ここからは少しメタ的な話をしようと思います
まず名前から。

天羽さんがずっと言っているように、名前とは個々を区別する大切なもの、そしてその人を表す大事なものです。

天羽彗糸。

名前からわかる通り、毛糸、運命の糸、彗星がモチーフで、名前は以下の意味があります。

天を羽ばたく者（天使）、理不尽を彗く者（神への反逆者）、救いの糸を垂らす者（神そのもの）。

そして同時に糸を引いて散ってしまう彗星にもなぞられています。あと『けいと』と『ていとく』で字面が似てるんですね。『け』も

『て』も母音が同じですし、『いと』が入っています。だから垣根は「二人は運命の糸（）で繋がっている」と答えたわけです。

◆ 次に『犬』について。

天羽さんは何かと色々なものに例えられます。

蛇、小鳥、龍、犬。

それぞれ複数の意味を持ちますが、共通して神を意味する例えとなっっています。

蛇は悪魔と神。

小鳥は天使と神。

龍はフイクシヨンの産物であり、神の象徴。聖と邪、どちらにもなる不安定な生物です。

そして犬。

他の三つは分からなくてもないけど、犬ってドユコト?と思ったかもしれません。

犬、英語でDOGと書きます。

そしてこの世界は虚像が本物に、本物が虚像になる反転した世界です。

DOGを反転するとどうでしょう？

GOD、つまり神様ですね。

実はこの犬、クトウルフ神話の一つ「ダンウィッチの怪」でヨグソトースと人の間に生まれた子供を食い殺す、神に似た異質な存在として描かれています。つまりこの場合の『犬』の例えは、脅威を喰らう邪神という意味です。

物騒なものにたくさん例えられる天羽さんですが、それには理由があります。

それは天羽さんが『人間』で、複雑な構造をしている本物、そして神の分身だからです。

人間には色々な側面があり、ある人から見たら魅力的ですが、ある人から見たら嫌な人ってことは多々あります。神様も同じで、信者は敬拝していますが、グノーシス主義から見たら悪魔と同義です。

本物の神様を一言で表すことなどできない。全ての性質、全ての混沌を抱える神を一つの単語で表すことなど到底無謀。そんな訳で、天羽さんは色々な人から疎まれたり、尊敬されたりしています。

あと明確に天羽さんに好意的な感情を抱いたのは垣根と青髪のみです。

それ以外は「なんかとつつきにくいなー」とか「たまに怖いんだよなー」とか「いい人過ぎて逆に怖い」等、よくは思われていません。彼女の言う通り、デウスⅡエクスⅡマキナの側面があるので、都合のいい存在は嫌われます。

けれど垣根にはそれが希望の星に見えたんでしょね。

青髪さんは女体ならなんでもいけるので意味はないです。

◆ では最後に0930あたりのアンケートについて。

ヒロインアンケートと恋愛アンケートがあったと思われませんが、採用しなかった方のルートを書いておきます。

最初にヒロインアンケート。

天羽さんはヒロインか否かの選択肢でしたが、ヒロインじゃないが勝った場合、この小説は1009で天羽さんが死んで終わりとなっていました。天羽さんの肉体はこの世界の人間じゃないと運用できないので冷蔵庫にもなることなく文字通り天に召されるはずでした。

けれどアンケート結果で天羽さんがヒロインとなり、自ずと垣根がヒーローとなったので、主人公が気合いでなんとかしました。

未元物質データマターは天上世界の物質なので、天羽さんの体を維持する機械を作ることができたわけです。

2回目のアンケート、恋愛についてですが、こちらは見てわかる通りどういふ関係性になるかのアンケートです。

幸いなことに両想いが勝ち取ったので良かったです。結果によっては脳が破壊されるような片思いとかになってました

天羽さん垣根くん両方が、恋愛の意味で好きじゃない場合は兄妹としてロシアから帰宅します。

なので最後のセリフ、「なんか、その言い方えっちだね、帝督くん」

が、「なんか、恥ずかしいこと言うね、お兄ちゃん」になってたかもしれません。あとキスもしないです。

話は逸れますが、この「えっち」という単語は一番最初の話、異世界転生する直前の妹との会話で出てますね。

天羽さんはこの会話から10年以上経って初めて性というものに恥じらいというか、意味を持つことができたというか。ようやく思春期が来たというか。

遅すぎ！

話を戻して、どちらかが片思いだった場合。どうあがいても天羽さんが死にます。

天羽↓垣根だった場合、報われない想いに気づいてしまい、汚い自分を清めるため、汚い自分を垣根に近づけさせないため北極に沈んで死にます。

反対に垣根↓天羽だった場合。垣根の愛情を信じることもなく、触れさせることもなく、本気で叩きのめして天へ帰ります。

どうあがいても死。

ですが見て分かる通り両想いになったので今後は幸せでしょう。

汚い感情に気が付いてしまいました。この世界線の垣根くんはヒーローなので、天羽さん程度の欲くらい受け止めてくれると思います。

と言っても天羽さんは恋愛的な欲求は弱いのでなんともいえませんが。手を繋ぐとか、一緒に遊びに行くとかで満足できる子なので。

でもまあ、彼女らの関係がプラトニックかどうか聞かれたらちよつと返答に困りますね。

番外編：一話完結

手綱はこの手の中に

彼女は怪物だ。

「アレイスターを蹴落とし学園都市を掌握するだなんて、愉快な子でありけるな、アザトース。一体何を考えてなるのかしらん？」

「ごめんなさいねえ、アナタの嫌いな相手を殺しちゃって。色々計画が狂ったでしょう？」

パソコンの画面越しに金髪の女が見下すように笑う。地面に擦れる長い髪を揺らし、わざとらしく鼻を鳴らした。

イギリス清教アークビショップ、ローラースチュワート。

学園都市総括理事長補佐、天羽隼糸。

二人の女は密やかに会談を続ける。

「何を知っているのか知らなりけれど、誰が学園都市を支配しようが、私には関係の無い話なりけるわ」

「そう？アレイスターが本当に死んでしまったか分からない。あたしが何を考えてるか分からないでしょ？」

「……ほう？」

「メイザースくんとの契約、自分の目的。どう出し抜くか迷ってる。だからこうやって正体隠して連絡取ってきたんでしょ？コロゾンちゃん」

くるぶしまで届く金髪を指に絡ませ、その怪物は淡々と話す。

目の前の少女、超次元の存在の思考を探るため、腹の探り合いが続く。怪物たちの駆け引きは終わらない。

「アンタのところの水道も電気もインフラも、何もかもがあたしの名義になっていて、お偉いさんは洗脳済みだし、電話一本で全て止まっちゃう。でも何にもしてこない。恐怖だよね、アナタを殺せる存在が何もして来ず、連絡もなく、ただ日常がすぎていく」

高値で買ったスピーカーから荒い音が漏れる。美しい緑の瞳で見つめ、その怪物は静かに笑ってパソコンの前でため息をついた。

「死と隣接する恐怖、尊大な悪魔には少し刺激が強すぎたみたいだ」
学園都市を支配する女とイギリスの魔術師を支配する女。

二人の女が言葉の力で互いにねじ伏せようと音を喉から吐き出す。禍々しい空気は回線を通じ、淀んだ雰囲気の中、彼女たちは薄っぺらい笑みを浮かべ談笑を続けていく。

「死？誰にそう言っているのか、分かっているのか小娘」

「拡散の悪魔、フィクションの産物に言ってるってわかってるよ。だからお前はあたしに勝てない。フィクションはここで打ち切り。デッドエンド、拡散なんて狭い世界の中では波にすらならない」

本性をさらけ出し、怪物はおぞましい笑顔を浮かべる。

本能を支配する艶やかな女の笑み。優越感と支配欲、ほんの少しの悪戯心が混ぜ合わさった勝者の笑みは、暗い室内で恐怖を煽った。

恐ろしい。彼女の笑みは悪魔すら恐怖に突き落とす。

「世界を偶像とでも思ってるのか。哀れだな」

「哀れはお前だ、立体を認識できない舞台上の駒が。第四の壁を超えることの無い薄っぺらが」

「な、にツツツ、ンア!!」

その怪物は、次元を超えた。

日本とイギリス、時間的な距離、空間的距離は飛行機を使わないと到底縮まない。

けれど超次元の怪物はそれを手繰り寄せる。立体物は平面を支配し、薄いデスクトップに腕を伸ばした。

パソコンを超えて、電子を超えて、平面を超えて、そのおぞましき怪物は悪魔の髪を掴む。

そして薄い笑みを浮かべたまま、握った金色を力任せに引き抜いた。

「ここら辺がアナタの最終回みたい。駒にすらならない紙なんて要らないし、存在すらしてない肉塊なんてどうでもいい」

「あああああああああつっつっつ!!」

どの時代の魔術でもない。ホルスでもアイオーンでも、なんでもない。

時代ではなく、次元の違う神の力。
怪物はデスクトップから腕を伸ばし、身体を枠から出し、立体になる。

スクリーンから飛び出た肉感的な女は長い金髪を揺らし、悪魔の命を引き千切って絶叫の中静かに微笑む。

「悶え苦しめ、信徒を騙る忌々しき悪魔が」

悪魔を噛み砕く邪神を教会のステンドグラスが照らし、祝福するかのように鐘が鳴る。

夢見る魔皇は神の名のもと、不幸な右手で物語の全てを打ち消した。

おぞましき怪物。けれど、最も美しい怪物。

その怪物に心奪われた者がいた。

「ただいま」

「おー、対談は無事に終わったか？」

黒いミニドレスをひらひらと揺らし、胸元のリボンを弾ませ、彼女はゆっくりと扉を開く。

彼女たち好みに魔改造された総括理事長の仕事部屋はとても華やかで、フォーマルな姿がよく映える。

広い部屋の奥、大きな机に置いたパソコンを睨む少年は、部屋に訪れた怪物の姿に小さく微笑んだ。

おいでと手招きをし、長い背もたれに体を預けて

彼、垣根帝督は優しく目を細める。

彼らは所謂男女の関係にあった。

「大丈夫、ちよつと手荒になっただけ、概ね順調かな」

「手荒って、大丈夫かよ」

「平気、平気。それよりそっちは作業終わったの？」

垣根の手招きに従って、従順に天羽は彼を抱きしめる。軽く唇を押し当て忠誠を示すと、彼女は嬉しそうに体を離す。

そのまま浮かれ気味に奥の扉へ向かい、給湯室の電気をつけた。寝室にバスルーム、給湯室の簡易なキッチンといい、この理事長室は彼女たち好みにリフォームされていた。

どこもかしこも、彼女の跡が残る。

「ああ、プロットは練った。あとは会議にかけるだけだな」

「暗部の方の調整だっけ？」

ザラザラと音を立ててコーヒーメーカーに豆と水をいれ、機嫌のいい彼女は楽しみに垣根の話に耳を傾ける。

豆の状態でも香る質の良いコーヒーの香りが垣根の鼻をくすぐった。

「そう、簡単に言えばホワイト化と合法化を進めてる。公的な特殊部隊にするって感じか？」

「特殊部隊？テロ対策とか？」

「お前の能力のおかげで上層部では裏切り者はでねえし、研究者も法律を無視した研究ができなくなったからな、俺がやってきたような仕事は不要になっただろ？」

「なるほど、原作通り暗部を解体したら失敗するから、逆に表に出すのか」

手早くコーヒーカップを出し、満タンになったポットをコーヒーメーカーから外す。

動きに合わせて揺れる赤いピアスと長い金髪が光を反射してキラキラと輝いていた。

コーヒーマーの香りが部屋を満たす。その中に微かに感じるラズベリーと薔薇の香りも相まって、とてもみずみずしい。

女の匂い。彼女の匂い。

幾度となく感じてきた少女の香りが心地よかった。

「そういうことだ。殺人だとか犯罪行為はしねえけどな」

「その方が管理しやすいし、いいと思うよ。血の気の多いやつらの捌け口も必要だし、いい塩梅じゃないかな」

その香りは特別だった。花のような香りを振りまいて、彼女は垣根を救いあげる、抱きしめる。

コーヒーに混じった神様の香り。

救世主^{メシア}。その香りは救いをもたらす。

暗部を抜け、望みを叶え、隣に完璧な女がいる。

この邪神の気まぐれで垣根帝督にとってこの上なく都合のいい世界が生まれた。

誰も不幸にならなくていい世界、夢物語だと思っていた完璧で幸福な世界。

理論に当てはまらない完全無欠の神様は、彼だけに愛を囁き、世界をくれた。

黄金の髪、赤と緑のおぞましい瞳、全てを虜にする見た目と、全てに嫌悪される傲慢な思考回路。

艶やかな邪神はその夢の中で彼にだけに微笑んでくれる。

「どうしたの？」

「いいや、なんでもねーよ」

都合が良すぎる神の寵愛が時に怖い。

泡沫のように弾けて消えゆく夢のようで。いつかこの幸福が壊れて、溶けて、なかったことにされるのではないか。

砂糖の甘さに慣れてしまって、欲張って、彼女に愛想を尽かされるではないか。

そもそも、彼女が一生好きでいてくれるなんて、言葉でしか約束できない。

確証もない口約束。

思い出したように押し寄せる不安が波打つ。

考えれば考えるほど、その不安は波を大きくしていった。

「コーヒー入れたけど休憩にしない？」

「……そうだな、甘いものが欲しい気分だ」

照明を遮り顔に影が差す。コーヒーとカップ、そして冷蔵庫から取

り出したスイーツをおぼんに載せて、彼女はいつも通り優しく微笑む。

言い表せない不安に蓋をして、ソファへ移動すると、砂糖と小麦の香りが広がった。

テーブルの上に置かれたきつね色のまん丸なパイ。網目模様からほんのりと黄味がかったファイリングが見える。

売り物のような整ったパイは白い粉糖と、緑のミントが添えてあり、甘い香りを漂わせ、腹に響く。

「今回はねえ、アップルパイです。大変だったんだから」

「なんでも作れるのな、お前」

「次はミートパイにしようかな」

「パイ縛りかよ」

ケーキ用のナイフが真ん中から一直線にパイを切る。交差したパイ生地がさくさくと音を立てて五等分に切り分けられ、美しい断面が現れた。

完璧に計算された断面。

パイを切り分ける彼女とよく似ていた。

「……なんでもできるよな、お前」

「な、何、突然」

「俺は、料理あんまできねえから」

「火力がちよつと強いけど、基礎はできてると思うよ？それに、飾り切りとかあたしより上手だし」

ふと、思っていることが口から零れる。甘い香りに誘われて、苦い感情が胃の奥底で熱を持つ。

弱々しい本音は、ヒーローに似つかわしくないのは分かっている。けれど、この神様を前にすると懺悔をしたくなる。

失いたくない。けれど同時に騙したくない。

二律背反。アンビバレント。

彼女に対する感情と同じものだ。

「裁縫もできるよな」

「家庭科で習った程度ね」

「俺ほどではないが頭もいい」

「まあ、大学院まで行つたし。というか実年齢垣根くんの倍だし……」
切り分けられたパイをひとつ貰い、フォークで突き刺す。砂糖漬けにされたリングとシナモンの癖のある味が舌の上で混ざり、胃の中へ落ちていく。

パイ生地は軽く、中の詰め物はしつとりと。想像通りの美味に手が進む。

彼女とよく似た甘つたるいパイに虜になつてしまう。

好きだ、この中毒的な甘さが。

「まさしく全人類が思い浮かべる『理想の女』ってやつだよ、お前は」
「な、なんなの突然……パイ不味かった？まずいならマズイって言う方がいいんだよ？そんなおだてなくても……」

「ちげーよ。本当、都合がいいって思つてな」

常識もそこそこあつて、明るくて、愛嬌と可愛げがあつて、顔も可愛い部類で、程よく肉感があつて、巨乳で、一途で、健気で、気配りができて、エロくて、彼のことだけが大好き。

そしてなにより、彼女は彼を肯定する。

その後悔を、その懺悔を、その罪を、彼女は赦す。

一番欲しい言葉をくれ、一番欲しい温もりをくれる。

おぞましい狂気を孕んでいることを除けば、彼女は一般人が思い浮かべる完璧な女に近い。

ご都合主義な盤上の神様。

誰もが夢見る永遠の淑女。

「……何が言いたいの？」

「たまに、お前と出会つてからの日々が夢なんじゃないかと思つちまう」

ナイフを片手に顔を覗き込む彼女と目が合う。

緑と赤のおぞましい瞳。人間とは思えない禍々しくも煌めく神の瞳。

その瞳に見つめられると、体が強ばり本能が彼女を恐れていた。けれど同時に惹き込まれる。

彼女は美しき幸運の女神であり、破滅を誘う気まぐれな邪神。

ぐちゃぐちゃになる感情が、絞り出すように本音を漏らす。目の前の怪物に、全てを知っていて欲しくて。

「本当は寝てて、それこそ原作の俺みたいに意識のない状態でこの甘い夢を見ているのかもしれない。そう思うと——」

——たまらなく怖いんだ。

しかしその言葉は音にならず、代わりに体がソファへ軽く押し倒された。

腰に重い体に乗せ、太ももが足を固定する。肩に置かれた手によって上半身の動きは封じられ、体はピクリとも動かない。

「あたしの好きをフィクションにしないでよ」

いや、本当は動くのだ。

けれど飼い主が犬に暴力を振るえないように、信徒が神を蔑ろにできないように、本能がそれを拒む。

乙女の姿をした怪物を薙ぎ払うことなど、ヒーロー主人公にはできない。

「都合がいいのはあたしがそうしたいから、幸せそうにしてる姿が好きだから、なんでも出来る、何でもしてあげたい。あたしの努力をフィクションなんて言葉で解釈しないで？」

生き物のように蠢く髪の毛がゆっくりと垣根の体に絡みつく。

それぞれが意思を持っているかのよう。足を、腰を、手首を、金色の糸が這い、飲み込まれる。

まさしくアザトースそのもの。這い寄る触手が下僕を逃がさない。

悍ましい瞳で捕らえ、美しき美貌で圧倒し、恐ろしき暴力で屈服させてしまう。

「……それとも、肉体で、感覚で感じないと分からない？」

長い髪が触手のように絡みつき、逃がさないと言わんばかりに強く縛り付けた。柔らかい髪が頬を、腹を、手をくすぐり、薔薇の香りが舞う。

優しく美しい拘束だ。甘くて、力を奪う拘束は垣根の緊張を解く。

動きを封じ、上から覆い被さる彼女の支配者らしい力強い目が魅惑的だった。

「そういう行為で満たされるのなら、あたしはなんだってするよ。なんだってしていいよ。好きな男の肉欲くらい、この体で受け止められる」

「彗糸」

「望むように動いてあげる、触ってあげる。能力を全て使って、都合の女になってあげるから、だから、そんな顔っ……」

「彗糸、コーヒーが冷める」

支配から逃れようと優しく名を呼ぶ。愛情と肉欲がよく分かっていない無知な子供の背伸びを愛を持って制して、体の拘束を振り解いた。

少し焦った彼女の表情からはいつもの尊大さが感じられない。

「……わかった」

呼ばれた名前に口を閉じ、不服そうに髪を解き、彼女は膝の上で俯いた。

恋愛における愛情表現が分からない彼女は直ぐにそういう行為をほのめかす。

本当に可愛そうな子だ。

今までは隣人愛、家族愛しか知らなくて、それ以外は知りたくもない、汚くておぞましくて気持ちの悪いものだった。だからその感情の表現が分からない。

コーヒーを入れるのは隣人愛。

パイを焼くのは家族愛。

一緒に眠るのも、一緒にお風呂に入るのも、一緒に出掛けるのも、全部兄弟愛。

なら、恋愛は何で表す？

兄弟、家族では禁忌であり、原則恋人や配偶者としかしくないもの。それは肉欲、劣情。それしか該当しない。

彼女の手札は幼稚で在り来りで、勉強不足なものだった。

「ったく、お前はいつつも突然すぎんだよ。軽率な行動はやめろ」

「じゃあどうしたら不安を取り除ける？あたし、そんな顔みたくない」
その怪物は愚かな乙女だった。

「ほんと、お前は馬鹿だよな」

恋愛とは、特定の行動ではなく感情。

示す必要はない。言葉使いから、態度から、服装から見て取れる。そして彼女も、恋心が透けて見えていた。

それに気がつかない彼女は本当に、本当に、愚かだ。

その愚かさに囚われてしまった垣根が言えることではないが。

「あたしは真面目につー！」

「分かってる、ちゃんと理解してる」

この不安はきつと永遠に消えない。

この世界が彼女の夢である限り、この世界に永遠はない。

けれど、少し不安を口にするだけで世界が終わるかのように焦り、泣き、縋る彼女の姿に溜飲が下がる。

この恋が続く限り、この世界は巡る。

彼女が垣根帝督を愛する限り、この世界は終わらない。

「……お前がいなくなるわけねえよな、彗星」

「そうだよ、あたしは前世から、来世まで、ずっと帝督くんのこと愛してるよ」

彼女は怪物だ。

運命の糸を引き千切り、自分好みの頑丈で、鮮やかで、温かい糸で運命を手繰り寄せる神に似た怪物。

誰にも抗えないを崩す、第四の壁の向こうから現れた彗星。

鮮やかに煌めくその妖星は、乙女の姿をした怪物。

けれど、その怪物と回りくどい恋愛ごっこで愛情を確かめ合う彼もまた、ある種の怪物ともいえよう。

「このくだらねえ会話、あと何回繰り返すんだろうか」

「一生付き合っただけ。あなたが飽きて、捨てるまで」

遙かなる魔皇アザトースは恐るべき旅路の果てで、暗澹たる玉座を見つけた。見つけた。

そしてその地位はきつと、永遠に揺らぐことがない。

この物語が続く限り。

愚かな妹は気難しい

人が増えてきた午後過ぎ。オートロックの扉を開け、玄関から室内へ入る。

かすかに聞こえる賑やかな音と、男の声。またかため息交じりにリビングへ行くと、茶髪の少女がソファの上でじっと座っていた。

「学校終わったんだな」

「っ、おかえり！早いね」

「お前もな」

「うちんとこ今日午前だけだったから」

自分と同じ茶色の髪と黒い瞳で彼女は振り向く。女にしては高い背と、去年まで中学生だったとは思えないプロポーション。

天羽彗糸と呼ばれていた彼女は、垣根帝督名義のワンルームでぽつんと座る。シャンプールの香りを振りまいて、テレビから目を離れた彼女の姿はこの無骨な部屋に馴染んでいた。

「どんだけ画面の中のお兄ちゃんが好きなんだ、宿題終わってんのか？」

「あたしのこと小学生かなにかかと思ってる？」

「似たようなもんだろ」

薄手のTシャツとホットパンツでゆったりと眺めるテレビには、つい最近発売したライブ映像が映る。

初回限定盤の箱とパンフレットがローテーブルに散乱し、随分前に物販で買ったのかファーストライブのペンライトが淡く光っていた。

画面に映るのは自分、学園都市に七人しかいない超能力者の一人、第二位垣根帝督。

王子様スマイルと、俺様な口調、どんな芸能人も霞む美貌とスタイル。アイドル、垣根帝督。

絶対偶像進化計画。

ミラクルアイドルゼーション

一体誰が考えたのか上層部にカチコミに行きたくなるこの計画は、超能力者をアイドルにし、ファン力で絶対能力者にするというもの。

超能力者である垣根も例に漏れずこの計画に参加し、アイドルとして認知されている。

「この間のライブか？」

「そう、垣根様のこと見たくなつたから」

「妹ならいつだって生の俺が見れるだろ」

「ヤダ」

そして彼女、天羽彗糸と呼ばれていた彼女は現在、アイドルである垣根帝督の妹として過ごしていた。

同じ茶色の髪、同じ黒い瞳、高い背と人間の中でも上位な顔。どこからどう見ても兄妹な彼らは、この狭いワンルームで二人暮らしていた。

姉を豪語する彼女が大人しく妹に居座っているのが不思議だが、彼らはそれで満足のように、ここ二ヶ月は問題なく過ごしている。

張り合いがないのは少し寂しいが、静かなのは良いことだ。

「アイドルの垣根様とおにーたまな垣根くんは違うんですうー」

「何が違うんだよ。つか名前」

「は？」

「同じ『垣根』なんだぞ、苗字呼びは変だろ」

しかし彼女の方はまだ認めたくないようで、無意味なプライドから反抗を繰り返す。

そもそも妹になったのはアイドルである垣根のせい。いつも通り世話を焼き、優しい彼女だが、その現実を突きつけられるのは不快だった。

「……気が向いたらね」

「そう言い続けて何日だ？」

「妹になつてからずっとだね。妹っていうより、お世話係だけど」

「相変わらず頑固だな、お前は」

「垣根くんが幸せならそれでいいの。名前の呼び方なんてどうでもいい」

不貞腐れる彼女の隣に無造作に座り、散乱したグッズを手にとる。彼のことが大好きな妹に半ば呆れつつ、感情とは裏腹に笑みが溢れ

てしまう。本当に自分のことが好きだと、隣で頬を膨らます血の繋がらない妹が自分だけをみていると思うと苛立ちも消え失せる。

とても平和な日々。

殺しもない、痛みもない、平凡だけど刺激的で、楽しい日々。

一生続いて欲しいと心の底で願う。

「……ねえ」

「っ、なんだよ」

「香水つけてる？」

暗い室内でぼーつと自分が映るテレビを見てみると、不意に声をかけられる。彼女の声に視線を移すと視界いっぱい彼女の姿が広がって少し恥ずかしい。

家族といつても血は繋がっていない。まだ同棲にも慣れず、女の形をしたそれに驚きたじろぐのも無理はなかった。

「香水？そんなもの……あ」

「心当たりあるんだ？女物の甘い香水なのに」

「あー、今日心理定規メジャーハートとちよつと……」

跳ね上がった心音をごまかすために袖の匂いを嗅ぎ、怪訝そうな顔で見つめる彼女から視線を外す。蛇に睨まれたカエルのように、不自然な緊張感が漂う。

怒りに似た得体の知れない感情で顔を顰める妹にかける言葉が見つかからない。

「あの子と付き合ってるの？」

「……っは!!？」

「そっか、ついにこの日がきたか……」

「おい、なんか誤解してねえか？俺は別に——」

「よし、あたし妹やめる」

困った顔で彼女は立ち上がり、温度のない声を放つ。そのままそこらにおいていたパーカーを羽織って、チャックを閉じた。

少しブカブカナシルエットのパーカーは確か垣根が買って着ずにいたもの。白いTシャツとドルフィンパンツしか履いていない姿より露出度が下がるというのに、その姿はどこか蠱惑的だった。

「は？」

「他に女がいるのなら、身を引くのが礼儀でしょう？この日がくるとは思ってたけど、まさかこんなに早く来るとは」

「いや……妹やめるって、俺らが結んだのは養子縁組でも特別養子縁組でもなければ、マジモンの戸籍改ざんだぞ？血が繋がってるってことになってんだぞ？んなこと出来るわけ、つか身を引くって、他に女なんて——」

「入籍」

彼女が集めたお宝グッズが眠っているカラーボックスから何かを取り出して、彼女は淡々と、冷えた音を吐き出す。

何か恐怖を煽る声色に、焦りと不安が垣根の心を掻き乱し、言葉を詰まらせる。

妹という存在は、時に兄を凌ぐ。

今この場を支配するのは彼よりも背が低く、彼よりも柔らかく、彼よりも愚かで、彼よりもか弱い少女だった。

「……は？」

「女は結婚すると配偶者の戸籍に移る。妹という事実は消せなくても、別世帯としてカウントされ、同じ家族としてみなされなくなる」
「そう、だな。え、それがなんだよ？」

くすんだ茶髪を揺らし、彼女は振り向いた。冷たい擦りガラスのような黒い瞳が彼を射抜く。

その手にあるのは一枚の紙切れ。お役所のような堅い印象の紙切れには、小さくこう書いてあった。

「今の日本では女は16になれば結婚できるのよ」

「それはっ……!?ま、まさか、お前！」

婚姻届、と。

「あたし、結婚する」

「は、はああああ!!」

思い切りのいい愚かな妹の宣言に兄は堪らず声をあげる。

走って玄関を飛び出す姿を呆然と見送って、彼はその場で地面に膝をついた。

どこぞの友人ではないが、この日ばかりは叫びたい。

ああ、不幸だ。

とても不幸だ。

少女が歩くと茶髪が跳ねる。手に持った紙切れを眺めながらため息をつくとき、まぶしい太陽の下足を止めた。

「啖呵を切ったものの、結婚って誰とすればいいんだろう？」

手元の婚姻届を見つめ、眉を八の字に下げる。

適当な人を洗脳して記入してもらうことはできるが、そんな強引で相手の人権を無視したことはしたくない。

かといって思い浮かぶ男はあまりいない。

いつそのこと役所を燃やして戸籍を消滅させるか。しかしそんなことできるわけもなく。

この体に、この顔に興味を持つ誰かがいるのを願うしかない。

「あれ？こんなところで何してんだ？」

力なく道の隅で立ち尽くしていると、花に集まる虫のように誰かが声をかけてくる。足元に見える影と声は記憶にあった。

「お、不幸少年と腹ペコシスター」

「む、なんだかその呼び方はイヤなんだよ」

「垣根いねえのか？」

声に顔を上げると、そこには見覚えのあるツンツンした黒髪と小さな白いシスターが視界に入る。

上条当麻とインデックス。この世界では主人公格ではない彼らは、いつも通りの何気ない日常で生きていた。

ちようど良いタイミングで現れたクラスメイトに思わず笑顔が浮かぶ。

手に持った紙切れを渡す相手を見つけ、少し浮かれ気味だった。

「そんなことよりさ、上条くん今暇？」

「え？まあ、暇といえは暇だが」

「ここにサイン書いてくれない？」

胡散臭い笑顔で可愛らしい紙を手渡すと、不思議そうに上条は文字を目で追う。最初こそ不思議な顔をしていたものの、その文字を認識し、言わんとしていることを理解すると、その顔は青へ塗り替えられた。

「サイン？どれどれ……って、婚姻届エエ!!!」

「ええ!?けいと!!どういうつもり!?とうまのことが好きなの!!」

その紙を押し付けるように返却し、上条一行は赤やら青やら愉快な顔を見せる。恐怖と羞恥と困惑と、いろいろな感情が体を巡り、裏返った声で彼らは元凶に詰め寄った。

どういう意図なのかさっぱり分からないのも当然で、何をしたいのか彼らは探っていた。

「好きじゃないけど……だめ？」

「ダメダメダメ!!だ、ダメでしょう!そういうのは好きな人です
ねえ……!」

「そうだよ!自分の感情に逆らって、自分を売るようなことしちやダメだよ!」

「ていうか垣根はどうしたんだよ!アイツのこと好きなんだろう!」

好きでもない男に突然婚姻届を渡すのは流石に不審に思われ、清らかな説教と心配が彼女を襲う。

その引き合いに出された愛おしいアイドルの名前にわずかに眉が動く。

好きの解釈を俗物的な恋愛に当てはめられるのは癪だった。

「好きって、アイドルへの感情だからね?あの子一体何人のファン抱えてると思ってるの?」

「その割には妹になるとかですつとべつたりじゃねーか」

「妹ということにしておけば女が家に出入りしてもおかしくなくいしょ？あたしがそうしたのは垣根くんのお世話をしたいからだよ」

「メイドかよ！垣根のこと好きじゃん！」

「好きだよ、けど上条くんが思うようなものじゃない」

彼女は垣根が好きだ。

アイドルで、笑顔を振りまく垣根が好きだ。

それは綺麗な愛情だ。

暗い過去と、闇に落ちた現在とは比べ物にならない明るい未来を持った美しい少年が見たこともない幸せそうな笑顔をされていて、楽しみに微笑んで。

年相応な表情を見せる我儘で子供っぽい彼を愛している。大好きだ。

その笑顔が永遠に続くのが彼女の願いで、彼女の目的だ。

この綺麗な愛情を、恋だの何だの言われるのは腹がたつ。

「今人気だよね、ていとく。この間もアニメの前のCMに映ってた！」「そうなんだよー！最近も売り上げいいし、次回の箱もでかいし！軌道に乗ってるっていうか！」

「ていとくのこと、大好きなんだね」

「うん！じゃなきゃ、笑顔のためとはいえ、妹になんかならないよ」

「じゃあ俺じゃなくて垣根と相談しろよな？お前ら家族なんだから」

しかしこの高尚な愛を理解できないラブコメカップルに一から話すこともなく、適当にファンらしく振舞ってこの場を終わらせる。

この人たちに、主人公たちに何言ったって通じない。

脇役の運命なんか知らない人たちに何を言ったって無駄なのは随分前から分かっていた。

「……だから、結婚したいんだけどなー」

「へ？」

「推しが他の女とセックスする光景なんて、見たくないじゃん？」

「セツツ、ヴァツツツ!!」

「それだけが理由じゃないけどね」

優しい少年の言葉に濁った黒い瞳を伏せる。

どうせ彼女の気持ちなど分からない。信じない。

こんな人と婚姻関係になるのは馬鹿らしいと、頭の隅で見下す。

無駄な時間を過ごしてしまった。

そう思ったら早かった。

「別の人探す！よく考えたら上条くん結婚適齢期じゃないし！」

「今気づいたのかよ！」

適当な軽口を叩いて素早くその場から離れる。思いついた次のターゲットのもとへ走り、風の音に体に乗せた。

そしてその様子を見ていた兄は静かに唸る。

「上条ツツツツ!!」

「ちよっ!!?落ちて着いてくださいっス、サインしてませんし、大丈夫ですって！」

「くそっ！離せ、あの馬鹿が上条の毒牙に！」

自分の家族になってくれた愚かな妹が目の前で危ない橋を渡ろうとしていたら止めなくなるのが兄の性。

無防備な服装と無邪気な言葉で男を意図せず惑わす妹に並ならぬ心配を抱え、垣根はその後を物陰から見守る。

何とも微笑ましい兄妹だが、それに毎回巻き込まれる人は堪ったものじゃない。

部下であり、しもべであり、ストップパーでもある誉望万化は怒れる主君にため息をこぼす。

毎度巻き込まれる兄妹喧嘩とも呼べない馴れ合いにそろそろ飽きていた。

「落ち着いてくださいって！垣根さんの知り合いなんっスよね!?だって垣根さんに歯向かうとは思えません！怖いし！」

「くそが！ちよっでも妙な真似したらすぐに行く、わかったな？」

「過保護っスね。天羽彗糸が結婚って騒いだって絶対垣根さんのところ戻ってきますよ……こんな喧嘩毎回してますし」

こんな騒ぎは初めてじゃない。この兄妹は何度も喧嘩し、何度も仲直りし、その度に誉望が駆り出された。

いい迷惑だ。

しかしそんな言葉を言えるわけもなく、いつも同じように使われる。

あの妹ができてから随分精神状態も安定し、優しくなっているとはいえ、相手は垣根帝督。どんな暴力が待っているか分からない。

「天羽じゃない、妹の『垣根』彗糸だ」

「んなことどうでもいいっス。それより、なんで今回は結婚なんて言い出したんスか？心当たりは？」

とりあえず事態收拾のため軽く事情を聞いておく。何が引き金となりこんな現状になったのか分かれば、どうにか改善できるかもしれない。

「女がいると勘違いされた」

「え、垣根さんスキヤンダル対策徹底してるのに」

「馬鹿の誕生日近いから心理定規に香水選んでもらったんだよ。

あー、柄でもねえことすんじゃなかった」

嫌そうに出した答えは何ともありきたりな嫉妬の原因。互いに恋愛感情はないと彼らにこっぴどく言われたというのに、結局行き着くのはそこかとなぜか落胆してしまう。

女が常日頃ぼつと湧いてくる顔面エリート様。形容し難い恨みを抱きながら聞く義妹の話は、全てにおいて腹立たしかった。

「そのまま素直にいえばいいじゃないっスか。何が問題なんスか？サプライズよりも妹の機嫌とった方がいいっスよ」

「女へのプレゼントを別の女と選ぶなんて地雷だろ。何言ってるんだテメエ」

「分かってるならやらなきゃいいのに……」

「女物の化粧品なんてわかるわけねえし。ああ言うのはプロに任せたほうがいい」

「気が利くんだか利かないんだかよく分かんない人っスね……」

モテ男ならではの思考回路なのか、ただただ無頓着なだけなのかは分からないが、垣根帝督という人に常識が通用するはずもなく、言っている事は意味不明だ。

そんな性格だから喧嘩するのではないかとも思うが、そんな性格でも彼の妹はずっと彼のことを好きでいるのだから恐ろしい。

そう、あの妹はずっと垣根帝督を好きでいる自信がある。

つまり、この騒動も最終的には彼女の機嫌が直って仲直りして元通り。

「おい、馬鹿が移動したぞ」

（早く帰りたい……）

早くこんな茶番終わらせて新作のゲームでもしたい。

真剣な眼差しで血の繋がらない妹の恋愛事情を心配するリーダーの見たことない表情をぼんやりと見つめ、その整った横顔に溜息を吐く。

そして喧騒の中、面倒になって色々考えるのをやめた。

上条から走り去り、日々働く病院へと辿り着く。関係者専用のエレベーターに乗り込み、地下へと向かうと、しっかりとした足取りで自身の受け持つ研究室へと急いだ。

「18以上の男で、私の知り合いって言ったら……一人しか思い浮かばないよねえ」

条件を満たす男はここにいる。悪役だけどこか憎めないあの男がここにいることを願って、研究室の扉を開く。

カラーの入った髪と、蛇のように鋭い目つき、ニタニタと笑う口元、自分と同じくらいの身長。

唯一知る年上で大人な青年の名前を呼んで、勢いよくスライド式の扉を開け放った。

「相似くん！」

「おや、騒がしいのが来ましたね」

木原相似。悪名高い木原の一人でロボティクスを専門とする技術者。

たくさんのピアスといい彼女とウマが合いそうな男だが、元氣良く名前を呼ぶ彼女に露骨に嫌な顔をして顔を顰める。

善性の塊である彼女は木原一族の彼には毒に感じるのか、あまり好まれていない。

「帝督モンペさんがいないとは珍しい。喧嘩でも？」

「ううん、結婚しようと思って」

「……はい？」

「相似くん、結婚しようぜ！」

そんな相反する彼に婚姻届を押し付け彼女は神々しい笑みを浮かべる。ニコニコと愛らしく茶髪を揺らして笑う彼女の言葉はあまりにも突然で、木原といえど話に追いつけない。

眉間に指を置いて面倒そうな顔を浮かべる相似は、何とも言えない表情で彼女と視線を合わす。とても嫌そうな口ぶりだった。

「随分と唐突な……あの、一から十まで説明していただけます？ 貴女の低知能に追いついていけないんですよ」

「垣根くんが彼女作ったから出てってあげたいの。妹である以上近しくなっちゃうから、他人の戸籍入ればいいかなって」

「もう結婚まで考えてるんですか貴方は……あの帝督さんが彼女なんて、早とちりな気がしますけど」

「でもいい案だと思わない？ あたしと結婚すれば上に文句言われずに実験に使えるよ？」

嫌そうな顔を続ける彼に少し苛立ちを感じながらも話を進める。

大人で、科学者である相似にしてみれば彼女は金の卵のようなもの。永遠に死なない都合のいい実験体を自分だけで管理できるのだ、そこに食いつくだらうと安易に思っていた。

「それだけのメリットで貴方と人生歩みたくないです」

「えー？ 人妻らしくご飯作るし掃除するしセックスもできるよ？ 何な

ら、好みの女になれるし。例えばほら、この髪とか、目とか、全部垣根くんの改^{オーダーメイド}変なんだよ?」

「心底いらないですね。貴方に触れたいと思ったことありませんし」
しかし現実はうまくいかず、オプシオンをつけても彼の顔が晴れることはない。

覆ることのない拒絶。良い女にせがまれたら結婚するものではないのかと首を捻りつつ、頭の中で彼の答えを飲み込む。

マズローの唱えた五段階の欲求の中でも人間の生理的欲求、社会的欲求、承認欲求を満たせるスキル、能力があるというのになぜ欲しいと思わないのか。

答えはきつと単純、且つ呆気ないもの。

「もしかして、あたし魅力ない?」

「ないですね」

「ふうむ、やはりロリコンか」

「違います」

それに気がつくのと、何だか途端に馬鹿らしくなる。今までの話は一体なんだったのかと、世界に問いたくなってしまう。

女性的魅力の欠如。胸も大きく、顔もそこそこだと思っていたものの、この世界のハードルは越えられないらしい。

前提がひっくり返る言葉に意気消沈し、生きてる意味すら見失ってくる。

馬鹿げたことをしていると、今更ながら反省してしまう。自分は一体何をしているのだろうか、思考が絡まって解けない。

「まあ、もう少し大人になったら考えてあげますよ。実験体には使いたいので」

「今がいいんだけど?」

「嫌ですよ、高校生って犯罪ですし。ロリコンじゃないのですよね」
「ロリじゃないが!」

さらに追い討ちをかけるように相似はチクチクと痛みのある言葉を吐き出す。心底嫌がるそぶりで大きなため息を吐いて、続けざまに罵倒を並べていく。

「とりあえず帰ってくれますか？ここは遊び場じゃないんですから」

「所長あたし！」

「でもほとんどいないじゃないですか」

「う……」

「それに馬鹿ですし」

「にゅ……」

「というか、結婚してくれる人なんて見つかるんですかねえ。貴方嫌われ者じゃないですか」

心臓を抉る罵倒が次々と突き刺さる。棘のついた言葉が積み重なって、徐々に重りをつけていく。

全て本当のこと、でも言われるのは腹立たしくて悲しくて、少し辛い。

「帝督さんが可哀想ですねえ。貴方みたいな人間に纏わり付かれて」

「……それは」

「邪魔だと思ってるって感じたから結婚なんて言い出したんでしょう？どうせなら死んだらいいじゃないですか。貴女がいると、彼が不幸になると思うので」

精神の幼い彼女に、垣根帝督のことを揶揄するのは悪手だった。

大好きな彼を不幸にしているなんて、彼女にとってはどんな罵倒よりも傷つく鋭利な刃。隣にいたことが彼にとって不幸だと、何よりも恐れていることを突きつける言葉。

分かっている。彼にも嫌われていること。

それがどうした？それがなんだ？

そんなことどうでもいい。

けれど、彼女が生きていることで彼が不幸になるのは彼女の望みではない。

自分は彼を幸せにできないと、そう言われるのが堪らなく嫌だった。

彼女を殺す魔法の言葉。

彼女の生き様を否定する。

「そんなん、分かってるし……わかってるよ……」

だから涙が一滴零れたのも普通のこと。

「デメエ、人の妹泣かせてんじやねえぞコラ」

涙が一滴床を濡らす。

瞬間、鼓膜を揺さぶる大きな衝撃が男の声と共に狭い研究室に轟いた。

スライド式のドアが真っ直ぐに吹き飛ばされ、地震のように部屋が揺れる。埃を巻き上げ、衝撃でチカチカと点滅する蛍光灯の下、彼女と同じ茶髪をなびかせ、黒い瞳の少年が獣のように睨む。

低い唸り声を絞り出し、翼を広げる姿は天使には見えなかった。

「か、垣根くん?!」

「安心しろ、すぐ殺す」

「ウワアアア垣根さんストップウウ!!!」

青筋を立てて相似の元へ突撃する垣根を何とかして止めようと誉望が叫び、突然の出来事に彼女の涙は引っ込んだ。

お兄ちゃんの堪忍袋の緒はどうやらとても脆いらしい。

大きな音を立てて蛍光灯が地面に落ちる。ガラスの割れる音が埃っぽい空気に響き、部屋に影を落とす。

明るかった部屋は見る影もなくなり、爆発が起きた後のように散らかっていった。

「で、どうして結婚とか言い出したんだよ」

「別に、意味は無いし」

研究室から廃墟へ変わってしまった室内で垣根は自分と良く似た少女を見下ろす。彼と視線を合わせずそっぽを向く彼女の頬を餅のように両側から引っ張り、無理やり目を合わせると、彼女の赤い目元がさらに赤みを増した。

涙目で薄っすらと目を開ける彼女の生意気な表情が少し腹立たしい。

「あ？答えろボケ」

「やら」

「言わねえとこの研究室が半壊から全壊になるぞ」

「……らっひえ」

「なんだよ」

口ごもる彼女の頬から手を話し、言葉を待つ。観念したようにむくれながら俯いて彼女は小さな声で本音を吐露していった。

「……だって、垣根くんが、彼女作ったら同棲とか、そういうことするだろうし、血が繋がらない小姑なんて、相手にとつては不安分子でしょ？垣根くんの幸せを考えたら、いない方がいいじゃん」

「なんで俺は結婚する前提、というか彼女がいる前提なんだよ」

「……マネージャーとやってきたんでしょ。じゃなきやあんなに濃く香水の匂いなんてつかないし」

「あれはお前の誕生日に香水贈ろうと思って買いに行ってたんだよバカ。心理定規はその付き添いだ」

「ほかの女とプレゼント選ぶとか付き合ってたんじゃない」

うじうじと頬を膨らませて、彼女は小さく呟いた。

子供の嫉妬心を混ぜ込んで苦くなった本心がぼろぼろと溢れて、彼女が小さく見えていく。その姿が何だか可愛そうで、馬鹿らしくて、呆れてしまう。

「ちげーよ。大体、なんで俺に彼女がいたらお前が身を引くんだよ。妹なんだから堂々としてろよ。なんなら兄貴に変な虫がついた！って喚くぐらいすればいいだろ」

「そんなことできないよ」

「それは俺が幸せにならないからか？いつも言ってるもんな、俺を幸せにしたいとか何とか」

おぞましい妹という生き物は、垣根とは違う思考回路を持っている。

垣根の幸せのためだけに猪突猛進に行動を起こし、自分を蔑ろにする彼女は妹と呼ぶには少し破天荒すぎた。

「……垣根くんはさ、もしアイドルになつてなくて、暗部にいたまま

で、あたしにも出会わず、大切な人が皆死んじゃって、自分も殺されるような世界だったらどうする?」

「あ?どうするって、そんな世界を変えるように行動する、とかか?」
「この意味の分からない計画がなかったら、そうなってたかもしれない。計画が終わったら、また人を殺して、不幸になって、笑わなくなるかもしれない。そう思うと、とても怖い。あたし、垣根くんがつらいとこ見たくない」

彼女との対話は何か、深淵を覗くようだった。何か別の世界を観測しているかのように、彼女は『もしも』を語る。

「妹になったのも、垣根くんが楽しくアイドル出来るようにしたかったから。ご飯も作ってあげられるし、洗濯もできる。妹という立場なら自然に一緒にいれるし、スキヤンダルにならない。なんなら垣根くんは妹思いの優しい子って報道されるかもしれない、メリツトがたくさんあるから」

甘い香りを漂わせて、妹は顔をあげる。何か恐ろしいものに焦るような、狂気に魅入られたようなその表情はどこか恐ろしく感じる。

きつと心配性の彼女にはこの幸せな世界が紛い物のように感じるのだろう。だから精神を病んだかのように異様に垣根を心配する。

「垣根くんが幸せじゃない世界になるのが怖い。あたしのせいで恋が破れたら一生後悔する。だからちよつとでも可能性があれば幸せになれる方向にしたいの。彼女がいるんだったら邪魔しないように見守ってたい、距離を取っておきたい。そう思っちゃう」

この夢が崩れるのを恐れて、この世界が終わるのを恐れて、彼女はいつも垣根のそばにいた。

何とも健気で恐ろしい生き物なんだろうか。

しかしその健気さは垣根にとって邪魔なものでしかなかった。

「あー、つたく、お前は本当に馬鹿だ。バーカー!」

「な、ンあ!」

思いつきり彼女の頬を両手でつねると、大声で罵倒とも呼べない言葉を叫ぶ。幼稚な言葉で彼女を責め立てても気は収まらず、彼女につられて本心を喚く。

彼女の言葉に正当性なんてない。
彼女の思いに思いやりなんてない。

甘え下手な彼女に思いつきり衝撃を与えたかった。

「俺の幸せを考えるのは俺だ。んで、お前の幸せも考えるのがお兄ちゃんだ。つまり、お前の考えていることやら行動は無意味だ」

考えすぎな妹に、兄としてできることは限られている。けれど彼らにはそれで十分だ。

紙切れ一枚で捕まえた妹を籠の中で生かすため、飼い主は優しく声をかける。

奇妙な腐れ縁をこんなところで切るつもりは毛頭ない。

「もうちよつと俺を信じて甘えろ年下。恥ずかしいなら妹らしくお兄ちゃんの陰に隠れてろ」

「なにひよれ、ふあかにしてひゆ？」

「馬鹿を馬鹿扱いして何が悪い？」

少し顔色が良くなった妹から手を離し、見下すように兄は笑う。いつも通りの兄妹の軽口に彼らは怒りつつ、楽しげに目を細める。

「……今日晩御飯作らないから！」

「えっ、おい、それは許されないだろーおい！」

「お兄ちゃんうるさい！」

茶番は永遠に続く。

彼らが辞めるまで。

その事実には彼らは安堵し、確認し合う。平穩が崩れぬように。

馬鹿らしい兄妹喧嘩は第二章へと向かう。

それが彼らの日常だった。

整頓された研究室は無残に破壊され、帰ってしまった兄妹の足跡が残る。

「……………え？この惨状は誰か片付けるんスか？」

残された少年はひとり壊れかけの蛍光灯の下で呆然と立ち尽くす。

「貴方、確か念動使いサイコキネシストでしたっけ。あとはよろしくお願いしますね」

「ふ、不幸だアア——！！！」

優しく肩に手を置かれ、胡散臭い笑みを見せる研究員に今日一番の大声をあげ、静かな部屋に汚い泣き声を響かせた。

この茶番は、巻き込む全てを不幸にする。

非常に厄介で、傍迷惑な兄妹の後始末に追われ、誉望万化はひとり啜び泣いた。

恋愛長編：キミのあいどる！

act1：それはすれ違いから始まった

『絶対能力進化シフト計画』

それは一人の能力者を進化のその先へと導く暗く濁った学園都市の実験のひとつ。

二万ものクローンを殺害した果てに、一人の怪物が神になるための計画。

そんな悲惨で恐ろしい実験はある不幸な少年の拳によって頓挫した。

ヒーローの拳が学園都市の闇を一つ薙ぎ払い、一人の怪物を救い上げたのだ。

クローンは自由を手に入れ、怪物はヒーローの夢をみる。

闇の深いこの学園都市で彼は光を示した。

だが学園都市の研究者たちは諦めなかった。

知見を集め、計画をアップグレードし、この実験を継続するための知恵を求めた。

そしてひとつの答えに辿り着く。

裏で進化するのが無理なら表で進化すれば良い。

七人しかいない超能力者の面々をアイドルとしてデビューさせ、ファンの中で進化を促す。

それが「絶対偶像進化計画」の始まり。

そして、意図せず生まれたとある男女の恋愛譚の始まりでもあった。

長い廊下の真ん中。

超能力者^{レベル5}の皆様、と簡潔に書かれたプレートが目立つ楽屋で彼らは騒がしく出番を待つ。

リハーサルは終わり、本番までのお昼休憩の時間で少年少女らは不満げに感情を吐露していた。

「なに!? 第七学区で熊が暴れている!」

程よい筋肉と聖人君子のような性格が印象的な黒髪の少年は一人携帯と睨み合い、何やらカチカチと返信を返す。そのまま猛スピードで楽屋から飛び出すと、何か雄叫びをあげながら走り去って行った。

ハチマキにジャージ、見るからに運動が大の得意な男、超能力者^{レベル5}序列七位の削板軍覇は今日も今日とて人助けに精を出していた。

「はあー、暑苦しい人達ばかりでやんなっちゃうわあ」

「女王、アイステイーを入れました」

その様子を面倒だと言わんばかりに眺める長い金髪の美少女は第五位、食蜂操祈。

長身痩躯でグラマラスな体つきの彼女は、髪を綺麗な縦ロールに巻いたマネージャー兼忠実な家来である帆風潤子から冷たい紅茶が注がれたグラスを受け取る。

女王の呼び名通り、中学生とは思えない貫禄とカリスマを持つ彼女は一人お付きとともに優雅な昼を過ごしていた。

「なあんで楽屋がこのアホ共と一緒になんだよ浜面アアア!」

「ひいひい!!」

「うっさいわね! 私だって嫌よ!」

「お姉様!」

静かな食蜂たちとは打って変わって怒鳴り声をあげる茶髪の美女は麦野沈利。第四位に君臨する彼女の視線の先には罵声に萎縮するマネージャーの浜面仕上の姿があった。

そんな彼を哀れに感じたのか、それとも騒がしいのが嫌なだけなのか、短い茶髪を揺らして少女が割って入る。

青白い火花を頭の周りでビリビリと発生させ、彼女は低い声で獣のように麦野を睨みつけた。

相手は格上の第三位。超電磁砲レールガンの名で有名な超能力者、御坂美琴。心配そうに見つめるマネージャーであり後輩の白井黒子が見守る中、一触即発の空気は徐々にしぼんでいく。

力量の差に怖気付いたのか、フリルが沢山詰まった衣装で仁王立ちする姿が面白いのか、どちらかは分からないが、威勢のいい彼女を鼻で笑い麦野は口を閉じた。

しかし騒がしきは止まることを知らない。

大声で賑やかに言葉を続ける二人の少年はこの部屋で一際目立っていた。

「何が悲しくてテメエと同じ楽屋になんなきゃいけねえんだよクソが」

「それはこっちのセリフだクソツタレ。テメエみてエな騒がしいのと一緒にナンか誰が好き好んでなるか」

罵倒し合うのは見た目が全く違う二人の少年。

一人は百八十を超す長身と美貌を兼ね備えたガラの悪い少年。

もう一人は白髪と赤い目が特徴的な涼し気な二枚目顔の細身の人物。

王子様のような煌びやかな衣装に身を包んだ二人のアイドルが、その容姿に似合わない罵倒を口にする。

第二位、垣根帝督。

第一位、一方通行。アクセラレータ

いがみ合い、罵声をぶつけながら彼らは喧嘩とも言えない罵り合いを続ける。

「はわわ、止めないと！ってミサカはミサカは飛び出してみたり！」

「貴方に飛び火するだけよ、やめておきなさい」

その様子を小さなマネージャー二人、ラストオーダー メジャーハート打ち止めと心理定規は困ったように眺めていた。

しかし大事な人である一方通行の様子を心配そうに見つめる打ち止めと、またかと呆れる心理定規の視線に気がつくことも無く、彼らは罵声を飛ばし合う。

「つーかさっきの収録のセリフなんだよ。俺のセリフ丸パクリじゃねえか、自分で決め台詞を考える脳もねえのかよ」

「テメエこそ、その衣装。パクリじゃねえか。帝国の王子様ってか？似合わねえな。筋肉つければア？ガリノツポ」

「それはテメエだろ。チビのくせしてなんだその衣装は。王子様って……ふはっ！俺の隣に立つと哀れな低身長がさらに際立つなヒョロガキ」

「十二センチ程度で何いばってんだ。身長ばっかで脳みそに栄養いかなかったからって、馬鹿な価値観おおっぴらにすんなよクソガキ」

「喧嘩売ってんのか？」

「テメエが売ったんだろオガ」

加速する罵声に声も大きくなっていく。本格的に喧嘩が始まりそうな緊張感の中、弾けるようにドアが開いた。

「お弁当持ってきたよー！」

一際大きな声で脳天気な少女が朗らかに楽屋のドアを開く。

先がピンクのグラデーションで彩られた肩より長い金髪と麦野と食蜂に並ぶ巨乳。グラマー体型と一昔前なら言われていそうな少女は体に似合わない幼い顔を化粧で覆い、白い衣装で身を包んでいた。

「ねえ、わたし別で買ってもらってたんだけど、貰ってきたあ？」

「食蜂ちゃんのはこっちの袋に入ってるよ、お箸しかないけど大丈夫？」

「大丈夫よお、ありがとね☆」

「どーいたしまして」

大きなビニール袋を持って楽屋に來た彼女はほぼ爪先立ちのバレエブーツから足音を響かせ、近くの食蜂に持ってきた弁当を手渡す。

元々の長身と異様な高さのヒールで見下ろす彼女はいつものようににこにこにこにこにこ、朗らかな笑顔を浮かべて他の人にも弁当を配り出した。

「で、麦野ちゃん鮭だよな?」

「浜面に行かせたつてのに、相変わらずパシリやってんな」

「悪いな、取りに行かせて……」

「挨拶で回るついでだから、気にしないで。みんな忙しいだろうし。御坂ちゃんの分これね」

「ありがとう天羽先輩」

他のアイドルがフリルが多い可愛い路線やら、パンクロックの甘辛系の衣装やらで身を固める中、真っ白で無機質な衣装を着る彼女は少し浮く。

防寒性の高いジャケットとノースリーブへそ出しのシャツ、短いズボンはどれも真っ白で、所々から垂れ下がる紐は鮮やかなグリーンで染められている。

どこか排他的で無機質。SFチックといったらそうかもしれない。

三次元のアイドルの中で、彼女だけが二次元にいるかのような、異質な偶像^{アイドル}だった。

「はい、おふたりさんの分」

鮮やかなグリーンを翻し、彼女は優しく一方通行と垣根の間に割つて入る。花が香る笑顔で弁当をふたつ渡すと、一方通行はとても嫌そうに眉をひそめて舌打ちを響かせた。

一方通行は彼女が嫌いだった。

「どオモ。第六位はよく働くことで」

「どういたしましたして。ちゃんと食べるんだよ?」

第六位、天羽彗糸。

柔らかな笑顔の裏に見える狂気に触れたくなくて、一方通行はその微笑みから目を背ける。

「あつ、一方通行、話はまだ終わって——!」

弁当を受け取り、その場から離れようと背中を向ける一方通行に噛み付こうと口を開く垣根に彼女の手が触れる。

その体温に肩を大きく震わせると、開いた口からは音のない息しか出なかった。

「また喧嘩してるの?」

「……うるせえ」

「ダメだよ、そうやって喧嘩ばつかしてると色んな人が心配させちゃうんだから」

「テメエに言われる筋合いはねえんだよ。どっか行つてろ」

困った顔をして上から覗き込み、天羽は垣根の衣装を掴む。

赤と緑の不気味な瞳に吸い込まれるようで、垣根の顔がみるみるうちに歪んでいった。じんわりと伝わる彼女の熱が嫌だった。

「そっか、ごめんね。お弁当いらない？」

「要らねえとは言つてねえ」

「なら一緒に食べる？」

「勝手にしろ」

「じゃあ一緒に食べようか」

熱を振りほどくように強引に弁当を奪って垣根は彼女から視線を逸らす。

逃げるように彼女から離れていく垣根の姿を困った顔で追いかけて、天羽達は二人楽屋から立ち去った。

「ほんと、垣根さんって天羽先輩のこと嫌いよね。先輩も構わなきやいいのに」

「超能力者が仲良くしてるのもおかしいだろ。天羽の頭が御花畑なだけだ」

垣根帝督と天羽彗系は不仲だ。

「……どうかしらねえ？」

それが傍から見た彼らの関係性だった。

収録も全て終わり、一日の終わりが近づく。

第七学区の大きな病院、その地下にある研究室で天羽慧糸は湿った髪を乾かしながらため息を吐いた。

「怒らせちゃったよねえ……」

自室として冥土帰しからあてがわれた一室はパステル調の可愛らしい家具やぬいぐるみで統一され、淡い色合いの彼女に良く似合う。アイドルとしての彼女のイメージ像とはかけ離れた室内で、赤いTシャツ一枚だけを身につけて深くベッドに横たわると、さりげなく時計をみた。

夜の九時。客人が来るには少し遅い。

(準備したんだけどな)

しかしため息をかき消すように誰かが優しくドアを叩く。

コンコンコン、三回のノック。

部屋に来る客人は一人しかおらず、思いがけない出来事にベッドから立ち上がり、下着を着けていない無防備な姿のまま急いでドアへと走る。

「いらつしやい！」

「……よう」

勢いよくドアを開けると、茶髪がかすかに揺れて七センチ上の視線が彼女を見つめた。

「垣根くん、今日はもう来ないかと思ってた」

「悪かったな。連絡入れたかったが携帯忘れたんだよ」

「あー、それなら納得」

夏は始まったばかり、外気との温度差のせいか頬がほんのりと赤い彼を涼ませてあげようと部屋に上げると、ローテーブル近くのソファに座らせる。

お茶でも持つてくるかそのまま背を向けたものの、垣根はそれを止めようとシャツに手を伸ばす。

「慧糸」

「ん？どうかした？」

「これ、お土産」

彼はこの部屋に來ると途端に口数が少なくなる。持つていた大きな紙袋をぶつきらぼうに手渡し、眉をひそめつつ彼はソファに背を預けた。

「昼、色々言い過ぎたから」

「……昼？」

「バレないようにとはいえ、素っ気無すぎたからな。いいから受け取れ馬鹿」

「はあ……そっか」

よく分からないが、垣根が押し付けた上品で高そうな袋を受け取って困ったように眉を八の字に下げる。

なにか気を使わせてしまったようで申し訳ない。

紙袋から大きな瓶を取り出し、テーブルの上に置く。有名な飴らしき、中に入っていた薄いパンフレットには色とりどりのキャンディや金平糖が印刷されていた。

昼のお詫びとはなんだろうか。

一緒にご飯を食べなかつたこと？
手を振り払つたこと？

そんなこと、どうだつていいのに。

酷く扱つても壊れないというのに。
傷つくこともないと言うのに。

このキャンディが何を意味するかは分からない。
分かるのは彼が優しいということくらい。
でも、それさえ分かれば十分だつた。

「ありがとう、垣根くんは優しいね」

「……そう言つてくれんのはお前くらいだよ」

彼女たちは、いわゆるそういう関係だつた。

男女の仲、恋仲、彼氏彼女。

呼び名は沢山あるが、とにかく彼らは他人には感じたことの無いトキメキを、ドキドキを、互いに感じている。

……はずだ。

「それで……今日は泊まるの？」
「っ！」

男女の仲。それはつまり性行為を行う関係性ということでもある。彼女の言葉はそれを暗に示しているのは言うまでもない。

付き合ってから一ヶ月ほど。

彼女らは体を重ねたことがなかった。

「準備はしてるけど……病院だし、検査入院つてことにすれば体裁は保たれるってゆーか、その……」

隣にどかっと座り、わざとらしく彼の腕に絡みつく。

下着をつけてなくてよかったと脳の隅っこで考えながら、あざとい言葉を計算する。

どうすればこの男に求められる？

どうすればこの体は望まれる？

どうすればこの身を使ってもらえる？

心を支配するのは恐怖と不安。

彼の望みを叶えたい。

彼を幸せにしてあげたい。

この体でできることは全てしてあげたい。

それが自分のやるべきこと、天羽彗系にしかできないことだから。

「……お前、この下何も着てねえだろ」

「それが？ どうせ脱ぐなら同じでしょう？」

「俺はそうは思わねえけどな」

不意に腕を握られ、彼の黒い瞳と目が合った。

とても怒っている。怒りしか感じない濁った瞳に少し恐怖を感じるも、押し付けた胸は彼の腕を離さない。

柔らかい肉、甘い匂い。嫌いだという男はいない。

けれど垣根はいつも彼女に冷たい視線を向ける。

笑わない。笑顔を見せない。

不機嫌そうに視線を逸らして、顔を見ないように立ち上がる。苛立った素振りで優しく体を離す彼の顔は見えなかった。

「え、どこ行くの?」

「帰る」

「は!? えっ!? な、なんで?」

「今のテメエとそういうことはしたくない」

背を向けたまま彼はドアへと向かう。

冷たい声が可愛らしい部屋に響き、鼓膜の奥で反響する。

怖い。

求められないことが。

認められないことが。

望まれないことが。

それは自分の存在理由を否定されているのと同じだから。

「どう、どうして? なんで? 巨乳は嫌だった? 変えるよ? 身長? それとも髪色? ねえ、教えて、次までには変えるから!」

「……そういうところだ、馬鹿」

縦るように手を握ろうとするも、優しく振りほどかれて彼はついにドアへ辿り着く。

振り向くことも無く、彼は扉を開き小さく別れを呟いた。

最後まで視線は交わらなかった。

「おやすみ」

「あ……」

キスはしないんだ。手も繋がらないんだ。

望まれないことが屈辱で、辛い。

誰かのために生きることが生きている理由なのに。

体どころじゃない。

手も、唇も、吐息も、体温も何もかも、彼女らは重ねたことがない。

もちろん感情も、重なることは無かった。

「……なんでよ」

付き合うって、そういうことですよ。

道具として扱ってよ。

そのためのあたしですよ。

あたし、なんだって出来るのに!

「垣根帝督は天羽彗糸が嫌い。
少なくとも、彼女はそう思っていた。」

「早かったですね」

「ああ、出してくれ」

病院の駐車場、真つ暗な夜の中で黒い高級車がライトをつける。

中で待機していた垣根の部下、誉望万化はアクセルを踏みゆつくりと車を発進させた。

「暗い窓の外の景色を後部座席で眺める垣根の長いため息と、エンジン音だけが響く。この静かな緊張感が運転手にとって恐ろしいようで、ちらちらとバックミラーで確認している。」

足を組み直し、眉間に皺を寄せて窓を睨む姿はたとえ眉目秀麗な少年と言えど、運転する部下を怖がらせる程度には恐ろしいのは確か。イライラしている。

他人が見たらきつとそう見える。

（今回の色仕掛けはお粗末だったな）

しかし態度とは裏腹に彼の脳裏にあるのは先程の会話。体温。感触。

腕に押し付けられた柔らかい肉の塊が頭から離れない。たった一枚の薄い布で隠された温かい少女の体の感触が消えなかった。

いつもそうだ。彼女と喋る度、彼女の部屋に入る度、よく分からない緊張が垣根の体を駆け巡る。

いつもと違う一面とか、ギャップとか、谷間とか、そういうものに男は基本弱いのだ。

素っ気ない態度を取ってしまった後悔とか、今日も我慢できて偉いとか、色々な反省やらなんやらがああ柔らかな胸の感触と共に押し寄せて、つい眉が寄る。

「はあ……クソが」

「っひえ、俺何かしました?」

「あ? なんでもねえよ。こっちの話だ」

再び足を組み直し、垣根はぼんやりと移ろいでいく景色を眺めて目を伏せた。

あの柔らかい体を感じる劣情をも上回る虚しさや苛立ちが垣根の心を燻っていた。

(……ああやってねだられるのは興ざめなんだがな。あの馬鹿)

垣根はちゃんと分かっている。彼女が何をしたいのか。何を望んでいるのか。

そして彼が何をすべきなのか。

しかし恋人である天羽隼系には少し問題があった。

それは彼女の精神の問題。思考の問題。

彼女は、彼に愛されていないと思っている。

この関係は利害の一致で生まれたものだと思っている。

たぶん自己肯定感の低さと彼女の境遇から、その考えが来ているのだろう。

だから体を使って救おうとする。

能力を使って垣根の望みを叶えようとする。

それが彼女にしかできないことで、今まで多くの人にしてきたことだから。

自己犠牲。

自己陶醉。

彼女は彼の愛情を理解出来ず、沼の中でもがき続ける。

そんなのムカつく。

自分が優位に立っているなんて思うな。

幸せにする立場にいると思うな。

(どうやってたら、あの馬鹿を治せるんだろうか)

深く目を瞑り、揺れる車に深く体を預ける。

いつか彼女がこの重い愛を理解する日が来るのだろうか。

乙女の姿を見せる時が来るだろうか。

これは難易度EXTRMEの頭脳戦。

そして少女が乙女になるまで、少年が彼女を嫌うまで続く育成ゲー

ム。

彼らの駆け引きは、アイドルになっても終わらない。

act 2：あなたのためになりたいの

天羽慧系の異常な思考を知ったのはアイドルになる少し前、愛の告白をした日の事だった。

好き。

付き合つて。

そんな言葉をぶつきらぼうで短い、垣根らしい文章で伝えただけ。そこにそれ以上の意味はないはずなのに、真夜中の公園で、街灯をスポットライト代わりに佇む彼女はどこか冷たい笑顔で笑っていた。「あたしとセックスしたいの?」

言葉に隠さず彼女は淡々と言い放つ。

街の灯りが美しい深夜二時。セーラー服を翻し、彼女はいつも通りの笑顔を見せる。

「……はあ!!?」

「何驚いてんの、そういうことでしょ?」

笑うと目が細くなる可愛い癖が今日はかりは恐ろしかった。

「だって、あたしにはそれしかないもんね」

「……お前はいつもそればっかだな」

「そう?」

なんの疑問もなく、話を続ける彼女は正しく狂人と表現するにふさわしい異常者。

第六位、肉体ドミニオンの支配者。

彼女は自分を含めた全ての生き物の肉体に干渉し、支配できる神様のような人。

その能力は医学の分野はもちろん、対人の分野で輝く。

特に性的な意味での。

だって彼女は完璧なのだ。

男が望む理想の女にも、女が望む男にもなれる肉体の柔軟さ。

床上手な処女、経験豊富な男、そのどちらにもなれる特異性。

そして何よりも、彼女に触れられずとも感じたことも無い快感を生み出せる能力。

彼女の力は本能を刺激する。欲求に訴える。

彼女は中毒性の高いジャンクフード。

手軽にドーパミンを出せる合法的な麻薬。

それが彼女に求められてきたこと。

彼女が誰かのため出来ること。

存在理由。

「でも、そうか。あたしこの体なら垣根くんを幸せにできるんだ」

「んなわけねえだろ。そんな理由で俺がお前を選ぶと思うか馬鹿」

「思うよ。だって、あたしみんなに嫌われてるもん」

だから彼女は愛を素直に受け取らない。

垣根の感情を決めつけて、突き放して、自分だけが愛情を与える側になる。

「垣根くんも嫌いでしょ?」

「嫌いなら好きなんて言わねえよ」

「どうかな?人は案外打算的だ、あたしみたいにね」

その異常な思考回路が気持ち悪い。

不気味な感覚をもつ彼女が気色悪い。

「それに、普通の人はこんなデカくて可愛くない女選ばないんだよ垣根くん。選ぶとしたら性行為目的くらい」

「本当にそう思ってるならテメエは大バカ野郎だな」

「うん、あたし馬鹿だから」

彼女はコンプレックスの塊だ。

自分を惨めだと思って、だから求められる分野で勝負を仕掛ける。

認められたいから。求められたいから。自分という存在を認識できるように。

「でもね馬鹿でも分かるの。あたし、垣根くんが好きって。幸せにしたい、この体で垣根くんを笑顔にしたいの」

可哀想な女。

気持ち悪くて、気色悪くて、くだらない思考に囚われた馬鹿な少女。

そんな少女が好きだった。

「大好きだよ、垣根くん。あたしをいっぱい使って、いっぱい幸せに

なっつね」

恋とは障害があればあるほど燃え上がる。

それは事実である。

「……俺も、同じくらい好きだぜ」

上から目線の大胆な感情の告白に彼女は一体何を思っただろうか。

この日から、二人の戦いが始まった。

彼女は体を武器に誘惑する。彼の幸せのために。

彼は理性を盾に彼女を愛でる。彼女の幸せのために。

そして今日、いつも通りのアイドル生活が続くとある七月のこと。

戦局を大きく変える風が吹いた。

「超能力者でドラマだあ？」

集められたのは超能力者の面々とそのマネージャーたち。

簡素な作りの会議室で向かい合って、彼らは手元の資料に目を落とす。そこに書かれたのはとあるドラマ企画の資料。長つたらしい文で企画内容とスケジュールが書かれた資料には、珍しく超能力者全員の名前が印刷されていた。

「超能力者だけでドラマって、しかも恋愛モノなんて……無謀でしょ」
「このメンツで集まって恋愛ってなんかのギャグだろ」

企画内容は恋愛学園モノのドラマ。一クールで終わる原作無しオリジナル作品で、超能力者たちがそれぞれ主人公とヒロインの恋愛に巻き込まれるのがメインのストーリーラインとなっている。

超能力者全員が恋愛をする訳では無いが、それでも協力やら協調やらが苦手な超能力者たちには荷が重い。

「何より主役がなあ……」

主人公とヒロインの欄にある名前に全員が気まずそうに目を向ける。

「……あたしたちかあ」

ヒロイン役に天羽慧糸。主人公役に垣根帝督。

簡潔に、簡素な字体でそう書かれていた。

「えーっと、『かわいいコギャルと学校一のイケメンの恋愛モノ』……なんとまあ、具体的な。確かにこの中だとあたしたちくらいしか当てはまるのいないけど……あたし背高いからいい感じの画面作れないと思うんだよね……」

「そっじゃねえだろ」

隣合つて座る彼らの嫌そうな顔に場の雰囲気が一気に冷める。

彼らは他の超能力者^{レベル5}にとっては犬猿の仲のめんどくさい奴ら、恋愛ができるような人達とは認識していない。

「やらなくてもいいけど、女優業は初体験だし、やって見たらどう?」「でもテレスティーナさん、可愛い系はあたしの売り込みコンセプト、路線が違うっていうか……」

「コンセプトより認知でしょ?これで色々な幅で活躍できるって知ってもらえれば新しい仕事につながるわ」

天羽のマネージャー、テレスティーナ⇨木原⇨ライフラインの言葉に少女は口を閉じると、垣根の方にちらつと視線を動かした。

その視線が垣根にチクチクと痛みを与えて抜けない。

この関係は絶対にバレてはいけない。それは双方共通で理解している。だが仕事でそういうことをする場合はどうなのか。

有名な監督、有名な脚本家、おかしいほど豪華なスタッフと豊富な予算。成功する確率が高いこの企画を蹴るのはこれからの仕事に支障が出るかもしれない。

けれど出るとしたら垣根と天羽の関係が発覚するリスクが跳ね上がる。

どうしてほしいか彼女は聞いていた。

垣根が第一の彼女だから、垣根のしたいようにさせる。発言を待

っ。

それが分かっているから、少し面倒だった。

「でも人選ミスじゃない？まだ天羽さんと削板のほうが仲良いと思うけど」

「あ？」

「なんであんたが怒ってんの？」

御坂の言葉に若干苛立ちつつ、垣根は隣に座る天羽のつむじを眺める。

恋愛モノ。ドラマ。

確かに関係がバレるのは困る。しかし反対に考えればこれはチャンスではないか。

アイドルである彼らは表立って恋愛が出来ない。

だから逢瀬も病院という疑われる余地のない場所で行なっていた。病院なら能力の検査と言えば納得され、パラッチされても忙しいから特別に夜間で検査をしてもらうるとか言えば炎上はしない。何より彼女の保護者^士は味方であり、かなり融通が利く。

逆に言えば、彼らは病院の中でしか会えないし、本心をさらけ出せない。

ドラマという言い訳があれば、堂々と二人でいられる。

さらに言えば、それがきっかけで仲良くなつたというストーリーが作れる。

なにより彼女に恋愛的な感情を理解してもらえるかもしれない。常識的な恋愛の範囲を知れば、きつと考えも改まる。

かつこいい彼のまま、彼女にこの思いを理解してもらえる。

「……まあ、お前がヒロインだろうがなんだろうがいいぜ。受けてやるよ」

静まり返った会議室で一番に口を開いたのは垣根だった。

交際がバレる危険性なんて、リスクとしては小さすぎる。

彼女に恋愛を理解してもらうため、自分の欲求を満たすためならそんなリスクは無いに等しかった。

「分かった、垣根くんがそういうなら……やろっか」

「……おう」

その答えに満足したのか、優しい笑顔で頷いた。垣根の目を見て優しく笑う姿は確かにヒロインらしい。

他の誰がなんと言おうと、垣根にとつてこの配役は完璧だった。

「他の方は？降りる方がいるなら今のうちよ」

「はあ……やるわよお。天羽さん一人じゃどんなオオカミに食べられるか分からないしい？」

「いいのですか？女王」

「いいわよ。どうせなら衣装提供もしちやおうかしら？帆風、交渉よろしくね☆」

「分かりました、直ちに」

垣根たちが承諾したのが効いたのか、渋い顔をしていた面々がため息交じりに参加してくる。

面子は揃い、撮影は今月末から始まる。

どんな姿が見れることになるのか少しの期待を抱きながら、今日の会議は終了した。

垣根と天羽は風のようにすぐさま帰宅し、残っているのは五人の超能力者^{レベッル5}とその付き添い。

企画にもう一度目を通したり、帰る支度をしたり人それぞれだが、彼らの話題はずっと変わらなかった。

「にしても、垣根さんが承諾するとは思わなかったわ」

「私情よりもビジネス優先にただけだろ」

「計算高い方ですの。嫌いな方と恋愛模様を織り成すなんて、私なら

お断りしますわ」

御坂とそのマネージャーの白井、そして近くで企画書を読む麦野は先程の会議での話を蒸し返す。

一方的に天羽を嫌う垣根が彼女の相手として恋愛モノのドラマに主演するなんて、それほどインパクトある話だった。

けれど、その話に耳を傾けていた一人はため息交じりに顔を顰める。簡易な椅子から立ち上がって冷たい目線を送る食蜂には、彼女らの話が信じられなかった。

「……本当にそう思ってるの?」

「何よ急に」

本当にそう思うのか?

毎回毎回天羽の隣を死守して、他の男と喋らないように導線を引いて、喋る度に耳を赤くして視線を逸らして、ずっと視線で追って、嫌な態度を取るくせして絶対に嫌いと言わない垣根を見て、本当にそう思うのか?

彼らの演技に騙される他の超能力者^{レベル5}の姿がとても滑稽で、思わず鼻で笑ってしまう。

あんなにも分かりやすいというのに、世間も、目の前の格上たちも、全員騙される。

「なんでもないわよお、おこちやま御坂さん」

本当に、真剣なんだなと思わずに居られない。

少しだけ、この場にはいない二人が羨ましかった。

「喧嘩? 買うわよ?」

「やーん御坂さんったらこっわあーい! じゃ、そゆことで☆」

「あ、女王! お待ちを!」

うるさい同級生を無視して会議室を後にする。後ろを付いてくるマネージャーと共に廊下を歩き、その先で待っていた友人の姿に可愛らしく笑った。

「あら、待ってたの?」

「まーね。話したかったし」

「全く。帆風、ちよつとここで待ってなさい」

待っていたのはヒロイン、天羽擘糸。

彼女らは友人だった。

「この企画、食蜂ちゃんの案でしょ？」

「なんの話かしらあ？」

「このレベルの製作陣を集められるの、限られてると思うよ？」

二人壁にもたれかかって仲良く言葉を交わす。

似たような見た目と似たような能力。考え方はまるで違うのにある程度仲が良いのは親近感ゆえか。

「……安心なさあい、別に何か企んでるわけじゃないから」

「分かってるよ、食蜂ちゃんは良い子だから」

「わたしのことは口説かなくても良いのよお！もう！」

だが超能力者には珍しく人当たりの良い天羽によくかき乱される。アメリカ仕込みの直球的な褒め言葉は時々人の心理に踏み込み、簡単に絆してしまう。

それが彼女の良いところかもしれないが、同時に悪いところかもしれない。

アメリカよろしく彼女が囁く愛は挨拶と同じ。一体何人がそれの間に受けてきたのか。

「いい？お人好しでお馬鹿な天羽さんには分からないでしょうけど、今の所あなたの幸福力を願ってる人間が二人はいるの」

「え、でもうちの親は放置気味だったんだけどな」

「違うわよお！わたしと！垣根さん！よ！」

「そうなの？」

「そうなのよお！」

あまりにもお人好しで、あまりにも危機管理能力がなく、あまりにも一方的な考え方の彼女の呆れ、肩を揺さぶるように顔を見つめる。

「おぞましい瞳の色が眩しい。」

温かみのない瞳が怖い。

「いい？あなたには垣根さんと絶っつつつつ対幸せになってもらうんだから！」

その瞳を溶かすためなら、食蜂操祈は目の前の少女の恋路に手助け

るかしらあ？」

その顔をもう見たくなかった。

どんな手を使ってでも、目の前のヒーローを死の淵から引き上げたかった

「わたしは『心理掌握』超能力者判定の精神系能力を持つてるわあ」

脳の水分を操ることでも人の心を制御する能力。

血圧が下がり、水分のバランスが崩れた状態ではどう転ぶか分からない。

無理やり水分を操作して脳がどう影響を受けるかなんて、どんなに考えて、演算しても多様な結果がある。

もしかしたら半身不随になるかもしれない。

もしかしたら喋れなくなるかもしれない。

もしかしたら、もしかしたら。

もしかしたら、もう食蜂操祈を認識してくれないかもしれない。

大きなリスクと、大きな命。

それでも、どちらを取るか決まっていた。

「それを使えば——」

しかしその言葉を告げる前に音がなる。救急隊員の無線に通信が入る音。

すぐさま繋いで、決まりの言葉を告げて、何か驚いたように隊員は振り向いた。

嬉しそうな、安堵したような、この緊迫した状況下で見せるような顔ではなかった。

「安心してください！彼女が来ています！」

「——彼女？」

「そう、彼女！」

隊員が叫ぶように告げた言葉にぽかんと言葉が奪われる。

「身体の全てを操る支配者、白衣の天使。彼女の前には死体の一つもない、生命の母」

自信と、憧れと、尊敬を込めた隊員の瞳に誰かの姿が写った。

静かな学園都市にフラットシューズの音が響く。

血の匂いをかき消す甘いラズベリーの香りが広がって、暗い世界に光が灯った。

「超能力者^{レベル}の一人、天羽彗糸、その人です」

眩しい金と甘い桃色のふわふわとしたポニーテール。

パステルピンクの優しいワンピースとナースキャップ。

高い背と女性的な体。

そして荘厳な赤と緑の混ざった異様な瞳。

真っ白な甘ったるい神様が、幼い顔で微笑んだ。

「その人が患者さん？」

その少女を前に死人などでない。そして、それはこのヒーローに対しても同じ。

血が引く。痛みが途絶える。息が整う。均一な心拍。

苦しげな顔はいつしか安らかになっていた。

「大丈夫よ、お嬢さん。少年は必ず助かるから」

眩しい笑顔が心を掴む。

天使なんて生ぬるい。食蜂操祈にとって、天羽彗糸はヒーローを救った女神だった。

その姿が食蜂の心臓に強く、強く残って離れない。

act 3 : 胃袋掴めというけれど



三時間目、家庭科室で甘いバニラの香りを漂わせて少女は頬に付いたクリームにそっと手を触れた。

金色とピンクのふわふわした髪と、ぱっちりした大きな瞳。

少し背の高い彼女は控えめにフリルが主張する薄緑のエプロンを翻して少年に太陽のような笑顔を見せる。

『ケーキを作るのに必要なのは可愛さっしょ』

泡立て器を握り締め、手で拭ったクリームを赤い舌で猫のように舐めた彼女は薄く目を細め、結んだ髪が揺れた。

『……可愛さだけで飯は食えねえがな』

香るバニラが食欲をそそる。だが目の前の砂糖菓子に触れる勇氣はなく、そつぽを向いてぶつきらぼうに突き放す。

甘い砂糖菓子なんて、触れただけで壊れてしまいそうで怖かった。



「カット」

監督の言葉でシーンは暗転し、演技は終わる。

学生服はただのコスプレに。

フリルの多いエプロンはただの布に。ガチャガチャと鬱陶しい耳元の飾りの音が酷くうるさい。

高い位置で結んだポニーテールが三角巾で固定され、足を覆うニーハイソックスも相まって窮屈だ。

天羽彗系のまま、天羽彗系らしくない服装で身を包む。もうすでにこの仕事から降りたかった。

「お疲れ様。案外演技上手ね、素人とは思えないわよ?」

「まー能力的にもこういうのに応用できるからねえ。感情なんて結局体温と筋肉の信号弄れば見た目だけなら取り繕えるってもんよ」

「便利よねえ、その能力。わたしにも分けて欲しいわ」

「それは食蜂ちゃんにも言えるでしょ」

ボウルと泡立て器を置いて自分の休憩所へ向かうと、テレステイナと食蜂操祈がニヤニヤとした笑みで彼女を待つ。

台本の上で繰り広げられる光景が新鮮なのか、楽しげな顔の二人の顔が少し癩に障る。

ついに始まったドラマ撮影。

八月の初めから今年の終わりまで行われる撮影はついこの間だから克蘭クインしており、今日は五日目に当たる。

演技をするのは初めてだが、ベテランに引けを取らない彼女の演技は人の目を引くようで、すんなりと休憩までつつかえることなく終わった。

「それにしたってコロコロ表情を変えるのは難しいものじゃない。褒め言葉は素直に受け取るものよ」

「ぶりっ子モードのテレステイナさんに言われてもなあ」

「あら、罵られる方が好きだった?」

「本心で喋ってくれるなら罵倒だってウエルカムだよ?」

近くにあったテーブルにもたれかかると、少し空気が凍えて静まり返る。騒がしいはずなのに、この場はひどく静かでいたたまれない。

メガネ越しに見えるテレステイナの瞳は暖かい海のように綺麗だった。

「……貴女のそういう所大っ嫌いよ」

「フラレちった」

眉を寄せてテレステイナは大きいため息をついてから顔を伏せ

る。

そんなに嫌だったか。

その姿になんだか申し訳なきと寂しさが天羽の心臓に押し寄せる。嫌われるのは慣れている。

けれど、面と向かつて言われるのは何度目だろうと心の裂け目からズキズキと痛みが溢れ出して止まらない。

この虚勢はいつになっても剥がれ落ちることがなかった。

「とりあえず、今日はわたしたちしかいないし、垣根さんのところに行ってきたら？あの人も待ってると思うわよお？」

「そう？すげー不機嫌そうだけど。演技以外じゃ目も合わせてくれな
いし」

「そんなわけないでしょ？好きな人の可愛い姿は直視できないものなのよ」

「垣根くん好きな人いるの？」

「……それは新手のボケかなにかかしら？」

この会話が面倒とでも言いたげに、食蜂は悩ましげに視線を落とす。何か言葉に詰まっているようだった。

苛立っていると肌で感じる。

どうしてただの事実確認に怒るのか。

付き合いはそこまで長くない。故に天羽には目の前の年下の少女が何に呆れ、何にため息をついたのかよく分からなかった。

「垣根さんは恥ずかしいのよ。今頃家庭的で可愛い姿にトキメキでも感じてんじゃない？」

「なわけ！今んとこあの子と視線合っていないよ？いつものことだけど……」

彼女の視線が移り、次は奥まったところで休憩をとる背の高い男に向く。

その視線の先には先程までイケメンフェイスで笑顔を作っていた主人公役、垣根帝督の姿があった。

ベージュのセーターにチェック柄のズボン、ついでに黒のエプロン。一般的な学生服に身を包み、腕に脱いだエプロンをかける彼は真

剣な眼差しで台本を確認している。

とてもかつこいい。

しかしその真剣な姿とは相反して、どこか不機嫌そうな横顔がどこか近寄り辛い。

喋りかけろと言われても、更に怒らせてしまうのではないかと躊躇してしまふ。

笑顔なのは画面の中でだけ。

機嫌がいいのは舞台の上でだけ。

それがいつものこと。今更疑問に思うことはない。

天羽彗系にとって、彼女らの関係性は利害の一致に生まれたものだった。

彼女は垣根のそばで役に立ちたい。

彼は彼女の体を有効的に使いたい。

関係性が変わったあの日に呟いた言葉は嘘。

好きだの、恋だの、天羽にとっては縁のない世界。

今になつてその常識が覆ることはなかった。

「なんでもいいから、あの人のところに行きなさい？あなたのアクションを待ってるのよ。自分から話しかけるのが恥ずかしいんでしようね」

「アクション？なんで？」

「なんでって、今回のステージ見たら分かるでしょお？」

しかしテレステイナたちはそうは思わないように呆れたように視線で教室を見渡した。

今回のドラマは基本的に学園都市の技術をふんだんに使ったスタジオで撮影を行なっている。

毎回セットが変わり、天羽にはよく分からない技術が使われているそうだ。

そして今回使用するの是一般的な学校にある家庭科室。どこの学校にもある設備を前に、答えは出なかった。

「……家庭科室、だ、よね？」

「あのねえ……好きな人に手料理を披露するなんて、恋愛モノじゃあ

るあるでしょ？ここは私用では使えないけど、今日も研究室来るんだから、晩御飯でも作ってあげればいいんじゃない？」

その答えは非常に簡単なもの。

キッチンで行う唯一のこと、料理だった。

今回の撮影も調理実習がメインの回、確かに家庭科室と調理はイコールで繋がる。しかし食蜂の答えはしつくりくるものの、どこか納得できない。

「でもアイドルに手作りとかマナー違反でしょ」

「恋人は別。ファンとは土台が違うのよお？」

「でも、そこまで料理上手じゃないし……第一それはあたしに求めているものではないんじゃない？」

「何言ってるの、大丈夫よ。垣根さん、なんだかんだ甘いから。マズ飯くらい文句言いながら飲み干すわよ」

料理は垣根が望んでいるものではない。

そんな誰にでもできることを、第六位の地位にいる女に求めるものではないはずだ。

彼の隣にいたい。そのためには役に立たねばならない。

自分にしかできないことで彼の役に立つ。そうすれば、彼の隣にさせられる。

料理に、掃除、そんな誰にでもできるものではその資格は得られない。

提供できるのは誰にも真似できない能力だけ。

能力と体を使った快感と理想でしか、彼を幸せにできない。

「でも、それだけじゃあたしは役に立てないから」

「またくだらないことを……」

「前途多難ねえ」

筒抜けの感情に女が二人大きくため息を吐く。

大袈裟に肩を落とし、テレスティーナは天羽を抱き締めるように腕を伸ばすと、くるっと向き合っていた体を後ろに回転させた。

「いいから行け。飯食う約束取り付けるまで帰ってくんない」

「えー……っ？」

軽く背中を押し出され、よろめきながら仕方なく垣根のもとへ足を向ける。しかしその足は酷く重い。

何を考えているか分からない思い人に話しかけるのは酷く億劫だった。

ひらひら、ニーハイソックスからはみ出る太ももの上で踊るミニスカート。

誰かの所有物だと主張する男物のネクタイ。

揺れるポニーテールを抑える三角巾と、乙女らしいエプロン。

仄かな甘い香りが男を惑わす。

(随分と珍しい姿だったな)

台本を確認しながら深呼吸を繰り返す。ヒロイン役の姿に最低な感情が生まれないようにゆっくりと、深く息をはいて空気を吸う、

しかし呼吸を繰り返す度に肺を満たす甘い空気が嫌という程先程の演技を思い出し、更に自己嫌悪が湧き上がった。

—— ケーキを作るのに必要なのは可愛さっしょ

ただの台詞で、彼女の気持ちとは全く関係ない。台本の上に書かれた意味の無い言葉。

そんな台詞をまるで本心のように言う彼女に、感情が浮かび上がって、強まっていく。

(まったく、一体誰だこのドラマ企画を考えたんだ？男のツボを理解

しすぎている)

台本を読み返しながら垣根は黙々と考える。

今回のドラマは学園が舞台の恋愛モノ。

天真爛漫で可愛い物好きの量産型地雷系ギャルのヒロインと、ちよつかいをかける文武両道ツンデレイケメンの主人公。

主人公に何とか振り向いてもらおうとヒロインが友人や家族を振り回して恋を成就させるストーリー。

適任じゃないか。

まさしくいつも見る元気はつらつな彼女に。

犬のようについてまわり、健気に愛を伝える。

たまに盛った犬のようになるが、まあそこはいい。

彼女の姿は今回の役に適任で、演技の上でも本人そのものと会話しているように感じてしまう。

きつと、本人とマトモな恋愛をしていたらこんな感じなのだろう。

本人すら分かってない朗らかで、無邪気で、無防備な笑顔で駆け寄って、普通の少女のように普通の幸せで、普通の青春を謳歌するの
だろう。

「垣根くんっ!」

そう、こんな風に。

「擘……天羽。なんだよ」

「台本、一緒に確認しようよ。ちよつとは時間あるし、だめ?」

「……………別に」

キラキラと曇りなき純粋な瞳で彼女は垣根を見上げる。

七センチ差の身長。

顔が近くて、吐息がかかる。疲れることがなく、会話を続けられる
身長差は今まで出会ってきた女とは全く違う。

「そっか、よかった!それでさ、今回のシーンなんだけど……」

「どれだ?」

台本と体を近づけると、揺れる髪が甘い香りを漂わせる。いつもは
下ろしている髪は一つに括られて、普段より肌面積が広い。

このシチュエーションでドラマを撮ろうと言った人は変態、それも

童貞だろう。

男が求める青春というものを理解している。

甘いバナナの香りに、調理という好き合う二人の共同作業、相手の作った料理。

撮影はもちろん美術スタッフの作ったハリボテや、撮影用の工夫がされた食用不可の料理が並ぶが、それでも二人で何かするということに恋する男子は興奮と緊張を覚える。

それは垣根も例外ではなかった。

(やつぱ同じ学校に転校すべきだったか。そうすれば不自然なく話せるし、あの三馬鹿から引き離せるし。だが一年下だからな……)

リアルなのにリアルじゃない演技に少しだけ落ち込みながら余計なことを考え始める。

色仕掛けとか、そういうことにはトキメキを感じない。

日常を感じるふとした愛に心惹かれる。

それはきつと彼が人を多く殺してきたから。

ずっと前から仮面を被って、上に言われるがまま、敵を殺して、血溜まりの中で生きてきたから。

だから光に恋焦がれる。

汚い欲じゃなくて、綺麗で、かつこい垣根帝督のまま、彼女と恋愛ごっこをしたかった。

「ねえ、ちよつと、垣根くん聞いてる？」

ふと声をかけられ視線をあげると、丸い目と視線が合った。

顔が近い。

彼女の香りで満たされて、まともな思考が出来ない。

「……テメエの声が小せえんだよ」

「あ、ごめんね」

香りに乗っ取られた意識のまま呟いた声は思っていたよりもぶつきらぼうで、冷たい。本心とは真逆の言葉で返答し、つい強い口調で返してしまうのが彼の癖だった。

(しまった、またやつちまった)

いつもそうだ。

彼女の前にすると口調が酷くなり、顔が強ばる。関係性を隠すためにはある程度仕方ないが、それでもやはり言いすぎてしまう。

仕方ないじゃないか。

可愛がると、愛してやると言っても、まともな恋愛経験がないのは垣根も同じ。

正直言つて、特徴と要素だけあげれば天羽は完璧な少女だ。

巨乳、高身長、かわいい系の子犬、性的な行動に対し理解があり且つ意欲的、そして一途。

男の夢やロマンを詰め込んだ完璧で完全な少女と言えよう。

そんな少女、たとえ何に対しても動じない精神力と、女に多少耐性のあるイケメンな垣根と言えど感情に乱れが生じる。

もつと感情を伝えたい。けれど、この瞳に見つめられると言いたいことが全て消えてしまう。

この感情を汚いものだと思解されるのが酷く恐ろしかった。

「……そのエプロン、お前が選んだのか？」

「え？あー、ほら、キャラ付けがかわいい系の子でしょ？だから衣装がこんなんばつかなんだよねえ」

どうにかして冷たい態度から挽回しようと定まらない視線で台本の上と彼女の姿を交互に見つめる。

ひどいことを言ってしまった、ならばプラスの発言をすればいい。

服装や秀でた部分を褒めるのも好印象。

控えめなフリルが可愛らしい薄緑のエプロン、同じ色の三角巾。耳元のピアスは魔法のステッキやリボンなど、少女らしい。

アイドルとしての彼女とは全く違う方向の可愛らしい衣装。

服装などなんだっていいが、それが似合うとは感じる。

冷たく言い放った分、感情を込めてそれを伝えるのが得策だろう。しかし、公の場で褒めるのもできず。

「……そうか、いいんじゃないのー」

「お世辞はいいよ、返答に困るから」

結局、在り来りのことしかいえなかった。

「世辞じゃねえけど」

「それよりさ、今日来るんでしょ？また準備しておくけど」
(話変えやがった)

垣根の褒め言葉など気にも留めず天羽は話を変えてニコニコと家庭科室のセットを見つめる。

少し困ったような笑顔なのが気になるもの、無邪気な笑顔に心臓がぎゅっと締め付けられるような感覚に陥って仕方がない。

彼女は垣根の言葉など意に介さない。

自己評価の低さ、自己嫌悪の強さ。

それをどうにかしなくては、彼女は乙女らしい反応を見せることなどない。

「……あのなあ、俺はお前と一緒に居ればいいんだ。変な色仕掛けとか考えてんじやねえぞ」

「今回は違うよ。でもそうして欲しいなら、ちゃんとするけど」

「いらねーから」

自己評価を上げたいからこそ、彼女は下手くそな色仕掛けで垣根の役に立とうとする。誰もそんなこと望んでいないというのに。

自分の能力しかないから、体しかないから。恋などされた経験もない乙女が編み出した最低な作戦。

腹が立つのは当たり前だった。

彼女にそんなことはさせたくない。

体だけで繋がってるとは思われたくない。

垣根帝督という男が下卑た欲で彼女に群がる男と同じだと思っ
て欲しくなかった。

「晩御飯、食べてくかなくて思っただけだよ。なんか作ろうかと思っ
て」

「へー、晩御飯……晩御飯？お前が作るのか？」

「宅配が良かった？」

「絶対エやだ」

だがその考えは杞憂のようで、天羽は垣根が思っていた言葉とは全
く違う提案をした。

晩御飯を作る。

彼女の言葉を賢い頭で解釈していく。
誰が作る？

天羽彗糸。

彼女の料理を知っているか？

知らない。

恋人に手料理を振舞ってもらうのは？

青春っぽい。

「行くから、なんか作れよ。絶対だぞ」

「……そんなにお腹すいてるの？」

答えはひとつしかあるまい。

ようやく、ようやく彼女も考えを改めたのか。

その喜びと初めて出来る青春らしい行為に人知れず感情が躍る。

どんな馬鹿でも、恋愛くらいは本能で分かってくれるものなのか。

ゲームがようやく終わった。そう感じて仕方がない。

今日はいい日だ。

しかしそんなことはなく、いつも通りの光景が広がっていた。

「お、まえ……それ……」

「あは♡このエプロン買取ったんだよねえ」

夜、彼女に呼ばれていつも通り病院の一室へ向かった先、扉を開ける彼女の姿に唾を飲む。

そこに居たのは肌色だった。

男を魅力する露出の高さで、彼女は楽しそうに垣根を出迎える。その姿に言葉が詰まった。

「ご飯にする？それともあたし？」

「二択しかねえのか」

目の前にいる彼女は撮影で使ったくすんだ薄緑のエプロンに身を包み、上目遣いで垣根を見つめる。

そう、エプロンを身につけている。

もつと言えば、エプロンしか身につけていない。

それは伝説の装備、裸エプロン。

服も着ず、下着も付けず、一枚の布で前しか隠さない男のロマン。頭が痛くなる服装に目の前がクラクラする。彼女がようやくマトモな恋愛観に目覚めたかと思っただけの勘違いだった。

「……帰る。そんな格好した女と飯なんて食えるか。ここはストリッブ劇場じゃねえんだぞ」

「えっ、たべないの……？」

すぐさま帰ろうとドアに背を向け足を踏み出す。だがその足は引つ張られたジャケットによって呆気なく止まってしまふ。

彼女の悲しそうで、寂しそうな声色に勝てる男は恐らくこの世に一人としていない。

もう勝負は決まっているようなものだった。

「……クソっ、食ったらすぐ帰るからな」

「ありがとうー！ほら、コロッケ作ったの！」

「こんな暑い日に揚げ物かよ」

ため息を吐いて渋々と部屋に入る。はち切れんばかりの笑顔を咲かせて招き入れる彼女の前で帰ってしまうのはやはり名残惜しい。

「食べて食べて！お茶入れるから！」

（犬だな、料理する犬）

子犬のように周りではしゃぎながらローテーブルへ引つ張ると、胃を刺激する油の匂いが鼻腔に広がる。

とても美味しそうな匂いに腹が鳴って、口の中が空腹感でどうにか

なつてしまいうそう。

促されるまま席につき、食器の前で橋を手に取る。

白やパステルカラーの可愛らしい食器と、ハーバリウムというのか透明な持ち手にドライフラワーが詰められたデザイン性の高い箸。

垣根にはどれも似合わないが、目の前の席に座った部屋の主にはとてもよく似合ってた。

「ごだわりが強いな、お前」

「そうかな？」

「花とかパステルカラーとか、なんだかんだ女らしいっつーの？」

淡いパステルカラーで統一された部屋で、金色と桃色の少女は輝きを放つ。柔らかい肌と大きな目をした彼女はシャープな衣装より、フリルやレースの衣装の方が似合うだろうに、いつも頑なにこういった趣味を表に出さない。

もったいない。

ポテンシャルを生かさないのは売り方としてはあまり良いとは言えないだろう。

温かい衣に箸を入れる。じゃがいもと牛ひき肉のコロッケを口に運び、静かに胃に落とす。

レストランほどでは無いが、母親が作るような愛に溢れる美味しいご飯だ。とはいえ垣根は母親の愛など知らないが。

けれど、愛のこもった料理とはこんな感じなんだろう。美味しくて暖かい。

「……ごめん、次来る時は使わないようにするね」

「は？なんでだよ」

「やっぱり男はこういうの嫌いだよね。ここには実験用かあたしが集めたやつしかないからさ、なるべく垣根くんが不愉快に思わないものを選んだつもりだけど、なんかごめんね」

だが温まる垣根の心と反して、天羽は見るからに落ち込んでいく。視線を揺らし、定まらない目線で顔を伏せて弱々しく弁明を吐き出す。

突然の脈絡ない言葉は酷く痛々しい。コンプレックスに支配され

た彼女の発言は聞いていて心地好いものではなかった。

喉を通るサラダの味が分からない。ドレッシングの油が気持ち悪くて、吐き気を覚える。

半分まで食べ進めた料理が最早気持ちの悪い物体にしか見えなくて、心が痛みを訴えていた。

「……あのな、俺の言葉に裏の意味があると思ひ込むのやめろ。皮肉じゃねえんだ、額面通りに受け取れよ。お前らしくていいじゃねえか」

「でも、あたし、垣根くんを不快にさせたくない。垣根くんのためならなんだって捨てる、だから——ッ!」

彼女の言葉に地面が揺れる。苛立ちから展開された能力が床を揺さぶり、重力を狂わす。彼女の頭が押さえ付けられるようにテーブルへぶつかって、鈍い音が部屋に響いた。

怒りが沸き上がって止まらない。

コンプレックスは時に人を苛立たせる。

好きな人からの言葉なら特に。

「二度は言わねえからな」

「ごめん……」

愛を伝えるのが歪とはいえできるのに、なぜ受け取る側になると出来なくなるのだろうか。

頭が悪く、コミュニケーション能力が著しく低い女。

言葉の真意を汲み取れず、深読みばかりで卑屈になる姿が嫌いだ。

太陽な少女が月に隠され闇の中で泣く姿は腹立たしい。皆既日食なんて暗いばかりで美しくもなんともない。

「なんでお前はそうなんだろうな」

太陽に恋焦がれる向日葵は幸せを願う。けれど失敗ばかりで、彼女の思考回路はショートしたまま直らない。

向日葵は太陽の作る濃い影が大嫌いだった。

しかし花は太陽がなくては生きていけない。

溶けてしまうような熱視線の中、壊れかけの少女と歩むことをやめなかった。

それが彼女の愛だと理解しているから。
彼もまた、少女と同じようにおかしかった。

act 4：青年の主張、少女の感情

「天羽と喧嘩？」

「喧嘩っつーか、俺が一方的に怒ったら落ち込んだっつーの？ちよつと悪いことしちゃってな」

ベランダから見える晴天が眩しいお昼時、ツンツンヘアの少年を前に垣根は小さくため息をついた。

狭いワンルームで男二人、自販機から安く買ってきた黒豆サイダーを前に言葉を交わす。恋バナと呼ぶには少し一方的な会話を遮る蝉の音と、クーラーの効いていない部屋が少し鬱陶しい。

「ほー、だからこの上条さんに仲を取り持ってもらおうとアポ無しで来たんですね？しかもお昼から」

「どうせ暇だろお前」

「くっ、正解だ……！そんで何がどうして喧嘩したんだ？」

インデックスもおらず、上条が住む寮の一室で少年二人がダラダラと会話を続ける。ソーダ味の棒アイスを食べ、扇風機の風を感じながらローテーブルを囲む彼らは、どこからどうみても一般的で、普通の高校生だった。

「……晩御飯、作ってもらったんだよ。手作りの」

「殴っていいか？」

「話聞いてからにしる童貞」

「話聞いてもらう奴の態度じゃねえ！」

女人禁制の男子会、話すことはもちろん恋や女の話。青春真っ只中の垣根には普通の男子高校生のアドバイスが必要だった。

女の扱い方は知っているが、恋人の扱い方は知らない。しかも頭のネジが半数取れている狂人が恋人である垣根の場合は特に。

「でだ、問題はその食事中に起こった」

「なんだ、飯が不味かったのか？あるあるだよなー、メシマズ系ツンデレ暴力ヒロイン！そういう不器用なところが可愛いわけですが、非オタにはちよつと刺激が強すぎるのも納得だわ」

「いや、飯は美味かったぞ？アイツ家庭科得意だし、俺のこと大好きだ

し、暴力は一切しないし……ツンデレではないとしても、恋愛面において不器用なのは認めるが、そういう感じの女ではねーな」

「は？ 処す？」

「処すな、話聞け」

会話にいちいちノロケを挟みながら相談を語る。つい先日の出来事を鮮明に思い出しながら語る内容はくだらないかもしれないが、垣根にとっては何よりも重大な問題。神妙そうな顔で淡々と上条のヤジをかわしながらあの日について語っていく。

「まー天羽が家庭科出来るのは何となく知ってたが……それで？ しようもねえ話なら部屋から追い出すぞ」

「しようもなくねえよ。確かに食事は美味かったし、ありがてえって思ってるさ……けどな……」

「けど？」

あの日、恋人に手料理を振る舞ってもらおうという恋愛漫画あるあるのイベントが起きた日、垣根は彼女の姿に苛立ちを覚えていた。

別にご飯が不味いだとか、暴力だとか、言い争いとか、そんな些細な問題ではない。彼女自身の歪な考えに対する苛立ち。

思い通りにならない苛立ち。

そして最低な自分自身への苛立ち。

「アイツ……飯食ってる時ずつと、その……裸エプロンだったんだよ……」

エプロンだけの姿。いわゆる男を誘うための姿。

それは垣根が低俗で下半身にしか血液が回っていない馬鹿だと認識されているようなもの。

屈辱だ。

その他大勢の男と、超能力者第二位である垣根を同じと見ているその事実が屈辱的で腹立たしい。

そしてその格好に一瞬でもやましい考えが浮かんでしまった自分自身が。

垣根帝督は天羽とはまた違った種類の狂人で、誰よりも自分自身に對する執着が強い。

彼という個人を見て欲しい。男というカテゴリじゃなくて、垣根帝督という唯一無二を見て欲しい。

簡単に言えば、垣根は誰よりも自分に誇りを持ち、不安定で、非常にプライドが高い男だった。

彼らの欲求は同じ。

自分にしか出来ないことで認めて欲しい。

他の男と違う本物の愛情を認めて欲しい。

彼の、彼女の特別になりたい。

それだけだった。

「……裸エプロン?」

「そうだ。目の前でずっと、布一枚でうろろうろされて襲えとか、誰がテメエに触るかよってんだ。鬱陶しい」

「鬱陶しい……?」

「どうした、上条?」

しかしその承認欲求は一般人には理解できない感覚だった。

垣根の言葉に肩を震わせ、歯を食いしばる。

どう考えても、今この場で常識的な反応をしているのは上条の方だ。

「ノロケなら帰ってくれませんかねえ!? こっちが虚しくなるんだが!?!」

「うるさ」

「なんだよ裸エプロンって! お前、どこぞの漫画の主演級チート悪役がこの場にいたら嫉妬から螺子伏せられるぞ?!?!」

「はあ? なんでだよ、飯どきに服着てねえとか頭おかしいだろ」

相容れない二人の考えは徐々に声を大きくさせる。

羨ましい上条に、鬱陶しい垣根、彼らの考え方は全くもって違う。

それがいつもなら面白いのだが、今回ばかりは双方譲れなかった。

「それは乙女の必死のお誘いだ! テメエそれでも男か! 据え膳食わぬは男の恥って言うだろうがっつっ!!!」

「見える地雷踏み抜く奴がいるか! アイツにそういう行為ははえーんだよー!」

「そんなこと知りませんねえ！彼女が頑張って「垣根くん喜ぶかな♡」って誘ってんのに、それを無下にするのか貴様はア!!!」

上条の考えは確かに正論だ。可愛い彼女が相手を喜ばせようと恥ずかしがりながら素肌を見せる。一般的で普通の少女ならそれは一理あるし、それを鬱陶しいなんていう垣根はD.V.彼氏予備軍だろう。

しかしそれは普通の少女、および普通のカップル相手での話。

彼らはまともじゃない。

超能力者^{レベル5}というミクロの現実を歪める力が恐ろしく強い、一種の精神異常者たち。その恋愛だって普通とは乖離している。

だから上条の言葉は垣根にとって不愉快なだけだった。

「んなこと思っちゃってねえんだよアイツは！大体アイツの奇行は基本誰かの入れ知恵だ。そもそもあの倫理観貞操観ゆる女の誘惑がまともな思考してるはずねえだろ！」

「笑止千万！女の子の背伸びした誘いを断った、それだけでデメエは万死に値する！というか、あの天羽に誘われて断る男なんて男じゃねえ！アイツにどれだけの男がお世話になつてると思ってたんだ！」

「その通りやね、カミヤん」

本質を理解していない戯言に苛立ちが増すばかりで互いに譲らない議論だったが、テノール歌手に匹敵する低い声が罵り合いを止める。

一体どこから侵入したのか、染めた青髪とピアスが特徴的な少年大きな荷物を背負って上条の後ろに力強く立っていた。

「青髪ピアス!?!」

「うわ急に出てきた」

「そうだと垣根、お前はいま全男子を敵に回したのと同じぜよ」

「土御門……!」

そして垣根の後ろには金髪グラサンが目立つ少年。上条のクラスメイト二人がどこからともなく意地悪そうな笑みを浮かべ現れた。

突然の来訪に困惑しながらも、垣根たちは彼らの言葉を待つ。不敵な笑みで仁王立ちする彼らは得体の知れない不気味さを放っていた。

「天羽隼糸十五歳、俺らと同じ学校、同じクラスの女子高生で、尚且つ

第六位を冠する超能力者^{レベル5}。そして学園都市を盛り上げるアイドルであり、俺らのマブダチ垣根の彼女でもある少女ってのは分かっている？」

「マブダチって今日日聞かねえな」

「嬉しいくせに」

「テメエの血肉で現代美術でも作ってやろうか？」

「何それ怖い」

垣根と同じくらいの身長で見下ろす彼らはそのまま語り始める。

グラサンを少しあげ、口を開いた土御門元春の目元は見えないが、口調からしてどこか真剣だった。軽口叩いて話題を変えようとしても、頑なに流れを掴んで話さないほどには。

「さて、そんな天羽の能力はなんだ？ 答えてみる垣根！」

「終始このテンションでいくのか？ あー、彗糸の能力は簡単に言えば肉体操作の能力だな。能力でも原石でもない神の御業と言われている第三の能力で研究しづらいから六位に収まってるのか」

上から指を差されることに少しムツとしながら与えられた質問に淡々と答える。初歩的な質問、造作もない。

特に彼女に関する事なら書類は全て目を通しており、なんでも知っている。もはやこの感情は執念、執着と呼ぶべきだろう。

それでも別に構わない。最後に恋とカテゴライズするのは自分と彼女、他人がどう感じようが興味はなかった。

「答えとしては正解だが、俺たちが望んでる答えじゃねえな」

「はあ？」

「彗糸ちゃん的能力が肉体操作ってのは正解やが、抽象的すぎる。生き物の体に対してどんな操作もできる……体の動きを止めたり、感覚を鋭敏にしたり、DNA配列から変えたり、外見を物理的に変化したり、他人の体をジャックしたり、洗脳や催眠ができたり……考えうる体の全てを操作できるつちゅーのが具体的な能力なわけや」

しかし垣根の表面的で書類上の情報は土御門たちが求めている答えとは程遠い。

健全な男子高校生、考えていることはいつだって決まっている。

「ジャックとか洗脳って、彗糸は食蜂見たく水分も調節できるし、できねえことはねえだろうが、練習が必要になると思うぞ?」

「それ今は関係ないねん! 関係あるのはそう、体の全てを操れるって理論的事実だけ!」

「それがなんだよ」

「まだ分からねえのか垣根。仕方がない、青髪! 例のブツを」

「おうよ!」

困惑する垣根たちの前に青髪ピアスが背負っていたリュックサックをおろし、勢いよくチャックを開く。土御門の合図で開かれた鞆から取り出されたのは本の束。どうやら漫画作品のようで、それぞれ絵柄違う。

大体B5サイズの薄っぺらい本はどれも統一性がなくカラフル、しかし全てに同じ文言が書いていた。

Adult Only、もしくは18禁と。

「なっ……!?!」

「いいか垣根はん、彗糸ちゃんってのはなあ、これ以上ないほどエロ漫画と親和性のある女神のような存在なんやで!!」

俗にいうエロ漫画、それも素人が書いた同人モノ。その全てに絵柄の違う同一人物が描かれ、気持ちの悪いタイトルがつけられていた。

噂には聞いていたし、芸能人がそういつた目で見られるのは分かっていたものの、欲望の結晶の前に少し吐き気を感じる。それも大事な女がモデルなんて尚更そう思わざるをえない。

「ロリ化! ケモノ化! 調教! 母乳! 感度操作! まさに現代のサキユバスと言っても過言ではないほどエロに特化した能力者は彼女しかおらん! その結果! 彼女を信仰する男子高校生は学園都市の約七割にも上るって噂や! (青髪調べ)」

しかし垣根の感情を置いてバカ三人組は力説する。

少年らしい低俗で希望に満ちた欲をブチまけて、およそ女には聞かせられないような言葉の数々でくだらない説明を語る彼らの目は非常に生き生きとしていた。

「イチチャラブ甘々、能力乗っ取りからのドS向け調教快感責め、反対に

能力フル活用のドM向け女攻め！そして何より年齢操作よる義妹口リメイド!!……と天羽の能力には様々な『夢』がある。この事實は学園都市の男たちに大きな希望と夢を与えてるんだにゃー!」

「何より見た目が変更できるってことはな、130cmのロリ巨乳にも、シヨタにも、なんなら両性具有にもなれるつちゅーことや。やから腐った女子も多いし、すけべ野郎にとつてはまさに理想の相手つてわけや……!!なんなら作品の中ではオチや原因を担当する場合もあつてな、天羽推しじゃないやつにも御利益がある!」

「分かったか垣根!お前の彼女はなあ!学園都市に住む全ての男が垂涎するほどの女なんだぞ!だから大切にしろ!」

もはや一切理解不能な言葉で興奮する彼らは薄い部屋の壁を貫通するような大声で垣根に詰め寄る。くだらない話のわりに真剣な目をしているのは欲望に対する直球な思いだけでなく、クラスメイトとしての情や妹分への心配など、多少は清い感情があるからだろうか。

垣根も、天羽も、良き友人を持った。

全身全霊でふぎけて、全身全霊でぶつかる良い友人だ。

普通を知らない垣根の模範。対等に、個人を見てくれる気のいいやつら。

彼らは垣根を『エリート様』なんて呼ばない。

能力の恐ろしさなんて忘れて、彼を男子高校生として扱ってくれ

る。とても気のいい奴らだ。

「……ああ、分かってるさ。アイツが男にとつても、女にとつても、性欲を満たすには都合が良くて完璧な存在つてのはな。だからテメエらが言いたいことはよおーく分かる」

「垣根……!そうだぞ、だから俺らのためにもアイツに優しくしてやつて……!」

「で、それが遺言つてことでもいいんだな?」

しかし良い友人とは決して善人では無い。地雷を悠々と踏み抜く彼らは今この場において最も愚かな選択をしているのは明白だ。

「……………フアツ!?!」

ゆつくりと立ち上がり、白い翼を背に垣根は口を閉じた騒がしい友人たちを見下ろす。これから何が起こるか感覚と経験で理解する彼らの顔はみるみるうちに青ざめていき、ぼたぼたと汗が垂れた。

形勢逆転、その意味を理解できないほど彼らはバカじゃない。

「俺の女で妄想すんのをたとえ法や国が許そうが、俺は絶対許さねえ。この意味わかるか？」

「か、垣根さん？目が、目がマジですよ？その羽をしまってくださいると有難いのですが……??？」

「悔い改める猿ども、性欲なんて考えられないほどの恐怖を植え付けてやるよ」

輝く白い翼を広げ、垣根は冷たい目線で、冷たい言葉で侮蔑する。目の前の有害図書、そして有害な友人たちを排除しなくてはいけない。

それはあの少女のため、自分のため。

腹立たしい野郎どもに鉄槌を下すのは自分の傲慢なわがままのせい。だがそんなことどうだっていい。

あの少女に不純な想いを抱くのは自分も含めて許せなかった。

「ふ、不幸だア——」

爆発音が狭いワンルームに響く。ガラガラと崩れる戸棚と悲鳴のような叫び声を聞きながら垣根は眉間に皺を寄せ、肩を落とした。

苛立ちが増幅する。

埃っぽい空気が充満する狭い部屋の中、気絶した友人たちを見ながら何度目かのため息を吐いた。

落ちた本を何冊かカバンにしまって、好みじゃないのは全て燃やす。

（今日は早く寝よう）

帰り支度が済んだら玄関から明るい外へ出て、のんびりと帰路につく。そして汚れた服から着替えて、荷物をおいて、甘いお菓子を買って、彼女が待つ病院へと向かうのだ。

密かに獣から守った少女のそばで安眠を貪るために。

カメラに視線を向けてパソコンでコメントを随時確認する。綺麗な撮影部屋でたくさん光を浴びながら笑顔で彼女はファンを喜ばせる言葉をスピーカーのように垂れ流す。

アイドル天羽慧系の日常。

昼から配信は珍しいが、かなりの視聴者がいるようでコメント欄は滝のような速さで流れていく。

「そろそろ切りまーす。いつも通り週の真ん中くらいに歌枠か雑談枠で深夜配信するんで、また来てね？今日は乙でした」

おしゃれで、かつこよく、大人。それが今の彼女の売り込み方。落ち着いた口調と大人びた対応、それが偶像アイドルとしての天羽慧系だった。

コンサートは月に一回程度、もしくはそれ以下か。主な収入はテレビの出演と作詞作曲の手伝い、ゲーム・歌・雑談の生配信、モデル業。アルバムを出す前はMVと音声収録、衣装の制作も加わる。

眠りが必要としない体だからこそハードなスケジュールに耐えられるが、本心ではやりたくなかった。

アイドルという職業は誰かを幸せにできない。誰かの感情を晴れやかにしても、足の動かない少女を助けることはできない、死にかけの少年に治癒の奇跡を行うこともできない。

やりごたえのない仕事だった。

疲れを感じない体が重い。

「……切った？」

「はい、配信終了の表示が出てます」

「相似くんありがとねー、こういうの苦手だからさ」

ふっと息をついてパソコンを閉じる。目の前の机で技術面の手伝いをしていた青年に小さく笑いかけると、細い目で呆れたように笑い返された。

染めた髪に耳を飾るたくさんのピアス。天羽と同じぐらいの身長と、体を隠す白衣や黒い革手袋。

マネージャーの一人、木原相似は淡々と機材の片付けをしながら天羽の言葉を聞き流しては、適当に返事を返す。

「貴女の技術班として雇われている以上、それ相応のことはしますよ。さすがに丸投げは困りますが」

「次のライブ、数多くも技術班で入るんでしょ？こういうの相似くんに頼りっぱなしだし、たまには有給取りなよ？」

「機械いじるのは好きですからね、苦ではありませんよ。貴女は大っ嫌いですが」

「へー、すみませんあたしが雇い主で」

嫌いという言葉に少し胸を痛めながら撮影部屋から逃げるように出て行く。バレエブーツのヒールが床を蹴り、高い音が廊下に響いた。

甲高い音は悲鳴のようで、ひどく鬱陶しい。

「おい、配信中にクソガキきたから teme の部屋通したぞ」

扉を開いて部屋から出ると、苛立った様子のテレステイナーと鉢会う。顎で天羽の自室を指して急かすような目線で見つめてくる彼女は、いつものぶりっ子をしていない。

「えー！今日来るって聞いてない！どーしよ、エロ衣装のネタないよ……取り敢えず裸で行けばいい？」

「ただの痴女ですよそれ」

「この間の裸エプロンも大差ねえぞ」

「でも結局脱ぐし、服とかいらなくない？」

相似くんも加わり、学者三人で廊下を歩く。ヒールのせいで突出して背が高い天羽を挟むようにつまらない話をしながら研究室へと向かった。

一方通行には警備員センセイの黄泉川と研究者の芳川、グループの面々と打ち止め。

垣根帝督にはスクールの面々。

御坂美琴には風紀員で後輩の白井黒子

麦野沈利にはアイテムの面々。

食峰操祈には派閥の子たち。

削板軍覇は分らないが、ともかく超能力者アイドルはそれぞれバックアップする人たちがいる。

天羽の場合、それは木原だった。この病院の冥土帰しも含まれるが、彼は保護者なのでアイドルそのものには干渉していない。

彼らは彼女のためにスケジューリング、交渉、技術開発、マネタイズ、その他諸々を行う。

金と暴力と謎の心地よさで天羽の支配下にある木原たちだが、この二人においてはもつとも重要な業務を任せられていた。

それは天羽と垣根の恋愛面のバックアップである。

「けれど前回の服装は一応男性が求める割合が高いものを選んだんですけどね」

「肌面積っしょ」

「バカっぽいので好まれるんでしょうねえ。金太郎みたいですし」

「貶すんじゃないっての」

なので基本的に天羽の誘惑は木原、特に相似の仕込みである。支援というより私怨でからかっているだけに感じるが。

「やっぱ可愛いパジャマだろ！買ってやったやつ着ろよ！」

「テレステイーナさんが選ぶの可愛すぎるからエロいのがいい……あたしは好きだけどさ……」

「可愛いほうが男ウケいいぞ？」

「それは恋愛面においてでしょ？体の関係になるためには肉欲を煽る服の方が手っ取り早いじゃん」

しかし相似とは反対にテレステイーナはこの業務が好きだった。可愛い物好きなのは本場で、着せ替え人形を扱うようにいつも衣装を見繕ってくる。

しかし同じ趣味を持つ天羽でも垣根に対しての作戦では可愛いものは採用されないのだからただテレステイーナの趣味に付き合っているだけになるが。

「あー、もう、ほんとにこの子は……」

「近々ドラマの撮影でプールにロケしに行くので、今日は控えめにしたらいかがです？たまにはそういう日があってもいいと思いますよ」
「……それもそうかな。とりま今日はお疲れ、あとは解散でいいよ」
木原たちをあしらって鍵のかかった自室にノックを三回して入る。何か言いたげな木原たちを置いて、アイドルではなく一人の少女としてドアを開けた。

笑顔を作って理想の少女を完璧に演じきる。

それが彼女にとつての愛だった。

「垣根くんお待たせー……あれ？」

ドアを片手で閉めて辺りを見渡すが、そこに愛しの少年はいなかった。あの茶髪も、あの低い声も、高い背も見当たらない。

キョトンと首を傾げてもう一度周りを見渡す。けれどやはりいい。

目につくのは不自然に膨らんだベッドの上くらいだった。

「……寝てる」

盛り上がったベッドに近づくと、可愛らしい寝息が聞こえてくる。静かな部屋で、彼は薄いブランケットに包まって眠っていた。

随分と疲れた様子で、ベッドの上に腰掛けても全く起きない。安心しているのか、寝顔はとても安らかだ。

「必要なのは女体ではなく柔らかい毛布、か」

しかし気に入らない。

そのベッドは寝るためじゃない、彼の欲を受け止めるために買ったのだ。彼に天羽の体を使ってもらうためにここにあるのに、用途が違う。

一体何がしたいのか分からなかった。

どんな理想にも成れ、どんなことも受け止められるこの体を使用してもらえないのが怖い。

別に好きじゃなくていい、嫌いで構わない。

けれど天羽彗系を認めて欲しい。彼の役に立てる、彼のために身を捧げられる。それを知ってほしい、そして使ってほしい。

大好きだから、彼しか見えていないから、彼に認めてほしい。自分

にしかできないことで。

何か腑に落ちない。

「なんかなあ……」

胸のあたりに汚い膿がたまる。

自分ではなくブランケットで体を温める少年の姿に、何か言語化できないうぞましい感情が浮かんで、心臓の奥に沈んでいく。

何か認めたくない想いが芽生えそうで、恐ろしかった。

act5：面倒な女と面倒な男は交差しない

ジリジリと太陽が砂を焼く。人工的な強い潮の香りと冷たい風が心地良く体を通り過ぎる午前八時。

女性用更衣室と書かれたプレハブで少女たちが白い肌を惜しげも無く晒し、面積の小さい布で隠していく。

可愛らしい少女たちの談笑と波が引き返す音が小さな部屋で響いていた。

「ねえ日焼け止め持ってない？」

「ああ、天羽さんに頼めば？あの人なら日焼けしない体にしてくれるゾ☆」

ロッカーから腕輪の着いた鍵を抜き取り近くの鏡で前髪を軽く整えると、麦野は紫色のパレオを揺らして振り向いた。

夏真つ盛り、扇風機から感じる風が唯一のオアシスである狭いプレハブで、超能力者の少女たちは水着に着替える。

ヘアメイクなどは全て整い、あとは外に出るだけ。しかし女だけのプレハブは暑くとも少なからず心地よく、彼女たちは男の居ない女子会に花を咲かせていた。

「こういう時便利よね、先輩」

「あの人がいれば日焼け知らず熱中症知らずよ。一家に一台欲しいわぁ」

立ち並ぶロッカーの裏側に食蜂に続き御坂、麦野も揃って立ち入ると、目的の人を探して視線を動かす。

ロッカーをパタンと閉じる音と共に顔を上げた少女の姿に歓声が上がるとその視線はすぐさま一点に集中した。

そこにいるのは目当ての友人。真つ赤な水着を着た背の高い彼女はとても目立つ。

「天羽さーん！麦野さんが……あら」

「わ、先輩真つ赤だ！」

「真つ赤って、確かにそうだけど」

桃色の毛先が眩しいツインテールを揺らし少女——天羽は困った

ように眉を寄せた。

抜き取ったロツカーの鍵を腕にはめて、なれない髪をいじりながら背を向けると細いリボンが揺れると、かすかに香水の甘い香りが舞った。

「ツインテールとかガキかよ。ロリコンくらいにしか受けねーぞ」
「ちよつと、それわたしもガキって言いたいの？」

背を向けた天羽に食蜂がひつつくと、赤い水着と白い水着のコントラストが強調される。フリルたっぷりの水着はデザインが全く同じで、髪型も揃えている二人はいわゆる双子コーデで固めていた。

同じ水着に、同じ髪型と色、似たような体型、目の色が違ってなければ双子とはいかずとも、姉妹には見えるだろう。

「二人ともお揃いなだね。姉妹役だから？」

「そうよお。でもよかつたわねえ御坂さんが妹役じゃなくて。同じ水着なんて哀れなことになっちゃうもの」

「あ？どういう意味？モッペン言ってくれる？」

「あら、自分で分からないのかしらあ？そうねえ胸部周辺の脂肪といえば、ねえ？」

その姿が珍しい御坂だったが、食蜂の一撃に肩を震わせる。確かに、客観的に見て、他人の目から見て、食蜂と天羽は胸部の脂肪が多い。二人が公表しているサイズを一度ネットで見たことあるが、御坂とは四か五程度サイズが上だった。

サイズを知らなくても完敗である。

なんなら勝負にすらなっていないのかもしれない。

だがその客観的な敗北は食蜂にとって最高の「ネタ」であった。

「育つわよー！」

「どうかしらあ？ねえ、天羽さん」

「いやー、おっぱいの成長は中二で基本終わるからなあ……」

「天羽先輩っ!!？」

天羽の腕に引っ付いたまま嫌味ったらしい笑みを浮かべる食蜂に苛立つ御坂だったが、思わぬ伏兵に目を見開く。

天羽の全く気遣いなく直球な発言に御坂の心は大きく傷つくだけ

だった。

「中学卒業までに十分な睡眠と十分な栄養がないと育たないからねえ」

「そうなの？ 遺伝かと思ってた」

「女性ホルモンの分泌率とかは遺伝関係あるだろうけど……巨乳のお母さんの子供が巨乳なのはお母さんと同じ食事、睡眠のルーティーンしてたら同じように育つよねって話だよ。まあちゃんと説明されるわけじゃないから正しいかは証明できないけど」

しかしその感情を知ってか知らずか巨乳三人組は会話を続ける。

食蜂操析は意地悪な笑みを浮かべ、麦野はただ感心しながら天羽の話聞いていた。

「でも確かに私は早寝ね。よく食べるし」

「同じく私も」

「食蜂ちゃんは食事に関してはストイックだよね」

「そこはわたしたち相入れないのよねえ」

「あたしあんま食べないからね。食べてもジャンキーなの多いし」

もはや先ほどの話とは話題が変わっている。アウェーな話が続き、流石に御坂の顔が曇っていく。

話の輪に入れないのが嫌ではないのだろうが、ただプライドを刺激されているのが居心地悪いのかもしれない。

「けど細い子の方が可愛いデザイン着れるからお得だよ。それ、可愛いよ？」

「……天羽さんも似合ってるわよ」

「うーん、あたしにはちよつと子供っぽいかな……あたしの売り込み路線とは真逆でちよつと困るっていうか……」

だが案外空気が読める天羽が軌道修正を試みる。カラフルなドット柄が可愛らしいフリルたっぷりの水着を見つめ、小さく微笑むとひんやりした空気が柔らかくなった。

「仕方ねえよ、男は可愛いロリ女が好きだからな」

「あたし身長いちばん高いんだけどな……」

姉と妹のような微笑ましい空気だが、今度は天羽の表情が暗くなっ

ていく。

実に面倒なことに、大人ぶりたい御坂とは真逆に天羽も小さなコンプレックスに苛まれている。

可愛いもの、それがいわゆる天羽の地雷だった。

「でも十分ガキっぽい顔だろ。一番は第三位だが」

「あ?」

「そうよ、かき——ガキっぽいって言うけど、男はみんなあざとくてカワイー女が好きなのよ。これならどんな男でもイチコロだゾ☆」

それを分かっているからこそ、食蜂はそれを覆そうと策を練り、言葉で伝える。

このフリルだらけの水着も、ツインテールも、全て仕込みだ。

食蜂は天羽に恩がある。ひどく重く、永遠に返し続けなければならぬ恩が。

その恩を返したい。だから彼女が幸せを掴めるように手助けをする。

天羽彗系の恋路を助け、あの日の恩を返したかった。

「そうかな?」

(あれ?)

だが今日は少し天羽の機嫌が悪いようだった。

「そろそろ海行こうか。あたしも終わったし」

「海っていうか人工プールだけどね」

「学園都市ってたまに頭イカれるわよねえ」

「しかし男どもが興奮しすぎて撮影中止にならなきゃいいが」

どこか冷たい言葉を吐いて天羽は更衣室を後にした。暑い日差しに素肌を晒し、超能力者の少女たちは夏の風物詩に足を踏み入れた。

みずみずしい肌が映える赤、白、黒、柄入りの水着。男の視線を全て奪う姿を前に待ちくたびれた超能力者たちはつまらない言葉を吐き捨てた。

「遅え」

なんとも面白みのない二文字。そう呟いたのは一方通行で、男性陣たちのイライラを圧縮したその単語が第一声だった。

その単語に女性陣は朗らかな空気を一瞬で緊張感ある冷たいものに変える。女性の身支度の長さを口にするのはタブーだと彼らは知らないようだった。

「ズボン穿くだけの野郎とは違うんだよカス。見えねえのか？この装飾をよ」

「それにしたって遅くねえか？」

「ロケで来てるんだぞ、ちゃんと時間を守れねえのは根性が足りてねえ証だ」

「間に合ってたんだろうが！」

舌打ちをして立ち去る麦野に続き、ため息をついて御坂もスタツフのいるところへいつてしまう。イライラとする男性陣に付き合つてられず、女性陣は食蜂以外全員近くの休憩スペースまで呆れながら向かってしまった。

そう、食蜂以外の全員、つまり天羽はこの場にいなかった。

「あれ？天羽さん？」

おかしい。

垣根帝督が目の前にいる現状、いつもなら鬱陶しいほどつきまとうというのに、しかも今日は水着という装備なら尚更見せびらかしに行くだろうに、彼女はここにいない。

現実ではそっぽを向いて他の女性陣とともに木陰へ行ってしまった。

(……垣根さんを避けてる?)

どこからどう見てもおかしい。何かが起きているのは明白だった。ならばサポートする側はどう動くか決まっている。

「垣根さあーん？ちよつとお」

「んだよ」

「あなたたち、喧嘩でもしたの？」

大きな声で問題の中心人物を呼び止め、なるべく穏やかに話しかける。天羽と同じように笑顔を作って、穏便に。

「……それが分かってたらあんな露骨に拒絶されねえよ」
「でしようねえ」

思った通りの反応に面倒を通り越して呆れを感じる。本当に面倒な二人だ、食蜂がいなければこのすれ違いは一生続くのだろうか。

「……全く世話が焼ける人ね」

面倒見甲斐のある友人とその連れだ。

ビーチサンダル越しの熱い砂と浮き輪から感じる熱が不愉快だった。



劇が始まる。

『姉に何か用?』

少女は姉の前に立ち塞がり、いけ好かない長身イケメンを睨みつける。

女を食い散らかすような見てくれの男に大事な家族を取られるわけにはいかなかった。

『ちよつと、失礼でしょ』

『好きなら好きってはつきり言ったらどう?』

『この人とはそんなじゃないってば!』

お揃いの水着とお揃いの髪型とお揃いの浮き輪。

困り顔の姉を守るため、妹は茶髪の少年の前でこれ以上ないほどの勢いで凄む。しかしその姿に少年はため息をこぼすだけ。

『ならなんなんだよ、お前にとっての俺は』

真っ黒な瞳が姉を見下ろす。妹なんていないかのように振る舞う姿が少しつまらなかった。



次の二人の出番はもうしばらく先。海に似せた屋外プールで二人、白鳥とフラミンゴのデザインをした浮き輪に乗って水の上でゆったりとアイスを食べながら流れていた。

「今日は珍しく不機嫌ね」

「そう?」

ピンク色のフラミンゴが可愛らしい浮き輪に沈みながらメロン味の棒アイスを頬張ると食蜂は掲げた自撮り棒のボタンを押した。

「演技に熱が籠ってたから」

一口齧ったソーダ味の青いアイスが舌の上で溶ける。何を意図した言葉か測れず太陽を仰ぎ食蜂から視線を逸らすも、彼女は天羽のことをよく知っているようで確信したような口ぶりでチクチクと深層心理に棘を刺した。

天羽の考えなど、心のエキスパートには全て丸わかりだとようやく悟る。

「……他人をコピーすれば、自分のことは忘れられるの。自分じゃないなら、心配事なんてないでしょ?」

「相変わらず極端ね。垣根さんが心配してたわよ?」

「なんでまた。関係ないでしょ」

「……本気で言ってる?」

「本気も何も、あたしの機嫌は垣根くんに影響を及ぼさないじゃん」
彼女の前で嘘は通用しない。

それは今まで関わってきた人とはできないこと。初めて息をつける。

食蜂操祈にとって天羽擘糸が特別なように、天羽も彼女が特別だった。

「はあ、貴女は相変わらず……」

『頭がおかしい』かな？」

「自覚してゐるなら治しなさい」

「自覚はしてないよ。みんなそう言うからそうなんだろうなと思って思うだけ。この感情を理解できない人間の言葉なんて信じるはずないじゃん」

隠した本音がこぼれていく。もう一度アイスに口をつけてシャーベットのような中身を口の奥に飲み込んだ。

「いつか垣根さんに愛想つかされるわよ。嫌いになられていいの？」

「別に彼の言う好きが本物だろうが嘘だろうがどうだっていいんだよ。あたしが彼の為になれば、それ以外はどうでもいい」

「その思考が彼を傷つけてもいいのね？」

「傷つかないよ。だって相手はあたしなんだもん」

冷たいアイスが胃に落ちる。食道を通る不快感と胃の中を冷やす嫌悪感。物を食べるのはあまり好きではなかった。

支配できない無機物を身体に入るのはとても怖い。

「貴女、垣根さんのこと好きじゃないのね」

「……好きだよ、多分。恋と定義されたら、そうなのかもしれない」

「じゃあ、何に怒ってんのよ。好きな割に、今日はずっと不機嫌で彼に優しくしないじゃない」

「だって分からないの」

彼女の恐怖は未知から始まる。

男性の経験はそれなりで、多くの欲や汚い感情は身を以て知ってきた天羽にはそれしか理解が及ばない。

父も母も、研究所のおじ様も、病院の行ったことも無い病棟の患者さんも、知らない通行人も。

男は女に性を求める。

そう聞かされてきた。

「はあ？何が」

「あたしは垣根くんのためにある。自分のものになれと言われたから、あたしは身を全て捧げる。そのためのアクションも起こしてきた」

けれど垣根は少し違う。

彼女を見ない。使用しない。男が女に求めるものを求めてこない。最初は恥ずかしいのだと思っていた。

だから手を尽くして、やりやすいように環境を整え、服装を変え、彼のために頑張った。

しかし彼は目を合わせない。

どんなに努力して、彼のために何かをしても、彼は彼女を見てくれない。

「けど、彼はそれを望まない。あたしに何も望まない。あたしには垣根くんが何を望んであたしに付き合うだなんて言ったのか分からないの」

「相変わらずあなたは……なにも貢ぐことが恋の全てじゃないのよお？」

「でも、あたしはそのためのモルモットでしょう？誰かに使用されないと、価値がない。せつかく垣根くんの隣にいれるのに、あたしは何もしてあげられない」

支配できないものが怖い。

理論が通じないものが怖い。

パターンが読めないものが怖い。

支配者は得てしてそういうもの。イレギュラーに対しての対抗策が見出せなかった。

混乱、困惑。

好きな人に何もできないのが腹立たしい。

何もさせてくれないのが心を凍てつかせる。

何も出来なきや捨てられるのに、彼は何もさせてくれない。

自分の全てを使って欲しいのに、彼は何をするにも許可しない。

——ならなんなんだよ、お前にとっての俺は

ただの台詞がずっと脳に張り付いて、消えてくれなかった。

「垣根くんのためなら、死だって厭わないのに」

ボソツと呟いた言葉に少し感情が乗る。

彼のためならなんだってできるのに、彼はそうさせてくれない。苛立ちは募るばかりで、食べきったアイスの棒切れから嫌な音が響く。

この感情に名前が欲しい。

ムズムズして、膨張していく感情が、日に日に複雑に変わって、心臓を掴んで離さない。

行き場のない感情が日照りに晒され心奥から漏れ出るばかりだった。

「気色悪いわねえ、本当に」

白い浮き輪を穴が開きそうなほど握りしめるとひんやりとした水が手にかかる。ガリガリとアイスの棒を噛み、その水面のきらめきに目を細めた。

呆れたようなため息が聞こえるたびに足先が冷えていって、太陽の暖かさがどこか遠くにあるかのようにだった。

「でも大体問題はわかったわ。あなた、本当に愛されてるか不安なのね」

「別にそういうわけじゃ……」

「そういうことでしょ？いいわ、手伝ってあげる」

しかし呆れたまま食蜂は優しく微笑む。頭のおかしいのは平常運転、天羽の突拍子も無い発言などとうの昔に慣れていたようだ。

「だから、愛されてるとかそーゆーのはあたしには関係ないし……」

「そうやってウジウジしてばっかで、何も出来ないから手伝うんでしょお。今の状態のまま過ごして困るのは誰？」

「……ていうかさ、それよりもっと考えることあるんじゃない？」

「何よ」

ちやぷちやぷと足先で水を蹴飛ばして食蜂は朗らかに笑う。跳ねた水が光を反射して眩く光ると、涼しい風が頬を撫でた。

夏の輝きと水面に映った少女たち。白鳥とフラミンゴの浮き輪の上で、赤と白の少女の目が合った。

「食蜂ちゃん、ここから沖まで戻れる？」

「……天羽さあん」

「ハイハイ」

海を模した人工的で擬似的なプールの真ん中、足がつかないほど遠くにきてしまった少女たちは困ったように顔を見合わせる。

今日ほど自分に泳ぎの才能があったことに喜んだ日もないだろう。

白鳥の浮き輪を渡し、ゆつくりと二人は大きな水たまりの中、静かに水をかき分けた。

「恋とは支配よ。自分だけを見て欲しい、自分だけに素を晒してほしい、自分だけがその人と深い関係になりたい、自分だけのものになって欲しい。独占欲や嫉妬といったものはそういう感情からくると思うんだゾ☆」

「支配……精神的支配ってことね」

モザイクタイルのような木陰で金髪の少女二人が声を潜める。

恋だの愛だの、若者らしい会話に花を咲かせて二人は木陰の中から一人の少年を見つめていた。

「そうよ。一般論として、付き合う、結婚するという行為はその支配欲、独占欲を満たすために行うわ。でなければ戸籍を一緒になんかしないでしょお？」

「確かに付き合うっていわば自分以外とヤラないでって意味だもんね」

「どうしてそう下ネタに走るのかは分からないけど、そういうことね」
背が高く、すこしガラの悪い茶髪の少年。天羽彗糸の好きな人。

そして、今一番会いたくない人。

彼の挙動一つ一つが天羽の不安を煽る。

嫌われるのは構わない、けれど彼のために何も出来ないことが怖い。

彼の役に立てないことが何よりも嫌だった。

しかし彼はなにも望まない。天羽から言わない限り何も求めない。それがとても寂しくて、怖かった。

「つまり、本当にあなたと付き合うことに満足しているのか確認したい、発展のない関係性に終止符を打ちたいわけでしょう？ならばその支配欲を確認することで今後に期待できるんじゃない？」

「そうなのかなあ？」

「そうなのよ。というわけで、垣根さんの前で適当に嫉妬するような行動をしてきなさい」

「え!!まさかの丸投げ!」

その心理を見透かしている食蜂には、言い訳など通用しない。天羽の後ろ手に回り、胡散臭い微笑みを浮かべながら背中に手を置いた。嫌な予感しかしないのは何故だろうか。

「行ってこーおーい☆」

「えええ!!」

とんつと背中を押され明るい日差しの中に飛び出した。ざらざらした砂に足を取られ、赤いコルクサンダルが滑る。

バランスを崩した体は軽い音ともに、全身で痛みを受け入れた。

「ぎゃふっ!」

「うわっ」

しかし、体が飛び込んだのは砂だらけの地面ではなく、誰かの胸の中。

甘い男性用のコロンの香りがふんわりと広がる。

とても甘い香り。

スパイスとシトラス、そして奥に感じる星のような弾ける、彼の能力の香り。手に持ったプラスチックカップから香る上品なコーヒーのビターな香りも混じって、とても甘い。

水に濡れて冷たい表面と体温が混じり合って、鼓動に乗って体に巡る。その音が脳にぐわんぐわんと重く響き渡り、足先が少しくすぐつたい。

この体温は初めての感覚だった。

「あ、あー、ご、ごめんね、ぶつかっちゃってごめんね」

「別に。急いでたか？」

「いや、そういうわけじゃないけど……」

顔を上げて、鼓動を鎮める。掴んだ腕は離して困ったように笑顔を浮かべれば、なんともないように見える。

けれどそこからなんと言葉を繋げればいいのか分からない。

少しの沈黙。

顔を合わせず、よそ見をして、頑なにこちらを見ようとしない彼の横顔になんて声をかければいいのか分からなかった。

「……それで用件は？」

「えっと、用件は……」

「なんだ？また台本の確認か？」

大きなため息で沈黙を破るも、垣根は少し不服そうだった。

目を逸らし、明後日の方向を見ながらぶつきらぼうに返事をするだけ。

赤いフリルの水着、そこからはみ出た胸と、珍しく結んだツインテール。

全体的に幼いデザインでも、胸や下半身は大人のそれ。

寄せなくても出来る谷間、水着から見える胸のライン、手足は程よく細く、おしりにはそれなりに肉が着いている。

グラビアによくいるプロポーション。もつと言えば、男性が性的魅力を感じる姿。

その姿に『かわいい』とか、『エロい』だとか、そういう言葉をかける男は多い。

なのに、彼は嫌そうに目を背けるだけだった。

いつもそう。

何をしても不満顔。

どんな姿でも顔を逸らす。

話しかけるのは天羽から。休みの日に何をするかも、何をしたいかも、提案は彼女から。

それは構わない。

けれど、その提案は却下されるのがいつもの事。

笑わない。

目を合わせない。

喋らない。

ずっと、彼女の前では機嫌が悪い。

天羽に望むのは綺麗なベッドでの睡眠だけ。

本人には何も望まない。

そんな男に嫉妬させることなんて、到底無理だ。

「削板くんに用があつて」

「……は？」

そう思うと、目の前の男と喋ることが億劫になる。

ベッドが欲しいだけなら、自宅に帰ればいい。

この体が、この能力が役に立たないのなら、それは彼にとって邪魔という意味でしかない。

使わない道具は捨てられる。

それは人間関係でも同じ。

「削板くーん！今暇——?!」

「うおっ?!なんだ!?!」

「ちよつと走り込み付き合つて!!」

「おう！相変わらず根性あんな！」

するりと脇を通り、顔見知りの黒髪に声をかける。サンダルごしに感じる砂の熱が鋭い痛みに似ていて歩きづらい。

駆けていく砂浜、波の音。その後ろで、パキッと、何か軽いものが割れる音がした。

プラスチックからコーヒーマグが香る。圧力で簡単に割れてしまった容器から茶色い液体がぼたぼたと零れ出た。

垣根の感情と同じ。

その感情が甘い香りと交わって、心の傷を化膿させていく。甘くて優しいラズベリーと花の香り。

シャンプーと、香水と、化粧と、汗と、女の子の香りが塩素と混じり、鼻を通ると記憶にこびりつく。

明るい金髪が風に揺れて、水面よりも華やかに光を反射して、少し眩しい。

名残惜しい体温が胸の奥をちくちくと痛めて、酷く不快だ。

「置いてかれたわねえ。追いかけていけないの？」

「……あれはテメエの差し金か」

どこかへ行った少女の後ろ姿を呆然と眺めていると、意地悪そうな笑顔を浮かべて第五位が木陰の奥で囁いた。

何かを企む女の声色。これからおこることに期待をしている顔がたまらなく腹立たしい。

「なんのこことお？」

「あの馬鹿が俺を差し置いて別んどこ行くわけねえんだよ」

「随分信頼してるようだけど、分からないわよ？あの子、第七位の筋肉すごい褒めてたし」

「はっ」

見下すような笑い声に軽く舌打ちをするも、なんともないように彼女は話を続ける。

人の嫉妬心を煽るような、中身の無いムカつく話。

明らかに意図のある攻撃的な言葉に苛立ちが増幅して、ポケットの中で握る拳が強くなっていく。

「冗談よお☆からかっただけ。でも、奪われるのは結構呆気ないのよ。そこに時間なんて関係ないんだから」

「……あれが奪われることなんざねーよ」

食蜂の笑みから目を背き、再び天羽の方へと視線を移す。赤い水着で胸を弾ませながら、いけ好かない格下と笑い合う姿は腹立たしい以外のものではなかった。

ちかちか、眩しい。

水面の煌めきが。少女の胸を伝う水滴が。太陽とおなじ金髪がおぞましい瞳が。

遠くから眺めることしか出来ない眩さに目を細め、さざ波の音の中でもはつきりと聞こえる明るい少女の声に心臓が跳ねる。

夏の暑さじゃない、恋煩いの熱さが脳の機能を停止してしまいそうで、熱を逃がすために大きく息を吐いた。

「自信満々なのは結構だけど、あの子も案外乙女だって知っておいたほうがいいわよ。失ってから文句言っちゃって知らないんだから」

「テメエはしらねえだろうが、あれはそんなじゃねえよ」

「あの子は別に特別じゃないのよ」

棘のついた食蜂の言葉に一瞬肩が震える。

その言葉は垣根の認識と掛け離れていて、酷く馬鹿馬鹿しい。

「あなたはあの子をガラス細工みたいに思ってるけど、彼女はただの女よ。好きと言えば喜ぶし、求めてくれれば満足するんだから」

天羽彗糸は特別だ。

言い換えるなら歪んでいる。

頭のイカれた幼い少女。特別扱いは当然で普通に扱うなんて到底できない。彼女の勘違いに拍車をかけるだけ。

「それは『好き』を確かめて満足してる訳じゃねえんだよ。あれは自分が役に立っていると確認することに喜びを覚えてんだ。他の男がそれで満足したからな」

あの少女が抱いているのは普通の恋愛感情ではない。

誰かの役に立ちたい。

誰かの欲を満たす道具になりたい。

被虐的で、自己中心的で、自分を殺した考え方。

それは弱ければ、もしくは恋愛感情も同じように強ければ問題はな

かったのかもしれない。

求め合う、互いに支え合うような関係性なら、垣根だつてここまでストイックに禁欲することは無かった。

全てはあの女のせい。

あの女に狂わされた。

あの金髪に、おぞましい瞳に、精神が歪んでいく。

「それじゃダメだ。俺が好きで求めるならまだしも、他の男と同一視して俺を普通の男として接するなんてくだらない」

彼女の特別になりたい。

男を穢らわしい欲望の塊だと思っている女にとって、完璧で、常識から外れた、紛うことなき王子様になりたい。

哀れな少女を救い出すヒーローになりたい。

他の男なんか忘れさせる程、垣根帝督というかつこよくて、賢くて、誰よりも優れた特別を、余すことなく知っていて欲しい。

「……あなた、ずっと嫉妬してるのね」

そう、結局は嫉妬だ。

垣根の本心から目を逸らし、他の男から培った常識で垣根本人を測るなど言語道断である。

だがそんなことを本人に言えることも無く。ただぶつきらぼうでヘタレな態度しか伝わらない。

愛情を伝える、好きを理解させると言っておいて、自分が一番伝えることが出来ていなかった。

「だからって話し合いは必要よ。その感情を隠してたってなんの役にも立たないわあ」

「つつても、アイツ不機嫌だし、何話したって無駄だろ」

「今晚、話し合いの機会でも作ってあげるわよお。あの子もちゃんと話したいだろうし」

「そりゃどーも」

食蜂の呆れた声に苛立ち背を向ける。話し合いと言われても、愚かな少女になにを話すかなど分からない。

困らせるばかりの少女にどう接すればいいか、奥手でカツコつけた

がりの垣根には最適解が出せなかった。

「キスのひとつくらいしてあげてみれば？ 大切にするのも良いけれど、優しすぎるのは時に逆効果よ」

去り際に食蜂が残した言葉が胸に残る。

キス。

愛を伝え合う行為。自身の唇で、相手の唇を触れる愛の伝え方。

してみたい、されてみたい。

そう思ったことは少なからずある。

「出来たら苦労してねえよ」

それで愛が伝わればどれほど良いか。

それが簡単に心臓に負担がない行為ならどれほど良いか。

案外ロマンチストな少年には、そんなことできるはずなかった。

act 6：黄金の輝きに価値がある

一日の撮影は終了し、割り当てられたホテルの一室で天羽隼系は小さくため息を吐いた。

（水着、嫌だったのかな）

ベッドの上でスマホの中の画像を見ながらも一度ため息を吐く。赤い水着の自分と、その他の女性陣と一緒に撮った自撮り画像は目に溜まった水分で少し歪んで見えた。

自分のアカウントに掲載するために撮った画像は、自分で言うのも躊躇うほど綺麗に写っており、胸の谷間もハッキリ見えている。

どこからどう見てもエロくて、男向けの体をしているのに。

（垣根くんは、小さい方が好きなのかな）

不安が膨らむ。

彼に必要とされなければ、彼の隣にいる権利が無くなるのだ。

ずっと一緒にいたい。隣で笑顔みたい。

そのためには役に立つしか道はなかった。

「あ、そうだ。テレステイナーさんから貰った……これだ」

ふと思いい立ち、別のアプリを開いてスクリーンに指を滑らせる。

テレステイナーから安全の為に貰った鍵のアカウントを開いて、撮影中のドラマの公式アカウントへ飛ぶ。

十月、秋クールから始まるドラマの番宣、オフィシャルティーザーやポスター、アー写などが投稿されているアカウントには、垣根と天羽、主人公二人で写ったものがあつた。

当たり前ではある。主人公なのだから。

（画面の中だと笑ってくれてるのにな）

かつこよく微笑む垣根の姿に目が眩む。

画面の中の自分が酷く羨ましかった。

なにか恐ろしい感情が自分の中で渦巻いている。あの日以来、おぞましい感情が心の中で目覚めて、酷く気持ち悪い。

恋は支配。

それを認めるのは酷く悔しかった。

「あら、SNS? 珍しい」

「食蜂ちゃん! どうしたの?」

静かにベッドに顔を埋めていると、がちやんと大きな音を響かせてドアから金髪の少女が現れた。

スマホから顔を上げると、大きな荷物を持った友人、食蜂操祈の姿が映る。がらがらとスーツケースを転がして天羽の隣に座ると、スマホの中を覗き込んだ。

はちみつの香りがふんわりと舞って、なんだかどきつとしてしまう。

「作戦の続きよ! 露出度の低い色気ある服装なら、あの人も褒めてくれると思って、色々持ってきたのよ」

「褒める……別にそういう言葉が欲しいわけじゃ……」

「いいから、次の作戦に移りましょ?」

「でもさあ、さっきもなんもなかったし、やる必要もうないでしょ」

どこか楽しげにスマホから目を離すと、今度は持ってきたスーツケースに視線を移す。

彼女の口ぶりはどこがご機嫌で、なにか企んでいるかのよう。

あまりにも普段とかけ離れた姿に疑問を持つも、スーツケースを開けていく彼女の後ろ姿にそれを聞くことも出来ない。

「いいえ、結構いい線いってたわあ。垣根さんの目が怖すぎてちよつと嫌いになりかけたもの」

「そうかなあ、垣根くんいつも目つき悪いから……」

「だから次は正攻法でアタックするわよ」

「はあ……どんなの?」

「乙女アピールできる夏の風物詩って言ったら、一つしかないでしょ?」

スーツケースから取り出したのは一枚の布。色とりどりの柄が入った薄手の布は、普通の洋服とは違う寸法で繋がっていた。

とても涼しげで、鮮やかな布。彼女の言葉にその意図を理解すると、二人顔を見合わせて頷いた。

しかしその考えに大きな不安ばかりが増す。

そんなテコ入れであの少年が振り向くとは思えない。

「仕掛けは終わったわ、あとはあなただけよお」

小さな紙を置いて食蜂が微笑む。今晚行う余興の招待状、そこにかかれた字を眺めながら困ったように眉を下げることしか出来なかった。

マネージャーとの簡単な打ち合わせも終わり、あとは休むだけ。ホテルの廊下を進み、渡された鍵で宛てがわれた一室を開く。

広いバスルームに柔らかいシングルベッド。リゾート地に相応しい部屋に踏み入れると、その違和感に足が止まった。

「話し合いの機会を設けるとは言ってたが……」

ベッドの上に不自然に置かれた布と、数枚の紙。

一度荷物を置きに来たときはなかったはずと記憶を整理しながら手を伸ばすと、紙に印刷された文字を目で追った。

一時間後に行われる余興の告知、及びその招待。

そしてもう一枚は、その布の扱い方について。

日本の伝統、浴衣の着付け方である。

「なんつー短絡的な……」

行われるのは全員参加の肝試し。

綺麗に畳まれたシックな色合いの浴衣を手に取り、小さく口角を上げる。

全員参加の文字を見つめ、着ていたTシャツに手をかけた。

「ほんと、馬鹿馬鹿しいな」

吐き出した言葉とは裏腹にどこかご機嫌だった。

街灯が薄らと光るホテルの裏、舗装された地面があるとはいえ、木々が生い茂る道は薄暗く、幽霊といった類がでてきてもおかしくない雰囲気醸し出す。

しかし、集った者と比べれば一切恐ろしさは感じない。

この場にいるのは軍をひとつ滅ぼせると言われる超能力者たち、そのすべて。

第一位から第七位まで。人によっては悪夢のような光景に比べれば、暗い木々を歩くなど肝試しにもならないだろう。

「ルールは簡単。この道をまっすぐ行って、反対側に出ればオツケーよ。一応スタッフが脅かしに来るけど、反撃しないように。ホテル側の好意でやってるから迷惑行為は慎んでちょうだいね」

懐中電灯を持って愛嬌のある笑顔を見せると、食蜂は集まった人達に釘を刺す。

友人の恋愛事情を隠すために全員集めたはいいもの、問題児ばかりの超能力者に肝試しは少し難しいかと今更になって後悔してしまう。「それは分かったけど……どうしてこう勝手に二人組を決めるのかしら？」

「喧嘩するのが目に見えてるからよお」

「う……だからって、なんで……」

早速うるさく文句を言ってくる第三位にため息交じりに答えるも、何やら嫌そうな視線で見つめ返される。

この肝試しは天羽と垣根のペアを違和感なく溶け込ませる為、二人組で行う。

その結果、ほかの四名は食蜂が勝手にペアを作った。

麦野、御坂の女性二人組と、一方通行、アクセラレータ削板の余り物組。

ただ性別で分けたただけだが、それでも何か言いたいことがあるように、御坂たちは酷く嫌そうな顔で互いの視線を交差させる。

「文句言いてエのはテメエだけじゃねえんだ、我慢しろ」

「そう言いながら参加するのな」

「ガキがうるさいからな」

「あー……なるほど」

だが珍しいことに、一触即発の空気を取り持ったのは第一位の一方通行。

手伝いに来たそれぞれのマネージャーたちを横目で見つめて、借りて来た猫のようにむすつとしながら近くの柵に寄りかかると、苛立つたように腕を組む。

いつもの一方通行からは考えられないお利口さに一瞬静かになるが、それでも悩み事は尽きないようで険悪な雰囲気は続く。

「でも一番心配なのは……」

「あ？」

「先輩に変なことしたらアンタ、snsで晒すわよ」

「脅しが現実的すぎる」

天羽に懐いている御坂にとって一番の心配は垣根。彼らの関係性を知らない部外者にとって二人のペアは地雷のよう。

犬のように仲良くしようとする天羽を鬼のように拒む垣根。暴言を吐き、拒絶し、彼女の前ではいつも怒っている垣根が、二人きりで暗い道を散策するなど到底無謀だ。

そう思っていないのは本人の天羽と垣根、そして内情を知る人たちだけ。

思いが強すぎて奥手で面倒な二人だとは、何も知らない人たちは想像もできない。

「そーいや天羽はまだ来てないな。どうなんだ主催」

「集合時間は教えてるし、そろそろくるはずだけど……」

その本人はどうやらまだ来ていないらしく、垣根はどこか落ち着きがないように辺りを見渡す。その様子は側から見たら苛立っているようにも見え、彼の素顔をよく知っている人から見たら浮かれ過ぎに

も見える。

幸い、この肝試しは彼らの仲を知る食蜂が企画し、設営しているもの。スタッフはもとより、警備も彼女の手中、たとえボロが出ても外部に見つかることはないが、超能力者は別。

他の参加者に気付かれてはならない中、垣根の態度は少し不安だった。

「もしかして、あたしのこと言ってる？」

「あれ？天羽さんいた、の……」

「……は？」

そわそわと待ちぼうけをくらう垣根の後ろで、カランと下駄が鳴る。涼しい音と少女の声。

喜びを隠して振り向いた先、垣根、そして食蜂たちの目に知らない少女が写った。

「ど、どちら様……？」

「へ？」

地面についてしまいそうなほど長く、艶やかな黒髪、片目を隠す前髪。

超能力者の中でも低い背。

そこにいたのは見たこともない少女だった。

木々の間に挟まれて、懐中電灯の光を頼りに歩く。下駄の音と、偽物の蝉の声。

夏の蒸し暑さに汗が落ち、浴衣が肌に張り付いた。

「スタッフの姿ないねー。食蜂ちゃんが気利かせてくれたのかね？」

黒髪が揺れる。

「でも本当にお化け出たらヤダなあ。あたしの能力じゃ、お化けはさ

すぐに倒せないからなー、困る」

甘い香りと、甘い顔。

いつもの彼女と同じ、けれどその姿は全く違う。

「……彗糸、だよな？」

「そうだけど、なんか変？」

「いや、変っーか、もはや別人だよな？」

濡羽色の髪と瞳、身長は垣根と頭一つ分低い。青緑に赤と白の花の絵柄が咲いた綺麗な浴衣が異様に似合う大和撫子。

気持ち悪い。

望んでいたものと違う。

浴衣美人を望んでいたわけではないのに。現れたのは黒髪で、小柄で、儂い少女。

金髪で、背が高く、胸がでかくて、似合わないと思痴をこぼして不機嫌になってしまふ、そんな愛すべき愚かな少女が来るのを待っていたのに。

現実とは違っていた。

「なんで、イメチェンなんて、急にどうしたんだよ」

「だって、浴衣は小柄なほうがいいでしょ？」

「は？」

前を歩く少女が垣根の言葉に足を止める。知らない顔で、知った声で彼女はただ笑うだけ。

強烈な違和感と嫌悪感が垣根を襲う。

「それだけ……？そんなくだらしない理由で、体格も、何もかも、変えたってのか？」

「ん？別に、それだけじゃないよ」

おぞましい思考は姿が変わっても同じ。下駄を鳴らし、垣根の前で笑みを浮かべて立ち止まると、その腕が垣根の腰を掴む。

目線がいつもと違う。

不愉快で、苛立ちが増すばかり。

「ねえ、セックスしやすい身長差って、22センチ差なんだって」「は？」

「垣根くんは180だから、158、ちょうど今くらいだ」

「……ツツ!!」

「それとも、もつと小さいほうがよかったかな？」

つま先立ちでも今の彼女では垣根の目線まで届かない。いつもと違う。顔も、声も遠くて、心音が遠のく。

あの金髪がない。

あの眩しい髪が黒い色に飲まれて消えてしまった。

吐き気がする。そこに好きな女の姿はなかった。

「あたし、垣根くんのためならなんでもできるよ。だからなんか言つてよー!」

「っ!やめろー!」

知らない女に追い詰められて、体重をかけられる。あまりにも恐ろしい。

彼女のいらぬ配慮が怖くて、気持ちが悪くて、大嫌いだった。

その恐怖から少女の柔らかな胸を強く押し返す。浴衣の上からでも形が分かるほど強く体を引き剥がすと、少女の体はいつも容易く地面に崩れた。

綺麗な青緑色の浴衣が地面に汚れ、長い髪に土が跳ねる。背後のプールから聞こえるさざ波が静かな空気に反響して、心音が大きく耳を支配していた。

(やべっ!!)

「……そっか、キミはやっぱり体は求めてないんだね」

「はっ!」

「垣根くんにはちゃんと三大欲がある。食欲、睡眠欲、性欲。でもあたしが満たせるのは睡眠欲だけなの?食欲はあたしから言い出さないと欲しがらない。性欲は言わずもがなで、あたしに求めているのはただ綺麗な布団を貸すだけ?」

浴衣についた土を気にも止めず、少女は立ち上がって力なく笑う。

やはり今日の彼女はどこかおかしい。昼のことも、いまも、何か切羽詰まっているかのような憔悴しきった目で垣根を見つめる。

哀れな姿に心臓が締め付けられて、まともな思考ができない。

「あたしが露出度をあげて、わざわざ手を出しやすいようにしてるのに、何もしてこないのはあたしにそれを求めていないから？あたし、役に立たない？」

長い前髪が顔を隠す。昔、出会った初めの輝きはそこになかった。「あたし、垣根くんの役に立ちたいのに。あたし意義はベッドを貸すだけなの？」

静寂の中、ポツリと呟いた言葉が響く。

その言葉は何回も、何回も、垣根の心の中で反復された。少女の言葉に明晰な頭脳がついていかない。

そうだ。

彼女の機嫌が悪くなったのはあの日から。最後に病院の研究室を訪ねた日から。

ならばその日、その時、その行動に原因が必ずある。

「……お前、構って貰えなくて拗ねてたのかよ」

その日に行なったことといえば、ベッドの中で勝手に寝ていたことくらい。

ようやく腑に落ちる。避ける理由も、逃げる理由も、原因は垣根本人にあった。

女を不安にさせたこと。それに尽きる。

男としては最低かもしれない、とふてくされて地面を見つめる少女にため息をつきながら自己嫌悪に浸る。

彼女は誰よりも面倒で、愚かな子供。その思考を矯正すると豪語しておいてこのざまか。

乙女心が未知とはいえど、その感情が理解できればただの可愛い駄々にしか見えない。

理解できればもう恐怖はなかった。

「違う」

「だからイメチェンして関心を引こうと……案外乙女だな、お前」

「ちがうってー！」

「違わないだろ？」

彗糸の手をとって、機嫌の悪い頬に手を添える。怒っていても、垣

行き場のない手で体を引き寄せて、優しく包む。それぐらいしか今の垣根にはできない。

いつもの姿じゃないのが少し不服だったが、無機物に嫉妬したことは大きな進歩。

少しくらい、甘えさせてもいいだろう。

「……じゃあ、今度は布団じゃなくてあたしを使つてね」

「それは遠慮しとく」

それでもまだ思考は変わらない彼女に呆れつつ、腕に入れた力が微かに強まる。

もつとたくさん嫉妬しろ。

もつとたくさん悩め。

垣根帝督という男に、その全て支配されてほしかった。

act7：心はそれを認めない

九月に入り、暑さが少し落ち着きつつある今日、教室にエアコンの稼働音が伝わる。緩やかな曲線を描く髪が冷たい風に揺れて、少女の鼻歌が重なった。

髪も化粧も終わり、あとは渡された衣装に着替えるだけ。

まだ今日は始まったばかり。

だというのに彼女は誰よりも楽しそうに鏡を覗き込んでいた。

「最近の機嫌いいですね」

「まあねー！」

木原相似の声に弾んだ声で少女は笑う。

あの日から、あの夏の夜から彼女の熱は収まらない。

ハグをされた。

頬を触れた。

いつもの姿がいいと言われた。

垣根にそんな言葉を向けられて、抱きしめられたのは初めてで、浮かれてしまうのは当然だった。

歓喜と興奮。

睡眠だけでなく、この体はまだ役に立てることがひどく感情を揺さぶる。

捨てられない。

隣に置いてくれる

それが分かれば、不安はもうない。

天羽隼系の頭の中にはずっと彼の言葉と体温が反響して止まらなかった。

「今日の衣装見てもそう言えるといいが」

「メイド服でしょ？仕事だし、ちゃんと着るよ」

「でも萌えの鉄板ですし、今度こそリアクションがもらえるかもしれないよ？」

「んー……最近、いろんな角度から攻めても不発だったからねえ……」

しかしそれでも垣根は一度も彼女を使用したことがない。

テレスティーナの言葉で衣装ラックにかけられた黒と白のコスプレを見つめると、鏡越しにそれを相似が呆れ気味に鼻で笑う。

今日の仕事はしばらく前のプールのロケと同じで少し特殊。

学生服ではない趣味の悪いコスプレに嫌気が差す。誰が喜ぶのかと今一度上に問いたいが、仕事とあらば仕方がない。

「だから、言ってんだろ？今からでも遅くねえから路線変更するべきだ。可愛い路線で第三位たちに並ぶロリータとかなー！」

「それはテレスティーナさんの趣味でしょ？色気ある方が性欲に繋がるんじゃない？」

「でも貴方男性ファン少ないじゃないですか」

今日の衣装はミニスカートのメイド服。

フリルたっぷりのワンピースとカチューシャ。

丸いトウの低いパンプス。

リボンか胸元を飾り、くるぶしを隠す清楚な靴下が足元を可憐に見せる。

少女趣味な衣装は、高身長で胸の大きい女に着せるようなものではない。

少なくとも、天羽の考えでは。

だが彼女のマネージャーたちはそうは思っていないようで、不機嫌そうな目つきで論理を展開していく。

目を逸らしたい事実を突きつけて、彼女の考えを否定してくる彼らはどこか必死だった。

「そうだぞ、お前のガワを好きになるのは基本女だ」

「う……」

「それに比べて第三位や第五位の可愛い系はほとんど男性ファン。この違いは路線の違いの結果ですね」

「この溝をどうにかしねえとこれ以上売れねえぞ。結局女に貢ぐのは男だからな」

「今回のドラマで男の新規が来てくれるとありがたいのですが……」

彼らがここまで強く言うのは売上のため。

天羽彗系は六番目。それは能力も、売上も同じ。

女ウケのファッショント、万人ウケしない曲。

サブカル特化の超ニツチな女性シンガー、それが現時点でのアイドルとしての天羽彗糸。

デイスコで流れていそうなエレクトロ・ポップと、誰にも真似出来ない能力ありきの幅広い音域。

歌詞は厨二チックなものか、エロティック、もしくは暴力的な英語しかない。

マイクは握らず、ハードなダンスを繰り返して声を荒らげる。

いわゆるJPOPには当たらないプロモーション。

それは今の流行りとは乖離していた。

どんなに見た目が良くても、どんなに性格が良くても、多数派が好むような方針を取らなければ売れることはない。

売上がなければ経営は傾き、できることは限られる。

金がなければ収入が低減する。収入が少なくなれば活動ができない。

彼らはどうにかしてでも客を取る必要がある。

そのためには天羽を言いくるめなくてはならなかった。

「でも一応男性のお客さんいるし……」

「それはドMのクソ野郎か、お前の曲に知ったかの洋楽オタクが群がってるだけだ」

「オタクくんだったって一応ファンでしょ？ドMも……」

「でもお前のことは好きじゃない、曲が好きなんだよ。ドMに関しては、垣根がドMとは思えねえから一切役に立たねえ」

「でもさあ、好きになる女とやりたい女って違うじゃん！あたしは垣根くんのためになれればなんでもいいの！」

テレスティーナたちが望むのはフリルとロマンチックが散りばめられた乙女のアイドル。

似合わないリボンに、ツイントール、ピンクとハート。

ありふれて特別な、可愛らしく夢で溢れた世界観を求めている。

幼い頃ならそれもいいのだろう。少女アリスのようなフリルのエプロンも、リボンがたくさんのドレスも、年齢が一桁だった頃よく着

せられていた。

けれどそれは今の天羽には適切ではない。

肌面積を大きくとって、欲情を煽る格好こそが彼女にとっての勝負服。

それが一番似合うから、それが一番求められるから。

大人の姿になってからは特にそう言われて育ってきた。

似合わない服など誰が喜ぶのか。事実、喜ばれたことも、着て欲しいと言われたことも無い。

凝り固まった常識は溶けることがなかった。

「でもよ、あいつはお前が好きなんだろ？ならふつーに手繋いでデートしてた方がよっぽどいいと思うんだが」

「男が好きになるのは処女で背の低いロリっ娘って相場が決まってるのよ。保護欲を煽る、小柄な子と恋愛して、あたしみたいな巨乳は愛人なのが基本でしょ」

「思想が偏ってますねえ。そうでもないと思いますけど」

「全くだ。男の守備範囲は恐ろしいほど広いぞ」

天羽の常識は世間と全く違っていた。彼女の出自を考えれば妥当な考え方だったが、それでも他人から見たら頭がおかしい部類。

彼女の言葉一言一句に誰かのため息が聞こえる。

誰もこの考えを理解しないことくらいずっと昔に分かっていたが、それでもどこか寂しかった。

「えー？そうかなあ。でも、あたしみたいなのは愛人でいいと思うけど……隣歩いてても、好き同士で付き合ってるようには見えないでしょ？」

「では世論に聞いてみましょう。貴方と帝督さんがお似合いなのか」

「へ？」

マネージャーたちの溜息に負けじと反論するも、相似の言葉に言葉は引つ込んだ。

突拍子もない発案に頭が混乱する。しかし鏡から目を背いて見つめた相似の顔はいつも通りで、混乱していること自体がおかしいとさえ錯覚してしまう。

世論とはなにか。何を聞くのか。
よく分らない。

「貴方のファンにも、あちらのファンにも一定数ですがカップリングを作って楽しむ方々がいます」

「カップ?」

「男女、または同性同士の二人組の間に恋愛感情があると妄想することですよ」

「……ん?」

「で、そういう方の中にはナマモノジャンルに手を出して、あろうことかエロ本を作る輩がいます」

「ん、んんん?」

「その作品の傾向から、貴方と帝督さんが恋人のように見えるか、どんな関係性が望ましいか考えてみましょう」

彼らが言っているのはいわゆるエゴサーチ。それも特定の界限にポイントを定めたもの。

その界限とは、いわゆる二次創作を行う界限のこと。

妄想を絵にし、文にし、それをあろうことかネットにあげる人々は世界に一定数存在する。

それは大半が架空の人物、アニメのキャラクター、漫画の登場人物、ゲームのAvatar、などを信仰する人に多く見られるが、もちろん現実の人間で創作を行う人もいる。

それこそ、今をときめくアイドルも。

「でもナマモノは垢に鍵かけてるだろ、検索に引つかからないように。妄想ばっかで大したこと呟いてねーし、わざわざハッキングして見る必要があるか?」

「こういう輩が金落とすんですから、広報担当としては見ますよ。それにドラマの告知がされてからかなり賑わってますからね、PRのネタとしても色々知見が得られます」

「ナマ……?」

それをよく知っているマネージャーたちは天羽そつちのけで話を続ける。

だが話の中心人物は何を言っているのかは全く分かっていない。

エゴサーチなんてしたこともない天羽には日本語には聞こえず、理系の悪い部分を凝縮した会話に辟易しながらも、彼らの会話をぼんやりと聞くことしか出来なかった。

「あー、置いてきぼりだな」

「直接確かめた方がいいですね。見せてあげますよ」

その姿を不憫に思ったのか、相似は手にしたタブレットを少し弄ると天羽に手渡す。

怪訝そうな顔をしてそれを受け取ると、画面に表示されたページを目で追って、口で読み上げた。

キラキラとした絵柄の電子書籍に描かれているのは天羽本人と垣根にそっくりなキャラクター。

そしてタイトル。

「……？えっと、二位かける、六位？R、じゅうは、ち。R18!？」

「ええ、成人向け作品です」

「はあ!？」

何も考えずにタイトルを呟いた、その愚かさを悔いる。

手にしていたのはR18、十八禁、成人向けのエロ漫画。天羽を模した全く関係のないキャラクターと、垣根を模した全く関係のないキャラクターのベッドシーン。

自分と知り合いによく似たキャラクターが性行為に及ぶ趣味の悪い内容に目眩がする。

「基本は貴方単独のエロ漫画が多いんですが、貴方はなんだかんだ男性陣と絡みが多いので男女カップも女同士も結構あります。まあ他が少ないってのもありますが……」

「他の奴らが絶望的だからな……男女の場合は基本お前しか相手がないんだよ、誰に対しても明るく振る舞えるし、ほとんどが前からの知り合いだし」

「同性なら結構幅あるんですけどね。強いのは常盤台のコンビ、男なら第一位と……いえ、やめておきましょう」

マネージャーたちの会話そっこのけでページをめくる。

白黒のキャラクターと、インパクトのあるコマ割り、そして流れるようにスムーズな導入。

普通の漫画と言われてもおかしくは無いクオリティ。だと言うのに五ページ目で下着のホックが外されている。

どこに出しても怒られる不健全な漫画だった。

それを除けば普通の恋愛もの。

王子様系の垣根と、それに振り回される鈍感な天羽。

皆に秘密の恋愛を続けて、楽屋の中で官能の世界へ没入していく。

大雑把に言えばそんな内容。

「こ、れは一体……」

「結構普通の選びましたけど、地雷でした？」

「ふつう」

「ええ、普通の恋愛ものですけど……？」

見たことも無い世界に困惑しか感じられない。これを普通と言う相似にも。

(普通?!普通の人は電気マッサージ機をこんなことに使うの!?)

一枚一枚、電子の上のページをめくる。

(ここは感覚ないのになんで感じてるの?!つか何とは言わんがデカくね!!?馬!?!)

めくるにつれて、彼女の顔は青ざめていく。

(ていうか内臓の位置違くない?!ここに液体は入んねーよ!!解剖学が狂ってる!!)

フィクションの世界のファンタジックな体の神秘、及び人々の妄想に何か吐き気に近い嫌悪感が腹の底から湧き上がる。

下世話な誰かの妄想はただの毒でしかなく、見たくもない。

しかし、目を塞ぎたくなるイラストはこの世の普通を表している。

誰かに愛されたい。

誰かを愛したい。

そういった普通で、一般的な恋を描写し、描く人の常識を写している。

だから、このおびただしい量のコマは、彼女にとって恐ろしかった。

(ちよつとこれは……ないわ)

触り合う二人は吐息とともに愛を吐く。

好きだ。

可愛い。

愛してる。

大好き。

気持ちいい。

愛してる。

物語の彼らは砂糖のように甘い言葉を囁き合つて、愛し合つて、触れ合う。

(……普通はこんなに恥ずかしいこと言われるの?)

目眩がする。

吐き気が込み上がる。

こんな現実、認めたくなかった。

好き合う同士として、肌に触れて、愛を囁き、求め合うことが普通。褒め合つて、認め合うことが普通。

その普通が分からない。してもらつたことも、して欲しいと言われたこともないから。

彼女にとつての性行為とは彼女を有効的に使う手段のひとつではない。

誰にもできない感覚や脳の操作で快感を与え、理想の姿で男や女の欲を満たす。だから言葉の押収も、愛を囁いたことも囁かれたこともない。

彼女は都合のいいモルモット。誰かのために体を使うことでしか存在が保たれないと、ずつと言われ続けてきた。

「……これは恋愛が絡んでるけど、それ以外はないの?なんかほら、共感性羞恥心が煽られないやつ」

「基本ないですね。あるとしても片想いだとか、最初は感情がなくても結局両想いになるとか、あとは寝取られとかですかね?なんだかんだ恋愛感情が絡む結果になりがちです」

「普通そういうことは恋人同士でしかやらないからな。あつたとして

も男性向けとかか？けどそれに意外と男性向けでも恋愛もの人気
だったりするから一概には……」

だから、この作品が恐ろしかった。

普通を突きつける誰かの妄想が、酷く心臓に突き刺さった。

「普通の、恋人……」

「そうですよ。だから貴方が心配するような——彗糸さん？」

普通は、恋愛感情がなければ性行為を行わない。

そう感じないのは『普通じゃない』自分だけ。

ハグをした時。

頬に触れた時。

いつもの姿がいいと言った時。

彼は笑っていなかった。

この絵の世界とは違う。

彼が愛を囁くことも、優しくキスをすることも、強く抱き締めるこ

とはない。

好きじゃない女を抱かない彼を、この体で幸せにすることは出来な
い。

虚しい。

絵の中で笑う、自分そっくりな女が酷く羨ましかった。

アイロンがかかった黒い燕尾服。グレーのベストと、金のボタン。ウイングカラーのシャツと、革の靴。

施した映像向きの薄いメイクと、いつもの髪型、そして整った顔。

垣根帝督は今日もかっこいい。

「垣根、かっこいいー!」

そんな当たり前の事実嬉々として黒髪の少女が声を弾ませて笑う。

「そうだろ? なんでも着こなしまうからな。つつても、こんな格好をすることになるとは想像できなかったが」

「楽しんでるのはいいけど、あまりうるちよろしないのよ? 今日は特にな」

「文化祭モチーフだったか。美術スタッフが苦労したんだろうな」

胸のあたりまでしかない背の低い子供はとても楽しげに、瞳を輝かせてくるくと垣根の周りを回る。

楽しそうな彼女——杠林檎の姿に少し笑みを浮かべると、釘を刺すマネージャーの言葉に顔をパツとあげる。

今日は通常の撮影とは違う。少し前のプールと同じように実際の建物での撮影だが、今回はその建物のほとんどに装飾が施されている。

文化祭を行う回の撮影を数日間に渡って行うため、借りている廃校舎を全てそれらしく飾っていた。美術班が残業し作った装飾、軽率に触って壊してしまつたら元に戻せない。

それを考えると小さいマネージャー、心理定規の言葉も正しい。

「ぶんかさい?」

「一端覧祭いちたんらんさいの小規模なもの……って分からないか」

「学生がお店を開くイベントのこと。設定では主人公たちは喫茶店を行うのよね」

「女がメイドで、男が執事だな。なんつか、ありきたりな設定っての? こすられまくってる三流漫画みたいなもんだ」

文化祭が舞台の話。こういったイベントに馴染みのない林檎に簡単に説明すると、戸惑いながらも彼女は頷いた。

垣根が着込む服装がいつもと違うためか、理解していないながら何か特別なことだと感じ取ったのだろう。

垣根が着ているのは燕尾服。今回は執事の格好だった。

文化祭ではよく見かけるメイドと執事の喫茶店を行う話、主人公の彼がこのような非日常的な服装をしているのも頷ける。

とても王道で、ありきたりな学園ものらしい、よくあるコスプレ姿。

「そういうベタな展開を楽しむドラマだから、仕方ないじゃない」

「ベタすぎんのもどうかと思うがな」

「でも、女も男もそんなベタが好きなんでしょう?」

「あ?」

「少女漫画らしく、メイドさんをエスコートしてきたら?」

そしてヒロインも同じ。その少女のことを暗に示す心理定規の言葉に微かだが肩が跳ねる。

男が執事で、女はメイド。

今頃ヒロインは黒と白のフリルを纏って、カメラが回るのを待っているのだろう。

彼女を迎えに行きたい。その心情を見抜かれている。

人の感情を見透かすような子供の視線が気に食わなかった。

「エスコートって、んな時間ねーだろ」

「美術スタッフの作業が遅れてるそうよ。一時間は色々できるんじゃない?嫌なら構わないけど」

「そりゃあまた随分と都合のいい話だな」

だがその苛立ちを覆す言葉に面食らい、呆れながら鼻で笑う。一時間という長くも短い空きができるのと知って、その時間に何ができるのか。

そんな短い時間じゃ話をするだけで精一杯。

けれどもその足は言葉とは裏腹に出入り口へと向かっていた。

「何処か行くの?」

「知り合いのどこだ」

少女たちを通り過ぎ、扉に手をかけるとスーツの袖に引き止められる。さらさらの黒髪から輝かしい瞳で覗き込む子供の姿に、自然と足が止まった。

林檎のキラキラとした好奇心に気後れしてしまう。断る理由は沢山あったが、断れない理由もままあった。

「一緒行くー!」

「なら私も行くわ」

「それはいいが、邪魔すんなよ?」

「わかってるわよ」

冒険心、好奇心に満たされた少女の明るい顔に断ることもできず、後ろから付いてくる彼女たちとともに別の教室へと映る。

楽屋代わりの教室がそれぞれ割り振られており、撮影で使用しない奥まった棟が関係者用に使われていた。

そのうちの一つ、天羽彗糸、と名前が印刷された表札代わりのA4用紙が貼り付けられた扉を軽くノックをしてから中に呼びかける。

「天羽、いるのか?」

「どうぞお」

「邪魔するぞ——ア!?」

中から聞こえた女の声に意気揚々と扉をガラツと開く。ほんのりと暑い廊下に流れ込む涼しいエアコンの空気が頬を撫でて、その奥にいる少女が視線を奪う。

そこに居たのは半裸の少女。

青い下着と白い肌、それを隠すはずのワンピースは背中部分が丸見えで、背中のチャックが全て降りており、きちんと着れていない。

人目見てわかる。

着替え中。人を入れていい状態ではなかった。

「お前、着替えてんなら人入れんな!」

「チャック上げるだけだしいいでしょ、別に。神経質なんだから」

慌てて扉を閉めると、能天気な少女の言葉が小さく扉の裏側から聞こえる。

脳の機能が足りていないのか、無防備な状態で人を部屋に入れる彼女の無神経さが不思議でたまらない。

「裸見て浮かれてるの?」

「んなわけねーだろ」

扉に手をかけたまま固まっていると、後ろで控えていた心理定規がくすくすと馬鹿にするように笑う。

その言葉に扉の内側で着替える天羽の姿が脳裏に浮かんで、腹立たしい。

肌が見えたからなんだ。

下着が見えたからなんだ。

そんなものに一喜一憂するほど垣根は女に飢えていない。

だと言うのに何度も腹立たしい疑惑を向けられて、いい加減うんざりだった。

「本当、奥手でツンデレねえ。今のままだと嫌われるわよ?」

「あいつが俺を嫌うわけ、」

「どうかしら? 女は貴方みたいな不器用でぶつきらぼうの恥ずかしがり屋、大嫌いよ」

しかし、そのまま続く心理定規の言葉が動揺を誘う。腹立たしきは宇宙の彼方に飛び出して、残るのは不安と心配、そして動揺。

嫌われることなど、一度も考えなかった。

初めて感じる不安に動揺してしまう。思わずドアから離れた手は、かすかに冷えていた。

「もういいよ、入って」

「……おう」

ゆっくりと開いた扉と、天羽の声にはたと思考が戻る。

不安を隠し、視線を移すと金髪に気を取られてその動揺もどこかへ行ってしまった。

フリルがたくさんの白いエプロン、華やかな襟元と緑のリボン。珍しいミニスカート姿から見える足はほとんどが露出し、くるぶしを隠す短い靴下しかない。

金色と桃色の髪が弾む。

高い位置で括られたハーフツインが子犬の耳のようで、どこか子供らしい。

昔出会った幼い少女と重なる。

かつこいいと言ってくれた少女と。

「わ、メイドさんだ」

「あれ、どなた？」

僅かな時間とはいえ呆然としてっていると、後ろからするりと林檎が飛び出した。フリルの多い可愛い服に興味津々のようで、キラキラと眩い瞳でメイド姿の天羽見つめて笑顔を絶えず浮かべていた。

しかしこの二人は面識がない。あるとしても、林檎が一方的に画面越しで知っているだけ。

全く知らない子供に困惑するのは至って一般的で、天羽も例に漏れず首を傾げて眉を

八の字に下げている。

「杠林檎。お洋服、可愛い」

「よろしくね。あたしは天羽慧糸、杠ちゃんのお洋服も大人っぽくて可愛いよ」

林檎に目線を合わせてしゃがむと、金色と黒の二つのつむじがよく見える。生粋の子供好き、人間好きの天羽には林檎と関わるのは楽しいことらしく、優しい笑みで頭を撫でる。

垣根には滅多に見せない笑顔と、手つきに少し嫉妬心が煽られるも、喜び溢れる少女たちの姿に水を差すようなことはしなかった。

「で、保護者は？」

「こっちで保護してるのよ。見学したいらしいから連れてきたわ」

「保護……垣根くんと一緒に住んでるの？」

「あ？まあ基本事務所に住んでるが、たまに来る時もあるな」

「へー……そうなんだ」

しかし一瞬、心理定規の話に耳を傾けていた天羽の顔が微かに曇る。

（あ？なんだ、今の）

初めて見る顔だった。

取り繕った笑みが剥がれ落ち、獣の本性が現れたかのような、なに
か恐ろしく、背筋が凍る恐怖。

「垣根くんと仲良いんだ？」

「でも怒ると怖い」

「怒ったら怖いのはみんなそうだよ。でも、垣根くん優しいでしょ」

「んー、たまに」

だがその顔も直ぐに消え、いつもの朗らかな笑みが戻る。

満面の笑みで林檎の淡々とした反応に答えて、楽しそうに笑い合
う。先程の恐ろしい女の面影はどこにもなかった。

「それで、ここにはどんなご用事で？撮影はまだ始まらないって聞い
ただけど……」

「暇だろ？見て回ろうぜ」

「確かに暇になってるけど……」

「私たちは二人でまわってるから、行って来なさい。演技の前に雰囲気
を見ておくのも大切よ」

丸い頭を上げて、しゃがんだまま天羽は垣根たちを見つめる。フリ
ルのついたカチューシャと小さいツイントールが幼くて、顔の作りと
目線の高さも相まって、何だかすこし背德的に感じてしまう。

獣のような恐ろしさはなく、ただの可愛らしい少女。

いつも通りの、彼女だった。

「それもそうだけど……」

「ほら、行こうぜ」

その姿に手を伸ばす。しゃがみ込んだ彼女をひきあげるため。

しかし彼女は不思議そうな顔をして、一向にその手を握らない。

差し出した手の意味が分からないのか、彼女も恥ずかしいのか、微
動だにせず彼女は首を傾げて大きな瞳で垣根を見つめた。

なぜ手を握らない。

恥ずかしさから？

手汗が気になる？

理由はよく分からない。けれど、彼女は手を握らないのは事実だ。
仕方ない、と手を引っ込めてポケットをまさぐる。

直接触れるのが嫌なら、手を何かで覆えばいい。

「お手をどうぞ、お嬢様」

執事らしく、真っ白な手袋をはめて、片膝を床につける。

齒が浮くような甘い言葉を囁いて、可愛いメイドに手を差し伸べた。

白い手袋に緑のネイルで彩られた指先が触れる。

「なにそれ」、なんて少し恥ずかしがりながら、困ったようにその手を取った。

垣根にだつて恥ずかしさはある。

好きな女に触れるのは、アイドルの仕事より何十倍も恥ずかしくて、こそばゆくて、嬉しくて、切なくて、心臓が激しく高鳴った。

act 8 : 支配者の恋

手を繋ぐ。手袋越しに体温が伝わって、繋いだ手から彼の鼓動が体に駆け巡る。

その温かさが怖い。感じたことのない想いに戸惑いながら右手を握って、誰もいない廊下を歩いていく。

足音が響いて、静かな廊下に二人の声が混ざった。

「滑りやすいから気をつけろよ」

「流石に転ばないよ!」

「随分前にすっ転んだの忘れたか?」

強く手を握られて、垣根が先に階段を降りていく。

初めて握る彼の手。

手袋越しに感じる男の手。

手を引かれ、誰もいない階段で二人、ぎごちない態度で視線が交わった。

金髪が跳ねる。ワンピースが揺れる。

どこかいつもと違う。

背広が背筋を伸ばすのか、いつもよりピリピリとした姿の彼に静かな緊張感が廊下に広がっていた。

「……で、どこに行くの?」

「さあ?お前はどこ行きたい?」

「垣根くんが行きたいところ」

「あのなあ……」

階段を一段一段下りていくと、数ステップ下で佇む少年と目が合った。執事らしく軽く手を取って、いつもと同じ仏頂面のため息交じりに肩を落とす。

天羽が言葉を発するたび、彼は眉間にしわを寄せて嫌そうにため息をつくばかり。

いつもそうだ。

何か言いたげに、がっかりしたように彼は苛立った目で蔑む。

だから誘う。笑顔にしたくて、幸せにしたくて。

この体を使えば、どんな男も満たせるから。

「そうだなあ、強いて言えば……ほら、鍵が掛けられて、防音で、人気の無い教室が沢山あるよ？ヤリたいこと、あるんじゃないの？」

「そういうこと、俺以外に絶対言うなよ」

「垣根くんにはか言つてないよ、今の所は」

しかしアップローチは簡単に跳ね返される。舌打ちを響かせて、握る手に力が入れると垣根は酷く怖い顔で彼女を見上げる。

階段を下りる足がその声に止まって、心臓が一瞬大きく跳ね上がった。

いつものことだ。

彼女を利用としない。彼女に触れない。

手を握つたのだから、記憶が正しければ初めてのこと。

しかも手袋越しで、実際にその肌に触れたことはない。

そのいつもが、今となっては恐ろしく感じる。

「今のあたしは垣根くんのもものだから、無闇矢鱈と他人に股は広げないよ」

自然と握る手に力が加わる。

あなたのものだから、あなただけのものだから、好きに扱って、好きに黽つて。

彼の気を引くためにわざと蠱惑的な声で、仕草で、彼を見つめる。

役に立ちたい。

この体で彼を満たしたい。

それが求められているから。

そうしないと、彼の隣にいれないから。

「昔と違つてか？」

彼の寂しそうな冷たい瞳が、ぎゅつと心臓を握りつぶす。大きくため息をついて、最後の段差から足を下ろすと、彼は面倒臭いと言わんばかりに目を伏せた。

垣根は天羽が嫌いだ。

目線をそらして、不機嫌な顔で冷たく返事をする。

それでも天羽は垣根が好きだ。

ずっとそばにいたい。

そのためには役に立つしかない。だから体を使って、能力を使って、自分の利用価値をあげている。

けれど垣根は一向に彼女を求めない。

やはり、恋をしていないと彼はこの体を使わないのだろうか。

疑問が浮かんでは心臓を蝕んでいく。

この体に意味はないのだろうか。

自分に意味がないと言われるのがひどく恐ろしい。

「それにしても、メイド喫茶なんて、他の超能力者にはきついだろうな」

「……それは垣根くんもだよ」

不穏な空気が嫌だったのか、垣根はつまらなさそうに沈黙を破って話題を変える。

もう、その話題に触れて欲しくないようだった。

軽やかなステップで残りの階段を降りると、スカートが広がり、自分の香りと彼の香りが混ざるように舞う。

ラズベリーとバラのシャンプーの香りは自分のもの。

少し奥に感じるシトラスと、スパイス、ちよつとビターな甘い香りは彼のもの。

「そうか？ 似合ってるだろう？」

「そうじゃなくてさ。人の下につくなんて、できなさそうだなって」
星がきらめく彼の香りに喉の奥が鳴った。

邪な感情が見え隠れして、何か嫌な感覚が腹の奥底から湧き上がる。

今日の自分は少しおかしい。

消耗していく精神を閉じ込めて、正常を装いながら、彼の手を握ったまま淡々と答えていく。

この感情は多分、理解してはいけないもの。

「性に合わねえのは確かだが、仕事だってんなら仕方ねえさ」

「仕事でも、人の機嫌伺って、振り回されるの苦手でしょ？」

「そりゃそうだろ。むしろ、俺の機嫌を損ねないように他人が気をつ

けるべきじゃねえのか?」

「確かに、それもそうかも」

いつも通りのテンションでまた歩き出す。目的もなく、ただ駄弁りながら飾られた学校の廊下を渡る。

とても静かな朝の学校。二人だけの世界のように、なんだか小つ恥ずかしい。

「……お前に振り回される分には構わねえんだけどな」

「なにそれ、あたしが問題児みたいに聞こえるじゃん」

「実際問題児だろ」

「ひどーい。垣根くんよりマシだよ!」

ふと顔を上げると、彼の茶色い髪に窓の外から光が差し込んで、微かに反射する。

その横顔が綺麗で、少し足が止まった。

「はあ……うるせえな。ったく、どっかで休憩でもするか」

「ラブホなんてあったっけ?」

「そういうことじゃねえんだわ」

「え!?!じゃあなに!?!」

「一息しようって話だボケ」

止まった足に気がついて、彼も歩みを止める。少し戸惑ったように天羽を見下ろして、ムツとした顔で頭を小突く。

その拳は軽く、力加減がされていたが、声は低く、怒気を感じる。

同時にどこか覚めていて、どこまで深く考えてもその感情はよく分からない。

朝日に照らされた顔からはその真意は見えなかった。

「なんだ……つまんないの。じゃあ紅茶でも淹れようか」

「テメエは何もすんな。エスコートしてんのは俺なんだぞ?」

「えー?垣根くんお茶の淹れ方わかるの?」

「俺を誰だと思ってやがる。どんな世界の作法だろうが、俺にとっちや常識の範囲内だ」

「ふーん……あたしは何しよっかな。垣根くんへの御奉仕」

今度は明確な目的を持って、周りの教室を物色しながら進む。

二人で休めて、尚且つ人目のつかないところを探しつつ、少し暖かい手袋越しの垣根の手を軽く握り返す。

涼しい朝、ゆったりとした時が進んでいた。

「は？要らねえだろ、そんなもん」

「今のあたしはメイドですから、ご主人さま。どんなことでもしてみせますよ？」

「なんだそれ、馬鹿みてえ」

くだらない言葉と共に足を止めると、その手を振りほどき、スカートを摘んで軽くお辞儀をする。

下ろした前髪の間隙から見えたのは鼻で笑う垣根の姿だけ。

「えー、似合わない？あたし、垣根くんのメイドになりたいんだけどな」

「メイドはいらねーぞ」

「じゃあ今日だけ」

お辞儀をして、広げたスカートの皺が視界いっぱい広がる。

短いスカートから見える脚と、白いフリルのエプロン。女の子の憧れを詰め込んだ可愛いだけの衣装は着ているだけでも恥ずかしい。

だというのに、つむじに集まる彼の冷たい視線のせいで余計に羞恥心が生じて仕方がなかった。

(似合うとは言ってくれないんだね)

顔に熱が集まる。

その熱に気づかれないように顔をあげて、いつものように馬鹿で抜けた笑みを作りあげた。

とても恥ずかしくて、死んでしまいそう。

「だとしても、エロい事はすんなよ」

「え、メイドなのに……？」

「お前の中のメイドは一体なんなんだ」

どこか虚しい。

いつもと同じやり取りなのに、今日はやけに重かった。

「じゃあ垣根くんはメイドさんに一発ぶちかましたいって思わないの？」

「思わねーよ」

もう一度手を取られて、今度は正面を向き合いながら彼は嫌そうな瞳を向ける。

そんなに嫌なら腰を捕まえてまで引き止めなければいいのに。

じつと、穴が空くほど不機嫌そうな顔で見つめる彼の行動原理が分からない。

「じゃあ、垣根くんは好きじゃない女の子に手は出さない主義なんだ？」

疑問から、つい本心が飛び出した。

好きじゃない女に手を出さない。

先ほど見た如何わしい本の内容が反響するばかりで、まともに垣根の顔が見えなかった。

好きじゃない女に手は出せないのなら、天羽を使わないという意味。

それは、彼女がいらないう意味。

あの本の濡れ場を思い出す。

可愛いって言われて、好きって言われて、そんな相思相愛の世界。

それを望むのなら、垣根は天羽を使うことはない。

確信。

天羽が彼を褒めることはたくさんあったが、その反対は今まで一度もなかったから。

「俺が浮気する様な男に見えたか？」

強く、それこそ骨が悲鳴をあげるほど強く、天羽の手を握る垣根の手に力が入る。

その痛みに心情を察してしまう。

「確かに俺はクソな悪党かもしれねえが、俺は好きな女を裏切るほど落ちぶれてもねえよ」

「……そっか」

「だからお前も——」

何か続けようと口を開くも、垣根の声は誰かの足音で音が掻き消えた。

小さな靴音と、杖をつく音。

白い髪の人相の悪い知り合いと、隣で微笑む小さな少女が、全く違う表情で廊下の角から現れる。

「あれ！二人仲良しだね、メイドさんと執事さんだ！ってミサカはミサカは珍しい光景に興奮しちゃったり！」

「メンドクセエのに話しかけんな」

白いのつぼと、それにしがみつく茶髪の子供。第三位とよく似ている打ち止めは、垣根と同じ燕尾服を着た一方通行ラストオーダーの後ろで笑顔を作るアクセラレータと、明るい声で楽しげにそばに近寄ってきた。

その姿を認識すると、手が振りほどかれて垣根は天羽の後ろに隠れるように下がる。

第一位と第二位は仲が悪い。

それは周知の事実。威嚇する猫のように隠れながらイライラしだす垣根に呆れて思わず笑ってしまう。

「一方通行くん、燕尾服似合ってるね。細いからかな？」

「そういうテメエは相変わらず駄肉がぶら下がってるな。早く痩せろ」

仕方がなく、垣根の代わりに前に出て同じように悪態をつく一方通行の前で笑うと、それが嫌なのかさらに彼の機嫌が悪く鳴る。

垣根と同じ燕尾服、執事姿の彼は何やらとても不機嫌なようだった。

「あのさあ、これでも一応モデル体重ですからね？170で60いてないのって結構凄いだから」

「んなこたア聞いてねエンだよ、テメエのコスプレはガキの教育に悪いっつってんだ」

「服着てるだけで!?!」

「テメエは生きてるだけで教育に悪いだろ」

今まで言われたこともない暴言にすこしたじろぐ。珍しく会話の主導権が奪われて、ペースが合わない。

相変わらずの毒舌でグチグチ、人生のなかで初めて聞くような暴言がグサグサと弱いメンタルに突き刺さった。

確かに自分でも今回の服装は似合わないと思っている。

短いミニスカートとフリルだらけの白いエプロンとペチコート。くるぶししか隠さない白いレースの靴下に、リボンがついた丸っこい黒のパンプス。

背が高く、巨乳の女には似合わないのは分かっている。

(褒められるとは思っていなかったけど、教育に悪いは予想できなかったな……)

だがそこまで言われる筋合いはない。すこし虚しい気分になりながらしゅんと顔を下げる。

悲しみはあまりないものの、なんだか心が辛い。

「そういうテメエは似合わなすぎて笑えるな、ヒョロガキ。俺の方が執事っぽいだろ」

「テメエは相変わらずだなヘタレ。背が高いことでしかマウント取れねえのかクソが」

項垂れていると、ふと前に影がかかる。すつと後ろから出てきた垣根の背中が視界いっぱい広がって、鼻の先が微かに服とくつついた。

全て分かっていると云わんばかりの上から目線で笑う一方通行と、それを高い背で見下ろす垣根。

何やら感情に整理がつく前に、いつもの喧嘩が勃発しようとしていた。

「あわわわ、そんな喧嘩しないで、ってミサカはミサカは腕をつかんでみる！」

「そ、そうだよ、二人共似合ってるんだから、張り合わなくても」

思わず女二人で相方の腕を掴んで制する。それでも一方通行は勝ち誇った顔をやめず、垣根は物騒な物言いをやめない。

「ああ、そうだな。テメエらにしては珍しく似合ってるな。これからコスプレのままベッドで乳練り合う頭の弱いカップルの真似だろ？」

「死にてえならそう言えよカス」

「カスはテメエだろおがボケ。女振り回してるだけのガキが」

「あ？」

「わー!!!行くよ垣根くん!!!」

最終手段、片腕を体で包むように絡め取って、強く引っ張り廊下を走る。

この場は離れるのが得策だ。一向に収まらない喧嘩は無理やり終わらせるのが鉄則、体ごと険悪な空気から連れ出せばいい。

「もう、張り合わないの!」

「別にいいだろ」

映像では映さない、物置のような廊下のひとスペースに二人の体を滑り込ませる。

明かりが点いていない薄暗い廊下には誰もおらず、とても狭い。大小様々な道具と装飾、誰かの荷物やペンキが所狭しと置かれた場所は、この時期かなり蒸し暑い。

「垣根くんが似合うのは誰の目から見ても一目瞭然なんだから、そんな怒らなくても」

「じゃあ誰がテメエのために怒るんだよ」

不機嫌そうに黙り込んでいた垣根から腕を離し、肩を落として軽く咎めると、急に圧迫感で押し潰されそうになる。

ものに溢れた狭い廊下。壁に引っ付いた体を見下ろすのは自分より背が高く、恐ろしい風格をもつ男。逃げ道はなく、普段より低い声が命の危険を警告する。

動物の本能が、脳にうるさく警報を鳴らしていた。

「はあ?なんの話?」

「馬鹿見てえに笑いやがって、人の気持ちが理解出来ねえのかテメエは」

「いきなり何?」

低く、唸るような声で垣根は声を絞り出す。何か恐ろしい声だった。

真っ黒な目で見下ろされて、暗い影が体を包む。

彼の息がかかるほど近い顔、心音が伝わりそうな距離。

恐怖からか、心臓の鼓動が不思議と早まる。胸の高鳴りは近い距離からか、彼の怒りからくる恐怖からなのか、皆目見当がつかなかった。

「いつもそうだ、俺の感情なんて気にしないでやれ交合うだとか性交渉だとか、テメエは発情期の犬かなんかか？」

「犬!？」

「なんでテメエはそういうことしたがる。第一それをしたって俺が喜ぶわけねえだろ！」

「あつ」

強い力で肩が壁にぶつかると、肩を掴まれ勢い良く壁に体を押し付けられ、思わず上擦った呻き声が漏れた。

その声に一瞬たじろぎ、垣根は視線を彷徨いながら肩から手を離す。

おかげで痛みは無くなったものの、ぎこちない空気はそのままだった。

「……テメエがしたいわけじゃねえからムカつくんだよ。他人の言葉に振り回されてばかりで、自分の考えはねえのか」

「自分、の……」

垣根の言葉に、またあのやらしい本の内容を思い出してしまう。

二人の男女の恋。想い想われ、慕い慕われ。

あの眩しい常識が何か胸に突っかかって、言葉が出ない。

彼に嫌われたって構わない。

——本当に？

彼の役に立ちたい。

——本当に？

好きって言われなくていい。

——本当に？

捨てられたくないだけ？

「垣根——」

「ちよつと、走らないの」

自問自答で頭に熱が登る、脳の混乱の最中、誰かの声が廊下に響いた。

確か先ほど会った垣根が保護している子供の声。

どうしてか、その甲高い声に微かに苛立ちを感じる。

暗い廊下、二人きりの興奮と恐怖。自分と彼だけの空間に混じる異物に苛立ちを覚えるのは乙女なら普通のことだった。

しかし、天羽にとってそれは普通じゃない。

「怪我するわよ！」

「垣根っ！あつちに甘いふわふわの——!!」

少女が走る。清掃したばかりの濡れた床は摩擦やら重力のせいで小さな子供の体を反転させて、大きな音ともに少女がぶつかつた。

転倒。

衝撃を和らげようと近くにあつた脚立を掴み、地面へ倒れ落ちた。

降る。刷毛が、テープが、ペンキが。

脚立の上に煩雑に置かれた誰かのやり残しがくるりとひっくり返つて、その先にいた天羽と垣根の頭上に真つ逆さま、落ちてきた。

「つたく、誰だここにんなもん置いたのは」

「あ……」

降りかかる衝撃に構え、目を瞑るものの、一向にその衝撃はこない。なにが起こつたのかと不思議に思い、恐る恐る目を開けると白い世界がそこにあつた。

真つ白な翼の中、一瞬だけ垣根と目が合う。ふつと息を吐き、目を伏せて、軽く天羽の頭を撫でて白い翼を広げた。

「林檎、怪我はねえか？」

「ん……ごめんなさい」

「別に構わねえよ」

翼をしまい、彼は急いで少女の元へ向かう。ポツンと一人、取り残されて。

その背中を繋ぎ止めたい。

そんな願いが、静かな心の中で何回も、何回も反響する。

恋とは支配。

脈絡なく食蜂操祈の言葉を思い出す。

その言葉の意味をようやく理解できた気がする。

この行動の意味も。

彼を支配したい。

この体で、この能力で、自分だけで満足して欲しかった。
振り向いて欲しかった。

自分にだけ、笑って欲しかった。

「どうした？」

知らない子供は家に上げて、あたしは呼ばないの？

あたしを撫でた頭で、その子供を撫でるの？

可愛いつて、言ってくれないの？

あの本みたいに、優しく笑って、好きって言ってくれないの？

(昔は可愛いつて、言ってくれたのに)

支配者を蝕むのは汚い感情。

傲慢な本能を刺激する支配欲。報われたいと、彼を奪いたいと、支配したいおぞましく一方的な欲求。

「あたし、垣根くんが好き」

「……んなこと、知ってるっての」

人間は好きな女を抱く。だから彼は彼女が好きじゃない。

一生振り向くことがなければ、報われない恋。

この支配欲が彼を蝕む。彼の笑顔を曇らせる。

彼が他の女を抱いたら、どんなことをするか分からないから。

彼が他の女に笑うと、酷く心が掻き乱されるから。

そんな女、彼の近くにはいけない。

嫌いな女の劣情なんて、気持ちの悪いもの。

気持ち悪いものを、美しい男のそばに置きたくなかった。

天羽彗糸は今日、初めてその感情をあらわにした。

初めて我儘を言った。

初めて、彼のためではない、自分のために言葉を吐いた。

「だからさ、別れようよ」

初めて、ずっと無視してきた自分の感情と向き合う。そのあまりの重さに、唇の体温が奪われていった。

act9…きらめく始まり

昔、神様を見たことがある。

それは幼い頃のこと。

まだ研究所を点々としていた、昔のこと。

垣根帝督が背の低い、力もない、子供だった頃の話。

無機質な白い廊下を女の研究員とともに歩む。

靴音が響く廊下で少し項垂れながら研究員の後ろをついていくと、冷えた空調に寒気がした。

「お、っと」

黙ったまま研究員の後ろをついてくと、不意にその背中にぶつかる。突然のことに驚き、足が止まった研究員の視線の先を追うと、チカチカする金色が視界に入った。

お姫様のように長く、ウェーブのかかった金髪と、熊の耳に似たお団子頭。

研究員二人に挟まれて少女は高級そうな上品な服で歩く。垣根よりも幼く、小さいその少女は不思議と大人びた雰囲気纏い、スカートを揺らしていた。

なぜか白い布で目を隠し、黒い拘束具をつけているその少女は、どこか化け物のよう。

「誰だ、あいつ?」

「ああ、あれは神様だよ」

「神だあ?」

「といっても、彼女を崇拜していた教会でそう呼ばれていたただけだよね」

広い廊下で金色の幼い少女が横切る。爽やかなシャンプーの香りが舞い、金色の糸が真っ白な世界に広がった。

大きな力に目覚めたのは幼い頃で、その頃からずっと研究所で育つ

ているようなもの。なので大抵の実験体は顔を覚えているのに、その少女に見覚えはない。

金髪を見るのは初めてで。その輝きに小さく息を飲む。

「あ、」

瞬間、彼女が横を通るその僅かな時間、彼女と目が合った気がした。布越しで本当かどうかは分からない。けれど、こちらに向けた顔は間違いない垣根に向かって微笑んでいた。

鮮やかな少女が視界から外せない。

拘束された腕に、封じられた視界、自由のない研究所で、嫌になるほど眩しい笑顔をする少女に心掴まれた。

「……気持ち悪」

吐き気がする。

人が死んで、軽んじられる環境を知らない無垢な笑顔が垣根の心を乱す。この気持ちの悪い環境で、笑顔を作れるその幼い子供が怖かった。

「大丈夫？」

思わず吐きだした侮蔑の言葉に少女は振り返る。

小さく呟いたはずなのに、少女の幼い声が返事をした。喋れるとは思っておらず、唐突な声に少し肩が跳ねる。

耳障りな声で呟く彼女の声は少し馬鹿にされているようで、居心地が悪い。

「っ、喋れんのか、テメエ」

「気持ちが悪いのなら、安静にしておいた方がいいよ」

「違えよ。テメエの姿が気持ち悪いんだよ」

「ああ、なるほど。アナタは綺麗だから、汚れたものが気に食わないんだ」

罵倒したというのに、彼女は傷一つついていないと言わんばかりに朗らかに笑い、そして真っ直ぐ見えない瞳で垣根を見つめる。

そして小さな口がぱちぱち弾けるキャンデイのような甘い言葉を囁いた。

人を墮落させる、悪魔の囁き。

その声に心臓がざわついた。

「……見えてんの？」

「いいえ。でも分かるよ」

「は？」

「香りがとても綺麗だから」

立ち止まった少女は優しく垣根に笑いかける。その笑顔はもう会えないあの子と良く似ていて、意識せずに彼女から視線を外す。

とても嬉しそうに、あどけなく笑う彼女は恐ろしく、おぞましい。

けれど何故か、心の奥底では綺麗だと感じてしまった。

「きらきらした香りがする。弾けるような星みたいで、とても綺麗」

「そういうテメエは太陽みたいに真っ白だな。今にも燃え尽きるんじゃないの？」

「これ、白い服なの？可愛いのかな」

少女の言葉に皮肉を吐き捨てるも、目が見えていない少女にそれは通用しない。

少し罪悪感が垣根を襲う。

目の見えない少女に外見についてとやかく言うのは幼い垣根でも酷い事だと分かっていたはずだというのに。

「……まあそれなりに可愛いんじゃないの？見えねえだろうけど」

「馬鹿正直ね。からかっただけなのに。服は自分で着たから分かるよ」

「んなっ!!？」

軽率な言葉に落ち込む少女の顔に戸惑い、自分でも珍しく動揺してなれない言葉を呟いた。

その声に少女の顔はパツと鮮やかな笑顔を取り戻す。明るい笑顔は学園都市の子供らしくなくて、なんだか心地が悪い。

その明るさを直視できるほど、まだ垣根は大人じゃなかった。

「テ、テメエ……」

「ふふ、素直な子。アナタは星のように純粹で可愛らしいのね」

可愛らしい白いワンピースが少女の動きに合わせて揺れる。控えめのフリルと緑のリボンが金色の髪に負けず、淡く少女を彩ってい

た。

童話の中から現れた少女は、とても、とても嬉しそうに笑う。懐かしくて、こそばゆくて、切ない感情を呼び起こす、そんないたいけな笑顔が心を奪った。

「あたし、キミのこと好きだよ」

死んだあの子と同じ笑顔。

褒めてくれたあの子とよく似た優しい声。

そして初めてもらった甘い言葉。

心臓にぽっかり空いた穴に、ストーンと少女が収まる。

「……あいつ名前は？」

「ん？君が興味を持つとは珍しい。けど知っても意味ないよ」

けれどその少女と二度と会うことはなかった。

「だってあの子、数時間後に死ぬんだもの」

それは昔の甘く、きらきらした記憶。

そして惨めな記憶。

一度目はあの子をなくし、二度目は触れる前に消え失せた。

失うことがこの世の何よりも怖い。

求めることが馬鹿げている世界がひどく忌々しかった。

その朧げな記憶が執着を生む。

（あ、金髪）

歩きたび、揺れる金髪に目が向くようになったのはその記憶のせい

だった。

学校に繋がる通学路。コンビニで買ったコーヒーを飲んで、眠気からゆっくりと覚醒しながら学校へ向かう。

染めた金髪の学生に、黒髪の大人、一時間目が始まって数分の道にはそこまで人はいない。

(———!!)

そんな緩やかな朝、悠々とした足取りで進む道で、何かが聞こえた。広い道から分岐した狭い通路から、男の音が小さく響く。

(あ? スキルアウトか?)

物騒な物言いの声と、金属が擦れる音が垣根の目の前の通路で反響する。

太陽の届かない薄暗い路地裏へ続く、狭い通路のその奥。

(———)

とても小さく、しかし確かに聞こえた女の声。

「……刺激的な朝になりそうだな」

とつくに朝のホームルームは終わり、授業が始まっている時間。女を助けた事実があれば反省文は書かずに済むだろう。

とても打算的で、計算で出来た善意でその闇に足を踏み入れる。

奥へ、奥へ。さらに深まる影を踏み、騒がしい最奥へと辿り着く。

「おい、早くしろって言ってるだろ」

「高値で売れるんだろ? 使っているのかよ」

「その前に『試し』たってバチは当たたらねえよ。さっさとひん剥いとけ」

「……っ!」

無能力者の愚か者が、女の服を裂いた。

「すげえ胸でけーな、こいつ」

「こんなもんぶら下げておいて、襲われなくても思ったか?」
「っあ……!」

露出した肌と、いい女の香り。

舌なめずりするような不快な男の声に少女が重なる。

いつもの学園都市の光景。

何も変わらない事案。

「朝から随分と面白いことしてんな」

「おう……………あ、誰だ、テメエ……………エ……………」

二人の柄の悪い男、うち小さい方の肩に腕を伸ばしと垣根は低く、冷たい声で囁いた。

「なあ、俺も交せてくれよ。遅刻寸前でムカついてたんだ」

「ひ、あ……………て、テメエ……………」

少女の服を掴むクソ野郎に腕を回し、空々しい笑顔で感情のない言葉をつき捨てる。

皮肉多めの台詞は、雑魚にとっては死の宣告ほど恐ろしい言葉。その言葉に恐怖し、恐れ、みるみるうちに顔が青みを帯びていく。

彼らは知っていた。

「テメエは、まさか……………第二位の……………!!」

有名な学校の制服を着た少年が、学園都市で七人しかいない超能力者のひとり、第二位、垣根帝督だと。

「女の前で、無粋な話はやめろよ」

「なっ、うがアアア!!」

青い顔を吹き飛ばすと、醜い男が5mほど先の地面に顔を擦り付ける。

暴力的な風が男の骨を砕き、断末魔もなくそれは気絶して白目を剥いた。なんとも呆気ない、間抜けな姿が馬鹿らしくてついたため息を吐くと、もう一人は後退りをして顔を酷く歪める。

「くそがあっ……………!」

「逃げんなら今のうちだぜ」

「能力に依存してる、ザコがよおおお!!」

何を思ったのか、人相の悪い男が折り畳みナイフ片手にその細身で垣根に向かう。

重心の定まっていない足取りで叫び、握りしめたナイフを前へ、前へと伸ばし、突きつけた。

「大人しく床で転がってろコラ」

「アがっアアアアア!!」

しかし垣根の長い足が男の鼻を潰し、靴底で顔面を蹴り飛ばす。地面に突き飛ばされ、蠢くだけのその男の腕の骨を足の力だけで断ち、骨が折れる嫌な音が狭い路地に響いた。

力量の差がありすぎる。関係ないスキルアウトだと言うのに、少し加減が利かなかった。

「あ……」

「逃げなかったのか、テメエは」

地面で伸びた男ふたりの無様な姿から視線を逸らすと、暗い路地裏、少女と目が合った。

女らしい体つきを覆う長袖のセーラー服は力任せに破られ、タイツも同じく繊維がちぎれて丸い穴が空いている。

「つつても、その格好じゃ無理か。これやるから、とつとと行け」

その姿から目を離すと、大きめのブレザーを脱いでその女に投げ捨てた。

目に悪い。

肌の谷間が主張して、視線に困った。

「でも、アナタこれから学校じゃないの？」

「あ?」

視線を逸らし、歩き出す。しかしその歩みは少女の手で引き止められた。

弱い力で掴まれたセーターの裾が踏み出した足を止め、意識を向ける。突拍子もない少女の言葉に戸惑い、力に惹かれその少女と視線を交えた。

「これは大丈夫、いらないよ」

振り向いた先、赤と緑の瞳が垣根を見つめた。

近い。

視界を埋めつくす少女の顔と、香りにおののいて、思わず息を飲む。座っていたから気が付かなかった長身が、少女と垣根を近づける。女にしては高い背が心臓の鼓動を早めた。予想と反したベビーフェイスと、女らしい体が近づいて、声が喉に引つかかる。

(ち、近づ……)

暗い影の中、差し込む小さな光の隙間に少女が照らされる。煌めく金髪と、揺れた先の桃色が強烈に目に焼き付いた。

「ブレザーないと、お兄さん怒られちゃうでしょ？校則は、面倒でも守っておかなくちゃ」

「……そういうテメエもサボりだろ？」

「あたしが怒られる分にはいいんだよ。それよりもアナタが心配だし」

眩しさに目を細めるも、優しく微笑む彼女の瞳から視線が逸らせない。

赤と緑の、神秘の瞳が恐ろしいほど美しく、目が離せなかった。

「怪我は？ダメだよ、力があっても厄介事に首を突っ込んで。心配するでしょ？」

襲った男が倒れ、それを倒した男がいて、だというのに少女は真っ先に垣根の目を見て困ったかのように瞳を歪ませる。

感謝も、恐怖も、叫びも、ありきたりな反応ひとつせず、彼女はただ真剣に垣根を心配していた。

気味が悪い。

自分のことを認識せず、見ず知らずの他人を優先するその姿勢が。ラズベリーと薔薇の甘い香りと自分の香水が混じって、むせ返りそ

うな空間で、にっこりと笑う少女が異質に見えて、少し怖い。

「とにかく、それはやる。早く警備員アンチスキルのところでも行け」
「でも、」

「うるせえ！黙って持ってけ、見苦しいんだよ！」

銀河の煌めく瞳からようやくやく抜け出し、背を向けて再び歩き出す。

先程よりも、少し、いや、かなり早歩きで少女から遠ざかるために足を動かした。

理解のできない鼓動の早さに戸惑って、ブレザーを脱いだはずの体の熱に困惑する。

その日の授業はいつもより酷くつまらなかった。

不思議な女を助けてから一週間、まだ春の陽気が暖かい五月の終わり、未だ彼女を忘れられなかった。

優しい声が。

甘い香りが。

明るい顔が。

あの眩しい金髪が忘れられない。

「かつきねー、くん！なあにニヤニヤしてんだよ！」

「してねえ」

「してたろ！なんだ？恋か？恋なのか!？」

靴箱の前でローファーに履き替えていると、肩を強く叩かれる。

満面の笑みでスニーカーを取り出すと、友人は楽しげに垣根のことを見下ろした。

なにか期待した目に嫌悪感がじわじわと湧き出す。

恋という馬鹿げた言葉が気持ち悪い。誰に対してその言葉を言っているのか分かっているのだろうか、あまりにも下品な世間話が癪に障る。

けれど何故か、あの少女の顔がちらついてしまう。

感情が渋滞する心は複雑に苛立っていた。

「うぎ。友達無くすぞ」

「なんだよー、つれねえな。彼女出来たんなら早く言えよな」

「なんでテメエに報告しなきゃなんねえんだよ」

「やだ！うちの帝督反抗期だわ！」

「きも……死んどけバーカ」

乱暴に靴箱を閉めて校舎から外へ出る。セキュリティで有名な進

学校だが、帰りの賑わいは普通の学校と同じように騒々しい。

「おい！垣根！」

「あ？今度はなんだよ……」

「さっき担任が言ってたんだが、校門前にお前の客がいるってさ。早く行ってやれよ！彼女だろ？」

傘立てを通り過ぎ、セキュリティ万全のエントランスを通り抜けると、後ろから声がかかる。

先程の友人が慌てたように声を荒らげ、知らない情報を叫んだ。

あまり覚えのない話だった。

その声に適当に相槌を打つと、再び前を向いて校門へと向かう。

客。

女の客がいると言われたが、どうしてかピンと来ない。知り合いの女は二人ほど、それも仕事の部下で、会いに来る理由はないはず。

「誰？あの子」

問題の場所に近づくと、誰かの小さい声が聞こえた。

それは一人だけじゃない。入口に居る一人の少女へ向けて、帰宅途中の生徒たちは口々に小さな声で呟いていた。

「あそこの、ほら、偏差値低い学校の制服じゃない？あれ」

「デツカイな。モデル？」

悪意と嘲笑が交じった妬みの言葉、軽蔑の言葉。

「でも見た目が良くて……ねえ？馬鹿じゃ意味無いでしょ」

その言葉の先には、背の高い、綺麗な金髪の女が居た。

飛び抜けて高い背、淡い太陽を反射する金髪とウェーブのかかったピンク色の毛先、見慣れない深緑の制服と黒いタイツは藍色の制服ばかりの生徒の中で一際目立つ。

「随分と目立つな、テメエ。便利ではあるが」

両手が紙袋で塞がった少女の前に立つと、甘い香りが広がった。

花のような少女は軽く上を見上げて、悪意の言葉なんて気にしていないように垣根に向かって微笑み返す。

「アナタも、背が高いから分かりやすいね。目立つタイプだ」

屈託の無い笑顔が、少し眩しかった。

「垣根帝督……!?知り合い!？」

「なんでまた、あんな頭悪そうな子に……」

騒音が煩わしい。

「生憎目立つのは嫌いでな。話なら別のところまでしてくんねえか？」

気味の悪い視線と、悪意の言葉から抜け出したい。

少女の腕を取って逃げ出したのは、近くの寂れた公園。

遊具は砂場とブランコ、滑り台のみという貧相な子供向けの公園には人はほとんどおらず、猫が昼寝しているほど。

いわゆる穴場スポットだ。

「ごめんなさい、お礼が遅くなつて。ブレザーをクリーニング出した
り、長点に連絡してたりしたらちよつと遅くなつちやつた」

「別に。ありがとな」

ベンチに座り、少女は卵色の紙袋を手渡す。中にある藍色のジャ
ケットは少女の言葉通りクリーニングされたようで、透明な袋と黒い
ハンガーにかけられていた。

しかしあまり喜ばしくない。

一度誰かに渡つたものを自分の所に置いておくのは垣根の性格上、
そして身分上気持ちが悪かつた。

けれどなぜか、少女の体温でほんのりと温かいその袋を手放すのは
惜しかつた。

「それはあたしの台詞だよ。この間はありがとうございました。危う
く売り飛ばされるとこだったよ」

「それよりも犯されそうだったが」

穏やかな時間が流れる。物騒な話をしているというのに、何故か彼
女も、垣根も、珍しく機嫌が良かった。

「それもそうかも。ありがとう、心配してくれて」

「してねえよ」

「でもジャケットを貸してくれたのは事実じゃん？ありがとうね、お
兄さん」

「……してねえっての」
「ここにここにここに。」

絶えず笑顔を作る少女がどこか怖くて視線を逸らす。

名状できない感情が、その目を見つめる度に心の奥から湧き出て、思考がまとまらない。

不思議な感覚だった。

「それで、これお礼。コレ渡しにきたの」

「別にいらねえよそんなの。助けたわけでもねえし」

もう一つの紙袋を手になると、更ににこにここと垣根に笑顔を見せる。

金持ち向けの高級デパートの紙袋。少し苦い香りがするその袋を垣根の膝において、彼女はとても楽しそうに、それこそ揺れる犬のしっぽが見えるくらい嬉しそうに垣根を見つめて笑った。

「助けて貰った日、アナタからコーヒーマグの香りがしたから好きなのかと思って」

袋の中にあるのは有名な専門店のコーヒーマグギフト。

もつとも高級なコーヒーマグと検索すればすぐに検索欄に出てくる店で、少女のように底辺の学校に通う生徒だと買うのを躊躇うような品々しか売っていない。

なぜだかその事実が心臓がキュッと縮む。

言葉に出せない感情が、垣根をいつもより無口にさせていた。

「よく覚えてんな」

「お兄さん、いい香りだったから、尚更ね」

「……あ、そ」

少女は止めどなく、甘くキラキラした言葉を吐く。

絶えず笑みを浮かべ、照れくさい言葉を使い、垣根を真っ直ぐ見る少女は、人生で三度目だ。

「嫌だった？」

「あ？」

しかし少女の顔に影が落ちる。

上を見上げて、彼女は垣根から目を逸らした。十センチ程度の身長

差、近い距離と程よい角度に少し目が滑る。

「……やっぱり体で支払ったほうがよかった？」

「おう、体……体!？」

「交ざりたいって、言ってたもんね」

困ったように笑う少女は、冷たい言葉を吐き捨てて白いスカーフに手をかけた。

一瞬、体が固まる。スカーフを解いて、セーラー服のジッパーに触れた少女があまりにも非現実的で、思考が止まった。

「ぬ、脱ぐな！ テメエの裸なんぞ見たくねえ！」

「だってアナタ頭良いでしょうし、お金ありそうだし、コーヒー以上って肉体くらいしかないよ……?？」

「コーヒーで十分つってるだろ！」

下ろしていくジッパーの音で正気に戻ると、慌てて少女の手を取って馬鹿な行為を止めさせる。

しかし、八の字の眉で垣根を見上げる少女は恐る恐るといった表情でその手を振りほどいた。

自信のない笑顔は先程までの笑顔と違う。寂しそうな、悲しそうな、そんな顔。

落ち込む犬のような姿が罪悪感を煽る。

「でも……お兄さんなんか怖い顔してるし、足りないのかと……」

「それは生まれつきだ。そういうのは大事にしろよ」

「そうかな？ お兄さん、笑うともっとかっこいいと思うよ」

この少女を前にすると、形にできない感情が体を満たし、思考にバグが現れて、まともな考えができない。

早まる鼓動が鳴り響く。

息が上がって、心臓が押し潰されそうで、逃げ出したかった。

「………帰る」

「えっ?？」

「コーヒーありがとな」

芽生えた知らない感情に戸惑いながら、勢いよく立ち上がる。

彼女は毒だ。

気恥しくて、照れくさい、甘くて欲しい言葉ばかり吐き出す、とびきりの毒。

暗部の人間にとって、一番厄介な人間だ。

後戻り出来なくなる前に離れなくてはいけない。

公園の後にしようとして、ベンチから離れて階段へ向かう。

急な斜面に取り付けられた階段を下りて、少女をおいて帰路に就いた。

「えっ、あ、ちよっ……つぶみ！」

それを追いかけて、少女が走る。乾いた階段を急いでおりて、少女は垣根の袖に手を伸ばした。

だが彼女自身の大きな胸が足元を疎かにさせる。見えていない足は簡単に足を踏み外し、体が宙に浮いた。

階段下へ真つ逆さま。二メートルはある高さから少女は墜落した。

酷い音が響く。骨が割れ、肉が裂ける音。

思わずその衝撃に目を細めてしまった。

「おい、大丈夫か？死んだら俺のせいになるから死ぬなよ」

「な、なんて自己中……」

駆け足で階段を下りると、少女の顔を確認する。ぶつきらぼうに悪態を吐くも、内心は焦りを見せており落ち着かない。

垣根にしては珍しかった。部下が怪我をしても、これほどまで不安を感じることは無い。

しかしなぜそう感じるのかは分からなかった。

慌てて少女のそばに駆け寄ると、彼女は弱々しい声で答える。

無事生きているようで、ほっと胸をなでおろした。

「にしても随分と派手に吹っ飛んだな」

「ちよっと階段下りるの下手なだけだし……」

言い訳を並べながら立ち上がる彼女は、とても綺麗な顔をしていた。

それは造形の話ではない。

彼女は、その可愛い顔に傷一つつけていなかった。

「……なにか？」

能力だろうか。

自分の肉体を再生する能力があることは知っている。しかし彼女のスピードは驚異的だった。

垣根（レベル5）に匹敵する出力、それは底辺高校にいるべき人材ではない。

「馬鹿なやつだな、お前」

「ど、どういう感想……？」

興味が沸いた。

不思議を詰め込んだ少女に。

甘くて苦い少女に。

もうすでに後戻りは出来なかった。

ブレザーはそろそろお役御免の季節、衣替えが後数日に控える今日、大きな校舎の前で垣根は青い空を見上げていた。

あの日から数日が経つ。

悩みに悩んで、ずっと考えて、ようやくここにいた。

眩しい太陽に目が眩んで、目の前の校舎と正門がちかちかと輝いているよう。

「お、長点の制服やん」

「あ？」

鐘は少し前に鳴り、下校する生徒がちらほらと見えてきた。

その中でかなり目を引く三人組は、垣根の姿を見つけるとニタニタと笑いながら近づいてくる。

垣根と背丈が変わらない金髪と青髪の生徒、そして少し小さめの黒髪の生徒。

「なんや？彼女待ちか？コノヤロー！」

「けどうちの学校にこんなどえらいイケメンの彼氏持ちなんかいたか？ 噂になるだろ」

「……人を待つてるだけだ」

「そうか？ 呼びたい奴いるなら呼んできてやるぞ？」

名前を知らない彼らは、瞳を輝かせ、興味津々とゴシップに群がるバカのように垣根に詰め寄る。

他の学生の視線がこちらに注がれるのがよく分かるほど、うるさい彼らは目立っていた。

「おバカ三人組！ お兄さんにつつかからないの」

しかしそのおかげか、聞き覚えのある声で誰かが声をかけた。

金色と桃色の髪と、高い背。

一際目を引く少女が、ムツとした表情で少年たちを睨む。

「ようやくお前にも彼氏が……お兄ちゃん感激！」

「上条くん、小萌先生に補習頼んどこうか？」

「いやあああ！ スケスケミルミルはもう宜しくってよオ!!」

「あ、カミヤん！ 待ってえな！」

「じゃ、また明日にやー」

どうやら彼らは友人のようで、少女のからかいに乗っかって逃げていく。

その様子はどこか楽しそうで、何だか心が冷たく、痛い。少し不思議な感覚だった。

「まったく……で、お兄さんなんの用？」

三人組が走り去ると、少女はくるりと垣根の方を向く。

キラキラとした金髪が太陽を感謝して、目がチカチカする。

少女を前に、体温が上がっていく。彼女に何か、感じたこともない感情があるのは確かだった。

「……近くを通ったから」

「そんな理由で？」

キラキラした少女は、不思議そうに垣根を見つめて首をかしげる。教えた覚えのない学校前で、怖い顔をして待っていたら誰だって不思議に思う。

ストーカーと勘違いして警備員を呼ばないのは彼女が善意の塊のような人だからか。

「ダメかよ」

「ダメではないけど……今日バイトあるからあまり話せないからね？」

少女はただ「もうっ」となんだか可愛鳴き声をあげて、短いスカートと小ぶりのピアスを揺らしながら歩き出す。暑そうなタイツで歩く少女は垣根の隣で少し不服そうにしていた。

その姿に何かが引つかかる。

口にしたバイトという単語。

底辺校の頭の悪い女。金はあまりないはず。

だというのに高いコーヒーや、キラキラしたアクセサリーを持っている少女は明らかに何かお金を稼ぐ手段を持つてる。

答えに辿り着くのに、そう時間はいらなかった。

「売春はやめといた方が身のためだぞ」

「違うよ！・しないよ！」

初対面の垣根に体を使うと言うあたり、それが金儲けの道具なのだろう。

だがお節介な忠告に少女は食い気味に否定した。近づけた顔でまっすぐ、否定する言葉だけを呟く。

「金のためとは言え、そう言うのはどうかと思うぞ」

「だから！違うって！ば！お金ちゃんとおるからっ！！なんならあれだから、スーパ－のお菓子買い占めれるぐらいあるから！！よーゆーだから！！」

しかしすぐに否定するさまが余計に疑惑に真実味を与える。子供みたいな発音と思考回路吐き出す言葉と、垣根を見つめる姿が大人びた姿とちぐはぐに噛み合つて、何か面白い。

子供のような少女に、垣根にしては珍しく口角が上がる。

彼女の前では、垣根もただの少年だった。

「……ぶツ、クククツ、ハハハハッ！お菓子って、お前、っハハハ、随分食い意地張ってんな、そうか、お菓子が買えるか」

見た目と反して意外と少女趣味なのか、言葉のチョイスに笑いが溢れる。

どうしてかは分からないが、彼女の言葉はここ最近で一番面白い言葉だった。

ようやく笑いが収まると、少女が静かなことに気がつく。じつと丸い目で垣根を見つめて、表情を変えない。

流石にからかいすぎたかと気まずい雰囲気の中、彼女の顔に視線を向けるも、彼女は予想と反してとても嬉しそうに笑っていた。

「んだよ、そんなに恥ずかしいのかよ」

「お兄さん、笑うと可愛いなって」

まただ。

また彼女は甘い言葉を囁く。

その言葉が体全身に甘い痺れとなって駆け巡る。

彼女の言葉は全て、初めて貰う甘いもの。刺激がひどく、反動で言葉がつかえる。

その言葉に視線を逸らすと、大きくなる鼓動の音を落ち着かせようと小さく息を吐いた。

「……それで？お姫様はなんのバイトしてんだよ。キャバか？」

「だから！違うって！あたしはねえ、看護師の見習いなの！第七学区の病院！知ってる？」

「看護師？国家資格じゃなかったか？」

「正確には違うんだけど、看護師みたいなもんなの！あたしの保護者が外科医だから、お手伝いしてるの」

今度は真面目に少女の話を聞くと、彼女は顔を上げて少し胸を張って笑う。優しそうな笑顔は出会った時、垣根の怪我を心配していた時とは少し違って、なんだか不思議だ。

赤と緑の、神秘の瞳が恐ろしいほど美しく、また心臓がぎゅっと締め付けられる。

初めての感覚だった。

彼女と一緒にの時は感じない感覚に戸惑ってしまう。

しかし舌触りの悪い心臓の痛みは、不思議と不快感はなかった。

「ふーん、随分と徳が高いことで。その見た目でいい子ちゃんかよ」
「でも患者さんの世話とか大変なんだよ？お兄さんが思うほどキラキラした職業じゃないって」

自分は看護師だと豪語する少女と赤信号が光る横断歩道の前で足を止める。

隣に並んだ少女は非常に偉そうに、そして楽しそうに微笑んだ。
なるほど、確かに白衣の天使を職業としていそうな顔だろう。しかしその天使はよくない噂も度々聞く。

男との痴情の纏れ。白衣の天使は度々男の欲を受け止めると、下衆で下品な都市伝説が思春期の男子高校生の間で蔓延っていた。

「……じゃあ、患者とエロいことしないの？」

「だからしないって！っていうか、してるように見える？」

だがその噂は少女の苛立った顔で否定される。なぜかその返事に安堵しながらも、再び疑問が生まれる。

あの時、ブレザーを返しにきた妖艶な誘いはなんだったのか。

あの冷たい言葉はなんだったのか。

「あんなに熱く俺を求めてきたのは誰だよ」

「だって体の方がコーヒーよりは高値でしょ？っていうか求めてたのはそっちじゃないの？」

「そんなくだらない理由で体売れるのかお前」

「お礼はちゃんとした方がいいし……」

どうやら、少女は少し頭が弱いようだった。倫理観はどこかへ消え去り、話が噛み合わない。

哀れな少女だ。

派手な見た目通り、少女の倫理観はおかしかった。

「じゃあお前、これから先暴漢から助けられる度体差し出すのかよ」

「そんなわけないじゃん」

「じゃあなんで俺にはそうしたんだよ」

「お兄さんは……お兄さんはいいかなって」

しかしその倫理観でも、その奥に何か甘い何かがあった。

その言葉に心臓が跳ねる。

「……お前、俺のこと好きなのか？」

「うん、そうだよ」

砂糖の過剰摂取だ。心臓にこれ以上甘いキャンディは入らない。

口から言葉はでなかった。

「じゃあ、あたしこっちだから」

信号が青に変わる。横断歩道を渡りきり、少女は黙ったままの垣根に暗にさよならを告げた。

しかし指差した方向は少女のバイト先には繋がっておらず、方向音痴なのかと一瞬思考が止まった。

砂糖の甘さを忘れてただ疑問を口にする。

それは、まだ話すための口実だった。

「そっちはお前の言ってた病院と違くねえか？」

「ん？ああ、今日はね、派遣なの。別の施設に呼ばれてて」

「じゃあ俺も——っ」

ついていく。そう続けようとしたものの、けたたましい電話の着信音に邪魔をされた。

設定した電子音と、三コールは仕事先——暗部からのもの。

「でなくていいの？」

「……バイトの連絡だ」

「あら、じゃあ行かなきゃね」

この甘い空間を壊す音が酷く不快で、吐き気がする。

「じゃあ、頑張って！怒ってばかりじゃダメだよ？」

離れる少女と、冷たくなった感情がどうしようもなく腹立たしかった。

act10：濁った別れ

『集まったようだね』

「さっさと本題に入ってくれ」

日が傾いてきた学園都市の高いビルのひとつ、高層階でパソコンを前に垣根は足を組む。

眉間に寄せた皺がくつきりと今の機嫌を表し、部下三人は遠巻きにそれを見つめていた。

「随分とピリピリしてるわね、今日」

「なんででしょうね？」

「八つ当たりされないといいですけど……」

「うるせえぞ」

ドレスの少女、黒髪の野暮ったい少年と小柄な少女のぼやきを低い声で牽制すると、ソファに背中を預けて再びパソコンに向き直る。

心理定規、誉望万化と弓箭獵虎、優秀な部下ではあるが今はただ苛立ちを助長させる存在でしか無かった。

『今回はとある研究所の制圧だ。どうやら良くない事を計画してるようだな、手っ取り早く君たちに阻止してきてもらいたい』

「内容は？」

『とある能力者を使用しての研究、らしいね。そのためにそのお嬢さんを拉致、監禁しているのを確認している』

淡々と進むパソコン越しの報告に眉を顰める。

仲介役が持ってきた仕事は、少し珍しい事案だった。

誰かを救出するのは彼らの役目ではない。

統括理事会直轄の暗部組織、名前も知らない『お嬢さん』を助けるような組織では決してないはず。

「お嬢さん？」

『彼女は上層部のお気に入りだね。統括理事長自らが学園都市に勧誘したのはこっちでは有名なほど。だから下手に利用されるのは困るんだよ』

疑問を軽く投げかけると、ため息交じりに男の声が答えた。

それはおよそ答えとは呼べないが、垣根たちに仕事が終わってきた理由としては理解出来た。

しかしヒーローに頼めばいいお使い未満の依頼、わざわざ垣根たちに頼むのは未だ納得がいかない。

「ふーん……どこかのご令嬢なのかしら？ スポンサーの娘とか？」

「そんな方が……お、お友達になれるでしょうか!？」

「拉致されてるんだぞ?。」

部下三人の話を他所に、垣根はふと疑問に思う。

そんな学園都市に大切にされている女は一体誰なのか。

垣根の記憶にそんな存在は居ない。不思議に思うのはごく普通のことだった。

「誰なんだ、そいつ」

『キミの四つ下さ』

「あ?。」

ただ口からぽろつと、無意識に聞いた。純粹な興味。

少し打算もあるけれど、それよりもそんな存在が気になっていた。

『名前くらい知っているだろう? 第六位の名を』

画面越し、潜めた笑い声に乗せて男は言った。

勿体ぶるように呟いたその言葉は短かったけれど、垣根の思考で答えまで導くには十分だった。

赤い夕焼けの下、研究所の正門が見える路地裏で三人の部下を見下ろして手にした携帯からデータを送る。

「さて、お姫様の救出とのことだが、地図は行ったな?。」

作戦会議とは名ばかりだ。

ネット上で入手出来る簡素な地図を送信し、黙ったままの部下に続けて次の行動について淡々と話していく。

簡単な仕事は酷くやりがいが無い。

「テメエらは裏門とその他出口を探しておけ。俺は一人で正面から行く」

「いいんです？ 分散して」

「話によると計画者は一人、しかも大して金もねえ。護衛はごろつき程度なのは明白だ。だったらどこにいるのかも分からないお姫様を探す方を優先すべきだろう」

「そうですね、今回は楽チンなお仕事ですし、わたくしは一人で大丈夫です！」

「お前なあ……」

携帯をしまい、面倒だと口にする部下たちの言葉を低い声で遮った。

意識が垣根に向いて、緩い空気が途端に鋭く、冷たく変わる。

「行動開始だ、早く終わらせるぞ」

正門は簡単に突破し、研究所の寒い廊下を進む。

人の気配は全くなく、異様に静かだった。

「……特になんもねえな。もぬけの殻……夜逃げでもしたのか？」

革靴の足音を響かせていると、足首に何かが引つかかる。廊下を横切るようにピンと張られた糸が垣根の足を取り、床から凄まじい爆発と爆風が湧き上がった。

爆音が轟く。

人が死ぬ温度と風が廊下を包み、鼓膜を破る音が垣根の体を駆け抜けた。

「なんだあ？ こんなガラクタで俺を止めれると思ってるのか？」

しかしこの程度、なんだことはない。

真っ白い翼を六つ背にして、垣根は少し首を傾げる。足にかかったままの焦げたワイヤーを振り落として、ただ呆然と廊下を見つめていた。

「……まるで大昔のからくり屋敷だな。なんなんだ、ここは」
学園都市で侵入者を迎え撃つならもつと大掛かりなもの作るはずだ。

翼をしまい、ただ床を見つめる。溶けて跡形も無くなったワイヤーが不思議でたまらなかった。

考えられるのは二つ。
予算不足。

それか罫をはった奴が底抜けのバカか。

答えに辿り着くのは案外早い。

地面を凝視していた垣根のそばで銃声が響いた。

「まさか俺に実弾で挑む馬鹿がいるとは」

答えは後者。

乾いた音が廊下に反響して、金色の弾が少し髪を掠る。

定まらない銃口で立ちふさがる見てくれの悪い男が廊下の奥で、肩を大きく上下させ悲鳴に近い声を吐き出していた。

「ひいつ……!!?」

「あ……う……なあんであのゴミ野郎がここに?」

その男に見覚えがあった。

あの金髪の少女と初めて会ったときに見た。あの少女に跨っていた二人組のうち一人、ナイフを向けてきた方。

そして、腕の骨を足で折った方。

「う、うあ、うわああああああ!!」

「逃げてでも無駄だぞ」

「うぎいぎやああああ!!?」

顔を見合わせた瞬間に背を向けて逃げ出す男に翼を広げ、剣のように尖った羽を一枚飛ばし太ももに突き刺す。

噴水のように吹き出た血液が廊下を汚し、血溜まりの中に男は倒れる。

一気に鉄の匂いと汚い汗の香りが充満して、吐き気がした。

「おい。俺の質問に簡潔に答えろ。なんでここにいる?」

「やっやと、雇われでえ、がぎゃ、つああ!!」

倒れた男のそばで見下ろすと、広がる血溜まりを見つめて冷静に男の頭を踏む。

十日ほど前につけた大怪我が自然治癒されるわけが無い。警備員

に捕らえられていたら尚更。

誰か協力者がいる。

それを知るためにも、確保は優先。

けれど、あの少女を傷つけた男相手に、容赦する必要はなかった。

「あの時、半年は治らない怪我を負わせたはずだ。なんでこんなに馬鹿みてえに騒げる体力がある?それは雇い主の技術か?」

「あのっ、ぎん、金髪、女がつつ、助けて、ぐれっだっつつ!!」

強く頭を踏みしめると、悲鳴に近い声で男は叫ぶ。その言葉に心がざわつく。

金髪の少女の笑顔が脳裏にこびりついて離れない。

この汚らしい男は、あの少女によって助けられた。

男はそう言った。

「なるほど……ああ、なるほど、そういう事が、クッククック、ハハハッ、あー、なんだ……そうか……?」

「だっだっだっ、がぎゃあっつつ!!」

その真意が理解できないほど、彼は愚かではない。

男の頭を蹴り上げると、痛ましい絶叫が広い廊下に響き渡った。ひっくり返った男は床に頭をぶつけると、泡を吹いて息をしなくなる。

もう動くことはない死体を見下して、ただ無為な時間に肩を落とすしか今の垣根にはできない。

「俺を誘い込むための罠ってことか」

男の最後の言葉に可能性が一つ現れた。

マッチポンプ。

あの日、あの時、少女は危険でなかったのかもしれない。

仲間だった可能性の方が大きい。でなければ、わざわざこの男を治す必要はない。

きつと目的は垣根自身。

わざわざブレザーを綺麗にして、高いお礼を買って、垣根に取り入れようとしているのは明白だった。

あの少女こそが、囚われた第六位の化け物。

この依頼も、垣根を呼び込むための罠。

あの鮮やかな笑顔は嘘で、あの甘い言葉も偽物だった。

その事実が、酷く苛立ちを増幅させる。脱力感と虚無感が垣根を襲う。

この感情をなんて呼ぶのか、いまだ分からなかった。

『はい、何かありましたか？』

「女は見つけた。テメエらは先帰つとけ」

数回のコール音で電話に出た部下の声にぶっきらぼうな言葉で返すと、有無を言わず通話を切る。自分が狙われているのなら、無理に部下を巻き込む必要はない。

再び重い足を動かし、長い廊下を進み出す。

この長い道が恐ろしく冷たく感じた。

長い廊下の先、髪を灰色に染めた男が柄の悪い男とドアを見つめて、くぐもつた笑い声を響かせる。

「じゃ、手早く済ませてくださいね」

「ハッ、いいのか？ 大事な実験体なんだろう？」

「構いませんよ」

柄の悪い男は薄気味悪い笑みを見せるとドアを開けて薄暗い部屋へと向かった。ドアから漏れる青い光と、だれかの吐息が静かな研究所でやけにうるさく響いた。

「クハハッ、なら遠慮なく」

それを上回る大きな音でドアが閉じると、残された男は白衣の襟を正して背を向ける。耳にたくさんつけたピアスが鈍く光り、遠ざかる足音に男の眩きが混じった。

やけに嫌そうな声が、なんだか腹立たしい。

「ま、本当はこういう用途じゃないんですけどね」

「じゃあどういう用途ってんだ？」

背の低い男の後ろで、コツンと床を蹴る。振り向いた男はまるで蛇のような笑みで仰々しく垣根を見つめ返すだけ。

やけに自信満々な研究者の意地汚い笑みが何か不穏な印象を受ける。

酷く苛立つ。この男があの子の仲間だと思いと、言葉にできない虚無感が垣根の肩をぎゅつと重くした。

「来ましたか、スクール……いえ、垣根帝督さん」

「馴れ馴れしい男だな。テメエが第六位の拉致監禁を？」

「まあ、そういったところですよ」

殺意のこもった言葉が口からポロつと溢れる。意識せず、男への苛立ちや憎悪が湧き出すのが嫌という程感じられた。

目の前の男への殺意が、どうしてか止まなかった。

その殺気に反応したのか、白衣の男を守るように、ドアの中から大勢の大柄な大人たちが現れ立ち塞がる。

アンチスキル警備員と同じ制服を着た男たちは、虚ろな目でただ垣根を見つめていた。

「……DAか」

「ご明察。雑魚も搜索には役に立ったのですが、貴方相手だとそれなりの装備が必要でしょう？」

アンチスキル警備員の中でもハブられている戦闘集団は数人しかおらず、男を守ると言つても少し心もとない。

時間と予算が足りなかったのか、盾というには薄っぺらい人間の体に思わず嘲笑が浮かぶ。定まらない瞳孔で立つ彼らは脅威とは言えなかった。

この程度で垣根を止められると思うなど、ただの馬鹿だ。

「それしか集められなかったくせに装備だとか抜かすなよ。雑魚が」
「あの子も戦力のひとつです。お忘れなきよう」

「だからどうした？第六位とは圧倒的な差があるのは分かってんだろ？」

しかしそれでも男は揺らがない。

やはり垣根の推測通り第六位が戦力として換算されている。彼らはグルだ。

その事実が、ひどく苛立って仕方がない。

「分かっているのはそちらです。彼女は奇跡そのもの、その価値は謎だらけの貴方より高い」

「あ？」

「人を、動物を、植物を、生命全てを操るデュアルスキル（）の如き応用性、めちやくちやな演算と、実機では実現不可能な理論上可能な事象を全て作り出す異端。全く新しい能力の形は、貴方を上回るでしょう」

第六位、少女の能力は超能力者^{レベ}の中でも有名だった。

それは能力がすごいだの、異質だの、そういった理由ではない。

誰も本当の能力を知らないからこそ、有名だった。

ある人は『植物を操る能力』だと聞く。

ある人は『怪我を治す能力』だと聞く。

ある人は『血液を操る能力』だと聞く。

ある人は『動物を操る能力』だと聞く。

ある人は『病気を治す能力』だと聞く。

ある人は『死に至る能力』だと聞く。

第六位は誰にも本当の能力を知られていない。超能力者^{レベ}の中でもトップクラスの情報統制で何が真実か、本当に存在するかも分からない存在だった。

知っているのは名前と性別だけ。

やけにきらきらした可愛い名前と、垣根と違う性別という事しか知らない。

しかし男の言葉を全て信じるのなら、彼女にまつわる全ては本当な

のかもしれないなかった。

「……そんな化け物と、つるんで何がしたい？」

「神の代替品を作るのです」

「はあ？」

「彼女はそもそも貴方と一方通行の代替品として連れてこられた
第三候補、^{サブプラン}ならば 神の代替品にだって、
神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くものの到達だって可能でし
う？」

その怪物を取り込んで何をするかと思えば、いつも通りの学園都市らしい回答が返ってくる。

しかし、その回答が少し引つ掛かった。

垣根の予想だと、少女とこのいけ好かない男は仲間のはずだ。

でなければ少女が襲っていた暴漢を回復する意味はない。

助けた垣根に好意を持ってもらうために近づいて、今回の依頼で罨にはめる。

てつきりそう思っていた。

「……テメエの目的は文字通りあの女なのか？」

「そうですね？そのためにそこらへんの人に搜索と拉致を頼んだのですが、貴方が蹴散らしたんじゃないですが」

「じゃあ、あの女はあの時本当に襲われていたと……？」

「そうですね。まさか、貴方を狙った罨とか思いました？自意識過剰ですねえ！」

だが男の回答はその予想と反する。

「あの女は……ただの善意で、自分を襲った野郎を治癒して、ただの善意で、自分を拉致した科学者の手助けをすると、本気で言ってるのか？」

「ええ。馬鹿げてますけど、彼女はそういう人なんですよ」

まるで、本当に少女を拉致して、少女が善意で襲ってきた相手を救って、少女が自分の意思で男に味方するかのようない方だった。

あの眩しい善意は、何も垣根にだけではない。

彼女は本当に、本当に、心の底から甘い少女だった。

「今だつてほら、男の肉欲の手助けをしていますよ?」

理解と同時に扉を破壊する。大きな翼で全てをなぎ払い、DAも、男も、壁も、全てを吹き飛ばす。

沸き上がった血は、頭に上って制御できない。

「っ、短気ですなぁ……」

「あ?取り込み中つて、ひいつつ!!?垣根帝督つつつ!!?」

壊れた壁向こう側、少女は狭いオフィスチェアで肌を晒す。肉に縄が食い込んで、縛り付けられた椅子の上でスカートが捲れた。

覆いかぶさる顔の汚い男と比例して、淡いパソコンの光に照らされた少女は場違いなほど綺麗だった。

「楽に死ぬると思うなよ」

「ごぎやっ、あがアアアアアツツ!!?」

翼を広げ、男の背中に突き刺した。少女に被さるように倒れた男を横から殴り飛ばし、壁に激突した男に歩み寄る。

接触すら許さない。

声を出すことも許さない。

怒りは限界に達した。

「やめつやめでつ、ぐださい”””つつつつつ」

地面に倒れた男の腰に足を置き、腕の力だけで足をもぐ。そのまま足で踏み潰し、腰の骨を折った。

「なら二度と生きるな」

断末魔は聞かせない。翼を刺した箇所から肉が灰へと変わっていく。人間として、男はもう生きることができなかった。

その姿を見届けて、少女の方へ視線を移す。

乱れた服は目に毒で、本当はあまり見たくない。

「おい、生きてるか?」

猿轡と目隠しをとって、紐を全て解く。少女は少し悲しそうに垣根を見つめ返すと、バツが悪そうに目を伏せた。

「また助けられちゃったね」

「そういうことはしてねえって言ったのは誰だったか」

「ごめんね、嘘になっちゃった」

「……哀れな奴だな」

弱々しい声に衝動が湧きあがる。
抱き締めたい。

可愛そうな少女の笑顔がずっと頭から離れなくて、酷く心が焦燥する。甘くて、柔らかい、善を煮詰めた少女が曇るのは、なぜだかとても気持ち悪かった。

肌についた痣が垣根の心を燻る。少女の腰を掴み、弱々しい足取りの少女の髪に触れると、その感情はさらに広がっていく。

もう少しで答えがでる。

だが向けられた銃口がその答えを遠ざけた。

「別に貴方にはそこまでする義理はないでしょう。暗部ならこんな景色、何度だって見てきたでしょう？」

立ち上がった少女に向けて、白衣の男が頭から血を垂らしながら銃口を向ける。

立っているのがやっと。

男は最後の力で少女を睨んで吐き捨てる男は酷く濁った目をしていた。

「この人は優しいんだよ」

「はい？」

「だからあたしのこと助けてくれた」

その瞳に負けることなく、少女は男を見つめる。

「アナタも少し、見習ったほうがいいと思うの」

もう痣はない。立ち上がって男に向かって歩む少女はやけに華やかな笑顔を作っていた。

「起きたらうちの病院においで。ちょうど、テレステイナーさんに手が欲しいってせがまれてたから」

男は大きな音を立てて倒れる。音のない部屋に聞こえる寝息と、消えた怪我。

まだ男は生きていた。

触れずとも人を殺し、人を癒す少女の力。

少女はそれで人を殺す選択をしなかった。

「は……？お前、殺さないのか……？お前を利用した加害者だぞ……？」

「あたしを使うのは当たり前前の事だもの。あたしは、誰かに使われるために生まれてきたんだから」

男のそばに名刺をおくと、とても優しい声で少女は笑う。

振り向く彼女の笑みはきつと一生忘れられない。

「ね、帰ろっか」

その笑みはこの世全てに勝るほどおぞましかった。

暗い道に行く。

街灯が照らす道を進み、涼しい夜風に体が晒される。

「涼しいね、垣根……くん？」

「……それでいい」

破れたセーラー服が揺れる。穴の空いた黒タイツから見える素肌は少し寒そうで、歩く速さが少し遅い。

「垣根って、珍しい苗字だね。あたしも人の子と言えないけど」

「……テメエは」

「んー？」

少女は恐ろしく純粋な笑みを浮かべて垣根の隣を歩く。

その笑みが怖い。

「なんで、テメエはそんななんだよ」

「とうとう？」

「テメエは、第六位だ。一国の軍隊を一人で相手にできる力を持つてんだぞ。そんなやつ、あんな相手に勝てねえわけねえだろうが」

「うん、そうだね」

恐ろしい。力ある少女の理解できない思考が。

その未知が酷く恐怖を煽る。

「なら、なんで」

「誰だって痛いのは嫌いでしょ?」

静かな道で響いたその声は、とても恐ろしかった。

「あたしはみんなのためにあるの。決して人を傷つけるためじゃない」

「だから、犯されても文句言わないのかよ。どんなリスクがあるかなんて、女のテメエの方が分かってるだろ?」

「リスク?そんなものないよ」

街灯がスポットライトのように少女を照らす。

歩みを止め、少女は人のいない公園の前で微笑んだ。その笑みはどこか神々しい。

「あたしはね、妊娠もしない、病気にもならないの。痛覚も、触覚も弄れるから相手は楽しいだけ、自分も何も感じないから何も思わない。なんならずっと、永遠に処女のままでいられる。とても都合がいいでしょ?この能力」

「そこまでして、なんで他人に体を許すんだよ」

「だってみんなが幸せになれるように、あたしは生きているんだもの。他人のためと言われたら、やるしかないでしょ?」

祈る少女ように手を合わせ、柔らかく微笑む少女に酷く心臓がかき乱される。

彼女がこの世界の神様だったらどんなにいいか。

酷く慈悲深く、吐き気がするほど甘くて、底抜けにお人好しで、好きになっってしまうほど優しい彼女が神だったら、どれほど良かったか。

彼女が神様だったなら、この世界はこんなにも不幸でなかった。

けれどその幸福はきつといつだって彼女の犠牲で成り立っている。

それは何よりも嫌だった。

「……だからさ、そんな悲しい顔しないで?」

その感情は恋に似ていた。

「ねえ、どうしたら笑ってくれる?幸せになるにはどうすればいい?あたし、垣根くんのためになりたいの。アナタのこと幸せにしたい

の」

「お前が幸せなら、なんだっていいんだよ」

この感情は恋だった。

「俺はっ、俺は……俺は、お前が笑ってくれれば幸せだ」

衝動。初めての感情に、自分なりの好きの言葉を吐き出す。

無我夢中だった。垣根帝督というアイデンティティを放棄しても、少女にこの恋を伝えたかった。

彼は生粋の負けず嫌い。そして誰よりも諦めの悪い男。

二度失った彼は、三度目を望まない。

この少女を失いたくなかった。

「なあ、俺の……俺のそばに居てくれねえか」

「今いるじゃん？」

「ずっと。お前が俺を嫌うまで。女……恋人として」

少女のスポットライトに踏み込んだ。

同じ光の下で、二人、輝く瞳に閉じ込め合う。

精一杯の愛の言葉は、垣根が思うよりもずっと恥ずかしくて、照れくさかったけれど、失うことと比べれば、恥ずかしい言葉なんて些細な障害でしかなかった。

「あたしとセックスしたいの？」

でも、少女には恋も愛もなかった。

少女の名は天羽彗糸。

垣根の初めてを奪った女。

そして酷く可哀想な少女だった。

——別れようよ

彼女の言葉が耳に残って離れない。

何がいけなかったのか。

何が悪かったのか。

昔の思い出とともに疑問が湧いては虚しい感情が心臓を襲う。

彼女が離れていく。

心にできた空洞は、何をしても満たされない。

車が飛び交う横断歩道、街の騒音が鼓動と混じって酷くうるさかった。

act 11：偽物と、冷たい鎧

文字を読む。

『大好き、大好きだっ！だから、っ、付き合ってくださいっ！』
『っぶ、はは、大事なところで噛んでんの！馬鹿だな、お前。その言葉は俺からだろうが』

薄い紙の本に書かれた台詞を頭の中で何度も復唱して、想像に耽る。

「……なんて陳腐な台本」

台本の上では、天羽も垣根も、幸せの塊のような存在だった。絶対に見せることのない笑みで、嘘の言葉を吐いて、彼女に触れる。

楽屋の中、冷たい瞳で鏡の中を見つめると、ひどくやつれた女と目があった。

『大好きだから、キスしてもいい？』

『許可なんて必要ねえよ』

反吐が出る。こんな台詞も、こんな女も、人間という器も。

なら大罪と呼ばれる感情が龍のようにとぐるを巻いて心を掴む。言葉にすらしたくないおぞましい欲は、確実に少女の心臓を蝕んで、膿を溜める。

こんな醜い感情を持つくらいなら、人として生まれなければよかった。

そう思うほど、小さな少女は酷く憔悴していた。

「なあにしてんのお？」

溶けていく感情を照らすように明るい少女の声为天羽の頭上から聞こえた。蜂蜜のような甘い香りの少女、食蜂操柎は不思議そうに首を傾げて天羽の後ろから腕を回す。

似た者同士の少女は今日も仲良く、お揃いの金髪で二人駄弁り始めた。

「台本確認。今日のシーンちよつと嫌だなって」

「仕方ないわよ、恋愛ものなんだから」

「そうだけど……」

「そういえばその主役は見かけた？ 垣根さんいないみたいなんだけど」

食蜂の言葉に顔あげて楽屋の中を見渡すと、確かに垣根の私物はな
い。ここにいるのは女子二人とつまらなさそうに座る一方通行、そし
て荷物だけおいて何処かへ行った他の女性陣。

削板は別の仕事でいないため、今回呼ばれた中では垣根だけが仕事
場にきていない。

非常に珍しいことだった。

仕事に関してはかなりストイックで、仕事への熱意のようなものが
超能力者の中でも強い垣根はいつだって仕事に時間通り来る。

その彼がいないのは、不可解ともいええた。

「確かに、まだいないね。一方通行くんは何か知らない？」

「ア？ 知るわけねエだろ」

「でも仲良いし、連絡とってないの？」

「テメエの目は見えてンのか？ 仲良いように見えるなら眼科に行け」

少し心配になりつつ、平静を装い一方通行に軽く話を振ると、彼は
嫌そうに悪態を吐くだけ。

人を傷つける冷たい態度に少し眉を顰めるが、一方通行の態度はい
つも通りのため咎めることもなくそのまま流して考え込む。

仕事はもうすぐ始まる。だと言うのに未だ来ていない垣根に不安
を覚えてしまう。

もう付き合いはないと言うのに、事故や病気、様々な恐ろしい自体
に不安が煽られ怖かった。

「そっか。でも心配だね……事故とかじゃないといいけど」

「ないわね」

「ないな」

「ないかー」

しかし相手は垣根帝督。超能力者の第二位で、かなうとしたら一方
通行くらい。事故に遭うとは思えなければ、病気もあまりピンと来な
い。

「……他の女のところかもな」

一方通行の答えが一番現実的だった。

脳を横から殴る言葉に声が出ない。天羽から一方的に別れたとはいえ、もう垣根とお付き合いをしているわけでもないのだから別に気にする事はないはずだ。

だが、何故か天羽の心臓はぎゅつと締め付けられる。他の女と手を繋ごうが、ベッドで寝ようが、もう関係の無い話だと言うのに。

「ねえちよつと。今日の撮影中止ですって」

ぐわんぐわんと無駄な考えに思考を巡らせていると、突然扉が開いて御坂美琴がため息交じりに楽屋に現れた。

同時に吐いた言葉は、天羽たちの思考を止めるには十分。

呆れたようにどかつと椅子に座り、そのまま帰宅の準備をする彼女に慌てて金髪二人組は立ち上がる。

「御坂ちゃん？え、それ本当？」

「さつきプロデューサーに言われたわ。全く、面倒だったらありやしない」

「でも急にどうして……」

「大変！大変！第二位さんの交通事故により撮影中止になったって！ってミサカはミサカは大慌てで報告してみる！」

がたんと勢いよく立ち上がって御坂に詰め寄ると、今度は小さな御坂が扉から飛び出た。

一方通行のマネジメントを手伝う打ち止めラストオーダーは、御坂そっくりな顔でびよんびよんと飛び跳ねながら可愛い声を荒らげる。

あまりにも突然でしばしその内容に混乱するが、意味を理解した三人の脳は同時に大声を上げた。

「はアアア!!？」

「ちよ、ちよつと、え!!？」

「おいテメエら！テレビつけろ!!」

「今度は何!!？」

「いいから!!」

だが大声はさらに大きな麦野の怒声に上書きされる。打ち止めが開いた扉を叩き、次に現れたのは麦野沈利。

戸惑う天羽を押し退け、興奮した様子でズカズカと楽屋に置いてある壁掛けのテレビの前へ行くと素早く電源をつけた。

真つ暗だったテレビのチャンネルを1のニュース番組に変え、焦つたように音量を上げる。低かった音量が上がるにつれその声はつきりとクリアになった。

『本日をもって、俺は、垣根帝督の垣根帝督による、垣根帝督のための個人事務所設立を行う!』

テロップに映し出された緊急記者会見の文字と垣根帝督の声。
不穏な組み合わせにこの場の誰もが驚いた。

「緊急記者会見!」

「え、事故の話は?」

『記者諸君。 いずれこの件は正式な案内を行うから、楽しみに待つてろよ。そして、一方通行、これを見ているか?俺は必ずやお前を第一位の座から引きずり降ろす!』

大胆不敵な告白とともに笑う垣根の声が響く。そのあまりにも突拍子な発言に驚き、騒がしかったはずの楽屋が一気に静まり返った。

「ど、どういふこと!!」

「事務所って、アイツとうとう頭おかしくなったのか?」

「あ、あたし確認してきますうっ!!」

混乱した頭のまま天羽は楽屋から勢いよく飛び出す。衣装のブレザー姿のまま楽屋から抜ける彼女の顔は酷い焦りが見えていた。

別れたといっても天羽の感情は変わらない。

人が何かハプニングに巻き込まれているのならば、それを助けるのが彼女の信条である。

相手が垣根なのもあつてか、その足取りはとても早かった。

「ちよつと!!」

「……無鉄砲馬鹿だな、相変わらず」

好きな人の為ならば彼女はどんな地獄にも落ちる。

愚かな少女の背後から、ひどく大きなため息が聞こえたのはきつと空耳ではない。

だがそんな音はただの事象。

ただの事象が彼女の走りを止める事はなかった。

現場から離れ、少し緑が豊かになった街の中。一方通行は金色の髪を探して視線を動かす。

少し離れたところで金髪でとても目立つ少女の姿を見つけると、背の高い彼女に向かって杖をついて歩き出した。

「事務所は……こっちはか」
「違う」

キョロキョロと頭を動かす彼女はしきりにスマートフォンと前方を確認し、ようやく答えが出たのか進み始める。しかしその方向は彼女の目的地に続いていない。

どこに行こうとしているのか、その先は記憶によれば行き止まり。流石に目の前で間違った道を行こうとしている彼女を放つてはおけなかった。

「えっ、あれ？一方通行くん？なんでまた」

歩き出す少女の後ろからワイシャツの襟を引っ張ると、彼女はすんなりと足を止める。わずかな身長差のせいかな、襟を掴みづらい。

突然のことだというのに、彼女は怒りもせず、目をまん丸にして一方通行に振り返った。

底抜けに明るい少女の姿に、一瞬目を細める。

この明るい笑顔が苦手だった。

「地図読めねエのは誰だったか」

「……読めるし」

スマートフォンに映し出された地図とは違う方向に行こうとするおつむの足りない少女は、鮮やかな緑と赤の眩しい瞳をしていた。闇に近い人間にはおぞましいその瞳を、好むのは垣根くらいだろう。

可能ならば本当はすぐにでも立ち去りたい。

けれどあの夏の日、無謀にも手を伸ばしてきた少女には多少なりとも恩があった。

「ならこの公園突っ切る方が早いって知ってたか？」

「知ってる！から！お気遣いなく！」

愛する男のところに行くための手伝い位はしてやろうと、彼の事務所までの道を指差す。

目の前にある大きな公園を通り抜け、交差点を渡り、道順に歩けば目的地。少女は嫌がっているが、これぐらいの手伝いならば、あの小さな恩に見合うだろう。

「……どうやら通行止めのようなだな」

「えっ！嘘、撮影!!？」

そう思つて公園へ二人赴くも、仕事上見慣れた撮影クルーやスタッフを取り囲み、どうも通り抜けはできないようだった。

何が起こっているのか、通り抜けが可能か聞かため、少しそれに近づいてみるも、その足は聞き覚えのある声で止まる。

いや、止まらざるを得なかった。

「今更名乗るまでもねえが、俺こそが学園都市第二位の超能力者^{レベル5}、垣根帝督だ。俺の『未元物質^{ダークマター}』の可能性をお前らで測らせてもらうぜ」

「第二位の兄ちゃん、だよな？」

「なんか微妙に違うような？」

そこにいるのは削板軍覇、いつぞやのヒーローと白いシスター。

そしてもう一人、濁った黒い瞳、明るい茶髪と長身、そして切れ目が印象的な美少年。

彼らが探していた垣根帝督、その人だった。

「……はあ!!?いるじゃん!!?」

「元気だな」

「では早速!『焼きそばパンの大食い対決』で勝者を決めるんだよ!」
「おっしやー!ーっ!勝負開始だっ!」

打ち止めやテレビとの情報と違い、すこぶる元気で口に焼きそばパンを詰めていく垣根の姿に2人はしばし固まって哑然と見つめていた。

事故にあつたと言う話はどうしたのか、彼は非常に元気で、心配するような姿をしていない。

「垣根くんも焼きそばパンなんて食べるんだ……」

「お前アイツのことなんだと思ってるんだ?」

その様子に驚いているのか、天羽も目をパチパチと瞬きしながら呟いた。

混乱しているのか少しずれた意見だが、確かに彼女の疑問も尤もで、その言葉に思わず垣根の手元に目がいく。

垣根はあまり多く食べない。

長身で、一般的な男よりも引き締まったスタイルの良い野郎だと言うのに、食べる量は一方通行以下。

ダイエツト中のオシャレOL並みである。

その垣根がであろうことか大食いに出場し、胃袋の許容範囲外の焼きそばパンを食べているのはおかしな話だった。

「お、天羽!ちようどいいところに!!」

「上条くん……」

呆然と立ちすくんでいると、天羽のもとに司会をしていた少年が歩いてくる。うれしそうに小走りやってきた少年は喜々として少女の手を引っ張りカメラに映る位置へ誘う。

上条と呼ばれた彼もまた、あの夏に一方通行を救った男。面識があった。

「一方通行も!お前ら司会やってくれよお……俺はなんか巻き込まれただけだしさあ」

「え、あ、ちょっと！」

手を引かれ連れていかれたのは垣根のすぐ隣。

困惑しながらもテレビカメラの前でアイドルらしい笑顔を作るあたり、プロ意識はあるようで、いつも通りの態度で突然の撮影に出演する。

だがやはり困っているようだった。

生放送では無いので編集をすれば問題は特にないものの、突然の撮影とはいろいろリスクがつきものだ。

彼女もそれが分かっているであろう、いつもよりその笑顔は険しい。

「彗糸」

彼女が隣に立つとすかさず垣根は顔を上げる。優しく名前を囁いて、細めた目で見つめると普段の彼からは想像もできない甘い顔を作った。

見たこともない光景だった。

彼が人の前で彼女の下の名前を呼ぶことも、ラブシーン三秒前の顔をすることも、今まで一方通行たちは一度も見ることがなかった。

強烈な違和感。

垣根の姿に感じたこともない違和感がまとわりついて、疑問ばかりが浮かぶ。

目の前の男がよく知る第二位だと思えなかった。

「……ねえ、アナタ、本当に垣根くん？」

彼女もそれを感じたのか、獣のような低い声で目の前の男を睨みつける。

不穏な空気の中、パタパタとスタッフやクルーを眠らせて、都合の良い舞台を作り上げると、彼女はようやくやく本題に移った。

静かだ。

大勢の寝息と、超能力者^{レベル5}、あるいはその友人の唾を飲む音が聞こえる。

秘密の話をするにはカメラが邪魔だったが、人の目がないだけでも十分。

天羽慧系がいる限り、この世の生き物はその全てを支配される。彼女なら人の耳に自分たちの言葉が入らないようにすることぐらい簡単だった。

「試してみるか？」

「何を？——っ!？」

カメラ以外安全な空間で垣根は彼女の頬に触れる。

触れた手は距離を近づけ、二人の体温が混ざった。茶色い髪と金色の髪が交差して、生ぬるい風に二人の香りが舞う。

髪が交わるその奥。

吐息が消えた。

彼女の息は重なり合った唇に奪われた。

「っ!!離れて!」

「照れてんのか?かわいいな」

キスをしていた。

ほんのわずかの一瞬、彼らはカメラの前で唇を重ねた。

アイドルとしてはあるまじき態度、スキヤンダルを呼び込む事態に一方通行の体が動きを止める。

誰も予想できなかった。

いつもの彼からは想像のできない出来事に啞然とする。

「……誰だ、テメエ」

「垣根帝督、それ以外に見えるか？」

「俺の知ってる垣根帝督は、女相手に突然セクハラするようなやつじゃねエ」

「合意の上だ。セクハラじゃねえよ」

突き飛ばされ、垣根の姿をした男は少しよろめいてたにもかかわらず、とても楽しそうに笑う。

しかしその意味は、あざ笑うかのようなひどく上から目線の腹立たしいものだった。

「……削板くん、クルー撤収させて。映像も叩き割って」

「おう、スキヤンダルになるのはお前のファンが困るからな」

「もぐ、もう食べないの?」

「インデックス、お前はあつちで食べてなさーい？」

スタッフやその場にいる人を移動させ、削板やシスターがいなくなると、男は馬鹿にするように鼻で笑った。

不愉快な顔。

いつもの能天気でプライドの高い阿呆な笑顔とは違う敵意を向きだした笑みにひどく苛立つて仕方がない。

「オイオイ、いいじゃねえか、バレたって。俺らの仲だろ？」

「悪いけど、アンタみたいな知り合いはいないわ」

「酷え言い草だな。愛する男じゃねえか。忘れたなんていうわけじゃねえよな？」

互いにこう着状態が続く。

唇を拭って、ひどく恐ろしい声で威嚇する天羽と、不敵な笑みを見せるだけの垣根に似た男。

二人して出方を伺っている。

垣根の姿をした見知らぬ人、強さは計り知れない。

「……彼はキスもしなければ、かわいいなんて言う男じゃないの」

「そういう男だぜ、垣根帝督は」

「いいや、違うな」

緊迫した空気に冷たい声が響いた。天羽の前に立ち塞がって、交わった視線を上条は切り捨てる。

「上条くん？」

「垣根はそんな強引で最低な男じゃねえよ」

ヒーローの背中が少女を守るように前に出た。

いつかの夏の日と同じ。守りたい人を守る、ヒーローとはかくもそういうものだった。

一方通行が憧れるヒーローの姿。

ただただまっすぐ芯のある強い目が彼は得体の知れない男を見る。「いつつもヘタレな文句ばっかの奴が、昨日今日で突然そんな俺様系になれるか」

吐き出す言葉は強く、何も無い公園に重い空気が漂う。

「何が起きてるのか分かんねーけど、垣根が大事にしたいって言って

たもんを軽々しく冒読するなら、俺はテメエに容赦しねえぞ偽物」

ぐつと拳を握りしめて、強く目の前の得体の知れない男を見つめる彼は一方通行には少し眩しかった。

「……さすがに分が悪いか」

その眩しさに躊躇ったのか、目の前の男も同じように苛立った顔で舌打ちを響かせる。

そして垣根の能力のコピーか、大きな翼を広げると体が宙に浮く。天使と見間違う能力は、よく知る彼とそっくりだった。

「あ、待ちなさいー！」

「おいー！」

何も考えていないのか、飛び立った男を追って天羽は走り出す。彼女の気持ちからそうするのはわかっていたが、あまりにも無計画な彼女に驚き、慌ててその後を追った。

焦る乙女の背中を追って、人のいない路地裏へと進んでいく。

面倒に巻き込まれるとは自覚している。

けれど愚かな少女について行かない選択肢は無かった。

天羽を追って、路地裏に滑り込む。

「どこ行った!?!」

建設中のビルが囲む人のいない空き地に三人で探るように足を踏み入れるも、先程の男の姿はない。

人の目のない狭い場所、ここに来るのはおそらく意図的だった。

「なあ、これって……」

「完全に誘い込まれたな」

「ああ、その通りだ」

誘い込まれたその先で、真っ白な男がたたずんでいた。

白い髪に白い肌、少しだけ色味がかつた白いスーツと、どんよりとした赤い瞳と本来白いはずの黒い結膜。顔もスタイルも身体も垣根と同じなのに、色だけが先ほど見た男の姿とは随分かけ離れていた。

そしてその後ろにいるのは巨大なカブトムシ。

白く、ロボットののように統率の取れた、車のように大きなカブトムシだった。

「これは夢か何かか？」

「か、カブトムシ!!?デカ!!?」

予想外の出来事にさすがの一方通行たちも目を見開いて驚く。

普通のカブトムシだったら気持ち悪いの一言で済んだのだろう。

しかし目の前にいるのはあまりにも大きすぎる白いカブトムシ。

赤い目を光らせて彼らを凝視するカブトムシの軍勢はあまりにも非現実的で、得体の知れない恐怖が湧き上がる。

『アイドルの頂点に立つために支障をきたす要因を残らず殲滅』しませす」

「……アナタの仲間?ってことは、アナタもカブトムシなのね」

だが一方通行たちとは反対に、天羽は眉一つ動かさず淡々と白い男を見つめていた。

その表情に感情は見られない。

冷たい顔が普段と違う彼女を余計に際立たせて、何か恐ろしかった。

「ああそうだ。俺たちは未^{ダークマター}元物質で作られた分体。垣根帝督をベースに生み出された兵器だ」

「ふーん……兵器ねえ……」

「ああそう、だアツ!!?」

冷たい言葉を吐き出して男へ向かって歩くと、天羽は勢いよく拳を振り上げた。

容赦なくその拳は男の顔面にめり込む。

大きな音が狭い路地に響き、男の体は工事の骨組みをなぎ倒しながら吹き飛ばされた。

一瞬の出来事だった。

少女の細腕が男の頬に勢い良くぶち当たる。

人が好きだと豪語し、一度もその能力を生き物を傷つけるために使ったことがない少女が誰かを殴るのは初めてで、普段の人畜無害な笑顔から想像できない圧倒的な腕力に誰も言葉が出なかった。

「相手が人間じゃないなんて素敵だわ」

砂利を踏む音が聞こえる。茶色いローファーが薄汚れて、灰色のブレザーが風に揺れ、甘い香りが漂う。

「殴ったって、蹴ったって、殺したって、誰も泣かないもの」

「は……え、この顔を躊躇なく、っ!!」

冷たい瞳で男を見下ろす天羽は、悪魔のようだった。

「誰に喧嘩売ったかそのちっこい脳みそで理解しな、ゴキブリ共」

そこからはまさに地獄だった。

「どうしたの？足をもがれて動けないの？」

蠢く脚を引きちぎり、大きな虫をひっくり返してその足で内臓を掻き回す。

「アナタ達はカブトムシと同じ回路なのかしら？ならその脳みそも支配できそうね」

ツノを折り、カブトムシの脳みそにそれをぶち込むと彼女は高らかに笑う。

「ねえ、カブトムシって同性でセックスするらしいけど、モノが硬すぎて腹が裂けて死ぬんですって？ね、面白そうだから見せてよ」

屈託のない笑みが酷く恐ろしい。

「カブトムシも狂犬病とか狂牛病みたいなものってあるのかな？苦しんで逝けっ」

目尻を下げて笑う彼女があまりにもおぞましくて、強大な力を持つ一方通行ですら背筋が凍る。

「天羽を怒らせない。これ鉄則」

「さすがに治療法が確立されてない病気には勝てねエからなア」

単純な攻撃力では一方通行の足元にも及ばない。弱い女。

しかし彼女の強さは物理的なものではなく、その汎用性にある。

脳髄を弄り、細胞を掻き乱し、電気信号をめちやくちやにし、体の奥から全てを支配する。

学園都市の科学技術でも未だ解明されきれていない肉体を操る彼女は、彼女が望めばどんな人間でも殺害できるポテンシャルを秘めていた。

「……けど、あいつなんで殴ってんだ？」

「あ？どういふことだよ」

彼女の勇姿を見つつ、カブトムシたちを捌いていると、ふと隣でカブトムシを殴る上条が呟いた。

「触れずとも病気に出来るってことは、触れずとも殺せるんじゃないか？」

それは単純な疑問。何でもできて、すべてを支配できる少女に対する些細な疑問だった。

下手をすれば一方通行ですら死に至らしめる彼女の能力なら、簡単にすべて殺せると言うのに。

「やっぱり所詮は虫ね。ガラクタみたい」

「言ってくれるな」

「自分で考えることすら出来ず、ただオーダーのみを遂行する。性欲がないなら本物以下じゃんか。ガラクタと呼んで何が悪い？」

カブトムシの体液を浴びて、少し粘ついた汚れの着いたブレザーが生ぬるい風に揺れる。

初めて聞く冷たく低い声をカブトムシに吐き捨てる彼女は、なにか人間とは違う生き物に見えて、恐怖が煽られるばかりだった。

「あーあ、おつかねえ女こんなんじゃない、垣根帝督に愛想つかされるのも当然か」

その恐ろしい形相に、垣根に似た白い男が嘲笑を浮かべる。建物の上から挑発して、安全圏の中、少女を見下ろす彼はどこか楽しげだっ

た。

しかし彼の言葉に天羽の足は止まる。

垣根帝督という名前は彼女を止めるのに十分で、ほんの僅かな一瞬、彼女の集中がふっと切れた。

「止まるなよ」

「っ!!?」

隙が生まれる。

その精神の隙間を見逃すほど、相手は愚かではない。

白い翼が広がり、少女に向かって数枚の羽を飛ばす。鋭利な羽は地面に突き刺さり、白い肌に傷をつけた。

「どうして邪魔をする?」

「……我々は同一個体ではありませんが、思考パターンには個体差があります。そのため自分自身で考え、行動するべきだと私は思います」
だがその白い肌は、別の人のもの。

「退け」

「この個体は『アイドルの頂点に立つため』……すなわち垣根帝督の口頭命令を『競い合い頂点に登り詰めてこそ真のアイドル』と理解しました。よって『他のアイドルをせん滅』することに私は異を唱えます」

「退けつつつてんだろ」

「これよりカブトムシ05は『垣根帝督からの口頭命令を完璧な形で最適化するため』あなたを保護する側に回ります」

天羽の前にいたのは男と同じ、垣根の姿をした真っ白な人。

カブトムシの群れから現れた、緑の瞳をした美少年が天羽の前で静かに立っていた。

その姿に翼を広げた男は苛立ったように舌打ちを響かせる。

同じ姿の美少年二人、違うのは瞳の色とまとう雰囲気くらいで、あまり見分けがつかない。

敵意を放つ赤目の個体と、輝く緑眼を持つ個体。

二人の視線は火花を散らしているかのように交わり、互いに譲らない。

「なんだ、仲間割れか？」

上条の言う通り、仲間割れをしているようで、静かな緊張に包まれた。

緊張の最中、一方通行は現れた新しい男の背を見つめて黙ったまま少し思案に耽る。先ほどの光景と、彼らの言葉が何かかぴったりとくつつくように感じて、何か違和感が心の中で蓄積されていた。

(個体差、か)

さっきのキスと、高みの見物をする赤目の少年。

それぞれ個体差があるという言葉がどうもひっつかかった。

「ひどいことをしたのに、守るなんていうの？」

「酷い？殺せる相手を殺さない貴女は十分優しいと思いますよ」

「なにそれ」

カブトムシ05と呼ばれた緑眼の少年に、天羽は少し訝しんで後退る。その姿に垣根の顔で微笑むと、少女との開いた距離を縮めて彼女の手を握った。

「貴女は垣根帝督が作ったものを本気で殺せるような度胸なんて持っていないから。保護対象」

「……………過大評価ね」

触れた手に警戒する一方通行たちをよそに、緑の目をした少年は朗らかな笑みを見せる。彼の紳士的で明るい微笑みは不思議と年相応の可愛げがあった。

その姿に緊張がある程度ほぐれる。

敵意は感じない、それだけで今は十分だった。

「テメエら、俺を無視してんじゃねえ!!」

「うあっ!!?」

しかし腑に落ちない人が一人いた。もう一度翼を広げて単調な攻撃を繰り返すと、怒気を含んだ大声で地面に降り立つ。

それを避けるためカブトムシ05は天羽を横に抱いて空を飛ぶ。同じ三対の白い翼で空に浮かぶ彼は、どこか神々しくて、輝いていた。

「野蛮な男は嫌われますよ、ナンバー50」

「はっ！キスもできねえヘタレに何言われたって響かねえよ!!」

「へタレなのはマスターである垣根帝督で……って、ちよつと待ってください。キスと言いましたか？」

険悪な雰囲気が続く中、50と言われた赤目の個体の言葉にカブトムシ05が眉間にしわを寄せ、王子様のような甘い顔を陰しく歪ませる。

「あー、さつきされたね。それより降ろしてくれと……」

「は？なぜその情報を送信しない？」

「するわけねーだろボケ」

明らかにキスという言葉に反応した。

彼らの違和感、その姿に一方通行の仮説が立証される。

殲滅するのなら、キスのついでに毒でも入れればいい。

肌に触れるなら、その場で殺せばいい。

天羽と同じ、殺せるはずなのに殺さない違和感。

「……あいつらは垣根をベースとしてるって言ってたよな？」

上条の言葉に喉に唾が落ちる。

「もしかして、この時間って世界一不毛なんじゃないか？」

「言うな……」

違和感は全て解けた。

それは彼らの天羽への感情が起因する。

垣根をベースに作られているというのなら、差異はあれど似たような思考を、思想を持つ。

ならば女の好みも同じになるのは、理論的に考えればわかること

だった。

彼らの行動は垣根の感情とよく似ている。

片方は優しくしたい保護欲。

片方はキュートアグレッションから外れた行き場のない支配欲。

男が苛まれる二つの感情が二つに分離しているかのよう。

だからこそ、彼らは天羽本体の蹂躪を甘んじて受け入れていた。

「あの……話すならとりあえず降りて話さない？」

天羽の言葉にカブトムシたちは静まり返る。さつきとは打って変

わって従順な態度に、一方通行は一人ため息をついて抉れた地面を見

つめていた。

恋とはなんとも厄介な感情だと、少し呆れながら。

「えつと、とりあえず色々教えてもらおうかしら？」

土ぼこりが落ち着いた空き地で天羽は垣根とそっくりな二人に落ち着いた表情で問いかけた。

「私たちは垣根帝督のオーダーを遂行したのみ。それ以上のことはなにも」

「あ、テメエー！」

「早い者勝ちです」

先の戦闘と比べると随分従順に飼い慣らされた二人は、互いに悪態を吐きながら天羽の前で火花を散らす。

同じ顔で全く違う反応をするのが何だか物理法則から外れた鏡を見ているようで気色が悪い。

「垣根は今どこにいる？何をしている？それくらいは分かるだろうが」

「なんでテメエに教えなきやなんねーんだよ」

「事務所ですよ。怪我をされているので、安静にしなければなりません」

「あつ、おいー！」

「やっぱり怪我はしてるんだ……」

有益な情報を言わないそっくりさんに嫌気がさし、本当に知りたいことを聞くと、彼らのはあつさり垣根の居場所を漏らす。

聞いていた通り垣根本人は怪我をしているようで、事務所へ向かうという最初の目的は正解だった。

それを聞けて一方通行は満足だったが、気絶したカブトムシの一匹

に座りその話を聞く天羽は酷く不安そうな顔を見せる。

彼女にとって大切なのは垣根が事務所にいることではなく、彼が動けないほどの怪我をしているということ。

聖母のような気持ち悪い慈愛に満ち溢れた彼女にとっては彼女自身を拒否する彼の気持ちより、彼の痛みの方が優先順位が上だった。

「じゃあこの三人で見舞いに行くのでいいかな？カブトムシ達の処遇もどうにかしてもらわなきゃいけないし」

「それでいいんじゃないか？」

「いや、ダメだ」

いてもたってもいられないと急いで天羽は立ち上がるが誰かに腕を掴まれ、もう一度カブトムシの背中に座り込む。

腕を取ったのは白い垣根の二人だった。

「ええ、それだけはダメです」

「なんで？」

「私たちは『アイドルの頂点に立つための行動』をするようにオーダーされていますが、もう一つ、オーダーが下されています」

「それが天羽隼糸、テメエをマスターの事務所に近づけないことだ」

悪意と善意、二人違う性質を持っているはずなのに、ぴったりの呼吸で彼らは天羽の腕を取った。

恐らく垣根が命令した中でも最重要なオーダーだったのだろう、真剣な顔つきは先程と違う。

「え……」

「なんでだよ、彼女に看病されるとか、男の夢みたいなものじゃねえか？それに天羽に関しては何も看護師だぞ？嫌がる理由あるか？」

「でも、あのへタレらしい行動とも言えるな」

垣根の命令の内容はおおよそ想像出来る。

天羽隼糸を事務所に近づけない、または垣根と接触させない。そのような内容だったのだろう。

おそらく彼のプライドから、彼の恥ずかしさからそういった命令が出た。

わかりやすい。

恋人に対して無駄なプライドと、かつこっつけを止めない垣根が命令しそうな内容だ。

怪我した自分を見せたくない、格好悪い自分を見せたくない、そんなプライドが原因だろう。何とも馬鹿げた話だ。

「あの、落ち込まないでください保護対象。彼の真意は簡単なものではなく……」

「……大丈夫、分かっているよ。一方通行くん、お見舞い、よろしくね」
天羽も垣根も、互いの感情が行き過ぎてすれ違う。

お互いを想いすぎて、互いを傷つける二人が馬鹿みいだった。

「お前はそれでいいのか」

「垣根くんが幸せなのが一番だから。あたしもう行くね、男ばっかのところパパラッチされたら困るし」

「あ、お待ちください、保護対象」

「置いてくんじゃねえー!!」

一人寂しく少女は帰路につく。愛する人にそっくりな偽物を連れて。

「……面倒な奴らだな」

残念なことに、一方通行には二人の感情は嫌という程分かってしまう。

たくさん人を傷つけてきた悪党が、ようやく見つけた光を大切に、愛おしく守ってしまう心理は腹立つことに身に覚えがあった。

むず痒い。

酷く不快だ。

彼らのもどかしい恋愛なんて、見てるだけで吐き気がする。

「そういう時に友人がなんとかしてやんねーとな。な、一方通行」

「垣根なら友人じゃねエぞ」

「またまたあー!」

彼女とは反対に道を進む。

足が重い。しかし頼まれたのだから仕方がない。

うるさいヒーローを連れて、頼まれた面倒な知り合いへの見舞いへ向かうのだった。

act 12：名状し難き恋

暖かい毛布の中で微睡みと慢性的な痛みが波のように引いては戻る体を温める。

包帯を巻いた体はどこもかしこも痛みがひどくて、眠いのに眠れない無意味な時間が過ぎて行くばかり。

青い空が眩しい窓の外では白い雲が流れていた。

「はあ……情けねえ」

流れていく雲は人の手では掴めない。

掴まえたかった輝きは自分のつまらない人間性によって失い、もう戻らないのは明白。

垣根帝督の中で渦巻くのは汚い感情。

別れを切り出した彼女の言葉がずっと脳に残って、体の痛みが全身を蝕んだ。

(失恋ひとつでこのザマかよ)

失いたくなかった。

なくしたくなかった。

けれど垣根の願いとは真逆に彼女は去っていく。

悪夢だ。吐き気が止まらない。

暖かい毛布の中で、体が冷えていく。寒気が酷くて、死んでしまいたい。そう。

「なんだア、そのボロボロの無様な姿は」

「怪我ってマジだったんだな……」

毛布の中で蠢いていると、がたんと大きな音が狭い部屋に広がり、誰かのうるさい声が聞こえた。

聞き覚えのある声。

毛布の中から顔を出し、重い体をもぞもぞと動かすと、見知った顔と目が合った。

「……何の用だ」

そこに居たのは上条当麻と。珍しい組み合わせに少し驚くも、気怠い体と思考ではそれらしいリアクションは出来ない。

「あのカブトムシとか、テメエのそっくりきんは一体何だ？」

「あ？あぁ、暴走してんだっけか。あれはただの量産品だ、事故で動けねえから作ったんだよ」

彼らの言葉が耳に入るもすぐに出ていく。眠りにつきたいと、彼らを適当にあしらって答えるも一方通行はそれに納得しない。

目を逸らしても分かる彼らの非難する視線が、チクチクと背中を刺して痛かった。

「事故に遭ったンならそれらしくしてろ」

「うつせえな。仕事はしなきゃなんねえんだから、仕方ねえだろ」

「天羽を連れて来て治して貰えばいい話だろオが。見舞いに来てって連絡の一つでもすればいい」

一方通行の言葉に体が大きく跳ねる。

彼の言い分は尤もで、普通の話。天羽彗糸ならば、包帯に巻かれているこの事態を能力で解決してくれる、出来なくても最大限の看護はしてくれるだろう。

「できねえよ」

「喧嘩したって話か？」

「……フラれただけだ」

だがそんなこと出来ない。

捨てられた身がそんなこと願うことなんて到底無謀だ。

なにより、好きな女にこの無様な姿を見られたくなかった。

「どオセテメエがくだらねエプライド捨てれねエだけだろ、ヘタレ。交通事故も、それがフラれた衝撃で気緩んでたから起きたンだろ？」

「う」

「それで怪我したのがかつこ悪いから呼ばねえってなったのかよ。お前なあ……」

「ううう……」

その心理は見破られているのか、一方通行たちは呆れたように垣根を見下ろす。その目が嫌だった。

痛む。

包帯の下、薬を塗った傷口が痛む。心臓の痛みと呼応して感情に体

が支配されているよう。

「そういう事してつからフラれンだよ。分かってンのか？」

「何がだよ、知るかよ……」

「あのき、ずっと聞きたかったが、垣根はアイツとどうなりたいんだ？」

痛みに悶えて布団の中に潜ると、静かな部屋の中で上条がポツリと呟いた。

布団の中でくぐもった音は聞き取りづらく、聞き取れていても理解できない。上条の簡素な質問はあまりにも情報量が少なく、一瞬理解に辿り着けなかった。

「あ？どうなりたい……？」

「付き合ってるんだろ？今は喧嘩中だが、まあ、そこはいいとして、付き合ってるって状態で、お前はなにがしたかったんだって話」

「どういう意味だよ」

「恋人つつつたらほら、一緒にデートして、イチャイチャして、やることやる相手だろ？そんで、俺らは学生だからあんまし関係ないけど、大人の場合だと結婚に至り、子供ををこさえてウンタラカンタラ……つつーのが一応のゴールだ。そこはわかるよな？」

「わかるが……」

布団から目だけ出して上条の顔を見ても質問の意図がわからない。ますますこんがらがるだけで、痛みと寒気でぐわんぐわんと回る脳では話すこともままならなかった。

「俺より馬鹿な teme にもわつかりやすく言ってる。いいか？恋人同士という関係性は、普通の家族関係とも、友人関係とも違う。つうことはその特殊な関係を結んだ相手とは、その特殊な関係だと相互理解するために、該当する行為や行動をする必要があるんだよ」

「なんか余計ややこしくなった気がするけど……俺が言いたいののはさ、『鬱陶しい』つつつて天羽の誘いを無下にしたり、手も繋がらないで、アイツを自分を含めた外敵から守ってるだけじゃ、付き合ってる意味ないんじゃないかって話」

寒気が酷くなつていく体に長つたらしい説明がストーンと落ちる。

ベッドの縁に座った上条の諭すような声と強い目は苛立つほど真つ直ぐで、狭い心の入口にズカズカと入り込む。

「付き合うって一方的なものじゃないだろ？友達より深いところにいるんだから、色々さっさと出さねえと」

「できるわけねえだろ」

「けどよ、アイツは世話好きのお節介焼きだぞ？お前の世話焼きたいんじゃないのか？」

嫌いだ。

自分を捨てたあの女も。

心の中に入り込む恋も。

汚い感情に踊らされる自分自身も。

「じゃあテメエはインデックスに甘えて、弱いとこ見せて、トラウマほじくり返す真似出来んのか？酷いこと、出来んのかよ？」

「俺らとお前らじゃ関係性が違うだろ。そうやって八つ当たりしても無意味だぞ」

「そうだとしても、アイツに汚いことはできねえ」

記憶の中の肌色が感情が高ぶるたびに引き出される。

暗い部屋に、ロープの跡。男の死体と、タイツから覗く女の肌。

恐怖に近い。

自分の立場がその男になるのではないか。

彼女に嫌われるのではないか。

彼女に恐れられるのではないか。

それが現実になってしまったら、きつと傷がつく。

守ると決めた心の中のヒーローも、愛情に飢えた心の中の少年も。

「そういう目にはっかあつてきて、それが世界の心理だと思っている馬鹿に手を出す野郎は、俺以上のクソ野郎だな」

「けど、アレはそういう類のものを愛情表現だと思ってるわけで、テメエの感情を汚いものとは思ってねえんだろ」

「アレって……」

「テメエが選んだのはかなり気持ち悪い生き物ってのは分かる、だがその生物に対応できるのはテメエだけだ。テメエがアレを信じてや

れねえと、アレは一生理解者がいないまま生きるだけだ」
双方、足りないのは信頼と話し合い。

一方通行は見た目に反して随分と真つ当で、当たり前前の言葉で反論する。

「それを踏まえてだ。テメエはあの女とどうなりたい？」

破けたセーラー服と冷たい夜風。

ひんやりした風の中、冷たい笑顔で光の下で佇む少女の姿に胸が締め付けられた。

助けたあの日に見せた心配性の柔らかい笑顔が忘れられなくて、冷たい笑顔なんて見たくなくて。

そう思っていたらあの言葉が漏れた。

自分なりの感情を伝えてしまった。

好きだ。

付き合って。

スタートはそこからだった。

「俺は、アイツを……あいつに笑っててほしいだけだ……」

「なら、笑い合えるように頑張れよ」

毛布をこれでもかと被って、熱い頬を隠す。

顔が熱い。

熱を持った心臓がどくどくと波打って落ち着かないのは、きつとあの女のせいだ。

お節介な男どもの言葉は寒気を助長するだけで、居心地が悪かった。

「……とはいえ、もう無理かもしれないねエけどな」

しかし一方通行の言葉にその熱は引いていく。

「なんでだ？」

「さつきコイツのクローンにキスされて泣きながら路地裏に連れてかれてただろオが」

「……あー、なるほど。うん。そうそう、そういえばそうだったなく。

アレはやばそうだったなー。うん、やばいなー」

予想外の言葉が毛布を貫き、秋の寒さを巻き込んで垣根の心臓の奥

まで突き刺さる。

「なんでそれを早く言わねえ！」

「聞かれなかったから」

「死ね！」

キス？

泣いていた？

知らない話に飛び起けると、毛布を剥いで明るい窓を開く。

震える心臓が痛みを消し飛ばし、輝く翼が涼しい秋風から体を守る。

大丈夫。

どんな姿でも、彼女を救える。

絶対的な自信を胸に、茜色が地面から燃える青緑の空に飛び立った。

昔、天使に出会ったことがある。

それは幼い頃のこと。

まだ研究所を点々としていた、昔のこと。

天羽彗糸が背の低い、恐れられた化け物だった頃の話。

「これが例の『神様』か？」

「ああ、アメリカから送られてきたバケモノだ。丁重にあつかえよ？
ひと睨みで大人を殺せるらしいぞ」

「こえー」

研究所の裏口、運搬用のトラックの荷台で日本語を喋る大人が小さ

な体を囲む。尾ひれのついた噂話をわざとらしく吐き捨てる男たちが馬鹿らしくて、大人びた子供はその小さな脳の中で小さく舌を出す。

貼り付けた笑顔の裏は、少し毒々しかった。

「そんなことしないよ。それよりさ、これ外してくれないの?」

「研究所の内部を把握されないようにする処置だ、我慢しろ」

男の手に髪を掴まれて、無理やり座っていた荷台から降ろされるとアスファルトで固めた地面に足が触れた。

そんなことしなくたって、エコーロケーションで大まかに掴めるよ。なんて、ペラペラと喋る若い研究者たちに言ったらもつと乱暴になるのだろうか。

「ついてこい。お前を担当する研究員のところまで連れて行く」

腕にゴツゴツした拘束具を付けられて、犬のようにリードを引かれる。鎖が擦れる嫌な音と、大人の汗と薬品の匂いが不愉快で、思わず顔を顰めた。

「テレステイナーさんだっけ?今日は顔合わせだけ?」

「後はお前の不死性の確認もする。拒否権はあると思うな」

「えー、死ぬの?面倒だな、結構エネルギー使うのに」

たわいもない話をふると、真面目そうな研究員は案外会話を続けてくれた。

幼い子どもの姿に絆されたか、リードを引く手はそこまで強くない。

「どうでもいいが、そっちの神と同じく生き返るのに何日もかけられないのは分かっているな?」

「それは神の子ね。学もないの?」

「驚いた。小学校にも行っていないガキにそんなこと言われるとは」

「大人が多い環境だと、学校にいかなくても学はあるのよ」

「さすが、お偉いさん方の慰みものになってたガキということが違うな」

男の言葉が耳に残る。

うるさいな。分かっているよ。

早い反抗期が苛立ちをパンの生地のように膨らませ、胸の中が不愉快だ。

彼女の能力は「肉ド体の支配者ニオン」

どんな病気も治せる。

どんな人間も殺せる。

どんな死人も生き返る。

彼女の能力が発現したのは三歳のころ、アメリカでの出来事。

子供には過ぎた力は恐れられ、敬われ、それはいつしか畏怖と崇拜へと変わる。

彼女は邪神アサトリスとして育てられた。

現代の神。

森羅万象、万物を操る恐れ多き魔皇と、教会を転々としながら崇拜された。

そして、神の力を、永遠を望む強欲な罪人たちは少女を食う。

理想として、快樂の追求として、神に到達したいとして、子供の肉を指で食うのだ。

泣きもしない、声もあげない、つまらない子供を大人として扱う。

ただ、理想を反映する都合のいい装置として。

そして大人として扱われた少女はいつしか、本当に大人の心を持っていた。

「ん？」

心で渦巻く嫌な感情と格闘していると、不意に別の存在に気がつく。

目隠しをつけていても能力のサーチに引っかかったその人に気がつくのと、手首から伸びるリードを引っ張った。

「誰？」

「ああ、あれは未元ダーク……あー、天使だよ」

能力で分かるのは自分より成長している少年で、美形ということくらい。

同年代を知らない天羽には、少し新鮮で、自ずと興味が湧いた。

「天使？」

「羽が生える能力なんだとよ。俺らは関与してないから知らないが」
広い廊下で少年を横を通り過ぎる。響いた音から算出するに、天羽より十センチ以上は高く、髪は少し長めのよう。

瞬間、彼の横を通るその僅かな時間、彼と目が合った気がした。布越しで本当かどうかは分からない。けれど、甘い弾けるような香りと気配が伝える。

見えない瞳が心の隙間に収まった。

「……気持ち悪」

上擦った少年のソプラノ声に心が掴まれた。

教会の鐘のような綺麗な少年の声。星のようにキラキラで、弾けるような澄んだ香り。

嗅いだことの無い特別、天国の香りに心臓が跳ね上がる。

「大丈夫？」

聞いたことがない高く綺麗な声に、思わず返事をしてしまった。

「っ、喋れんのか、テメエ」

「気持ちが悪いのなら、安静にしておいた方がいいよ」

「違えよ。テメエの姿が気持ち悪いんだよ」

「ああ、なるほど。アナタは綺麗だから、汚れたものが気に食わないんだ」

足を止めて、どこか可愛らしい少年の言葉に耳を傾け真っ直ぐ見えない瞳で彼を見つめる。

小さな口がカフェラテのような苦くて甘い言葉を囁いた。

幼さ故の強がりか、どこか覇気のない声が異常に可愛くて、心地よくて、なんだか心が暖かい。

「……見えてんの？」

「いいえ。でも分かるよ」

「はっ」

「香りがとても綺麗だから。きらきらした香りがする。弾けるような星みたく、とても綺麗」

少年の弾ける鮮やかな香りが顔を綻ばせる。

初めて嗅ぐ天使の香り。甘くて優しく、とても綺麗。

きつと天国も、同じ香りがするんだろう。

「そういうテメエは太陽みたいに真っ白だな。今にも燃え尽きるんじゃないの?」

「これ、白い服なの?可愛いのかな」

天羽の言葉に皮肉を吐き捨てる少年だが、言ったそばからばつの悪そうに『あ』と不思議な鳴き声を出して声に力を無くす。

とても素直な子。

優しい子。

それだけで好感は上がるというのに。

「まあそれなりに可愛いんじゃないやねえの?見えねえだろうけど」

少年のカモミールのように甘い色の言葉が心の中で咲き誇る。

誰かからその言葉をもたらしたのは、この姿のまま言われたのは初めてだった。

可愛いなんて、最高の賞賛を彼は言ったのだ。

気持ち悪い。

頭がおかしい。

かわいそう。

そんな言葉はたくさん聞いてきた。

だからこそ、少年の言葉はドラッグのように甘かった。

「……馬鹿正直ね。からかっただけなのに。服は自分で着たから分かってるよ」

「んなっ!!?」

その声がかくすぐったくて、可愛らしくて、ぎゅっと心臓の辺りが締め付けられる。

少年に愛が溢れて止まらない。

パツと鮮やかな笑顔を取り戻すと、天羽はとても嬉しそうに微笑んだ。

「テ、テメエ……」

「ふふ、素直な子。アナタは星のように純粹で可愛いからね」

ワンピースが天羽の動きに合わせて揺れる。今日という日に感謝

して、とても嬉しそうに笑った。

学園都市に来てよかった。

それは紛れもない本心。

「あたし、キミのこと好きだよ」

大人ばかりの世界。

煙草の匂いと酒の臭さと体液ばかりの日常。

心臓にぽっかり空いた穴に、ストンと少年が収まる。

鮮やかな香りが、記憶の奥から離れない。

「喋りすぎだ」

「それはごめんなさいね」

時間が来て、リードを強く引つ張られると少年から遠ざかる。研究

室までの道のりはまだ終わらない。

けれど、その足取りは少し軽かった。

また、会えるかな？

それは昔の甘く、きらきらした記憶。

小さな支配者にとってとても大切な出来事。

あの日からずっと、アナタの甘い香りが好きでした。

(どうせアナタは覚えてないでしょうけど)

自宅へ戻るため、踵を返す。薄暗い路地裏で近道を辿りながら進む

も、昔のしょうもない思い出を引き摺って足取りが重くなっていく。

歩幅が狭まる。

会えない日なんて今までも沢山あったというのに、今日は普段より

ひどく焦燥していた。

「いいのかよ、帰って」

「別にいいの。それより君たちは帰らなくていいの?」

焦りを隠して、彼とよく似た白い少年二人と帰り道を歩く。垣根と同じ匂い香り、同じ顔、同じ背丈、落ち着かない心臓が鼓膜を揺さぶってせわしない。

「私は貴女のためにありますから、保護対象」

薄暗い路地裏で影が差す。緑の瞳をした少年の天羽より少し高い背がピッタリと背中について圧を感じた。

しっとりした空気がどこもなく心地悪い。

含みのある微笑みも、優しい声色も不思議と恐怖を煽る。

その影にふと冷や汗が落ちた。

路地裏で、男ふたりと女ひとり。

この空間はあまり良くないのではないか。

アイドルとして、芸能人として、なにかを感じる。

なぜだろうか、罨に嵌められた気がしてならなかった。

「な、に……?」

振り返って、距離を取る。足をくるりと回したその短い時間で、大きな風が、肌を傷つける強い風が狭い道を通り抜けた。

その先に見えたのは白い翼と茶色の髪。

合うはずだった緑の目はそれに気を取られ、彼女は一人戸惑った。

「テメエら……命令に背いて、馬鹿な女攫うだなんて、つまんねえなあ……?」

空から風を大きく舞いあげて、降りてきたのは包帯とガーゼをあちこち付けた垣根帝督、白くもカブトムシでもない、本人だった。

「え、ちよ、垣根くん!?!」

「来ましたか」

「死ねっ……!」

突然現れた垣根に一瞬ほかんとするも、くらくらと覚束無い足取りで進む彼にはとつとする。

今にも倒れそうな彼に心臓が締め付けられて、気づいた時には白い少年を投げ飛ばして走っていた。

「クソが、うっ」

「落ち着いて、落ち着いて！」

目の前からぎゅつと体を抱き締めて、今にも崩れ落ちそうな少年を受け止めると小さな声がポツポツと耳元で微かに聞こえた。

せん妄か、切羽詰まっているような彼はどう見ても普通じゃない。抱き締めたまま地面にゆっくりと座らせ肩に頭を抱き寄せると、その熱が全身から伝わってくる。平熱よりだいぶ高い体温が抱き締めた体を熱して、吐息を温める。苦しそうな顔と痛々しい包帯があまりにも酷く、心が苦しかった。

「ちよ、待つて垣根くん熱あるじゃん！病院連れてくから……ん？」
持ち上げようと膝を浮かせるが、もたれ掛かる体重に阻まれ上手く腰が上がらない。

天羽の筋力は現段階では平均程度。しかし能力を使えば、生活に支障が出るほどの筋力を付けることだって出来る。それなのに、何をどうしても持ち上がらない。

原因は簡単だった。

「彗糸——」

弱々しい声が耳に届く。

——置いていかないで。

子供のようなうわ言が、強く体を締め付けて離れない。ずり落ちて胸元に顔を埋めた垣根の耳は真っ赤で、その姿に心臓が飛び跳ねた。

「……あたしは置いていかないよ」

きらめく甘い香りが舞う。

小さな子供を抱きしめて、熱を受け取るこの時間がなんだかとても幸せで、暖かかった。

支配者の愛。

名状し難き神の愛。

彼を独り占めしたい。

彼の全てを知りたい。

支配したい。

胸の中で眠る幼い少年に、ただ劣情ばかりが湧く。

あたしにできる全てを与えたかった。

あたしのできる全てで満たしたかった。

そしたら、もう二度と離れないから。

深層心理が浮上した。

温かい体温が、初めて感じる体の大きさに正解が脳裏に浮かぶ。

自分だけの笑顔が見たかった。

自分だけで満たされて欲しかった。

けれど彼はずっと不機嫌で、苦いコーヒーのよう。

それが堪らなく怖くて、どんな手も使った。

けれど苦味は増すばかりで、失敗しかしない。

フィクションの中みたいに、あたしにだけ笑ってよ。あたしにだけ

可愛いつて言ってよ。

その言葉も、体温も、全て欲しかった。

これはまぎれもない独占欲。

それは恋と呼ばれる感情。

複雑に絡み合って、真っ直ぐにならない。猫が遊んだ毛糸のよう

に、ただ絡まって、猫を悩ますだけ。

この感情が、おぞましい衝動が、何もかもが怖かった。

act 13：普通の恋

優しい光が瞼を照らす。柔らかな風が頬を撫でると、ワンピースが少し揺れた。

カーテンから流れる秋の風と、黄昏時の金色の光が狭い部屋に差し込んで、少年を優しく起こす。規則正しい寝息は小さなあくびに変わり、少年の黒い瞳に淡い光が宿った。

「起きた？」

「……彗糸」

「具合は良さそうだね」

眠そうな顔で毛布の中から顔を出すと、ぼんやりとした瞳が天羽を見つめる。いつもの病院の、ちゃんとした病室。

カーテンを締め切って、窓を閉じて、起きたばかりの垣根のそばに行くとき控えめに視線が変わる。

「なんだか少し気まづかった。」

「うん、熱だいぶ下がったね。微熱だけど、よかった」

熱っぽいおでこに手を当てて、能力による体温チェックをしつつ、ある程度体調に目星をつける。

傷口と、熱。酷い有様に心がチクチクと痛む。

彼の場合は自然治癒に期待するしかない。未^{ダイクマター}元物質を無意識下でも操れる彼の体を操作したら、どういう化学反応が起こるか分からないためだ。

第六位では、第二位を癒せない。

それが現実で、リアルだ。

「……ワンピース、似合ってるな」

「ナース服ね」

「かわいいんじゃないの？」

ベッドの近くに置かれた椅子に座ると、沈黙を破るように温かい手が天羽のワンピースに触れる。

触れた熱が体を巡って、脳の動きを止めるのは案外早かった。

「……どうしたの？頭ぶつけた？」

「違え」

「なんでもいいけど。とりまセンセ呼んでくるね」
「気まずさ。」

砂糖を含んだ言葉と急激に静まる室内に耐えきれず、慌てて椅子から離れて扉へ向かう。

心音が響く体は熱を持ち、体内時計が狂ったかのように急ぎ足だった。

「どこ行くんだよ、おい、どこにつ」

「はあ？ ナースステーションだけど、うおっ!!？」

急ぐ足を止めたのは狭い個室に響いた金属音。ドアに掛けた手は止まり、振り返った先で倒れていた点滴に目がいつてしまう。

ベッドから大幅に落ちた彼のつむじに焦りが募って、気まずさなんか忘れて駆け寄った。

「どうしたの？ 痛いところは？」

「一緒に、行く」

「病人は安静にしてなきやダメでしょ？ ほら、まだ熱がある。静かに寝ててくださーい」

「一緒に……イテテッ」

「もう、分かったから、ベッドに戻って。ね？」

倒れた上半身をしっかりと肩で支えると、微かに血の匂いが鼻をくすぐる。

押し付けた大きな胸から感じる彼の鼓動は、少し早い。先程とは違う焦りが天羽の心臓をバクバクと刺激して、居心地が悪かった。

「行くな、絶対に」

「どこにも行かないよ」

「嘔吐き」

ベッドに体を戻し、椅子で一息つこう後ろに下がると、離れたはずの手に強く引き止められる。

バランスが取れない体は容易くベッドに腰を下ろして、動きを封じられた。

「嘘じゃないよ」

「別れるって言った」

「それは、そうだけど」

強く、強く手が握られる。緩やかに握り返す天羽の手と、逃がさないといと叫ぶ彼の右手が繋がって、鼓動が重なる。

骨に響く鼓動は熱も相まって、身体中を駆け巡って息がしづらい。

「俺は、お前をなくしたくない」

「なんで？」

「好きだから」

彼の言葉は甘すぎて、上がった息がどうにも戻らない。

悪夢でも見てるかのようで、恐ろしい。

「……熱が上がってきたみたいね。熱せん妄かしら？解熱剤もらってくるから——」

「違うっ!!」

居心地が悪い中、立ち上がろうと足に力を入れると、握られた手に勢いよく引つ張られる。

濁した言葉は最後まで言えず、ひっくり返った重心が体を暖かい毛布の中へ引き摺りこんだ。

温かく、大きな体が視界を埋める。

思春期らしい薄っぺらで、けど厚みのある男の体。いつもと違う身長差。

白いワンピースに触れる体から心音が交わって、熱が上がっていき。

「……熱、上がってるよ。心拍数が異常だ」

「病気のせいじゃないって、テメエの能力ならわかるだろ」

「どうかな。あたし、精神系はさっぱりだから」

抜け出そうとしても、大きな手のひらが頭を抱えて更に深く垣根の胸板に押し付けられる。先程とは違う意味で息苦しい。

頭を撫でて、好きと言って、可愛いと褒める。

いつもの垣根帝督からは想像もできない、甘く煮つめたドロドロとした言葉と態度が混乱を招いて、力が抜けてしまう。

この熱に身を預けたい。

けれど、残った僅かなプライドがそれを許さなかった。

「俺のこと、嫌いになったのか？」

「なに、藪から棒に」

「じやなきや、別れるなんて言わねえ」

「……嫌いになるわけないでしょ」

心臓の鼓動がけたたましく皮膚の下で鳴り響く。

好きだ。

好きだ。

大好きだ。

温かくて、大きくて、優しい手のひらが感情を掻き乱す。

欲を持つてはいけないのに。

望んではいけないのに。

「でも、垣根くんはあたしのこと嫌いでしょう？」

気づいてしまった。

欲深い感情に。

卑しい想いに。

穢れた恋心に。

「ずっとしかめっ面で、笑いもしないでさ」

興味を持つて欲しい。

「あたしは何言つても嫌そうな顔ばっかで、何してもそっぽ向いて。好きな女は抱くつて言ったのに、あたしの体は嫌がって、文句ばかりで」

けれど、この人はこの体に、天羽隼糸という人間に興味を持っていない。

「この期に及んで、何？好き？アンタは一体、何がしたいの？」

この感情をもったまま、愛することなんて出来ない。

これ以上を望んでしまう。

これ以上に膨らんでしまう。

このどうしようもない切なさど、どうにも出来ない支配欲が。

「意味分かんないよ、アンタの考えなんて」

嫌われてもよかった。

好きじゃなくてもよかった。

しかし流れる血が本能に嘔く。

フィクションが感情を刺激する。

「でもそんなアナタが好きなんだ……」

支配者の本能が僅かなプライドを打ち砕いた。

恋とは支配。

体を包むこの男を、この体で支配したい。

冷たいその視線を、独り占めしたい。

口下手な彼を、誰にも渡したくない。

苦味ばかりで吐きたくなる少年を、ずっとずっと、手元に置いておきたい。

自分の力で、垣根帝督を幸せにしたい。

「俺も、好きだった」

吐き出した心をぎゅっと腕の中で掴まえて、垣根は静かに呟いた。

とても甘い、蕩けるような愛の嘔きを。

だがそんな薄っぺらい言葉、もう信じることは出来なかった。

「嘘つけ」

「嘘じゃない」

「嘘」

「嘘じゃねえっての」

「嘘だった」

本当は信じたかった。

その甘い言葉を鵜呑みにして、全てを預けたい。

何十人の業を飲み込んできた体は、疲れきって甘い言葉を欲していた。

けれど痛みへの恐怖がそれを拒む。

それは能力のせい。

肉体を支配する能力は、天羽を守る為に精神にもロックをかける。

傷がついたら細胞が活性化し、癒す。

ストレスがかかったら意思に関わらず涙を流す。

恐ろしいものがあれば、恐怖でそれを警告する。

動物と同じ本能が、人よりも強かった。

「なんでそう思うんだよ」

「……好きなら、普通はもっと違うんでしょ？」

その本能が、彼の熱で溶けていく。

「好きだから、体使うんでしょ……」

信じた理性が拒む本能を覆い隠し、嫌になるほど饒舌になっていた。

「バーカ、テメエはほんと何も分かってねえな。何も知らないお前を掴まえて、色々察してもらおうとしたのが間違いだった」

「……バカでごめんなさいね。別れてよかったでしょ？」

「そうじゃなくて。お姉ちゃん気質の甘え下手には、手本を見せてやるべきだったって話だ」

温かい手が腰に回る。自分の手もいつの間にか彼の首に回されて、二人抱き合う姿勢になっていた、

暖かい。

太い血管が束になる首、脈打つ血流が皮膚越しに伝わって、胸の高鳴りが最高潮に達した。

「なら、見せて？ 垣根くんが好きになる方法を」

無意識のうち、思いがけない大胆な誘い文句が零れ落ちる。

暖かく、きらきらした香りが充満したベッドの中では、正常な判断はもう出来なかった。

「……そうだな、まずは名前ですべてから始めようか」

触れた体温に吐息を奪われる。

交わる息と触れた皮膚が熱を加速させて、体温を上昇させていく。暖かいベッドはとて心地在良かった。

十月一日、ドラマの初回放送日となった。初回放送日だと言うのに、垣根が病欠していた分通常より一時間ほど長く続いた撮影はようやく終わり、それぞれが帰宅する準備を始める。

撮影で疲れていたのか、撮影を終えた超能力者^{レベル5}たちはいつものハチャメチャな元気はなかった。

「お先失礼します。用事あるので！」
「俺も」

第二位と第六位以外は。

「なんか最近、あの二人仲良しじゃない？」

「恋にでも目覚めたんじゃない？ま、第二位にそんな感情あるわけねえけど」

疲れきった超能力者^{レベル5}達を置いて、垣根と天羽はマスクに地味な服装のよくあるお忍びスタイルで二人揃って楽屋から出て行く。

その背中がやけに楽しそうで、御坂と麦野はどこか違和感を覚える。

垣根の一方的なものだが、あまり馬の合わない二人が仲良く一緒に帰る姿は想像しづらい。けれど、現に二人は仲睦まじく寄り添っていた。

「あ？アイツら付き合ってるぞ？」

その答えは簡単で、一方通行のなんてことない一言で御坂たちに衝撃が走る。

思いもよらない発言にただ驚き、口をあんぐりとあけて一方通行の言葉を脳内で何度も繰り返す。

「ツキアツテ……？」

「あら、気がついてたのお？」

「アイツらとはアイドル前から面識あるからな。その時から知ってただけだ」

「俺もだ。天羽とは結構前から付き合いがあったからな！」

「え……私だってアイドル前から……え？その時から？え？」

「私はアイドルで初対面だけど……知らなかった……」

それに気づいていないのは御坂と麦野のみ。

短い労いの言葉に続けて爆弾発言を落とし、何事もなかったかのような顔で颯爽と帰宅していく男子二人を見つめると、彼女たちの口角が引き攣った。

「御坂さんつたらにぶちんねえ。『超能力者^{レベル5}の中で唯一の彼氏持ちの天羽さん』のこと見習ったほうがいいんじゃない☆」

「そそ、そそそ、そんな、彼氏とか、別に欲しくないし!?!」

「第六位、殺すか……」

落ち込んだり、焦ったり、物騒な言葉を並べて事実を知る御坂たちを尻目に、食蜂操析はいたずらっ子のような笑みを浮かべてふっと息を吐く。

とても嬉しそうに微笑み、帰路に就くあの少女の顔。

初めて見た乙女の表情に心が深く安堵する。

「あの子、楽しんでるといいけど」

この後、彼の部屋にお邪魔するとか。

ふたりの秘密を食蜂にだけ教えてくれる、少し天然でお馬鹿な友人の姿が忘れられない。

食蜂の心は満たされた。

達成感と満足感。

友人の晴れやかな姿が単純に嬉しかった。

ついに来てしまった。

「お、お邪魔します」

開いた扉の先、ワンルームにしては広めの部屋の前で垣根の心臓が

強く鳴り響く。

「狭いが、我慢してくれ」

「そんなことないよ。長点の寮なんて家賃高いでしょ？」

「いや、そこまでじゃない。あ、そこお手洗いな」

撮影終わりの夕方。仕事の終わったその足で彼女の手を引き自宅へ戻る。

文章にしたらずって普通のはずなのに、玄関の棚に置かれたアロマと彼女のシャンプーの香りが混ざりあって、背徳感が心臓に根付く。すました顔で受け答えする外側に対し、内面はくらくらして、惚けてしまっていた。

「とりあえずゆっくりしてけよ。カフェラテでいいか？」

「あ、うん。なんでも飲めるよ」

「つつてもお前甘党だろ」

「でも味覚切れば」

「そういう話じゃねえよ。ほら、座れ」

「はい」

玄関をぬけて洋室へ招き入れると、暗い部屋に明るい金髪が煌めく。

今日のために片付けたシンプルでモダンな内装は好印象だろうか。

エスコートはスマートだっただろうか。

鬱陶しいパラッチ共に気づかれていないか。

ふつつつと不安が心の奥で湧き出して、少し無口になる。

座る場所を探して、テレビの前のベッドの上に腰掛ける天羽の姿に意味の無い不安ばかりが膨らんでいた。

「やっと始まるな、ドラマ」

「ほんとだね。十月まで長かったあー！」

キッチンカウンター越しにたわいもない会話を続ける。

ポットでお湯を沸かし、コーヒーの豆を挽くと、一気に香りが広がった。

十月、ドラマの秋クールが始まる。

今日彼女を呼んだのは、ドラマの初回放送を見るため。

「テレビつけてろよ。放送までそんな時間ねえだろ？」

「そうだね。リモコン借りるよ」

放送が待ち遠しいのか、ベッドの上でそわそわとしていた彼女の姿に小さく笑みが零れる。

ずつと下心が見透かされるんじゃないかと、部屋に呼ぶのを避けていたが、それも杞憂だったようだ。

「ねー、音つかないんだけど、壊れてる？」

「あ？コンセントが抜けてんじゃねえか？」

カチカチとリモコンを押す音が聞こえたものの、コーヒーマルを回す音とともに天羽が僅かに声を大きくして、キッチンから見やすいようにリモコンをかかげた。

何度もボタンを押して見せるも、CMが映るテレビは彼女の言葉通り音声だけがつかない。

(今朝掃除したしな。テレビの裏……………あ)

最新型のテレビのため故障あるとは思えず、コンセントが原因だと目星をつけるが、そこでふと気づく。

コンセントなんて自然に抜けるものじゃない。何か衝撃や、人為的なものがない限り。

そして今日、彼女を呼ぶために、部屋の隅々まで、それこそテレビの裏も掃除したことを思い出す。

「ちよつとまで、やっぱ俺が見る」

「垣根くん」

めつたに片付けられないテレビの裏。そんなところわざわざ掃除したのは理由がある。

「これ、何」

テレビの裏とはものを隠しやすい場所。

(しまった)

例えば、彼女が手にしたピンク色の薄い本を隠すには最適だ。

「なんかいうことない？」

「……………悪かった、謝る」

「それで？」

「今から燃やす……あ？」

コーヒーミルから手を離して彼女の前で小さく謝罪の言葉を述べると、冷たい空気が肌を刺激した。

随分前に上条たちから奪った成人向けの薄っぺらな本を前に気まぐず視線が彷徨う。

本人をもした漫画など、不快でしかなく、気分が悪いだろう。そう思って、彼女の手に残った本に手を伸ばすものの、びくともしない。怒ったような、何かに期待するような、そんなわかりづらい彼女の顔に困惑してしまう。

男の欲を詰め込んだ本など、当事者には気持ち悪いだけだというのに、何故か彼女はその本を手放さなかった。

「あととは？」

「あと……？」

「馬鹿だろ。絵じゃなくて本物の乳を揉めつつってんだよ、バーカ」

答えに悩んでいると、立ち尽くした天羽の後ろ、テレビの中をすり抜けるように誰かの腕が伸びた。

真つ白な腕が彼女を包む。見覚えのある男の大きな手が彼女を捕まえようと大きく腕を広げた。

「ひっ!？」

「50!」

垣根と瓜二つの整った顔と、真つ白な髪と体、そして服。カブトムシの一体、ナンバー50。

テレビをすり抜けて、その手は天羽の胸を薄手のセーター越しに下からぐつと持ち上げた。

「な、何してんの?」

「見りゃわかんだろ」

「そうじゃなくて、あの、離してくれる?」

「嫌——っがはあ!」

あまりに唐突な出来事に一瞬静まり返るも、事態を飲み込んでからは早い。天羽から手を離すか、垣根の蹴りが先か。

しかし、鉄槌を下したのは彼ではない。

「申し訳ありません保護対象。この個体は少々デリカシーがないよう
で……」

「だからって殴ることアねえだろ」

「あります」

柔らかな肉に手を添える50の頭上にまたもや白い人影が映ると、
白いつむじに白い靴がぶつかった。

同じダークマターで作ったカブトムシ、ナンバー05の鋭い踵落と
しが見事に決まり、50は地面に倒れ伏す。作られた中でも一番善に
傾いている05は、その姿にため息をつく、深々と頭を下げた。

「元気だね。通常の垣根くんが元になってるとは思えないくらい」

「悪い……」

「落ち込まないでよ。別に分身たちは悪いことなんてしてないんだか
ら」

同じ顔が三人もいる自体が垣根にとって少し気味が悪いが、それよ
りも突然すぎる出来事に言葉を失う。

作られた分身とは言え、彼らは垣根の性格や思考回路をもとにして
作られている。罵り合う50と05を横目に、ただひたすら罪悪感に
苛まれていた。

「……悪かった、本当に」

「別になんとも思っていないってば！」

一瞬の出来事、けれど彼女にとってはそうじゃない。

汚い欲に触れさせてしまった。この間病室で互いに深く話し合っ
たといえど、まだ彼女にそう言った欲をぶつけるのには抵抗がある。

ずっと汚いものと生きてきた彼女に、自分の汚らしい欲を知られる
のは怖かった。

けれど、優しい顔と温かい声で笑って、彼女はこてんと体を垣根に
預けて手を握る。彼女の心音が体を巡って、熱が上がっていく。

彼女から手を握るのは初めて。だというのに、少女は動じもせずに
花のように微笑んで、静かに垣根の隣に座る。

「だって、50の言ったこと、ホントだから」

照れ臭そうに、彼女はそう呟いた。

繋がったコンセントがテレビの音量を上げる。うるさくなった部屋の中で、その声だけがやけにはつきりと耳に残る。

始まるドラマの明るい音声とは打って変わって、目の前の乙女は随分と大人びていた。

act?? :デートに誘おう!

休日。^{オフ}

学校で勉強に励み、部活動などで汗を流す健全な高校生にとって安息の日。

本来ならば、重い体を休めるため睡眠を取ったり、溜まった洗濯物を干したり、行きたかったお店へ遊びに行ったり、普段会えない誰かと会ったり、特別な人と過ごす日のはず。

「さて、つい先日色々初めてを済ませた垣根さん、まだやるべきことがあるとは思いませんか?」

決して、黒と金とツンツン髪男に囲まれ、狭いワンルームに押し込められる日では無い。

「なんだ、いきなり。くだらねえ事で呼び出してんじゃねえよ」

「そうですね、お付き合いがさらに濃密になったおふたりですが、まだやっていないことがあるんですね」

「人の話聞いてんのか?」

惰眠を貪っていた午前、突然『いいから作戦会議だ!』と無理やり部屋から引き摺り出され、連れてきたのはいつもの上条の部屋。

ワンルームの狭い間取りは、身長や体格がしつかりした男三人並ぶにはやはり狭い。

「それって一体なんだにゃー?」

「土御門さん、実はですね、この二人……デート、したくないんですよ……」

「ええ〜!」

「なんなんだその小芝居は」

眠気が吹っ飛んだとはいえ、友人たちのふざけた態度は寝起きの人間にとってかなり癪に障る。なんならつい二日前に起きた彼女との色々、悶々としている今、それについてとやかく言われるよはもつと腹立たしい。

しかし彼らはそんな苛立ちなど気にも止めず、にたにたと腹立たしい笑顔で話すばかりだった。

「というわけで、垣根帝督の恋路を盛大に応援する会主催、『垣根と天羽をデートにぶち込もう!』のお時間です!」

「ヒュー!」

「くだらね」

垣根の健康を損なってまで彼らが話したいこと、それは随分とお節介な議題についてだった。

垣根と天羽、紆余曲折あつて付き合うことになった二人だが、彼らにはひとつ問題がある。

それは彼らの職業。

アイドルである彼らは上層部に半ば公認とはいえ、ファンはそれについて知らない。

知られてはいけない。

スキヤンダルなんてもつてのほか、どんな匂わせも避け、何も無い風に振る舞わなくてはならないのだ。

つい先日の話し合いでお互いわだかまりが解消され、今までより随分と距離は近くなつたが、それでもバレてはならないことに変わりはない。

最近は何となく仲直りしたこともあり接触が増え、尚且つ超能力者^{レベル5}には気づかれてる。

この状況下でデートなどしたらスキヤンダルは確実。

だから彼らは一度もまともなお出かけということをしたことがない。

したとしても、アイドル前の話。しかしそれも暗部で仕事をしていた時のため、巻き込まないよう配慮し、下校時にカフェに寄る程度のお出かけしかなかった。

「いいんですか? 垣根さん、我々のバックアップ、いららないんです?」

「はあ?」

「魔術師にかかれば、人の認識を阻害する魔術ができるし、人払いも出来るぞ?」

「俺はパラッチ的な能力を無効化できるから、遠隔で見られねえと思うが?」

「ぐ……」

「もう一度聞くん！俺らの助けアリで、彼女の私服を見ようと思わねえかつつ?!」

だからこそ彼らの話は魅力的だった。

能力では無い別の力である魔術に、異能を打ち消す上条の右手。

超能力で築いた学園都市では完璧なスキャンダル対策と言えるだろう。

しかしあまりにも垣根に都合がよすぎる。

そして都合のいいものとは、相手にとつても何かが都合のいいものが多い。

詐欺と同じようなもの。

暗部出身の疑り深さはだてでは無い。

「……いや、テメエらはそういうタイプじゃねえ。目的はなんだ」

「喜ばせるためだよ、ブラザー」

「そうだけ、別に宿題手伝って貰おうとは思ってねえーよ、親友」

企んだような、いたずらっ子の笑みに悟る。都合のいい話とは、やはりいつも誰かの思惑が絡んでいることを。

「……………はあ、そんなに言うなら、手伝わせてやるよ」

彼らはなんてずる賢くて、なんて酷いやつらなんだろう。

ニコニコ、馬鹿みたいに笑う彼らに心の奥底から嘲笑してしまう。

その笑みは、男子高校生の、至って普通の微笑みとよく似ていた。

受話器越しに会話を重ねる。

少し甘い言葉を吐いて、貰って。

終了の電子音に惜しむのはいつものこと。

「誰から?」

音が途絶えたスマートフォンをしまつて研究室のドアを開くと、蜂蜜のような金髪が蛍光灯の下で輝いた。

研究室にいるのは似たような女たち。胸がでかくて、背が高くて、金髪、あるいはシャンパンゴールドか。

天羽彗系に、食蜂操祈、テレスティーナⅡ木原Ⅱライフライン。似たような見た目の彼女たちは、ティーカップ片手に談笑を止める。

「垣根くんだけど……ねえ、テレスティーナさん、来週の創立記念日ってオフ??」

「なんで?」

「暇なら会おうって」

「あら、デートの誘い?」

「んー、うん。ぽいね。午後から外で遊ぼって」

電話から戻ってきた天羽の言葉に視線が集まると、怪訝そうな顔でその言葉に食蜂は首を傾げる。

それもそうだ。

外で遊ぼうなど、アイドルの彼女たちにはご法度な提案、垣根が何を考えているか不思議に思うのも当然。

しかし垣根の友人、もとい自分のクラスメイトの事情を知っている天羽には特別不思議なことでもなかった。

「外?変装する必要があるし、それはやめておいた方がいいんじゃない?」

「あー、えっと、垣根くんの友達に人の認識を阻害する能力の子がいてね、その子が協力してくれるんだって」

「アイツ友達いたのか」

天羽の弁解を聞きながら、手にしたティーカップに紅茶を継ぎ足し

て、お茶請けのクッキー片手に二人は会話を続ける。

特に天羽の答えに疑問は持っていないようで、少し安心した。

「でも、それなら安心ね。一応何かあったら連絡頂戴？友達のよしみでなんとかしてあげるわよ☆」

「カメラも、こつちで細工しておいてあげるわ」

「ありがとう。でも来週だし、今から張り切らなくても……」

「一週間しかないじゃない！お洋服買って、美容院行って、エステして、ネイルして、そんなのやってたら一週間なんてあつという間よお！」

「えっ」

安心もつかの間、食蜂は席を立ってきらきらとした瞳をさらに輝かせる。彼女の頭の中にはきつと乙女の可愛らしく甘い夢でいっぱいなのだろう。

好きな人とのデート、その単語だけで気分は上がり、世界が煌めくから。

けれど天羽の熱量はその半分以下。食蜂の楽しげな声と言葉にラグを生じながら反応した。

「えってなによ」

「いや、そこまでするつもり無かつたんで……」

「じゃあなに？貴女、あの代わり映えのしない服でデートに行くつもりなの？」

「ダメ？」

「ダメに決まってるでしょお！あんな普通の安物、デートに適してないわあ！」

天羽にとつて、お出かけとは言葉通りのもの。外で遊ぼうという言葉はデートとは変換されない。

そのせいか食蜂たちと熱量が異なる。

そもそも外出自体はアイドル前によくしていた。とはいえ大抵は下校時の放課後デート。制服姿で街をぶらつく程度のものだが。

だからデートという概念に、あまり熱は感じられない。

「そんなにおかしいかな？」

「いつも赤系とかばっかで、ぱつとしないし、学生にはババくさいのよ」

「確かに鮮やかな赤多いな」

「それはロマンチックレッド現象の応用で……」

「そんなくだらない理由で？全部捨てなさい」

「集めるの苦労したのに……？」

天羽の熱と比例するように食蜂とテレステイナの勢いが増していく。天羽の恋愛事情がそのままアイドル活動へのやる気が変わる現状、テレステイナにとってこの件は最優先の事項で、勢いがつくのも仕方がなかった。

食蜂操祈もそう、彼女にとって数少ない友人の恋愛事情は恰好の遊び場。アイドル活動も楽しいが、友人とする恋愛相談はとても楽しい経験だった。

しかし天羽はそう思わない。いくらこの間ようやく自分の恋だの愛だのを理解したと言えど、まだその思考はおかしいまま。

自分が着飾ることにあまり意味を見出せない。

「でも実際、お前の私服は質素すぎるし、男物も多いからやめた方がいいだろ。もっと可愛いものにしておいた方が好印象じゃないか？」

「それはテレステイナさんの趣味でしょ」

「いいえ、違うわよ。なんでこの世にまだ王道ぶりっ子ゆるふわ女子が絶滅せずに生き残ってると思うの？それは男が好きだからに決まってるでしょ？」

その考えはただの友人相手にだったら困らないのかもしれない。だが恋人とのデートはそれとは違う。

一番似合う服を着て、一番可愛い自分になって、『 temeエが選んだ女は世界一だぞオラ、もっと惚れろ』と喧嘩を売りにいくのがデートの醍醐味、彼女の意識の低さでは垣根に恥をかかせるばかりか、なおかつ戦いに負ける。

スリムなジーンズになんてことないTシャツは、デートの勝負服ではない。それがミィーハーで可愛い物好きの彼女たちの考え。

「え、でもあたしもアメリカでは結構ぶりっ子のクソ女って小さい頃

から……」

「アメリカと日本じゃ違うんだから！日本の男には日本の落とし方があるのよお！」

「そんな事言われても……」

けれど天羽の考えは真逆。というより、アメリカの世論は逆である。

十六歳、アメリカで十年、日本で五年。常識、特に恋愛に関するものはアメリカに寄るのは当然。

アメリカでは、巨乳で、強気で、大人らしい女性になって欲しいと、何度も言われてきた。それに応えてきた。

少女趣味の可愛い女はポピュラーではなく、なんならアメリカにおけるぶりっことは過剰にエロティシズムを煽る女を指す。そういう場所で育った。

だから性欲を煽ろうとしてきた。

もうその必要はないと分かっている、それでもやはりそういう思考になってしまう。

歪だ。

子供なのに大人の価値観を持っていて、けれど子供の思考だからそれに振り回される。

こうなったら、何が何でも可愛く、可憐で、男が振り向く天女にしないと気が済まない。

それが天羽の友人である食蜂操祈と、母代わりであるテレステイナーがたどり着いた考えだった。

「よし、テレステイナーさん。今週末はあいてるかしら？」

「ええ、平気よ。エステとかは勝手に予約入れとくけど、いいわね？」

「正直天羽さんの能力にエステはいらないかもしれないけど、行っておいた方がいいわ。けど美容院は、デートは午後からなのよね？ならその日の朝に行くのがベストねえ」

「分かったわ。準備はこちらでやっておくから、買い出しの時に連絡して構わないかしら？ちなみに、どこで買うか目星ついてる？」

天羽をのけ者に二人スケジュールを組み立てていく。もう二人の

中には一定の結果——コーディネートが決まっているのか、随分とさくさく、本人抜きでいろいろなものが決まっていた。

「あのお、そんなマジになんなくても……」

「貴女は黙ってなさい」

その手際の良さと、鋭い眼光に天羽はただ、震えながら黙るほかなかった。

act♡♡：デートに行こう！

十月九日、学園都市創立記念日。

学生が待ち望んだ休日に、垣根帝督は大規模な水族館のエントランスで人を待つていた。

(早く来すぎたな)

腕時計の文字盤が指すのは待ち合わせ時間の二十分ほど前。渋滞に巻き込まれたら、ハプニングが起きたら、と色々考えすぎて早めに出て来たが、少し早かった。

しかし近くのカフェで待つのは短く、足りない微妙な待ち時間。エントランスのガラス前、姿身代わりに自分の姿を移し、時間が過ぎるのを待つ。

秋の始まり、薄手の黒いカットソーと、大きなチェック柄が目立つテーラードジャケットのセットアップ。オーバーサイズ気味のシルエットの上半身と、スツキリした下半身、かなり気に入っているブランドの秋物で、ブラウンのセットアップは落ち着きがあり、はたからみてもやはりかっこいい。

だがそれでも不安はある。

待ち合わせ相手の反応とか、そういうの。

今は土御門の術で認識が障害されているとはいえ、雰囲気だけでかなり女性の視線を奪っている。

顔とスタイル、アイドルをするためのように生まれて来た姿は目を引く。昔からイケメンと持て囃されていた上に、自分に絶対的な自信がある垣根には、その視線はもはや当たり前のこと。

しかし、恋人との待ち合わせ、気合の入ったコーデインートは人生で初めてのことであった。

緊張が増すのが嫌という程心臓に伝わって、胃が痛い。

「あと二十分か」

「なのにもう来ちゃったの?」

時計に目を落として針を見つめると、黒い革靴に影が落ちる。

甘い香りをした影は、待ち侘びた少女と同じ、緩やかな曲線を描い

ていた。

「彗糸……来てたなら言えよ」

「今来たところなの。遅れてごめんね」

その影に顔を上げる。眩しい金髪が輝き、赤と緑の不思議な瞳と目が合った。

そこに居たのはお下げの背が高い女。

金色と桃色の髪に混ざった白いリボン、同じく白い吊りスカートとフリルの着いた薄紫のブラウス。

揺れたスカートから伸びた足は薄手の黒いニーハイソックスに守られてる。

(なんだ、なんでやけに目立つ感じなんだ?)

一瞬、誰か分からなかった。それほどまでに、目の前の少女は待ち人——天羽彗糸と違う雰囲気を感じて纏っていた。

花とパステルで彩られた彼女の部屋を思い出す。

まるで夢見がちなお嬢様のような服装がヒラヒラと垣根の視線を奪って、胸の辺りが気持ち悪い。

「……どうかした?」

「その……服、珍しい感じだな」

「あーね、テレスティーナさん達に選んでもらったんだ」

胸焼けがする。心臓がギュツていう。

大きな胸元で弾む黒いリボンが心を乱す。

短いスカート、強調された胸、太ももとニーハイの境目。

気持ち悪い。

胸が吐き気でいっぱいだ。

「やっぱりちよつときついよね。あたしもヤダって言ったんだけど」

「……別に、いいんじゃないの?」

白いスカートに目が眩む。

似合わないフリルに、際どいスカート。誰かの目線を奪うために重なる布。

キュツと白とピンクのショルダーバックを両手で握って、恥ずかしそうに視線を背ける彼女に胃が空腹を訴える。

「そう……かな？なら、えっと、うん、よかった。垣根くんの服、とつてもかっこいいから釣り会えるならいいんだけど」

「釣り合うも何もねえだろ。つか名前」

「あ、ごめん。まだ慣れてなくて」

白い彼女と黒い自分。

コントラストに圧迫感で胸が締め付けられて苦しい。

恋する普通の乙女は、こんな汚い男と一緒にいるべきではないのに。

腹が立つ。

少女の眩しさに。

こんな自分のために着飾る彼女に。

褒め言葉のひとつつ出せない自分に。

「つたく、早く行くこうぜ」

しかし腹が立つのは彼だけではない。

(可愛いとは言わないんだよね、やっぱり)

同じように少女も面倒な不安を抱えて彼の後を追う。

十センチ程度の身長差が、今日はひどく遠くに感じた。

チケットを切ってもらい、半券を片手に水族館へと入館する。オーブンしたばかりで、学園都市の技術を集結させたこの水族館はとても煌びやかで、かなり多くのカップルが見られた。

「広いね。さすが学園都市」

「金かかっているからな。ジンバイザメもいるらしいぞ」

「ジンバイザメ!? 飼育大変そう……あんな大きいの」

暗い空間の中、床に、壁に、青い海の水面が投影されて鮮やかに彩る。

天羽の軽やかなステップに合わせて映像に波紋が広がる。海の上で遊ぶような映像に白いスカートが揺れて、涼しげだった。

「そこかよ」

「だってプランクトン大量に食べるんだよ？ 餌代とか、他の魚との折り合いを考えると……すごい労力、すごい」

「動物好きだな、相変わらず」

「動物が好きなんじゃなくて、生物が好きっていうか、あ、まって、すごいすごい、エイ、トビエイだよ」

波紋の先に進むと、まぶしい影が落ちるトンネルへと入る。魚が泳ぐ海の中のトンネルをイメージした水槽はとても広く、入り口なだけあって、かなり人が多い。

その中ですいすいと人混みをかき分けガラスへ向かう。波に流される彼女に、どくと不安がおしよせた。

「あ、バカ、はぐれるだろ」

「でもあたし達目立つし、平気でしょ？」

「そういう話じゃねえ」

無意識に体が動く。フリルのついた長袖を掴んで、手首の鼓動が直に伝わる。そのまま手を滑らせて、指の間で捕まえた。

温かい。距離が近い。

色々な思考で、会話の返事が疎かになる。ラズベリーの甘酸っぱい香りと、優しい花の香りが鼻先をくすぐり、思考に乱れを生じていた。

「ええ？ そうかなあ」

「ほら、進もうぜ。あっちクラゲいるらしいぞ」

「クラゲ！ どのクラゲかな？ やっぱリミスクラゲ？」

「はしゃぎすぎ」

手のひらから体温が伝わる。暗い室内と、淡い青のライト。自然と近く距離のせいで視線も近づいて、眩しい。

彼女の高い背は、こういう時腹が立つ。

「だって、こういうところ来るの初めてだから」

「……あそ」

幼い頃の身長差と同じ。幼い頃なくした少女たちと同じ身長差が

胸に針を刺す。

昔捨てたはずの少年心が、十センチしかない違いにくすぐったさを覚えていた。

トンネルをくぐり抜けると、広い空間が広がる。水族館の目玉と言える巨大水槽の中には多種多様の魚が泳ぎ、床に影を落とす。

「おおお！本当にいる、ジンベイザメ。6mちよいのメスカ」
「かなりデカイな」

人の数倍はある大きなジンベイザメが悠々と泳ぐ水槽に彼女は楽しげな顔をして駆け寄る。小走りで走るにつれ、同じように弾む胸とスカートが甘い香りを撒き散らす。

大きなジンベイザメが優雅に泳ぐ。

お洒落なドット柄と、ゆったりとした姿。

大きな図体に見合わないつぶらな瞳の可愛い顔。

淡い光に照らされて泳ぐ彼女にそっくりな魚は、水槽の中、スポットライトに照らされたように目立っていた。

「いいねえ、おつきくて。存在感ある」

「ああ……本当にな……」

けれども、その魚よりもずっと彼女のほうが目立つ。

と言うよりその一部。

「ん？なんかついてる？」

「いや……別に」

存在感あるのは彼女の胸のほうだ、と口走るのを必死に抑えて、当たり障りのない言葉を呟いた。

真っ白な吊りスカートは確かに上品で、際どいミニスカートであることを除けば普通の服だ。

しかし幼い顔にそぐわない凶器のような肉付きが合わさると上品さは消える。

正直に言おう。

色々な欲が掻き立てられると。

ハイウエストで強調される胸は、どの男の視線も奪うと。

「どしたの？さつきからなんか変だよ」

「あのさ……お前、寒くないか？」

「え？あたし気温感じないから、特になんとも思わないよ」

「寒いよな？」

握る手に力が籠もる。魔術で認識が阻害されているとはいえ、透明人間になった訳ではない。

ぼんやりとした輪郭の中見える胸に多くの視線が集まるのは想像に容易い。

腹立つ。

この清純な子供に、そういう目を向ける全ての人が。

「え？いや。大丈夫だよ？」

「そうか、寒いか。ジャケット貸してやるよ」

「だから、大丈夫だって。服、せつかく選んでもらったし、その……」
「いいから、着ろ」

大きめのジャケットを脱いで、無理やり彼女に袖を通させる。垣根にも大きいジャケットは、背が高いと言っても女らしい体型の彼女にはさらに大きく、目論見通り胸元が隠された。

「もー、なんなの……？」

「ボタンも閉めろよ」

(これはこれで目立つが……まあ、隠せるだけマシか)

ある程度山はあるが、先程よりだいぶ良い。長い丈のカットソーだけではオシヤレとは言い難いが、苛立ちを解消するためなら自分のジャケットくらいなんともない。

セットアップで同じ柄のジャケットとズボン。少女のコーディネットと全く合わないそれを羽織るということは、所有権を主張しているようなもの。

男がいる女にちよっかいをかけるやつは少数、心配事が一つなくなつて、自然と垣根の機嫌が良くなつた。

だがそれは男の視点のみ。

(見苦しい……ってこと?)

天羽の目からしたら服を隠され、目に触れなくさせられたようにしか感じない。

適当なことを言っているが、圧の強さは不快だった。

背伸びして似合わないものを着た勇気が、全部否定されているようで、ただ寂しい。

「もう、次のとこいこうよ」

「そうだな。次は触れ合いコーナー……ここか」

そんな彼女の気持ちを知つてか知らずか、垣根は強く手を繋いで進み出す。部屋が変わるとガラリと雰囲気も変わり、ロマンチックな空間から明るい、親しみやすい場所になる。

いわゆる触れ合いコーナーというもので、低い位置に置かれた水槽には人だかりができていた。

「あー、はいはい。ナマコとかヒトデかな? こういうのって海が近いところしかやらないものかと思つてた」

「学園都市だからな、なんとかしたんだろ……ん? ナマコつた?」

「う? うん、ナマコ……あんま好きくない感じ?」

水槽に群がる人々が手にしているのはくすんだ色ばかりの生き物。蠢くヒトデ、転がるウニに、ヌメヌメとした黒いナマコ。

わざわざ、わざわざ垣根の為に服を新調して、照れながら着てきた彼女にそんなものを触らせるのか。

そう考えると吐き気がこみ上げる。

「……好きではねえな」

「まあ結構グロテスクだもんね。いいよ、その次ペンギンだし」
過保護なのは分かっている。

潔癖気味なもの、垣根は分かっている。
けれど嫌だった。

危険だらけの世界で彼女が汚れるのが。

また離れてしまうのが。

「悪い」

「え？垣根くんの服汚れたらヤダもん、あたしは全然、賛成だよ」

この子に首輪を付ければ心配なんてする必要のないのに。

「ほら、行こう？コウテイペンギンと垣根帝督のツーショなんて、奇跡じゃん」

「……………おう」

独占欲はとうに通り返した。

心にあるのは支配欲。

それは、彼女も同じ。

「おー圧巻だな。飼育員は全個体を把握してんのか？」

「さあね？あたしは分かるけど」

「はあー、お前の能力はそういう使い方もできんのか」

やってきたのはペンギンの展示コーナー。南極をイメージした氷の柱や、暗い室内を照らす青白いライトが涼しげだ。

「可愛いね、コウテイペンギン。垣根くんみたい」

「どこがだよ」

「色合いと、可愛い感じと、あと結構タフなところ？」

「お前はたまに通常の間人間が思いつかないような感想いうよな」

巨大なガラス越しに群れる寒そうなペンギン達とは違い、手のひらから伝わる体温が心を温かくする。

好きだ。

好き。

可愛いものに囲まれて、かっこいい姿が浮く彼が。

困惑気味にペンギンを見つめる彼が。

ずっと手を握ってくれる彼が。

「可愛いと思ったら、俺はさっきのジンベイザメの方が可愛いと思うが」

「ジンベイザメ……デカくて見栄えするけど、可愛いかな？」
(ていうか、魚には可愛いって言うんだ……)

このペンギンみたいに、彼が小さければいいのに。
汚い感情が湧き出て止まらない。

この服はダメだったか。何か可愛くない発言をしたか。

魚に可愛いって言うくせに、なんで人間のあたしには言わないの。
醜い独占欲と支配欲が体を縛る。

彼が小さなペンギンなら、ずっと手元に置いて、抱き締められるの
に。

「デカくて目立つのはかっこいいし、あとドット柄がオシャレだろ。
おっとりしてて、お前そっくりだ」

「あたしジンベイザメなの？」

「似てるだろ？絶滅の危険がある希少種で、大食漢、おっとりの人畜無
害で、デカくて目立つ」

プールの中に飛び込むペンギンを見つめて、垣根は少し嬉しそうに
話す。

繋いだ手は力が増して、熱量も上がっていく。

「……それだと、あたしも『可愛い』ってことになるけど」

「可愛いだろ。アイドルが何言ってるんだ？」

彼の言葉に一喜一憂してしまう自分が腹立たしい。

「そういうのはさ、最初に言いなさいよ……」

心臓が破裂してしまいそうで、腹の下辺りに熱が集まる。

見返りなんて要らなかったはずなのに、いざ甘い言葉を貰うとくら
くらしてしまう。

「あ、まて、ダメだ。それだと俺がコバンザメになっちゃう」

「何それ、垣根くんはペンギンだからいいんだよ」

「ペンギンだと分布違くないか？」

「そんなこと気にしなくてもいいでしょ？だってそんなこと、些細な
問題だし」

この人を離したくない。

この人とずっと一緒にいたい。

この人に好きって言われたい。
支配欲は独占欲と混じり合い、恋へと変わる。
この首に、首輪を嵌めて欲しかった。

涼しくて、けれど少し暖かい水族館はもうそろそろ終わる。

もう最終下校時刻。学校がある日ではないが、弱つちい少女が外にいるには危険になる時間、別れが目前に迫っていた。

「結構見たな」

「全部見て回ったもんね。もう出口だ」

「シヨップ寄ってから出るか？」

「うん。お土産頼まれてるし」

もう水族館は終わりに近い。併設されたレストランとオフィシャルシヨップの前に立ち止まると、天羽は小さく垣根の手を握り返して店内へと向かう。

「テレスティーナさんたちはお菓子として、杠ちゃんは何欲しいかわかる？」

「それよりお前はどうかだよ」

「え、うーん。あたし自身は特にない、かなあ」

「そう、か……」

店内入ってすぐの棚に立ち止まって、可愛らしい缶を手にとった。綺麗な飴が入った缶は綺麗で、それを片手に悩む彼女の姿になんだか寂しさが込み上がる。

帰りが近づくのもそうだが、男としては甘えて貰えないことが不服だった。

金もある、垣根自身のスペックも十分で、懐も広ければ愛情は底抜け。
頼まれればなんだって出来る自信はあるのに、プライドが高くて長

女気質の彼女は垣根と同じように甘え下手。

甘え下手で過保護な垣根と、同じく甘え下手で世話焼きの天羽、相性は良くない。

「……だつて、一緒に遊べるだけで楽しいから」

それでも一緒にいられるのは、天羽が嘘のつけない素直な性格で、垣根が甘やかしたがりだからだろう。

「じゃあほら、俺はペンギンなんだろう？ぬいぐるみでも買ってやるよ。集めてるもんなお前、こういうの」

「えっ、いいよ、別に」

「一匹じゃ足りねえのか？ならオススメで一匹？」

「そんなに要らないよー」

持っていた缶をひったくり、そのまま手を握ってぬいぐるみが所狭しと並んだ棚へと向かう。

コツメカワウソにカニ、イルカとアザラシ、ペンギンとジンベエザメ。

いろいろな生物の可愛らしいぬいぐるみが大中小と並ぶ棚に立ち止まると、彼女は目に見えて焦り始める。施しを受けるのが何よりも嫌いな彼女には、何かを買ってもらおうということが屈辱的なのだろう。

「一匹ならいいんだな？」

「あつ、いや、そういう意味じゃなくて——」

彼女を無視して棚の中から一体、垣根の胴体ほどあるぬいぐるみを引っ張り出すと、片手でつかんでレジへと向かう。

しかしその背中を追いかけて、というより引き止めようとピーピー鳴く天羽の声が煩わしくて、思わず足を止めてしまう。お節介、甘やかしたい感情はあれど、嫌がられるのなら止める理性はまだ持ち合わせていた。

「じゃあ、じゃあ！あたし、ジンベイザメ買う！」

腕を引き止めて、彼女が言った言葉に耳を傾ける。しかしあまりにも突然すぎて、その言葉を完全に理解することはいくら垣根とてできなかった。

「はあ？なんだ突然」

「交換こしよーよ。それなら、フェアでしょ？」

小走りで柵に向かうと、天羽はペンギンより大きめなジンベエザメのぬいぐるみを持つてくる。

魚を抱えて、まるで名案を思いついたかのように笑う少女の姿にまた吐き気が込み上がり、胸焼けがしてしまう。この感情は一体なんなのか分からぬまま、ペンギンを握って少女を見つめると、さらに彼女の顔は華やかになった。

「貰うこと自体は好意的なんだな」

「貰ってばかりなのは嫌だし、遠慮したいけど、でも垣根くんが選んだものをもらえるのは嬉しいから」

目尻が落ちて、頬が緩む。いつもは見ない乙女の姿に吐き気がひどくなる。

「……そう思うなら、早く名前と呼べよな。俺だけ名前呼びじゃねーか」

「あつ」

恋の病が催す吐き気。

不治の病に苦しみながら、垣根は照れ臭い笑顔を見つめることしかできなかった。

学生は帰る時間。水族館の外、空はもう日が落ちていた。

「迎えは来たって？」

「うん、すぐそこだって」

「そうか。そこまで送る」

駅までの直通バスやタクシーが止まる水族館のエントランスを二人歩く。握った手を離さないで、しっとりとした空気の中、名残惜しそうに少女は呟いた。

「でもいいの？帰っちゃって」

「変なこと考えんなよ。帰らせるに決まってる」

「そう……」

「そしたら、また会う理由ができるだろ？」

まだ離さないでと訴える彼女の瞳に打ち勝って、その手を離す。

明日からまた秘密の関係に戻る。それが嫌なわけではないが、公に出来ないのは寂しい。

けれどデートとは、寂しいくらいで帰すのがちょうどいい。

「……楽しみにしとくね、帝督くん」

見知った車が止まると、天羽はやっぱ寂しそうに笑う。

それでも、いつもと違う。愛があるとわかつている顔。

そして頬に当たる体温。

「なんだ、言えるじゃねえか」

もう馬鹿の一つ覚えのように誘うことはしない。

ただの可愛らしい乙女が、そこにいた。

あのゲームは彼女の負けで終わる。

あとはただ、普通の青春を送るだけ。

遠くなる車を見つめ、ただ願う。

この甘酸っぱい日々が、ずっと続くことを。

「途中ハラハラしたが、円満に終わったな」

「俺たちがいるって分かってながらあの距離感……腹たつにやー」

少年と少女の別れを、エントランスの柱から覗く人たちがいた。

黒髪と金髪のツンツン頭。

友人たちの勇姿を見届けるため、甘い別れを惜しむカップルを遠く

からコソコソと影から見守っていた。

「けど、よかったな。無事に終わって」

「それもそうだな」

上条当麻と土御門元春。垣根たちが誰にも認識されずにデートを終えたのは彼らのおかげ。

大事な友人たちの初デートをからかい半分とお節介半分でセツティングした彼らは、仕事を終えた晴れやかな顔でその姿を見つめていた。

「ラーメン食って帰るか」

「おう！」

日が落ちる。

幸せそうな友人たちの姿を尻目に彼らは歩き出す。

男子高校生二人。夕暮れの中で大切な友達の幸せを願っていた。

現代中編：異世界跨いで画面外

初日：初めまして

10月9日、学園都市創立記念日。

スクランブル交差点にて。

「は……はは……ちくしょう……テメエ、そういう事か……っ」

巨大な力が少年にぶつかる。その力を跳ね返すことは出来ず、ぼんやりとした意識の中で、まるで他人事のように黒い竜巻を見つめていた。

どうしてこうなった。

ただ、忘れられていくあの子たちが嫌で、このクソみたいな世界が嫌いで、もうなにもなくしたくなかっただけ。

それだけのはず。

白い悪魔が少年の四肢を引きちぎる。真っ白な翼の中で、美しい少年は血を撒き散らし、嗚咽を漏らした。

醜い痛みの中、思うのは小さな願い。

普遍的な幸せが欲しかった。

あの子たちが幸せになる世界が欲しかった。

自分も、幸せの欠片が欲しかった。

それが垣根帝督の願いだった。

そして、その願いは気まぐれなる神に届く。

暗闇に沈んだ意識が何かを掴む。

天の糸、あるいは救いの糸。

空へ落ちていく感覚。

少年は微睡眠、その感覚に全てを委ねた。

2018年、12月25日。

東京都杉並では特に雪が降ることも無く、寒いだけのクリスマスが過ぎる。

電飾に、サンタ服のチキンのおじさんの像、クリスマスの概念で彩った街は今日が最後だと言うのに、随分と賑わっていた。

そんな賑やかな街を一台のタクシーが通る。

大通りを突っ切って、向かうのは住宅街。一軒家が立ち並ぶ道を走り、似たような家のうちの一つ、天羽と書かれた表札の前に止まると、タクシーはドアを開いた。

大きなスーツケースひとつと、食品が入った手提げ袋、そしてチエーンで繋がったスマートフォンを肩から提げて、金髪の女性が降りる。

仕事を終えたタクシーを見送り、門扉を開くと少し嬉しそうな顔をして玄関へ向かった。

玄関の前に人がいる。その人たちの姿に見覚えがあった。

綺麗な赤毛の女と、平均より飛び抜けた背の男。その人たちと視線が合うと、彼女はより一層笑顔を浮かべて走り出す。

「お母さん！お父さん！」

「彗糸!? アンタ帰ってきたの!?!」

彗糸と呼ばれた彼女は両親に駆け寄り軽くハグをした。

自分と血の繋がった子供の帰還に喜ぶ両親だったが、その喜びよりも驚きの方が強いようで目を見開いて彼女の髪を撫でる。玄関前の寒さは、あまり気にならなかった。

「八月ぶりか? 少し見ない間にお前太ったな」

「は?」

「おっぱいとおしりがママに似ただけよ。パパはデリカシー無さすぎ」

「背と顔は俺に似たんだがな……」

「玄関前でやめてくんない？」

仲の良い親子は楽しげに寒空の下はしやぐ。寒いと言うのに明るい家族はクリスマス装飾に負けないほど賑やかで、暖かい。

「あれ？ていうかそもそもお前今日帰って来ないんじゃないのか？」

「え？昨日メッセ送ったじゃん。既読してたよね？」

「パパ……？まさか忘れてたの？」

「……みたいだね」

「お父さんさあ……」

しかし徐々に会う娘にはしやぐのも直ぐにやめると、二人は少し首をひねって困惑気味に顔を伏せる。帰宅したばかりの娘を出迎える格好ではないところから察していたが、愛する娘の帰宅時間をド忘れてしていたらしい。

「ごめえん！アンタ帰ってこないって聞いてたから今日からパパとニューイヤール旅行なのよお」

「だと思った。いつもならアホみたいに祝うし」

「埋め合わせはするから、ごめんな」

「いいよ。あいつと過ごしてるから」

「あ、あの子も出かけてるわよ。友達……ほら、あんたとも仲良い」
どこが抜けている両親はいつもの事。

仕方がないとスーツケースを持ち上げて玄関を開くと、ため息混じりに家に入る。

しかし彼女の思惑と違い、家の中にはもう一人の大事な家族が見えない。

「マジ？じゃああたし一人でクリスマス過ごさせての？」

「夕方には帰るって言ってたから、そろそろじゃない？ご飯は作ってあげて」

「……はーい。おふたりさんは楽しんできてね」

「あと布団干してるから取り込んでいて！」

「分かったから！」

一人のクリスマスマスが確定した。

申し訳なきそうに旅行へと向かう両親がいなくなり、静かな家中、一人ぼつんと靴を履き替える。

スーツケースは玄関の前に置いて、ブーツを揃えてリビングへ。その足で庭についたバルコニーへと向かうと、からからと音を立てて窓を開けた。

外に並ぶのは白い布団。おそらく妹に取り込ませようとしたのだろう、低い位置で干された布団は柵にかかっているだけでクリップが着いていない。

「またクリップつけ忘れてる……布団落ちてんじゃん！」

そのせいで真っ白な布団が一枚、無造作に落ちていた。

ベランダに落ちた異様に白い塊に近寄ると、持ち上げようと手で触れる。とても暖かい白い布団。

しかし手触りは布団のそれと違っていた。

「布団じゃ、ない？」

それは白い羽根の集合体、翼だった。成人男性の平均身長より大きいその翼は三対あるようで、何かを守っているのか、蛹に似た形をしていた。

柔らかい羽に恐る恐る触れる。

撫でるように触れた羽は、その優しさを受け入れるように花開く。

彼岸花が咲くような美しい光景に、思わず息を飲んだ。

「子供……？」

そこに居たのは麗しい少年。

香る香水と鉄の匂い。

冬の太陽に照らされて、秋の色をした少年が寝息を立てると、それに呼応して翼が脈打つ。

翼が守るのは赤紫のスーツを着た、幼い寝顔の天使だった。

暖かい。

肌に伝わる温度が体の熱を上げる。

微睡みから覚め、ハッキリとしていく思考の中、瞼が開いた。

「……………あ？」

ぼんやりした視界が捉えたのは見知らぬ部屋。その天井。

「どこだ……………どこ……………？」

病院とも違う、生活感溢れる部屋のソファの上、体を温める毛布を握って体を起こす。

知らない匂い。

知らない部屋。

あまりにも情報量が多い。

最後の記憶は10月9日、あの決戦の時の痛み。

破壊した交差点と、悪魔の笑顔。

だと言うのに見える景色は暖かい家のリビング。

この流れからなら運がすこぶる良ければ病院か、学園都市の命運に任せればどこかの研究所、その二択しかないはずなのに。

「……………なんなんだ？」

「あー起きた？結構寝てたね。4時間くらい？」

ソファに座り辺りを見渡していると、柔らかい女の声か広い部屋に響いた。

普通の女の子の声。優しい声色で話すその女は、垣根の後ろ、階段を降りてソファに向かう。

「痛いところとかかない？大丈夫そ？」

「いや……………」

階段をおりる度に長い金髪が弾む。

白いシャツと暖かそうな柄が入った水色のニットのベスト、そして黒いワイドパンツ。大学生ほどか、垣根より年上の若い女がとても嬉しそうに垣根の前に現れた。

「ならお風呂入っておいで。お洋服は貸せるから。あと下着もさつきコンビニで買ってきたからさ」

「その前に……ひとつ聞く——聞いてもいいですか？」

優しそうな女性に少したじろぐ。

ここがどこなのか分からない現状、彼女が敵なのか味方なのかもはつきりしない。

もし彼女が味方で、匿ってくれているというのなら、一応の愛想は必要だろう。

「お姉さんのことは知らないんですが、なぜ俺をここに？そもそもここはどこなのか……」

「えっと、あたしは天羽彗糸。彗糸ってよんで」

「彗糸……さん？」

とすとんと横に座ると、天羽彗糸と名乗った女性は朗らかに微笑んで垣根と視線を合わせる。

彼女の甘い香りと、キッチンからだろうか、洋風の美味しそうな香りがくらくらと鼻腔を掴んで離さない。

「あ、タメ口でいいよ。歳とか気にしないから」

「……分かった。それで、俺はなんでここに？」

「天使くんはね、ベランダに落ちてたの。そのままにしておくわけにもいかないからうちに入れたんだ」

なんだかとても楽しそうに彼女は語る。くるくると跳ねる金髪が少し眩しくて目を細めると、彼女はさらに眩しく微笑んだ。

「天使くんって、俺のことか？」

「うん、違うの？」

「……普通の人間なんだけどな」

「えっ!?翼生えてたのに!？」

目を丸くした幼い顔で、彼女は驚いたように垣根を見つめる。年相応とは言い難い、可愛げのある反応がなんだかすこし新鮮で、心の緊

張がほぐれていく。

何故だろうか、彼女を疑うことに罪悪感が溢れ出る。

「だからって天使はないんじゃないかな？」

「そう？天使くん綺麗だから、そうだと思ったのに」

女の子の声で、彼女ははにかんだ笑顔をみせた。

何も知らない、汚れのない無垢で純情な笑顔に心臓が悲鳴をあげる。

そんな優しい顔を、声を、言葉を貰うのは久々だった。

「……ありがとう」

愛想を忘れた本音の言葉が、思いがけず垣根の口から零れた。

紛れもない本心。

あの激闘の末、酷い痛みと衝撃を受けた体に、砂糖にまみれた甘い言葉は嫌という程染み込んで、心を温める。

知らない女性の優しさは、酷く傷んだこの体にはあまりにも熱くて、甘くて、どろどろに溶けてしまいそうだった。

水滴が落ちる。

茶色の髪から水がしたたり、暖かい湯気が頬を撫でる。

(敵では無さそうだが……色々不思議な点が多い)

それなりに広いファミリー向けの風呂場、浴槽の中で大きいため息を吐く。

思い悩むのは先程出会ったばかりの女性、天羽彗糸と名乗った綺麗な女のこと。

それは別に恋愛的なものでも性的なものでもない。彼女の言葉が脳の中で異物として残っていた。

天使なんて、学園都市の人間が口にするような言葉じゃない。そもそも、記憶が正しければ一軒家は学園都市にはないはず。天羽彗糸の名前も、暗部では聞かない。

能力を使ってる素振りもないし、高位能力者らしい上から目線もか
んじない。

謎。

そればかりが頭を埋め尽くす。

(あの女を全面的に信頼する気は無いが、大人しくしておいた方が無
難か)

頬を両手で挟み、マッサージするように揉み込む。好青年の笑顔を
ずっと保つのは少し厳しい。

だが、味方の可能性が高い今は少しでも好印象を残しておいた方が
無難だ。

(……というより、夢、明晰夢とか、走馬灯を疑うべきなんだろうが)
本当にそれだけか？

心の奥底、救済を願う子供心が垣根の耳元で囁く。

(これを夢だと思いたくねえな)

金髪、色白。胸、尻、背はデカく、優しくて明るい年上の女性。

こんな垣根に何も聞かず、ただ底抜けに優しい笑顔を振りまいて、
暖かいなかで感情を満たしてくれる甘い女。

その母性に甘えてみたいと、垣根の中の子供は頬を膨らました。

長袖のシャツを着て、ダボついた青のジャージを履く。高校の体操
服だと思われるも、刺繍で施された校章は見知ったものでは無い。

「ありがとう、服とかいろいろ」

「結構ピッタリだね！申し訳ないけど、今日はそれで過ごしてね、明日買いに行くから」

「え？いや、そんな悪いし、気にしなくて構わないよ」

また謎がひとつ増えつつ脱衣所から出ると、すぐ側のキッチンで金髪が見え隠れする。

フライパンとにらめっこする彼女の機嫌を伺いつつキッチンに向かい、軽くお辞儀をした。

「それで、色々聞きたいんだけど。いいかな？」

「料理しながらでいい？」

「構わないよ。それで、ここがどこか……とりあえず住所教えて貰えると助かる」

愛想を良くしないと欲しい回答が得られないかもしれない。

上の立場、救ってやった立場の人間にわざわざ喧嘩を売りにいったって意味は無い。

敵だとしたら内部からの攻撃、味方だったらそのまま関係を保てばいい。

ともかく、何も分からない今のままでは下手くそな愛想を振りまっししか手がなかった。

「住所？……ここは東京都杉並。あたしの実家。まあ、なんもないところだよ」

「杉並!？」

「え、知らん?」

一番大事な質問に、彗糸はなんてことないように答える。

フライパンの上で温まる茶色いソースを小さなスプーンでかき混ぜて、日常の延長線で彼女は答えた。

ここを東京と、平坦で普通の声色で、彼女はのたまったのだ。

雷どころの騒ぎではない。地球が真つ二つに割れるような衝撃が垣根の脳に走る。

そして多くの疑問も、雪崩のように押し寄せた。

彼女の言葉を信じれば、ここは外部、学園都市から離れた外の世界。

この女が学園都市から脱出させた？
それとも上層部が？

何のために？

何を思ってる？

何が目的で？

「……俺は学園都市にいたはずなんだが」

「学園都市？八王子だっけ？」

その疑問はさらに深まるばかり。

謎が謎を呼び、彼女の何気ない言葉に酷く恐怖する。

(学園都市を知らない……!!?)

学園都市。

東京都西部にある完全独立教育研究機関。ありとあらゆる教育機関、研究機関が集まった学生の街。

超能力開発が実用され、外部と比べ科学が発達している。

一般知識の範疇。

しかし目の前の大人はそれすら知らない。

おかしな話だった。

「えっと、日付を聞いても？」

「え？今日はクリスマスだけど。2018年12月25日の、えっと、午後五時だね。やべ、あいつ帰ってくるかも」

だが次の質問でまたもや言葉が詰まる。

(クリスマスだあ!?!俺の記憶ではハロウィンすら来てねえぞ!!?)

最後の記憶は10月9日。間違ってもクリスマスではない。

しかし彼女が指さした冷蔵庫は確かにクリスマス、それも知らない年度を示していた。

パニック。

記憶と噛み合わない現実には吐き気と胃痛が体を支配する。

ぐわんぐわんと脳は痺れ、思考が阻害されていた。

「ね、天使くん、ちよつとこれ食べてみて？」

「え？あ、はい……」

痺れた脳は目の前に差し出されたスプーンを拒絶しない。

茶色のソースが舌に絡まるように喉に落ち、しょっぱくて甘いデミグラスが味蕾を刺激した。

暗部の人間として、超能力者として、食べるものは気をつける方だ。それも他人が作ったものは。

しかしそんな疑いをさせないほどの衝撃が脳を麻痺させ、ソースの味を舌全体に広げた。

「うまい……」

「じゃあもういいかな。味見しすぎて味分かんなくなってたから、ありがと」

野菜と肉の旨味。

毒のことを考える余裕もないまま、美味しいソースが胃の中に消えていく。

誰かの手料理を食べるのは初めてかもしれない。

その温かさに単純な疑問が浮かぶ。

女。

純粋な筋肉量や力は男より、能力者でなければ尚更弱い生き物。

男よりリスクが高く、危険を孕んだ崩れやすい砂の城のような女が、目の前に、武装もせず立っている。

「なあ……なんで、なんで俺みたいな不審者に優しくするんだ？」

「んー？難しいね。強いて言うなら、困ってそうだから？」

不思議だった。

絶対的強者である垣根を前に、恐怖すら見せないこの女が。

「そうじゃなくて、何も詮索せず、服も着せて、風呂も沸かして、こういったらあれだけど、男と女で、二人きりなんだけど、どうしてそう無防備になれる？」

「なに？あたしにアレコレしたいの？」

「んな事言っただけだ！」

目を細め、少し妖しく微笑んで彼女は真っ直ぐ垣根と向き合った。その表情に反して、その声はとても弾んで、楽しそうだった。

「あ、ちよつと乱暴になった」

「っ、言っただけ、です」

「別にいいよ。気を張らなくて。好きなように喋りな。天使くんも警戒してるんでしょ？なら対等に喋るべきだ」

荒らげた声に動じることも無く、逆に嬉しそうに口角を上げる。男を惑わす目線と体、だというのに男と二人でいても怖がらない女が少し恐ろしかった。

「……なら、言わせてもらう。危険だと思わねえのか？見ず知らずの男を家に上げて、なにかされると思わねえのかよ」

「そりゃあ、元々人間じゃないと思ってたし。天使は無性、性別ないっていうの？天使くん美形だから服くらいでしか男女イマイチ判別つかないから、いいかなって」

天羽彗糸は笑う。

とても綺麗な、可愛らしい笑みで。

「それに、アナタみたいな綺麗な子が、理不尽に酷いことをすると思えないから」

まるで人を信じる可憐な乙女のように。

「……面食いつて言いたいのか？」

「そうかもね。ねね、サラダ作るの手伝って？」

彼女への嫌悪感はなんとも簡単なものだった。

なくしてきた少女たちと同じ、きらきらとした無垢な瞳が、失う恐怖を呼び起こす。

深く知ってはいけない。

なくしたとき悲しいから。

深く付き合ってはいけない。

なくしたとき寂しいから。

あの時の苦しみが、死への恐怖が、優しい女性を否定する。

「変なやつ」

「よく言われる」

けれどどうしてか垣根は微笑んでいた。

昔なくしたはずの希望が、愛情に飢えた心が、この女の甘い言葉を求めて、血流を酷く熱した。

一日目：おやすみなさい

重たい扉を開けて、靴が散乱する玄関へタイヤを回す。

普通の家より広い玄関先、靴を両手で脱ぎ捨てて別の椅子に座ると、ゆつくりと廊下を進む。

「うひい、廊下寒っ！」

廊下の扉を開けて、おいしそうなご飯の香りを漂わせるキッチンへと向かう。肉の匂いとソースの香り。

姉がいる事はメールで聞いていた。

久々に食べる姉のご飯に想像が膨らんで少女は恋を弾ませタイヤを進めた。

久々に会う好きな人、機嫌が良くなるのも当然だ。

「ただいまあー！お姉ちゃんご飯!!」

元気よく挨拶したものの、キッチンからは返事が返ってこない。

しかし誰かの話し声が聞こえる。

楽しそうな女の声と、抑え気味の男の声。

「お姉ちゃん？」

その声に不安が募る。

父も母ももう旅行へと向かっているはずで、男の声などするはずもないのに。

恐る恐るとタイヤを回す。フローリングに軋む車椅子の音と、誰かの話し声がやけに心音を早めて、怖かった。

「天使くん飾り切り上手！器用だね」

「精密機器の扱いは慣れてるからな」

「工学系天使……！」

暖かいキッチンの角、そこにいたのはよく知る姉と、どこか柔らかい笑顔の茶髪の少年。

姉より五センチほど背が高く、美しい顔をした男だった。

「お姉、ちゃん……？」

「あ、おかえり。ご飯できてるよ」

朗らかな笑顔で美少年とキッチンに立つ姉は、いつも通りの声色で

彼女に声をかける。

まるでそれが日常のように、疑問などないように。

「誰だ？」

「ああ、あたしの妹」

「ふーん、似てんな」

しかし妹にとっては疑問ばかり。普通と暗に言われても、姉の隣に立つ男は妹の知らない人。

忘れたわけでもなく、本当に知らない人だった。

なぜそんなにも確信があるのか。彼の顔を一度みれば誰だって納得する。

こんな傾国の美少年、いちど見たら忘れない。

男は間違いなく妹の知らない人。とは言え、姉の交友関係を全て知っているわけでもない。だから、本来ならば男が何者であろうと妹の知らない姉の友人だと結論を出すはず。けれど、この美貌の前にはそうは言えない。

顔が良い友人がいれば、何かしら妹に話すだろうし、もし近所にいる人ならば、杉並に国宝級のイケメンがいると連日大騒ぎだろう。

紛れもなく、妹にとっては不審者だった。

「……………唐突なNTRに脳が破壊された」

「は？…なんそれ」

しかしその不審者は、あろうことか、姉と甘い空気の中笑っている。笑い合っている。

詰まると客で、姉にとっての大事な人。

そこまで分かればこの男が姉の恋人に近い存在だと、中途半端に良い頭が推測してしまう。

「見損なったよお姉ちゃん!!行き遅れるからって未成年たぶらかすなんてー!」

「いやいや、落ちてたの拾っただけ。可愛いでしょ？」

「人が落ちてるとお思いで??犯罪がバレなきゃセーフなのは宇宙人までだよ!」

犯罪。未成年淫行だったか、誘拐だったか、とにかくおぼろげな知

識が警告する。

姉が何かに巻き込まれているのではないかと。

「犯罪とかじゃなくて、とにかくこの子しばらくうちで面倒見るから。アンタ粗相のないようにね」

「え!!?やだ!!」

「騒がないで静かにしてよ。文句は後で聞くから」

「やだー!!!純愛がいいのお!!!茶髪のチャラ男はやめてえ!!お姉ちゃんの面食いー!バカー!」

それでなくても姉が続けた言葉に驚いて、心の奥底から叫ぶ。

こんな色男が家に住み着くたって!?

うちの姉はどうしちゃったのか!!

実の姉の色恋沙汰、しかも若い男とのただだれてそうなものなど見たくも聞きたくもない。

姉の腹をポコポコと叩き、必死の抵抗を見せる。

しかし柔らかいお腹に縋り付くように突進して叫ぶも、姉の表情は変わらない。

「黙らないと部屋のDVD片っ端から捨てるよ」

「……はい」

「まったく……ほら、自己紹介しな」

というより、怖い方向に変わってしまった。

姉のバイト代で買いまくったDVDを人質に取られては、もう反論などできない。本気で怒る姉の怖さを知る小さな妹は、素直に、そして不機嫌にその手を止めて男に向き直る。

「……天羽恋糸。お姉ちゃんと名前似てるから妹の方って呼べば?」

「恋糸と彗糸……なんか、双子みたいな名前だな」

頬を軽く膨らまして名乗ると、男は低めの、少し荒っぽい良い声で呟いた。

その声に脳が反応する。記憶のフォルダが、その声を覚えていた。アニメにゲーム、映画、嗜んだオタク文化は姉より圧倒的に多い。

その妹の記憶は確かに、その声を覚えている。

「……?お兄さん、声かっこいいね」

「は？なんだ突然……」

「確かに。大人っぽいね」

落ち着きがありつつも、大人びた声。ちょっと気だるげで、色気のあるその声は、確かにこの間いたばかりのものだった。

すぐそこまで、ぼんやりとした輪郭は浮き出ているのに、なかなか脳は口を割らない。

「思い出しそうなんだけど、なんだっけ……主人公じゃなくて、最近聞いたばかりの……」

ウンウン唸って背の高い彼の顔を、全体をよくみる。顔面偏差値の高さに驚いていたが、ようやく見た少年の全体像もどこか普通とは言い難い。

今時ではないぴよんぴよんした長めの茶髪。

切れ長の美人。

スラリとした長身と、どこか風格を感じる立ち振る舞い。

少年はどこか記号的で、特徴の多い姿をしていた。

そしてその記号に当てはまる存在を彼女は一人知っている。

「……垣根帝督？」

2018年冬アニメ。

大好きなアニメの新クールに、同じ姿の存在がいた。

大好きな主人公のいない、旧約15巻。本体は一卷しか出てこないのに人気のある公式イケメン、そして二次創作で引っぱりだこの禁書界屈指のネタ枠。

誰よりもロマンあふれる能力を持っていて、原作者に美しいと評される顔をしていて、少しニヒルでカリスマのあるその人。

そのキャラクターの名前が、ぼそっと、小さな口から溢れだした。

「何者だ、テメエ」

「へっ……」

「なぜ姉が知らない情報をテメエが知っている？」

その言葉に、少年は眉を釣り上げ酷く低い唸り声をあげた。

車椅子を見下ろす長身が、冷たい黒の瞳が、どこか無機質で恐ろしい。

しかしもつと恐ろしいのはその背中。

「へ、は、はあつ、本物……!?!」

「早く答えろ」

甘い香りと、鈍い血の匂いがする純白の翼。

神々しい三対の巨大な翼が、広めのキッチンを覆い隠す。

時が止まるとはこういうことをいうのだろう。

魔法にかけられたような光景に、息を飲む。

ただ呆然と車椅子の上で眺めることしかできない。

「垣根帝督……ああ、アンタが好きだなアニメのキャラクターだっけ？」

その翼の隙間から、呑気な姉の声が響く。この状況下でなんと悠長なことかと思うものの、その間抜けで穏やかな優しい声に、恐ろしい

形相の少年は逆立った精神をある程度落ち着かせたようだった。

だがその発言に今度は彼が驚く番。

ブレた黒い瞳が恐る恐る、姉と視線を合わせると、透明な水滴が頬

を伝った。

「……キャラクター？」

聞いたこともないような小さくか細い声。

子供のような小さな声に、場の空気はガラリと変わる。

これは妹自ら説明せねばなるまい。

好奇心と興奮を必死に隠して、テレビの録画を取りに、冷えたタイ

ヤに手を添えた。

美味しい食事。快適なりビング。暖かいカフェオレ。

暗部の頃とは違う、明るい声の中、醜い男の声が響く。

『なんで俺とオマエが第一位と第二位に分けられてるか』

胃の中で溶けるデミグラスが迫り上がるような感覚。

『その間に絶対的な壁があるからだ』

忌々しい男の声。

記憶に焼き付いた鮮明な言葉が、再び鼓膜を揺さぶる。

デフォルメされたアニメーションと、声を遮る効果音。

酷く不愉快な記憶が、映像となり、テレビに映る。

その光景に、脳はただ混乱するばかりだった。

「ね？言ったでしょ？」

「確かにそっくりね」

午後五時から時は過ぎ、今は午前一時。飛ばし飛ばしで見せられた

深夜アニメはようやく終わり、寝た方がいい時間。

ご飯はあつという間に食べ終わり、あとはもう寝るだけ。

しかし垣根は静かに手元の本を眺め続けていた。

「……とある魔術の禁書目録」

それが世界の名前だった。

小さな本に収められた自分たちの世界。

何万、何十万、何千万という文字で形成されたフィクション。

それを知ってしまったら、もう苛立ちも、怒りも湧かない。

ただひたすら、重い脱力感が肩を襲う。もう、考えることを脳が拒

絶していた。

こんな狭い世界だったのか、と。

「この、フィクションがアナタの世界で合ってるの？」

「ああ……見覚えがありすぎる」

「そう。それは、なんて言えばいいか」

呆然と本を眺める垣根に、姉の方は優しく声をかける。同情と、哀

れみと、慈しみを含んだ優しい女の声。

空を飛ぶ垣根の絵で止まったテレビの画面を背に、彼女は甘く、暖

かい言葉をくれる。

それがひどく気持ち悪かった。

「まあ異世界転生したと思って楽しむばいいんじゃない？学園都市にな

かった外の空気楽しもうぜ!!!」

「あのねえこの子にとっては一大事なのよ？そもそもこんな長時間映

像見せ続けられて疲れてんの。もう1時なんですけど」

「えー？これでもかなり話数飛ばしてるし、wikiと私の解説付きだから早い方だよ」

垣根の感情を置いてけぼりにして、少女たちはスマートフォンに、本に、映像に、様々な媒体で記された世界の秘密を追いながら軽やかに喋る。

借りたタブレットに表示されたウィキと、公式のホームページ。

欲しかった情報を何もためらいなく開示して、手軽に知って、明るく話し合う。酷い目眩がする光景だった。

何年も、何十年も、苦勞して、もがいて、戦うために集めてきた情報が、アクセス制限すらなくネットの海で泳いでいる。

腹が立つのも、当たり前だった。

「垣根くん？でいいんだよね。そろそろ寝ましょう」

「っ、あ、ああ。それでいい」

「和室に布団敷いてあげるから、今日はそれで寝てね」

心の中で渦巻く苛立ちを抑えて、明るい女の優しい笑顔にそれとなく返事を返す。ソファの上、柔らかい女の体温が少しづつおぞましい怒りをなだめていく。

「寂しいなら一緒に寝る？」

「……いらねえ気遣いどうも」

ただひたすらに真っ直ぐ、垣根を見つめるこの女に、この怒りをぶつけることはできなかった。

「ねえ!!まだ話終わってないんだから寝ないでよ!!」

「でももう垣根くんのバックボーンは理解したけど、他になんかある？」

「感想！」

「よし、垣根くん寝よっか」

「一生のお願いだからああ!!お姉様ああ!!!」

しかし妹はといえば、その優しい気遣いを遮って、車椅子から身を乗り出し姉に迫る。同じ顔だというのに、ここまで性格が違うのがなんだか不思議だった。

「そう言われてもね。面白いのはわかるけど、単純にあたし向けじゃないのよ。色々ツツコミたいところもあるし、あたし人死ぬやつ大嫌いだし」

「ひとことーひとことでもいいから……!」

「ひとこと、ねえ……本人前にして言っただけいいの?」

妹に腰を掴まれて、立ち上がった隼糸は戸惑ったようにため息をつく。その視線は垣根と交わり、何処か気まずそうで、居心地が悪い。

「……悪かったな、落ちてきたのが人殺しで」

「別にそんなこと言っただけでしょ?泣かないの」

「泣いてねえ」

その視線が自分を責めているようで怖かった。

顔を伏せて、その視線から逃れるように弱々しい声を絞り出す。

「アナタは悪くないよ。子供の粗相は、大抵親の責任なんだから」

どんな悪態を着いても彼女は受け止める。それが酷く心地が良く、腹立たしくて、怖い。

それでも彼女にやめろとは言えない。

何故だかは分からない。

けれど、彼女に嫌われるのは天地が崩れるような恐怖だった。

「ただ、垣根くんの世界の大人が子供で、アナタが大人びていただけ。罪悪感を持てるなら、アナタはちゃんとした子よ。大丈夫、あたしは垣根くんの味方だから」

「なんでそう言えるんだ」

「言葉を交わせれば分かるよ。垣根くんが素直で、頭が良くて、真面目な子って」

よしよしと、丸っこい垣根の頭を撫でて、彼女は静かに微笑む。

その手を振り払う力は、今の垣根に残っていない。

「お姉ちゃんは垣根推しか……ホントことごとく趣味合わないよね」

「あー、アンタあれでしょ?上条だよね?」

優しい手のひらが髪を撫で、なんてことないように、それが当たり前かのように頬に触れて前髪を整える。

とても、とても、暖かい。

「お姉ちゃんの守備範囲外でしょ」

「うん。説教臭い人は大嫌いだもん」

「ああ……お姉ちゃん偉そうだもんねえ……」

「なんだつて?」

ぱつと体温が離れると、車椅子を追いかけて姉はソファから立ち上がる。重みが無くなり、跳ねるようなソファの柔らかさが今は癪に障った。

「なんでもないよ♡妹ちゃんはもう寝ます♡♡だから怒らないでください♡」

「あ、コラ!ここ片付けろ!」

「お姉ちゃんよろしく!!」

器用に車椅子を動かして部屋を移動する妹に怒りつつも、彼女はただ小さくため息をついて散乱した机を片付け始める。

テレビは消し、本は閉じて、積み上げて、至って普通に片付けを始めた。

仲の良い姉妹。

うるさい妹と、面倒見のいい姉。

そして、自分。

「……仲良いな」

「そう?反抗期の生意気妹よ」

その姿が羨ましい。

守りたかった少女たちが成しえなかった幸福。

自分が欲しかった安寧。

彼女たちは、それを全て持っていた。

ぐずぐずと、嫌な感情が湧き上がる。

全て持っている彼女に、名状しがたき感情が生まれていた。

おやすみなさい。

優しい声にそう言われてから、一体何分たったか。

(寝れねえ……)

硬い畳の上に敷かれた弾力のある敷布団。暖かい毛布に、それなりに硬さのある低反発枕。

客人に出すには少し値が張るもの。だと言うのに垣根の臉は一向に降りない。

原因は分かっている。

現実とか、真実とか、嘘とか、本当とか。

処理しきれない情報が、垣根の中で渦巻いて、渦巻いて、どうにも手の施しようがない。

見せつけられた自分の行為と、自分をえぐったあの黒い翼。パツキリと別れたコントラストに、ない傷が痛む。

自分は死んで、利用されて、踏みじられたというのに、この世界ではただの線と、ただの平面。この痛みは嘘だと突きつけられた。

プライドがその事実を認めない。

あの子達も、何もかも、嘘にしたいくなかった。

「……水でも飲むか」

ひどい痛みと寒気に布団から起き上がる。喉なんて乾いてなかつ

だが、それぐらいしか心を落ち着かせる方法なんて思い浮かばない。襖を開いて、冷たいフローリングが足の裏を刺激する。

静かだ。寝静まった闇が、何か不安を煽って、垣根のなかにいる漠然とした恐怖を思い出させる。

暖かい場所に行きたい。

少し散らかった寒いリビングに、一人ポツンと立つ。頭を撫でたあの体温が、忘れられなかった。

「寝れないの？」

一人静かに部屋を見つめていると、不意に声が聞こえた。

甘い香りとともに、優しい声がふんわりと風に乗って広がっていく。リビングの隣、庭につながるガラスから、冬の夜風と金髪が舞う。

明るい夜の中、姉、天羽彗糸が煙を纏ってそこにいた。

「っ！起きてたのかよ」

「まーね、眠れなくて。垣根くんもどう？お月見」

バルコニーの椅子で、テーブルの上に酒とタバコを並べて彼女は微笑みかける。幼い顔立ちではあるが、もうすでに成人なのだろう、火のついたタバコから煙を吐き出す彼女は大人の匂いがした。

「……明るいな」

「案外綺麗に見えるでしょ。ほら、こっちおいで。眠くなるまでお話ししましょ」

「危機感ねえな、お前」

「そう？」

冷たい空気が頬を撫でる。「はい」と渡されたブランケットを借りて彼女の隣に座ると、タバコの苦い香りと、シャンプーの甘い香りが鼻先をかすめた。

能力で寒さなどどうとでもなるのに、なぜか温まろうと布を借りてすぐ近くに座る。

無意識の行動の意味が自分でも分からない。

温度だけではない暖かさを、胸の奥が欲していた。

だがその暖かさに屈するほど、垣根は子供ではない。垣根を構成する小さなプライドと誇りが、彼女の熱を拒絶する。

「俺は男で……いや、それよりも、俺は人殺しの悪党だぞ。なぜそうも無邪気でいられる?」

「人殺しねえ。アンタが殺した殺してないって言ってるのはただの紙の上の文字、もしくは線。ただのフィクション。垣根くんはユニコーンを殺したと宣う馬鹿を動物愛護法で裁けると思うわけ?」

「フィクションか。俺は、?から出たまことでも?」

俺は、この記憶は嘘なんかじゃない。

そう言い切る前に、タバコの火が消えて、月だけが頬を照らす。

彼女を見つめることしかできない。

優しい笑顔から、次の言葉が出て着るまでの時間が、やけに長く感じて鼓動が早まる。

彼女の甘ったるい瞳に見つめられると、不思議と声が出なくなつた。

「真面目なんだね、垣根くんは」

「あ……?どこをどう見たらそう思う」

「罪悪感があるんでしょ?本当に人を殺したから、本当に人を救えなかったから。自分の犯してきたことの罰則が欲しいわけだ。それって、き真面目じゃない?普通なら、警察に捕まるのが怖くて高飛びするのに」

ふつうの、優しい言葉。

どんなに強くて、どんな鉄壁の守りを持つ、^レ超能力者⁵と云えど、ただの優しさには勝てない。

「そんなに真面目なら、アナタは大丈夫よ。そんなに自分を責めないの」

「何が大丈夫なんだよ、テメエに何が——っ」

「分からないよ。何も。ただ、この世界の法律と、お手伝いをしてくれて、礼儀はわきまえて、食べ方が綺麗なアナタを知ってるから、そう言ってるだけ」

ふと見上げると、オリブ色の、茶色と緑の瞳と目が合つて優しさが視界全体に広がってしまう。

とても柔らかくて、暖かい熱の籠つた微笑み。

子供に笑いかけると、優しい眼差しと、宗教家のように尊大で、そして甘ったるい言葉。

熱い。

「なんで……なんでそんなに悪党に甘いんだ」

「だって垣根くんのこと大好きだから。守りたいって思うの」

ああ、もう。

その熱を、こんな悪党のために使わないでくれ。

「だからさ、あたしだけでも垣根くんを赦してあげたいんだ。それだけじゃ不十分？」

「それは……」

「ならこの話は終わり。解散！そろそろ寝ましょーか？明日起きれないよっ。」

その熱に犯されてしまうから。

「どうしたの？」

ゆっくりと立ち上がり、去っていく熱に手をのばす。

咄嗟に出た手は彼女のシャツを掴んで、その足を止めた。

もう壁は崩落した。

手は行き場をみつけ、目が願望を叶えるために彼女を見つめる。

「……あたしのベッド、狭いけど。それでいい？」

袖から手が離れない。

離したいのに、こんな女々しいこと、本心じゃないのに。

心臓が、感情が、この女の熱に犯されて、動かせない。

「大丈夫、あたしはどこにもいかないよ」

学園都市では与えられなかった熱は、垣根を垣根らしくさせてくれない。

泥の中でもがく一人の男を、ただの子供にしてしまう。

もう、悲劇の英雄なんていなかった。

二日目：おはようございます

心地よい微睡みから暖かい温度で覚醒する。柔らかな毛布と、頭を沈めた枕の甘い花の香りが鼻を掠めて眠気を飛ばす。

爽やかで、暖かくて、気持ちの良い目覚めだった。

「……ぬく」

暖かい布団の中で、まだ焦点が定まらない目をこする。昨晚の熱を帯びたまま狭いベッドの上で身じろぐと、人の気配がないことに気がついた。

確かにそこに大人の女が寝ていたはずなのに、その熱も香りもない。

少し戸惑いつつも、借りたスウェットのシワを少し伸ばして部屋を出る。突き当り、狭い階段を降りて、昨夜騒いだリビングへと向かう。裸足の裏から感じる朝の冷えたフローリングは、どこか気持ちよかった。

「あ、おはよう。早起きだね」

朝六時。

羽織が欲しくなる寒い朝、暖かい光の向こう、彼女がいた。

ふんわりと香る味噌汁と、炊いた米のほんのりとした湯気、キッチンから溢れる包丁とフライパンの音楽。

おとぎ話のような世界で、彼女は一人、ひまわり色のエプロンを着てそこにいた。

「……おはようさん、そう言うお前こそ早くねーか？」

「ご飯作るからね、早めに起きた方が都合いいのよ」

額縁から現れたような姿の彼女は、母のような優しい微笑みを携えて垣根をまっすぐ見つめる。

キラキラしたヘーゼルの瞳。

その瞳はどこか人形のようなだった。

「じゃあ垣根くん起きたし、ご飯食べたら行こっか」

「どっか？」

丁寧に野菜を切りながら、彼女は嬉しそうに目尻を下げる。

「ショッピング！」

酷く嬉しそうな声で、酷く楽しそうな瞳で、緩めた口元がにっこりと弧を描く。

その笑みに、寒さなど吹き飛んで、どこかへ行ってしまった。

彗糸の少し危なっかしい運転で走る車に揺られ、連れてこられたのはたくさんビルの並ぶ中心街。

人混みは尋常ではなく、クリスマスの次の日だというのに人は溢れるのかと思うほど多い。

「ここが噂に聞く渋谷か」

「行ったことないんだもんね」

連れてこられたのは渋谷。

東京都渋谷区。オシヤレの中心地と遙昔に聞いた覚えのある外の世界は。案外暗くて、清潔感はなかった。

「清掃ロボット、居ないんだな」

「技術的にはあるけど、普及するのはもっと先じゃない？」

曇り空に馴染む薄暗いビル街を見上げて、小さく息を吐く。

見慣れないブランドの看板。見覚えのない飲料水の広告。知らないバンドの曲。

この薄暗い世界が突きつける。

「ここが、本当に知らない世界だということ。」

「しかしわざわざ遠出してきた意味あんのか？」

「地元だと知り合いに出くわしそうだったから」

「なるほど。あ、おい、先いくなよ」

「え、なんで？」

ぼうっと空を眺めていると、金髪が動く。高い背にヒールを履いたいけ好かない女は垣根をおいて、手元のスマホに映った地図片手に目的地まで進む。垣根よりも高くなった目線は、手元を見たまま、声をかけるまで合わなかった。

「迷子になるだろ、お前が」

「えっ!? なんないよー!」

「ここちはテメエの妹に見張ってるよう言われてんだよ」

先に歩き出した彼女の腕を掴んで、制止する。画面上の地図とにらめっこしていた彼女のきよとんとした顔に呆れて盛大にため息をつく。朝の記憶を思い出してしまい遣る瀬無い。

ナビが示す方向と逆に歩く彼女のことは、妹から聞いていた。

それは今朝のこと。朝食を済ませ、姉の方から借りた無難な服を着たあとのこと。

『どっか行くの?』

金髪の小柄少女が玄関に向かう垣根の足を止め、首をかしげる。姉と良く似た顔の妹は車椅子のタイヤから手を離して興味津々と言わんばかりに垣根を見つめていた。

姉と良く似た、明るい顔だった。

『渋谷って姉は言ってたぞ』

『ああ、なるなる。そりゃいつものホスト服着れないよねえ、コスプレになるし』

『うっせえな。つかお前はいかねえのか?』

借りた女物の黒いセーター、そしてもともと履いていたスラックスとシャツを着て出かける準備する垣根とは対象に、妹はパジャマのまま座っていた。

どう見ても出かける様相ではない。

『クリスマス過ぎたと言え冬休みですから、人混み多いと進みづら
んすよコイツは』

『……悪いななんか』

だが案外理由は近くにあった。

それは彼女の足。

症状やら病名などは聞いていないが、四六時中車椅子で移動する妹
を昨晩から見続けていたため、足が動かないという客観的事実は分
かっている。

だというのに頭は回らなかった。

学園都市と医療や技術に差があるこの世界では、車椅子は非常に不
便に違いない。

『生まれつきですから、謝られてもねえ？普通に生きれるし、なんくる
ないさーだよ、ていとくん』

『ていとくんって誰のことだ』

『冷蔵庫って呼ぶのはさすがに失礼かなって……』

『どつちも失礼だろコラ』

だが悲観そうな顔一つせず、あつけらかなと彼女は笑う。垣根をか
らかうことを忘れずに。

妹気質が強すぎる彼女は、不便さなんて気にしてないと言わんばか
りに楽しそうだった。

『あ、そうだ。ていとくんお姉ちゃんから目離さないでね、あの人方向
音痴だからすぐ逸れるよ』

『は？あいつあんなんでも成人だろ？そんなことあるか？』

『あの人は今日まで勘と運と人徳だけで生きてきた絶滅危惧種のポン
コツだよ』

しかしすぐに神妙な顔をしてつぶやく。縋るような、呆れたよう
な、よくわからない瞳を向けて、乾いた言葉を吐き捨てる彼女に少し
背筋が凍る。

『……つっても地図ぐらい読めるだろ？』

『ははは、面白い冗談だね』

宇宙人を初めて見た人はきつとこんな思いだったんだろう。

常識を外れた存在とは、意外と近くにいたようだ。

「つーわけだから、絶対、絶対俺のそばから離れるな」

「そんなこと言っただけ……」

「ほら、その地図も貸せ！きつきから見えてらんねえんだよ！」

「あああ!?まっ、垣根くんやめてよお！」

隼糸からスマホを奪い取って、手首も掴んで歩きだす。

この絶滅危惧種は手厚く保護しなくてはならない。

そう垣根の父性に似た保護欲が警告していた。

曇り空とは変わり、明るい照明が眩しい店内。一階から上の方まで

同じブランドが入っているビルは、人でごったがいし、かなり狭い。

「店の中つーのにやけに人多いな。お前はぐれんなよ」

「そんなすぐはぐれないよ！」

「地図も読めねえ女が何言ってるんだ」

ヒールでカサ増しした高い身長、そして金髪が目立つとはいえ、方向感覚が狂っている女を一人にするにもいかず、くつついたまま服を物色していく。

12月というのもあって春物が多いが、分厚いコートやセーターはまだ隅の方にセール品として残っていた。

「それは妹が言ってるだけだから！もう、ほら、服選ぼうよ。これとかっこのいいんじゃない？」

「あ？これポリエステルじゃねーか。他のねえのか」

半額になったニットを手に取り、『安くてラッキー』と嬉しそうに垣根にあてがう。安いわりにしつかりとした縫製のそれは、学園都市で

よく見たものと違い、薄くてやわっこかった。

「んー、そうだなあナイロン、アクリル、ポリウレタン……後は普通にコットンとか自然素材？」

「は？そんな薄っぺらいので撃たれたら死ぬぞ」

「……いちおう聞くけど、どういう状況を想定してるの？」

「銃撃戦。あるいは抗争？」

服のタグを見ると、学園都市では見ることもない弱くて脆い合成繊維の名があった。彼女が見せる他の服も似たようなもので、強化されたものではなかった。

当たり前だ。

この世界では科学の発達が進んでいない。学園都市と比べてはいけないとは分かっている。

けれど、寒さにも耐え、暑さにも耐え、爆風にも耐え、爆発にも耐える学園都市製の服を知っていると、この布がないに等しいものにか感じない。

「物騒だなあ。ないよそんなの……」

「それでなくても女は危険だろ」

こんな薄っぺらい服、引っ張っただけで千切れてしまいそうで、隣の女が急激に心配になる。

薄い服で、どうやってこの世界の無力な人間は身を守っているのか、彼女は守られているのかひどく不安だった。

「ハイハイ。あ、ほら、これ良くない？」

「なんだそれ、セーターか？やけにデカイな」

「垣根くん成長途中みたいだから、大きめ買っという方がいいよ」

「もう背は伸びねえだろ」

しかしその不安なんか気づきもせず、彼女はまた別のセーターを手にとる。冬らしい、真っ白なセーターは、あまり好みではなかった。

「朝髿生えてなかったし、まだ伸びるよ。まあ骨端線とA1pの数値見ないとわかんないけど」

「思いの外本格的な診断出してくんのなお前」

「あとほら、オーバーサイズが流行りだしね。かつこよく着こなそう

じゃないか」

「流行りい？ブカブカなのはどうかと思うが」

彼女が手にした白のセーターはみるからにシルエットが大きく、垣根の体には合わない。だが他の服もどうやら大きめに作られており、近くにかかっていた女性用のコートも、肩周りを除けば男物と大きさに大差はなかった。

「それが今どき……あ、そっか垣根くんたちの時代背景って10年くらい前なんだっけ？そんで流行もちよつと遅れてるとか……」

「……たしかに、俺が知ってるような服着てる奴らは見かけねえな」
どうも一律、ほとんどのものがそう作られているらしい。

確かに周りを見渡してみると、どの男も女も、ぶかぶかで彩度の低い服ばかり着ている。女性はくるぶしを隠すロングスカートばかりで、もこもこしたコートを着てる人が多い。

目の前の彼女も、クリーム色のコートと丈の長いワンピースを着用しており、学園都市の原色やらコントラストの高い服から考えると、だいぶ流行がずれていた。

「2010年から遅れてる、ってことは平成初期辺りの流行かな？確かにあのころは細身のシルエットとか、腰パン流行ってたね」

「よく知ってるな。当事者？」

「違うよ、そんな時はまだ……4、5歳とか？かな？あたし1996年生まれだから、うん、それくらい」

実際学園都市とこの世界は時間が少しずれている。そう言って悩む彼女は指を折って歳を数え始めた。

一、二、三、指を数える彼女の言葉にわずかに驚く。

現在、2018年。彼女の言葉が確かなら、もうすでに23歳ほど。成人したばかり、まだ垣根と4歳ほどしか離れていないと思っていた彼女は、その予想を少しだけ上回っていた。

「あ？てことはテメエ社会人かよ。大学生くらいかと思ってた」

「院一年だよ。一応まだ学生」

「ふーん？何研究してんだ？専攻は？」

院、つまるところ大学院に通う彼女に少し興味が湧いた。手元の

セーターを戻して、ラックに積まれた他の服を物色しながら、話をふる。

単純に、彼女の事が知りたかった。

「生物学。研究対象は生物物理だからギリギリ理工学部かな？人体とか、神経とか、そういうの研究してるよ」

「生物学……その、人体実験とかすんのか？」

しかし彼女の言葉にびくりと体が脈打つ。

手にとったダウンコートのタグを見ながら、平静を装いつつ淡々と言葉を返す。

科学、それも生命科学にいい思い出はない。

たとえこの世界が平凡で、平和で、つまらない世界でも、その言葉にいい感情は抱けなかった。

「人体？自分の体で試すことはよくあるけど、他人はないよ」

「自分の体も使うなよ」

「だって自分で考え抜いた理論を他人でやるなんて勿体ないじゃん？自分の頭の中にあることを、できることなら自分で試したいんだから」

「それはそれで倫理観おかしいぞ」

「そんなもんだよ、科学者ってのは」

それでも彼女はとても楽しそうにコートを手にとって笑う。

目の前にいるのはただの善人、善という塊だった。

心配は杞憂に終わる。彼女はただの女で、普通の人間。

「それに、大切な人のためにしてることなら尚更、誰かを実験体にしようなんて思わないよ」

そのはずだった。

「……？」

「ほら、垣根くん試着室いくよ！サイズわかんないと困るし！」

「……分かった」

小さく聞こえた不穏な言葉に心臓が脈打った。

言葉自体はただの優しい人の善意だというのに、その声色が、その冷たい瞳が恐怖を煽る。

試着室までの足取りが、どうしてか重かった。

暖かい店内から出ると、冷たい風が髪を乱す。暗い夕方、赤く染まるはずの空はまだ雲に覆われていた。

「はあ、買った買った！いい買い物だった」

「いささか使いすぎじゃねえか？無一文になっても知らないぞ」

たくさんの紙袋、それも統一性のないブランドを両手に提げて帰路につく。駐車場はまた別の場所、移動が億劫だったが、嘆いても意味はなかった。

「大丈夫よ、多分。遠慮しないの」

「けどよ」

「いいの！あんたたちのことを世話すのがあたしの生きがいなんだから」

「なんだそれ。奴隷か何かか？」

「愛の奴隷といわれればそうかもね。アンタたちのことが大好きだから、世話焼きたくなんのよ」

リズムを作るように、軽やかな足取りで人の少ない通りへ行く。駐車場まですぐそこ、機嫌の良い彼女は弾んだ声で、シヨツピングバックを揺らした。

身体に沿って広がる長いコートが、曇り空の中はつきりと主張していた。

「そうは言っても留守番させたり、一人で帰らせたり、車椅子相手にすることとは思えないが」

「愛で方と愛し方は違うのよ。甘やかすことだけが愛ではないの」

真つ白なワンピースも合わせて揺れる。彩度のない世界で、彼女だけが眩しかった。

「……何が違う？」

「垣根くんつてき、背筋ピンとしてて、姿勢がいいよね」

少し後ろで歩く垣根に、白い女は振り向く。長い金髪が風に乗って、たなびいて、キラキラして、少し言葉に詰まる。

そのぼんやりした優しい瞳に捕まると、体が動かなかった。

「食べ方も綺麗だし、歩き方もだね。それに、最初に会話した時、なるべくへりくだって、今とは全然違う、かしまったかんじだったよね。だからあたしはキミを信頼したし、好きになっても大丈夫と認識したわけだ」

多分、彼女は『普通』と違う。

「マナーとかき、礼儀つてのはき、自分が有利になるためのものでしょ？へり下れば相手は気分を良くしてくれて、自分に有利な状況を作ってくれるかもしれない。簡単にいえばき、全部自分を良く見せるすべだよ」

「それがなんだよ」

「でもき、それってどうやって覚えた？」

多分、彼女は『おかしい』のだと思う。

「誰かに注意されたり、注意された人を見てき、この行動は他人を不快にするだとか、自分が不利になるって学ぶわけだ。その注意があるおかげで自分が有利に振る舞えて、人生においてプラスを作り出せる。マナーが悪かったり、初対面なのに暴言を吐くような人間は好きになれないでしょ？躱された犬の方が、人間、愛着を持ちやすいのと同じ」

それは確信に近かった。

白い女は、歪な感情を瞳の奥に隠して愛を囁く。

ひどく冷たくて、熱のこもった合理的な愛を。

「あたしはあの子を愛してるから、あの子のためになる生き方をしてるの。振る舞いも、善行も、勉強も。あの子があたしを見て正しく行きられるように。あたしが死んでも、ちゃんと車椅子を動かせるように」

「愛だけで、そこまでするのか？」

「するよ。この命は彼女のためにあるんだから」

子を守る狼のような、鋭く冷たい瞳だった。

心を殺して作り上げた徹底的な合理主義。

愛を使って他人を支配する悪魔。

善意を押し付け人を淫らに落とす魔皇。

彼女はひどく頭が良く、ひどく愚かな人間。

彼女は愛を使って正義を騙る。理不尽で、傲慢で、自分勝手な存在だった。

「……母さん気質だな、お前」

「そうねえ、垣根くんのこと産んであげたら良かったんだけど」

「そういう話はしてねえから」

「でも、この世界にきたのが垣根くんによかった。こればかりは、神様に感謝しないとね」

きつと、彼女には妹の姿も、垣根の姿も映っていない。

そこにあるのは未来の彼ら。そのゴールに向けて、彼女は合理的に、ロボットのよう計算して、大人として振る舞っているだけ。

「きてくれてありがとう垣根くん」

彼女はゲームをしているのだ。

運命を司る神と。同等の立場で俯瞰して駒を進める。

愛に溢れた悪魔は、細めた瞼越しに垣根を見つめていた。

「バーカ、恥ずかしいやつだなお前は」

悪魔とは思えない、ひどく優しい瞳が垣根の奥にある何かをくすぐる。

それは垣根の子供心。

母に、父に、世界に愛されなかった子供のわがまま。

その悪魔の囁きが、この世の何よりも美しい。それが自分も欲しい。

血のつながりだけで愛される妹が羨ましかった。
曇り空はいつしか晴れ、赤い空を覗かせていた。

三日目：こんちわ

暗い外を窓越しに見つめながら少女は唸る。姉はおらず、妹と垣根の二人きり。

車椅子を引くとフローリングと擦れたタイヤが軋んだ。

「冬休み、宿題沢山、パラドクス」

「クソみてえな俳句だな」

リビングのテーブルに薄っぺらい教科書とプリントを散らかして、金色のつむじを見せつけるように目の前のチビは机に突っ伏す。高校2年、物理と書かれた教科書を読んでいる彼女の目は死んだ魚のように絶望ばかりが多い尽くしていた。

「物理分かんやいなよ。ゲームしよ、乱闘しよーよお、ひと狩り行こうよお、イカでもいいぞ」

「こんな小学生レベルで躓いてんじゃねえぞコラ。ゲームは後にしろ」

「IQ1億の人間と比べられてもねえ」

「確かに俺様はテメエみたいな道端のゴミと比べられないほどの天才だが、流石にそんなねえよ」

要領が悪いのか小学生レベルの宿題に頭を抱える彼女は、大学レベルくらいとつくに修了した垣根には馬鹿らしい。姉に頼まれ宿題をする妹を監視しているが、そろそろ面倒になって来た。

ため息をついて姉の方に借りたタブレットで生物学の論文を暇つぶしに読みながら、垣根は妹の方から視線を逸らす。縋るような子供のわがままに付き合いきれなかった。

「ううう……ていとくん代わりにやって」

「テメエのためになんねえだろ」

「優しいねえ……そんな優しいさいらないねえ……」

「今日中に終わらなかつたらそのゲーム機叩き割るぞ」

グダグダと鉛筆を置く彼女に呆れて、金髪頭を少し小突く。二つに括った髪が揺れると、長い前髪の間から姉とよく似た大きな瞳が覗いた。

「思ったより優しくないねえ!!? 割ったら四万弁償してもらおうからね」
「壊したら直せばいい」

「んんんんん理工学男子ムカつきますわあ!! 無職の癖に……」
「お前と違って稼ぐ方法なら色々ある」

小型犬のように威嚇して、彼女はききやんきやん吠える。姉と違って落ち着きがないのか、姉がただ大人しいだけなのか、全く違う姉妹は飽きがこない。

クソガキの侮辱は、欠伸が出るような可愛げのあるものばかり。垣根が怒ることはほとんどなかった。

「え、売春……?」

「ちげーわ」

「でもおっさんに身売りしてそう」

「殺すぞ」

「やっぱり童ていとくんなん? チンチン何センチ?」

「お前の事セクハラで訴えたら金取れるかな」

「でもこの世の中には垣根帝督の貞操が気になる生物だっているんだよ!!? 垣根帝督のチンチンサイズで一喜一憂する人間がいるんだよ!!!? 彼らはネットですつ来るかもわからない原作垣根を待つては夜な夜な泣いてるんだよ!!? 教えてあげなよ!!!」

「滅びろそんな人間」

セクハラじみた少女の興奮した声を淡々と切り捨て再び電子書籍に目を落とす。

神経やら脳の構造について書かれた本を読んでいる方がよっぽど有意義で、彼女の言葉はあまり耳に入っていない。ひどいことを言っているのは分かるが、この生き物に構うのは時間の無駄だとこの三日過ごして嫌という程わかっていた。

「でも実際問題、身売り以外にどうやって稼ぐの? パパ活ならお姉ちゃん名義で贈与税払えばいいけど、ちゃんとしたバイトとか正社員って戸籍とか必要じゃない?」

「……お前の言ってることも間違いじゃねえな。クソほど下品だが」

しかし急に飛び出したまともな意見に、タブレットを見つめる視線

が動く。

彼女のいうことは下品だが、根本的な疑問は正しい。

この世界から戻る方法が見つかっておらず、なんなら戻りたくない垣根としてはこの世界で金を得て、生きて行くしかない。そのためには戸籍、身分を証明するための何かが必要になる。

それはもつともな意見だ。

「フリーランスかあ……動画配信とか？でもその顔目立つからなあ。んー……この世界では学歴もないし……」

「まあ、暴力に頼ればなんとかなるかもしれないねえが、彗糸に迷惑かけるし、案外難しいな」

「食蜂操祈とかなら洗脳して戸籍とか作れるだろうけど、未^{ダークマター}元物質つてそういう用途じゃないじゃん？正直、戸籍周りとか法的なこと？解決する手段、今のとこないよ？」

「となると、個人事業主するのが一番現実的か？と言っても何をすればいいのか……」

それをクリアするには姉の名義を借りて家の中で商売をするしかない。戸籍がない以上、この世界の法律の仕組みに則って金を得るのは難しく、それぐらいしか案が思い浮かばない。

しかし個人事業主として何をするかはよくわからない。

この世界のレベルに合わせる必要があるため、表に出すスキルは限られており、学園都市の技術を意図せず使う可能性があるプログラマーやエンジニアはリスクがある。また彼女の言う通り、モデルや芸能人のようにホイホイと顔を出すのも難しい。本を書いたりしても面白いが、これもまた内容によっては学園都市の技術を漏洩してしまう危険がある。

何が最善か、今の垣根にはピンとこなかった。

「あ、そうだ！あるじゃん」

「なんだよ」

「芸術家！ほら、ていとくんカブトムシ作ってたじゃん！アレ自作でしょ？手先器用なんじゃない？」

だが妹にはいい案があるようで、机から身を乗り出して輝く瞳で垣

根をまつすぐ見つめる。昔なくした少女と同じ、キラキラした瞳は少し垣根には眩しかった。

「あのデザインはこっちだとイラストレーターが考えたものだけどさ、あれを考えた設定を持つていてくんなら、そのイラストレーターと同じレベルのデザイン能力がある訳で、金になると思うよ」

「理論的には分かるが……」

「作ってみよーよ！カブトムシ05作ろうよう！」

身振りを大きくして彼女は笑う。姉とよく似た笑顔で。

「その前にお前は宿題終わらせろ」

「うづあああああ!?!」

なんだかとても腹立たしかった。

彼女と血が繋がっていると見せつけられているようで。

「……あいつ虫平気か?」

お出かけ中の彼女の顔を思い出しながら爪先をいじる。あの優しい笑顔をくもらすのは少し忍びなかった。

駅、寒々しい空に白い息を吐きながら賑やかな人混みを掻き分ける。お土産を買いに駅のモールに来たはいいものの、年末のセールや正月準備のためか人が多く進みづらい。

院の知り合いへのお土産、妹たちのおやつ、大掃除の道具、餅も買って、おせちの材料、年越しのそばと今晚のご飯。とりあえず今日はお

土産と餅だけ買うつもりだが、未だ手には鞆しかない。

誰か連れて来ればよかった。心の中で悪態をつきながらキヨロキヨロとどこから回るか考えていると、タイミングがいいのか悪いのか、スマートフォンから音が鳴った

「ん？メール？」

何かと思つて写真をたくさん貼り付けたスマホを手に取り、通知に目を通す。教授からのメールや、サブスクの通知に埋もれるようにあつたのはメールではなく妹のスマホ経由で送られてきたチャット。『カブトムシは好きか？』と簡潔に書かれた分はどう見てもうるさい妹が考えた文面ではなさそうで、あまりにも脈絡がない文章に一瞬立ち止まる。

何を思つてそんな文章を送つてきたのか分からないがとりあえず返事を送つて再び歩き出す。

「……飼いたいのかな？」

怪訝に思いつつも『好きかも』とだけ答え、思考を巡らせる。なんでそんな文面を送られてきたのか、考えられる一番の理由は飼育のためくらい。

事実、垣根帝督は虫が好きらしいと妹から聞いていた。世話もろくにしない猫や犬を飼われるよりマシかと思ひ、不安を募らせつつ買い物へ向かう。

帰宅が待ち遠しくないのは、初めてのことでなかった。

時間が過ぎる。黒鉛が紙を滑る音と、自分の呼吸音が静かなリビングに響く。暗く鳴ってきた外にリビングの明かりが反射して窓が鏡のように垣根たちを移す。

とても静かでゆつたりとした空間は、とても居心地がよかった。

車椅子の少女が口を開くまでは。

「あああああああわかんない!!!物理ってナニ!!!??
!!イキって物理選ばなければよかつたああ!!」

「ウルセエな、静かにできねえのか単細胞」

うるさい叫び声をあげてその生き物は机に頭を叩きつける。半日は過ぎたと言うのに一向にページが進まないことを嘆く女子高校生は、来年受験生とは思えないほどおつむが弱かった。

「助けてかきねもん」

「何を」

「全部」

「ヤダ」

「なあんで」

「お前が嫌いだから」

すすり泣いて忙しい垣根の腕を掴むその生き物は、姉と違って惨めに嘆願する。それを無視して白いカブトムシを作り続けていると、さらにそれは声を荒げて泣きわめいた。

「ええー、なんでよ。お姉ちゃんとクリソツだぞ!!可愛いでしょ!!手伝ってよお!!!」

「似てるって言っても、顔だけじゃねえか」

騒がしい少女に根負けして手を止めると、長い前髪の隙間から見える瞳と目があった。元気そうな幼い顔と、ヘーゼル色の虹彩、確かに彼女と似ている。化粧をした後の姉の顔と。

しかしそれだけである。

そのすぐ下は平たく小さい体がくつついている。どう見ても、姉とは似ても似つかない。

「オイーどこ見てんだ!」

「身長」

「いいや、目線は30センチ下見ていたぞ貴様!」

「かわいそうに。自己肯定感の低さから自虐か」

「確かにお姉ちゃん見たら凹んでるけどさあ!巨乳の方がレアなんだから!!こつちが普通なんだから!!」

「俺はなんも言っただけだから」

体だけ遺伝子が同じにならなかつた哀れな妹からの悲痛な叫びを無視して、手元の白い塊を形成して行く。

徐々にカブトムシの形になってきたそれは、初めて作るにしてはやけに手に馴染んでいた。

「やっぱりお姉ちゃんが好きか、見損なつたぞでいとくん！」

「ほんと騒がしいな、お前」

「じゃあ嫌い？お姉ちゃんのこと」

不意にかげられた問いにピタリと手が止まる。

あまりにもナンセンスでつまらない問いは、垣根の心をずっしりと重くさせた。

「……絶滅危惧種に認定すべき善良な人間だとは思う」

「何それ、つまんないの。もつと色々あると思つたのに！」

言葉にするなら恩人というのが正解だろう。

見ず知らずの世界で、見ず知らずの人間に衣食住を用意して来て、甘い言葉をかけてくれる。そんなファンタジーのような人間、嫌いになる人間がいるのだろうか。

好意を持っている。それは間違いない。

けれどそれは目の前の子供が考えるような汚いものではない。

これはもつと根強く、根深く、偉大で、神聖なもの。

誰にも理解できない厳かで美しいもの。

「はあ？お前、俺に恋愛感情でも持つて欲しいのかよ。無理だぞ、正直、アレにそういう感情を持つのは」

「まあ分からないでもないかなー、お姉ちゃん変人だもんね」

「変人？」

「分かるでしょ？あの人、頭おかしいんだよ。他人への絶対的な支配欲っていうか、奉仕欲っていうか、あの人はね、他人を自分の力で幸せにすることで自己肯定感をあげてんの」

ポツリポツリと、少女は蛇口から落ちる水滴のようなさみしい声で何かを話す。垣根の思いを牽制するような酷い罵倒を、ただひたすらに。

「酷い人なんだよ、お姉ちゃん。幸せになつて欲しいのに、人の話なんて聞かないで勝手に突つ走る。誰かが手綱を握らなきゃ、あの人はいつか騙されて、最悪な人生を辿るんじゃない？」

「ひでえな、そこまで言うか？」

「それぐらいおかしいの、お姉ちゃんは」

呆れたように顔を伏せてしばらく口を閉じると、妹は椅子を引いて、見せびらかすようにタイヤを大きく回す。

重たい前髪で見えない表情が、なんだかとても不気味だった。

「この足さ、ずっと動かないんだよね。医者は匙を投げて、通院は半年に一度。一生動かないって言われてるんよ」

「それが？」

「垣根くんならどうする？ たった一人の妹が、何よりも変え難い大切な人が、哀れにも一生歩けぬまま生涯を終えることに、どう思う？」

先ほどとは打って変わった深刻な問いに、一瞬驚き、すぐにその答えを導き出す。

ずっと車椅子の上、一人の人間がそれ以上を知らずに死ぬ。それは、学園都市の子供達とよく似ている。

小さい頃から運命が決定づけられ、それ以上を求められない環境。可哀想だと卑下されて、面倒なものとして扱われ、何も起こらない。

そんな少女たちを見てきた。その笑顔も、その最期も。

「……動くための技術を開発する？」

「ああ、君もそっち側なのね。だからお姉ちゃんは好きなんだ、君の事」

考え抜いた答えをつぶやくと、彼女はあからさまに落ち込む。わざとらしく大きなため息をついて、ひどく惨めなものを見る顔で垣根を見上げていた。

「んだよ、どう答えて欲しかったんだ」

「そうだなあ。君が相対した^{アクセラレーター}一方通行なら、車椅子で転ばないように道を綺麗にする。上条くんなら、車椅子でも幸せになれるよう美味しいご飯を作る。その日常が壊れないように。足が動かないことを前提に物事を考えるわけだ」

「それじゃ根本的な解決にならねえだろ」

「そうだね。君は諦めが悪くて、理想主義者で、完璧主義の潔癖症で、革命を起こしたがる変人だ。平穏な日常を壊して、さらなる幸福を目指す。不幸な子供たちに目を向けて、学園都市に反旗を翻す君は、そういう人でしょ？」

足をさすって彼女は冷たい瞳で床を見つめる。小学生に見える小柄な少女は狭いなで肩を更に落として椅子に深く背を預けた。

彼女は垣根が好きじゃないのだ。

言葉の節々から感じる違和感と憎悪。彼女の視線と呟いた音に納得がいく。

姉とよく似た欲と、他者のための革命。

自分のため、他人のために世界を巻き込む主人公は、彼女のお好みではない。

自分の平穏を祈り、少女の平穏を祈り、巻き込む悪から少女を守るヒーローこそが彼女の理想。

垣根はそれにそぐわない。

「お姉ちゃんもそうなんだよ。あの人は、文字通り、人生かけて私の日常をより良いものにしたがる。誰もそんなこと頼んでないのに」

彼らは革命家。未来を見据えて行動する。

それを今生きて死んだ少女たちが望んでいないとしても。

「その分愛されてんだろ」

「自分のことも愛せない人に愛されたって困るだけだよ。愛し方を知らないんだから」

だがその思いは垣根にとってただただ不愉快なだけ。

あんなに愛されているのに。

あんなに想われているのに。

学園都市の子供達がその一生で出会わないような光溢るる慈愛を貰っているくせに、くだらない憎悪でそれを無下にする。

「お前、神様に嫌われてそうだな」

「そうかもねえ。それで殺してくれるとありがたいんだけど」

血が繋がっているだけで、同じ血が流れているだけで、無償の愛を

もらえる目の前の餓鬼が忌々しかった。

「早死にしたいのかよ」

「お姉ちゃんよりまし。私のためとか言っただけでアメリカの大学まで行くほうが自殺に近いでしょ。銃社会だぜ？危険だって言ったのに！」

もう話なんてないと机と向き合った途端、少女の声がやけにクリアに聞こえる。これ以上嫌いなガキと話なんかしたくないのに、はつきりと聞こえた国の名前に脳は素早く反応した。

聞こえた言葉が本当だと信じたくなくて。

「そりゃ——アメリカ？」

「そうだよ。私の足を治す研究がしたいって言って、勝手に行って、年に数回しか帰ってこない。聞いてると思うけど、お姉ちゃんが生物学に進んだのもそのせいだかんね」

「じゃあ、大学院も、同じアメリカ……だよな？」

「え、うん、今も通ってるよ？来月の二日に戻るはずだけど……」

恐ろしい予感は的中する。運命とは、つくづく垣根の味方をしない。

一生一緒にいれると思ったのに。

ずっとこの生活が続くと思ったのに。

12月27日、残り一週間もない僅かな時間で彼女は垣根の手から離れて行く。

虚しさ、苦しさ。怒りが体をめぐる。

窓の外は雨が降っていた。

「つくしゅん……うー……誰か噂してる？」

空調管理の行き届いたモールの中で寒気が走る。小さくくしやみをする、ポケットからティッシュを取り出して軽く鼻をかむ。

分厚いコートを着ているというのに、寒気はなかなか治らなかった。

「風邪かね？」

「あれ、お隣の」

コートの襟を正してティッシュをしまうと、背後からふと声を掛けられる。

聞き覚えのある低い声は、隣に住む顔見知りのもの。慌ててお辞儀をすると、彼はにっこりと笑みを浮かべて彗糸の前に立つ。

スーツにジレ、凜とした隣人はどこか胡散臭かった。

「やあ、久しいね。アメリカは楽しいかい？」

「ええ。おかげさまで、研究室にどっぷり浸かってますよお」

「それは良かった。君が不幸せだと困る人間もいるからね」

「あはは、イギリスの方は面白い言い回しをするんですね」

たわいもない会話を重ねて、どうにかこうにかやり過ごす。片腕にかけたエコバックが重みで腕を痛めて、早く帰りたい。

「それより、いつもより服が華やかだが、どこかにお出かけしてきたのかな？」

「ああ、うち今、えっと、ホームステイしてる子がいまして、買い物といえど、ちゃんとした格好してた方がいいかなって」

「……ホームステイ？」

「ええ、家庭の事情で預かっているというか、男の子を泊めていて。ですから、うちに知らない少年がいても不審者で通報しないでくださいね？」

そそくさと帰ろうとするも、進展する会話に思わず肩が跳ねる。慌てて嘘を交えて素直に答えると、更に会話が広がって行く。

嘘をつくのは苦手ではないが、家に垣根がいるところを目撃されている可能性がある以上、下手にごまかすのは得策ではない。

それらしい言い訳と事実を交えて会話を繋げる、それくらい簡単だった。

「……それは、もしかして茶髪のかっこいい子かな？」

「あ、もしかしてもう見かけました？ご挨拶に伺えなくて申し訳ない」
「いや、気にしなくて結構」

もう一度お辞儀をして暗に離れることを示す。

最後に一言添えて。

「今度、ご紹介しますね。アレイスターさん」

「……それは楽しみだ」

その言葉に男は少し眉を顰める。染めたように綺麗な長いプラチナブロンドが揺れて、深い碧眼が少し泳ぐ。

彼の名はアレイスター・クロウリー。

ただの善良で、普遍的で、人畜無害のお隣さん。

四日目：お久しぶり

青いカバーのスマートフォンを耳に当てると、コール音が鼓膜に響く。

何度目かのコール音の後に聞こえるのは無機質な女の声。一向に相手の声が届かない。

「……出ない」

「歩ってんじやね？お姉ちゃん基本ミュートだから気が付かないよ」

何度目かの発信だが、姉が電話を取らない。借りた妹のスマホには、狂ったような発信履歴が残るだけで、腹の中で蠢く苛立ちはまったく収まる気配がなかった。

「あのクソ女……どこほつついてんだ」

「迎えに行けば？バス停ならすぐそこだし」

「……いく。マップはどうやって見る？」

「んー、っと、アプリの、ここ」

買い物から帰ってこない姉に痺れを切らし、地図を見ながらバス停までの最短距離を計算する。セールスマン問題は得意な方、答えはすぐに出る。

「行ってくる」

「もう覚えたん!!」

「傘借りるぞ」

玄関まで静かに走ると、傘立てから一本傘を奪って扉を開く。

土砂降りの雨に傘が打たれて水が弾けると、水溜まりにぼたぼたと滑り落ちる。分厚い雲で覆われた空は光を通さず、世界は暗い。

その暗い空に混じって、明るい金色が目映った。

「彗糸っ!？」

門の前、ふと目を離れたすきに現れた長い金髪に足が早まる。

傘をさして、石のタイルを踏むととの空気が頬を冷やした。

買ってもらった部屋着用のスウェットに水がつくと、色が濃くなっていく。吐いた息は白く、暖かい。

「っーおい、着いたなら電話——」

「すみません、結局送って貰って」

「気にしないでくれたまえ、他でもない君のためだからね」

濡れた服が肌に張り付いて気持ちが悪い。彼女の目の前でエンジンを唸らせる黒い車と、運転席の男が心を揺さぶる。

そこには知らない男がいた。

困ったように笑う彼女の手首を掴んで門の内側に引き入れると、知らない人間を睨む。

こんな危機感のない女、そんな女が仲良くする男などろくな奴ではないと垣根の直感が囁いていた。

「……誰？男？何？」

「あ、垣根くん！さっきモールで会ったんだけど、この方お隣の――」

「やあ、こんばんは。賑やかな子だ。仲が良いようにで安心したよ」

傘の中に入れた女を強く掴んで、車の男を見定める。車の厳ついエンジンブレムから見るに外車だろうか、どこか高級感を感じる車体は警戒心を高める。

この女に手を出そうとするもの好きの顔をみようと中を軽く覗くと、長い銀髪を揺らすスーツ姿の男と目が合った。

「この人、お隣のアレイスター・クロウリーさん。民俗学の学者さんですね、それで……垣根くん？」

「なんで、テメエが……」

息を飲む。

その男を知っていた。

銀髪碧眼。中性的な顔立ちの男は、この間見せられた画面と同じ顔をして、スピーカから聞こえた声と同じ声をして、垣根の前に息をしていた。

「……見知らぬ男がいるのは思春期には酷なことだろうね。私はそろそろ戻ろうか」

「あ、ごめんなさい。ほら、アンタも」

「いいさ。また話そう、明日にでも」

「テメエ、こいつに何をっ！」

車のエンジンを鳴らして窓を下げようとするその男に思わず声を

荒げて替糸の前に立つ。

血が湧き上がる。

心臓が波打つ。

別世界に来て、その憎悪と復讐心は忘れることがなかった。

「あまり声を荒げないほうがいい。垣根帝督」

「な、テメエ何を企んで」

「この世界の神様は都合よく設定されているが喧嘩ぐことは喜ばない。管理が面倒になって手離すような結果になるのは、君とて嫌だろう？」

垣根の荒々しい声を遮って、その男は呟いた。

とても冷たく、静かな声。ただ落ち着いたその声からは敵意を感じず、体に溜まった怒りが意図せず萎んでいく。

混乱、困惑、思考と感情が交わらず、体の制御が止まってしまった。

「どういう……」

「家は隣だ、いつでもきたまえ少年」

車が走り去る。本当に隣の家に入って行き、その様子を呆然と見続けることしかできない。

「どうかしたの？」

「……今の話聞いてなかったのか？」

「あ、ごめん。教授からメールきてて。あんまし……」

彼の言葉が耳に残る。都合がいいと、冷たい目で言っていたあの男の声。

その言葉が真実に思えて他ならない。

スマホ片手に立つ彼女の姿がやけに印象的で、あの言葉の違和感が際立っていた。

「お家入ろっか。寒いでしょ？おふる沸かしてあげる」

「それよりテメエ、アメリカに行くって聞いてねえんだけど」

「あれ？言っただけだった？」

苛立ちよりも困惑が思考を支配する。

ただ笑うだけの彼女に怒りが湧かないのは、そのほうが都合がいいからなのか。

あの男の言葉は、全ての物に疑惑を植え付けるほど衝撃があつた。

日は跨ぎ、12月28日。天羽家から歩いて数秒、手入れされたイングリツシユガーデンが眩しい隣の家に立つと、恐る恐るチャイムを鳴らす。

門の内側、一般的な玄関の鍵が回る音がすると、忌々しい姿をした男が顔を出した。

「思ったより遅かったな。君も懐柔させられたか」

「アレイスター―クロウリー。ご本人のようだな」

「いかにも。そういう君も、垣根帝督そのものだな」

スタイリツシユなジレとストラックス、長い銀髪に碧眼。英国紳士そのもののような風貌の男がそこにいた。

垣根よりだいぶ歳をとったその男は、垣根の人生で最も憎い男と瓜二つ。

アレイスター―クロウリーその人だった。

「窓のないビルから見てた顔だろ？」

「随分と昔のことだが、覚えているものだな。あの頃と変わらない」

門を隔てて風が吹く。赤紫のスーツが小さく揺れて、甘い洗剤の香りが鼻をくすぐった。

画面から飛び出した男二人が対峙する。

火花が散る。

この男を前に、冷静な判断ができるのはおかしな話だった。

「そういうテメエはアニメで見たときとは違って、随分若いようだが」「若いといえど、妻子持ちだがね」

「それは、」

「それよりこんなところで話すのも野暮だ。入りたまえ、紅茶とスコーンがある」

しかし彼はその火花を枯らす。穏やかな口調で垣根を招き入れるように玄関を大きく開くと、暖かい空気が外へ逃げ出した。

悪魔の牙は抜かれ、ただそこには無気力な弱者が立っていた。

通された広めのリビングは英国風で、大きな窓から見える庭先の鮮やかな花々が眩しい。カップに注がれた赤い紅茶と甘いスコーンが香り立つ。

しかし甘いそれを手をつける気にはならなかった。

「さて、積もる話は数多くあるが、何から話そうか」

銀髪と、金髪——に近い茶髪だが——が顔を合わせる。

ここはテーブルを挟んだ戦場だ。戦闘服スラッを着て、この世界じゃない、アレイスターを指した超能力者として垣根はここにいる。

いつでも殺せる覚悟があった。

あの女を裏切っても、目の前の男にこの怒りを伝えたかった。

「まずテメエがなんでここにいるかからだ。妻子持ちとかいつてたが、いつからここにいてる？なぜここにいてる？答えによつてはこの場で殺す」

「その物騒さ、懐かしい限りだ。長い話になるが……まず私は、転生というべきか、生まれたときからここにいてる。君が良く知るアレイスターは前世と言っても良いかもしれない」

「前世……？」

「ふむ、そうだな、君はパラレルワールドを知っているかい？」

「知ってるに決まってるだろ」

怒りをあらわにしながら目の前の男の言葉を待つ。案外育ちがいい垣根は、怒りに我を忘れてそれを邪魔することもなく、背筋を伸ばして彼の弁解を聞いていた。

「なら話が早い。ここはあの世界が物語だった場合の並行世界。魔術も奇跡も嘘に反転したひどく色褪せた世界だ」

「その話はおかしくないか。テメエはまだ、一応本編、新約21巻ではまだ生きてんだろ？本体が死んだ俺とテメエは違うだろうが、幸せ者」

アレイスターが口を閉じると、すぐに垣根の口が開く。

彼の言い分は少し矛盾していた。

前世だとか、転生だとか、それは死んだ人間に起きる現象だ。それこそ、垣根のように。

のうのうと生きて、何巻も生き抜いて、主人公に許されて、辛い過去を恥ずかしくもせず本の中でひけらかす幸せ者に起きるような現象ではない。

「……なるほど、なぜ君がこんなところにいるのか不思議だったが、そうか、君は彼女を知らない世界からきたのか」

「彼女？誰の話だ」

「君も大好きなクソ女……もとい神様、天羽擘糸だ」

「ハアア？」

その言葉に何かを理解したのか、彼は深くため息をついて紅茶に口をつける。

だが垣根にはその意味はよく分からない。引き合いに出された彼女の名前がただ体をこわばらせて、顔が引きつるだけだった。

「別の世界の君は彼女、一つ年下の幼妻を掴まえてめでたくハッピーエンドを迎えた。永遠に幸福のまま学園都市の中で冒険をしているのだろうよ」

「……おさな、づま？なんの話だ？」

「まあそこはいいか。とにかく、私は君とは違う世界線のアレイスターIIクロウリーであり、超能力者で君の相棒である神に殺され、慈悲によってここで生きているのだよ」

ゆつくりと彼の話を飲み込んで行く。ずば抜けて良い頭脳でもこんながらがる不思議な話を丁寧に、絡まった糸を解くように。

「君は神に救われなかった世界の垣根帝督、そして私はその神に捨てられた者だ」

低い声がりビングに響く。ティーカップの湯気越しに見える銀髪
の男は、酷く冷めた顔をしていた。

「……………つまり、テメエの世界には超能力者で、俺と行動をともにしたひとつ年下の彗糸がいて、俺はテメエとは別の世界にいたと、そう言いたいんだな？」

「正解だ。彼女がいた世界では、君は10月9日に殺されることもなく、変わることもない日常を噛み締めている。いまでもな」

彼が言いたいことはなんとなく分かった。

「それを哀れに思ったのだろう。彼女がいない世界の垣根帝督を幸せにしてやろうとも思った神は時空を歪ませ、私の監獄に想い人を呼んだのだ」

現時点で三つの世界があるのだ。

垣根帝督がいた世界。

天羽彗糸が垣根を救ったという世界。

そして今いる世界。

アレイスターが殺された世界。自分が死んだ世界。

どちらも存在すると、彼は言いたいのだ。

「俺とテメエが似て非なる立ち位置なのは分かったが、その神って一体誰のことだ。ここは一応そういった類のものはないんだろ？」

「そうはいつても、君をここに連れてきた第三の存在がいるのは確かじゃないかね？それに、魔神程度でも世界に干渉できることも知っているだろう？」

「それが彼女だと？」

「正確には私の世界にいた、神となった彼女だがね。この世界の彼女はいわば他人の空似、君の保護者という役割以上に意味はない個体だ」

そしてそれには『神』が関わるといふ。

思いがけない発言に戸惑うも、彼の意見は的を射ている。そもそも並行世界の移動など、学園都市の科学力とはいえできないはず。できていたのなら、目の前の男が何かしら作中で問題を起こしていたはずだ。

だができる存在がいる。

それが魔術サイド、世界を何度も作り変えた魔神ならば可能である。

彼の話を鵜呑みにするのならば、もともと魔術サイドか、なんらかの要素で魔術の拒絶反応を克服した天羽彗系が魔神、もしくはそれに近い存在に変化したということだ。

「……随分とファンタジーだな、この世界も」

「仕方あるまい。ここは彼女の世界だ、都合が良い方に世界が象られていく。だから神様ってやつは大嫌いなんだ」

非常に壮大で、予想もできない話だ。助けてくれた女が別世界では神様で、垣根を助けたくて別世界に飛ばしたと言われたら誰だって信じる気は起きないだろう。

しかしあの天羽彗系がその神だと言われたら信じるほかない。

慈愛しかないおぞましい女が別の世界で神さまをしていると言われたら、納得してしまうのも仕方がなかった。

「都合が良い、か。ならなぜアイツはアメリカだかどつかに行く？俺が好きなら、ずっと一緒にいたいと思うのが普通じゃねえの？」

「言っただろう？ここはパラレルワールド、もともとあった別世界に私と君が捻じ込まれたのさ。そうになると、たとえ神の意思が介入していても元々の思想や行動を正すことはできない」

「だからって、俺がいる状況でそのまますぐに行くのはおかしいだろ。というか、普通は最初にいうはずだ」

「彼女はもともと恋人を残して戦地にいけるような性格だ、君をおいて行くのになんら不思議はない」

だがその女神さまは垣根を置いて行く。本物の神様じゃないから、ただの人間だから、垣根を置いて今までの日常を過ごすだけ。

認めたくない。

けれど彼女が出て行くのを止める方法は思い浮かばず。

欲しかった愛を無償でくれる彼女を、ずっとそばにおいて起きたいのに。

「しかし、この世界でも彼女を好きになるのか。どんな因果か、これは興味深い」

「『好き』じゃねえ。けど近くにおいておかなきゃ、俺はこの世界で安心できねえんだよ」

「だがアメリカについて行くわけにもいかんだろう？そもそも私とは違い、いわゆる転移の君は戸籍がなく、パスポートを作れないからな」
その感情は筒抜けで、テーブルを挟んだアレイスターは目を閉じたように顔を伏せて笑う。

「それにこの世界ではその名前で生きるのも難しいだろうし、科学力が違うことも致命的だ。常飲していた薬もなければ、能力者は繊細だからな、特に君のような規格外は病気になるっても医者にかかれない」
かわいそうな子。そう言われた気がした。

「……それがテメエになんの関係がある？」

「手伝ってやると言っているのだ、この世界で生きたいんだろう？」

「なぜ？テメエにどんなメリットがある？」

紫のスラックスを握りしめて、狼のような唸り声をあげる。中性的な顔が垣根を見下ろし、まるで威厳があるかのように振舞っていた。

——テメエのせいでこんな目にあつてんだろうが。何の面下げて上から目線で見下ろしてんだクソ野郎。

そう言いたいのを必死に我慢して、静かに睨む。

力のない年上を殺すことなど容易いが、保護者である女の顔を思い浮かべると行動が抑制される。

「メリットか。そうだな、私は神が嫌いだ。そして、神に監視され続けられるこの世界も」

「それが俺を手伝う理由だと？嫌いなら手首でも切つて死ねばいい」
「監視さえなければ、という話だ。この世界そのものは望んでいたよ
うな世界に近い。物理が世界の中心で、奇跡など起きないこの世界
は」

垣根の感情に流されず、アレイスターはただ話す。上から目線で自分勝手な願望を。

そして、垣根にとって都合のいい提案を。

「だから、垣根帝督、君の助けになろう。神に愛された君を助ければ、私は許され、いつこの世界を取り上げられるか分からない恐怖から解放される」

「……俺の読んだアレイスターIIクロウリーが言うようなセリフじゃないな」

「お前だって分かるだろう？一度極楽に浸かれば抜け出せなくなる。昔なくした妻子が、しがらみのない世界で私と一緒にいてくれる、その世界を手放したくないのはいたって普通の思いだ」

落ちぶれた悪役に胃が締め付けられる。

そうだ。一度甘い砂糖を知ってしまったら、それ以上を望む。それ以外見えない。精神が依存を繰り返す。

部屋中に飾られた彼と、彼の家族の記念写真。叶わなかった夢がここで叶うというのなら、人は愚かにもその糸を掴む。

「神の施しを、まだ手放したくないんだよ」

慈愛を自分のものになりたい。

それは垣根も同じ。

「それで、私の手をとるか？」

「……あっちの知識は残ってんだろうな？」

「もちろん。君たちのデータからプランまで、覚えているさ」

悪役二人。

可哀想な過去がある二人。

報われなかった二人。

この世界で報われた二人。

救いの糸を手放しなくない二人。

答えは決まっていた。

「なら、手を貸してもらおうか」

「では何から始めようか。戸籍取得からかい？それとも職探しかな？」

けれどまず、やるべきことがある。

「そうだな、それはテメエを殴ってから考えさせてもらう」
忘れられていく子供たちの復讐だけは、終わらせなければいけない。

重いドアを開く。ぬるい空気が通り抜け、甘い花の香りが舞う。

「あ、おかえりー。どこ行ってたん？」

「……散策」

靴を脱いでリビングへ。ダイニングテーブルの上で教科書を広げた少女の前で強く拳を握る。

悩ましい顔で空白を埋めて行く彼女に、なんて切り出せばいいか分からなかった。

「おもしろいもんあったけ？」

「ない」

「そういえばさ、カブトムシ完成したん？お姉ちゃんに見せた？」

振られた話題にピクリと眉が動く。彼女から出る姉という単語が酷く耳障りで鬱陶しい。

嫌いなくせに、彼女の愛にあぐらをかいて貶すくせに、都合のいいときだけ愛を受け取るこのガキが、今ではアレイスターよりも憎らしい。

「まだ調整中だ。それより、お前に話があるんだが、今いいか？」
「なんすか」

だから、彼女から奪う。

血の繋がった女を。

「お前の姉についてだ」

神様も同じ気持ちだろう。

異教徒などいらぬ。愛を受け取らぬ愚か者なんて、そばにいる意味なんかない。

嫌いだというのなら、捨てろ。

いらぬのなら、奪ったっていいじゃないか。

最終日：さようなら

最近、何かがおかしい。

「アンタたち、何してるの?」

「えっ?! いや、なんでもないよお」

庭先、リビングからは見えない角度に彼らは集まって背を向ける。コソコソと、髯糸に黙って何かをしているようで、車椅子で体を隠して二人何かを話し合っていた。

「なんでもじゃないでしょ、垣根くんに意地悪してんじゃないでしょね?」

「意地悪って……」

「しないよ!」

「アンタがしないわけじゃないじゃん!」

妹の目が泳ぐ。微動だにしない垣根とは違い素直で嘘のつけない妹のおかげで、すぐに彼らが何かを企んでいることがわかってしまう。なんて単純な妹なのだろうか、自分の妹とてそこは呆れてしまった。

「ひどい! お姉ちゃんのバーカ!」

「赤点女に言われたかないわ!」

「事実陳列罪で捕まっちゃえー!!!」

何を企んでいるのか聞き出そうと、スリッパを履き替えて外に出る。それにぎよつとしてタイヤを回すと、妹はすぐに逃げ出した。

怪しい、いかにもな行動にため息がでる。残った垣根に踏み込んで聞くこともなぜかできず、そこに立ってただ息を吐く。

「一体なんなの……?」

ここ最近、垣根をお隣さんに紹介した日からか、彼らはなぜか姉の方と距離を置きたがるようになった。

だが話はそれだけではない。

「なあ、ちよつと出かけてきていいか?」

「いいけど、大丈夫? 一人で行ける?」

ある日は外出の許可を求められた。外出自体はなんともないが、垣

根から聞かれるのは珍しく、少しばかり驚いて目を見開く。

買ってあげた新しい黒のコートとスラックス、紫のセーターと白いシャツを着て、困ったように頼む彼が新鮮だった。

「私いるから大丈夫！」

「そもそもどこに……」

「図書館！宿題見てもらうの！」

だがその内容に再度驚く。図書館なんて、妹が行くようなところではない。この女の行動範囲は遠くて秋葉原か池袋、近くて駅周辺のゲーセンかアニメ関連ショップ。勉強への執着を姉に全て母親の体内でかつさらわれた妹が言い出すような場所ではなかった。

「アンタが図書館？送らなくていい？」

「大丈夫!!大丈夫だから！」

「連絡しなさいよ？」

「分かったから！」

この日を境に、ここそそするだけでなく、場違いな図書館へ入り浸るようになった。

垣根はともかく、この妹の変化は姉にとって天変地異のようなもの。塾に入れても1日で辞め、テストは古典と数学、英語で赤点を毎回取り、高校生だというのに受験について一切考えていない妹が、図書館なんてあり得ないはずだったのに。

そしてもう一つ。

何よりも重大な違和感があった。

「あ、お酢がない。買ってなかったっけ」

それはまた別の日のこと。キッチンで調味料を探していたときのことだ。

「買ってこようか？」

「ひゃー！」

調味料入れをひっくり返して見当たらないボトルを探していると、不意に声を掛けられる。全く聞こえなかった足音と気配に驚いて思わずしゃがんでいた体を床にぶつけて、小さな悲鳴をあげた。

「っ、か、垣根くん……びっくりするから後ろに立たないでよ」

「失礼、しかしお手伝いしようかと」

痛いお尻をさすりながら立ち上がると、彼の黄金比もひれ伏す綺麗な顔が視界いっぱい広がる。その真っ黒な瞳は、光の反射なのかどこか穏やかな緑の輝きを持っているように見えた。

どこか違和感を覚える。

しかしそんな違和感を彼に面と向かって伝えることもできず。

ただひたすらに気まずかった。

「だい、大丈夫。レモン汁で代用するからさ！垣根くんはテレビでも見てなよ。ほら、情報収集も大切で——」

「お手伝い、させて」

「……えっと」

上から見つめる瞳に違和感があった。

ここ数日、彼は妙に優しい。言葉遣いも、何かがおかしい。

そして、それを不思議に思わない自分がいるのが最も気がかりだった。

「どうかした？」

「う、ううん。お酢はいいから、冷蔵庫からレモン汁と、棚に片栗粉あるから取ってきてくれる？」

「分かりました！取ってきますね」

「ありがとう……」

お手伝いをする優しい彼。

目尻を優しく下げる彼。

敬語ばかりで慎ましい彼。

——この垣根帝督は、いったいだれ？

その違和感を口に出せず時間だけがすぎ、今日は年末、12月31

日。ソファに体を預けると、柔らかい布に下半身が沈む。

冬の寒さは、暖かいエアコンの前では無力だった。

「あの子たち、何時帰ってくんだろ？」

もうそろそろ12時、年が開ける時間だというのに、妹たちは家にいない。二人で何を企んでいるのか知らないが、大晦日とはいえこんな夜中に外出する二人に心配が募る。

（年越しそば作りたいんだけど……いらなのかな。ていうか今どこにいるんだろ）

リビングにて、マグカップから登る暖かな湯気とココアの甘い香りに微睡みながら、冷蔵庫の中身に関心を移す。

もうつゆは作っており、鍋に火をかけ温め直すだけ。天ぷらを作るための用意もできており、ネギや薬味ももう切って冷蔵庫に置いてある。

しかし頑張って用意したこれらも、彼らが食べなきや意味がなくなる。

（無駄になっちゃうな）

垣根くんに食べて欲しかったんだけど。

「あれ？」

そう思った。思ってしまったのだ。

違和感しかない感情に不安が募る。その思いは、天羽彗糸にとってがおかしなことだから。

だって、彼女は垣根の姉じゃない。家族同然と思ってはいるが、本当の家族ではない。

優先すべきはいつだって妹。ご飯を作るのも、洗濯するのも、掃除をするのも、全て妹のため。

だというのに、今の彼女が真っ先に思い浮かべたのは垣根だった。なんで垣根を優先した？

疑問が浮かぶ。彼女にしてはあり得ないことだというのに。

なんだかとても、

「……………気持ち悪い」

「どうした？」

うるさい頭を押さえて机に顔を伏せると、優しく肩を叩かれる。驚きつつも顔をあげると、そこにはいつも通りの表情で見つめる垣根がいるだけだった。

「な、なんでもないよ。帰ってきてたんだね、遅いよ」

「まあな。つかお前なにやってんの？」

魔法のように突然現れた垣根にもう驚きもせず、ソファから立ち上がってキッチンへ向かう。もう垣根の出現に耐性ができていた。

「垣根くんたち待ってた。もう蕎麦作ってもいい？」

「晩飯食つたら」

「でも年越しだし」

だがキッチンに向かう足は垣根によって引き止められる。強く掴まれた手首が少し軋んで痛い。

彼の揺らぎのない黒い瞳も相まって、ひどく恐怖心が込み上がる。

「それよりもさ、行きたいところあんだけど」

「え？どこに？」

「ほら着替えてこいよ」

「その前に行き先くらい……」

交わった瞳をそらして背中を向けると今度は後ろから肩を捕まえられて、自室につながる階段に押されていく。

どこか浮かれた声の彼に困惑しながら階段を登って、少し散らかった部屋に入ると一瞬足を止めて彼は嬉しそうに髪を撫でる。

「初詣……」

彼のイメージにそぐわない柔和な笑顔と、離さないと言わんばかりの強い手の力に違和感と恐怖が膨らんでいく。

何かが蠢くその黒い瞳が怖かった。

冷たい空気が鼻にあたる。吐く息とマフラーのおかげで暖かいと言えど、露出した顔はやはり寒い。

ミントグリーンのコートと、中に着た白いジャンパースカートは、防寒にはあまり向かなかった。

「なんでまた初詣なんて……学園都市の子はそういうの興味無いんじゃないの？」

「確かに、クリスマスも初詣も、学園都市ではただの口実でしかねえかな。意味なんざねえよ」

「口実？セールとか？確かに、福袋とか新年セールは大切だけど……誰もない深夜の街を二人歩く。人通りの少ない道は酷く静かで、心音が響き渡る。

なんだかやけに緊張してしまう。まるで綱渡りをしているようだ。それくらい、この空間に違和感を覚えていた。

「……その年で純情ぶるのは些か痛いと思うぞ」

「純情？あー、もしかしてアレ？キスするから？」

「は？俺としたいの？」

「んーん、アメリカだと恋人とかとね、新年になった瞬間キスとかハグするの。新年の抱負的な？年越しの瞬間にしていたことが新しい年の方向性を決めるって言われてるからさ」

「へー、年越し前に聞けてよかった」

ゆったりとした歩幅で二人並ぶ。身長に差がないからか、歩幅もペースもほとんど同じ。

その同じが、今となってはとても異物感があって、そして安心感がある。

なんて呼べばいいかわからない感情が心の中で混ざる。

「それで、初詣ってどこ行くの？お寺はこつちじゃないけど」
「寺なんて行かねえけど？」

なんだか話を逸らしたくて、感情を無視して少し前に出る。後ろを向きながら彼と目を合わせると、先程と同じようなどこか狂気を感じる瞳に自分の姿が映る。

夜の魔力か、その狂気が美しく感じてしまった。

「じゃあ神社？」

「ちげーよ。だって神様はここにいるだろ？」

「はあ？なにそれ」

「それに、もう願いごとなんてねえだろ。才色兼備の俺がいるんだから、将来は安泰だ」

時間が止まったかのようにゆっくりとして、静かな夜。

誰かとこんな静かな道を歩くのは久しぶりで、それがさらに感情を刺激する。

吊り橋効果のようなものだろうか、冷えたからだだが徐々に体温を取り戻していく。

「自分でそんなことよく言え……って、そんなことないよ！あるよ、願いごとー！」

「ふーん？じゃあ何願うつもりだったんだ？」

「それはやつぱり——」

「妹の足が治るように、とか？」

だがその熱は直ぐに失われた。小馬鹿にするような、嫌味な言い方が彗糸の足を止める。

この願いを蔑むのは、例え垣根であろうと許せない。

「……そうだけど、なんか悪かった？」

「別にいいけど、自分で治すんじゃねえの？」

背を向けて信号機の前で立ち止まる。赤信号のカウントダウンが目目を刺激して少し痛い。

妹への思いは何よりも大切なもの。

そのためなら人生も人権も投げ捨てられる、天羽彗糸の願い。

叶わぬ夢と罵られることが、何よりも屈辱だった。

「そりゃあ自分で治せるなら治したいよ。でも、彼女を不幸にしたのが神だというのなら、また運命を握るのも神。加害者に願うのもおかしいけど、それで解決するのなら、あたしはプライドとか捨てるよ」「つまり、お前が治さなくてもいいんだな?」「そう聞こえるだろうけど。何なのよ、突然」
ぱつと信号の色が変わる。赤と緑、色が反転した。歩き出す。

どこに行くかは多分、彼が導いてくれる。
なぜかそう、脳が理解していた。

「いいや?ただ、もうその願いは叶ったって話さ」
手が捕らえられた。

少年は、彼女の手を取り予想通り道を正す。

その手は、先程とは打って変わって優しくかった。

「はあ?」一体なんの話さ——!」

連れてこられたのは、小さい頃よく訪れた広い公園。蚕の工場だったとかで、普通の公園とは思えないクラシカルな風貌は、暗い夜だというのによく映えていた。

「お姉ちゃん!こっちこっち!」

そこにいたのは金髪の小柄な少女。自分とは違う、小さくて、可愛くて、ちよつと騒がしい愛しい妹。

彼女はそこで一人、夜空を見上げて佇む。

そう、彼女はその細い足で、大地を踏みしめていた。

「な、え……」

「あのね!ていとくんがね!足を作ってくれたの!」

「は……?」

体が浮くような非現実感。目の前の少女は、医療器具の助けなしにその場で立っていた。

茶化す気なんて起きないほど、その光景は衝撃的で、心音が沸き立つ。

嫌な予感とは、多分これのことだった。

「未元物質ダイクマターそのものじゃないけどね。人間には適合しないし!簡単に

「いえば未元物質ダイクマターを操って神経を新しいものに入れ替えただけ？
なんかそんなんでね！治ったの！あし！」

「へ、あ……」

「平気なんだよな？別の人に治されても」

「あ、ああ……へいき、平気、平気だよ。うん、大丈夫……」

「ごちゃごちゃと砕かれていく感情に追いつかず、絞り出した声は掠
れていた。

体温が消えていく。脳髓が煮えたぎる。

この引き裂かれるような感覚は、とても苦くて、冷たかった。

「お姉ちゃんってば驚いてんだ？夢だったもんねえ、お姉ちゃんの！」

「う、うん……あたしの……」

「よかったね、お姉ちゃん！これから自分の幸せだけ考えられるんだ
から！」

彼女の暖かい笑顔が針のむしろのようで、ズキズキと心が痛む。

あたし、アナタのために生きているのに。

この人生の全て、アナタのためにあるのに。

この人生を自分のために消費しろなんて、ひどくつまらなくて、最
も愚かな選択を、目の前の肉親が迫る。

そんな選択肢、元からないというのに。

ひどい人。

「そうだな。もう無理して大学院もいなくていいし、ずっとここに
いられる。よかったじゃねえか」

「それはっ、また別の話で、」

「てか早く行こうぜ。コンビニで買うんだろ？カップ麺」

「年越しは蕎麦がなきゃ始まんないしねえ」

「もう始まってんだろ」

呆然と立ち尽くしていると、筋肉のない棒のような足で妹はくると
と回る。二つにくくった同じ色の金髪と、重たい前髪が風に乗って石
鹸の香りが舞う。

人工的な甘い匂いが気持ち悪かった。

「……え、蕎麦？」

「うん。年越しそば。カップ麺でいいでしょ」

ようやく彼女たちの声に気がつくのと、少し魔の抜けた声を吐き出す。上擦った声が少し喉を痛めて、瞳に水がたまる。

彼女の嫌味のない屈託な笑顔が眩しい。悪気のない言葉は、その無邪気さと反して慧糸の心を抉るばかりだった。

「で、でも、あたしもう作って」

「お姉ちゃんきつねだよね？私買ってくるよ！深夜ピクニックと洒落込もうぜ！お湯あるし！」

「用意周到だな」

「言い出したのそっちじゃん！」

「そうだったか？」

妹はもう、姉なんて必要がなかった。

細い足で軽やかに彼女は公園を歩いていく。補助なんていらぬ、妹は人として歩く。

姉のことなんてどうでもいいというように、彼女は去る。

その光景が、辛かった。

「ま、いいけど。お姉ちゃんたちは仲良く椅子に座って待ってなよ！今日は私がおごったるのだ！」

「あ、ちよつと、恋糸！」

「ウッフフ、ていとくんお姉ちゃんのことよろしくねえ！」

「ああもちろん。責任持って預かるさ」

追いかけたいの、そばにいる少年がそれを拒む。肩を抱かれて、この冷たい空気から逃げられない。

彼女の小さくなる背中に手を伸ばしても、その思いは届かなかった。

「ねえーこれはどういうこと!!?何が、何をして！」

「恩返しだよ」

彼女が見えなくなつてすぐ、パツと垣根の方を振り返る。

この天変地異を起こした張本人に、話を聞く必要があった。そしてその返答次第では、彼を叱る必要も。

「は、なんの？」

「お前に。俺みてえな外道に馬鹿みてえな優しさを振りまく女はお前くらいしかないだろ？」

「そんな、そんなことで彼女に、」

「悪いようにはしてねえよ。ただ治しただけだ。それにかまわねえんだろ？神だろうが誰だろうが、治りさえすれば」

「それ、は……」

だが思いの外優しい声色に煮えたぎる思いをぶつけることもできない。目尻の柔らかい、黒い瞳が彗糸の体を縛り付ける。

まるで魔法にかけられたかのように。

彼を貶すことも、彼を嫌うこともできない。本能が囁いていた。

「嬉しくないのか？」

「え、いや、」

「俺のこと、嫌いになった？」

「それは違う！それは、違う。けど、あたし、」

近く距離に心が恐怖で飛び跳ねる。この感情が恐怖を増幅させて、息が早くなつていく。

嫌いという言葉は何が何でも否定しなければならないと、本能が叫ぶ。

けれど理性はその本能に疑問を投げかける。

「そう怖がるな。俺がいるだろ？」

彼に見捨てられたくない。本能がそう言うのだ。弁解するのも、何もかも、行き着く先は彼。

妹への夢も願いも無くなった今、空いた穴を満たすのは彼だった。

今まではこんな感情になったことなどないのに。

徐々に心が侵食されていく。

「俺がお前の人生になつてやるよ」

彼の言葉は呪いだつた。

妹と言いたいのに。あの子の名前を叫びたいのに、体がそれを許さない。

まるでマリオネットのように、体の自由が奪われろくに言葉が出なかった。

「家族がいて、足も治って、誰よりも幸せで、お前のことが嫌いな子供。家族がいなくて、居場所もなくて、哀れにも殺された、お前のことが好きな俺。どっちを選ぶ？」

白いコートに、青いセーター、白い靴。全部、足の先から頭の先まで、彗糸が揃えた安物。

けれどそれが希望に見えたんだ。

彼ならあたしが幸せにできると、そう思ったんだ。

「あ、」

「答えは決まってるだろう？」

かちつと、なにかボタンが押された。頭に響く軽い音が、脳を揺さぶり意識を奪う。

思想が塗り替えられる。

思考がすり替えられる。

重い眠気に瞼が閉じていく。

妹への思いも、記憶も全て、今日でお別れ。恐怖と何処か満ち足りた感情が脳髓を掻き乱して、吐き気が込み上がる。

恐怖ばかりが体を支配していた。

女は願う。

少し眠って、また目を開けたて。そしたら、いつもの世界に戻ることを。

軽い体で道を歩く。足の裏から伝わる衝撃が、賑わう心をさらに加速させる。

自分の足で歩くことがこんなにも楽しいことだと、夢にも思わなかった。

「あの垣根帝督がなあ〜」

この感情は垣根が教えてくれたものだった。

『お前の姉さんに恩返しがしてえんだ』

そういつて足を治す手段を模索し、一週間もせずに治して見せた彼には驚かされる。

そしてそれが姉のためだと言うのだから尚更。

「まさかあんなこと言うなんて。頑張ったかいがあつたつてわけよ！」

男っ気のない姉にもついに春が来たかと内心大喜びだった。それも絶世の美男子が相手など。

姉の幸せを願つてきた妹にはこれ以上ない話だった。

「……このままゴールインしてくれたら助かるんだけどな」「誰と誰がだい？」

その流れのまま、妹への執着をなくしてくればいいのに。そう思つてコンビニに入ると、後ろにたつた男に話しかけられる。

頬にガーゼをつけた彼は、妹もよく知るお隣の英国紳士だった。

「わっ！お隣さんだ！こんばんは！」

「お姉さんはどうした？まだ渡米してないと聞いていたんだが」

「お姉ちゃんはですねえ、今男のこといい感じに二人きりなんです！だから私一人っす！」

コンビニに入って、男と二人眩しい店内に眼を細める。比較的人見知しない妹は、どんなに胡散臭い見た目でも、お隣さんの彼に屈託の

ない笑顔で応えた。

それだけでなく、妹の心は多分世界で二番目に浮かれていて、いまにも空を飛びそうだ。

「……そうかい、じゃあ彼はうまくいったようだね。作るのを手伝った甲斐があったようだ」

「何が？」

「いいや？・微笑ましい話だと思っただけさ」

胡散臭い笑みを浮かべた男に元氣よく挨拶すると、彼は少し安堵したように微笑む。憑き物が取れたような気の抜けた顔がどこか不思議だったが、あまり興味は湧かなかった。

今はただ姉のことばかりに気を取られて、彼の言葉の真意などどうでもいい。

「でしょー？・このままお姉ちゃん、幸せになるといいですけどね！」

「それはもう、私も願っているよ」

明るいコンビニの中で、男と二人微笑む。

大好きな姉のために、大嫌いな神のために、祝福に満ちた未来を静かに祈っていた。

夜風が頬を撫でる深夜0時、女を抱きしめ公園の椅子に二人座る。女はもう言葉を発さず、虚ろな目で遠くを見ていた。やはり思想の入れ替えは負担になるようで、ゆっくりと浸食したにしても、少しの間意識が朦朧とするらしい。

その姿に一種の興奮を覚える

この虚ろな女が欲しかった。血は繋がってないけれど、年上で、ちよつと抜けた、家族という名の光が欲しかった。

だから意識を奪われ、人形になった神様を、ずつと望んでいた。これから彼女は垣根の家族になってくれるのだから。

今日から忙しくなる。そう思うとただ喜ばしい。

大学院はやめさせて、部屋を借りて、家族ごつこを始めるのだ。

それは待ち望んだ願い。それはきつと素敵なこと。

だから垣根は赦される。

「これで良かったんですか？」

だと言うのに、分身はそれを訝しむ。

白い髪と緑の目。垣根帝督と瓜二つの生き物が、リモコン片手に東屋の影から現れた。

精神を操る幼い少女のデータが入力されたそれは、本来の垣根とは少し違い、優しく、朗らかで、思慮深い。

だからこそ、垣根の願いが叶った未来を危惧していた。

「これで良かったんだよ」

だがそんなこと無意味だ。

ズルして手に入れた家族と幸せになれないと、誰が決めた。誰が証明した。

彼らの未来など、彼らにしかわからない。

「誰も彼も、俺も、妹も、忌々しい男も、全員が幸福になれるハッピーエンドだ」

「しかし彼女が幸せではありません。妹も奪われ、夢も奪われて、これを幸福と言えるのか疑問です」

「何言ってるんだよ。自己犠牲が好きな女にはふさわしいエンディング

「だろ？」

神様は奪われた。

ハッピーエンドで幕が降りる。

「支配者が変わった。それだけの話さ」

鐘の荘厳な音色が鳴り響く。

世界が彼らの未来を祝福していた。